

戦後強制抑留者の労苦の実態に関する 調査研究集約編集報告

「まえがき」

労苦の実態に関する調査研究については、抑留体験者の手記・聞き取りにより平成三年より平成二十一年の発行終了までの「平和の礎」に、旧ソ連圏における酷寒凍土の荒野で、重労働を強いられ苛酷な抑留生活を余儀なくされ、平和がいかに尊いものであり大切なものであるかが語られている。

この忠実を次の世代の参考として申し送るについて、同一作業と雖も収容所・地域・或いは管理者により相当な差異があり、多岐に亘っておる。その内容を労働・統制管理等に分類集約しその実態をより顕著にするため記事内容を項目ごとに分類・分析を行い集約編集を行った。

◎調査概要

集約対象資料

「平和の礎」全十九巻

記載内容 一、〇七三名

九、五五七頁（八〇〇字／頁）

◎実施要領

集約は左記項目に分類

地区・収容所等により同一項目内に於いてもその内容は多様を呈している。また抑留期間中一人平均三〜四種類程度異なった労働に従事し

ておるが、作業内容単位に集約編集した。
分類項目

一、労苦の実態

(1) 従事した作業について……………3

従事した作業については、種類は伐採を筆頭に多種多様であるが作業ごとに分類集約した。

結果においては、改めてその何れもが飢餓と寒さと重労働について抑留者は、その苛酷さを身をもって体感したことが文面で窺うことができる。

- | | |
|------------|-------------------|
| ① 伐採 | ⑧ トラック・貨車・船荷の積み卸し |
| ② 鉄道工事 | ⑨ 護岸工事 |
| ③ 製材 | ⑩ 農作業 |
| ④ 石炭・鉱石の採掘 | ⑪ 機械工場の作業 |
| ⑤ 建築 | ⑫ 収容所内作業 |
| ⑥ 煉瓦作り | ⑬ その他作業 |
| ⑦ 道路補修 | |

(2) ノルマについて……………241

ノルマは本来作業の量が、測定できる労役について設定されたものであるが、シベリアにおけるノルマはソ連側の作業責任者等が、自分の業績を挙げるために恣意的に定められたもので、未達成の場合責任者は何らかの形で処分をうけておる。

常に飢餓の線上にある抑留者の弱点である減食、作業時間の延長をもって作業を強要しておることが文面に現れておる。

二、抑留者の統制管理の実態

(1) 収容所について……………268
 曲りなりにも、従来からあった建屋が相当存在していた事が伺えるが、建屋が不足する場合、抑留者本人達で、丸太で作った建物や幕舎での生活も余儀なくされた。

(2) 健康診断について……………375
 名前は健康診断だが、機器によるものでなく、触診、視診によるものが主で作業要点確保判定のものであった。

(3) 病気・怪我について……………394
 病気は凍傷、栄養失調、発熱、伝染病（チフス等）等自己だけでは防ぎきれないものが多い。
 怪我は内容として裂傷、打撲、骨折等がほとんどである。
 処置としては治療器具や医薬品がないため作業休みが殆どで入室、入院は僅少である。
 本人の苦勞が多く語られておる。

(4) 死亡者について……………450
 死亡者に対する感情亦埋葬についての意見、更に自分自身の今後についての回顧。

(5) 衣食住について……………519
 不安定な衣・量と質の貧しい食・不完備な住に対する、対応所見。

(6) 民主運動について……………602
 民主運動参加に対する各人各様の対応。

三、抑留中の生活と極限状態における意識

(1) 重労働の苦痛……………698

(2) 餓えの凌ぎ……………715

四、その他

(3) 酷寒の凌ぎ……………739

(4) 死の意識……………755

(1) 抑留生活を自分の人生にどのように位置づけるか……………769

(2) 赤のレツテル……………788

(3) 赤裸々の人間性……………800

(4) 生命力の強さ確認……………819

(5) 尊い経験の教訓……………827

(6) その他……………851

一、労苦の実態

高知県 安岡精治

① 伐採

(1) 従事した作業

- ① 伐採
- ② 鉄道工事
- ③ 製材
- ④ 石炭・鉱石の採掘
- ⑤ 建築
- ⑥ 煉瓦作り
- ⑦ 道路補修
- ⑧ トラック・貨車・船荷の積み卸し
- ⑨ 護岸工事
- ⑩ 農作業
- ⑪ 機械工場の作業
- ⑫ 収容所内作業
- ⑬ その他作業

朝食を終わり、朝六時ごろだと思っている。森口班長の命により、班員全員整列し、作業道具を渡された。それは二人で伐採する鋸であった。初めて見る鋸（ピラ）であった。私と牧野一等兵が二人一組になった。ソ連の兵士に引率され、現場へ向かった。徒歩で約一時間くらいで、深い雪の中、シベリア松の大木の森についた。

大木の松の木の下の雪をスコップで掘り、牧野一等兵と二人で作業についたが、力はなく、鋸で木の中ごろまで切ると、昼となった。他の班員も一本の大木を切るには一日かかると話していた。シベリアの寒さは日本軍の防寒服では耐えられないほど寒い。みなでグループを組んで雪をのけ、小さな穴をこしらえ、松の木の折れた枝を集めて火をつけたりして寒さをしのいだ。この日の温度は零下二十五度であった。

私たちにとつてはほとんどの班員が、こんな伐採作業の経験者はいなかった。夕方になって一本の大木を切ることが精いっぱいであった。一本を切っていない組をみると、半分以上が切っていないのである。作業終わりの銃声が聞こえた。直ちに集合し点呼を受けた。

ソ連軍兵士の点呼は何回も行なわれた。私は夜食を終わると班長室に呼ばれた。ソ連軍収容所長は、日本人捕虜は仕事をしない。こんなことでは私の上官にも報告することができないので、明日より必ず一日一本の木を切り始末することを命ずるとのことであった。ノルマの始まりであった。

弱った身体、粗末な食事、寒さ、経験のない作業、これがもとで気狂いの原因ともなり、病気（なんとも言えない）になり、入ソ作業の約一か月に班員の半分はノルマの達成はできず、私自身も病人のように体が震えることもたびたびだっ

た。もう食事と寝ることがどんなに人間には必要であるかがはっきりとわかった。

岩手県 金野秀雄

あるとき、夜十時過ぎにソ連将校に起こされ、理由を知らぬまま山に連行された。

それは二三日前に伐採した赤松の切り根が高いとのことで、ソ連将校は切り直しを主張してゆずらず、五く六人で十センチほど低く切って引き揚げた。収容所に着いたときは朝三時ごろであったと思う。一睡もせぬまままた山に出かけた。

静岡県 今井一成

シベリア鉄道の無人駅マルタにて貨車を降り、半地下室の古い兵舎を片づけて木の枝を床に敷いて押し重なって入った。これからの責苦を背負わされた不運な者同士、いずれも無言のままであった。

その後は分散して幕舎の日々となり、伐採道路に丸太を敷きつめ、この道路を中に右と左に別れ、山を切り開くための伐採作業が始まった。木を倒す者、山出しの者、積み荷の者と分け、最終には四キロくらいまで幕舎を移動し、伐採しながら進んで行った。三、四か月も入浴はなく、シラミは取りきれないほどにいた。一年くらいの間には大方の者が栄養失調となり、作業場や日ごろの生活の中に死んで行く者が増してきた。寝たまま死んでいる同僚を何人か見た。

マルタの収容所は地獄谷と言われ、このラーゲルから生きて帰るのは大変であった。ノルマができず、朝六時に起き、夜の十時まで伐採現場で働かされたことが何日もあった。シベリア線に貨車が入ると、夜中の一時でも二時でも積み込み人員の使役が出る。やつと十時過ぎに寝て、使役の都合で二時に起こされるときもあった。酷寒の深夜作業に倒れた者もいた。食う物もろくに食わず、ノルマに酷使されて、これで生きていけるわけがない。裸にして土葬にした者の数はわ

からないほどにある。

栃木県 八木澤旺二

一〇六収容所の周りは、エゾマツ、トドマツ、カラマツ等の大木がうつつ蒼々と空高く繁茂している密林地帯である。私はその材木の伐採に従事した。二人で大鋸を引いたり押ししたり前後運動をしながら大木を切り倒す。大木が倒れる瞬間が極めて危険である。木の倒れる余波で死傷者が何十人出たか数知れなかった。ソ連通訳の話では、ソ連本国の住宅に使う材料だと言っていた。

和歌山県 野下善喜

トボトボと三十キロを歩いて伐採地に向かう。この作業所も他の所と変わらず、二人一組で長い鋸(ピラー)斧(タポール)での作業であった。火力発電所の薪の伐採で、一組のノルマは三立方メートルの薪を輪切にして積み上げるのである。すなわち原木を伐採して一メートルの長さに輪切にして、一メートルの高さに積み上げ、三メートルの長さ、幅分をつくらなければならない。何といっても食べる物も食べさせられずの労働だから、重労働中の重労働になったことは事実だ。

そのころ、お互いの生活の知恵というか、だれが考案したか知らないが、白樺の木に斜めに鋸目を入れ、小さな枝をさし込んで飯盒を受けておくと、糖分のある甘い水が溜るのだ。それを飲むのが楽しみであった。また、休憩時には草木の芽をつみ、飯盒にいっぱい詰めてラーゲルに持ち帰って、ペチカで煮て、塩味もなかったが、腹を満たし、飢をしのいだものだ。

このように、よい気候となる五月中旬以降はよいのだが、六月を過ぎるころになると、松類の樹木はヤニ(樹液)が出て伐採が難渋するのだ。それはヤニのために鋸が思うように動かなくなるからだ。そんなことはソ連側も知っているのか、伐採をやめて鉄道沿線のラーゲルに引き揚げた。

和歌山県 入山敏一

苦しい生活の中で半年余りの伐採中、一番大仕事をしたことがある。私にとつては大変な作業であつたと思う。作業はいつも二人一組で、朝七時開始、一本の大木を切り倒すのに約二メートルほどの鋸を六本も取り替え、六時間半かかつてやっと仕上げた。確か午後一時半ごろであつた。横に倒れた木の太さに驚嘆したが、その大木も二メートルずつに寸法切りするのだが、倒した木の横に立つても相手の顔も見えないほどだから、想像できると思う。白樺で踏み台をつくる寸法切りするのだ。

枝も大木同様にして仕事を終えたつもりで、歩哨に尋ねても未だ聞き入れられずに、「駄目だ、積み上げよ」と叫ぶ。そのときは夜の十時ごろであつたように思う。やむなくドンドン火を燃やし続けて、ない体力を尽くして懸命に必死の作業を終えたのが翌朝四時過ぎであつた。積み上げた丸太の上に座り込んだまま動くこともできず、放心状態であつた。やっと正気に戻つて隣の木を伝つて下に降り、疲れ切つた身体を引きずつて宿舎に帰り、一睡はしたものの、一日の休養もなしに、また伐採に参加するのだ。

我々は奴隷ではない。このように使い捨てに、食も十分に与えられず、「死ぬば死ぬ式」のやり方が当時のやり方であつた。そこには国際法の規定もなければ人間としての道も何もない、地獄の生活そのものと言ふべきソ連での抑留の毎日であつたと私は証言する。

島根県 右田武

内地帰還の夢も消え去り、ソ連軍の計画によつて、嚴重な監視のもとに重作業が課せられた。我々はこの地において木材の伐採をするために送られて来たのである。千五百人のうち半数は住宅建設に、他は伐採作業に当てられた。今まで見たこともないピラー(鋸)、タポール(斧)が渡された。そして一度も斧を入

れたことがないであろう大森林の中に入れられた。

樹木は主として赤松、落葉松、白樺で、この大木を伐採して駅まで出すのが我々の任務である。元来この伐採作業は、ソ連内においても最も過重な労働といわれ、主として囚人や定期的な労働大隊が当てられた仕事である。作業はすべてソ連どおりのノルマ(作業基準定量)によつて行われた。ノルマ一日六立方メートル、二人一組で十二立方メートル積み重ねなければならない。用材は一人七・五立方メートル、朝未明に起きて夜暮れるまで働いてもなれない我々にはなかなかノルマを果たすことはできなかった。

十一月となり、シベリアは最早雪の原である。零下二十度となり、三十度となり、防寒被服をつけても手足が凍え、斧さえ握り締めるのが困難であつた。吐く息も白く凍り、鼻毛につららが下がり、小便まで凍つてきた。しかしいくら寒くても作業の休みはなかった。

殺人的な寒さと、我々を襲つた最大の悩みは、殺人的な食糧不足であつた。コーリヤンや栗の雑炊や、三百グラムの黒パンの小切れで空腹と寒さで、満州で肥えていた身体も一日一日やせて、ほとんどの者が栄養失調にかつた。肺病患者が激増し骨と皮となり、加えてシラミが多発して精神的な負担と重なり、枯れ木のごとく多くの戦友が倒れていった。

福岡県 尾花侯衛

入所二日目の夜、我々の仕事は「伐採」と知らされ、ノルマは一人当たり三リユーベ(切つた丸太の先の径が三十センチで長さ六メートルのものが六本枝を落とし、一定のところに運搬集積まで)。十人一組となり、二人引大型鋸と斧が渡された。全員がノルマを一〇〇%あげるよう話があつた。ノルマが達成できないときは、翌日の食事は減食にするとのきびしい仕事。

三日目から伐採作業に。軍服のうえに防寒外套を着込み、防寒靴は間に合わず、第一日目はその様な服装で、杵のない三十屯牽引トレーラーに乗せられ、

奥の山へ、更に徒歩で約一時間、深い雪の中、太モモまでうまりながら山へ登った。

目前に広がる広大な森林。シベリアは森林地帯とは聞いていたが、余りにも無限に広がる大森林に驚いた。両の腕をまわして、やつとり巻く様な赤松の大木、一直線に伸びた「さま」は内地の杉の様である。

息をはずませながら伐採。六メートルに玉切った大きな丸太を数人で転がしたり、だき抱えたりして集積場所へ運び、またもとのところまで登る伐採の繰り返し。慣れない作業に極度の疲労と心身の消耗に収容所に帰った時は言葉も無い。寒さにふるえながら、ペーチカをたこうにも薪は生木、夕食を食ったら何もかもなく、荒い板張の二階建寝台にゴロ寝。壁は丸太の積み重ね。内側は凍結した白い氷の壁。入浴も出来ず、防寒帽をかぶり、防寒外套を着たまま、靴もはいたまま配給の二枚の毛布にくるまった悲惨な姿は、流刑のシベリア囚人よりもひどい寝起きの生活だった。

ノルマはなかなかあがらない。未達成のため、朝と夕の食事は「トロトロ」の粟のカヌが飯盒の中蓋に一杯。キャベツの葉が一切れ、二切れ浮いた塩味のスープ。これも中蓋に一杯。昼は黒パン(二百五十グラム)一個とジャガイモの薄く切ったのが二切れ、三切れはいつた塩スープ。これも中蓋に一杯。三食分を一度に食っても満腹にはならない。

伐採作業にはソ連軍の警備兵がつき、疲労と衰弱で動きがにぶいと「ダワイダワイ」(早くやれ)と銃の台尾でこづかれたたかれる。食糧の不足は身体の衰弱を増し、作業は遅々として進まず、追いまくられ、ころび、深雪の中に倒れ起きあがる力もなく、にぶい動きのところへ、切り倒されてくる大木に逃げきれず、悲運にも下敷きとなり瀕死の重傷にあつた友をまのあたりに見る。

警備兵は一瞬驚いた様子だったが、あわてることもなかった。ソ連人の現場監督も全員に作業中止の指示をするでもなく、日本人二人に命じ、急ぎ担架をつくらせ重傷の友を乗せ下山させ、作業は夕刻まで続いた。

和歌山県 土永 勲

ラーゲルでの一番目の作業は森林伐採であった。そこでのソ連人いわく「お前達を日本に帰国させてやりたいが、日本から船をよこさないし、海が凍っていて船を動かす事が出来ないから、氷のとけるまでここに収容するのだ」と。私達は今更仕方なく木を切ってペーチカにくべる「マキ」を山ほども積んだのである。幾日もかかつて……。そして、くる日もくる日もラポーターは続く。大木の伐採のために体力を消耗しながら、飢えと寒さに。その年が過ぎても一向に帰国の話はありません。

千葉県 関 宗則

私たちは山で伐採とその運搬でした。燃料用の薪と太い木はベニヤ用材とか、長さは二メートルでした。鋸は両方に取手のある二人用でしたから、二人一組で作業をします。ノルマは一人最初は二平方メートルでしたが、間もなく二・五〜三・五立方メートルと増してきました。

ノルマを増やせば私たちもどうせソ連の仕事と、監視の目を盗み、木を切るのは少いで、前に積んだ薪の山(薪は検収するため一・五メートルの高さにし、ノルマに応じ幅を計ります)をくずし、運んで積み上げて仕事をサボりました。

やがて冬になり、零下何十度という寒さ、川も沼も凍るとトラックにて積み出しでしたが、夏サボって薪を切らなかつたため、積み出す薪が間もなくなくなり、監視兵より日本人はずるいということ、一月より四月ころまで、日の短い零下三十度にもなる極寒の時期、朝暗いうちより夕方暗くなるまで、四立方メートルより四・五立方メートルの薪を監視兵のダバイダバイ、ウイストリ、またはスカレイと大声で追いまくられ、夏にするけたとしても、その冬は地獄のような作業でした。

無理な仕事のため倒れて来た木の下になり、落ちて来た枝に頭を打たれ亡くなった人、怪我人もたくさん出ました。

和歌山県 崎山 肇

二十年十一月ウオロシロフ地区第四收容所に移転することになる。十一月ともなるとシベリヤ嵐が吹きつけ一段と寒くなり、あたりはうつすらと雪化粧になり、零下二十度近くに下がる。

約一千人近い大隊で、ヴェンキという山中に穴を掘り一年近く沿海洲の大森林で伐採の作業に従事する。作業は朝早く広場に集合、五列縦隊に並べ点呼を取る。ソ連兵が員数を数えるのに何度かやりなおしをし、長時間寒い広場に立たされ、手足が凍りそうである。やがて各分隊に分かれ、飯ごうにコウリヤンがゆの昼食を携帯して森林の奥深く入り、ピラノーマ(鋸)、タポール(斧)と二人一組で、直径一メートル以上もある松の大木を切り倒す作業で、重労働である。糧秣も草刈りのときよりも優遇されるが、昔から「きこり一升飯」ということわざがあり、少々の食糧が増加されても、空腹とノルマが厳しく、その上氷点下三十度の寒さで凍傷にかかる者や、餓死、凍死者が日に日に増している。大地も凍っており埋葬すらできず、山中に捨てて雪をかぶせるだけである。

作業の合間に小休止があり、ロートル(年寄り)の歩哨がガジエター(新聞紙)とマホルカ(たばこ)を少しずつ配分してくれ、仲間とたき火で暖をとり語り合う一つ時が楽しい。

福岡県 林 茂美

作業は伐採で、直径五、六十センチ以上もあるエゾ松を二人鋸で伐採し、枝打ちまでしなければならぬが、ノルマが高く、五〇％もできない。食事は黒パン三百六十グラムとスープかけごうに一杯、ひどいときは大豆が五、六粒しか入っていないときが多かった。

作業は一組二十五人に編成され、毎日ソ連の点呼を受けたのち、ソ連のマツセルに渡され、二人のソ連兵士に警戒されながら、重たい防寒具を身につけた

私たちは、六キロ以上もある積雪の山を登るのであるが、途中、ソ連の警戒兵からダバイ、ダバイと押される。ヨロヨロして倒れるほどに体力も気力もない。昼食のパンは朝大抵の人は食べているので、雪を食べる人が多い状況である。

寒さと重労働、それに飢餓は重なり合って、栄養失調、それに夜盲症が続出した。便所に行くとき血便でいっぱいである。なれない伐採作業で負傷者が多く、あるときは八人の同僚が大木の下敷きになって死んでいった。

新潟県 宇野公夫

在ソ三年間の一番苦しい思い出の等級食時代のころは、山中の收容所に転属され伐採作業に従事し、ノルマ遂行のため空腹で奮闘したものです。この收容所は無人のところへ入ったのですが、最初にやった仕事が道路づくりでした。何しろ湿地帯の中で道路建設が行われ、腰まで水中につきながら赤松を切り出して土台づくりしたものですけれども、何分重くて十六人がかりで三メートルくらいの赤松を井げたに組んで土台としてその上に木の道路をつくり、形ばかりの道路を完成させました。さて伐採作業のノルマ一〇〇％は、末口十センチの六メートルのもの五十本で、枝の焼却までの仕事でようやく四百五十グラムの黒パンにありつけるため、作業環境のよい山に入るときはひも類すべて持参し、木に目印をしてノルマ確保に努めました。

大木一本切り出すと幹の方には何も小枝がないので、何とか四百五十グラムのパンにありつけたのですが、条件の悪いところではとても四百五十グラムのパンは食べられそうもなかったもので、あきらめて終日山中で体を温め、もっぱら体力維持に努めて毎日を過ごしておりました。

新潟県 矢部松二郎

收容所内の宿舎に分散される。安住の場所は、ちょうど十字架を二本並べて、その間に板を渡してあるだけ。下段に二人、上段二人、計四人で休むもの、あ

とは何もなく、私たちは「とまり木」といつて、これが強制抑留者に課せられた「安息の場所」であった。

伐採作業の強制労働収容所である。あまりの環境の移り変わりに、魂の抜け殻のように身体を横たえ、まどろみながらいつのまにか眠ってしまった。グワラーン、ゴーン、グワラーン、ゴーンと起床の「地獄の鐘」に起こされた。午前六時ごろであろう、朝食だ。各班ごとに個々に、パインの缶詰の空き缶と各自手製のスプーンを持って、我れ先にと食堂へ駆け込む。炊事班の兵隊から、スープを空き缶に八分目くらい配給された。大豆汁あり、あわ汁あり、梅干汁あり、今朝の配給は大豆汁で、空き缶の底にスプーン一杯の大豆があった。残りのスープを缶に口をつけながらゴクン、ゴクンと飲み終わり、別の缶と一緒にスプーンともども大切に腰にぶら下げると、同時に作業出発の「地獄の鐘」が響き渡る。

作業出発点呼のため、衛兵所前に各班ごとに五列縦隊に集合整列する。間もなく収容所所長がソ連兵を従えて定位置につく。「収容所長に、敬礼つ、かしらあー、なかあー」日本将校の張りのある声が汁腹に、シベリアの寒風とともにビリビリ響く。

このときから、シベリアでの重労働が強制されたのである。五列縦隊に整列させて、人数点検する。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十まで数え、五十人と記入しまた同じことを繰り返して五十人と記入。これを全部合計する計算で一時間以上も寒風にさらされて、歯の根も合わずガタガタ震えがくるので、足踏みをしながらか人数点検が終わるのを待つ。

やつと人数点検が終わわり、衛兵所前の門より柵外へ出る。材料倉庫で、三人一組になり、伐採に使用する道具、鋸、斧をソ連兵より受領して、また五列に並ぶ。先頭と最後尾、それに中間のところどころに自動小銃を持ったソ連兵が、監視のため終業まで同行する。作業の目的地まで「五列、五列、急げ、急げ」片言の日本語でせきたてる。伐採作業現場までの山道は、細くて「ぼこ」あり、両端を歩く戦友は、斜めに走るようにして歩く。途中ソ連兵の気持ちにさわるよう

なことがあれば、自動小銃を空に向けてバーンと発砲して威嚇する。

収容所より約三キロくらい行軍、目的の伐採現場に着いた。平場と違って雪が多い。また木が密集して、なかなかの森林である。鉄道の枕木にするのとこととで、早速三人一組で作業に取りかかる。ソ連兵に指示された、切り倒す大木の根本の雪を踏みつけて、二人でできるだけ根本のほうから、鋸で前と後ろに引き押しする。三分の二くらいに切り入れると、反対側から、少し上の方を同じ容量で引き押しする。最後に斧で斜めに少しずつつ切り込みを入れる。「おーい、倒れるぞうー」事故防止のため、必ず合図をし合う。ドドドドン、バリバリ、ドサツーンと山の斜面を半回転しながら倒れる。倒れた木の小枝を斧で切り落とし、燃やして暖をとる。白樺の木が意外と多い。白カバの皮をはぎとる。面白いほどにはがれる。これが火種になるが、煙がたくさん出て顔がすすける。私たちの作業服装は、夏場の軍服で、軍手使用で、鋸や斧を使つて三十分もすれば、手足の感覚がなくなってくる。また小枝を斧で割ると、ときどき小枝の割った中に、真つ白い凍りついたサナギのような虫が入っている。三人で火に熱すると、プチツとはじける。それを三人で手に取り、むさぼり食う。「あまい」口の中で溶けて、「うまい」、三人とも汁腹を少しでも満たしたので、斧で小枝を切り割っては、サナギのようなものを取り出す。作業がおくれる。「日本の兵隊作業しない。食事だけ多い」監視のソ連兵が大声でどなり散らす。抑留者だったのだと現実に戻り、伐採作業に取り組む。

いつのまにか昼食時になる。作業のできない仲間が、二十人くらいで山道を天秤棒の真ん中にスプーンのおけをつり下げてヨロヨロ、ヨロヨロと担ぎ登ってくる。ソ連兵が配給係で、朝食と同じようにスープを空き缶に八分目受け取る。やけに空き缶が重い。スプーンで掻き上げて見ると、梅干しの種が五、六個あった。スプーンをすするとすっぱい。梅干汁だった。昼食だけは、昔の桃マツチの小箱二個合わせたくらい黒パンが一個同時に支給された。黒パンをスプーンの中に入れる。ふやけて倍以上になった。残った梅干の種は、火に熱して斧で割る。真ん中に実が

ある。なかなかおいしい。遠くからスープを運搬して来るので、冷たくなっている。火に熱して、鼻水と一緒にすする。

またソ連兵にせきたてられながら伐採作業が続く。倒して小枝を切り落とし、た木は、枕木の長さに切り、三人共同で下の平地まで搬出する。そのあとは運搬作業班が目的の地まで運ぶことになっている。「ノルマ作業量は、長さ六尺、幅六尺、高さ六尺として積み重ねて、作業ノルマは完了するのである。寒さは寒し、腹はすく、小便をするたびごとに空腹を訴える。作業ノルマを完了しなければ、収容所へは戻れない。異国の地に眺める落日のころ、やっと収容所へたどりつき、鋸と斧を作業倉庫へ返納、人数点検を受け所内に入る。

夕食のスープ汁を食堂で受け取り、すきつ腹に流し込み、終わる間もなく民主々義の講話を聞くため、所内の講堂へ集合、それが終わってやっと宿舎に帰る。暗い宿舎に伐採作業中に取った白樺の皮を燃やして、明かりの代用にして、「とまり木」にゴロリと着の身着のまま横になる。

福岡県 藤吉静男

作業内容は、山でカラ松、赤松、シラカバを伐採、製材所へ運搬、枕木に製材、貨車積み込みの一貫作業。満領にいた間は主食白米の給与が、入ソと同時に精白コウリヤンにかわり、間もなく原穀のまま、煮炊きして上がるようになる。胃腸の弱い人は受けつけず、下痢、血便、栄養失調で十一日から死亡し始め、虚弱者、急性肺炎等で半年の間ラーゲルだけでも三十五人、後の入院死亡まで合わせると七十人の多きに達した。

健康な者で、食物が少なく、朝食、バレイショから甘らん数切れ、羊肉一切れ入つていれば幸運なスープ。といつても塩汁。八十グラムの黒パン、かゆに近いコウリヤン軽コップ一杯、昼食はコップ一杯半のコウリヤン。夕食は朝に同じで、朝食一パンに食べ、夜まで我慢する人、作業場で飯ごう一杯かゆにて食する人。もつともかゆを長く続けると、体が作業できぬほどむくんできた。

とかく、冬、空腹に耐え、零下四十五度前後に極寒の中で過酷な伐採。ノルマ三人一組で六立米、大変なものだった。運搬は馬そりとトラック積み込み、その夜間作業のつらさ、直径二メートルくらい、大たき火であたれど、前は焦熱なれど後ろは酷寒にさいなまれ、一晚中きりきり舞い。作業と両方で疲れ果てたものだった。

新潟県 高橋義夫

夏じゅうコルホーズの仕事をして十月雪が降り出したら、今度は一行二十五人で四十キロくらい山の中に連れていかれ、伐採の仕事である。着いてみると昨日まで別の日本人がいたらしい、宿舎の前に大きな釜がある。ふたをとつてみるとその裏に苦しかった伐採の様子がごまごまと書いてある。大変なところに来たものだとみな顔を見合わせた。だれの目にも涙が浮かんでいた。そこでの伐採作業は前冬の仕事より以上につらいものであった。今振り返ってよく生きて帰れたものだとつくづく思う。

長野県 西村又夫

初めての冬を越えた五月ころ、多くの仲間と伐採作業のため遠く離れたハンダガヤ収容所に移る。平地林で見渡す限りの赤松カラ松、一抱えもある大木、収容所の回りは植木をぎつしり建てた柵で宿舎もお粗末なものだった。

なれない伐採作業。燕麦のかゆ、馬鈴薯だけの食事。栄養不足で体力の消耗がひどく、その上すごいシラミに悩まされ夜はたいまつを燃やしてシラミ取り、全く人間の住む環境ではなかった。伐採ノルマがどうしても達成できず、ソ連将校兵が回つて来て、班長だった私にもっと仕事をさせると拳銃を突きつけ強要。このころからノルマに応じた食事の配分が行われる。同じマスの中で操作するため仕事のできない者はますます衰弱。医務室に行っても体温計だけの診察。熱がなければ入室入院も許されず、朝、床の中でまた山道で倒れ息絶える仲間が多

く出たが、混成の班のためこの誰ともわからず、極限の生活で我が身を守るのに精いっぱいだった。作業能率不良のグループは収容所に帰るのを待って、将校兵に山へ追いかえされ、材木運搬の労役を罰として課せられた。遅いと尻をたたかれ、追われる羊の群と同じだった。私も班長の責任を問われ収容所の営倉に夜だけ入れられ減食。同じ日本人同士これ以上の強要はできなかった。

熊本県 畠田 完

ダワイ、ダワイとノルマ、ノルマに追われる毎日である。日曜は原則として休日だが、ノルマをカンチャイ(完遂)していなければ駆り出される羽目になる。ことほどさように雨が降ろうと風が吹こうと雪が降ろうと、作業の連続だ。大雪というように頭に「大」の字がつかない限り休めない。熱がある、頭が痛い、腹が痛い、腰が痛い等は通用しない。女医が腹の皮をつまみ、脂肪分が少しでもあれば、ダワイである。

入ソ当時は五立米が二人に課せられた伐採量だった。ところが、八、十、十五立米と量は増していく。上がるノルマと反比例して体力は目に見えて落ちていく。日本人の競争心を相手にうまく利用された。

丸太を積み上げてつくった収容所の周りは白カバ、モミ、松、エゾ松、トド松、タモ等の原生林の山だ。見たばかりでどきもを抜かれるような大小の木、木が我々を待っている。山に着いたら下刈りをして荷物を置き、火を起し一服。一服といつても本当のたばこはまれである。粗末な茶がらを干したものはまだましな方で、ヨモギの葉、モミジの葉等を新聞紙でくるくるっと巻き、煙を出しているだけである。煙はのどをけたくつていき、味も何もない。体によくないと思いがらも、また吸っている。

切る木の品定めをして作業開始だ。二人引きの鋸初めて見る鋸、〇・七メートル、一メートル、一・五メートルと各種のものがある。木に鋸を入れ、中心まで達したころ反対側を斧(タポール)で削り、さらに鋸を引く。斧の切れ目に近づくと木はミシツ、ミシツと前傾し、ビリ、ビリッと大きな音に変わる。いくぞ、倒れるぞと叫び、合図をしながら最後の鋸を引く。木は大きな地響きを立てて地面を打つ。

タポールで枝払いをし、二メートルの物差し(真つすぐな木で各自つくっている)で原木を測り切断する。これを繰り返して、ノルマの目安が立ったところで、二メートルの丸太を一メートルの高さに積み上げていく日課だ。

切りやすい木、切りにくい木があり、作業の段取りに大きな差が出てくる。中身の無いガラン胴の大木でも見つけようものなら、ノコ引きも楽だし、倒すのも早い。ノルマは一ぺんに達成できるし、この上ないお客様だった。大きな木を切るときは、鉄でつくったくさびを鋸の目に打ち込み、鋸がスムーズに引けるように、また大木を積み上げるのにトビロを使い、自在に動かせる道具を考え出した。トビロは穂先の長いもの、短いものを持ち、当意即妙に使い分け随分と助かった。日本人の合理性というか、生活の知恵というか、作業上雲泥の差があった。カンボーイもびつくりして見ていた。

積み上げられた材木は、トラックへの積み込み作業が待っている。夕方になるとブーブーと音を立て、時にはスリップをしながら、道なき道を登ってくる。力強い力、ボディを見るとUSAと書かれている。ここでもアメリカが頑張っている。科学技術の差が今日の我が身かとあきらめる。

積み込みでもトビの力が発揮される。「ヨイヨイヨラ」「一、二の三」と掛け声も力の入れようで変わってくる。

滋賀県 村田英信

第二日目、起床五時、当番制で食糧受領し配分する。六時三十分作業整理。点呼は暗やみの中で行われ、寒さに震えながら順番を待って、小隊ごとに門を出る。作業は伐採作業で、斧と鋸を受け取り約一時間ばかり森林の中を歩いて作業場に到着するころ明るくなってくる。一分隊十人で、八時作業始め、規定

のノルマを消化するように、「ベストラ、ベストラ(早く早く)と追い立てられる。十二時から一時まで中食時間が与えられ五センチに十センチくらいの黒パン一個にエンドウ豆のスープが飯ごうのかけごうに一杯だけで終わり。午後の作業開始切り倒した大木を規定の長さに切断し集積所へ運搬。枝打ちされた生枝を集めてこれを完全に焼却する。午前十一時ころ太陽が出て午後三時ころには日没とする。五時に作業終了して収容所へ帰り着くのは六時ころ。また暗やみの生活が始まる。毎日同じ作業が四月ころまで続けられる。

鳥取県 井澤正義

作業は一部の人員で機関車用まきづくりのための伐採と、主として鉄道路線の補強作業であった。十月下旬ともなると、気温も氷点下四十〜五十度となり、択捉島では各自五枚程度の毛布があったが、ソ連船に乗るとき厳密な検査で、防寒用として毛布一枚と外とう一着しか許されず、寒さは日増しに厳しく採暖用のまき収集、バラックの補修等行ったが、初めてのシベリア越冬は不安であった。

十一月酷寒期にはいり給食は黒パン三百グラムが主食で、作業は厳しく特に鉄道路線補強の砂利列車到着時は短時間に荷おろしせねばならず、深夜であるうと吹雪の天候であるうと容赦なく作業を強要させられ、一層体力を消耗した。

和歌山県 長峰泰夫

丸太の切り出し運搬

各班が奥地へ雪を踏みながら入っていく、手ごころな落葉樹を切り倒してからひと休みのため、たき火を燃やし円陣をつくり、お国自慢の食べ物を披露し合つて、ちょうど昼ごろ幕舎へ帰り、午後もう一回、丸太を持ち帰って一日が終わる。兵士がついてくるが、言葉が通じないので会話もできず、たき火の周りを回つた

りして体を持て余していた。

毎日毎日、この作業を繰り返す。木取りの距離も段々遠くなり、除雪をせず雪の上に出た幹の下を切つて、休憩時間を確保するようになる。用具はラパータ(スコップ)、ピラー(鋸)、タポール(まさかり)の三点セットであるが、アメリカ製の方がよく切れた。帰ると、手がかじかんで感覚が鈍くなるので、バケツにお湯を入れて手をつけて、手が痛いような、かゆいような感じを経て、手の感覚を回復するまでつける。

神奈川県 菊川栄一

貨車に乗りさらにトラックに乗せられ到着した所は山の中。今までの閑散な農場とは打つて変わった収容所で、仕事は伐採作業だ。奥深い山の中にトラックで運ばれ、無線通信機を持った手が二人引き鋸が変わつたのだ。友より聞か話だと、最初はノルマが四立米だったのが六立米、今では八立米とのこと。死に直面した絶望の生き地獄さながらだ。ノルマを達成した組は毎日数えるほどしかなかった。

現場へ着くと、伐採に適した立ち木を探す。一抱えもある大木が物凄い地響きを立てて倒れる光景は壮観ではあるが、最も危険です。死傷者がかなり生じたのです。酷寒の中での作業ゆえ、防寒服防寒靴で動作が鈍い上に、栄養失調と三重のハンディで完全に麻痺し、大木に押しつぶされて世界した友は数知れません。

京都府 久保田清蔵

九月初めに伐採の作業に変わる。九月になると朝晩冷え込む。道路も凍りつく。二度目の冬の時節に入る。二人一組になって二人用の大きい鋸で大木(四人ほどで抱える)を二人で切る。(一日のノルマ二本以上)切ると黒パンの持配が当たる。十月初めには雪が降る。この雪は小さくサラサラして解けない。毎日降

るから低地で雪だまりになり、風が吹くと雪が暴風雨のように舞い上がり、五十メートル先視界は見えない。このようによく暴れる降雪後の作業はつらい。腰までつかつて仕事をする。木を切つて倒すとき、倒す方面の人員に待避を伝える、大木が倒れるときは周囲の木の枝をはねて危険だ。

岩手県 田辺壮久

収容所では年老いた佐官級の将校も朝暗いうちから夕方暗くなるまで、下士官兵と変わることなく、伐採作業、丸太のトラック積み込み作業に狩り出されている。

早速トド松、シラカバの伐採である。ソ連側は逃亡を恐れて、狭い山に大勢張りつけて作業をさせる。山仕事には全く素人の集団なので、大木がどこへ倒れるかわからない。毎日木の下敷きになる犠牲者が出た。原始林が樹高が高く危険だから、作業間隔を広げるよう要望しても、逃亡されるとして、要望は聞いてもらえなかった。現に逃亡者が出て、捜索され銃殺され、見せしめのため、衛兵所横に三人の遺体は何日も放置されていた。

私は、若い頑強な相手を選び、傾斜地の下方の木に順次切り口を入れ、上方で大きい木を倒し、その勢いで一気に数本を倒してノルマを上げるようにした。ノルマは積み上げて二人で六立方メートルであった。

靴底が破れ板を張り付けた補修なので伸縮がなく、山作業や作業現場まで四キロの往復には、ひどく難儀をした。

新潟県 中沢仁作

伐採作業は三人一組で、二人は鋸でひき、一人はなたで枝をおろす。なたで皮をむいて印のあるエゾマツのみの伐採であった。ノルマは何本であったか記憶がないが、六メートル、八メートルの長さに切り、馬で目的地まで引き出すのである。零下四十度になっても作業は続行され、二月に入ると現場も遠くなり、往復の

時間も長くかかる。足を引きずりながら収容所に帰るのである。毎日同じ作業の繰り返しであった。

新潟県 生越昇

伐採作業のノルマ(基準作業量)は、二人一組で、器材はピラ(鋸)一丁、タポール(おの)一丁で、立木を切り倒し、枝をおので払い、倒木を二メートルの長さになり、切り口の高さ一メートル十センチ、間口六メートル幅に積み上げる。今考えても並みのことでは達成できるようなノルマではない。作業帰りにまきを外套の下に隠し持つてきて、衛兵所で取り上げられじんだ踏んで悔しい思いもした。夜間作業にも狩り出された。零下四十度を超えるような厳冬の中トラックに乗せられ、暗やみの中で高架線上の貨車から石炭の固まりを落下させる作業で、危険と寒さと闘いながら帰つて、翌日はまた伐採場でノルマと闘わなくてはならない。

鳥取県 森田廉

伐採作業の内容は伐採班、道路班、積載班に分かれる。伐採班は朝五時に起床、アワの量より水の多いカーシヤ(おかゆ)をすすり、二人一組となってタポール(手斧)を各人持ち、それに二人で引く大きな鋸を一本渡される。収容所から四キロも離れた原生林に雪を踏みわけて入つて行くのである。防寒外套の上から鋸を帯のようにぐるりと腰に巻き付けて、引手をガチャと組み合わせ歩く。荒縄で縛つた帯にタポール(斧)を腰にぶら下げての行進である。元関東軍の精鋭を誇つた人間とはどうしても見えない。あまりにもみすばらしい姿である。作業中に逃げおくれ倒れる枝にたたかれて多くの戦友が死亡し、また負傷者を出したことは残念なことであった。一日の作業量はノルマ(基準量)で示される。二人分で五クボ(五立方メートル)であったが、作業能率は悪く、せいぜいその五〇%も上げれば上等の方であった。一クボの量は約四十センチの直径の松を切

り倒して小枝をタポール(斧)で打ち払って六メートル五十センチに切り落とした程度のをいった。後には要領がわかり一〇〇%が遂行されるようになったらノルマを引き上げた。監督はいかにして日本人を働かせるかということに専念していた。

大阪府 近藤恒雄

それは、見たことも聞いたこともない、二人引きの大きな鋸を使つての雪中伐採であつた。膝まである雪の中、両方から懸命に松の木を切る。ようやく一本を切り倒して、痛い腰を雪の上に伸ばし空を見上げたとき、つらさからか、望郷からか涙がにじんだ十六歳であつた。また作業中、寒さのため靴下二枚、防寒靴を履いていても足指先がうずいてくる。凍傷にかかる寸前とわかるが、あえて手当てはしない。少しくらいの凍傷ならかかつて入室した方が休める。思惑どおり一週間ほど休めた。極寒期の一週間休みは生きのびるのに大いにプラスになつた。

石川県 大坂喜久治

伐採作業

十一月に入つて本格的な作業に入った。伐採である。二人引きのピラ(鋸)とタポール(斧)をわたされて、五葉松の生い茂つた森に入る。馴れない鋸曳き、枝払い、運搬と、歩哨にからかわれ、追い回されて右往左往する明け暮れは、肉体的にも精神的にも実につらい。一本の丸太に十五〜六名もかかつて動かさねばならぬほどの体力の衰えと飢えのつらさ、気温は冬に向かつて零下を下がる一方、加えて風土病に侵される者も出始めて、体力、気力の尽き果てた者から死んでゆく悲劇が今日も、明日もと続くようになる。

東京都 堀口卓也

タポールの思い出

伐採の作業で木を切るとき、回りの小さい木を切りはらつて作業しやすいようにするのであるが、鉛筆も楽に削れるあの鋭利なタポールで、自分の足を靴の上から親指まで切ってしまった。おかげで一か月ほど治療に専念させてもらった。雪の積もつたごく近くの山のできごとである。

材木の山出し

山で伐採した木を馬ソリで運ぶのである。雪山の何本も小木のある中に切り倒された材木をどうやたらうまく運び出せるか。こういうふうによれと指示するのが私の仕事で、午前中は頭が働き、すいすいとうまい手が打てるのに、午後になるとさつぱり頭が働かない。栄養の関係だろうか、実に歯がゆい思いをしたことが今も思い出される。

丸太の寸法計り

山から運ばれてきた材木の寸法を計り、記帳する役をやつたことがある。鉄道線路のそばに材木を運んでくる。その材木の寸法を計り記帳するのである。材木の寸法は末口といつて細い方で寸法を計るのであるが、ノルマを上げるために元口の方で計り、記帳した。おかげで各人のノルマは上がったようだが、この帳簿をみて材木を取りに貨車がやつてくる。帳簿上はまだ沢山残りがあるはずなのに、現場には殆どない。これは困つたことになつたと思つていたら、転属になりホツとしたことを覚えていた。私の後を引き継いだ人は困つたろう。ごめんなさい。あるいはこれがばれて転属させられたのかもしれないがと、今にして思う。

茨城県 石橋實

十月十日ウラジオストック港に着き、翌日上陸して第十收容所に入る。そのとき、平野中隊は千名くらいであつた。余り大きくない建物に千名をすし詰めにしたので、ちよつと起きるともう寝られないほどでした。

翌日から穴掘りをして、それは大きな便所となった。角材を渡しただけのものである。水道工事などをしているうちに、初年兵一人が病名はわからないが死亡した。名前はわからないが埼玉県出身と聞く。

私は当時四年兵でした。十月も中旬になると寒くて、ウラジオストクはまだ雪は降らなかったが寒かった。

十一月十日、新たに編成された五十九師団通信隊の林少尉殿の指揮によりセミヨノフカへ伐採作業のために移動することになり、丸一日がかりで現地に着く。

全員が装具を解いて寝台に落ちつくと同時に床が落下したので数名が負傷した。

当日は食事なしの日でしたが、翌日は二日分の食事なので大いに満腹したが、このようなことはシベリアにいた間一回だけであった。負傷者を除く全員が零下三十度の森林の伐採作業と運搬、雪は八十センチくらい積もり苦しい作業であったが、一つの楽しみは大きな松かさを集めて持ち帰りペチカで松脂を焼き取り、皆で分けて食べた。これが一番の楽しみであった。

毎日の雪中の作業は苦痛であった。食糧不足と重労働と飢餓と寒さで死線をさまよった。

ある日、伐採作業中、松の木の上部に大きな枝が片方であり、切り終わると同時に自分のいる方向にねじれて倒れかかったが、雪が深くて逃げ遅れて圧死した初年兵がいた。山形県出身だと聞いたが、名前はわからない。

零下三十度の雪中の伐採は、二人で引く鋸で切り倒すのであるが、真実重労働でした。

一日の食事は、黒パンは三百グラム、雑炊は米、数の子、魚で飯盒に半分くらいでした。

毎日、夕方の点呼の時間が長いには困った。

夜は丸太小屋なので丸太の間から南京虫、それにシラミの襲撃にあい眠れな

いほどでした。

電気はないが、ランプとペチカの明かりで夜を過ごす。室内は暖かくよかった。この收容所長はノビューフという少尉だと思えます。

昭和二十一年二月中旬に疲れから私は三十八度五分の熱を出し、ソビエト軍の女医さんの命令でスパーチと言われたので寝ることができた。

一週間たっても熱は下がらず、岩手県出身だと聞いた軍医中尉影山殿に大分お世話になった。

それから熱が下がったが、女医さんの命令で作業免除となり收容所内の軽い作業、掃除などをした。

收容所では病人が多くなった。神経痛などは熱が出ないので痛んでも作業に引き出された。そのような友を見ると申しわけなく感じた。給与は少しはよくなったが、それでも友のパンを盗む者が出た。それで制裁を受ける者、食物でけんかする者がいた。

新潟県 山田正夫

原始林伐採作業は地獄図

極寒シベリアの原始林は雪が張りつく氷の山でもある。マンドリン自動小銃を持つソ連兵に尻をこづかれながらの山路は、防寒靴もすべりながらの現場行きである。

吐く息も防寒帽にツララをつくる。普通ならばそれでも力強く登れるだろうが、なにしろ一日黒パン二百グラム、砂糖が親指位、岩塩少々の食糧ではジツとしていても腹ペコ、まして極寒四十度近い氷の山路登り、誰も黙々として一歩一歩を登る。

現場は名も知らぬ山の中腹位、西洋鋸組二名、タポール(ナタ)組二名。鋸組はなるべくノルマを早く達成するために大きい木を選び、タポール組に斜めに倒れ易いように三角口をつけるように頼む。口が出来ると、反対側から二人で鋸

を押し合う。大木が段々と斜めに姿勢を替え、やがて異様な響きをあげながら研させつつ倒れて行く。「倒れるぞーっ」と叫んで危険を合図するのだが、声も思うようには出ない。こうしたことで倒れる大木を避けることもできずに僅か一か月位の間に死亡者六名、負傷して病院行き十二名の惨状を呈したのである。「ヨツポシマーチ！」その度にソ連兵が怒鳴り「チッ！」と唾を飛ばし、「スコーラ、スコーラ」と死傷者を山から降ろすように命じ、自動小銃を突きつけて催促する。

その為に何人かの手が減り、作業量が落ち、ノルマ成績達成どころでなくなる。

暗くなり始めるまで伐採をやられ、松明を掲げながら凍てつく山路を収容所へと急がされることもしばしばであった。

伐採中に、キクラゲ、苔、食べられそうな草、松の実、スプーンの無くなった飯盒に木の汁をゴムを採る要領で採り、収容所で煮詰めて腹に流し込む(キクラゲはスープとして最高の感じ)。

夜半に貨車が引込み線に入ってくると叩き起こされ、防寒具を着るいとまもなく貨車への路をせきたてられる。吹雪く夜もあれば、死者の屍の臭いを知った狼の遠吠えを聞きながら月下に影を落とすときもある。

貨車へ伐採してきた材木を積み込む、貨車が満杯になるまでの作業、こうした作業も十日も経験すると要領を覚え、横積みの中に適宜、縦に材木を入れかさばらせる。途中でどうなるかと知ったことではない。早く貨車を出して寝床といつても丸太を組んだ上に木の皮を敷き、更に帽子や防寒具を被せ、毛布にくるまつて足には布を巻きつけての二段式寝床である。今は少しでも身体を休ませて生きる力を貯えるのが一番、そしてなにがなんでも家族のところへ帰り着く、日々がそれで一杯。その寝床へ早く帰る為にお互い同士、以心伝心で作業を続ける。晴れた夜は寒さが特に厳しい。作業が終わり焚き火を囲んで暖をとつてから寝床へと急ぐ。無情の道を月の光が照らす。水たまりは氷になって油断

していると滑って転ぶ。栄養失調症の身体には一寸したことが怪我となり、骨折もし易くなっている。

やがて収容所が近づき、歩哨が「アジン、ドヴァー、ツリ、チテリー……」と数える。

数に弱いソ連だと毎度のことながら呆れ返る。知恵を絞って作った防寒扉を押し中に入る。ドラム缶に薪を入れ、乾燥した草に火をつけ、周りを囲んでしばし暖をとりながら、今日の無事を確かめ合う。上と下の寝床に別れて目を閉じる。空腹と疲れ、古里を夢に見ながら、間もなく静寂の夜の帳に包まれる。

なんのために、誰のために、どうして、自問自答しながらいつものように眠りかけていく。狼の遠吠えが木の葉をゆすりシベリア風を渡つて聞こえる。古里から家族の「頑張つて」の子守唄を夢みながら今日も命永らえることができた。

シベリアの朝は意外なほど早い。今日は曇りで、そのうち雪が舞ってくるらしい空模様。日々が伐採の繰り返し作業、貨車積み作業、わずかばかりの黒パンと親指位の砂糖と岩塩、高粱がスプーン二杯位の朝食をとる。

スプーンはソ連製砲弾の薬キョウが材料で、仕上げまで一か月位はかかった貴重品でもある。スプーンを入れる箸箱も自動車のスプリングを使った削り道具で造り上げたものであるが、これも貴重な日用品である。飯盒のふたに黒パンと砂糖、飯盒の中は水で沸かした高粱、味つけは岩塩である。

ゆつくりとかみしめながらの食事である。今日は何人が倒れるのか、みんな無事で頑張ろうね、と心に祈りながら作業仕度を丁寧に整えて行く。

あれから五十年。家族も嘘を言っていると初めのうちは言っていたが、今では信じてくれるようになった。異国の荒野に屍をさらしているであろう戦友達の冥福を祈るこの頃である。

福島県 村上 武

伐採はノルマに追い回された。機具は鋸と大斧と鎌と鉋なだである。まず鎌と鉋

を使って倒す。木の根の本草などを刈り払い、倒す方向の根本を三分の一ほど鋸で切る。次に反対側の幹を、初めの鋸目より五十センチ高いところから切り始める。大体を切り梢を見上げる。木の梢の揺れを見て「倒すぞ!!」と大声をあげて、四囲の作業者を避難させる。退避を確認してから大斧で倒す方向の根本を切る。空腹で足腰の弱い者が多い。完全な避難の距離をとらないと、枝に打たれてけがをする者が多い。誤って木の下敷きになる者も出た。伐採は多数の者が同一場所ですす作業ではない。小指ほどの枝でも倒木の勢いは強い。また、木を倒すとき、木が割れることもある。根本の周囲に居て、けが人の出ることも多々あった。

和歌山県 北又光夫

抑留第一日目の作業は伐採であった。二人引きの大きいノコギリ、タポール(オノ)を持たせられ、ソ連兵の言うままに山へ向かう。山では大きな木に二人で切り目を入れ、また反対側よりタポールで切り目を入れる。なれないから思う方向へ木が倒れない。腹が減って動かれない。もちろんノルマつきであるが、終わらない。作業のでき方を言うが、とても話にならない。帰り道では草をむしり、腹の足しにした。このアカザという草は、日本人の生命を助けてくれたのではなからうか。

寒くなってくると雪が積もり零下三〇度、風速が加わると零下六〇度、七〇度にもなる。作業山に行く道々、口ヒゲやまつげにツララができること冬中日のことであった。私は現役兵で若かったが、召集兵で四十歳近い戦友が相当数いました。栄養失調と戦争中の疲れに加えて寒さと作業、路上で倒れて息を引き取る者が出始めました。ノルマを終えて帰るとしても、木の枝と草を並べてつくった仮兵舎で、家と言えたものではない。横になつて寝ても、背中がゴロゴロして休まれない。冬は疲労と寒さと不眠に悩まされました。

雪が腰以上にあるので、木を切るためにどこへ行ったらよいかわからない者

ばかりであるし、逃げるのに足元が雪のために動けないので、他の者が切った木の下敷きになり死んだ者が相当数ありましたので、お互いに散らばった位置で木を伐採しようと話し合い、ソ連側の言うことばかりしてノルマに追われては皆死んでしまうぞと、互いに励まし合ったものです。しかし、ノルマは増すばかりで、雪の中でつまずけば起き上がれないことが何度かあって、自分で自分に気合いをかけて、その都度何が何でも内地に帰るんだと言いつける毎日でありました。

ピラカン伐採作業

福井県 天谷小之吉

ピラカンの冬の朝、明るくなる夜明けは午前八時半から九時ごろであった。表門に整列する七時ごろはまだ真つ暗だったので、いつも電灯がついていた。

カンボーイのドラスチャー(歩哨のおはよう)朝のあいさつから、次はアジン、ドヴァ、トリ、チテリ(一、二、三、四)と数えて門より出て左折、そして西の方へ進んだ。この門を出るとき、互いに手を取って、民主の歌声高らかに出発するのであった。距離にして四百メートルくらいのところに鋸の目立て小屋があって、この小屋の中で二人、日本人同士が夜勤で目立て作業をしていた。私たちは毎朝この小屋に寄って、目立てたばかりの二人用鋸とタポール(斧)を受け取って背負い、西の方へ西の方へと進む。「マタボーズ」木材運搬の専用レールが敷いてあった。その上を互いに肩を組んで、歌を歌いながら歩んだ。出発点からおよそ四キロメートルほどの地点で、樹木の伐採した跡が見える。近くの方から伐採したのだから、後になればなるほどだんだんと奥地に進んでいく。

この作業のノルマは、立木を伐採して、二メートル五十センチに切つて、その木材を今度は幅二メートル五十センチ、そして高さ一メートル五十センチの一山を二人でつくつて百%であった。樹木の種類やまた場所によつてその日の作業能率が大きく異なるので、その伐採地近くになると、我先にと走つてよい場所を陣取

る。歩哨は我々の行動や作業範囲を自由に認めていた。そして、大体その作業範囲の中心地に薪を集めて、たき火をして暖をとっていた。

我々はまず防寒外套や上着を脱いで軽装となり、二人互いに呼吸を合わせて作業にかかる。最初に目算でどこまで、また何本くらい切り倒すか決めてかかる。できるだけ下枝の少ない、そして高い間のある木、運搬の楽な条件の揃ったところを選ぶ。直径三十センチ乃至四十センチほどの木の下に半中座して、二人曳きの鋸で、押す挽くの手順に合わせて一、二、一、二の掛け声を掛けて数分一本切り倒す。凄まじい音と共に(ばり、ばり、どしゃん)横倒す。やれ一本やっただと次々切り倒し、予定だけ倒すと、今度は下枝をタポール(斧)でつり落とす。それが終わると次は長さ二・五メートルに輪切りにして、大体の数を讀んでみる。これで八分通りの仕事ができたとの心算で、今度は薪を集めて飯盒炊きさんの準備をする。要するに、午前中に大半の仕事をして、それから昼食をする習わしにしていた。薪は前年かそれ以前に枯れた立木などである。シベリアの冬期間は枯れた立木などはほとんど水分がないほど乾燥しているので、非常に燃え易い。

さて、雑炊の材料としては、粟か高粱で、その味出しに鱒か鮭又は鯛が一人分百五十グラム前後、肉の場合は三十〜五十グラムだった。主食の黒パンは三百五十グラム支給された。

第二十四地区シベリア原生林

初めてシベリアの樹林に入った。雪が十センチくらい積もっている針葉樹の多い原生林であった。ソ連兵の指示で立木の根元の雪をのけて、地上から十センチくらいのところから切れと言う。これは後で運搬のトラックが入れるようにするためだ、と言った。

松や落葉松、白樺の木が多かった。木を倒したら枝を払って、長さ二メートル

新潟県 高橋 算

のところ輪切り、この丸太を高さ一メートル十センチ、長さ四メートルに積み上げて、これが二人一日のノルマだと説明された。だが、初日はどの組も完成したものはなかった。二日目も雪の中で木を切ったが、夕方までには半分くらいしかできなかった。そして毎日ノルマはできなかった。

ある日、やっと倒した松の横で一息入れていたら、ソ連兵が回ってきて、ブイストラ、ブイストラ(早くしろ)と言いながら、銃で私たち二人は外套の上から殴られた。あちこちでもそうだった。ノルマを達成する組はなく、毎日遅くなるので、彼らは怒っていたのである。氷点下の雪中で、多くの日本兵はなれない伐採を昨日もきょうも、いつ終わるともしれないノルマに向かって厳寒と空腹を耐えて苦しんだ。私と組をつくった兵は、秋田出身で、若い元気な若者で助かった。

私たちはこんなとき、達成できないノルマをごまかすことを教えられた。それは、前日に積んだ丸太の木口にソ連兵がたき火の炭で検査した印を十方所くらいつけてある。これを見つからないように大急ぎで切り落とし積み直して、夕方まで待つて検査を受ける方法だった。一回か二回はうまくごまかしたが、ついにはかの組で発覚して、監視の兵に殴られたりして大騒ぎとなり、だれもできなくなった。仕事は苦し過ぎた。そして寒かった。

東京都 小野正大

私たちの中隊は伐採の作業です。シベリアの木は日本の木のような太い木はなく、せいぜい三十センチくらいの直径の太さです。両端に手で持つところのあるこぎりで切り倒します。みんなが一緒に切り出すので、どこから木が倒れてくるのか一瞬わからないので怖かったです。何人か木の下敷きになって、死亡やけが人がたくさん出ました。

この作業期間中に、ある事がありました。戦友が「お前の名前が食堂に張り出されているぞ」というので「私の名前がなぜ」と聞きますと、「作業優秀者としてあるよ」と言ってくれたので、昼食のときに食堂の奥の一番高い所の壁に作業

優秀者という張り紙があるのを見ました。私の部隊で三人の名前があり、その中に私の名前がありました。馬場班長にどうして私の名前がと聞きましたら、班長は、中隊長よりの命令で班から一名書き出すようにとのことで、一週間班員の作業状態を見て出したのだと言われました。そのおかげで食事がみんなより多くありましたが、しかし食べ盛りの二十歳ですから、それでも少々足りなかったです。これはみんなを働かせて早くノルマを達成させたいソ連側の意図なのです。

岐阜県 伊藤 武

仕事は二人一組になって赤松の伐採作業であった。

直径四、五十センチの赤松に斧(タポール)で木の周囲に切り口を入れ、二人曳き鋸(ピラ)で切り倒す。真直ぐなものは六メートル、曲がったものは四メートルの長さに切り揃え、二組(四人)が共同して一日当たり十トントラック一杯がノルマであった。作業に取り掛かると、監督官(マッセル)が近づいて来て身振り交じりに何か言うが理解できない。そうすると怒って早口になる。さらに分からないので立ったまましていると、私たちの鋸(ピラ)を取り上げ、切株の高さ十五センチの部位に傷をつけ、この位置で切れという。私たちは五十センチくらいの高さのところを切っていたのだ。それほど低く切るのは作業能率が悪くなるので、なぜそのように切らなければいけないのか理由が分からなかった。

十五センチよりも切株が高く残っていると、運搬用トラックが入ってきたとき、車軸が切株に引掛かるためであった。それはとてつもなく大きな十トントラックで、横にU・S・Aの三文字が明瞭に書かれており、戦争中にアメリカがソ連に供与したものに違いない。私たちに教えてくれた監督官(マッセル)は比較的親切であったが、切り方が理解できなくて反抗的に振舞った仲間は、ソ連兵によって止める間もなく射殺された。問答無用の社会であり、畜生のように殺されることに怒りが募るが、下手に反抗はできなかった。

一緒に働くことになった相手は、第一兵舎の中で隣に起居する新潟県出身の石川という差し物大工であった。

広島県 円光寺秀頼

昼間は伐採のダワイ・ベストレの罵声とむちでしりをたたかれての強制労働、隣の友が朝起きてみると既に亡くなっている。声を出す気力もなく、まさにこれが地獄というものかと何度思ったかしれません。

朝八時から夕方五時過ぎまで、風で頭が痛くても、腹が悪く下痢していても、三七度以上の熱がなければ絶対に休ませないひどいものでした。直径一メートルの松の木をノルマは一人一日三立方メートル。直径一メートルもある立木を長のこぎり二人が引き合せて切るのですが、栄養失調で力がなく、直径十センチくらいの木にさえつまずくほどでした。さらに夜間たたき起こされ、零下三〇度の中で貨車の石炭おろしも苦しいものでした。

千葉県 磯貝恭三

冬が来て作業が始まった。伐採作業であった。直径一メートル以上の松の木の根切り作業で、二人一組で鋸を使い交互に引くのであった。冬の間は雪と氷で覆われているが、夏の間は湿地帯で山の中へは入れず、伐採は冬の仕事であった。

三分か四分粥を飯盒の三分の一くらいの量を一日分として配給される。伐採作業は重労働であるので、こんな食糧事情では作業量も落ちてくる。そこで私たちは携行する飯盒の粥を朝食でしてしまう。それでも満腹感はなかった。次は昼食であるが、朝全部食べてしまうので昼食はもちろんない。そこで、松の木を切ると松傘がいっぱいなので、二百ないし三百くらいの松傘が落ちる。その松傘を両手でつかんでねじると、中から種子が出てくる。これを食べると空腹の足しにしたのでした。

次にタイガーと呼ばれる伐採作業に回された。私には坑内作業の無理がたつたのか、急速体力の低下が目立ち始めた。伐採現場までは現地収容所から歩いて初めは四キロぐらいであったが、その距離は次第に伸び、六キロぐらいになった。徒歩で一時間余の行程となると、衰えた体力では容易ではなかった。晴れた日は少なく、たまの晴れた日の直射日光さえぬくもりを感じないし、いつも鉛灰色の曇天が多かった。作業は二人が一組となり、一・五メートルほどの長さの二人挽き鋸(ピラー)と斧(タポール)を与えられ、松の木(直径四、五十センチぐらいの立木)を倒し、枝を落として脇に積み上げるのである。ノルマは八立方メートルと聞かされたが、私たちの作業班は屈強な者は見当たらず、非力な者が多かったせいでもなからうが、幸いカンボーイは余りノルマには固執しないよう、むしる帰営時間に気を使うようでありがたかった。

伐採方法は、地上三十センチぐらいのところに斧である程度の切り込みを入れ、反対側から二人挽き鋸で倒れる直前まで切り、押し倒し、その直前に反対側に待避するが、一抱えもある立木が物凄い地響きを立てて倒れる様は壮観である。しかし、実際には予想外の方向に倒れたり、他の組の倒木と交差したり、他の立木に噛み合ったり、二人挽き鋸は気が合わないとテンポは狂いがちで、時には鋸が木に噛まれて動かなくなつて、思わぬ時間を浪費したりがしばしばであった。ペアを組む場合、気心の合う人は即定まるが、私のように全くの素人の場合、残った者同士で組むしかなかった。思うようにはいかなかった。

作業班は四、五十人であったが、かなり広範囲になりがちなので、カンボーイは一目で監視できる場所を選び、たき火をしながら見渡していたが、われわれは寒さが体にこたえるので払い落とした小枝を集め、たき火をするが、その状況を見はからつて時々空に向かって威嚇射撃をすることもしばしばであった。よく見ると、たき火をしているとはいへ、この雪上で居眠りをしている時もあり、その凶太さに驚かされた。ナポレオンもヒトラーも勝てないはずだと思つた。

一日の作業を終え帰途につく私たちは、寒さに筋肉もこわばり、着衣さえ重大動作が鈍くなる。ちよつとしたものにつまずいてもすぐぶつ倒れる。倒れたらすぐ起き上がれない。カンボーイのブイストラ・ダワイ(早く歩け)も夢心地であった。ラーゲルに帰るとまずすることは、湿った長靴(当時支給されていたソ連製のフェルト)、外套などを乾かす段取りと、夕食を済ますと死んだように寝るだけであった。つまり毎日毎日が死と隣り合っているようであった。

朝五時起床、六時食事、七時営門に集合して伐採場へと向かう。遠距離の個所へはトラックに分乗し、二人挽き鋸、斧などを腰にし、いまだ明けやらぬ夜道のようにしたところを寒空を切つて車は駆けた。さらに林道を木の間に縫うようにして現場まで歩いた。凍つた体は足先まで痛くした。吐息に唾も凍らせて、しばたく目を空虚にもしたが、零下三〇度にも低くしていた。焚き火に暖まることもできずに作業をしなければならなかった。手もかじかんで指先が痛い。二人挽き鋸も身にこたえて重かった。「おい、もうすぐ倒れるぞおー」「ぎいーいっくうーっ」、銀雪の散る空にこだまが広がり、深々としてあたりは異様なまでの木折れが響いた。ずっしん：大きな音響とともに大きな樅の古木が倒された。大きな樅の木が枝葉を地に叩きつけた。風圧で粉雪が宙にと舞い上がった。横なぐりに散つた雪が顔面をいやというほどに痛めた。身も切られたようにも感じたが、耐えに耐え、また次の木へと二人挽きを戦友と挽いた。防寒着に重くした身は、転び、また起こしてあえぎ、ソ連の警備兵に怒号され、ダバイ(早く)と追い立てまкруられた。ノルマを達成できなければ日暮れても帰さない。体が思うように動かない、重い防寒着に阻まれ、木枝をまたぐのも至難だった。切り倒した木を枝打ちして長さ二メートルに裁断、この丸太を縦に、また横にと交互に高積み、一メートル五十センチに積み上げた。一組が十名の班を組み、伐採、枝

打ち、丸太の裁断、高積みめの作業を連続繰り返して、ノルマに追われた。

東京都 伊藤真正

千葉県 奈良光雄(旧姓 印藤三夫)

森林伐採作業

第五收容所は主として鉄道建設に伴う用材調達に当たったが、果てしなく続く松の原生林で、長さが三十メートル余りに達する見事な松の林が続いている。我々は伐採には全く経験のない者ばかりで、三人一組となり、二人で使う鋸と手斧で枝を切る者と組んで作業するわけだが、一個中隊は約百名ぐらいで、警戒兵が五、六人つく。監督は作業を捗らせるべく「ダワイ、ダワイ」と盛んに叱咤するし、警戒兵は作業とは関係なく、脱走者を出さぬことにのみ専念するので、両者の間にはしばしばトラブルが起きていた。

シベリアの夜明けは遅く、朝真つ暗の中をたたき起こされ、光明とてない中で雑穀も肉も魚も一緒にした雑炊を嚙り込み急いで出発するわけだが、動作は至つて緩慢だ。朝八時にまだ真つ暗の中を狩り出され、前後を銃を持った警戒兵に「ダワイ、ダワイ」と叱咤され現場に向かう。彼の国にはノルマと称する作業量の標準が決まっていて、熟練した者を基準とされているので、我々のような初めての人には一〇%も達成できないので彼らは焦つて、そのころ、ノルマのできない者は基準に従つて食糧を減らすようなこともあり、ますます仕事にならない。栄養失調で倒れる者も続出し、余りの空腹に耐えられず、松の木の甘皮を剥いで何度も煮こぼして支給される食糧に足して食した者もあつたが、その人たちには栄養失調が進んで死亡した者が多かった。

また、作業中倒れる木の下敷きになったり、倒れる木の枯れ枝が白樺の木にはじかれて頭に当たつて死んだ者、また座つて鋸を使って避けそこねて両足が巨木の下敷きになった者などなど、作業に伴う事故の発生もこの頃が多かつた。

食事はノルマにて決まるのですが、なかなかノルマができないため食事が少ないので多数の死亡者が出ました。午前六時に起床して七時に作業場に出発、八時よりソ軍に指定された松の木を切るのです。

一人のノルマは四立方メートルであるが、寒さと食糧不足ではだれもノルマはできない。日本兵が多数死亡したので、私が埋葬いたしました。

私も大変疲れて、作業が終わつて帰る途中で倒れ、二時間ほど意識がわからずにいたが、意識が復活して月の明かりで一人で兵舎に帰つたこともある。各人も皆疲れているので、他人のことなど面倒見る人はいない。私が一番最後の作業場より帰つたのでだれも知らないようでした。

また、仮兵舎の青い松の葉を積んで作つたところで寝るのです。この地区には茶色ダニ虫、黒色ダニ虫と赤色ダニ虫が多くおり、猛毒ダニ虫です。特に赤色は大変猛毒が多いので、ソ軍人や地方人は恐れてこの山にはあまり入らないのとことです。私はこの恐るべき地区で松葉の仮兵舎で作業させられ、夜は松葉の上で寝、朝起きると猛毒赤色ダニ虫が頭や顔、首、手足などに数匹が血を吸つているので軍医さんに取つていただいたものです。幾度もこのようなことで、ついに四度くらいの高熱が続いたので意識はもうろう、耳鳴り、目も悪くなりついに倒れ山間の医務室へ入院した。日本軍医とソ軍医の診断の結果、猛毒ダニ脳炎症病であると診断して二時間に一本ずつ注射をしたようで、八日間注射と水でようやく生死の境を逃れ生き延びていた。

今日、復員以来、戦傷後遺症で国立東京第二病院に月二回、外来で治療を受けておりますが、過去入院した国立東京第二病院でないと治療と薬はないソ連捕虜特殊病です。

和歌山県 笹内武夫

昭和二十一年五月ころであった。私たちは移動して「チグロワヤ」收容所に入つ

た。ここでは作業大隊として二大隊ほどの人員がいたようである。第一大隊は広大な山の中での伐採作業であり、その材料による宿舎の新築など各種の仕事に拡大されていった。また、別の第二大隊は駅の方で貨車の積み込み作業専門で、時折、第一大隊の方から応援に行ったりしていた。ここでは、皆一人一人の一日の「フルマ」が決められていて、伐採の相手次第で能率の程度の上下が生じるので、相手が弱いと仕事が捗らず泣きたくなるような時もありました。

作業の最中、倒れてきた木の下敷きとなり股が裂けて一時間後に死亡した者、落ちてきた枝で頭を叩かれ即死した者、裂けた木が腹に落ちて来て腹部を打たれて十六時間後に息絶えた者、事故の連続で、小高い丘に立てられて行く墓標は今日もまた一つ、一つ、と増えていった。事故ばかりではない。空腹に耐えられぬ栄養失調死亡者も加わってである。

石湯温泉

「ヤポンスキーダモイ」とはソ連兵の口癖で欺瞞である。それが分かっているが若干の望みをかけ、もしかしたら帰国できるのではないかと編成に参加し、トラックに乗り込んだ。平壤駅と思いついたのに山の中にどんどんと進み、着いた所が石湯温泉という伐採作業の現場である。

松を主に雑木を伐採し、貨車積みにする作業であるが、小生は前述したように炊事班長を命ぜられ百名程度の給食を担当した。川床の静かな場所に竈かまを築くため周辺の石を探し二人で担ぎながら据付けたのはよかつたけど、片棒を担いでくれた鈴木候補生は重労働の無理がたたり、マラリアに罹り苦勞をかけたことは忘れない。作業場の近くを、朝鮮鉄道が通っており、北上する貨車の窓から手を振る日本兵たちを複雑な気持ちで見送った。石湯温泉の作業は付近の山林を丸裸にして数カ月で終わった。

岩手県 荒田昌三

収容所前に立ちほたるかざるザガラス山は谷合いが奥深く、懐を一里ほど入った辺りから人跡未踏の松柏の密林地帯となる。樹木は寒帯地方なので実の成る木は一本もなく、樅と柏の喬木が林立している。

毎朝の点呼に際し、一本のタポール(斧)と一枚のピラー(鋸)が渡され、銃を持つソ連兵の監視の中、ダワイの掛け声に追われ山に入り、労働作業を開始する。次々に径二尺ほどの大木を傾斜地で伐採するが、樹の倒れるときに逃げ遅れると、樹木の枝葉の下敷きとなり死亡することになるので、大声で皆に合図が要る。

長野県 池上博

昭和二十年十月八日、間島を出発、十日余りの強行軍、野宿を重ねながらも、日本に帰れることを信じて専ら歩いたのに、着いた所はシベリア鉄道の名も知らない小さな駅。ここで貨車に乗り、数日後着いた所がシベリアのホルモリンという所。この第二〇一収容所と呼ばれる粗末なバラックに二千人が入る。宿舎は板の床が二段になっている。

食事と言えば高粱か粟の粥少量。時には黒パンといった粗末なもの。作業は木材の伐採、運搬、ドームの建設。伐採部が二人挽きの大きな鋸で伐採した木材を、運搬部が外部より来る馬により運搬する。一定量の木材がたまるとドームの建設に掛かる(ドームと言っても、丸太を組み合わせ湿地からコケを取って来て隙間に詰めたもの)。終わるとまた、伐採に掛かるといった作業の繰り返し。一日の作業を終え、収容所まで一時間の行程。零下三〇度を超す寒さ、一日の疲れを癒すどころか、南京虫、シラミに悩まされ、安眠もできない有様。

こんな中で栄養失調と重労働の疲れで斃れる者が続出する。

スハラは我々第五一一労働大隊の本拠地である。約六百名ほどがここで、何百年かの年輪を重ねた森林で雪をかき分けて二人組での伐採作業である。

ジプヘーゲン駅近くに分所があり、ここでは貨車への積み込みであるが、無蓋車、有蓋車問わず五十トン、二十トンとあり、かなりの時間が掛かった。特に泣かされたのは、貨車の入る時間が一定せず、夜中だったり、夕方であったり、はたまた早朝であったり、いずれ貨車が入れば直ちに作業開始である。場所の記憶はないが、通称「中の山」と称した所があり、伐採作業が主体で、時にはトラックへの積み込みにも駆り出されたのである。

私は、スハラ、ジプヘーゲン、中の山でそれぞれ二カ月ずつ強制労働させられたが、虱が異常繁殖して苦しめられたのである。酷寒の中、栄養不足が加わり、パンを口にくわえたまま死んだ友が何人いただろう。隣に寝ていた友が死ぬとすぐ虱が移動するので分かるのである。

ある日、伐採から疲労困憊し。パンにかじりついたとき、ソ連の将校が突然宿舎に来て、怒りを込めて甲高い声で何やらわめいた。通訳によつて説明されたその内容はこうだ。今日の伐採で切り株が高いのがある、すぐ現場に行つて切り直せとのことである。明日やるからと理解を求めたが、命令であるとして譲らず、夜中まで掛かつて切り株を再び切ったことがある。こうした山への行き帰りに疲れ果てての死亡者が数知れない。死亡者は丸裸にされ、物置に積み上げられ、何十体かになると馬糞で監視のもと死体捨て場へと運ばれ、雪を掛けて春の雪解けを待つのである。

私たちは二十一年四月半ば、中の山を引き揚げ、いったんスハラに移動したが、七十五名編成だったのが約半分となり、何とか働ける者は十人足らずの状態であった。病弱者百七十人ほどが編成され、小沢中尉の指揮でハバロフスクの病院に入院するというのでジプヘーゲンを離れたのは間もなくである。

翌日からの作業は伐採である。二人一組で鋸一挺と斧二挺、鋸は、長さメートル、幅十センチ、二人挽きで、弓型となつて、二人で交互に挽くようになっていた。

原木は五十年以上経つた二抱え以上あるような大木で、高さは三十メートルくらいある松材であった。先程の鋸を横にして二人で根倒しをするのだが、生まれて初めての伐採、とりわけて二人挽きの鋸である。交互に押し引いたりするのだが、呼吸が合わず、鋸が遊んでなかなか幹に吸い込まない。おまけに空腹と寒さで意のごとく作業が進まない。その上監視兵に「ダワイ、ダワイ」と叱られながらの作業は、当人でなければ知る由もなく情けない限りであった。根倒しされた大木は枝を落とし幹のみ二メートルごとに刻まれる。使用目的は都市の薪になるようだった。そのように小刻みにされた二メートル物は高さ二メートルに積み、いわゆる二メートル四方の堆積ができる。こうして積まれた二メートル物はソ連のトラックが来る地点までシベリア特有の馬により櫓に積み込み運搬されるのだった。

チタ付近はバイカル湖があるため、湿地帯で、冬期のみ入山可能で伐採も冬期の六カ月のみである。最初一週間くらいはノルマがなかったが、作業に慣れるにつれノルマがあたえられるようになった。ノルマは先ほどの二メートル四方の積材を二個が百%である(二人で)。たやすくできるものでもなく、泣かされる毎日であった。

二メートル四方を真面目にやつていたら体がもたない。ずるいこととは知りながら倒木した丸太の枝落としを高目に落とし(枝が幸いして堆積空間ができる)、外部から分かりにくい中程にその木を積み込み周囲のみ普通状態にしておいた。

当分はこのことも通用したが、程なく彼らの知るところとなり、ひどく叱られたこともあった。

福島県 相田正明

シベリアの冬は朝九時ごろより夜が明け始め、午後三時過ぎると日が暮れてくる。その間、毎日毎日伐採と材木の搬出。キコリの経験もなく、森林の中で二人一組での鋸挽きがアッチコッチで始まると、樹木が倒れる寸前に「木が倒れるぞ」の叫び声が入り乱れて、危険も多く、樹木に当たったり下敷きになったり怪我人続出して、死傷者も出て、修羅場の状態となりました。

その上、食事は豆、粟のスープと一片の黒パンであり（日本のキコリは一升飯を食するのに）、更に想像を絶する寒さでたちまち栄養失調のため、病人続出となり、多くの同僚が死んでいきました。

零下四五度以上になると、すべての作業が中止となります。外で二、三分でも立つて寒気に当たると、たちまち耳、鼻が白くなり凍傷状態になります。外気は凍つてボーと音を立てているような感じで、煙突の煙はボコボコと綿が重なって動かない状況となり、まさに寒さの極限状態でした。零下四〇度くらいになるのを待つて、付近の山へ薪拾いが始まりますが、食物が腹に入ってませんから気体力もなく、夢遊病者のように薪をやつと集めても持つ力がなく、束ねて引きずりながら運びました。

兵庫県 森田 純

伐採作業を一般の人々はしていました。二人用ののこぎりで直径一メートル〜一・五メートルある大木を倒すのですが、冬は雪の中で木全体が凍っているために倒すと枝が五〇メートル周囲に飛び散り、その枝に当たって傷を負う人も多く出ました。また、シニョバを着、防寒帽をつけ、フェルトの長靴をはいているため、敏捷な行動ができず、大木の下敷きになる人もいました。とにかく生きることだけしか考えない生活が続いたわけです。

京都府 中西 昇

昭和二十年八月十五日終戦。当時は南千島エトロフ島三原大隊に所属して守備に就いていた。

九月十八日ソ連軍により武装解除された。

九月二十二日ソ連兵に警備されつつ、ソ連領沿海州に入りソフガワニ收容所に入る。宿舎はシベリア特有の太い丸太を組み合せた建物で、ヘチカで暖房されるが、零下五〇度の厳寒時は寒くて眠れない夜もあった。

労務―我々三原大隊は約一千名余で作業小隊を編成し、森林伐採の労務に就く。シベリアの冬は早く、十一月には降雪あり、厳しい寒さの中、二人挽きの大鋸で大木を倒す。直径一メートルもある大木が、梢をふるわせて辺りの枝を打ち払い轟音をひびかせて雪の中へ倒れて来る様は心臓が凍るような恐ろしいときもある。

抑留されて一番に思ったことは、何年抑留されるのか、果たして日本へ帰る日があるのかと、なんの発表もないまま一日一日が過ぎていく。

京都府 吉田 静

抑留地はテルマ收容所で日本兵三百人余が入られた。

作業は森林伐採ですぐ始められた。現場に作業小屋があつて五十名余り宿泊する。丸太造りの半地下式で零下四〇度―五〇度の冬の寒気は心臓も凍りつきそうだ。食糧は少量で空腹をかかえての伐採はきびしい。雪が降った。一晩で五十センチ余り積もったが、労務は強行された。雪で足もとが悪く能率が上がらない。そんな毎日であった。倒れて来る大木の枝が当たつて大怪我をする者もあった。直径一メートル余の巨木を倒し、枝を外し、搬出する寸法に挽く、二人挽きの大鋸を使うのが栄養失調になりかかっている我々には地獄の苦しみとつぶやくものであった。

京都府 林 至

冬期の労役

大地が石のように凍り川の水も凍りついて、その上をトラックが楽々と通れる厳冬になると山へ伐採に入った。

火力発電所の燃料になる松材の伐採で現場には半地下式の小屋があり、ここに寝泊まりする。衣服は現地人の着る綿の入った労働服だった。

積雪の中で直径五〇センチから一メートルもある松の巨木を二人挽きの鋸で引き倒して枝を払う。この作業も重労働だった。相変わらず食料は乏しい。抑留二年目もこのような労役が続いた。

島根県 中島正義

翌日から建築用の松の伐採作業に入ったが、ノルマを達成しないと帰してくれず「ヤポンスキーブイストラ」と言つてソ連人の監督が物すごい形相で怒鳴る。食事は黒パン二五〇グラム、水のようなスープ、二〇代の若者にとっては、力の原動力にならず、働く意欲が出るはずがない。

毎日朝七時の夜明け前に食事をすませて広場へ集合、人員点呼をして各中隊ごとに作業現場へ行くのが日課となる。松や樅の木を二人一組で「タポール」（なた）で枝を切り払い、四メートルから十五メートルの長さに輪切る。毎日この作業を続けているうちに、私も栄養失調者になり、鋸の目立て、タポールの研磨など、軽作業をすることになった。

広島県 石井博之

やがて貨車は駅のない殺風景な雪一色の原野に停車。そこはスホイロスク収容所だった。白樺の並木が続く荒漠とした丘の上にブラック式の小屋が十五棟あった。周囲は高い鉄条網で囲まれて、四隅の望楼には首に銃をかけたソ連の監視兵が立っていた。

私の抑留生活の中で一番忘れることのできない檻の中の生活と労働の始まりであった。以前ドイツ人捕虜の収容所に使用していたそうだが馬小屋のように何にも無かった。丸太を積み上げて造った収容所の周りは白樺や松などの原生林の山だった。立木を伐採して、床に丸太を並べ、隙間にはコケを詰め込み、その上にソ連軍がトラック輸送してくれた乾燥した雑草を敷き、毛布一枚と防寒衣が支給され三人で畳二枚程度の広さで寝食を兼ねた。我々五十名を含む混成作業大隊が編成され、森林伐採・用材輸送、道路建設の二つの労働に従事。私は伐採組となった。

収容所からの出入りは、厳重に人員の点検をする。数の計算が無知識なソ連兵が多く点呼に長時間かかった。早朝の点呼は暗闇の中で行われ、それから一時間もシベリアの大森林地帯をソ連兵に監視されながら伐採場へ行く。

松の大木と白樺の木が繁茂している密林地である。伐採にはノルマが定められ、一日の作業量（何立方メートル）としてあった。二人一組で二人挽きの大きな鋸（一メートル×一・五メートルくらい）と斧二挺で径三〇センチ×五〇センチくらいの大木を倒し、枝を払い、大木は二メートル間隔に切断し、積み上げて整理。枝は跡形もないように焼却処分する。整理した材木の高さや幅を測って検査。『ノルマを達成せねば収容所に帰さぬ』とソ連兵が毎日、その日の伐採する立木に印をつけ監視していた。

現場に着けば手足が凍りそうなのにすぐ仕事に掛からないとノルマが達成できない。膝まである積雪の中の伐採、（降雪の場合は八十センチぐらい）周りの雪かきをしてからの作業開始。両方から一生懸命に松の木を切る。寒さのため、顔は目と口だけ出してあとは完全防寒（？）しているが足や指先が疼いてくる。凍傷から身を守るため、作業中は勿論、休憩時も耐えず足踏みや両手を動かしていた。樹木も凍っていると思うように伐採ができない。切り終わらないうちに急に思わぬ方向に木が倒れることがある。

そんなある日、突然猛吹雪になり急に視界が悪くなってきた。倒れてきた大

木の下敷きになって亡くなった友や、落ちて来た枝に頭を打って重傷（入院していたが死んだと聞いた）を負った友が続出した。また極寒の枝払いは大い大きな枝でも斧でポキンと折れることもあったが、燃やすのに大変苦労した。白樺の林に行つて皮を剥いてきては助燃材として燃やしていたが、完全焼却処分するには時間が掛かる。ノルマは達成できない。夜十時から十一時フラフラになって収容所に帰る。着替えるものはない。作業の疲れで、いつしか眠る。横になったと思つたら朝の点呼で起こされ、前夜の飯と朝食を一度に食べ、昼食の黒パンを持ってまた伐採場へと……何度となく続いた。

苦しい一日の労働が終わり、その帰り道、疲れと空腹で雪に足をとられ、重たい足を引きずり歩く。雪道に躓^{つまず}いて転ぶ。列に遅れると監視兵に銃床で叩かれて追いつきながら帰った。その帰り道にソ連兵がタバコの吸いさしを捨てると先を争つて拾っていたが、皆その気力もだんだんと薄れてきた。

岩手県 崎田正治

何日経過したか定かでないが、とある小さな駅の構内に停車した。ここはシベリアの「セミノフカ」だった。直ちに下車を命ぜられ、それから徒歩で数十キロ歩き、夕方に二五〇人くらい入れる収容所に収容された。

収容所は丸太で造った山小屋で、寝床も丸太を並べたもので、その上に毛布を敷いても身体が痛く、寒さも厳しく眠れたものでなかった。

収容所に入った翌日から二人引きの鋸と斧を渡され二人組となって作業に入った。山の奥地の作業は森林伐採で、履物はソ連製のカートンキ（羊毛をフェルト状に圧縮した、革や金具は全然使つてない長靴）を履いた。永久凍土のシベリアならではの履物である。作業中もお互いに顔を見て「鼻が白いぞ」「頬が変だぞ」と注意し合ったが、手足の凍傷は続出した。また濡れた手で飯盒にふれて指がピツタリくっついてびっくりしたこともあった。このような極寒三、四十度での苛酷な重労働中にソ連の警備兵（カンボーイ）に「ブエストラ、ダバイ、ダバイ」と

銃でこづかれるありさまで、朝は星をいただき夕に月影を踏んで帰る重労働であつた。

夏季（七月位）の夜は十一時頃まで明るく、朝三時頃には夜が明けるといふ白夜であつた。寝る時間が来ても明るくて眠れないので、調子が狂つて困り果つた。

夜、痩せた身体を丸太の寝床に横たえ隣の戦友と語り合うことは決まって食べ物で、「米飯を腹一杯食べてから死にたい」など、食べ物次は「早く日本に帰りたい」という話し合いであつた。しかしいつ帰れるかわからない。希望のない暗黒のシベリアの荒野に生ける屍であり、祖国を思い胸が痛んだ。

岩手県 石橋喜治郎

命取りの伐採作業に入ソ三年目の冬に従事したことがあり、抑留中最も厳しく辛い仕事であつた。伐倒二人と枝払い・焼却一人の三人が組で、ノルマ・カンチャイ（基準量完遂）が至上命令だつた。作業用具のピラ（鋸）一、タポール（斧）一を携行して樹齢百年余の沿海州松の原生林に挑むのである。ズブの素人が立ち向かうには立木が太過ぎて大変な難作業だつた。

ソ連製二人引きの鋸のため、対面する二人が素人同士の組は相手と呼吸を合わせることを知らないで断面が平らにならない。このため鋸の動きが鈍くて、労多くして効が少ない。体力の消耗が激しく、ノルマの達成が到底無理である。毎日が早出・残業の連続だつた。経験者同士組むと時間内労働で十分ノルマの達成が可能だつたから、特別高い設定ではないと思えたが、大抵の伐採班にとつては荷が重くて労働に疲れ、はたまた飢えと寒さに泣き通した冬であつた。

通直材は建築用として六・五メートルの規格に玉切りする。曲がり材と立枯木は二メートルに採材して薪用になる。広葉樹用材だけは五・五メートルに玉切りされた。単一規格だつた。この点だけは頭を悩ます必要がないので助かった。木を倒すと一人がタポールで枝を落とし、その枝や末木を集めて焼却処理をし

た。

この一連の作業を三人一組で行う。必ず末木・枝条はその場で焼く。それは森林火災の防止と伐採跡地の更新促進のために励行するのであろう。

立木の伐採で運が良いと余得がある。伐採木の松が朝鮮五葉の一種なので、樹冠に実を付けた木を倒すと歓声をあげて喜んだ。松かさの中にある実がちょうど銀杏ほどの大きさがある。これが脂肪の固まりのような美味しい食物だった。この時ばかりは警戒兵の警告も何のその、軽く無視してまず松の実を確保してから、次いで作業に移った。何せ貴重な脂肪の供給源を見捨てるわけにはいかないのだ。多少の危険を伴うが敢然と取り組んだ。この松の実だけは現在口にしても必ず美味しい食物だと思う。彼らソ連人は向日葵の種子と同様に、口の中に入れば手を使わずに上手に殻を吐き出して食べていた。

ノルマの苦しさに耐えかね、カントーラ(監督員詰所)との交渉の結果、ピラの目立てとタポール研ぎの要員を日本人の手で行うようになった。道具が仕事をすると、つまりノルマ(基準量)の向上には仕事の段取りと道具が必要なのだ。これを彼らソ連人に理解させるには相当の時間を要した。

千葉県 伊藤千次

朝六時、レールを切つて吊り下げた鉦の音で起こされる。飯上げも分配も戦友がしてくれた。「ハイ朝飯、ハイ昼食のパン」と手渡してくれた。山に着く頃には夜が明け、すべて見えてきた。作業は伐採、二人一組で大木をピラー(二人引きノコギリ)で切り、六メートルと四メートルに玉切りし、一カ所に集めて積み上げ、枝葉を燃やしてきれいにする。積み上げた山を毎日測るがノルマはなかなか達成できない。昨日の分を積み換えてごまかすこともあった。ソ連兵が気づいて片口に墨をぬるようになった。すこし切つて燃やし、また積み換えるが、それでもノルマは達成できない。段々と慣れて、ピラーの目立て、丸太の動かし方、枝葉は幹から打ち落として燃やす。仕事ができるようになってソ連兵はノルマを増

やしたので、きりがなかった。

木が倒れるときお互いに声をかけ合つて倒したが、運悪く枝が刺さつて重傷を負つた戦友がいた。軍医は川の水に食塩を入れてリンゲルのように注射したが何ごともなく元気になった。

春先になり雪が解け出すと、切つた木を馬で引き滑らせて再び谷川に落とし、氷の上に積み上げた。川の水が解け出すと丸太が流れ出す。川の狭い所で丸太が引っかかり次々とからみ合い流れを止めてしまふ。トビロを持って丸太をチョンチョンと渡り、引っかかりを引きはずし大急ぎで岸に逃げ帰る。命がけである。川を行き来して丸太の面倒をみる。

新潟県 真嶋藤作

そして二日後、いよいよタポール(斧)とピラ(鋸)を嚴重な員数検査の上、各作業グループに渡され、積雪五、六十センチから一メートル近くもあるうかと思われる密林の中へ各警戒兵に率いられて、寒さがしんと肌にこたえる松林の中に入つて、直径五、六十センチから一メートル以上もある松の巨木を二人挽きの鋸で倒してゆくのである。

そしてその時からいわゆる「ノルマ」なるものを課せられ、それを果たさなければ食事も休息も与えられず、幕舎に帰るのはいつも時間は判然しないが、いずれ暗がりの雪道を、凍傷に注意しながら、無口、無言、誰一人として言葉を発する者はない。余計なことをしゃべれば体力を消耗する。自然の自己防衛策か。帰れば幕舎の中は真つ暗である。持つて来たたいまつの明かりを頼りに、パン百五十グラムに大根の少し入つたスープ、飯盒の底に二センチくらいの厚みの量である。握り締めれば二口くらいで終わりである。空腹には堪え難く、道中、松の青葉を摘み口に入れては噛みながら唾液を起こした。

当初はそれほどでもなかったが次第にノルマの遂行が厳しくなり、作業の量により食糧の量に差別があり、一級から三級まで、一番量の少ない一級食が我々

は常であった。やがて寒さと、食糧の欠乏で、すべての人達がやせ細っていった。栄養失調なるものを初めて知った。冬季間の寒さとその糧秣の欠乏、加えて重労働で、遂に多くの戦友が次から次へと倒れていったのである。

宮崎県 宮川健三

ノボシビルスクに一時停車した後は毎日毎日歩きに歩いた。東チタ、西チタに来ると極東だと思われ、喜びが浮かんで来た。左にバイカル湖をしばらく見ることができた。この日を二年間思い、祈り続けたことが現実となり、広い湖を思い切り眺めた。極東のハバロフスクに着き、落ちついた所は八分所だった。極東に来たという喜び。ここは、呼べば日本に届くような気持ちのする極東ハバロフスクなのだ。

当分所は伐採が主体で、材木の貨車積みや製材をする分所。今までも政治教育に責められた地区にいたのだが、それほどでもなかった。当地区の恐ろしいほど政治教育の盛んなには頭をひしがれたような思いがした。教育の遅れた地区から来たので常に「教育、教育」と苦しまられた。

ラポーチー(作業)としての伐採も今想像するとゾッとするようなことであった。雪の積もっている道路を自動車は走る。シューバー(毛皮のオーバー)を着てカートンキ(フェルトの長靴)を履き、天にそびえる立木をタポール(斧)、ピラー(鋸)を持って自動車から降りると直ちに二人組は目標を定めて出発する。立木を倒すのは実に愉快なものだ。深山に入り自分の思う木を倒れやすい方を見て習ったように倒す、その段取りの忙しさ。枝を切り落とし、直ちに枝や葉を燃やし始める。そして一定の寸法に丸切りをしていく。材に取れないものはドラワー(薪)とする。材としてノルマを達せない所はドラワーでノルマを上げる。八時間が二時間くらいにしか思えぬ忙しさだ。自己批判、相互批判により作業能率をぐんぐんと引き上げていく。しかし山の悪い所ではどうしようもなく、ただ苦心をさせられるのみだ。カートンキを履き、綿入れの衣袴を着て、その上にシ

ューバーを身にまとい、身動きが取れないくらいだ。これで自動車から飛び降り、遠いときは半里くらい雪がひざまである雑木林の中を歩いていると雑木に引っかけ倒れることも、深くぼみに落ち込むこともたびたびあった。しかしそのようなことはおかまいなしの行軍だ。定地に到着すると、シューバーを一定個所に脱ぐなり大きな革の手袋で二人引きのピラーとタポールを持ってすぐに二人組で山に入る。その勇ましい姿は演習時の突撃そのものようだ。いよいよ根元直径五〇く六〇センチの伸びの良い松の木二本を見つけると、上衣を脱ぎ直ちに退道側方に切り開く。これは必ず実行せねばならない。ピラーを入れようとする頃は太陽も高い十時になる。根元はできるだけ低く切らないと切り直しをさせられる。枝葉を完全に焼き払う。一分間も力と気を緩めることはできない。真剣勝負そのものであり、剣道の掛かり稽古同様に山の中の八時間の作業が続けられる。

ある日このような事があった。タポールで右の太ももを袴の上からきった。赤い血が袴の上にしみ出た。相当きったなあと思ってたけれど傷を見ることさえできず、ラーゲルに帰ってみてこんなに大きな傷だったかとびっくりしたことがある。今も傷跡がはつきり見える。この傷跡を見る度に、人間の真剣な時はあらゆるものを超越するものだと思った。

東京都 飯塚年男

この休養收容所に一カ月ばかりいて、今度はさらに北のヤクドニアの八百何分所だか、伐採が主の收容所に移った。二十三年の春ころである。

伐採は、馬そりで木を運び出す関係で、雪のある冬にする。ピラー(のこぎり)、タポール(斧)を使つての力の要る、そして危険を伴う仕事である。

作業は、木を切り倒し、枝を払って焼き、一定の長さに切るのであるが、ノルマの関係でいろいろと無理をする。細い木では能率が上がらない。三十メートル以上もあるできるだけ切りやすい木を選んで切るが、なかなかさうもいかない。

大きい木は、なかには枝の根元が二十センチ、長さが十メートルもあるのがあ
るが、それを雪の中、どた靴はいて枝を一本一本担いで集めて燃すのである。ノ
ルマ一〇〇%でも大きい木を五、六本は切らなければならない。雪の上で生木を
燃すのである。なかなか燃えない。一本一本枝を集めて何力所で分散して燃や
してなどはいられないのである。

切り倒した木の先をなるべく一カ所に集めるように、右に倒れそうなのを、
無理してくさびを打ち込みながら左の方に倒す。枝がからみ合い、折れて落ち
てきたり、思わぬ方向に倒れることがある。倒れるときは「いくぞーッ」と声をか
け、走って木から遠ざかるのだが、見ていると、雪の中を、のろのろ歩いているよ
うにしか見えない。

危険を伴う伐採だが、ノルマは一〇〇%で十五ルーブルである。他の製材とか
大工などは十八ルーブルとかそれ以上である。おかしいと思つて聞いたことがあ
るが、山で木を切っただけでは何の役にも立たないが、運び出して製材して板や
枕木にすれば役に立つ、机やすいや、家を造つたりすればさらに役に立つという
ことだったが、納得のいく論理には思えなかった。

石川県 藤澤栄次

三年目より作業は一転して森林伐採となり、イマン西南の奥地キタイゴロ
ドに移動した。伐採の作業も殆どの者が未経験であり、倒木の散在する原始林
で、一抱え以上もの松の巨木を二人引きの鋸(ピラー)で息を切らしながら切る
作業は、草刈作業にも増して過酷であった。ここでもノルマに追われて体力の消
耗は甚だしく、その上作業による事故も加わり、多くの犠牲者を出した。

島根県 田辺勝義

私達の作業は伐採であった。主として赤松で、白樺や落葉松も少しはあったよ
うだが、直径一メートル以上のそれらが広大なシベリア平原に林立している姿は

壮観であった。それを二人用の鋸で両方から引き押しして切るのだ。地上二
三十センチで切り、切り株は枯れるように皮をむく。切り倒すと幹を二メート
ルに切断し、枝は切つて寄せて山にし、後で焼くのだ。ただでさえ固い材質の樹
木が凍つておきたから作業は難渋し、二人で二メートルの丸太を、三メート
ル幅で一メートルの高さに積むというノルマ達成は大変であった。積んだ丸太を
後からノルマ検査員が木口へ墨をつけて回る。私達はその木口の近くを切断し丸
太の再利用の作戦に出たが、バテしまつてからその手も駄目になったという笑
えぬ話もある。

また、その丸太を自動車の積み込み場所まで馬そりで搬送する作業もあった。
その際は良い馬の取り合いが始まる。馬糧の取り合いが始まる。馬糧は高粱や
燕麦だったから、くすねて食べることができるのである。こんなむき出しのすさま
じい光景もあったのだ。

愛媛県 田坂正

約一カ月後、さらに興南に下る。約二千人くらいいたかと思う。十二月末に
全員帰還するが、それに先立つ十月上旬、不運にも私を含む百人ほどが再入ソ
ポシエト湾沿岸のクラスキーノ付近の山中でさらに二冬、冬將軍と対決するこ
とになる。ウオロシロフ五六二労働大隊分遣隊と言ひ、仕事は伐採である。二百
人ほどの先住者がいて、彼等から「懲罰大隊」だと聞かされる。仮借ない厳しい
ノルマで、給与も悪く、成績の悪い私のグループはよく飯を減らされた。幸い翌
二十二年夏には四級となり、バーニア勤めを三カ月ほど。一息つけた。

元来危険な仕事、何人かの犠牲者が出たが、彼等は特にハラシヨラポータであ
り、気の毒であった。その中の一人は私の故郷近接の町の方で、後日、私にご遺
髪を県世話課に届け、ご遺族のもとに帰られた。

雑伐たる山仕事にも虜囚の身を忘れるようなひとときもある。馬力搬出は
馬と一体だが、朝当てがわれて、夕方ブラッシングをして返納だから、大して厄

介ではなく、馴らされたおとなしい駄馬との交流の日々である。空腹のあまり、昼休みに与える馬糧の燕麦をピンはねして、焚き火で焦がして手で揉み皮を取り、もさもさと頂戴した。(馬さん、ごめんな)

岩手県 安倍庄吉

十二月初旬、いよいよ本格的な伐採、運搬作業が始まった。まず日本の軍医立会いのもとに簡単な身体検査があり、一、二級は伐採作業、三級は軽作業、四級はOKと称し、炊事その他の雑用であった。

十一月末頃と思われるが、将校が持っている軍刀の取り上げがあり、引き揚げられる前に試し切りと称して薪割りをして返納した。

岐阜県 加知郁夫

私達の作業は伐採と決まり、二人用鋸と、タポールが手渡された。作業現場は、鉄道沿線を歩いて一時間くらいの距離にあり、雪道の歩行は難儀を極めた。鼻の凍傷にかかりやすく、お互いに注意し合った。凍土と積雪の原生林での伐採は酷であった。

ノルマを達成するためには、一抱えもある樅の木に挑戦する。樹木そのものが凍っているので鋸の歯が立たず、思うようにならない。二人呼吸を合わせて四苦八苦しながら、一日平均五本程度伐採するのが精いっぱいである。

切り倒した木は、五メートルの材木にして製品にする。材木搬出に邪魔になる木や枝は一カ所に集めて、燃やしながら休憩して一日の作業は終わる。

夕方になるとソ連の監督(元囚人)が検査に来て、ノルマの達成状況を計算していく。ノルマは一人当たり何立方メートルであったか忘れたが、随分過酷な重労働であった。

一日の作業を終え、朝来た道を収容所へとぼとぼと帰り着き、器具は営門前

の器具庫へ返し、営門で人員点呼を受けて宿舎へ。

夕食は、三五〇グラムの黒パンと高粱の入ったスープでとても口に合わないが、空腹であるために平らげることができる。こんな毎日の連続であった。

千葉県 林興一

作業班は六人で編成し、斧三、大鋸一、糸鋸二で、器材の損傷は営倉もしくは絶食であった。ハラシウラボータ(成績の良い人)は早く東京ダモイであるという。そして「ノルマ」は一人ずつ四〜五立方メートルで一組三十立方メートル、絶対遂行せよとの厳命であった。最初の頃は、原生林(松)は二十メートルくらいで杉の木のように枝も少なく真っ直ぐに伸びていて「ノルマ」も楽々クリアした。一線上に拵がつて真正面に一直線に進む様は壮観というか豪快。それにも増して東京ダモイ、何と魅力溢れる言葉だろう、自然と体力が漲る思いである。早く完遂して「ダモイ」だ、五百人悉くそう思ったであろう。例え一日粟粥二杯でもがんばると。

それも束の間、一カ月もたたぬうちに「ノルマ」は五立方メートル、五・五立方メートルと繰り上げられ、最後は六・五立方メートルとなった。栄養失調という病気を聞いたのもこの頃である。夕べ故郷を偲んで話題に花を咲かせた戦友が朝には骸となり、毎朝一、二人は他界した。あるいは栄養失調なるがゆえに機敏に避けることが出来ず、木材の下敷きになって果てる者もあり、誠に残念至極であった。こんな世界が実存するのか。戦いに敗れたといえ、我々の思考の限界を超えた、全くわからない正に暗黒の世界であった。虫けら以下である、

東京都 堀口卓也

伐採は主として冬に行われた。木のやにも凍り鋸につきにくく、伐採に好都合だからだ。朝暗いうちに宿舎を出て夜暗くなって宿舎に帰る毎日であるが、寒い中、朝うすいスूपのようなカーシヤ(お粥)で食事を済ませただけで、重い

衣服をつけ、鋸や斧を携えて雪道をコンボーイ(警戒兵)に先導されてとぼとぼと目的地向かう。出かけるときも帰るときも星を眺めての行動であった。ちよつども風が吹けば寒さが重複され、風に向かつては歩けない。ひたいに何本も氷の針を刺される痛さであった。

山に入って伐採が始まる。直径が五〇センチもある大木を伐り倒すのである。私等は三人一組で、二人引き鋸を二人が向かい合つて挽く、一人は倒された大木の枝を払い、焼却する。まず伐採する木の回りの小さな木を伐り倒して足場をつくり、逃げやすいようにしておいて伐りにかかるのであるが、時には木が思いがけない方向に倒れ、危うく木の下敷きになりそうになった。

そのうち気温が零下三〇度以下になると作業中止となったが、山中に散開して木を伐つており、なかなか集合命令が届かず、集合に一時以上もかかった。気温はその間も下がり続けている。冷たい。頬がこわばつてしまう。

このほかシベリアではいろいろの仕事をした。馬そりでの木材の運搬、木材の検収係、製材所の丸太積み、列車への積み込み、鉄道敷設、保線、バラスおろし、道路整備、炊事の水運搬、衛兵所勤務、その他。

神奈川県 及川勝郎

さあ仕事です。防寒服を身につけ、足に布をぐるぐると巻き付けて防寒長靴を履き、グローブのような手袋を肩にし出発です。雪が深くて腰までつかるので、一列になってゆつくりと前の人の足跡に踏み入れて「右、左」と声を出して歩くこと二時間、やつとの思いで目的地に着きました。周囲は松の大木で空をも覆い隠すような森林地帯でうす暗く、寂しさを感じました。この大木を切り倒すという伐採の仕事でした。初めて見る二人引き鋸で、直径一メートル以上もあるこの大木、なかなか二人の呼吸が合わず、息のみがハアハアと出るありさまで、やつと一時間かかつて一本の大木を切り倒し、枝を払って仕事は終わりでした。

帰りは、朝来た雪道を、長靴の中に雪を入れないように足を上げてゆつくり

ゆつくりと歩き収容所に着きました。北国の日暮れは早く、周囲は真つ暗闇となりました。帰つて来た夕食を食べて寝る。また朝がくる。何の楽しみもなく山に行くの繰り返しの毎日でした。朝起きて見ると、寒さと栄養失調で毎日一人、二人と死んでいくのでした。埋葬するといつても地面は硬くて掘れず、雪を一メートルほど掘つてその中に入れ、墓標もなく森の中に捨てられるのでした。明日は我が身かもしれない悲しい毎日でした。

重労働の伐採も終わりとなる頃に、ちよつとした不注意でもつて自分の切った木の下敷きとなり一週間休みましたが、ソ連の医者には「打撲で大したことはないからラポータ、ラポータ(働け働け)」と言われ、仕事に戻りました。しかし、現在でも痛みを感じます。

京都府 今井敬一

ここでの労働は伐採作業が主で、各作業班に分けられノルマが課せられている。毎日六時に起床し、七時には作業に出る前の点呼、ソ連軍の下士官が人数の確認をする。柵の外は警戒兵が作業場までついてくる。現場に着くと伐採用の二人引きの大鋸とタポール(斧)が渡され、作業始めになる。シベリアの雪は北陸のように多くなく、雪の質もサラサラで、ひざくらいしか降らない。しかし大きなシューバーと防寒靴、毛布の生地で作られた防寒大手套、それに防寒帽といったいでたちが伐採作業の姿である。八、十メートルといった大木が倒れる時の凄まじさ、十代の少年兵には身の縮む思いがする瞬間である。こんな大木がシベリアの山中では凍つて立っているのである。今まで日本人捕虜以外に人が立ち入ったことのない地である。大木が倒れる時に凍った枝が互いにつかり合い折れて降ってくる。大木が地上に叩きつけられ雪煙が舞い上がる。時には方向が定まらず、長い大きい氷の塊となった大木が予想もしない方向に倒れることもある。自分で切った木なら多少なりとも反射的な行動がとれるのだが、付近で別グループが切った大木が倒れてきた場合、雪の斜面では体が思うように動かない。手足

を挟まれたり、頭を打たれたり、極寒の地で倒れ異国で眠っている先輩戦友も何人かあった。

鳥取県 廣瀬重雄

作業は直径六〇センチ以上もあるカラマツ、モミの木が多かった。二人で引き合う鋸(ビラー)で伐り倒す。それを六メートルくらいの長さに切断する。二本の太木を倒し、切断してノルマ(定量)百パーセントだ。空腹で力が入らず、鋸の歯をかまれても、大木ゆえなかなか取れない。ノルマ達成は容易でなかった。倒木の下敷きで犠牲になる人もいた。何しろ素人木挽だから、どちらに倒れるか木任せだ。大木の倒れる様は物凄い。周りの風を呼び、吸い込まれそう。倒す前に大声で近くの人達には注意するが、防寒衣服の着ぶくれと栄養不足で動作が鈍い。平成八年墓参の折、ムリー(シベリアの大山脈中にある)の墓地近くの伐採跡を見たが、巨大な切り株が沢山あり、案内をされた町長さんが、日本人(抑留者)が切った切り株だと説明されていた。

岡山県 妹尾正一郎

ここで初めて捕虜としての伐採作業が始まった。二人が一組となつて、タポール(斧)とビラー(鋸)を持ち、午前八時から午後五時まで規定の時間働いた。主に落葉松の直径四十センチくらいのものが多く、この木を根倒しして枝をほらい、幹を二メートルの長さに切り一カ所に集め、最後に枝を処理して終わる(枝の処理は雪のあるときは焼却、ないときは山のように積んでおく)。これが伐採作業である。木が太い赤松(鋸が短いのので切りにくい)や白樺(枝が多く仕事がかからない)の山に入ると大変である。何しろ不慣れで鋸の切れが悪かったため、思うように仕事はできなかった。

三日間が終わったとき、今まで切ったものを一カ所に集めたら、やっと八立方メートル、これが二人一日の作業量(ノルマ)と聞かされ啞然とした。翌日からは

夜明け前に起こされて作業を始めた。暗くなるまで働かされた。夜中に作業(実際には根倒しは危険でできない)をして、朝帰ることも度々あった。もちろんその日は夕食抜きであった。着替えもしないので、作業が終わって宿舎に帰れば、着の身着のまま横になって寝るだけであった。

窮すれば通ずるといふのか、こんな日が続いたある日、「切れない鋸でいくら頑張ってもソ連の言うノルマは完遂できない。よく切れる鋸で仕事することだ」と言う者がいた。そのとおりである。それではどうしたらよいか。「そのためには、鋸の目立てのできる人を宿舎に残しておき、昼は寝て、みんなが仕事から帰って寝ているとき目立てをし、翌日はその鋸で作業をする、そうすれば作業効率も上がり、検収員を喜ばすこともできる」なるほど、いい考えだ。だが、ソ連側との交渉が問題であった。中隊長は毅然として交渉に当たった。交渉は案外すらすらと成立した。作業効率も非常によくなり、我々を喜ばしたのは「ヤポンスキー(日本人)は頭がいいぞ」という言葉だった。それでも伐採作業はきつく、食糧事情もよくなかった。作業の帰りは遅くなり、宿舎にももちろん電灯もないので、明るさと暖をとるために白樺の皮を燃したが、油煙で顔も衣服も真っ黒になった。だんだんと栄養失調で痩せ衰えていった。顔のむくんでくる者も増えてきた。特に伐採は重労働で、栄養失調のため死亡する者も多かった。老衰で死亡するようでも哀れであった。

熊本県 高瀬潤吉

收容所の体裁が整った頃、作業大隊の本命である伐採が始まった。伐採するのはシベリア松で素性が良く、真つすぐな樹が真上に向かって伸びていた。切断すればどちらが根元かわからない状態であった。伐採に使うのは、両方から引く鋸(ビラー)といって一メートルから一・五メートル程度と斧(タポール)である。タポールは、木を倒すとき根元を削り、倒す方向を決めたり、倒した松の枝を落とし、また根株の皮を剥ぐのに使用した。切り倒した松はウラの直径に応じ

て、六・五メートル、五・五メートル、四・五メートルに切断した。切断した松は、トラック(独ソ戦中、アメリカからの無償軍需物資)に積み込みやすいように一カ所に集積しなければならない。伐採作業に対して運搬作業と言った。運搬作業では、小さい木は二人で、大きくなるに従って四人、八人、十二人、十六人と、テコの原理を利用して取り組んだ。元気な間はよかったが、食料事情が最悪になり、体力がなくなつてからの運搬作業はまさに死ぬ思いであった。みんなで担いでいるとき、もし斜面の雪で足を滑らせれば全体のバランスが崩れる。この運搬作業が残りの少ない体力を更に消耗していった。こんなとき元気な者だけで組んでやろうという人たちがいた。初めは四〇〇パーセントやったということでも人もうらやむような大きなパンを食っていた。そのため他の人たちの食料が減らされていくことも考えずに。しかし日が経つにつれノルマの基準が上がり、後ではいくら頑張つても一〇〇パーセントそこそこになり、ロスケにだまされたといつて解散した。

宮城県 鎌倉廣行

さて森林伐採の手順であるが、現場の森に着くと作業監督が皆を集めて伐採の要領を手まねで教えてくれた。切り倒す松は建築用材と薪用材に分けられるが、私たちは最初に建築用材について監督から手まねでしっかり教え込まれた。ソ連の労働者は、労働量をすべてノルマで決められており、伐採のノルマは二人一組で八立方メートルということであった。しかし、初めての捕虜には八立方メートルは不可能と判断したのか、監督が教えてくれたことは、山に入ったらまず倒す木を探すこと。切り倒す松は、薪用の場合は直径が十五センチ以上。切株は地面から三十センチ以下とする。用材用の松は、直径五十センチ〜六十センチの場合は長さは六メートル半か、四メートル半に切断して、枝を全部払う。二人一組の場合のノルマは、直径五十センチ程度の木であれば、三本を伐り倒さねばならない。伐採の方法は、まず地上から三十センチの位置に斧で二十センチ

程度の切り込みをつけ、その反対側から二人挽き鋸で挽き、倒れる直前に反対方向に逃げることに、注意しないと大怪我をする……と厳しく注意されたのであった。私たちの仲間には、伐採経験者はいなかった。危険な仕事であるが、命令であり、小さな木を伐つて練習することから始めたところ、要領がわかつてきたので助かった。伐採の要領も、慣れるに従って伐採する森林も奥地へと進むため次第に収容所からの距離も遠くなり、体力の消耗も激しくなっていた。しかし朝晩の食事の内容はあまり変わらず、次第に栄養失調者が増えていった。

岩手県 岩間栄一

翌日からの作業は伐採でした。三人一組で鋸一丁と斧一丁。鋸は長さ一メートル、幅十センチ、二人挽きで、弓型となつて、二人で交互に挽くようになっていました。山に行くくと落葉松の密林です。直径五十センチくらいから一メートルを超えるものまであり、薪にはもったいないようでした。先ほどの鋸を横にして二人で根倒しをするのですが、生まれて初めての伐採、とりわけ二人挽きの鋸です。交互に押したり挽いたりするのですが、呼吸が合わず鋸が遊んで、なかなか幹に吸い込まれません。おまけに空腹と寒さで思うように作業は進みません。その上監視兵に「ダワイ、ダワイ(早く、早く)」と叱られながらの作業の辛さは当人でなければ知る由もなく、情けない限りでした。

根倒しした大木は斧で枝を落とし、幹のみ二メートルごとに切断します。高さ二メートル、長さ三メートルが一人分のノルマでしたから、高さ二メートル、長さ九メートルが三人一組の百パーセント仕事です。これを達成しなければ明日の食事に影響があるのですが、健康な体力でも達成はなかなか困難でした。

北海道 澤田清吉

翌日から早くも労働に従事

ふらふらしたまま朝食、それが黒パンとスープで終わり。昼食は黒パンと塩蔵

ニシンの三分の一匹分(塩鱒の場合もニシンぐらいの大きさ)を持って原始林の中に入っていく。シベリア唐松、黒松、赤松など巨木の密林の中へ、監視兵の先導で入っていく。

ロスキーの鋸は二人挽き。長さ一メートル、両側から取手を握って、押し返すようにする押し挽きである。日本のように一人挽きの、手前に引くのではない。切っているうちに松ヤニが鋸の歯にくっついてだんだん切れなくなるから、力が要るようになる。倒した木を一メートルずつにタマ切りする。さらにこれを縦割りして薪に仕立てて、一メートルの高さに積み重ねる。こうしないと、監督は数量を確認できない。立米(立方メートル)計算が終わると、さらにこの薪を肩に担いでトラックの入ってくるころまで担ぎ出すのである。

冬は雪で足が滑る。倒木につまずく。よろよろと、まるで亡者のようになって、ようやくバラックに戻るのである。

ラポート(労働)

愛知県 河村廣康

仕事をすることをロシア語では「ラポート」と言います。私たちが入った収容所のラポートは、伐採・製材工場が主で、ほかには時々雑用がありました。入所の初めは伐採でした。収容所から歩いて二時間位かかる森林で松を伐るのですが、その山まで行くのが大変な重労働です。何故かと言いますと、道路は凍っていて表面はツルツルになっています。兵隊のときに支給された革の編上靴はソ連兵に取り上げられ、替わりに木下駄の歯のないものに布をクギで打ちつけたというお粗末きわまる靴をはかされていたのです。その木靴の裏も凍ってツルツルになっています。ツルツルとツルツルどうしですから、ピラー(片刃の大きなこぎり)を肩に、足に神経を集中して歩くのに一苦労も二苦労もしなければなりません。

山に入ったところには足がおかしくなっているのです。山の中は私の胸や首ほどの高さの雪が積もっています。指示された松の木の根元まで雪をかき分けなければ

なりません。そして二抱え以上あるものを二人がかりで伐り倒すのです。一日の仕事量(ノルマ)は二人で三本伐り、枝を払い燃やし、幹は三メートルの長さに切って、一カ所に積み上げる。最初のうちは一本か一本半がやっとです。二時間かけて山に着き、そして雪をかき分けます。ハンゴウのカケゴに擦り切り一杯の飯(朝も同様)で、ノルマをやり遂げよと言うのは、慣れてきても到底無理なことです。ノルマが達成できないと次の日の飯の量が減らされます。

ただでさえ少ないのに、これ以上減らされてはと思うのですが身体が言うことをきいてくれません。「ビストラ、ビストラ、ヨッポイマーチ(早く、早く、なにをぐずぐずしてるんだ)」と怒鳴るので、「馬鹿野郎、俺たちのような少ない飯でやれるものなら、お前達がやってみろ」と言っていたのですが、後日になって、日本語を少しずつ覚えてくると、そんな言葉を言う顔と顔を真っ赤にさせて怒っていました。

山からの帰りは、もうくたくたです。戦友たちと「いつまでこんなふうにかき使われておらなきゃならんのだろ。いつまでも続くんなら、いつそのこと死んだ方がまだだな」と、怒りと不満を話し合っていました。

京都府 八木篤司

ここはリーダー一八八収容所という密林の中の粗末な小舎の収容所で、伐採作業である。こんな仕事をやったことはなかったが、現地人の監督の話や兵隊の中に農業をやっていた者もいたので、そんな話を参考にして伐採が続いた。直径が五十センチメートルから一メートルの落葉松の根元に、先ず斧で二十七センチメートル余の切り口をつける、そして反対側から長さ一メートル余の二人挽きの鋸で切るのであるが、押す者と挽く者の呼吸が合わねば鋸の歯が木に食い込まず苦労する。挽き終わって大木が倒れる時は、方向を見定めて逃げないと枝などにはねられて大怪我をすることがある。毎朝僅かな粥(雑穀)と昼の小さい黒パンでは力も出ない上に、雪が積もっている思うように逃げることも出来ない。毎

日が大木との戦いである。他の木の枝を打ち折りながら轟然と倒れる瞬間は恐ろしい限りである。この伐採作業は冬の間だけで、翌昭和二十一年春には最初に入ったエラブカの収容所に戻って来た。

東京都 島村幸雄

作業は森林の伐採で白樺や赤松類が多く、直径二〇センチくらいから五六センチの樹木で、酷寒中は木も凍りピラー（のこぎり）も使いにくく苦勞する。ピラーは二人挽きで防寒外套を着用し防寒手套をしての作業で、決められたノルマの達成は容易ではない、無理のようだ。作業は主として倒木を二メートルの長さに切る仕事である。切り倒した材木をトロツコの路線敷のある場所まで運ぶのだが、積雪や木の根が多く、運搬も容易ではない。一日の作業量とするノルマを決められたが現実には達成はできず、達成者には食事の増配があつたが数えるほどしかいなかったように思う。

直径五〇センチを超える樹木を切る場合、樹木の傾斜を頭に入れ切り始め、切り倒しの段階で周りで作業の者に大声で知らせることが絶対要件である。樹木枝葉の影響もあるので、その段階で中腰の姿勢でいつでも体を移動できる態勢で、倒木寸前でその場から離れるように、あらかじめ根元につまづかないように十分留意する。幸いこの作業で負傷などを受けた仲間もなく作業を終えた。この作業も周辺の樹木もほとんど切り終わった、思えば危険な作業であつた。

愛知県 内藤朝夫

ラポータは伐採で、約半年やった。隊を組んで、二人用のノコギリとロープを持ち山林に行く。ノルマは個人ではなく組単位のようなつた。

作業中大木が倒れ即死した友もあり、皆で木を跳ね退ける。死体は他の運搬組がどこかへ片付け、凍土は固くて掘れないので雪を被せておくだけのようなつた。

つた。

富山県 室田幸雄

私たちは帰国の望みを失い、死ぬ事も覚悟しました。私はすべてを神仏の導く運命にゆだねることにし、少し心が落ちつきました。一週間貨車に揺られてバイカル湖近く、ジマ市郊外のバランスキイク捕虜収容所に入りました。ここで入門の際掛けていた眼鏡以外、予備の眼鏡、万年筆、腕時計、大事なものが入った背のうごと全部没収されてしまいました。

後日、縫い針、石けん等返してくれましたが、私は掛けていた眼鏡を物にぶつけて壊してしまい、その後復員までの一年半、盲人のように大変不自由な思いをしました。

入所の翌晩、我々は先発伐採隊の百五十人選ばれて、直ちに無蓋貨車に乗車し、山奥に向かつて零下二〇度を越す寒い夜中、二時間、林の中をのろのろと登って行きました。私たちは凍傷から身を守るため手、耳、鼻をすり、足踏みし、車台から転落しないようお互いにしつかり抱き合っていました。夜中に昔ソ連の犯罪者が入っていた収容所に着きました。その夜はそこで疲れと寒さからの解放でぐっすり眠りました。それ以来二週間ここが私の住み家となりました。

翌日から我々は二十〜三十人のメンバーの数のグループに分けられ、そして二人で一組になつて森林伐採のため山奥へ入って行きました。

東京都 関栄夫

伐採班は六人一組として斧二丁、鋸二丁、伐採をする者、指定寸法に切る者、枝を払って焼却する者、建築材と薪材に分かれていた。伐採は大木を切り倒すので大変な危険作業で、鋸は二人向かい合つて挽くのですが、呼吸が合わないとなかなか切ることができない。一年二年と過ぎ、慣れてきたときは体力が減退してきた。

最後に六名で伐採した木材を積み重ね、「ノルマ」一人当たり五立方メートルですので三十立方メートルにしてソ連四人監督の検収を受けるのですが、誠に向が悪いので計算に時間がかかり、手まね足まねして説き聞かせるのです。証明を監視兵に提出、他の組の終わるのを待ち山を下りるのです。

三年間で二つの山の峰が見えるくらい坊主山にしてみました。

伐採場もだんだん遠くになり、歩く時間が多くなつて、伐採する時間が短くなり、ノルマの達成が大変な苦勞となる。新規の伐採場に伴い、トラックの走る山の中の道路も木材運搬鉄道の軌条延長もすべて新規にて建設され、ここにもノルマがかかる。

ノルマの増えたのも、だまされて早く作業が終われば休んでよい、この言葉信じて一生懸命早く終わらせ余裕があると見なされ、ノルマを自分自身で増やしたも同然のことであった

伐採のノルマは、

切口二十センチ以下は三立米(立方メートル)各一人

四十センチ以下は五立米 各一人

六十センチ以上 六立米 各一人

長さ四・三五メートル 五・三五 六・三五

口径五十二センチ 四十四 三十六

一立米 一立米 一立米

の三通りだけ。ノルマが達成できなかつたときは食事の減配で、普通食。パン三百五十グラムが、三百グラム〜二百五十グラムになる。

伐採は三人一組であるが、二人一組として作業しました。

兵庫県 芦田史朗

厳しい伐採作業を第一に話さなければならぬ。

ここを通る機関車は薪を焚いて走っている。いつ、どこでも積み込めるように沿線に薪を積んで置かなくてはならないのである。だから、薪が多量に必要なのである。

松や白樺等を伐採して薪をつくる作業である。作業量(ノルマ)はソ連人と同じである。この国にはすべての作業にノルマがある。ノルマは二立米である。二メートルの長さに切り、一メートルの幅、そして一メートルの高さに積み上げなければならぬ。

小隊は三十人だから六十立米である。ピラー(鋸)、タポール(斧)を渡された。目が立つていない鋸は二人用である。とにかく、みんな仕事をしているのだが、ノルマの半分もできない。毎日のようにプロラップ(作業主任)に呼び出されて注意された。そのうちに、成績を上げるために枯れた木や腐った木を積むものだから、「ヒートリー(うそつき)」と言って余計に怒られる始末である。叱られても、責められても、みんなの体力を見ているときつくは言えず、困ってしまった。

福岡県 白石 寿

冬の伐採は体の動作が鈍いから危険であった。傾斜地では切り口の差に注意しないと危険だ。まだ切り終えぬ前に裂けて、五、六メートル根元が上に上がつてその場に落ちる。そのため逃げ遅れて下敷きになって死んだ者がいた。それから、まず逃げ場を確保してからかかるようになった。犠牲者が出て次への知恵が出てくる。これも死んだ戦友の遺言と理解している。

福井県 片山清次

バム鉄道建設の基礎となる路盤工事計画に基づく森林伐採である。樹高二〇〜三〇メートルに達する松、唐松、樅、白樺が密生し、斧鉞(フエツ)も入れら

れたことのない昼なお暗き原生林のこれらの巨木を二人挽きの鋸で、ひざまで没する雪の中での作業である。冬期はマイナス四〇度〜五〇度前後、監督は焚き火すら無情にも足で踏み消し「ダワイ、ダワイ」と作業を強制する。夕刻には巻尺で個人個人の成績を計算し、ノルマを達成するまでラーゲリへ帰ることを許さなかった。土地柄、冬期は朝の十時ごろ太陽が弱々しく昇り、午後の三時過ぎには薄暗くなり始める。タイシユットの冬は朝星、夜星を仰ぎながらの重労働であった。夏は早朝三時ごろから夜が明け、森の鳥たちが忙しくさえずり出す。夜は十二時近くになつても夕暮れ時の明るさであり、昼間の作業場は雪に代わつて「蚊」と「ムシカー」と称する吸血虫が毎年大発生し、人間や家畜の露出した皮膚にたかり血を吸うのである。駆除策として「カンレイシヤ」製の袋を頭から被り、枯れ草でなつた縄を防虫線香代わりに火をつけて腰にぶら下げ伐採をした。

伐木は、主として建築資材として使われた。

北海道 鈴木良男

三、四キロメートルも歩いて伐採現場に着く。緩い斜面一帯巨木の林立で、五〇センチから八〇センチ以上もある赤松の原始林である。ソ連兵は雪と落葉をかきのけて、マッチ箱を地面に立てて五センチの高さを示し、この高さから切り倒して、長さ二メートルに切断せよ、と指示し、二人一組に鋸、斧各一丁ずつを与えて作業開始となる。

多くは全くの素人である。巨木の根元は地面に大きく張り出しているから、五センチどころか三〇センチ上げたとしても太さはかなり違う。誰もが手を出そうとしない。

ソ連兵は怒鳴り立てる。言葉の通わない押し問答の挙句、彼は斧を手にして根株を切り削りして見せたものの容易でないと分かつて断念し、一〇センチくらいまでは良いと言う。それみると言わんばかりに彼を見つめると苦笑する。これ

で彼らは、できもせぬ無理難題を我々に押しつけることをやめた。

北海道 鈴木良男

体を動かさずにいると骨まで凍る思いがする。一〇センチと言うなら一五センチでもと鋸を引き込む。一メートルの鋸を向き合つて引き合うのになかなか呼吸が合わない。それに、凍木で鋸が切り込めない。その上、鋸にしる斧にしる、ヤスリも砥石も当てたこともない赤サビだらけの刃物である。即座に要領が得られないのも当然で、凍土の上に腰は据えるが手の方は動かない。

執念を燃やした末、倒れる巨木の様は見事である。完全に樹木が凍っているから、砲弾の炸裂音とも思われる轟音とともに二、三〇センチもの幹の末端や枝が雪煙とともにこぼみじんに飛散する。このとき、退避が遅れて飛散した木片が当たつての怪我、または身の動きが悪く、倒した丸太の下敷きになつての死者は、当初はしばしばあった。

作業は、倒した丸太を二メートルごとに切断し、一定の場所へ一・五メートルの高さに積んで、ソ連の係の検定がある。次の作業は、枝葉を集積しての焼却と後片づけ、切り株部分の皮を斧で削り取るのである。これは、残骸を放置すれば、腐る時点で松食い虫など害虫の繁殖するものとなるので、森林が荒らされないように防止するためと聞かされた。ソ連の愛林精神の徹底ぶりには、驚きとともに感銘も受けた。

千葉県 伊藤千次

隣のグループで、声を掛けてうまく倒したのに逃げ遅れて木の枝の下敷きになり、頭を怪我して大童に血を流し、收容所に運ばれた戦友がいた。ソ連にはろくな薬がない。軍医はバケツに谷川の水を汲んできて、それに食塩を入れてかき混ぜてリソゲルのように注射したとか……。その戦友は間もなく元気になり仕事に復帰した。生命力の強さ、運の強さをつくづく知らされた事件であり、

我々に生きる力を与えてくれた。

三重県 太田 勇

その日の伐採が赤松かカラマツかも関心事の一つでした。稜線が東西に延びる場合、南斜面は赤松、北斜面はカラマツと相場はきまっています。赤松林に入るとホツとしたものです。それはカラマツに比べて赤松は伐りやすく、幹の太さに根元と樹の先との差が少ないので用材が多く取れ、ノルマが果たしやすいくからです。カラマツは鋸を入れる根元の部分がやたらに太く、先端に向かって急に細くなります。それゆえ倒木に時間を要する割には石数が出ず、本数を多く伐らなければなりません。それだけでなく、カラマツは樹脂が多く、鋸の切れ味を悪くするので皆が嫌がった樹種です。切り株からしみ出た白色の樹脂をソ連の監視兵はチューインガムのようにかんでいました。まねをしましたが味もそっけもありません。菌垢の掃除に少しは役立つように思いました。彼らの習慣かもしれせん。

私たちの収容所では赤松とカラマツの伐採が主な作業でした。二人組の作業で、収容所を出るとき組ごとに一丁の鋸と二振りの斧が手渡されます。鋸は歯の部分が一メートル余りもある大きなもので、その両端に握り手がありこれを押したり引いたりして樹を切ります。斧は、樹を切る前に鋸を当てる幹の反対側をくさび状にかき取ったり、倒木の枝打ちに使います。一日に十数本を伐採しなければノルマにたっしません。倒した樹は枝を払い、決められた長さ(一・五メートルほど、坑木の規格か)に切断し、谷底へ転ばして一カ所へ並べ積み(高さ一メートルほど)します。これをわれわれは「這い積み」と呼んでいました。ノルマを果たすには大体午前中に倒木を終え、午後は枝打ち・輪切り・搬出に時間を使わなければなりません。しかし作業の進み具合はその日の天候(とくに風向風速)や作業場所・樹種によって大いに違い、夜の七時八時まで山肌にしがみついていることがしばしばありました。

その日のノルマ達成が早ければ早いほど、収容所へ戻る時刻が早くなります。それだけ体は休まり、身の回りのこともできます。私たちは真剣に作業の効率化を考えました。その一つが鋸の改良です。鋭利な、そして樹にかまれない鋸が欲しい、これが皆の願いでした。手始めに専門の目立屋を班ごとに設けました。彼はヤスリを片手に作業場を巡回し、求めに応じてその場で目立てをします。三十分程で見違えるほどの鋭利さが戻りました。もちろん、目立屋の彼にも伐採のノルマがあります。それは全員で負担し、自己ノルマに上積みして達成しました。それでも以前に比べると仕事が楽になり、皆大喜びしたものです。千五百人も集団になると、目立てのできる器用な人が何人かはいるものです。

それからしばらくたつて、樹にかまれない鋸の創作に成功します。袋状になった谷間の山肌は風が回り、風向きを考えて伐り出しても途中で逆風になり、鋸が樹にかまれて動きがとれなくなります。何とか方法は無いものかと考えた末、思いついたのが弓張り鋸でした。

材料は米国が援ソ物資を梱包したスチールベルト(ごみ捨て場に木箱とともに山積みされていましたが、白樺材で作った工字型の木枠及び丈夫な張り紐です。スチールベルトは一メートルほどに切断し、片側をたがねで鋸歯状に切り、切り口をヤスリで研ぎ、両端に穴をうがち木枠の一方に固定、他の一方を張り紐で緊張します。これでできあがり。その切れ味の素晴らしさは見事の一語に尽き、谷風を気にせず伐採ができるようになりました。

岐阜県 早川芳美

二人一組に二メートルくらいのピラー(鋸)と、七十センチくらいのタポール(斧)を各自に一丁ずつ渡された。五、六組にロスケの指導者一人がつき、作業をした。五、六十センチ以上の(エゾ松の種類であろうか)太さの木が鬱蒼と茂る原生林であった。

まず倒す方向にタポールで受け口を掘る。続いてピラーを双方お互いに呼吸

を合わせて引き、切り倒す。タポールで枝を払いピラーで一メートルの長さに切つて行く。次に一玉ずつ起こして両方からタポールを打ち込むと難なく割れ、適当の大きさになるまで割つて、これを夕方、高さ一メートル、横三メートルに積むとその日のノルマ達成であった。

タポールで受け口を掘るのにも力がないので跳ね返され、仕方がないのでそのままピラーで挽くと倒れる方向が決まらず隣の木に引っかかり、これを倒すのにまた一苦勞しなければならぬ等、次第にノルマ達成が困難になつてきた。女の指導者によく「エラポータ、ヨッポイマーチ」(仕事をせぬ人で悪いやつだ)と悪口を言われたり突き倒されして、思わず斧に手をかけたこともあった。

山梨県 桜井彦寿

チタでの作業はほとんど伐採ばかりでした。二人一組となり一丁の大鋸を二人で調子を合わせて切り倒し丸太として用材を造り、他は薪として積み立て、二人で三立方メートルが一日のノルマでした。私は農家で育ちましたので薪切りは得意でいつも一〇〇パーセント以上働きましたので「ハラショーラポータ(働者は)だ」と褒められたものでした。そのため昭和二十一年一月頃から作業組長(四十人くらいの作業班)となりましたが、いつもノルマは一二〇パーセント以上の成績でした。困ったことは、衣服の支給もなく着のまま、入浴も一カ月二回そこそこ、真つ黒な体にシラミがゴソゴソでした。また冬に入ると満州から持つて行つた糧秣も食い尽くしたので給与も悪くなり、黒パンも定量の半分くらいしか支給されず、元気な者も次第に栄養失調症となり突然死する戦友も多くなり、全く惨めな生活になりました。

伐採作業

北海道 村上嘉寿雄

收容されて三日目、作業班が編成され、二人挽きの鋸と斧とが二人に対し

渡され、人員点呼後、ソ連兵の誘導で一キロくらい歩いた所の雑木林で、主に白樺、泥柳などを二メートルの薪材の伐採をさせられた。ズブの素人では大変な難作業であり、また二人挽きの鋸のため、対面する相手と呼吸を合わせることを知らないで、このため鋸の動きが鈍くて、労多くして効が少なく、体力の消耗が激しく、ノルマの達成が最初は到底無理な人も多かった。

ノルマは、長さ二メートルに切断し、高さ一・一メートル長さ四メートルに積み込んで、翌日民間人監督の検査を受けなければならなかった。ノルマの苦しさに耐えかね、監督員詰所での交渉の結果、半年後、鋸の目立てと斧の研ぎの要員を日本人の手で行うようになった。道具が仕事をする、つまりノルマの向上には仕事の段取りと道具が必要な事をソ連人に理解させ、同時に鳶口とガンタ(木回し)を捨ててある車のスプリングを利用して鍛冶屋の経験者に造らせ、丸太の移動が簡単にでき好評を得た。雪の中での伐採中、二人挽きのため、木の倒れる方向を見定め逃げ道は作つておいたが、木が途中で裂ける等により下敷きとなり、犠牲になった人も時々あり、いつになつても気の抜けない仕事であった。

北海道 東島房治

伐採

試験伐採をやるという事で自分の分隊がやる事になった。ロスケの鋸(ピラ)二人挽きで押して切る。二人で押したり引いたり呼吸が合わないと疲れるだけで切れない、鋸係が二人、枝を払うナタ(タポール)係が一人計三人一組で三方メートル、三組で九平方メートルを切るとノルマ一〇〇%になる、これは割合と楽なノルマである。

ロスケの将校が一人、指導のため一緒に来て色々教えてくれる。この山は誠に立派な森林で、五葉の松がびっしりと生えている。密生に近いので曲がらず真つ直ぐ伸びている。早速作業に入る、馴れないのでなかなか呼吸が合わない。力ばかり入つてすぐ疲れてしまう。だがやっているうちに段々上手になった。

二人で手頃なのを二本倒すと大体間に合う、それを枝を払って四メートルの長さに玉切りする、払った枝は全部焼いてしまう、そのままにしておくど害虫が付くからの事。この枝焼きがまた大変助かる。零下一五度から二〇度もある中でこの焚火は大きな火になり、昼の休憩時間には裸になって虱取りができるのだ。

シャツを脱いで火にあぶると、虱は熱いので走り回る、そこをすかさず払い落とす。一匹一匹取るより効率的なので皆これをやる。それでも午後四時頃までにノルマ一〇〇%を達成したのでロスケの将校も大変満足のようだった。

一週間程この試験伐採に参加してだいぶ要領も良くなった。また伐採のもう一つの楽しみは、キノコだ。シベリアの秋は急速に寒くなるとみえて秋遅くに出たキノコが凍って自然乾燥の状態で木に付いている。これを取って塩魚と一緒に煮るととても美味しいのである。昼の弁当代わりになりとても助かった。

自分も伐採作業に行く、山は中隊ごとに別の山に入る。伐採の監督に来るのが民間人で、しかも十七・八歳位の女の子なのだ。これがなかなか融通が効かない、また警備兵は警備兵で自分達の監視がし易いように、できるだけ作業区域を小さくし、四方を切り開いて見通しを良くし、その内側で作業をやれと言うところが狭いと木を倒すとき危険が多くて能率が上がらない。殆どが素人なので、この木はどっちに倒れるか解らないで切るので時々自分の意志に反して反対側に倒れて来るので、うっかりしてられない。それで監督と警備兵が毎朝喧嘩をしていて、なかなか作業区域が決まらない。馴れた者は枝の張り方でどっちに倒れるか分かる。また倒した後の作業がし易い場所に楔を使って自由に倒す事ができる。しかし素人はそうはいかない、時々倒そうと思う反対の方へ倒れるがその場合倒そうとする方向には声をかけるが反対の方には注意をしないので事故を起こす。ある日、「危ない」、の声をかけたので上を見ると大木が自分の方へ向かって倒れてくる。慌てて逃げようとしたら運悪くツンドラ坊主に足を取られて転んでしまった。もう逃げる時間がない、頭を抱えて伏せる。シューと大きな音

を立てて倒れて来る。時間にしてほんの二、三秒だろうがとても長く感じる。ドーンと大きな音がして枝が折れて舞い上がる。ところが自分の身体はちょうど太い枝と枝の間にあり、小枝で少し背中を怪我しただけで助かったが、もう一メートルずれていたら天国の切符を貰うところだった。皆はもう駄目だと思ったようだ。枝を掻き分け顔を出したら、皆わっと声を上げて喜んだ。

自分は本当に運が強いと思った。戦場であれだけ弾が来ても全く当たらず、今もまた僅かの差で命を拾った。生と死は紙一重と言うが全くその通りだと思っただ。

今回も素人が楔で倒そうとして失敗した典型的な過ちだった。

栃木県 橋本正男

伐採は直径一メートルを超える立木が多く二メートルの鋸は二人用で刃もそのように仕立ててあり大体地上五十七センチから一メートル位の高さの部分で伐採するのであるが、その木の傾斜度や風向を考えながら切るのであるが間違えて思わぬ方向へ倒れる事があり、時折怪我人が出る事があった。丸太は長さ四メートルに切るのであるが木株や枝が妨げとなつて丸太の搬出が思うようにできず困難を極めた。

木株を取り払うのは手作業だけでは駄目なので主として日本軍より没収した黄色火薬を根本の穴に充填して爆破をするのであるが、この爆破とて安全ではなく退避場所が近過ぎるか火を点火する係が何かの都合にて少し遅くなった時には至近距離に爆破の木株や土砂が身体に降り注ぐ事もあって、やせ衰えた我々には敏捷に退避する事などできる訳がなく点火役は命がけで仕事をしておった。

木株を爆破すると次に手作業にて残りの木株の滓を除去き、表土の厚さ三十センチメートルほどを除外して十メートル幅になったところでグレーダーにて側溝を造り八メートル幅に敷砂利を施行するのであるが、砂利が足りない時に

は木口3センチメートル位の丸太を敷詰めるのであった。

その丸太も長さ五メートル位のものを交互に敷いてトラックを通すのであるが、乱暴な車の使い方をしておつた。

富山県 石川正一

そして特徴的なことは、ケードルといわれるシベリア五葉松、樅、白樺、岳樺、だけかたばたも、科など限られた種類の樹木が集落をなして森林を形成していることである。私たちの作業大隊（赤軍労働五六九大隊）が冬の四カ月あまり伐採に明け暮れた樹種はシベリア五葉松ただ一種といつても過言ではなかった。このように、この五葉松と樅が荒涼とした冬の原野に黒々と緑を残している。

私にとってこの五葉松は命の恩人である。それというのも、この五葉松の老樹には巨大な松かさ数が数十個もなつていて、それには大豆ほどの身が数十個もついているのだ。松の実である。松の実はいかに殻に包まれているから食用になる部分は小豆粒ほどである。小さいが脂肪分が多く、香りのよい熱量の高い食べ物である。伐採に当たって私たち（比較的健康な）は真つ先に、その木の梢に松の実が多くついているか否かで木を選んだ。せつかく伐り倒してもリスにそっくり先取りされていることもあった。しかし、その松の実のお陰で私たちは栄養不足と空腹から救われたといえよう。

冬が去り春が到来するとタイガーには急速に夏がやってくる。岳樺の樹皮に切れ目をつけるとたちまち樹液が滴り落ちる。空き缶などで上手に汲み受けると、それはまたとない清涼飲料となった。夏は山菜の季節でもある。こごみをはじめわらびによく似たしだ類が樹海一面に生える。なかでもこごみは他のしだ類とは異なりアクがなかったので私たちは、それを摘み取って茹で、すぐ食うことができた。

こうしてタイガーは飢えた抑留者にさまざまな食べものを提供し、生きる望みをつないでくれた。

また、秋のタイガーはゾロターヤ・オーセニ（錦繡の秋）といわれる。この季節、

松や樅はタイガーの主役の座を白樺やたも、科などに譲る。秋はまた、きのこの季節でもある。八月も末ともなれば日本の晩秋の茸であるなめこが群生する。

昭和二十二年の暗い長い冬をタイガーで越した私は、樹海に生えた大量の山菜を食べ元気を回復していた。だが初秋、タイガーに茸が出始めたころ、マラリアの症状が出たため平地のラーゲリに移されることになった。転出するのはマラリア患者の外に衰弱し切った老兵たちも含まれていた。

愛知県 鈴木英一

サハリン収容所

こごみ伐採作業。ハラゲンと同じ電気も水道もない。

出身部隊はばらばらだったが、同郷の人が四人いたので大変心強い思いをした。

伐採のノルマも二人で八リユーベとなつていた。木のある場所もないところも同じノルマを要求されており、非常に理不尽だったので、私達はあることを実行して一矢を報いた。

作業が終わるとソ連の検収員がノルマの検査をして、積んだ丸太の切り口に刻印をつける。私達は翌日にその印をつけた切り口を鋸で引いてノルマ完了として焚火にあたっていた。

次の日は、高さ一メートル十センチ、長さ四メートルに積み上げた長さ二メートルの丸太の検収の刻印を切り、少し離れた場所に向きを変えて運び、積み上げてノルマ完了として焚火にあたっていた。

ソ連の検収員は最後までこの事を気がつかなかった。余程日本兵士を信用していたのか、それとも私達の方法が巧妙だったのか、どちらかである。

二十二年九月に将校大隊を編成するため将校がまとまって収容所を出て行った。

この頃はお互いの呼び名を〇〇さん、〇〇くんと言うようになって階級制度もなくなっていた。収容所生活にもある程度順応してきたのか病気の心配も少なくなり、体も回復してダモイを考えるようになった。だが、伐採作業の重労働には変わりりはなかった。

カムチャツカ カリヤーキーでの作業

主な作業は伐採であった。毎日、ラーゲリから二キロメートルほど歩いて白樺林へ行った。そこにはソ連兵のトラクターが既に待機している。

トラクターの後部滑車から出ているワイヤーを白樺の木の根本に巻き付け、S字環をかけ、右手を挙げるとトラクターが前進して木を倒す。ワイヤーを外し、別の木の根本に巻き付ける。ソ連兵は機械のハンドル操作だけであるが、我々はトラクターのエンジンがかかっている間は動きづめに雪の中を走り回らなければならぬ。大変な仕事量である。ワイヤー係以外の者は、倒木の枝払いをしてから長さ四メートルに切断し、転がしていつて集積しなくてはならない。ノルマは一人当たり四・五立方メートルで、完遂しなければラーゲリに戻れない。

十一月末ともなると、積雪三十センチ位になる。朝、作業に出るときは、雪がまだサクサク凍っていて歩きやすいが、十一時頃になると融け出して軍靴に滲みてくる。作業が終わって帰る頃になると、またカチンカチンに凍ってしまう。

ラーゲリに帰ったら、足をよく揉んでからストープにあたるよう指導していたが、直接ストープのところへ素足を出して温めるため凍傷になる兵が増え、作業に出られなかったり、中には凍傷が原因で入院したり、時には経過が悪く足を切断する者もいた。

樺太 ボヘジノ(古屯)での作業

ラーゲリの門のところで二列横隊に整列。人員点呼後、二人に一丁ずつ鋸が渡された。長さ百三十センチ位の鋸の両端に直角についている取っ手を、兩名が

腰を下ろして交互に引張って白樺の木を切る作業である。

ソ連兵に連れられて白樺林へ行く。二人一組で倒木し、枝を払い、長さ四メートルに切つて、丸だけを積み上げる。夕方、ソ連兵の係が伐採した木の末口を計りに来る。合算した数字を表に当てはめると、何立方メートルできたか作業の結果が出てくる。ノルマは四・五立方メートルである。ノルマを完遂した組は作業終了、完遂しない組は残業となる。

ペアーは現場へ早く到着した者同士で組む。結局、足の早い者同士がペアーを組むことになってしまい、体力のある者とならない者の差ができてしまう。私が夜遅くに巡回していくと、体力のないペアーが月明かりの中でソロソロと鋸を動かしている。私は歩哨の兵隊に「この二人は体の調子が悪いんだ。今日はもう勘弁して帰してやってくれないか」と交渉し、帰したことが度々あった。

また、ノルマを上げるためには太い木でないといけない。細い木を切ると何本も枝を払わなくてはならないし、立方メートルも上がらない。そのことが原因で、太い木のところにペアーが固まってしまう。倒れる方向を決めるため斧で切り口を入れるのだが、倒木が隣のペアーの方へ倒れることもある。運が悪いと倒木の下敷きとなって重傷を負い、ソ連病院に入院したり、それがもとで後遺症が出たり死亡したりする者も出た。

積雪の中の作業で死に物狂いの毎日であった。私も積雪の白樺林を何キロも巡回し、クタクタになって宿舎に戻った。

作業内容

愛知県 水野朝之

イ 約九五センチメートル〜一メートル十センチ直径の松材伐採作業、枝は全部取り去り、表皮は全面はがし、切り株の表皮もはがし、枝や皮全部を燃やす。長さを四メートル〜五メートルに切断。直径一メートルの大木の伐採作業は二人で行う。手鋸を行い、倒れる方向に切り込みをつけ、鋸が中央近くから食い

込まれて働きが重くなるので「クサビ」を打ち込んで切っていく。

分隊長はクサビを打ち込む位置や、切り込みの位置で倒したい方向に倒れるように工夫する。大木が倒れる時は、三メートル位倒れる方向に飛んで地面に落ちる。その時は地響きして震動が地面から伝わってくる。大木の全長は、三メートル、四十メートル位になるので、倒れる前に人がいないか十分に気を遣う。そして倒れる方向に向かって「倒れるぞ！」と大声を出す。倒す時はクサビを一気に打ち込む。

ロ 切断木材の移動

搬出道路予定地の脇斜面上部にトラックに積み込みできるように積み重ねる。

作業能率を向上させた工夫

松材を伐採し、表皮を全面はがして、道路または予定道路の脇斜面上部にトラック荷台に積み込みできるように敷木を置いた上にそろえて積み重ね、ソ連検査員の山男に検収刻印を押させて、当日の伐採した仕事量として計上されて作業が完了する。本口が平均で一・二メートル、末口も〇・八メートルもある大木で、長さ四メートルの生木ですから二トンから二・五トンもの重さになる。その運搬は技術と熟練及び掛け声で一致した行動がとられる隊員の人数が必要である。入ソした当時は何の説明も指導もなく苦労した。特に山の斜面での運搬は、立木が所々あり、失敗して大木材の下敷きにもされたら大変である。また崖の谷に落としてしまつては元も子もなく、非常に危険な作業である。当初は材木に綱をつけて引張っていたが、切り面が地面に削り込む。てこ棒で上方へ浮き上がらせて引張っていたが時間がかかり、先端の下方になる部分を斜め切りして丸く面を取つてみたが、これまた時間がかかる。何か良い方法はないものかと考えて、図5のごとき運搬用櫓を考案した。これは堅木から手斧の手作りにより製材し、反りの部分は火で焼いて曲げた。また櫓と横桁との接続は山男に頼んでボルトとナットをもらい、一号機、二号機、三号機まで造つて用い

た。

使用する場合は、図6に示すように材木の先端部分を櫓の上に乗せ、櫓と材木とはロープで固定し、引張り用ロープを材木と櫓の両方へつけて引張ると、よく滑り動くので、雪の降った時には運搬しやすく、雪のない夏期でもよく機能して運搬作業は飛躍して向上した。

①ソ連山男との会話

私は、ソ連の山男とは検査時に、案内して各地で作業し、材木の検収に立ち会いますが、特に二回目のアントノフカ山中収容所の方とは親密になり、休日に私を呼び出してくれまして、彼の家で昼食の接待を度々受けて互いに話し合うようになりました。私はこの山男との会話で少しロシア語ができるようになりました。そのようなことから毎朝会う時には彼の方から近づいて「おはよう」と言つて握手を求めてくるようになり、私からも近づいて行くようになりました。彼の家で話し合うことで色々なことを知り、我々日本人を褒めたたえてくれたことが印象に残っております。断片的ですが、次に示します。

この地方の松の巨木はこの限られた一部の場所でしかなく貴重な存在です。北の方や西方のモスクワ地方へ行つてもその途中でも、一メートルもある巨木はこゝしがなく、こゝは海（日本海）に近く温かい低気圧が来てくれて雨量が多く、同じ沿岸地方でも北方のバロフスクでは気温も低く南からの低気圧が来ないので雨が少ない。それで大木と言っても三〇〜四〇センチ位で、こんな巨木は一本もありません。

それで我々は、こゝしかない巨木の伐採作業をしていることを知りました。

帰国後、他の収容所で伐採作業をしていた方々と会いましたが、最大で四〇センチくらいで、一メートルもある巨木は扱ったこともないと言われ山男の話は正しかったと思います。「この巨木を見事に処理してくれているのはお前さんたち日本人だけだ」「今まではソ連の囚人やドイツ軍の捕虜等に来てもらったが、事故死が多発して仕事にならず帰つてもらつた。我々ソ連人もこんな巨木の伐

採をどのような方法で行えば良いか、マニュアルもなく見当もつかなかったが、何一つ文句も言わないで、グループが一致協力し合ってきちんと仕事をさばいていく様を見せてくれて驚いている。日本人はすごい」と言われました。

②大粒の「松の実」について

松の巨木には大粒の松の実がありまして色々な思い出があります。この地方には直径が十五センチ、高さ三十センチ程の「松かさ」が枝についております。魚の鱗のように松かさの葉が一枚一枚交互についていて、その葉の中には松の実が入っていて、それが大きいのです。ちょうど、落花生よりも少し大きめの実が殻をつけて入っています。

日本の内地でも松の実が売られておりますが、実が小さく北朝鮮産のようです。この南沿海州での巨木の松の実は、それより三倍位大きく味も全く異なり、大変香ばしいのです。

殻の状態にして火にあぶって焼くか、又は松かさの葉のみを斧で削り取って焚き火の中に入れて焼きますと実を取り出しやすく、黒くなった松かさをたたいて砕けば実を取ることができて、皆、好んで食べました。

けれども巨木を倒すと、その周囲約三〜四キロメートル位まで倒れる音が伝わりますので、警備兵がどこからともなく袋を担いでやって来て、松かさ全部持って行ってしまいます。この松の実は高級な嗜好品で、モスクワの外交の場や、高級なレストランで出されるそうで、町へ持って行けば高価な金になるので、警備兵は小遣い銭欲しさにやってくるのです。

松の巨木が倒れた音の方に向かって探します。木を倒したらすぐ全員で松かさの実を取って、隠してから作業を始めます。しかも、警備兵は松かさを自分で袋へ入れないで、我々に取らせて「袋に入れよ」と言うのです。自分は、マンドリン銃を抱えて見ているだけです。

まことにいまましいのですが、仕方がないのです。まだ、松かさを持って行く

のは良い方で、時には「松かさを砕いて実だけを袋に入れよ」と言うのです。これは時間がかかり、仕事ができなくなりまます。そこへ私が出くわした場合には「それではノルマが達成できなくなる。松かさのまま持っていけ。さもないと、お前の将校に報告するぞ」と言いますと、しぶしぶ松かさのまま持って行きました。

埼玉県 山口秀夫

それから、その収容所で伐採作業に入るのでありますが、これがまた大変でした。何しろ伐採などは生まれて初めてなので、要領がわかりません。軍隊では工兵だったので、初年兵のとき、「のこ」や「おの」の使い方は習いましたが、これは普通の大工道具です。伐採に使うというのは――その伐採というのも立ち木で直径一メートルぐらいあるので、普通ののこではかかりません。それで、長さが一メートル二十から一メートル五十ぐらいの二人で引くのがありますが、それで立ち木を二人で切り倒すわけです。最初のうちは全然、一日かかっても半分ぐらいしか切れないんです。後でわかったんですが、その「のこ」は目立てもしていない、つるの「のこ」だったので。そのうちだんだん要領がわかって、一日二回ぐらい目立てするようになりました。そうしたら、ようやく一本倒すのに一時間もかからない。三十分ぐらいで倒れるようになりました。そして、それを用材の場合は二メートル、それから、薪にするのは一メートルの長さに切つて積むわけです。それを二人で四立方メートルがノルマだったんですが、それができるようになりました。

ところが、できると、だんだんノルマがふえてくるんです。四立米が六立米になり、しまいは八立米まで上がりました。日本人というのは早くやって早くしまおうという気があるものですから、最初はまだ日の明るいうちにすぐできちゃうわけです。それで、どんどんこれじゃあれだということで、八立米ぐらいまでになりました。

伐採作業の思い出

岩手県 吉田欽三郎

翌日、中隊そして小隊ごとに何やら仕事らしき割り当てがあり、数十人と連れて行かれ、持たされたものが二人引き鋸と斧であった。

案内するのは囚人上がりの一般人で、作業班の前後には機関銃を持ったソ連兵が付く。

沢を越え谷に入りさらに山地に入った所で、これから伐採すると言う。

見渡す限り松の大木ばかりであり、好むと好まざるに関わらず、自らをして仕事の選択のできないのが捕虜である。

内地での伐採の経験等全く無い自分である。二人引き鋸相手の戦友もそうであった。ロシア語で何か言っているのであるが、伐採の班全体を集めてのしつかりした説明もなく、ただダイワイと急かせるのである。

とにかく二人でこの大木を伐つて倒し、ノルマとしなければならぬ。高さで三十数メートルはあろう、根元の直径でも一メートル以上はあるのである。一間違えば幹の下敷きにならずとも、倒れた時、折れて飛んだ枝に当たっても死になると言う。

さてこの松の大木、どこから伐つてどの方向に倒すかが伐採の難しいところらしい。幹の高さを半径とする円の中に、同じ戦友が伐採をしていないかどうか、怪我をさせないと同時に、隣の大木がこちら側に倒れてこないかどうか、しかも枝張り具合と風の方向にも関係があつて、倒れる瞬間、幹が回転して思わぬ方向になる危険性もあるらしい。

初めての作業に教えることも、正しい伐り方の見本も何もないのだ。分からぬこととは言えど、捕虜は先ず伐ることであり働くことである。

根元に深く斧で刻みを入れ、手前より相手と共に鋸で伐り始めたのである。屈みながらの鋸作業であり、根元も太く、初めての相手とも呼吸が合わず休みながら伐つた。

生の枝であり、しかも単に枝とは言えど直径が十センチ以上もある太い枝ばかりである。内地であれば残し置いて薪とするものなれど、ノルマには関係ないことである。

だが…この後片付けの仕事こそ難中の難事であり、細かい枝しか焼くことができなかつた。冬の落日は早く、やむなく未処理のまま帰ることが多かつたが、日曜日の休みに残物の枝処理として作業に狩り出されることもあつたのである。

やがて伐り終わりも近づき「倒れるぞ…」と四方に叫びながら根元から離れるのであつたが、冬作業のこととて雪の中を急いで逃げなければならなかつた。

しかし、粉雪を飛ばし地響きを立ててあの大木が倒れる瞬間の伐採は正に痛快なる気分である。瞬時の喜びもつかの間、この幹を所定の長さにつつた後、さらに枝を鋸で切断、焼いて処理しなければノルマは終わらないと言うのである。

伐採作業(ハウザンカ)

愛知県 齋藤高志

ここで初めて伐採作業が始まつた。二人が一組になつて斧(タポール)と鋸(ピラー)を持ち、午前八時から午後五時まで、ノルマ(規定の作業量)に向つて伐採作業をした。主に落葉松の直径十五〜二十センチメートルぐらいの立木が多く、この木を根倒しして斧で枝をほらい、幹を二メートルに切り、切断された幹を一方所に集めて一・一メートルの高さに積み、最後に枝の処理をして作業を終える。(枝の処理は、雪のある時は焼却、無い時は山のように積んでおく)これが伐採作業である。何しろ不馴れと鋸の切れが悪かつたので、思うように仕事ははかどらなかつた。二日間が終つた時、今まで切つた材木(ドラー)を一カ所に集めたらやつと六立方メートルあつた。これが二人一日分のノルマと聞かされ啞然とした。

翌日から夜明け前に起こされ、作業所で作業をした。帰りは暗くなるまで働かされた。それでも規定のノルマに達せず、徹夜をして朝帰ることも度々あつた。

もちろんその日は夕食抜きである。「窮すれば通ず」こんな日が続いたある日、こんな事を言う者があつた。

「切れない鋸でいくら頑張つても、ソ連のいうノルマは完遂できない」なるほどの通りである。それでは、よく切れる鋸で作業するにはどうしたらよいか、毎日みんなで考えた。そのためには、鋸の目立ての出来る人をラーゲルにおき、昼は寝、みんなが寝ている時に目立てをして、翌日はその鋸で作業をする。そうすれば、作業能率は上り、検収員を喜ばすことも出来るとの結論に達した。だが、ソ連側との交渉が問題である。中隊長は毅然として交渉した。交渉は案外すらすらと成功した。作業能率も非常によくなり、みんなも頑張つた。それでも伐採作業はきつく、食糧事情もよくないので、作業からの帰りはいつも遅かつた。ラーゲルには電灯もないので、明るさと暖を取るため白樺の皮を燃やしたが、油煙で顔も衣服も真黒になった。

大阪府 岡崎博好

〔懲罰の伐採で山中〕二十三年冬

定期的にラーゲルを移動するのはソ連側の労働力の再配分などで珍しいことではないが、時には政治部と民主クラブの思惑が介在する移動もある。建設工事現場でのカピタンとの確執や三猿論争にまつわる民主運動オルグとの不協和音も移動の因とならないこともない。

政治部将校が通訳を連れてラーゲルにやつて来たのはそれから数日後の夕刻だった。直ちに移動させるから持ち物を整えて営門の前に出て来いという。面白いことに営門に出ると既にトラックが止まっており三人の兵隊が乗っている。こいつらもやられたのかと思うといささか気が楽になった。トラックは野越え山越えして走り続け、山中のラーゲルに着いたのは真夜中だった。深山幽谷の化け物でも出そうな雰囲気の構えをくぐり四人は別々の班に編入された。班長という軍曹くずれのような態度の大きい男が出て来て明日からの作業の説明を始めた。

二人一組で両挽きの大鋸で伐採に行く。直径五十センチ以上、周囲一メートル以上の立木を切り、二メートルの長さに揃えてトラック一台分にする。これがノルマだ。

学生時代、軍事教練で扱った小銃ぐらいしか持ったことのない、ペンと紙の日常から一転、キコリになれと言われても、見るもの、使うもの全て生れて初めての経験だ。

山に入る前に、雑然と山になった大鋸から好みものを選ぶのだが、どれが切れるのか、どんな鋸が扱い易いのか知る由もない。ペアになった相手も学卒の若者でこの方の知識など皆無という。古参の者や大工の経験者はひと目見てその切れ味が分かるらしい。早々とめざす鋸を取つて営門を出て行く。残つた鋸にろくなものはない。警備兵に追い立てられながら知らぬ山道を歩くが、古株に足を取られ、苔に滑つたり。適当な小さくて大きな木を定めて先ず斧で鋸の切れ目を入れ、右と左に別れて大鋸を引き合うのだが容易に鋸は動かない。当方を素人と見たのか、鋸の方から動くのを拒んでいるようだ。「倒すぞー」の合図で振り向くと一抱えもある大木が辺りの木を押し倒し蹴散らしつつ轟音をたてて倒れる。あれだけの大木ならトラック一杯分はあろうか、そのペアは昼前にノルマを果たし帰営していた。こちらはまた一本も倒していない。昼近くに細いやつをやつと一本。黒パンと鯁の塩スープで昼食をとり、休む間もなく二本目。三本目を倒した時は上弦の月が雲の中を泳いでいた。シベリアの十月は冬である。腹は減る。腕は疼く。腰は鳴る。倒木で打った後頭部に手をやると血が出ている。同僚の姿はどこにもない。急いで帰らねば脱走と間違えられ、チョルマー(牢屋)にもなりかねない。こんな作業の日常が続いたが既に体力の限界を感じた。

和歌山県 林三子雄

昭和二十二年二月二十日、伐採隊編成発表

隊長 小川工兵少佐以下百四十人

各班二十人の七個班編成となり、我ら三人は第六班で、班長・長谷川戦車中尉配下となる。

衛門を出てアメリカマシーナーと彼らが言う大型トラックに三十人ずつ詰め込んで現場宿舎まで二時間余りで到着した。

宿舎は一棟建ての木造板葺きで二段棚式は他と同じながら夏向き用の建物らしい。

中央通路二メートルぐらいで寝棚もそれぞれ二メートルぐらいで窓ガラスと裸電球も多く、ラーダの穴蔵と比べて格段に明るいので嬉しい。

伐採地へは徒歩で三十分ぐらい歩いた所で管理事務所から案内人が来て連れて行き、森の樹で伐る樹種と残す樹種の指導をして、現場で鋸斧を受け取って伐倒したら長さ二メートルに玉切り、一柵二メートル高に積み上げるのだが、鋸の使い方にも工夫が要る。能率を上げるには大変な努力が必要だ。未熟者ほど力を入れた分成績が上がらず、くたびれもうけになる。

伐採隊の伐る樹は広葉樹で白樺、シナの木、檜、楓等伐跡で萌芽する樹だ。針葉樹は除く。三月中は時々降雪もあつて積雪三十センチぐらいの中で伐採木も根元が四十センチぐらいが主で、時々太いものを伐ることもあつてすべて薪用にトラックへ積み込んだが、伐倒は鋸使いに二人の気合いが合わないと疲れる割りに能率が上がらない。積み込み係は生木を扱うので重くて腕と腰に疲れが溜まつて調子が悪くなるなど支障が出てきた。長谷川班長に昔、早稲田のラグビー部で練習後にマッサージと指圧で疲労回復を図った経験の伝授を受けては体力回復に応用した。毎日作業終了後二人一組で相互に指圧の修業と治療に努めたお陰で指圧要領を会得した。

愛媛県 梅崎文夫

收容所に入所して三日目より收容所外の作業となった。作業は山奥なので伐採以外にはない。鋸(ピラー)、斧(タポール)を使つての作業であるが、鋸は一メ

ートルに余る長物(一メートルぐらいのもあつた)で、しかも二人引き。我々日本人が従来使用する一人引きとは大きく変つて勝手が違つた。従つて器材に慣れるまでが大変であつた。ましてや民間にあるとき全く畑違いの職業だった人々にはなかなかであつたと思う(もちろん、日時が解決したけれども)。作業監督(マフツェル)は我々に対して「ダバイブステリー」を繰り返した。また時に自分が気に入らないときには「ヨッポイマーチ」と怒声を上げることがあつた。「ヨッポイマーチ」とは馬鹿者という意味である。

愛知県 奇岡秀夫

シヤブールでの強制労働

シヤブールは、チタの西方四百キロ、外蒙古の近くで、エゾ松、カラ松の広大な森林地帯です。一年の大半が冬で、十月には雪が降り始めますが、冬中、積雪は多くありません。六月には一斉に花が咲き、七月は夏、八月は秋と春夏秋冬一度にやつてくる感じですが。零下五〇度の寒さになることも度々で、満州から送られた十頭の馬は、一冬で死にました。寒さに強い小柄の蒙古馬は、ツララの固まりになつてもそりを引いてくれました。一度降つた雪は、冬の間、解けることなく、凍土は岩より固くなり、墓の穴掘りは大仕事です。主食は、牛馬用の穀物の雑炊で、絶対量が不足、時には中身がほとんどありません。飢えてくると心まで外道飢餓となり、人間の誇りや情けもなくなつてしまいました。衛生面でも、未完成の收容所には風呂や洗濯場がなく、一冬、入浴出来ない衣服も体もシラミの巢となり、シラミの大群に食い殺される思いの越冬となりました。作業は伐採、搬出、製材、線路工事等で、私は三人一組の伐採が主の班、体重四十キロの私にも一人前のソ連兵のノルマが課せられるのです。いよいよ自分もお陀仏かと覚悟した私が、地獄の中から生還出来た唯一のよりどころは、「生きて帰つて米の飯を腹が裂けるほど食いたい一心」への執着です。

伐採

兵庫県 石坂博信

森林での伐採は危険を伴う重労働作業で、シベリア抑留者の多くがこの作業に従事し、数知れぬ犠牲者を出している。

伐採作業は二人一組で行う。冬は厳しい寒さと闘いながら、酷暑の夏は蚊とブヨの猛襲を防ぐため防虫網をかぶる。事故防止のため隣の作業班とは五十メートルの間隔を保持する。

森林に入ると先ず薪を集めて焚火をした。冬は暖をとり、夏は松葉をいぶして蚊とブヨを追い払い、焚火の煙は各作業班の所在を明らかにした。作業は、ソ連側の定めた伐採基準と安全規則により行った。次の手順で伐採を行った。先ず伐り倒す木の根元約三十センチ程度上のあたりで、木を伐り倒す方の面に受け口をつくる。受け口はピラー（二人用鋸）で木の径の三分の一まで挽き、上の方からタポール（斧）で楔形に幹を削り取る。次に反対側の幹を少し上の方から鋸を入れて挽く。…木が徐々に受け口側の方へ傾き出す。この時、開きだした木口に鉄楔を打ち込み、鋸を挽きやすくして倒れるまで鋸のピッチを上げて挽く。

木がゆっくり動き始めるこの時、相番と木の倒れる方向を予測し、逃げる心構えで鋸を挽く手を早める。大木が倒れる瞬間の光景は壯観ですさまじい。ゆつくりと、時には回りながら、次第に速度を増して倒れる。周りの木の枝をなぎ飛ばし、天地をゆるがす響きを轟かす。その瞬間、「やったーッ！」と思わず歓声が上がると、だが油断のならない一瞬でもある。なぎ飛ばされる枝は小枝でなく二十センチ以上の太さで、予測できない方向から凶器として襲ってくるからだ。

伐木はソ連側の指示の長さに玉切りする。枝は全部集めて燃やす。

新しい作業地に移動

一 新地について

六月のある日、自分達の小隊（五十人）に移動の指示がある。私物を全部持って徒歩で原始林の奥地に約五時間かかって到着した。宿舎は掘つ立て小屋で屋根は樹木の皮で覆われ細長く、両側に並んで就寝する。中央部分の数力所に暖房用の焚火をするようになっていた。

二 伐採作業について

作業は立木を伐採して冬季にトラックで前作業地の鉄道線路沿いに運ぶ原材の準備であった。二人一組で鋸と斧を渡され、監視兵に連行され奥地に入り思い思いに立木を伐採し、二メートルに切りトラック用道路まで運ぶ。これが毎日の作業であった。この仕事が十月まで続く。

愛知県 鈴木英一

伐採は二人一組で、二人でひく大きなのこぎりと斧一丁を持って膝まで付く雪の山の中に入つての作業でした。ほとんどが伐採するのは初めてで要領が分からず、その上、栄養失調で体がふらつき、防寒具が重たくて仕事もはかどらず、ノルマもなかなかできない状態でした。寒くて焚き火にあたっていると、ソ連の兵隊が「ヴエストラダワイ」（早くやれ）と銃口を向けて脅します。いつも夜空を仰いで山を下りて帰つたものでした。

伐採中、他のグループの倒した木の下敷きになって亡くなった人もおりました。無残でした。防寒帽で耳が塞がっており、体の動きも鈍く逃げ遅れてしまうのです。また、自分が切つて倒した木が反動で根元が跳ねるのでよけるのですが、なかにはよけずにいる者もおるのです。木が足に当たり骨折して即入院です。そうすると、はたの者は、あいつはうまいとを言ふんですね。明日から自分の間、伐採をやらなくてもよくなるからです。そんなに伐採は嫌な作業でした。

島根県 福田 恭（旧姓高瀬）

この収容所での作業は伐採の仕事をしておりましたが、今考えてみますと、零下何十度という気温の中の樹木は凍つており、街の中に建つておるコンクリートの電柱のような木であつたと思います。このコンクリートのような木を相棒とこのぎりでコリコリと切りましたが、相棒の名前も所属部隊も知らずこの誰であるかも分かりません。お互いにそれぞれの身元を聞く余裕ありませんでした。こうした状態の中で段々体力がなくなり、いつまで生きておれるかも分からなくなつてきました。

② 鉄道工事

作業が雪どけとともに今度は鉄道工事にかかりました。山と山との谷間に橋をかけ、左右両方の山より無蓋車に満載された土砂を、一台に六人づつでおろしていくのです。おろし終わつてホツとするまもなく、つぎの貨車がきてまつております。そのような労働が昼、夜間、徹夜の三交替で、約六か月続きました。そして、谷がうまり、レールがふせつ、列車が開通いたしました。これが第二シベリア鉄道の工事であつたわけです。

暗い密林地帯も仲間の苦闘の労働で鉄道路盤はうねうねと赤土の盛り土が明るく続く。二百二十キロ目的地点、約五日間の行軍。山また山、奥地へと伐採した路もなく、湿地帯を渡り仮宿舎に到着。テント生活と道路工事が始まつた。大木を五、六人で担ぎ次々と丸太組み立ての道路が完成していく。重労働で体力の消耗が激しい。空腹に野草、茸、松の皮まで煮たり焼いたり雑炊量を増やし、蛇を捕まえ飯盒のふたで火でいり、油とともに最高の料理である。丸太道路が終わり、二百五十キロ第四地区の鉄道建設開発に入った。幾百年の老木が鋸と斧で幅五十キロを境に切り開かれ、切り株は火薬で爆破。土工も七月の真夏の照り輝く太陽、共同作業も原始的一輪車運搬であり、突然倒れてきた木の下敷きで戦友が死んだ。また休憩中赤い草の実取りに行つた同年兵が山に迷つて行方不明、時間になつても戻らぬ。警備兵が捜査することも許可せず。夕暮れの山に叫んでも山彦ばかり、次々と不運が起こる。収容所の建築も、丸太づくり。本格的鉄道建設現場には毎日二キロの峠のある往復路、歩くだけでも汗が流れ、馬汗峠と名づけた。路盤に枕木レールの敷設遠く、列車の汽笛が懐

しく身に沁み響きが聞こえる。

昼夜二交替で疲労ますます、夜の室内は恐ろしいほど静寂で山々には紅葉が過ぎ、また迎える厳寒が迫りつつある。

新潟県 片山正治

千鳥ウルフ島から「日本に帰す」と言われてついた港がソ連領ポートワニ港の収容所だった。

マンドリン自動小銃にかこまれ、鉄条網にかこまれた掘立小屋。コーリヤン、馬糧、脱穀しない米、大豆かすの食糧。この食事の粗末さのつぎの大敵は寒さであった。零下四、五十度、ストーヴ一個、支給された毛布一枚と防寒外套でゴロ寝の毎日である。零下三十余度のなか、豊かな食糧ではないが苦しくはなかった千鳥の生活をへてきた我々にも、この環境は骨身にこたえた。

身体から目にみえて力がなくなっていた。「ダワイ・ヴィストレー！」銃にこづかれて息もこおりつく戸外にかりだされ、明けがたのこおりついた道を作業に急がされる。鉄道敷設工事である。満足に道具もない。鉄の棒とスコップ、ハンマーぐらいいかないなかで、軌道床づくり。極寒のこおりついた土砂れき扱いは容易ではない。

熊本県 畑中眞澄

まず鉄道作業である。鉄道の路床をつくるため、山の崖を切り開く作業であるが、ツルハシとスコップの粗末なことにまず驚いた。従って作業能率は上がらない。すべて作業にはノルマがあるから、それを達成しなければならぬのだ。監督はカンカンに怒って、声高にののしるが、ロシア語が全く通じないので、どうしようもない。通訳を呼んでもなかなか来ない。作業の手順、監督の意図するところの意思が通じ合わなくて大変困った。意思の疎通には言葉の果たす役割を痛切に感じた。意思の疎通がうまくいかずに、気短かな日本軍の将校が軍刀で切りつけた

事件も起き、将校の軍刀の没収になった。

線路の路床に使うバラスおろしは夜間作業であった。次々に運ばれてくるバラスをおろすのも並み大抵の作業ではないが、ソ連の女子囚人の作業で軽作業の部に入るそうである。満足な食事もとつけない我々には負担が大きかった。

我々の手によって鉄道が延長され、複線化が進むにつれ、ソフガワニの方に向かつて毎日昼夜を分かたず輸送が始まったので、一体、何を運んでいるのかと聞いたところ、武器を千島の方に送っているのだと言う。無蓋車の上にシートをかぶせてあるが、それらしきものであることがわかった。

新潟県 岸野利栄

入ソ第二年目の昭和二十一年の四月ごろ、タイシエトから約二百数十キロメートルもある奥地の収容所へ私どもの作業大隊は転出しました。私どもはこの収容所を第二二〇収容所と呼んでいたように記憶しております。

ここは、私どもの鉄道建設の最終地点のようでした。シベリア原始林を伐採して、工事用の木道をまずづくり、これに並行して鉄道本線の線路敷、枕木、線路の工程でソ連式ノルマの建設が営々と進められました。

十月に入り、私どもの作業隊はタイシエトから最初の収容所であったニューベルスカヤの方向へ逆に戻り、パラチンカという地区の収容所に移動しました。この位置はタイシエトから百キロメートルもあるところでした。このあたりには、ソ連軍の兵舎もありました。私どもの作業大隊は編成替えされ、この収容所（一〇キロ収容所と呼ぶ）から七キロメートルほど離れた収容所（一〇三収容所と呼ぶ）に移りました。この一〇三収容所から東へ約二キロメートルには新駅ができていて、この地域の鉄道建設にも私ども日本人による大規模の強制労働力が集結させられておりました。

私どもはこの収容所に、昭和二十二年から同二十四年八月ころまでおりました。この間に、タイシエトから北方二百数十キロメートルの地域間のバム鉄道

建設が完了したように聞いております。

新潟県 村山家司

春になると鉄道工事、この鉄道は独ソ戦の折、レールを取りはずして本国に持っていくたこと、作業は線路わきの排水用側溝づくり、工兵隊出の老下士官殿が作業長となりトンボといわれる道具をつくって傾きを測量して作業を進めるのである。暑いときは裸になって汗だくの作業、午前午後二回、十五分間休憩する。このときには、帰国のこと、家族のことや、故郷の料理自慢に花を咲かせる楽しい一刻であった。休憩時間中に警護兵がマンドリンを発射するのにはびっくりした。空葉きようの数がひろつていけばいいのだそうだ。九月中旬には降雪、ツンドラ地帯での側溝掘りはノルマどおりには進まない。ノルマが達成できなければ食物は減らされる。我々はまきを集めて溝に積み重ねて火をつけて帰隊する。翌日来てみると残灰の下は解けて掘りやすくなっているのである。このような工夫をこらしてノルマの達成に励んだものである。そのほか通称「井戸掘り」という湿地帯での井戸掘り作業。これは砂利の層を掘り当てるという路盤工事的用のガラス採取の候補地となるであろう。ここでも帰りぎわには側溝掘りと同じ工夫を施行したことは当然である。

深夜のガラスおろし作業

退院後の二、三か所での作業を終え、帰国するまでは線路の補修と鉄道敷設作業であった。枕木、レールの敷設作業では私は鉄道隊出身なので割合楽な作業といえた。これにはウラがあつて、それは深夜の作業が待っていたのである。九時就寝、やっと眠りにはいったと思うころ、全員起床させられ、貨車に積んであるガラスを線路上におろす作業であった。積んであるガラスは凍りついていて、スコップでは歯が立たず、ツルハシで打ち砕いてそれを少しずつおろすのである。作業時間も含めて夜の二、三時間にも及ぶこの辛い作業はシベリヤ抑留中の最も厳しいものであった。夜は徹夜の作業、昼は普通の作業と全く非人間的な労働で

あつた。

滋賀県 村田英信

三月ころまで石割り作業に従事する。ボールとツルハシのみで山中の岩盤を砕き碎石をつくり、トラックに積み込む作業。翌日はトラックで運ばれた碎石で鉄道線路づくりと側溝掘りの作業を隔日に繰り返す。零下三十度までならば作業を続ける。三十度を超えれば作業は待機になるが、毎日二十度前後の日が続いた。しかし時たま零下三十五度、四十度の熾烈な気温も体験する。四月ころにまたもダモイ東京の話題がのぼっても、今度は本当とは思わなくなる。アンガラ川の氷が解け始めたころ自動車で移動が始まり、転々と移動、作業に従事する。

愛知県 松尾典夫

そして雪解けとともに四月より作業が変わりました。鉄道工事です。これは第二シベリア鉄道の一部でした。昼、夜、終夜の三班編成で、一か月ごとの交代制で作業をします。大きな谷に橋梁をかけ、右、左より六両連結の貨車が土砂を満載して休みなくはいってきます。それを車に六人ずつで円びでおろしていくのです。休憩時間もありません。作業終了のときがくると、もう精魂つき果てて、動くこともできない状態でした。収容所へ帰る道のりの何と遠かったことか、まさに悪夢のような毎日でした。

東京都 青木貞一

また、あるときは、鉄道のレールを敷く作業にも加わりました。地ならしは一切不要、草が生えているままの大地に枕木をポンポンと置き、その上にレールを乗せ、釘でとめれば出来上がり、ごく単純な作業のようですが、さにあらずです。骨皮筋衛門の体力で、あのレールを動かすのですから。大勢の力を合わせ何

とか作業も進めることができました。

作業中にはいつも小休止がありました。このころになると、監視兵も安心してか、私たちの行動にあまり神経を使わなくなりました。どう見ても暴れ出す元関東軍兵士の体力ではなくなっていたのですから。

石川県 前川武雄

レールの切れ端を叩く音で六時に起こされ、三班に分かれた作業が始まった。私どもは汽車の釜にたくまき集め、別の班は線路のかさ上げ工事であった。まき集めは倒れた松材を一メートルほどの長さに切り、太いものは割って、線路のわきに積むのであった。ノルマが段々上げられる一方、倒木もなくなると、二人引きの鋸をもって立木を切り倒さねばならなくなった。

岡山県 大水操

昭和二十三年五月より四一〇分所第二中隊長を命ぜられ、ウルガル東方四キロ地点の山をダイナマイトで掘り起こし、土砂を主に西方路線に貨車で運び、道床上げをした。

山は第二中隊約五百人。山に立て穴掘り二人一組。五メートルの間隔で深さ六、七メートル掘り下げ、底部へ横穴を一メートル掘り、ダイナマイトを麻袋に二分の一入れ、導爆索を差し込み、十メートル幅で二線彫り爆破。引込線で貨車に積み発送ですが、工期限内に計画どおり進展しません。抑留者は疲労こんぱいで、作業監督中尉が、中隊長の指導が悪いためだと激怒し、中隊長を穴に埋め爆破すると命令。私は、中隊長は連日の強行作業で体はやせ細りふらふらであり、無理をするな、生き長らえて何が何でも故国に帰りつこうと激励して回った。そして作業のおくれは私の責任だから穴に生き埋めにして爆破してください、覚悟していますと、監督中尉に申し出ました。これもおどしでした。

シベリア鉄道は抑留者が復旧した

新潟県 山崎清

部隊は満州第四一部隊、終戦は満州方正県方正、武装解除後は貨車に乗せられ鍵を掛けられると延々と一週間近く、一日に三回の食糧給与以外は扉は開かれない。その三回が用便の唯一の機会である。時折りガタンと音がして停車しても付近を見ることもできない。

窮余の一策の言葉どおり、貨車内にあつた金属片(八番線位の針金、その他)を集めて先端を平らにして、貨車の片隅に穴をあける。

辛抱強く交替交替で穴をあける作業を続ける。一日位かかつて外を眺める、といつても一部分しか見えないが、光が入るだけでも良かった。床には各人停車しないときに用便できる位の穴を開けることができた。

監視のソ連兵も初めは「何事か」と銃を構えていたが、そのうちようやく理解したらしく、給食時には愛想のよい笑顔をみせるのだった。出発してからは夜になつてもそれ程の寒さを感じなくなってきた。ということは、暖かい地方へと貨車が走つてゐるんだろうと皆で領き合っていた。

貨車が止まり扉が開かれ、ソ連兵数名、将校二名が来て降車を命じた。降りてみると広々とした原野が視界に入り、丘の上にはまばらに兵舎跡らしいところが見られる。隊列を整え歩哨の後に続く。

三十分も歩いたらどうか、共産党の幹部らしい民間人二名が歩哨に近づき、新たな案内人となつて隊列を案内し、兵舎跡らしい建物へと我々を導いていく。

後で解つたことだが、対ドイツとの戦闘で激烈なレングランド攻防戦が展開されたために、殆どが廃墟の街と化し、私達の収容された建物もその被弾跡も生々しい傷跡が多数箇所にあつた。

建物の周囲は有刺鉄線が張りめぐらされ、一部が門扉になっていた。

長い旅…貨車での抑留旅…を弾痕跡も生々しい兵舎跡でその疲れを休める

ことになった。これが建物らしい中で、の收容所生活の第一日、苦しい強制労働前
の一夜となった。

建物内を整理し、ありあわせの材木や板片で三隅に寝る場所を形づくり、
毛布や防寒具で寝床をつくる。持参した食糧もまだかなりの量はある。幸いに
も屋外に残されたドラム缶二個を使つてかまど(煮炊き場所)と暖炉を造る。落
ち葉や薪になる材料を集めて、食事を炊事係をやつていた経験者四人でつくる。
腹が一杯になつてくると、ドツと睡魔が襲つてくる。身体を横たえる間もなく深
い眠りに落ちこんだ。腕時計は十時近くを指していた。

ソ連兵の「ダワイヴィストラ」の声で目をさます。午前七時、炊事係からの朝
食をとるや否や、屋外に整理、身体検査が行われた。検査とは名ばかりの略奪
行為である。腕時計、万年筆を初め、めぼしい身のまわり品が奪われていく。じ
つと我慢するしかなかった。

民間人姿のソ連人五人が軍用トラックにスコップ、ツルハシ、テコ棒、それに一輪
車もある荷を降ろした。五人一組の班にされて、その道具を渡されると徒步行
軍である。約十分程のところに線路(広軌)跡があった。曲がりくねつて途中で無
くなつている。通訳が今日から鐵路建設をやるんだということで、まずは跡かた
も無いところをならして路床づくり、モッコになる材料を金網と担ぎ棒でつくる。
ソ連兵が感心した顔で眺めていた。

トラックで土と石材が運ばれてくる。それをスコップで積みあげ路床とする。
大木とその太いところの枝二本で「石バカッチョ」の台木をつくり、二人で路床を
上から「ヨイショ、ヨイショ」と叩き固める。土方仕事は経験があつても線路工夫
作業は初めての者ばかり。「無条件降伏」のこの身体、なんでこんなところでこん
な苦勞をしなければならぬのか、心の内で叫びながら作業を続ける。

こうして毎日毎日鉄道の路床づくりが続く。一か月も経つた頃、大型トラッ
クに線路が運ばれて来る。枕木になる丸太を焼いて枕木に仕上げる。みんなで
掛け声をかけあいながら枕木の上に鐵路を置き、ツルハシで線路と枕木の間に

固めていく。線路と枕木をつなぐ金具をどうするか。みんなで相談し通訳を通
して鍛冶場と鋳材を請求する。翌日返事をするということだった。こうした経
過で線路が固められて試験的に鐵路が出来上がったところを何回も往来して
「カンチャイ」となり次の場所へ移動していく。広野の落日は非情にも遅い。薄暗
い帳がくる迄作業、林を切り拓き、崖を削り、測量をしながらの悪戦苦闘の連
日も段々と多くなつてくる。

時折はドイツ人の抑留労働者も見かける。こうした抑留者の労働によつてシベ
リア鉄道は修復や新たな路線をつくつていった。

吹雪く日、雨の日、風の日も容赦のない強制労働の日々が二年を過ぎて「ダ
モイ」の日を迎えたときは思わず万歳を叫び合った。

福島県 村上 武

鉄道工事は、上陸以来二年半にわたつて、ソフガワ三駅と港を結ぶ約十キロメ
ートルの曲がり曲がった路線工事である。険しい山塊を通す工事なので、岩を崩
して貨車に積むことから始まった。一日三交代の突貫工事であつた。大きい石は
転がし台を使つて貨車に積み、手で持ち上がるものは下と上とで手渡しに積む。
細石や土砂はスコップを使つて貨車に跳ね上げる方法である。満足なスコップはほ
んどない。「ソ連兵め」とスコップを投げつけたときもあつた。積む石がなくなる
と、岩崩しにかかる。道具はテコ棒とハンマーとツルハシである。

月のない暗夜の作業はうす暗いカンテラの光で、黙々と動く姿は現し世の地
獄である。見る人をして慄然たらしむ。乏しい食糧のため足腰が落ち着かず、け
がをする者、石に挟まれて死する者数知れず。六万の死亡者と六万余の不具
廢疾者を出したのは、安全管理のないソ連指導部の抑留者扱いであつた。回顧す
れば恨み骨髓に沁むる。

ソ連にはノルマというものがある。土を掘るにも、砂地と粘土地と石まじりの
地とではノルマが異なる。さらに伐採についても、建築についても同じである。

収容所の所長は日本人の生活・衛生を管理する。作業係は作業の進捗を管理する。ナロメローチクは作業の出来高をはかる。この三者は常に利害関係を保持している。ナロメローチクは作業係と多い少ないの論争であり、所長と作業係は日本人を作業に出せ出さないで論争する。極寒四〇度を超えて風速のいかによつては、所長は絶対に日本人を作業に出さないと頑張つて作業係と張り合う。

彼らには五カ年計画がある。例えば一日一五〇%働く労働者は、三年半で五カ年計画を達成することとなる。日本人は彼らの利害の板挟みにされた。

ノルマを少し超えたときは褒賞が出た。パン二十グラムくらい、飢えた我々にとつては一口の食い物でしかなかった。

熊本県 上羽淳一郎

第一地区(ムリー)にて鉄道作業に駆り立てられた。それはバラス下ろしから始まり、枕木を敷き、レールを担ぎおろし、犬釘を打ち込み、線路の歪みを直す。すべて未経験の仕事で、血の滲むような苦勞の連続である。いつか見たアメリカ映画の西部劇を髣髴させる場面だ。常時空腹の身では、でかい枕木を担ぐのがやっと、犬釘を打ち込む力などない。へたり込んでいるとソ連人の女囚が寄ってきて、「ヤポンスキー・スマトリー」(見ていなよ)とハンマーを取り上げ犬釘を打ち込んでみせる。

ソ連側の男囚、女囚の収容所に日本人の捕虜収容所があるので、朝夕は仕事場に行く道はラツシユアワーになり、ごった返す。彼らが声をかけてくる。「ヤポンスキーお早う、ご機嫌いかが」と。「ハラショー」と返事をする。決して「ハラショー」ではないが、これも社交辞令だ。

食糧も満足に与えず、ノルマ完遂を強要される捕虜の身は奴隷扱である。一日の仕事を終え、ラーゲル(収容所)に帰り、夕飯にありつく。黒パンに塩味のスープ、練の塩漬けだけではとても身体がもたない。寝て見る夢は食物の夢ばかりで、情けなくて眠れない。空腹で水ばかり飲んでるので、裸になると、地獄

極楽の飢餓地獄の絵をつくりで、下腹部が異常に膨れ肋骨が浮き出ている。私はここで夜盲症に悩まされた。

熊本県 家人壮介

バム鉄道は、ソ、独、日三方国の涙の遺構

ソ連は第二次世界大戦前、極東方面の資源開発、軍事力の増強などを推進するため、また既に限界にきていたシベリア鉄道の輸送力を補うため、第二シベリア鉄道(バム鉄道)の建設を進めていた。その沿線に二一七収容所があり、バム鉄道建設のためにつくられた収容所であった。

バム鉄道は、バイカル・アムール幹線鉄道と言った。シベリア鉄道のタイセットを分岐点として、バイカル湖の北を通り、終点コムソモリスク・ナムーレまでの四千二百キロメートルの建設が計画されていた。戦前既にウスケートまでは開通していた。またコムソモリスクからの工事も進められ、二一七収容所付近はレールも敷設されていたが、第二次大戦で工事は中断し、レールなどの資材は撤去されて、兵器の材料にされたという。建設用の道路とともに荒れた路盤だけが残っていた。

初めはソ連の囚人によって工事は進められ、そのときの収容所であったが、第二次大戦中にはドイツ人の捕虜が入れられていたようで、一五〇大隊が二一七収容所に到着したときには、まだ本部の建物にドイツ人が残っていた。

二一七収容所のある村は、マプリンスク村と言つて、駅はマプリンスク駅である。バム鉄道沿線のこの付近は、ホルモリー地区(ホルモリン又はフルモリーとも言う)第二支部に属し、コムソモリスクから五十〜六十キロメートル余り離れたところではないかと思われた。

入ソのとき、列車から降ろされたコムソモリスク郊外のドーフ辺りが第一支部で、第二支部はホルモリンの二〇一・二〇二収容所から二一七を通り病院のあったゴーリンまで、その奥には第三支部(カリマ、エボロン付近)、第四支部、第五支

部と続き、一支部には十〜十五カ所の収容所が三〜五キロメートルの間隔で点在していた。ほとんどが直接間接にバム鉄道建設のため建てられた収容所である。

二二七の鉄道工事は、二十二年の秋ごろから路盤をつくる土木作業が始まり、多い日には伐採、馬搬出、製材所の各一個小隊及び雑作業を除いた全員が出動した。約四百人の作業員が四キロメートル余りの担当線路の工事に従事した。二十三年春にはソ連人によるレール敷設工事が始まり、マブリンスク村の駅は製材所の横につくられた。夏には工事用列車が走るようになった。その後は線路保守の作業に少数の人員が毎日従事した。

また、線路はマブリンスク駅から分岐して、東南の方向にある木材工場の二二〇収容所まで約四キロメートルもつくられた。鉄道は、丸太や枕木、建築材などの木材製品の輸送が主体であった。道路は鉄道とほぼ並行してつくられており、食糧、日用品などはすべてトラックで輸送されていた。

石川県 中田清康

ようやく土盛りも終わった鉄道路盤にすぐ枕木を置き、満鉄から持ってきたというレールを敷き、しばらくすると汽車を通す。このようだから脱線は日常茶飯事であり、脱線するたびに昼夜構わず脱線揚げに駆り出された。このころ貨車の荷おろし作業にも出た。パン粉を盗んで生のまま水で飲み込み、腹がパンパンに張って苦しんだり、塩漬けのマスをかすめ取り生食し、のどが渴き胸が焼け苦しんだことがあったのもこのころだ。食糧のおろし作業はかくのごとく、かすめた物をズボンに隠して持ち帰るが、衛兵所で巻き上げられることが多かった。抑留生活はまさに食いの餓鬼道であった。

静岡県 赤堀四郎

労働は大工仕事と鉄道路盤の土盛り作業、汽車用燃料マキづくり、鉄道橋

梁は木製のため、橋脚の丸太打ち込み作業、これは満州よりの戦利品ヤンマーディーゼル杭打機を使用した。ノルマ倍達成、増食となったのは初めてだった。

労役の統制管理は本部が行い、ソ連側作業主任がほとんど指示した。作業出発、往復路の監視は厳しかったが、異変ということとはなかった。

岩手県 荒田昌三

五月ともなればシベリアの山にも春が来て、冬期に伐採済みとなつて裸山となつた山裾を周り、山向こうまでの山林鉄道工事が始まる。まず道床拵えの碎石を作るため、鶴はしとスコップ一丁が渡され、二人一組で一日に無蓋車二両に積むのがノルマである。簡単なようであるが、連結されている貨車の発進するまでに積み荷を終わらなければならないので、昼の休みも休まず稼働を余儀なくされ、暑いので裸身となり岩を叩くので、その破片が肌刺さり、着衣も破けボロボロとなり、心身共に泥まみれのバラス採取の作業であった。

加えて、現場までの往復の道の平地部一帯は、凍土が融解しツンドラと化し、水は澄んでいるが、靴の中まで水浸しにして歩行しなければならず、足はブヨブヨとなり、後始末に苦勞をした。もう虱などはどうでもよく、折角辿り着いた二段式の寝床は、夜と共に南京虫の攻撃となり眠られず、ついに屋外に出てまどろむ。

神奈川県 宮沢信行

我々の来た目的はバム鉄道、即ち第二シベリア鉄道の建設であり、第一期建設としてそれら作業員の兵舎造り、第二に、それらの資材を運搬するための道路造りであった。鉄道工事で最も基本的なことは路盤づくり。

この地方では十一月から四月まで地下一・五メートル乃至二メートルまで凍りつき、スコップなどはまったく受けつけないし、大きなツルハシを振るってもピンとはね返って、その当たった部分がちよびりこむだけである。よほど腕力の強い者

がやつても、わずかに氷片が飛び散る程度で、コンクリートの壁を崩す方が凍土を掘り起こすより楽だといわれる。勿論ダイナマイトも使用されたが、ダイナマイトで土を爆破するにも、火薬を装填するための穴は手で掘らねばならない。穴を掘るには、まず焚き火をして氷を溶かし、すばやく焚き火を他に移し、そこを掘り始めるというやり方が用いられた。

路盤をつくるための土運びも、最もつらい労働だ。ターチカと呼ばれる一輪手押し車に土を積む、そして運ぶ仕事である。このバム鉄道はシベリア鉄道より更に北の、人跡まれな、一平方キロ当たり人口が一人にも満たない無人地帯の鉄道工事であつて、この建設に従事する者の作業環境、生活環境は著しく悪く、バム鉄道工事で何人の日本人が死んだか明瞭ではないが、それは「枕木一本につき一人の割で死者を出した」と表現されている。

和歌山県 河端亨之

三回目の移動であるが、大体千名くらいの収容所で、主な作業としては、バム鉄道の路盤の造成と、それに関連する作業であり、一部、森林伐採や製材所の作業に従事した。その外は「コンクリート管」の製造、「基礎工事」、「排水溝作業」、「揚水機の屋舎建設」などであつた。

私がここで従事した第一の仕事は、伐採された原木の、内地の杉や檜のような真つ直ぐな赤松や根元の大きな落葉松が多いので、それらを五メートル〜六メートルの長さに切り馬車で運んだ、それを製材所において足場板や角材に挽くのである。

赤松は挽きやすいので、ストックがなくなるとまた、頃合いを見て落葉松のラツパ状のものを製材所に運んできてもらった。製材所では、硬い木やラツパ状の落葉松には難儀するし、二人引きの鋸で挽くには意気投合できなかつたら大変苦勞します。それらの採配については、作業隊長の私の方で適当にやったものです。

次のコンクリート管の製造ですが、直径一・五メートル、直高一・二メートル、

厚さ十五センチの管を作ることでした。それは小屋を建てトロツコの上にコンクリートの型枠を組み、図面に基つき配筋も完全にして、コンクリート配合も、打ち込みも、すべての作業を入念に実施したのだから、品質や出来ばえは十分なものであつた。

次にやらされたことは、基礎工事というか、幅三メートル、長さ十二メートル、高さ三・五メートルの穴を掘り、コンクリートを打ち込む、基礎地盤を造る作業である。周囲に掘つ立て小屋を建て、外周に背板を張つて隙間を粘土で目張りして外気を遮断し、室内でペチカを焚いて温度を上げて、掘った穴にコンクリートを打ち込むのである。外気は零下三〇〜四〇度です。通常の処理作業では、よい結果の出るものではない。水、砂、砂利もすべて鉄板の上で加熱し、セメントを加えながら更に加熱しながら小型角スコップで練り上げて打設して行ったのである。三交代で、何日間作業したか、熱中の余り忘れて記憶は定かでないが八時間当たり四十名か五十名であつたか、加熱する者、練り上げる者、打設する者、真剣な仕事の連続であつたことを思う。

かような作業状況の中で、要員の交代時に監督が来ては地面からの深さやそれを測定して、グループの作業量を割り出しては、「ハラシヨ」とか「ニエハラシヨ」と「ラボーター」の成果を評価していたが、ソ連の監督も適当なもので、食事とか何かの用かで、官舎に帰つて不在になるときは、我々もこの時とばかり適当に休みながら仕事を続けたものです。この基礎工は質も悪く、完全とは思えないけれども、三・五メートル以下の土壌は凍らない、という水道管工事の実証もあるので、凍土となつて鶴嘴を受けつけないような凍土を掘り起こしてコンクリートを打設するような作業は、する必要はないように思った。せいぜい一メートル二十センチの深さに掘り、その深さまで良質なコンクリート打設を施工すれば良いことだと思ひます。

次に水道管の埋設作業に当たつたが、長さ五メートルか六メートルを幅一・二メートル全面に焚き火をして、土壌を温めておくのです。初日に十センチくら

いを掘り、帰りに付近の山林から木の枝や枯葉を集めて焼き、いったんは帰り、翌日そこを掘撃すると二十センチも三十センチも掘ることができず。その後、中間の段に板を架けて深度を下げる。三・五メートル以下は凍土であつても溶けているので穴を穿つて隧道を作つた。とにかく、早く能率よく作業を進めるためにいろいろと工夫したが、水道管を入れるまでの作業だけで終わり、完成できたのか、しなかつたのかは知らないままで、それを見守ることもなく途中で他の作業に移つた。

次の作業の話は、少し時期を飛ばし、排水溝を作る作業でした。季節は夏で暑い日である。湿地の中で二百メートルか三百メートルの間を、一・五メートル幅で深さ一・三メートルくらいの排水溝を構築した。地質は凄く粘土質のため、スコップに粘りつく、そこで焚き火でスコップを焼いて温めながら掘り起こすのです。太陽の暑さと焚き火の熱と、それに加えて「ブヨ」という小虫が顔面に飛んで来る、たまらない気持ちだ。それで蚊帳のような物を帽子の上にかぶり悪戦苦闘したこともありました。

次は揚水機の屋舎建設に従事した時のことですが、幸いなことに内地で本職左官の人がいたので、その人の指揮の下で工事が楽にできたことがあつた。また、バム鉄道の本筋の工事で路盤の盛土のため一輪車の「ターチカ」で土を運搬するのであるが、私は「ターチカ」で細い足場板の上を歩いて土を運搬するのが特に得意の仕事のひとつで、作業は意外にうまく進捗したものです。ある時、路盤の盛土も概ね完成し「レール」敷設作業も奥地に移動したころであつた。夜間呼集がかり、十五トンの無蓋貨車が十両ほど近くの線路に來たので土砂下ろしを命ぜられた。一両五十名で担当し、車両の片側を四十七センチほど持ち上げて、傾けて一分も掛かるか掛からない間に下ろしたこともありました。お互いに持っている智恵、力、技術などを出し合つて作業を順調に進め、成果を得たりしました。

一月に入ったら太陽の輝きが違つてきた。何となく陽差しに柔らかさが見え始めてきた。「アレツ」と思った。この調子でいけば、この時期を過ぎればあるいは生き延びることができるとはと内心ホツと安堵感が一瞬よぎつた。だがしかし、寒さはそれとしても、雪が消えてから作業は伐採から鉄道の路盤工事となつた。ソ連の自家製の松の木をうまく割いた板で造つた一輪車を使用するのである。

雪が消えると俄然シベリアは日中の明るい時間が長くなり、午後八時、九時になつても暗くならない。明るいうちはノルマ完遂まで帰さない。ヘトヘトになつても「作業止め！」の号令はなかなか下りてこない。その頃から戦友の多くはバタバタと倒れていった。作業途中で倒れたり、前の晩一緒に並んで寝た友が翌朝冷たくなつていた。さては今度は自分かと思つと気が滅入つてしまふ。スクツ！と起き上がつて臍下丹田に力を込めて、「クツツ死んでたまるか」と、全身を鼓舞し気を持ち直した。

山林開墾に従事させられたが、満足な機具はなく、鋸や斧も十分ではなかつた。運搬機具も自分たちでつくり、昔ながらの天秤棒作業である。朝は早く夜は日没までノルマ作業で、生き地獄の状態であつた。鉄道作業が進むに従い、機具運搬機も一輪車（ターチカ）も我々日本人がつくり、作業した。冬季は地下二・五メートルまで大地が凍り、作業は困難だつた。当時は満州より黄色火柴をソ連軍が戦利品としてシベリアまで持つてきており、冬期間土地の爆破作業に使用していた。重労働、それに食糧も不足、生きることが困難な状態であり、歩哨の目を盗んで山中に入り、アカザ、タンポポ、アザミ、ワラビ、ヤマウド、柔らかい木の葉、松の皮を取り焼いて、するめと思つて食つていた。

また、蛇などは手当たり次第食糧として腹の中におさめていた。冬季になれば草の芽はなく、ただ配給の食糧のみで栄養失調になり、次から次へと死んでい

く状態であった。作業中、体がふらふらでつるはしを振る元気もなく、「ヴィストラ」とソ連のコマンジールに追い回されるだけであった。コマンジールの目が離れたときに野草取りに行き、道に迷い帰り道を失い、山の中で行き倒れて死んで行く同志、毒茸を食って死亡する同志、生き地獄とはこのことと思つた。

和歌山県 坂本長兵衛

作業は鉄道建設であつた。鉄棒とスコップを使って直径三〇センチ、深さ五〇センチの穴を三カ所掘る。これが一日のノルマ。地面は一メートルから二メートル凍結し、鉄棒を力いっぱい打ち込んでお返し。三カ所はおろか、一カ所掘るのがやつと、寒さと空腹で鉄棒を支えるのが精いっぱい。できた穴に火薬を入れる。線路を貨車が通るので、合間に爆破する。一回爆破すると畳一帖程の土の塊が至る所に滑り落ちる。この土石を細かくし、ターチカと言う一輪車で線路の外に運ぶ。途中で監督やソ連兵が見張つていて、運ぶ土石の量が少ないと足でターチカを蹴り倒された。いっぱい入れると支えて歩くことができない。しかしノルマを消化せねば作業は終わらない。日が暮れるまでやらされる。作業が終わつて宿舎に戻つても誰も話す者はいない。それでも下級の者はストーブの薪集め、夕食の支度などで休むことはできず、夕食が済むと靴を乾燥場に持つて行かねばならない。フェルトで作つた長靴は雪で濡れ、五人分も持つと重い。

愛媛県 東 兼隆

私達は、昭和二十年十月、牡丹江から貨車でイルクーツク州タイセツト地区へ抑留されました。バイカル湖の北側を通るバーム鉄道の建設が私達の主な抑留の目的で、それまではソ連の囚人とドイツ軍の捕虜等でシベリア鉄道本線のタイセツト駅から六十八キロまでがどうか通過できるまでになっていました。

私達日本人の抑留者は、残り約二百三十キロをドイツ軍と交替して建設することになりました。六十八キロからは先は人跡未踏のタイガ地帯が多く、鉄

道建設の土工作業はとても重労働で、寒さとともに食糧不足、量も少なくさらに雑穀の質も悪いので消化不良の原因となり、栄養失調の患者が続出し、特に兵卒は食糧の分配にしても割の悪い日が続き、年老いた兵卒に犠牲者が多かつたように思います。

鉄道の建設が進むに従つて奥地へ奥地へと、ブラーツク方面に向けて移動しました。

愛媛県 田中 純

鉄道敷設のうち、レール敷設はソ連の囚人によつてなされた。その後の枕木の下に砂利をつめ込む作業が捕虜によつてなされた。この砂利は決まって真夜中になると貨車いっぽいに積んで運んで来る。ひどい時は朝方にもう一度砂利おろしがあつても、この分のノルマの増量は別になつた。夜の作業ではブトの襲撃で顔がかゆくて腫れあがつていた。さらに日中の作業時間も八時間が要求され、眠い目をこすりながらおろした砂利を線路内にかき込み、次の列車がどうか通れるようにしておく作業がくり返されていた。今夜もあの汽笛とカマンジールの「ダワイ、ダワイ」の声にせきたてられ叩き起こされるかと思うと身の細る思いであつた。このような無謀に作業大隊長や通訳が抗議したが、これだけはソ連側も譲る姿勢は少しも見せなかつた。

熊本県 南部吉正

送り込まれたラーゲルは、鉄道建設に従事する囚人達の収容所であつた。枕木を造る製材所班、鉄道の路盤を盛り上げる作業班、レールを敷く鉄路班等に分かれていた。

私は路盤を作る作業班に所属することになった。五十人近くの囚人はほとんどがウクライナ、ポーランド、ラトビア、エストニア、リトアニアといった東ヨーロッパの民族であり、日本人は私一人であつた。ターチカという一輪車に土を満載し

て板の上を押して運ぶのである。鉄の小さな輪が付いているターチカは、それ自体が二十キロもある木製の一輪車である。土を満載すると百キロ近くにもなる。敷きつめてある板の道の幅は三十センチ程であり、ちよつと狂うと板の上から落ちてしまう。一度落ちた一輪車は後続の人の手を借りなければ持ち上げることができない。路床までの距離は百メートル近くもあった。

夕方、くたくたに疲れてバラックに戻ってくる。一杯のスープをすすつて、泥のように眠る。パンは朝一度に一日分を食い尽くすので、昼も夜もスープ一杯をすするだけである。

三カ月後身体検査があり、私は三級者となつて鉄道班に回された。体力の限界を感じていたので、レールを敷く鉄道班に救われる思いがした。朝、三十メートルもある長いレールを積んだトロツコから下ろしたレールに綱をかけて、二十数人で枕木の上をひっぱる。レールを継ぎ、枕木とレールをボルトで締めていく。

この班でも、日本人は私一人であった。元ウクライナ軍の将校だったという班長は、日本人が珍しいのか、よく声をかけてくれた。ゲイシヤ、サムライ、フジヤマと言つて、班長はさも日本のことを知つてるように笑いかけた。「グワントンスカヤ・アールミヤ(関東軍)が、ドイツが対ソ戦を始めた時、東から攻撃していれば、敗けることはなかったのだ」コノネコというウクライナ人の班長は、そんなことも言った。

宮崎県 鎌倉廣行

今度は鉄道作業要員として、夜間勤務に従事することとなった。

工事現場は収容所から約一キロほどの所にあり、枕木の下に詰め込むバラスを、貨車の両面の扉をあけて線路の左右におろす仕事であるが、その作業は決まつて真夜中のため、貨車が来る時間の直前までに現場へ到着しなければならなかった。せつかく眠りについたら頃叩き起こされて、寒い中を現場まで歩く。現場に着くと、やがて到着する貨車の停まる位置に待機し、貨車が到着するや、満載

されたバラスを一人でスコップでかきおろす。限られた時間内に、五十トン貨車、十トン貨車に飛び乗つて息もつかず線路脇におろすのだが、その時の苦労はいつも死ぬ思いであった。監督は時計を見ながら「ブイストラ、ブイストラ(急げ、急げ)」と怒鳴るばかりであり、恨めしかった。こんな重労働は生まれて初めてであり、全身にこたえた。ようやく作業が終わると収容所に帰つて寝るのだが、寒さと疲れであまり眠れなかった。この作業隊に回された隊員は体力の消耗が激しく、後には全員が要注意者となり、作業を禁じられた。

北海道 澤田清吉

お正月を楽しんでいるうちに鉄道補修隊に編成替えとなり、マンガクト(モンゴフトとも言う)第二〇八収容所に移る。

このバム鉄道は、日本の敗戦直前、昭和二十年七月に敷設されたばかりのもので、ソ連の政治犯を中心とした囚人の手で敷設された。粗雑な工事で、二本のレールを敷いたばかりのものである。まだ路盤が固まつていないから、その路床を補修強化する仕事である。

線路の両側の路盤固めだが、凍土のため四、五月ごろまで土方工事はできず、枕木交換、線路の路床揚げ作業であった。一にも二にも飢餓と酷寒。食物は少ない補給、寒さは着たきりのシューバ(綿羊の毛皮外套。毛のある表皮を内側にして空気層をつくつて保温性を高め、脂肪分の強い裏皮を外側に向けることにより氷雪をはじく)だけでは間に合わない厳しい寒さである。

ロスキーの監視兵はどうかというと、このシューバの上にはもう一枚の、しかも地べたをひきずるような長いシューバを重ねて着込んでいる。足許からくる寒さを防ぐためである。

こちらは、ただでさえ少ないカロリーの食糧で、どんどん体温が奪われてゆく。寒さの中で働かされるのだから、悲劇的であった。

いよいよシベリアにも春がやってきた。厚い凍土も解け始める。鉄道線路は一

段と高いところを走っている。その両側の路盤の土盛りをするのが我々の仕事である。傾斜がきついので、霜、雪の日には足許が悪く、滑ってしまい、なかなかノルマが上がらない。そこでターチカ（一輪車）の前に縄をつけて引つ張り上げる者、下から押し上げる者が協力し合って仕事を進める。何しろロスキーのターチカは馬鹿でかく、転んで壊してしまい、ノルマ完了はいよいよ遅れる。監視兵は「ヴィストラ・ダワイ」と叫び、ラーゲルへの帰りが遅くなると銃を振り回してせき立てるのである。

鉄道作業

鳥取県 細木昭男

私達が乗せられた車両は古色蒼然たる寝台車で、上中下の三段になった寝台に起居することになったが、引込線のある停車場に着くと、そこを基地として幾日か停留し、鉄道線路の古びた枕木の交換作業をやり、そこで作業が一応終了すると、次の地点へと移動した。

移動した地点は、ナホトカからウラジオストクを経てウオロシロフ（ウスリースク）に至る間で、この三方所を除いてはスーチャン、チグロバヤ、カンガース、マイヒクノーリといった地名の所で、辺鄙な田舎や山の中であった。

鉄道の枕木交換作業は、ソ連人のエンジニアがあらかじめ新品と交換すべき古い枕木に目印を付けておき、それを我々の手で交換するのだが、まず枕木が埋まっている周辺をショベルで掘って土を取り除き、イヌ釘を抜く。そして大きな鉄製の挟み道具を使って片方の脇から引き抜く。次に新しい枕木を差し込んでイヌ釘を打ち込み、最後に土の埋め戻しをして終わる。

そして、この作業の場合も例外なくノルマが課せられた。一人一日のノルマは五本ぐらいであったが、一個班五人の場合、一日に二十五本の枕木を交換しなければならぬ。

シベリア鉄道の広軌の枕木は長くて太く、これを二人掛りで担ぎながらの運

搬や柄の長い大きなハンマーを振つてのイヌ釘打ちは、空腹と体力の消耗した私達には重労働のものであった。

京都府 松本長四郎

昭和二十二年冬から二十三年にかけて、同じコムソリスクではあるが森林地帯の収容所へ移った。ここは半地下式の宿舎で、雪の朝などは雪をスコップで掻き分けて外へ出るような状況で、一晩で四〇〜五〇センチも積もったことがあった。それでも伐採に出かけた。これから切る木のまわりの雪を除けて二人曳きの場所作りをする。二人曳き鋸は呼吸が合わないと言え、木を切ることが出来ない。ある程度切れたところで斧で斜めに切り口を作る。この方向に倒すよう反対側から切つてゆく。このやり方が悪いと予定しない方向に倒れて、自分らだけでなく、あたりで働いている戦友を傷つけることになる。亭々と天に伸びる直径一メートル以上のカラ松の太木が倒れるときは、風を呼び付近の木々の枝をへし折り、その轟音は凄まじいものであった。雪が積もつて足元が悪く、防寒服で身体も重く、逃げ損なつて枝に跳ねられ大怪我した戦友もいた。乏しい食料三〇〇グラムの黒パンや汁のような雑穀の粥で、一日中空腹で身体が自由に動かないのが伐採で怪我をする最大の原因ではある。また、この材木を集積地へ運ぶのが大変であった。

昭和二十三年から二十四年は、コムソリスクより北の方のソフガワニというやはり森林地帯で伐採をやらされた。仕事に慣れてきて気分的に楽な感じであるが、朝晩の粥が少し濃くなった程度で、黒パンは三〇〇グラムより大きくならなかつた。ソ連は機械力が少なく、独ソ戦のせいもあつただろうが、人力不足のためか、人跡未踏と思われる大森林がどこまでもどこまでも続いているのには驚いたものである。

愛媛県 長野吉雄

私達は、イズベストウルガル間の鉄道レールを取り外した後の軌道の土盛り、軌道修正、それに付随する伐採、崖斜面の穴掘り、爆破した土砂の運搬等が主たる作業で、工作機械等は皆無で、すべて人力でやった。

厳しい自然や労働と対決するための食事は、兵は黒パン一日三五〇グラム、将校は三〇〇グラム。階級作業、ノルマの達成状況によってパンの量が増減された。ビタミンCの補給として、松葉湯をよく飲んだ。

じっとしている時は絶えず足踏みをした。油断するとすぐ凍傷になり、特に鼻、耳、手足に注意した。

零下四十五度以上になると作業は中止となる(一回あった)。四月になると春の気分となった。六月中旬ごろになると、落葉樹や白樺の芽が吹き出し、ツツジやシャクナゲが咲き誇り好季節になる。

特に夏の炎天には、ブヨとアブの大群に往生した。十月になると結氷期に入った。収容所での南京虫には悩まれた。壁の中で、特に天井などになると手に負えるものではなかった。いつも塗り直しの繰り返しで作業ははかどらなかつた。

汽車が通る両側の崖の斜面を修正のため、岩に穴を開けダイナマイトで爆破した土砂を手押し車(ターチカ)で運ぶ作業は、ノルマ達成のため競争であった。

福井県 片山清次

保線作業

連日、昼夜を分かたず運び込まれて来るバラスの山を、昼間作業隊はスコップで枕木の間に投入する。そして、木製の角スコップで枕木を中心に向かい合い、バラスを枕木の下に押し込む作業をする。日本でよく見かけた、線路工夫が先の平たいツルハシで呼吸を合わせてカッチン、カッチンと枕木の下を固めている作業である。このような保線用のツルハシ代わりに木製のラパータと称する手作りの器具を用いた。バム沿線は湿地帯が多く、土砂を投入しても、レベルで計ると一

日で二〇センチほど沈下する箇所が多い。翌日、その場所にバラスを投下して土盛りする。その翌日計測するとまたまた二〇センチほど沈下している。いわゆる賽の河原である。コソヤクかようかんのような軟弱地盤の上に土砂を盛り上げるのであるから当然の結果だ。

線路敷設計画に基づき伐採及び森林清掃を実施した箇所について、レール敷設のための路盤構築作業を実施する。レベルで高低を測量し、幅員一〇メートルの範囲内の一木一草に至るまで取り除く。高所の土は、ターチカと称する一輪車に積載し、松の厚板をレール代わりに並べた上を調子をとりながら押し運び低地まで運搬するという、体力と平衡感覚を要求される危険極まりない作業であった。雨や雪の日の作業は、バランスを失い一〇〇キログラムに近い土砂とともに高所から転落するという命がけの仕事であった。

曲がりなりに路盤の格好がついたとはつとする間もなく、ブラック街道を通りレールや枕木がトラックで連日、大量に運び込まれてくる。

鉄道兵出身の抑留兵士の指導で枕木を並べ、その上にレールを置いて行く。機械力は皆無で、すべて手作業であった。

「一五二四ミリメートル」、世界一の軌間を誇るソ連のレールを支える枕木は、無尽蔵と言える松、唐松、樅等を製材し、生木のままを運び込んでくる。一本当たり二メートル余り、優に八〇キログラムもあるものを、骨と皮に痩せ衰えた抑留兵士は一人では担げず、複数の人員で担がせてもらい、よろめきながら運ぶ姿はこの世の地獄絵図であった。不孝にして途中で落とした場合は、自力で担ぐこともできず、監督からは「サボタージュ」「プロホラポーター」と蹴飛ばされるのであった。

むき出しの赤土の上に敷設されたレールは、土木工事現場のトロッコの軌道を思わせるものであった。路盤が締まるまでは二、三年かかるだろう。汽車が通るのはそれからのことだ。鉄道兵出身の抑留兵士は、自らの経験からそのように語った。

静岡県 松崎市郎

我々は本来定住を知らない。鉄道が徐々に延長されると、それとともに移動しなければならぬ。大体四〜五キロメートル間隔に幕舎あるいは囚人の収容所等を利用していたのはそのためである。

昭和二十一年の年末頃より昭和二十二年頃にかけて、徐々にではあるが周囲の環境も改善された。シベリアの気候は春夏一遍に来る感じで、山いちご、山百合、その他名の知れない草花が一気に開花、いつとき気のなごむ季節である。その年の暮れだと思いが、初めに少し書いたノモンハン抑留者のことであるが、我々が作業を終え帰路につく途中で行き交った抑留者が、最近ハバロフスクで日本人捕虜を見かけた。その捕虜はハバロフスクへ捕虜交換協定で連行された。ただそれだけでは気づかなかったが、電信柱の上部にて電線工事中、日本の子守歌等を口ずさんでおったとのこと。私達も大いに驚いた次第であります。

路盤が構築され、枕木が敷かれると、レール運搬車にてレールを運んで来る。このレールは満州のよりも重畳があり長大なものである。以前、ドイツ人捕虜が作業しているところを見たが、レールが枕木の上に乗ると大釘を打ち込み、その動作は鮮やかなものであったが、今の我々にはそのような力はない。釘が最後まで打ち込めない（頭が少し浮いている）。機関車を通るとレールが上下に移動し、曲線ではレールの幅が広がる恐れがあるのである。脱線の可能性もある。今まではそんなことがあると、真冬には小便をかけてごまかしておった。これがなかなかのアイデアであり、零下三〇度くらいになると完全に凍りつき、重量物が通ってもびくともしなかった。気温が上がってくると氷も溶け、また元の状態に戻ってしまうのである。そんなところを運悪く指摘されたのである。白い顔を真っ赤にして「ヨッポイマーチ ニイバラシヨ」と罵詈雑言である。後の手直しがまた大変。一日三五〇グラムの黒パンと水のような少々塩気のあるスープ。その中にジャガイモの一かけくらい入っていれば、大騒ぎである。こんな食料では死者が出る

のも無理はない。「枕木一本、死者一人」と言われたようであるが、それもうなずける。この鉄道の終点はコムソモリスクだと記憶しているが、我々の大隊は途中まで、この作業を他の大隊と交代した。

新潟県 平原敏夫

鉄道工事

入所当時、地面に直に枕木を置き、その上にレールを並べただけのような鉄道の仕上げ作業が、私たちが収容された地区のメイン作業であったようだ。私も再々従事してきた。

広軌の太いレールを、何人かてこにぶら下がるようにして持ち上げ、その下に私たちが動員されて台車から降ろしたバラスを、打ち込み押し込み、もつと大勢でボール（金棒）を線路の下に差し込み「せーの」「よいしょ」と一斉にレールを右に振り左に戻し、枕木も一部取替え大釘を打ち直すなどして、曲直の線も美しく鉄道工事は逐次仕上がっていった。そうしてついこの間まで生木の薪を焚いて火の粉を忙しく吐き出しながら息せき切って走っていた機関車、列車は、石炭で勢いよく疾駆するようになっていた。

沿線に点在した丸太造りの鉄道官舎も、逐次私たち抑留者の手で建て替え新築整備が進み、その機能を倍加し、勤務する彼らの生活環境は著しく改善されたはずである。新築の駅舎は角材を使った本格的なもので、ここでは大工さん、とび職、それらの経験者が重宝がられ、彼らの腕の振るいどころ、見せどころでもあった。

岩手県 土川清

収容所では独ソ戦で撤去されたバーム鉄道（シベリア鉄道）の改良復旧工事が主な仕事だった。森林の伐採、木材の馬での搬出、鉄道の土木工事に従事した。シベリアは、五月中旬から六月が春、夏は七月のわずか一カ月間で、八月は

秋、九月中旬ごろから氷が張り冬に入る。

零下五〇度になるときが年に二、三回あり、体を動かしていないと生き物が凍りついてしまう寒さを抑留生活で体験した。

作業を終えたあとも暖房のための森林の伐採、飲食に使う氷の切り出しなどの作業があり、夜中の十二時ごろまで働き、起床は午前六時だった。

鳥取県 清水要範

青年行動隊

昭和二十三年の春、鉄道敷設の路盤の突貫工事が始められた。この仕事のため青年行動隊が組織され、私も指名された。まだ土は凍っている。焚火で溶かしながらの土振りは遅々として進まない。鶴嘴も一時間も使えば丸くなる。まして今まで伐採などが主な仕事で土工は初めてだし、衰えた体力で一日中鶴嘴を振るのは重労働である。ある日スコップで土を投げた途端、背中に激痛が走った。体が痛くて曲げることもできない。診療所の診断では相手にしてもらえない。微候の現われない肉離れや神経痛などは認めてくれない。反面、皮膚病や発熱などは軽くてもすぐ休養が許される。

痛みがとれる十日間ぐらいは苦痛に泣いた。思えば四年間、病気や怪我で一度も休んだことはなかった。

鉄道補修

伐採や薪割り、貨車の積み込み等が主な作業だったが、鉄道の補修作業に回されたことがある。冬季のシベリアは大地が凍り地盤が持ち上がる。春先、狂った地盤や線路を直すのである。作業班は十人ぐらい。看視兵はなしで、ロシア人監督の指示に従う。監督の合図で枕木をてこで持ち上げ、下に砂利を詰めたり、線路のゆがみを直したり、大釘の補充など。付近には民家や、無人だが駅の建物など、久し振りに解放感の味わえた仕事だった。通過するのは貨物列車が二本ぐらい、たまには監督が粉煙草を恵んでくれたり、しかしこの作業は長くは続

かなかった。

茨城県 山崎勝一

昭和二十年八月二十四日、武装解除される。二週間ぐらい、満州国延吉にソ連軍捕虜の取り扱いをされる。国境まで徒歩にて行軍、日用品と食糧を少量持つて入ソする。その後は鉄道貨車に詰め込まれ、貨車内に二十日ほど、汽車は北へへと走る。ソ連鉄道員に何駅まで行くのかと聞いてもわからず、止まったところで急ぎモクハ収容所に入れられる。

鉄道敷地の開拓（日本の地図にはチタ鉄道と完成してある）、実際には未完成であり、ドイツ捕虜が先に鉄道敷を開拓し、その交替に我らが入ったので、主に伐採作業、土砂運搬等で、零下四〇度までは屋外作業、四〇度以上になると屋内作業である。食事は米が何粒か入った野菜と、本当に水のようなスープと一日黒パン二〇〇グラムとジャガイモ二個である。初めの頃はその食糧さえないので文字通りの吞まず食わずの生活である。栄養失調のため多くの戦友が死んだ。朝起きてみると横に寝ていた友が冷たくなっているのもしばしばである。死体は道路わきに雪を覆い、そのままである。心から冥福を祈るのであった。伐採作業は三人一組で二二〇センチメートルの鋸を両方から押し切る。一人は倒れた木の枝払い作業である。自分も倒れた木にはね飛ばされて気を失って、ソ連の監視兵にかつがれて医務室に五時間ほど入った。幸いにも体に異常なく帰った。山林は処女林のため伐採作業は一箇所までできる。次から次へと木にかかって二十本ほど倒れなくなった。監視兵が、危ないからお前達は遠く離れていると。監視兵が一本を切ると見事な音を立てて二十数本が一度に倒れた。その木を六・五メートルに、次に四メートルに二本切る。夕方、係員が切り口に日付と検印を押し一日に切った数（リウベ）を調べる。一日の作業が終わり鋸を背中に背負って収容所に帰る。食事もジャガイモ、一日に飯盒一杯で、二十日ぐらいの時もあった。

少し頭を使ってやれと朝早く現場に着くと、監視兵の居ない時に昨日切った材木を検印のある部分を一センチに薄く切つて雪に埋めて、夕方監視兵に、これも今日切つたと言つて、実は二本しか切らないのに八本も切つたように係員に言つと、よし、今日は八本切つたのだなということに樂をしたことがあつた。春になつて雪が融け、伐採の数と搬出の数が合はず重営倉に一晚、食事もなく入れられた事もあつた。ひもじさの余り馬糞をジャガイモと間違つて拾つたこともある。

福井県 片山清次

バム鉄道建設(タイシエツトからブラーツクまで)

バム鉄道とは、バイカル・アムール鉄道の略。シベリア鉄道の略。ウラジオストクから四千四百七十五キロの地点(モスクワまでのほぼ中間点にあたる)タイシエツトを西の起点としてバイカル湖の北側を通り樺太の対岸ソフガヴァニ(ソビエツカヤ・ガヴァニ)にいたる全長四千三百キロに及ぶ鉄道である。現在走つてゐるシベリア鉄道に対し、この鉄道を第二シベリア鉄道とも呼ばれている。

スターリンは中露国境、特にウラジオストクとハバロフスク間を通るシベリア鉄道は軍事的な弱点があることを指摘し、併せて広大なシベリアに眠る豊富な森林と地下資源の開発、輸送等の観点から一九三七年、ソ連の最大国家事業として建設が開始された。

一九四一年、タイシエツトから百五十キロまでレールが敷設されていたが、独ソ戦争勃発に伴い五十八キロ地点のニューベルスカヤ駅以北の鉄道を撤収して独ソ戦線に資材として転用したという。一九四五年深夜、関東軍将兵は日本帰国の甘言に乗せられて遠路はるばる満州の地から貨車で家畜並の扱いを受けつつ、この地ニューベルスカヤに降ろされた。

駅舎もプラットホームもない。車止め寸前で機関車が停止している。その先は、深い密林の中に切り開かれた一条の赤土の路盤のみが密林の奥に消えていた。

ここから我々は三百五十キロ奥地のブラーツクまで(一部は更に以北七百二十キロメートル、ウスチークトまで)の鉄道建設に従事させられたのである。杜撰なロシアの諸資料によれば、このタイシエツト地区に抑留された関東軍将兵の人員数は一般に四万五千人と発表されているが、私自身に付与された番号は四五一六四であることから推察されるように実際はもっと多くの人員が投与されていたことと確信する。

バム鉄道建設はタイシエツト地区(イルクーツク州)と同時期にフルムリ地区(ハバロフスク州)、ウルガル地区、トインダ地区(アムール州)、コムソリスク・ナ・アムール(ハバロフスク州)でも日本人抑留者が投入されている。

斧鉞の入らない松、白樺、樅、落葉松等の巨木が密生する原生林が延々と続き、飛行機から見ると巨大な黒い絨毯を敷き詰めたようである。周知のとおり悪環境のもと、先ず密林の中に宿舍を建設、同時に建設資材と交通のための道路建設であつた。平坦な道路建設でも大変であるのここは湿地帯が多く、夏季は胸まで浸かる泥濘の中、巨木を伐採して井桁に組み、その上に直径四十〜五十センチほどの松を四メートルほどの長さに切り、二つ割りにしたものを三・五ミリ幅に並べ地獄楔(くま)を打ち込んで道路に仕上げる。一方、測量で示された地点を中心に差しあたり三十メートルの範囲で伐採と森林清掃をして路盤を構築する。

それに要する資材は斧とのこぎりとラパート(スコップ)が中心で土砂運搬にはターチカ(木製一輪車)が用いられ、専ら人力による作業が厳しいノルマによって実施された。平均気温マイナス四〇〜五〇度の厳冬時は、地表から三メートルは岩のように凍結しており、つるはしも受け付けぬ土壌をダイナマイトで爆破しながら掘り進むのであつた。

路盤の高いところは、一輪車に土壌を積み込み低地に投げる作業の連続であつた。木製道路の整備によつて当時の日本では見られなかつた米国援助によるスチュードベーカーと称するV8エンジン前輪駆動の強力なトラックが建設機材を

積んで奥地にやつて来た。本格的な鉄道工事が始まった。エクスカバートルと称する巨大な(掘削機)が投入された。これも初めて見る土木機械であった。巨大な恐竜の口を思わせる様な鉄製のバケットが一回すくい取る土砂の量は一トン近くあるだろう。二回しゃくると土砂運搬用トラックが満杯になる。現在(はじめて)も見受けられる。パワーショベルのことである。

昭和二十二年秋、百九十八キロ地点にある第一收容所でのことであった。あらかじめ期限が示されていたのであろうか？ タイシエットの建設本部の将校が多数、作業現場に来て監督を始めた。そして前例のないことであるが、近辺にあるロシア人監獄から比較的温順なロシア囚人を我々と同じ現場に数十人投入して日ソ合同で突貫作業をさせられた。

こんなことは後にも先にも無い経験であった。隣同士でスコップを握り一日汗を流した。休憩時にタバコを吸いながらの雑談は、昭和十一年ベルリンオリンピックでの日本水泳の前畑秀子、遊佐正憲選手の素晴らしさを今でも覚えているとか、俺は昭和十六年日ソ中立条約締結時、モスクワで松岡洋右氏の閲兵に儀仗兵として参加していたと、丸坊主で小柄な松岡氏の表情をゼスチニアを交えて笑いながら披露するなど和やかな一時を過ごしたことが印象に残っている。

某日、赤く土の露出した一条の路盤がブラーックの方に続いている作業境界線二百一キロの地点には、樅の木で急造されたミドリのアーチが立てられ建設本部の幹部将校や收容所長、監督将校達が集まり、この日を祝った。一段落したところで、三日も経たないのに機関車が黒煙を吐きながらレールや枕木を運んで来る。バラスも敷いてない赤土の路盤の上に二メートル余の枕木を並べ、二十五メートルのレールを連結しながら線路を延ばして行くのであった。

常識では考えられない手荒な手法で、鉄道建設を急ぐ理由は？ バイカル湖から流れ出るアンカラ河の下流三百五十キロメートル地点のブラーックに一九五〇年初頭、当時ロシア最大の水力発電所を建設のための資材運搬を目的とするための突貫工事と言われている。

そのため前述の掘削機や大量の土砂運搬トラック、線路敷設車が運ばれて来る。作業場にさっぱりとした被服を身につけたアクチーブがやつて来て「同志諸君、この敷設車はスターリン賞に輝く世界に誇るもので日本には無い。人力のほかに及ばないこの素晴らしい働きに目を見張るものである。このバム鉄道が完成することはソビエト民主陣営の勝利であり、それはとりもなおさず日本の民主陣営の強化につながるものである。同志諸君、更に頑張ろう」と敷設車の前で自国の事のように胸を張り誇らしげに演説を打つのであった。同じ日本人ながらこいつはどこの国の人間か？ 心ある者は感じていた。平成十四年厚生労働省の依頼でチタ方面に埋葬調査に行ったとき、小さな駅の引込線に赤く錆びた敷設車が停車していたのを見て懐かしく思った。

線路が敷設されたらされたで新しい苦役が生じた。バラスも敷かない路盤の上に列車を走らせる結果、各所で脱線事故が続出した。昼間の疲れでぐっすり寝入っている深夜、突如として衛門の鐘が乱打され全員集合の大声が飛び交う中を衛門前に集合、スコップ、鉋、鋸、鉄棒等を持って現場に急行する。巨大な大蛇がのたうたうのように横たわり、どこから手をついたら良いか分からない。

それも灯火一つない暗闇の森の中、人海戦術で三〇四時間するうちに夜が白々と明けてくる。復旧作業を終えてやっと收容所に帰り、朝食を済ませると休息する間もなく日常の作業に駆り出されるのであった。その間、夜昼なしに大量のバラスが長列の貨車で運ばれて来る。夜中に機関車の甲高い汽笛の音、間髪を入れずに響き渡る收容所のガンガンと鳴る鐘の響きは「地獄の鐘」と恐れられた。

そしてバラスが入られると保線の作業が忙しくなる。こゝタイシエツト地区は湿地が多く地盤が軟弱である。一日で路盤が十〜二十センチも沈下する。例えて言えば羊糞の上に大量の土砂を盛るようなものだ。

昭和二十四年四月過ぎにブラーックの手前のアンジョビーにある五十メートルほどの山を真っ二つに爆破する作業に従事した。山頂に数十メートル(ごと)に、

予め測量されている目印の箇所をそれぞれ指示された深さに掘り、底部に火薬を入れる横穴を掘る。次に山麓まで連日、黄色火薬が貨車で輸送されて来る。セメント袋に詰められた火薬を人力で各人が一袋ずつ担いで山頂の穴まで運搬する。

山頂から、この景色を眺めると蟻が列をなして餌を運んでいるような錯覚に陥る。辛い日々がしばらく続いた。各穴の前に指示された量の火薬が山積される。次にその火薬を太い白樫で作ったバットで袋の火薬を叩いて塊をほぐし、穴の中に充填していく。

次にロシア人爆破技師が信管と導火線をセツトし覆土を完了。

翌日は爆破現場から二キロ離れた収容所は休日に切り替えられた。収容所のすべての窓枠は全部外すよう命令され爆破時間の午前十時に発生する現象を待つていた。

定刻十時「ドカン」と腹に伝えるような鈍い音と、一瞬地震のように揺れを感じた。どんな大きな揺れが来るのか？ 期待外れの結果に終わったが翌日、現場に行つて驚いた。昨日まで眼前にあった巨大な山は饅頭を土で半分に切つたようにえぐられ、大きな谷間に変つていた。赤土がむき出しになっている山の斜面には密生していた松の太木が大人の足ほどの太い枝という枝はことごとく吹き飛ばされ、太い幹だけが、さながら魚串を立てたように並んでいた。一同はしばらく啞然として、この凄まじい光景に見とれていた。

居合わせた収容所長や爆破技師、現場監督将校達は口々に「ノルマー二〇パーセント」と喜びの声を上げて大はしゃぎであった。爆破で飛ばす土の量が少なくてもマイナス。計画以上の土が飛んでしまつてもマイナスになると言う。今回は火薬の量に対し予期以上の成果であつたらしい。生まれて初めて経験した男性的で壮大な作業は、つかの間ではあるが爽快感を味わつた。

それから二カ月後の七月下旬のある日、いつものとおり路盤作業の最中に突然「全員ダモイ」の命令が下達され、長年の夢であつた祖国帰還の途についた。

待ちに待つた朗報に一同は、枕木運搬用のトロツコに全員が飛び乗つて収容所へ戻つた。所内は蜂の巣を突つたような状態であつた。機材の返納、舎内清掃等を手早く終了して「アンジヨウビー駅」に集合する。

既に停車している長い無蓋貨車の列を背にして整列する我々を前にして、若い所長のニコライ少尉は「長年にわたる労苦に感謝するとともに、健康に留意して父母の国、日本に無事帰国されんことを祈る」と挨拶するや、顔をそむけて涙をぬぐつた。

毎日、怒鳴り散らしていた鬼監督のガンチャーフも今は感極まつて両目から溢れる大粒の涙をぬぐいもせず「ヤポンスキー・サルダート・トウキョウ・ダモイ・ハラシヨウ」と大声で叫びながら一人一人に大きな手で握手を繰り返し、祝福してくれた。

足掛け五年、苦難の日々を過ごしてきた沿線各地の収容所や作業現場を列車は一瞬のうちに通り過ぎて行く。その一つ一つの思い出が脳裏を去来し、胸迫るものがあつた。五千人を超える死没者を出したニコタイシエツト地区は、受刑者にとつて三大屠殺場の一つとして噂され、ソ連囚人の恐怖の地区としてつとに有名であつた。日本人抑留将兵にとつてもシベリア強制抑留労働最悪の抑留地の一つであつたことを改めて実感させられた。

バム鉄道建設の路は、遠く長かつた。亡き戦友のご冥福を心から祈るものである。

今日までバム鉄道建設に関する多くの書物に目を通すと、この壮大な国家的大事業は、スターリンの指導のもと、ソビエト愛国青年の止むに止まれぬ祖国愛に燃えた奉仕活動を中心に、共感するソビエト国民有志の手で建設された世紀の大偉業であつたと麗々しく称賛されている。

真実はタイシエツトとブラーツク間の三百五十キロを始め、コムソモリスク地区や沿海州地区等の建設には、大部分が不当に強制抑留された日本人将兵と自国民たるソビエト囚人の血と涙によつて建設されたものである。

この真実については隠蔽され、一言の記述もなされていない。我々、強制抑留された日本人将兵は、この真実を世界に向けて「語り部」として永く語り伝えていかねばならない。

滋賀県 山口 馨

色々と重労働の仕事をやったが、特に忘れられないのは穴掘り作業である。大きな穴を掘り、最後に火薬をしかけて爆破させ、鉄道線路の路盤用の土を取るための作業である。ノルマは第一日は九十センチ、二日目は七十五センチ、三日目以降は六十センチの深さに掘らないとノルマ一〇〇パーセントにならない。一〇〇パーセントのノルマを達成しないと黒。三〇〇グラムにありつけない。夏とはいえ内地とは異なり、地表から三十センチも掘るとそれからは凍土である。ツルハシやバールでもそのままでは掘れず、手がしびれるだけである。そこで凍っている土に薪を燃やして凍土をやわらげて掘り出す。穴の掘り始めは二メートル角ぐらいで、少し下へ行くと二メートル角ぐらいになってしまいが、深くなつてくると作業も大変で、穴の出入りには両側に両手と両足をつぼつて上り下りをする。下の方に行くと土の掘り出しが大変で、隣の友と交替で長い細木やロープなどにバケツ等を取り付けて、土を上げる工夫もした。一日の作業が終るとロシア人の監督が長い棒を持って来て、その日の掘った穴の深さを計りノルマが決まる。帰りには我先にそこそこ薪を拾い集めて穴に掘り込み、火をつけて明日の作業の能率を少しでも上げることに互いに奔走した。結局一〇〇パーセントの食事にありつくために体力を消耗させてしまった悔しい思い出がある。シベリアの湿地平原に太陽が沈むころになると、カンボイの「ダモイ」の声でスコップやツルハシを肩にかつぎ、隊列を組んで収容所へと帰る。皆一日の重労働で心身共に疲れきった体で話し合う元気もなく、終戦前の若い勇姿の面影は消え、ただ背を丸めてロボットが並んで歩いているさまで、その侘しさは筆舌に表せない。

③ 製材

島根県 足立秋男

ホールには製材工場と発電所があり、数日後早くも製材工場へ働きに出された。ホールには製材工場と発電所があり、数日後早くも製材工場へ働きに出された。

シベリアで最も苦勞したことは寒さ、飢え(食料の質、量とも最低)、重労働、言葉の四重苦。冬は零下四十度台まで下がり、生きていくのがやっとという感じ。川の流水はもちろん凍結するが、今でも覚えているのは四月の初め、川の真ん中へ連れて行かれ、二十メートル間隔で川底まで氷に穴を掘らされたこと。水深一・五メートルくらいだったが、川底の十七センチや十五センチは氷が流れていると思つたのに、底までカチンカチンの氷詰め。ロシア人の監督に「あと一か月もすれば氷が解けるのに、なぜ穴を掘るのか」と聞いたら「お前は頭が悪いなあ」ときつた。結局、解氷期の直前にソ連軍工兵隊がこの穴に爆薬をしかけて氷を爆破し小さくしないと、大きな氷塊がすぐ下流の木橋の橋脚に当たり、一発で橋がぶつ壊れてしまうという話だった。

毎日の労働もきつかったが、冬は川が凍って原木を川から揚げることができず、貨車積みで製材工場の引込線に入ってくるのをロープだけで下ろす作業が一番きつく、危険度も高かった。直径一メートル以上はざらという巨木下ろしには心身ともにクタクタ。日曜日に貨車が入ると原木下ろしに狩り出されるが、代休制はなく、一カ月ぶつ通しで働かされたこともあった。

福岡県 藤吉 静男

製材所の使役は全員が機械に振り回され、ひどい毎日だった。夏は夏で山野ではアブ、ブヨ、蚊の大群に顔が変形するほど刺され、舎内は昼はハエの大群、夜は南京虫、ノミに責められ、悩まされ、眠ることでできず、泣っ面にハチ。

でも食物は山野の雑草、キノコ、何でも食べられ、ただ、タンポポはにがく、いただけなかった。ワラビはゆでたらとけてしまう感じ。動物は犬、猫、蛇は大ご馳走、ネズミ、カエル、昆虫、何でも胃袋を満たしてくれ、特に赤松にいる幼虫は大変美味だった。

調味料は駅の構内使役のとき、貨車の床裏に岩塩汁が流出、乾いたやつ、もつとも牛馬の小便も石灰の粉もまじった大変なしろものをはぎ取ってきて、味つけしていた。

新潟県 村岡千代貴

製材工場に作業することになったのは十一月七日の革命記念日後と記憶している。直径抱きつかれぬほどの巨木の製材に驚いた。動力は廢材を燃料としてたかれているので、馬力は弱い。電圧は高低の流れから能率定まらず、作業内容は乏しく、考えられないやり口には一段と驚くばかりである。

和歌山県 古久保秀夫

作業割りで一番先に割り当てられたのが製材所の雑役であった。徒歩で約三十分くらいの距離で、主な仕事は引込線に入った貨車から丸太の荷下し作業だったが、これが大変で、貨車が入るのが不定期だから夜中の二時、三時ころに呼集の掛かることが度々あって、まことに気が重いことであった。

眠いので、前に行く人の肩に手を載せさせてもらって、居眠りしながら行進することも再三あった。大型の無蓋貨車へ山積みで入荷した原木は六メートルから十メートルもあり、直径一メートルを超す大喬木もあって、荷下しは引込線から二メートルくらい低い広場へ転がし落とす仕事で、蟻が芋虫に挑戦するようになかなか大木は動いてくれない。一斉に徒手で押し転がそうと努力しても、足場と押す角度の確保が難しく徒労が多く、掛け声だけでは丸太は動かない。苦勞してやつと一、二本落とせたが、寒中なのに汗びつしよりでとても苦しい。一

息入れてから続けようと立ち止まると、監督にきているデブの大男が口やかましく怒鳴り立てるばかりでなく、棍棒を持って来て丸太や貨車の台を叩いて大きな音を立てて熊のように歩き回りながら威嚇されるので休めず、丸太押しを繰り返すが、そのうち要領を覚えて、梃子の応用で棍棒を上手に使うように工夫を重ねたので、次第に能率が上がったが、彼らの言うノルマには届かないのか、一向に食糧は増やされず疲れるばかりであった。

製材所では、荷下ろし作業のないときに掃除をして屑木を集めて焼却するのが一番人気の作業であった。交代で焚き火のそばへ行つて暖をとったが、とにかく足から冷え込むので常に足踏みをしなければ足先が痛くて耐えられなかった。もちろん手も肩も冷えて辛い、足が一番辛かったので焚き火は御馳走でした。

東京都 嶋崎武男

翌年私はここからさらに奥地のモシカに送られた。それは、ここに製材所が開設され、枕木の製作が行われることになり、伐採、搬出、製材の要員としてであった。それぞれに三種類の労働を割り当てられノルマを課された。ところが私は召集前大学工学部に籍があった事が知れたのか、マシーニスト(エンジニア)ということで、製材所の機械工として配置された。しかし仕事はエンジンが笑い出す単純な仕事だった。丸鋸のシャフトの軸受(ベアリング)の加熱を防ぐため、そこに詰まるおがくずを取り除き、ベアリングを洗浄、グリスを給油する仕事。一日に何回となく切れてしまう丸鋸回転のための蒸気タービン動力伝導ベルトの緊急接続修理の仕事。また丸鋸の前を矢のように何回となく往復する原木保持機の伝導ワイヤがたびたび切断してしまうので、その交換修理の仕事など、次々起こる突発的故障を迅速に修理して、製材ノルマに影響させないようにするのが私の責任だった。他の製材所要員たちは故障が起これば故障が直るまで休めるので喜ぶが、私は故障が起これば一分でも早く直さなければならなかった。零下五十度の酷寒の中ときには素手で修理する事は大変な仕事であった。

愛媛県 宇都宮政壽

十月四日ウランウデの收容所に入り、製材工場班に編入。非能率な工場で、監督はがなるばかりで成果はさっぱり、ノルマ未達が続き、食事は質量とも最悪になる。一年くらいは我慢をしたが限界にきて、重営倉覚悟でスト決行。カンカンに怒る監督に「一片のパンと少量の塩汁」を見せ、「これが昼食、これで働けるか、ノルマの査定を考えろ」と交渉、監督もこの食事には驚いて善処を約束したのでスト中止、怪我人なしで終わった。

愛知県 杉浦守市

エッセイ製材

汽車に乗って一区東のエッセイ駅に到着。エッセイ部落にてエッセイ河で上流から運ばれて来た材木の陸揚げ、製材、製材した角材、板材、原木等の積み込みである。各グループ別にて、製材機械の補助(製材鋸を操作するのはロシア人である。指示により原木の移動の手伝い)、貨車より原木を下ろし、原木を台車にて製材場まで移動、製材した製品を貨車に積み込み、鋸屑及び製材不良品等の整理、貨車の移動、エッセイ河より原木の陸揚げ、その他雑仕事である。関連する作業であるので、重労働であった。全体のノルマ達成が大きな目標のため、協力し合つての作業である。鋸屑整理が特に苦しかった。少しサボるとすぐ鋸屑が満杯になり、製材が遅れる。常に少ない状態に片づけることになっていた。

千葉県 伊藤千次

雪解け

いつしか五月近くになると雪がどんどん解け出し、山も野も川も水浸しで洪水である。谷川は音を立てて流れ、積んであった材木が崩れて流れて行く。大自らの姿である。谷川いっぱいには大量の材木が流れ出し、あつちに引っかかり、こ

ちに引っかかり、しまいには重なり合つて全部止まつてしまう。川の岸边を下つたり上つたりして、止まつた材木を引きはがす仕事ができた。

命懸けの仕事である。重なっている材木の上をチョンチョンと飛び歩き、重要なひっかけを確かめてトビロで引きはがす。速やかに岸にたどり着く。あちこちで命懸けの仕事をするうちに上手になり、成功したときの気持ちは何とも言えない。大木が音を立てて流れる。切り倒した大木の音を聞くときのような充実感に浸った。

三重県 太田 勇

製材所は駅の近くにあり、かなり大きい事業所でした。前述のように、山で伐採した赤松のうち、太くて電信柱のように真つすぐな松は、ソ連兵の指示で六メートルの長さに切断し、後日馬そりで林道まで運び出しましたが、それが皆この工場に搬入されていました。これらの松はここで厚さ五センチほどの板にひきます。製材機は十個ほどの鋸(伐採用と同型)を歯を一方方向に向けて同じ間隔で縦一列に並べ、鉄枠に固定したもので、これが上下運動をするところ(トロッコに乗せた丸太を突つ込むと一度に十枚ほどの板が同時にひける仕組みでした。動力は蒸気機関で燃料には製材所自給のおがくずが利用されていました。我々日本人は用材をてこ(木の棒)でトロッコに乗せたり、でき上がった板を舎外に運び出す作業が主で、機械はもっぱら所員の手で操作されました。

北海道 東島房治

木工場作業

最初の作業は木工場の道路が悪いので、角材を並べて道を作る作業をやつたが、別に木工場作業という程のものでない。次にやつた仕事は製材された板を記号別に分けて、トロッコに積み、引き込み線のホームまで運ぶ仕事であるが、これが

ドンドン製材されて出てくるので、大変な作業だ。工場は二十四時間操業なので、勤務も三交替制で行う。製材は上下に動く鋸で、刃が十数枚同時に動くのでどんな大きな原木でも一辺に切れてしまう。だがこゝもノルマが有り、ただ引く本数だけを重視して製品の良し悪しはどうでも良いらしく、満足な板は一枚も無く皆プロペラのように曲がっている。

一番辛いのは夜間作業で製材の整理は外なので非常に寒く、さぼると寒いし一生懸命やるとすぐノビルし本当に参った。余り作業に追われると、仕方ないのでコソコソと鋸係に故障を起こすように頼むのだ。故障の方法はロスケの目を盗んで鋸が丸太の半分位迄来た時に真ん中の刃に鉄の棒を噛まして刃を折るのだ。そうすると機械を止めて刃を取り替えるのに二・三時間は掛かるので、その間ゆつくり休める。悪い事には実に良く頭が働く。

岩手県 吉田欽三郎

日本への帰還後、図書館の世界地図によってタイシエットの位置を確認したが、北緯五六度線上にあり、樺太の北端よりさらに北の緯度に住んで居ったことを知った。

一次夜勤を終えて帰るのが朝の三時である、夏ならいざ知らず冬であつて、身も心も縮む冬である。「集合…」夜は更けわたり冷気は深々と沁みてくる。作業班ごとには帰れないのだ。昨夜営門を出た人数が揃わなければ、警備のソ連兵はもちろん、我々としてもここを出発できないのである。また「集合…」、寒くて集まらないのか、ノルマが遅れて集まらないのか。

集まつて居った者二十〜三十人、声を揃えて「集合」、叫べど答えず。吐く息が凍つて防寒帽の口元に回りつく。それでも「集合」。足が凍り身体が震えるから、我々はただただ足踏みして待つより外はなかったのである。

もう二次夜勤の働く機械の音が聞こえて来る。それでも次の者達に引き渡し出来なかったのか深夜である。早く帰りたい、早く帰つて寝床に入りたい、…寒い

…。

吐く息が凍つてまつわり付き身体の芯から寒く、もう叫べないのだ。

こうして連夜、製材の班だけが遅れるのであつた。なればノルマだと言う。

「俺達だって仕事をし、お前達のために待つておつたんだぞ」の文句も、寒さで言う力も出ないのである。とにかく帰ろう。寒い。

翌日、作業の始まる未だ明るい時分、皆で製材職場に行つて見た。

製材の撒播さつぱは板にして板に非ず。シベリアの撒播は直径一メートルの大木より出る撒播なれば、厚くて重く長いのだ。その撒播が山となつて積まれており、夜勤の稼動する薄暗い野外の捨て場は大変だつたろう。

あの山の上に、上まで引つ張り上げてから捨てるにしても、外套を着、大手套をしての作業なれば、滑ることもあろう。足を踏み外し転ぶこともあろう。一人では出来ない力仕事であつて、納得せずともお互い抑留の身の上のことなれば気持ちの上で了解し、無言のまま自分の職場に向かつたのである。

こうして自分自身のことならずとも、震えかじかみ足踏みしたあの辛い思いは、永久に忘れることができないのである。

今夜もそうであつたが、帰りはもうお互い無言であつた。

雪明かりにうごめく無言の隊列、それは疲れとままならぬ人生、引かれることとく歩く我々であつたが、誰にも言うことのない抑留の身なのである。

段々、収容所の灯が小さく見えて来る。もう少しで帰れる、眠れるのである。次第にハッキリ見えてくる。そして近づく収容所と人家の灯。だが不思議にもその辺り、部落の上の空だけがなぜか雲のごとく白く固まつておつたのである。なんだろう？ どうしてなんだろう、誰も分からない。誰もがハッキリ言わなかつた。

だが毎夜のことなれば、我々は次第に「空気が凍つたのだ、そうなんだ…」と言うようになった。

それは部落の生活上、諸々の水蒸気が空に上つて凍り雲状となつたもので、仲

間千人の呼吸の吐く息もあろう。夜を通して炊くペーチカの新の水蒸気もあろう。早起きする我々炊事が作る炊飯の水蒸気もあろう。それらすべてのものが部落の上空にあつて、白いガス状固まりとなつたものならん、吐く息の白さと同じ現象ならんと領いたのである。

内地では聞いたことが無い。しかしここはシベリアなんだぞ、生きていろぞ。

俺は生きているんだ。兄よ…父よ…、母よ…明けなんとす凍る異郷の四時であり、静寂そのものの夜である。

④ 石炭・鉞石の採掘

島根県 都田 実

カラカンダ第八収容所入り

カラカンダ駅から徒歩で三十分後に、第八収容所に着いた。周囲は、鉄条網が張られ四隅には見張台の櫓があつた。中には建物五棟建つていた。門前に二時間くらい待機して、収容所の一棟に入った。そして身体検査、居住区注意、作業配置等。この収容所は三つの炭鉞を受け持っていた。収容人員は約五千人くらい、ゲルマニア(ドイツ)、チエスロバキア、日本人は千人くらいだったと思う。炭鉞は、露天掘り、立坑、斜坑とに分かれ、カラカンダは斜坑で、層は三〜四メートル地下に向けて無限に入り込んでいる。

炭鉞の作業は、クツ進(穴掘り)、仕繰り(鳥居形支柱立て)、移転方(コンベアの取付移動)、採炭夫(コンベアへ石炭を入れる)、ワゴン車係(貨車)、カッター(層の下部の石炭をカッター機械でさらえる)、プリンスキー(穴あけ係)、ハツパ係(穴をあけダイナマイトをつめる)、電気係(スイッチ配線等)、充填、選炭に分かれている。

入坑

いよいよ入坑となり、収容所から炭鉞の控え小屋まで警戒兵が両側に隊伍を組んで歩いて約二キロ、控え小屋でランプをもらい、斜面の坑道へ降りて行く。上には大きな送風機が空気を坑内に送りこんでいる。その音と風とがスーと、まるで地獄の底へ降りてゆく感じである。この中央坑道は、石炭巻き上げ、巻き下げのレールが複線になつており、レールの上部には太いワイヤが上下している。歩道は道路わきにあり、出入坑者はそこを通る。斜面を降りてゆくと、百メートルごとに横坑道が左右に分かれており、さらに一番、二番、三番と、私らは十二番坑道であつた。それから右側三百メートルほど横坑道を歩く。この周りは全

部石炭が掘りつくされている。この横坑道は、石炭を貨車で運び出すため、複線のレールと電車の架空線が張られている。採掘現場から貨車十車両単位で中央坑道まで運ばれ、そこから上に捲き上げられるわけである。

作業現場に到着して、私らの作業はブチキ(充填)で石炭を掘ったあと、鳥居形の支柱(丸太の木)をするが、これは一時的の処置で、天井が下がるので、永久的に天井を支えるために、所定の場所間隔に、天井をばらした石を材料とし、前からつくられてきた支柱、長さ五〜七メートルぐらいの石の柱を継ぎ足してゆくわけである。この作業は、ハツパをかけて石を落とす下の作業で、ときどき石が落下するので、大変危険で一時も油断ができない。天井の石のギザギザは、下の私たちを威嚇しているようである。この危険な作業は、緊張の連続で体がクタクタに疲れる。

一般の作業は、前記のように分かれ、一組(八時〜十六時)、二組(十六時〜二十四時)、三組(二十四時〜八時)となっており、時間が決まっている。ブチキ作業は、作業終了せねば出坑出来ない特殊作業である。最初作業になれぬため、十時間〜十五時間もかかってやっと終了。クタクタに疲れた体でスコップを肩に担いで、現場横坑道から斜面の中央坑道を上へ上がり、暗黒の世界から地上に出る。真つ黒になった顔に太陽の光が当たる。太陽のありがたさが身にしみ出る。今後入坑までの命は大丈夫と自分に言い聞かせる。控え小屋でみながそろりと収容所に向け歩く。疲れた体にむちうちながら、凍りついた道で転ぶ者もいる。隊伍を乱すので警戒兵がわからぬ言葉で怒っている。顔がチカチカする。零下四十度くらいかなと思つた。

やがて収容所に到着。入浴場に入る。四角の小さい手桶一杯のぬるま湯で、最初は真つ黒になった手、顔を洗い、タオルで体をふき、真つ黒に汚れた残りのゆるま湯で作業服の汚れを洗う。この地区は、水が乏しいのだ。しみじみ水のありがたさがわかる。やがて食道に行く。長時間入坑していたので、二食一ぺんに食べるこゝとなり、腹が変な具合である。食事が終わり自分の居住区の部屋に入

り、とにかく眠たい。疲れがひどいので、すぐ寝入ってしまう。次の招集が来るまで寝入ってしまうわけである。入坑のときは、今日の命は大丈夫か、作業終了して出坑すれば、次の入坑までの命は大丈夫と、以上の繰り返しの日であった。つまり生と死の境地であった。

第一の事故、落盤

炭鉱は、この世の地獄である。地上の無限の重圧でいつ落盤するかわからない。またメタンガスの爆発も起きる。そして多くの犠牲者が出る。この炭鉱ではソ連人の五〜十年の重い懲役人が多数入坑していた。

六か月ほどたつて、一応作業になれたある日のこと、現場で所定の場所にスコップで石をつめていたとき、突然天井から大きな石が降ってきた。これは大きな落盤の前兆で、作業中の五人の者が慌てて安全な場所に避難した。やがてすさまじい音がして、私の頭上から大きな石が落下してきた。私は、慌ててそばにあつた材木の陰に身を伏せたので、材木のため、私の身体がペシャンコにならず助かった次第である。そのとき、あまりの出来事で、私は気絶した状態がしばらく続いた。やがて大丈夫かと、戦友の大きな声で意識を取り戻した。不思議にもかすり傷一つも受けていなかった。

第二の事故、感電

一年ほどたつたころと思う。作業終了して、現場から横坑道の線路の上をスコップを肩に担いで歩いていたら、電車の架空線が部分的にたれ下がっていたことに疲れていたのが気がつかず、スコップが架空線に接触して感電した。そのときは、目から口から耳からパツと火花が出たと同時に、身体全体がリンと硬直した。そして意識を失つた。そして前かがみのまま線路の中央の水たまりに顔をうつこんでいた。前かがみで歩いていたら、感電と同時に前に倒れたので、感電の時間がわずかで、黒いげにならず助かったと思う。意識不明のまま線路の水たまりにうつむけになつていたので、どれくらい時間がたつたかはわからない。口が冷たい感じがして少し意識が戻ってきた。こゝは何処だろう、私は何をしてい

たのか思い出せなかった。

やがて右耳下がチカチカと痛み出した。そして意識が戻ってきた。私は、ここでスコップの先が架空線に触れ、柄が耳たぶにあたっていたので、そこから身体に電気が入ったのだと、ぼんやり坐りこんでいる。地上控え小屋では、点呼をとって私がおらぬので、大騒ぎでみな心配して迎えに来てくれた。このときも命拾いをした。

新潟県 井口忠三郎

走り続けること三昼夜、着いた所は炭鉱の町。寒さで身を切りさかれる思いの夜半だった。この町の名はキロワと教えられた。そして私どもはこの町のキロワの炭鉱にて働くのだと言われ、翌日から作業が始まった。

ゲルマンスキーたちとともに同じ収容所にて半年間生活した。言葉は通じないけれども、意思の通いはあった。私どもの仕事は、地下二百メートルもある斜坑を徒歩にて下がり、厚さ一・五メートルある石炭の層、長さ三十メートルはあった。番号は十九坑道と言うていた。生まれて初めて体験する石炭掘り、落盤はしないだろうかと心配と恐ろしさにて採炭の仕事にならない。私どもの採炭の班は十一人にて、ソ連の地方人が二人、この人たちは採炭夫としての大ベテランで、この人に指導を受けた。最初のうちは採炭のノルマなぞできなかった。一週間、いやそれ以上の日数、このベテランのソ連人が見ているとばかりに、私どもの採炭割当を手伝ってくれた。国境を超えた人情には深々と頭が下がった。

毎日同じ仕事を繰り返しているうちに、なれない仕事も身についてきた。一人でノルマ達成ができるようになったので、このソ連の炭坑夫も非常に喜んでくれた。だが、食糧不足にて日に日に仲間たちはやせ細って、収容所から炭鉱までの道程は四キロから五キロもあるが、歩哨の監視のもとでダワイ、ダワイとせきたてられて、歩くのも精いっぱいだった。

冬の夜の往復には、道路に落ちている馬鈴薯Ⅱカルトシカを拾ってきては、パイ

チカの上にて焼いて食ったこともたびたび、あるときなど大事に拾ってきた馬鈴薯が焼けたら、馬糞にてがっかりした事もあった。繰り返される毎日の仕事に私も栄養失調にてやせ細って、あちらの医師の診断をしてもらったら、休み一日、二日と毎日の診断のたびにもらい六十日も続いたが、食糧が悪いのでやせ細ってはいるけれども仕事を休んでいるので、体調は快方に向かった。が、ドクトルの診断結果、採炭作業は無理と、二年半も作業した石炭掘りから編成替えになり、地上作業になった。

千葉県 久保田精一

遂に下車の命令が下った。出発から二十日以上過ぎていた。一個大隊千五百人が倉庫のようなところへ分かれて入った。チェレンホーボであることを知る。ボタ山が真っ白い原野に数カ所見える。この附近に炭鉱が三十ぐらいいるとか、炭鉱の町である。

炭鉱の仕事は激務である。ハッパで崩した石炭を円匙でベルトコンベアへ乗せるのであるが、ノルマは一人十トンであった。五トンまでは円匙を動かすだけで積めるが、落盤を防止するため、大きい丸太を運び切り合わせながら鳥居型に構築しなければならぬ。これが済むとつるはし等を使って掘り起こすのである。危険防止の作業は大事な仕事であり、技術的な面もあり、力の必要な作業で空腹はつるばかり。機械でも止まるとみな集まり、正月の餅が食べたい、お祭のだんごが食べたい、食べたい話ばかり、空腹のつらさを物語る。作業中、時には落盤が起こる。コンベヤによる採炭は広い空洞ができるので、一部落ち始めると全部落ちるおそれがある。兆候がみえたら素早く退避することである。ノルマの遂行は強く要請された。

栃木県 林 英治

奉天で敗戦の日を迎え、ソ連軍の軍門に降り、北陵に終結させられた私たち

は、貨車で粗食に耐え、二か月余りも費やし、昭和二十年十一月にトルキスタン州ハンタギー村着。廃墟のような鉛鉱山の地で収容所生活が始まった。

三千平方メートルくらいの敷地にバラックの棚組みがなされ、四隅に歩哨が交替で見張る望楼があり、作業に行くときは五列縦隊の前後に歩哨つきで往復監視される。まさに虜囚の身の悲しさを思うにつけ、ぞっとする心境です。十一月ということで、見渡す山に緑はなく、岩石の山肌を見ると寒さの厳しさが、一段と身を刺した。

鉛鉱山の作業生活が始まり、かつての戦時体制を思わせるような三交替労働に付いたが、食糧が少なく、しかも質が悪い。体力の維持がやっとの生活だ。食べることに何もうえられないわびしい毎日でした。

比較的健康の者は鉛の鉱山作業に、その他の者は坑外作業にされた。私は鉱山作業に配属されたが、坑内施設は廃坑状態のようで足のくるぶしぐらいいは常時水びたし。鉛鉱石の採掘、トロ保線班、角材運搬等、サク岩機で岩盤に二メートルくらい深く穴を数か所あけ、八時間労働の最後にソ連人がダイナマイトを仕掛けて爆破させて次の交替要員が採掘に入坑するわけですが、換気が悪くガスが抜けず、作業開始までには三時間くらいかかる。残り五時間で八時間労働のノルマを達成しなければ帰れないので、上半身は裸で全力を投入する。まことに粗食でありながら、過酷な極限状態の重労働でした。

サク岩機の下での作業に当たったときは、鉛鉱石の粉塵が鼻穴の粘膜に付着して呼吸ができなくなるので、何回か掃除をしなければならぬという状態で、サク岩機士はたくましい体躯の者でも、振動と鉛毒の影響か四か月も続けると体調に変化をきたし交替した。

ハンタギーで二か年働き、レンゲル炭鉱で一か年と、三か年を鉱山生活をした。

東京都 小沼文平

そして十一月五日シベリヤ・テルマ収容所に、一個大隊くらいの捕虜が入ったのです。山奥の廃坑ばかりあるところの収容所でした。翌日から廃坑のような何を見ても古々しい、入り口などは今にも落盤しないだろうかと思われるような炭坑の入り口でした。夜ともなると坑内には電気はなく、カンテラという携帯用の重油の入れてあるランプが一個渡されます。入坑は前半後半に分かれ、前半は昼間、後半は夜間というように分かれて入坑です。入坑時は腰にカンテラを下げ入り口にある炭車を一人で押して、入坑です。炭車のみでもなかなか重く坑道を奥深く進むのですが、登り坂あり、下り坂あり、思うように進めず時間がかかり現場に着くのも容易なことではありません。現場に着くと、炭車に石炭を掘って満炭車になるまで、何時間でも掘り続けなくては坑から出ることはできません。一トン車一杯がノルマです。

食事の支給は、最初のころはパンに芋のスープでしたが、そのうちパンはなく湯の中にジャガイモの小さなのが二、三個くらい、あるときは馬の食糧である燕麦のスープ、またニシンの塩漬けが一匹のときもありました。このような食糧が毎日続くので、やせ衰え仕事もなかなかできません。身体がぐあいが悪くても仕事を休むことが許されません。警備兵に銃を向けられ驚かされるし、体力はますます低下して行くのであります。

前半の部で入坑しても、体力がないから、自分のノルマがなかなかできず、後半の部が入坑してきても出ることができません。体力がない友はますますぐあいが悪くなりやせ衰えていくのです。食糧はなし、仕事は毎日ノルマで働かされるし、栄養失調で倒れていく友が多くなつていくのです。まことに非人道的であります。食事を与えず、仕事は強制ノルマを達成できるまでさせられ、生きているのが不思議なくらいであります。

新潟県 周佐吉三

炭坑の作業は、八時間労働の三交代制ですから、各作業班ごとに建物の両方の出入り口に一人ずつの泥棒除けの不寝番を一時間交替で勤務することでした。

私たちの収容所から作業場まで約二キロくらいの近いところに露天掘りの炭坑があります。その炭坑は、白カバ林を切り開いて、地中に大型ハツパをかけた後、電気で動く特大ショベルカーで土を貨車に積み込み、どこかに運びます。

土を取り除いた後は、黒光のすら石炭の層があり、その厚さが何と三十メートルくらいあります。その最下位のところに石炭を選別所へと運ぶベルトコンベヤーが据えつけられています。坑内は広大で作業班は何組にも分かれています。

ドイツ人、ソ連人、日本人と人種もいろいろです。石炭運搬用の貨車の引込線が何本もあり、各選別所には二十トンの無がい車が配車され、満車になるとまたかわりの貨車が配車されます。各作業班は三十人一交替で八時間労働のノルマは確か二十トン貨車満車で一〇〇％です。石炭の採掘場は長さ五十メートルくらい、奥行き三メートルくらいあります。石炭と石炭の間にパロードといって泥炭の層があります。それは固くして粘土を圧したようなものです。それをツルハシと炭スコップで取り除くと、今度はロシア人のハツパ係の人が来て、長さ一メートル、電気ドリルで二メートル間隔おきに石炭に穴を開けて、ダイナマイトを差し込んで、最後に導火線に自分のタバコの火で点火してから安全なところへ待機する。大事なことは、ダイナマイトの数が何本爆発したかを数えることです。全部爆発が終わると、ハツパ係の合図で仕事にかかるのですが、まず最初はコンベヤーに山盛りになっている石炭の中に若干ではありますが、泥炭が混じっていますから、それを急いで取り除く作業が大事で、その後は大きな石炭用のスコップで下のベルトコンベヤー目がけて石炭を投下する作業になります。

下から吹き上げる石炭の粉で、顔や鼻の穴や手等は真っ黒になります。次の交替の組に作業を申し送るのです。この作業は三交替制ですから、一週間交替

で繰り返している。

新潟県 村岡千代貴

そんなある日、先の大移動からやや忘れようとした矢先でもあるのに、季節は八月を指していた。移動命令は急転直下のごとく、まるで追い立てる同様に、手ぶら姿で貨車に押し詰められての輸送ぶりであった。口説きながら貨車にゆられ、目的も暗然、あせる一方、下車させられたところは炭坑地アルチョムと連絡あり。環境になれたイマンの地から、再び暗い生活との活動が待っている。人生初めて見聞の坑夫作業に全く自信なく心配が先走る。作業開始だ。翌朝古びた保安帽につけられた薄暗いライトが何よりの作業上に頼りの道具でもある。坑内はわき水に驚くと思うと、落盤の残骸が足元を泣かせる。照明も乏しく危険状態のままだった。このような個所の動作は話のほか。作業監督はところかまわず怒鳴るの繰り返しだ。全く生きた心地もない、ただ気のあせりが疲労を積み重ねる弱気だった。数日後坑外作業に移される、

新潟県 周佐喜代止

幸いにも病気は回復して、二十二年厳寒二月ころにまたブカチャチャの収容所に帰され、再度坑内作業に従事しました。馬にトロッコ二十台ほどもつないで坑木の運搬並びに坑木組み立てや石炭掘りと重労働の毎日が続きました。食糧も少々よくなったが満足のできるほどではありません。また収容所内の人員の移動やらで変わっており、私が伝令として伝えた橋本中隊長もすでにおりませんでした。

北海道 渡辺健一

坑内の職種は削岩手、粹組手、ズリ手、採鉱運搬手に分けられる。ここまで来てしまった以上はもう引き返されない。行くところまで行くしかない、と私は

心に決めた。今思えば若さだったのかもしれない。メンバー（部下、隊員）を慰撫激励して入坑する私のそばにいた石垣一等兵は妻子ある召集兵だったが、小柄な体を緊張にふるわせ「隊長、大丈夫でしょうね」と心配そうに言う。

一線労働セクションのコンマンダーとして私の定位置は第二シャフトと決めた。入坑人員が最も多く、採鉱切り羽、掘進ブロック、生産量が群を抜いて多く、この鉱山全体の代表的シャフトで、生産活動は最も活況を呈していた。

私は入坑してから難関にぶつかった。陸上の労働現場とは全く作業形態が違う。定点にいてチーム全体を掌握指導することは困難であった。一番離れた場所にある第八シャフトなどは、なかなか掌握できなかった。これでは怪我人が出てもわからない。私がシャフト在任中の一年四か月の間に、直接この足で第八シャフトを踏み、メンバーの就労状況をこの目で見、保安管理を確かめ本人を激励し必要な注意指導を行ったのは、残念ながら五回ほどであった。それほど地形的に離れた他シャフトまでの掌握は困難であった。コマンドの盲点であった。チームのリーダーとしての機能は極度に阻害された。後日バケットの下敷きになって部下メンバーが一人死亡した。それを知ったのは救急搬送されたあとであった。地下鉱山という特殊な坑内現場は不慮の事故が多かった。中でも第二シャフトはプロックの範囲が大だったので事故も多かった。次いで第三、第一、第八、第五シャフトの順に被災者が出たと思っている。鉱山特有の坑内事故は、最も多いのは落盤崩落事故、次いで転落事故だ。がけ掘り切り羽では命綱を胴体に結節しての作業だが、それでもズリ石とともに切り羽から断崖のブロック谷底に転落する例が多い。何せ坑内は主要坑道を除いては、電灯設備なく、切り羽洞窟は暗黒のやみだ。携帯用カーバイドランプ一つの明かりだけが頼りである。ランプの調子のよいときは、ランプを中心として三、四メートル四方は肉眼で視認され、その範囲で作業を進める。しかし、削岩機（圧縮空気で回転する乾式のもの。）のみの突端から噴出する圧縮空気とともに吹き出される鉱石粉塵は、もうもうと

切り羽洞窟内に充満し、目も鼻も白い粉でふさがり、払い除けてはせきにむせび、たんを吐き出し（唾液と粉じんのまじったもの）ついに口から呼吸する仕儀となり、嘔吐を繰り返し、空腹なるがゆえに吐くものもなく、しまいに黄色い胃液を吐くありさまに泣くに泣けず、男ひとり苦しむもだえて身に迫る苦痛をこらえるのみでありました。一瞬くらくと目まいを感じ、こんな苦しみをするくらいならいつその真つ暗やみの断崖に身を投じて楽になった方が……と何遍思ったことか。八時間の入坑労働時間の間、休息も昼食もなく、ただ悪条件と闘いノルマ遂行に汗を流すだけであった。

和歌山県 坂本清次郎

生まれて初めての穴倉の中、日本の土木工学をもつてすれば、撫順炭鉱のように露天掘りにするような浅い炭鉱に思えた。キャップランプを頭に、木のはしご段を踊り場に通じて五、六回も下れば横穴であった。初めての地下、またその作業のスコップの大きいこと、トロツコの重たいこと。石炭満載のトロツコが脱線でもしようものなら大変である。人間一人ではとてもだめで、反対線路の空のトロツコを押してくる友を待つて、二人以上で線路に乗せるのが精いっぱいである。

ソ連の婦人が通りかかるものなら、彼女が「ヤポンスキー、サルダート、セイノ、セイノ」日本の兵隊よ、セイノセイノの掛け声ばかりでは「ニイハラショー」（だめだ）と言って、トロツコの前に歯どめをして、尻でトロツコをグイと持ち上げ脱線直す。力と尻に、女からその脅威とコツを教えられ、覚えたものです。

来る日も来る日も地下、穴の中、三交代八時間労働もさることながら、幾つもの切り羽（採掘場）に分かれての仕事である。一か所の「切り羽」の上りが遅いと、みな脱衣場でゴロ寝して待つという毎日。一番方の勤務では朝日の昇らぬ間に採炭場へ。やっと地上に出ると、早や夕やみの中。全く日の目を見たことがなく、三番方になると朝日の輝かしい太陽に接することができるが、人間、夜眠る習慣に生きるのが通常であるのに、ここでは全くそれができない。

体のきついこと。夜たたき起こされての集合、点呼のつらいこと。仕事を終えて酷寒の中、営門前での点呼。ソ連兵にかかつては、出発したときの人員と帰ってきたときの人数を数え合わせるのに一苦労である。五列縦隊を何度も読み直す。足が凍るような痛さの中、我々の足踏みが続くのです。これが天国だと感ずることは地下が温かいこと。地上では零下三十度であるのに、地下では十八度から二十度と暖かく、石炭のきれいな黒光りする層を見ると、何と見事な黒ダイヤだなあと感服するのです。

また、良質の石炭の軽いこと、軽いこと。あの大きいスコップでの貨車積みも、なれてくれば苦にならず、わずかな酸っぱい黒パンと中身の無い水のようなスープレの食事だけで、よくこれだけの重労働ができるものだといながら驚く。

岡山県 田中一司

私は一番若手ですから、当然A作業それも特Aとなつて、炭坑の中でも一番厳しいブツキスをやらされました。これは石炭を掘り出し終わったところの跡地を急に崩れないように補強する作業です。絶えず落盤するし、ミシツミシツとバラバラとドンとの音しか聞こえない真つ暗やみ、天井と地上が三十センチもなような道をくぐり抜け、柱を立て石積みをして回るといふ作業です。三か月ぐらいで石炭掘りの方に変わりました。日本の炭坑がどんなものかわかりませんが、高さ約二メートル長さ約五十メートルぐらいの石炭の壁(層)に発破をかけ、その石炭を鉄板の幅五十センチ長さ二メートルのものを縦に並べたコンベアをモーターでゆすつて石炭をズリ落とし、ワゴン車に積むわけです。ソ連人もなかなか考えたもので、石炭掘りのスコップの柄が長く皿が軽いのが五丁、柄が短く皿が重いのが五丁、十人一組で地上より約二百メートル、ランプの明かりをたよりに歩いて現場に行くのです。日本ならともかくソ連のためにそんなのぼせて働くことはいよいよと言っていました。作業のノルマを超えると黒パンの枕のような大きいのと砂糖等の特別食がもらえることもあつて、先を争つて駆け足でそ

のスコップを取り合いするようになりました。坑内には監督以下数十人来ていましたが、監督以外はほとんど囚人でした。ウクライナで汽車の運転をしていたが列車を遅らせたことが四、五回あり、十年の刑で来ているとのことで、わずかなことでシベリヤ送りになった人がたくさんいたと思われれます。ロシア人の女も一緒に働いていましたが、まことに体格がよく力持ちで、一抱えもある石炭を我々が二人がかりで持ち上げるのを軽々とコンベアに運んでくれたこともあります。これらの人たちは人種差別なく我々にも親切にしてくれました。

京都府 金谷要一

炊事、便所の準備、燃料の確保、宿舍の整備、食糧の運搬等々で、既に厳寒のときになつていたけれど、冬の衣類の持合わせもない。我々は夏物の厚着をして寒さを凌いだものだった。

まず、宿舍について説明すると、ちょうどかまぼこの形をした五メートルに二十メートルぐらいの広さで、半地下式になつていて、中央に通路があり、両側に二段式のベッドが並んでいる。二寸角のタル木に板を並べたもので、製材したままの荒っぽいものだった。それに我々が持参をした毛布を使い、ソ連から支給されたものは何もなかった。上段の枕の高さの位置が、ちょうど外の地面の高さぐらいで、ガラスが明り取りに入つていた。通路にはペーチカ(暖炉)が二か所あり、石炭を燃料に使つていた。宿舍の屋根は五十センチぐらいの土盛りがしてあり、なるほど、これなら寒地では暖かいと思つた。雪は降るが、夏には雨が降らないので、これならと思つた。でも、電灯は二か所十燭光ぐらいのものがあつただけであつた。

数日間は片づけもの、環境の整備等で過ごしたが、ぼつぼつとソ連の本性が出た。時間の制限や昼夜の別を問わず、貨車の貨物の積みおろしに駆り出される。二週間くらい経過したころに体の健康状態の外観調査があつて、よほど弱々しく見える者だけを外して炭坑に入り、石炭掘りに従事するということで、

初めて綿入れの分厚い大きな外套とゴム短靴の支給を受けた。これで所持をしていた軍靴は没収されることになる。

当カラカダは、ソ連での石炭の産出量では第三番目という巨大な炭坑街だったのだ。面積は広く、深く、また露天掘りをしているところもあった。その炭坑に我々は十月下旬より入坑することになる。一日三交代八時間制ということになる。我々は杉山大隊と呼んでいて八百五十名くらいだったが、我々は六十四坑に、他の一隊は八十三坑にそれぞれ入坑することになった。

我々は覚悟はしていたが、石炭掘りをした経験者は隊の中に数人いたくらいで、思っただけでも息が詰まる気がする。一日目だけスコップの使用方法を教えてくれたけれど、坑内作業のやり方、事故防止、安全対策等については一切の説明もなくて、無理に押し込むというやり方であった。

青空の下の明るいところなら、危険なことでも多少と自分なりに危険予防も考えられるが、あの真暗な中での安全対策は全然ないということである。ただあるのは換気装置があるだけで、それ以外は全然ないのである。日本の国内ではこんな状況では採掘許可は出ないし、明治時代の状況だということであった。

初めての入坑が始まった。四キロメートルほどの道程のある六十四坑は、ここは古い部類の方に入るとかであった。入り口で手提げの、灯油の煤のよく出る火の灯りの悪いカンテラをもちょうが、拒否をしても順番だからといって聞き入れてくれない。露天掘りをしているくらいだから、炭層は割と浅いところにある。

四百メートルほど斜道を下り、横道を三百メートルで切羽の出口のところに着く。切羽よりコンベアーでこの横道まで送り出す。この横道は炭車の通路でもあり、軌道が敷かれている。このような切羽が数か所あり、十五人から二十人くらいで一班をつくっている。

ここまではまだよいとして、これからが非常に危険な部署なのだ。炭車係は炭車に石炭がいっぱいになったら、炭車を入れ替えるだけであるが、発破の現場まで行くのは大変で、危険が大きいのです。まず、発破を先端の切羽に仕掛けて石

炭層を崩して、それをスコップでコンベアーに積み込むスコップ隊と、石炭をコンベアーで炭車に送る作業になる。

ところで、時間交代がきても、コンベアーは停止をさせてくれない。時間がもつたないということだ。だが、切羽の先端まで登りつめるには広いところもあるが、落盤しかけて非常に狭いところもある。その狭いところはコンベアーの上を通ったり渡ったりする場合もある。コンベアーはショック方法で、石炭を流している斜面上に乗っている。石炭の上を歩くことは非常に困難だ。登ろうとしても石炭で磨かれたコンベアーの面は滑って苦勞をする。ちよつとした拍子にランプが消えることがある。こうなると、絶体絶命である。身動きができない。御存じない方が多いと思うが、普通地上では、墨を流したような暗さを暗黒というけれど、目がなれば、また微かな明るさがあり何とか行動ができるが、坑内では暗夜に目隠しをされた状態であつて、手探りができないのです。うっかり手を出すと、コンベアーが動いているので、手でも足でも頭までも挟まれる危険があり、そのままの状態の流れてくる石炭に足をとられないようにして、坑木にしがみついて、誰かが通るのを何時までも待つしかないのです。

また落盤のある箇所を通り抜ける場所もあります。このようなところは現場に馴ればある程度察知はできますが、ソ連人の無理な追い立てによって、仲間の一人が眼前で厚さ三十センチで畳二枚分くらいのボタ「石炭の層を包んでいる黒い石」の落盤により痛ましい犠牲となりました。

それから、記述が微に入り細かく記していきますが、私としてはこの炭坑生活を丸三年勤めてきましたので、これについてしか体験がないので、しつこいようですが、詳しく述べさせていただきますと思います。

まず、切羽の先端は三メートルに二メートルくらいの壁になっている層にドリルで一・五メートルくらいの深さの穴を四ないし六箇所にあけると、ソ連人のおぼちゃんがダイナマイトを埋める。爆破するのはほとんどソ連人の監督が行う。この爆破は一番方のうちでは大体二回行うのが普通であつた。発破がかかったら

すぐに我々を現場に追い上げて、石炭の積み込みに駆り出す。我々は五分間発破がかかっても待つてほしいのだが、監督は物すごい形相で、ダバダバといくづきまわしたり押し倒したりをする。叩くことはされたことはなかったけれど、発破がかかったときは、硝煙の臭さと炭塵であの暗さの中で呼吸もできない。作業ができない状態なのに無理に押し込んでかえつて能率も悪いし、健康を損ねると説得するも、頑として聞いてはくれないのである。

次に爆破した石炭の積み込みをする。ショック式の吊り下げたコンベアーの長さは五十メートルから百メートルくらいあり、その下にある炭車の中に積み込まれて横坑道から斜め坑道まで送り、そこから巻き上げ機で地上に昇って行くことになる。ところで、コンベアーであるが、ちょうど平たい桶の形で、長さ三メートル余りでボルトでつなぎ合わせるが、途中が右に左とカーブになっています。モーター部はコンベアーの中部より下の方に設置されていたが、株式会社日立製作所の社名板も鮮やかに光り輝いていて、ここでも日本の製品が活躍しているのに我々も驚いた次第である。

というわけで、コンベアーがワイヤーで坑木を吊り下げているが、運動に無理があるので、カーブで石炭がたまり重くなる。石炭がこぼれるので、そこに一人すくい上げる者を配置させねばならない。また、ワイヤーの摩擦で、コンベアーが磨滅してワイヤーが食い込んで、石炭の流れを食い止めて下へ降りてこない。炭車方から少しも出て来ないと連絡があり、班長が不良箇所があるところを探しに走るというようなちぐはぐな作業が連日のごとく行われている。

我々にしたら、一時機械を止めても完全に不良箇所を修理して調整すれば、その日は成績が悪くても次の番方でそんな遅れは必ず取り返し、楽しんでノルマの達成は数倍になるというのだが、どうしても彼らには忠告を聞き入れる耳は持たなかった。彼らにはこんな単純な能率向上の理屈がわからないのかと不思議に思われた。

とにもかくにも今の作業の成績がすべてなのであり、ノルマの成績が悪いのがし

ばらく続くと、突然に新しい監督が来ていて、従来の監督が一般の労働者に格下げされて我々と一緒になって働くという、問答無用の厳しい処分がされて、責任をとらせられるということは何度となく見せられる社会組織であった。

しかし、このようなことからソ連の事情が少しづつ理解することができてきた。長年にわたり共産社会主義を教育してきた成果なのであろう。連邦を維持するには、このようにして権力者と労働階級との区別をしないことには成り立たないのであろう。ただ、がむしやらに命ぜられたままに体力を使えばそれでよいのかも知れない。知力での労働は上級へ任せておいて、成果の良否は上級者の責任において成績が問われているようであった。番方交代時には機械を止めた方がスムーズに交代もできて作業もはかどるという意見の具申も、てんと受け付けてくれないのである。

我々の班は二十人近くで編成されていて、班長がソ連人の監督の指示にしたがつて作業をしていた。ほかにソ連人の坑木建て作業員一人、女性の発破係、コンベアーの移動係数人と番方の監督、坑内の総監督の陣容である。

切羽に発破をかけ、スコップでコンベアーに積み込む。流下した石炭はワゴン車にいつぱいになると巻き上げ機まで押し出して、地上に巻き上げられる。切羽には一番方で二回発破をかけるが、これ以上はしかけない。どうしても時間内では石炭が手不足するが、それでも石炭を積みという。仕方がないのでボタを承知の上で積みけれど、監督は見ているも知らぬ顔をしている。ノルマを上げることが自分の成績と給与に関係するからである。

石炭を取り出すとすぐに、坑木を仲間が運んでくる。これが大変である。直径四十センチくらいな太いものもある。これは二つ割りにして使う。長さ三メートルくらいもあり、狭い穴の中を引いて持ってくる。時には落盤により通路をふさがれて、直径一メートルくらいの輪の中をくぐるような坑道になっている。生の唐松みたいだ。こちこちに凍ったままだ。しつとりと重い。手が吸いつくように冷たい。シベリア沿線で果てしもなく続いてきたあの宏大な極寒の中で、多くの同

胞たちが命と引き換えに切り出したものに違いない。その苦勞のほども思いやられる。どんな気持ちでやっているかと思うと胸に迫るものがある。

坑木建てが終わると次の発破の作業にかかるのである。坑木建てはソ連人が二人でやってしたが、半年ほどしたころから私が助手になつて相手となつてやってしたが、坑木建てが暇な時は石炭入れを私は手伝つていた。我々はお互いに仕事の上では分担以外にも助け合ふのが普通のように思つていたし、そうして来ていたが、彼らにしたら、自分に与えられた仕事以外は目の前で何があるかと関係ないのである。手伝うのみを、そんなことはしなくてもよいので、自分の仕事だけをすればよいのである。重い機械の移動を苦勞しているのを見ていてもそしらぬ顔である。この国はこのようにして成り立っているのかと思つた。

また、困つたことに、ラーゲルと炭坑の通行に綿入れの外套を支給されているが、坑内の作業では脱いで置いておくところがないので、坑木の間に置いておくと、帰りぎわにとられたか置き場所を間違えて紛失したかでひどい目にあつて、夏布団のような外套を腰に巻きつけて作業をした。炭塵とごみにまみれて汚いことはおびたが、どうしようもない。洗濯もできない。戦後の浮浪者の、軒下、道路などごころ寝の姿の衣服類の汚れなどと比較ができないほど、もっとひどい汚れであつた。

カラカンダ地区は、我々は地理に疎かつたけれど、人口三十万人といわれている。北緯五十度、西経七十五度あたりに位置して、ちょうどインドの北端の遙かに北部にあつて、高原地帯でなだらかな起伏があり、樹木は街路樹がたまにある程度で見渡す限りの夏は草原で、冬は白雪に覆われる。シベリアの大地の中ではシベリア本線の北側よりは気候はまだよいかもしくない。

だが、ここもシベリア流刑の土地ゆえに、土地の多くの人は政治犯、経済犯を主体とした罪人やその子孫たちの生涯の地であることには変わりはない。坑内の人たちはほとんどが解き放たれた中での監視された生活であるという。街から五キロメートル以上外へは出られないという。国からの命令のある以外は、他

所へ行くことは禁じられているという。市内の人たちの多くが何らかのかかわりがあるという。

日が経つにつれて、我々と心の壁がとれて、気安く話をしてくれる。スターリンの悪口や、現体制の批評を打ち明けてくれる。彼らは医者に行つたことがないといつていた。恐らく余り医者もいないのであろう。我々のラーゲルへ医者らしき者が来たが、日本の看護婦程度の知識があるのか疑問に思えた。

彼らの不満は病気で仕事に出ないと賃金がもらえないということであるので、我々は彼らを休ましてかわりに手伝つてやつた。彼らの階層は誠に哀れに感ぜられた。また、機械係にブルガリヤ人が多数いたが、彼らは強制連行された由で、本国に家族を置いていて、いつ帰国できるかわからないと言つていた。既に戦争は終わつていても、帰国させる様子もない。

さて、出坑するときは、だれもが四キロくらいの石炭を抱えて帰る。宿舍のペーチカに燃すための燃料となる。帰る途中の吹雪の中で、凍傷を起す者がいる。我々は気づかなかつたが、警備兵が冷たい雪でこすりつける。鼻の頭や耳が青白くなると、さすが目ざとく見つけてくれる。これだけは親切であつた。

ただ、困つたのが門の出入りのときの人員の点呼に時間がかかり過ぎるのである。人員の勘定ができないのである。わずか六十名か七十名の勘定が十分くらいかかるので、零下数十度の中でゴム靴に布を巻いた足にはたまらなくつらい。彼らこそフェルトの長靴を履いているので、苦痛は少ないだろうに。

宿舍では他の番方の連中がペーチカで湯を沸かしてしてくれる。出坑をしてきたときは、炭塵の汚れで眼と口とがわかるくらいで、顔の裏と表が区別がつかないくらいにひどいもので、墨を塗りつけたといつても過言ではない。体格や人相で見分けていたくらいだつた。

すぐ、食堂に飛び込むとカウンターに盛りつけのした皿が並んでいるが、どれが大盛りか見回してから手を出したものだ。人間腹が減るとあさましいものだ。パンは三百六十グラム、これは一日分である。俗に黒パンといつて、燕麦の麦がいつ

ばい混入した粗雑なもので、目方を合わせるために小さなものにはつまようじでかけらがくつつけてある。筋の入った羊の肉にキヤベツ、ジャガイモに粟らしきものが若干入っている、ドロドロとした雑炊がどんぶりに一杯である。

食後は疲労で次の出坑まで眠りこけるのだが、腹をふくらませるため、どうしても水分を取り過ぎて睡眠の途中で起き出るが、外は零下数十度もあるもので、入り口の近くで放出する。(便所まで数十メートルもある)入口付近はかてかとなっており、結局は各自の理性に任せて改善はしたけれども、また便所の方も壮観であった。二メートルほど掘ったところに板を渡して屋根なしで三方を板塀で囲っただけのもので、十五人くらいの人が横に並んで用を足すが、なれっこで何の感情も起らない。下から積み上がって山が高くなってお尻に突き刺さりそうになると、地上勤務者が鉄棒で突き崩してくれていた。また、夏には囲いの板に蠅がびつりと止まっついて、そのおびただしさにびくりする。ただし、人間には割と寄って来なかった。何万匹ともわからぬ壯観で、いかにも大陸的だ。

すこし捕虜生活になれ始めて、昭和二十一年の正月を迎える。全員で故国に向かつて遥拝をする。毎日の厳しい中にも故国のことを思わぬ日は一日とてなかった。零下二十五度以下になったら作業は中止という布告があったが、坑内に入れば零下十度までだったので、一日とて休日はなかった。三百六十五日を通してのことである。

ようやく春めいてきた四月ころより、食糧事情が悪くなり始めた。パンは三百グラムになり、雑炊はなくなり、食べ物といえば雛の卵くらいの馬鈴薯が七個か八個くらいとパンだけとなった。これで相変わらずの入坑作業で、腹が減っただけでは済まされないう事になった。出坑時にはだれもが坑道を昇つて来るのに壁にもたれて支えられながらの出坑が毎日のようになった。この状況はただごとではないと総員集会を開いて、収容所長に我々の統括の杉山少佐より苦情を訴え、改善がなければ作業ができないと、初めてストライキをした上で入坑を拒否した。

杉山大隊長もおれはどうなってもよいから諸君たちを守らねばと先頭に立つてくれました。入坑拒否したので、炭坑からの連絡だったのか、数時間後に勲章をたくさんぶら下げたお偉いさんが早速に来て、杉山大隊長と実情の説明をやり取りしたところ、ソ連も戦争とウクライナ地方の作物の不作等で穀物は不足をしているので、その点は了承してほしい、しかし、食事の支給は変わらないはずだと言いつつ、収容所長へ質問をしていたが、食糧は善処するので入坑せよとのこと、しぶしぶ我々は休むことなく入坑を続けたが、結局は収容所長は物資を横流ししていたとかで、翌日よりどこかへ降格転勤とかで、新しい所長が配属されて来た。

食糧事情は元に戻ったが、杉山少佐はストライキの扇動の罪で、お気の毒にも他所へ移されてしまった。

千葉原 白土勝雄

港が凍結してしまい、船が入ってこなくなったので、こんどはマガダンの町から七十キロとか八十キロほど奥地にあるハッセン炭鉱の坑内作業につくことになった。ハッセン炭鉱は収容所までマガダンからトラックで二時間ぐらいかかったが、その二時間ほどのあいだ寒さのため凍傷になり、手足の指を切断した仲間が何人も出たほどである。

炭鉱内の作業は石炭の採掘が主だった。保安設備は皆無に等しく、裸電球がところどころにぼんやりと灯されている程度のため、つねに危険がともなっていた。採掘作業は主に石油にポロ布の芯をひたしただけの粗末なランプを使っていたが、ランプの煙で、坑内を出て見ると体じゅうが真っ黒、鼻をかめば真っ黒な鼻汁がでる。痰をはけば真っ黒い痰がでる。私は、あれから四十年近く経った現在でも慢性気管支炎で苦しんでいるのは、そのときの後遺症ではないかと思っている。

採掘された石炭は、手提げランプの灯りをたよりに選炭場まで運ばれるのだ

が、坑内整備がされないため地盤沈下を起こしたり、坑道の支柱が歪んできた

福井県 天谷小之吉

りで、トロッコと支柱の間に手を挟んで負傷する者が少なくなく、ときには頭を挟まれ、頭蓋骨陥没のため死亡する仲間もあった。ノルマを上げるためには、われわれ捕虜の生命など犬猫と同じだったのである。われわれはそのあまりもの非道さに、何回かソ連に抗議したこともあった。しかし、そのつど一時的には坑道内の電球が多くなつて明るくはなるが、それも数日間だけで、またもとの暗くて危険な状態に戻つてしまう。作業の安全と保安のために指導する立場に立つはずのソ連の兵隊たちが、坑道内に新しく取りつけられた電球を自分の家を持ち帰つてしまうのである。つけるとはずして持ち帰つてしまうのイタチごつこの繰り返しでは、作業場の安全など保証されるはずがない。ソ連という国はまったく不思議な国なのである。

われわれは占守島に駐屯していたので、零下二十度くらいの寒さには慣れていたが、ここハッセン炭鉱は零下四十度が普通で、少し寒いと思うと零下五十度には下がつており、零下六十度とか、あるいはそれ以下になる日もあったかもしれない。ともかく、そのような想像を絶する寒さのなか、特に午前零時から八時までの作業は言葉では表せなかった。走ってくるトロッコに危険を感じながらも、寒さと栄養失調から身体をかわすことができずに怪我をする者が多く、なかには死亡するものすらあった。

冬になると北の空に七色に妖しくゆらぐオーロラが現われ、夏には日没が午後十時ごろで真つ暗な夜になる日がない白夜である。冬には、はるかな北の空にオーロラを仰ぎ、夏には白夜の眠れないままふるさとの夢にいくたび泣いたことか。私は幸いなことに、二度目の冬に入る前に、体を悪くしてハッセン炭鉱を出たのだが、もしも一年この炭鉱で越冬していたら、生きて日本の土を踏むことはできなかつたらろうと思う。

十一月にもなるともう表土は凍結する。機械でも採土できなくなる。すると今度は爆破作業が行われる。直径五センチメートルほどで、長さ百五十七センチメートルの鉄棒の一方を、鉛筆の芯のごとく尖らして、それを石炭の火で熱し、真つ赤になるまで燃やして、赤く火の粉の吹く鉄芯を土面にハンマーで打ち込むのである。最初簡単に思ったが、やつてみると大変で、そう簡単にはいかなかった。表面より三十センチメートル下は案外楽だったが、そこまでの上層部が堅い。まるで鋼鉄のようだ。一度焼いて打ち込んだでも、わずか一センチメートルくらいしか入らず、人が代わり、その都度焼き鉄芯を換えても思うように進まず、肩があがつてしまう思いだった。また、手にはママができて痛くて、もうハンマーなんか持てないぞと訴える者もいた。

しかし、この作業は一日じゅう石炭を燃やすことができた。それが何よりの楽しみだった。午後三時を過ぎるとソ連兵の火薬係が来て、完成した穴の中にダイナマイトを差し込んでいく。そのころ、我々作業者は火を消して作業器具を全部一カ所に集め、三百メートルほど離れたところまで移動(避難)して次の指示まで待機するのであった。

ピリ、ピリ、ピリという笛の音と共に導火線に火をつけ回る。こちらから見ていると面白くように見える。しかし火付け役は汗を流して走りまわっている。最後の一つをつけ終わると、両手を高く振りながら避難場所へ急いで駆け込む。と同時に、大爆発音と共に大小さまざまな土が飛び上がる。まるで打ち上げ花火のようだ。大きいバケツくらいのはわずか一メートルくらいしか飛ばないが、一握りくらいのもなら五十メートルくらい軽く飛び上がり、四方八方に散る。二百余個の爆破は二十分くらい続いた。その間、私たちは茫然として見ているだけだった。

不発弾が残っていると危険なため、その日の作業は終了となり、翌日ソ連兵の現場監督が異常の有無を確認して、作業を受けつけた。

岡山県 土居一志

ここで炭鉱労働について書いてみよう。作業服として紺の綿織物の服を一着支給された。作業に出るときは軍服の上にこの作業服を着て、防寒用の帽子、外套、靴といういでたちであった。各炭坑ごとに厳重な人員チェックをされ、それぞれの作業場に出発していった。炭坑に着くと我々の脱衣場で外套だけを脱ぎ、カンテラを受け取り入坑準備完了である。約十五名くらいが一組になり、ロシア人の監督に引率されて坑内に入っていく。この炭坑は地上から十五度くらいの傾斜で二千メートルくらいのところが採炭場であり、我々の作業場であった。仕事は、大きな重い柄の長いスコップで石炭を鉄板のうけに積み込むのが仕事だった。

新潟県 周佐吉三

私は炭坑の作業班に編成され、部室も全部炭坑の作業をする人たちと一緒に住むようになりましたが、炭坑の作業時間は八時間労働の三交代制で、非番の各作業班ごとに、部室の両方の出入口に一人ずつ泥棒除けの不寝番が一時間交替で勤務しました。私どもの収容所から作業現場までは約二キロメートルくらいのところで、大きな露天掘りの炭坑がありました。その炭坑は、白樺林の地下五メートルくらいの厚さの土砂を、電気の大型のハッパを掛け、電気で動く特大型のショベルカーで土専用の貨車に積み込んで捨てて来る。土を取り除いた後は黒光りする石炭の層があり、その厚さが何と三十メートルくらいあります。その最下位のところに石炭を選別所へ運ぶベルトコンベヤーが据えつけられています。また、炭坑内は広大で石炭運搬用の貨車の引込線が何本もあり、各選別所には二十トンの無蓋車が配車され、満車になるとまた代わりの貨車が配車されます。

各作業班員は三十名で、八時間のノルマはたしか二十トン貨車満車で百%

す。各班の採掘場は、横の長さが五十メートルくらい、奥行四メートルくらいありました。石炭が四十センチメートルくらいの下に、パロードといって泥炭の層が五センチメートルくらいあり、また石炭の層になっています。このパロードという泥炭の層は堅くて粘土を圧したような物です。それをツルハシと石炭専用の大きなスコップで取り除くと、ソ連人のハッパ専門係の人が来て、長さ一メートルくらいの電気ドリルで一メートル間隔くらいで穴をあけて、穴にダイナマイトを差し込んで、最後に長い導火線にタバコの火で次々に点火、全員安全なところで待機する。そこで大切なことはダイナマイトが何本爆発したかを数えることです。

爆発が全部終わるとハッパ係の合図で仕事に取り掛かるのですが、そのときは、コンベヤーに石炭が山盛りに乗っています。下から吹き上げる石炭の粉で顔や鼻を急いで取り除く作業が先で、その後は大きな石炭用のスコップで下のベルトコンベヤーに石炭を投下する作業になります。下から吹き上げる石炭の粉で顔や鼻の穴や手などは真っ黒になりますが、坑内には所々に地下水やら溜まり水もあります。水質はよくありませんので、顔と手などを洗って次の作業班に申し送るのです。炭坑作業の交代は朝八時と午後四時、それから午前零時の三交代制で、これが一週間交替で繰り返されます。

静岡県 松浦和市

また赤い貨車に乗せられ、十月初めの寒い夕方、山間のちよつとした広場へ降ろされた。ここが炭鉱の山ブカチャチャだ。翌朝より、これから入る収容所の鉄条網の支柱材を山より運搬する作業などで数日間働き、やがて古い大きな倉庫を改造した中での生活、周囲は鉄条網で囲われ、四隅には日夜立哨、檻の中の生活が始まった。

いよいよ全く経験したことのない仕事、地下に潜り石炭掘りです。私は帰るまで同じ作業を続けました。三交代で作業を行ったのですが、重い足を引きずりながら薄暗い杭木のカビ臭い中を、カンテラの光を頼りに、またいつ落盤が起こ

るか不気味な地下で、空腹に耐えながら仲間たちとともに励まし合った苦しい労働でした。

当初、満州より持ち込んだ大豆が食糧だった。毎日毎回大豆だけ、これでは下痢になって当然。しばらく続くうちに下痢患者が続出。空腹のため毎回全部食べてしまう、ますます下痢が悪化、次第に栄養失調になり、二十年の冬期間、毎朝多勢の死者がソリに積まれて収容所を出た。その後、食糧も高粱、野菜スー、黒パンなどに変わり、環境になれば、次第に死者も少なくなってきました。

福島県 小泉与次郎

昭和二十一年三月末、百五十名は十方面に分散されて移動、主に炭坑地帯に配置された。

約二十五日間貨車輸送。中央アジア・ケメロボ州のキシロフカの町、ドンバス炭田地帯に着く。世界でも量質共に一、二番の炭質である。

収容所建物は鉄筋コンクリート、約千人。他建物にはドイツ人約千人がおった。衛生関係はまあ悪くはなかった。ほかの収容所の話によると十日に一回は入浴の設備に入って体を洗った。

労役は採炭、貨車積み作業、時間八時間。朝夕の点呼は毎日実施された。

ノルマを達成しなかったときは食糧減配。採炭については良質で豊富、どこでも簡単に採炭ができるため、設備が不完全で身に危険が非常に多く、怪我人が続出した。体重が減ると作業を止め、仕事に就かせない。健康の管理について特別の配慮はない。

滋賀県 松村晋二郎

入ソ二カ月ぐらいして、労働させられることとなった。まず体力検査が始まった。ズボンを下げ、尻を丸出しにして軍医(主に女医)の前に並ぶ。軍医は一人ずつ尻の肉をつまんで、皮下脂肪の張りぐあいで一〜四級までに区分される。一、

二級は重労働、三級は軽労働、四級はオーカーと呼ばれ、労働免除である。私は一年ぐらいは重労働組であった。

初めゴルネーと呼ばれる金属鉱山(鉛鉱か)の坑内作業にまわされた。防寒帽、手袋、靴、外套など日本軍のものが支給された。衛兵所横につるされたレールをたたいて出発のための集合を知らされた。交代制のため、四、五十名の者に往復、銃を持った監視兵(カンボーイ)が前後につく。初めはわが方の将校が二、三名先頭に立った。街(住宅)並みを通るときは威勢よく軍歌を歌って行進した。しかし日があたつにつれ歌はなくなり、道端に立つ子供らと、物々交換による黒パンの小片を得ようとす様相に変わっていった。天気の良い日には窓辺に毛布が干されているが、星や錨のついた戦利品には驚きであった。

コントラー(現場事務所)に着くと、ナチャリニック(職場の長)の指揮下に入るが、カーバイト入りのランプ(戦後わが国では露店で見かけた)に数本のマツチ棒をもらい坑内に入る。ナチャリニックより作業場の割り当て、作業方法、量(ノルマ)を身ぶり手ぶりで指示され、終了前に仕事量のチェックにくるのである。セメント袋の切れ端のような紙に、ちびた鉛筆をなめながら記帳するのである。いづころからか、この記録が翌々日ぐらいの主食の黒パン(定量は三百五十グラム)に反映し、定量に二〇パーセント増えたり減ったりするのである。面倒なのは、日本人の姓を聞き取るのが難しいことである。例えばマツチはマチとしか聞き取れないようで、二人一組の仕事であるのに評価が別であるなどのこともあった。

坑内の主な仕事は、発破後の碎石を鉱車(トントロ)積み込み、一定の場所まで搬送してあけておくのであるが、大きい石はハンマーで砕かなければならない。初めの日は三人で押していたが、ニエラシヨ(よくない)と言われ二人にされた。私の場合、入坑初日に新品の皮バンドを三角巾で巻いており、今まで見破られなかったのが、見破られ押収されたが、作業場で手心を加えられたのか、ノルマのないウインチ操作(女鉱夫とペア)に回された。が、長くは続かず、トロッコ押しや鑿岩夫の補助や測量士の補助等にまわされた。測量士は復員らしく若くて

元気で、随分嫌がらせされた。堅坑の昇降は大変であった。測量機器を背負い、右手か左手にトランジットを抱え、カンテラを持ち、空いた手で竹梯子を一段一段昇降するのである。遅いと上から靴で頭（ヘルメットは着用）を押さえつけるのである。しかし、坑内は寒暑が坑外と全く反対であるため、冬は暖かく夏は涼しいという利点もあった。

岩手県 佐藤欽一

何でもオリフラム（タングステン）の鉋脈があり、その採掘が正式に決まった作業とのこと。

一日八時間労働の三交代で、数十名が一個班に編制され、それを、切羽の鑿岩機組、交代した前の組が発破を掛け、飛び散った鉋石をトロッコに積み込む組、鉋石でいっぱいになったトロッコを暗闇の中をがむしやりに押しつけて坑外に運搬する組とに分けられた。初めに私はトロッコ組に入れられ、毎日カーバイトランプ一個持たされ、一日数十回、坑道の中の線路上をトロッコにつかまり走りまわった。何しろ路線といっても継ぎ目も粗末で脱線する場所が数カ所あり、脱線しようものならトロッコの前面に掛けている鉄製のカーバイトランプが吹っ飛び、真っ暗な中で次のトロッコが来るまで立ち往生。二人がかりで復線、お互いにノルマに影響したこともしばしばあった。

その後、積み込み組に換わり、前の組が発破を掛け、交代したあと、先に坑内に入り、切羽の下の盛り上がった鉋石を鑿岩機ですぐ仕事できるように根掘りをするのが仕事の始まり……。

その日も他の人より先に切羽に着き、同僚と二人でスコップを持ち鉋石をかき始めたまで記憶しているが、突然腕に猛烈な痛みを感じ、何か大声を出して叫んだ途端目が覚めた。発破を掛けた後のガスが鉋石の間にまだ残っていたのをスコップでかき回したものだから、二人ともガス中毒となり意識をなくし、遅れて入坑した積み込み班の人たちにトロッコに乗せられて外に出され、坑道入口付

近にマグロのように寝かせられ、注射を打たれた途端に気がついた。それ以後は十分余裕を見て仕事に掛かり、ガス中毒には十分注意をした。

さて、最後は鑿岩機の番。鑿岩機は、エアーコンプレッサーにより空気を受けノミを回す。二人で八本穴を掘り、ダイナマイトを仕掛け、発破を掛けて次の組と交替する。ノミの長さは一メートル五〇センチものを使い、根元まで掘った穴が一本分である。ノミの中央には水を通す穴があり粉じんが少なくなるようになっていたが、何ぶん交代までに八本掘らなければならず、早く仕上げる関係上、水を通すと能率が上がらず作業がはかどらないので、一回も使用しなかった。そのため作業現場付近は粉じんが無い、鼻の穴の中はすぐコンクリート詰めのように塞がり、小指の先で抉り取りながらノルマ達成に邁進した。そして発破を掛け、交代するわけだが、何ぶん相手は岩盤、時間ぎりぎりに一メートル五〇センチ掘り上げても、層が固い場合は七〇センチくらいしか飛ばない場合もあり、岩盤が比較的軟らかいと普通よりも早く八本掘り終わり、いくぶん余裕を持って発破を掛けると一メートル六〇〜七〇センチも飛ばす場合がある。

ノルマは飛んだ距離で決められるので、苦労しても三六ラシヨ、案外、楽に掘って余裕があつてもハラシヨラポータ。私は平均して比較的軟らかい岩盤に恵まれ、二十三年の初めごろ、ハラシヨラポータで休息の家（一週間仕事をしないでぶらぶらしている）で過ごしたこともあった。ただし、一旦具合が悪くなつても、発熱するか栄養失調で尻たぶらがぶよぶよになるか、とにかく見た目の症状が悪くなければ軍医（女医）は絶対に休ませてはくれず、神経痛やリューマチなどは病気のうちに入らなかつた。

炭坑での労働時間

実働八時間、三組に分かれ、炭坑は二十四時間休みなしにどの組かは働いていることになりました。一組は午前八時から、二組は十六時から、三組は午前零

福島県 大和田正友

時から労働です。組は月ごとに順次交代ですが、食事の時間も不規則になり大変です。

収容所から炭坑までの引率は兵隊です。五列に並べ十・十五・二十と数えて、兵隊四人が数えた数が一致しないと出発できない。これがなかなか一致しない。寒い夜など苛立つばかりです。「まったく頭が悪いんだから」とつい不平が出ます。

炭坑での僕の仕事は(トロッコ押し)です。注意しなくてはならないことは、電圧が二百ボルトで、坑道の天井を通る電線に頭が触ると大変です。防寒帽子を被り、事故防止に努めます。トロッコは石炭が一トン入る鉄製です。下り坂でトロッコに乗り、頭が電線に触れ、電流が両手の指から流れ、指をなくし地面にたたきつけられた事故もあつたのです。

僕はトロッコ押しを三月月で電気機関車の運転手に昇格したが、二十一年の六月、機関車の脱線上げで右手を負傷して、ドイツ人の医師がいる第五ラゲルへ送られた。この医師の責任感の強さに感心したのです。新しい患者が入ると、夜でも患者の容態により何回も往診に来ます。感心していると、「君のときもそうだったよ」と隣の外人患者が教えてくれた。

出血している間は白パンで、栄養たつぷりの食事であつた。手術のあと抜糸も済むと、十日間のここでの生活も終わり、僻地であるスパークスの病院に送られた。

石川県 餅井 茂

当初は駅の除雪、貨車積み、建築現場の穴掘りなどの作業だったが、二十一年の春ごろから、一交代二百人、三交代で六百人ほどの人が炭坑労働に従事するようになった。

この炭坑作業に従事する人は、毎月一回行われる身体検査で一級(ヘルウエ)に指定された人が入り、二級(フタロイ)は地上の建設現場、三級(テリーチエ)は所内の軽作業、四級(チトヴォルトイ)は休養か入院と、大体このような等級

区分だつた。

この身体検査は、ソ連軍医が素の裸になつた兵隊のお腹の皮を引っ張つたりお尻の肉をつねつたりして決めるもので、我々の知っている身体検査とは大違ひだつた。そして、この軍医ほどの程度の専門知識があつたのか、今でも疑問に思つている。

坑内労働は三交代制で、早出組(午前八時から午後四時)、中出組(午後四時から十二時)、晚出組(夜十二時から翌朝八時)に分かれていて、交代の切替えは毎月一日に行われた。

坑内業は、採炭専門の組と隧道すいどうを掘る組とに分かれ、どの組にも先山、後山があり、先山はツツパで穴をあけて丸太で木枠を組む仕事、後山はこの支柱の丸太運びと石炭の積込みが仕事で、先山一人に後山四、五人がついて一班を作り、これにソ連人の監督助手が一人ついた。この助手には人のよさそうな者もいたが、ほとんど囚人上がりの気性の荒いのが多く、こんなのに一日中横でダワイダワイをかけられた日には頭がぐらくらしたものである。

石川県 寺西 作次

炭坑作業は三交代八時間労働である。現場に着くと一日のノルマが与えられそれが完了しない限り、八時間過ぎても帰してくれなかつた。朝出てから夕方帰るまで水一滴与えられず、作業中は休憩もなく、ぶつ続けの八時間労働であつた。八時から四時までの一番組は、収容所に帰ると小おけ一杯の湯で炭塵を拭き取る程度の入浴。午後六時過ぎに昼食にありつき、八時過ぎに夕食ということになる。二食分続けてやつと食事を取つたという感覚を持つのである。野菜類の摂取がないから、我々は現場への往復の道で名もない雑草をむしり取つてポケットに詰め、食事のスープに細かくちぎつて浮かして食べた。これが唯一のビタミン補給であつた。また草のなかに二十日ネズミのような野ネズミがいたので、棒で叩いて捕らえ、腹わたを捨てて、ペーチカの上で丸焼きにしてむしり食べたりも

した。たばこは住民の捨てた吸い殻を素早く拾って、まわし飲みをする。まさに餓鬼の明け暮れであった。

明日は一週間に一日の休日と、やっと毛布の中に潜り込んだと思うと、叩き起こされ全員集合。戸外の夜間作業に引っぱり出されて、山と積まれた坑木の貨車下ろしや粉炭の山の整理など、厳寒零下四〇度、暗闇の中の作業は、全く泣くに泣けなかった。そうかと思うとトラックに乗せて遠い石山へ行き、一日中トラックに石積み仕事をさせられる。その石も二人か三人でやっと転がせる大石ばかりだから、これも油断すると危険な作業だった。その使用トラックが満州から奪って来た日本軍の十輪車の日産トラックだから、一層腹が立った。それでも青空の下の作業は、坑内組にとつて少しは心も晴れる思いであった。

静岡県 前沢豊次

炭坑内での採炭作業は、幾つもの悪条件の重なったきつい労働であった。落盤、ガス爆発などの被害をいつも内蔵し、よこれよんだ地底の空気、入出坑のわずらわしさなど、枚挙にいとまがないほど劣悪な条件下におかれたものであったが、それでもなお捨てがたいものを持つていた。それは厳冬季、氷点下三〇度を超える酷寒の中での地上作業に比べれば、まだまだましであるということである。

岡山県 土居一志

構内本線にはトロッコ運搬用ワイヤーが常に動いている。支線の各採炭場の石炭は、ベルトコンベヤーで本線のトロッコに積み込むトロッコワイヤーに引かれて坑外に運び出される。支線の坑内は両側に柱が立ち並び、落盤に備えてあった。時には落盤もあり太い柱が重みで潰されているのを見た。落盤のあった坑内をはいまわつたこともあったが、若かったからできたことで、いま思い出してもゾッとすることばかり。坑内で死亡した戦友も多かったらうと想像できる。

坑内ではカンテラを柱にかけて仕事をする。頭に着ける電灯もあったが、ほと

んどカンテラだった。防寒服・防寒手袋での作業である。おまけにスコップがバカに大きく、栄養失調の体ではスコップ一杯の石炭を持ち上げることができなかった。防寒服は石炭で真っ黒になった。

カンガンダは石炭の街である。ここから石炭を抜いたら何も無い。確かに黒い所と言える。第一大隊主力はこの地区最大の第十八ピース(炭坑)に入った。作業は昼夜続行の三交代だった。つまり、三組に編成され、一組が朝八時から夕方四時まで、二組がついで夜中の一、二時まで、ついで三組が朝八時までだった。

下士官は非常によく頑張りが立派だったと思う。将校の大半が追放されて、部隊を離れたが、その後に至っても常に仕事面でのリーダーとなり、自分も小隊長に選出され、生産に頑張った。毎日百五十から百八十名を連れて炭坑に行き、仕事はしなかったが炭坑内をぐるぐる回った。「将校がいてくれれば」と思った。時には赤大根になり、腹の中は白大根で頑張った。それがあれば精神的な支柱となつて、ともかく帰国の大きな原動力となった。

長野県 春日直喜

バイカル湖を出てイルクーツクに着く。全員整理し服装検査、余分な物は一切その場に置き、旧ドイツ兵の捕虜収容所だったと言う半地下式のバラックに収容される。

間もなく炭鉱の重労働に駆り出される。作業は、ハッパで砕いた石炭を悪い物を除いてベルトコンベヤーによりトロッコに積み込む作業である。一昼夜三交代の八時間労働。零下四〇度を超す寒さの中、鼻、手足の指先が白く凍る。そのままおいたら大変なことになる。お互いに擦り合いながら頑張る。作業終了後帰るため整理したところ、一人足りない。皆で捜したところ、後方に倒れているのがわかる。早速抱き起こしてみると既に息絶えて冷たくなり、手足は凍っているといった悲惨なこともあった。食糧は少なく、食事らしい食事もない上の重労働、

加えて厳しい寒さ、栄養失調により無念にも斃れる者が続出する。

死体は素っ裸にされ小屋に積まれ、凍りついて丸太のようになっていく。つらいのは埋葬の使役だった。元日本軍の輜重車両に数人を積み、挽いて行って埋めるのだが、上は凍っていてなかなか掘れない。仕方なく雪を掛け手を合わせて帰る。自分もいつかはこうなるのかと思えば、心細くなる。

滋賀県 水野清一

私たちを乗せた貨車は確実に西へ走って、やがて着いたところはバイカル湖畔のスリュージャンカという街で、スリュージャンカとは雲母の街という意味だそうだが、雲母のことをスリューダと言い、スリューダの街、スリュージャンカは正に雲母鉱山の事業によつて成り立っている街である。私たちの収容所はこの街はずれにあり、これから三年間をこの鉱山に働くことになったのである。

スリュージャンカ第十四収容所、これが私たちの収容所で、約千名の日本人が抑留されていた。この収容所は、イルクーツクの管轄であった。作業の第一は雲母の採掘であった。作業は露天掘りが主であり、山の岩盤をくずすのと地上の雲母を拾うことであった。また、岩石を捨てるトロッコ押しも重要な仕事の一つであった。そして、一日に百パーセントに達するには、トロッコ二十台を押さねばならなかった。こうした作業になれて行くにつれ、上手に作業する道も覚えていった。朝ごとに人員点呼をし、収容所を出て鉱山に向かい、終日山に働き日没と共に収容所に帰る。

広島県 藤森隆行

坑内で拾ったゴム紐でバッテリーを腰に固定してヘッドライトをヘルメットに差し込み、削岩機（十数キロ）とノコギリ（切羽の支柱立てに使用）を肩に掛け、四五度ほどある急な斜坑を上って行くのです。

初日は監督も現場の切羽まで来てくれて、「ここが〇〇号切羽だ、覚えておけ、

今日はここで切るんだ」監督はライトを炭層に近づけ「フジモリよく見る、黒くて艶のあるこの層が柔らかな部分だ、ここを先に切り込み、それから上下を落とすと楽に切れ、ノルマが上がる、どこの炭層もみなこの要領でやればいい、分かるか」と言つて、数分間実際にやつて見せてくれた後、私の肩を叩いて、「頑張れよ、時間には計測に来るからなあ」と次の現場へ回っていきました。

広い切羽は気味悪いほど静まり返っていて、私一人の気配だけです。教えられたようにライトで炭層を見極め、削岩機をそこに突き立てると、静かな切り羽にダツダツと大きな音が反響して、ドサツドサツと黒い塊が次々と暗闇に飲み込まれ、下の坑道にある採集口へ落ちて行く、その様は実に爽快なものでした。今で言うトストレスも吹っ飛ばすといった感じでした。

初日なので条件の良い切羽をくれたのか、面白いほどはかどり、彼が来て計測を済ませると「フジモリ一三五%もある、初めてにしては良くやった」と自分のことのように喜んでくれました。数日後、収容所で政治部の大尉に会ったとき、そのニュースは既に彼の地獄耳に入っていて、高い鼻を一段と高くして喜んでくれたのには驚きでした。

広島県 稲村香

通信隊長の和田大尉が中隊長となつて第六炭坑で作業することになった。一〇三組に編成され、朝八時から三交替で昼夜の作業である。三組になると夜中の十二時から朝の八時までであり、この組になるととてもつらい思いをしたものである。組の交替は一カ月毎で、入坑の一時前には収容所を出るのでその前に食事をせねばならず、作業中の八時間は飲まず食わずの重労働、ようやく作業を終えて帰ると入浴、その後食事となるので、正味十一時間くらいは何も口にせず働くわけである。しかもその食事たるや、黒パン三百グラムに水のようなスープ粥を少々する程度。よくこれで体がもてたものと思議でならない。入浴の終わった者から食堂の入口に順番に並ぶ。早く飯にありつこうと入浴

もそこそこ、耳たぶの方に石炭の黒こげが残っているのもお構いなし。入口で先ず黒パン一個を貰う。三百グラムずつ計量してあるので量に変わりはない筈なのに形に大小が目立つ。大きく見えるのにみんな注目する。あの大きいのは何番目の者に当たるとか気になったものである。空腹に堪えられず、寝ても覚めても食うことのみ考えていた。まさに人間飢餓の苦しみの教えを体験したものであった。生馬鈴薯を盗んで食べたり、生人參をかじったり、口に入れられるものは何でも食べようとした。生人參は柿を食べるよう、甘味があり美味しかったことを覚えてる。

愛媛県 木屋隆行

一番方(〇〜八時)、二番方(八〜十六時)、三番方(十六〜〇時)の三交替で休みは各番一日あった。この地区の日本兵は一番多い時で六千人ぐらいたという話である。私達のラーゲル(収容所)でも最も多い時で二千人近い人がいたということであるが、それはほんの少しの間とか……。

入所当時(二十年十月頃)は、夕方は相当冷えた。半地下式の宿舎には、三百人程度が入っていたようである。このラーゲルは炭坑の第一、第三、第八、第九の四炭坑と露天掘り炭坑の作業が主であったが、最初のうちは、我々が住む宿舎の増設工事と便所の増設、またソ連兵、ソ連役人の宿舎建設に殆どの人員があてられた。

十月頃から三〜四月頃の酷寒、大雪の中、川原から石を運搬し、石積みの家を造る。大きい石はハンマーで割り、小さいのはそのまま積み上げるのであるが、石と石の間には泥と石炭を水で捏ねたものを入れる。結構接着力はあった。凍り付いたかもしれないが、しかし地震でもあれば一発であろう。これは高級住宅である。一般住宅は、泥とおがくずを水で練ったものを木の形箱に入れて作る日干し煉瓦を積み上げて造った。

私は元気で年も若く、結局炭坑に回された。それこそ初めての作業で、今ま

での友と別れ、新たに編成された「露天掘りグループ」に入った。三交替制でグループ二十人程度であった。

表面の土を大型の機械で取り除いて石炭層を出し、それを私達が掘り出すのである。ソ連人監督からいろいろ教えてもらい、先ず「ブリもみ」といって、二メートルぐらいの鉄の棒(直径三センチメートルぐら)の先にピョールカというキリ先を取り付けたもので、一メートルぐらいの間隔で五〜六本の穴を掘る。これに発破屋が火薬を詰め、人払いをして点火する。緩んだ炭層をつるはし、えんぴで石炭を掘り出し、トロツコに積んで地上に運び出す。最初は思うように掘れず、監督から「ダワイ、ビストラ」の連発であったが、ある程度馴れてくると、ウズベク人のグループその他より大分多く掘り出すようになった。作業を進めるための要領のよしあしで大分の違いが出てきた。監督とも休憩時色々話すようになったが、お月さんがモスクワとこの地と二つあるとか、満州から取ってきた昭和初期の日本の会社のマークのある蒸気機関車を指さして「こんなの日本にあるか!」等、人のよさそうな監督ではあったが、教育の程度がわかった。しかし石炭を掘ることについては大変よく知っていたようである。

こんな作業をしながら休憩時地上に上がり、雪の下の草や、時折犬やねずみを捕まえ、スープにして食べた。夏は草も豊富で、その上、蛇、蛙類がよく取れた。ソ連人いわく、日本人が来て、犬、ねずみ、蛙の姿が見えなくなると。でも雑草も時々毒草と知らずに食べ、大変なことになった人もいと聞いた。また、雑草取りで、石の下にいるサソリ、毒グモも多く困った。また、気に食わない奴の靴の中に取って帰ったサソリを入れることが流行し、皆が大変恐れた。また毒グモも面白半分で室に放したりする者があり、これにはソ連側から特に嚴重なる注意があった。雑草取りも命懸けであった。

昭和二十一年中頃から色々あり、編成替えて第一炭坑に替わった。初め三カ月ぐらには一番危険な「ラワ」という作業で、日本の炭坑では「掘い」をかける

と言わらう。日本でもまた相当危険な作業と言われているのか。二本の本坑道の間の炭層を掘り出す作業で、作業にかかる前、先ずいざという時の「自分の逃げ場」をつくり、それから作業にかかるのである。立てた坑木は細いものを使い、八時間もつかもたないか程度のものである。幸い誰も事故に遭った話は聞かなかったが、以前相当頻繁に事故があり、人も機材もそのまま、ソ連人も相嫌がる仕事らしい。私達は何も知らずのんきなもので、そんな危険な作業とは知らず、狭く息苦しい仕事であるが、大きなソ連人より小さい日本人の方が向いているのか、断然出炭量が増え、監督は「ハラシヨラボーター」と大変褒めてくれた。

私は大の汗かきで、人と同じかまたそれ以下の仕事でも人の二〜三倍の汗が顔、背中に出る。監督は通りすがりに背中を叩いて「ハラシヨ」と言ってくれた。炭坑からの申請か、一週間の「ハラシヨラボーター」で休養をくれた。二十一年の暮れのこと、皆から大変うらやまれたものである。

熊本県 小佐井善次

生まれてから今まで見たこともない坑内作業で不安である。坑内は常時粉塵や発破のガス、灯油ランプの黒煙が充満し、鎮静する暇がない。一番先の切羽の所まで坑道は真つ暗で、小さいランプの灯を頼りにお互いに大きな声でオーイオーと呼びながら歩いて行った。

坑外に引き揚げるワイヤにトロツコを連結して、空のトロツコを引き込み、積み込み、押し出す事の繰り返しで、崩れた鉱石を全部坑外に搬出しなないと九時間でも十時間でも監督は帰さなかった。全く人間としての労働力の限界を超えた苛酷な重労働で、今思い出すと身震いする程の死闘の作業場であった。

熊本県 山形満治

収容所でも作業が始まる。自分たちの仕事は石炭掘りである。小さな灯油ラ

ンプを持って坑内に入る。三交代で作業をする。坑内には歩いて入る。作業場に着く、ソ連の人がつるはしで掘ったものを下に降ろして石炭運搬車に積み込み、炭車を出口まで持つて行く。石炭を掘った跡には坑木を建てる。寒い時、暑いときは過ごしやすい。炭坑の中ではソ連の地方人と一緒に仕事をしてきた。警戒兵は地上にいた。初めの間は地方人も日本人を珍しがっていた。作業が終わると初めのうちはシャワーを浴びさせてもらえた。数日たった頃、夜勤務の人が三人で逃亡したので大変だった。監視は厳しくなり、食料は削られる、シャワーは使えない。水も使う事ができなくなる。顔も真つ黒、作業服も真つ黒、歯と目が白いくらい。仕事は重くなり、栄養失調者はふえた。

島根県 松浦久雄

ここは炭坑作業を主とする収容所であった。即日、所属する小隊班が決まり、二〜三日は炭坑についての予備知識、作業の種類、坑内の危険防止、禁止事項等についての説明があった。我々の入る炭坑は浅く、地表より垂直六十メートルくらいの採炭場。徒歩で斜坑を下り現場に。最初は選炭作業、その後は主に採炭。三交代制で、ノルマは各人の体力等級、採炭現場の状況により異なるが、一級で十トン、二級で八トン、ノルマが達成できなくても罰則のようなものはなかった。ノルマの八十パーセント達成からプレミアが付き、一〇〇パーセントでパン、バターの支給があった。しかし、これを目標に生産を上げる努力はしなかった。その日その日の出来に任せた。一つの採炭現場の構成は、ロシア側が監督。電気、設備保全、発破、坑内ガス検査、その他で七〜八人、日本人二十人くらいの八時間交代三組制。番方の交代は一週間おき。採炭現場はかなり通風はよくしてあるものの、発破、採炭等が出る炭塵で交代頃には作業衣を通し肌まで黒くなるような状態。それでも防塵マスクなどはなかった。これはロシア人、日本人も同じで、坑内作業の労働条件に差異はなかった。組織の編成替え等で働き場を再々変わることも少なく、ソ連側の人達とも顔なじみになった。

島根県 槻谷利夫

最初の半年くらいは自動車整備工場の整備あるいはセルモーターの整備であったが、やがて鉱山の掘り出し作業に就いた。ロシア人が坑道内で発破をかけた採石の運搬作業が主な仕事で、掘り出した鉱石をトロッコに積み込み搬出口へ運ぶ作業で、一番方々三番方の三交代で行う作業であったが、一番方がノルマの達成ができないと達成するまで作業を続行させられ、二番方の就労が二時間くらい遅れることになり、食事も不定期となり、重労働にもかかわらず、ノルマ達成まで就労させられ、一日二食のことが多かった。食事はそれでも黒パン三百グラム、スープは飯盒半分、ジャガイモのふかし三百グラム、それでもノルマ達成のため空腹を我慢しながら、鉱山の薄暗い穴の中で重労働に耐えた。二十一年の三月頃、広い広い坑道の中で(五メートル四方の場所)作業中突然落盤事故が起り、四人の戦友がその下敷きとなり命を落とした。その事故でロシア人のカマンジールが交代させられたこともあった。このことがあって、いつ自分の身に降りかかるかもと、一瞬の事故が明日は我が身と身震いがした。そんな事故が起きた後はロスケの点検も慎重になり、事故もなくなった。

静岡県 佐藤定衛

何日かわからずチタから百キロ余り北東のブカチャチャに到着。小さな炭坑町は囚人ばかりが暮らす刑務所らしく、建棟は幾つもあったが有刺鉄線張りで四隅の望楼から監視されていた。仕事は炭坑と工場の鍛冶屋。炭坑は一炭坑から七炭坑まであり、私は一炭坑に入った。八時間毎の一番、二番、三番(一番八時から四時まで、二番四時から十二時まで、三番十二時から朝八時まで)を一週間毎に交替、私は班長として部下九人を連れて作業に従事した。

愛媛県 大久保正一

私は捕虜番号が「九九九」でありました。数字が覚えやすかったせいか今も忘れませんし、「九九九」を口にするのと当時のことが思い出され、ぞつとします。

一日たつてから、炭坑で作業することになりました。三十分くらい歩いた所にある大きな炭坑で、地下三百メートルくらい入つての作業でした。三交代で働きました。生まれて初めての重労働でもあるし、腹がすいて、その上ソ連兵の監視が厳しく、ノルマがあつて、それはそれは、この世の地獄とはこのことかと思ひました。大勢の同胞が次々に倒れていきました。最初二千くらいいたのが、千五百人くらいになったと思います。収容所の位置は確かではありませんが、クラスノヤルスクカバルナウルではなかったかと思ひます。

京都府 谷口信太郎

馬鈴薯畑の仕事が終わつた頃は秋も過ぎ、そろそろ冬に入つた頃移動がありました。我々作業隊は貨車に乗せられ半日ほど走つた町、ゴレヤへ着きました。収容されたところはドイツ兵の捕虜が入つていたという鉄条網に囲まれた古い平屋の建物が並んでいました。部屋の中は木造の二段ベッドがあり、五十人くらい入れる部屋が並んでいました。翌日は作業はありませんでしたが三日目から石炭掘りが始まりました。ここは露天掘りで、寒風の中、作業隊を二つに分け、上にある土を取り除く組と、石炭を掘る組に分けられました。石炭掘りの方は現地人の熟練した男性がダイナマイトを次から次へと装着して、そして大声で合図して点火してゆきます。大音響と共に連続爆発する様子は実に凄いものでした。先の丸くなった鶴嘴で掘り起こす者、貨車に積み込む者、貨車のレールを敷き替える者。二十両余り連結された貨車に石炭が積み込まれ出て行くと、やれやれと思う間もなく待ち構えていた空車が入つて来るので、ちよつとの間も休めない息の詰まるような作業でした。

昭和二十年も暮れ、ソ連での新年を迎えましたが何の変化もありません。寒

い最中でもあったので一日と二日は作業休みとなりました。零下三十度より下がると休みとなりますが、二十五度では作業に出かけます。冷たい風が吹き荒れるときはまぶたや鼻の穴が凍てつき、押さえるとバシバシと音がします。監督の「ヤポンスキー、ダバイ」に追いつてられて石炭掘りが始まります。食事は相変わらず貧しいもので、朝食は雑穀のうすいカーシヤ(粥)が飯盒の蓋に八分目ほど、昼は黒パン三〇〇グラムのみ、夕食は朝より少し固めの雑穀のカーシヤと青いトマトの入ったスープ(塩汁)、これが重労働をする我々の食事です。栄養失調で痩せ細ってゆく者が増えてきます。休憩時間にはせめて内地のうまいもの話をして空腹をなくさめていました。

三年目も作業は変わりません。露天掘りの石炭はほとんど掘られていきます。貨車のレールを移動しながら、毎日ハツパの轟音を響かせていました。

京都府 八木敏雄

何日か走ってノボシビルスク駅に着き、そこからシベリア鉄道を外れて列車は南へ南へと、二日間くらいして炭坑の街カラガンダに夕方着いた。二十年十月二十日だったと覚えている。

さすが大陸の冬は早い。夜になると零下三十度くらいに下がっていたと思う。収容所の前で雪の上に五時間くらい座らされてもう駄目だと思った。監視兵の「ダワイ」に追い立てられてバラックに入る。板張りの二段ベッド一組で四人寝られるようにしてある。おがくずの入った薄い敷布団と、掛け布団は毛布一枚であった。

翌日から全員作業に出る。収容所へ行く水道の穴掘り作業だった。自分は身体が弱っていたので休ませてくれた。一週間ぐらいして炭坑の作業に出るようになって、自分も出られるようになっていた。

それから毎日石炭掘りをドイツ人と一緒にやった。一昼夜三交代で、一組は午前八時から午後四時まで、二組は午後四時から十二時まで、三組は午前零

時から八時まで、組替えは一週間毎にやった。自分の仕事はトロツコを通す坑道掘りで、鳥居を二本組み上げて、掘った石炭とボタはトロツコに積んで片付けねばならなかった。八時間働き詰めでも予定の作業が完成しない時が度々あって、次の組のカマンジールがひどく怒った。毎日炭坑まで歩いて一時間半、雪の酷く降るときには二時間以上かかり、空腹と疲労で死ぬ思いで歩いた。収容所にいる十二時間足らずの間に三回の食事を摂らねばならないから寝る時間がなく疲れが取れず、その上食事の少ないこと、一食パン一切れのときと飯盒一杯のスープのときがあり、食べたそのときから空腹の連続であった。お互いに話し合うことは食べ物の話ばかりである。それにもかかわらず作業はノルマ制で、八時間ではとても出来ないノルマで、一〇〇パーセント出来ないときはその分食事が減らされ余計能率が上がらず、身体は痩せて皆見る影もない有様であった。

愛知県 近藤昌三

軍隊は「運隊」だが、シベリアはさらに「運」次第だった。厳寒という言葉では言い表せない酷寒の地上で、木材伐採などの重労働につかせられ、抑留者の死亡率は物凄い高率だったに違いない。私がこうして無事に帰還できたのは、もちろん現役兵の若さの特権があったのは間違いないが、炭鉱という恒温の地下、しかも換気坑道係という比較的楽な労働に配属されたことが一番の幸運だった。一年七カ月のシベリア生活は私を運命論者にした。

アルチョムラーゲリから炭鉱まで往復の一、二時間の酷寒を辛抱すれば、地下は天国である。しかし、炭鉱内での作業割当で「運」が決まるのだ。

名古屋育ちの私は、炭鉱というものを初めて見た。大きなボタ山の隣に鉄塔があり、最上端に大きな鉄の輪が回転している。この輪がワイヤーを巻き上げ、堅坑の中のゴンドラを上げ下げする。この堅坑の終点、地下二百メートルの終着点から東と西へ二本のメイン坑道は伸びて、最前線の現場(切羽)まではそれぞれ千メートル以上あるという。メイン坑道は四方がコンクリートで固められ、東

西にレールが伸びて、その上を石炭ワゴンを引いた電気機関車が轟音をあげながら走っている。このメイン坑道に並行して換気用の坑道があり、所々で主坑道と繋がっている。そこには直径一メートル以上ある大きな送風機と木製の扉があり、この送風機で主坑道のカスや汚れた空気を吸い出す。扉の横にはソ連のおぼちゃんや座っていて、送風機の運転と扉の開閉を見張っている。私は作業割当て

この換気坑道係となった。ゴッホの自画像に出てくるようなシンガリオフという老人（といっても五十半ばだろう）と。ペアで坑道の修理保全が仕事。換気坑道はコンクリートでなく、土のまま。左右と上は坑木で組んである。

我々の作業は、落盤によつて崩れた坑木の組み直しや、地圧によつてせりあがる地面を掘り下げること。その日の作業はシンガリオフが決めるが、坑木は古いものを地上に上げ、新しい木を下ろして来て組み直すのだ。残土も地上へ上げなければならぬ。切羽のように落盤の危険は少ないが、それでも時にはある。坑木の運搬も、その組み替えもなかなかの重労働だ。だが一番の問題は「灯」だった。我々はもちろん、ソ連人の灯も全部「カンテラ」だ。我々日本人はマッチがない。言葉も通じない。一旦、灯が消えたら真っ暗闇、しかも人気のない換気道、送風機の風でカンテラの灯はいつもゆらゆら揺れていて心細いことこの上ない。シンガリオフが近くにおればまだ良かったが、一人の時、灯が消えてしまつて、絶望の淵に落ち込んだことも一度ならず味わった。

切羽の落盤で命を落とした戦友も多い。そして一番の重労働は豎坑の下のリフト係だ。切羽から次々とやつてくる石炭ワゴンを、上から下りてくる空ワゴンに、一台一台ゴンドラの中で力いっぱいぶち当てて入れ替えるのだ。豎坑の中はもちろん地下水でいっぱい。リフト係の作業場は滝のような地下水。スペースが狭いので一人ではできない。このリフト係の悲運、何人が無事帰還されたのだろうか。

和歌山県 坂本清次郎

炭鉱の街に下車したのだから当然炭鉱作業に従事と思っていたが、屋外作業の穴掘り。それも単純な労働でのんびりと過ごさしてもらったが、環境にも慣れない食事にも我慢することを覚え、ソ連側も捕虜の取扱方法がよくわかってきたのと、両方ですべての疑問点が合致したのか、いよいよ炭鉱作業に入ることになる。作業員はもちろん一、二級の健康体を持つ下士官以下である。

将校は引率のみで作業に従事せず、兵の作業時間は更衣室で待機している。そして一人の衛生下士官がその将校に付随して、日本兵作業員の負傷、疾病に当たる。それに通訳が一人つく。

私たち憲兵下士官、兵もバラバラの宿舎に配置され、顔を合わすことも少なくなつたが、身分を隠匿するには好都合であつた。

まず、坑内作業に従事する者に、坑内で着用する作業衣（テント地のようなゴワゴワした着古しである）、帽子（防寒帽のようなもので、前にヘッドランプを付けるようになって）、靴（ゴム製のズック靴の大きいもの）、靴下の代わりに巻き付ける古い布等の支給がある。皆と顔を見合わせ聞き合わせ、軍服の上に作業時着用することにする。

炭鉱作業は年じゅう休みなしの一日二十四時間稼働である。坑内でどんな作業が待っているか一切不明であり、周囲に炭鉱作業に従事した者もない。「日本兵は補助的作業をするのであり、ソ連側の坑内夫の指揮を受け、その作業を忠実に実施すれば良い、食事も改善されるであろう」との将校の話である。話は簡単であるが、まず不安が先に立つ。食事の改善という餌に張り切る者もいる。そんな者は若い。召集兵は机の上の仕事しか知らない。老兵たちは一カ所に集まり、不安気にヒソヒソと話をしている。

いよいよ坑内作業の第一日がある。将校に引率された下士官以下約三百人の作業隊、収容所の正門に五列縦隊で並ぶ。皆、作業服をくるみ、紐で結んで肩にかけている。人員の点検は相変わらず遅い。寒さ、冷たさがプラスする。ド

ンドンと足踏みをする。監視兵が「静かに」と怒鳴る。構つてはいられない。やつと前進。いつもの道とは違う建物に向かつて歩く。炭鉱特有の高い建物が見え始める。

別戸建の大きい建物の二階へ案内される。風呂の脱衣場である。広い。ここで作業衣に着換え靴をはく。炭鉱員が来て監視兵と話し合い、通訳があらかじめ編成された「長」の名前を呼ぶ。炭鉱員がその班を連れて出てゆく。作業開始である。どの班がどこでどんな仕事をしているか一切不明であり、後で兵同士の話し合いでその作業内容を知る。

「〇〇班」と呼ばれ、八人の兵と一緒に部屋を出る。受付のような所に連れて行かれ、そこで一人一人、キャップランプをもらう。部屋が明るいのか、キャップランプの光はブーツとして暗い。坑内夫のはイキイキと明るい。「ニイハラシヨ(悪い)」と文句を言うが、聞く相手でない。一旦外へ出て、坑内へ入る部屋に入る。小さな小屋である。日本では、坑内に入るにはトロツコに乗り、勇ましく入坑してゆく姿を映画で見たことを思い出すが、そんな場所ではない。「ダワイ」の声で見ると、縦穴が大きく掘られ、木製の梯子が見える。洋々人的な顔をした引率の坑内夫がまず降り、それに従う。二〇段も降りた所に踊り場のような場所があり、またそこから二〇段も降りる。そんな梯子段を四回も降りると広い横坑に出る。螢火のようなキャップランプもこの地下に来ると明るく見える。よく見て、よく考えて坑道を歩かないと帰りに迷ってしまうのではないかと、思うほど、坑道は縦横に人が立つて二人並んで歩けるほどに張り巡らされている。炭鉱を知っている兵がいた。彼曰く「こんな炭鉱であれば、日本の機械化をもつてすれば露天掘りにして業績を上げる」と。なるほど、日本の科学陣であれば露天掘りにして、落盤等の体の危険率を少なくするであろう、採炭量も最高であろうと思う。

第三坑の発掘現場に行く。責任者が「兵隊はトロツコの運送」と手振りで指示をする。ベルトコンベアーに乗った真っ黒な石炭がドンドン流れ、トロツコに積まれ

てゆく。山盛りになると押し出し、次のトロツコがその場所に入る。積載されたトロツコを押すのが与えられた仕事である。鉄製のトロツコをここへ来るまで何度も見ているが、空でも重そうである。それに石炭を満載するとなお重い。一人でそれを押せと言う。困ったなーと見ているわけにはゆかない。押そうと手を掛けると「お前はトロツコを押さなくても良い、ここでチョークでトロツコに番号を入れてゆけ、今の番号の順に書けば良い」とチョークを渡される。なるほど、今何台目のトロツコか、横に大きな数字が書かれている。満載されたトロツコを押し出し、空のトロツコをベルトコンベアーの下に持つてゆき、次の番号を記入する。割合と楽な仕事を任される。トロツコを押している兵隊が心配である。比較的元気な者ばかりであるが、二人ほど年配の召集兵がいる。しかも力仕事をしたことのない者ようである。トロツコの線路は中央まで約一〇〇メートル、帰りは空のトロツコを押しこくる。

休みもないのかと思っているとベルトコンベアーがとまる。石炭が全部積み出され、次のハツパを掛けるまでの休憩である。線路にへタへたと座つてしまう兵隊たちは今は完全に二食となつてしまった給食関係。小さい黒パンに実の入っていない岩塩汁。そこ今度の炭鉱作業である。「頑張れ」と言うのも愚かか。

二日目より、若い私がトロツコを押し、老兵と仕事を代わる。なるほど、石炭満載のトロツコは重たい。しかし、二、三回往復すると押すコツがわかつてくる。線路上りと下りの勾配があり、それを上手に利用すると楽である。下り前で見切り押し、両手でトロツコの上部を掴み足を下部の縁に乗せる。トロツコに乗るのである。トロツコは勢いよく走り、その惰速で上りも下りも力が不要である。

要領がわかればトロツコ押しも苦にならないが、石炭満載のトロツコが脱線でもしようものなら大変である。栄養不良の者では無理な仕事である。反対線路を通る友を待つて二人で頑張るが、トロツコは重く容易に持ち上がらない。ソ連の女性労働者が通りかかる。「ヤポンスキー、サルダート、セイノ、セイノ」と叫ぶ。

「日本の兵隊よ、セイノー、セイノーの掛け声ばかりではニイハラシヨ(だめだ)」

と言うと、トロツコの前に歯止めをして、後方を尻でグイとトロツコを持ち上げて脱線直す。その尻の偉大さに脅威とコツを学ぶ。毎日毎日が暗闇の中のトロツコ押し。

働け働けの日々が過ぎてゆく。ノルマの出来を聞くが、達成しているのか、一〇〇%以下なのか、一切不明。ソ連の切羽長が「作業終了、上がれ」と言えばノルマ一〇〇%達成と思っている。そうすると毎日がノルマ達成である。だから切羽によって作業終了の時間が違ってくる。早い切羽の班は定刻に終了し、入浴を済ませている。

入浴と言っても、日本風の湯舟があるわけではない。水道の蛇口が並んでおり、お湯と水が出る。それを桶に受け、まず真つ黒で目玉のみがギョロギョロした顔を洗う。次いでタオルに石鹸を塗り、体を洗う。その作業を早く済ませないといつ湯が止まるかもわからない。水では汚れが落ちない。石鹸は茶色の素質の悪い固形が支給されたが、貴重品である。

板の囲いの向う側は女性用であり、ソ連の女性の話し声が聞こえ、監視兵が時々浴場に入つて来ては節穴から覗いてニヤニヤしているが、日本兵はよう覗かない。プライドがあるからか、女性は平気のようである。穴を埋めることもない。

坑内作業に慣れてくる。ところに、作業内容が変更されることがある。有蓋貨車への石炭の積み込み作業である。無蓋車へは機械での積み込みが可能である。有蓋車は一部、ベルトコンベアーで石炭を流し積みしているが、捕虜を遊ばさず使えとばかり、野積みの石炭を有蓋車にスコップで積み込ませる、そのスコップの大きいこと。先が平で四角のスコップである。そして良質の石炭は軽い。下地がコンクリートのような物であれば、スコップはすいと入る。その石炭を、開けた入り口より両角の方に放り投げる。四、五人で作業時間内で十分にノルマが上がる。ただし、冬季間の外での貨車積みは寒さとも戦わねばならない。

冬季になれば外は零下四〇度ともなる。零下四〇度以上になると、本部に黒い旗が掲揚される。野外作業中止である。

しかし、炭坑に入れば気温はいつも二〇度前後の適温であり、快適である。坑内は寒さ知らずである。凍傷はない。宿舎の暖房も快適である。作業が終わる帰路につく時、必ず誰かが作業衣の中に石炭を忍ばせて持つて帰る。良質のカロリーの高い石炭は軽く、負担にならない。宿舎の四隅にあるペチカは勢い良く燃えて、シベリアの寒さを忘れさせてくれる。

炭鉱とは地中での作業である。陽の当たる場所ではない。それに三交代制が実施されている。一番方は、作業開始の午前八時に備え収容所を薄暗いうちに出てゆく。作業終了は午後四時。それが通常であり、遅い切羽は一時間も労働が延長されると、全員揃って帰途につく時は真つ暗闇である。太陽の顔を見ることはない。

二番方は太陽の光を浴びて炭鉱へ行くが、帰途は真夜中である。

三番方は夜半に出てゆくが、作業を終わり風呂で炭塵を流しサッパリとして、太陽の明るい、温かいお顔を拝見して帰るが、さてそれから休養のための睡眠をとろうとするが眠れない。また、一番方が帰ってくるとガタガタと騒がしく、熟睡が妨げられる。

昼は働き夜は睡眠という人生の法則に反逆しているのだから、致し方ない。

白夜、雪で真つ白の道を帰る二番方。疲れて元気がない兵たちの歩行。それを励ますように歌う監視兵の二部合唱。下手か、上手か、私にはわからないが、いろいろな慰問団で来た歌手よりも迫力のある二部合唱。もちろん歌詞の内容は不明であるが、哀調を帯びた歌声、民謡にも似たリズム。彼らは二人寄ると必ず二部合唱となる。広い白い広野、人気のない雪原、そこに流れる男らしい歌声。その哀愁を帯びた声に、遠い祖国の故郷の山々、川、肉親の顔を思い浮かべたのは私一人ではないだろう。

石川県 前多義雄

炭坑内作業には採炭係と運搬係がある。最初はこの採炭係になった。ここで

炭坑内の仕事の順序等を簡単に説明したい。坑内に入るの一日のうち朝・夕・深夜の三交代勤務である。入坑する時は傾斜坑内を歩いて二キロメートルほど進むと現場に到着する。ここではベルトコンベアが回っている(スキー場のリフトのようなもの)。これに数メートル置きに一トンのワゴン車が載せられている。往のワゴン車は空、復は石炭を山盛りにする。採炭係はここで固い坑内帽(この上にランプがある)を被り、または手提げランプを持って真つ暗闇の横穴に進み、こゝでまずブリ(電気モーターの錐)で細長い穴を開けて、爆薬を仕込んで爆破させる。崩れ落ちた石炭をスコップでワゴン車に搭載してワゴン車を押し出す。これにはノルマがあつて一日に何百台かが一〇〇%となる。

また、運搬係はこの終点でワゴン車を載せたり降ろしたりする。これには相当の腕力が必要であり、熟練しないと線路のレールから外れて危険である。私はこの採炭係を一年ばかりした後は運搬係に回された。

カラガンダには数十の炭坑があり、日本人捕虜は一万人以上はいたのではないか。そして私の収容所では最初は四中隊(採炭夫)であつた。

採炭夫は流しコンベアが動く仕事をしなければならない。コンベアは、縦坑、横坑、そして採炭する所は横坑のまた縦坑で傾斜をつけ、コンベアの上下運動によつて石炭が流れる仕組みである。前述の如く、石炭は壁の横坑をブリで二メートルほどの螺旋の穴を開け、火薬を詰めてハツパをかけ電気で爆発させる。爆発とスイッチの距離は三十メートルほどである。何かの理由でコンベアが止まる。そうすると採炭夫は休憩になる。

カマンジールはこの仕事を手伝つて、ようやくリズムが出たところで、今度は坑道を降り各横穴から出てくるワゴン車を縦坑の機械にはめ込む仕事がある。これがまた原始的で、平板(鉄板の厚さ五〜十センチメートルくらい)上で横穴から来たワゴンを方向変換するのが六中隊の仕事である。方向変換は三人ですれば楽だが、二人では容易なことではない。これを半日または一日じゅう(八時間労働)人手の足りない組の手伝い。とにかくカマンジールは、困った部署部署の手

伝いと全体(四十人程度)の作業員の管理監督(偉そうに言えば)が仕事である。

話変わつて、間一髪、死を免れた一つの事故を紹介したい。トロツコがレールから脱線すると、これをレールに載せるのは大仕事である。坑木とワゴンの間に入つて、背中でワゴンを、足は石炭の壁に、そして力で後輪と前輪を交互に乗せて正常に戻すのである。

ある日のことである。私がワゴンと坑木の間に入り乗せようとした時、機械が動き出した(機械が動けば体が潰れて干しいかみたくなる)。この時だけはこの世の終わりかと思つた。頭の中が真つ白とよく言うが、私の場合真つ暗で、そのうちに親・兄弟の顔が閃光のように過ぎ去つた。幸いにもシグナルを押してくれたので機械が止まつた。何回となく死機(死期ではない)はあつたが、この時だけは一瞬、もう死んだと思つた。九死に一生とはこのことか、あの時の記憶は絶対に忘れることができない。

大阪府 藤本善造

日本の炭坑は斜坑を炭車で降りるといふ姿と思うが、シベリアではエレベーターで一直線に地底へ降りる。着いた所は地上から百二十メートルだそう。エレベーターを出た所は天井までの高さが三メートル位に見えた。そして、全部がコンクリートで巻かれているので、地の底にいるという圧迫感はなかつた。しかし奥へ進み枝坑へ入ると、天井も低く岩肌が荒々しくむき出しになつていた。そこを通る度、命が縮まるような恐怖感を抱いた。

静岡県 宮代武雄

なお、私の入所した収容所(ラーゲルと呼ばれるものは、カワレルワ地区のシーヘンチアと記憶している。最初に従事したのは鉛の鉱山で、作業はこんなものであつた。事務所で作業衣をまとい、抜け道のない坑内にトロツコを線路に乗つて

押し進み、二百メートル程度（奥に続く）入ると木製の七十〜八十センチの蓋が足元から一メートルくらいの高さの側面に、ある間隔を置いて幾つもあって、その足下にトロッコをとめ、その蓋を横に引くと上から鉱石（ダイナマイトで破壊された大小さまざまな大きさの鉛の鉱脈まじりの石がたまっている）がドーンとただれ落ちてくる瞬間、トロッコがいっぱいになるタイミングを見て蓋を立てて落ちる鉱石を止めるのである。もちろん下に落ちて線路がふさがった石は脇にまとめ、今度はこの重い鉱石を續んだトロッコを坑外へ運び出すのだが、奥から外へは少々曲がりくねりがあり、この坂道（レール）を下つて出なければならぬ。

途中勾配がかなりあるのでスピードが加速され危険を伴うが、ブレーキも無いので履いている登山靴まがいの重いゴツイ靴で車輪を押さえスピード調整をしつつ転覆しないよう搬出する。出てきた所は鉄パイプを張った上で、ここにトロッコの取っ手を持つてひっくり返すと鉱石が下に落ちる（下をのぞくと大きな鉱石のたまり場となっていて、これはさらにトラックが来て精練所に運ばれる）。

このときロシア人の女従業員がいて運び出した回数をチェックしている。これを何回も繰り返して、一日の作業終了後、トータル回数によりすべての作業について規定されているノルマにより当日の成果が測定報告される仕組みである。

静岡県 小野一男

翌日、炭鉱へ連れて行かれた。石炭を掘る者、運ぶ者、地上に運ばれた石炭を貨車に積む者に役割を決められた。私は鉱内に入って石炭を掘る方に回された。ツルハシとスコップを支給され、カンテラと呼ぶ明かり取りのランプを持って、指示に従って中へ中へと入って行った。石炭のある所に着いて、今日からお前の現場と言われた。

段々の坂になって入り口より四、五百メートルくらい入ったところである。背の高さくらいの石炭の層が無限に続いている。一日一トン車で五台掘り出すのが、彼らの言うノルマであった。満足な道具もなく、初めての仕事で、体が痛いという

よりしびれるという状態であった。ソ連の民間人と一緒だったので掘り方を教えてもらった。彼らは決して勤勉でなく、ただ仕方なく働いているというところのようだ。炭鉱で働くようになって食物は少し良くなった。ノルマを達成した者に二百ルーブルが支給されることになった。パン、煙草くらい買えるようになった。

坑内は暖かく、零下三〇度にも下がる地上より、仕事は決して楽ではないが、寒いということもなく、仕事が終わって宿舎に帰ると風呂に入れるし、どうにか最低の人間生活ができるようになった。監視もあまり厳しくなくなり、許可があれば近くのマーケットのようなどころへ行けるようになった。

作業の帰りに石炭を各人、持ち帰るようにした。暖房に事欠かぬようになり、過ぎし日々が思い出され、良くぞあの寒さの中で生きてきたと語り合ったものだ。そんなときに、石炭貨車の入れ替え作業中に仲間の一人が事故で死んだ。帰国できる望みとてない毎日であったので、死んで楽になった幸せな男だと、埋めて帰る道すがら、誰言うともなく話したものだ。

三重県 中森謙

体力のない者はポツポツ死んでいく。だが我々捕虜をいつまでも遊ばさない。ロシアのドクターが来て体力検査をして、一〜八まで番号を付けられた。

- 一は炭坑作業。穴の中へ入り石炭掘り、言えば一番健康な体力のある者。
- 二は、一の掘った石炭を地上で選別役。
- 三、四は、地上の建築とか土建屋仕事。
- 五、六は、収容所の周りの雑役作業。余り体力がない。
- 七、八は、病弱者で体力のない入院者。

自分は一で、まだ若い（二十歳）。体重は減っているが炭坑の穴の中は暖かい。腰にバッテリーをつけてヘルメットにランプをつけ、石炭を掘る体力はまだあった。鉱山の穴を奥へ奥へと石炭を掘って進む。穴は人間が漸く立てる位の穴で、線路を引き、トロッコ積んで地上へ運び出す。穴の中で作業するのは、ロシア人の労働

者の指導で日本人、ドイツ人、ユダヤ人、白系ロシア人の皆捕虜。

穴の中は真つ暗でランプの光で照らす、掘り起こしているところのはしの先がピカピカに光っている。他国人と一緒の穴の中で仕事をしていると、あちこちでピカピカ光るので本当に地獄のような毎日の作業。

坑内の奥へ進むにつれ、落盤しないように柱を組んで奥へ進む。穴の中は真つ暗、落盤したら必ず死ぬ。たまたまそんな現場も見た。いつ、どんなことが起こるか分からない炭坑作業、命がけの仕事、でもよいこともある。

第一に穴の中は暖かい、寒さ知らず。

第二に重労働のため食糧(パン)が多い。

鳥取県 原中宜夫

そのうち作業に出ることになった。行く先は炭鉱である。ライチハの炭鉱は露天掘りで、街の四方に広がっていた。そのうちの一つ、収容所の南部に広がるトーキンスキーと呼ばれる炭鉱で作業は始まった。

作業は、丘陵地帯原野の表土を巨大な電気ショベルが取り除き、その下に現れた炭層表面の清掃作業で、板もつこを使い二人一組で炭層表面の残土を運搬除去するのである。作業そのものは至って単純なものだが、空きつ腹抱えての作業では仕事がかどるはずもなく、休み休みで仕事をすれば、現場監督は「ダワイ、ダワイ」とせき立て、警護兵まで「ダワイ、ダワイ」と追い立てる始末、仕方なく嫌々仕事を続けるしかなかった。加えて、古年次兵達は我関せずと焚き火のお守りばかり。ここでも初年兵の悲哀は続いていた。初めて「ダワイ、ダワイ」の言葉と、その意味を知った。最初に覚えたロシア語であった。

こうして毎日同じように「ダワイ、ダワイ」の繰り返して炭鉱作業が続いていった。

作業場帰りにはみんな、石炭の塊を両脇に抱えて帰った。幕舎に一つあるドラム缶ストーブの燃料である。冬ごもりには幾らあっても多過ぎることはなかつ

た。石炭は結構重かったが、皆我慢して持ち帰った。時には厳しい監督もいて、炭鉱の出口で全部置いて行かせられることもあったが、大抵は大めに見てくれた。た。

神奈川県 北澤治雄

作業と言うには余りに酷薄な労役であった。それは、鞭をもって馬を追うよりもひどい処遇だった。この労働者の祖国には作業に関する作文はあったが、それは現実の労役とは全く関係がなかった。ノルマというものが綿密にできていて、たとえば穴を掘る場合、土質が粘土か石まじりかなど、細かな条件が設定されてはいるが、現実には全く作文である。

炭鉱の実情で言えば、各鉱区にナチャルニツク(監督)がいて、彼らにとっては指示された炭量が決定的な重さで要求される。達成されないと、翌日はシャベルを担いで一ラボーチ(労働者)として炭を掘らなくてはならない。したがって私たちに強引に要求する。たとえば、その鉱区は水が多く湧き出して水浸しになって掘つても量が出ないことや、炭層が薄くて量が出ないことがあっても、まず手加減はない。八時間労働は十二時間労働になることもあった。しかし、これは後に多少は正されるようにはなった。

手袋や防寒帽、靴の修理をして、十一時には出発。坑内は油壺のカンテラが頼りだからこれを整備して十二時には現場で交代しなければならぬ。

番立ちは十日ずつの交代だが、五日もすると顔色は青黒くなり目がくぼんで亡者みたいな形相になってくる。幸いここはガスが全くなかったが、落盤がときどきあつて、半畳くらの石の下で手足をびくびくさせながら死んでゆく仲間もあつた。

以上が炭鉱作業の大体であるが、最も情けなかったのは、飛び込み臨時作業で原木おろしがある。これは坑道の支柱に使う坑木の松の原木が五十トン貨車に入ると、夜中だろうが雪だろうが、そのとき宿舎にいる者はかり出される。

茨城県 須藤富之助

いよいよアルチョモフスクの收容所の強制労働が始まった。

まず第一、石山の作業である。ローム(鉄棒)、十字くわ、金矢、ハンマーを手にして毎日毎日石山へ送り込まれた。精神的にも体力的にも苦痛であった。ソ連の社会主義のノルマの強要である。

九月末ごろともなれば、ウクライナ地方も寒気が増し、初冬を感じさせられる季節となった。我々が入所したときは夏の衣服であった。日中はまだしも朝夕においては大分しみるようになった。

三百人くらいの人員を二台か三台くらいのトラックで往復輸送する。ノルマを完了してラーゲルへ帰るには順位があるから、後の方にもなると夜中になるようなこともあるし、ソ連の国産車の性能が悪くマツチ箱のような車で故障をすることがあると大変なことになる。夜の十時過ぎに帰って食事をするが、真っ暗いところで何が何だか分からない食事をすることになるのである。

山梨県 渡辺長治

ノボシビルスクはアルタイ山脈の銅鉱掘り出しの鉱山の街で有名な銅山であり、ソ連では戦前盛んに掘り出したが一時中断、終戦と同時に、ドイツ人捕虜、日本人捕虜を人夫として酷使していた。宿舎は丸太積み重ねのログハウス。半地下式の大きな建物で、日本の木造兵舎の大きさ、二段ベッドの板敷寝台、真ん中が通路で入り口、出口にストロブ(石炭)があつて暖をとるが、冬は寒気が厳しく夜は寝られない寒さだった。一棟に一作業中隊(百人)が收容所されました。

この銅山は地下約三百メートルくらいの坑口で、トロツコ方式の鉄道運搬。私も日本人は、ハッパで砕いた銅鉱石をトロツコに積み込んだり下ろしたりする仕事。それもソ連の民間人と一緒での仕事なので余りきつい仕事でもなく、ロシア人の温かい気持ちに助けられたり、また、日本軍人さんかわいそうだと、黒パンや煙草を恵んでくれたり、重労働の中でも助けられて感謝してきました。

仕事は十五人一組となり、毎日十組百五十人ずつの三交代、八時間労働でした。地下に入れば真冬でも一〇度くらいですから、地上の零下三〇度に比べれば大変なものです。地下には鉱塵が多く、胸の病氣(塵肺患者)が多く出ました。それでも病人は休養室に入れてくれたり、重病人は病院(入院も認められたので、收容所内は割合明るい生活ができました)。

山梨県 岩沢一男

アルチョムは露天掘りで有名な良質石炭の採取場でしたが、戦争中ソ連囚人を使い、次はドイツの軍人捕虜、次いで私ども日本人捕虜を人夫に使うということでした。收容所は半地下式の丸太積み造り(ログハウス)の棟が十棟も並び、周りには有刺鉄条網四面に、二階建の望楼から衛兵が銃で監視するという厳重さでした。

一棟に百人くらい居住。三段式ベッドで、一人の居場所は畳一畳ほどの広さです。すから全くウサギ小屋でした。

收容所には二千人くらい收容され、一組百人単位で三交代で入坑、地下六十メートルくらいの坑穴で掘削、トロツコ貨車に石炭を満載してソ連人の運転で外に運搬するという方式です。ソ連の地方人と一緒です。すからノルマに追われることもなく割合気楽に働きましたが、地下採炭です。すから粉塵が多く肺に入り病人が続出しました。

滋賀県 川清一

ほどなく本格的な石炭掘り作業に入った。採炭作業はシヨベルカーによるものと手作業によるものに分けられていたが、日本兵は後者をやらされた。手掘り作業は「土の取り除き組」「石炭掘り組」「運搬と貨車積み組」などに大分されていた。石炭掘りは、土を除いた炭層をロシア人がダイナマイトで爆破すると、先の丸くなった鶴嘴で掘り起こす。それを貨車に積み込む。貨車のレールの取替えな

ど一連の作業が続いて、二十両の列車を編成して仕上げとなるが、すぐ次の作業に取りかかることになり息つく暇もなく作業が続く。寒い風が吹きすさび、手足がしびれ、鼻水が凍って痛くなる。自然と動作が鈍くなると、すかさずソ連兵が銃を構えて「ダワイ、ダワイ、ビストラ」と追い立ててくる。

埼玉県 菊田鎮男

私のいた炭鉱は二十四時間を三交替でやったわけです。私はちょうど二番方と言いまして、夕方四時から夜中の十二時まで。比較的楽な時期だったんですけど、でも、そこでもうしまいには階段を上がるのに、足を持ちあげないと、上上がれないんですよ。兵隊と兵隊が階段でぶつかって両方倒れるんですよ。でも、炭鉱の穴の中に入るとびしっとするんです。人間の精神力ですごいものです。それで、炭鉱の柱がミシミシシツ、石炭がガタガタとおこちているところでも、やっぱり一人ノルマが八トンです。ソ連の独ソ戦争の捕虜一人と私ら抑留者は四人、五人がチームなんです。五人で一人八トンですから四十トンですよ。四十トンをつまみで運ぶのがノルマなんです。日本人は頭がいいですから、最初のうちはこの爆破された石炭をうまく積んで、たちまちトロッコをいっぱいにして送り込んだわけなんです。途中でトロッコが地上へ行くまでにとろとろとろ行くうちに、だんだん石炭は沈んでいっちゃう。ですから、百トン貨車で百杯分トロッコに石炭を入れれば、百トン車がいっぱいになるようなシステムがある。日本もそうでしたよね。上に高いところにトロッコで上げると、下に貨車があって、そこいっぱいになる。ところが、四十杯入れてもいっぱいにならないんですよ。日本人はずるをしているから、半分しかいかない。そのうちに親方に怒られまして、日本人はヒートリーだ、ごまかすばかりだと。それからまじめに入れるようになりましてけれども、そんなことをやっているうちに、毎月毎月、今月のハラショーラボーターというのが発表されるんです。二十人ぐらい発表されるんです。今月のハラショーラボーターはだれだと、ずっと名前を書かれて。幸か不幸か、私

の名前は毎月書かれましたね。

福井県 白崎峯男

二カ月ぐらい過ぎて第九炭坑作業に変わりました。作業編成は採炭、二十四時間稼働するので三区に分になる。一番は八時より十六時まで。二番は十六時より二十四時まで、三番は翌日八時まで。一回に約百五十人入坑する。十日ずつで交替でした。

半年ぐらいは入浴は全くなく、シラミやノミがわき、発疹チフスが流行し煮沸消毒をしました。予防注射も二回しました。日本人向きの鉄板風呂も作ってくれたので入浴する事が出来ましたが石鹸はありませんでした。坑内の入口はエレベーターもなく、鉄製のランプで傾坑百五十メートル歩いて入りました。

坑内は古く、一トン入りのトロッコに石炭を積み、毎日八時間、厳しい監督がダワイダワイと言って炭坑の作業が続いた。作業量にはすべてノルマがあり、日本人の未経験者には苛酷なものでした。炭坑作業は給料を二回もらいました。食べる黒パンも以前よりは少し大きくなりました。

日曜日には福井県人会をアングレンの山頂で開きました。二十人ほど集まり、楽しい「ひととき」を過ごす事が出来ました。坑内のトロッコ押しは二人ずつ三区間押しでしたが、線路の継ぎ目が悪く脱線する事が多くて大変でした。ノルマがあり厳しい目にあいました。一生懸命作業をしても落盤で坑道が不通になったり、その他の事故の場合はトン数が出ないためにノルマが上りませんでした。

エレベーターを作るために穴掘りもしました。直径六メートルの穴です。鉄の桶の中へ土を入れて機械で上げ下ろしをしたのです。穴の中の作業はスコップやつるはしで手作業でした。狭いので五、六人でした。いっぱいになったら吊り上げて、空の鉄の桶が下つてくるとまた土や石を中に入れる。円形の型のコンクリートを穴の中に入れてボルトで締めると円形のコンクリートが出来。百メートル余り掘り下げて縦穴を作った。苛酷な労働でした。ようやく簡単なエレベーター

ーが出来上がりましたので便利になりました。それから坑内の仕事は鉄板のコンベアがあり、一トン入りのトロッコに石炭が入る仕組みになっているのでスコップでコンベアに入れました。層が薄いので横に機械を移して取った後は廃坑になりません。狭苦しくて大変な仕事でした。坑内の一番奥にはコンプレッサーがあり、石炭を掘るために一メートルぐらいのねじ穴を六本ぐらい掘り、ロシア人の火薬取扱人が来て火薬を穴に詰め、導火線と粘土を長い棒で詰めて爆破した。一回に五く六トンの石炭が出ますので皆、横穴に入ります。その爆破した石炭を数人でトロッコに積んで運びます。この様な事を繰り返していましたが、週一回の休日には碁や将棋をして遊びました。碁や将棋は皆の手で作ったものですが、これが唯一の楽しみでした。

露天掘り炭坑開始

千葉県 堀越宗悦

一カ月遅れて入所してきたのは、やはり終戦直前北支より入満した陣六十三師団の一部の一千人と関東軍司令部の八百人、計二千八百人が第八ラゲルへ収容された。

チエレンホーボには以前からシトリナヤ坑内炭坑等数箇所あったと思われるが、新たに街より四キロぐらい離れた白樺林の伐採から始まり、穴掘りと二人用の板の「モッコ」で土運搬の八時間の重労働、朝食はエンバクのお粥、中蓋すりきり一杯の少量で、満腹感は更になく、昼食用の黒パン少量も二食分食べてしまい夕方四時まで飲まず食わずの連続であった。

地下二メートルも掘ると真っ黒な石炭の様な土と変わり五メートルぐらい下は無尽蔵の良質の石炭であった。十月末より本格化された露天掘り作業は三交代替制となり、八時から十六時、十六時から二十四時と、特に夜の十二時より明日の八時までの深夜作業は骨身に応え厳しいものであった。飢餓と過酷な労働で体力はみるみる消耗。衛生状態も極度に悪く虱と南京虫による伝染病が

大発生。赤痢、発疹チフスと栄養失調の追い討ちで友はバタバタと倒れ、収容所の谷鉄馬連隊長「関東軍司令部」出身と我が弘の二〇五大隊長が相次いで亡くなられた。この発疹チフスで星野部隊長は四〇度の高熱で意識不明となりソ連軍医が薬と偽ってウオツカを口に注ぎついに他界された。部隊長だけは軍服を着たまま木箱に入れて埋葬したいと再三の願いでようやく許可された。部下思いの部隊長の死は収容所内、弘部隊の全員に大きな悲しみと一層の不安を募らせた。

疲れ果て収容所へ帰れば更に次の仕事が続いていた。亡くなられた友の埋葬です。ロスケがハツパをかけてからの穴掘り作業、馬櫓に積み重ねられ運ばれてきた骨と皮に変わり果てた十数体の遺体はカラン、カランと音がする。花も線香もなく合掌作業は夜明けまで続いた。この埋葬作業は十一月から一月ごろまで健康な者で毎日交替で行われた。この間に亡くなられた人、「ジマ」の地方病院に入院された人が併せて九百人以上にも及んだといわれた。

ついに盲腸患者と変わり果て

収容所内は伝染病も治まりシベリアにも春の兆しが見え始め、雪解けの始まった五月、作業から帰り、深夜の腹痛と吐気の繰り返し発作があり、翌日は同僚に担架で医務室へ運ばれ診断を受ける。医務室には関東軍の盲腸博士と言われた綿谷軍医大尉が「直に手術だ」と言っても、収容所付のソ連軍医は局部を温めて一昼夜様子をみて手術はそれからだと、綿谷軍医と言いつ争っている様子が伺われ、ソ連の医学の遅れを痛感した。

島根県 塚田信雄

ラーゲル生活と炭坑労働

ライチで我々を迎えたのは「日本新聞」で、洗脳された民主運動で、赤旗と革命歌の波であった。かつての将校は「特権階級、反動分子」として糾弾され、別棟で生活し労働していた。

（コライチハ市（ライチヒンスク）は数十キロ四方、どこを掘っても石炭が無尺蔵といわれ、人口約五万、東シベリア有数の露天掘りの炭坑街である。また、ラーゲリ内も大集会場、バザールとサナトリウム、病院等の施設も完備している。その反面、民主運動も極端に進み、共産主義教育も徹底している。その一例として、旧憲兵、将校、特務機関員は反動分子として名指しをされ、大衆の面前で自己批判させられる。日本兵の中で適任と指導部が認めた者をハバロフスク市前衛学校（共産主義教育）へ六カ月派遣を繰返し、修了後、出身中隊へ帰り、アクチーブと称し、我々を教育する立場になる。いくら作業に疲れても夕食後、彼等の講義を約一時間くらい受けねば「反動分子」のレッテルを貼られ、帰国に影響すると思うからこそ仕方なく受講する。

宿舎は半地下方式で、屋根は丸太で合掌建てとし、板で葺き、その上に土を盛り、所々に煙突が出ており、燃料はすべて石炭で、所内はブレイヤーと同じく二段ベッドであった。我々は二十五人単位にブリガード（作業班）を編成し、日曜日以外は中隊ごとに朝八時に出発して夕五時半ごろ帰ってくる。仕事の内容は、炭面清掃（表土三メートルくらい機械で除去した残土の処理）と線路横行（引き込線のレールを枕木をつけたまま、各自バールを持ち、班長号令により一声に移動させる作業）の二種類だが、食も不満足な我々には大変きつい重労働であった。炭層の表土掘り等、機械を使う技術的な作業は一切ソ連人がやり、我々は雑役だ。採掘する機械はショベルカーで、よく見ると神戸製鋼のプレートが貼り付けてあるから日本製で、撫順炭坑あたりで戦利品として掠奪したものと思う。我々の作業内容は、ショベルカーからのこぼれ土とか、炭面の残土を箒のよな物で箇所ごとに掻き集めすくい易いようにする。仕事はソ連人も共に働き、暖房用石炭を、毎日の事だから少量ずつ担いで帰るのは我々と同様だった。

収容所に大浴場があり、石炭が豊富なたため度々入浴でき、プレーヤー時代が嘘のように思われる。食事もだんだん良くなると同時に、作業ノルマの向上を要求してくる。我々にも糧秣の支給と共に賃金の支払いがあり、ノルマ達成率によつ

て増減があるから、人間として欲望には勝てず本気で働いたものだ。具体的には、それぞれの作業班が突撃隊とか、行動隊の隊旗を持ち、競争してノルマの向上に努めた。

愛知県 高木 昇

作業は石炭掘りの重労働です。露天掘りで、土を二メートルくらい掘り下げると厚さ二、三メートルの石炭の層が現れます。それを掘り出すのですが、僅かの黒パンと乾燥野菜が一切れか二切れ入った塩味のスープだけでは仕事もできません。私達はボタといっていました。石炭層の上に二十センチほどの茶色の層があります。その茶色をした粘土のような物を焼きますと、まるでビスケットを食うようで香ばしく、いつも空腹の足しにしました。シラミと南京虫にはずうつと悩まされ続けました。取つても取つてもきりがありません。石炭の粉で身体も衣服も真っ黒ですが、着たきり雀ですから洗濯もできません。ましてや炭鉱地帯ですから水はよそから馬車で運ばなければならぬ貴重品です。したがって入浴は三カ月か半年に一度で、石を焼いて水をかけるサウナ式です。垢と石炭の粉で黒くざらざらした肌をこすつて落し、手桶に一杯の湯か水で身体を洗い流します。日本でいう、入浴で疲れを癒すなんてことは夢のまた夢でした。

私の炭鉱での仕事は、発破を仕掛ける穴掘りでした。機械はアメリカ製の大きなものが入っていて驚いた記憶があります。とにかくほとんどの者が栄養失調かそれに近い状態で、酷寒といわれる寒さの中でのノルマの達成にこき使われました。

ある日のことでした。石炭を運ぶ引込み線のそばを皆と歩いているとき、列車が入ってきました。すると一人の戦友が貨物列車めがけて飛び込み自殺をしたのです。

千葉県 堀越宗悦

露天掘り炭坑開始

一カ月遅れで入所してきたのは、やはり終戦直前北支より入満した陣六十三師団の一部の一千人と関東軍司令部の八百人、計二千八百人が第八ラゲルへ収容された。

チエンホーボには以前からシトリナヤ坑内炭坑等数箇所あったと思われませんが、新たに街より四キロくらい離れた白樺林の伐採から始まり、穴掘りと二人用の板の「モツコ」で土運搬の八時間の重労働、朝食はエンバクのお粥、中蓋すりきり一杯の少量で、満腹感はなく、昼食用の黒パン少量も二食分食べてしまい夕方四時まで飲まず食わずの連続であった。

地下二メートルも掘ると真つ黒な石炭の様な土と変わり五メートルぐら以下は無尽蔵の良質の石炭であった。十月末より本格化された露天掘り作業は三交替となり、八時から十六時、十六時から二十四時と、特に夜の十二時より明日の八時までの深夜作業は骨身に沁え厳しいものであった。飢餓と過酷な労働で体力はみるみる消耗。衛生状態も極度に悪く虱と南京虫による伝染病が大発生。赤痢、発疹チフスと栄養失調の追い討ちで友はバタバタと倒れ、収容所の谷鉄馬連隊長「関東軍司令部」出身と我が弘の二〇五大隊長が相次いで亡くなられた。この発疹チフスで星野部隊長は四〇度の高熱で意識不明となりソ連軍医が薬と偽ってウオツカを口に注ぎついに他界された。部隊長だけは軍服を着たまま木箱に入れて埋葬したいと再三の願いでようやく許可された。部下思いの部隊長の死は収容所内、弘部隊の全員に大きな悲しみと一層の不安を募らせた。

疲れ果て収容所へ帰れば更に次の仕事が続いていた。亡くなられた友の埋葬です。ロスケがハツバをかけてからの穴掘り作業、馬糞に積み重ねられ運ばれてきた骨と皮に変わり果てた十数体の遺体はカラン、カランと音がする。花も線香もなく合掌作業は夜明けまで続いた。この埋葬作業は十一月から一月ごろまで健

康な者で毎日交替で行われた。この間に亡くなられた人、「ジマ」の地方病院に入院された人が併せて九百人以上にも及んだといわれた。

滋賀県 村木庄蔵

初めの間、おつかなびつくりで異国人に接したが慣れてくると民間人も珍しいのか煙草をくれる人もいた。二十年十一月に入つてそろそろ種々な使役が出て来た。

まず雲母鉾山の採掘である。ラーゲルの中は雲母の山でいっぱい、雨が降ると濡れた雲母が夜に警備灯の光を受けてキラキラ光つてきれいである。裏に大きな川が流れていて、そこに運搬する使役で分隊から二、三人ぐらい毎日出て行つたが、私は耳が悪くて作業を休ませてもらった。雲母の中には時々地下足袋や色んな物が隠されてあった。皆、取り上げられるのを嫌がった作業である。

十一月に入つていよいよ作業に従事しなくてはならなかった。一部の者は既に雲母鉾山に入つて作業に従事していた。医務室より退室した私もしばらくすると交替要員で作業に出るようになった。

鉾山はラーゲルより三十分ぐらいの山の中腹にあり第一作業場である。第二作業場は奥山の頂上で四十五分ぐらい歩き、その後板の階段を登らなくてはならなかった。皆、野菜不足で脚気を病み、徒歩は困難を極めた。しかしソ連軍医は腫れるか凹む脚気以外は認めず、神経痛はもちろん、外部に出ない病気はほとんど休養許可なし。神経痛の者は足を引きずりながら作業場に向つた。時々生の丸太を三人で担いで頂上まで持つて登るのだが、階段は垂直で凍つていて滑りやすくなっている中、一組でもバランスを崩せば下に続く者全滅である。登つたときは汗びつしよりだが寒いのですぐ冷えてくる。

昼食は馬車が運んで来た高粱飯を当番が飯盒に移して三本ずつ、両手に六本持つて階段を登るのに一苦勞。登つたときは飯の上部が薄く凍っているので焚火で温めて食事をとる。虱と南京虫によくやられ、特に虱退治にはきりがなく、

皆閉口していた。また湿疹が指の間に出来、スカベースと言われ二度ばかり入室した。

十二月、夜勤で大型鉄製トロコ押し作業で風邪をひき、三九・五度の熱で入室。一週間後退室、また鉾山に戻り、今度は堅坑に入るが、地下百メートルあつたような気がする。真つ直ぐな梯子をカンテラ一つ頼りに三人で、監督にマダムが一人ついていて。中は寒かったが風がないので外より暖かい感じ、しかし底冷えがした。作業は手動巻揚機で、寒いにも関わらず濡襟一枚で頑張った。一人は採掘現場に降り、二人は上で巻揚げをするのである。マダムはノルマ七十回と宣言して、一回巻き揚げる度に石を一個ずつ物入れに入れて勘定していた。マダムはタートル系で、日本に自動車や電車が走っているか聞かれて啞然とした。夜勤で堅坑に入ると時間がわからずノルマ完了が遅れて、外に出ると二時の終了予定が大幅に遅れ、外作業が終了した者が皆揃うまで帰れず待つていてくれた。頂上から見る星は満天の星で、手を出せば届きそうなくらい近くに見えて気分が安らいだ。

時計が無いので北極星を中心に回る北斗七星の場所で時間を計った。

⑤ 建築

高知県 那須忠男

昭和二十二年八月七日、ナホトカ第九地区収容所に入所した。収容所の給与は依然として最低であつたが、心の中では、日本帰国も目前かと希望は明るく、作業は海軍アパートの建設工事場の作業で、日本人の左官を必要としていて、徳島県の人で左官職、その手伝いとして十三人が希望で作業につき、私は助手としてこてを使ったが、全然経験のない私はよく注意され、努力していた。

ある日、ソ連軍の官舎増築に左官が一人入用でと監督同行で作業場に来て、十三人の中で一番の技術優秀者を一人抜いて連れていかれたので大変、左官の指導者を取られ、残った者でこてを使った経験者は一人もない。仕方なく土方に変更を監督に交渉したが、絶対駄目と受け入れてくれない。そこで私は左官技術を勉強するには絶好のチャンスと考え、みなも了解した。

私はこてを完全に使えるという勉強を懸命に努力して、技術面は自分の器用を生かし、作業面は監督の指示に従うという考えで、五月目のある日、私は左官にも大分馴れて、四階の外窓を左官していた。

ちょうどそのとき、モスコより海軍アパートの総監督が視察に見えて、作業ぶりをじつと見ていた。そして現場監督に指示し、日本人の熱心な作業ぶりを高く評価する。そして技術もすばらしいと評価し、表彰せよと指示して帰ったと監督より伝えられ、パーセントは四七%で現場で初めての表彰グループとなり、監督の信用も厚く、私は左官の監督と認められ、素人左官の日本人として恥じることなく、十三人は苦勞の甲斐があつたと喜び合った。

そしてでき上がった四階建てのアパートには次々と入居人が増すという。

岩手県 奥寺信一

建築現場といっても、瓦、ブロック、木造、鉄骨、等々何でも一通り職人の手元みたいな作業をやりました。

ソ連の作業ノルマですが、土方作業が一番不利なようで、技術者は案外ノルマの心配は考えないようであったと思っています。

作業用一輪車(猫車)のことを『ターチカ』と呼ぶのですが、車輪だけが鉄製で外は木製だったので、車の回りがよいのと悪いのが極端であり、ターチカ押し番のときなどは、現場が近くなると車のまわり具合のいいターチカを先取りするため、だれとはなしにターチカのあるところに走り出すのです。そして比較的楽に押せる一台を手中にして作業をしたのです。まことに哀れな現象であったとも思っています。

ソ連では石のことを「カーメン」と言いますが、基礎コンクリートを打込むときなどは、我々の考え以上に大きな石ころを平気で投入するので、夜間作業等のコンクリート打ち込みを行う際は、その付近にある物品を何かにの別なく、だれも看視していない間にコンクリートの中に投入して、ノルマの向上に知恵を働かしたものです。

厳寒時にれんが積み作業現場では、れんがの間に入るコンクリートの練ったのがすぐ凍って固くなりますので、積み手の人にターチカで運んで、そこでストーブのような暖房つき受け皿に移し、それから積み手が取つてれんがを積むのですが、湯気が立ち込むれんが積みは極寒地ならではの風景でしょう。積み上がったれんがは自重で動かないし、いともなく落ち着いて立派な建築物となつて竣工するのです。

鳥取県 村上豊

夜半ウランバートル市、郊外の兵舎に着く。(地下室で寝る、地上は屋根だけ、両壁は氷の柱)作業は蒙古大学の建築工事、零下何十度の中ボイラーの場でセ

メントを練り、背負い子を運び、れんがを持つて待っている者、セメントを流せばさつとこで平らにし、その上にれんがを置き、その繰り返し繰り返しで積んでいく。雑な仕事に驚く。数か月後に他の収容所に二百人くらいで移動される。君たちは、国家賠償のために働いてもらうのだと言ひ渡された。

滋賀県 村田英信

やっと気温も上昇して温かく感じる季節になったころ、収容所内にダモイ東京の話題をソ連兵たちが我々に呼びかける。本当とは思えないが、これで帰国できればとだれもが淡い希望を持つようになったころ、移動が始まった。列車に乗せられ五時間くらいで下車させられ、今度は丸太でできた収容所に入る。

ここでは毎日建設作業に従事する。丸太づくりの建物を幾つも建てさせられた。ソ連兵士の話では、ここは新しいシベリヤ鉄道が敷かれ、駅舎と関係の建物とのこと。内装の壁塗り等は夜間作業で、土に石灰をませ合わせ、道具なしで掌で土を塗り、枝で平にこすつてでき上がり。

東京都 青木貞一

私は、れんが造り住宅の建築作業に回されたことがあります。現場は寒風吹きすさぶ平原の一角で、大きなかまどの上のドラム缶にグラグラと湯をわかします。その熱湯でセメントを練る者、セメントを運ぶ者、れんがを積み上げる者、作業は大変困難なものでした。

熱湯のセメントが冷めないうちにれんがを積み上げなければなりません。

島根県 大谷昭

化学工場の工事が一段落して、今度はラーゲルに近い丘陵地の建築工事に取りかかった。

基礎の穴掘りが大変であった。

ソ連の現場監督がつくった「縄張り」の基礎は十メートル×二十メートルくらいだが、基礎の深さは二メートルにせよとの指示である。

土も凍っていて、ツルハシを振り下ろしても岩のように固く、はね返ってくる。

トラックでたき木が持ち込まれた。基礎づくりの場所でたき火をして土の凍結を解き素早く掘る。二十秒も掘るともう凍りついて掘れない。今掘った穴の隣でまたたき火をする。掘っている時間よりたき火をしている時間が長いくらいだから、トラックで運んだ木は一日ももたない。

一か月くらいすると、監督がハシヨの合い図を出す。次はコンクリート打ちだが、これも大変である。トラックで運ばれて来た氷まじりの水をドラム缶の釜で湯をわかす。砂を焼くため分厚い鉄板で釜をつくり、湯気の出るほど砂を焼いた。漬物石のような大きなグリ石、湯気の出る砂、そして沸騰した湯とセメントでコンクリートをつくり一輪車で基礎の中へ流し込む。下手をして火傷する者もあった。

ソ連の基礎工事はこうして寒期に行うのだが、それは穴掘りをしたところが凍っていて土が崩れず、土どめ板など要らないからだと気づく。四十人くらいでこの基礎工事が三か所でき上がった。

気温がプラスになるころには、一棟のブロック建ての兵舎の形ができた。

岩手県 田辺壮久

次は建築工事である。セメントと石炭穀練り合わせでつくるブロック作業、床掘り、五階建てブロック積み、モルタル練り、天小板枠づくり、同据え付け、鉄筋組み立て、壁塗り、すべて我々素人の日本兵士の作業である。図面を見てもよくわからない。ソ連の監督とは言葉が通じない。資材が不足する。それぞれの作業種ごとにノルマがあり、工程が上がらないとして残業させられることが多く、どこも収容所でも苦勞の連続であった。

冬期は湿地の建築工事の床掘りと基礎工事が多かった。土は一・五メートル

も凍結している。ツルハシと金棒で掘るのだが、カチンカチンに凍結していてツルハシがはね返えされる。

ノルマは二立方メートルである。あたりの老朽古材を探し、燃やして採暖がてら凍土を溶かし、スコップで掘り上げると効率がよいが、なかなか古材は見つからない。

ノルマの達成が果たせないときは、減食となり、黒パンは軽く、スープは薄い。

北海道 石川朝雄

鋸とタポールとで建物が建つのである。作業指導員の言うとおりの丸太で収容所を建て天井はやはり丸太を並べるので落ちないはずだ。屋根は主に落葉樹ばかりの太い木を四十センチくらいの長さに切り、幅二十センチくらいのものを台に乗せ、刃が三十センチくらいのついた四メートルくらいの根元につけ、先の方で四人(二人は押す、二人は棒の先に綱をつけて引張る)くらいで、厚さは桎の厚さに一回一回引つ張るとちょうどよい桎になる。これを屋根に張つて、釘は古いワイヤをほどいて真つ直ぐに伸ばし、古いタポールの刃の上にし、この伸ばしたワイヤを斜めにタポールの上に置き、上から金槌でたたき(長さ三センチくらい)と一本の釘が出来上がる。これで桎と釘ができることになる。次に丸太を積み上げた家の中から、外壁はこれも落葉の木を長さ七十センチ、幅二センチ、厚さ二センチくらいに割り、この壁に釘で打ちつけ、それに粘土質の土を打ちつけ表面を平たくならし、乾燥したところ石灰を水で溶かして白くなったのをはけで塗る。そうして内外壁ができ、部屋のうちは両側に上下二人ずつ寝る寝台をつくつて出来上がるということになる。

神奈川県 新谷俊男

何か技術を覚えなければ雑役に回されるので、私は左官になることにした。

左官のノルマは天井が十八平米だと思ふ。下塗り、上塗りまで仕上がりとなるの

だが、難しくノルマは達せられなかったが、技術を覚えたのはうれしかった。冬の左官は、窓は板張りにし足場の下で暖炉をたき凍らないようにして作業させられた。

新潟県 宮野 泰

作業は石づくりの建築の仕事であるから、相手は切り石、れんが、砂、セメント等重いものばかり、石材の切り出し、製材、石灰岩を切り出しての石灰焼きと重労働も多かった。田村隊長の強引ともいえるソ連側への注文が功を奏して、食糧事情や居住条件等も改善され、何よりも温暖な気候も幸いして、多少の病人は発生したものの、帰国まで一人の犠牲者も出さずに済んだ。

福島県 村上 武

建築は主に駅舎と鉄道員の宿舎である。駅舎は煉瓦造りで、煉瓦四枚の厚さで積み上げていくが、従業員の宿舎は木造であった。主にカラ松を使っていた。丸太の皮を剥ぎ、柱に溝を掘り、横木を嵌め込んでいく簡単な作業で、手斧と鋸でほとんど事が足りる。壁は木を三センチぐらいに割り、さらに二センチぐらいに割って板棒をつくり、横木に三十センチぐらいの「ダイヤ」の型に釘で打ちつける。そこに壁土を塗る。もちろん横木の隙間には苔を詰める。壁の内外の厚さは四十センチほどになる。壁が乾けば石炭を溶かして塗る。屋根は木端葺きである。裏板は木材を並べて壁土を上げる。内装の壁は前述の要領と全く同じである。わずかな暖炉で部屋は暖まる仕組みである。

サボれば何をされるかわからない。ソ連人も五カ年計画遂行のため気が立っていた。毎日毎日精魂尽きるまで働かされた。

滋賀県 南部高恒

何日かすると建築の方へ回される。左官の仕事なんてやったことがないので、

うまくできるはずがない。三人一組になって何平方か積み終えて、夕方検視に来た者が、ここが曲がっているとわざと足でぶつ壊す。ブツブツ言いながらやり直した。できるまで帰つたらいかんと言う。つまり「プロホーラポーター」になる。

このころになって、現場の往復に「アカハタ」の歌を合唱しながら現場まで行くようになった。空腹と疲れで声も出ないが、日曜日のつるし上げが怖いから仕方なくついていくのだった。

和歌山県 山本良市

昭和二十一年秋ごろからのラーゲルはウランバートルに移った。ここは暖房も石炭も使えて住み心地はよかった。作業隊では建築全般の作業班に分かれていて、私の班は左官仕事を担当させられた。「木摺打ち」と言つて、細薄板を壁骨や天井骨に小クギで隙間を少なく並べて丹念に打ち止める作業で、最も時間を取られ疲れる仕事だ。

次に「モルタル塗り」と「仕上げ塗り」や「吹き付け」の化粧仕上げまで、建物一棟ごとに移つて働いた。建物は一般住宅が主で大きな劇場も建てたが、次第に要領が良くなり、出来上がりが良いと褒められることもあったが、食糧給与は相変わらず少なく空腹続きであった。黒パンとスープの給食二食分を受け取つて朝食に全部食べて満足感を味わい、昼食時は水を飲んで耐える者が続出していた。他の班では石工班と言つて基礎用石を切り出し、叩き揃えて並べる作業だが、ほとんど毎日のように夜遅くまでノルマ不足で帰してもらえず、常に空腹と疲労で苦しんでいると聞いた。その他、煉瓦工場へ行っている組や種々の班があったようだが、詳しくは知らされなかったし、当初戦友であつて抑留地まで一緒だった友だちとも別れてしまつて、どこの部隊から来たのか、何と名乗っているのか分からない人へ次から次へと仕事の相棒が変わつていくため、仕事場では話し合つて一日を過ごすのが、心を割つて付き合える友人ができず、一緒に働いた者の名も忘れた。

「働かざるもの食うべからず」の鉄則で叩きのめされたと思っている。

熊本県 本田正行

昭和二十年九月二十七日、沿海州スーチャン地区チグロワヤ村にて、苦難の生活が始まったのである。

兵舎建築

我々は人員点呼後、ソ連兵の誘導で一キロくらい歩いた所の小部落側の雑木林で野営した。翌日、旧森林鉄道のレール沿いに五キロくらい山の中に雑木林を踏み分けながら前進した。その晩は携行の天幕で野営したが寒さが厳しく眠れなかった。

翌日、幕舎の中央に溝を掘り、煙道を作り、入口で薪をたくことにした。幕舎にも木の葉や草を覆いにした結果、幕舎内はいくらか暖かくなった。まず、兵舎造りを急がねば雪が近い。二人挽きの鋸と斧とが渡され、材木伐採をする者や半土中家屋のため山の斜面を利用して穴を掘るなど大忙し。各中隊競争で兵舎造りが始まった。壁も屋根も丸太だ。屋根はその上にモミの葉を敷きつめ土を盛って出来上がり。各分隊の上は煙出しの小屋根がつく。

中は二段式寝台、これまた丸太を並べるだけ、その上にウラジロのような葉を敷き、二人で一枚毛布を敷き、一枚は着る。中央通路には石と土でペチカを作る。各分隊二階の部分に両側に小ガラスの窓を作る。わずかな光が入ってきた。夜の採光は針金で網を造って、肥え松を小さくして当番が燃やした。幸い松の根は豊富だった。翌年の雪解け時期になると、天井から泥水が落ちてきた。携行天幕のない者は木の皮をはいできて裏張りしたがうまくいかない。そのうち、松、モミなどを五十センチに輪切り、斧で割って薄板(ドラッキ)を作って張っていた。釘はないので鉄条網を間引きして五センチくらいに切断し、各人何本とノルマ。作業から帰ってからレールを台に石や斧の後ろで叩き伸ばして代用釘を作った。

岩手県 金野秀雄

労働は製材所建設とのことで、基礎工事である。三十〜四十センチメートル掘ると、七月末なのに、昔からの凍土であろう、コンクリートにツル、シを下ろしたごとくで全く受け付けない。ノルマには変わりなしだ。そこで焚き火をして溶かしながら掘ったのだ。製材所工事は途中で止め、今度は収容所近くの丘に労働者用のアパート建設に取り掛かり、二階建て四棟、個人家屋七棟などを建築した。

建築大学出身の女性技師(タマラ)より私は設計図を作業小隊長として渡されたが、理解ができず、通訳と共に随分苦勞した。基礎から煉瓦積みやブロック積みなど、ノルマは厳しいが、個人人としては勉強にもなった。ノルマは、いつも百パーセント〜百二十パーセントに達していた。ハバロフスク市内の市民家屋の修理にも指名され出掛けたことも何回もあるし、サハリンから輸送されて来た雑穀や白砂糖などの積み降ろしにも行ったが、このころは監視兵も何も言うことなく、人員の把握のみだった。

和歌山県 面家一博

十数日かかって二十年十一月の初めころにバイカル湖南岸の「ウランウデ」に到着し下車した。

収容所はあまり大きくない棟二棟で、狭いながらもそこで起居することになった。

二日目から宿舎を建て増しする工事に掛かる。山に行き原木を切ってきて骨組を建て、壁は二重に板を張って、その間に「おがくず」や雑草、土などを詰めるのであるが、後で春になって詰め物に雪が混っていたので融けてすき間風が入ってきたものだ。新しい二棟が出来たのでゆつくり眠れると思ったが、やはり古い宿舎の方が寒さ凌ぎには勝れていたようです。

島根県 星野好夫

ハバロフスクの作業は主として建築作業で、中でも冬季の穴掘り(幅一メートル、深さ四メートルである)、四メートル中一メートル半は凍結しており、鶴嘴を打ち込む度に火花を発し容易に作業ははかどらない。鶴嘴は日本軍の工兵隊が使ったと思われる両方尖ったもの。一日の作業が終わると必ず鶴嘴を修理する鍛冶場に持ち寄り、明日の準備をせねばならない。

一メートル半を過ぎるとやわらかな土となり大助かりで、四メートル掘ると二十メートルくらいの丸太が穴にはめられ建築の支柱となるらしい。埋め戻す際、砂と土と雪でやった。その後どうなっているか知る由もない。

どこでも建築には大工と左官が必要であるように、ソ連でも大工、左官を求めていた。本職の者、未経験者を問わず、志望する者、研修を希望する者は優先して採用され、大工、左官の下回りをさせられた。これらの作業は一般の雑役の作業より軽作業で志願者も多く、後々では本職に変わらぬ技術を身に付ける者もいた。これらは、ひいてはソ連側もノルマが上がり、優良作業班となって優遇されていたと思う。

建築は主に軍民の官舎が多かった。ハバロフスクと言えば極東の重要地点で、これからは極東首都指令部にも価値するものとも思われ、建築熱は夥しいものがあった。

新潟県 片桐貞夫

転属させられた私たちは先乗りをして、後から来る者たちの兵舎を造るのが仕事の中身だと言われた。丸太造りの小屋の青写真の図面を見せられた。どれもが図面が読めないということで、結局私が作業班の責任者ということだった。

十五人くらいのグループを作る。材料は周りの材木どれを切つて使つてもよいということだった。工具と言つてもノコギリと斧しかない、しかも大工の経験者は

いるかと聞いてもだれもない、大変なことになったと思いつながら、翌日から材料の伐採に入った。

一体どうなることかと心配したが、一月月くらいで丸太造りが一棟出来た。ソ連の少佐が良くできたとはめていた。いままでの仕事と違って、この仕事はそんな重労働ではなかった。入村するときに残した仲間がいつ来るかと心待ちにしていたが、とうとう来なかった。

秋ごろまでに十棟ほど出来上がった。一棟は入浴場だった(浴場と言っても、湯を沸かし、みんなが桶一杯の湯をもらって行水するだけ)。

自分たちの造った小屋に住むことになった。一棟三〇人くらい入れる建物だった。素人の集まりでよくこんなことができたと自分でも感心した。やる気になれば何でもできるんだなーと、いい経験をした。

島根県 景山利造

早速、翌日からは分担により作業にかかる。既に厳冬期に向かっているので、抑留棟の建設が急務である。まず地下一メートルから一・五メートルの穴を掘り、山から木材を切り出し、その掘った穴の上に屋根状に丸太(十センチ径くらい)を並べ、その上に掘った土を二十センチくらいかける、古代の竪穴式住居のような土饅頭形の棟(一棟三百人くらい収容)を五棟建築した。屋根に明かり取り窓を四カ所、外壁にはなかったと思う。まさに穴蔵そのものであり、昼でも暗くて話にならないが、天幕舎よりは暖かく感じた。^{ヒデ}

あまりの暗さに、伐採作業の折につくつておいた肥松を持ち帰り、これを缶詰の空き缶で少しづつ燃やし照明としていた。これを各班各所でそれぞれ燃やすものだから、穴蔵式の我が住居はたまつたものでなく、まるで火事場の煙を吸っているようで誠に情けない原始的な生活である。作業に出て疲れると、真黒いのが午前中くらい出たものだ。

宮崎県 宮川建三

キヤマ収容所を引揚げ自動車で五時間ぐらい走り続けた。やはり山の麓らしい所は見当らなかつた。鉄の寝台が待っている所だと言われていた、フェルガナ収容所に着いた。ここでの作業はアルコール工場建設で、一期工場は完成し運転中、私たちは二期工場建設だった。製造方法は綿の実から油―脂肪麦―石鹼としている。殻と綿毛を蒸して硝整処理してプレスする。アルコールを精留する方法で、これから飛行機用の潤滑油をも造るのではないかと思われた。

最初はベトン作業、これは実に重労働作業である。砂や砂利にセメントを入れ、シリカリチートを入れてミキサーを回す。ミキサーの運転手はソ連の女子だった（恐らく何かの犯罪を犯しこの地域に回され、フェルガナより外には旅行できない人たちののだ。しかし本当に良く働き、体力もあり元気なものだった）。一輪車の猫車をターチカといい、あらゆる作業にターチカが利用される。これにコンクリートの混ぜたのを一杯入れて押すと、初めは腰がふらつき良く押せなかつたが、だんだん上手になった。中村班という作業班だったが、若い二十四、五歳の者と元気に三カ月本当に必死に努力した。ノルマを出すためにやかましく言われて頑張ったところ、体力が一級だったのが急に三級になった。見るからにやせてきてきて、医者が見てお尻の肉がほとんどない者は三級の体力という事だ。それ以下は〇ズ（オーカー）といい、入院かまたは作業に出ないで収容所内で作業に当らせられる。一、二級者は重労働、三級となると中労働だ。石炭降ろし作業に回され、真つ黒になって作業に従事した。二カ月俸給を受けた。七十円程度だった。

新潟県 高橋吉郎

昭和二十年十一月二十日頃から作業に出ることになった。ソ連兵の歩哨宿舎を建てるための穴掘り作業であつた。シベリアでは十一月も下旬ともなれば零下二十五度から三十度にもなる。土は凍土となり、一メートル以上は鉄より硬

く凍結している。この土をルームと言って長さ一・五メートル、直径三センチほどの鉄棒を、ドスン、ドスンと凍土に打ち下ろすのであるが、ピンとはね返つてなかなか掘れるものではない。これを一メートル立方を掘るのが一日のノルマであつた。防寒具で身を包み、自由もきかない。シベリアは太陽がなかなか出ない。どんよりとした曇りの日が多い。バイカル湖の方から霧のようなものが吹いてくると針をさされるような痛みである。いても立ってもいられないほどの苦痛である。身体に力を入れて掘ろうとしても、毎日与えられる食料は腹八分目どころか半分にも満たない。満州で過ごした体力がまだあるので辛うじてこれに耐えられるが、一日八時間労働で昼の時間一時間休むことしかできない。歩哨もつきつきりである。手を休めると、マッセル（監督）が来て、ダワイダワイ（やれ、やれ）と足でけとばしたりする。わずか一時間がとても長く感ずる。まさに生き地獄であつた。一日の重労働が終わつて収容所に帰つても水のようなスूपに黒パン二百グラムである。着のまの横になって死んだようになって眠るのである。

岡山県 田中一司

家屋を冬期に建築したことがあつた。まず穴掘りで、凍結しているのでなかなか掘ることができない。ノルマがあるので監督の隙を見ては穴のなかに柱を立て水か小便をかけると一本立ち上がる、周りには雪をかけてでき上がり。それを何回か繰り返し返すうちに柱が立つ。柱に溝をつけて壁の代わりに丸太を並べて出入口を除き全部並べる。窓などはない。天井も同じ。隙間には苔を詰めて塞ぐ。屋根などはない。ほとんど雨が降らないからだ。あるとしても簡単な勾配で、松の木を一尺ぐらいの丸太に輪切りにして縦に割つて薄く削り、それを針金の釘で打ち付ける程度で、丸太の周りに馬の踏みわらや馬糞を積み暖を取るようにする。中にペーチカを置き煙突を作り、三段または二段の床を作りでき上がり。何しろ鋸と鉋で作る家なので責任は持てない。夏になる前に移動したいと祈るばかりであつた。

住宅建設

都市づくりのため丘の上に住宅を造る。半地下の住宅はこの地方では適當で、造成が簡單である。

この作業では、①土れんが作り。丘には土れんがを作る赤土が無限にあり、水を一〇〇メートルぐらい運んで来てよく混ぜて、人間の頭ぐらいで適度の硬さにして、標準の大きさの木箱に詰め、木箱を抜いて干し場に運び日干しにする。この土れんがを建築場所に運んで行く。ノルマは一人一日二〇〇個ぐらいである。②土れんが積み。家造りにはまず半地下で、約四メートル四方、深さ約三メートルの土を取り除き、ここに土れんがを積むのである。この場合のノルマは、家造りの構造によつて違うので一律に決められない。③家造り。設計によつて土れんがを積み、その上に横木を渡し、木板を張り、その上に、細い木を張る。この上に、コケラといつて製材所で造つた横一〇センチ、縦三〇センチ、厚さ約五ミリぐらいの用材を重ね合わせて釘付けにする。玄関を適當に設け、窓二つ造り、座を適當に備え、備品は後に詞達するのであろう。

家屋の内部は石灰を塗つて部屋を明るくした。昭和五十一年、三十年ぶりにこのアングレンを訪れた池田幸一がこの住宅を見ている。私もできれば一度訪れてみたいと思つている。

四十五区(ソーロクベアチ 数字の四五)

作業が始まった時は二組と呼称されていた。程なく四十五区となり、昭和二十二年(一九四七)年になつて四十四区と変更された。ドイツの捕虜によつて建築が始まり、交代して日本人が造る建築現場であつた。二階建てのブロック建築だ。職業別に大工、左官、電気工、建具職、鍛冶屋、石工、雑役等の職種が集まり、一五〇人ぐらいが作業をしている。一番多いときには三〇〇〜四〇〇人が作業をしていた。

愛知県 杉浦守市

六中隊はカーミン(石炭ガラとセメントを混合し圧縮して蒸気乾燥したもの)積みが主とした作業で、特に二小隊が担当していた。一小隊はトロツコでカーミン、木材等の運搬。二小隊は石工、左官等の補助としてカーミン・セメントを手元まで運び積みやすくする。三小隊はペント打ちと各種の雑作業。二中隊は大工、建具職で、六中隊が仕上げた外壁、間仕切り壁等の内装を家としてまとめ上げる。

そして一中隊の左官がカーミンの上塗りをする。五中隊は左官のセメント練り。三中隊は基礎工事、各所の整理等、土木雑工事が多かった。

カーミン積みの監督兼職人でトルコ人が直接の作業に関係した。

エフレム爺、セミニーヒ、ダグラスコーク、アレキサソダー、バトラ等、年配の職人であつた。白い山羊ひげが懐かしい。ブイストラ、ブイストラ(早くしろ、早くしろ)と追い立てられての作業だつた。カーミン一個が十五か二十キログラムくらいあつたと思う。背負いに二個乗せて架設の足場を一步二歩と踏みしめながら二階まで上がつていくつらさは、なんとも言えないつらい事であつた。

セメントのモルタル作りも、湯でセメントを練るのだが、十二月の真冬の作業で、モルタル、カーミンと、素早く作業しないとモルタルが凍つてしまう。こんなことで密着するであろうかと心配する。地震でも起ればカーミンがバラバラになり崩れて落ちて建物は倒壊してしまう。しかしシベリアには地震がないので、取り越し苦勞でもあつた。

トルコ人の監督も気立てはよい人であつた。休憩には、マホルカ(刻みたば)の無心をする。度々もらつた。ラジエータ(新聞紙)も度々分けてもらつた。

復員するまでに二階建て二十四世帯のアパートが十二棟完成した。共同住宅になるであらう。

新潟県 小菅稻秋

カンボーイ(銃を持ったソ連の兵隊)がないから「ダバイ、ダバイ」と言われな

「今日は助かった」と内心思った。機材庫へ金槌と釘を取りに行く者、穴のところに薪を集めて燃やす者など手分けて動き始めた。三十四、五人の小隊だったと思う。金網らしき物は五個ほどあったが釘がない。木羽もない。仕事ができないから皆で暖まっていた。小隊長が木羽板を持ってきたが、釘が無いので仕事ができない。マイナス三〇度ほどの寒さだ。午後三時を過ぎた頃、薄暗くなつたが《黒皮ジャンパー》ロシアの收容所所長が来たのが判つたので急ぎ火を消した。「オンチエル！ポチカ・ニラポート！（小隊長！なぜ、働かないのか！）」《黒皮ジャンパー》はカンカンになって小隊長を叱っている。小隊長は釘が無いのと、寒いと言いつけているようだ。「ザクリ・チョネ！（営倉入りだ！）」《黒皮ジャンパー》は小隊長に営倉入りを命じた。

翌日、また木羽打ちの命令だ。小隊長は営倉に入れられていたのだろうか。我々に「ダメイまで我慢しろ。ソ連側は『釘が無い』とは知っている。自分たちの宿舍だ。どうしたら木羽が打てるか努力だ」とソ連側が叱っていたと小隊長は説明してくれた。

我々は皆で相談して、午前中道路に落ちているワイヤーや針金を捜し集め、機材庫で切断と焼戻しをして、午後から屋根に上り釘打ちをした。木羽が凍っていて釘が曲がり、なかなかうまく止まらない。木羽十枚で満足に止まっているのは、一枚くらいだったろう。だが、下から見ればでき栄えは「ハラショー」。

晩の点呼で《黒皮ジャンパー》がまたガリバー（説教した）。

「デキタデハナイカ、ハラショー」

明日は……？また……？？

三重県 太田 勇

入所して二年目も終わるところであったと記憶しますが、收容所に大改造があり、二棟に全員が寝起きできるほどの大住居の建設が始まりました。伐採が可能な期間は伐採と建築の両班に分れての作業でした。大住居は長さ五十メートル

ル、幅十五メートルほどだったと思います。記憶に間違いがなければ半地下式で木造の校倉型でした。棟梁は日本人です。多分この所長（作業大隊長）がイルクーツク、ウランバートル、タイシエツトなどの日本人收容所を視察し、その建築技術のすばらしさに驚き、ぜひわが收容所でも、と思いついたのではないのでしょうか。棟梁は大学の建築画家でも出た人のようで、私も一度彼のノートをのぞいたことがあります。難しい計算値がいっぱい書かれていたのを覚えてます。建築は二カ月ほどで終わり、広々とした使いやすい部屋に移り、皆大喜びをしたものです。

コムソリスク第三分所

兵庫県 田中康夫

春になると日本から船が来ると言うので皆元気が出た。ここでは三、四階建のマンションを建設する。收容所から現場まで列車で往復した。入隊前、自宅（加古川）から神戸まで、約一時間かけて通勤したことを連想した。鉄筋で組まれた木框の中へ、縦横に渡された歩み板の上をターチカ（一輪車）でコンクリートを運び流し込む。バランスを崩して転覆し、ソ連の監督に幾度か怒鳴られた覚えがある。この街には古いマンションもすでに点在していたが、このときが建設ラッシュの最中ではなかったか。この街は整備されると、極東ではハバロフスクに次ぐシベリア第二の大都市になるのだと言っていた。果たして今はどうなっているのか、テレビでも見たいものである。但し、当時の建築物はあえから半世紀経過しているので、再建築されたか、ソ連のこの五十年はハイテク軍備増強の期間であり、街は案外あの頃より廃れているのでは……などと考える。

日本人、ソ連人が共同で数千戸が建設された。今、考えてみると、これは特に都市を新しく形成する総合プロジェクトである。まず原野の中に鉄道を敷き、拠点となる駅、次に巾広い道路を縦横に伸ばし、最小限に必要な住宅を建てる。この街は今頃どうなっていることや……二十四年一月、三〇一收容所は閉鎖さ

れた。ダモイのため少しでも東の方へ行きたい。

北海道 東島房治

大工の棟梁

ある朝、作業割り当ての時「誰か大工のできる者はいないか」と言うので、自分ができると申し入れる。

自分は樺太でも倉庫を建てて来たので自信がある。「ヨシ、それじゃあお前行け、ロスケの民間の監督がいるからその指示を受けろ」と命令を受ける。

ロスケの監督の話では前の大工は駄目だ、頭が悪いと言うのである。どうしたのかと他の者に聞くと、丸太を一本計り違えて切り損じたとの事である。ロスケの家は原木のまま積み上げていく方法であるが、住宅を建てている付近には木がなく、春になると運ぶ手段がないので、一本でも駄目になると大変なのだ、それで怒って首にしたらしい。

しかし原木を積むので一本一本寸法と太さを合わせて切り込みを入れるのでそんなに難しいものでない。早速仕事にかかる、自分の他に手元が三人いるので、自分は寸法を計り墨付けをし、他の者が切り込みをする。一本積んではまた次をやるので間違える筈がないのだが、本職の大工が何で間違えたのか。

その大工と言うのが例の糞詰まりをやった男だと分かって、さもありませんと納得した。

順調に作業が進むので監督も満足して煙草をくれる。すっかり信用が付いて今日から大工の棟梁になった。

この建物はロスケの個人住宅との事である。大工ができるのと嘘を言ったが実際は全くの素人で不安はあるが、そこは持ち前の心臓で図面を見ながら何とか上まで積み上げた。天井は一寸板を張りその上に三十センチ程土を載せる。これは寒気を防ぐのと雨が漏つても土に吸収されて下に落ちない仕掛だ。従つて屋根は簡単に割り板を張るだけで三角の部分は両方共空けたまま、風通しを良

くしておく。

建物が出来上がったら、今度は入口のドアと窓枠も作れと言う。ロスケの住宅の窓枠は日本と違い、ガラスの寸法が一枚一枚違うので棧を通し棧にできない誠に複雑な作りなのだ。しかも道具が何も無い。仕方ないので鍛冶屋の担当に頼んで、ノミと鉋の刃を作って貰い、鉋の台は自分で作った。

本部に頼んで本職の指し物師がいなか探して貰ったところ、やはり一千人もいろと色々な職業の者が居るもので、本職がいたのである。早速翌日から彼を使つて作り始める。結構立派な物ができた。終わると今度は机や椅子も作れと言う。ロスケは大工は木に関する物は何でもできると思っている。しかし今度は本職がいるので大丈夫、これも希望通りの物を作り上げた。

自分で大工を引き受けてから約一カ月位ですべて立派にできあがり、監督も大変満足してくれた。それで終わりと思つていたら、監督がまた大きな図面を持つてきて、今度はこれを作ると言う。見ると大きな建物でトラクターが三台入るガレージだとの事。幅六メートル長さ二十メートルの大きな物である。自分にはできないと断つたが、すっかり監督に見込まれ、どうしてもやれと言う。やらないとマーリンキドームに入れると脅かす。仕方ないのでやる事にし、とうとう本職の大工になった。

土台には大木が必要なので、木のあるところで建てると、少し離れたところで始まった。

十五人の手元を貰い、作業に入る。まず土台になる木を倒し、穴を掘つて土台を入れるのであるが、これが問題だ。根元と先では太さが大分違い、一旦入れると大木なので動かす事ができない。どうやって上を水平に入れるか悩んだ。ところが幸いな事にツンドラ地帯なので掘った穴に水が留まっている。しめた！水は水平なので水面を基準にして深さを割り出し掘らせた。その通り一発で決まったので監督も感心する。この建物は柱を建て、柱に溝を掘り細い丸太をその溝に落として壁を作る方法で従来のソ連式の建物と違い日本式に近い方法だ。

監督は柱を丸いまま建てるのだと言う、自分はそれでは駄目だ丸太の両面を平らに削って上下同じ厚さにし、壁の丸太は全部同じ長さで切れば良く、その方が能率も上がり楽だ。また土台も柱を建てる所を平らに削った方が安定すると説明する。監督は素人なのか感心してそれで良いと全部任せてくれた。これで少しやり易くなった。自分は専ら掘るところ、削るところを墨付けする。墨付けの仕事がない時は自分も削る仕事をしていたら監督が来て「お前は仕事をするな、外の物が間違わないように見ていれれば良い」と言う。大分柱もできてきた。だが自分は心配でなかなか立てる決心が付かない。監督は早く立てろと言う、自分はまた駄目だと言うて立てない。

宿舎の中に修理をするところがあり、頼まれて一日ガレージの方を休んだ。

翌日行くと何と柱が立っているではないか、自分がいないのを幸いに監督が立てさせたのだ。監督は自分の顔を見てニヤニヤ笑っている。だが柱はちゃんと立っている、自分は監督にヨッポイノマーチと言ったが、心の内では安心していた。

それからはできた柱から順次立てた、梁も無事上がった。これで少しくらい風が吹いても大丈夫と一安心。

梁にロシア語で自分の名前を刻んでおいた。

愛知県 水野朝之

又、この男の家の小屋を建ててくれと言われ、私の小隊が指名されましたので、大工の経験者と手元の作業員数人に行つてもらいまして、「見事にすばらしい家を建ててくれました。ありがとう」と言われました。

例えば丸太二〇センチ位のを、ここにないので他の所から運んで来て、これを積み重ねて壁にする場合、その傾きができないように正しく垂直に重ねて行くよう簡単な定規を作つて建ててくれる様を見て、「これ又、日本人はすごい」と言つてくれた。又、大工道具でこの地方にない「ノミ」をこの山中で作つてしまう姿を見て驚いていました。

例えば、コークスで赤熱したストーブを使用して他の「ノミ」を赤熱させて、たいて別の「ノミ」に加工し焼きを入れて主動のグラインダーで仕上げ、砥石で磨いて、この地方では手に入らない「ノミ」を作つてしまい、細かいところまで手の込んだ仕事をして小屋を建ててくれた日本人の手の器用さは、我々が真似ができない。すごい人種だと思う、と語っていました。

栃木県 橋本正男

測量をするのではなく指揮官の気の向くままの道作りなので一週間程工事をやつても気持が変わればやり直しをするのであったが、指揮官の思う方向へ向かつて二十メートル幅に伐採し中央に十メートル幅の道を造成するので両側五メートル幅には伐採した用材を積み上げておき、後日道路が出来上がつてから搬出するのであった。

昭和二十三年の一月頃から道路の修理らしく既設道路の穴のある付近へ連れて行かれ、道路側溝の下を一メートル掘り下げると全部砂利になつており、その砂利を各人二・七平方メートルに採取しなくてはならないのである。

その場所は地形から言う扇状地と言って太古の昔高い山から流れ出した土砂があたり一面に拡散して沈積したものであり、その砂利の上に厚さ一メートル近くの火山灰が堆積したのであった。我々は一メートルの凍土を金棒とつるはしとで穴を開け徐々に穴を拡げて砂利を取りだして道路の端に一人二・七立法メートルだから断面積一平方メートルの砂利山を二・七メートルに積み上げるのであるが、シベリアの大平原は吹きさらしのために寒い事はおびただしい限りであつたので、弱い者は近くより枯草を集めて焚火をして歩哨の機嫌とりをするだけで重労働はやらせなかった。彼らも暖かい火当たりをしていれば夕方の検査も手が加えられてノルマは軽くなるので全員大助かりであつた。

中にはどのような計算で二・七立法メートルを算出するのか大変に疑問を感じてくる者もいたが、我々はその疑問に答えるべく入れかわり立ちかわり体を

休めつつ説明をするのであるが、元來掛算の頭のない者ばかりなので一日掛かりで教えても翌日には全部忘れて来るので毎日同じ事を教えるのであるが時には教える側も教える者もくたびれて昼寝をしてお互が体を休めて何とか体力を維持できたのである。

大阪府 岡崎博好

〔建設ラッシュ〕二十二年冬

アムール河をはるかに望むラーゲルではビルディングの工事が盛んに行われていた。基礎工事はなぜか夏を避けて冬季に行うことがほとんどだ。夏は少し掘るだけで湧水がひどく深層工事が不能。冬は凍土だからかなり深い所まで掘れるという。もちろん、日本でいう潜函工法などという高度な技術など無縁の国。すべて捕虜の人力に頼るのみ。零下四〇度という永久凍土を掘れというのだから容易ではない。一日一平方メートル二十センチ掘るのが精いっぱい。それでは「ノルマ・ニマグー」(労働基準量不足)という。三十センチ掘れと責めたるが、当の監督自身それは不可能であること先刻承知での注文なのだ。以心伝心、人間なら自ら分かるものだ。

シベリアでの基礎工法を紹介しよう。基礎深度を目標まで掘り下げると、小さきままの土石塊を「ゴロゴロドードー」と全く無造作に流し込む。次にトラックで運んで来たバラのセメントをスコップで流し込む。もちろん、作業は抑留者である(セメントは日本のように袋に入ったものではない。すべてバラ)。粉のセメントだから一面もうもうたる煙だ。作業の兵は、手拭で頬かぶりしているが、全身セメントの塊になっている。これに水をかければ塑像が出来るだろう。傍らの監督が笑いながらつぶやく「早く春が来ないかなあ」。春になると地下水が上昇して石と砂とセメントが混ざり合って立派な土台が出来るというのだ。地震のない国というからこんな工事も可能なだろう。面白い体験だった。

静岡県 飯島久

建築現場へ行くことになりました。室内作業に慣れていた体には、屋外作業の寒さが応えました。もう三度目の冬、木造住宅現場に木切れはいくらでもあり、焚き火などして日を過ごしていききました。

普通の家は四部屋でした。田の字つくりというか、中央にレンガ積みみのペーチカを配して、四部屋すべてがペーチカの壁に面して暖房される仕組みで、生活の知恵とはいえ巧くできたものでした。荒っぽい角材をダボ穴でつなぎながら、積み上げる工法で、四隅の切り込みはロシア人大工が手斧(タポール)で器用に加工していました。角材と角材の隙間には山の苔を楔でうちこんでいきます。厳しい冬に備えて、この仕事は重要で、ロシア人監督がワーワー言っておりました。内壁は細い板を斜め十文字に打ちつけ漆喰と石灰で仕上げます。これでは寒さは侵入できないでしょう。厳冬期でもペーチカを威勢良く焚くと、室内はワンピースでも過ごせるくらいに温まるようです。ラーゲル生活の私たちからみると、うらやましいような家が出来上がりました。

ソ連に個人住宅はないようです。みな国から支給される住宅です。デザインもみな同じ、土地も私有ではありませんから、住宅建築場所など、いくらでもあると言う感じで、カクイの町の予算次第で何軒でも家が建ちます。段々老朽家を建て替えていくという計画経済！なのでしよう。

ある時、六部屋もある建物を建てることになりました。田の字造りですからペーチカは二カ所になります。高級住宅という訳です。壁になる柱も太い物でした。

ところがシロコフが度々現場へ来ては、特に壁の隙間へ打ち込む苔をやかましく点検していました。彼の上司の党員の家になる予定だったようです。党員の家は六部屋の高級住宅、シロコフの気の使いようは尋常ではありませんでした。大工の親方(マッセル)が、あいつのコムサモールの仕事はどうなっているんだと陰口を叩いていました。

⑥ 煉瓦作り

新潟県 徳永三四士

煉瓦づくり超ノルマ

昭和二十二年五月十五日、前日十四日午後、転属して来たばかりの鬼の大隊と言われる煉瓦工場のある二〇三収容所である。前の年と打って変わって大型機械導入でみな喜んでいたが、そんなものではない。日曜日もない二十四時間三交替制のフル運転ノルマの前には、人間も機械と一緒にである。

私たちのれんがづくりは、生煉瓦づくりで、粘土を掘って運搬、その粘土と水をかきまぜて、機械を通して出てくる粘土を切り、手が向かい合って一回に四個ずつ切り、その生煉瓦を乾燥室まで運搬する順序になっている。

私の仕事は粘土と水をほどよく調整し、適当な速さで切り、手に送り出す一つの重要な作業だ。大変だと思ったが、やることにした。切り手も新参なら調整役の私も新参である。何日たつても、八時間の作業時間帯に五千個から六千個が精いっぱいだ。

そのような毎日で、いかに努力をしてもなれないため、七千個以上はできない。後になつて聞いた話だが、ノルマとしては、一作業時間帯あたり一万個以上なのだそうだ。ともかくいかに一生懸命頑張っても七千個以上できない日が続いた。

月があけて六月三日、遂に運命の日が来た。三日午前零時から八時までの時間帯、私どもも必死に頑張った。ソ連の係官も、作業が終わるまで付きつきりで見守っていたが、作業が終わった時点で聞いたところ、七千六百個しかできず、収容所の門前まで来たところ、収容所長が通訳を従えて待ちかまえている。何かあるなど感じた。

所長いわく、七千六百個しかできないのは、切り手の二人と、かくはん機を運転している者が相談し合つて数量の制限をしている。小隊長と切り手の二人、か

くはん機を運転している者、計四人は規則に反する行為だ。直ちに営倉に入れる。明日もこのようなことだと地区の憲兵隊に突き出すと言ひ渡される。

夜半から働いて、朝食も食はず、普段、人の住んでいない建物なので、冷え切っているため、防寒着は取られて襦袢一枚では何としても寒い。床は張つてあるがぬれているので、立つていなければならず、眠ることもできず、二人一組になり、背中を合わせてお互いの身体でわずかな暖をとることにした。

昼飯はなし、午後四時ころになって、収容所にいる小隊の者が私たちを氣遣つて営倉の修理に来る人に朝食のパン(三百五十グラム)を届けてくれた。身体が冷え切っているので、それくらいの物を食べても暖かくなならない。何としても寒いにはやり切れない。

午後八時過ぎ、ようやく日が落ち、四方がうす暗くなるころに、営倉に足音が近づいて来る。やつと営倉にお別れかなと思つたら、鍵をあげて入つて来たのは、衛兵所にいる将校の取り計らいで、私らの食事を持って来たと言うのだ。昼の食事ではあるが、暖かい雑炊だ。息もつかせずつきに食べる。大変うまかった。

身体も少し暖まり、ようやく生きた心地だ。午後十時四十分ころ、衛兵所から使いの者が来て、営倉からようやくやくのことで出所することができた。収容所の食堂へと急ぐ。あつたかい夕食を四人で食べる。まことにうまい。食べ終わると、急ぎ小隊に戻り、全員喜んでくれた。が、十一時を過ぎていたので、すぐに十二時からの作業時間のため、整列が待つていた。

二十四時間一睡もすることなく、収容所から五、六分のれんが工場へ、足ども重く歩き出す。シベリアにも天の神がある。煉瓦工場に着くと自家発電のボイラーが故障して、ボイラーがとまっていた。技師が一生懸命修理をしていたが、なかなか直らないのだ。とまっているボイラーに身体をくっつけて横になる。二十四時間眠っていないので、すぐに眠る。ボイラーの修理が完了して起こされた。朝五時ころであった。全くの天の助けである。

作業になれもあつてか、六月十二日ころより数も多くできるようになり、作

業時間帯に遂に一万個できた。収容所長はじめ作業主任も喜び、もちろん私たちが一番うれしかった。日に日に多くできるようになり、七月二十六日には最高の一万七千三百個できる。かくして九月二十日、年間ノルマの四百五十万個を突破して生産を終了した。日曜もなく全くの休みなしの四か月間だった。

新潟県 高橋義夫

そのうちれんが工場に回された。たき口が二十四か所もある建物の中に型のできたれんがを十万枚も運び込む。ソ連の職人がそれを積み上げてゆくのだが、それが十日間くらいかかる。それから片側十二か所のたき口から石炭を投入し火をつける。十日間くらいで焼き上がり、その後やはり十日間くらい放置して、さめたころ釜出しが始まる。それでも中はまだ熱い。五枚ずつ持つて出るのだが厚い手袋をしていても熱くてたまらない。外は零下三十度、釜の中は酷暑、そこを行ったり来たりの仕事はつらい。それでも最初のうちは百枚の山三つが一日のノルマで早々と仕事も終わり休む時間もあつたが、そんな我々の仕事ぶりを見てだんだんと仕事量をふやされて、ついにノルマは最初の三倍となり、遅いときは深夜までかかることもたびたびとなり、体はもうくたくたに疲れる。それでも翌朝はいつも同じ時間に宿舎を出なければならぬ。一握りの黒パンと冷えたスープだけの食事でこの重労働をさせられ文句も言えない。この世の生地獄とはこのことである。

ある日同僚二人が行方不明になり探したら、近くの建物の中でひもに下がって冷たくなつていた。つらい仕事に耐えきれなかったのだろう。涙が出てとまらなかつた。

幾らか寝たかなと思つているうちに全員起床という。外はまだ薄暗い。これから作業に行くのだという。一日ぐらいは環境の整理をさせてくれるだろうと思

新潟県 関本 清

つていたが着いた翌日、しかも暗いうちからはあんまりだと思つたが、捕虜の身となつてはいたし方ない。そのうち朝食に上がったものが各人の飯ごうに分配されたが、それがまた皮のかぶつた燕麦をどろどろに煮たおかゆのようなもので、しかもかけごうに一杯ぐらいだけ。どうして食べたらいいかと迷つたが、とにかく口の中に入れてぐにやぐにやかんで汁だけをのどに通し、皮は飯ごうのふたにベツペと出した。なにせかけごうに一杯の量である。その半分は皮だから腹のどこに入ったかわからない。その上寒さも厳しく飯ごうのふちについたのり状のものが食べ終わるころはもう凍るほどであつた。

昼食に配給されたのが同じく燕麦の粉を焼いた厚さ三センチぐらいの黒パン一切れ、おかずなどもちろんない。その黒パンを洗いもしない飯ごうにほうり込んで外に出て整列した。なかなか人員の掌握できないソ連兵にじらされやつと出て小一時間歩かされ着いたところはれんが工場だった。みな防寒帽の毛には吐いた息が凍りついてさながら霜の中から顔を出しているようであつた。

そこで粘土掘りをさせられたが、ツルハシとスコップを渡されて粘土を掘つてみたが、凍つた土にツルハシの先が一センチほど入るだけでとても掘れるものではない。監督はブイストレ、ブイストレ(早く早く)、ダワイダワイ(やれやれ)と目を血走らせて尻をたたき。それもそのはず粘土が行かなければ工場の機械がから回りをするのである。酷寒のシベリヤでもしまいに上衣を脱いでも汗の出るほどにツルハシを振るつたが、掘れる土はわずかであつた。

静岡県 熊谷精一

作業は一班二十人にて日本のブロックのような品物をつくる作業。昼夜二交代制で、材料は石炭を燃やした後のアース殻をミキサーに入れ、セメントに水を加え練つた品物を木の型枠に入れ木槌でたたき、それを乾燥室に入れ一週間くらいかかつて乾燥させる。縦横十五センチの長さ三十センチぐらいのドームをつくるためのブロック。

仕事はノルマ制で一人当りの生産個数を割り当てられ、作業場とはいえ、屋根の下にミキサー一台設置してあり屋外の作業と同じで、風通しはよく回転部分はいけれど、それ以上の場所は水を使用するために全部凍りついている。作業は防寒外套、防寒手袋、防寒靴という服装でしたが、足などの感覚は全くなく、顔は針を刺すような痛み、凍傷になるのではないかと心配の連続でした。休憩するときは乾燥室に入り暖をとる、我れに返った気持ちになりました。

余りの寒さのために人より早く乾燥室に入りたい気持ちになる。暖をとっているとカモンジールに(ラポーター・シラシヨ)と文句を言われる。そのためにノルマをふやさされ、我が身を削りながらの作業。食事はアワ、コウリヤン、エン麦、豆類、黒パン等の雑穀類。お腹を満たしてくれるにはほど遠く、食事のときなどパンが大きい、小さいと人々とまなざしは戦々恐々と見つめている。明日への生命の源である。

岩手県 小岩敏夫

三日目より仕事について。土を水で練って型枠に入れ、れんがの形をして天日に干す組と、干せた土れんがを一輪車で窯の中に入れて焼かれんがを窯から出す組とに分けられた。私はれんがを焼く粉石炭を箱付きの一輪車で窯の上に架けられた橋を渡って運ばせられた。窯の上には直径二十センチぐらいの穴が無数にあり、そこへロシア人の女が石炭を入れて燃やし、れんがを焼くのであった。一か月ほどして土れんがの運搬組に回された。

ロシア人の監督にソルダート、ダワイ、スカレ、(兵隊早くやれ)と言われ、一輪車を持たされた。一輪車は木製で、車は二十センチぐらいの鉄製で、十五センチから二十センチの鉄板を敷きその上を生れんがを積んで押すのです。生れんがは重い、脱線させて倒してしまい、土れんがを壊すことたびたびでした。監督にれんがを壊すな、よくないと怒鳴られる。二か月ぐらいで、九十枚も積んで一日十五回ぐらい押した。製造のほうはノルマを達成して五十ルーブルぐらいもらえ

るのに、運搬組は苦勞してもノルマ一〇〇%にならないので、銭はなし。土れんがは重く腕と腰に力が要るので、体がもてない。土れんがで手の指の皮がすりへり血も出る。

作業にははだしで、上半身は裸、下はパンツ一枚で五月より十月まで通した。六月、七月、八月は酷暑で毎日四十度を超した。灼熱の太陽、風もない、雨も降らない、皮膚が五回もむけ、体の色は黒々となった。はだしで働くので足の裏は厚く固くなり、痛みを感じなくなつた。夏の間は朝六時より十一時まで、午後は五時より八時まで作業、昼間は休み。

重労働と二時間夜の残業

新潟県 若月太郎兵衛

翌朝、私は団本部へ出頭した。規律委員会の決定が告げられた。千二百人中最重労働の現場第三煉瓦工場掘削作業である。あらゆる公職は追放である。夜は夕食後団本部の指示に従い二時間の残業に服すること、期限は無期限である。

指示どおり第三煉瓦工場へ出かけた。おんぼろ工場である。掘削作業は大変な重労働である。地下にストロブをたいて粘土を溶かし円びで鍋トロに積み込む、一台積み込むのにへとへとなる。円びから粘土が離れないのだ。まさにこの世の地獄だ。ノルマもへちまもあつたものではない。何とかよい工夫はないだろうか、私は農民だ、四本鍬が欲しい、箱箕が欲しい、それがあれば楽をしてノルマを上げられる。もう一つ生煉瓦を乾燥室に運ぶトロコの線路がめちやくちやで脱線の連続、無駄骨のエネルギーの消耗である。これの解決なしには、どうにもならぬ。私は職場会議に提案した。皆は一人の反対もなく日曜日に線路を直すことに賛成した。日曜日を返上して線路を徹底して工事した。粘土を積み込む用具は簡単にはできなかったが、それからは脱線もなくなり作業も頗る順調に無駄骨を折らなくてノルマも向上したのである。

毎日粘土との戦いでくたくたに疲れ果て声も出ないくらいだ、ふらふらとラゲルが帰ってくると今度は夜の二時間残業が待っている。

夕食後、団本部の指示で炊事場裏の汚水や野菜の屑等が凍ってつんつるてんのカチンカチンになっているのをバール(長さ一・五メートル重さ三キロの鉄棒)で割って清掃する作業。小便水を割る仕事、大便の柱、積もり積もって柱になる光の糞柱をバールで突きこわして片づける等が残業である。

和歌山県 出口爲治郎

アメーバ赤痢もどうか忘れてきたころ、夏でしたが、れんが工場に変わり、この作業も大変な作業だったが、夜の仕事で、歩哨の目を盗んでサボることができた。山の土でローラーから出てくるれんがをトロッコで広場に並べる仕事で、乾燥できたれんがは囚人方の昼の仕事へ申し送るのであった。周辺にリンゴ畑があり、まだ十分とも言えぬが、盗んできて食べ合って腹を膨らませた。

東京都 伊藤真正

初めはレンガ作りで、一人五百枚作るのがノルマですが、できませんので苦労した。だんだんと枚数を上げられたのでノルマはだれもできずに苦労した。食事はノルマで決まるのです。また、レンガを使って家屋を造る作業をさせられたが、これもノルマはできなかった。

広島県 村中汎雄

所内の大改造も済み、春らしくなると、屋外作業に出るようになったころだと思いが、今までの小隊単位の作業隊から、作業所ごとのグループ(班)編成になり、ノルマ(基準量)が課せられるようになった。私は主として煉瓦工場に行くようになった。

粘土に鋸屑を混ぜて羊糞のような生煉瓦を作り、これを乾燥室に運ぶ組、

乾燥した煉瓦を窯の中に積み上げる組、焼けあがった煉瓦を窯から出す組と、三工程で一グループ(約二十名)、昼夜三交代で三グループで仕事をしていったと思う。粘土を掘り出す組と、時々煉瓦を貨車に積み込む組は別のグループであった。仕事はソ連の労働者と一緒の共同作業であり、我々がやれば彼らのノルマは上がり、やらなければ下がるのだが、余り『ダワイ、ダワイ』と言わなかった。むしろ我々に任せているようだった。六〇から八〇パーセントくらいはなかったと思うが、彼らは彼らで別のノルマであったのか？しかし、製鉄工場ではヤポンスキーが来てから我々のノルマが高くなったとこぼしていたが…。

前に集団で貨車に煉瓦積み込みをしたとき、これだけ積むと帰してくれるかと仕事をする前に交渉して作業にかかったら昼過ぎに終わった。余りにも早かったのか現場監督は帰そうとしない。約束が違うではないかといういろいろと文句を言ったが、なかなか「うん」と言わない。とうとう警戒兵が出て来て、作業が済んだのなら連れて帰ると言いつて早目に帰ったことがあった。警戒兵も我々があつちこつちに行くので、監視できず弱つて中に入ってくれたのかもしれないが？それから後は、だんだんとノルマが上がって、我々の首を絞めるようになった。

体感温度零下百度は国境警備のとき経験したことがあり、歩哨勤務も三十分交代で長時間屋外に晒されることはなかったが、ここではそうはいかない。おまけに防寒被服も充分でなく、栄養も採れず、八時間の寒風の中の屋外作業は死ぬ思いであった。動けば動くほど、疲労は増しても、少しも暖かくなってくれない。一応零下三、四〇度になれば屋外作業は中止ということはあるが、守られた様子はあまりなかったようだ。雪は少ない地方だが、それでも一晩に一メートルも積もったこともあった。除雪された雪が道路の両側に二メートルも積み上げられ、その雪の土手を通って工場に通った。

大地は凍り春五月にならないと溶けなかった。短い夏と白夜、午前二時ころまで薄明るく一番楽しい時期だが、我々には明日の仕事で寝ること以外には、食べることにダモイのことしかなかった。夏の喜びも冬の寒気の厳しさに消えて

しまい全然記憶に残っていない。幸い製鉄工場も煉瓦工場も暖房があるので、道中の寒さに耐えればまあまあ我慢できた。煉瓦工場での生煉瓦造り作業は、湿気が多く暑くなつて外に出ると、二、三分もすると耳たぶが痛くなる。慌てて耳に手をやるとバリッと音がして凍りかかっている。鼻先を防寒大手套で擦ると皮がむける。しかし、我々のグループでは凍傷に罹ったということにはなかつた。

レンガ造り作業

滋賀県 小西信太郎

今日より作業に、工場で煉瓦造りで、三交代で八時間労働が初めて経験する仕事でした。

朝食、粟のスープ、一日三百五十グラム黒パンで朝食を済ませ、工場まで一キロ余りを毎日往復監視付で作業が始まり、慣れない仕事。煉瓦造りの仕事は広い工場内で、ソ連の係員の説明するノルマ一〇〇%という高度の達成はとても程遠く、やつてみて五〇%ぐらいしかできない者が多い現況でした。窯より出す焼いた煉瓦を、タチカという一輪車に一人で積み込み、挟い鉄板の上を積んで運び出し、広場に積み、一日一人三千六百枚を運んで一〇〇%という数字でした。

とても重労働、車に百枚積んでも三十六回往復することになる。中には一輪車が脱線して、煉瓦が落下して傷つき、係員よりひどく叱られる者が度々でした。結局、少なく積み、回数を多く運ぶのがよく、また生煉瓦の場合でも、日光乾燥場の棚より一輪車で窯に入れる作業で、一〇〇%のノルマは、生煉瓦は重いので一人二千六百枚、これも到底達成は困難の数字でした。

煉瓦造りの土は、裏山に穴をあけ、中に爆薬を入れて爆破して、トロッコに積み込み、土を運び込み、また、土が砕土器で粉にされコンベアで水を加え練り上げ、羊かんを切るように四枚ずつ切つて、それを二枚ずつコンベアに流し、流れて来た煉瓦を乾燥棚に十人ほどで次から次と運び、八時間労働で休む暇もなく

続けられる。寒い日はひどく体に無理があり、きつい労働でした。

慣れない作業で、再三所長よりノルマ達成ができないのでひどく叱られ、食事の方も減食され、ますます苦しい状態が続きました。栄養失調者も増えました。食べることだけが頭にあり、餓鬼道の哀れな日々で情けなく、一日も早く帰れる日を空を眺めて祈る心でいっぱい、慣れない作業に互いに励まし合った生活が続いた。

神奈川県 香坂毅

テケリ収容所より来た者のうち、オカ(病弱者)を除いた殆どはキルピーチ(煉瓦)工場に配置され、私もここで働く事となる。工場までは殆ど人家はなく、田舎道を一キロ程歩いた山麓の閑散とした場所にあつた。周囲は有刺鉄線が張られていたが、形式的なもので重圧感は全くなかつた。工場内には、カザフ人は勿論、ウズベク人、キルギス人、タジク人が多く、ウクライナ人だという人も働いていた。人種差別はなく、性格は明るく陽気で屈託がなく、すぐに仲間となる事が出来た。日本の事を根掘り葉掘り興味深げに聞きたがつた。

キルピーチ工場のノルマは体力のあるソ連人を基準にしたのか厳しく、毎日ダワイ、ダワイの叱咤に明け暮れた。当時、異常な建築ラッシュで供給が間に合わず、煉瓦窯出しの日は、まだ熱い煉瓦をトラックに直接積み建築現場へ直行、目の回る労働にしても百%のノルマは達成出来ず、朝夕二回で二百グラムの黒パンを得るのは大変だつた。技術者の能力を高く評価していたソ連では、我々肉体労働者とは雲泥の差があつた。

福井県 谷崎喜久雄

入ソ一年目の冬を終えて、翌年春からは、収容所よりトラックで三十分くらい走つた現場の丘陵地に煉瓦工場があり、この地が私たちの作業現場だと連れて行かれ、作業内容の説明とノルマの基準も示された。そこはソ連人の囚人がか

なり働いていた。この四人たちは山を掘削し、土練りして土煉瓦を送り出す。私
たちはこれを二百枚一山として、天日乾燥を約一週間して焼窯に入れる。焼窯
は楕円形トンネルになっていて、一拵三千枚くらいずつ窯詰めし密閉し、これ
を境にして次の窯詰めを行う。窯詰め、窯密閉の済んだところは、トンネル上に
一拵ごとに焚口が設けられているので、上部焚口から石炭を投入して燃焼に入
る仕組みで、この窯はほとんど夏冬を問わず年中稼働していた。

この燃焼は当工場専属のソ連人技術者だった。燃焼期間は約三日間くらいで
焼き終わるが、冷却期間は二三日間くらいだったと思う。この焼き上がった煉
瓦を取り出すのは我々日本人抑留者が担当して行く。素手で煉瓦を持つと熱
くて火傷するし、煉瓦出しに入ると上部焚口から火の粉が落ちて衣服が燃える
ことも再三あった。煉瓦の取り出しは二輪車に積み、野外に二百枚一山として
積み上げるといった作業工程だったが、この作業が、昭和二十三年五月、やっと
近々ダモイ(日本へ帰る)というときまで続き、抑留期間中で一番長かった。約
十四カ月だった。

強制労働の煉瓦工場

コムソリスクの第十一分所からハバロフスクに来て、ある煉瓦工場に駆り出さ
れた。収容所から三キロくらいの丘の台地にある工場で、そこには赤土の原料が
豊富にあることから、ここに煉瓦工場が建設されたらしい。

戦時中は男子が兵隊にとられて労働者不足から操業が停止されていたらし
い。どこもどこも機械らしいものはない。全くの原始的で工場内は全般にほこり
と煤だらけ、僅かの機械部門は赤さびである。コムソリスクの十一分所での煉
瓦工場と全く同じような姿で、作業の行程はまず原料の赤土掘り作業から始
まって、土の運搬、粘土作り、その煉瓦を木型に入れて、木槌で力いっぱいたたき
こうした煉瓦作り。できた煉瓦を乾燥室まで運搬、これを乾燥させる。ある程

岐阜県 坂井文介

度乾燥したものを窯につめる。他の窯からは完成品の窯出し班が出荷の搬出場
まで運搬する。こうした一貫の作業であるが、全部が人間の力に頼るもので、時
代遅れの工場であった。

どの作業班もすべてノルマが課せられ、今の日本人の虚弱な身体力ではとても
百%はできない。赤土掘りは一日一人でトロツコに何杯、煉瓦造りは一日何個、
運搬は一人何個というように決まっている。それぞれ各部署ごとにソ連人の監
督があり、午後になってノルマに達しないとダワイダワイとやかましい。まるで牛
馬に酷使するに似た奴隷仕事である。どの部門もこの部門もなかなか百%はで
きない。皆が疲労困憊その極みに達する。五時頃になると足腰も立たないほどへ
トへトになってしまう。帰りは日本製のトラック(三ツサン)に乗せられて収容所に
帰る。帰るともう欲も得もない。体が汗がにじんで異様なほど汗くさい。バーニ
ヤ(入浴)は一週間に一度くらい。

この収容所に来てからようやく黒パンが支給された。薄いパンでもとても満腹
感はない。夜はクタクタになって寝てしまうが、夜中に一度や二度は南京虫に襲
撃されるので睡眠不足になってしまう。この煉瓦工場は約一カ月で交代になった
ので兵たちは殺されなくてよかったと喜んでいる。

レンガ工場での作業

十五人一組でレンガ工場の作業、窯の出口付近に乱積みしてあるレンガを
製品置場に運ぶその距離五十メートルくらい、道具はターチカ(木製で輪だけが
鉄の一輪車)、地路では動かないので、板のレールを敷いて運ぶ。日本の一輪車と
はわけが違う。その一輪車でも、パンクしたらどうしようもない。それが細い鉄の
輪だけである。脱線転覆の連続で、ターチカの運転は本当に難しい。

最初の頃は、一生懸命やつても三〇%の成績、ただでさえ少ない食糧、パンが
ますます少なくなる。空腹と寒さは身にこたえる。「ビストラ・ビストラ(早く早

岐阜県 中上英雄

く」と監督は追い立てる。手袋ではレンガがよくつかめないので素手でやる。息を吹きかけ、手をこすりながらやった。それも長続きしない。三〇〜四〇分もやると、手の皮がむけて血がにじんでくる。

作業は五時に終わるが、三時頃にはもうへとへと。その頃になると監督が回ってくる。成績が悪いと怒鳴る。雪をかじってまた頑張る。作業の終わる五時頃には体力も限界に等しい。雪をかじりながら二キロの道程を、やっとの思いでねぐらに帰り着く。わずかばかりの食糧を流し込む。昼間の労働にはとても適した量ではないが、少しでも胃に収めなければ生きてゆけない。

大阪府 藤本善造

昭和二十二年の正月過ぎからレンガ工場への通勤が始まった。この工場は八時から十六時まで、十六時から二十四時までという今まで経験したことのない二交代制の作業場で、途中二十分の休憩を除いて八時間フルに機械に追われる作業場であった。工場の概要は、レンガの製造と乾燥を主体とする建物が一棟、その横に原料の粘土採取場が広がり、建物の後部に回り方式の焼き窯が一基という姿であった。製造は、まず原料の粘土がレンガ成型機の上部へトロッコで運び上げられる。ここで水を注いで練り、その練土が機械の下部の口から延々と出てくる。それをレンガの原形状に切断する。切断した生レンガを板の上へ十枚ずつ載せてゆく。その板を担いで乾燥室へ入れる。乾いたものは次々と窯へ詰める。このような各工程を経て製品ができ上がるのである。当世こんな作業はすべてオートメーション化されていると思うが、当時はすべてが人力に頼る方式であった。この一連の作業の中で一番つらいのは原料の粘土採取場である。粘っこい土を掘り起こすのは大変力が要る。また、粘土をトロッコに積む仕事もつらい仕事であった。一時間も二時間も連続作業はできない。骨休めのため腰を下ろす。すると監督が青筋立てて怒鳴りに来る。こんな次第で、この作業場は二、三日毎に交代しながら働いたものであった。

では工場内の仕事はどうかといえば、何分にも機械に追われているので勝手に休むことはできない。作業時間中はフルに歩き回ることになる。こんな次第で終業の合図があると皆が工場の土間へ足を投げ出してへたり込んでいた。また、乾燥室の構造は、石炭を焚いて、その熱気、煙、ゴミ、ホコリのすべてがこの中へ吹き込まれるのである。つまり、乾燥室は煙突そのものでもある。だから室内には煤がうず高く溜まっているのである。このため、終業を迎えると全員が黒人のような顔や手足となる。だが、空きつ腹を抱えて疲れ果てた我々にとってそんなことはどうでもよかった。途中の二十分の休憩時には、この中へ入り込んで汚れも構わず座り込んでいた。その姿は、暖かい陽だまりを探してうずくまっている野良猫の姿であった。

愛知県 杉浦守市

地方人労働者と共にする作業である。大トロッコ、小トロッコ、切り換え、煉瓦の積み込み、石炭運搬、雑役等各種の仕事があった。朝鮮系の労働者が多かった。女性の労働者も多くいた。昼夜二交代制の労働である。日本人は夜間作業は少なかった。

昼勤務者は、窯より大トロ(大型運搬車)に横んである完成品の煉瓦を出して中トロ(小型運搬車)に積み替えて、屋外の所定の場所に集積する。窯内部の清掃、石炭ガラの処理、土練機場に、粘土、鋸屑運搬。成型された煉瓦の屋外乾燥場への運搬等である。夜勤者は半乾燥の煉瓦を、小トロより大トロに積み替えて窯内に入れる。また焚き口への石炭等の運搬である。大トロの移動は困難な作業であった。作業場としては重労働の作業場であった。窯の近くでの作業で、冬は暖かかった。地方人が多いので、物々交換、ルーブルにて、パンを買うこともできた。ロシア婦人が多く働いており、ふつくと飛び出た胸、アヒルのような尻、また人情味のある人柄で、浮気の話も時々出ていた。よく働く女性達であった。

北海道 菊池普薫

またあるとき、レンガ工場の使役に誰よりも早く手を挙げたら、たちまち十五人の賛意を得て、これを引率、作業に従事した。我々は大型のダンブにレンガを集積し一休みしていた。ふと向こうを見ると、ドイツ兵の捕虜約三十人位も同じようにレンガ集積の作業をしていた。しかも三人に一人ずつ銃剣付きの監視ではないか！ 彼らは実際に戦闘して捕虜となったが、我々は詔勅のもとで抑留となった。それは雲泥の差と言っても過言ではないと思う。

愛知県 糸井紀伊

レンガ工場の作業を工程順に述べると、

- 1 採土・粘土層をパワーショベルで掘り取る(ソ連人の仕事)
- 2 トロッコの連結 粘土の入ったトロッコを順次つないでウインチに接続する(日本人の仕事)

3 ウインチで巻き上げられたトロッコを工場内まで押してゆく(日本人の仕事)

- 4 トロッコを傾けてコンベアに入れる(ソ連人の仕事)
- 5 コンベアの粘土はミキサーに入って混練される
- 6 混練された粘土はレンガの寸法で押し出される(ソ連人の仕事)
- 7 寸法に切られた粘土を台車の上の枠に移しかえる(日本人の仕事)
- 8 その台車を予備乾燥炉まで押して行く(日本人の仕事)
- 9 予備乾燥終了後、焼結炉に移動(日本人の仕事)
- 10 焼結後窯出し(日本人の仕事)
- 11 貨車積み(日本人の仕事)主に夜間

作業時間は内務省関係は八時間であった。面白いのは馬も八時間労働であったのには驚いた。先のトロッコをウインチにつなぐ作業のところで人がフウフウ言っ

てトロッコを押しているのに、傍らで馬が麦を食べているので、現場監督に「馬に引かせれば良いではないか」と言ったところ、答えは「あの馬は今朝からもう八時間働いている」であった。馬にも八時間労働とは徹底したものと感心した。

夜間のレンガ積み込み、あるいは駅での穀物積み込み、積み卸し等にはよく行かされた。レンガ積み込みは何故か夜の十時ころ、列車が工場に入れば朝までに完了せねばならず、ノルマは二人で一車四千五百枚であった。

熊本県 霍田 功

私は一週間したところで百人とレンガ工場と石炭工場のあるところに行きました。私はレンガ工場でした。とても大きな工場で、日本では見た事のない大きなものでした。年がら年中火の消えない大きな工場でした。私たちが行く前にはドイツの抑留者がいたと聞いています。入れ替えのようでした。

レンガの土取りから始まり、ようかんのように出てくるのを切つてそれを乾燥させて、それを釜に入れて二階から石炭を入れて燃やしていくのです。釜の入り口が三十カ所くらいあったようです。その入り口より一万个の数を入れたり出したりするのが私の仕事でした。時にはまだ熱いのある時もありました。一輪車で出し入れしていました。下に鉄板を敷いて、その上を通していました。この仕事は現地の人が一人と日本人が二人でした。千葉の詞合君と後で女性が一人来ましたので、四人で出し入れをしていました。その女性の人はドイツ系の高給取りの人で働き者でした。工場では言葉は慣れて何でも話せるようになっていました。工場のカマンヅル(責任者)に気に入られていたのでとても良かったのです。釜の事は大抵任されていました。レンガをトラックで買いに来られる人が毎日のようでした。

毎日同じ仕事を現地人と一緒にしていたころ、物をもらうのを覚えて町に出て行くようになりました。町まで三十分ぐらいで行っていました。ところが悪い事に門より出て行ったところをソ軍の監視人に見つかり注意されました。カマンヅル

ルが断るけれども聞かず、本隊に連れ戻されました。本隊で仕事をしていたところ、二十日頃にはレンガ工場に二十人行くようになり、私もそれに入り、又工場に来ました。工場でも本隊でも、身体の悪い人から帰国の人選がありました。が後に残され残されして、最後まで工場におりました。レンガ工場では私はカマジンジルに気に入られていたので余り苦しみはありませんでした。そうした事を毎日しているうちに月日がたちました。

大阪府 岡崎博好

レンガ工場は小高い丘の上にあった。

木型の中に練った泥をつめて「土レンガ」を作るのである。丘の上からはるか下のレンガ干し場まで線路が設けられている。トロツコに土レンガの箱を載せて坂落としさせるのだ。中には脱線転覆して折角の土レンガがおしやかにすることも。難関は干し場から上の粘土場までトロツコを引き揚げる作業である。トロツコに群がるごとく左右三人ずつ計六人でロープを肩にえんやこらと運び上げるのが一苦労。作業の実体は噴飯に近い超原始的な工程だ。戦争前から続いているレンガ工場と聞いて唾然としたものだ。

栃木県 秋元武夫

煉瓦作り作業は三交代です。先ず山を爆破し、この土をターチカ(鉄の車の一輪車)で細い鉄板のレールの上を運ぶのです。

この赤土には石等の穀物の混入はなく、すこぶる煉瓦に適した土でした。この土を水で練り、針金で一定の形に切りベルトコンベヤーで流すと、待ち構えている作業員達が両手でそとと取り上げ棚に並べるのです。(二交代のノルマは一万五千個)針金が切れたりすると大変なことになるのです。

次は、乾燥した煉瓦の窯への搬入もまたターチカを使います。何日かかかって焼き上がった煉瓦の窯出し。熱い煉瓦を取り出す度に立ち込める濛々たる粉塵。

ノルマ達成のため、二段三段とターチカに積み重ねての搬出はたちまち手の皮がはがれてしまうのです。薬はなし、もちろん休めず。誰が考えたか、ベルトの切れ端で煉瓦ばさみを作ったのでこの問題は解決したのです。窯の奥に入るほど熱気は強く、粉塵もひどい。マスクは無し、入浴はままならず、手立てのしようがないのです。そのため、肺を病み倒れた戦友がどれほどいたでしょうか？ 復員後もこの病で苦しんだ戦友もおりました。

静岡県 安江進

私は運が良かったのか比較的楽な煉瓦工場。工場内暖かく仕事も楽であった。工場長は女性であった。作業員はウクライナ人の女性と一緒で大変美しい女性であった。私も二十歳で何かと話が合い、割合に楽しい作業場でした。若い男子は動員され、あとは老人ばかりであった。

私は煉瓦の元になる「ネンド」をトロツコで運搬する仕事でロシアの若い女性十八歳と一緒にした。名前はフレローナといい、体重が八十キロも、私は五〇キロ、よく東京日本の話をした。

愛知県 水野治一

一日の休息中に、ソ連の建築関係者が来て、日本語混じりで建築の職業別(大工職、左官職、煉瓦職、雑役等)に仕分けた。

私は全く建築技術は無知であり、思索していたとき、同士(私の後輩)で、内地では左官、煉瓦の本職、名古屋出身の酒井氏が「左官、煉瓦職を志願せよ。僕が仕事の面倒を見るから」と言ったので、全くの素人であるが自信なく申し出た。

作業現場は、收容所から約二百メートルのところで、煉瓦積み二階建ての作業が中断されていた。聞けば、最近まで日本人抑留者の作業所であった。用途は学校校舎である。

現場には私と同様、素人煉瓦工、五人が志望していた。酒井氏に作業を教わった。現場責任者は、我々五人を素人と見抜き、「お前達は偽煉瓦工だ」と最初から躍起になって怒る。煉瓦積みにもノルマが課せられていた。

「ノルマが終るまでラーゲリに帰さない、食事も半減だ」などと言うが、今さら素人は素人、そのはず一度も煉瓦、鏝こてに手を触れたことがない初めてのこと。

ソ連の煉瓦構造の二階建てには、鉄筋、鉄骨、セメントは一切使わず、モルタルは砂と消石灰を混ぜ、煉瓦を積み上げる。冬期の屋外では、直ぐモルタルが凍結することから素早くしないと直ぐ凍り付く厄介な作業で、ノルマは上らないこととで一苦労した。

⑦ 道路補修

和歌山県 長峰泰夫

道路の拡張作業をすることになる。ポルト(港)を〇キロとし、奥地へ八十七キロまでの七メートル幅の道路の両側を一メートル拡張し、九メートル幅の道路にするという作業である。道路を四区間に分けて、一中隊二百五十人ずつで一区間を担当することになる。ラーゲル(収容所)のある地点に一個中隊を配置していく。第一中隊：六十五キロ収容所、第二中隊：三十キロ収容所、第三中隊：三十九キロ収容所、第四中隊：十九キロ収容所と決定する。我々第四中隊は、井辺准尉以下二百五十人が十九キロのラーゲルへ行くことになる。

昭和二十年十二月、十九キロ幕舎収容所 道路拡張作業

幕舎の整備作業が終わると、予定していた道路拡張の作業が始まった。当時のマガダンから発するコリマ街道は奥地タイガーへ通じる重要な道路である。タイガーへ、食糧、物資を常時輸送して、労働者の生活、資源開発を維持している。この道路は幅員七メートルであるが、この道路の両側を一メートル広げて、幅員九メートルの道路として、より安全性を高めようとするものである。

道路の舗装は土と小石のみできている。路面は凍結で十分締め固まる。この道路はポルト(港)を〇キロとして、一メートルごとに道標が立っているが、今回は八十七キロまでを四区に分けて、その一区を担当する。道路の奥地に向かって右が道路より低い平地で、左が丘陵になっているので、左の丘陵の土を掘って両側へ埋め立てる作業である。丘陵の土は五、六十センチくらいの永久凍土となっていて、これにローム(鉄棒)で穴を数本あけて、ダイナマイトを仕込み、爆破して柔らかい土を出し、運搬して埋め立てるのである。

用具は、ローム、ラパータ(スコップ)、カイロ(つるはし)、ターチカ(木製荷積用一輪車)、ターチカを通す板等である。別に発破用ダイナマイト、導火線等がある。

る。

服装は戦闘帽、防寒帽を重ねてかぶる。防寒外套、毛普通外套、毛軍上衣、防寒シャツ、綿シャツ。毛ズボン、毛袴下、綿袴下、ふんどし、靴下二枚。ソ連製綿入り布防寒靴、防寒手袋と所持している全衣類を着装して重かった。防寒衣類、靴はたき火でよく焼けて補修に追われる。

朝、整列し、近ければ徒歩で、遠ければトラックで現場へ着く。まず、グループごとにたき火にあたり、一息入れて作業にかかった。兵隊もついて来ていて、あちこち歩いているだけで退屈そうだった。開始当時は、ノルマについては全然認識がなかった。朝八時から夕方五時まで、昼食時間一時間休んで仕事をすればよいと思っていた。

まず、土を出さないといけないが、永久凍土となっていて、カイロ、ラバータでは歯が立たない。近くの盛り土のある場所を選んで、五人前後の班をつくり、発破をかける位置を決める。ここへ各人がロームで一本ずつ穴を掘り、一〜二メートルに達したら、ダイナマイトと導火線を入れ、土をかぶせて爆破して、柔らかい土の層を出して、その土をターチカに積んで道路の側面に埋めていくのである。

穴は場所により掘るのに難易があり、簡単にいかなかった。大体午前中に穴を掘り、午後に発破をかけてから土を運搬するのが一般の作業であった。従って土は半日しか出せなかった。寒いから監督がいないと、たき火にあたり休憩するから、仕事はかどらないので、正味の労働時間は短くなってしまふ。ロシア人の監督は作業量が少ない、「ブローハ、ブローハ（悪い、悪い）とぼやいている。

それで、穴を早く掘り、土出しを早くするしかないと考えた。そこでロームの先を常に土を掘りやすいように、先端を平らに広げる加工を作業から帰ってすぐ行って、自分専用とし、寝台の下に保管する。この方法で掘る場合は、周りを崩しながら下へ掘るとスピードが上がった。しかし、石に突き当たったりすると、先端が円くなり、現場で修理して使用した。また、ロームを修理した後、新しい

別の穴を掘ることもあった。けれども、穴掘り、発破かけ、土掘り、運搬では、場所によりばらつきがあり、思うようにいかなかった。

土出し現場は、翌日のために帰りに袋をかけ、その上に土を撒いて、翌日は袋を持ち上げれば凍結が少なく、早く土出しができて能率が上がるが、別の場所へ行けば、また穴掘りからなので、一から作業となった。衣服をたくさん身につけているから、動作が鈍いので進度が遅いのは仕方ない。食糧も、日本食がなくなりロシア食になり、カーシヤ（おかゆ）では力も出なくなってくる。なれない食事が作業、寒さで体力を消耗して、栄養失調者がじわじわふえていった。そのうち雪が降ってきて作業が除雪へ変わっていった。

私に割り当てられた作業は道路の清掃作業で、二人一組となり、大ぼうきで二キロの道路を掃いて、小石を両側へ掃き出すものである。ほうきの柄の材料とする約二・五メートルの丸太一本と、パン袋を飯盒に入れ、腰にぶら下げ、兵隊の監視もつかずに出発する。初めは近距離なので徒歩である。現地近くになると、ほうきの先に松葉をくくりつけて、道標のところから二人並び、中央から側面の方へ掃きだしながら進んでいく。自然を眺めながら、自由にのんびりとした仕事である。

側面の下には、タイヤ、木の根株、板切れくらいしか落ちていない。時々、トラックがスピードを出して通り過ぎていく。道路は傷んでいないので、掃除の進み方も順調である。昼食は黒パン二百五十グラムと塩漬けニンジン百五十グラムだけである。終わったら、その山へ入って、松の実、キノコのありそうな方向を話し合う。午後は二〜三時の間に終わると、山へ分け入り収穫に夢中になる。収容所に帰るのは五時半過ぎとなる。もちろん、松の実、キノコを持ち帰る。日も長し、早く帰ると炊事のまき割り等、使役をさせられることがあったので、一般の作業の帰り時間に合わせるようになった。

北海道 奈良勝正

冬季のダイナマイトの穴掘り作業は、凍土に直径三十センチ深さ一メートルの穴を三個掘ればいつ帰ってもよいと監視兵の言葉を聞き、寒さも忘れ氷のように冷たい鉄棒の冷たさも忘れ、夢中で掘り上げて、三時ごろ収容所に帰り、しばらくたつと右手の手指指と中指がろうそくのように真っ白にはれ上がり凍傷にかかり、そのお陰で二週間休息ができたこと。今でも私の指には手術の跡が残り、指紋は消えている。

鳥取県 森田 廉

道路班の作業は、森林の中に道路をつくるのである。道路の側溝を掘る。幅六十センチ、深さ六十センチの溝を五メートル掘ることに決められた。ところが酷寒のシベリアの台地は凍結していて、ツルハシもスコップも全然役に立たない。特に吹雪の猛烈に吹きつける日は作業はほとんどゼロである。積載作業班は切り出された材木を六十トン貨車に積み込む作業である。十人一組で二貨車に積み込めば作業終わりであったが、これとて寒風吹き荒れる日の作業は並々ならぬものがあつた。

各班とも作業帰りの仕事はまき集めとシラカバの皮取りである。一日の作業を終わつて自分の体をやつと運べるだけの体力しかない。木の根につまづきゴロリと転がりながらやつとの思いで雪道をねぐらへと帰る。暖房用のペチカに枯れ木を拾つて帰らねばならず、また油もない山の中での照明用にとシラカバの皮を持ち帰つて当番が少しづつ裂いて火を燃やして明りとした。

神奈川県 鈴木重雄

七月七日から始まつた道路補修作業は延べ二百四十キロに達し十月十八日に終了した。その間、桶屋の経験者の募集があり二名、ここまで来たら、日本に何が何でも帰るといふ執念から応募し許可された。樽の補修ということでした

が、さわつたこともない樽、それもましてビヤ樽で、仲間二人で考えるだけで作業なし。それでも食欲は一人前で、倉庫にあるキウリ、トマトの塩漬けを腹いっぱい食べて、帰りは民間人が迎えにきて、一週間から十日間くらいは天国でした。

道路補修にしても、天候は安定していて、休業することはなかった。ただし、ノルマは決められていて、監督がトラックに私たちを乗せて、ポツンポツンと所々に置いて、交互に向かい合つて、両側の路面と側溝の除草、穴埋めなどしたが、当時未舗装だし、通過する事も少なく、案外と楽な作業であつた。寒くもなし、畑のジャガイモの掘り残しなどいただき、食糧の足しにした。

彼らも大陸的で、コルホーズでノルマの収穫をあげればそれで済みで、後は国家で保証してくれるという考えだから、掘り残しなど問題なくそのままにしてある。

その後で、ソ連工兵隊将校官舎での雑役、薪切り割り、室内の石灰塗りなどをしたが、石灰塗りには閉口した。石灰を水で溶き、刷毛で塗るのだが、長時間やつていると指に穴があき、ヒリヒリと痛く治りにくかつた。この家の主人はモンゴル系の少佐で、黒髪黒目で親しみがもてました。作業が終わると黒パンやタバコなどくれました。

工兵隊だから、車庫に軍用トラックが入っていましたが、格納するとき、ラジエーターの水を抜いているのを見たが、停止するとき必ずやることで、五十年も前からしょうがない。翌日エンジンをかけたら焼けてしまうからだろう。

道路作業中に、浅い大きな水溜まりを見つけ、中に入ったら貝(カラス貝)片手の掌くらいの大きさ、幅八センチ、長さ十三センチくらいで、縦にびっしり隙間なくあるではないか。早速に実を取りだし、飯盒で茹で、皆で食べたが、美味で胃を充分満たしてくれた。これを長期に食べようと思ひ、天日乾燥したがだめだった。

移動作業なので、時間もなかつたこともある。ビタミンの補給には、アカザやタ

ンポポの葉を摘み、茹でてよく食べた。

滋賀県 南部高恒

きょうから道路作業に回される。スコップ、ツルハシを持つ者、山の斜面を削り、木材搬出のトラックが通れるようにする。新しく削り取った道にタイヤがめり込まないよう、その幅だけ分厚い板を敷く。一人当たり何メートルというノルマがあるのだろう、五時ごろになると地方人らしい人が検視に来る。それが済まないと帰れない。時間が来ると歩哨が「ダワイ、ダワイ」と追いまくる。もうその時分になると空腹で思うように身体が動かない。木製のターチカ、日本の一輪車である、キーキークと足元もふらふらしながら何十回と低いところへ運ぶ。この仕事は腹も腰もしっかり踏ん張らないと途中でひっくり返ってしまう。お互い交代しながらやるのである。しっかりとおなかに入っておれば叱咤されなくてもできるのにも思いつきながら。帰りにアカザという草、ちよつと渋味のある草で毒ではないらしい、これを帰りの道で採り、湯がいて握りにして食べる。一時的でも腹の足しになる。翌朝の分も用意して枕元に置く。疲れていつか眠ってしまった。

北海道 十和田善作

この収容所での作業は主に道路建設(戦捷道路、高さ二メートル、上幅七メートル、二車線の道路)である。建設機材は国家所有のシヤベル(厚手の鉄板でできており、柄は太目の木の枝でできているもの)、さらにモッコ(やはり、太目の木の枝二本に七十センチメートル四方の板を打ちつけたもの)のみである。モッコに土を載せ、前後二人で道路用地に土を盛り上げていく。土は道路用地以外のところの平地を掘り、それを運ぶわけである。毎日の作業人員が五千人から七千人。長い軍人用マントを着た人やら、防寒外套を着た人、いろいろである。この五千人〜七千人の作業現場への往復はもちろん徒歩で、濛々たる砂煙を上げ、遠くからでも一望できる。

まことにアリババの行列のごとしである。こんな道具で、やる気のない捕虜の作業で果たしてできるのだろうか?と疑う者は私一人に非ず。初めはほとんど不可能のごときものであったが、餓鬼も人数とか、三ヶ月後は何とかそれらしい形を成してくるではありませんか。驚くばかりであります。作業のない人は炊事の水汲み、ボーチカ(樽)を二人で担いで沼より水を汲んでくる。また、郊外の森へ行って薪を取ってきて炊事に積み上げる。これも一人小枝一本ずつでも、五千本、七千本は塵も積もれば山となるの例えどおりである。

新潟県 関口義作

貨車からおろされたところは、後で聞いた話で「サンタゴ」という三十戸くらいのコルホーズのようでしたが、村民と接触することはなかった。作業には各人「ノルマ」があり、道路建設だと一日二・七五立方メートルずつの土を移動しなければならなかった。一カ所十人ずつで山の斜面を切り開き、五メートルくらいの幅員で道路を作る重労働だ。終わらないと日没になっても帰ることができなかった。辛い通訳の人が土量計算等してくれたし、また哨兵には立方体の計算などできなかった。その点いささか抜け道はあったようだ。が、何しろノコギリ、オノ、スコップとツルハシだけしかない集団だから、工事が進むにつれ奥地へ奥地へと進んで行くわけで、住居は松の木の皮を屋根にのせ雨露をしのげるだけの小屋に枯れ草を敷いて「ゴロ寝」である。入浴も洗濯もない。ただ食べたいことだけで、他に考える余地などなかった。糧秣を積んだ車がエンコしたか三日くらい食べ物がなくて、さすがに川辺まで水を飲みに行くにも這って行ったことがあった。今でもそのときのことを戦友の今井義員氏と会えば思い出して、当時の苦しかったことなど話は尽きない。人間の生と死の極限に達したときの心理状態は、平和の現代の人々には想像も説明もできないことが多い。

石川県 村沢藤作

私がよく行った作業場所は「スタジオン」「ミンジンスカヤ」「ノボエドーム」「エンペーバーウ」そして「ポルト」であった。

「スタジオン」というのはグラウンド建設、「ミンジンスカヤ」はミンジン街の道路工事、「ノボエドーム」は新築建物工事、「エンペーバーウ」は地下防空壕のよう、海に面した所から奥深く通じた巨大な地下壕であった。

グラウンドの建設は主にトラック作りで、海草のようなものを敷き詰めてから砂利を撒く作業で、三十日余り続いた。ミンジン街の道路工事は一面に石を敷き詰めて、間に土を詰めた。この作業中、側溝の中から日本の銅貨が沢山出てきた。シベリア出兵当時の物ではないだろうか。

道路工事

土掘りは、一立方メートルがノルマ(基準量)である。厳寒時は二〇〜三〇センチも凍結していて、先の丸くなった鉄棒(ツルハシ)では、氷土は豆粒ほどの氷がピンと飛ぶだけで、受け付けてもくれない。歯を食いしばってやっと氷土が割れた頃にはエネルギーは燃えつきて、自動車なら完全にエンストである。

土の運搬はターチカ。運転は、レンガ工場で苦勞したので、ある程度の自信があった。しかし、午前中の氷割りに時間がかかり、いくら頑張っても七〇%、これなら上等の方であった。一〇〇%上げなければ食糧は増えない。でも、これが限界。とにかくにも食うこと以外は頭になかった。最初の頃はまずくて捨てた黒パンが、だんだん美味しくなってきた。環境の恐ろしさを痛感した。

石にも「め」がある！

茨城県 和知義美

路盤構築に使う石は、層のあるものは割れるが丸石はなかなか割れるもので

はない。大ハンマーに細身の柄をつけて真つ向からたたく。手がしびれるばかりではね返される。

ところがロシア人監督が二、三度振ると、大石が割れる。彼は言う、ここに「め」があるのだ、そこを打てばいいと。なかなかわからなかったが、なんとなく割れるようになる。小さくした石を一輪車で運ぶ。ノルマには大変だ。

滋賀県 山中重夫

収容所は原生林の谷合いの台地にあり、監視人によると、よく狼が出るのとことであつた。

以後、我々はここを狼谷収容所と名付け毎晩ラーゲルの四方に篝火を焚くこととし、交替勤務により篝火を絶やすことなく焚き続けた。

この薪取りは昼間の作業終了後、当番が近くの樹林の中から拾い集めた。

いよいよ翌日からはドイツ人が働いていた後を引き継いでの道づくりである。長柄のスコップ、一輪車、発破をかけるための穴掘り用の長いのみ、ハンマー等が工具として与えられる。既設の幅三メートルぐらいの道を十メートル以上に拡張する作業で、四、五人が一組となり、監督が割振る仕事を完工するもので、これの出来具合を監督が査定してそれぞれのグループのノルマの評定がされてパンの量目につながることになる。岩盤の多い区間は共同作業でハンマーと鑿のみで穴をあけ、その穴にダイナマイトを仕掛けて爆破し、砕いた岩石をターチカという一輪車で反対側の土手へ捨てる作業が毎日の仕事であつた。この労働は重労働で、また過酷なもので、現場監督は仕事の進捗状況や仕事振りを見て常に「ダバイ ダバイ ラポーター」と口やかましく急き立てた。

大阪府 岡崎博好

〔大平原に舗装道路造成〕

北極までも続いているのではと思われる地平線を望みながら、大平原にアスフ

アルト敷きの近代？的舗装道路を造るといふ。収容された翌日にはこの道路工事に駆り出された。二十メートルの幅をとった道の両側に一・五メートルほどの兵隊が立てる深さの側溝を掘っていく。五十人ほどの兵隊が一行になってツルハシを振る光景は正に壯観である。道路となる中央帯には大小さまざまな土石が運び込まれ、日本軍から掠奪したローラーで固めていく。次にベトン（アスファルトの粗製品）を流し込んだ上にさらに砂礫を敷き詰める。もうもうと煙が立つ道中に並んでならしていくのだが、シベリアとはいえ既に夏に近い季節の炎天下の作業は極熱地獄そのもの。

早朝にたたき起こされ黒パン一片と塩分だけのスープという食料で西日が地平線に消える薄暮まで間断なく続けられる。掌の豆はつぶれて血がふき出す。足は丸太のごとく腫れ上がる。戦争に敗れること、俘虜の辱めなど、この重労働に比すれば物の数ではない。ラーゲルに引き揚げて口をきく者はいない。黒パンのかけらに例の塩辛だけのスープをすすり、二段に分かれた寝台にばったり倒れたまま寝込んでしまう。こんな日常が三カ月も続いただろうか。突然の移動命令である。

⑧ トラック・貨車・船荷の積み卸し

夜間作業

和歌山県 岡本昇

仕事の疲れでぐったりと寝ていたら、不意に「作業だ」とたたき起こされる。工場の引込線に入った貨車に積んだ鉄板をおろす作業である。鉄板の表面は凍りついて、にぶい外灯にギラギラ光っている。手を差し出すのもためらう。全部おろしてから帰るといふ。十人で力を合わせてやつと一枚持ち上げ、肩の高さの貨車のボディーを越させて投げる。足許はすべるし、身を切る冷気は手足の感覚を奪ってゆく。それでも気を抜くと大怪我をするので、泣き声で「セーノ」と掛け声合わせて放り出す。落ちた鉄板の金属音が腸をえぐる。線路脇に整理し終わるまで、かれこれ三時間、我に返ると疲れがどっと出て、凍りついた星空を仰ぐと無性に悲しくなった。収容所に帰っても夜食はなく、空腹で眠れない。それでも翌朝は定時に作業に放り出される。冬の夜間作業は殊更骨身にこたえる辛い仕事であった。

セメントの積み替え

有蓋貨車に半分くらいバラのセメントが積んであり、これをトラックに積み替える作業に狩り出された。トラックが数台待ち受けている。貨車の扉を少し開けて、交替で角スコを使ってトラックに積む。最初のうちはうまくいったが、入り口のセメントが少なくなると、十人とも貨車内に追いこまれて、中の者は奥から入口めがけてスコップでセメントを放り出す。角スコでは思うようにすくえない。

次第に足許が埋まって身動きできなくなる。それにもまして車内はもうもうとして、目をあけておれない。口や鼻は硬ばってくる。入口では監督が口やかましく、早くやれと怒鳴るので息も絶え絶え、無茶苦茶にスコップを振り回す。息が詰まる。入り口と中と交替する。全身真白で、「殺される」という口の動きが

ようやくわかる程度だ。終わって目や鼻、口を洗うのに一苦勞したが、いつまでもばりばりしていた。どうしてこんな無茶な作業ができたのか、不思議に思うし、今再現することは不可能だと思ふ。

和歌山県 土井 昇

やがて前後左右をソ連兵に固められて、どこともなく行軍に入った。不安な気持ちで着いた所は、ちよつとした川沿いの工場で、どうやら造船所らしい。

早速二十人単位の作業班をつくらされ、工場内に引き込まれた。鉄道側線の貨車から鉄板をおろせという。幅三メートル長さ六メートル厚さ三センチ、一枚数百キロ以上もあるうか、百枚以上のものを三時間以内におろせと、金挺子五、六本与えられた。だが、不なれな作業のため、なかなか作業が進まない。ソ連兵のいう半分もできていない。

ふとそばを見ると、木製ながら立派な起重機が数基立っている。起重機を使えば何倍かの作業ができるのにと腹が立つ。約二倍余りの時間でようやく貨車一両の鉄板おろしが済んだ。翌日からこの鉄板の横持ち作業、各自かけ声一、二、三で持ち上げ、周囲の端を肩にかけ、百メートルほどの工場内へ運搬する。こんな危ない仕事は約二十日間ほど続いた。

次は石炭おろしだ。夕方、四名一組となつて到着した八十屯積み有蓋貨車の石炭を夜半までにおろせという。扉を開けると崩れ落ちるうちは楽だが、中ほどの分はショベルで二回くらい中継しなければ扉まで届かない。夜半までの作業が朝までたつてもまだ終わらないことしばしばで、空腹の上、寒さと重労働の連続で、多くの戦友が病に倒れた。

栃木県 小野寺進

またあるとき、一日のノルマが終わつてラゲルに帰り寝ていたら八時ごろ非常召集がかかり、五十人で貨車工場の構外に石炭を満載した三十トンの大型

貨車が四両到着し、一時間で全部降ろせと言うのでみな一生懸命やったが、後かたづけなどしたら夜中の十二時までにかかったことがある。

和歌山県 木下正夫

伐採した厚木を手で小引きして薪に、そしてその薪を山の麓の駅の貨車積みだ。「ヨイトマケ」の掛け声でみんなが心を合わせてやらなければ、体の弱った者もかなりいるので、仕事もスムーズに進まないのだ。貨車が入れば、時間内に積み込まなければならない。難作業で積み残しは絶対に許されない。たまつたものではない。

山からの木は家庭でたくへチカ用として白樺と紅葉の堅木ばかり、松は建材用ということ。積み込みの駅には電灯ひとつない暗やみ、タイ松の明りで作業するのだが、積み込みの薪が近い車両であればよいが、何百メートルも離れた車両に積み込むのは大変だ。一々担いで運び入れなければならない。それがすべて協同作業であるので、凍りついた渡し板がすべつて、一人が倒れば八人が倒れてしまう。

島根県 八幡垣正雄

次に、ウオロシロフでの労働、生活等を逐次書いてみる。

労働

收容所の施設等も一応完備したので、いよいよ労働である。收容所を出るとき、はいるときに厳重な人員点呼である。これがまた大変で、四列縦隊では計算ができないとみえて、五列縦隊に並ばせて数えていき、一度で終わった例がなく、二度、三度と繰り返す。五人、十人、十五人と足して計算していた。人員点呼も終わり、いよいよ出発である。

道路は五メートル幅の砂利道で、途中に一か所川があり、川幅三十メートル前後であったが、橋がかけてなく、両側堤防に斜めに道がつき、自動車も人間も

川の中を通行するのである。シベリアは非常に雨が少ないのでいつも水は川底を流れているので、飛び石が転々と置いてあり、この飛び石を渡って道路に上がり作業場についてみると、鉄道の引き込み線があつて、なかに貨物駅のようにホームがあり、倉庫三棟と屋外に多くの機械類があつた。この施設名はバザールと呼んでいた。整理して待つていると、かっぶくのよい人柄のよさそうな人が来てこの人はドーニックと呼んでいた)通訳を通じて、今後ヤポンスキーソルダート(日本の兵隊)はこのバザールの責任者の指示で(ラポータ)労働するようとの内容であつたように思う。

このバザール内での仕事の内容は、貨車の積みおろし作業、セメント、生石灰、石灰、石炭、材木、機械類の積み降ろし、満州からの戦利品(発電所等の機械及び部品類、軍隊からの備品等、「軍隊からの戦利品の内容については後述)まきづくり、倉庫及び屋外の機械類の整理等で、この外に自動車等でよその作業(バザール関係以外の作業)等で毎日作業内容が変わつていた。

セメント、石灰貨車おろし作業

どの仕事も嫌いであつたが、一番嫌いな仕事は、散積のセメント、石灰の貨車おろしであつた。有がい車のセメント、石灰を真夏の暑い日にスコップですくつてトラックに積み込むのだが、もうもうとした粉が舞い上がつて、目も口も開いていられず、外に飛び出して呼吸をしながら積み込み、汗の出たところに石灰の粉セメントがついて、目や鼻の中にもはいり、目や鼻の中で固まって非常につらかつた。貨車おろしが終わつてみると、体じゅうが白く、または灰色になつて、互いに布切れ等で叩き落とすが、汗のために体に密着して水で洗うより方法がなかつた。

このような作業をしたときは、ハラショウ・ラポータ(よく仕事をした)であるので、早引きをして帰る。帰つても風呂がないので、途中の川で体を洗つて帰つたが、寒いときには手足、顔だけを洗う程度であつた。

材木の貨車おろし作業

材木の貨車おろし作業は、無がい車であるが、台車だけでなく外枠付きの高さ一・八メートルくらいで、枠が倒れない貨車に末口二十〜五十センチ、長さ六メートルの材木が二列に積み込まれている。上部の方を降ろすことは簡単であるが、下に下がるごとに木の太さも大きくなり困難であつた。

おろし方法は、両側に支柱を外枠に斜めにかけて、ロープを両側にかけて、そのロープを外から引つ張り、中から押し上げる。支柱にそつて歯止めをしながら貨車おろしをした。一貨車をおろし終わるまでの所要時間は三時間くらいで、危険な仕事であり、一列車で貨車が五両、多いときで十両で、特につらいのは夜間作業であつた。

夜間、貨車はいつてくると、警戒兵が大声でヤポンスキー・ドラワ・グルジイ・ダワイ(日本人材木おろしだ早く)と呼ぶので、貨車の数を聞くとピヤーツ(五つ)と言う。そうすると、長らく貨車おろしをしていると一貨車に必要な人員が決まつているので、夜間等を考慮して人員を増減して交代で作業に出かけた。

夜間作業をしたときは、昼間はオデハイ(休み)であるが、また貨車おろしがある場合は、貨車おろしに出かけ、不規則な作業であつた。材木の種類は主にカラ松、モミの木等であつた。

戦利品の貨車おろし作業

このバザールにも満州からの戦利品が輸送されてきた。私たちはこの戦利品の貨車おろし作業を行つた。

軍隊からの戦利品は、回転式飯炊き用の釜、高圧滅菌器(衛生機材)軍人用の衣類等、便所の戸(下士官用便所と書いた戸)この便所の戸は満州で私たち同胞がわざと積み込んだものと思う。

その他では、発電所の変圧器、配電施設の機械器具、他に相当の品物があつた。

ソ連兵は炊飯用の釜の使用方法がわからないので、私たちに使用方法を聞いたので、使用方法をいつわり教えても、ソ連兵はハラショ(よろしい)と言つていた。

貨車おろしの際、ソ連兵の監督がいないときは、貨車から投げ出したものである。

この戦利品の貨車積みをしたのも、満州に残留の日本兵が積み込み、満州から食糧、馬の食糧、衣服等を大量に輸送したのである。

満州からの戦利品等の貨車積み込み作業が完了次第に、軍人、軍属を二十一年の終わりに全員をソ連に抑留したのである。一から十まで日本軍の物資及び満州の資材等を我々軍人等の手で送り込み、我々の手で整理したのであった。

新潟県 宇野公夫

そのうちに作業内容が変わり、材木のトラック積みとなりました。この作業は特別十二時間労働となったため四時間の超過勤務となり、これに対して賃金の支給を受け、当時四キログラムの黒パン三ツルーブル程度でしたが、運転手に金をやり町のバザールから買ってきてもらい飢えをし、また戦友にもおすそ分けなどしました。この作業のためトラックが来ると作業に狩り出されたのですが、ある日零下五十数度の猛烈な寒気の日も狩り出され積み作業に従事したけれど、在ソ三年中に一番一生懸命に仕事をしました。あまりの寒さのため自分で身を守らなければならぬため、体を働かし体温の調整を図ったものです。

福岡県 藤吉静男

貨車積み作業はほとんど日常作業の終わったころ、貨車が四、五十両はいり、主に夜間積み込みが始まり、十二時過ぎる真夜中までかかり、しかも週二、三回と、難行苦行の一つで、かなり体力消耗の作業だった。

もう一つ、スタハーノフの日とかで、日曜日、平日のごとく作業に狩り出され、理由が増産なのか、ノルマ不足のためかよくわからぬまま。六日間、栄養失調の体を引きずり、作業を続け、日曜に休養がとれるささやかな喜びも吹っ飛び、

しかも一か月二、三回あり、ひどいときは一か月も続き、休養がとれなくて、塗炭の苦しみをなめさせられたものだった。

京都府 武内敏次

バルハシ湖という大きな湖がある。昭和二十一年の夏何回かここへ来た。対岸から運んで来た岩塩を運搬船から荷上げする作業だった。船倉へ鉄の箱がグレンで下りてくる一トン積みその箱の岩のような固い塩を転がしたり抱えたりして入れる。炎天の船倉は焼けて火を吹くような暑さだ。積み終わると上へつり上げてすぐ下りてくる。バケツに入れて水をガブガブ飲みながら、汗と塩にまみれて積み込むが、監視兵はダワイ、ダワイと怒鳴る。

京都府 久保田清蔵

十二月初めごろ、伐採の作業から材木のトラック積み込み作業に変わる。この仕事は危険だ。トラックの片側、前方と後方に丸太をかけ数人で回しながら押し上げる。材木の置場が林道の近くだといいが遠いと骨が折れる。この仕事のノルマ午前一回午後一回の積み込み。日に二、三回のときもあり、最高にノルマを上げる。所長はいつも我が班を賞していた。班長は鼻高だった。

岩手県 田辺壮久

夜間突如として、貨車からの丸太おろし、石炭おろしに狩り出され、体が冷えきつて一睡もできないまま、翌日は普段と変わらない激しいノルマが課せられた。

北海道 石川朝雄

三月に入つて今度は台車にバラス積み作業をさせられた。ところがソ連のスコップというのは柄の握るところがない。丸棒のみである。従つてスコップに入ったバ

ラスが台車に投げ入れる前に半分くらい落ちてしまうから、ノルマが達成されず、これには大変な目に遭った。ソ連は朝の温度が零下三十八度以下は作業休止となる。ただし作業に出たら、ノルマが達成されないと深夜までもやらされる。おそらく夜の温度は相当下がっていたと思う。

岐阜県 梶尾利男

このころ毎日ダモイの列車を見送りながらいつ帰れるのか、我々の番がいつくるのか、全くやりきれませんでした。ここでの作業は丸太のおろしです。実に大変です。昼夜を問わず、貨車が駅に入ればおろし作業に刈り出され、八人一組で一貨の木材をおろすのです。最初上の部分は力もたいして要らずゴロゴロとおろすことができるが、だんだん下になると二抱えもある大木、十分な食事もしていない我々、全身の力を入れ作業をしないとけがをする。野外の気温は零下三十度より下がっている。気の抜けない命がけの仕事である。重量物であるから下手としてはねられて死亡した人もあった。実に気の毒なことである。戦争は終わったのになぜ我々がシベリアまで来て命を落とさなければならぬのか、全くやりきれない。

千葉県 村上武士

だれ一人としてむだ口をきく者もない。ただ、足踏みの音だけが切なく聞こえる。じつとしていけば、足がしびれて凍ってしまうからだ。時折、無情の風がほおをたたく。ようやく迎えのトラックが来た。荷おろしの作業内容といえば、東ドイツから運ばれてくる石炭液化の部品が、一日貨車で四十〜五十台運ばれてくる。荷おろしといえども、機械も何もなく、ただあるのは、古いブルトリーザ一台にロープをかけて引きすり落とす。これが唯一の方法であった。従って、精密な部品も相当に破損したとか。某曹長は、その責任を取らされ、私どもの帰国の日、ソ連裁判にかけられ、九年の刑が確定したとか、まことに気の毒な一面

もあった。

岡山県 大水操

肉おろしは、目をむいた牛の頭だけ。角を持って背負い地下倉庫へ。少し暖かくなつて牛の臓腑おろしには閉口。上衣のロシア服は脂でべたべたで、大変臭い。また関東軍より押収したみそだるをおろすと、「これは何だ」と監督は言う。我々はたるをあけて「日本人の大便秘だ」と言うと、つばをかけ「捨てろ」。タコのたる詰め、「これは海の虫だ」「これも捨てろ」と言うので、詰め所に持ち帰り、夕食に岩塩でたいてご馳走になる。

小麦の製粉は、大きな直径一メートル五十センチくらいの石うす。下うすは固定、上うすだけが固定心棒で回る。発動機は神戸製鉄製の四十馬力。昼夜二交代制で、夜間は零下四十度、二階二人、小麦をうすに入れ、下一人、小皮まじりの粉の袋詰め。腹がすくと、この黒い粉を水で練って丸いせんべいにして、煙突の上で焼いて食べる。この皮まじりの粉だから黒パンができるのだとソ連人が教えてくれる。このような作業をウルガルで昭和二十三年五月まで行いました。

強行なノルマ、穴掘り作業で疲れ果てて帰り、夕食を済ませ就寝中またまた貨車の土砂おろしで作業出勤。外は真っ暗、吹雪模様。三十トン無蓋車にスコップを持って二人ずつ乗車して、土砂を両側におろす。零下三十度、体も凍りつく。昼間の作業で疲れている。

もう夜中の十二時、貨車おろしが済むと下の線路上の掃除。土砂があると脱線するから、私が各車を見回りして、終了引き揚げの指示をした折、収容所内日本人大隊副官某軍曹来たり、線路掃除やり直しと指示する。私は終了であると宣言、副官と大げんか。果ては暗夜吹雪の線路上、中隊員の見ている前で、貴様日本人が、同胞を一人でも多く故国の土を踏ますのが我々の責任だぞ、貴様はこの場でぶち殺してやると、大格闘、ソ連軍警戒兵や作業監督らが駆け寄り仲裁に入り、一応終了。

この件で我が中隊兵は非常に私を信頼してくださり、私も大変うれしかった。

岩手県 西富一郎

各所に雑役で働く日もあったが、真夜中に鉄道貨車が入ると、枕木の積み込みをさせられ、零下四十度以上の厳しい寒さの中、投光機の明かり頼りに、凍結した足元に注意しながら必死に頑張る。これがシベリア最大の地獄であったかもしれない。疲労のために亡くなられた方々には、話す言葉もありません。

滋賀県 南部高恒

きょうから材木を貨車に積み込む作業だ。かなり太いロープを木材の両端に回してかけ、反対側から三人か四人、両方に分かれて、掛け声をかけて引つ張るのだ。これも夕方になると力尽きて、もう一息というところで上がらなくなる。するとソ軍の歩哨が見かねて手をかすこともしばしばあった。我々の体力の衰えを痛いほど感じる。この宿舎は砂地に洞穴式であるためノミに悩まされ、一晩じゅう眠れない。どうして消毒しないのか、さっぱり分からない国だ。ここは約半月余りで中隊本部に合流し、二十二年六月ごろ、突然移動することになった。

新潟県 高橋 算

シベリアの厳冬も去り雪も消えていったが、寒さでは春とは言えないころ、軍医の健康診断があった。女性の軍医であった。いかめしい軍服姿で堂々とした体格である。余り多くの日本兵が死亡するのでソ連当局も心配したのではないか。

上半身裸になり、いすへ腰をかけると、腹の皮をつまんだり引つ張ったりを繰り返し、そして背中の方も同じようにして診断は終わった。診断はそれだけであった。そして「ドヴァー」と言った。診断は一がアジーン、二がドヴァー、三がトリーと言った。そしてドヴァーは軽作業であった。ドヴァーに体力が落ちると、ノル

マも減らされるが食事も減らされるという。

二、三日後、私は貨車に丸太を積み込む隊へ移動した。十四、五人だったと思う。丘の上から線路の見えるラーゲルへ着いた。そこには七、八十のドヴァーの先輩がいた。線路の付近には我々が切った丸太の山が積んであった。ホームもないだ原っぱの線路ばかりのところへ貨物列車が止まると、直ちに出勤して積み込む列車は大体一日一回くらいしか入ってこないが、時間が決まっていなかったので朝早いときもあった。貨車は全部有蓋車で五十トン、三十五トン、十五トン車の三種類で、五十トン車には奥の方に明かり取り窓が左右についてあった。そして長さが十メートルもあり屋敷のように広かった。

貨車が到着すると、直ちに集合して丘の上からおりていく。六人、四人、二人と、貨車の大きさによって持ち場が指示された。積み込みが始まると、ソ連兵が来てベストラが始まる。早く終わった組はほかの組のところを手伝う。日本人は担げるものは全部肩に担ぐが、ソ連兵はたまたま手伝っても横抱きにして担がない。余りうるさい監視の兵がいたときに、しやくにさわって一段積まずにごまかしたこともある。予定の貨車の積み込みが終わると次の貨車に入るまで休んでいた。

東京都 小野正大

翌朝午前三時に起床、ラーゲルを出ました。作業は、一車両の土砂下ろしを一時間以内にするませ、次の車両に移り、これも一時間以内で下ろす。これの繰り返しです。車両は五十トン貨車で無蓋車です。土砂といつても土は粘土で砂はこぶし大の石がまじっていて、スコップに粘土の土が粘りつくので作業は本当に大変でした。一車両四人で組み、休まず作業しても五十分はかかりました。次の貨車が着く間に食事を取ります。いつの作業も厳しかった。栄養失調になりながらもよく体がもっているものだと思います。ふと夜空を見上げると北斗七星が頭上に輝いていました。日本で見る北斗七星は東の空から西へ大きく動くの

に、シベリアでは私の頭上で小さく一周するので驚きでした。いかに北極に近いかを感じました。

熊本県 安田 剛

次は駅構内で貨車から木材を下ろす作業。シベリアから直接送られてきた物で、七、八人いて担がねば動かない大木、みんなの呼吸が合わない危険な作業。私の班で不手際があり、私の親指が材木の間にはさまり負傷したので、翌朝、医務室に行き、女性の軍医大尉の診療を受けたが、熱がないので休ませない。仕事に行けとソツケない返答(医者知識なんてゼロ)。他の人たちの中にも神経痛、脚気、その他、熱の出ない病気の者は皆このような状態で苦しめられたものです。

和歌山県 山本良市

最初の作業は倉庫の荷役であった。その倉庫は相当大きな川の岸に建っていた。そして河水は凍結していて広く、大型トラックも自由に通行していた。

河口はバイカル湖と聞く。荷物は主に食料品で、船着場からベルトコンベヤーに載せたり、倉庫からトラックで積み込むこともベルトコンベヤーを利用して二人一組で仕事をしたが、力の要る作業であった。

気の合った強力な相棒と組んでの作業であったから大いに能率を上げたが、砂糖や粉袋で一個が百キログラムを超えて詰めた物がくるため、指や掌が痛んで苦労した。常に作業中は素手であった。荷役の役得は、食料袋の破れた袋から増し飼いを時々失敬して体調を保つことであった。このときの重量荷積み下ろし作業で肩と腰に負担が掛かり過ぎたために、帰国後、長年月、始終鍼灸治療に通い続けているが完治せず苦しい。骨頭変形になった。

鳥取県 井上万吉男

五五三労働大隊は、我ら幹部候補生の若者を中心に、師崎隊長以下約千名で編成され、ウラジオストクの漁港関係の作業に従事した。ここウラジオ港では、北洋で捕れた魚を満載した漁船から荷揚げをし、サケ、マスに分類しながら箱詰め、樽詰めにして貨車へ積み込む作業。更にカニ缶詰製造、箱詰め、また箱作り等一連の作業がほとんどであった。食料事情や生活環境の悪い中であつて、労働のノルマが課せられており、一般的には100%の消化は難しかったが、我ら五五三労働大隊は若さとやる気に溢れていて百五十から二百%近くのノルマを稼ぎ、漁業関係者はもとより、市民からも喜ばれ、全抑留者の模範とされていた。

岩手県 川口純二

数カ月たったテルマの夕刻、暗くなるころ、突然に厳寒の奥地モシカ収容所に送られた。私はこの地で帰国「ダモイ」の声を聞くまで丸三年間も絶望の苦しい日々を送つたのです。冬の平均気温は零下五〇度にも及ぶ極寒の地域であった。この時から私のラーゲル(収容所)生活が始まったのである。

雪山での重労働で、伐採、薪伐り、集積、材木積み込み、牛馬取扱い、糧秣運搬などノルマを課せられて労働が割り当てられた。厳寒の夜間作業は体の芯まで冷え切り、身を切られような「しばれ」です。足踏みすれどもすれども寒く、天を仰ぎ北極星を虚ろな放心状態で眺めつつ、丸太材木を貨車に積み込んだらあの「巻いた巻いた」の悲痛な掛け声が、復員五十余年経た今でも夜空を見るたび、私の脳裏に甦り、感慨無量です。

広島県 村中汎雄

毎日のように駆り出されて行く製鉄工場はアムール工場といい、この付近では最大規模の工場であつたらしい。例の「ポー・ポー」という汽笛はこの工場のものであつた。初めころの仕事は溶鉱炉に入れる屑鉄をトロに積み込む作業である。引

込線の間にはドイツの戦車が山のように積み上げられている。遙かヨーロッパ戦線からよくぞ集めたものだど驚く。ソ連の戦車もある。そのうち日本の戦車も姿を見るようになった。これらのガス切断したものを積み込むのである。一列に並んで一つ一つ手渡しする。あるいは戦車の中に入ってサボる。要領よく適当にやることを心掛けていた。

岡山県 土居一志

毎日の労役は駅のホームでソ連軍戦利品の積み込みだった。農産物・木材・石炭などから鉄道の犬釘(枕木にレールを固定する)や事務室、ついたて、いす、寝台などの家財道具にまで及び、見当のつかない量だった。参戦して一週間ほどの戦利品としては、余りにも徹底的で火事場泥棒的な根こそぎ略奪だった。鞍山、本溪湖、奉天などの大規模な工場設備も解体してドシドシ北方の本国に向けて送った。我々は嫌気がさしてきた。しかしソ連兵の銃口の前には抵抗の術もなかった。

福島県 石黒庄七

ポートワ三港に入港。二時間後、下船命令。異境の地への第一歩である。これから四十キロくらいは行軍とのこと。戦争に負けた哀れな姿。港を出ると早く着いた同胞が柵の中で、物が無い、大事にするんだなどと口々に伝える。四キロくらい歩くとドイツの捕虜が焚き火をしており、その分所に私たちが入ることになった。

次の日一日、身の回りの整理、休養となる。次の日から鉄道作業、大きな貨車に石積み作業である。一メートルの高さに積むのがノルマである。石が多い所は時間内に積めるが、石がない場所では積めない。積めないときは時間延長で積まされた。

それから間もなくシベリアの厳冬。三交代の作業である。特に夜間作業は寒

さ零下三〇度までは働いたのである。今思い出してもぞっとする。

石川県 吉野藤吉(旧姓 高山)

私たち若い一個班は共産党「オルグ」から反動分子と睨まれ、懲罰として農村へ送られる。収穫期の砂糖大根の貨車積みで、一人で六十トン無蓋車満杯が「アルマ」。貨車が入れば昼夜の別なく積み込みで、入らないときは丸々休み。

岩手県 石橋善次郎

木材積みにはトラックと貨車の積み込みがある。どれも伐採に次ぐ重労働である。私はどうした因縁か、抑留中、木材と関係のある所で一番多く働いた。軍隊に入るまでの職業も国有林を管理する営林署に勤めていた。春から秋まで雑多な仕事の農場とか建築現場にいても、秋深くなると伐採作業地に鞍替えして丸太の取り組みに移った。嫌な腐れ縁が付きまるとついていた。

丸太の積み込み作業の中で貨車列車への積み込みは、時間の制約があるし昼夜の区別がない。貨車の入り次第で作業するので大変不規則な労働で、随分泣かさされた。朝・夕は雑炊をすすり、弁当は三百五十グラムの黒パンをかじつての体力、それに働く大義名分がない。無気力さも手伝つてはどんな仕事でも嫌気が先走りして楽な事はないのだ。

貨車に比べ自動車の積載の方は、ソ連人の運転なので時間内労働だったから心身共に余裕を感じた。使用車は自国製車両は一台も走っていない。全部米国製ばかりだ。アメリカからの借り物の車だった。私達には珍しい十輪車に更に補助台車を付けた大型車が運搬していた。

長材の積み込み作業を簡単に書いてみる。自動車・貨車ともに、二本の輪棒を架け渡し、積む丸太の両端にロープを引っかけて反対側で引っ張り、輪棒の上の丸太を巻き上げて積み込むのだ。

一グループが十人内外で編成される。リーダーが車両の上に立ち声高らかに

音頭を唱える。これに応じて一斉に掛け声を出して一緒に綱を引く動作を繰り返しながら長尺重量材を輪棒上で回転させて巻き上げる。作業要領とか動作の一切は、リーダーが唱える音頭の文句で指示される。

自動車・貨車ともに一車両の積載量は同じくらいだった。三十立方メートルほどとかという。見上げる高さまで積み上げるから、終わりの頃は渡した輪棒の傾斜が急角度となる。重くて途中で立ち往生することもあった。また、滑り止めのため、丸太と輪棒の接点に鷹口を使い歯止めを必要とした。この危険度の高い役目は動作の機敏な者が担うことになる。自らも危険であるが、同僚達の命を預かっていた。

上乗りリーダーの一挙手一投足を凝視しながら彼の掛け声により揃って作業しないと不測の重大事故を招くので、皆一生懸命に気を揃えて作業した。ソ連には捕虜の労働安全衛生規則の適用はない。自分達で自分の生命を守るのが宿命なのだ。

四方八方の作業現場から音頭と掛け声が響き渡り賑やかであった。このリーダー達はもともと故国の東北や北海道で丸太扱いの経験豊富な熟練者で、何も知らない我々を指導してくれた。掛け声は昔からのヨイトマケと同じだ。作業指示の文句や即興の事柄を交えて唱えた。実に美声の持主が多かった。日本人捕虜製の鷹口(ドットコ)・木廻し(ガンタ)等の使い方も教えられたし、多少でも能率向上の要領を知り、体を楽にして働くこともこの人達から学んだ。

抑留後半、ダモイ(帰還)まで従事したのが二メートル材を有蓋貨車に積み込む作業だった。短尺の用材はほんの一部で、大半は薪用が多い。乾燥材だったり、生材だったり、大径・小径木等雑多な短尺材である。積み込みには人肩による方法しかないのだ。

長尺材を無蓋車に積み込む作業にも従事したが、作業の要領は全く自動車積みと変わらない。ただし、前にも書いたとおり、貨車の都合次第で時間との戦いと夜の作業が多くて辛かった。自動車積みの場合、一車積み終わると次が来

るまで待ち時間があつて気兼ねすることなく休息できた。しかし時々待ち車があると休む間もなく積み込みをする場合もあったし、ソ連人運転手の気まぐれな運行に振り回された。

長尺材の積み込みは、自動車・貨車積みともに相当高く積み上げるので、運行中荷崩れしないよう丸太の配置に熟練を要した。両端に置く適材丸太の選定が重要で、上乗りリーダーの腕の見せ所でもあった。

あの最低の労働環境の中で、実によく働いたものだ、その他大勢の素人集団を束ねて危険な作業をやったと、思い出しても背筋が寒くなる。勿論犠牲もあつた。輪棒が外れて丸太が落ち怪我をした者もあつたが、幸い死者が出なかつた。それが不思議なくらいの危険な作業に違いなかつた。

短尺材の輸送は有蓋貨車が使われる。入口に丈夫な登はん板(歩み板)を架け渡し、大径材から順にこれまた人肩で運び込む。屋根付き貨車は大きく感じだが、トン数は判らない。車内の棚積みには、上手に空洞を作つて実材積を少なく工夫するのが肝心だった。これが労働時間を左右するのだ。したがって内地での経験者を各貨車に配置する。上手に彼らはソ連人監督の目をごまかす工夫をするのである。内地でも、薪棚積みするときこんな空洞を作り、棚数を増やす慣行は知っていた。

貨車の両側から重い丸太を下積みし車内に縦に並べ、車内の中央から木口が見えるように積む。中央部の入口付近は横積みにするので最後まで残る。奥の方から天井まで隙間のないように詰め込む。積み込みの途中で巡回監視するナチヤニック(監督者)の目を上手く騙して空洞を作るのに創意工夫を凝らしたものだ。

運び込む要領を書いてみる。軽い材は一人とか二人でじかに肩で担いで運び込む。丸太の直径とか重さにより、金属の輪を丸太に通して担ぎ棒を入れ、歩み板を登つて運び込む。担ぐ人数によつて二点張り(二人担ぎ)から三・四・六点張り、最大級の丸太を搬送する八点張りまでがあつた。六点張りとか八点張

りになると軽業師のような芸当が要求された。

新潟県 真嶋藤作

まず太くて重い丸太に金輪を通し、金輪にその棒より短い棒を通す。この棒の両端を支点にして担ぎ棒を当て、四人の肩で担ぐ。前後この要領で担ぐのが八点張り。重い後ろだけこの方法で担ぎ、前は二人で担ぐのが六点張りと呼称した。これで狭く傾斜のある歩み板を昇るのだから大変な労働だった。一人の一寸の油断が大きな事故になり、外の人達に大きな迷惑を掛ける。少しでも気を抜くことができない。緊張の連続の、危険この上ない作業であった。

人数が多くなるほど、背丈も同程度の者で肩の高さを揃えた。それに気の合う連中が組んで慎重に担がないと歩み板から転落して大怪我をすることになる。危険がいつでも付きまとう作業だった。

事故も時々発生した。帰国の直前に腰に怪我をした宮城県人を記憶している。この作業は、何といつてもお互いに意思の疎通を欠いては最悪の事態を招く。傾斜のある登はん板を重量物を複数の人間が担いで歩むのだ。特に後ろの者に荷重が重くかかるからグループの人選が重要だった。あの最悪の環境下で何とか無事に働いて今日があるのは、日本人リーダーの好配慮があつてのことであると感謝している。シベリアで体験した様々な労働の中では、自動車・貨車の長丸太積みも作業指揮能力が大切だったが、特に登はん板を渡って担ぎ上げる短尺丸太の運搬作業は最も指揮者の力量が問われた労働だったと思う。

日本内地でも昔の木材産業労働は重労働の仕事と言われていた。俗に木挽の一升飯食いと言われていた。それほど腹ごしらえを十分にして体力を維持しないと働けない仕事である。それが捕虜の身でろくな食いの配給もない、飼いやしの状態の中であれほどの労働奉仕をやった。たいしたもんだと自負している。私自身も体を使つての仕事は経験がなく、ペンより重い物を持つたことのない人間が命永らえて現在に及んでいるのは、ラーゲル(収容所)の生活で良きリーダー達に恵まれた結果と思つている。

一番こたえたのは、酷寒零下四十度の夜間のトラックへの積載作業である。六人一組となつて、先般伐採してある木材をトラックに積み込むのである。一、二月頃のシベリアの夜寒は格別である。今日も零下四十度にはなつたであろう。皆、一台積んでは焚き火にすがりついた。焚き火の火花で顔には小アザができ、外套は火花で小穴が多数焼け跡となつて残つた。

福井県 井上博夫

こうしてハバロフスクからウラジオストクに移り、最後の一年は港湾作業を主に沖仲仕といったようなことをした。もうこの頃には労働報酬に対しての賃金も出され、食事の方も次第に良くなり、前の奥地より比較すれば気温も楽だし、これで内地へ帰ることもできるなど内心ゆとりをもてるようになった。ある夕方、ルール(お金)を持つて初めて白いふんわりしたパンを買い、ウラジオ港の湾に立ち静かな波を眺め、この水が先に帰つた方達の舞鶴へ続いている、地図から見れば今飛び込み泳いででも帰れるような錯覚さえ起き、感無量になつたことが今は夢のように思い出される。

ウラジオ港の作業は、船に積む、また、おろされた物資を五十トン貨車に積み込むものであつた。この仕事は時間との競争であり、夜の真夜中でも作業に出ることもあり、特に六十キロ入りの穀物の貨車積み込みは五十トン車に八百五十袋あまり積み込まなければならなかつた。十人のグループで、二人でよいしょと持ち上げたのを上手に肩に合わせなければうまくいかない。急な足場を登り、貨車の奥までは相当あり、チームワークの良さが非常に大切であつた。私もこれは生まれて初めての作業であつた。今の時代のようにリフトもなければコンベアもなく、全部肩にかかつたものである。しかし大型機械のオペレーターへの女性の進出には一際目を引かれたものである。男女同権とはこのようなことかと感心させられた。

ウラジオは色々参考になった。港に並ぶ大きな倉庫には日本陸軍軍用倉庫と大きな文字で書かれたのがそのまま残っていた。当時日本の軍隊は大手を振って我が物顔に町の中を自由にしていたのだろうと頭の中をかすめ、今、自分達の捕虜としての身分を一層悲しく感じたものである。それにしてもあの大きな文字が消されず残されていることに、共産党国家と資本主義国家との違いをまさまざと見せつけられたものである。こうして毎日の決まった作業ではなく、何に出くわすやら現場に着くまでは見当もつかない。今でも忘れられないのはセメントのばら積み作業だ。顔も鼻も衣服も、また呼吸困難になったことさえある。いくら続けてもきりのない作業で、実に苦労の種であった。また船一杯に山積みされた岩塩の荷おろし作業もあつた。先にも記したように、一握りの岩塩があの広大なシベリアの奥地ではなくてはならない貴重品であることを思い起こし、作業に精を出したものである。

歩の悪い作業ばかりではなかつた。これは冬のある日のこと、貨車積込みの作業のときであった。またあの重い六十キロ入りの穀物の積込みかと半分あきらめながら重い足取りで現場に着いた。肩は先の作業ですりむけ、軽い生傷はまだ痛々しく血の出た跡が皆残っていた。現場に着いて見ると今度は違う小さな段ボール箱詰品が山のように積まれていた。残念ながら文字は読み取ることも出せず品物は何かよく分からなかつた。目方にしては七キロくらいで軽い。まず先の五十トン貨車に両方の奥から積込み、なかなか時間もかかつたが、この日ばかりは夜暗くなるのも苦痛ではなかつた。ところが中身はなんと見たこともないチヨコレートの箱詰とわかつた。そこでの品物を上手に頂くことにした。冬場の衣服はありがたい。まずズボンの下足首の所をしつかり止めて、ズボンの中に詰め込んでカザルマダモイという段取りだ。初めの間はマンドリン小銃を肩に掛けた兵隊に内緒でわからないように、次にはこの兵隊にも打ち明け、チヨコレートを彼の皮のシューバ(毛の外套)のポケットに詰め込んで、監視役をチヨコレートで買収というわけだ。積込み終わり、箱の数はOK、貨車のドアには鍵が掛けられ、残

る不安の一つにカザルマに着いて点呼の時だ。これかもしれないたらまたあの恐ろしいシベリアの奥地に送られるかもしれないと思う心配もあつた。しかし何もなく収まり、一件落着であつた。腹一杯詰め込んでその上お持ち帰りという、実がありがたい、盆も正月も一度に来たような気持ちとはこんなものかと皆で喜び合つた。長い間にもこんな作業は一回きりであつた。いや一回きりでよかつたことかもしれない。

広島県 榎上竹士

抑留生活が始まった当初は、満州から掠奪して来た鉄鋼、機械、石炭、主として工業資材を貨車からおろす危険な重労働であつた。貨車の回転を早くするため、夜中でも叩き起こされて「ヴィストラ、ダワイ」である。ひっきりなしに貨車が入つて来るので作業時間が定まらず、睡眠が不足し、その上、何よりも食糧が飯盒に半分の高梁粥が当たればよい方であつたから、一回見る見るうちに栄養失調に陥つた。先ず胃腸の弱い者が斃れ、次いで肺炎など呼吸器病で斃れていった。そのうち入浴ができないために虱が湧き、発疹チフスが猖獗(しょうけつ)を極め、高熱にうなされてぼっくりぼっくりと死んでいった。大隊千五百人のうち、二十一年一月中旬までに実に百六十余人が憤怒のうちに死亡したのである。

工業資材のおろし作業も一段落し、私達小隊は、若い現役兵ばかり四十人ぐらいでアムール河の土砂を貨車に積載する重作業に出された。朝、薄暗いうちに収容所を出てコムソリスクの市街まで歩き、そこから軽便鉄道でアムール河岸まで行き、さらに作業場まで歩かされた。収容所から市街まで四キロぐらいの道を一人の警備で軍歌を歌いながら行進をさせる。市街近くになると子供や老人がどこからか集まつて来て「ヤポンスキーマツオカ」「ヤポンスキーバンザイ」と叫ぶ。はじめは万歳と我々を歓迎するのかと思つたが、どうやら「日本軍は両手を挙げて降参した捕虜だ」とあざけっているのだつた。この時ぐらい敗戦の惨めさを痛切に感じ、情けなく腹立たしく思つたことはない。

警戒兵一人で道中別段せき立てるでもなく、総て日本人が指揮を執り、作業現場では人のよきような中老の監督が、片言のロシア語が出来る日本人と交渉して作業をさせる。土砂運搬用の貨車三台に河砂をいっぱい積み込む作業だが、日本の倍くらいある大きなスコップでの慣れない作業は大変に辛かったが、午前一回、午後一回、計二回だけ貨車が入ってくるので実働時間が短く、収容所から作業場までの往復時間が長く休憩時間も多く、結構楽しい思いをした。

岩手県 安倍庄吉

ご飯を腹いっぱい食わせるから、重労働だが糧秣積み込み作業に出役しないかとの話があったので、帰りに現品(白米)を失礼しようとの下心から志願をした。

深夜の貨車積み込み、駅の裏から距離にして百メートルくらいのところから野積みの糧秣を貨車に積み込むのだ。相変わらずソ連兵は「ダワイ、ダワイ」とせき立てる。我々はわざと牛歩戦術に出るが、南京袋一袋背負う。荷は重く体にくき。我々の食糧を奪取され、その上酷使に従わねばならない不満から、故意に穀物袋の縫い目をほじくり穴を開け、こぼれるのはおかまいなしで運ぶ。まさに以心伝心、一斉に実行される。ソ連兵へ言葉は通じないから「いくらかでも軽くして運ぶ方がいいぞ」と誰かが叫ぶ。この言葉に誘われたように袋を切る者、裂く者、穴を開ける者等あり、粃、大豆、粟、高粱等の運搬が朝明るくなって終わった。

プラットホームは、こぼれた穀物で砂を敷いたようだ。約束通り缶詰で白米飯を腹いっぱい食べ、白米がなかったので大豆を失敬して新しい靴下に入れ、腹に巻き収容所に帰った。我々が積み込んだ食糧は収容所の主食であったとは。「あのとときの穀物」をもっと多く積みばよかったと悔やまれた。

東京都 岩本行夫

五十トンの無蓋車が六、八両、どこでバラスを積んだのか、夜入って来た。測量班が路盤の低い所に目印の棒を立ててある。酷寒の夜間は睡魔で身体がにぶく、顔、鼻の凍傷も気が付かないことがある。凍傷は隊員が雪でこすってやった。車両の側面はバラスの重みで錠が開かず、ハンマーで叩き開ける。バラスの上の隊員は凍結したバラスの塊と一緒に落ちて怪我をしたことがあったので、注意するようになった。酷寒の夜間作業のバラス降ろしは苦しかった。

福井県 尾上敏雄

その頃の作業は伐採した木材の搬出や積み込み作業だった。伐採した木材を馬そりに乗せてトラックの搬出所まで送り出す。そしてここでトラックに積み込む。たしか六人一組だったと思う。二人はロープを使って巻き、四人が肩を入れて押し上げ、戻らぬように両方に楔を構えつつ、ヨイトマケ、ヨイショヨイショと掛け声をかけて、五メートル五十センチの原木丸太を積むのだった。歩哨も覚えて、ヤポンスキー・ヨイトマケ・ヨイショと物まねをして笑っていた。この仕事も終わるまでは食事は与えられず、空腹でふらふらになって宿舎へ戻った。大変な労働だったので、春を待つ四月頃までに三百人ほどが亡くなり七百くらいになってしまった。亡くなった方の姿は、あばら骨がまるで洗濯板のようで、本当に骨と皮だった。

長野県 長田伊三男

昭和二十年八月十五日、敗戦。私たちの所属する部隊は、奉天北陵大学に集結、ソ連軍の指揮下に捕虜となり、九月中旬、国境の町、黒河に移動しました。

町は戦いで焼かれ、線路は曲がり、砲弾はごろごろと転がっていて、戦闘の物凄さを物語っていました。ここで十日間くらい待機させられ、その間、食糧その

他物資の積込み作業の労務に使われました。黒龍江の上流で河幅は二〇〇メートル余、その水量と急流は物凄く、ソ連の貨物船が対岸まで横づけできないので、その間十五メートルくらい、板の棧橋をかけて自分の体重より重い七十キログラム入りの高梁や砂糖袋を積込むのです。こたえました。その上、棧橋は狭い揺れる、ふらついて落ちれば黒龍江の藻屑、命懸けの仕事でした。

滋賀県 竹山悌三

真夜中の夜間作業、砂バスの荷おろし、吐く息が凍り、古布で顔を包んでいたが、あごから一尺以上もある太いつらが下がった。まつ毛に吐く息が凍りつき、目の前が見えなくなるのもしばしば。捕われの身、犬畜生にも劣る。哀しい、悔しい、情けない、みじめさ、出る涙も枯れ果て、まさに生き地獄、まさに凍りつくシベリア大陸、この地こそが捕虜扱いにされた我々にとつて最悪の地獄であった。

生きているから苦しまねばならぬのだ。死んだら楽になる。「もし帰るようなことがあれば供えてくれ」、自ら伐採する木の倒れゆく下になり、尊い命を落とした人もある。戦争の傷跡がいかに悲惨な悲劇を残したか、必ず後世に語り継ぎたい。

島根県 内藤 潔

東京ダモイにだまされて貨車に詰め込まれ出発。十月二十一日、ソ連領アルマータに着いた。

ここは第一收容所、第四收容所まであり、一收容所で二千人くらい收容する施設だった。日本人千五百人の他、ドイツ人、朝鮮人、イタリヤ人等先客を合わせ二千人くらいと聞いていた。

ここでの最初の作業は、鋳物工場(カツウラ工場)で油倉庫勤務を二十年十一月二十七日より二十一年三月二十二日まで約四カ月間、貨車積みの油を下

ラム缶に移し替える作業だった。十七人の班長として勤務したが、その中に東大出身の田中上等兵がいて、彼のアドバイスで作業能率が物凄く上がり、一二〇パーセントくらいの成績で、食事の増配と信用度が高まり、その後の作業に大いに助かった。

茨城県 豊田耕八

朝起きて海上を見たら、大きな貨物船が入っている。今日から貨物船の荷役作業に出る。荷物は何かわからない、とにかく早くおろせと昼夜兼行の作業だ。貨物は雑穀のようだ。高梁とトウモロコシが主体で、あとはその他の雑穀。容器は千差万別である。厳寒の海上、夜間作業は殊の外厳しかった。倉庫は忽ちいっぱいとなり、屋外に野積み状態だった。欠食の我々には絶好の食料補給になるが、監視は厳しかった。しかし食べないと作業が続かないと交渉したら、多少のポケットは黙認であった。荷物の種別、数量を確定し、保管台帳ができると、在庫監理も厳しくなった。

酷寒の深夜、闇夜の木材積み込み作業。抑留中、この作業ほど死と対面した危険な作業はなかった。伐採作業は昼間のみ。山の中に広い木材集積場をつくり、多勢の人馬で伐採集積が行われた。

鉄道までの搬送は、トレーラーが限られており、日中だけでは搬送できず、夜間も連続積み込み作業である。直径四十〜五十センチもあり、長さ五、六メートルの丸太を高い台車に六段積み上げる。輪棒丸太を斜めに渡し、力を合わせ転がし上げる。木材は凍ってコンクリート柱と同じ。力が合わないと落下する。夜間作業である。月の明かりがあれば少しは明るい、闇夜の晩は真つ暗だ。気温は零下四〇度ぐらいに下がっている。周りに焚き火をして焚き火の明かりで積み込む。運転手もノルマがあり、休まない。寒さ厳しく防寒服を着用。体力もなく、靴の雪も凍って足に力が入らない。木材と一緒に滑り落ち怪我人も出る。全く悲惨この上もない作業であった。

新潟県 高橋吉郎

愈々三度目の極寒の冬を迎える頃の秋も深まる十月頃であったか、イルクック市内にある大規模な火力発電所の作業に行くことになった。遠くからも見える大きな煙突が五メートルも天を突き立っていたが、人口六十万というイルクック市の電力をまかなうだけに、これに使用する石炭も相当なもので、開始トラック数台で入れかわり運搬されてくる石炭をトラックからおろす作業であった。これは深さ二メートル、幅五メートル程の貯炭槽にトラックから石炭を投げ込むようにおろす作業で、石炭はクレーンで巻き上げられるのであるが、そのクレーンの補助作業などで、これも単純な作業であったが、極寒の屋外作業でトラックを順調に送り迎えするのはなかなか容易な作業ではなかった。昼夜二交代、一交代三十人程の作業で、夜間作業が終わると翌朝の七時頃になるのであった。疲れたうゑに空腹で、これにも耐えて送り車のトラックを待つのは大変であった。しかし隊員はじつと我慢して誰一人苦情を言う者もいなかった。

京都府 八木敏雄

昭和二十二年の冬になつて食事も大分良くなつて空腹を満たすようになり、給金も少しくれるようになった。ある晩、仕事に疲れて寝ようと思つていたら材木の貨車下ろしに出よとのことで、一台分を下ろし終わつたら帰すと言つていたが、もう一台分下ろせと言つので、それでは話が違つたと抗議すると「お前等は捕虜だから死ぬまで働け」と言われ、情けないやら口惜しいやら、煮えくり返るほど腹が立つたが仕方なく作業をすませた。そのときは材木は「こちこちに凍りついていた。零下三十度くらいは下がつていたと思う。今も共産党とロシア人に対しての憎しみは忘れることが出来ない。夜空の月を見て、歌の文句じゃないけど「あれが鏡であつたなら日本の故郷が映るのになあ」と涙したことが度々あつた。何としても死んではならないと自分で励ました。

愛知県 河村廣康

翌昭和二十一年一月になつて製材工場に回されました。ここは山から運ばれた原木を加工します。そしてノギリ屑などを燃やして発電もしておりました。おんぼろ発電機ですから、ただでさえ暗い電灯がいつもため息をしていました。私は、原木車下といつて、軽便鉄道やトラックで運んできた原木を降ろして、地上に積み上げる仕事です。簡単な仕事ですが、これがまた大変です。車の荷台の両側に原木が落ちないように立ててある支えのくいを外して降ろすのですが、外すと同時に原木がごろごろと落ちてきます。ひとつ間違つと原木の下敷きになつて命を失うことになります。降ろした原木を鉄棒でこじたり、持ち上げたりして、積み上げるのです。この工場の仕事は昼夜三交替でした。昼間はよいのですが、夜間は電灯が灯っていない暗がりのところですから、危険度は昼間と違い非常に高いものになります。昼間は零下二十度前後でも、夜間となると零下五十度以上になります。鉄棒を持つ手は全く感覚がなくなつてしまいます。工場に行くようになつて一カ月経つたころ、原木の下敷きになつて戦友が一人亡くなりました。私も随分注意をしていたのですが、それからしばらくして原木の下敷きになるところでしたが、幸いにして原木が頭に当たり、その勢いで貨車の下に跳ね飛ばされて、命拾いをしたことがあります。

昼間は明るいから仕事も早く片付きますが、夜間は暗いから倍以上もかかります。軽便鉄道で運んでくるのは次が来るまで一時間以上ありますから、多少は休憩所で暖を取ることもできます。

調子の良いときは三十分くらいで片付きますが、時には原木がいうことをきかず一時間ほどかかるときもあります。そうしますと、降ろし終わらないうちに、もう次の貨車が入ってきます。

トラックの場合は、やつとのこと一台降ろしてやれやれと思う間もなく、トラックのライトがピカッと光り、もう次の車が来るという有り様で、少しの休みも

なくぶつ続けて朝方まで五時間仕事をしたことがあります。厳寒の零下五十度前後の夜、危険におびえて神経をすり減らし、骨と皮ばかりに等しい体で長時間働かされると、体全体の感覚もなく、神経もマヒしてしまいます。危険だという観念もなくなり、無意識の状態です。仕事をしている頃には、ものを言おうとしても言葉にならない、こんなときには決まって二、三人の凍傷者が出ます。

ソ連兵は監督から凍傷者が出た報告を受けると、「仕事を怠けているから凍傷になるんだ」と言つて、収容所内の営倉に入れられます。「ラボート、ビストラ、ビストラ」と働かされるのも地獄ですが、ここは地獄でも一番ひどいところです。火の気の全くないということは、零下十五、六度から二十度くらいの部屋に閉じ込められます。毛布も何もないところです。一日二十四時間、凍えそうになりながら夜も眠ることができず、体を動かしていなければなりません。そうしてないと必ずと言つていいほど凍死してしまいます。そのため何十人も亡くなったということです。

私たちを監督するのはソ連人の流刑者、つまり犯罪者です。ですから私たちは犯罪者以下ということになります。犯罪者以下ですから、食事もうくに与えず働けるだけ働かす。死のうが、栄養失調になろうが構わないと……。本当に死ぬほどに辛い苦しい労働でした。今の平和で物の豊富さはもつたない程です。この上ない幸せです。

鉱山(山)・入院

十月も半ばを過ぎると、もう冬である。雪の中をとぼとぼと帰つて来ると、ラーゲル入り口に幌をかけた大型トラックが一台止まっている。「お前達はハラシヨールポーター(優良労働者)だ。ダモイの先発だ。ダワイ、ダワイ(早くしろ、急げ)」と。今までだまされ続けてきたので、彼らの言うことは半信半疑。それでも他の作業隊員と三十人の混成でトラックに乗った。

岐阜県 中上英雄

自分はこ二、三日、体がつらい。今日は診断を受けるつもりであったが、着く早々にダワイダワイで車に乗せられ、それどころではなかった。

車中約一時間半、着いたところは何と山(鉱山)である。着くなり直ぐに仕事だ。もうマッセル(監督)が待っていた。直ちにカンテラの付いた安全帽、安全靴に身を固め、マッセルの案内で坑内に入った。

昨夜のうちに発破で崩したルダー(鉛の鉱石)をトロツコに積み、縦坑のエレベーターに積み込む。この鉱山は、鉛の含有量が六〇%以上で世界最高であるという。なるほど、非常に重くてピカピカしている。こんなのは、スコップですくつては重くてとてもトロツコに積むことができない。手で投げ込む。重いので、一杯積むのも大変なことである。

どこの作業場でも同じであるが、マッセルが、「ビストラ、ダワイ、ダワイ」と怒鳴りながら追い立てる。この頃の体調ではとても無理であった。

翌日、診断を受けにいったが、私の五、六人前の受診者で、病人のノルマはこれで打ち切り、残りは健康人と見なされた。下痢もますますひどくなった。我慢に我慢して頑張ったが、三日目に遂に倒れこんでしまった。二十日ほど入院した。退院後はゴルホーズへ移された。

静岡県 斎藤肇

工場が多いが、どこの工場も動力に使う電力を発電しているので大きな煙突がある。アムールに面した川のほとりに大きな火力発電所があり街の電力を賄っている。大量の石炭が貨車で送られてくる。

収容所の隣に大きな製材所があり、毎日三十人ぐらい作業に行った。朝、作業の分担を決めて仕事に就く。ボイラーの石炭運搬、貯木場の材木をコンベヤに乗せ製材機まで送る、作業製品を板や角材に分類、トロツコに積んで倉庫片付けの作業、川が解けるとゼーヤ川の上流から筏で木材が着くので、コンベヤで二十メートルぐらいの貯木場へ揚げ積み込む作業をして、二週間ぐらいで交替して

他の工場へ変わった。

三キロメートル離れた所に大きな製粉工場が四カ所あり、第一製粉工場から第四工場まであって、ウクライナ地方から送られてくる小麦を昼夜休まず三交替で製粉にして送り出している。

この四カ所の工場へ第一收容所から大勢の作業員が出て働いていた。第一工場の生産は八時間に六十キログラム詰め二一〇袋、一日に七二〇袋四十三トン。交替者は決まっています、一週間ごと出番が変わって作業する。袋詰めが二人で、製粉された粉が大きなタンク二つへ落ちて溜まり、タンクの下部が袋の口の大きさになっていて、袋を掛けバンドを締めてタンクのハンドルを外し台秤ではかり目の調節をしておく、ロシアのマダムが袋の口を縫う。そしてベルトコンベヤへ乗せ、倉庫の高い所から担ぐ荷台の所へ滑って来るので四人が片付ける。二四〇袋運んで六袋の十段が四山で一〇〇%だ。石炭運搬が四人いるので、交替する人が常時十人働いている。

第二工場も十人、第三と第四が八人ずつ、合計三十六人の三倍の人が交替し、ほかに麦の貨車が入ると麦降ろしや石炭降ろしと作業は多かった。

ほかに発電所の石炭運搬の八人ずつ三交替も冬は大変だったが、帰りにサウナへ入れたので嬉しかった。

ピラでの仕事

高知県 加納 憲

氷が張るようになると湿地帯が凍り、道路に自動車が行けるようになる。伐材が始まる。自動車で運ばれた材木は町の集積場に積まれ、それから貨車に積み込まれる。材木は松（日本の杉のように真つ直ぐ）が主で、直径二十〜百センチの生木で、二メートルと六メートルの長さである。仕事の細部になるが、山で伐材し、下の駅の集積場に集め、それを貨車に積み込む、この一連の作業が主たるものだが、貨車積みは夜中時間帯で行われるため、寒さ、防寒具等での

身のこなしが不自由で危険が伴った。また、日本人は重い物を肩に担ぐが、これは力と要領がいる。ロシア人は抱き抱えるだけに腕力があつた。

ようやく寝ついた頃に、引込線に入る貨車の悲鳴に似た汽笛が鳴ると、ソ連の歩哨が部屋の中に入ってきて、「ダワイ！ ビストリー！（早くしろ）」とわめきながら兵隊を追い出した。作業場では民間の監督（ナチャーニクと呼ばれた）、背の高いわし鼻の初老の男が、口うるさく指示し、また若いソ連の歩哨が自動小銃を肩に担ぎながら監視していた。

一方日本の将校は、たき火にあたりながら、作業進行を見守っていた。

愛媛県 宇都宮政壽

坑内の労働は、石炭を貨車への積み込みや坑木の運搬が主な作業。八時間労働、三交替制、一カ月ごとに作業時間を交代。交代する日は十六時間、坑内で休みなしの労働である。中でも最も厳しい交代は午後四時入坑のときだ。午後三時前收容所を出発するので夕食抜き、翌日の午前八時まで飲まず食わずの重労働、坑内から上がって器具返納、シャワーを浴びて整理、十時過ぎに收容所に帰り朝食後、欲も得もなく泥のように眠りこけたものである。

こんな中でも嬉しいことがある。ダイナマイトを包んでいる紙が発破の後で手に入り、紙に苦勞をしなくなったこと、真つ黒になつて坑内から上がるので、毎日シャワーが浴びられ、下着の洗濯もできるので、一カ月もしないうちに風の悩みから解放されたことである。

ある日の終業時間が近づいた頃、監督が回つて来て空の貨車を見つけ、「横坑に溜まっている石炭を落とせ」と怒りまくるので、危険で嫌な作業だが私がやらざるを得ず、横坑にのぼり、この辺までなら大丈夫だろうとスコップを突き立てると同時に足元が崩れ、大量の石炭に巻き込まれて墜坑に転落し胸まで埋まる。これは生き埋めになると、大声で必死に連呼。異常を感じた監督がのぼって来て顔をのぞかせたので「早く石炭をおろせ」とどなるが、落ちて来る石炭に「早

くおろせ、早く」と気が気ではなかった。交替時間間近で発破がかからず、一度に大量の石炭が落ちてこず命拾いができたのである。監督が「大きな石炭が出て来た」と馬鹿笑いをしたのは、「冗談じゃない、死ぬ思いをしていたのに、この野郎」とぶつ飛ばして、スカツとしたかった。

茨城県 初鹿野清

午後、港へ荷役作業に出かけた。健康なもの三十人ほどであった。技術中隊左官班からは佐藤中尉をはじめ小山田、武智、横田といった顔ぶれも加わった。仕事は、穀物の入った麻袋をトラックで倉庫から運び出し、はしけに積み込む作業であった。場所はボルガの岸壁ではなく、はしけ用に作られた運河の小さな岸壁であった。トラックの上から二人が麻袋の両端を持っておろし、下で二人がそれを受け取り一人の背中に乗せる。それを背負ったものは、はしけへかけ渡した厚板を渡つて船内へ入り、船内の二人がまた両端を持って積み重ねていくという手順であった。

私は、背負わされて船内へ運び込む役であった。どの仕事も楽でどの仕事も苦しいという訳でもなかった。日本人のやる仕事であったが、ソ連の監視人が少しでも仕事の速度を緩めると「ダバイ ダバイ」を連発、けしかけてくるのには閉口した。

東京都 関 栄夫

検収済み、積み重ねた木材をトラックに積み込む。作業トラックは米国製前後輪駆動の車、囚人の運転手にも一日何回というノルマがかけられているので、運転も従つて乱暴になり、積み込み積下ろしも急がされる。積み込んだ木材の上にも乗り、傾斜曲がりの多い山道を下るので、途中で振り落とされて一命を落とす者も少なくはなかった。集積場にて下ろし終わると、またそのトラックの荷台に乗り山に戻り、また積み込むという繰り返しの作業。終われば今度は集積さ

れた木材を貨車に、発車時間までに積み込み完了しなければならぬという作業です。

長野県 中山麻人

伐採の後は積み込み作業だ。アメリカ製のマシーナーと呼ぶ十輪車が平地林にどんどんと進入して来る。それに七人一個班を編成して積み込む。二十四時間ひっきりなしに来る車に三個班八時間勤務である。シベリアの夜は冷える。材木の長さは六メートルの長尺物、これを左右に二人、車上に二人で班長の号令で突き上げて行き、上の二人が逐次積み込んで行く。技術も要るし力も要るし、危険な作業であった。

兵庫県 芦田史朗

ガラス下ろし作業
ガラスを積んだ貨車から、線路横へ下ろす作業である。一口で言えばそれだけのことであるが、酷寒期の深夜であろうとガラス列車が到着したら出勤しなければならぬ。

「ダワイ(早く)」「ダワイ」「ダワイ」
短時間で下ろさなければならぬ。ガラスはカチカチで、動いてくれない。小さなスコップでつくとスコップが曲がる。くわでこぞて起こさなければならぬ。午前二、三時の厳しさは恐ろしい。油断していると凍傷になってしまう。次の汽車が来るからと、「早く下ろせ」銃を向けられる。

静岡県 今泉 茂

最もつらかったのは、深夜引込線に入った貨車からの石炭下ろしであった。六〇トンの有蓋貨車の天井近くまである凍りついた石炭を限られた時間内に二人で下ろすのである。日本のシャベルの倍もある大きなシャベルは柄が長く、三角形

の握る部分がないので扱いにくく慣れるまでは大変であった。人使いの荒い監督に当たったのも災難であった。ちよつとでも手を休めると「ブイストロ、ブイストロ（早く早く）」とどなり、思うようにはかどらぬと怒り狂ってひわいな言葉で罵倒する。「畜生」と思うがとらわれの身の悲しさ、身を粉にして働くしかない。下ろし終わった時は精根尽き果ててへたへたとその場にしゃがみ込んでしまった。奴隷労働とはこのような苦役を言うのだと思つた。綿のように疲れて収容所へ戻る途中、ソ連の囚人の一団に出会つたことがある。誰一人話す者もなく、うつむき加減なその顔は絶望の淵に投げ込まれた者達の表情であった。

福井県 片山清次

砂卸下(すなしやか)

数百トンもある列車の重量を支えるクッションの役割を果たすバラスが、連日、夜昼の区別なく運ばれて来る。五〇トン貨車と呼ばれる台車の上にバラスがピラミッド型に山積されている。二十両ほどの編成である。戸外の明るい昼間は別として、夜間の場合は、電灯一つない暗闇の中で、ポロ布に石油を浸してたいまつ代わりに燃やし、唯一の光源とし作業をするので怪我人がよく出た。厳冬の夜中に予告なく列車が入って来る。昼間の労働でクタクタに疲れ、ぐつぐつと眠っている抑留兵士の耳に、「ボーッボーッ」と響く機関車の汽笛と、時を置かず「ガーソーンガーソ」とラーゲリの衛兵が打つ鐘の音、日本人労務係が「砂卸下集合ッ」と大声でラーゲリ内を触れ回る。スコップ一挺を肩にして現場へ駆けつける。車両一両に四人ずつ割り当てられて素早く台車の上に立つ。自分の身長より高いバラスの山が目前に迫っており、この山を小さなスコップ一挺で路盤の上に落とさねばならぬ。誰も助けてくれない。何もしないで突っ立っていると体は凍えてしまう。嫌でもスコップを動かさなくてはならない。堅く岩のように凍りつき、砂と石が混じっているのでスコップが容易に突き刺さらない。他の三人の仲間達も同じ思いであろう、一言も喋らずひたすらスコップを動かす。運ばれて来た土質

にもよるが、全部降ろし終わるのに要する時間は三時間〜四時間かかった。降ろし終われば、列車の進行を妨げぬようレールの上や路盤の上に高く積もったバラスをならしてやっとなら解放される。

夜中に列車が到着すると、大体夜明けに終了する場合が多い。朝飯を終わると、休息も与えられず平常通りの昼間作業に駆り出される。ろくに食事も休息も与えられず、こんな無茶なことを強いられた結果、体力は目に見えて衰えていった。

薪の貨車搭載作業(十人一組)

北海道 村上嘉寿雄

丸太の積込み作業の中で貨車への積込みは、時間の制約があり、昼夜の区別が無い、貨車の入り次第で作業するので大変不規則な労働で、随分泣かされ、誠に重労働と思われた。

短尺材の輸送は有蓋貨車が使われる。入り口に丈夫な歩み板を架け渡し、大径材から順にこれまた人肩で運び込む。屋根付き貨車は大きく感じたが、車内の棚積みには、上手に空洞を作つて実材積を少なく工夫するのが肝心だった。これが労働時間を左右するのだ。上手にソ連人監督の目をこまかす工夫するのである。貨車の両側から重い丸太を下積みに車内に縦に並べ、車内の中央から木口が見えるように積む。中央部の入り口付近は横積みにするので最後まで残る。奥の方から天井まで隙間のないように詰め込む。積み込みの途中で巡回監督の目を上手に騙して空洞を作るのに創意工夫を凝らした事もあった。ここでも、鳶口と、ガンタの使用により、大きな丸太も簡単に動かす事ができた。

栃木県 渡辺常夫

日中の使役で疲れ切つて寝込んでいる十時頃、ソ連側本部から石炭降ろしに三百人出すような命令が来たようで、自分も中隊から順番制などで使役に

るようになった。ちようど生憎シベリアでも一番寒さの厳しい二月上旬だと思ふ。現場に到着して見ると石炭を満載に積んだソ連軍無蓋貨車が三十両程編成されてホームにズラリと列んでいる。スコップを渡され一両に十人ずつで作業にかかる。防寒服を着ているものの酷寒零下四八度、体全体が氷で包まれているような状態で冷え込み、作業も思うようには進まない。石炭一つ一つががちがちにべばりついているので簡単に降ろすことができない。寒さと飢え、そして栄養失調との戦いで精いっぱいなので、その上作業が満足にできる筈がない。夜明け方作業が終わり人員点呼を取ると一人がいらない。中隊長が周囲を探すと、京都出身の木村という初年兵が倉庫の陰に腰を掛けたままスコップを持って氷死していた。寒さと飢えで毎日が二人、三人とただ無言のまま死んで行く。敗戦国日本兵抑留の惨めさは、体験した者しかわからないだろう。

新潟県 平原敏夫

列車は何両編成だったろう。でっかい五〇トン積みの無蓋車は、バラスを満載してきており、私たちは日常の作業にバラスしてそのバラス降ろしの作業に駆り出されるのであった。

大抵機関車は後ろ向きで車両を引っ張ってきており、その機関車のヘッドライトの明かりを頼りに作業は進められるのであった。扉のくさびの抜き取りから作業は始まり、つるはしの片方をくさびの底に当てがい、いま一方をハンマーでたたき上げるのであるが、重いバラスがずしりと扉を押しきいて、くさびはなかなか抜けなかった。

カーン、カーンと金属が金属を叩きつける脳天に突き刺さるような甲高い音が、車両の数だけ線路に沿って響き、大気を震わせたまだ明け切らない天空にこだまし消えて行くのであった。手の空いている者は貨車のバラスの上によじ上り、少しでも早くくさびが抜けるようにと、スコップを縦に車体の扉に引っかけ、内側に引き寄せ踏ん張るのであった。それでもくさびはなかなか抜けず、扉は一向

に開かなかった。でも時には急に抜けて扉が開き、足場になっていたバラスが崩れ、一緒に地面に叩きつけられることもあった。

こんな危険もついてまわって、バラス降ろしの作業は繰り返し繰り返し、結局鉄道線路の仕上げ工事が完了するまで、それに必要な量のバラスが運び込まれ、その都度私たち、どこかの収容所の同僚たちが、声もなくそれを降ろす作業に駆り出されたのである。作業を終え疲れきった体を引きずるようにして帰途に着くころ、ようやく東の空が白みかけ、宿舎に戻って落ち着く間もなく、また一日の作業が「ダワイダワイ」と始まるのであった。

富山県 石川正一

昭和二十二年の暮れから翌二十三年の厳冬の貨車積み作業は言語に絶する苛酷なものとなった。わけても長材積載の場合が苦しかった。直径三十センチから六十センチ近くもある長さ五メートルの木材は通常は一個分隊約十五人で取り組む。また板状の無蓋貨車の片側にストイキと呼ばれる木の杭を立て、線路脇に積まれている木材をロープで巻き上げて、それは行われた。なお、二段目からは両面を平らに削って作った木のレールを敷く。貨車には輪棒りんぼうという丈夫な丸太が差しかけられ、木材は転回しながら貨車上に転がり込む。

木材は太さに応じて四段から五段ぐらいに積む。最初の段階では、木材の置き場所は比較的高く、積み込む位置も低い。貨車に差しかけた輪棒の傾斜もそれほど急ではない。だが、積載が進むにつれ、材の置き場は低くなり、反対に貨車側は高くなってゆく。輪棒の傾斜は益々強くなる。

木材の巻き上げが最上段ともなり、材が太い場合は輪棒の上で一進一退を繰り返し、なかなか貨車上に届かない。ロープは寒気のため硬直してくる。それを握りしめて巻き上げる手は凍え、防寒手套はいついて力が入らない。兵たちの疲労も限界になる。輪棒には歯止め役の兵が二人いるが彼らの疲労もまた激しい。貨車上には巻き上げと合図役の兵が二人いて、ロープを引き上げ、声を限

りに、「よいと巻いた」と叫ぶ。貨車の反対側には巻き上げ組がいて、「そーら巻いた」というように呼応する。だが、彼らの声は烈風に掻き消され、掻き消される。そんなときは隣の貨車の仲間たちが駆けつけて助け合う。

こうして終夜の貨車積みが終わるころ、冬の長い夜も白み始める。彼らがリーダーに帰り暖をとり、朝食を終えて泥のように寝込んだころ、貨車の入れ替えがあつて、また貨車積みに駆り立てられることもたまにはあつた。

そんな、真冬の深夜は氷点下三五度以下ではなかったかと思う。風の強いときの体感温度はさらに低いものとなつた。

三重県 川邊幸治

ポロナイスク(敷香)における筏作業と海上での木材の貨物船への積載作業
宿舎の前に川があり、対岸で待機する。上流の湖で他の抑留部隊が組んだ筏を独航船が曳航してくるのを受け止めて、対岸に係留する仕事であつた。

岸に打ち込んだ杭に筏のワイヤーを縛り付けるのは苦勞した。水は流れているので、普通に結ぶと固く締つて筏を外すとき解けないので、工兵隊の人に教わつた特殊な結び方で係留した。この結び方は復員後も随分活用させてもらった。

貨物船が河口沖に停泊すると、係留した筏を外し独航船の後方へ何連も整え、貨物船へ曳航する。貨物船まで曳航すると、独航船はロープを出して本船に固定する。そして、貨物船から下りてくるクレーンによつて筏を船倉に積み込む。

次に、本船から下りてくるワイヤーを海に浮かんでいる材木に縛り付け、本船の上甲板にいる者がロープ締めした材木を引き上げる時、右手で上下左右の指示を出しながら船倉に下ろす。船倉にいる者は、ロープを外して端からきちんと積み上げるという作業であつた。

実に連繫プレーの要る作業である。特に海が荒れている日は大変で、波に揺

れる材木を海上でワイヤー掛けする作業は本当に死に物狂いである。船倉にいる者もフラフラして、まともに作業できない状態であつた。

堪えきれず私は「こんな荒れた日は作業ができない。怪我人が出るかもしれない。作業を中止してくれ」と申し出た。すると、「日本人は雨が降つても大風が吹いても戦争をしたではないか」と言つて取り合つてくれなかつた。作業を終わつて宿舎へ帰ると呼び出しがあつて、「プルーハ、カマンジール(悪い隊長)」と言つて鶏部屋のような所に入れられた。兵隊が檻の間から代わる代わる毛布とか食料を差し入れてくれ、嬉し涙がこぼれた。

岩手県 吉田欽三郎

入ソ二年、積載班の作業

ヨイト巻く 大木めぐりて 秋の蝶

作者名は不明であるが、当時の積載班は戦車隊の頑強な他中隊の人達が多かつたという。その積載の人達が貨車の車上にあつて、重い大木を巻き上げるそのロープの回りを白い蝶々が飛んだと言う、ただそれだけのスケッチである。

しかし蝶とは本来「春」の季語であるが、秋の蝶と詠んだ作者は虜囚の故だろうか? 否、本当に秋であり、小春日和の暖かさに誘われた蝶々が、巻き上げられる大木の回りを飛んだかも知れないのである。

ただ分かることは純粹無欲であり、全く綺麗であり素直な俳句であることだけだ。

伐採された原木は、山より馬と轎によつて麓の集積場まで運ばれ、貨車積みとなるのであるが、この積載の人達こそ大変な苦勞をされたのである。

作業は、集積場から原木を貨車の上に渡した長木の上を六人協力の力とロープで巻き上げるのであるが、六人の呼吸が合わなければ逆に滑り落ちて、下の者が大事故となる危険性が大きいのである。

左右均等、同じ力で巻くにしても根元は重く、原木の円周・長木の円周、線

と点の接触なれば、厳寒期では雪も氷であるから「ヨイト巻く」の言葉以上の細かい作業の呼吸が大切らしい。

それにも増してこの積載は、休日に拘わらず日勤者が帰る時間帯であっても、貨車が入線した通知によって「積載班集合」の命令が四六時中あったのである。それはノルマの国であり、捕虜だからだ。

これが労働の源泉であるべき米の飯の環境ではない、黒パンと燕麦のスープでの食事なのだ。

「積載は重労働だからもつと飯を食わせろ：腹が減って原木も上がらないじゃないか：」一五〇グラムのパンとスープであり、昼食は高粱か燕麦の柔らかい飯の給与である。

「俺達日本人は朝・昼・晩、固い白飯ばかり食ってきたんだ、こんな軟らかい食い物なんかで仕事ができるもんか」と言ったところで、それも空しい捕虜の身の上である。

高くて頑丈な衛門、回りには細長く尖った丸太を立て並べた高い塀、その上をさらに鉄条網、四囲の櫓の上には終夜ソ連兵が立ち、機関銃と共に監視の目を光らせていて逃げることはもちろん、生きることに苦しい異郷の涯の捕虜強制収容所だったのである。

前文 ヨイト巻くの俳句は、わずか十七文字の字句であるが、優雅にしかつ尊い労働の姿を浮かび出し得、終生忘れることの出来ない事象であり、これを基(モトイ)とした発句とそれを成し得た作者こそ偉大であり、私自身にも替え難い心の大きな糧となったのである。

馬も人間だ

ソ連の実情や習慣を知っておかなければいけない事を、身をもって体験した。伐採作業も終り、次は櫓作業と自動車積込みに分かれた。私は櫓作業に回さ

愛知県 齋藤高志

れた。櫓作業とは、伐採して積上げた材木を、自動車積込みの広場まで馬櫓で運ぶ仕事である。

ようやく白みがかつた酷寒の朝、手袋を取って馬具をすばやく馬に装着し、白櫓の木で作った櫓をこの馬につけ、一キロメートルもある作業現場まで馬と共に歩いて行く。栄養失調の者には、歩くことが大変である。櫓の中は一メートルで一回に運べる量は一立方メートルである。一日のノルマは八立方メートルである。昼も近く、人間も馬も空腹と疲労で気が立っていた。ノーノー(馬を追う声)といつても動く気配さえない。ついに怒って近くにあってた木ぎれで、馬の尻を殴打した。これがいけなかった。自動小銃を持ったカンボーイ(歩哨)が、つかつかと来たと思うと持っていた鞭で、私の背中を思いきり殴って咆哮した。私は失神してその場に倒れたが、ややあつて同僚が、「馬も人間と同じだ、馬をたたく奴はたたかれる」と怒鳴ったと言った。私は無性に悲しかった。

貨車積み

貨車積みは、労働時間にかかわらず、貨車が引込み線に入れば貨車積みである。

伐採作業や櫓作業で一日のノルマを終えて、収容所に帰り、カーシャをすすりごろりと横になった頃、貨車積みの命令が出れば、三キロメートルも離れたヤブノロワヤ駅の貨車積みの応援である。

貨車積みとは、貨車の大小によって四人〜八人で長さ二メートルの材木を積むのである。時によっては、もつと長い建築用材を積んだ事もある(無蓋車)。貨車の奥は縦に積み、扉の所は横に積んで検査を受け、終れば扉をしめ錠をかける。早く終った組は遅い組を手伝う。作業を終るのは明け方の時も、真夜中の時もある。終れば腹をすかして、また、三キロメートルもある山道をとぼとぼとサハリンに帰る。

〔夏期の作業〕

冬の間、深い深い山奥の森林地帯で伐採した原木を大型トラック(アメリカ製)で、十数時間をかけて運搬してきた、太さ八十〜百センチ、長さ二十メートルをトラックから降ろして、貨物列車の引込線へ十五人が一組となって積み込み場まで運び、貨車積みが出来の高さまで七〜八段を積み並べました。広大な野原が原木の山で埋め尽くされました。貨物列車は二日ごとに一日二〜三回入る状況でした。積み込み作業は、機械は何も無しで、すべて人力で行う重労働でした。その上、貨物車は超大型で、百五十〜百八十トン積みの無蓋車でした。三十人が一組になり、二十〜二十五両の列車に積み込みを行い、やっと終了して暗い夜道を収容所に帰り着き、眠りに入って間もなく、次の「貨物列車が入った」との連絡で起こされて、また数キロ離れた積み込み場へ行き、五〜六時間かけて積み込み作業を終ると夜が明けて、翌日の作業として続けられました。最も苦勞したのは雨の時季でした。幾日も雨が降り続いても、合羽、着替えも無く、ズブ濡れのままで、体温で乾かしながらの毎日でした。材木の上に乗ると何度も何度も滑りながら、捻挫、打撲の繰返しで、骨折の負傷者が続出していった。人員が減少すれば一人当りの作業量は増すばかりで、三十人が二十人になり、十五人が一組となる状態でした。ソ連側より「この積み込み作業が終了する秋頃になれば日本へ帰れる」……という話を何よりも頼りに歯を食いしばりながら、お互い同士が励まし合って、その日が来ることを楽しみに待ちましたが、秋も過ぎ冬になっても「日本へ帰ること」は実現せずに落胆が続き、またも恐ろしい冬を迎えました。抑留二年目の冬となり、またも深い深い山奥に入り、零下二五〜三〇度の極寒の森林地帯で(北極に近く、人間が来たことなし)伐採の作業に従事しましたが、抑留生活が一年余りを過ぎて、当初の千五百人が、死亡者、重傷者の続出で千人を割る人数にまで減少していました。同僚同士がお互いに不安を隠しきれず、明日は我が身か……と暗い思いが胸を強く打ちました。

〔清津港船積み作業〕

二十年も冬が近づくと、さすがに堅穴住居では人間の命を維持することは無理となり、清津へ南下する。ここは北部朝鮮での唯一の不凍港であり五千トン級の大型船も接岸可能な港湾施設を持つ天然の良港。かつては北隣の羅津港と共に満州の農産物、鉱産山物を日本本土の新潟、舞鶴に輸送する使命を持った要衝であった。茂山の鉄鉱石は豆満江沿岸の石炭電力と共に製鉄製鋼を初め重化学工業、窒素肥料工業の大工場が林立する工業都市だった。

宣戦布告からわずか一週間で全満州はおろか朝鮮北部にある日本の大工場をことごとく奪い取り本国へ持ち去ったスターリンの悪行振りは歴史に残る特筆すべき汚点であろう。解体された大小さまざまな機械設備を船積みあるいは鉄道輸送した使役はすべて我等俘虜の労力によったものであり、ソ連経済の再建復興に天文学的な貢献を果たしているのである。しかるにその対価、その功績に対して、幾ばくの補償を支払ったであろうか。正にそれは火事場の盗人も舌を巻く行為ではなからうか。

北部朝鮮は多雨多雪の気候で有名である。殊に清津港の冬は氷点下一〇度も珍しくはなく、これに風が伴うと堪え難き苛酷な労働環境となる。「ビストリ・ダワイ」を連発する長いコートを着たソ連将校は指揮棒を振り振り「ア・エータ」「ア・エータ」(これとこれと)などと声を張り上げて船積み作業を強要する。昼夜兼行の船積みだが、真夜中ともなれば、突っ立っているだけの警備兵もさすがに寒さに耐えきれず、俘虜を誘っては焚き火を囲むのだ。

和歌山県 林 三子雄

昭和二十一年九月中旬に貨車で二日移動して下車し徒歩で六時間行軍して、エラブカ収容所へ入る。収容されたのは古い教会の大聖堂と思われる大きな塔の

中で、寝棚は急ごしらえの雑木棚の二段造りだった。採暖はペーチカのようなのだが各部屋では焚かなかつた。

到着の翌日から薪運び隊に出勤した。大八車一台に八人掛かりで曳き綱を引き、十台縦一列で指揮者の号令で、往路は空車だから楽に進むが、帰りが大変。長さ四メートル、末口二十センチ程度、筏に組めない屑丸太を選び出しては大八車へ縛り付けて荷造りをするが、バランスが重要だった。荷造り上手な車は順調に帰るが、荷崩れする車は度々修復に時間を取られて隊列から遅れ、日が暮れて弱りきつて帰ることが度々あって、薪運びは重労働だった。

薪運びはラーゲルだけでなかった。街の主婦グループも同じ様に屑丸太を車に積んで同じ方向へ運んでいるのに追い越されたり追い越したりした。彼女達はポリウムたつぷりの体格で行動も素早くキビキビとして働いていた。

おかしかつたのは日本人が力をあわせるために掛ける掛け声の「エッサ、ホイサ」を聞きとがめるように「ヤポンスキー、ホイサ・ホイサ・ダ」と片腕の握り拳を固め、肘を曲げて体の正面で拳を上下に動かして見せ、皆一斉に「ホイサ・ホイサ」と言つては大笑いして通り越したので説明は無かつたが「ホイサ・ホイサ」は勢いを現す音らしい。

薪運びが雪の季節となつて大八車から木櫓に変わった。雪道は歩行が安定できないから櫓の操作が難しく転倒することが多く、打撲捻挫で故障者続出して就労可能者が減少し、元気な者は連続勤務が続いて弱り込んだ。

二十二年三月、身体検査で、痩せ過ぎだが働き過ぎで無病の判定を受け、二週間の間、休息の家で静養が与えられた。三十八キログラムが休養二週間で四十二キログラムに戻った。冬期は日照時間が短いのと寒さの厳しさで体力消耗が甚だしかった。

朝八時は真つ暗闇だ。先頭が松明をかざして出発する。続く櫓列は次々数珠繋ぎに十数台続く。薪材を受け取る場所は八キロから十二キロぐらい先の工場だ。丘を幾つも越えて運ぶ作業は重労働だった。昼間の明るい間に荷造りを終

るが帰途はたちまち薄暗くなり、前の櫓引きの掛け声を頼りに雪道を歩くが雪の固まった筋を外れると大変な労力と時間を費やして苦しみ大騒ぎだ。前櫓に遅れないよう「エッサ、ホイサ」を続けてはい込むように戻り着く。吐く息は白く、たちまち防寒帽の垂れの毛皮に凍りつき、防寒外套の中では汗が凍つて固まってくる。ようやく一日の作業を終えて夕食の分配を受ける。ジャガイモを煮つぶして透き通ったカーシャと呼んでいる薯蕷炊を一リットル缶に一杯もろう。温かいうちに一気にすすりこんで終る。毎日の給食はカーシャ七〇〇グラムぐらい、作業特配付で一リットルぐらいをもらつて過ぎしたが、いつも空腹であつた。

岩手県 千葉義一

ここで約二百人の作業隊が編成され、大方面識のなかつた人達と、チタとチェルノフスカヤの中間に駅を持つ、「マカヴェイ」と呼ぶ部落に送られる。

この駅は無人駅で旅客ホームは狭く、広い木材の積み込みホームと線路下に丸太置場(土場)が広がり、乱雑に積まれた大小の丸太が氷雪に固く凍りついた寒々とした風景に身震いがおこる。

これを見て我らのここでの作業はすぐに呑み込めた。宿舎は駅にほど近い木造古屋。奥に狭い炊事場があつた。或いは以前囚人でも住んだ跡であろうか。宿舎は狭いので、早速土場から細い丸太を集め二段の床を作り、松の枝葉を敷いた上に毛布を広げ、寝室兼居間はでき上がる。

仕事はソ連のトラック部隊や囚人の手で遠い山から運び込んだ丸太の貨車への積み込みで、引込線に入る貨車の来る時間は不規則の上、積み込み所要時間が厳しいノルマで、ほとほと泣かされた。貨車は有蓋の十五トン車から無蓋車七十トン級まで雑多で、一列車約二十両ほどで、車両の大きさにより一両に何人と割り当て、二〜四時間以内とか、制限時間が設けられた。

凍りついた松丸太は直径十センチから六十センチ、長さも二メートルから五メ

ートルぐらいまで、不思議なことに鳶口、鶴嘴、ロープはおろか一本の鉄棒もない。すべて体一つでの作業で、まるで手品のようなもの。

細い丸太は肩に担いで有蓋貨車に、無蓋貨車には長い丸太をコロ木を敷いて土場からホームへ、ホームから貨車に細い丸太を斜めに渡し、みんなで「ヨイシヨ、ヨイシヨ」と転がして載せる。この作業中に肩や手足を怪我する者が出る。腹が減つて力が出ないのに、警戒兵が「ダワイ、ダワイラポーター（早く働け）」と怒る。

日本人は頭を使って体力を消耗せず、能率を上げようと議論し合うが、彼らはこれがまた癩しかに障ららしい。「お前達は理屈ばかり並べて働かない。黙つて体で動け、この様にだ」と丸太を軽々と担ぎ上げて見せ、最後はやはり「ビストラ、ダワイラポーター」とくる。

貨車入線は全く不定期で、夕食前や夜中にくることもあり、まるで夜襲の戦鬪を迎えるような騒ぎとなる。

ある冷え込む夜、午後の積み込みでへとへとに疲れ、暗い電灯の下でわびしい夕食の芋がゆをすすり始めたのは、既に九時ごろであつたらう。今箸を持った瞬間、天はなんと無情であろうか：例の貨車が入った。至急集合せよとの命令が出た。あまりの悔しき、情けなさに、お互いに命令を無視して食事を続けることにした。わめいていた警戒兵もあきれていた時、長身で大柄な所長が満面に朱を注いだ顔に、肩は怒りに震え現れた。

彼の口から出る言葉は、ロシア語最低の罵言ではないか。怒り狂つた彼は、あたりにペツペツと唾を吐きながら、やにわに皮長靴で日本人の夕食中の飯盒を片っ端から蹴飛ばし始め、警戒兵もこれにならい、無残や血の一滴に値する少量の夕食は、飢えた胃を満たすことなく一瞬に吹き飛んだわけだ。

ああ何たる非人間的仕打ち、何たる屈辱。しかも教養あるべき高級将校（大尉）の仕業と信ずることができようか。もし我に剣あれば、この男と刺し違えて死にたいと思つた。素朴で人情味あるロシア民衆を見ているものにとつて、権力を持つ彼ら階層の本質を見た思いで、今も忘れることができない。こんな日常に明

け暮れる日々であつた。

島根県 福田 恭(旧姓 高瀬)

新地に到着

一 新しい作業地着

ナホトカより列車で数時間で新しい作業地に到着(約百人)。駅舎もない広場に下車、三百メートルくらいの位置に日本兵の使用した古い建物が二棟あつた。おのおの五十人入居、新しい収容所生活が始まつた。(地名は記憶になく淋しい寒村であつた)

二 生活、設備

生活様式はほぼ前と同様でシベリアは寒冷地のため暖房設備が必要、一日中焚火をし暖房する。服装は持ち物を全部着て防衛する。手袋などは毛布等の布きれで手製で作る。食事の量は以前と同じでも多少調理方法が違った部分もあつた。炊事場、W・Cは別棟にあつた。

三 作業について

夜中に急に起こされ集合する。持ち物はなし、防寒具はすべて着用する様指示があつた。鉄道の沿線に連行され、その広場に木材(長さ二メートル)が線路に向けて積まれていた。各十人の班に分かれその位置に待機する。間もなく貨物列車が入る。有蓋車、無蓋車半々で二十連結。「これよりこの木材を各班で一車両に二時間以内で積み込みを完了」する様指示が出た。初めての作業で小隊長以下あぜんとする。重く、高い位置の貨物に積み込む作業は到底無理、いずれ怪我人が出ると考える。現地人らしい監督が現れ早くやるように大声でどなる。その後別の監督が作業の方法を指導説明する。有蓋車の場合二メートルの木材を中央入口より積み両側に天井まで積み込み、後、中央部分に積み込み引戸を閉めて完了。無蓋車の場合は両側に臨棒という長さ二・五メートルの棒をくずれないように固定して立て、先ず反対側に立て手前より平均的に積み

込む。途中しっかりと鉄線で結び固定しながら二メートルまで積み上げる。終わらたら両側に臨棒を立て鉄線で前後左右にくくり終了する

作業の終了まで四時間かかる。直ぐ発車する。馴れたら三時間くらいで出来る。マイナス二〇度からマイナス三〇度の寒さでも作業中は汗が出る、寒さは感じなかった。発車後ホツとし、顔を見合わせ大笑い。髪の毛もひげも汗でぬれてそれが凍って白髭のおじいさんになっていた。この作業が一日一回くらいあり約七カ月続いた。三月になってもダメイは無かった。

茨城県 梅沢正之進

二〇二収容所にいるとき、鉄道用レールが出来ましたので、貨車で持つてくるが、夜に卸すという作業に駆り出される。この作業は、昼間働いてもやる、夜はノルマでも何でもありませんから、残業手当もないけど、もうそれが来たら、それをやらなきゃならんです。そして、また、昼間、当り前に仕事をさせられる。本当につらかった。

貨車に碎石を山ほど積んでいる。車も貨車もろくなものじゃないから、外し方によつてはパーツと飛んで来て、けがして死んだ人もある。そんな作業を随分させられました。

何が危ないと思つても、パーツと逃げようと思つても、元気だったら逃げられるけど、空腹で、ふらふらつとしているから、けがする人も多かったです。

⑨ 護岸工事

滋賀県 川端増雄

昭和二十一年四月頃、伐採作業が一応終わると、次はソフガワ二港の木製の栈橋づくりに従事。主として石炭や割木の積みおろし用のものであった。四月といえどもシベリアはまだ厳寒、海の潮風にあおられるしぶきが衣服にかかって真っ白になる。海中への杭打ちに全身海水を浴びながらの作業で苦闘がつづく。約一年間この作業は続く。

⑩ 農作業

草刈り

和歌山県 岡本昇

二年目の夏、私も四十人ほど、収容所を出て、泊りこみで、外蒙に近い農場へ働きに行くことになった。シベリアの夏は、朝四時ごろ夜が明けて、夕暮れは午後十二時近くで、日中は暑い。ソ連の農夫が機械を馬にひかせて草を刈る。それを集めて積むのが私たちの仕事だが、一山のかさと幾山という一日のノルマがある。

暑いので怠けて、できるだけそつと積んで、格好だけつけて休んでいると、監督が回つて来て、馬上から勢いよくその草山の上に飛び降りる。たちまちペンヤンコになる。さらに憎らしく全体を踏みつけて、両手で山の大きさを示しながら、このとおりに積めと急ぎ立てる。見ている間は仕方ないので、その通りやると、やがて安心して行ってしまう。私たちは踏みつけた草をまた元通りにそつと積み直す。監督兵はこのいちごっこを笑つて見ていた。時間が来たら引き揚げた。

島根県 内藤静夫

農作業……秋に農場要員の募集があり、タラフク食えるつもりで応募して、国営農場に行きました。およそ農場などといえそうもないところで、広大な土地「イバラといつしよに麦がちなな！」といった感じの麦を刈り取り、調整が仕事でしたが、切れの悪い鎌で、しかも日中は暑くて仕事にならず、その間を避けての一反歩は悪戦苦闘であり、刈取りが終われば脱穀調整ですが、これがまた前近代的で、広場に集めた麦を直径十メートルぐらいの円型に厚さ二十センチぐらいに広げ、その上を馬に石臼を引かせ脱穀し、そして落とした麦で唐みのでふるうわけですが、唐みのはなるほど日本製で動力式のものでしたが、いかにせん

動力がなく、これを私たちの手で回させ、ちよつとでも手回しがぶくになると、「ダワイダワイ」(しっかりやれの意)と背中に実弾入りの銃をあてがつての督励で、もし暴発でもしたらと冷や汗をかきながらの仕事で、タラフク食うどころか食事内容はあいも変わらずでした。

新潟県 高橋義夫

六月になるとコルホーズの仕事にやられた。キャベツの苗植えである。向こうが見えないくらいに畑に植えるのである。シベリアといっても日がかんかん照りつけると暑い。日陰もない畑でノルマを達成するまでは帰れない。暑さとすきつ腹で目がくらみそうになるのもたびたびであった。

新潟県 関文一

第一年目のつらい冬をイルクーツク第七収容所で越し、春を迎えた。短い夏はソホーズ国営農場に分遣された。大地に緑がよみがえり、草が口の中にはいることはうれしかった。だれもが蚕のように緑色の大便を排せつした。

けたはずれの広さを持つソホーズ(国営農場)は機械力を必要とした。捕虜集団をその代用とするソ連の考えはまこと当てはずれであった。広大な土地に放たれた捕虜は三々五々くぼ地に身をかくし、することはひなたぼっこシラミとり、取り残された馬鈴薯を探し回る毎日。これを見て地平線の彼方よりりっぱなひげを生やしたカマンジール(労働監督者)は、馬に乗ってむちを振り上げ、捕虜を追い回すのが日課。これで収穫は皆無、これがソホーズの実態かもしれない。

次いで分遣(だんだん少人数になる)されたのは牧草刈りであった。谷合いの湿地帯(トラックで運ばれ天幕生活)ウズベック族の老人の指導で、大鎌をふるって草をなぎ倒し、木ぞりにロープで縛りつけ、運び、積み上げ、露天に貯蔵する。四十メートルの高さの牧草の山があちこちに出現した。少人数で監視兵も一人

しかおらず、のんびりした、牧歌的な環境であった。

しかし、何しろ広大な土地で、地理も不明な谷合いの一角、逃亡することなど考えも及ばない。暖かくもなく短い夏は終わり、八月に降雪を見ることもあった。

滋賀県 村田英信

七月ころになって出張作業に出る。我々は二十人一組で十キロほど離れた川のほとりに天幕を張り、広大なバレイシヨ畑の草取り作業を毎日行う。監視のソ連兵はただ一人だけ。毎日同じ作業を繰り返すだけ。十日ばかり過ぎたころ大雨が二日間降り続き、ゆっくり骨休めができた。

給与のパンが届かなくなる。川の増水がはなはだしく、対岸との連絡が絶たれ、孤立の状態となる。自給のため親指くらいになったバレイシヨを夜になると目立たないように掘り起こし、飯ごうで蒸して腹の虫を抑える。しかし、翌日は全員下痢を起こす。小指くらいの小さなものは毒性があり、腹痛を起こすことが判明する。雨が上がっても食糧は届かない。草取り作業どころではない。付添いのソ連兵は我々をおいてきぼりにして部落の方へ消えてしまう。自足自給のためソバの花芽を刈り取り、虎の子の岩塩で味付けして食べる。横に流れる川を見ていると、イワシくらいの小魚が目につく。名案が浮かび、ワイヤ線で釣針をつくることができ、腰の真田ひもの糸で釣糸にし、柳の枝を釣竿とし、ミミズの餌で釣り上げる。おもしろいくらいに釣れ、久しぶりに栄養がたつぷりとれる。残りの魚は背開きにして干物の保存食をつくる。たまたま農民が通りかかりこれに目をさめ、ゼヒマホルカ(たばこ)と交換してくれと話かけられ、十四でコップ二杯のマホルカを入手して大変うれしかった。ソ連兵の連絡で一週間目にパンが届く。やっと人心地を取り戻すことができた。

七月初旬第二回目の移動が始まる。ダモイ東京を期待する。貨車に乗せられ南下する。翌日バイカル湖が見えて内心喜びを感じたところ全員下車。船に

乗せられアンガラ川へと下る。夏期は日照時間が長いので午後五時ごろ下船させられる。船を降りた途端に物すごいブヨの来襲に目も口もあけていられないありさま。顔や手はみるみるうちに変形するくらいに攻められ、上衣を頭からかぶりやっと収容所につく。土地の住民や護衛の兵士は蚊帳の布でつくった防虫帽を着用していた。

翌日からバレイシヨの収穫作業に従事する。八月八日に初雪が降って、朝夕めつきり寒さを感じる。下旬には時々氷が張る寒さ。九月中旬までにとり入れを終わらないと芋が凍つたためになるとのこと。「ベストラ・ベストラ」と急ピッチで収穫作業を行う。

北海道 石川朝雄

次は牧草刈りが始まった。日本の鎌と違って刃の長さが七十センチもあり、それに柄の長さが一メートル七十センチもあって、それを横に振って刈るのであるから大変な力が必要であった。しかし前の収容所ほどではないが、日本新聞の輪読会は昼休み時間にやる程度で、夜のつりし上げはなかった。この草刈りのノルマがまた大変多くて、いつも定時刻には帰れなかったが達成できた。

岐阜県 梶田利男

シベリアの夏は昼が長くて暗くなるのはほんのひとときです。まあ冬よりは過ごしいと言えるでしょう。八月になると移動することになりました。列車に乗って着いたところがイルクーツクの郊外、国营農場(ソホーズ)でした。ここでは収穫の手伝いです。馬鈴薯の収穫は機械で掘ったあとの芋を拾う作業でした。キャベツにニンジン等、野菜はいくらでもあるので、ここでは食べ放題みんな太ってバリバリ作業ができました。現金なものです。元気になったところで今度はアンガラ河を渡って対岸の農場へキャベツの運搬。トラックへの積み込み作業に行きました。ここにはソ連の軍隊も収穫の応援に来ていて、一緒に作業をしました。

コルホーズの収穫作業

私たち二十名を乗せたトラックは、およそ二十キロほどを走ってコルホーズ(集団農場)に着いた。地平線らしきものは遠く模糊として見えるのみで、視界全体が農場である。燕麦、馬鈴薯、キャベツなどが一望に広がっている。久しぶりに青い空、広い大地をみて、昨日までの辛苦を一時忘れた。

今日はキャベツの収穫ということで、一人一人にスコップが渡された。そして、三メートル間隔で横隊に並び、前に進みながらキャベツをとるようにと言われた。

一株ずつキャベツをスコップで掘っていると、そんなことをするのではなく、スコップでキャベツの根元を撥ねていくのだという。やってみると、首を撥ねるよううまくとれる。これはおもしろいと次から次に前に進んだ。後を振り返ってみると、アツという間に三メートルくらい進んでいた。しかし、おもしろいのもその辺りまでで、だんだん振り上げるスコップが鈍ってきた。疲れたのである。腹も減ってきたのである。それかといつてやめるわけにもいかず、スピードを落として、それでも二百メートルくらいは前進したと思った。そのとき、休憩がかかり、その場に腰をおろした。

休憩後の指示が出た。畑のあちらこちらにある手押し車で、今までのキャベツを積んで倉庫に運べというのである。それならば余り撥ねるのではなかったと思うが、もう手遅れだった。手押し車に積めるだけ積んで運ぶことにしたが、途中コロコロ落ちるので、十個ぐらいにして倉庫まで運ぶ。畑はデコボコで、手押し車は思うように進まない。倉庫まで何回か運んだが、疲れきって、その数は覚えていない。もう手、足は棒のようになっていた。そして暮れていくキャベツ畑を後に収容所に帰った。

翌日もコルホーズの作業である。昨日と同じくキャベツの作業であった。今日は

失敗しないで、ゆっくり撥ねることをみんなで申し合わせ、のんびりとキャベツを撥ねた。

遅々として進まない作業に監督が来て、能率を上げないと帰らせないといい、この杭の位置まで進み、そして手押し車で倉庫まで運べと指示した。一応、杭の位置までキャベツを撥ねたが、手押し車で運ぶと倉庫の位置は昨日の倍になり、さらに難儀な作業となり、トラックに乗ったときはかなり薄暗くなっていた。収容所に帰り、明日の作業予定はと聞くと、同じコルホーズと言われうんざりした。

また、同じ道程でコルホーズに着くと、今日の作業は馬鈴薯掘りであった。馬鈴薯に傷をつけないように、できるだけ株の遠くからスコップを入れるように注意された。

みんなで漫々のにやらないとまた倉庫まで運ぶのに大変だよと、そうすることにした。最初掘ったとき、びっくりしたのは、馬鈴薯が紫色なのである。珍しそうにかじってみると、おいしいので食べていると、そこへ監督が来て、昼には馬鈴薯をしつかり食べさすから、生はやめとけと言って去った。そうとなれば馬鈴薯掘りも頑張ろうということになった。

昼、掘った馬鈴薯が農場の炊事場で蒸かされ、私のところへ運ばれた、いくら食べてもよいということで、このときばかりと思う存分食べる気だったが、もう我々の胃袋は大食できないものになっていた。食欲と消化機能が全く反対で、無理に食べないようにした。

随分余ったので、持って帰ってよいかと聞くと、よいというので収容所に持ち帰り、戦友たちに分配した。明日は飯盒を二つ持って行き、充分詰めて持ち帰る話をしたが、翌日の作業は変更されていた。

農耕作業

農耕と云つてもすべてが自活用のもので、ソフォーズとか、コルフォーズのような大きな農耕作業ではない。年が明けて春四月、収容所内の空地を利用して、試験的にビート(砂糖大根)作りが始められた。私は凍傷あがりであり、農学校出身ということもあつて、この作業を受け持つことになった。

まず、種まきから始めた。ソ連兵の指示を受けながら雪解けの後をエンピで耕し、適当に播種したが、非常に乾燥していたので毎日の水かけは欠かさず丁寧にやつた。しかし何日たつても発芽せず、ソ連兵の指導を受けた。結局日中の太陽熱で乾燥がはげしく、水かけが不充分であつたのである。以後水量、回数を増やして、どうやら発芽を見ることが出来てほつとした。その後は無肥料でも試験作は一応成功した。

その後本格的にということ、農業経験者の将校以下、下士官、兵の半病人が二十人選ばれて、収容所外の川の近くの原野を耕した。小型トラクターを使用したので、個々の労働力は案外軽くて済んだ。

この土は積年の枯れ葉、葉が腐食していることと、土が新しいということとで施肥をしなくても結構いい野菜が出来た。

主なのは、ビートを初め、キャベツ、トマト、馬鈴薯等である。特にキャベツは大きなものが出来た。トマトは赤く実らないが、青いまま漬物として食用に供した。この地方の特色である。これらの農作物は大体五月から八月一杯位までである。

千葉県 兼平正二

学校を宿舍として当てがわれ、床の上で休むことができた。

それが終わると、集団農場(コルホーズ)の馬鈴薯掘りや大根、キャベツの収穫の手伝いであつた。このときは、農場主が馬車での送迎をしてくれた。生のまま食べるのでできる野菜の取り扱ひなので、監督(マツセル)の目を盗んではこっそり大根を引き抜き、手際よく手や服で泥を拭い取りひたすら食べた。また、すこしの暇を見つけては枯れ枝を集め、馬鈴薯を飯盒で煮て一日三、四回食べ、太鼓腹をして「フーフー」言いながら作業を続けたが、捕虜にとっては腹いっぱい食べられるのが正月であつた。

集団農場(コルホーズ)の食事は捕虜も家族も同じで、さらに子供たちと一緒に納屋や作業小屋の干草の中で寝た。民間人と身近に接したのはこの時期であつたが、捕虜の身である私たちであつても、とりわけ差別をしないロシア人の心に触れ、軍人との落差に戸惑ひも覚えた。

広島県 増田敬三

希望のない年が明けて翌二十二年の夏、コルホーズ(農場)へ行くというので、期待を持つて五十名ほどが一日がかりでたどり着いてみれば、農場どころか人家一つない草原ではないか。臨時の天幕で草刈り作業が始まつた。冬の牛馬の干し草づくりである。人里離れたところで、私たちの糧秣は三日ごとに自動車で運ばれていたが、何かの間違いから一日ほどその到着がおくれた。毎日食つても栄養は十分ではないのに、そのためかどうか、日暮れに五十人中二十人ばかりが目が見えないと訴えた。鳥目になつたのである。便所が遠いので行く先がわからず、幕舎から綱を引いてそれを伝つて用足しをする始末になつた。そのうちに松井衛生兵が「鳥目の者は集れ」と一列縦隊に並ばせて、次々にアーンと口をあけた中に肝油を一滴つつ落としてくれた。何と驚くことにこれが効いた。翌晩には全員鳥目がすっかり治つていた。

岐阜県 伊藤 武

一方、私たち病弱の三級労働者は、数日間、国営農場(ソルホーズ)の収穫作業に行かされた。作業は燕麦の結束で、馬が機械を引いて刈り倒していったものを、一抱えほどの大きさに集めて紐で結ぶことであつた。結構忙しかつたが、小

東京都 小野正大

出発のとき、通訳の人と二人で所長の所へあいさつしてゲートを出ました。ゲート前で待つこと数時間ありました。友の家での生活は夢を見ていたような気がします。地獄で仏に会った思いでした。そのうちに輸送車が来てそれに乗ってラーゲルに帰りました。帰るとすぐに次の作業が待っていました。国営農場に行つて作業です。私たちの班は十五人で、朝八時に出発、ソ連兵が二人ついて農場に向かつて歩き出しました。道は狭く曲がりくねっていて方角はわかりませんが、三〜四時間歩いたときに前方から合唱の音が聞こえてきました。近づくとも十五人くらいのロシア人の男性が「ボルガの船唄」を歌っていました。そこは川が流れていて、その川を渡る舟を待っているながら歌っていたのです。私たちもそこで小休止し彼らの歌を聞いていました。それはきれいなハーモニーで、日本の合唱団では及ばないほど音量があり最高のものでした。

歌声に酔いしびれて出発となり、川に沿って再び歩き出しました。一時間くらい歩いて農場が見えてきました。農場の向こう側に女性の刑務所があり、反対側に民家が五〜六軒あり、その民家の前で止まりました。ソ連兵が通訳を通して一軒に三人ずつ入るように命令しましたので、私たちは三人ずつに分かれて家に入りました。食糧は刑務所から車で届けられ、食事をつくって食べましたが、もう遅い食事でしたのですぐ眠りに入りました。

翌朝六時、刑務所のサイレンで起床、朝食をとり、係員の来るのを待ちました。やがて係員が来て、係員の指示でジャガイモを拾う作業でした。各人南京袋を持って広い農場に行きました。まるで飛行場のような広さです。そこで芋拾いを始めました。毎日毎日拾っても拾ってもありません。そのジャガイモは「カレトウチカ」という種類で、とつてもおいしくて、木の棒でつきますと餅のように粘つて、なおおいしく食べました。

ここでは夏になると日中の日が長く、日の出が午前二時ごろで日の入りが午後九時ごろになりますので、夜は四時間くらいしかありませんので睡眠不足に

悩まされました。

次の作業は草刈りでした。背丈もある柄の長い鎌をかつて山に入ります。山といつても雑木林です。早い話が人跡未踏の地といった方がよいほど木が茂っていました。一歩足を踏み入れると、ぶんぶんという物すごい音が聞こえてくるので、何だろう思つて四方を見渡してみると、うす黒く固まったものが動いていて小さな虫ということはわかったのですが、そばに寄りつけません。すると後の方から、指揮官でロシア人のヤコベンコという人が、アミの帽子をかぶれと指示して、みんなその帽子をかぶつてその人の後について行きました。その虫は蚊でした。日本にいる蚊の三倍はあろうかと思われるものでした。その蚊に血を吸われると一時間はもつまいよということをお聞きさされ恐ろしくなりました。そこにはキノコがたくさんありました。私たちは腹の足しにするために千本しめじをよく食べました。塩を入れて煮て食べるのです。なぜかキノコは毎日食べても飽きませんでした。その草刈り作業も終わりになったところは九月も半ばに入つたと思います。

滋賀県 寺村芳郎

主な作業はコルホーズで馬鈴薯掘り。一日のノルマは、横一列に並び幅二メートル、長さ百メートルの収穫。午後三時になるとコルホーズ長(国営農場長)が馬で来て、みんなの掘り出した跡を馬の前足で無作為に掘り返し、芋が一つでも出てくるとスタートラインに呼び戻され一からやり直し。検査が終わると麻袋に詰めて一カ所に集積し、一日のノルマ完了となる。

この収容所で一番つらく、みんなが一番嫌がったのは、約一週間ごとに回ってくるコンボイナヤロータ(ソ連警戒兵の宿舍の掃除と原木運び、また輪切りした木材のまき割り、ソ連兵の一日分の糧秣運搬)の作業であった。

和歌山県 北村明

五月十五日、収容所を隔たること約三十キロの農場(コルホーズ)に派遣され

る身となった。

肥沃な七百ヘクタールに及ぶ黒土をこの農場は持つていた。コルホーズでの作業規定は八時間労働であるが、植えつけ期と収穫期とは別であつて夜間作業もあつた。

その日の作業量（ノルマ）を毎朝点呼のときに農業技師（アグラム）から達せられた。この地における農業経営の絶対的権利は彼「アグラム」が持つていた。五百人の中に混じつて一緒に作業していた私たち二十名は「アグラム」の命令によつて馬耕をやることになつた。車輪つきの大きな農具（ブラウ）に二頭の馬を仕立てて、この果てしなき大原野を耕してゆくのである。機械の使い方も短時間で習得して、私たち日本人二十人のみが五十日余りを、朝幕舎を出て夕方まで全く監視されることもなく解放された人間として自由に農耕作業に従事した。

このことは今にして思えば、ありがたい生きる喜びの体験であつたと思う。近くの部落で村の娘たちがかん高い声で歌っているのが聞こえてくる。このときなどは抑留者としての現実を忘れたひとときであつたと言えよう。ある日の昼休みに、馬に乗つて部落に行つたこともある。かわいい娘からリンゴをもらったこともあつた。いわば若い青年時代の思い出のひとつとして私の脳裏に残るものである。これは淡い恋心であつたのかもしれない。

和歌山県 松本博文

着いた所はソ連領ボセットである。（昭和二十一年七月ころ）

ここで貨車に乗り換える。また日本への希望はあきらめざる。貨車は西へ走り続けること二十日間、今度着いたところはカザフ共和国レノゴルスクという高原の街。標高三千八百メートルくらい、日本の富士山より高い所だという。まだ八月というのに雪がちらつた。ここでは甜菜、馬鈴薯、トマトなどの除草作業である。ある日、一列に並んで畑の草を取りながら進むと、向こうからも同じ作業をしている組あり、よく見るとドイツの捕虜である。通訳を通じて休憩中、片言、手

まねで話すと、どうやら日本は日ソ不可侵条約をまじめに守り過ぎた、もつと早く極東で対ソ宣戦しておればソ連は手を挙げたこと間違いないと、しきりに残念がる。農場は馬鈴薯、トマトなどあり、何かと我々にとつてありがたかつたが、二カ月ほど過ぎて次は煉瓦工場に移る。十一月ごろである。煉瓦を造る土を練るのも足で踏む、そして型枠に入れ乾燥して竈かまどに入れて焼く。

静岡県 室伏貫二

再び私はイズベストコーワヤに戻り、今度は十二、三キロ南に連れていかれた。ここは広大な集団農場コルホーズで山の中ほどに幕舎が並んでいた。

この農場で新しい仲間たちと農作業を行う。大根、人参、馬鈴薯などの草取り作業である。近くにソ連囚人の建物があり一緒に毎日作業を行った。シベリアの空が訪れ始めること馬鈴薯の収穫も始まり、毎日毎日掘り続けた。シベリアの秋は短く寒気が急速に増し、収穫が終わるころにはまた移動させられた。

島根県 高尾敏教

昭和二十二年四月といつても地面は凍つていた。このコルホーズにはゲルマン系のソ連人が多かつた。若者は日本と同じ戦争に駆り出され、老人と女性が多かつた。当分は畑仕事もできず、植付用の種馬鈴薯の選別や、大根、キャベツの種子を作る作業をした。去年刈り取り乾燥した莢さやを作業場の庭に広げて、これを裸馬に乗つて馬に踏ませて、種を採り出す作業で、時には落馬したり、尻の皮はむける、大変な仕事だつた。第二次大戦も終わり、ソ連でもこのころ復員軍人が一人、二人とコルホーズへも帰つて来るようになった。

気候もよくなり植付、種まきの時期がやつて来る。キャベツ、人参、トマト、玉葱、南瓜、ジャガ芋など、日本の農家で作るものと、少しもかわらず、土地が肥えているのか作物はよくできた。雨の少ない地方で、夏の作物には用水路から水

を引くこともあった。時にはバツタの大群がキヤベツ畑を襲うこともあり、人間の力ではどうすることもできず、広い畑をアツという間に丸裸にされたことがあった。シベリアは冬の来るのが早く、九月になると収穫で忙しくなり、馬に鋤を引かせて人參やジャガ芋を掘る。これを拾い集めて馬車で貯蔵庫へ運搬するのが主な仕事だった。

福島県 大室 清

作業の稲刈りだった。遠い北の地の零下四十度からの寒地で、まさか稲刈りをするとは夢にも思わなかった。なんでもドイツの捕虜が作付けをし、どんな理由からか刈り入れできずに引き揚げた後だった。気の遠くなるような広々とした田圃の氷の上に、チョコンと穂だけを出している黄金色の稲穂を、刃渡り六十センチくらいで長さ二メートルくらいの柄の中間に取っ手を付けた草刈り鎌でガリガリと薙ぎ払い、それをフォークでとどころに山積みして置き、モルチルカという脱穀機に放り上げて籾と藁とに分別する。食事情は最悪で、初めは気力で働いていたが、寒さと飢えで作業のできる体力ではなかった。捕虜という立場では、動物並みの扱いに苦情を言っても通らない。「ダワイ、ラボータ(さあ働け)、ブイストレ(早く)」とハッパをかけられる。それでも籾米を扱う作業だから自分で食を補うことだと、初めのうちはカンボーイの目を盗んでは籾米をスコップで、焚き火に乗つけて、炒り米にして、満足に穀の取れていないのを口に放り込んで食べた。翌日のトイレは、米は完全に消化され、血のついた籾殻だけが排泄されている。そのうち馴れてきて、缶詰の缶に籾米を入れて棒でゴツゴツと精米を始める者、作業現場に行く途中のザポール(塀)からコンクリートを剥がしてきて、二枚すり合わせて精米する者と、それぞれ工夫するものである。それもナチャリニクの目を盗んでの仕事だし、見ても知らん顔で見逃してくれるカンボーイもいれば、ナチャリニクにおべつかをつかい目を光らせているわずらわしいカンボーイもいる。そんな苦勞をしてズボンの中に流し込んで持ち帰り、仲間とス

トープで飯盒で煮て食べることにするが、たびたびソ連兵が視察に来るので見張りをつけて、ソ連兵の姿を見ると「空襲警報」と怒鳴る。バタバタ片付けて知らん顔でよそごとをしているように見せる。そんなことも初めのうちは通ったが、敵もそんなに甘くはない。ついに見つかつて警戒が厳しくなり、帰宅時のラーゲル(収容所)の入口での持ち物検査が徹底的にされるようになった。せつかく骨折って精白した米も一〇〇%取り上げられる始末。ある日いつもの徹底検査で、腹から両足のズボンと数人で、パタパタ始まった。私は約二升くらいの米の入った袋を頭の上に揚げて検査を受けた。ソ連兵は夢中で下ばかり検査して頭の上までは気がつかず、無事持ち帰り大笑いしたことがあった。稲穂の山の中にはとどころに野ネズミが巣を作っている。これを見つけたときは大騒ぎである。フォークで追いかけて回して捕まえ焚き火で焼いて食べる。米を食っているヤツだから、小鳥のような味でうまい。カルシウムもとれて最高のご馳走であった。

こんな稲刈り、籾処理作業も終わり、次に田圃にするための側溝掘り作業が始まった。考えてみれば、ただ、だだっ広い原野に稲穂が生えたような田圃とは言えない田圃であった。日本人の農耕作者の知恵だろうと思われる田圃用の側溝掘りである。幅二メートル、深さ二メートルくらいの形に掘り下げる作業だが、これまた大変な仕事である。零下四十度、五十度の寒さは、地下も一メートル五十センチくらいまで凍らせている。カイロ(鶴嘴)で掘るのだが簡単に掘れるものではない。ソ連の共産主義には「働かざる者食うべからず」という徹底した主義があり、これに忠実である。働くこと、すなわちノルマの達成である。ノルマの達成率が食べ物に影響してくるのである。このノルマに関しては、体力に等級があつて、それでノルマの内容が違ってくる。たとえば一級(ピエロイ)、二級(フタロイ)、三級(ツリーツチ)とあり、一級は一〇〇%、二級は一級の八〇%で一〇〇%達成、三級は一級の五〇%で一〇〇%達成となる。四級(オカ)は栄養失調で、五級(ペイペイ)が病人で、四、五級はニアラボータ(作業なし)といった具合である。では等級はどうして定まるか、これがまたお笑いである。ドクターが頭から足の

先まで見下ろし、肩の肉をつまみ、尻の肉を引つ張る。ただそれだけで等級がつけられ、ノルマが課せられるのだ。コニアジナーク(馬と同じ)扱いだ。

千葉県 伊藤千次

シベリアの秋は短いから農作物は短期間に収穫しなければならなかった。九月中頃チバリ川の中流域の農場にじゃがいも掘りに三十人派遣された。畑は大きく一枚が四、五町歩もあり、馬に鋤を引かせてじゃがいもを掘り返して行く。その後から柳の枝で作ったカルジンカという箆に拾い集めていく。集めたじゃがいもは細い木で米選機式の大型の選別機を作り、上からころがして小粒を取り除く。最後にトラックで倉庫へ運ぶ。初めのうちは一生懸命働いたがだんだんと疲れてくる。中央でカルジンカ一杯のじゃがいもが、畑の端の集積地まで百メートル二十キロが三十キロに重くなる。誰始めるともなくじゃがいもを拾うではなく歩哨の眼をかすめて埋めることを覚えた。これも体力を保つための悲しい知恵であった。

畑と畑の間に木が生えており枯れ木もたくさんあった。畑の端で焚き火をし、カルジンカ二、三杯のじゃがいもを放りこみ、焼けた頃かわるがわる取りに行き火傷をするような熱いものをポケットに山盛りに詰め込み、仕事をしながらいもを食べていた。農場にいる間は空腹ではなく満腹をへらすために働いていた。ある日作業から帰ると収容所の中がごった返していた。ソ連兵が私物検査をしていた。畑からじゃがいもを盗んで来たのと取り上げ、庭に袋に入れて積み上げている。中に入れてくれないで、庭では火を焚き盗んで来たじゃがいもを茹でて氣勢を上げて食べている。中で盗品を摘発し外では新しい盗品を食べている。間拔けなソ連兵である。五、六袋のいもを取り上げて帰っていった。九月に入ってソ連兵がいやに仕事を急がせると思っていたら、シベリアの冬は早い。一晚の霜でいもの茎が真っ黒になってしまった。

畑の端の大きな倉庫もじゃがいもでいっぱいになった。この倉庫の真ん中に大き

なストーブがあり、じゃがいもを凍らせないために春まで昼夜火を焚き続ける。その仕事は婦人がしていた。薪は原野から自分で集めて燃やしているようだったが、雪が降ったら応援を頼むのだろう。

雪の降る前にじゃがいもを土産に第五収容所に帰って来た。

広島県 榊上竹士

どれくらいそこで過ごしたか記憶にないが、寒波も過ぎて幾分暖かくなって、見渡す限り灌木の生い茂る原野をアムール河下流に進み、広いコルホーズ(農場)に到着。農場には数人のロシア婦人が働いていた。私達の姿を見て皆仕事の手を休め、口々に「ハラショー、ヤポンスキーハラショー」と歓迎してくれた。農場中央の野菜貯蔵庫に枯れ草を敷き、宿舎として用意された。就寝して夜中にかゆいというより痛いので見ると、五ミリはある大きなダニが身体中とこころ構わず食い込み血を吸うのには閉口した。特に股間の柔らかいところに身体半分食い込み、血を吸って赤く染まった尻尾を覗かせているのに驚き、指でつまみ取ると尻尾だけが取れて頭が残った。先の尖った物で掘り出さないと取り出せないのだ。

翌日から農作業を始めた。農業の経験のある者は野菜貯蔵庫の前の苗床に野菜の種を播種して苗を育てた。他の者は馬鈴薯の植え付け作業をする畠に三十センチぐらいの間隔で穴を掘り、トラックで運ばれて来る種芋を播くのであるが、ノルマは種芋の量によって今日はトラック何台分と決められる。初めは一つ穴に二切れから三切れを植えていたが、それではノルマが達成されないで、ソ連人の目をかすめ大きな穴を掘り、その中に十切れも二十切れも放り込んで素早く土を覆ってなんとかノルマを達成した。シベリアの野菜(馬鈴薯)の成長は早く、間もなくして収穫の時期が来る。収穫の作業ノルマはこんどは畠の面積を決める。両足間に茎を挟み、茎だけ引き抜き誤魔化してノルマを達成する。ソ連は収穫作業を抑留者の健康回復の一つの手段と考えていたようで、収穫物を宿舎

に持ち帰ることは固く禁じていたが、作業現場で煮て食べるのは何も言わないので、皆飯盒持参で作業して、見る見るうちに健康回復し元氣になった。その反面、ソ連の基本姿勢は、明らかに労働に役立たない者は抑留しても意味がないということから、私達栄養失調の者を雪嵐の中を移動させれば死亡者が出ることは明らかであることを十分承知の上でそうしたのではなからうか。このことは私の深い心の中に秘めたことで、想い出すのも嫌で、思うと今でもゾーンとするのである。

愛媛県 鹿島智夫

五月頃、横洲と私はコルホーズの使役を命ぜられた、コルホーズには二頭の牛が飼われていた。カルチベーターやプラオが小屋の中にあつた。この農具類はかなり使つたものか、鉄の先が丸みちびて光っている。のんびりと牛が啼くので開拓時代を思い出した。農夫らがとても人なつこく二、三人寄つてきて、スコップを二つ出して、これで牛舎の糞を出してくれと手振りをする。開拓地で常に馴れていた仕事なので手際よく一時間くらいで作業を終えた。農夫たちはハラシヨラボータを何度も言つて作業は終わったと言うので、二人で畑の傍らの蓬よもぎをむしり食つた。まだ五、六寸の丈だったが、萌え出たばかりだったので甘かつた。にがい筈の蓬が少しも苦くない。腹いっぱい食べて飯盒にもいっぱい詰めた。

新潟県 若月太郎兵衛

「起床、起床」の声に起こされた。まだ薄暗い九月五日、明けの明星が輝いておる。外は零下、霜で真つ白だ、かちんかちんに凍っている。仕事は馬鈴薯掘りとのこと。眠い目を擦りながら例の食事を済ませて舎外整列、点呼。「アジン、ドヴァ、テリー、チテリー(1、2、3、4)」、勘定が合わぬ。これがやがて在ソ期間四年半、じれつたさに泣かされることになる。馬鈴薯(カルトーシカ)畑は広く、高原の如く地平線まで続いている。女性監督ホーチャは足の速いこと、ついて行

くのにお金が大変だ。彼女曰く、スターリンは一秒を無駄にするな、一カペーク(ソ連のお金の単位、日本の一円のようなもの)を疎かにするなどのこと。まさに小走り
で計測(二十メートルおきに正方形に印を印をつけてゆく、碁盤の目のように)、
そこへ馬鈴薯を集積するのだ。

いよいよ芋掘りだ。一人二畝受け持ち、カルトーシカ掘りだ。前方は霞んでい
るほど遙か彼方、夕方までに届くだろうか。気の遠くなるようなソフホーズの畑、
社会主義国の大きさに驚いた。

朝のうちは土が凍っている(九月初めなのに)参つた。二十センチくらいの棒
切れ一本預けられ、初めての労働。掘つた、掘つた。シベリアは北海道と同じく無
病なので成長拔群、トマトの木のように大きく、芋も大きく豊作なのだ。北海道
や満州並みの酷寒地であり、湿度が少なく適地なのだ。おまけに一、二年作り
後は五年間も休耕して草ぼうぼう。六年目になると大型トラクターで鋤き起こ
し、プラウで碎土して黒パン用のライ麦を作る。休耕、輪作、無肥料粗放農業、
機械化農業の典型だ。畑は耕うん前、一面の草原に火を放ち焼き畑にしてやる
ので理想的と思つた。土地は広く幾らでもあるのでとのこと、羨ましい限りであつ
た。

朝のうちは畑が凍っている(九月初めなのに)参つた。二十センチくらいの棒
水も溶けて掘りやすくなった。あまり芋が沢山出てくるので困つた。夕方まで掘
つても彼方の終点へは届きそうもない。誰か頭のよい奴が名案を發明した。芋の
茎の根元を両足で踏みつけて茎だけ抜き取り、後は四、五個くらい指で探りな
がら掘り取るのだ。柳箆にいっぱいになれば、かねて計測しておいた集積地点へ
あけてくる、これであればノルマも何とか達成できそうだ。掘っているうちに、ろ
くな物も食べていらないのでお腹が焼き芋を要求している。焼くといつても燃えるよ
うな物は何もない。仕方なく枯れ草や芋の茎などを燃やしてやつてみた。焼き
芋などできる訳がない。生焼き芋をかじり始めた。生まれて初めての食べ物、お
腹の虫も驚いた。でも、こうした苛酷な環境では結構栄養になるらしく、誰も腹

痛もなく満足であった。朝、明けの明星を仰ぎながら作業へ。作業が終われば次のお月様が赤くぼんやりと出ているのであった。

こうしたことを三日くらい続けたけれど、人海戦術の限界を知った。監督は掘り取り専門のトラクターを持ってきた。トラクターは二畝一度に鋤き起こし、振動で土をふるい落としながら芋が表面にばらばらと撒き散らしたように落ちて行く。我々はその芋を拾い集め籠に入れ、いっぱいになれば集積地点へあけてくる。簡単のようだけれど忙しいこと夥しい。さすがは社会主義国だ、スケールが違う。こんな大きな機械化農業は初めて見た。彼等は傲慢しながら「日本にはないだろう」と得意になっておる。悔しいけれどまさにその通り。牛馬の農業は北海道にはあったかも知れぬ。全部掘り終わって今度は駅まで運搬だ。USAベーカー・トラックが畑へ、所かまわず入ってきた。全然スリッパしない、凄いいトラックだ。余談になるけれど、アメリカがヒトラーをやつづけるためにロシアに援助した物なのだ。そればかりではない。メリケン粉、缶詰、鯨肉、フィラデルフィアのランクリン工場製蒸気機関車、ジープ、などなど。日本と戦いながえ、さすがは物量誇るアメリカなんだ、日本の敵ではない。桁が違うと思った。

二十メートルおきの芋の山は、スコップで麻袋に詰めて二人でトラックの上へ投げる。あけては詰めるの繰り返し。満タンになれば駅へ。有蓋貨物へスコップで積み込む。芋は澱粉工場用や食料になるとか。一週間ぐらいでやれやれ芋掘りも終わった。今度こそはダモイ(帰国)だとはしゃいだ。監督が、畑を検査したら手掘り畑は五〇パーセント残っていると怒り、どうなることかと心配したけれど、隊長が謝ってくれ、何とか許してもらい、ほっとした。

岐阜県 坂井文介

七時、皆が収容所の門を出た。道のない広野を出た。太陽の光から見ると東の方に向かってる。一時間くらい雪原を歩くと、荒野の中にもまきの稲がカラカラに枯れて小さな米の穂が首をたれている。ここでも人手不足で収穫ができ

ないままになつて居る。ガタガタトラックが一台大きな鎌を持って来た。日本のような小さな鎌ではない。この鎌は両手で持つて横なぐりに刈り倒す。倒れた稲は鎌のない兵隊が集めよという。そしてたった一台の旧式なコンバインに入れるという。そして脱穀された米をガタガタトラックでソフホーズ本部に運んで行くのである。

十二時、昼食時になると収容所に帰って食事、一時間の休憩を終えると再び作業場へ向かう。北風が身にしみる頃になると、作業やめの号令がかかる。今日も一日命があつたと喜ぶ。

稲刈りは約二カ月間続いた。西も東も大雪原である。その中にソフホーズが稲を作っているが、男手がないので今年の収穫もできないままであった。夜になると遙か小高い丘の中腹の道路を、毎日毎晩軍用トラックが満州から占領品、掠奪物資を山と積んで走るのがかすかに見える。ここイリンスコエの野は実に広漠千里、満面蕭条たる流刑の地である。

高知県 加納憲

草刈り

生まれて初めて見る薙の先に鋼鉄の刃をつけたようなロシア鎌で、これで夏草を刈るといのが全く要領がわからず、また軽石のような砥石を渡され、研ぐと指に切り傷を作るし、研がねば切れない。これでノルマが一人一日一五〇〇平方メートルと聞いて二度びっくりし、とても出来ない作業だと初めから思った。

ここでも草の成長はよく、どうかすると身の丈くらいある。朝はブヨ、日中はアブ、樹の下にはダニで、これに対処しなければならぬ。

ブヨには風呂敷をかぶり、中東の婦人のように目だけを出し、顔にはガソリンを塗り、手足のすき間を防備して十時頃まで作業をする。日差しが強くなるとブヨはいなくなり、次にアブが来る、熊蜂のような大きな奴がくると、初めは怖かったが、これが蜜を持つてることがわかり、そのうちに腕にとまらせて血を

吸わせて徐々に叩き取る。そして胴体を真つ二つに裂くと蜜が出て甘味の足しになる。こうなると食うか食われるかである。

また、山の樹の下を通ると、いつの間にか痛みを感じて、見るとダニが食い込んでいる。ダニは柔らかいところに食い込み、舉に食い込むと大変だ。無理に引き抜くと頭が残り、これがまたやつかい者である。それで煙草のヤニを付けてゆつくり取り出す。ダニのような奴とはよく言ったものだ。

これで宿舎に帰ると、南京虫と風で、シベリアの夏はこ奴との戦いでもあった。草を刈ったあと夕方に一カ所に集め、フォークで山積みし整えて仕事が終わる。

三重県 林 英夫

次いで、農場作業に駆り出された。これは雪が解けて水がひいてから秋口までの天幕生活で、広い平地の中、申し訳程度の囲いがあった。作業は牛馬の飼料にする草刈りや、ジャガイモの栽培であった。周囲一面の平地で山の姿がない。一面の平原で、製粉用の高い風車、大きな干草の山が散見された。牛馬の放牧もあり抑留生活中としては比較的のんびりした時期であった。農作業は大ざっぱであった。種芋を満載した大きな箱車を馬に引かせ、底からぼろぼろ落しなから広い畑地を往復し、われわれがそのあと適当に棒で土をかぶせるというものであった。収穫期になると、ここから各自しかるべき量を失敬して夕暮れ時炊飯し車座になってたらふく食べた。各農家周辺のいわゆる自留地の作物はきわめて良く手入れされて大切に管理されていて、バザールに持ち込んで換金できる。公共農場のものについての関心は薄い。自留地のものには決して手を出さないといいことは鉄則であった。草刈りは冬季の牛馬の飼料として重要な作業であった。普通の手鎌をそのまま等身大にしたようなもので体全体で刈る。エンジン刈払機の先に長い刃がついているようなものだ。これにもノルマがあったが、いいかげんなものであった。夜半、露天で句会が催され、また雑談に花が咲いた。無聊をいやす歌会、句会は各地で行われていた。秋の訪れとともに、ここを引き払いマルシヤ

ンスク収容所へ戻った。

次いで、ビンスクよりやや近いこれまた森林の作業現場(地名は覚えてない)に移された。針葉樹の大木の大森林地である。帝政ロシア時代を示す表示もあった。ここには冬から夏近くまで過ぎた。二百人ほどの集団であったろうか。隊長は大串少佐という大変立派な方で、われわれは心から尊敬信頼した。

一抱えから二抱えもある喬木の根元で二人向き合って座り、半月形をしたのこぎりを引いて切り倒す。高さは三〇メートルもあるので、その半径の範囲内は危険地帯である。倒れるときは大声を出して注意しあう。うなりを立てて倒れ雪煙をあげる光景は壮絶である。枝を打ち表皮をはぎ、さらに六メートルほどに切りそろえる。大勢で力をあわせ一本一本転がして林道に運び出す。雪道をロープ(と言っても柳の表皮を編んで作った綱)で引いて川岸(川はマルシヤンスクに流れている)まで運ぶ。川はもちろん結氷している。とにかく冬の間には大量の木材を川岸に集積する労働である。

福井県 横田 肇

とあるコルホーズで降ろされ、ロシアマダムの作業の手伝いとなる。ここでは馬鈴薯の植え付けで、大きな櫛(歯の太さが十〜十五センチほどが五十センチ間隔で八本ほど付いている)を作業主任?が運転するトラックの後ろに引張つてできた溝の中へ種イモを並べていき、後から土をかける作業だ。休憩になるとドラム缶を二つに切った釜でイモを茹で、腹いっぱい食べさせてくれた。夕方になると「ハラショーラボーク(よい働きだ)」と言われ、悪い気はしなかった。宿舎はブラックの小屋で、食事はロシアマダムの作ってくれた彼女等と同じもの(黒パン、肉入りスープ、トマト、キュウリの漬け物)が出され、もつと食べると言われ、久しぶりに満腹になる。病み上がりなので特に気を使ってくれたと思う。二十日ほど植え付け、雑役の仕事をしてかなり体力も戻った。

次の所へ移動(トラックで丸一日)。そこは最初入ソした時の建物と同じ丸太で

できた建物で、そこには日本人が四十人ほど先に入っていた。その人たちの話によると、あちこちのラーゲルの体の弱い人たちのようでした。

和歌山県 南口佐一

着いた所はラドである。ここは満州虎頭とはウスリー江の対岸で、イマソ市の南、コルホーズ、ソホーズと言ひ、国営農場であった。

この農場は主に馬鈴薯を作っていた。大根、ニンジンもある。大根は日本と違いテンサイ糖で、砂糖を採ると聞く。なるほど甘く感じた。初めは馬鈴薯を生で食べたもの。うまいがエグイと思ひ、後は一斗缶で炊いた。

仕事はトラクターで種芋を植えていくが、その後私達は埋まっていなくて、土を被せていくので、作業は楽で体力も回復し、大根、ニンジンを生で食べたもの。ニンジンも日本よりも一回り小さいが変わりなく、赤かぶもあり、日本は白だがソ連は赤である。塩も日本は精製しているがソ連は岩塩でニガリがあり、薄茶色をし、お粗末なものだが貴重なものでした。シベリアの土地は凍結期は戦車も川の上を走りますが、溶ければ土はボコボコになり、作物は良好で、短期間で収穫できるのです。馬鈴薯は一樣にものごくでき、見事です。私は、馬鈴薯が凍つて溶けて乾燥すれば澱粉ができると初めて知りました。昨年の芋が凍り、それが表面に出て乾燥すれば、皮はへしかみ中は白い粉、これが澱粉で、湯で混ぜて食したのです。ソ連の制度は、十月過ぎれば作物は解放になり、誰が取つても罰にならないそうです。

和歌山県 辻本信二

ソ連には、コルホーズと、ソフホーズ(国営農場、農民は完全な賃金労働者である)とがある。私達十四、五人が作業衣のまま飯盒、水筒、毛布等を持ってラーゲルを離れ、約三十キロトラックに乗せられて行つた。目的は、馬鈴薯の貨車積込み作業に従事するためだ。ソ連では直属命令者とその命令を受けた者以外は何ら関知せず、兵士でも将校でも自分の直属以外は横の連絡は全くないので全然関係なしだ。警備兵は私達の警備だけでその他は何があつてもノーコメントだし、トラックの運転手は命ぜられるがままに車を走らせていけばよいのだ。ほどなく田舎のただ広い貨物駅に降ろされ、そこで寝泊まりすることになった。何両かの貨車に馬鈴薯を積み込むのだが、二十貫入りの袋は二人でも相当な苦勞をしながらの作業となった。私達より一足先に使役に来ていたドイツ人捕虜は一人で軽々と提げていた。私達を見兼ねてか時々手伝ってくれた。夜はドイツ人捕虜と一緒に寝た。彼等はソ連人よりももっと太っていて大きかった。彼等は「我々は今は帰る国はないが、あと十年もすれば大ドイツ帝国を以前のよ

うに作り上げるんだ、ソ連人なんかに負けてたまるもんか」と大いに気焔をあげていた。

和歌山県 辻本信二

今度は、駅近くのコルホーズに行つて馬鈴薯の袋詰めをすることになった。畑に出て見ると山のようにうず高く収穫した馬鈴薯やニンジンやキャベツを積んで、茎や葉で蔽つてあつた。もう十月も下旬で霜が降りてその葉が真黒くなつていた。ソ連の将校が何やら交渉に来て、その山からニンジンを抜き取り、軍服で土を落として生のままかじつていた。

一日の作業を終えトラックに袋入りの野菜を山のように積んで帰る途中、警備兵が一袋おろせと命じた。せつかく苦勞して積み込んだものを員数が足りなくなるのを心配していたが、そこはうまくできたもので、なれ合いと言うのだから、後で分かつたが、彼等はこの袋入りの野菜と一夜の妻とを交換してきたのである。土地娘であろうか、私達が見ているも平気だ。目の前でキスをしたり、天幕で蔽つて警備兵と運転手と駅員が交代で可愛がつていた。ここでも革命に敗れた哀れな民族の意識の低さと、動物と何ら変わりない彼等の行為を侮蔑の眼差しで眺めやつたのであつた。

いよいよ移動命令が出て、あわよくば日本へ帰れる(ダモイ)かと思つたが、大隊の半分位、自分も含むが、ウオロソフの地で、今度は一変して農作業だった。二年も過ぎると気候にも慣れて、言葉も日常語が話せるようになり、ロシア人との会話も楽しく一日が過ぎジャガイモしやすくなつて来た。

畑仕事と言っても主に馬鈴薯(カルトシカ)作り、見渡す限り山一つない大農園地である。一区切りの畑が二十四町歩(一町歩は十反)で区割りしてあり、碁盤の目のように地平線上にある。カルトシカ作りも全然手作業はない。広過ぎてできない。耕作から種芋の植えつけ、収穫も総て軽飛行機で仕事をする。軽飛行機の操縦も教えてもらい、面白い毎日の仕事だった。これもちよつとの暇もなかったが航空隊で習つたお陰。

畑の周囲には深い側溝があり、畑の水やり用ポンプにてきれいな水が流れている。溝には八ツ目鰻、大鰻がたくさんいる。ロシア人は長い大きなものは絶対に食べない。日本人が喜んで食べると不思議な顔して見ている。

農作業をしながら、木綿針を焼いて曲げて糸をつけて餌なしでも釣れる。チラチラするから炭坑作業より遥かに仕事は楽で楽しい。私はまだ飲んだことはないが、農場主が一生懸命仕事をするとロシアのウオッカを持つて来てくれる。酒の好きな同士は飛行機の燃料を盗んで飲む者もいたが、目をやられ、鳥目になる。ひどいのは失明になった者もいた。そんな時八ツ目鰻は目によいと言い食べれていた。当時ほ味付するものがないが、岩塩(氷砂糖のようなもの)を溶かして鰻に塩分を含めて食べた、うまかつた。捕虜になつてこんなうまいものは食べたことがない。また馬鈴薯も作つているので、飯盒で茹でて食べる。寒い所でできた馬鈴薯は本当にうまい。収容所で食べる食事よりうんとうまい。

腹いっぱい食べる、農場主も何も言わないで笑つている。故郷へ帰ることも一時は忘れることすらあつた。

六月の十四日には本部から私達に急に命令指名があり、十日間の予定でコルホーズへの出張であつた。仲班長以下九人。私は通訳兼で同行することになった(まだロシア語はよくしゃべれないけれど、命令だから)。十人分の食糧持参でトラックに乗つて、荷台の上で揺られながら山越え谷越え、約二十キロメートル地点の丘か盆地のような所に着いて下車した。まず装具はリンゴの木の下に枯れかかつた草を厚く敷いて置いて作業に出た。作業は、馬三頭を草刈機の前で引かせる。後ろに鎌がつけてあり、真ん中の椅子に使用者が腰かけて運転する。また草寄せも馬三頭に前からホークを引かせて運転して寄せる。それを私達が大きく寄せて積むのである。二日、三日で済んだら、次はコルホーズの綿畑の草取り。ソ連のマダム達が手伝う。わからぬ言葉でしゃべりながら草を取つていた。私達は十人で十日の予定だったので、一人ずつ交代で飯盒炊きさん。木にある青リンゴは食べ頃で、全員腹いっぱい食べた。夜は干し草の上にごろ寝で、上は青天井、星が見える。時には警戒兵が私を呼んで、民家に寄つて牛乳をもらつてこさせ、皆に分配して飲んだが、とてもおいしかつた。ソ連の警戒兵は黒人二人、白人一人の三人だつた。この付近は綿畑も牧草も広々と続いて、その合間にリンゴ園がある。

ある日、いつものように綿畑の草取りをしていたら、馬に乗つた二、三人がコルホーズを見回りに来た。そうしたらマダム達がパツと話をやめて草を取り始めた。私達も真似して取りかかつた。月日のたつのは早いもので、十日の予定がもう二週間になつたが、まだ収容所から連絡もない。そのうち朝になつて出発すると言つて来たので仲班長に伝え、警戒兵のザーシカの指揮で帰りは歩いて行くことになつた。山越え谷越え川も渡り、足は全員ひざまずぶぬれで歩き通し全員疲れた。やつと収容所に着いたときはちよつと太陽が落ちたばかり。二十八日、私は体の調子が悪くなつてラーゲル内の医務室に入室した。

コルホーズ(農場)作業

夜明けとともに収容所を出発すると、途中にブタの飼育小屋があつて、十頭ばかり飼つていた。これはちよつと余談になりますが、このブタの餌に畑からキャベツを取つて来て、下葉を除いて、葉っぱの上等部分だけをブタに刻んで与え、下葉は全部捨てるのです。毎朝そうして捨ててある。我々はその捨てられたキャベツの下葉を皆と争いながらむさぼり取り、農場に着いてから焚き火をしてその葉っぱを焼いて食べるのです。ブタの餌にもしないキャベツの下葉を、人間が争つて食べる。焼くと甘味が出てうまかつた。まさに人間の最低生活、落ちぶれたものです。

コルホーズに行つて馬鈴薯の種芋を畑に植えるとき、確か六月ころでしたか、シベリアでは年に一回しか収穫ができません。あらかじめ苗場に線を引き、約四十センチ間隔で種芋を植えて歩く。ここまでは普通の作業であるが、何と明るる日になると、昨日植え付けたピンポン玉弱ぐらいの種芋をほじくつて飯盒に入れて煮て食べるのです。腹が減つては「背に腹はかえられぬ」とえ話のごとく、悪いこととは知りながら、皆平気でやつた。身体の栄養のバランス上、肉体がそう求めたのであろう。

滋賀県 吉田貞次

メトフェ乳牛の牧場は乳牛を三百頭位飼つていました。国営ですから労働者のはのんびりしたものです。その作業は、乳牛の乾草飼料を馬二頭引きの馬車で五百キロを運搬するのです。零下五〇度のところで馬二頭を走らせ、約三〇キロメートルのところまで乾草を半トン積んで帰るのです。行きは空車です。乾草積み用のフォークは先が細く突かれたら痛いですが、二頭の馬の尻をフォークで突いて走らせるのです。馬は突かれて血が出ていましたが、三〇キロメートルを乾草半トン積んで帰るのには余程走らないと帰れませんでした。馬も可愛想ですが、

日本人抑留者には災難です。厩舎の手前まで帰ると馬の尻から血が流れており乾草でこすつて解らぬようにしますが、厩舎管理人から叱られました。収容所へ連絡がありました。

農場作業は馬鈴薯の種芋を植えるのが仕事でした。日本人は腹が減つて困つておりますので、植えた種芋を掘り起こして持ち帰り飯盒で炊いて食べていました。その時は解りませんでした。しばらくすると芽が出て葉が出て葉が付きますが、日本人が掘り起こしたところは芽が出ませんので管理人は「ヤポンスキー、ヒーター(日本人はずるい)」と怒りました。日本人は「ヤポンスキー、日本人は知らない」と答えると、また管理人は「ヤポンスキー、ソウダーツ、ヨッパイマーチ(日本の兵隊は悪い)」と何度も怒りました。管理人は、種芋が収穫時には沢山獲れるのに今食べたら大きい損だと怒っている意味は解つていますが、今日本人は腹が減つて困っているから食べたのです。日本人は食べられる物は何でも口に入れました。胡瓜の葉でも口の中では困つても食べました。今考えるところかのようなことです。ロシアの日本人抑留者でも、場所によってはよい待遇の部隊もあつたそうです。全国強制抑留者協会では話を聞くと、私らは最低の低を歩んでいたと感じました。

作業で小麦刈り作業に出た。麦刈りが遅れて雪が麦の上を覆い、雪と一緒に小麦刈りをしました。麦刈り作業も、例えば今日五アールの割り当てを一生懸命に刈り、昼過ぎに終わつて帰ります。翌日は八アールが増えておりますが、日本人は正直に刈ります。午後三時頃刈り終わり、帰ります。また翌日は十アール程度の割り当てをする。日本人はロシア人に、麦刈り面積が毎日増えるのが納得できぬと交渉する。ロシア人は「日本人は早く帰るから面積を毎日増やす。毎日ゆつくり一日かかつて刈ればよいのに早く帰るから面積が増えます」と。翌日から「のんびり」夕方までかかり刈ることにしました。

ソフホーズ作業も種々様々な作業をしましたが、ちょうど一年、アレキサンドルフカにいました。

ソフホーズ(集団農場)

ソ連特有の農業協同組合方式による営農システムであり、耕地や農機具など大部分を共同化したそれは「能力に応じて働き、必要に応じて与えられる」という共産主義社会の根幹であるという。そんな思想には興味はなかったが、大地を相手に思い切り手足を伸ばす労働はこれまで味わったことのない解放感に浸ることができた。カルトシカ(じやがいも)は寒冷地のものが美味と聞いていたが、うわさにたがわず実にうまい。北海道産のイモが連想された。

ロシアの大地は広い。山も丘も見えない。見渡す限り農地の展開である。我々の仕事は掘り出されたイモを一輪車で倉庫に運び入れること。慣れない一輪車に悪戦苦闘、何度ひっくり返したとか。その度にロシアの女性群の笑いの種になる。「ヤポンスキーがまたやった」などと手を叩いての哄笑であるが、それは決して悪意をこめたものではなかった。とにかくロシアの女は朗らかでよく働く。そしてよく食う連中は肥満である。

ソフホーズ

退院すると、ちょうど新しく病弱者のみで小隊を編成することになり、私も編入された。

そしてソフホーズ(集団農場)へ派遣されることになった。

見渡す限りの大草原の中に、小さな集落があった。住民は、シチエン、カザック、ロシア人等がいて、牛を飼っているソフホーズである。

北国の春は短かい。青草がのび、おしろい花が咲いて、草原はもう夏であった。

大阪府 岡崎博好

ここでは監視兵はおらず、自由に振舞うことが出来た。この広い草原が作業場では、監視も出来ないし、トラックか飛行機でもなければ脱走は不可能であろう。

我々の仕事は、刈取って乾いた草を集めて野積みにする作業である。この牛は広い所に放牧されているので、図体は大きいが極めておとなしい。手頃なやつ角をつかんで捕え、牛車につけ、それに乗って走らせ、七キロから十キロも離れた場所で草刈や集草をする。草を運ぶのは、切倒した樹木を、そのまま本の方を牛の首かせにつけて、樹の上に乾草を積んで牛を走らせる。まことに素材で原始的な方法であった。住民はこの運搬に使う樹木をマシーナ(英語のマシンに相当する)と呼んでいたが、思わず微笑をさそう呼名であった。

東京都 金井秀雄

「ソフホーズにて」

やがて三度目の冬を越し、昭和二十三年の短い春が終ろうとするころ、矢野軍医殿に呼ばれ、「金井君はこの収容所については駄目だから、今日、身体の弱い者五十人をソフホーズに出すよう命令が来たので名前を入れたい」と告げられた。軍医殿の温情に感謝した。私の着いたソフホーズは、見渡す限りはるか地平線のかなたまで馬鈴薯畑であった。作業の日本兵は五十人ずつ、四カ所の収容所より集まり、二百人だった。翌日畑に出ると我々は、まだ育ちきれぬ馬鈴薯を掘り出し、土をちよつと拭いただけで生のままかじった。蒙古系の背の低いズングリ型のカンポイ(歩哨)は、食べては駄目だと日本兵を蹴る。日本兵は広い範囲に散っているので歩哨の方が疲れて諦めた。その後もズングリ歩哨が近くにいる時は蹴られるので注意した。生でかじったのは最初の時だけで、仕事に馴れると、焼いたり蒸したり、餅のように搗いたり工夫し、おいしい食べ方を研究した。一カ月も経ったころ、若いソ連の所長より全員集合の命があった。初めてのことで何事かと集合した。所長は、医務室を担当しているI軍曹で、治療の際に患者

に煙草を要求する、医務室を金井に担当させるよう投書があったので、この場で賛否を問うと言う。私はソ連で表面に立つ仕事は不向きと思っていたので、内心困ったと思っていた。結局I君を支持したのは同年兵の方一人で、他の方は、私のことを知らない方が多いのに全員、私に賛成した。私はソ連の所長に、金井は衛生兵で医者ではないこと、この收容所に衛生下士官が多くいるから、相談制か輪番制にしてほしいと申し入れた。所長は、日本では責任者が二人いるのか、ロシアでは常に一人だ、その方が良い仕事ができる。医者は週に一回、ロシア人の医者を派遣すると言う。私はこの若い所長に好意を待ち信頼して、医務室担当となった。

山の作業隊と異なり、作業も軽く馬鈴薯のお陰で体力も増し、病人は皆無となった。だが約束通り、ロシア人ドクトルは毎週土曜になると訪れ、お互いに不自由な日本語とロシア語で語り合った。ドクトルがある日、ロシア人收容所に泊りに来いと言う。自分で所長の許可をもらってきてくれた。車にてロシア人收容所に着くと、先ず彼の個室に案内し、私の汚れた外套を脱がし自分の外套を着せ、自分の帽子を幼児に被せるよう形を整えて私の頭にのせてくれた。何と優しいロシア人もいるのだろう。彼のなすままに任せた。次に炊事場に案内し、腹いっぱい食べるように勧めてくれる。私は思いがけぬロシア人の優しさに胸がいっぱいになり、せつかくのご馳走がなかなか咽を通らない。食後、日本流に最敬礼して謝意を表した。次に女性の收容所に案内してくれた。若い女性が多く、煙草を吸いながら瘦せた日本兵を見物している。ほとんどがドイツ軍に協力した罪とのことだった。ドクトルもドイツ軍の捕虜となった一人で、日本人捕虜に深い同情を持っていた。三回遊びに行ったが、その都度、身内の者を遇するように温かく迎えてくれた。満州に侵入してきたあのソ連兵と同国人とは思えなかった。ある夜のこと、日本兵が怖がついていたズングリ歩哨が来て、部落に患者がいるから一緒に来いと言う。薬箱を持ち、畑道をついて行く。私は夜盲症で夜道は足元が

悪く、時々つまずいた。歩哨は不審がり、どうしたと聞くので、夜はよく目が見えない病気だと答えると、誰もいない暗い畑の真ん中で銃を私に持たせ、かがんで背中に乗れと言う。銃と薬箱を持った私を背負い、八百メートルも畑道を歩いて部落に着いた。私は「スパシーボ」と頭を下げ銃を返すと、彼は黙って人の良い笑顔を見せた。彼の額は汗で濡れていた。もし私が逆の立場であつたら、捕虜に銃を渡し背負うことはできなかったであろう。患者は十歳の子供で発熱していた。両親は、日本の薬だと大変喜んでいて。帰り道、彼はまた背負うと言う。私は一人でゆっくり帰ると言うと、頷いて先に帰った。日本兵が怖がつた、あの歩哨にこんな優しい面がある。あの馬鈴薯は国のものとの思い、職務に忠実なのだと思つた。その夜、いつもは凍るように冷たく感じる満天の星が、特に美しく感じられた。日本からははるか遠い北の空で光っていた。北極星が頭上真上に輝いている。流れ流れて今この北辺に生きている。いつの日帰れるのか問うても答えぬ星に語りながら、一人夜の細道を歩いた。コルホーズでの馬鈴薯の収穫が終つた。この所長は我々を人間として扱い、捕虜に理解があつた。日本側の指導者の志村君も良識あり、失意の同僚をよく励まし、食糧事情も良く、半年ほどの期間であつたがシベリアの抑留者としては恵まれた月日であつた。この次は冬が近い、どこの作業大隊に編入されるのか心配であつた。

千葉県 菅谷一雄

苦難の道の第一歩の始まりである。收容所に着くまで農場の仕事。麦刈り、馬鈴薯掘り、生の麦をかじり馬鈴薯も生で。農場から農場へと進んで着いた所がライチハ第十九收容所。板塀と有刺鉄線と四隅に望楼ある本格の收容所である。孫呉を出発し二十日余り、着の身着のまま厄介もの風には苦勞しました。宿舎は半地下式二段板張りである。ここは炭坑町のように露天掘り、もはやどうしようもできません。十月下旬のシベリア、寒さも加わり始めます。早速ラボータ、仕事、仕事。

飢えと寒さ、重労働、線路際土砂の取り除き、貨車へ石炭を抱えて積込。何もしなくても動いていないと凍傷になってしまうので身を守るのも一苦労です。ソ連は何でもノルマ(パーセント)がつき物で、最初のころは仕事の内容も分からないし、やる気もなし。作業現場に行っても東京ダモイはいつ、次に食物の話。おはぎとぼた餅の違いの話ばかり。若者が一日も満腹感がなかった。故国へ帰るまで死んでなるかと自分を励まし、生き抜くことだ。

二十年の暮れから二十一年の春まで多くの抑留者を酷寒の凍土の荒野に不帰の客とさせたシベリアでの寒さと飢えと重労働の過酷な状況の中で強く生き抜いた者の責務として後世に伝えるものです。

⑪ 機械工場の作業

神奈川県 新谷俊男

工場関係者はみな技術者ぞろい、すぐノルマを上げ給料日にはみな賃金をもらい、帰りに引率のソ連兵の許可をもらいバザールでパン、たばこ、新聞紙等々を買ってくる。(新聞紙はたばこを巻いて吸うのに使う。)これを見た仲間は大変うらやましがった。他の作業ではノルマを上げた者はいなかった。

和歌山県 出口為治郎

二年目の夏ごろから、中隊長の指示により、私に職を代わってくれという。何だろう、ロスキーのコマンジールから鍛冶屋の仕事に一人欲しいと言ってきたのです。これもまた面白いと返事をした。鍛冶屋さんには経験はないが、よしやってみよう、ロスキーじいさんと二人で金槌の頭をつくる仕事だった。一日の目標四十五個で百%。「なかなか、三十個だよ」とじいは言っていた。こんな小さな仕事でもノルマ達成がいかに厳しいかがわかる。

鍛冶屋の小屋は工場の中心部で、道具はハサミ二、三丁とハンマー二丁だけ、火を起こすのは台湾ウチワという、日本では珍しく、見た方、知らない方も多いだろう。お粗末な仕事場でじいさんは大変変人で、機嫌をとるのが大事。金槌でつくるのは四十個、翌日に隠しておいて員数を増す。「ソルダート出口、なかなか頭ハラショー」と褒めてもらった。

千葉県 石井利

翌二十一年の春四月、また健康になった人たちをもって大隊を編成し、再びシベリアに連れて行かれたのである。着いたところがウオロシロフ市という所で、自動車部品工場であった。作業は資材運びや雑役、鋳物工場、旋盤機扱いなどい

ろいろ分担させられた。私は丈夫だったので重労働の鉄割り作業をやった。これは鉄をハンマーで三十センチ角の大きさに割るもので、ノルマは一日四トンであった。ノルマが完遂されなければ、帰さない、休ませない、食べさせないの毎日であり、特別重労働であった。それで特別食の給与でなければ仕事ができない旨申し出て、特別給与を受け、つらい毎日であった。私たちの中でだれかがやらなければと頑張ったのである。

大阪府 杉山森一郎

私たちは元のままの軍隊編成で強制労働に従事させられたわけで、その作業場は市中の大きな工場敷地でしたが、爆撃を受けたのか荒廃した工場跡で、この工場は「コンバイン」の一環工場で、私たちはその鋳物工場にて働くことになりました。熔解の「キューポラ」は、ソ連の作業員の技術も、冶金工学を修得した私から見れば余り感心できませんでした。

この収容所で三年ほど働きましたが、二年目ころには「ノルマ」の向上で、ある程度以上（三百五十ルーブル？）の収益を上げた者には、「ノルマ」以上の分だけ本人にその賃金が支給されるようになりました。そのため、私は街の劇場へオペレッタ「石の花」を観に行つたことがあります。

千葉県 内田健次

どこから入ったか知らないが、とにかく着いたところはウズベク共和国のタシケントというところであった。着いて二、三日したら雑役に出された。そのころソ連の作業係が、酸素を扱える者がいるかというので、私はできると答えた。そうすると作業係は「明日からその仕事をやれ」と言うので、「どこへ行くのか」と聞いたが教えてくれなかった。

翌朝、酸素屋である九州の山村という男と二人で現場へ行つた。行つてみたが道具がない。あつても誠にお粗末な物ばかりであった。ノルマがあるのに能率が上

がらない。カーバイドを使つても道具が悪いのでみんな逃げてしまう。日本では水を落とすと発生したガスがタンクの上部に溜まっているが、ソ連ではカーバイドが水につかりっぱなしだからガスが出つ放しだった。無駄なことだと思った。

私たちは鉄材の切断が専門だった。八十メートルがノルマだった。そんな作業が続いていたある日、今日は何メートル切ったか計つてみようということになって、計つてみると百二十メートル切つていた。監督は「オーチン・ハラショーだ」と言う。それでは何パーセントくれるかと言うと、一一〇パーセントだと言う。正確に計算すれば一五〇パーセントになるはずだ。このときほどばからしいと思つたことはない。

私たちの作業場には監督が二人いた。一人は仕上げの監督であり、もう一人は生産の監督で、生産の監督はとても意地が悪かった。仕上げの監督はひどく怒りっぽい男だった。怒つたときの様子が亀のようだったので、その監督のことを日本人は「亀」「亀」と呼んだ。亀のことをロシア語でチエルバーハと言うのであるが、本人は日本語の意味がわからないので一緒になって「亀」「亀」と言つていた。そのうちにだれかがその意味を教えたらしく、カンカンになって怒り出した。そして、私のノルマは三〇パーセントにされてしまった。宿舎に帰り労働係が、ノルマが低いから営倉だと言う。経緯を説明すると、初めてのことだから今日は許すが今度は営倉だと言われた。

広島県 難波繁男

およそ人間として限界をはるかに超えた、これまた生き地獄のような毎日が二年半ほど続いたある日、技術を持つている者は申し出よ、という通達があり、早速申告したところ、十日くらいして、四〇名がトラックに乗せられ、クラスノヤルスク駅に着き、また、貨車に乗り換え、着いた所は、イルクーツクという都市で、更にトラックで着いたのが、自動車修理工場。

既に抑留者が働いており、驚いたことに、工作機械は全部と言つていいほど、

日本製のもの。私の配置された仕事は、まだ倉庫に置かれている、満州から略奪して来た機械を工場に据え付ける作業で、三人で行うもの。先遣の人たちの中に新京の市民部隊の人がいました。

長野県 草野克己

作業は列車の製造工場で、無蓋貨車の製造作業。鉄工場で鉄板の切断、工作塗装。また木工場で製材、出来た物を貨車に組み立てるという作業。屋外作業よりましと言っても、慣れぬ仕事に寒さのため手は凍え、作業は捗らない。文句を言われてもどう仕様もない。おまけに工場まで二、三十分の道程ときている。また、作業は昼夜三交代作業。時には夜中に石炭の荷降ろしなどの使役に駆り出される始末。食糧不足と労働に耐えきれず、栄養失調により無念の死を遂げる者が四百人近く出る。残念ながらどうすることもできない。

岩手県 佐藤竹男

工場では私たち四人はチームを組んで仕事をした。工場での工作機械は、ソ連が満州から火事場泥棒的に運び込んだ機械で、ほとんど日本製であったので、私の場合操作するのに一つも困らなかつた。ネジ切りなど細かいネジ、太いネジ、自由に切つて見せたものだから、「ハラシヨハラシヨ(よろしいよろしき)」で昼食時など黒パンやトマトの漬物、タバコなどもらうのであつた。そして帰りはいつも一〇〇%以上のノルマ達成率をもらつて帰つたものであつた。

とくに夏場から秋口のスチーム暖房用のラジエーターの製作や組立取付(出張作業)では、ソ連の民間人よりはるかに能率の上がる仕事をして「ハラシヨラポーター(仕事がよくできる)」で通つていた。また、水道や送風等のパイプ製作では、(カーブや接合部)現図で展開図を引き、切断後の溶接などは我がグループの独壇場であつた。トラクター工場への往復や工場での作業ではロシア人たちから「オーチンハラシヨ(たいへんよろしい)」などとほめられ、毎日ノルマ達成率は一

〇〇%以上であつた。黒パンも二人も三人ものロシア人からもらい、収容所での夕食はおやつ的な状態で、私はタバコは吸わないので、マホルカなどは戦友たちに分けてやった。またルーブルも百ルーブル以上ももらった。(昭和二十三年秋ダモイのとき、日本では使えないと言われ取り上げられた。)

和歌山県 出口為治郎

三日目から早くも仕事(ラポート)で、「働かざる者は食うべからず」、ノルマパーセントの歩合によつて食券が配布されるのだから怠けることができない。私たちの収容所は第二収容所で、ここでの第一中隊として鑄物工場の作業に従事することになり、毎日片道十キロメートル、朝六時起床、七時出発であつた。

朝食は世話なしだ、昨晚にあの黒パンを食べ終えているからだ。そして昼めしはスープだけで、大根、玉ねぎ、人参、川魚等、塩と少しの砂糖味のスープ、飯盒の蓋に八分目。夕食まで辛抱しなげりやならない。いつも腹へこだ。

私の工場での作業は主に溶解作業で、経験があつたので私には幸いであつた。作業員七、八百人ほどで働いた。溶解・木型・鑄型・ヌキ・荒仕上・旋盤といった各部門に分かれて作業に従事し、ここでは小さい金槌などの小物の品の製作だつた。

あるときはソ連の爺さんと二人で、小さなタン板の屋根の下でかじ屋仕事を一生懸命やつてノルマを一〇〇%達成。一カ月もする間に「ジャポニーズソルダート・ハラシヨラポート(お前はよく働く、よろしい)」と、偏屈爺さんであるが人気のある方に褒められたのだから、爺さんには好かれたらしい。ここでは個人的な情の触れ合いを見たように思う。

岐阜県 坂井文介

「スト」を執行して指揮官を首になる

自動車工場の仕事は、満州から掠奪して来る日本の自動車の修理で多忙で

ある。ここはソ連製のものもあるが、今ではほとんど満州よりの戦利品でいっぱい。真面目に日本の自動車を修理して敵国に渡す、こんな馬鹿げたことは面白くない。兵たちには適当に働けと言った。

この工場にはソ連人もかなりいたが、一人前の技術者はいなかった。

あるとき、この工場長が、日曜日にもかかわらず、ノルマができていないから働けと言ってきた。一週間働き続けてきている兵は疲れている。兵を働かせることはできないとカンボーイ、チンコーフに相談した。日本人びいきのこのソ連兵は、そうだ、お前の言う通りだ、いいから兵を出さないと言えと話ができた。

ソ連の工場長はソ連兵に向かって日本兵を仕事に出せと言っている。ソ連兵は、おれは知らない、日本人のコマングール(指揮官)が命令することだと言っている。これは面白いなあと思っていたら、工場長は遂にあきらめて、この馬鹿野郎、馬鹿野郎と怒りを連発しながら引き揚げていった。このやりとりを聞いていた私の部下達は喜んで、一日ゆつくりと休みをとった。そしてこのストはひとまず成功を収めた。

ところが二、三日したら一台のジープに乗ったソ連将校が、我々の宿舎に飛び込んできた。コマングール、コマングールと叫んでいるので、私が出て行った。お前はコマングールか。その通りと答えた。ダワイダワイ荷物を持ってこいという。こうなることは予期していたが、こんなに早く効き目があるとは思わなかった。自分の交代者が乗ってきている。この者とコマングールは交代だという。おまけにウクライナ出身のチンコーフはどうも交代させられるらしい。さあこれに乗れという。あわただしい交代劇で、あつという間の出来事で、四十人の兵隊にろくに言葉もかけずにジープに乗り込んだ。自分とソ連兵、共タストの責任をとられ、この自動車工場の指揮官を首になったのである。私とチンコーフは仕事をサボったという犯罪人となってどこかに連れ去られて行くのである。チンコーフに「相済みぬ(イズビニーチエ)」とこっそりささやいたら、「いや、かまわない(ニエストーイ)」と言って私を慰めてくれた。心の中でこのチョビヒゲのウクライナ人に感謝を捧げ

た。
約四年間のシベリアの捕虜生活において、私に好意を持ってくれたたった一人のソ連兵であった。

京都府 中西 勲

昭和二十年の冬から二十二年の春まで、石炭の町カオルチャンカで炭坑の仕事をした。最初、現場の監督が我々に向かって「電気溶接の出来る者はいないか」という呼びかけに私は早速手を上げた。入隊する前は溶接の仕事をしたこともあり、軍隊に入つてからも工兵隊だから溶接の仕事をしたこともあった。

作業は、地の底より石炭を積んだトロツコを引き上げる太いワイヤ・ロープを支える台作りである。相当な重量を下から引き上げるため、よく破損する。それを作ったり取り替えたりが忙しいものであった。朝から空き腹であったが経験のある作業なので、炭塵にまみれて坑内の石炭掘りのことを思えば幸いであった。原住民と一緒に仕事をするのでロシア語も次第に判り、彼らにもノルマがあり、物資も乏しく生活が困難のようだった。収容所へ内緒で持ち帰った石炭を焚くのだが、冬になると夜中は零下三十度〜四十度になる粗末な掘建小屋では、夜中に目が覚めたら寝られない時もあった。

岐阜県 水野隆男

機関車工場内の収容所

私が収容されたラーゲリは、機関車工場のすぐ近く(あるいは工場内の敷地か)にあり、収容人員は三百人前後で比較的设备は良かった。

主な仕事は鉄道に関する事が多く、貨物の積み下ろし、工場内の雑役、それに旋盤工場。その他市内の道路工事、建設工事にも出ていた。私は工場内にある旋盤工場(溶接工も二、三人はいた)への引率が仕事で、このラーゲリにいた約二カ月(昭和二十一年六月〜八月)はほとんど工場通いで他の作業の引率をし

た記憶がない。

日本の技術者

ソ連側の指示で調査して、旋盤・溶接の経験のある技術者二十人程であったろうか……を引率して工場側に引き渡して、後は工場内を見て回るだけである。日本人の中には未熟者もいたはずであるが中には素晴らしい熟練者もいて、ソ連労働者に技術のコツを教えて回っていた者もいた。仕事は旋盤が主であったが、溶接の技術の素晴らしい者もいた。聞いてみると工兵隊の兵隊さんだった。彼等は工場へ入ればもう捕虜ではなかった。ソ連労働者とは対等の立場、いや、指揮者として尊敬され、上司からも大変重宝がられていた。「日本人の技術はオーチンハラシヨ！（大変素晴らしい）」工場の手チャーターニク（工場長）は私の所へ来て盛んに感心する。おかげで私はこの工場では大変優遇され、一目おかれていた。何もやる事がないのでちよつと仕事の手伝いなどしていると「カマンジエール（指揮者）はそんな事をしなくてもよい。この椅子に掛けておれば良い」とみんなが言うてくれる。技術の優秀な兵隊さんのおかげであった。

機械工の仕事

先の工程の中で、パワーシヨベルが粘土をトロツコに入れるときにパワーシヨベルの爪がトロツコをたたくことがあり、そのために曲がったりねじれた車体のバラシと修理。

車軸の修正。ベアリングの交換。

スコップその他道具の作成。レールの切断等。

スコップは厚み五ミリくらいの三尺×四尺ぐらいの鉄板から切り出すが、タガネとハンマーを使つての作業である。新米の私はいつも大ハンマーを振るう役で、一個のシヤベルを切り出すのに四十発はたたかなければならず、一日に四十枚作るには、一日千六百回たたかなければならなかった。作るときは続いて作るの

で十日ぐらいは続いただろうか。

ソ連はさすがに鉄は多いようで、交換した古いレールは道端に放つてあり、使いたい者は誰でも持つて行つてもよいようであった。

トロツコの修理作業は外での作業であったが、あまり寒くない日を選んでくれて、寒い日は室内作業をさせてくれた。

機械工の仕事は少し頭は使うが、肉体的には他の労働に比べれば楽で、しかもノルマは常に一〇〇〜一二〇%であった。この国では技術職は得なようにできていた。

石油貯蔵庫の勤務

茨城県 和知義美

町には発電所、製材所、糧秣貯蔵庫などがあった。石油貯蔵庫の手伝いは一人で行つた。重油のタンク車が入ると二人作業。これはポンプをもむのには二人が必要だからである。重油は粘度が高い。三〜四トンのタンク車が入つたら地獄だ。

ポンプ作業は全く単調で、終わりが見えない。タンクの下でたき火をして少しでも楽になるかなどしてみても重い。腕も腰も痛くて巨大なタンクが恨めしい。

ガソリンや石油をドラム缶から出すのにホースを口で吸つてサイフォンにする。毎回うまくできればいいが、あつという間に口の中へ！ 気持ちの悪いこと。簡単な道具がない。所長などは平気でやつている。

運転手と伝票を間にケンケンガクガクとやつている。言葉はわからないが激しい口論だ。厳しい配給制なのだろう。アメリカのトラックが多かった。

鳥取県 原中宜夫

夏頃に作業場が変わつた。今度の作業場は「オテース」と言いコルホーズ、ソフホーズ向けの各種資材、器材、糧秣等を扱う基地となつていて、構内の

引き込み線に到着する物資の貨車卸しと、その運搬整理作業が仕事であった。

この構内には製材所が隣接し、既に第二民主主義突撃隊の作業となつて、ここでも高い成績を挙げていた。

到着物資は、木材、鉄筋、鋼材、釘、セメント等の建設資材。塩、砂糖、燕麦粉（パン粉）、雑穀等の糧秣類。

時には旋盤等機械類もあり、さまざまなもの、隣接の製材工場用の木材が大半を占めていた。石炭輸送用の六〇トンの貨車からの木材卸しは、この作業場一番の難作業で重労働であったが、我々は独自の方法によって安全に迅速に、高い作業成績を獲得するようになっていった。

時折、ロシア人労働者と別々の車で同時に作業することがあり、我々を真似てかけ声を掛けているが、リーダーの要領が悪いのか、なかなかうまくいかず、我々がとづくに終わってもまだ済まず、機関車が貨物を引き取りに来てても終わらないこともあった。こんなときは必ず応援させられた。もちろん、その分は我々の作業量に加えられるとはいはなかった。

また、ロシア人労働者が行っていたバラ積みセメントの貨車卸しは、二人一組で箱もつこを持って運び卸すものだったが、この仕事は狭い十トン貨車の中で、セメントの埃の中で働かなければならぬので敬遠されたく、我々が行つてからは我々に回つてきた。我々もそのような悪い環境の中で仕事をしたくはないので、早くて楽な方法はないかといろいろ考え、土木作業用の木製一輪車を使うことを考へて試したところなかなか調子よくいくので案外早く片づいてしまった。彼らの半分以下の時間で終わつていたという。

北海道 宮崎維新

我々がここに到着した日を最後にアムール河は結氷し、交通機関は春の雪解けまでない。最初の作業は収容所のペーチカに使用する薪の伐採で、見たこともない大きな鋸を使って一定の数量をノルマにされ、夕食の量に影響した。また別

の作業は、アムール河で結氷した大きな丸太を氷を割つて引き揚げ製材工場に運ぶ。氷上の寒さは筆舌に尽くし得ないものであった。初めての冬は過酷の一語に尽きた。凍傷患者が続出したため、マイナス三〇度以下のときは外作業中止となった。しかし、気温が幾らか上昇すると製材工場へ丸太の搬入。船舶の錆落とし、これはカンカン虫と呼ばれていた。

河の水が解け船が入港すると荷役作業が始まる。昼夜の二交代作業となる。雑穀、小麦粉、砂糖、乾燥野菜、タバコ類で、最も多いのはパンの原料の麦粉である。腹の虫が動き出すと袋に穴をあけて飯盒に入れ、河の水でかたく練つてそのまま食べる。二、三日続けると下痢を起こしてしまう。樺太から来た石炭船に船倉から大きなモッコに入れて岩壁に引き揚げる。機械を操作するのはロシア人である。終わるとどの顔も黒く煤けている。

新潟県 佐藤正平

港湾工事業

新しい収容所に入ったのは十二月近くだと思ひますが、ここに収容されてから定作業が決まり、それはナホトカ港の整備作業で、山を発破で切り崩し、その岩石をトロッコで運び、港を埋立て拡張する工事でありました。

仕掛けの穴掘りと火薬発破による粉塵は物すごく、また岩石の運搬距離が次第に長くなり勾配も急坂となるので、かなりきつく危険な作業となります。特にレールの上を走るトロッコは猛スピードとなるので二人でカシの棒をブレーキにして必死の操作となります。

約十カ月ほど港湾工事に従事しましたが、帰国間近に一人の犠牲者が出てしまいました。発破をかける穴掘り作業中に、穴の出入の際に足を踏み外し転落死亡したとのこと。若くまだ童顔を残した少年で、痛ましい姿に全員涙を流し御冥福を祈りました。まさに帰国直前、戦争抑留の犠牲者であり、御家族の方のことを思うと言葉がなく、悲しい出来事でした。

三重県 太田 勇

私たちの伐採した赤松やカラマツはほとんど炭坑の坑道造りに使われたよう
です。伐採して二メートル弱に輪切りして谷底へ転ばし、這い積みした坑木は、
伐採ができなくなる夏の季節に搬出作業が始まります。搬出はもっぱらソ連兵
の運転するトラックで行われ、われわれ日本人は山で車に積んだり、時には馬そ
りを使って長物(素性のよい材で、板材や校倉建築用材)を林道まで運び出しま
した。

搬出に使われたトラックはすべて米国製で「スチュードベーカー」と呼んでいま
した。多分援ソ物資の一つで、とても頑丈で、粗悪な道路を走ったり、ソ連兵の
荒っぽい運転にも十分耐える車でした。箱型の荷台は取り除かれ、シャシーの上
に直接坑木を横並びに積み上げました。もちろん日本のシャシーには後部末端
に四角の穴があり、坑木の一端を削って縦に打ち込み荷崩れのないように固定
しました。運転するソ連兵にもノルマがあったようで、われわれのしりをたたい
て積載させ、自分もせつせと坑木を担ぎ、積載が終わると一目散に山を下って行
きます。

貨車に積載する労働は入ソ二年目の八月半ばから十月ころまでで、収容所か
ら百人ほど出役したように記憶しています。ノボバプロカ駅近くの仮宿舎に寝
泊まりして毎日駅構内の木材集積所へ通いました。貨車は古ぼけた有蓋車で、
走行中に床が抜けて脱線するのではないかと心配したほどです。そんな車を四、
五十両連結して集積所の引込線へ入ってきます。日によって貨車の入構時間は違
いますが大抵午前は九時過ぎ、午後は四時ころであったと思います。坑木を肩
で担いで積むのですが、二時間ほどで作業を完了しなければなりません。大変
な重労働でした。五人が一組になって最小限二車を担当しました。積み方が悪
いと走行中に荷崩れを起こし、貨車がバランスを失って事故の原因になります。
そのためソ連監視兵は安定した積み込みをしているか否かを絶えずチェックして

いました。貨車積みが終わるとソ連側は全車両を点検して施錠し、発車を待ち
ます。

島根県 星野誠一

アムール河(黒龍江)をサハリン(旧樺太)方面の河口の方から貨物船に食糧品、
即ち塩ヅケ、塩マス、塩ダラ、塩ニン等をビヤ樽のような大きな樽に詰めてコム
ソリスクの港に運んで来た品物を、船倉から甲板に揚げなければならぬ。階
段があつて、なかなか引き揚げるのが難しい。ロープで巻いて甲板に引き揚げ
るより手はない。ロスケの労働者もいて、その労働者たちは、樽の壊れたのから前
記品物をかっぱらつて、まず彼らが先にバザール闇市に持って行き、お金に換え
て帰つて来る。そこで今度は我々に対し、「見張りをしているから、お前らも取れ
取れ」と言う。なかなか取れる品物がないと、船倉からロープで塩魚の入った樽
をクルクル巻いて揚げると、もう少しで上に揚がるかなあというところで、わざ
と下へ落とす。下へドスンと落とすと、ポンと蓋が割れて中身の塩魚が顔を出
す。それを手早く外套の裏に隠したり、ポケットに突っ込んだりして持ち帰るので
ある。最初の頃は成功してよかったのですが、そのうち手の内が見つかり出して、
なかなかそういうこともやれなくなった。面白くない、つらいような作業であつ
た。

滋賀県 川 清一

二十一年一月、こんな作業を続けていたある日、隊長に呼ばれて「旋盤の経
験があつたら修理工場に行かないか」との誘いがあった。苛酷な採炭作業から逃
れられたら幸いとばかりに早速承諾した。工場に行ったら、旋盤工、仕上工、溶
接工、製函工、鍛造工など五人組の組合わせが済んで、経験者が集められてい
た。この修理工場はロシア人が二十人程いたので、私達を含めて二十五人の従業
員となつた。主として掘削に使う「シヨベルカー」の修理を専門にしていた。設備は

一応揃っていたが新しいものはなく、いずれも古い物が目立った。

作業は炭層の掘削現場にある。大型のシヨベルカーの故障が出ると、その部位の工程作業が決定され、工場長の命令で作業が始まる。作業内容は、メタルの取替・ひび割れの充填・蒸気洩れの修復・心棒の取替などからボルト・ナットなどの補充など、修繕各般にわたった。各工程での作業が完了すると、その取付けは現場でロシア人が担当した。

当初のうちは要領もつかめなかったが、ロシア人はいかにも先輩らしく命令に従うよう仕向けるため、もっぱら見習うしかなかった。六カ月もたつとロシア人ベースで作業が進んではいたが能率が上がらないため、工場長はノルマの遂行を強調し出した。これでは、せつかくラゲリを抜け出してきたわけがなくなるような危機感が漂ってきた。そこで五人組は鳩首協議して、日本人のノルマ達成基準をつくって工場長に提示し、承認を得て実行に移すことになった。実績は着々と上がり、各工程の能率も倍化し、質・量ともに格段の改善を見ることになった。工場長は感謝してくれたし、現場も喜んでくれた。窮すれば通ずる努力の結果が報われ、ノルマ達成が連日続くこととなり、ノルマ超過分のルーブル貨の賃金までくれた。やがて修理工場では技術指導員の認定までくれて、ロシア人の指導にも当たることとなった。

熊本県 村田昭三

我々の仕事は近くの農機具工場でトラクターが牽引する大型農機具部品の生産、職場は鍛工（鍛冶屋）と呼んでいた。冬場の凍りついた鉄材の切断は、滑り、危ないものだった。夏場に三・五メートルの鉄材をボイラーで真っ赤に焼き、二人、三人がかりでJ型に曲げるのは大変な労働であった。汗が乾いたあと塩気で肌が白くなって見える。塩があれば生きられると、岩塩を積んだ無蓋貨車が工場の引き込み線に入る。カーブで待ち伏せ、スコップですくい落とすことも度々あった。危険は承知であった。

⑫ 収容所内作業

滋賀県 村田英信

十月に入り毎日鉄道敷設の道路づくり作業が続く。食糧の給与が少ないため、栄養失調者が続出。自分もその一人となり、重労働がでなくなる。

十一月から翌年三月ころまで収容所内外の軽作業（近くの山中に炊事や暖房用のまき取り使役）に従事する。ある日はアンガラ川いっぱい張りつめた氷割り作業。監視の兵士にこの氷を何にするのかと開くと、ずっと奥地の作業に従事する日本兵の飲料水として送るのだと、ざつと奥地の作業にのみ道具で高さ一メートル、幅一メートル、長さ二メートル積み上げるのが一日のノルマである。川の氷は一メートルくらいの厚さはあるが、バールで割っても大きな氷はとれない。一日かかってもノルマをこなすことができず、泣きたいほどである。翌日になるとトラックで運搬され、また同じ作業を行う。気温は零下二十度前後で、昼の一時間の休みも川の氷の上で震えながら中食をとるありさまで生きた心地がしない。でも奥地で重労働をしている同胞のためと涙を流しながら互いに慰め合い作業に従事する。

あるときは栄養失調で死亡した戦友の埋葬のため墓穴掘りの使役が二回あった。冬期は地面が凍りついているために、深さ一メートル長さ二メートルの穴掘り作業は半日もかかり苦労したものである。

営内作業でこんなこともあった。自分たちの排せつした尿や便がすべて氷になっている。これをツルシで割りむしろに乗せて営外の谷間に捨てる使役であった。雪解けになってその谷間の横を通ったとき、尿や便が解けた悪臭が忘れられない。

和歌山県 長峰泰夫

昭和二十年十月二十三日、十九キロ幕舎周辺整備作業

幕舎は三棟と炊事棟、便所、少し離れて監督の家と兵隊の住居がある。幕舎は寒くて睡眠できないし、付属設備も整っていないので整備作業をすることになる。幕舎の保温は周りに丸太を積み上げ、布地との間に土とおが屑を詰め、屋根の部分に草を根こそぎとって、敷きつめて保温するというものだった。

○外壁の保温作業

別の班は、運ばれた丸太で柱を二本ずつ立てて、間に丸太を横に積み上げていく。幕舎の布と丸太の間に、土とおが屑を混ぜたものを詰めていく。詰める幅は平均五十センチで、下はこれより少し広く、上は狭くする。屋根には根つきのツンドラを敷く。ただし、ストーブの煙突回りは空ける。ここまで終わるのに半月以上かかってしまった。

○垣根づくり作業

幕舎の保温作業を終了して、今度は外回りに垣根をつくることになる。丸太の柱を立て、丸太の横木を渡して固定し、松の枝をさして幕舎と外部と隔離する。出入り口は一か所のみである。普通のラーゲル(収容所)は有刺鉄線の二重の囲いになっている。

○望楼建て作業

兵士の歩哨が夜間警備のために登るもので、垣根の角に建てられる。四本の丸太を建て、上に望楼の床、屋根、腰回り板、はしごをつくって終わる。夜、兵士はシューバー(内に毛のあるオーバー)の膝下と靴の下より横に長いものと二枚着て立哨する。蒙古系の兵士が多かった。

○炊事場の改修

日本人が炊事をやりやすいように改修する。

○ロシア式便所

角材と板でつくった簡易式であるが、日本人から見ると驚きだった。三方は囲

つてあるが、入口の扉は低く中が見える。敷き板には八個の丸い穴(直径二十五センチ)が等間隔に空いているだけである。用便には、二人目からは前に人のお尻を見ながら座ることになる。外には、次の人が並んで待っている。大はよいが、小はみ出してできない。初めは大変抵抗があった。そのうちに諦めたが、後味は複雑だった。

和歌山県 北又光夫

一カ月も楽をすると若い体はすぐに太り、次の検査では二級か一級に上がり重労働となる。三級か四級になると、炊事やらパン焼き、味噌つくりの雑役に行かされる。時には食い物にありつき、むさぼり食う。一階級ぐらいつきに上がってしまった。労役の中で喜びというか楽しみというか、それは食べ物の話しかない。話をして想像して楽しんだ。だれしもが代わる代わる話した。なかなかの話し上手もいて皆を楽しませた。食い物の話はかりして、間違っても色気の話は出ない。体が七十歳くらいの老人と同じになってしまっているのである。

石川県 村沢藤作

ウラジオストックも七月、八月という暑い日が続く。毎度のことながら人員点呼で立たされるのは一苦勞である。ある日の点呼で随分時間をくつたが、そのとき、突然目の前が真つ暗になって卒倒した。脳貧血を起こしたのだろう。「重いな、重いな」という声に正気づくると、医務室に担ぎ込まれている途中であった。しばらく横になっていただけで回復したが、それからはこの女医さん、この男は虚弱体質と見たのだろうか、しばらく所内作業に回され、楽をさせてもらった。

岩手県 荒田昌三

昭和二十年十月五日に初雪が舞い、診察の結果、病人に指定され、一カ月の軽作業要員となり、防寒に備え壁の隙間に乾燥苔の詰め方や、泥塗り、石灰

塗り、便所の清掃などが課された。

静岡県 室伏貫二

今度は十四、五キロ西に向かつて歩かされると次の收容所に着いた。そこは抑留者五百名ほどの作業大隊で、ここでも收容所のラーゲルと呼ぶ檻の中の生活だった。

ソ連軍医の身体検査があり、一級者と二級者は重労働に、三級者は軽作業に回される。私は三級者で收容所内の入浴場に回された。入浴場は蒸し風呂になつてゐる。月曜から金曜までは五百名の日本兵の入浴、土曜日はソ連監視兵、收容所長、衛兵所の各将校、現場監督やその他の家族である。

一日の作業は、午前七時起床、浴場内の清掃を行い、八時に少量の雑穀類の朝食、そして前日の入浴者百人分の襦袢と袴下百枚を洗濯する。午後一時から六時までの入浴場作業は二名で当たった。他の者は午後から水汲みで、冬は厚い氷を割つてバケツでくみ上げ馬車で運び、薪は近くの伐採跡から運ぶ。午後五時、作業隊が戻り入浴が始まる。

滋賀県 小西信太郎

ある日、ソ連の将校に「スタルシナ小西、ダワイ」と呼ばれ、ソ連兵のコックが病気になるので、しばらくの間コックをやってくれと言われ、承諾することになりました。ソ連の監視兵とも顔なじみでしたので信用してくれたのだと思ひました。

当收容所に一人ソ連兵と共に起居していたドイツ軍の抑留(ゲルマン)軍人の兵士が日本馬をつかつて糧秣受領をする作業をしておりましたが、ある日、馬が暴れて馬車共に投げ出され、大怪我をしたので、日本側の隊長に馬を扱う者がいないかと、通訳を通じて隊長に出してくれと言われた。隊長も私が馬を扱うのを承知しておられるので、コックと馬の取扱いを承諾し両方をやることになりました。

作業小隊長の方は外の軍曹が担当し、私は一週間に三回、タシケントの町のパン工場へ、ソ連主計(インチエタント)と当分の間ではありましたが、糧秣受領に行き、作業としては楽な方で助かりました。馬が恐怖症で暴れるのには十分注意し神経を使う毎日でした。その作業を四カ月ほどやっております。主計ともいつも一緒にタバコ「マホルカ」などくれました。

初めての営倉入り

入所して初めて便所に行ったとき、何のこいもないのに驚き、また厚板の穴より下を覗いて深いのに驚いたが、二年半の歳月がたつと、間が三十センチぐらいいしか空いてなく、満杯になり、塵も積もれば山となることはこのことだと思ひました。ある日、近日中にソ連のお偉方の巡視があるということで、当收容所係の衛生の将校が下見をして、便所を汲み取るように日本側隊長に通訳を通じて連絡があり、早速にソ連側より汲み取り用タンクが支給された。私に汲み取りを命ぜられ、馬車で收容所裏山の大きな穴場に捨てるようにと。三日目の出来事でした。馬が何かに驚き、後びきしてアツと言う間に車ごと穴にはまつて帰れないので、收容所に帰り応援を要請。隊長を初め同僚十人ばかりが駆けつけて、ロープで縛り上げ、苦労したあげく、ようやく馬を助け出してどうにか命を取り止めましたが、足を怪我しており、苦しまぎれで汗びっしょり、びっこをひいてその責任を問われて営倉入り。びつくりしました。ソ連では厳しく罰せられました。

食事は差し入れてくれました。

一晩中寒さに弱りました。初めて営倉入りの体験でした。いつまで入れられるのかと本当に情けなく出所を待つのみでした。

翌朝、ソ連兵よりダワイと鍵を開けてくれ、やっと安心した。日本側の隊長、同僚たちも心配そうに私に同情の言葉をかけてくれ、労をねぎらってくれて、何よりも嬉しく感じました。

馬が一日も早く快復するのを祈る思いでいっぱいでした。

北海道 桐木留吉

ソ連の女医から炊事要員に指名され、他の要員と共に二千人の同僚のため炊事作業に就かされ、帰還まで続けさせられた。

支給された糧秣は粗悪なもので量も少なく、塩蔵鱈のスープ、雑穀の粥のみで常に飢餓状態が続き、所外で集めた雑草で補食したが、飢えは募るばかりであった。しかし、私は炊事担当で、この悲惨さから免れることができた。同胞たちは栄養失調の中、出役させられ、疲労困憊の未倒れる者多く、連日牛舎入口に二、三体の屍を見る状態となり、冬は雪中に埋め、融雪後数カ所に合同埋葬した。

福井県 福田 薫

伐採班の者は違う班に分かれて作業に付いたのです。退院した私は、もう外での仕事は怪我をしたためか嫌気がさして、何か建物の中での仕事とと思って大工や指物師の仕事場を見に行ったところ、年老いたロシア人が桶を作っているのです。私はそばに寄りジツと見ていますと、あまりよい仕事ができないようなので「ちよつと私にやらせてくれないか」と手真似で言うのと「やつてみる」と言うのでやつてみました。出来上がった品物を手に取って「ヤポンスキー、オーチンハラシヨウ」と言つて、明日からここに来て仕事をしろ、所長には俺が言うからとのことで、桶作りの作業をするようになったのです。実を言うと私の父親は桶屋で、私は高等小学校を出ると入隊するまで父親と一緒に仕事をしていたのです。それからは建物の中の仕事ですので、暑さにも寒さにもあまり関係なく作業ができました。

二十一年の十月の終わりが、所長に呼ばれて、何かと所長室に行きますと、笑顔で迎えてくれ「福田、ご苦労だけれど隣の八〇二収容所に一カ月ほど行つてほしい」とのこと。なぜかと聞くと、浴場の湯を沸かす桶が傷んで風呂に

入れなくて困つているので頼むと言われ、早速翌日出張ということになりました。私の収容所の近くには八〇一、八〇二、八〇三、八〇四、八〇五、三〇六の六収容所が七十キロほどにあつたのです。それからは、ほかの収容所には桶屋がいなかつたので、各収容所に一カ月、二カ月と回つて桶作りでした。どこへ行つてもよくしてもらい、技が身を助けてくれました。

岡山県 木下美知夫

糧秣受領の使役は、作業にいかにも疲れて帰つていても希望者が多い。何とか、たとえ少量であろうとも、クスねる機会があればこれをクスねて帰つて人知れず食べたい。飢えた人間の生のままの心である。この糧秣受領は毎日のことである。ソ連側は、食料は毎日一日量しか渡さない。これは逃亡を恐れることと思われた。糧秣受領の作業から帰つた兵隊が飯盒をペーチカへ載せている。何か獲物があつたのであろう、水を一杯入れて一緒に流し込むのである。古参上等兵も哀れなものだ、過去には多くの新兵のビンタを取つたであろうに、過去の威厳は既がない。

三重県 宇平 博

ラーゲル生活ラーダ収容所

ウラル山脈を越え西シベリアの広野を過ぎて、十二月初旬モスクワ南方四〇〇キロのウクライナに近いラーダ収容所に到着した。白銀の雪原の白樺林の中に点在する洞窟兵舎に分散収容され、真ん中の通路を挟んで二段ベッドが並列されていたが、早速南京虫の襲撃には閉口した。白樺の皮で点火し次々と焼き払つた。酷寒の中の早朝点呼には、吹雪の中で全員点呼が済むまで凍えながら辛抱した。ペチカに使う用材は近くの雪中の森林に入り朽木を中心に取りますとめ、二人で運搬を繰り返したものです。雪が解け、早春の野道を通りタンポフに通ずる道路工事作業に従事しましたが、その帰途野草を採取してビタミンC

の補給をした。ゲルマンを中心に多数の外人抑留者がいたが、逐次どこかへ転進していった。

七月下旬ラーゲルの移動が現実化、タタール州エラブカに転進することになり、ラーダ駅を出発し、キズネール駅に到着した。二泊三日の行軍にてエラブカ△ラーゲルに入った。七月三十日頃と記憶しています。

ラーゲル生活エラブカ収容所

収容所の近くに金のクルスの寺院が糧秣倉庫になっており、主として野菜関係の管理を担当したゲルマン二人がマネージャーとしており、友人と三人で野菜の整理作業をやっていた。休憩時間にゲルマンの教えてジャガイモとニンジンをストックでふかし、皮をむいて鍋に入れ、木づちでつくどジャガイモ餅ができ上がった。余分に作り飯盒に入れて所内の友人に差し入れたものです。

一番重労働だったのが吹雪の中の原木運搬だった。吹雪の中を早朝に出発し、雪そりを八人が馬の代わりに原木一屯を約一六キロの伐採集積地より夕方頃までに運搬した。前曳き六人と後押し棒で後押しと舵取りするもの二人で、坂道はエンヤサコラサのかけ声で運搬した。のどが渇くとききれいな雪を食べてのどを潤していた。

近くのソホーズの小麦収穫作業に泊り込みで出掛けた。雪の降る中、手袋もなく素手で収穫をやれとの事、辛抱を重ねて作業をしたが、つらかった。宿舎に帰りトルコ蒸気浴をして眠ったが、隊長幹部が協議し、無茶なラポータ(労働)を拒否することになり、翌朝は宿舎を出ず指示を待った。交渉の結果、手袋と鎌を準備するとの事でようやく腰を上げノルマを達成した。

三合里

昭和二十年九月二日はミズリー艦上で無条件降伏の調印式があったと聞か、当日平壤地区にいた日本軍はとても惨めな姿であった。約三個師団三万余

富山県 前田義雄

の日本軍が二十四キロ、六里先、三合里収容所に今日中に入れのソ連の命令出る。中隊命令で各自寝台のわら布団を半分に切り、リュックサックを作り携帯食料と日用品を詰め、馬にも鞍はないが毛布で鞍がわりに食料を目いっぱい積んで出発した。出発してみると五く六メートル幅の道を各部隊が行軍、隊列は一列縦隊とならざる得ず、大きな布団袋のリュックをかつぎ、馬には山盛り荷を積んだ五列くらいの部隊行列。命令伝達は全く通じなくなり、また、とても暑い日で馬には水もやれず暴れる。人も水がない。渋滞で前は進まない。ソ連の歩哨がマンドリン銃をバリバリ発砲し早く進めとおどかさ。暑い、水がない、苦しい、悔しい、はがやしい、みじめ。素晴らしい日本軍隊でしたが、朝鮮人の前に情けない姿をさらして残念の思い、言葉にならず。六里の道が夜になってもなかなか着けない。目の前に入口があるのに進まない。人員を数えるのに十列でないと数えられないソ連兵なので手間取っている。門内には馬は入れない、荷物各自持っているだけ。大きい荷物は全部、馬も門前に捨て、山となる。その混乱はこの世の姿ではない。

三千人くらい収容できる仮兵舎(三万余入れられたので寝るところはない。各自飯ごう炊事したいが薪がない。馬屋の腰板は全部なくなり、所内の松の木、全部使い切り、根を掘り燃やすも生で燃えない。水がない。便所に困る。四方有刺鉄線送電してあり、自動小銃の歩哨がたくさんライトをつけて監視、それでもつらさに耐え切れず夜に逃亡する人あり。しかし逃げ切れず戻って来たときに見つかり、二人向かいの丘の上で銃殺され、皆に見せしめされた。そのころ千人単位の作業大隊に編成され、私らは中津大隊(大尉)石川中隊となる。

北朝鮮 古茂山収容所(清津北方)

着いた。「下船」の声も待ち遠しく上陸する。

どうも街の様子がおかしい、長髪の人たちの話す言葉は朝鮮語だ。頭の中は

岐阜県 早川芳美

真つ白になる。

「ダワイ、ダワイ」(早く早く)、ロスケの声に我に返りトボトボ後に続く。古茂山収容所に着いた。この間の行程は全然記憶にない。

河原のような広場の所々に、十畳ほどの広さで深さ六、七十センチほどの穴が掘ってあり、側面は石が積んであった。十人くらいに分かれ寝るように言われ、仕方なくその日は持ってきた毛布を共同で使い就寝する。

六月下旬の昼間の北朝鮮は日照が強い。翌日、全員で屋根を造ることになり、幸い付近に柳の木が生えており、手ごろな大きさを骨組みにできるのを選んで、刃物を持たぬ我々にとっては難儀なことであったが、何とか皆の努力で屋根の形になり、柳の葉を被せて日よけができた。

三度の食事は連日トウモロコシに塩魚の水煮で、胃の弱い私は下痢に悩まされるようになる。おまけにビタミンの不足か鳥目になってしまう。夜は視界が狭くなりはつきり見えなくなる。それに加え膝と足の裏が痛くて、杖をついて用を足すような状態になった。私の他にも多くの人たちに見られた。ある日、露天に囲いもなく長く掘ってある壕のような便所で小便をしていると、突然向かい側から「あなたは岐阜県の出身ではないか」と。私は見覚えのある顔を思い出したが、とつさのことで名前が思い出せない。「付知の方ですか」と問い返すと、「僕は九区の片田正弘です、あなたは芳美さんでしょう」とお互いに確認した。正弘さんは私より状態が悪く、戦友の介添えがなければ用を足せぬ状態であった。以後何かと訪ねて昔話などして慰めた。

梅雨に入り柳の葉の屋根では雨漏りで湿気に悩まされ、仕方なく毛布を屋根に被せる。湿気に加え食事の悪さのためか赤痢が発生、死者が出始めた。

こんな状態ではせつかくシベリアから生き延びた命、何とかせねばと考え、まず下痢を治すことが一番とトウモロコシを一個一個皮と芯を取り除き、搗いてダングにして焼いて毎日食べた。これに付近の食べられる草を戦友に習い、箒草、酔っ払い草等食べられる草は何でも茹でて、塩魚の残り汁をかけて食った。また

竹を焼き炭にし、粉にしえ飲んだ。

そのうちにこれらの効果があつたのか足の痛みも取れ、夜見えなかった鳥目も治ってしまった。元気になってから死者の埋葬使役に出て十六人も埋葬したが、ホツとする間もなく、後何人かの追加埋葬をしたことがあつた。

七月初め、平壤(ピョンヤン)に移動の命令が出て、正弘さんに別れの挨拶に行くと、涙を流しながら別れを惜しまれた。そのときの正弘さんの姿が今でも思い出される。復員後しばらくして、この地で亡くなられたことを知る。ご冥福を心よりお祈りする次第です。

千葉県 仲澤豊春

十二月一日、寒さのために黒竜江は結氷し、ソ連軍が氷の上に鉄道を敷いた。私たちは雪と氷の上を少しばかりの荷物を持ち徒歩でブラゴシチエンスクの駅に着き、二階造りの貨車に詰められ、北へあるいは西へと走り続けた。一カ月くらい貨車に乗せられ着いたところがイランの北カスピ海(裏海)の東岸の中央の小さな町クラスノボドスク収容所に着いた。その日は十二月三十一日であった。

その町は対岸のバクーの町から原油を船で運び、そこから鉄道で運ぶ所であった。

屋根だけが地上に出た収容所で、室内は木材で造った三段のバタリ式の鶏舎を思わせる宿舎であった。いよいよ作業が始まった。その作業は山から石を切り、それを積み上げ二階三階とアパートや劇場等の建設作業であった。そこにはトルコ人とドイツ人等同じ作業場で働いていた。

茨城県 須藤富之助

第二の都市ハリコフ、「ハリコフ収容所」へ入所した。比較的のんびりした生活が始まった。主として収容所内の作業が多かったが、そこは製薬会社の跡地だそう、独軍の攻撃によって破壊された跡地だそうだが、おおよそ二、三カ月くらいの

期間だったか、この収容所から藤井大尉を長として二百六十人ほどが「チグユ」という収容所へ移った。

そのチグユ収容所には「ゲルマンスキ」ドイツの抑留者が四百五十人ほど収容されていた。初めて見る彼らの印象は、同じ白人ではあつても何となく人間的にすぐれた、しかも利発な感を抱いた。

さて一番困ったことは、宿舎は誠にお粗末なもので、それはやむを得ないとしても、宿舎内に巢を作つて住んでいる南京虫、そしてノミ、なおまたシラミの、共同攻撃である。これには誰もが参つた。幾ら疲労していても寝ることのできないつらさをだれかれとなく困り果てたのである。毎夜どんなことでも二、三回は起きて退治するのであるが、ほとほと困り果て、隣同士で顔を合わせてもどうすることもできなかった。

五十人の少数で、その一員として隊から別れてエンジンの収容所へ来てみると、何とここにはアルチョモフスク収容所にいた者で知人もいた。お互い健在を喜び合つた。この作業現場は三交代で、朝出、昼出、夜出と三交代で道路作業の橋梁設置の要員である。

また例の突然の移動の命令が出た。それも二十六日ではないか。同僚たちとここで新年を迎えられると思つていたので皮肉な運命である。それも五十人という。その一員として参加させられた。

クリウコフ収容所

いよいよ五日目に目的地に到着した。どんな所なのか、作業は何の仕事か、環境はどうなのだろうか、そんな思いで到着したのは、意外な場面で肝を抜かれた。何とそこにいた者は栄養失調に近いやせ細つた同僚が約百五十人くらいいたけれども半病人的な人たちであつた。

二日ほど走つたところでラーゲルに着いた。

福井県 石田照夫

シベリアは昔の流刑地で囚人の収容所が所々に建てられていて、その一棟が我々の生活場所のラーゲルである。出入り口以外は二重に有刺鉄線を張り巡らし、四隅には望楼が建てられ、二十四時間監視兵が見張つていた。逃げたところで食う物はなし、防寒具もなく死ぬのが落ちなので、ソ連兵の言いなりになるよりほかに手はなかつた。

強制労働をいろいろやらされた。道路工事、ピルス工事(波止場)、鉄道レールのレモントバラスの運搬。そのころのシベリアの鉄道は薪で走つていた。汽車の薪切りもその一つである。太さ十センチから十五センチくらいの立木を切り倒して、長さ一メートルに切り、二つか三つに割り線路の近くに積んでおくと、薪のなくなった汽車がそれを積んでまた走つて行く。ノルマは一人一立方メートル。鋸は長さ一メートルくらいで両方に握るところがあり、二人で引くので慣れないと難しい。

生活で一番の苦勞は水がないことで、必要な水は飯盒や水筒などを持って川まで汲みに行った。朝はコップ一杯で口をすすぎ、顔を洗つた。風呂は洗面器に一杯湯をくれるので、それで体を拭いたり洗つたりしていた。水汲みは大変きつい仕事であつた。

一週間に一回の風呂だから不潔になりシラミが湧いた。シャツの縫い目には卵がぎつしり付いていた。暇なときはそれを爪で潰すのが仕事であつたが、それも入浴のたびの煮沸消毒や熱処理によつてそのうちに全滅した。南京虫も昼は木材の割れ目や壁の切れ目の中に隠れ、暗くなると出てきて人間を刺しに来る。食われると痒いが二、三カ月すれば免疫になつて気にならなくなる。

トランスワール収容所

しかしホツとする暇もない。割り当てられた雪に埋まつた宿舎の入り口を探して掘り出さなければならぬ。やつと雪をかき分け入つて見れば、どこから入つ

岐阜県 早川芳美

たのか部屋の中は雪が半分くらい積もっている。やっと片付けたが薪もない。食事もいつのことか、その日はついになく日が暮れる。寒くて仕方がない。やむを得ず木製の寝台を叩き壊してペーチカにくべ暖さをとり寒さを凌ぐ。

翌日ロスケの将校に分かり、物凄く叱られた。

一部屋に十人ぐらい割り当てられた。雪で埋まった宿舎は薄暗く、夜は二重扉の外扉を不寝番を立てて絶えず除雪しないと出られなくなり、外から他の部屋の方に掘り出してもらったこともあった。

恵那地方出身の同年兵六人がトランスワールに来て、丸山君と私が使役に出て、残った四人のうち三カ月余りの間に、原君、中津川の田口欽一君、中の方の森甲子男の三君を失う。

残った笠置の樋田君が、余りに犠牲者が出るので三月末閉鎖することになり、我々のギードロにヨボヨボになつて移つてきた。樋田君から三君の死を知らされる。

酷寒の中、金山の厳しいノルマに加え、食料不足による栄養失調により多くの死亡者を出す。その話の余りの悲惨さに声もなく、ただ己の運の強さに感謝した。三カ月の間にトランスワールでの死者二百人余り、まさにその悲劇の大きかつたことを知ることができる。

鳥取県 加藤一郎

一カ月遅れでナホトカに着いた。記録によれば一九四八年六月二日到着となっている。

これでいよいよダモイかと期待していたら、また第一收容所(作業隊)に入れられて、さらに一年間の労働に従事した。ナホトカの港に降りたときには、まさか作業收容所に入れられるなどは全く考えていなかったが、「病人は列外に出る」と指示があったり、先頭の列の方向が海岸沿いに近づいているのでちよつと不安であったが、予感的中して作業收容所に入れられ、ここでさらに一年の重

労働をさせられた。

ナホトカは冬の温度も零下二〇度程度で、バイカル湖周辺の気温に比べると随分暖かいが、当時の私達にはもう防寒被服というような物を不十分で、最も寒さにこたえる靴下もなく、最後の一冬はゲートルを足に巻いて靴下がわりにして靴を履き作業したが、四年間使ったゲートルは毛もなく、ただ名ばかりのゲートルで、よくあの寒さに耐えたと思議である。

一九四九年九月、ダモイ收容所に入り、徹底的な身体検査を受け、戦友の住所録のようなものさえも取り上げられ、文字通り身軽になつて日本に帰つた。

鳥取県 谷口富治

疲れ切つた体で、昼夜連続で歩き続けた。歩いている方向は全くわからない。喉が渇くので、道の水溜りの泥水を飲んで下痢した者も大勢いた。夜中の休憩は、寒くて、仮眠どころではない。大陸の夜は冷え込む。枯れ草に火をつけて、その中を歩き回つて暖をとり、夜の明けのを待ったものだった。ソ満国境を通過して、ソ連領内に入ったことを知り、ガックリ、一度に疲れが出て、動けなくなつた者が大勢いた。どこの駅かわからないが貨物列車に乗せられて、着いたところがウラジオストックであった。ウラジオストックから、ラーゲルまでそう遠くはなかったように思う。その日ウラジオストック駅の除雪作業に駆り出された。関東軍から押収したコンクリ切りの小さなスコップで雪かきをせよというのである。人海戦術だ。これでは作業能率はゼロ、構内の雪をかき回すだけで終わった。

翌日から本格的な労働が始まった。労働の主体は建築作業、場所はレーニスカヤ街で、毎日毎日歩いて通つた。地下一階、地上五階のれんが建、ソ連軍将校のマンションだのことで、独ソ戦で中断した工事だった。抑留者の中には、左官、大工と技術者が大勢いて、ほとんど日本人だけで完成させたようだった。足かけ三年がかりで完成をさせた。最後に棟木に「日本人建之」と落書きをした。

港に船の荷おろしから積み荷の整理、石山にも行った。パン工場は製粉工場で原料の小麦の貨車おろしなどがあり、その他いろいろな臨時作業があった。港で原木の整理をして五、六人で肩から大木を投げおろすとき、過って木にはねられて倒れ脳震盪で意識を失ったこともあった。

五階建の立派なレンガの建物が完成したのが昭和二十三年のまだ寒い春、痔がものすごく悪化、耐えられなくなつて、診断を受ける手続をした。女の軍医であつたが、診るなり「ニハラシヨ」と言つて、何も手当てもせず、重病人の仲間に入り、ナホトカへ移送された。

高知県 東山林

もちろん、ソ連兵の道先案内によつて、その後について歩くということですが、どこまで歩くのか見当もつきませんし、また、何キロ歩いたのかもわかりませんでした。着いた所は、有刺鉄線を二重に張り囲んで、角には六メートル程の高い看視塔がある百メートル正方形で、ちよつと牛の放牧場かなと思わせる草原で、その上に雪が積もり、建物など何もありません。

これが、我々の起居する収容所であつた、ということですよ。

このままでは「凍死」しかありません。

まず住む所(建物)を作らねばなりません。

ソ連側から提供のあつた「ピラ」(二人びきのノコギリ)と、「タポール」(斧)で、付近に密生している松の幼木(日本の竹のように長くのびた、直径が小さいので約五センチ、大きいものでも十センチ、長さは十メートルくらいあるもの)を切り、それを材料として、各小隊ごとに、いろいろ思い思いの形の住むものを造り、携帯天幕や遮蔽網を利用して外気との遮断をして、その真ん中でたき火をして暖をとるといふ代物でした。

たき火の材料は枯木ですが、白樺や松は油分が多くて、生木でも結構よく燃えましたので材料集めにはたいした労苦はありませんでしたけれども、不寝番を

つけて、消さないようにたき続けましたので、朝、起きてみますと「すす」で顔が真つ黒くなり、誰だか判別できない状態になっており、また、敷物がわりに刈り取つた雑草が背中に凍りついて、ミノムシのようになるのに驚きました。

宮崎県 田代香

昭和二十年十一月三十日、苦しかった一カ月目の貨車の旅も終わった。いよいよ下車となると、二千人の将校集団であるため、あるいは全員処刑されるのではないかと心の動揺も禁じ得なかつた。

六、ラーダ収容所に収容(ロシア共和国)

深雪の中をただ黙々と歩き収容所に着いた。寒さの中、門前での人員の引き継ぎに長時間を要し、ソ連兵の頭の悪さをつくづく感じさせられた。収容所は外側に幾重にも鉄条網が張りめぐらされ、番犬が鉄線に環で繋がれて警戒しており、四隅の一段と高くなつた望楼には警備兵が銃を構え警戒している。

宿舎は半地下式施設で、丸木床の丸木小屋で、床は二段床が多かつた。暖房は奥まつたところに一カ所、ペーチカがあるのみである。この収容所は元ドイツ軍が収容されていた施設で、まだ多くのドイツ人及び他の外人捕虜もいた。

私達航空士官学校関係者は、村井少佐の率いる航空情報隊を主とした隊と一緒に、第七四号舎に落ちついた。私は夏用の軍服であつたので、大変な寒さを感じた。後日、ソ連から、藁布団、敷布、枕が貸与された。

宮崎県 田代香

七月二十三日、ラーダ出発から六日目、列車が停車し、全員起こされた。午前一時であつた。車中の給食はすこぶる悪く、それでも日本帰還を信じていたものを。三分の一食事を済ましていたところ、不意に「各自防寒外套・飯盒・水筒のみを携行して下車せよ」との命令である。全員ただ唾然。ロスケの野郎またしても騙したかと思うと、腹が立つてしょうがない。思い思いに残りの荷物をまとめ

て置き、十時にキズネール駅を出発した。

これから八十キロメートルを行軍し、目的地に行くことを知らされた。かんかん照りの真夏の暑さ、加えて水の補給がほとんどない。落後者が多く出たが、これを助ける余力はない。途中、ドイツの捕虜達と出合う。我らもまた彼ら同様重労働につかされるのであろうと思うと、一層足が重くなる。

二十三日、二十四日、二十五日と野宿を重ね、二十六日は途中雨に降られながらも收容所にたどり着いた。

昭和二十一年七月二十六日、途中雨に降られながらも、十四時、多くの落伍者が出たがエラブカ收容所に到着した。当日は体の消毒ができなかったので、所内での露営であった。建物は元刑務所の跡で、赤煉瓦造りの建物であり、他に木造建物二棟と、中央部に便所棟があった。煉瓦棟には、佐官クラスに給与中队及び体力の弱っている者が優先的に入室していた。

山梨県 高村國夫

私どもの收容された場所はアムール河から約三キロメートル離れた小高い山村の第十八收容所と呼ばれ、元ドイツ人捕虜が入っていたという半地下式のレンガ造りの小学校のような大きな宿舎でした。ペーチカ式で保温もよく電灯もあり、比較的日常生活環境はよかったです。しかし、十月初旬だというのに既に雪は積もり、夜は零下三〇度という寒さの中で、衣服は夏服のまま冬衣の支給もなく、食糧も満州から調達してきたトウキビ、アワ、ヒエ、大豆の類で米はなく、黒パンも定量は支給されず、毎日空腹、空腹で、この冬にかけて栄養失調の病人が続出して多くの戦友が死亡しました。

山梨県 天野清一

当時のウラジオ港はソ連唯一の軍港だったので、我々日本軍人のスパイ行為を警戒してか、軍港上陸から市街の行進は暗闇の中を一晚じゅう歩かされました。

続いてエゾマツ、トドマツの生え繁る原始林の中を三十キロメートルも徒歩行軍し、山中で露営してまた行軍し、幾日かたつて「ダバハザ」という小さな村に着きました。

ここはウラジオからハバロフスクに通ずるシベリア鉄道の通過点で、小さな駅があるだけの山中。着いた日から軍用天幕で寝起きしながら原始林を伐採し、その丸太を積み上げ半地下式のログハウスを造り、両壁は泥で固め、ところどころに明かり窓をつけ、真ん中の通路にドラム缶のペーチカを据え付け、両側に二段ベッド式の座敷を造り、枯れ草の上に毛布一枚でゴロ寝、それが上等の夢の宿でした。

それでも春五月から秋九月までは、シベリアの山野にもアカザ、ヨモギ、フキ、キノコなど野草が多かったので、それを取って飯盒に入れ岩塩でゆでて空腹を満たし、また水は白樺の木を切り込んで垂れる水を貯め「天命水」と名づけて飲んだものでした。

さらに困ったのは入浴で、一カ月一回。着のみ着のままでしたからシラミがたくさん発生し、発疹チフスなどの伝染病で亡くなった戦友もありました。

愛知県 堀内俊彦

昭和二十三年四月初め、「トーキョーダモイ」と言うので喜んでナホトカヘトラックで移動したが、着いた所は港から遠く離れた丘の上で、周辺には建物もない所だった。

この收容所に来るときは日本へ帰るということでトラックに乗ったが、ソ連が気候を理由に引揚げ開始を延期したため労働大隊に編入されたのだ。

最初にしたことは、大きな袋に野積みしている干し草を詰め込むことだった。これは今夜から寝る敷き布団で、もう一つ作った小さい方は枕、次に百人くらいが入れるテントを二張り立て、ここで寝ることになったが、四月初めのナホトカの夜は冷え込み、着のみ着のまま、あるだけの毛布をかけ、重なるようになって

寒くて寝られなかった。

間もなく収容所が有刺鉄線で囲まれ態勢が整うと、我々で一辺が七・八メートルの家をブロックで十戸ほど建て、そこで起居するようになった。

作業場は収容所から歩いて三十分くらい離れたところにあり、労働歌やソ連の歌を歌いながら往復した。ここの作業は港湾建設と建築資材作りで、どちらも港に隣接した広場が作業場だった。港湾建設は三立方メートルくらいの大きなコンクリートブロックを作る仕事で、これを作るための碎石や練ったセメントを運ぶ仕事、建築用資材はコンクリート製の杭や階段や床のパネル、石炭ガラでブロックを作る作業等だった。

私は主に建築用の資材作りをしていた。振動する鉄板の上に置いた木枠の中へ鉄筋を置き、流し込んだセメントを振動によってつき固める仕組みで、四人か六人一組でしていた。このころになるとロシア語も若干理解できたし、作業の内容も単純でさほど危険なこともなく(時々指を挟んで爪を剥がしたことはあった)、仕事の要領も上手くなってロスケから煩わしく言われることは少なくなった。

静岡県 望月 貞

やつと十月十日、帰国列車に乗った。博克凶の兵舎が空になった。貨車の中は二段ベッドで、頭がつかえて立つていられない。食事分配で列車が止まる。そのとき飛び出て用便をする。線路から遠くへ行くと逃亡とみなしてドンと来る。満州里を過ぎチタを過ぎても西へ行く。行ったり来たり引込線へ入って動かない。これは帰国ではないと思う気持ちになってきた。配給停車と思っていたら全員下車だというので降りる。そろそろついて行く。紺色の服を着た人たちと兵隊といった部屋割りがあつて部屋が決まる。帆布の袋が各人のベッドにあつて、その袋に外の乾草を詰めるように言われる。藁蒲団と枕ができた。自分のベッドへ入れる。毛布は一枚。昼飯は食堂で食べる。長テーブルに長腰掛け、八人腰掛けて食べられ

る。一度に百人前後食べられた。炊事係が平食器に黒パン兼食器にスープを入れたのをテーブルに並べてある。勝手に行ってどこでも食べる。各部屋にはペーチカがあり、大きなアルミ葉缶が一個ある。水は外の井戸で汲んで来る。ペーチカの横には薪が積んである。いつでも燃して良い。薪は炊事でノコギリと斧を借り、原木を切つて割つて持つてくればよい。炊事の横に薪用原木が山と積んである。至れり尽くせりだ。初めてのペーチカ、皆集まって雑談に花を咲かせる。ふんわりした藁蒲団で貨車のゴトンゴトンもない。少しの揺れもない。いつか眠っていた。

「私がこの収容所長である。君たちはすぐ帰られる。但し日本人捕虜が多いので帰る順番がある。それを待っている間、十分体力をつけ帰国に備えてもらいたい。我々の言うことを良く聞いておとなしく順番を待ってもらいたい」手を叩く者もいた。皆安心した笑顔が戻った。希望が湧いた。午後から冬服交換をした。医務室の入口で全裸になる。袴下と襦袢と着る順番に大小、自分の体に合う物を選んで着る。布靴下、防寒靴、防寒外套、防寒帽、ゲートル、おおてぶくろ大手套まで越冬も可能な日本兵ができた。満鉄の人たちも全員軍服となり、見境もない。肩章もなく全員一兵卒となった。胸には白布で名札を付けた。これで上下なく平等になった。

愛知県 兵東政夫

昭和二十一年五月十五日、樺太も早春、珍しく花曇であった。

私たち二百四十人の中隊は、数香の東方、多来加湾のなぎさを東に向かつて歩いていった。ジブシーのごとく流浪するのである。東多来加に着く。ここが私たちのねぐらであった。戸数十五戸くらいか、小さな栈橋に数人の日本人、ロシア人、離れてギリヤーク人かオロッコ人がいぶかしい顔で立っていた。萌え出た薄緑の浜辺にガンコウラン、砂地の奥にハイマツとフレップの実が待っていた。そしてその州を行くと、突如新しい杭で囲まれた「間宮林蔵上陸之地」の標柱が建つ。やつとの思いで初めて戦没した戦友の慰霊祭を行い、遺骨を飯盒から出してやつて、

語り合う。トドマツ、エゾマツ、ドロノキの流送作業に毎日が暮れるが、小隊一日のノルマ八〇〇立方メートルに每晚鉄棒を振り回して来るシエレベンコ上級中尉と争うのが日課であった。

そんなことを思っている時にいかだ作業は突然中止。昭和二十一年十月十五日であった。出発のとき、栈橋にはうさわの娘さんをはじめ十数人の日本人と移住してきた幾人かのロシア人が立っていた。

敷香駅までは二十七キロメートル。

駅はみぞれにぬれていた。暗闇の貨車であわただしく他の日本兵の部隊とすれ違う。互いにどこへ連れられていくのか。

着いた所はかの真岡であった。

熊本県 高洲安則

四月に入り身体検査があった。九日に全員が兵舎前に集合、装具を持つての検査であった。部屋に入つて出発の準備をし、翌十日早朝より兵舎を出発して愛河駅へ、二段装置の貨車が待つていた。全員決まった車両に乗り、「東京ダモイ、東京ダモイ」と言われて北へ北へと走り、ソ満国境を渡った。まだ黒龍江の水は凍つていた。シベリア鉄道に入り、ハバロフスクも過ぎてシベリアの大平原をまっしぐら右はシベリア、左は満州の山々を見ながら汽車は西へと向かつていた。また騙された、東京ダモイと言いながら。

そのうち、チタ、バイカル湖、イルクーツク。バイカル湖を通過するのに一日かかった。やがてシベリア鉄道の分岐点ノボシビルスク駅を通過して支線に入った。単線である。

五月に入った。汽車はカザフ共和国の首都アルマアータも通過した。もうこのあたりは野生のほうれん草が沢山生えていた。近くの駅で停車した。ほとんどの人が降りてほうれん草取りに出た。この駅で一中隊と三中隊は下車された(後で聞いたが、アルマアータ郊外の伐採とか)。私達はすぐ汽車に乗り発車した。

五月五日、日曜、晴。淋しい山間の小さな駅に着き、そのまま引込線をゆつくり汽車は一キロメートルくらい行つて停車。ホームもなし駅でもない。飛び降りて、少し歩いて畑か丘か広い所に着いた。半分ばかり天幕が張つてあった。淋しい山奥のラーゲルだった(炭坑)。地名はウズベック共和国タシケント地区シヤフトマと言つた。

三重県 太田 勇

通化でソ連軍に拘束された私は、その後吉林の師道学校で三カ月程入ソ待ちをさせられ、十一月の末千五百人の集団でシベリアへ送られました。着いた所はシベリア鉄道の沿線で、ノボバロフカという地図にもない片田舎の駅でした。

ここで、私たち千五百人の集団について語るなければなりません。どこでどのように選別されたかは知りませんが、この集団が元将校ばかりであることに気づいたのはノボバロフカ駅でのことでした。それまでも、日ごろ親しかった人が急に姿を消したり、初めて見る顔が隣にいたりすることはありましたが、入ソ列車がチタにとまったとき、どつと顔ぶれの変つたことを覚えています。多分ここで最終的に編成されたようです。上は大佐から下は見習士官までと多彩で、関東軍の佐官尉官が多数いましたし、歩工砲の部隊長だった佐官はざらでした。憲兵の将校もいました。この人たちは前歴を隠してこの集団に紛れ込んだそう、それが日を追つてあばかれ、いつの間にかこの集団から姿を消しています。私と大の仲良しだった大尉もその一人で、朝起きるとソ連軍の取調室に向きます。あるとき夜遅く収容所に帰ると「太田さん、もうだめだ、ノモンハンがばれた」といきました。その翌日、彼は取調室に向いたきり、再び収容所に戻つてきませんでした。あれから五十年たった今でも、どこかに生きていてくれたらと祈らずにはおれません。彼は心優しい人でした。吉林の仮収容所で私が熱を出して寝ているとき、リュックの中から高級品の羽布団を引っ張り出し、目の前で二つに切り裂いてその一つを私に着せてくれました。聞けばこの羽布団は奥さんが自分の分

身として持たせたものだったそうです。

北海道 長島秀夫

十月二十七日、チタに到着。ソ連軍管区の中心地である。下車させられる。古いガタガタの無蓋のトラックが何十台も連なっている。休む間もなく、これらに追い上げられる。満車になると次々に出発する。

トラックは、一晩中休みなしに走り続け、翌朝ソ蒙国境の町ナウシキに到着する。町といつても、見渡す限り家らしきものはない。点々と見えるのは、パオだけである。遮断機が下りている。その脇に小さなパオが二つあり、それぞれからソ連兵とモンゴル兵が出てくる。国境警備の兵である。運転台の男が、二言三言話をする、遮断機があげられ、モンゴル領に入る。十月二十八日のことである。

寒空の中、トラック輸送されること三日。十月三十日、モンゴルの首都ウランバートルに到着。やつと、点々とはあるが、建物のある街らしきところに入る。何かしらホッとした気持ちになる。ウランバートルを通り過ぎ、禿山の連なる郊外のホジルブラン収容所に収容される。半地下の丸太造りの建物で、中は板張りの二段式やぐらのようになっていいる。もちろん敷物など全くなく、窓のない、穴倉のような建物である。

モンゴルには、僅かな期間に、民間人を含めて、一万二千人を越える抑留者が送り込まれたため、収容所関連施設や食料の備蓄等についての準備が、全くできておらず、捕虜である我々が、自分達の手で、すべて作らなければならない状況であった。

便所

サハリンの収容所には、三百人ぐらいの抑留者が生活していたが、便所は一所しかなかった。縦八メートル、横四メートル、深さ二メートルの穴を掘り、足

愛知県 齋藤高志

場は真直ぐな細い松の木を四本か五本、三十センチメートルおきに渡し、その上で用を足した。冬はかがみ込むと尻がモゾモゾすることがよくあった。

落下物が凍って高くなっていくのである。高くなると鉄の棒で壊すのだが、この使役は、かけらが衣服について、暖かい部屋に帰った時、溶けて臭うのでいやだった。なるべく使用しないように、入口には「野糞励行」と札が掛けてあった。

福井県 矢部矩喬

小生は一年半ほど炊事勤務を命ぜられた。勤務は火夫、調理、清掃、洗浄などに分かれていたが、私は洗浄班で食器洗いばかりしていた。百枚ほどの皿を何回も繰り返し使うため、初めは新しかった湯も後にはどろどろに濁ってあまり清潔なものではなかったが、三、四人で洗うのでなかなか忙しい思いをしたものです。仕事を終わって夜引き揚げる時、オーロラ「極光」を拝したことも二、三回ありました。

茨城県 梅沢正之進

私もついにオカになりました、今度は仕事せずにおれと言うんですけれども、なかなか楽なことをさせてくれませんが、収容所内の掃除、いろいろな雑用、ソ連人の将校の官舎の手伝いとかなんとか。一番ひどかったのは、便所掃除でございます。便所が凍っていますから、氷になっており、それを十字鋏で砕いて、モッコでもって担ぎ出すわけでございます。本当にもう話にならないです。そんなことをやっているんですから、オカになっても、さっぱり休めず、まあ、本当にひどい目に遭いました。そして、こんなことを言うとおれなんです、十字鋏で砕くものですから、しぶきが飛びます。落としたりつもらいでも、部屋の中に帰ったら、それがブーンとおつてきて、本当に苦労しました。

⑬ その他作業

新潟県 猪俣國雄

病院労働

潜伏性マラリアにおかされて、セ・ミノフカの病院。一週間で熱もさがり、病氣も治った。収容所へ返されると思っていたら、政治局員(ゲ・ペ・ウ)に「病院で働け、ことわれば射殺することおどかさされ、しかたなしに病院労働に従事することになった。抑留仲間が各収容所から栄養失調やけがで毎日十人、二十人と到着する。いかなる病人も、「バーニヤ」(石を焼き、水をかけて蒸気を充満させたサウナ)には必ずいれてから、カルテがつくられ、幕舎の各病棟へ運ばれる。名前を知りえないうちに、五人、十人と毎日仲間達が亡くなる。

丸太小屋の屍室(運ばれる。ソ連の軍医達(中尉のチーフと若い将校三人くらい)がタポール(斧)と金切鋸、メスで解剖する。解剖屍体を縫合し、片隅の屍台に重ね、血で密着し、凍りついたしかばねを、近くで軽作業(ア・ラ・ボート)の仲間達が鉄棒で掘りおこした氷の穴に埋葬するのが、私に課せられたおまじ日課であった。合掌して埋葬しても、氷片で上をおおうくらいがやつとである。夜ともなると、群狼の遠吠えが聞こえ、翌朝にはしかばねが散乱している。埋葬、散乱がくりかえされる。陽が当たると風下に向かつて屍臭が拡散していく。

岩手県 梅津盛一

昭和二十二年七月ごろ、五十人ぐらいの同僚とともに転属を命ぜられた。また貨車で移動したが、あまり遠い所ではなかった。着いたのはベグワードという所で、草も木もない砂漠のような所だった。ここでの作業は、近くにダムがあり、ここから発電所への大導水路の工事が中心であり、土工作業、法面の石張り作業、石山の切り出し作業と、毎日千人が各職場に分かれて、季節によっては三交代

の作業であった。やはりここでもノルマに苦しめられた。冬から翌春にかけて西からの季節風が強く、砂ぼこりで目が開けられないような日が何日もあった。

高知県 安岡精治

所長は馬で、私と通訳は日本人運転手の車がきて、タイセット本部に着いた。このときより私は日本帰国が最後のことになることとなる。

タイセット地区の本部は市街より少し離れた所であり、日本人抑留者の状態を調査し、各収容所の調査(作業、生活物資輸送の状態、死亡者の名簿等、抑留者の出身県の調査、洗脳教育の状態)、このときより帰国さす日本人抑留者の問題等が任務となっていた。私は通訳とともに各収容所を回り、ハラシヨラポータ(ノルマ以上の仕事をしてよい成績をあげた)の人名の調査をなし、本部に報告する任務となった。フトロスキー大尉は妻と官舎に住んで本部長となった。

翌日より通訳とともに各収容所を回り始めた。第三収容所、第四収容所、第五、第六、第七、第八、第九各収容所を一月にかかると調査し、約二百五十人程度の人名を通訳は私に日本語で書かせた。私の宿舎はタイセット捕虜病院の一室で、通訳も私の隣の室で、彼は病院の事務もやっていた。

この二百五十人が早期帰国の第一団であることがわかった。第九収容所で忘れない八木一郎君外十二人がリストに載っていた。通訳の言うには、第五収容所の毒きのこを食した組や、各収容所よりの重病者は、八月初めに高砂丸(病院船)にてナホトカより舞鶴港に向かったとのことだった。

この時分より、タイセット駅には日本人抑留者の列車が走るのを、私は通訳とよく見た。私はタイセット地区の各収容所の人名、人数等を通訳が調査するたびに、日本語に書き、本部に提出するのが任務となり、昭和二十二年の冬も去り、昭和二十三年に入り、いよいよ各収容所の帰国順番をきめるソ連本部の計画書ができはじめた。昭和二十三年、二十四年と本部には計画書があると通訳は私に話した。

私の仕事は、これから各収容所の人員、氏名の調査票を作成し、特に死亡者の人名調査は捕虜病院にいる通訳と連絡をとり、作成するように命ぜられた。通訳が、急ぐ仕事である、しつかりやれと肩に手をかけ、たたくように笑った。

近いうちにタイセット地区の帰国が始まるので、みなに体を大事にして作業するよう伝えてほしいと話した。彼はうれしくてか、私の手を握り、吉報を待っている第九収容所は第七収容所へ変わってきたこと、約五百人ぐらいの死者が出ている、このことも私に伝えにきたと言つて帰った。

千五人中五百人とは、私は亡くなったあの第九収容所の戦友に対して心より冥福を祈った。異国の雪の中で他界され、戦友の心の中はどんなであったか、第九収容所のことを思い、一日も早く帰国の情報を各収容所に知らすが私の役目であると心より誓った。

和歌山県 那須淳男

昭和二十三年五月一日を迎え、ボルガ河は過去二年にも増して大増水で、とうとうと流れていた。突然ソ連当局の命令で、自動車工場勤務者の中から四人を選び、国営農場のトラクターの運転に行けとのこと。最初はソ連に奉仕するようなことはしたくなかつたゆえ、トラクターの運転はできないと拒否したのであつたが、日本人首席から、ご苦労だがみんなのため、今年の祖国帰還のためにも犠牲になつてくださいと懇願されるまま、四人の仲間入りして、五月四日、国営農場へ出発した。

収容所から八キロの地点であつた。ここには農機具類の不寝番をする六十三歳の老人が一人いて喜んで迎えてくれた。宿舎は貨物列車の箱のようなものが置いてあり、その中は二段にして、四人就寝できるようになっており、今まで老人が一人で起居していたのであるが、私たちが到着するや片づけて、ここへお寝みなさい、自分は牧草の中へ帆布をかむり寝るのだと言う。なかなかお人好しそうな爺さんである。

翌日よりいよいよトラクターの運転を始め、バレイシヨの耕耘・植えつけ・覆土と一貫作業を毎日繰り返し行つた。ときどき破損した部品受領や修理のため工場に行くこともあつた。作業は、私たち日本人は交代で運転をし、作業機の操作はソ連人が行い、三人で運行した。一度に八列植えつけていき、片道千五百メートルぐらいを往復した。飯は現場支給で爺さんがつくってくれた。

大阪府 小森淳男

初めてお墓係を引き継いだときは泣きました。霊安室に積み上げられた遺体、そしてみな丸裸、そしてほとんどの遺体がやせている。松葉を刻んで焼香の代用品としたものだ。引き継いだ当初の日本人墓地は、山かげの湿地帯で、雪解けころだったので、埋葬者の手足が露出しており、埋葬しなおしたが、もし私が死んで、ここへ埋葬されるのだったら私はいやな気がするので、せめて見晴らしのよい、そして陰気でないところだったらなあと思つて、ナチャーニック、収容所長にかけあつたところ、話のわかる所長で、カマンジル小森、お前が適当な場所を見つけてこいということになり、今までの墓地より少々遠く、かつ上り坂になるが、湿地帯ではない、ジメジメしていない、眺めは満点。丸太でここに日本人墓地ありと、印に困つたので、鳥居をつくってきた。およそ千二百〜千三百人ほど埋葬されていると思う。

栃木県 小野寺進

冬のある日、私は町の所々にある公衆便所の掃除に連れていかれ、大小便が凍結して使用できないためボールやスコップで砕き、馬そりに積んで郊外に捨てに行つた。

広島県 星野豊

厳寒零下三十度の凍原には、氷片の粉が舞っている。そして地下二メートル余

り凍っている。その地下に水道管を敷設するとなると、年中凍らないところまで掘下げていく工事が必要で、しかも厳冬の時季に限る。早速この工事に取りかからされた。

栄養失調の体ではとても耐えられそうもない。つるはしを十回ぐらい打ちこんで、ようやく握りこぶしぐらいの凍土がぼそつとはがれる程度で、ノルマ達成どころの話ではない。パンの量も減るし、昼は飯盒の中に四、五粒の大豆が汁の中で泳いでいるぐらいでは、力の出ようがない。

新潟県 関口謙治

朝、掘立の草小屋を抜け出ると命令がきた。「今日から我が中隊はこの草原で草刈り作業を行う」中隊長の言葉に、みなぼう然とした。近くには自動小銃で武装したソ連兵士がこちらに銃口を向けている。強制労働だ。だれとなく皆んなに伝わった。文句を言う者もいなかった。

いつの間にか、ロシア製の鎌が用意されていた。各班ごとに鎌を一人一人が受け取り、草刈り作業が始まった。作業は簡単だった。草を刈るだけ。後は天日に乾かし乾燥すると、トラクターが一か所に集めるのである。

ところがである。なれるに従ってノルマが課せられる。鎌も切れなくなる。疲れる。何しろ朝晩おかげで、昼はパン一切れ、次第にみなが疲れていった。病人も出る。病気になっても草小屋で休むだけ。だれの看病もない。水もない。菓等もちろん皆無だ。

とうとう若い岡田君が、空腹に耐えかねて毒草を食べて下痢を起こし、栄養失調になってしまった。二、三日で亡くなった。お父さん、お母さんと叫んで死んだと友人から聞いて、涙が出た。みんなで土を掘り、埋葬した。野花を一輪捧げるだけの極限状態であった。

広島県 星野豊

やがて寒さがやってくると、間もなく吹雪となる。ここでもまた新しい作業ができる。道路はもちろん、広い広い飛行場までの除雪作業で、心も体も弱ってくる。次に氷点下四十度ぐらいの日が続きますと、鉄棒とスコップをかついで町のトイレの糞尿砕きという作業が待ちかまえている。さらに汚水にいたるまで割ってトラックに積み込み、バイカル湖まで運搬し、捨てるのである。数十日も続くと体から出る臭気は何とも言いようのないものとなっていく。

和歌山県 原寿一

昭和二十三年三月十八日、レグツード第二八八管理局に移動入所、作業としては既に完成しているダム工事の上を通って鑿岩機で岩を砕き、ノルマは一人三立米、朝鮮モッコに砕いた石を乗せ、ダムに石をほり込みに行く。その時栄養失調で、若い男が力なく石ごとダムに落ちこみ、何人が死んでいくのを目前で何回も見ている。

その後、中央サバクへ移動。幅二百メートルの大運河建設。ソ連が蒸気シャベルでトラックに積んできて、ダムを進めてゆくのだ。一人ジョレンを持ってトラック一台の土を五人で五十台がノルマ。もちろんふんどし一丁で裸、汗と土ぼこりでぞろぞろ。収容所に帰って水泳をして体を洗ったものだ。

和歌山県 入山敏一

他の地区に次から次へと移され、最終はチタの収容所に行き、吉田大尉の指揮下に入った。ここでは大きな工場で働くことになったが、私に対し、この収容所で本職である理容師として散髪をせよと言われたが、男の意地、日本人として「露助」の頭など刈れるかと言つてのけた。さすればたちまち幹部の態度が一変して、工場内で最も厳しく苦しい仕事をやらされることになってしまった。鋳物塊の三つ山を大づちで砕き、かまに入れやすいようにする仕事。

また、湯流しといって、バケツ状の重い容器を二人で担いで型に流し込む仕事。外は氷点下四、五十度であっても、工場内湯流しの仕事は上半身裸でない危険で、大火傷または死につながる。思えば私のような細腕でよくやれたものだといまさらながらゾツとする思いだ。

その次は、砂ふるいといって、製品を取り除き、砂をふるって翌日の仕事の作業準備しておくことであつた。これとてやさしい仕事ではなかつた。もちろん相変わらずの食料の不足のため、飢餓状態は続いていた。

シベリアでの電気屋さん

新潟県 金田市郎

昭和二十年十一月、琿春經由クラシキノ收容所をへてハロフスク第十七收容所におちつく。收容所での労働はおもに伐採及び木材の集積作業で、木に関係したものであつた。

山から帰り、皆と一緒に馬糧コウリヤンの浮いている重湯をすすっていると軍曹がきて、金田、御苦労だが衛兵所までいってくれとのこと。何の用かと聞いても軍曹にも良くわからない。ただ、電気のわかる兵隊をということらしい。

衛兵所へいくと、俺の顔を見て兵隊が何かペラペラ言っている。俺にはチンプンカンプンだ……。おかれて通訳がきて話がわかつた。軍医の部屋の電灯がつかないので修理しろとのこと。そんなことかとアパートの部屋を聞き、一人でいく。看視兵なしで。

八畳ほどのなかに電灯が一つ、テーブルに椅子が二個。タイマツで配線をしらべたが、フューズボックスはない。テーブルにあまり電球をはずして見る。フィラメントが切れている。新しい電球はと聞けば、ないと言う。困つた。また衛兵所へ。通訳を呼んで聞いてもらおう。新しい電球は区長へいけばもらえるのだ。電球をもらい、取りかえ、点灯する。何のことはない、ソ連の配線は内地と違い、ノーフューズ配線である。

明るくなった室内で軍医と奥さんの顔を良く見た。室内は何もない。つくりつけのストロープとベッド、テーブルに椅子。食器、下着等は見当たらない。俺達とあまり変わらない生活だ。電気屋初仕事を終り、ハラシヨで送られ、收容所へ帰る。それ以後、山から帰ると、よく呼びだされ、電球の取りかえをやらされた。

そんな主労働以外の仕事をしながら、柵の中で二つ年をとり、ハラシヨラボータとか言われ、ナホトカにむかう。ここでは電気屋集合で仲間五人といく。初日はふといワイヤを焼かされた。何でと不思議に思う。二日目、そのワイヤをといて金網をつくれと言うのだ。それも二耗角の目を針一本で一メートル二メートルを。一日中編んでもそんなに編めるわけがない。三、四日と続けてみたが、指先には血豆、彼はどなるばかり、一週間で首となる。

翌日、五人は別な男につれられ重労働の作業だといわれる。作業内容は建柱とのことだ。十五メートル柱をA型に組んだ場所の説明を受ける。一本を立てれば百%だという。五人では無理だと言うと、別に兵隊を三十人つけるとのことだ。五人といつても建柱経験者は一人、電車の運転、鉄塔屋、内線屋ばかりである。必要資材を港がおおつて動けない船よりはこぶ。昼となったが、我々には関係ない。皆んなに建柱の方法を納得のゆくまで説明する。

穴はほつてあり、建てるだけ。おこす方向につな二本、反対側に一本とソンモ、五人は根本を分担して建柱。そんな初日だったが、一時間ほどで柱は建つた。あとは根本をうめるだけ。直立を見ながらとけた水と一緒に土のかたまりをいれる。見る見るしたからこおつてゆく。うめ終わり二十分ほどで柱は動かない。つなをはずす。百%である。

そんな作業が続く。午前中で百%の重労働は楽しかつた。ある日、同人が二本を建てたら百五十%の話が出る。彼に、捕虜は百五十%、お前は二百%かと聞けば、首をコックン。にくめない男だ。皆んなと相談したら、建てるという。翌日から二本の建柱、十二時頃には收容所に。

ある日の建柱なかば、腕木部分が隣の電話線にあたり動かなくなった。根本

はしたにつき、どうにもならない。引きかたのつなを一本ゆるめさせ、柱が動かないよう両方でつなを張ってもらう。四十五度ほどの柱をつたつてのぼる。電話線を足でけりながら少しずつおこす。線がはずれるまでくりかえさす。そんなことをやつて地上におりた。

拍手の音で振り返ると、金ピカの軍人が二十人ほどハラシヨ、ハラシヨと言っている。通訳がきて、名前などを聞かれる。帽子をだせという。パピロスなど一つの帽子でははいりきれない。仲間の帽子もかりる。あとで皆んなで分配す。

また心配ができる。ハラシヨラボータでまた帰りがおくれるのではと五人で心配をしたが、それから一週間ほどで迎えの船が本国よりきた。無事に乗船できた。

ダモイだ、ダモイだとたまされながら山での労働、皆んなが休んでいるときの電気の仕事、舞鶴が朝もやの中に浮かんだとき、生きて帰れたと戦友とだきあつて涙した。

和歌山県 神前恵一

飢えと夜の寒さがジーンと身にこたえる。入ソ最初に病院勤めを命ぜられたが、衛生一等兵の経験しかないので、カーシア(お粥)の運搬と、毎日死亡する抑留中死没者のしまつで、屍室から凍土に掘られた墓までの運び屋であった。

A、B、Cという具合に幕舎病棟が分けられてあつたが、しかばねの始末は毎日三〜四十人ぐらいはあつたと記憶している。主としてタイセット地区からの入院患者が死亡者の数では圧倒的に多く、カルテ(病人名、病名、死因等を記したカード)はソ連側しか見ることが許されていないので、どこの誰であるかがわからなかつた。ただただ手を合わせて死者の冥福を祈るばかりであつた。

夜ともなると狼か野犬のいであらうか、とおぼえが聞こえ、朝見ると、むざんにも墓が荒らされていた。無情断腸の思いが身体中を走るのだった。

病院では、労働もできない者から順次帰国させるためのチェックが、軍医や政

治局員によつて始められた。二十二年頃からである。他の収容所からも多数の仲間達がソ連兵や政治局員達に連れられてやつてきていた。自分の番はいつの日になるのか、望郷の思いひとしおで、こころした状況を黙して見つめるばかりだった。

新潟県 三間國松

ソ連の規定では、零下三十度になると作業中止になっている。我々には適用されていない。私は長い山の仮ラーゲルで、栄養失調と疲労の重なりで倒れ、高熱、肺炎と中耳炎で入院した。ソ連の若い女軍医は、私をよく治療に当たってくれた。感謝するが、耳は難聴になった。命をもらつて二か月あまりで退院、女医の好意で、ラーゲルは無理と病院の勤務に残してくれた。

仕事は馬糞、ロシア馬はすこし小さくおとなしい。これはいけると思った。病院の資材運搬はよかつたが、戦友の遺体運搬は悲しかった。墓地まで五キロ、馬糞に三遺体ずつ。墓地を掘り返して、途中、シベリアツツジを折つて埋めて、これを立てて合掌した。自分もこの姿になるのかと涙が出た。

栃木県 富樫源次郎

二十年の年も暮れてやがてシベリアにも春が訪れた。このころからは大河は恐らく目測では三百メートルの川幅あり、この河に山から原木を切り出して仮橋を架ける作業だった。直径八十センチくらいの大木に四本の足を八の字に取り付けて、対岸と二組に分かれて橋脚を立てその上に乗せたを渡してさらにその上に横丸太を敷き詰め欄干もつける作業。八月いっぱいころまで続いた。週に一回くらい割で架橋の神様といわれる老人が来ているいろいろ文句を言われながら、二人引きの大鋸と日本の金太郎が持つような斧が唯一の道具であつた。道具がないのでできないと言つても捕虜の言い分は通らない。本当に情なくなつた。責任ある作業でもないのに、自然自暴自棄になつて、その日その日をいかに何事もなく

生きのびることしか考えなくなったのも事実だった。

二冬の酷寒を過ぎ一番つらかった作業は、鉄橋のアーチの足場組みであった。高いところへ登るので、寒さをしのぐ防寒具を着ては体の自由がきかないし、小休止のときはたき火をすればソ連の監視が来ては大声で怒鳴られ、折角のたき火を足でもみ消される。こちらは寒さに耐えかねて幾回消されても監視の隙をみては再びたき火をする。いくら叱られても凍死してはおられない。いくら怒られても死にはしないとふと腐れの気分になった。

熊本県 畑中眞澄

鉄道工事も一段落ついたので、次は水道工事であった。この工事は水道の基幹になるので、極寒のシベリアでは浅く埋めたのでは凍結して破裂してしまうので、相当深く埋めなければならない。

深さ七メートル。マンホールに当たるところは九メートルまで掘らなければならない。

工事の手順としては、掘り下げるに従って側板を組みながら進めるが、掘り下げると掘った土を上げるには三段構え四段構えで土を穴の外に出さなければならぬ。地中深く掘れば土のところばかりはない。固い岩盤に当たって困難したこともたびたびあった。真夏でも七メートルも掘ると薄い氷の層を見ることもある。これがツンドラ地帯の特徴であることを知った。

掘り終わると直径三十センチの鉄管が入られるが、その鉄管に三菱のマークがついていたのは驚いた。多分満州から持ってきたのであろう。土を埋めもどして、上部に一メートル土を盛って終了である。一メートルの盛り土は将来、盛り土が下がることを想定して盛る。

以上が我々の二年間における主な作業であったが、その他、住居の屋根の修理、丸太小屋の建設、ダイナマイトの穴掘り等も行った。

新潟県 矢部松二郎

点々と收容所を強制移動をさせられているうちに、寒いシベリアで二年目の夏を迎えた。やっと落ち着いた收容所は草刈り作業場であった。労働は軽作業であるが、定まった作業時間がなく、日の出から日の暮れるまで作業に追われる毎日である。

私の抑留されたこの收容所も三度の食事は実のないスープばかりだった。空腹をこらえて便所に行き用を足して帰る間もなく、地獄の鐘が、まだ明けきらぬ空にジャランゴン、ジャランゴンと気味悪く收容所のすみずみまで鳴り響く。「おーい起床だあー起床だあー」と叫ぶ声があつちこつちで聞こえる。「朝が早いので起きるのがいやだけど、スープが早く飲めるのでうれしいよ」意地を張ってつぶやく連中もいる。

時計を見ると午前四時、朝食のスープを胃袋に流しこみ表門の衛兵所の前に整列して、人数を点検確認して、ソ連兵の作業責任者より防虫面とロシヤ鎌を受け取り整列する。ロシヤ鎌とは、柄の長さが約六尺あり、中間のやや下のように取っ手がついている。刃の長さが約二尺五寸ぐらいあるだろう。三日月型になつており、その大鎌を肩に担ぎ收容所をあとにする。朝露を踏みしめながらヨロヨロ、ヨロヨロと歩く。時折肩の大鎌がキラリ、キラリと目にしみる。もうこのころは「シベリアぼけ」という言葉が流行していた。

草刈り作業場まで約二キロくらい行軍すると小高い丘に到着する。でこぼこであるが、見渡す限り私たちの首まである草原であった。だれが着たのかわからない色あせた夏の軍服も、肌まで通る朝露でビッシヨリ。

いよいよ作業開始だ。防虫面を頭からかぶる。紐を首で結ぶ。大鎌を肩からおろす。一列横隊に並ぶ。一番左端から右へバサリー、ザアーとなぎ倒す。三メートルくらい進むと次は二番目、次は三番目と順々に進む。ブウワンと蚊やブヨの羽音が聞こえて無数に空に飛び立った。朝露のため、蚊やブヨは草の裏側にとまっている。バサリー、ザアー、草のなぎ倒される音が朝の空気を揺がす。

栄養がないためか蚊やブヨに刺されると、体質の弱い戦友は発熱して入院することがある。あちこちで枯れ木を集めて燃やして、蚊やブヨを防ぐ煙が立ち昇る。

この地区の草刈り作業場は必ず毎日午後から一時間くらい、物すごいスコールがやってくる。ゴロゴロゴロ雷が鳴る。ザッザー大粒の雨が大鎌を握る素手にたたきつける。手の甲が痛い。ソ連兵は急いで雨具を身につける。私たちは牛や馬同様である。もちろんシベリア抑留者であることを忘れてはいけない。土砂降りの雨の中、昭和の月形半平太のごとくぬれていこう。下着はもちろん、ふんどしまでビショリとしづくがしたり落ちる。こんな情景になると、なんとなく日本のふるさとを思い出す。雨の音をリズムにして歌声が聞こえる。「泣くな妹よ、妹よ泣くな、泣いて叱った兄さんの、涙の声を忘れたか」歌は人生の並木道だった。やがてみんなが一緒に歌う。望郷の涙と雨のしづくが顔からしたり落ちる……。うそのように雨が降りやむ。

この草刈り作業場には食べものがある。美しく咲いた山百合の花、この花の根はラッキョウが重なり合ったようで、火で焼いて食べると最高だ。またスズランの赤い実や日本では絶対に捨てる真つ赤なキノコ、もちろん蛇やカエルなどは血眼になって探し、必ず火で焼いてむさぼり食う、生のまは絶対に食べない。生きるために得た貴重な体験である。

作業ノルマも終わり収容所へ帰っても、着替えるものとして何もない。被服は手で絞れるだけ絞り、またそれを着用して、夕食の汁をすすり民主主義の講話を聞き、やつと与えられた部屋の止り木に横になる。ハックション、ハックション、くしやみの音が続く。絞った被服は自分の体温で乾かすより方法がない。風邪でも引いたら大変だと心配するが、日本へ帰るまではと気が張っていたのだろう。今日まで生命があった。作業の疲れでいつしか眠る。ジャランゴーン、ジャランゴーン、地獄の鐘に夢を破られる。もう起床の時間だ。体を動かすたびにごとくに被服がガバガバ音がする。体温ですっかり乾いていた。

また昨日と同じ作業ノルマが続く。

自動車(トラック)解体作業

岩手県 奥寺信一

これは独ソ戦争の戦場等から引き揚げた何百何千台と一か所に集中してあるポンコツ車を一人一日一台を割当てられ、それが一日のノルマとしての解体作業でした。作業工程ですが、まず荷台を取り、運転席、機関回りと進み車輪を取り除くのです。エンジンを一定の場所に集める際は、六人かかっただけで担いだことを思い出します。車体の下回りについているナット類はスパナをほとんど用いず、タガネを使用して切り飛ばしたものです。製作するより解体する仕事ですから、案外気楽な作業だったと思っています。

その他いろいろさまざま、町工場に雑役的作業やトラックの上乗り要員として木材を積んだりでしたが、一番多かった作業は建築作業現場でした。

和歌山県 長峰泰夫

除雪は、初めのうちは、六十センチ角のベニヤ板に柄をつけたスコップにて、雪を道路に両側に寄せ、土をたたいて円弧にし、風が吹いても吹きだまりにならないように指示される。道路に積もっても、マシーナ(自動車)がスコップしきりように除雪した。そのうち雪の量が多くなり、また風が吹くと、雪だまりができ始め、道路も厚く雪に覆われるほどになってきた。

こうなつては鉄製のラバータ(スコップ)で道路下へ雪を放り投げるようになる。マシーナを何が何でも通すという監督の態度であった。聞くところによると、特にプランマシーナという十五トントラックに三十トンの有蓋ワゴンを引くものは、日時を決めて走らせて、目的地へ着けないといけない。重要な車だから、絶対ストップさせるなどという要請である。奥地では、やがてロータリー式の除雪車が来て、みるみる雪を吹き飛ばすのを眺め、ヤレヤレと思ったものでした。ところが、

迎えのトラックがなかなか来ない。また、走り出した。やっと来たトラックにはい上がり、転がり込んだ。収容所へ帰ったらふらふらとよるめいていた。夜中に起こされ、飲まず食わずに約十時間、吹雪の中を動きまわったが、こんな苦しい経験は初めてであった。

静岡県 熊谷精一

その後、一般の建物に移ることができた。仕事は火力発電所の石炭おろし、この仕事も昼夜二交代制二十人ほどにて、四、五百トンの石炭おろし、有蓋車は五十トン車、二十七トン車、石炭は天井近くまでいっぱい積んである。五十トン車の場合は八人ほどおろすのに一時間もかかる。それに無蓋車は塊炭、粉炭一回に十五回から二十回くらい入ってくる。なかなか力の要る仕事であった。目と歯だけ白く顔は真っ黒。昼間の仕事は石炭の種類によってはノルマの上がらない場合がある、特に塊炭などの場合スコップで一回一回おろさなくてはならない。カマンジールが時々作業を見て回りに来るが、ノルマの上がない場合などは昼食を食べることが許されない。

ニラショーラボータのためにそのときは夜間作業員の交替の人たちが来るまで作業を継続させられる。少ない食事で昼食抜きの仕事は、空腹を通り越してただ気力で仕事をしているだけ、それだけ我が身を削っている。石炭おろしの仕事は力仕事で大変重労働であった。帰りにはバーニヤに入ることが唯一の心の慰めであった。

大阪府 総元禄朗

よさそうな中年男が待つていて「おれはこの小屋の責任者だ。お前たち三人で小屋の中にあるれんがを積み上げ、まずパン焼き窯をつくってくれ」と、その設計図を見せてくれた。なるほど三人でパン工場をつくれというのか。ヨーシよい仕事にありつけたと考えると、気合いをかけて五日間でこの窯を仕上げやうった。男は

よほど気をよくしたらしくて、我々の隊長に面会を求め、続いて二人をパン製造工にさせたい旨申し出た。隊長即刻承諾したらしく、三人は当分の間、パン工場に向勤務することになった。

こんな場合、収容所を出れば、市民と同じ扱いを受けることになるらしい。朝五時に出向。夜は十時過ぎても天下御免。衛門はスイスイ通過することができた。

さて、毎日の作業内容は次のようである。

男の指導に従って教えられたとおりに行動した。二人は外でまき割りとお水汲み役。私は小船のような容器に、パン粉を定量の水、イースト菌を混ぜ合わせて醗酵させる。ある程度時間を置いてかられんが型した鉄の型枠に原料を詰める。一方では窯にまきを積めてどんどんと燃やす、燃えきった余熱でパンを焼き、ソ連独特のれんががパンができ上がる。変なことだが、パン窯は内地で見る火葬場の窯とソックリなのにガツカリする。

岩手県 田辺壮久

翌日からナホトカ港の石山作業である。石山を崩して石を一輪車に載せ、海に埋め船着場を拡張する作業であった。一輪車の車は丸太を輪切ったもので、年輪の硬軟によって楕円形に変形して丸く回らない。一輪車が横に倒れて石が下方で敷地中の仲間転がり込む。金棒で石山崩しの現地からも大石が転がる。大勢が上下に重なりあつての現場なので、石の下敷きになつての犠牲者が毎日出た。

港づくりの石山現場から三百メートルくらいのところに、日本の輸送船が二、三日おきに発着して白衣の日本の看護婦の姿が見えた。

日本輸送船を目のあたりにしての犠牲者は何とも気の毒で、労働環境の拙悪からの事故ゆえに痛恨に耐えがたかった。

岩手県 川村富弥

たどり着いたのはソ連国境のクエプシエフカ。宿舎はれんが工場の窯の中である。電気もない。昼でも真つ暗である。冬眠熊と一緒にいる。

何日か経ていよいよ点灯設備に入る。日本の家庭電圧は百ボルト、ソ連は二百ボルトのため、日本製の電球はそのまま通用は不能なため、私は水抵抗調節し点灯したため、一躍インジネールとなり、大変重宝かられ、その後れんが工場作業場では軽労働の機械給油係で大分助かったのである。

千葉県 村上武士

どこを向いても山らしきものは見えない。見渡す限りの大草原。小高い丘の向こうから、ちようどアリの行列のごとく進められている水道管敷設工事。延々と何キロ続いているものやら、皆目見当もつかない。四人一組となり、幅一メートル、深さ二・五メートルくらいと責任が分担されている。幸いなことに、夏期なので凍てはないが、まともな道具一つなく、ただ作業能率、ノルマだけを計算されるのだから、無責任きわまりないが、これが抑留者の宿命であろうか。

岩手県 本宮龍平

作業はサキサオールという灌木が砂漠に砂山のあちこちに密生している。軍用のまきにする油の多い木で、これを取る仕事である。タポール(斧)だけを持って森に入る。ノルマは一メートル以上の長さで、高さ一メートル、幅三メートルであったが、だんだんにナチャニツク(現場監督)に高さをふやされ、ノルマの達成は容易ではなかった。朝食は少々黒パンとスープを暗いうちに食べ、昼食はない。三食にすれば食べたような気がしないからである。作業現場までの距離は最初は二キロぐらいであったが、日増しに奥地へ伐採して進むので、その距離は加速度的に延びていき、一か月もすると六キロ以上にもなった。この砂山の道を歩くには、衰えた体力では容易でなく、現場に着くまでにかなり体力を消耗してしま

う。

島根県 八幡義隆

私は地方で何をしていたかと聞かれて、油差しをしていたと言った。技術者は帰れないと収容所での話だったのでうそを言った。仕事はアレモスネー(かんな盤)に油を差したり刃を取り替える。機械が四台あり刃を取り替えるのは、機械がとまったときと休憩時間だ。刃が壊れて板に傷が出るとすぐ取り替えねばならぬ。目立て工場の工場長はアロジオンカルポーピッチといってソ連人としては頭のいい方で、思想犯で十九年の刑でこの収容所に入ったという。おとなしくて、怒らないソ連人であった。あるとき刃を替えるときに私のハンマーと使いぶりをみてマッセル(技術者)だという。仕方がないので、ブリキ屋だと言った。かんな盤の刃の取り替えも大変だし。寒いので大手袋をかけてスパナを使ったり、ハンマーを使ったり、刃が凸凹していると板に傷がついたり、ブリキ仕事なら屋内でペーチカのそばでできるので、やったことはないけど、何とかなるだろうと、アロジオンがハロンスキー(好いロシア人)らしいので。

最初の仕事が煙突だ。乾燥場の煙突でアロジオンに教わりながらつくったが、寸法をロシア語で言うのでサツパリわからない。直径を板に書いてもらい、ロシア人は紙がないので、シラカバの板にカレンダー(鉛筆)で書く。これも日本兵から取ったものだろう。大変大切にしていた。単位はメートルで直径に円周率を掛けてマチャル(材料のトタン)に野書き、切りばさみで切り、(このはさみも大きなもので内地のはさみの倍くらいもある)どうにかつくり、アロジオンはハラシヨウと言ってくれた。煙突がどうにかできたが、それからが大変だ。乾燥場に煙突を立てよと言う。屋根の上に登って作業せねばならぬ。目立て工場に七人ほどいたので、乾燥場の兵隊とでどうにか取りつけた。アロジオンはミスキー(食器)やバケツロスカン(ペーチカの上に掛け湯をわかしたりする鍋で丸いおけのようなもの)や柄を付けた湯飲みのようなものを、満州から持ってきたのか、コールタールで塗った屋

根トタンを延ばした材料でつくる。水をとめるのにハンダがないので、油と土でねったものをかみ合わせの中に入れてつくるが、水はあまりもらない。とにかくだぶ仕事にもなれて楽になった。

岡山県 田中一司

私は主としてセメント工場作業であった。百二十余人の作業隊長として各部署で下手なロシア語で監督と交渉したが作業が進まず、部品がなかったり、設計図どおり組み立ててないと叱られたり、頭を悩ますことがたびたびであった。我が隊員には技術専門家がいたので、彼らを信頼し励まし合って難工事を切り抜けることができた。

石灰を粉末にして噴射点火の調子もよく、石灰岩を牛乳状になるまで砕いたりまぜたりする行程も調子よく、いよいよ傾斜した直径二・五メートル、長さ三十メートルの鉄筒(中ならせん状のみぞ)の中に、筒の上部から石灰岩(乳状)を流し下部から石灰(粉末)を噴射点火すれば、静かに回転する鉄筒の中に焼けた石灰岩が豆腐ほどになつて流れ出る。一回これを見て歓喜の声を上げた。これから種々の工程を経てセメントになる。わが隊員はセメントを手に乗せ、苦しめた二年余の作業をしのび、むせび泣きをした。

新潟県 中沢仁作

イルクーツクの收容所へも少数であったが移動した。そこでバイカル湖の氷割りをした。極寒でも耐えられなかった。ここでも死亡した同胞は全裸にされてどこともなく運ばれていった。

二十三年の春までいて、いささか記憶が薄いがウランウデ第八收容所に入所した。発電所の石炭おろし、機関車工場、運動場(スタジアム)新設作業、山を崩して三交代作業もした。

石川県 河原三雄

冬季の作業はとりわけつらかった。川面全体が氷結したトニプロ川に我々十人の班が出かける。分厚い防寒外套を着たまま、直径三センチ、長さ二メートルの重い鉄棒で氷面を突いて突いて穴をあけ、一抱えの大きさに仕上げた氷塊をトラックに積み込むのである。切りあげた氷の下には深緑色の流水がとうとうと音を立てており、足を滑らしたら最後、一命を失う危険さだが、過労と無気力からの虚脱感でさほどの恐怖心もわかず、トラックが戻ってくるまでの約十分間、氷上にぶつ倒れて束の間の安息を味わうのだった。対岸まで一キロの茫漠たる氷原に、刺すような寒気に耐えながら過ぎた。この無我の一刻が今に忘れられない。この氷塊は付近の農村の夏の飲料水に使われるということであった。

一番厭だったのは、何といつても粘土の掘削です。次は伐採です。伐採は二人引き鋸で相手と呼吸が合わないと全然切れないのです。粘土は凍って一枚板のように歯が立たないのです。解けた粘土は粘つてスコップから離れないのです。日本のような使いやすい工具であればまた別です。量ばかりの生産でろくなものがないのがソ連の現状でした。二人引き鋸一つみても、ドイツ製は鋼で切れ味抜群ソ連のものは生金で灰ならしに等しい。よい仕事はできるはずはありません。量もいけれど質のよいものでなければ、骨折り損のくたびれもうけ、労働者は浮かばれません。当時のソ連では、わかっているけれどもそれは無理だつと思えます。我々は重労働と言っているけど、お腹いっぱい白い飯を食べていれば重労働の部ではありません。年から年じゅうすき腹で栄養がとれていないから、何をやっても苦勞なのです。

新潟県 若月太郎兵衛

ミヤソコンビナート(肉)屠殺場のことである。仕事の期間は八月から十二月まで二十四時間操業二交替で、牛の場合は昼勤で六百頭、夜勤で六百頭、計千二百頭がノルマである。全部分業式で流れ作業である。貨車でどんどん運んでく

る牛を、八時間で六百頭も屠殺し解体し皮をはぎ内蔵を処理し皮は塩をぬり、皮革工場へと貨車積み、内蔵は分類され、ソーセージに食糧に、血液は蒸気でむし固まったものをダンボール箱に詰めて、内臓についている脂の類は、蒸気窯で熱し透明に澄んだ脂を汲み取り、ダンボール箱に入れて食糧や石けん工場へと送られていくのである。牛は満州物は脂がのつていて素晴らしい肉であった。かたやシベリア物はろくに食べ物もなく谷地坊主の草しか食べていないのでやせた牛ばかりであった。もちろん豚はごく稀で、二番目は綿羊であった。綿羊はノルマは牛の倍。一日に千二百頭(八時間)当たりで処理される。ソーセージもつくっていた。腸詰めである。腸を水道の蛇口につなぎ、石灰水のようなものでもみながら洗浄して、その中へいろいろ肉や卵やニンニクなど調味料を加えて詰め込み、燻製室につるして、下で火をたきながら仕上げるのである。ミヤソコンビナートにはもちろんビルのような大きな冷蔵庫がある。肉の種類別、等級別に、また燻製品と部屋が分かれている。

熊本県 井場寿春

作業は石山の石切り出し作業でした。ロシア人が爆薬によって爆破した石(花崗岩)を適当な大きさに切つて、貨車に乗せて積み出すのです。すでに雪が舞いただでさえ寒いのに、石は冷えきっています。作業はなかなかかどりません。三十トン積み貨車にいつぱいになるまで班長は帰してくれないのです。

福井県 天谷小之吉

そのころの気温は零下三十度で連日下がっていた。被服は満州で(開戦時)支給された。夏衣服と編上靴である。最近になって防寒帽と防寒外套、それに防寒手袋が支給された。いずれも旧関東軍時代の古いものである。せめて給食でもよければまだですが、まるで牛馬に与えるような粗末なもの、量にして腹に五分目ぐらいでは、寒さも一層強く骨身にこたえるのでした。風の強いときは鼻

頭や耳等は、時折摩擦をしなければ、ただちに白蟻となる。寒に恐ろしい。足もじつとしておればたちまち凍傷になる。

旧軍隊の編上靴で歩くことは、靴底が吸いついて、まるで磁気靴をはいているようで、一歩進むごとに冷汗を流す思いだった。

午前八時、收容所を出て右折二回して、南に向かって約一・五キロ進む。露天掘炭坑作業場に着く。すると付き添いの歩哨が現場監督のところへ行くと、各作業班ごとにその日の作業が割り当てられる。

朝食べた雑炊も若い我等には、もうグウグウ腹は減って鳴いている。このころの給食は余りにも残酷で今なお忘れられない。参考までに書いてみる。

朝ポーミ(唐黍の粉)の雑炊、五等一。この数字は、飯盒の中身の五分の一のこと。その当時の雑炊といっても、箸にもかからぬもので、ただ濁っている汁で、鯡の匂いがするから今日の雑炊は鯡のだしかと思つた。昼は乾ばん八センチ角ぐらい、暑さが一センチ程度のもの一人当たり二枚弱で、この乾ばんも、上官や古年兵に形の整つたものを渡すと、初年兵に配分するころは可愛想に、かけらばかりで量も減つて、(だから初年兵の死亡率が高かつた)、夜は朝と同様な雑炊の中に、ポーミでつくつた団子が入っていた。ラムネの玉ぐらいの大きさが、一人当たり十個ほどだった。これだけの食事が二十日余り続いた。そして枕木運搬やレール運搬の重労働の強制。

このころが給食として最悪の状態でした。班長殿は「今日は当たりくじが悪かつた、枕木運搬だ、事故のないように、気をつけてやれよ。」

枕木を肩に乗せたら確かに重い、少しでも早く運んで肩の荷をおろさねば、肩が食い込む痛さでやり切れない。百メートルから二百メートル遠いときは三百メートルを超える。凸凹道や凍水上のつべつべ道を冷汗をかきながら、一歩一歩身体で調子を取つて歩む。だれしも終着点に着くとほととす。全身汗ばんで帽子を取ると白い湯気が立つ、戻り道はぶらりぶらりと時間稼ぎ。そして始発点に着くとあまたかと、枕木をじつと眺める。

人それぞれに利き肩があつて、反対側には乗せられない。同じ肩で何回も運ぶと赤く腫れて痛くなるが、今は囚われの身なんだ、いわれるままに、為されるとおりに、あてがわれたものを着て、あてがわれた物を食べ、決められた時間は寒くとも暑くとも、牛や馬の如く我慢して、例え骨皮になつても息の続く限り働かされた。私の身体も限界、軍隊当時六十キロあつた体重が、三十七キロ迄落ち込んだ骨と皮。

そして一重の幕舎生活、連日北西の風でばたばたと煽られ幕舎内は寒く、四ツ角には一メートル余りの氷柱がへばりついている。

小隊長殿はエネルギーの消耗を極力抑えるため、「必要以外は喋ることを禁ず、目を閉じて横になつて休め」そうしてこの苦難を乗り切つた。尊い体験だつた。

漬物工場の作業

明日は漬物工場の作業と聞いて、ちよつと興味がわいてきた。ロシア漬は有名である。おいしいハルピンのロシア料理店でロシア漬を食べたが、実においしいと思つたことがある。

好奇心をもつて漬物工場に来てみると、その大きいのに驚いた。そういえば日本と違い、各家庭では漬物はつくらず、工場で一括してつくるので、その規模は想像以上であつた。

工場の内は、日本の酒造会社の仕込み桶と同じようなものがずらつと並んでいた。その数は相当なものである。作業内容は、一つの仕込み桶を六人が担当。桶の中に三人、外に三人と配置し、外の三人が材料となるキャベツ、トマト(熟れていない物)、キュウリ、塩を中に入れる。それは五メートルもある桶に梯子をかけて、それぞれを容器に入れ、梯子の上つて中に落とす作業である。この場合、キャベツは丸のままである。

中の三人は、落ちたキャベツをスコップで砕く、どのように砕いてもよい。そして、トマト、キャベツ、キュウリを適当に混ぜ、岩塩を振りかけて足で踏む。これが中の作業であつた。

一見簡単なような作業にみられるが、なかなか大変で、重労働であつた。そこで、午後からは中の者と外の者が入れ代わり、作業のバランスをとつた。一番苦労するのは、中盤梯子と外の梯子の上り降り、漬物工場は暖房はなく、外気と同じようなもので、私たちは防寒具の作業で動きは鈍い。

漬物工場の作業も、私たちにとつては苛酷なもので、一週間も続いたこの作業でみんな衰弱した。

炊事場の水運搬

抑留中、一番泣いた作業であつた。

収容所の炊事場に百五十メートル離れた水場から水を運ぶのである。その運搬する容器は、日本で見られるセメン樽を一回り大きくした樽である。その樽自体でも百キロ近くあるもので、それに水を容れて、炊事場まで二人で担いで運ぶのであるが、担ぐのがやつとという重さで、その重さに耐えながら歩くのであつた。凍結している道は歩きにくい。足に力を入れればなおさら滑る。五メートル歩いては止まり、また担いで歩く。肩に食い込んだ天秤棒の痛さは、百足にかまれたような言いようのない痛みであつた。この苦しみを、一日二回運ぶのであつた。

その肩の後遺症が今もあり、石を投げても肩に痛みを感じるのである。この肩の痛みが私をソ連人嫌いにしてしまった。

駅の除雪作業

二年目の冬を迎えたが、昨年よりもひどい豪雪に見舞われた。毎日毎日が吹雪で、収容所もとうとう雪に埋もれた。そのようなことから、駅の除雪作業に行くことになった。

貨物の積みおろしをする引き込み線で、毎日貨車が入るので、その日その日

の除雪作業が要求された。一尺角のベニヤでつくった除雪スコップで、雪を角切りしては反対に放り投げていく作業であったが、なかなか要領がいる。防寒外套を着ての作業だから簡単にはいかない。本気でやればすぐ疲れてしまう。ベニヤ板にのせた雪は結構重たい。量を少な目にしてやるとか、いろいろ工夫しながら、どうやらなれてきた。午前にも一回、午後一回、それぞれ十五分の休憩があり、そのとき、休憩所で初めて腰をおろす。収容所から駅までは四キロもあり、作業が終わって帰る頃は、空腹と疲労で雪の上に寝たい思いがした。駅の除雪作業は、二十二年の正月が過ぎても続いた。

ある日、駅に行ってみると、その日は他所の収容所からも除雪作業に来ていた。休憩時間にいろいろと話をしたが、そのとき海拉爾の部隊にいた者と出会い、より多くの話をしていたら、毎月、鉄道自殺をした抑留者が出たと残念そうに話をしてくれた。よく聞いてみると、その人は海拉爾のとき同じ内務班の栗原上等兵であることがわかった。

栗原上等兵は十三年徴集兵で、私が十九年十一月に入隊したときはノモンハン帰りの上等兵で、近く満期除隊があるということで随分楽しくしておられたが、ソ連参戦で除隊どころかシベリアまで送られてきたわけで、死を選んだやるせない気持ちはよくわかった。

空しいパン工場の作業

二月の半ばに、明日からパン工場の作業と発表された。みんな喜んだ。思う存分ばんを食べる話にその夜は賑わった。

翌日、軽い足取りでパン工場に行った。作業はパンの材料を積んだトラックから、その材料を降ろし、倉庫の内に運ぶ作業とわかった。

およそ四十キロもある材料袋を担いで、三十メートルの位置に運ぶので、四、五回も運ぶとうんざりしてきた。近くの製造工場からは、出来上がりのパンの匂いがプンプン鼻をついてくる。

午前中の休憩時間には、オヤツ代わりにパンが出るかと思つたが、その気配す

らもなかった。午後と同じ作業で、オヤツは何の姿も見せない。何と浅ましい奴かと、自問自答して収容所に帰った。収容所に帰ると、パンのおみやげがあるだろうと首を長くして待っている戦友がいた。

材木運搬作業

三月に入って材木運搬作業に行った。収容所から一時間トラックに乗った。着いたところは、大きな河の辺りであった。

その河はオビ河の上流であるが、上流といっても、大きな汽船(船の両脇に水車をつけて進む)が走っていた。

三月の早春とはいえ、シベリアはまだ凍土である。しかし、風は幾分春めいたぬくもりをもっており、心を和ませます。作業は岸边にある材木を陸に上げ、それを二人で担いで、きれいに並べる仕事であった。よく見ると、私たち以外にも作業をする者がいた。ドイツの捕虜とシベリア送りの囚人(ソ連人)であった。ソ連人の囚人は必ず腕に入れ墨を入れられているのですぐわかった。

哀しい墓地の整理

三月の下旬頃から、誰言うもなく、この春は帰国できるようだと語っていた。

その頃のある日、十名編成で墓地の整理作業に行くことになった。もちろん、私たちの同胞の墓地である。

冬の間亡くなった者たちは、雪がかけてある程度である。ツルハシで穴を掘って、その中に埋没するのであるが、凍土は堅く、ツルハシを打ち込んでもツルハシは滑るばかりである。何とかして掘り安らかに眠れるようにしなくてはと頑張ったが、無理であった。あきらめて合掌した。涙を流しながら。

新潟県 若月太郎兵衛

材木運搬と女性監督ホーチャ

バーム女性監督ホーチャは小柄な丸顔の四十歳ぐらいの可愛い小母ちゃんで、先祖は日本人だったとか、人なつっこい女性である。彼女は我々を戦争の犠牲者

だ、気の毒だ、一日も早く日本へ還してやりたい、親兄弟妻子も首を長くして待つているでしょう、君たちには罪はない、罪は帝だ、一握りの軍財閥だ。ソ連人と君たち労働者、農民は皆兄弟だ、我々には国境は要らない。事故だけがをしないように、凍傷には絶対ならないように気をつけなさい、我々は大切なあなた方をお預かりしているの、もしものことがあったら申し訳ありません。困ったことがあつたら私に言いなさい。赤鬼の国へ来て、こんな言葉を耳にするなんて、夢にも思わなかった。耳を疑いたくなる。しかしホーチャの言葉には嘘がない。人間愛ヒユーニズムだ真実だ。我々こそ、今までだまされてきたのだ。はてな、これは買収か、懐柔か、眉つばか、ゆつくり時間をかけて見ることだ。本物か、偽善か、それにしてもよい監督にめぐり合わせたものだ。すさんだ我々の気持ちも大いに和らいだ。この監督の指示で木材運搬が始められた。

私は木材運搬はお手の物だ。一番大きい物からどんどん運んだ。他人の持てない物を片っ端からいとも簡単に運ぶので皆驚いている。私のほかにもう一人おつた。彼も玄人である。三、四日続いた。そして一段落しハラシヨラポータ、作業優秀者として表彰された。賞品も出たのである。賞品は何が出るのであろうか。ついに出了。お米である。命の糧でもある。量は驚くなかれ缶詰の小缶に一杯。日本では私は稲作農家だ、百五十俵もあるのに、情けない。それでも誰もお米を拝むこともできないのだ。皆にわけてやるほどの量でもない。私ばかり、よだれ垂らしている皆の前でどうして食べればよいか迷った次第です。これも一つの思い出の部に入りました。

煉瓦工場は鉄道省のもので全部レールが敷設してあります。一号から十号へエチカ、レンガ焼の釜で大きい釜は生レンガを積み込むのに二十人くらいで一か月もかかります。製品となり貨車六十トンに積み込むのに一週間もかかります。何車両も一回に焼き上がるのです。年間割当は百五十万枚です。工場長はノンハン事件に参加し負傷した軍人上がりで、いつも勲章略綬をつけていました。

凍てつく北緯五十五度、北樺太の北端と同緯度、人間の住む限界点バーム収

容所である。煉瓦の原料粘土は一枚岩のように凍ってツルハンもバールも受けつけない。仕方なく電柱のような材木を一日じゅう燃やして掘るのだが、二、三升ぐらいしか掘れない。ジレクトル、ザオダ工場長は飯にもパンにもならぬとかんかに怒っている。怒ったつてどうにもならぬのに自然現象、寒いのだからどうしようもないじゃないか。

そのころ、我々の食糧がなくなり底をついていた。一日の食物はスープ水と岩塩に馬鈴薯二、三個、黒パン三百グラムのほかはなにもない。自分の身を食うほかなかつた。肋骨は洗濯板、湯たんぼだ、栄養失調だ。それも切れた、何も無い絶食だ。それでもサイレンが鳴れば作業整列だ、工場へ皆出かけた。仕事どころではない。生ける屍だ。ホーチャは、仕事は休みだ、ストーブの回りに集まりなさい、お話でもしましょうという。空腹を抱えていい話も出るわけもない。それでも心温かなホーチャの心づかいが地獄に仏というところだった。腹が減って声も出ない我々を我が子のようにいとおしむ。彼女は観世音菩薩のようであった。

突然ドアを蹴るようにして工場長が怒鳴り込んできた。ポチム、ニエラポータ、なぜ仕事をしないのか、ホーチャ、彼女は毅然と立ち上がった。ヤポンスキー、サルダート、日本の兵隊さんは何にも食べていないのです。ソ連人は何も食べなくても働きました。預かっている日本の兵隊さんを何も食べさせずに働かせることはできません。ソ連の恥と思いませんか。彼女の言動態度は残念ながら日本では見られない光景でした。実に感動しました。工場長は帰す言葉もなく、勝手にしやがれと立ち去りました。工場長は先にも述べたとおりノモンハンで日本軍にたたわにされた恨みがこびりついているのです。

バームで二年近くホーチャとかかわりを持って暮らしてきました。やがて第一次が降り、我々残り二百人はチタへ転属することになりました。ホーチャは目を真っ赤にして泣きながら一時も早く平穩に日本海を渡ってください、家族が待っていますから、ご苦勞様でした。これがソ連人だ。このソ連人と戦えるか、我々は日本軍国主義こそ敵だと憎むようになった。同じ人間同士、何で戦わねばな

らぬのだ。ヒューマニズムだ、人間愛だ。平和の架け橋となることだ。ホーチャは国境を越えて我々に多くのことを教えてくれた。ホーチャは丈夫で暮らしているだろうか。一度、会いたい。

イワノフ・ホーチャ、我々は一生あなたを忘れない。国境を越えたヒューマニズム人間愛、正義感、勇敢に自分の意思をたとえ誰であろうと恐れることなく主張する女性、すばらしかった。そしてあなたはいつでもどこでも惨めな我々にパンをタバコを与えてくれた。あなただつて配給なのに、我々は偶然ながら幸せだったのだ。

六十何万の戦友は恐らくそうしたことはいないだろう。ホーチャありがとう。日本の皆さんはだまされたんだというが、そうではない。人間の良心真理だと私は反撃するのだ。既に四十五〜六年経つて、あなたは八十歳代だ。いいお婆さんになっているはずだ。生きておられるだろうか。当時二十六歳ぐらいの私でも七十二歳になってしまったのだから、本当に一度でいいからお会いしてお礼やお話しなどしたい。元気で生きていてください。

和歌山県 北又光夫

入ソ当初、特技のある者は申し出よとの話がありましたが、特技ありと報告すればダメイできないことになるのではないかとお互いの話の中で出たので、申し出をしなかった。でも、かような重労働で食べ物の少ない状況では命がないと、思いついてトラック運転手であると申し出ました。

すぐに「ハラショー」よろしい、「ダバイ」すぐ来いと言つて連れていかれたところはトラックの車庫で、三十台くらい並んでました。「ダバイ、ダバイ」で乗せられ、早速案内つきで走り出しました。一時はどこへ連れていかれるのかと不安で、山道を登り始めたときは殺されるのではないかと思いました。着いたところは日本人の抑留者ばかりで、やれやれの気持ち。「ダバイ、ダバイ、ヴィストラ」早く来いと言う。早速、五、六人集めて木材を積ませることにした。私は運転台で休んで

おれということ、一車に積み込むまで四、五十分くらいだろうか、ゆつくり居眠りさせてもらいました。

トラックが材木満載になれば、私にダバイの命令で発車です。当然案内つきで、着いたところは広い集積場で、近くにソ連人の家が点々と目につきました。もちろん引き返すときも私は何もせずに終わり。ソ連兵の歩哨は何度も「ハラショー」ラポーター」と言つてくれて、本当に仕事は楽で、褒めてくれ、最高の気分でありました。大工、左官、理容師など、技能者は皆、復員後の話では、命を保つて帰つてきているようでありました。今考えれば、私はよくも運転手であつたものだと思いました。

しかし、冬来れば内地と反対で、ラジエーターにお湯を入れ七輪(かんでき)で火を起こし、オイルパンの下でオイルを暖めなければクランクが回らない。これが一番の仕事であつて、毎朝のこととして出勤までにエンジンをかけなければ「ヨオポイマーチ・ハラショーニエツト」と言つて歩哨にどなりつけられることも何度がありました。いつでもかかりやすい車を先にかける。次にワイヤーをかけ引つ張る。この段取りで上手にやり遂げました。全車のエンジンが動き出したときは最高であつて、次はなれた仕事としてハンドルだけを持つておれば一日の作業は終わり、楽な仕事であつた。運転手様々でありました。だから、無事幅員できたのだと思います。

滋賀県 松本晋二郎

コルホーズへ

二年目の五月ごろ、体力テストの結果コルホーズに回されることになった。厳寒のこの国も、夏ともなると真昼の太陽はじりじり照りつける。草刈り作業に何日か汗を流した。草は人並みの高さで、長い柄に大鎌のついたロシア鎌で、二メートルぐらいの間隔に横一列に並びバツサバツサと刈り進んでいくのである。作業中の楽しみは、刈られた草の中から小動物が飛び出してくる。時にはまむし

(蛇?)がニヨロニヨロ出る。するとカンボーイが、ヤポンスキー・ビタミン・ビタミンと呼ぶ。早い者勝ちである。捕らえるとその場で口から引き裂き、串刺しにして腰にぶら下げた缶詰の空缶に入れておく。昼休みに捕獲物を焼いて食べるのである。現場への道すがら、野草や食べられそうなものは何でも食べた。生きんがためとはいえ、餓鬼道の亡者であった。

馬鈴薯の植えつけを済まし、そうこうするうちラーゲルへ帰るよう指示された。いよいよダモイが実現するのかと内心、心が踊った。

石川県 垣内久米吉

生まれて初めての綿摘み作業に出る。防風林に囲まれた綿畑は、十二月ともなれば一面褐色の枯れ木のみである。取り残された真っ白な綿畑があった。ウズベク人の監督の指示で、一列横隊に並んで、葉の茎も枯れた上部に付着した綿花を摘んで袋に入れていくのである。

体力の衰えた私たちには、中腰になつての作業は五分と続かない。どの畝を見ても、綿袋をかたわらに置き、腰をおろして雑談に夢中である。

一日にわずか数キロしか摘めなかつたが、翌年の夏に出掛けた折は、一人平均三十キロという成績であった。“一番綿”を摘むときの新鮮な快感に魅せられたわけではない。成績の上下が食糧の配給量に比例したからである。ウズベクの娘たちは、綿摘みの成績が嫁入りの第一条件であると教えられた。

和歌山県 笹内武夫

昭和二十二年八月、馬の取扱い経験者で木材運搬の運送希望者はいないかというので、これに参加希望して四十人ほどで「パコスナヤ」へ移動した。そこでの作業は、長さ四メートルから六メートルの長物木材を二本又は四本に結束して馬に挽かせて七キロ乃至八キロの行程を運搬することであった。途中で傾斜度六十度くらいの急坂を駆け下りてゆく「スリル」は楽しいくらいであったが、まかり間

違えば命を落とすかもしれない坂道であつたので程々にしたが、下り切つた所は浅い川でかなりの水しぶきが上がつて爽快でもあつた。

千葉県 宮崎定雄

昭和二十一年九月二十五日ごろより測量助手の補助仕事でした。

インボ付近の農作耕地の測量です。監督はソ連人。スターリン政策批判の流刑者で、前はモスクワ大学の教授とのこと。助手宮川氏は大泊付近炭鉱の測量技師とのこと。

小生は箱尺、木杭、円匙、鉋など携行随行し、指示により箱尺立て、支え木杭の穴掘り、杭埋め、邪魔な雑草灌木の除去の仕事でした。監督は休憩時間を多くして、草の実、木の実、野草を採り説明し、栄養、特にビタミンの補充を率先実行、試食する。野苺、薔薇の実など、五十年後の今も思い出します。

十月末ごろより、木造堤の工事関係測量に変更。線路に流れる川水を防ぐため、堰堤建築。春先、河川の凍結と解氷と雪解け増水で水面が盛り上がる。当地の小川四メートルくらい。木堤、高さ六メートル、長さ二〇メートル。底面に二メートル方形の暗渠を造り、土管一メートル五〇センチ円形のもの、線路地下二メートルを通す工事の設計と測量。

この工事中、約百メートル沢向かいの山腹で用材伐採中、倒れた大木斜面に加速、先に倒した大木に衝突。この大木、方向を九〇度変換、沢を飛び越えて三十メートル斜め下にて作業中の大工・松村君を直撃です。ウウンと言つたのみ出血もなく、五分くらい後、小生接近時、脈拍なく呼吸なく即死でした。

イズベストコワヤより支線を北上して、転々と三、四カ所移動。作業は電柱立て。地面を二メートル掘り、埋める作業です。地面は一メートルくらいまで凍結していて、焚き火して鉄棒で掘る。一メートルより下は、湿地土砂、小石、雑草木で、深まると湧水で難儀。一メートル五〇センチくらいで掘り止め、監督を誤魔化して立てました。

平成四年七月初め、この地帯を臺参に訪れたとき、昔の電柱、先端地面すれの物、支柱により四、五メートルの物を架線のみ新しくして使用していました。

次の仕事は工事器材の番人でした。夜十七時より朝八時まで、器材小屋の外の不寝番。廃材で三面囲い、屋根にも廃材を乗せ、風雨を防ぐ所を自分で作った粗末な物でした。風に弱く、翌日建っているのが珍しい有様でした。二月でも明け方、気温零下四〇度以下の時もあり、凍死しないため焚き火を切らさず、手足を常に動かし、眠らず十五時間過ごすつらい生活でした。

夜勤の最後は踏切番でした。二坪くらいの小屋。後ろに四坪くらいの倉庫、馬鈴薯や穀物を入れて施錠してありました。夜十七時より朝八時まで不寝番と、前の線路の踏切番でした。列車は勤務時間中一回から二回、不定期通過です。

警笛が聞こえたら遮断機を下ろして、列車通過後、遮断機を上げる楽な仕事でした。季節も初夏で、少しの焚き火で暖を取り、暇を持て余し、晴天には星空を眺め冥想に耽ることのあつた楽な勤務でしたが、良い時期は短く、二十日くらいで終わりました。

短日数の作業で、馬扱いがありました。最初は、満州より連行した日本馬で糞便運搬でした。生まれて初めての馬扱いです。春先、氷の溶けかかった糞便を鉄棒で砕き、円匙で馬そりに積んで川に捨てる作業です。十五日くらいで解氷が進み、終わりになりました。その間三回の仕事は、馬が思うように動かさず作業が遅れ、慣れた人の半分以下でした。昼食のスープ運搬は三十分到着が遅れ、作業員に迷惑を掛け、一回で終わりました。

秋には乾草刈り採り、運搬作業でした。去勢していないロシア馬で、日本馬の二倍くらいの大きさでした。扱いは素人では無理です。馬の意志で行動、私は握った手綱を引きずられるのみでした。草刈り作業三日目、帰営時、営門直前で営内にいた牝馬を見たのか、突然発情、柵を開ける間もなく、馬そり諸共体当

たりです。衛兵二名に押さえられ、柵を半分壊して止まりました。私は気持ちが悪く動転して動作不明、大分叱られました。翌日、馬扱いクビ。処罰はなしでした。

マンホール工事。地面を六メートル掘り、直径五十センチの給水鉄管を埋設する作業です。凍土は岩石より堅く、焚き火で暖め鉄棒にて砕く。一メートル過ぎると凍結はなく、深まるほど土砂は掘りやすいが、一メートル幅の穴、狭さのため、土砂の地上搬出が大苦勞です。中間に板を並べ、二段バネ、三段バネです。五メートル以下では、馬穴に針金又はロープを付け、上より巻き上げの難工事です。ノルマは上がらず、時間延長が時々でした。

次は官舎建築。二階建て一棟の建設でした。私の仕事は壁塗りで、不器用のため仕事が遅く、なおかつ下手。三日でクビでした。次は官舎の不寝番です。塗られたの壁を凍らせないため、各室八個のペチカの火を焚き続けることで、夜十七時から翌朝八時まで一睡もできず、二カ月間、大変な重労働でした。

福島県 石黒庄七

二十一年、分所を転じてOKとなり、休養分所で休養。三カ月で検査、また労働分所へ。その後はゾーナ。昭和二十三年ごろ、通信作業。電線延長、架設、柱立て、補修。作業は一個班三十人。ソ連の証明書を持って日本人だけの作業で、各分所を転々移動。歩哨がないので、若干のんびりと作業ができた。ポーツワニよりテルマの間と思うが、地名は定かでない。

新潟県 片桐貞夫

ここはタイセットから百十キロくらいのところだそうだとだれかが言っていたが、定かでない。十一月ごろだと思つたが転出命令が出て、五〇人くらいだと思うが、次のラーゲルへと移動した。歩いて二〜三時間くらい、十キロ足らずのところだと思ふ。

この収容所は三百人くらいだったと思う。作業の内容は、谷の埋立てと、山を一つハツパで飛ばすんだということだった。

最初は、トラック七、八台で土砂を機械で積込み、谷を埋める仕事。私は、機械積みで、バケットでたかれるのか、トラックのボディが壊れてその修繕だった。前の収容所で建築をやったので、そんな仕事をさせられたと思う。

間もなく、山を二カ月くらいで飛ばすということだった。谷の埋立ては二カ月で終わり、車両班の人たちは移動していった。

山に二メートル角くらいの穴を掘り、火薬で飛ばすということだった。つるべ掘りとか、天秤掘りと言っていたようだ。井戸のような（二メートル×深さ一〇メートル）穴を二十カ所くらい掘り（約二カ月かかった）、六〇トン貨車に三十両くらいきた火薬を仕掛け、四キロ四方、全員退避命令が出され、翌日正午爆破だった。

ドーンとにぶい音がして煙がもうもと上った。夕方に解除命令が出て現場を見に行った。幅二〇メートルくらい、長さ百メートルくらい、山が飛んで掘割が出来ていた。すごいことをやるもんだとみんな驚いた。この作業はこの大仕事が終わりに、私たちはまた、次のラーゲルへと移動した。

兵庫県 森田 純

昭和二十年十一月の中ごろだったと思うのですが、移動命令が出ました。行く先は不明で、十台の貨物自動車に分乗して、氷の川を通路として三日ほど方向もわからぬまま進みました。そして到着したのは製材工場であった。大きな丸のこ、帯のこが動き製材の音がしていた。この地で暮らすことになるんだと言われ、それぞれ作業（仕事）の内容が伝えられて小隊が解かれて作業内容によって小隊編成がされた。作業内容は、鉄道敷設、製材工場要員、軽便鉄道従事者と大きくわけて三部門に分けられ、私は軽便鉄道の機関車従事者となった。運転士、罐たき、連結士と三人一組で三台の機関車を扱うことになり、二交代で十

八名で組織され、それに整備士が五名加わり軽便鉄道が動いた。

機関車の燃料は薪で蒸気を発生させていた。エンジフターで川の水を補助タンクに入れ、薪を機関車の後部に満載し、原木を山から製材工場まで運搬する仕事でした。一番困るのは、冬季マイナス三〇度〜四〇度の日は鉄は凍り、機関車の動輪が凍り、よくすべつて脱線したとき、周りは雪また吹雪、手は凍り人間自体の動きが鈍り、ノルマに追いまわされた時は生きた気持ちではありませんでした。作業内容は原木運搬の繰り返しで毎日、日曜日の休暇は最高の一日でした。

私たちのラーゲルはブライツクという地名で製材とタイセットから鉄道敷設が主な仕事でした。工場内は帯ノコと丸ノコがあり、原木（カラマツ）を、ほとんど枕木をつくって各方面に搬出していました。このラーゲルには二千人ほどの旧関東軍兵が生活し、一般の作業は鉄道敷設で、土盛りとレール敷設で、ターチカ（今の一輪車で木製です。車輪は鉄製で、タラップを作り、その上を押す方法です）で土を運搬して、一日のノルマが一立方メートルが自分たちの生活で、衣、食、住でゼロというノルマでした。だから一日にどうしても一立方メートルの土を土盛りせねばカンチャイ（終わり）ではありませんでした。カマンジールの点検をうけて一日の作業が終わります。

だが、夏季はほとんど八時間以内に終わりゆつくりと作業ができたのですが、冬季は凍土となり、朝から掘る場所で火を焚き凍土を溶かして運び、また溶かして運ぶの連続で、一日ではノルマが終わらなく寒さと空腹と疲労と一日の日照時間の短いのと、労働時間が十時間以上も長くなり、やっと寝たかと思えば起床で仕事という毎日が続き、一般作業隊の人々はまず食うということに神経が集中して、内地でのポタモチ、巻寿司、すきやき、米のめし、その他食う話だけでした。また、ポタモチが夢にまで出てきた人も数多くいました。

和歌山県 河端亨之

「ネーベルスカヤ」の収容所に入った。

収容所には一個大隊を千名として四個大隊が収容されていたように思える。牡丹江を出発するときは大隊長、中隊長の名も知らなかった。ソ連収容所では阿部少佐が大隊長ということであった。収容所はバム鉄道の最終点であるため、「OTS」「TTS」と言つて、鉄鋼関係、機械、土木工具、木材関係の工具など、ソ連の物資とか満州からの分捕り品(満州内での各工場の資材や機械その他)、雑貨の集積・地区収容所への雑穀物の配送などの雑役をやらされていた。二十一年三月末ごろまでは作業らしい作業はなく、私の場合は三個班の一班として二十名を引率して作業に当たったが、多くは「TTS」とかいふ鉄鋼材や工具関係の倉庫の整理整頓であった。

全く驚かされたのは、満州からの戦利品の多いこと、十五丁焼玉エンジンが百台以上もあり、それらも整理したし、他にも「OTS」といふ被服や穀物倉庫が収容所に隣接して並んでいて、そこにも作業に行くと、それらの倉庫に並行して引込線に貨車が六両から八両分(六十トン車)入ったら、一両につき各幕舎から一個班二十名を出役させて卸下する作業の競争をさせられたものです。その外、主な仕事は、木材を運んできて炊事用に又は各幕舎(これも独ソ戦当時の戦利品だという人もいた)のストーブの燃料として薪を作る仕事であった。

東京都 金子亮輔

行く先はウラジオストックの街の中にある、港の造船所の所に繋がれている「サマルカンド」といふ船の収容所である。貨物船で、中に日本人が百五十人ぐらいいたと思う。大体、千島列島方面にいた陸海軍の兵隊であった。日本人は街の中にある工場及び造船所へ作業に出た。一番重宝がられた電気、建築関係、特に電工、大工、建具屋などの人々は、労働に対する報酬があった。後は樺太(サハリン)より来る貨物船の修理と掃除、私は俗に「かんかん虫」と言う「ペンキ塗り」

の作業に、又は日によつて掃除の方に回された。人数は一個班十五名くらいだったと思う。

島根県 中島正義

昭和二十一年四月になると、二〇八キロ離れた第二十分所へ転属、相変わらず伐採作業中、技術者の調査があった。私は入隊前海軍工廠にいたので、製鋼、溶接の技術を習得しており、同年八月ごろさらに一七五キロ離れた場所で鉄橋の仕上げ作業班に入る。鉄道の貨車が宿舎で人員は十五名くらいであったと思う。監督は政治部員であつて、陸軍技術将校でモスクワから派遣され、三十歳くらいの有能な青年である。作業内容は組立てだ。鉄橋のボルトを外すのはソ連人二人、日本人一人で、全部ではなく緩んでいる箇所だけにする。ロシア人は緩んでいるか、締まっているかを、ボルトの頭を叩いただけでは分からず、日本人の技術者が点検して目印をしてから外していた。

リベット焼も三人一組で、火が真つ赤なうちにつけ、ノルマは八時間で二五〇本くらいが標準であつたが、仕事は大変神経を使い、きつい労働である。これを、二五〇本から三〇〇本つけたときは、「ヤポンスキー、ハラシヨ、ラポーター」と大喜びで、ウオツカを一緒に飲み、マホルカ(たばこ)をくれたこともあつた。この地の鉄橋が完成すると、次は二三〇キロ離れた別の場所と同じ工程の作業をした。ある日、作業中、監督将校が給料を支給するから事務室に来いと言われ、行くとい五〇ルーブルずつ初めてもらい、金の有り難さを感じた。

石川県 宮村利雄

シベリアを東奔西走した一軍医の青春

昭和二十年十一月末から千名単位の大隊に編成された日本人の貨車輸送が始まり、私も衛生部員八名だけの一車両に入れられて、一カ月の旅路について。毎日、他の貨車を見回つて患者の有無を調べたが、時々ソ連の軍医からパン

の特配があつて羨ましがられた。

ウラル山脈を越えたのは十二月十七日、目的地のタンボフには二十四日着。郊外のガーダの半地下営舎に收容されて初めて武装解除を受けた。ここには日本人が四千人以上、ドイツ人が四、五百、その他数カ国の国の人がおり、正に国際ラーゲルの観があつた。思ひぬ所でドイツ語が役に立ち、和やかな親善の一時もあつた。

極東やシベリア地区の日本人が一冬で死亡者が多発したというので、翌二十一年、モスクワからの命令で援助に行くことになった。六十名の衛生部員が三班に分かれ、特別待遇の寝台車で旅をしたという例は他になかったであろう。

極東の中心地ハバロフスクに着いて軍医は各地にばらまかれ、私は第二シベリア鉄道の要地、コムソモリスクから東方、樺太方面に向かうムリー地区の僻地、コス克蘭ボに着いた。初めは鉄道工事の大隊の中隊長をさせられ、九月二日、同地の三〇九九病院に移つたが、朝起きてみるともう白一色の雪景色であつた。

伝染病棟を担当したが、続々入院してくる下痢患者のために懸命に働いた。ソ連側の女医が長期休暇で留守の間は、二百数十名の患者を抱えて食事時間も惜しい毎日であつた。

肝心の薬は、満州から略奪してきた日本のものが主だったが、黒龍江沿岸に多いとされた「アミーバ赤痢」には特効薬がなく、血便の患者を洗腸しながら、ソ連製の「デイスルファン」という薬を用いて、一週間ほど折るような気持ちで経過を見守つていたことを今思い起す。

この他の伝染病には腸チフスや流行性出血熱、森林ダニ脳炎があつたが、幸い大学時代、病理の石川教授の講義を聴いていたので、処置については他の軍医よりの確にでき、ソ連の院長から「よくやった」と褒められたことを覚えている。

死亡者の解剖には日ソの医師が立ち会つたが、結果は病歴と共に必ずハバロフスクの本部に送られていたにもかかわらず、今日までソ連側の死者の発表が、いづもい加減な数字であるのは納得がいかない。遺体は手厚く土葬にされ、墓標

に日本語ではつきり書いておいたのだが、いまはほとんど消えているのではなからうか。数百に及ぶ墓標が建つ小丘の情景は、今も私の脳裏から離れない。

島根県 高尾敏教

昭和二十年十二月になり、寒さも本格的となつたころ、昼夜の別なく貨車から材木下ろしをやらされた。雪が降ると、鉄道線路の除雪作業や飛行場の滑走路の除雪作業をさせられた。零下四〇度は超えていたと思う。徹夜作業で、このときは、珍しくウオツカの水割りの配給があつた。抑留中、このような待遇を受けることは二度となかった。作業隊の編成が始まり、機械工場、煉瓦工場、建築現場などに分散して作業にいくことになる。

私は地方での職業を生かし電気関係の仕事に就くことができた。機械工場で一般ソ連人と同じ仕事をし、対等にノルマを達成することができた。だが、この作業も長くはなく、次の組み替えて煉瓦工場へ行くことになる。作業は三交代制の粘土掘りで、作業隊中一番の重労働で、寒さと空腹でノルマの達成ができず、ほかの作業隊に迷惑をかけることもあつた。毎日作業隊のノルマを掲示していたが、五〇パーセントを上下していたときには営倉へ入れると言つて收容所長から叱られたこともあつた。

京都府 谷 才治

労務は自動車修理工場でトラックなどの木部の取り付けや取り替え、修理などであつた。私の職業は指物大工なので木工作業は得手で、若い兵隊を指図して自動車の修理を行つた。しかし、食糧が少ないので弱つた。朝食は、ヒエ、トウモロコシなど雑穀の粥が飯盒の蓋に一杯、昼は黒パン三百グラム、夜は朝と同じ雑穀のかゆだが少し濃い目とスープ(塩汁)だった。これでは労働を癒すには少なすぎて夜寝ても食べ物の夢を見るばかりだった。現地人の話では長い戦争のため、ソ連全体が食糧が不足していると言つていた。

広漠千里とはこのことか、どこまでも続くモンゴルの砂漠、夏でも夜になると冷え冷えとする。それが冬ともなれば、零下五〇度ぐらいまで下がる。朝の作業出発の午前七時半になって、零下三五度以下の場合には気温が上がるまでは待機させられる。三四度ぐらいになって現場へトラック出発となる。兵隊は身を寄せ合つて凍土を走るトラックにゆられていた。

翌二年目の労務は木工場であった。工場や個人家庭で使う木製の道具や家具などを製作する。机、椅子、戸棚から寝台なども作っていた。日本では家具などにニス塗っていたが、ここではそんなものは無かった。白木地のまま仕上がりだった。二年目になつても相変わらず食糧不足だった。来る日来る日も雑穀粥と塩汁で空腹を抱えての労役だった。

岩手県 佐藤竹男

ソ満国境を越えて最初に着いた所は草原といった景色で、小高い丘陵がある原っぱが果てしなく続く所であった。戦友たちの話を照合すると、ここはソ満国境の近くで、昭和十六年の関東特別大演習に備えてソ連軍が対峙した横穴式の兵舎だといふのである。当初とんでもない所に来たといふ不安と、これから先どうなるのか、日本へ帰れる日はいつ来るのかといったその日暮らしであった。最初のラポータ(労働)は草刈りで、果てしない地平線がどこまでも続く地の果てといった寂寥感が体中に広がる草原であった。その草刈り作業はつらいものであった。作業は長時間労働のため喉がとても渴いた。

朝、夜明けと同時に狩り出され、太陽が地平線に沈むまで(沈んでもしばらく)働かされ、作業中の喉の渴きは文字では表現し切れない程つらいものであった。草は夏の間狩り、それから乾燥し集め、冬湿地が凍結したところでトラックで運搬するのである。

私は冬のトラックの上乗り中に手足が凍傷にかかつてしまった。トラックには詰めるだけ積みロープをかける。収容所へ帰る最後のトラックなので、ロープにつ

かまり振り落とされないようにするものだから、手足(特に指先)を凍傷予防のため絶えず動かすことができず手足の指先が凍傷にかかつてしまった。幸い手の方の指先は元通りに戻ったが、足の指先、特に左足第二第三はひどく、冬の入浴は苦労している。湯につけたり戻しながら、徐々に暖めながら時間をかけるのである。その度にシベリアでのトラックの上乗りを思い出すのである。

滋賀県 橋本健二郎

クレドールの駅の前の埋立作業は割合長く続きました。木の箱に鉄の一輪車のついたターチカ、いわゆる現在の一輪車で、山を発破で壊しては積み込み、足場板の上を走つて低い谷のような所へ運びました。このノルマが毎日何回と決まつており、みんな使い易い一輪車やスコップを取り合ひしたりして頑張つたこともありました。お昼頃になると、遙か遠い収容所の方から牛の車にスロープを積んで来るのを今か今かと待つたものでした。毎朝の点呼時には、ノルマの達成票があつてスタハノフ(ソ連の成績のいい労働者)に続けとアジが飛んだものでした。

前にも述べたようにノルマが高い人は表彰され、幾らかの賃金がもらえるようにもなりました。ノルマも食ノルマと作業ノルマがあつたと思います。身体検査と言つてもお尻の肉付きを見るくらいでしたが、これによつて一級、二級、三級、オカと決められ、それによつてノルマも多少格差はつけられました。

島根県 田中勘助

落ち着いたと思つたら、作業に行くのだと厚い二本指の手袋を渡されて門を出た。外は寒い。石山に連れていかれる。玄翁げんわうと鉄棒を持つて大きな石を小さく割る仕事、なかなか割れない。叩く場所が悪いと幾ら叩いても石は割れない。鉄棒も同じである。よい割れ目を見て突かないと駄目である。手袋がすぐ破れる。鉄棒に生身が当たつたら大変、くつついてしまう。零下何十度なのだろうか。ラーゲリに帰つたら手袋の修理、そして腹が空くので食べ物の話ばかり。ポタ餅が

食べたい、いつまでこんなことをするのか、一人ではとても耐えられなかったろう。大勢だから凌げたと思う。

二、三日して、今日から街の工場の仕事に出るのだと、各小隊毎に門前に並び、ラーゲリの看守と外の歩哨部隊から派遣された警戒兵との間で員数引渡しをする。五列に並び替えてなかなか手間取る。四列では掌握出来ないらしい、驚いた。腕時計を取り上げて、ネジが切れたら故障と思っている兵のいることは聞いていた。行列の前後に警戒兵がついて行く。各小隊毎に作業場所は違っていたようだ。街の名はサルカンドと聞く。シルクロードで知った名前、遠い所に来たものだ。

色々な建物を建設中のようにだった。我々の作業は穴掘りだった。基礎作りらしいが、冬は寒くて固く凍った土は岩盤のようである。鉄の矢をハンマーで打ち込んで掘るのだ。力が要る、腹が空く。昼だといふのになかなか食事にならない。ようやく食事が来たと食堂前に並び、そして渡されたのが薄い小さな黒パンと、これもまた薄いハムのようなもの一切れ、一口でなくなる。呆然とする。とても仕事する気になれない。小隊長は秋田見習士官だったが、彼も怒ってストライキだと道具を投げ出して、寒いので体操を始める。現場監督らしいノツポの男が「エラポーター」とやってくる。言葉は通じないが多少解るらしい。小隊長とやり合っている。「何故働かぬ」「食事がないので働けない」「ソ連はノルマがないと食事が無い」「ヤポンは食べないと働けない」と片言で身ぶり手ぶりを加えて言っている。監督もあきらめたか、ブツブツ怒っていたが行ってしまう。

警戒兵も工場に着いたらどこかに行ってしまう。工場内では責任はないらしい。道中だけが任務のようだ。それからあまり作業せず、時間が来たのか警戒兵が迎えに来て帰る。ノルマというのはその時に知った。穴掘りはなかなかノルマの上がない作業だ。翌日から昼食はラーゲルから持参したが、三〇〇グラムぐらいの黒パン一個だけだ。仕事は、帰る時鉄棒を打ち込み電流を通しておくと翌日は土もやわらかくなっているので多少はかどりだした。二、三カ月後ということ

だった帰国の話もない。ダモイは八月に延期になったらという話が出てきた。

広島県 稲村 香

入院した頃はすっかり痛みもなくなり、食事は黒パンから白パンに変わり、スープも肉が入り、比較的自由な生活が続いて勿体ない毎日であった。ちょうどその頃病院の責任者で加野軍医さん、後に岐阜市の医師会長を務められた人物で、収容所長の信頼の厚い人であったが、その人から、退院したら診察室で内科の助手として働かないかとすすめられた。戦時中は通信兵としてモールス通信のことならいざ知らず、衛生兵としての経験は全く持たない者に来るわけがないのでお断りしたが、炭坑で命を堵して働くより診察室で働く方が安全で幸いではないか、よく考えて見ると説得された。必修要件は、一、ロシア文字で氏名が書け、読めること、二、多少の会話が可能であること、三、薬の品目を覚えること等であった。いろいろ考えた。今後何年この地で抑留生活が続くのか、内地に還るまで生き続けねばならない、それなら安全な仕事場を選ぶべきだと決心して、すすめに応じた。

退院して内科の診察室で白衣をつけ、三瓶軍医の助手として指示を受けた。なかなか慣れないが一生懸命頑張ったお陰で三瓶軍医も可愛がってくれ、よく指導してもらった。

ある日モルヒネ〇・三グラムを三グラムと間違えて与え、患者がフラフラしてとても炭坑に行けないと再診を願い出て練兵休となった。あとで三瓶軍医にひどく叱られたが、それ以外は気に入ったようであった。暇があれば診察室内外の清掃に精を出した。ある日病院の責任者でロシア陸軍大尉のナチャーニクが「稲村、ハラシヨラポータ」と大そう褒めてくれたことがあった。それ以来、毎月の体力検査で検査官の少佐が一級を宣しても、ナチャーニクが記録表に三級と書き込んで長期間病院内に留めてくれた。

ナチャーニクの子供に四歳になる女兒がいた。可愛い子で、名はカーリーナと言

った。母親が毎日診察室に連れて来るので暇があれば遊び相手になつてやつた。よくなつて私を離さないようについて来る。ある日母親が私を家に連れて行き、馬鈴薯を牛乳で炊いたものをご馳走してくれた。あの美味しかったことも思い出に残っている。マダムが日本のこと、両親のことなど聞くので、内地を出て五年近くなる、一度でいいから父母兄弟に会つてみたいと話すと、マダムは涙を浮かべてカニエーション（肯定語）と理解を示してくれ、今年の秋頃には第二回目のダモイが実現するかも知れない、その時にはナチャーニクによく話して帰国できるように頼んでやると言ってくれた。

熊本県 西崎 通

その後、技術要員として、ボイラー発電所各工場一般、ソ連人宿舎、関係照明の保安作業を日夜交替でやつた。それから二カ月、現地より一・五キロのところに小さい工場ができるので、その地点まで送電線及び電話線の架設をするように私に命令が出た。

冬期間で電柱建設の不能な状態であつて、当時は零下四十度ぐらいであつた。地下二・五メートルくらいまで凍っている。どうやって電柱を建てますかとソ連人の責任者に尋ねたところ、「ヤポンスキー、ガラバ、ハラシヨ」と言うので、通訳に尋ねたところ、「日本人は頭がよいから考えて実施するだろう」ということだった。

そこで私も考えた。送電線を新設する工事の期間は何年ぐらいか尋ねたところ、冬季四カ月ぐらいの臨時工場であり、冬期間待てばよいとのこと、人生最初で最後の仕事、世の中にあまりない電柱建設に取りかかった。地形見当幅二十メートル、距離千五百メートル、伐採（工事要員三十人）電柱は付近の木材を切り倒し、皮を剥ぎ、白樺の木で上の腕木をつくつて建設することをソ連責任者に話したところ、さっそく実施命令が出た。いよいよ電柱建設の準備。荷馬車三台、水樽三基用意完了。我々同志、各受け持ちを分担し、電柱づくりをし

た。運搬作業開始。電柱は定置へ、水運搬係は水汲み作業と共同作業である。さっそく電柱は凍りついた。零下四十度の電柱建設は初めてでもあつた。

架線二分鉄筋の短い線を継いで張ってくれとの指示があり、鉄道のレールを切断した金敷きを使用、たたいて鉄線で締めつけ接続した。このときもソ連の物資の不足を強く感じた。架線に取りかかり張線の段階がきた。私はソ連責任者にどうして線を締めるのかと質問した。ソ連責任者は私に手を合わせた。ソ連にもこんなしぐさがあるのかと思ひ、話を聞いたら、我々の同志が手を合わせてお願いするしぐさを教えたそうだ。

張線の機具はない。我々は日本人大工二人を要求した。ソ連責任者は、我々同志二人を連れてきて私の仕事を見守っていた。内容を話したところ、それは簡単ですわと言った。そして私の希望通り即席かくらさんを数時間できくり、丸太棒の中心に穴をあけ、棒を差し込み、付近の松の木に鉄線で輪を二方所かけ、中間棒を回すごとに線が締めまり完全に張線が終わった。喜んだのがソ連責任者「タワリーツシ西崎、ソルダート三人出せ、幅三十センチぐらいの板一枚ずつ持つてこい」と言ったので、同志三人がソ連責任者のところに何の用かと思ひ通訳とともに炊事場に行った。驚いたことには、二キロ黒パン十五個とたばこをたくさん「お礼だ、ヤポンスキーソルダートに食わしてくれ」とくれたのだ。我々同志も皆喜んで、久しぶりに腹いっぱい食糧にありついたのである。

発電所の作業班にも二人の同志が編入されてきた。三日後、送水ポンプを回すモーターが故障になった。水なしではできない。ボイラー、工場の設備の機械も停止。怒つたのがソ連コマンジール、「お前が責任者だ、パッサージ」と繰り返し怒るだけである。私も我慢できず、「ハラシヨ、パッサージ」と繰り返した。仕方なく機械を点検し、数時間後修理して機械を活動させた。ソ連責任者は私に、「タワリーツシ西崎、ダモイ・ニハラシヨ」と言った。そのとき、我々技術者は当分ダモイはできないと同志間で話し合っていた。数日後、急きよ転属になった。行く先は当地より十キロ奥だ。短い期間の当収容所であつた。

今度の転属者は技術者少数で、電機関係、大工、機械関係、計八人であった。私は今度で三回目の転属収容所である。前に当収容所にいた同志が帰国したので、その後の補充要員であった。私は前と同じく発電所勤務、ほかの同志はマアセルスカヤ、職場では同じ作業で、ソ連人の連携ブレーの行き届いた指令には驚いた。

今度の発電所には、以前二人のソ連人が勤務していたようだ。囚人出の地方人であった。昼夜交替で私ども二人、ソ連人二人、昼勤務が私どもで、二人仲よく助け合って、帰国のことばかり研究していたところ、突然同志が病気で入院、私一人の勤務になった。当発電所の前方に、我が同志の死体収容小屋が十坪ぐらいの丸太づくりであり、そこも私に管理せよとソ連責任者の命令が出た。それは戸締まり及び同志が亡くなったときの戸の開け締めに立ち会うだけだった。ただ、犬が出入りせぬようにとのことだった。

東京都 飯塚年男

作業は、初めのうちはまき拾いとか道路修理など雑役で、だんだんときつい作業をするようになった。ノルマなんて言葉も聞いたこともなく、月に一回くらい五十グラム入りのマホルカの包みを四、五人に一個の割合でナチャニック(監督)がくれた。捕虜条約の規定などその存在すら知らず、「うちの所長はいい人だ」など言っていた。ただ、言われるがままによく働いた、一ルーブルももらえずに。

作業から帰って、夕食が済むと、屋外で点呼がある。十列に並ぶ。日本の軍隊では四列で並んだが、ソ連兵は四人四人では数えられないらしい。収容所に勤める人は、みな予備、後備の元軍人で階級章をつけた将校もいる。所長は尉官で、人事係や作業係は下士官である。将校の所長は別だと思いが、そのほかの人は、足し算、引き算はできるが、掛け算、割り算はほとんどできないらしい。地方人も同じようである。

あまり寒くないときなど、面倒がつて外とうを着ずに出てひどい目に遭うこ

とがある。一列十人ずつをアジン(一)、ドワ(二)、ティリー(三)と足して計算していくのであるが、ときどき間違えることがある。そのたびに初めからアジン、トワ、ティリー……とやり直す。六、七百人ほどいるので、二十分以上かかる。寒くないといっても零下十度以上はある。屋内に逃げ込むわけにもいかず、点呼の終わるまでガタガタ震えながら立っていなければならない。

この人数の計算は、朝夕の作業隊が出入りするときも同じ、朝はいいが、帰りに作業隊が一緒になるときがある。五列に並び直して入るが計算が遅い。後方の者は寒さに耐えて待つていなければならない。

セナコースから帰ってすぐだったか覚えてないが、二二〇分所に移された。この収容所の仕事は、テルマの町のパン工場から、水や薪の配達、公衆便所の掃除など、いろいろである。

私はここで、支部のペーチカたき、糧秣庫での糧秣を貨車から倉庫へ運び、収容所へ分ける仕事。パン工場では黒パンづくりの手伝い。器材庫では、バラのセメントや石灰の移しかえ、夏は石灰など体にべとつき、冬はセメントが零下二十度以上にもなるが、靴がはけないのでその冷たさは大変なものである。その他、油倉庫やデッポ(機関庫)などの仕事もしたが、特にデッポの炭車からの石灰おろしはきつい労働だったし、危険も伴った。

大きな炭車の下のハッチをあけると、石灰がザツと落ちてくる。それをシャベルで後ろへ払いのけるのだが、炭車はあとからあとから何両もひっきりなしに入ってくる。はねた石灰は山のようになっているが、滞貨車料をとられるのか、二十四時間、交代で働かされた。冬は、石灰が凍ってハッチから落ちないので、上に上がってボールで砕いて落とすが、石灰と一緒に落ちて大けがをする者もいた。

この二二〇分所は、私のシベリア抑留生活の中で思い出の一番多い分所である。つらいこともあったが、今は懐かしく思い出される。

二二〇分所にいるとき肺炎でテルマ病院に入院し、退院すると、どこかの分所

(二〇五か)で薪用の伐採作業をし、それからクレドール近くの百何分所だったか、ここではワクター(衛生兵)の仕事をするように言われた。

朝は、各方面に出かける作業隊の人数の確認をして見送ると、夕方まで休み、また帰ってくる作業隊の人数を確認し終わると、明日の作業隊の行く場所ごとの人数を近くの警備中隊に報告に行く。そして夜の十二時には、収容所の下の方にある駅に電話をかけて、収容所唯一の時計を合わせる。ロシア語も、単語を並べて話は通じた。今はすっかり忘れてしまったが。

この分所でビスカンボイ(補助警戒兵)というのをした。腕に「BK」と記した腕章をつけて、カンボイ(警戒兵)と一緒に作業隊についていくのである。カンボイが足りないのか、草刈りに何日か行っただけだったが、暑い日差しの下で仲間が草を刈っているの、少し手伝おうとすると、カンボイが「お前はカンボイなんだから、ラポータをしてはいかん」と言う。ただ立っているだけで、仲間の視線が痛いくらいわかる。嫌な仕事だった。

昭和二十三年の暮れ、待望のダモイということ、残留組に見送られて貨車に乗り込んだ。着いたところは、およそダモイとは関係のない、葉の落ちた曲がった木の多い寒々とした収容所であった。ここで薪用の伐採を一カ月ほどして、この第一分所からハバロフスクの第二分所に移った。ここは大きな収容所で、各地区からいわゆるアクチーブを集めて、収容所で宣伝活動をするため二カ月ほど教育する講習会場や、れんがの建物もあった。

二十四年四月の末、『日本新聞』に、イスベスチャだったか、「今年中に日本人捕虜を全員帰還させる」という発表の記事が載っていた。

ダモイの望みが出てきたものの、この収容所のラポータはきついのが多かった。大きな丸石をハンマーで割るのである。ヘトヘトになるまでたたくが、ちっとも割れない。一緒に石を割っていたポリスカーロフのような大きな囚人が来て、「ここをたたけ」というしぐさをする。そこを目がけてハンマーを四、五回打ちおろすと、あら不思議、ポカッと二つに割れたのである。石の「目」というのがあるような気が

がする。それがわかるようになる前にほかの作業に回された。

ハバロフスクの駅で冬、小麦などを貨車に積み込む作業をした。十人くらいで一組になってするのだが、六〇トンという大きな貨車に、七〇キロの小麦の袋なら七〇〇袋も詰め込むのである。零下四〇度になっても、ラポータ禁止は輸送作業には適用されないというのである。高さ二メートルもあるタラップを、ぼろ手袋をしているので、袋の端をつかめずただ背負ったまま担ぎ上げる。塩の九〇キロの袋なんか担ぎ上げるときは、背骨も足の骨も折れるんじゃないかと思っ

た。夏、アムールの川岸でトラックに砂を積み作業をし、帰りが遅くなることがあった。対岸は満州、小興安嶺に沈む夕日を見たりして、六月が過ぎ、七月、八月とダモイ列車が何本もハバロフスクを過ぎていき、九月も末になると朝晩はとて

北海道 五十嵐甚吉

も冷え込み、私のダモイはなく、とうとう十月になってしまった。担当病棟は結核と伝染病の患者で、病棟は天幕の内側に板材を使用してお

がくずを中に入れ、冬もストーブだけで十分の二段ベッド式で、病棟は五〇人収容の一棟から五棟まであり、ソ連の軍医と日本の軍医が各病棟に二人、看護婦三人、准看護婦一人という編成だった。別棟に手術室、レントゲン室、薬局、炊事室と整備され、軍医、看護婦の宿泊施設等完備していた。四キロから二百キロ程離れている約十五カ所の各収容所から、栄養失調から外傷患者まで毎日のようにトラックで転送されて来た。各収容所には医務室があっても応急手当てのみのため、重患になつてから、また、トラック等の都合で転送が遅れるため、入浴して被服を取り替え、病棟が決まり、タンカで運搬途中死亡する人もいた。

千葉県 鈴木 博

八月末に鞍山市内旧自動車隊の三角兵舎にいた。ソ連軍の命令で満州製鉄所の施設の解体作業に日本軍隊が動員された。一部情報によれば満州製鉄所従業員、特に満人にソ連軍の命令で解体作業に従事させようとしたが、何十年と製鉄所に働いてきた人達は、その解体作業には殺されても参加しないと作業に出て来なかった。止むを得ず在鞍部隊に要請、いや強制的に命令して、朝に夕べに星を見ながら朝六時から夕方六時までソ連兵がマンドリン銃(自動小銃)を肩からぶら下げての監視付きで労働させられ、その機材は満鉄の船舶でソ連へどんどん運搬され、短期間に終わらせるために〇〇工場は何万とか懸賞金を懸けていたが、そのお金は製鉄所本社の金庫を占拠して支払っていたそうだ。

九月半ばまでに解体作業は終わり、製鉄所幹部社宅一三〇戸の警戒に将校以下十三人、私もその一人として社宅内に起居して警戒任務に就き、十月上旬に大宮中学校に集結して、十月十二日午後富士見小学校に集合、シベリア行きが編成された。

石川県 藤澤 栄次

初めて手にする大きな草刈鎌の操作は思ったより難しく、両手と腰の廻転による要領は容易に修理出来ず、その上草いきれと、凹凸の谷地坊主の足元のためにノルマ達成は極めて困難であった。

入ソ初年度の冬は、慣れない労働や食糧不足に精神的要素も加わり、栄養失調や熱病による死亡者が連日続出した。

北海道 竹島 秀雄

補給小隊の私はしばらく薪山伐採作業に従事していたが、今度はアムールの氷上作業に回された。氷漬けになっている川船を氷の上に揚げる仕事で、陸と違い氷上を吹く風はひとときわ冷たく肌を刺す。しかも作業器材は粗末な先の

尖った鉄棒と木の枝に鉄板を打ちつけたようなスコップで、鉄棒は厚い手袋をつけているので氷に穴があいた途端に滑ってストーンと川底に落ちていった。すると現場監督は激しくのしり、作業能率のパーセントを下げた。作業能率が一〇〇%以上になると増食になったが六〇%以下は減食の罰を受けた。

やっとこの仕事が終わると今度は水道工事で、一メートル以上も凍結している表土を道路に沿って幅五十センチ、深さ百五十センチの側溝を掘る作業も道具はやっぱりこの鉄棒と鉄板スコップで、硬く凍りついた土は鉄棒の手にビーンとしびれる衝撃がくるだけで容易に掘れない。真冬日になると顔は防寒帽で包んでいるが鼻の頭と手足の指が凍傷にかかりやすく、ソ連軍は「日本兵は仕事を休むためわざと凍傷にかかる。以後凍傷にかかったものは営倉に入れる」と厳しい通達を出した。

そのうち私は幸いにも今度は屋内作業に回された。なめし革作業の仕事で、アザラシの皮が大半で屋外倉庫にびつしりと積まれていた。現場監督一人と二人の女性に指導され、初めは汚い仕事で気持ち悪かったが、そのうち皮から削った脂肉を飯盒で煮詰めスープにすると、少量のふすま汁に一切れの黒パンで飢えている者には貴重な食材となった。けれども衣服が皮の脂で汚れ、異様な臭気を発散させるので皆に嫌われたが、この脂肉を持ち帰り分けてやると、すごく喜ばれるようになった。

北海道 北野 實

收容所の作業も終わり、二班に分かれラポート、工場行きである。收容所から三十分ほど歩いて引込線まで行く。客車の古い車両であった。また、帰りもその汽車が工場の引込線のある所で待っていた。

工場名は「フロンゼー」「セルマーシ」という二つの工場であった。

作業内容は、各人の前職を生かし就業することであった。機械工、製図工等、色々である。それ以外の人は雑務である。煉瓦工場、掃除、整理等であった。ソ

連も、独ソ戦にて工場等は切迫した所まで運営して戦ったと思われる。中に日本製の工作機械が据えられていた。ネームプレートもあった。驚くと同時に、何か郷愁を感じた。

溶鉱炉の中に屑鉄や鉄鉱石を入れ鑄物を造る。それは農機具等の部品であった。春になると、一部の人が工場の外に出て建築の仕事をするようになった。現場近くに穴を掘り、そこへ水を引き運び混ぜ、中に草等を入れ強度を増すためである。平地に砂を撒き、その上へ並べていくのである。雨が少ないので十日もたつと硬くなる。煉瓦が出来上がる。二個出来る型枠を造って、その中へ上からたたきつける。枠を持って砂を敷きつめた所へ持って行き木枠を取る、出来上がりである。

遠くフィンランドより、一両毎に一棟分の建築資材が積み込まれて来る。設計図をたよりに建ててゆく。そのうち二棟、三棟と仕事をするたびに早く出来上がるようになって「ノルマ」も上がる。ナチャニックから「ハラショウラボータ」と言う工場の食堂で昼食をいただくこともあった。また、外の仕事なので通行人、タール、ウズベック人等からパン、タバコ等をいただくこともあった。彼等には木材が不足か、小さい板端でも必要なのか、持つて行く。歩哨はどこかで休養でもしているのか、気にしないようであった。道路は石畳であった。一輪車でロバに声をかけながら通り過ぎる。少しは自由を取り戻した気持ちになる。

近くの川辺等にカーミン石が、石炭のボタ山のように随所に高く積み上げ集積されていた。この地は春から秋口まで雨が少ない地方であった。米、綿、果物等が採れる。ラクダも道端で綿を背に積むのか、横になつている。道路も石がきれいに敷き詰められている。延々と続くこの道は、昔は西南「シルクロード」へ続くのであろうか、何やらわからぬ言葉で通り過ぎる。

ラーゲルで慰労会があり「戦艦ポチョムキン」「石の花」等の映画を鑑賞することができた。これも帰国のための民主化美化運動の一環であるのか、数年ぶりの映画であった。

カミツシヤ(視察官)が来る時には収容所内を隅々まで清掃する。また、食事も日頃溜め置いた分量を使い、副食等も盛りだくさんのメニューが用意され出された。革命三十周年のお祝いがあった。

各ラーゲルの競争のためか、美化活動であるプラカード、花壇等、新しく手入れをした。

ウポールナヤ(便所)

北海道 澤田清吉

収容所のトイレは衛生的立場から、バラックから五十メートル以上も離れたところに造られている。一段高くまわりは囲つてあるが、トイレの中はまったく仕切りというものが無い。一尺五寸幅の長い板に、丸い穴が並んであけてある。これにはヤポンスキーは全く困惑する。鳩の巣のような一つ穴を使つて大小便を処理しようとするから大困難である。

ロスキーがたまにこのトイレに入つてきて用を足すことがある。ヤポンスキーの横に並んで、ズボンをおろしてしゃがんだかと思うと、三十秒もしないで用を足して出ていってしまう。これには、どうなつているのかと驚いたことがある。ヤポンスキーはこうはいかない。この一つ穴を使つて、大は大、小は小と上手に区別して用を足さねばならない。そうでないと、たちまちトイレは修羅場となつて大変なことになる。

酷寒零下三、四十度のウポールナヤを、月に二、三回、各班から三、四人の使役が出て作業する。道具は鉄棒とスコップである。大便が鳩の巣穴から、まるでノツポビルのように突き出ている。そこで鉄棒が主役。まずノツポビルを途中から崩していくのである。そのうちに、その破片がシューバの毛の中に入り込み、それを知らずにバラックに帰ると、それが溶け出してきて大変なことになる。自身で工夫しながら四年あまりを、とうとうトイレトパーパーなしで生き抜いてきたのである。

神奈川県 丸山國武

入院中考えていたのだが、どうせ運命のいたずらで一人残されてしまったのであるから、無事元気に退院したならば、この病院でどんな仕事でもよいから働こうと決心し、退院と同時に勤務員になることを志願し申し出た。これには病院側や旧ソ連軍の責任者も驚いたらしい。何故ならば今までの退院者で働こうとする者は一人もなく、全員「ナホトカに帰りたい」と申し出て、誰一人としていつ帰れるかわからないこの病院に残る者はいなかったのである。私は、どんな嫌な仕事もやった。人の嫌がる作業には、いつも手を挙げて積極的に先頭に立った。患者の世話をする衛生勤務はもちろん、炊事係、便所清掃係、滅菌係、水くみ運搬係、解剖室立会い係等、しかし一番長くやった仕事は死体運搬埋葬係であった。

今から考えれば都会育ちの私がよくできたものである。この仕事は午前中、同病院の裏山の墓地にのぼり穴を掘り、午後、死んだ戦友を埋葬する仕事である。この病院に初めて勤務する者は、誰でも一回以上は死体運搬を強制的にさせられた。一つのしきたりとなっていたのである。死体運搬だけは、どうしたわけかやりてがないので勤務員がお互いに交代でやることであった。私は心の中で「これではいけない、誰かがやらなくてはならない。よし自分がやろう」と決心した。同病院では、開設以来約五百人の日本人捕虜が死亡したと記憶しているが、大部分が栄養失調、赤痢、下痢、肺結核等であった。なかには労働大隊で作業中転落した死体も幾つかあり、死体が重く運搬に苦労したことが度々あり、途中何度かいやになり、やめようかと何回も考えたことがあったが、歯をくいしばって頑張ったものである。墓地は病院から約二キロメートルの丘の中腹で、ナホトカの港がよく見える所であった。丘にのぼると海がよく見えて、日本海を渡れば内地だなあと思いつるのである。酒もなければ、金もない、女もない。食べるものも少ない。早く日本に帰って「食べたい」「ぼたもちを食べたい」「白いご飯を食

べたい」もう食べることにしか考えが浮かばなかった。衛生兵の資格等はなかったが、患者の看護として病室で患者に付き添っているときに、死んでいった戦友が「日本に帰りたい」「内地に帰りたい」「こんなところで死にたくない」と口癖のように言いながら無念やるかたなく死んでいったかと思うと、生き永らえた私が、この戦友を埋めてやれば死んだ戦友の供養にもなるとまた頑張った。

まず、いかれたエンピ(シヤベル)を手に持って墓地にのぼり、適当な箇所を発見し、縦約二メートルくらい、横約一メートル、深さ約二メートルくらいの穴を掘るのである。この「ノルマ」はなかなか大変な仕事であった。土は硬いうえエンピが悪いので相当に苦労した。しかし私は泣かなかった。なにくそと力を入れて掘った。掘ったあとは必ず私が入り一たん横に寝てみて、死んだ同僚が安らかに眠れるように、自分自身でためしてみた。私がやる前は、冬のことでもあり、穴が深く長く掘れないので、面倒くさいのか二人や三人を入れたりして、足や首がひん曲がつて苦しうであったとのことである。

そんなことがあったら、死んだ本人はもとより、家族に対しても申し訳ないと、またエンピに力が入ると隣の土地からゆつと真新しい骨が出てくることたびたびあった。午後は不思議と三日に一人くらいは死者が出る。平均して夏より冬が多かった。病院で死亡者が出ると、死体は直ちに解剖室に運ばれ、死者はソ連の軍医によって簡単に解剖所見が行われ、解剖が終了すると、午前中に墓地で穴を掘り終わって幕舎で待機している私のところに連絡がくる。私はこのような仕事をすることによって、いつしかこの病院にはなくてはならない人物になってしまった。

ソ連という国は日本と異なり死者を丸裸のまま埋葬する。捕虜という身分のためなのか、死体が解剖のままの丸裸で死者に対しても失礼なので、病院の所長と何回も通訳を通して交渉し、相手側も納得し、やっと旧軍隊の軍衣袴の配給を受け、着せてやることのできた。解剖室に置いてある亡き戦友の死体に手を合わせて一礼して、毎日交代で来る他の一人の勤務員と私の二人で担架をかつ

ぎ、墓地に行くのであった。墓地に行く途中、旧ソ連の民間人に時々会うことがあつたが、私達が泣きながら担架を担いで行くのを不思議そうに眺めて、なぜ泣くのかと質問されることがあるが、いくら説明しても納得しなかつた。部隊が異なるが、同じ釜の飯(病院)を食べた戦友が、日本へ帰れないで悔し涙で死んでいったかと思うと、私らはどうしても死んだ本人や家族のことを思うと泣けて泣けて、たとえ親や兄弟や身内でもないけれど自然に涙が出てくるのであると再度説明するのであるが、旧ソ連という国民性なのか、宗教の違いなのか、今でもわからない。私もロシア語がよくわからないので、手真似、口真似で、想像するところによれば、死ねば働かなくていいのではないかと、なにも君達が泣くことはないではないかというのである。もちろん札をするわけでもなく、ただ何事もなかつたように知らん顔をして通りすぎるだけであつた。

墓地に着き、何回も何回も敬礼し、このまま放り込んで痛いだろうと、静かに足の方からずりおろし、穴の中に入って両足を引っ張って寝かせてやるのである。その時の戦友の顔はなんと書き表したらよいのであろうか。軍人として旧満州の各地の戦野で戦死者等の顔を見ても戦争中という特異な心理状態なので気にもしなかつたが、この場合は私もかわいそうで顔面を見ることは忍びないので、そばに咲き乱れる名もない草や花をむしり取り顔にかけてやり、土を入れてやりながら、「ああ、たとえ肉体は滅びても、魂だけは日本に飛んで帰って暖かい肉親の元に、そばに行つて下さい」と祈るのである。エンピできれいに土をならし、他の相動員が「マホルカ煙草」を線香代わりに立ててやると、煙は風に流れてどこに行くともなく空に消えていった。遠く日本海が見える墓地の上で、あらかじめ用意され担架の上に乗せて持ってきた墓標を立てて、後ろ髪を引かれる思いで懐かしい軍歌を歌いながら墓地をおりるのである。この墓標は大工の経験のある勤務員の一人が木の板、小さな立て札のようなものを作り、氏名は記入されておらず、ただ何列の何番の記号しかない簡単なものである。

「異国の丘」の文句ではないが、「ああ、こんなところで倒れてたまるか」と、相

動員が大声で叫ぶ。私はもう二度この仕事はしたくないと思った。記憶はうすれてしまったが、このようにして取り扱った戦友の死体は、復員するまでには数十人を越したであろう。(合掌)

私も病院の勤務員の中では一番古くなり、勤務員の責任者からもかわいながら、まじめに働く存在も認められ、黒パン等の食糧もなんとか自由になり、やせ細った身体もやや丈夫になってきたが、あのシベリアの山中のタイセット地区では、強制労働と寒さと栄養失調のため衰弱してしまい、冬が来れば寒さのために身体がもたないことを自分が一番よく知っていた。病院の勤務者も三カ月ごとに交代してナホトカに帰つて行つた。何回も何回も復員業務の補助もし、お手伝いもさせてもらった。当然先にダモイができる権利や順番を持っていたが、後から来た戦友たちや、病院から退院した者や、中には勤務員からも「おれには妻子がいるから」「年をとっているから」等々と涙を流しての哀願には勝てなかつた。私のように何カ月もこの病院や勤務員として幕舎に居るのは辛いのであろう。引揚船が入港するたびに先に帰してやつた。

本当にそれらの人々に対して仏さまを拝むように手を合わせて先に帰つて行つた。

新潟県 若月太郎兵衛

昭和二十一年冬(二十六歳)満州開拓青少年義勇軍五十人も一緒だつた。僕は小隊長を命ぜられ、彼らと行動、作業を共にした。ある日、薪割りの作業だつた。薪はなくて広い原野を探し求め、根っこが見つかる、鉄道線路の四メートルくらいのもので根元を少し掘つて、梃枕を使つて線路を突つ込み、皆でぶら下がつて「えい、やあせー」の掛け声もろとも根っこを起すのである。幸いなことに地下が凍っているため、牛蒡根がなく案外楽に掘り起こせたのであつた。それを、満州から我々が荷物を積んで黒河まで持ってきたとき、軍の輜重車に、さながら桃太郎が鬼征伐の宝物を積んだように、ロープをかけて(手が冷たいの

で誰も手を出そうとしない、仕方なく僕がロープを掛けて締めた。運んでくるのであった。それが炊事用になったり、班内のペーチカの暖房に使われる。薪割りは掛矢とハンマーを使った。タポール(金太郎式のような斧)もあつた。根っこを細かく割るのである。二人びきのピラー(鋸)で切断したり、なかなか大変な仕事であつた。年中空う腹を抱えての作業だから、ましてや育ち盛りの若者には気の毒でたまらなかつた。手や足など怪我させないように目配り気配りしながら、先頭に立つて頑張つた。皆よく辛抱して働いてくれた。軍人でもない少年兵、寝小便たれる者もおつた。

薪を割つておるうちに誰か将校用の薪を割つてしまった。ラーゲルの係長将校にしたたか怒られた。「誰が割つたか、割つた奴は出てこい」大変な怒りよう。日本将校たちは少年兵を出せと言つた。僕は、少年兵は出さぬ、僕が責任者だ、僕が出るのが筋だ、と僕が出た。その将校は僕を営倉に入れろと命じた。

営倉は守衛所の同じ屋根の下の一室である。狭い部屋へ入れられた。夜間には外は零下四十度。僕は毛布一枚投げ込まれ、どん底生活だ。まだまだこれしきで死んでたまるか、営倉だつて家の中だ、冷凍になることはないだろう。今ごろ故郷では皆どうしておるだろうか、ただ一人の弟はビルマ方面へ行ったのだがどうなつただろう、結婚してただの十日で別れて来た新妻はどうしているだろうか。いろいろと走馬灯のように頭の中は駆け巡り、眠気も起きない。ろくに眠らぬうちに夜が明けた。そんなことが三日も続いた。食事は一かけらの黒パンだけ。塚本通訳は「若月はハラシヨ・ラポーターだ、早く出してくれ」と懇願してくれたそうだ。お陰で営倉から釈放された。朝だつた。

少年兵たちは黒パンを差し入れてくれたり、迎えてくれた。皆、涙して喜んでくれた。彼等こそ満州に骨を埋める覚悟でやつて来た立派な少年たちなのだ。夢破れ、兵隊とは何のかわりもない者を、スターリンは労働者として駆り集めてきたのだ。今ごろはそれぞれ地域発展の為にも大いに活躍しておるだろう、幸せを祈つておる。この他、中国人、朝鮮人も数は少ないがおつた。元憲兵隊の憲

兵補や特務機関の勤務者たちである。彼等はいつ帰つたかわからない。

滋賀県 清水誠之助

間島を出発して間もなくはハルビンにいたと言う少しロシア語を話せる人が通訳であつたが、次に、二中隊だったか中隊長が知らせてくれたのがシベリア出兵当時ウラジオストクの小学校で正課でロシア語を習つたという井上氏だつた。当時四十五歳で、小さい人であつたが現地召集されて来た人だつた。私が間島の部隊で拾つて来た八杉先生のロシア語文法と日露会話集、ソロバンがボロボロになる程に役に立つた。井上氏は基礎が出来ているからベラベラ、自分もお蔭で得をした。すぐロシア語のアルファベットをマスターして、何回も大隊の名簿を作つたことがある。井上氏がいてくれて我が一大隊はほんとに助かつた。井上氏は早くダメイされたが、時計屋のようであつた。時計の修理道具を持つていて、最初は日露の所内の時計修理をしていたが、後、隊の通訳をしながら分所の事務所横に時計修理店(チャソイマツセルスカヤ)を出店し、若い日本人の助手と二人でノルマを上げてくれた。

私もグループに付いて作業に行つた。最初の間は員数外で行つて手伝つていたが、作業のグループが増加すると人数が足りない、それを補うため班長(ブリガジール)としても出て行つた。班長がロシア語が出来ると相手も喜んだ。指示された通りやるから双方よかった。ロシア人に付き切りでダワイダワイと追い回されるのと、いないのとでは違うからだ。私と行くとグループ員は喜んだ。

岐阜県 小川太郎

馬匹にも劣る延々三十日の列車輸送で下車したところはウズベキスタンのグリンチマザールという田舎駅。油田開発を始めて間もない高原地帯であつた。翌日からどのような取り扱いを受けるか判らないので、小隊長以上が会合し、如何なることがあつても全員が助け合い守り合つて、故国の土を踏む日まで、犠牲

者を出さぬよう注意を払うことを約した。

我々に課せられた労役は、油田に至る道路構築、油田従事者の住宅建設であり、ノルマ、給与、環境等すべて劣悪であったが、朝鮮から携行してきた若干の物資で細々とつないだ。四カ月ほどはレンガ造り、建物の基礎コンクリート打ち、二階建て住宅のレンガ積みに従事、その後フィンランド製木造組立式二階住宅（フイニスキードーム）建設に従事、六棟を完成した。

グリーンチマザールの労役は一年で終わり、大隊長以下三個中隊はベゴワード第五収容所に移送され発電所用運河の建設工事に一年有余の間従事した。この間、私共の作業隊は鉄筋工・砂利採取・運河の掘削・橋脚のベトン工事・運河の堤防構築・新設運河からの農業用水取入樋管埋設・湛水池の構築等多様な土木工事を経験した。

我々の作業(鉱山)

鉱山は地下坑内作業で寒さをしのぎ大いに助かった。収容所の近くの山の中腹にあるタングステン鉱の鉱山で、縦坑があり地下二十メートルぐらいの地下坑道から、四、五本に分かれた横の坑道があり、坑道にザボイとダーチカ一組をトロッコに積み運搬するもの一組、トロッコを縦坑まで運びロシア人の昇降機係に渡し、地上では鉱石を指定の場所に捨てる。私の作業は隊員を各部署に配し、各部署を巡回して特に危害予防に注意した。

ロシアの監督、名前はガマ(通称)に私はタングステン鉱を探させて言われ、隊員に話し作業のかたわら鉱石探しに熱中した。作業ノルマより私たちの実益に叶った良い話で隊員一同喜んで探した。

タングステン鉱は黒い石で重い、割れば鉄と同じ、それを見つけて集め監督にやると喜んだ。翌日、黒パン、砂糖、タバコ(マホルカ)等たくさんもらい、隊員全部で分けて、食べたり飲んだり楽しみであった。

岩手県 佐々木清三

監督の話では、このタングステン鉱をブルジアのマガジンにある物資の配給所に持つて行くと、特別の配給があり、自分の欲しい物資と交換できるとのことで喜んでいた。

千葉県 椎名帯刀

作業は、地下水をボーラーで炊き塩しぼり、塩を倉庫に搬入、各ボーラーに石炭運搬、炭ガラ捨て(トルコ車で)、雑役、塩の貨車積み込み。なかなかノルマ割当が達成できないので、ダバイ、ダバイと牛馬のごとく働かされた。

工場は収容所より千メートル位の所にあつて、第一班八時―四時、第二班は四時―十二時、第三班は十二時―八時までだった。夏はよかったが、厳寒の夜間作業は苦しかった。交代の帰りは皆石炭を持ち帰り、ストーブを炊き、燃料にして寒さをしのいでいた。

作業も初めのうちは要領が分からないので苦勞したが、次第に覚えて、ノルマのごまかし作業もできるようになった。食事は一日三百五十グラムの黒パンとジャガイモと野菜のスープだけ。食事分配も皆同じに分配しなければならず、苦勞した。工場の周りの雑草、アカザ、アザミ、タンポポ等の雑草を摘んで塩茹でして食べていた。

冬の作業は、零下十五度以下にならないと休みとならず、工場は無休作業。夜間の塩の貨車積み込みは一定のノルマがあつて、重量ではなく容積で一定の線があり、記されてあつた。なかなか正直にやつては達成できないので、皆で研究して、積み上げ方法を考えて、中身は固まりで大きくして空洞を作り、容積を大きく積み上げてノルマを達成した。

二十三年ごろ、ウクライナのママムたちが工場に配属され雑役作業をするようになり、初めて皆の顔色もよくなつてきた。彼女たちは、戦時中ドイツ軍に協力した反共分子として収容されて、各作業所に配分、労働させられたとのことだった。殺風景な作業所も外人の女性と一緒に作業ができ、夢にボタモチ、心の

慰めとなった。次第に慣れて、彼らと物々交換してパン昼食できるようになった。

身体検査で栄養失調となり、夏にコルホーズ作業に回されてジャガイモ掘り。工場と異なり、日中八時間作業でノルマがなく、作業は楽しかった。看守の目をごまかして工場から持つて来た焼塩で味つけて食べ空腹をしのぎ、体力も回復した。

コルホーズ作業も終わり、第八分所に配属されて、山から石の切出し作業をさせられた。ツルハシとシャベルで切り崩し、一定のノルマに積み上げる。塩工場で覚えた要領で中を空洞にしてノルマを達成していた。

夏は夜十時頃まで外で新聞が読めた。赤旗紙を見て、遙か東の空を眺め故郷を偲び、『異国の丘』を歌い、互いに慰め合っていた。

長野県 横内弥太郎

作業は、煉瓦工場、炭坑労働、鉄道工事、そのほか多種にわたったが、いずれの作業にもノルマの分厚いノートがあり、これによって課せられる。食糧不足による体力の減退、想像もつかない寒さの中でノルマ達成は無理だった。達成できないと食糧を減らされる。煉瓦土を掘った穴にロシア人が投げ込んだ犬、ネズミ等を飯盒で炊いて食べたことも何回か。農作業に出た時、種ジャガイモを食べてしまい、後になって芽が出ないということもあった。また作業の帰り、キャベツを取るのを見逃してくれたソ連軍の下士官の計らいで空腹の足しにしたこともあった。

健康管理については、ソ連の軍医が尻をさわって重労働、軽労働と分けて決められる。いくら体調が悪くても一定以上の熱がないと休ませてはもらえない。

岐阜県 林 正彦

作業は、炭鉱作業、煉瓦造り、道路作業等あらゆる仕事をやった。

ドロを固めた煉瓦の家造りが始まった。一日で乾燥させる誠に粗末なものだった。が、ともかく家ができ、街作りが行われた。

炭鉱は主として露天掘り、雨の全く降らないこの土地でよくも三年間頑張れたものだとつくづく感じる。

愛知県 天野春吉

今回もダモイ東京と騙され汽車に押し込まれて再びソ連領のマソゾフカの収容所に送られた。もしまたシベリアに送られることが解っておれば、多分私は住み慣れた満州で脱走したことであろう。その後、ソ連領内のヒョードロフカなど幾方所もの収容所を転々と移動させられ、伐採、山奥からの木材搬出、トラックや貨車への積込み、森林鉄道の施設工事、草刈り、トラクターの整備、コルホーズの作業、漬物工場の手伝い、煉瓦の運搬、煉瓦建ての建築作業、道路工事など、数え切れない程の作業を体験した。

三重県 林 英夫

苦しみの第一は強制労働であったことはいまでもない。収容所のバラックに分散収容されて間もなく、右も左も分からぬうちに、身分階級に関係なく労働に駆り出された。サラトフーモスクワ間の天然ガス管理設工事の作業であった。酷寒の一月、固く結氷した地面を鉄棒で突いて砕く。氷の粉がはね返ってくるだけで全く歯が立たない。ノルマの要求は激しく、突貫工事とかいつて夜間照明をつけ作業させられた。寒さにも生活にも慣れず、さらには敗戦抑留という大ショックのさなか、抑留生活を通じ最大の苦役であった。この先どうなるのか全く暗然たる思いであった。

次いで、ビンスクという森林の村の作業場へ移された。徒步行軍で半日以上、四百人ほどの集団であつたらうか。行けども行けども尽きぬ林道、その中に点在する集落、ロシアの森の深さ、広さには驚いた。半地下式の細長い掘り立て小

屋、中央に狭い通路、両側に丸太を並べた棚、めざしのように並んで寝る。採光はほとんどなく極めて不衛生である。だいたい森林伐採の作業小屋はこれが通常である。朝飯、点呼があつてから、昼食用の一かけらの黒パンを持って数キロ離れた奥地の伐採現場に向かう。ここには前の作業隊（ドイツ人と聞いた）が伐採した二メートルほどに切りそろえた雑木の丸太（主として燃料用）が集積されてあつた。これを各自担いで、足元の悪い細道を一列縦隊で、これまた数キロ離れた川岸まで運ぶ。二十歳そこそこのわれわれはともかく、年配の方々には大変な苦痛であつた。一同はゆっくりゆっくり歩く。現場監督はただひとり、いそげとせきたてる。第三者が見たらさぞかしこつけないな光景であつたろう。一日二往復ぐらいたであらうか。

北海道 佐々木佳明

虜友の多くはこれら工場の作業に就労した。特に旋盤工、鋳物工の技術者も多く、これら技術者は驚異的なノルマを達成した。ソ連の技術者は能力があつても一〇〇%以上は働かないのだという。虜友たちは能力のあるだけ力を発揮させられたのだらう。そのため非常に優遇され、それなりに報酬が多かつた。炊事係は給料がないので彼らの分け前を頂戴した。一方、土方の作業に従事した仲間には悲惨であつた。土方は主に囚人が就労する仕事とかで、いくら精を出して働いても全くノルマが上がらず、常にプロホーラポータ（働きが悪い）で、報酬は皆無で支給される食糧も少なく悪循環である。高ノルマを達成したハラシヨラポータ（優良労働者）は黒パンの量も多く、白パンを支給されることもあつた。時には夕食時に賞賛され一段高いテーブルで食事が与えられることもあつた。

静岡県 今泉 茂

製粉工場の作業は、楽ではないが、食べ物にありつけるのが魅力であつた。はるばるウクライナから運ばれた小麦、グリーンピース等を直接工場の地下倉庫に

下ろしたり、倉庫に貯蔵された小麦を一輪車で運ぶ作業である。もうもうとした粉塵が作業中に舞い上がるので、のどや気管支を痛めがちであつた。休憩時間には事務所のストーブで暖をとることが認められ、一日に一度は小麦粉を水で練つて厚い円形のパンを作り、ストーブの上で焼くことが黙認されていた。収容所に帰るときは仲間とグリーンピース等をくすねて持ち帰り、食料の足しにしたものである。

兵庫県 芦田史朗

ある日パン運びの使役に出された。馬の扱いは騎兵仕込みでお手なもの。馬糧の手綱を操つて軽く走らせた。後方で糧秣倉庫係のサーシカがハラシヨラと言っているのが聞こえた。これが縁でサーシカ伍長の糧秣庫、被服庫の手伝いをする事になった。どんな小さな黒パンのかけらでもポケットに忍ばせて来て同僚に渡す、毎日シューバの古いのを着て作業に出て、被服庫でましなシューバと着替えて帰り皆に渡してやったので、羨ましがられこそすれ憎まれほしなかつた。

リオット作業

氷割り作業、本当に恐ろしい仕事であつた。割つても割つても地下水が噴き出てくる。際限のない仕事である。「賽の河原」である。地下水が線路横に湧き出る所がある。夏は流れて問題にならないが、十月下旬頃から凍つて盛り上がってくる。そのままにしておく列車が危険であり、鉄道が不通になる。徹夜で氷の番をしなければならない。一晩中、翌朝、交替が来るまで続けなければならない。

福井県 片山清次

洗濯場勤務

入院患者の下着、病衣、敷布、毛布類の洗濯作業を行う。一人一日当たりノルマ三三三枚（当該物品の大小を問わず、シャツでも毛布でも一枚として計算さ

れる。

作業手順は、五右衛門風呂クラスの大釜へ早朝第一に水を張り、洗濯用の湯を沸かす。次いで、ソ連人責任者が規定ノルマに従って汚れた洗濯物を数えながら積み上げて行く。積み上げられた洗濯物は胸ほどの高さになる。これが今日のノルマだと示される。それに対する石けんは、わずかバター三箱程度の大きさで二キログラムの粗悪なものが支給されるのみ。赤痢患者の血便と膿液にぬれた下着の山から発する悪臭と、伝染病に罹患するのを恐れるあまり、洗濯場作業に回された者は誰もが三日と辛抱できず、たまりかねて洗濯場と尿尿汲取作業以外の作業なら何でも辛抱すると変更を申し出る者が後を絶たず、病院での嫌われものの作業場であった。酷寒にさらされる戸外作業ではなかったことだけが唯一のメリットであった。

岡山県 田中一司

強く印象に残っているのが運河造りである。河川の下に無煙炭が無尽蔵にあるらしく、河川を移動させるための作業である。昼夜通して三交代の作業である。特に夜間雨降りの中、寒さと暗い中でまことに辛かった。今思い出しても、ぞつとする強制労働であった。

セメント工場建設作業

この作業が我々鞍山ラーゲル日本兵特有のもので、主としてこの作業に従事し、天気の良い日は広い野原の作業にも出かけた。

セメント工場といつても初めからあったのではなく、我々が作業を始める前にドイツから戦後占領してきたセメント造りの中心となる大回転窯である。この窯を中心に一方から石炭、一方から石灰岩を入れる。石炭は粉末にし、石灰岩は乳状にして、回転しているらせん状の大筒の溝の中を流す。点火した石炭の火によつて焼かれると、石灰岩が小さい粒になって傾斜している筒のらせん状の溝の中を流れ落ちる。これがセメントであるが、すぐにセメントではない。約一カ月屋

内に置き、次の工程に移る。この粒状のセメントの原料を粉碎機にかける。四回ぐらいで本当のセメント状の粉末がで上がる。

この粉末にギブス、粘土、その他のあるものを混入してやつとセメントがで上がるのである。このようにセメントができるまで簡単なように見えるが、石灰を点火するまでの工程、石灰岩を乳状にしてらせん状の溝に流すまでの工程。今でも思い浮かべることができる。

電気熔接、ガス切断、鉋打ち、点検、点検試運転、成功の喜び。部品作りの協力、ボルト、ナット、旋盤、鍛冶屋、給水塔、石灰下ろし(貨車)。ノルマといっても作業内容が複雑で、機械関係のものではできなかった。ソ連側の作業監督も厳しきであったが研究的態度で、日本兵も捕虜という気持ち捨てて技術員という立場で、毎日意欲を持って工場造り、機具作りに励んだのである。

セメント作りをする一方、工場造りにも力を入れなければならなかった。

岡山県 片山衛真

ソ連共産主義社会ではあらゆる資源は国の所有するもので、個人で使用することはできない。また個人で人を使用することもできない。私達は品物を作る材料を盗んでこなくてはならない。盗つ人を指示する役人達は私達六人の者に毎日一五〇パーセントノルマ達成と表示してくれ、捕虜では最高額である四十五ルーブルが毎月支給された。ソ連では国民全員が計画した労働で生産されると信じていたのに、計画生産ではない。役人達はそれを利用して生活用品を作らせ給料を支払う。思想教育で受けた社会とは別の社会である。

二十三年三月ごろだった。エセイ河の近くにある工場、その二階に取り付けであるチェンブロックを盗むように指示される。二人の兵が二階の窓から投下、私が現物を肩に私達の小屋に走った。残った兵は安全のために監視している。そして安全を知らせられる。私は無事小屋に帰ることができたと思つたとき、後を追ってきたロシア人に現行犯で捕まった。ソ連責任者は知らん顔をしていた。グ

ループの兵も心配そうに見守るだけ。私は連行された。レンガで作られた小さな小屋に入れられる。外からカチンと錠の音がする。ソ連では国の所有するものを盗めば重罪だ。長い間寒いシベリアで過ごしてきた、遠いシベリアに来て盗人になり投獄される。どうにでもなれ、もうどうすることもできない。小屋の中央に座り故郷を思っていた。

明かり窓を見つめていると窓の錠が内側にある。窓も逃走できる位置にある。罪人が逃亡すれば罪は重くなる。日本に帰ることはできないかもしれない。ソ連人はばかな奴だ、逃げ道が作ってある。私は小屋を退出し他中隊に逃げ込んだ。私が逃亡したことをグループに知らせると、小屋に近づくな、捜していると言ってきた。十日間ほど他の中隊に混じって行動し、小屋に帰り、帰国の日まで盗つ人続ける。不思議なこと十日間仕事もせずに逃げ回った私が、毎日一五〇パーセントの作業を達成したことになっていた。

白壁屯(カーミン工場)

愛知県 杉浦守市

石炭ガラをローラーで粉碎して、石灰、セメントを入れて混合し、エヤーで圧搾成型して煉瓦(ブロック)を作る。蒸気窯にて蒸気乾燥をする作業場である。

出来上がった製品は四十五区等の建築現場に貨車輸送する。窯は直径二・五メートルくらい、奥行き十五メートルくらいの円筒形の鉄製の窯である。底面には台車を入れるためにレールが設置してある。上部及び左右の両側より、蒸気が注入できるように設備されている。

一基に十三台の台車(一台に約六十個)が入る。約二十時間にて乾燥できる。

一日の設備能力が七百八十個である。窯は二基設置されていた。カーミンの大きさは厚さ二〇センチ、横四〇センチ、縦三〇センチ、重さは十五〜二十キログラムくらいはあった。

窯より乾燥した製品を出して、所定の場所に積む。終了後、成型した製品を窯内に入れる。その日の状況により、一〇〇%の製品化は無理であった。機械の故障により、作業ができないことも時々あった。

ガラ入れ・トロッコ搬入・搬出・積み込み・機械(エヤー)の作業に分かれている。監督は二人で、「赤っぼ(ガー公)」と「目玉」のあだ名がついていた。「赤っぼ」は赤い帽子でガーガーとよく小言を言う。我々の担当であり、良い監督であった。「目玉」は、大きい目をして、なかなか手ごわい監督であった。気に入らないと、円び(スコップ)の柄で殴りつけることもあった。五中隊一、二小隊交替制で、夕方六時より午前二時まで、午前二時より午前九時までの夜間作業が多かった。日勤も短期間であったが地方人が主であった。

爆破作業

福井県 片山清次

造成中の路盤の突き当たりには高さ五〇メートルほどの山がある。その山を爆破して線路を敷設するという計画が伝えられた。

まず、爆破する箇所を数メートルごとに定め、それぞれ指定された深さの縦穴を掘る。深いところでは二〇メートルほどの深さであった。底部に達すると計算に基づく横穴を掘る。縦穴の完成に合わせて黄色火薬が貨車で続々と運ばれて来る。セメント袋に入った火薬を麓から縦穴まで、何日もかかって一袋ずつ、アリの行列さながらにぞろぞろと繋がって担ぎ上げる。次に、この火薬袋などシラカバの木で作った巨大バットで一袋ずつ叩いて固まった火薬を砕いておく。それを縦穴の中に詰め込み、信管と導火線を埋め込む。

爆破当日は、爆破技術者以外は五キロメートル以内立ち入り禁止。建物の窓ガラスは全部、外すよう命令された。一同はラゲリで待機し、爆破開始時間の午前九時を待つ。やがて「ドーン」と鈍い音と共に地震のように室内がグラグラと一瞬、揺れた。互いに顔を見合わせて「ヤッター」と叫んだ。

爆破現場に差しかかると、昨日まで目前にあった山が跡形もなく消え去っていた。そして、そこには饅頭を二つにスッパリと切つたようにえぐり取られ、赤茶けた山肌が露出し、何か痛々しく感じた。林立していたあの松の太木のすべての枝がもぎ去られ、焼魚の串が無数に突き立てられたような山容を呈し、爆破力のいかに凄まじいかを証明していた。

労務長や爆破技術者、収容所長等は、ノルマ二二〇%、予想以上の大成果であったと歓声を上げていた。使用した火薬量に対して爆破した土砂量の多寡から算定するらしく、終日ご機嫌であった。我々にとつて、数百トンの火薬を使った豪快な爆破作業は、後にも先にも経験しない貴重な作業であった。

愛知県 森武雄

炭坑の中に入つて石炭を掘る作業、これには最も身体の丈夫で健康な者が従事することになつてしたが、割当人数不足の場合は軽い病人でもかり出された。八時間作業・三交代で行われた。炭坑の外で石炭を貨車に積み込む作業、これは主に少年の満軍の候補生が従事した。

森林の伐採作業は冬期気温が零下三〇度以下になると作業を中止することになつてしたが、そんな命令は全く無視された。従つて伐採作業が一番きつかつたと思う。毎日のノルマは決められていたがよく分かつたので、ノルマが達成されていないと作業が時間延長された。

コルホーズの農作業は、昭和二十一年六月中旬となるとシベリアにも春がやってくるので農作業の労働にかり出されたが、この作業は一番楽しいものであった。暖かくなつてからの外の仕事で比較的軽労働であつたし、何よりも兵達が喜んだことは、ソ連兵の目を盗んでジャガイモの種芋をポケットに入れて持ち帰ることができたからである。特に収穫期（八月下旬）の作業は喜ばれた。しかしこの作業期間は短く、割当人数も極めて少なかった。

京都府 野村喜与四

三日後から作業で現場に出たと思う。いわゆるシベリア組と違つて気象条件は恵まれていた。ただ、カスピ海と黒海にはさまれた風通しのよい平野で、通常でも強い風に見舞われ小豆大の小石が飛ぶ位、注意してないと怪我をする。最初の作業は石油の油送パイプを埋設する穴掘り。直径二メートル位のパイプを埋めるので、深さ八メートル、上部の幅は五メートル、それを手掘りスコップ一本で三段階に掘り下げる。実際に埋設するところは見えないので分からないが、何十何百キロかも知れない。表面に出す部分もあるらしいから埋設はここだけかも。トウモロコシの畑を掘っているので、埋めたらまた畑に復元するのだろう。若いトウモロコシを切つたりしたので実を頂いた。甘い実に舌鼓を打つ。しばらくして作業場の配置替えがあり、工作機械や仕上げ作業などの工場へ。ここでも舞鶴での経験が役立つ。トラクターのキヤタピラーのピンの取り換え、ちよつと力仕事だったが五人掛かりで一台三日位のノルマ。配電板の改良仕上げ、現地のロシア人も責任者として一緒にいるので次第に会話も覚えた。一部にはドイツの捕虜も一緒に作業場に入りしていたので親密になった。会話も手話同然だったが同じ境遇をいたわり合えた。

新潟県 佐藤正平

工場作業

十二月に入つて雪のちらほら降り始めたころ、工場に連れて行かれました。中に一步入つて驚きました。機械の騒音と油煙り、まさにモーターのうなり、機械の回転と切削音が交錯する、工場特有の雰囲気です。

一瞬私は何とも言えない懐かしさを感じ取りました。次々に職場を指示され、我々十人には施盤班への所属が命じられました。

工場は収容所から二、三十キロメートル離れたタシケント市郊外に建てられたコンプレッサーの製造組立一貫作業の工場で、従業員一万人、あらゆる種類の

工作機械を備えた大工場です。多勢の男女ロシア人の仲間となつての工場通勤作業が始まりました。

工場作業は八時から五時まで、昼休み一時間、一週間ごとに夜勤となります。無蓋車で通勤、工場に着くと図面とカードが渡されます。図面は三角画法なので、見れば容易に理解できて、工程も立てられます。カードには加工個数、標準時間(ノルマ)等が記載され、このカードを持って工具室、材料置場を回れば加工に必要な一切の材料・工具・測定具等が支給される仕組みになっています。与えられる仕事量は一日か二日分といわゆる多産少量生産方式です。六尺盤盤は私の得意分野、しかも日ごとに加工部品が変わるので面白く、その後の二年有余の期間一度もノルマー〇〇%を割ったことなく、しばしば一五〇%を超してハラシヨ・ロボットのマカロニを手にすることができました。

ロシア人たちと挨拶して帰途につきます。

工場通勤作業が始まつてやや収容所内の空気が少し変わってきました。一中隊は工場通勤、二中隊は農場(コルホーズ)作業とそれぞれ定着してきたのを受けて、使役のころの自暴自棄、倦怠、サボタージュの動きが止み、少し落ち着き余裕のある態度になつてきたのです。入浴も週一度の休日に行けるようになりました。

三重県 太田 勇

入ソ二年目の夏、天気の良い日は樺太が見えるという沿海州のソフガワニまで出稼ぎに行つたことがあります。三十両編成の貨物列車の旅で、そのうちの二両は煉瓦のかまどを築き、走りながら飯を炊く大がかりの移動でした。ハバロフスクから北へ向かい、コムソモリスカヤから有名なバム鉄道に入り、十六日間乗りつ放しでようやく目的地に着きました。当時のバム鉄道は米国の援ソ物資輸送に急造した鉄路で、路床が軟弱で速度が遅く、機関車はまきをたいて走る始末、このため距離の割には時間を要したものと思います。ソフガワニは漁業の町、鱒

漁が盛んです。塩鱒製造場が港の近くに軒を並べていました。収容所を出るときソ連兵が「栄養をとらせてやる」といつた言葉が、ここに来て始めて分かりました。それにしても、栄養物のある所へ人間を運ぶ発想は、いかにも遊牧民を先祖に持つ人種らしい物の考え方だと、変なところで感心したものです。

早速漁労班と製造班に分かれて作業開始です。漁労班は朝早く定置網の引き上げに海(日本海)へ出ます。私は製造班で、専ら水揚げされたマスの内臓を除き塩漬けする作業に回りました。ここで、恥ずかしながら、獲りたてのサケやマスはカツオのように丸々と太つているものだとして初めて知りました。まず腹を切り、内臓を捨て、水洗いします。次いで鰓(えら)をこじ開けて岩塩を詰め、さらに腹にも多量の岩塩を押し込み、これを十匹ほど板に並べます。ここまですがわれわれ日本人の仕事です。建物内には直径三メートルの大樽が半地下式に幾列も据えてあります。樽底には漬け方専門のソ連人がいて、マスを並べた板を渡すと受け取るや否や両腕を右から左へサツと振り、菊花模様につき間なくマスを並べます。その速さと鮮やかさには驚きました。熟練工といったところでしょうか。一段並べ終わるとマスの姿が見えなくなるまで岩塩を投げ入れ、足で踏み固めて上段へと詰め上がります。

山梨県 高村 國夫

私は幸い飛行機製作技術者でしたので、同技師四人一組となつてコムソモリスク飛行機製作所に行き、ハバロフスク等から捕獲してきた日本軍の飛行機の整備、修理、点検等の仕事をするようになりました。ソ連軍では日本人の技術者をエンジニアと呼んで、その対応もよく、仕事にノルマもなく、私どもに待遇もよかつたので、この種の工場に通つている間は割合楽な労働でしたが、たまに他の戦友の代わりに建設現場や道路工事、コルホーズ農場作業に駆り出された日は、重いノルマのため五〇パーセントくらいが精いっぱいでした。

昭和二十二年四月初旬、春の訪れとともに私どもは捕虜生活にもなれ、技

術者という特典もあつてソ連兵の監視もそれほど厳しくなかつたので、東京出身の先輩技官から「我々は一生技術者としてソ連で酷使されるだけだ、皆で飛行機で脱走しよう」と提案があり、私たちはその気になつて皆で計画を立て、まず「コムソの飛行場からカラフトの飛行場へ」と経路を決め、脱走機の整備も終え燃料給油の段階まで準備を了したが、どうしても給油の方便が立たずやむなく中止したのでした。

三重県 太田 勇

ハバロフスクに数日間滞在し、ソ連軍が満州から奪つて持ち帰つた戦利品の整理をさせられました。それらの品は幾棟もの倉庫に乱雑に置かれていましたが、その種類と量の多さには驚きました。この分だと、今満州は砂漠のようになってゐるだろうと、正直なところ思つたほどです。我々に整理させた倉庫には武器らしいものは一つもなく、一般人が日常生活に使う品物ばかりでした。例えばトタン板・台秤・柱時計・自転車・薬缶等々で、それがまたどれ一つとっても完全な形をしたものがなく、何の目的で略奪し、ソ連領へ運んだかが疑われるものばかりでした。ただ一つ、これはと思つたのは松花江(スنگアリー)の発電所施設を根こそぎ運んで来たことです。しかし、ここまで持つて来て、後は野ざらし日ざらしでは余りにも芸のない話だと思ひました。

この建築工事が終わつて間もなく、今度はソ連側が收容所の電化を計画します。こんな山奥まで電線を引くのかと思ひのほか発電所を造れとの託宣。これには皆驚きました。

この時ばかりはソ日が逆転して日ソになつた形で、日本側ペースで工事は進められました。

発電所は收容所から二、三百メートル離れた谷川に近い台地が選ばれました。理由は水補給の便利さによります。私は発電所建設工事の第一着に参加しま

したが、春近しというのに土はまだ固く凍り、穴掘りに手間のかつたことを覚えていきます。しかし、工事は順調にはかどり、建屋が完成するころにはボイラーや発電機が駅から運び込まれ、数日後には据えつけが終わりました。ボイラーのたき手は日豊線機関士の経験をもつ元少尉が二、三人の助手をつけて引き受け、私はまき割りや山からまき材を伐り出したり、馬そりを使って谷から水を運ぶ役に回りました。

ところが、配電工事は難航しました。送電にふさわしい被覆電線の入手が難しいこと、碍子はシベリアじゅう捜しても手に入らないことが主な理由です。そのため議論に議論を重ねた結果、配線は裸の鋼鉄線(米国の援ソ物資)を利用する、碍子は煉瓦焼き窯を使つてわれわれの手で造ることになりました。早速数十人が土をこねて土偶を造り、細い木の棒を差し込んで穴をうがちます。他方で塵捨場から割ガラスを拾い集めてこれを砕き、土偶にまぶして数日間乾燥します。干し上がった土偶を煉瓦窯に入れて焼くと、ガラスが溶けて土偶を覆い、完全な絶縁体ができます。これに木の棒を差し込めば碍子のできあがり。配電工事は急ピッチに進み、ソ連軍の建物は無論のこと、收容所内のすべての建物に配線されました。一灯三十ワットの電灯が收容所を不夜城化したことは言うまでもありません。

山梨県 湯山大吾

昭和二十二年五月頃、タイセットのネーベルスカヤに鉄道関係発電所新設工事が開始され、私ども日本人技師が選ばれて発電施設的设计組立等に当たりましたが、日本の技術については当時、ソ連より優秀なところがあつた、收容所長も私どもの能力を認めてくれたり「ヤポンスキー、ハラショー」と褒められたものでした。「芸は身を助ける」とか、捕虜生活の中で一番よい待遇を受けられた私どもは運がよかつたと今でも感謝しています。

私は、タイセット・ネーベルスカヤ第七建設所において右鉄道関係発電所建設

の建設技師としてスターリンの五カ年計画に参加し、立派な発電施設新築に貢献したということで、一緒にこのプロジェクトに参加した戦友技師とともにタイセット市長から表彰されましたが、収容所内では私どもに、技師はソ連国の科学的指導者になった以上、日本帰国は許されないのでソ連に帰化して永久居住しなさい」と勧められたこともありましたが、私どもは「我々は日本人だ、敗戦のため仕方なくソ連に抑留され、生きるために電気技師としてソ連国の建設工事に協力したのだから、任務が終われば日本に帰国して祖国再建に尽くすことが我々軍人の使命である。どんな苦勞をしても必ず生きて日本に帰るのだ」と誓い合ったものでした。

昭和二十三年六月末、私どもが担当した発電所工事が完成し、七月十日早朝、収容所長から「発電所建設工事に参加した技師並びに第七工事収容所日本人全員、東京ダモイが許可された」と伝達され、皆で泣きながら喜び合いました。

愛知県 太田吉春

カラカンダの二二収容所は広い収容所で、北側は石山が連なっていました。南方は街まで一・五キロメートルくらい離れた所で、広い敷地内に平屋の学校の校舎のような建物で、四棟と炊事場と食堂があり、周囲は有刺鉄線が張られ三重の垣根になつていて、中に警戒灯用の電柱が建つて電球がついていました。こんな収容所に着いた早々のことです。後藤副官(日本人の代表)より依頼を受けて私はこの収容所のマンチャール(電気技術者)として、一人で毎日夜間、千五百人に必要な水を供給するため、一キロメートル離れた現地人の使用している給水所に勤務することになりました。一人きりで夕方収容所を出て給水所に行き、現地人使用のバルブを閉めて収容所側のバルブを開けます。現地の人が一人勤務していますから、その人と一緒に仕事をしました。大きなモーターでコンプレッサーを動かして九十メートル地下の水を上汲み上げて大きな四角いタ

ンクに入れ、そのタンクより送水ポンプを経て利用者側へパイプで送られるので、私は送水ポンプの開閉器を動作させてから収容所に戻り、給水されているかを確認してまた給水所に戻り、一晩現地の人と一緒に勤務しました。

一年くらいしてこの給水所はやめ、当市の「マイドック」と言う部落の給水所へ変わりました。ここでは汲み上げ作用はなく、他所より現地人用に造られた給水所で、その隣に収容所へ送水できるように設備ができていたのでびっくりしました。今度はここで勤務となります。夕方行ってスイッチを入れ、朝になったらスイッチを切り、送水ポンプの異状を確認して帰りました。ここで勤務時間中は、夕方より朝まで電気のヒューズが切れなければ何もすることはないので、だから、一般の現地の人我每天びん棒の前後にバケツを下げ、タロンを窓口のおばさんに出して水を運んで行くのを、給水所の小屋の横で立って見ているのが毎日の私の仕事でした。そして朝明るくなつて労働者が出勤したところ、私は一人で収容所へ戻り朝食をして寝るのでした。

こんな仕事をしていれば、他の皆さんはうらやんで見ていると思います。直接聞いたのでは、ソ連は電気屋さんがいないから私たちが帰った後も太田君は日本へ帰れぬだろうと言っていました。

またこんなこともありました。あるときに寝ているところを起こされ、警戒灯の電球が切れているので交換せよとの命を受けて電柱に昇ったとたん、パンパンと二発発砲されて、すぐ電柱を滑り降りて助かったことがありました。これはソ連兵同士の間柄がなかったからと後で聞きました。その他、吹雪で電線が切れたときも、電気の流れている線を柱上でつなぎ、ソ連の将校さんがびっくりしていました。

終戦前、北支那で何度も死に直面したので、どんな状況にあつても気持ちがお不思議と動じないようになっていた。電気技術者はおそらく日本へ帰れんやろうと皆さんが言っていたので、帰国については半分はあきらめていました。

北海道 東島房治

收容所の作業は外柵作りや、他の地区にある大きな建物を解体し、それをトラクターで運び收容所内に組み立てて宿舍にする作業が大半である。相当大きな建物なので難作業である。しかも何をすることも満足な道具がないのである。

ある日、誰かトラクターの運転ができる者はいないかと言うので、トラクターの運転なら身体も楽だしあんな物スピードもないし、一回教えて貰えばできると思い自分ができるかと嘘を言った。「よしそれなら明日からトラクターの助手をやれ」と命じられた。しめたと思ったのが大変な誤りであった。こゝは夜中には零下三〇度は軽く越す。そのためにトラクターのエンジンが凍つてかからなくなるので、一晚中エンジンの下で薪を燃やして暖めるのが仕事だ。トラクターの運転とは関係ない。皆が寝ている夜中じゆう起きて火を焚いていなければならぬ。身体は楽で火の側なので寒くはないが、どうしても眠くなる。話が違つて言つても後の祭り、それでも二日間やった、誰かやらないかと聞いたら、やると言う者がおり、早速代わつてもらつた。

こゝでは日中で零下三〇度を越すと作業中止になる。

栃木県 橋本正男

俘虜になつて早々、特技者は申し出よとの事であつたが、彼らは毎日のように東京ダモイを叫ぶので、特技があるために帰国が遅くなつてはつまらないので誰一人として申出する者もなかつたが、同僚の諸橋東一さんから話がありトラック造りを頼まれ、お前弟子になつてくれぬかとの相談があつた。ソ連の鋸は二メートルの二人用の物だから一人では使えないので手伝つてくれとの事で私は渡りに舟とばかりに手伝つたところ、ソ連側の期待した以上の見事なトラックができたので、彼ら将校連は外仕事はせず屋内にてやれとの指示が出た。私達は山へ入つて枯木の素性の良いものを見つけて来て適当な長さに切り、縦鋸がないのでタボールにて毎日板削りをやり、大体の厚みになつたところで切味の悪い鉤にて

仕上げ組立てるには金釘がないので白樺の木を割つて乾燥させてから釘に仕上げて要所所に打ち込んだので釘の色も分ならずとても好く見えたのである。オーチンハラショーと私まで誉められて楽をしたのと、我々は年に三回位移転してドームを作るので棟梁は諸橋さんがやつてくれたので我々も手順を覚えて大変に早くできるようになつたのだつた。

機関車用の薪割り

新潟県 平原敏夫

私が最初に割り当てられた作業は、蒸気機関車用の薪割りであつた。直径三十〜四十センチのエゾ松が多かつたようだが、木はシラカバでも何でもよかつた。その辺の立木を手当たり次第に切り倒し、一メートルずつに刻んで二つ割りにするのであつた。倒した樹木の枝葉の焼却などの後始末もあつて、こういう仕事はまるつきり初めての私には、結構きつい作業であつた。のこぎりは二人用で、押しでも引いても切れるような歯並びになつていた。

タボール(手斧)を使うのも初めての私は、空振りをして自分のひざ小僧を割りそうになり、肝を冷やしたことも再三であつた。一メートルずつに切つた丸材を台の上に立て、それに力いっぱい斧を打ち込み、丸材ごと頭の上まで持ち上げ、斧を下にして勢いよく台に打ちつける。そうすると斧を振り下ろす方に丸材の重さも加わつて、その丸材はサクッと二つに割れ、その度にヤニの何か生臭いような匂いが鼻頭をよぎるのであつた。しかし水分をいっぱい含んだ生材はなかなか重く、一日のラポート(労働)を終えて宿舍にもどり、寝台に横になると膝や腰、肩が痛かつた。

一人一立法メートルだつたと思う。ノルマ(割当作業量)があつた。入ソ当時の私たちはまだ健康体だったので、早々とノルマを達成、定期前に作業を終了、宿舍に引き上げていた。それが裏目に出、ノルマは間もなく一・二立法メートルに上積みされてしまつた。

機関車は生木の薪を焚いて走るので、暗くなって走行する列車はパチパチ火の粉を吐き出しながら、時にはメラメラツと火炎さえ噴き出し、まるで火事がそのまま駆けて行くようで忙しくにぎやかな、それはそれは勇ましいものであった。

福井県 増田武也

約一キロ程歩いたところの林の中に移動ができる薪火力製材所があり、シベリアにもう一本鉄道を造るのだと枕木造りの作業。林の中から馬で丸太を引いてくる者、枕木の長さにピラ(二人引きの鋸)で切る者、ボイラーで枕木を引く者、それを運ぶ者、ボイラーの薪を造る者などいたが、零下三五度〜四〇度になるのでボイラーが冷えると温度を上げるのに大変なので昼夜三交代。夜に当たると寒さが大変。私はボイラー係で温度が上がらないと機械が止まる。乾いた薪を入れると良いのだが、薪造りは外の人達で生木の薪を造るので火力が出ない。上がるまで休憩でその間暖を取る。監督がノルマが上がらないので怒鳴るが、乾いた木が少ない。ノルマは半分だが寒いので仕方がない。

一カ月程作業すると木がなくなり、二キロ余り歩いて木の切り出しに通う。木を切り倒す者、ある長さに切る者、二、三人が肩で線路まで運ぶ者、皆体が疲れているので小さい石や木屑でもつまづくやら、倒れる木を見ても逃げ切れず怪我をする者が出る。時間になってもノルマはできず監視兵は「ダメイ」と言う。監督は「まだ駄目」と毎日のごとく小言、だから帰る。

三重県 川邊幸治

私の部下は航空隊の技術者がほとんどであった。そのため工場を運営しているソ連軍の要請で、私を長として技術者が選抜され、カリヤーキーから移動を命ぜられた。

トラックの荷台に乗せられて移動したのであるが、私は荷台の上で兵に「向こうへ着いたら第一印象が大切、最初に与えられた仕事にはかけ声をかけ、きび

きびと精いっぱいやった振りをしよう。きつと、よい結果が出る」と話しかけたところ、全員が賛成してくれた。

夕方、現地に到着。タイヤ修理工場に宿舎を割り当てられた。装具を外してくつろいでいると、我々担当の軍曹がやってきて、「ストーブ用の薪割りをしてくれ」と言ってきた。到着したばかりなのに使いぶりが荒いと思ったが、車上での申し合わせを実行しようと、私が「やろうか」と言うと、全員が「ウオー」と大声で返事をし、きびきびと動き回った。軍曹は、「ラポート、オーチンハラシヨ(大変素晴らしい動きぶりだ)」と誉めた。

しばらくすると、「兵隊三人を出せ」と言ってきたので、二人の兵を同行させたところ、白パンと白米の入ったカーシャをもらってきた。据え膳で夕食にありつくことができた。担当の将校もやってきて「君たちの仕事ぶりは素晴らしい。明日からもしっかり仕事をしてほしい」と言ってくれた。車の中の作戦が図に当たったとめくばせをした。

肩擦り合うばかりの狭い部屋だったが、床張りのスチームのある部屋であった。

最初に与えられた作業は、工場増設のための敷地造成の作業であった。昨日の作戦が当たったのか歩哨も付かず、私の判断で仕事を進めさせられた。航空隊の兵ばかりで土木作業は全く苦手、一輪車なんか見たこともないといった兵ばかり。それでも担当軍曹が見回りに来るときは、気合いを入れてきびきびと動くのを見て喜んで去っていった。

二十一年四月、工兵隊から溶接、旋盤、鍛冶、大工など手に職を持った兵が増派された。翌日から、作業に出る前に宿舎前に全員集合させ、各特技ごとに班を編制し、各班長が人員報告した後、それぞれの持場に出場することとした。製材工場も開設した。自己に合った仕事ができるようになり、各兵の表情も明るくなり、楽しそうに与えられた仕事に取り組んでおり、宿舎での生活は和やかにになった。

かくして、ドウェナーツチでの作業は抑留生活三年半のうち、一番過ごしやすかったと思われた。

滋賀県 吉田貞次

「強兵」「弱兵」の差があり、弱兵を見送り、別れを告げました。強兵は山の収容所へ行き、またロシアで作業することになりました。ナホトカより八キロメートルのところに収容所があり、毎日ナホトカまで歩いて作業に出ました。収容所は午前四時起床、同五時頃朝食、同五時三十分集合、同五時四十五分出発。約八キロメートルを歩く。ナホトカ港で作業をする。

作業は、岩を火薬で割る、その後日本人は大ハンマーで岩を砕き、その石を一輪車で運ぶ。一メートル立方で長く積む。一日の作業量は運んだ石で検査を受ける。一日量何立方メートルと測量をする。立方数により食料の配給が違います。後日、その割り石をナホトカの海にあけるのです。一枚の足場板を一輪車で割り石を積んで海にあけます。

夜間作業もあります。夜間作業で一輪車に石を積んだまま海へ落ちました。約三メートル下に落ちて、助けなくて叫んでおりますが誰も助ける者はおおりません。落ちた人は犠牲者です。抑留生活はどこで死ぬか解りません。また、岩を割るため「ハッパ」をかける間は退避をしますが、退避解除後作業に行き、開いた岩が戻り、岩と岩に両足を挟まれ助けてくれと泣いているが仕方なく、助けることもできず気の毒だと思っただけ。おそらく両足切断と思います。全部知らぬ人でしたが気の毒な現場でした。ナホトカの作業も毎日一六キロメートルの道を歩いて作業に出ました。その間、引揚船が港に着くとロープを張り、無断で乗船のできないように注意しています。

愛媛県 山本繁夫

十日朝、我々がナホトカへ着いた六時頃から十分ないし十五分置きに後続列

車が入ってくる。一列車の梯団は千人で十本列車が入れば一万人。十時頃に三収容所も満員、海岸の砂浜も人、人であふれた。それでも列車はどんどん入ってくる。僅か五時間か六時間の間にナホトカ港はいっぱいになり、午後から到着した列車はいずれも二〜三十分停車していたがバックでスーチャンやウオローシーフの方へ後退した。

昨日、日本から迎えの船が二隻入って昨年から待機していた兵士が全部帰国したらしい。道理で私たちが朝一番に到着した時はどこを見ても日本人が一人も見当らない。私たちの列車が八月十日に一番に入り、初めての列車だったようである。帰国者のためには当然ナホトカ勤務の要員が必要である、七時か八時頃、私は元の五分所の所長ナーギンとG・P・Uのエグナチックさん、ベトロフさんに呼ばれた。「ヤマモト、昨日の船で日本人が全部帰ってしまった、世話をするものが誰もいないのだ、炊事要員と被服庫関係、糧秣倉庫関係にどうしても最低三十人は必要なのだ、ヤマモト、すまぬが残ってやってくれぬか」と頼まれた。

ちょうど三十人、ナホトカの留まつて帰国者の面倒をみることになる。この三十人は収容所内で帰国者の行動を見るアクチーブとは違い、収容所外にある糧秣、被服関係と炊事だけ目的としたものである。

愛知県 水野朝之

イ 昼間は三〇〇%台の重労働の仕事を、夜は洗脳教育と縛り返すうちに皆、疲労困憊して来た。私はそれが原因と思われるが食事ができなくなつて医務室へ行くと、体温が三七・五℃を示し、その日は仕事をしなくてもよいことになった。三六℃に下がると仕事に行き、三七℃以上に上昇する、休めば平熱になるのを繰り返していると、医務室の計らいで民主委員に申し出されてソ連収容所の許可になり、所内勤にされた。

口 作業日報の作成業務

私は作業日報作成の仕事を毎日するようになった。それは、ソ連の山男から

メモを受け取り、昨日の各分隊の作業量を計算して日報を作り、山男に返却する仕事である。これは各分隊別、各小隊別、収容所全体の作業量とノルマ達成率を表にまとめたもので、山男のソ連人が交代し別の人が来てから、検収に山へは行くが計算はしない(できない?)人だったので、私がロシア語を少しばかり小隊長時代に覚えたので話を通じることから私が指名された。最初、以前の報告書を見せてもらったがまるきり計算違いで、加算も位取りを間違えているようだった。これを山男に言うと、「あまり騒ぐな、このままにしておけ」ということだった。このような間違いは私が見ただけでも六割は違っており、木材伐採のスターリン五カ年計画の達成量として中央に報告されるが、とても「おそまつ」なものであることを知った。

北海道 工藤清吉

当初の労働は雑役が多かった。貨車に積まれた染料の木皮おろし、石炭、木材おろし、塩、穀物おろしなど。体力のない私達にとって、ノルマ(課せられた作業量)はきつかった。上下水道工事の穴掘りは大変効率の悪い作業であった。つるはしと鉄の棒だけで凍った粘土質の土には歯が立たない。監督から「ダワイダワイ」とノルマの完遂をどやされた。

塩漬けされた牛や羊の皮をなめす工場で皮運びの仕事をした。羊の皮は軽いが牛の皮は重い。ずるずる引つ張って運ぶには体力が要る。他人が寝ている時起き、深夜から朝まで働くのは辛くて苦しかった。

皮のあちこちにこびりついている肉片を削り取って持ち帰り、塩抜きして缶詰で煮て食べた。生き延びるために見つけた策であった。

住宅建築場にも行った。内壁と外壁の間に防寒材として炭殻を入れる。それを運ぶ。暖房は煉瓦でペチカを積む。その煉瓦は大きく重かった。ロシアの木工は日本の木工のように切り込みをしておいて一挙に建てることはしない。作業量が目に見える形にならなければ認められない。国の違いを見せられた。

広い機械置場での作業もあった。どうやら戦利品としてドイツから運んだものらしかった。その中には私が見た事もない巨大なクレーンやブルドーザーがあり、鉄材を移動させた。機械類は日本より進歩している実証を見せられ、これでは戦争に負けても当然だと思った。

これらの機材を受け入れ整理保管し、受注者に引き渡すのが任務らしい。私はワイヤの掛け外しの助手役で、体力はいらぬが危険が伴う。うっかりすると機材に挟まれたりぶつかったりする。一時も気の抜けない緊張が強いられた。作業を終えるときは疲れていた。それでも「お仕事お疲れ様」とねぎらってくれる人もいなければ、特に多くの食事に当たるとも寂しいものだった。

肉加工場の夜間作業に駆り出された。羊や牛の肉の運搬だ。力仕事は大変だったが楽しみもあった。監視の目を盗んで肉を切り取り持ち帰って煮て食べた。大変なご馳走だった。一カ月ぐらい働いたら、「お前、こけていた頬がふくらんできたぞ」と言われた。

ある日監督は私達を連れて、全く違う作業場へ行った。そこにはロシアの男達が働いていた。屈強な男達は筋肉ももりもり、力仕事をバリバリこなす。その手伝いをさせられたが到底彼等にはかなわない。「俺達だつて腹いっぱい食べられたら負けないさ」とつぶやいたが、負け惜しみでしかなかった。

岩手県 吉田欽三郎

抑留中の仕事は、多種多様である。

伐採・搬出・積載・積み降ろしから製材工場の製材・乾燥・倉庫・指物職場・雷気と鍛冶、旋盤にボイラー係、はたまた春と秋にはホルホーズの農作業。そして営内は、炊事、理髪、入浴場、洗濯場とあらゆる職種があったが、すべて自分からの選択は不可能であり、命ぜられるままの作業であった。先輩福島さんも当時井戸掘りの班長をしておった。

「今日の業 井戸より出でて 若葉風」ソ連人将校官舎等一般人の地形?に

よって掘つたらしいが、土まみれになって穴より顔を出した時の若葉風、何という清涼感であろう。ホツとした丸い顔が目に見えようである。

抑留後の作業分担

作業は木材伐採作業、自動車工場内作業、鉄道での石炭積み込み・鉄材積み下ろしなどで、それらがこの街の主な作業であった。それぞれの作業場へは二十〜三十人のグループで出かけるのが常であった。私はロシア語が分かったため、主に収容所内の炊事・倉庫・医務室等を回ったり、所内に設けられていた大工の作業室・床屋・鍛冶屋などを回って通訳として働いた。私は、第四収容所の一年間、第十一分所の一カ月及び第一収容所の一年間の計二年一カ月を常に通訳として勤務し、直接作業には加わらなかった。

愛媛県 橘 兵馬

最初の冬、保線をやっていた酷寒時の事、両方に低い山があり、その間を線路が通っていた。一日中太陽の当たらない所で、山から水が流れ落ちていた。線路の横のたまりへ落ちていたので夜間はその溜り水を三分間に一回ぐらい棒切れで混ぜる。氷が張ると汽車が脱線するのでその作業を四、五人で一晩中やらされた。夜間は零下四、五〇度に下がるので実に辛かった。

夏は長い草を五尺ぐらいの柄のついた大鎌で刈った。二、三日乾燥させ、背中に背負い一カ所へ集め、縦横十二メートルぐらいの山に積んでおいて冬分の馬糧にする。

その冬からは主に伐採をやらされた。直径一メートルぐらいの原木の足元の雪をかきのけ、二人びきの大鋸で裏びきをし、タポール(おの)で切込をして本引きをする。切り倒して枝打ちをし、枝焼きをし、大きさによって三メートル物や五メートル物に切った。仕事にはノルマというものがあって、ノルマを完遂して一

〇〇パーセントの仕事をしたことになる。一〇〇パーセントの仕事が出来なかったら一日一回一切れの黒パンを減らされて、一〇〇パーセント以上仕事が出来た組が増えて貰えた。黒パンは雑穀が原料で、甘味も塩分もなく酸味が少々あるだけで、日本ではとうてい食べられる物ではありません。

静岡県 小川賢介

和歌山県 林 三子雄

昭和二十三年五月一日、メーデーを祝う催しがあったから移動させられた。今度はボルガ河の外輪船で河下り。四時間ぐらいで下船し、収容されたのはカザンの波止場に近い収容所で百五十人が入った。建物はようやく建てたばかりで仕上がってなかったから石灰汁を壁に塗ったり寝台を整えたり炊事用釜等調度品の整理をして、石灰臭の部屋は南京虫や虱の煩わしさなし。工場内の清掃等々各種作業に出たが、深夜の飛び入りでの貨車積みや荷卸しは時間限定で三時間激働は体力消耗が甚だしかった。中でも新築建物の塗装準備作業で内壁と天井の塗り下のササラ打ちは細い板が扱づらい。天井へは金槌で釘を打ち上げるから首も手も非常に疲れた。天井の隙間ばかり見つけていて足場を踏み外して転落、足場板へ胸骨が掛かって止まったから良かったが、肋骨四本骨折し内側へ畳む負傷に呼吸動作も辛い。二週間の作業休と絆創膏テープリングをしたのみ。静養を申し渡されただけで鎮痛剤はくれなかったから、怪我の晩から一週間ぐらいいは起居振る舞いが制約され大いに苦しんだ。

怪我が回復すると炊事係に指名されて勤務に着いた。朝は午前三時に起きて馬鈴薯粥を仕込んだ大釜の座った窯の火入れをして、薯釜が沸き出すと焦げ付かせないため釜底を木製オールで常時掻き回すのが新入りの役目で、調味から配給は先任が当る。釜掃除、粥桶の清掃から室内外清掃で夜九時頃まで立ち尽くすので足が疲れる。それでも寒風に曝されての所外作業より体力消耗は少ない。

各小隊は二十五人ずつに再編成され、本格的な作業が始まる。私の隊はカーバイド工場へ水道を布設する工事に回された。カチカチに凍った大地をつるはしで掘るのは苦しい仕事である。冬は地下二メートルまで凍るので二メートル三十センチ掘らねばならない。つるはしを打込むと小さな穴が出来る。一尺角くらいのまわりに、小さな穴をあけていき、次にその角の中へ打込むのだが、空腹で力が入らず、作業は容易にはかどらない。ソ連側では遅いといつて怒鳴る。日本側では飯もろくに食わさないで仕事が出来ると、一斉に座りこんで抵抗する。ソ連兵が来て機銃を手に威嚇する。仕方なく立上る。仕事はのろのろとやる。初めはそういうことの連続であった。しかし我々が抵抗しても、彼等は決して手をかけようとはしなかった。日本の軍隊は手が早かったが、これは国民性の相違であらう。

あるとき、同じ作業場で働いているドイツ人が言った。「日本人はなぜソ連側に協力して仕事をしないのか。ここはソ連であつて、日本ではない。働かなければ食料も多くはもらえないし、要求も通らない」。

我々の側でもそれは考えていた。しよせんは、はかない抵抗に過ぎない。このままでは犠牲者がふえる一方である。事実、作業の行き帰りや、作業場で疲労で倒れる者が毎日何人かあつたのである。

そして作業の能率を上げることに努め、ノルマは順次向上し、食料の増配や、処遇の改善の要求もおいおい実現していった。

しばらくしてから、鉄材運搬作業を割当てられた。戦利品の機械類や工場資材等が運ばれて来て、野積みしてあつた。有名なドイツのシーメンスやクルップの名のある機械類がたくさんあつた。これらを運搬し、工場に据えつける仕事である。運搬機械等はなかつたが、こういう仕事は日本人の得意とするところで、梯子とコロとロープを利用して運搬する。我々は作業の要領がよく、能率が上がり、ノルマは五〇〇%から七〇〇%くらいに評価してくれた。收容所の食糧はノ

ルマによって配給されており、食事もノルマによって差をつけることをソ連側が要求していたが、日本側ではこれを拒否して平等に分配していたのであるが、どうしても差をつけることを要求するので、この頃からノルマによって各小隊の食事が違うようになった。私の小隊は、連日高成績をあげていたので、多量にもらった。依然として粟やきびのカーシャだけで、時々黒パンがあつたが、満腹していた。食事に差をつけたのは三月月ほどで、後では日本側の強い要求で平等に分配するようになった。

(中略)

ダム建設工事

厳しく陰うつな冬が、再び訪れた。ソ連の收容所では、二カ月に一度くらい身体検査が行われ、尻の肉をつまんで、その張りの具合で三段階に分け、一、二級が重労働に従事し、三級は軽労働をしていた。私は退院後ずっと三級であつたが、昭和二十一年十二月頃二級に昇格し、一般の作業小隊に編入された。その頃ダムの建設工事が行われていたが、来春の雪解けまでに完成させるため、交替制の突貫作業で進められていた。私の小隊は夜間作業を割当てられ、午後八時から明方まで働くことになった。

工事現場は、凍結を防止するため仮の囲いをして、中で石炭を焚いていた。コンクリートを打込む場所は、幾つもの区画に別れ、上に板で橋を架けたようにしてある。ミキサーから出てくる生コンを一輪車に載せて、その板の上を歩いて運び、生コンを投込む。板の通路はゆらゆら揺れたり生コンの重みでしなる。ともすれば身体の平均を失いそうになる。体力を要すると共に要領がいる。電灯は暗くて見え難い。もし落ちたら人間コンクリートになってしまう。体力の弱つていた私にとつて、この仕事は苦しく、いつも死の恐怖にとりつかれているようで、実にいやな仕事であつた。何とかして他の仕事に変わりたい、又は死なない程度に病気が再発して入院したいと考えていた。

ストーブの石炭焚きを懲役囚のロシア人がやっていたが、あれがよいと思ひ、監

督に石炭焚きをやらせてくれと頼んだ。なぜかというので、私は目が悪いので電

灯が暗くて見え難いと答えた。彼は少し考えてから、大きくうなづいた。二、三日して石炭焚きを割当てられたが、この仕事もやってみると楽ではなかった。広い工事現場を回って、次々と石炭を入れる。温度は摂氏五度から八度に保持しなければならぬ。石炭を補給しなければならぬ。休む間もなく動かねばならなかった。おまけに質の悪い泥炭で、燃え難く、ともすれば火が消えそうになった。三日目頃、何力所かでついに火が消えてしまい、温度が摂氏五度以下に下つてしまった。私はストーブ係は不適合ということになり、戸外作業へ回された。

トラックで運ばれて来た砂をおろし、ミキサーに連結している穴にはうり込む仕事である。

寒い日は零下四〇度にもなる厳冬の夜間作業は、又違った苦しみがあった。この工事は至上命令だったらしく、どんなに寒くとも、吹雪の夜も、休ませてはくれなかった。人間コンクリートになるおそれは無かったが、凍傷を警戒しなければならぬ。自衛の手段として靴下は腹巻のネルを用いて手製の袋を作り、底は六重とし上は四重として靴下にし、その上に防寒靴を履いた。顔は防寒帽の前に布をつけ、目だけ出して作業をした。少し動かずにいると大腿部や腕が麻痺してきて固くなってくるからいつも動かねばならぬ。被服が重くてよく動くから、疲労度が激しい。病後の身体であったから、いづれ又発病すると心待ちにしていた。今度は死ぬかも知れないと思つたが、もうどうでもよいという気持だつた。

しばらくして昼間作業に変わり幾らかよくなった。作業が苦しいので、時々順番が回ってくる便所掃除を志願したこともあった。便所は大きな長方形の穴を掘り、上に板を何枚か架けたもので、その板にまたがって排便する。囲いはしているが屋根はない、中で皆一緒に排便する。冬は凍つて順次せり上ってくるから、それをつるはしやボールを用いて崩すのだが、大小便の凍つた粉が服や防寒帽に付着する。落したつもりでも残つていて、宿舎へ帰るとそれが解けて、臭いの

閉口した。

ブレヤーの石切り作業

島根県 塚田信雄

我々はライチハを出発する際二分され、五百人の集団となりブレヤー河畔の木造で大きくて古い建物に入る。脱走を監視するため四方に望楼を建てて昼夜交替で警戒し、正門には衛兵所があり出入者をチェックしている。またラーゲルの周囲は三メートルくらいの丸太を三、四メートル間隔に有刺鉄線で張り、さらに内側にも同様の方法で筋違いに張り巡らす。そして内外柵の距離が二、三メートルあるので、その間に砂を敷き、入れば足跡がつき、犬猫以外の出入は不可能である。

着いた翌日から我々の生活する建物の修理、修繕をする羽目になったが、ソ連人の囚人もおり、共に働いた。ラーゲルの一部に百人は入れる大型トイレができ、その一隅の個室を収容所長以下幹部が使用していた。便槽は深いので当初は爆弾投下してもお釣りが来ないが、溜まると芝草か木の枝を入れて予防策を講ずる。また両足下は長くて厚い板を使用し、落ちる心配はなかった。冬期間は凍結して山が高くなるからボールで突き崩し柳条製のザルに入れて廃棄するが、凍結して石ころ状態になっており、汚い感じがなく、この作業は軽労働の人の仕事であった。そのうちに医務室が開設され、日本の軍医、衛生兵が勤務したが、責任者はあくまでソ連の女軍医である。医療技術ははるかに我が方が上のように。彼女の診察方法は、尻の肉をつねって肉付きの有無で健康度を決めていたらしい。即ち一、二級は所外の労働、三、四級は所内の軽労働で栄養食を与えていた。

私は入ソして芋掘り作業のためか、右手の薬指が化膿し痛いので診察を受けるところ「指瘡」と診断され、約三ヶ月休養し戦友から羨ましがられる。しかし、手術の際は医療器具がなく安全剃刀で切開したから物凄く痛く、今でも切

り跡が残り、寒い時指を使うと半世紀後の今日でも痛みを感じるからとんだシベリア土産になる。またソ連の軍医は、風邪をひき、いくら咳が出て苦痛でも熱が三八度以上ないと作業を休ませてくれない。しかし、このような境遇でも帰国する目標があるから、作業事故を含め一年半の死者は五百人中六人で、他のラーグリより死亡率は低く喜ばしいことであつた。

入所して一カ月くらい経過したころ、正式に抑留者の給与規定が決められた。主食は朝夕雑穀(高粱、大麦、小麦、燕麦、大豆、小豆、玉蜀黍等が原料)。それに三食用のスープの材料は野菜類(キャベツ、人参、胡瓜、茄子、南瓜、主として馬鈴薯)。魚類は鯿、羊豚肉が入ることもある。しかし、すべて人員に応じてカロリー計算で支給するので、量的に少なく、全部ブツ込んで雑炊にする以外に方法がない。また、雑炊とスープの場合も各班ごとに炊事場で配分するが、大釜で幾ら混ぜても最初は中身が少なく、底に近づくと中身が多くなるから、当番は時間内になるべく遅く行くようにした。理由は分らないが、日本の祝祭日に主食用に白米を特別支給したが、おそらく関東軍の備蓄物資の一部だろう。特に当番が神経を使ったのは昼食用の黒パンの配分だろう。皆飢えているから食については極めて敏感だ。だから当番は公平を期し、全員の前で黒パン(長方型三・八キロ)を包丁で切断して等量を定め、竿秤さねかりを作り、配分は抽選する。パンの中より切り端の方が固くて歯ごたえがあるから、それが当たれば喜んだものだ。また、入隊前、社会的地位の高い人とか年配の人が食に対し汚い行動をする事が多かった。例えば病人が枕元に置いたパンがいつの間にか紛失し、その犯人は前述の人達だ。過半数が二十代の若者の集団生活であるのに、色気話はなくただ食い気一辺倒で、ぜんざいとか、餡たつぷりのぼた餅など、甘い物の話に花を咲かせ、唾を飲み込み寝る毎日だ。

シベリアの大地が凍りつき、ブレイヤー河が凍結しトラックが木材を積み走る十二月ごろからいよいよ石切り作業が始まることになり、酷寒期に入り、防寒具(日本兵、開拓団員の使用した綿入れ)の不備な冬期の労働に不安を感じる。

出発は寒暖に関係なく日曜以外八時出発、十七時過ぎ、隊列の前後に警備兵が付き帰つて来る。作業現場はラーグリから約一キロの所にあるが、石切り場の下に引込み線があり、ブレイヤー駅に通じている。作業は中隊ごとに持ち場が定められ、ソ連人の監督が常時付き、「ダワイ、ダワイ」を連発し作業を急がせ、抑留者の悲哀をつくづく感ずる。作業は岩山を崩し、大石はコンプレッサーの削岩機で穴をあけ、その中にダイナマイトを詰め込み発破をかけ、大割りしたものを大ハンマーで砕く。機械器具を使う技術的な仕事はソ連人がやり、我々は石の大小を分類し、ターチカ(車輪だけ鉄製で、白樺、カラ松等厚板の一輪車)で引込線置場まで運搬して、定めた五立方メートルに積み上げる。ターチカは木製で相手が石だから度々破損するので、修理専門で六十歳くらいの大工がいた。道具は斧だけで切る、削る。器用にやつてのけた。

ある日突然「ギヤアー」と悲鳴を聞き駆けつけると、岩に挟まれて苦しんでいるではないか? 慌てて数人でボールを差し込みこじ開けようとするが、なかなか思うようにいかない。ようやく引き出し、即製担架を造り医務室に運んだが内臓破裂と出血多量で死亡した。誠に痛ましい犠牲で、共に帰国を待ち望み苦勞したのに残念であつた。

このように危険性の高い馴れぬ重労働はソ連側も配慮し、我々も注意し、それ以降このような事故はなくなる。シベリア抑留生活の初期、最も腹立たしい事は、着たきり雀の我々を約半年の長い間、非人道的に入浴と衣類の交換をしてくれなかった事だ。そのため風が大発生し、疲れて作業から帰り夕食後、全員下着を脱ぎ虱取りの風景は苦々しい思い出の一つだろう。その後ソ連当局は、一週間に一回のシャワー入浴と、衣類の煮沸消毒等幾分改善された。

約一年半のブレイヤーの石切り労働とも別れを告げ、全員、ライチハラグレイ(収容約一万人)へ移動する。

目的地カラガンダへ

監禁二カ月（この理由は不明）、これでやっと解放された。祖国へ帰れる……勝手な判断でした。再びチタの駅から貨車に乗せられ西へ西へ。凍結した白々と光るバイカル湖を過ぎたころには騙され続け帰国の望みは絶望のどん底となりました。更に走り続けた七日間、ナホトカから八千キロ、異国の丘の歌「海山千里と云うけれど」まさに二千里、中国チベット高原の裏側にあたる中央アジア、カザフ共和国カラガンダの目的地に降ろされました。時に昭和二十一年三月の終りごろ、春程遠い酷寒のシベリアでした。途中一日二回ぐらい何も入っていない塩気だけのスープ一杯と黒パン一片の食事のため、立ち上る気力も体力もなく小便にも血が混り疲労の極限でした。

収容所、労働作業の状態（全般的）

私達収容所の近辺内部

六十万人の抑留者は広大なシベリアの荒野に作られた千五百カ所余りの収容所に分散されました。この労働内容は、鉄道の敷設、採炭、建築資材の掘り出し（碎石）、木材伐採、ナホトカ、ウラジオ港湾建設、水道工事などが主なものでした。特にスターリンが最優先したバム鉄道は計画よりも二カ月も早く、昭和二十四年の十一月に開通され、これは枕木一本ごとに一人の日本人抑留者の亡きながら眠っていると云われるほど苛烈な突貫工事であったと云われています。収容所の規模は労働の種類条件等により、その収容所人員は大きささまざまです。私達二千人の部隊は七百人ほどの作業部隊に分散されました。収容所の周辺には望楼があり（四隅）、周辺全体には有刺鉄線が張られ、自動小銃を肩に看視兵が見守り、逃亡の防止に眼を光らせています。建物は半地下で、土壁、土屋根。一棟に百人ほど入れられ、真ん中にペーチカがあり、二重窓で室内は暖かく、片側五十人あて、上下二段の粗末な板張りの寝台が作業に疲れ果てた身体を横たえ、友と語る故郷の話、各々のうまい食べ物の話。その作り方等、唯

一の憩いの場と時間でした。（唯一の楽しみは食べる事と寝る事）

従事した作業全般の状態

このカラガンダ地区は、ソ連でも屈指の炭鉱地帯でしたが、私達は抑留期間を通じて炭鉱作業に一度も従事しませんでした。建築の基礎に使う様な採砂、碎石（ハツパ）をかけて山を砕く、水道敷設のための壕掘り作業は幅六メートル、深さ三メートルの壕を、つるはしとスコップの手作業です。酷寒零下三〇度のシベリアは一面の雪と凍土です。収容所の衛門の入り口に吊るしてある鐘（鉄道のレールの切り端三十センチぐらいのもの。私達は地獄の金と呼んでいました）が、寒暖計が零下三〇度を一度でも上ると集合の合図で現場に出発です。降り積もった雪の下の凍土はツルハシも寄せ付けません。それでも監督、監視兵は容赦なく作業に追い立てます。ふと相手の顔を見ると鼻の先が真っ白、恐ろしい凍傷です。「おいお前、鼻の先が白いぞ」相手は自分には分りませんのでお互いが注意、自分が注意されて始めて一心に鼻をこすります。ようやく元に戻り、また作業待ちに待った昼食は朝食に支給になった黒パン三五〇グラムと炊事から運んで来る粟、稗、高粱等を塩味に食用油を混ぜた、眼の映るようなスープを食器に一杯。休む間もなく午後の作業。夕刻、作業を終り人員点呼。これがまた大変。程度の低い監視兵は数の勘定も充分出来ず、五人ずつの縦隊に五、十、十五と並ばせ、それでもなかなか勘定が合わず、寒い現場に立たされました。

作業中での特に悔しい思い出

頭書述べた通り、私達部隊の仲間は一部の民間人の満州ゴロ（ヤクザ親分、自分の集団）がソ連側に取り入り、衣食を欲しままにし、蓄えた体力をかさに現場ではろくに作業もせず、一般の我々には作業の状態が悪い等と暴力をふるい、同胞でありながら余りに血も涙もない仕打ちにはソ連側にも増して悔しく切ない思いをしました。

作業中見たものなど

栃木県 秋元武夫

土の運搬作業中、人骨が出て来ました。ハイヒールらしき物も出ましたが、握ると形が崩れてしまいました。人骨を集め髑髏船の旗印を作ったことは一つの慰みであつたかも知れません。時に頭蓋骨の中に金歯を見つけ、はてこの地は？と皆と話し合ってみました。ひよつとすると帝政ロシア崩壊の折、貴族たちが殺され埋められた所ではないかと。真相は全く分からぬまま、この金歯でソ連の作業員とこつそりパンと交換した人もあつたように記憶しております。

愛知県 山田芳雄

作業は主として住宅用の建設にレンガ運搬やモルタル運び等や農場作業をする。たまにリングゴ園にてリングゴ採集をする。

特に忘れられないのは朝の食事にて当番が汁の中へ小さなダンゴを入れるとき、自分の食器に一個でも多く入れないかなあと期待したのは終生のつらい思い出です。

愛知県 片山節男

作業は毎日指示に従って行い、宿舍は私達の手作業で半地下の二階式の収容所を作りました。

作業の中では煉瓦工場、道路作業、農作業等が多く、他に馴れない作業も多く、しかもノルマによつて評価され、食事も変つていった事もありました。

小隊長をしていた私は、抑留されては作業班長となり、早く会話ができないといけなかったので苦勞しました。

抑留の生活は、衣類は今自分の持つているもの、食事は黒パン、ぞうすい等、腹六分低度、今考えてみても、よく生命が保てたと痛感します。食事や冬の寒さのため、多くの戦友が死亡したと聞きました。六十万余ソ連へ行き、六万人は死

亡した事は帰国後耳にしました。日本の様子は全く分からず、日本へ帰国できるとは考えられませんでした。

栃木県 野沢 功

そんなある日(昭和二十二年の冬と思う)収容所内の技能者を調査すると言う。約三百人の人がクラスノヤルスク機関車工場に転送となる。私も配管工でしたので一緒に行動する事になり、機関車の組み立てボイラーの取り付け作業である。

石川県 今西三郎

退院した時に、病院勤務者を募つたので、これは収容所よりも病院のほうが食べるものがいだろうと思つて手を挙げましたけど、まあ、びつくり、宿舍はテントです。枕元は氷になつています。これは下手なところへ手を挙げたなど。その時の作業というのは、炊事場の水の補給、ボイラー用のまきの伐採、患者の便の処理です。炊事場の水の補給は、囚人がタンク車で、川の氷を割つて運んでくるのをガンガン移し炊事場まで運ぶのですが、退院まもなくの体で大変苦痛でした。

あるとき入院患者が言いました。「窓からあなたを見ていたら、何であんな人が働かなきゃならんのか。今倒れるか、今倒れるかと思つてはらはらして見ている」と慰めてくれました。そうだったと思います。また、夜間の作業は寒いよりも痛いんです。針で突いたように、ちくちくつと痛さを感じます。

また、患者の便の処理は、一斗桶に入れ天秤棒で担いで、病院前の空き地へ、ただどつと空けてくる。決まった場所はありません。空き地へただどつと空けてくるだけです。

しかもその便というのは、自分と同じ赤痢の患者の便、発疹チフスの患者の便です。防寒手袋一つで扱いました。当然汚れますが、洗うこともできません。雪

でこすつて落としました。また、捨てた便には菌がうようよしているはずですが、すぐ凍ってしまえますから菌も一緒に死ぬんでしょうか。どうなっているか分かりませんが、まあ、日本では考えられないような不衛生なことを平然とやつてまいりました。

また勤務者用の便所は、土地の高低を利用して丸太を二本立て、それに横棒を渡して、それにまたがつて用を足すんですが、落ちたものがだんだん積もつて凍ってきますから、ちようどつららを逆さまにしたような格好になる。そして尻につかえそうになると、つるはしで根っ子をガンとやる。五メートルほどの高さから、彩色豊かと申しますか、色とりどりと申しますか、氷の塊ががらがらと崩れてくるんです。まあ、シベリアでなければ見ることができない思い出の一つでした。

また、用を足しても紙がないのでふいたこともありません。二年間ふいたことがないんです。また、ソ連人もふかないんです。あれはどういうわけか、食物の関係か、ふかないんです。自分としては初め気持ちが悪かったけど、慣れりや何とも思わない。環境がそのようだから仕方ない。

一本松の悲劇

私は順調に回復していききました。柔らかい食べ物の栄養を吸収する力がまだ胃腸に残っていたからでしょう。間もなく水のはいた桶を部屋の中へ入れることもできるようになり、雑巾をしぼる力も出てきました。危機を脱したのです。昭和二十一年四月の末ごろになつていたでしょうか。昼間は軒先のツララから雪がたれるようになってきたころ、元の候補生の部隊ではなく、軽作業を中心とするOK(オカ)という部隊に戻つていくことができました。

厳冬期には一日に二十人を越える死者が出ていました。死者の衣服はすべて剥がし、手首などに布切れを結び名前を書いて、テント小屋の中の棚に並べてあ

静岡県 飯島 久

りました。死者への尊厳などを配慮することなどひとかけらもありませんでした。交代で遺体埋葬に出るのですが、作業に疲れて帰ってきた者が、再び墓掘り作業に駆り出されたのです。

零下四〇度を越える寒さでは、雪も土も固くてそのままでは掘れません。炭鉱から帰ってくる人たちが塊炭(石炭の塊)を担いできて、一人一人分くらいの長方形に石炭を積み上げていきます。角を少し砕いて、木屑や枯れ草をおき、カテラで火をつけると、意外と簡単に燃え出すのです。それほど質の良い石炭でした。一晚チヨロチヨロと燃え続けると、その場所だけは三十センチほどは掘れたのです。雪と泥をかけた程度で、遺体をすっかり埋葬するには無理なのですが、そこへ遺体を横たえ泥をかける程度の惨状でした。

しかし、その程度の作業では増え続ける死者の埋葬は間に合いません。OKの私たちには遺体埋葬が主な仕事になっていきました。テント小屋に収容しきれない遺体は外に放置されていました。魚河岸の冷凍マグロそっくりの惨状でした。

遺体は台車に積み上げ、毛布を何枚かかけて、ロープで縛つてラーゲル北側の門を出て、鉄条網の塀に沿つて、左周りにラーゲルの裏へ回りました。途中で遺体がロープからすべり落ち、にぶい音を立てて凍った地面に落ちました。私たちは無表情に裏の丘へ向かいました。ラーゲル南側の柵の直ぐ傍らに一本の松が立つており、その直ぐ右側から遺体を埋葬していきました。土盛りの数は一列二列と数を増していき、いつの間にか私たちが墓地のことを「一本松」と呼ぶようになっていました。明日は我が身の恐怖の言葉でした。

埋葬を終えた私たちは、台車をひいて、食糧の受領に倉庫へ向かいました。付添いのソ連兵が伝票のようなものを示して穀物、大豆、いも、凍った野菜などを倉庫のソ連人から受け取りました。私たちの楽しみは、スコップなどでバターの塊や、凍った肉や魚の干物を叩き割つて、外套の裏を破いて作った物入れに隠し持つてくる事でした。ソ連兵にとつて、それは管轄外のこと知らん顔をしているのが常で、時には少しお裾分けにバターなどを渡してやりました。日本人が盗ん

だものですから、彼らの罪ではないのです。台車に積んだ食料には、遺体を覆ったあの毛布をかけ、車を黙々と押している私たちは普通の感覚ではなかったのです。

五月の末ごろから氷が解け出しました。六月、チロチロと青い火がふき出ししました。遺体の骨から出る燐が燃えるのです。暗くなるのは夜十一時過ぎ、薄暗くなった一本松の丘に燃える青い火、一生忘れることのない凄惨な光景でした。

(2) 作業量(ノルマ)について

作業のノルマ……イルクーツクでもそうでしたが、ソ連では全労働について必ずノルマ(目標)が課せられ、これが「働かざる者食うべからず」のゆえんであり、とにかく一〇〇%の達成が必須条件で、このため本当に苦勞しました。ちなみに畑の麦刈りで一人約一反歩、鉄道建設の土掘り同じく一立方メートルといった具合です。

島根県 内藤静夫

二十五日もかかつて着いたところは、ウズベック共和国のタシケント、第十六収容所の分所だった。

新潟県 青柳善吉

電気工場の工場で、ソ連人五百人、我々抑留者千人の従業人員で、中にあるのは、驚いたことに戦利品で運ばれてきたのか、日本の製品、ドイツの製品の山だった。ロシア語も仕方なしに覚えざるを得ない。作業はモートル巻線からやらされたが、一日のノルマは五百個、どう考えてもやれるものではなかった。

次の作業は鉄板切り。厚さ二ミリくらいの鉄板を一日五十枚がノルマ。黒パン三百五十グラム、スープ飯盒半分目ではとてもやれるものではない。ソ連では比較的暖かいところだったが、作業はきつい。

和歌山県 松本安次郎

切り倒した材を長さ二メートルに切り、幅二メートルに並べ、高さ二メートルに積み上げて四立米とする。それが四人の一日のノルマとなる。ノルマだけしておれば問題ないが、それ以上の立米について一立米ごとにわずかなパンが出る。こ

れをねらうのは若い者に多い。このわずかなパンをねらうのが、死因を招く結果となる。

大阪府 小森淳男

日本人は捕虜の経験がないので、今回の捕虜生活では随分と要領の悪いことだった。「ハラシヨラポータ」は優先的に日本へ帰すと餌に出されれば、毎日毎日帰りたい思いでいる捕虜の我々は、その心理をつかれてツイツイ無理して仕事をすると目立つ。事実、その人は「ダモイ」のメンバーに入れられて帰国していくのでノルマが上がり、結果的には自分で自分のクビをしめることとなり、それがまた健康を害した原因にもなっている。聞くところによると、独ソ戦では、捕虜にしたり捕虜になったりで、シベリアに來ているドイツ人の捕虜全員はせいぜいノルマの五〇%程度しか作業をしない徹底ぶりだそう。我々日本人は初めての捕虜経験なので、ダモイを餌にされるなどして、キツイ「ノルマ」をさらに上げる結果となった。

和歌山県 浜寿一

最初のラーゲル(第一収容所)でのことである。私たちに与えられたのは、れんがを作る仕事だった。このれんがは日本の三倍もある大きさだが、土に水を入れて練り型にはめるだけで、焼く必要がない。一年中全くいつてもよほど雨の降らないこの地方では、このようなれんがで家を建てられる。

れんが作りは一日三百六十個のノルマが課せられた。型にはめて抜き取るといつても、これはなかなか大変な仕事だ。最初作業に出かけた富田は、三百六十個を達成できなかった。次に分隊長は私に作業員を命じた。私はもともと京表具師なので、手先の仕事にはなれている。とにもかくにも三百六十個のれんがをつくりあげることができたのであった。

和歌山県 入山敬一

新しい收容所長が派遣されて来たが、作業の厳しきは相変わらず「ノルマノルマ」の毎日。

そのようなある晩、夜中に私が便所に行く途中に知ったことであるが、旧日本軍将校と軍医とのヒソヒソ話を耳にしたのは、ノルマを上げるために、「栄養失調のために働きの悪い者は注射で死なすよりない、悲しい手段であるがやむを得まい」という話だった。まことにひどいことで、私はそれ以来、もし病に倒れても、決して注射だけは打たせないと心に定めたものだ。あの当時、強度の栄養失調になれば、あつげなく自然死ということで処理されていたようで、我々の山ではこの病で数えきれないほど死んでいった。

新潟県 片山正治

生死限界の粗末な食事と極寒零下四十度の寒さ。シラミの大群がはなれない衣服。「ダワイ」「ヴェイストレー」と自動小銃に囲まれての強制作業の毎日。そのかれつき、非人道的な取り扱いに、栄養失調や作業による怪我がもとで日に日に犠牲者がふえていった。

作業人員が減つても、收容者の作業量はへらされない。絶食をかけての人間らしい取り扱い闘争もくわだてられたが、「いかなる理由があつても、ソ連政府の命令に反抗する者は、ただちに地球上よりまっさつする」というのがソ連側の回答であり、「ダワイ」「ヴェイストレー」は一層のかれつきをくわえるのだった。

生きるためには、仕事へのかげんが必要である。ノルマは落ち込む一方である。ソ連側がどう考えたのか、作業が水道関係になった。管理のための作業になつても、その環境の変化はない。夢遊病者のように、小さな石にもつまずいて倒れる者が多くなる。このままシベリアの凍土にくちはてるのではないかとという恐怖と不安のなかで「ダワイ」「ヴェイストレー」を聞きながら、力なくスコップを動かす。

作業ノルマが思うように上がらない、不良作業者のレッテルをはられ、一週間

くらい貨車に乗せられて、一層かれつな重労働にかりだされた。カーメンラボーターである。岸壁をよじのぼつての岩れき運搬作業である。一体なんのためにこんな目に遭わされるのか、ひしゃく一杯のスープとカーシャ(粥)が食事のなかでの、強制労働に言葉を出す力もなくなつていった。

福岡県 尾花保衛

空き地の広いところに整列、隊互を組まれ肌を刺すような寒気の中を進まされた。凍傷にかからないよう鼻をこすり手をさすり凍りついた路上の行軍には活気もなく、意気もあがらなかつた。意気消沈。無言の歩みは、まるで屠殺場に向かう羊の群のようだった。

山の中へと突き進んで行くうち、と或る大きな建物の前に止まった。それは、奥深い山の中につくられた、旧囚人收容所のこと。周囲は丸太で組み込まれた、高さ六メートルもある頑丈な柵で、その柵の内外にさらに二メートルくらいの柵がつくられ、三重に囲まれた脱走防止の柵である。約四百人の将兵は、ソ連兵の銃剣に取りかまされながら收容所のなかへと追いこまれた。大きな門は容赦なく閉ざされ、收容所の四隅の高いやぐらには、早速警戒のソ連兵が立った。いよいよ厳凍の地、極寒のシベリアでの抑留生活が始まった。

日本人でロシア語の出来る人が通訳となり、ソ連軍收容所長(独ソ戦で負傷した気の荒い中尉)と日本軍将校(大尉)との間で、日常生活について守らなければならぬ規則並びに注意があり、日本軍将校の言い分は何ら通ることはなかつた。規則制約を破る者は即座に銃殺するという厳しい通告だった。身振り手振りですす收容所長の態度に、敗軍の日本とはいえ、将兵の皆々にふんぬの敵意をあたえた。

まき切り作業

島根県 八幡垣正雄

太さ三十〜四十センチの松の木を二人引きの鋸で長さ四十センチに切り、これをタポール(斧)で割つてつくる仕事、ノルマ作業で、ドラワ・ピリー・カンチャイ・ダモイ(材木切りが終わつたら帰つてもよい)の請負作業である。

ノルマ量は忘れて不明、最初はノルマ量も少なく、互いに一生懸命行い、昼食抜きで午後二時ごろに終わり、ラーゲルに帰つて休んだが、あまり早くノルマを遂行するので、だんだんとノルマ量が多くなるので、午後四時ごろに終了するように休憩をしながら作業をしたものである。

ソ連のノルマの基準は適当で、個人差があり、使用する者より使用される者が頭を使い、要領よく働かないと、ノルマの基準量が上がつて私たち全員に影響するのであった。

福井県 尾上敏雄

昭和二十一年の中ごろよりおの自分の仕事をするようになり、仕事もノルマ式になり、なお、体にも等級がつくようになった。一級から四級まであつて、一、二級は重労働、三級は軽労働、四級は休養で、食事も一、二級は四百五十グラム、三級は二百五十グラム、四級は百五十グラムであった。私は木材伐採が得手で、十一月ごろから原木の伐採及び製材所の仕事に従事した。作業には監督がいて、我々の仕事の監督はソ連の囚人であった。その上ソ連の軍法会議にかつたソ連の軍人、その上にソ連の正規軍人がいた。日本の捕虜はすべてソ連の内務省管轄であつたようである。仕事はノルマ式で一日の労働時間は八時間であったが、収容所長の権限で二時間の業間作業が毎日のようにあつた。休日は週半日であつた。結局一か月二日の休みであつた。二十一年の十一月ごろより二十二年の六月ごろまで原木伐採、製材製品の整理等の作業であつた。製品は主に鉄道の枕木であつた。私の体は割合丈夫で、二年間で体が三級になつたのは二か

月のみであつた。

仕事の中で一番つらかつたことは、製材の製品中枕木の積み上げであつた。ノルマ二人一日百五十本であつた。ノルマ完了できないときは減食であつた。

和歌山県 崎山肇

朝から草小屋の前に整列し、各班ごとに、大きな草刈り鎌で一列横隊で作業をする。ノルマが課せられており、不なれで思うように作業がはかどらず、次第に日中の暑さと飢えとで激しい疲労の毎日である。何しろ朝晩は米の少ないカーシア(かゆ)が飯ごうに三分の一度、昼は黒パンが二百グラムで、班の中でも次々に病人が出る。小生も高熱で倒れたが、草小屋で休むだけで何の治療もない。幸い牡丹江の医薬庫でたくさんの薬を用意していたので、二、三日で回復した。死者も数人出た。皆んなで墓場をつくり埋葬した。すすり泣く声が広野の風に乗つて聞こえてくる。

鳥取県 竹安熊市

私たち五十人の作業隊は石割り作業に従事させられ、道具はハンマー、ツルハシ、タガネ等、ソ連人カマンジール(監督)が作業の指図をする。石山にて一人のノルマ(基準)と場所を告げる。作業はなかなか進まず一日一立米もできない。その日の外気温は零下五十度でした。私は作業中痺春で負傷した左手小指が凍傷にかかり、見る間に白くなり手の感覚がなくなりました。収容所内にてソ連人女医により手術。手術と言えば聞こえはよいが名ばかりにて、指をはさみで切り骨は金切り鋸で切りました。激痛とともに三日間四十度を超える高熱が続き、生死の境をさまよいました。にもかかわらず女医は「君は左手は使えないが、右手で労働はできるはずだ」と、とても負傷者に対する言葉とは思えなく無念でなりません。戦争に敗けるとは、このようなことなのか。まるで奴隷だ、奴隷とはこのような姿を指しているのだろうか。さながらここでの生活

は地獄であると解するほはなかつた。

一日二百グラムの黒パンと塩スープで重労働に追いまくられた。しかもなれない酷寒の中で……。いつか故郷へこの一念が支えとなり精神力で耐え忍んだ。やせ衰えて骨と皮になりながらノルマの上にノルマを課せられ、入ソ当初は日本人上官からも殴る蹴られるで酷使された。なかなかノルマ達成できなく、いつも平均三〇%しかできず、収容所に帰つてからは、夕食はパーセントがあがらないので大豆が二十粒くらい入つていれば上々、一口か二口に満たない黒パン三百グラムでした。一日三〜四時間の睡眠と足を引きずりながらの重労働、極度の栄養失調により四十度の高熱が続く苦難苦痛の毎日でした。しかも夜にはソ連政治部員に指導され、日本人アクチーブの共産主義、マルクス・レーニン主義の教育でした。コムソモルスク収容所での二年間は、捕虜は奴隷であると言わんばかりのソ連側のあまりにもひどい仕打ちでした。

福岡県 藤吉静男

いつのころか定かでないが、私どもの体に等級がつけられ、その方法は、赤軍の女医が胸の肉をつまみ、復元力の強い者、体に異常があつても肥満型の人は早くもどり一級、やや遅い者二級、健康でもやせていて遅い者三級、しまいにはみな衰弱し、やせてくると、尻の皮を引っ張つて決められるようになった。その次が四級で、入院下番等、作業できない人は作業免除された。そのほか、体の調子悪く、作業できない者は、毎朝作業に出る前、医務室で診断を受けたが、一日の練兵休は四十人が限度、それ以上はどんなに悪くともため、腹痛、風邪、いかなる病気でも、熱が三十八度以上なければ休めず、もつともいろいろ工夫して熱を出していたようだった。

一番ひどくかわいそうなのは、やせてなくて足腰の神経痛、関節炎の人は、いかに悪くとも認めてもらえず、苦しみにあえいでいた。

一級は村のソ連人並の重労働。ノルマ高く、真面目に一生懸命頑張つても八

〇%がやつと。従つて食事も定量の八〇%、やつと生きて作業ができる程度。六〇%以下パンなし。三〇%以下は見せしめのためか食事なく、重営倉入り。二級は一級の八〇%が一〇〇%。三級は六〇%で一〇〇%。

ちなみに三級が一級の八〇%すれば一二五%以上の食事がもらえた。全く無茶苦茶な使い方だった。私も体の強い方でなく、すでに血たんを出していて、あと一年もいたらシベリアの土に化していただろう。

和歌山県 奥山博

そのうちに昭和二十一年にはいったが、帰国できる様子は全くなく、鉱山へは昼夜三交代にせよという命令で、早朝、夕方、夜中の三組になって本格的な鉱山作業をやることになったのである。そんな「キツイ」重労働をやらせながら食糧は相変わらずで、ろくすつば与えようとせずにいることはもつてのほかで、けしからんではないかと大隊長に詰め寄り交渉してもらおうのであるが、先方は「ハラシヨウ、ラボウター」（ノルマのよい働き）。ノルマとは、「仕事の出来高」のことで、仕事ぶりのよい、働きぶりのよい部隊から先に帰っているのだから、しっかりと働いてノルマを上げることだとの回答ばかりである。

作業隊は五十人を単位に一個班とし、エレベーターで地下へおり、作業は十人一組になつて鉱石（タンクステン（原石）を掘り、運び、エレベーターに積むのである。ここではソ連の現地人の監督がつききりで監視して、仕事を怠けると「スターブ」（捕虜収容所）へ連絡されてしまうのです。一度作業隊員の一人が仕事中に熱を出して座つていたところへ、監督仲間でも一番厳しい者に見つかったのであるが、しばらくしてソ連軍の少尉がピストル片手にやつて来て、現場作業の責任者であつた私を彼の車に乗せて収容所に連行し、二日間独房に入れられひどくやられました。何も作業を、怠けさせたわけでもないのに、どんなに言いわけしても聞き入れない。現場監督はその日の出来高を収容所に報告するのであるが、これによつて黒パンその他の食糧の量が決められるのだ。我々にとつてはたまった

ものではないことであつた。

岐阜県 齊藤克己

毎月二回、女医による名ばかりの身体検査があり、表面の皮膚をちよつとまんで見ただけで等級をつけられて、仕事の軽重が加減されるので、なるべく等級が下がり軽労働になるように、要領よく振る舞う者も大勢いた。いま一つは発熱であり、三十八度以上あれば文句なしに完全休養になるので、この方でも努力して熱が上がる工夫をした。

鳥取県 真山 基

作業は穴掘り、伐採、石切り運搬、れんが運搬、れんが積み、塗装等であるが、直径五、六十センチ、深さ一メートルくらいの小さな穴でも、かちかちの凍土は鉄棒をはじき思うように掘れない。その上空腹では腹力が出ない。「腹いっぱい食べさせてくれたらなあ。仕事もするのだけど」と当時は思った。

仕事はすべてノルマ制で、一人の一日のノルマが課せられ、それだけはいや応なしにしなければ夕飯にありつけないのである。れんが運搬は三、四十枚背負い、三階まで走るようにして運搬する。その回数を日本軍元将校さんが記帳し、翌日点呼の際に報告、成績優秀者は表彰し、一回に掛けごうのふたで一杯のメリケン粉が増配されていた。個人ごとの成績記録はグラフにかいて兵舎の廊下に張られていた。

鳥取県 村川 豊

建築・道路・れんが工場・砂場、森木伐採、炭坑から炭送車の炭おこし等々、二、三か月くらいであちらの工場、こちらの工場と移動され、毎日がノルマ、ノルマで重労働、働かざる者食うべからずの共産国、ノルマがでなければ欠食、零下二十〜三十度のなか体を動かさねば寒く、働けば腹が減る。

食事は、一食朝飯ごうのふたに八分目、スープ(米が花になった状態)中にはホルモン(畜内蔵)小指の先くらいの切れが一、二個、キヤベツとバレイシヨの小切れがはいったもの、昼は黒パン(兵黒、下士官白、黒、将校白)一食分は日本の食パン一斤の四分の一くらいの大きさ、夕は卵大のバレイシヨ三、四個湯がいたもの(塩分なし)または米・コウリヤンをおかゆ以上にたき、スープ状のもの。国際上は一人一回何カローリ、白米、肉、野菜、黒パン、砂糖、雑穀、塩、たばこ、等々何グラムというなれど食事は十分ではなかった。春というか夏というか、雪、あられの降らないのは六、七、八の三か月間、五月の中ごろまで、九月の中ごろから雪、あられが降る。ノルマが終わればこの工場はみんながよき成績でした……が、いまだノルマの上がらぬ工場があるので、その方へ応援に行く。次の作業場が終われば帰国させるから頑張つて働いてくれ。この仕事が終われば帰国する。何度も何度もだまされた。

和歌山県 上田 宗雄

労働の実態、ノルマの状況

使役は毎日零下三十度までは狩り出され、病人以外は出役させられた。病人でも熱がなければヒートリ(ずるい)だと言って、足腰が立てばかなりの重病人でも出された。神経痛のように、いくら痛くとも熱のない人は気の毒だった。作業にはすべてノルマがあり、一〇〇%遂行しなければ三百グラムの黒パンも二百グラムになり、さらに何も出ないことすらあった。これは個人ではなく作業班全体が対象となっていた。

帰国近くなるころ、一か月一〇〇%遂行した班員には、一人百五十ルーブルの金を支給されたことがあった。ノルマは何をどれだけということだが、何を基準として定めたかはわからなかった。

北海道 倉部房次郎

抑留中ラーゲルは七、八か所も変わった。だれもが経験したように、いつも空腹を抱え、ノルマに追い立てられ、重労働に明け暮れた。

作業は草刈り、伐採、製材、れんがづくり、建築、土木、雑役と何んでもやらされた、「ノルマ」身ぶるいする言葉だ。食事はあまりにも少量、とても重労働に耐えられるものではない。野草も食べた。ネズミを食った連中もいるはず。馬糞が饅頭に見えたりもする。食事した夢が覚めてみたら毛布の端をかんでいて苦笑い。食料を扱う使役は皆に歓迎された。多少でもくすねることができたからである。

穀物倉庫の作業で米をくすね、袋を下着に隠し持ちかえったところ、ラーゲル入り口の検査で発見され、目がくらむほど殴られたこともあった。夜中に監視兵のすきを見て、二、三人で囲い線をくぐってラーゲルを脱出、畑作物を失敬するという危険な行為も体験した。

どこのラーゲルでも話題は食物のことばかり、他の欲望は一切去勢された感じだった。

石川県 永井正三

シベリア鉄道を西へ西へと参りまして、結局三十数日かかりまして中央アジアの方へ、南へ下がりまして、ウズベック共和国のタシケントという首都におりました。そこからまた乗りかえて東へ百キロほどの二千五百メートルほどの高原にある炭鉱地にはいりました。アングレンと申します。戦前からの炭鉱地で流刑囚が大半おりました。そこでの作業で、初めは土木作業でありましたけれども、あとで聞いたところが、高原の谷間を大きな川が流れておりましたけれども、その川をせきとめて新しい川をつくれという作業であった。何でということとはわかりませんでした。これが前の川の河川敷を十メートルほど土をはねると、厚さ五十メー

トルほどの炭層が二十五キロにわたって埋まっているということでありました。そこ日本人の約六個大隊、七千人近くが投入されまして、町の建設と河川工事と従来の炭鉱というように従事いたしました。高原でありますので、私は初め外の作業、道路工事とか鉄道をやっておりましたけれども、富士さんの七合目ぐらの高さですから、時々酸欠がありまして、何もしないのにみんなぐったりして、監督にもうど散らされたことを覚えております。鉄道工事をやっております。今覚えておりますノルマでは、枕木の取りかえが一人一日十六本でした。二人で組んで三十二本ですが、これはとてもできないことで、三十二本がずうつと並んでいれればできますけれども、シベリアから送られてきた生木の枕木の集積所へ行つて、それを担いで帰ってきて、それをまた古い枕木をあらに一本、こちらに一本という、三十人ほどの作業隊が何キロにもわたって枕木の交換をするという重労働でありました。幸いシベリアと違って気候が温暖で、せいぜい寒くても零下五度から十二度ぐらい。犠牲者が少ないのは何よりの幸せでした。

岩手県 菅原義三

そして、伐採が終わりました。今度は土を平らにする作業です。向こうでは、一輪車もあったわけですが、木の車あるいは鉄の車というような一輪車、多分ターチカと言ったような記憶があるんですが、それでも土を高いところは削り、低いところに埋めるというような作業をしたわけでございます。やはりこれもノルマが一立米というふうに決められまして、最初はまず一立米ということで、これは割と簡単にやったわけです。もちろん、条件のよいところ悪いところがありまして、条件のよいところは作業が割と簡単にできるわけです。ところが、ソ連という国はどうしたものか、一日一立米が簡単にできると、次の日は一・二立米、そしてその次の日は一・五立米というふうにノルマが追加されてくるわけです。ですから、一立米のノルマに対し、一・二立米やると大したいい労働者、ハラシヨーラボーターだというようなことで、食糧も倍量されるわけですが、だたそれ

だけならいいんですが、一・二立米ができませんと、今度は一・五立米というふう
にノルマが追加されるわけです。だんだん後になってわかったわけですが、ソ連の
労働者はあまり働かない。つまりノルマぎりの線で作業をやめるわけです。
ノルマが完全に達成されずと、次の日にはノルマが追加されますから、それを
覚えているソ連の労働者はノルマ以上働かない。いつもノルマを達成しないでぎり
ぎりの線で働くというようなことが後からわかったわけです。

石川県 大坂喜久治

戦後、日本にも「ノルマ」という言葉が使われるようになった。シベリア抑留者
がどれだけその「ノルマ」に泣かされたか、聞くたびに怖気が立つ言葉である。

ノルマの達成と食糧の増減に、毎日神経をかき乱されたが、日々支給される
黒パンの分配についても、大の男が目の色を変えて、一分一厘大きさを争う悲喜
劇が演じられた。

どこのラーゲリ、バラックでもそうだったと思うが、黒パンを裁断するための手
製の物差しが、またスプーンを等分するための秤が、分隊ごとにつくられたことか
らみても「食べ物の恨み」がいかに凄まじいものか想像に余りある。分配に時間が
かかると冷えてしまったスプーンをすすり、やっと手にしたパンの一片をガツガツと
頬張ってしまうもの、一つまみづつち切ってはゆっくり味わう者、人それぞれだが、
電灯がなくて代わりにコイ松（松脂しみこんだ内皮部）を灯すので、顔も室内も
油煙で真っ黒。暗闇の中で食を楽しむしほしの静寂は異様なものであった。やが
ては、闇の中で他人の物に手をのばす、さながら生地獄も展開されるようにな
る。

モシカ收容所でのノルマ

東京都 嶋崎武男

私はこのテルマに三か月いて、翌年二月、さらに奥地のモシカに送られた。ここ

が私の今後三年間の收容所生活を送る地となった。この地域の冬季の平均気温
は、摂氏零下五十度という極寒の地だった。ほとんどの者が、伐採、搬出、製材
の三種類の重労働を割り当てられ、それぞれにノルマを課された。ところが私は
ここでは幸運にも、大学工学部に籍があったということで、マシーニスト(エンジン
ア)ということで、製材所の機械工として配置された。しかし仕事はエンジンアが
笑い出すような単純な仕事だった。それは丸のこぎりのシャフトの軸受けベアリン
グの加熱を防ぐため、軸受けに詰まるオガクズを取り除き、ベアリングを洗浄し、
グリスを給油する仕事。一日に何回となく切れてしまう。動力伝導ベルトの緊
急接続修理の仕事。また丸のこぎりの前を矢のように往復する原木保持機、こ
れの伝導ワイヤーがたびたび切断するので、伝導ワイヤーの緊急交換修理の仕
事など、次々に起こる種々の故障を迅速に修理して、製材ノルマに影響させない
ようにするのが私の担当任務であった。他の製材要員たちは故障が起これば休
めるので喜ぶが、私は故障が起これば一分でも早く修理しなければならなかつ
た。零下五十度の極寒の中で、素手で修理することは大変な仕事であった。しか
し他の人たちの作業はもつと厳しいものだった。伐採の仕事に当たった人たちの
中には、重い防寒外套を着ての作業は機敏に動くことができず、倒木を避けき
れず下敷きになって死んだ人もいた。搬出作業に当たった仲間の中には、山から
の材木の馬力運搬の搬出作業で、転落死してしまった人もいた。こんな重労働を
しながらの食事が、干からびたトウモロコシや皮かぶりのコーリヤンでは、弱り切つ
た胃が受け付けるはずがなく、皆ひと下痢に苦しめられた。

岩手県 土川 清

こうしている間に馬を連れてきたので、運搬班ができた。二一七收容所は、バ
ム鉄道建設に携わる收容所であった。伐採、木材運搬、製材、鉄道建設と各作
業班別に編制され、組織され、聞きなれない「ノルマ」を課せられ、なれない労働
に昼夜にわたり過酷なまで、監視の下に働かされた。このころになると、健康度

の検査があった。一級から五級まであり、検査は、健康な人が疲労して体力が落ち、やせ衰えると、ソ連のドクターが尻の皮を引っ張って、伸びぐあいにより判断する。一級、二級は重労働に耐えられるということで普通の作業、三級、四級になれば軽作業、健康度によって作業ノルマが決まっていた。一級が百%とすれば、二級は八〇%でノルマ完了である。毎日の食糧がそれで決まるのだから、何と言っても作業量を上げてたくさん食べ、ることを考えなければと思いつながら、木材搬出作業の小生らは相手がいる、馬である。素直で健康な馬であれば何とかノルマを達成できるが、道産子のような小さな馬なら、幾ら頑張っても五〇%のノルマ達成、黒パンもいつも三百グラムぐらいにしかならない。

新潟県 田中文平

收容所に入った翌日から早速作業に駆り出され道路工事に従事、あたりの山にはまだ人の登ったことのない原生林が連なっている。

我々に伐採させるためには、まず山に登る道を作らなければならない。ツルハシとスコップだけの道具で作業が始まった。十一月ごろには地面が凍ってツルハシを受けつけない。カチカチに表土が凍って仕事にならない。山から雑草を採ってきて積み上げ、燃やして氷を溶かす。作業は一向に進まない。ソ連人の監督は怒鳴るばかり。最初は私たちも悪かった。ソ連のノルマ主義が分からず、何も敵国へ来てまで仕事などするものか、我々には関係ネーやとサボっていた。空腹もあり、動くとなお腹がすくのでなるべく動かない。

監督は、終業近くなると今日の作業量を計算し、何パーセントの労働と帳面に書き込む。二、三日して收容所長より、君たちは自分の食料は自分たちの労働のいかんにより配給を受ける、今までの働きでは食料はやれぬと、まさに「働かざる者食うべからず」の国である。毎日の食事はひどいもので、黒パン少々、エンバク、コーリヤン、大豆粉など、動物の餌同様、それを混合したお粥一杯だけ、これで働けとは無理なことと皆ばやきながらの作業であった。体力も落ち栄養失

調で倒れる者続出、夕方うす暗になると鳥目で目が見えなくなる者、ビタミン不足だけがすると血が止まらない者など、半病人同様な者が沢山出てきた。軍医の計らいで山より松の葉や山ぶどうの葉などを取り寄せ煎じて飲ませ、いろいろな方法を講じたのだが、最後には働ける者が半数に減ってしまった。山に登る道が出来ると、今度はいよいよ伐採の仕事だ。冬の厳しい寒さ、零下三〇度の冬山の作業は大変だ。粉雪が風に舞い、目も口も開けられない。火を焚けば番兵が火をけちらし「ラポート、ラポート」(仕事、仕事)と銃を向ける。

熊本県 安田 剛

收容所での作業は建設作業ということでしたが、最初に連れていかれたのが広い畑の中、何のことはない、ケーブル埋設のための穴掘り。その日のノルマを示されたので、最初ではあるし、みんなが助け合いながら、ほとんど目標どおり頑張つて安心していたら、翌日はその何割増し、次の日はまた何割増しとノルマを上げるので、いつまでたっても達成できず、監督のズルサを恨みました。

神奈川県 香坂 毅

アルマアタでは、キルピーチ(煉瓦)工場で働いた。体力のあるソ連人を基準にしたのか、ノルマは厳しかった。当時、異常な建築ラッシュで煉瓦の供給が間に合わず、毎日「ダワイ、ダワイ」の叱咤に明け暮れた。こうして精いっぱい労働をしても、朝夕二回で二百グラムの黒パンを得るのは至難だった。收容所生活での一番の楽しみは食べることと寝ることだったが、その双方共ままならなかった。食事はノルマで縛られ、後者は、南京虫とシラミに終始責められ、睡眠不足と精神的苦痛に悩まされ、オーカーなどは、間接的に死に至った者まで出た。

熊本県 畠田 完

帰国するつもりが一転して千仞の谷に突き落とされたような生活が始まった。

起床、点呼、食事をすませ山行きだ。カンボーイ(警備兵)つきで作業場に急ぐ。二人引きの鋸で木を切り倒す。斧(タポール)で枝を払い、二メートルの長さに切り、一メートルの高さに積み、ナチャリニック(監督)の検査を受ける。時にはカンボーイを我々の中隊長が代行することもあった。朝八時から夕方六時ころまでよく頑張った。

仕事にも大分慣れたころ、よく働く者から早く帰すという出所不明の言葉にだまされ、ノルマカンチャイ(仕事終わり)も早くなった。仕事が捗れば捗るほどノルマを上げてくる。五立方メートルから七、一〇、一二立方メートルへと上げ、最終的には一五立方メートルになっていた。よく働くエゴノミックアニマル的な性質をうまく利用され、敵の術中にはまっていた。零下三〇度を超す極寒の中で、自分の首を締める結果になり、死期を早めた友もかなりいたのではないかと悔まれてならない。

病弱者には「コバ割り」の仕事があった。樫の木を五〇センチに切り、それを斧で薄く割り、屋根の材料を作るのである。ノルマはあったが軽作業で、行く人は大体レギュラーメンバーだった。特に体調が悪いときは回してもらえる緩衝地帯でもあった。このほか道路工事という軽作業もあった。

初めのうち、ノルマを達成すると、ハラシヨラポーター(優秀労働者)として何ルーブルかの褒賞金をくれた。煙草、パンなどを買ひ、豪勢な思いをしたこともあった。また、ラーゲルで五人選ばれ、ハバロフスクに糧秣受領の旅をした。勿論ソ連人と一緒に客車の旅だ。談笑しながら、マホルカ(新聞紙で巻いて吸う荒く刻んだ煙草)、パンを食べると、すすめてくれるし、ヤポンスキー(日本人)、日本に帰りたいだろうと、日本の音楽をギターで弾いてくれたり、人情の機微に触れたこともある。政治体制は違っても、個人は豊かな人間性を持っている。世界平等だと痛感した。

伐採中、赤松を見つけたら、松の実を取るのが楽しみだった。焚き火の中で蒸し焼きすると、ピーナツを小さくしたような飴色の実が出てくる。最高の栄養

源、嗜好品だった。大きな木に登って取る方法と、切り倒す方法があるが、一本の木に麻袋何ばいも取れ、カンボーイたちに一袋でもやろうものなら、大喜びで、ノルマも大目に見てくれた。

ノルマが厳然と存在する中で、作業能力を高めるため、重い木材を自由に動かすいろんな形の鳶を作り、その場に合ったもので体力の消耗を最小限におさえた。また鋸の通りをよくする楔くわの使用等を考えた。上手に使いこなし、効果は計り知れないものがあった。

岩手県 荒田昌三

年が明けて、やっとパンを焼く釜ができたので黒パンが支給されることになったが、ノルマの基準が厳しく、一日の定量三百五十グラムを得るには百パーセントの仕事量が要求され、常に七〇パーセントの能力では高嶺の花で、二百五十グラムだけのパンであった。従って絶対のカロリー不足で次の作業に支障を来たし、果ては悪循環し斃れることとなる。それでも空腹を抱え今日も山作業に行く。

星の消えない早朝から星の出る夕べまで、ダワイにせき立てられる労働は過酷な上、収容所に帰ってから、飯上げや不寝番(暖炉の火焚き)の内務があり、この任には特に初年兵が当たる結果となり、星数の少ない者から次々に斃れていった。

熊本県 本田正行

兵舎建設にメドが付いたころ、作業班を編成して伐採が始まった。しかもノルマが一人二・七立方メートルという。我々、拉古編成十二大隊(長・小林大尉)は五六六労働大隊として、第五の谷(旧地区)に二十二年六月まで居住して、主に白樺、リーパ、泥柳などを長さ二メートルの新材伐採をさせられた。時には六メートル、八メートルの電柱材(松、樫、梅など)も伐採した。

我々と同時に当駅に降りた十一大隊(長・梅田大尉)も第五の谷の新地区で

伐採していたが、後では第一の谷に移動していた。また、十八大隊（長・松本大尉）は駅付近に展開して、薪の貨車搭載や集材する自動車隊の整備などをしてきたが、後には自動車整備員のほかに炭坑の労働に行ったと聞いた。貨車搭載の労働は十一大隊の一部がやっていたようだった。我々も二十二年七月から隣の第二の谷に新兵舎校倉式を建てて移動したが、作業は第二、第五の谷を担当して伐採、集材、自動車搭載などを行った。

ノルマは当初一人二・七立方メートル、二人で（鋸が二人挽き）五・五立方メートルだったが、二十一年夏ごろから一人五立方メートル、二人で十立方メートルとなった。つまり二人で命ぜられた伐採地区（後述）で禁止木を除く白樺の木材を長さ二メートルに切断して、高さ一メートル十センチ（十センチは積込み空間一割として）長さ五メートルに積みこんで、翌日ワインレスホース（軍用営林署？）からナチャリニツクが来て作業結果を検査して証明書を書いていた。五センチ以下の枝は全部燃やして公園のように清掃させた（これもノルマのうちとか）。

朝七時点呼後入山、夕方までにノルマを終えた者、六時を帰宅時間に帰っていた。夏はまあまあだが、冬は苦労が多かった。前日の検査済み印として主な薪の両面に炭で×印を付けて盗用せぬようにしていた。自動車積込みで山を崩しに来るのは二、三日後だから、そのときは切り口にヒビが入っているので盗用できず、結局真面目に働かざるを得なかった。特に二十一年春、草の芽が出るまでは食糧事情が悪かったので、その間が一番みんな栄養失調になって、力が出ないし、「ダワイ・ダワイ」の声は今でも忘れられないほどうらめしいものであった。二十センチ径の二メートルの薪を二人でやつと持ち上げて担いで行くのに力なく倒れてばかりいた。本当に情けないが栄養失調になって働いた者でなければわからないと思う。

不達成のため中隊長が「棺桶宮倉」に入れられた。隊長の話では五十センチ四方の校倉オリの中に立たされたので、座ることもできず、足を折るにしても膝が少し曲がるだけだ。二回目から工夫して小さな枝木を服に隠して角に尻の高さ

にはめ込むと少しはよかったとのこと、後日談、内地だったら前科何犯の大前科者だかと。

それで我々も何とかノルマ達成のための悪知恵を考えては見るが、思うようにはいかぬ。帰還する前ごろ、先の谷に残留薪が二十万立方メートル帳簿残があるのに実測は十三万立方メートルしかない。お前たちが自家用薪に盗んだんだ、その分、別途伐採して補充しないとダメイできないと言う。我々としても、「ダメイ」の予告があったので、彼らがノルマを重複加重命令すると思い、「我々に罪を強要しているが、一般ソ連人が持つて行くのも見るし、時には車ごと運転手が彼女の家に下ろしたことも見たし、モスクワの裁判所に申告するので手続を教えてください」といつて頑張っていたが、その後ダメイしたので後はどうなったことや。そのようにしてノルマの重複的作業の強要があったのではないかと思う。ノルマの規定署を見せろと言うと、ウオロシロフの委員会にあるとか言っていたが、信用できなかった。ノルマ達成のため軽作業しかできない者まで出勤させようとする。軍医が作業は無理と言つても、その分のノルマは他の元氣な者が負担せよいつて、いつも、点呼のとき作業人員でもめていた。

ある日、昨日は八名の軽作業者が今日は五名増えて十三名になったといえ、ソ連中尉が両手を出して口で十一、十二と数えたのには驚いた。総じて掛け算、割り算がスムーズにできる者は少なかった。

千葉県 宮崎定雄

昭和二十二年四月初め十キロ南下、ソフガワ二軍港に移動。飛行場の滑走路拡張工事です。

丘を切り崩し平坦にし、その土砂を低地に運び埋め、地ならしです。堅い岩石は爆薬で粉碎、円匙と鉄棒で作業、残土砂はトラックにて低地に運び平坦にします。

最初はトラック積み込み、ノルマ四名一日八台、達成すると十二台、次回は

十六台、次回は二十台、最後は二十四台になりました。ノルマ未完了では監督は作業続行で頑固です。日本人の指揮者の交渉も聞き入れず、日没後、ソ連警戒兵の権限で帰営することしばしば。警戒兵は作業無関係、捕虜警備の時間強調。ノルマ十六台以後は土砂積載量を工夫、軽く中央のみ高く見えることとく誤魔化し、監督の目を盗み、又は運転手に頼み、台数だけ走らせました。薄暮は有効でした。

岡山県 妹尾正一郎

同盟休業(ストライキ)

モグゾンでは五小隊に分かれて伐採作業を行った。みんな頑張ったが検収員が意地悪で、作業量をノルマの三〇パーセントくらいにしか書かなかった。私たち五名の小隊長は、毎晩のようにソ連の大隊長室に呼ばれ、ノルマの督促を受けた。いくら頑張ってもこの検収員ではやりがいが無い。収容所におけるストライキは、厳しい管理体制で不可能である。各小隊長は決死の覚悟でストライキに入った。

翌日から、伐採の現場には行くが、焚き火を囲んで仕事はしなかった。ところが、一番初めに困ったのが検収員であつたから皮肉である。作業終了後、検収員の書いたノルマ表に日本の小隊長が署名し、事務所に届けることになっている。事務所に届いたノルマ表も小隊長の署名がないので通用しない。したがって、検収員は仕事をしないことになり、食糧の配給が停止された。検収員は困って、寝ている各小隊長に署名するよう依頼に来たが、個人的には絶対署名しなかった。ついに五名の小隊長と検収員が山の中で団体交渉することになり、雪の中で相對して交渉した。以後、作業量を百パーセントに書くということで妥結した。その後は、日本人も真剣に作業に励んでノルマの完遂に協力した。

石川県 松田春雄(旧姓 北村)

作業班が編成し直され、私も班長に推された。今度は伐採に代わって、ソ連

の民間人の監督(マッセル)と二人で毎朝、前日伐り倒した丸太の石数を計算してノルマを出すことと、現場の作業監督をする仕事である。私たちのマッセルは二十一歳のターニャという娘であつた。ソ連では男女平等で人種差別もなく、みな「同志」であつた。子供も「ヤボンスキー」と声をかけて集まって来て、何でも「ダイチャ、ダイチャ(頂戴、々々)」と言ってねだつた。

それからは毎日、私は山へ行って作業の指示をした後、マッセルと二人で前日伐つた丸太を一本一本寸法を計ってV印をつけ、彼女がノートに記録する。合計してノルマを出すのだが、どうしても百パーセントどころか半分もできない。時々乗馬で視察に来る村長級の監督に、腹いっぱい食わせれば必ずやり遂げるから、と何度も交渉したが、まずやって見せることだと取り上げてくれなかつた。

ラーゲルの近くから伐り倒していくので作業場もだんだん遠くなり、疲労、衰弱も増していく。冬のある日、仕事の終わった帰り道、歩哨が、自分らの兵舎用の薪にする長さ五十センチほどの丸太を一本ずつ背負って帰れと強要した。疲れ切つた体に無理難題、私を先頭に牛歩で歩いているところへ、所長(アダ名が赤鬼)が乗馬でやって来て、なぜ早く歩かぬかと詰問した。私の抗議を聞くと逆上して下馬、腰の拳銃を引き抜いて私の背中に突きつけて怒鳴り散らした。私は覚悟を決めて撃つなら撃つと開き直つた。

赤鬼は業を煮やして帰っていったが、収容所に帰るや否や、営門の前の丸太小屋、営倉に放り込まれた。

黒パン一片と水、毛布は一枚で五日間。しかも昼間は皆と作業に出るのだからやり切れなかつたが、夜中、床下からノックする音に板を剥がすと、暗闇から高粱飯を盛つた飯盒と毛布一枚がせり上がってきた。危険を冒しての部下たちの情に嬉し涙が止まらなかつた。幸い土地が砂地だったので、鉄条網の下から床下まで、モグラのように土をはねて忍び込んでくれたのである。

作業隊長の私としては、とにかく皆に腹いっぱい食べさせることが先決、それ

には何としてもノルマを上げることだと策略を練った。まずマツセルのターニヤの歓心を買うことだと、ロシア女性が一番欲しがるネツカチーフ用にと、風呂敷や日の丸、兵隊が持っていた赤禪まで集めて、次々にプレゼントした。翌日、赤禪を被つてきたのには大笑いしたが、彼女の信用はどんどん増して、いよいよ本題の伐木の計測に際し、私は次々寸法を早口に言つて、彼女が記入に手間取る間に、三本に一本はV印を付けずにおき、翌日の記帳のとき、「オヤ、記入洩れがある」と言つて記録させた。

この「ゴマカシ」が功を奏して、月平均一二〇パーセントの成績を上げ、食糧も増して皆の生気が回復してきた。月一回、チタの本部から来る地区司令官が全員の前で訓辞するが、北村作業隊はハラシヨラボーター（優秀作業隊）だと褒めてくれ、月に百から二百ルーブルの給料もくれるまでになった。優秀者は先に帰すという噂が流れていたので、早く帰りたいの一心でもあった。ところが、実際は病弱者や役立たずを先に帰していたのであった。

東京都 金子亮輔

昭和二十二年になるとノルマ(仕事量)を指定するようになり、作業は厳しくなつてきた。このころから「スタハノフ社会主義生産運動」が展開されて、期間は一カ月であるが、終わつても「ノルマ」は止めなかった。

岡山県 妹尾正一郎

初めて捕虜として伐採作業が始まった。二人が一組となつて、タポール(斧)とピラー(鋸)を持ち、午前八時から午後五時まで規定の時間働いた。主に落葉松の直径四十センチくらいのもが多く、この木を根倒しして枝をはい、幹を二メートルの長さに切り一カ所に集める。

最後に枝を処理して作業を終る(枝の処理は、雪のあるときは焼却、ないときは山のように積んでおく。山火事をさける)。これが伐採作業である。木が太

い赤松(鋸が短いので切りにくい)や白樺(枝が多く仕事がかどらない)の山に入ると大変である。何しろ不慣れと鋸の切れが悪かったため、思うように仕事はできなかった。

三日間が終わつたとき、今まで切つたものを一カ所に集めたら、やつと八立方メートルあった。これが二人、一日分の作業量(ノルマ)と聞かされ唖然とした。

翌日からは夜明け前に起こされて作業を始めた。暗くなるまで働かされた。それでも規定のノルマに達せず、夜中作業(実際には根倒しは危険でできない)をして、朝帰ることも度々あった。勿論その日は夕食抜きであった。着替えもないので、作業が終わつて宿舎に帰れば、着の身着のまま横になって寝るだけである。

「窮すれば通ず」こんな日が毎日続いたある日、こんなことをいう者があつた。「切れない鋸でいくら頑張つてもソ連の言うノルマは完遂できない。よく切れる鋸で仕事をするのだ」そのとおりである。それではどうしたらよいか。「そのためには、鋸の目立てのできる人を宿舎に残しておき、昼は寝、みんなが仕事から帰つて寝るとき目立てをし、翌日はその鋸で作業をする。そうすれば作業能率も上がり、検収員も喜ばすこともできる」成程いい考えだ。

だが、ソ連側との交渉が問題であった。中隊長は毅然として交渉に当たつた。交渉は案外すらすらと成立した。作業能率も非常によくなり、我々を喜ばしたのは「ヤポンスキー(日本人)は頭がいいぞ」という言葉だった。それでも伐採作業はきつ、食糧事情もよくなかった。

新潟県 片桐貞夫

作業が本格的に始まった。松の木を伐採し薪をつくる仕事だ。ノルマが課せられ、長さ一メートルに切つて一人三・五立方メートルだった。

ノルマの達成者は一人もいない。一立方メートルくらいできるのが良い方であった。自分たちの幕舎は三〇人余りだった。そのうち下士官が五人くらいいて、ノルマは全員の人数で割られ、下士官は作業をせず監督気取りでぶらぶら、中に

は兵隊に気合をかけている者もいた。

武装解除以来同じ部隊のままの編成だったので、まるで軍隊の延長であった。ここでの作業が一番きつかった。作業は兵隊に任せ、食事になれば自分たちが一番最初に兵長に盛り付けをさせ、残りが自分たちに配られた。一番若い私が半年くらいでアバラの骨が一本ずつかめるほどやせて、一カ月休養を命ぜられた。

戦争が終わっても毎日下士官に気合を入れられながらの重労働、何とも言えない気持ちの毎日だった。

T曹長を作業班長として、三〇名余りの作業隊だった。実際に作業する者は二〇〜二五人くらい。前にも述べたが、三〇人分からのノルマを二五人くらいでやるわけだから一人当たり四立方メートルからの作業量、まず不可能と言ってよいノルマだ。しかも冬になれば零下四〇度近い寒さが毎日続く。一メートルに玉に切つて斧で割るのだが、松の木の芯まで凍っていて斧で叩いてもはね返るだけ。しばらく力いっぱい叩いていると、凍っているからスパッと割れる。一つの玉を六つくらいに割る。これが大変な重労働だった。

高さ一メートルに三・五メートル並べてノルマの検査は終わるが、完全にできる者はいない。半年近くこの作業が繰り返された。抑留中ではこの作業が一番つらかった。仲間が何人も体を壊した。俺もその中の一人だった。

一個作業班には必ずソ連兵が自動小銃を持って四〜五人、監視でついている。彼らも日本兵がこわいのか、口もきかずに遠巻きに一日監視している。

兵庫県 石田 寿

私たち捕虜の体の健康度によって番号が付けられた。一級は一人が三リユーベの木を切ったら百パーセントであり、二級は二リユーベ、三級は一リユーベで百パーセントと見なされ、四級は病人であった。

百パーセントの仕事ができない者には、その翌日の朝食のパンは三百グラムから

そのパーセントによって削られるのである。

捕虜の仕事は、木の伐採と、それを山から馬で挽き出す仕事と、それをトラックに積み込むことが主体であった。それには、いずれも高いノルマが課せられていた。このころは、ただ生きているだけが精いっぱい、夜になつてもだれ一人話しか合う者もなく……。

和歌山県 面家一博

作業のことですが、原木の伐採、レンガ造り、道路建設、機械の部品造りなどで、私は機械には経験があるので機械工場の方に行くことになり、自動車の部品やそのほかの部品造りであった。工場では「ノルマ」があり百パーセント達成はたやすいのであるが、地元の工員たちが嫌って困らせられたのです。余り「ノルマ」を上げると基準も上がつて余分に働かねばならぬと言うのである。しかし私らは、冬は寒いので、早く「ノルマ」を済ませて火のそばで暖を取りたいのです。

「ノルマ」を百パーセント達成したその日は、パンの大きさも違っていました。

島根県 景山利造

ソ連軍から日本の国技である相撲大会を公開せよとのことで、体力に自信のある者が選手となり、盛大に楽しく大会は終わった。ところがソ連の狙いは別の目的があつたようで、これだけの体力があればと、翌日からさらにノルマの上乗せが強要された。実に巧妙な手段で体力を測定させたものと地団太踏んでも、後の祭だった。

北海道 村岡 務

一〇〇%の作業をすると黒パン一人分、厚さ約一〇センチくらい、おじや(おかゆ)、青トマトの漬物、塩漬けの鮭等の小間切れの入った物が飯盒(軍隊の弁当箱)一杯もらえた。八〇〜九〇%は黒パン厚さ五センチくらい、おじやが上の目

盛りまで。八〇%以下だと黒パン三センチくらい、おじやが下の目盛りまでなど、作業量によって食事の量が変わった。共産主義は「働かざる者食うべからず」という考え方である。ただし一二〇%以上働くとお金をくれるということであったが、各班が競争して一〇〇%の能率を上げるとノルマをさらに高くして、いくら努力してもなかなか一〇〇%以上にならないようにした。その点技術者は能率が良く、毎月十〜二十ルーブルのお金をもらって煙草やパンを買って食べていたようだ。

福井県 井上博夫

ソ連においての当時の作業ノルマというものは徹底した面があった。ある路盤工事のため、縦穴を四メートル掘り下げ、さらに横に二メートル掘り、この奥に火薬を仕掛け爆破させることがあった。勿論手掘り作業で、掘った土を短い柄のスコップで地上に掘り出さなければならない。私はこの穴掘り作業には毎日ノルマ百二十以上を出して、午前中でカザルマダモイということも度々あった。そうして、これからが実に面白い。早く帰った私達は食事も多く、黒パンも多く貰うことができた。一日の作業を晩まで時間をかけて働いて帰ってくる者よりも一日に与えられる食事が多いということである。

熊本県 大阪公夫

私は月一回ぐらいのタバコの配給のとき、受け取らず皆で配分してもらっていた。中にはパンとかえる者もいたが、そのようなことで信用を得たと思う。数カ月後、四十人の組長に選出された。一日の仕事が終了すると、ノルマ係から、お前の作業隊は今日の達成量は三〇〇%だ、二八〇%だという具合に、全体の仕事の達成量の通知を受ける。組長の仕事はそれからが大変だ。組全員、各人の達成量を報告せねばならない。Aは七〇%、Bは七五%という具合だが、最終的に四十人の合計が全部の%に合わなくてはならない。毎日夜遅くまでかかっ

て、翌朝提出する。組長も組員の仕事だけ見ているわけにいかない、作業員として率先して働かねばならない。正確な報告ができるはずはなかった。幸い無報酬であったので何事もなかったが、これが有給であれば公平を欠いて大変なことになったと思つた。

過去には、ノルマによってみんなが本当に欲しい食事の量を、甲食、乙食、丙食と区分して働かされた年があったが、今日は組全員が精一杯働いて甲食をもらおうと頑張った結果が期待に反して乙食であったり、隣の組は楽な仕事でもよい%をもらえて連日甲食であったり、不満続出で、このような制度は長くは続かなかつた。狭い通路からの煉瓦の背負い出しはきわめて重労働で、いかに頑張つてもせいぜい六、七〇%達成が限度であった。そこでやっと考え出したのが一輪車であった。これで一五〇%は達成できるぞと喜んだのもそのときだけ。一輪車では%が背負い出しの何倍かになっていることに気づかなかつたのである。

島根県 田辺勝義

零下四十度以上になって作業がストップされても作業量は減るわけではない。しかし、あまりに寒く焚き火の前で半日も座り込んでしまうと、さすがにノルマを下げてくれる。すると少ないノルマを早く片付けてしまう。相手はこれを見てまたノルマを上げるといふイタチゴッコを繰り返したこともあった。

岩手県 松浦竹治

作業の状況について若干述べてみると、一番やりたい作業は馬鈴薯の収穫だが、シベリアで馬鈴薯は貴重品であつたので、食料不足の中で帰りの際の身体検査が特に厳しい。平たく切つて、ベルトの下に並べて隠すもの、靴の爪先に潜ませるもの、あらゆる知恵を絞つて持ち帰ろうとするが、門前の検査で取り上げられた。量が多くなると営倉という罰を与えられる。私達の作業の目的はシベリア第二鉄道建設というものであり、それに関連する工事が中心である。そのために大

密林を切り開き、道路を造り建設に必要な資材を運ぶ関連作業であったが、この作業に従事する人達の食糧調達(馬鈴薯掘り)も極めて重要な作業であった。

作業によって、比較的軽いものもあれば、肉体的にかなり厳しいものもあり、その区分は以下のような健康診断で区分された。医務室から集合命令があり、医者の方に背中をむけさせ、尻をみて尻の皮をつまむ。たるみをみて一級から四級まで区分する。それによって来週からの作業を決める一瞬である。医者は、私の収容所は男であったが、女の医者が多いと書いている本もあり、女医は厳しかったという人が多い。

作業監督と看守兵について、ソ連では一定の作業(ノルマ)を完全にやらせる責任のある者と、人員を確実に掌握する責任ある者とが区分され、私達の作業に必ず両者がつきまとっていた。夕方時間がきてもノルマが出来ないと作業監督はイライラして早くやれと責めまくる。人員責任の方は、さあ帰ろうよとなる。暗くなると、人員確認が困難となり、心配なのだ。二人で口論となり、人員確認の方が勝てばよいと思っているが、大抵は作業確認が勝つ場合が多い。

長野県 長田伊三男

到着してから一週間くらいは作業に出ず、身体検査をして体力に応じ等級をつけられました。一級、二級、三級、OKの四段階で、一級、二級は重労働作業、三級は軽い作業で、OKは所内の使役作業でした。

〈尻肉を チョットつまんで ハイ三級〉

岐阜県 小栗晴美

昼間は医師の診断を受けて許可がなければ休めない。零下四十度にならない限り、外の露天掘りに、石炭の炭坑道路の新設、建築工事等にノルマで追い立てられた。一〇〇%ノルマができなければ食事が減らされる。空腹に僅かな黒パンと水ばかりのスープで一食である。重労働、酷寒、貧弱な食事では体がもたない。

入ソ半年で二十一年の三月頃には皆骨皮の目ばかりギョロとした栄養失調になつてしまった。そうなる人間は最後は食欲だけの餓鬼のようで、食事の分配で小競り合いが起こったこともあった。全く悲惨なことである。春ともなれば野原のタンポポ、いら等はもろろん、口へ入るものは何でも食べた。戦友との話は内地での白米の飯、さしみ、餅等食へる話ばかりで、あさましい限りであった。

しかしその中で、これだけは是非皆さんに伝えなければということがある。それは、そんな貧弱な食事のために栄養失調で無念にも戦友が死亡する中で、我々三千人ほどの食糧を収容所の所長が「ピンはね」をしていたのである。その所長は五カ月ほどで左遷されたが、若手の共産党員で、政治部将校の大尉であった。全く鬼畜の如き人物である。そのために幾多の戦友が死んだかと思うと、いまだに忘れることが出来ない。

滋賀県 竹山悌三

霜もなくなった七、八月、木の先はぐんぐん伸びているのに下葉は早くも紅葉をしてくる。八月下旬から九月、霜が降り始める。この半年間だけが生きている心地がした。日が長い太陽の光は、栄養をコントロールし体の調子を整えてくれた。作業はやりやすく、ノルマがこなせる。割り当て分ができると「ハラショーラボータ」でパンの量がふえる。満腹とはいかぬが体も活気づく。明日はノルマが少し高い。

日本人の長所で短所であったが、時間まで無理をする。パンが倍ほどになり、腹も膨れるが、翌日になったらノルマのパーセントが倍ほどになっている。残業をしないとできなくなった。また無理をする。ところが体も限界、頑張つて無理をしたため、作業のノルマパーセントが驚くほど上げられた。「後の祭り」、腹の膨れたのもつかの間、寒さが待つてくれない。地面の表は凍り始める。日も短くなる。十一月ともなればはや零下十度を割る。ノルマ量は落ちる、パンは目に見えて小さくなる、腹はすぐ等々、元の木阿弥。自分で自分を苦しめ、また次の年もこの

繰り返して三年が経過した。

岡山県 妹尾正一郎

モグゾンでは五小隊に分かれて伐採作業を行った。みんな頑張ったが検収員が意地悪で、作業量をノルマの三〇パーセントくらいにしか書かなかった。私達五人の小隊長は、毎晩のようにソ連の大隊長室に呼ばれ、ノルマの督促を受けた。いくら頑張ってもこの検収員ではやりがいが無い。しかし、収容所におけるストライキは、厳しい管理体制で不可能である。各小隊長は決死の覚悟でストライキに入った。翌日から伐採の現場には行くが、焚き火を囲んで仕事はしなかった。ところが、一番初めに困ったのが検収員であったから皮肉である。作業終了後、検収員の書いたノルマ票に日本の小隊長が署名し、事務所に届けることになっていく。事務所に届いたノルマ票も小隊長の署名がないので通用しない。従って、検収員は仕事をしていないことになり、食糧の配給が停止される。検収員は困って寝ている各小隊長に署名するよう依頼に来たが、個人的には絶対署名しなかった。遂に五人の小隊長と検収員が山の中で団体交渉することになり、雪の中で相対して交渉した。以後、作業量を一〇〇パーセントに書くということで妥結した。その後は日本人も真剣に作業に励んでノルマの完遂に協力した。

宮崎県 鎌倉廣行

入所して四カ月がたち、伐採のノルマも次第に厳しくなり、収容所長や作業監督からも、もつとノルマを上げてもらわねば日本には帰せない……と、よその収容所の実状に触れながら私たちに活を入れた。「働かざる者は食うべからず……」と。よその収容所はもつと成績を上げている……。この言葉が最後に言う切り札であった。

石川県 松本忠男

木材運搬、草刈り、畑仕事等々、すべての作業には一日一人当たりのノルマがあり、それを一〇〇パーセント達成しないと給与が減らされる。どの作業にもチャボボーイ(警備兵)とともについて来て作業指揮をするナチャーニック(監督)がいてノルマが指示される。当初は日本人的考え方で、一日の作業量を早く仕上げてバラックに帰り、少しでも休養したいと思ひ頑張つてやると、半日少々で終わった。ところが、翌日はノルマを上げられてしまったのだ。こんなことを二、三日続けて、やつと与えられた仕事を一日の決まった労働時間内にゆっくりやれば良いことがわかり、その後は少しでも体力の消耗を避けてゆっくり時間いっぱいやることを覚えたのである。種々の作業のノルマは細かい国家作業基準があるらしいが、我々にはわからない。作業監督が自分のノルマから算定して割り出していたらしい。勤勉一途の日本人にはソ連人の大陸的作業感に当初は驚いてしまったのである。

岩手県 平田玉男

隊長殿が言うには、船の都合でウスリースクで十日程待ち、その間ソ連国の手伝いをやるのだという。初めは信じていたが、十日も過ぎ、更に一カ月過ぎたにもかかわらず草刈りやら干草巻きで、冬を迎えてしまった。

草刈りの面積は、十人のグループで三ヘクタールがノルマだった。草巻きは五人で初めは三十巻きだった。そのうちに五十巻きと増やされる。それは、一生懸命やつて少しでも早く終え、休む時間をつくらうとしたのが仇となった。日本人はいくら増やしても片っ端からやり遂げるようだとみたのか、更に増やして七十巻きとなった。腹が立ったがどうしようもない。「ダワイ、ダワイ(速くやれ、速くやれ)」で急ぎ立てる。最後には何と、百巻きに増やされてしまった。

こうなったら我々も考えなければならぬ。そこで、いざれ百巻き渡せばよいのだから、今日の七十巻きに明日の分から三十巻きを持ってきて百巻きにして渡

す方法を考え、これが成功した。ちよつとずるい考えだが、そうしないと体が持たぬ。仕方がないのである。

七十巻きに昨日の分から三十巻き運ぶときの様子は、今考えるとおかしなようだが、みな真剣である。ソ連人の監視の目を盗むのにひと苦労した。干草の巻きに縄を付け、体を低く腹ばいになりズスリ、ズスリと引く姿、全くおかしくもあり、情けなく感じたのである。故郷の親達には夢でも見せられない無様な姿でもある。

昭和二十年八月十五日終戦。シベリアに抑留された。

埼玉県 山口秀夫

最初はウオロシロフの郊外に入り、作業も石造りの建築物(兵舎と聞いていた)を造る仕事で、楽ではなかったが何とかこなしていた。

春三月になつて道路作業となり、道路造りがどんどん延びて行くので毎日が野宿であつた。その作業内容は、幅六メートルの道路に側溝を掘り、道路面に十センチの砂利を敷き、中央を高く山型にすることであつた。砂利は道路脇の土を五十ないし八十センチくらい掘ると出てくるのでその砂利を敷けばよい。ただし一人四メートルのノルマで、道路が土だろうが岩であろうがノルマに変更はない。岩の所になるとそんなに出来る訳がない。当時指揮者として行動していたが、ソ連の監督技術中尉に交渉するが聞いてもらえない。当時食糧を個人で受領し各人自炊していたが、もちろん夕食もとらずに作業したが、いくらやっても出来る訳がない。そのうち夜も遅くなり腹は減ってくる。そこで私も覚悟を決めて「皆、作業止めて座り込め」と言つて私も道路の真ん中に座り込んだ。警戒兵が来て「ダワイ、ダワイ」と銃床で小突き回す。三十分そうしているうちに中尉が来て「今日はもう帰つていい。明日から何日かのうちに今日の遅れを取り戻してくれ」とのこと皆も納得し一応解決した。

高知県 加納憲

建築のやり方は、まず穴を掘り柱を立てる。柱には溝を彫つて、少し細めの丸太の両面を削り、一本一本溝の中に入れ横棧としてはめ込み、その隙間に湿地帯から苔を持つてきて詰め込む。次に馬糞と壁土とを混ぜて壁として塗り込む。仕上げは石灰を溶かし塗る。

ロシア人は毎日ノルマがあつて、一日何本かの丸太を削り一本ずつはめ込むが、日本の大工はそんなことをしない。まとめて削り、建てる際は一挙に作り上げるため、平日のパーセントが少ないが、建前になると一遍に何百パーセントとなるので彼らの驚きだつた。

新潟県 高橋吉郎

愈々シベリアの極寒の冬がやつて来る。灰色の空から冷たい雨が降つて来た。取り残された者は二、三日して更に奥地のチェレンホーボの炭坑に送られたのであつた。憲兵と警察官だけの作業隊となつて、鉄道線路に連結される自動式発電機械を格納する建物の基礎工事で、穴掘り作業をやらされた。シベリアはもう地下一メートルは鉄より固く凍結している。その穴掘りのノルマは、一メートル四方で深さ一メートルを掘るのが百パーセントであつた。三年前収容された当時長さ一・五メートル、直径三センチメートル程のロームという鉄棒を、凍結した土に打ち落として掘る作業を極寒零下三十度から四十度にもなる屋外でやらされた地獄の苦しみ思い出し乍ら、今度は石の上にも三年で考えた。シベリアには冬期間、牛に食わせる乾草が至る所に積み重ねて二オにしてある。もう逃げも隠れもしいと思つているのか、ソ連軍の歩哨も付いて来ない。作業場は収容所から三キロメートル離れた所にあるので各個バラバラに作業場に向かう。道すがら乾草の二オから枯れ草を一抱えして行き、作業現場に着くと、これを火種として付近に散らばっている丸太切れなどを拾い集めて焚き火を作るのである。作業にかかる頃になるとこれが燃えて凍結した土が三十七センチメートル程柔

らなくなり、太陽が出るに従って穴掘りも深さ一メートル位掘れて、百パーセントのノルマが出来るのであった。

新潟県 若月太郎兵衛

この工場はチタ市の経営である。相変わらずのおんぼろ工場。僕は最も難儀な粘土掘削の現場へ行かされた。トンネル式に掘っている現場で、ストローブを燃やして粘土を溶かしながら掘削するのであった。粘土を鍋トロッコに積んで、煉瓦工場の攪拌機の上へ電気で巻き上げて粘土をあげると攪拌機のところへ落ちてゆく。粘土に適度の水を加えて攪拌し、柱状の羊羹のようになって下へ押し出されてくる。下はテーブルになっており、出てきた粘土柱を針金の二本ついた切断機で切ると二枚の煉瓦が出来上がり、それをトロッコに積んで乾燥室へ運び棚に並べて終わり。一日のノルマは八千枚といった工程である。当時、スタハノフ社会主義生産カンパニア(生産競争)が展開されていた。

罪人の僕が行ったら偶然にも僕の後輩、田京君がいた。元同じ地区の友達で懐かしかった。田京君も喜んで迎えてくれた。「若月さん、誰もあなたを反動などとは思っておりません。あなたが来てくれて皆喜んでおりますよ」と言われ、嬉しかった。田京君は「僕に任せて下さい、食事伝票切りますから」と言ってくれた。ノルマによってA・B・C食に区分されている、僕の伝票はいつも最高の量の物であった、地獄に仏か、僕は幸せで、感謝した。

さて、僕はつぶさに現場を見聞して、どこに作業の溢路があるか、点検した。生煉瓦の運搬用線路の整備だと直感した。脱線ばかりして骨折り損のくたびれ儲けでは駄目だ。職場会議に提案して、日曜日を返上しても線路を整備しようと呼びかけた。全員異義なし。早速実行して脱線の苦勞から解放され、能率は向上した。

他にもいろいろ溢路を改善した結果、面白いくらい成績が上昇した。ソ連人の過去のノルマのレコードは一日に八千枚。我々は一万三千枚を達成して、各職場

を引き離して断トツ。優勝旗は我々の頭上に掲げられたのである。工場長はじめ支配人たちは喜んで祝福してくれた。「君たち日本人の英知と創造、たゆまぬ努力は立派な模範である。我々ソ連人は君たちの模範に学び、追いつけ追い越そうの運動を展開するであろう。シベリアの僻地に素晴らしい模範を示してくれ。ありがとう。日本人労働者の栄光を忘れないだろう」。我々も感激した。素晴らしい感銘であった。日ソ友好の足しになれば幸いである。

福井県 谷崎喜久雄

二十二年一月末だったと思う。建築現場の基礎掘りを一週間ほどさせられたことがあったが、鉄棒一本与えられ、二人一組での穴掘りだった。鉄棒を直に持ったら手の皮が鉄棒に引っついて剥がれるので、革手袋を着けねばならない。幅一メートル、長さ二メートルくらいが二人一組の掘り場だが、深さ一日に十センチくらいしか掘り下がらないので、ノルマでは六〇%だと怒られたことも度々あった。

岐阜県 水野隆男

抑留中は技術者(旋盤、溶接、大工、運転、縫製、炊事等)は大変有利であり、また、優遇されたのであった。その一つの例が食糧の配給区分である。チタ市へ入って初めて判ったことだが、配給の食糧はすべて労働に応じた基準ノルマがあり、そのノルマの達成率によって区分されていた。一〇〇%達成した者が黒パン三〇〇グラム、八〇%が二五〇グラム、最低が一五〇グラムで、一〇〇%達成は野外における筋肉労働では至難の業である。昭和二十年の冬を越すころは食糧事情も悪く最悪の状況であったが、年が明け四月頃よりやや好転し、このような制度が確立したのだろう。

毎日その日の作業が終わると達成率による色分けの食券が配られる。それを食堂の窓口でパンと引き換えるのである。後にはスープも出るようになったが、

そのスプの中身も量も%により区分されていた。そのほか、一週間に一、二回タバコ(マホルカ)と砂糖の配給があった。

私達引率将校は特別給与だったが、技術者には一〇〇%以上の者が多かった。反対に肉体労働者は五〇%〜八〇%が普通で一〇〇%はまれであった。

食堂の片隅では、どこで手に入れたのかフォーク、果物ナイフ、メダル等と。パンの物々交換、また、ルーブル紙幣などによる売買、砂糖、タバコの交換など、日本人のたくましさを見せていた。ついでに黒パンのことに少し触れておくが、日本のものよりキメが粗く水気が多く少しすっぱい味で、慣れてくるとそれが結構おいしい。

静岡県 佐藤定衛

食事は飯盒に粟、黍、高粱、燕麦の重湯だ。半年くらい後に食堂が出来て食券が渡りやや改善されたが、ノルマで量が左右されるのには変わりはない。仕事を終えると現場監督が事務所に来て、紙片にその日の仕事量を一人一人記入して、監視兵が收容所に持つていくという仕組みであるが、事務の整理上、今日の仕事量は一週間後だ。ノルマによって一人一人別だが、七〇パーセントから八〇パーセントの記入しかなされていなかった。当初所長が「日本人は仕事をしない」と言った理由が判った。現場監督が頭をはねていたのだ。

片言が話せるようになって、事務所「今日はトロッコに何台入れれば一〇〇パーセント達成にしてくれ」と交渉し、一〇〇パーセント達成。しかし食は少なく仕事は辛く、足に石炭を幾度落としたかしのれない。落盤したと言ひ足を引きずつて医務室に行く。二、三日休養してはまた仕事の繰り返しであった。死か怪我をしなければ日本に帰れると言われた。

長野県 千葉貫一

ミニアルチョムの收容所は以前ドイツ兵の收容所であり、当時まだドイツ兵が

少しばかり残っていた。この收容所は炭鉱の收容所であり、仕事は主として石炭の坑道掘りであった。一日二十四時間三交代で掘り続ける。おまけに休日はない。ロシア人の監督は作業量を重視、ノルマを強要する

しかし食糧は人間が食べるとは思わなかったフスマのお粥のほかに何もなく、体力は弱るばかり、ノルマ達成どころか栄養失調による犠牲者が続出。

また昭和二十一年十二月の炭鉱爆発の発生により十五人程が被爆、また落盤事故等により二十人以上の尊い生命が失われるなど最悪の事態が続く。

何の望みも楽しみもない、ただ願うは一日も早く日本に帰りたい、これが唯一の夢だった。こんなとき、日本兵の手によって風呂が造られ、週に一回位の入浴ができるようになった。身も心も疲れきっていた時だけに入浴によりわずかながらも心休まり、ささやかな憩いの場となった。

私は馬舎当番六人の中選ばれ、馬八頭、牛六頭に豚等の飼育に当たることになった。この仕事は六人で十二時間交代、休みなしの決して楽な仕事ではなかった。しかし空腹に堪えがたい時には馬糧や豚の餌を食、べて空腹をしのぎ、栄養失調から身を守ることができた。

岐阜県 山口武

抑留中の出来事

伐採作業は日本人特有の要領本分で何とかノルマを達成して、ノルマ定食を食、べることができました。

貨車の積み降ろし作業はごまかしがきかない、これには正直言、つて降参しました。五十時間ぶつ、ついでで木材の積載作業をしたことがありますが、本当にもう死ぬかと思、つていました。

愛知県 水野朝之

ノルマ五〇%を割ると小隊長は夜のみ営倉に入れられた。

昼間は山へ行き、夜は夕食を除かれ営倉に入った。ノルマ五〇%を超えるまで

その状態であった。営倉は、我々日本人が立つてやっと入る寸法に造られたロッカー状の箱になっていて十個ばかりあったが、毎夜満席で、七人の小隊長共々連夜入つて来て、ノルマ達成は収容所全体ができなくなつてしまつた。

けれども、ノルマ五〇%を割ると前述したように、その責任者(小隊長)は夕食を除かれて、夜は営倉に入れられた。昼間は山に出て仕事をし、朝食と昼食は食事ができて、夕食のみ除かれ、営倉に入る。五〇%を超えるまでその状態が毎夜続いた。営倉はちょうどロッカー状になつたもので、日本人が一人立つてやっと入れる寸法にできていた。我々抑留者が造つたものである。顔の辺りに窓があり、そこから夏はブヨ(ハエの大きさ)が入り込んで体を刺し、苦しんだ。そのような営倉の箱が十個ばかりあつて。連夜とも満席の状態だつた。

ブヨは体中の下着の中まで潜り込んで刺すのだが、それを手で払うことも自由にできない窮屈な営倉である。私は足部に三カ所、ひどく食われて化膿した。卵をそこに産み付けられてブヨの「ウジ」が発生してひどく腫れ、足をひきずつて歩くようになり、長期にわたり苦しんだ。今でもその部分が黒色に変色して、あざになつている。

チ 私は営倉に入ることで見つめる時間ができ、私は生きていた

私はこの営倉に入るのは夜だけです、月を眺め星々を見つめ、日本の故郷を想い、祖父母、母や父、弟妹を思い、涙したこともあつた。そして、明日はどのようなにしてノルマの数字を出すかと、そのことを考えていた。今思えば、もし私が皆と同じ隊員であつたら私も飯盒に水増しして体をこわし、氣力を失つて死亡していたと思われる。小隊長として、責任者として考え、悩んでいたことが、私が生還できた大きな要因である。

岩手県 吉田欽三郎

三号券と二号券

入ソ二年目に入り、一号券・二号券・三号券の食券制度が施行された。

二号券は営内作業を含め従来通りの普通、三号券をもらう者は優秀作業者であつて、一号券とされた者は普通より作業が悪かつた者だと言う。

食事はすべて個人受領であり、朝に朝昼二食分の食券を寮の日直(寮内人事係)からもらうが、その時は既にソ連当局から誰々は三号券、誰々は一号券と指示されておるらしく、一号券の食事はハッキリ食事が少なかったのだ。夕食時となればこれは又深刻大である。

しかしこれがソ連式「働かざる者は食うべからず」と言うから大騒ぎとなる。

反発と反対が功を奏したのであろう、間もなく一号券・三号券制度は廃止され、皆安心した。

だが当時、炊事では一五〇グラムのパンを秤に載せたであろう、小さいパンの小片が楊枝で何個もプラスされて渡されるようになったが、正確さを喜ぶと共に、パンの端の固い二号券は営内作業を含め従来通りの普通、三号券を貰う者は優秀作業者であつて、一号券とされた者は普通より作業が悪かつた者だと言う。

私もシベリア四年目の数カ月、ある作業班長となり、月ごとにソ連ボスより作業成果を聞き班員のノルマ計算をしたことがあつた。班全体が一〇〇パーセントならずとも平均八五パーセントであれば、班員二十人中の五人を一一五パーセントに申告し、残りの者を七五パーセントに報告して、一一五パーセントの者の褒賞金を班全体で分配することを非公認として任せられたのである。

愛知県 齋藤高志

ノルマに泣く

朝作業に出発時、寒風肌をさすような門の前で、人員の確認がある。カンボ

ーイは掛け算が出来ないので一列に並ばせ、アジン、ドバー、ツリー(一、二、三)と真剣に数えるが、三十もいくと間違えて、初めから数え直しをする。しかも、五回も六回も、五十人を数えるのに十分も二十分もかかる。冷たい雪の上で足踏みをしながらか待つのが大変である。入ソ一年ぐらからヤポンスキー、ガラーハラショウ(日本人は頭がいい)といつて、それから日本人が人員を確認するようになった。

伐採作業は特にきつかった。私の小隊の検収員は、融通のきかない二十歳ぐらいの女性であった。午前中は別に用事がないので山裾で私と雑談したり、半練の歯磨粉を白粉だといつて顔にぬり、ヤポンスキー(日本人)の娘さんより美しいと言っておだてているうちは、こ機嫌だが、午後の検査になると、極めて厳格で我々を困らせた。

或る日、検査の最後の組が伐採後、枝の始末がしてなく、雪の中にちらばっていた。いつものごとく、チースト、チースト(掃除、掃除)と言つてきかない。疲労困憊している一人には、枝の片付けなど出来ないと思ひ「よし俺がやる。お前も見ておれ」といつて二人を帰し、雪の中の枝を片付けかけたが、どう考えてもやるものではない。いつの間にか検収員もいなくなった。「死のう」——後は何も考える余裕はなかった。寒いので今日伐採した材木に火をつけた。狼は近くで吠えているが火を見て近寄つては来ない。この火が消えたら俺の命も終るか…。こんな事をぼんやり考えていた時である。中隊長以下全員が松明を持って私を迎えに来たのである。収容所に帰つてから中隊長が、誰でも死にたいぐらいつらいんだ、だが命のある限りこの苦しい生活に耐え抜き、一人でも多くの抑留者を日本に帰すのが我々の務めだ。お互いに頑張ろうと言われ、私は自分の行為を恥じ、申し訳ない事をしたと思ひ一晩中泣いた。

「ノルマ」

みな仕事に「ノルマ」がついて、各自の働きにより食事量がみな違うのである。ある時、鉄道工事について。これは土木用の土を取るのに、丘陵地に五、六メートルおき、四角に井戸を二十、三十メートルの深さに掘るのである。

二人一組で初日は二メートルぐらいは掘れる。日に日に深くなってゆく。岩盤が出てくる。ハツパをかける。しばらくは煙とガスで入れない。

木の枝を取つて吊り下げ、ふわふわとおびき出し中々大変だ。

深くなるにつれ、何ほども掘ることができない。毎日「エラポータ」だ。

初めの二日、三日は「ハラショラポータ」といつて、多く食事にありつくことが出来るが、それが反対に減量、減量で自分の身体を食つてしまふ。

それこそ栄養失調だ。あまりにもバカにしたノルマの付け方だ。

十メートル、十五メートルと掘り、横穴を掘り爆薬を沢山入れ、穴は元通り埋め戻し、いつせい点火する。

山はドンと上がり形は変わった。

「エスカワトル」という大きな機械で線路を引き込み五十トンの貨車に積み込む。

これを二人一組で一夜の中、朝までに五十トンの土砂を下ろさなければいけない。なんと情けないことだろう。

これも生きてゆくためには仕方がない。

冬は鉄棒を真つ赤に焼いて土中へたき込みハツパをかける。

そんなにまでしなくてもいいのと思うが、シベリアの土は一年中、溶ける時がないのだ。

上が溶け、地下まで溶けてゆく中、もう上から凍ってくる始末だ。

仕事に行くのに収容所を出て行く。

行く先が二十人、三十人と違う。

衛兵所でロスケの兵隊（監視兵）が人員を当たるのが面白い。

勘定が中々できない。

アジン、ドバ、テリ、チテリ。一、二、三、四と何度でも教えて中々合わない。なんと頭のいい兵隊さんばかりだ。

兵隊さんは手の甲に名前（ファミレ）と生まれた年号を入れ墨している。どこでも分かるように。

我々は、少しでも時間が経てばいい。

仕事の行きはまるで葬式のように、ソロソロ、のそのそだ。

帰りは農民より先に家路に急ぐ牛のようだった。行きは三十分、帰りは十分といったようなものだ。

ロスの兵隊は言う。

「ヤポンスアルダート、ヒイトレ、ムトレ」と言う。日本兵隊ずるいというのだ。

ノルマ

鳥取県 清水要範

目の届かぬ広い樹林、赤松が主で落葉松や白樺など混在している。伐採は四人一組で一本の木を倒し枝葉を焼却、所定の長さ丸太を切る。当初悠長だった仕事も次第にノルマが上げられてゆく。そして二人一組に改められた。山は区画されこの区画が済めば東京ダモイ「ロシア人の監督が言う。ノルマを達成すれば握り飯の増配や煙草の支給がある。帰国させるとの甘言と増配に吊られて精を出すと更にノルマが上げられる。イタチごっこである。ひたすら日本への帰還を信じ、酷い寒さ、劣悪な食糧、歯を食いしばって重労働に堪えるしかない。その区画が終れば次へと移ってゆく。

給料

すべて一〇〇%ノルマを達成するのは難しい。そこで考えられたのが作業班で大部分の者を八〇%ぐらいに押さえて記入、一、二人に余った分を集中して一

〇〇%以上に報告する。帳簿のやり繰りである。一〇〇%以上には超過した率で給料（報償金）が支給されるようになった。それをみんなで分ける。わずかだが自由になる金である。早速売店で紙や鉛筆、煙草など買うことができた。復員後の話では、収容所によってかなりの金が支給された所もあるらしいが、私どものところではほんの雀の涙ほどの額だった。

このやり繰りはソ連側も黙認していたようだ。

愛媛県 梅崎文夫

強制労働について

先ず思い出されるのは、その当時、社会主義の原則は「働かざる者食うべからず」と聞いた。これをスローガンに全てのソ連兵にノルマ（作業の標準若しくは基準）が課せられていたのだが、抑留された日本人も例外ではなかったのである。ノルマは先程触れたことごとく一〇〇パーセントを基準とし、一二六パーセント以上の成績を上げた者に対しては有給休暇（一週間ぐらいと聞いた）、加えてパンも四五〇グラムの支給であったということだが、私はついぞそんな恩恵にあずかる事は一度もなかった（私の周囲でも恩恵にあずかった人を余り知らない）。

三重県 廣田吉生

ようやくにして人員数が掌握されると解散となり、東方が少し明るくなり始めた九時頃になると「出発だ」「ダモイだ」のソ連兵士の罵声に急かされて、簡単な朝食を済まして、昼食も茶碗一杯の高梁の雑炊と一握りの黒パンを持って五十人が一集団となり数キロ離れた原始林の生い茂った密林（えぞ松）で、太さ五十五センチ、高さ二十〜二十五メートルを二人が一組になり、大きな鋸で伐採を行いました。ノルマ（仕事量）はソビエト人の平均伐採数が基準となり、それで私達の成績も決められました。凍りついた硬い木々を、体力が弱くなっている上に伐採の経験も無く、大きな鋸を使うこともほとんどの人が初体験の事

で、私達日本人には到底及ばない仕事でした。暗くなるまで八時間働いて、二〇パーセントの成績がやつのことでした。その日の成績で翌日の食事も決まるため最低量(質)が続きました。

ソビエト憲法で「働かざる者は食うべからず」「ノルマは必ず達成せよ」……と定められて、それを実行する事が国民の務めであることを強制させられました。一日八時間労働は鉄則でした。私達抑留者にはどこからも救いの手は無く、もちろんのこと生命の保障も無く、死亡者が続出してもソ連側は当然のごとく捕虜としての扱いで、そ知らぬ態度でした。

茨城県 山崎勝一

満四力年で米を食べたのは数えるほどである、それも湯の方が多い粥である。また一時はノルマ給与で、今日の作業のパーセントが明後日の食事になる。「ノルマ表」という分厚い本には、すべての作業にノルマが国家として認めてあるのである。

身体検査が月一回ある。一級・二級・三級・オカと体格によって判定。ソ連の軍医の診断により決定される。先ず回れ右させて臀部の肉をつかんで級を定める。内臓の病気などは余り関係がない。太って身長のないずんぐり型で肉づきの良い者はいつも一級である。自分はやせて背が高い方なので診断でいつも三級で誠に幸せであった。作業も一級の者の二分の一で二〇〇パーセントであるので、その点では有り難かった。二級の者は一級の七五パーセントで二〇〇パーセントである。「オカ」は作業なし。

福島県 橋本宗明

私も片言ながらロシア語を勉強して、特に中隊長に選ばれてから、ロシア人の監督と折衝する責任にありますので、ロシア語の単語を並べて、何とか意思の疎通を図ることができた。

シベリアの体験の中で、特に私の記憶に鮮やかに残っているのは、ソビエトの労働法です。いわゆるノルマの制度。ノルマの制度というのは非常に合理的にできています。私たちのやった仕事はレンガづくりの建物でありますけれども、ノルマという考え方からいえば、八時間労働の仕事をする場合に、量的に計算すると、ロスタイムというのがない。何かは仕事をしているわけです。向こうの監督に何かの仕事をしていることを計算させればいいわけです。

例えば、トラックから荷物をおろすという仕事をする、その仕事のために働いた時間は何時間何分で、その仕事の計算は、一時間当たりどれだけで、終わって計算すれば、ちゃんと労働賃金が出てくる。こういう計算です。

ここで私が感心したのは、壁塗りなんか、左官の仕事ですが、平らなところを塗ると、角をつくる仕事は別なんです。平らなところは面積で計算する。角をつくるのは長さで計算する。ノルマが別なんです。それを合わせていくと、かなりの労働賃金になるんです。まともにもやっている人は八時間ちゃんとやっていたら、二二〇%ぐらいの仕事になるはずなんです。そういう計算を監督と折衝しながらストラッカーという証明書に書かせる。

私が立ち会った監督は非常に人のいい人で、私の「ハシモト」をロシア語のスペルで書くと、Hを読まないで、「アシモト、アシモト」と、彼は言っていました。「アシモトは『ヒドル』、強い」と言うんです。強いのではない。合理的に考えれば、そういう計算で百二十人の部下に当たる人たちの労働を正當に評価させれば、必ず一〇〇%を超えるわけです。

そういうノルマの考え方は、非常に合理的なものだ。例えば、この若松辺の建物にしても、ノルマで計算して、面積など全部計算していくと、幾らでできるはずだという計算ができるはずなんです。そうすると、いわゆる元値といいますが、見積もり価格、こういうものが正當になされれば、競争入札というものもつと合理的にできる。私の本職からいえばまるで違う仕事ですけども、こんな考え方を学んでいったように思います。

愛知県 中根昭二

吉田通訳を通じて色々な作業説明を聞いた。この国ではノルマ(固定作業量)というものがあり、今日の作業量(成績)を%で評価せる。その%を収容所に持ち帰り収容所の本部に提出する。本部からは炊事へ連絡が届き、明日の食事の量に影響されるといふ、ソ連独特のシステムになっている。つまり働かざる者食うべからずといふ共産主義の理念であり第一歩の実行である。今日の昼食は大豆の煮豆が片手のひらに乗るくらいの量で、塩気も味気も何にも無いものだけだ。しよせん人間扱いの身ではないからと愚痴をこぼしても始まらぬ。皆んなは減り腹にもめげず誠心誠意頑張った。お陰で我が小隊は一〇〇%をもらう事が出来たので明日の食事が楽しみだ。段々と食糧事情が険悪な状態となり腹が減ってトイレに行くのさえふらふらしてしまう。皆んなひもじい思いで毎日を送る。炊事場へ行き残飯をあさる者、他人のパンを盗んで食べる者、まるで乞食か捨て猫のような心境であった。今は今とて何一つ口に入れるものはない、この辛さ病むよりつらい毎日の明け暮れであった。このころは牛馬の飼葉にまぶす小麦から粉が一人茶碗に一杯ぐらいしか与えられない。それを炊事場で大込みに煮立て菜っ葉が浮かんで乾燥トマトのこま切れが少々で塩の薄味と山羊肉が二切れ、馬鈴薯のこま切れが三〜四個は入った、びしょびしょが飯盒に半分ぐらいでとても箸では食べられないので、各自手製のスプーンを作つて大事に持ち歩き昼食は現場で食べる。

食へ物の事となると二十代の者も三十代の者もまるで子供の様に餓鬼まる出しで喧々囂々でまた楽しい食事でもある。

我々の一日分の食事給与規準は次の通りである。

- 一 黒パン三五〇グラム―患者は四〇〇グラム
- 二 米麦粟いづれかで四五〇グラム
- 三 魚六〇〇グラム(魚の無い時は穀類五〇グラム増)

四 肉一二〇グラム(肉の無い時は穀類五〇グラム増)

五 砂糖一八グラム(砂糖の無い時は穀類五〇グラム増)

六 塩一〇グラム(漬物が入荷の時は塩が少くない)

七 油二〇グラム(肉の無い場合油の増量)

八 野菜六〇〇グラム(乾物の場合は十分の一)

九 お茶五グラム

こんな具合で営内入荷があるが、当時はまだ旧軍隊の制度があり、将校食と言つて特別待遇で食事を作つていた。また時々ソ連兵が炊事場へ入り肉の一かたまりを持つて出て行くが、日本兵の炊事係の者は見て見ぬふりをしていなければいけない、苦しい立場である。

ラポートとノルマ

三重県 後藤良之介

「ニエラポート ニエクーシャツチ」(働かざる者食うべからず)共産国ソ連の鉄則である。すべての労働にノルマが課されており、八時間労働が建前であるが、ノルマが達成されなければ何時間でも働かされる、ソ連労働者のノルマはそのままヤポンスキー(日本人)俘虜にも適用され、私達はこのノルマに泣かされ通してあった。知的労働者や技術者のノルマは案外軽く、肉体労働者のノルマは重かった。シベリアでの約四年三ヵ月、私が体験したラポートは次のようなものである。

水道管理設のための溝掘り(イルクーツク市)

イルクーツク駅の線路工事や除雪作業

キルピーチ(煉瓦)工場の作業

木造住宅の建設作業(第二イルクーツク市)

雲母採掘の坑内作業

炭坑(石炭露天掘り)の作業(チェレンホーボ)

セメントや木材などの荷おろし作業

コルホーズやパン工場の作業

収容所内の洗濯班の作業

冬期の便所清掃作業

その他色々のラポートをやらされたが、今でも冬になると、昭和二十年冬のイルクーツク郊外での水道管理設のための溝掘り作業の辛かったことを思い出す。直径二五ミリのパイプ埋設するために地面の幅三メートルからV字型に深さ三メートルまで掘り進むのである。冬期に地表から二メートルは凍結するので、更に一メートル深く掘る必要があるのだと言う。単純な土木作業はノルマも最もきつい。僅かな黒パンと水みたいのスープでは空腹と疲労に耐えられず、酷寒と共に犠牲者の多かった最初の冬であった。

チェレンホーボでの石炭露天掘りの作業は三年目の冬で、ここでは作業そのものよりラーゲルから炭坑までの距離が遠く、現場で八時間労働のために早朝暗いうちに出発、凍った雪道を二時間近くトボトボ歩いて炭坑に着く。ラーゲルに帰るともう真つ暗、この作業はそれほど長くなかったが忘れられない。

私はカマンジールとして一番長く携わったのが第二イルクーツクの木造住宅の建設である。二階建てのアバートで、クズネツオフという名前の人の良いナチャールニク(監督)と一緒に基礎工事から完成までやりました。

静岡県 岩村伊勢二

ソ連ではほとんどの作業にノルマがあります。私は夏の間、農作業班でコルホーズ(国营農場)で働かされ、農場内のバラックで暮らしました。仕事は種の植え付け、草取りが主な仕事でした。ノルマは、一人何平方メートルと決まっております。草取り等は草が生えていても無くても同じ広さで、草の多い場所に当たった者は大変でした。初め私達は一生懸命働いてノルマを早く終わり、ゆつくり休みましたところ、次の日からノルマが増やされました。以後は要領よく一日がかりで割当作業をすることにしました。

十月に入り収穫が終わると、また収容所生活が始まります。抑留生活三年を振り返ってみますと、昭和二十年、二十一年の冬が最も悪く、食物、飲み水の支給が少なく、寒さと飢えのために多数の栄養失調者がおり、ひどい者は静かに死んでいきました。その死は横に寝ていた同僚が気付かず、朝起きないので初めて気付く有様でした。死人が出ると土葬のため穴を掘って埋葬するのですが、地面が凍結し、ツルハシが刺さらず、重労働だったことを思い出します。

愛知県 伊藤専一

労働(ラポータ)ですが、最初の一年間は伐採をやらされました。四十分くらいかかる山まで歩いて作業しますが、一日の作業量(ノルマ)はきつかった。ノルマが達成できないと、意地の悪いカンボーイ(監視兵)は達成するまで山から返さないと厳しいものでした。けれども中には理解してくれるカンボーイもいて助かることもありました。

栃木県 橋本正男

我々は来るべき夏に備えて道路の補修に出た時である。そこは広漠たる扇状地で吹きさらしなので寒く、大地は一メートルも凍結している。ノルマは砂利二・七立方メートルを凍土の下から取り出すのである。二人一組で穴を掘り、一メートルの凍土を抜けると見事な砂利が出る。その砂利を路肩に高さ一メートル、幅二メートル、長さ二・七メートルが二人のノルマであった。早く終わると明日は三メートルになるので毎日歩哨の機嫌をとりながら仕事をしたのである。その様にして能率を上げないように時間まで仕事をしていたのである。早く終われば翌日は必ずノルマが多くなるからだ。彼らはノルマが有ると言うだけで書いたものはないらしく、その時の機嫌によってところと変わるのだった。

山井戸掘り

これは恐らく三〇七収容所辺りかと思うが、はつきりした記憶は無い。この辺一帯の線路の予定地はどこも立木が伐採され、取り除かれただけでどこまでもでこぼこ山が続いていた。

その高い山の付近一帯に丁度井戸ぐらゐの大きさの堅穴を掘り下げていく作業なのだが、二人一組となつて一つの穴を受け持ち、五メートルぐらゐの間隔で、一場所十個所から二十個所に及ぶこともある。もちろん各組の受け持ち場所は抽選によつて決めて始まるのだが、その仕事のノルマが直に翌日の食料の支給に直結すると言つ、いわゆる「働かざるもの食うべからず」とのソ連の大原則を盾にとつての捕虜いじめだった。我々は与えられた工具、即ち円匙、十字鋏、石のみ、バケツ等をもつて仕事を進めて行くのだが、各穴の条件はほとんど違つて言う事だ。従つて、円匙と十字鋏だけでほとんど掘つていける穴もまれにあったが、ほとんどの穴は堅い岩盤を、石のみとハンマーで少しづつ打砕いていかなければならない。其の上、水の出る穴に当たった場合は、この水のくみ揚げに時間をとられ到底ノルマを完遂することなど出来なかつた。その結果支給された一例をあげると、一人一日当り一〇〇%のノルマ達成の人は一般基準量である黒パン三〇〇グラム、雑穀三五〇グラムの他、野菜、魚、塩等を大釜で煮とろかした水っぽいスープが缶詰の空缶に一杯、と言つたことなのだが、これが基準量の八〇%しか出来なかつた人には二〇%の減量、六〇%の人は四割減量の支給と言つことになる。同時に一二〇%達成出来た人は二割増しの給食になるのだが、ほとんどまれであった。

この様にして彼らは我々に食べ物をちらつかせながら仕事の能率を上げようとしたのだが、その結果は全く逆であつたと思う。のみならず我々は減食を強要されたため、日ごとに体力の低下を来し、次第に痩せていったのである。

この様な事実こそ、正に人権を無視した残虐行為として忘れられない。

千葉県 庄司音松

築港作業が毎日続いている。私達は炊事出身者ばかりなので体力も他の人達より持つていた。石積み作業は長崎県の出身者で浜田という男がいた。彼は開拓義勇隊の出身で兵隊ではなかつた。私の班にはその義勇隊の出身者は二人いた。

彼らは石積みにかけては非常に手腕があり、周りを大きく中へは余り石を入れず、うまく積み重ねた。ソ連の監督は外側を計り何リニューベと計算するので周りを大きく見せるのがコツだ。私達は石運搬、彼らは石積み作業で、他の班の人達よりはるかに作業量が多く、毎日百パーセント以上の作業を遂行していた。

また石落し作業は山の中腹に石と土とが混つていたので中腹に宙づりになり、石と土を落す作業だった。私達は一人山の上に見張りを置いておき、その石がいつでも落せる様に仕かけておく。そして監督が来るのを山の上で待つ。来た時は皆に連絡する。監督が来ると同時に一斉に石を落す。監督はそれを見て上機嫌、毎日百パーセント以上の作業率であつた。

千葉県 林 興一

同朋のために肩を交互に交替して一カ月、ようやく「ホーリンスク」収容所に入った。

「秋の陽をまともに浴びて、行く道の果さへ知らずシベリアの奥深く来つるものかな あゝ千里」

建物は、形は成しているが丸太小屋、シベリアの流刑地の跡で南京虫の巢である。それでも露天に仰向で眠るより人間的でホツとした。丸一日、死んだ様に眠つた。いよいよ明日から作業である。

限り無く続く、天然の大森林の伐採作業一人当りの作業「ノルマ」(ノルマとは責任作業量)は六・五リニューベ、六人一組で作業するから合計その六倍が責任量である。それが達成できなければ営倉である。営倉は野天で零下六〇〜七五

度、そして半減食と厳しい。しかし「ラシヨラボータ」(良く働け)「ノルマ」を完遂すれば、東京ダモイが早くなると欺瞞する。現実の体力からして到底できない「ノルマ」である。十月より零下四〇〜六〇度、吐く息も凍り、睫毛も凍り、心も凍り、身体は栄養失調「十キロ〜二十キロ」減り、瘦身古木のごとく、目だけ大きい、嘘と知りながらも一日も早く祖国日本に帰りたい。行軍中の満天の星に、願っていた。ホームシックが高じて逃亡者が遂に出た。空しさ、悲しさいっぱい。ただ無言、狼の餌食となった戦友、万斛ばんかくの涙々。シベリアバイカル湖から祖国日本は遠い遠い遠い。

広島県 益田繁美

抑留され初めてノルマと言う言葉を知った。蒙古兵はソ連兵に命令された下っ端の仕事の監視が主な任務で、日本人を動かしているのはソ連兵である。誰も一日にしなければならぬ一定の仕事の量を決めていて、その量を超えると褒賞としてその人に食糧を与える仕組みで、日常腹三分くらいしか与えない若い現役甲種合格の兵隊は褒賞のパン欲しさにノルマを達成していた。褒賞と言っても一センチ厚さの黒パンである。全員がノルマを達成すればノルマを引き上げるので、栄養と労働のバランスが崩れ、一、二カ月続くと痩せて骨と皮になり次々と倒れていった。僕は開拓団に入植以前の病気から、人並みに出来ないと言いきかせ一度も褒賞パンをもらった事はない。ただ、ただ生きて日本に帰れることを願うのみで、仕事の量は七〇パーセントでも殺しはすまい、空腹はつらいが、水で満腹感を一時的に充たした。しかしこれがいつまで続くか、長引けばこの蒙古の土となるかも知れない。

阿倍仲麻呂が支那で歌った歌を思い出す。

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

はるか東方に昇りし月、仲麻呂の心、感無量で涙が頬をつたう。父の顔が、母

の幻が、この月を見ているだろうか。

愛媛県 小西照男

ソ連はノルマが特に厳しい。個人個人の作業量は健診によって実績が決まる。一級から四級まであつて毎月の診察があるが抑留者の診察はいたって簡単で、腕の皮膚を引っ張ってみて皮が多く引きあがれば三級とか四級に決まる。一級の体になったら一〇〇%の仕事をしなないと一〇〇%の食事は与えられない。二級の人は八〇%の仕事で一〇〇%の食事ができる。

半年くらいたつたであろうか、また奥地へと移動した。鉄道線路の土面を作るための穴を掘ってダイナマイトで爆破する作業で、一メートル掘ると下は凍って掘る事が出来ない。一メートルの角で深さ五十センチのノルマであるが、二、三日はできるが後は土が凍っていて掘れない。慣れてからは夕方、立ち枯れの木を切つて来て、穴の上で火を炊いて帰る。

翌日は氷が溶けて少しは作業が楽になる。

二、抑留者の統制管理の実態

(1) 最初に收容された收容所の形態

栃木県 八木澤旺二

十日ばかりすると、凍っていたベッドも人の温もりで少しずつ乾いて、どうにか眠れるようになった。

收容所で

和歌山県 岡本昇

收容所は板塀で、上部に鉄線をめぐらし、四すみに監視台がある。門をくぐると、すでに先に来ていた同胞が私たちを迎えて、「自分たちは明日帰国する」と言った。十棟ほどの建物は、屋根が地上すれすれで、土を載せている。入口の扉を開くと、二坪ほどのおどり場で、さらに奥の扉を開くと階段になって地下におりる。

中央に通路があり、その両側に二段ずつの板のベッドが並び、隣のベッドの間は、やっと人が上り下りできるくらいで、一段に四人寝るようになっていた。中央の両側に暖炉があるが、燃やしていない。うす暗い電球が二つある。私は上段のベッドを与えられた。屋根裏との間は中腰になると頭がつかえて窮屈そのものである。

驚いたことに、急造であろうベッドの板も屋根裏も松の生木で、表面がガリガリに凍りついている。この上で寝れという。冗談じゃあない、氷の上で寝たら凍死する、と文句を言っても通じない。やむを得ず毛布を敷いて外套にくるまったが、とても寝つかれぬ。百人ほどの者がみな通路に立つて「えらい所へ連れて来られた」と泣き事を言いながら夜を明かした。

携帯の飯盒は取り上げられた。食事は干大根の千切り、小豆と少量の家畜の内臓の入ったスープがブリキ製のうどん鉢大の容器に七分目、それに酸っぱくてボロボロの黒パン百グラム、これが一食分のすべてで、三食とも同じものであった。

收容所は丸太を組んでつくった掘立小屋である。我々はベグス(一〇六收容所)と呼んでいた。もちろん電灯があるわけではない。ランプもローソクもない、夜の灯とした白樺の油煙が部屋いつぱいたち込め、人間の顔や手も真っ黒になってしまった。笑うと目玉だけがギラギラ輝き、齒は真っ白に見える。洗顔する水もないので、入浴もできないので、全く原始時代以上の野蛮な生活に戻ってしまったのである。

隊長が、「ここが我々の收容所とのことであると言って、後方を振り向き指した。隊長の近くにソ連兵の監視詰め所らしい建物が小さくポツンと見えるのみで、四圍には建物も何もない。監視所前の門を基点に有刺鉄線が広大な原野と斜面になつている山の中腹まで張り巡らされている。これから收容所を建てて入居することになる。材料は附近の山にいくらでもあるという説明に言語に絶する驚きであった。ともあれ建物は何日かかるかshれないが、自分たちの寝ぐらをつくらねばと、毛布や携帯テントを使って除雪作業である。人員の半分は山に枯れ木とりである。チタ地区は地球上でも有数の極寒地区である。空腹も手伝わて身体が凍るようだ。暖をとらねばと、たき火をやり携帯用の天幕をつないで風よけ程度のテントを張り、たき火を中央に毛布を敷き、一段落し、ホットしたときはもう夕方になっていた。飢餓と睡眠不足でだれもが困憊の極に達していた。不寝番を交替制でということにし、毛布の上に横臥したが、除雪したとはいえず凍土が体温で溶け、服は泥水で眠るなどできない。たき火も次第に凍土を残し、時間の経過とともに沈んでいく。結局一時間足らずの睡眠で、泥になった衣服の乾燥で全員が不寝番を勤めたのだった。

最初の抑留地カローリ収容所

島根県 八幡垣正雄

私たち捕虜は食糧、炊事用の鍋釜を交替で担ぎ、目的地向かって出発、この光景を見るとちやうど敗残兵が退却して山中に逃げるようであった。ふと我に返つて見ると、まさにそのとおりであった。これがかつての関東軍の精鋭の姿であったのである。

歩くこと二時間余りで目的地に到着、この地に住むにも家もなく、また天幕等も携行していないので、私たちが新しく建てなければならなかった。半地下式に土を掘り、山の立ち木を切り、丸太小屋を建て、壁は木の皮や草などで周りを囲い、中に炉を切り、夜は交替で火を燃やして寝た。この地区での作業は、長柄の刃渡り六十センチの鎌で乾草用の草刈りであった。

和歌山県 中松利男

牡丹江を出てから二十四日目、昭和二十年十一月二十七日に白樺茂る森林内の小さな駅に到着した。雪の大変深い所であった。下車し、疲れきった体に防寒衣をつけて、四列縦隊になつてとぼとぼと歩くこと二時間、六条の鉄条網を張りめぐらした、そしてソ連兵の警備する収容所らしいところにたどりついたのである。

二十四日間の長い旅を、常にソ連兵の監視下におかれ、不安と飢えと寒さに耐え、病氣とシラミと闘いながら頑張り抜いた、その悲痛な気持ちは、余人には想像もつかないことであろう。

ここはタンポフといつて、独ソ戦のとき、ソ連の大兵を集結したという洞窟兵舎を収容所にしたものと聞かされた。一兵舎は、二百人から三百人の収容能力がある。地下深く掘つてつくられたもので、昼なお暗い全くの洞窟建物で、これが我々の収容所であった。

この収容所には、日本人将校約一万二千人、独逸人約二千人が収容されて

いると聞いていた。これからいよいよ抑留生活が始まるのである。

和歌山県 林三子雄

「正月や地獄の旅の一里塚」と元旦の風景を望めば、列車は山脈横断をしている。もうウラル山脈だと推量す。沿線に樅の木の見える。「もう帰れないぞ!一蓮托生、なるようになる、みな我慢しているのだ、男なら辛棒」と励ましかつたが、余り元気は出ない。

一月四日十時半ごろ「下車」と叫んでくるのが聞こえる。雪原に朝日が輝き出す。荷物を背負つて並び、三十五日間暮らした貨車に別れて雑木林に入り、ラーダ収容所に着く。警備門を入るとき「帯刀を預ける」で軍刀に氏名札をつけて渡した。

収容所の建物は、入り口へ立つまで気づかない低い雪山だ。換気櫓だけ黒く見える、半地下式丸太小屋で、中央にペーチカー一基、周辺二メートルぐらいの広場で、広場から通路が十文字と分かれ、その幅一メートルぐらいあり、通路両側に二段棚、周囲の壁際も通路で、大部屋だ。薄暗い裸電球が天井に数個灯つていて、使い古した小屋だ。中は異臭を感じたが、次第になれた。年輩組を中央近く、若者は周辺へと割り振られて、入り口に一番近い二階と決まった。

一棟に四百人ぐらい詰まり、部屋の温度も昇つたように思えたが、夜が更けるに従い小便に通うため出入り多くなり、朝まで戸の開閉が忙しく、いつも冷たい風が突き刺すように襲うので閉口した。ここでの生活が思いやられる。いつまでも頑張れることやら。

和歌山県 木下正夫

やがて国境を過ぎるころ、夜空には我々の行方を指すかのように流れ星が北へ飛んだ。磁石を見れば北へ方角を示している。やっぱりだまされたぞ、日本に帰れるどころか、ソ連領だ、だれ言うとなく抑留されるのだ、あきらめるより仕方

がない、もう駄目だ、暗い気持ちで重い足を引きずり歩いた。

やがて収容所らしいものが間近に見えてきた。後で知ったことであるが、着いた所は伐採のための収容所であった。厳重な鉄条網に囲まれ、籠の鳥同様、木の切り株だけで、兵舎どころか何も無い、だれしもただ茫然とするばかり。この先が思いやられる、あきれるよりない。

地面に枯れ草を敷き、毛布にくるみ、着の身着のまま抱き合うように寝るのだが、夜中に用たしに行くのと寝る所がなくなると、朝まで起きていなければならぬ。幕舎生活が始まった。前途は全く暗いが、隊長を中心に日本人としてあくまで潔く最後を遂げる心構えはしておくようにとのことで一同決意して入所したわけだ。

しかし、幾重にも張りめぐらされた鉄条網に近寄れば、逃亡すると思うのか銃殺される。

滋賀県 寺村芳郎

昭和二十年十一月六日、ダモイ東京と言われ、喜んで貨車に乗り込みました。中は二段になっており、小さな天窓が一つあるだけの不安いっばいの出発でした。どこを走っているのかサツパリわからず、指揮官に尋ねても知らないの一点張り。機関士に聞いても自分の運転区間より知らないようでした。が、列車は休みなく西へ西へと走っておったわけでした。

十日ほどたつて駅へ着きました。大きな海が見え、それがバイカル湖であることを知ったのはあとのことでした。そして一日中湖辺を走って、二十日間ほど行った森で下車、これがラーダの森でありました。収容所は独ソ戦当時の兵舎で、屋根だけ地上にある穴倉でした。宿舎の天井裏にライオンハミガキの使い古しがありました。これがだれの使ったものであったか、あるいはノモンハン日本兵のものであったか、不明でした。

そのうちにソ連の兵隊が、この兵舎にはドイツ兵が二千人ほど入っておったの

だが、全部銃殺されてしまった。お前たちもそんな運命に遭うのだろうかと言っていたのを思い出します。

十一月になるとともに、一面氷が張ってきました。作業は電話線の埋設の仕事でした。深さ約一メートルほど掘り下げ、幅二メートルで掘り進むのです。途中、石畳の舗道があり、それを取り除くのに大変苦勞をいたしました。

ソ連の地方人が化粧石けん等、日用品を欲しがって寄ってきておりました。これを歩哨は追い帰してはおりましたが、彼らの物資不足は深刻の様子でした。

ある日、私たちの仲間が長靴をとられたとの申告があり、収容所へ帰ってきたところ、所長より、今日作業に出た者は全員広場へ集合させられ、その前に歩哨全員を並べ首実験せよとのこと。そのうちの一人に容疑がかけられ、全員の前で射殺されました。我々の面前でこれが行われ、全くびつくりいたしました。

島根県 八幡垣正雄

歩くこと二時間あまりで目的地に到着した。山の中腹の平坦地で、この地が抑留最初の地、カロリー地区であり、私たちが当分労働するところで、林に囲まれた原野であった。

この地に住むにも家もなく、また天幕等も携帯していないので、私たちが新しく建てなければならなかった。さっそく家の建築である。建築といっても掘り立ての丸太の炭小屋程度のお粗末なものである。経験者ごとに作業分担が定められ敷地をつくる者、木を切り出す者、丸太小屋を建てる者、炊事用の水汲みをする者等に分散し、夕方までに私たちの住む家、炊事場、便所等がほとんど完成した。

建物の構造は骨組みが丸太を使用、屋根、壁等は草や木の枝等で囲い、中は半地下式で、中央に炉を切り、外壁の下部に土を高く盛り上げ、雨水等が中にはいらないようにでき上がり、日本のように笹やカヤがないので、苦勞をしたものである。

一棟に四十人が生活し、一人分の場所は四十センチ程度と狭く、敷物は干草を敷き、その上に各人が携行の布を敷き、夜は中央の炉で火を燃し、交代で不寝番について休んだ。場所が狭かったが、互いに密接していたので暖かった。

熊本県 岩野寅雄

草原に自分たちでつくった半地下式住家は、骨組を付近にある柳の木をより合わせ、屋根は草ぶきで幾つも並べてつくられた。横の中央に階段を設け、室内の両側に六、七人ずつ寝るようにして真ん中に少し火を燃やして暖をとった。一回火の不始末で火災を起したこともあった。

和歌山県 崎山肇

列車は時々長時間停車する。ヤポンスキー、ダモイダモイとロシア兵が大声で叫んでいる。我々もウラジオストクから船で日本に帰れるのだろうかというわさが飛んでいたが、列車は急に北へと進路を変え北上する。だれもが帰国できるいちの望みも断ち切られた。

やがて広々とした原野に停車、全員下車の命令で一夜野宿、枯れ木を集め、火を焚く。初秋だというのに夜はかなり冷え込み、零度近い。

朝早くから、ダワイダワイとマンドリンを下げたソ連兵に狩りたてられ、空腹を満たすため生米をかじりながら行軍する。昼前、草原の中ほどに到着した。

ソ連軍のカピタンが日本人通訳に当分の間ここで草刈り作業をするとの命令で、各班に編成された。まず自分たち各班の住まいをつくれとのこと、一体どうしたことか、まったく見当がつかない。仕方なく手分けして枯れ枝を收拾し、草で編んだ縄で支柱を組み、また草を刈り屋根に載せて草小屋を完成させた。また小屋の近くに大きな穴を掘り枯れ木を渡した便所もできた。何とか雨露をしのげるだろう。

夕日はすでに西に傾き、真つ赤に空を染めている。ひと息つき、ふと故郷の両

親兄弟の顔が浮かぶと、とめどもなく涙がこぼれる。

どんな苦労があろうとも生きて帰りたいと心に誓った。

小屋の中は真つ暗で、班の仲間たちとごころ寝であるが、幾分か風もささぎり何とかしのげた。

屋根の草も数日で乾燥し、天空の月が見える。班員と月を見ながら、故郷話に花を咲かせる。雨が降ると小屋の中はびしょぬれになり、寒さと飢えで苦しい日々である。

岩手県 笹川博

十一月七日、チリノスカヤ駅着、十キロくらい歩いてカダラの収容所へ。建物は昔シベリアへの流刑者を収容した二階建ての建物。入ってみたら電気もなく、ランプもなく、便所もない。零下四十度での大便をするとき尻が凍るようだったし、尻をふく紙もなく、ないないづくしの収容所生活。食べ物はスープと黒パン一個を七、八等分したもので、夜昼はおかゆ(雑穀)ニシン半分、若干の変わりがあったが、抑留生活中量がだんだん多くなっただけ。抑留されて翌春まで生活環境の変化、飢え、寒さと慣れない作業で一人二人と死亡、一日二十人くらい死亡した日もあったように思う。毎日が長く、一日が三日くらいに感じながらの生活だった。

熊本県 吉間政範

二十一年四月、雪解けと同時にソ連入りし、シベリア沿海州カバレロ(シ)ホリタ山脈の山中、スイゾエフカの近く)の山中に入り、五日間で宿舎建築(材料は山中で伐採した丸太)せよとの強制作業でした。

宿舎建築の概要

工具 ノコとタポール(斧)

材料 山中に生えている木材(かわやなぎの木)

構造 長さ二十五メートル・幅六メートル・平屋・土間の中廊下・土間の両側

に二段床ベッド(床は丸太を並べ、むしろを敷く)

屋根・壁は、かわやなぎの小枝を組み土を塗る。土間の中央にドラム缶のペーパー(暖房用)

雨が降ると土屋根のため雨もりがひどく、雨の落ちない所を選んで片寄って寝る状態でした。

夜には電灯もなく、昔のように灯油に芯を立てて燃やすので、朝起きると顔はすすで真っ黒けでした。

真冬の夜は、気温が零下三十度にもなるので、隣の同士と丸裸になって抱き合いながら、お互いの体温で暖め合いました。経験のない人には、全く想像のつかないことでしょう。

福岡県 林 茂美

疲れ果てて、やっとチパリという人家が五、六戸しかない山の中に着いた。急造の丸太を積んだバラック建てで、四方には望楼があり、歩哨が立ち、鉄条網が二重に張りめぐらされ、「ここから出ると射殺する」と書いてある。

長野県 茅野道寛

九月二日武装解除。平壤郊外三合里の旧日本軍の練兵場の兵舎に収容され、周囲のバラ鉄線を自分たちで張った。敗戦の年の冬はここで過ごした。特に決まった作業もなく、炊飯用のまき取りに出掛けるぐらいだった。

糧秣も旧日本軍のものが支給されたので、それほど苦にならなかったが、発狂者が出たり、逃亡者が捕らえられ、目の前で銃殺されたのが恐ろしかった。病気による死亡者は少なかった。

大阪府 倉見 曠

汽車の着いたところはハバロフスクでした。駅前より五百メートルくらい歩いて行きますと、すでに先発の日本兵が道路作業をしているではありませんか。これで私もみんなも観念したように思います。それから二日ほど歩き着いた河辺に旧日本客船があり、ここに宿泊し、翌日より近くの馬小屋のところに自分たちの宿舎建築にせつせと励み、一か月半くらいで完成し、ここに入り、本当の抑留生活が始まったのであります。

福井県 山本武治

嘆き悲しんでいる中、汽車はハバロフスク駅に着き下車させられる。その晩は、大きい倉庫の中で一泊、翌日トラックに荷物のように乗せられ走る。数日、山また山、これがシベリアの大森林地帯なのだ。

どの方向へどれだけの距離を走ったのかさっぱりわからない。ようやく建物らしきところでおろされた。これが三〇九収容所であった。一個大隊三百人も入られるような建物、階段式の寝台、中央に大きい暖炉一個、中へ入るとひえびえとしていたが、暖炉の火が燃えると結構暖かい。その夜は寝台にモミの木の葉を敷いて寝た。翌朝起きると、外は零下三十度、配給の食糧は大豆や小豆だけ、水はなく、外へ出て雪をかき集め溶かして大豆など煮るのに使用した。その当時の食物環境等を思い起こすと、栄養失調にならないのが不思議なくらいである。

大阪府 総元六三郎

私は入ソ以来、チタ州カルイムスカヤという小さな駅付近で下車を命ぜられ、零下三十度を超す吹雪の中を三つほど山を越え、不安な気持ちで行軍した。着いた地点は白樺の密林である。

私たちは早速携帯天幕を張り合わせて、何とか降雪を忍んで仮眠すること

とした。しかし寒さで一睡もできない。夜明け前に即時森林伐採の重労働、一方、一小隊の兵力で丸太造りの小屋がつくられ、何とか起居することができた。

鳥取県 竹安熊市

ウラジオストック經由帰国させることで、貨車積みとなって北西に向かった。零下十余度の寒空にどこへ連行されるのか全く見当のつかぬ不安と精神的打撃の上に、さながら生ける屍としての一週間でした。当初は血涙にむせていたが、固く閉め切られた真つ暗な貨車の中に無言でうごめく人々は、ただ黙々として何も語らない。まぶたを閉じ、うつむいているのは、遠く故郷に残した家族の安否を思いやっているのであるか。私もさまざまに思いが去来し故国の追憶にひたりながら『無事でいてくれよ……自分は石にかじりついても生きて帰るから、必ずや相まみえるときがあるだろう』と父母兄弟の無事を祈った。案の定、貨車の着いたところは、帰国のための港ではなく、寒々とした中、徒歩で二時間ほどのところにあるコムソモルスク収容所でした。

ラーゲル(捕虜収容所)での苦勞

朝、私たち作業隊がラーゲルから出る場合は、門番の下士官とカンボーイ、それに日本側の引率者が人員の確認をする了解が出れば開門する。我々日本人であればこの程度のこととは五分もあれば済むと思うのだが、この単純作業に毎日のことながら三十分以上もかかるから閉口した。気候のよい夏場であれば時間は気にならないが、零下四十度となる冬場ではたまらない。室内で暖まった身体が三十分も戸外で立たされると、どんなに足踏みをしていても、全身が凍るように冷えてしまう。作業隊の人数はその日によって異なるが大体五十人前後である。

新潟県 宇野公夫

囚門に数日滞在して奥地延吉へ移動、旬日にして囚門經由琿春峠を越え入

ソしました。着いたところがクラスキーの大地で約一か月間幕舎生活しますが、携行食糧乾パンのみであろうとは。馬糧コウリヤンを一日中飯ごうで炊き毎日を過ごしました。

クラスキーからコムソモルスクへ

冬を迎えようとするとき「東京ダモイ」の声にだまされ貨車に乗せられて奥地へ、車中寝て起きると車内の天井が一面白く凍りつき「東京ダモイ」がうそであることがわかり、こうして四、五日してある場所へ停車、早速ダワイ、ダワイでせかさされ貨車よりおり、着いたところが収容所コムソモルスク第四収容所でした。馬小屋を改造した二段式ベッドの簡単な建物で、もちろん電灯などなく、灯火は作業に出かけた折り貨車の車軸から油を抜き取りランプ式にして明かりをとりました。翌朝お互いの顔はすすで真つ黒くなっており、笑えない状態でした。

ここはアムールの川岸にあつたので川船からバレイシヨやサケのたる詰め等の荷上げ作業で食事も満足にとれなかつたので、作業帰りに各自が軍袴の下をしばり袋状にしてその中へバレイシヨを入れて帰ってきましたが、それを見ていたソ連警備兵は「ヤポンスキタコイダ」とまたを開いて笑って話しかけ、またサケのたる詰めをわざと橋げたにぶっつけてこわしてサケを抜き取り食糧として過ごしていました。また、この収容所での思い出として、同僚と組んで炊事場のほりの上に登り、炊事用の釜の中へ飯ごうをつりおろしておもゆ相当の食事をかすめとった記憶がよみがえってきました。

大阪府 吉岡芳延

日本ダモイダモイとだまされ続けて、昭和二十年暮れ着いたところは、バロフスクの北東に位置するエバラン湖の畔、第三〇五収容所であった。

冬将軍がやって来た。零下四十度という寒さである。新兵どもはテントに入られれば寒さで眠れず、一時間ごとに尿意に目醒め、皆便所に走りつくまで我慢ができず広場の白い雪の上に洩らしてしまい、翌朝広場も黄色く汚れてい

た。

降雪も多く我々の食糧を運ぶ車も走行不能となり一か月たつても食糧は来なかった。初めは自分たちが身につけた米を出しておかゆをつくり当分はやれたが、ついに米もなく、もちろんパンもない。飯ごう八分目の塩湯に大豆が十粒ほど底の中に沈んでいるだけ皆弱ってきた。その上シラミがふえ、夜中全員雪の上に整列させられ全裸になって衣類からシラミをポロボロとはたき落としても、一時間もすればまたモゾモゾと身体を這い回る。手をズボン下の縫目に沿ってこさげると手の平に数十匹のシラミで、それを食いつぶした。そんな調子が雪の解け出すころまで続いた。当然皆栄養失調の上シラミに血を吸い上げられ、かまれたかゆさに掻き破り、疥癬となりさらに発疹チフスに冒され、次々と祖国よ父母よ妻子よと望みを空に死んで行った。他の収容所から転属して来た兵の話では、ある収容所のソ連所長が大佐かなんかで、その人のお父さんが日露戦争のときに日本の捕虜となったとき、日本人に非常に親切にもらったといい、日本軍抑留者を大事にしてくれたといううれしい話もあったが、栄養失調、発疹チフス等のため二十人全員死亡した収容所もあるとか。

雪が解けて食糧は来たが、所定の量の一食二百五十グラムの黒パンもコウリヤン粉の上に水分多く、目方をこまかした小さいもので毎日毎日空腹だった。

栃木県 黒川 護

シベリアに強制的に連行された我々を待ち受けていたのは、かつて想像もしていなかった寒気と、一方的の押しつけられた強制重労働であった。送られた場所が一体どの辺なのか。ハバロフスクまでは大体わかっていたが、その先はさっぱり未知の世界であった。

でも、昭和二十年の十一月に入所し、翌年の雪が消え一面が緑におおわれ、名も知らぬ花が咲き出すころになって、現在地がどの辺か大体わかってきた。つまり、ハバロフスクから約二百キロくらい北上したところの街がコムソモリスク

(我々はこの汽車よりおりて、そこから自動車に乗せられて北上)で、ここを起点として、シベリアのど真ん中を北西に向かつて走り、バイカル湖の北辺を通って、やがてシベリア鉄道と連結する。こういう鉄道をつくるためにここに連れてこられたわけである。

つまり鉄道建設のため、これに関連したすべての作業をやらなければならなかったのである。もちろん、ソ連側はそのような詳しい説明など表立っては何も話さなかったが、だれかが聞き出した情報が耳から耳へと伝わってきたのであろう。

それからこの鉄道の名称はバム鉄道というらしい。このようなことが次第にわかってきた。「バーアム」とは、バイカル、アムールの略称で、アムール川のふちにあるコムソモリスクからバイカル湖の北辺を通って、シベリア鉄道の駅タイシエトまでを言う。)。

この地区名を五地区、またはフォルモリー地区といい、四つの支部にわかれているらしいが、その全距離は相当なものであったであろう。コムソモリスクからの入り口付近は、鉄道の路盤はほぼ完成していた様子で、我々は最初から二支部に入ったように思う。

恐らく第二次大戦前までは、ソ連の囚人の収容所としてつくられたのであろうが、戦争のため中止して、そのまま捨ててあったのであろう。屋根のないのやら土台の周りだけ終わったのがそのままになっていたのである。このようなところに放り出された我々は、到着と同時にまず自分の住む家を建てなければならなかったのである。その間、急造の天幕の中で、夜は着のみ着のまま、防寒帽子をかぶって隣の人と密着しながら横になったのだが、どうしても寒くて眠れない。仕方なくストーブの周りに来て、うとうととするのがせきの山であった。

その上に想像をはるかに超えた寒さである。だれも彼もが地獄の一丁目に放り出されたわけだ。かつては関東軍の精鋭として、一身をなげうって、あらゆる難関辛苦をも克服してきたはずなのに、事ここに至っては、その片鱗すらも見る事ができない。ただソ連の歩哨や監督に「ドバイ」「ブイストラ」「ドバイ、ドバイ」

と追い立てられ、それに逆らうこともできず、夢遊病者のような毎日が続いた。もちろんかろうじて生きていられる程度の最悪で多少の食糧の供給がこれに輪をかけたのである。零下三十度といえは、我々にして見れば、今までにまだ経験がないので全く驚いた。何か話そうと思っても口が全く回らないのである。言葉にならないのである。(なおその後零下四十八度という日があった。)

新潟県 田村恭一

私の隊はトモンというちっぽけな町に下車させられた。たしか第二十八ラゲリだったと思う。建物はなく、幾つかの幕舎に枯れ草を敷いたのがこの日からの宿であった。

九月というのにすごい寒さで、抱き合つて寒さには耐えた。食事は携行した米や缶詰であったが、二、三日でなくなり、ソ連給与のカルタほどの黒パン、飯ごうのふたで半分くらいのスープでは、食べたあとすぐ腹が減った。

働かざる者食うべからず——の国だ。翌日から自分たちが囲われるラーゲリづくりのため山中に入り材木作業。自動小銃(マンドリン)を首からつるした哨兵がベストレ、ベストレ(早く早く)を連呼して追いたてるように働かせる。少しでも反抗の態度をすると銃を向けてこづく。ノルマを課せられた重労働。すごい寒さ最悪の食事に私たちの体力は急速に衰えた。

新潟県 矢部松次郎

貨車からシベリアの地へ第一歩をおりたときは、小雪がチラ、チラ降っていた。そこからまた行軍して、到着したところがタランジャンという地名だそう。人間の住む家屋もない、また目ぼしいものは何もない。ただ、冷え冷えとして屋根のないコンクリートの建物だけで、牛や馬を入れてあった建物だそう。ここが仮のシベリア抑留地の宿であった。

ソ連兵の指示で、分かれ分かれに分散して、牛馬小屋へ収容された。貴重品で

あるたった一枚の毛布を掛け合つて、重なり合うようにして横になり休む。コンクリートの床が冷たく、肌突き刺さる。あまりの変化と、日夜の強行軍でいつしか眠る。寒さに目を覚ます。早い夜明けだ。掛け合った毛布の上が粉雪で真っ白い。

この収容所に三日間抑留されて、全員別々にトラックに乗せられて、山また山の間道を寒さに震えながら次の収容所へと突っ走る。やっと到着したところが立派な収容所である。丸太を積み重ねた家屋の建物の間からは、暖かそうな湯気のようなものが立ち昇つて見える。ソ連兵に「ブイストレ、ダバイ、ダバイ。」急いで、早く早くとせき立てられ、トラックからおろされて、収容所の前に整列させられた。人数を確認しなければ、所内にははいれない。

この収容所は千人収容できるとのことである。収容所の周りには、三重の柵が張りめぐらされて、有刺鉄線が取りつけられ、四隅には高さ二十メートルくらいの望楼が建てられて、交代でソ連兵が自動小銃を肩に監視している。収容所の出入り口には、監視のため衛兵所があり、その前に二メートルくらいのレールが二本合わせて、太い針金で結んであり下げている。起床と作業出発の合図の鐘である。この鐘を「地獄の鐘」と呼び、恐れられている。

ようやく人数が確認されて、トラック輸送の責任者から、この収容所「ハバロフスク地方イズベスト地区第一一収容所」の所長に引き渡され、強制収容された。短期間であったが、せっかく知り合った戦友とも、またまた別れ別れにさせられた。後日聞いた話であるが、日本人はすぐ仲よしになるので、団結をこわがつて、一定の強制労働が終業すると、次の収容所へ異動させるのだと、先任兵が語ってくれた。「東京ダモイ」帰国のその一言で、多くの兵隊がだまされ続けられてきた。

新潟県 高橋義夫

数日かかつて荷物を運び終わるとみなその貨車に乗せられ、三日間走つてお

ろされたところはチタであった。その町の近くの第二十四収容所に連れて行かれた。そこに今までドイツ人の捕虜がいたという。地下の穴倉に十燭くらいの電灯が二つ三つ、目がなれないと何も見えない。板張りの二段ベッドで三人一組となり、毛布一枚敷いて二枚かけて寝るのである。

翌日から作業が始まった。同じような宿舎をつくるのだ。最初平坦なところに丸太を敷きつめてかすがいでとめる。そこから七、八メートル離れたところから段々深くなるように掘っていく。丸太の下までくると、下に柱を入れて丸太が落ちないようにしながら掘り進む。こうして丸太の下を全部掘ると、今度は掘り出した土を丸太の上に四十センチくらいの厚さに敷き、上からつき固めるとでき上がる。土の中から暖かいと思いたいが、真冬になるとやはり寒い。朝目が覚めると、体の近くまで氷柱が下がっているようなこともあり、熟睡できない夜も多かった。そんな仕事が一か月も続き、五か所くらいできると、そこに日本兵が続々と送られてきてその宿舎に入れられ、我々もまたそこに移動させられた。

それからは町の清掃、パン工場の雑役、貨車の積みおろし作業等させられた。

和歌山県 奥山 博

たしか二日ほど走ったであろう、朝になつて全員荷物を持つて下車し、ここで休憩すること。列車をおりと人家らしい小さな建物が、パラパラと目につく小さな駅である。後で知ったのだが、ハタブラークという駅名であった。ああ、いよいよソ連領に来たなあと思いつながらホームにいと前の方から動き出した。二列に並んで歩き始めた。銃を持ったソ連兵が列の両側から警備する。

歩くこと約半日で丘の上に出た。下の方を見ると、鉄条網のような囲いをした中に、屋根半分くらい土をかけた牛小屋風の細長い建物が見える。これが二年余りを過ごした小屋なるうとは思ひもなかったことである。二列の隊は鉄条網に近づく。ソ連兵が我々の所持品を検査し、飯、こうと水筒と雑のうだけを

持たせて、他の物は全部取り上げ、入り口のところに山積みにしてゆくのです。ハテ、これは何事だと思いつながら自分の番のくるのを待った。彼らと何やら話し合つて私の行李を開けようとしたが、将校が命令口調でその兵に声をかけ、私はそのまま荷物を持つて中に入る事ができた。

山の中腹を半分土を掘つて、前は丸太を積み上げた小屋で、天井を見上げる隙間から空が見える、このような「兵舎」小屋に入れられることとなつたわけである。

夜中に小用に出て、さて寝ようとしてもすし詰めで、隣の者がハミ出して入れない状態。小屋の内部に裸電球がところどころにぶら下がって、ストーブが一つ中ほどに置いてある。薪を燃して暖をとるようになってはいるが、部屋が温まるというようならぬものではない。寒中になると零下三十度ぐらいに屋外の空気は下がり、ツララが垂れる。床が低いので、冷えてぐっすり眠れない。毛布は上下二枚であるが、うち一枚は木綿の粗末なものである。日本へ帰すと確かにチチハル出発のときに話したソ連軍の将校の言葉とあまりにも違うことに皆が不審を持ち始めるのは当然である。そのために大隊長が交渉に当たつたが、再三繰り返しても同じ返事で「日本軍の帰還のために『ウラジオストック』は兵員でいっぱい、それを迎えるための日本の船が間に合わないで、ここで待機してもらつて、おだ」と。毎日の食事は黒パンがごく少量だけで、みな空腹を訴えて、これもたびたび交渉してもらつたが、全熱量はふえそうにもない。初め、しばらくの日数が過ぎたころ、軽作業に兵を出せということ、便所づくりの作業をしているうちに、場外に出て鉱山らしきところできい打ち等の雑役であったが、二か月ぐらゐもすると作業量が多くなつて、坑山に入坑し土を手押し車で運んだり、トロツコへ鉱石を積んだり、毎日毎日同じ仕事の繰り返しであった。

京都府 武内吉男

鉄橋を日本兵が爆破して通れないので、それが復旧するまで待つということ、

小学校へ入れられ、それから毎日南満州から送ってくる物資をソ連の赤い貨車に積みかえ作業ばかりの日が続いた。

ようやく十一月終わりころ、ウラジオストクから東京ダモイということ、一両の貨車に四十人詰め込まれ、狭くてとても寝ることもできないありさまで、何日かかったかはつきり知らないが、全員下車ということ、外へ出て見てびっくりした。ウラジオどころかシベリアのチタの町だった。駅前の広場人員の受け渡しでなかなか人員点呼ができず、寒い中ふるえながら長時間待たされた。ようやく我々四中隊はトラックで二時間ばかりかかり、アタマノフカというところの収容所へ入れられた。

いよいよ長く苦勞の抑留生活の始まりである。零下三十度の寒さの中、毛布一枚の支給もなく、夜の食事は百グラムの黒パン一個、一キロの黒パンを十人で分けるのに一苦勞。それが大きいや、これの方が小さいとなかなか食べるところへいかない。そのうちだれかがクジ引きをしるということで、どうやら食べることができた。食事も朝は燕麦のおかゆとスープ、昼は黒パン、夜もおかゆとスープでは、とても仕事どころではなかった。毎日れんがを貨車から自動車積み込み作業で、寒さと空腹で腰足もフラフラだった。寒さの中、栄養失調で多くの友が倒れていったことを思えば涙が出る。

高知県 東条平八郎

七日くらい経過したと思いますが、まだ明けやらぬ早朝、静寂としたどこかの小駅に到着したようでした。発車する様子はありませぬ。

白々とようやく朝の光が車内に差し込み、何となく小窓の外を眺めたとたん、脳裏を驚愕の電波が突き抜きました。大きな川の向こうに赤、白、青の屋根で、大小さまざまな洋風の建物が点在していたのです。

「ソ連領だ、やっぱりそうだったかつ、だまされたっ！」

そこはソ連国境北の果て黒河で、黒龍江(アムール)の対岸はブラボシチェンス

クで、最初から橋梁修理なんて真つ赤なうそで、私たちがだまし続けていたのです。

ブラゴエから二日間シベリア鉄道で西に走り、小さな駅で下車し山道をまる一日の強行軍にて到着したところが、チタ地区のシヤフタマというモリブデン鉱石を産出するソ連囚人流刑地でありました。

後日警戒兵によると、自分たちが到着するまではソ連政府犯や、ドイツ捕虜が起居していた鉱山収容所だったとのこと。

宿舎は建物全体が土の中で、輸送中の貨車二両分を屋根の部分で地上に出し、それから下を地中に埋めたようなもので、入り口は階段で部屋におりる構造でありました。

新京出発前や輸送列車内で、幾度となく身体と所持品の検査、並びに物品の強奪を受けて危険性の物は何一つ持っていないのに、入所と同時にまた同じような検査が一日中行われ、どうにか隠し持つて来た時計や万年筆、ペンシル等を発見され、警戒兵に強要され、提供しなくてはなりませんでした。

収容所は山のゆるやかな斜面で、約一キロの周囲に高さ八メートルくらいの丸太を十センチ間隔に立て、その丸太の内外一・五メートルのところに高さ二メートルの丸太を同じように立てた三重の丸太囲いで、それに有刺鉄線が無数に張られ、犬の子一匹の出入りもできず、四隅の物見やぐらには昼夜を問わず警戒兵が自動小銃を肩にかけ厳重な監視を怠りませぬ。

新潟県 岸野利栄

十月も中旬ころ、グロデコーから貨車に乗り、シベリア鉄道で西進しました。幾日もかかり、凍り始めたバイカル湖を右に見ながら、私どもはイルクーツから同州中部のタイシエツトに着きました。ここで、私どもの輸送貨車はシベリア鉄道から外され、ニューベルスカヤというところに着きました。十二月初旬ころだったと思いますが、シベリア大陸の真つただ中の荒野で、身にしむ寒気に包まれていま

した。

私ども作業大隊は、ソ連人のいた收容所跡の墓舎に初め入り、この地の收容所を転々と動きながら、一か年鉄道敷設作業をしました。私はここで、一人の同胞の死体の処理を取り扱いました。穴掘り、死体運搬、埋葬という一連の処理でした。入ソ當時のことで、精神的、肉体的の日々が全く余裕がなく、残念ながらこの同胞の姓名や埋葬場所は記憶に浮かんできません。このニューベルスカヤというところは、シベリア鉄道のタイシエツト駅を基点として数十キロメートルで、鉄道がここまで敷設されており、ここから北方は私どもの強制労働による計画になつていたようでした。

鳥取県 山本篤行

終戦はハルピン、孫家において武装解除。阿城から牡丹江集結のため貨車輸送、牡丹江弾薬庫收容。十月半ば日本帰国ということでも有がい貨車の二段装置の中で毎日を送る。

「内地」のみ頭にあるのでバイカル湖が日本海に見えた。バイカル湖で日本帰還はうそであると観念した。また十月の末というのに果てしなきシベリアの山野は吹雪と変わり、輸送貨車に吹きつける雪と風は我々の前途を真っ暗闇にしてしまう。十一月三日(明治節)の朝引込線を入れて駅もない山の中の白雪がいがいたるところに「下車」の命令下る。またその場において携帯した大豆を食べて夕食にせよとのことで、雪の中から燃えるような枝を拾って燃やし、鉄板らしいものを拾ってきて大豆を焼いて食べる。また装具及び食糧はそりに積んで收容所に向かう。ロープをつけて二人は引く、後押し数人。大隊全員が黙々と雪の山道を登る。もちろんカンボーイ(警備ソ連兵)が点々と隊列を警戒する。幾時間かして收容所に着いた。

收容所は山の上にあつて、周囲すべて鉄条網をめぐらし、四隅に監視兵の立つ望楼。門の傍らに衛兵所あり、入門する。我々は隊列を組み五列の人数を点検、

おのおの建物に入る。最近までドイツの捕虜がいたらしい。各部屋は上下二段に仕切られ、真ん中は板敷で窓際にペーチカがあり、窓は二重窓で外気を遮断するようにしてある。電灯なく白カバの皮を燃やして灯にするが、煙が出て室内は煙がもうもうとする。板の上に着用している外套のみである。上の段は暖かいが煙たい(夜は白カバの皮を燃やすため)下の段は寒い。扉を開ければ霧状の冷気が部屋に入る(外は零下三十度前後)。牡丹江から二十何日貨車に揺られ初夜をあかした以上のようなところに起居する運命となる。

翌日からペーチカでたく燃料(木の枝)収集の作業隊が各隊から編成された。雪深い山の中から枯れ枝を拾って担いで帰る。石炭も炭もまきもない。枯れ枝のみが我々の命をつなぐもとであり、一刻として燃やさずにいられない貴重なものである。白カバや松の枯れ枝があるが鋸というものが無い。また翌日からもみが各人に配られた。それは満州から我々と一緒に積み込んだものである。アワも同じく精白していない収穫そのままである。

茨城県 松本要祐

大きな駅に何度か停車しながら、シベリア地帯では屈指の出炭地チエレンボウに到着した。下車と同時に運動不足からだれもの足がガクガクで、しばし歩行ができない始末であった。数百メートルくらい先に幾つかの大きなボタ山が見えて、その付近に炭鉱の施設があつたので、だれともなく「やあー石炭掘りをさせられるぞオー」とささやき合った。

それから收容された家屋は一面雪原の中に十数棟あり、中は二段に仕切られ、一人当たりのスペースも狭いものだった。ここで一番容易でなかったのが用便で、何しろ千余人の人数なので、庭先五十メートルくらいのところに直径五十メートル前後の浅い穴が掘ってあり、回りに囲いはなく、どこからでも飛び込んで用が足せる。吹雪く夜なぞは、電光石火型に用を足さぬことには露出したところが凍傷になる騒ぎで、排泄物は即、カチカチになるので悪臭も汚れも絶対に

心配なし、数か月後に炭鉱の三交代制の暇を利用して、収容所も半地下式のもの建造し、春先の雪解け時を見計らって便所もつくり上げた。電柱が二本もつないで入るほどの細長い深穴を掘り、そこに丸い穴を等間隔にあげた厚板を渡し、一度に百人程度が使用できる屋根つきの豪華なものであったが、もちろん個人ごとの仕切はなかった。それからしばらくしてから他の収容所に、ラチフスの割で町の浴場を利用していたが、急ぎ浴場も設備し、衣類の熱気消毒所も併設、保健に大いに役立った。浴場といっても搬入水が容易でなく、一週三回程度の利用で、大き目の木製のおけに湯は三杯、水は二杯と制限されていて、この範圍の中で体を洗い、肌着類の洗濯を完全にやっつけてのけるユツをだれもが体得したものである。

新潟県 周佐吉三

十月八日午前十時ころと思いますが、有刺鉄線の囲いのあるチエレンホーヴォ捕虜収容所の前で、私物の検査をされ、印かん、預金通帳、手帳等の私物を没収されました。捕虜収容所では、全員番号がつけられました。私は一五七八号と呼ばれました。いよいよ捕虜収容所の生活です。

我々より先に到着していた他の部隊兵も多くいました。また我々の後日も、他の部隊不明ですが、続々入所してその冬最後で、四千人くらいと聞きました。

収容棟は大きな床板張りの倉庫のような建物で、両側に二段づくりの寝台です。一棟に約二百人くらいの収容でした。全部で二十五棟あり、その他炊事場、病棟、床屋、浴室等ありました。便所は新しくつくりました。長さ二十メートル、幅五メートル、深さ四メートルくらいの上に、大きな木を横に渡し便所を建造したものです。

入所の翌日から早速我々の食糧となるキャベツの運搬作業がありました。キャ

ベツ倉庫まで片道約三キロくらいの道中、銃剣を持ったソ連兵が一人ついて来ました。我々は外套のすそをまくり、大きなキャベツを五個くらいずつ運搬する道中、ソ連兵に見えないようにして、生キャベツを取り出して食べましたが、最初はやかったが、だんだん青臭いのと、甘苦いやらで捨てるにも、ソ連兵がいるので捨てられぬので、とうとう無理してよいところだけ食べました。なんとしても生きて帰るためには、背に腹はかえれぬという気持ちになりました。

こんな作業が春まで続きましたが、その後炭坑の作業に変わり私たちは棟も変わり、炭坑の作業する人たちと住むようになりました。

高知県 清水清助

こうしてソ連領に入り、駅々でとまりながら、ある駅でおろされた。そこはチタから約二百キロ西のシベリア、ザバイカル州、ペトロスキーというところだった。その収容所に入れられた。外側は板囲いで有刺鉄線を張りめぐらし、四方に望楼があつてソ連兵が警戒に当たっていた。

約二年間、この収容所で生活した。作業は整地作業、穴掘り、伐採作業、セメントブロックづくり、石山からの石の切り出し作業、石割りなどだった。日課は弁当を持つて作業に出て四時ごろ終了、収容所に帰る。食事は作業別にノルマに応じ支給される。私は体が弱くて軽作業に回され、パンの量も少なかった。最初は酸っぱくてまずいと思った黒パンが命の綱となった。収容所生活の中では、食べることに、日本へ帰ること、この二つしかなかった。一切れというにはあまりにも小さい小さいパンと薄いスープ。油の浮いたスープ、実はほとんどない。たまにあるとすると、ジャガイモ、キャベツの切れはし。困ったことには、ジャガイモがにがくてみんな吐き出した。時たま塩漬けの青いトマトが出るがあった。私の頭に残っているのは、人間がギリギリの線で食うという問題にぶつかつたとき、倫理とか教養とかは一切なくなり、けものじみた気持ちになる。豚の餌にする残飯を食べようとして懲罰を受けた者もあった。

餓死は聞かなかったが、栄養失調が多かった。私自身も二回かかった。軍医の診断で栄養失調となると作業には出ない。オーカーといつて所内の便所掃除をやる。

栄養失調になると何でも食べたくなる。私の体験でも、ソ連の事務室の前を通っているとパンが落ちてくる。あっ、パンだと思つて引返してよく見たら、なんとれんがの割れであった。それほど食に執着するようになる。

重傷の場合は病院へ入れられる。病院へ入ると帰つてこない。だから重病人も病院へ行くのはいやがった。

岐阜県 厚見 茂

途中、一日中食事も取れないときもあった。十三日目に、エッセー西岸のクラスノヤルスクに到着、下車を命ぜられた。

落胆、疲弊の兵に向かつて、「ここは言葉のゴロでは暮らしやすいよだなあ」と気分転換もまじえて、駅前の大衆浴場で久しぶりにあか落としを済まし、ソ連兵の案内で、第五ラーゲルまで行軍。

このラーゲルは元少年監獄であつたらしく、二段式一棟二百人収容、ベッドは粗末だったが、奥地で掘つ立て小屋で、重労働に服した友軍よりは恵まれていた。

ただ、便所だけは、広い空地に深い穴を掘り、長い板を二枚渡し、幾列か全員が並んで、恥も外聞もなく使うほかはなく、時折当番制で清掃作業をし、いやな仕事でも努めて樂觀的にやっていた。もちろん落とし紙はなく、悲哀のどん底生活を我慢した。

東京都 三井 清

それは十一月初旬の日だった。明日出発とソ連軍より命令があり、十一月初日ころ、鞍山駅を出発した。約四十五日間の汽車の旅だった。おろされた場所

は、十二月半ば過ぎなのに、草などは青く暖かく、かなり南に来ていると感じた。約一時間くらい歩いて収容所に入った。

収容所は、三方に望楼があり、ソ連兵が着剣をして監視している。収容所の周りには有刺鉄線で三重に囲み、外側には電流を通していた。宿舎は二百人くらいはいれる棟が五棟と、炊事場、医務室で、収容所の真ん中に小川が流れていた。

食事は原米、小豆、コーリヤン、アワ等のおかゆが主で、昼は黒パンに少量の砂糖等だった。

仕事は、用水池の堤防づくり。朝八時、正門前に、数えられやすいように五列に並んで、ソ連の人員点呼を受け、作業場に行く。三十分くらいで仕事場に着き、一輪車に土を入れて、堤防の上に積み上げて固くたたく。

昼になるとラーゲルに帰り、昼食の黒パンだ。パンは固く酸っぱくて、汗を流しながら、食べる始末だ。午後と同じ仕事だ。そのうちにここはタシケントだとわかった。ソ連の民間人から聞いたのだ。

午後は五時ごろまでで、約半年続いた。堤防工事にはドイツの捕虜も離れた場所で仕事をしていた。彼らの仕事ぶりは、作業始めの号令で一斉に仕事にかり、休憩の号令が出ると、どんなときでも一斉に休む。日本人と国民性の違いを目の前で見せつけられた。

日本人は、仕事始めでもなかなか仕事にからず、たばこを吸いながら、だから仕事を始めるのだが、仕事に勢いがつくと、汗を流して、休憩時にも休まずドイツ人よりも早く確実に仕事をするのだが、ソ連人はインチキだといつて争ったこともあり、営倉に入れられた。

岐阜県 山田好美

ここはイランとの国境近くだと言う。作業は部落づくりの土方作業であつた。収容所の周りには有刺鉄線が四回り鉄条網のごとく張つてあり、二か所の望楼が

あつて、昼夜兵隊が見張つていた。出入り口には昼夜勤務で兵隊と将校、下士官がいる。西も東もわからぬ土地で逃げ出す者もいなかろうに、大変な警備であつた。

日曜日には鉄線の門を掘り返しの作業が行われた。足跡のつきやすくするとのことだ。

島根県 多賀頼秀

寒さに寝つかれない収容所の第一夜が明け、昭和二十年十一月三日の朝を迎えた。昨日の夕方、湖岸の長い土堤を歩いて来て、この粗末な建物に收容されたのだが、今朝見れば前の湖水は一夜にして固い氷にとぎされている。この建物は流刑者を收容するために建てられたものだそうで、二か所に望楼が建ち、銃を持った兵士がいつも監視している。この寒々とした收容所にいつまでおらねばならぬだろうかと思うと身が凍る思いだつた。

思えば九月十八日に奉天で列車に乗り込んでから黒龍江を渡り、バイカル湖の岬を通り、シベリア鉄道のノボシビスクから分かれて南下し、実に四十六日目に貨物列車からおり立つたのがこのカラカンドの地であつた。

うず高い古鉄の山が延々と続く中を通り抜け人造湖の長い堤防の上を進んで行くと、湖水のはるかかなたの丘陵のふもとに平たい白壁の建物が立ち並んでいるのが望まれた。これが我らを收容するための第十八ラーゲルだったのである。一体何の目的でこんな遠いところまで連れて来たのか見当がつかなかったが、やがて数日たつてから本格的なラポーターが始まり、やっとわかつた。それはこの間来るのときに見た膨大な古鉄を精錬する製鉄工場を増設するために我らを使役しようとするものであつたのだ。それからは毎日昼食用の三百グラムの黒パンを腰に下げ凍つた湖水の水を転びつまるびつ長蛇の列をつくつて作業場へ通うのだつた。

島根県 山本久夫

四年半にわたる私の抑留生活の場は、カザフ共和国のカラカンド第八ラーゲル(收容所)である。このラーゲルは他の收容所とも大体同じような建物が何棟か並んでいる。この棟が私らが寝る場所で、部屋は中央にペーチカがあり、二段ベッドが並べられ、板の上にマットと毛布が一枚ずつ備えられていた。所内には別に炊事場、スクロウヤ(食堂)、バーニヤ(浴場)、医務室、クズネイツ(鍛冶工場)、倉庫やカントーラ(事務室)等の棟が建っている。ラーゲルの四隅は高い塀がめぐらされ、その内外二〜三メートルの地面は砂をまいた立ち入り禁止の地帯である。有刺鉄線で囲みつなされた四隅には物見監視やぐらがあつて、マンドリンを肩にしたカンボーイ(警戒兵)が立哨していた。第八ラーゲルには、二〜三百人の炭坑作業に従事する者と、一部地上で建築や道路造成等の仕事をする日本人俘虜がいたが、何分その正確な人数は全く不明であつた。

新潟県 関本清

列車はまる四日走つて着いたところはバイカル湖の少し手前のウランウデという小都市であつた。向こうを見ると有刺鉄線を張りめぐらせた收容所が冷然とかまえていた。

日もとつぷり暮れたころ物資の車おろしも終わり收容所内の大きなドームに入れられ、私物検査を受けた。全員の検査が終わつたのは午後十時を回つたころだつた。

シベリアの十二月の気温は零下三十度以下である。だれもが早く温かい床にはいつて寝たいと思つたに違いない。しかし「今夜はこのドームで寝ること。明日からは作業があるのでなるべく早く休むように」と命令された皆は、あ然としてブツブツ不平を言いながらドームのコンクリートの上に持つて来た毛布を敷き服を来たまま横になり、交互に人と足を組んで暖をとり、防寒外套などありつたけのものをかけてようやく眠りについた。

新潟県 遠藤新吉

我々の集団が着いたところは、ロシア共和国に属するブリヤート自治共和国であった。住民の全部が蒙古人で、我々日本人とそっくりの風ぼうをした人々であった。この自治共和国はモンゴル人民共和国との国境にあつて、キヤフタという町にほど近い炭坑地であつた。従つて私たちは、石炭の採掘など、これに関連した労働をさせられた。

冬はいてつくような酷寒のもと午後三時ごろから夜になるという北の国特有の地理的条件とノルマによる過酷な強制労働、さらに劣悪な食事……、夏は夏で大陸性気候による湿度のない乾燥した暑さ、冬の反対の白夜が続く眠れない夜、私どもの収容所の多くの仲間たちが栄養不良によつて死んでいった。

長野県 西村又夫

十月にはいりソ連軍の監視下満鉄貨車に積み込みの作業後、だれとなく伝わるウラジオより内地に帰還するのだという言葉を信じながら、部隊編成のまま貨車で出発。黒河に到着したのはもう十一月。凍りついた河を渡りブラゴエシチエンスクよりはいり再びシベリア鉄道の貨車に乗車。期待したウラジオとは反対方向に進行。これが長い抑留生活の分岐点だつた。列車はシベリアの大平原を一日走つて三日、半日走つて一週間と駅に停車。窮屈な貨車、行く先不明な長旅。体調をくずし落伍する者も出始め、どこかにおろされていった。

貨車生活一か月ウランウデ駅で下車。鉄条網で厳重に張りめぐらされた収容所本部にはいり、将校は全員部隊編成から引き離され、下士官兵だけとなり、他の部隊と混成の班編成となり、私物検査でほとんど没収。翌日より歩哨付きの強制労働が始まる。

コウリヤンのおかゆと黒パン、全く生活環境の違つた不自由な生活、ノルマに追いつて立てられる毎日。シベリアの厳寒は満州以上、防寒具の不備などで凍傷にかか

る者が続出。食料不足、栄養失調、飢えと寒さに倒れる者が多くなる。物置の遺体安置所を見て驚いた。下着だけの蟬細工のようになったコチコチの遺体が並べてあつた。大木を燃やして凍土を溶かし我々に大きな穴を掘らせ、大勢の遺体を一緒に埋葬したのを見ている。

終戦後のソ連(シベリア)強制抑留生活

鳥取県 井澤正義

(1)昭和二十年九月十九日夜半、単冠湾を出港し、二十一日朝、樺太大泊湾に寄港し、夕刻同港を出港、二十三日朝ソ領沿海州ワニ港に上陸。貨物列車(一車両約四十人)で、二十四日朝ムリイ地区収容所三一五分所(ワニ港より約五十キロ)に到着。この間食糧の配給もなく一日に手持ちの乾パン一袋を三人で分け合つた。シベリアの収容所はソ連がシベリア開発のため、当時の囚人をこれに充て、ヨーロッパ地区から多数の囚人が重労働に服していた。この囚人収容所の跡である。

(2)収容所は、鉄道の駅もない森林地帯を切り開いて建設したバラックで、その周辺にソ連兵と関係者の住宅が点在していた。収容所は高さ三メートルの木柵(外側に有刺鉄線)をもつて囲み、その四隅に木柵より高い監視歩哨の望楼があり、収容所正面には衛兵所があり、内部建物は起居用バラック、炊事場、医务室、入浴場、便所等は一応整つてはいるものの、設備ははなはだ貧弱そのものである。

北海道 川友勝

昭和二十年十一月二日タイセットより五十二キロ囚人の村キビトクに下車。我々五千人は駅より約八キロ白がいがいの雪路を警戒兵にどやされながらトボトボ歩いた。だまされた無念さと、いつ帰国できるかわからない失望のため、無気力集団と化していた。収容所は周囲に有刺鉄線が張り巡らされ、四隅に望

棲が立ち、木造平家のバラックが大八棟、小五棟、実に網走番外地である。

明治の初期に北海道開拓のため、奴隷のごとく酷使したタコ部屋もかくやと思わせるところであった。第七收容所は山の上と山の下に分かれており、山の下に私たち二個大隊(二千人)がはいった。直ちに人員検査、軍隊の習慣で四列縦隊に整列したが、警戒兵は何回数えても総員がわからない。仕方がないので五列にならんで、やっと終了。まきとり、糧秣運搬、水汲み以外の作業のなかったのは次の日一日だけ。三日目からは伐採、道路建設、道路盤づくり、丸太おろし、集積、運搬等の強制労働が始まった。日曜とメーデー、革命記念日、年末年始三日間だけ休み。一日八時間、ノルマとのたたかいであった。主な作業はバム鉄道(ウスチークトからアムール河畔コムモリスクに至るシベリヤ第二鉄道)の建設であった。

二週間以上の不衛生な貨車輸送、着たきり雀の被服、シラミが猛発生、つぶしてもつぶしても減らない。入ソ一か月もたたずに発疹チフスが蔓延し、死ぬ者がでてきた。あわてたソ連は入浴の都度デスカメラ、熱気消毒(半地下の建物にペーチカをたき、高温の中に被服をつり下げシラミを退治する)、さらにわきの下などの毛を剃る等少しでもシラミの発生源を除去しようとした。入浴もまた哀れ、おけに二杯の湯しかない。一杯の湯で二センチ角の石けんを洗い、あと一杯の湯をかぶって終わり。熱気消毒を終わった温かい被服がなかったら風を引く。もちろんこのくらいのことシラミ、発疹チフスが絶滅するわけがなく、赤痢、結核、栄養失調患者がどんどん増えて二年目を迎えるまでに半数の者が発病、千人くらいが死んだのである。ついに私たちの收容所は病院となり、比較的死者の少なかった私たちの大隊が病院つき作業大隊となり、名もタイセツト地区第七病院と呼ばれた。

新潟県 村山家司

終戦の八月十八日に武装解除後に、拉古にあった收容所に十月の二十四日

まで收容される。

食料の米は靴下二足に詰めたものだけで、これは数日間であらう、その後は付近の日本の開拓団跡にあった畑のトウモロコシを主食、とってきたものを馬ふんのみで焼き、砂糖大根など手当たり次第に口にはいるものを取って食べて空腹を満たす生活が続く、しかしこれもなくなると、馬糧のゴウリヤンが主食となる、何回も洪抜きをして、つぶして食する生活が牡丹江から帰国するといういつもの生活まで続く。終戦は八月で被服は夏物、冬が近いというのに夏服で、寒さと飢えて体力は著しく低下、毎日食料を求めての生活であった。ある日の開拓団で、満人がその部落を占拠しているのを知らずに食料を集めたので、怒った彼らに大鎌や銃で追い回されほうほうのていで帰隊したことがある。武器を持たない無力な軍隊の悲哀を知った一幕でもあった。全員が極度の食料不足と寒さで入ソ以前に栄養失調状態になっていたのである。

滋賀県 村田英信

十月下旬、バイカル湖を右窓外にどんどん北上する。日に日に寒気が加わってくる。投降時が夏場の軍衣だったため、そのままの姿で氷点下十五度くらいの車内はたき火を絶やさないと命が危ない、幸い夏衣でも辛抱できた。目的地に近くなったところに防寒外套が支給された。列車がとまって全員下車する。タイセツト地区の第二收容所へ第一歩を印す。

これより苦難の生活が始まる。十一月初旬のことだったと記憶する。集団脱走を防止するため收容所の割振りにはばらばらにされ、戦友がどの收容所に行つたのか全然わからなくなった。一夜明けてまた班の編成。幾つもの二重張り天幕が立ち並ぶ。一幕舎の收容人員は約六十人くらいで、二段式につくられている。一人分のスペースは幅四十センチで、メジロ押しに重なり合って寝られる程度が自分の城で、毛布二枚支給される。これにくるまって一夜を過ごす。

和歌山県 山本富三

私たちの最初に收容されたラーゲルは、沿海州の奥地にある森の中に、高い丸木の塙に囲まれた古ぼけた收容所でした。番号は三〇五、もしかしたらここが私たちの墓場になるのではと一瞬思いました。起床時刻はたしか七時ごろだったと思いますが、ほとんどの人はもう目を覚ましていました。なぜかといいますが、空腹で眠ってられないからです。食事当番が朝食を運んでくれるのが一番うれしかったが、昼食用のパンも一緒に配給されるので、三度の食事で満腹感を味わえない私たちは、一日一回でもよいからと昼食用のパンまで食べてしまいました。そのかわり昼食の楽しみはもうありません。伐採作業等のときは、夏は野草や木の実をとって、スープの入った飯ごうに入れ、煮て食べたことがありますが、その期間はほんの短いものでした。長い冬はそうもいきません。草は枯れ、木の実も枯れて、量を増すのは雪だけでした。スープの味がなくなるぐらい雪を飯ごうに詰め込んで、沸騰させてなんとか一時の満腹感を味わうだけでした。

東京都 足立芳郎

チチハル第二飛行場に部隊が集結、作業大隊を編成、人員千五百人が十月十五日出発、二段貨車にて榆樹屯、ブハト、ハイラル、満州里を経て十月二十五日ソ連領シベリアチタ地区十二分所ハタブラクに收容される。收容所は二重の鉄条網に囲まれ、四隅にはサーチライトのついた望楼があり、警備兵がマンドリン銃(自動小銃)をかまえ、四六時中監視していた。作業は鉱山の採石作業が主力で、ノルマ万能の中で重労働。その上食糧事情が極めて悪く、過酷な労働と栄養失調で倒れる者が続出した。シラミの媒介により恐ろしい伝染病、発疹チフスと回帰熱により四十度前後の高熱に冒されうめく者。隣の寝台で就寝していた戦友が夜が明けてみると冷たいしかばねになっていたり、便所に行き倒れそのまま死亡したりした。当初は敷布に包んで一人、二人と丁寧に埋葬していたが、

日々に死者が多くなり倉庫に数十人と積み重ね、丘の上に大きな穴を掘って、衣服を剥がし埋葬した。なんと六か月間に四百八十余人という多数の死者が出た。それは悲惨な生地獄であった。

愛知県 松尾典夫

十二月二十八日、イルクーツク郊外の收容所へ入りました。丸太を組み立てただけの粗末な兵舎です。ここでこのあと何年住むことになるのか、暗たんたる気持ちになりました。翌日より、毎日炊事用のまき取り作業に狩り出されました。年が明けて、正月三日より本格的な作業が始まりました。山に切り倒されている木材の運び出しです。二人一組になりロープを縛りつけて、トラックの待つところまで引つ張り出すのです。何しろ現地へ到着したばかりで、体力もあり、一生懸命働きました。しかし、日が経過するにしたがって疲れがたまり、次第に作業の能率が落ちていきました。食糧といえば、満州から持参したものは全部なくなり、配給されるのを待つばかりでした。それはコウリヤン、アワ、豆かす等です。これはすべて馬糧として満州の倉庫に保管されていたものばかりです。これらの物質しかなくなると、一本を十人から十三人で分けて配給される黒パンと、塩水スープ飯ごうのふた一杯であります。これでは体力が目に見えて衰えていくのがわかりました。

愛知県 竹田 嘉明

着いたところがライヒヒンスク、そこはとりもなおさずシベリアの炭坑町であるということはおそらくお知りかもしれませんが、案の定その町で石炭掘りということになったわけですが、とりあえず着いた当初は、十月のちよūd終わりごろでございまして、畑にはまだ芋が収穫が終了していなかったものですから、毎日々々芋掘りばかりの作業でございました。特に嫌だとか、苦しいとか、悲惨だなあと思いましたが、何と申しましてもう十月といえればシベ

リアは非常に寒うございます。そんなとき、雨が降ったり、雪が降ったりすると、着ているものがほとんどずぶぬれという状態でございまして、着がえもなく、乾燥する場所もなく、そのまんま一間真四角に四人、与えられた毛布は各人一枚、そういう中でお互いに体をくっつけ合わせながら、お互いとお互いの体温によって濡れた衣服を乾かして、また翌日作業に出ると。こういう非常に惨めな環境がほんとに苦しゅうございました。

特に食べ物、シベリア抑留者の皆さんがおっしゃっておられますように、非常に少なく、例えば飯ごうのふたに五分目か六分目ぐらいのおかゆさんにも等しい量をつるつると飲み終わると、それで朝食が終わり、夕食が終わり、与えられるパンはほんとにごくわずかでございまして、とても空腹を満たされて満腹を感じるような状態ではございせんでした。

マガダンとは

和歌山県 長峰泰夫

マガダンはシベリアの極東にあり、北緯六十度、東経百五十二度の地点にある都市で、マガダン州(当時はコリマ州)の州都となっている。昭和二十年(一九四五)当時の人口は十万人といわれていた。

夏は日が長く白夜であるが、冬は逆に日が短く、暗い時間が長い。真夏は三十度を越す暑さになる。三か月の間に芽が出、花が咲き、果実が実るあわただしい季節である。冬は長く、九月に氷結があり、厳冬では、晴れの日中でも零下十度くらいで、零下三十度〜五十度になることも珍しくない。五月に入って雪解けが始まる長い季節である。

マガダン港は冬に凍結するが、重要な港である。北極圏の各種金属の採鉱したものを輸送する中継基地となっている。冬は砕氷船が活躍し、航路を確保する。昔から四人の流刑地として有名で、資源開発のために強制労働をこの奥地にあるタイガーで、道路、建築、施設、資源の採掘、輸送を行っている。悪条件の

ため死亡する人が多く、もしここで生きて刑を終えても、この地で生涯を終わる人が少なくない。

都市公共施設等がそろっていて、州庁舎(四階建、日本人も建設に参加)、市庁、電話局、消防署、学校、病院、育児院(デートコンビナート)、銀行、博物館、文化館(ドーマクリトル：劇場、図書館等)、映画館(ゴリキノ、ダンスホールも中にある)、公園(落下傘塔もあった)、旅館一号、旅館二号(兵舎にしていた)、ドーマ十五号(日本人が三年かけて建築、美しさはマガダン一)、放送局(ラジオコンツェル)等。

倉庫群、発電所、水道供給所、自動車工場、ガラス工場、ビール工場、れんが工場、木工工場、被服工場、パン工場、洗濯工場、化学工場等。

陸の孤島と言われるように、寒冷地であるから、食糧、資材はウラジオストック、ナホトカから二千七百キロの海上輸送に依存している。マガダンの奥は山岳地帯も多く、未開発の地帯が広がっているところである。この奥地へ食糧、物資を送る重要な拠点となっている。

マガダンは当時、日本人抑留者は市内に二千人、ここから八十七キロのところまで二千人が点在して、道路拡張工事、鉄道整備、伐採、炭鉱採掘、ガソリン配管工事をしていった。市内では、港湾、倉庫、建設、工場等、多くの職種で労働していた。

昭和二十年十月十八日、マガダン港へ上陸

陸地が見えてきた。山の頂上が石だらけで、下の方に木が見える殺風景なところではあるが、船は岸壁へ横づけになる。二隻の船が先に横づけになっていた。全員、荷物を背負い下船して、五列に並び整列する。人員の点呼だろう、ソ連兵が一生懸命数えている。一時間半かかりやっと歩き出した。だから坂を上がつていくが、時々停止しては歩き出す。ロシア人の男女、子供が口をもぐもぐさせて珍しそうに眺めていた。(松の実を食べていたため)

だんだん冷えてきたころ、大きな建物に着いた。中はほこりっぽく、天井に裸電球が数個ぶら下がっている。二段になった板敷きの寝台がある。ここに五大隊の千人が入れられたが、寝台だけでは足らず、土間もいっばいになり、荷物と一緒に座るのが精いっぱいであった。夕食の炊事が始まったが、水が足らず、砂が混ざった米しか炊けなかった。

北海道 石川朝雄

「下車」の号合で下車し、五列縦隊(ソ連は五人ずつ並ばせる)で前進し、ここから十分ぐらいのところで停止した。

見ると四方を高さ二メートル直径十センチぐらいの丸棒というか、びつしり立てて、入り口が一角に二か所に望楼(高さ十メートルぐらい)があり、歩哨がマンドリン(銃)を持って立っていて、四方を見ているのである。すなわち我々の収容所である。入り口が営門になって、この営門をまたまた数えられて入ったが、きょうか昨日まで独軍の捕虜が入っていたということを耳にした。

運悪く自分の班はこの屋根裏であった。よく屋根裏を何十人も入れるものだなあと考え、「必ず屋根裏が落ちるぞう」等と考えていたが、落ちなかった。

真つ暗で何も見えない。とにかく腹が減って動かない。戦友と言葉を交わすのもたいぎである。

そうしているうちにだれかが灯を持って来た。聞くと歩哨と交渉したのか缶詰の空き缶に列車のオイルを入れウエスに火をつけての灯だ。さあ、たまったものではない。火が半分燃える、黒煙が半分だ。それでもみな疲れて寝についていたが、何だか体のなかでモゾモゾする。それが一匹や二匹ではなく何十四匹と言ってもよいくらいだ。そうと手を体の中に入れて一匹つかまえてみたらシラミではない、それより少々大きい。つぶして臭いをかいでみたら油くさい。何というものかわからないが、体中かゆくなる。この夜はこの虫に悩まされ、まんじりともしないうちに朝になってしまった。

「船に乗ったら腰をかがめて船の両舷側に手をつかまると、向こう側に着いてから『上がってください』と言うから、それまでは絶対に船の中では立ったり動いたりしないでください」十人一組になって若干ものが入っている背のうを背負って船上の人となり、七十人が七回渡ったことになるが、中に一回一人が向かい側にまだ着船しないのに立ったため、船はひっくり返りみならずぶぬれ、ここから三十分ぐらい歩いてホルホーズの収容所に入った。ここは高さ二メートルの柱が二メートル間隔に立っていて、これに横に二十センチメートル間隔でバラ線が横に張ってあるだけ、隣にソ連女性の囚人の収容所があり、バラ線で区切られているのみ、バラ線を少々上下すると自由に往来できる。ここにはソ連の歩哨もおらず、総責任者はナチャニツク(大尉)夫婦とその下に少尉夫婦、パン工場のパン焼き(イワンと言っていた)夫婦と営門に老人と作業監督、四、五人の老人がいるきりで、後は我々日本人捕虜と女性の囚人のみであった。陸の孤島みたいなおとろである。(女性の囚人も五十人ほどおった)。作業は主に馬鈴薯づくりで、あとはキャベツ・ニンジンその他若干の野菜をつくるのが主な作業であり、我々は馬鈴薯づくりの作業であった。主に馬耕で馬と人とですべてやっていた。女性の囚人とは別々の作業であり、一緒にすることはない。作業が終わってバラ線をくぐって行ったり来たりもでき、お互いが単語ながら話もできて今までは違った生活環境であった。

東京都 鳥崎武男

シベリアの夏は短い、九月半ばには白銀の世界になってしまう。収容所の寝台は二段ベットになっている。ところがこの二段ベットは上段と下段では気温がまるで違った。それは部屋の真ん中でたく大きなペーチカで暖められた部屋の空気は天井に上がってしまい、逆に冷えきった地面の冷気が部屋の床板を凍らせ、下段のベット周辺の空気を冷やしてしまうからだ。上段ベットでは暖かく寝られるが、下段では毛布を何枚重ねても寒くて寝られたものでなかった。

岩手県 田辺壮久

暗いうちから衛兵所前に整列して山に入り、シラカバの立木の下側をおのり切りつけ、上方を長い二人用鋸で二人で引いたり押ししたりして切り倒すのだが、初めて見る鋸で二人の呼吸が合わず、ノルマ(労働の割当標準)が上がらない。暗くなって小屋に戻り、食事をして、着のみのまま、外套も着たまま丸太の上にゴロ寝である。朝はゆで大豆が飯盒の中盒に半分と野菜のスープ、昼は黒パン一切れ三百グラム、夜は煮たコウリヤンが中盒に半分と山羊の骨のスープで、酷寒五十度の山中での伐採作業の重労働から体力を保持することは、全く不可能な食事であった。

小屋の中で採暖用にドラム缶にシラカバや松をたくので、室内はすすだらけで洗顔、入浴などはしないから、目と歯だけが異常に白く見えた、顔や手は真っ黒である。

この収容所以外の消息は全くわからない。我々戦争して入った兵隊は、敵国の捕虜として、働けるだけ働かされ、酷使されて帰国することもなく、この名も知らないシベリアの酷寒の地で果てるのかと、不吉な予感が漂ってきた。

十二月の末ころになって、食糧不足による栄養失調と重労働の過労によって、重病人が続出してきた。特にシラミが蔓延し、頭髪から足先まですべて体中がシラミだらけとなり、収容所が発疹チフスの猛威に襲われた。隣でコトンと音がしたので見ると、先ほどまで飯盒のスープを吸っていた仲間が飯盒を落とし、息が絶えている。昨日は右隣で、今日は左隣である。栄養失調死である。

前夜向かい側の兵隊が、食糧運搬の馬そりの後を追い、奉公袋に詰めてつるしていたのが、朝、形が崩れていた。馬糞が馬鈴薯に見えたのであろう。間もなくやせ細った補充兵の命は絶えた。赤松の皮がそっくり黒パンに見えたとし、凍った馬糞が馬鈴薯に見えてならなかった。空腹が極限に達していたのである。

舎内では毎日栄養失調と発疹チフスでバタバタと倒れ死んだ。死んだ後には、

すぐどこからか別の仲間が補充されるが、死者はあとを絶たない。収容所の整理が行われていたのである。私も発疹チフスとなり、十二日間意識不明に陥り、四十度の高熱に冒されて氷点下五十度の雪中をダモイだと叫んではい回っているところを、抱えこまれ、日本の軍医に「若いから助かるだろう」との注射のおかげで我れに帰った。旧軍隊から携帯した医薬品は底をつき、助かる可能性のある者のみにしか投薬しなかったと後で衛生下士官から聞き、九死に一生を得たと感謝している。四十二キロまでやせ衰えた。

死亡者の続出で二十一年二月四キロ地点が閉鎖となり、さらに奥地の十二キロ地点へ移動して、さきの将校団の収容所に入った。

北海道 奈良勝正

コムソモリスク市内で道路作業中に通行中のロシア婦人の小脇に抱えた黒パンを見た私は、ニムノーチカ、ダワイ(少し下さい)と話しかけたところ、三キロパンを無造作にちぎりと与えてくれた。かわいそうに思ったのか、我が子がドイツ戦線で戦死でもしたのだろうか、食糧不足の中ひとつかみのパンであったが、その感激は今でも忘れることはできない。これも同市で作業中、ソ連服装の日本人が近づきわく、私はノモンハンでソ連軍の捕虜になり現在ロシア人と結婚し市民権もあり、祖国に帰りたいのだが靖国神社に祭られている体であるので、帰国はできぬ。あなたたちは帰れるのにと、涙を流していた。これも戦争のなせる悲しい思い出であった。

新潟県 小柳信人

五時間くらいがたったであろうか、夕日が沈みかけ寒気が忍びよるころに山が見えてきた。

馬小屋のような三角屋根の丸太小屋、裸電球がポツンと一、二個ぶら下がっている。そこが目的地らしく先頭の足がとまったようだ。老いたロシア人が一人

歩哨とともに丸太小屋に入つて行つた。間もなく中に入るように言われ、先頭から順序に中に入った。中は丸太の二段式で粗末ながらドラム缶が二個ほど置いてあった。

ロシア老人がわらを敷けと手まねをしたのでわらを上下に敷いて装具を置き、所内のかたわらにあった材木の中からたき火になるまき材を選んでドラム缶に火をつけた。ドラム缶が真つ赤になると暖かさが感じられるので、なるべく多くの炭火をつくつて寝につく。

空腹に耐えかねてわずかばかり残っていた携帯食糧を口に放り込む。パリパリと音を立て、かなたかなたで食べている。

格子なき牢獄、生きるだけの執着心が所内に充滿している。

厳しい初冬のシベリアの夜が明けると黒パン二百グラムとわずかな大豆、塩、砂糖の配給である。付近の沼らしいところから水を運んで、持参の布を木の葉の下に敷いて水をこし飯盒に詰めて、ペチカで湯をつくり、大豆を入れ、塩で味をつけ、湯で伸ばした砂糖を黒パンに塗り食事である。

静岡県 吉田吉治

着いたところはライチハ第十九分所であり大きな露天掘りの炭坑であった。

我々は一番最後であったが、七、八千人が同じ収容所で暮らすことになった。私たち以外はグラゴエシチェンスクより歩いてきた人たちで「汽車の通るところまで歩け」と言われ、やっと汽車の音がするので喜んだら、それは石炭輸送の貨車の音であったという。だまされどおしの行軍であったようだ。この人たちは真新しい冬服を着ていたが、我々は夏服であった。そして防寒被服もなく、ろくな食事も与えられず冬を迎えたが、この冬は一番多くの人が死んだ。

満州より持っていたむしろ一枚を敷き、その上に寝るが寒くて寒くて腹が減るし、話しする元気もなかった。作業衣は石炭の粉で真つ黒に光る。下着も真つ黒、シラミがたくさんつくし、南京虫に刺され夜は安眠などできるはずがない。

朝早く起こされ(起こされるといふより、寝ないでまんじりして夜が明けた支給される朝食と昼食を一度に食べるが、それでも満腹感などなかった。作業に出るが、作業ごとに並ぶが人数を数えるのが大変で、五列に並んで幾度も数える。その間、我々は足が冷えるからバタバタ足踏みして待つのである。

岩手県 長塚力

ハタブランク収容所。一週間しかいませんが頭より離れません。収容所に着くや、マイナス気温の中で裸にされ入室。衣服一つずつの繰り返し支給に、先行きの不安と、持参した被服等を没収され、結果的に入ソにあたり、運送の使役をさせられたこと等。ダモイ・ダモイの掛け声とともに、ソ連に対する考えを改めねばと感じました。

ソダトイ収容所。十月下旬入所。以前は馬鈴薯の貯蔵庫か体育館のように所内の仕切りはなく、古い施設にて土間でした。私たちが住まわせるために、急づくりの板だけの二段式ベッド。着のみ寝る生活の中で、百五十人ほど収容されていました。マイナス三十度の厳寒の中で、シラミによる発疹チフスの媒介と栄養失調と合わせて、死亡者の続出をただただ茫然と悲しみの中で見送りました。

神奈川県 新谷俊男

収容所は未完成、まず周りを板塀で囲み、見張り櫓(逃亡を防ぐ)、便所。便所は屋外で即製の大きな深い(背丈以上)穴を掘り、その上に丸太二本ずつ渡し、これをまたいで用便する。丸太二本は数か所置いてある。昼使用は少なく、寒い夜用便する人が多く(隣り同士で話をしながら用便する人もいる。)明かりは十分でなく危険。あやまつて糞尿の上に落ちた人もいました。そのうち小屋の便所もできました。食事が悪く皮をむかないアワ、キビなどが少し続くと、そのままコロコロとおこしのように、このため痔の悪い人はおこしと一緒に真つ赤な血を置いていくこともあった。

黒の丸パン一個を七、八人で分けるのに正規の計量器がないので、即製のはかりをつくり目分量で一個切り、それを基準に人数分切り計る。大きければ切りまた計る。これを繰り返して最後は屑みたいなものやりくり。みな目を大きくして見つめ、あれやこれやと分配は大騒ぎであった。

岐阜県 梶田利男

イルクーツクを越して、タイセットから支線で何十キロかわからないが入ったところ、カスタマロフというところに下車、収容所へ向かう。以前囚人がいたようので、今日からの宿舎となる。喜んだのは南京虫であった。今晚から新しい血が吸えるところ。四隅に望楼が立つて銃を持った歩哨が四六時中監視をしている。下手に逃げようものなら一発であの世行きた。次の日から作業は後統部隊が来るらしく宿舎づくりだ。穴を掘つて丸太で柱を立てて天幕をかぶせて宿舎づくり。二重とはいえこれからのシベリアの冬をこの天幕でどう過ごすのか。

一か月ほどしたら後統部隊が到着、収容所は満員となる。ところが点呼が大変だ。我々を並ばせて一時間以上かからないと人数がつかめない。零下三十度の野外ではたまったものではなかった。

島根県 八幡義隆

収容所内はペーチカが二つあり、れんがづくりの大きなものだ。広い部屋には裸電球が三つあり、寝台は二段で四人ずつ寝るようになっていた。後で中に板を敷いて上下二段になったが、最初は寝ていても落ちそうで寝られない。それに南京虫がいて静かになるとゴソゴソ這い込んでくる。かまれたところははれ上がり、かゆくてたまらない。つぶしたり、ローソクで板の間にいるのを焼き殺す。しばらくはいいが、また出てくる。そこで手袋をし、袖口をしばり包帯包のガーズで袋をつくり、頭からかぶり首をしばったが、手首や首はよくなったが、腹の方はとめようがない。これではたまらんと思ったが、次第になれてかまれても平気になっ

た。

岡山県 田中一司

約二千人を乗せた貨物列車は鞍山を出発し、バイカル湖畔を経由し中央アジアを南下し、タシケントから山脈の斜面をあえぎながら登り十二月中旬アングレーンに着いた。一か月半もかかった。この地はソ連の刑務所二、捕虜収容所三、原住民と刑を終えた人たちが住む小さな町である。近くに見える山なみは天山山脈の西の果て、東の山の向こうは中国、南の山の向こうはアフガニスタンである。

真冬には深い雪で零下三十度まで下がり、防寒服を着ていても常に動いていないとだめで、真夏では暑くて直射日光の中ではとても立っておれない。三年間の捕虜生活(強制)労働の苦痛は大きく、帰国の日を一日千秋の思いで十年ぐらいいも過ごした感じであった。

収容所は約八百メートル四方で二重の有刺鉄線で囲まれ、四隅に監視所があり、とても脱走できない。作業隊員の幕舎は横六メートル、縦四十メートル、高さ三メートルばかりで、トンボの羽根のように上下で四人の寝台が並び、一幕舎に二百人、中央にストーブがある。本部、医務、炊事、集会所、中央出口に守衛所がある。幕舎の天幕は日本製である。

ラーゲル内にはドイツ兵が一幕舎に入っていた。彼らは作業が終わるとグルーブでギターを弾き、歌うという毎日である。私たちとは全く違う。寂しさ情けなさをこうして紛らわしているようだ。空腹などの苦しさは私たちと変わらないだろうに……武士は食わねど高楊枝である。

これは日本の語句であるが……日本人は食べ物に釣られたり、甘い言葉に負けてソ連の言うとおりに行動を変えざるが、彼らは自分たちの信ずる道しか行動しない。そのためいろいろな圧力はあるのだが負けない人たちだった。最低生活に入るとその人の真価がわかるという。彼らの毎日を見て私はドイツ人こそ世

界最高の人種であると思った。彼らはこんなことも言った「あなたたちには大和魂があり、私たちにはナチス魂がある、どうしてあなたたちはソ連の言いなりになるのですか」と言われたときに私は恥ずかしくて穴があったら入りたい気持ちだった。

福岡県 三上 巖

昭和十四年三月、大阪府庁より満州国建築局へ家族とともに赴任しました。十九年国務院防空部に転勤。調査資料を整理する暇もなく五月十三日、第二国民兵の私にも召集令状があり、四十歳くらいの人約四百人がハイラルへ召集され、部隊といっても木銃一本の装備であった。

召集兵は翌日より爆破訓練を受け、召集兵を残して大隊全員と私ら召集兵三人は興安嶺の築城のため完全装備で出動し、各連隊より編成された約一万人の部隊は地下特殊兵舎の築造に、にわか作業隊で負傷者が多く、連日昼夜兼行の三交替で地下壕の掘削を続け、一日六十か所の爆破を行った。八月十三日夜、ソ連戦車の侵攻があり、特殊攻撃隊が編成され出動したが、多くの戦死者を出し、部隊全員投降する。

全員フルギ飛行場で武装解除され、さらにチチハル歩兵師団に各地より收容された後、連日シベリアに強制抑留が始まった。

收容者全員に健康診断を受けさせ、作業不可能者には胸に赤札をつけさせ作業隊と分けられ、赤札のみ二百五十人くらい客車に乗せられ満州里を経てソ連領に向かった。

石川県 河原三雄

三か月後、我々はさらに西方に移動し、たどり着いたのはウクライナのドニエプロペトフスクというところであった。西へ西へと遠ざかるにつれて、満州に残してきた家族の安否が無性に気がかりだった。

ここから黒海の北岸、クリミヤ半島のセバストポリ港から北へ五百キロ、地名のとおりヨーロッパ第三位の大河ドニエプロ川の沿岸であった。有刺鉄線に囲まれた收容所には、すでに独ソ戦で捕らわれたドイツ人兵士三千人が先客としており、そこへ我々五百人近くが加入したのである。

ラーゲルの寝所といえ、大戦で破壊された軍需工場の地下通路を利用したもので、その片側三段に使い古したわらむしろが敷かれていた。ストーブは全くなく、狭い寝床に抱き合うようにして寝かされるのは、かつての大戦でソ連軍が体験した困苦を、日独の兵隊にもなめさせる底意があるように思われた。

岩手県 西富 一郎

私の所属している小林隊の三百人は、この作業大隊から離れ、小集団になって寂しく感じた。この駅舎から三百メートルくらい離れているので、地名も知らぬままこの地を去る。

一昼夜半後に、シベリア鉄道に近い木材の町タルバカタイに到着。

板塀と有刺鉄線の回された望楼のある捕虜收容所に入れられ、抑留生活が本格的に始まる。室内はまき用のペーチカがあり、床の一部は上げ床で、その上にアンペラの敷物が敷かれてあった。他の部屋はお粗末な松の皮板で、二段式の居室につくられている。何一つ自由行動ができなく、厳しい警戒である。雑役等で、所外に出た者がいろいろと情報を聞いてくる。我々が入所する前には、ドイツ人捕虜が労役に服していたとの話である。

新潟県 若月 太郎兵衛

ラーゲル生活は絶望的な悲惨なものでした。いつ帰られるか全然わからない。聞けばスコラ、ダモイ(早いうちに帰られる)の言葉だけ、寒さは極限に達し、零下七十度日中で零下三十度、風が吹けば体感温度は何倍も冷たくなる。最初は電気もなく、松やにを採ってきて小缶に明かりをつくった。夕食後は手袋や

靴下などのつくり、糸はないから軍足をほぐして糸をつくり裁縫である。朝起きてお互いの顔を見合わせて大笑い、まつ毛や鼻毛にすがぶら下がって真つ黒け、自分の顔は見えないからわからない、相手の顔だけ見ておたがいさまと気づき、話の種がまた一つ。気のきいたつもりで灯油かと思つてガレージから油を少し失敬してインク瓶に詰め、明かりにしようと思つた途端に爆発して、寝台の上は大火事になった。油は灯油ではなくベンジンだった。もう少しで大火事になるうとした。皆落ち着き払っている者ばかりなので、慌てず毛布をかぶせ消しとめた。やがて電灯がつけられたので、皆はやれやれというところ。発電所はれんが工場のもので、蒸気機関車のスクラップを利用してダイナモを回転させて、二百ボルトの電力を供給するものだ。

ある組は、松林から六、七メートルくらいの松杭を切つて運んできた。ラーゲル周りに三重の鉄条網をつくるのだ。我々はスコラ、ダモイなのだから、これは多分ドイツの捕虜でも来るのだろう。自分たちのためのものだと信じられなかった。お人好しの樂觀主義者だった。

新潟県 室橋正一

クラシキノ集落へ到着した日は、雪降りて吹雪に変わった。その日の夕方、貨車で極東のコムモリス市へ出発した。貨車の中は排せつした汚物や病人と死者の悪臭が立ち込めていた。コムモリス市から北方には線路が開通していなかった。

さらに極東のフルミーまで、夜間にトラック輸送である。夏服一枚をまとつた兵士は夜間輸送に耐えきれず、凍死者が出た。

混成部隊で互いに顔も名前もわからない、トラックの上で霜に覆われて真つ白くなって凍え、口も聞けない状態だ。凍死した兵の人数などわかるはずもない。

到着した場所は暗く星空だった。目的地は収容所とはいつても形ばかりで、十

数戸の廃屋は傾斜して、屋根と玄関は崩れ落ちてなくなっていた。広大な空き地は雑木とカヤ草が繁殖して粉雪に覆われ、荒涼とした極東の流刑地であった。その昔、ロシアの囚人が生活した監獄である。

岩手県 菅原義三

今考えますと、十二月の十日前後だったと思います。牡丹江から汽車に乗りまして、それから約一か月ほど貨車に揺られながら、少ない食糧と寒さによって、目的地といえますか、収容所に着いたときにはもうみなへトで疲れ果てておつたわけです。

ちょうどバイカル湖に近いところの駅に停車したわけです。それならば、塩からいか、甘いか見てこいということで、二、三人の者が降りて水をなめたわけですが、塩からくもない、真水でした。

やがて、バイカル湖らしい湖に差しかかったわけです。右手の方に大きな湖が見えてまいりました。一部の人は、いやあれは日本海だぞというような話もあちこちで出て、とうとう港に出たと、そういうような喜びを上げたわけですが、それから一週間ぐらい走つたでしょうか、タイセットという町に着いたわけです。

その収容所は満州から持っていたテントの幕舎でございました。私たちが入ったときには前に入った人たちが何中隊かおりまして、私たちは四番目ぐらいに入つたと思います。一列車千人の梯団ですから、四千人ぐらいが収容される大きな収容所が、鉄条網を張りめぐらして、四隅にはソ連の監視兵が立つておりました。そういうような収容所に入つたわけです。テントの中にはストーブが二つほどありまして、火をたいておつたんですが、何しろテントですので、零下三十度、三十五度、四十度の寒さには身も心も凍るような寒さだったわけです。その中で私たちはまず着る物を全部着る。あるものは靴下でも外套でもシャツでも何でもかんでも、持っているものは全部着て、そして毛布をかぶつて寝たわけですが、とても寒くて尋常に寝れるようなものではございませんでした。でも何とかかん

とかそういうようなところで生活をたわけです。

石川県 大坂喜久治

シベリア入り

マトベーフカ收容所

「ダワイ、ダワイ、ビイストラ」(早く、早く、ボヤボヤするな)という意味のロシア語を一番先に覚えさせられて、行軍の何日目だか、小さな流れを渡って着いた所が目的地、マトベーフカ(マツチベフカ)收容所だった。(後日調べたところではウラジオオから北へ直線距離で百五十キロほどだが、ハバロフスクへ向かう本線を、マソフカで右折して東約二百キロ、セミヨノフカ地区内の一寒村であった)

百メートルに百五十メートルほどの広さで、二重に有刺鉄線で囲まれ、四隅の高い櫓には歩哨が四六時中、自動小銃を抱え立っている。門は両開きで、横に小さな潜り門があり、そこから一人ずつ中へ入れられる。刃物を持っていないかと先ず携行した私物検査が行われるが、その実、彼らが欲しくてたまらないのは別物で、万年筆、時計、安全剃刀、眼鏡、石けん、それに布地物は風呂敷、タオル、寄せ書きの日章旗、着替えの越中褌まで、見つけ次第取り上げる。私も腕時計をバンドを外してズボンの股下に縫い込んでいたが、取り上げられてしまった。

バラックの内部は、中央に土間を奥まで通し、両側に細い丸太の柱を建て並べ、柱に打ち付けた横木に板を渡して寝台とする。天井まで二段に造られ、上段の者は座れば天井に頭がぶつかる。窓は小さく、隅にペーチカが一つ。もちろん電灯はない。後で聞けばここは、囚人部落で、刑を終えてもある期間他所への転住は許されないという。

我々から取り上げた時計をはめて喜々としている者。日の丸の旗をネックチーフにしている婦人、みなご機嫌で無邪気そのものである。作業で部落内を通った某日、越中褌をひもでぶら下げて食器拭きにしているのを見て、なるほどいい

アイデアだなあと感心した。入所して二日間は食糧もなく、じゃがいも掘りの手伝いに出て、畑でナマのままかじる始末であった。

ヨロベ收容所

マトベーフカ收容所(第三分所)では一年近くの伐採でほとんど伐り倒したので、北(四十キロほどのヨロベ收容所(第八分所)へ移動した。まず兵舎造りからで、自分で自分の逃亡を防ぐ有刺鉄線の二重張りには全くなさけない。女医の診断で、第三級の病弱者はリズコー(第四分所)に送られ、マトベーフカは閉鎖された。

ヨロベでは引き続き伐採で、夜ともなれば裏の山で熊の鳴声がする。元下士官の数人がどこかで教育を受けて来て、共産主義教育をやり出す。労働で疲れ切つて帰ってきた夜分、集合をかけられて講義を聞かねばならぬ辛さ。拒否すれば反動分子の烙印が押される。満州にいた元憲兵、元警察官の連中は摘発されて、いずれかへ消えて行く。給与やノルマで苦しめられているその上に、思想の強制、教条の押しつけに、精神面でも針でつつき回されるような明け暮れであった。

入所して一年もたつとロシア語の片言もわかるようになった。とはいえ、文字は覚えられず怪しげなロシア語とゼスチニアで結構通じる。ソ連兵が日本兵を侮辱する一つ覚えの日本語は、ハラキリとサムライで、苦し紛れに何をし出すか分からないといった潜在恐怖感があるのか、自動小銃を手放せなかった様子である。

テルマ收容所

東京都 嶋崎武男

苦難の年の暮れ、昭和二十年十二月二日、我々は最初の收容所テルマに着いた。そのとき皆体力は消耗しきっていて、ペーチカの薪を拾いに行くのがやっとだった。ソ連側もこんな状態は承知していて、しばらくは作業をさせなかった。ここで食されたのは、かつて関東軍の軍馬の飼料だった。皮かぶりのコウリヤン、カチカチに乾燥したトウモロコシ、それはどんなに煮ても軟らかくならない。しかも給

付されるのはほんの一握りの量であった。それを一さじの岩塩で味をつけ、飯ごう一杯にお湯を足して増やし「スープ」と称して腹に流し込んだ。しかしそれは食後しばらくすると、皆小便になって出てしまい、いつも腹は空っぽだった。皆食べ物の話をして楽しんだ。うまいものを腹いっぱい食うことだけが一番の欲求だった。ソ連側は、我々が落ち着きを取り戻してくると、次第に労働を割り当ててきた。薪運搬、家屋修理、伐採、木材搬出、製材など次第に労働は苛酷になっていった。私も最初は伐採をやらされた。外套(シューパー)を着ての雪の山での作業は重労働だった。

千葉県 齋藤 明

紙のないシベリア抑留の苦難

一、ラーダー収容所(モスクワ東南約二百キロ・北緯約五十三度)

昭和二十年十一月六日、牡丹江の仮収容所を出発、同年十二月一日、タンポフ市の近くにあるラーダーと云う小さな町の収容所に着いた。約一か月間の有蓋貨車輸送である。

(1) 収容所

収容所は松林の中で兵舎のように見えた。建物の周囲は有刺鉄線で囲まれ、所々に望楼があり、ソ連兵が監視している。建物は半地下になっており、入口から階段で中に降りて行く。地上に露出しているのは一メートル程の高さの屋根の部分だけである。屋根は板葺きで室内はうすい暗い。ところどころ天井に明かり窓があるが、燈火がなくては思い切つて歩けない。中央が通路になっていて、両側を上下二段に板で仕切つてある。

北欧の十二月は特に夜が長い。太陽は午前十一時頃出て、午後三時頃見えなくなる。その前後二時間位は白夜と云つて明るい時間があるだけだ。こんな建物に二百人ずつ五棟に分宿させられた。

この収容所隣にはドイツ軍将校が有刺鉄線の柵を隔てて収容された。ドイツ

語の出来る人は朝夕柵越しに話をする事が出来た。

(2) 日課

一日の日課は朝八時頃(まだ薄暗い)の点呼から始まる。屋外の雪の中に整列して「お早うございます(ソ連語で)」の挨拶と人員の点検で終わる。洗面は雪で顔をこする程度。食事は黒パンで一日分三百七十グラム。それに少々の砂糖と紅茶(葉だけ)。外に毎食毎に「カーシヤ」と称するものが出た。これは肉(主としてモツ)と穀類、(コーリヤン、ピースなど)と野菜(主として馬鈴薯)の煮込みスープだけである。

毎日の作業として、薪取り、水汲み、建物周囲の清掃、雪かき等があった。極寒地帯で薪炭が無いと一日も生活が出来ない。毎朝隊列を整えソ連兵に警護されて五キロ、十キロの雪道を森林の中まで徒歩で枯れ木や生木を取りに行った。かついだり、縄で肩にかけたりして引つ張つて歩くのである。まことに長い行列となった。

日常の中で困つたのは便所で、第一に建物から五十メートル以上離れた所にあるので、昼間はともかく、夜はすっかり体が冷えきってしまう。なお大便の場合には紙がないので、あり合わせのものがある間はどうかやら間に合ったが、それが尽きると皆困つてしまった。通訳を通じて古雑誌なり古新聞の支給を申し出たが「生活の必需品ではない」と云うことについて帰国まで支給されなかった。しかし夏の間はまだよかった。作業途中などで紙代用の植物の葉をもつて間に合わせただけである。便所の形式は大きな部屋(板敷き)に一定の距離間隔をおいて直径二十五センチ位の円い穴が十数個ならんでいるだけである。「個人別のしきりなし」である。後になって幾分精神的な余裕が出た頃

五人抜き相撲とかけて何と解く。

ソ連の便所と解く。

その心は、しきりなし。

とやらかした者もいた。

また、これは收容所が他地区に変わつてからのことであるが、私はある時一週間の間、毎日洗濯をやらされたことがある。が收容所関係のソ連下士官クラスの下着の洗濯でチリ紙を使用していないのであろう事実を発見して、なるほど生活必需品ではないと思つたことである。

(3) 入浴とシラミ退治

一週間に一回、入浴と消毒が行われた。入浴といつても暖房してある浴室で洗面器大の桶に一杯だけの湯を配給されて、これで体全体を洗うのである。この時脱いだ衣服を全部消毒室で熱気による消毒を行うのである。目的は、シラミがよく発生するのでこの退治と乾燥消毒である。また毎月一回身体検査が行われた。医務室で裸になり白衣の婦人(看護婦か女医)に臀部を見せる。尻の肉をさわつてみて栄養状態の良否を判定するのである。またこの機会に陰部の毛をきれいに剃られてしまうのである。(毛シラミ予防)

(4) 日本新聞と身上調査

毎月一回、日本新聞と云う一枚紙(現大新聞の四分の一位の大きさ)が四五人に一枚位の割合で配布された。内容は日本語版で、当時の内地の現状と世界情勢が書かれてあつた。ソ連の意図は赤化教育の一環であることがよく分かつた。読み終わった新聞紙は小さく切つて煙草の巻紙に使われた。便所までほととも回り切れない。

收容されて一段落した頃、全員について身上調査が行われた。一人ずつソ連調査官の前に呼び出されて、階級、氏名、所属部隊、職名等が聞かれる。先方では予め準備してあつた日本軍の部隊編成表に基づいて確認し、必要事項を聞いていた。この調査で戦犯関係者も出たことだろう。私たちは幹部教育隊所属だつただけに調査は簡単であつた。

二、エラブカ收容所(モスクワ東方約六百キロ、北緯約五十度)

ラーダー收容所で一冬を越し多少生活に慣れた頃、次の收容所への移転となつた。各自手製のリュックを担ぎ昭和二十一年七月十八日ラーダーを後にした。

途中徒歩行軍・貨物列車・徒歩行軍と重ねてカマ河(ボルガ河支流)に近いエラブカに移つた。(所要日数十日位)

この收容所は洞窟式地下施設とは異なり、コンクリート三階建の普通の建物でA・Bに分かれていたが、最初B收容所に入り、本格的な労働作業が始まつた。主なる作業は、農耕・森林伐採・同運搬・鉄道建設(路盤工事)・工場内の雑役等であつた。作業により百人・二百人位が一同となつて近隣地区に派遣されるという形がとられた。收容所の出入りは非常に厳格で相当の時間を要した。五列縦隊にして下士官クラスが数えるのであるが、算数的能力が低く容易ではない。いじ悪く時々列を乱して困らせたりしたこともあつた。

抑留中唯一回だけ労働賃金として十ルーブル貰つたことがある。何に使つたか覚えていないが一部持ち帰つて記念にとつてある。

日常の收容所内の生活はラーダーと大体同じであり、一番困つた便所もまた別棟に離れて築かれた掘つ立て小屋で吹き流し、寒冷は身にしみるものであつた。

かくて昭和二十二年十月、A收容所に移り、同月末帰国の為エラブカを去る。

福島県 村上武

抑留生活

港に上陸して約二キロメートルほど歩き、湾の奥のところに收容所があつた。昨日までロシア人の囚人が居たという。建屋と内部構造に驚きの目を見張つた。間口六メートルほど、奥行四十メートルほどの細長い一棟に、三百人以上を起居させておく、まさに前世紀の奴隷の小屋と直感した。ロシア語でカローナと呼び、またはバラックと呼んでいた。

約一カ月ほど経て新しいカローナに移つた。東の方約一キロメートルの地点である。一ヘクタールの敷地に三棟の宿舍と、炊事室内勤者の一棟と、床屋、入浴

場の一棟とがあった。便所は外である。入口には衛門があり、收容所の四隅には望楼がたち、夜間哨兵が監視をしていた。管理者が紹介された。所長(子チャーニツク)中尉、そのほか中尉一名、少尉一名、曹長一名(女)、門衛軍曹一名。五名のほかに、作業担当者一名が收容所のソ連軍側の指導者であった。收容所の近くに一個小隊ほどのソ連軍が駐屯していた。大きな收容所は二千から三千人ほどいたところもあるが、我が收容所は千二、三百人ほどであった。風、南京虫などが手のつけられないほど増えたが、一年半ごろ、ドスカメラという地下室がつくられ、百二、三十度ほどの高温に衣服を吊るしてからは風より解放された。

和歌山県 北又光夫

旧鉄道線路沿いの道路を歩いた。十月半ばだというのに寒さは厳しい。まだ雪は早かった。鉄条網で囲まれ、見張り台が四隅についていた監獄跡らしい。古い建物の施設が所々にあり、続いている。囚人たちが木材の伐採に送り込まれていた監獄地帯であるらしい。歩き続けて、夜は黒。パン一切れ。倉庫のような大きな建物に詰め込まれて眠った。床は板張りであった。次の日、夕方まで歩いて、そこにあった監獄跡に入ってしまった。ここが私たちの暮らす收容所らしい。翌朝大隊長から話があり、帰国まで約二年ぐらいここで労働に従事することが言い渡された。

寒さは日増しに厳しくなる。労働もきつくなりノルマを課せられた。木が多いので枯れ木の乾いた物を薪にして使った。シラミ退治は火力乾燥室があり簡単に解決してしまった。その技術はソ連の囚人たちは上手であった。フェルト製の防寒長靴も乾燥室で乾燥したロシアの囚人も多かった。收容所での日本人は一個大隊である。入浴は十日に一度ぐらいであり、入浴の方法は、室内の温度を汗が出るほど高め、お湯で体を洗うだけである。順番であるため、早い時であれば夜中の時もあった。入浴所にはソ連人のボスと日本人が三名ほど勤務していた。入

浴後必ず陰毛とわきの下の毛をそり落とされた。衛生のためらしかった。元床屋の兵隊が四、五人、理髪とその仕事に専従勤務していた。私は帰国する二カ月前くらい前までこの收容所で暮らしたので、ほかの收容所のことには知らない。この收容所は六十三大隊と呼ばれていた。労働その他において、この地帯でも一番嫌がられていた。「地獄の六三、鬼の三大隊」と言われて、ここに転属になることを嫌がったと聞いている。

抑留者の統制は旧軍隊以上である。下級の兵隊は戦死、病死が多く、生き残ったのは下士官が多く、したがって編成は良過ぎた。小隊長は准尉か古参曹長、軍曹で分隊長、伍長で分隊長になっている人は少なかった。彼らの軍国主義は抑留でその極に達した。終戦前の陛下のため、国のためが、ソ連に置きかえられ、ソ連側の命令には服従した。苦しい分だけ兵隊をしごいた。三カ月ぐらいの間隔で行われる身体検査でランク付けされ、三級か四級に下がらない限り、他の労役や勤務にかわることは絶対できない。労役猶予又は免除はこの検査結果により決定し、何人もくつがえすことはできなかった。三級は軽作業、四級は休養が主で、居住する所も労役についている者とは別室である。ソ連軍医は検査だけで日本の軍医と衛生兵が衛生管理を行った。收容所に医務室があり、日本の軍医大尉と衛生曹長、衛生兵が四名ほど勤務していた。危険な伐採現地には必ず衛生兵が救急カバンを持ってついでにきた。抑留者にとってはなくてはならない存在であった。

朝夕の收容所の出入りは厳重である。わずか五十人を数えているのに、途中で忘れて数回やり直す。暖かいときは我慢できるが、寒いときには閉口した。着衣などは最初は日本軍のものが使われたが、徐々にソ連人の衣服が使われた。日本の防寒具では役に立たないことが分かった。ソ連のものは、日本のものに比べて使いやすく暖かくできていた。

食事は日に三食、それぞれの量は計算どおりにはいかないものである。団体の場合の中間搾取はあるものだが、ソ連は略奪、中間搾取の国である。彼らの「カ

ラピチー（盗み）」の残を水で増やして我々が頂戴し、空腹に耐えかね、また飯盒でそれを増し、伸ばして空腹を一時補ったのである。もちろん、肉、野菜、魚はあるにはあったようだが、私たちは匂いを嗅いだ程度である。私は三級のとき、倉庫の使役を三カ月ほどやり、そのからくりを深く知ることができた。休日は月に一、二度あったように思う。演芸会は休日ばかりでなく、平日にも夕食後開かれた。兵隊の中には元プロが何人かいた。落語の昔々亭桃太郎なども一緒であった。浪曲、落語、講談など、大勢の中にはプロ級の人たちが結構いるものである。

施設構造は、ソ連の監獄に入ったのであるから一時的なものでなく、十分に計を立て長い間使ってきたものだけによくできていた。居住密度も上下二段でやや過密という程度である。

熊本県 家人壮介

すき間風に起こされた第一夜

昭和二十年十二月四日、急にトラックがとまった。「ダワイ、ダワイ」とソ連のカンボーイの声に促されて、ほろを押しのけてトラックから降りる。外は薄暗く、周囲は簡単な木さくに囲まれている。隅には望楼があり、銃を持った警備兵が見下ろしている。いよいよ捕虜収容所に入れられたという実感を持った。寒さと疲れのため、指示された二番目の丸太小屋に入り、寝る場所を決めると、着のまま背のうを枕にごろりと横になった。ここが我々が住むことになる二一七収容所であると、後でわかった。

翌朝、丸太の壁のすき間から吹き込む、雪まじりのすき間風に起こされた。顔から肩にかけて痛いような寒さを感じ、ここはどこだろうかと辺りを眺めようとしたが、目が開かない。かぶっていた防寒帽の開いている顔の部分は、口元、鼻などすべて吐く息が白く凍りついている。まつ毛も凍りついて目が開かない。

外の気温は零下三〇度くらいには下がっているであろう。このようなことは、

北満・ハイラルの軍隊でも行軍のときに経験したことがある。慌てずに、指でまつ毛の氷をゆつくり溶かしながらしごいて取り、身を起して部屋の中を見回した。薄暗い部屋の中は四方に二段ベッドがあり、みんなは軍服のまま所狭しと重なるようにして寝ていた。しかし、ほとんどの者が起きて寒さにうずくまっている。

明かりのない部屋の中は死んだように静かで、真ん中に据えられた四角いペチカの炎は、ゆらゆらと小さく消えかけていた。まきはもう残り少なくなっていた。このままここで骨を埋めるのかもしれないと思うと、嫌な予感にさいなまれ、身も心も凍りつくような思いであった。

かくして、昭和二十年十二月五日（一九四五年）、世界最強を誇った精鋭関東軍の中でも、その中核であった下士官の集合隊である第一五〇作業大隊のシベリアでの第一日は、二一七捕虜収容所において不安と焦燥の中に明けた。

岐阜県 伊藤 武

シヤバルトイ捕虜収容所

シヤバルトイ捕虜収容所の正式名は、第五二捕虜収容所第一〇分所といい、二重の鉄条網と木柵で囲まれた東西百七十メートル、南北百十メートルの規模で、南側に少し傾いた傾斜地にあった。

東側のやや南にある衛兵のいる入口を入ると、四棟の平屋建て兵舎が見られる。それらのうち一棟だけは、入口を右に折れるとすぐ突き当たり、そこから東側の本柵に並行に北に向かう細長い建物で、第四兵舎と呼んだ。他の三棟は、それぞれの建物の入口を第四兵舎に向け、東西に長く伸びる建物で、北側から順に第一兵舎、第二兵舎、そして第三兵舎と呼ばれていた。

これらの兵舎の入口は二重の外開きの扉で、扉と扉の間に少しの空間があり、寒さを防ぐように工夫してある。内側の扉を開いて中に入ると、部屋の床部分は土中に斜めに下り、周囲の大地よりは一メートルくらい掘り下げられた半地下式であった。細長い建物の真ん中が通路になっていて、その両側は丸太で作ら

れた二段の蚕棚の状態である。そして屋根棟の部分には丸太が並べられた天井があり、細長い兵舎のほぼ真ん中の壁側部分だけは、明かり取りのための二重のガラス窓がはめ込まれていた。ちょうどその位置にはダルマ型の薪ストーブが据えてあつて、夜間交代で薪をたき、暖を取った。

便所は兵舎から百メートルほど離れた南西にあつた。兵舎から相当離れているので、行くのに寒い思いをした。しかもその便所は、大地に幅二メートル、長さ五メートル、そして深さ二メートルの穴を掘り、その上に股幅だけの横木を二本ずつ渡しただけのもので、凍ったときなど少しバランスを失うと下に落ちることもあつた。屋根はなく、周囲に空き袋を吊るして目隠しにしていた。落し紙の支給がなかつたので、マホルカ(タバコ)の巻き紙を代用とした。

そのほかに本部詰所、医務室、風呂(バーニア)、大工小屋、蒸気滅菌室(ジスカメラ)、隔離病室などがあつた。これらの建物の間に二つの井戸があり、管理用の建物は収容所の外、入口の東に集まつており、パン工場(ピタルニア)もその一隅にあつた。

抑留地の生活

高知県 東山林

ハラグンは、チタからシベリア鉄道に沿つて西へ約二百五十キロメートルのところにある一寒村であります。現在日本で販売されているどの地図でも見つけることはできません。十一月下旬であつたか、駅舎もない引込線に停車し、全員貨車から飛び降り、暗くなりかけてはいたが、見通しはかなり遠くまで確かめられます。「ブイストラ!ブイストラ!」とソ連兵の肩にかけた自動小銃でこづかれながら、膝まで没する雪の草原を歩くこと約一時間余り。欲張つて持てるだけ多量の荷物を背負つたので汗でびしょり、凍傷になるのではあるまいかと心配したが、どうにか寒さをはね返して立つたままの野宿です。横になつて眠ることもできず、四、五人が体を寄せ合つて寒さに耐えねばなりません。周囲が次第に明

るさを増してきたころ、再び出発。三、四時間雪原を歩いて、やっとたどり着いたところが、これから我々が住む収容所。その場所というのが、高さ四メートル以上もある松の丸太を打ち込み、鉄条網(有刺鉄線)で二重張りに補強され、四隅には六、七メートルの高い監視塔が建ち、面積は縦二百メートル、横三百メートルはあると思われる広さの囲いの中へ投げ込まれた形、住む建物など何一つない雪野原です。後で知りましたが、この柵はルーマニアの捕虜がつくつたものわかりました。

さて、ここでこれから、どのような仕事をさせられるのか全く知る術もありませんでしたが、まず住む(寝る)ところをつくらねばなりません。このままの状態を越すようでは凍死を覚悟せねばなりません。

各分隊ごとに持つてきた円匙(小型シャベル)で雪を除き、草を刈り、凍りついた土を少し掘つて雑木(主として白樺や松)を切り集めて半地下式のカマゴ型の屋根をつくり、小枝や雑草、携帯天幕で覆い、その上に雪を叩きつけてかためた穴蔵をつくつて、その中で寝起きしながら、翌二十一年五月までノルマを課せられた、なれない伐採という重労働を強要されたのであります。

新潟県 周佐吉三

そのような列車生活も終わり、十月八日ころと思ひますが、午前十時ころイルクーツク州のチェレンホーボ駅から行進して、有刺鉄線の囲いのあるチェレンホーボ捕虜収容所の門の前で私物などが検査され、そこで印かん、預金通帳、大事な手帳など一切の私物を没収されました。捕虜収容所では全員に一連番号が付けられました。私は一五七八号と呼ばれました。また有刺鉄線の囲いの中は、見るからに自由もなく恐ろしいような感じでした。収容所の四隅の上には機関銃を持った兵隊が二十四時間警備のため見張つております。私どもより先着の部隊兵もいましたが、私どもの後からも続々入所して、その冬最後には四千人くらいになつたと聞きました。

収容所内の各棟は床板張りの倉庫のような大きな建物で、両側には二段造りの上下四人用の寝台があり、一棟に約二百人くらい収容されました。全部で二十五、六棟あり、そのうち炊事場、病棟、浴室と床屋は同じ建物で、その他に将校専用宿舎などがありました。便所は、私どもが新しく、長さ二十メートルくらい、幅は五メートル、深さ四メートルくらい、その上に丸太の横木を渡して中仕切りをして建造したものです。また両方の囲いの外には板をV形にして小便専用にしたものです。

石川県 中田清康

ウラル山脈方面で半年くらい伐採作業をしてから帰国すると言ってたまされ、牛馬以下の貨車輸送で、着いたところはバム鉄道起点タイセットから少し入ったネーベルスカヤ収容所、ここで初年度越冬、この冬の食事は最低であった。コウリヤンのふすまや原穀のアワを食わされ、皆ふん詰まりを起こし、ひどい者は衛生兵が針金を曲げてほじり出していた。栄養失調の犠牲者も多かった。私も足が重くて上がらず、小さい段差でもひっくり返った。つい昨日までパンをかじっていた者がいつの間にか死んでいたとか、木の下敷きになって死んだ伐採仲間の肉を焼いて食って銃殺された者があったという話もこのころであった。翌春四月、帰国だと希望を持たされて、アングラ川を汽船でさかのぼりブラーツク収容所へ回された。ここではアメーバ赤痢にかかり、ブラーツク病院で約一カ月入院した。ここは伐採が主であったが、秋には農場でカルトーシカ収穫作業に出た。そのとき、旅順で捕虜になり松山収容所にいたという老農場監督に会う。彼の話は特筆すべきものと思うので記しておきたい(通訳あり)。

「私の今までの一生で一番楽しい思い出は捕虜になって松山にいたときだ。米が毎日であり、新鮮な魚や肉、そして野菜をたくさん食わせてくれ、作業らしいこともせず、いつも温泉へ入れてくれた。帰るときは捕虜全員が新しい背広二着ずつと、いろいろお土産をもらった。日本人は皆親切だった。それに引きかえ、

おまえたちはひどい目に遭い、食事も貧しく本当にかわいそうだ」と。彼は五日間の収穫作業の間、毎日我々にカルトーシカをゆで、腹いっぱい食べさせてくれた。あの当方で六十半ばくらいであったろうか、ひげの濃い彫りの深い顔だちで、大きな体の好人物だった。あれから既に五十年近くになる。あの世から彼は懐かしくついていた日本へ遊びに来ておられるであろう。合掌。

大阪府 今井源治

最初のラーゲル

第八ラーゲルはタイセットから五十三キロの地点にあった。ここは奥地のブラーツクに至るバム鉄道(バイカル・アムール)建設の労働力補給基地らしく、既に先着の日本部隊多数が収容されていた。二重の鉄条網と高い板塀に囲まれ、要所要所の望楼には警戒兵が昼夜、厳重に監視していた。

私たちの幕舎の防寒用二重テントはすべて関東軍のものであった。内部は両側に柵をつくり、上下二段に分かれて寝たが、松の背板を適当に並べた隙間だらけの柵は、上段の者が動くバラバラとごみが落ちてきた。時には隙間から毛布の端の紐だのが垂れ下がって下段の者の顔をなでた。

ストーブが二個、そのためのまき取りに、赤松や白樺の密生した雪の山へ重い足を引きずりながら登ってゆき、雪の中に凍りついた倒木を防寒靴でけったり棒でこじ起したりして、重いのは二人、三人でよろよろと担ぎ帰った。

十一月も半ばとなると気温は猛烈に低下し、朝な朝なの作業整理が苦痛だった。足を踏み、膝を叩き、寒気と戦いつつ待ちあぐむヤポンスキー(日本人)の所へ、長い外套にマンドリン(自動小銃)を抱えたソ連兵がやってきた。

「アジン・ドゥアー・トリ(一・二・三)」と人員を数えるが、何編繰り返しても勘定ができないやつがいる。四列に並ぶと暗算ができないのだ。「オーイ、五列に並んでやれや」

無学文盲、鉄砲の撃ち方だけしか知らないような、こんな監視兵を嘲笑しな

がら日本兵たちは、彼らの自動小銃に追い立てられて作業に出ていくのだった。

広島県 桑田四郎

○昭和二十年十二月、タイセット第七收容所地区第十分所。冬期Ⅱ一、二等兵、開拓訓練生などの若年者は伐採、枝打ち、搬出。五年兵の古兵など有技術者は丸太小屋の木組み工作。夏期Ⅱ有技術者などの古兵指揮のもとに、大型丸木小屋の組み立て、建築。

和歌山県 出口爲治郎

いよいよ下車して二十分くらい歩いて收容所の門前に到着した。ここが我々の連れて行かれる目的の收容所だったのだな。員数を調べるのに一時間も費やして、自分たちに比べて頭の悪いのにあきれてしまった。

翌日から第二收容所で、八百人とも言われていたが、はつきり覚えてなく、各勤務所に割付けなど、種々多用で忙しい毎日だった。この收容所内三十メートルに別棟がある。ドイツ軍の襲撃があつて天井が全壊しているのを職人の兵隊が一週間で立派な收容所にし、我々は喜んで入ることができた。まず職場を定められ、自分は(イモノ) 鑄造工場に行くことになった。中隊長の詩司内務班長割り当てということで、鑄造工場とはいっても三百人ぐらいの仕事場のように思つた。

ノルマ・パーセントの労働

仕事内容は、鑄型からハンマーでたたき出す仕事、私と今枝上等兵とソ連女工さんと四人の仕事。毎日ほこりまみれの力仕事。三十歳ぐらいか？の女工さんたちは、我々に劣らぬハンマーでの力仕事で、でも外は寒気氷点下何度。野外仕事のことを考えるとありがたいと思つた。私は十五歳時分から熔解工の経験があつたためもあり、幸いにして室内作業を与えられたので、「ヤポンスキーソルダート、よく働く」と二人から誉められたが、若い自分たちにとっては腹が減る

のが一番つらかつた。でも同一の仕事だから、精神的にかわいがつてくれた。

ソ連という国は、特に仕事のこと、人間は働く機械であると政府が言っている。それにしても、食を与えず仕事ノルマばかり言つて、たまつたものじゃない。一日に与えられるのは黒パン三百グラム、野菜の塩漬けのスープが飯盒の蓋に八分目。一回パン百グラム、時には粟のかゆ一杯だけ。これではハンマーなど使う労働ができる道理はあり得ない。ソビエトでは土地は国有だから、売ったり買い求めたりすることはできないが、工場は権利を持つてっていると聞きました。だから、就職して定年まで勤めれば、自分の住宅になると言われていた。

北海道 十和田善作

昭和二十一年一月十八日、早朝よりナホトカに上陸せる将校団の一部は貨車に乗り、ナホトカ北方三百キロメートルのスパスクに移動する。ここは広大な煉瓦乾燥工場の建物らしく、急造の木造二段式ベッドに着衣のまま、持参の毛布一枚にくるまり横になる。ナホトカの急造幕舎よりは風もなく落ち着く。なお、大きなペチカを不寝番を立てて終夜燃やして暖をとるも、とにかく寒さ厳しく、屋外は零下四〇度。寒さのため小便に起きる人多くおるも、便所は建物より五十メートルくらい離れた位置にあり。その厠まで我慢できず、建物入口の前で放尿するのがほとんど。はなはだしきは、ベッドより出で、建物入口までの通路で放出する者まで続出する。さあ大変、朝になると通路は凍つてテカテカ。入口は小便が凍つて、鍾乳洞の鍾乳石の筈のごとく天に向かつて何本も何本もできており、小便が凍りついて上に上に高くなる現象はまことに壯観なり。ソ連軍女医が見回りに来て、「グリヤーズヌイ、グリヤーズヌイ(汚い、汚い)と、怒ること怒ること。早速ツルハシで全部削り、便所に捨てて一件落着。ただし、翌日も翌々日も毎日同じことの繰返しである。

起床六時、さあ、朝の点呼がまた大変である。建物外の広場に整列、常に四列縦隊、收容所長と係官二人による人員点呼。初めは目で、アジン(一)、ドヴ

アー(二)、トリー(三)と数えていくが、途中でわからなくなり、最初に戻り、次は指差して、アジン、ドヴァー、トリー。また途中でわからなくなり戻る。今度は一列ずつ手で触って勘定し、そのまま隊列を残して衛門に戻り、四×〇〇列、〇〇人、鉛筆で計算し、解散の合図。朝の寒さの中、三十分以上も待たされ、全員はガタガタ足踏み。解散の合図とともに一斉に便所へ急行が毎朝の行事である。一月の空は青々と澄みわたり太陽の光りがキラキラと輝いているが、しかし下水の水はカチカチに凍りついた現象である。水の補給は給水車により、コップ一杯の水で口をすすぎ、顔を洗うわけである。

新潟県 三田敏男

イズベストコーワヤ地区ヤクディニヤ三〇八収容所へ。人員は約五百人、作業は鉄道敷設、道路工事、伐採、製材等。

収容所生活は、シラミ、南京虫、寒さ、食糧不足で、人間社会に通用、想像できない生活。毎日尊い犠牲者が出た事実。また、厳しいノルマが課せられ、これらはその経験者でなければ語るができない。

広島県 円光寺秀頼

八月十五日で終戦となりましたが、私たちは鏡泊湖北の山中で陣地構築をしていたため、無線もソ連に邪魔をされ、十九日になってやっと部隊長より終戦を知らされ、八月下旬にはソ連の掌中下となり、九月下旬ソ連の貨物列車に乗せられ、満州綏芬河を経由、ソ連のホールよりさらに森林鉄道により山奥に送られ、ソ連の囚人が使用していた古いブラック収容所にきっちり千人収容されました。十月五日でした。

収容所は古く、屋根も壊れ星空が見える状態。しかし周囲は新しい有刺鉄線(日本製で満州から取って帰ったもの)が張られ、四隅には望楼があり、銃を持ったソ連兵が二十四時間見張りを続けていました。その収容所まで八月下旬から

一度のふるもなく、シラミに攻められ眠れない夜が続き、このころ既に気温は夜中零下十五度以下で、私たちは夏服を持ってきたので、毛布一枚で食事もろくにももらえず、不潔さと空腹、栄養失調、睡眠不足で次々と友が倒れていきました。

福島県 鈴木正之

ライチへの収容所は以前からあったものだったが、到着してから増築工事を開始、半地下にするために二メートルくらいの穴掘り、丸太材を使って収容棟建築に使われた。この間の食料はコウリヤン、粟などで、その他に黒パン少量で、慣れた丸太材工事の重労働と将来に向かつての不安なども重なり、極度の疲労、栄養失調などが加わり、初めての厳寒に予想外の死亡者を出すことになった。特に初年兵にとっては、重労働という外圧に加えて、日本軍内部の人間関係も加重されて過酷な毎日であった。

滋賀県 中村藤市

十月初めアルタイ地方の一都市に着き下車しました。寒く、このころより食糧も余り支給されず、五百人(別の五百人はアルタイスカヤにとどまりました)五列縦隊で歩き、三日間かかつてドイツの捕虜が入っていたという収容所に入りました。上下二段式左右四人一組となったところに二百人余り、二兵舎で起居することとなりました。便所は兵舎の前に簡単につくられました。徒歩の三日間で二、三十人が死去いたしました。

食事は、ジャガイモ二、三センチほどの大きさ二、三個、パンは二日か三日に一日一個程度のもので支給されました。

七時起床、七時半より五列縦隊で荒涼たる野原を歩いて作業現場に着きました。

作業は二人一組となつて、幅二メートル、高さ二メートル、奥行き二メートル

の量の原木伐採に、凍りついて硬いのを休むこともせず苦しい作業の毎日でありました。

その間、伐採で一度に二十人余りがあの世に去りました。毎日毎日「ドライバーボーター」の言葉を嫌というほど聞き、二十一年の正月を迎え、三月になってやっと寒さもなくなり、四月からはジャガイモづくりと伐採の仕事に明け暮れました。

千葉県 磯貝恭三

その収容所は四角く、一番外側は高い板塀で囲まれ、その内側約五メートルくらいのところに鉄条網が張り巡らされ、四隅の望楼がその板塀の高さよりも高く建てられ、ソ連兵がいつも監視の目を光らせ、板塀と鉄条網の間にも入れば望楼から弾丸が飛んでくる仕組みになっていた。

また、私たちが入れられた建物は丸太小屋であった。丸太を横に組み合わせ、積み上げ家を造り、その丸太と丸太との間の隙間は土や苔などでふさがれ、寒さを防ぐようになっていた。室内は両側が三段に寝るようになっていた。私たちは少ない毛布をお互いに譲り合い、また重ね合せて寒さを防ぎ、生きて帰ろうと誓い合っていたのであった。

新潟県 柴澤正雄

昭和二十年九月中旬ごろ、ソ連兵士が上陸して我々は武装解除される。約半月後に日本に帰還と騙されて、ソ連船に乗せられた。たどり着いたところが沿海州のソフガワニ港。持ち物は乾パン、タバコその他軍隊の支給品少々と私物も若干、服装は防寒服に防寒具。港に入港すると花火を上げ、ソ連人の男女によるダンスなどで我々捕虜を迎える。初めて見る外国人、珍しさと恐ろしさで異様さを感じた。

上陸後、早速、歩かされ捕虜収容所に夜到着する。収容所の周りは二重の

有刺鉄線が張り巡らされ、四隅の高い見張台には常時ソ連兵士が自動小銃を持って監視している。いよいよ明日から捕虜生活が始まると思うと、胸深く刺し込むものがあつた。また我々の体験しない重労働が待っていた。

岐阜県 長澤秀道

当時三万といわれていた平壤駐屯の各部隊はマンドリン(小銃)を手にしたソ連兵によって武装解除を受けた。二十日夜、部隊編制のまま食糧、被服その他できるだけのものを持って三合里へ出発した。翌朝、三合里収容所の厩舎に入った。ここがこれから二月月間の住まいになったのである。ここでの作業は、トラックで旧部隊の糧秣庫、被服庫からの物資の運搬と燃料となる樹木の伐採が主であつた。すべてソ連兵の監視下で行われた。

静岡県 石川博

夕飯もなしで汽車は走り続ける。まるで物を運ぶかのように、食事の時間もなく、便所へ行く時間もなく走った。一夜明けてどこかの駅かわからない駅に着いた。戸が開いた。みんな外に出て外気を胸いっぱい吸った。水筒に水をくんで汽車に乗る。汽車はまた動いた。二時間くらい走ってとまった。駅のない野原だ。そこでまず飯盒で食事をつくり、やつとで腹へ食物が入った。

少し休んで、初めの車両の順から列を組んで歩き始めた。我々は真ん中へ入り歩き出した。延々と長蛇の列ができた。約二時間くらい歩いたときに、初めの部隊は止まった。そこは平地だった。その場所へ天幕を張って住家とした。敷物は、ソ連兵が用意してあつた草を敷いた。自分の寝る場所に装具を置いた。あすからの作業について説明があつた。炊事に使う薪を取りに行く者、水をくむ者が各幕舎から二名ずつ使役として出た。その使役に出た人たちが言うに、遠い所だと言う。外で説明している間に、ソ連兵は各幕舎に入り盗みをした。時計、万年筆、ハンカチ、国旗などがなくなった。通訳を通じて、ソ連兵の責任者に抗議した。明

日からは草刈りの作業だが？

内地では終戦一カ月になるが、どうしているか心配していることでしょう。妻や子供のある人たちは言うに言われない気持ちでしょう。幕舎の中は明かりがないので、話をする人もいない。出てくるのはため息だけだ。草刈りというのと、我々は鎌で刈ると思っている。明日を心配しながら眠った。

滋賀県 松村晋二郎

秋乙兵舎で帰国への淡い期待を抱きながら帰国準備をしていたところ、九月一日ごろ、急遽移動のため集合させられた。行き先はわからないが、どうやら郊外に向かっているようである。やがて、初めて聞く「ダワイダワイ」の声で追い立てられ、帰国用の梱包も次第に重荷になり、次々と路傍に捨てられていった。着いたところは三合里という旧軍の演習廠舎であった。

岩手県 土川清

周囲は鉄条網が張りめぐらされており、格好の収容所であった。ソ連軍の監視下におかれ、初めて今度なるようにしかならないというあきらめの心境になったと思う。

北海道 北村忠一

シベリア抑留地への旅(昭和二十年秋)

ハルビン、牡丹江省横道河子海林収容所、牡丹江収容所、仮寝住まいをしながら綏芬河^{すいぶんが}を経て入ソ、この間、有蓋貨車の二段ベッドに積み込まれ、コムソリスク市の西北ホルモリン地区第三収容所(二二七分所)に二十年十二月に到着、抑留生活が始まりました。

抑留地の生活(昭和二十年冬より)

収容所での作業は、伐採、木材運搬、木材の貨車積み降ろし、建築などで、私は収容所の生活が必要とする水、燃料の調達のため、氷割り、風倒木の薪拾いなど行い、氷の運搬には六尺四方の天幕一枚にかけらの氷の塊を肩に

担いで数キロの道のりを午前中二回、午後には風倒木(長さ二〜三メートル、木口四〜五センチ程度のもの)一本ずつ担いで二回、体力を消耗しないよう気を遣いながら運搬作業に従事しました。

宿舎は古ぼけた丸太小屋での暗い生活で、シラミが肌着の縫目に一列に並んでいるのを幾度か見て驚いたものでした。食糧の分配も飯盒の蓋での一杯の薄粥、それにわずかな黒パンのかけら、このように食糧が不足だったため、糧秣倉庫の作業では穀物(主に大豆)、魚類(鮭、ニシンの塩漬)、肉などを盗んでは、仲間とラーゲルでの食事を補給したことが数多くありました。我々の入った収容所は、第二次大戦中ドイツの捕虜が入っていたところとも聞きました。この収容所は下士官主体の一千人の大隊でした。

朝からトラックが数台来て、人員輸送が始まった。「ダワイ、ダワイ」とせき立てられながら、二十〜三十人ずつ乗り込み、厚い天幕の覆いをかけられて出発した。道路が悪いらしく、ガタガタと大きく揺れながら奥へ奥へと進んでいった。何時間走ったか、トラックが止まる。長い間空き家であつたらしく、丸太の壁はすき間だらけで、ガタガタの扉から吹き込む風は肌を刺すようである。薪を燃やすペーチカの光がチラチラと揺れ、言いしれぬわびしい夜であった。毛布もわからぬので、板の上に着のみ着のまま、背のう枕に横になると小雪まじりのすき間風が顔に吹きつける。シベリアのどこにいるかもわからない。ただ寒さと重労働の毎日が続くことになる。こんな山奥に来て何をやるのかと思つたら、毎日毎日伐採作業である。

岩手県 大場正志

停車した駅はピラであった。全員に下車の命令が出た。殺風景な田舎町である。このときに初めて不審に思った。

この町から二十キロ離れた場所から列車に乗り換えるというので、荷物はマタオースに積み込み、徒歩で線路沿いに歩いた。次第に山が深くなってくる。マンドリンを肩にしたソ連兵の人数が多くなっている。皆、口数が少なくなっている。しかし帰国の希望は持ち続ける。

無情にも二十キロ地点で線路は行き止まりで、前方は深い森林の山ばかり。右手に、有刺鉄線が高さ五メートル、間隔五メートルで二重に張り巡らされた、二百五十メートルと百五十メートル、約三万五千方メートルくらいの広さで、四隅には十メートルくらいの高さの監視塔があり、内部には百五十坪くらいの口グ方式の構造物が三棟あつて、だれの目にも監獄であることがわかった。

私どもの編制梯団は一千人、独工七三三部隊牧村中尉隊長以下二百名、憲兵隊黒川准尉以下六十名、輜重隊などの混成で編制されていた。

ソ連軍の少佐、大尉、軍曹各一名、ほか下士官・兵二十名、全員柵無いに集合。ソ連軍少佐、大尉の訓示があり、堀越さん(民間抑留者)の通訳で、この収容所はソ連軍の直轄で、第五三三労働大隊と称する森林木材の伐採及び搬出、積み出し作業に従事することを告げられた。

岩手県 佐藤欽一

チタ地区ハタブラクにて全員下車、ダモイの夢も破れ、自分たちで収容所の周りの穴掘り、バラ線の塀を造り、抑留生活が始まった。

間もなく五百名が他の地区へ移動、千名が越冬することになったが、何分、食糧は黒パン若干とスープ少々では栄養が十分はなはなく、おまけに南京虫、虱の大発生、熱病、下痢などで、冬を越す間に半数の五百人以上が死亡。埋葬するにも厳冬の中、地面はコンクリートのように固く、墓穴も掘れず、素っ裸にして雪を被せただけ、翌春、雪も消え穴掘りのできるようになってから埋葬したが、白樺の木で急造した十字の墓標が裏の山に林のように林立した。

長かった冬もようやく去り、春先ともなると杏の花が咲き、いくぶん落ち着

きも取り戻してはきたが、まだ定まった労働もなく、毎日馬鈴薯倉庫で芋の選別、一般家庭の薪割り、その他を交代で行っていたが、日曜日の休みの日でも、山火事(野火)が発生すれば、即刻スコップと竹ぼうきを持ちトラックに乗せられ、消火に出動させられた。

そのうち他の収容所への移動が決まり、貨車に乗るまで四列縦隊で行進させられると、沿道のソ連兵や住民が私たちを一人ずつ頭を撫でるので不思議に感じていたら、以前日本人が帽子の中に腕時計を隠していたのをソ連兵が見つけた、それから頭を撫でるようになったとのこと。カラングイを経てブカチャヤで貨車から降ろされ、大きな鉾山のある収容所にたどりついた。

千葉県 奈良光雄(旧姓 印藤三夫)

やがて夜中に、見渡す限り白銀の雪の広野の中に下車を命ぜられ、これが我々の目的地の第五収容所、バム鉄道と称する第二シベリア鉄道のタイセットより五つ目の収容所であり、収容すべき建物とてなく、二重に張り巡らした鉄条網に囲まれた中に天幕が十個ほど並んでいたのが我々の住居となった。

酷寒の中、天幕の中に小さなドラム缶を切ったストープで薪を燃やして暖を取るのだが、外は零下三〇度以下、天幕の中も零下五〜一〇度ぐらいで防寒具一式を着けたまま眠るのだが、顔のまわりに自分の吐く息で真っ白く霜が降り、着のみ着のまま、軍用毛布一枚が支給され板の間にござ寝となり、実に極悪の環境でたちまち衰弱者が続出する状況であった。

抑留地の生活

福島県 大和田正友

カラガンダに到着したのは十月二十一日である。十八日間の長い列車の旅であった。第六収容所の一晩に待っていたのは、南京虫の襲撃であった。天井をはつてきた南京虫は人の真上に来ると、パツと落下して、ものすごい痛さで血を吸うの

だ。刺された跡には二点の傷がつく。イタリヤ人やルーミア人が帰国した後、血に飢えていた南京虫は遠慮会釈なく攻撃してくる。防ぐのには皮膚を出さないうことである。手にも靴下、顔や頭には袋を被るしかない。昼は木の割れ目深く入って隠れていて、退治が困難なしろものである。

収容所は高さ二メートル五十くらいの塙に囲まれ、その前後四メートルのところに鉄条網が張られており、それに近寄ると望楼の見張り台の警備兵の注意を受ける。逃亡したところで砂漠の中の炭坑町、逃げ通せるものでない。冬など塙に雪の吹きだまりができて、逃亡者は成功したかに見えましたが、零下六〇度にもなる夜の温度、凍傷になり足を切断する羽目になった人もいます。

兵庫県 田中護朗

歩いた歩いた三日間、大羊、盤山ばんざんを経て奉天省海城に着いた。砲兵連隊の兵舎に着いた。

既に日本軍が入っていた。集結地らしい。二棟の兵舎に分かれて入った。ここには第三方面軍司令部や一部関東軍司令部、それに隷下師団の将校、当番兵、下士官らが集結していた。後にわかったのだが、関東軍の将校で編制した第八梯団と言っていた。三百五十名くらいだったと思う。集結した上、やがては日本に帰れるものどだれもが思っていたから、大した不安などなかったのだ、のんびりと過ごしていた。

「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残す勿れな」と厳しくたたき込まれていたのだが、捕虜となっても大勢だと観念も変わってきて、あきらめもつき、少しのんきになっていたようだった。

ここに落ち着いてからは、ソ連の指示で雑多な作業があった。主に海城停車場での貨車への積み込みだった。周辺の工場施設、特に鞍山製鉄所から運んだ煙突、耐火煉瓦など、あらゆる資材を積んだソ連は、泥棒そのものだと思う。ここでの生活は、約二カ月近く続いた。満人が柵越しに、パイチューや饅頭を持って交換に

来る。ソ連兵にロシア語を習ったりして、のんびりあきらめムードだ。

和歌山県 柴田英雄

○月○日 今から我々は下船する、ここはウラジオストクの西方にあるポセツトという港であると、元軍司令部の高級参謀である〇大佐が緊張した面持ちでソ連側の命令を伝え、今こそ忍びがたきを忍ばねばならない運命にあることをよく自覚して自重してほしいという意味の話であった。

○月○日 なかば放心したように足を引きずって小さい丘を越えて間もなく、前方の緩やかな斜面に幕舎の一群が見えてきた。私たちの収容所であるらしい。濃い緑色をした幕舎の群は、黄金色の草原の中に鮮やかに浮き出て美しい緑の村を形成していた。それは砂漠の中に見えるオアシスといった感があった。緑の村に到着して、私たちはその場に倒れるように座り込んだり寝転んだりして幕舎の割当てを待った。幕舎には長方形の大きなものもあれば、小さいもあり、円錐形のも混じって形は様々であるが、一定の距離間隔をおいて整然と並んでいた。また、林立するストーブの煙突は目前に迫るシベリアの冬を連想させた。

ようやく幕舎の割当てが決まり、私たちは一刻も早く手足を伸ばして横になりたかったが、それもできず、間もなく草刈りに後ろの丘へ出かけねばならなかった。それは夜の冷え込みを少しでも防ぐためのもので、毛布一枚を敷いただけでは過なぎせないということを参謀長に教えられたの作業であった。ようやく日の沈んだ西の空は一段と美しいあかね色に輝き、麓の幕舎は薄いとばかりにかすんでいた。

○月○日 ポセツトの幕舎に入ってから別は決まった仕事もなく、毎日ストーブの薪拾いが主な仕事であった。しかし、ソ連領に入ってから給食は一層悪くなって、わずかばかりのかゆだけで、いつもいつも満たされない空腹を抱えて身の動きが鈍るばかりか、気力も衰えてくるのであった。

福島県 山口小一郎

汽車が止まり下車するよう命じられた。下車した地面はカチカチに凍りついていた。クラスキノを出る時はまだ残暑が厳しかったのに、もう零下十度を超えていた。夏服のままの姿ではどうにもならない。寒さと空腹で倒れそうになった。皆が寄り集まり、体をこすり合せて時間を過ごした。通訳が来て、隊列を作り行軍せよとのことで行軍した。約二キロ程度の行軍であったが、どうにも耐え難いみじめなものであった。約二キロほど歩いて行った所に真新しい收容所ができていた。急に造ったのであろうが、何とも寒さをしのげるようなものではなかった。

新潟県 田中文平

夜明けを待つてまた出航、二日目に着いた所はナホトカ(後で内地引揚げの港)であった。そこで下船させられ「ダワイダワイ(行け行け)」とせき立てられて野宿しながらの行軍、皆空腹と疲労とでふらふら人の後を追う。夜になるとシベリアの空気は寒い、毛布を頭からかぶつてとぼとぼ歩いた。

大分奥地に入った様子、着いた所は山に囲まれたラゲール(收容所)、有刺鉄線が二重に張りめぐらされ、四隅には機銃を据えた見張台、常時ソ連兵が監視している。日本の捕虜を入れるために準備していたのかと聞くと、いや、これはゲルマンスキー(ドイツ人)を入れるために造ったのがちよつとお前たちに間に合つたと言っていた。我々の收容所はバラック建てで屋根はシート張り、小屋の周りに土を積んで風除けとしたお粗末なもの、中にトロッコを伏せたようなストープが置かれてある。電灯がない、水道がない。薪は山から取つてこなくてはならない。翌日から我々の原始生活が始まった。

まず、マッチがない。火を焚くには大変だ、火打ち石にて綿のようなものに火花を落とし、ふうふう吹いて煙が出たら一安心。燃えやすい物に点火する。電灯の代用は、山から松の木の松やにのところに小さなこつばに割つて火をつけ、次から次と絶え間なく燃やして明かりにする。まるで何百年も時代が逆行した

ような錯覚を感じる。朝起きて点呼のとき、顔は油煙で真っ黒で、涙の目をこすつた跡が眼鏡猿のような顔で、みんな見合つて大笑いしたものです。

静岡県 橋本茂次

九月二十七日午後三時ころコムソモリスク駅に到着。それより徒歩にてコムソモリスク地区第八收容所へ四時半ころ到着した。

收容所へは他部隊の人と共に四百人ぐらいで入った。この收容所は元ソ連の罪人を入れた所らしく、二階建てで二棟もあり相当な面積であった。到着してから我々の手で周囲を三重に鉄条網で囲つたり、便所なども作つたりした。

静岡県 赤堀四郎

入所は十月末、牡丹江駅より貨車に詰め込まれ、非衛生な家畜並みの扱いを受け、約一カ月後、收容地タイセット地区ネーベルスカヤに着く。もう一面の銀世界。この駅までは鉄道ができており、行軍は少しくらい。十月十五日、海林編製の作業第一四八大隊千名はこの地に完全抑留の身となった。ドイツ兵か囚人收容の古びた天幕が並び立ち、幕舎生活が始まった。石油基地があり、糧秣の基地と町作りの計画で作業は倉庫と官舎の建築が主だった。倉庫完成後は、毎日到着する貨車より倉庫へ搬入、特に樺太からの冷凍サケ・マスの五十トン車が多く、昼夜別なく強制労働で酷使された。入浴など全くなく、冬季は週一回くらい、小桶二杯で全身を洗う。シラミなどの発生も多く、設備ができてからは月一回程度、衣服の乾熱消毒あり、身体検査は、裸体になり、尻の肉をつまんでの健康度等級をつけて作業に出すなど、まことに乱雑なものだった。

和歌山県 瀧本宏

イルクーツクを過ぎ、タイセットに着き、森林地帯に入り、ネーベルスカヤとかいう地点から三十キロほど離れた山の中の收容所に入れられた。

所内には建物が六棟で二千人收容されることになり、内一棟は炊事場と浴場であった。その後、我々が糧秣を取りに鉄道のそばまで行くようになって知ったことだが、二キロぐらいの間に二カ所の收容所があり、全員で五千人ほどになつてゐることが噂された。この地域での收容人員らしい。私たちは小隊五十人、三個小隊をもつて中隊とし、三個中隊で大隊をということで作業隊を編制した。ネーベルスカヤから百六十三キロ地点で野宿や仮宿舎を作りながら、森林伐採や丸太二ツ割りの板敷き道路の建設に従事した。毎日が「ノルマ、ノルマ」で作業は厳しく、党の監督官に追い立てられ、日照時間の長い夏場は十六時間労働が通常のことであつたし、また冬場は想像以上の寒さで平均零下三五度から四五度であつた。零下五〇度になもなると空気まで凍つて、きらきら輝いて見事でしたが、こんな日は作業は休みであつた。

私たちが最初に收容された場所での食事は高粱か粟であつた。量にして茶碗一杯ぐらいで副食は何もなく、栄養価値のあるものではなかつた。

島根県 高尾和良(旧姓 坂田)

十月二日ごろと思う。イルクーツクの第二收容所に到着した。

この收容所に到着一番、部隊長の言われた言葉は、今も時々思い出し、懐かしさと同時に当時の身の引き締まりを思い出す。「本日より我々は、ソ連衆人環視の中での行動については日本人としての品位を失う行動を絶対にするな、部隊長は当地で骨を埋めても、貴様ら全員内地に帰すよう努力するから頑張つてくれ」、この一言は生涯忘れることはないと思う。

抑留生活の実態

この收容所は既存の建物で、收容人員は二千人くらいと思うが、詳細は不明。中はほとんど二段式で板敷で、何も無い。電気、暖房(ペーチカ)は一応完備していた。作業は各所属により種々で、他の人のことはあまり知らない。当初は木炭自動車の薪の生産の仕事で、ノルマなどは聞いたことがない。ときたま夜中に貨

車から石炭下ろしに出役させられた。

昭和二十一年二月ごろから半年くらいたつたと思うが、突然炊事の応援に行かされた。

ここで給食について述べると、一日に黒パン三百グラム(これはどこも同じと思う)、雑穀、野菜、魚、肉、砂糖などそれぞれ規定の量があり、我らの收容所では雑穀(量については忘れた、以下同じ)は、燕麦を主とした麦類、野菜はキャベツ、馬鈴薯、魚は鮭、鱒(日により異なる)と一緒に大釜で雑炊した固めのものを各食事時間に配食する方法がとられていた。十分とはいえないが、他の收容所から帰られた人の話では、かなり恵まれていたようである。

石川県 伊藤鍊二郎

五〇トン積みの有蓋貨車に四十二人ずつ三段の棚に詰め込まれて出発したのが十月八日。それから四十余日、行けども行けども港には着かず、十二月初め下車した所が中央アジア、ウズベク共和国のベグワード(現在ベガバード)で、四周峨々たる高山に囲まれた。パール高原の麓、フェルガナ大盆地の一隅であつた。

盆地を貫くシル川の水を利用して運河を通し、ベグワードに発電所を建設する大目的のために一万人余の日本人の労力が投入されたのである。

水路の掘削作業には泣かされた。現場監督は我々より古参のドイツ兵で、怒鳴り散らすわ、暴力を振るうわけで、私も撲られ片耳が聞えなくなつてしまつた。高原から吹き下ろす寒風の厳しさは想像以上で、一メートル以上も結氷した土を掘り起こすのに精根尽き果て、夜半の寒さは、敷布団の藁を抜いて足に巻き付け、靴のまま寝る有様であつた。

水路に渡された仮橋を渡つて作業に行くのだが、絶望の果て、欄干から身を踊らせて濁流に身を投げる日本人が日に二人、三人と出てきた。金網を張り巡らして身投げ防止を図つたが、それでも網をかけ上つて飛び込む者がいた。私

自身、今日こそは自分もと何度決心したことか。その都度、満州に残してきた妻や二児が目前に浮かんで、涙ながらに耐えるしかなかった。

熊本県 安田 剛

私たちは、九月中ごろ、奉天出發―ハルビン經由でソ満国境の黒河に十月初めに着く。そこからソ連領に渡り、貨車に乗せられ、長い苦しい旅が始まりました。そして、旅の終着点は中央アジア・ウズベク共和国のタシケント、昭和二十年十月の末でした。

タシケントの収容所前に並んだとき、あの入り口の門の重い扉、そして、周囲に張られた鉄条網、四隅の望楼を見たとき、いよいよつらい地獄の生活が始まるのかと思ったとき、不安が胸いっぱいになり、いつしか目に涙したのを今でもはつきりと思い出すことができます。

神奈川県 香坂 毅

飢えと寒さと自由を束縛された貨車生活も、満州出發以来五十日目の十一月十六日、カザフ共和国テケリに到着し、第四十地区第八収容所に入る。夜は不気味な狼の遠吠えを耳にする人里離れた山岳地帯。宿舎内は二段式の寝台が向かい合って並列し、藁布団と毛布一枚が支給された。もちろん電灯はなく、ランプが所々に形式的にあつたが用をなさず、日が暮れると眠るしかなかった。翌々日、ソ連軍医による奇妙な体力判定検査が行われた。軍医が腹の肉を手でつまみ、即座に等級が決定された。これに基づき職場も決まり、即、黒パンに影響した。私は判定の結果三級(軽労働)だったので、ノルマ(割当基準量)が低く、作業は辛くなかったが、その代わり食事が少なく、体力を維持することが大変だった。入所以来、過酷なカロリー不足が三カ月ほど続いたころになると、オーカー(病弱者)をはじめとして栄養失調による病人が続出し、死に至る者が出始める。何とか体力を保持するため、満州より大事に持っていた下着類、石

鹸、靴下、手拭いなど交換できる品物はすべて黒パンに化けてしまった。飢えと寒さのテケリでの生活後、同地区アルマタ大五収容所に移送される。もし、あのままテケリに残されていたら、命の保証はなかっただろうと述懐した。

石川県 垣内久米吉

期待していたタシケントでの下車命令はなく、さらに百キロほど南下して、パプロダルという小駅に到着したのは十一月十八日。奉天を出てからまさに九二カ月の飢餓と不安の大旅行であった。シベリア”横断”はまさしく”黄疸”であった。

綿畑の寒村

パプロダルは、町というより、不毛の砂漠を開発した綿畑の集落であった。

高い堤防を築いて運河を造り、水を引き、堤の両側には防風林がすくすくと伸びている。林と林の間は約一キロ、それに囲まれた綿畑が何枚、何十枚と続いている。

重いリュックサックを背負って、ガタガタするひざで幾つかの防風林を過ぎて、やつとバラックに着く。泥造りの建物で、屋内は壁に沿って止まり木が二段式に組み立てられている。

疲労困憊の老兵たちはしばし土間にぶつ倒れていたが、私は上段の窓際によじ上り、立てかけてあつた泥柳の枝で編んだ畳ほどの大きさの敷物(私たちはこれを編畳と呼んだ)を止まり木と止まり木の間に渡してネグラとした。

着いたその日から、私たちの一番の関心事、“食事”がないという珍事に所内には私たちの糧秣は用意されておらず、満州から運んで来たコウリヤンや大豆であると聞かされて、これからの生活を思つて戦慄するばかりだった。

このバラックの前住者はドイツ、イタリア、ルーマニアの捕虜で、そのうちの何人かは今も所内のパン工場、炊事場、洗濯場などに残っている。新入者の所持品や装具検査があつて、目ぼしい物は取り上げられるということも教えられて、一同

戦々競々、時計などの隠し場所に苦心する始末であった。

和歌山県 山本良市

和歌山県 森中定夫

白樺林を過ぎ、丘陵の草原を西へ西へと走り続けること二週間くらいで、着いたところは、バルハシという所で、十月上旬であったが、もう雪が降っていた。

そこで三方年間、帰るまで移動なしで働かされたのです。

バルハシに着いてから毎日、私物の検査が繰り返し行われた。小刀などは全部引き上げられる。これはあとから考えると笑い話のようだが、次第に検査が行われることがわかってきたので、大事な物は事前に収容所内の雪の中に隠した。ところが、広い収容所の四隅にある監視塔から監視兵がちゃんとお見通しで、あとから全部あばき出された。

山口県 中根弥太郎

黒河を渡って、ブラゴシチエンスクから一カ月に及ぶ貨車列車の旅となる。そして十月一日、カザフ共和国カラガンダ市にある九十九地区第八ラーゲルに収容される。

以前ドイツ兵が入っていたという収容所は、四方を鉄条網で囲み、四力所に自動小銃を持ったソ連兵が監視していた。これが四年半にも及ぶ藤部隊千二百人の地獄の生活の場であった。

初めて入る炭坑。斜坑を歩いて下りると、木の枠が折れ、ボタがボロボロと落ちたり、水たまりがあつたり、恐怖この上なし。八時間働いて上がる時は、空腹でめまいがして、倒れる者数知れぬ状態であった。

黒パン三百グラム、粟や燕麦のお粥が飯盒の蓋に一杯、これが入坑するときの食事。終えて上がったときは、パンなしで、お粥とスープが一杯。腹の中はからっぽで、食堂を出るのに未練たっぷりであった。

出発してから一カ月余りを経て到着した田舎の小さな引込線で貨物列車から降ろされて、仮収容所まで行軍した。草原を進んで着いたが、天井から星の見える建物であった。

トラック輸送で最初の収容所へ送られた。ここは半地下式で二段棚の木造だった。そして、ストーブもダルマ式で薪を焚いた。草原は枯れ草、雪は少ないが寒さはひどいもので、零下五〇度を下り、空っ風に曝されるので、寒いより痛い感じで朝の人員確認点呼は特に辛かった。また給与がひどく悪い。今思い出しても腹が立つ。人間用と家畜飼料を混合して支給されるため、米麦粟黍でも無搗精の粗穀つき高粱、粒玉蜀黍、大豆粕、大豆、な豆などを給食用に配給され、煮ても煮ても食べられない食事ができて大迷惑で、体調を壊し下痢、栄養失調で体力がガタ落ちになった。慣れない労働を強制されたから、飢えと寒さに耐えきれずに二十一年の春を待たずに無念の憤死を遂げた戦友たちが、凍った草原で死体を狼に食われたという噂を聞いた。草原には沢山狼がいて、ラーゲルの夜は遠吠えの声を聞いたものです。

ラーゲル入りに当たって入浴があり、衣料品一切を熱気消毒する一方で体毛を剃り落としたので、虱は死んで楽になったが、翌日から体毛の伸びるに伴って痒くて困った。

鳥取県 井上万吉男

平壤三合里に終結

昭和二十年八月末日、教育隊の倉庫から被服、糧秣等が配給になり、一人用天幕を急造してリュックサックとし、詰め込めるだけ詰めて背負い、三合里に向けて出発した。我が家への土産にもなるだろうと思うと、重いのも苦労はなかった。夕闇迫るころ辛うじて三合里に到着した。入口にはソ連兵が大きな声で騒いでいる。なんのことかと思ひ近寄って見ればリュックサックの点検である。折角

担いだ荷物をほとんど没収され、苦勞の第一歩が始まった。

狭い盆地に約三万人の日本兵が収容された様子、我々幹部候補生は天幕生活だったが、後に馬小屋に移動、馬一頭のねぐら奥行三メートル・幅二メートルの場所に一個班十五人が起居した。常識では考えられない広さである。寝るときは七人と八人に分かれ、交互に足を入れ合い横向きで重なり合うさまは、なんとも言えない格好だ。夜中に用便に行き、帰ってみれば一寸の隙間もない。仕方がないので、元いた場所に寝ている同僚の上に横たわっていると、疲れも手伝いつの間にか眠ってしまう。朝になって目が覚めてみると、元の姿に割り込んでいたのだった。

岩手県 荒田昌三

ハバロフスク市の近郊、ホール地区の小駅ビヤズムスカヤで下車し野宿となる。翌日、山林地帯へ通ずる経便山林鉄道のトロに乗る。途中、セレブリヤナの交差点で五百人ずつに分かれ、一班は山の駅フロントボイに到着した。降り立った眼前には、二重に有刺鉄線を張り巡らせた柵の中に、古びて粗末な校倉造りの木造が二棟建っていた。以前、ドイツ人の捕虜が使用したと言うが、ひどく荒んだ建物で、これが我々の収容所となり、いつか帰国するまでの住み家であった。運命の途とはいえ、何も考えることができず、冷雨も加わりなかなか眠れなかった。

ウラジオストックの初夜

数日間の行軍で着いた所はウラジオストックと聞かされ、旅の疲れを癒すこともできず夕食の準備に取り掛かることにした。炊事班員の募集から手掛けた。約千人余りと聞き、三十人の炊事員をにわか作りで編成した。ソ連から釜と食糧の配給があつたが肝心の燃料がない。しばらく待ち係員に督促するが、「待

鳥取県 井上万吉男

て」と言うだけで一向にらちがあかない。午後四時を過ぎても配給の気配がない。五時過ぎの夕食に間に合わない。意を決して薪のかつ払いに出た。三十人総出である。見渡せどそれらしい物が無い。ウラジオストックは漁港があるのに気づき魚箱を狙った。一人五箱ずつ担ぎ、百五十箱の燃料でどうにか夕食を炊くことができた。

まだ配給の薪は届かない。定刻に夕食ができてよかったと自己満足をしていた矢先、ソ連兵がやつて来た。カツパライのことであろう、一言二言言いながら有無を言わず営倉まで連行された。将校らしいソ連兵より詰問があり、有りのままを報告した。彼いわく、「燃料は必ず配給する、それまで待たねばならない」とのこと。小生は「日本人は三食とも時間励行にしなければならぬ。夕食の時間に間に合わないのでやむを得ず、悪いとは知りつつ魚箱をカツパライした」と弁解した。将校は重ねていわく「ソ連は個人の物を盗むのは構わないけど公の物を盗めば重罪だ」と言い、これ以上問答無用とばかり無灯の鉄牢獄に押し込まれた。これで弱冠二十一歳の生涯は終わりと思ひ、一睡もすることなく走馬灯のごとく巡る思いに耽っていた。家族のことをはじめ、彼の人のこと、あの出来事、そして軍隊生活等々二十一年間の生涯は脳裏に刻み込まれ、はかない一生に別れを告げ瞑想に耽った。やがて夜も明けたであろうところに、扉が開き再度の訊問である。覚悟を決めた以上どうにでもなれと自暴自棄になった。腕組みをしたままの対応である。向こうも余り追及しなままジープに乗せられた。いよいよ冥土行きかと思ひ目を閉じていた。「ダワイ」という声に目を開いたら昨日のラーゲリであった。ソ連の初夜は牢獄であった。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。

熊本県 畠田 完

抑留地の生活

直径十五センチくらいの丸太を積み重ね、内と外から壁土を打ちつけ、とこ

ろどころに明かり取りの窓があり、屋根は木を小さく割ったものを張っており、薄暗い建物が宿舎だった。

中は小さい丸太の畑が二段あり、雑魚寝をするようになっており、四隅と中央には大きなドラム缶がヘチカの代わりとして据えてある。勿論電気はなく、ランプが用意しており、殺風景な山小屋である。

捕らわれの身になって、いつもつきまとわれたのが「シラミ」である。着たきり雀の上、入浴も一カ月に一〜一・五回、誠に不潔そのものだ。入浴中に衣類の煮沸消毒、殺虫をするが、成虫は死んでも、縫い目にびっしりとついている卵は健在である。シャツを脱いで、爪でビシッビシッとシラミつぶしが日課である。寝床の板の間には南京虫という厄介なやつも住み込んでいる。ただでさえ生きているのがやつとというのに、貴重な血を四六時中吸い取られる毎日だ。

島根県 星野好夫

乗車して十日くらいたった朝、チタ付近と思われる地点に列車は止まり、我々憲兵のみ下車を命ぜられ、ソ連監視兵三名と積雪三十センチの原野を北方に歩くこと十時間、ふと倉庫のような小屋のある付近に到着した。これが宿舎であり、当分我々の寝床であった。

この小屋は、後で分かったが、ソ連がソ独戦の際捕虜となった者(囚人)の宿舎に当てていたもので、最近まで入居していたようだ。

入口は二重になっており、最初のドアを開けると一メートルくらいの広場があり、更にドアがあつて階段があり、十メートルくらいの奥行となり通路があり、両方に丸太を半分にしたものが敷いてある。内部は真つ暗で、掘つ建て小屋に等しい。ある程度の高さに土を盛り雨をしるぎ、屋根の代用となっている。明かりはないが松ヤニを焚くのだとのこと。程なくだれの顔も黒くなり目だけがすどく光っていた。水は近くに穴が掘つてあり洗面などは可能であったが、食事は極悪で僅少のパンとスープのみのあわれな状態だった。

千葉県 宮崎定雄

昭和二十年八月二十五日、ポートワ二港上陸後、輜重八八連隊と軍属等混成約千名で志村大隊を編成。小生、北田小隊の分隊長。隊員十五名。本年六月入隊の若年補充兵と三十五歳以上の老年兵、半々です。

貨車にて北上。二十七日、ルジューに着く。鉄道線路保線作業と捕虜住居一棟増築。収容所は木造板張りのバラック。周囲は高さ四メートルくらいの板塀で、有刺鉄線が張られ、四隅に望楼があり、ソ連の歩哨が望楼上より昼夜警戒していた。

兵舎は、細長い部屋の中央通路の中段に急造ドラム缶のストーブ一個で採暖。両側は二段ベッド、一間に上段八名、下段七名で、身動きも不十分なままの就寝。夜中、用便後ベッドに戻しても寝る隙間なく、ストーブの側で起床まで過ごす人多数です。夜食のパンの配分の大小で大騒ぎ。百から百五十グラムの物を等分に切り、即製の天秤ばかりにて調整。小指の先くらいの切れ端を串に刺し、七、八人グループごと籤引きにて取り合う生活。照明のただ一個のランプは石油の配給不足で、白樺の皮を薄く細くして燃やして交代で持ち、夕食分配中、照明にする。松脂の使用もあり、照明暗く周りの人、油煙で真つ黒になり、不評。

新潟県 片桐貞夫

最初の収容所は、タイセットから一九キロの付近だと聞かされた、一九ラーゲルと呼んでいた。着いたときは全員弱つていて、一週間くらいは薪集めをさせられた。

どんどん日本兵が送り込まれ、大体四千人くらいいたと思う。兵舎は幕舎で、真ん中に暖炉が置いてあり、薪を燃やす大きいものであった。二段ベッドで床は白樺の組丸太が並べてあったが、満州から持ち込んだアンペラが一枚敷いてある

だけ。慣れるまでは背中丸太の跡が着いているのかと思うような状態で、しかも頭の方は防寒帽をかぶっていないと凍りつくような寒さであった。

石川県 松田春雄(旧姓 北村)

「ダワイ、ダワイ」「ブイストラ、ブイストラ」訳の分からない怒鳴り声に追い立てられて、どれだけ歩いたか。ある地点で四百名を残し、更に残り六百名が数十キロも進んだようだ。ソ連領に入ってから収容所は「チタ地区(第二四地区)」「ナルイム」にある第四分所であった。シベリア鉄道本線の要地、チタから二百キロ余東南方の所である。

収容された所は、ソ連の重罪犯が流されていた監獄とかで、二重に張られた鉄条網の間に、尖端を尖らせた三メートルほどの松の丸太を隙間なく立てた柵があるという厳重さで、隅の二カ所に立つ柵には、監視の歩哨が自動短銃を持って昼夜の別なく見張っていた。ソ連軍に抵抗して戦った日本の部隊には、報道的に冷酷な扱いをしたということを後になって聞いた。

入ソした十月はもう初冬で、日一日と寒くなっていたが、夏服の着の身着のまま来て部下たちは、寒さに震え上がり、冬服や防寒具をもらうまでは随分と苦労した。

身の回りの整理もそこそこに、早速作業に狩り出された。作業は、見渡す限り林立する松の伐採と運搬、トラックへの積載などで、私の小隊は運搬作業であった。

北海道 遠藤勝好

昭和二十年初めに第八十九師団司令部に召集され、四月末、釧路から樺太択捉島の天寧に派遣された。終戦で現地で召集解除されたが、ソ連軍に侵攻され、日本軍・民二、三百名が拿捕され、船でハバロフスク州のソフワガニに連行され、その中に私も含まれていた。これは九月二十三日のことで、汽車で二時間足

らずの第一〇八収容所に抑留されたが、地名は思い出せない。

六十名足らずの小さな丸太小屋で、もう一棟あった。私のいた小屋では本道出身者は二十人で、他の四十人は大阪出身者だった。道路造りや森林伐採作業に出されたが、二十年の冬は特に寒気厳しく、零下六〇度まで低下し、週に六く七人は死亡した。

岡山県 妹尾正一郎

ゲネラルパーティ

列車の着いた所はチタ州ヤブローワヤであった。ソ連における捕虜は内務省の管轄する一般収容所と、赤軍の管轄する労働大隊である。私たちは赤軍管轄下の第五一八大隊に編入される。ヤブローワヤで各隊、各方面に分かれて行った。私たちも二個中隊二百名が最初の収容所ゲネラルパーティに向かった。そのころは個人の私物も沢山あり、中隊の食糧なども持つていて、人里離れた雪の山道を、重い荷物を背負い、二時間も歩いてやっと現地に辿りついた。そこで柵(二メートルくらいの丸太の先を鉛筆のように尖らせ、びっしりつめて並べた柵)の中に追い込まれた。

柵内は切り捨てられた落葉松の枝ばかりで、また収容所も建てられていなかった。ここが今から住む収容所かと驚いた。その後は、毎晩雪の降る中での野宿で、焚き火をしながら夜を明かし、苦しい毎日であった。

やがて収容所の家造りが始まった。柱を建てる所に穴を掘り(穴を掘るのが大変である。土地が凍っているので二時間ぐらい焚き火をしても十センチしか掘れない)、掘った所に柱を建て、後は校倉作りのように丸太を積み重ね、丸太と丸太の間に苔を並べるだけである。屋根にはつじの枝を並べ、その上に馬糞を十センチくらい載せた。馬糞は暖かくてよいが、夏になって雨が降ると寝ても黄色いしずくが落ちてきてまいった。一カ月も作業してやっと二段式の宿舎ができた。ゆつくり休めるかと思ったが、翌日には私たちのような若くて体の強い者

百名は一山越した別の所へ移動させられた。今まで一生懸命造った収容所は五一八大隊の病院になるのだと言っていた。残留者が病院の勤務者となり、軍医の補助を務めたとのことである。

福島県 相田正明

抑留地の生活

タイセットに着くと、ソ連兵の古い防寒具を渡され着用して、トラックにて約三〇キロ以上離れた山間部の丘陵地帯で降り、所定の地点まで行軍となりました。途中、奥地より出てくるソ連人の女囚の大集団とすれ違い、余りにも多勢にて驚きました。警備のソ連兵に聞くと、政治犯、思想犯とのことでした。交代に我々が、シベリアの原野にある収容所に入りました。なんと幕舎であり、厳しい寒さに身がふるえました。

幕舎の中は、上下二段式に板で左右に区分され、真ん中に薪ストーブが設置され、出入口は天幕が二重になっており、誠にお粗末な幕舎で酷寒のシベリアの冬を過ごすのかと茫然となりました。幕舎の収容人員は約五十名くらいで配置されました。貨車生活の連中とはバラバラに編成されました。ソ連側は日本兵を「腹切りサムライ」と言つて、団結と結束に非常に敏感になっており、折につけて編成替えが行われたものです。収容所は総勢千五百名くらいだったでしょう。ここからシベリア抑留者の悲劇が始まったのであります。

休む間もなく目の前の山に入り、薪としての小枝拾いが始まりました。終戦から強行軍、そして缶詰状態での抑留列車で着いたところが、零下四〇度以上にもなるシベリアの大地であった。飢えと寒さ、そして絶望！そして酷寒の中で幕舎生活であります。その中で収容所建設のための森林伐採の重労働が強いられました。

神奈川県 宮沢信行

貨車はやがてタイセット駅に着く。乗車以来十五日目、ここが目的の場所であつた。

貨物列車から降りる。一面の雪、雪で十一月半ば、私たちは普通編上靴で目的の地まで徒歩。前後左右にソ連兵が警備する中を、凍った地面に足を滑らせ、転びそうになりながら九十二キロにある収容所に辿り着いた。夕方薄暗い中、靄もやの立ちこめる暗い雰囲気の収容所に、我々千人の兵隊が入った。以前に入っていた者と合わせ約二千人の大世帯である。この地点は、東経百度、北緯五六、七度の位置であり、日本の樺太の北の先端辺りであると思つた。皆それぞれの丸太でできた兵舎に入る。

電気設備もなく、換気の強い兵舎で、二階への階段がついた板敷きの寝台である。着いたその時からローソク代わりに白樺の皮を燃やす。また、これがよく燃えるが、煤が多く出て、目も鼻も煤だらけ。皆黒人のようになり、人のことはよく分かるが、自分もそのとおりであるのに気がつかなかった。そのうち、機材庫の方からわずかずつケラキンが配給になり、灯火の方も落ち着いた。毎日わずかばかりの食事、それも零下六〇度地帯では輸送する方も大変らしく、黒パンなど夜中の十時、十一時ごろ到着する。それを空腹を抱え、我々は待っている。

広島県 難波繁男

入所したその日から

やつぱり噂どおりと歯を食いしばり貨車上の人となつた我々を尻目に貨車は走り続けましたが、これからが大変。食事は今までとは全く異なり、高粱、粟、トウモロコシなどを煮たお粥か黒パン、一日によく二食、貨車が停まらなかつたら一食、それが三週間もの長旅、体にはシラミがわき出し、痒くて眠れない日が続き、着いた所はクラスノヤルスクという都市の収容所でした。その所長が「お前は日露戦争、シベリア出兵の仇討のため、これから賠償の肩代わりとして働か

せる……と正に青天の霹靂のことば……これは大変なことになったぞ……と顔を見合
わせました。

滋賀県 小西信太郎

ウスベク共和国の首都タシケントは七十万都市で、シベリア鉄道輸送から開放
され、例の石畳のガタガタ道を疲れた足を引きずりながら腰に飯盒と空缶をぶ
らさげて、四列の隊伍を組み、ソ連兵の監視のもとにやっと目的地へ。古びれた
汚れた建物に大門を開き、今度は五列に隊伍を整え入門する。ソ連の将校が
二、三人、出迎えるため制服に身をまとい、長靴をはいた大尉級の襟章をつけた
厳格を保ちながら、人員の点呼をする。

建物の周囲は、鉄条網が三重に張り巡らされ、四隅には監視の高台が聳えて
いるのが望見できた。囚人収容所跡の感じがした。

目色の変わつたソ連人たちが、柵の外からさも珍しいものでも見るようにじろ
じろ見ている。

しばらく後、身体検査や装具の検査があり、抑留生活が始まった。

まず便所に行つて驚いた。厚い板に穴があけてある。二十五カ所、前後に五十
カ所向かい合つて用を足す。話をしながら、御気張りやすの真つ最中。初めは嫌
な感じだったが、別に気にしないようになり、互いに話を交わしながら、また煙
草を吸いながら用便の……ここで、収容所だけで経験できるものでした。やがて、
建物の中に入り、じめじめした薄暗い部屋へ、上下二段の丸太で組まれた床板が
敷かれ、そこに詰め込まれ、やっと落ち着く。

少し時間を置いて広場に集合の連絡があり、外に出ると、はやソ連の監視兵
が四隅の高台に自動小銃を手にして立哨警備していた。長い輸送途中で死亡し
た者も数多く、やっと命を取り止め、互いに励まし合つた友達と共に喜び合っ
た。

人員点呼を今までは隊伍を四列だったが、ここに来てからは五列に並べて勘

定する。人員の点呼においても、三、四人で数を調べ、皆寄つて数字を出したら
三人三様の変わった数字が出た。顔同様に知恵も不足しているらしい。ようや
く点呼を終了し、収容所長の訓示があり、朝鮮人ふうの通訳を通じて説明さ
れる。

東京都 小林保

武装解除及び捕虜収容所

八月二十五日、各自に支給されていた兵器、部位が所有していた爆弾等をソ
連側に渡し、ここに無条件除伏をし抑留生活に入る。

北豊原の樺太興農製糖工場農業の倉庫、牛舎、豚舎を改造し、これを捕虜
収容所とし、周囲には高さ四メートルくらいの有刺鉄線による鉄条網が張り巡
らされ、四ツ角には監視の望楼が建てられ、四六時中監視されていた。

工兵隊は技術者の集団であり、作業は主に建築、架橋、森林伐採等であつ
た。

作業は日曜を除く毎日で、収容所出発は朝七時で、作業終了は大体午後五
時か六時ごろで、収容所に帰るのは午後六時から七時ごろである。

作業出発時から作業中、帰路時まで必ず監視のソ連兵が二人くらいついて、
作業人数の多いときは、四人のときもあった。

東京都 金子亮輔

昭和二十年九月ごろ、日本へ帰国するのだと乗船命令を受け、ソ連兵がつい
ていた。連行された所はウラジオストクで、港に上陸。市内を巡つて対岸の丘の
上にあるラーゲル(収容所)に。地区はわからない。九月二十日ごろだと思いま
す。

シベリアは九月に入ると日本と異なつて寒い。収容所は二重に有刺鉄線で囲
まれ、四隅の高い櫓には歩哨(チツソボーイ)が自動小銃を抱えて立っている。カ

ザルマー(兵舎)又は収容所と言う。入る前に服装及び所持品の検査があり、二百人くらい入れる粗末なものであった。ペチカが東、西に一つずつあった。一週間は収容所を修理したり、環境の整理をした。その後、ラボート(労働)に出る。芋掘り、製材所、ドース(家造り)、レンガ積み、左官や大工は前職を生かしての作業である。

北海道 桐木留吉

抑留先は、アムール川を挟む黒河対岸のライチハで、帰還までここに収容されていた。

畜産地帯と見られ、牛を追い出した牛舎が収容先となった。丸太作りの壁塗り、堅牢な建物で糞臭漂う中、ここに押し込められたが、一人当たり畳一枚分の余裕があった。採光、換気不良であったが、暖房(薪)効果高く、終戦時の服装のままで過(こ)せ、ソ側からの防寒具は支給されなかった。牛舎一棟辺り二、三百人収容され、これらの牛舎がかなり散在していた。

島根県 景山利造

後でわかったことだが、ここが我々の目的地の、チタ州ジブヘイゲンの収容所の位置であった。

収容所の外周は、柵の高さ三メートルくらい、直径十五センチくらいの丸太でギッシリと埋められ、さらに外柵の外側は有刺鉄線による鉄条網が張りめぐらされ、その四隅には、望楼が一段と高く、警備兵が自動小銃を持って目を光らせていた。内部は建物らしきものは何一つなく、原野のままである。

まずは、そこで流行した天幕舎を建て夜露を凌ぐことになる。時既に九月中旬、シベリアの冬は早く、夜間幕舎裏は霜で真っ白になり、寒さに慣れない我々はこの先が思いやられたが、かくしてシベリアの一夜は屋外で明けた。

島根県 高尾敏教

最終目的地に着いたのは、月も変わり十一月になっていた。カザフ共和国カラガンダ地区第九十九捕虜収容所第十一分所、ここが私たちの落ち着き先であった。奉天北陵で編成された部隊は鞍山の高射砲第八六〇部隊と照空隊第一二二四部隊と合わせて一千名で、第八六〇部隊の松本少佐を長とし、第一二二四部隊の富沢大尉を副とし、軍医一名外に見習士官ら旧軍隊の延長であった。収容所は以前ドイツ人捕虜が収容されていたところで、入所したとき、まだ数人のドイツ人捕虜とルーミア人がいた。建物は煉瓦造りで外壁には白粘土を水で溶かして塗ってあった。雨が降ると、塗料が流れ、たびたび塗り替えさせられた。部屋の割当ては一室に五〇人くらいで、寝台は四人用で、木造の実に粗末なもので、板と板の間には南京虫がいっぱいいた。入所早々よく作業に引き出された。

北海道 庄司忠

収容所での生活は、すべて重労働で、食事が一日一片の黒パンと、一日二回、水に塩を入れたスープがカップに二杯のみの支給で、木の二段ベッドに布団も与えられず横になるので、骨盤の横がタコになりはがれて出血しました。

その上、少しばかりの食事もロシア人や他の民族に奪われて飲まず食わずで重労働に従事。また、風呂は月に一度手桶二杯を浴びるだけ。シラミと南京虫に残り少ない血まで吸われた上、作業場ではマシカ(蚊)にまで追い打ちを掛けての間断の無い攻撃に悩まされ続けました。

レシヨウテイ駅から北に向かい、二千人程いる収容所でようやく数人の日本人と出会うことが出来ました。翌年春にはまた伐採や土木の重労働となり、日本人とは会う事もなくロシア国籍の各民族や各国の人々の中で働きましたが、ロシアマフィアにピンハネされたり略奪されたり、食事もせずに重労働にかり出され、たちまちにして廃人となりました。

その收容所は二千人の收容所で、炊事場も一般用と病院用の二カ所あり、余分に貰つてきて日本人の仲間に食べてもらい、配給の黒パンが残るので日本人と朝鮮人の共同班に分け与えてあげることが出来ました。思えばここまで道程は決して平坦なものではなく、常に死と直面しながら命懸けで生き抜いた年月でした。

北海道 村岡 務

朝になると兵隊が来て、人数を調べるついでに時計、万年筆、財布等何でも見つけた物は取り上げてしまう。両腕に時計を三個も四個も喜んでいた兵隊もいた。それが終わるとパンと水を車内に入れてくれた。

外は全然見えないが毎日走っている。停車するとはばらく走らないようなので臨時列車のようだった。指折り数えて二十二日か二十三日目に貨車から降ろされた。何にも見えない砂漠であった。そこから二〜三キロ歩いた所に收容所が見えてきた。よく見ると家の屋根らしいものが所々にあった。後で聞いた話によるとウズベク共和国のベゴワードという所であった。

收容所には三千人くらいの捕虜が入っていた。気候は旭川より暖かく、夜雪が降つても朝九時頃には溶けてしまう。民家は地下に作られていて地上には屋根が所々に小さい山のように見えるだけ、時々ラクダの列が通つて行くのを見ることが出来る。年間通して雪が二〜三回降るが雨はほとんど降らなかった。砂漠地帯には所々にトゲのある草と綿のなる草が生えているだけ、木は生えていない。崖の下には河が流れていて、その向こうは緑地帯で水田、畑の農場地帯になっていた。

收容所での生活は朝六時に起床、洗面、食事、八時に発電所の建設作業に出る。十一時三十分に戻つて来て十三時に出発、十七時に帰つて来て夕食、自由時間、二十一時就寝となっていた。作業は土工、溶接、自動車の運転等が主な作業で、私達は土方作業の方に行った。噂によると技術者はなかなか帰して

もらえないというので土方をすることにしたのだ。三十六 秆キロメートルの水路と発電所の建設工事で、満州で一番大きい発電所を解体して持ってきた発電機だということだった。

門を出る時は五列にならなければソ連の兵隊達は数えられないらしく、四五回数え直しをしなければわからないらかった。四列では計算出来ないといった教育程度で、日本人よりかなり低い。特にシベリア系は無学に等しいと感じた人数の確認が終わると隊列の前後に兵隊がついて作業場に行く。そこまでは約一〜二秆くらいであった。

岩手県 橋本達夫

かくして、ソ連の命令により入ソに先だつて作業大隊が編成され昭和二十年十月十五日満州国齊々哈爾出發、ときに一、五〇〇人の兵員が有蓋貨車に詰め込まれ輸送の間、食糧の供給が悪いため腹痛、下痢などの患者が続出し、停車中などは周り一面トイレの状態となっていた。

十月二十八日、シベリアに入つてから二つか三つ目の駅に下車、一〇秆ほど歩いてセルロバヤ收容所(当時ハタブラク)に強制收容されたのである。

途中ハイラルにて三人加わり入所人員一、五〇三人になっている。この收容所は編成時第二十四收容所(チタ州チタ市)第十二分所(チタ州ボルジャ市)に位置している。兵一、五〇三人の部隊別内訳を見ると、一七七連隊が一、〇〇〇人、一〇七挺進隊二〇〇人、一〇七通信隊二〇〇人、師団司令部他一〇三人であることも後でわかった。

私が特に忘れないで書きたいところは、この收容所は、元々は、独ソ戦苦戦のためソ連国内において経済的にも苦しく、特に労働者の不足も加わつて休山になり、廃鉱同然の状態であったタングステン鉱山で、以前は囚人受刑地にもなつていたように聞いている。

宿舎の建物も丸太を積み重ねた古いもので、トイレその他の施設もなく、周

困には鉄条網をめぐらして、四方角に昼夜監視兵が立つて、ものものしい警戒ぶりである。鉾山の設備も悪く、特にコンプレッサー故障、坑木なども腐れ、いまにも崩れるようだ。横杭は氷になって一メートル程にも達し全面的に結氷している。最初の作業はその氷を砕いて搬出することから始まったが、空気が薄く倒れる者まで出たのである。

福島県 大宝 清

興南の港よりダモイ(帰国)ということとで船に乘せられ出港したが、左手から陸が離れない、これはおかしいと皆が騒ぎ始めた。ナホトカに荷物を降ろして、それから日本に向かうとこのことで、半信半疑だったが結局は嘘であった。マンドリンで脅されて下船させられ、貨物列車に詰め込まれて数日、いつ止まり、いつ発車かわからない汽車の旅、また何時間も動かないときはソ連兵がすきを見て、「ダワイポパイ(交換しろ)」とくる。交換ならまだよい、恐喝、略奪、特に腕時計、万年筆などは目の色を変えて持つて行こうとした。途中「赤飯が出るぞ」と大喜びして口に入れたら、ボソボソの高梁飯でがっかり。おかげで腹をこわす者が続出して大変だった。

着いた所はサンタヘーゼ第十四收容所という所で、見渡す限りの平野だった。遙かかなたに湖(ソ満国境の興凱湖と聞いた)が見える所だった。朝は地平線から二、三メートルもあるような太陽が赤々と顔を出し始め、三分の二くらいにもなるとポコンと飛び出すように地上に昇る。また沈むときは、三分の一くらいになると急にかなたに引きずりこまれるように姿を消す。大陸ならではの風景である。翌日からはもうフラポータである。

千葉県 伊藤千次

ようやくたどりついた所はチパリ收容所。周りに高い鉄条網を巡らし、二カ所

に高い望楼があり四六時中歩哨が立哨していた。その中に事務所、炊事場、風呂場の一棟と丸太小屋(丸太を横に積み上げた家)が二棟、広さは三間の十間、床は二段板でなく丸太がならべてある。中央に箱形のストーブが一個、電気はない。たどりついたが真つ暗闇で私には何も見えない、戦友に助けられて丸太の上に毛布を敷き枕元に装具を置き眠った。朝、暗闇で身支度ができるように心配してくれた。

東京都 嶋崎武男

苦難の年の暮れ昭和二十年十二月二日、我々は最初の收容所テルマに着いた。このとき皆体力を消耗しきっていてペーチカの薪を拾いに行くのがやっとだった。ソ連側もこんな状態は承知していて、しばらくは作業をさせなかった。ここで食わされたのはかつての関東軍の軍馬の飼料だった。皮かぶりのコウリヤン、カチカチに乾燥したトウモロコシなどで、どんなに煮ても軟らかくならなかった。しかも給付されるのはほんの一握りの量であった。わずかな岩塩で味をつけ塩湯に近いものをスープと称して腹に流し込んだ。しかしそれは食後しばらくすると皆小便になつて出てしまい、いつも腹は空っぽだった。皆食へ物の話をするのが楽しみで食い物にありつくのが第二の仕事であった。ソ連側は我々の体力が少しずつ回復するのを見て燃料運搬、家屋修理、伐採、木材搬出、製材など、しだいに労働は重度になつていった。私も伐採をやらされたがシューバーを着ての作業は重労働だった。

新潟県 真嶋藤作

数時間、雪の今にも落ちてきそうな、零下十五度もあろうかと思われる厳寒の中に立たされ、ようやく有刺鉄線のある鉄柵の、かつてドイツ兵が收容されていたという一部木造の幕舎に入れられた。これが入ソの労働拠点の始発点となつたのであった。時に昭和二十年十一月十八日の暁であった。それから一兩

日は自活のため、まずは寒さに備えた薪取りが全員の仕事であった。

福井県 井上博夫

さて、この北へ向かつて行軍中の全く予期しなかった不幸の出来事が一つあります。

ある晩五人の同胞がシベリアへ連行されることを知り逃亡したのです。しかしソ連の監視兵と軍大とによりこの五人は目的を果たすことが出来ず、朝私達の部隊が発砲のため整列したとき前に出され、三メートル位の間をあけて並ばされて、一人ずつ順番にソ連の兵士によって銃殺に処せられたのです。これは私達日本兵への見せしめのためと知らされ、今後は絶対にこのような行動は取らないようにと部隊長より命ぜられ、その後はこのようなことはありませんでした。この時の様子は何と言っても同胞が目の前で撃たれ、ソ連に対し「この野郎！」と心の中では叫ぶものの、部隊長といえどもどうすることも出来なかったのです。大きな荷物を背負っていても皆前にばったり倒れ、なお首に銃剣を差込みとどめを刺す。なかなか抜けないので足を踏みつけて銃剣を引き抜く。何とこれが無条件降伏の代償か、畜生この野郎と心に思い、手を合わせて拝みのが精一杯でした。

こうしてダワイダワイ(早く早く)とマンドリン小銃を肩に掛けたソ連兵の監視のもとに、北へ北へと野宿を続け、ブラゴエを目指して夜暗くなるまでの行軍。着いた所で糧秣を受け飯盒炊飯、もうあたりは暗く手探り状態の中、空にはきらきら星を頂きながらの野宿。段々と体は毎日に疲れ果て、顔はこげ髭は延び、体力のある者となし者との差ははつきり出始めてきた。連行される途中小休止があり、座つて休むうちに眠りつき出発の合図にも目の開かぬ者には、お互いに気を使いゆり起こすといった状態も出てきた。

こうしていよいよ最初のラーゲルに着き、大体四〇人から五〇人の班に編成となり、いよいよ作業に入った。作業は土方仕事や木の伐採、搬出、薪造り、道

路作り、鉄道の路盤工事、発破用の穴掘り作業であった。大体の作業は班単位のノルマで、病弱者のいる班長はいつもプラップ(作業監督)よりノルマ遂行について百分を強制されていたものである。私は子供の頃から百姓の手伝いをさせられ肉体労働にはある程度自信もあり、初めて親に貰ったこの体になりたいなあと感謝をし、祖国の空を眺め手を合わせ、元気で働いて必ず無事に帰ることを心の中で報告をしていたものである。初めの二年半くらいは次々と奥地へ移動させられ、鉄道の路盤工事をさせられた。

週一回の割で風呂があった。しかし、風呂といってもボーチカ(木の桶)と言って、日本で見ると一斗入りの酒樽のような木の桶であったが、上が小さく下が大きい。その桶に約七リットルの湯で要領よく自分の体を洗い流すといったものである。終わり次第襦袢などの取り替えをした。さすがに風呂の中は暖かく保たれていた。しかし終戦直後から入ソ当時は白い虱と南京虫に悩まされたものである。特に虱は体の衣服のいたる所にぎつしりと、まあなんとこれだけ繁殖出来るものだなあと、今思い浮かべると背筋がぞつとする。この虱は寒さには大変強い。零下四十度以上の寒さの中、衣類を外に置いて何ともない。これを退治するにはただ熱湯につけるか煮沸する以外はなかった。このような中にも年に一回くらいは身体検査があり、体の弱い者はオカといって、そうした施設に集められ約一カ月から四十日位の間は重労働は免除、その上食事は普通食が与えられ、元の体に戻るとまた作業隊に送られるといった具合であった。

滋賀県 橋本健二郎

イズバストコローヤからなお森林鉄道のあるみすばらしい駅に着き、行軍となりました(後でクレドルと知る)。何もわからぬ異国の地、北満にいて二年冬の寒さを経験してはいるものの、今敗戦の身となり、色々の事を考えつつ銃も剣もなく、ただ身につけたものを大事に山の方へ山の方へ入っていきましました。奥に入るにつれ道も細く、どこへ行くのかわかりません。ようやくたどりついたのが小さ

なバラックの小屋、ただ寝るのみ。水は近くに小川があり、洗面炊事の用は足り
ました。その時この收容所に来た者は数十人だったと思います。

それから幾日もたたぬうちに、町の一一五收容所に転じました。ここは少し
多くの兵が收容されており、佳木斯の陸軍病院の軍医さんや看護婦さんまで
おられました(もちろん断髪軍服姿でした)。

初めの間は毎日焼けた山の掃除や收容所の中の施設整備で、我々は初めから
労働をしなければというとは思っていませんでした。收容所はどこも丸太組み
で屋根は板張りのお粗末なもの、寝台として木造りの二段ベッド、電燈とてなく裸
のカンテラで、油の油煙で朝には鼻の穴が黒くなっていました。

幾月かしてまた私は同じ町の一〇四收容所に移され、そしてここが私の抑留
生活四年の館でした。約千人程であつたでしょう。

某大尉が日本の隊長で、ナチャニツク(所長)は大きい人でした。作業係の将校
やら、收容所の四隅には監視の望楼があり夜は監視兵が立っています。周りは
三重の有刺鉄線の柵が張られ、近づくとレールを切った鐘をカンカンと鳴らし
た。

一日の生活は、まず朝の点呼、五列に並んで守衛の兵が数えますが、これが
なかなか手間がいろいろでした。冬の寒い間はほんとうにつらく、それから作業。

食事は、初めは軍隊の飯盒をさげて実もないシヤブシヤブの汁をもらいする
ように飲みました。パンはどこも同じ黒パン、一日三五〇グラムでした。耳のつい
た固い方がかみしめるのに味があつて歯ごたえがある。人間も動物と変わりな
いソ連抑留生活になつて初めて上下も貧富もない、ただただ生きるには食、餓鬼と
いう言葉があるが、まさにその通り、食べられるものはなんでも口にするように
なりました。今日の生活を思うとただただ涙、あわれ栄養失調で倒れて行つた
戦友を思うとき、もつたないという心が言葉として出てきます。

和歌山県 山口為治郎

物すべてを詰める。みんな到着の安心感や不安感の交錯する気持ちのようであつた。

いよいよ下車。夕刻近く二十分ほど歩いて收容所の門前に到着した。引率し
てきたソ連兵が五列に並ばせ人員を点呼するのだが、なかなか数え切れない。
何回も繰り返しやられるので皆参つてしまった。言葉が通じるなら一言文句を
言つてやりたいのだが、じつと我慢の時が流れた。まず入浴の支度を、と通訳か
ら伝えられて準備しようとするのだが、一向に進まない。

收容所は第一、第二と五百人ずつに分かれたが、その場で三時間余りも立ち
んぼさせられた。入浴の番が来たので、まず衣類の殺菌消毒からシラミ、ノミの
駆除をし、その間にこの前と同じようにバケツ一杯のお湯で垢を落とす。さあ部
屋はどこか、小さい建物だ。百人ほどこしか收容できない。

この一夜を眠れないままに明けて、翌日からもう一つの建物に入ることになつ
たが、天井のない建物で、早速修理にとりかかった。通訳の言うには、ドイツ軍の
爆撃でやられたそうだ。建築専門の兵たちによつて修築され、入所することが
できて喜んだ。

島根県 田中勤助

十一月の初め、やつと着いたらしいがどこか解らぬ。今度は行軍である。皆荷
物を持つてトボトボと歩き出した。もうなるようにしかならない。寒くなつてき
た、白いものがチラホラ降つて来た。遠い。やがて日も暮れ出てきた。皆疲れた
ようだ。やつとラーゲリらしい白い建物が見える。あそこらしい、ホツとした元
囚人の收容所だつたようだ。塀壁の四角に高い監視塔が見える。ラーゲリの中の
建物にそれぞれ分配されて入つた。

ラーゲリでの生活

建物の中の奥に鉄パイプのベッドが積んである。部屋を掃除してベッドを並べる。

疲れた身体をベッドに横にしたのは夜中も大分遅くなつてから。しばらくしたら身体がかゆくてたまらない。誰も同じらしい。灯がついた、見ると、いるわいるわ、南京虫が壁をウヨウヨしている。とても寝れたものではない。自分は初めて南京虫を見た。肌には二カ所ずつ噛み跡が残っている。大騒動である。ベッドを壁から離して、空缶をベッドの足に敷く者等、各人対策を考えている。

岡山県 横畑友三郎

国境の街、満州里も通過して遂にソ連領内に入った。それからは一面雪に閉ざされたシベリア平原を昼夜の別なく走り続け、途中わずかに給食のため停車するのみである。その際、貨車のドアから限られた視野で眺められる風景は、荒涼殺伐とした風景である。

車内には暖房もないために、夜間はひしひしと迫り来る寒さと飢えとにさいなまれる日が幾日も続いた。

かくして長い旅も、ようやくにして彼らが目指す街へ到着したようである。時に昭和二十年十二月二十五日昼過ぎごろ、列車が停車し、下車が命ぜられた。この地がどこなのか、また何という街なのか、誰一人知る者はいない。下車したところは木材の積卸用の引込線の停車場であった。この街にはどこを見ても駅舎らしい建物は見られなかった。

材木置場に集合が終わったところ、トラックに乗って将校以下十人がやってきた。輸送指揮官との引き渡し手続き中に、同胞の兵士であったトラックの運転手に尋ねたところ、この地はウズベク共和国のアングレンという街であつて、同じ関東軍の将兵約五千人が五カ所の収容所(ラーゲル)に分散収容されており、労働に従事であると言う。私たち鞍山大隊は第六収容所に入ることが判明した。

ソ軍将校の引率により徒歩二十分くらいでラーゲルに着いた。早速作業班の編成及び宿舍割りが行われた。私は、旧補給中隊を主力とした第一作業班に組み入れられた。各班はおおむね百人前後で編成された。

所内には、将校用宿舍一、下士官兵用宿舍六、他に炊事室一、医務室一、洗濯兼シャワー室一、衛兵所の計十一棟の建物があつて、私は一号棟に落ちついた。建物の周囲は、テレビの報道等で諸兄もご存じのように、有刺鉄線が二重に張りめぐらされ、しかも内側の鉄線には常時電流が通じており、また、四隅には地上五メートルぐらいの望楼が建てられ、これには自動小銃で武装した監視兵が昼夜警戒と監視を行い、なお衛兵所には将校以下二十人が常駐していた。入所後一週間は身辺整理や糧秣運搬等の軽作業に交代勤務であつたが、年も改まった二十一年一月二日からいよいよ本格的な労働が課せられるようになった。

広島県 榎上竹士

しばらくしてハバロフスク市街に入る。ソ連兵の警戒が厳しくなる。ハバロフスク駅に下車、郊外の収容所へ。玄関に日本人が作った大時計があり、多くの日本人が忙しく往来していた。市街の浴場で入浴し、衣類を消毒して健康診断を受けた。そこからさらに列車で北上。コムモリスクに到着。コムモリスクはハバロフスクからアムール河を下ること約三百キロであつて、発展途上の新興工業都市で、交通の一大要衝であつた。収容所は郊外の閑静な所にあつた。角材を積み重ねた二階建ての大きな倉庫を改造したもので、周囲には真新しい板壁を張り巡らし、四隅には望楼が立ち、自動小銃を腰にソ連兵が立哨警戒する。

広島県 稲村 香

四平街を出発して一カ月余り、ヤブノロイ山脈を越え、オムスクを通過してペトロパロフスクから分岐し南下し始めた。誰言うともなく中央アジアに連行せられ、生化学兵器の試験台にされるとか全員去勢されるとか囁かれたが、それ程動揺するものでもなかった。分岐して三日目、草原の中に三角の黒い山が見えた。ボタ山である。そこで初めて炭坑に連れて来られたことが解つた。

輸送中の食事は不規則で、あらかじめ予定された場所に到着しないと飯にありつけない。真夜中であつたり、二食の日も度々あつた。また、排泄も大休止のときでないと出来ない。そのときは貨車の下にもぐり時間を気にしながらやったものである。

収容所生活と炭坑作業

万一の病人など想定して出発するとき軍足に入れてきた非常用白米を、最後の会食とするため井戸水で炊飯したが、苦くて食べられない。あとで当番からの伝達で、上水道以外の水は絶対飲んではいけないと注意された。地下水は鉄分が異常に多く、前年ドイツ兵が鉛毒により多数死亡したと聞いた。到着したところはカザフ共和国カラガンダで、第六収容所に収容され、軍隊組織のまま収容所生活が始まった。

愛媛県 木屋隆行

九月下旬、今のウズベク共和国の首都タシケントの近くのアングレンという町に朝早く着いた。直ちに点呼、山の中腹に向かった。途中、大きな河（深くはないが川幅は広かった）に架かる今にも崩れそうな橋を渡り、目的の収容所（ラーゲル）に着いた。昼は過ぎていた。それから丸三年間の住まいであった。

このアングレンは炭坑の町で、北は天山山脈続きの山、南はヒマラヤ山脈続きの山で、両方とも中腹以上は年中雪があつた。西は砂漠で、東は人の話では前の河の上流で大きなダムがあるとのこと、しよせん私達抑留者を放し飼いでできる恰好の場所であった。

ここでは私達日本兵のほか、ドイツ、イタリアまたポーランドの兵隊もいると聞いた。が、実際に会つたのはドイツ兵だけで、作業の途中彼らに会うと、十年の知己に会つたように手を振り声をかけて喜んでくれた。

このほか、ソ連の囚人もいたようであるが、この人達の監視は特に厳しく、一般のソ連人も私達も近づくとはできず、遠くで作業をしているのを見た程度

で、どうも政治犯、思想犯の人達ではなからうか。

私達の作業の行き帰りは「銃」を持ったカンボーイが一人ついてきたが、二十一年の終わりごろから全くつかなくなり、私達だけで行動した。

愛媛県 山本繁夫

当時、私はちょうど満二十歳になったばかりだった。三宅少尉殿も恐らく幹候上がりで私より二、三歳年長だと思つたが、実際は五歳年長だった。コムソモリスクの収容所はハバロフスクから二五〇キロ北で、北緯五十二度でアムール河の流域にある工業都市であつた。造船所、飛行機工場、レンガ工場、魚缶詰工場、製材工場があり、建設途上の将来性のある町に思えた。当時人口は十万人くらいだった。日本人の収容所も第一から四までと、郊外に五、六、七、九収容所と第十一の九分所と中央病院があり、一万人から一万二千人収容され、前記の工場と伐採作業とバム鉄道建設、赤レンガ四階建てのアパート建築に従事した。

熊本県 大坂公夫

昭和二十年十月、海林第四百七十大隊として千人で編成、徒歩や貨車でイズベストコーワヤ（四地区）第一〇八分所に着いたのは十一月四日だった。

当時の姿は、各人、満州の収容所などで拾った缶詰の空き缶を腰のバンドにぶら下げ、これらの空き缶はそれから代用食器として、ブリキ職人によりブリキの食器ができるまで一年半以上使用した。むしろを背中に一枚背負い、顔は黒く焼けて痩せ、これが関東軍の末路かと思つたと誠に哀れでもあつた。

荒れ果てた収容所はこれといった設備もなく、翌日から近くの山から白樺の木を切りその丸太を並べて、上下四人休めるトンボ形の診断を各人でつくり、その上に携行していたむしろを一枚敷き、交替で夜通しドラム缶のペーチカを焚き、靴をはいたまま寝る生活であつた。

熊本県 西崎 通

数十日汽車に乗って駅に着いても、行き先不明を繰り返して、目的地であろうか数回停車している。鉄道左側に收容所らしい建物がある。周囲に鉄条網が張りめぐらされ、高い歩哨の望楼が見えた。ここに我々も收容されるのではなからうかと思っていたとき、下車命令。直ちに下車、人員点呼、丸太づくりの收容所らしきところに入れられた。

丸太づくりの收容所は、人間が生活できるような設備ではない。馬小屋同然で足の踏み場もない状況で、人間としての生活ができそうな状態ではなかった。さつそく次の日より作業編成がなされ、我々は鉄道線路工事作業班となった。

宮崎県 宮川健三

昭和二十一年五月二十七日午前十時頃、宮川、四元、某三人が呼び出され、防寒外套に冬衣袴を着用させられ、君たちは今から飛行機に乗せるから待機しておれとのこと待っていたら、本日は都合にて延期ということでもまた室に入つて一泊した。

五月二十八日晴天だった。例のごとく午前十時頃準備をして、收容所長の中佐から逃亡はするなと厳命を受けて飛行場に行った。昨年この飛行場の滑走路を八八三一部隊にて修理したのだ。この飛行場をソ連の飛行機にて飛び立つという敗戦国民となろうとは思わなかった……。双発のダグラス機にて、三十人くらい乗れる飛行機に名前を呼び上げられて日本人三人とソ連将校、兵士十数人と共に乗り、午後一時頃出発した。飛行機は静かに昇つて行く。連浦の部落が真下に、興南も興德里も真下に見える。あの列のあの家に妻も子供もいるのだ。一瞬自然に両手を合掌した。精練所の煙突が真下になると思う間に西湖津を真下に見た。飛行機は少しも揺れなかった。

本当に死を決心すれば訳なくこの人たちを殺してしまえるがなあとと思う。運

転台の操縦を見ている間に咸北の沿岸の上だ。ポセツト湾を下に見、ウラジオストク市街が見える頃になると、今迄の平和な朝鮮の風景とは異なり真つ白な壁のソ連の家々が見えるのが、あれは魔の家だと思われてならなかった。いやな重苦しい思いがした。三時間を経過した。飛行機は機首を下に向け着陸した。何という都市の飛行場か分からなかった。直ちに小さい室に入れられた。またかと思つた。しかしもう帰れないのだと腹が決まったので平気になった。体は少し太つていたし、何でもやり何年でも生き延びてやるのだと決心した。

一泊して明二十九日には自動車にて監獄に送られた。後で分かつたのだがウオロシーフ市の第八刑務所なのだ。裏には大きな建物の取り調べの家がある。東にはゲネラル中將の住宅というのがあり、身体検査を受けて室に入った。中には白系ロシア人、朝鮮人、満州人、日本人で五十人を数えた。室は四間に五間の室だったが、このような室が八つあり、この室は七号室だった。入るや驚いた。そして不幸中の幸いともいふべきだと思える奇遇な事があつた。中隊長だった田縁中尉と山崎中尉がおられるではないか。安心したという気持ちがあつた。自分一人と思つていたのに同類がいるじゃあないか、いかなる運命になるか計り知れないが同じ行動を取るのだから元気でやろう。我々三人は、家族に引揚げ状況はどんなになつているかなど毎日毎日、遠隔の地となつた興南のことを語り合つた。それがまた何よりの慰安でもあつた。

この狭苦しい室に五十人も入つているのだ。室はちょうど舞台のように二階になつている。下の者はやつとのことに入つている程度の高さで実に陰気だ。二階の中央には髪もひげも真つ白の井上中將(全国在郷軍人会長)、眼鏡の老人加藤泊次郎憲兵中將がおり、二階の左側には白系の獄長と威張る奴がいる。その列には通訳だった奴らが大きな顔をしている。連中は日本人をどんなにひどい目にさせているかしのれない悪党なのだ。満州人、朝鮮人、白系ロシア人、日本人、各民族ごとに民族性が異なる。これが食事のときに特に現れる。同じように分けパン、一定量にするために天秤を作りそれではかり分けるのだ。全員が見てい

る中で当番が交互にする。それでも色目で見ている。衣食足りて礼節を知るということをしみじみと身をもって体験した。畜生と同様だ。食糧一日五〇〇グラム、カーシャ(スープ)、コーリヤンを水炊きした水っぽい雑炊が夜は出る。何も仕事をしていない者でもあまりに少ない食事だ。本当にやり切れない気持ちになった。肴も本当に若干、野菜はほとんどなく、ビタミン欠乏は明白だ。自然に身体が弱ってくるのを覚えた。

戸外に出るのは朝食後の十五分、夕食後十五分、大便に行くときだけだ。小便は室にある樽にするのだ。室内に体臭と小便の臭気で頭が痛くなる。六月、七月、八月、室が狭いの五十人もうようよとしていたのだからとても暑苦しく、むせかえるような苦しさは例えようがない。本当に監獄というものがこのように苦しい所だということが分かった。室の北側に狭い鉄柵のある窓が二つある。それが高い所にあるから風は少しも入らない。カンボーイ(監視兵)が何かの用事で戸を開けてくれるのが何よりのシャバの空気が吸えるときなのだ。このときのように空気の有り難さを痛感したことはない。井上、加藤閣下とも毎日話をした。また将棋もした。話の材料もなくなり将棋もあきてくる。取り調べの話もその場で終わる。ここに来て六十五日目、どこかに移動らしいので数日前から毎日のように名前の点検がなされた。二百人中百八十人移動、二十人の重要人物は居残りになった。井上、加藤中将らは居残り。モスクワにでも連れて行かれるのだろうかと思わせざるを得なかった。

東京都 飯塚年男

いよいよ内地へ帰還ということで、海林で我々第七五八八部隊を主に千人で編成された第一二三大隊の隊長から話があった。「これからウラジオストクへ行き、船で青森に向かう。前に帰国した部隊に同行して青森から帰ってきた通訳の話だから、間違いない。ただ途中で下車して二、三日使役させられるかもしれないが、そのときはいやな顔をせず我慢して作業するように」ということだっ

た。

乗り込んだ貨車は、日本の貨車より二回りほど大きく、上下二段に仕切っており、窓といえるものはなく、暗く息苦しかったが、日本に帰れるとの思いであり苦にならなかった。

どこをどう走っているのか、何時間も停車しない。扉のすき間からのぞいてみると、どうもおかしい。夜が明けて空が白み始めると、太陽が列車の後方から昇ってくるではないか。東の方のウラジオへ向かうなら、太陽は列車の進行方向に昇るはずである。

皆、ガヤガヤ言い始めたが、どうしようもない。落ちつかない数日が過ぎて、荷物を持つて下車した。降り立ってみると、すでに雪がうっすらと地表を覆っていた。寂しい寒村、クレドールというところだった。

ここは、ハバロフスクからシベリア鉄道で約二百キロほど西の、イズベストコーワヤと北の第二シベリア鉄道(バム鉄道)のコムソモリスクとを結ぶ線で、その最初の駅なのか、ここまではレールが敷いてあるが、その先ははずされて荒れた路盤だけが残っていた。

この鉄道の建設と沿線の開発が私たちの仕事だった。

クレドールに着いた翌日の晩だったか、一枚の日本語で印刷されたものが配られた。『日本新聞』である。そこには「天皇の祖先は昔、地方の豪族であった」とか「日本一の大地主でどこそこの株をいくら持っている」とか、私たちには驚くようなことがいろいろと書いてあった。シベリアにおける洗脳教育第一号である。

ここで、がけを削りとりバーニヤ(浴場)をつくるということで、二、三日シベリアで初めての労働をして、テルマに移動した。

テルマはこの線のほぼ中間で、北緯五十度ぐらゐのところにある。支部や病院、学校などがあり、この沿線では一番大きな町で、テルマというのは、囚人とか刑務所という意味だということを知ったことがあるが、収容所の多いところで、ドイツ人捕虜の収容所や女子の収容所もあった。私の入ったのは二〇九分所、収

容所を分所と言っていた。ハバロフスク地方は第十六收容所と言ひ、その收容所長は、ゲネラル(将官)である。

昭和二十年から二十一年にかけての最初の冬は特に寒く、夜明け前には零下四十度を超すこともしばしばで、日中でも何回かあつた。

住居も食事もひどく、不衛生な生活で、下痢や肺炎などで多くの人が故国に帰れずに死んだ。この最初の冬を何とか生き抜いた人が、ダモイに結びついたのである。

シベリアの冬は、朝八時前、作業のため営門を出るころはまだ薄暗い。收容所わきの坂道をのぼると、関東軍の防寒短靴も、降り積もった雪が凍りついていて滑る。ようやく日が昇つてあたりが明るくなると、空気がキラキラ光って見える。ダイヤモンド・ダストである。

北海道 五十嵐甚吉

毎日海岸を行軍、北樺太のアレクサンドロフスク港に到着、この地で一週間程貨物船の荷揚げ作業、そして空船になった船に乗船して航海が始まった。航路は南下しているので日本に帰れると思つて歩哨に聞くと、わからない。スターリンしか知らないとの返事。二、三日すると右側に島が見えるも、左側には何も見えなくなり、沿海州とわかり、ここで日本に帰る夢がなくなり、着いた港がウラジオストック。下船して町の中を歩くと、上部との連絡不十分で、また船に乗りナホトカに上陸。トラックに乗つて二百キロ程北上、サマルカ收容所に到着。金網におおわれて、歩哨が立っている。バラック收容所での強制抑留生活が始まった。昭和二十年十月頃だったと思う。

医務室、炊事場、パン工場、守衛所と整備され、男ばかりの生活とは言えトイレが大小兼用の丸太造りで、沢山の人が使用出来るが、人間としてこんないやな思いは二度と再びしたくないと思う。

入浴は、週一回收容所の外での蒸し風呂。脱衣所に歩哨がいて、所持品検査

をして自分でほしい物があれば没収する。くやしい思いをした。やがて毎日、朝夕の点呼で外に整列すると、本人はもとより全員の襟首にシラミが列をなして付いており、毎夜ペーチカの火にあぶつて退治したが、追いつかなかつた。山での伐採作業とトラックによる木材の運搬と、往復監視のもと作業ノルマを与えられるも、毎日目標を達成していた。食料は少ないながらも、がまんして、野外の作業休息の時に、芋掘りの終わった畑に小さな芋を拾い集め、焼いて食べては空腹を満たしていた。

千葉県 鈴木博

夕方鞍山駅出発、私達は名前を呼ばれず編成もれであつた。曹長以下下士官三十人、兵六人ポツンとあとに残り一晩富士見小学校に泊つた。その時、八路軍将校、下士官、兵十数人が部屋に入つて来た。私達は物音に眼をさますと、八路軍の一人が「皆さんはシベリアへ連れて行かれてしまうから八路軍へ入つてくさい、優遇しますから。また日本の兵隊さんが大勢いるので是非」と言つて帰つて行つた。敗戦後一カ月足らずで我々はすでに強制労働に従事していたのだ。敗戦の惨めさである。十月に入り逃亡する者もあり、目標を失つた船の航海と同じで、イラクへ行くとかいろいろな情報が飛んだ。それも信用できないが、軍人が行かなければ一般人、俗に地方人の男子が家族を見捨てて行かされること、私達若い者は独身と若さの軍人の誇りが当時はあつたので決心し、十月十三日編成して貨車に乗り鞍山駅を出発した。

ソ連軍の年齢層は十代から五十代まで、老若混じつた人間編成だった。貨車は六十トン車で内部は二段に仕切り、床板中央部を直径三十センチ位丸く切り抜いて大小便共用に使用した。何と言つてもシベリア鉄道である。夜も昼も走る。走行中は扉の鍵を掛けてしまい、貨車ごとにソ連兵が自動小銃を持って警戒している。車両七、八十両連結して機関車二台で炊事車も連結している。駅に着くと各車両から食事を受領に行つたり大小便を済ませたり大変である。右

側にバイカル湖を見て走り、日本海に着いたと騒いだのも歩哨の「東京ダモイ、東京ダモイ」のせいだったか。

二十日ほどでノボシビルスク駅に夜着いた。入浴との伝令があり一同待機して、身軽な服装で行けとのことで間もなく着いたが行列で、それも屋外で寒く、身震いしながら待った。ようやくして屋内に入り、入浴といつてもシャワー式で、シャワーを浴びていると身体中がかゆくなって来て手拭いでこすると垢がポロポロとよじれ落ちる。突如誰かの「あまり強くこすると風邪をひくぞ」との声に間髪を入れずに「あつそうか」と思わず大声で、一同顔を見合わせた。何日ぶりかでありこりと笑みが見受けられた。輸送列車の食事では満腹にならないが、貨車専用停車駅に着くとソ連人の生乳フレブ(パン)、干しアンズ等の食品と、初めのうちは捨てたりしていた軍足、シャツ等汚れた衣類でも物々交換できた。鞍山出發時に新しい毛布、衣類等多量に持っていたのが幸いした。

先勝国のソ連に入っても物資不足が目立っていた。十一月十三日ウズベク共和国タシケント駅到着、我々二百人が下車。大きな荷物を背負い、また両手に持ち、薄い雪解けの道路を自動小銃を肩に掛け不気味なソ連兵に警戒されつつ、行き先も分からず長蛇の列で約一時間歩き、途中二、三回休憩をとって着いた所が仮収容所らしく、門から入ってやれやれと思ったが直ぐに屋内に入れず屋外に待機。やがて日が暮れて皆いららが激しくなつて来た時漸く二つの部屋に灯がつき、二人のソ連将校が現れ、二人ずつ荷物を持って検査が終わった順序に舎内に入る行程と分かった。やがて出て来る人は入る時と異なり大きな荷物が没収され、半分以上に減らされてがっくりしながらぶつぶつ言つて舎内に入つて行く。束の間、さすが百戦の勇士といわんや、機転と思われる。誰かが外で順番を待つ戦友の「荷物、タバコ、靴下等束ねておいては駄目だ。没収されるからバラにしておけ」と叫んだ。また、特に貴重品の時計等は身体に着けておけば外套の上からポンポンと叩くだけでOKとなると教えられた。早速実行したら没収品も少なく済んで一安心した。数時間費やしただろうか、全部終わつて夜も大分

更けた。黒パンとスープが少量の夕食であった。次にトラックに便乗して町へ入浴に行き、眠りについたのは夜明け間近であった。

収容所の位置は高い所に位置しているブドウ酒工場の建設用地らしかった。数日経過したある日、糧秣受領の使役で収容所外へ出た。建設機械等があり、下の方に民間飛行場が見え、ダグラス旅客機が離着陸していた。収容所周圍は有刺鉄線を張り巡らし、四隅には高さ三メートル位の望楼があり、昼夜ソ連兵が自動小銃で監視していた。約四週間ゴロゴロ毎日遊んで過していた。そのうちに楽しみな三回の食事も、初めのうちはわれ先にと飯盒を持つて行ったのに当番が叫んでもだんだん急いで行かなくなってきた。やがて原因が分かった。実は炊事場の大平釜で、材料は粟の日本では重湯とお粥の中間程度の食事を作るのだが、炊事当番が苦勞して平均に分けるつもりでも先に行くとうしても最初は水分が多くなり、後になる程濃くなってくるのであるべく遅く貰いに行く。他に何もないので人間本能のしからしむるところであった。

千葉原 榎本義雄

終戦を過ぎた昭和二十年十月十九日、私達は北朝鮮の咸興から二個大隊(二個大隊千人)乗船させられた。私の大隊は中隊長であった増田大尉が大隊長、そして私、榎沢(旧姓)曹長が副官として、ウラジオストック經由で内地送還との話で、喜びと希望で乗船した。しかし船内生活三日間、その間諸々の思い出や流言飛語が流れ、敗戦国の私達捕虜はいかなる虐待を受けるであろうか、諸々のことを想像して、海を見下ろしてはいつそのこと飛び込んで死にたいような気にもなった。

そのうちに船はウラジオストックに到着した。上陸後、野戦帰りであろうか荒々しいソ連兵達が「ヤポンスキー(日本人)ダモイダモイ(帰国だ)」。その言葉に嬉しいやら不安やら種々想像しているうちに有蓋貨車に詰め込まれた。

監視兵付きで、用便、糧秣受領以外は外には出られない。臭気と“人いきれ”

の貨車の中、その列車は北へ北へと進む。不安であった。食糧はメンタイ(スケトウダラ)一日七匹、三日間の貨車生活は終わった。着いたところはメンレバロフという田舎町の収容所であった。

夕方五時頃であったが、ソ連本部と私達幹部だけ幕舎を張り、その他の者は野宿ということになったが、三日間のメンタイ生活で喉が渇くし、腹が空いてどうにもならなかった。

私は大隊副官として、ソ連本部に水と食糧の要求をした。ソ連側は私の要求を承知したものの、野戦帰りの兵士は私が腕にはめていた金文字腕時計に目をつけ、それをくれとせがんだ。食糧と水を何とかしなければならぬと思い、通訳がいけないので手まね足まねで漸くのこと納得させたが、私からは腕時計が消えた。

水汲みも案内してくれた。薪も用意して一日一人当たり三合の米をくれた。皆、喉が渇き腹は空き、一人ずつ飯盒で炊いた三合飯を一度に食ってしまった。翌日半数以上の者が腹痛と下痢に大騒ぎとなったが、その翌朝は皆おさまったようである。

その翌朝いよいよ三人ずつ身体検査と服装検査で逐次収容所に入れられた。二千人全員が収容所に入るまで二日かかった。

検査の時にはヒモ類を全部取り上げられた。困ったことに越中ふんどしも取り上げられ、皆フルマラであった。後で聞いた話であるが、我々が首を吊ると思つて取り上げたらしい。しかし、ふんどしだけは交渉して漸く返して貰った。

十月二十七日いよいよ捕虜としての生活が始まったが、一週間位は毎日身体検査や点呼やらで、その間一、二、三級に決められた。三級の者は他の収容所に転送され、結局体の頑健な一、二級の者が残されたのであった。その人数は五百人位になった。だがこの部隊には通訳がいなかったので私がソ連本部との交渉に当たり、言葉が通じないため随分と苦勞の連続であったが、少しでも皆が有利になるよう懸命に勉強して、約三カ月位して殆どの言葉を話せるようになった。とに

かく我々の収容所は本当に田舎なので、野天風呂で設備も悪く水も無く、寒さと狭い部屋に多人数入れられ、不衛生のためか疥癬かいせんが発生してきた。また冬になると寒さと栄養失調で死亡者が出始めた。

入浴は普通は三日おき位で、はじめのうちはシラミが湧き、休日はひなたでシラミつぶしに専念するありさまだった。けれど氷点下三十五度以下になって衣類を野外に出しておくとしラミの卵も死ぬ程だった。とにかく水の少ない所で冬は凍結し、ソ連兵のコップ一杯の水で歯を磨き洗顔するという器用さには、節水という点で見習う必要があった。

私達の収容所の食糧は、週二日位は僅かな米、その他は黒パンとスープ、たまに入っている肉は元軍馬であつたろう硬い馬肉か豚の頭だけ。それだけに皆の目は食糧の配給に集まる。スープの配分は二個の飯盒を天秤にかけて計り分配し、それは非常に深刻なものであった。

石川県 荒川 宏

昭和二十年十二月半ば、ポーランドのカチンの森の連想(将校の大量虐殺)に脅え、ソ連のコンボーイ(護衛兵)の強奪に遭いながら、辿り着いた森の中の半洞窟の収容所ラーダ。着いた夜すぐにバーニヤ(入浴場)に引率された。身に着けている物全部を針金の輪に通して、熱気消毒の準備をする。

瞬時に冷え込んだ裸の一群に、漸く順番がきて一列に並んで控室に飛び込む。ハンガリー人らしい勤務者が、片手にバリカンを持って次々と陰毛と腋毛を刈る。ソ連のシストラ(看護婦)がジツと監視している。「捕虜になつてしまったなあ」と、言いしれぬ悲哀の実感が胸にこたえた。

タタールの丘を越えて

ダモイ(帰国)か、との期待は見事に外れて、森の収容所から東行した列車はキズネルの駅にとまってしまった。エラブカまでの七十五キロを昭和二十一年七月二十二日から三泊四日で行進させられた当時のメモ。

「延々と続く長い隊列が、羊の群れの如く野を越え丘を越えて、蹠踉として辿る。朝から何も口にしない身体に、灼けつくような夏の陽が容赦なく照りつけていた。」

子^{ぼうふら}子を吹いて溜まり水を掬って飲む。ダダーンとコンボーイが放つ銃声が追いついてる。この飢えにも耐えよう、この渇きにも耐えよう。しかし、いかにしても堪え難いのは、この群れに注がれる韃靼人(タタール人)たちの憐憫の眼差しであった。」

石川県 藤澤栄次

炎天下の強行軍により移動した拉古^{ラコ}收容所で一千人ごとの大隊に編成され、「ウラジオ経由で日本へ送還する」との妄言を信じて、九月一日貨物列車で拉古駅を出発した。ところが四日後に下車させられたのはソ連沿海州地方のリュサザヴォーツク駅であり、全員の落胆ぶりは言うまでもなかった。その後連日徒歩行軍を強いられ、漸く九月九日に目的地のシマコフカ駅西南方ヒュードルフカに着いた。

この間数回逃亡者が出たが、その殆どが射殺された。このヒュードルフカを基地として、約一年半の間周辺を転々としながら、草刈りとその圧搾作業に従事させられた。(この間、昭和二十一年一月一日に第五五四作業大隊と改称され、ソビエト軍の大隊長、中隊長による担当が決まった。)

滋賀県 船川廣二

ついにソ連軍が「ダモイ東京」と笑いながらトラックでやって来た。何とダモイでなく黒龍江へと向けて、いくら叫んでも「戦いに敗れたんだから」と、黒龍江を渡河してトラックで貨車の駅まで運ばれた。二段式有蓋車に畜生同然の扱いだつた。これが昭和二十年十月初旬頃。一カ月余りの長い長い旅路。食べる物として少なく、飢えと下痢とシラミ、そして寒さが近づく。二十年十一月十日、イルクーツ

クに送られて下車してみればもう雪。敗者とはこんなものかと思う。收容所に入れられるが、ペチカが燃えて暖が取つてある。だが一夜明ければもうラボータソ連兵が連れに来る。雪の中あなたに丘があり、そこで何日も何日も樹木の伐採作業。栄養失調で遂に倒れる者が出始める。歩けない者、手でズボンを持って引き上げながら歩む者。あちらこちらで伐採木が倒れてくるが、栄養失調と深い雪で逃れられない。声を掛けてもだめ、ついに下敷きとなって死亡する戦友。地獄とはこれを言うのかと思つた。

京都府 長曾修

当時の住所京都府船井郡園部町から、昭和十六年二月二十一日、現役召集で満州国黒龍江省佳木斯^{ジャムス}の関東軍独立守備隊四四一部隊へ入隊しました。極寒零下四〇度の北満で厳しい初年兵教育を受けました。

その後、ソ連との国境付近にある同江、富錦、鶴岡などの警備についていました。

昭和二十年八月十五日終戦。八月十八日、佳木斯においてソ連軍により武装解除されました。

十月中旬、アムール河を渡りソ連のハバロフスクに入りました。

新京、奉天方面は国民党軍と中共軍が戦争をしているので日本兵はウラジオストック経由で日本へ帰されるのだというデマにだまされて、四年間もソ連復興の手助けをする事になった次第です。

ハバロフスクの北方イズベストコーワヤという森林地帯の收容所で三百人余が毎日山に入り伐採と運搬です。亭々とそり立つ大木を二人引きのこぎりで切り倒します。轟音とともに倒れる凄まじさは恐怖あるばかりです。これを運べる長さに切つて製材所へ運ぶ作業が二年半毎日毎日繰り返されました。

この作戦のノルマが厳しく、腰近くまで雪が積もつても警備兵にダワイ・ダワイと追い立てられます。食糧は少なく、朝も夕食も飯盒の蓋に八分目ぐらいの雑

穀の粥、昼は黒パン一切れでは、こんな重労働は続きません。毎日のように二人と死んでゆきました。医務室とか病院があるわけでもありませんから、風邪をひいて熱があるのが、栄養失調でフラフラになつていても「ヤボンスギ、ダワイダワイ(日本兵早く仕事しろ)」と、地獄の鬼もかくやと思うばかりです。この材木は製材所で枕木に仕上げで独ソ戦で破壊された鉄道復旧に送つていたようです。

和歌山県 豎谷正一

奉天を出てから何日たったか、暦もないので、おぼろげに指折り数えて推測してのことであるが、国境の満洲里を過ぎたのは確か十一月一日であつたから、十一月十四日であつただろう。やっと目的地に着いたらしく、列車は停車した。収容所はこの地の各所に散在していて、それぞれの作業毎に分担されたようである。我々は五百人から六百人くらい、収容所に落ちついた。

後から噂で知つたことであるが、地名はソ連邦キルギス共和国内アングレン第一分所で、ソ連邦最大の穀倉地帯として有名なところで、私の四年五カ月に及ぶ作業のすべては、抑留者五十人ないし六十人と一人の警備ソ連兵との日常で、草刈り作業が主で、ノルマ達成の有無不問であり、しごくのんびりした、いい加減で適当な警備兵の監視状態で、よく彼らは昼寝して時を過ごし、早く帰りたいと言わんばかりの様子であつた。体力検査なども、頼るべき専門の医師もないまま、日本人医師による適当な診断で休みを取れるように配慮してくれたし、健康管理は日常、朝夕の体操と昼寝を心得ることを第一とするのが、収容所内みんなの態度として決められているように思う。

この広いシベリアでの抑留者である我々には逃亡など考える者などあるはずもなく、冬などは綿入りの作業衣などもくれて支障はなかつた。食事については一日三回ではあるが、もちろん満足できる状態ではない。この地以外の収容所の事情は全く知らないが、帰還後の他の収容所での実情に比較して、私どもの収容

所の食事は米、麦飯が多く、肉や野菜は二週間に一度くらい。魚類は全くなかったが、その栄養不足分と思われる品種を、野外作業時に皆と申し合わせて、野草のことを勉強して各自で採取し、持ち帰つて収容所内の栄養源にすることを心がけた。休日は特別なことのない限りは休みとして、さらにみんなで相談して、所内での演劇や歌謡、碁、将棋など自前でできずには努めて実現できるように、その都度話したが、抑留生活での互いの励みの一助になつたようにも思える。

広野内にある各収容所の相互連絡に努めて、施設の悪いところは工夫を重ねてお互いに修理補強して使いよくし、抑留生活の助けになつたことは事実だ。生活改善のために所内の問題を取り上げる当番をつくつて所長に進言、許可を得て実践することに努めた。洗脳教育などこちらの態度で全くなく、みんなで作つた劇団や歌謡団などで一日でも楽しく過ごせる時を、自分たちの工夫でつくるように心がけた。月内の企画発表が収容所内みんなの楽しみになつてきていたことは事実で、所長ほかソ連側の担当幹部たちも喜んでることを感じていた。

和歌山県 山本富三

当時はどこを歩いているか地理不案内で、今思えば彈春を経てソ連領内に入り、クラスキノ収容所に結集し一時期を過ごしたが、移動し、有蓋貨車に詰め込まれ身動きもできず床の隙間から用便をすました者もいた。走行中は外の景色は見せてくれず、昼間停車で夜走る。また、二日くらい停車したままのときもあった。

十日ほど過ごしてやつと収容所。約五百人ないし六百人くらいだったと思う。最初の時は自活作業が多くノルマもなく、滞在期間も短かつたが、次の収容所からはノルマに追いまくられた。伐採、線路工事、線路延長路盤工事、荷役、積み込み、水道工事、煉瓦工場等々、すべて重労働ばかりであつた。ノルマ達成時にはパンの特配も時にはあつたが、達成できないことが多いため減量の心配ばかりさせられた。

労働時間はおおむね八時間であったが、突然、夜中に着いた貨車のガラス落としに駆り出されることは全く辛かった。常に空腹であるので眠れない。そんなときの夜中までの作業や夜中から朝までの使役は楽なものがなく、疲れが翌日まで及んで、食糧の不足、栄養値の不足、睡眠の不足、この不足がちのすべてが栄養失調の人をふやしていった。これらの不足は自ら補うよりほかなく、松葉、野草、木の芽、きのこを煮るか煎じるかして生命をつなぐことに精一杯の努力を続けてきた人たちが今日の目を迎えることができていると思う。

実際、収容されて一年余りは生きて帰れることに希望を持っていたが、年を重ねるにつれてだんだんと生への希望も薄らいで、帰国のことすら疑問を持つようになった。このようにこき使われ、最後に自分の墓穴も掘られるのではないだろうかと言う者も出てきた。この私もそう思った。

和歌山県 岡本広蔵

昭和二十年十二月下旬、誰かが「日本に帰れるぞ」と叫びました。「ほんとか」一斉に喜んで「万歳」と叫んで皆の顔は生き生きとしていました。いよいよ乗船ということになって何だか変な気がしましたが、そのときは日本に帰れることばかりで外のことなど考えませんでした。船底に送り込まれて、これは違うと直感しました。そのときはもう「なるようになれ」の気持ちになっていました。三日、四日と過ぎたでしょうか、着いたところは、後から知ったことでしたがナホトカでした。

ソ連領シベリアの凍土を初めて踏んだ第一日目のことです。腹がすいているので飯を炊くことになったのですが、水がなく、仕方がないので海水でどうだろうということになって試し炊きしてみました。失敗で、苦くて食べられそうにもありませんでした。

いよいよ、行く先もわからないまま行軍の開始でした。十日間歩かされ、幾度か落伍しそうになりましたが、無事に抑留地らしいところにたどり着きました。

ナホトカを出発したときの人員の半数くらいになっていたことに不審を覚えましたが、いなくなった人たちのことを考えるだけの余力もありませんでした。

収容所で一夜を明かし、各班に編成されましたが、私は第一班でした。いよいよ収容所生活の始まりです。何か不安な気持ちもありましたが、皆と一緒にいるのだからと自分に言い聞かせました。一週間後、労役を始め、土木作業、伐採、道路工事等々、午前九時出発、午後四時まで、自動小銃を構えた警備兵がいても皆のんびりで、ノルマなんか気にしないようでしたが、黒パンの配給に大差がつくとすると、皆、目の色が変わってくるようになったものです。枕型黒パン一本を十二人となると、一口か三口で食べ終わるので耐えられません。常に空腹状態ですから、ノルマ向上に夢中にならざるを得ないように仕向けられたものです。

島根県 田辺勝義

黒龍江を渡って初めてソ連の地を踏んだのは二十年九月十一日だったと記憶している。私達がチタ地区のジップヘーゲンという土地に連行されたのは忘れもしない十月二日、シベリアはすでに冬で毎日吹雪が舞っていた。慣れないあの寒さは身にこたえた。ここが私達のいつまで続くかわからない生活の地となるらしいのだ。ところが、入る家もない。持参の日本の天幕を建てて当分はそこに落ち着き、その後、私達で伐採した木材で収容所を建築して本式なラーゲル生活になった。住む所から私達の自給自足によるもので、いかに日本人の強制連行が場当たり的で急な施策であったかをうかがい知ることができるのである。

愛媛県 田坂正

敗戦により錦県飛行場に終結した将兵およそ二万人。昭和二十年十月六日、ダモイの夢を胸に、内部を上下二段に仕切って収容力を増やした有蓋貨車で、千五百人の将兵が旅立った。北上四十七日間、十一月二十一日黒河に着く。

道中道草が多く、普通なら二泊三日の行程であろう。さらにアムール川の十分な凍結を待ち、十一月二十六日、糧秣のそりを牽きて渡河、ブラゴシチエンスクからまた二段仕切りの貨車で出発。扉の掛け金を締められ、何故といふが、スターリンの悪企みに思いも及ばぬ「敗戦初体験」の将兵であった。ダモイの夢破れ、皮肉にも開戦記念日の十二月八日に炭坑町レニンスク・クズネツキーに降り立つ。五〇三収容所といった。

熊本県 小佐井善次

貨車は国境を通過しソ連領に入り、北へ北へと広い雪の原野を通り西か東か全く想像出来ない。何日間進行したか判らないうちに、見渡す限り雪の原野に貨車は止まった。見れば雪の中に半地下の棟があり、全員監視兵に連れて行かれた。寝る部屋とてなく、自分達で大工仕事で寝る部屋を作り、残りの米があったので飯盒で飯を炊き食べたのが十一月三日であり、この日を抑留記念日として、今も変わらずただ一人で平和を願い、多くの犠牲者の冥福を祈っている。

この収容所に拘禁され飢餓と酷寒と苛酷な重労働でノルマに追い回されるとは、唯一人として想像しなかつたことであつた。

一カ月もすればいよいよ作業班が決まり、私は坑内作業と決まり、黒パン一日分三百グラムで八時間ないし十時間の重労働が始まつた。零下五十度、六十度のシベリアでの作業。特に炭坑で削岩手の所でのエンピ組の積み込み、運搬、坑木の組み立て、三交代制四人一組で作業、ノルマを達成する事になった。

熊本県 山形満治

ウオロシロフという町の山のふもとに、有刺鉄線が張り巡らされて角々には望楼があり、ソ連兵が銃を持って見張っている場所があつた。東京ダモイは真つ赤なうそであつた。ここは自分たちの収容所であつた。幅が五メートルぐらい、長さが二〇メートルぐらい、柱が点々と立っている。ここが自分たちの住む所であるとい

う、驚くばかり。

板切れを集める、釘を作る、ワイヤー鉄線を短く切つて釘にする。板を張り終わると土を練つて壁を塗る。屋根には満州から持つて来た天幕を張る。家の内は、中心が通路で両側が二段ベッドである。ベッドは板切れで作られる。布団はない。夏の草を刈つて家畜の飼料用に乾かした物が布団の代わりである。着の身着のまま乾草の中にもぐりこんで寝る。ペーチ力は石炭運搬用のトロッコを引つ繰り返して、石炭が落ちないようにタナが作つてある。石炭は十分あるので寒い時はいくらでも焚く。便所は横五メートル、縦一〇メートル、深さ一・五メートルぐらい。幅三〇センチ、厚さ五センチぐらいの板が置いてあり、共同便所である。雨が降つたり、風が吹いたりの時は困つたものであつた。シベリアは水が少ない。顔を洗つたことはない。

衣・食・住と言うが、何ひとつ満たされていなかった。捕虜、敗戦の惨め、食物と言つても人間の食べる物ではない。コウリヤン粥とスープにはキャベツの葉が浮かんでいる。肉、魚はほとんどない。たまに鮭、ニシンがスープの中に入っている。黒パンはめつたにない。あつてもマツチ箱ぐらいの大きさ、炊事場に行くと牛の頭、足の骨、爪が山積みされている。野菜も肉も魚もまともな物は食つたことがない。満州の軍人、一般人、数十万人が急にソ連国に入つて来たので物の不足するのわからないが、人道を外れていると思う。寒さと食糧不足、重労働で、元気で普通の人はほとんどいない。春になると草の新芽、アカザ、ヨモギ、木の新芽と食べられる物は何でも取つた。物をそのまま炊いても苦くて食べられない。木炭を入れるとおいしく食べられる。捕虜の通つた道には草も生えない。人間の生活とは思えない。

北海道 竹島秀雄

間宮海峡をしばらく北上すると今度は左に曲がり、とある港に停泊した。「ダワイイ」とソ連兵にせかされ暗い岸壁に下ろされた。「ここはどこか」と聞く

と「ニコライエフスクだ」と言う。するとここは第一次世界大戦後ロシアに革命が起きたとき、日本が米英仏と共同で反革命軍を支援してシベリア出兵のとき発生した「尼港事件」のあった所である。

収容所に着くと「ダワイイ」の一言で私たちの背負ってきた荷物はその場で全部没収されてしまった。屋内に入ると、木製の二段式の粗末なむしる敷きの長い寝台が部屋の端から端まで無造作に二列三列と並んでいるだけの、他に何も無い大部屋で、一人一枚支給された日本の毛布を敷き、着てきた防寒外套を頭から被つて着のみ着のまま互いに体を寄せ合い横になるだけ。この木の二段式寝台の上でこれからの長い抑留生活が始まったのである。

着替え洗濯、洗顔、入浴の際の水も施設もなく、下着には白い虫がわき、天井からは南京虫が夜ごと捕虜の肉体の血を吸いにおりてくる。

冬のシベリアの落日は早い。雪の日、風の日、嵐の日、風にも、作業は休みなく早朝から日がとっぷり暮れるまで、実に労働管理は厳格である。実働八時間が原則と思うが、その作業所に行く所要時間や、食事の支給を受けるために寒い屋外で並ぶ時間の浪費などが甚だしい。

ニコライエフスクの収容所は数丁区間を板塀と鉄条網で囲み、北千島から二千二人、樺太と満州から各一千人、計四千人をこの一面に収容し、北千島部隊の桑田中尉をソ連軍は大佐に任命し、連隊長として日本軍の責任者とした。将校は別棟に収容し、急な欠員補充のための補給小隊を置き、日常作業は二十五人単位で下士官以下二十四人に将校一人を付け、ソ連軍の指示により各作業所に配分された。

昭和二十年十二月、ナホトカ上陸。宿泊地に向かう

どのくらい歩いたか、時計がないので不明。坂を上り、平坦地に着いた。昼過ぎだったように思う。アメリカ天幕が十張りほどあり、全部日本兵でいっぱいであった。一張りの天幕に二百人くらい収容可能で、私共はなんと軍使用の国内用の天幕であった。厳寒のシベリアでの使用は無理だが、余分なく、それで宿泊

することになった。まず燃料がなかったので、幕舎の中に枯れ草を敷き、立木にロープを引つ掛けて二、三人で引つ張った。すると一〇センチくらいの太さの立木が簡単に途中から折れたので、外で燃やし、幕舎内のこたつに入れ、防寒具一切を着け休んだが、朝まで寝付かれず、目鼻は氷がついて処置なしだった。何しろ土の上に草を敷いて休むのだからお手上げである。

岩手県 松浦竹治

バイカルを過ぎて間もなく、タイシエトという名のところで貨車から降ろされた。乗車してから十五日くらいと記憶しているが、一、二日の違いはあるかもしれない。途中シベリア最大の都市イルクーツクを通過したはずだが、誰も知らないままに過ぎたのだろうか。軍事機密のためだろうか。

収容所はソ連の思想犯の入つていたところと聞いたが、入れ代わりに彼らは出ていった。お互い無言ではあるが、笑顔で私達を迎えていた。元気で頑張れよという笑顔にみえた。同病相哀れむという気持ちだろうかと感じた。

収容所の建物は丸太を積み重ねたごく簡単なものである。抑留者の方々がそれぞれの記録の中で同じようなことを述べられているので、建物等のことはここでは略したい。

岩手県 安倍庄吉

峠を一つ越えて山の奥へ奥へと歩き続け、森林に囲まれた盆地に出た。緩やかな斜面の広場には我々を収容する大きな建物、離れて民間の建物が五棟ほど見えてきた。現場に来てみると、丸太造りの大きな平屋、バラック一棟だけで、これから自分たちが住む小屋を建てるのだとの説明があった。なんと無責任、無計画なことか。しかし、これがソ連流と諦めざるを得ない。この夜は携帯天幕を松の中心に繋ぎ合わせ幕舎を造り、雪の上に寝るより仕方がなかった。

これが十一月一日、ボダラ収容所の始まりである。翌日から作業が始まった

が、まず丸太小屋を造るための伐採で、鋸と斧が渡され、寒い天幕生活に疲れた捕虜たちはせめて丸太小屋に住みたい一心で懸命に働いたものであった。

丸太小屋の周りに丸太の扉と有刺鉄線の柵をめぐらし、監視望楼も建てられ、一応収容所の形ができ上がった。また、丸太運搬用の橋路も造った（橋溝を掘り、夜散水してコチコチに凍らせる）。山の土場から河岸まで木材を運び積み上げられた丸太を、春の雪解け時、渦巻く河に次々と投げ込み、下流にある製紙工場貯木場で引き揚げ、用途に応じて分類することであった。

ある日、関見習士官と山の土場より河岸までの距離を測ったことがあった。ノルマの基本をつくるためらしい。

岩手県 高橋三郎

私はソ連軍がソ満国境を越えて満州になだれ込んだとき、新京の陸軍病院で病床に横たわる身であった。「結核」、当時今の癌ほど恐れられ不治の病といわれていた「結核」で、畳一枚ほどの段差もままならないほど衰弱しきった身体であった。そんな私達が白衣のままソ連に連行され、三年余り強制労働に従事して生還、七十歳の今日まで生きているということは、本当に自分でも信じられないことなのである。

ソ連軍侵攻の報に陸軍病院側は直ちに退避の命令を出し、有蓋貨車に、病室ほどではないが、ある程度の設備を設けて病兵を乗せ、釜山目指して出発した。

途中、満人の駅員に難癖つけられて列車が立ち往生し、そのたんびに持ち合わせの食料や衣類を差し出して通過させてもらい、何とか三十八度線までどり着いたのは昭和二十年八月二十五日頃のことであった。そこでソ連軍にストッブをかけられ、そのまま平壤まで後退、学校のようなところに収容された。言い分が振るっている。「貴方達は病人であるから、ソ連軍は人道的立場から貴方達を精密に検査診断をして療養させなければならない。現在日本の国は敗戦によ

り食う物も着る物も建物も不足していて、貴方達が今帰ったとしても何の治療も受けられないばかりか全員餓死するよりほかないだろう。日本の国がいま少し落ち着くのを待って直ちに送還いたしましょう」

長いことソ連にいるうちに、こういったソ連流欺瞞のシステムはわかってきたけれども、そのときのわれわれはその言葉を信ずるよりなかったし、実際信じて平壤の施設で暮らすこととなった。新京を出るに当たって食料、衣類等必需品は相当列車に積んであったから、当面の生活はさして困ったこともなく、平穏な日々で三カ月近く経過した。

福島県 太田俊一

シベリア鉄道を貨車に揺られながら十数日、名も知らない駅に停車し、直ちに貨車を降りた。聞けばイルクーツクという街。見渡す限り白一色。行き先も知らされずに、命じられたまま雪道を音もなくただ黙々と一時間も歩いたかと思われるころ、「ストイ（止まれ）」の号令。そこは小高い丘の上、前方五百メートルほどの所に山小屋を思わせるような建物が見えた。それにしては屋根が低い。軒先が地面に届くほどである。その周りには有刺鉄線が二メートルほどの高さに三段から五段に張っており、四方の隅々には十メートルを超す高さに展望哨（見張り所）が建っている。ここがこれから私たち一、二〇〇人が共同生活するラーゲル（収容所）だと言う。

ここをイルクーツク第五収容所と称した。中に入って驚いた。出入り口や窓が二重になっているのは満州でも同じなのでわかるが、入り口から三段ほど下がって、約二メートル先にまた三段下がって通路（土間）になっていた。つまり半地下式構造になっていたのである。外から見れば屋根が地面すれすれであったが、これは防寒のためであった。建物の幅は約六メートル、高さが低いところで三メートル、高いところ（棟木）で五メートル、奥行は、その大小にもよるが約三十メートルほど。それが五棟から十棟は建っている。中は、通路を挟んで両側に五十七

ンチほどの高さに丸太や角材で仕切り、板敷で、そこに毛布を広げ日常寝起きました。それが二段になっているので、うっかり立ち上がった時背伸びをすれば、頭をイヤツというほどごぶかれ目から火花が出ることになる。

東京都 堀口卓也

私の一五〇大隊は一九四五年十一月中旬にシベリアに入り、十二月にホルモリン收容所に到着した。日本人を帰国だと信じさせたソ連のシベリアへの移送は実に見事であったと言うほかない。我々は毫も疑わなかった。上手に我々をだました。千人単位にしたのは作業をさせるためであったことを帰国してから知ったが、当時作業大隊であると知らされたらどうなっていただろうか。あのように整然とは輸送されなかったのではないだろうか。

ホルモリン現地にトラックで深夜に到着し、荷台から降りたとき、車中で配給された内側に毛皮のついた関東軍の防寒靴を履いているのに、足の裏に針の刺さるような寒さを感じた。地獄の針の山はこういうのかな、生きて地獄を味わったという感じであった。それでも重い荷物を背負って十分も歩くと汗びっしょりになった。着いた宿舎は古い古い丸太小屋、今の言葉ではログハウスと言うのだろうが、そんなしゃれた家ではなく、囚人の收容施設であった。空き家だったのですきま風で寒く、防寒靴下の上に軍隊の防寒大手袋を履いて、毛皮の防寒外套を着たまま横になった。枕元で零下六度であった。

作業は、伐採に道路工事、仕事は重労働であった。この人道に反する仕打ちをされたことを我々は何がなんでも故国に報告しなければならない、死んでたまるか、がんばれと、身に心にむち打ってがんばるしかなかった。

東京都 岩本行夫

走つては止まりの二日間がかりで、アムール河の支流らしきところで他の隊は降りた。私たちの中隊はまた走つては止まりの貨車で数時間。地名も分からぬ

原野に降りた。

小さな家が四棟あり、囚人がドイツ兵が居住していたそうだ。私たちは分散して小屋に入る。薄暗く油臭い嫌な感じ。灯油の入った缶に火をつけると、黒煙と共に明るくなった。二段の板の寝台に落ち着く。昼夜南京虫が攻撃してくる。シベリアの酷寒期を越さねばならぬので、居住する收容所(ラーゲル)を全員で建築に取りかかった。材木は豊富、二人引ノギリ(ピラ)、斧(タポール)などの道具で伐採、運び出し、寒さを克服。一生懸命建設に励んだ。

ソ連人所長は日本人が器用で良く働くのでびっくりしていた。どのような作業にもノルマがあることを知った。食事の量は少なく、いつも空腹だった。体力のない隊員は栄養失調、怪我しても過酷な重労働に耐えなければならなかった。

神奈川県 及川勝郎

ふらふらでたどりついた所はバイカル湖畔でした。すぐに船に乗せられ、甲板ではなく船底に皆が横になるだけでした。船酔いすること二日間、上陸した所は湖畔の奥深い所にある囚人收容所でした。建物は高い塀に囲まれ、四隅には監視楼が一段と高く立って、逃亡するといつても発砲するぞと銃口を我々に向けていました。

窓一つない暗い部屋、そして電灯もなく、出入口は一つ、あるのはペチカ一個、狭い通路の両側は寝台。寝台といつても、丸太を半分に切り、木の皮をつけたままで虫もいます。後ではシラミも出ました。全くの暗闇では何もできないので、裏山に行つて松ヤニを採ってきて一夜の灯としました。夕食も灯が消えないうちにと急いで分配するのです。飯盒の蓋一杯のジャガイモスープも、うす暗いため芋のないスープの人もいました。それに初めて食べるロシアの黒パン。なんと一切のパンの中に粗穀が数十個入っているので、つまみ取って食べました。食べないと死んでしまいます。胃に刺さる思いでした。他に食べる物はありません。一切のパンと中身の無いスープでは腹がへつて眠れません。やがて松ヤニの灯も乏し

くなり、だんだんと話す元気もなくなり眠るのです。朝起きて見ると、皆の顔は松ヤニの煙で真っ暗でした。外に出て雪でもって顔を洗いました。支給された一枚の毛布と自分達の衣類も真っ黒でした。

新潟県 高橋吉郎

この冬は例年より寒いといつて、なんと零下四十度でした。部屋の中でも眉毛が白くなり、濡らしたタオルがピンと立つのです。トイレに行っても、大便是し終わらないうちにピラミッド型となり、後からの人のために鉄棒で碎きます。すると顔に固まりが跳ね返ってくるのですが、別に臭気もないので、ソリに積んで裏の林の中に捨てる毎日でした。

新潟県 上村慶一

富寧収容所は工場の社宅と思われる建物で、まわりを板塀で囲み四隅に望楼が建ち、哨兵が塀より四メートル以内近づくと容赦なく撃つ。塀から四メートル以内には粟の穂が実っていた。空腹のあまりこれに手を出し、銃殺された者もあり、その後もときどき威嚇射撃音が聞こえていた。

収容された部屋は、畳一枚の広さに二人で寝た。一部屋二個分隊三十人が入つての生活。各自、壁際に頭をつけ鯛を並べたように寝る。床はコンクリートに藁敷き、着のみのままのごろ寝。風呂はなくおのずからシラミに攻められることになり、発疹チフスが流行。医療資材はままならず、四十度の高熱に喘ぐ患者に氷を包んだ手拭いを額にのせ、手まめに取り替えて、やるせない思いで見守るほか方法もなかった。犠牲となった遺体は屋外に並べ、十体を数えるようになると収容所外に搬出、埋葬した。十一月ともなれば凍土となり、埋葬のツルハシを跳ね返した。

食糧は極端に少なく、一日大豆一合弱の日が長く続いた。塩分も不足、よほど静かに立ち上がらないと目が眩んだ。やがて籾、雑穀、麦粉等支給されたが空腹を満たす量ではなく、皆栄養失調となった。野菜は皆無、壊血病患者多数、医師の指導で、全員が松葉を噛んで凌いだ。

到着の夜は駅付近の倉庫のような所に一泊して、翌日の昭和二十年十一月十一日、イルクーツクの郊外でイルミジヨウという所の収容所に収容されたのであった。

イルクーツクはもう白雪の舞う冬に入っていた。シベリア出兵当時は日本軍がこのイルクーツクまで進駐して来たと言われていた。われわれが収容された第六収容所は、橋を渡つて更に四キロメートルほど南方に丘の上に建っていた。収容所は間口十メートル、奥行五十メートルほどで、中央が二メートルほどの廊下とも言うべき通路になっている。廊下をはさんで両側は二段構えの板敷きとなっており、この板敷きが各人の起居する場所であった。畳一畳に一人というスペースで、板の上に着のみのまま就寝するという有様であった。この建物は四棟あって、一個大隊八百人ほど収容されたのである。極寒の地であるので建物の両脇は土盛りがしてあり、明かり窓が取つてある。中央に暗い電灯が二個とペーチカが設置されている。まだできたばかりで、すべて丸太や板も松で生木であった。収容所の周囲は二重に有刺鉄線が張りめぐらされて四隅に望楼が立ち、ソ連兵が警戒監視している。重罪を犯した凶悪犯人の収容所のようなのである。収容所の出入口にはソ連兵の衛兵所があつて二十四時間厳重に警戒監視を続けた。

福井県 長谷川久

忘れもしないが、昭和二十年十月二十五日、午後二時頃、ネエブルスカヤに着した。鉄道の線路が高地にあるので、私たちの入所する収容所の外回りが見える。大きい面積で高さ四メートル近くの板塀があり、内塀は有刺鉄線のようにだった。四つ角には高さ五メートルほどの監視塔がある。監視兵の姿が見えた。

夕方早目の夕食を自炊で済ませ、入り口で私物検査を受けて囲いの中に足

を踏み入れた。自動小銃を持った兵が私たちの人数を調べるのだが、幾度も数えるので掛け算ができないのだと思った。

連れていかれた所は天幕舎であった。この幕舎でシベリアの冬を越すことができるのかと心配になってきた。舎内に入ってみると、両側に二段になった丸太の寝台があった。中が通路で鉄製のストーブが入り口近くと奥の方に二個あった。寝台の高さが低いので座っては入れられず、幾人入れるのかと思ったら、六十人近く入るとのこと、貨車より悪い。寝台も丸太で、天幕は二重になっているが、人間の入る幕舎ではなかった。人間扱いにしてくれないようだった。

シベリアの十月は日が短い。午後五時になるともう暗い。幕舎に入って寝台に上ったが、丸太作りで足が痛いがどうにもならない。横になる幅がない。まともに眠ることはできなかった。重なるようになって横になったが、寒い、眠れない。起きて防寒外套、防寒帽子、防寒靴をはき、完全防寒装備で眠ったが、丸太が腕に当たって眠れない。起床の声で我にかえった。頭が上がらない。防寒帽が幕舎の幕と凍りついて離れない。あこのホックを外して起きた。二基のストーブはよく燃えているのに、帽子と幕が凍りついてしまうほど幕舎の中も寒かったのだ。

薄暗いカンテラの明かりで朝食が配食されたが、暗くて中身がわからない。口にして初めてわかった。ポーチ粉と乾燥ホウレンソウの雑炊だった。一飲二飲と食しているうちに無くなつた。洗わずにその飯ごうを出して昼食の配分を受けた。大豆の炊いたのとジャガイモ三個だった。

福井県 尾上敏雄

汽車は十二月一日、コムソモリスクから森林鉄道に入り、北東に数時間走ってやとと止まった。そこで下車命令が出た。出て見れば原森林は銀世界一色だった。そしてここで防寒被服や防寒靴等が支給された。捕虜生活の第一歩である。一列に並んで雪道を歩いた。食物も与えられず空腹のままだった。そして大きな建物の中へ入って一夜を明かした。夜が明けるとその倉庫の周辺には幌をかけた

トラックが数十台、待機しているようだった。このトラックに私たちが三十人ずつ乗せられ、ソ連監督二人付きで車は走った。幌をかけているため外は見えず、野原か森林道か分からない道を走り続けた。寒さと空腹で誰一人しゃべる者もない。夕方暗くなつて車は止まり、下車命令が出た。降りてみると見わたす限りの森林地帯、そしてそこかしこに点々と撤収した幕舎の跡があった。後日分かったが、この幕舎にドイツ兵の捕虜が収容されていたとのこと。そしてこの幕舎にとりあえず私たちが入ることになった。上下二段、一ます(二メートル×二メートル)に十人ずつ。丸太を組んだその上に乾草を敷き毛布一枚が支給された。夜中、小便に起きて用を終えて戻ると、もう寝る場所はない。しかたがないから次の者が起きるまで、中央のストーブ周辺で暖を取り待っている。この繰り返しだった。

夜が明けて舎外に出て見た。身が引き締まるような寒さ。雪は五十センチくらいだろうか。一日ぶりに食事が出た。黒パンとスープが少量。そして食事が終わるとすぐ作業出発の号令、直ちに集合して作業に出た。ここでの作業は伐採、道路工事、建物の基礎工事等に分かれた。私は森林伐採の作業に行くことになった。これが抑留捕虜労働の第一歩だった。

長野県 長田伊三男

私たちには何処まで行くのか少しも分かりません。

十一日目頃だと思えます。汽車は小さな町の駅に到着しました。こここそ私たちが、それから四年余にわたつて、飢えと酷寒と重労働で、全く生と死の境を明け暮れるチレンホーボの町で、ドカンドカんとハッパの音のする人口二万くらいの炭坑の町でした。

六つのラーゲル(収容所)があり、私たちは第四ラーゲルに収容されました。もう日本ダモイの夢はいつのことやら、あの精鋭の北支派遣軍も見ると影もない情景でした。収容所は小高い丘の上にあつて、大きな露天掘りの炭坑が眼下に

見られ、四五〇〇人の収容人員でした。

収容所は古い木造の建物で今まで何に使用していたのか分かりませんが、半地下式で窓の所まで土に埋まり寒さをよけ室内保温をする二重式のガラス窓で、室内には木造で簡単な二段ベッドがぎっしりと並べてありました。ペーチカがあり、外は零下四〇度でも中は暖かでした。

広い収容所の周りには、三重に高い鉄条網が張りめぐらされ、電流が流れる電線が張られていました。四カ所の角には、高い見張り小屋があつて、夜はサーチライトが照らされ、自動小銃を持ったソ連兵が、昼夜監視していました。

岐阜県 小栗晴美

何ぶん重い二十五キログラムほどの荷物を持つての行軍で、重い足でやっと目的地に着いた。ライチハという炭鉱町である。高い鉄条網に囲まれた、四隅には監視のための望楼のある収容所である。まるで罪人と一緒に、先着の大隊もあり、三千人ほどが収容された。宿舎は半地下の木造で洞穴のようである。ちょうど長い牛舎を半地下にしたようなもので、真ん中に通路、両側に二段に板を並べてベッドにしてある。その上下段にゴロ寝で一棟に百五十人くらいが入った。

岐阜県 加知郁夫

旧満州牡丹江で、千人単位で編成された我々の作業大隊が入したのは昭和二十年十一月頃の厳寒と、白樺と樺の原生林の連なる積雪地、ちょうど樺太の対岸に当たる沿海州のシベリア鉄道沿線の僻地であつた。

見渡す限りの凍土と原生林の中で、平地の一角に収容所があつた。周囲の集落とおぼしきものは、ソ連軍の兵舎、収容所長官舎、収容所関係者の家屋が散在するだけの殺風景なところであつた。

収容所は以前、囚人が収容されていたという古びた半地下式のバラックで、十数棟が周囲を木柵で囲まれ、木柵の高い所に対角線に監視望楼が設置されて

ソ連兵が見張つており、まさに監獄であつた

一棟当たりの収容人員は五十人から百人程度であつたと思う。収容所内での規律は、旧軍隊の内務班形式がとられて、争いもなく平穩であつた。将校達の宿舎は別棟で、日本人の収容所長は大尉であつた。

ソ連との交渉係は、旧満州ハルビン学院出身のロシア語の堪能な人が当たるとになつた。

収容所は、半地下式の二段ベッドで、窓が小さく日中でも薄暗く陰気そのもので、電気設備はなく、ランプが二、三個ぶら下がっていた。暖房は、ドラム缶のストーブが二カ所に設置されて薪を焚く仕組みになっており、なくてはならない貴重器具であつた。これで零下二十度、三十度の酷寒を乗り切ることができる。心配である。

飲料水は、木樽が一個設備されていたが、生水は飲めず、一旦沸騰させた湯を飲む。

洗面所、便所は屋外で、凍りついた道を歩いて行くことは難儀なことであつた。

食事は黒パン三五〇グラムと高粱のスープで、初めのうちはとても喉を通る代物でなく閉口したものが、何分にも空腹の飢餓状態では腹を満たす以外になつた。

京都府 今井敬一

ここでまたソ連将校の所持品検査が行われ、検査のたびに所持品を取り上げられた。ここまで新京を出発して何日かかったか、ここにたどり着くまで食事も用を足すことも寝る場所もなかった。焚火で暖をとり、凍るような寒さの中で眠れぬ夜を過ごした。いつになれば足を伸ばして寝ることができるだろう。

三日目早朝より作業が開始された。まず寝る場所を確保しないと極寒のシベリアの山中で生きていくことは不可能である。このことは日本人捕虜のだけれもが

知っていた。早速伐採組と穴掘り担当組に分かれ、作業が始まる。シベリアの土地は冬には四メートル以内は凍る（都会でも水道管は四メートル以下に敷設する）。早く掘らないと土地が凍る、焚火をしながら穴掘りをした。つるはしなどはない。ボールとスコップのみで作業を進める。やがて幅約八メートル、奥行き約二十五メートル、深さ約二メートルの穴が掘れた。その上に伐採組が作業してきた松の生木が屋根に丸太のまま使用され、その上を松葉や苔で覆い、土を乗せ、古代人が住んだ穴ぐら生活そのものである。室内は二段の寝台を造り、みんな折り重なって寝たが、背筋が寒く目が覚め、眠れぬ夜が続いた。昭和の時代には松脂の多い松明を使用した。油煙が出て、部屋、毛布、衣類、防寒帽を被って寝るので防寒帽、顔、手と、あらゆるものが真っ黒で、雪焼けた顔は日本人離れをした異国人のようである。この姿は経験した者でないと実感が出ないが、実に情けない哀れな姿であった。

大阪府 中森 勇

丸太を横に積み上げて造った、以前はロシア人囚人収容所であったそうだ。電気もなく、この山の中で伐採作業かと思うと失望した。入所二、三日目に工場技術経験者は集まるようにと通告があったので、経験はないがこの山奥ではとてもじゃないと思ひ、なんとかなるだろうと経験者になりすまし、職種は仕上工とした。工場のある所はたぶん街で、ここよりは条件が良いと考えたからだ。

新収容所は各作業大隊より集められた工場技術経験者五〇〇人で構成され、白のモルタル造りで、電気もあり、寝台もまあまあである。ついでにぞ！と思つた。旋盤工・鋳物工・製缶工・仕上工などで、工場で働くことになった。日本人収容所の隣はロシア人囚人収容所で、共に工場作業業者である。工場の主要職は民間人で、ロシア人囚人と日本人戦争俘虜が肉体労働者であった。

収容所・工場とも三重の有刺鉄線で囲まれ、四方の望楼から二十四時間監

視している、檻の中の生活がいつまで続くのか、先のことなど判らない。

一週間ほどすると、技術のよくない者約五十人は屋外作業に配置換えされ、未経験者の私は当然その仲間入りした。貨車から冷凍肉・冷凍魚や石炭の下ろし、また道路の補修作業などであった。

入所以来見覚えのロシア語がいくらか判るようになったとき、事務をする者が必要になり、幸い事務所でも働くことになった。事務所は工場の二階にあり、日本人の屋外作業者の労務関係の仕事であった。

鳥取県 森田 東明

ラーダの森にある第一八八収容所は、独ソ戦でヒトラーがモスクワを攻略する時、ソ連軍の陣地として造られたもので、白樺林の中に半地下式の土窟兵舎で、飛行機からも見えない巧みなものであった。ほとんど日光の入る窓もなく、至近距離でなければ顔の判別すら困難な程で、極めて不衛生な宿舎であった。丸太を組み合わせた兵舎の板の上に毛布一枚を敷き、身動きもできない程狭い寝室兼食堂であった。それに、着の身着のまま、外套を掛け、隣人と触れ合ってお互いの体温で生きていることを通じ合うといった環境であった。宿舎には電灯もなく、便所も屋外へ数十メートル出なければならぬ不便なもので、特に冬期間はその往復が難儀なことであった。

岡山県 田中 一司

シベリア鉄道の貨物列車に詰めこまれた長い旅で、昭和二十年十二月、三十日目に、アングレーン駅に到着した。

海拔一五〇〇メートルに近いこの炭鉱町は、冬は零下三〇度、夏は四〇度を超える高原特有の気候で、足を伸ばすと一メートルもある毒蜘蛛がいるといった未開の土地だった。この町の都市建設の目的で、日本人捕虜が八千人ほど配置され、四つの収容所に分けて入れられたが、これらの収容所は、それまで囚人

用に使用されていたらしく、飢えた南京虫とノミが充満していた。

收容所の広さは東西約八〇〇メートル、南北も東西と同じぐらい、四隅に望楼を設け終日監視兵が目を光らせていた。有刺鉄線を二重に巡らし、その間が約五メートル、逃亡防止の垣である。この收容所の中に約二千人が收容され、一つの幕舎に約百五十人から二百人收容され、木製の二段ベッドで、上に二人、下に二人、頭を内側に向けて足を伸ばして寝られるようになっていた。上の天幕からと下の柱から南京虫が攻めてくる。上から落下する虫は退治できるが、下からのぼってくる虫に対しては油をまいて防ががなかなか思うようにはいかない。真冬になると中央にストーブを一個設置するだけで、毛布をかぶって、どうにか寝られた。

岡山県 妹尾正一郎

ヤブロノワヤで各隊、各方面に分かれて行った。私たちも二個中隊二〇〇人が最初の收容所ゲネラルパーティに向かった。そのころは個人の私物も沢山あり、中隊の食糧なども持つていて、人里離れた雪の山道を重い荷物を背負い、二時間歩いてやっと現地に辿り着いた。

そこで柵(三メートルぐらいの丸太の先を鉛筆のように尖らせ、びつしり詰めて並べた柵)の中に追い込まれた。柵内は切り捨てられた落葉松の枝ばかりで、まだ收容所も建てられていなかった。ここが今から住む收容所かと驚いた。その後は毎晩雪の降る中での野宿で、焚き火をしながら夜を明かし、苦しい毎日であった。やがて收容所造りが始まった。柱を建てる所に穴を掘り(穴を掘るのが大変である。土地が凍っているので二時間ぐらい焚き火をしても十センチしか掘れない)、掘ったところに柱を建て、後は校倉造りのように丸太を積み重ね、丸太と丸太の間に苔を並べるだけである。屋根にはつつじの枝を並べ、その上に馬糞を十センチくらい乗せた。馬糞は暖かくてよいが、夏になって雨が降ると寝ていても黄色いしずくが落ちてきて、まいった。一カ月作業してやっと二段式の宿舎

ができた。ゆつくり休めるかと思ったが、翌日には私たちのような若くて体の強い者一〇〇人は一山越した別の所へ移動させられた。今まで一生懸命造った收容所は第五一八大隊の病院になるのだと言っていた。残留者が病院の勤務者となり、軍医の補助を務めたとのことだった。昭和二十年十一月二十五日のことであった。

愛媛県 鹿島智夫

クイブシエフカ收容所は赤の広場の町の收容所であり、元囚人たちのいた所だそうで、鉄条網を二重にめぐらした獄舎であった。戦勝により囚人達を解放した後、日本人捕虜收容所と変貌し、一部二階建てであり外観も偉容を放っている。内部は三段の柵造りに急造されて、千人以上の捕虜がひしめく。一区切り約二メートル四方ぐらいで十二人が頭と足を交互にして寝る。両足は伸ばせないで片方は必ず立てて寝る。しかしこの窮屈な寝床は十日間ばかりですっかり広くなった。死亡してゆく者が日に日に多くなったからである。

この收容所で一番驚いたのは浚さらったどぶのような食である。真つ黒でどろどろして、とても食べ物とは思えない。二日ぐらい一口も食べる者はいなかった。スプーンで掬ってみると凍った馬鈴薯の爪程のものが黒くなっていた。凍みたものはなかなか煮えない、それに恐らく洗ってもいないのを釜に放り込んだものと思えなかった。しかしこれとて食べねば飢え死ぬ。一口ずつ食べて腹を撫でる者ばかりであったが、この頃から死者がどんどん増えてきて、連日十人二十人、今朝は五十人死んだなどと平気で話す声を幾度も耳にした。当然栄養失調と凍傷である。このどぶのようなものが三カ月続いた。それから大豆食になり、これも三カ月続いた。こうしているうちに青草の萌ゆる五月になったが、この大豆食に代わった当時はまた驚いた。大豆はきれいに炊けているし栄養もあるので命の心配はなかった。しかし喜んだのも束の間で、飯盒の中蓋に七粒しかなかった。汁が少しあるだけでこの状態が三カ月続いたが、その間にただ一度だけ十四粒あった。

この時は大変嬉しかった、どうせ長い命ではないと常に観念していた私には思わぬ僥倖でもあった。

愛媛県 山村 眞(旧姓 岡原)

まさに忍従の連行であり、十月二十日頃イルクーツクに到着した。

徒歩で一時間も歩いたか、寒風の中の收容所は闇の底に黒々と横たわっていた。周囲は鉄条網で厳重に囲われていた。四隅の監視塔には例のマンドリンを肩にして立哨していた。第三十二收容所第七分所と記憶している。川と駅が近くにあったように思う。その日から昭和二十二年三月末頃まで、他に移動することなく、昼夜の別なく作業現場で最低の掛け声に律せられて心身を勞した。

愛媛県 田中 純

小高い丘になっている一帯に間隔を置いて並んでいるレンガ建ての弾薬庫跡が拉古捕虜收容所で、周囲に有刺鉄線が二重に張り巡らされ、ソ連兵の厳重な監視がなされていた。ここに次々と收容されていった。我々も一つの倉庫に押し込まれた。内部はまぐさが敷き詰められていたが、火薬の臭いが少し残っていた。

ここでの一日はソ連側の使役と自分達の食糧の確保が大切な仕事だった。ソ連側の作業は、貨物廠での物資の積み出しや施設の撤収にかり出され、日がたつにつれ体力が次第に減退し、栄養失調によって痩せる者が目立つようになり、下痢患者も続出、防疫をほどこすことのできぬ中、すでに血便を排する者さえ出る悲惨な状況になってきた。

愛媛県 坂本 眞男

数日後ビロビジャンに到着。この町は第四十六地区收容所の本部であった。早速半身裸にされて、肉付きのよい元気そうな者を一級、他は二級に格付されて、

一級三〇〇人を選び、後に魔のヒンガンと呼ばれた二分所に送られることになった。ここは錫鉞開発計画の所と聞いていたが、人跡未踏の地で道路はなく、米国製の八輪大型トラックで河をゴトゴトと上り、岩にぶつかればわれわれが車を下りて排除し、一日をかけて目的地に到着した。

既に十月半ばであり、積雪二〇センチくらい銀世界、厳しい寒気の中に、二張りの大型天幕に小丸太を組み二段とし、少量の乾草を敷き三〇〇人を收容、ほとんど寝返りもできない状態であった。中央にドラム缶のストーブ二基を備えて暖をとっていた。端々の者は朝方には着のままの衣類に氷が張りついていて有様であった。缶詰の空缶を利用した油しんで灯をともした。

初め頃の作業は道路建設、收容所建設、木材伐採等で、寒暖計が目盛いっぱい零下四十八度になれば作業中止であった。いずれも体力の衰えと希望なき人間の本能か、無気力によってノルマを大幅に割り、「ダワイダワイ、ブイストラブイストラ」とせきたてられ、悲憤に堪える毎日であった。給食は言うに及ばず粗悪少量で、到底労働に堪えられるものではなかった。後方との運搬が途絶えて一日トウモロコシ十二粒と黒パン一かけらで耐えたこともあった。野菜類は数カ月皆無であった。

熊本県 高瀬 潤吉

到着した所には古い兵舎のようなものがあり、ソ連人はドイツの捕虜を收容していたと言っていたが、建物はかなり古く、反体制の政治犯を強制労働のため收容した跡ではないかと思われた。ともあれそこは私ら小野作業大隊一千人の二年にわたる伐採作業の拠点となる所であった。到着の翌日から早速自分たちの住居や外柵の設置に取りかかった。日本人は誠に器用で、はじめ家の建築法を教えたソ連人に半日もすれば教え返す有様で、ソ連人は舌を巻いてながめていた。小さな小屋であれ、大きな建物であれ、すべて丸太を横に積み重ねるログハウスである。しかもこれらはすべて、鋸と斧で仕上がっていく。難しいことは考え

ない。重なる面は平たく削るが、多少の隙間がかまわない。隙間には後で山ごけを詰める。更に上等に仕上げようと思えば、石灰を水で溶かして、その上から塗れば上出来になる。松林の中で野宿をしながら、一週間程度で四、五棟の建物、そしてそれを取り巻く外柵が完成した。外柵の四隅には内外を監視する高樓があり、四六時中歩哨がいて、特に柵内の様子を見守っていた。また、柵の内五メートルの所には鉄線が張られて、それより柵の間は立ち入り禁止であった。後日、発熱した兵が立ち入り禁止の場所のきれいな雪を取りに行つて歩哨に射殺された。自分が監視される柵を自分で作るといふ奇妙な結果であった。柵の出入口には小さな門番小屋もできて、収容所の体裁も一応整った。更に柵内では炊事場、物置など逐次でき上がるとともに、柵外では歩哨の住まい、収容所長の官舎、パン工場等の建物もできていった。かなり経つて、営門の前に営倉もできたが、抑留者に使用されたのは少なかつた。

宮崎県 鎌倉廣行

私たちは間島で新品の満服を着せられ、「日本ダモイ」「東京ダモイ」の言葉にのせられて、あてどもないシベリアへの長旅に出発したのであつた。あれほどいた日本兵が、一人も考えたことのない事態となつたのである。何という人のよき、善意に善意に考え過ぎる日本兵はこのようにして人質に取られ、シベリアの辺境の地へと送られたのである。

それから二週間余りの貨車の旅を経たある夜半、小雪の降り敷く白樺の林の続く湿地帯で下車させられた後、有刺鉄線で囲まれた望楼の建つ収容所が私たちを待つていたのである。後で判明したのだが、「ここはホルモリン」と言う森林地帯であつた。

私たち五〇〇人は厳重な監視のもとに、古びた木造の収容所の中で、収容所長(カマンジール)の訓示を受けた。「逃亡者は射殺する。今後の収容所の生活は収容所長が命令するが、隊員の規律や生活、労働については、日本の将校の指

揮のもとで行わせる」旨の注意があつた。その夜は寒さと疲れの中で、幾つかの建物に分けられて眠つた。

一夜明けてみると、収容所は至る所が壊れており、修理が必要であつた。収容所は、丸太を組み合わせて建てた倉庫風の建物で、まん中にベチカがあり、壁ぎわに木製の二段ベッドがあるだけであつた。白壁に刻まれているロシア語を見て誰かが「ここは囚人の収容所だぞ」と大声で叫んだ時はショクを受けた。

我々は収容所長の命令で翌日から、監視兵の厳しい監視のもと、まず外柵の補強をすることになった。近くの森林から若木を伐り出してきて周囲に突き立て、ゆるんだ鉄線の張り直しを行い、次に監視塔(望楼)を補強した。自分たちの入る収容所を自分たちで補強して、逃げられないようにするのだからおかしな話である。

岩手県 岩間栄一

列車は走り続けて数日、着いた所はチタ市でキノ湖の湖畔だったので。

数日、食事も与えられず携帯食で過ごしてきました。着いたら食事を与えるとのことでしたが、今夜は遅いから明日与えるとのこと、またも騙されました。一晩中、あちらこちらで飯盒でご飯を炊く姿が見受けられました。

荒れ果てた収容所に入れられ抑留生活が始まり、昭和二十年十月三十日より、土木建築及び伐採作業に従事いたしました。

第一番目の仕事は、自分達が入っている収容所の周りに杭を立て鉄条網を張る作業で、地面は凍りなかなか掘ることが困難で、「ダワイヴィストラ、ダワイヴィストラ(早くやれ)」と言われるばかりでした。

食糧は少なく、お米のとぎ汁のような重湯を飯盒一個、五人で分け、一人分は中ごう一杯に米粒(炊き切れたもの)十数個くらい、または昆布だけの日、大豆だけの日と、誠にお粗末な食事でした。また、水も一人一日三合で、歯を磨き、手足を洗つて、飲み水にもしなければなりません。ほとんどの人が栄養失調

となりました。寝床は蚕棚式で、一メートルくらいの高さで三階まで、一間に六人で頭、足を交互にして休みました。

着のみ着のまま、六カ月が過ぎました。虱の大発生です。背囊を枕に寝ていると、寝返りする度ぶつぶつと音を立ててつぶれ、頭の後ろに手をやると真っ赤な血が付きました。服を脱ぎ、縫い目の所に溜まった虱は、缶詰缶が三回くらいで盛り上がったものです。梁を動く虱の音が、ちょうど蚕を食わせたようにジャワジャワジャワと大きな音を立てて行列を作つて動く姿も、体力がないためどうすることもできませんでした。

そこで、部隊長から命令が出ました。暇があつたら虱を取れ、取つた虱は全部食べ、虱には血と栄養がある。この命令は、私、終生忘れることはないと思いません。

静岡県 小山昶爾

イルクーツクを過ぎ、シマ、チレンホーボとまた一週間以上が過ぎ、タイシエツトに着き、引込線の貨車に乗り換えて森林地帯に入り、ネーベルスカヤで下車しました。線路がないため、何キロメートルか歩いて、夕方、古い木造の建物が連なつてある場所に着きました。一番手前の建物でシベリア生活の第一夜。とうとうこんなところまで連れてこられてしまったのです。一生こんなところで暮らすのかと思案を巡らし眠りの床に就きました。

ここで思案をさせないほどのびっくり仰天する歓迎を受けました。眠りにつくと何やらゴソゴソと身体に近づいて血を吸われるのです。それも待っていましたと言わんばかりの歓迎で、あちらこちらで皆もやられている様子でした。暗闇で正体がかめませんが、虱の何倍もの吸引力で、身の毛もよだつ思いでした。私はそつと手を差し伸ばして捕獲に成功、たしかな手ごたえで、思い切り指先に力を入れてつぶしてみました。鼻に指を近づけると、ひどく臭いにおいがしました。朝まで眠れませんでした。

朝になつてこれが有名な南京虫であると班長が教えてくれ、朝から退治にかかりました。寝台の木の割れ目、柱の割れ目に一列縦隊に赤い身体を隠しているのが退治するには好都合で、細い木を割れ目に差し入れて上下に動かすことで簡単に退治できました。昨夜の仇と徹底的に殺したので、どうやら次の日はよく眠ることができました。

所内には建物が六棟あつて二千人収容できました。ここで小隊五十人、三個小隊をもつて中隊とし、三個中隊で大隊を編制して作業隊としました。この作業隊をタイシエツト、ネーベルスカヤまである鉄道をブラーツクまで建設予定の測量線上の三百キロメートル区間に配置したことから、百七キロ地点の大隊は百六十三キロ地点に配置した大隊まで五十六キロメートルが「ノルマ」と決めていた様子でした。

島根県 小池繁徳

列車の運行が何日間であつたか記憶にないが、とにかく昭和二十年十月二日夕方、小さな駅に停車し、全員下車を命ぜられた。ここはオブルチェという小さな町だった。夕闇の迫つた道を千人の兵士たちはうつむきかげんに元氣なく歩いた。やがてひっそりした丘陵の中に鉄条網が張りめぐらされた二百五十人収容の大きな幕舎が四つ建つていた。

貨車に乗るときには気がつかなかつたが、自動車や馬も一緒に乗せられていた。日本へ帰るのになぜそんなものが必要かと考える人たちはそのときはいなくなつた。シベリアへ連れて行かれ、ああ、やっぱりそうだったかと……。

収容所の中は二段の板張りになつていて、その上にむしろのようなものが敷いてあるだけだった。支給された毛布は二、三人に一枚あるだけ。内務班のときと同様、上段は古年兵、下段は初年兵で、軍隊時代と全く一緒だった。十月初めというのにシベリアの夜はものすごく寒くて就寝ができる状態ではなかつた。

昭和二十年十月二十日夜、貨物船に乗船して大泊湾出帆。北海道宗谷岬を眼前にしながら、船は間宮海峡を北上して、食事の給与全くなくして三日目、恵須取の対岸、沿海州ポートワニ港に上陸。直ちに貨車に乗せられて奥地に進み、ホトー三〇三収容所に入る。ありついた食事はタバコ大のフスマ入の黒パンと野菜スープ、といつても、箸に実のひつからないスープであった。

南京虫撲滅戦争

消灯、ようやく寝静まったと思うと、南京虫がどこからともなく這い出して来て、たちまち所嫌わず身体中を刺され、誰もがさがさが起き上がった、南京虫退治に騒ぎ出す。バラックは丸太を横に積み重ねた構造のため、その割れ目から南京虫がゾロゾロ這い出して来る。潰しても潰しても出てきて身体を刺す。潰すと独特の悪臭を放ち鼻をつく。

我々にとって生まれて初めての南京虫との遭遇である。この南京虫に悩まされて不眠状態に陥る。寝不足のうちに起床の鐘が鳴る。鐘といつてもベルではない。つるした古レールを叩いての起床合図である。バラック内の内壁は真っ赤に南京虫で塗りつぶされる。もたもたしていると、ソ連監視人が早く行動しろと大声でどなり込んでくる。

翌日、ヤポンスキー(日本人)の健康診断がある。強制労働に振り分ける等級を決めるためである。神経痛、リウマチ、腰痛など、外面にあらわれない症状のものは休ませてくれない。熱があるとか、外傷があるといったものは休ませてくれる。

バラックの中には「働かざる者は食うべからず」の標語が掲示されている。健康診断で病弱者と認定された者たちは、南京虫を潰した後始末や、真っ赤に汚れた壁を、石灰を水に溶かして白く塗り替える作業をさせらる。

私達はまず黒龍江を下り「ウラジオストック」から日本に帰れるということで、何の抵抗もなく輸送船に乗り込んだ。しかし途中、突然船から下ろされ、意外にもシベリアの地に送り込まれてしまった。後でわかったが、何とその数約六十余万人と言われている。

初めて見た捕虜収容所(ラーゲル)は二重三重と有刺鉄線が張られ、四隅の望楼には自動小銃を持った見張りの大きなソ連兵が立っていた。ラーゲルの建物内は細い丸太を並べその上に乾草を敷き、毛布一枚でなんとか寝起きしていた。

ソ連は日本軍の固い団結を恐れ、それまでの部隊をバラバラにし、五〇〇人単位のソ連式作業大隊を新たに編成し、各ラーゲルに分散した。

私達は「ピラ五三〇大隊」に編入され、ラーゲルで本格的な現地作業が始まった。

ソ連では総ての労働にノルマ(一日の基準作業量)が決められており、体の小さい日本人にはこのノルマの達成はとて無理であった。作業は主に森林の伐採、木材の積み下ろし、建築の手伝い、道路工事、農作業(じゃがいも掘りが多かった)など、ほとんどが初体験であった。

太陽は西に東に回り、どちらの方向を目指して走っているのか全く分からない。ブラゴエシチェンスクを出発してから十七日目の十一月十六日朝、全く人家の見当たらない雪原の僻地に停車する。ソ連輸送計画の目的地なのか。カンボーイにより扉が開けられ、全員下車し、人員確認がなされ、ソ連ゲーペーウー(内務人民部)将校の指揮下への引き渡しが行われ、ソビエト連邦カザフ共和国テケリ第四十地区第八収容所に抑留される。

山の斜面を利用して、兵舎風の平屋建てが三段、道に平行して数棟並んでいた。丸太を組み合わせた上に粘土を塗り込め、石灰のようなもので吹き付けた

お粗末な宿舎だった。収容所の周囲は有刺鉄線が高く張り巡らされ、隅々には望楼があり、既に監視兵の姿が見えた。宿舎内は土間で、蚕棚のような二段になった寝台が左右に通路を挟んで数列並んでおり、藁布団と毛布が一枚ずつ置かれていた。勿論電灯はなく照明はランプで、それも三メートルぐらいの間隔で配置されていた。窓という窓はなく、宿舎内は常時薄暗く日が暮れば眠るしかなかった。

最初の二、三日は雪掻きが主な仕事で、この合間を利用してソ連軍医による体力判定検査が実施された。検査はごく簡単なもので、上半身裸になり、軍医が腹の肉をつかみ、肉付きの良し悪し、弾力性の有無によって即座に等級が分類された。一級から三級、更にオカと区分され、一、二級は重労働、三級は軽労働、オカは病弱者として構外作業は免除された。私は体格が悪くやせっぽっちで検査結果は三級(軽労働)だったので、ノルマ(割当基準量)が低く作業は辛くなかったが、その代わり食事が少なく、空腹の日々が続き閉口した。

富山県 山田秀三

モンゴル国アルタンブラグまで行軍、ここから軍用自動車に乗る。幌で覆った自動車で走るので、物凄く寒気が身にしみる。モンゴル草原の原野を走る走る、何百キロ走ったか、向こうに微かに白い建物が見えて来た。全然思いもよらない国へ連れられて来た。何をさせられて殺されるのか不安が募る。まあ皆が一緒だからと覚悟はしている。果てしない草原で自動車から降りた。

零下四〇度、木枯らしが体にしみる。体感温度は六〇度ぐらいだろう。降ろされた所には地下洞穴が点々と数カ所見られる。この洞穴が宿舎らしい。中隊毎に洞穴に入る。中は通路幅三メートル長さ八〇メートル程度で、両側に一メートル程の高さの棚が八段あり、垂直の梯子が片側に四個取り付けてある。野菜の貯蔵庫に使用していた所とのこと。明かりは一〇ワット程度の暗い電球が四個程あり、手さぐりの室内である。洞穴の入口は三メートルで、穴の縁はちよう

ど雪の「かまくら」のように氷が穴のまわりを包んでいる。洞穴と外気との差があつてできるのだ。

どさくさの中から炊事の支度になるが、まず水の準備が一番。草原原野で水がなく、四キロ離れた所に河があるので取りに行く。各中隊より数百人の割当てで、寝具の毛布を首に巻き、モンゴル兵監視の引率で敗残兵のみずぼらしい姿で水でなく氷を取りに行く。何とも情けない光景である。かつての日本軍の姿ではない。河の水を砕くにはちよつと骨が折れる。氷を毛布にくるみ、背負って宿舎の洞穴の地獄風呂釜に入れる。氷を水に溶かして使用するには随分氷が必要だ。夜明けになると氷を取りに行くのが部隊の日課だ。氷を水に、水をお湯に、そして家畜の飼料コウリヤンを人間が口にするのにどれだけの時間がかかるか。一日に一回が精いっぱい。それを皆が何よりも首を長くして待つ。口に入れる食物がないと何と哀れなものか。腹はぐうぐうと鳴るがどうにもならない。皆静かに暗い穴の中で待つだけだ。室内も零下で、人と人が交互に体をすり合わせて暖を取る。まったく地獄の監獄だ。

室内は薄暗い。手探りの何とも言えない淋しい環境の日々が続く。外は零下四〇度くらいあるだろう。十二月は昼の長いもぐらの穴蔵の中で、夜中三時頃に一日一回出来上がる中国のコウリヤンのまだ炊きあがっていない雑炊の配給で静かな薄暗い穴蔵がとたんにざわざわしてくる。飯盒の目盛りで厳しく分配するのだ。胃袋の中に何も入っていないと餓鬼の境遇になり、普通常識では考えられない、何と表現していいか、この境遇になった者でないと判らない餓鬼の社会だ。

氷取りが十二月の日課、外は零下四〇度の木枯らしの風が吹く。室内も零下で、環境衛生は最悪の状態。体力は栄養失調で発熱者は続出、軍医がいても薬も充分になく、死亡者が多く出たのはこの時期だった。死骸は一カ所に集めてあるが、冷凍になつて人間としての扱いではなかった。

自分もいつのようになるか分からない。淋しい思いで一日一日、皆と暗い洞穴で体をすり合つて日々を過ごした。

愛知県 河村廣康

昭和二十年十月十日、タイセット第四收容所に到着。ここが目的地でした。收容所の入り口で荷物検査があり、地図、磁石、武器に類する物、薬品などは取り上げられました。こうした検査はその後一週間置きにあり、その度ごとに持つて来た物はだんだんと減つてゆき、一カ月の間に荷物は全部取り上げられて、とうとう着の身着のままになってしまいました。

この收容所は私たちの来る直前までドイツ人が入っていたそうです。この位置は大きなバイカル湖の西側の中央部にあり、雑木林というより密林が遙か彼方まで続いているところを切り開いて、收容所が作られています。收容所の前を幅十四、五メートルの道路が駅の方まで延びており、反対方向は密林の中に消えています。

松の板を打ちつけた三メートル程の高い塀が周囲を囲み、塀から内側五メートルの間隔を置いてずうっと鉄条網が張り巡らされています。四隅には監視塔が建ち、昼夜を通してソ連兵が、七十二発の弾丸を装填した銃身の短いソ連独特の小銃を肩からつるして見張っていました。

出入口は幅四メートル程で両開きの板張りの扉があり、道路に面した一カ所のみで、その横に小さな出入口がついています。收容所の広さはよく判りませんが、一千五百人を收容しても余裕のあるほどですから、相当な広さです。捕虜收容所になるまでは、ソ連のシベリアでの強制労働をさせる流刑者を收容していたというのですから、全くお粗末なものです。建物も随分古く、屋根は乱雑に削った板葺き、幅七、八メートル、長さ約三、四十メートルの細長い建物です。朽ちかけた丸太を組み重ねたもので、真ん中あたりに板戸の一方開きの出入口、不細工な鉄製のストープが一つ、粗削りで作った木机が一つ、割り板やそぎ板で作られた二段ベッドが続く寝台床板は勿論凸凹で、ところどころすき間があり、そして照明は薄暗い裸電灯が一つづら下がっています。したがって部屋の端の方

は暗くてほとんど見えないから、たいまつを明かりにしています。四カ所に小さな窓がありました。その部屋に八十人が起居するのですからぎつしりです。それに毛布は二枚、最初のうちは体が痛くて息苦しくて困りました。厳寒の時期には室内でも零下五、六度です。壁は石灰が塗り付けてあります。これが懐かしの家？です。

ほかに、炊事場、医務室、浴場、便所、ソ連兵の詰所があります。

收容所に入ってから階級章をつけて軍隊組織そのままでした。ソ連の将校より大隊長（一千五百人が一大隊に組織されましたから、軍隊時代の部隊長（大佐）が大隊長になりました）が命令を受けて、私たちは中隊長から伐採、製材工場など、それぞれの仕事を割り当てられておりました。

大阪府 有光徹二郎

まず、びろうな話になるが、私達の收容されていたラーゲル、テルマ第二二分所のトイレは、幅二メートル、長さ一〇メートルの壕の上に板を並べてあるだけ、外側は木の囲いはあるが、各個には仕切の垣はない、全部がまる見えだ。朝などの混雑時、頭を並べて、前後左右しゃがんでいる光景を想像してみてください、壮観の極みである。氷点下四〇度、五〇度以下が普通の厳寒期に、あの黄金が、落ちるそばから凍りついて、盛り上がって鍾乳洞のような山が出来る。それが板の間から顔を出すようになる。私達は「黄金の塔」と呼んでいた。真夜中など、電灯などあつたものではないから、しゃがんだ途端、尻を突き上げられる。その痛いこと痛いこと。何といつてよいか、筆舌に尽くし難いものがあつた。

しばしば「黄金の塔」を壊す作業が回つて来る。鉄のバールでコツコツと壊して、籠に入れて捨てに行く。どんなに払つても氷のかけらは服に付着していて、部屋に戻るとそれが解ける。ものすごく臭い。へどが出そうだ。それでも皆平気で飯を食っている。あそこでは俺達はみんな人間かな……？と思ひ出す。

高知県 加納 憲

昼頃列車が到着し降ろされた駅はビラであった。全体の人員は三百〜四百人くらいだったろうか。駅の周辺には人家が見え、それなりの施設もあるようだ。ぞろぞろと連れていかれた途中に女囚の一団とすれ違った。彼女らは「ヤポンスキー……」とめいめいに叫んでいたが、笑いながら冷やかしているようだ。町中を通り抜けるとビラ河はるかに望める郊外に收容所が見えた。收容所の先に材木置き場が、また近くには製材所があった。周囲を二重のバラ線に囲まれ、四隅に望楼があり、入口には歩哨室、隣が将校室、離れて兵舎(カザルマー)があった。早速部屋割りが決められ、めいめいの寢床に乾草を敷く。(ついでに書くと、三年半のシベリア生活での寢床はいつも乾草で、「シベリアの体験記」の写真にあるようなマットには出会わずじまいである)

トイレも、穴を掘って丸太を一面削り、それを渡して作った。晩飯は遅くなつて食べたが、その晩は悲哀・不安で眠れなかった。翌日半分くらいの人数が他のところへ移動し、二百人くらいが残った。

クラスノヤルスク

收容所名はクラスノヤルスク二十一地区第九收容所、收容所長ミカセ大佐と聞く。けれど、收容所名を記した物は見られない。所長ミカセ大佐にも一度も出会ったことはない。超秘密主義のためか、町名、工場名、門札、看板等字を書いた標識が見られない。シベリアの中央に位置したこの町は動植物も育たぬ寒冷地であり、九月下旬より四月上旬まで零下三十度より温かくなならない。零下三十七、八度の日が最も多く、四十度を超す日も度々ある。

体感温度零下六十度、寒さに耐えて作業場に向かう。そんな時は、日本に帰りたい、他に考えることのない我々はこの寒い土地を早く離れたかった。人の住まぬ土地に、流刑者、罪人の町、数十万の人々が酷使されている。銃に囲まれた

岡山県 片山衛真

集団によく出会う。收容所は十一棟の兵舎に二千人が收容された。收容所は高い塀で囲まれ、上部には電流が流されている。要所に高台が作られ、夜間照明灯で照らされていた。兵が小用のために塀に近づき射殺された事件があった。塀に近づくな、近づくと殺すという警告である。便所は收容所の中央部に一カ所作られていた。戸も門きりもない風通しのよいところだ。零下幾十度の中でも生きる限り使用しなければならぬ。食べる物が不足し食べないためか、便所に行く回数は少ない。休日の度に使役でツルハシを使用して取り除くのであるが、大便是固く凍り、長い時間が必要だった。汚物は車で三三三川の氷上に捨てて行く。寒さのために水道設備はなく、手を洗うことも顔を洗うこともない生活だ。

初めてのシベリアの冬、ペーチカはあるが燃料がない。ソ連側は燃料を支給しない、室内でも零下幾十度、防寒具を着用したまま眠っていた。防寒帽の口の周りには白く凍っている。食糧不足、強制労働、体力は弱っている。その上、暖をとる燃料がない。毎朝四、五人の兵が冷たくなって逝った。前日まで働き、夕食を共にした兵が、痛みを訴えるでもなく死亡していく。作業場で石炭を盗んで帰るようになってから死亡者も少なくなってきた。ソ連は死亡者に対して冷酷だった。寒さのために死亡してゆく。ソ連の役人達は知ついても燃料の補給はしない。

收容所

白い高い板塀、その上に数本の電流が流れている。要所には高台が作られ、自動小銃を持ったソ連兵が見張っていた。到着順に各兵舎に收容された。私たちは一一号舎に入る。小さな兵舎に二百人が詰め込まれ、床板に自由に休むことは出来ない。頭と足を交互にし横にならぬと休むことはできない。シベリアの冬は早くやつて来る。零下十五〜二十度になっている。燃料は不足している。ペチカはあるが冷たい。一日一日と寒さは増してくる。到着後二時間、少量であるが、

岡山県 片山衛真

水の多いアワのおかゆが支給された。塩味がつけてある。温かい一杯のおかゆであつた。この味は一生忘れることができない。十三日目の早朝、口に食べた物だつた。人間の命も強いものだ。この間に病弱な者は去つていった。この国では病弱な者は必要ないのだろうか。持ち物は軍隊当時着用していた軍服、下着は上下一枚、毛布一枚、防寒外套であつた。食事をもらう空き缶一個、木の枝のはしである。シラミは下着数百匹と付いている。シラミがいると、温かさを感じる。自分の友達のごとく、シラミの動作を見て楽しむ日もある。夜中に出て来る南京虫には困つた。小豆ほどにも血を吸つて歩けなくなつてゐる。七月頃より風呂に入つていない。下着も長い間洗つていない。收容所内には洗面所はない。顔を洗うことはできなかった。暖かい地方だと水は自由に使用できたことだと思ふ。

九月二十二日、私たちは他の中隊と兵舎を混成し、中隊には畠山満、三村勉、二人の同年兵がいた。中隊は第四中隊である。九月下旬には零下三〇度以下つた。夜の明けるのは十時を過ぎる頃である。暗い收容所の中に五列になり点呼を受ける。人数を確認するのだが、ソ連軍下士官が幾度も幾度も計算する。寒い口の周りは白く凍つてゐる。足は痛む。毎朝三十分くらい点呼に必要だつた。暗い道を工場に歩を運ぶ。腰には空き缶を下げてゐる。收容所は二十一地区第九收容所と言われていたが、他の收容所は皆目わからない。

工場よりは北に一・五キロほどのところにあり、エセイ川の河畔を朝夕歩いてゐた。樹木は收容所にはなかつたが、幾本かの名の知らぬ三メートルほどの高さの木が見られた。草は一切見られず、私たちが到着した日に降つた雪がそのままであり、以後雪の降ることはなかつた。收容所には約二千人、終戦時は各地の陣地より集結し、故郷も全国各地より集まり、中でも熊本、静岡の兵は多いようであつた。戦友で岡山出身は三村勉君一人であつた。他の收容所より一年後私たちのところに、岡山三野小学校一年上の広瀬君、二年上の三木さんに会うことができた。また日生の人も三木と言つてゐた。シベリアの広野において二人の学区の人々に会うことができた。

死、四の中隊

私の配属された四中隊は、死の中隊と言われ、收容所内では一番苦しい作業であつた。大型コンバインを作る工場であり、重労働は文筆で表すことのできないほど苦しい毎日であつた。ノルマによつて作業は進められ、十分な食事も支給されず、毎日のように兵隊は死亡していく。トロツコを押しながら失神する者、ロシアの指導者は作業を強要する。ノルマに達することができなければ食事が悪くなる。

十二月頃だと思ふ。床を共にしている納塚が、食事も済ませてから、子供の写真を出して一人で話している。「母さんを大切に、よく勉強して」彼は座つて、じつと写真を見詰めていた。涙を流していた。彼の古里は大分県である。終戦十日ほど前に召集になつて入隊したのだ。四十歳は近いように思われた。原隊は別であり、あまり知らなかつた。眼鏡をした角顔の小男であつた。入隊前は製鉄所の役員だつたそうだ。長い間子供と話しているので、私は明朝仕事は早いんだ、早く休むよう話した。彼は何も言わず横になつた。これが私との最期であつた。明朝彼は冷たくなつてゐた。栄養失調死は苦しむことはなく自然に死んでいく。收容所で毎朝幾人も他界してゐた。私も戦友も、顔は目ばかり光り、別人のようになつた。骨と骨がすれ、ガラガラ音がしているようだ。四中隊は特にひどい。作業が苦しく、太田伍長は便所で首をつつて他界した。車輪のない貨車の中で凍死した兵もいた。貨車に乗れば、日本に帰れると思ふのだから。五人ほど集団脱走した兵隊がいたが、数日後全員凍死したとの知らせがあつた。東に向かつて歩いたのだろうか。日本に少しでも歩いて近づいても、寒いシベリアだ、帰れることはできない。承知しての逃走だつたらう。死亡者は西の丘にすてた。初めは下着をつけていたが裸体で捨てるようになった。残つた者が必要だつた。私の順番も近いのではと思つてゐたが、彼らの住所等知ろうとも思わなかつた。死亡者に対して淋しさも同情もなかつた。若い者より年上の者が多く死んでゐた。また、ねずみ、木の皮を多く食つた者も死を早めたようだ。十一月になれば、零下四〇度

に下ってくる。寒さと粗食、重労働、兵隊たちの苦しみは体力をも失わせ、人間の限界だ。気力で生き続けている。東の空を見ては泣いた日々でもある。私の二十歳も終わる頃のことである。一日の作業を終わり、また自動小銃を持ったロシア兵に囲まれて収容所に帰る。少しのかゆを食べ床につくのだが、休むことだけが楽しみだ。その楽しみも、寒さのため眠れない。けれども一日のうち最良の間である。寒さのためか夜中に十数回小用に行く。便所までがまんでできない。入口から用を足して歩く小便の道である。休みには水を割って運んだ。眠っていても、口のまわりは白く凍っていた。室内も零下二〇度くらいだったろう。その朝はまた作業に出発して行く。一月一日元旦も腰に空き缶を下げて仕事に出発だ。

北海道 佐々木佳明

炊事場にはステンレスの大釜が三基と中釜一基が設置されていた。雑炊などは木製の大へらでかき混ぜる。民謡を歌いながら調子を合わせゆったりと攪拌する。かような作業は民謡がよく合うのである。東北の民謡が多かった。軍歌はリズムに合わず余り歌わなかった。かまどの焚口は外で、燃料は粉炭で火力が余り上がらず、時折外の焚き人に対し火は燃えているかと大声が上がる。

茨城県 初鹿野清

第七十四号バラックであった。収容所の西端、鉄条網のすぐ近くである。バラックの中は真っ暗であった。黒い影と黒い影がぶつかり合いながら、手さぐりで落ちつく場所をみつけ、そこに荷物を置いてひとまず腰を下ろした。隣へ誰が来たかわからない。

バラックの中は幅が約十メートル、一メートル程の通路が両側に二つ、それを挟んで一坪ほどの升が四列に二段装置で縦に十二列、升の数は九十六もあった。四人ずつで定員三百八十四人という大変な収容能力であった。出入り口は南

北に一つずつ、その出入り口の所に三坪ほどの空間があり、煉瓦済みのペチカがあった。便所は外。人間が眠るだけの機能を備えているに過ぎなかった。

隣の升で明かりをつけたので二段装置の住居の様子がはっきりした。屋根裏には直径十センチメートルほどの丸太が敷き詰められ、その上は土が載せてある。

福井県 横田肇

小屋は以前はドイツの捕虜がいたとのこと。朝になって見たら、直径十センチほどの丸太を横に積み上げ、外側に土が張りつけてあり、屋根も丸太を斜めに掛けて土が載せてあった。中は丸太を並べた床が二段になって、中央は土間の通路となっていた。

一週間ほど環境整備で、炊事場作り、便槽掘り(板を渡してその上で用足し)、床の草敷きのための草乾燥等で過ごした。その間の食事は飯盒の中蓋一杯の高梁雑炊(スープに近い)で、腹が空いて、寝る時に横道河子から持って来た乾パンを少しずつ食べて空腹の足しとした。

茨城県 初鹿野清

「おうい、南京虫がすごいぞう！みんなして退治せんと……」隣の升から、バラック内に緊急警報が出された。バラック内は、すわつとばかり、ハチの巣を突つたように色めき立ち、各所に火が灯った。私達の血を狙う伏兵がここにもいたのである。その数、バラック内で数万匹を数えるであろう。一匹か二匹でも眠れなかった牡丹江のことを思い、私は慄然として背筋が凍る思いであった。バラック内は、南京虫退治一色となった。炎を掲げて敵影を追い求める血走った男達の目が異様な緊張を作った。炎で焼き殺された死骸は床の上に落ち、悪臭が充満した。

私達の升の天井にも、同じような大集団がいくつかいた。水沢は、炎で焼き殺す戦法でなく、まず厚紙ですりつぶした。その悪臭は格別であった。丸太は血し

ぶきを当てたように赤黒い虫の血で汚れた。集団から離れ、クモの子を散らすように逃げ惑う……それを追つて炎がゆらめく……：相手を見殺し、そして追い詰める男達のまなざしは、真剣そのものであった。

東京都 関 栄夫

ブレーヤという駅でした。ウラジオストクどころか、通訳の言った帰国とは真つ赤なうそ偽りでした。

直ちに駅の引込線より木材運搬専用森林鉄道の台車に乗り移り、山の奥へ奥へと進んだ。着いた所はソ連の囚人収容施設跡で、二百メートル南北東西同じくらい、四隅に監視用望楼が設けられ、逃亡防止のためだろう、その間約五メートルに有刺鉄線で柵を二重に張り巡らされている。囚人宿舎は何年かが過ぎ、崩れ落ち、廃墟になっていて、直ちに住む事はできない。

収容所の外にはソ連軍の将校官舎、兵舎、パン工場、倉庫、食堂は既に補修されていた。早速ソ連将校及び監視兵関係者が住み込んだ。我々はまたもや柵の中で野宿生活。出入り口は一つで、四隅の望楼には既に監視兵が銃を構え、厳重に収容所内を監視していた。早速各班に編成され、我々の宿舎造りが始まる。深さ一メートル、横二メートル、長さ三十メートルの縦長穴を掘り、監視兵つきで山に行き、小丸太、木の皮、山ごけを調達持ち帰り、半分地下構造合掌を組み、屋根には木の皮を張り、周りに土を盛り上げ、すき間には山ごけを詰め、外気を防ぐ。床には小丸太を並べ、上には乾草を敷き詰め寝床を造った。ほとんど寝返りもできない状態で寄せ合つて寝るのですが、一度小便などで起きると、自分の場所に入るのが大変でした。武装解除以来、雨風をしのぐことのできる屋根付き宿舎に泊まることできてほつとした。

大阪府 藤本善造

収容所は周りを高さ五メートルぐらいの板塀で囲み、その上には幾重にも有

刺鉄線が張られ、所々に裸電球が取付けてあった。四隅には望楼が設けてあり、中に哨兵がおるらしく、その影が時々揺れていた。ただ不思議に思ったこと、板塀の向こうに私達が入居するはずの建物らしいものが何一つ見えないことであつた。

やがてソ連の将校が二人がかりで入口の板の扉を左右にギギツと開けた。そこをくぐつて内部を見てびっくり仰天した。ほの暗い内部に見えているのは、かまぼこ状の半地下式の土小屋が並んでいるのだ。それは冬期の野菜貯蔵庫か、豚小屋のような居住棟であつた。

狭い入口を二、三段下りると中にベーチカが燃えていて、むせ返るような土の臭いが立ち込めていた。ちよつと触れただけで空気の中から水が滴り落ちそうなの。一〇〇%の湿度だつた。真ん中を一・五メートル位の通路が通り、その左右に上下二段に仕切られた板の間の寝台があつた。その上に一枚の毛布を敷いて座つたが、その姿は街の片隅で物を請う乞食の姿でもあつた。この日から三年間、思ひもよらない虜囚としての苦難な日々を送ることとなつた。ちなみにロシア語ではこの土小屋を「ゼムリヤソカ」と呼ぶ。

兵庫県 芦田史朗

昭和二十年九月二十三日、ものすごい音を立てて錨をおろした。ここはまぎれもなくソ連沿海州のシベリアである。「下船準備せよ」「下船」

ただただ、一点を見つめるだけである。「北海道へ」嘘をついてシベリアへ連れて来られた。牛が引かれて行くように、ゆっくり、ゆっくりと歩いていく。かくしてシベリアへ上陸させられた。ソフガワニというところらしい。貨物列車に乗車した。

千島の夜も短かつたが、ここシベリアでも四時に夜が明けた。夜が明けてみると、水たまりはすっかり氷が張っている。ひどく寒い。のどがかわく。水がほしい。貨車は時々動いては長い間停車した。駅もなく松林の中で停車した。「全員下

車」

この建物は「マサ草き」の平屋である。一棟を二段に改造されたが狭苦しい。一人平均四十センチの床しかなく、頭足交互に就寝する。電灯も水道もなく、灯油も十分でなく暗い。狭くて窮屈である。やつの思いで横向きになった。それも束の間であった。飢えて待ち受けていた南京虫の総攻撃である。天井から「ポトン、ポトン」と顔や腕に落ちてくる。下からは蚤が「のそり、のそり」と這いのぼつてくる。首筋から袖口、足首から全身へ這い回る。かゆい、かゆい、ごしごし掻くより方法がない。それでも昼間の疲れからか、いつの間にかうとうとと眠れたものである。風呂もなく、洗面所もない原始生活が始まるのだ。

欧露へシベリア鉄道横断

昭和二十二年七月、突然の移動命令で、将校団二百人が有蓋貨物に乗車させられた。

「ブローホ オフィセル」(悪い将校)

「ブローホ コマンジール」(悪い指揮官)

活動分子(アクチープ)の管理になって、千島からの沿海州の将校が集合させられたのである。行き先がわからない汽車の旅の始まりである。

「帰国ではないだろう、有蓋貨車に五十人はど押し込まれたから」

「しかし、何か解放感というか、自由になれたと感じた。もう隊のみんなのことを考えなくていい、自分のからだのことだけを考えればよいのだから」

「水浴せよ」

広い広い川、きれいな水である。川辺で野糞も格別である。泳いだり水浴したり楽しい時を過ごした。このとき初めて貨車の多いのに気がついた。十二、十三、十四、十五、……。

バイカル湖。西へ西へ、大陸の中に忽然と現れた大海原の岸辺を走る。大平原のかなたに小高い丘の大森林地帯が見える。列車はウラル山脈に入ったと知らされた。大森林の中を何日か走った。下り始めた。ウラル山脈を越えてヨーロッパ

に入ったらしい。四十日ぶりの貨物旅行はマルシャソスク到着で終了した。

アングレンにおける抑留生活

岡山県 田中一司

海拔一五〇〇メートルに近い炭鉱町、冬は零下三〇度、夏は四〇度を超える高原特有の氣候で、都市建設を目指して、このたび日本人捕虜八千人ほど配置され、四つの収容所に分けて入れられたが、これらの収容所はそれまで囚人用で使用されていたもので、飢えた南京虫とシラミ、ノミが充満していた。幕舎その他の施設は日本製のものがあつた。

収容所に入つて一番先に驚いたことは、まず便所であつた。共同便所であつた。個人個人の仕切りがないのである。便所は幕舎の中にあつて、大きな穴を深く掘り、縦と横木を交わし、板張りの中央に通路があり、その両側が大便所となつている。左右合わせて五十人ほど、使用中の風景はまことに見事なものである。使用中に横の人と話をしながら、たばこを吸いながら「共産主義で困つたものだ、便所まで共同だ」。

飢餓と寒さと重労働の上に私たちを悩ましたのがシラミと南京虫であつた。一日じゅう体が無性に痒く、作業の休憩時に焚き火してシャツ、袴下(ズボン下)を交互に脱いでシラミ取りをする。栄養失調の身体の血を吸い取るシラミは、袖の縫い目に列になつて白い卵がくつついていて、それをつぶすとプチプチと音を立ててつぶれた。

南京虫は夜の吸血鬼だ。眠りにつくころになると壁のすき間や柱の割れ目から、寝台の木の裂け目から、大小さまざまな南京虫がぞろぞろ出てくる、そして首筋や手首足首など出ている部分を食う。これまたシラミとは違った痒さがあり、ポリポリとかくとその部分が潰瘍になり、いつまでも治らない。つぶすと一種異様な匂いがたちこめる。その吸血鬼はさんざん私達の安眠を妨げ、朝の起床前になると、ちゃんと三元に戻るのである。

愛媛県 長谷川三郎

海水で米を洗い、飯盒で雪を溶かして飯を炊き、塩味のついた飯で夕食をすまし、野宿地へ向かつて月明かりの雪原を黙々と行進が行われました。数時間後に小高い谷間の野宿地に着きましたが、付近には暖をとる薪にする物は何もなく、携帯天幕を張り、毛布で周囲を囲うだけのものでした。雪原のシベリアで第一夜の野宿を十数人が一かたまりとなつて過ごしました。酷寒の厳しさで凍傷の心配があり、一晩じゅう手足の指先を摩擦し、一睡もできない野宿でした。後日、ここを地獄谷と呼んでいたことを知りました。

夜が明けると二日目の行進が始まり、日暮れに谷川沿いの野宿地に着きました。全員で焚火する雑木を集め、一晩じゅう焚火をし、飯盒で飯を炊き塩をふつて夕食をとり、背囊に腰をかけ焚火を囲んでの野宿でした。

しかし、生木を燃やすので煙いのと、火の粉が飛び服に火がつく心配があり、寝られるような状態ではありませんでした。このように野宿では毎晩生木を焚くので目が開けにくくなり、雪原の行進がまぶしいので目を閉じると、毎夜の寝不足のため居眠りしながら歩く状態でした。

歩む方向からそれると、後ろの人に肩を突いて起こしてもらうことがたびたびでした。毎日の行進の疲労で隊列より遅れて歩くと、ロシア人の泥棒三、四人に囲まれ、防寒帽子、防寒手袋等をはぎ盗られ、警戒兵は泥棒を見ても知らぬふりをし容認しているので、泥棒はどこまでも追つて来る。酷寒のシベリアで防寒帽子、手袋等を盗られると凍傷になるので、隊列に遅れないように行つて行くために全力で歩きました。

食事は一日一回、野宿の時に炊いており、一日分の米を飯盒で炊き、三分の一を食べて三分の二を翌日の朝食と昼食にしておりましたが、翌日になると凍つて雪を食べるのと同じことで、次からは野宿の時炊いた自分の飯を温かいうちに全部食べて、翌日の朝昼の食事は、雪原の表面の雪を手でふるいよけて雪を

食べました。一日一回の食事と睡眠不足と目を閉じての行進で、疲労が極限の状態となりました。

数日後に到着した収容所は山間部の作業場の近くにあり、木造の古い建物の中が二段に仕切られ、電気、水道はない。暖房は薪ストーブ一台で、水は谷川まで汲みに行く。入浴の設備はもちろんなく、電気もないので、朝晩の食事どきは松やにを採つてきて明かりにしていました。食事は、雑穀の雑炊で飯盒の蓋一杯を一日二回。空腹の毎日で寝ておりました。

山口県 長野安廣

入所後二週間、栄養失調で旅立つのは大方が若い兵ばかり、中には「お母さん」と一言。私も入院していた。薬もない名ばかりの病舎だった。

この第六ラゲル、カラガンダでは大きな収容所だった。三重の鉄条網、中心は三メートルのコア板を張り巡らし、四隅にはサーチライトの付いている望楼が設置され、マンドリンを抱えたカンボーイが四六時中警戒していた。内側の鉄条網に近付くと容赦なく鉄砲弾が飛んで来た。外界から完全に遮断されたソ連製龍宮城だった。現代版浦島太郎というところか。早々と編成された炭鉱組は入坑を開始したようだった。中支以来の下痢が止まらないまま、寿命も限界に近づいたなど覚悟を決めていた十月末、役に立たない病人が百人近く、十一トンドンに積み込まれた。行き先は療養所とのこと。

外は小雪だった。毛皮つきシューパー一枚にくるまって雪道をまっしぐら。朝九時出発、昼食なし、トイレ休憩三回、到着は午後五時、もう真つ暗だった。この療養所は旧関東軍が主力のようだった。ドイツ、チヨ、ルーミア、日本を加えると四種混合だった。ここで寿命のある者、ない者、生と死の淘汰が始まった。岩塩のスープ、飯盒の蓋にすり切れ一杯の粟粥に黒パン一切れ、毎日が同じメニューだった。薬らしきものは何一つ口にしないまま寿命のない者は皆旅立つて行く。

寿命のあつた私は、半年後、元の第六ラダーゲルに戻った。昭和二十一年五月だ

京都府 野村喜与四

つた。翌日より炭鉱勤務、スコップ相手の採炭夫だった。元御用船の火夫だった私には苦にならなかつた。以来二年間、ロシア娘のワリーヤとヘルタちゃんに励まされ助けられ、頑張った。粟や稗飯で腹いっぱいにはならず、足りないところは水で補いながら。

愛知県 糸井紀伊

収容所の建物は前からあつた建物で、直径三十センチほどの丸太を積み重ねて外からしつこいを塗ったもので、窓は二重ガラスになっていたが、破れていたため室内の湿気がその間に入って凍り、氷の壁になっていた。

二段装置になっていて、老人や少年義勇隊の者は上の段で寝て、下は若い者が寝た。床は板張りであつたが、そこから三十センチくらいのところに下段の板敷きがあつて、その上にむしろを二枚重ね、その上に携帯天幕を張り、毛布一枚を敷いて寝た。

枕元に窓がくるが、凍っているので防寒帽をかぶつたまま寝た。毛布は一人一枚しか持つてなく、一枚は下に敷いたので、上は二人で一枚の毛布を一緒にかぶつて寝た。下に敷いたムシロの二枚のうち下側は凍っているので日曜日に干して上下交換して使った。

寒い夜は背中が冷え、左下にすれば左下が冷え、右下にすれば右下が冷えて、とうとう座つて夜の明けるのを待つこともあつた。

そのため背中の神経が変になり、後に自律神経系を傷めることになり、胃、心臓に変調を来すことになった。

一緒に毛布をかぶつて寝ていた初年兵さんは、風邪を引いたと思つていたら肺炎になり、しかも結核性の末期の肺炎であつたから、こちらも感染し、一年後に発病し、十五年の療養をすることになった。

グルジア人には日本国を知らない人も多い。地球儀の上でも極東の小さな島国なんか知らなくて当然。私もグルジアはロシアの一部でコーカサスという地名の一束の中にあつた。初めて外国を体験してみると、一生を南の海、南方の島、中国大陸に、この戦争で命を落とした若い兵隊を悼む心でいっぱいだ。

捕虜という立場に同情的なグルジア人は友好な関係、仕事の場でもバザールや道で会つても明るく接して嬉しかった。寒いシベリアで大変な苦勞をした学友に復員後聞いた話と大違い、戦争の爪跡はいろいろな面で残っているが、命を拾つて六十幾年無事でこの文を書いている、不思議に思う。

ソ連の侵攻がいかに唐突だったか、グルジア人は日本と戦争になったことも知らず、捕虜がこんな遠い所まで連れてこられたことを不思議がった。ドイツとの戦争は、モスクワの近くまで攻められたし早くから捕虜もいたので詳しい。世界は広い、当時の報道は新聞ラジオ等、それでも主要都市をつなぐ位で、僻地では二日も三日も遅れ、グルジアでもそんな状態だから仕方がないのだ。

二十二年九月、待望のダモイ列車に乗る。トビリシの街も余裕を持つて見ることができた。古い落ち着いた都市、もう二度と見ることもないだろう。ある種の哀愁を感じながら列車は東へ進む。

バクーに着いて今度はカスピ海沿岸を北上、海拔ゼロメートルの湿地帯、背丈を越える位の草原の中をひた走る。貨車の小さな隙間から無数の虫が入り込み、みるみる虫だらけ、車内に溢れ、我々の想像を越えた状態。本当に不毛地帯とはこんな所のことなんだ。

もう一つ、当時としては画期的な出来事だろう、遠目ながらジェット噴射の実験を……。後にロケット発射で宇宙開発が始まつて、なるほどと納得した。

収容所

① 国外追放されてから(古茂山収容所)

② 平壤市三合里ソ連作業収容所(八月一日)

約二万人程いた。ここからソ連に入ソした人も三万人ぐらいいいたと聞く。

③ 八月十日頃より真性コレラ発生。九月十日頃までの一カ月で千五百人以上死亡する。

毎日毎日が死と生の谷間であった。私の班十五人中十四人は死亡した。私の抑留生活は毎日が死の隣にいて、生を考えたことはなかった。

いつ自分が死ぬか、それだけに一人一人の遺体をどう安置してあげるか、ただそれだけが私のできることで、そうすることで私も遺体を安置してもらえると信じて、多い日は百人の死体が運動場に並べられていた。初めは八人で埋葬していたのが、最後には私一人が遺体を背中にしぼって一キロくらいの山道を運んで埋めました。朝一人、午後一人、二回は大変な重労働であったけど、それが皆様への恩返しだと思つて、一カ月どのくらいの人数を埋葬したか分かりません。

凍結した大地は岩盤同様で、人手の土工具などでは歯が立つものではなく、焚き火をして解凍を待つのだが、火の熱は地中には伝わりがが少ない。勢い作業は進まないいで、ソ連兵は怒鳴り立ての連日である。

何はともあれ、全く言葉の通じない状態で仕事につくのだから大変である。また一方では、収容舎屋の建築に着工するとはいうものの、これまた素人の集まり。生まれながらにして労働に未経験の者、鋸、斧、槌など手にしたこともない連中にはどだい、無理難題以外の何ものでもない。それにしても、設計図とか施工図のような、概略なりともつかめる書き物とか、頼れる説明なり手ほどきなりがあつてのことならともかく、騒ぎ立てるソ連兵からして、技能者でもなければ指

導者でもない。まず、五メートルの掘つ立て丸太柱の地上部分に、幅七〇センチ掛ける、深さ五〇センチの溝を造り、これと直角方向に同様の作業をしたものが四本(これが建物の隅柱である)。さらに同様の溝を相対面に掘つたものを造る。この数は、建物の間口、奥行の大きさによって異なる数となる。

柱の位置を四メートル間隔に、深さ六十〜七十センチくらい掘つて、これに柱を立てる。次に柱間隔側面に四メートル丸太を当て、柱間の長さを合わせたこの丸太の両端に、柱の溝と同じ寸法のホゾを付け、これを柱間にはめ込み、この方法で建物を一周する。二段目の丸太も同じ方法で造り、さらに丸太の下端となる面を谷状に斧削りする。

最初に取り付けた丸太の上端に、湿地から採ってきた苔を並べて敷いて、その上に二段目、そして同様に次々と積み重ねる。苔は丸太の隙間をふさぐためのものであるが、これも完全凍結であるから解凍して使用するが、しかし、すぐ凍りつくのである。

五〜六段積木したときに入り口、窓の位置に、大きさに合わせた幅で丸太二本を切り取っておく。(後で必要な大きさで上下に切り込み、入り口や窓の穴をあける)

こうして建物の大きさによって積木が重ねられ、最後の丸太の上端で柱のホゾを造り、ケタ材の穴にホゾ差しとなる。ケタの上に長材の梁を二メートル間隔で渡し、さらに梁の上に長木丸太(細丸太)を並べて、上に乾草を敷き詰め、さらに土を三十センチほどの厚さにのせるのである。

この後は入り口を切り抜き、枠付けをして厚板造りの扉と、明かり取りの窓も同様にして造り、一応建物は完成。実に原始的建物で、鋸と斧、それに溝掘りの手斧、使用に耐えられない穴掘り用ののみと、数少ない工具による建築作業であつた。

内部は、三方にコの字形の棚が三段造られたが、高さがないので、座ると頭がつかえる。おまけに、丸太造りの棚であるから、寝ると丸太のデコボコで体が痛め

つけられる有様。

夜の明かり取りは松根や白樺の皮等を燃やし、暖房は土間通路に二台の薪ストーブであった。そして、この建物一つに千人もの人数が収容された。

収容舎屋が完成して初めての晩、真夜中に事故が発生した。棚の丸太材はすべて生木で、芯までの凍木であった。暖房と大勢の体温によってそれが徐々に解凍し、初め丸太材は水を張ったようにぬれていたが、凍木が解けるに従い人の荷重で横材がたわみ、取り付けの仕口の掛が外れて、二段目の棚の一部が人間もろとも落下し、一段目に寝ていた人たちが下敷きになったのである。悲鳴とともに暗闇の中での大騒ぎで、救出に当たったものの、既に三人が絶命していた。

ロシア語通訳

富山県 谷村文平

第九師団の主催する通訳要員教育(昭和十六、十七年)を受けていたので、収容所入りと同時に役立つことになった。昭和十九年、南鮮の三千浦に移駐の際に、もはやその必要がなくなったものと判断、辞書など一切を処分した後、ソ連参戦の大転換が突発、有用武器を全く持たぬ丸裸のロシア語通訳が始まったのである。

昭和二十年末「東京ダモイ」のかけ声で千人単位の大隊編成で貨車に乗った私の大隊は、資料によると大隊長水谷大尉で、興南に移送された。興南収容所では港湾の荷役、化学コンビナート関係の作業をしていた大隊がソ連に送られ、その穴埋めが三合里から送られるという筋書きになっていた。

車両整備基地(ソ軍)への派遣

到着と同時に自動車整備の技術者、旋盤工、仕上工等が調べられ約二十人の職人集団が編成され、私とその通訳、隊長の将校がついて車輪工場に隣接する街中の一軒家が宿舎として与えられる。興南に隣接する咸興市内である。作業はエンジンを下ろして分解、摩耗した部品を交換、すり合わせて組み上げる、

オーバーホールと呼ばれる作業で、使い捨ての現在は忘れられている仕事である。ロシア、アメリカ、日本の車種が対象で、その優劣、欠陥がよく分かって面白かった。最初は仕事の説明に手間取ったが、職人同志の理解は容易で、軌道に乗ると私は糧秣受領か入浴の世話(外部施設を利用)ぐらいでよくなった。春が過ぎる頃から「凍傷の日本人が朝鮮へ送還されている」といううわさを耳にするようになる。同時に「お前達、働きが悪い」とシベリア送りになるぞ……という言葉が耳にするようになった。受領する糧秣の定量はシベリアの場合と変わらないと思うが、朝鮮では穀物、パンが全部米に換算されるから、重労働でない職人には余裕ができる。私はそれを町の魚屋で鮮魚と交換して我々の食事を豊かにすることができた。糧秣は必ず自分が受領に立ち全うから彼等にごまかされたりしない。この車両工場は約八カ月で終わり、昭和二十一年八月下旬、咸興収容所に戻った。

高知県 中平松鶴

これより一年余りにわたる我々の俘虜生活が始まったわけである。スレレンスクというひそやかな炭鉱街で病院跡がそのまま収容所となった。シベリア鉄道が眼下にあり、毎日毎日食糧や満鉄のものである橋材等が原形のまま、あるいは分解されて積み込まれ、西へ西へと走り去るのを複雑な気持ちで見送った。

終戦直後の私たちの集結地は満州チチハル(原隊海拉爾)であった。チタ經由シベリア鉄道で内地送還というふれ込みで退院組の一個大隊が編成され、貨車(客車ではない)の人となったのは十一月。関東軍防疫給水部要員であった私たちは同年兵(二年兵)になったばかり十数人とともにこれに加わったわけである。

退院組の隊だったので、炭坑作業に出る者は一部であったが、それぞれれんが工場、道路作業、伐採、貨車の積みおろし、コルホーズ等々「働かざる者は食うべからず」で毎日のようにどこかへ駆り出された。精神的な打撃に加えて肉体の疲

労、さらに食糧の悪さ、隊員は日を加えて衰弱していった。いつ帰れるか皆目分らない。長いことはないだろうというのが皆の気持ちだった。

抑留者の統制管理

富山県 菊野末一

昭和二十年十月から二十一年二月ぐらまでは、收容されたものの宿舍の整備、警備隊の宿舍整備、周囲を囲む材木でのさく造り、トイレ造り、炊事と食堂造り、井戸掘りなど、自分たちが生活をしてゆくための施設造りであった。

①どの労役に就くかは、日本兵の話し合いと、もと下士官がソ連の要求に従って仕事の種類別人員を指示していた。

②労役に就くことが無理な病気持ちは警備兵に届けて作業人員から減らし割り振りした。

③健康管理は食事と作業のほか衣類の洗濯、ふろが考えられたが、いずれもないに尽くしではどうにもならなかった。

④冬期間の日曜日は飯ごうに井戸で水をくみ、ストーブで沸かし、下着をそのお湯に浸しては絞り浸しては絞りを繰り返してから乾燥すれば、生地は幾分軟らかくなり、保温もよいので極力努力するよう指導した。

⑤朝夕点呼作業場往復は普通で、あまり変わったことはなかった。

⑥着衣衣服は十月までに元軍隊の被服廠から輸送して来た防寒シャツ、袴下、冬のかつての軍服、防寒外套、防寒手袋、防寒靴が配付された。

岐阜県 中島正教

隊列を組んで十月七日着いたところは、草原の中の二階建の外観は立派な兵舎のように見えたが、内部をのぞいてみると窓ガラスは一枚もない。水道も電灯も厠もなく、ただ屋根があつて雨に濡れないで済むだけだ。(コムソモリスク・第五分所)

この部屋はせいぜい二〇人くらいの所に五〇〜六〇人くらい入れられ、上を向いては寝られず、皆、体を横向きにし肩を下にして、魚を詰めて並べるように寝た。夜中に小便に出ると、帰つて来て自分の場所に入ることができず、隣の兵を横向けにしてもぐり込んだ。こんなことが十日以上も続いたが、作業が始まり出すと、どこからともなく用材を集め、二階、三階と蚕棚のように三段ベッドを仕上げていった。

翌日から炊事の方法、水道の件などソ連側と交渉に入った。大隊長石川少尉は主計松本中尉(これまでに将校会議で、全員少尉ではやりにくいし、進級時期の来た古参少尉を中尉として、我が隊の建制を保とうと協議した結果)と常に協議し、四人の中隊長、軍医も加わつて、日夜ソ連側と交渉し、火の焚けるよう、そして入浴の件が取り上げられ、まず水道、次は厠。そうしないと收容所は糞で埋まってしまう。兵力を集中して大きな穴を掘り、横に長く二メートルくらい、幅は狭く二・五メートルくらいのを二カ所掘った。二メートルほどの深さにし、幅の狭い方に板を渡し、板の中央に便口を設け、一列に並んで排便する。前者の排出状況がよくわかり、病気の発見には思わぬ役に立ってよかった。

二カ所の厠に囲いがほしい。作業に出ている者に作業現場から板を担いで帰らせ、囲いはようやく完成した。

矯正收容所(ラーゲリ)

岩手県 五十嵐弥助

間もなく、例のように一週間分のパンと塩魚を渡されてストリユーピン列車に詰め込まれた。

物事は度重ねると慣れるということがあるけれども、ストリユーピン列車の苦しみは楽になるといふしろものではない。極限の苦しみは一層ひどくなる。それは体力が一層衰弱していたせいもあつただろう。しかし今度の一行は、大部分が老人と病弱者だったので車内はこれまでよりは静かだった。

クラスノヤルスクからペトロパロフスクまで一八〇〇キロあるが、途中、ノシビルスクや町名も定かでない中継監獄で下車休養を与えられた。どこも満員で、支給されるパンの量もスープの塩かげんも房の仕組みも錠の大きさまでどこも同じで、規格が一定だった。すべてのものが規格の国である。

ノシビルスク中継監獄は駅からちよつと距離があり、歩いて二十分もかかったろうか。途中、日本軍の捕虜がもとの軍服姿で多数木材の運搬をしている姿を見た。もちろん銃剣の監視のもとでの作業だろうが、青空の下で、しかも言葉の通ずる同胞と共に働ける姿は実にうらやましかった。

ペトロパロフスクはシベリア鉄道と中央アジア地区への分岐点で大きな古都である。護送兵と警察犬に追いつて立てられての二十分間の徒歩だから観察する余裕もなかったが、町並みは落ち着いた静かな街のようだった。

岩手県 五十嵐弥助

当時ここに収容されていた囚人は、一万五、六〇〇〇人といわれていた。ここでソ連の囚人の数について書かなければならない。帰国後であるが、一九四七年末か四八年の春かに、ソ連の国営新聞イズベスチヤに次のような記事が載ったことを聞いた。「アメリカの新聞記者がソ連人に対し、ソ連には三〇〇〇万人の囚人がいるそうだが事実かと質問したが、そのような事実はあろうはずはない、こんな質問はソ連を誹謗する悪質な宣伝である」と懸命になって弁解したことがある。しかし、世界の常識や一般ソ連人の常識では、ソ連の総人口二億四〇〇〇〇万人に対し囚人数は三〇〇〇万人前後であるということになっている。更に例のウクライナの粛清を始めたため、一九四八年から四九年にかけては三二〇〇万人から三五〇〇万人に膨張したと言われている。

しかもソ連の囚人は、刑期が十年、二十年が普通で、五年以下などほとんどない。囚人同士ラーゲリで「お前の刑期は何年だ」との質問に対して「七年だ」という返事があったら「お前は少ない(ジベ マーラ)」と驚きの言葉が出ていたから、

その後幾度か政策の変更があったとはいえ、今なお膨大な囚人が監獄にラーゲリにうごめいていることは大体間違いないと思う。

この中継監獄は、いよいよこれから矯正労働所(ラーゲリ)に振り分けられる奴隷の市場となっていた。

囚人の服装は千差万別で、日本なら乞食でさえ顔をそむけるようなぼろをわずかにまとう者、そうかと思うとキリツとしたまともな服を着ている者、こんな者は極めて少ないが、親戚から最近差入れがあったか逮捕されてまだ目浅い者だろう。略奪を免れてよくここまで来たものだと思わされた。

年齢はと見ると、十二、三歳のチンピラからヨボヨボの老人、人種は確かめるすべはないがソ連人が最も多く、満人、鮮人、日本人の黄色人種、ポーランド人、ドイツ人と思われる北欧人、頬骨の出っ張っている蒙古系らしい者、写真で見たことのあるカザク系の者と、まるで人種の市場である。戦傷者と思われる手、足のない体が不自由な人の多いのは特に痛々しく見えた。

女囚は、有刺鉄線で一応囲われている別棟にこぼれるようになってうごめいていた。

房の先住者の一人は二十五歳の上林という青年、もう一人はオタスの森の中川というオロツコの青年だった。上林は上敷香で造材人夫をしていたとのことだったが、二週間前「反ソ行動」で既に十年の刑を言い渡されたと言っていた。

それがひどい「反ソ行動」である。スターリンの写真の載った古新聞を泥道に捨てたのをソ連の憲兵(ゲーペウ)に見つけられ、逮捕されたというものであった。ソ軍進駐後、住民は盛んに雑役に駆り出されたが、ある日彼も手弁当でそれに応じた。握り飯を食べ終わって、包んできた古新聞をポイと泥道に捨てたその古新聞にスターリン元帥が君臨していたというのだ。彼はそんな写真なんぞ全く意識していなかったのだ。憲兵に腕をつかまえられて初めて気がついたのだが、そのときは既に遅かった。有無をいわずに捕えられ、いとも簡単に十年という長期

刑となったとのことである。なんたる無茶なことか。これを聞いて、まずソ連のやりかたに度肝を抜かれてしまった。

いま一人の青年中川は、上敷香の特務機関に小使として働いたことで捕らわれ未決中とのこと。オタスの森に住むオロツコの男子は、百数十人、根こそぎ逮捕されたことは聞いていたがその一人だった。先住民族であるオロツコの人達は、オホーツク海に注ぐ幌内川の河口近くにあるオタスの森に住む遊牧民で、我が国の手厚い保護を受けて訓鹿を駆使し、狩猟をしたり幌内川に遡上するサケ、マスを獲得して平和に暮らしていたが、特務機関の工作を受け、日本軍に協力していたとする容疑らしかった。

ビスク駅に到着

約十五日間の貨車の生活も終わり駅ホームに到着。下車、ろくに食う事もなく長かった貨車輸送の疲れで膝ががくがく、身体はふらついてまともに足が前に進まない状態であった。

捕虜収容所生活

駅から一キロ位離れた所に我々がこれから生活に入ることになる。第二次大戦中、ドイツ兵の捕虜収容所に使用されていた所である。二、三日は使役がなかったので、終戦後一度も身体を洗う場所も暇もなかったものでたまったものではない。夜寝ると栄養失調の身体からシラミは生血を吸っているので丸々と肥えて、身体中を駆け回っている。捕まえて両手の爪で潰すと汁が跳ねて目に入ることもあった。収容所の周囲は高さが三メートルもある分厚い松の板で囲まれて、四方の展望台にはソ連兵が自動短銃を持って厳重に監視している。

祖国を離れて何千里、酷寒零下五〇度という歌の文句の通りのシベリアのビスク捕虜収容所で、いつ祖国日本に帰れるあてもなく過ごさねばならなくな

った。

シベリア上陸

くしくも革命記念日が我々のシベリア上陸の記念日になる。

船は岸壁に着き上陸が始まる。余り大きな町でない淋しい港だ。港を囲む山には高射砲陣地があるのが見える、こゝは軍港かもしれない、上陸が終わり行進が始まった。行つた先は何と海岸の砂浜である。

今日はこゝで泊まるというのだ、町には宿舎の設備が無いらしい、砂浜なら何千人でも寝れるだろう。だが冗談じゃ無い。夏なら兎も角も、今は冬である、何も無い。海岸の砂浜に寝ろと言うのだ。

この砂浜には既に先客がいて、もう何日もいると言う、仕方ない諦めよう。夕食の支給が有つたが何と米だけだ、どうしようも無い。先客の兵隊が盛んに砂を掘っている。行つて見ると、何と三十センチ掘ると下に石炭があるのだ。ソレと我々も一生懸命に掘る、一センチ位の厚さで粉炭や小さな石炭が出て来た。皆でやつたら結構集まった、石炭船が沈没か何かして流れて来たのだろう、誠に天の助けである。

石を集めてかまど竈を作り石炭を燃やして暖を取る、米は水を探して来て飯盒で炊き、どうやら夕食に有り付ける。砂の上に毛布を敷き皆で固まって寝る、ところが夜半になつて雪が降つて来た。これはたまらん、とても寝て居られない、近くを探したらちょうど良い大きさの鉄の枠みたいな物が有つた、皆でそれを運んで来た。上に毛布を掛けて周囲も毛布で囲い何とか十人位入れる小屋になった。真ん中に石炭竈を作り石炭を焚き暖を取る。毛布は小屋に使つたので着る毛布は無いが何とか寒さは凌げる。

翌朝起きて皆の顔を見て思わず笑つてしまった、石炭の煙りで真っ黒なのだ。煙突なしで石炭を焚いたので毛布も顔も真っ黒になったのだ、海水で顔を洗う。

何日目だろう、夕方銃声が一発聞こえた。しばらくして日本兵が一人撃たれたとの事、薪を探しに行ったのを逃亡と間違えられたらしい。言葉が通じないので間違いを起こす、絶対に単独行動をしない事だ。

新潟県 平原敏夫

収容所は、直径八〇センチ、高さ五メートル程の揃った丸材をびっしり立て連ね、その外側数メートルに有刺鉄線を張り巡らせて二重に柵で囲まれていた。細い丸材を隙間なく立て並べて作られていた柵は、いかにも森林資源の豊富なシベリアならではの物であった。柵の四隅にやぐらが組まれており、その上にしつらえられた小屋の中に、銃身の長い狙撃銃を構えたソ連兵が監視の目を光らせていた。

柵内には、これから私たちが起居する丸太造りの、粗末な建物機棟が寒々と並んでいた。宿舎内は、真ん中に通路をとり、両側に高さ四十五センチ、その上に更に一二〇〜一二〇センチくらいだったと思う。二段に厚板が敷かれ、窓が少なく、それも小さくて明かりが入りにくいため陰湿だった。貧しいとしか言いようのない様子が、僅かに記憶に残っている。

所属隊、班ごとにこつこつした体を寄せ合せて、それでもなんとか頭足交互までする必要のない、とにかくひっくり返れるだけのスペースが割り当てられた。そこが私たちのその夜からのねぐら、居住する場のすべてなのであった。

五十トン積み？ の大きな有蓋貨車に七十人ずつ乗車、松輪島から持ち込んだ背囊を敷き詰めた上に座り込むと、車両の中は結構窮屈であった。間もなく列車は発車。牽引するともなくでかい蒸気機関車にも私たちは仰天した。燃料は石炭でなく薪で、火の粉を忙しく吐き出し、時々ピーピーと汽笛をうるさくわめき散らしながら息せき切って走行するのであった。途中駅舎らしい建物の見えた集落に停車していた時、貨車の床に変な音がするので車内に敷いていた

背囊を除けてみると、車両の床に穴が開けられ、私たちが松輪島から携行してきた物が盗まれていた。それは飯盒であったり水筒であったり、まさに手当たり次第という状態であった。

戦勝国とはいえ当時のソ連は、西部戦線とどこん追い詰められ、連合軍の反攻に支援されての勝利であつて、疲弊極に達し、その厳しさは私たちの想像をはるかに超えたものであつた。私たちは松輪島から積んだ輸送船、化け物のような図体でかい蒸気機関車も、アメリカ建造、製造のものであつた。

ソフガワニを発車した列車は度々停車し、その都度燃料の生木の薪を積みだし、給水しながら、移送人員を減らし減らし進み、約三十五時間を費やして一四二キロを北上、鉄道の起点ピワニーから三〇八キロの地点、一三〇収容所に到着、第三大隊の第九、第十中隊を主力とした約五百人が下車を命ぜられ収容された。九月三十日、小雨が降っていて冷え冷えと夕闇の迫った午後五時頃と記憶している。

注 ソ連(ロシア)極東の主要都市コムソモリスクから、アムール(黒竜江)を隔てた対岸は河港の町ピワニーである。

この町を起点に四五〇キロ、ソフガワニに至る間の鉄道沿線に点在した幾つかの収容所を移動しながら、私たちは様々の作業、ノルマ(割当作業量)に追い立てられてきたのである。

富山県 石川正一

私は捕虜として昨夜からこの小駅に置き去りにされ、一夜を明かしたところなのだど理解するには更に何秒かの時間が必要であつた。

その日もすでに夕方近くになり、また野宿かときらめかけていたときソ連兵がやってきてトラックに乗せられた。そして前日本隊の先着していた宿営地に着いた。

あたりはすっかり暗くなっていた。焚火が燃えている。疲れ切った仲間たちが

火を囲んでごろ寝していた。

翌朝目覚めた私が気付いたことは、自分の持ち物すべてが盗まれていることであつた。

敗戦後ずっと持ち歩いていた父母の写真も乏しい持ち物もなにもかも失くなつてた。

着こんでいた軍服と、はおつていた防寒外套、防寒帽だけが残つた。こうして私は最初のシベリアの冬を着の身着のまままで迎えねばならなかつた。昭和二十一年十一月初めのことであつた。

私がシベリアでの初めての冬を過ごすことになつたスイソエフカ地区のタイガーの収容所は、豊富な湧き水の外には、人間の生活に必要なものは何一つなかつた。住まいも私たち自身で建てねばならなかつた。二人用の大きな鋸とタポールという名の手斧の外にはなんらの道具もなかつた。直径十センチから十五センチほどの松の木が兵たちの手で伐り出され、集められた。壁も床も部屋の間仕切りも天井も、ドアまでもすべて松丸太で作られた。屋根は必要なかつた。天井が屋根の役割を兼ねることになつた。天井の上に土が盛られ、兵たちがしつかり踏み固めて屋根作りは終わった。あとには雪がすっぽりと積つて防寒効果を發揮してくれるはずである。

兵舎の中央は土間のままで、そこには急造のドラム缶のストーブが赤々と燃えていた。だから兵舎内にいさえすればそれほど寒くはなかつた。電灯もなかつたが、私たちは、たちまち松脂や白樺の樹皮を上手に利用して灯火を作ることに成功した。

こうして兵舎ができた。私たちは本来の労役が持つていた。それは木材の伐採と搬出である。シベリア五葉松と樅もみの原生林が伐採の対象であつた。

滋賀県 吉田貞次

十月一日、ブラゴエの街の中に空き家の荒れ家がありました。それが作業第

十一大隊の捕虜収容所でした。窓の障子はなく、床もなく土間でした。窓は煉瓦で塞ぎました。土間のままで三段装置の棚(バッテリー)式で、段の床は(ミザラ)式)板の隙間をあけて板張り。三人で二枚の毛布で寝ました。交互に寝るので隣に寝る者の足が臭く、お互いに隣の足が臭いと言いながら寝ました。

電灯はなく、缶詰の空缶に工場の廃油を持ち帰り、それを入れて上から空缶を蓋にして、缶の真中にボロ布を芯に入れた「カンテラ」の灯で電灯の代用でした。

収容所は約百メートル四方の面積で、四方を鉄条網で三・五メートルの高さで張り、約一メートル離れて高さ一・五メートル位の三重の鉄条網を張り、四隅には三・五メートルの高さに望楼を設置し、自動連発銃に実弾を込めて監視をする。鉄条網より三メートル以内に近寄れば射殺すると規約があります。

ある人は、下痢のため便所が遠いので鉄条網三メートル以内へ近寄り射殺されました。

十月二日よりブラゴエチエンスク市内工場の雑役作業に出る。各工場の所要人員に応じて各班ごとに分かれて出発をする。各工場のロシア人は、毎日変わらずに同じ人が欲しいと話すので、当分は同じ者が同じ工場へ行く毎日。変わると毎日仕事を教えるのが面倒で作業の能率が悪いから同じ者を要望する。

滋賀県 川清一

再び大行軍が始まつた。十日間ぐらい野宿を繰り返しながら到着したのが国境の街、霍爾莫津(ホルモジン)だった。この埠頭から、用意されていた船に積み込まれて対岸のコンスタンチンノフカに上陸した。黒龍江を渡るのに二十分ぐらいだった。初めてソ連領に第一歩を踏むことになつた。万事休す、帰国の夢などはなく消えていく。丸裸になつた日本兵が上陸しても、ソ連の民間人はさげすむ眼差しで見ることすれ、寄りつこうともしなかつた。私達が見たソ連の姿の第一印象は子供に集中した。まるで裸足で靴などははいていない。小さな体に日本軍

の軍衣股も着ている。大人は女ばかりで、男は年寄りと若い軍人ばかりが目立った。まさにソ連は「大砲とパン」しか作らなかったのであろう。こんな国に敗れた日本軍の弱さをしみじみと感じ、心の底から情けない涙がこみ上げてきて仕方がなかった。

ほどなく原野の中の集団農場(コルホーズ)に造られたテントに入り、一夜を明かす。寝床は持参のテント二枚を合わせて張り、その中に一枚を敷いて六人単位で横になる。

この頃のシベリアはもう冬化粧で、夜の霜は際立って白く降り注いで寒い。体を寄せ合って体温でお互いを温め合いながら寝るのだが、なかなか寝つかれない。行軍の疲れから自然といつの間にか寝てしまった。

十一月初め、約一カ月程かかって「ライチハ」に着く。ここは炭鉱の街である。壮大な露天掘りの炭層が見える。黙々として働いている先入の労働隊員が目に入る。皆、下を向いて力なく動いているようである。到着した我が大隊を収容するところがなかった。野宿の延長をして十日間程滞留した。この間は専ら炭層の清掃作業を強いられた。作業が終わると隣の「アロチカ」に移動することになった。アロチカはライチハのいわば郊外に当たるところで、ここも炭鉱の街である。早速、収容所に入れられる。高い鉄条網に囲まれ、四囲には監視のための望楼があり、どこでもあるようなタイプのものであった。まるで罪人同様の扱いで、先着の隊員も大勢いた。宿舎は半地下の木造で洞穴のようであった。ちょうど、長い牛舎を半地下にしたようなもので、真ん中に通路があり、両側は二段式のベッドになっていた。その上下段にゴロ寝するのだが、一棟で百五十人ぐらい入れた。

北海道 長尾忠也

途中何人かの仲間が命を絶ったが、ようやく中隊がコムソモリスク収容所に着いた。辛い日々であった。この収容所は出入口に衛兵のいる門番があった。周囲は

柵で囲まれており、四方四カ所に望楼があり、衛兵が監視している。衛兵所を出る人は中隊長と通訳だけであった。この収容所はかつてスターリン政策に反対した政治犯の収容所だったという。民間人が何人かこの収容所に入りしめたが、その人たちは刑を終えた人たちであった。従って彼等は、スターリンの悪口を言ったらすぐに刑になると言って、首に手をやる動作をする。これも特徴の表現だった。

収容所は一棟三十人収容であり、二段ベッドだった。私は下段であり、上段から夜になると「南京虫」がポタポタと落ちてくる。身体に吸い付いて血を吸う。これが毎夜であり、これには参った。

北海道 工藤清吉

大きな街の駅に着き下車した。かなり古い街並みと見受けたがそこはイルクーツク市であった。市民は厚ぼったい綿入れの上下服を着こみ、男は前立てのついたシャープカ、女は厚手のスカーフで完全な冬支度であった。

トラックに分乗して街中を突き抜け郊外のラーゲリに収容された。周囲の有刺鉄線や望楼は新しかったが、建物は古く囚人を収容したものに間違いはない。私達はシベリア流刑人となったのだ、日本からはるかに離れた地で。

窓は小さな二重窓で白く凍りつき、暖房は小さなペチカだけ、触っても暖かくはない。鉋もかけない板の二段ベッドに毛布を敷き、防寒具を掛けて横たわると涙が止めどもなく流れ、母や姉達の顔が浮かんだ。

岩手県 千葉義一

昭和二十年十一月八日頃の朝、チタより二、三西に入った小さな無人駅に列車がごとりと止まる。カダラ相のチエルノフスカヤと呼ばれる田舎の炭鉱部落ということであった。

初めて踏んだ異国の地は既に寒冷地。軍靴の下に感じる大地は凍ってゴチ

ンコチンと乾いた音。垢あかに惨んだ軍服を通す初冬の風の寒さに、思わず身震いする。快晴なのに空は鉛色に見え、はるか地平のあなたは暗くかすんでいた。ここで初めて彼等の言う「トウキョウダモイ」(帰国)は脱走を防ぐ手段で、たばかり、抑留労働させる目的で連行したことを知った。

「ダワイダワイ」とせきたてる警戒兵(コンボーイ)達も捕虜扱いの態度に変わり、荒野を大分歩いた小高い斜面の丘に出た。そこには捕虜収容所として最近急造中の半地下兵舎(ゼムリヤンカ)があった。完成八棟ほど造りかけの棟もあり、その夜は狭い兵舎に折り重なるように眠った。

翌日から全員で兵舎造りが始まった。土木機械はなく、工具も少ないので大変であった。兵舎の内部は真中を通路に、両側に二段の荒板張りの床。南面の地上の部分に明かり窓をつけ、東西の出入口には地上に出られる階段の土間二カ所に板扉。室内両入口近くに、ペーチカがあつて石炭を焚く。電灯はしばらくの間無かったので、夜は全くの暗闇、明かりは各棟ごとに工夫がこらされた。

兵舎完成と共に外周に三重のバラ線も張り、バラ線内部は鋳で土を柔らかく耕し、逃亡者があれば足跡が分かるように、念の入ったものである。バラ線柵の四隅には望楼が建てられ、昼夜交替で警戒兵が見張り、柵に近づくときと大声で怒鳴り、時には威嚇射撃を受けることもあった。

チエルノフスカヤの回想

収容所(ラーゲルとよばれる)中心部の一棟に「第十四大隊本部」の看板がかり、将校と経理部、若干の当番兵をおき、以後「第十四作業大隊」と呼ばれ、一棟六十人ぐらいつの中隊編成とされ、大隊長のK少佐、副官は我が連隊出身の西宮大尉、渋谷軍医など十五人ほどの将校がいた。

兵舎が出来次第、いよいよ大方の者はカダラ村地内のトルム、ノービートルム、マリウトカなどの炭鉱で三交替で石炭を掘り、やがて多数の死者を出すことになる。

住まいの地下兵舎は作業から疲れ帰ってきてても休憩室も食堂もなかった。戦

友二人組んで荒板の床に毛布一枚を敷いた上の、約五十七センチ幅が自分の領域のすべて、食事の配分も食事も休養の場、寝る所もこの範囲から出ることはなかった。

岩手県 吉田欽三郎

収容所営庭に並べさせられた捕虜一同は千人ぐらいいも居たろうか。正面に部隊長、横に副官、前に各中隊長、我々兵隊の後方は傾斜地であり、収容所があった。

前方衛兵所を介して道路と鉄道路線があり、あの線路で我々が輸送されて来たのである。ここが我々の住居であるらしいが、四囲には櫓が立ち、外柵と鉄条網、その間には人らぬよう、入れれば脱走と見なされ撃たれるという注意があつた。

訓示にはタイシエツト四十一キロメートルの収容所であると言う。

そして我が小隊は他の者達と共に百二十人ぐらいいも入ったろう。ここも二段ベッドの大きな布張りの天幕が住居となつたが、右も左も分ならず、薪ストーブ一個の寒さと薄暗い裸電球の下、防寒外套の着の身着のまま、シベリア第一夜は天幕生活の佻しさに、靴も脱がずに眠った。

静岡県 小川賢介

東京城を出てから二週間ぐらいい経つてから停まった所は、樺太の対岸から西に八百キロメートルのコムソモリスク市という小都市であつた。我々はこの他に抑留されることになった。時に昭和二十年九月十日(頃)のことであつた。

我々は一先ずコムソモリスク第四収容所に入ることになった。八月二十五日に満州から貨車に閉じ込められ、日本に帰ると言つて騙されて連れて来られたことを思い、口惜しさに耐え切れない思いがした。さらにこの先、寒い収容所生活がどのようなものであるかと思ひやられ、打ちひしがれた思いがしたのであつた。

宿舎とは名ばかりの板張りの粗悪な建物で、寝具は二人で毛布一枚、食事は高粱の粥、黒パン一切れ(たまに米の粥を飯盒に一杯)の実に粗末なものであった。

收容所の所長は若いハンサムな陸軍大尉で、そのほかに陸軍少尉と下士官(女性下士官を含む)がそれぞれ五人と、約十人の兵隊(主に警備兵)が配属されていた。作業は九月十日頃から始まった。朝八時に営門前に五列に並び、人員点呼後、作業場へ向かった。これには必ず警備兵が付き添った。

愛知県 齋藤高志

ゲネラルパーティ

昭和二十年十月二十四日、列車の着いた所はヤブノロワヤという小さな駅で、今までダモイ東京、ダモイ東京と言いつつ続いていた輸送指揮官も歩哨もいつの間にかいなくなり、新しい指揮官と歩哨が待つていた。この小さな駅から各隊、各方面に分かれて雪の中に消えていった。

私達朝藤隊、長尾隊二百人が最初のラーゲル(收容所)ゲネラルパーティに向った。その頃は個人の私物も、中隊の食糧も沢山あり、人里離れた深い雪の山道を重い荷を背負い、延々と二時間も歩いて、やっと現地ゲネラルパーティにたどり着いた。

そこで柵(三・五メートルぐらいの丸太の先を鉛筆のように尖らせ、並べて埋めたもの)の中に追込まれた。柵内は切捨てられた落葉松の枝が山積みしてあり、まだラーゲルの建物も出来ていなかった。ここが今から生活するラーゲルかと思うと情けなかった。

その後は雪の降る中での野宿で、焚火をしながら夜を明かし、ラーゲル造りという苦しい毎日であった。食事は朝夕はカーシヤ(米・高粱などを煮たお粥)、昼はパン(青カビで小さかった)。

一カ月も全員で作業して、二段式の宿舎が出来た。ゆつくり休めるかと思つた

が、翌日には私達朝藤隊の百人は一山越えた所に移動した。今まで一生懸命に造つたラーゲルは第五一八作業大隊の病院になるのだと言つていた。

和歌山県 林 三子雄

列車は一路西へ進んで二十一年正月四日の朝、引込線の雪原に停まり、三五日間の旅が終わり下車した。二枚の毛布を肩に掛けて、ぞろぞろと導かれてラーダ收容所に着いた。

有刺鉄線を厳重に張り巡らせた囲いの入口衛門で、持参の軍刀へ所持者の所属氏名を記した付箋を付けて預け台へ載せてから丸腰で穴蔵式宿所に詰め込まれた。

宿所に割り当てられたのは半地下式で二段柵に仕切つてあるが、柵材は雑木枝条を並べただけへ持参の毛布を敷き、一枚を被つて、靴だけ脱いで倒れて休む。

穴蔵式宿舎は入口に押し開きの二枚扉があり、常時は閉まるように自動復元装置で、扉の表裏と把手の取付框は麻袋を覆つて防寒対策をしてある。鉄類を直接接触すると皮膚が破れる。一の扉を通つて二メートルぐらい進むと幅三メートルぐらいの通路で、階段を降り八段進むと二メートルぐらい踊り場があつて、二番目の扉が同様式で据つており、扉の中は宿舎の床に連なっている。

一番扉を開けて階段にかかる頃、異臭が漂つており息苦しくなつた。室内は暗く手探りだ。先住者はゲルマン捕虜との話だが、体臭か汗のにおいか異様に鼻をつくの、この中に住み付くことかなわんと息をひそめて入った。

室内の区画割りを受ける。老人を中の方へ、若く元気な者を入り日付近へ割り振つたから、我等若人は入口正面の二階に決まる。

夕食を済ませて眠りにかかったが、入口の扉が静止することなく開閉して用便往復する数がおびたらしい。夜が更けて冷え込みが強まると小便往來はますます頻度が上つて吹き込む風は白く霧となつて流れ込み、冷たいことこの上なし。

よく冷えるから一時間も我慢出来ず小便に起き、冷えて帰って横臥しても暖まらず、直ぐに小便を催す悪循環に陥つて、身を縮め我慢したが大変疲れた。

愛媛県 梅崎文夫

どれくらい歩いたか忘れたが、製材所の前を通過した。その周辺に、従業員の家屋であろうか、松林の中に散見された。松林の間を歩くうちに前方に収容所らしいものが現れた。

周囲を高い木柵に囲まれ、四隅に見張り台であろうか望楼があった。そして中央に門があり、入った右側に衛兵所があった。もちろん門内に入るまでにまた時間がかかった。人員数の点検である、またしてもうんざりしたのである。やっと門を通つて収容所内に入った私達は、兵舎ならぬ宿舍の割り当てでまた若干時間を要した。

その間に数棟の建物を眺めてみた。いずれも屋根を土で覆い、壁の部分は大きな丸木の面をはつて上と下の材の間に苔状のものが詰め込んであった。窓も両側に幾つか造られていた。扉は当然(寒い国の生活の知恵のことであるが二重となつていた。しかし割り当てられた家屋(小屋といふべきか)に入つて驚いた。何にもない、あるのはペーチカのみ、全くの土間であつたのだ。かと言って既に時刻は夕刻、どうしようもない。その夜は着の身着のまま外套をつけて横になつた。だが凍つていた大地より凍みあがる寒さは屋内といへども極端に寒い。とうとうその夜はまんじりとも出来なかつたのであつた。夜が明けると早速大隊長が収容所長の了解をとり屋内に座を造る作業を始めたのである。

さて、軍隊ほど種々雑多の職業に恵まれている所はない。早速、民間にあるとき大工職であつた人達が集められ、必要な器具は収容所側より借用して作業が始まつた。私達未経験者は製材所よりの資材運搬であつた。その日の夕方までに各棟見事に板の間が完成した(もちろん、中央を通路として)。やっと昨夜のよくな寒さと惨めさを再び味わうことはなくなつた。全くもつてやれやれであつ

た。

スバク収容所

愛媛県 井手正人

到着したのは夜中の十二時頃だつたと思う。粗末な土造りの建物で室内は土間である。中が通路で両側の約一メートルの高さに、製材したままの板をはつてあり、これが寝床である。この収容所にはドイツ人の捕虜がいて、案内してくれたが、我々が到着することは何の連絡もなかつたので、食事の準備は出来ていなかった。ドイツ人は残っている食事を出してくれたが、個人に配給されたのはスプーンに二杯のカーシヤ(おかゆ)であつた。焼石に水というたとえがあるが、二日間何も食わないで寒中行軍をして来た我々にとつて、ほとんど何の役にもたないであろう二さじのおかゆをむさぼるようになめた。そして崩れるように倒れ、そのまま眠つた。翌日から食事にはありつけたが量が少ない。粟やきびのカーシヤ(塩と油で味をつけたおかゆ)が茶碗に一杯から一杯半くらいの量でそれだけである。ここでは格別仕事はなかつたが、空腹でたまらなかつた。夜は食物の夢ばかり見ていた。

我々は何のためにここに来たのか、ここはどこであるか、何も知らされてはいなかった。ロシア語の分る兵隊もいて、ソ連兵に聞いたが、何も教えてくれず、彼等も又詳しいことは知らない様子である。そのうち英語の達者な兵隊がいて、ドイツ人に話を聞き大体の様子が分つた。

ここは中央アジアにあつて、ソ連邦を構成する国の一つであるカザフ共和国である。地名はスバク、そしてここは一時的に収容されているだけで、労働収容所の受入体制が出来るまで待機しているのだという。

福井県 白崎峯男

中央アジア・ウズベキスタンの首都タシケントに到着。それから六時間、山頂炭

坑の町アングレンに到着し、收容所は元ロシアの囚人が入っていた古い建物でした。丸太囲み、四方望楼あり、鉄線で張り巡らし、監視兵が二十四時間見張っていた。建物は木造半地下で二段寝台板張り。食糧の配給は一日一人当り黒パン三〇〇グラム、高粱、野菜、骨入りスープでした。作業は陸の土運び、建物工事、一輪車で石炭を貨車に積む等、色々な雑役をしましたが、空腹になり、昼食後タンポポやアカザの野草をつんで帰り、飯盒で煮て食へました。

福井県 矢部矩喬

目的地エラブカの町に着くことができた。タタール共和国内にあるこの町にはA、B二つの收容所があつて、各收容所には約一万人ずつ入所できるとか、小生はBラーゲルに收容された。これから二年余の抑留生活が始まるのである。收容所は周囲が高い煉瓦の塀で囲まれ、四隅に見張りの高い望楼が立っていた。敷地内に煉瓦造り三階建の建物を中心にして数棟と、草葺の屋根だけを地上に出した洞窟兵舎二棟から成っていた。散髪屋、洗濯工場、食堂炊事、医務所、縫製工場、靴工場まであつて、特技のある人は専従でその仕事をしていた。その他一般はラポーターといつて使役を割り当てられるのである。所内で使用する水を町の給水所から運んで来る者、原木を夏ならば鉄輪の車で、冬は橇で運ぶ者、この様子が大変面白い。一台に十人ほどずつ引繩を肩に掛けて掛け声をそろえてヨイサホイサと引くのであるが、少しでも他人より力を出して張り切ったら身体が持たないので、適当に繩に連なっているだけで全部ダブダブにたっている。それでも少しずつ進むものです。

特別清掃班は少し食事の配給量が多いので進んで志願する者もいたが、冬などはカチカチに凍った汚物を長い棒の先につけた鉄のみで砕いて所外に運ぶのである。

列車走行中の出来事

一 思わぬ災難

途中列車の下で排泄中、ヤレヤレと思つた瞬間、現地人が現れ、持ち物を手当たり次第かつぱらつて行つた。アツという間の出来事、無抵抗、残念で涙が出た。

二 虱に襲われる

約十五日過ぎたころから痒くて眠れないというバニク状態になった。原因は虱の発生であつた。昼夜もなく裸になり虱取りが始まつた。肌着に成虫、幼虫、卵が整列し、取つても取つても次々と育ち、駆除の方法も無くお手上げとなる。

ふと、高熱に弱いと、それならば寒さにも弱いのではと考え、幸いマイナス二〇度から三〇度の極寒の地ゆえ一晩さらせばと案が出る。早速小窓の鉄格子にくくり一夜さらしてみると完全に死滅し、思はず歓声が上がつた。

三 次の災難

虱駆除の順番が小生に來た。例の小窓に肌着はもちろん、下着も鉄格子に固く絶対に落ちないようにくくり一夜明けてみると陰も形もない。不思議に思つた、残念ながら現地人にかつぱられたと分かつた。大切な物をなくし泣いた。その後はこの駆除は中止する事になった。

就労地ベガワード收容所に着く

一 砂漠の荒野を行く

首都タシケントを離れ、西南アフガニスタン国境方面に枯れかかつた雑草の荒野を列車は山もない人家も人影もない砂漠を走つた。約三時間後駅舎のない野原に止まつた。下車の指示が出る。警備兵の連行で約二時間歩いた。

二 收容所に到着

周辺が鉄条網に囲まれ、監視塔のある收容所に到着した。

外見は土煉瓦の壁、屋根は草木で覆われ土が塗られた粗末な古い建物であつた。

た。同じような建物が二十棟はあった。

三 設備、宿舎について

一 棟約五十人単位で入居。四人用二段ベッドが十二個から十三個ある。出入口は二カ所あり、道路は踏み固まつてカチカチになっていた。以上我々の寢室兼休息室である。

四 便所は

ラーゲルの片隅に一カ所あり。長方形の穴が掘られ板が橋状に渡され併列で大・小使用する。(ソ連兵も同じ様に使用)

五 その他

ラーゲルの出入口付近に事務室、医務室等がある。炊事場、湯茶の補給所、洗面所、倉庫等の建物はラーゲルの中央部にあった。浴室の設備は無かった。

ラーゲルの生活

一 宿舎内生活について

ラーゲルの収容人数は千人、各棟五十人の中隊として分けられ中隊長、補佐、通訳の割で編成され宿舎に入る。ベッドは昔の戦友が隣になる様に自分らで決めた。

寝具は各人に敷布団、毛布、枕が支給された。(元ドイツ兵の使用した物で洗濯済みであった。朝・夕の点呼はソ兵の立会いなし)

二 衛生面、身体検査、体力の格付け

二日後中隊別に広場に集まり軍医の身体検査が、軍医、看護兵の順で行われた(雨の日、寒い日は宿舎内)。全員。パンツまたはフンドシ一枚の裸になり順番に係官の前に立つ。体重、身長を計らず聴診器も当てることなく外見だけで一級、二級、三級の三つに分けられる。月一回行われる。

一級 外見中身ともに健康そうな人 約八十パーセント

二級 やせ気味で弱そうに見える人 約十五パーセント

三級 軽い病気や欠陥がある人 約五パーセント

三 作業の内容

一級及び二級は労働要員と定められる。これで労働体制は出来た。

二級の一部はコルホーズに行く事もある。

三級は炊事要員、倉庫番、清掃等軽作業。

四 第二ラーゲルについて

作業現場近くに第二ラーゲル約千人収容所があり、聞くとまだドイツ兵が残っていると事、でも近々日本兵が来る予定だそうだ。

我々のラーゲルを第一ラーゲルと呼んでいた。

五 食事について

朝食パン二五〇グラム、砂糖朝昼用二〇グラム、昼食パン一〇〇グラム、夕食粥二〇〇グラム(米または麦のトロトロの粥の中に肉、魚、野菜が入っていた)。

六 食事の配給、配分について

当番制で炊事場にグループ別に取りに行く。当番が各人に分配する(朝夕)。昼食は朝食のパンと同時に受け、作業場に持参する。

朝、湯茶は飯盒で人数に応じて配給あり。各人は湯茶を水筒に入れて作業場に持参する。水は制限が無く空腹を補うため飲む。

七 食事の配分について不満出る

食事の配分について、量的について自分より人のが多くまた大きく見えて人間の欲望の限界か不満が出る。協議の結果、何物もくじ引きで配分することとする。

強制労働について

一 出発時の点呼

出発時の点呼は十列に並び警備兵が数え、途中でやり直しが毎日のようにあり、時間がかかった。作業場への往復は隊列を乱さないよう注意される。

二 労働の体制

労働は三交代制及びノルマ制に。

労働時間は一日三交代制で組まれる。

午前九時より午後五時まで八時間

午後五時より午前一時まで八時間

午前一時より午前九時まで八時間

ノルマ制が決められる。

目標の仕事量が決められ、毎日やった仕事の量を調べパーセントで表す。

一〇〇パーセント達成が当然でノルマ一〇〇パーセント以上の部分に対して給料が割り増しされ、低い場合は減額される。抑留者の場合は一〇〇パーセント越えた分はソ連の通貨、ルーブルで支給され、低い場合は食事が減らされる。慣れない仕事のため常に食事が減らされた。

労働の内容と目的

一 作業場について

作業場は一面の起伏のある荒野で、遠くに山らしいものが霞んで見える。人家らしいものは無く枯れ草が少々ある。

砂漠の一面に運河を掘り水を通し、下流で落差を利用し発電所を建設し、将来は農地を造る目的のようである。

運河を掘るための作業場に各中隊が配置され、毎日河の中心部の土を堤防部分に麻袋に入れ担ぎ運ぶ作業が約二年続いた。例のノルマ達成には程遠かった。

トラック、ベルトコンベア、ショベルカーの機械類はなく、すべて人力であった。

二 当地の気候

冬は(十一月～二月)夜マイナス三度～マイナス八度ぐらい、日中は二度～五度ぐらいまで、春・秋は二〇度～二五度ぐらい、夏は三〇度～三八度ぐらい。風は年中強かった。雨は非常に少なく雪は積もる事はなかった。

三 現地人の住居

乾燥地で風は強く蟄居生活であった。地上から見えない。

生きるためのアイデア

一 生きるためには

空腹と戦うためには蛙、蛇、とかげ、亀、バッタ、イナゴ、カマキリ、カタツムリ等食べられる物は手当たり次第食べる。料理方法は焼くか煮る。

二 現地人と物々交換

約六カ月過ぎたころより監視も緩む。ラーゲルと作業場の間、現地住民ウズベクの女、子供がパンを持って我々を待ち、監視の目を盗み物々交換するようになった。

我々の私物品(石鹸、タオル、ハンカチ、紙類、筆記具、衣類)すべてパンに替えた。替える物もなくなった。いよいよ最後だ、日本兵の必ず着用している褲があった。次々に褲がパンに化けた。即ち褲も食べた事になる。

三 死亡者が出る

この様な困窮が続いた。栄養失調、伝染病、風土病、怪我等で死亡者も次々と出る。私の入隊以来の戦友も腸チフスにかかり死亡した。何の手段もなく他界、死の直前に手を取り合って泣いた。

新潟県 植木茂男

九月二十八日 我々は貨車に詰めこめられた。たしか二段だったと思うが。このとき同じ部隊の仲間とはかなり分散されてしまったが、そこにはまた新たな仲間が発生した。抑留者を乗せた大きく長い長い貨物列車はバイカル湖沿線に出たとき、初めてただならぬ気配を感じた。すでに日本の抑留者が西へ送られていることは明白だった。列車が止まるたびに、黒パンや羊だかの腸詰などを持った口スケのママム達が寄ってきて物との交換が始まるのだった。時計、ハンカチ、万年筆等何でもよかった。食事は二回、時間は不規則、もう記憶は薄らいだが着衣一切を高熱処理により虱の駆除が行われ、抑留者は洗面器一杯か二杯の湯で体を拭く程度の入浴が行われたがこの駅だったか今は分からない。いつどこへ連れ

て行かれることや。貨車の中では静かに寝ているよりしようがない。貨車はノボビルスクより南下した。

十月二十日 私たちを乗せた貨車はブラゴエから二十三日目にウズベック共和国タシケント州ベグワド町のシルコア駅に到着下車。私のメモではこの日は河原で宿泊と書いてある。長い旅疲れで多くの仲間は生気がなくなっていた事は確かだ。

十月二十三日 第四ラーゲルに收容、ソ連へ来て收容所生活のいわば始まりである。

日本人通訳によりソ連の收容所長の注意事項が達せられた中で、抑留者一人の脱走が伝えられた。

労働現場へ向かう抑留者が衛兵所を出る時の人数確認が手間だった。五列縦隊に並ばされ、アジン(ひとつ)、ドワー(ふたつ)、ツリー(みつ)と、くわえ煙草をポイ捨てまでして声を発しながら数えていく日直将校の姿は滑稽でもあった。

私はこの第四ラーゲルでは四十日余を送ることになる。分担した労働は工場での穴掘りとバラス運びだった。現場へは昼食が専用トラックで運ばれてきたが黒パン一切れとぬるま湯のようなスープだけだった。ここでは浜松以来の仲間は八人中、宇都宮出身の直井甲子郎と斎藤皎と私の三人だけとなったが斎藤とは労働が一緒だった。昼食時や休憩時も会話は途切れることはなかった。不思議と気が合った。遠くはるか万年雪をまとった天山山脈が望めた。私は入隊前は東京にいたこともあつて関東の山々を歩いた。斎藤も宇都宮辺の山に出かけたという。天山の山脈を望みながら互いの生い立ちから入隊までの一切を語り合うことがしばしばだった。彼には既に両親が承知の許婚があることも打ち明けた。十一月三日の明治節には日本の隊長の号令で日本に向かい最敬礼を行った。自分が今生きていることが届くことを願った。

ある日、抑留者全員の前に首をうな垂れた脱走兵が立っていた。脱走中住民

一人を殺害したことが報告された。後日この脱走兵は銃殺されたことを聞かされた。

ある時、抑留者が医務室で全裸にされ、ソ連の女性軍医による身体検査をうけた。診断の最後はお尻の筋肉を掴むのであった。私はソ連にきてから痩せてしまっていた。軍医は私に「ラポータ・ニ・ラシヨ(労働は無理)」と言った。立会いの日本の軍医によればO・K(オーカ)グループに入れるとのことである。

十一月二十五日、私は発熱三八〇度で五日間も続いた。マラリヤとのことだったがラポータは休めた。熱患者は文句なしに休息が与えられた。再びラポータに出たと思ったら斎藤が熱を出し彼は医務室に隔離された。直井と見舞いに行つた時は顔を真っ赤にしていた。「早く、うちへ、帰りたい」と彼は言った。「みんな一緒に帰ろう」と元気づけた。明日また来るからと退去したがこの時が最後となった。

昭和二十年十二月五日午後五時十三分逝去、病名は急性肺炎で私より一つ少ない十九歳だった。軍医にお願いし彼の小指の一部を切り取ってもらった。彼と同郷の直井に持ち帰りを頼み、どちらか先に日本へ帰つたらこの事実を両親に伝えることにしようと約束をした。後年舞鶴で私が先に帰国したことが分かり係官にこのことを報告した。

昭和二十一年一月五日 年が明けて間もないこの日、五十〜六十人ぐらいがシルコア駅へ、初めての移動だったが列車は客車だった。O・Kの宣告を受けた者ばかりだった。

一月九日 アンジジャン駅着チャマ療養所へ入所。あちこちからの尻が皮ばかりの抑留者の寄せ集めの場所のようで百人ぐらいだったろうか。ベッドは二段ではなく大部屋の病室のようで、食事は個人ごとの飯盒に配られた。昼食には時折パンと野菜のスープの他、副食に魚(バイカル湖でとれたという鮎に似た魚)の塩漬けや、漬け物(キャベツの酸っぱく漬けたもの)がついた。周囲の畑には積み上げられた綿花の山が点々としている。療養所でのラポータは綿花の摘み取り

と二人一組となつての綿からの糸作りだった。糸より機を回転させながらラップ状の口へ綿を入れるのだが、ノルマに追い立てられることはなかったが今となつては幻のようだ。

ここでは抑留者同士の結束のようなものが生じた。お互い明日の運命が分からないなか、せめて住所だけでも交換記録をした。私はマホルカ(たばこの巻紙に鉛筆で住所を書いてもらったが、この小さな住所録は無事日本へ持ち帰った)。

療養所では就寝前のひとときを寝たままではあったが、お互いの故郷をしのんでの話や歌などを交換することもあった。

三月十七日 再び次のラーゲルへの移動がやってきた。アンジシャン駅へ。

三月十九日 ベグワドシルコア駅着第三ラーゲルに収容される。

ここでのラポーターは一番きつかった。麻袋に土を詰めて長い斜面を運ぶのだった。土の量を少なくすると、監督が文句をつけるし、のろろ歩きでも叱るし、たまつたものではない。復員して腰痛に悩んだのはこのときが原因だったと思つてゐる。第一だか第三ラーゲルだか有刺鉄線をはさんでドイツ人の捕虜と会話ができた。ドイツ人がいた所は収容所ではなくロシア軍人の集会所で夜になると音楽が聞こえドイツ捕虜の演奏により、ロスケがダンスをしているのがよく見えた。ダニウ川のさざ波や金と銀の曲が流れてきた。ある時ドイツ捕虜の話によれば小高い丘を指さして亡くなった仲間がムノーゴ(沢山)埋められている、と教えてくれた。

第三ラーゲルでの労働は発電所建設のための麻袋による土の運搬だったがこの他にアングルの運搬などもやった。私たちが療養所にいたころ第三ラーゲルでは亡くなった抑留者がたくさんおられたことを聞いた。やはり冬の寒さはこたえる。ことに交替勤務の夜中から明け方までの労働には苦勞した。零下二〇度になると待機を知らせる鐘が鳴った。たまに板に乗せられた遺体が抑留者の僧侶の読経と一緒に墓地へ向かうのを見た時は両手を合わせ黙礼するしかなかった。

ある時はラポーターの途中、誰からともなく一斉にただ立ち止まったことがあるた。

言ってみれば、つかの間の労働ストのようなものだった。原っぱでしゃがみこんで長い長い用足しをしたが、同じ寒さでもラポーターでの用足しは我慢ができた。体力の消耗を防げたからだ。

一土間で藁ぶとんと毛布二枚で寝なければならぬこともあったが、寒くて我慢できず二人一組となり、合わせて四枚の毛布の中で寝たが夜中のトイレへ行くのに一苦勞だった。女性軍医による身体検査では私は相変わらずO・Kだった。骨と皮だけの栄養失調同様で腹は膨らんでいた。この段階ではまだ自分の死を考えたことはなかった。私は苦しい時はいつも第四ラーゲルで亡くなった斎藤君のことを思つた。「斎藤、俺は日本へ生きて帰る、君のお父さんやお母さんに報告するまでは死ねないよ」。直井君もどこのラーゲルで同じことを考えているだろうと思つた。

四月十九日 再びダワイ、ダワイの声に迫られたらトラックにいつぱいの抑留者が乗せられた。どこへ連れて行くのだろうか。しかしほとんどがO・Kと診断された者ばかりであり、アンジシャンの仲間の顔ぶれが多かった。トラックで揺られること二時間ベグワド郊外のホルホーズ収容所に着いた。私のメモでは第六ホルホーズ収容所とある。栄養失調ではトラック輸送がこたえる。腸がちぎれるような振動がこわいのだ。抑留者は百人ぐらいだったと思う。規模の小さい収容所であった。私は抑留期間中で最も長い半年余をここで送ることになる。ホルホーズの農場の見取図を書いてみた。ここでの抑留者の年齢の構成をみると我々のように二十歳前後と、あとは現地召集の四十代の方達で、中間の三十代はかつての下士官クラスで少なかった。収容所には確か電灯がなかった。多くの仲間は鳥目になった。夜盲症である。

ラポーターにはマンドリン銃を肩にしたカンボーイが一人付くだけで、農場へ着くと独特のカラフルな丸い帽子をかぶり、顔色は日焼して、厚手の綿入れの長い

コートを着たウズベク人の監督(カマンジール)が待つており、すべては彼の指示で作業をするが抑留者を本気で怒ることはなかった。

コルホーズへは時間にしてゆっくり歩きで二十分ぐらいだった。一番始めの作業はカルトーチカ(じゃがいも)の植えつけで、既にトラクターにより畝^{うね}ができていた。長さ百五十メートルぐらいで幅の広い畝に二人一組となり、一人が鋤で穴をあけて待つているところへもう一人が袋から小さい種芋をポイと投げこみ鋤で土をかぶせて進む。

ポミドール(トマト)は幅三メートル長さ百五十メートルの畝と畝の間に用水から引いた水が流れている、その流れに添ってひよろひよろの長さ二十センチぐらいの苗を田植えでもするように差し込んでいく。我々は「こんなもの実るまでこんなとこにいられるか」と言ったものだった。玉葱、人参、胡瓜、西瓜、メロン等々の作業や草取り等々作業は続く。昼はラーゲルへ食事と昼寝に戻る。まだ陽が高い二時になると集合の鐘が鳴り農場に向かう。水の枯れた用水を掘ると、たくさんの亀が出てきた。炊事場の竈で焼いて食べると結構いけた。蛙や蛇も食べた。畑の草にアカザがいっぱいあり腹を満たしてくれた。ある日、広い農場に抑留者が散らばるように作業をしている時のことである。いつも抑留者に混ざってウズベクの女性も仕事をしている。そんな中の年配女性に近寄っていく、銃を持たない一人のソルダト(兵隊)がおった。抑留者達はじっと立ったままこの成り行きを眺めた。兵が何かを叫んだときその女性は走り寄って彼を抱きついた。そして泣き出した。ウクライナ戦線からの復員兵が母に会いに来たのだった。何やら複雑な思いをしたのは皆同じだったと思う。バザールのある日はラクダの隊商が近くに行く。歌声も聞こえてくる。

六月二日(十二日) ついに自分にも腹痛がやってきた。トイレへ行くところよびり便が出る、その後に粘液が出る。帰ってきて横になるとまたトイレに行きたくなる。こんなことの繰り返しで日に二十回以上続く。粘血便になったときはこれ以上悪化しないよう祈った。日本の軍医は死に至ることはないと言いつけてくれ

た。トイレは板を丸くくりぬいたところへ用を足すが、二十ぐらいの穴があり仕切りはない。アメーバ赤痢は十日間で治まりラポータに復帰した。農場の一角に高さ五十センチ、一辺が二・五メートルほどの土盛りをしたところがある。農民がそこに座り太陽に向かい何やらを唱えながらお辞儀を繰り返している。作物が無事育つよう太陽に祈っているとのことだ。

やがて、猛暑の季節がやってきた。日中は四〇度にもなりズメがばたばたと落ちる。ラーゲルでの昼寝は軒下や縁側で休んだ。

病人も出た。日本の軍医は熊本出身の大道大尉だった。医務室はいつも満員で、マラリヤのほかアメーバ赤痢患者が圧倒的だった。農場では余りの暑さに耐えかね、神奈川の橋本出身の島田小太郎さんと二人で少しばかり離れた幅五メートルほどの川で泳がせてくれと警戒兵に申し出た。彼はOKし川まで付いて来て、我々の全裸でふりちんの泳ぎを監視した。この間十五分ぐらいだったろうか。彼にはスパシーボ(ありがとう)を繰り返した。やがて次から次へと作物の収穫期となったがトマトは青いものは漬け物として倉庫のコンクリートで囲った穴へ運び、赤く熟れたトマトは横からナイフをいれ皮を三センチほど残し横に開き前記の土盛りした上に並べ塩をまく。丸一日もすると乾燥トマトが出来上がる。人の良い監督は農場ではいくら食べてもよいがラーゲルへは絶対に持ち帰らぬよう言うが、我々は残留者のために分担して持ち帰った。乾燥トマトもキャベツやトマトの漬け物は同じ日本の抑留者の口に入ることを聞かされていたので感慨ひとしおの思いだった。トマトは香りがなくなってきた甘いはかりだった。スイカは一時的に水腹となった。大きさがラグビーボールのような形をしてもっと大きめなウズベクメロンの味は最高だったし、監督は慎重に扱うよう注意した。栄養失調同様の体には食べすぎは禁物であった。ある日ラポータが帰ったら、島田小太郎さんの置き手紙があった。彼は発熱で医務室にいたが中央病院送りとなった。「会いたる者いつか別れんとは宇宙の法則とかいう、我らその期の余りにも短かりしを嘆き、ウズベクメロンの味親しまざりしを遺憾とす。日本での再会を祈

る。」と置き手紙を私あてに残していった。私はラポータと並行して三カ月ほど日直勤務もさせられたが一日のラポータが終わり帰るときカンボーイがヤボンスキー軍歌ハラシヨウ歌えと言う。佐渡おけさをやったり、雀の学校をやった、その後はいつもチイチイパツパをやれというのには参った。

十二月一日 コルホーズ収容所にさらばする日がやって来た。カンボーイは「ヤボンスキーソルダト東京ダモイオーチンハラヨウ」（日本兵は帰国できるぞよかつたな）と言っている。我々は「三エト、三エト」（違う、違う）とやりかえす。

このカンボーイの生活を見てきたが、丸い飯盒に切った馬鈴薯を入れ、更に人参や玉葱を加え羊の肉を入れ、煮立ったら塩を入れとろとろにして食べる。朝食は黒パンとスープだけだった。靴下は使わず布を足に巻きつけていた。洗面は口に含んだ水を手の平に移し、顔を一〜二回こすって終わる。コルホーズ収容所では羊の肉が入ったカーシヤ（お粥）がよく出た。癖がなく柔らかく比較的受けたとと思う。

住民の交通手段はロバで大人も子供も利用していたが一度だけ監督のロバにまたがった。

ダワイダワイの声に追い立てられトラックに揺られながら着いたところが第一ラーゲルだった。千人近い抑留者が大きな発電所工事の労働に従事していた。我々は最初はラーゲル内のトイレの穴掘りを、次いで工事現場での水路造りだったが肉体的には大変だった。コルホーズの労働とは余りにも差があったからだ。第一ラーゲルへ来て初めて日本新聞を目にしたが何だかじつくりと活字を追う元気もなかったが、このことを口に出しては言えない鬱陶気だった。

長野県 杉田正成

「全員降りろ」の声がかかる。こんな所に降りしてどうするのか、皆不安な気持ちで降り整理した。

着いたのはナホトカなんかではない。とんでもないシベリア奥地で、まだこれか

ら山奥へ歩くのだった。

どのくらい歩いたのか分からないが、一日中歩いて着いた所が山奥で、建物も無い森の中である。

これから自分たちの寝起きする建物を作るのだと言う。ところが道具がないので土で家を作る。穴を掘り、木の枝でドームのように屋根の部分を高くして、掘った土を水で練らせ、屋根全体に草を乗せた上に厚く塗って出来上がり。入り口は草を編んで作ったのれんであった。

場所は後で分かったが、スイソエフカという引込み線駅から一日中歩く距離でとても逃げて日本へ帰れる所ではない。それでも逃げ出して蜂の巣のように撃たれ死んでいった兵隊もいた。昭和二十一年春五月の事である。

モグラ生活

—南京虫とマラリアのおまけ付きと戦う—

スイソエフカの引き込み線終点駅で貨車から降ろされ、一日中歩いて着いた森の中には建物などなかった。五、六人が寝られるよう地面に直径三メートルぐらゐの堅穴を掘り、木の枝などで屋根とした原始人のような仮住まいの「モグラ」生活が続いた。

千人もの捕虜を収容する大きな建物をすべて人力だけで作るのは容易なことではない。川を挟んで五百人ぐらゐが住める二棟の宿舍作りに、穴ぐらの仮住まいから毎日かり出される。一抱え（約六十センチ）もある大木を四本立て建物の骨格とし、四本の柱の間に一間（約一、八メートル）間隔ぐらゐに間中を立て、この間中の間に横にした丸太を積み重ね壁にする。更に丸太と丸太の隙間を埋め、暖かくするために建物の周りの排水溝を掘った土を練って壁に付ける。

しかし、この練った土はそのまま丸太に叩き付けても落ちてしまうので、柳のような細い枝を太い針金を切って作った釘で×字に打ちつけ、その上にソフトボールぐらゐに練った土を叩き付けて壁にする。外と中から土を付けた壁の厚さは五十センチ近くにもなる。天井裏も丸太を並べ、その上に同じように土を乗

せて頑丈な捕虜收容所が出来た。

数カ月もかかった收容所を作る作業の間の生活は、最初に地面を掘って作った堅穴で過ごした。誰かの歌の文句じゃないけれど、電気もなし、ランプもなしの穴の中、真っ暗では人間は住めない。明かりが欲しい。山から脂(樹脂)を含んだ松の木の根っこを掘ってきて、割り箸のように細く割り、燃やして明かりにした。

朝起きてびつくり、皆の顔が真っ黒で、煤を吸った鼻からは口や眼の周りがパングのようになり、見られたものではない。松の木の脂が取れない時は自動車の古タイヤを同じように細く切って代用したが、これも黒い煙がもくもくと立って黒くなるのは同じであった。

出来上がった收容所は広く、二段ベッド式で丸太を並べたままなので寝ても背中が痛い。枯れ草を沢山敷いて寝たが毛布はなく、外套を掛けただけの寝床で、足が冷たく膝を抱え、しつかり身を寄せてお互いの体温で温めながら眠る。

收容所の中は薪ストーブで暖房しているが、この寒さと広さではとても暖まらない。帽子までかぶったまま寒さをしのげるものは何でも身に付けて寝る。朝になると土間は真っ白に霜柱が立っている。早く暖かくなって欲しい、早く来い春、とただひたすら待ち望むばかりであった。

春とはいっても五月でもまだマイナス一〇度ぐらいだが、五月末からずいぶん寒になった。福寿草が黄色く辺り一面に咲き、やっとこの冬もなんとか生き長らえたか、との思いと、日本への帰国の希望で話が弾んだものだ。

六月になると名も知れない野の花が一度に咲き乱れ、空は雲一つなく晴れ渡り、川の水も雪解けで量が多くなってきた。そのころになって寒さがしのげるようになると今度は南京虫が暴れ出す、南京虫(シラミ)の仲間、別名トコシラミとも言う。これは明るい所には出ないが暗くなるとそこそこはい出て我々の貴重な血を吸って行く。

南京虫は必ず二カ所に傷を付けるのですぐ分かり、又それが痒くて痒くてた

まらない。この南京虫をこんな方法で退治した。まず物干し竿ぐらいの太さの枝を切ってきて、鋸の切れ目をたくさん縦横に入れて寝床の周りに置く。もちろん暗い中で準備をし、南京虫が体に近付いてきた頃合いの良しとなった所で例の明かり(松の根を燃やした照明)を灯すと、南京虫は慌てて鋸の切れ目の中へ逃げ込む。その枝を外で燃やして焼き殺すのである。この方法が一番効果があった。毎日こんなことで夜もよく眠れなかった。夜は南京虫に悩まされ、昼は蚊に刺される。この蚊が又悪で、伝染病のマラリヤを媒介するマダラカなのだ。刺されると高熱の発作などを起こしてとても苦しむ。これは熱帯地方に多いが、なんとこの寒いシベリアにもいて、刺され、苦しみ、もがいて死んでいった仲間も多かった。

南京虫は、半翅目トコシラミ科の昆虫で体長五ミリ、円盤状で扁平、翅は退化して小さく、全体赤褐色、頭部は小さく、口は吻状で吸血に適する。アジア南部の原産で、幼虫、成虫ともに室内に棲息し、運動は活発で、夜、人畜から吸血し激しい痒みと痛みを起こさせる。

北海道 平久保清

一九四六年の一月ごろだと思うが身体検査がありオ・カと判定された。身体検査はソ連の医師(ほとんどが女)が健康状態を診断して、四等級に判定する。一、二級者は屋外の重労働、三級者は室内の軽作業、さらにオ・カという級があつて、オ・カに判定されると体力が回復されるまで休養となる。私はこの身体検査で收容所を移動することになり、殺人梯団とまで言われたムーリー百十一收容所を去ることになった。もちろん、部隊の編成替え以来、地獄の鬼みみたいな上官達とも「アバヨサヨナラ」となり、心の中で万歳を叫んだ。

私の移動先の收容所は四十二收容所で、主な作業はやはり伐採作業であつたが、私は收容所本部の仕事が割り当てられた。ここで当番として働いていた約三カ月がそれから先の私のシベリアの生活を大きく変える原因となつた。本部には

小林茂利松曹長と宮迫定夫通訳と小林嘉吉という先担当番と私が四人で居住することになり、私は小林嘉吉さんの指示で行動しましたが掃除程度の雑務で身体に負担のかからない仕事でした。

小林嘉吉さんは更に私に「そんな衰弱した身体では日本に帰れなくなるぞ、今後何かの役にたつと思うからロシア語を覚えなさい」と言つて毎日暇をみてはロシア語を教えてくれました。一月もすると作業量記入表に收容所全員の氏名をロシア語で書けるようになり、また食事のメニューなども書けるようになりました。丁度三月くらいたつたころソ連の都合で四十二收容所が閉鎖されて、二〇一收容所に合併になり、その時の身体検査で二級に判定され一般作業に出るようになりました。身体検査の方法というのは、私達の場合、ソ連の女医の前に素裸で立たされ、一通り身体を眺められたあと回れ右をさせられ、女医が臀部の皮膚をつまんで判定するという原始的で腹立たしい検査で、それでクラスの判定が下される。栄養失調で衰弱すると皮下脂肪がなくなり皮膚がたるんでくる、そのたるんだ皮膚を掴まんで弾力をはかり、弾力のあるなしで一級から〇・Kまでの判定を下したのである。またシラミの繁殖防止を理由に陰部の毛をバリカンで刈られたあとに女医の前に立たされたときの惨めさと屈辱感は今だに忘れられないでいる。あの惨めな姿をさらす哀れさは、抑留者でなければ体験できなかったと思う。

酷寒シベリアにも四季があり、多くの抑留者を死に追いやった零下四〇度、五〇度の気温も徐々に遠のき春が訪れてくる。そのころになると防寒のため着ていたファイカと呼ばれる防寒外套やフェルト製の防寒長靴、耳カバー付の防寒帽、親指のついた防寒大手袋が薄くなっていく。そして何よりも酷寒から解放されるという気持ちも少しずつ和んでゆく、そして精神的に落ち込み無口になっていた者達も少しずつ口数が多くなつていった。

一九四六年夏ごろだと思ふが收容所に「日本新聞」が配られるようになった。この新聞はハバロフスクで発行されソ連側の編集長はコワレンコと言ひ、編集員が七、

八人で日本側の責任者は浅原正基であつたということを復員してから知つた。新聞の内容はレーニン・スターリンの肖像画がやたら多く、レーニン主義は万人の教えであり旗である、という宣伝や、日本はアメリカの三S政策（スポーツ、セックス、スクリーン）で骨抜きにされているという記事や、日本軍国主義、祖国日本の天皇制打倒や人民政府樹立などが、羅列されていた記憶がある。收容所内にも民主グループが組織され、壁新聞が貼り出されたり反軍闘争が湧き起り徐々に在ソ民主運動の基礎的なものが作り出されていった。民主運動が活発になり、軍隊の階級章ははずすようになり更に收容所から将校が居なくなり、隊長を自主的に選出するようになった。そのころ收容所内で通訳の手伝いにロシア語を書ける者がいないかと探していたので、少しぐらいなら私が書けますと名乗り出たらすぐに採用され、通訳の手伝いとソ連側の管理事務所と両方で働くようになった。この仕事は約六カ月続いたので、この間に自分の身体が少しずつ回復するのが分かつたし、ロシア語の会話も記述も少しずつ上達した。ソ連の管理事務所は收容所の外にあるので私には守衛所を自由に通過できる外出証が渡された。管理事務所にはソ連に政治犯で流刑されたという経理担当者が一人居て、よくロシア語の算盤と日本の算盤とで計算の競争を行ったが、私が日本型算盤で一度も負けることはなかつた。特に割り算の計算方法には驚いていた、また時々食糧やタバコを私にくれるので肉体的にも精神的にも虜囚生活で楽な時期であつた。

一九四七年の春が近づいたところ、收容所を移動し別の收容所に合併することになった。移動と共に私はまた伐採作業に戻るようになった。ここでは伐採作業ばかりでなく材木の搬出作業材木の貨車積込作業もやらされた。材木の搬出は馬を使つて搬出するので馬を操つたことのない私は馴れるまで苦勞の連続であつた。

また貨車への積込作業は夜間作業になることもあり、冬期は足元が滑り危険が伴うことが多かつた。崩れた材木とレールに身体を挟まれて友が一人命を落

としてしまったのも夜間作業の時であった。

一九四八年暮れには体調が悪くなり発熱したが、三七度ぐらいの熱では休ませてくれない。一カ月ぐらい体調不良のまま作業を続けていたら三八度を超えた熱が出て倒れてしまった。真夜中に馬桶に乗せられて病院に運ばれたが零下四〇度の中で震えが止まらず意識がもうろうとして、気がついたら病院のベッドの上だった。それでも体力があったのか三日ぐらいで熱が下がり身体が楽になった。最初は肺炎だと言っていたが、十日ぐらいで作業隊に戻されたことを考えると何だったのか不思議だったし、よく持ちこたえたものだ。病院の中は静まりかえっていて気持ちが悪く、隣の人ともほとんど話したことはなかった。病気があがりでも作業隊に出されたら一人前の仕事がすぐ与えられた。仕事は馬の飼料の運搬作業であった。ふらふらしながらも徐々に体調を慣れていた。他人に文句を言われようと気にしないようにしていた。

六月下旬になったころ、帰還収容所に移動するといつて貨車に乗せられた。また「ウソ」だろうと思っていたら着いた所は港町だった。ナホトカであった。夢ではないかと思ったが夢ではなかった。奥地から次々と貨車で仲間が運ばれてくる収容所はすし詰め状態で、夜寝るときは狭くて大変だった。理由は引揚船が遅れて来ないからだと言っていた。日中は相変わらず近くの作業場で働かされた。

二十日ぐらい待たされてやっと順番が回ってきた。すると民主運動のリーダー達の指示でスターリンに対しての誓約文に署名せよというのである。それは「日本に帰ったら日本共産党に入党します」という誓約書である。私達はソ連に不法に抑留されて早く母国に帰りたいかった。帰ってしまえばこちのものだという考えから署名したが、本心で署名した者は何人いたろうか。

抑留地の生活

この収容所は八三六収容所だそうです。最初の収容所です。毎日の作業は鉄

北海道 東海林正雄

道線路の布設する前の路盤を作る工事です。長さ千メートルぐらい、幅八十メートル、高さ五十メートルの所の岩石の山を掘り割ってダイナマイトで岩石を砕いて、砕いた岩石をトラックに積みこむ作業です。

労役

この岩石を積むのに毎日怪我人が続出しました。また死亡する人も時々出ました。手や足に岩石を落として手や足を折る人が毎日でした。毎日、病院や医務室では治療に当たっていたようです。この工事は前はソ連の囚人がやっていたようです。

労働時間は朝六時より夜六時までと、夜六時から翌朝六時までの二交替でやりました。夜間作業になったら夜の十二時から朝二時ごろは眠くてどうにもならないぐらい眠いので、空を眺めて北斗七星の星を見ていたものです。大体の時間が分かれます。ソ連兵の看守が自動小銃を背負って高い所から看守しているのです。夜間作業は大きな野外灯をつけて、作業しているのを見守っているのです。私達の収容所には逃亡する人は聞いた事はありません。でも最高哀れに見えて度々余計なことを考えて涙がでることがありました。逃亡して銃殺されることは他の収容所ではあったことを聞いています。

食事は大豆の粉とコーリヤン、エンバクの粉と冷凍魚、キャベツ、玉蜀黍の粉を塩と油を少し入れてスープのようにしたものが食事です。黒パンは重労働で四〇〇グラム、軽労働で三五〇グラム、普通の人は三〇〇グラム、ONとOKは二五〇グラム、病人は二〇〇グラムです。

気温は零下三〇度から四〇度ぐらいです。どんな寒くても休まなかったです。気温が下がると凍傷になる人が多く出ました。ソ連では凍傷を嫌うのです。凍傷になって切断する人が案外いました。

私も昭和二十二年一月二十八日、急性肺炎にかかり軍医(ソ連)が入院といわれたのです。病院へ行つて体温を計つたら体温は少なくて入院しないで帰されました。すぐ医務室に入りました。ソ連は入院する時は必ず体温に関係な

く入浴して体を綺麗にして入院させるので、この入浴で死亡する人が随分いると聞いています。これで私も生き延びたと思いました。

それから医務室勤務となり患者のお世話をしたり、自分も注射して療養の身となり、少しは楽になりました。毎日肺炎とジフテリアの患者と、足と手を折る人が毎日でした。

私はシラミがついたのはちよつとだけでした。毎日夕方、作業から帰ったら着ている服を脱いでデズカメラ(殺菌室)へ入れて翌朝これを出して着るので案外シラミは死んでいたようです。

医務室には吉野軍曹、平田軍曹、牧野上等兵いずれも衛生下士官と衛生兵がいるのでこの方々に少し教えられて助手についたのです。

昭和二十一年四月ソ連軍医による体格等位検査があり、四月二十一日十六時にONとなり、また栄養失調で他の収容所へ移動となったのです。二百人が八一七収容所へ移動したのです。軽作業の収容所です。

ここで東京の増田さんと一緒にいて大変お世話になりました。作業から帰ったら食事を温めて頂いたりして大変お世話になりました。また三八五収容所へ移動になりました。この収容所から二十日でもた移動です。検査があり、二級の体位となり、また八一七収容所へ戻ったのです。ここは営内作業で大工や左官、鍛冶工、板金工などの仕事です。

抑留者の統制管理

昭和二十一年十二月三十一日大晦日の日である。何も変わったものはない。正月気分なんか全然ない。今夜もコーリヤンの粉のスープと黒パンだけである。塩鯨一匹ずつである。

昭和二十二年一月である。必ず体格検査があり、体格等位により労働区分で仕事するのです。この様な基準はあるが余り該当する者はいなかった。

ON、OKは少し休養させた程度である。朝夕は必ず点呼である。朝六時と夜六時は点呼が始まるので室に残ることはできない。五列に並んで寒い時などは三

十分も四十分も外に立っているのである。

兵舎の点検もする。ソ連兵が見回るので、ソ連兵が人員を数えるのに三十分も四十分もかかるので本当に困ったのです。日本兵は番号をして最後の番号で大体分かるのである。ソ連兵は五列にならないと数を数えることができない。最後に日本の将校が数えてソ連将校に報告したようです。

シベリアに行つて一冬越したら、着ている日本の軍服は全部破れて着れなくなる、昭和二十一年に千島から持つて行った針と鋏は全部ソ連兵にとられてしまつて誰も持つていない。修理することができないので、破れたら終りである、穴だらけの服をそのまま着るのです。

食物は黒パン三〇〇〜三五〇グラムのみでした。スープは飯盒のふたに八分目、コーリヤン、玉蜀黍、エンバク、大豆。これはスープの原料で魚は一週間に二〜三回、塩鯨などは一匹食事に与えられた。肉は全然なかった。

毎晩パンやスープだけでは寝てから腹がすいて寝られなくて、昼に外に出た時に食べられる野草を缶詰の空缶にいっぱいとつてきて、これをスープに入れて、お湯を飯盒に入れて夕食に煮て食べたものです。また山へ出た時に枯れ木の中にいる虫を捕つてきて煮て食べたものです。不足分を補うので助かりました。

一カ月に三回ぐらい休日がありました。休日には収容所で皆と話をしたり寝台で本を読んだり、またコックリさんという占いをやりました。四〜五人で集まつて部屋でやったものです。ダモイはいつごろ帰れるかを占うわけです。いっとき喜び、そして寝るのです。大変器用な人がいて、将棋の駒や麻雀のパイ等を本物そっくりに造る人がいました。びつくりしました。

建物の修理や建築する場合にはほとんどの日本人の兵隊が造ったのです。ロシア人より日本人のほうが器用でした。

ソ連での建物は松の木を山で切つてきて丸太を柱立てして、この間に丸太を積み上げて、この積み上げた丸太の表面にドランケ(壁の下地)を割つてこれを丸太の表面に三角形の形を打ち付けるのです。この壁に粘土を打ちつけて表面をコテ

でなでて、仕上がりです。中に丸太が入っているので厚さ五十センチくらいになるのです。この壁を零下四〇度で霜柱が枕元まで通してくるので寒くて眠れない日が時々ありました。大変苦勞しました。

また朝晩六時に山へ行って一人一本ずつの枯木を倒して担いで来るのが日課でした。これを切つて燃料にしたのです。炊事と兵舎両方の燃料にしたのです。

コムソリスク市へ移動した時、朝晩民主主義の講習会がありました。

昭和二十二年七月に日本の兵隊は特別教育を受けたものです。先生は日本の兵隊で特別に教育を受けた人が先生になるのです。また赤旗の歌を毎晩歌つたものです。ソ連も日本の兵隊にこの教育を任せたとそうです。

ソ連も帰国が近づいたのでほとんど日本兵に委ねたようでした。ダモイばかり気にして頭からダモイが離れないのです。私達は余り懲罰を受けた人はいなかつたと思います。ほとんどが真面目な人が多かつたと思います。私は栄養失調になつたのでダモイが近いと感じていました。

抑留中の生活と極限状態にある意識

人間このような環境に遭つた場合、何と言つても各個人として強い気持ちを持つて何事も実行することだと思ひます。常にこのような意識をもつことが必要と考えます。どんなことも最後までやり遂げると思ひます。意志の弱い人はすぐダウンしてしまいます。私も大変良い経験を体験したと、これからの人生に生かしていきたいと思ひます。

私は生まれて初めてこのような体験を通じて、今、顧みると苛酷な労働に耐えてきたことを思うと人間は強い意志で、どんな困難にぶち当たつても最後までやり遂げる気持ちをもつことが一番必要であることを体得できました。また食事はいつも不足であることで、日ごろ考へている中でどんなものでも食べられる物は食べれるので命をおとすことではないということがわかりました。

栃木県 野沢芳夫

抑留生活に入る

ソ連にダモイ、ダモイと騙されて上下二段の有蓋貨車に乗り込んだ。ナホトカウラジオストクに行く、そうすれば日本に帰れる。ソ連兵はそう言つていた。だからその言葉を信じ仲間と乗り込んだ。昭和二十年十一月の事であつた。

少ない荷物を抱え夏の軍服のまま乗り込んだ。窓もなく、三十〜四十人でぎゅうぎゅう詰めとなつた。故郷に帰れるという嬉しさからか、ろくに食べてもいないのに車内は穏やかな雰囲気だつた。だが鉄橋に差し掛かり、アムール川を越えたのが分かると、車内の様子は変わった。ざわめき始めた。どこへ行くんだろう。川を越えて北へ行くと銃殺されると聞かされていたから、故郷へ帰れるという思ひは消えた。どこで何されるか分からない。いつ帰れる？ と不安だけが残つた。

食事や用を足すため、列車が停車すると隙を見て逃げ出そうとする仲間もいた。捕まつた仲間はソ連兵に脇を抱えられ、列車から離れて行く、そして後方から銃を向けられた。見せしめだつたんだろう。皆の見える前で射殺された。車内はそれから無言になつた。

列車を降り、トラックに乗せられ着いた場所はナホトカでもウラジオストクでもない、雪で真つ白な原野、絶え間なく細かい雪が降り続く場所、シベリアだつた。冬になると氷点下四〇度にも六〇度にもなる世界。トラック二台分の材木を切り出し丸太小屋の収容所を作るのが仕事だつた。

飯盒に半分ほどのスープ、マッチ箱のような食パン、具合が悪く働けない者はそれさえも減らされ、その内仲間はバタバタと死んでいった。特に召集された三十五、六歳の年長者は、可哀想にみんな栄養失調であつた。

愛知県 加藤一郎

ノボシビルスクの収容所は丸太を組み重ねて造つた建物で、日本では最近小さなものを見掛けますが、建物の内部は二段式の「蚕棚」のようになっていて、その

棚の上には、寝台用のマットと言うようなものは何もありませんので、床板の上に直接毛布を敷いて、着の身着のまま寝るのですが、到着したのが十一月八日ですからシベリヤは既に氷点下の日常です。驚いたことには私達が予想していたような暖房設備、ペーチカとは、ほんの名ばかりの暖炉のようなものがあるだけで、夜は当然のことながら氷点下何十度になりますので、頭の前から足の先まで着たまの姿です。もちろん、靴をはいたままでした。

滋賀県 村木庄蔵

二十年十月九日遂にある引込線に入り、雨が降っていたが十四大隊千人が降りた。十六大隊の先発はまだ降りず十四大隊だけ出発する。スルジャンカと言う地名である。鉾山と言われ、田舎で山も有り、鉾山か伐採かはずれかと思つた。

川を渡りラーゲルに到着、外に長い事待たされ、やっと中に入ると早速所持品及び装具検査があり、時計、万年筆が主に取り上げられ紙幣も取られた。

中は三段に仕切られ、粗末な板で作られていた。これから先の事を考えると不安になり落ち着けなかつた。夜の食事は食糧がなく、皆から集めて乾パン三枚が配給された。トイレは板で腰掛式の感じだが、二十五センチぐらいの丸い穴が開いているだけでいかにして用を済ますか困つた問題である。夜トイレに行つて帰つてくると狭いので寝る所がなく、島根の癸坂君と二人で床下に入り、生のジャガイモをかじつて眠つた。

しばらくは毎日所持品私物検査でする事なし、鉛筆、紙等文房具品は片端から取られた。衛生材料等は取られる前に衛生兵に渡した。

(2) 健康診断について

身体検査……毎月一回夜、うす暗い裸電球の下で軍医(日本でなら准看程度の女医)が、ふんどしもしない真つ裸の一人一人の胸と、尻の肉をつまんでそのつき具合で一級二級とランクづけをして、重労働、普通労働向けの判定をされました。

島根県 内藤静夫

ソ連では月に一回カイツシヤ(医師団五、六名)が来て身体検査をして、尻の肉づきを見て一級、二級、三級、オッペー、スラーベーオッペと五段階に分け、一級、二級は重労働、三級は管内当番、オッペは一日三時間労働、スラーベーオッペは寝ては食いで栄養食を食べて毎日休みだ。

和歌山県 藤本藤雄

和歌山県 木下正夫

ある日、健康診断があった。ドクトルが木でつくったラップ型の聴診器を私たちの胸に当て、手の甲の皮を引っ張り、痛いかと聞く。栄養失調の者は病院に運ばれるのだが、その病院とて満足なもの一つもなく、非常な悪環境であった。貨車で運ばれるのだが、凍りついた貨車の中で息を引き取った死者の名前も記録されずに、丸裸にして草原に放り出された。何ぼ何でも無茶な仕打ちであると私は思ったのが当時の実感だった。

大阪府 小森淳男

月に一度の身体検査は月末の入浴日に行われ、同時に衣類の滅菌消毒と丸

刈り散髪が行われる。一つのバリカンで腋毛と陰毛を刈る。そして軍医さんもほとんど女医さんだが、その人の前に進み出ると、前身を眺めた後「回レ右」と号令をかけられ、お尻の皮をひっぱり、その肉づきによって一級、二級、三級、オ・カ、あるいは入院と健康状態の区別分けをされる。

一〜二級は健康者(重労働に服務)

森林伐採、搬出、製材(枕木と板作り)、家屋建築、道路、鉄道路盤作業、枕木敷き、レール敷き、墓掘り

三級はやせた者(軽作業に服務)

炊事の水汲み他、補助勤務、浴場勤務、薪割り、薪集め、便所掃除、収容所内(庭)掃除

オ・カは作業免除の虚弱者で、室内掃除

作業はすべてノルマ制度だが、病気にもノルマに近い規定があって、日本人はこれに随分と泣かされてきた。発熱は三十八度以上の患者が休養か入室。人間には個人差があるのに、一律三十八度以上が発熱患者なのだ。健康なときの平熱から一・五度か二度上がった者は発熱患者としてくれなければ、三十八度に一分足りなくても作業に出される。かえって悪くなってしまう。

こんな日本人が一人おった。検温直前にトイレに行くとかして、ちよつと活発に行動してくるのだ。そして検温したら三十八度が出る。これを軍医さんが見て「オ・スパーチ、ニエラボート、スパーチ、スパーチ」と。次に外傷患者だ。傷口が見え血が出ていると、すぐ「スパーチ」で休めという。だれが見ても怪我していることがわかる病気は、長くは休めないが、すぐ休めという。

私の場合、平熱が低く三十五度七分だ。一度や二度くらいの上昇なら何とか我慢できるが、二度以上の発熱はつらい。それでも作業にダワイだ。こんなことが重なって、だんだん健康をそこなう人が少なくなる。軍医、女医にいくら言ってもわかってくれない。日常個人的に付き合っつて、このソ連人はいい人だなと思う人でも、ルールや組織の中のことは一切融通はきかない。それは自分が監獄

に入るようになるからだ。日本人に多い神経痛やリウマチは外傷のように目に見えないので全然ダメだ。全員ダワイ、ビストレーラポートだ。次に多い痔の患者も「デイブイア、ヒートリー、ヒートリー」「ダワイ、ビストレー、ラポート」だ。

痔の判定については、こんな話がある。というのは、昔ソ連人の囚人が作業のつらさから逃れるために、尻の穴に糊殻やその他のものを詰め込んで一気に気張つて出すと、出血もするし、痔の症状も出て、病人扱いを受け作業が休めた。それが囚人仲間にだんだん流行して、それがバテて本当の痔の患者が泣かされるようになったのだ。日本人の痔の患者に笑みを浮かべて、ヒートリー、ヒートリーと言うのは、狡い狡いと言っているのだ。だから、神経痛、リウマチ、痔の患者は、ソ連では患者扱いをしてもらえず、みな作業に出された。彼らにいくら言っても通じなかった。このような患者は随分とつらい思いをしたことだろう。私は神経痛、リウマチ、そして痔がないが、平熱が低いので、発熱では泣かされた。

千葉県 宮崎定雄

毎月一回の健康診断(カテグリ検査)は、ソ連のドクトル(ほとんどが女医)が我々を裸にして、四つばいにして、尻の肉をつかむ、筋肉のつかめるもの一級(重労働)、筋肉のややつかめるもの二級(普通労働)、皮のみのもの三級(軽労働)、皮と骨と一緒にもの四級(休養者)。

四月下旬の健康診断で、私は四級ジストロフィヤー(栄養失調)と診断され、五月一日、トラック便にて四十キロ位北上、チブナレン(通称オツペアジン)に收容された。この收容所は全員休養患者で、作業なく、砂糖、脂肪、肉の量を多くし、パン、穀物は若干少ない食事であった。衰弱した体は、寝台上がるのがやっと。

和歌山県 長峰泰夫

五月の中旬に屋根に上がり、シラミ取りをしていた者がロシア人に見つかった。寒さのほかに、このシラミは、人が寝入るとシャツの縫い目の中にひそんでいたの

が、はい出てもそもそと歩き皮膚をかむと、くすぐりたいし、またかゆくなる。このシラミが人間の衣服に住んでいると、不眠の原因にもなっていた。早速、デスカメラ(熱気で殺虫消毒する容器)に衣服全部を入れて、シラミ退治をすることになる。毎日数回行われ、五、六日で全員が終わり、完全に殺虫消毒が完了した。気分的に清々した。

それから数日後に、ソ連の医師が着て身体検査が行われた。例のとおり、上半身裸にして、腕の皮を引っ張つて肉がついた者をチェックする。その結果、一中隊六人、四中隊十人を残して、ほかの人はもとの中隊へ帰隊することになる。中隊に帰れば普通の作業に復帰させられる。

二中隊で残った四中隊十人の一人として私も残された。合計十六人は第三カテゴリー(体の貧弱な者)として、第二中隊の人員の中に入り作業をすることになる。ただし労働時間は、一日に六時間働けばよいことになっている。食事は一般の隊員と同じ時間に同じものを食堂でとることになる。朝の点呼、出発は一緒に行うが、帰りは二時間早く帰ってもよいようになったのである。

北海道 石川朝雄

そして毎月ソ連の医者の方の身体検査があり、お尻の肉をつまんでピンと張っているのは、「アジン」(1)ということ、「ドワ」(2)ということ、「テリー」(3)ということ、「オペー」(やせということ)の検査結果を個人別の表に記入され、お尻の肉が薄くたるといっているのはすなわち栄養失調のオペーにかかっているということになり、このような人から先に帰されるようであった。これでようやく命があれば帰されるかという考えが浮かぶようになり、シベリアに上陸したときに考えた、「働かされて銃殺される」ということは否定されたのである。

岡山県 田中一司

身体検査をして労働の軽重を決めるのですが、至って簡単、女の軍医の前で

順に裸になり(もちろんパンツもぬいで)体を見、後ろ向きになってお尻をチョツとつまんで終わり、Aが炭坑作業、Bが地上作業、Cが炊事ほか軽作業といったぐあいです。

島根県 箱上春市

十一月十五日から全員の身体検査があり一級から四級に区分され、一級は地下三百メートルの鉱山作業、二級は地上の土木作業、三級は収容所内の軽作業、四級は入院入室と決まったのである。

岐阜県 木村秀雄

病院でのことを少し書きますと、当然のことながら病人ばかりで、誰も自分のことはいっぱいで助けてくれません。発熱患者ばかりで、ある人は背袋を負って家に帰ると言つて外に出て撃たれて死んだ人。口が乾いて雑巾水を飲む者。水を飲むと、体の中まで発疹が出て血便が出てとまらない人。今まで話をしていたのに、既に亡くなっている、貧血のため眠るように死んでいきます。

私が出がっていたので水は飲まず沸かした湯しか飲まず、ソ連には青いトマトの漬物があり、そればかり食べて体力をつけました。頭の毛は抜けてしまい、爪は柔らかくなってしわしわになりました。

そのうちにすこしずつ一皮、一皮がむけるように思い出し、生き残った実感がわいてきました。

そのうちに退院できる日がきました。そのときはほとんど全員に伝染して兵舎の全員が病人ばかりとなり、収容所全部が病院のようになり、所長は責任をとつて首となつたそうです。

私は早く元気になりましたので、死体確認の係となりました。毎日、二十五〜三十名くらい運ばれてくる戦友の被服を脱がせ裸にして、小屋の中にごぼう積みにする作業でした。

なぜ裸にするかという点、シラミがたかつて体が冷たくなると最後に腹に全部集まってくるので、彼等は毛シラミと勘違いして裸にするのです。

そのうちに私を看護して助けてくれた戦友たちが次から次へと運ばれてくるので、まことに申しわけなく、私の下着を彼の下着を取替えましたが、三名まででした。これを着て故郷に帰つてから戦友の奥さんに本人のものとわかる遺品として届けましたが、あとは交換するものとして毎日毎日が地獄でした。三人に一人しか残らず、なんとか岐阜県の友だけはと思ひ、名前と日付と場所を書きとめておきました。

福島県 村上武

入ソ以来の二年間は実に苦しいものであった。スコップもツルハシも何とか一人前に使えるようになり、仕事にも馴れてきて、皆と同じく何とか仕事ができるようになったのである。頭が痛い、腹が痛い、歯が痛い、熱が出たなどは、ほとんど認められなかった。腹がすいてふらふらとなり、小石につまずき転ぶ有様であった。三カ月に一回の身体検査はあつたが名ばかり、聴診器は持つてくるが使わない。体の皮肌を引っ張つて、痩せているか肥えているかで、一等級、二等級、三等級と分け、三等級を「オッペ」と称して、別の収容所に送る作業をソ連の医者はやつていた。

健康管理などの目ぼしい扱いは覚えていない。春になると、カラ松の葉を煎じた水を飲まされたことは覚えている。

広島県 村中汎雄

毎月だったか何カ月に一回だったか、身体検査がある。ソ連の女医の前に素っ裸で立つ。羞恥心も何もない。腹と尻の皮をつねり、肋骨が見えているかどうかで労働等級を決める。一級二級が屋外作業、三級が所内作業、四級が病人であつたと思う。せめて三級くらいにと腹をひっ込めてみても肋骨は出来ない。栄

養失調味になると腹は出つ張り全身むくんだようになる。これでは病人と認めてくれない。

島根県 星野好夫

身体検査

身体検査も二カ月に一回くらいあり、女性軍医であった。

検査要領は極めて簡単初歩的なもので次のようであった。

- (1) 全体的な容貌を検分
 - (2) お尻の皮を引張つてみる
 - (3) 要検診者だけ検診する
- で一般的には(2)が大部分であった。要はお尻の皮に肉がついておればOKで、ほとんどがOKとなっている。こうした身体検査により作業区分が指定されるが、作業区分は次のようであった。

- (1) 一、二級は健康者(重労働に服する)
 - ・森林伐採、搬出・製材(枕木、板造)
 - ・家屋建築・道路工事・鉄道工事
 - ・炭鉱・草刈
- (2) 三級はやせた者(軽作業に服する)
 - ・炊事の釜炊き、水汲み・補助勤務
 - ・浴場勤務・便所掃除
- (3) 病弱者(作業免除)
- (4) 入院者

ここでユーモアを一つ。女の軍医は我々に対し、検査をしながら、ヤボンスキー・マーリンキ・ポルショイハラショ(日本人は小さい、大きいがよろしい)とからかっていたが、我々はそんなことより腹を満たすのが精いっぱいである。

栄養失調の検診

岡山県 妹尾正一郎

二カ月に一回くらい、女医さんによる栄養失調の検診が行われた。颯爽と長靴で闊歩する姿は、女医さんとは思えないほど勇ましい。聴診器による内臓の検診はまだよいが、栄養失調の検査は股の肉をつねる(肉の厚さで調べる)だけで決定される。女医さんに点数のない者は、なかなか栄養失調になれないといううわさであった。栄養失調になれば、一カ月間作業が休める規定なのでみんななりたかった。私も二回だったが、残念なことに休む機会には恵まれなかった。一回目は休む代わりに炊事係となり水汲みをした。炊事当番は食事が多いので、三週間で六十五キログラムになり、途端に原隊復帰となり作業に回された。二回目は思想教育の一環であろう。

神奈川県 宮沢信行

毎月一回あるいは三、六カ月に一回、ソ連軍医によって定期検診が行われ、このときの診断により捕虜たちは体位が決められる。体位は六級に分けられ、一級は昼夜の労働に耐え得る者、二級は夜間労働を除きほぼ一級に準ずる者、三級は軽作業に従事する者、四級は老年、不具、病後、衰弱などの肉体的欠陥のため作業を免除される者、五級は重症者で特に栄養失調及び胸部疾患患者、六級は外傷患者である。五級、六級はたいいてい入院で、普通は一級から四級までである。この際の健康診断の方法は、全員が全裸になって順番を待つ。軍医は全身を見回した後、胸のあたりを軽くつまみ、それから後ろ向きにして、あるいは四つんばいにしてお尻をつまみ、「一級」「二級」と判定を下す。

私の收容所へはよく女軍医が多く来た。聴診器は一切用いない。皮膚の色つや、皮膚の弾力だけの判断である。收容所内には医務室があるが、捕虜は第一次的には、診断を受け病氣と認められた場合は休養し、あるいは医務室内で療養する。收容所の医務室、病院もヨーチンなど数種類の医薬品しかなく、メスの代わ

りに安全カミソリで手術された人もいたくらいである。因みに收容所の日本人軍医は産婦人科医であった。

岡山県 土居一志

強制労働の後、我々を丸裸にして身体検査をした。ソ連の軍医将校であった。親切な診断とはおよそ縁の遠いもので、軍医はまずケツの皮をつまんで、引っぱった手をはなすと同時にもとの状態にかえるのは「アチーン」と呼んだ。つまり一級品である。重労働に耐えられる。それで身体検査は終わりだった。「ドヴァー」は二級で地下採炭作業。「トリー」は三級で地上勤務。「オーカー」と呼ばれた者は四級で皮がいつまでも元にかえらないあわれな状態であり、軽労働であった。

東京都 金子亮輔

昭和二十一年になると、冬の寒さは我々の考えていた以上に寒く、栄養失調、気管支炎、気管支系統の病気や肺結核等の病気が増加して、死亡者が続出した。ソ連のマダムドクトル・マイヨール(少佐)が、常勤で抑留者を診察した。日本人の軍医も一緒である。患者は熱が三八度以上ないと、その日の作業を休ませてもらえなかった。痔の患者は、どんなに病状が悪化していても作業は休ませてもらえませんでしたので、仲間同士で助け合いながら、内地に帰るまでは絶対に死ぬまいとお互いに励まし合った。

宮崎県 鎌倉廣行

ある日、收容所長の命令で伐採作業が中止され、ソ連の軍医による身体検査が行われた。收容所の板の間に十人一組となつて、一人ずつ軍医の前に立たされた。軍医が手に持っている物は、竹笛のような形をした聴診器だけであった。見ていると軍医は、最初の隊員を裸にして前に立たせた後、横を向かせて隊員

の尻の肉をつまんで、二、三回強く引張ってから手を離れた。診断はこれで終わったのである。軍医はカルテに何か書き込むと次の隊員を立たせ、同じように尻の肉を引張って離し、何かを書いていた。体の内部に異常を訴える者には、ベッドに寝かせて、二十センチほどの竹筒の形をした物をその患部に当てて、耳を寄せて聞いていた。それは日本の医師の聴診器に代わる物のようであった。私たちは、その診断ぶりがおかしくて、思わず顔を見合わせた。数日後、診断結果について個々に伝達された。診断結果は、級別に格付けされており、私は二級であった。私たちは日本の将校から次のように診断結果について説明を受けた。診断結果は、一級から四級に格付けされており、一級と二級者は健康体、三級者は要注意者で收容所内の清掃、その他比較的軽い作業者、四級者は要安静者ということであった。私は健康者の診断を受けたことで内心ほっとしたもの、伐採作業で毎日激しい労働に従事しており、これ以上働かされたら倒れるだろう……と不安な気持ちであった。尻の肉をちよつとつまんだだけで体の内部の異常がわかる筈はないとひそかに思った。この診断で入院した者も数人いた。その隊員は見ただけで、全身が衰弱している人たちであった。その人たちのことを考えると、健康で働けることはいいことだと思ひ直したのだ。

福井県 谷崎喜久雄

また各月毎に一回は所内全員の身体検査も行われ、一級から五級に次のように分別された。

- ① 一〜二級は健康者で重労働可能者
- ② 三級者は、病気が味で軽労働可能で舎内作業
- ③ 四級者は、負傷者、不具者で作業免除
- ④ 五級者は、病弱で別棟收容

私は前述の通り、夏秋を通じ時期的にマラリア(風土病とも言われた)で、発熱すると四十度を超えることがあったことから、入所して二年くらいは度々三

級で、一カ月くらいずつ管内作業をしたことがあり、今考えるとこの病状があったお陰で三級体力の診断を与えられ、管内作業をしながら体力復旧をする余裕があったと考えている。いずれにしても、ここでは毎月一回の健康診断で一級二級の者は営外作業現場に引き出されて重労働作業に従事させられ、冬場では零下三十度を下らない限りは営外作業に従事させられる仕組みである。従って、一カ月管内勤務につくと、決まって体重が少なくとも二キロ〜三キロ増した。

軍医

岐阜県 水野隆男

今朝も下痢をしていた兵隊が引率途中で倒れた。栄養失調の上、下痢をした人間がこの寒さの中で働くのは死に直結する。絶対安静が必要だ。病人がその日の作業を休もうとするときはソ連軍の軍医の検診を受けなければならぬ。軍医の判定により休養が与えられたり、所内の軽作業に回されるが、これがなかなか厳しいのだ。軍医(女医)は、三十八度以上の発熱がなければ病人と認めないのだ。軍の規則だと言う。下痢をしたときは熱は上がらないのだということを、その日の朝、軍医とやり合ってきたばかりだったのに、しかし、その女軍医はけたたましくロシア語をまくし立ててそのことを認めようとしなかったのだ。

やがて約一カ月後には入浴・消毒・健康管理の手抜きが原因で赤痢が発生し、万延して、私を含めほとんど全員が生死の境をさまよひ、部隊の半数以上が病死という惨事が訪れる。そして工場作業も中止となり、その責任を問われてキヤピタン(大尉である収容所長)と女軍医は降格のうえ左遷されることになる。

和歌山県 坂本清次郎

「働かざる者は食うべからず」のソ連で遊ぶはずがなく、着々と作業への準備を整えていたようである。健康診断のあったのはそんなある日である。日本人

軍医の聴問、形ばかりの触診があり、最後にソ連軍の女医の前に揮一つで立つと、全身の前を見、後ろを観察、肉付きを見て「ビヤツ」と尻を叩き、「一級」「二級」「三級」と決定してゆく。まるで牛肉の卸市場と一緒である。ここに捕虜の悲哀を知る。

一、二級は重労働、三級以下は所内作業と態勢は整い、作業開始は間近である。その間、特技の調査があり、入営前に在職した大工、左官、指物師等は建築班へ、理髪職は抑留者の散髪係、給食関係者は炊事班等に指名され、喜んで往時の職につく。私らは皆現役で、またその中より選抜された下士官、兵で、虚弱な者はいない。全員、重労働の組へ配置される。どのような作業が待っているかは不明である。

福井県 片山清次

カテゴリ検査(等級検査)

ラゲリでは二、三カ月ごとにカテゴリ検査と称する検査が実施される。これは疾病の発見より労働の適格性を目的として行われる。ラゲリに居住する者全員を漏れなく対象とし、全員が素裸で一列縦隊に整列する。陰毛を剃り落とした。ペニスを丸出して順番を待つ、主として二十代のうら若いソ連の女軍医が日本人軍医を立ち合わせ検査をする。まず一人ずつ女軍医の前に立つ。

頭の上から足の先まで一瞥、下手くそな日本語で「マレーミギー」と命令する。回れ右をする。臀部の筋肉を指先で軽く摘み傍らの助手に「ペールイ・カテゴリー」等と判定を下す。その間わずか数秒間。時たま木製の玩具のラッパのような聴診器を耳に当てることもあるが、ほとんどは尻摘みみであった。

これは、医学的に言うところの皮下脂肪厚による栄養状態の判定方法の一つである。しかし未婚の若い女軍医が表情ひとつ変えることなく無機的に処理していく態度は、我々を人間と見ず、まるで家畜を扱うような心理状態であるとの印象を毎回感じさせられ屈辱の時間であった。

我々はこの検査を奴隷検査と呼んでいた。簡潔に表現された言葉である。判定結果に従い昇格または降格した者は翌日から作業部署が変更される。だが実際には第一級と第二級には何らの差はつけられなかった。

栃木県 野沢芳夫

一 ペールイ・カテゴリー(第一級)Ⅱ肉体頑健にて、あらゆる作業に適する者
二 フタロイ・カテゴリー(第二級)Ⅱ第一級の八〇%に相当する作業をこなせる者

三 ツリーチ・カテゴリー(第三級)Ⅱラーゲリ内において定められるた軽労働に適する者

四 オカー(O・K オスウオポジジョンナヤ・カマンドの略称)Ⅱ体の衰弱により作業を免除された者のグループ。関東軍当時、弱兵ばかり集めて訓練した錬成隊と同じような意図のもとにソ連側で考えられたもの。各ラーゲリのO・Kをどこかのラーゲリに集めて軽労働に就かせ、体力が回復すれば再び一般のラーゲリに戻して就労させるわけであるが、現実にO・Kと判定されれば、自分たちの宿舎の当番、便所の尿処理、ラーゲリ内の草むしり、炊事場の雑用等々、軽度の作業に第三級の者と一緒に従事していた。

栃木県 加藤源四郎

夜半のカチゴリー(身体検査)

夜八時頃から中隊順に身体検査、一部屋に入り全員真っ裸になって一列に並び、腰かけた女医の前に立ち名前言い、三十センチメートルぐらいの木の台に片足をのせ、のせた足のふくらはぎを軽くなせる。そして陰毛を引張る。ポチム(どうして剃らないのか)。私は言った、ザフトラバーニア(明日は入浴日)だ。タコイタコイと手真似で剃る説明。ポニマイ(分かった)。回れ右するとお尻をつねり二級と書く。原始的だが理に合った方法だなあと思った。翌日、毛を剃ってもらったら二〜三日はチクチクして困った。次回からはバリカソで自分で刈り済ませた。入浴といつても、夜間、收容所を出て約一キロ、小さな小屋、浴槽はなく、温

水を器一杯貰うだけで、名ばかりの入浴であった。

また、ソ連の軍医は他の病気より発熱者を重視する傾向があり、熱がなければ病気と言わない。聴診器などは使わない。体温計のみ渡されるので、熱がなければ病気ではなく、ただ仕事をさばるのだと言っているのである。日本人はソ連人より頭がよいので、渡された体温計を布で擦り目盛りを上げることに成功した。そして熱があれば四級になり作業が免除される。

健康診断は全裸になり後向きにしてお尻の皮をつまみ、肉づきの具合で弾力性を見るため、診断は約十秒位で終わる。神経痛やリウマチという病気はない。いくら痛くても熱が三十八度以上なければ作業免除にはならない。日本人には考えられないことである。医者には事前の健康指導、診断により地域住民を病気にさせない努力が強制され、患者が多く出るとは医師としての資格が問われることになり、患者が少ないことが評価されていた。

愛知県 森藤真一郎

目視による身体検査

二カ月に一回、作業に耐えられるかどうかの身体検査を女医が行う。これは健康診断ではなく体力の検査である。体力を一級、二級、三級に区分し、二級は八〇%で一〇〇%のパンをもらえ、三級はスバーチと言って一カ月一〇〇%の食料でラーゲル内の軽作業をさせる。検査の前にシャワーで体を洗わせ丸裸にさせる。胸部、腰の骨の突起状態を見て判定する。私のようにやせて肋骨が突起していると三級が多く、頑丈そうな人は一級、二級であり、この人たちが多く亡くなっている。私どもは三級になっても翌月の検査ですぐまた一、二級に戻されるが次の検査でまた三級である。石鹸等はなく、風呂もなく、シャワーであかを擦るだけの衛生管理であった。

岩手県 五十嵐弥助

クラスノヤルスクに着いて三日目から身体検査が始まった。医務室と称する部屋はバラックの一隅を区切ったガランとした部屋で、テーブルを幾つも並べて、医師と思われる軍服姿の脂ぎった赤ら顔のロスが三人一組になつてずらりと座っている。裸にした囚人を長蛇のように並べ、次から次へと診断し体位の等級を決めていくのである。その速いこと、一人一、二分のスピードである。手足が満足についているかどうかを見て、あとは後ろ向けにしてしりの皮を引っ張って見るだけである。しりの皮が著しくたるんでいるかどうか、その程度が判断のかぎになつていた。細くなつてしまった首に支えられた頭は、危なっかしいほど大きく、胸は洗濯板のように肋骨の溝がくぼんでいる。

うす暗い医務室に並ぶ囚人の顔色は結核の末期症状にも似て、闇魔王の前で裁きを受けている亡者のごとく、お寺に掛けてある地獄絵そのままであった。

元来やせ型の私は、当時すぐくやせ細つてしまい、骨が邪魔になつてこれ以上はやせられないほどだった。おしりの皮のたるみも著しかった。第四級の重労働不適の判定を受けた。

これには事由がある。豊原の刑務所時代、空腹に耐えかね、使役に出された同房の友に頼んでこっそり炊事場から岩塩を運んでもらった。それを水にとかし黒パンをふやかして一時の満腹感を得るため十日間もガブガブ飲み続けた。これが原因で腎臓をやられ次第に小便の出が悪くなり、土左衛門のように膨れ上がってしまった。内臓がすっかり圧迫されて呼吸が困難になり、横になることもできなくなつてしまった。監獄の女医はもう助からないと判断したのだ。

三重県 中森讓

満州国内の大きい各駅に停車しながら将校服を着た捕虜を乗せて走る貨車は、満州国境を越え南進するのと思つて北進を始めた。「東京ダモイ」の

言葉は夢の中を去つて行き、希望もなく「ナルヨウニナレ」と思い、貨車はシベリアに向かつている。白一色に覆われているシベリアを西に走りバイカル湖畔を一昼夜走り、古都イルクーツクに着き、用便を一行横隊に線路の脇でする。捕虜の浅ましきである。用便を終え列車の人となり、ノヴォシビルスク、オムスクと大雪原を走り、ウラル山脈を越えヨーロッパの黒土地帯に入り、ボルガ河を渡り十月三十日午後五時頃、モスクワ東南のタンボフ市郊外ラーダの森に、牡丹江を出発して二十八日目に到着した。

この森にある収容所は、ヒトラーがモスクワ攻略をした時、ソ連軍の陣地として白樺林の中に飛行機からも見えないように造つた半地下式の土窟兵舎で、日光の入る窓もない。至近距離でないと顔の判別も困難。不衛生な宿舎で、兼食堂で着の身着のまま、外套を掛けて隣人と触れ合つて寝る。便所も屋外に出るという不便なものであった。午後七時頃になつて自分の寢室が与えられる。自分に落着きが出てきた。一三九連隊佐官・尉官の将校は全員ラーダの半地下式の土窟兵舎に入り、佐官・尉官と宿舎を区分され、午後七時三十分過ぎ呼集がかけられ、舎内通路や宿舎の立てる所に立つことにし点呼をとられたのであった。

一カ月二カ月と過ぎて行き、七月に入り、ラーダ収容所を出発し、シベリア方面に行く路線の駅に向かつて行軍を半地下式の土窟兵舎にいた将校達二千人ほどが開始した。本線に幾車両も連結した貨車が引込線から入つて来た。貨車はシベリアの方角に向かい停車している。停車している時、私達は全員貨車に乗つた。六日目位だつたと思うが、「エラブカ」に着いた。ボルガ河の支流カマ河のほとりにある街で、帝政ロシアの囚人を絞首刑にした跡地であり、ここがドイツ兵を射殺した場所だという銃弾の穴が多く煉瓦塀に残っている古い赤煉瓦で三階建ての建物、ここは収容所に、早くから来ていた将校集団もありAとBのグループに分かれていたが、私達ラーダから来た将校集団はAのグループに入った。

京都府 野村喜与四

シベリア本線に入つてハバロフスクに着いたのは夜だったと思う。シベリア第一の都市ハバロフスクの灯もぼつんぼつん、頭の中ではここが最終地点と思つていたので下車する様子もなく夜明け前に出発した。アムール川の沿線に向くドアと小窓は開放禁止になった。要塞地帯で機密保持のためなのだ。列車に乗つて何日経つたのかバイカル湖の近く、間もなく湖面が見え隠れ、教科で地理は好きで得意の方だったので頭の中で描くことができる。現実のバイカル湖に会えると思うとちよつと興奮する。休憩時間にバイカルに手を浸した思ひ出、帰つてからの自慢話でもある。チタからイルクーツクとシベリア中部の大都市、水の豊かな街でもある、いよいよ本格的な平原をひた走る。どこまで行くのか、クラスノヤルスクではエニセイ川、オムスクではオビ川と、行けども行けども草原だ。水平線は実感として知つてはいるが地平線は初めての経験。赤い夕日が沈む光景は雄大な平原を象徴する風景だ。

平原の先にチャペルの尖塔が見え出すとシベリアの都市が現れる。もう機密保持もとつくに解除されているので見える限界から意欲的に観察。夜間に通過した所はどこも闇の中、惜しいが仕方ない。やがてウラル山脈はシベリア本線の南チエリヤビンスクを通過してヨーロッパへ入った。こんな遠い所まで連れてこられて、もう帰るといふ決意も宙に浮いた悲痛な状態だ。他の人は分らないが、頭の中の地図を広げると不可能という字が浮かんでくる。敗戦というショックと、行けども行けども止まらない列車、現実は無力感がひしひしと体を包んでいく。

サラトフ、ボルゴグラード、ロストフ西南に進み、ロストフから東にカスピ海西岸を南下、バクーの近く、たくさんの油井を見ながら油田の街バクーに着く。黒い池で光った街、駅近くはタンク車が何十両と連なっている。これが本物の石油、日本を苦しめた石油戦争の引き金になった石油、感慨深いものである。

バクーから今度は西に向かつている。コーカサス山脈以南は中東の地図の上で

しか知らない。黒海に通じる平野グルジア、当時はロシアの勢力内、今は共和国。首都トビリシから更に西へクタイシの手前で列車は停止した。そしてここが我々の最終地点であった。

シベリア抑留生活第一歩

千葉県 伊藤千次

ウラジオストクを出港してより十日目、昭和二十一年一月十七日朝、左舷に雪を被つた山々が見え、氷の大海原に船は止まっていた。船倉までニュースが伝わり、船内は大騒ぎである。十日前までは内地帰還の夢があったが皆の心配が本当になった。皆、上甲板に上がつて来た。朝の太陽が氷原をギラギラと照らしてまぶしい。一番に歩哨が氷原に四、五人降りる。次に板切れが落とされて驚いたことには焚き火を始めた。次には、ジープが降ろされ氷原を走つて行つてしまい再び驚いた。

下船命令が下つた。三千人降りるには時間がかかる。昼頃までかかったような気がする。とぼとぼと歩き出す。前を大型船が横切り、海が凍るまで三十分待たされた。これは三つ目の驚きだ。途中で他の部隊は諸方へ別れて行き、夕方近くになると私達二百余人になつてしまった。だんだんと街の明かりが見えてくる。シベリア大陸上陸第一歩である。

小さな湾の奥まった川口の南岸に上陸し、高台の部落に上つていった。湾の入り口北岸に大きな町の灯が見える。薄暗くて良く分からないが、集会場のような広い平家に辿り着く。大きな三キロパンが渡され五、六人で切つて分ける。黒パンの味も初めて、酸っぱい。ここで板の間の上にごろ寝、寒い寒いシベリアの第一夜を明かす。

広島県 原修三

停車中は特に警戒兵はよく列車を見回すが、片言に、お前らはウラジオスト

ソクから日本へダモイ(帰るといふこと)であると言ふも、ウラジオストクどころか列車は西に向かつて走り、チタを過ぎれば北に向かいウラル山脈を通過し、いよいよ欧州領に至り、モスクワまで六〇キロの地点のタンボフという小さな駅で下車。当地に設置された収容所に到着。これまで所持することを認めていた軍刀を収容所前で没収したのである。時、昭和二十一年一月五日で、ハバロフスクを出発してちょうど三十日、シベリア鉄道の輸送生活であった。

昭和二十二年四月下山し、本隊に合流してエラブカ収容所に移動す。この収容所はオランダの捕虜の将校を銃殺に処したとの話があり、我々もその後釜ではないかとの話もあったが、案に反して収容所所長は婦人で日本語の達者な美しい人だった。私はそこでも森林業務に就く。しかしこの作業は幹木をそりで集積場に運搬するのである。

九月から樽桶作りの作業を実施することになり、その工場に務めることとなる。工場といつても収容所内にあるので、朝八時に行き午後五時に宿舎に帰るのである。工場には指導者が一人おり、見習いが新旧四人であった。水桶や物入れで、作業は道具の使用方法、木拵えから組立の順である。初めての仕事で、いろいろためになった。

十二月に入り、カザン州の首都カザンの収容所に移動した。ここの収容所は何かの工場の空舎だったようで、広大で立派なものだった。

部隊は皆が将校で、北は北海道から南は鹿児島に至る日本中の集まりであり、私達は広島県人会を作り時々集まっていた。

愛知県 糸井紀伊

いよいよ東に向け行軍開始。開戦前後しばらく駐屯したことのある懐かしい岡們市街の北を通り山を越えることになった。折れ曲がった之の字型の山道を登って行ったが、銃はなし、弾もなしで、身軽なはずなのに、あごを出してふうふう言つて登って行った。道端には持ちきれなくなつて捨てた乾パンの袋や米の入つ

た靴下も捨てられていた。食料のない日もあるだろうからそのために持っていた方が良いのはわかっているが、今は重くて仕方がなかったのだろう。と言つても我々も自分の物を持つのが精いっぱい、人の物まで拾つて行く気にはなれなかった。

峠をやつと越えて、平原に着いた時に、戦闘地域から下がってくる居留民の人たちに出会つた。四、五十人はいただろうか。女の人は布団を担ぎ、前には乳飲み子を抱き、両手に歩ける小さい子の手を引き、男手はない。四十五歳以下の男子は現地召集されてしまつて、残つたのは老人だけである。「兵隊さん」と叫んでくれるが、今の我々には手助けする自由もない。我々でさえこの山を登つてくるとにやつとこさだったのに、子供を抱えてこれから先どれだけ行けるのだろうか。朝鮮に行くのだそうだが、それまで何人たどり着けるだろうか。恐らく暴徒に遭えば着の身着のまま丸裸にされてしまうのでないか。この人たちの姿は五十七年経つた今も忘れられない光景である。

あの岡們の山で、居留民の人たちから「兵隊さん」と呼ばれても何の手助けもできなかったのは、生涯忘れることのできない記憶なのである。

富山県 小森繁雄

一部重機関銃主力此川隊、三中隊安村隊は九月一日色丹島穴間において武装解除。九月六日大浜作業大隊(指揮官 大浜中佐)に編入。色丹島及び国後島において作業に従事する。

十一月中旬ころになつて色丹島の整理も大体終わり、自分たちの作業班六十人は十一月十五日、国後島の押臼へ移動し、同所で水車を動力として製材所を営業しておられた民間人の野田豊次郎氏の指導のもとで伐採作業と製材、大工仕事と、ロシア人の住む住宅の建設作業に従事する。

国後島での作業も終わり、今度こそ日本へ帰れるのだと思ひ、昭和二十二年八月二十六日、国後島を出帆したが、着いた港は樺太大泊港で、上陸、直ちに

汽車に乗り北上し、八月二十八日、樺太氣比收容所に入り同地に抑留、伐採、草刈り、道路の建設に日夜にわたりノルマに追い回され、今まで色丹、国後島での作業と異なり、食糧も悪く、栄養失調で、寒さと疲労のため毎日のように犠牲者が出るようになり、心細くなる日が続き、過酷な冬山伐採にあえぎ、一生懸命に帰国を待つ。樺太の気屯（北緯五〇度線まで約十八キロメートル）に遅い春が来た。二十三年五月、極限の抑留生活も三年に近い年月が経った。

岐阜県 永治正

八月十五日払暁、真つ黒やみの中を陣地を放棄し後退したが、ソ軍に遭遇し、マンドリンという機関銃で後ろから撃たれた。敗走する兵隊は鉄帽をかぶり直し、前を逃げる戦友に遅れないようにと一心に逃げた。精強とうたわれた関東軍も、戦意を喪失した軍隊はもういものである。一発の弾丸もよう撃たず、夜が白々と明け、ソ連の戦車に追われ、部隊は散り散りとなり落後兵は増大し全滅しそうになった。そのとき私は落後兵となり最後尾となった。ソ連の戦車は後方千メートルくらいに迫っていました。大隊長が心配して迎えにきてくれた。落後した五、六人の弱兵は尻びんたを取られ、のろろと本隊を追及した。本隊は戦車の登れない岩山に布陣して決戦に備えた。ようやくにして本隊のいる岩山に到着した、戦友は心配して待っていた。しかしそれ以上ソ連の戦車は追撃してこなくなり、我が部隊は全滅を免れることができた。これは当日が終戦の日であり、戦闘停止の命令がソ連軍に伝達せられたかもしれないと後から思った。

終戦を知ったのは興安嶺山中であった。武装解除をして山中より出て集結せよと連絡があったそうであるが、兵士には真相を知らされていない。武器弾薬を興安嶺山中に放棄し、自決用の手榴弾一発だけを持たされ、興安嶺山中をさまよった。この当時はまだ軍隊組織精神が確立しており、生きて虜囚の辱めを受けずと、落後して捕虜にでもなれば自決用の手榴弾で自決すべしといわれていた。しかし終戦を知った今、何としても生きなければならぬと、自決用に渡され

た手榴弾を河の中へぶち込み爆発させて魚とりに使ってしまった。

興安嶺山中より北滿の平原に出てきた。満人部落へ行くと既に終戦を知っていて、食糧を分けてくれない。トウモロコシ畑へ入りトウモロコシをかっぱらう。昼間行動するとソ連軍に発見されるといので、干し草の山の中に隠れ、夕方出て、東へ向かってとぼとぼと歩く。長い長い敗残兵の列が続く。一人、二人と落後する。たちまち満人の集団に襲われる。長い柄のついた草刈りがまで襲われる。被服装具を投げ捨てる、満人がそれを奪い合う。その間に命がけで本隊を追及する。落後して一人になればもう命がない。疲労こんぱいその極とはそのことであらう。

新潟県 高橋吉郎

それから一週間、我が関東軍とソ連軍とは死闘を繰り返していたのである。中でも牡丹江の戦いは激戦であったのである。不法に一方的に侵攻してきたソ連軍は、ドイツと戦いヒットラーを降伏せしめた勝利の勢いで虎林、黒河、ハイラルの三方から侵攻して来たが、二十五人乗りの戦車で侵攻して来て、途中で我が関東軍の決死隊に寸断され、牡丹江や我が軍の砲兵隊の援護射撃に遭い後退を余儀なくされたものであった。ソ連軍は、我が軍の猛反撃により前進を阻まれたソ連軍が後退して行くのと前進してきたソ連軍とが味方同士で撃ち合いとなり、大きな犠牲者を出したのである。牡丹江の戦いでは日本軍は勝っていたのである。

やがて郊外の鉄道沿線に到着した。昭和二十年十月三十一日であった。そこで各人の携帯天幕をつなぎ合わせてテントを張り、ここで露営することとなった。三日間滞在したのである。そこで我々の部隊に憲兵が合流したのであったが、憲兵准尉が悲観論を言い始めたのである。我々をウラジオストクから日本へ帰すなどんでもない話である、我が国日本は、ドイツ軍がレングラードまで侵攻した際、日本武士道と称し、満州から不可侵条約を結んでいるとして糧秣まで

ソ連に送って助けてやっているのである、それにもかかわらずこれを裏切り一方的に満州にソ連は侵攻して来て我々を拘束している、すんなりと日本に帰すわけがない、と言っていたのである。事実その通りだったのである。

岩手県 五十嵐弥助

ストリユーピン

その翌日、私達は西へ向かつて旅立ったのである。もちろん行き先は誰も知らない。

囚人専用車両、囚人達はストリユーピンと呼んでいた。ストリユーピンは六、七十年前の帝政時代の内務大臣の名前で、当時から囚人の護送専用の列車として登場していた。革命後はおびただしい囚人の輸送に本格的に活用されていた。決して日本人の戦犯の輸送のために、にわかにならされたものではない。

この車両は九つの車室に区切られていた。四室は護送兵用であり、五室だけが囚人専用となっている。片側が余分と思われるほどの余裕ある護衛兵見回りの通路で、五つの部屋が鉄格子に仕切られていて、中が丸見えになっている。その格子は鉄棒をななめに交差させたもので天井まで届いている。通路側は普通の窓があるが、外側からななめの鉄格子がはめてある。囚人用車室には窓がない。あるのはやはり格子のはまった小窓が一つあるのみ。

五つの部屋ごとの入り口は、不必要と思われるほど頑丈な鉄の扉に大きな黒い錠前がかかっている。いつてみれば、ものすごい鉄の唐丸かごである。各室は三段となっており、下段は六人くらいが座ることができ、二段、三段にはそれぞれ五人くらいずつ横になれる。十五、六人が定員というところだろう。しかし二段、三段は低いので背をまるめてやと座ることができ、この部屋に二十六人も詰め込むのだからたまらない。生きている人間だから少しでも楽な姿勢になりたい。囚人はソ連人、満人、鮮人の混成だから譲り合うような美德は少ない。互いに折り重なって四方から人間の体と足にはさまれ身動きもできない。

ストリユーピン旅行には、出発前七日分の黒パンと塩蔵の川魚が渡された。車中ではスープの給与がないからパンの量はちよつとばかり多いようだった。もちろんその量は命をつなぐに必要な限界である。七日分で三キロもあつたらうか。これまでこんな大きなパンを手にしたことはないわけだが、これを七日分に分け、更にそれを朝、昼、夕の三つに等分するには大変である。高等数学で解いてもその答えは出てこない。うっかり計算を間違えば最後の方は絶食ということになる。

車中での給与は水だけである。一日三度と定められ、食事時になるとバケツで鉄格子の小窓からクルンカ(アルミのコップ)で一人一杯ずつの配給である。誰も食器を持つていないから大急ぎで次の人に渡さねばならない。副食物が塩魚だからのが渴いて仕方がない。それに夏の暑さとすし詰めの人いきれと体温で、車中はうだる熱気である。渴きに耐えかね懇願しても護衛兵は規則で一日三度だと、てんで相手にしない。それには彼らなりの理由があるのだ。水を余分に飲ませると小便の方がうるさいからだ。

用便は、大は朝一回、小は正午と夜十時と決まっている。それ以外は絶対に許さない。健康な者でも一日三回と決められたら大変である。体が衰弱すると病的に尿を催すものである。これを辛抱することは正に塗炭の苦しみとなる。鉄格子にしがみついて護衛兵に懇願する叫び声は次第に呻き声になつてくる。ついに止むなく履いている靴に大切に保存せねばならぬことになる。それ以外の方法では満員の他の客人に迷惑をかけることになるからである。

大の方は小の方より耐久力があるが、それも限度がある。限度を越えればこれまた止むなく帽子等に受けることになる。保存した品物は、用便の時に捨てることになるのだが靴はもちろん捨てるわけにはいかない。素足ではこの先、生きてはいけなからである。帽子は護衛兵が捨てさせない。帽子なしでは囚人護送はできない規則になつているのだ。中身は捨てて洗えと言う。しかし水はない。止むなく中身を捨てただけで頭につけることになる。既に人間と非人間の境

界が取り外されてしまっていた。

出発して二日目の朝、一番奥から四、五人ずつ荷物を全部持って通路に引き出されている。身体検査、所持品検査である。これまで何度も繰り返し繰り返してきつてきたから、危険物や禁制品など持っているはずがないのだから狙いは別にあるのだ。それは検査でなく所持品の略奪手段なのである。護衛兵は我々の身の回り品を欲しくてたまらないのだ。五人の所持品を一遍に通路に広げてばらばらにして、さあ次の番だと「急げ」「早く」とせきたてて元の房に押し込むのだ。そのどさくさまぎれに、ねらいの品物を手際よくせしめてしまうのだ。房に戻って調べると、シャツ、手袋、靴下等が足りないことに気がつくのだが既におそく、もはや取り戻す方法はないのだ。この兵隊達は、終戦時に戦利品を漁る機会に恵まれなかったのかもしれない。

その検査の様子をそばでじつと見ている将校がいる。それが曲者なのだ。所持品の小物でなく、もつと素晴らしい囚人の着ている服、はいている靴、シャツである。将校はじつとにらんで目星をつけているのだ。これからの芝居が見ものなのだ。

夕方になったら房の入れ替えが始まった。折り重なるように詰め込まれ、横にもなれないから少し余裕をと、仏心を出したのかと思ったら、さにあらず、三人だけの入れ替えであった。新入りの人相はと見ると無気味な鼻の曲がったゴリラのような面構えで、ランニングシャツ一枚しか身につけていないブラトヌイと呼ばれるロスの若者である。頑丈な首筋、入れ墨のあるたくましい胸は、監獄で衰弱したことなど一度もないような姿である。入つて来るなり甲高い罵声、無遠慮な振る舞い、傍若無人な態度には、一同はいっぺんに威圧されてしまう。間もなく行動開始である。片っ端から私物の袋を開け、囚人ポケットに手を突っ込み始める。まるで自分のポケットに手を突っ込むようなふてしきである。

被害者になる房内の囚人が二十数人もいるのだから、力を合わせれば、わずか三人のブラトヌイだから何とかなるだろうと思うのだが、意思の疎通のない、

言葉も通じない混成の囚人の上、皆体力は極端に衰弱している者ばかりで、我が身を守るに精いっぱいなのだ。命知らずの無頼漢のためにこんなところで命を落とすには余りにも無念である。

無頼漢は着ている服、外套、靴を売れという。金があるはずがないではないかの言葉に対し、護衛兵に頼んで買ってもらい、パン、煙草に代えてやるし、その代わりの被服も持つてくるという。廊下でやった先刻の身体検査の折じつと見ていた将校の回し者であることが誰の目から見ても明瞭である。将校は、この国でも囚人からただで強奪したのでは、後日問題にされ自らの破滅になることをおそれているらしい。代償を与えて買い取ったことにおけば問題にならないらしい。恐るべき合意である。囚人たちは、どうせいつかははぎ取られるものなら、今のうちにパンや煙草にした方がよいという気になってしまう。

それにしても、もし腕力による抵抗が不可能だったら、どうして犠牲者は訴え出ないのだろうか。通路からは鉄格子越しに房内は何もかも手にとるように見え聞こえているではないか。銃を持った護衛兵はゆくり行ったり来たりしているのに、被害者の悲しげな声もちゃんと聞こえているのに。たった一メートルしか離れていない薄暗い車室の洞窟の中で、人間が略奪されているのに護衛兵は知らぬ顔である。間もなく、あきらめた数人の囚人に、外套やシャツの代償に大きなパンやホルカ(やに煙草)が鉄格子の小窓から入れられた。

とにかく護送隊の兵は、将校も下士官もろくな物は持つていない。持つている物といえばマンドリン型の銃と飯盒、それに配給食糧だけである。従つて囚人の立派な服、外套、牛皮の長靴、文明社会の品々を見ては戦勝国の軍人としてたまらないのか、それともこうした役得が長年黙認されてきたこの国の体質なのか、ソ連の囚人達はあきらめ顔で案外騒がないところを見ると、後者であるらしい。

空腹と渇き、極端な排便の制限、横になることも出来ないすし詰め動物以下の乱暴な取扱いは、どんなに丈夫な人間でも、そう何日も耐えられるものではない。ましてや一年近くも未決監獄でいためつけられた体では極限である。

囚人は死なしてしまえば困るのである。この国の科刑目的は、罪の償いや社会復帰のための遷善というようなものよりも、囚人を最も安価な労働力として活用するのが先行しているからである。護送兵の責任は、何はともあれ殺さずに目的地に届けることが必要なのだ。従って、それには七日くらいが限度で、それ以上の行程では国家目的に沿わないことになるのである。

岐阜県 中島正教

かくて間島からウオロシロフまでを一、〇〇〇人の行軍が始まった。長い行軍序列になると先頭ほど楽であり、第四中隊の我が隊は始終遅れる兵のため、延々と長い隊形の後尾を整えるのに苦労した。

一週間ほどの行軍は、早朝出発、暗くなって野宿だが、我が軍はすぐ天幕張りにかかる。ソ連歩哨は山野雑草の土に銃を抱いたままごろ寝で、食事は黒パンに小川の水を飲んで平然としている。我々には、黒パンを配給してくれても、とても喉を通過しない。持ち合わせの練乳をつけ、毎日毎日これを食べた。各分隊で米を炊くこともあったが、用具は乾燥野菜の缶で、だんだんと慣れて上手に飯と汁ができるようになった。

行軍中、休憩すると兵らは排泄に林に入る。すると、そこに兵の死体や軍馬の死骸を発見し報告に来るので、部隊名、氏名を報告させるのであるが、なかなか注記がなく、また新品着用者は一切記名がないので、やむを得ずハエの発生しない程度に埋めさせて出発をする。

二日目の夜行軍中、何事か異常な状態が発生し、発砲音を聞き、急いで駆けつけ「何事だ」と叫んで眺めると、そこに倒れているのはソ連の監視兵である。不思議なので「どうしたのだ」と行軍中の兵に聞くと「ソ連兵が我々の時計をかすめに来てゲーペーウ（国家政治保安部）らしいのに射殺されました」と答えた。

私は耳を疑った。撃たれたのは日本兵でなく、護衛・監視についているソ連兵だ。当時、時計を見れば強奪するのがソ連兵だ、と皆隠したが、ときどき取られる

のがいた。それがゲーペーウに即刻射殺されたのを目前にして、日本軍は軍法会議にかけるのにソ連はやるときにはやるもんだな、ゲーペーウとはいずれにしても恐ろしい生殺し奪の権を持っていることに驚いた。

愛知県 森 武雄

武装解除はソ連軍によって整然と行われ、何も問題はなかった。八月末日、作業大隊の編成が終わったのでいよいよ作業のため出発準備で忙しい時で、私達の大隊はどこへ行くのか、何の作業をするのか、そしてこれからどうなるのか、不安な毎日であった。九月上旬、私はソ連軍から次のような命令を受けた。「大隊は作業に出発するから三カ月分の食糧を準備せよ」と。私は早速新京貨物廠に向いて食糧の交渉をしたが、時既に遅く、主食の米麦はほとんどなく、大豆と高粱、粟が少し、調味料は塩のみで味噌醤油は皆無であった。この食糧状況がシベリアに入ってから私達の部隊の悲劇を生む原因となった。

九月十日頃新京を出発。私達兵隊仲間の噂では、食糧を三カ月分持つて行くので長い間シベリアで作業させられることはない、強制労働を何年間もさせられるとは、一抹の不安を抱いていたが想像もしていなかった。

食事は、新京を出発する時三カ月分の食糧を貨車に積み込んだが、大豆が大部分で米はなかった。若干あった米・麦は携行食糧として各自に渡してあったので、ラーゲルに到着するまでに食べてしまったようだ。私達が新京から持つて行った食糧は全部ソ連軍の倉庫に納められ、厳重に管理されることとなった。最初一、二年の間は毎朝食糧受領に出かけた。倉庫にはソ連からの配給物は何もなかった。倉庫番のソ連下士官いわく「長い間の戦争で我が国が食糧不足で困っている。日本人捕虜の食糧支給規定はこのとおりであるが、現物がなからしやうがない」と。米、肉、魚、油〇〇グラムと、立派な献立ができるように記載した文書を見た。

入所して一カ月余りは、大豆が主食であり副食でもあった。高粱や粟が若干

配給されると大豆と一緒に炊いて主食のご飯となる。副食にスープ(塩味をつけた大豆が十五〜二十個位入ったもの)、とても人間の食べるものではなかった。

岐阜県 中島正教

ソ連領入り

行軍七日目、国境を越えた。国境は、我々の見たこともないブルドーザーで一挙にならされ広くて平坦な道路に変わっていた。遙か向こうに国境守備隊の宿舎が見え出した。そのころ私共は捕虜として顔を見られることを嫌い、マスクをかけて行進した。大勢の国境守備隊員の家族が見物にやって来た。不思議に全員素足である。私はカンボーイ(監視兵)に「ロスキーはあわてん坊だ、日本兵を見るために靴も履かないで飛び出して来た」と通じないながらも言うと、彼らは手まねで「違う、日本は今お前らが着用しているような立派な服装用具を整えたが、飛行機も戦車も作らないで敗れた。ソ連は不用な服や靴など作らないで、もっぱら戦争に役立つ飛行機・戦車・自走大砲を作った。それだけ違うのだ」と言った。事実、入ソして時たま散見したソ連軍砲兵の自走砲は、走り止まり台座を下ろすと直ちに発射する。日本は当時まだ輓馬で砲をひいていた。歩兵は三八式(明治三十八(一九〇五年制定)を使い、一九四五の敗戦まで歩兵の第一の兵器で、五発充填し一発ごとに槓桿を操作して弾丸を送り、引き金を引いて発射する。特に歩兵の斥候がこれを所有し、パツと敵と遭遇したとき狙いを定める余裕はない。あつても一発一発「ガチャガチャ」と槓桿操作で弾を送り、どれほど正確に当たっても、バリバリと何十発もやられては、アツという間に倒されてしまう。これで米兵にあつさりやられて何の偵察もできず、また米軍はリーダーを早くから使用した。

全く研究不足、負けるのが当たり前でありソ連戦車、砲車、米軍より支援のトラック、ブルドーザーの大行列を見たらとても相撲にならないことを見せつけ

られ、何も知らずに勝つ勝つと思っていた方が不思議であった。(私自身は勝つと思つたことがなかったのは、開戦半年後のミッドウエー海戦のときから一貫していた)

静岡県 醍醐重雄

北千島には時折米軍機が飛来してきたそうだが、ウルップ島には一度だけ飛来してきた。

八月三十一日朝、ソ連軍が上陸して来た。武器の撤収が始まった。兵器の入れが悪いと日本軍人の恥になる、十分行えと命令が下った。指示された日に指定の場所に行つて見ると、銃、帯剣が山と積まれ放り上げてあるのは複雑な気持ちになった。

上陸したソ連兵の兵舎内への侵入を警戒し、舎前にいたときソ連兵が銃剣の先でビンを描き、腰の水筒(ガラス瓶)の栓を抜き、臭いをかがせた。何とアルコールの臭いでびつくりした。情報では、飛行場に積んであったエンジン始動用のメチルアルコールを見つけ飲み、何人が死亡したようであると聞かされた。

しばらくしてソ連船が入り乗船した。船倉に押し込められ、甲板には自動小銃(マンドリン)を持った兵が立つて警戒していた。ソ連軍が上陸して来て感じたことは、皆、自動小銃で、日本のような単発式ではないのには驚き、日本軍の装備の旧式さにはうらめしく思った。

船はウルップ島を離れ、ソ連兵はしきりと「カツカイドウ」と口走っていた。やがて見覚えのある港に入った。樺太の大泊港である。船に大釜、大鍋などが積み込まれ出港した。夜トイレのため甲板に出て星空を見たら、北極星に向かって進んでいるので、ソ連兵が言っている北海道でなく北方方面で、容易ならぬことになるぞと思った。

一、二日航海したか、軍艦が浮かんでいる港に入った。直ちに貨車に詰め込まれ、間もなく走り出した。列車はよく止まり、行ったり戻ったりしたのは理解で

きなかつた。

途中、駅で停止していると子供達が物をねだるので、故郷へ持ち帰ろうとしていた品物の一部を放り与えたが、負けた国の人間が勝った国の人間に物を与えるなんておかしな話で、ソ連も戦争で生活物資がなかつたのであろうと思つて複雑な心境であつた。

やがて鉄道沿いの収容所に入れられたが、丸太作りの二十メートルを超すほどの建物で、二千人ほどは十分生活できるような規模であり、周囲は有刺鉄線が張りめぐらされ、監視塔が四隅にあり、ソ連兵が四六時中、監視していた。宿舎内は暗く、手製の石油ランプの明かりが頼り。一番の困りごとは、寢床、丸太の壁、天井から来襲してくる南京虫で、これにはホトホト参つた。

シベリア鉄道盗品沿線

愛媛県 稲見 正

「ダモイ東京」「日本に帰す」というソ連当局の言葉、半信半疑ながら祖国帰還だけを願う一五〇〇人の集団を乗せた列車は、長蛇の如くのろのろと北上する。街を出外れ雪に埋もれた無人の広野に至ると、驚いたことに路線の両側は、貨車から投げ降ろしたままの梱包の山また山である。満州攻掠三ヵ月、一刻を争う如く慌てふためいて手当たり次第にある物すべてを強引に掠奪し尽くした、満州の物資機材が野ざらしのまま沿線果てしなく続く。あの目に余るソ連兵の暴虐は当然のことだつたのだ。時と所とを問わず、物と名のつく物は軍用も民用もない、一物も残さず奪取して、速やかに自国領内に持ち込んでしまえ！ というソ連の国家意志であり、至上命令であつたのだ。それが街や村落に近いと住民達が争つて掠める。そしてそれを発見すると監視兵がいつも無造作に自国民に発砲し、時に射殺する。これは大変な国だぞ！ と異様な恐怖と戦慄に襲われた。

列車の西進で捕虜抑留が判明してからは、日がたつにつれ不安、自棄、諦めの物言わぬ集団となり、吹雪の毎日がさらに暗く重苦しい。完全にソ連給与となり、基幹停車駅で配食されるが全く不定期。満州国内と異なり、他に補給の道なき若い胃袋は、いかに運動しないとはいえ、黒パンとキャベツの浮いた塩湯スープだけでは腹にこたえぬ。早くも餓鬼道転落の淵へと追われてゆく。

シベリア鉄道は行けども行けども吹雪の山嶽地帯で、雪に埋もれた赤松や白樺の原始林が続く。幾日目か、あえぎながら登っていた列車が突然止まり、ソ軍の輸送指揮官が来て、「兵隊を三十人出せ」と言う。驚いて聞くと、石炭が不足で走れない、補完用の薪を切るのだと言う。機関車に近い車両から一個小隊を出す。径十五センチから二十センチくらいの白樺や赤松を長さ二メートルぐらゐに切断して燃料車に積み込む。燃料の現地無償調達である。さすがはシベリア機関士、心得たもので、大きな生丸太を次々と汽缶に投入し、蒸気圧の上昇とともに高らかに汽笛一声、出発進行する。この一声、久し振りに列車の各窓に笑声を起こす。

岩手県 長沢龍次

二〇一部隊の猪俣大隊長も居られたと後日知つた。早速、抑留隊員の身体検査が行われた。作業隊員の等級は、検査により四区分に決められた。素裸になつて検査室に入りソ連の軍医(二十四、五歳の女医)外、係官二〜三人の前に立ち行われた。女医が尻を引つ張り、張り具合で体格の良さを重点に判断された。検査は約二ヵ月に一度行われた。

日本の山下、小花沢、両軍、日下通訳他も立ち会われたように記憶している。キンキラ声の女医さんの「イツキュウ」、収容所付きのジャッキ―准尉の「ツギ」、で等級は決まつた。

肋膜等、内部疾患の人は気の毒だつた。日本の軍医さんの診断も女医さんには通じなかつたようで、聴診器も用いなかつた。

検査の結果は、次のように区分けされた。
等級区分

一級 頑丈そうに見える者

二級 一に準ずる者

三級 体力ややおとる者

OK ^{オカ} 痩せてアバラ骨が見える者

等級別作業

一級(重労働)：伐採・炭鉱・作業等

二級(中労働)：貨車荷物の積み降ろし等

三級(軽労働)：鉄道建設(路盤の基礎作り)

ソホーズ・ユルホーズ(集団経営の農場)の作業

オカ(体力練成)：作業免除・室内外の清掃・軽作業

作業は、八時間労働がキチツと行われた。

新潟県 平原敏夫

せっけん水を飲む

当時部隊の中で一番若年で独身者の私、同期兵は、ひもじく寒く、毎日の作業が、つらく苦しいから早く帰りたいのだが、年配者、所帯持ち戸主の方々は、敗戦後の家郷の様子、家族肉親縁者の安否消息、家業、生活のことが気掛かりで気掛かりで、その心労は大変なものようであった。

本格的なダモイ(帰国)が近く、それも体力の衰えている者から順という情報が流れてきた。

身体検査が行われると思われる前日、洗濯用のせっけん(主原料が魚油で独特の鼻もちならない匂いが強く、青色でドロツとした、使用後はとても嫌な匂いがいつまでも、洗った物や、ゴシゴシやった両手から消えなかつた)を水で溶かし、何とも飲みにくいものだから鼻をつまんで一気に飲み下すのである。そうする

と便所にしゃがみ込んだまま動けなくなり、お腹の中、更に体内の水分まで排出されて脱水状態になり、こけた頬が更にこけ、眼球は瞳孔の奥に引込み、人が変わったような面相になってしまうのであった。しかし身体検査の予測日が狂うときあ大変、せっけん水をあおった皆さんは体力の急激な衰えとともに、本当に帰れるのだろうか、いつになったら、とすっかり弱気になり、精神的にも参って、周囲の者がつらくなる程しよげかえってしまうのであった。無理にそんな身体にして、シベリアでの回復は難しく、帰国後も果して元の健康体に戻ることができたのだろうか。

どうしても帰らねば、一日も早く、の止むにやまれぬ思いからの行為ではあつたろうが、何とも痛ましい、そんな幾人かの人たちをどうすることもできないまま私は見てきた。

身体検査

鳥取県 清水要範

真裸にされソ連の女軍医が尻の肉をつまんで等級をつける。軍医は看護婦程度の知識らしい。医学の遅れたここでは日本の軍医や衛生兵は重宝がられた。民間人の診療にも当たっていた。毎月一回の検査で一〜三級とオーカに分けられ作業も重労働から軽労働、オーカは営内の清掃などに振り分けられる。そして病人などは帰還の名目で収容所を出る。羨ましく見送ったが、しばらくたつと回復して戻って来る者もあつた。本当に故国の土が踏めるだろうか。

愛媛県 梅崎文夫

私達は時々軍医(ドクトル)の検査を受けた。検査というより、それぞれの等級審査と言うべきであつたと思うのだが、これが余りにも簡単なので、その都度あつけに取られたのであつた。何となれば、尻の肉とか腿の肉とかを二本の指でつまんで引張り、その時の肉のしまり具合や痩せ具合、たるみ具合によつて等

級を決めるのであるから全くもって恐れいっただのである。その結果、一、二級となつた者は健康体とみなして收容所外での作業。三級者もこれに順じ、四級(オカ)は收容所内の軽作業、五級は栄養失調者(シワトリヒヤ)として作業免除。ちなみに私は三級がほとんどで、時々二級にもなつたが、一級になつたことはただの一度もなかつたのであつた。

東京都 金井秀雄

昭和二十一年春ごろから身体検査が行われるようになった。聴診器を使つたり脈を診るわけではない。裸にして尻の肉を引っ張るだけで等級を決める。体力のある者は弾力と艶があり、衰えると臀部がたるみ、空気の抜けた風船のようになる。一人何秒。犬猫より簡単に一級、二級、三級、オーカと等級がつけられる。一級は重労働に従事する。私はいつも三級だった。オーカとなると、作業休みか室内作業、半病人のような者であつた。

愛知県 中根昭二

この收容所では入所当時暑さのため大勢の患者が出た。また栄養失調のため死亡者も続出し体調も崩れ病人を続出した事があつたのでこの收容所に医務室ができたが、注射器一本有るわけでもなく、血圧計や心電図がある訳でもない。ただ日本軍から持ってきた体温計が二、三本有つたのみである。ソ連の軍医と日本軍医が立ち合いで月一回健康診断をしてくれるが下痢と熱発だけは患者として認められるが、その他の病名は一切認められなかつた。聴診器を当てるわけでもなく血圧も脈拍も計るわけでもない。

肉の付き具合と皮の張り具合だけでチェックする。

一級 身体強健にして重労働に適す

二級 身体普通で通常の作業に適す

三級 身体虚弱で軽作業可

四級 病弱者で作業不可

これだけの診断がいとも簡単に片付けられていく、これは我々の体の事を思つて情け心でやってくれるのではない。

この人間動物をいかに安い飼代でどれだけ酷使できるかの目安に過ぎない。一番困つた事は足の関節の痛みや歯痛の悩みであつた。内臓系統の異状や痛みは全然認めない。ソ連医はただ横着で怠け者ぐらゐに思っている。

私も一度歯痛で苦しみ小隊長から願つてソ連の軍医に診てもらつたが作業は休ませてくれなかつた。仕方なしに戦友達と現場まで行き、戦友達の同情にすがり休ませてもらった。ノルマーは人員で割るので私も作業した事になり、戦友達には大変迷惑をかけた事になつた。

長期連兵休

愛知県 水野治一

私は、コルホーズ作業に駆り出され、心身共に疲れ、体調の不調を感じ、日本の川村軍医に診断を受けたところ、体温が三九度の高熱で下痢が伴い、風邪と診断され、取りあえずアスピリン(解熱)剤三粒を飲み、下痢には薬がなく、下痢止めに炊事場で木炭を飯盒にいっばいもらつて、水と一緒に飲んで早速洞窟の乾燥草に潜り込んだ。

翌日再診を受けたところ、軍医はこれ以上適薬はない、当分連兵休で作業を休み様子を見ることにした。

一カ月近く連兵休が続き、食欲も次第に無くなり、衰弱も日増しにひどくなり、月一回のソ連軍医の健康診断に相談したところ、軍医はビタミン不足が原因だから、できる限り生鮮食品を多く取るようにと言われたが、現状では特別に生鮮食品の補給は困難で思案したところ、ビタミン補給には草木の新芽に思い付き、翌日から特別申し出て、連兵休ではあつたが、炊事の薪取りを志望した。時は四月下旬のこと、薪取りに裏山では草木も発芽の時期、早速翌日から

始めた。寒いソ連でも四月下旬ともなれば丁度発芽のときで、先ず薪取りより先に立木の新芽を採取、長い冬期が過ぎ、新春の空気の新鮮さの中、新芽を摘み早速十分口に入れビタミンの補給に専念。後でポケットに摘み取った。其の後の薪取り、裏山はもちろん国有地で無管理地帯で枯木は無造作で採取は簡単であった。

毎日薪取りを志望し、新芽でビタミン補給に努めたところ、日増しに体調が回復したことを軍医に話し新芽の特効薬を宣伝した。

五月中旬、長い連兵休の解除を申し出て数日後から作業に出た。

静岡県 飯島 久

健康診断は五級に分かれ、一級(ヒロイ)が一番軽い症状とされるが、肋骨はむき出しになり、尻の肉はありません。立った人の後ろ姿を見たとき、肛門は絶対に見えません。一級になると肛門が丸見えとなり、そこから皮膚の皺が放射状に走り、腰の骨に皮膚がひっかかっている状態です。筋肉の脂肪もすべてカロリーとして消耗され、尻の肉はほとんどなく、骨に皮をかぶせた状態になっていました。それでも何とか立っていられるならば一級です。作業に適する体なのです。

二級(フタロイ)になると立っているのが困難となります。三級(ツリーツチ)は、もはや全く立えず横たわっているだけで、あれほど飢えた時なのに、どんな食物も受け付けなくなつて、ただ死を待つだけの状態です。胃腸の機能を全く失つてしまうのです。

(3) 病氣・怪我について

和歌山県 土井 昇

トラックに乗せられ、十キロほど行ったらテント暮らしで、奥地へ奥地へと進む。後で聞くと、この道はソ連軍用道路であった由。そういえば山中に戦車隊があったり、軍用機が着陸している所も散見された。軍秘に関する作業が終了すれば、作業従事者全員が銃殺されるのではと不安いつばいの毎日である。

道路修理に必要な材木の伐採作業に狩り出され、直径二メートルにも余る原生林に入り、木を倒し、数メートルに切断して一日一人五立方メートルのノルマ、ノルマの作業も過酷であった。ノルマ未達の者は食糧を減らす、いわゆる働かざる者食うべからず主義である。

この伐採作業中、切り倒した大木に足を挟まれ大怪我をした。作業中の戦友が十数人ほど来てくれ、必死で大木を切断してくれた。その時間の長かったこと、余り倒木が大きいので、ここでは動かず、短く切って助けてくれた。足は既に紫色に内出血し、足首はポンポンに腫れ、友の肩に乗って下山したが、医師も薬もない山中、テント内で患部を水で冷やすのみ。以後二か月、友が作業に出いていったテント内でただ一人、痛い足をかばいながら、点々と移動するたびに友の肩を借りる始末。このときばかりは何度自殺を考えたことか。

やがてこのつらい生活も終わるときが来た。完治不能かとまで思っていた左足も、月日という薬のお陰で、ビッコを引きながらもどうやら一人歩きができた。

岩手県 金野秀雄

戦友が四十度前後の高熱を出し、次々と倒れていった。飢餓と極寒の中での強制労働による衰弱の身であればやむを得ないが、シラミが悪疾を感染させた

のであろう。だれが名づけたか知らないが「怪奇熱」と言われて恐れられた。医療関係は皆無であり、自分たちとしては自分の身体から一匹でもシラミを少なくする意外に予防法はなかったのである。

栃木県 佐藤充男

外の扉の取手には縄をしっかりと巻きつけて置き、手の凍りつくのを防いだ。直接この鉄の取手を握ったら大変である。一瞬にして手の筋肉が取手に凍りついてしまうのである。

福岡県 日野治水

満州から四年有余苦勞をともした友も全部帰国し、異境での苦勞、失意で作業中も涙、ラーゲリでも毎晩泣いたものである。

このころから次第に食欲もなくなり、精神的憔悴と栄養失調に耐えながら過酷な強制労働に出役していたが、大陸性気候の急変などで身体の諸病に対する抗病力の減少と疲勞が重なり、昭和二十三年十二月下旬、作業中、両手足の関節部疼痛を自覚。疼痛は日増しに増大するもソ連の軍医(女医)は痛かったら熱が出ると受けけない。

昭和二十四年一月上旬には疼痛の部位も両手首から両腕、足関節へと拡大し、四十度近い発熱で労働困難になり一月十日受診。受診の結果、関節リウマチと診断され入室作業休となるも薬はなく、満足な手当では受けられなかった。

岩手県 梅津盛一

タシケントの收容所にいたとき、私は痔を悪くして帰るまで大変な思いをした。なにしろマラリヤ熱と違って休ませてくれないのである。

それからある現場で、鉄材を移動する作業をしていたとき、左足の親指を挟

み、生爪を剥がしたことがあったが、今でも色の変った爪が出ている。

島根県 都田 実

入坑して二年目、毎日毎日過労の連続。食事は悪い、少ない。パン一日三百グラム、粟か米がゆ、飯盒のふた一杯、砂糖大さじ一杯、スープ、トマトが少し入った塩汁、これでは体力が保てない。そして酷暑零下四十度〜五十度、最低零下五十七度にも下がった日もあった。

このような状況で、私は疲労の連続、そして感冒を無理して作業したため、急性肺炎となった。そして入院した。肺炎患者が十人ばかり入院していた。意識不明の日が八日続いた。私は、シベリアの土になるのではないか、いや、こんな所で死んではならない、頭の中でかすかにこんなことを思った。今日死ぬか、明日死ぬか、私が一番重態で死骸を片づけやすいように一番端に寝かされていた。九日目から絶望視された容態が、意識も少しずつ戻ってきた。設備もない、薬もない、治療法といっても平常より少しよいものを食べさせるくらいである。この最悪の状況でよくも助かったものと思う。

島根県 八幡垣正雄

栄養失調ビタミン不足による鳥目

昭和二十二年の秋ころ、夜になると急に目が見えなくなり、針の目つぎの穴だけの光が見えるだけで、夜になると不便で、特に便所に行くのが大変であった。鳥目はビタミン不足によるのが原因であるので、肝油を飲むとよいとのことであったが、肝油などなく、別に治療の方法もなく、昼間の作業には影響がないので、他の者から見ると怠けているようであった。

ちょうどそのころ、コルホーズで馬鈴薯掘りの作業があったので、希望して行き、昼はいい掘り、夜は普通の食事以外にいいものをたいて食べて、この地で十日余りの作業であったが、大分目もよくなり、一か月くらいで元のように治癒した。

高知県 山本明司

ついに私も倒れ、入院し、次第に弱り、いよいよ今夜は死ぬると自他ともに認め、私の遺品と髪と爪を取りに来てくれた。私はその夜、毎日続く高熱のためやたらと水が飲みたくて、日本の衛生兵やソ連の監視員に交渉したが、水を飲むと下痢をするから汚いと言つて、死にがけの水も飲ませてくれない。

もちろん、水も遠くから運んできた貴重品だ。私はどうしても我慢できず、どうせ死ぬのだ、ままよと監視の寝静まった夜中、魚だるの古いのにいれてある水タンクに忍び寄り、ふたの上に置いてある掛け盒に二杯飲んだ。

その水のうまかったこと、それまで生死の境地をさまよひ、目を閉じると、故郷に帰り父母や氏神や秋祭の風景が見られ、目を明けると病室の天井が目につき、ああ、これはいけない、いまだソ連にいるのだと悲しみを繰り返していたが、水を飲んで、次第に苦しみも薄らぎ、生き返った。

私の両サイドの二人はその朝息を引き取り、氷のように冷たく、骸骨に皮を着せたような姿となり、二人のシラミは私に移動して、私はその時のシラミの食跡がいまだ酒を飲むと首全体に残っている。

和歌山県 入山敏一

痔を悪化させ、歩くにも股を開いて歩かねばならず、大便も立便しなればできない状態になり、診察の結果、入院と決まり、隣村へ移された。しかし事業は病院ではなく、薬一服も与えられず、早速に軽作業という名目だけの農作業に従事させられ、食事は何ら変わるものでなく、ただ、ここでは何かの動物の血でつくられた血粉のコーリヤンとかゆを食べさせられた。これはまことに生臭くて食べられたものでなかったが、命を保つために無理して食べたお蔭で、体力もついでかなり持ち直したように思えた。

栃木県 加藤源四郎

二十年十二月 同じ中隊の高橋一等兵が夜中に腹痛をうったえ、さわがしくなった。「軍医、軍医」と誰かが言っていたので自分も行つて見た。これは胃痙攣だ、俺が治してやる。

右足と左腰を押し、右尻をたたき、五分間でうなりをとめ、十五分くらいで平静にもどった。二十年一月、満州延吉で同年兵の胃痙攣をなおしてやったのとちようど同じであった。

二十一年一月 中隊の一人が、痔が痛く作業にいけないとのこと。二、三日前、軍医に見てもらったが、設備もなく、手術は出来ないと言われただけ。そこで俺が治してやると寝台の上で治した。胃痙攣と同じ方法で、明日の朝までに治るから、五分間の治療、翌日は元気で仲間と作業に出ていき、その後二年間異常なし。

二十一年二月 自分達の小隊は草原で家屋の基礎工事の濠を掘っていた。十時頃、五百メートルほど先の別の小隊の兵士が走ってきて「小隊長に言われて来た。貴隊に加藤一等兵がいるでしょう。実はうちの小隊で大きな事故があり、怪我人が出た。直ぐ見てもらいたい」と。小隊長は「加藤、行ってやれ」。使人のあとを追った。見ると、一人が足を投げだし、痛い、痛い泣いていた。自分達と同じ一・五メートルの濠を掘っていた。零下二十五度の気温、三人が土砂崩れに遭い、腹上まで掘り、はいだしたが、鳥居上等兵の左足膝下が内側にはずれている。

よし、皆んな手伝ってくれ、あおむけにしろ、そして左右の腕を一人づつ押さえろ、右足も押さえろ、自分は左足を持って言った。空気を十分吸い、全部はきだしたところで静かにとめろ。その瞬間、左足を一気に折りまげた。ほんのかすかな音がして、元どおりに入った。これで大丈夫だ、あの工具置場にねかしておき、五時までに戸板をつくり、みんなでかついで帰ってくれるようたのんだ。その晩七時頃、衛生兵がきて、軍医殿が膝の入れ方を教えてくれと。大したことはない、教えるほどのことはないこととわった。聞くところによると、現在大阪で病

院を開業(産婦人科)しておられるとか。

二十一年三月 自分の小隊はブロック積みをしていた。十時頃、鈴木一等兵が近くの公衆便所にいったが、二十分くらいしても帰らないので、いって見ると、便所の中に青白い顔してうずくまっていた。どうした、痔が悪く、出血したので気分が悪い、便所の中は真赤だ。よし、俺が治してやる、外にでろ。凍った雪のうえで防寒衣を着たままうつぶせにして、足腰尻と五分間くらいで治療した。これで治るから便所の中でやすめ。その後三十分くらいしたら、気分が良くなったからと出てきた。まあ、今日は仕事をするな。帰る五時までに元気になり、並んで一緒に収容所に帰った。

二十一年七月 石橋大尉副官が、最近、体の調子が悪く寝込んだ。軍医に見てもらったが、はつきりしない。ある日、満州延吉で胃痙攣を治したこと、また、終戦直前、八面城で前部隊長を治したことを知っていた元内務係田畑曹長がきて、副官を見てくれとのこと。副官のいる小さな舎に入り、五分間治療。明日もきてくれと言われ、その後週二回、計六回ほどして良くなった。

二十二年六月 他の中隊の話だが、兵士四人が仕事先でとった草を雑炊にいれ、広場で会食した。二十分ほどして四人とも笑いだし、笑いがとまらない。そして部屋に帰り、日本に帰るのだと、身のまわりをまとめた。驚いた仲間はずれて医務室に。しかし軍医も原因はわからない。しかたなく四人とも巻脚絆でからだを寝台にしぼりつけておいた(部屋からでないように)。二日ほどして治った。このことを所長に話したら、日本兵は馬鹿だ、ソ連では豚でさえ食べないと笑っていたとか。

朝出なら、病人が出て、怪我人が出て、どうすることも出来ず、仕事仕事のみ。毒草で脳がおかされても、日本に帰りたいことだけの神経はすぐひらめく。抑留者全員がどうしてこんな所に連れてこられたのか、考えれば考えるほどなさない、くやしい。ただただ一日も早く日本に帰してくれることを祈る気持ちの毎日だった。

福岡県 尾花保衛

衛生管理のない收容所生活は「ノミ」「シラミ」の発生となり、日を経つて群れをなし、各人の下着衣類には「シラミ」が列をつくりはいまわつていた。滅菌設備もなく、夜、ペーチカの焚火の明かりで爪先でつぶす以外に方法はなく、指先は血のついたように真赤になった。

熱発患者がで「発疹チフス」患者がでて医療設備も薬もなく、ソ連軍の医者もおらず、不幸にして日本軍にも医者はいなかった。衛生兵の診断で隔離するのが精一杯で、人里離れた山奥の抑留生活ではなすすもなく、作業から帰つてみると熱発患者はすでに亡くあの世の人、二度と仲間の顔を見ることもなく、友は淋しく死んでいった。

栄養失調者は増え「発疹チフス」は蔓延し、患者の食、残しを食べれば、翌日は死が待つ吾が身と知りながら、極度の空腹には摂生の理性もなく、一刻でも良い、空腹を満たすことに我を忘れ、かくれて一気に飲みくだす姿は、まさに餓鬼道そのもの、熱発数日後には無言の死を横たえ、悲しみのなかにもまたあわれであった。一日も早く日本に帰ることを念じ、幼い吾が子に会えることを口癖のように唯一の楽しみにしていた友が、願いかなわず異国の地に帰らぬ人となつた。

吹き降ろす吹雪のシベリアは寒かろう、冷たかろうと祖国で一日千秋の思いで待つ父母や妻、幼子に永遠の別れをした友を今更ながら不びんに、はるか遠い遠い北の空をみつめ、生きてふたび帰らぬ友の霊に静かに臉を閉じ合掌する。

広島県 今田日出太

一番しんどかったのは風土病のマラリアにかかるんです。まず第一番に水が悪いですから、水を飲んだらてきめん腹痛です。下痢です。下痢しちよるから休

ませといふのは通らんで、熱がなけりや休ませてくれん。朝からマラリアが出てくれりやええんですが、工場の途中で仕事をしおるとブルブル震え出すわけです。何でこんなに熱があるのに仕事に出てきたんかと言って、向こうの工場の者は言うけど、それはしょうがないんで。それでマラリアの薬をもらうんです。あれはきついキニーネですか、きついやつをもらうと熱は出んようになるけど、そのかわり今度は下痢をし出すんです。

私なんか、そのキニーネは飲まずに置いて、下痢は消し炭で止めおつたです。あれが一番よう効くんですよ。消し炭が水分を吸収するんで、下痢をしないいうことなんです。これは理屈に合うておるじやろうと思うんですが、真つ黒い便をしてね。みんなそれぞれにそういう知恵を絞り合つて、消し炭を飲んで下痢を止めて仕事に行きおりました。

滋賀県 寺村芳郎

食事といえは五分がゆ、昼食はパン二百五十グラムくらいです。朝食のときに昼のパンも同時に食べてしまうので、昼は水を飲んでのいたものです。昭和二十一年の元旦と五月一日に米のご飯の支給があり、ニシンの頭つきが一匹ずつわたり、喜んで食べました。しかしその晩、胸がやけて眠れないので水道の水を飲んだところ、その水が悪く、たくさんの者が熱を出して作業を休みました。腸チフスと診断されました。所長が驚いて中央より医師団を呼びよせ、治療に当たつたものの、約二か月の間に六百八十人が死亡しました。

島根県 八幡垣正雄

病氣、怪我等の治療、手当て

私は冬のある日、バザールで汽車の引込線の脇でものをかついで作業中に、足がすべつて転んで顔を線路のレールにぶつけて、上の前歯が二本とも根本から抜けて、口の中も外も切れた。転んでぶつかった瞬間に目から火花が出るという

が、そのとおりで星の火花が目の前で散ったのである。

寒いときであつたので、血が凍つて唇が固くなり、凍っている状態になつていると、しびれているのと両方で、あまり痛みを感じなかつた。

怪我をしたときは夕方の四時ころであつたので、全員の仕事が終わるまで休憩室で唇を手で押さえて待つていた。

ラーゲルに帰つて島田准尉に治療してもらつたが、縫う針も糸もなく、赤チンキをぬつて絆創膏をはつただけで、三日くらいで治癒した。

いくら口の中が痛くても食べ物は丸のみをして飲み込んだ。いくら怪我をしても作業を休むことができず、二三日はバザールで軽作業、休憩室や便所の掃除、休憩室で燃す薪の用意等をして過ごした。そのときの傷あとが残っている。

病氣は一度もしたことがなかつたが、風邪をひいても熱がないと休むことができず、若干あればアスピリンを飲むだけで、大病は本部病院に入院していた。一番困るのが腹痛である。薬もないが、休むこともできなかった。

栄養失調ビタミン不足による鳥目

昭和二十二年の秋ころ、夜になると急に目が見えなくなり、針の目の穴だけの光が見えるだけで、夜になると不便で特に便所に行くのが大変であつた。

鳥目はビタミンCの不足によるのが原因であるので、肝油を飲むとよいとのことであつたが、肝油などなく、別に治療方法もなく、昼夜の作業には影響がないので、他の者から見ると怠けているようであつた。

ちようどそのころ、コルホーズにバレイショ掘りの作業があつたので、希望して行き、昼はいも掘り、夜は普通の食事以外に芋を炊いて食べて、この地で十日余りの作業であつたが、大分目もよくなり、一か月くらいで元のように治癒し、とてもうれしかつた。

病氣による入室、入院

ウオロシロフ地区で病氣になると、他所の病院に入院するのであつたが、ハバロフスクでは最初は收容所の医務室に入室するのであつた。

入室の際に一番先に実施されるのが頭の髪を丸坊主に刈り、次に裸になり脇の毛などをバリカンで全部刈り取る。髪及び毛を刈り取るのは、毛ジラミを駆除するためであつた。

次に洗面器一杯の湯で全身を洗うのであるが、三か月以上も風呂に入ったことがないので、洗面器一杯の湯では到底全身を洗うことができず、顔や手足を洗うだけであつた。

入室してみると、ウオロシロフにいた島田衛生准尉もハバロフスク收容所に私たちと同様の容疑で来ていられた。入室して二三日して病状の重いは入院であるので、私も入院した。

病院といつても日本人専用の病院で、二階建ての古い建物を改造した病院であつた。部屋は四人部屋で、それでも一人用のベッドに毛布が一枚あり、收容所より環境設備もよく、食事は別によくなく收容所と同じであつた。

医者は軍医が一人で、看護婦もいなく、日本人の衛生兵が四五人いたようであつた。

病院というより休養室のようで、入院した最初に軍医の診察が一回あつた。聴診器はラップの短いような聴診器で、体に顔をつけるようにして診察があつたが、病名とか病状の説明もなく、薬も注射もなく、安静にして寝ているだけであつた。帰国の命令があるまでこの病院で静養していた。

虫歯に悩む

抑留中すべてのことに困つたが、虫歯に大変悩まされた。栄養失調の上に毎日雑炊を食べ、また歯を一度も磨いたこともないので虫歯ができ、歯科医院に行くでもなく大変困つた。

昼間はどうか我慢できるが、夜寝静まつて体が温まってくるとちようど真夜中ころである。虫歯がズクズクと痛みだし、水を飲んで口の中を冷やすにも水もなく、自己流の治療法として縫針を虫歯付近の歯ぐきに刺して、ガスを抜いて一時的の治療法で痛みをとめてその夜を過ごした。針を刺して虫歯の神経に

針が立つと、体が飛び上がるほど痛くて大変であった。

そうこうするうちに、痛みを治療したのであるが、また次の歯も虫歯となり、一年間は虫歯に悩まされ、夜がくるのがこわい日々が続いた。

福井県 尾上敏雄

五月初め、私は不幸にして木材搬出中怪我をして入院することになった。私は足の骨折であった。同僚と別れ病院へ行った。病院といっても丸太を積み上げたお粗末な建物であった。医者は、病院に一人男の医者がおおり、他はすべて女医ばかりであった。私は幸い入院患者の中に外科医(日本の医者)がいて診察していただいたので、約三か月で退院、また別の収容所にはいり、翌日からまた道路工事、木材の搬出と毎日激しい仕事ばかりであった。

大阪府 倉見 曠

相変わらずの食料不足の中で、働け働けと追い回されて、私もキャベツ畑を歩き、キャベツの根のしんの白いときどき食べ過ぎとしておりましたが、戦友がジャガイモを生でおいしそうに食べているのを見て、私も食べてみましたが、初めてで終わりでしたが、戦友は何回か食べていつの間にか病院へと運ばれて行きました。私も冷えから腸を壊し、作業中に便所はないし、野原で用便を足し、ついにはうみのようなまで出始め、血まで入り始めたので、医務室へ行き診察を受け、即入院となりました。一日便通が二十回以上と続き、小用まで回らずで、大した手当てもなく、水筒に熱湯を入れて腸を暖めるのが最大のように記憶していますが、そのかいあつて一週間ぶりに小用が出てから快方に向かい、間もなく医務室を出しましたが、こんな状況で身体も衰弱し、しばらく舎内の雑役をさせられてましたが、一か月過ぎた時点で身体検査があり、体重測定をしましたところ、四十六キロでした。いつも五十六、七キロあったはずなのに私自身びっくりしました。その折ソ連の軍医がお尻をひねりながら判定しているのを見て、変わ

った見方もあるなと思いました。その後保護兵扱いになり、重労働には回らされんようになりました。

石川県 中川政義

私の収容所では終戦の年から翌年にかけて回帰熱という伝染病が蔓延し、一時は遺体の収容と墓場の穴掘りが日課だった。回帰熱というのはその土地のロシア人が感染源だといわれ、シラミが原因で急激に熱が高くなって、食事は一切受け付けなくなり、顔色が黄色味を帯び、下痢を伴って死亡してしまうのである。朝の点呼に出なければもう死んだかと思われたくらいの悲惨さ。毎日死者が出る始めると、ついには人手不足のため、道路向かい側の倉庫に二百人ほどの遺体を積み上げ、埋葬されるまで放置されていたのである。連日、墓場の穴掘り作業に明け暮れていたころ、私自身が回帰熱にかかってしまった。頭が重く気分は悪く、体温は四十度に上昇しており、絶対安静ということで入院した。しかし、医薬品も不足しており熱を下げる特効薬とて全くなかった。高熱が十日以上も続いた後、設備のよい別の病院へ移送され、手厚い看護を受けるとともに特別の病院食が与えられた。

このような手厚い看護と栄養食に恵まれて、猛威をふるっていた回帰熱を無事克服。二か月後に退院できた。

島根県 多賀頼秀

伝染病

四月になると凍っていた湖水もそろそろ解け始め、そこはかとなく春の気配が感ぜられ、やっと寒さから解放されることとなった。しかし、依然として食事の給与が少ないので、ひもじさには変わりはない。八月になってから病人が続出するようになった。同僚の室園真二君が体調が悪くて食事が進まないと言うので、おかゆの残りをもらってちょうだいしたが、彼はやがて入院し、そのままつ

いに会うことはなかった。数日たつてから私もまた下痢を起こし、発熱し、入院することとなった。先に入院した室園君は腸チフスだったのだ。彼の残飯をいただいたので、自分にも感染したらしい。

昭和二十一年八月十五日、悪寒のため寝台に寝ている体が激しく震えるので、マリヤにかかったかと思っていたが、やはり腸チフスだった。腸が敗れたのか物すごく多量の血便が出、衰弱がひどいので、これではとうてい助かるまいと思った。隔離病舎の個室でただ一人寝台に横たわつて、寂しく思いめぐらした。

祖国は今お盆である。自分が死んだことがいつの日か父母や妻子に伝えられるだろう。そのとき、どこでどういう死に方をしたやらと思つて、定めし悲しむことだろうと思つと悲しみが心の底からこみ上げて、何とも形容しがたい悲痛な思いに嗚咽がとまらなかつた。そしてそのまま昏睡状態に陥つたらしい。

翌朝広瀬軍医大尉に起こされ、「お前は坊さんか」と問われ、「ハイ、そうではありません」と答えると、「だから昨夜はナンマンダ仏ばかり言つとつたナ」と言われたが、回診されたことも注射を打たれたことも全くわからなかつた。幸い一命をとりとめて、病気は次第に快方に向かつていたが、スパースクの病院へトラックに揺られながら転送された。

この病院には大勢の患者が入院しており、ドイツ人のドクトルが何人もいて丁寧に診察、治療をしてくれた。ここにいること数日にして、今度は第八ラゲルの病室に転送された。ここは收容所の一隅に建てられた病舎で、ドイツ人のドクトル一人と数人の看護師がおり、二十人くらいの患者と一緒に板の間の一室に布団を敷いて、寝たり起きたりしていた。病気はすっかりよくなつていたので、薬は出さず、十月十八日に六十七日ぶりに病舎を出て、ここの收容所の第三中隊へ編入されることになった。

京都府 武内敏次

十二月鑄物工場へ小隊三十余人と作業に行く。大きなエンジンのようなもの

が鑄物の型枠からはずされ、小グレンで運ばれてくる。その不用物をハンマーでたいて落とす作業が大変だった。重くて二人がかりでやつと運ぶ。ある日その運搬中に右手人差し指をつめてしまった。痛む指を辛抱しながらその日は終わったが、翌日は赤くはれて痛むので医務室に行く。四、五日通つたところで痛みも少なくなつたところへ、ソ連軍医が收容所外の一般の病院へ連れて行つた。ここで治療するというのだ。日本人は一人もいない。周りはソ連人ばかり、えらいことになつたと思つているうちに、数日病院暮らしをして五日目ぐらいか治療室で看護婦が何か言っているが、言葉がわからない。医師の言葉もわからない。何かしらドキツとする雰囲気だ。後ろ向きの位置で右手を押さえられ局部麻酔を打たれたらしい。やがて幹部の指先から何回かで切り取られてゆくのがわかる。痛くはないが指がなくなる。それも突然の出来事。それも切断せねばならぬほど悪化してないように思われたのに、言葉の通じないところがいま一本なくなる。涙がポロポロ落ちた。即日退院して收容所に帰つたが、切断された指は数日寝ることもできぬほど痛み続けた。作業に出るにはそれから二か月ほどかかった。

北海道 倉部房次郎

二年目の冬の明け方、激しい腹痛で目が覚めた。急性虫垂炎と診断された。元軍医はいても、手術はおろか、これといった薬もない。万事休すと観念した。仲間は作業に出てラーゲルにはだれも残らない。激痛を耐え、独りで舎外の氷を取り込んで、ともかく幹部を冷し続けた。

作業の終わった夕方、やつと遠隔地のラーゲル医務室に連行されたが、その道程がまた冒険そのもの、トラック、汽車、トラックと乗り継ぎ、揺られ通して着いたのが夜中の十一時であった。何か注射されて、いつしか眠つていた。朝方目が覚めてみると、あの痛みが消えている。助かつたのである。軍医は奇蹟的だと言う。季節が冬であり、氷が手の届くところにあつたのも幸いしたと思う。もしあれが暑い時期だったらと考えると、今でも背筋に冷たいものを感じる。

和歌山県 長峰泰夫

昭和二十一年三月、十九キロ幕舎收容所、患者班

三月に入ると歩くのも大儀になり、作業には出ず患者班となって、所内にて雑用をするようになる。この数も次第に多くなり、月末には四十四人になった。全人員の一七%を越える人数にふえてしまった。作業に行く人もつらいし、休む者もどうなるかむなし。まき割り等、軽作業をして日を送っていた。

この收容所の奥(東側)に幕舎が一棟建ててあり、ここへ各中隊から送られた栄養失調者が全員收容される。ソ連では才力と呼んでいた。入所者は百人前後だったと思う。二中隊の作業員が出た後に、日課が始まる。

新潟県 田中新次郎

ある日、負傷者が出た。医者はいないので、衛生下士官が太もも切断という大手術を行った。その後の消息は知らないが、実に地獄そのままの生活であった。

雪解けとともに山を下り、海岸の小さな收容所に移動した。魚関係の作業である。

新潟県 村岡千代貴

以前北支の済南陸軍病院で三か月ほど衛生兵教育を受けたことから、五百住軍医大尉の指示によって先輩三人と医務室勤務することになった。このころから翌二十一年の雪解けころまで抑留者には最も過酷と苦難との闘いの時期であった。夜明けは八時ごろ、日没は四時前、作業現場では一にも二にもダバイダバイの連発である。全員飢えと酷寒との闘い。疲労は増し病人の続出から、入室の空きなく看護にも限界に迫られる始末。薬品不足、その上医療器具は語るに及ばぬ状態。どうして病人の回復などあろう。五百人編成で五十人余の患

者。その病名は、栄養失調、肺炎、肺結核、下痢、腸チフス、その上日々の重労働、指導性のない作業限界からなる負傷者、病人は清潔なき雑魚寝、高熱に打たれあえぐ悲鳴、うわ言が耳の奥深く残り、疲れを取ろうと横になるが眠れない始末。手の施しようもなく、ただ「頑張れよ、ここで死んでどうする」、「故郷の親、妻子親族が他国における君の帰りを神仏に願って待っている」と励ます以外彼らに力づける手段はなかった。反面、伝染病など万一分に感染したらと考えると、なんとなく背すじがぞくぞくする毎日が続いたことは、今なお心に深く刻まれている。

看護にあたっては二十四時間マスクを肌身離さず常にクレゾール液消毒は習慣づけ、自身のみの予防ではなく、患者全員に対する安全対策でもあった。看護の多忙から身の物、白衣の洗濯もできず腕まくりの状態では患者への必死全力投球、不眠不休の看護の手も彼らに通用せず、息を引きとる無念の涙の別れ。ある朝、三人一度に冷たく仲間から離別の人々と変わっていた。冷えた遺体から無数の白い黒々としたシラミがひも状となり、まだ生暖かい患者の体へと移動する。その悲惨さの余り流れる涙も乾くありさまでした。ソ連軍医の話では、君たちにはこの大勢の患者を扱う任務がある。第一に食べることが大事だ、ウンと体力をつけるのだ。五百人分の糧秣から十分取って食べろ、と押しつける。何とばかな言い分なのか。国は民主主義、人間が人間同士の搾取は禁ずる、すべて平等を条件にする国の指導者格将校の平気な態度には、ただ茫然とする。

新潟県 加藤新三郎

冬のシベリアは二年目と三年目は月例検査で女軍医中尉にオーカ、イッシュョアデハイドーマと言われた。休息の家で三週くらいは休養で体力を回復しては、原隊へ戻され作業をさせられたものだった。また初めての冬に風邪を引いて三十九度五分もの熱を出し診察を受けたら、今日のところは病室が満員だから、明日診察にくるようにと言われた。内地であれば三十九度五分もの高熱なら、肺炎

になるのを心配して大騒ぎであろうにと思い、この非情な扱いに憤慨し、がっかりした。それでもその晩は同僚の不寝番がかわる額を冷やしてくれて助かった。翌朝再び診察を受けに行ったら、まず頭髪やその他の毛をバリカンで刈られた。蒸気機関車でわかした湯を一斗だるにもらって全身を洗ってから診察を受け、すぐ入室が決まったが、お前の場所は今死人を片づけるから待っているとされた。翌日、日本の軍医が診察して急性肺炎だと言われ、重病人の場所へ移されることになったが、これも昨日のように死んだ人を始末してからだと言われ、目の前の死人を眺めながら自分もあのようになるのではないかと、全く心細かった。が、幸いにも隣の人が急性肺炎だったが、快方に向かつて元気になっていて、「私は元衛生兵だ、大丈夫私が見てやるから」と言われて、室外は出れないが、急造の便所の屋根の板囲い裏につく氷をバタ缶十二オンス入れに引っかけてきては、私の額を冷やしてくれたので、幸いにも死を脱した。また別の場所に移されたが軍医は、お前は静かに寝ていなさい。そうすれば自然に治るのだからと言われ、薬も与えられない状態で、捕虜とは全く惨めなものをつくづく骨身にしてみた。

北海道 石川朝雄

そうしているうちに二月のある晩、急に腹が病んできた。しばらく我慢していたがとまらず、ますます病んでくる。隣の同志が見かねて手配してくれ、軍医が来て、「急性腹膜炎だ、早速手術の必要がある」ということで、早速トラックに自分の持ち物を持って防寒衣を着てトラック上の人となったが、病んで病んでどうしようもない、トラック上で転がっていた。真夜中なので寒さ厳しく零下六十度以上下がっていただろうと思うが、そんなの気にせず一時間くらいのところだということだが二時間も三時間もかかったような気がした。このときはここで死んだまると一生命「南無妙法蓮華経」のお題目を、右腹を押さえ転がりつつ病院に着くまで唱えた。

ようやく病院に着いたが、入り口から入って着ている物を全部脱ぎ風呂に入り（と言っても前述のごとく桶二杯）入り口と反対側に出口があり、そこより出て白衣を着せられてすぐ手術台の人となった。

早速ソ連医師の執刀で手術にかかったが、こちらも衛生兵で多少手術の心得もある。全身も各部も麻酔をする気配がない。片言でその旨話したが、「ニヤット」で麻酔はないらしい。独ソ戦で何もかも不足しているんだなと瞬間的にひらめいた。麻酔を打たないで腹を切られるのだと覚悟を決めた。右下腹部を何かで消毒しようだ。そして手と足を寝台に縛りつけて助手の女医さんか看護婦か四、五人手伝っていた。一人は私の顔の汗ふきだ。メスが肉を切るのがジリッ、ジリッと切られるたびに局部の痛さで頭の神経と全身に痛さを感じる。全身汗でびっしょり、顔の汗は一生懸命ふいてくれている、時間は一時間半以上もかかったような気がした。最後は汗も出なくなり脂汗のみであった。終わってとった盲腸を見せてもらったが、ちょうど親指の第二関節から先の大きさのものであった。

その後経過もよく、十日くらいで退院したと思うが、退院後はまた別な収容所に入れられた。従って日本から行った旧中隊の戦友とは全く一人ぼっちになってしまったのである。

ここでは退院の翌日から作業に出された（ソ連はどんな病人でも三十七度以上の体温がなければ作業は休ませないのである）。

新潟県 加藤新三郎

さて、今一つは、忘れもしない昭和二十三年六月十一日に、雨あがりの作業で二階で同僚と二人で下からウインチで上がってくる松丸太六メートル物の梁（はり）を運搬していた。たまたま一回り大きいのを担いで相棒が前で私が後ろで目的の場所まで行き、一、二、三の掛け声とともにまさに右側へ投げおろそうとしたときに、私の左足がズラッと滑った。投げる寸前に右方から滑り落ちてボ

キンと音がして右足下腿骨折し、ソ連の監督にヤポンスキーヨッポイマチ、ヨッポイマチとどなられたが、結果として仕方ないことだった。間もなく病院に運ばれて入院したが、翌日になったら骨折した向こうすねに大きな水泡ができた。一週間くらいで水泡も治ったので、女軍医中尉の手で包帯石膏を巻いたが、暖いので石膏が乾いても痛くて歩けない。病棟長の少佐の巡視の折りに説明したら、早速やり直したと言われて、再び包帯石膏の巻き直しにかかった。が、何しろ骨折以来三週間で、前に石膏を巻いて二週間余りも日がたつていたので、骨折箇所に肉が付き始めていた。石膏を巻くのに五人がかりで頭と両手両足をしっかりと押さえつけ、特に右足を日本の軍医に力いっぱい引っ張られ余りの痛さに大つぶの涙が出た。軍医が引っ張って正常な位置に直して、女軍医中尉がしっかりと丁寧に包帯石膏を十一本も巻いてくれた。今度は最初のとくと違って石膏が乾燥した後、松葉杖で突いて歩けるようになった。

石膏を巻いて三十三日の朝、女軍医中尉に呼び出されて、ヤポンスキー杖なしに歩いてみよと言われて歩いた。まだ少し痛いといったが、ハラシヨウハラシヨウ、イツシヨ東京ダモイだと言われた。石膏を切ってもらったが足がブラブラして歩けない。一本杖で練習して歩くようにと言われた。

千葉県 庄司音松

その年の十月始めであったと思う。そのころから、夜、目が見えなくなる人が続出してきた。日本の平田軍医いわく、野菜物を食べないからだ。なお、薬も何にもない。手のほどこしようなないと、悲観的な言葉しか聞けなかった。

静岡県 吉田吉治

仕事は重労働、栄養失調でやせて骨と皮ばかりになってしまった。ものを考える気力がなくなりました。朝隣に寝ていた戦友が冷たくなっていた。私もとうとう下痢になる。血便が出て熱が出てとうとう病室に入った。病室といっても何

もなし。ただ横になって寝ているというだけである。一日十八回便所へ行ったが、何も出るものがない。ただ白い粘液がほんの少し出るだけだったが、なかなか時間がかかる。便所でしゃがんでいると、元気のよい人が隣へ来て小便をするから、小便のとぼつちりが尻へかかってぬれるが、拭くものもなし。薬もなかったが、樽の木を煎じた汁を飲ませられたが、私は作業へ出る者へ頼んで木炭を持って来てもらい、それを粉にして飲んだ。二日後私が入室したのを聞いた部隊の衛生兵高橋さんが来てくれて、そつと「これを飲め」とクレオソートを三、四粒くれた。つんと鼻をつく匂い、薄苦い味、のどを通って胃の方へいくのを感じながら、これで治るようと神に祈った。このときほど戦友のありがたさと薬を信じたことがない。もしだめだったらマーキロを飲もうかなと思っただけ飲まずに済んだ。そして元気になった。

夜盲症になった人は気の毒であった。夜、便所へ行けなくなり、部屋の入り口で我慢できなくなり、ついもらしてしまうが、元気のよい連中には文句を言われるし、部屋の中は便所の臭いといっぱいであった。

新潟県 周佐喜代止

ついに病気になる血便たれ流しの戦友とともに貨車に乗せられ、今にも死にそうな人たちと幾日もかかって、ようやく着いたところはチタの西の方に当たるカクイというところの塀をめぐらした大きな病院でした。道中、貨車の中は血便と死臭というめき声に満ちていました。何しろ二百人くらいのところ、約半数は亡くなったのではないかと思います。それなのに看護人もおらず、ただマンドリン銃を持った兵隊が二、三人どこ吹く風とばかりに通りすがりの女たちをからかっているありさまでした。全く言葉にも表わせないほどです。患者の中で歩ける者はだれ一人もなく全員担架で運ばれたのです。病院の院長さんは女医でしたが、院長の言うにはブカチャチャではこんなにもひどくなるまで酷使したのかと嘆いていたそうです。戦友たちはブカチャチャは全く地獄だったなあと言っておりま

した。

新潟県 小山九藏

シベリアの夏は春と一緒にやってくる。そのころに流行するのが銀鉱山特有の鉱害による鉱山病である。採掘粉じんが肺や内臓を冒す病気である。薬は全くない。ゼイゼイと喘息のようになり、みるみるやせ細っていく顔面が青白く気味悪い、手足が動かなくなる恐ろしい病気だ。毎日ように倒れていく数がふえる。

島根県 八幡義隆

二十二年一月に錬成隊に転属することになった。三十人くらい地下壕みたいなどころに集まり、引率され行軍で錬成隊に着いた。二十人いて作業隊でオーカ、デアジンとなった者がここで体力を回復させ、また作業隊に行くといったシステムだ。体力のよい方から一級、二級、三級、オーカ、デアジンの順がある。三級から上が作業隊に行く。各作業隊の寄り集まりで沖繩から北海道まで全国の者がいる。印象深いのは伊豆の伊東温泉の主人と寝台が一緒に、年齢も余り変わらず面白い話を聞かせてくれた。鹿児島、東北地方の人の言うことはわからない。作業隊と違って掃除するくらいで外に仕事はなく楽であった。

一番よいところは入室患者室だ。給与もよいようだ。三十七度以上の熱があれば入室できる。何週目であったか発熱したので週番下士官に申し出て入室させてもらった。入室してみると、一週間に一回ソ連軍医が診察に来る。体温計を十本くらい持ってきて熱を計り、三十七度以上あれば、また一週間はいられない。患者の中にもボスがいて熱の高い者は下段。熱の低い者は上段というぐあいだ。軍医も全員計るわけではなくチンピラトール(熱)イエス、ニエスと聞く、イエスと言えばそれで通る。聴診器はラッパのようなもので、大きい方を胸に当て、小さい方を耳に当てて診察する。また薬はゲマストーゲンという薬で、風邪であろうと腹痛であろうと薬やこれしかないらしい。考えてみると生水はもちろん茶、コ

ーヒーもなく、パンとスープだけなので、風土も一緒に病気も一定の病気しかないらしい。日本人のような下痢患者はないらしい。大便も馬の糞のようでトイレットパーも必要ないようだ。中国でもそうであったが生水は飲めない。軟水でシベリアは中国より石灰分が多い。飯盒一杯の水をわかつて沈んでんさせると下に一ミリくらい石灰がたまる。

岩手県 折居次郎

忘れられる恐怖

真つ暗やみの中を出て真夜中(ほんとうは五時だが)に帰る毎日が続いているうちに、足が重くなり、はれが目立つようになったので、医務室にいくと腎臓が悪いので入院といわれ、即日テントの病室に入院した。

どうにか命を長らえて日本に帰りたいと懸命にそれだけを願う体を大切にしてきたはずなのに、急造のテント病室に入った途端、むくみがひどくなり動けなくなってしまう。まふたも重なり物を見るにも手で目を広げて見るようになり、もうこれで終わりかと無性に寂しさに襲われた。毎日々々テントの穴を眺めながら、この広いシベリアの中で、自分が今ここにいることを知っているのは自分自身とソ連当局者しかいないという底知れぬ不気味さと、このままだれ一人知る人もないままこの地に果てて雪の原野に放り投げられ、オオカミの餌になることすらだれにも知らせることができない悲しさ、この世からこのまま抹殺され、忘れ去られるのかと思うせつなさ、せめてここで死んだと日本のだれかに伝えてほしいと願つてもかなえられないむなしさ。これは抑留者のだれもが一度は味わった最も恐れた悲痛な思いだ。そしてやるせなさにのおのく毎日が続いた。幸いにも春の訪れとともに危うく命拾いをして退院できた。

岩手県 岩館弘一

昭和二十二年の一月ころ、ヤクドニヤの収容所に移動し、収容所より南へ四キ

口の地点で路盤の左右に側溝掘りの作業となった。片道一時間の路盤を往復し、爆薬を使用したりして酷寒時の作業としては順調に工事が進んだ。このころは我々捕虜の体力は衰えてきた。

この作業に従事してから約十日くらい経て、夕方帰路の際、私の目がなんとなくかすんでいるようだった。隊伍を組んでる小隊より私がおくれていた。各人も寒さのため防寒帽の耳覆いをおろして下の方だけ見て歩くので、私の遅れているのをだれ一人わからなかったのだ。私の目は遠くに小隊のかたまりがかすかに見える。そして私が左右の路盤下に落ちたり、またはい上がったりしてうち小隊は相当進んだようだ。このままでは私は收容所に帰れないので、オーイだけか来てくれ、助けてくれと大声を出して叫んだ。叫んでいるうちにだれかが呼んでるようだ。そして目の前に戦友が四人私を両側より支え、おい岩館大丈夫か、どこが悪いんだ、どこが痛えんだと言言葉に、私はただ涙が出て話をする事ができなかった。ようやく気持ちが悪くなったので、目が見えなくなると路盤より右に転げ落ちたり左に落ちたり、その都度はい上がり、このままでは死んでしまうと思ったので助けを求めたことを話した。小隊が止まって待っていたので、小隊長に事情を説明し、また小隊の諸君にご迷惑をかけたことについて謝った。無事收容所に戻ったが、当日監視兵がついていたら銃殺されたかもしれない。戦友に両脇を支えられ宿舎に入るが、人の顔が見えず、ただランプの明るさだけがぼんやりとしか見えない。食事受領にもまた便所に行くにも戦友が一人付いてくれなければ全くどうすることもできなかった。宿舎内で食事を受領するために戦友に支えられても、だれかにぶつかって怒鳴られたりして宿舎の戦友諸氏に大変なご迷惑をかけた。翌日日本の軍医に診断してもらった結果、夜盲症でありビタミンAが不足しているためで、脂肪を必要とするから炊事の方に聞いてみるのとのことであつたが、炊事にも全然ないとのこと、二、三日中に脂肪をみつけると言われた。

恐ろしい発疹チフス

四月十日、再診の結果、発疹チフスと言われ即時入室となり、その日のうちに医務室に送られ、三大隊生活を終わった。そのころ收容所にはこの恐ろしい発疹チフスが大流行していた。

私は、重い頭をかかえ医務室までようやくのこと足を運び、すっ裸にされ湯桶で全身洗浄をされ、消毒の後病衣を渡されたところまではうすぼんやり覚えていたが、それから先のことははっきりした記憶がない。入室から半月ほどは意識もうろうとして、そのなすところを知らなかった。やがてその月の終わりになり、少しずつ意識が回復、体力も幾らかずつでも戻ってきた。寝台の上では用便が大変というので、衛生兵の介護で下段に落としても戻らなかった。

四月末といつてもシベリアの風は冷たい。せつかくのペーチカの燃えが悪く、部屋全体に冷気が常に漂っていた。この寒い部屋にシラミ検査のために毎日婦人軍医が来ては、何のえんりよもなしにすっ裸にして調べる。いなしと言つても検査はやめずに実施する。これと同時に衣服、寝具の消毒がしばしばで、寒い中だけに閉口した。もちろんすっ裸で仕上がり待つので大変だった。チフスの源はシラミだといふので、不潔が悪いということ全身の毛髪をそり、衛生的にとせまられる。しかし、ここでは給食は一般兵に比べてややよく、スープ食、うるち米も少量まじったり、ミルク、ほしブドウなども、まれではあつたが入ったこともあつた。ただ熱があるため、のどが渇き耐えられなかった。飯盒の底を洗った湯を大事に使い、最後には飲んだ。中には我慢し切れずに掃除(防火)用水を盗飲し、衛生兵にひどく叱られたりする者もいた。たれ流しをするわけではないが、床ずれで悩まされる者も続出した。私もやせこけたためか、その一人で、長い間治らず苦しんだ。

日増しに南京虫とシラミは大繁殖して、板床に毛布の半びらで体を巻き、眠ろうとするが体を刺すのでなかなか眠れない。着替えもなければ、入浴もできないので、頭から足首まではシラミがふえて、これがチフス等の伝染病の媒介となる。水が自由に使えない。顔など洗ったことがなく、室内の暖炉の煙で自然にだれもが黒い顔になる。飲み水の不足は、所内の庭から汚れた雪を、古びた飯盒や空き缶を利用して、ペーチカで溶かして水の補給に努めた。体がだるくなり大方の者は、顔が青くなつてむくみ始める者多く、厳寒の最中のため、野草あるいは他に食物を手にはすることは不可能で、体力維持のために、枕木のあら皮下の甘皮を火であぶり松皮もちとして食べ、春の来る日を祈りながら待ちわびた。

寒さと疲労のために、私は発熱して、戦友のはからいで医務室に入室することになり、その体温三十九度五分もあつて、ただもうろうとなつた。入室するとき、そばにいた者が「危ない」と私の病状を話した声が記憶に残り消えなかつた。重病の峠を越えて快方に向かつたときには、同室に九人の栄養失調患者が寝ているのに気づいた。入室しても薬もなく、おかゆが少し上がるだけである。あとき医務室で看護してくれた衛生准尉さんに対して生涯感謝しております。

私の抑留生活

テルマ二〇一収容所では農園作業と伐採作業、二か月ほど過ぎたある日、収容所から一人の逃亡者が出た。要注意隊としてすぐに隊は他の土地に移動させられた。宿舎もない、我々は木を伐採し丸太で宿舎を建てた。農園作業は野菜の収穫、伐採作業は直径一メートル位の松の大木を切り倒し、宿舎までの運搬である。我が第三小隊の作業成績は、他の工兵以外の小隊と比べものにならないほど抜群で、ソ連の収容所長から見込まれ、食事も全員最高の百二十五%のノルマのパンを与えられた。これが悪かつたのです。その後、鉄道路盤の建設作

業、屋外の電柱建て等、困難な仕事は全て我が第三小隊に命令された。ある時は、路盤建設作業から帰ったばかりの我が隊に、収容所長が宿舎に駆け付けてきて「収容所の前に汽車が入って他の隊が貨車から線路をおろしているが、さっぱりはかどらない、一時間以内におろさなければ私が罰金をとられる、お前の隊が代わつておろしてくれ」と、我が隊は休む暇なし、荷下ろし作業もさせられた。毎日の重労働で入院患者が出始めた。最高百二十五%の食事といつても普通より僅かに大きい黒パンで、腹は満たされず、ヘビやネズミ、カエル、キノコ、草類またソ連人の捨てた塩シシンの骨拾いに危険を侵して出かけた。

シベリアに入ったら小隊長といえどもいばつてなんかおられない、現場では率先して仕事に従事、帰つてからは夜の八時からソ連の収容所長室に行つて翌日の作業の打合せ、隊員個人の本日のノルマを八十%、百%、百二十五%の三段階に分けてつけて提出しなければならぬ。

冬がやつてきた。夕方五時に出発、翌朝四時まで、連日零下二十五〜三十度の中で鉄道建設の夜間作業が約四か月間続くだ。作業は独ソ戦争で持ち運び去られた鉄道路路の施設と路盤工事である。現場は暗く、薪を拾つてきて雪の上であちこちで燃やして作業する。

私は毎夜いつ時、ソ連の機関車の煙突の前に乗つて、鉄道路線の完成した部分の場所まで機関車のみを誘導し、建設状況を確認する。この夜間作業が二か月余り続いたある日、私は機関車がカーブを過ぎた時機関車からほうり出され、頭から落ち、燃えている薪に付いていた釘に頭をぶつけて頭をさいた。体がものすごく熱くなつてきたのに気付きやつと目がさめた時は、軍服の前半分は既に燃えていた。私も疲労の限界にきていた。体のやけどは尻だけであつたが、頭のけががひどく、隊に入院。とうとう馴れた第三小隊ともお別れだ。馴れた隊員との別れはこれで二度目である。

一か月ほどで退院。退院者五十名の長として道下隊が編成され、二二二収容所に配属され、又も鉄道建設作業に従事する。作業は、貨車に積まれた碎

石の到着を待つて、碎石を貨車からおろして路盤を建設するのである。貨車の側板を開いて碎石をおろすのであるが、開け方を一つ間違えば石の下敷きになってしまうのである。ある日十台位の貨車のうち八台までは順調にいったが、九台目で失敗した。側板はハンマーで四く五回叩くと開くのが、最初の一回で開いてしまい、逃げ遅れて石の下敷きになり、又もや入院。二週間ほどで退院、原隊に復帰する。

昭和二十二年二月二〇八收容所に道下隊は転属され、ここでも鉄道建設作業に従事、隊長としての一日の睡眠時間は約四時間位、疲労が重なり身体はやせる一方で、骨と皮。入営当時の七十二キロは見る影もない(おそらく四十五キロ位と思われる)。

ある日、鉄道建設作業現場にソ連の軍医が来て、全員裸にさせ、ふんどし一枚で一列横隊に並ばされた。軍医が一人一人の前で、胸をさすったり尻の皮をつまんで五十人のうち四名を選び出した。私もその四名のうちの一人である。(お前は使えないならない)

ソ連は昭和二十二年八月この四名を二一八收容所に移動し、帰国要員を集結させ、約一か月薪集め、宿舍の清掃等の軽作業に従事させ、若干体力を回復させて、昭和二十二年九月十二日ナホトカから舞鶴に上陸復員させたのである。

薬のないときの医者の悩み

入所時の軍医さんの苦労も大変なものであった。栄養失調、発熱、凍傷、けがなどの患者が多いに加えて、下痢をする者が出始めた。栄養失調の患者が下痢をすれば死につながる。当時は野草やキノコなど、何でも食えるものは口にしていたが、その中の毒草が原因で下痢患者が出た。

中田軍医は、ソ連側に食糧の増配を要求するとともに、栄養失調の患者に

熊本県 家入壮介

休養を指示するが、ソ連側軍医は三八度以上の熱か外傷がなければ病氣と認めない。またノルマの国ソ連では、患者数にもノルマがあり、それ以上の国ソ連では、患者数にもノルマがあり、それ以上の患者が出ると軍医の成績にかかわり、下手をすると処罰されるので、なかなか作業を休ませることはしなかった。

責任感の強い中田軍医は、ソ連の女軍医リユーバ(通称・ダットサン)と口論しながらも、自分が実験台になり、付近の雑草を試食して毒草を探し出し、朝の作業出発前の点呼のとき、みんなに「この草は毒草だ、下痢をするぞ、この草は食べてもいいぞ」と教えられた。下痢患者もなくなり、みんなも安心して雑草やキノコを食べて喜んでいった。

ソ連の規則では、死亡者が出るとソ連の軍医が解剖して死因を調べるようになっていた。日本側の大隊長、軍医などが立ち会って行われるが、伐採による初めの犠牲者が出たとき、栄養失調による疲労が原因とわかつていても、中田軍医の意見は一言も聞かずソ連側のみで処理された。中田軍医は、帰国を夢見て異郷の地に倒れた若人を見てみずからの責任と受けとめ、胸中、無念の涙に暮れていたという。中田軍医は患者に対する責任感とソ連側との間に立つて悩み、ノイローゼになってどこかに転出された。みんなに慕っていたのに突然の転出で、入院されたのか、将校大隊に行かれたのか、行き先は不明であった。

私は満州の海林捕虜收容所で赤痢状の猛烈な下痢がとまらず衰弱した。仮設の病院に入院して死線をさまよっているとき、中田軍医が最後のとおきの薬としてくださった「征露丸」によって命を救われ、戦友に助けられながら入ソ、無事帰国することができた。

中田軍医は命の恩人であり、その後のご清祥をお祈りする次第である。

岐阜県 伊藤 武

三月、伐採作業中の再び高熱に襲われた。相棒の石川と伐採作業に就いて白樺を切っていたとき、急に震えがきて寒くてたまらない。「寒い、寒い！」と言いな

がら二時間ほどすると、今度は四〇度くらいの熱が出て、目の前がボーっとなり朦朧としてきた。汗が出てしばらくすると元に戻す。これの繰り返しだが三日目ごとに起きる。監督(マッセル)は、私が仕事が嫌いだからインチキをしているのだと主張し、こうした症状にもかかわらず「しばらく作業を休止して寝かせておけば治る」と言って取り合ってくれなかった。四十度の熱が出たときの苦しみは大変なものである。

たまたま二カ月に一度回診に見えた宮川軍医少佐は、私を裸にして寝かせ、左脇腹を押さえながら事情を聞き、これは典型的なマラリア病であると診断を下された。ソ連の女医にも説明をして同意を得、さっそく私は収容所の西北隅にある休養室に隔離された。

マラリア——こんな寒い土地でマラリアに……。関東軍兵士として南満州の飛行場勤務時代にマラリア蚊に刺され、保菌者となっていたとしか考えられない。ただし、比較的健康であったので発病しなかったであろう。

ソ連では、労働の義務があると同時に病気時の休養の権利もあるので、休養室に入ると薬は何も与えられなかったが、三度の食事は運ばれてくるので、部屋の中で横になって完全休養すればよかった。一日中横になって休んでいるうちに周期的な高熱はなくなり、二週間で普通の体調に戻ったが、体重は十キロも減って四十キロになってしまった。それでも回復したということで一級労働者のグループに戻された。

シベリア抑留時における第一の死を脱出

○昭和二十一年十二月二十九日夜半 高熱にうなされ、悶え苦しんだのか、不寝番に背負われて医務室(第十分所)は、炊事と入浴を除いてすべてドイツ軍製の二重張り幕舎)に入室。運よく直ちに便意を催し、便座(鉄驢訓練所、虎林の和平屯、温春、海林で一回の入室・入院もなく、オマルを全く知らなかった)

広島県 桑田四郎

に尻をおろすやいなや激しくピーピーと噴出。少食、空腹の腹中のすべてを排出したのか、早朝、毛布にくるまれて、リンリンと馬ソリにゆられて行きつつ、次第に意識不明となる。

○昭和二十一年十二月三十日早朝 日本人(第三)病院入院

回復期に「急性肺炎」と知らされる。意識不明中のことも、聞いてみた。

①十四日間、大いに「うわごと」「言うて見て「ああこんな、もう死ぬのか。あのベッドは死のベッドだ」と。

②狂ったように言う「うわごと」「は「何と書いていたか」「何と書いていたのか、大きな声だったが、早口で言うのでよく聞きとれなかった」と不得要領。

九死に一生を得た意識回復直後のこと。

①急ぎ炊きあげ衛生兵の差し出すスプーンの重湯を一口入れ、これを激しく吐き出す。(衛生兵の知らぬはずはなかるうに、塩味であったのか)

②衛生兵急ぎ炊きかえ持参する重湯を食す。(味なし粥—第三病院初の大重病者回復する)

③第十分所医務室で腹中のすべてを出した体質は、急性肺炎と苦闘したあとの体質も同じだった。意識不明中の十四日間、一回の排尿、排便もしなかったと確信す。

収容所の医療

新潟県 中沢 敬

私は、あるとき、れんがを積み、門柱の仕上げ作業を命ぜられ、机を二重重ねて作業中、十一時半ころ、外の作業場への昼食の汁おけを積んだ車の軸に机の足を引っかけて下に着、その際左足をついたため足が地につけなくなり、四十歳くらいの女医でしたが二日だけ休みをくれた。その後随分長い間足を引かずしながら土方作業をすることになり、帰還してからも気候の変わり目には

痛くて農作業ができないときもありました。聞くところによると、当時一番つらかったのは痔を悪くした者で、熱がなければ病人ではないということで無理に作業出勤をさせられた。それはソ連の、常にサボるのではないかとの疑いの考えが先に立ったようです。

広島県 円光寺秀頼

栄養失調で死んでいった

和歌山県 出口為治郎

いよいよ二十一年の暑い夏が訪れた。工場に通う白樺の木の下にれんがに似た色が毎日のように見えるのを黒パンと覚え込んでいた。これも人間が空腹を感じる脳の働きだろう。でも、五月、六月となると内地と違って一斉に草木が出てくる。ホウキ草、アガサ草、兵隊はポケットにやたらと摘み取りラーゲルに持ち込み、飯盒で煮て腹をふくらます。岩塩で味があり、私も再々食ったがおいしかった。中には暗いところで選別したせいとか、一番恐ろしい毒性の多いシベリアの毒草を食って命を失う連中も度々いた。その夏、私もシラムのせいとか、アメーバ赤痢が大流行して、入院一週間の診察で、入院どころか命が危ない病人の看護をさせられた。毎日五、六人ずつ死去していくありさまだった。

神奈川県 相原貞雄

夏は線路の枕木交換、運搬、下ろしてある土砂をならす路盤整地など、余りノルマは上がらない。テルマ收容所に移り、ある日食糧受領使役に出かけ、馬車で駅まで運ぶのであるが、御者がいないというので買って出た。積んだ荷物に腰掛けて御していたのだが、下り坂に来たとき馬が惰性で走り出し、そういうときは手綱を締めるものだが、体力不足なので締め不足。速度が出て荷物から滑り落ち、車の下に潜る格好。瞬間、とっさに縦長となったからよいが、横倒しになって頭をひかれればいどころ、足なら切断。運よく左横前部を土面にこする格好、毛皮状にむしられてぶらさがり病院に收容。医師が化膿を心配し剥がれたとこ

ろを切り落としたので、ハゲとなって今でもそのままである。

私はこのような毎日が続けるうち、幸か不幸か、シベリア特有の伝染病赤痢にかかり、森林鉄道で山をおり、ホール病院（日本人だけ收容する病院として設けられ、医者はソ連軍医、看護婦もソ連人、また炊事婦もソ連人）に入院させられたのです。一日に六十回以上も用便、最後は血便、ついに三日間全く人事不省。友人仲間では入院した直後に既に死んだとうわさもされたようで、何しろその病院に入った百二十五人の友のうち約二〇%は亡くなっているようです。

このとき聞いたことですが、ほかの收容所では五〇%の人が亡くなっているとか。病院に入つても別に薬をくれるでもなく、食事も病人が食べるようなものでもなく、黒パン百グラムに具のない塩味のスープの毎食。入院三日後に私は幸いにも意識を回復し、医者も看護婦もハラショー（よかった）と喜んでくれました。私は、世界人類は一人と一人の交わりでは悪い人は少ないが、国という組織になると全く悪くなるとしみじみ感じさせられました。

そんな状況の中、あたりの入院者は毎日のように数人ずつ死んでいき、病院も百人足らずの患者が、一カ月たたないうちに二百五十人余りに膨れ上がりました。ソ連憲法九条に「働かざる者食うべからず、各人はその体力に応じてその報酬を受けることを得」とあるのだから、おまえたちは最低の食事なのだといったびたび病院長の言った言葉が今でも私の頭に残っています。

千葉県 内田健次

私たちの監督はいい監督だった。仕事がないときは外の仕事を回してくれるし、普通に仕事をしていけば百パーセントはくれた。

そのうち、鉄骨は出来上がり、現場に行くことになった。素人の集まりで柱を

立てるわけであるが、上に上る人がいない。上れる人は私と松本という男と見習士官の三人であった。四本の柱を立てるに三人しかない。そこで監督が上ることになった。

足場もなくワイヤーで吊って上げている途中でワイヤーが外れて、五十センチぐらいの鉄骨が私の頭に当たった。すぐ医務室へ行ったが、簡単な治療をしただけで宿舎にすぐ帰れと言われ、宿舎に帰ると作業係や所長たちが五、六人来て、守衛室に連れて行かれて「どうしてこうなったのか」、「サボタージュではないか」と責められた。自分で落とすたのではなく落とされたのだと状況を話したが、なかなかわかってくれなかったか、最終的には了解した。そして医務室で治療を受けることになったが、何もなくヨーチンを塗って包帯を巻き替えただけで、休んでいろと言われ宿舎に帰った。

翌朝起きると物凄く頭が痛むので診断を受けに行ったら、熱を計れと言う。体温計を借りて計ったら平熱であった。熱がなかったら作業に行けと言う。どうしてかと聞くと「熱がないと休めないんだ」と軍医は言う。「じゃあ行くよ」と言って現場に出てみたものの、立っているだけでもおっくうでたまらない。監督に話すと、それでは休んでいろと言う。しかし、ここでは人目につくから上の見えないところで休めと言うので、上の方で休むことにした。間もなくカタンコトンと階段が上がってくる靴の音がする。上がってきたのは警戒兵であった。彼が何をしているのかと聞くので、体の具合が悪く監督に断って休んでいると説明し、監督も「日本人は仕事をしに来ているのだから仕事の話は俺が監督する。お前は警戒にきているんだから仕事には口を出すな」と言ってくれた。この監督のおかげで一週間ほど現場で休ませてもらった。この監督には大変お世話になった。

滋賀県 寺村芳郎

昼ごろになり右足首がはれ出した。それは四日ほど前から靴ずれを起こし戦友から借りた地下足袋で行軍を続けていたが、夕方やっと目的地に着き、早速

裸にされ身体検査(收容所が変わることにソ連の女軍医)、足のはれを見て入院を命ぜられる。入院といっても病院ではなく一般宿舎の一部を病院に見立てたもので、ベッドらしきもので一人寝ができ、便所は、今までの收容所では屋外で幅二十センチ余り、長さ十五、六メートルの溝を三、四列掘り、縦に並んで用を足すのであるが、この病院では、一部屋に一段高くした板に直径二十センチ弱の穴をあけ、横に五つ、すなわち五人が腰かけて用を済ます。冬の寒さの中大いに助かった。

さて、足の傷は日に日に悪化、痛みは脈拍に準じてズキンズキン、寝ていても辛抱できず、丸棒三本で三脚をつくり、それに右足を体より上につるしてもらい幾分か楽になる。包帯交換は日に一度。一週間がたつたとき、ついに緑膿菌に進行日本の青木軍医が診察して、「こりやいかん、下手をするとアキレス腱を切らねばならぬ。ソ連に話して包帯交換は二回にしておおう」と言われ、傷口から真っ白い筋を見せられる。緑膿菌の臭気は部屋に充満し、他の患者に大変な迷惑をかけたことです。

約一カ月の入院生活で傷口もふさがり、身体の疲労も随分とれ、退院後も約二十日は松葉づえに身をゆだねながら軽作業につき、小麦の乾燥に従事。内緒で小麦をいつては病人や戦友に分けて喜んでもらえたのもつかの間、一般作業に復帰させられた。

広島県 田中工

目的の地らしい駅に下車したのが十二月下旬、既に酷寒の最中。四日間行軍してエラブカのラーゲルに着きました。

私は防寒靴がなく、ソ連からもらった靴の右足親指のところに穴があったため凍傷になり、手術をされ入院。その約一カ月の入院中に、同じ友が毎日のように死亡していきました。ほとんどが栄養失調でした。

ラーゲルでの日々は、原木伐採、原木運搬と農耕でした。整理して人数を数

えられるのに時間をとつたりの二年間ですが、相変わらず友は次々と死んでいき、きょうは何とか元気な自分が明日は？と思わせられながら昭和二十二年十月を迎え、いよいよ日本に帰れるという情報が入りました。でも、ほとんどの者は信じていませんでした。

新潟県 柴澤正雄

私は昭和二十二年四月、まだ寒いシベリア、地名は収容所をあまりにも転々としたため記憶がない。森林の伐採中、タポールにより左膝を受傷する。それでも作業を相手の北海道江差市出身の平田氏と続行しておりましたが、作業途中、はれがひどくなり熱も四〇度ぐらゐとなり、ソ連側の命令により作業を中止して収容所に帰り、日本人の軍医により早速手術をしたが、傷が深いため化膿がひどく、ソ連の軍病院に入院してソ連の女性軍医により緊急に再手術をする。傷口が二方所のため貫通銃創と同じ状態で約三カ月入院生活をする。なお、手術はすべて麻酔のない手術でした。病院の闘病生活中に毎日のように死亡者が続出。遺体は倉庫の中に山積みになされ、後に海に投げ捨てられたとのこと。退院後はオッペーカーナに収容された。

福島県 大和田正友

病院での生活

病院生活でも、身体検査は月一回必ず行われる。これは労働のための等級付けである。一級は炭坑生活、二〜三級は地上勤務、四級は病人扱い、軽作業。これを決定するのは若い女の医師のときが多い。全員丸裸で一列に並ぶ。順番が来ると右脚を台に上げる。女医師がへふくらはぎを引く張るへ、次に後ろ向きになるとへお尻の皮を引く張るへ、悪いところの問診があつて等級が決定される。

身体検査には必ず陰部の毛を剃っていくことが条件になる。これは毛ジラミの防止のためと言うが、逃亡防止も兼ねているようだ。

問診では、右手は親指、人さし指以外は負傷の後遺症で動かない。医師が触ると痛さをオーバーにした。これは外人習慣を見習つたのである。それで軽作業の四級に格付けされ、夜間にジャガイモの皮むき、干し魚の骨取りなど、病院の食堂の下ごしらえが任務となり、一日おきに勤務した。日本人、ドイツ人、ルーミア人などそれぞれの国が四人一組になり、一晩に二樽の馬鈴薯の皮をむく作業が一番多かった。日本、ドイツは規定量の仕事をするが、他はためである。ドイツ人に手伝いをしようとすると「これは自分の仕事だ、お前は休んでいなさい」と言う。責任者がある日「三樽むけ」と言う。ドイツ人は「休みなしにむいて二樽が最高、それ以上はため」とはつきり断る。日本人は黙って引き受ける。いざむくと三樽は無理。どうしたかというとき、三樽目は粗相の上の方だけ丁寧なむいて納めた。病院の調理場である。役に立たない品物で責任者の怒ること、この上ない。上の人にはく巻かれるので、自分に責任を持つことができない欠点をさらけ出したと恥じ入るばかり。飛ばない飛行機もこんなことでつくられたと想像しました。

医療

石川県 餅井茂

病気になるた人は医務室で軍医(主に日本軍医)の診断を受けて休養することができたが、腰痛や神経痛などで外部所見のないものは病気としてほとんど認められず、発熱は三七度五分以上が休養基準だった。

また、患者に対する施薬や治療はほとんど行われず、私も三九度の発熱で十日間ほど入院したが、薬一服与えられず、またランプ係のときバッテリーの濃硫酸が目に入つて失明寸前になり、市の病院へ行ったが、ろくに治療もせず、目薬一滴差してもらえなかった。

また、栄養失調は病気として認められなかったから、これにかかった人は寒さと重労働に耐えられず、毎日二人、三人と亡くなつていった。何人亡くなられた

か正確な人数は分からないが、事故死も含めて百人ぐらいの人たちが亡くなったのではないかと思っている。

東京都 園部 忍

昭和二十二年八月二十一日、朝食前、全員集合がかかり、歩いて五百メートルのところの工事現場の近くは湿地帯だから線路が少し高いところにある。その線路から大きな石が落としてある。その石を二個、近くの工事現場へ運べと言われて、どの石が良いかなと選んで、この石がと左手を掛けたとき、上の方から降りてきた同じ班の者が一遍に二個運べば一回で終わると思つて無理したので、一個落としてしまった。その石が自分の左手を掛けた指に落ちてしまい、中指と薬指を骨折してしまった。すぐ收容所に行き、日本人の軍医さんに注射もしないで薬指を切り落とされてしまった。

和歌山県 笹内武夫

ある日の起床後、少し腹が痛み出したので、そのことを班長に伝えて休ませてもらうことにした。ところが急にまた激しい痛みに襲われて直ぐに便所に行った。そこで多量の出血である。自分でもこれはえらいことだと思ひ医務室で診療を受けますと、直ぐに入室しなさいと言われたのです(ここには内科・外科・婦人科の三医師がいたようです)。腸出血ということであった。ここでは化学薬品が少なかったため、漢方薬的な「生薬」を使い、私の場合、専ら「金水引」という物ばかりであった。下痢はなかなか止まらず、五日間過ぎてても歩くことさえできず、雪の上を這つて便所に行き、帰つて来て部屋に入り床上がろうとしても、なかなか力が出なくて上がれなかった。次第に痩せていく我が身、この時ほど心細く、日本に帰りたい、郷里に帰りたいと思つたことはなかった。

本当に、いま家に着いたらすぐに死んでもよい、こんな所で死ぬものかと思つたのが、真実の気持ちであつたと申せます。それから四カ月間、出血は止まつた

が、体力は衰え、体重も三十数キロまで減つて、これで本当に耐えられるかなと、自分自身を信じられなかったが、地獄の底から生き永らえて耐えてくれました。十月ころまで静養して、ラーゲルの外でソ連軍の薬品倉庫の管理と薬品凍結防止の暖房係を始め、昭和二十二年の五月でその仕事を終えラーゲルに復帰し、七月末ころまで雑役ばかりに従事し、お陰で助けられて体力の恢復ができたようです。

岩手県 荒田昌三

足の指に凍傷を受け歩行困難となつた。日本軍医の計らいでソ連軍医を納得させ、山を下りることとなり、ホールの病院行きが決まり、二十四日吹き曝しの中、数人と一緒に無蓋車のトロツコに乗り込む。何か死出の旅路に出掛ける感じであつた。ソ連の医学は予防医学で、治療医学の進んでいない病院では、寝ている患者は食糧が少量でよい。裸で部屋に寝ていさえすれば病気は治るといふ信条をもつてする医学である。食事は、パンがなく、人参のスープのみであつた。

鳥取県 井上万吉男

水虫との出会い

平壤三合里に集結して以来、風呂に入ることはほとんどなく、不潔な日々であつた。潜在していたであろう水虫が急に蔓延し軍靴が履けなくなった。他の体は丈夫であるにもかかわらず作業に出れない。同僚にも申し訳ない気持ちで困つた挙げ句、上司に相談したところ、「炊事なら下駄履きでできるし、やつてみよう」と言われて、言下に「やります」と答えた。そのときは自信はなかったが、思えば専業農家であつた我が家では農繁期になれば近所の方々に手伝いに来ていただいていた。十数人の賄いを担当していたのが祖母で、小学生のころから炊事の手伝いをし小遣いをもたらしていた。経験をしたというものではないが、なんとなくやれそうな気がした。しかし、配給の食糧は粟、稗、高粱、大豆粕などで、およ

そ口にしたこともない、人間の食べ物ではない、調理の方法も考えられない。大変なことになったと内心弱気になった。以来丸三年、ソ連の使役に出ることなく炊事に精通した。

千葉県 宮崎定雄

昭和二十一年三月中旬ごろより体力衰え、壊血病の兆し現れる。直径十センチ程度の丸太に足が上がり、踏み越すのも困難になる。

四月末、月例身体検査でジストロフィーと診断される。栄養失調とのこと、労働免除。

五月五日ごろ、ジープにてチプサレーに移動。通称、オーペーアジン収容所に入所。

五月中は寝たきりの生活。食事と用便のみ歩く。日中は壁に凭れ過ごす。就寝時は仰向きは尾てい骨が床に触れ痛く、半月くらい、俯きで両腕で胸を庇いながら過ごしました。食事は油と砂糖のみ多い普通食です。

六月は燃料用薪採り、軽い物、日に二回の生活。

捕虜生活不安と無気力の時期

六月末、恒例の身体検査、トリーカテグリ、三級労働者の軽作業となる。

七月三日ころトラックにて北上、トムニー移動。収容所三、四カ所転々として営内雑役、保線作業の雑役軽作業、線路付近の除草と清掃など。この時期、食べられる野草はもとより、蛙、蝸牛、鼠など、出会った物全部食べました。

八月下旬、身体検査、トリーカテグリ十五名の一人となり九月初めダモイ、帰国予定。洗濯した被服と交換され待機する。九月九日、迎えのトラック到着。十五名中十三名にて出発。残留二名の不運者となる。高年齢順とのこと、まだ労働できるからか。

熊本県 畠田 完

頭、腹、肩、腰が痛い、風邪を引いたと診察を受けても、ソ連の軍医か衛生兵が、腹、尻の皮を引っ張り脂肪の量で判断する。薬もなく、休むなんてもつての外である。日本の軍医もいるが口をはさむことはできない。三十八度以上の高熱者は内務班で休ませ、二三日様子を見て病院に入院した例も何件かあったが、その後の消息は不明。

人間離れた生活の中で、元気だった人が起きてこない。冷たく息絶えている。栄養失調の恐ろしさを何度となく味わされた。特に家族持ちの召集兵が犠牲者で、何とも言えない気持ちだった。ある時は伐採中にダニに食われ、ダニ脳炎で、また伐採中の事故で一命を落とす戦友、常識では考えられないことが日常茶飯事のように起きる。出来る事と言えば、ラーゲル(収容所)の裏山に穴を掘り、硬直した屍を真つ裸にして葬るくらいで、その穴も凍りついて満足に掘れない。今でも目に浮かび、慚愧の極みである。

ある日、夕方になると目が見えなくなる夜盲症の友、カルシウム、ビタミン等の栄養がいかに大切か、飽食時代の今では考えられない状態が現実だった。

朝にちよつとラジオ体操をするくらいで、健康管理というようなものはなく、いつか帰れるだろうと自分に言い聞かせつつ、ただ気力との闘いで生き延びていた。

鳥根県 星野好夫

昭和二十三年の冬、身体検査の結果、急性肺炎のため入院することとなった。

当時大きな呼吸は全然できない。小さな呼吸でも時々胸を刺されるような痛みがあつて、はてはこれまでもかとも思つた。ソ側の軍医により注射を数本されたが、これがアメリカ製のペニシリンだったことが分かり感謝している。半月くらいで退院し、軽作業組に配置され、炊の釜炊事きをするこゝとなつた。

広島県 村中汎雄

私は今日まで、手術台に六回上がったが、その内二回がシベリア抑留中であつた。一時的に労働から逃れようとする気持ちはあつたが、その発病が、暖かくなり始めたころになつてからである。冬の間の体力消耗と、ろくに栄養が採れず心身共に疲れ果てた時に起きている。一回(昭和二十一年五月)は結核性の淋巴腺炎で、このときは分所内の医務室に入室して手術を受けた。ソ連の女医は手術しようとしなかったが、日本の軍医はこれは簡単であると施行した。術後「とうとうやったか」と女医が言ったが、結核性の病気は嫌がつている様子だつた。

何とかして仕事を休もうと診断を受ける者が多いが、発熱(軍隊では熱発)も三百度以上でないと病気と認めてくれない。ペチカに体温計を当て四〇度になつて慌てて振り下げている者もいた。特に神経痛の者は気の毒だ。日本の軍医は病気だと言うが、ソ連の医師は駄目だと。「寒いから神経痛が出たというならソ連の人は皆神経痛だ!!」熱があるか、外傷があるかでなければ、病気となかなか判定してくれない。私も紫斑病らしきものになつて、膝関節を曲げると痛かつたが、日本の軍医は「若いのにリュウマチでもあるまいに」と言いながら休ませてくれた。もしソ連の医者が側にいたら「ラボーチ(働け)」だつたらう。

昭和二十二年八月二十八日、またまた中央病院に入院する。入浴の前だつたか後だつたか記憶にないが、すぐに診察だという。変だと思ひながら診察室に行く。どんな顔触れであつたかは知らないが、何だか物々しい雰囲気がしていた。例によつて裸で立っていると、ソ連の女医が何とか言つたが、その意味は分からなかつた。それから病室に案内される。右頸の手術跡が化膿して切開しているのに、何の治療もしない。汚れた包帯を巻いたままであるのに、ザルプロの注射のみである。げげんな顔をしていると、同室の者か衛生兵かだけれかが「貴方は幸運だ。入院してすぐダモイの検査を受けられるとは……」初めてその意味を知り、女医がどう言つたかが気になりだした。ダモイの組に入ったのだろうか、どうだつた

のか? しかし、まだ帰りたくないと言えば嘘になるが、二分所にいる連中を置いて先に帰る気にもならない気持ちもあつた。連絡のため病院と二分所の境の柵に来ていた丁に「済まないが、ダモイになるらしい」と言つたことは覚えていた。

こうした結核性患者は集団生活においては特に嫌われる。ソ連では甚だしい気がした。ろくに診察しようとしめない。日本の軍医に任せたままだ。治つてもたいした労働力にならないからだろう。私にとっては幸ひした。

兵庫県 森田 純

重労働を強制される毎日が続き、次々と倒れる人々が出ました。栄養失調の患者が多く、骨と皮で見られる姿ではありません。それでも軽い人は仕事に出なくては行けませんでした。軍医の診察をうけてもラボート、ラボートといわれて休むこともできず、ふらふらしながら土盛り作業をしたのです。時に倒れノルマがあがらず営倉に入れられた人もいました。

また、神経痛が出て、足、腰が痛み、とても作業ができる状態のない人でも、軍医はロスキーに神経痛という病名、病気はない、おまえはうそを言つて仕事をサボろうとしているといつて認めてくれず、仕事をしている人が多数でした。ソ連側に交渉しても通じませんでした。回想すればこんなことが多くあり、実に悲しい思いをみせつけられました。

兵舎内でストーブを囲み内地の話をして寝た人が次の朝には死んでいた。いくら起こしても起きず、さわつてみると冷たくなつていました。栄養失調患者の特有の死でした。そのとき、ソ連の人々は人情も義理もない無知な人間だ、いや、人間ロボットだと感じ、友人に、草を食え、食える物はすべて食えと話し合い、この栄養失調から逃れたい一心に励ましあい、いつかは日本に帰れるから頑張れ頑張れの連続でした。

和歌山県 河端亨之

昭和二十年二月末ごろ、食料も不足がちとなり、食事の量を多くするために高粱の粥を更に水を加え食べさせられたものです。私は、そのような生活を続けていたある日、ペチカの上の飯盒の水を沸騰させ、二階の自分の席に上げてもらったときに、薄暗い所で手前に引き寄せようとして誤って飯盒の熱湯をひっくり返して、両足の甲の上からひつかぶって大火傷をしたことがある。軍足を履いていたがダメであって、皆にお世話をかけたことがありました。収容所の医務室の病室で両足を吊り上げられて治療を受けたが、治療と言っても消毒薬で清め消毒するだけのことを繰り返すだけであった。

岩手県 笈川新蔵

シベリアの抑留地にはいろいろな病気があった。その総てが栄養失調からくるチフスとか肺炎。およそ二十代、三十代の人たちに、普通の生活状態では考えられない本当に珍しい病気が多かった。発疹チフスが虱の蔓延によることを知ったソ連当局が、衣服の熱気消毒によつてその卵を殺し、その消毒時間に手桶一杯のお湯の供給を受けて体中の垢を流すというささやかな入浴ができるようになったのも、抑留生活が始まって相当時間が経つてからである。このような病気のほかに皮膚病の疥癬又はビタミン不足による夜盲症などもあった。皮膚病で人が死ぬなどということは、この平和な今の日本ではおよそ考えられないだろう。シベリアで流行した疥癬は相当人の命を奪った。普通発症は皮膚の柔らかいところから始まるけれども、重症となれば全身とこころ構わず真つ赤に腫れてくる。そのかゆみは何とも、体中を振り起こしたいほどかゆいのだ。「疥癬中隊」と称して重度の疥癬患者だけの兵舎があったが、彼らの入浴する姿は、あたかも皮をむかれた白兔の行列を思わせるものであった。栄養が悪く不潔で、ろくな薬が無い。しかも雑魚寝となれば、伝染性のある疥癬が蔓延したのは無理からぬことであつた。私はそれほど重症ではなかったが、ふくらはぎに今もつて消えない病痕が

あつて、その痒みの非道さは今もつて忘れられない。

東京都 金子亮輔

そのうち私はマラリアと壊血病に罹り、ウラジオストックのウリウスの病院に入院したが熱が下がらず、ウラジオストックの中央病院に移された。この病院は各地区、地方より送られてきた日本人の患者が大勢いた。日本の軍医と衛生下士官数名と、後はソ連の軍医が数名いたようである。さすがに栄養失調、肺結核などで、後は作業場での怪我で体が弱っているの、なかなか治らないようである。日本人の死亡者は、ソ連の軍医、日本の軍医の立ち会いのもとで解剖された。私の戦友、野口賢次も一緒に入院したが死亡してしまった。そうこうしている間に私の体も回復し、退院した。昭和二十三年四月ごろだったと思う。

神奈川県 大高 武

又も肺炎を再発し、再度クイビシエフカの病院に入院させられた。息苦しく、毎日高熱が続いた。女軍医と看護婦が一生懸命に看護してくれた。特に軍医は家族持ちであつたが、家に帰らず私たちのために尽くしてくれた。ソ連では当時貴重であつたらしいペニシリンも打ってくれた。民族を越えたこの人たちのお陰で私の病もみるみるうちに回復し、退院することできた。苦しい抑留生活を強制されたが、この人たちの善意には今でも感謝の念は去らない。

岩手県 石橋善次郎

私が五年余りのシベリア生活の中で身近で起きた怪我を目撃したのは、二件とも丸太の積込みの作業事故だつた。それも鉄道貨車への丸太積みで、無蓋車の厚い側板が頭に当たつた事故。それと薪材積みで歩み板から転落した事故で、いずれも瀕死の重傷を負つた。耳に入った怪我人の数は数えきれないほどだつた。その人達のその後については一切知らない。

これらの作業事故も悲惨であるが、それ以上に身につまされたのが、抑留された年の冬と二年目の冬にかけての栄養失調による死亡者の続出である。あの頃はまさに生き地獄の中にいた。涙なしでは語れない。隣の戦友が眠るように静かに死んだ、これらの悲話は、多くの抑留者が体験談として世に出しているから省くことにする。

岩手県 橋本達夫

収容所内の掃除はカチンカチンに凍った汚物の処理であったが、ツルハシや鉄棒で砕くと破片が顔にあたり、顔の熱でとけてどうにもやりきれなかった。ある時は風が猛烈な勢いで繁殖して、夜、体の中を這いまわって寝られたものではない。たった一着の軍服が作業衣であり、普段着であり、そして寝具でもあった。その衣服という衣服に風の卵が真っ白く付着していた。

シベリアの冬は夜が長く寒さが厳しいため、外套、帽子、手袋など防寒具のすべてを身につけて寝たが、空腹と風、そして将来の不安が交錯してなかなか眠れない。このような生活も長く続くわけがなく、敗戦の年の十二月も過ぎ去り二十一年を迎えたあたりから病死者が急に多くなり、日毎に増加し一日にして三〇人程にもなったように記録している。

遂にとどめを刺される瞬間がやって来た。食糧の中の塩分が不足となり、皆の顔は一樣に蒼白くなり下半身が特にだるくなってくる。階段を上るにも足が持ち上がらなくなったり、空腹に絶えかねて水ばかり飲む。下痢症状をおさめようとしても薬がないので、皆ペーチカに這い寄り白樺の消し炭を食って口の周囲を真っ黒にして息絶える者、発狂して自分の大小便をほおぼって死んでいった者、まさに阿鼻地獄が展開された。最後のとどめになったのは回帰熱の集団発生で、風が媒体となって蔓延し九割以上の者がかかった。これは熱病で四〇度以上が長く続いたため、そのまま息絶えて死んでいったのである。

少しでも動ける者たちが各ベッドを回り、死んでいる者を探した。死んでいる

のか生きているのか分からない。特に上段ベッドは生死が不明のため、木刀のようなもので足をたたいて少しでも動いていれば生きていると判断したのである。

福島県 大室清

マリアに一度だけ悩まされた。マリアには「三日熱」「五日熱」とあり、三日おきに熱が出たり、五日おきに熱が出るのである。私は「三日熱」の方だったが四十度を越す熱が続く、何枚も毛布を掛けたが、ガタガタと震えが止らず、二、三人で押さえてもおさまらない。なんでも「マリア蚊」という羽に白い斑点のある大きな蚊に刺されるとマリアにかかるとか、かかる人とかからない人がいて、帰国してからも発病した人がいると聞いたが幸いにも私は発病しなかった。

千葉県 伊藤千次

私達が最初に上陸した所は一山向こうの谷間の平地で第三収容所、どちらもソフガワ三湾に面しており、ソフガワ三川をさかのぼった所がチパリ収容所である。

気候は五月、一カ月余りも何もせず遊ばせてもらったので、薬は何もなくてもだんだんと元気になってきた。ずっと鳥目に悩んでいたがアメリカの肝油はよく効いた。毎日一粒ずつ三日飲んだら夜眼が見えるようになった。夜中眼がさめてトイレに起きようとして土間を見るとサンダルが見える。柱が見える、隣の戦友の布団が見える。庭の離れたトイレまで行くことができた。半年間夜は目が見えなかったもので、こんな嬉しいことはない。

こんなにいい肝油も病質者でなければもらえないので、私は何日も何日も「まだ見えない、まだ見えない」といつて薬をもらい内務班の戦友に分けてやった。（群馬県の沼田という戦友がいたが、今はどうしているだろう。）そのうちに内務班は帰され黒田班に入った。

東京都 嶋崎武男

こんな重労働をしながらの食事が干からびたトウモロコシや皮かぶりのコウリヤンでは、弱りきった胃が消化できるはずがなく、皆ひどい下痢に苦しめられた。

激しい下痢の結果極端な栄養失調になっていった戦友たちは次々に死んでいった。グッタリと疲れて誰も何とかして生きることだけを考えながら眠った。人間は生と死の堺では死よりもいかに生きることだけを考えながら眠った。人間を思った。しかし生きる希望を失って首を吊り自ら命を断つ人もいた。突然夜中に起き上がり「ほら、船が来ているじゃないか、早く行かないと乗り遅れるぞ」と叫んで酷寒の戸外へはだして飛び出した戦友がいた。彼は肉体的な苦痛、何の希望もない精神的な苦痛に耐えきれず苦悶のすえ発狂してしまったと思われるが、その後間もなく死んだ。

昭和二十三年六月、私はモシカの収容所で突然発熱と共に激しい下痢に襲われ血便が出た。ソ連軍軍医は私を「赤痢」と診断したものと思われる。伝染を恐れてか、私を急ぎホテルマに送り病院に入院させた。ところが幸運にもこのとき、この病院の入院患者の帰国(ダモイ)の検査が行われた。そして何と私はこの検査で帰国者の中に入れられたのである。おそらくこの病院でも私を赤痢と診断し帰国に入れたのであろう。しかし私は入院後数日で下痢も血便も止まってしまった。今思えば赤痢ではなく大腸炎か何かではなかっただろうか。従って私は帰国を取り消され、また奥地へ送り返されるものと覚悟していた。けれども帰国は取り消されなかった。もし帰国検査があつたら、恐らく私はまたモシカに送り返されてさらに帰国は二、三年遅れるか、あるいは二度と故国の土を踏めなかつたかも知れない。運命の不思議さを痛感せずにはいられない。幸運に感謝しながら、出港地ナホトカへ向かつての出発が待ち遠しかった。

新潟県 真嶋藤作

ある晩、例によって深夜になるとしんしんと気温が下がってきた。腹の底から

冷え切ってくる。きりきりと腹の底から痛み出した。そして焚き火の傍から動くことができなくなり、うずくまった。同志がカンボーイにそれを告げた。仕方なく警戒兵が肩をかして近くの病院に直行である。

こんな所に病院があつたのかと思ひ、中に入った。大した暖も感じないが、まあ外よりはましと示された木製のベッドに横になった。途端、ダーン！という音がした。何かと思つてみると「また誰か死んだな、魂が飛んだ」とロクに言い出した。それは二重ガラスの病院の窓に直径十センチくらいの穴があいて、そこから今、死んだ同志の魂が故郷に向かつて飛んで行ったのだという。誰か死ぬ度に何か異変が感じられるそうで、それが常のようで、皆驚きもせず普通に話し合っている。いずれいつか自分におハチが回ってくることを予感するかのように、冷え切った悪寒が襲ってきた。

微熱が一カ月以上も下がらず、肺浸潤とやらで作業に行かず、ごろごろしていた。自分としては、多少熱が出るくらいで、作業にこき使われるより何倍も結構なことではあつたが、当時、入院すれば死に直行するくらいに考えられ、可哀そうに彼奴もシベリアでお陀仏かと、退院など思つてもいまいようだった。

福井県 井上博夫

何の前ぶれもなく私の首筋に腫れ物が出来、激痛と四十度くらいの熱が二昼夜ほど続いた時のことである。ドクトルはドイツ人の女医さんであつた。この方も先の独ソ戦において捕虜となつた軍医中尉殿であつた。この方が少しの間も私の傍らを離れることなく、夜も眠ることもなく、「井上、バク(痛い)、井上、バク」と声を掛けて、私を抱き締めるようにして「バクももうすぐ、バクももうすぐ」と言つて付ききりで看病してくれた。後で、私が熱のため相当うわ言を言っていたと笑いなから話してくれた。その後も「井上元氣、スコラ東京ダモイ」と言つて励ましてくれたあの若い美しい女医さんの顔、また態度は、今も忘れることは出来ないと感謝している。先に記したように私は作業はいつもハラシヨラポータで、何回

もソ連の女の方から一緒になってくれないかと誘いを受けたことがあったが、その都度断わり続けてきたものである。しかしながら、この軍医さんから声が掛かったならばお受けしていたかも知れないし、私にとつては神仏のような方であった。実に惜しいことでもあったと、今でも思い出される。

和歌山県 出口為治郎

いよいよ「シベリアの冬」がやってきた。アルマタは中国の西端二百キロメートル北の地点にあり、天山山脈七千メートルの連山を境となす。街から南を眺めれば、雲をはるかに突き抜け万年雪が頂上を輝かせている。いわばその山麓遠く、イシク・クリ湖の北に位置している。私たちの収容所（ラーゲル）二カ所の敷地面積は四百坪ぐらいで八百人は収容できるだろうとされてるが、その周囲は鉄条網が張りめぐらされて、常時、警備兵が自動短銃を肩にかけて目を光らせていた。所内には小さな医務室があり、女医が子どもの玩具のような聴診器を肩にかけて診察してくれるが、必要な薬がなくて、そのころ病気になったら、よほど体力を維持するだけの栄養を与えてくれなければ回復することは少なく、食事は毎日変わり映えない同じ内容のものばかりの連続であるので病気に打ちかつだけの力がなく、倒れ込むことになってしまう。

当時のラーゲル内で発生した病気で診察を受けた事例は栄養失調・下痢・マラリア熱・アメーバ赤痢・肺病・風邪ひき等々であるが、通訳を通じて対策を願っても、これに応じてくれることがなくて手の尽くしようがないらしく、当時のソ連邦そのものも、戦後の戦勝国であったとしてもすべてが疲弊の極にあるらしく、戦利品の中にあるはずの薬品も各収容所に行き渡らないのが実情であったのではなからうかと私は推測したが、これがために、酷寒に入ろうとするこの異邦の地の果てで尊き命を奪い取られた同僚たちの悲哀断腸の思いは、はかり知れない。

昭和二十二年三月ごろから食事は粟粥の配給量がこれまでの倍ぐらいになったが、栄養度についてはあまり信用できなかった。少しでも腹を満たす感じを得たようだったが、黒パンの方は別によくなくなったような様子は見えなかった。

私たちの中隊であの恐ろしいアメーバ赤痢が大流行して、私もその一人となった。便所に通うこと教え切れない。この病気にかかったらまず一カ月入院しなければならぬのに、医務室は前にも述べたように寝るところもなく薬もない。全く苦しい毎日であった。シラミと南京虫に攻められる。私も入院患者であるのに、重態の友が多いので、患者が患者を看護しなければならぬありさまであった。今思えば身ぶるいする。そのときに次から次へと尊い命を奪われていった人々の顔、顔が思い出されてならない。改めて心からご冥福を祈る。

岡山県 横畑友三郎

昭和二十三年一月二十九日午前二時ごろの深夜、折からの降雪と冷え込みによつて、コンベヤーのプリーに付着した粉炭が凍結してベルトが滑つて空転し、送炭が不能な状態となったので、私はプリーに付着した粉炭を取り払い中に過つて右腕をプリーに巻き込まれ、けがをした。

直ちに発電所所員がラーゲルの日直将校に通報してくれて、待つほどもなく地区の病院に収容された。病院とは名のみであつて、薬品の備蓄も少なく、ましてレントゲンなどの機械類は皆無であった。軍医さんはソ軍の女医さんと九州帝大出身の内科医須石博士の二人であった。早速診察を受けたところ、右上膊（しやうはく）、前膊骨折とのことで、副え木を当てて固定され、あとは自然治癒を待つこととなった。関節の脱臼については遂に発見されることもなく、何らの処置も施されず放置されたことが原因で現在も屈折が不良となっている。

受傷から四月四日までの間アングレン病院で療養生活を続けていたが、同日夕食後転院が決まり、翌五日朝食後、貨物列車でアングレンの街を離れた。病

院出発の朝、ラーゲルから、旧補給中隊以来の戦友である新潟県出身の篠沢君がただ一人、見送りに来てくれた。この日を最後として、以来四十余年の歳月を経た今日まで、九七飛大の戦友たちの消息は一切不明である。

私たち八人はその日の夕刻カガントンという街の病院に到着した。この街は、ウズベキスタン共和国の首都タシケントに近い街で、高層建築も見受けられるかなりの都会であった。同共和国内の各地に点在する日、独両国の戦時捕虜専用（ワイナープレッ）の病院であつて、日、独、ソ三国の軍医が勤務しており、日、独兵士の患者が七十人ほど入院中のことであつた。独軍患者とは病棟も区別されていたので、遂に接触することもないままで終わった。

同胞患者はおおむね症状が固定した外傷者で比較的明るい雰囲気であつたが、ダモイの日を一日千秋の思いで待つ毎日であつた。転院後一カ月を経た五月五日、遂に待望の日が訪れた。

輸送に耐えられる患者五十一人は、朝食後シャワー浴を済ませ、ソ軍の女性軍医さんの最終診断後に、ソ連人看護婦の手によつて頭髮を切り、髭剃りも行い、入ソ以来初めて爽快な気分を味わたが、驚いたことに陰毛も剃り落とされて、上も下もすっきりした。衣服は相も変わらずソ軍兵士の払い下げ品であつたが、洗濯したてで気持ちがいい。

広島県 榎上竹士

冬になり屋外作業が出来なくなつてからは市街の屋内作業をした。その頃、所内の医療施設も整い、入ソ以来初めて健康診断が実施された。軍医の診断はなかつたが日本の衛生兵が体温を計り、三十八度以上の発熱ものは作業免除、所内休養、重傷者には所内の医務病棟で療養診断がなされた。私は衛生下士官の取り計らいで四十度の高熱ということで医務病棟に入院した。二階の広間に設備された病室には真新しいシーツの掛かったベッドが十台くらいあり、重症で動けない患者二人と入院した。食事は病人食白パンが給与された。そのほかマ

ホルカ(煙草)も支給された。二カ月ぐらいで退院を申し出、作業隊に帰った。春になつて今度はソ連軍医の健康診断があり、百人近い者が栄養失調と診断され、労働不適格で他の收容所に移されることとなつた。私もそのうちの一人だつたが、石川大隊長から「病人は他の所に移されて殺されるかもしれない。君の代わりに〇〇を出したので君は当分〇〇を名乗りここに残れ」と言われ、残ることになつた。夏にその人達は他の收容所に移送され、その後の消息は不明であつた。帰国して後で解つたことであるが、その人達は二十一年十二月八日帰国第一陣で、大久丸・恵山丸の二隻で合せて五千人が舞鶴港に上陸、帰国していた。

広島県 稲村 香

こんな状況をくり返して半年ぐらいたら勤務替えがあり、今度は石炭を運ぶ電車の助手となつた。運転手は二十前後の可愛い女の子で、マルーシャといひ感じのよい子で、よく話しかけてくる。腹が空いて仕事にならないと愚痴を言うとき、翌日パンとバターを持って来て食べろと言つた。地獄で仏に会うとはこのことと感謝して、腹巻きにして残しておいた絹の布をプレゼントした。それから時々差し入れをしてくれたので炭坑に行くのが少し楽しくもなつた。

ある日いつものようにコンベヤーから落ちる石炭をトロッコに積み、一列車二〇〇三〇両で満車になると次のスメーナーに引き継ぐ。引継ぎが終わるとマルーシャに手提ランプで発車の合図をする。電車が発車してアブラキート(終点)近くに来たことは覚えてるが……イナムラ、イナムラと呼んでいるマルーシャの声に気がついた。見ると線路の上に寝ている。向かいに手提ランプがころげて光って見える「スタタコイ(どうした)」、マルーシャが真剣な顔つきで私を凝視している。感電して失神、トロッコから振り落とされたのである。そのときの恐怖心は何ものにも例えようがない。猛獣にでも襲われた感じで、誰かに助けを求めたい、何とも言いようのない一瞬であつた。マルーシャがアブラキートに連れて行き休ませてくれた。帽子も靴もすべて不導体、どうして感電したのだろう。坑道の天井が

極端に下がっているところが何力所かある、そこは注意して姿勢を低くしないと危険であるが、慣れると放漫になりそのとき電線に耳たぶが接触した。

これこれ入坑して一年近くなったある日、トロツコを連結していたら急に後ろから他の車が暴走、あつと言う間に追突、右手首を骨折、見る見るうちに腫れて痛みには耐えられない。マルーシヤが心配して監督に連絡してくれ、ひとまず事務室の医務係に診察してもらったら、脱臼との診断であった。収容所に帰って医務室の岡本軍医さんに診察してもらったが、レントゲンで見ないとはいきりしたことは言えない、当分休んで経過を見ようと練兵休一週間をもらった。入所以来はじめての連休、何だか他の戦友に悪い気がしてならなかった。一週間経て再診を受けたが、腫れが取れないので町の診療所でレントゲンの検査をすることになり、早速車でロシア人の看護婦に連れられて町に出た。久しぶりに自由な空気を胸一杯吸い、目一杯自然を眺める機会を与えられた。

二、三日経つてレントゲン写真の結果を知らされた。やはり骨折であった。今でも手首の骨が突出している。その時既に折れたままで治癒に近い状態なので、ねじ戻さないと元の形にならないと言つて、ねじつて副木二枚で固定した。そのときの痛さはなんとも言いようがなかった。

それから一カ月の入院許可が出て、入院生活が始まった。

愛媛県 木屋隆行

今まで述べたことは昭和二十二年以降のことで、それ以前はつらく、悲しいことが多かった。疲れ、つい水を飲みマラリアに、また赤痢にかかったり、はと麦や他の穀物のスープには殆どその殻が付いたままで運わるく盲腸炎にかかる人も多く、盲腸炎は大して病ではないと思つていたが、抑留中は大病で、亡くなった人もいたと聞いた。またマラリアは慢性的に発生し、多くの人が弱つていった。薬は黄色い錠剤で、これを飲むと胃を壊し他の病気を併発するというので皆敬遠した。マラリアは決まった時間に熱が出るため、予め水筒を集めて温め、毛布も

集め、頭から温かい水筒と毛布で押さえ震えの止まるのを皆起きて見守つたが、それでも疲れて寝てしまうこともあった。

宮崎県 宮川健三

昭和二十一年十一月、数日間三十九度の熱が続いたが頑張り通したのが悪く、マラリアだとわかった頃、寝台(二段の上)に寝ていてろつ骨の末端をなでるとブクーツと親指大のふくれができていた。診断をしてもらったが、幸いにも病院には旅順病院長であった吉村軍医大佐と大連陸軍病院長大屋軍医大佐がおられ、二人の診断でろつ骨カリエス間違いなしと言われた。私は悲観のどん底に落とされたような気持ちがあった。収容所内の治療室へ入室させられた。マラリアは治つたけれどカリエスというふくれは一向に変化なし。二週間、三週間、ついに一カ月となつたけれど親指大のふくれは少しも変わらず、痛くもかゆくもないがとても心配だった。注射器で膿を取つたがやはり赤黄色の膿が出る。カリエスだと都合三回とつた。

二十三年三月になりコーカンド病院に入院だと言われて自動車(米製)に乗つて四時間。フェルガナの駅より汽車に乗せられ古都コーカンドに着いた。コーカンド病院は色々と完備している病院だった。ここは昼間は非常に太陽光線が強く、裸体では水泡ができるので住民は日本の綿入れのはんてんと同じ着物を着ていた。胸を一杯開いて思い切り日光浴をした。これがどんなに良かったか、びっくりする現象が起きた。入院後膿をとつたが全然出なかった。実に不思議だと言つていた。しかし毎日太陽光で焼いてくれる。薬とビタミンと六回食の食事、病については国境もなく親切そのものであった。ドクトル(医師)は熊本医大の博士、軍医中尉がおられた。まだ若い博士だった。この病院に一カ月入院し、治癒しても三カ月いる病院であると言われた。三カ月入院したので体が本当に回復し、カリエスも引つ込んでしまった。感謝いっばいで退院したが、一難去つてまた一難というように、蒼白い顔で自動車に乗せられたが、待つていた所はあわただしい赤旗の

鉄条網で包まれた収容所だった。

二分所全員、引揚げ集結地ともいふべき二十一分所について来た。昭和二十五年二月二日、「永かつたなあ、二、三月中には輸送できるんだぞ、頑張れ」と励まして転属していくこととなった。直ちに身体検査だ。上半身裸体の俺を日本人ドクトルは「十人前に君はOKだ、本当にやせているなあ」と言われた。二分所の意気は引き続き猛烈だ。この教育と作業意欲の旺盛なこの分所にきて早速OKなのだ。人並みに作業隊の一員として出られないのに興奮した。食道の当番をやらされたが、やはり作業隊の労に感謝せよとの合言葉で指摘批判も多く、足は重く時間の長いのに参った。自分としては本当に重労働だと思った。体が弱っているのに立ちどおして本当につらかった。

第三次の物価引き下げがあり、ソ連人民も日本人抑留者もびっくりさせられた。政府が突発的に物価引き下げをやることは初めてではないとこのことであり、それで国民労働者は豊かになった。五十銭で二〇〇グラム以上のパンが買えるようになった。マガジン(売店)は大したにぎわいだった。

発熱と下痢で作業は何もすることができなかつた。栄養食をやるといわれて日に四回食事をさせられた。油や肉、砂糖は多い。パンは白パン五〇〇グラム、穀類八〇グラム。二週間頑張つてやっと食べた。その間、別室にて休憩させられた。

東京都 飯塚年男

ソ連の女医さんは、熱が三十八度あればすぐ休ませてくれるが、下痢は熱が出ない。病状を訴えてもなかなか取り上げてくれない。作業場へ行つても、仕事なんかできはしない。隅の方でじつとしゃがんでいるだけである。収容所へ帰つてきても、食べ物はあまり食べる気はしない。横になると、五分としないうちに下腹が痛む。シューバーを着、靴をはいて、収容所のはずれにある便所に行く。便所といっても、長い板に丸く穴をあけてあり、そこへしゃがむのである。板の囲いはある

が、夜は月も星も眺められるというお粗末な便所である。

零下三十度であろうと四十度であろうと、板囲いの便所に尻を出してしゃがむのである。痛む腹をさすりながら我慢していつまでもしゃがんでいても、何も出ない。トボトボと帰ってくる。シューバーを脱ぎ、靴を脱いで寝床に横になるとすぐ我慢できずシューバーを着、靴をはいて便所へトボトボと。これを一晚のうちは何回も繰り返すのである。私は、黒パンを真つ黒に焼いてその粉を飲んだりしたが、よく耐えたと思つている。

肺炎にかかる人が多かった。最初の冬は特に寒さが厳しく、劣悪な環境のもとで無理がたたつて肺炎になり、あの頑強だった人が肺炎で亡くなったという話をよく聞いたものである。

私は二一〇分所だったか、冬、便所で倒れて、気がいたら医務室にいた。それからテルマの病院に移されたが、元衛生兵らしい者が、裸になつて体を拭けと言ふ。熱が四十度近くあり、裸になったが、拭くどころか立っているのがやつとだった。

ゆっくり休めたのか、いい薬があつたのか、半月ほどで退院したが、入院中、一つ思い出がある。看護婦が午後、毎日のように注射に来る。それもいつもニコニコして来る。そして若いのである。私に気があるのかと思つたが、ときどき看護婦がかわる。聞いてみると、私の腕は青白く、血管が細くて、注射の練習にはうつつけだったのである。どうりで注射が終わると、いつもブドウ糖なんかのアンブルをくれた。

昭和二十二年の暮れだったか、テルマの北のモシカかどこかの収容所で身体検査があつて、オーカー(O・K)というので、休養収容所へ行くことになった。ここは労働で疲れ、やせた人を休ませ、元気な体にしてまた労働につかせるところで、ラポータはなく、所内の掃除か、冬はストーブの薪取りくらいである。給与は一般の収容所に比べればよく、パンは、トウモロコシなどでなく小麦か燕麦、カーシヤもコーリヤンや大豆ではなくアワやエンドウ、肉なども質はいいが、みんな量が

少ない。

私はこの收容所にいる間にまた肺炎にかかった。今度は入院はせずに医務室へ通うことになった。元下士官の衛生兵が、湯のみ茶わんほどの大きさのびんの内側に石油アルコールを塗って、マッチで火をつける。パツと燃えると素早くびんを胸に当てる。中の皮膚がプツと盛り上がる。これを五つか六つ当てる。お灸のようなものだが、こんなもので治るのかと思つたが、一週間ほどで熱も下がり、治つた。

このナチャニツクは女で、将校だが、印肉を口紅がわりに唇に塗っていた。そういうえば寄せ書きの日の丸を頭につけていた女を見たことがある。化粧品など全然手に入らないのだろう。

北海道 五十嵐甚吉

ある日、食料受領のため、ソ連兵と馬車に乗って町へ出かけた。町の中心地で、前方からトラックが速度を出して走り通り過ぎると、その音に馬が驚き、くると道路を廻り始め、その反動で馬車から落下して右側胸を打つた。三カ月ぐらい痛みもなく働いていたが、毎日四〇度ぐらいの高熱が続き、医務室で休養したが、原因がわからず、薬もなく医者もいない。いよいよこれでは死を待つてゐるようだった。

ソ連の收容所長が日本の兵隊に高いノルマを与えているため、病人やケガ人が出るので、中央からロシアの軍医と日本軍医が検査に入り、全兵隊の栄養と健康診断を行った。その時斉藤軍医の診察を受け、内科の先生であつたので原因がわかつた。三カ月前の胸部打撲により水がたまり発熱、早速注射針で水を取り出した。幸い化膿しておらず、一日一日と熱が下がってきたが、長期療養が必要とのことで、また百六十キロ程南下、セミヨーフカ陸軍病院に転送された。

三カ月間の入院で全治して、收容所に戻るよう診断され、トラックが来るまで待つてゐると、ソ連の担当軍医から、病院に残つて患者の世話をしよう命令

が出て、病院の第五病棟長として働くようになった。

和歌山県 堅谷正一

懲罰体験は抑留生活中、すべての方々にはなかつたと信じてゐる。私自身のこととして、自動車工場の部品倉庫がソ連兵の焚き火と喫煙が原因で火災が発生し、二人のソ連兵が火達磨になり危険状態であつたのを、二人の間に入り、私自身も手に火傷を受けながら必死に助けたことを、そのときに現場近くで状況を見ていたソ連の上級幹部将校が、本人の責任を考えもし、また兵たちの責任も併せて所内で口外しないように特に頼まれ、そのときの功績を十分に認めて帰還時に考慮するとの申し出があつた。そのときの彼の申し分は皆、役目柄の自己保身であると感ぜられた。このことであつたのは昭和二十四年三月十日で、火傷治療のために私は中央病院へ入院した。

熊本県 小佐井善次

ある日、毎日の重労働で疲労困憊し、半病人状態となり、ソ連軍医の命令で一切の仕事は離れて收容所内で休養中、作業人員が足りないので坑内作業に出よとの命令で坑内作業に従事した。この時、坑内に入る前にソ連監視兵が日本人通訳に「今日は零下六十度ある」と言つていた事を今も覚えている。この作業場は坑内でも最も寒い極寒、骨身を刺す極限の想像を絶する作業場で、作業中呼吸困難となり咯血しながらその場に倒れた。身体全身痛み出し何回も咯血したが、どうする事も出来ず交代が来るまで我慢した。交代員が来て連れ出してくれ、医務室の診断の結果、急性気管支肺炎と診断された。引揚げ後三十数年経た今日、鹿児島大学名誉教授縄田十郎博士の診断で、シベリア珪肺塵肺で、この日が発病年月日である事を説明された。今も尚一人前には何事も出来ず、後遺症で苦しみ続けて世を憚りながら暮らしている。

北海道 久保田栄一

私は痔が悪化し歩行困難。戦友達はドラム缶に雪を入れ、急造の風呂を仕立てた。戦友四人に手足を持たれ幹部を温めること二日。されど良くならず、本隊よりナホトカ医務室に入室。暗い室内ではあるがベッドもあり、食事もまあまあであった。ただし、薬は不足。日本の薬が七割である。夕食後に錠剤を二錠支給され、暗いのでそのまま飲んだ。翌朝も二錠、念のため見るとなんと「わかもと」であったが、痔に効果あるのかどうか。衛生兵に聞いたところでは、薬がないとの話だった。軍医殿か下士官がいるかの確認をすると、下士官はいるとの話。早速来室をお願いした。まもなく年配の班長に薬の話をしたが、痔の薬など全然なし。色々話をしたところ班長の私物の薬二個を頂き、差し込んだ。初めてのことなので使用法を聞いたところ、銀紙を取って使用すればよいとの話。薬を挿入するにもなかなか入らず、かなり痛みを感じたがやっと入れ終わっても二十分くらい動けず、参った。翌朝下士官に昨夜の話をすると彼は大笑いした。銀紙の下にさらにロー紙に包んであるのをそのまま使用したからであった。

五日間くらいしたら痛みがなくなり平常に戻った感じであった。ところがソ連女医より診察の話があり、医務室に行くと女医少佐その他女医四人がおり、韓国通訳一人が怪しげな日本語で「四つんばいになれ」という。白手袋をして肛門に指を入れ三、四回掻き回された。目から火が出るとはこのことか。ストップせずにやられたら完全にのびてたと思う。終わっても少しの間立てなかった。日本の軍医ならこんな診察はしないだろうと、恐ろしい目に遭った。

岩手県 高橋三郎

危うく発砲されそうになったことがある。数日前から体調が悪かったけれども、医務室にも行かず作業に出たときのこと、下痢気味だった腹がキンと痛み出して便意を催し、ちよつと隊列を離れて用便しようと思った途端、警戒兵はやにわに肩にかけた銃を外して手に持ち銃を構えた。私は隊列に戻りかけなが

ら、とつさにズボンを下ろし、しゃがみ込む暇もなく水のような下痢便をしたから、くだんの警戒兵も納得したようにまた銃を肩にかけて何とか撃たれずにすんだ。国境が近いせいもあったと思うが、逃亡者が多く警戒兵が常にピリピリしていることが多かったから、瞬時も隊列を離れることが許されなかったのである。

石川県 山本利男

病気等で休養できるのは医師の診断書がある場合に限られる。ところがソ連の医学は著しく遅れており、専ら体温計が頼りで、いくら身体の不調を訴えても三十八度以下の熱なら休養許可にならなかった。四十歳近い召集兵で神経痛リウマチのため足を引きずって歩いていたが、診療所で行っても仮病だと不許可になり、全く気の毒な人達も多かったです。

宮崎県 鎌倉廣行

抑留されてから二年目のことであった。私は厳しい寒さと戦いながら仲間と伐採作業に従事していた。

その日も収容所から六キロ離れた原生林で、シベリア松を仲間と大鋸で挽いていた。突然、腹痛を起こし、私は雪の中に座り込んだ。苦しがる姿を見て駆けつけてきた隊員も、手の施しようがなかったらしい。私は全身に脂汗が流れ、痛みで気が狂いそうであった。私は現場監督の命令で、仲間の櫓に乗せられて収容所に運ばれた。苦しむ私をみた日本の軍医は、収容所長と相談の結果、遠隔地の病院に私を入院させることにした。私は幾重にも毛布に包まれて、馬の引く櫓に固定され、一人の若い監視兵に付き添われて、零下二十度の寒さの中を出発した。私は櫓の上から鉛色の空を見上げながら痛みと闘っていた。監視兵は時々馬を止めて私を振り返り、「まだ痛いか」と手まねで尋ねた。私はその都度うなずいた。行けども行けども雪原は続いた。日が暮れる頃、見知らぬ町に着

き、私はその駅で監視兵に背負われて夜行の寝台列車に移された。生まれて初めて見る寝台列車であった。監視兵は私の枕元に「まだ痛いか」と心配し、「もう少しだ」と手まねで励ましてくれた。捕虜の急病によって緊急移送の重任を負わされたこの若い監視兵に、私は申し訳ないと思った。夜が明けて列車は大きな駅に停車した。監視兵は再び私を背負って下車すると別の馬轎に私を移し、日本兵が入院している大きな病院に移送してくれた。病院で手続きを済ませた監視兵は、看護婦に私のことを頼んだ後で私の手を握り、日本語で「もう大丈夫ネ」と笑った。私も、親身になって私を気遣い、移送の重任を果たしてくれたこの監視兵に担架の上から「オーチン・ハラシヨ・スパシーボ(大変ありがとう)」とお礼を言った。監視兵は私の笑顔を見て安心したようであった。私は「この病院の軍医少佐(女医)のおかげで、一命を取り留めることができた。私の命を救ってくれた金髪で目の青い、背の高い監視兵と軍医のことは、生涯忘れることはできない。今考えると夢のようである。

私たちは初めてのシベリアで真冬を迎え、慣れない寒さの中で慣れない仕事と闘っていた。綿雪が降り積もって森林で雪に足をとられながら、重いシューバー(毛皮の外とう)を引きずり倒木を選び、えぞ松を切り倒す作業は簡単なことではなかった。油断をすると、顔も手足もすぐ白く変色して凍傷になるからである。鋸を二人で挽きながら、いつも相手の顔色を見ていないと、鼻、頬、耳が蠟のようにまっ白く変色する。蠟色になったらすぐ知らせてやらないと手遅れになる。放置すると腐敗し切断を要するので、すぐそばの雪をすくって、鼻なら鼻を、頬なら頬をマッサージしなければならぬ。何回もマッサージしていると皮膚に血色が戻り凍傷を防ぐことができるのだ。問題は、足先がしびれて感覚がなくなつた時である。雪靴を脱ぎ、足の布を除き、大急ぎで足を雪でマッサージしなければ手遅れになる。足指を凍傷でなくした者もいた。真冬の伐採は、重い装備を身につけては作業にならない。だからと言って、装具を体から離せば寒さで作業はできないのだ。零下三十度を下らなければ伐採作業は中止になら

なかつたので、私たちは労働大国と言われるロシア人の冷血さを見せられた思いであった。

熊本県 坂本重喜(聞き取り)

ある日、支柱の取り外し作業中、右足指に柱が落ち、骨折した。しかし軍医には骨折がわからず、痛みをこらえて作業に駆り出された。ついに足が腫れ上がり動けなくなり、やっとラーゲルの中の一室に入室した。治療は何もしてくれない。動くこともままならず、栄養失調になり、コルホーズに派遣された。毎日ジャガイモ、キャベツ、トマト等新鮮な野菜を食べ、回復してきた。この半年で命拾いをしたと思っている。

北海道 澤田清吉

労働地獄の裏側で

ラーゲルでは飲料水、浴場用水はすべて給水車で運んでくるから、水は大変貴重である。しかもシベリアに渡ってから、一切生水を飲むことが禁じられている。硬水であるばかりか、水による伝染病の発生に非常に神経を使っている。特にこのバム鉄道沿線では赤痢が多発していたから、なおさらである。

浴場では、小さなサラダボール三杯の湯が割り当てである。二杯で身体を洗い、残りの一杯は流し湯である。どうするかというと、まず湯を口に含んで、口から少しずつ吐き出しながら手の平に受けてまず顔を洗う。同じやり方で両腕、両脚、胸、腹と、含み湯をかけながら洗っていくのである。少ない湯量で顔を洗い、手足を洗うという、ロスキーのやり方の合理性には驚きであった。

ロスキーの風に対する警戒心はまた非常に強い。とはいっても、毎日が着たきり雀で、寝るも起きるも着たきりでは、出すなどいっても風が発生して当たり前である。入浴の際に脱いだ衣類はすべて、リングという金輪に通し、消毒室に入れる。床は鉄板できていて、床下は火炉である。下で薪を焚いて消毒室の温

度を上げる。この熱気で風をあぶり出し、殺そうというのである。これがロスキーマ方式の風退治である。

入浴が終わり消毒室で暖められた衣類をまとうと、まことに気持ちが良い。ぼうっとして、生き返った心持ちになるから不思議である。ある収容所では、この風で発心チブスが発生し、投薬する薬もなく、みすみす多くの死亡者を出したと聞いている。

ヤポンスキーにとって驚きであったことは、この入浴の機会に、ソ連ではどうも男女にかかわりなく、身体の大事などころの体毛を西洋剃刀で綺麗に剃り落としてしまうことである。年に一回ぐらいだったと記憶するが、裸になって一列に並び、理髪経験のある者が集められて、体毛剃りをやらされるのである。そばにはソ連の女医、セストラといって看護婦程度の女性が、じっと監視の目を光らせているので、ごまかしはできない。要は発疹チブスの予防のためだという。そのくせ、あごヒゲ、鼻ヒゲを伸ばしたり頭髪を伸ばすことは許されるのである。ヤポンスキーはどうしても若く見られやすいので、ロスキーマに馬鹿にされないためにも、ヒゲを伸ばした方がよい場合が多い。

岩手県 平田玉男

やがて春になり、いくら暖かくなってきた。やれやれと思つたある日の朝、作業に出かけるため支度をして外に出たら、どうも両足が重い。仲間と作業場に行くのも困難な状態であった。

これではいかんと思ひ、作業班長に体調の不良を申し出た。早速医務室に連れて行かれた。ソ連の軍医はこの俺を見てビックリ顔。どうしてこんなになるまで作業をさせたのかと、作業班長をカンカンになって叱つた。ただちに治療のため医務室に入室させられた。診断の結果は脚気だった。両方の足は下腿から脛の方まで腫れて丸々と太り、指で押すと指の跡が穴になって、一日中元通りにならなかつた。

眠くて眠くて、食事も食べたり食べなかつたりした。三日寝たら、三日目の午後から少しずつ腫れも薄れてきた。それから日増しに回復して、一週間後にはお陰様で作業に出られるまでになった。ソ連の医師は、疲労と栄養不良からくる病気だと言つていた。

岩手県 立石章

入ソして二年目の冬を迎えたころ、俺は慢性的下痢をおこし「骨皮筋衛門」となつて痩せさらばえ、骨の髄までしみとおる酷寒の雪原でふるえながら、連日何回も尻をまくり緊張つたのが原因で、尻の穴からイボ痔野郎が首をだし、そして大量の出血、水鉄砲さながらにほとばしる鮮血が雪を真っ赤に染めた。やがてイボ痔は出つばなしとなり痛み苦しいで、もう為す術なし、とても作業には出られぬ状態と相成つた。帰国後、今は亡き母から聞いたのだが、父も同じ病状で大分苦労したとのこと。どうも父から有り難くない遺産を授かつてしまったらしく、シベリアの劣悪な環境により発病を加速させたのだろう。

どうにもこうにもならなくなつた俺は、じいさん軍医の診察を受けた。軍医は出つばなしの痔と骸骨化した体を診ると、その場で翌日入院を言い渡したのである。俺の運命もコレッキリの極限でもうだめかと絶望的だったこの時に、じいさん軍医に入院加療を言い渡された時ほど嬉しかった事は無い。天佑神助と言えどそれまでだが、救いの手を差し伸べてくれたその時の老軍医の顔が慈悲深いキリスト様か阿弥陀如来様に見え、老軍医の背からも幾筋もの後光が差し、輝いて見えたほど有り難かつた。

あのじいさん軍医はもう黄泉の客となつているのだろうか、そして俺のかかわりなど何ひとつ記憶になく、単なる人生の行きずり出会いのひとつまでであつたにすぎないことだろうが、俺にとっては命の恩人であり、あの時に救いの手がなければあの荒果れてたシベリアの土と化していたことだろう。

だから五十年近くも前の老軍医の顔や姿がいまだに脳裏に浮かびあがり、い

つまでも忘れ得ないのである。

新潟県 若月太郎兵衛

昭和二十三年秋、暮れのころだったと思う。バム駅にて家屋の廃材木材を無蓋貨車に積み込む作業であった。各自、防寒外套、防寒靴、防寒手袋に身を固め、駅の引込線で木材を積んでおった。

大分荷はうずたかくなった。もう一本で積み終わりだが、どうも崩れそうだなあと思いながら最後の一本を積んだら、案の定、木材はがらごとく崩れ落ちてきた。はっと気づき逃げたつもりなのに防寒靴が挟まれ転倒、木材と一緒に落ちて、下敷きになった。側溝へはまったところへ木材が重なり落ちてきた。人事不省、目も見えなく、耳も聞こえない、仮死の状態になった。戦友たちはささず人工呼吸をやったりしてくれ、間もなく蘇生した。防寒外套を二着交互にして袖から棒を二本通し、応急担架を作ってくれ、僕を乗せて医務室へと運んでくれた。途中バラケリフ上級大尉ラーゲル所長の前を通りかかったら、山形県の戦友高橋弥蔵君がバケツに一杯茹でた馬鈴薯を持って泣いていた。彼は僕が担架に乗せられて行くので、多分死んだのだと早合点したのだ。彼は所長の奥さんのお気に入り、その日もペーチカ修理に向き、奥さんにバケツ一杯馬鈴薯を貰って、茹でて今夜は皆に腹いっぱい食べさせるのだと大張りきりにしておったのだ。それが夢破れ、若月は死んだと、がっくりしたのだ。彼は医務室へ跳んできた。若月、死なないでよかったですと、抱きついて共に泣いた。嬉しかった、よい戦友を持って幸せ。彼とは、帰るときは君の家へ泊めてもらって、餡ころ餅をよばれて、それから山形へ帰るのだと約束しておった仲だった。

彼は毎朝配給のパンを節約して、沢山食べて早く元気になるんだと差し入れてくれた。自分の身を削つての戦友愛である。こうした立派な、親切な、親身にも優る戦友を持って僕は幸せであった。それから彼は早く帰ったし、僕は憲兵経験が災いして最終帰還になったので消息は定かでない。老人クラブの旅行で山

形上ノ山へ行つたとき、半日かかって電話帳を調査したけれどわからなかった。残念の極みであった。僕の受傷はありがたいことに骨は異常なし、右膝の側面三週間の打撲傷、松葉杖に一週間お世話になって、計三週間の入院で済んだ。

愛知県 河村廣康

顔や手は、たいまつを灯してナンキンムシ退治をするから一夜にして油煙で黒くなりますが、股の付け根からももにかけての毛穴が変に黒ずんできたら栄養失調の前兆で、だんだん広がってきたら栄養失調です。栄養失調にはそれぞれ段階がつけられており、一級・二級・三級・OK(オーカー)・ジストロフィー(栄養失調)の五段階でした。ソ連軍の女性の軍医が尻の肉をつまんで等級をつけてゆきます。ジストロフィーが重くなると腰も立たなくなりですが、三級までは屋外作業にどうやらこうやらの者(ほとんど全員)と一緒に働かされる。それに寒さが加わるから、倒れたら即死ということになります。こういう戦友が次から次とシベリアの土となりました。

私は栄養失調といつてもオーカーで、目は落ち込み本当に骨と皮ばかりになりました。ソ連も、これでは役立たずと判断したのでしょう。昭和二十二年四月になつて帰国者(復員)の一人に加わり、故国、懐かしの故郷に帰ることが出来ました。

岡山県 木下美知夫

入ソしての急激な環境の変化と併せて住関係も粗悪となり、安眠が得られないこともあり、栄養失調者が続出した。身体全体に黒い小さな染みが無数にできている。その染みを爪で剥がして見ると中からとぐろを巻いた生毛が出て来る。これが栄養失調の所見である。要するに、毛穴から毛が外部へ出ていないことで皮膚呼吸ができなくなり、自然体力の消耗が加速することとなるのである。

島根県 岩崎 輝

伐採は力とコツの要る仕事でした。昭和二十年十月二十日、私は同僚と向かい合つて木の根元を鋸で引いてしまったところ、突然風向きが変わり、木が私の方に倒れてきたので逃げかけた時に、左足の上に木が倒れて反動して二度当たり、骨折してジーンと痺れました。

医務室に運ばれましたが医薬品もなく、針金で骨折箇所を固定して包帯をしてくれました。氷嚢もなく、患部を冷やすこともできず放置状態で、一週間後、ソ連の医者が診察して入院を指示しました。二、三日して、ソ連兵に警備され、同僚にオンブしていただき列車に乗りクイブシエカの病院に入院しました。

ソ連の看護婦が、寒いのに全裸にして水で体を洗い、体毛を剃って、白木綿の患者用の服を着せて病室に案内してくれました。

この病院でもレントゲンも撮らず、ソ連の医者が骨折箇所を手で触れるだけで針金もそのまま、包帯をしてくれました。

入院患者は独ソ戦で負傷したソ連兵が多く、日本人の患者は私達十五人と聞いていました。

同室の患者は、骨折や銃創などで歩行不能な者が多く、入り口の寝台に通訳の日本人が起居して、医者と患者の連絡をし、病室の掃除はソ連の中年婦人が担当をしていました。

私達は病院内の病室と廊下だけの生活で、外部とは遮断されていました。食事は、量は少ないが白パンやお粥と塩漬けの魚などでした。

私はただ安静にしているだけの毎日で、このまま複雑骨折で歩行不能になるのではないかと不安な気持ちで、痺れて、腫れた足を眺めていました。

寒さが厳しくなるにつれ日本人の入院が多くなり、ソ連兵の患者は他の病院に移し日本人だけになりました。

昭和二十一年になると凍傷患者が激増して、一台の寝台に二人が寝ることになりましたが、未知の者と頭と足を逆にして寝ていると目の前に凍傷の足が

あり、不気味な感じでした。

それでも患者を収容できなくなったので、治療を要しない者で一人歩きできる者を選んで、当時、北満を制圧していた八路軍に引き渡すことになったようでした。

一月末に百人ほどが突然退院をさせられて、所有者不明の汚れた軍服一式をくれ、着替えて、入院の際に預けた軍服や持ち物(私物等)は一切返却されずにトラックに乗せられ、ソ連に入った時とは逆の方向にブラゴシチエンスクから黒河の病院に連行されました。

病院は煙草会社の倉庫で、暗く不潔な床いづばいに病人が寝ていました。私達は、看護している日本兵から各班に割り当てられ、寝る場所を与えられました。

持ち物のない私達は、床に敷く物も体にかける物もなく、冷たい床に直接横になっていました。この病院では寝具の支給もなく、治療も薬品もなく放置されていたため、毎日死亡者が続出しました。私も折角ここまで快復したのに伝染病になり発熱して、意識がモウロウとなったことが何回もありましたが、幸いにも生き長らえて、三月末に北安の病院に移り、ハルビンで難民生活をして十月、コロ島発にて広島県大竹港へ帰国し、奇しくも骨折した十月二十日に松江市に到着しました。

愛媛県 宇都宮政壽

私は二度痛い目に遭う。爪と肉の間に刺さった木片を抜いたままにしていたら化膿、軍医に診せる。「抜かないとダメだ」と、メスで爪の周囲をサツと切つて、アツと思う間に生爪を剥ぎ取られる。もう一度は、奥歯が十日以上もうずき、歯茎が変に思えるので軍医に診てもらおう。「歯茎が化膿している。放っておけば骨膜炎になる」とメスで切開し膿を取って「明晩七時に来い」と。翌晩、麻酔なしで抜歯、衛生上等兵が腕の脈をとりながら「大丈夫です、大丈夫です」と言うの

が聞こえる。頭が真っ白になりかけた時に終わる。脱脂綿を丸めたのを渡され、「これで押さえておれ、しばらくで血が止まる」。誠に荒っぽい治療であった。収容所では怪我と病気は大敵、薬がなく、粗末な食事、下手をすると死に直結する。

愛知県 内藤朝夫

抑留者の統制管理

①健康管理はなく、働けるかどうかは目視検査で、裸にされ前後の肉付きを見る、尻をつねり女医が休ませる人を決める。そしてその女医は、特定の者をどこかに連れ込み自分の慰み者に行っているようだった。その特定の人は特別な配給品をもらっていたこともあった。

②私は体調を崩し肺炎を患い、四〇度の高熱で病室に入り一週間うわ言を言っていたようで、その時日本の軍医(愛知県一宮市)がいて、よく面倒を見てもらいました。軍医の話では「ビタミンCの不足ですよ」という診断で医薬用のブドウ糖を与えられ、なお松の葉がよいとのこと毎日その葉を噛んでやるとよくなつた。

病室には九人が入院しており、部屋は八畳位の板間で暖房もなかった。

北海道 堀 勇二郎

昭和二十二年冬、栄養失調で半月ほど入院中に見たものは、朝起きて死を確認すると丸太棒扱いし、病院の隣にブラック小屋が二棟あり、そこへ放り込んで、凍土が解氷される夏、大きな穴を掘って一緒に埋めたもので、テレビで放映されている墓標の下には骨のひとかけらもないと確信できます。粗末な病院で栄養食など一度も口にしたりもなく、診断もお粗末なもので尻を引く張つて栄養失調と診断、聴診器を持つている医師はほとんどいらない有様、入院すなわち死に場所でした。

北海道 佐々木佳明

小生、タシケントに抑留されて二年目にマラリア病にかかり発熱した。これが三、四日続くのである。発熱する前に悪寒が来る、このとき同志に辺りの仲間の毛布を借りてもらい何枚も掛けてもらう。間もなく発熱する。年に二度くらいこの症状が起るのである。しかし帰国してからは一度も再発したことがない。これは風土病であったのであろうか。

富山県 谷村文平

十メートルもある巨木の密生する原生林の伐採作業は熟練した職人の仕事である。素人集団が精神的にも最低の状態で着手しているから、習熟するまで事故が多発した。その上この土地特有の「ダニ脳炎」の発生が数人の命を奪った。これは七、八月頃に発生、露出する人間の肌に松の枝についているダニが付着して食い込む。あまり痛みを感じないので、気づいたときは払っても落ちない状態になる。これが脳炎ウイルスを媒介するので発熱、昏睡状態から死に至る。この当時は有効な薬がないので注意する以外対策はなかった。現地の医務室で死亡した一人については日ソの軍医が立会いで大脳を開いて死因を確認、私も立ち会ったので強く印象に残っている。現在墓参の場合でもダニについてきびく注意しているが、当時は全く知らせず一作業させたロシア側の責任が問われねばならない

石川県 通 実

壊血病におびえる

日常生活に不可欠な新鮮な野菜を食しなければ、ビタミンC不足で壊血病を引き起こす。まずはビタミンCを摂取することが急務である。松葉を低温で煮た液を朝晩二回、食事前に飲む。また、ドロジー(黒パン作り発酵)を飲ませ

れた。病状は、紫色の斑点が十円玉ぐらいに体に浮き出る。その後、出血死を招くまことに恐ろしいものだ。

福井県 横田 肇

トラックと汽車を乗り継ぎ到着した所は牡丹江郊外で、建物は過去に関東軍特別大演習のとき造った仮設兵舎とのこと。

軍医はソ連兵の男女各二人ほどだと思ふ。その下に同じく看護婦がおり、病舎の食事、掃除等の世話には日本の衛生兵(自称)がいた。病院とは名ばかりで、二、三日に一回、ラップの型をした聴診器で診察し、薬は一日一包を飲むだけで、二週間ほどしたら薬はなくなった。

食事は飯盒の蓋八分目の粥が出ただけで、寝ていても空腹を満たせるものはなかった。

少し病状の良くなった者は、病院の敷地外へ水汲み(馬車にドラム缶を教本積んで水を運ぶ)に行く馭者に何か品物を持たせて大豆と交換して、夜中にストープで煎って食べる者が時々いた。二、三日たつと必ず下痢をして下着を汚し、後は裸で毛布にくるまって栄養失調となり死んでゆきました。

病院でもシラミが多く、昼はストーブの側でシャツの縫目にピッシリと並んでいるシラミ退治が日課となり、横に寝ている人が亡くなると、そのシラミは全部こちらに移動して来るので大変だった。五月ごろには衰弱して十五センチほどの段差を上がることができず、這い上がるようになり、一日寝ていることが多くなった。このころ、軽作業者の話では死亡する順番が囁かれることが時々あり、私も三番目くらいに言われた。体の自由は利かなくても耳は聞こえるので「何くそ、絶対に死なんぞ」と、出征の時の西さんの言葉を一思い出して自分に言い聞かせたものだ。

三月ごろになると少し体調も回復し、舎内での軽作業もできるようになった。食べ物も粥のほかに黒パン一切れと塩魚一切れか漬物(キュウリ、トマト)が出る

ようになった。

岐阜県 佐々木 博夫

二十一年十月ごろ、痔が出て歩くことに苦労したが、痔の患者はどんなに病状が悪化しても作業は休むことはできない。戦友から、石を焼き痔に当てると良くなると聞き、作業の帰りに石を持って帰り、ペーチカで焼き、当てた。気持ち良くなった。左手で当てて寝る。そのことかどうかは分からぬが、左手首から先がボンボンに腫れて痛かった。ソ連軍医者に見てもらったら、ニーハラシヨスパーチナーダ(良くないから休みなさい)とのこと。それから半月程度休むことができ、痔もよくなった。

大阪府 藤本 善造

昭和二十二年の初夏の頃、アパート建設の作業場で、労役に服することとなった。そしてこの当時、全員が下痢で苦しんでいたように思う。その原因は、前年の秋、ソ連の穀倉とでも言うべきウクライナ地方が凶作とのことで、我々の主食は燕麦でなく豆の粉の煮た物を食わされていたのである。

作業中でも、便意を催して待てしほしのできないとき、皆が基礎穴の片隅で用便をしていたのである。

工事の始まりは基礎の穴掘りからだだが、この頃になるとスコップはさくさくと土中へ刺さる。しかし、下痢で体力の落ち込んだ我々は、仕事が長続きしない。またしても座り込む、ということが多かった。通りかかった監督が「何を怠けているんだ、早く仕事をしろ」と文句を言う。すると私達は口を揃えて、片言のロシア語で「フショサルダート、バリノイ」と言い返すのである。

栃木県 天野 喜一

切断といつても医務室に麻酔薬はなく、戦友の二、三人が体の各部を押さえ、

軍医が小型切断器にて指を切り落とし縫い合わせる。患者は体中脂汗を流し、歯を食い縛り手は強く握り締めている。その治療に立ち会ったが、痛いという表現より死の苦しみであり、悲惨そのものであった。

私達も多情多感な尊い青春を、零下三〇度以下にも下がる厳寒の中、飢餓と過酷な強制労働のため体力も尽き果てて、次々とあたら尊い命を失った多くの戦友を忘れてはならない。その屍を十分に葬ることもできず、一個の物体とし扱われない境遇に置かれた毎日であった。明日の自分の命がどうなるか分からず暗たんたる境遇の中で歯を食い縛り、一切れの黒パンで故郷の夢と親兄弟との再会に望みを繋ぎながら死を乗り越えてきた。

千葉県 伊藤千次

後で分かったことだが鳥目になっていた。三合里以来食事に缶詰が多く、生肉、魚、野菜が少なくビタミンAが不足して夜、目が見えなくなっていた。夜遅くチパリ收容所に着いた。入り口の電灯に照らし出された高い板塀、その外にもっと高い鉄条網、四隅の望楼には照明灯が光り武装した歩哨の目も光っていた。

暗くてよく分からないが細長い小屋の中央に薪ストーブがあり、両脇に丸太の床の二段ベッドがあった。そこに着たまま寝た。翌日いろいろのことが分かった。チパリ收容所は川上に向かって左側に切り立った山があり、その隣に幅四十五メートルの川があり、その隣には百メートルほど平坦地があつて次が高い山になつている。收容所は川なりに、横百メートル、縦五十メートルに鉄条網を張り、右の方に入り口、衛兵所、炊事場と風呂場。左の方に三間に五間の小屋が二棟、道なりに建ててあり、川の下角に便所があつた。

いずれも小屋は丸太を横に積んだカナダ方式。室内に電気はなく、白樺の皮を缶詰の空き缶で燃やし明かりとした。白樺の皮はジイジイと音を立ててよく燃えるが煤煙がすこく、皆朝になると顔が真っ黒になっていた。

千葉県 伊藤千次

その衛門隣の病室に入室、三十人ほど入れる病室で、やはり中央にストーブがあり暖かい部屋だった。軍医衛生兵もおり、薬はないが病室としての良い生活をさせてくれた。鳥目は相変わらずだったが、アメリカの肝油で鳥目に良く効くという薬を、二日分六粒もらつて服用した。二日目の夜中に小用で目が覚める。天井に電灯が二つ見えるのはいつものとおり。柱に伝わりうると下が見える。戦友の寝ている顔、真ん中にストーブ、手製のサンダルが見える。嘘ではないかと目をこする。股をつねつても痛い。本当に治つたのだ。うれしかった。

山梨県 中村清

私も第一收容所の收容人員は二千人と聞いていましたが、石炭掘りは毎日朝七時から十五時、十五時から二十三時、二十三時から七時までの三交代。一交代作業人員五百人という大世帯の作業所ですから、一時はアルチョムの街は石炭の街として評判になったようですが、地下採掘場の我々作業員はその炭塵で肺を侵され、次々に病人となりました。

因つたことにソ連の軍医は、病気になれば熱が出る、熱が出ても三七度五分以上にならないと絶対に休ませてくれず、熱の出ない病気を訴えても「うそつき」だと言つて取り上げられず、炭肺患者や栄養失調者は作業場に駆り出され、作業中バツタリと事切れた戦友もおりました。

長野県 中村良恵

しかし、再度発熱し病棟に入りました。大半が結核患者のようでしたが、患者たちは比較的元気の様子でした。五月に入り薯全員呼び出され診断。翌朝出発と言われました。別の病院へ移送されると想いましたが、翌朝收容所下の引込線に貨車が入つて来て、最後尾車両に三十人ほどと乗車。知人は一人もおらず、約十日間くらいでポセット港に着きました。数日後ソ連船に乗り朝鮮の

清津に下船。再び貨車で出発、着いた所は古茂山という所で、日本のセメント会社のあつた所と聞きます。宿舎は防空壕跡で、屋根もなく、ひどいところでした。早速棒を渡し、近くの河原で柳の枝を切り、一メートルくらいの厚さに重ねて屋根らしきものを作りました。もともと病弱者ばかりなので、毎日十人から二十人の仲間が亡くなり、裏の畑から裏山の中腹の方まで埋葬しました。仲間の中に六十人ほど、シベリアにおいて凍傷で脚を切断し、松葉杖を使う人たちがおり、機械化部隊と呼ばれていました。私たち元気な者三十人ほどは、セメント鉱山や収容所のまき切り作業等に一月くらいずつ従事しました。

北海道 渡辺照造

日本人はチフスといえば腸チフスを連想するが、ソ連でチフスといえば発疹チフスのことをいう。発疹チフスの媒体はシラミである。捕虜とシラミ。これは万国共通、切つても切れない関係にあるのだろうか。狭い所に多勢押し込める。着替えもなく入浴もない。洗濯もできない着たきり雀。これでシラミが発生蔓延しない訳がない。

夜、寝台に横になる。待つてましたとばかり南京虫とシラミの攻撃である。かゆい。見当をつけて指をシヤツの中に入れる。探るとまず空振りはない。指先にコロツとしたやつが触れる。ご主人様は痩せて栄養失調なのに、こいつは栄養満点、丸々と肥えている。

昼間、シヤツを裏返して縫い目を見るとビツクリする程の卵の行列、シラミをはたき落とし卵を潰してまたシヤツを着る。

ソ連式シラミ退治法は、零下二〇度以下の日に、戸外で布きれや衣類を広げ寒気に晒す。何時間かしてから見ると、シラミは凍死して白くなっているが、卵にはあまり効果はなかった。

二十一年頃から週に一度位バーニヤ(風呂)に入れるようになった。しかし、風呂といつても小桶に湯を二杯位貰つて体を拭くだけである。それと、バーニヤの

隣に熱風乾燥室ができ、夜は作業で濡れたカートンキ(フェルト製の長靴)を乾かし、昼は衣類の滅菌乾燥をしてシラミ退治をする。これで漸くシラミとの縁が切れた。

愛知県 森 武雄

発疹チフスにかかり栄養失調の病人は死ぬ前まで食べたくてもうがなないらしい。死ぬ時は全く苦しまず、朝起きたら隣に寝ていた戦友が死んでいた話は何度も聞いた。冬の零下四〇度位の真夜中、炊事場を私が見回っていた時のことであつたが、毛布を頭からすっぽりかぶつてフラフラしながらゴミの山を漁っている痩せ衰えた者がいた。よく見ているとどうやら食物を探しているようである。凍ったキヤベツの芯と腐ったジャガイモの皮を手につけている哀れな姿に、まさに餓鬼道に落ちた人間を見る思いがした。

消化の悪い食い物ばかりで下痢患者は次第に増えた。黒パンの配給もあるようになったが(一日三〇〇グラム位)、毎日大豆ばかりの食事では日本人の体力が衰弱して、炭坑に入れない者が続出した。

島根県 伊藤善雄

私は昭和二十一年三月頃、炭坑内で手の指を怪我して入坑を四日ほど休んだらマラリヤ病で高熱が発生、女医の診断で「オツカー」になり、当時の病人等々患者六〇人ほど、粗末な自動車に乗せられて約一〇〇キロ南のスパコ第一ラゲルに転送。ここにはドイツ、イタリアその他の捕虜が収容されていて、三月末頃には体調のよい者は麦畑の除草、ジャガイモの植付け等々軽労働をしていたが、何分弱体の身で毎日毎日死人が続出で大きな穴に全裸でポイポイ捨てたが、これこそ名前も分からず相当数亡くなられた。

死線彷徨

静岡県 今泉 茂

伐採の日々が続いたある日、悪寒を覚え検温すると三八度あり、作業を休むことになった。夕方仲間が作業から帰るころ急に息苦しくなり、呼吸する度に何本もの針が肺に刺さるような痛みを感じ医務室に運ばれた。検温の結果四〇度近くもあり肺炎と診断され、収容所内の病室に入ることになった。当時肺炎の薬などあるはずもなく、できることと言えば部屋を暖かくして湯を沸かし、空気の乾燥を防ぐしかない。熱が下がるかどうかは数日の勝負である。苦しい息づかいにもうろうとした意識の中で、こんな所で死にたくないと思い、敗戦後の祖国でわたしの帰りを待つ父母や姉妹の顔がぼんやりと浮かんだ。寿命があつたと言うべきか、若い生命は肺炎に打ちかつた。「もう大丈夫だ。命拾いをしたな」とK軍医に言われたときは、「ありがたいございます」と言うのがやっとで、涙がとめどなく流れ枕をぬらした。

捕虜達は夏の間に収容所近くの原野に幾つも墓穴を掘らされた。冬の死に備えるためであつたが、何とも気のめいる作業であつた。北海道出身の同年兵は突然の腹痛で七転八倒の苦しみを訴え、入室後間もなく死亡した。K軍医が解剖した結果、回虫が腸より胃に入り、胃壁に穴をあけていた。色白の好青年であつた。

富山県 谷村 文平

私にとって問題は、医療に関する事項に多くの難題があつた。戦場からラゲリに直行した諸部隊では最初の冬に多くの犠牲者を出したのと同様に、二年目入ソの私達の場合もロシアの風土と糧食には抵抗しきれなかつた。全死亡者の半数以上がこの冬に倒れた。初年度(朝鮮)は温暖で食糧にも恵まれ、ほとんど犠牲のなかつた集団であるが、粗悪な食糧にどう対応するか心構えができていない、寒冷地の生活習慣がない、シラミ、南京虫の攻撃に耐えられない、前途

の光明が見えない等々が絶望感を醸成して犠牲者を出したと私は思っている。

下痢症状から栄養失調、衰弱死のケースが目立った。医薬品は日本側の軍医の手持ち以外に補給はないので、軍医自身、将来の見込みがないのに投薬できないのが実情。冬の終わり頃、ソ連側が軍医の鞆の検査を強行した。この時温存されている薬剤が見つかり患者に投与、助かった兵もあつたが、一時的な効用に過ぎなかつた。昭和二十二年の三月頃、私は衰弱した患者を後送入院させたつもりでいた。帰国後御本人と会う機会があつて聞いてみると「病院らしい施設はなくて、直接ナホトカへ送られた」とのこと。労働大隊の場合、患者を収容治療する対策が全くなかつたのではないか？

私の大隊の死没者の多くは栄養失調から衰弱死に至るケースであつたように思われた。これは春の到来ともにおさまる。山菜の時期には毒草によると思われたのが一件、夏には脳炎ダニの犠牲が出た。初年度の厳冬期にあつた惨状は繰り返していない。ロシアの食糧事情がもろに収容所の炊事に反映したと思われた。穀物、野菜を定量通り受領しても、内容(品質、種類)には天地の差があつた。

北海道 宮崎 維新

私も凍傷にかかつた一人であつた。右足第一指が三センチほど切断された。この経過を見てから左の方も手術されると思つていたが、切られずに済んだ。結果的に右の足指も切断する必要がなかつたものである。医療設備、器具、医師の技術は日本と比較にならないほど幼稚で、聴診器も子供のラップのようなもので患者の胸に当てていた。私は凍傷で二カ月、六カ月を経て栄養失調で二カ月ほど市内の病院に入院した。

千葉県 仲澤 豊春

私は昭和二十二年四月ころであつたか発熱し、診断の末手術とのこと、病名が

分からないから骨髓を取り出し検査することであったが、私は不安でいっぱいであった。麻酔注射もなく、木に穴をあけるような錐で胸骨に穴をあけて血液を取り出し検査したが、いま一回取るとのことと同じ方法で二度まで胸に十字の手術をされた。その結果カラサル(山東熱)と病名が発表された。それは風土病であった。そのとき、アメリカの薬で、よい薬といい、一回注射されると一週間くらい動けないほど痛い注射であった。それを五回くらい注射された。しかしそのころから熱が下がり、少しずつ快方に向かった。

鳥取県 加藤一郎

私は四年間で、正確に言えば入ソした二年間で六カ所の怪我をした。最も大きいのは左人差し指の裂傷で、十一針縫った。一九四六年の冬に、松丸太の貨車積み作業中に、押し上げた丸太が落ちて左人差し指の怪我をしたが、これは皮がむけたような状態になり十一針縫ったのだが、これももちろん麻酔をしないでの手術であつて、じつと辛抱した。そして何とかかんとか言つて一カ月近く休んだ。もう一つは、一九四七年四月頃、伐採の失敗で、倒れた木に引っかけ枝が跳ね返つて来て、右の顔の毛の生え際を七針縫う怪我をしたが、このときは出血が多く、処置した後顔の腫れが大きく、また腫れが引いても目の下に血隈ができて、お岩のような顔になつていたので、ソ連の女軍医さんも長い間休ませてくれた。

あとは手の指、足の指の生爪で大きな怪我でもなく、生命にかかわるようなことではないが、外傷で一目で確認ができ、作業ができないので堂々と休むことができて、私にはよい疲労回復の時となつた。この手足の三カ所の生爪は、入ソした一九四五年十一月から翌年の春までの約六カ月間の、枕木の皮むき作業に従事していたときのことで、三メートルの松の枕木は生木で凍っていたから非常に重く、防寒手袋をしたままでの作業であつたから、本当に腕力が強くなければ二人で堤げて運搬することができず、指を挟んだり足の上に落としたりする

故になつたものである。生爪になつた爪は麻酔をかけないで直接メスで切り取つていたから、非常に苦痛ではあつたが傷病みをするともなくて、何日間か作業を休むことができることが何よりであつた。

私は、入ソした一九四六年十一月頃から翌年の春頃までに三カ所の生爪で作業を休むが、この間に最も多くの死者が出ていたことを思えば、私はこの程度の怪我で休み休み作業をしていたことが幸いしていたものと考ええる。

このように適当な間隔をおいて怪我をしたのであるが、私のような者が生きて日本の土を踏むことができたのは、このように怪我を重ね、その度に休養したことが大きく関係しているかもしれない。

鳥取県 星野誠一

その他食べられそうな物は何でも食べたから私は胃腸を壊してしまい、下痢すると風呂場(ドラム缶風呂)に行き、消し炭をかき集めて、それを石を金づち代わりにしてコンコンと叩いて粉にし、下痢止めに飲んでみた。作業に行つて腹具合が悪くなると、その都度そういうことをしていたら、とうとう腸の方に傷がついたのか血便が出るようになり、熱が出て作業に出られなくなった。ソ連の女医が来て診察すると、「熱が下がらんから、お前はマラリアだ」ということになつて、「入院しなさい」と言うのです。ところが日本の軍医さん(山根少尉殿)は、「お前はマラリアではない、腸に傷があり、そこから熱が出ていますので、大腸炎だからそんなに心配することはない。病院に入ったら作業に出なくてよいから入院せい、入院せい」と入院を勧められて結局病院に入院した。病院ではマラリアということで直ちに隔離病棟に入れられた。ところが一週間たつたら平熱に下がつてしまひ、今度は普通の病棟に移された。

ナホトカに着いて、早速、私は炊事場の使役に出された。その日の朝食は、塩ダラの煮込みご飯であつた。ナホトカの収容所に、ダモイの待機者が二千人おつた。その二千人全員にタラの煮込みご飯を出した。私は内務班で朝食を済ませ

炊事場に行くと、炊事班長から、炊事の使役に来た者は後からご飯をいっぴい食べさせてやるとのこと。朝食を食べたのに、またその上に余分にご飯を食べた。ところが昼前ころから皆、腹が痛い、腹が痛いと言いだした。私も腹が痛くなつて、まず便所に行った。そして内務班に帰る。また便所に行きたくなる。行つたらまた下る、また帰る、また行きたくなる。その繰り返しで、とうとう便所紙を使い果たしてしまい、昼前から便所へ行つて、午後六時ころまで便所におつた。下痢で便所から出られない。そうこうするうちに同じ分隊の者が、私が見えなくなつたと言つて大騒ぎとなり捜し回り、結局、私が便所におつたのを見つけた。その後やっと、なんとか下るのが止まつて内務班へ帰つた。

それからダモイの「恵山丸」という船がナホトカ港に入港するまで一週間あつた。その間、何とか病気を治してこの船に乗船しなければと心は焦るばかり。海岸まで出ては砂浜を歩きながら海に向かつて手を合わせ、病氣平癒を神に祈つた。早く治らないかなあ、この日本海に向こうには夢にまで見た日本がある、内地がある。ここまで来てお陀仏するのはまことに残念極まりないと涙が出た。この食中毒で重症の方はお亡くなりになり、また病院に逆送された重病人もおられた。私はこのとき、満二十歳であつた。若かつたために、一週間ぶりに恵山丸が入港したときには病氣が治つておつた。

ナホトカで二十人全員中毒になつたという事は、一生涯忘れることができない事件であつた。

高知県 東山 林

給食の状態が極度に悪かつた原因に、入ソのとき積み込んだ三カ月分の糧秣をソ連側が横流しをしたことを決して見のがすことはできません。そして我々には馬糧であるコウリヤンやふすが使われたのです。しかもその量が少なかつたこともあつて、体力維持に効果はなく、この私も、平素の体重は六十五、六キロであつたのに、当時は四十五、六キロ前後で、五十キロにはとても届いていなかった

であろうと思ひ出しています。体重計器が無かつたので確たることは不明ですが、多分当たらずとも遠からずと言えましよう。

体力が衰えたところへ、シラミの総攻撃を受けた、まだその上に赤痢が発生して、作業不能の状態となり、さく内の片隅に掘つた便所（野せんち）のそばで、毛布にくるまり、ふるふる震え、呼吸で凍てついた髭をこすりながら、しゃがみ込んでいる人もいました。

自分の寝ているところから五十メートルくらい離れている便所で用を足しても、もとの所へ帰りつく暇もなく、またすぐに便意があり、粘液だけ出るのです。私も一日に二十回以上、この野せんちに通いました。

この収容所に到着し、翌年移動する五月までの約六カ月間に、我が第一中隊だけで三十八人の犠牲者があり、私はこの手で全員を埋葬したことは生涯忘れたいことはありません。

I氏は不寝番をしており、そのとき、分隊長の靴をソ連兵が盗んで持ち出したことを知り、責任を感じて、これを取り返すべく、出入口の近くまで追いかけていったところを、看視のソ連兵に逃亡と間違えられ、看視塔の上から射殺されたと聞かされたのです。

また、I氏は、死亡原因がテンカンとなつておりますが、実際はソ連兵に射殺されたのです。

テンカンの病名をつけたのは、ソ連側との間で交渉の結果、矢部軍医の判断によるものであることも、軍医自身の口から聞かされました。なお、矢部軍医の談によれば、当時、私が死亡を確認した人の数は九十七人と記憶しているが、これをソ連側に報告した記憶がない、とのことでありまう。

山梨県 渡辺喜明

私も昭和二十一年十月頃、伐採場で喉が渴いたので雪を溶かした水を腹いっぱい飲んだところ、その晩から下痢となり、風邪気味もあつて翌朝から三九度の

熱発をってしまったので、「もうこれで私も命はないだろう、どうせ死ぬなら人の厄介にならぬように」と思って、真つ裸になって亡くなった戦友の屍体置場に行つて屍体の中に割り込んで寝たままでは覚えていましたが、しばらくして気を失つてしまいました。気がついてみますと、不思議なことに屍体置場小屋の窓から北斗七星が輝き、私は生きていたのです。熱が下がつて頭もスッキリ、ただ母の声が「喜明、死んではならない、生きて日本へ帰るのだ」と呼んでくれたことだけ覚えています。私は生きていたのだ、と泣きながら裸のまま部屋に駆け込み自分の床に入つて、まだまだ死んでたまるか、と気を持ち直して頑張りました。

その後のある日、私は持っていたステนレスの小さな鏡をソ連の女医さん上げたところ、その女医さんが大変喜んで特別に私を可愛がつてくれるようになり、よく官舎(私邸)の清掃や使役に使つてくれるようになりました。

兵庫県 田中康夫

昭和二十二年初め、エバロンの収容所(配属番号不明)。春になつて、山の白樺が緑に萌え、野には桔梗やキスゲ、ユウスゲ、山百合が美しく咲いた。やつと自分に、自然を見る感覚を取り戻した、と思つた。作業は第二シベリア鉄道(バム鉄道)建設作業であり、まず崩れた路盤を整備することから始める。そのための土砂が必要となる。山に横穴、縦穴を数十箇所掘り、ダイナマイトで一斉爆破する。その後、トラックで土砂を路盤へ運搬するのであるが、自動車に土を積むための作業として、私は、起重機(エスカロートル)のスコップが土をすくい、車の荷台が下に来たとき、ロープを引いて、スコップを開く作業をしていた。ある日、作業中ロープが切れたので、土砂の山を登り、ロープを修理していたところ、上から岩石が落下してきて顔面に当たつた。その後、一昼夜意識不明であつた。

エバロン病院か、ゴーリン病院か定かではない。左頬の傷は約十センチと大きく口を開いていた。治療方法としては傷口を消毒して、絆創膏二本で張り合わせただけである。大尉の女医さん、少尉の看護婦さんたちに大変お世話になつた。

「国に帰ればお母さんが大変驚くよ」と心配顔で語りかけてくれた。母が私の顔を見るなり、「顔が半分なくなつていと聞いたが、大丈夫やないか」と安心したように言つた言葉を今も覚えている。私が怪我をしたとき、同じ隊に同郷の誰かがいたらしく、彼が先に復員して、我が家への事故を知らせてくれたらしい。未だにそれが誰なのか判らない。

死の一步手前

滋賀県 林 憲一

抑留後、昭和二十一年の正月ころより三段の木製ベッドに寝ていた者で、毎日二、三人ずつ栄養失調で亡くなる者が出始めた。朝食の時間に呼びかけても応答なしである。私はその年の二月十一日紀元節の日に四二度の高熱が出て直ちに入院したが、薬はアスピリンのみであつた。同室に朝鮮の三中井デパートに勤めていたという野登川出身の野村君を知りよく話をしてしたが、彼は間もなく両手両足の凍傷と栄養失調で亡くなつた。

私も血便が出だし、間もなく意識不明となつた。何時間か、それとも何日間か分からなかつたが、意識が回復し気がついたときには熱も下がつていた。初めて白米の重湯をいただき元気が出始めた。あのまま死んでも分らないまま、これも助かつた一つである。高熱が下がつて退院するも、頭はがんがするし体はふらふらし、伝い歩きがやつとるとき、軽労働の仕事をするこゝとなつた。

静岡県 望月 貞

病気になつて休む人がうらやましい気持ちになつて、もう俺も限界だと觀念しかけたとき、病人の看護者を探していることが耳に入る。とにかく山から抜けられたらの一心で申し込んで、翌日より看護についた、十一月末であつた。看護係に指導してもらつた。二十人ばかり病人が入つていた。熱が治まつた者ばかりだが下痢が止まらない者が多い。その者が下痢しそうになると呼ぶので急いで石油

缶を持って行く、それに用を足す。二段ベッドの上段の者は下痢が治まって上れるだけの力がある者、下段の者は下痢している者と上段へ上る力がない者で、上段の者は便所へも行く。食事も食べ回復過程にある者でこの方達はあまり面倒にはならない。病人が入って来た。熱はないか、下痢しているか、上段へ上れるか、聞いて寝台を決める。病人が二人三人とどんどん増えてくる。隣の部屋も病人でいっぱいらしい。石油缶を欲しがって忙しいときもある。食事は炊事係が見当で持つて来る。下痢している者はほとんど下痢が恐くて食いたがらない。食わなきゃ回復もないので食うように勧めてもなかなか食ってくれない。とうとう俺のベッドも病人に取られ、床に毛布を敷いて寝る。夜中にも起こされる。昼間もとうとうとしている。それでも「ダワイ、ダワイ」よりつらくない。発熱で頭がおかしくなつて朝から晩まで流行歌を歌っている者、食事だと言つて目の前へパンを置いても手も出さない、顔の前で手を振つても分からない者、朝になつて隣に冷たくなつて死んでいる者も出てきた。二、三人の手を借り下へ降りして廊下へ出す。持ち物全部に毛布を掛けておく。各棟の入り口の物置へロシア兵が二人で運んで行く。

十二月二十七日、中立ちで出る。少し寒気がしたが出た。二十二時まで何とか勤める。帰ってきたら部屋の者が頭に手を当てて「これは四〇度あるぞ」と言われすぐ入室、ベッドへ倒れ込む。天井を見ていて、どうも自分の部屋ではないと思つていた。近くへ人の気配がした。「ここはどこだ」。途端に「おい、こいつは生きてるぞ」と皆に聞こえるように言った。「今日は何日だ」「二日だ、一月二日だ」と聞こえた。ここは医務室だ、医務室までが病室になったのか、ああ俺は生きてるという感じが何となくしてきた。大声を出した。看護係がお皿を持つてきて、「まずこれを飲め」何かの重湯だ、気持ち良く飲んだ。「お前は運が良いぞ、ここ三、四日はパンも大豆も穀物の配給は何もない。皆キャベツの塩漬けの酸っぱいのを主食代わりに食つている。炊事がコウリヤンを少し取つておいたから病人だけその重湯をすすっている。今は伐採も製材工場も働く者がいないので休んでい

る」熱はないが、頭をかくとふけと一緒に頭の毛がぼろぼろ抜ける。パンも配給が来た。初めは石油缶で小便をしたが、三日目ころからは外便所に行かれた。部屋の看護係のように動いた。ペーチカへ薪をどんどんくべ、部屋を暖めた。薪の使い過ぎだと炊事から文句を言われた(病室の薪は炊事の係)。

鳥取県 原中宜夫

年が変わった頃、高熱と咳が続いて治まらず、「気管支炎」と診断され入院することとなった。風邪をこじらしたものでしかなかった。

病院は収容所内にあつて、何かの建物を転用したものらしかったが、ともかく日本の軍医がおり、病室にはベッドが並び、日本人の衛生兵がおり、病院特有の消毒薬の匂いがあるこの場所は、何となく安心感があつた。少なくとも休める、休養ができるということが単純にうれしかった。萎えかけた心は大いに救われた。

病室は私が入つて十人くらいで満室となった。他の患者に気兼ねするほどの余裕もなく、激しい咳は一向に治まらず続いていた。薬を与えられ休養するうち、次第に回復してきた。病人食は高粱や粟等の雑炊の作業食と違つて白米に鮭等の混じつた雑炊で、白パンもあり、量は少なかつたが、日本人の患者にとつてはありがたい食事であつた。投薬と食事が適切であつたのか、それとも休養がよかつたのか、一カ月余りの療養で退院も間近になるまで回復していった。

私はここで、親しかつた同年兵のA君の死を知つた。栄養失調症だったという。ほかにも無念の涙をのんで逝つた多くの人があつたことを聞かされ、またしても「なぜ、何のために」という疑問は解けず、かつて戦場を去るときと同じ空しさ、やり場のない新たな憤りをどうすることもできなかった。ただ「冥福を祈るしかなかった」。

退院の間近になつていた私は、思わぬ皮膚病「疥癬」に取りつかれ、体のあちこちに黒い塗り薬を塗られて治療する羽目になつた。当時、所内では疥癬症が蔓

延しており、病院付属の建物内にこの患者を隔離して治療する「疥癬中隊」と称する治療所が設けられていた。「疥癬」と診断された私もここへ隔離された。その数ははつきりとは覚えていないが、体育館のような広い建物いっぱい寝起きしていたので、相当な数ではあった。

治療は毎日、担当の衛生兵に患部へ黒い軟膏（薬名はテールー膏とか言った）を塗ってもらい、数日おきに病院付属の浴場（浴槽のない広い洗い場に、数組の湯と水の出る蛇口が設けてある）で体を流して清潔を保つだけのものであった。

神奈川県 北澤治雄

半年くらいは入浴が全くなく、着たきり雀だからシラミがわき、発疹チフスが流行、死者が毎日のように出た。遺体は薪を積むように積み、墓堀り班ができて埋めるのだが、何しろ石のように凍った土を掘るのだから、はかはいかない私も三回ほどやったが、指が凍傷になり、もう少し遅かったら右の中指と薬指を落とすところだった。

このチフス禍は甚大であつたらしく、急に衣服類の消毒が励行されるようになった。最も印象的だったのは、男性のシボルの毛を剃り落としたことである。骸骨のようにやせ衰えた男が毛のない一物をぶら下げて列をつくっている図は、滑稽を通り越して鬼気迫るものがあつた。私自身、在ソ中、三回やられた。

病気になる、ソ側軍医が日本軍医に手伝わせ診療するのだが、ひどいやぶばかりで、医者とも言えない連中だった。熱がないと病気とは認めない。脚気が多かったが、糸瓜のようにむくんだ足を引きずって働く人が目についた。

私も肺炎となり日本軍医の強硬な主張で入院したが、下熱したら三日目くらいには、病院の廊下をレンガで磨く作業をヒョロヒョロしながらやった。けがをすると看護婦が来るが、彼女たちは血を流している患者の手当てをせず、時間場所・状況をていねいにノートしてでなければ手当てに取りかからない。彼女にとつては、ノートの方が患者よりも大切なのである。

熊本県 高洲安則

七月七日、木曜、晴。突然本部から呼び出しがあり、各中隊にいる患者と入室者全員、入院のため本部前に集合して、夜、トラックに三十二人が乗せられて、どこかの病院に入院するために出発した。十日の午前中にタシケント駅から客車に乗せられて、十一日の午前中にカガン駅に停車した。下車してすぐ近くにあるカガン病院に入院した。私達が入る以前はドイツの患者が入院していたのだろう。現在も十数人が入院されている。私達も入院してまず入浴。入る前に丸裸となつて入浴して、上がるときに着物と下着を支給されたので着替えて、決められた部屋に入つてゆっくり休んだ（装具と衣服の着替へは全部取り上げられたが、退院のとき返されるとか）。今日からいつまでかわからないが療養生活だ。月日はたつて、この夏はすごい暑い。いつも四五度以上、五十度内外だ。雨一粒も降らない。庭の丸井戸もカラカラだ。病院の中も外も変わりなし。冬も厳しい寒さ。十月十八日に部屋の移動があつた。

年明けて二十二年二月二日、日曜、晴。カガン病院を退院した。四十三人が退院して夕方、カガン駅で貨車に乗った。夕食が病院から貨車の中まで運ばれてきた。車内ではパンも配給された。夜、発車した。私はこの病院で二百七日、入院生活だった。貨車がゆっくり走って五日目。二月六日、木曜、曇り後晴。タシケント駅に着いた。下車して歩いてタシケント地区収容所本部兼第一収容所に着いた。

三重県 太田 勇

日医側の注文は医薬品をはじめ医療器具の整備が中心でした。ソ連側もそれには素直に応じた様子で、収容所内に一戸の医療小屋が設けられ、医薬品や医療用具が日に日に増えました。それらのほとんどは関東軍から押収したもので、骨折時の固定材に使う石膏まで包装袋「関東軍」と書かれていたのには驚き

ました。

日医側の医務室が診療を始めたのは、一冬過ぎて少し温かくなったころであったと記憶します。医務室の前が受診者で大にぎわいした風景が今もまぶたに焼きついています。誰の顔にも「ああこれで助かった」という安堵感がありました。私も幾度か受診しましたが、主治医はいつも前記の元軍医部長さんで、大変気さくで優しい方でした。外科が専門とのことでしたが、内科の分野にも詳しく、診断も治療も的確で、収容所の全員から神様のように尊敬され慕われました。驚いたのは軍医がいるはずのソ連側まで診察を請うてきたことです。そのため日ソの診療日割り表を作った程です。これではソ連側軍医の立場がないように思いましたが、よく考えてみると医は仁なり、医道に国境はないはず。仇を恩で返す元軍医さんたちに、私は深い尊敬の念を抱いたことを覚えています。

北海道 長島秀夫

夜中に、腹痛がひどく目がさめる。便所に行きたくなったが、蒙古には便所などない。男も女も野原の適当な所で用をたし、あとはそのままである。

しかたがないので、建物の裏にまわり、丸太塀との間で用をたす。激しい下痢、水便のようだ。マイナス三〇度をこす寒さの中、いつまでも裸の尻を出してはいられない。遠くで狼の吠える声が聞こえる。急いで建物内に戻る。

翌朝、抑留者全員の健康診断があった。健康診断というと体裁がいいが、蒙古軍の軍医と称する者が、ただ体温を計るだけである。体温が三八度以上ある者は、作業休止となる。それ以外は、何を言ってもだめである。私は、下痢のせいか三八度以上あり、ただ一人作業休止となる。他の者は、マイナス二〇度をこす寒さの中、野天での作業に駆り出されていった。

与えられる食事は、朝は、精白しない高粱と野菜の水のようなおかゆが、飯盒の蓋に八分目。昼は、例の黒パン一切れに砂糖小さじ一杯。夕食は、朝食よりやや濃いめのおかゆに、羊の肉が一切れ入ったものが、朝と同じ量。朝食、夕食

は食べるのではなく、飲むのである。

私は、作業休止で、宿舎に帰るとすぐに便意をもよおし、建物の裏に出る。雪が赤く染まっている。昨夜、血便が出たのだ。また白っぽい鼻汁のような中に、血がまじっている。三十分から一時間おき位に便意をもよおす。しかし何も口にしていないので、出るものは血のまじった鼻汁のようなものが、たらたらと出るだけである。

赤痢か、腸チフスカ、どっちにしても薬もなく、満足な治療もできない。こんな所において、生きて帰れるのだろうか。

このような毎日が続いた。私は、パンを少し食べるほか、朝夕は、おかゆの汁だけしか口にしないでいた。熱は下がらないが、なんとか腹の方は幾らか収まって、楽になつてきたようだ。

病院の裏山の中腹に、石を積んで“アムラルト”と蒙古語で、遠くから見えるように書いてある。“休養”という意味である。ここはもともと病院というよりは、蒙古政府高官達の保養所のような所であつたらしい。

病院での生活は、全く何をすることもなく、朝から晩までごろごろしているだけである。十分な薬もなく、適切な医療処置もできず、ただじっとしているだけである。自力での回復力のない者は、次々死んでいく。この病院だけで、毎日数人が死んでゆく。昨夜、祖国の話をした隣の者が、翌朝、冷たくなって死んでいたこともあった。捕虜として、モンゴルに入った日本人一万二千人のうち、二年の間に、二千人をこえる者が死んだのである。その殆どが栄養失調、発疹チフスなどによるものであった。

北海道 東島房治

ある日、他の班の兵隊であるが、腹が痛いとしきりに苦しむ出した。日本軍の軍医が居るので、診察して貰ったところ、糞詰まりだとの事。浣腸をかけたところ出て来た物は何と細かく砕いた骨ばかり、出る出るわ、吃驚する程出た。魚の小骨

と違い動物の骨は消化しないのだ。彼は虱も食べていた兵だが美唄出身の体格の良い男なので人一倍腹が空くのだろう、危なく命を落とすところであった。

食事に粉が入っているので盲腸を心配したが、粉はある程度大きいので心配する程のこともなく、誰も盲腸にはならなかった。

入院

愛知県 鈴木英一

あまりに多い病人の発生に、ソ連側は収容所の裏に天幕の仮設病院をつくり患者を収容し、私も入院させられた。

天幕は一張り十二人程収容していた。入り口の天幕は重病人で、ここで息を引きとってしまう人が多かった。死を脱して少しよくなると次の天幕に移され、順次、天幕を移り、やや回復すると退院である。

私も三週間程して天幕の仮設病院を出て、ハラグンの東方二二〇キロ程にあるヤブノロワヤの山にあるゲネラルパーチ病院にハラグンの十数人の患者と一緒に転院した。

この病院は日本の軍医がおり、薬こそ少ないが食事と静養で体力が回復して約一カ月程で退院、ヤブノロワヤ駅から東南四キロの山の中のサハリン収容所に移動させられた。

石川県 藏 久雄

病院となる部屋は勿論汚れた兵舎であった。朝から夜まで一日中掃除で終わった。鉄製の二段ベッドも運び込まれた。どうにか病室らしくなってきた。しかしながらレントゲン室や薬室は未だにできていなかった。ソ連医師二人、看護婦二人が私達に色々指示することとなった。四、五日して日本医師も二人来られた。収容所はどこからともなく集まった人達は一千人程に達した。病院も忙しくなってきた。毎日五人、十人と入院してくる。約一カ月程で病室が満杯とな

る。患者さんは栄養失調と高熱者ばかりだ。私達の仕事はタオルで頭部を冷やすことであった。院内には患者食を作る炊事もできた。素人の同僚がわずかな米、パンで患者食を作った。私達はわずか良い雑炊であった。毎日朝、通訳と医師が回診する。指示といえは頭を冷やす事と、薬は熱冷ましだと言って白い錠剤を一つ与えられた。診察も漠然としたものであった。薬物は何も準備されていない。毎日のように患者が増えてくる。病院も満杯になった。数日してやっとリングルが数本入ってきた。必要な患者に行き渡るはずはなかった。私達はせめても思い、一本の半分ずつ注射して回った。ともかくも同僚達はかけずり回り患者たちの手当てに忙しかった。

患者食や少量の薬品が来たとはいえ、既に遅かったのではなからうか？ 毎日のように亡くなっていられる同胞たちの屍を見送らねばならない。私達の気持ち、誰に伝えたらよいか、ただ合掌して見送るだけであった。

朝夕の配膳も忙しい労働の一つでした。食欲のない患者も多く、又、わずかの量も口にするのでできない人達には何度無理に口に入れてあげたことか。医師には食糧とか薬物の量とかを色々願ったが全く無理であった。同僚たちの労働も昼夜と働き、もうくたくたであった。限界にきている。医師とどれだけ口争いをしたことか、これも無理であった。同僚達と譲り合い、その日その日を過ごした。それでも毎日のように満足に食事、薬も口にする事なく故郷の地を踏まれない人たちがいる。

六 医療について

三重県 川邊幸治

抑留の中には、衛生兵はいたが軍医はいなかった。作業に出る出ないはソ連軍の軍医の判断である。軍医に「大丈夫」と言われたらどうしても作業に引張り出された。一番困るのは年老いた召集兵で、神経痛で脚、腰が痛いと言っても「ソ連には神経痛という病気はない。ラポート(仕事)」と言って、作業に出なく

てよいと診断してくれない。これにはいくら説明しても無駄で、痛みをこらえて作業に出た兵もたくさんいて気の毒だった。

三重県 葛巻尊男

ところで、入ッ当初から生水を飲むことは厳禁され、ラーゲリ内に「湯沸所」を設置して常時湯茶が用意されていた。私はこの湯沸所に勤務することになり、朝三時起きて五百リットル余りの水を入れる大釜に火をつけるのである。朝の湯茶補給も終わり、舎内殆どの者が作業に出かけラーゲリ内がひっそり静まり返る頃、釜の横でごろ寝をしてしばし仮眠をとるのである。午後は釜焚き用の薪割り、四時頃より夕食用の湯沸しと、すべての作業が終わるのが夜の八時過ぎ、これが私のノルマのない一日の作業であった。寒風吹き荒む屋外で、空腹とノルマにさいなまれる激しくて辛い肉体労働から解放されようやくこの体に合った仕事を与えられ、またこの湯沸所が炊事場の隣にあつたので、食事も炊事場からの直接給与となり、栄養失調症も日増しに回復し始める。

昭和二十二年、抑留二回目の正月を迎える。雪降りの日が続いていた。三寒四温、多少暖かく感じる日もあつたが、横降りの粉雪が毎日のように降り積もつていた。零下三〇度以下になれば野外作業は一時中止されることもあつたが、湯沸し勤務の私には逆に沸騰まで長い時間を要するようになる。

そんな頃、一日二回、五キロも離れた川より水を馬桶で運搬してくれた同僚が、雪上車の運転を誤つたのか事故を起こし、発見が遅れ凍死したとの知らせ。毎日二回、顔を合わせ親しくしていた友の悲惨なこのニュースは、私にとつて最大のショッキングな事件であつた。

三重県 葛巻尊男

三カ月後のある日に左手の人指し指が急に痛み始め、一晚中疼き、まんじりともできないで一夜を明かし腕も腫れ上がつていた。翌朝の診断の結果「ひょう

疽」とかで直ちに手術。勿論麻酔薬があるわけではないので「なま」の切開手術。激痛の余り一時失神状態。半日間ベッドに寝かされていた。今も左手人指し指の変形した爪を見る度にこの時のことを思い出すのである。この時の手術担当の富山市出身の軍医中尉の肝煎りで舎内勤務に就くようにと手配されるのである。

愛知県 水野朝之

八百人の収容所全員が悪性のアメーバ赤痢に感染して次々と他界されることになり、三百人の尊い命が失われました。だれ一人として「炭を食べる」ことに気がつく人もなく、そこへ私ども三百人がその補充で編入させられまして、私どもも次々と感染してしまい、このような状態になつても「ソ連」当局では病人とは認めないのです。何度交渉しても体温が三七℃を越えない限り病人ではない。又アメーバ赤痢なんて、そんなもの病気でない、薬はないと言われました。私は常に忙しく飛び回つていて、常に自分を自覚して「我思う」の状態でありましたが、感染してしまひまして血便が出るようになって、ここで死亡しなければならぬのかと古里日本を想ひ肉親を想つて、悔しいが死を覚悟をしまして「我あり」の状態ではなくなつてしまいました。

けれどもちようどその時、我が小隊内の元衛生兵長が「炭を食べると治るかもしれない」と初めて提言していただいたことにより、私も収容所全員も「炭を食へて」助かることができました。私は助けられた後に元衛生兵長さんに問いますと、「別にそのような事を聞いたこともなく教育された事もなく知識もありません。ただ、山で仕事が終わつて焚火をした後に火を消すために水をかけてきた消し炭を見て、手に取つて直感的に、これを食べたらもしかすると治るかもしれないと思ひました」「なぜなら、乾電池のマイナス極は炭素棒ですから、これを腹の中へ入れるとマイナス極の雰囲気にする事ができるかもしれない、もしそのようなになれば、菌はプラス極内では活発になつて盛んに繁殖しますが、マイナス

極内では活動が抑えられてしまいますから、これを食べると菌の活動を弱らせることができないうかと思つた」と言います。彼は、自分も血便が出て、このままでは死に至る事を知り、衛生兵として常に衛生的に物事を見たり考えたりして、絶えず、その思いの中に入り込んで集中されていたので、これを食べると助かるかもしれないと直感されたと思います。又、彼は初め、分隊長に申し出たが、「そんなもので治るもんか」と蹴られてしまつて、私(小隊長)に提言してくれたのです。これは天の助けか分かりませんが、大いなる御方のお導きがあつて「我あり」の状態にして助けていただいたと思えます。これは決して偶然ではなく、大いなる御方のお導きによるものであると思えます。心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

愛知県 水野朝之

ブヤンキー山中収容所は、五百人のところへ三百人が編入されて計八百人の収容所になった。当初は八百人の人員であつたが次々と死亡して、我々がその穴埋めに編入されたことを知つた。当初は気が付かなかつたが、便所へ行くと(外に溝が掘つてあつて板二枚が渡してあり、板に両足を乗せて用を足す)血便が至るところにしてあるのだ。一カ月半位して、編入した我々三百人全員が悪性のアメーバ赤痢にかかつてしまった。悪性のアメーバ赤痢は熱はなく、下痢が激しく、粘液便から血便となり脱水して衰弱し死亡していく恐ろしい病気である。大陸の人々はほとんどアメーバ赤痢の免疫を持っていて発病する人は少ないそうだが、我々日本人はそれがなく、すぐ感染して発病しやすく、薬も持参のセイロガンが底をつき、医療室へ行つても薬はないと言われ、しかも熱が出ないので病人と認定してもらえない。したがつて休むこともできず、仕事に出ればノルマは一人前に計算されて仕事を課せられるので苦しんだ。

ほとんど全員が感染してしまい、どうなることかと思つていたが、私の小隊の元衛生兵さんが「炭を食べれば治るかもしれない」と言い、初めはそんなもので治

るか? と思つたが、溺れる者は藁をも掴む思いで、最初、私と数人の者がそれを試してみた。これは松の木を燃やし赤熱させ、水に漬けて消し炭を作り、それを砕いて粉にして毎食後、茶碗一杯位食することで、約一カ月後に完全に治癒できた。約十日位で下痢が止まったので所長に報告進言して、収容所全員が木炭の消し炭を食するようになって全員が助かることができた。私は当初、ここで命を失うかもしれないと思ひ恐怖を感じたが、助けてもらうことができた。

北海道 工藤清吉

私の最初の仕事は、貨車で送られてきた部厚い木の皮を降ろす作業だつた。経験したことのない寒さで着ていた防寒具は役に立たず、手足を凍傷にかける者が続出した。私も足の感覚がなくなり「やられたか」と思つたことが何度もあつた。作業場では木の皮を燃やして暖を取つたが、かざした手や顔は熱くとも、背中では寒く足は冷たいままだつた。

厳寒に耐えるだけでも精いっぱいなのに、食事が乏しい。主食の黒パンが一日三五〇グラム。夕食時分配され三食に分けて食べると言うが夕食に全部食へてしまう。でないと空腹で眠れない。例え残しても夜中に盗まれてしまうからだつた。だから朝と昼は雑穀粥だけだ。

その粥も柔かで飯盒に半分もない。これでは到底労働する者の食事ではない。私達はたちまち栄養不足で体重を減らしていった。それに加えて虱が発生し容赦なく血を吸い取つた。毎晩虱取りが日課となつた。私達が痩せ細っているのに虱は丸々と肥え太つて、潰すとパチンという音をたて血が飛び散つた。

発疹チフス騒動で虱を退治する為、夜肌着を外へ出して凍らせ駆除しようとしたが効果はなかつた。街中まで出かけ高熱缶で身ぐるみ脱いで卵まで死滅させてもらった後はしばらく痒くない暮しができたがすぐ元の木阿弥になつた。

私自身も脚気の症状が出て脚がだるく、夜目が霞んで見えなくなつた。体力も衰えてふらふらになり、小さな水溜りも飛び越せず回り道をした。階段も登

る力がなくなりはつて登った。一日一日が生死の間で、朝起きたら隣の者が死んでいたということもあった。

戦争が終つて帰国できると思つたのに、このシベリアで死ななければならぬかと呪つた。

衰弱死の危機から脱出

二十一年二月、本部勤務と島津、大竹両中尉の当番を兼ねていた自分にも、運命の厄病にとりつかれる時がきた。我慢していた下痢が悪質の血便に変わり、物凄い腹痛に襲われ、渋谷軍医の診断の結果、患者病棟に移された。

岩手県 千葉義一

病舎は百人ほどで満員。発疹チフスの高熱にうなされて、うわ言に妻子や母

親を呼んでいる患者。腹痛を訴え苦しむ者。下痢患者の用便の音とむせ返る悪臭。栄養不足から結核が昂じ、咯血する青白い顔の男。戦友に看取られ、今正に昇天しようとする栄養失調者。虚ろな目を天井に向け、伸び放題の髭の下に萎えしなびた肌、痩せ細つて小さく老化した肉体は、一年前、勇躍満州に渡つた秀麗な眉目輝く二十歳の青春の末路なのであろうか。なぜ天はこれほど残酷に我らを処遇するのであろうか。死を看取る戦友もはや涙も枯れていた…。

こちらにも病棟に落ち着くが早いか便所通いが始まつた。病室の東西両入口二カ所に、患者用の木樽に踏み板を乗せただけの便槽が露出のまま置かれていた。凄惨な腹痛と一緒に便意が襲ってくる。便槽をまたぐ、胃の中は空なはずなのに、コバク色の血便は多い。熱も出てきた。寢床に入つてまたすぐ便槽に走る。行列で満員だが我慢するに待たなれ、失禁する生温かい血便は、肌着との間を百足がはうような感触で流れ靴底に溜まる。

替わりの肌着はない、どうしようと思つたとき、後から「千葉よ。洗濯してやるから脱いでこれを履けよ？」天の声か…振り向くと満州時代の古兵殿であつた小峯兵長の顔があつた。彼はこの病棟の勤務であつたらしい。

食事は所属兵舎より玄米の重湯らしいものが届けられるが、皆ガツガツ食つては便所通いを続け、かえつて胃腸を苦しめているように思えた。もちろんこれほどの重症患者なのに、医者の回診、治療、投薬もない。衛生兵が検温する程度で、自分の病名すら知らされず、ただ死を待つばかりの病棟である。

入室以来、目に見えて痩せ続けてきた。自分で二の腕を握ると親指と中指でまわる。腿をつかむと両手の親指と中指で回つた。これは大変、ここで死んではいけない。ようし、食つて死ぬか食わずに生きるか、賭けをして断食してみよう。これこそ命賭けだ…食事は隣の人にやつて、食事の時間には毛布を被り我慢することにした。

断食二日目には熱もあり足がふらつき、便槽まで床板つたいに歩くほど衰弱したようだ。

その頃、左隣に白髪混じりの人が毛布をかぶり、うんうん呻きどおし、ひどい臭いの血便がこちらに流れ込んでくる。朝になつて静かになつたので、毛布を揚げて覗くと、呼吸がなくなり死を迎えていた。この人は浜松出身の五十歳前後の高官軍属だという。やがて仲間の軍属連中が通路に集まり、娘婿という若い人がきて、おいおいと泣きだした。こちらにも心細くなり、滅入つてしまう。

さてまたその翌朝、反対右側に浅黒い屈強そうに見える、うんともすんともなく眠つてばかりいた男が死んでいる。いよいよ三日目は、俺の番かなあ…と、死と対決することになった。

明けて翌日、ぽかりと眼が醒めた。「おお、俺は生きてるぞ」奇跡というべきか、悪性の下痢は止まり、熱も大分下がつたらしい。おかゆを食べてみると、下腹に力が出て爽快になつた。今まで何度か死線を越えた。「俺は不死身なのだ、絶対生きて帰るぞ」…そんな叫びが胸に込み上げてきた。

抑留中にはこの病気のほか、いろいろの危機があつた。栄養失調になつて頬がこけ、肋骨はあらわに浮いて胸肉がこみこみ、正に骸骨を見るような姿にもなつた。

酷寒期の作業現場から帰る夕方、ホロ付きトラックの疾走中ついに凍傷になつ

たことがあった。左手の薬指と鼻の頭が白蟻状になり感覚がない。あわてて両手で擦り合わせたか、やがて双方とも水泡となり爪が剥がれたが、幸いにも皮膚が再生して回復した。

ある兵隊は凍傷で両手の全指の第二関節から先がただれ、腐肉が削げ落ち指先の骨だけが残り、作業用具も使えないので、彼の現場ではノルマを仲間みんなで背負うということもあった。

また靴下や防寒シャツの綻びの穴からの寒気で凍傷にかかる者も見ていたので、充分注意して補修するが、古軍足をほどこいて縫い糸に用い、針は鋼鉄線拾って来て先を石で磨ぎ、頭は石でたたいて穴をあけ利用した。

ある時は左股から足先まで赤く腫れ上がり、痛くて歩行もできなくなった。ソ連軍医に診てもらおうと、この地方の風土病の「クインケ浮腫」という病気で、蚊が媒介するものということではしばらく休業したこともあった。幸い何度も死線を超えて生き耐えたものである。

鳥取県 横川茂男

十二月三十一日、入ソした年の大晦日、いつものごとく戦友の氷を取りに黒龍江の支流ゼイヤ川に出て帰り、戦友の看護を終えて帰りました。翌朝は元旦です。別段何事もなかったのですが、丁度入ソ間もない頃であり、満州からもち米が持参されたく、一人当たりぼた餅二個の割当があり祝餅としていたただいたわけです。食事が終る間もなくその場に倒れ、意識がもうろうとなり、チフス感染と決まり隔離棟に入所する結果となったわけです。まだ意識は少しある状態で、裸体となり消毒されて寒中、無蓋車のボデーに投げ込まれた時をはつきり覚えております。そしてどこか他の施設に転送されたわけです。後で聞いたわけですが、この時患者の一人一人を診察して、生きる見込みのある者、ない者の区別をして処置されたようです。この時の処置の結果、私は八十二歳の生命を今日まで見る事ができたわけです。

病 気

岩手県 吉田欽三郎

シベリアへの移動直後の昭和二十年十一月か十二月頃だったと思う。

シベリアという急激な環境の変化ではなかったろうか、凶らずも「黄症」になったのだ。

全く食欲がなく、だかららとして力が出ず、顔から目の玉まで黄色くなったそうである。

「何か食べなければ…こんなシベリアなんかで死んでたまるもんか…」と思っただころで、食べたいものを売るところもなければ、買うことも出来ない抑留生活である。

日直は(寮内の世話人兼人事係)一目見て分かってくれ翌日の作業から外し、ドクター診察の手続きをしてくれたが、ソ連軍医は「ラボータ ダワイ(仕事に就け)」と言って薬も休養も与えず、その日も営内作業をするよう言われたのであった。

夕刻、仕事から帰った戦友達も心配してくれたが、どうにもならない捕虜収容所である。毛布の中で思うことはただただ故郷のこと、母のことであった。

そうだ、母はよく風邪等で休んだ時、片栗湯を飲ましてくれたことを思い出したのである。

「何か欲しいものは…」と言われて、戦友仲間同士の気安さに、その片栗湯のことを話したのである。不思議や…思いがけなくその片栗湯が出てきて飲ませてもらえたのである。有り難かった、本当に有り難かった。小隊の者も分隊の者も注目の中だったろう。自分一人だけが珍しいものを食うのであったが、恥ずかしさも何もなかった。

戦友達が助けてくれたのだ。

聞けば、ジャガイモ二個が釘穴のオロシ金によつてすられ、水筒の熱湯が注が

れてシベリア式片栗湯が出来たそうである。

欲張りではない、砂糖つけない片栗湯であったことは記憶しているが、ジャガイモをどのようにして探し求めたのか全く知る由もなかった。

食券で炊事からもう食事以外の闇の物と分かれれば厳しく問いただされ、問題になる抑留生活の中での好意であった。

とにかく食欲の全く無かった身体に片栗湯が入り、次第に良くなったのである。

母が夢枕に立つてくれたのだ。そしてもちろん、戦友達が助けてくれたのであった。

思えば数日前、工場の引き込み線のわずかなレールの高さにも躓いて倒れたことや、収容所の丘の急斜面を登って寮に入る時、戦友達に手を添えられたこと等が思い出されるのであった。

怪我

思えば色々の職種があり、色々の仕事に就き、させられたのも捕虜の天命である。

この地タイシエツト四十一キロメートル地区の開発と生産のメドが立ったのであろう、奥の七十五キロメートルの収容所に転出させられた時も、指物時代の星班長と同行し得た。

奥に移動しても、経験豊かな星さんは寮の建設を命ぜられ、我々は伐採した松の木の皮を剥ぎ、太鼓型に両面を斧でハツリして、この丸太を土台から順に積み重ねる丸太建築であったが、底面は斧で溝を掘り、付近の山から苔を採取して防寒の気密材として詰めた丸太を積み重ねたのである。

とにかく窓部分の切り欠きも終わり、窓際壁上部に長い丸太を載せ、窓の両壁部を固定する作業に入った。

長木を渡してその上に丸太を載せて、これに跨り斧で溝をハツつておいた時、僕は不覚にも百八十度回転してそのまま落下し、地面に捨ててあった丸太の切

り欠きに背中を打って気絶したのである。

「オーイ 吉田：」「吉田しつかりしろ：」と、揺り起こされた……。

だんだん顔の上にいる周りの人達の頭を薄ボンヤリと……そして次第にハッキリと見る事が出来たのであった。

郡山の星さん(現性尾花さん)、本当に有り難うございました。皆さん、有り難う。

当時二十七歳の若さであり、この背中への打撲はシベリアの仕事に追われて内地に帰るまで気にもしなかったが、結婚後、子供達と回転宙返りの遊びの時、背中に息の詰まる痛みを感じ、病院のレントゲン撮影結果「背骨に傷があり、傷が傷を覆う軟骨が生まれて、二個の背骨が一個となつて固まったために曲がらないですよ……」と言われ、以後無理な屈曲運動を慎むよう言われた。「後遺症」となったのである。

大阪府 岡崎博好

〔発疹チフスで入院〕 二十四年

早朝、無性にどの渴きを覚える。起こしてくれた隣の兵隊が私をのぞきこんで「どうした三オカザキ」と叫んだ。四〇度近い熱で頭にさわれぬほどという。全身に発疹だ。間違いなく発疹チフスだ。ソ連側に報告され、直ちに入院となった。高熱でうなりながらトラックの振動は脳髓を突き刺すようだ。ゴスピタルに着いたのは昼過ぎだった。三十人ほどの日本兵がベッドでうなづいてた。何日かたつたのか、ある朝、セストラ(看護婦)に起こされた時には熱も下がり発疹も消えていた。型通りの診察の後「ラボト・ニマグー(労働不適格者)と認定された。体重三十五キロの骨と皮の体を見れば分かるように、労働に堪える体力は持っていないかった。

三重県 廣田吉生

〔肺浸潤で生死の淵を彷徨〕

昭和二十二年一月頃のことです。作業から帰ると「米搗き当番」を言われました。(この当番は作業から帰った後に三日間、四時間行います)米の脱穀を足踏みしながら、約三メートルの杵を踏んで行いますが、米も凍結しているために常温で行う場合の数は倍はかかりました。米搗き小屋は板で囲われた物置小屋でした。雪にスッポリと包まれて、内側は作業者二人が吐く息が天井に当り凍り付き、冬の長期間、幾人かの吐く息と糠埃が重なって、天井、柱、壁にまで厚い氷壁となり、冷凍庫の中で作業を行っていました。もちろん暖房の設備は無しです。杵を踏む全身活動で汗をかき、そのまま屋外に出たり入ったりしていましたので風邪をひいたのですが、幾日も発熱していても倒れるまでは作業を休むことは出来ませんでした。かなりの高熱になり起き上がる事も不能になった時、日本人の旧医師の人が体調を診て「肺浸潤」で体温も四二度近くありますとの診察で、ソ連側に伝え、作業を休む許可を得ました。薬も何も無く横になり寝ているだけでした。飢えに飢えていたのに食欲は全く無く、水が無性に飲みたくても水を渡してくれる人もいない。ひたすらに水を脳裏に描き続けていました。部屋の隅に樽に入った防火用水があることを前から知っていました。水は長い間取り替えることもなく、汚れは酷くなっていました。夜間になり人がいない時に起き上がってフラフラの体でしたが、水の樽に近寄り水を手ですくって満足するまで飲みましたが体調は更に悪化して、体温も更に上がる傾向となりました。もう命はあまり持たない……と思われていましたが……日本に帰るまでは死ぬまいと心の中で叫び続けていました。

この時期に今までにない事が起きました。それはソ連政府が各所の收容所を調査することになり、役人が私達の病室に入り、私を見て「この人は酷い病人のようだから病院へ移しなさい」と收容所長に命令しました。今までにない事で、私は「助かった」と心の中で叫びました。早速に入院することになり、トラックの

荷物台にまるで丸太棒を運ぶようにゴロゴロと乗せられました。トラックは凍りついた凸凹の大きい雪原を走り出して、振動と大きな揺れで、荷台に置かれた私はトラック上をゴロゴロと転がされて、いつしか失神していました。何十キロも走り続けたと思いますが、頬を叩かれて我に返りました。暗くなった頃、病院の大きな門を通って、五階建ての病院に到着して路上に降りましたが、介添者はいなく、どのようにして歩いたのか記憶はなく、放心状態だったので。陸軍病院でした。ここなれば医師も薬もあり、助かると思えました。病室内へ入るには「シャワーせよ」との命令で、シャワー室は水と同様の温水を頭からかけられて放心から正常に戻されましたが、もう身体はヨレヨレの状態で、生死の間を彷徨していました。診察室の受付前で待つ間、大きな咳が連続で止まることなく苦しみを抜いている様子を見ていた看護婦が、私の右の胸にカンプル注射を打ってくれたので、しばらくすると咳が止まり平静に戻り我に返りました。病室に移されて看護を受けましたが、人種差別のない国であり、また日本人は私一人のため珍しうに近寄って慰めてくれました。春が過ぎる頃になり健康体を取り戻したので退院となり、收容所へ帰りました。捕虜の身でありながら陸軍病院に入院が出来て、命を救われた破格の取り扱いは受けることが出来た幸運は忘れる事が出来ません。

異郷に病む

愛媛県 井手正人

サマルカンドの冬は長く、そして厳しかったが、その内に作業に習熟し、人間的な思考や精神的な余裕が出来るようになった。昭和二十一年四月のある日、突然発熱し胸痛を覚えた。寒気がして苦しかったが、作業はそのまま続けた。風邪だろうから一晩ぐっすり眠れば回復するだろうと考えていた。翌日起床して、かつて経験したことのない激しい胸部の疼痛に襲われ、歩くことも出来ず、そのまま座りこんでしまった。親友の渡部兵長が医務室に連れて行ってくれ、直ちに

収容所の病院に入院した。軍医が背中に試験穿刺して抽出したものは、血と膿がまじったようなどす黒い液体であった。

軍医は私に言った。「悪性の肋膜炎だ、かわいそうだがここには薬もないし、食事悪い、どうにもしてやるのが出来ない、じつと安静にして、体力の回復を待つだけだ、話をするのもよくない」

私はこの軍医の言葉と表情から、危険な状態であることを悟った。三八度から三九度の発熱が続き、全身の脱力感と、胸部の激痛で会話する気力さえ失い、食事は全く喉を通らなかつた。話もせず、ベッドに寝たきりでいたが、二、三日経過して胸痛が和らぎ少しずつ食事が出来るようになった。

この病院を担当しているソ連軍の女の軍医中尉がいて、時々見回りに来ていた。彼女は診察はせず、すべて日本の軍医にまかせ、医学の知識を教えてもらっていたようである。ある日私のところへきて、顔を近づけ、病状を聞き、それから手振りを交え、平易な言葉で熱心に語りかけて来た。分からない言葉もあったが、大意は理解出来た。

「ソ連へ来て悪い病気にかかり気の毒に思う。お前はまだ若いから日本にお母さんがいるだろう。お前がソ連で死んだら、お母さんは悲しみ、そしてソ連を恨むだろう、私はソ連をそんなに思われたくない、身体に気をつけて無事日本に帰れるよう祈っている」そんな意味であつたと思う。

このあまり美人ではない二十七、八歳の女医の体臭には辟易したが、彼女の言葉には真情がこもっていた。

この病院には四十人くらい収容されていたが、重症が多いので死亡者が多かった。朝、便所へ行く時、廊下に死体が置いてあるのを時々見かけた。

ある夜、私は便所へ行くため、壁づたいに衛生兵の控室の前を通つたら、中から話し声が聞えて来た。「三号室の井手も助からないだろうな」K衛生兵長の声である。私は脳に衝撃を覚え、足がふるえているのが分かつた。

ベッドに入ると、いろいろな思いが浮んでは消えた。一万数千キロかなたの故国

はあまりにも遠く、故郷の思い出は、まるで前世の出来事のように、次第に遠のいていくように感じられた。異郷の雪の下に冷たく埋められることはたまらない思いで、何としても生きて帰るため、最善の努力をする事を、その夜、心に誓つた。深夜の病室は静まりかえり、私は初めて真の意味の孤独を知つた。

私は軍医の言葉を忠実に守り、話をせず、安静に努め、食事はゆつくりとそしやくして食べた。一週間くらい経過して、快方に向つていくことが自分でもよくわかり、それから順次回復していった。

福島県 橋本宗明

二十年の暮からシラミが物すごく発生し、そのシラミが媒介する回帰熱という熱病が非常に蔓延いたしました。栄養失調と合わせて、その回帰熱で倒れる者が非常に多かつた。

年を越えて二月ごろだつたかと思いますが、私もその回帰熱に冒されて、入院をいたしました。私が入院したころ、アメリカ製の、梅毒の特効薬だつたんです。サルバルサンという注射液が入つてまいりまして、幸いにして、そのサルバルサンによつて、一命を取りとめることができました。そういう意味で死線を越えてやつとその年は生き延びることができたという経験を持っております。

千葉県 林興一

休日は一切無しの重労働、発熱三八度以上か酷い外傷だけ。神経痛、リウマチは問題外、作業忌避であると。日本人の常識は通じない、吃驚仰天、こんな国があるのか。こんな国に敗けたとは残念、無念、現実には捕虜！ 極寒の中の重労働と飢え、正にこの世の地獄、作業中の事故死、歩行中、就寝中の死亡、枚挙に暇なし。総員五百人中、自己管理出来得る者なんと十五人となりました。全く筆舌、言語に絶する生活を強制されました。過去どんな明文化された条約が締結されてあつても相手国に常識が無ければ紙屑同然である。

石川県 今西三郎

私は抑留中入院しまして、退院後ほとんど病院勤務をしておりました。その体験をお話ししたいと思います。

日本へ帰ると言ってたまされて、着いたところがシベリア。人影も何もない大荒野の囚人流刑地でした。たまされたシヨックは大きいですよ。今後どうなるのか、大変心配もしたし、またとにかく寒いのと腹が減るのにまいりました。

一日の食事は、コーリヤンを原料とした赤いパン三〇〇グラム、自分たちは二〇〇ぐらいしかありませんでした。実も何もないスープで、とてもそれでは食べた気がしない。それで栄養失調になって、ばたばた倒れていきました。

作業へ出ていくにも、足が上がりません。直ぐつまずいて足が上がりません。やっと収容所に帰ってきた友は、翌朝冷たくなって亡くなっていました。そんな状態がずっと続きました。ソ連では、熱がなければ絶対に休ませてくれませんでした。栄養失調は病気とは認めてくれないんです。頭が痛い、目がかすんで見えない、足がふらつく、そんなことではとつてもだめ。しかもマイナス四〇度まっは作業に出ます。飢えと寒さ、きつい作業、たまったものじゃありません。みんなふらふらになって、どんどん倒れていきます。

そのうちに追打ちをかけるように赤痢が流行して、次々入院してゆきます。かわいそうになら思ったら、自分もやられました。ひどいさし込みを伴う下痢になる。体の中にこんなに水分があるかと思うほどドロッと出ます。何かとめる方法はないか。炭が水分を吸収させるのではないかと思つて、焚き火の炭をガリガリと食べました。外に方法はなかったです。一日三十回ぐらい、雪の上にしやがんで痛さに耐えました。痛いです。尻を出してやるので冷えてきます。痛みと寒さ、とつてもたまらなかつたです。

しまいに出来るものが何もなく、遂に何か膿のようなものに血が混じってきます。目も黄色くなつてきました。これじゃもうだめだと思ひました。入院と

決まりました。これで再び友と会うこともないだろうと思つて、また死んだら頼むぞ、帰つてこなかつたら頼むぞと別れを告げて入院しました。

入院したといつても、当時の病院というのは医者もおらず、薬一つないんです。ただ患者を一カ所に集めただけ。そういう状態でした。自分が入った部屋は七十人収容の大部屋でしたけど、毎日三〜四人は亡くなつていきました。ひたすら痛みに耐えました。こんなところで死んでたまるか、絶対死なんぞと自分に言い聞かせました。

また、食べなければ死ぬ、一口でも食べて頑張りました。一人いた衛生兵が回つてきたので、何か薬があつたらとお願いした。「まあ、これしかないな」と言うて一服頂きました。どうか効きますように。苦しいときの神頼みと言いますけれど、そのとおり。祈つて飲みました。奇跡が起きたんです。二十五回、二十回と日を追いだんだん痛みの回数が減つてきました。十五回、しめた、これで助かるぞ、光が明るくなりました。十回、五回と、とうとう奇蹟的に痛みがとまり、下痢もとまつてきました。

一カ月ほど入院して、それで退院することになりました。発疹チフスが流行してきました。病院勤務者は三十人ほどおりましたが、その中から四〜五人入院して、次々亡くなつていきました。私もかからなきやいいがなと思つていたら、またやられました。友は一生懸命冷やしてくれました。いつとき四十二度まで上がったというんですけど、そんな高熱あるもんかね。夢うつつの中で、今度はだめだろうと思ひました。友が寝ずに冷やしてくれたおかげで、朝型には若干下がり、入院見合わせとなり、それから日を追い、だんだん下がつて平熱に戻ることができました。再び死より脱出することができました。うれしかったので万歳しました。

石川県 介田實男

そうこうしているうちに、私もあまり丈夫でなかつたものだから栄養失調にな

り、黄疽になりました。黄疽と言う病気は頭のてっぺんから足の裏まで、黄色いというよりも黄緑に近いような色になり、舌の先までその色がすこくなる。私は診療所の一室に、入院といったらおかしいけど、部屋があつて、そこへ入れてもらったんですけど、ふらふらになり、歩けないものだから、友達が私を背中にしよつて、そこまで連れていってくれました。

そこで三週間ほどおりましたところ、少しいい食べ物を出してくれりや治るんです、栄養失調やから。三週間ほどで大分元気にありました。その時ちよつと熱が出たものだから、また二週間ほどおりまして、五週間ほどその診療所の部屋に休ませてもらいました。そして元気になって、歩いて隊舎へ帰りました。

ところが、友達は私の顔を見るなり、「おつ、お前よう帰つてきたな」と言うわけです。「お前をしよつて行くときは子供をしよつて行くようなものじゃつた。軽い子供のようなやつた。今こうしてお前をおぶつていつてやるけど、帰りは白木の箱に骨となつてくるかと思つた。お前、よう治つたな」と言つて、私の手をしっかりと握つてくれました。私の大事な友達です。それは名前は忘れましたが、長崎県の人でした。そして私は命が助かりました。

私の入院

静岡県 飯島 久

司令部前の温度計は零下五五度を記録しました。冷たく沈んだ空気がジンと音を立てるような気がしました。二月初めだつたでしょうか、私がラゲル内をフラフラ歩いていると、急に腹が痛み出し、ヌルリと便が出てしまいました。止めようと思つても止まりません。ズボンを下ろしてみると、半透明の粘液のような便でした。僅かに臭いがしていましたが、着替えがあるわけなし、仮に着替えがあつたとしても、洗濯などできないのです。体の熱で自然に乾いてくるのを待つしかないのです。まともな食物が長く胃腸の中に入つていかないと、胃腸はだんだんと機能を失い、粘膜が剥げ落ちてくるそうです。末期症状でした。

体がグラグラしたと思うと、私は地面に崩れ落ちました。凍つた雪に泥を被つた地面は固く、零下数十度の冷たさだつたでしょうが、不思議と暖かく感じられました。これで作業に出なくてすむだろう。明日から休める。何か嬉しいような気分になっていました。幸せな気分でした。いつの間にか気を失つていたようです。

気が付くと病院の廊下にくまなくおりました。朝になればどこかが空くのです。毛布一枚と小さな雑嚢、たしかに自分の全財産でした。七期生の誰かが私を病院まで運んでくれたのでしょうか。それが誰かは分かりません。あのまま地面に放置されていたら、一時間も経たぬうちに凍死していただしよう。

病院ではやつと私の番が来て、はいつくばつて空いている場所へ倒れこみました。嬉しい気持ちになったのを記憶しています。その後のことは全く覚えておりません。

幾日か経つて、気がついた時には四人部屋に寝かされていました。重傷者の部屋でした。軍医から君は胃腸が強かつたから助かつたのだよと言われました。それから幾日かたつて、おかゆのような食事を支給され、私は日に日に回復してきました。危険は脱したのです。

ある日、衛生兵から、君は元気になつたのだ。部屋の掃除でもして、だんだんと多力に力をつけなさいといわれました。好意から出た言葉で、喜んで私は承知しました。その人が木製の桶に水を入れて、部屋の外に置いてくれました。私は桶の中へ入れようと、持ち上げようとしたのですが、どうしても上がらないのです。そんなバカなど、いくら頑張つても駄目でした。君は助かつたのだと言われても、まだそんな状態だつたのです。思わず涙が出たのを覚えてます。

私が医師から言われたのは栄養失調二級でした。骨と皮だけのどんな惨めな姿をしていたのでしょうか、今考えても寒気がします。友人や医師、衛生兵のお陰で、薬はなくても私は助かつたのです。

シベリアの寒さについて申し上げますと、大体真冬は零下五〇度くらいまで下ります。九月には雪が降り、日本の旧正月のころが最も寒く、アラコルハという所では毎日零下五〇度以下でした。気温が零下三〇度以上に上るまで待機し、零下三〇度を超えるのを待って作業に出ましたので、毎日が半日作業でした。大変助かりましたが、冬はすべての物が凍っています。松の木も芯まで凍っていましたし、松を伐る時には、枝の張り方を見たり、倒してから木を刻む段取りを考えたりして倒す方向を決めるのですが、木が凍っていますから切口を平に切らないと木が倒れる時に株が滑ったり、舞ったりして思わぬ怪我をすることがあります。私も倒した木の先が計画よりずれて、隣の木に寄りかかつて倒れたものからです。倒した木の枯枝がはね返って私の額に当り、六針縫う怪我をしました。この時は大変な出血でソ連の軍医もさすがに心配してくれましたが、縫った方は良くなっても眼の周りの血ぐまが消えないで、怪談に出てくるお岩のような顔をしていましたので、大変長い間休みました。

(4) 死亡者について

和歌山県 岡本 昇

定期に女医の診断があるが、体温は平常、尻にまだ肉がついていると休ませてくれぬ。神経痛を訴えても、とり合ってくれない。こうして三か月を過ぎるころから栄養失調者が多くなった。上段のベッドからそのまま尻を出して下痢便をする者があつても、下段の者はこれをとがめることができない。こうなると入り口の片隅にあるむしろ囲いの部屋に收容され、何の手当てもなく、そのままにして置かれる。うつろな目は故郷の空を見ているであろうが「米の飯を腹いっぱい食べたい」と力なく言い残して死んでいった。

ソ連兵が死体を虫けらのように全裸にして、入り口のおどりに積み重ねて置くと、自然に冷凍化してゆく。三十体くらいになると私たちの出入りに差支える。やむを得ず死体を踏んで通らねばならない。はじめは戸惑ったが、次第に何の抵抗もなくなつてきた。死体は馬車に積んで、どこかへ持ち去り、どうなつたかわからない。お互いに生死をともした同胞の死体を踏むとは、許せないこととのそしりは免れないが、当時の生地獄にもひとしい状況の中では、人間の倫理など顧みることのできなほほど、極限の状態であつたと言ふことができる。

千葉県 土橋治吉

收容所名はスーチャン地区第十二收容所トダゴで、一年目の冬は兵約三百人が死亡した。二年目の冬は兵約六百人が死亡した。死亡された方は全員栄養失調である。墓穴は地面が凍つていて掘れないのであるが、たき火をして土を熱し、土が若干やわらかくなつたときに鉄棒で掘るのであるが、五十センチの深さにするには三日間はかかるのである。鉄棒の先が尖つていて、トントンと落とす

て穴を掘るのである。ラーゲルの周りは、鉄条鋼を張りめぐらし、二十四時間四隅には歩哨兵が立っている。月二回程度の銃声がしたが、脱走者の射殺音がある。だが、誰も見に行かない。今朝も戦友が三人死亡した。栄養失調であり、数人で抱きかかえて裏山に運び、鉄棒で掘つた穴の中に埋葬したのである。木片に氏名だけ書いて立てたままであり、風雨のため、数カ月で飛んでしまつて、誰の墓標かわからなくなつてしまふのである。

和歌山県 土井 昇

この工場に来て約半年くらいとき、この地の状況にくわしい軍属と下士官兵三人が、夜、收容所を脱走して、ソ満国境に逃亡した。夜中、非常呼集がかり、人員の点検に朝までかかった。

翌日、逃亡した三人がソ連軍用犬に発見され、三人とも射殺され、しかも我々にみせしめのためか、素裸にして收容所鉄条網のよく見える雪の上に転がし、約三か月放置されていた。(合掌)

高知県 安岡精治

昭和二十一年の七月になつて、班長より呼び出しがあつたので、会いに行つた。兵舎のうらの森の中に少しの広場があつた。その場所に穴を掘るとのことにて、翌日班員八人とスコップを持つて大きな穴を掘つた。第一班の班員十六人が荷物を持つて馬車が続いていた。冬季に亡くなつた戦友七十五人の死体であつた。私たちに埋葬せよとのことで、私はなんとも言えない悲しい気分になり、涙が出た。異国の土地で死んでいく戦友に対し心より冥福を祈つた。班員たちも顔色は土色になり、涙を流していた。

栃木県 佐藤充男

主食は黒パンだったが、その量は生きること精いっぱいのものであつた。仲間同

士の食事の奪い合いも見られた。こんな状態から、生きるだけに精いっぱい食事では体力を維持することはできず、爪は伸びず、頭髮、髭等も全く伸びずに散髪を必要としなかった。従って、死亡した者の遺髪は眉毛を切りおとした。生命を維持するに精いっぱいだったわけである。

栃木県 佐藤充男

抑留二年目あたりからは「栄養失調症による死亡」が多く、一日に十人に及ぶ死亡者があった。食べ物の話をしていて声が急になくなったら死亡という状況で、小屋に裸にして首すじに捕虜番号を下げただけで積み上げて保安した。近くに仮埋葬する穴を掘るのだが、のみと二十ポンドのハンマーで一日中掘っても二十センチがやつとのことで、春になってから丘の上に正式に埋葬した。部隊長が亡くなったときに初めて軍服姿で棺に納めて埋葬した。

新潟県 青柳善吉

收容所の近くには抑留死亡者の墓地があった。墓標のつもりか、白樺の木切れがあったので、その数を数えたら八百本だった。酷寒と飢餓に耐えられず、無念のうちに死んだであろう仲間の墓標に合掌しながらの伐採作業で、自らの運のよさに感謝するのだった。野牛や狼が墓を掘り起こすのか、遠吠えが夜半の寒気を通して伝わってくることもたびたびだった。

大阪府 小森淳男

当時私も、中隊と呼ぶのは何だが、中隊長をしており、小森中隊を通過した人で、亡くなった人たちの遺髪、爪、官、氏名、病名と亡くなった年月日時刻等を書き小さな袋に入れて、ラーゲルを転出するときも忘れずに持ち歩いた。そして四年目にして、いよいよ待望の「ダモイ」の日が来た。タイシエトを昭和二十四年七月十五日に出発して、ナホトカに七月三十日着、乗船待ちの間、約一時

間の道路掃除と、後はスパーチ、スパーチと寝かされた。また入ソ以来ナホトカで久しぶりの白飯と牛肉の料理で、ちよどブタを売る前と同じようなことで、顔は丸々していた。

八月五日、乗船(信濃丸)、このときに「遺髪袋」がソ連兵に見つかり、日本に持ち帰ることあいならんということになり、ナホトカで茶毘に付す前、戦友各位の協力を得て、一人当たり二、三人の割合で死亡年月日他を覚えてもらい、焼却したので承知が出た。乗船後すぐ日本の海員さんに紙と鉛筆を借りて、戦友の皆さんにも忘れないうちに書き込んでもらい、生きて帰る者の務めとして最後までキチンとなし遂げた。

八月七日舞鶴港上陸、引揚援護局の係官に、上記紙片を当時の軍隊言葉で「確度甲」として届けた。その数、実に七十数人だった。

島根県 八幡垣正雄

飲用水は硬質の地下水または川の水で、よく下痢を起こした。入ソ当初は池沼の水を飲んでアミーバ赤痢が流行し多くの死者が出た。また栄養失調による死者も多く、酷寒のシベリアに抑留された軍人、軍属等は五十七万五千人で、抑留中に死亡した者は六万三千人と聞いている。

新潟県 湯田太郎

終戦を満州の蒙家屯(このような名称でした)で迎え、武装解除をされ、シベリアのアンゲレンという地名の炭鉱のある集落でした。炭鉱より二、三キロはなれた所に收容所があり、そこに收容されたのです。

早速炭鉱要員と岡作業要員とに分けられ、早速翌日から炭坑通いが始まったわけです。私は第一炭坑要員で、それぞれ三交替制になっており、最初は第一班の昼間作業の朝八時から五時まででした。一組二十人くらいだったと思います。收容所を朝七時過ぎに警戒兵に守られながら出発、炭鉱に到着、入坑

するのですが、当時はまだ石油ランプでした。しかも一人一個ではなく、二人に一個といった具合でした。

入坑前には、所長のような人から、当日のノルマが言い渡され、同時に地方人の炭坑夫に一人ずつの兵隊が組まされ、今後この炭坑夫と一緒に仕事をすることを言い渡され、いよいよ入坑です。もちろん言葉はわかりません。手まねでどうやらエレベーターで下り、やつと切羽まで着きました。

これから採炭が始まるわけですが、お互いに名前もわかりません。上にいたときに所長に教えられたのですが、着くまでに忘れてしまいました。炭坑夫は「俺はブチコフ、お前は」という具合に手まねで聞くので、「俺は湯田という名前だ」と言うと、ウンウンと言いながら地面に字で書いてくれました。今でも覚えております。ブチコフもすぐに覚えたようでした。

すぐに粘土が足りないから取ってこいと言うのです。それはハツパをかけるときに使う粘土だったのです。それはエレベーターを降りてから途中で取ってきたものでした。私は思い出して、そこまで行って取ってきました。ブチコフは喜んでハラショーを繰り返していました。翌日からは途中で取っていくようにしました。

初日からノルマは達成されました。翌日はもちろんノルマは増やされました。ノルマを達成すると、翌日のパンの量が多くなるわけですが、決してよいことばかりは続きませんでした。それは、二年過ぎくらいだったと思います。落盤事故に遭ったのです。通路に落盤があったのです。前から危険な状態だったのですが、ノルマ、ノルマで補強することをしなかったので、遂に落盤したのです。

トロツコの音も聞こえないし、コンベアもとまり、不思議に思つて通路へ出て見ると、途中で落盤しているとのこと。みなで現場まで行って見ると、初めて見る落盤で、本当に驚きました。幅六、七メートルで、青空が見えるのではないかと思うほど大きな穴があき、通路は完全にふさがれてしまったのです。小さな落盤には前回も遭っていましたが、こんな大きなのは初めてでしたので、もう駄目だと思ひました。

さすが地方人は落盤事故にはなれていました。前にもこのような事故に遭ったことがあるから心配要らない、非常出口があるからと言うのです。この時分には片ことまじりではあったが、言葉はわかるようになっていました。ブチコフは送風機を何回もたたいていました。すると反対側からもたたく音が聞こえてきました。このとき、初めてみな顔が笑顔に変わりました。

ようやくにして非常階段を見つけました。それははしごを組んだようなものでした。三尺四方くらいの広さで、六、七メートル昇ると踊り場があり、またそれくらい昇ると踊り場があり、それを繰り返して数十メートル昇ったかは覚えておりません。地下水が出てはしごはツルツルすべり、踏みはずしたら真逆さまです。夢中で登りました。どれくらい時間がたったのかもわかりません。ようやく天井に光が見えてきました。

前後になります。当時はすでにランプではなく、充電式のバッテリーを腰につけ、電気は頭につけるもの変わってしまいました。八時間は大丈夫ということでしたが、光が見えてきたころは、ほんのわずかしか見えない状態でした。ようやくにして昇り終わって、出たところが、何と第三炭鉱のあるところでした。坑内であつたおつたわけです。

第一炭鉱まで下り、みなと一緒に無事を喜び合い、帰路につきました。後始末は二番出、三番出の人たちがしたわけで、翌朝入ったら、きれいに片づいていました。どこに落盤があったのだらうと思うくらいで、相変らずノルマの繰り返しが続きました。

高知県 山本明司

昭和二十一年の正月前にヤブロイ駅の積み込み要員として山を下りたが、そこはソ連の兵舎を改造して、粗末ながらペーチカもある古い建物だった。そのころ、入ソして二か月ぐらい経過していたわけだが、栄養失調と入浴をしないよごれた身体に猛威をふるって増え続けたシラミ。そのシラミが媒介する回帰熱の

ため死ぬ者、脳症を起こし故郷に帰りたいと父母を夢見て狂い死ぬ者、結核を併発する者が続出して、急遽兵舎を仮医務室に当てていた。

毎日三、四人、多い日は六、六人死んでゆく。それを木ぐろ積みにして集めて置いて、兵舎の裏山の古い野雪隠のくぼみの中の雪を除けて入れ、上に雪を被せる。とても土地は凍って一寸も掘れぬのでいたし方なく、春めいてくるとそれを狼が食うので、ソ連に交渉して焼く。その焼き場で戦友の肉を食うたどの風評が立ち、複雑な思いをした。

広島県 星野 豊

チタ附近で貨車は急に停車した。見渡す限り野は銀世界である。それは貨車の片隅で息を引き取った友の埋葬のためであった。夜の明けるのを待つて、マンドリンに迫らたてられ、五人一組、スコップ二丁での埋葬のための穴掘りである。雪をかきのけると、黒光りのする凍土がのぞいている。スコップをあてれば『キーン』という音が返ってくる。しかたがないので一人交替で体を暖めて削るように土をはいで、ようやく夕方までに体が半分ぐらいかくれる深さになった。身にまとっているものは取り上げられ、友を裸同然の姿で雪で埋葬したのである。悲痛な別れを告げ、再び貨車にゆられて着いたのはウランウデの郊外であった。

和歌山県 木下正夫

作業からの帰り道、草むした草葉の陰にたくさんの墓標が立っていた。これらも飢えと寒さと、ひどい環境の中でむしばまれ散っていった友よ。私は常に、絶対に異国の土になるまい、祖国日本の土を踏むまではと話して来たことも、すべて無情の風に吹かれていったではないか。俺たちはお前たちの分まで生き伸びなければと肝に銘じながら、頭を垂れるのだった。

高知県 東山 林

クタクタに疲れて伐採作業から帰り、穴ぐらの中で夕食をしながら、故郷の話をしていた隣りの戦友が、うつむいて何も言わなくなったので「おい、どうした」とひじで軽くついたら、ゴロンと倒れて死んでいったことや、「今生の思い出に腹いっぱい食わせてほしい」と申し出た兵に、私は自分のものと比較的元気な人のものを集めて与えたら「うまいうまい」と言つて食つたのはよかつたが、翌朝は冷たくなつていた。

地獄を見たことがないから確たることは言えないけれども、もし地獄があるとすれば、このような状態のことを指しているのではあるまいかと今つくづく思ひ出している。

もう一つ、頭にこびりついて忘れられないのが「遺体」の処理である。

初めの間は枯れ木を集めて碁盤形に一メートルぐらいの高さに積み重ね、全裸にした遺体をその上に置いて茶毘に付していたが、三月に入り「焼くことは相ならぬ」とソ連側の命令があり、凍土はどうしても満足に掘ることができないので、雪を覆つて葬つたのはよいが、次の日に別の死亡者を埋葬するため墓地に行つてみると、一面に荒されていて、遺体は跡かたもなくなっていることもあった。それが餓狼のしわざであることを知つて茫然、暗涙にむせんだことも再度ではなかつた。

岩手県 富岡衛四郎

白樺林に異国の地で倒れた戦友の墓標を後に出発で、だれ一人として訪れぬ奥地に捧げた句「残雪の異郷に墓標供造花」春の花未だ咲かず、寂しく造花が供えてある。

戦友の死

島根県 右田 武

十二月、一月となり、シベリアの寒さは極度に増してきた。零下四十度、五十度と下がり、防寒被服をつけてもしびれで身体の自由さえ失う寒さである。酷寒と飢餓で戦友がバタバタ倒れていった。作業場で凍死する者、伐採の木の下敷きとなる者、また栄養失調で倒れる者、一日に五人六人、多い日には十人も死んでいった。

夜遅く作業から帰り、一緒に食事をとっていると、そばにいた戦友がぐったり倒れた。「どうしたか」と起こしてみると、呼吸もなく死んでいたこともあり、一緒に寝ていた戦友が起床になっても起きない。起こしてみると死んでいたこともあった。これらの死亡者は全部ソ連の命令で毎日車力に乗せて積み重ね、山に引いて火葬にし埋葬した。翌年四月まで我が収容所で三百六十五人の戦友がこの地で憤死したのである。

戦争も終末を告げ、内地帰還を夢見、父母、兄弟、妻子の安否を気遣って、日ごとに郷里の話に花を咲かしていた。しかし彼らがついに内地の土を踏むことができず、永遠にシベリアの土と化したことを思うとき、やるせない怒りを感じるとともに、亡き戦友の冥福を心から祈る次第である。

和歌山県 土永 勲

ある日、ノーチラポーター(夜間作業)で製材に出かけたとき、ずっと彼方に白い物が見えるから、暗夜を利用してソ連兵の監視の目を避けながらソツと見に行くと、驚いたことに日本人の亡骸が魚を積み上げる様に放置されていたのです。何たることだ、憤りと、あまりの悲しさで思わず怒鳴り散らしたい気持ちであった。翌日、早速カマンジル(所長)にこの様子を話したのである。しかし、なかなか聞き入れようとしなかった。しつように申し入れた結果、やっとしぶしぶながら埋葬を認めることとなった。凍り切った土を薪で燃やしながら五人一組で数

か月かかつて掘りおこし墓穴を作ったのであるが、なにしろ零下三十度から四十度の厳寒に、せめても亡き友の遺骸を寒風と雪に野ざらしのまま、放置することなく埋葬して供養の誠をつくしたく、涙ながらの作業であった。

これ等の英霊の方々の死因は、栄養失調と下痢、肺炎等が主であったと聞く。我々はその後も転々とラーゲルをノルマ、カンチャイと共に移動させられて行った。ヤポンスキーダモイ東京だと云われながら騙され続けて……。四十数年過ぎた今も尚、母の名を叫び、妻や子供の事を叫び、「ダモイ東京だ」と大声で叫んでいるであろう「英霊よ安かれ」と心より祈ると共に、帰国後も後遺症に悩む病と葛藤の方々よ安かれと願う者の一人です。

沖縄県 當真 莊平

夏は雨にぬれ、冬はスネッグ(雪)にたたかれながら、氷点下三十度の酷寒にさいなまれた肉体は、次第に疲労困ぱいし、「デストロフィヤ(栄養失調症)」になっていた。その苦悩を具体的に表現できることは、何もしないで寝ることであった。

戦争がもたらしたのろわしい悪夢、シベリア極東地方の伐採作業に激しい怒りも、反撃する気骨もなく朽ちた枯れ葉同然になっていた。

日ごとに病に倒れる戦友がふえてきたので、休養できる別棟の病室を建てた私(元衛生兵長)たちが寝起きしている「木の葉の掘立小屋」同様な建物で、風雪を防ぐことはできなかった。

寝台は土間から九十センチくらいの高さにして、直径五、六センチの小さい雑木を並べて、デコボコにならぬように配慮したが、曲折しているため多少の高低は避けられなかった。木の葉を置き、さらに黄色の乾燥をぶ厚く敷きつめたが、肩骨、脊椎骨、尾てい骨が痛むらしく、苦痛を訴えていた。

入室後一か月を経過した戦友(とも)は、生きる気力を失ったかのように、一枚の毛布の下から顔面だけ出し、まぶたをあげたり閉じたり、時にはうつろな目を開いたまま一点を凝視し一声も発しなかった。目を閉じるまいと気張ってい

るようにも見えたが、いつかまぶたの開かなくなった戦友の脈拍をとってみると、トーン、トーンと脈拍は弱くなっていた。どこから飛んできたのか、濃いブルー色の大きなハエが五、六匹彼の唇と鼻にとまった。やがてその数は増して、閉ざされているまぶたにもせわしそうに食いつき始めた。私はびっくりしてすぐ近くの木の枝を折り、戦友の顔面上で左右に振り回しながらハエを追い散らした。ハエはブーンブーンと飛び上がり、また急降下して舞いおりてきた。群がってくるハエを追い散らしながら戦友の顔をのぞきこんだところ、苦痛に耐えているかのごとくかすかに唇が動いていた。まぶたの上に中指の先を置いてみると、小さな動きを感じた。死んではいなかった。それなのにハエが群がっているということは、体内の死臭があたり一面にただよっているに違いないと思った。戦友は群がるハエを追い払う気力もなく生けるしかばねになっていた。しばらくして息を引きとったのかと思いい、戦友の顔をのぞきこむと、鼻腔と唇に小さな白いかまりがあるのを見つけた。指先で触れてみた。まぎれもなくハエの卵であった。慌ててハエの卵を木の葉で払い落とした。それでもハエは執拗に戦友の顔面の周りを飛び交っていた。

翌日入室した戦友は「四、五日尿が出なくて下腹部が張って息苦しい」と訴えてきた。

全身を裸にすると、つやがなく蚕のように青白く水ぶくれしていた。熱発の気配もあるので、腎盂炎ではないだろうかと判断し、同僚の元衛生伍長に相談して「ウロトロピン」を服用させ経過を見ることにした。翌朝回診に行つて私はがく然とした。ほおほ「け落ち、手足は、細く皮に包まれた骨ばかりになっていた。本人は「気分がよくなりました」と喜んでた。

体中の水分は尿とともにすっかり排出してしまっていた。薬の分量が多かったのか、それとも症状が悪化していたのか、夕方この戦友もハエに目、鼻、口を吸いつかれ静かに息を引きとった。

三人の戦友は翌日ラーゲルの裏の墓地に埋葬した。墓地は有刺鉄線の外側の雑木林を切り開いて、約三十坪くらいの広さになっていた。夕暮れの冷たさが身

にしみて、異国の丘に戦友を埋葬する悲しみが深くなつてゆく思いをしながら、墓穴を掘り始めた。黒土はまだ凍結していなかったが、固くなりかけており、渾身の力をふりしぼつて十字にくわを打ちこみ、スコップで黒土をすくい上げて深く掘った。木の葉の掘つ立て小屋に抑留されてから毎日二、三人も埋葬していた。

砲煙弾雨の中から生き延びてきたのに、飢えと寒さと重労働に耐えられなくなっていた。

帰ろうとすると、ソ連のソルダート(兵)が私の前に立ちどまり、「ピヤッチ」(五つ)と言つて五本の指を目前に突き出した。

ソ連兵の考えを知るすべもなく、不安におのきながら言われるままに穴を掘り始めた。私は円匙の柄を握り、右足を鋼の上に乗せ、土の中に押し込み、強く踏みつけながら考えた。ハバロフスク地区の松林の墓地に戦友を埋葬したときは、氷点下三十度の真冬で、積雪を払いのけ、十字クワを力いっぱい打ち込んだが、凍っている土は石炭のように固く、深さ一メートル、長さ二メートルの穴を掘るのに二日もかかったことを思い出した。

私は「真冬になったら掘りにくいので、今土が凍らないときに掘らしたのではないか」と言うところ、そうかも知れない、全くびっくりしたよ、こんな雑木林の茂っているところで、穴を五つも掘れなんて言われると、私たちが銃殺して埋めるつもりではないかと思つたよ、戦友も初めて落ちついた口調で、自分の考えを打ち明けた。

「墓穴を掘る」という言葉を耳にしたことはあるが、いま現実に墓穴を掘ってしまった。自分が埋められるのか、戦友の墓穴を掘っているのか、考えれば考えるほど頭は混乱し、全身から血の気が失せる思いにかられた。やっと五つの墓穴を掘り終わったので、私たちは再度墓地に向かつて合掌し、急いでラーゲルに引き上げた。ソ連のソルダート(兵)も帰った。

ハバロフスク地区の伐採で疲労が極限に達していたので、このウオロソフ地区に

来て二か月目だというのに、一週間くらいは毎日埋葬しない日はなかった。戦友らの墓穴を前もって掘っていたのである。

氷点下四十度になると積雪は解けにくく膝まで没するので、一人で一立米（高さ一メートル十センチ、横一メートル、長さ二メートル）のノルマ（責任作業量）を終わるには、午前四時より夜の十一時までかかっていた。

朝晩の食事はキユウリやトマトを切り込んだ五分がゆ程度の雑炊、昼食は三百五十グラムの黒パンまたは黒パン饅であったので、年月が重なるにつれデストロフィヤ（栄養失調症）になり、亡霊のように影も薄くなっていた。

滋賀県 杉本武男

ライチハ収容所に到着するのにかかりの日数がかかった。我々捕虜が約八千人収容されたと聞いたが、酷寒の一冬で約半数の四千人となった。これも毎日々々炭坑に出る労働で体力も弱り、栄養失調となり亡くなったのである。

朝、炭坑に出て体が悪いので「班長の許可」を得て仕事を休んでいる我々戦友が、作業を終えて帰るときにはすでに死んでいるみじめさであった。また幕舎暮らしの小隊の中でも一晩に十一人死んだ。さすが小隊長の目に涙が光っていた。今もこれだけは忘れない。

自分もいつか死ぬか、不安な日々を送った。このようにして死者が多く出ると、死屍当番に勤務しなければならぬ。今思い出すと昭和二十一年一月ころのことである。ソ連の埋葬地に戦友を埋葬したことである。トラックに石炭を積み込み埋葬地に出発する。ソ連の言葉が通じないが、通訳曰く、これから長さ二・五メートル、深さ二メートル、幅七〇センチを七個掘れとのこと、七人ほどの者が石炭をたきながら一日がかりでようやく掘り終わったのが夕方である。彫り上げた土砂が凍結してカチカチとなる。確か零下四十五度の寒さであった。

すると、ソ連の埋葬従事者がトラックに日本人四十九人の死体を積んでくる。何と一つの穴に七人ずつを埋葬したのである。何と残酷なことであろう。この世

の地獄である。埋葬を終わり、木の葉をかぶせて収容所に引き返した。このような体験は一生忘れられることはできない。

北海道 川友勝

毎日十人、二十人と死ぬ。遺体は衛兵所のわきの霊安室の土間にシート一枚をかぶせて並べ、将校が交代で通夜をする。廃油で灯りを取り、松葉をくぶらせて線香がわりにし、パン粉を練って団子をつくり、備えただけの通夜。酷寒のシベリヤ、花等あるわけがない。終わって真夜中の埋葬。NHKの放送で、ハバロフスク、イルクーツク等の日本人墓地が紹介されていたが、私の知っている限りキビトク山の山の上に二千人くらいの遺体が埋まっているはずであるが、そこには墓らしいもの一つもないと思う。毎晩日本の食べ物の夢といつ帰れるかの話をしながら死んでいった人たちの怨念は、いつ晴らされるのだろうか。

零下三十五度以下に下がった酷寒時、スコップだけで凍土を掘るのは大変な作業だった。一人々々の墓穴等も思ってもよらない。たき火をして凍土を解かし、幅三十センチ深さ二十センチの側溝のようなものを長く掘り、遺体を一列に並べ、その上に掘り上げた凍土をかぶせるだけで精いっぱいでした。翌春五月、表土が解けたころ、遺体埋め直しの作業をしたのであるが、もちろんだが、どこに埋められているかわかるわけがない。当初大隊本部で死亡者名簿を作成していたが、政治部員に取り上げられた。

やむなく道、県人会を開いて出身地別に死亡者名を覚えてもらったが、これも二回やっただけで不法集会と見なされ、収容所長から解散させられたのでした。二年目の五月以降になって一部の将校が他の収容所に移された。そのたびに少しずつ兵も出され、八月ころまでには四分の一くらいとなり、私が転出した十一月ころには、衛生兵を含め、五十人くらいになり、本格的な病院となった。

神奈川県 菊川栄一

死亡することに屋外のテントの中に安置して、大体五十人くらいになるとトラックに積み、山の中の大きな穴に埋葬するのです。実は私の祖父が僧侶なので、私は幼いときから門前の小僧でお経は詠めましたので、埋葬するたびに涙を流しながら、戦友よ安らかに眠れよと一心にお題目を唱えました。

東京都 青木貞一

死の訪れ

こんなこともありました。ある朝、いつものように目を覚ましましたが、早起きの隣人は寝たままで。私は声をかけながらゆり起こしましたが、動く気配もなく、息絶えていたのです。

全く驚きました。四十を過ぎたらしい背の低い頑丈な体つきの人でしたが、名前はどうしても出てきません。だれにも見取られず、ただ一人で死んでいく、何んたることでしょう。哀れはかなきは人の命、ほげ面が今でも脳裏に残っています。

ある朝、いつものように墓掘隊が集まっていると「兵長は昨夜死んだそうだ」との知らせがありました。彼は二十一、三歳の若武者、責任感も強く、好感の持てる青年でしたが、重労働が重なって息を引きとったのです。

収容所の東の隅に「死人部屋」がありました。幾十人もの死体が丸裸のまままで積まれていました。死者が多くなるのは酷寒期でしたので、死体は凍ったままです。衣類は全部脱がされ、洗濯して生き残った隊員に支給されるのだということでした。つまり、生き残った者の体温を守り、生命を長持ちさせるための防寒上大切な物だったのです。

東京都 宮崎武男

戦友の中には重い防寒外套を着ての伐採作業に機敏に動けず、倒れる大木

を避けきれずに下敷きになってんだ者もいた。山からの馬力搬出で転落し命を失った人もいた。製材所で作業中製材機の上の振動する材木を足で押さえた一瞬に右足首から回転する丸鋸で失ってしまった人がいた。

北海道 石川朝雄

秋ころに、ある小隊(三十二人ほど)全部が古い落葉樹の根株に生えついたキノコを食って、作業が終わり営門を入ったとたん全員バタバタと倒れた。早速軍医がこの兵隊を近くの病院に送ったが(モンダクトと記憶しているが)二、三人生き残ったきりで後は全員死亡したという。後日収容所でこの死亡した方々の小便を見せられたが、真つ赤な血を薄めた色をしていた。すなわち縦に裂ければキノコは食べられるというので、やってみたら縦に裂けたというのだが、毒キノコであつたわけだ。こんな死に方をした戦友もいるのである。

新潟県 生越昇

二十二年四月上旬のころトラックに乗せられて行って、大きな穴を掘るようになつた。最初は凍土のためラパート(シヤベル)などは通用しないので、まきをたいて凍土が溶けたところから鉄棒を使って数日間かけてようやく深さ三メートルの穴を四か所掘り上げた。最初のころは穴の目的がわからなかった。ノルマも案外低かったので皆喜んでいたのですが、だんだんと作業が進むにつれ穴の目的がわかつたときには皆「ウア」と声を上げて愕然としたが、作業は始められた。仮埋葬された遺体を掘り出して大きな穴に埋葬するのであるが、わからないときは二メートルほどの鉄棒を地面に突き刺して、その反応で遺体の有無を確かめ、遺体を掘り上げる。全部の遺体が裸の上解剖されていた。さすが最初るときは肉の入ったスープが嫌だった。一つの穴に五十遺体埋葬した。全部で二百遺体ぐらいと思う。遺体を掘っていると、先の収容所で一緒に生活したところのある加藤軍曹の遺体が発見された。皆驚き、人ごとではない。我々も病に倒れた

ならば軍曹と同じ運命になることと思った。遺体をねんごろに弔い、五十の遺体の一番上に渡辺隊長がモミの木を植えて、一同南無阿弥陀仏を唱え、ご冥福をお祈り申し上げます。

和歌山県 松浦虎市

十一月ごろから翌年五月ごろまでは地面が鉄のようにコチコチに凍ってしまうので、地面に穴を掘ることができないので、遺体は雪の中に仮埋めした。そして地面の氷が解ける五月を過ぎて土葬にした。

神奈川県 新谷俊男

中隊で第一号の死者(同年齢)が出たとき、夜になったら裸にして外に置くようにと命令された(ソ連軍医)。これには驚きと憤りと悲しみでいっぱいでした。

岩手県 千代川幸吉

私が五か月間の伐採作業から元の収容所に戻ってみたら、意外なことが起こっていた。それは、満州開拓団時代からの親友だった同じ町出身の村上丑蔵さんの死である。その死因について事実関係を聞くと、村上さんはソ連側にも信望があつて、当日も二十人ほどの作業員を引率して、ソ連の警備兵とともに作業現場に着いたが、作業のことで現場警備兵と口論があつた後、村上さんが足下にあつたレーキを取り上げて作業を始めようとしたら、その警備兵は自分が襲われると勘違い、村上さんに向け発砲し、村上さんは心臓を貫通され、そのまま「ウー」を最後に即死したとのことだった。これも捕虜という身の哀れさである。

ウラジオに上陸、ボタ山の見える炭鉱で下車した。

この作業は地下で、私も生まれて初めての地下作業である。ここが私の墓場になるかとさえ思った。早速翌日の午前中、落盤事故防止の注意を受け、その翌日から入坑して作業開始だ。現場は二十四坑道、作業は坑木運搬と採炭で、

ここでの糧食は地上作業の三割増くらいで、あまり空腹を感じることがない。私は初心者でも、在満中鶴岡鉱山経験者が多く、心強かった。

ここで三か月ほど経たある日の午後四時一番方の私たちが下番するとき、この収容所から来た日本人か、防寒服に防寒帽、それにカンテラ掲げて入坑する五、六人の人たちに出会った、それから私が夕食を済ませ床に入ろうとしたとき、二十四坑道全員集合の命令が出た。身支度して出ようとしたら中止のこと。坑内が爆発したが入坑不能とのこと。

翌日坑内に行つて見たが、驚いた。厚さ一寸ほどもある鉄板が鉛のように溶けている。爆発の原因は電気スイッチのスパークによる炭じん爆発だったが、これも入坑中禁じられている日本人のタバコの火ということになった。ここでも捕虜の身のつらさを痛感した。

亡くなった人たちには気の毒だが、もしあの爆発が二時間早かったら、今の私はない。戦後最初から坑内作業で抑留三年間事故なく帰国した者、初入坑当日爆死した者、これも人生の奇遇か運命か。あのころのことが脳裏に浮かぶ。

東京都 島崎武男

このために極端な栄養失調になった戦友たちは次々と死んでいった。グッタリと疲れてだれもが何とかがして生きることだけを考えながら眠った。しかし、どうしても生きることが希望をなくして自分から命を絶つていった人もいた。突然夜中に起き上がり「ホラ、船がきているじゃないか、早く行かないと乗り遅れるぞ」と、酷寒の戸外へはだしで飛び出した彼はとうとう発狂して死んだ。

岩手県 折居次郎

この入院中に同室の多くの栄養失調患者は次々に毎日々々、日本の家族にも親しい友人にも知らされることなく、シベリアにいたことさえ忘れ去られ、この世から抹殺され、シベリアの雪原に捨てられ、オオカミの餌になり、魂だけ日

本に帰って行った。いや、いまだに魂は自分の存在を主張し続けて、シベリアの原野をさまよっているのかもしれない。明日は自分の死ぬ番だと覚悟を決めていたせいか、隣の人が朝冷たくなっても、別段悲しい重大事件が起きたとか、かわいそうだとかの感情は全く起こらなかった。

いずれみんなこうなる運命の下にいたのだからだろうか。それにしても死者の霊をあつく弔うのは、日本ばかりでなく常識であるはずなのに、八百人ともいわれた当収容所で、死者のために墓づくりの使役に出た者がいなかったことは墓をつくらなかつたからで、そのまま裸で雪原に置き去られたとしか思われぬ。もちろん酷寒の地とて冬は墓を掘るのが困難だった事情は理解できるとしても。

友の墓掘りについて

千葉県 村上武士

シベリアは冬ともなると、殺人的寒波が襲来する。アバカン地方でも、夏ともなると一通り暑くなり、休憩時間などよく日陰回りをしたこともあった。たしか昭和二十一年の十二月三十一日と記憶しているが、この日がまたとてつもなく寒い日であった。作業も待機になり、室内にいと、通路の方でどなっている声がする。ふとそちらの方へ耳を向けると、だれか使役に四人ほど欲しいとのこと。順を数えると、ちょうど自分も番に当たっている。寒波で作業待機になっているものを、何とまあと思いつつも身支度をして、ちぎれるような吐く息をも凍る屋外に出た。用件は友の墓掘りだという。

ソ連の監視兵を先頭に四人一組となり、一面雪におおわれた小高い丘の上にとぼとぼたどり着いた。そこはソ連住民の墓らしく、また雪の中から十字架か卒塔婆らしきものが突き出していた。その隣に、夕方までかかつて凍りついた丘に一メートルくらいの穴を掘ったことを、今でも鮮明に覚えている。数十年過ぎた今日でも、その日が来ると、あの穴に埋められたお人は、果たしてだれだったろうかと、今でも、私の脳裏をかきたてる。

五、六回と停車したところだったと思うが、各車両から寒さのためか何人かの死亡者が出た。

岡山県 田中一司

ソ連兵が来て死体を下車させたが、この同志たちはその後どうなったのだろうか。それから同じように走ってはとまり、とまっては走る。もうきようは幾日目かも忘れてしまう。このころから皆空腹を覚え始めたのだ。そうして鞍山を出発して三十五日間の汽車の旅は終わりとなり、ウズベク共和国の首都タシケントの南にあるアングレンに到着した。

そして悲劇が起きた。下痢をしているので何回となく便所に行きたくなるため、作業中でも野糞をする。この日、隣の作業グループで銃殺が起きた。それは作業をしている私たちの周囲を四角に歩哨が警戒している。この歩哨と歩哨を結ぶ線から一メートルでも出ると大変だ。一発の銃声が聞こえた。隣のグループの同志が便をする姿のまま銃殺されたのだった。逃亡したという理由のようだが、こうしていつも簡単に処理されてしまう。逃亡している姿勢かどうかよく見ると言いたい。馬鹿らしくて話にもならない。今の私たちの体で逃亡できるかどうか考えてみるとどなりたくなかった。

二、三か月後私たちは地下炭坑に入ることになった。そのころ露天掘りの作業グループから次々と死亡する者が出てきた。原因は毒野草を食ったため目が見えなくなり、下痢をした末死亡してしまう。また栄養失調で寝たままの姿で朝には冷たくなっている、そして銃殺された者などである。私の横に寝ていた東京の加藤上等兵が、朝作業に出る時間なのに起きない、呼んでも返事がない、ゆり起こそうとしたら冷たくなっている。栄養失調で死んだのである。どうしようとしてウロウロしていたらソ連兵がきて「ダワイダワイラポータ」と言って強引に外に出されてしまった。母一人子一人の加藤上等兵だった。残念で死んでも死にきれない気持ちだったと思うと、涙がとまらなかつた。昨夜も枕を並べて語り合っ

たばかりだったのに……。

それからまた悲劇が起きた。

このころ支給されているエン麦のスープのため腸閉塞を起こして入院し死亡した者が続出した。それはエン麦といつても精麦されたものではなく、外皮のままテンサイ(砂糖大根)のスープである。麦の外皮で舟のような多量の殻が腸内で大きな玉になって詰まってしまったとのことである。空腹のためガブガブとそのまま飲み込んでしまった結果のようだ。半年くらいして支給されなくなった。ソ連は私たちを人間として扱ってははいないのである。

島根県 箱上春市

シベリア鉄道第一日の夕刻、落胆した若い弱い兵士二人がショックで死亡したが、集成第五大隊の最初の犠牲者で痛ましい限りであった。

新潟県 中沢仁作

五百人いた同胞は飢えと極寒で二百人以上死亡したのに収容所長は驚き、作業の中止を下した。後日わかったことだが、経理将校が糧秣をモンゴル部落へ横流しをしていたことが判明した。

あらゆる作業で死亡した同胞は冷凍そのもの、全裸にされどこへともなく運ばれていく。私たちは、全くわからない場所で埋葬されたか山に捨てられたか、判明しない。山犬の餌食になっていた同胞もいたのではないか。

北海道 渡辺健一

(モリブデン鉱山)

洗面を終わり、さあ帰営しよう。人員点呼をすれば一人足りない。だれだ、第〇シャフトの川野だとわかる。どうして上がって来ないのだ、このとき初めて私

の脳裏に悪い予感が走る。何かあったのではないか。何があったのか、彼はズリ手をしていたからブロック切り羽からがけに転落したのではないか。落石の下敷きになったのでは、時間が過ぎてても上がって来ないのはどういうことか、悪感につかれたいようにカントーラに走る。ナチャーニク(管理責任者)に詰問する。やはり事故被災であった。なぜ早く知らせないのだ。被害の程度、事故の時間、場所と今被災者はどこにいるのか、見舞い、激励に行きたいと申し出る。しかし返ってくる返事は「今、最善を尽くしている。落盤事故で落下した石の下になり、全身打撲で逃げるひまがなかったらしい。救出したときは意識があった。早速臨時の救急車(トラックで代用)で都市病院に搬送した。十分な処置と看護をしているから大丈夫だ、心配要らない。あとは病院にまかすときなさい。バルハシの病院で不十分ならカラカンダ(カラカンダ州の州都で大病院がある。)病院もある。アルマタ(カザフ共和国の首都で大病院もある。)には完備された病院もある。最良の医療施術をしているから大丈夫だ、安心してまかしておきなさい。見舞いに行きたい気持ちはわかる。しかしそれはできない。どうしてか、それは私からは言えない。」と。

そばにいた技師長は、あるときコマンダーに知らせたかったが、坑内の切り羽はたくさんあり、どこに連絡とればよいかわからないので、とり混んでもいたし、人手も足りなかつたので連絡できなかつた、故意に隠したのではない、と弁解した。これが管理責任者の回答である。その後毎日患者の容態と居どころを確かめてみるが「今その後の容態を聞いているところだ。我々は大丈夫だと思っっている。心配ない。いい返事がくると思う。病院医師団は全力を挙げて治療に当たっている。向こうの病院にはいい薬もある。今に元気になって戻ってくる。コマンダー、ワタノーベン(渡辺)あんまり心配して体をこわすよ、大丈夫だからもうそれ以上心配するな。」と取りなしてくれる。

それが本当なのであろう、と思いたいが、確たる裏づけは何もない。重い気をふり払うように私はカーバイトランプを肩にひっかけ、メンバーの働く地下坑内

に急いだ。

新潟県 中沢仁作

シラミがたかるし、発疹チフス、赤痢、マラリアの患者が多く、南京虫で夜は眠れない。死亡者続出で、本当に悲惨であった。私もマラリアにかかったこともある。二日熱である。赤痢にかかり下痢がとまらず隔離され、松の木を焼いて炭をつくり、その炭を食べて下痢どめの薬にしたこともあった。便所は外で、夜は何十回も行くので眠る時間がない。下痢をしているからおさらだ。同胞が毎日死んでゆくのを見るたびに、きょうは我が身かと何度も思った。

岩手県 岩淵 功

この三大隊の労役に戦友の埋葬があった。飢えと寒さとにかく一冬を越したものの、栄養失調、発疹チフス等で次々と倒れていく。死亡した戦友を車に積み(そのときもあった。)およそ六キロ離れた場所へ歩哨監視で運んでいく。別の隊の者が専門に墓穴を掘っている。縦が一メートル横二メートル深さ約一メートルの箱形に掘るのだが、岩のような固い凍土をツルハシ、鉄の棒(金てこふうのもの)スコップで掘るのだが、能率が上がらず、死人の方に追いまわされる格好だった。一つの穴に八人を埋めることになっており、どの死体を見ても骨と皮ばかりにやせ衰え、見るにしのびないようだった。

「本当にかわいそうだ。少しでも丁寧な……」と念入りに葬つてやろうと思っても、監視の歩哨に「早く早く」とせきたたられるので、全く不本意な埋葬に終わってしまう。遠い祖国の親がこの死に方を知ったら、どんなに嘆き悲しむだろうと私どもも戦友は涙ながらのいやな作業だった。

新潟県 森 肇

小さな駅の付近で列車が停まった。車内で死亡した仲間を降ろして線路の側

に埋め、再び列車は動きだした。一体身元は確認されているのだろうか。復員しただれかが留守家族へ知らせることができたらうか。多くの仲間の埋葬地であれば遺骨収集も可能となるであろうが、ただ一人の埋葬地は忘れられてしまいうらうし、ソ連人自身も関心のない埋葬者になってしまふ。異国の地で眠る六万人余りの死亡者の中にこのような人が他にもおるだろうが、シベリア抑留のもたらす悲劇ははかりしれないものを感じる。

熊本県 山形満治

収容所には千二百人くらいが入っていたと思います。しかし最初の冬が越せず、多くの戦友が亡くなりました。前の晩、早く帰って白いご飯とみそ汁を腹いっぱい食べたい、といっていた隣の戦友が、朝起こしても起きないのです。さわってみると、すでに冷たくなっていたのです。

それら亡くなった人は、軽作業にしていた人たちが近くの丘に運んで埋葬したようです。私は兵隊に入る前に農業で体を鍛えていたので、何とか耐えて、常にツルハシを振って先山で石炭を掘る作業ができたのだと思います。

鳥取県 森田 廉

塩のスープに黒パン二百五十グラムの食事、前述の作業と外気は四十度、五十度の寒さの中での作業である。どんな頑丈な体でも体力の消耗は激しく栄養失調となり、だんだん体に肉らしいところがなくなり、目玉は大きくなり、骨と皮だけになり、床に骨が当たって寝返り打っても痛くて仕様がな。当時一個大隊千人単位で入ソ抑留された者のうち、昭和二十年八月から越冬した翌年の四月までにその三割から五割の人がシベリアに葬られた。元気だった隣の戦友が朝冷たくなっている。ほとんど栄養失調の死に方は苦しまず、体力の極限で息が切れる。毎日死者がふえ自分自身もいつこのようになるかしの不安があるが、だんだん無感覚の状態になることは事実である。生きていること自体が不思議

議だと思ふ。

極寒中の埋葬は並大抵でない。凍土である上に作業する者自身が体力の限界の来た者ばかりだから、丁寧に穴を掘って埋めて十分土を盛って墓標でもねんごろに立ててやるような常識はない。次から次と埋葬も忙しい。そのために春五月から六月、暖かくなると死体の手や足が現れてくるのである。死者に対しては言語道断の処置で、仏に対して深く謝る次第である。

岐阜県 服部酒造雄

そんな朝、円びを担いでラーゲルを出ていく途中、バツタリ倒れた兵がいた。「こやつ！ 仮病を使いおつて」同じ捕虜の身でありながら、抱きかかえて起こすでもなく、どなりつけた。ソ連兵の点取り虫と、常日ごろから嫌がられていた鬼の分隊長が仕方なく引き起こしたら、もうその兵は事切れていた。

岩手県 佐々木正志

まき運びというから私は小まきか、石炭か、そういうものを運んでくるもんだなど、そう思っておりましたけれども、しよつてきたのを見るとトンビの巣みたいなもんだ。ナラの木のごようみたいなようなものをしよつてくる。ただし、何里先向こうまで行つてとつてくるんだか私はわかりません。大体私が歩いているコースは大木は一本もございませんでした。ナラの木のごようというか、腰だけから背だけぐらいな長さのもの、それをへし折つてくるような状態で、結局その病人が何里も向こうへ行つてまき運んでくるもんだから、次の日はすぐ使えんような状態になつてしまふ。二日目か三日目にはこの人は必ずあの世行きになつてしまつておりました。ところが、そのままラーゲルに置いておくわけにはいかないから、次の日和尚さまを務めていた軍曹の人があつてその人が押んで、そして私が馬車へ乗せてつて、ちよつと小高い森へ運んで私も南無阿弥陀仏と言つて押んで、置いてきたと言つた方が早いです。なぜかと言へば、シベリアの湿地帯が凍つてしまつ

たら、スコップもツルハシも刺すだけで掘り上げるといふことは絶対不可能です。だから、ちよびつと掘つたぐらいな程度で、それが凍つてしまつたもんだから、前の日に寝せてきた人を、ごめんくださいというふうな気持ちでゴロツと横に引っくり返して、馬車へ積んである死人をそこへまた寝せておく。それが何十人かは繰り返してきました。

山梨県 中山嘉明

殊のほかシラミも多く、発疹チフスや疥せんにかかる者も多数にのぼつた。栄養失調の患者も次第にふえていった。病院といつても薬も思うにまかせず、毎日のように死人が続出した。そして私たちが毎日やらされる使役は死人を埋めるための穴掘りであつた。それも初めのころは衣服を着せたまま埋葬したが、後には衣服を脱がせて埋めた。一晚のうちに何回か用便に起きるのが常であつたが、隣に寝ている戦友が用便もせずよく眠っているなあと思っていると、朝方には冷たい骸(むくろ)となつていた。

岩手県 日沢幸太郎

強制重労働を終えラーゲルに向かう岐路、縦隊のだけかがバツタリと倒れる。しかしみんな疲れているのでそれに気づかない。それもそのはず、だれもが歩くことで精いっぱいである。監視のため同行したソ連兵が行進停止を命ずる。あの倒れた日本兵をラーゲルまでつれて行けと命ずる。しかしそのときはもうすでに死んでいる。五、六人で何とかラーゲルまで運ぶ。彼はどれほど故郷をしのび今日まで生きて来たものか、親や親類の方々はこの惨状を知つたら……生きて耐え忍んでいる者も苦しい。戦争に負けてなぜこれほどまでに苦しまなければならぬのか。飢えの夜はふけて行く。いつの間に眠つたらうか。朝の起床時間になつて、体のしびれをさすりながら起き上る。隣の兵士をゆり起こそうとして、ゆすつた方に体全体が動く。すでに死んで体は固くなつたからだ。毛布ごと死んだ兵士

をソ連兵に引き渡す。

シベリアの凍土は二メートル乃至三メートルに達する。従つて埋葬された戦友たちは凍土の中に眠ることもできず、ひたすらに祖国からの迎えを待つておることを思う。

生き残つて祖国に生還した人たちも、生と死の接点に立ちながらよく帰れたものと思議と思われる。

岐阜県 服部酒造雄

最初の年越しに一番犠牲者が出た。あちこちの幕舎で、日夜、バタバタと栄養失調で倒れていった。十分な手当てでも、薬も与えられず、見守ってくれる者もなく、寂しく息を引き取つていった。墓標一つ立てる余裕もなく、供える花すらない。凍つた肉体は、まるでろう人形のようになり、雪の荒野に運ばれ、着衣はソ連兵にはぎ取られ、素肌のまま、カチカチで掘ることもできない林の地面に、野ざらしにされるのである。恐ろしいあのオオカミの餌食となることを承知の上でのソ連兵のやり方であろう。

青森県 工藤利雄

思い浮かぶままお話し致します。

時は昭和二十年九月と記憶しております。シベリアの東部、ペトロシーの收容所に居た時です。小さな駅、ホームも無い駅で、街と言つても、家並もまばらな村落という感じ、ここに約一年位いました。仕事は山奥に入り伐採作業を主としてさせられていました。

私の隣に枕を並べて寝起きしていた人、片川清という人は、同郷の青森県出身で、年令は私より二つ少ない三十歳で、大正六年十月生まれと聞いています。そして身長は一メートル六十八センチ(五尺五寸四分)位で、当時、五尺五寸と言えば大型でした。タバコが好きで、タバコがなければ生き甲斐もないように見

受ける人でしたが、タバコ(マホルカ)の配給とて、一日大サジ二杯程度しかありません。到底満足する量ではないので、常にタバコを吸わない人から配給分を貰つては吸つていたようです。私たちの伐採作業はとても重労働で、仕事が終わつての帰路は腹がペコペコで、足が前へ進めてくれません。楽しみの食事の量も少なくパン一切れとスープだけで、腹を満たすためには、草や虫を食べ、また蛙、ネズミ、蛇まで食べたりにしていました。それでも、みな一人残らず栄養失調で、骨と皮ばかりとなり、フラフラの状態が続いておりました。

ある朝「工藤、俺は今日どうしても体の調子が悪くて作業に出られそうもない。担当の者に伝えて来て欲しい」という。私は連絡に走り、休みの許可を貰つて来て、片川氏に休むよう申し伝えました。ほとんどの者が栄養失調で、ただ、頑張れるか、そうでないのか差があるだけで、病状にはさほどの差が見られない收容所内の状態です。次々と患者が出てきて、次の患者も休ませねばなりません。作業人員の割当は連日変わりなく出さねばならず、片川氏も二日休ませてもらつたものの、三日目からまた伐採に出るよう命令されたのです。

虜囚の身ではどうすることも出来ません。止むを得ず作業に出ることになったのです。それに先立つて片川氏、ベチカの影の暗い所で、みなに隠れて何か食べているらしく、口をもぐもぐさせています。どうやら馬糧の燕麦のようです。麦殻そのまま呑み込んでいます。私は見兼ねて注意しましたが、殻ごと呑み込んでしまつて殻を出そうとしません。誰でも同じことで腹を満たすために殻ごと呑み込みたいのですが、それは身体のことを考えると食べはならないことなのです。その日の作業中、午後三時頃だったかと思いますが、片川氏は、急に体の不調を訴えてとうとう倒れてしまいました。担当責任者に連絡して、大急ぎで木の枝で担架を造り、四人で担いで收容所に帰り、すぐソ連の医師の診療を受けました。診療を済ませて、医師はこの患者の友人は誰かと問うので「ハイ自分です」と答えたら「今晚が大事だから用心して看護すること」「患者が眠りかけたら頬などを叩いてもよいか眠らせない様に」と、眠つたらおしまいとのこ

とで、これは大変なことになったと思ったが、一生懸命に見守っていた。言われた通り頬を叩いたりゆすったりしていたが、片川氏、とうとう鼾も高く寝入ってしまった。そして深い眠りに入ったようです。私も自分の手におえなくなり医師に連絡に行きました。夜の十一時過ぎではなかったかと思えます。医師はすぐに来てくれました。「この患者はもうだめだ」と言われて、私は「ドキリ」と心臓のとまる思いでした。何しろ深山の奥地で薬一服も与えられず、もちろん、注射液など思いもよりません。ただただ見守るだけです。次々と戦友が駆け込んで来てくれますが、どうすることも出来ません。情けない。みじめな虜囚の患者、夜も更け切った頃、片川氏の心臓の鼓動が遂に止んでしまった。余りにもみじめで、夜の明けるまで戦友と共に泣き明かしました。

その日、朝から彼の火葬の支度のため私にすべての責任をまかされました。彼の着ていた服や下着などの洗濯から始めて火葬場の薪の準備、そして十人の戦友等と火葬に取りかかったのですが、何一つお供えする物がありません。タバコが好きだったからみんなから少しずつマホルカを貰い集めて山の草花と合わせて頭上に供え、ただそれだけで茶毘に付したのです。

それ以後私は戦友として遺骨管理の任に当たり、移動の度毎に大切に持ち歩いたのです。私たちの中隊では遺骨の数が三十個以上にもなり預かっている者はそれぞれ丁重に取り扱っていたのですが、それがかえってソ連兵の疑惑をかい「中を見せろ」と強要する。「若しや宝物、時計」移動の度毎に銃口をつきつけられての騒ぎの繰り返しに私も何回かそのような目に遭っておりまして。上部の人たちがいろいろ話し合った末、これ以上紛争が大きくなって「若しものことで預かっている者への迫害があつては大変」と、遺骨を一括してソ連側に預けることに決まり納めることになりました。その数三十柱以上、その後は遺骨の行方すらつかめず、その収容所を移動することになってしまいました。私は片川氏の形見に何かないかと考え使用していた石けん箱を形見としていたのですが、引揚船に乗船する前「決められた物以外は船に持ち込むことを禁ず」で、取り上げられてしま

いました。石けん箱一個でも片川氏の遺族の方にお渡しすることが出来れば、それだけでも私の精一杯の行為を認めて許して貰えたらうに。生きて帰って来た私“どの顔下げて”片川氏の遺族宅を訪れられよう。いろいろ考えあぐんだ末、訪ねて行かないことにしました。今だに申し訳ないような、済まない気持ちで一杯です。あの抑留当時は思い出す度毎に、ゾーツとします。二度とあのような苦しみは味わいたくありません。今後、私たちの子供、孫、ひ孫、玄孫に至るまで、あの生地獄の味は絶対に味あわせたくありません、本当に懲り懲りです。

熊本県 徳永年春

シベリアではどういふわけか死者は皆解剖されることになっているらしく、解剖を手伝うようにとのことであった。私と先発隊の人と二人で牧さんについて来ているので、この軍医さんと衛生兵の人たちとで、ポプラの影のある兵舎の庭を借りて準備をする。机を出し、椅子を出し、膿盤の桶ときれいな水を入れた桶と、物足りないシベリアのこと、満足な用意はできないまでも準備万端整い、軍医さんの白衣姿もりりしく解剖は開始された。

天もあわれと思ったのか、強い日差しを少しさえぎって雲が出て陰をつくってくれた。大きな直刀で喉にメスを入れ、次に肋骨七本を鋏で。パチン、パチンといとも簡単に切つてしまわれ、次は腹部を直刀で大きく切り割ってから、一つ一つ内臓を調べられた。開腹と同時に、多量の膿が机の上に吹き出してこぼれ落ちた。あれほど化膿を心配して腹部を冷し続けてきたのに、最早手おくれであったのか。膿は腸に充満して、生きているのが無理であったのであろう。

昨日まであの遠い採草地まで片道五里、六里と歩いて行って大鎌を振り、幾十ソートの草刈りを続けてきた。草刈りばかりではない。トラクターのバリカンによる草刈り、ガラブリ(草集め)、馬方による草集め、小山づくり、大山づくり、どれ一つとつても楽な仕事はありはしない。シベリアに来てからも数えきれない苦難の日々をなめつくして、日本に無事帰るべくやつとここまで来たものを、尊

い人を亡くすとは何と悔しいことであろう。

曇っていた太陽がまた強く照り出して、メスを持たれた軍医先生も、手伝いの兵隊たちも汗が玉のように額をしたたり落ちる。悪臭をかぎつけた大きなハエが無数にたかるので、近くにあった向日葵の大きな葉を団扇代わりに使った。腹の中を水できれいに洗い、内臓を元の位置に納め、縫合針で縫い上げ、肛門と口に固く脱脂綿を詰め、アルコールで体を拭き上げて解剖は終わった。死体安置所に牧さんを寝かせてもらい、兵舎に帰った。

入ソ以来どんなに待ちわびた「東京ダモイ」。ナホトカまでやっと来たというのに、或る人は船に乗って無事日本に帰ったというのに、こんな遠い大草原の果てに連れて来られてあと一ふんばりというとき、腹痛を起こすとは何たることか、家では皆が待っているであろうに、ナホトカからすんなり帰してくれたら腹痛も起こさずに命を落とすこともなかったろうに、惜しい人を亡くしたもんだと悔まれる今日の日である。

午後もお天気はよくて、かんかん照りの中を、昼食の後、四、五名の人に手伝ってもらって、西の方にある丘の上の墓地に墓掘りに出かける。スコップと鶴嘴を持って、折角こんな遠いところまで牧さんを助けたいばかりに大事に連れてきたものを、墓まで掘らねばならないとは何と残念なことであろうか、悔やみても悔やみきれない、くやしきである。

医務室に昨夜連れて行ったとき、なんで開腹手術をしてくれなかったのか、手術道具が揃っていないかったのか、軍医さんが内科の人で外科手術ができなかったのか、それとも、輸血、リンゲル、ブドウ糖等々の医療品に乏しくて助ける見込みがなかったのか、解剖するまで腹にさわらなかつたのは今思っても不思議である。

現在の日本であるならば、まだ助かる見込みのある中、ラーゲルの医務室に連れて行ったのである。あたら若い命を残念でたまらない。また、私を作業に追いやらず医務室に看護においてもらえたら、最後の牧さんの言葉を聞いて上げ

られたのに、何一つ遺言もない。

ラーゲルの西方百メートルほどのところに小高い丘があって、墓地になっていた。現地には死んだ戦友たちの墓標が新しいのやら古いのやらが十幾柱立ち並んでいる。この大草原でどんな事情で亡くなられたのであろうか。感冒か、怪我か、栄養失調症か、幾度もご苦労されたことを思い、しばし両手を合わせた。

左手の広い場所を見つけて墓を掘ることにした。固い赤土はスコップを受けつけない。一生懸命鶴嘴を使つて掘ってみる。スコップで土をはねて、こびりついた赤土を掘り上げる。人丈以上に深く掘る。夏の午後の日は暑いこと、汗が体中から吹き出してくる。服が汚れるので裸ん坊で掘る。深くなると一人で掘るため交替で掘つて、やっとお墓を掘り上げることができた。皆にお墓で待つてもらい、ラーゲルまで牧さんの遺体を迎えにいきタンカに乗せてくる。牧さんはすっかり痩せかけて細くなつているので軽いはずなのに、牧さんを担ぐ足どりは石よりも重く感じられた。暑い夕日を浴びながら、汗びつしよりになつて墓地へ担いでいった。

シベリアであらゆる苦労を重ねて、ソ連の国に多大なる貢献をして、牧さんにはどんな立派な着物を着せてあげてもよいはずなのに、着物一枚着せることもなく、古ぼけた毛布の切れ端にくるんで、犬ころでも捨てるみたいに邪魔者扱いするとは何事であろうか。

いよいよ最後のお別れだ。牧さんを抱き上げて皆で墓の中におろしてもらい、頭を北に向けて安置する、やっと深い谷底に寝かせることができた。

大きな向日葵や、萩、おみなへし、かるかや、ききょう、なでしこ、月見草、きれいに咲いた野の花を牧さんの上に乗せて飾った。

「皆さん、いいですから土をかけて上げてください」とお願いして、三丁であったか五丁であったか、スコップでつぎつぎと墓の中に赤い土が音立ててはうり込まれていく。墓が深いので息が切れる。交替で土を入れてやる。どうやら土も入れ終わつて、亡くなられたほかの戦友たちのように高く土まんじゅうを盛つてやつ

た。固くスコップでたたき固めて、東正面を向けて「牧正徳君の墓」と新しい墓標を隊長さんに書いてもらったものを建てた。全員、長い黙とうを捧げてささやかな野辺の送りは終わった。

昭和二十三年七月十六日 朝九時 死亡

午後六時 埋葬

大草原の真つ只中の墓地で、だれも詣でる者もなく今なお淋しく人を待っていられたるシベリアの遺霊の人々。隊長以下十数人葬儀に参列、牧さんの埋葬を手伝っていただいた。真つ赤な太陽を真西に拝むようにして牧さんの墓標に向かう。背の高いポプラ、プラタナス、泥柳の枝で夏蟬がやかましく鳴き交わす。炎天の大草原、萩の花が牧さんの死をいたむかのように深く頭を垂れる。大きな向日葵が幾つも咲き競い、ききよう、おみなえし、野菊の花、なでしこ、月見草等々が美しく咲き揃っていた。長く長く黙とうを捧げていた兵隊たちの目から「滂沱」として涙が流れ落ちてとまらなかつた。手伝ってくれた皆さん、本当にありがとうございます。でも、どうして牧さんを助けることができなかつたのであろうか。

大きな、とうもろこしの葉がさらさらと風に鳴っていた。とうもろこしの花が異人さんの髪の毛のように長く紅く畑いっぱい揺れていた。とうもろこしの畑の角にもその近くの庭の角にも、収容所の庭のあちこちにも、墓地のあちこちにも暑い陽射しにしほれたような姿でいっぱい咲いていた。昼間はひまわりや萩、なでしこが牧さんの墓前を飾ってくれるのである。大陸の夜は星も月も美しい。月見草は夕方花開くとき音立てて花開くという。

だれも知らないシベリアの墓地の、ひまわりよ、萩よ、ききようとおみなえしよ、そして夜は淋しである。牧さんの墓地を守って忘れることなく幾歳霜、荒野に咲きかわり続けているであろう月見草を思う。

墓前に手折って捧げてきた月見草、向日葵、萩、また今年も美しく咲いてくれたことであろうか。

秋風が吹き、枯れ葉が舞い、また冷たい冬が訪れる。

死亡者

高知県 東山 林

十二月から翌二月上旬までは遺体を茶毘に付し遺骨を埋葬していたが、それ以降は遺体を全裸のまま雪を覆って葬った(土が凍って墓穴が掘れない)ものの翌日の埋葬者を運んだ時、前日埋葬した人の遺体が飢狼の群に襲われて跡形もなくなくなっていたのは再度を超えた。生き地獄とはこのことだと感じながら、この実態はどのようなことがあつても遺族に伝えねばならぬという責任感から、細字の特殊技術を利用して死亡者二十八名の名簿を作成し隠して持ち帰った。書いた物は(印刷物も)一切持ち帰ることはできない状態で時々持ち物の検査もされ、書類などが見付かると、その本人は勿論のこと所属部隊全員が帰国不可となる、とおどされていたので、之を実行する時の気持ちは「命的」という悲壮感があり、その隠し方については永い間公表する気持になれなかつた。

和歌山県 北又光夫

初めての冬、古兵で陣内上等兵と皆が言っていたその彼は、夜静かになつたまま朝起きないので、そばの者二人で近寄り起こしたが、声もなく既に死んでいました。やはり栄養失調死であつた。シラミは不思議に命を引き取ると体外に出してしまう。私たち五、六人で寒い外に運び出し、土を掘ろうとしても、極寒零下何十度となるととても掘れるものではない。少し掘って土を被せ、合掌して拝み、心から冥福を祈つた。

死者の火葬

新潟県 高橋 算

三十センチも雪の積もつた寒い朝だつた。ソ連兵に呼ばれて使役を命ぜられた。

四人の仲間であったが、何と死者の火葬当番であつて、嫌な使役であつた。髪の毛一本見えないほど白い包帯で全身を巻いてある六人の遺体であつた。

雪をのけて丸太を何本も運び、林の下の雪をのけて地上に井桁に組んで二人の遺体を載せて、またその上に丸太の井桁を組み重ね、二体を積む。また丸太を重ねて六体を載せた。二人で一人の遺体の頭と足を持っても体は少しも曲がらないで、凍っているのか、丸太を持ったような感じだったのである。そして一番下から白樺の皮や小枝を集めて火をたいたが、丸太にはなかなか火が燃えず、何回もやり直した。

四人は終始無言で努力した。そして煙が上がリ丸太が燃え出して中は見えなくなり、少し離れて見守っていた。嫌なにおいがして火の手が上がつたころ、ソ連兵が別の仲間四人を連れてきて交代させられた。後のことはどうなつたかわからない。そして遺骨はどうしたかわからない……。

ただ日本人であつたことは間違いない！ 今になって考えれば、そのとき六遺体の官姓名を聞き、遺骨の一部でも持ち帰れたならどんなによかつたことかしかないが……。だが、当時はそれどころではない。自分がそうなつていても不思議ではない状態であつて、生と死との境にいる魂の抜けた人間の集団であつて、正常ではなかつた。

そして、ソ連内に日本人墓地が方々にあると聞くが、死者の全部の墓石があるとは信じられない。広い原野の丘に一人寂しく、詣でる人もなく眠っている人もある。ソ連国じゆうに八百五十カ所もあつたと言われる各ラーゲルに、多かれ少なかれこのようなことはあつたに違いないのである。私どものラーゲルはチタ二十四地区と言うようだった。そして二十四地区内にも同じようなラーゲルはたくさん存在していたし、山小屋程度のところは数知れないようだった。

清野君の死

新潟県 高橋 算

シベリアでは秋も冬も一度に來た。夏の間は小さな山小屋へ転々としたが、寒くなると大きなラーゲルへ集結する。そして伐採する林もだんだん遠くなつた。そして一時別れて作業していた清野君とまた一緒になつた。

雪の二十センチくらい積もつた日、暗いうちにラーゲルを出て林へ歩いて行つた。そして落葉松二、三本倒したころ、また一本の木を間にして清野君と雪の中に腰を落として切つていたら、隣の方から「倒すぞ」と声がかかつた。倒すときは互いに声をかけ合うことになつていた。声のする方を見たら相当離れてはいるし、細い木であつたので二人とも手を休めて見ていた。すると向こうの樹は半回転してこちらへ倒れてきた。そしてその樹の先端が私たちの二人の間の木の先端に当たり、バラバラと雪と小枝を落として倒れた。逃げる暇もなく、体も動かず、雪煙がおさまるまで頭を下げていた。

雪煙がおさまつて見ると、清野君は頭を上げなかつた。「大丈夫か」と急いでそばへ行つて声をかけたら、肩と膝へ当たつたが大丈夫だと言つていたので安心した。私は小枝と雪がかかつた程度だつた。ソ連兵が見たらしく、すぐに歩いて來た。そして清野君の顔を見ていたが、やがて「ラーゲルへ帰れ」と言つて、彼は一人で雪の中を歩いて帰つて行つたが、実は私にとつて清野君の姿は最後の別れであつたのである。

二、三日後になつて衛生兵に會つて清野君のことを聞いたら、病院へ行つて死亡したと言ふ。私は事故のときよりこのときの方ががっくりきた。

岐阜県 伊藤 武

一月の寒さの厳しさが続く朝であつた。点呼のときに一人足りない。気づいた第三兵舎の隣人が、兵舎に戻り様子を自由にゆくとまだ毛布にくるまって寝ている。起こそうと思つて手を掛けると、既に硬く冷たくなつてることが分かつた。

急いで引き返し、このことを警備のソ連兵に告げると、彼は所長(ナチャーニツク)に報告し、やがて日本人捕虜を引き連れ仕事場に向かつてしまった。残っている炊事係に所長(ナチャーニツク)からの命令が伝えられた。「収容所西の望楼より百メートルの丘に埋葬せよ」とのことであった。私たち四人が第三兵舎へ行くと、北側下段の中ほどに毛布にくるまった若者が死んでいる。四人で毛布の端をもつて兵舎の入口まで運び出し、「どのようにしたらよいか」と相談すると、中年の男が、「墓地へ行って、まず積もっている雪を取り除く。土が見えてきたら、それは凍土になってるので、その上で焚火をして少しずつ溶かす。溶けただけツルハシで掘り進み、スコップで砂を出して寝棺の大きさの穴を作る。そこに毛布のまま埋めるのだ」と静かに話してくれた。

道具と薪を手分けして運び、三時ごろまでに一人一人埋められるだけの穴が掘れた。再び引き返して、第三兵舎入口に置いてあった遺体を毛布ごと持ち上げ、営門から埋葬地まで雪の中を運んだが、その遺体は実に軽かった。穴に遺体を入れ、掘り出した土を戻した。元の高さより少し盛り上がった程度の土饅頭ができた。凍土のため十分深くまで埋めることはできなかった。また、この辺りには石というものがなく、その上に三石(みついし)を置くこともできなくて、ただ松の木の枝を折り目印としただけであった。

戦友が次々と死んでいく……抑留地の実態

前にもシラミのことを書いたが、全員がシラミをどつさり持参したので、五百人が残らず発疹チブスにかかった。辛うじて半病人の炊事要員のほかは皆四十度以上の高熱を出し、ほとんどが脳症で、うわ言を言っているかと思ったら、ユトツと動かなくなってもう死んでいる。私も例外ではなく、河井伍長と枕を並べて熱にうなされていた。松井衛生兵が皆の熱を次々はかつて、一番高い者から注射してくれる(注射液が少ないため)。私が四一度、河井が四〇度五分で五分ほ

広島県 増田敬三

ど高い私に先に注射してくれた。今でも覚えているが、うつらうつらの意識の中で木の皮をはぐように熱がとれていったそのとき、河井伍長が泣きそうな声で「増田兵長はエノー」と言ったことが忘れられない

それから二日後に河井も脳症を起こして「増田兵長、妹が営門まで迎えに来るとるけん、連れてってくれえやあ」と繰り返しながらとうとう死んでしまった。また永井伍長もその二日後に、わけのわからぬことを大声で叫びながら河井伍長の後を追った。私もそのときは、大分熱も下がってどうにか正常の意識に戻っていたので、ジャラントンで井上少尉の言った「これから先、内地に帰っても決して幸せはない」との言葉を思い出し、内地どころか極寒のシベリアで捕らわれのまま死んでいった河井、永井をどうしてあの時自決させなかったか、しなかったかと悔やまれてならなかった。

次々に死んでいく友。ソ連は火葬ではなく全部土葬で、そのため死者の穴を掘るのが大変だった。土地がカチカチに凍っている。初めころはひつぎに入れて埋めていたが、余りにもどんどん死ぬので穴掘りが間に合わない。その穴掘りも、半病人で自分が歩くのがやつとのありさまなので、やむを得ず浅い穴へ肩の上に肩を重ね七名から十名を一緒に埋めていく。それでも間に合わず、今度は物置小屋に死体を積み重ねて置く。でも気温は零下三〇、四〇度なので、物置に運ぶとすぐにキーンとカチカチになる。そのしかばねを半病人が二、三十名で来る日も来る日も埋葬するのである。

初めころはひつぎに入れて深く埋めて墓標も立てたが、間に合わぬようになってからは、裸のまま並べてむしろをかけ、その上に掘った土を盛り上げるだけで、墓標も立てなかった。今考えてみると、戦友でありながら随分冷たいことをしたように思うけれど、そのときはまるで感慨のかけらもなかった。

歩哨の監視のすきをくぐってこっそり地方人の家に行き食物をねだったりして、見つかると死体を積み重ねてある小屋に入れられる。罰である。ただ黙然と凍りついた友のしかばねの上で一晩じゅう罰を受ける。

話が前後になるが、次々に死んでいく死体を山下軍医(目下東京で内科医院開業―戦友藤江恒郎の話)がかみそり一丁できれいに解剖する。これといった病原もなく、ほとんどが栄養不足だったという。

広島県 九十歩利春

最初一カ月は何とか過ぎ、十二月初めごろから伐採作業になりました。朝五時起床、朝食は皮かむりコウリヤンを炊いた飯が飯ごうのふたに八分程度。

そのころより体力が衰え、睡眠は満足にできず、九月ごろから入浴は一度もなく、被服の洗濯もなくシラミがいつばい、味わったこともない寒さが襲い、ストーブの傍らで暖をとって床に入ろうと思うと、すし詰めのため他人に場所を奪われ、それこそ生き地獄というのはこんなのではないかとだれもが思っていました。

一月に入って死者が激増し、多い日は数十名の死亡で、この次は自分では何度思ったかできません。埋葬地は石のごとく氷結して(ツンドラ)、死者を埋める穴がなかなかできません。枯れ松の丸太五十年のものを四〇五本、俵を積むように組み上げ火をつけて帰り、翌朝行き焼け木を除いて焼け跡を掘りますが、十五センチから二十センチくらいしか掘れません。そのため収容所の死体置き場は山積みになりました。ソ連では死者に衣服は不要と脱がせ、十日間ぐらいかけて、深さ一メートル五十センチの溝状の穴を掘り死体を三段に重ねて埋葬しました。

埋葬地への死体の運搬は軽作業の病人でやらされ、むしろの上に乗せ両端を縛り運ぶのですが、むしろからはみ出して進めなくなると、あごにロープをかけ雪上を一体四人で引っ張つてという、まことに申しわけない悲惨なやり方でした。遺体を収容所の外に運んでいたとき、四角の望楼の上のソ連兵が何か叫んで嘲笑したのに出会ったことがあります。腹が煮えくり返り、「おのれ、今に見ておれ、必ず仇を討つてやるぞ」とにらみ返して通った思い出があります。

三月末ごろ、春には帰国とのうわさが流れ、そのためにか遺骨の作成の指示が出て、死体置き場から一体ずつ出し、手足十本を手おので切断、鉄板の上で焼き、一人の遺骨で二十人分をつくらせました。三月末、生存者二百三十三名、死亡者二百六十七名だったと覚えていますが。この死亡者については、昭和二十年五月ごろ徴集された徴兵検査で、第三乙種の者(ハイラル第八野戦自動車廠関係者三十歳以上の者)と、配属してきた当時、竹の水筒、竹の飯ごう、竹の帯剣で入隊した体の弱い兵隊が特別多く含まれていたように思います。

福井県 林俊男

入ソ以来、日増しに寒さが増してくる。着衣は満州時代のままである。五人ほど収容されているアムール州第十一収容所では、入ソ以来一度の入浴もなく、体は垢にまみれ、虱はわき放題だ。毎日カンテラの灯で三十四匹ほどつぶす。また翌日同じ数の虱がわいている。そのうち発疹チフスが蔓延。四〇度の高熱が続き、舎内にて死亡する者が出て、棺桶に入れて積み上げ、棺桶が足りなくなると一個に二人を収容し、板が不足したので厠の囲いの板でつくり、死体が溜まると馬車に積み墓地に運ぶ。墓地の穴は、毎日使役で穴掘りに出掛ける。明日は我が身の墓穴を自ら掘った。

熊本県 白井鉄郎

このころ忘れることができない嫌な悲しい事件が発生した。四月半ばと思うが、山の作業を終え、収容所前に整列し人員点呼を受けているとき、一人の兵隊がフラフラと雪の原野に歩き出した。ソ連兵が「ストーイ(とまれ)」「ダモイ(帰れ)」と連呼したが、振り向きもせず真っ直ぐ歩いていく。並んでいた我々も茫然として見ていた。

やがてソ連兵が銃を構え「ダモイ」と連呼するが歩みをとめない。ついに引金が引かれ、瞬間、飛び上がるようにして前のめりに倒れた。距離にして二百メー

トルくらいか、みな自分の目を疑うような現実であった。

射殺された遺体は、その後四、五日、收容所門横に放置されていた。

滋賀県 島田 敏

ある日の早朝、監視兵が発した銃声が聞こえた。一人の兵隊が鉄条網のすぐそばで射殺されたのでした。彼は衛生上等兵で、おとなしい真面目な人で、私の下でいろいろと大変よく医務室関係のことをやってくれた人でした。そのころ彼は下痢がみだつたのか、收容所の便所が満員のため我慢ができなくて、鉄条網の近くで用を足そうとしたのでした。ソ連の監視兵は逃亡を企てたものとみなして、注意のための威嚇射撃もなく、いきなり射殺したのである。

当方の吉田隊長はソ連側の所長に抗議したのですが、あまり問題にしなかったようです。

伐採作業、木材輸送、製材作業、貨車積みなどの重労働のため、過労の上に栄養失調が重なり、朝起きると既に冷たくなって帰らぬ人となっていた人たちが、厳寒の中で思いがけない事故によって亡くなった人たちが、ことに收容所に入った当初はこのような気の毒な人が何人かおりました。

和歌山県 笹内武夫

昭和二十年九月十五日、綴芬河で二日ほど休息の後、十七日、乗車。十八日ソ連領に入る。全く行く先は不明である。シベリア極東鉄道に乗り入れた時からだと思ふ。車両は時々駅もない所でも停車したり、また走り出したりで時間などはさっぱり頼ることができず分からなかった。もう極東鉄道に入っているのであれば、南の方向に走らねばならないのに、北東に向かっているように思えてならない。方向感覚も鈍くなっているのだろうか。

ある日の早朝、列車はまた途中で停車した。それからしばらくして銃声が聞こえた。不吉な予感が走った。すると私たちの車両から二両後方で事件が起き

たのです。本当に、思えば哀れと言うか、ばかげた事と言ひ捨てなければならぬのか、停車した車両の外に出て、人間の生理現象の用便を果そうとしたのをソ連兵が脱走と思ひ違ひして発砲したらしく、日本兵は腹部の貫通で即死であった。ほんのちよつとした双方の「思慮の不足」のために起きた悲しい出来事でも、もう少し互いに慎重な行動であつて欲しかったと私は痛感しました。あまり時間がなかったが、ソ連側に頼んで、明け切らぬ薄暗い線路脇に遺体を埋めて、合掌して別れて来ました。本当に、かようにして瞬間の出来事のために他国の土の下に埋められて行く余裕の無い人生が憎らしく悲しく思えました。

岩手県 川口純二

極寒の收容所で、大量の同胞が死んで行ったこと、朝起床の合図、そしてまた隣人のベッドの上段の戦友を死体で発見：何という悲惨な死であつたか。当時は自分自身生きることが精いっぱいであつたのだ。彼も恐らく苦しみつ、苦しみの中であつて人の助けを求めようともがき苦しみつ、しかし、それを言い出せず死んだ。何ということ。さながら生地獄とはこのことかと思つた。

次々の死骸の処理に、極寒の水結した山野の地表面は固く掘撃困難であり、衣類を脱がせ、全裸体にし、死体を戸板で運び積み重ねた。重ねるときのあの鈍い音。耳に残り、生涯忘れることができない。

岩手県 川上 仁(旧姓 出羽)

とにかく、作業場所は北へ北へと移動し、その果てはシベリアへ行かざるを得ないようになつていたのでした。何度も聞く「ダモイ」の話で貨物列車に詰め込まれ、長い日数を動物運搬同様の扱いで北へ運ばれるのであつたが、今度だけはダモイであつてくれと願ひながら苦しい貨車暮らしにも耐えて来たものの、生理現象はどうしてもとまらないので貨車の扉を少し開けて放水してみるが、体が動くと失敗する。いろいろ考えたのが、厚紙があればV形に折り扉の間に挟み用を済ま

せはしていたが、大の方はどうにもならないので、見回りのソ連兵に話を聞いてもらうと、よく分かるので責任者に聞いてから方法をというこゝで帰った。直ぐ返事がなかったが三十分したら来てくれて、そのことについては条件があると言うのであった。

一、貨車から降りたら背を貨車に付けていること

一、排便はその場ですること

一、その場所からは一步も前に出ないこと

以上の条件付きなので、日本の兵が一列に線路上に並び用を足している様子は、他人が眺めたらさぞや奇妙な光景であつたろう。

ところがどうしたとか、一人が前方の叢へ向かつて駆け出してしまったのだ。

考えられない行動を取ったものである。監視のソ連兵が、大声を上げてロシア語で叫ぶので、何で叫ばれたのかわからないようでも振り向いた瞬間、ソ連兵の自動小銃の音が響くと同時に駆け出した兵はのけぞつて斃れてしまった。これは一瞬の出来事だった。夢でありたかつたが目前の悲しい出来事で、今でも思い出される。監視の兵は逃亡者と見て射殺したのだから、なぜあの男が皆と一緒に排便できなかったか、不思議でならない一つの出来事だった。

岩手県 荒田昌三

外気が零下二〇度を超えると川面が凍り始めるが、それを待っていたのか、十二月二十日の夜半、四国出身の二名の兵長が、收容所の鉄条網を潜り満州国の方向を目指して脱走したが、翌日捕まり、射殺姿となつて戻つて来た。見せしめのためか、すぐには埋葬許可が下りず、日本兵の目の届く所に野晒しにされ、監視の警備が強化された。

一週間後埋葬することになったが、作業から帰つて来た兵に余力がなく、かつて同中隊の者を募つたが、十名しかいなかった。埋葬地の裏山は凍土に変化しており、墓穴の掘鑿は容易ならず困難を極めた。寂しい越冬であつた。

二十一年の夏の重労働は更に栄養失調を促進させ、現に頭蓋に手で触れると容易に骨の継目が分かるようになり、日によつては起床時に数名の死者が出ることもあつて、これまでの死亡者の数は総員の二割の百名を超していた。このことは、この国に搾取があるからで、ソ連の社会主義国家は、平等で搾取なき平和な国と標榜しておりながら、その反面では、各層に盗みと横領が蔓延し、安逸を貪る者がいる実情であつた。

常々、ソ連はユートピアの道程に在るとうそぶいているが、そこには進化も文化もなく、娯楽さえ許されず、鉄のカーテンに閉ざされた冷たい国で、それは病院の患者百人に対して体温計が一本しかなかったことからもうかがわれた。

岩手県 新沼隆男

收容所の生活、毎日の重労働は筆舌に尽くせぬ苦難の連続でした。前労働から帰つて二段ベッドに横になつている戦友に声を掛けると、「済まないが水が欲しい。汲んで来てくれ」と。……急いで缶詰の空き缶に汲んで「水だよ」と声を掛けたが返事がない。「おいつ……どうした」と揺り動かしても何の返事も反応もない。体は骨と皮ばかり、食べたものは全然消化されずそのまま排泄され、栄養失調で水を頼んだ時には既に足の方から死んでいたのだ。どんなにか日本に帰りたかつたであろうに……。皆で涙し埋葬する。明日は我が身かと不安と焦燥の念が走る。

千葉県 宮崎定雄

昭和二十一年一月下旬、分隊員・佐藤千代松君、夜、「ぼた餅、お汁粉などを腹いっぱい食べたい」と話した。眠いからと先に眠つたが、朝起きず。死亡確認する。北海道空知出身の補充初年兵、十九歳の落命です。労働優先の国、仲間はずれ一人見送ることもなく埋葬され、場所も知ることなく終わる。

埋葬

広島県 村中汎雄

春になって、霊安室の遺体を埋葬する使役に出された。冷凍したマネキン人形のような遺体が、裸のまま積み上げられている。中には解剖されたのか、針金で切り口を閉じられた者もいた。何体あったかは記憶にないが、これらを針金で腕などに引つ掛けてトラックに積んだ。埋葬場所は林の中の広い所に深い壕（二メートルくらい）が掘つてあつたように思う。この壕にまた針金で滑り落とした。このときは、まだ埋め戻しはしなかつたように思う。悲憤の涙が溢れ、明日は我が身かと、死者の心情を察し、さぞかし無念であつただろうと、冥福を祈らずにはおられなかつた。

石川県 松田春雄（旧姓 北村）

シベリアでは、夏は日の出が午前二時ごろ、日の入りが午後十一時ごろ、冬は午前十一時ごろと午後二時ごろであつたが、作業はカッキリ八時間働かされた。零下五〇度以上の酷寒の日も一冬に三、四回あつた。

作業は零下二五度以上になると一応中止とはなつたが、酷寒、空腹、重労働と三拍子揃つてはたまつたものではない。入ソした初の冬から翌年の六月までに、六百名のうちなんと三百五十余名が骨と皮ばかりの栄養失調で死んでいった。残つた者も痩せ細つて、全くこの世の地獄図絵であつた。

岡山県 妹尾正一郎

特に伐採は重労働で、栄養失調のため死亡する者も多かつた。老衰で死亡するようであつた。死亡者は火葬にし（山の中であるから、材木が沢山あるので簡単であつた）、死亡年月日、住所、氏名など書いてお互いに知人が持つていた。何度かの装具検査にも、紙片を口の中に入れて隠したり、服の中に縫い込んでいたりしていたが、最後のモグゾンの装具検査で遺骨と共に取り上げられ、誠に

残念であつた。

幸いなことに私は、最初のころの五十七地区に配属されたことはなかつた。元来歩哨は捕虜を保護するのが任務である。その歩哨が検収員（作業量の検査をする人）と同調し、作業管理を盾に栄養失調による重症患者、歩行困難な者、回帰熱患者（繰返して熱の出る病気でシラミ、南京虫などが病原菌の媒介をする）など病気に苦しむ患者まで作業に追い出すので、歩哨や検収員は蛇蝎のごとく忌み嫌われた。病人が作業に出れば、健康な者は病人の面倒を見ながら、病人の分までノルマが要求される、作業中患者が寒いので焚き火の所に外套にくるんでおき、休みになって帰つて来ると、焚き火の中に倒れて焼け死んでいたり、作業を終わり病人を背負つて、やつとの思いで宿舎に辿り着いたら死んでいたり、という者も少なくなかつた。ちなみに、第五大隊千五百名中約半数の七百名くらいが死亡しているが、この地区の宿舎には廊下まで患者がいる、死者がいる、歩く道もない有様だつた。

朝の点呼には、週番が寝ている者の頭をたたいて回り、目を開ければよいが、開けない者は死者として裸にして外に運ばれた。山と積まれた死体は、炊事の水汲みが桶に入れて山に捨て、帰りにはその桶に食事に使う水を汲んで帰つて来る有様であつた。まるで地獄だ。帰国の希望も空しく死んで行つた同胞の怨念が落ちつくこともできずに、が五十七地区であつた。

広島県 難波繁男

炊事の設備が足りないため、毎朝五時起床、朝食を食べ終わつたらまた寝こみ、八時、作業に出発。そのとき昼食を持つて…の状態で、バタリハに着いたとき七五〇名いたのが一年で五五〇名足らずに減少。その上、死んだ人は冬の間はそのまま放置され、六月中旬ごろ、土が掘れる時期になったら、山の中に三・五メートル四方、深さ二・五メートルの穴を掘らせ、死体を投げ込み、上から少し土をかぶせて、その山の木を伐採し終わつたら次の山に移動するので遺体はそ

のまま放置されました。

福島県 相田正明

夜になると、交代で幕舎の中のストーブに薪を投げ入れ燃やし続け、飢えと疲労で寝床につくと、隣り合って話が出るのはいつも食べ物の話で、夢でもいいから箸を持って温かいご飯を食べたい、また「大福餅」も食べたいと話が始まると、「あんころ餅」と「おはぎ」の言葉も出てきて、出身地によつて餅の呼び名が違つたと議論し、お互いうまい食べ物自慢話へと進み、それぞれ故郷に思いを馳せて眠りにつく。

朝になって、「起きろ」と声を掛けると、隣の友は栄養失調と過労ですでに死んでおりました。そして山ぎわに穴を掘る準備に入り、雪をかきわけて焚き火をしながら土を少しずつ掘り、凍土をやわらげながらまた掘る、の繰り返しで、一メートルの穴を掘るのに数時間を要して凍土を取り除くと、ようやくスコップで掘れる状態になりました。夕方までかかつて一定の穴をつくつて土葬をいたしました。亡き友の冥福を祈り、明日は我が身がこうなるのかもしれないと、みんなしんみりとなり顔を見合わせました。

兵庫県 森田 純

ナホトカに着くまで三〇四の駅で停車し食料の補給をしてナホトカに着いたわけです。これがナホトカだとわかつたのは下車して收容所に入り、まず最初に持ち物検査を受けました(税関検査)。全裸になり、体をしらべ、次に持ち物すべて調べられました。

ここで一番悲しい思い出が残りました。それは自分の所属していた收容所で栄養失調とか木の下敷きとなつて死亡した人々の氏名と死亡年月日とその人の日本の住所を書いたメモ帳を没収されてしまい、まったくわからなくなつてしまいました。内地の親、兄弟に連絡したい気持ちで書き綴つた紙片ですが、無くして

悔しくて悔しくて仕方ありません。いまでもあるならほしいと思つています。

神奈川県 宮沢信行

收容所では、捕虜が死亡すると死体收容所に安置され、三日たつと医師が解剖する。この解剖は死因の究明ではないらしく、だれに対しても行われた。短時間で終了し簡単に縫い合わせておく。これは別の話であるが、收容所で死んだ人間が門を出るとき警備兵が銃剣で胸を突き刺し、足の踵を切断することになつていた所もあるようであつた。

ソ連では死体を美しく粧うという習慣はないよう、死亡すると、着ているものは全部脱がされる。真冬でも素っ裸で、仲間の捕虜がそこから集めた木材で作つた粗末な棺桶に入れる。死体に衣類を着せてやろうという戦友の要求は、「衣類も寝具もすべてソ連邦のものだから死体と一緒に捨てることは許されない、死体と寒さと何の関係があるのか」と拒否された。

この死者の着ていた衣類は、熱気消毒して後に再び生存者にあてがわれるのである。供養のダンゴや野花も棺桶に供えることは許されなかつた。一般的にこの種の宗教的とか精神的、情緒的なことについては、「唯物論主義者」のソ連当局の理解を得ることはできなかった。捕虜になつてから最初の二年間くらいが最もひどく、死亡者も連日後を断たなかつたが、シベリアで共産教育を受け、帰国後ソ連礼賛を続ける人でさえも、「入ソした当時の状態はあまり思い出してもゾツとするほどの、言葉では形容もできない生活であつた」と話している。

神奈川県 池田秀良

こんな食事では到底重労働に耐えることはできない。シラムが湧いてきた。南京虫も夜になるとぞろぞろ出て来て血を吸われる。冬は想像を絶する寒さになる。栄養失調で死者が続出した。亡くなつた戦友の遺骸は雪をかけ、夏を待ち埋葬された。冬は地下何メートルと凍結し穴を掘ることができないからだ。極

寒の中での作業のつらさ。寒いというより体が痛い。

岩手県 及川新蔵

和歌山県 河端亨之

火傷で入院中に私の見たことは、病室の一隅に同胞の屍体を井桁に組み二十体ないし二十五体はあつたように思う。三月末までの間に、四大隊收容されてはいたはずであるが、少なくとも三百名以上の犠牲者が出ているのではなからうか。しかし、我々の幕舎では、一度も墓地作りや穴掘り埋葬とかなどのような作業に出ることはなかった。次の移動後は、気候も暖かくなってきたので犠牲者も少なくなったことと、慣れというか寒さについても次の厳寒期を迎えることに對する習慣性が、いつの間にか皆の心身に養われてきていることもあつて、死亡者も少なくなった理由の一つであると思われれます。

広島県 難波繁男

その後作業に出るようになったが、その仕事は伐採。今までに経験のない者ばかり、それが人跡未踏の深山に入り、幹回り一メートル以上の松林が無限に広がっている中で、監督から作業方法を習い二メートルぐらいの鋸を両方から引いて巨木を切り倒す：初めはなかなかできなかったが慣れるに従い、ノルマを決められ、その上寒さが零下六〇度までは作業をやらされ、それ以下なら收容所で待機、零下六〇度になったらまた作業と厳しい状態。しかも銃剣つきで、加えて飢えと南京虫、シラミなどによる病魔に侵され、最初の年に早くも、朝起きて見たら毎日五、六名の死者。冬の間は百名以上が亡くなり、また、凍傷で手足の指が腐つてしまい作業のできない人が薬を与えられず、わずかに赤チンを付けるぐらいの治療しかしてもらえず、二十一年になつて、帰国だと收容所を出た人が、無事に日本に帰れたかどうか分かりません。

靈安室と言えは聞こえがいいが、死人を置く、バラックの小屋があつた。シベリアで死んだ人間は、真夏以外、冷凍人間である。立っていて肛門の穴が見えるほど無残に痩せ細つた冷凍死体は、裸のままうず高く積み上げられている。彼らに言わせると、死ねば人間といえども物体である。物体に着物を着せるなどというのは不経済だ。したがつて裸で構わない。入ソ当初の衣食住の劣悪さ、それに続く過酷な労働によつて、当初の半分ぐらいのうちにバタバタ倒れる人が多かつた。一日に十五人、二十人と死ねば、その処置が大変なことだつたであらう。ある深夜、死体置場でその冷凍人間をトラックに積み込むソ連人がいた。首と足を持って真つ直ぐな死体は材木を積むように積むことができる。私は茫然として、あの凍てつくシベリアの闇夜に立ち尽くしたのであつた。私の推量になるが、私のいたところは露天掘りの炭坑であり、したがつて膨大な土捨て場があつた。死体をあの土捨て場に捨てて、その上に土をかければ簡単に処理できたのではないか。

曲りなりにも穴を掘つて埋めるようになったのは次の冬からだつたと記憶している。

北海道 太田隆夫

伐採による骨折や栄養失調患者が次々と息絶え、氷上に積み重ねられ、被せられた枝木とともにガソリンで焼かれるのを毎日見ながら、湿布と注射による治療も効かず、痛みと熱で日に増し痩せ衰える我が身で、帰国が果たせるか否か不安が募るばかりだつた。

しかも、同胞が黒バンをかじりながら死んだ体に真つ白にたかる虱の山、麻酔なしの手術で断末魔の叫び声を聞くにつれて地獄さながらの思いを味わい、帰還に一縷の望みを託して身の保全に意を注いだ。

島根県 景山利造

軍隊時代の階級年次意識がまだ残っており、亡くなる人は四十歳前後の補充兵か初年兵に特に多かったと思う。昭和二十一年厳寒の二月、第三号棟が火災となり、数十名の戦友が焼死し、無残な光景であった。この屍を焼却せよとの命令により、山中に櫛で運び、地中は凍結して掘れないので、焚き火して凍土を溶かす作業を何回も繰り返して、やっと焼却したという嘆かわしい事件は今も忘れ去ることはできない。

また、伐採作業中やトラックへ丸太の積み作業中の不慮の事故により命を落とした人も数多くあり、一、五〇〇名の大隊員のうち三〇〇名余りが望郷の念に駆られながらもシベリアの凍土に骨を埋めたのである。

やがて五月ともなれば寒いシベリアの地も春というより一挙に夏が訪れ、野山には綺麗な花が咲き乱れた。そのうち野生のタンポポ、アカザ、ニラ、山からキノコの種類など、各人山ほど持ち帰り、それを煮て少しでも満腹感を味わいたく食べたのである。ある班は、氷の溶けた川辺より芹と思いつき持ち帰って、みんなで食べたところ、たちどころに腹痛を起こし、全員（十五名）が死に至り、食べたい一心とはいえ、誠に痛ましい事故が発生した。

岩手県 崎田正治

昭和二十一年夏、ソ連の将校に五十番（私の捕虜番号）を收容所の隊長に命ずると言われたが、私がそれを拒否したところ、ソ連側の将校に私が命令に応じないという理由で営倉に入れられた。そこには日本兵の死体が十体以上も入れられてあった。一晩中一緒にいなければならぬ。ソ連の冬季は凍土のため墓穴を掘ることが困難で、前の晩から焚き火をし一日に二、三体しか埋葬できないので、穴が掘れるまで営倉に入れておいたのであった。私は驚いた。痩せこけて骨と皮ばかりの素裸の身体から湯気がたっていた。死んだばかりの仲間だったのか、気味が悪いのを通り越し怖くなって、早く時間がたつようと死体に手を合

わせ祈るばかりであった。

岩手県 橋本達夫

死んだ者は直ちに全裸にして死体集積室に入れて置く。見る見るうちに多くなつていく。シベリアの冬は真に冷凍庫のようなもので、冷凍人間になるので少くとも五月頃まで保存できる。最悪の事態は二月であった。死亡率五割に達していた。このときに幸いにも関係者の努力もあつてか、海拉爾陸軍病院から横哲夫軍医中佐が大量の薬品サルバルサンを持参し療養に努められ、このお陰をもつてかろうじて全員死亡の難をまぬがれたのである。もちろん私もその一人である。

すべての調査資料にあるように、この收容所についてはどうも異常に感じざるを得ない。第一に、全員で一、〇〇〇人のうち、約半数の四八一人が死亡、二月に二四一人を最高に一月〜三月の間に集中していること。第二に、埋葬地も単独一カ所で四八一人である。第三に、この埋葬地が現在タングステン鉱山で露天掘りのため、廃土石の山の下になっていて遺骨収集も困難と思われる。

おそまきながら風の撲滅運動が展開され、陰毛の剃毛や熱気消毒室も作られ、虱も卵から消滅していった。かくして入所して初めて経験したシベリアの飢餓と酷寒と奴隷的労働に耐え、死の谷間をさまざざとつ奇跡的に生きながらえた。

恐怖の冬は過ぎシベリアにも春がやってきた。生き残った者たちのうち、比較的丈夫な者から順次、四八一人の屍の埋葬作業にかけた。運搬は荷車で五体くらいずつと、墓穴は三〇センチも掘れば精一杯で、凍土になっているため当時の体力では限界であった。それでも塔婆がわりに残材に消炭で名前を記入し、それぞれ読経を上げることができるだけの手は尽くしたのである。こんなつらい最期を目の当たりにして思えば、気持ちの治まることを知らない。その後六月から最後の二十三年八月の間病死者も少なく、概して生活や労働条件も逐次改善され、二十二年五月には收容所内にも浴室、洗場、便所、理髪室などがそれなりに

整備され、生活にもいくぶん余裕ができてきた。

岩手県 佐藤竹男

最初の収容所では国境に近いということもあって逃亡の話で持ち切りではあったが、年を越す頃はそれ程でなくなった。最初の冬は数人が亡くなった。朝点呼に出てこないのを見ると死んでいた。冬場の土葬は穴が掘れず、雪をどけて枯草をかけた上に雪を乗せるだけであった。冷たい雪の下で誰にも看取られず異境の地で死んだ戦友たちに対し、今は哀惜の念はもろろ、無念さ、淋しさ、恨みつらみは山ほど高く海ほど深いものである。しかし五十年ほど前の私たちは、次々死んで行く事実に対して（私自身も）何らの感情がわかず、むしろその日に亡くなった戦友の分、黒パンが増量になることへの期待だけだった。今考えてみると何という悲しい事であろう。必ず無事に日本へ帰国しようと話し合い励まし合ってきた戦友の死を弔うどころか、黒パン一かけらの増量を期待する本能だけの人間状態だったことを今再び思うとき、私は慚愧の念にも近い心情になるのである。土を掘ることができず雪だけかけて葬儀を済ました遺体は今どうなっているだろうか。

幸い命運よくながらえて今日現在満ち足りた年金生活に恵まれていることに、全身全霊をあげて山野川草に眠る戦友たちに感謝するものである。私にできることは何かと今でも考え続けている。

新潟県 平原敏夫

昭和二十年十一月、日時は定かでない。初めて迎えたシベリアでの冬、寒さはいよいよ本格的になってくると、その寒さに耐えていくだけでも、相当の量のエネルギーを必要とした。日ごとに体力の衰えが自覚されるようになってきたそんなある日、恐れていた人身事故、それも死亡事故がつかいにおきた。被災者は隣中隊の兵隊であったが、抑留生活に入ってから初めてのことだったので、皆のショックは

大変なものであった。いつ、どこで、どこから、どのように、誰を襲ってくるかわからない死の恐怖に、私たちは声もなく顔を見合わせたのであった。作業が一緒でなかったのに詳しいことは分からなかったけれども、事故は、伐採作業中倒れてきた大木を裂け切れなくての災難ということであった。

その夜、宿舎の全員が参列して通夜が営まれた。暮る不安で顔をひきつらせ、額を寄せ合つての心細い通夜であった。それでも位牌が作られ大根の味噌漬（誰かが千島の松輪島から持ってきていたらしい）数切れが霊前に供えられた。供物はそれだけであった。折よく宿舎内に僧職の方が居合わせ、お経を上げて仏を弔うことができた。服装はともかく、威儀を正しての読経、独特の抑揚あるうら悲しい声を聞きながら、皆の胸の内をそれぞれに去来したのは、果たしてどんな思いであったろう。松ヤニを燃やす手製のランプが、翌朝には皆の鼻の穴を真つ黒にする煤をゆらゆら吐き出しながら、ほのかに宿舎内を照らし、うずくまっていた私たちの影が大入道となり小坊主となって、右に左に不気味にゆれていた。こうした真似事みたいであったが、葬儀らしい行いが営めたのは、この時が初めてで最後であった。

昭和二十年のある日、朝目が覚めたら宿舎内が騒々しかった。私の寝台から少し離れた所であったが、隣に寝ていた兵隊が冷たくなっていると人だかりがしていた。

そんな騒ぎもよそに、その日も「ダバイダバイ（急げ急げ）」で、私たちはいつものように作業に駆り出されていった。当時はどんな作業に従事していたか思い出せない。夕方帰ってくると、遺体は病院に運ばれたということで、宿舎内は収容人員が一人減となっただけ、その他は全く昨夜と変わりなく、ほの暗いランプの下でわずかな夕食を済ますと横になった。栄養失調なのだろう。毛穴汗腺の一つひとつが紫色に腫れ上がってザラザラした体、手、足をさすりながら、死とはこんなにもあつげなく性急に訪れるものなのだろうか、生とはこんなにもはかないものなのかなど、思いがめぐってなかなか寝つけなかった。そうして、板敷の寝

台に毛布らしいものが一枚、入所時持参した毛布も、衣服の継ぎはぎ用に千切られていて、いつの間にか、らしきもので小さくなっていた。そこが私たちのねぐらであった。その硬さが、その夜は殊更に身にこたえて、幾度も幾度も寝返りを打った。同じ宿舎内の皆も、死と隣合わせの生活ともいふべき現実には、なにか森閑として、それぞれに物思いにふけた一夜であった。

その後聞き知ったのであるが、亡くなった方の所持品を整理したら、寝台と敷いてあった毛布の間に、二百円紙幣が四枚きちんと並べてあった、ということであった。

当時の私たちは「銭」が通用していた頃しか知らない者ばかりであったので、この八百円は大変なお金であった。ちなみに昭和十四〜五年頃、大東亜戦争の始まる前には、千円で家が一軒建つといわれていた。現在は二千万円ほどのお金が必要なのではないか。そうすると当時の二百円札四枚八百円は、単純計算で千六百万円となり、大変な額のお金だったのである。

亡くなった方は、毎日作業から帰るたびに、所用で寝台を離れ戻ること、その四枚の二百円札の存在を確かめ、帰国後の生活設計に夢を膨らませていたのではないだろうか。そうして、あるいは、体が不調であったにもかかわらず、入院となると身体一つで行かなければならないので、八百円を失うことになってしまふ、そんなことを恐れての無理が、ついに自らを死の淵に沈めてしまうことになってしまったのではないか。なんとも、なんともお気の毒なことであった。考えてみると、兵隊がそんな大金を持っている訳がないので、樺太あるいは満州から入ってきた、いわゆる地方の方だったのかも知れない。

昭和二十二年十月、発熱で入院、間もない十一月の某日、重症で寝たきりだった同室の患者の一人が、ついに帰らぬ人となってしまった。どんなにか、本当にどんなにか帰りたいかたたらうに、どんな思いで、本当にどんな思いで息を引き取ってゆかれたのだろうか。私たちは運び出される遺体を息をつめ、目で追ったのであった。大分の年配の方のようであった。ご両親、妻子もいらしただろうに。最

後まで意識はしっかりしていらしたようだ。なれば尚更にその方の胸中、私は文字にする術を知らない。

収容所で亡くなった皆さんの遺体は、全部病院に運び、解剖、縫合の後埋葬されることであった。こうしたなか、冬期は病院に運ぶ便を待つ間、丸太造りの兵舎のポーチに、カチンカチンに凍った遺体は、幾体も幾体も井桁に積みっぱなしであった。そんな光景がうそ寒く思い出される。

昭和二十三年に年が改まって間もないある日、退院後病院の作業隊に編入されていた私は、解剖室勤務を割り当てられた。夜明け前に解剖室のストープに火を入れ、医師たちが集まるまでに部屋を暖めておくのが役割であった。それは冬季、解剖が行われる日だけに必要とした作業であった。

月の光が殊更に冴え渡っていたその日の早朝、私は解剖室へ出向いた。部屋に安置、というより台上に放置されていた素っ裸の、月光に青白く浮かび上がり硬直した遺体は、抑留者の誰もがそうであったように、早く、一日も早く帰りたい郷里に、そのことのみを願いつつも、無念、病で倒れたのか、それとも外傷はなかったように思うのだが、何か大きな事故に巻き込まれでもしての死だったのか、目はしっかりと閉じられ、手は胸に固く合わされていた。合掌の後、その仏の傍らで薪運びなどの作業を始めた。一人でカタコトと動き回っていると……、いきなりその遺体がむくむくと起き上がってきて私に襲いかかり、その靈魂が私の魂を食いちぎって私に乗り移り、私とその遺体の身代わりにされてしまふ、そんな幻想が私の脳裏をよぎり身体を突き抜け、まさに鬼気迫る思いで、思わず立ちすくんでしまった。そうして震えが止まらなかった。月光下の台上の素っ裸の遺体、顔形は思い出せないけれども、二時間足らずの間の、私の動きから生じるわずかな物音の外は、森閑と静まり返った静寂の中で、背筋をゾクゾクつと突つ走つたその時の戦慄。今でも私の身体のどこかがしっかりと覚えている。

東シベリアの主要都市コムソモリスクの、アムール(黒龍江)を隔てた対岸はピワニーである。その河港の町の南九十五キロの地点、ポニーに、私の入院したソ連の

陸軍病院があつた。その病院に隣接した山あいに日本人墓地があつた。

長円形の土饅頭にロシア語のアルファベットで埋葬者名が横に、算用数字を縦に死亡年月日が柱に、わびしく記された粗末な十字架が立っていた。お墓は整然と並んでいて、かぞえたはずのだけれど、その数はどうしても思い出せない。

冬、しんしんと寒さが降りてきた。墓標を捲いて粉雪が舞い、漂う冷気は瞬時も離れようとしなかった。迫ってくるのは寒さばかり、底知れぬ静寂の中にひっそりと日本人墓地があつた。

待ちに待った春が訪れ、やがて短い夏がやってくる、一生懸命息吹く雑草の茂みで、盛土から墓標までが埋もれてしまいそうになった。だが表土の下は、永久に溶けることのないツンドラ（凍土帯）なのであつた。

和歌山県 出口爲治郎

私自身、あのアルマタという土地に収用された間に、野外作業中隊の連中が次から次へと毎日のように死んでいった死者の埋葬に参加して、六人のやせ細った先輩の遺体を素裸のフンドシ一枚にして、積雪を除きバールもつるはしも打ち込めぬ凍土を三、四時間もかかつて命ぜられるままにあえぎながら掘つて、重なり合うキャンデーのように埋めたことがある。私たち一等兵、二等兵が死体運び専門の役目にされてしまったような感じであつた。「明日は我が身」と思えば経文を唱える者もなく、哀れで悲しい日々が続いたが、そのようなことがあつてはならないと、不幸な体験を申し伝えておきたい。

広島県 榎上竹士

年が明けて、私達健康のすぐれない者百人ぐらいで作業隊を編成して、行く先も知らされずに突然に移動が始まった。シベリアの冬は寒く、そのものがまるで牢獄で、明けても暮れても灰色の空からチラチラと粉雪が舞い、その寒さは「寒いというよりも刃物で切られるような痛み」である。老年で病弱の多い一行

の徒歩移動は容易でなく、その苦労は並大抵ではなかつた。途中物凄く寒波に襲われて、凍傷にかかり歩行困難となり凍死する者が続出し、止むなく河岸の漁獲倉庫で雪嵐を避けることにした。大きなブラック建の倉庫には暖房設備等勿論なく、寝具も何一つない。ドラム缶のストープを入り口に一つ備えたが全く暖房効果はなく、昼間は運動して身体を動かし何とか寒さを凌ぐことができたが、夜は外套に身体を包みブルブル震えながら、小便に十数回も往復、全然眠ることが出来なかつた。高齢者の多くが斃れ、多い時には一日三人も四人もが死んだ。死者は裸にしてトラックに積み、アムール河に運び捨てたと聞いている。一行の半数が中年の召集兵であつたが、それは重労働と寒さと飢えにさいなまれ、栄養失調で尽きぬ恨みを残して死んでいったのである。誠に気の毒であるが、どうすることも出来なかつた。

愛媛県 山本繁夫

因みに、私のいたコムソモリスク五分所は、木造二階建て四棟に、当初昭和二十年十月月上旬、ちょうど千五百人の日本人がいたのだが、昭和二十一年二月には生存者は千人になつたと覚えている。つまり死亡率三三%だつた。転入転出もあつたが、昭和二十三年五月に閉鎖するときは七百五十人、二年半で生存者は半分になつた。死亡率五〇%と私はハッキリ記憶している。シベリア抑留の各資料によると、コムソモリスク地区は当初一万人から一万二千人いて、二〇%から二五%の死亡率となつているが、私たちの五分所は五〇%の死亡率であつた。この事実あればこそ、戦争はしてはならない、こんな経歴は自分の孫や子に体験させたくないと思うのである。

熊本県 大阪公夫

思えば八月九日、ソ連の参戦以来三カ月以上も入浴しておらず、シラミの発生による発疹チフスの流行、小さな石にでもすぐつまずいて倒れるような栄養

失調などにより、死亡者が続出した。多いときは、毎日八人か十人ぐらい亡くなられたと思う。死体は屍室に積まれたが、死亡後は裸にされ、零下何十度の寒さの中カチカチに凍り、まるでするめの干物のごとく痩せて、汚れて、戦友であつても何一つかまうこともできず、線香の一本をあげる人もなく、平和になれた今日の人たちには想像できない、言葉ではあらわせない哀れさであった。死亡者が八十数人ぐらいに達したときだったと思うが、一度だけ（仲間の中にいたお坊さんだったろう）全員立っている前でお経を唱えてもらい供養したことを思い出す。

隣の寝台で枯れ葉でも落ちるように、何の苦しみもなく、父母、妻子のことを思う気力も失せ、眠りにつくようにして死んで行く。隣に寝ている自分も、人が死亡していくのに何の感情もわかない。だれが死んだか名前も全く覚えていない。故郷に帰れる望みもなく、自分自身がまたすぐ後を追わなければならぬ状態。眺めるものは夜の星だけ。そのようなときは、人間の生命の価値は無に等しいと感じた。満州で命を落とした戦友をうらやましく思ったこともこのころであった。

一〇八分所では、そのうち元気な者だけ二個小隊約八十人だけ作業に出ることになり、私もその中に加わることができたが、仕事は、出水で道路が凍って盛り上がり自動車が通行できない場所の氷割り（この作業は一日でも欠かすことができず、今でも囚人かだれかの手によつて続けられているものと察する）や、死体を埋めるための穴掘りなどであったが、凍った土はつるはしぐらいではいくらも掘れず、そのため死体は野犬などに荒らされたことと思う。当時死亡者の墓標に氏名を記入されていた宮崎県出身の松野重太郎曹長とは、帰国後一度再会でき、幸いであった。

熊本県 西崎 通

厳しい作業で食物も完全なもの食べさせてもらえず、栄養失調で次から次

へと死んでいく。そして、死体室に運ばれ、目は開き、足は曲がった状態で、積み重なった魚の冷凍と同じで、見るも哀れな状態であった。冬期間は埋めることが困難であった。地下二・五メートルの凍土では、焚き火して二時間ぐらいで十センチぐらいしか掘れない。死体を埋めるには数日を要する。だから、死体室に収容しておく。いずれ自分もこんな状態になるのではないかと、無念の涙が出るだけであった。

北海道 五十嵐甚吉

病院勤務で一番つらいのは死体解剖の立ち会いだ。ソ、日の軍医が今まで治療してきた経過に誤りがなかったか、治療カルテと照合確認する作業だ。

はじめのうちは最後の縫合まで軍医が行っていたが、冬の季節は安置室が寒いので、解剖処置後の縫合を自分が行ったこと、墓地に死体を運び、零下三五度の季節に友と穴を掘り埋葬したことは一生忘れられない。

埋葬すると、ソ連の将校が死体頭部側に番号を記入した墓標を立て、死亡埋葬済番号をカルテに記入整理していた。

特に伝染病棟の担当のため死亡者が多く、立ち会い、埋葬業務が抑留生活の中では一番つらいことだった。

病院のため、中央から軍医少佐級のキャピタン、マヨールが必ず査察して、病院の治療、薬品等、その時代としては良い方で、週一回は敷布、着替えは実施されていた。

石川県 荒川 宏

私どもの収容所は、約二年半位の間に二十二人が栄養失調や環境不備のため病気にかかり死亡するという痛ましさであった。

北海道 北野 實

收容所での病氣、事故、栄養失調等で、誰見守ることもなくベッドの上で、ロソクの灯が静かに消えて行くような無情にも等しい状態であった。シベリアの土となる悔恨、推して知るべしである。指を切つて祖国へ持ち帰るといふことを聞いたことがあつたが、果たして届けることができたか、案ずる。

岩手県 平田玉男

酒好きで秋田県出身の高橋伍長が、アルコール入りの缶を見つけ、酒の代わりに飲んで死亡した。その夜、乾燥した草などを集めて火葬したら、ソ連の監視兵にひどく叱られた。(ソ連では、火葬せずに埋葬することのこと。)
「なぜ人を焼いた」とカンカンである。仕方なく通訳を通して、日本では、死んだ仏様は火葬にする、遺骨は大事にして祖国に持つて帰り、家族へ渡すのだと説明して納得させた。

千葉県 伊橋芳二郎

慣れない一日の作業もなんとか終わりソ連兵とラーゲルに帰る。途中決まったように軍歌の代わりに赤旗を歌わされる。しかし空腹、疲れきつた仲間は歩くのがやっと、歌など歌えるものではなかった。やっと低い声で歌い始める。実につらかった。これもただただダモイと黒パンしか考えない餓鬼人間だったことを思うと残念でならなかった。

また、こんなとき、疲れ、歩くこともできない仲間を背負つてラーゲルに帰つてくると、背中の仲間が既に何も言わずに亡くなつていたこともある。これが痛みも苦しみもなくいわゆる「栄養失調死」である。いくら体の具合が悪くても作業を休ませてはもらえなかった。シベリアでは女医にかかると、熱(三十八度以上)がなければ病人扱いはしてくれなかった。

シベリアの奥地でこうして仲間が死亡しても、ただ毛布一枚に包み、山裾の凹

地にそつと横たえ(冬は地下一メートルも凍つていたので雪を覆う)、線香もなく合掌だけの情けないお別れには涙も出なかった。

また、酷寒零下三十度、地下一メートルも凍つてしまう身を刺す寒さと、食糧不足、慣れない作業などのため、心身の疲労が極度に重なり、栄養失調による死亡者が初めて迎えた冬に特に多かつたことが悔やまれてならなかった。

戦死でも、戦病死でもなく、今なお何の補償もないまま、ただ異国の地に眠る国の犠牲者に対しては終生胸の痛む思いである。残念ながらその数約六万二千人に上つている。

千葉県 菊田鎮男

時期は忘れましたが、一人が逃亡し、民家に押し入りソ連軍に捕まり銃殺されたものと思うが、その後が悲惨でした。全員集まれのことで集合した所に馬にまたがったソ連兵が、逃亡者を逆さに、足を馬の尻尾の所に結び、顔は地面に擦りながら早駆けの状態で到着、顔はザクロのようでした。その同胞の前で、お前達も逃亡するところになると言われました。

岐阜県 坂井文介

やがて緩芬河への国道線に出る。掖河を過ぎるとかつては激戦の地であつた磨刀石の部落である。ここはかつて岩壁の母で知られた有名な、端野いせさんの息子新二さんのいたところである。我々はそんなことも知らずに黙々と追われる牛のごとく歩を進めて行つた地点である。

その頃、突然隊列の前方で、パンという自動小銃の音がした。不思議に思つた。間もなく我々の隊列から一人の兵が用便のために離れたところを射殺されたのだと聞かされた。死んだ兵はそのまま野原に転がされ、葬ることもなく捨てられた。どこの誰であつたか名も確認されず、哀れ、まさに犬死にである。人命をこれほどまで粗末に扱うソ連人の人間性を恐ろしく思った。

ジマ日本人墓地

岩手県 立石 章

東方がやっと白みかけてきたがまだ暗い。

あちこちの家から朝食の炊煙が、無風の暗い空間に銀色に垂直にゆっくりと立ち昇っている。三十分も歩いただろうか、街はずれにきてやっと明るさが増し、あたりの風物が眺められるようになってきた。上空には水蒸気の層でもできるのか、シベリアの冬空は毎日が霧状のベールに覆われ、太陽や青空など望むべくもない。強いて変化を求めれば、他より幾分明るいところが太陽の位置であろう。その空の下、我ら四人（入院患者の中で比較的病状が回復し、ある程度の作業可能と判定されたもの）は、重いシュノーバーに大大手袋、肩に鉄棒のいで立ちで、ジマ市北方の、鉄道線路に沿ったなだらかなスロープの坂道を墓地へと向かっていた。

死亡者続出で、軽作業者が選ばれ急きよ墓穴掘りを命ぜられたのである。坂道を登りきった鉄道線路と反対方向の六百メートルぐらい離れたところに、木立に囲まれたロシア人墓地が見えてきた。簡易な木柵に囲まれているが、その外周や内部は椿科の常緑樹に覆われており、何処までも広く白い雪原の中で、その単調さを打ち破るようにここだけは緑葉が映え繁っていた。ロシア人墓地の中を覗くと、ロシア正教であろうか墓標は飾りゴシック調十字架あり、キの字形のものあり、また十字架のてっぺんから両側に傾斜板を取り付けたものもあつた。これは木製十字架を雨や積雪から守るためのもので、飾りではないと思われた。石塔の形も多様で、好みに応じたものをつくっているように見えた。個々の墓の敷地は思ったより狭く、周囲が広大な原野のためか、なにかせこましく、あたかも肩を寄せ合い寒さを避けて暮らす小部落のようであつた。

この墓地に隣接したところが亡き戦友達の眠る場所で、北側は雑木林、西側は鉄道線路、東側はなだらかな起伏を重ね合わせている広漠たる原野であつた。

（北・西・東の方向については自分なりに感じたものである）。既に埋葬された戦友達の墓は、単なる盛り土で、その上に幅十センチメートル×長さ十五センチメートルの木板に三桁の数字が記された立札で、恐らく二、三年で朽ち果てるであろう。この真新しい墓標が五十ぐらい最果ての凍土に寂しく並んでいた。

病院を出るとき七十歳ぐらいの小柄で無口な爺さんから渡された先の尖った鉄棒で、雪と土の混じりあつた凍土の表面に墓穴の地取りをし、この線に沿ってここごと凍てついてコンクリートのように硬い地表を根気よくたたき、跳ねた土や氷が目や口に飛び込む。二日目ぐらいからこの作業の要領を体得するが、それでも一穴に二人で二日ぐらいかかる。鉄棒の先は三日ぐらい使用すると丸くなり効率ダウン。あの爺さんが先を尖らし焼き入れたものと交換してくれる。野ざらしの原野、冷えきつた熱伝導のよい鉄棒は、分厚い大手袋も効き目は少なく、突き刺すような痛みが間断なく両手指を襲う。

休憩時の焚火材を雑木林で探すも、雪の凍り付いた小枝は容易には燃えない。手取り早い方法でとロシア人墓地裏手の木柵を壊して燃やしたが、警戒兵に見つかってしまう。相当怒られると覚悟したがそれ程でもなく、元通りに復元しるとも言わず、ほつとする。よそ者の若い兵士のこと、俺にはあまり関係がないといったところであろう。

警戒兵は作業現場にいたことが少なく時々姿を見せるだけ、何処か暖かい良い所を探し遊びに行っているらしい。我々の監視だけが任務で、ノルマについては入院患者のため、その責任がないのであろう、殆ど口を出さない。あのダワイダワイがないことは本当に助かる。

貨物列車が凍った空気を揺るがしてハーモニックに響き余韻を残して通り去つた。この列車が通ると、あと一時間程で携行の昼食、三百グラムの黒パンが食えると思うと鉄棒にも力が入る。

ある日、いつものごとく作業をしていると、警戒兵が口に指を当て煙草を吸う動作で休憩を告げ、我々を穴掘り現場の見えない離れた場所に連れ出した。

ふと見ると遠くに一台の馬櫓が目に入った。同胞の屍体運搬櫓で、二十分ばかりして再び墓穴に取れ戻された時、既に馬櫓の姿はなく、墓穴に入れられた屍体は見えない程度に雪まじりの土に覆われており、後は我々の手で地上十センチメートルほどの高さまで埋め戻した。雑木林から針葉樹の小枝を探し、それぞれの墓に差し、手を合わせた。薄幸なりし友よ、日毎待ちこがれしダモイを果たせず、最果ての凍土に朽ち果てんとす、どんなにか無念であつたらう。

あゝ 辺境の地 シベリアの風は

渺茫たる曠野の枯葉 雪粉を誘い

啾々として遠ざかる 汽笛の音に

埋もれし友の 望郷の念想うとき

誰か この切々たる 哀隣の情に

哭かざるものあろうか

星霜五十年を経たけれども、東方に向かうシベリア鉄道のレールの響きに呼び起される望郷の怨念は、今もなお消えないであらう。

しかし、やがて春夏が訪れなば、あの最果ての地にも可憐な美しい花が咲き、あの近くの雑木林は小鳥のさえずりに賑わうことであらう。

今、この日本人墓地がどのような状態に管理されているか全く分からぬが、土地には事欠かぬあの広大な原野がありながらロシア人墓地の隣接地を選んだことについて、種々問題ある相手であるにせよ、先祖からの墓地の隣に外国人俘虜の墓を何の躊躇もなく造つたことは、シマ市民に同じ人間という人種差別や偏見のない広い心があつたからであらうし、地下に眠る同胞にせめてもの慰みになるのではと思う。

あの製材工場前の冷え込んだ屋外作業のとき、見知らぬ年配の一市民が隅の方で隠れるようにして我々にパンを配っていた光景が思い出される。パンは少量

ですぐなくなつてしまつたが、一般市民も食料事情が悪しき中での行為で、その恩情は忘れられない。

また、あのロシア人墓地を見て、信仰心の厚い人達が多いように感じた。墓参りに訪れる人達の中には、隣接墓地の不幸なりし同胞の冥福を祈つてくれる心ある人もいるのではと思う。何もしてやれない今の私には、せめてそうあつて欲しいと願わずにいられない。

今日も墓穴掘り作業で、既に警戒兵も来て外で待つている。ところが何時も鉄棒を持つてくる爺さんが出発時刻を二十分過ぎても見えない。警戒兵はどうでもよいとばかり看護婦とイチャつき話に夢中である。作業開始が遅れてもこちらは一向かまわぬが、その分を後に延ばされ帰りが遅くなるのはかなわぬので、病院事務の男に聞くと、爺さんは風邪で休みとのこと。やがてその男が何処からか鍵を持つて現れ、鉄棒は裏の小屋の中にあるからと鍵を渡された。病院の裏手に回り、物置きとおぼしき木造小屋の扉をあけたとたん、冷水を浴びせられたかのごとく立ちすくんでしまつた。そこは亡き同胞の遺体が積み置かれた屍室で、その有様はあまりにも悲惨、とてもこれを書くことはできない。戸口に立て掛けてあつた鉄棒を手取るや、逃げるように外へ飛び出してしまつた。

日本人には見せたくない場所を爺さんの風邪による手違いから私が見てしまつたということである。

患者の戦友達には害あつても益なしと思ひ口外は避けた。それにしてもあの同胞の姿、とても人間としての扱いとは思えない。一日も早く埋葬し安らかな眠りにつかせてあげなくてはならない。残念ながら今の我々に為し得ることは誠意をこめて墓穴を掘ることだけであつた。

静岡県 佐藤定衛

寒さは朝夕の点呼と炭坑への往復で、帰りには持てるだけ石炭を持つて来るので、室の中は日夜燃やして寒さはない。寒さと言うまでもなく、土を見るの

は僅か三〜四カ月。九月から三月、四月頃まで零下四〇度前後の毎日。寒さと重労働、栄養失調で日に三人、五人と斃れ、夕食終えて朝になってみれば寝たきりで死んでいる人もいた。松林に三十人、五十人と穴掘り要員を出す、凍土はツルハシも寄せ付けず、枯れ枝を集め燃やして掘る。一人用の穴に四、五日はかかる。十日後に自分の掘った穴に入る人もいる。第一收容所千二百人中五百人強が死亡、第二收容所二千人中八百五、六十人が他界。落盤による死者は少なく、五十六人だ。ほとんどが栄養失調だった。

福井県 福田 薫

昭和二十年十一月二日の夜明けだったと思います。列車が停まり、下車するように指示があり全員が降りると、これから行軍だと伝えられました。降りて驚いたことには雪が降り、下には三、四センチの雪が積もり、満州でもこんなに早く降ることはなかったのに、本当に驚きました。さて、それからが大変でした。雪は降りしきる、防寒具はなく、靴は革長靴、腹は減る、飢えと寒さのノロノロ行軍。ソ連兵は「ヴィストラ、ヴィストラ、ダワイ、ダワイ」と叫ぶ。いくら叫ばれても気力はなくなり、倒れる者も出てくる始末でした。精も根も尽き果ててしまったのです。

行軍が始まって六日目の午後のことでした。小休止の命が出た。皆、その場で雪上に寝転んでしまいました。十五分か二十分くらい休んだのかわかりませんが、「出発」の叫び声に目を覚まし立とうとしたら、右隣におる友が起きないのです。名前を呼んで「おい、出発だぞ」と叩くが起きません。左隣の戦友に「おい、こいつ変だぞ、起きないぞ」と言うと、彼は胸を開け手を入れて「冷たくなっておる。死んでおるぞ」と言って胸のボタンをかけ、すぐに小隊長に連絡すると、小隊長がソ連兵を連れて来ました。私たちはどうすることもできず、「さようなら、成仏してくれよ」と言って彼を残して出発したのです。飢えと寒さと栄養失調で、我々の大隊でも幾人もの戦友たちが亡くなっていったのです。明日は我が身かな

と淋しい思いにかられながらも、何とか命を永らえて父母のもとに帰らねばと神仏に祈りながら行軍を続けたのです。

鎮魂の灯

山梨県 渡辺時雄

昭和二十一年七月初旬の夕方、私どもコムソモリスク第八分所のソ連側收容所長モスカレンコ大尉が、日本側の大隊長後藤園丸大尉と私を呼びつけて「コムソモリスク本部命令で、中央病院から送られてきた日本人捕虜の屍体埋葬作業を特に第八分所で行うよう私に命令があった。これは渡辺中隊の作業成績が特に良いので本部からの命令である」ということだった。

私は戸惑った。作業成績が良いと褒められるのはよいが、屍体埋葬を喜んで引き受ける訳にはいかないと思つて、後藤大隊長と收容所長に「私の中隊の働きが良いことは一人一人が今の立場を理解し助け合つて生きようという努力の結果である。所長の命令とは言えこんな大仕事は私一人で承知する訳にはいかない。中隊に帰つて所長命令を伝え皆の意見も聞いておくので、一時間後に中隊全員にこの話をしてほしい」と言い残して中隊へ飛び帰った。

全員を集めてこの話をしたところ「我々渡辺中隊は伐採作業で生きてきた中隊だ。そんな不衛生な仕事は他中隊にやらせて貰つて下さい」という意見が大半だったが、幸い私と同じ部隊で阿城駐屯当時から一緒に戦つてきた高橋茂明君（軍曹、東京）や鈴木武徳君（上等兵、神奈川）が、「隊長、俺達は日本人だ、助け合つて今日まで生きぬいて力つき亡くなった戦友を葬つてやることは我々の務めではないか、みんなでやろうよ」と私に味方してくれた。この一言は捕虜である我々の魂をゆさぶつた。私は嬉しかった。そして「今日は人の身、明日は我が身の三途の川にいる俺達だ、みんな我慢して気持ちよく埋葬作業を引き受けて貰いたい」と心からお願ひした。

甲論乙駁していると、モスカレンコ赤鬼所長が中隊に現れた。随行してチグノフ

政治部中尉がナターシャ女医中尉、阿部軍医、それに日本側後藤藤園丸大隊長などお歴々を引き連れてのお出ましである。そして、コムソモリスク地区収容所本部長命令で「第八収容所長は所員をあげて中央病院より送致された日本人捕虜の屍体埋葬を行うべし」との命令が出たこと、その実行のため「わが収容所内の優秀作業隊である渡辺中隊にこの作業を命令すること厳かに宣告された。こうなれば「万事休す」である。軍命令に従わなければ抗命罪、中隊生活を続けられないことは明白である。

私は勇を鼓して「渡辺中隊埋葬作業を引き受けますが、収容所長にお願いがあります」と前置きして、「埋葬作業中は中隊全員にノルマー〇〇%を付与すること。毎日下着の交換が出来るよう被服庫に手配すること。埋葬作業終了後入浴が出来るよう手配すること。埋葬作業は午後三時迄とし、その後の二時間は明日の埋葬箇所の調査、埋葬準備並びに隊員の衛生管理(休養)に充てること」の四項の条件を申し出てみた。赤鬼さん目をパチクリしていたが、即座に「よろしい、四項とも何とか叶えてやろう」と約束してくれた。日本軍隊では命令は絶対であるが、当時のソ連社会では、労働者、農民が社会主義社会の主人公であるという思想からか、職場での大衆討議という形式は認められていた。私はこれを利用して心算で演出したのだが、うまく当たって、赤鬼所長さんも大衆の前で我々に理解ある約束をしてくれたのである。

翌日からその準備で忙しかった。所長はどこからかドラム缶十個を調達してきた。これを適当に切って野天風呂施設を十カ所並べて造った。一回十人、十交代で入浴を済ませようというのである。これで一カ月一、二回の集団入浴場に行く必要がなくなるのだ。下着の交換については縫工所勤務の島海長吉君と高野正夫君(両人とも中隊要員)が引き受けてくれた。私は中隊に基地測量班、穴掘り班、屍体運搬班、埋葬班、墓地整備班を編成、作業手順を定め準備万端を終えて作業開始に備えた。

三日目の晴れた朝、収容所の西北約六百メートルの小高い丘の広場へ、収容

所長を先頭にチグノフ政治部長、ナターシャ女医、後藤大隊長、阿部軍医等に連れられて集合した。見れば背後には丸い山があり、山と丘の間の窪地には無数の屍体が裸のまま捨てられてあった。まさに地獄である。

冬のシベリアでは日本式の埋葬は不可能だった。収容所で我々捕虜が死亡するとその場で日ソの軍医が立ち合って「死亡調書」を作り、終わると身近な戦友が二、三人で野辺の送りの準備をする。今にして思えば酷い話であるが、通夜を終えた戦友の屍体は見取った戦友の手で裸にされる。そして掛けてあった毛布でグルグル巻きにして裏口から馬籠に乗せ、ソ連の監視兵が御者となつて所定の屍体置場に運ばれる。

私は中隊の戦友であれば収容所長から特別の許可を貰って墓地まで送って行ったものである。先記のように墓地とは名ばかりで、小高い山裾の窪地の、湿地帯の凍土の雪の上にコチコチに凍った裸の遺体を転がすだけである。十分と経たないうちに横なぐりの吹雪で屍体が埋まる。その間私どもは手を合わせて首を垂れ、「この次は俺かもしれない」と思いながら冥福を祈るだけで精いっぱい。天気の良い日なら傍らの雪で屍体を覆って埋葬終わりである。私どもはそれを雪葬と言った。

雪葬が終わると、ソ連の御者に追いたてられ後ろ髪を引かれる思いで収容所に帰る。そして今雪葬してきた戦友が着ていた下着から毛布まで衣服一切を一晚ドラム缶の風呂桶で煮沸する。乾くと中隊で一番体の弱い者に「亡くなった戦友の形見だ、これを着れば温かくなる、早く丈夫になれよ」と申し送ることにしていた。胸の中で「気の毒だが死んだ人は寒いとは言わない、生きている戦友はまだ辛い思いをしているから勘弁してくれよ」と、死んだ戦友に詫びるのが精いっぱいだった。形見を貰った戦友の中には、「これは温かい」と喜び、戦友の霊に励まされて再起する者もあった。

ところで中央病院から送られた遺体の多くは、人体実験のためか解剖されたままろくな縫合もしないで捨てられた無残なものが多かった。窪地一帯に累々

と屍体が積み重ねられ、七月の陽射しに照らされた光景はまさに地獄絵図そのものである。

私はまず中隊全員を集めて谷間に眠る戦友に黙祷した後、「共に助け合って生きて還ろうと誓い合った戦友をこうして埋葬することは、生きている我々としては何よりも大事な作業だ。みんなが良い墓を作って冥福を祈ろう。そして生き残った日本人として責任を果たそう」と心から隊の皆さんにお願した。

それから私は、墓地の位置を北側に山を背負った小高い南向きの丘の上に定めた。そこからはアムール河が望みできた。河の流れは日本海に注ぎ、亡き戦友の魂魄はやがて日本に還りつけると思ったからである。そこには可憐な野草が咲き乱れていた。

作業は測量班、穴掘り班、屍体運搬班、埋葬班の順に手筈通り順調に進んだが、私の胸の内は悲痛だった。「生き地獄」とはこのことを言うのだろうか、今は生きるために飢餓地獄、労働、地獄に耐え抜いてきた私ども中隊であるが、今日からは亡くなった戦友の鎮魂の場を造るのだと思うとやりきれなかった。しかし、この作業が何よりも神聖な仕事だと思ひ直し、みんな歯を食いしばって黙々と作業を進めてくれた。私は隊員たちのその姿に心から感謝し、そっと涙を拭いた。

穴掘りは縦二メートル、横十メートル、深さ一・五メートルと定められており、その穴に十人の屍体を並べて埋葬し、上に白樺の枝で十字架を作って墓標とする集団墓地であった。

七月とは言え、シベリアの大地は一メートルくらい掘ると下は岩のように凍っていた。穴掘り班の作業も大変だった。しかし運搬班は更に大変だった。陽の当たる場所の屍体はすでに腐乱して、少し動かすと物凄い死臭と共に体液や雪解け水が流れ出す。手袋もないので素手でその屍体を持ち上げて担架に乗せて二人がかりで穴まで運ぶのだが、足を滑らせて転べば屍体がやにわに抱きついたり背中へのしかかってくる。どの遺体も痩せ細って骸骨のようだ。中には病院で人

体実験でもされたのか腹を切り裂かれ、ろくな縫合もされずマジックで胸にローマ字で印をされている遺体が幾つもあった。惨めなことだ。

上の方に積まれた屍体を丁寧に運んでいた運搬班は、下の方に行くにつれてまだ凍結しているのを見て一計を考えた。それは積んである屍体の首から頸に針金の輪を掛けて引張り出すと、凍りついた遺体がツルツルと青草の上を滑ってついて来る。まだ凍りついている屍体を強く引き離すと、頭の毛や手足の皮だけスッポリ剥がれて他人にしがみついたまま引っぱられて行く。

いかに捕虜という異様な状況下とは言え、こうリアルに表現すると非人間的行為だと非難されるだろう。しかし私としては、「あの時点では我々は地獄の鬼畜となつて亡き戦友を引きずり回していた」と赤裸々に告白する以外にこの記録を書く術はない。もちろん読まれた方々の批判は甘んじて受ける覚悟である。

正午少し前、赤鬼所長が先のスタッフを連れて埋葬作業の状況検分に来た。私はこの地獄絵巻は一度日ソの上司にしっかりと見せておくべきだと思っていたので、屍体置場から埋葬地までの作業状況を子細に案内した。

七月の爽やかな陽を受けて百花繚乱咲き盛るのかな山裾で、ここはまさに阿修羅の生き地獄であった。さすが歴戦の勇者赤鬼所長もこの凄まじい屍体埋葬現場を見て驚いた様子だったが、更にナターシャ女医は、軍医という見識からか女という人間愛からか、赤鬼所長に食ってかかった。「ペチェム（何故）こんな仕事を渡辺中隊にやらせるのだ、マスクも手袋も与えないで。こんな仕事は即刻中止させる」と怒鳴り出した。そして「この仕事でもし伝染病患者が出れば私は刑務所行きだが、責任は所長だよ」と念を押した。所長も驚きながら真っ赤に激怒して「何を言うのだ。作業命令の時は女医も承知していた筈だ。作業場での衛生管理の責任者は軍医だ、マスクも手袋も医務室で準備すべきではないか」と怒鳴り返した。そこで政治部のチグノフ中尉が仲裁に入って「とにかく今日は午前中で作業を中止させ、午後は衛生上の処置を完全にして明朝から作業を続

行させたらどうか」ということで、どちらの顔も立てながら私達を応援してくれた。それでも谷間から運び上げた戦友の屍体を完全に埋葬し終わるともう午後二時を過ぎていたが、中隊の戦友たちは一言の不平も言わず黙々と働いてくれた。戦場では何人もの戦死者を処置した私も、この凄惨な鬼畜の処置を、任務とは言え容認した私の弱さを戦友に心からお詫びした。

女医の意見具申もあつて我々はその日の午後はドラム缶の野天風呂に入った。マスクや手袋の配給も受けたり、おまけに菓を飲まされたりしながら、その日は衛生改善という名目で一休みした。

そんな経緯もあつて、それから毎日昼頃になると收容所所長は女医と一緒に埋葬作業を見回りに来るようになった。ノルマのない作業だったので所長の一存で午前中で作業を中止し、收容所に帰って入浴後昼食、午後は衛生休養ができたので少しは救われた。

それから十日ぐらい埋葬作業を進めた七月下旬のある日、運搬作業班長をしていた横江春一君(軍曹、名古屋)が私のところへ飛んできて「隊長、加藤軍曹らしい遺体があります。すぐ見て下さい」と言うのである。「そんな筈が……」と耳を疑いながら屍体置場に駆け下りて見ると、いま氷雪の中から掘り上げたばかりで硬く硬直してやせ細った加藤好友君が合掌した姿で寝かされていた。頭の禿げ具合、特徴あるカイズル髭、まさしくわが独立重砲二隊中の優秀な観測班長加藤好友君(大阪)に間違いなかった。

横江君と加藤君は、昭和十八年六月満州国阿城駐屯当時、私共の中隊に観測手として入隊、私の内務班で訓練を重ね優秀な下士官となったが、終戦後コムソモリスクの第八分所まで一緒だった。しかし昨年十二月風邪で発熱したので、私が軍医にお願いして中央病院に入院させて貰ったままだった。「まさかあの元氣者が」と思いながら横江君と丁寧に担架に載せて基地中央の一番高いところに安置した。そして原隊の戦友達全員を集めて遺髪を切り同郷の横江君に託した後、全員で冥福を祈りながら、「ゆつくりと休ませよう」と墓地の中央部に大

きな穴を掘って野花を捧げ代わる代わる皆で土饅頭を盛り上げた。いつの日か必ず迎えに来ることを誓って、その目印として小さな白樺の木を墓の北方メートルに植えた。

私と横江君は、收容所に帰って営内で働いている中隊の戦友達に加藤君との奇遇を告げて回った。そしてあの何百人もの遺体埋葬作業中に戦友横江君に見され、私ははじめ原隊の戦友に見送られ埋葬されたこの奇遇は決して偶然ではない、「これこそ加藤君の霊魂が私どもを導き、そして別れを告げたのだ」と皆で泣きながら、一晩中加藤君の話が続いた。

私はその夜から続けて二晩加藤君の夢を見た。加藤君が観測班の中で一番重い砲体鏡を背負って禿頭に汗いっぱいにじませて私の後を追ってくる夢や、加藤君が満期除隊となって阿城駅から日本に帰るということで私と横江君が手を振って別れを惜しむ夢だった。

私たちはそれから毎日、作業が終わると加藤君の墓前に白樺の枯れ枝を積んで炎々と燃やして帰ることにした。それは加藤君はじめここに眠る戦友達の霊に捧げる我々のせめてもの「鎮魂の灯」であった。線香も蝟燭もなく僧侶もないシベリアの荒野でできる唯一の儀式であった。それから夏中、日本人墓地には毎晩鬼火が燃えるという評判が立つようになった。

收容所長やソ連側スタッフは、そんな墓地で一生懸命に埋葬作業をする我々に心から感心している様子だった。私は、国や人種が違っても人間同士みんな同じなのに、なぜ戦争し殺し合わなければならないのかという疑問をしみじみ感じたものだった。

そして私がこうして亡くなった戦友の屍体埋葬という尊い作業に携わることができたこと自体、私の生涯にとって素晴らしいことであると思った。特に横江君や原隊の戦友たちが「隊長、屍体埋葬の仕事を引き受けた渡辺さんを恨みましたが、こうして加藤戦友達まで立派に埋葬できた今、本当によかったと思います」という戦友達の話を聞いて涙が出た。

それから毎夜赤々と燃える鎮魂の灯に戦友の冥福を祈りながら、「俺たちはいつの日か生きて日本に帰れるだろうか」と思う日々が続いた。だが、「ダメイ」の話はバツリ途絶えたまま埋葬作業は八月上旬まで続いた。窪地屍体置場から戦友の遺体を一人残らず正式墓地に埋葬し私どもの任務を達成した時、その埋葬人員は確かに六百人を超えていた。

忘れもしない昭和二十一年八月十五日の朝、赤鬼所長から「渡辺中隊は日本人墓地整備に全員出沒せよ」との命令があった。私は中隊の戦友達を励まして墓地を整備し、墓地の一つ一つに野花を捧げ周囲を清掃していると、所長以下ソ連のスタッフ一同が盛装で揃ってやってきた。そして野草で作ったソ連式の大きな花輪を掲げて、ソ連式の鎮魂の儀式でいかめしく祈ってくれた。

それから赤鬼所長は、私ども中隊の前に立つて「渡辺中隊の努力によって日本人墓地が立派に出来た。皆さんに感謝する」と言い、脱帽してわれわれに礼を言ってくれた。私は、その日が日本敗戦後まる一年目であることと、私どもの隊だけこの墓地に集めて戦友の慰霊をしてくれた赤鬼所長に軍人としての友情を感じ、心から感謝した。

それから私どもはみんなで枯れ木を集め最後の訣別だと特に大きな薪火を捧げて、戦友の眠る墓地を後に収容所に入った。収容所から見える墓地にはそれからも「鎮魂の灯」は赤々と燃え続けていた。

毒セリ中毒事件

どうにか正月を迎え、本田少尉の新年の訓示の中で「希望を持って帰還を待とう」という言葉があったが、「それまでもたないよ」と兵士は苦笑した。

三月の初め頃だったか、河ふちの雪も少なくなってきたとき、日曜日に舎内で演芸会が催された。真ん中のドラム缶にガンガン薪をくべ、真っ赤になっていた。我々の班でも腹が減つてしょうがなく、お茶でも沸かすかというのでドラム缶の

高知県 加納 憲

横に飯盒を掛けていた。

そのうち二、三人の人達が川辺でセリを摘んできたという。「ちようど人参の先のようなだ」と言つてこれも飯盒を掛けた。

「あいつらはうまくやったね、こちらはしようがない、お茶でも濁すか」と話しながら演芸を聞いていた。それから三十分くらい経つただろうか、突然異様なうめき声と叫び声が聞かれた。初めはわからなかったが、水野曹長のどなり声で「水を持つてこい！ 塩を持つてこい！」と言われて、全員が総立ちになった。演芸会は中止、患者は見ると全身痙攣を起し、顔面蒼白で、口から血を吐いている。先ほどセリを煮ていた人達である。「セリを食べた者は皆ここに来て、これを飲め！」と水野曹長がどなつていた。そして早めに食塩水を飲んで、吐き出した者は助かった。

五、六人が絶命し、解剖してみると胃が焼けていたという。また、助かった者も神経系統の後遺症に悩まされた。悲劇というにはあまりにも悲しい出来事だった。

長野県 高嶋利春

私も下痢がとまり調子がよくなり、自分でもやつとこのことで希望が持てるようになった。二十一年二月中旬、若干暖かくもなり、班に帰り身体検査の結果、三級。しばらくの間軽作業、四時間の作業場に行く。たまたま夜、戦友の埋葬に出る。割当てがあり三人出て行く。屍室の前に行くとき馬そりに三頭の馬がいる。するとロシアの兵士が、十五体をこの「そり」に積むようにと指示。室に入るとびっくり、戦友の屍が何百体とも知れぬ、いっぱい積み重なっており、体には何も着ておらず真つ裸。「ふんどし」一つ着けていない。余りの姿に驚き入った。瞬間、後ろに戻った。大きい室に何重にも積み重なった屍の山、戦争中の大きな作戦でもこのような所は見たことがなかった。見れば見るほど哀れと言うか、言葉にならない。仕方なく一台の「そり」に十五体を横積みにして、三、四キロくらい

向こうの丘の上に運んだ。まだまだ寒く土で埋めることはできないので雪で埋めて、ソ連の監視兵の「ヴィストラ、ダワイ、ダワイ(早く早く)」の声に涙して帰った。その後も二回くらい行つたが相変わらず屍室はいっぱいで、まだまだ相当な人が死んでいるようであった。

滋賀県 川端増雄

昭和二十二年四月頃、ソフガワニからコムソモリスクに移動させられる。ここでも鉄道工夫や森林伐採の苛酷な作業が続く。飢えと寒さに耐えながらも出る話は食うことばかり、人間も、最低生活基準である食の限界にすれば全く動物と同じような感覚、動作となる。作業中、死亡者や病没者が続々出る。死体は真つ裸にされ、十〜二十人とまとめて作業所近くで掘った穴に一緒に放り込まれる。墓標を建てるわけでもなく、尊い人命も虫けら同様の扱ひとなる。

ある日、あまりの空腹に耐えかねて、近くにあった川芹を持ち合わせの塩をまぜて飯盒で炊いて、少しでも腹こしらえをしようと食べ始めた。十分か二十分しかかと思われるころ、一人また一人と血を吐き出し、やがて芹を食べた者全員が七転八倒の苦しみの上、次々と命が絶えていった。まさに毒草を食べたわけ、食うことだけが望みだっただけに、毒草かどうかなど調べる余裕すらなかったのである。ここでも非業の死を遂げた抑留者がいた。

岐阜県 坂井文介

栄養失調で倒れる者が出てきた。馬糧燕麦の食事では栄養にならない。ある日、作業を終えて帰途について。一日の労働でへトへトになった体を追われる牛のごとし、ソ連のカンボーイがダワイダワイとわめく。栄養失調の兵隊が力尽きて倒れた。戦友にうながされて立とうとしても動けない。ソ連兵が進めと銃でたたく。やむなく力のある者が背負つても、一時間の道は自らが疲労し切っているので交代交代で連れて帰るのである。戦友に背負われた一人はたわ言を言うよ

うになる。月も出ていないのに「いい月だナー」とか、「東條閣下が今俺に会いに来る。そこをどけどけ」などと気が狂ってくる。こんな兵は、ようやく収容所に連れて帰ると、支給された食事をすすりながらコテンと倒れるともうそれで息の根が絶える。これが栄養失調の死の特色である。

どこの誰か私は知らなかったが、翌朝ソ連本部に伝えた。ソ連兵が来て、三人は作業に出ないでもいいから残れと行つた。私と兵三人が残つた。朝、作業に本隊が出て行つた後に、死体を野原へ運んだ。穴を掘って埋めろという。凍てついた大地は雪の下に眠り、なかなかスコップで穴を掘るにも大きな困難が伴う。死体の骨を残すために親指の関節のところをナイフで皮を切ると指先が落ちる。それを拾つて、わずかな枯れ木を拾つて燃やし、これを焼くのである。こうして骨をとる。戦友が布に包んで、復員の時には遺骨として故国に持つて帰ろうというのである。なかなか人体を埋めるほど掘れない。三十センチほど掘るともう埋めろという。やむなくユツコツになった死体を埋めて雪をかける。名ばかりの埋葬である。

このように栄養失調によつて、今日も明日もどこかで死んで行く犠牲者の数は後を絶たなかった。こうして病死していった日本軍人は十数万人から二十万人に達するであろうと言われた。シベリアの大地に葬られた死体は、翌年の春、雪解けになると哀れにも野犬や鳥の餌食になるのである。

岐阜県 水野隆男

発疹チフスの発生と新谷一等兵の死

食糧不足と酷寒の中での重労働、体力の衰えたところへ風の媒介による発疹チフスの発生である。

最初に倒れたのは召集兵であった。当時の部隊主力は二十歳を過ぎたばかりの現役兵であったが、昭和十九年末から二十年初めごろに大量動員された三十五、六歳の召集兵も多数いた。十一月に入り、ばたばたと病人が続出し死亡

者も増えていった。すごい発熱でうわごとを言う者も多かった。兵隊の部屋をのぞくと、まるで精神病院に行ったような雰囲気だ。私の顔をじーっと見て「隊長殿！ 只今から東京へ帰ります」大きな声で真面目に言う。熱で気が狂っているのである。

「復員司令部ができた」「来月は帰れる」というデマが盛んに聞こえてくるが、その発生源はどうもこの熱のせいらしい。

十一月二十五日「新谷が隊長殿にどうしてもお願いがあるそうです。すぐ来てください」との伝言が届いた。彼が重病であることは知っていた。早速彼の枕元へ行く。「今、家内が飛行機で飛行場まで迎えにきています。私を飛行場まで送ってください。お願いします」新谷はガツチリした体格と目の大きい頼もしい召集兵で、キビキビとよく動き、現役兵も一目置いていた優秀な召集一等兵であった。

そばの兵隊に聞いてみると、いくら戦友に頼んでも飛行場まで連れていってもらえないので私に頼んだそうだ。私の顔をじーっと見つけた彼の大きな目からは涙が流れていた。私は何と答えて良いか分からなかった。元気者の彼も今はげっそり痩せていて昔の面影はない。彼は十日ほど前から寝込んでいて今は何も食べていないという。「そうか、よかつたなあ。今は動くといけないそうだから、明日は飛行場まで送っていい」彼の手をしっかりと握ってやりながら、ゆっくり納得させるように話してやった。彼はその意味が分かったのか私の顔を見てにっこりと笑った。

新谷が死んだのは、翌日の夜明け前であった。その枕元には、なんとか食べさせようと炊事に行っている戦友が届けてくれた蒸したじゃがいもと、タバコの大好きな彼が吸い殻を捨てずにくずたかく積み上げたものがあり、印象的だった。私が言ったとおり彼は次の日に家族と共に飛行場から故郷へ帰っていったのである。

後にこの収容所からチタ市へ移動するのであるが、当時の死亡者名簿はその

ときソ連軍により没収されたが、今私の手元にある水野中尉のノーバヤにおける死亡者名簿によれば、水野隊だけで死亡者四十九人のうち十一月五人、十二月十三人、一月十一人、二月八人、月日不明十二人となっており、十二月、一月が最も多い。全体としては五百人中二百六十二人までの死亡者名簿の数を覚えている。

四中隊

岡山県 片山衛真

到着後、作業中隊に再編成され、私は四中隊に。同年兵では私と三村勤、島山満、三人が働くことになる。他の中隊より集まった二百人の兵が内藤中尉に従い作業場へ。作業はコンバイン（農業機械）の鋳物部品を作る工場である。四中隊は収容所で最悪の作業であり、死中隊とも殺人工場とも言われるほど、労働に耐えられず死亡者が多かった。作業ノルマ成績は毎日表示され、作業ノルマを工場長は強要する。内藤中尉は兵の苦しむ姿を見て、工場長に度々反論し、ノルマの引き下げを要求していた。そのために四中隊を追われ、上原少尉が四中隊の隊長になる。上原少尉は苦労を共にする。大田兵長が便所で首吊り自殺をしているのが、作業が終わり収容所に帰る前に発見された。また作業中行方不明になった同年兵の一人は、翌日貨車の中で凍死体で発見された。貨車は車輪のない廃車であるが、動かぬ貨車でも日本に帰る夢を見て凍死したのである。食糧不足に寒さ、体力のない兵が重労働を強制される。四中隊の中では、その苦しみに堪えられず世を去っていく兵もいた。

岐阜県 水野隆男

死体の埋葬と非情なソ連軍命令

十二月に入り製材所の仕事も中止された。大部分の者がチフスに感染し、毎日のように死亡者が出た。それらの戦友を比較的元気だった者が墓地へ運んで

土葬にするのである。私はついに一度も墓地へ行っていない。しかし墓地へ行った者の話を聞いて悲憤やる方ないものがあった。

まず戦友の死体はソリで墓地まで運ぶ。埋葬の位置を決めると皆で雪を払い、その上でたき火をするのである。大地は酷寒の地で十二月に入ればかちんかちんに凍っていて、まるでコンクリートのように硬く凍りついている。やがて地面が弛んできたころ、十字とスコップで掘り起こし、またたき火をする。それを繰り返してようやく人体が入るまでの深さに掘って埋葬するのであるが、その埋葬が問題である。

ソ連政府の規則により着ていた衣類はすべて国家のものであり、すべてを脱がせて裸にして埋めよと言うのである。そんなばかげた事があるうか。日本だったら、「寒かったらうに……、死んでも寒くないように……」せめて使っていた毛布の一枚でも遺体に掛けてやるのに……。かわいそうに衣服を全部脱がせて裸にして埋めたのである。

この事は、その後、ソ連側と幾ら交渉しても駄目であった。唯物論の国ソ連ではどうにもならぬ話だった。本当にひどい国だと思った。

その後死亡者もどしどしその数を増し、この穴掘りの人手も足りなくなり、遺体は春の雪解けまで、物置を改築した死体収容部屋に安置されたのである。

静岡県 斎藤 肇

汽車に乗って帰ると思っていると、駅を通り過ぎ二十分ぐらい行った所に収容所があり、そこは鉄条網を高さ四メートルぐらいに二重に張って、四隅の望楼に一人ずつ警戒兵が自動小銃を持って昼夜監視している。

宿舎は古いアラバ家、ソ連の兵隊が侵攻の折宿舎にしたようだった。この収容所がブラゴシチェンスク第一収容所で、二十三年の春ダモイまで忘れることのない生活を送った。

その頃栄養失調で死亡する者が多く、他の収容所から遺体が十体ほどトラツ

クで第一収容所へ送られて来た。襦袢袴下だけで凍っていた。ソ連の軍医が解剖して研究するために運んで来たという。医務室のそばへ屍室を作り安置する。自分と衛生兵の二人でその遺体をペーチカの上に四体立てて並べ、柔らかに溶けるまで火の番をした。今でもその時の気持ちを忘れることが出来ない。

二、三日経ってから墓掘りが始まった。駅の北の小高い丘に街のロシア人の墓地があり、その一隅に大きな穴を掘った。毎日交替で十人ぐらいつづ行った。凍っていて硬くてなかなか掘れない。ツルハシとバールで砕きながら掘り、帰る時は凍らないようにシートを掛けてくる。幾日もかかかって掘り埋葬する。自分達の収容所でも幾人か亡くなって一つの墓に眠っている。故国に帰る日を夢見て遠い酷寒の異国で亡くなっていった戦友達を一日も早く故郷へ還してやりたい。

岩手県 佐々木清三

死者続出

十二月になり、栄養失調に回帰熱蔓延、シラミの媒介により毎日死者が出た。昭和二十年十二月から昭和二十一年三月までの四カ月で、四百八十一人の多くの死者を出した。時には一夜に十数人の死者を出したこともあり、ある戦友は真夜中に四〇度の高熱にうなされ大声で「日本に帰る汽車が来た。皆起きろ」と叫び外に出てまた寝て、朝には冷たくなっていた。

愛知県 内藤朝夫

約七百人の収容所で毎日四、五人の人が亡くなり、二、三カ月で約二百人が亡くなった。口伝えの話だが、どこへ運ばれるか分からない。伐採で亡くなった処置と同様に、運搬組がソリに積んで毎日運搬し、小山のように積み上げ、雪を被せるか、また降雪で見えなくなるようにしておくだけの様子だった。二百人も死体をきちんと埋葬できる状況ではなかった。

①乗りこえてきた信念……死んでたまるか、生きてダモイするのだと頑張った。

②生死の境、死に直面したときの感想……栄養失調の戦友がパンを握りしめて死んでいるのを見て悲しかった。

福井県 片山清次

連日、夜となく昼となくおびただし入院患者がトラックや馬桶で管内のラゲリから送られてきた。当時は病院とは名のみ、数多く点在するシベリア監獄の一つを転用したに過ぎないこの施設では、医薬品も医療器具もない。ただ数人の日ソ軍医と衛生兵、ソ連人看護婦がいることで病院という体裁を保っていた。

鉋もかけられていない松板で作られた二段ベッドに汚れた夏の軍服のまま横たわり、持参した一枚の毛布にくるまり、ひたすら回復を待つのみであった。当然、助かるべき生命が、何の医療の手も差し伸べられないまま、いとも簡単に尊い生命が奪われていく事実を何度も見ながら涙した。

入ソ当時の大部分の患者は栄養失調、発疹チフス、赤痢等が挙げられ、将兵の中で最も死亡者の多い階層は若年兵と高齢の召集兵であった。

更に不幸なことに、昭和二十年の冬から二十一年の春にかけて近年にない寒気の厳しい年であったという。これらの悪条件が重なり、厳寒の日々、一日に二十人前後の死者が出ることは連日のことであった。屍室に運搬する担架が足りなくて、梯子の上に死体を載せて運んでいる場面に何度も出くわした。唯物論のお国柄か人間も死んでしまえば一個の物体とばかりに、着ている下着は全部脱がせて全裸にして埋葬するのであった。零下四〇度の世界は死体を忽ちにしてマネキン人形のごとく無情に凍らせてしまう。せめて下着だけでも着せて葬っ

てやるのが死者への思いやりではないかと懇願するのだが、この国の人たちには一向に通じない。

死体埋葬は人目を避けるためかいつも日没寸前の時間が運ばれた。白一色の雪と鉛色の空、薄暗い光りのもとで、触れ合えば金属的な音がする程硬く凍りついた死体を一〇体前後馬桶に積み込み、ぼろ毛布で覆って吹雪の中を近くの山腹にある墓地へと走る。そこにはツルハシも刺さらない硬く凍った凍土を溶かすため、伐採した松を積み上げて巨大な焚き火を前夜から焚き、翌朝表土が三〇cm程度軟化したところを大急ぎで掘る。この作業の繰り返しにより五〇体が埋葬可能な墓穴が予め五カ所掘ってあった。その中に頭を東向きにして体ずつ梯子で降ろして並べていく。旬日を経ずして満杯になると雪をかき集めて墓穴を覆う。

土が軟化する春先に改めて覆土をする。まないた大の板に五十人の死者の姓名をインク鉛筆という変わった鉛筆でロシア文字で書き込み墓穴の上に立て掛ける。一、二カ月も経つて墓地へ行けば、風雨にさらされて死者の姓はほとんど消えている。果たして、この墓地に眠る死者の姓名は祖国日本に通報されるのだろうか。この思いが当時から頭の中にこびりついていた。

昭和二十二年の春のことである。前年の秋、タイシエツト二六km地点から一七八km地点のチュクシャに移転した新築の第五病院に勤務しているとき、突然に、病院側から一人一人に一〇cm程に切った包帯に桁数の多い番号が書かれたものが渡された。白い包帯に水のような液体で書かれている。暫くすると黒く発色して数字が読めるようになった。ソ連には墨汁がないので硝酸銀溶液で書いたのではないか？ その番号が本人の固有番号であるから上着の左胸に縫い付けるよう命ぜられた。

通訳の言によれば、捕虜番号ということである。同時に夕食後から一人一人が別室に呼ばれ、ソ連人事係将校と通訳との三人で捕虜番号に基づき「登録文書」が作成された。その中味は、姓名、生年月日から始まり、出生地、入隊まで

の住所、職業、宗教、学歴、兵科、階級、軍隊における地位、更には身長、体格、毛髪の色、眼、鼻等の顔の特徴に至るまで詳細な調査項目が埋められており、紙不足のソ連に似合わない上質の厚紙に、それら項目が印刷されていた。日本人通訳を介して人事係将校が項目を埋めていく。一人当たり二〇〇〜三〇〇分は経過したであろう。

人事係将校の説明によれば、この登録文書は捕虜一人について同文のものが三通調整され、一通はソ連政府、一通は日本政府に送付され、残りの一通はラーゲリに保管される。本人が他のラーゲリに移動するときは、この文書も本人とともに移動先のラーゲリに引き継がれる。このように登録文書は常に本人と共にあり、祖国に帰るまでついで回る。もし不測の事態が生じてこの登録文書を通じて日本政府に通報されることであつた。

時を同じくしてこの時期にモスクワからの命令と称して、死没者の取扱に關しては清潔な下着を着せて松板で作った寝棺に納め、両手は腹の上に組み登録番号を記入した木札を手首に結び付けて一体ずつ埋葬するように改善された。埋葬箇所にも登録番号を明記した木札が墓標として立てられたが、残念なことに一カ月程で番号は消えてしまうのであつた。

思えば長い長い時間の末、やっと人間らしい扱いを受けられるようになった。入ソ當時、マネキン人形か冷凍マグロのように扱われた多くの友の不憫を思い出し新たな感慨を覚えた。

日本が主張する関東軍や在満民間人からなる百万人近くの抑留者に対し、先般、やつと重い口を開いてソ連の発表した数は五十九万四千人であつた。

もつと早い時期に登録文書が整理されていたらこのような数の開きも出さず、より正確な数が把握されていたことであろうと思う。今となつては残念に思えてならない。

大分県 中谷 孝

それまでの出来事として、日本の軍人の死体は軍服を着たまま、軍人以外の日本人の死体もそのまま放置されていた。ソ連の軍人は丁寧に埋葬されていたのが満鉄沿線から見られた。

シベリアに向かう途中、チタを過ぎて蒸気機関車に給水するために停車した駅で、飲料水の確保のため乾パンの空き缶に水を汲んでいたが、途中、軍服が濡れたために貨車の中に干していたら、その軍服並びに武運長久の日の丸の旗と千人針を民間のソ連人を持って行かれた。ソ連の警備兵が、貨車に穴が開いていたのは中谷が興安嶺で逃亡するために穴を開けたと言いがかりをつけ、銃殺にすると銃を付きつけたが、通訳の猿渡が、中谷は中隊の本部にいたのでそういう人ではないと弁明してくれたので、ソ連の警備兵は銃をおさめた。

ソ連のクラスノヤルスク第三收容所の死亡者の第一号は收容所に到着した日に発生したが、それは町の風呂に入った時に初めて知った。なお、死亡者名簿は全員を持つている。

入隊―終戦―抑留―復員して五十年、一日も忘れたことのない人(死亡者・消息不明者を含む)の住所氏名

大分県内

日田市 坂本八郎

津久見市 坂本辰美 関健男?

佐伯市 藤田健 神志名新八 山城?

佐賀関町 渡辺基 姫野良夫

日出町 中野豊

臼杵市 川野一二三 北山猛

大分市 長岡慶事 池田作馬

福岡県内 葛原生人

熊本県 松本孝

鹿児島県 野本勇

大阪府 相見利嗣 寺島富之

福島県 大野昌二

山口県 くにしひろ?

秋田県 河村辰生

ハイラル陸軍病院(第三病棟)

副院長 神谷軍医

看護婦 岡崎文子 (富山県?)

看護婦 つのとしこ(富山県?)

入院患者 瀬戸山直 (宮崎県)

入院患者 篠原敦 (宮崎県)

入院患者 小林 (印鑑作成指導者・四国?)

クラスノヤルスクの収容所

ソ連人 軍医 ナターシャ 軍医 マアリンキ

日本人 軍医 高野正好

日本人 衛生兵 渡辺基 佐々木三郎

河村辰生(秋田県) 田中三郎

西山?

死体埋葬(冬は凍結のために仮埋葬して、春に本埋葬。半年たつても全く死体は変化していなかった)

死体は棺の中に入れて櫛に積み、ロバに引かせて墓地に行き、棺は開けて持って帰り再度利用した。

認識票を数珠の代わりに胸にかけて手を合掌さして、頭を上にして緩やかな斜面に埋葬した。

最初は木の墓標、四角で一辺が十センチで長さが一メートル。一部は鉄の丸い墓標で、直径が十センチで長さが一メートルくらい。

死人と埋葬

栃木県 加藤源四郎

同中隊の兵士が死亡した。休日に八人が就役に出て、死体を戸板にのせシヤベル三個、鉄棒二本を持ってソ連兵に連れられ裏山に埋めに行った。山というより丘で、立木一本もなく雑草のみ。凍った雪を除き、畳一枚くらい、深さ五十センチメートルくらい、固く凍っているのをやっと掘った。死体を入れろ、そして作業衣、下着、襦まで全部脱がせと。死体はろう人形 のように、バールで足を軽くたたくと鈍い音がして凍った石のようだった。皆で手を合わせ黙とうし土をかいた。ソ連兵はイツシヨナーダ、装具は全部持って帰れ。誰もが無言だった。こんなところで死んでたまるかの気持ちだったろう。

東京都 関 栄夫

冬は零下四十度という寒さの中での作業が毎日行われているのです。何もかも凍り、吐く息までも凍る。伐採場の往復、作業中に過労と栄養失調のため倒れて、そのまま枯れ木のごとく死んでいった戦友もいた。

夜な夜な狼が遺体を食い荒らし、次の日には影も形もなし。狼は近くで吠えているが、たいまつをたきながら夜空の星を見ながら、故郷を思い出して山を下り、一日の作業が終わり夕食にありつける。

大木が思いがけない方向に倒れて木の下敷きになり一命を落とした者、これも過労、栄養失調のため機敏さが失われ、大声をかけても逃げ遅れてしまうのです。

福井県 横田 肇

外に出てブラブラ歩きをして、あるテント小屋をのぞいて我が目を疑った。そこには土の上に素裸にした死体が三段ぐらいに無造作に積み重ねられてあった

のだ。花はおろか供物も水もなく、ソ連兵の話では、死んだらそのあたりの木材と同じだとのこと。その後二、三十体になると馬車に乗せてどこか運んで埋めるとのことで、無性に腹が立った。

それから二年ほど後の冬に一人が作業中の事故で死亡した時、埋葬のために穴を掘りに行ったが、鉄棒のバールも地面に刺さらず（凍土のため）、火を燃やして凍土を溶かし「日に深さ十五センチほど（縦二メートル、横二メートルほどの広さ）が掘れただけで、人を埋められる深さになるには三日ほどかかり、十分な深さでなかったが埋葬した覚えがある。病院のときの死体はどう扱われたのか……

福井県 横田 肇

凍った川にも水が流れ出したころ、痛ましい事故が。それは、乾燥室の木材の入替え作業の時、入口の柱とバックしてきたトラックに挟まれて一人の死亡者を出したのだ。ナチャニックに話してラールで一晚通夜をしたいと申し入れたが許されず、そのトラックでどこかへ運び出されたことだ。後でナチャニックが我々に「ソ連は今教会もなく、宗教はないからしかたない」ということをわざわざ通訳を連れてきて話をしてくれた。

長野県 中山 麻人

人の死ぬのは大概夜明け少し前だった。病室のどこかで「ギヤーツ」と言う叫び声が聞こえてくる。一声または二声、それは日本兵の最期の声であった。妻子もあつたらう、両親もあつたらう、どのような思いであの世へ行ったのだろう。こんなことを深刻に考えていると眠る気にもなれなかった。亡くなった人の周りがざわめいて来た。首を回して見れば何ということだろう、隣にいる病人が一人二人よろめきながら近づいて、争いながら雑のう、飯盒その他の身の回り品を奪い合っているのである。何たる姿であろう。朝になって見ればその兵士の身辺は何一つ

残っていない。ソ連の衛生兵だろうか、担架を持って近づいて硬直した体を無造作に乗せて行く。彼等の主義は死んでしまえば人間と言えども一個の物体に過ぎないのだ。丁重に葬儀を行う日本人の感覚ではとても理解できない。二、三日たつとまた同じような光景が始まる。伝染病棟の患者は皆、骨と皮となって死んでいった。仏画で見る正に地獄の図のような光景の中で昭和二十一年を迎えた。

愛知県 森藤真一郎

朝、目を覚ませば、一緒に毛布をかぶって眠った友が冷たくなっていることが続いた日もあった。亡くなった友をラール内柵近くに穴を掘って皆で土葬する。凍土は石のように固い。一本のバールで交代しながら掘って約半日はかかる。作業は休日に行なうが、深さは二十五センチ程度まで掘るのが精いっぱい、体を上向きにし、皆で合掌しながら見えない程度に土をかぶせるだけである。当時の環境の中でこんな残酷な目に合うのは牡丹江で敵をやつつけた報復だろうと思う人も少なくなかった。なぜかと思う気休めもあったでしょうか。

岡山県 片山 衛真

死体は遠くない街角のレンガ造りの死体置き場に運ぶ。今まで死亡者は西の丘の上に捨てたが、ソ連の死体置き場は初めてだった。男女の区別なく重なり合つて積まれている。死亡者は老人は少なく四十歳前後の人が多し。髪は入り乱れ、汚れた服、汚れた顔、これに勝る地獄はなからう。その中に三本木を運ぶ。私が行くところへ三本木が……。一本の花も供えることができず泣けて仕方がなかった。

マルクス思想では人間の死は動植物の死と同じで、人間の死後は何も残らない、土になつていくのだと。

宗教は禁止され、教会、仏寺、墓地も見られない。死者に対しての取扱いは

冷酷だ。五月下旬、倉庫の中は寒い。死体は凍っている、悪臭はない。凍った死体が溶ける頃には、ソ連の手で人里離れた人の訪ねることのできないところへ捨てられるのだろう。

岡山県 片山衛真

思想教育では、人間の死について進化論、唯物論を教材とし、人間の死は動物と同じであるとする。人間の死は人間の終わりでも残らない。土と化するのみである。そのために寺院、教会、墓地もこの町には見られない。

二十年の冬は多くの兵が死亡した。死亡した兵をソリに乗せて西の丘に捨てて行く。下着は残る兵が必要のために裸体で捨てる。体力のない私はソリを引くのに苦しい。ソ連兵は無情に早く早くと呼ぶ。今日引くソリに明日は私が、そんな気がして仕方がなかった。ソリに乗せた兵の氏名も出身地も知らないし、知ろうともしない。それは自分の命が今日か明日か知れぬとき、知る必要のないことである。零下三十幾度の毎日、死体は凍り、雪の上に捨てて。土は凍り掘ることもできず、そのまま放置してしまう。生きて帰った私は、ただ戦後四十幾年過ぎても思い出して夜眠れぬ日が多かった。四十七年目に再会した愛媛県川之江出身の矢野さんの話で、数人の兵を連れて死体を埋めに行ったことを話してくれた。雪の上に捨てて掘ったことを知らなかった私は、ほっとした。これが私の実感でした。矢野さんも、五十年近くなくても過去として忘れることができず眠れない日々が続いたという。

四十八年目に再会した田中九市同年兵の話によると、土が溶けて暖かくなった頃使役で死体を埋めに行つたと、当時の話をした。ソ連兵は死体を深く掘ることを要求したが、栄養失調で土を掘る体力がなく浅く掘つたという。彼も現在においてもシベリアの苦難の日々を夢に見るといふ。

私達が作業に通う道端に四十歳くらいの男性が凍死していた。顔は道行く

人々に向けられていた。帰るときも顔は道行く人々に向けられていた。次の日も放置されていた。肉親も知人もいないのだろうか。でも私には死者の顔が過酷な苦しみから逃れ、安らかに眠っているように思われる。彼もまた死体置き場に運ばれ、闇から闇に始末されるのだろうか。この町には数十万の流刑者が寒さと食糧不足に耐え強制労働に服している。この人達はロシア民族以外の人々である。ロシア人によって罪なき人々が流刑者として送り込まれている。二度と町を離れることはできない。そんな話を聞いたとき、私はロシア民族以外の子孫を断つための投獄であつたのではと思う。それはこの町に子供がいけないことだ。多くのソ連人は新居を持つているが、一人の子供も見つことはなかった。

役人達は遺骨、遺品、筆記したメモ等を所持することを禁じていた。もちろん筆記用具、用紙も求めることのできない社会でした。三本木を運んだ死体置き場を見てそうしか思えなかった。

山口県 小曾根三郎

体がうんと弱って下痢を起すと、胃腸の栄養吸収機能が失われ、顔はムーンフェイスにはれ上がり、体は、骨の上に皮が張りついた、理科教室の骸骨標本とそっくりになり、数日のうちに脱水症状で死んでゆきます。

入ソしたとき千人だつた部隊が、翌年の春までに三百人死んで、七百人になっていました。一日で三人亡くなる割合になります。しかし、そんな極限状態になりますと、生きているのと死んでいるのとの境目になって、ブーツとなり、悲惨とか絶望とかの感情はわきません。「次は俺かな」とかすかに思うくらいです。

日に日に餓死する人が出ますが、労働のある日は休めませんから、裸にして收容所の片隅に置いておき、零下四〇度を超えて労働体になったとき、死体をまとめてソリに積んで白樺林の凹地に運んでゆき、凍った大地の上に積み上げて帰ります。

「カラーン」と乾いた音が、苦勞を共にした戦友との別れの音です。

私達は監視兵に「お経をあげさせてくれ」と頼みましたが、監視兵は。ペッとつばを吐いて認めてくれません。

福岡県 白石 寿

作業終了後、兵舎内は狭いので急造の作業場を片つけて野辺の送りとなる。幸い坊さんがいたので、タイマツで灯りをぼろ切れに火をつけて線香代わり。翌日埋葬となり、四人くらいで穴掘り作業をするが、凍土の墓地で薪を焚く。しばらくしてその火を横に移して燃やす。前の所を金棒でつついて掘る。一〇センチも掘ると堅くて掘れない。横の火を移し後の所を掘る。繰り返し掘っても一日で一メートルも掘ればよい方。死体を置き凍土を覆って別れをしても、ここらは狼がいて、下の部落の馬小屋を襲った話もあり、丸太を並べて掘り返されないようにしておき、雪解けになつてから深く掘って埋葬し直していた。

熊本県 岡田博之

多くの戦友が栄養失調による下痢症状を起こし苦しんでいても薬はなく、消し炭が薬代わりであった。そして虱は繁殖し、一年も二年も着たままの黒光りする衣服の襟首や背中を、大粒の虱がぞろぞろはい回っていた。取つても取つても虱は減少せず、後ではその虱を取る気力もなくなり、虱のながままの毎日であった。毎日毎日、尊い命を失った戦友達は、屋根もない白々とした厚い雪の上に並べられていた。その戦友達は死ぬ前にほとんどが、はるか我が故郷の父母や家族のことを思い、その中で「お母さん」と言つて息を引き取る者が多かったようである。この收容所でも、はつきり分らないが、一冬に二百人余りの戦友が死んでいったと思う。そして、亡くなった戦友の名札を病室の棚に置くと、ソ連の将校の手によって、不必要になつた物でも処分するように簡単に捨てられていたことであつた。

岐阜県 若尾美義

四年間の抑留生活の中でどうしても忘れることのできない事件が一つあります。それは、約十メートル以上の材木を台車に積込み作業中、過つて大木の下敷きとなつて二人の戦友が命を落としたことです。即死でした。それからが大変でした。ロシア人のマッセルは、衣類を全部取つて裸にせよと命令しました。衣服をはぎ取られた戦友を裸のまま穴を掘つて埋めたときの悲しさ、哀れさほ、一生涯忘れることはできません。まさに地獄とはこの事でしょう。

愛知県 杉浦守市

栄養失調にて衰弱死する人が出ると、必ず死体は解剖して病名が探究される。捕虜が死亡したことについての責任回避のための解剖であつたと思う。死者の衣服には何百匹かの虱がいる。取る力もなくなり、虱の犠牲となつたのである。

死亡当日は屍衛兵が立哨する。翌日墓地に埋葬する。全裸体で寝棺である。当初は棺のまま埋葬したが、年が明け二十一年になると、死者が増して、板材不足にて裸のまままで土葬することになった。棺は墓地までの移動用となつた。

また、時によっては毛布、むしろを掛けて墓地へ行くこともあつた。死者の被服は滅菌場にて殺菌消毒して倉庫に納入する。代品として誰かが支給を受けることになる。

一月のシベリアでは、埋葬は重労働作業である。埋葬のために穴を掘るにも、凍土状態で掘り下げることが困難である。五〇センチメートルくらい掘り下げて埋葬して、近くの雪を山盛りにし、墓標を建てて帰つたこともあつた。春の雪解け時期には野犬に荒らされるのではないかと心配もしていたが、対策もなかつた。

栃木県 天野喜一

水上輸送二日目と記憶しているが、他部隊の櫓を引く兵士と出合い、櫓に遺体と思われるものが積載され、立ちどまり事情を聞いたところ、日本兵の遺体であり、火葬するには燃料がなく、埋葬するには酷寒零下三〇度を超す平原の掘削は困難であり、やむを得ずアムール河の水を掘削して河に流す水葬の作業ですとの話であった。

氏名・出身地・部隊名も判明せず、敗戦の悲惨な光景を目前にし、手を合わせご冥福を祈るばかりであり、敗戦の悲しさを痛感した次第である。

千葉県 伊藤千次

「オンボ部屋」

退室したばかりの人はすぐ外の作業に出さなかった。籍を置いたのが表題のオンボ部屋。黒田分隊長以下十五人、明けても暮れても毎日毎日墓穴掘り。だから皆が「オンボ部屋」と呼んでいた。

初めの頃は一人死ぬと、周りの戦友達が埋葬していたようだが、だんだん多く死ぬようになり、作業のノルマもきつくなり、戦友の死を弔う時間もなくなり、墓穴掘りの分隊ができたそうだ。

収容所の生活は一般の人と変わりないが、朝食を食べると収容所の裏の墓地に集合し、今まで埋葬された墓の隣に墓穴を掘るのが仕事で、一日じゅう墓地にいた。墓地は原生林を切り開いて造ったもので、碁盤の目のようにきれいに墓標が並び、その墓標には封筒ぐらいの板を横に打ち付け、アラビア数字で捕虜番号が書いてあった。

朝食が済むと戦友は各職場へ、私達は墓地に着くと穴掘りの予定地で焚き火を始める。夏のうちは土が凍っていないのですぐ作業を始めるのだが、冬は焚き火をして凍った地面を解冻する。原生林に倒れている枯れ木を引きずり出し、また生木を切って燃やし、半日つきつきりで燃やしているが、何しろ零下三、四

〇度、余り効果が見られず、二十センチも土がやわらかくなれば上出来である。

昼食後は火を片つけて、ツルハシやバール、スコップで入れ替わり立ち替わり掘り、また火を燃やし夕方まで二、三回繰り返し、寝棺が入る深さまで掘るのがやっとであった。こんな始末だったので、冬は戦友が死ななくとも墓穴を掘っておくという奇妙な話だが、前記のように一日八人も死んだことがあったので仕方なかったのだろう。六月頃になると死ぬ人が少なくなったのでオンボ部屋は解散し、炊事の薪取りに出発するようになった。

千葉県 伊藤千次

戦友が死ぬと製材所から板を持ち帰り、棺桶を作り埋葬した。だんだんと死ぬ人が多くなり、また作業がきつくなり、死人にかまっていられなくなり、毛布にくるんで埋葬した。ずっと後での話だが、他の収容所の話では、死ぬと裸にして倉庫の中に積み上げ、春になって埋葬したとか、痛恨の至り。合掌。

愛知県 糸井紀伊

奥地からどんどん送られてくる抑留者の中には、船にも乗せられないほどに弱った人もいて、そのほとんどは栄養失調で座る元気もなく、トラックの上に折り重なるようにして横になっていた。

その人たちは、我々の第五三三ライゲルから程近い所にある第八八病院に収容されたが、なすすべもなく、日本を前にして死んでいき、五三三ライゲルからは毎日五十人の穴掘り要員が出て行き、遺体を埋めたのであった。死んだ木人たちはさぞ無念なことであつたろうと思われる。穴掘り作業は一月以上続いたので、そこだけでもかなりの数であった。

広島県 平本直行

私のシベリア抑留は三合里だと思っています。この三合里で昭和二十一年八月、真性コレラが蔓延して約千五百人の死者を出した。

三合里コレラ事件は余りにも悲惨で、文にする言葉さえ失う。もちろん医師、医薬品が全くない。一万人に近い病人が集団生活をしている。ハエの媒介で多くの死者を出した。今も「伝染病」の文字にはあの時のあの惨状が頭をよぎり、忘れ去ることはできない。そしてこの死者の後始末もまた大変な作業であった。朝百人という死者が広場に横たわった。ハエの止まった食物で約二時間もすると嘔吐する。下痢が始まり三時間で死に至る。日々山のような死体に遭遇する。埋葬のために歩ける者は皆駆り出された。四人が二組となり、担架に死体とスコップを乗せ山を登り目的地に運ぶ。

死体の身長をスコップで計り、棺桶のような穴を掘った。草を敷き死体を入れ、できるだけ野花を摘み、そっと顔に乗せる。四人は大きな声で「終わりました」と叫ぶ。その声でお坊様が一番短いお経をあげる。「お前だけ送りはしない、俺達も行く。一日も早く日本に帰れよ」と、私はとめどなく流れる涙で叫んでいた。その時の状況は決して決して忘却はしない。この三合里は自分の胸の奥深くしみこんで、大きなしみとなっている。

山口県 長野安廣

前世からの約束だったか、夢も希望もなくした若い兵達、痩せ細って灯明の消えるごとく、皆安らかな死だった。每晚廊下には石のように冷たい屍体が五つも六つも。この療養所には電気がなかった。夜はカンテラが頼りだった。旅立った兵の亡霊に出逢った者は一人もいなかった。

高知県 篠原精一郎

その頃から戦友は栄養失調と疲労でバクバクと倒れていった。私の班で最初の

犠牲者は、長崎県の藤田整備兵長だった。私の横で寝ていたが、夜中にいつもより寒いので目が覚めた。そのとき体に触れるとすでに死んでいた。

ソ連兵の指示で、着ているものはすべて脱がされ丸裸にされた。死人に着せておくのはもつたいないという考え方であろう。その脱いだ衣服をソ連兵が持ち去ろうとすると、光るものがポトリと落ちた。すばやく拾ってみると、成田山のお守りだった。連れて帰ってほしい一念で私に預けたのだろうと思ひ、今もお守りとして肌身離さず持っている。できたら何とかして藤田の遺族を探しお返ししたいと考えている。とにかくその日一日で死亡者が十五、六体にもなつて、埋めることになった。ところが土が凍っているので掘れない。そこで火を焚いて土を解かしながらようやく掘った穴に、カチカチに凍った遺体をちようど大根漬けのように交互に詰め込んで埋葬した。それから後も、冬の最初の数カ月は毎日数人、あるいは十数人と死んでいった。

特に夜中の死亡者が多く、昨夜は何人だった、今夜は何人死ぬだろうか……と噂しながら寝た。あまりの数にもはや埋葬はできず、死体はすべて丸裸にされて、栈木を積んだように積み上げられていった。死体の間に吹き込んだ粉雪を払うと、戦友といつでも会うことができた。しかし、もはや特別な感情はなくなつていった。

その遺体もいつの間にか馬車で運び出されていくが、死体は次から次へと積み重ねられて、なくなることにはなかった。

高知県 篠原精一郎

それといま一つ私たちの目についたことは、初めのうちの死体は解剖室に運ばれ、私たちの目の前で解剖が行われていたことである。ソ連の軍医は死因の究明と称していたが、実際は彼らの勉強のためにやっていたと思う。

愛知県 土井好夫

武装解除後、衛生兵四十人で衛生隊が編成されて、ソ連に連行される日本兵士等で病氣、負傷で連行途中落伍する者の手当等をしながら綏芬河からソ連領グロデコーポに入り、グロデコーポで満州から連行された日本兵士の病人の手当と死亡した兵士の後片付けを行った。

日本人が死亡すると、担架に乗せて埋葬地のソ連軍が掘った戦車壕まで運んで、その場で死者の着ていた服を脱がせて裸にして戦車壕の中に投げ入れて埋葬した。この時、死体を埋葬した後の担架に付いていた虱が白い砂のように担架いっぱい広がっており、集めると手のひらに二、三杯位あった。今でもこの虱のことを思い出すとゾーとした寒さを感じる。

戦車壕と病院の庭を掘り起こして埋葬した日本兵は約六百体はあったと思う。埋葬した後は、戦車壕も病院の庭も平地にしてジャガイモを植える畑にしていた。

高知県 中平松鶴

不順な気候の異郷にあつて、心身の酷使は、食糧の悪いのと相まって故郷を恋いつつ次々と死んでいった。私の不寝番の折も一人「お母さん」と呼びつつ息を引きとられたが、思い出すだに身につまされてならない。死者には、襦袢、袴下もくれず、かちかちになった遺体は素裸のまま、こもを着せただけで、そりで墓地に送られた。戦友の冥福を祈りつつも皆、自分の番がいつ来るのかと恐れた。

長野県 大沢正人

ベッドの上にならずと死体が並び、屍室に何一つけない死体の山がいく山も作られていた。これでは皆全滅するのかもしれない。自分も赤痢になって炭を食べていた。幸いに同じ村から一緒の同年兵の衛生兵がいたので、無理やり少ないクレオソートで治していた。

二月、三月と一段と寒さも加わって死亡者続出で作業に出る者もなく、何百人ともなく屍室は天井まで全裸の死体で入れる所のないありさま。骨に皮がついているだけのミイラ状のこちこちの屍、全く見たこともない、ただただ驚いて声も出ないありさま。運んで来るとき屍を積み上げると凍っているのでカランカランと音がする。ただただ呆然と見ているばかりでした。身内の人には話もできない、この厳冬では穴掘りの作業も進まず、埋葬もすることができない。

北海道 菊池普薫

責任者として特別収監ラーゲルに三日間収容され、罰直として昼食は除かれた。本部付の副官〇〇中尉が薪の中に黒パンを差し入れてくれた。四畳半位のラーゲルのため部屋が狭く、小さな薪ストーブでは寒くて眠れず、夜通し焚きつけながら暖をとっていた。すぐそばに望楼があり、歩哨も寒さに耐えられず暖をとりにやってくる、ロシア語で盛んに話しかける。自分も日本語とロシア語(チャンポン)で話して退屈しない。ある程度の時間になると望楼に戻る。三日目に解任され作業に戻ったが、相変わらずシラミ取りに追われる。余りにもシラミが多く蔓延し、そのうち発疹チフスが流行して体力的、精神的にも衰弱して、毎日のように亡くなる人が続いた。主に亡くなる人は在満開拓関係で強制抑留者の方々である。無理もない。我々と違って家族を思い、精神的打撃に追い打ちをかける発疹チフスである。自分も僧侶としての関係上、亡くなられた方々数人を供養したことがある。最初は新しい襦袢、袴下、軍服を着用させ、階級も上げて読経した次第である。

連日零下三五度の酷寒であるから、嘆仏偈が葬式の読経であった。地面は地下深く凍結し、ツルハシなどは跳ね返ってしまう。ソ連の習慣は火葬せず、埋葬である。一人埋葬するために少しずつ火を燃やしながら掘り下げるが、それだけで一日じゅうかかる。ようやく埋葬できるだけの穴を掘るのだが十分ではない。どこかでそれを見ていたロシア人が、食糧、衣類が欠乏している状態なので、夜中

に死人の衣服を剥ぎ盗り裸にして、「サアー」と浅く土をかけるだけなので、狼が来て埋葬者を食い荒らす。これではならじと裸にして荒ムシロに包んで読経、埋葬したものである。

愛知県 森 武雄

ブカチャーチャ地区の收容所(正式にはチタ地域第二三收容所第一、第二分所)に收容された日本人は約三千人と言われているが、その中で生きて帰れた人は千四百余人で、残りは死亡したのである。ブカチャーチャ村には日本人墓地が四カ所、第一分所の第一墓地には五百余人が眠っている。その他二カ所の墓地は残念ながら不明である。第一分所は昭和二十一年の春、收容所の建物の一部が突然崩壊して十三人が非業の最期を遂げた。私がいた第二分所の南側に広い丘(二〇メートル×一五〇メートル)の真ん中に一五メートル位の大きい赤松が一本立っていたことから私達は一本松墓地と言うようになった。この一本松墓地には八百五十人余りが眠っている。特にひどかったのは昭和二十一年一月頃から三月までの厳寒期であった。最も多い日には二十七人も死亡者を葬ったことがある。ラーゲルの門が本部事務所のすぐ近くにあって、毎朝、衣服をはぎ取られ裸で凍らせた骨と皮になった死体にムシロがかけられ、荷車でコトコトと音を残して門を出ていくむごい光景は正に地獄絵を見るようで、とてもこの世のものではなかった。心の中で手を合わせて見送ったことは終生忘れることができない。

一本松墓地について忘れられない光景の一つがある。死んだ仲間の墓穴を掘るうにも、凍土はスコップでは硬くて歯が立たない。飢えと重労働で疲労の積もった元気のない者ばかりで、穴掘りの使役に出る者はなかった。そこで考えたのは、夜間石炭を燃やして地面を解かし、翌朝やっと掘った二十センチメートル位の穴に亡骸を置いたのです。その石炭を燃やす炎が毎晩、凍りついたシベリアの夜空にユラユラと揺れていた光景が忘れられない。明日は我が身かと思うとやるせ

ない寂しさがこみあげてきた。

和歌山県 南口佐一

このラーゲルで私の実感したことは、シラミが人間の死期を知らせると私は感じた。それは、今まで体内にいたシラミは、血がまずいのか冷たいのか、首筋に這い出してくる。そのような状態になれば友は朝起きてこない、死んでいる。シラミは時を告げると思った。

死んだ友を毛布に包み、引きずって一つの戦車壕に六人ほど入れ、雪を被せただけ。凍結期のために土に埋めることもできなかった。肉親もおらぬ哀れなもの。真実を家族にも言えない。本当に気の毒で、友とともにこんな所で死ぬるものかとよく言いながら、死に際に「もうあかん」と言う。互いに「もうあかんは言わん」と言いながら、「あかん」と言って死んでいった。

夜になれば月はこうこうと輝き、シベリアで見る月は冷たく、狼は吠えれば至る所から吠え出す。不気味で空を見れば涙が頬を流れたのです。

岐阜県 中島正教

作業隊員が一番多く死亡したのは酷寒、食糧不足、重労働、赤痢、発疹チフス、回帰熱等の伝染病、睡眠不足等で、昭和二十年十二月中旬ごろから始まり、昭和二十一年一〜二月には毎日十五人ほどとなり、最高は一日十七人であったと青山軍曹が会報で報告した。

死亡者が出ると屍室(運んだ。栄養失調の特徴は、今まで元気だった者が突然倒れて死んでしまうという点である。私も二十一年初春、作業から帰り「御苦労、解散」と言って解散した兵が突然倒れた。急いで抱き起こしたが、もう死んでいた。食事の折、飯盒に入れ終わっても手に持ったままでいるので「オイ飯は入ったぞ」と声をかけると、もう死んでいる。死ぬのに何の苦しみもなく、父や母の名さえ呼ばない。まして「天皇陛下万歳」なんて言ったのは一度も聞かれなかつ

た。楽な死に方だけが戦友としては助かった。これが苦しまれたらとてもたまらない。私自身も、いつこのようになるのかと常に思い続けるのであった。

同年一月、室内で病死者が出た。小松軍医の診断で死亡と確認し、居室に運ばせた。居室に安置するため数体の死体を動かしたら、動くのが一体あった。よくよく見て脈を計ると動いている。兵が驚いて「生きてますよ」と言った。微かに呼吸している。よくも全裸で零下二〇数度の一晚を過ごせたものだ。大急ぎで部屋に連れ戻り、一命を取り止めたことがあった。あまりに多数の死者が出、生命ある者まで死者扱いにされた件であったが、私の隊員ではなかった。

ある日「司令部で三宅少尉を呼んでいるぞ」との知らせを受け、「俺は司令部に呼び出されるような覚えはない」と言ったが仕方がない。意を決して、隊内の一角に負けて逃げることに一番の司令部が、それでも参謀肩章をつけて私を呼びつけた。行って、「三宅少尉、お呼びによつて参りました」と入り口で言うと、少佐で参謀肩章をつけたのが「少尉は坊さんだそうだな」と言った。なんだ僧侶としての用事かと思ひ「ハイ、本願寺の僧侶です」と答えると、「師団長閣下の子供が亡くなったのでお経を読んでもらいたいのだ、埋葬してあるが頼む」「ハイ、それくらいのことは簡単なことであります。ただいまお袈裟をとつてすぐ参ります」と部屋に帰り、輪袈裟、御本尊と経本を取り出し、葬儀の儀式の型のように正信偈の読経を終わった。

終わつてから後ろを向くと、参謀と副官は厚く？礼を言った。すると女性の一群が後ろから私を取り囲み、私にもお経をお願いしますと言ひ出した。七、八人はいる。これにいちいち正信偈を読むことはできぬし、そうかといつて合併では満足しないだろうから、「お経は短いが一人一人読みます、功德には変わりありませんからご安心下さい。皆さん大変でしたね、子供さんが多いでしょうが、御老人を亡くされた方もあるでしょう、さあおつとめを始めます」と一人一人に読経した。

「何もお礼できませんが、どうもありがとうございますと礼を言われるので、「どうか気を丈夫に持つて生き抜いて下さい。貴方がたの無事を亡くなった方々はきつと守つて下さいますよ」と申した。私は軍隊で初めて読経し、持つてきた本尊、袈裟を押しいただいた。

第三分所支援

このような折、アムール河畔に五〇〇人收容の第三分所があり、この分所から救助応援を要請してきた。任務は、機能を失つて食事も作り得ないとの情報なので、炊事班員を五人派遣した。一週間ほどして帰つた臼井伝五郎軍曹は、「收容所に入つたら寂として声なく鬼気迫る思いでした、五〇〇人のうち二五二人の死亡で炊事する者すらおらず、死体の処理もできなく全員病臥の有様でした」と報告した。

息を引き取つた者は全員全裸で、襦袢も袴まで外され、衣類は洗濯の後再使用されるのが実情である。

死者が出ると二〇人くらいを単位に追悼会を行った。私が僧侶であるので命を受け、一式取り扱つた。大隊には八人ほど僧侶がいたが、私と同じく本願寺の田中伍長、新瀉の大谷派の清水上等兵その他で、私の導師のもと本願寺式で「帰命無量寿如来」と、本山下付の御本尊を安置し、その前に僅かであるが、炊事からダンゴを作つてもらいお供えをし、唱和した。他宗の僧にも参加してもらつたが、第七作業隊はほとんど私の導師で挙行した。この御本尊も終わりには自らの手で焼却せざるを得なかつた。

この遺骸は全裸にされ櫛に積み原野に埋葬するのだが、墓穴を掘るのは作業不可能の病人で所内残留者に命ぜられるので、二日ばかりでも一五センチメートルくらいしか掘れない。櫛で運んだ遺体はその中に並べ、土と雪をうつつすらとかける。夏になったら露出するほどであった。土の凍結したのはコンクリートよりも強靱で、病人では二日かかっても二〇センチメートルも掘れないのが現実であ

った。

北海道 宮崎維新

マイナス三〇度以下になると寒さで作業はできない。ましてアムール河ではマイナス四〇度以下になる。ただ立ったまま足踏みを続けるほかない。この作業で凍傷者が続出した。私と同年兵であった玉川光弘君は全身凍傷で、昭和二十年十二月二十五日死亡した。他にけが、急性肺炎、栄養失調、壞血病などで死亡者があり、帰国までおよそ二年間で百五十人くらいと聞いていた。ロシア兵が玉川君の死体を無造作に荷物のように運び去り、雪の原野に穴掘りをさせられた同僚の兵があつた。墓標を建てたという話は聞かなかつた。

岩手県 鈴木良雄

遺骨の収集と埋葬

昭和二十三年、シベリアの短い春が夏の気配を伝えるころ、どこからともなく本物らしい帰国のうわさが高まつていた。それについても気がかりなのは各所に放置されたままになっている屍の整理であつた。

シベリアの最初の死亡者はソ連側の指示により埋葬され、以後も火葬が認められて、遺骨は分骨してマッチ箱に入るくらいのガーゼの袋を作り、本籍、住所氏名、死亡年月日を記して、三十センチメートル四方の木箱を私が作り、事務所に安置していたが、その後は、処理のいとまなど全くなく、コチコチに凍った死体をそりに積み上げて、離れた場所の雪の吹きだまりに泣く泣く置き去りにしていたのであつた。赤色委員会はもちろん気にとめる様子などない。

後に知ったことであるが、長尾作業隊長以下四人で密かに収容所を抜け出し、十キロメートルほど離れた山の中へ二日間出向いたとのことであつた。そこには何百体に及ぶ屍が、山の面に散乱していた。すでに白骨化し、風雨にさらされるまでである。それらを集められるだけ集め、長い間吊うことのできなかつたことをわびながら一カ所に埋葬し、長尾作業隊長が「皇軍将兵の墓」と白樺の墓標に

筆を下ろし、野花を手向け「海行かば」を合唱して下山したとか。

スハラ作業所でも、塚田作業隊長の指示で、遺骨を一カ所に埋葬した。ここでは、徳下さんという方が観音菩薩像を彫刻して遺骨と一緒に葬つたと聞き、ジップヘーゲンでも、本部要員が中心となって、ささやかな供物を手向けて、一応の弔いは済ませることができた。

しかし、これらはほんの一部分のことである。何千何万もの遺族とつながる人間の屍を、冷凍まぐろさながらに放置してきた苦衷は、生涯の汚点として消え去ることはないのである。もとより遺体は何一つ語るものではないが、死者のそれぞれの顔が、筆舌に尽くせない深い哀愁と怨念と苦悶の面相となって我々の網膜に焼きついたのである。

シベリア鉄道を西から東へ走る貨車の高窓から、帰国の途につく日本人捕虜が手を振る姿を見かけるようになったのもそのころである。

富山県 黒川隆

伐採作業で倒れた木の下になって死亡した兵も何人かいた。

ラーゲリで、隣に寝ていて、よく話し相手になってくれた大阪府八尾市の岡田上等兵が朝起きないので、よく見ると死亡していた。同室の戦友三人でラーゲリの裏山へ運び、一日がかりで凍土を鉄棒でコチコチンと身体が隠れる程度の穴を掘り死体を埋めた。この作業はソ連兵の監視もつかず、まことにゆつたりした気分で作業することができた。

二百人収容されていた私達のラーゲリで、昭和二十一年～二十二年にかけて約七十人の死亡者が出て、裏山は埋葬の余地がなくなる程であつた。

伐採作業からラーゲリへ帰る途中七人の兵が衰弱と疲労で倒れ死亡。また、発疹チフス、赤痢等の病気で収容所の医務室へ入室した者はほとんど不帰の客となつて、部屋へは戻つて来なかつた。一晩で二十人も死亡したときもあつた。

実際四〇度以下になると寒くて伐採場に行っても仕事にならない。まず現場に着くと皆すぐ薪集めをする。枯れ枝など薪をどんどん集めて来ては、ドーウと燃やして暖をとって体を温めてから作業にかかる。ソ連の監視兵に見れば、そうしたことが気に入らない。「作業にかからないで焚き火にばかり当たっている」と、ロスケの兵隊は小銃を持って来てはおどす。だからノルマがなかなか達成できない。

ある日のこと、作業から帰って、いくら点呼をやっても作業人員を点検しても、どうしても一人人員が合わない。誰だ誰だ、誰がおらんかと、よく調べて見たら、藤田がおらんじゃあないか、ということになった。この藤田さんは補充兵上がりの年齢は三十八歳で、青森か秋田、東北出身の方でした。早速捜さねばということになり、代表者と、ある程度体力のある者が、私もその中に入つて、今日作業をやった現場に暗い夜道(雪道である程度は助かった)を捜しに戻ったのですが、現場近くの山の中に半分くらい入った所でしたか、藤田さんが倒れているのを発見し、体力のある者が交代交代で肩車に背負い、収容所に連れて帰った。しかし既に全身凍傷で硬直が始まつており、どうすることもできなかった。ただただ哀れというほか言葉もなし。「安らかに成仏あれ」と祈るのみであった。

朝、収容所を出発して伐採現場に着いたとたん、体力のない者は寒さのためよく倒れた。倒れるとすぐ焚き火をして体を火であぶつてやる。体を温めてやるとまた元気を取り戻す。しかし大した仕事にはなりません。伐採というのは夏場は蚊などに苦労するが、冬場はなかなか大変な作業でした。

そこにはいろんな患者さんが入院しておられ、中でも佐世保出身の前田兵長(当時四十五歳)さんなんか栄養失調で小便が極めて近く、内務班におられた当時は多いときで一晩に便所に十三回も通つておられた。入院されてからは小便が出るのが分からなく、いつもワラ布団(軍隊の敷布団)がブツブツ湿つておった。栄養失調になると、本か何かで見たが、死ぬ前になると寝ていて手を

合わせる、と。私の隣にいた補充兵の田崎さんなんかは、死なれる一週間ぐらい前までは食べることに大変関心があつてガツガツしていた方だったのに、死ぬ一週間前あたりからは何も欲しくないようになり、それで彼言うのに「俺、今夜死ぬかも分からんよ」と夜中に言う。「そんなことはないよ、日本に帰るまでは何としても頑張らねばいけないよ」と。言い聞かせる。朝になって隣に寝ているはずの田崎さんを見ると冷たくなつていいる。これには大変驚いた。

私が入院中、病院で見かけたことですが、栄養失調、結核、壊血病、発疹チフス等、病気で毎日のように五、六人から十人ぐらいの戦友の方々がお亡くなりになり、時には一日に二十人も亡くなられた日もあった。いつも朝になると遺体を迎えるにトラックが来まして、丸太のように硬直した遺体、冬なんか寒さが厳しいので当然すぐ硬直します、入院患者のうち比較的元気な者が硬直した遺体の頭と足を持って、一、二、三と掛け声をかけて待機中のトラックに投げるようにして乗せ、時には満載して墓場の方へ乗せて行くのを目の当たりに見て、本当に哀れだなあ、この光景をご遺族の方が見られたらどんなお気持ちであろうかと手を合わせつつ、心から「冥福を祈るのみでした」。

宮崎県 田代香

魔の三七号舎。一カ月にわたる貨車の旅と給与の悪さから疲れ果て、十二月から三月にかけて病人が続出し、医務室病棟か保育棟に移される者が多かった。医務室病棟で十分な治療を受けられないまま、無念にも異郷の地で他界した者も多かった。ソ連は、死者に国の財産である被服を着用させておく必要はないと、丸裸のまま、凍つた遺体を蚕棚のような棚に差し込んだまま一冬を過ごしたのである。死んだら一個の物体としてしか取扱わない国、これがソ連である。途中から日本の抗議により、被服だけは着用したまま棚に積み込まれていた。冬は大地が凍っているため、埋葬の穴を掘ることができない。

春になり、凍っていた大地に穴が掘れるようになってから、遠くの山林奥地

に大きな穴を掘り、夜間、トラックで死体を運び出し、この穴の中に投げ込まれて土葬されたのである。この一連の作業は外人捕虜が当たり、日本人の目には触れさせなかった。今、その墓地がどこにあるのか知る人はいないであろう。

冬の凍土の中で慰霊されることもなく、今なお寂しく眠っている戦友を思うと、断腸の思いがする。

愛知県 太田吉春

収容所の門を入ると冬は毎日そり馬車が止まっていて、そこに四人か五人くらいの死体が積んでありました。それは病気で死んだ抑留者を収容所の裏山へ埋めに行くのだと聞きました。後に聞いた話ですが、三百五十人くらいのことでした。

滋賀県 林 憲一

舎前にネズミ色のドンゴスのような毛布に裸のまま包まれた遺体、霊安室（小屋）に山積みされ入りきれない遺体を丸木の手製の担架で二人一組となり収容所の裏山の丘陵地の砂地に運び、掘ってあった五坪ほどの大きな穴に七体を交互に入れ、砂と雪の混ざったの上からかけるも砂が足らず、歩哨が「ダバイ、ダバイ」と怒鳴り、遺体の上上がり踏みつけよと命令する。私はナムアミダブツと折りつつ、やっと被せることができた。その翌年二十二年の夏、一日の作業終了後、前年に十七体を埋めた横に、長さ二メートル、幅五十センチメートルくらいの穴を幾つか掘り、十七体の遺骨を二体ずつスコップで分けて改葬した。二人ずつの番号をつけて終了した。

静岡県 望月 貞

何でもやって体力をつけ、絶対に日本に、妻子の所へ帰ると心にしっかり誓った。たまたま門の所を通ったら村の人が「ちよつと手をかせ」と手招きしたのでついて

行くと、物置から死体をロシア兵が出し、二人で片方ずつの手を持ち、ロシア兵が足を持って櫓に積む。五、六体も積んだか、いっばいになったので毛布をかけて村の人が馬櫓を引いて行った。死体は全部袴下だけで上体は裸だ。物置の中でロシア兵が衣服を剥いでおくのか。ある日、食堂に通訳がいたので、「死んだ人はあれでは可哀想だから襦袢くらい着せるようにして下さい」「ソ連では人が死んだら何にもならない、唯の物だ、腐ったリンゴと同じだ」と言っている。「袴下はスターリンの慈悲だとか言っている」と。通訳も、負けたのだから何も言えない、仕方ないと言う。情けなさ、悔しさが目の前に、大きな厚い壁にさえぎられ、どうしようもなく無力さを痛感させられた。悔しいが泣き寝入りだ、考え始めると眠れなくなる。変になってしまふ。自分を守るのは自分しかないと痛感する。死んだら腐ったリンゴだと、死んだら終わりだ、俺は死なないぞ！

三重県 太田 勇

ここで、不幸にも収容所で他界された人たちは、どのように埋葬されたかを思い出してみたいと思います。さきにも書いたように、私たちの収容所では七、八十人の方が亡くなりました。入ソ一年目が最も多く、二年目三年目と徐々に減つたように記憶しています。季節で言えば冬が多く、やはりシベリアの冬將軍に負けた人が多かつたようです。埋葬は土葬です。しかし冬季は土が凍り穴が掘れないので、収容所の一角に丸太杭で囲った遺体安置所を設け、屍を裸体のまま安置しました。遺体は一晚でカチカチに凍結し、二人がかりで頭と足を持ち上げて折れ曲がることは全くありません。安置所が狭かつたので、凍結した遺体は春先まで積み上げておきました。安置所の祭壇には灯明や線香こそありませんが、伐採の帰りに山で折り取った緑の小枝が誰言うもなく供華に手向けられ、常にしめやかな雰囲気包まれていたことを思い出します。

さて、一冬過ぎて三、四月ころとなれば、凍土も解けはじめ、野辺送りの季節になります。私は二回ほど埋葬の行事に加わったことがあります。一回目の

ときは二十人ほどで組を作り、まず関東軍から奪い取った輜重車に六、七体の屍を積み、ひき手と押し手に分かれて谷間の険しい坂道を登ります。それは道とは名ばかりの岩石のゴロゴロ露出している谷底でした。監視兵の案内で、その尻について車を押し上げる格好で登ったのですが、途中で皆息切れして二、三度休息したことを覚えていますが。二時間近く汗を流したでしょうか、谷の左手に百坪ほどの立木のない平坦な空地がありました。それが墓地でした。監視兵が急がすままに、休む間もなく穴掘りにかかりました。遺体は輜重車に三台分の二十体ほどであったと記憶します。穴は遺体を寝姿で埋められる大きさです。ところが土の溶けているのは数センチメートルの表土のみで、その下はシヨベルもつるはしも通りません。そのため表土を除いて周囲から枯れ木を集めてたき火をし、溶けた土を除いてまたたき火をするという始末でした。

北海道 長島秀夫

死体は、身につけている物は、ふんどしまでとられ、丸裸にされて、病院の外にある廟のような建物の中に放置される。遺体は一日で、コチンコチンに凍ってしまふ。数日間で十体位になると、馬車に、丸太でも積むように積んで、裏山に捨てにいく。私は、この病院に二度入院し、このような状況を再三目撃している。

私は、あえて“捨てに行く”という言葉を使ったのは、この病院の作業員としてこの仕事に従事させられていた人間から聞いたことによるのである。

コチンコチンに凍った丸裸の遺体は、頭と足を一人一人が持つと、丸太ん棒のように簡単に持ち上げられる。これを十体ほど馬車に積み上げる。縄で崩れないように車体に縛り付ける。

裏山の遺体置き場に登って行く。遺体を埋める穴を掘ろうにも、地面は、コンクリートのように凍っていて、ちよつとやそつとでは掘れるものではない。仕方なく、表面に積もった少しばかりの雪をかきわけ、そこに裸の遺体を並べて寝かせ、周

りから雪をかき集めて遺体の上にかける。あたりを見回せば、今までに、同じようにして置かれた遺体は、狼に食いちらかされて、白骨になって散らばっていた。前には、なんとか穴を掘つてと思ったが、今では、早く置いて帰りたいという気持ちがいっぱいで、可哀そうだが段々粗末になってきているとのことであった。

新潟県 平原敏夫

初めての犠牲者

収容所生活に入ってから一カ月ほどたち、寒さもいよいよ本格的になってくると、その寒さに耐えて行くだけでも大変な量のエネルギーを消耗した。日ごとに体力の衰えが自覚されるようになってきた。そんなある日、恐れていた事故、それも死亡事故がついに発生した。被災者は隣中隊の兵隊で、伐採作業中、倒れる大木を避けきれなかったの災難であった。頭著になつてきた体力の衰退が、彼の受難の原因のすべてであった。

その夜、宿舎内の全員で通夜を営んだ。位牌がつくられ、大根の味噌漬け（誰かが松輪島から持って来ていた）数切れが霊前に供えられた。供物はそれだけであった。それでも折よく宿舎に僧職の方が居合わせ、お経を上げて仏を弔うことができた。読経の抑揚ある独特のうら悲しい声を聞きながら、どうなつていくのだろう、と私たちはこれから、不安と、終戦後の様子は少しも分らない故郷生家のこと、肉親や知友人たちの消息など、ゆらゆら煤を吐き出しながら揺れる松や二を燃やす手製のランプのわずかな明かりの中にうずくまって、額を寄せ合つての心細い通夜であった。当時の様子は忘れられない。しかしこうした真似事のようなお弔いができたのも、この時が最初で最後であった。

愛媛県 山本繁夫

昭和二十一年一月一日、元日の朝八時半、使役に出ると言われ、他中隊からの見知らぬ若年兵、私と同郷の年恰好の二人は徴兵所前に用意された馬糞

二台で死体安置室に井桁に積まれた冷凍死体二百体の内の約半数を昼食抜きで警戒兵に早く早くと急がされてうす暗くなった四時前、収容所から西北一・五キロの低い丘へ一回に七体位ずつ載せて七回往復、一人が五十体、二人で百体埋葬した。慰霊の際は、墓地へ是非とも行きたいと思ったが現地の方が道路がなくとも行ける所ではないと断られて行けなかったが、いつか何とかして埋葬地へお詣りしたいと思っています。

石川県 藏 久雄

ある日、春とはいえまだ寒い日であった。ソ連医師から死体解剖をするよう言われ寒気がした。誰か代わりに……と思ったが言えなかった。仕方なく行った医師は数分間、指で触り、終わった。私は南無阿弥陀仏を唱え、凍りついた死体を縫合して終わった。その日の夕食は口に入らなかった。夜は亡くなられた人々が思い浮かんで眠れなかった。それから数日ごと一体、二体と解剖を行わされた。戦時中、北満病院で幾度か手伝ったことがあったから苦労はなかったが……。私は誰にも話さなかったが知っている同僚がいたようであった。一、二年を過ぎてからであろうか、通訳を通じて私に死体解剖立会人としてサインが命ぜられた。何十通もあつたのではなからうか。反発する間もなく終わったことが疑問でならない。

ソ連の病院への入院と病死者

ソ連軍軍医に入院の診断を受けると、トラックでソ連の病院に入院させられる。医療行為についてはわからないが、元気になって帰って来る者より、死亡して屍をトラックで運んで来る方が多い。ある日、指揮班の幕舎の前にトラックが停まった。道路に出て見ると、ソ連兵二人がトラックの荷台の上で頭部と両足を持つて屍を地上に放り投げ、「ポームル(死亡)」と言って走り去ってしまった。私は

三重県 川邊幸治

休業者を集めて天幕を張らせ、屍を安置した。作業終了で隊員が帰るのを待つて全員を集合せた。同僚の中には僧侶もおり(数珠を持っていた)念仏を唱えてもらい、穴を掘って樺の枝を燃やして茶毘に付し、遺骨の骨片を大工に作らせた小箱に入れ、出身地近くの戦友に託した。こういう事が数回起こっていた。

愛知県 久野春男

シベリアにおける初めての冬。食糧不足で栄養失調になる者が多く、零下三〇度の酷寒、寒風の吹く中を毎日の重労働で体力を失って、精神的にも限界に達し、生きる気力を失って誰かが毎日死んでいきました。

こんなこともありました。朝になつても隣に寝ていた戦友が起きないので、声をかけて揺り起しても全く動く気配もなく既に息絶えて死んでいた。明日は我が身かと、常に死の恐怖を背負つての悲惨な抑留生活でした。

滋賀県 川清一

このように厳しい重労働、乏しい食事、凍える寒さの三重苦に加えて永い間の旅の疲れが加わつて栄養失調者が続出してきた。やせ衰えて声も出ないまま眠るように死んでいく者、熱にうなされて帰国の夢でも見たのか大声で叫びながら死んでいく者など、この世の地獄絵を見せられたる惨状が目の前で毎日繰り広げられた。しかも死者は誰に悔やまれることもなく、誰に読経されることもなく、外に掘つた穴に放り込まれて異国の土となつていった。

埼玉県 菊田鎮男

炭鉱で夜中の一時ごろに帰つてきて、板の上にごろつと寝ます。そうしたら、朝食、いわゆる泥水スープが上がつたときにだれも起きてこない。何で起きないんだ。オーイと言うと、もう亡くなつている。そういう状態でした。ですから、死亡者は通称六万人と言っているけれども、実態は本当にもっと多かつたんじゃない

いかと思います。

「最初はこつちもある程度元気があったから、一番最初の人は腕をなたで落として焼却したんです。けれども、そのうちにそういう元気がなくなっちゃって、それで埋めたんですけれども、どこ埋めたかも全然わかりませんよ。埋めるのも、石炭を二十四時間灯して地面を温めても、一ミリぐらいいしか穴を掘れないんですから、凍土ですからね。石よりかたいんですから。そういうところで一人埋葬するというのは容易なことじゃない。

滋賀県 吉田貞次

九月末か十月に雪が降り、毎日零下五〇度の寒さで困りました。

シベリアの冬は初めての冬で、特に初年兵は困りました。自分等の大隊は千人で、十月から四月末日の間に約四割が死亡しました。病名は「栄養失調」「凍傷」「発疹チフス」等で亡くなりました。死体は禪一枚で、着ていた衣服は裸にして全部引き揚げてしまいました。

ある朝、自分の戦友で同年兵、福島県出身の金井要君の隣に寝ていました。「金井君、朝だ起きろよ」と呼びかけ、「朝食(スープ)を食って、さあ出発だ、起きないと作業に間に合わない」と体を起そうとすると冷たく、体は堅くなっていました。「班長殿、金井君は死にました」と報告する。「吉田は戦友だから今日は使役に出ろ」と申され、早速監視兵立会いで衣服を脱がし、死体をトラックに積む。体は堅くなり、戦友と二人で丸太を積むように「いちにいのさん」で調子を合わせて積みました。我が大隊で毎日二十五人か三十人の死者を出しました。トラックに乗って街外れまで行き、また丸太を下すように足と頭を持って「いちにいのさん」で三十人の死体を捨て、帰りました。毎日の死体で山積みになりました。今でも思い出しますが、あの死体はどうなっただろうと不思議に思います。毎日の死体で、自分も今日死ぬか明日死ぬかと覚悟はしておりました。初年兵の元気な高橋君に「吉田が死んだら頼むぞ」といつも話しておりました。

北海道 太田隆夫

ある日、その麻袋が十メートルぐらいあるのが崩れてきて、私は不幸にもその下敷きになったわけです。腰をしたたか打ちまして、歩くこともできない状態になったんですが、ロスキの監視は、おまえは怠けて痛いと言っている、何も傷もないし、はれもそんなにひどくないということで休業を認めない。日本の隊長は、本当にそんなに痛いのなら、掃除当番ということで一人か二人収容所の中に残って、そういう作業をする番にさせてくれたんですが、そうしているうちに今度痛みのために四〇度近い熱が生まれて、これは大変だということでロスキの軍医も認めて、ハバロフスクからポールという方の病院に入院させられました。

この病院がまた昔馬小屋があったという半地下のバラックづくりの建物で、その中に二百人ぐらいの患者がずらつと寝ているんですね。奥の方には息絶え絶えの患者が寝ている。手前の方は比較的軽患者がいるということで、毎日一人二人と亡くなるわけです。手当てもなく、あるいは治療の方法もない。院長というのがロスキの軍医少佐で、女医でした。その下に日本の優秀な外科の中尉の軍医さんがおりました。この方が八面六臂の活躍で、我々も軽患者ですから少しは手伝ったんですが、注射も麻薬も薬もないものですから、骨折患者の整復という作業で治療室でギヤーという声が毎日のように聞こえた。それでも、そういった麻薬を打たないで手術したり、あるいは整復したりすると治りが早いものですが、栄養失調でオイハの軍の方から来た患者たちは息絶え絶えで寝ているわけです。それでも病院では白パンが与えられたんですが、白パンを渡してやると、食意地が張っているから死にかかってもかじるわけです。かじった途端にクツと息を飲むという光景が随分ありました。その息絶えた患者にシラミが頭から体じゅう真つ白につくわけですね。本当に生き地獄というのはあのことでしょ。

そういった患者を毎日一人二人と担架に乗せて、冬は穴が掘れませんから路上で木の枝を死体の上に重ねて、その上に灯油かガソリンをかけて焼いたという

のも見ました。本当に情けないやら悲しいやらで。こういう話を人の前でしたことはごさいせんけれども、こういう実情が実際にあったわけです。

見知らぬ兵士の死

青森県 竹内 大

入れられた所は「架設病院」と称する弾薬庫であった。コンクリートの床にアンペラが敷かれ、背囊を枕にし外套を掛けて寝る。晩になると「木箱」の上にローソクを立てて衛生兵がついていた。周囲では痛みを訴えてわめいたり、うなったりする者がいたが手当をする医薬品は何一つなく、もちろん手術できるわけもなくただ放置されている状況だった。

私の隣にいた兵士も夜中にわめいていた。どのような戦傷なのか私にはわからない。翌朝目をさましたら静かになっていた。「おい、夜が明けたぞ」と私は声をかけ体をゆさぶったら「ガクン」と頭が背囊から落ちた。恐らく夜中か、明け方近くにでも息を引き取ったのであろうか。しかし、私にも彼の「死」の最後を見届ける余裕は全くなかった。

どこの誰とも分らない。一人、異郷の地で誰にもみとられることもなく死んでいったこの兵士のことを考えると「人間とは何か」と深刻に考えさせられた。どんな思いをして死んでいったのだろう。父や母や兄弟等、家族のことや友達のことを思いながら、黄泉の国へ一人旅立ったのであろう。それ以来、私も死というものに対し、今まで極度に持っていた恐怖の念というものがだんだん薄れた。そのことは、いつかは自分にも与えられるものであろうということからだった。

幸いにも私は順調に快方に向かった。というのは、仲間の候補生が「ゲンノシヨウ」を煎じて一升瓶に入れて持ってきてくれた。そのお蔭で日増しに良くなった。漢方薬の効能に驚くとともに、候補生達の暖かい気持ちに胸の詰まるような感謝の気持ちでいっぱいであった。

ラポータ ダワイのシベリア

北海道 工藤清吉

昭和二十一年のシベリア抑留生活は悲惨を極めた。食事が劣悪な上に重労働を課せられ、かつて経験したことのない厳寒と悪環境にあえいでいた。栄養不良の体に伝染病が襲いかかり抗すべき術もないまま十人に一人はシベリアの凍土に埋められていったのだ。

戦争が終って帰ろうと思っていたのに何ということだ。終戦の詔書で天皇は「耐え難きを堪え、忍び難きを忍び」と述べたが、耐えることも忍ぶこともできず力尽きたのである。

故郷に帰って肉親に会いたかったであろう斃れた者達^{たお}はどんなに悔しかったか。

祈り

岩手県 吉田欽三郎

入ソ初の収容所で迎えたシベリア一年目の冬、栄養失調で死んだ戦友がおつた。

夕食後、各分隊より何人かずつ出て墓を掘ったことがあった。

九野航出身移動修理班の仲間は知っておつたが、終戦以来十一野航・戦車隊はソ連が編成した寄せ集めの新部隊であつたので、顔も名前も分からぬ戦友であつたが、召集された初年兵であつたと言う。寒い風土で苦勞したのであろう。

「眠るがごとく」の知らぬ間の往生だったらしいが、我が身に引き換え感ずるところあり、引かれるままに自ら手伝つたのである。墓掘りの指揮は中隊長の准尉(人事係)であり、各分隊を集めて指導したが

土が凍つてツルハシも跳ね返る凍土であり掘れずに、薪を焚き炭火の残る中掘つたが未だ土が固く、再度薪を焚いて掘つたのである。

炎々として燃え上がる夜空の中、その火の粉を見詰めながら思つたのである。

「ここは日本を遠く離れた雪と氷のシベリアなんだぞ、お前だって父も母もおつたろうに……」

死んではならないのだ、死んでなるものか、還るまでは……と言って合掌したのである。

岩手県 千葉義一

二十一年春まだ浅いある朝、夜明けと共に警戒兵のただならぬわめき声があつて、各兵舎の不寝番が叫ぶ。「起床、起床。非常点呼？」の声に叩き起こされた。集合すると広場には、殺気立った警戒兵が右往左往し、腰の拳銃に手をかけている者、いきり立つ軍用犬に引きずられ必死に綱を握っている者もあつた。

四隅の望楼には軽機関銃が置かれ、物々しい情景であつた。仲間のひそひそ話で知ったことは、昨夜逃亡者が一人あつて、身代わりに某曹長が射殺される事件があつたらしい。

全員整列の上、いつもより厳しい点呼があつて、険しい顔の所長が、昨夜炭鉱で逃亡兵があつて、逃亡を助けた下士官が現行犯で現場で射殺された。君達は我が国の領外に逃げ終える企ては全く無謀であり、自殺行為である。二度と逃亡があれば、責任は大隊長に及ぶであろうし、諸君への監視、処遇も一段と厳しくなろう云々……長々の説教の上「脱走者は既に捕まつている。また犯罪を幫助した者の死体は門の入口に置くので、よく見て注意するがよい」

営門のバラ線脇にはあわれにも部下を庇ひ死を招いた曹長が、寝棺に冷たくなつていた。惨劇のままの姿であろうか、防寒帽で顔は見えないが、外套の胸には血糊がべつとりとつき、生々しい事件を物語つていた。

やがて夜中に荒野をうろつき、捕まつた逃亡兵は腰に紐をつけられ、肌着に素足で引き出された。顔には血の気がなくやつれ果て、警戒兵によつて隊列の中を引かれた。腹の立つた日本人仲間から烈しい罵声が飛んで、営倉代わりの地下霊安室に死んだ上官と一緒に収監される。

古い諺に「人の禍福はあざなえる縄の如し」と。部下に情をかけた者が落命し、逃げた本人は捕まつて命が保てるとは、何たる運命の悪戯いたずらであろうか。

凍土に友の墓穴を掘る

シベリアの真冬の寒さは、粗悪と生きる限界の食糧、粗末で少ない被服、劣悪な生活環境との相乗作用によつて、二十年の越冬は峻烈を極めたと見えよう。発疹チフス、大腸炎、栄養失調など、多くの捕虜たちが家族の待つ内地帰還の夢も虚しく、次々に非命に倒れていった。

死が迫る最後の怨念とも言うべき悲痛なうわ言は、幾山河を隔てた我が子の名を呼び、妻の名を呼んでいる。妻子のない若い兵士や義勇隊員は一様に「お母さん」「かあちゃん」万斛の恨みをのんで、最後は暗い地下兵舎の荒板の上で、汚れた毛布一枚に覆われ、小さな屍に果てるのであつた。

死体の周りには、我も明日なき友のたたずむ姿はあつても、菓子や香花はおろか、末期の水さえやれない情けない最期である。

入ソ間もない十一月中頃から、各兵舎から毎日一人、二人の遺体が松の荒板の棺に納められ重ねてある。ソ連側の命令で三日分ほどを一時に埋葬するこゝとが多く、室内は暖房のため死臭がただよい、堪えかね詫言詫言の気持ちで室の外か霊安室に置くこともあつて、哀れにも遺体はこちこちに凍ることになる。

二月末頃、体が弱つてオカとなつたとき、死体埋葬の使役に出される。墓地は二キロほど先のカダラ地区共同墓地である。

その日は二体を大八車に積んで、栄養失調者四人で幸い警戒兵はつかかなかつた。

厳寒の中こちこち凍つてついた山道を引いたが、途中急傾斜地が二、三方所あつて、体力のない連中は大きい大八車を持って余し、悪戦苦闘で上り坂を登り、下り坂もさらに大変であつた。四人で静かに下り始めたとき、一人が滑つて転倒した。もうどうにもならない。危ないのでみんな手を放す。大八車はガラガラ音を立て、道の脇の白樺にドスン……その途端、二つの棺がつるつるの雪の上を流れ、大

さい石に触れたと見るや、棺の底が抜けて凍った一体が薄毛布の中に包まれたままサーツと坂を滑り落ちて行く。凍った遺体は、まさに石の地蔵様の姿に見える。皆青くなつて棺に納め直し、ようやくカダラ墓地に着いた。

墓地はカダラ村一帯の各収容所で利用する共同の日本人墓地に利用されたもので、木陰になる一木の樹木もない雪風の吹きすさぶ荒野の中で、死体は不規則に埋葬され、百近い土饅頭が雪をかぶり、墓標は許されないということ、焚火の炭で「故何某の墓」と印された板切れが雪の中に建っているだけの殺風景さには遣り切れない思いであつた。

墓地にはツルハシとスコップがあつたが、凍土は厚く、まるでコンクリートを掘るに等しく困つていて、先着の警戒兵が石炭をリヤカー一杯届けてくれた。これを棺の長さに盛つて火を焚いて表土を融かして掘れということであつた。

警戒兵がまた遊びに出かけたので、遺骨収集を思いつき、棺の蓋を外して胸の上に手指を組み合わせている遺体の両手首を斧で切り落とす。斧をかざすと痩せ細つた手首が、コンコンと枯木を切るような音をたて、凍った肉片が飛び散り、やがて組み合わされた両手がぼろりと体から離れ落ちる。くすぶる石炭の火中にねじ込む。

凍土が融ける間、昼飯の凍ったパン一切れを火にあぶつて食べる。周囲の墓の中には埋葬が充分でなく、覆土が浅く毛布の端が出ているもの、雪だけ深く掻き上げて誤魔化しているものも目についた。

地表が大分軟らかくなつたところで、手首の骨を拾い、一気に土を掘り上げて二体を埋葬する。板の切れ端に氏名と死亡日を記して手を合わせ、訣別を告げる。

雪解けの春なかば、埋葬に出た戦友から様子を聞くと、土の浅い墓は遺体のはみ出し腐臭が漂い、墓標がわりの記名板は何者かに焚火の材料とされ、悲しいことに現地民であろうか、死体をくるんだ毛布や肌着がはぎ取られ裸の遺体があり、金冠の入れ歯は石で叩いて外し取つたとみられる跡があつたという。ソ

連の物資不足の深刻さと、彼等の国民性を垣間見た思いで、大きい衝撃を受けらる。

戦後、チタ地区独立墓地と呼ばれたここカダラ墓地は、昭和三十六年八月、厚生省が主催する日本人墓参団が派遣され、初めて遺族代表の手によって香花が供えられ、懐かしい酒やタバコを味わえたこと、せめての慰霊となつた。

当時の新聞の見出しには「果てしなき荒野にただ涙」と書かれ、改めてこの地に果てた同胞の悲惨さがしのばれた。この墓に眠る我らの戦友の一人一人を思い起こすと、まだ少年のあどけなさの残っていた顔が浮かんでくる。報道では墓地は整然と並び、管理が行き届いていたとあつて、救われる思いであつた。

五十七地区

愛知県 齋藤高志

この地区は、私達五一八作業大隊ではなく、ハラグン(百五十キロメートルも奥地)の上古大隊から派遣された上滝隊であつた。私達より早く入山していた(昭和二十年十月五日入所)。

元来カンボーイは、抑留者を保護するのが任務であるが、検収員と同調し、栄養失調の者、やせ衰え歩行困難な者、回帰熱患者(繰返し熱の出る病気で、シラミなどが病原菌の媒介をする)等、病気に苦しむ患者まで作業に追い出したので、カンボーイや検収員は忌み嫌われ、特に検収員のお婆さんは、鬼婆と恐れられていた。

病人が作業に出れば、作業する者は病人の面倒を見ながら、病人のノルマまで要求される。作業中、患者が寒いので焚火の所に外套にくるんでおき、休憩で帰つて来ると、前に倒れた者は焼け死に、後に倒れた者は凍死している者もあつた。作業が終り、病人を背負つて宿舎にたどり着いたら、死んでいた者も少なくなかつた。

朝の点呼には日直が、寝ている者の頭をたたいて回り、目をあけない者は、死

者として裸にされ前の広場に山積みされた。山積みされた死体は、炊事の水くみが桶に入れて山に捨て、その桶に水をくんで来て飲み水や飯炊きに使う有様であった。

この中隊は、二カ月で死亡百四十人、体が衰弱して作業の出来ない病人、二百二十人をチタの病院へ送り、残り数十人を第五一八作業大隊の各中隊に送り、改めて各中隊から作業員を補充して作業をしたが、前と同様で死人、病人が続出したため、二十一年三月頃、全員引上げた。まるで地獄だ。帰国の希望も空しく、死んでいった同胞の怨念が、落着くことも出来ずに漂っている五十七地区である。

栄養失調

入ソして二回目の冬に入る。劣悪な少量の食糧と酷寒の中での重労働に次第に体力は消耗してゆく。立つて後を向けば尻の穴が見えるといっても過言ではない。皮膚は弾力はなく鶏の毛をむしたようになる。三十七、八歳からの召集兵や初年兵などに衰弱が多い。意識が薄らぎ意味不明のことを口走る。知らぬ間に枯木が朽ちるように息を引き取ってゆく。葬るための特別の時間はない。席の隣などの親しい者が夜間に始末することになる。凍てついた土を焚火で溶かしながらの穴掘りは三十センチも掘れば朝になる。形ばかり土をかけて番号の書かれた杭を立てる。次第に杭が増えてゆく。明日は我が身だろうか。ソ連抑留者は六十万人以上という。彼の地で無念の死を遂げた者も一割以上。

愛媛県 井手正人

隣のベッドに、肺結核で入院して来たN上等兵がいた。入院した夜、激しくせき込み、井に二杯の血を吐いた。泡のまじっている鮮明な血液である。どこからこんな血が出るんだろうと不審がっていたが、私は気の毒で説明出来なかった。

咳が出るから悪いので、咳さえ止ればすぐ治ると本当に信じこんでいたが、衰弱するのが自分でよく分かったらしく病氣のことを話さないようになった。そして時々、日本の方角を向いて座り、何事かじつと考えていた。私には彼の気持がよく分かった。四、五日して、また激しく喀血し、その夜あつげなく死んだ。この山口県出身の良家の出らしい端正な容貌をもった二十二歳の男は死ぬまで自分の病名を知らなかった。

(中略)

巨木のひしめく大森林地帯や、原生林の中を何日間も走り続け平原地帯に出た。ノボシビルスク、オムスクを過ぎ、距離標識(モスクワからの)で二千キロメートルくらいのところ、ペトロパブロフスクに着く。ここから南下してよいよ目的地に到着したらしい。その日は食事の配給はなく、空腹をかかえて貨車に寝た。ブルゴエを出発してから、五十日に及ぶ大旅行である。しかし途中で止まっていることが多かったので、普通に走ればおそらく十二、三日くらいの行程であろうと思う。

翌日下車して見て驚いた。駅ではない。建物が四、五軒あるだけで他に何も無い。見渡す限りの平原である。遠くの方はなだらかな起伏が見え、高原地帯であることを思わせた。午前十時頃出発した。平原の中を歩いて行くのである。十一月末といえども本格的な冬に近い。気温は零下一五度くらいであったろうか。ソ連監視兵の説明では、約五十キロメートルのところに収容所があるという。我々は信じられない気がしたが、やめるわけにはいかない。長い閉鎖的な貨車生活と栄養不良で、体力は弱り思考力も鈍っているように思った。考えるのが面倒くさいのである。又考えても選択の余地がないのでどうにも仕方がない事であった。雑のうと毛布一枚を肩に掛けた軽装であるが、前日から飯を食っていないので、夕方になると空腹と疲労で落伍者がたくさん出た。

落伍者は隊列の後方に馬車を二台用意してあつてこれに積みこんだ。だんだん落伍者が多くなり、人間の上へ上へと積み上げていった。

荷物と同じである。ついにいつぱいになってしまってもう乗せることが出来ない。

熊本県 村田昭三

それ以後の落伍者は放置する以外にない。放置すれば何もない平原であるから、その内に狼に食われてしまう運命にあった。私の小隊でも落伍しようとする者を励まし尻を叩いて引張ったがついに倒れてしまった者が何人かいた。これら後から落伍した者は結局行方不明となり、先に落伍した者で馬車の下に積まれた者は圧死してしまい、上に乗せられた者だけが目的地に生きて到着したのである。私は疲労で目の前がともすれば暗くなったが、落伍は死に直結すると思ひ懸命に歩いた。日が暮れてから後、前方に明りが見えた。そのあたりはなだらかな起伏があつて、明りが歩く場所によつて見えかくれている。夜間の明りは近くに見えるという。それからが又遠かつた。疲労で意識がもうろうとした頃ようやく収容所に到着した。

愛媛県 池田政治

作業は鉄道建設の路盤工事予定地の原始林の伐採作業と、切った用材の馬櫓での運搬や製材所での雑役作業が主であつた。製材所では薪をたいて蒸気機関で機械を運転しており、石炭や油が不足していたものと思われた。

伐採は二人用の鋸で二人が向い合つて伐るのであるが、雪が深いために倒れる前に避難用の途を十文字に除雪しておくのであるが、木が凍つているために逃げた方向に木が倒れて来る事もあり、教育隊からの親友であつた東京の森田候補生もここで木の下敷きになつて亡くなったのである。抑留された日本兵が飢えと寒さと重労働に耐えかねて、毎日のように倒れていったのもこの時期である。倒れた者は医務室に連れて帰るが、医務室と言つても医薬品はなく、身体検査と死体の処理が仕事のように、死体は衣服を利用するために裸にしてトラックに積んで埋めに行くのである。冬は凍土のために穴が掘れず、浅い所に埋めて上に土を掛けるのであるが、時によつては二人三人を一カ所に埋める事もあつた。

シベリア本線ノボシビルスクを分岐点に、カザフ共和国アルマタ(現アルマテイ)に通じる鉄道で途中のバルナウルを経てロストフカ(現ルプツォフスク)で下車、二十数日ぶり鮪詰めの貨車から解放された。敦化で編成した二三一作業大隊九百九十八人は第三支部に六百四人(死亡二百二十九人)、第四支部に三百九十四人に分離された。他の作業大隊から二百五十人が第四支部に加えられる六百四十四人(死亡二百二十三人)。通信中隊の仲間ほとんどが第三支部に収容され、自分が収容される第四支部には四、五人がいたに過ぎなかつた。第四支部収容所は建物、設備が悪く、古い刑務所跡とみられ、所内に営倉が設けられ、その下が地下屍室に。当初の冬はシベリアも想像以上の寒波で一度下ると止まらず、十分な暖房もなく死を待つだけで、多くの者が命を落とした。春先カチカチに凍つた五体をロープで引き上げ点呼広場に並べ、櫓に何体も重ね、収容所正門横に塀から一、二メートル離し、当時の記憶から幅五メートル、長さ十メートル、深さ二メートル、自分等で掘つた穴にほとんどが裸のまま埋められた。

静岡県 後藤光義

十月二十日タイセット駅に着き下車、すぐ行軍。三日ぐらいかかつて百二十四キロメートル地点の板塀とバラ線の二重の囲い、四隅に望楼の有る収容所へ入る。前から囚人を入れてあつた様子だつた。始めは仕事は少なく、氷が張るようになったら鉄道の路床作りだ。湿原の十センチぐらい凍つたのを鶴嘴で割りモッコで外へ運び出す重労働だ。三日目の日に身体検査有り。三級となり営内作業となる。南京虫と虱に毎夜血を吸われ、食べる物は少ないのでやせて当たり前。三級になって良かった。営内掃除中、収容所の入口近くにある小屋の戸が開いていたので中を見たら、身に何も付けず禪さえも付けない裸の死体が十六体あり、何とも仕方なくただ合掌するのみ。

アルチョム炭鉱の死

—舌切り雀のオートミールに耐えて—

歩け歩きの行軍に、さすがの馬も最後は一頭だけとなる。十七日間ぐらいの道のりを、ろくな物も食わずに歩き続けて来たのだ。兵隊も数十人が行軍の道端で、どこか誰かわからずに死んでいった。

今になってその顔だけが浮かんでくる。

「おい、着いたようぞぞ」

誰かの声したが「そうか」と声が出ない。重い足を引きずりソ連兵舎に入った。早く掃除をしてねぐらを作らねばと思っていると、何人かずつに分かれて班が作られた。

「班長集合」の声がかかる。

長い行軍で疲れ果て二、三日は休みにしてくれと願ったがそうはいかなかった。明日からの作業の割当が決められ、石炭掘り、坑木運びが各班に割り振られた。

あのアルチョム炭鉱は斜め坑道で、八百メートルほど地下へもぐって掘る作業であった。

坑木運びは、直径二十センチから三十センチの丸太で長さ二、三メートルぐらゐを外から二人で担いで坑道口まで運ぶが、血気盛んな二十歳の男であるはずなのにふらふらした足取りで、なんとも情けない姿であった。

その作業の警戒兵はやはり捕虜になっていたドイツ兵だったのでだいぶ理解があり、まだ若く体格も良くて一人でその一本を担いで行く。日本人には優しく、作業も「休め、休め」と手つき手真似で休ませてくれ、ソ連兵が来ると「来たぞ、来たぞ」「働け、働け」と言つて助けて笑つてくれた。しかし、どうにも腹に力が入らない。運ぶ姿を見て笑っているが、笑われてもどうにもならないのだ。毎日が地

獄の作業であった。食べる物といったら、日本へ帰ってから分かったが、オートミールと言うものだった。

「何だこれ、舌切り雀じゃねえぞ、のりじゃねえか」笑うに笑えず、すすつて終わりだ。パンといたら黒く、水を含んだ物で三キロと重い、それを二十二人で分ける。寒さでかちかちに凍っているパンをどうやって分けるのか。石で叩くと粉になってしまった。その粉をテントの敷物の上で目の色を光らせて、一山、一山平等に、高さを見て「あの山は高いぞ」「この山低いぞ」と、当番は大変な苦労だった。オートミールの量も缶詰（三センチぐらゐの厚み）の器に一杯、他に汁も同じ量。汁には豆が一粒入っていればいい方で、冷たい塩汁であった。

凍つて粉になったパン屑を舌の上に乗せたがおいしいものではなかった。だが今はそれしか食べる物が無い、我慢するより仕方なかった。毎日体力が落ちていくのが目に見えてきた。二十歳の若さでも情けない姿であった。

作業が終わり真つ黒になった手足を洗う元気もなく、着たままで寝る日が毎日であった。

「おい、帰りてえな」誰かぼつんと一言言った。それにつれ、あちこちから声が出てきた。「おれ、帰ったら寿司が食いたいな」「おれだって、寿司でも何でも食いたいよ」贅沢は言わない、米の飯が腹いっぱい食いたいという思いで、寝床では毎日食べる話に花が咲いていた。大福だ、安部川だ、何といつても味噌汁だ、日本人は味噌が欲しい。

あれやこれやの話も結局食べる話しか出なかった。そんな話をしながら眠った朝のことだった。

「おい朝飯だぞ」と隣の兵隊を揺り起こす。なんとも息がない。右隣の兵隊を「おい朝飯だぞ」と起こしたがこれも又死んでいる。寝るときにあんなに日本へ帰つたらあれを食べるこれを食べると言っていたのに、両側で死んでいった戦友がいた。

しかし、俺は生きている。毎朝目が覚めると「おう」俺は生きていた、と思う毎

日であつた。毎日死んでいく戦友はほとんど栄養失調と発疹チフスだつた。

栄養失調で死ぬ兵隊の皮膚はもう色も肌色でなく白く灰色になり、皮膚を摘んでみると、摘んだままに富士の山のようになっている。頭髮や鬚は指で摘んで引くと簡単に抜ける。毛の色も灰色になり、人間の顔つきでなく異様な姿になり、すべての骨は全部外から見分かるようになって、骸骨が歩いているようになって死んでいった。

七十三人の死を悼む

—アルチョム炭鉱から 零下四〇度の貨車の中—

十二月のある日、「今日は全員、健康診断をする」との知らせがあつた。健康状態によつて区分されるといふ。このアルチョム炭鉱に一千人近くの日本兵が収容されて、既に三分の一近い三百人もの戦友が栄養失調等で死んでいった。中には同年兵で人一倍汗かきの滝沢千秋君もいた。彼は下士官候補として優秀な青年であつて、初年兵の教育に力を入れていたが一晚の熱で逝ってしまった。

零下四〇度の寒さで死体はもうすっかり凍りつき、かちかちになっている。肌着一枚の体を見ると灰色になつていて、目だけぱっちり開けてにらんでいるようだ。頭と足を持つて、一、二の三でトラックに投げ込む。その時の死体のぶつかる音が今でも耳に残つている。

トラックは三百人もの死体をどこへ運んだのであろう。不思議でならなかつた。ずつと後になつて、死体を処理させられた兵から聞いたことだが、トラックで運ばれた死体は吹雪の海に投げ出されたそうだ。腕や又足が折れる不気味な音に、「おい、静かに下ろせよ」と言われ、真つ白に凍つた死体は、市場で見るマグロの瘦せた干物のようだったと言う。

死体処理の兵隊は、一面、氷に閉ざされている海に人間一人が入るくらの穴をあけて待つていて、一体ずつその穴に落として流す。まごまごしてはいられない。寒さで穴が塞がってしまうのだ。ソ連兵は「ダワイ、ダワイ」（早くやれ、早くやれ）とせかせる。分かっているが一人一人の戦友との別れである。そんなに

簡単にゴミのように扱えない。言葉では言い尽くせない悲しい別れなのだ。

愛知県 伊藤専一

死没者が出ると下着一枚にして、製材所から持って来た板で棺桶を作り、入れて、冬は雪が解けて穴が掘れるまで積んでおきます。初夏のころになると穴を掘つて埋葬してました。私たちの収容所では二百人ほど亡くなったと聞いております。この戦友たちは日本に帰ることができず、シベリアの凍つた土の中で、懐かしい日本に早く帰りたいと今でも待つていると思いますと、今の私は本当にすまない気持ちでいっぱいです。

鳥取県 加藤一郎

私の所属していたウランウデ第三〇収容所関係の死亡状況を調べてみますと

昭和二十年十月〜十二月の三カ月間に百十人

昭和二十一年一月〜五月の五カ月間に百十三人

合計八カ月に六百二十三人

第三〇収容所管内の総死亡者九百四十人の内、この八カ月に六百二十三人、全体の約六六パーセントが死亡しており、ソ連の調査においても他の収容所の例ではありますが、死亡原因の五一・六パーセントは栄養失調症と報告されており、いかに栄養状態が悪かつたか想像できます。

またソ連の報告の中で日本人の捕虜収容所における死亡率はドイツ人の捕虜収容所における死亡率の二倍である（〇・四〜〇・一五）と報告されています。

輸送中の食糧事情、環境の悪さに加えて、厳しい気候条件、満足な住居施設がなかつたこと、あらゆる種類の物資が不十分であつたことがその原因と考えられます。

東京都 金井秀雄

日本兵の死体は、衣類を全部剥ぎ、素裸で埋める。その穴掘りも難作業であった。鉄棒や円匙が強く土に当たると、金属が打ち合ったように火花が出る。焚火で凍土を温めては掘り、温めては掘るを繰り返す。遺体は五体二十体と同じ穴に埋める。その丘に行く時、樞の上に枯木を積むように五人も六人も遺体を重ね、掛声をかけて丘に登る。明日は我が身かも知れぬ。やせ衰えた兵が、昨日までの友の遺体を引いたり押ししたりして行くさまは、地獄絵図を地でゆく姿であった。将来のある有為な青年を次々と失つてゆき、名もない丘に悲しみの墓標は立ち並ぶ。ある時は吹雪舞う雪の中に、あるいはまた暮れゆく夕陽の残光の中に、恐らく肉親の訪れはないであろう凍土の丘に淋しく立っていた。

栃木県 橋本正男

我々は時々歩哨と議論をしたが、ソ連では死者は土葬にするが、日本では火葬にするのは残酷だと言う。冬のある日曜日のことである。その日は三十三センチくらいの雪があった。破れた靴下を縫い糸にして軍服の修理をしている時であった。五人使役に出るとの連絡があり、通訳に何をするのかと聞いたところ葬式との事なので、私は普段染をさせてもらっているその日は率先して名乗りを上げて、他の四人と共に歩哨に連れられてホルホーズの事務所へ案内された。そこにはカマンジールと事務員らしき者一人で、二人だけである。しばらくするとどこからか馬樞に乗った若者が現れ、我々の中から三人に角スコップ三丁を持たせ穴掘りに行く素振りをして雪煙をあげて去って行った。残った二人はボンヤリしていると事務員が隣の家から細長い箱を引きずって来たので中を見ると、うす汚いパジャマを着た老人が入っており、雪降る中を道路まで引き出し、彼一人で家から板を二枚持ち出して来て箱に蓋をしたのである。その時、焼け跡から拾ってきたような古釘を一枚の板に二本しか使わず釘の頭を二センチほど残しておくのでそのわけを尋ねたところ、狼が食べやすいようにするのだとの事であった。

ソ連人は嘘つきが多いので本気にはしなかった。

一方、穴掘りに行った連中は三十分くらいで帰って来たので随分早かったのではないかと尋ねたところ、吹き溜まりの雪を三メートルほど掘っただけとの事で疲れた様子もなかったので不思議に思っていたが、それより気がかりなのは、葬式ならば坊さんか牧師さんが来てお経を上げるものと思って待っていたが誰も現れず、穴掘りの三人を乗せて帰った。馬樞には屍を入れた箱を乗せ、息子らしき若者が箱にまたがり馬に鞭当てるのと馬樞は雪煙を上げて走り去った。

我々にはご馳走までは行かずとも枕団子くらい出るだろうと思っていたが何も出なかったので仕方なくトボトボと帰ったが、馬か牛ならば片足くらいはもえたのと思ひ残念でした。

二カ月ほどしてから屍を埋めた近くを通ったのでトイレに行くふりをして雪の吹き溜まりに行ったところ、見覚えのある箱は蓋がはがされ、パジャマはずたずたに破れて転々と引きずられたようになっていたので、夜行性の狼が死体を引きずる途中に、パジャマは脱げたのだと思った。ホルホーズのカマンジールの言った事は本当らしかった。屍を火葬にするのは残酷か、狼に食わせるのが残酷かは分からないが、凍土を一メートル以上掘って埋葬するのは容易ではないので合理的かも知れんと思った。人間も死ぬと粗大ゴミのように扱う習慣のようであった。私達も、狼が食ったのか狐が食ったのかは目で確かめたのではないから確実とは言えないが、間違いはないと思うのです。

千葉県 庄司音松

「特別の作業員出してくれ」と私の班に申し入れがあった。班長に「私が出ます」と申し出て作業に出た。総勢三十人ぐらいたった。ソ連人に引率され、築港作業の反対側に向って歩いた。一時間ぐらい歩いたところで、アンペラ小屋があった。近づくにつれ異様な臭いが鼻をつく。そのアンペラ小屋の前に止まった。ソ連人が鍵を開けた。開けたとたん何と日本人の死体が土間の上に襦袢袴下のまま

うず高く積み立てている。私達は目をそむけざるを得なかった。ソ連人から、私達が一人ずつ担いで山の上に持つて行き、そこに穴を掘り埋めると言われた。

どこから連れてこられたのか名前は、部隊は、全部分からない。ただ太っている人はなく、皆痩せて骨と皮の姿であった。アンペラ小屋に入った。その臭いたるや何とも言いようがない。私達は一人、一人担いで、懇ろに葬った。しかし全部の人を葬ったわけではなく、残った屍はまだ沢山山積みされていた。

福井県 片山清次

開設間もない「病院」とは名ばかり、数多くあるシベリア監獄を転用したに過ぎない。薬も医療器具も無い。数人の日ソ軍医と衛生兵、ソ連人看護婦が配置されているのみであった。鉤も掛けられていない松板の二段寝台に、汚れた軍服のまま一枚の毛布に患者はくるまつて、ひたすら回復を待つしかなかった。

当然、助かるべき生命が何の医療の手も差し伸べられないまま、いとも簡単に尊い生命が奪われていく実態も見ながら涙した。当時の患者の大部分は、赤痢、発疹チフス、栄養失調等であった。

一日二十〜三十人前後の死者が出た。居室に搬送する担架が足りなくて梯子の上に死者を載せて搬送している状況に何度も出くわした。

唯物論のお国柄か？ 死んでしまえば一個の物体に過ぎずと、着ている下着は全部脱がせて丸裸にして埋葬するのである。零下四〇度〜五〇度の外気は、死体をたちまち凍結してマネキン人形のごとく固く凍らせてしまう。せめて下着を着せて葬つてあげるのが死者への礼儀と思うのだが、ソ連当局は下着を着せることは無駄であると絶対に認めない。

墓地への搬送はさすがに良心がとがめるのか？ 人目を避けて、いつも日没寸前の時間に死体搬送の使役がなされた。鉛色の空を背景に白一色の雪の中を薄暗い光のもとで、触れ合えば金属的な音がするほど固く凍りついた死体を十体ほど馬橋に山積みして近くの山中の墓地へと走る。

ツルハシも跳ね返る凍土のため、あらかじめ松の木を伐採して大きな焚火を翌朝まで焚く、表土が軟らかいうちに三十センチほど、大急ぎで掘る。その作業の繰り返しにより二メートル×四メートル、深さ三メートル、約五十体ほど埋葬可能な墓穴が三方所、掘つてある。

その中に頭を東に向けて一体ずつ梯子で降ろして並べて行く。やがて満杯になつたら雪を集めて穴を覆う。土が軟らかくなる春先に改めて覆土し、まな板ほどの厚板に死者の姓名をロシア文字で化学鉛筆（水分に触れると紫色のインクになる）を使つて書き込み、墓穴に立てて終わる。一〜二カ月も経つて墓地に行くくと、風雪にさらされた墓標の文字はほとんど消えかけている。

当時、私は、この墓地に眠る死者たちは祖国日本に通報されているのであるか？ この思いが頭にこびりついていた。

島根県 谷口澄晴

二十一年一月末ごろには毎日亡くなつていく。ある朝、私が指揮班に行つておと呼びに来ました。早速帰つてみますと碁を打つていた年配の友人が亡くなつていました。元気でいたのに、ただ手を合わすしかありません。この朝三人亡くなり、戸口にロスケ兵が二人おり、来いと言われ、詰め所に連れて行かれた。別のロスケ兵が二人来て、私たち六人と裏の墓地に初めて行き、私たちはびびくりしました。墓地とは名ばかりにて、ここは地下一メートル以上凍つております。小山のように長く長く連なつており、見渡す限り何列もあります。ロスケが早くせよと言います。私が見ているので、見ればならぬ早く穴を掘れと言う。六十七センチぐらい掘ると、良いと言う。上に水をかけて皆様の冥福を祈り、手を合わせて帰りました。

小山の死体、長く連なつており、見渡す限りです。何千何万あるのか想像もつきません。私たちもいつ逝くか分からないと笑つて別れました。二月中旬ごろまで続き、死者も少なくなりました。三月には十一個大隊いたと、語り部の軍

曹が話してくれました。

広島県 益田繁美

九月いつごろであったか、朝目覚めてみると隣に(隣と言っても毛布を三折りにした、六十センチ幅が一人の寝床)寝ている斉藤君が動かない。いつも一人が起きると「こそこそするの」に動かない。変だなと思いつても返事がない、オイとゆすつてみると死んでいる。

昨夜は彼の出身地青森県での納豆餅のおいしい話を二人でして寝たのに、班内は声もない、明日は我が身かも知れないのである。

故郷を夢見て、肉親を思い浮かべながら死んだ友、もはやどうすることもできない。入口の右にある石炭置場に裸にし、背中に名前を書き、そのまま入れ、死体が数多くなったら、山に運び埋めたのである。装具と毛布は班内で分ける。死んでは駄目だ、石にかじりついても生きて日本に帰りたい。

枕よせ納豆餅の話し食い

朝は冷たき戦友哀れ

なき戦友の肌着を分けて生き延びた

酷寒の中の友のぬくもり

石川県 今西三郎

春になって雪解けのころ、亡くなった人をどんどこに埋めたのか、願ひ出て清掃に行きました。白樺林を抜けたところに土盛りがずつと向こうまで並んでいます。冬の間は囚人が一つ穴に五人ずつ埋めたと聞いておりました。その土盛りの数を数えてみると三百五十ほどある。既に少なくとも千五百から千六百人は眠っておられました。中には狼に荒らされたものもありました。幾つも清掃しました。また清掃に行くときは、亡くなった方をタンカで担ぎ埋葬しました。ソ連では亡くなった方は素つ裸にします。ふんどし一つ許してくれませぬ。素裸と

は何と情けない仕打ちと思いました。また冬の用意にたくさん穴を掘るのも作業の一つでした。

静岡県 飯島久

軍官学校生徒の間に、ついに最初の犠牲者ができました。石炭は斜めに掘られた坑道に沿い、地下数百メートルからつるべ式の炭車に積まれて引き上げられます。線路沿いの所にブンケルと呼ぶ、数十トンに入る大きな鉄板製のじょうご状の器があり、その上で炭車がひっくり返って石炭を落とす構造でした。石炭はブンケルの下に開閉式の出口があり、リユークという大きな雨どい状の鉄板上を流し、貨車の窓から積み込む方式でした。八時間の作業中、何回かは長い鉄棒でブンケルの内側をつついて、凍りついた石炭を鉄板から落とす作業が必要でした。ブンケルは大きな建物に包まれており、鉄はしごを伝わって上っていく。地下からあがってくる石炭は暖かく、部屋の中はさほど寒くはありませんが、石炭の湿気は足元の鉄板通路に凍りつき、非常に滑りやすくなっていました。

昭和二十年十二月二十七日の夜半でした。ブンケルが詰まったということで、いつものように一人の仲間があがっていききました。ところが、しばらくして、リユークから防寒帽が出てきたのです。日本人のものです。しかも湿っている……血のおいででした。ソ連人監督に知らせると真つ青になって、電話ですぐ炭車があがってくるのを止めました。ブンケルの部屋を調べに行った仲間が、誰もいないと叫んでいました。最悪の事態でした。靴の底はコチコチに凍り、滑りやすくなっています。鉄棒でブンケルの壁をつついていっている中に、誤って滑り落ちたのです。

直ちに石炭をすべて線路上に流し落としていきました。間もなく顔形の見分けもできない無残な友人の頭が出てきました。炭車は約四トン積み、ブンケルに滑り落ちた友人は、石炭に何度も直撃されて即死だったでしょう。体中の骨が砕けてしまった余りにも無残な死でした。わずか一年前には希望に燃えて海を渡ってきた私たちでした。こんな所で無意味な死を迎えるとは、また十八にもな

つていなかった友人の死でした。

ぎゆうぎゆうに詰め込まれた状態で横たわっている私達の間、虱が伝染していくのは瞬間でした。発疹チフスは三九度、四〇度の高熱が幾日も続きます。リバノールと二酸化マンガンしかない医務室では、手の打ちようがありませんでした。

高熱が一週間も続くと、脳が冒されて発狂する者が出始めました。栄養失調でやせ細った体で、脳症に苦しみ悶え、大声でわめきながら体力を消耗し尽くして、急に静かになって終わりでした。ラーゲルの中は悶え苦しむ声に満たされていきました。

ソ連兵は病気がうつるのを恐れ、略奪のためにはラーゲル内に入つてこなくなりました。作業に出れる人数が急速に減つていきました。ソ連司令部はついに作業の中止を命じてきました。ソ連人に虱や発疹チフスが伝染するのを恐れたのです。昭和二十一年の一月半ばの事でした。大惨事の始まりでした。

一月の末ごろであつたと思います。夜半の気温は零下五五度を下回りました。作業は中止されたままでした。何の対策も講じないので、発疹チフスはますます猖獗を極めていきました。ラーゲルの中では、朝になつても目を開けない者が次々と出ていきました。

私たちの仲間も次々と倒れていきました。「おい、今S君がだめだ」「I君も逝つたぞ」「凄惨な光景でした。

O君は枕許にいたT君に何かを懸命に訴えていたそうです。初めTには何のことか分からなかったのですが、O君の真剣な目と必死になつて伝えようとする仕草から、Oが枕の下から何かをと望んでいるのが分かり、彼の雑嚢を調べて、それが剃刀の刃であることにTは驚愕したのです。O君はそれを自分の右手に持たせる様に要求しているのです。もちろん持たせることはできません。Oの鋭い眼光は、とても言葉では言い表せないほど凄惨なものだつたとT君は言っています。柔

和なO君の姿からは想像もできないほどのものだつたようです。恐れをなしたTは傍らにあつた木片を彼の手に握らせました。O君は途端に安らかな表情になり、左手首の内側を、その右手に持った木片でゆっくりと何度も何度も押し付けて、その口の動きから「俺は自分で死ぬ、自分で死ぬんだ」と言っているのが分かつたそうです。徳島一中創立以来の秀才と言われたO君の余りにも悲しい最期でした。T君は「貴様は」「貴様は」と何回も叫んで泣いたといひます。後でT君は言っています。「O君の死は病死ではない。あれは自決したのだ。」まだ十八歳にもならぬ若者の死でした。日に日にラーゲルの中は阿鼻叫喚、まさに地獄の様相を呈していきました。

(5) 衣・食・住について

新潟県 三重堀芳三

一日の作業が終了し、今、生活の中で何よりも一番楽しいこと、それは夕食である。これは「チト小さいじゃないか」、これは「皮ばかり」、これは「一寸軽いヨ」、目の色を変えての言い合いだ。それはたった一人当たり百五十グラムの黒パンを、手製の「天秤計り」で分配している俺たちの集まりの言葉である。

そして分配したパンを今度はクジ引で受け取るのである。主食はそれしかないから、みなは真剣なのだ。ちようどわからず屋の子供と同じ「餓鬼」とでも言うか、みなは腹が減って仕方がないのである。それと、副食として大豆と綿羊の内臓(もつ)と岩塩とを味付けしたものが、それが「豆のスープ」とでも言うか、汁の方の多いものであった。量は飯盒の中盒に入る量である。

そして、このようなきまいった献立が一日三度とも同じで、三か月以上も続いた。それが嫌いだしたら食べ物が無い。その糧秣(大豆)が終わると、また同じ物がくるか、またはそのかわりの「小豆」がくることある。やはり品物が変わるといふことはうれしかった。

島根県 内藤静夫

食事……支給されるのは大豆か粟かコーリヤンのいずれかの雑炊のようなものが飯盒のふたに八分目くらい、夜はこれに黒パンの大人のこぶし大が一個です。従つて不足分は命がけで食糧庫などに忍び込み、独自で調達し、しかもすべて岩塩をつけ生食いですが、一番うまいと思つたのはキャベツの凍ったやつでした。

お食事……イルクーツクより多少はよくなりましたが、それでも知れたもので、ここで私たちに幸いしたのは、野外で容易に動植物がとれたことで、よもぎにあ

かぎ、野生ごぼう、へび、カエル、ねこに犬、亀、ラクダ等肉以外で口にできるものは手当たり次第で、このためか困った鳥目もいつの間にか治っており、ほんとうにホツとしました。

静岡県 高松又吉

初めて経験する伐採作業は苦しかった。それにも増して苦しかったのは空腹との戦いである。腹いっぱい食べたくても食物がない。少しのパンとスープの水腹である。ああ、パンを腹いっぱい食べたいなあと思う日々であった。それが入ソ以来約三か月も続いた。飢餓地獄と言えば言えたのだろうが、私はあるとき、ソ連軍将校に給与のことを聞いてみた。そうしたら一人当たり黒パン三百五十グラム、砂糖、油十グラム、その他副食物一キロの支給があることがわかった。これだけ支給されているのに、なぜ空腹なのか。大きく疑問が浮かび上がってきた。

私たちの部隊は強制抑留後も、旧関東軍の組織で編成されていた。将校、下士官が実権を握っており、給与のパンその他をピンハネされてもだれも何も言えない実情であった。このことが部隊の飢餓の大きな原因であることを知った私たちは、所長と話し合い、部隊の給与に関しては自主管理することにした。このことにより空腹は改善されたのである。こうしたことがあつて、部隊からの将校の切り離しを行い、将校は将校たちだけの收容所に收容するよう、ソ軍に申し入れを行い、これが実行された。收容所の運営は選挙により委員会を設け、その運営をソ軍の了解の下に行うようにした。

静岡県 今井一成

班内で食事の分配に口争いがあるので、細い棒で秤をつくり、飯盒を二個つり下げ、中身を等分にして分配したことがあつた。パンが大きい小さいといつて、あれを切り、これに加えてと、食事当番は平均をとるのに苦労した。山の收容所では、そのころ、食事の量にノルマ給食があつた。ノルマの量により食事の分量が違

つたがソ連のやることには反対が多く、直ぐとりやめになってしまった。酷寒には山の草もなくなり、赤松の上皮をとり、青い中の皮を煮て、その汁を吸った。ネズミを食った。焼き肉は美味であると思った。

イルクーツクの収容所に転属となり、拾い食いができるようになって、少く息をつくことができた。腰に缶詰の缶を下げ、何でも拾って入れて置き、持ち帰って食ったり、くれたりした。

大阪府 小森淳男

日本人捕虜にあてがった衣食住はどうか。

「衣」衣類は不足していて、先ほどのように日本軍から取り上げた軍服の支給だが、どれか一つ外れている、すなわち夏シャツに冬服、冬シャツのものに夏服といった具合で、どこか一つ欠けている。だから持っている衣類を全部身につけても寒くて、こんな情けないことはない。

「食」ソ連の幹部は、日本人一人当たり米飯一合分は与えていると言うそうだが、実態は三分がゆはおろか、重湯そのものだった。

彼らの食糧も配給で、一週間分を受け取っても、とても足りないから、五日くらいで平らげてしまい、後は水を飲んでいような状況で、我々が屋外作業で昼食の黒パンを食っていると、捕虜の私たちに、パンをくれと寄ってくるルンペン風の人が結構いる。そんな人が多いので、日本人捕虜用食糧が搾取されたり、横流しなどあつて、最終的に我々日本人捕虜の口に入るときは、三分がゆになっているのだ。

「住」住の方といえば、完全な木造家屋でもできているところに入るならいいのだが、次から次へと奥地開拓のため、人跡未踏の密林へ移動させられ、木造家屋ができるまで、テント生活なので、体力はドンドン低下し、大抵の人は参ってしまふ。このような移動時期が、夏季でも夜間はオーバーが要るのだから、冬季だったら本当に恐ろしいことだ。

夏になるといろいろなものが手に入るが、十分注意しないと、これがために死ぬこともある。毒草、毒キノコ、サルノコシカケを食べて死んだ人もあった。私はこんな方法で選別した。キノコを見つけたらまず二つに裂いて「虫」が入っていれば合格。いくら形がよくても、大きくても、虫の入っていないキノコは捨てた。百合根は上等品だ。二節より三節の方が根が大きい。だんだん上手に見分けられるようになって、それらの野草のお蔭で空腹をしのいできた。その他シベリアで食べた野性のもは、イチゴをはじめ全部甘かった。やはり寒いところでは糖分が必ず要なのだろう。

五月ごろに出るマムシはやせている。冬眠から出たばかりだろう。黒色で約三十センチくらいある。何といっても毒蛇だから油断はできない。頭と皮はみんなの約束事だから、十五センチほど掘って埋める。身は丸めて布に包み、シャツの胸ポケットに入れると、三十分くらい動いている。

六月ごろにつかまえたマムシの腹に野ネズミの小さなのが三〜四匹入っている。七月ごろのマムシの腹には卵が十個ほど入っている。三人組で卵焼きにして食べた。八月ごろのマムシの頭を落とし、皮をむくと、子供が飛び出してきて、早や噛みついてくる。マムシの子は大したものだと思った。可哀想だけど我々が生きて帰れたのも、こんな野蛮な行動が、生に対する自己暗示をかけていたのではなからうかとも思う。死んでも食へるかと言っていた人で、亡くなられた人が何人かいる。

昔、家の祖母などから、マムシを三センチも食べたら鼻血が出るよと聞かされていたが、シベリアで十センチほど食べたが鼻血は出なかった。健康身体であれば三センチで鼻血も出るのだろう。捕虜の我々が作業中とかまた行進中に、だれかがマムシを見つけて叫ぶことがある。もうみな目の目が輝いてとんで来て、我れ先にと捕らえる。私もマムシのお陰で助かったのではないかと思う。

高知県 山本明司

飢えと寒さと重労働にこたえて、身体はやせて髪はぼうぼう。そんなとき、

だからジャガ芋の選別があるという話があり、行つて見ると、ガランとした大きな建物にコルホーズやソフホーズでつくった馬鈴薯を選別した屑が、土と一緒に残っていた。すきを見てそれを掘り出しに行つて見たが、ソ連人もジャガ芋は貴重品で、太い芋は残っていない。小指の先ぐらいのいよいよ屑芋を土の中よりかき出して、飯盒で煮て食つた。

そんな日本人捕虜を見て、ソ連の民間人が、万年筆、鉛筆、ペンシル、時計、石けん、タオル、赤禰、風呂敷、軍服、下着等を黒パン、馬鈴薯、ミルク等との交換が大流行、またしても私の荷物が役に立ち、十五名の戦友と分け合つて食べた。

貨車が入つて来る。たいがいの貨車は馬や石炭を輸送したと見え、石炭の粉と馬糞に交じつて、馬がコーリヤンを食い落として踏みつけられ床にばりついているのをけずり取り、いつも持つている袋やポケットに入れ、時を見計らつて手で分け、石炭をのけ、馬糞が黄色くまぶれ、粉石炭も付着したものをガツガツと食うたもの。今でもあの時の渋いコーリヤンの味を思い出す。また残りは袋に入れ非常食とし、それでも食いたい者には握り分けて食つた。

食事分配には、夜は白樺の皮に火をつけて、その明りでパンを切り分け、スープを注ぎ分けた。高学歴の人の中に割りに多く心の腐つた人がいて、自分の量を多く取ろうとするものだから、トラブルが絶えなかつた。

私ら生き残つた患者とおの山の伐採作業隊の患者を集めて、四月ごろ、ヤプロノイより五キロほど山奥に、ドイツ人を收容していた丸太づくりの大きな家に移動し、ここがヤプロノイ地区の日本人の大きな病院となり、赤痢のときなど五百人も入院していた。

ついに私はその病院の責任者(支配人)になつたが、二十年、二十一年は食糧事情は悪く、二十二年ごろより少しずつ改善されてきたが、病院を開設した二十一年夏は、歩ける者を連れてキノコをとつて帰り、飯盒に詰め込み、岩塩で煮て、そればかり食つた日もあり、アマドコロ(スズランの一種)の根を掘り、それを

生のまますりつぶして食う。野ニフをとる、ワラビをとつて食う、ゴムの樹液をとる要領で白樺の樹液をとつて飲んだが、これがまた糖分が多く、助かつた。

私は菜物の葉用炭、フクシン、リバノール、メチレンブリアウで絵具をつくり、筆もつくり、時を見て絵を描き、食糧と替えた。またソ連の関東軍の医薬戦利品を受領し、それを民間に持つて行き、馬鈴薯や黒パンの交換材料とし、あらゆる苦勞を重ねて生きのびて来た。

次に食う物のたたりの話を三つ話すと、鹿児島兵隊で、馬鈴薯を夜、島で掘り盗んでいるのを猟銃で撃たれ、臀部に散弾が十数個打ち込まれ、病院に入院して来て取り出した者。ソ連の馬屋当番の日本兵が馬に下唇を食いちぎられ、下顎まで肉が取られ、山の中の病院で移植もできず、外科の日本人の医者の手で両方をよせ合わせて縫合するのみで口の小さくなつた方、見るも気の毒で内地へ帰つてやり直してほしいと慰めたものだったが、それを日本人の間では、馬の糧秣を取つて食つた罰と憎まれ口をたたく者もおつた。

糧秣倉庫の使役に行き、日本からの戦利品の中の海鼠(ナマコ)の干物を食つたのが腸の中でふくらみ、腸捻転で入院して来、私たちも立ち会つて手術をしたが、既に手遅れだつた。小さく乾燥した数個の海鼠が腸の中で間隔をおいて大きくふくれ、ひどいものだつた。

この方は心臓が右で内臓が反対になつていた。シベリアで手術、またソ連軍医の研究用として数百人解剖した。もう一人内臓の反対の方に出会つた。すべて名前は覚えていない。

冬は、比較的足腰の強い患者を引き連れて、狼、タヌキ、ウサギの罾を仕掛けた。狼は何度かくくれたが、ワイヤーを食い切り血を落として逃げられたが、タヌキやウサギは随分多く取つて食つた。馬がビソ(鼻疽)とか恐ろしい病気で死んでいるのを見つけると、ソ連人は近づかないが、我々捕虜はそれぞれの道具と袋を持つて、臭い物にたかる糞バエがコンドルのように、アツと言うまに骨だけ残し取つて行く。野犬や民家の犬を手なづけ、隠し持つている小さい紐で首を締め、殺

して食った。

食い物のたたりほど恐ろしいものはないといわれるが、極限の中では(学問の程度や教養の有無や、普通にいわれる人格などは全く関係なく)人間の動物的本性がむき出しとなり、実にみにくい争いとなるが、人間の持つ非情さとともに、今思い出しても何だか寂しい感じもする。

しかし、このようにして食えるものなら何でも食った人が、より多く生き延びられたということも間違いのない事実である。あるとき、私と一緒に腐った馬肉を食った某さんは今何をしているだろうと、当時を思い出しながら、筆を擱く。

和歌山県 木下正夫

その後、私たちは他の收容所に移動され、各地からの俘虜の混成の作業隊となった。橋架けの作業場だった。宿舍から持って来た飯も凍りついて温めねば食べられず、たき火すれば歩哨が消してしまふ。こんなことがたびたびのこと。持って帰った昼飯を雑炊にして食べるのだが、少量の食事でさえ食べなければ生命がもたない。腹が空いていると眠るにも眠れないで、ますます体力の消耗となる。春先になつて青草の芽の出るころは、ヨモギを持ち帰って塩汁のスープの中に入れて湯がく。これなども生活の知恵であるが、歩哨は切ない私たちの願いの野草さえ取らせてくれなかった。

そのころ与えられるようになった燕麦の飯を分配するのに、ドクトルが立ち会いで作業のパーセントで配分される。作業によって重労働の者のパーセントが低く、軽作業で町の溝さらえの方がパーセントが高い。これではたまったものではない。日本人同士の不満がつのり、ソ連側に平等に食べさせよと要求しても受けつけようとはしない。スターリンが命令していることだという。彼らの頭の堅さにもあきれて、ものも言えない。そこで私たちが雪の夜、ストライキすると言ったら、全員吹雪の中へ放り出され、何時間も外に立たされたこともあった。随分いじめられたが、これ以上反抗もできず、我慢するよりなかった。

岩手県 高橋隆男

満州へ浸攻したソ連は、関東軍が備蓄した莫大な糧秣のほか、開拓団や満人の米麦、コーリヤン等、根こそぎかき集めて自国に運んでも、多くは自国民に供し、働かせるために連れて来た日本人捕虜に与えた食糧はその一部で、生命を維持するにも足りない粗悪で少量だったのである。終戦の昭和二十年の冬から二十一年の二、三月ころまでは最も悪く、捕虜の少ない食糧は横流しなどもあり、栄養失調や悪病の流行等で生命を失った大半はその時期だったのだ。

收容所内には炊事場が設けられ煮たきされて配分される。一人一日の量は少量の黒パンにコーリヤン等のスープが与えられるのだったが、ひどいときは、塩味の大豆煮のみが何日も続き、いくら飢えていても大豆食だとみな下痢症状になり、便所の中は赤色になるのだった。また満州から持ち込んだもみがそのまま配分されたことがあったが、飯盒で煮て、口の中がかみしめ、殻をはき捨てるも容易なことではなく、水筒の中に入れ、棒でつき、米にしたりしたが、作業から帰つてからではその余力もなく、飯盒でもみ殻が炭化するまでいり、どうやら食うのだった。そのうちに炊事では松の木で土臼をつくり、玄米にして粥をつくつて与えられた。

私どもは開戦以来、食うや食わずの戦闘を過ごして、入ソする前に体はすっかり衰弱し切っていたのに、生きる限界の粗悪で少量の食糧で二十一年一月ころは兵舎住まいの者はみな、肌はいえしなび、やせ細つて小さく老化した身はテレビに映されたアフリカの飢餓の人のように体重は半分くらいになっていたであろう。顔のほおは骨が出つ張り、肋骨はすっかり現われ、腸はペコンと引つ込み、腕やもも肉はそれが関節だけが高くなっている。手首は親指と人差指で回つたものである。今手首を握つて見て、本当だったのかと不思議にさえ思われるのである。それに寒さ、労働があった。そのころもし生きて帰れても、寿命は十年、二十年は縮まったであろう。この思い、この苦しみに比べたら日本の監獄など楽

なもんだらう。俺は監獄のような所だつて平気だとしみじみ思うのだった。

和歌山県 南口佐一

食事の分配は、明日の昼食は前日の夜に。置いておけば、飢えた者たちばかりだから、盗んでしまう。このようなことの繰り返しだ。盗まれないために夜に食べれば明日の昼飯はない。実際は三百グラムあるものが、与えられる量は二百グラムよりなかった。朝晩の支給は約八百ミリリットルの缶詰と小豆かコーリヤン五十粒くらいと鮭と米糠のスープであった。

これが通常の一日の食事だった。本当にソ連より支給されるはずと聞いた数字は「穀物二百グラム、パン三百グラム、肉百グラム、油十グラム、砂糖一八グラム、塩魚」とあった。それが私たち日本兵には半分くらいしか与えられなかった。

岩手県 佐々木徳男

人間生活に必要な三条件は言うまでもなく衣食住であるが、私のシベリアの場合、三文字の上になるのは食であると思う。事それほど、シベリアを語るとき、「食」を抜きにしては到底語るができない。

ネーブルスカヤ収容所の一日の食事は次のとおりであった。

朝食・コウリヤンがゆ、飯盒ぶたで約八分目

昼食・右と同じ。

夕食・右と同じに黒パン三百グラム、加給品として白砂糖二グラム、大豆油二グラム。

以上がソ連側からの給食であった。その食事で重労働に服するのだから、当然栄養失調で死亡する者が相次いだ。(昭和二十年九月以降同二十二年八月までの間)十センチ径、長さ二メートルほどの丸太を担いでも小石につまずくと直ぐ転んだ。それを見てカンボーイ(看視兵)やカマンジール(作業監督者)は「ヤポンスキー(日本人)、ラポータ(作業)、マール(少し)、ニエハラショウ(よろしくな

い)」とあざ笑った。そのころ私たちはバーム鉄道と言われる軍用シベリア鉄道の建設に従事していたが、ノルマが厳しく、ノルマを達成するまでは食事抜きで働かれ、空腹で目まいを起こし、その場に倒れる者が出たりした。

十代から三十代の血気盛んな若い者たちから自然と笑いが失われ、話といえれば食べ物の話ばかりで、春の来るのをひたすら待ち焦がれた。六月も末になると、ようやくシベリアにも春風が吹き始める。一日のラポータが終えると今度は山菜採りに精を出す。少しでも栄養を補給し、トウキョウダモイしなければならぬ。それまでは死んではいられないのだ。蛇も蛙も虫もみんな食糧になった。死にたくないから食うのでなく、生きるために体が要求するのだった。

あるとき、弊馬(病気で死んだ馬)が埋められたという情報が入った。私たちは闇夜の中をその現場に急いだ。暗闇の中を手探りでどことも知れない所をナイフで切り取って帰り、雪を溶かして芋の皮と一緒にペーチカで煮て腹一杯食べた。翌朝、手製の鍋の中を見て驚いた。鍋の中には黄色の沈殿物がどっさり沈んでいた。それは紛れもない馬の腸の内容物、要するに馬糞だったのである。

貧すれば鈍す、また、衣食たりて礼節を知ると古来から言われているが、まさにそのとおりだった。食べ物一つで人々が憎み合い、争った。戦友愛は一体どこへ行ってしまったのだろうか。食事分配の公平を期すために、小さい天秤がつくれ、秤が水平になるまで六十人の眼がガラガラとそれを見守った。

そのときが一番私にとっては悲しいときに思われた。一本のタバコも二人で分けてのみ……「戦友」の中の一節はただの美辞の唄い文句だったのであろうか……。

シベリアのタバコはロシア独特のタバコでマホールカといったきざみタバコだった。そのきざみを新聞紙でクルクルと巻いて吸った。ソ連兵たちは普通の巻きタバコで、彼らはそれを半分ほど吸いポイと捨てた。私たちはそれを拾おうとして群がり寄った。意地の悪いソ連兵はポイと捨てたのをわざと靴でグイと踏みにつけて見せた。

私の歯の金冠に目をつけた機械倉庫のキャピタン(大尉)が、「その金冠を私にくれ。その代わり真っ白いフレーブ(パン)とタバコをモノーガ(たくさん)やる」と言う。「何に使うのだ」と聞くと、彼は左手の小指を出し、「マダム(妻)のリングにする」と言った。思えば十四年間、私の肉体の一部としてその役目を忠実に果たしてきた金冠と別れるのは何としても不甲斐なく情けなかったが、私はパンもタバコものどから手の出るほど欲しかった。背に腹はかえられず、じつくりと分別することもなく、ただ一時の欲望に負けて私は金冠をキャピタンに渡した。彼は「ハラシヨウ」と言つて帰つて行つたが、翌日、わずかばかりのフレーブとマホールカを持つて来、「残りは輸送車が入り次第持つて来る」と言つて帰つて行つた。しかし彼はそれつきりネーブルスカヤから消えてしまった。他のラーゲル(収容所)に転勤したという。

鳥根県 八幡垣正雄

塩分不足による体のむくみ

体、特に足のむくみ、歩いていてもふらふらするようであるので、自分一人かと思つて他の者に聞いてみると、大半の物がそうであった。

原因は塩分不足であるとの結論であり、パザールの糧秣庫から岩塩を盗んで持つて帰り、丸ヤスリで小さくして雑炊等に入れて食べたなら、体のむくみもとれて元気になった。

それから、塩の配給も多くなったようである。塩分は多くてもいけないが、また少なくともいけないので、塩がいかに大切であることがわかつたのである。

トマトの食べ過ぎによる体内の塩分排出

コルホーズではトマトの収穫作業があり、最初のうちは採つて食べるが、仕事で相当量のトマトを食べた。トマトはほとんどが水分であり、小便の量が多くなり、塩分が排出され体がふらふらして大変であつた。塩を付けて食べるとよいが、塩の持ち合わせもなかつた。ちよつと塩分不足による体のむくみの現象と同じであ

つた。

ビタミン補給にアカザ

食事といつても雑穀の雑炊で、それで量も少なく、ただ体を維持するだけのカロリーであり、野菜類は以前にも述べたようにバレイシヨ、キャベツ、トマトの塩漬だけであり、ビタミン不足を補給するために野草のアカザを炊いて食べた。あまりたくさん食べて青い糞が出て、便所が青糞でいっぱいになつたこともあつた。

芋の皮を食べる人間豚

バレイシヨは新しいうちはそのまま炊いて食べられるが、古くなると皮が厚くなり、はがないと食べられないので、ソ連兵は私たちに芋の皮はぎをさせるので、なるべく皮を厚くはいで、その皮を持ち帰り、またロシア人が捨てている皮も拾つて炊いて食べたものである。

今から考えてみると牛か豚が食べるものをよくも平気で食べたものであると思うが、しかしこんなことは序の口であつた。

自炊をして食べたのもこのウオロシロフの収容所が最後で、他の収容所では自炊等をする事ができなかったのである。

食事

朝食は雑穀の雑炊で、味つけは塩、肉または魚で味つけ、量はサバ缶に軽く一杯、昼食は黒パン一切れ三百グラム程度と、紅茶または魚のスープで、夕食は朝と同じで、野菜はジャガイモ、塩漬のキャベツやトマト等であつた。

環境衛生

特に困つたのは大便をするときである。蚊の大群である。頭等は布等をかぶつて保護できるが、尻だけはどうすることもできず、必ず便所に行くときは草等で蚊を追い払いながら用便をした。

便所といつても三十センチ幅の長さ五メートルくらいの溝を掘り、一列に並び使用、周囲は壁で囲つてあるが屋根はなく青天井であり、明り等がないので自然の明りであつた。もちろん、洗面、風呂等は、水は貴重であり、この地区では一度

もできず、食器洗いは一日に一度くらいであった。

熊本県 岩野寅雄

私の記憶しているソ連より支給された糧秣の一人当たりの定量は一日パン三百五十グラム、穀物類四百五十グラム、魚肉類二十五グラム、油十グラム、砂糖十八グラム、タバコ五グラム、とはなつていても受領は不正確であった。

熊本県 吉間政範

在ソ中一番苦しめられたのは何といつても食糧についてでした。初めのころは米が主食でした。一日の米の量がなんと湯のみ一杯（一合足らず）程度で、ご飯に炊くわけにいかないので三食とも水に米粒が少量浮いているような「おもゆ」で茶わん一杯ぐらいの量でした。食事に要する時間は一分以内、それもそのはず、箸も要らない、すすり込むだけの食事でした。食べ始めるまでが楽しみで、食べ終わればがっかり、こんな日が毎日でした。しかもノルマに追われる重労働で体がもつはずがありません。

半年ほど過ぎてからの主食は黒パンでした。一食三百グラムですが水分が多く、これに塩鮭の入った味の濃いスープ、時にはうまくない乾燥トマトのスープもありました。パンを各人に配分するのが大変でした。れんがの二倍ぐらいの大きさの黒パンを八等分したのが一人分です。正確なばかりなどあるはずもないので、目分量で配分するのですが、衆人注目の中での配分は大変気を使うことでした。三度三度の食事ごとにパンは抽選によって公平に配分されました。

時には、道路凍結のため食糧が届かず、絶食の日もありました。一週間も小豆の塩ぜんざいばかり食べたときもありました。

衣生活

長野県 茅野道寛

敗戦の冬を平壤で過ごしたということもあり、防寒の衣服も自分で持っていたので不自由した記憶はない。

食生活

一番困った。平壤では、旧軍の米を食べていたがウラジオに着いた途端、ろくに精麦もしていないような燕麦をどろどろに煮たかゆ状のもの。一週間くらいはのどに通らなかつた。先に収容されていた人たちは我々の食べ残したものを、待つていましたとばかりにむさぼるように食べていた。日数がたつうちに空腹に耐えられず、食べられるようになり、なれてきた。そのうちに黒パンも出るようになったが、生野菜は一度も食べたことはなかつた。たまに馬鈴薯や菜っ葉の乾燥したものが出た。

衛生環境

シラミの卵つぶしは寝る前の日課。発疹チフスで入院する者も多かつた。栄養失調で慢性の下痢患者がほとんど。朝起きると冷たくなっている者を何回か見て、次は自分の番かと話し合ったこともある。夜中に突然「ウォー」という叫び声で目を覚ましたが、翌朝その人は冷たくなつていた。トイレはたれ流し。野菜不足によるビタミンC欠症で皮膚に黒紫の斑点のできる壊血病。空腹、栄養失調で身体のだるさが抜けない毎日だった。

鳥取県 山本篤行

その各人に渡されたみみは水筒に入れて木片を探してきてそれをつくのである。ある時間ついたものを手に乗せて口で吹いて米ともみ殻をえり分けるのであるが、半分くらいしかみみ皮がとれていない。それを集めて炊事でたくのであるが、原米（碎米）のみと半々のものであるから飯らしいものにならない。それを飯ごうのふたに一杯ずつ配給して三百五十グラムの黒パンだけが三食である。も

みがなくなつてからはアワとなる。相当期間この状態が続いた。もみ、アワがなくなつてからは澱粉の粉(馬鈴薯)のスープにかわる。これが倉庫で変質していたものらしい(毒素発生)が仕方なく毎日食べる。そのうち医務室は患者で満員となり、いろいろな症状が出だした。下痢、嘔吐、発熱、めまい、痺れ、血便、腹痛、歩行困難、黄疸あらゆる病気発生。折からの寒気は零下数十度の日も連日ある。建物が病舎と区分される。

便所は屋外に深さ二メートル横五メートル縦二メートルの露天であり、排便はそのまま凍結して鍾乳洞の筍石のようになる。その上に新しいのが次々と落ちていくので、一日もすれば尻につかえるようになるので、それを倒さねば大便をすることができず、酷寒の屋外で下半身裸のまま便所することは想像以上の苦痛であった。

高知県 清水清助

作業の中でキャベツの苗を植えに行った。双葉のキャベツの苗を隠して持ち帰り、おひたしにして食べたが、これほどおいしいものはなかった。青いものにかつていた。

楽しみといえは、作業が済んで寝転がっておることぐらいかもしれない。ソ連二年間の抑留で何を得たか、ふり返ってみると、衣食足りて礼節を知るといふ中国の言葉は真理だと思ふ。食が一番。できるだけ体をいとうて、できるだけパンを確保して、生きて日本へ帰ることだった。話は食べることに、「生きて帰ろう、生きて帰ろう」というのが、毎日々々の繰り返しだった。

作業へ行き来の中で見たソ連の労働者の姿も、極めて貧しい服装をしていた。ソ連も戦争で疲弊していたのだろう。

島根県 多賀顕秀

作業は種々の雑役だったが、何としても零下数十度の寒さの中だから仕事の

能率が上がらない。能率が上がらないから給与の食糧もなく、寒さに震えながら時間稼ぎをするばかりだった。昼の休みになって持ってきたパンを食べようとすると、れんがのように固く凍って歯が立たない。そこで飯ごうに入れたき火のそばでしばらく温めてから食べることにしたが、この黒パンたるや初めはまずくていただけのものではなかったが、空腹のため後にはカステラのようにおいしい気がするようになった。

島根県 山本久夫

ラーゲルでの入浴と食事

労働が終わってラーゲルに帰ると、まず浴場に行く。浴場といつても湯船などはなく、四周の壁に取りつけられた数本の水道詮から適量の湯と水が出るし、シャワーもある。しかし、その湯水も自由には使えない。石けんは洗濯に使うような粗末なもので、ぬらした体に直接両手でこすりつけるが、あまり泡も出ないし洗い流す湯水の量も制限されているから、汚れが落ちにくい。第三組の作業終了の場合は、入浴を終えるとそのまま食堂に行くが汚れがとれず下まぶたあたり炭でくま取りした者もいる。

食事の主食は黒パンで、麦を中心にコウリヤンなどの穀類を精白しない粉のままパンにしたもので、白パンより固く味も一定していない。この茶褐色の枕状の黒パンを私らは一人一食約三百グラムの基準で、スープをすすりながら食べるわけである。スープはバレイショや豆類と何かの肉を少々入れたもので、みそ汁のようならまみはなく、味も素っ気なかった。

ラーゲルに入つて一年にならないころ、出されたスープがあまりにも臭く、油こく口になると吐き気を催すよう、まともにのどを通らなかつた。あとでそのスープはラクダの臓物を聞いて食欲を失ったこともある。しかし、いくら臭くまみずいスープでも黒パンとともに腹の中に入れておくと、体が弱って仕事もできないと、鼻をつまんで一気かせいに飲み込んだ。日本人の中には食事が十分にとれな

く空腹のため、捨てられた屑芋や残飯あさりをしたり、栄養失調で倒れた者もいた。ラーゲル内の生活は、初めも軍隊法式そのまま継承であったから、食堂にも将校用の席があったし、食糧も兵隊とは若干異なっていたようだ。すなわち、パンは同量の約三百グラムだが、穀物や野菜は兵隊が多く、将校は肉と砂糖がほんの少し多かつたと聞いている。ラーゲル内の炊事をするのは同じ日本人であったから、メニューも次第に私たちの口に合う食事となつたし、正月や記念日などには精いっぱい特別献立ができて、我々の唯一の楽しみである食べることを少しでも満たしてくれた。

静岡県 鈴木速男

食事は病んでない限り、食堂ですることになっていた。食堂といつても日本の昔の大衆食堂を大きくし、テーブルを一枚の長板にして何列も並べ、土間は土といつたぐあいのお粗末なものである。食事といえばブリキの食器(軍隊の飯食器くらい)に七分目のおかゆ、それもモミ殻付き四十も混じった燕麦である。食べるといふよりすすると言つた方が適当かもしれないしろものであり、私も軍隊時代にはコウリヤン飯や豆ガス(馬の餌)等も食べた経験もあつて食物には動じない方であるが、これには参つた。口の中でモグモグして舌でかみ分けするが、殻を吐き出すときに、中身まで付いて出たときのもつたいなさ、涙が出るほど悔しい思いをした。調味料といえば塩だけであり、副食はなくおかゆの中に細く切つた乾燥ジャガイモが二切れも入つていようものなら、上の方だった。また、時には酸っぱいキヤベツの漬け物が混入していることもあつた。

このような食事状態がしばらく続いたある夕方時、奇異な現象を目のあたりにした。夕食を告げるスリ板が鳴つた後、班員が一人両手を前に中を探るようにして歩いて行くのである。変に思つてそばに行き聞いてみると、暗くて前はつきり見えないと言つのである。これには驚いて食事を済ませた後に医務室へ連れて行つたが、栄養失調よりさせた鳥目だとのことであつた。このことが皆に伝わ

ると、軍隊時代によく言われた「馬が食べる草は人間も食べれる」という言葉どおり道端の野草をとつてきて水で洗い、おかゆの中に入れて食べるようになった。特にアカザなどは最たるビタミン源であつた。

その後の食事は、大豆のおかゆが一週間も続いたかと思うと、米がゆになり、ひどいときには緑豆(グリーンピース)ばかり十日も続き、作業隊から苦情が出されたこともあつた。黒パンはノルマによつて多少があつた。大体が黒パンというしろものは、ほんの少しの小麦粉へ魚や野菜を粉にしてまぜ、焼き上げたもので、一個約四キロであつたが、その硬さは凶器にもなりかねないくらいのしろものであつた。

和歌山県 上田宗雄

飢餓生活極限の情況

「食べたい何でもいから腹いっぱい食べたい」。全員これ以上に思うことがなかつた。三百グラムの黒パンの分配時ともなると、とまり木の上から班員三十余人の目は当番のパンを切り、目方を計り甲乙のないようにするのを、穴のあくほど見入つたものだった。少しでも一かけらでも他の人より多く食べたい気持ちは全員の気持ちであつたろうと思う。春になり雪解けの後にいっせいに芽を出す雑草の若芽をつんでは持ち帰り、收容所内のあちこちで煮る姿は夜中までも続いた。味つけは岩塩、なべは飯ごうだ。また秋九月には山林一帯に生えるキノコをとつてきてはこれまた飯ごうで煮る。こんなふうに厳しい作業の合間を見ては食べるものを探すのが常習だった。

こんなにして毒草、毒キノコなど食べ下痢し栄養失調になつた人たちが多かつた。私も枕木工場で左手中指を怪我し医務室で爪をはがして治療を受けたとき、体重は何と四十八キロまでになっていることを知りガク然としたが、軍医の計らいで炊事の雑役に回してくれ、やつとの思いで元気を回復した。炊事の雑役中にソ連倉庫に主計大尉(堤さん)といつて山形出身)に引率され車を引いて出か

けた。糧秣を受領して帰る途中、だれが落としかバレイシヨが山なりで落ちていたので大尉に報告すると、拾って帰ろうということになり、カチン、カチンに凍ったバレイシヨをから袋に入れて持ち帰って暖かい部屋に入ると、何か変な匂いがしてきたので皆で調べたところ、拾ってきた芋は何と馬糞であった笑い話もある。

このように、何でも食べたいときは馬糞も馬鈴薯に見えたのである。またつらいことは食物だけではない。シラミ、南京虫にも大変つらかった。着物の縫い目は白いくらいの卵で毎晩ポリポリとシラミ取りする姿がとまり木全部だった。また南京虫は木のすき間に巣くいて、暖かくなるとかみつかれ寝不足になったこともある。帰国後着て帰ったじゅばんの縫い目にシラミの卵かすがあるのを父母が見て泣きながら焼却した。

滋賀県 村田英信

十二月のある日、一年ぶりに入浴ができると知らされ、期待したが、実態は次のような次第。アンガラ川から入浴場まで長い長い二列横隊をつくり一斗だるに取手をつけ何十回となく手送りで百二十メートルくらい水を運ぶ。外気が寒いのでおけの外側から氷結し出し、浴場に到達したところには水は半分くらいになっている。いざ入浴。二人でおけ一杯の湯をもらい消しゴムくらいの石けん一年ぶりに体を洗う。次の一杯で石けんやよこれを洗い流し、やっとドラム缶の風呂へ向かう。順番をまっつ一人ずつ湯にひたることができた。しかし次の人が十五を数えると交代する。何十人も入浴だから仕方がない。このときほど風呂のありがたさを感じたことはない。大変貴重な体験だった。

和歌山県 長峰泰夫

五人に一人の割合で当番を定め、当番の飯上げが行われる。メニューは一般と違ってかなり良質のものが出された。フレーブ(黒パン)、カーシヤ(濃いおかゆ)、

スープ(豚脂入りキャベツのスープ)、ミルク(砂糖入りの牛乳)、スラギック(ビタミン剤の果汁)が出される。一般では黒パンは昼食用であるが、オカでは、朝も二百グラムぐらいのが出た。

キノコは日本のアワダケ(アマタケとも言う)に似て、裏側に網目のあるもので、表面が毒キノコのベニタケのようであるが、ぬめりがなく乾いた感じなので、食用になることが明白であった。ロシア人は食べられない。大きさは直径十センチくらいあり、大型ですぐ袋いっぱいになる。持ち帰って、夜に飯盒に入れて、塩魚の切れ端のだしで煮て食べる。松の実やきのこ汁で食糧不足の足しにして、胃袋を満たした。松の実による黒パンとの物々交換は、体力維持に大いに役立てることができた。

昼食を早めに終わって、相変わらずの松の実、キノコ取りは継続する。黒パンと松の実と交換できるトラックを探すのにも苦労する。長距離運転のトラックの運転手でない、黒パンを積んでいないからである。松の実も五葉松の多く生えているところでない、短時間に収穫することができない。

このころになると、一番の敵は大きい蚊の来襲である。この蚊に刺されると、びつくりするほど痛くて、真っ赤にはれる。そのため、作業用として白色の布製の袋状の前面に、目、鼻、口が出る範囲を切り取り、黒い網が縫いつけてあるものを支給された。蚊は草木の生えているところに多く、これをかぶって蚊よけとした。収容所内では余り見かけなかった。

岡山県 田中一司

空腹を満たすため、野ニンジン、野ごぼう、おぼこ、蛙、蛇など食べられそうなものは手当たり次第取って食べた。毒草を食べて死んだ者もあった。

和歌山県 長峰泰夫

三食とも同じ献立になるが、一般と比べれば栄養価は数段上である。作業が

全然なく、食べて休養しているだけなので、体力が徐々に回復しているのが見えてくる。幕舎なので、夜の冷え込みはまだきつい。夜中に二、三回小便しに起きる。衣服を着て、防寒外套を引っかけて外へ行かないといけないが、正規のところへは遠いので近くの傾斜地で済みます。用便するとすぐ凍るので、黄色い氷がだんだん丘になつてくる。ツルツルの黄色い小便の丘ができる。臭くないので、その上に乗って用便することもある。温かくなると溶けてなくなるが、臭くないからそのまま、来年も同じことを繰り返すようになるだろう。

新潟県 田中新次郎

収容所の生活は最低だ。朝鮮から持ってきたでん粉でつくっただんごのすいとん汁が夕食だからたまらない。頻繁に小便に通う。

消灯前といつても「電気がない」。朝食のパンが上がる。大切にしまっておいたらだれかにとられたので、翌晩からは直ちに食べることにした。昼食が小さなキャベツ一個のこともよくあった。栄養が悪い上に労働がきつい。

東京都 青木貞一

食事の分配

さて、ここで食事の分配について話すことにしましょう。

食事時になると、だれも彼もの眼の玉がランランと輝いてきます。ここは地獄の二丁目か、三丁目か。ほおのやせこけた土色の肌の餓鬼どもが、十数人集まって小さなテーブルの上の「天秤」を見つめています。夕食を分けているところなのです。

目方を計る当番が一人

「どうだ、このくらいでいいか」

はかりはだれかの手製のものです、どのくらい正確なものか知らない。当番は、天秤の水平の度合いを餓鬼ども全員に確かめているわけです。

「チト足りないゾ」と、だれかが言う。当番は二粒のコウリヤンをはしに載せて加えた。

「いいだろう」と、まただれかが。そこでその一人分は計り終わるのかと思うと、そうではなかった。

「どうだ、みんないいか」と、計り手は全員の顔を見回して再確認を促す。餓鬼どもは、それぞれに納得して「よし」と答え、かくして順次にそれぞれの飯盒に移されるわけです。

一粒のコウリヤン、一滴の重湯が、自分の命にかかわることを知らされてしまった餓鬼どもにとつて、その配分の厳正さは、極限まで要求せざるを得なかったのです。

餓鬼そのものと化した私どもの間では、こうした祭典にも似た行事こそ、収容所での生活に秩序を維持し、殺し合う悲劇を未然に防ぐ一つの方法だったかもしれません。人間の知恵というものでしょう。

そのころ、月に一度入浴がありました。入浴というより、主目的は衣類を住みかに入っているシラミ退治でした。下着から防寒着まで、一つるしにして熱風消毒室に入れ、三十分ほど待つ間にシャワーを浴びるという寸法でした。

その入浴で私たちはみんな驚きました。いつの間にかやせ衰え、ももから足首まで全く同じ太さ、ひざのところだけが丸くふくらんでいるのです。

病気でやせるのならともかく、ただ食べ物が少ないために、これほどまでにやせるのですから、それはそれは言い尽くせないほどひどいものでした。そのとき、これではとても次の入浴までは持つまいと思いました。生き地獄というものです。

作業に出たとき、わずかな溝でもあるとまたぐことができません。一度下において、ドッコイショと向こう側上がるのでした。またぐために上げた足が、向こう側に届かないで、ポロリと落ちてしまうからです。足を支える力がなくなつ

ていました。骸骨に皮をかぶせたような姿だったのです。

北海道 石川朝雄

食事も入所して炊事場もできてから主にコウリヤン飯とパンが三百五十グラム、それに前記の太平洋汁(主に塩ニンカ塩マスであった)。これではとても栄養カロリー等とれるものではない。腹が減つてたまらない日の連続であった。従つて持っているもので万年筆や時計(武装解除のとき取られなかった人)飯盒、最後に毛布まで持ち出して地方のソ連人と食べ物を交換した者ほとんどであったと思う。

北海道 奈良勝正

極度の食糧不足でカエルや、モグラ、バッタ、野草等食べて急場をしるぎ、中には、毒草を知らずに食べ腹痛を起こし、真つ黒な汚物を吐きながら死んでいった友もあった。

北海道 石川朝雄

このころから入浴もできるようになった。入浴といつても日本のように浴槽にたつぷりお湯があつて入るのは全く違つて、直径二十センチ、高さ十五センチくらいの丸いおけにお湯が一人二杯より使えないのである。従つて最初のお湯で石けんを使う洗ひもの、頭と体全体、後のお湯で洗い流すという方法をとつた。だから日本のお湯に入ったということは大変な違いである。多分一週間に一回くらい入れたと思うが、でも入らないよりはよく、それに床屋は日本兵の中に招集前理髪業をしていた者がいたのでこれは以前から行なわれていた。こんなことで衛生面もだんだん充実して来た。

北海道 奈良勝正

中央からの指令が経路を通つて流れているようだ。移動はバム鉄道を貨車にて

大体三、四日の行程で、その間食糧は前渡しで、黒パン、塩蔵ニン等が主で、通過駅でスープの補給がある。用便は備えつけのビヤダるを使用していた。

前渡しの食糧も空腹の毎日なので、満足感を味わうため二、三日で全部食べ、後は水ばかり飲んでいたような状態であった。たまたま食糧を飯盒に入れて車窓に下げておくと、交差する囚人(ロシア人)列車から伸ばした手で盗まれることもあり、いかにシベリア全域が飢餓状態かがうかがわれた。

島根県 阿倍光明

伐採に行き、針金で釣針をつくり、ロープをほぐして糸をつくり、川へ上るサケ、マスを引掛けたり、船の作業に行き、アンコのような大きな魚を釣り持つて帰つたり。五葉の松笠を取つて焼いて食べた。食うことにだれも心を配つた。体も気候に次第になれ、生活環境もやや落ち着いてきた。しかしシラミが大繁殖してやせた体につき、血を吸い、安眠できぬようになった。ドラム缶で衣服を煮て消毒するのである。月に一回の身体検査があり、女の軍医が尻をつまみ肉づきで健康のランクを決めるのである。

和歌山県 坂本清次郎

野にアカザの青い色が目に冴える。アカザをゆでて浸し物にする。これはよい副食になる。食事は相変わらずの黒パンであるが、スープの中身が少し多くなり、汁腹にこのアカザの浸し物だから満足するが、翌日の便が真つ青には驚く。

新潟県 小山九蔵

裸電球を一球増しては寒気しのためには防寒具内に隠し入れては暖をとり、仲間たちにもそれとなく世話をしていた。

暖気をとることはできても、飢えには耐えられない。窮すれば通ずることわざの実行をした。警備歩哨にニクロム線を利用した暖房器具をつくつてやり「ポリシ

ヨイ・スパシーボ」ということで、かわりに黒パンや、カルトーシカをせしめ、仲間たちと分け合つては食べていた。

歩哨から話を聞きつけたのか、ソ連人労働者が次から次へと暖房具の注文にやつてきた。多いときは月に五人くらいだったので、鉱山器具用の材料もほとんど使いきってしまうほどだったが、かわりに黒パン、たばこ(マホルカ)、サハラ(砂糖)が手に入り、坑内作業の仲間と灯りを暗くしては食べた。

島根県 八幡義隆

二十一年の春から夏になつてからは白夜で、朝は五時ごろに夜が明け、夜は十一時ごろまで明るい。冬と反対である。腹が減るので朝のおかゆと昼のパンを朝食でしまい、空の飯盒を持って工場に行く。昼の一時間の休憩時間に草を取つて食べる。夏に最初モギがたくさんあるので取つて食べたが、にがい。次にヘズリ、これは菜の葉のように食べられた。次はオカカリ等、名はわからぬがいろいろなものを採つて食べた。三か月くらいの間、春夏秋の草が次々に生える。工場内の草もなくなり、板塀と鉄条網の間にまだたくさんの草があるので採りに行く者がいるが、命がけである。ソ連兵が見張台の上から自動小銃をかまえている。見つければ撃たれる。秋になつて伐採等で山に行く者がキノコを採つてきて炊いてくれと言う。ペーチカをたくまでは火のあるところは機械工場だけだ。中には毒キノコを持つてくる者がいる。食べて死んだ者もいた。

岩手県 折居次郎

朝早く暗いのにゴソゴソ起きて、飯盒を持ち食事受領に出掛ける者が始まる。六時近いのだが、外は真つ暗やみ。食堂がないので食券を持って各自が飯盒にもらい宿舎で食べる。今朝はだんこの数が多いとか少ないとか、今日のおかゆはコッテリしてるとか、水っぽいとか、こんなことが抑留者たちには最大の関心事であり、直接生命にかかわる重大事だった。早い方が盛りがいいとか、締め間際

がいいとか、こと食事に関する話題は際限なくあるのだが、みんな真剣に取り組んだ笑えない事実だ。隣と比べて盛りのいいと感じたときは、一日寿命が延びたくらい得をしたような気がして一日中元気が出たが、少ないと思った日は反対に一年も寿命が縮んだ思いで、一日中ひもじい思いで過ごした。同じ器で配分するのだから多くても少なくても大差ないのだが、毎日々々毎食々々多いか少ないかが気になる餓鬼道の世界だった。何しろ生きて帰れるか、死んで白樺のこやしになるかがこの食事にかかつていたのだから、たかが食事のことであさましいなどと言いつて捨てる問題ではない。命にかかわる最も重要なことだった。

遠い作業場に行くときは昼食も朝渡されるが、これとてウツカリ雑のうに入れたりすると、いつの間にか消えてなくなっている。入手した食物の貯蔵法の最も安全確実なのは直ちに自分の腹に入れる以外にない。従つて二食分は直ちに腹の貯蔵庫に入り、必要もないのに空の飯盒だけは腰にぶら下げて作業場に行き、昼食は水を飲んで終わる。

千葉県 村山武士

衣といえば、満州より各自持参した衣類では、零下四十度、五十度の寒さにはとても耐えられるものではなかった。肌着から上着まですべて予備はなく、着たきりスズメで、洗濯さえもできなかったのが現実である。一年八か月、ずっと着どおしなので、雨がっぱを着ているようである。シラミがわくたび滅菌の繰り返しであった。強いて言えば、私は、靴だけはソ連製のカートンキという動物の毛で圧搾したものと交換してもらったことがラッキーというか、しかし、それがまた大変で、乾燥していればよいのだが、一たん水が付着すると、中まで浸透してきて、足の指ともども凍りつき、脱げなくなる心配が多分にあった。手袋といえば、綿でできた親指とほか四本が分かれていて、一つの袋になっている大きなものであったが、一日中寒さのために、指先がしびれてきて、感覚がなかった。

食といえは、一年八か月いるうちに、米の飯が二回ほど出されたが、その中にもみが半分混入しており、とても飯といえるほどの代物ではなかった。いちいちももを吹き出せば、半分は捨てることになるので、よくかんでのどに送り込んで食べたもので、これも私の抑留中、たったの二回きり。あとはソ連特有の酸化した黒パン三センチほどを一切れと、動物の骨を煮だした出汁で、大豆または小豆、または燕麦を入れ、雑炊風に炊き上げたものを、小さめのそばどんぶりに一杯ほどが毎日の定食であった。馬鈴薯といえは、ソ連では主食なので、とても抑留者の口にはほど遠かったのが現実である。

住といえは、寒さを防ぐために、地下を掘り下げて屋根のみ露出している建物で、入り口が二重になっており、外の扉はいつも凍りついて、一面氷の花のようにつららが下がっていたものだ。布団といえは、綿は全く入っておらず、布団の形の布におが屑を入れ、布団がわりにしていた。よく乾燥した屑ならよいが、乾燥していないので、いつもじめじめしていて気持ちが悪いが、文句も言えなかった。

入浴については、何百人という人が順番に入っていくので、夕方適当な時間ならよいが、時には、夜中の十二時、夜明けの二時、三時となることもしばしばであった。風呂といえども、湯船など全くなく、少量の湯で体をぬらす程度しかなく、とても洗うことなどできない。凍りついた夜道をとぼとぼと、二十分も歩いて帰ると、すっかり体も冷えきってしまう。楽しいはずの入浴が害となり、帰ってくる。月一度の入浴が、楽しみとかでなく、またかという気になってきた。

便所といえは、深い穴を掘り、その上に丸太を置き、板を張り、十人くらいが一度に使用できるようになっていて、堀も区切りも、恥も外聞も全くない。皆同じ穴にするので、だんだんと便が凍りつき、とんがり帽子のように積み上がり、凍りついた便が尻につくようになる。仕方なく、鉄棒で凍りついた便を砕き落とす。また積もるので、砕き落とすの連続で、ほかでは見られぬシベリアならではの光景である。

千葉県 小岩敏夫

アンジジャンの水は悪く、生水は飲めない。わかし湯だけ飲む、冷たい水は飲んだことはない。入浴は一週間に一度だけ、日曜日に街に行きシャワーを浴び、泥を洗い落とす。食事は相変わらず悪い。瓜かトマトだけの食事のこともたびたびあった。れんが工場には食う草もなかった。大陸は夜が寒い。布団もなく、毛布一枚しかない。

兵隊は病気になっても、三十八度以上の熱か外傷がなければ休ませられない。頭が痛くとも神経痛でも休まれない。下痢すると、看護婦が来て兵隊を庭に並べ同時に大便をさせ、赤便か白い粘膜便が出ないと休ませない。私は足の裏に底豆ができたので医務室に行った。日本の軍医は診てから「すぐ切る、麻酔がないが我慢しろ」と言つて、寝台につかまって切ってもらった。痛い痛くないの話にならない、脂汗が出た。それで三日間休ませてもらった。

夕方になると大きなマラリア蚊がたくさんいて、遠慮なく裸を刺す。マラリア病人も多く出た。高熱を出して苦しむ姿、家族には見せたくないと考えた。

岡山県 田中一司

話が前後しますが、食事と日常について話しますと、朝は七時から食堂(別棟)で黒パン(日本の四枚切れ一枚)スープ(青いトマトの切れが浮かんだもの)中盒一杯、コウリヤンのおかゆのときもありました。昼は作業が終わった五時過ぎ、夜は七時過ぎに黒パンにじゃがいもの煮込みとスープでした。この黒パンがエン麦をもみとも粉にしたのをパンにしたようで、ザラザラした舌ざわりにスッパイものでした。なれるにつれこのスッパさがよくなったものです。とにかくひもじくて何か食べるものはないかと話し合うのは、ぼたもち・赤飯・おやき等そのつくり方等々食べ物の話を尽きなくしたものです。

日本人はまことに器用なものでダイナマイトの針金で縫い針、導線の皮膜から

縫い糸、ダイナマイトのろう紙からちり紙といったぐあい。二年目から壁新聞、日本新聞等が掲示されるようになりました。我々も日本字が懐かしく壁新聞の編集の一員になり、共産党宣言などを詳解する仕事もしていました。

岩手県 石橋喜治郎

夏季作業の際に野性のアカザが群生している場所が見つかって、二食分を朝、腹に詰め込んで手ぶらで出掛けることもありました。昼どきアカザを煮上げ、だんご状に丸めて昼食代用に食べたが、塩の手持ちがないので、意地で飲み込んだものでした。その他、蛇、カエル、ネズミ、カタツムリ等、手当たり次第食糧にかえることに寸暇を惜しんで探し回り、栄養補給のため一生懸命であった。

特に松の倒木や、切れ株に巣食う鉄砲虫は最高の栄養源と思い、焼いて食べました。おいしくて食べると急に体力が強まった気分となりました。野草類や木の芽も随分食べた経験もありますし、秋になると名前も知らないキノコも恐れることなく、腹を満たすだけの食糧として採取に励みました。採って煮ても、味付する塩がなかった。それでも満腹感を味わいたくて、盛んに口に入れたのである。

人が生存するために塩と水が大切な要件であることを痛切に感じました。

食事配分のときこそ、異様な雰囲気が漂う無気味なときであって、大人が稚児に還る一瞬であった。

分配係は器用で誠実な者があらかじめ指名されている。この特定された者だけが、手を触れることができる。この係の必需品といえば、天びん秤(ばかり)、包丁、しゃもじが絶対欠かせない。もちろん現地で調達した手製の品々で、包丁(小刀)は刃物であるから、装具検査で見つけられないように慎重に保管しておく。雑炊を各人さまざまな器に、濃度、中味を加味して等量に配り、なおかつ秤にかけて、重さを計って正確を期すことになる。パンも輪切りして、調整しな

から一片も残さずに重量を計り、さらに公平にと、くじ引きで分配される。皆一斉に凝視する秤で分配するので並み大抵の神経ではできない役割であったろう。分配者の手もとを監視しながら、諸動作の一举手一投足に至るまで見逃すまいと目を皿のようにしていた各人のまなざしを今思うと、人間の仮面をかぶった野生獣たちの、食うか食われるかの生存競争に似ていたように思います。

このように時間をかけて、公平無比におのおのに渡った食事も飢餓亡者たちの胃袋を満たすには不十分で、片腹にしかおさまりませんでした。薄い煮込み雑炊の朝食はもちろんのこと、少々固めの夕食も、箸(はし)が使えず、手づくりスプーンで口に運ぶのですが、ちょうど幼子がおいしいものを惜しみながら食べるときと同じ動作をするのです。そしやくしなくてもよい雑炊を、一口ずつなめ回して、感触を味わうかのようにゆっくり時間をかけて胃袋に飲み込んでやる。この食事が、餓鬼道から逃れ、唯一人間性に戻るときだった。

岩手県 菅原春一

二年目あたりから戦友同士がちよつとのすきに食事を盗むようになり、とても油断ができなくなりました。また、ある将校は自分の当番兵の食事を取り上げ二人分食べておりました。また将校が、兵隊がソ連人と時計や万年筆、鉛筆入れ歯等をパンと交換するので困るというので帰国するときまで預かっておくと言つて、取り上げておりました。ところが、預かった兵隊が外の分所に行くことになり、小隊長に申し出て返してくださいと言ったところが、小隊長の話は、作業に出た後にソ連兵に取られたとので返してくれなかったもので、そのことをソ連兵の上官に話したら、取り調べの結果、そんなことはないというので、小隊長に話したら、自分がソ連人とひそかにパンと交換して食べておったので、それがきっかけで兵隊と将校と大喧嘩が始まりましたので、ソ連軍の上官が兵隊と将校を分離したのです。

あるときに非常に寒い朝でしたので、たき火をしたくとも、火種になるものは何ひとつないので困っていたら、一人の兵隊が自分の作業服を破って綿を取り出して、どこから見つけて来たのか二枚の板切れを持ってきて、その綿を板で摩擦をして口元に持っていき吹いたその綿が火を吹き出したので、それと一同が枯れ草や枯れ木を集めてたき火をしていたら、監視兵が来て怒り出し、各自の身体検査をしたが、だれも火種を持っている兵隊がおられませんので、監視兵がだれが火をつけたと怒りましたので、その兵隊が名乗り出たら、どうして火を燃やしたというので、その兵隊が説明をしたら、監視兵が驚いて、日本の兵隊は頭がいいといつて褒めてくれました。自分もオーチンハラシヨウと言って皆と一緒に暖まるのでした。その勇気のある兵隊のお蔭であつたまることができました。

衣、食、住

高知県 東山 林

着たものは一年間そのままを着替えたことはなく、食糧といえは桃印マッチ小箱程度の大きさの黒パン一個と水のようなスープが飯盒のふたに一杯というのが一食分。(二食分一度に配分された時は皆が全部食つていた。しまつておく和别人に盗られたから)寝起きするところといえは自分達が急造の掘つ立て小屋で、暖をとるのはすべて枯木を拾い集め、照明には白樺の皮を用いたので、朝起きた時は全員顔がススで真つ黒で誰だか判別ができない状態、また背には下敷きの雑草が凍り付きミノムシ状となつていた。

襦袢・袴下などは四年間、自分の持ち合わせを使った。作業服はそのころ日本ではやつていた防寒服であつた(綿が入つてダイヤに刺し縫いしたもの)。防寒外套は羊や山羊の革でつくつたもので、作業には重かつた。

シベリアは九月から翌年の五月まで冬である。夏は六月と七月と八月の三カ

福島県 村上 武

月である。夏の服装は日本と同じである。

主食は、四年間を通して玉蜀黍が最も多く八〇%である。次に高粱。入ソ当時は大豆の主食もあつた。食事は一日三回で、昼食のときだけ黒パン二百グラム程度であつた。

肉は羊や山羊の臓腑であつた。魚は「サンマ」しか覚えていない。野菜は馬鈴薯しか覚えていない。食い盛りの青年労働者の一食分しかないソ連の一日の食物であつた。よくぞ生き長らえたものである。

碁、将棋などは民主運動の激化に伴つてだれもできなくなった。演芸会などは文化部の行事となつた。

和歌山県 北又 光夫

食事は、二十本入りのタバコの箱二個くらいの大きさの黒パン一個で昼食終わりで、朝と夜は雑炊二合くらいとサケのかけら一個で、ほかは何もない。これでは仕事などできるはずはありません。体力はだんだんなくなり、気力のなくなるのは当然のことであつた。このようでは、次にシラミに食われて死ぬよりほかはないと思われたものです。正月が来ても寒さが身にしみ、あすは死ぬのかと、毎晩母親のことを思い、我々は皆、寄り添つて寝たものです。それというのも、二人寄り合つて休めば体温で暖かいからです。しかし、戦争中からずつと洗濯はせず、湯に入つていないからシラミがものすごく、腰まわりや首筋はシラミうじゃうじやで、またシラミの卵でどうしようもなかつた。

小便はすぐにカチカチに凍つた。大便をするときは、内地のツバメが電線にとまつているように一列に並んで二本の丸太でやる。もちろん屋根は木の葉っぱのつくりで、寒いことこの上なしである。だから、腹下りとなるとお尻を出す回数が多くなるので、ついには死ぬよりほかはないということ、全く情けないありさまでした。これは真実です。仮兵舎、木の葉ブラック便所は、一日ごとに大便が上につかえてくる。十字鋏で碎いてならず。すごく量が多くなれば、丸太の木を

切つて足場の上に並べて高くします。ここでの作業では大手袋を使ってやるのだが、糞がこれに飛び散りしみ込むことになるので、バラック小屋の兵舎に持ち帰ると、少しの暖かさでも溶けて大便の臭いにおいがする。体にもしみついているのだ。手を洗うにも水がないので、その手で黒パンを分配することもあり、衛生的に考えても病気になるのは当然である。このような状態の中で、ソ連側からはダモイ話はなく、栄養失調で次々と死んでいくのです。第一回目の冬である。あすの朝は自分も死んでいくのかと何度も思う。

労役の種類は、まず木材の伐採(冬季に限られる)、夏は煉瓦焼き材料の粘土掘り、鉄道の再建設作業、道路作業などである。鉄道と道路作業は冬もあつた。冬に行われる伐採作業は、まず寒さが、時間が、我々を苦しめた。朝八時には出発する。零下四〇度以下の寒さの所を現場まで四キロくらい、凍傷が続出した。私も二、三回かかった。幸い大事に至る直前で手当てをした。どんなに寒かろうが八時間労働は必ず守る。夜遅くなっても仕事の時間には厳しい。一時間のうちの中十分くらいはたき火に当たらないと日本人には無理だ。飢えている人にノルマに達しないと三割から半分ぐらいに食事の量を減らす。ますますノルマは下がる。たまに間違わないと達成できない。達成すれば食事の量が増し、達成できないと食事の量が減り、結果として四級に下がるか、死ぬか。最初の冬は死者が続出した。四等級になると一まとめにして休養させるか、軽作業、舎内当番や暖房用の薪づくりか、炊事の手伝いか、水くみくみらいのものであつた。

熊本県 上羽淳一郎

収容所に入つてまず驚いたことは、食事の量の少なさである。これでは明日の命が保証できないと悲観せざるを得なかつた。便所に困いがないのにも啞然とした。とても常識では考えられない。当分の間、明るいうちには便所に行けなかつた。丸見えである。部屋に入つて丸太を組んだ二段ベッドに寝るのだが、たちま

ち、蚤、シラミ、南京虫の襲撃に遭い、眠るどころではない。南京虫などは天井から顔に降ってきた。暗い中で手探りで潰しにかかるが、昼間の疲れでいつの間にか寝てしまっている。これが毎晩繰り返される。

昼間仕事の合間、秋の日差しを浴びながら、シャツの縫い目にずらりと並んでいる血を吸ったシラミを一匹一匹潰してゆく。その光景は、いつか動物園で見た猿そっくりだった。毎日のことだが、パンの分配には神経をすり減らすように気を使った。一食三百グラムの黒パンを十人単位で三キログラム受け取り、十個に切り分けるのであるが、当番のパンを切る手元を二十の眼が睨んでいる。物差しを作り、さらに公平を期するため天秤を作り、外側の固いところをどうするかで頭を痛め、ジャンケンでは決まらず、くじ引きで決めやうと手に入れる。

三百グラムの黒パンをゆっくりゆっくり噛みしめて飲み下す。馬の餌にする脱穀してないコウリヤンの塩味のスープをすする。肉片はなく骨が入っている。骨を捨てるのはもったいない。ペチカで焼いて食べる。部屋じゅう骨を焼く煙がもうもうと立ちこめ火葬場のような異臭がしていたが、気にする者は一人もない。ランプもなく真つ暗やみの中の食事だから、何が入っているか分からない。天井から南京虫が食器に落ち、私はそれを知らずに食ってしまった。口中に異様な臭気が満ち満ちたが、口に入れた物を吐き出すことはできなかった。そのまま目をつぶつて一気に飲み込んだ。

熊本県 家入壮介

二一七定食は満州産馬糧

二一七の定食は、朝はパンにスープ、昼と夜は雑炊である。この三度の食事の形は最後まで変わらなかつた。スープといつても、初めのうちはかすかに色と味のついたみそ汁に大豆が五、六粒入っているだけ。雑炊は満州から持ってきたコウリヤンが主で、燕麦や雑穀を煮込んだものであつた。たるの半分以上は澄んだ上汁になつているので、炊事班もよく攪拌して分配していたが、それでも後で底の方

をもらつたほうが得だ、いや、後で足りなくなると水で薄めていたのをおれは見ただと、自分の間は食事についての苦情は絶えなかった。

初期の穀物はほとんどが満州から獲得したもので、馬糧などでなじみのコウリヤン、燕麦や大豆が主なものであった。味噌も、ソ連人は大豆の腐ったものと言つて食べないので、捕虜用に満州から持つてきたものだ。

「二一七」の顔、野見山

食事について貢献した一人に、「二一七」の顔野見山糧秣受領係がいる。

二一七に入った一五〇作業大隊は下士官のみで編成された大隊で、兵隊は各隊長や将校の当番及び各小隊に一、二名の当番がいただけで、兵隊の数は少なかった。その一人、野見山は、小路大隊長の当番として二一七に入り、当番のかたわら炊事を手伝い、毎日行われていた糧秣庫から収容所への糧秣運搬。パン受領などをしていた。

パン受領は、当初は四キロ離れたホルモリーの二〇一分所付属のパン工場まで牛そりを引いて、雪と氷の白い道を毎日出かけていた。牛はやがて馬にかわり、パン工場も二〇一から福田が焼いていたゴーリンの手前の二〇五(後の二一九)分所にかわつた。このようなパン受領は、二〇五のパン工場が二一七に移転してくるまで一年近く続いた。野見山が受領してきたパンは、炊事にいた谷口(現、神沢)が三百五重グラムの定量に切つて、各人に分配していた。

糧秣庫に出入りするうちに、片言のロシア語を覚えた。笑顔で陰ひなたなく働く彼は、ソローキン主任の信頼を得て専任の糧秣受領係となつた。糧秣庫にはソローキン主任の下にロシア人が三、四名いて、糧秣の整理や分配をしていた。その倉庫責任者はチャイカだった。糧秣庫の受け持ちは二一七分所と二一六、二一八分所の三カ所で、トラックでコムソモリスクから運んできた糧秣を糧秣庫に受け入れ、それを各収容所に分配していた。

トラックから倉庫へ取りおろしする仲仕の仕事は一般作業班から出していた。倉庫の仕事にはみんな喜んで行つた。それは帰りに、袋の破れからこぼれる大豆、

コウリヤン、ジャガイモなどを拾つて、外套の中に隠し持つて帰る役得があつたからである。わざと袋を破つてポケットやズボンの中に隠して持つて帰り、友人とひそかに獲物を分け合い、夜遅くまで、ヘチカで炊いて食べるのが捕虜の何よりの楽しみであった。ジャガイモの作業では、雪の中に埋もれたジャガイモを拾つて帰り、飯ごうで炊いたところ、半分は馬のふんだった。「ええ！くそ！」捨てようかと思つたとき、腹の虫が「グウー」と鳴つた。背に腹はかえられぬと、馬ふんの味がついたジャガイモを取り出して雪で洗つて食べてしまつた。多くの捕虜が身に覚えのある悲喜劇的物語だが、シベリアでは珍しいことではなかった。

服役者のチャイカが刑期を終えて故郷に帰つた後は、野見山が見込まれて倉庫の責任者となり、ソ連人を使つて仕事をしようになつた。このころ(二十二一年)からカントーラ(収容所管理事務所)に日本人を使うようになり、浜田(經理)、続いて犬飼(經理)、小菅(被服)らが入り、後では各係の補助として日本人が働くようになった。計算が速く、まじめなため、多くの人々に信頼され、事務的な仕事はほとんど日本人捕虜の手で行われるようになった。

野見山が倉庫の責任者になつて、日本人捕虜収容所のほか、ソ連人や馬糧なども管理しなければならなかつた。ソ連人は油や粉末卵などを欲しがつたので捕虜の分を回してやり、そのかわりに麦粉や燕麦等、腹持ちのする穀類を多くの収容所に回したりした。また毎月の倉庫の棚卸し検査では、穀類はもちろん、肉、魚、砂糖など余つた食料はこっそり二一七に運び込んでいた。糧秣受領は毎日のことで、長い期間では量、質の双方で大きな利得をもたらしてくれた。

ある日、彼は収容所長ビチコフのサインを一生懸命に練習して、カントーラ(管理事務所)に来て、經理主任ズベリンスキーの補助の犬飼や当時の勤務者の田丸や家人に「どうだそっくりだろう」と自慢して見せた。「そんな下手じゃ、すぐばれて、監獄入りだよ」と言うと、また暇があれば練習して「もうわかんねえだろう」と得意になつていた。

糧秣受領は、伝票をカントーラの經理主任が発行し、収容所長のサインをも

らつてから糧秣庫のソローキンに提出して糧秣を受領し、それを二一七の炊事に納める。それが野見山の仕事である。彼のことだから、サインを有効に使って食糧の増配を二一七にもたらしたと思われる。

二回目の正月からつくり始めた正月料理は、質量ともに年々よくなった。炊事班から出されたメニューに合わせて、それに必要な砂糖や良質の材料を集めるのに「ここはおれの腕の見せどころ」と張り切つて、糧秣運搬の自動車運転手に頼んで、コムソモリスクの基地から特別の材料を仕入れたこともあった。

当時は、正月が来るのが楽しみで、今年の特別料理は何だろうかと、作業場でも夜の寝台の上でもうわさしながら、みんなが首を長くして待っていた。元旦のみはすべての作業を休んで、朝から全員入浴した。身も心もさわやかとなり、炊事班の苦心の料理を楽しんだ。

「捕虜の糧秣でよくこんな料理ができたな、本職の料理人がいるのだろうか」と、ゆつくり料理を味わいながら、ちよびり日本の正月を思い出した。そして夜遅くまで、故郷の食べ物、自慢話など、食の物談義に夢中になった。シベリアの元旦は、淡い郷愁に包まれた短い一日であった。

しかし、二十四年の正月には、こんなエピソードも生まれた。入ッして三年目の二十三年の後半になると、糧秣は、質はともかくも量だけは多くなり、残飯も出るようになった。それに目をつけた野見山は、早速どこからか小豚を二匹連れてきて、炊事の残飯で飼うようになった。彼は乾燥滅菌室の横につくった豚小屋を毎日訪れ室内をきれいに掃除していた。また豚は、浴場で作業班が帰る前、床屋の柳田らと洗つてやり、かわいがつて清潔に飼育していた。豚は丸々と太った。

二十四年の新年を迎えるに当たり、トン汁のごちそうをしてみんなに喜んでもらおうと、二十三年の大みそかに、そのうちの二匹を炊事の望月に頼んで殺してもらった。

收容所長ビチコフがこれを知り、無断でやつた豚殺しに腹を立て、望月を捕ら

えて営倉に入れた。営倉入りは帰国が遅くなるかもしれない。捕虜にとつては大変なことだ。しかし、頼まれて殺しただけの望月は一言の弁明もなかった。野見山の身代わりに甘んじて元旦から毛布一枚の営倉生活を送ることになった。二一七收容所の、助け合い、友情に包まれた隠れた逸話の一つである。

(※後日談——帰国後、野見山が望月の家を訪れたとき、「いやー、あのときは野見山さんは偉い人で、頼まれてやつたなどとても言えなかった。黙つて犠牲になるしかなかった」と言われ、野見山は大変恐縮して、会う人ごとに、望月が営倉に入ったことは知らなかった、悪いことをした、悪いことをしたとみんなに断り続けている)

食堂と食事

福井県 天谷小之吉

主食である雑穀が品不足のときでした。当時一日分の雑穀の半分ほどが、数の子(鯿)の乾燥したものを代替品として支給されたことがある。初めのうちは珍しさもあつて、水で戻して食べたが、毎日となると飽きてしまつて、後には手製で袋をつくつて、その中に入れ枕にしたことを思い出す。ソ連人は数の子やこんぶなどは食べなかつたように思う。

この食堂に私が勤務したころの糧秣について少し述べてみる。入荷してくる主食は主に大豆、高粱、燕麦、玉蜀黍などで、副食としては、まず魚類は鱒、鮭、鯿、鯛などで、季節によっては黒竜江でとれた川魚なども時々配給された。肉類としては、牛や馬そして野羊などだった。しかし時折、桶樽に牛の舌ばかり、又は面白いことに雌牛の生殖器が幾樽も入荷した。しかし、雄牛の睾丸は入荷したが、陰茎は一個も入荷しなかった。話によると、あの部分を加工して杖にするらしい。それからまた、こんな物が入荷した。牛の首から上の顔面部の皮を剥ぎ取つた、左右に大きな角の付いたいわゆる生首が樽の中に入っていた。初め蓋をあけた者は吃驚仰天、話を聞いて駆けつけた者もやつぱり驚いている。睨んだ

ままの目玉、また片方の目玉が落ちているもの、さまざまだが、余り気味のよいものではなかった。

調理としては、釜の上に三つまたを組み、縄を吊し、牛の角に結んでそのまま釜の中に入れて炊き込み、スープの味出しにした。

調理師はこれが仕事で、驚いてばかりはおられない。三つまたの横にどっしり腰を落として、時折、生首を上げては、表面の柔らかくなった肉をフォークで突き落としてはまた釜の中に入れて煮込む。何回も何回も繰り返していた。高い釜台に三首揃って吊された光景は、だれが見ても思わずどきどきとした。また、この姿を見ない一般作業者は、今日のスープはとてもおいしいと喜んでいた。その反面、この光景を見た者は喉に通りにくかった。

蠅退治

昭和二十二年の夏、ライチハ第二食堂で蠅退治が行われた。毎食事、食器に盛った食事の上が真つ黒と言っても過言ではないほど蠅が集まっている。また、煮汁の中にも必ず数匹の死蠅が入っていた。最初は気味が悪く箸で一々出していたが、蠅の死骸は出しても、汁は一滴といえども捨てられない。今の我々には栄養補給のために贅沢は言えない。否、贅沢ではない、衛生上許されることではないが、しかし、こんな環境でも生きるためには仕方なく丸飲みしたものだ。

七月のある夜、食堂係長の川口さんが、蠅退治をやってみようと、食堂勤務者三十人を集め、まず食堂内の全部の電灯を消して、配膳室の電灯のみつけてその明かりの前窓に米袋を広げて中に入るように仕掛けて、白布(テーブル掛け)を上下に振って追い込む作戦。蠅の習性として、夜は高い天井裏に集まっている。白布を振って追うたびごとに、ぶんぶん明かりの方に集結する。その鳴き声(飛ぶときの羽の音だろうか)騒がしい。いかにたくさんいたか分かるでしょう。

配膳室の食堂側二カ所の高窓付近は、押しかけた蠅で真つ黒。白布で追われるたびに先頭から袋の中になだれ込む。第一回目、まず成功だった。二カ所の袋

合わせて約三斗くらいは入っただろう。食堂の電灯をつけて天井を見ると、先ほどまで真つ黒だったのが明るいほど白く見えるが、まだまだ所々に黒く点々と地図のように残って見える。一服してもう一度追うことにした。二回目は要領も習得したので案内簡単に来た。二回合わせてなんと五斗余りも袋に入った。だれしもこんなに沢山捕獲できるとは想像もしていなかった。

翌朝からの食堂は大変美しく、また久しぶりに蠅の少ない食事を口にすることができた。

廁

収容所へ入って一番先に驚いたことはまず便所でした。共同便所でした。個人個人の仕切りがないのです。便所の中央に約一・五メートルほどの通路があつて、その両側が大便所となつている。縦に二十余りが一列に並べられてある。左右合わせて四十人ほどが中通路に向かって用を足す。まことに見事な風景である。朝のラッシュ時には入口に何十人も列をつくって待っている。中は満員である。順番がきて中へ入ると一目瞭然、四十人全員がお気張りの真つ最中である。急ぐ者早く終わるそうなの前に進み行く、最初は何だか嫌な感じだったが、ここ以外に場所がないから仕方なく待っている。用便中煙草を吸いながら、横の人又は前の人と話をしながら、「共産主義で困ったもんだなあ、便所まで共同ではう」と。

この国では、ちり紙がなくて大変困った。各作業へ行く道中又は作業場において、紙らしいものを見つけると、皆我先にと走って集めたものだ。強い紙のときは揉んで柔らかくするが、両手で揉むと紙に亀裂ができるので、用便中に片手で静に揉む。特に火薬の入った内側の包装紙は半透明だが強かったので、このようにして使ったことを覚えていた。私も丸三年シベリア生活をしたが、一度もちり紙の配給を受けた覚えはない。皆いろいろと工夫した。特に下痢便のときは身を切るような思いだった。

今はノルマもなく気分的に楽になったところのある日、防寒外套から真綿を取り出して、丸めて持つてカルトーシカ(馬鈴薯)と交換するため二人して出かけた。休みの日である。門のある大きな庭もある家だった。中へ五、六歩入ると、中から突然大きな大人ほどもある犬が飛び出して来た。仲間の一人は家の方へ逃げ、私は門の方へ逃げたが外套に食いつかれた。破れるとまた食いつき、最後には外套とカートンキューの間の満服と肉まで食いつき、二、三步後ろへ引き戻された。

ようやく女の人の声で犬は離れたが、血の出るヒリヒリする足で帰り医務室へ行った。衛生兵には貨車から降りようとしてけがしたと言ったら、これは貨車の傷ではないと言われたが処置してくれた。私のこの傷跡は四十年後の今でも消えない。このときは完全に失敗した。

また樹林に戻ったころ、五月一日のメーデーにぶつかつた。私たちは小さな小屋であつたので五十人くらいであり、ソ連兵とともに赤旗を先頭にして労働歌を歌つて、ほこりの立つ田舎道を行進した。

終わつてから、夕方久しぶりにロシアふうのスープとパンがたくさん出た。そして食つた。ソ連兵はウオッカのいいにおいをさせていた。そこで初めてシャワーを浴びた。そのシャワー室は、三坪くらいの小屋の中の片側に石を積み、真ん中に大きなかまがあつた。火は外で燃やし、湯が沸くとこれを石にかける。すると部屋は蒸気で薄暗くなった。やがて全身から汗がダラダラと出た。そして熱くなると体に水をかけて飛び出す。その間に別室では衣類の熱気消毒をする。狭いところだが鉄板の上に衣類を下げて、下から火を燃すとシラミが鉄板の上へ落ちてきてブスブスンと音がして、シラミ退治であつた。冬の間はこういうことはできないので、全員がシラミを持つていた。そして一年近く過ぎた後のシャワーは本当に気持ちがよくて、捕虜を忘れるようだった。

食事は一塊の黒パン三百グラム(現在の日本の食パンでいえば三、四切れに相当する)と、薄いスープが飯盒の蓋に一、二杯、又は大豆を薄い塩で煮たもの少々が一日分で、一カ月に一度、スプーン一杯の砂糖(十グラム)が支給された。腹が減つて、一塊の黒パンを一度に食べてしまえば後は食物はなくなつてしまい、野草や茸などを現地調達しなければならなかつた。パンを受け取ると、手で三分割して残りをなくさないように背囊にしまい、三分の一だけを食べるという日課であつた。

スープとは名ばかりで、湯に岩塩を溶かし、さらに豚などのラードを浮かせたもので、運が良いと細切れの肉片が入ることもあつた。そんなスープでも支給されるのは朝晩の二回だけで、昼は多くの場合、パン三分の一切れと小さな魚の燻製であつた。

毎朝の洗顔はしたことがないが、風呂(バーニア)には一週間に一度、日本軍の階級順に入ることができた。衛生兵あがりのいる医務室と私たち全員の責任者である竹内大尉や奥田大尉がいる本部との間に、十人くらいが一度に入れる風呂(バーニア)があつた。湯舟はなくて、中で裸になり体を拭くだけの丸太小屋で、入室するときにドラム缶で沸かした湯を桶に一杯だけ支給され、これに布切れをつけて体をこすり、わずかな湯を底に残しておいて最後に肩からかけて終わりである。厳冬の折など肩までつかる風呂に入れたらどんなに気持ちがいだろうとよく思った。

脱いだ衣類は全部、当番が蒸気滅菌室(ジスカメラ)に持っていつて滅菌し、風呂(バーニア)から出ると自分の衣服が消毒され置いてある。着るとまだ温かさがわずかに残つていて、寒い季節には心地よかつた。蒸気による消毒は小豆大の南京虫と虱の駆除が目的で、衣類の縫い目や襟にいるそれらを駆除することができた。

夜になり、私たちが昼間の労働の疲れで熟睡しているときに、南京虫は板の

隙間や柱の陰から出てきて、人間の血を吸いたい放題吸って、真っ赤に膨れると離れていった。吸われた跡が痒くてたまらない。南京虫の攻撃を避けるために、夏の夜は丸太の天井のうえに上り寝たこともある。

八月三十一日、腸チフスの予防ワクチン注射が実施された。他の地区では腸チフスが猛威をふるったということであったが、幸い当収容所では、予防接種が効いたのかどうかは分からないが、一人も患者は出なかった。

広島県 増田敬三

ここでシベリアにおける三年間の食事を書いてみると、主食の中心は黒パンだが、関東軍が貯蔵していたたぐさんの糧秣を運んできており、時として大豆ばかり(主食として)で二カ月を過ごしたこともある。油を抜いたシン粕、カズノコもよく食った。朝も昼も晩もカズノコのスープ(全然味が出ぬ)。日本では昨今カズノコは貴重品呼ばわりされているが、そのカズノコスープが二カ月近くにも及んだ。皮肉なこともあるものだ。粟飯が一番よかつたが、これは一年間くらい食った。

でも、あるとき、皮かぶり(小鳥のえさ)のアワ飯を食わされてみんな便が出なくなった。さあ大変、全員がふん詰まりで、だれかが力いっぱい全身の力で奮発してようやく少し出た便を見れば、全く消化していない。いかに私たちが粗食に耐えてきたとはいえ、その便を見たソ連の糧秣係はかぶとを脱いで、一日だけで引き取って別のものと取り換えた。

戦友に相撲(幕下)出身がいて、日本の軍隊では体重八十キロ以上の者は二人食、だつたと思うが、だれよりもずば抜けて大男の彼は一握りの黒パンくらいではとても足りない。山の作業のときは松の甘はだ(木の皮の一番中のやわらかい繊維)を飯、こう二杯、岩塩を入れてたいて食っていた。

北満でもそうであるが、シベリアは春夏秋冬が同時にやって来る。ニラとキノコが同時にできて、一握りのニラを求めて目の色を変えて探し回つたものだ。キノコ

は四十種類くらいに及んだが、毒ダケであろうと何であろうと片っ端から探して食った。日本のネズミタケと同じものがあつた。

高知県 東山林

当時の食事の状態は、主食の黒パンが桃印マッチ小箱程度の大きさのものが一個に、スープは飯盒のふたに一ぱいで、これだけの量が一食分でした。パンを配分するときは、耳は堅くて重く、中の方はやわらかくて軽いので、天秤をつくり、水平になるように隊員総監視の中で行われました。また、スープは底に大豆や高粱の粒が沈んでいるから、一度金網を使って別の容器へ移し、金網の上に乗っているものを二個、三個と数えながら、平等に分配した後、汁を分けました。将校、下士官、兵を問わず、人間の持つ動物的本性をむき出しにしたのはこのときで、その人の価値を知ることができました。

新潟県 周佐吉三

私どもは、ノルマ百%達成の時は燕麦の精白したものでお粥より少し固めにつくつたものを少々と、黒パン七百五十グラム、肉少々とバター、キャベツ、馬鈴薯の入ったスープを飯盒に半分くらい支給されますが、ノルマ未達成のときは減量となり、黒パン六百五十グラムになります。

また、一週間に一度ずつ糧秣を受領しますが、倉庫に燕麦がないときはある物を、例えば塩マス、グリーンピース、キャベツなど、そこにある物を受領しますので、一週間そればかり主食となります。塩マスなどは四分の一くらいが一人前ですが、塩分が多くてのどがかわいて困ります。またグリーンピースは量が少ないので毎日空腹を感じます。何ぶんにも飯盒の中蓋に半分くらいしかありません。キャベツは半分に切つて塩湯でゆでたものを飯盒に入れるといっぱいになります。これもキャベツのみになると全くいやになります。これを食べないと生きて帰ることができないと思つて、腹一杯になるように何でも食べました。

タンポポや馬鈴薯の葉などもゆでて食べましたが、馬鈴薯の葉の裏側のざらざらがのどに引つ掛かり、なかなかのどを通りません。それでも私どもには大切な野菜でした。今考えると、よく食べたものだ。これらは昔は馬や家畜の食糧と考えてきましたが、収容所に入所以来満四年間、これを繰り返して生活をしてきました。また、私どもはそれでも現役入隊した者ですから若さと体力がありました。召集兵で入った兵隊たちは飢えに我慢ができなくて、夜、炊事場の横に腐った野菜屑の捨て場があるので、その中から凍った馬鈴薯や燕麦の焦げついて捨てたものを拾ってきて、飯盒の中へ入れて部屋のパーチカの上に飯盒を乗せてゆでて食べたりした人たちが多く、下痢を起こして栄養失調で死んでいきました。

北海道 十和田善作

日中、作業のない者は、一日じゅう少しでも動かないよう、カロリーが損失しないよう、自分の寝台に横になり、じっとして夜寒さのための睡眠不足を補填するわけである。また、一番の楽しみは三度の食事であるが、いわゆるカーシャ(日本流お粥)は若干の脂肪分と岩塩で味付けされており、馴れば大変美味味ではあるが、何せ量が不足で、腹はいつも空腹の状態である。カーシャは美味といって、材料にもより、米麦のカーシャは稀で、燕麦、馬鈴薯、高粱などではお世辞にもおいしいとは言われない。量は平均〇・七リットル(七百グラム)〜千グラムの間で、馬鈴薯のような栄養価の少ないものは、時に千五百グラムのおときもある。このカーシャと一人三百グラムの黒パンが一日一回支給される。この黒パン(枕パン)は、三キログラムのを七つに分配するから、一個三百グラムといつても三百グラム強ということになる。この分配がまたいろいろで、並べたパンを取るための順番の順番を決めたりして、各人はまことに真剣である。

このほか、一日砂糖少々と、月何回か煙草の配給がある(主にマホルカ)。これを新聞紙片に包み込み、ツバをつけてとじ、火をつけて吸うわけである。四十何

歳までたばこを吸わなかったのに、腹の足しにと吸い始めた人も多々いる次第である。

東京都 小野正大

毎日の食事は粗末でした。大豆や小豆、トウモロコシに魚とか野菜を入れて煮込んだもので、飯盒の底に少量ずつ与えられ、いつも空腹の状態でした。昭和二十一年の年が明けてもこの作業は続いていました。朝、氷点下四〇度に気温が上がるのを待つて出かけるのです。ソ連人の着た古着のシューバーという外とうはつぎだらけのものばかり。それを着て、靴も底に穴があいているものをフェルトではんばりした靴を履き、氷点下四〇度での作業でした。服装一つにしても、私たちはボロボロの古着に穴あきの靴、ソ連人は羊の皮の服に新しい靴といったぐあい、これがスターリンのやり方なのでしょう。

夕方兵舎に戻り、冷えた体をパーチカに火をつけて暖をとりました。夜は零下六〇度くらいに下がり、窓のガラスがピピシと音をたてて細かく割れるのです。

鉄道作業が終わったところに私は友の家という収容所に行くことになりました。日本人の通訳の人に連れられてトラックに乗り、一時間くらい走ったら大きなラーゲルが見えてきました。そこが友の家でした。通訳の人と二人で一カ月のんびり過ごせるということで部屋に入りました。ベッドは五〜六並べであるきれいな室で、今まで私たちがいたラーゲルとは違っていました。毎日することがないで図書室で本を読みました。

日本人向けの本がかなりありました。小林多喜一とかマルクス資本論とか日ロ戦争とかロシア革命、弁証法的史的唯物論などがありました。そのような難しい本は読む気になりませんでした。同行の通訳の人はハルビン学園を出た人で、十歳くらい上のおとなしい人でした。この学園はロシア語を専門に教育する学校で、卒業生は全部特務機関に入るそうです。その人のおかげでロシア語を

大分教えていただきました。そうこうしているうち一カ月は瞬く間に過ぎ、元のラーゲルに戻る日がきました。

静岡県 斉藤文一郎

(6) 着衣被服類の支給はなかったが、何とか間に合わせて厳寒時は過ごした。

(7) 食事類

食物支給は黒パン二五〇グラム、三〇〇グラム。肉はあまりない。ガラ煮で米飯も定量支給された。

春・夏は野山で芽生えた野草や茸などを煮て食した。

(8) 休日は与えられた。毎週の日曜日は休務日であった。演劇、碁、その他遊びは、同好者が動いて慰勞してくれた。

(9) 収容所は我々が建築した家屋であった(入所当時は幕舎生活だった)。

福井県 佐々木清左夫

また、こんなこともあった。空腹とは恐ろしいもの、馬糞の中に大豆の原形があれば、水で洗って食べた人や、又は鍛冶屋が機具の焼入れに使った水は殺菌されてあるからと言って飲んだ人もある。前者も後者も短命となった。隊長いわく「インドのガンジーは水だけ飲んで三年も生き延びたというから、余り汚いものは食べるな」と。

岡山県 土居一志

バラックの中は、出入り口が中ほどに一カ所で中央に廊下があり、左右に上下二段式で木製の寝台が四人分一組でつくられていて、わら布団と枕にノコギリくずを入れて置いてあった。大切な小さいものだけ枕及びわら布団に隠しておいたので、その分だけは検査を免れて助かった。身体検査は二カ月に一

回。一級、二級は労働、三級は地上勤務、四級はOKで労務なし、ソ連軍医が身体検査する。一日の労働時間は八時間、八時―十六時、十六時―二十四時、二十四時―八時の三交代勤務。食事は一日に三回。パン一食二百五十グラム、アワ一食飯盒の中盒一杯、スープ飯盒のふた一杯、砂糖スプーン(大)一杯。休日は一週間に一回(一時間ほどの使役)。衣類の交換、五月夏物、八月冬物(防寒帽含む)。賃金は二十三年春より三十人中十人くらいの人に支給がある。分配すると一人に対して十五ルーブルくらいであった。懲罰所は所内に一カ所あり、抑留者に味方をした幹部の人がときどき入っていた。零下三〇度、四〇度の寒さで苦勞したことと思う。

福島県 小泉与次郎

着衣については、夏は上衣は綿の衣服、中は綿の肌着上下、冬は綿の肌着上下に綿布に綿が入った上衣、それに防寒靴(ソ連人と同じ長防寒靴)、防寒帽(ソ連製)。

食事は一日三度であるが、収容所より遠方の場所は昼食時には帰らず昼食抜き、夕方時に昼食と一緒にとる。朝は黒パン二百五十グラム、スープ五合、野菜はカルトーチカ一切れか二切れ、昼食はパン百グラム、スープ五合、夕食は粟と燕麦のおかゆ約飯盒の中蓋に一杯くらい、それが一日の食糧の状況。とにかくこれで重労働は無理である。このほかにタバコ一日五本分、砂糖は一日十グラム。

休日はほとんどなかった。娯楽施設皆無。収容所内部居住場所は、コンクリート・木製二階建て寝台窓は明るいほどにあった。その他は何もない。通路は、居住密度の高い人間が通る通路としては狭い。

滋賀県 松村晋二郎

ラーゲルは、どこもそう差異はないと思うが、周囲には有刺鉄線が張りめぐ

らされ、四隅には望楼があり、自動小銃(マンドリンと呼んでいた)を持った歩哨が監視に当たっていた。夜間になると強力な照明灯が真昼のように照らされ、近寄ると射殺することであった。

日課の始まりは人員点呼である。大隊本部前に十人ずつ縦に並ばせる担当の衛兵(将校、下士官が主であるが、兵の場合もある)が一、二、三(アジン、ドヴァ、トウリー)と数えていくが、途中で忘れるとやり直すこともしばしばで、最後の列が端数になると算数しにくいようで、兵の場合は時間のかかることが多かった。とくに暗算、掛け算が苦手なものには驚いた。冬場の点呼は大変づらかった。点呼で忘れられない出来事は今なお忘れない。確か二年目の正月であった。どう数えても一名足りない。衛兵総出で探した結果、別棟になっていたバーニヤ(ロシア式浴場であるが、主に衣服などの熱気消毒に使っていた)で縊死していたのである。一騒動となった。中年の家族のある人で痛ましいこととなった。とりわけ、その年の八月、帰国の夢がかなえられただけに忘れられない。

次は、われわれの命の綱である主食の分配である。いかに公平に分配するかである。主食である黒パン一日一片(三百五十グラム)は昼食用で、朝夕は飯盒のふた一杯のカーシヤ(かゆ)で、大体豆は浮いていないが豆汁であり、黒パンはソ連人でも二百グラム、三百グラムと目方で売られており、ラーゲル(収容所)でも一個分隊(十二、三名か)分を夜食(飯盒に半分くらい)のカーシヤと同時に炊事からあがる。黒パンは高さ十五センチ、長さ、幅とも三十センチぐらいであり、何人分として目方で配給される。班内では人数分に縦横に切り、パン屑まで加えて等分に近づける。秤(はかり)がないので、目分量によるしかない。最後はくじ棒の出番である。いつごろ、だれが考えたのか覚えてないが、帰国まで必要不可欠なものであった。この他、マホルカ(葉も茎も一緒に刻んだ煙草)、砂糖、石鹼などの支給品の分配にも使われた。

黒パンの食べ方もまたさまざまであった。三等分にして、あるいは賽の目に刻んで時間をかけて食べる人、多くの人は夜食のカーシヤと一緒に食べ、一時的とは

いえ満腹感を得るなどで、私も初めのころ作業場まで携行するつもりで袋に入れて枕許において盗まれたことがあって、以来、満腹感組になった。次に石鹼について思い出すことは、配給されても洗濯することがないので、つい雑のうに入れたままになる。毎月ではなかったが、所持品検査が行われ、石鹼は確実に没収される。つまり不必要品と見られるが、配給品は変わりなく支給される。これがソ連流かなと思議に思った。

その他、今思うとつらくみじめであった体験は、栄養失調症になると小便が頻繁になるようである。室外にある便所で小便を済ませ室内に戻ると、体じゅうが氷のように冷えきっているのが、暖房機に擦り寄って体を暖めた後ベッドに入るが、横になるとまた行きたくなるので起き上がるという動作の繰り返しである。何人かの人も同じことを繰り返しながら、目が合っても会話がないという状態であった。

福島県 宮城善一郎

ここで収容所と食料についてご説明したい。収容所は丸太を積み重ねてつくった、いわば山小屋を大きくした建物であり、屋根はコバを葺き、壁の内外に棧を打ち、その上に土壁を塗り込み、白く石灰を溶いて塗ると仕上がりである。真ん中に薪を焚くペーチカがあり、二重ガラスの小さな窓がある。これで零下五〇度の寒気に耐えられる。不潔な囚人が入れかわり立ちかわりした室内の柱には南京虫が敷き詰めに乗っかっており、夜陰となれば一斉攻撃を仕掛ける。

一つの収容所には千名ほど入れる棟数が建っている。入り口には武装したソ連兵が歩哨小屋に立っていて、周囲はほぼ四角四方に四メートルほどの先のところが丸太を並べて組み上げ、その内外に有刺鉄線を張りめぐらしてある。さらに角々には高い櫓を建て、その上にマンドリンを肩に下げた歩哨が昼夜の別なく立っていた。事を発見するとつり下げた鉄路をたたくようになっており、夜間はオイルを浸した布を焚き照明としていた。逃亡どころではない。塀に近づき射殺さ

れた者もいた。

食事は絶対量少なく、次々と栄養失調となり倒れる者が続出し、そして死んでいった。食料さえ十分なら、零下三〇度を超す雪の重労働にも若さで耐え得たと思う。二十年の冬を越し、翌年五月の春を迎えるまでの死亡率は大変なものだった。六万余の死者のうち、その八〇%が異国の凍土に埋められた。五万近い戦友が望郷の念を果たせず死没した。その全部と言っても過言でなく、栄養失調が原因で倒れた。いわば、じり貧の餓死と言える。ちなみに、二十代の若者が一日必要とする重労働者の摂取キロカロリーは平均三千三百五十キロカロリーである。零下三〇度(野外労働の限界温度だったが、寒暖計もない適当なものだった)の野外重労働なら四千キロカロリーは必要であろう。日本兵に与えられたカロリーは千から千二、三百キロカロリーだった。不足分は自分の肉体を消化し、尽きれば骨と皮ばかりになって死を待つばかりである。

石川県 中田 繁

生きんとする本能は食へることが命綱、その本能が無意識にも食物を捜す、それもこれも無意識の本能に食物を捜し求める姿が、実に哀れにも犬、猫同然にもした。人といえども畜生と同様なのだ。しかし、意識という能力が働いて行動する知恵を持つ生物であるがゆえに、またおのずからの守りに強い意識も働いた。生きようとして恥もまた外聞もなくした。だが、食へなくては生きられぬ、生きようとする行動は餓鬼道地獄だ。また食べ物と目をむき歩いた。落ちてくる馬糞の転がりも、じゃが薯でもあろうかと夜の便所に用足す道で拾い、宿舎で空き缶に水煮してみたところ、薯にあらず、馬の糞だった。煮くずれたる糞尿の匂うを見た。野草のアカザ草を食へもした。塩、ホッケ魚の塩出しも必要だった。凍土に捜し求めた食べ物にたまたま毒草があつてか、下痢をし死んだ者、生きようとすると、また哀れに衰えた体は透けて見える。

血も涸れ、痩せ体に吸血の虱も発生し、襲うた。また寝台に群がり巣くうダ

二の猛襲に遭い、またまた生き地獄を見た。着たきりの衣服は汗と埃、脂に汚れ、垢溜まって異様に匂わせた。異臭は虱をたからせた。衣服には虱が蠢いた。その卵が銀粒を光らせて服の縫い目に列をなすほどにもしたのだ。前に居並ぶ戦友の服の襟首に走る虱のパレードだった。痩せた体からしつこく血を吸う虫の、警備兵の怒声以上のしつこさに痛められた。異常発生の家ダニが寝台に散居をして、いざお休みと疲れた体を横たえてうとうと眠りに入れば痛痒く、ちくちくと刺した。腫れて赤く、痛痒くして気も狂わんばかりに苦しめられた。家ダニに寝る夜の来るのが恐ろしいぐらいだった。戦き慄えた。吸うほどの血も失せ瘦せた体に、虱や家ダニに、血を吸うのをやめて、勘弁してくれよ、許してくれよ、もよいものをと泣きたくもなつた。寝台に起き、松樹脂灯の明かりの下で懸命に虱潰しをした。血だらけの爪を眺め、ああ、もつたないと嘆けども、なれども、また我いまだ死なずにいる証なるかなとこの虱の生息に安堵した。

岩手県 大場 正志

食事の、スープに豆類の給食にはまいったものである。食器がわりにソーセージの缶を利用したが、豆が缶の底に一重に並ぶ程度で、サラサラの塩汁で黒パンが百グラムほどだけである。豆類の給食が半月も続くと顔がむくんで、目に生気を失いかける人が増えてくる。野草の生えている時期に多くなる。イラ草、カシヨなどを摘んで飯ゴウで煮て、給食の豆汁に入れ具を多くし満腹感を得るのである。顔がむくんで太った感じの人が日ごとに頬が落ちてくると、死期が迫っているようであった。このような状態になつても休むことができない。七、八カ月くらいは日本の軍医中尉、平川准尉が医務室を担当しており練兵休も比較的容易であったが、九月ごろソ連軍の女医が赴任して以来、厳しく容易でなかった。栄養失調などで望郷の念を抱きながら不幸にして死亡されると、慰霊室があり、食器に盛られた一膳飯を供えるが、いつのまにか供物の一膳飯がなくなっている。こんな状況はいつものことで、抵抗を覚えなくなった。

石川県 餅井 茂

この收容所にも〇〇收容所第〇ラーゲル〇分所という正式名称があったと思うが、正式名称も知らないから、単にアンジェルカの收容所(ラーゲル)と呼んでいた。

敷地は広く(約一万平方米メートル)、中央の食堂棟を取り囲むようにして隊舎、本部棟、医務棟、浴場があり、ウボルナヤは北側隅にあった。周囲は高い板塀に囲まれ、その内外に有刺鉄線があり、四隅の望楼にはカンボーイ(監視兵)が常時監視していて、警戒は厳重を極めていた。

捕虜にとつての楽しみといえば食うことと寝ることだけだったが、この食事たるやまことに粗末なもので、一日量は、黒パン一食(約三〇〇g)に、朝と夕方は粟か高粱のお粥で、これに菜葉の入った塩汁だけだった。

特に二十一年に入つてから食糧事情が極端に悪くなり、一日量は、黒パン二五〇g、雑穀と野菜が二〇〇g)だったが、炊事ではこれを冷凍ジャガイモといつしよに炊き込んだイモ粥にして、食器に七、八分目ほど支給された。しかし、水気の多いお粥ではすぐお腹が減る始末だった。

一方、労働のノルマは厳しく、ニエラポーターは更にパンが減量されて、その分がハシヨラポーターに増配され、三倍ほど大きいパン(最高六〇〇g)をもらつてゐる人を羨望の目で見つめたものである。

このころは皆、餓鬼道に落ちていたから、食事やパンの分配時には、それこそ血眼になつて大きめのものを狙つたものである。この空腹を少しでも満たそうと、春になると雑草を手当り次第に採つてきて食べたが、所内のウボルナヤ付近に自生していたアカザは柔らかく、最高においしいと珍重がられた。また秋には山から茸を採つてきて食べたが、茸中毒で何人かの人が命を落としてゐる。

食糧事情が少し良くなつてきたのは二十二年の後半ころからで、その後、一日の食事は、黒パン三五〇g、雑穀と野菜が四〇〇g、これに砂糖が一八gと

なつたが、これはダモイの時までこの規定量で支給された。しかし満腹感はなかなか味わえなかつた。

給食

静岡県 橋本茂次

第八、第一收容所とも労働はしても給与は悪く、朝はパイ缶半分ぐらいの高梁か燕麦のお粥に、パイ缶半分ぐらいの干タラの塩辛だけのスープ、昼は百グラムの黒パンにスープ、晩は朝と同じような食事で、時には皮付きの高梁や粟のお粥のときもあつた。皮付き粟のお粥は糞詰まりとなりやすく、それで死んだ人もいた。

埼玉県 兵藤真三

一九四五年十二月ホルモリン五收容所三三二分所へ移動するまで経験もなかつたマイナス三七度は、いかに強烈な寒さであつたか。とにかく筆舌に尽くし難く、酷寒とはこんなものかと思ひ知らされた。

食事は朝夕とも雑炊を飯盒の蓋に八分目くらい。昼食は、夕食後に支給される黒パン三百グラムくらいと塩鱈一切れであつた。中でもひどい夕食があつた。それは初のお粥である。大匙二杯くらいの初の入つた粥が飯盒の蓋に半分くらい、一週間くらい続き、最初のうちは初を噛んでははき捨てたのであるが、三日目くらいになると、空腹のためその初もジャリジャリ噛んで飲み込んだのであつた。初も粟やコーリヤンなどの支給される雑穀の中に加えられたようである。腹にたまるものがないので、五日目くらいの用便は初の固まりであつた。皆で狼の糞だと笑つた。また、折角の雑炊の中に梅干と同じ杏の漬物をそのまま漬け汁と一緒に煮込まれ、まるで豚も食わないすっぱい雑炊もあつた。

翌日の昼食用のパンと鱈は当日の食事当番が切つて分配するのであるが、厚い薄いがあるのですべてクジ引き、囲んでいる目はそのナイフの刃先に集中した。パ

ンは就寝の前に胃の中へ、したがって昼食は鱒一切れであった。飯盒に氷や雪をいっばいに溶かし鱒を入れて煮たスープであった。労働時間が終わり宿舎に帰ってから夕食までの時間の長さ、雑炊がたとえ飯盒の蓋に半分であってもそれが待ち遠しく、ただ満腹感を味わいたいたために飯盒に氷を入れて雑炊をいっばいにのばし流し込んだ者もいたが、これは栄養失調の始まりでもあった。食事が終わるとハイエナのように、近くにあるソ連人の家のまわりに捨ててある魚の骨、ジャガイモの皮、スープに出した豚の骨などを拾い、ペーチカで焼き^ひ、一時の腹の足しにした。幾多の戦友が餓死同然で命を落としたが、今日は他人の身、明日は我が身で、飢えた動物と同じ、目ばかりギラギラと光り涙も出なかった。

静岡県 赤堀四郎

衣服類は当初は着のまゝにて、自分で補修するも、乞食以下の哀れな姿で働かされたが、後年は何とか支給あり、困ることもなくなる。

食事情は、入ソ当時は皮つき高粱や粟、小麦、大豆、エンドウなどで、副食は魚、肉、野菜などほとんどなく、ジャガイモ一切れのスープくらい。空腹に堪えられず野草を多食したため、栄養失調者が続発、死亡者が出た。二年目後半ころより、食物も質量ともに若干ふえる。休日はたまにはあったが衣服補修などで、娯楽など不可能。

和歌山県 森中定夫

生活はもう毎日「腹が減った、減った」の連続で、朝食は粟のどろどろしたもの（ロシア語でカーシヤ）を飯盒の蓋に一杯程度と魚のスープ。昼は黒パン三百グラムを朝もらって携行するのだが、作業現場で昼になるころ、冬はコチコチに凍って食べられなくなるので、ほとんどの者は朝食のとき一度に食べ、昼は水道の水で我慢した。水道の蛇口に口をひっつけければ大変、凍りついてしまいますので要領

よく……。

野草で食べられるようなものは全然なかった。中に猫を殺して食べた者もいた。夕食はピン三枚（粉を蒸してつくった薄っ平なもの）と川魚のスープで、夜はなかなか眠れなかった。

たまに倉庫から甜菜を失敬して、甘いもんだから生で食べ、下痢が止まらなくなり当惑したことを覚えている。

馬鈴薯の運搬、皮むきの使役は、皆喜んで参加した。帰りにシュューバ（外套）の袖裏に隠し持ち帰り、ペーチカで蒸して空腹を満たした。黒パンは当初、すえたように食べづらかったが、すぐ慣れた。

シラミはなかったが、南京虫には随分悩まされた。朝起きて見ると敷布が真っ赤に染まっているくらい。そのため熱湯で駆除したが効果はなかった。空腹と南京虫で痒くて眠られない上、日中の作業の疲れで、栄養失調のため倒れる者も多かった。

石川県 村沢藤作

春ともなれば草も萌え、雲雀もさえずっている。

揚げ雲雀 とらわれの身は哀しくも

こんな句が浮かんできた。大空を飛び交う雲雀が羨ましかった。草を摘んで口に入れた。ヨモギの苦さもまた格別だった。少しはビタミンC欠乏症の補充にもなるだろう。

和歌山県 笹内武夫

昭和二十年八月二十一日ころだったろうか、私たちは横道河子を後にして拉古病馬廠に向かう。その日、夕刻に到着した。ここで当分の間、過ごすらしい。住まうとなれば食べる物の心配をしなければならぬ。ここでは、まだソ連軍の指揮下にあるとは思えないほど静かであったので、とにかく、食料の確保が第一で

ある。

空腹の毎日である。そこで、最も手近にある、あるものに気付いたのです。「拉古」に来て私たちは都合のよい人を見つけたのです。辻本さんという方で、牛馬の殺しの達人。幸いここは病馬廠です。何頭かの馬がいる。かわいそうであるが、一頭落として頂戴させてもらうことになったのです。味付けの塩も砂糖も醤油も勿論ない。全くの水炊きです。よく言うが「空腹に不味いものなし」であった。やつと飢えを凌ぐことができた。

岩手県 荒田昌三

収容所の壁に“働かざる者は食うべからず”の標語が掲げられているが、食うために働かなければ帰国への方途がない、という認識に立つて頑張ることにした。しかし現実には、戦利品の輸送がままにならないという理由で、初めは高粱、粟、ポーミ(トウモロコシ)粉の各一品の支給が続く、過去に飽食を経験した日本人にとつては過酷な仕打ちであり、いかに心を卑しいものにしたか分からない。

鳥取県 井上万吉男

食事

食料の配給は一週間ごとにあり、その都度一週間分の献立表を作成して、ソ連軍司令部へ報告しなければならない。朝食は主として粥で、それも米でなく粟や高粱、豆類の混合粥だ。それに乾燥野菜の煮付けがつく。昼は小麦粉と粟粉を混合した粉で蒸しパンを作り(イースト菌を入れているがふくれない)、すましスープ一杯。夜は米、麦、粟などの混合飯に魚一切れ、カロリー計算はできなかつたが、お話にならない粗末な食事でもうにもならない。これらはまだ良い方で、ある時は小豆の塩煮を一カ月間食べさせられたのは閉口した。よくぞ生きてこられたと思う。食うことしか考えない同僚たちは、我ら炊事係の行動を鵜の目鷹の目で見張っており、炊事班長の任務は大変であった。

献立表により出来上がった食事は、毎食配給三十分前に小生が検査し、その後ソ連の軍医大尉である女医殿が検査する。女医さんのハラシヨの合図で食園に詰め、小隊ごとの炊事当番へ渡す。しばらくして個人への配給が終わったところ、舎内を一巡して、満遍なく配給されたことを確認することも大事な仕事であった。

時には、炊事当番の同志からお目玉を頂戴することもあった。配給したご飯を各自の食器に盛りつけたのを見せられ、隣の小隊は山盛りあるのに、自分のところはこれとおり少ないではないか、とやられる。そんなはずはないと思い、念のため計量器で計ってみると同量である。よく点検して見たら炊事当番の悪知恵で、折角の飯を杓子で押えつけ少く見せかけているではないか。何とかして多く食べたい気持ちは分かるが、ここまで頭を使うとは情けない気持ちであった。

ある日のことスープ騒動が起こった。もともと配給の少ない食糧のこと、少しでも満腹感を与える工夫が炊事の任務でもある。今まで、すましスープだったのを、少し濁りがあれば重量感も出るような気がして、千人分のスープは約五百リットルの水でその中に糠混じりの白米一リットルを入れて作った。三十分ほどしたら米粒もふくれて、ややどんよりとした感じになる、そこに岩塩を入れ出上来がりである。一人前にすれば約〇・五リットルの中に米粒が四粒か五粒しか入らない計算になる。配給のときには攪拌して米粒を均等にしたはずだけど、正確には配分することは困難である。杓子運もあり、いろいろあるだろうと思っていた矢先、炊事当番の同僚から、炊事班長見ろの一喝があった。よく見れば六粒程度の班と三粒くらいの差があった。不公平だからやり直せと言うのだ。しかし米粒をいちいち計算することは至難の業だ。米一粒を欲しがるとは貧食は確かであるが、皆の理解を得て容赦してもらった。

衣食足って礼節を知ると言うが、せめて腹六分目くらいは欲しいと思うけど意のままにならず、せめて一回でも満腹感が欲しいということ、じゃんけんをして二食分のパンを食い翌日は昼寝をして我慢していた連中もあり、何とも言え

ない悲痛な思いだった。

熊本県 畠田 完

食事は原則として三回、朝夕は穀類がどこに入っているかわからない汁本位の雑炊で、鮭、鰯、肉、きゅうり、トマトの酸っぱいロシア漬、ジャガイモの煮ところがしなどが副食としてついていた。昼は黒パン三百グラムの配給があり、その配分は皆注視の中で、自分たちで特製した秤にかけ、一グラムも違わないよう、出たくずまで分けていた。その上、抽選である。黒パンの角のかたい所が菌こたえがあり、うまいので、希望者が多いからである。とにかくいつも腹ペコである。手に渡った途端食ってしまう人、夜寝ながら少しずつ、味をかみしめている者、ほとんど夜の内に処分されてしまっていた。明日の昼食は？と考える余裕はなかったのである。

夏は野草を、馬、牛が食うから大丈夫といつて、ゆがいては腹いっぱい食べた。塩もなくそっけないが、ただ腹に入れた。茸の季節になると、大小の色鮮やかなジュータンを敷き詰めたような茸、毒茸がどうかを見分け、ゆでたり、焼いたりして食べた。塩があつたらなああと、塩を敵に贈るという諺を身をもって体験した。

蛇とか、いなごも、カルシウムとして重宝された。特に蝮は貴重な活力源となつた。食べ過ぎて鼻血ブーになったこともあつた。

このほか、釣り針を作つてハエ釣りをしたり、時にはハツ目鰻を取ることもあり、夜盲症の戦友に食べさせて、症状が好転したこともあつた。

岩手県 新沼隆男

ようやく第一〇八收容所に辿り着く。ここで收容所の炊事班長を命ぜられ、戦友たちの炊事に専念する。酷寒のシベリアでわずかな黒パンとカーシヤ(おもゆ状のもの)と塩味のスープで働く戦友たち。食事分配は一グラムの誤差もないよ

うに爪楊枝を使って黒パンの配給である。生命を維持するためのギリギリの食糧である。

あるときの食料受領のことである。いつものように馬櫓でロシア倉庫に行き米や雑穀を受領して、最後に麻袋でUSAマーク入りの牛缶を数えながら入れるのを確認して受領したはずの缶詰が一個空ではないか。早速ソ連人倉庫へ行き抗議したが聞き入れられず、收容所所長に糧秣係の不正さを訴えたが却下される。缶詰は上下とも蓋なので、底の部分を見せて音のしないように入れたものである。薄暗いランプの下での受領であつた。私は結局作業隊に出されることとなつた。今でもあのころを思い出すたびに、戦友たちに済まぬことをしたと自責の念にかられる。

千葉県 宮崎定雄

作業中、蝮を発見、新潟県・佐藤源吾君捕獲。頭を潰し、皮を剥いで私にくださる。昼ごろ殺したものが收容所の夕食時、まだ体をびくびく屈伸させていました。半分食べました。脂肪の強い鯡の刺身のような美味でした。翌朝は体力回復、爽快でした。朝、残り半分食べました。一日中爽快で労働が楽でした。四年間の抑留生活中、ただ一回の体験です。その後、死後数日の乾燥した蝮ももらい、食べましたが、効き目は半減でした。

熊本県 本田正行

衣服は旧日本軍騎兵用の防寒ズボンが渡されていたが、冬は焚き火が多いので飛び火で穴があく。そのうち裏返しにするが白地のためすぐ汚れる。やぶれた穴から綿がさがつて乞食でも着てないような姿になる。親が見たら泣くだろうなど話していた。そこでソ連人に申し込んで、寒くてノルマ達成に影響する、と言うと、しばらくしてから満人用の黒綿入ズボンが渡された。翌日の朝礼で着用しているのは少数だけ。作業から帰ると舎内検査があつて引き上げられ

ている。

岩手県 川口純二

ソ連流に言えば、お前たちが作業ができないと言うから委員会に申し込んで支給したのに着用しないのは、まだ前のが着れると思つて引き上げたと言う。一理はある。そこで我々は身の丈など修正してから着るつもりだったと言つて返してもらつた。翌朝は一応新品着用でケリが着いたが、日本人はとかく良い物はしまつて置き、特に山仕事には古い物で仕事するくせがある。

食物は特に一番苦労した。入ソ当初は輸送の関係といつて二日分の高粱を五日に食い延ばされた。二人で一回に飯盒一杯のオモコ同然の汁を飯盒のフタによそつて交互に飲む。高粱の粒も木の匙でかき混ぜると、時々お目にかかる状態である。それから皆、目が引つ込み、足がだるくて歩くのに苦労しはじめた。

そのうち雪解けとなつてハコベの芽などの草の芽を雑炊の中に混ぜて食うようになって少しは元気が出てきた。どうも輸送途中にソ連兵がピンはねしているとの噂もあり、黒パンにしても重さだから水分を多くして支給するというので、我々はパンより饅頭がよいから、こちらで作るので現物の粉を支給してもらつたことにした。それで朝夕はそれに支給の魚や野菜類を混ぜて雑炊にした。昼は饅頭を作つて配つた。草の芽は雑炊に混ぜて量を増し、饅頭にはヨモギを石でつぶして混ぜて大きくして食べた。そのうち苺やわらびなど山菜が豊富にあり、栄養よりまず満腹感が優先された。思えば我々を救つてくれたクサには感謝している。中には毒草、毒茸を食べて犠牲になつた者もいる。「ヤポンスキー、馬と同じ」と罵しられても、ビタミン補給といつて高級野菜のつもりで食う。

また川では夏はヤマメ、ニジマスなども捕れたし、山には兎、まむし、蛇類、キツツキなどの鳥類はソ連兵をおだてて撃つてもらつた。秋には松の実最高の果物、木の芽出しごろは白樺の幹より出る薄甘い汁のお陰で、空の水筒を持って採つた。二十二年の夏ごろから草のお陰で体力もいくらか回復してきたし、仕事も要領がわかつてきて、時々休日があるようになった。

私らには普通配給の食事しか与えられなかった。ある日の夕食時、伐採作業で疲労も極度に達した日でありました。私は食堂で順番を待ち、自分の食事の分配を受けた。その日は食材が、大豆を煮詰めた食糧でした。一人一人飯盒を差し出して、ソ連人が監視する中で炊事人が柄杓で掬つて入れてくれた。ところが、私の飯盒の中には、大豆が数えるほどと汁ばかりでした。すぐ抗議を申し込んだのですが、彼らは受け合つてくれず、逆に不正を企んだのだといった剣幕でした。

口惜しく、悲しく、断腸の思いで涙を噛みしめて汁だけを啜っている私に、「おい川口、それではもたないぞ、俺のやつを半分やるから食えよ」と肩を叩いてくれた人物がいた。ランプの薄明りで透かして見ると、何と懐かしいではないか。ハルビン鉄道第二〇連帯幹部教育隊同期の戦友、松崎君ではありませんか。私は思わず彼の手を握り締め、感涙にお互い噎び泣きました。

「有り難う、有り難う。松崎よ、お前だつて腹が空いているのに、半分もおれに分けてくれるなんて、何てやつなんだ」とお互いに手を取り合つて、私らは感無量でした。真の友人とは戦友松崎のような人物。極限状況にあつてあのような行動を取れる人物。彼に対してどうにかして礼を尽くしたいと念願して行つた。そして、絶望的な一年有余を経過し、収容所内の人員も入れ代わり分散して行つた。私と松崎も別れ別れとなり、いつとはなしに音信も途絶えてしまつた。

モシカ収容所では、私は作業中、優秀作業者であるとして、幸か不幸か作業大隊長に認められ、ペカルニヤ(パン工場)ベーカー要員(パン製造人)勤務とのこと、決して楽な仕事場ではなかったが、食糧に関連する職場で、一般人より食物に関しては空腹を満たすことができ、ある程度体力を維持することができたのであります。勤務大事にと心掛け、精力的にパン製造に努力した。ここで製造したパンは、マガジン(販売店)に納入するものでした。このパン工場の管理者はソ

連人の、マダムカマンジール(女性所長)であった。

パン製造方法は、積み重ねた煉瓦の室の中に細かく割った薪をサンダル式に組み立て、それを燃焼して、おきを取り出し、窯を焼き、その中に仕込み終えたパン生地を入れた型に流し入れて焼くといった、パン製造方法は原始的なものであったと記憶しております。

昼夜兼行作業で数百キロ近くのパンを製造し、良質な製品を作るべく努力した。抜取り検査でもソ連人検査員からも好評を得、良い実績をつくりました。

風雪の荒れる日、カマンジール(所長)宅よりの帰り道、前方から一台の馬糧を積載した人馬が吹雪の中を喘ぎ喘ぎ突き進んで来た。行き交うとき、私は思わず「くろろうさん、大丈夫か」と声を掛けた。下を向いていた相手が馬の手綱を引いていた顔をこちらへ向けたので、お互いに視線が合った。「おお川口」お松崎か」瞬時に相手が確認できた。今にして思うとき、私は奇跡としか考えられません。

まさに、青天の霹靂とはこの事か。絶叫し合った二人は、しばし手を取り合っても何も言うことができなかつた。収容所で別離したなら二度と会うことはないと言われていたのに……

やがてお互いの現状の立場、様子などなど、短い時間内で話し合った。彼は馴れない馬を使つての荷役の作業を課せられていたのです。私も現況立場を話したのですが、彼は領いただけで、自分はもう現場へ帰らなければならぬとのこと。私は思った。何て心の清い奴なんだろう。私にパン一切れも欲しいの一言も言わないではありませんか。私は松崎をその場に待たせ、収容所に引き返し、パン工場に戻り、グループの組長に事情を説明し、戦友、同期の松崎に持たせるパンと、その場で食べるパンをシューバの下に抱きかかえて、一目散に松崎の所へ持つて行った。手渡された松崎は、目に涙を浮かべ黙したままそれを袋に入れた……

これを最後に、私も彼もお互いにまた別れ別れとなり、戦後復員五十余年、この思い出は決して忘却されることはないのです。願わくば、戦友松崎の御健勝

と御多幸を心から祈念いたします。

給与(食事)

広島県 村中汎雄

所内もだんだん改革され、食事も食堂で食べるようになった。それまでは炊事場から中隊ごとに受領して分配していた。当初は驚のマークのついたUSAの缶詰(この空き缶は食器として利用した)が多く、そのうち満州から取ってきた糧秣になったが、高粱・燕麦が主で米は少なかつた。献立も黒パンと大豆の少々入った薄いスープ、箸にかからぬお粥から、いろいろ工夫され、量は少ないながらも多彩な料理が出るようになった。お茶も献立の中に入れて、その日その日の献立表が掲示され、品数も五、六種類あつたのではなからうか。

こうしてある程度改善されても、並んで食事を受け取る時、パンの厚いもの、汁の多いものに当たると、相変わらず目を輝かした。ノルマ食が出るようになって増配されるグループもあつたが、我々は相変わらずであつた。砂糖は少量ながら個人にも配給があり、薬包のように新聞紙に包んで、ちびりちびり舐めていた。私はたばこと交換していた。

話は飛ぶが、USAの缶詰にしる自動車にしる、戦時中アメリカはソ連に対し莫大な物資援助をしていたものだ。まず武装解除のとき、乗つて来たジープとトラックがUSA、途中で擦れ違ふ自動車は全てUSAだつた。戦車だけはソ連製だつた。おまけに我々捕虜に食わせるほどの缶詰があるとは……当時ソ連も食糧事情が悪かつたはずなのに。

また食べる話に戻るが、冬の間ビタミンCの欠如により壊血病らしい症状が出る。壊血病は船乗りが罹かる病気だと思つていたが、陸地でも罹かる。暖かくなつて野草採りをする。中には毒草を食べて死亡する者も出る。私も蕨を塩揉みして食べたが、アク抜きが十分でなく中毒を起こした。仕事に行かなくてよかつたが死ぬ思いであつた。

夏の終わりに胡瓜とトマトの樽漬けをさせられた。仕込み樽のような大きい樽に塩を撒きながら、ベルトコンベヤーで運ばれて来る野菜を入れるのであるが、生育が悪く小さな胡瓜や青いトマトばかりだ。たまには赤味をしたトマトが届く。早速頂戴して、ロシア漬けはビールのつまみによかったと思いつつながら食べた。

何を原料にして発酵させたのか、『ドロジ』とかいうどぶろくを作った者がいて、飲ませてもらったこともあった。酸っぱい味だったが、ほろっとした気分にもなった。なかにはどこで手に入れたのか、イースト菌を取ってきてパンを焼いた者もいる。これは毎日食べている黒パンよりはるかに美味かった。パンを焼く枠の製鉄工場でちゃんと溶接して造ってきた。不自由な生活の中にもいろいろなことを考えるものだ。

島根県 星野好夫

ハバロフスクの食に対する待遇も悪く腹のすくことは同じだった。一五〇グラムの黒パンと中身の無いスープが飯盒に三分の程度であった。昼も同様で、多くの者は昼食を朝食時に食べ、昼は野草と掘り残しの馬鈴薯を蒸して食べるのが普通だった。

空になった飯盒を腰にぶらさげ重労働への一日であることは、あまりにもあわれであり、悲惨という外に言う言葉がない。

したがって、昼食時はまず畑の馬鈴薯掘り、それにヨモギ、セリ、ガマ、タンポポを混入、固型塩で昼食代用をしたものだった。でもよく体がもつたものと思うが、実は私はセリの中毒にかかり下痢発熱した経験もあった。

おかしなことに黒パンには中の軟らかいところと側の固いところがあり、だれもが固い箇所を欲しかったので、生活の知恵とでもいうべきか、秤を作り、平均に配分することとなり、平穩であったこともある。

乏しい食糧

厳しい労働を強いられながら、それを捕う栄養は極度に乏しく、また粗悪であった。飢えでやせおとろえた体に酷寒、重労働が重なって、ちよつとしたことが死につながり、多くの人が死亡した。当時のソ連の捕虜取扱規則によると、一日、黒パン三百グラム、雑穀三百グラム、野菜六百グラム、油五グラム、獣肉五〇グラム(骨、内臓を含む)、塩一〇グラム、砂糖一五グラム(キヤラメルするときもあった)で、これなら結構な量である。

しかし、実際に捕虜の手に渡ったのは桁違いに少ない。大方は二百グラムにも足りない黒パンが弁当(実際には朝食に食ってしまった)、朝夕はカーシヤ(粥)であった。勿論うすいので箸の必要はなく、すするだけで十分であった。特に生野菜の量が少なく、春になればアカザやきのこを煮て食べた。これは、ソ連の管理者や糧秣受領者がピンはねしたり、地方人に横流しされ、その残りが捕虜の食糧となったためである。当時こんな川柳が盛んにうたわれた。「末世かな、高粱米をはりたおし」。当然米の方が美味しく、高粱の比ではない。しかし、カーシヤ(粥)にすると米は三倍くらいにしかならないが、高粱なら四倍に増える。同じ目方なら高粱の方が堅くなるので珍重がられた。「五分確保、水汲みノルマ一度ふえ」カーシヤはうすくても、一人で飯盒に半分は食べたい。これがみんなの願いであった。この願いを満たすために、炊事の水汲みは一日のノルマを一回余分にするといい意。

岡山県 妹尾正一郎

福島県 相田正明

この時季に極度の飢えと寒さで、故郷を思い「食いていナア」とつぶやき死んでいく抑留者が多かったようです。ソ連側の食糧事情も最悪にて、独ソ戦でのアメリカよりの援助物資であった乾燥トマト、キャベツ、卵などがスープに混入されましたが、ほとんど満州から持ち帰った高粱、粟、燕麦などであり、警備のソ連

兵も手真似物真似で、ヤポンスキーの分、自分たちの食糧が減ったとグチっており、衣食住があつてこそ人間の生活ですが、飢えと寒さの極限の生活では人間も生きるためには「ケダモノ」同然となり、頻繁に配食用の食かん（食物が入っている容器）泥棒や分配された食事の奪い合いで、まるで野獣のような弱肉強食の争いで、すさまじい状態が続きまして。

鉄道建設という過酷な重労働が始まりました。タイセツトを起点として東へ三百キロ付近まで、バイカラーアムールを結ぶバム鉄道建設であります。道路建設と鉄道の路盤工事でノルマが与えられまして、ノルマ達成の作業隊は食事の増量の確約と、そして完成すれば間違いない「東京ダモイ」であり、働かざる者食うべからずとケンかけられました。

シベリアの夏は白夜であり、夜中の二時ごろより夜が明け始め、午後の十時過ぎが日没であります。労役の時間は、午前八時三十分収容所の門があき、厳しい人員点検を受けて出発、帰門は午後十時で、約十二時間の重労働で、東京ダモイを信じて白夜のシベリアの夏との闘いでもありました。長い一日の作業中の食事休憩（食事は大きな樽にスープやカーシヤを詰めて馬車で運んでくる）には原野の草（セリなど）をスープに入れたり、モグラ、カナヘビなどの小動物を見つけて、火を焚いてスコップの上で焼き、何でも食べました。食事をとつても年じゅう、空腹状態にて、場所によって山百合を見つけ、その球根と小動物を練りまぜてスコップを鉄板にして焼いて、腹いっぱい食べたときは生きた心地がして、当時は最高の思いでありました。

秋になるとキノコが出るので、みんなで奪い合つて探しました。ソ連兵はキノコは下痢すると注意しましたが、我々が食べるので驚いておりました。ここで死んでなるものかと、親を思い故郷を思い、「東京ダモイ」を夢見て、気力をいつもみんな持ち続けました。神奈川県

宮沢信行

昭和二十年入ソ当時の糧秣の支給量は、将校と下士官、兵とは当初食糧の

内容が少し異なっていた。将校は本来、国際法で自活作業以外の労働を課することを禁ぜられているのだから、将校に対しては量より質を重んじた給与が行われた。であるが、炊事設備の関係上、実際には将校、下士官、兵の間は区別なく行われ、昭和二十二年以降は全く区別はされなかった。ソ連当局が捕虜の逃亡を恐れ、炊事場に食糧の保管を一切認めなかったため、一日分ごとに支給されるものを、そのつど使い切つてしまわねばならない。そのため料理は単調にならざるを得なかった。

その献立は

朝 黒パン、スープ

昼 黒パン、雑穀がゆ

夜 黒パン、スープ

要するに、黒パンと雑穀がゆとスープの三つが食事の基本で、どんな激しい徹夜作業でもこの規定の食事以外に夜食など支給されることは決してなかった。

（グラム）昭和二十〇二十一年 昭和二十年夏冬 昭和二十一年

年以降

黒パン	三五〇	三〇〇	作業量による	三五〇
雑穀	四〇〇	二〇〇	〃	四五〇
野菜	四五〇	六〇〇	〃	八〇〇
魚	一〇〇	一五〇	一〇〇	一〇〇
肉	五〇	五〇	五〇	五〇
油	一五	一〇	一〇	一〇
塩	二〇	一五	一五	二〇
砂糖	一八	一五	一五	一八
茶	三	三	三	五
みそ	三〇	三〇	三〇	三〇

右の定量は少なくとも昭和二十二年以前は有名無実であった。

右が食糧配給の実情であるが、厳寒冷地においては寒さに耐えるには不足である、当時の元軍医の言である。なお、厳寒地であるために野菜の供給が不足し、そのために壊血病が発生し、歯茎から出血、鼻血、切り傷からの出血が止まらない、鳥目などで医務室は大混乱であった。私なども入ソ時は体重が十六貫ばかりあったのが、たちまち八貫くらいになり、座っていると尾てい骨が痛く座つてはいられなかった。以上のごとく、わずかな食料分配のため、その苦勞が絶えず、天秤棒の計りを作り、しかも数人が見張りでの分配であった。

ちようど入ソ当時、ソ連自体も大飢饉で、ソ連人自体も食糧状態が悪く困窮していたようである。ましてや我々日本人捕虜はなおさらである。入ソ当時、栄養失調で亡くなる人が後を断たず、作業中の休憩で隣に座っている者が、作業開始でも立たない、どうした、と見ると死んでいる。兵舎に帰つて来て椅子に座つたまま死んでいる。

夜寝てそのまま起床時に起きてこぬ、なぜだろうと見ると既に死んでいる。私は考えるに、現地召集で急いで入隊した人、補充兵で軍隊経験の浅い人が多かったようだ。今でもよく私が話すことであるが、昼食の現場でもらった物に飯盒に半分くらい水と小豆の粒が四粒入っていた。これで一日中ツル／＼やシャベルで土工作业である。道を歩くにもただ食べることのみ考え、日本へ帰ることも忘れた。

兵庫 森田 純

食事ですが、約半年間は高粱のおかゆというか、ぞうすい小魚入りでした。その次はトウモロコシの粉末のぞうすい、次は粟と大豆煮物で、昭和二十三年ころは食料は燕麦のぞうすいで、米の飯は一粒も食べませんでした。こういったぞうすいに黒パン一切れ（縦七センチ・横十センチ・高さ十二センチぐらい）と岩塩小さじ一パイと砂糖小さじ一杯ぐらいが一般の人々の食事でした。その他は自分で工夫するしかありません。例えばアカザ、ノビル、春から夏にかけての雑草の

新芽を摘み、岩塩で煮るより方法はありませんでした。また糖分などほとんどなく、正月とメーデーには燕麦でつくったようかんが炊事からあがるくらいで、他にはシラカバの木の芽がでるころ、木にゴム液をとるように傷をつけ、その液水が少し甘味を感じる程度の水を飲むぐらいで、長く続きませんでした。なぜかという、シラカバの芽が出てしまえば甘味のある液水は出ません。

概略の食生活の様子です。飢えと戦いながら一日一日生き延びるのが精いっぱいでした。食べる物はすべて食ったように思っています。いま考えればどんな苦しい生活でも生きることに関しては自信もっています。

次に、衣服などはほとんど支給されませんでした。洗濯も余りできず、水洗いぐらいでした。それと、衣服のシラミに困り、月に一回ぐらいの滅菌があり、そこに出して高温でシラミ退治をしていたのですが、二三日ぐらいしかもちません。二千人余りの人々の肌着でするので、簡単にはいきませんでした。靴は、軍隊の革靴は破れ、その代用に靴底は木製で、上は布ばりの靴でした。すぐに破れたり、底がこわれて使用できませんでした。冬はフェルトの長靴で、これは少し助かりました。

宿舎内の生活は二段ベッドで毛布四〜五枚程度で昼間の服装で寝ていました。特に冬は足に毛布の破れを巻きつけ、零下五〇度ぐらいの夜は防寒帽を着て寝ていました。当直がいて、一夜じゅうストーブを焚きつけて暖をとっていました、どうもいい気温には勝てませんでした。衣服を補修しようと思っても針も糸も布もなく、針は針金で作り、糸はマータイの麻糸をほぐしてよりをかけて作り、布は作業場でひろい補修をしていたのです。それも日曜日しかできませんでした。

ラーゲル内での生活は衣食住の生活を全員が助け合い共に強く生きる生活をしてきたと思います。だが生死をさまよう生活、特に過酷な労働（ノルマ）と食生活の貧困には隊員全員が困りはてました。日本人の要求はソ連人に通じません。ただ頑張って生きるしか道はありませんでした。いま回想すれば、生きていくことが不思議に思えるわけです。

ただ全員に同じ死ぬなら日本に帰って死にたい、カマンジュールになぐられようが、営倉に入れられようが、絶対に抵抗せず、内地に帰ろうという、ほんとうに精神力で生き続けたと思います。召集兵の人は高齢者もいましたが、特に高齢者には精神力で生きようの一言でした。

和歌山県 河端亨之

私は、二十年十一月中旬にタイセット地区ネーベルスカヤその他二カ所の収容所に移動したが、労働の厳しさに屈することなく過ごしてきたが、思えば、食事についてはこの収容所も変わらなかったことである。

とにかく、四年間にわたり、四度の正月を迎えたが、一度も米の御飯でお正月を迎えることはなかった。四年余の抑留生活は「高粱のお粥」のシヤブシヤブと「黒パン」でやつと生命を繋ぎ得てきたのであるが、それだけでは栄養不良になって倒れる者がいたのは事実で、当初のネーベルスカヤでは、春四月までは厳寒の雪の中で野草や「きのこ」を採ることもできず、特に栄養失調症状の者が多く出ましたが、私はそれほどのこともなく過ごせました。二回目の移動のあったころからは、春芽時の山、野で山菜や野草、それに「きのこ」「木の芽」も採れましたので、毎日の同じような食事に少し色を添えたことになり、栄養補給の足しになったようです。寒さから解放されたことの「生活の慣れ」というものであろうか。

本当のところ、私は徴兵検査以降、現在でも変わらず体重は六十五キロぐらいであるが、抑留中の最低体重は五十キロほどになった時もあった。それほどに抑留中の苦しさは筆舌に尽くすことはできないことであり、特に栄養維持のことについては、私事だけではなく、抑留者全員が一日も忘れてはならない最大の重要課題であったが、ソ連側当事者の政治上の認識の不足と収容所への中央指令の不備については、事ある度に思い知らされました。

広島県 難波繁男

我々の食糧を積んで来るソ連兵が途中で横流しをし、着いた時には六〇％くらいになっていたことが度々あり、一食分黒パン二〇グラム、キャベツとジャガイモの小さいのが三切れくらい入った塩味のスープが飯盒三分の一、これだけ。到底重労働には耐えられるものではないので、山で草、野ネズミ、ヘビなどを取り飯盒で炊いて食べ続けたこと。以前から、何回かの所持品検査で、満州から拉致された出発のとき、背囊にいっぱい詰め込んだ品物はほとんど盗られてしまい、隠し持っていた腕時計も空腹には耐えられずに黒パン一個と交換してしまいました。

滋賀県 小西信太郎

夏季には、食べる草はみな食った。長い長い冬の終わる五月の中旬になると黒い土が現れて、タンポポの若い小さな芽が出る。それを掘り起こして、芽はもとよりその根を、少し苦いが噛みこんで空腹をやつと凌いだ。また、ソ連の家庭の残飯桶を豚のように探し求めた。

実に「地獄絵図の餓鬼道さながらの様相を呈した」のであった。

東京都 植原秀一

ソ連製の小さいサイズのシューパーは、全てのもが凍りつく冬のシベリアで私の命を守ってくれた命の恩人であり、つらい体験を共に過ごした仲間とも言うべき思い出の品である。今は記念館の展示品となっているシューパーを思い出すと、日ごろは忘れていた五十数年前の出来事が、ある場面はおぼろげに、ある場面は昨日のことのようにはっきりと思い出される。

何しろ凍りつく厳しい寒さの中、ちよつと作業してはすぐに焚き火を囲むことになるが、日本軍から支給された布製の外套は、焚き火の火の粉で焦げてしまふような物で、とても厳寒に耐えるような代物ではなかった。

外套は単なる防寒着ではなく作業衣でもあったが、小柄な私は、支給された

外套が大き過ぎて作業中もずる引きずり、とても作業に適したものでなかった。どのようにして大き過ぎた外套が交換できたのか、今でははっきり覚えていないが、幸運にもソ連製の小さいサイズの毛皮でできているシューパーが手に入り、とても大助かりだった。

そのとき、『これはソ連製なので、何かあったらすぐに返すように』と言われたが、ついに取り返しに来ることはなかった。

北海道 村田 努

そんな生活の中でも楽しいこともあった。大勢の中には器用な人もいて楽器、太鼓、ラップ等を作り楽団を編成して労働歌を演奏してくれたり、一週間に一度盃に半分くらい砂糖の配給があったり、煙草を少しではあったが支給してくれた。日曜日は共産主義の教育があったり労働歌の練習があったり、南京虫退治の日もあった。マルクスの教える共産主義で感じたことは、健康で真面目に働けば食うことに心配はなく、能力があれば国費で大学にも行ける。大学生でも日本の管理職クラス(係長、課長)の給料が手当としてもらえるということだった。

岩手県 崎田正治

食糧事情が極度にひどい時期があった。一片の黒パンと飯盒の蓋に半分のスープが分配された。わずかの塩味に赤エンドウ豆が五、六粒入っていた。非人道的な食糧でも作業には駆り出された。夕食のパンの配給を受けるため炊事場に行くときは、隊ごとに運搬者のほか護衛者が数人は付かなければならなかった。それは空腹に耐えかねた他の隊の者達が襲ってきてパンを強奪するからで、食べ物に恐いものだと思った。

ある時一人の兵が黒パン一片を素早く隠したが、食べ物については敏感な人の眼はそれを見逃さなかった。その後のリンチは正視できないほどであった。

作業場への往復には路上に落ちていくジャガイモ、キャベツの葉一枚でも拾って

帰り、煮て食べた。夏になればソ連人の作業監督の目をこまかしてジャガイモ畑に入り、ちよつと失敬した。食糧倉庫の運搬等には時間外の作業でも志願者が殺到した。作業出発前に小袋を用意したりズキンに脚絆を巻き出発、こぼれた穀物等をズボンの中に詰め込んで収容所に持ち帰り食の足にしたが、多数の戦友達に栄養失調の徴候が顕著になってきた。

多少食糧事情が改善され始めた頃「ノルマ給食」が始まった。これは作業の労働量に応じて食事の量が配分される方法で、炊事係はソ連側の指示に従い大、中、小の計量容器(缶詰空缶)を作り窓口に備えた。一般作業員には数日後現場監督からソ連係官を通じ作業成績が通知され、それにより成績に応じた「カード」が渡され、その日以後の食事が決まることになる。私は隊で一番「ハラシヨラポーター」として一〇〇%以上「ノルマ」達成したので、それなりの食事が食べられた。しかし「ノルマ」達成できない仲間は極寒と苛酷な作業のため倒れていった。また、朝うつらうつらした眠りから覚めると昨夜話をしていた友は二度と目を覚まさなかった。その時は、いつ自分もそのような憂き目に遭遇するかわからない淋しい気持ちになった。

当初私たちは軍服を着用しており、着替え用の軍服、下着類、毛布、飯盒、水筒など携行可能な限り背負って収容所に入ったが、携行品は食器類を除きすべてソ連側に没収されてしまい、着の身着のままになってしまった。したがって洗濯もできず、入浴も三週間に一回程度なのでシラミに悩まされ、はなはだ非衛生的で人間的な生活ではなかった。入浴はすべて蒸し風呂で、長椅子に腰を掛け蒸気熱で汗が出るのを待って体を拭くという具合であった。室の一面を区切って消毒室が設けられ、脱いだ衣類は各人の名札を付け一括して室に入れ滅菌消毒をした。入浴が終わり、消毒された自分の衣類を探し着用しようとする回数不足していることもしばしばであった。

岩手県 橋本達夫

入所当時は、先の戦闘のための一般的な身体の衰弱に加えて、零下三〇〇〜四〇度もあり毎日の食料も極端に悪く、一食当たり黒パンはタバコ二個分の大きさ、それにスープ(米のおかゆ等)が飯盒の蓋一杯分程度であった。しかも作業は重労働である。

食料の分配のときはすこかった。これが日本人かと思った。全員立ち会いのもとに黒パン一個を数人で分けるのに厚いの薄いのとか、塩味だけのスープをスプーン一杯分多いの少ないのと、目の色を変えての騒ぎである。人のことより自分の命である。その分配の姿はまるで地獄だと思った。しかし誰がこれを責めることが出来るであろうか。

岩手県 佐藤竹男

支給された黒パンの紛失事件、分配をめぐるトラブルが日常茶飯事的な一時期もあった。したがって黒パンの受領には、当番の外に監視が一人とそれをまた監視する一人、つまり二人が左右について受領したのである。猫、ネズミも食った。蛙などは上等の食べ物だった。食べられそうな物は何でも食べた。わらびの根は冬なので掘ることができないので茎を煮たが、全く食えなかった事も思い出の一つである。白米が支給になったときも分配し、一粒単位の分配ができなくなると小刀で一粒の米を切り割って分配したのであった。暗い穴ぐらで煤で顔が真っ黒で目だけがギラギラ光り、大の男たちが米粒を分配する当番の手元をまじろぎもせず見つめる真剣なまなざしも鮮やかによみがえるのである。また、スープを分配するときは、マスですくう人ともう一人スープの具が片寄らないようにかき混ぜる専門が付き、息を殺して監視したのである。

福島県 大室 清

トイレは深さ二メートルくらいの穴を掘り、長さ十メートルくらいのところ

丸太を長々と渡し、それに両足を開いて用を足せる幅に細丸太を二本並べて足場にしたもので、まわりは萱で囲い、斜めに屋根をふいて雨風をしのぐといった粗末なもので、もちろん両脇に仕切りなどがある訳でもなく、野郎同士だから恥も外聞もない。

ソ連の煙草でマホルカ(何かの幹や枝葉を乾燥した物で、ちょうど材木を切るときに出るオガクズ状の物である)を新聞紙片にパラパラつとのつけて、くるくると器用に巻き、紙の端を舌でペロリとなめ唾でくっつけて、隣の人に「火をちよつと」とか言って貰い火をしながら、煙草をふかし用を足す。大便の用を足して、紙の代わりに萱の穂を使うなどは当たり前である。

零下四十度、五十度の寒さといっても、その寒さは経験した者でなければ考えられないと思う。小学生のときだったか、先生が「大陸の寒さは小便もチンポの先からツララが下がる」なんて話をしたことがあったが、そんなことはないが、まず地上に落ちるか落ちないかのうちに凍ってしまう。だんだんトイレの方が高くなり山積みになっていく。冬の罰則に便所掃除というのがあった。コツチン、コツチンに凍った大便、小便を鶴嘴で崩してモッコで運ぶのだ。パチンと弾いた便のついた氷が顔にはねる。口についた氷を袖で何気なく拭き取る。汚いなど感じる余裕はない。動物の心理もこんなものかもしれない。日本製の靴で、中に毛のついた防寒靴などはあまり防寒の役に立たない。靴の中にペルチャンキ(足巻布)を巻いても完全ではない。下手をすると凍傷になってしまう。一つだけソ連の物で感心した物がある。ベジンスキという靴で、ソ連製の、カートンキという動物の毛を圧搾して作ったサンタクローズが履いているような靴だった。これだけは零下何十度の中でも寒さ知らずの最高の履き物だった。だが、いったん濡れると乾かしても駄目だ、氷の履き物と化してしまう。

冬で悩まされたのに「南京虫とシラミ」がある。作業で疲れて床に入り、とろとろとした頃、チクチクと歯形を二カ所ずつ残して血を吸って逃げていく。その逃げ足の早いこと、明かりをつけたときには姿は無い。また、虱は腹巻き、シャツ

の縫い目という縫い目に隙間なく卵のオンパレード。爪と爪でパチンパチンと生ぬるいことなどやつていられない。いらいらして、縫い目を歯でギジャギジャと噛みパチパチと潰してはみるが、一部だけの退治にしかならない。月に数度バーニヤ(入浴場)の時間がある。バーニヤに行く到着している物を全部脱ぎ浴場に入る。その間に衣服は消毒釜のホルマリン蒸気で熱気消毒され、入浴場の反対側を出るとき受け取るようになってる。入浴と言ってもお湯にぎぶんと入るのではない。小桶二杯のお湯で頭から体を洗う。入浴中のみんなの後ろ姿を見たときには涙が出てきた。肉はほとんどなく、立っている後ろから肛門が見えるのだ。よくもこの体で重労働にたえ、頑張っているものと感心すると同時に、ソ連の、捕虜に対する仕打ちに無性に腹が立つが、敗戦国の立場では、諦めて早くダモイ(帰国)の現実を祈るのみであった。また、ときどき毛を全部剃られるには参った。陰部の毛などは伸びる際チクリチクリと痛い。

千葉県 伊藤千次

山の薪切りも任務が終わり町の収容所に帰ってきた。船での炊事班長柳川軍曹が待つていた。「炊事班に來ないか」と誘われた。多い時は千人もおおり、五右衛門風呂の四、五倍もある大釜、水を入れ米とか燕麦とか雑穀とかその日によって違うがカマスのまま中に入れ、エンピでかき回しゴミをすくい火をいれる。雑である。水はたっぷり入れ火を点ける。沸騰してからしばらくこと煮る。九時頃には明日の朝食ができ上がる。蓋をして朝までゆつくり蒸らす。人肌ぐらいの温度に保ち糊状になつている。体のためのお粥か胃袋を満足させるためか、とにかく量を増やして分配する。昼食は黒パン、夕食は糊とスープ、塩湯にきゅうりとかキャベツ、塩鮭とか小魚、たまには豪華にタラバガニのときもある。一抱えもあるようなタラバガニを鉋でぶつぶつ切りスープに放り込む。でき上がると味見をし殻は釜に戻しておく。

糧秣受領は炊事の係と歩哨と各中隊からの使役で行った。倉庫の係は倉庫の

物を取ると怒るが計量してトラックに積んだ物を取つてもとがめない。ついて行つた歩哨はトラックに積んだ物を取ると怒るが倉庫の物を取るとはむしろ勧めで仲間に入ることもあつた。使役は各中隊ともベテランが選ばれる。大きな魚のときは小魚、米のときは麦とか大豆または缶詰とか、トラックの中ではつきり受領品と違う物を倉庫の係のスキを見てかつ払う。取る物を決めて歩哨が倉庫係の気をそらすこともあり、帰つて来て山分けした。

糧秣受領で見つかった兵隊があり、衛門横の重営倉に入れられた。寒い時期だったので鉄格子の中でペーチカが焚かれ罪人はぬくぬく、外で歩哨に立つた日本人ががたがたふるえていた。おかしな話だが、衛門所の歩哨も暖を取らないので重営倉の歩哨も仕方なかった。

東京都 嶋崎武男

シベリアは六月末になると、日本の梅雨に似た雨がしとしとと毎日降つた。この時期はそれまですべて氷結していた川の水が一斉にとけ出し、雨水と重なつて道路という道路は水に浸り昨日までの雪原は泥沼と化し、交通は完全に途絶した。そのためシベリア鉄道沿線から輸送されてくる食料は、パツタリ止まつて、収容所は陸の孤島となつてしまふのが常だつた。十日二十日と過ぎるとやがて食うものは何もなくなつてしまつた。わずかに生えてくる草は手当たりしだいに食つた。馬糞を拾つて丹念にお湯で洗い流し、中から出てくる消化していない麦を根気よく集め、これを空き缶で炒つて食べた。早く草が生えて欲しい、そうすれば草が食える。木の芽が出て欲しい、そうすれば木の芽が食える。昨日の朝は右隣に寝ていた仲間が死んだ、今朝は左隣の友が死んだ。いったいあと何日生きていられるだろうか。今にしてみれば死ぬことはたやすいことだ、生きようとすることの方がどんなにか辛い。

それにしても、この大戦にアメリカはまだ余裕があったのか、ソ連のシベリアの果てまでUSAのピカピカの缶詰が回っていました。それに比べてソ連は、軍備は強かったのですが食糧事情は貧乏であつたのでしょう。物資は満州より略奪したものばかりほとんど運んで来ました。

さて、衣の方とて我々も着の身着の儘で、抑留後だんだんと衣服も破損して着替えもなくなりました。冬ともなれば防寒服なしで過ごせないので囚人の服や帽子を着せられました。さすがソ連の兵隊さんらは羊の毛皮の外套や帽子を被っていました。我々は綿入れのジャンパーというか上着を着て作業に出ました。特に赤い星のついたトンガリの防寒帽を支給された時は情けなかつたものです。

二年三年たつて衣食住も少しはよくなったように思います。衣もちよつとは小ざれいになり、風呂に入るたび(週一回)脱衣場で脱いだ下着は洗濯され、デザカメラ(火力乾燥滅菌室)に入れ消毒された下着を着衣場の方で着るといふシラミ等の対策がなされ、食もアメリカの缶詰の空缶で飯金のある兵士が上手に皿やスプーン碗を作つて、食堂は飯盒なしで行けるようになりました。

住の方も、収容所の建物に壁を塗つて、上に石灰のとかしした汁をハケで塗り、白い建物となりました。何年目頃だつたか売店さえ出来、ノルマの高い人は何ルーブルかもらえ、パンぐらいは買えるようになりました。そして正月には練の腹から数の子をとつて三種の肴にとお正月気分を味わいました。五月のメーデー、十月の革命記念日には休日で、楽しい日もありました。

一方、毎日の作業はノルマ達成のためソ連側から色々指示され、作業隊長も大変だつたようでした。第一、少量の食事に腹は満たされず、みんな栄養失調で我ながら骨がゴツゴツして見えてきた。歩む足もにぶかつたが、言われるままに初めは伐採作業や鉄道の建設の方や保線作業、貨物の積み下ろし——この作業では、食べるもの場合はちよつと失敬して腹に巻いたり長靴の中に隠して持ち帰り頂けるのが楽しみでした。しかし、衛門で検査に引つかかたりしたこ

ともありません。

十二月の暮れになるのにアルマタ収容所所長から一言の知らせなく、「ソ連では今度の正月の休みはないのかなあ」と所内でも口々に話し合ったが、三十日の夜隊長から、「所長から全員への申し伝えとして、正月は休日で、全員に飯盒一杯のぜんざいを馳走として振る舞い、ゆっくり休んで食べてもらう」とのことであつた。このことは入ソ以来の特筆すべき所内ニュースであり、そのことを子供のうちに純心に喜ぶ私たちの姿は、一面には食に飢える畜生道の人間性の姿とも言えるもので、修行道の「六道輪廻」と申して、「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天」の六界を廻つて十界ある残りの「声聞・縁覚・菩薩・仏」の四界あるを忘れて人間生活を行じていることの誤りを自覚しなければならぬのに、抑留生活の実態はまさに「六道輪廻」の連続であつて、人間生活でなかつたと断言できる。それはどソ連邦での抑留生活は「ひもじく、苦しい」ときの連続であつた。

建物は、小高い丘陵地の原野に縄文時代の先住民の住居跡に見られるように穴を掘つた掘立式の木造建築である。そして屋根は天井兼用の板を並べ、その上に土盛りがなされており、しばしば雨水の漏水に悩まされた。内部は、土間に丸太の柱が二列に埋め立てられ、その柱に腕木が二段に取りつけてあつて、木には幅五十センチほどの板が並べられ、上下二段になり、これが寝台となつて一本の丸太を中心にして四人が共用するようになっており、室内の照明は中央に裸電球が一個設けられていた。

半地下構造のため採光、通風は極めて劣悪であつた。しかも十日に一回程度のシャワー浴があるのみで、作業衣もパジャマも同一で不潔なため南京虫や虱の温床となつて、非衛生的な生活環境下での生活を強いられ、これには随分苦勞

させられた。

所内には水道施設は一切なく、炊事、シャワー室用の水はタンクローリー車によつて街から運んでいた。したがって、起床後の洗面とか、用便後また食前の手洗い等の習慣を全く忘れた日常生活であった。

特に苦痛を感じたことは、一片の紙も支給されないために、排便時の後始末には、毎日のことでもあつてほとほと困惑した。草葉とか小石、あるいは木片等を利用して始末を済ませたものである。したがって、作業現場では常にこうした物に留意して取得し、携帯したものである。

入所当時各自が所持していた豊富な関東軍の被服も、作業に出た留守中に再三行われる私物検査の名の下にすべて押収されて、着がえの被服は一枚もなく、もちろんふんどしとかパンツ類もなく、文字通り着のまゝの全く身軽な身辺であつて、抑留中に個人的に洗濯した記憶は全くない。

被服の洗濯については、十日に一回程度のシャワー浴があつて、その際、入り口で裸になり、出る時は反対側の出口に用意してある洗濯済みの被服を着装する仕組みが行われていた。また靴下についてもかえがなく、破れて使用できなくなつた後は、布切れを足に巻きつけて代用していた。

バリカンとかカミソリについては所内に二、三組備えつけがあつたが、個人的には所持することは許されなかつた。器用な同僚は作業現場で鉄片を拾い、これを加工してハサミとかカミソリらしき物をつくつて、どうにか仙人の姿にはならずに済んだ。

さて、人間社会には本能というか、必然的な三つの欲望があるとか。すなわち食、物、性の三大欲望の中で、各自の主観によつて異なるであろうが、私の体験では食欲が一番肝要であろうかと断言することができると。昔の言葉の「衣食足りて礼節を知る」という言葉がしみじみ痛感させられた。

支那事变当初の流行歌に「父よ あなたは強かつた」の歌詞の一節に「背もとどかぬクリークに 三日もつかつていたとやら 十日も食はずに……」と歌われて

いたが、私は抑留生活実に一千有余日の毎日が空腹の連続で、なおその上に強制労働を強要される。このような悲惨な生活が他にあるであろうか。

腹痛で診察を受けても休養は認められず、発熱の場合は文句なく作業休が許された。

さて、私たちの食生活であるが、朝食はパン一切れ（一斤の食パン四ツ切り）とわずかに豚肉の匂いにするスープを飯盒の蓋一杯。作業場での昼食は、重病人食のお粥（カーシャ）が飯盒に約半分、箸もスプーンも不要で流し込める。夕食については、朝食と同量の黒パン一枚とスープが飯盒におおむね半分の量であつて、三食分を二度に食べて空腹がおさまる量であつた。

関東軍の給与でつくられた強靱な体も、このような粗食「スターリン給与」で、果たしていつの日か訪れるであろう帰国「ダモイ」の日まで耐えられるであろうか。作業現場で枕木運搬をすれば、この大きさのカステラ一本が一度に食べられるであろうか、また、電線の束を運べばこれくらいの大さきのドーナツが何個食べることができようかなど、同型の物を見ればすべて食物が連想され、全くの餓鬼道に墮ちていたのは私一人ではなかつた。

熊本県 大阪公夫

以来満四年間、夏衣が支給されれば夏中、冬衣が支給されれば冬中、その一着で作業に出るときも寝るときも過ごした。確か毛布が一枚支給されたのは一年以上過ぎてからだったと思う。持ち物として何一つなく、以来満四力年間、寝台だけが食事の場所であり、休息の場所であり、すべての生活の場であつたことなど、今日の日本人にはいくら話してもわかつてもらえないのは誠に残念でもある。

支給される食事はあまりにも少量で同配分であり、私のように体の小さい者はどうにか辛抱できたが、中には入隊前力士だった人もおり、体の大きい人ほど短期間のうちに目立つほど痩せて、これには同情した。

一週間に一度は桶一杯の配給の湯で入浴できたが、出るときは陰部の毛などを全員剃らされた。日用品の支給として全くなく、タオル代用にはボロ布を使用したが大変であった。入浴は一週間のうち四回、二時間で約二百五十人が終わらなくてはならない。そのとき、シラミ駆除のため被服の乾燥があるが、一度乾燥室が火災となり、私もそれまで使用していた軍服を焼失し、栄養失調で死亡した人が着ていた、小便でガバガバになった被服を渡されたが、不平不満は通用せず、あのとときの気分だけは今も忘れることができない。

東京都 飯塚年男

二〇九分所は、私たちがテルマに入ったときは内部は荒れていたもので、掃除をし、ストーブを直し、あちこち修理して入ったが、十畳ほどの板の間を幾つか仕切つてあつて、その一つ一つに一五、六人寝た。寝巻きがあるわけでないし、脱いだものを置くところもない。それより何より寒い。みな着たまま寝るので、上を向いて寝る余裕はない。頭と足を交互に二列に並んで、横向きになつて寝るのである。夜中、便所に行つて帰つてくると、横向きの人が上を向いて寝ているので、自分の寝場所がふさがつていて、ない。この辺かと、寝ている人の間の上に乗つて寝る。いつの間にか入り込んでゐる。大の字になつて畳の上で寝たいものだ、と話し合つたものである。しばらくの間、こういう状態が続いた。

シベリアにおける私たち捕虜の最大の関心事は、食べ物であつた。少しでも栄養をつけてダモイまで生きていなければならぬ。收容所から与えられる三度の食事、これは質・量ともにいたつて貧弱だから、手に入る食べられるものは何でも食べた。ヘビやカエルは無論のこと、ネズミでも、名も知らぬキノコや野草まで食べたが、野草など一抱えほどゆでてもにぎりこぶしくらいになつてしまふ。キノコなどは見つけ次第何でも食べたので、中毒で死んだ人も出て、收容所からキノコの採食禁止令が出たほどである。

朝は、パンとスープ。パンはいわゆる黒パンで、小麦や燕麦は上等品で、ほとん

どがトウモロコシやコーリアンの粉、ひどいのはコーリアンのふすまのパンで、これはやつとの思いで食べたものである。昼は、パンと生の塩ニシン、包むものはないので、外とうの襟の中に入れて持つていく。場所によつてはスープをボーチカ(たる)で運んでくれるところもある。夕食は、カーシヤといつて、穀物を炊いたもので、ほとんどがコーリアンやトウモロコシである。アワなどは、オーカー(休養收容所)などで出る上等の部類に入る。

私は、冬の間、一カ月ほど炊事で働いたことがある。アメリカやカナダからのソ連に対する援助物資の一部である肉の缶詰や昆布、それから関東軍から戦利品として持つてきた乾燥野菜。私は食べるはおろか見たこともなかったが、こういうものが入つてきたことがある。そのほかたくあんや梅干。たくあんは大変古くチョコレート色をしていて、炊事係が「こんなものを食べさせたら腹をこわす」と言つて廃棄処分にしてしまつたが、梅干は使い切れず、食堂の前に置いておいたら、いつの間にかなくなつていた。

この梅干や昆布は野菜扱いで、捕虜の一人一日当たりの野菜の定量は八〇〇グラムであつたと思う。特に昆布の八〇〇グラムというのは大変な量なのである。私が糧秣庫へ使役に行つたとき、各收容所へ昆布を分けることになつた。糧秣庫のナチャニツクが、これは何だと言う。穀物でなければ、もちろん肉や魚ではない。カナダ産の昆布で、たしかシーキヤベツと書いてあつたと思うが、じゃ、野菜だということになつて、一人当たり八〇〇グラムを渡すことになつた。昆布は一束ずつ縄でゆわいてあつたが、一級、二級、三級と分かれていて、私は自分の收容所へ一級品を渡した。厚さ一センチ以上、幅三、四十センチほどある。大がまに入れると、ものすごい量にふくれ上がる。ちよつと大げさだが、一人分の八〇〇グラムで收容所全体の六、七百人の一分が賄えるほどである。処分に困つた。

肉や魚はボーチカに入ってくるが、魚はいいとして、肉はちゃんとした形が入ってくることはほとんどない。肉は一日一〇〇グラムだったか、量は忘れてしまつたが、骨ごと、中にはヤギの足だろつか、毛やひづめのついているものとか、頭ばか

りとか。頭なんかタポール(釜)で叩き割ってスープに入れた。目玉がポカリと浮いているスープをもらった人は、さぞかしびっくりしたことだろう。

昭和二十一年の夏、テルマの町から十数キロ離れたところで、セナコースと言っていたが、五、六十人ほどで草刈りをした。冬場の馬の飼料である。九月になって朝晩冷えるころまでした。

炊事場とか草刈り隊の根拠地は、テルマ川か、川のほとりで、私たちも十人くらいに分隊に分かれて、自分たちの寝泊まりするところを川の近くにつくることになった。十畳ほどの広さの四方に穴を掘り、切ってきた木を立て、横に細い木を渡し、釘がないので、何かのつるとか木の皮をはいで縄のかわりにして結んだ。屋根はシラカバの皮でふいた。強風が吹いたらひとたまりもないだろうが、とにかく小屋はできた。

朝早く朝食が済むと、大がまと砥石を持って、頭には防虫網をかぶり、手袋をして出かける。この防虫網の網の目をくぐって小さな虫が入ってきて刺すのである。日中、日が差すとサツといなくなるが、言語を絶するものすごい数である。

大がまで横に何人か並んで刈っていく。刈った草は二、三日干して、束にして積み上げていくのだが、高くなると長い竿の先に刺して差し上げる。これが思ったより重労働なのである。明日の天候次第では、刈った草は全部集めて積み上げが終わるまでは帰れない。シベリアの夏の宵は、いつまでも明るい。

和歌山県 岡本広蔵

酷寒越冬のためにソ連製防寒服の支給を受けましたが、私たちの抑留地スーチャンは極東でも最南端に近い地点にあり、気温は零下十度か十五度ぐらいに下がるといいますが、あまり寒いと私は思いませんでした。

次に食事についてですが、収容所に着いた当初はジャガイモ一個、それも生いも支給。黒パン一斤(六百グラム)を十二人で分配するのですから一人五十グラ

ムしかないので。足りるはずがありません。しばらくは黒パンだけでした。そのころはまだ朝鮮出発時に持ってきた米、砂糖、大豆、乾パン等で補って、もちろん十分とは言えませんでした。そのうち黒パン三分の一、高粱、トマト、ニンジン等の混合粥のようなスープが配給されました。これでほんの少しですが、腹は満たされた感じでした。

収容所の設備のことですが、体裁よく言えば「二段ベッド」ですが、お粗末そのもの。重労働の伐採や道路工事から帰ってくるとぐったりとなつて、上段に上るのに足が上がり、人に押ししてもらわないと上れませんでした。

食(食べ物)に関するエピソード。

島根県 田辺勝義

夜間、倉庫から糧秣輸送のそりが馬鈴薯を落としている。しめしめと密かに拾って持ち帰ってみると、大部分は凍った馬糞であったという笑えぬ話。

娯楽用の花札やマージャンを作つて、それを欲しい者に売る。買った者はその代償にパンを提供し、一週間はあのひもじい中でがまんしていたという、人間の価値判断の相違も見せつけられたのだった。

最初の頃は馬鈴薯を茹でただけの食事や、大豆粕を固めた豆板だけのお粥もあったが、これは食べられなかった。二年目ごろから馴れてきて、そこら一面に生えているキノコやタンポポなど、野草も食べることを覚えた。また赤松の白皮を煮て汁を捨て、食事の時残しておいたニンシを少し入れて塩味で食べたのも特別な思い出である。

東京都 堀口卓也

衣・食・住すべて最低の生活である。今振り返つても恐ろしい。よく生きていられたと思う。最初の一年は特にひどく、生き延びるには足りない最低最少の食事で、二十一年正月の給食など、飯ごうのふたに七分目の、容器を傾けると底

を粟がさらさらと流れる音が聞こえるような澄まし汁、動けば消耗するので、用のない時はじつと寝ころんでいろと日本の軍医に指示され、用のない時は常に横になっていた。栄養失調にならないのが不思議なくらいであった。

日本軍医はわれわれの身を案じ、ビタミン補給のためドロージという松葉汁を飲ませた。野草も食べた。茸も食べた。口に入る物はなんでも食した。

東京都 岩本行夫

刃物は炊事班だけ。炊事で黒パンを切ってくれたが、食することが何より楽しみの隊員が、パンが欠けているの、小さいの、耳のところがないのとひもじいので文句を言うので、炊事班は大きくても軽く小さくても重かった。パンをソ連の給与係より受領したまま班に渡した。班では人員の数に同量にパンを切って、くずまで分配した。ビヤ樽に入ったスープはよくかき回し、順番に分配するときは、寝台の上段下段の隊員は目を光らせた餓鬼であった。私もその一人だった。

作業帰りは何か落ちていないかと下を見て歩く。前列は風を受けるが列の後方では収穫がない。凍ったジャガイモが三、四個落ちていた。足を滑らし蹴り、素早く拾った。外套(シューパー)のポケットに入れ、収容所に持ち帰ってストープの上に置く。ジュージューと溶ける音と臭み。馬糞だった。

京都府 今井敬一

捕虜の一日の食事の内訳を炊事班に入つて聞いたのであるが、黒パン三百五十グラム、雑穀四百五十グラム、野菜六百グラム、魚百五十グラム、砂糖二十グラム、塩三十グラム、石鹼、タバコ五本である。チタ第七ラーゲルでは大体基準が守られていたようだが、ラーゲルの場所によっては、特に不便な山奥のラーゲルでは、ソ連人の給与も悪かったであろうか、給与規定の半分以下であったり、また給与係がラーゲルの担当軍人と共謀してピンハネを行っていたようである。

鳥取県 森田東明

食糧については、一日に黒パン三百グラム、それに朝、夕、カーシャという燕麦の粥か高粱の粥が、飯盒の蓋に七分程度、時には塩魚か豆類の少量入ったスープで、他に砂糖が水筒の栓一杯弱、岩塩少々であった。煙草は週に一回、マホルカという茎の多い木屑のような煙草が配給された。白樺で自作のパイプや、古新聞紙を切り、巻いて吸った。マッチがないので、石と金物を拾って火打ち石をつくり、綿に糸を巻いて火種を移して使用したもの思ひ出である。ソ側の要人が収容所を視察に来る時には、量が多く、小量のスープにも羊の肉等が入っていたから不思議であった。作業の都合で朝食が夜になり、昼食と夕食を深夜に一度にすることもあった。一日の作業を終わって帰ると空腹に襲われ、飢餓感をどうすることもできないほどで、寝つかれない夜や、また腹いっぱい餅を食べた夢を見て目が覚めたこともあり、寒さと空腹で朝まで眠ることできないようなことも何度かあった。

愛媛県 池田政治

十月末ともなればシベリアでは雪一色で、昼でもなお零下で、暖房なしでは夜も眠れず、周囲の山から枯れた倒木を運んで来て、鋸も斧もないので四メートルもある電柱のような丸太をそのまま、ヘーチカの焚口に入れると部屋のドアが閉まらず、不寝番が火を焚いて短くなってからドアを閉めるのだが、一本の薪が翌朝まで残ることもあった。夜の照明は手製の石油ランプで、十時の消灯でランプを消すと柱や板の割れ目から南京虫が出て来て頸から血を吸われ、また襦袢(シャツ)の縫い目には虱がわいて血を吸われて悩んだのもこの頃であった。

衣類も当時はまだ夏の襦袢袴下に夏衣袴のままで、上にソ連製の綿入りの上衣を来て、靴は編上靴の代わりにワールリンクというフェルト製の長靴と手には作業用の手套を支給してくれたが、帽子は略帽のままで耳の凍傷が心配であった。

人間の生きる基本的条件の衣食住の中でも食は最悪の条件であった。当時は

食事といっても、岩塩を溶かした塩水の中に満州からもって来た緑豆(緑色のアズキ)が二、三十粒入ったものを、飯盒の蓋一杯が一食で、空腹のために夜も眠れない日が続き、お互いに交わす話題は故郷の自慢料理や食べ物に関する話ばかりで、もし帰れたら米の飯を腹いっぱい食べることを話し、夢見て、栄養失調のために次から次へと斃れていったのだった。

当時我々に支給された糧秣と言っても、岩塩や緑豆はすべて満州から持って行ったもので、用材運搬の櫓を引かしていた馬も馬糧もすべて満州から持って来たものばかりであった。

熊本県 島野郁啓

昭和二十一年三月、イルクーツクから列車でバイカル湖畔のセルジャンカの既存の大隊に部隊ごと編入され、線路の工事作業、石の切り出し、橋の修理、更には屠殺場勤務と生涯初めてのことも経験した。最後には洗濯班長をし、昭和二十二年五月まで世話になった。

衣服は軍服のままを通し、食糧は高粱、ポーミー半々の粥、パンと少々の砂糖等が支給された。ラーゲルは長屋式の二段ベッドだった。発疹チフスで何人か亡くなった程度で、栄養失調での死亡者はなかった。『日本新聞』を時々見たくらいで民主教育は全然なかった。

こういうと恵まれたラーゲルのように思われるが、飢えと寒さの中の重労働は、いずこも同じ苦しみであった。

北海道 澤田清吉

真つ暗になってからの晩飯だ。一年たつても食事の内容は一向に改善されない。コーリヤンのカーシヤ(うす粥)に、綿羊や山羊の蹄のスープである。カーシヤの中のコーリヤンの粒を数えたら十八粒しかなかった。

ソ連に入国して、その日からは非必要なものは何であったか。それは食べ物で

ある。二年目の半ばで虚弱者となった私は、休養三カ月あまりで、同僚たちの励ましもあって、赤松の葉(シベリア赤松)をとってきてもらい、これを煎じて飲み続けたら、雑草の芽をスープに入れて食べたりして、ようやく大位検査で二級になり、今度は炊事労働に編成替えになった。

ソ連支給の主食は、米、コーリヤン、大豆など様々であるが、米は玄米、コーリヤンは皮つき、釜に入れて煮るのだ。水を沢山入れて雑炊仕上げ(カーシヤ、粥)にして、途中で植物性油を入れて弱火で煮るのだが、油断すると焦げつかせる。腹に入っても腹もちが悪いから、労働する者にとつて頼りにならない。スープは、綿羊、山羊の蹄、または鱒、鮭、鯿などの塩蔵もののスープ。具は目の保養ぐらいしかなく、当たらない人の方が多い。

蹄の上皮はストープの上であぶって、中の軟骨をコリコリと食べるのだが、何とも言いようのない食べ物であった。戦争中の食糧難のときでさえ、玄米は一升瓶の中に入れて棒でつついて白米にしたり、臼でひいて食べた記憶がある。その反面、このごろはどうしたものか、玄米は滋養になるとか、脚気によいとかで、わざわざ玄米を買ってきて食べることが流行っているからおかしな話である。このごろは毎日テレビで、毒々しいカラーで放映されるペットフード。無農薬・完全栄養とうたっているが、この犬猫の足許にも及ばないひどい粗食で四年あまり、どうやら命をつないで生還してきたわけだ。

特別休日についての一コマ

休日(正月元旦、お盆、メーデー、革命記念日など)には、炊事班長が配慮して、コーリヤン、米などを使って「おはぎ」作りをすることがある。一同、祖国に帰ったような気分になって、大喜びである。ところがロスキーの考え方は違う。ロスキーの主任は「規定の食物以外に嗜好物をつくるのは何事だ」というのである。食べ物は平均して食べるのが労働のためによいので、お前たちが一度に沢山食べようとするのはけしからんと叱られ、論争になったことがある。

新潟県 松井 徹

ある日、米が配給になるとの報に大歓声を上げて喜んだのも束の間、脱穀しただけの米だった。日本人の器用さはこのとき始まった。山から松の丸太を切り出し、昔で言う挽き臼を作って白米に仕上げ、白米が配給されたときは涙が止まらなかった。ソ連兵も感心して唾然としていたのが思い出される。

滋賀県 清水誠之助

舎内では飯盒もあったが、アメリカ製肉缶に統一していった。それを袋に入れて食器がわりに使っていた。同一の缶は分配に公平でよいものだった。分配は皆の目が光っていた。それが少ない、それが多いと分配は大変だった、砂糖・煙草・ラードの配給も。ラードは米国製で、トロ箱の大きさは幅十五センチくらいの豚の皮の部分で、塩漬けの物だった。日本人には馴染まないものであったが、寒い冬を乗り切るためには食べなくては体がもたないと行って私は食った。

新潟県 若月太郎兵衛

たまにアメリカ製の援助物資、鯨の脂肉、ポークソーセージなど、匂い程度であつたが支給された。塩はシベリア産の山から掘った岩塩である。黒パン三百グラム、他に雑穀、小豆、大豆、高粱、粟が支給され、米はなかった。魚はたまに樺太産の日本物。十三年前にとれた酸化した乾燥鰯(ドラワ、薪と言っておつた)を煮たもの。野菜はキャベツ、馬鈴薯ぐらいいだった。汁もので飯盒に三分の一くらい、目玉汁と言われ(覗くと眼が映る)酷いものだった。食料が遂に底を突いた。糧秣倉庫の床板をはがして縁の下の落ちこぼれを掻き集め調理してくれたが、土臭く黴臭くて口に入れられるものでない。

また、あるときは無精白の粟を炊いてくれた。ざらざらじゃきじゃきして食べづらかった。さあ大変、翌朝便秘が酷く、医務室は浣腸かけの患者で満員。朝工場では仕事どころではない。皆お尻を出して、「うーん、うーん」のしかめ面、

あつちにもこつちにも砲列をして喰っている。殺される、苦しい、悲鳴を上げている。青帽がやつてきた。「ポチム(何したのだ)」、「無精白の粟を炊いて食べたのだ」と誰かが報告した。「馬鹿者めが、粟の皮には物凄くタンニンが含まれておるのだ、命とりだ」かんかんに怒った。直ぐ炊事場へ行って精白工場へ持って行けと言われた。我々は肛門に棒きれを使ったりして砂のような糞をぼろぼろと排除した。タンニンで腸粘膜が硬化してしまうとのことであった。

神奈川県 田口幸安

私の八カ所の収容所の流浪は、いろんな苦役に服する艱難辛苦の連続であった。貧食は引揚船上まで波及する。司厨員の切る沢庵の頭と尻の切れっぱし、終わった途端に一斉に切屑めがけて躍りかかる態は、あたかも童心に等しい浅はかな醜行である。シベリアで如何に難儀したか推して知るべし。

山梨県 渡辺時雄

生命の灯

酷寒に飢餓と重労働の三地獄の中で生きるには、捕虜同士が助け合い励まし合つて、希望を失わず耐え抜くことのみであった。

幸い私の中隊は若い現役兵が多く、内務班長だった私を信じて明るく強く働いてくれたため、自ら良い環境を作ることが出来たが、戦後方々で捕虜となった戦友たちの中には、自信を失い自暴自棄となつて収容所の規律も守らず、作業もサボる者も多くノルマも上がらず無気力となり、栄養失調症患者が続出してきた。栄養失調症患者の多くは、食生活のふしだらさに原因があつた。私は戦友達に「配分された食糧は何でも良く噛み、胃に負担がかからないよう唾で丸めて飲み込め」とよく話した。量が少なければ少ない程大切に食べ、舌で味わう時間を長くしようというのが私の作戦であつた。「馬鹿馬鹿しい。そんな事では腹は減りつぱなしだ」と言って、配分された燕麦や高粱のお粥を飯盒に入れ、更

に黒パンを粉にして混ぜ、湯水をいっぱいに入れてグラグラ煮立て岩塩で味付けし、その汁をガブ呑みするという食べ方が流行した。私もやってみたが確かに一時は満腹感がある。腹の中が水いっぱい、動けば胃の隅々まで満腹感が伝わる。ところがこの食べ方を一週間も続けた者は胃腸の働きが悪くなって痩せこけてしまう。この現象は他の収容所から私の中隊に転入してきた戦友に多発した。空腹に耐えながらも配給された粥や黒パンを忠実に丁寧に食べる者、そんな食べ方に耐えられず「水っ腹」で一時的満腹感を求めた者、たった半月の生活態度で同じ労働に従事しながら生死の境を分けたのもこの時期の収容所だった。

そして信じられないような死もあった。他中隊から十数人の戦友が私の隊へ転入してきた。その転入者の多くはこの「水っ腹」愛好者だった。その中で一番若いA君が強度のジストロフィー（栄養失調症）だと阿部軍医から通報があった。A君は少し動作が鈍いようだったが病気の気配は何もなかった。毎日作業に駆り出されていた。栄養失調患者の多くは、特別な徴候もないのでソ連側から作業を休むことは許されず、勿論休養室にも入れられず殆ど作業に駆り出され、そして伐採作業場でポツクリ死ぬのである。風もないのに枯木が突然倒れるのと全く同じように、である。それこそ当の本人でさえ予知するすはなかったようである。昭和二十一年三月末、日本では早咲きの桜が咲き始める頃であった。私はまだ北斗七星がキラキラ輝く夜半、偶然厠でA君と一緒に。室内へ入ってペチカ（暖房）を囲むとA君は黒パン一切れをペチカの上に乗せながら「渡辺さん、私はなんだか眠くてたまらない。少し寝たいのでこのパンが焼いたら起こして下さい」と言つて二段ベッドの上方、薄っぺらの毛布の中にもぐり込んだ。私は「いいよ、焼いたら起こすよ」と何気なく引き受けて、パンの香りに自分の空きっ腹が鳴るのを耐え、パンを見つめて約五分、二、三度返してコンガリ焼けたので「A君、パンが焼けたぞ」と呼んでも起きて来ない。「オイどうした」と本人をゆり動かすともう事切れていた。私は呆然としながらもそのパンを千切つてA君の口の中へ

入れてあげた。こんなことなら凍ったパンを私が食いちぎって温め、口移しにでもして生きているうちに食べさせてやるべきだった、と思うと口惜しさで涙がこぼれた。

そしてA君のやせ細った手を胸に合掌させ、その手に黒パンを握らせて、同室の戦友を起して短いながらも通夜とした。そして翌朝、ギョロ目の阿部軍医と菊池衛生兵に深夜の出来事を報告した。阿部軍医は「またか」と大きい溜め息をして「栄養失調者はこんな死に方が多いよ。それでも渡辺さんに見取られただけでも浮かばれるだろうよ」と私を慰めてくれたが、私はこの地獄の運命を創り出したソ連邦を呪うだけであった。

私は今でもパンを焼く度にこのことを思い出し、食べる前にA君やシベリアで亡くなった戦友の冥福を祈っている。

食事

愛知県 河村廣康

ハンゴウの副食入れ（カケゴ）に擦り切り一杯の飯では腹が満たされません。ハンゴウに雪を入れ、たき火で雪を解かしその中に飯を入れます。普通のお粥よりもっと薄く重湯のようにして腹の中に入れ満腹感を味わっていました。副食はバイカル湖でとれた小魚を岩塩で漬けたもの一匹、日本では豚も顔を背けて食わぬほどの、腐った匂いがして口に入れると苦くて辛くて仕方がないほどの代物でした。

中さん（中隊長）が、「そんな食い方をしていると栄養失調になるから、たとえば僅かの物でもよく噛んで食え」と言っていました。腹が減って背中にくっつくくらいだから、そんなことは誰もしませんでした。戦友の中には朝食分と昼食分を朝一度に食べて、昼は雪を解かして湯を飲んでいる人もいました。

厳寒のマイナス三十から五十度以上もあるシベリアでは、外では口に入れる物はほとんどありません。松の小枝の先端部分が少し緑色になっている所があり、

その部分を剥くと白い柔らかな繊維が見えます。それを採って食べます。休憩時間になると、専らその繊維を食べました。あまり食べて下痢したことも度々。伐採にはノルマ(割当量)があります。それが達成できないと、次の日の食事の量は減らされてしまうのです。

厳寒と言うか酷寒と言いますか極寒のシベリアで、私は大きな発見をしました。ある日のこと、ソ連兵の食料のキャベツを駅までそりを引つ張って取りに行つたのです。貨車からそりに移すとき、木枠の中の凍っているキャベツが雪の上にパラパラとこぼれます。小指の先ほどの小さな破片をハンゴウいっぱい拾って帰り、雪を入れてペーチカの上でゆでて食べました。そのときのつゆの旨かったこと、甘かったこと。こんなにキャベツが美味しいものとは知りませんでした。戦友たちにも飲ませましたが皆喜んでくれました。今でもその旨さが頭に焼き付いております。口が肥えてしまっている今では、到底その味を味わうことはできません。

米飯は僅か二カ月ほどで、後は大豆、川付きのコウリヤン、黒パンに変わってゆきました。大豆をゆでたものが主食で、塩ゆでした大豆が副食というのが半年間続いたこともありました。煮たコウリヤンの皮付きのままの物を食べますと、翌日は食べた量のコウリヤンが下から出ます。ほとんど消化していないからです。そして、凝結していて、なかなか外に出てくれません。それで脱肛、痔になって苦しんだ者が随分おりました。私は幸いにも、そうならず済みました。

五月から九月にかけては本場に助かりました。草木が芽生え、巢ごもりしていた動物たちも地上に出て活動します。天の恵みです。小動物で捕れるものは何でも腹の足しにしました。特に蛇や蛙は大の御馳走です。野草もあらゆるものを口にしましたが、ニラ、アカザなどは御馳走様と言いたいほどでした。

私たちの監督をしているのは流刑者、つまり囚人です。その監督の昼食は、黒パンに冬なら塩魚、夏ならキウリをかじりながら済ませます。一般の民間人も、それよりよいかもしれませんが、とにかく貧しい国でした。私たちの食事の悪さは仕方のないことかもしれないのですが、しかし、私たち捕虜の食料を配給する

ソ連の将校が横流しをして、国際法とかで決められている量の半分に満たないのでは栄養失調になるのも当然のことです。

休憩時間に話すのは、食べ物の話ばかり、お国自慢の名物料理、とくに甘い物、牡丹餅やおはぎ、ぜんざいなど。ほとんどが若い兵隊でしたが、色気の話は全くありませんでした。夜勤のとき、休憩所で監督が女とセックスしていても、私たちは興味がなく、またやつてるなどその横で笑っていました。ジャガイモ一つに目の色を変え、タバコ一服にペコペコする。体は骨と皮、あの餓鬼の生活によくぞ耐えて祖国の土を踏むことができた、なんとしても生きて帰りたい、父や母に「今帰ったよ」と言いたい、その一念で生きてこられたと思います。

大阪府 有光徹二郎

シベリアでは、我々は体力の消耗と足りない食事で大なり小なり栄養失調になっていた。俺達はみんな腹いっぱい食べたい、帰りたいの二つだけが希望であった。三度の食事といえば高粱(粉つきのまま)または大豆のシヤブシヤブのカーシヤ(粥)が飯盒の蓋に八分目、まるで水を飲むようだ。たまに黒パン三〇〇グラム(厚さ一・五センチ、横八センチ、縦六センチ程度の大きさ)、それでは腹が減って仕方がない。

ラーゲルの周囲は原始林で、到着してすぐバム鉄道の建設に駆り出されたが、皆は野草を採って来ては岩塩を入れて飯盒でゆでて食べる。つい食べ過ぎるとときめんに下痢が起る。体が弱る。とにかくひどいものだからまた食べる。その悪循環が始まり犠牲者が出る。結局野草の食べ過ぎが原因である。栄養失調というものは人間を餓鬼にしてしまう。頭では食べ過ぎては駄目だと分かっているがら食べるのがやめられない。やせ細って死んでしまう。そればかりではない、毒草、毒茸が命取りになった者も沢山いる。ほんとうに飢餓地獄とはこのことを言うのだから。

四日目の夕方、行軍に小休止がかかった。小休止は午前中と午後三時ごろにかかったのにと思っていると、目の前に馬鈴薯畑と人参畑が広がっている。ロシア兵が捕虜を哀れんだのであろう。長い列をしていた捕虜の群れが一度に走り寄った。背のうを背にしたまま獲物に襲いかかる獣のように畑を埋めた。両手で馬鈴薯を掘り人参を抜き、泥のついたままバリバリと噛む。敗戦から一カ月、腹を満たしたことのない飢えた狼である。物すごい形相である。まさに餓鬼であった。瞬く間に広い野菜畑は黒土に変わった。後尾を歩いてきた者たちも一目散に走って充分腹を満たしたようであった。驚いたのであろうか、この付近に中国人の姿は一人も見当たらなかった。恐ろしくて逃げたのか、あるいは仲良しだった日を思つて哀れんだのであろうか。六年間、中国人と付き合つて来た私は、胸をかきむしられるような思いであった。

(中略)

私は喉が渴いてどうにもならぬとき、夜起き出て正門に行った。セメント樽の三倍くらいある胴体のふくれた樽があった。水が沢山あった。腰をかがめてガブガブ飲んだ。甘い水で、これは養老の滝の水かもしれないと合点していた。小学生のころ、養老の滝の水は旨いものだという話を聞いたことがあったのをふいに思い出したのである。遠い記憶であるが、父母を思つて二度も三度も口をつけた。明くる日は日曜だったのでこの樽を見に来た。綺麗な水であると思つたからである。のぞいて見た時たまげた。それは真に汚い水であり、ボウフラが浮き沈みしていた。私は物も言えずボウフラの浮き沈みする様を見ていた。この汚い水がどうしてあんなに美味かったのか、不思議でならなかった。将校達は残飯や汁は惜しげもなくこの樽に放り込んでいたのである。口をつけるとすぐに沈むボウフラであるから体に異常は起こらなかった。飲み込んではいなかったであろう。すつかり野性に同化していた自分を思つていた。

スターリン給養

食事は当初は割合によかったように思う。ほとんどが関東軍糧秣倉庫より満州で押収したものであった。最初は国際法に基づいて給養は、穀類三百グラム、黒パン三百グラム、野菜八百グラム、肉魚百六十グラム、塩二十グラム、砂糖十八グラムが決まっていたようである。ごく少ない物であるが、これを忠実に守ってくれたら、食料にまつわる悲劇はなかったと思う。

ロシア人が炊事場をのぞいて、自国民より良い物を食わしていると言つて憤慨していた。まずくても腹いっぱい食べたいのであるが、チャサボーイ(監視兵)の横流し等あつて、給養の三〇〜五〇%しかなかった。

食糧事情

食の乏しいのはソ連国民全体であり、捕虜に対しては家畜同然、日本の家畜のほうがうらやましく思った。粗末な黒パンはライ麦をそのまますりつぶした粉で作つたようなもの、スープは雑穀のフスマを糊状にしたもの、いずれも極端に量が少なかった。慢性的飢餓状態で、劣悪な食事と過酷な労働のノルマに悩まされながら異国の地に倒れていった戦友は一年目は特に多かった。クシヤーチ(食いたい)、スパーチ(眠りたい)、ダモイ(帰国したい)の毎日であった。

食事の悲劇は最後まで

朝食は黒パン少々と粗末なスープ。暗いうちに食べ、作業中の昼食は食べない。三食にすれば食べたような気がしないから。作業から帰つて粗末な宿舎の中で、油を燃やしたカンテラの明かりで少しばかりの食事を取る。作業現場までは最初は二キロくらい、日増しに奥地へ伐採が進み、一カ月もすると六キロ以上にもなる。砂山の道を歩くのは衰えた体力では容易でなく現場に着くまでにかかなり体力を消耗してしまふ。

一部の者はノルマ以上にやつて自分だけ少しでも多くパンをもらおうとする。すると監督がノルマをまた上げて自分の実績を上げようとする。この人たちは

後で体を壊し見る影もない病身となった。悲しい根性である。

後でドイツの捕虜と一緒に同じ現場で働いたことがある。ドイツ人は団体行動と団体交渉しからない。絶対にノルマを増やさせる事はしない。ナチス魂は立派である。大和魂はどこに行ったのか。

環境給与改善

岩手県 佐々木清三

多くの死者読出でソ連側も驚き、食料と環境改善に取り組み、チタより元チハル陸軍院長、牧軍医中佐が来て、診察の結果回帰熱と判断し、サルバルサン注射で治す。五百人の戦友は注射してもらい、助けられた。我々生存者の命の恩人である。給与改善と環境整備も進み、少し体調も良くなり作業できるようになった。

絶食の懲罰

富山県 窪谷好信

日中の作業を終え疲れ果て宿舎でぐっすり寝込んだ頃、我ら山田中隊が突然起こされる。文句を言っても通じない、不平を言いながら夜間作業に駆り出される。貨車の荷下ろしとのことで、駅でもない鉄道線路に停車中の無蓋貨車数両を目指して冷えきった夜道を急がされる。数人の班に分かれて、レールを下ろす作業である。列車が何十分後に発車せねばならぬから「ヤポンスキー、ビストラビストラ(日本人、おまえら、早く早くしろ)」とむちやなことを言う。各貨車には重くて長い鉄道用レールが十数本太い鉄線で固定しており、鉄棒でこれを利用して送り下ろせと言う。薄い月明かりの夜間の仕事は、まず鉄線を切ることからであるが、工具も無く鉄棒で叩き切るのに難儀する。二、三人ずつ双方に離れてレールの穴に鉄棒を突っ込み、掛け声合せて回転とてこれを利用しながら送り出す。悪戦苦闘どうにか下ろし終わったので早々と幕舎に引き揚

げる。下ろしたレールは乱雑なため、貨車の横板を上げ閉じられないので、他の遅かった班が始末させられたとのもであった。もともと我々も貨車はうまく出られるかなあと感じつつ帰ったが、少しぐらいロシア人で何とかするだろうと思っていた。我らの仲間に迷惑がかかったことは気の毒であり済まない気持ちがあった。

翌日、早速大隊長より中隊長を通じて、我らにきつい叱責と共に一日絶食の体刑懲罰が科せられる。作業は免除され幕舎内の謹慎であったが、営倉入りに相当する制裁を受けた。

栄養失調に等しい体に欠食は大変な仕打ちであり、日本人どうして罰し罰されるはめとなる。その後入院の遠因は、この事件であったのかと察せられた。

飢餓との闘い

愛知県 近藤昌三

テント生活時代はもちろん、ラーゲリに入ってから、我々に支給される食事はシヤビシヤビのスープとわずかの黒パンだけだった。スープはその後コーリヤンの粥になったが、その濃さ、具の多寡は全員が一番の関心事だった。私は今でもラーメンやうどんを食べて、最後に井に残った汁の中にゆらゆらとゆれるうどんの切れ端や菜っ葉を見る度にこのシベリア生活を思い出す。本当にあの頃は餓鬼だった。この切れ端が一分でも二分でも長くこの命を持ちこたえさせてくれるかもしれない。隣の戦友の飯盒の中と見比べ、畜生、俺の方が具が少ないようだ、と浅ましい考えにとらわれたことがあったことを白状せねばなるまい。

とにかく、食事の分配は大変だった。受領して来た粥とパンは、分隊全員十数人が目を皿のようにして見守る中で、当番が慎重に各々の食器(飯盒、後には全員缶詰の空缶になった)に注ぎ分け、パンを切り分け、隊長以下幹部の検閲を受けるのだ。右から三番目の缶は具がちよっと多過ぎるぞ、一番左のパンは少し小さいぞ、隣から少し削ってやれとか文句が付き、やっとOKが出ると、今度はこ

れをどんなふうにして食べるか、それが問題だ。黒パンの上部の盛り上がった表面はカチカチで、ナイフではとても刃が立たない。内側はねっとり水気を含み、少し酸っぱいような味だが、慣れると病みつきになる。上部のカチカチ部分は水分が少ないから目方も軽く、何よりも腹持ちがよいような気がする。この部分が誰に当たるか、全員の関心事だ。内側の軟らかい部分は冷たいままではまずいし食べにくいから、ペチカの上で焼くか、スープに入れて煮るかになる。とにかく、食べることに以外には差し当たって考えることはないから、全員が知恵と労力を出し合い、情報を交換するのだ。ただし、ペチカの上で焼く場合、目を皿のようにして見張っていないと、ちよつと目を離したらパンが消えてしまっていた、なんてことがちよいちよ起こる。食事の時にはこのペチカのまわりが満員の人数だかりになり、順番の取り合いになる。

我々が苦労したのはパンの保管だ。パンは一日一回の配給だが、その量は一食分にも足りないのである。だから、これを何回に食べるか、また、残しておくとしたらどこにどう隠しておくか、作業に持つて行くとしても、布も紙もない我々にはただ裸のまま雑嚢に入れるしかない。いざ食べようとなるとパンの半分はポロボロのカケラとなつてしまっている。雑嚢の底を掻き集めて口に運ぶ姿は我ながら情けない。

二年目になると食事はノルマ制になり、パンは食券を持つて行つてソ連人のおばちゃんからもらうようになった。その日のノルマの達成率によつて決められた量のパン券をもらうのだから、一人一人その量が違う。作業の帰りにソ連監督からその日のノルマ達成券をもらい、食堂のおばちゃんに出す。銀行の窓口のような仕切りの向こうで、おばちゃんは天秤に重りをのせ、もう一方の皿にパンを切つてのせるのだ。おばちゃんは天秤がきつかり水平になるまで、きつちりとパンを切つた。のせたりおろしたり、サイコロのようななかけらまでしつかり量るのだ。次は砂糖、天秤の皿の上に小さな紙をのせ、その上に小さじ一杯ぐらいの白砂糖を量つてくれるが、もちろん貴重な紙はもらえない。私たちはそれを空き缶で受けて

持ち帰るのだが、べろりとひと舐めで終わり、残しておく気にもならない。

收容所へ

和歌山県 坂本清次郎

收容所の正門前に四列縦隊で整列する。肩章を付けたソ連軍の士官、マンドリン銃を持った下士官が列を囲むようにして並ぶ。日本軍の通訳の下士官が「五列に並び直して下さい」と声高く指示する。「ソ連軍は五列縦隊が正規か？」誰かのひとり言である。

人員の確認が終わつた中隊から、宿舎であろう半地下の家屋へマンドリン兵が案内する。細長い家屋で、真ん中に幅三メートルぐらいの廊下が通り、その両側に部屋が分かれて入り口の扉がある。部屋は十畳ぐらいか、両側に二段ベッド二列、正面にも二段ベッドがあり、ベッドに十人が就寝できる。真ん中の広間に四人、計十四人の寢室となる。日本兵の来る前に塗つたのか、白い石灰の匂いのする塗料が壁板、扉と言わず塗られている。まず先任順の高橋軍曹より寝台を決めてゆく。下士官がベッドに、兵長、上等兵が広間に就寝することになる。簡単な夕食が出る。高粱飯と具のない食塩汁である。

各人が大事に持つてきた飯盒の中蓋に飯を盛る。飯盒が、帰国するまでの何年間もの生活必需品であることは、今は知らない。

板張りベッドの上に毛布を四ツ折りにして細長く敷く。この毛布も厳冬になると切られ、チョッキになったり、靴下になったりして、帰国時は形もなかった。雑嚢を枕にして横になる。体がまだ汽車に乗っている錯覚を起し、揺れているようで眠れない。ソ連領に入つて初めてのベッドでの就寝であるが、何か眠れない。

そのうち、体の手足の末端から何か痒い！ 虫が這っているような気が、寝惚けた頭を刺激する。幸いに薄暗いが電灯がついている。ベッドに座り痒い所を見ると、赤い斑点が無数に連なつてでき、無性に痒い。ふと横の板壁を見ると、赤い

小さい珠のような虫が無数に這っている。指で押し潰すとプスーと音を立てて、吸った血を飛ばして壁に赤い色をつける。上方のベッドを見ると、厚海伍長、岩崎伍長も一生懸命虫を潰している。南京虫だそうで、初めて見る。一晚のうちに石灰で白く塗られた板壁が、赤い斑点、線で汚されてしまう。以後、毎晩この南京虫の出迎えに悩まされ睡眠不足となり、その対抗手段として手袋をはめ、靴下をはき、その接点を紐でしっかりと結ぶという者も現れてくる。「住」はこの侵入者さえなければ、まあまあ眠られぬことはない。

「食」の方は、宿舎に落ち着いてから一変する。黒いパン食になる。パンと言えば白く、指で押すとへこむ軟らかい物と思っていたが、ソ連より支給される黒パンはこの常識を全面的に覆すものである。色は赤茶黒い、重い、ジトジトと湿っている、酸っぱい。

この黒パンが一日三〇〇グラムの支給と決まる。重いパンだから、三〇〇グラムといえは嵩は本当かさに小さい。手の平に乗るくらいである。味噌汁も岩塩汁もない。一度に食たべてしまいそうな量であるが、一回に食たべてしまうと一日一食となり、他の人の食たべるのを横目で見ていなければならない。我慢、辛抱である。我が部屋では兵隊が小まめに働いて食事上げ、使役等をこなしてくれる。

小さい黒パンは食事当番が取りに行き、入り口に近い部屋に陣取った中隊本部の下士官によつて各部屋ごとに分けられる。そこで兵隊同士の「食の葛藤」が始まる。食事当番に「こっちが小さい」「切り方が悪い」「パン屑を余り出すな」「出た。パン屑はこの小さいパンの上に乗せろ」云々。言う者も言う者であるが、言われた兵隊は腹が立つ。そこで工夫されたのが天秤である。もちろん、兵隊の手製であるが、糸を使って面白いほどよくできている。「窮すれば通ず」感心し、面白く分配を見る。私の部屋ではこのようないざいざはなく、下士官たちは皆紳士である。

「衣」は着たきり雀であるが、まあまあ何とかなっている。

衣・食・住が足りて、そこに排泄の大原則が必然的に起きる。収容所は穏やか

な斜面の一番下に建設されている。その一番高い丘に並行して幅約五〇センチの深い壕を掘り、そこへ板を渡す。その板に跨がり座つて用を足す。もちろん、四圍の囲いもない青天である。当初、使用するのに足踏みをしていたが、生理現象は否応もなく起こってくる。使用せざるを得ない。内向的な者は夜の暗くなるまで我慢するが、下痢等を伴うと大変である。宿舎より便所まで約七、八〇メートルの丘の登りを走つて行かねばならない。こんなことにも健康の二字がいかに大変か、痛感させられる。

収容されて落ち着いたと思つた途端、監視兵の荷物検査がある。全員、宿舎前に集合させられ、座らされる。十数人の監視兵が宿舎に入り、各人の荷物を立ち会いなしでひっくり返し始める。僅かの荷物を整頓し、大切に使用していた品物類が監視兵によつてあばかれる。兵器、危険物、大きな刃物等の検査であるが、余得として荷物の間に保管していた時計、万年筆等も没収される。入室に際しては、また一人一人の所持品検査があり、荷物がまた少し減つてゆく。

私たちはあくまでも一般兵科の下士官、兵であり、憲兵の言葉さえ言わぬように戒め合い、関連する一切の物品は齊々ハルで一般部隊に収容された時点で廃棄していた。編成された作業大隊でも、幹部も知らず下士官の多い部隊と
いうことで通つていた。

三重県 北村喜男雄

万年飢餓状態であり、雪中作業帰途ジャガイモが、麻袋の穴から落ちて行くので、それを拾つて飯盒で煮て、蓋を開けたら馬糞が上に浮いているのを手製のスプーンでかき回し、ジャガイモを食つた。今では考えられない事である。私ばかりか他の人々もイモと糞を一緒に煮た。みんなであつた。

北海道 佐々木佳明

糧秣受領は主にタシケソト市内に連れて行かれた。品目ごと数量を確認し集

計するのであるが、経理室で使用していた算盤を携帯していたので、楽に計算出来たのであるが、計算が早いので全く信用してくれない。担当の士官が更に再計算をするのだが時間がかかること甚だしい。その揚げ句、合っていると首をかしげるのである。検算に時間がかかり過ぎ、これでは折角の算盤も効果が發揮できなかつた。

主食は黒パンと穀物の高粱、燕麦、白米、大豆等である。朝は雑炊、昼食は黒パンとスープ、夕食は黒パンまたは雑炊か御飯に二品料理である。時には白米で普通の堅い御飯を炊き、塩漬けの鮭、鰯を塩抜きして、これをネタに、酸味が強いキャベツの漬物の汁を酢の代わりに押し押ししを作り給食にしたこともあった。

大豆も支給になったので岩塩から溶け出したニガリを集め豆腐も作り、豆腐汁あるいは奴豆腐にした。

野生のホウレン草が密生しているところがあり、この収穫に連れてゆかれた。「ヤポンスキー・ピタミндаバイ(日本人のビタミンを取りに行くから来い)」である。

あるときは大きな陸亀を捕りに出かけた。現地に天幕を張り、月夜に地中からはい出すのを待つのである。大量の亀を捕獲したのであるが、この料理が大変である。一たん大釜でゆでてから首や手足を先細の包丁を突き刺し取り出す。これをすき焼風の料理にした。体に似合わず鶏のような大きな卵が入っていて、これがまた結構美味である。残った亀の保管がこれまた厄介で、倉庫に入れておくと、倉庫は土間のため土中に潜り込み逃げ出してしまふ。

昼食は主にパン食で、炊事係が作業現場に一緒に出かけ、現地にかまどを設置しスープの炊き出しをする。材料と調味料を大きな平鍋に入れ、二人で両側の取っ手を握りぐら下げ運搬をする。冬には取っ手にロープをつなぎ、そり代わりに引つ張って行く。

支給された靴は、ズックで靴底は木である、全く歩けたものでない。靴職人であつた丁さんが足の木型を作り、調達した牛皮とズックで糸に蠟ろうを塗り二本の針で縫い合わせてゆく、これが軽くまことに履き心地の良い靴に仕上がつた。

鋳物工場の作業に行つている同志から、工場で使う綿糸、これが毛糸のような程よい太さで、これを調達し、ステソレスの編針で靴下、手袋、チョッキ、腹巻などを編み上げ身につけたので、冬の身支度は不自由しなかつた。

岩手県 山本喜代四

ガンガラのことであるが、この三一五収容所でも全員ガンガラを持っていて、六七、八月とガンガラ様に命を助けられたのである。日本にあるワラビ、フキ、シドケ等の山菜には一度もお目にかかつたことはなかつた。シベリアにはないのかもしれない。あるのはヨモギ、アカザを主体とした野草である。キノコだけは同じものがあつて大いに助かつた。(ガンガラは野草をゆでるため使用した。一人五個ぐらい持つていた)

福島県 小平里美

入ソして二年くらい穀物は粟・キビ・高粱・大豆・エンバクなどで米は全然なかつた。その後、北鮮との交易でいくらかずつ各収容所に米が渡されるようになった。野菜と言へばジャガイモとキャベツが代表的なもので、日本のように豊富な種類は見ることができなかった。俘虜給与規定で一日穀物何グラム、黒パン、野菜、塩、砂糖、タバコ、各何グラムと決められて、収容されている人数分だけ炊事係が毎日受領して調理したものを各分隊ごとに分配して食へていたが、入ソ当時はソ連側の係の者や、同じ俘虜の旧将校、下士官などの中間搾取が多く、我々の口に入る頃には量も大分少なくなつていた。

常時空腹で、道に転がつている凍つた馬糞を見ても黒パンではないかと近づいて目をこらす。ロシア人の住居の近くに捨てられた小さなジャガイモがガチガチに

凍つて山になつてゐるのを見つけると早速ツルハシやスコップで山を崩し飯盒に入れて作業場のストーブで煮て食べる。小さなイモの粒は皮が青くえぐい苦い味がしたが、空腹を満たすためには贅沢は言えない。春になって雑草が芽を出すと食べられるものは何でも摘んで食べた。

小川の泥の中で大きな淡水貝をたくさんみつけて大喜び、塩ゆでして、たらふく食べた後で下痢や腹痛を起こして苦しんだ事も忘れられない思い出である。

虱と南京虫

日曜日は労働も休みだったが収容所内の清掃や小作業があった。

入所当時は虱が蔓延して栄養失調の体から貴重な血液を奪つていた。板敷きの二段ベッドで裸になつた男たちがシャツやズボン下を裏返して縫い目に鈴なりに連なつてゐる虱を左右の親指でプチプチと潰しながら日曜日を過ごしたが、翌日からまた体じゅうをモンモンとはいひ回つていた。

夜眠りにつくると新たな敵南京虫の襲撃である。二段ベッドの板敷や柱の割れ目に潜んでいた大群が攻撃を開始して安眠できない。吸血されたあとはポリポリと傷になる程かいても痛がゆく、全く泣き面にハチであつた。

便所

数百人も生活している収容所の便所は一カ所しかなかった。十メートル×四メートル、深さ三メートルくらいの大きな穴を掘り、厚板を渡して丸い穴を十数個あけてそこで用を足した。

冬は穴の上にかがみこむと尻の辺をチクリというようなこともしばしばだつた。落下物が寒さのためにすぐ凍つてしまうので穴の下だけだんだん高くなり槍ヶ岳のようになつてゐた。

時々鉄棒で槍ヶ岳を壊してならしてやる。穴の中がいつぱいになるとガチガチに凍つた糞便をツルハシと鉄棒で碎き袋に詰め馬ソリに済んで黒竜江の真ん中

あたりまで運び捨ててきた。春になって氷が解けると、黒竜江の魚の餌にでもなつたのだろうか。黒竜江は一メートルも凍つていて馬ソリや自動車はおろか、戦車やレールを敷けば汽車でも渡れるほどガッチリと凍つていた。

栄養失調になると特に便所通いが頻繁になり、収容所入口の二重の扉を開けて外套をかぶつて零下二十〜三十度の室外に出て小走り便所に行き、戸もない便所で体が冷えきり、冷えて用を足してベッドに入ると体が温まらないうちまたすぐ出たくなり便所に急ぐ。その繰返しで一晩に数十回も通い、労働で疲れて南京虫に攻められ眠ることもできないと泣いていた者もたくさんいた。

トイレについて

二重、三重の有刺鉄線に囲まれた収容所の北の端に便所を作つた。深くて細長く相当大きい便所である。朝のラッシュ時にはお尻丸出しの兵隊がちょうど電線に止まつたツバメの行列のように並んだ。とにかく約一千人に近い人間が一斉にする生理現象の調整場である、たちまちにいつぱいになるのがわかる。

冬場は各班順番に便所掃除に当たる。何しろ酷寒零下四十度のシベリアである。毎日の排便で日本アルプスを思わせるような突起した山もできる。自営自活の作業であるから、臭いは覚悟のうえと作業に取りかかる。まずは黄金の山脈をツルハシで崩し始める。時々手心を加えながら上手に作業をしているのだが、小粒の金塊が口や耳に飛び込んでくる。次に、崩した汚物をシャベルで櫓に積み遠く離れた窪地に運ぶ。二十人の人数で半日は十分かかる作業量であつた。作業後は衣服を脱ぎよく叩いて着直すのであるが、暖房の利いた部屋に入ると何とも糞臭が二〜三日は取れず全く困つたものであつた。しかし生きて祖国に帰る希望実現のためには、全捕虜の奉仕のためにも、不服不満をもらす者は誰もなかつた。

栃木県 野沢芳夫

東京都 関 栄夫

ソ連将校は人員の数え方が遅く、四人縦隊と見やすく並んでも列の線に一人でも出遅れがあると、また最初から数え直す。また、十人縦隊で一列ごとに一、二、三と前に出て数えるが、最後、半端人員が出ると分からなくなる。野外の点呼は朝と夜、二回行なわれる。冬の寒さは半端な寒さではない、寒いから足踏みを始めると凍結した雪が音を立てる。数える事ができず、足踏みを中止させられる。点呼が長時間かかり足踏みを止めると凍傷にかかってしまう。酷寒の地での点呼は大変でした。将校の算数の能力の低さ、うそのような本当の話です。特に掛け算は最も苦手のような話でした。

我々の収容所は山の中にて、食塩が届くまでは何回となく積み替えが行われ、途中で搾取されて定量の食糧が届かなかった。主食の雑穀も配給定量以下、パンは現地の工場で焼いているが、焼きたてのパンに水をかけ重量を増して受領させられた。アワのみで米は一切口にすることはなかった。食事は三度ともアワの三分粥、夕食は黒パン一切れ、枕ほどの大きさのものを十六等分に切り、パンの上に番号札をのせ、くじ引きする。伐採作業の場合は山にて粥にいろいろの食用となる草を入れて量を多くして煮て食べる。知らずに毒草、毒キノコを入れて血を吐き一命を落とした者もいた。

馬そりからこぼれた馬鈴薯を見つけると皆競争で拾って持ち帰り焼いて食べる、あの時の味は今でも忘れない。しかし馬糞が凍っていると馬鈴薯と見分けがつかず、間違つて焼くと解けてしまったこともあった。ネズミ、カエルの卵、昆虫の幼虫、木の実、野草、リスが木の根っこに蓄えておいた松の実など焼いて食べた。夏は食べ物も冬と違いあるが、冬ともなると一面雪に埋まり何一つ無く、また、使役に出たときはソ連兵の食堂の残飯をあさり持ち帰る。収容所内の炊事場から交代で受領してくる粥の中に片手を入れてすくい食べる者、パン受領の際も同じように屑パンがあれば食べる者もいた。抑留生活に耐えるにはこのようなこ

とをしないと生きていけない極限の生活、衣食住すべて最低の生活であった。今振り返つても恐ろしい、よくぞ生きていられたと思う。

富山県 中葉正義

着衣は、初年度から二十一年は我が軍隊の防寒具でした。その後、満州の綿入りの服、二十二年から二十三年、段々とよくなり、ロシア用の綿入りで、最後の年は皮のシューバが、また靴はカートンキ(フェルトを圧縮した品)、帽子もロシア軍人の払い下げ品でした。

最初の年は満州から持参の高梁飯でしたが、後に燕麦、粟、大麦、ジャガイモが穀類として支給されました。

一日の糧秣は 穀類四百グラム、砂糖一五グラム、野菜八百グラム、煙草(きざみ)五グラム(五本)、肉類不明。

秋の期間は全員山へ出かけ、きのこが沢山出るので、一人マータイ(麻袋)に一杯取つて来るのです。ソ連の命による。一部は糧秣受領の野菜となる。

休日は一週間に一回ありました。

森の恵み

富山県 谷村文平

原生林(タイガ)の苦しい労役には余禄があつて、我々の慰めとなり栄養補給となつた。

アレーヒ(松の実)、沿海地方の松は「チヨウセンゴヨウ」と呼ぶ樹種で松かさが大きく、固い殻を割ると小さいが充実した胡桃状の実があつてうまい。量が多いので貴重な栄養の補給源。コクアはうす緑のぶどう状の果実で蔓性植物、北海道では自生するという。多汁で甘い、最高の甘味。山ブドウは日本のものに近いくとたくさんとれるとつぶして、支給(個人配分)の砂糖を出し合つて本職の酒屋さんに委託してぶどう酒に加工してもらつた。捕虜の身分を超越できるひととき

があった。山菜の種類は僅少、ノビルが一番のお目当て。この他よく利用したのは樹液のジュースであった。これは春の萌芽の頃、白樺、カエデなどの樹皮に傷を付けて、したり落ちる樹液を水筒に受けるのである。仕事前にセットしておく引き揚げる頃には冷たく甘い樹液がいっぱいになっている。白樺は量が多いが甘さではカエデの方が上であった。沿海地方で最高級の森の恵みは「野生の朝鮮人参」。値打ちは金に相当と言われた。私の大隊では一株発見している。内密にしていたがロシア側に漏れ、探索されそうになったが守り通した。小片をいただいたが、味は仁丹のような感じを記憶している。

長野県 中山麻人

枯松を集めて焚き火の回りで食べる昼食の時間が楽しく、また悲しい時間だった。一かからの黒パンと飯盒の中のスープへ雪を溶かして倍量にして飲み込むが、胃袋のどこに入ったか感じがしない。焚き火の回りにはじつと頭を下げている人もいる。朝、空腹の余り昼飯を食べてしまったのだ。食べ終わった後は毎日繰り返す全国うまいもの談義が始まる。ぼた餅、おはぎ、ぜんざい、お汁粉、ようかん等、主流は甘い物が多かった。これも肉体的に体が欲していたのだろう。

福井県 横田肇

昭和二十二年の春になり道路作業(幅六メートルほどの土道)に出た。道端の草取りと、くぼんだ所への土砂入れをして平らにならす仕事で、一日二、三キロメートルほど進んだ。日を追うに従って遠くなり、後は野宿をしての作業になる。このような状態になると食糧は途切れ途切れになり、道端の野生のアカザやゴボウを採って食べた。

塩は、塩マスを食糧としてもらったとき、腹や鰓えらの中に入っている岩塩を保存しておいて大切に使った。一週間も塩気がないと、少しの高い物にもけつまずいで転ぶ始末で、貴重品だった。

夏ごろから山中での道造りが始まり、班ごとに丸太造りの片流れの屋根を造り、太い木の皮を剥いで雨しのぎとした。床は土をならし草を刈って敷きつめた。作業は、道幅七、八メートルほどで一人二メートルの長さがノルマで、木の根の掘り起こしや、勾配のある所は平らに削り取り窪地へ運搬することで、前半の道路補修とは比べものにならない苦労だった。雨が降ると食糧の遅配、欠配が続く山中の松の太木を倒してこぶし大の松の実を取って焼いたり、山ユリの根を掘って飯盒で茹でて食糧とした。食糧が来た。遅れた分多く来たかと思ったが届かなかった。遅れた日数の分はどこかへ行つて、届いた日からの一週間分と分り腹が立ち、運搬してきたソ連の兵隊に文句を言ったが「エズナーユ(知らない)」と言っただけなので、後から来た女医に小言を言ったが肩をすぼめるだけだった。

岐阜県 佐々木博夫

あるとき、工場のカルトウシカ(ジャガイモ)の選別に行ったとき、ニンジンを選別もせよとのこと。そのときニンジンを生で食べた。そのうまいこと。日本の柿のよいうな味。食べた食べた。腹いっぱいだった。そしてジャガイモを帰りにズボンの中に入れて帰り、ペーチカで焼き、戦友達と分け食べた。みんな大変喜んでくれた。

大阪府 藤本善造

坑内へ入る前に、今まで書き洩らしたことについてちよつと触れておきたい。それは作業に出るとき必ず付いて来る警戒兵のことだ。その兵隊はすべてが年の頃十七、八歳の少年兵であった。それが私達の前後に付いて作業場へ向かうのである。もちろん、銃剣付きの小銃を小脇に抱えながらである。少年兵だがそれなりの権威があるのか、地方人らは一様に敬して遠ざかる風が見えた。これが付かなくなったのは二十二年の半ば頃からであった。我が方のリーダーの引率で外へ出るようになったとき、私は青天白日という言葉葉を胸の中で反芻したものであ

った。

ラーゲルでの入浴
岡山県 田中一司

労働が終わってラーゲルに帰ると、まず浴場に行く(一週間に二、三回)。浴場といつても湯船などはない。四周の壁に取りつけられた数本の水道栓から適量の湯と水が出る(シャワーもある)。しかし、その湯も水も自由に使えない。石けんは洗濯に使うような粗末なものである。ぬらした体に直接両手でこすりつけるが、あまり泡も出ない。洗い流す湯水の量も制限されているから汚れが落ちにくい。入浴を終えるとそのまま食堂に行くが、汚れが十分とれず、下まぶたあたりが黒くなっている者もたくさんいた。

食事の分配

食事は捕虜の最大関心事である。今、そのころのことを思うと当然なこと、ぞつとする。当時は全く死活問題であったのである。各班ごとに飯上げをする。各人の食器が多種で、飯盒、缶詰の空き缶大中小、分配は空き缶に柄をつけたひしやくで分配するが、一人前の分量が見当がつかないので、一通り分配した後、何回も追加し分配することにした。分配するときは全員が、ウの目タカの目で分配者の手元を見たものである。最初は古年兵が分配していたが、慣れてくると全員交代でするようになった。一食の分量は雑炊で飯盒の中盒の半分ぐらいで、そのまま食べてしまうと満腹感がないので、水を入れて水腹で満腹感を満たしたものである。

虱

静岡県 今泉茂

収容所の生活を悩ます小さな敵は虱であった。全く風呂に入らない生活が投

降以来続いていた。作業から帰り、ペチカで体が温まってくると急にむずがゆくなる。下着を調べると身の毛がよだつ程もぞもぞと虱はついている。虱退治が夜の日課であった。

虱退治を兼ねて一度チタ市の浴場に行ったことがある。夕食が済んでくつろいでいたとき突然「入浴のため浴場へ行くから直ちに集合せよ」と伝達があった。外はとつとに零下三〇度を超えている。不承不承点呼場に集合する。集合状態は極めて悪い。ソ連兵が屋内に入つて隠れている連中を引きずり出し、ようやく出発である。防寒用具に身を固めても刺すような寒気であった。黙々と一時間近く歩いて到着した。一〇〇〇人近い人数の入浴だから待ち時間の長いこと！寒さとの戦いに疲れ果てた頃ようやく順番が回ってくる。各自着衣をまとめ滅菌室のハンガーにつるす。滅菌室は一〇〇度近い熱気である。浴場の真ん中に円形の湯船があり、それを中心に同心円状に階段になっている。各自は小さい桶に湯船の湯をもらい体を洗うのである。チタの市民はシキミに似た植物を束ねてパタパタと体を洗っていた。サウナは熱い蒸気で浴場が温められるようになっていくはずだが、体が温まる程の温度ではなかった。早々に入浴をすませ滅菌室で衣服を探し外に出て整列、収容所に帰着した時は午前一時を過ぎていた。

熊本県 岡本透

二十一年六月ごろには、雪も消えて青い草の芽が出ると、すべて食べられると思ひ、野草を空き缶で茹でて、塩味もないものをおにぎりにして食っていた。中には毒草があり、数時間で死亡した者がいた。一番多い日には、一収容所で一日に十四人も亡くなったこともあった。それからはソ連側でも心配されて、野草は収容所内で体の弱い隊員で食べられるものだけを採取するから、皆さんは個人で取らないで下さいと注意されたが、自分達はアカサやノビル等、日本でも食っているものを探して取って食べたものである。何でも少しでも多く食べたい気持ちだった。夏の間は、カエルやヘビやネズミも焼いて食べたものだ。

また、その年の冬には、収容所で朝食に黒パンとスープをもらって来て、冷たいのでパンを温めようとしてストーブに乗せて、ちよつと寝台の所へ何か取りに行つて戻ったら、その一瞬にパンがなくなつたと言つて騒いだが、犯人はわからなかつた。朝食を盗まれた本人はどうすることもできず、スープだけすすつて作業に駆り立てられ、ますますひどい思いで苦勞したのである。

和歌山県 辻本信二

それは、このラーゲルは寝台(と言っても板を並べ藁布団を敷いたもの)と柱、アシの葉で葺いた屋根で、その四方から南京虫が湧いて来て疲れてやせた身体から少ない血を吸いに來るのである。敵はここにもいたのだ。

日曜日には、南京虫退治が日課になつた。暑い上にこの虫の攻撃にあつた私達は、戸外へ毛布を持ち出し芋虫のように丸くなって寝たのであつた。毎夜青天井で、北斗の星がいつしか見えなくなると頭から夜露をかぶつてしまふが、南京虫に責められるよりは幾分かよかつた。

南にパミール高原が、紺碧の空に夏でも雪を頂いた雄姿を聳えさせている。ここ中央アジアの南部に私は今いるのだ。もうそこを越えるとアフガニスタン、インドである。

満州へ渡つたときには、もうこれ以上遠くへ行くことはないであろうと思つていたので、実に遙けくも來たものだ。この星を仰ぎ、北斗の輝きを私は寝ながらにして眺めたのだつた。

岐阜県 中島正教

私自身も、朝食時に昼食用のパンも食べ終わる。そうしないことには朝食のお腹が承知しない。すると、昼食はスプーン一杯の粟か稗と岩塩、バターは分隊単位、何日かに一回の塩ニシン、砂糖少々、これで日本兵の行く所、雑草はすべてなくなるといふことになる。雑草をこの中に混入して雑草雑炊を作る。これは食

缶を傾けて口中に流し込むので、箸は要らないほどやわらかで腹持ちしなかつた。夕食にはたまに箸を使うくらいに食事があつたが、栄養失調で隊員の肌は鳥肌となり。鳥の毛をむしつたような状態になつた。炊事はこれを心配し、松葉水を飲ませビタミン補給を図つた。私は今日でも、食べられる雑草か否か、草を見ると直観的に頭に浮かんで來る。

ヨモギを飯盒一杯煮たが、これは口中で広がって食べられない。百合の花では一晩じゆう下痢。青ガエルは臭くてだめ。へびは上等だが三年間に一匹しか入手できず、一人に二センチメートルくらいしか当たらなかつた。

栃木県 天野喜一

抑留地の生活

収容所は高さ四メートルもある厚板塀で囲まれ、その内側と外側四メートルのところ、高さ一メートル程度の棒杭が一メートル間隔に立ち並び、有刺鉄線が三段に張り巡らされている。

敷地は約一万平方米(縦百メートル、横百メートル)、塀の四隅には高さ約六メートルの監視の望楼が設置され、自動小銃を持ったソ連監視兵が昼夜を問わず監視に当たつている。

出入り口は一カ所だけで、守衛所に監視兵が四、五人配置され警戒は極めて嚴重で、脱走者は見つければ即座に銃殺される。

収容所内には事務室・医务室・宿舍・炊事場・食堂・浴室・及び製パン工場も配置されている。

居住の宿舍は半地下方式で、窓は二重硝子窓にて開閉はできない(防寒対策のため)、両窓側に二段ベッド(蚕棚方式)があり、ベーチカ(暖房設備)は年間を通じて使用している。

朝六時の起床は、守衛所前に設置してある鉄道線路の切れ端(約五十センチ程度のもの)をハンマーで叩くのである。

朝起きて洗面する訳でなく、作業衣を身につけ食事当番の食料分配を待つだけである。各自が出した飯盒に食事当番は班員全員立ち会いのもとで均等に配分するが、一同の目は鋭く異様に光り、量が少ない、多いと飢餓状態から、自尊心や道義心、正常な常識すら失い、自己保存の本能のみが働くようになってしまふ。

富山県 菊野末一

水はどこにでもあると思っていたが、零度で凍ると、もう水ではなく簡単に利用できる氷になる。日常生活で風呂に入り下着を取り替える、洗濯する。ところが水なし、着替えなし、風呂なしの六カ月間、井戸で水をくむためロープにバケツをつけて下ろすと、ロープは氷の棒になり、折れてバケツは井戸に残る。うまくロープが切れなくてもこぼした水は全部下に落ちないで凍る。井戸の口は小さい穴になつてしまふ。ようやく春が来て川の氷が解ける、川に近いところの収容所は川に水浴に出かける。しかし素手で洗うだけ、タオルは一本だつてないのだ。仕事は八時間みっちり「働かざる者は食うべからず」という社会主義社会が共産主義か知らないが、これが鉄則であるようだ。ところが「働いても、少しだけしか食うべからず」はひど過ぎる。

高知県 篠原精一郎

作業は三交代制で、一組ごとにトロッコ何台と厳しいノルマが課せられ、ここでもノルマの達成状態で食事が増減され、体力のない者はますます弱つていった。特に夜間勤務のときはこたえた。何しろその頃になると全員栄養失調で、元気な者はほとんどいなくなつていた。収容所と炭坑を行き来する途中、ジャガイモを拾つて帰り、ストーブで焼いたら馬糞だったという話もある。

そうして春になるとノビルという草をソ連兵の目を盗んでとつて帰り、皆で分けて食べた。西森元義君の班では、福寿草に似た草を食べて泡を吹いて死んだ兵

隊もいた。秋の薪取りは、早く伐採を済ませ皆でドングリを拾つて空缶の食器で煮て食つた。すごく渋かつたが、食べられるものなら何でもよかつた。あるとき炊事用の水を運ぶロバが死んだ。収容所の隅に置いたが、朝になるとほとんどが消えていたのでソ連兵に詰問されたが夜中に食べてしまった後だった。またソ連将校の飼ひ猫がいなくなり、ヤポンスキーが食つたと言つて大変な立腹で調査されたが、食つた犯人はわからなかつた。こんな事もあつた。隣の班の一人が炭坑の近くで遊んでいた犬をタボールという斧で殺し、防寒外套の下に隠して持ち帰り、ストーブで焼いて皆で食つたが、さすがにうまくなかつた。

富山県 菊野末一

日常生活の中で衣・食・住とは何と重要なことか。衣類は着の身着のまま、寝るところは板の上に一枚の毛布にくるまるだけ、食事はのりのようにかゆ状にした何もかもませ合わせてあるもの、そして全く設備のないところでたくさんの方が大小の排泄を一日何度もする。生活とは今までそんな面倒なことだったのか、楽しい生活は夢見たが、これは何だ。私たちがシベリアに入ると十一月から三月までは零下10度20度30度あるいはそれ以下、それこそ手も足も出ないとはこのことかと再認識した。

抑留生活

シベリアの収容所生活が始まつてから、いつも、食糧が足りない。腹が減つて力が出ない。基準では黒パン三五〇グラム、雑穀四五〇グラム、肉類五〇グラム、魚類一〇〇グラム、野菜八〇〇グラムが与えられていることになっているが、いつもそれだけ貰つていないような気がしていた。四月にモクソワから偉い人が来たので意見を集約して代表から申し入れた。

①食糧は不足だ、働けというなら腹いっぱい食事を与えよ。②医師がいない、医薬品もない。③衣類は昨年十月から着替えをしていない、洗濯もしていない。

④シラミと南京虫で夜眠れない。⑤風呂に入っていないなどと訴えた。これに對し的確な回答はなかったが、食糧のそんなに不足はおかしいと調べてくれ、警備兵の横流しがわかり、警備隊長が交代するなどで、幾らか良くなった。その後、地下に熱風消毒室を造ったが、火災発生の一歩手前で失敗。風呂は地下室に石を積んでその下からまきをたいて石を焼き、それに水をかけて大量の湯氣を出させ、その中で裸になって身体をこすり、お湯で洗い流す方式を試したが、これも水が十分ないので四月の用水が流れるまで実現しなかった。

静岡県 松崎市郎

昭和二十一年はシベリア三大悪(極寒・飢餓・重労働)、私はこんなように位置づけている。この三つが拒絶反応を起し、生死の境を翻弄させられたのではないだろうか。

昭和二十二年は、慢性的な飢餓は解決とまでいかず重労働には変わりはないが、除雪の円びの使い方も一遍に円びを突き刺すのではなく、片方に半分力を入れてからもう半分に力を入れて雪を放り出し、体力を保持して帰国に備える。

この時期、幣制改革があったのではないかと思う。多分二月か三月頃だったか、記憶ははつきりしない。前述したが、百二十ルーブル、報酬として受け取る。簡単に言うと、物価が十分の一に下がったということです。私はその金はすべてマホルカという煙草に化けた。私の周りにロシアの囚人がいて、今日、コムソモリスクに用事があるから煙草買ってきてやると言うので十ルーブル渡す。コップ一杯十ルーブルとのことだが、手元に来るのは半分くらいで、後はピンハネである。私は、地方人との接触がなかったので本当にロシア語が苦手であり、また物を売買するような所もなし、物品の値段は皆目分からなかった。

昭和二十三年に入るとぼつぼつ周囲の環境も整ったが、私の記憶では今までどおり門前に整列し、点呼を受け、前後にカンボーイがマンドリン銃を肩から吊

るし、何かあると「ダワイ ヴイストレ(早く行け)」と大声を上げ現場まで強硬に連れていかれた。それがある日突然、距離の短い作業現場までならカンボーイなし。日本人の責任者が一人つけば、悠々と営門を出入りできるようになった。この時分から、特定の連中のところではダモイの噂等あったのではないかと推測される。

愛知県 森 武雄

シベリアの冬は早く、想像以上にきびしく、夜は零下三〇度以下がるようになっていた。もちろん風呂などなく入浴することはできない(昭和二十一年夏に蒸気風呂ができた)。ラーゲルに入ると同時に虱が発生し、三週間位で全員に広がった。衣服の消毒をなす術もなく、暇をみて爪でつぶすだけであつたので、入所一カ月位で発疹チフスが流行し死亡する者が続出するようになった。病氣になり作業に耐えられない者は女医の身体検査を受けるが、それは裸になり肉付きを見るだけ、特に尻の肉があるかどうかを見るようになった。ソ連軍の女医が一人、日本軍の軍医二人などで医務室、病院の設備を造ったが、医療器具や薬品は皆無で、手のほどこしようながない状態であつた。ソ連側には何度も交渉したが全く誠意がなかった。十二月に入ると気温が零下四〇度まで下がる。厳冬期になると病人は更に増加していった。発疹チフス、下痢がやがて栄養失調となり死亡していくことになる。続出する病人で病室に収容することもできず宿舎に寝かせておくだけ。薬もなく、更に悪いことには食べさせる病人食もなく、死を待つだけという状況であつた。

北海道 渡辺照造

冬期間のシベリアでは、まして捕虜の身分では生野菜等お目にかかれない。当然ビタミンC不足となる。足が少し重くなる。軍医の間でも話題となり、ソ連側より対策を教えられる、「松葉油を飲ませよ」と。

松葉油とは、ポーチカ樽の中に松の葉を刻んで入れ、これに熱湯をかける。松の葉の成分が滲み出る。この中にビタミンCがあるという。これがもの凄く生臭い。鼻をつまんで飲んでもなかなか喉を通らないという代物である。

早速作って食堂の入り口に置き、食堂に入るとき必ずツップ一杯飲むようにしたが、腹に入る物なら毒茸でもOKというつわものも、飲まずに済むなら飲みたくないと言通りする始末。遂には入り口に監視がついて、飲まなければ食堂に入れないと強制的に飲ませた。そのせいかどうか、その後壊血病の話はあまりなくなった。熱湯とビタミンCの関係などと誰も言わなかった。

千葉県 伊藤千次

シベリアには五葉松の大木があり、こぶし大の実が百から二百ぐらいについている。数が少ないせいか、歩哨は切るなど注意する。休みの日、少し奥へ入って切り倒して実を取ってきた。それを焚き火の中に放り込む。じゅくじゅくと燃える松かさの先が白く灰になる頃引き出して実をつぶすと、大豆ぐらいの楕円形の白い実が沢山取れる。ビタミンCが多いとか、これも命の源。

ビタミンCと言えば、赤松の葉にビタミンCがあるとか、それも南向きの葉が良いと取って飯盒で煎じて飲んだ。

低い灌木でユラス梅のような実のなる、マリーナーという木が一面に群生しており、甘くておいしい。日曜日など、下の町からマダムが大勢取りに来た。飯盒皿に一杯取るとパンやタバコと交換した。山本上等兵はマリーナーをつぶして水筒に入れ、南向きの木の穴に入れて置いて果実酒を造って飲んでいた。

山小屋の炊事班長の話をする。北朝鮮興南港を船出するとき、いろいろの食料を積んだが、大量の粉と染物の原料の粗悪な澱粉を積んだ。入ソするとすぐ澱粉が配給になった。コーンスターチと言っていた。炊事でコーンスターチを大釜で水に溶いて炊き上げると、一人飯盒一杯に分配できるが、食べるとすぐ小便秘に出てしまう。大部分が水分である。初めの一年、これで皆栄養失調になり死

んでいった。

初は作業から帰ってくると各中隊を通じて班に渡され、思い思いの方法で精米にし八時頃までに炊事に返し、十一時頃炊き上がり、重湯状が伸びて明朝になると糊状になり、朝食として採った。山小屋へも粉が来た。初めは皆ですりつぶしていたが、隣にある大木を切り倒し、根本を鉋やバールで一日がかりで穴を掘り白を作り、細い二本の立木を利用して支点を作り、丸太の杵をその上に乗せてトクン、トクンと足で踏み粉を精米にした。

愛知県 森 武雄

厳寒期(十二月に入ってから)を迎える頃、冷凍のジャガイモとキャベツ等の野菜が配給になり、献立も変化があり皆が喜んだものであった。しかし米、肉、魚などは皆無で、食物の量は少なかった。食事の関係は入所当時より若干よくなったと思われたが、気温が零下四〇度〜五〇度近くになると収容所内は全く悲惨な状態になっていた。新京の貨物廠に米の在庫がもしあったらこんなひどい目に遭わなくてもよかったと悔やまれてならなかった。

高知県 中平松鶴

こんな生活の中で我々に「生きる喜び」「希望」を与えてくれたのは、同好者によって作ってくれた演奏会であった。満州の放送局の専属であったというマンドリン奏者を中心にギター、アコーディオン、太鼓は干しバレイショの空きだる、鉄片を集めて作ったシロホンといったあり合わせの楽隊であった。楽士は好きとはいえず居残りは許されず、皆と同じに作業に出、夜おそくまで練習されていた。星の輝き始めた収容所の庭で、鉄柵の中にあることも忘れさせてくれる一刻であった。

山口県 長野安廣

この療養所で親身になって世話してくれたドイツ人の衛生兵、「希望を捨てるな、生きろ」と励ましてくれた。「ダンケシエン」。ある日、手製の楽器を手に手に十人ばかり、我々の慰問に来てくれた。それはドイツの人達だった。今日はクリスマスとのこと、大正生まれの我々には縁のない言葉だった。流れ出した世界の名曲、最後の曲は「荒城の月」だった。祖国を遠く何千キロ、異国の地で日本の曲を聞こうとは。並居る兵は皆戻して聞いた。

愛知県 森 武雄

私達の作業大隊の入ったラーゲル(収容所)は駅から歩いて十五分から二十分位の近い場所にあった。しかしながらラーゲルは倉庫に使っていたと思われる木の造のバラックが四、五棟あっただけで、全員収容することができず、一部屋分外にテントを張って生活しなければならないことになった。シベリアの十月は夜の温度がマイナス二〇度まで下がることもあり寒くて眠れない。最初から最悪の環境であった。目前に冬將軍が迫っていたので宿舎の建設は総力を挙げて行われた。便所のこと忘れられないことの一つである。宿舎から五、六十メートル離れた場所に板囲いで、土を掘った穴の上に一枚の板を渡しただけであった。冬になって糞が凍るようになると取り除かねばならないから、これがまた大変厄介な仕事であった。鉄の棒で壊して運んだものだ。

和歌山県 辻本信二

満州のその産業用資材も、日本人の捕虜を使ってこの咸興の港から軍艦でソ連に運び去られたのである。皮肉にもその使役に従事させられるとは……。

約四カ月間このラーゲルでの作業が続いた。埠頭や船中で穀類や豆類の積込みには誰もが希望して行きたがった。昼はその米を失敬して飯盒で煮て食べるこ

うちは全然ソ連兵に見付からず調子がよかったのだが、衛門で一人が発見されてからは大つばらに盗めなくなった。それでも彼等との知恵比べで随分と持ち帰り皆で分け合ったが、終いに身体検査までされるようになったので、昼食後もう一回飯盒炊きをして持ち帰るようになった。炊いたものまではやかましく言われなかったので大いに助かったのであった。

昼食のおかずは、埠頭のコンクリート塀を乗り越えて岩にくっついている海草や貝類をとって生で食べたり雑炊にしたりしてちよつと楽しかったが、生のカキを食べて中毒で三日も四日も下痢が続き苦しんだ。それから今日まで生ガキを食べなくなつた。海には油槽船の油や汚物が浮かんでいたが、食べることに寝ることにしか興味のない日々だったので、どんな物でも口に入れたのが祟つたのだ。

和歌山県 南口佐一

収容所(ラーゲル)は、馬小舎を改良し、二階にして小丸太を並べ、その上に敷草を敷き、寝るところは一人に七、八〇センチメートルほどで、通路は二本あるが、出口は一カ所。中にドラム缶を置き、暖を取るため焚くので、人のいきと燃やすために、だれ言うとなく一階は寒帯、二階は熱帯と言つたものです。空気が乾き、衣服は着の身着のまま、身震いするのはどのシラミ、卵とも一人に万ほど繁殖し、体中シラミに吸われ肌はこけ、松の木のごとくガサガサ、入浴の設備もなし、身体油気なく、枯れ木を水に漬けたごとく、水をはじく状態でなかった。敷草に火でも付けば、前に書いたが、通路は二本、出口は一カ所、窓もなし、そのこと思えば恐ろしく、ゾツとする。狭い馬小舎に二百七、八十人はいたと思ひます。このような環境の中で仕事に追い立てられ、散髪はもちろん、汚れた顔や手を洗うこともしなかった。

タンポポ

岩手県 鈴木良雄

凍土の表面がようやく緩むころ、一斉にタンポポの根掘りが始まった。鉄の棒、スコップ、バール、デレッキ、道具は何でも見つけ出す。地面に残る去年の枯れ葉を頼りに、一気に掘り起こして根を取り出すのに夢中である。

採ったタンポポの根は、水洗いして飯ごうに押し詰めて、ストーブにのせて煮る。ストーブの上は満杯で、外でたき火する者もある。

煮たタンポポは、たちまち各自の胃袋の中へ急行する。飯ごうにはまたタンポポが入られ、暇さえあれば、次から次へと採る、煮る、食うの大奮闘である。塩などないから無味であるがお構いなし、ただ食べればよいのだ。その食べ心地こそ無類の満足感であるのだ。

そのうちに葉が出てくれば葉を食べ、花が咲けば花も食べる。このころには雑草の若芽も伸びてきて、これもゆで上げただけで馬牛のように食べる。そう言えば、馬牛のように酷使されるのだから、それでよいのだ。食べれば達者になると頑張るのである。

事実、大なるビタミン補給効果の現われで、隊員たちは日に日に顔色がよくなり、体調とともに明るい元気を取り戻していった。誰もが、タンポポのおかげで生きかえったと語り合う。

しかし、根こそぎの採集であるから、次第に採り尽くされ、タンポポ畑のようだった近くの野にはほとんど見当たらなくなり、遠くへ出かけるようになった。

岩手県 鈴木良雄

赤松丸太の三層の皮を剥ぐと、木部との間に、柔らかでぬらぬらした白色の皮が現われる。我々はこれに目をつけたのであった。これなら、豊富な丸太から大量に採集することができる。これを飯ごうで長時間煮詰めるのであるが、容易に繊維が溶けてくれないので、これを棒でつく。餅状になったものに炊事場か

ら自分の食事分量を混ぜて更につくのである。これを松皮餅と名付けた。要は、いかに分量を増加させて胃袋を慰めるか、苦肉の策であった。

一時的には流行したが、松の匂いはよいとして、繊維のからみあいが強く、長続きしなかった。

生死のはさまをさまよう環境にあつては、誰人として他人に食物を分け与えることはない。あくまでも自分の生きることで精いっぱい、相手の救助といった心身のゆとりは全く失なつた世界であつた。

ところが、そういう晩こそ、貨車積み作業に代わる夜仕事に出かける集団があつた。これに気づき眺めていると、舎内が寝静まつたころ、黒い人影が二、三人ずつ忍び足で舎外に出て、小走りに門の外へと消える。数えると十数人にも及ぶ。この人たちは途中で集結して、六、七キロメートルも先のホルホーズ(集団農場)を目当てに暗い夜道を急ぎ、到着するや手当たり次第、大根、人参を引き抜いて大きな袋に入れ持ち帰るのだという。

これは何回となく繰り返し実行していたようであるが、ある晩、農場側に気づかれ、猟銃の発砲で、あわてて逃げ帰つたとも聞いた。人は苦境にあつてこそ生きるための執念が強くなる。

新潟県 佐藤正平

初期の收容所生活

周囲を有刺鉄線で囲んだ收容所の門をくぐりました。広い所にバラック建ての家が数棟、これが我々のねぐらかと思いつつ、重い腰を下ろしました。皆長途の貨車に揺られて来たので、やれやれとばかりホツとした気持ちです。

しばらくすると予期してなかつた身体検査が始められるではありませんか。一人一人指定場所に行き、梱包していた荷物を全部広げ、上衣のボタンも外されての検査です。身につけた被服以外のものはすべて取り上げられています。見る見るうちに没収品が山のように積み重ねられています。

せつかく奉天で集められるだけの上等品を物色し、苦勞しながら持つて来たのに、むざむざ取られ「こういうことだったのか」「やり方がひどい」「泥棒、詐欺だ」と口々に言うけれど、どうしようもない仕儀にて、悔し涙も出ない始末でした。それでも、後の検査に回る者たちは、下着類の重ね着などいろいろ工夫、検査の目をごまかす要領のよさで、せめての慰めとしたようです。

全員の検査が終わり、例の緩慢な点呼もようやく終わって割り当てられた棟の室に入りました。一室に二十人、五坪ほどの土間はコンクリート、床上は二段仕切りの板敷(下段は一メートルほど)で、薄いせんべい布団が人数分敷かれ、掛け布団は我々が持参した毛布二枚となっています。

日常の洗面、洗濯は戸外の鉄パイプの穴より噴出する水で。用便は別小屋で、扉はなく、床板に二十センチほどの穴でやる。一度に十四、五人ができるが、お互いに丸見えの有様で、とてもまともに見られる図ではありません。

食べ物とは恐ろしいもので、ある夕、食堂で分配方法をめぐって争いとなり、兵隊同士の刃傷ざたが起きたこともあります。また、黒パンをめぐって次のような騒動も起きました。

毎食中一回は黒パンとスープが支給されます。パン一・五か二キログラムを十人で分配することになります。ある日、古兵が食事当番を呼び出して「きさま、おれに何の恨みがあるんだ」と怒声とビンタを浴びせました。それはたまたま古兵にパンの耳の所が続けて二度配られた結果に腹を立てての行動であつたとか。その後、パンを分ける際は両耳を薄く切り十等分し、それを十等分したパンに盛りつけ、更にくじ引きして順番に分配する方法になりました。

岐阜県 早川芳美

人間、衣・食・住と生きていく上に大切な物を順番に並べているが、人間飢餓に墜ちると衣も住まいも顧みなくなる。まさに餓鬼道とはこのことであろう。

酷寒のシベリアで生きてゆく上に大切な毛糸の防寒セーター、靴下等をパンと

交換する者もおつた。セーター一枚で黒パン三キロ、靴下一足で一キロ、物資の少ない民間人相手では案外容易なことであつた。私もロスケの警備兵が布切れを足に巻いて靴下の代わりにしているのを見て真似してみると案外温かく、二足あつた靴下をパンと換えて食ってしまった。

ひどい話だが、倉庫に安置してあつた死人のセーターがいつの間にか脱がされていたことさえあつた。夜中に皆の寝静まったのを確かめ宿舎を出、警備兵に見つからぬよう注意しながら民家を訪れパンと交換し、後を楽しみにして食べ、残りを雪を掘って隠し毎日食つたものだ。

結局は我々のパンの量が減っていくことが分かり、最初のうちは点呼のとき高山少尉から自覚するようにとの注意だけだったが、何度注意されてもやまぬので制裁もエスカレート、半死半生の制裁を加えるまでになり、その制裁は凄惨なものであつた。私もパンと交換しようとしたときは決死の覚悟で、それからはもう二度とやるまいと思いつつも、その後何回か交換した。

夕食後にはシャツのシラミを潰すのも日課のうちである。朝起きると馬鹿にもぞもぞとシラミが多い。隣の戦友を起こしても起きない。よく見ると死んでいった。シラミも死体には気持ち悪いのか、両方に移動したとみえる。この人がギードロでの最初の死者であつた。

ちょうど私は休養中であつたので五、六人の者と一緒に指名され昼間穴を掘つたが、凍つていてツルハシとスコップで五十センチ程度掘るのがやつとであつた。

点呼後ロスケの指示で、倉庫にあつた死体を裸にし担ぎ出したが凍つて硬直しており、四人で担いで行くにはちょうど良かったが、家族には見せられない始末である。

二月末から三月になると、三カ月前にトランスワールで別れた戦友たちが見るも無残な、正視にたえられない姿で送られて来た。中には馬櫓に乗せられ意識不明で送られて来た者もあり、我が中隊の戸田班長もその一人で、私がギードロを去るときも意識は回復していなかった。收容所はまるで病院になつた。

我々は着くと同時に、飛行場の隅に宿舍の建設にかかる。

直径十メートルほどの円形の天幕を張り、天幕に沿って身長に合わせて藁を敷き完成。蒙古の包(パオ)を想像する。まさか十一月末までここにいるとは思ってもよらなかった。寒さが厳しくなるにつれストーブも据え、室内はそれぞれの知恵で順次整備され、暮らして見ればなかなか快適であった。一幕舎十人程度居住し、炊事室共に五幕舎だったと思う。

食事は塩のよく効いた鯖、サンマなどがその都度二本三本と付き食べ切れないので、腹を抜き天幕の上に干しておき、夜将棋などしながら腹が空くと食べたものが、塩分のとり過ぎか顔のむくむ者が出てきた。そのうちに未だ新義州の街で帰還のめどの立たない残留邦人会の人たちと、ロスケの許可で交流できるようになり、我々の魚と味噌、野菜等を交換できるようになり、食事が楽しくなってきた。これも八月末、邦人の引揚げが決まり、なくなった。帰還に当たり、我々の消息をこの人たちに手紙で託し、無事日本に帰還できるよう祈りながら見送る。復員後手紙は家族に届いており、入隊以来ただ一度の無事の便りに、父母はじめ家族親戚が安堵したようだ。

ある夜突然対岸の安東で、共産軍(現中国政府)と蒋介石軍との砲撃戦が始まる。我々は天幕の裾を上げ「対岸の火事」と興味を持って眺めていたが、結果は共産軍が負けて、同じ共産党治世下の北朝鮮に鴨緑江を渡り逃げてきた。これに影響を受けたのか、「蒋介石は日本人をどんどん日本に帰還させているが、朝鮮にいて未だシベリアに行ったことがない者はシベリアに送られるらしい」と誰言うことなく囁かれ始め、朝鮮にいて未だシベリアに行ったことのない連中がこれを信じ、そのうち四人が皆の制止を振り切り夜に紛れ収容所を出て行った。我々は一歩でも遠くへ行くように毎日の点呼をこまかし続け、「知らぬ、知らぬ」で最後まで通し四人の無事を祈った。

ロスケの兵隊は頭脳が悪いので、五列で人員を確かめてから出発する。数が合わないと出発が遅れる。冬場は氷点下四〇度と気温が下がる。防寒服に防寒短靴、足踏みして待たないと足先が凍傷になる。大変である。作業場のある伐採場まで約四キロメートルくらい。出発すると皆、下を見て歩き出す。腰には手製の空缶をぶら下げ、外套はボロボロ、尾羽打ち枯らしたタカのごとく、見られた格好ではない。ところで下を向いて歩くのは、道路上に馬鈴薯ばいしよが落ちていないかと思っているからだ。道路は吹雪で雪は吹き飛んで余り積もっていない。ピンポン玉くらいなイモに雪の粉がくっついており、馬糞と少しも区別がつかない。また煙草を吸われる方は煙草の吸い殻が落ちていないか、この人たちも下ばかり見て歩く。そして一つでも馬鈴薯みたいな物があれば、みな飯盒の中とか雑の中に入れて、また下を向いてトボトボと歩いて伐採場へと向かう。現場に着くと拾い集めた物を飯盒炊きをする。でき上がると取り出して食べる。たまに炊いていて何か異様な臭いがして飯盒の蓋を取って見ると、凍っていた馬糞が温められて熱湯で溶かされ砕けてばらばらになり、他の馬鈴薯にも移り香がして、その飯盒の分は全部だめになるので、そんな時は皆、がっかりしてしまう。シベリアの冬の路上は粉雪があり、それが馬鈴薯や馬糞にくっつくから見分けがつかない。実際、我々抑留者は食べる物にはまことに真剣であった。

春になるのを待つてマムシとかシマヘビとかを捕らえ、皮をはいで骨ごと焼いて食べた。またマムシの目は、栄養失調で鳥目になった者には特に珍重がられ、患者の方にはよく作業現場からマムシの目を取って持ち帰ってあげた。軽い症状の鳥目の方ですとマムシ一匹分、即ち目の玉二個飲めば大体快復したものです。カエルも食べた。シベリアのカエルは腹の赤いのが多い。皮を剥いで焼いて食べると、小鳥の肉のように香ばしくて美味しかった。

宮崎県 田代 香

食事のことでは、どの宿舎でも動物むき出しのトラブルがよく起きた。特にパンの配分については、大・小や耳の部分の争奪がひどく、食事当番となった者は、パンの切り方にも細心の注意を払い作業をせねばならなかった。このような状況の中で、名前は失念したが、一組の棒秤を考案作成した者がいた。分銅は煉瓦を削り、三百グラムの重さの物を作った。これで一個の黒パンも大体同じ重さとなるよう加減し、分配も毎日順位を変えて配分するようにした。これによりパンの配分についてはトラブルは起こらないようになった。食に対する執念は実に悲しいものである。

収容所の便所は中央部に一方所、木造の建物があり、深く掘り下げた便槽の上に板の床があり、中央部は五十センチ程度の高さの、大小便分離用の板壁で仕切つてある。大便の方は床板に適当な間隔で楕円形の穴が開けてあり、隣の人と触れ合う程度のため、隣人と昨日の作業のきつかったこと、今日の作業のこと等を話しながら……。しかし、朝は前に次の人が並ぶ混雑である。暖かい時期は、便の汲み取りは汲み取り口から容易に汲み取れるが、冬は大変である。大小便共に瞬く間に凍つてしまう。そこでこの特掃班の連中は、便槽の中に入り、ツルハシで碎いて運搬用ソリに積み込み、日に何回か繰り返しこの作業を行っている。この作業班の希望者は多かった。理由は、特掃班には二人分の食事が与えられたからである。

静岡県 望月 貞

四月末の検査で二級になった。製材工場へ行く。板並べをやる。病後の体にはこたえた。山へやられないよう頑張った。第一日曜日に初めての入浴だ。裸になつて服を全部ハンガーにくくり、大きな鉄釜の中へつるす。十五人分は入る。下で火を炊き、熱殺菌する。その間に桶一杯のお湯をもらい、布靴下をタオル代わりに体をこする。石鹸もない。それでも気分は良かった。熱殺菌された服を着る。

久しぶりにさっぱりした。ここは村の共同風呂だそうだ。やはり日曜日にやるらしい。それから毎月の第一日曜日が入浴に決まった。やはり楽しみになった。

製材工場で何の気もなく電灯線を見たら、一メートルか二メートルに必ず繋ぎ目がみえたので、あちこち見たらどの線も繋いだのである。低い所を見たら鉄線だ。十五番線だ。収容所へ来ている線も同じだ。ハトイ全部の電線が繋いだ鉄線だ。これは乾草などの梱包を切った鉄線だと思つた。銅はどうしたのだろう、大砲に薬莖に、綿類は綿火薬にか、日本はとも考え及ばなかったのか、それで良かったのか悪かったのか、いくら考えても分からない。

神奈川県 北澤治雄

一、居住

二重の鉄条網に囲まれた原野の中に八棟のバラック、半地下のものもあった。急造で床など生木で凍つていた。体温で解けて毛布がベトベトになったが、石炭はお手のものだから氷のベッドは間もなく解決。棚は二段または三段。三段のところは座ると頭がつかえる。縦二メートル、幅六十センチメートルくらいが一人分。窓にはガラスのないがあるので板や紙を貼つたりした。

便所は壕のように板が渡してあるだけ、扉などはない。用便中にたばこの火を借りたりする。棟によっては百メートルも離れていた。栄養失調と寒さで小便が近くなり、ねぼけ眼で雪に足をとられながら通うので、途中でやつてしまう。明るくなると黄色の穴が沢山できるので監視が立つようになったが、監視自身もやるから余り効果はなかった。私は二、三回収容所を移動したが、大体似たようなものであった。

二、食事

動物にとつて、人間にとつて、そして捕虜にとつては、最も決定的な条件。

初めのうちはときどき欠食の日があつたが、これは間もなく解消した。一日分、黒パン(材料はよくわからないが、粟とかコウリヤンの粉、魚、芋など)三百グ

ラム(坑内の先山は四百)、かゆ(えん麦、粟、コウリヤンなど)飯盒の二分のくらい三食、副食はなし。ソ側の説明では、魚肉などかゆの中、とあったが余り見かけなかった。

私はあるとき食料倉庫をのぞいたら、黒い山羊の頭が山のように積んであった。黒パンは湿気が多くて重いのでガサではレンガ一個くらい、たてまえ百グラム宛。三回に食べるのだから、皆一度に食べてしまおう。後はかゆばかり。

ある人が「食事をとるとかえって空腹になる」と言ったが、僅かな食のために胃が活動するからだだろう。まるで餓鬼。端的な例を挙げると、朝パンが一本上が(五人分)、これを切り分けるのだが、切り手の手元を八つの目玉が見据えている。その目のすごさ。公平を期して物差しや秤をつくらしたりする組もあった。

往年の閣下が炊事の溝から黒くなった芋を拾ったり、空腹で頭がおかしくなつて、隣のパンを堂々と食つて殴られたり、ビタミン補給と言つて、野菜のアカザを食い過ぎて下痢するようなこともあった。すしを握る手つきをして生つばを飲み込むような日常であった。

一方では滑稽と言ふか、主食なしで塩鮭一本を一人分としてくれたりする。これはソ側の担当者の事務的無能に起因する。ときどき検査官が来て在庫と支給状態を調べるので、慌てて隠していた鮭を処分するために起こることで、迷惑なのは私たちである。ソ側の職員が堂々と一尾ぶら下げて帰るのをよく見かけた。捕虜の食料のピンハネである。

三重県 太田 勇

しかし、炊事係の人たちがいかに努力してもできないのは食材の増量です。これは個人の自助努力しか手がありません。そこで皆が思いついたことは、野草をはじめ自然の恵みを己のエネルギーに換えることでした。入ソして三、四カ月を過ぎたころ、長いシベリアの冬もようやく終わりに近づいたある日、伐採に出かけた山肌で、私は雪の下に黒いキノコを見つけました。よく見ると辺り一面に同

じキノコがあります。試しに少し採つて持ち帰り、仲間と塩ゆでして食べました。柔らかく、そのくせ歯ごたえがあつて風味もよろしい。これだと思ひました。次の日から班全員にその話をして伐採労働の帰りにはキノコ採りをする事にしました。これが野草採りの始まりです。このキノコは昨年生えたもので、積雪に保護されて腐らずに越冬した、いわば乾燥茸でした。それから一カ月ほど過ぎて野山が緑になると、あるわあるわ、山の斜面に新鮮なハツタケがあちらこちらに見られます。大げさでなく、私は傘の直径約二十センチメートル、柄の太さ四センチメートルというお化けキノコを何株も見えています。ちょうどその頃から日曜日は休日となり外出も自由になりました。これ幸いと日曜日は皆が揃つて野草採りに出かけました。野草に関する限り私がリーダーです。その責任もあつて、あらかじめどの山肌には何があるかを調べておき、次の休日に皆を案内します。收容所近辺で見つけた野草の種類は十指に余ります。いま思ひ出せる野草だけでも、ネギ(野生)・ニラ・シベリアほうれんそう(私の命名)・アザミ・山ブドウ・ユケモモなどがあります。

その樹皮をはぐと樹皮裏に唐草模様に曲がりくねつた細い溝があり、長さ三、四センチメートルの虫がいます。何の幼虫かは分かりませんが、見たところは真っ白できれいでした。辺りを見るとあちらにもこちらにもいます。これは食べられると直感しました。急いで飯盒の中蓋にいっぱいになるほど拾い集めて班へ持ち帰り、暖炉の火で焦げ茶色に煎つて皆で試食したところ異口同音に「これはうまい」と言います。さあ、それからというもの、伐採ノルマを一刻も早く果たして虫集めに熱中する連中が増えました。この代物、味も色も落花生に似ることから私は「シベリアピーナッツ」と命名して收容所の評判になりました。

防寒具

北海道 東島房治

防寒具が支給になつた。防寒服上下、これは中に綿の入つた物で結構暖かい、

それと防寒靴、それはフェルトでできた物で、新しい物はフェルトを型で長靴に造った物で靴底も全部フェルトである、軽くてとても暖かい物だ。雪がサラサラしているので濡れる事がない。捕虜にはそんな立派な物でなく、底の破れた古いものを底に別のフェルトを縫い付けた物、それでも充分暖かい。

ソ連は軍隊も靴下は使用せず、夏は綿・冬はネルの四角の布を足にぐるぐる巻いて靴を履く。ぐるぐる巻くので靴下を二枚も三枚も履いたのと同じだ。それに四角の布なので同じところを履かないのでなかなか破れない。

捕虜にも同じ物が支給されたが初めのうちは中々うまく巻けない。少し歩いただけで解けてしまう。だが段々と上手になった。外に出る時はシューパー(毛皮の外套)の古い物が支給された、これも本当に暖かい。防寒帽は日本軍の物が支給になった。

灯り

灯りもしばらくするうちに每晚宿舎の前に止めてあるトラックがジーゼルエンジンで石油を使っていることが分かり、夜こそ針金の先にボロ切れを付けて燃料タンクに突っ込み、それを絞るという方法で盗むのである。空き缶には芯をつけてランプにした。

お陰で食事の時だけでも明かりが取れて大変助かった。

各班共真似をしたのでトラックの燃料は大分使われた事と思うが、ロスケも知らない訳はないと思うが、何も言わなかった。

虱(しらみ)

朝暗いうちに出て夜は暗くなってから帰るので、部屋の中は真っ暗で、ランプは石油が少ないので食事の時しか使えず、虱取りができない。歯も磨かず、風呂にも入らず、寝る時は着たままでしかも狭いので皆身体を寄せ合つて寝るので、自然発生的に虱が蔓延する。一匹・二匹のうちは痒みも分かるが全身にびっしり

いると、もう神経も麻痺して痒みも分からなくなる。たまにごそごそ這い回る奴だけ手探りで捕まえるだけ、日曜日はもっぱら虱取りが仕事だ。虱にも沢山の種類があるのがわかった。シャツの縫い目にはびっしりと卵が団子になってついている。もう一つの発見は虱は飼い主が変わると、二・三日血を吸えないらしく、身体が白くなっている。これはお前のだから返すよと冗談も出る。

毛布には虱が付かないと聞いていたが、これだけいると住家がないとみえて毛布にもいっぱい居る。いくら取っても取り切れない。一週間たつと元の木阿弥だ。ただでさえ栄養が足りない捕虜にこれだけ血を吸われては栄養失調になるばかり、中には虱を仇と思つてか逆に食べている奴もいてこれには自分も参った。

虱退治

ロスケも虱がいるとみえて、虱退治の方法を知っている。その方法は小さな小屋を作り、内外から泥壁を塗り密閉する、天井に衣服を吊るし下からどんどんストーブを焚くのである、そうすると、虱は熱いので慌てて走り回りそのうちに足を滑らせて下に落ちるといふ仕掛けだ。卵も熱で乾燥して全滅する。

自分は虱ドームの中が暖かいのでこそりさぼつて中で居眠りしていたが、しばらくして首の辺りがごそごそするので手をやってみたらなんと大きな虱である。吃驚して下を見るとなんと全身に虱が這い上がつて来ている。思わず飛び出して服を脱いで払った。虱は下に落ちただけで死んではいなかったのだ、さぼつた罰で笑い話にもならない。

食事

食事は日本軍の貯蔵米(粃のまま)を持って来たらしく、粃のまま支給されるので、臼を作り足踏み式の杵でつく、粃殻も取れると同時に精白もされる。だが中には粃のままの物も少し入っている、これを五分粥以上に延ばした物が支給される。昼の弁当も同じ、副食は塩魚と芋、豆、野菜等の煮付けが少し、だが朝

と昼の分を一度に食べても腹いっぱいにならない。結局は昼は塩魚に雪を入れて煮て、塩魚のスープを飲むだけ。夕食は黒パンが一人三〇〇グラム位と時々肉の入った煮付けのような物が出る。黒パンは少し酸っぱいので初めは「ロスケの奴、捕虜を馬鹿にして、腐ったパンを食わすのだ」と思ったが、そうではなく、酸っぱい味のイースト菌を使っているので腐った訳ではない。

ロスケの兵隊も同じ物を食べているらしい。パンが黒いのは粉にフスマが入っている事と漂白していない為だ。馴れると酸っぱい味が美味しく感じるようになった。

黒パン一個は三キロあるので十人で十個に分けるとちょうど良いのであるが、これが大変。パンの形が四角でなくつぶれたり曲がったりで平均に分けるのが大変面倒なのである。食事当番が分けるのだが、皆がその回りをぐるりと取り囲み睨んでいる。

まず最初に物差しで計って大体平均にして、今度は天秤てんびんで計り目方を同じにする。それでもまだ納得できず、今度は番号札で籤引きし、当たった番号順に左から取っていく。それでやっと納得するのである、それが毎日の行事でまた楽しいことでもある。

時々炊事からだしを取った後の骨が支給になる、骨を割ると中に髓がありそれを皆に食べさせて少しでも栄養の足しにするためだ。だが自分は何となく食べられなくて食べた事がないので味は分からないが美味しいとの話だった。

シベリアの春

春になりすっかり雪がなくなり、若草が新芽を出し始めた。春になって一番困つたのは、靴の支給がないことだ。ロスケは木の皮でつまごのような物を作る方法を講習してくれたが、固いので靴下もない素足では痛くて履けたものではない。仕方がないので枯れ草で草履を作って履く、藁と違い弱いので毎日一足ずつ作らないと間に合わない。

また春になって雪が消えると、この山奥までの道路がない、ツンドラ地帯が多くてトラックもトラクターも通れないのである。一番近い村でも二十キロ以上も離れている、食料等はその村までしか来ないので、そこからは人力で運ばなければならぬ、この運搬の使役が一番こたえる。何しろ一人三十キロくらいの荷を担いで、道らしい道もないところを運ぶのだが、栄養失調の身体では大変な重労働である。だが運ばなければなお栄養失調になる。歩きながらこんな苦勞をすくらないなら死んだ方がよっぽど楽だと考えながら、ただ惰性で足を前に出している。

でも春になって悪い事ばかりでもない。春になり新芽が出て来たので作業に行く途中で食べられそうな野草を採りながら行く。作業場に着くまでに昼食分位は楽に採れる。それを塩魚と一緒に煮て昼食にするので、空腹を十分に満たしてくれるのである。その他に自分はどうしても食べられなかったが、蛙、蛇、かたつむり等を食べていた。ロスケの兵隊は蛇が大嫌いで、蛇を見ると悲鳴を上げて飛んで逃げる。それを日本兵は平気で食べるので気持ち悪がつて寄り付かない。また馬の食べている物は全部大丈夫と言って食べている物を良く観察する。

それで日本兵は塩さえあれば死なないので塩を持っていると逃亡すると言って、時々検査をして塩を取り上げる。

風呂

少し離れた小川の縁に小さな風呂場ができた、ロシア式風呂は浴槽はなく、部屋の中に五段位の段を作り、下の方で鉄製のストーブを焚き、そのストーブにバケツで何杯も水をかけ蒸気を発生させて蒸し風呂にする。

上の段にゆく程熱くなる、自分の好きな熱さの段に腰掛ける。しばらく我慢していると、どんどん汗が出てくる、垢も浮いてくる。結構いい気分になる。

しかし石鹸も何もない、タオルもないのでどうにも仕様がない。

ロスケに教えてもらったのは葉っぱの付いた木の枝に水を付けてそれで背中をパンパンと叩く、そうすると浮いた垢が自然に取れるということをやってみる。結構垢は取れる。何カ月も風呂どころか顔も洗っていないので全身から取ってもどんどん出てくる。本当に何カ月ぶりの風呂だろう、生き返った気分だ。

だが二百人もいるのでそう度々入ることができない。

自分も一回だけ風呂当番に行った。前の小川から水を汲み、お湯を沸かしたり、ストーブを焚いて暖めたりが仕事であるが、小川が殆ど川底まで凍っていて、下の方にほんの少しチョロチョロ流れているだけ、しかも穴は相当深くなかなか大変である。だが悪いことばかりでない、それはその穴の明かりに釣られてかザリガニが出てくるのだ。獲っても、獲っても次々と出てくる。水を汲みながら二十匹程も獲れた。これをストーブの上で焼くと皮ごと食べられる、とても美味しかった。これが本当の役得だ。

当番でもロスケの奥さんが入る時は追い出される。意識的にしたのではないのにロスケの女性の方を向いて小便をしたとして、マーリンクドーム(営倉)に入れられた者も居る位エチケットもうるさい国だ。

便所

収容所の便所は宿舍の横に大きな穴を掘り、高さ五〇センチ程の囲いを付けて屋根には割り板を張り、穴の上に細い丸太を渡し、皆が並んでするのである。初めのうちは何か具合が悪く、出るものでなかったがそれれもすぐ馴れ、わいわい話しながらやっている。ところが冬のうちは良かつたが、段々暖かくなってくると匂いが酷くどうにもならない。それで今度は便槽を引き出し式にして二十カ所程並べて作り、当番が引き出しを担いで山に捨てて来るようにしたので少し良くなった。ただ困る事は紙がない事である。ロスケは紙を使わないらしく、一切紙の支給はない、仕方ないので着ている服の綿を少しずつ千切つて使った。春になる頃ちようど上下の服の綿は全部なくなっていた、春以降は草木の葉で何とかなっ

た。

床屋

収容所には床屋さんがいないので捕虜は皆髪の毛がぼうぼうに伸びて段々人相が悪くなる。元々悪いものいるが、ちようど自分は良く切れる洋鋏を一丁持っていたのである日曜日に戦友の頭を裾刈りしているところをロスケの兵隊が見つけて、自分達の頭もやってくれと言うので、ロスケの兵舎に行つて兵隊の頭を裾刈りしてやる、次から次と五人もやった。兵隊達は喜んで食事を出して食べて行けと言う。外の者に悪いから持つて行かずにごうんと食べて行けと言う。久しぶりの固いご飯で油で味付けがしてあり、物凄く美味しい。外に肉とか豆の煮付けも出た、働かざる者は食うべからずで、その代わり働くに必ず報酬を出すのがロスケの習慣なのだ。自分は一生懸命に食べた、腹がいっぱいになつても口が飽きないのだ。喉までつかえてもまた食べたい。ロスケは喉につかえるまで食べたと笑う。次からクシクシドクトルというあだ名がついた(良く食べる床屋と言うことらしい)。それから時々床屋として呼ばれ、その都度ご馳走になつたので大変助かつた。春、本隊が来るまで続いたが、本隊が来たら、本職の床屋がいて自分の仕事はなくなつた。

コックリさん

自分は初めてで知らなかつたのであるが、コックリさんと言って狐を呼んで、占いをするのだ、他の隊でそれをやる者がいて占つたところ、五月頃に帰れるという占いが出たと、その話で持ちきりになつた。それでは我々も一つ占ってもらおうと言う事になり、黒パンや魚を無理して残してその兵隊を呼んだ。

どうするかというと、大きな紙に鳥居を書いて、いろは四十八文字と一から十までの数字を書いたものを前に置き、本人は目隠しをして箸のような物を両手で握り、紙の上に置く、窓を開けて狐が入れるようにして一心に念ずるのだ。すると嘘か本当か知らないが手が段々震えてきて、トントンと紙の上を突つ

つくだである。その突つつくところの字を辿っていくと一つの文章になる。果たして日本の狐が遥々とこんなシベリアまで来るとは思われぬが、皆真剣である。

こんな事を信じる程望郷の思いが強いのだ。この時ははっきりとした文章にはならず終わった。自分のように信用しない者がいたので、狐が怒ったのかも知れない、どうぞお狐様お帰り下さい、と本人が言って終わった。

本当に狐に化かされたようなものでお供えだけはしっかり持っていかけた。その後も時々コックリさんがああ言った、こう言ったと話が伝わってきたが、どの話も当たらないので段々信用しなくなっていくの間にかこっくりさんの話はなくなつた。

愛知県 鈴木英一

食事をしていて箸をポトリと落としてそのまま息が絶える。朝、隣の兵隊が起きないのでよく見ると死んでいる。珍らしいことではなく、次は自分の番かと観念したものだ。軍隊組織を解体しようとするソ連側の方針で、原隊の戦友と離ればなれになるので隣の兵隊の身許が分からなくなっている状況だった。

岩手県 長沢龍次

排泄物は、人間にとつて大切であり、收容所に相応の施設は無く、緊急に戸外に便所として三メートル×五メートル位・深さ約一メートルの穴を掘り三〜四センチ幅の丈夫な板を十枚適当な間隔に架け大使用とした。少なくとも板に跨ぐ人員は定員二人、混む時間帯は各人了解?のもと三人が使用した。小便は、決められた場所に用を足した。大は、下から積重ねられ三角状に凍った。頂点が近づけば渡し板を移動し使用した。満杯近くなれば各班よりの使役により、これを砕きロープで結えた金物の盥に積み雪道を二人で引つ張り農地に運び肥料用にと捨てた(大便是、寒さのため下から凍って三角形となり臭み匂いもなかつたが、作業中に撥ねて衣服に付着したものが收容所に帰って溶けた時、匂い

が戻った)。夜の用便は大変難儀だった。ご老体の少尉の方は、シベシ渡瓶を離さず持ち歩いておられた。

この收容所で一年間、百人余が栄養失調・発疹チフス・肺炎等、合併症で亡くなった。近くの丘の上の雑草地に埋葬された。今は場所、面影も無いと言われている。

食糧について

三重県 川邊幸治

ソ連軍から支給される一日の食糧は、烏麦の黒パン幅六センチ位、アフシヤンカという粉、乾燥鰯、塩鮭、砂糖位で、皆空腹を訴えていた。

ソ連ではすべてノルマで左右される。一〇〇%で普通、七五%のときは二五%カットされる。野菜などのビタミンがとれない。炊事係がソ連兵のキャベツ畑へ行き、ソ連兵が上部のキャベツを刈り取って残った堅い茎を斧で切ってきて、ドラム缶で長時間煮てお粥のようにして食べた事もあった。ある時は積雪を掘って、ツンドラの苔をとって搾って食べたこともあった。ソ連兵は野犬や鳥を見つけると平気で銃で撃っていた。我々は、その死骸を集めてきて喜んで食べたものだった。また、支給になった砂糖を貯めておいて、作業のない日に汁粉にして食べるのが楽しみだった。

栃木県 橋本正男

シベシ虱は俘虜にはつきもので、秋から冬を越し春までは洗濯をしないので誰もが虱に悩まされた。昭和二十二年頃の冬には二回巡回バスのような車が来て交代で十人位宛シャワーを浴びた。凍らない程度の水のために寒くて風邪を引くようであるが、少しの水でも垢を落とすだけでも気持が良かったのと、その間に着衣は別の車にて滅菌消毒をするので終わると三日位は気持が良かったのであるが、四日も経つと元の木阿弥であった。

我々は夜ドラム缶を横にした。ペーチカを使用し夜中も火を絶やす事がなかった。自分の着て居る襦袢と袴下は飯盒にて雪を溶かしてその中に交互に入れて煮立てて虱の卵まで殺して、すすぐ水もないのでそのまま乾かして着ておったので常に下着類は雑布のような色であった。

ある年の冬の寒い日遠くから水を運んで来てドラム缶にて沸かして入浴した事があった。初めの二、三人(ソ連)の監視兵の入る頃は何とか湯もあるが十人以上も入るようになると湯も少なくなつて肩まで入る事ができなくなるので、それ以後入る人は二人抱き合わせで入らないと肩まで湯がなくなるのであった。皆全員やせているのでちようど良い工合に肩まで湯に浸る事ができた。だが周りに居る入浴当番の者は近くの吹溜りから雪を集めて補充したり薪を追加して火を焚かねばならないし、水は井戸にはあるようであったが釣瓶は炊事係だけしか持つておらず、零下四〇度も下る地方なので釣瓶の縄が凍ると折れて井戸の中に落ちてしまふので炊事係は貸してはくれないのであった。仕方なく砂まじりの雪を集めて湯の補充をするのである。

我々の寝る所だけは半地下の宿泊所を作つても、入浴場の囲いなぞは作る時間がないために止むを得ない方法であった。

そのような風呂でも少しは垢が落ちるので三日位は気持が良かった。このような風呂もその冬に三回位は入つたような気がする。夜が明けると残り少ない湯は凍つているのを捨てて二人でドラム缶を持参し近くの川から水を汲んで湯を沸かして昼食時には全員その湯を飲んで腹を満たしたのであるが、誰も腹痛を起さないようであった。

福井県 増田武也

板造りの平屋のバラック建、中は土間で、両側に板で上下二段の二人用「幅一三〇センチ」程で、何しろ二人がくつついて寝るベッドに七〇センチ程あけてまたベッドで、それが片側に二十五個ずつで五十個、二メートル余りの中通路で二百

人、両側入り口にドラム缶を横にした薪ストーブ一個ずつ、石油ランプ三個。ストーブの近くの者は暖かいが、下のベッドや中程の人達は寒くて寝られない。ただ疲れて知らぬ間に寝るだけ。通路に板造りの机を並べて食事はそこで取る。トイレは外に大きなタルを置き、それに足す。全部凍るので翌日使役が出て氷を割り縄モツコで運び捨てる。零下四〇度の外のトイレで体が冷え中々寝られない。大変だった。着衣は軍服を着たそのまま、作業も夜寝る時そのまま、着替へもなく引っかけ傷ができて糸もない、汚れてもそのままだった。厳寒になると足はソ連製のベージンキと言う動物の毛を圧縮した長靴で、氷の上でも滑らないで歩ける。また中にボロを巻き、中が濡れると夜干して翌日また使用した。手はウサギの皮で作つた親指だけ動く大手袋を着用した。また外套も貸してくれた。大きいのがやらいのやら、また汚れたのやら傷つきやら、情けないものだった。心身共に疲れ果てた我々は、生きる為に身を保つように少しでも食物をと、極寒のシベリアでは夏四カ月程しか虫も草も生かないが、少しでもあれば取りスプに入れ主食の足しにし、また松の苔を取り焼いて食べた。またソ連の官舎のそばを通ると芋の皮が捨ててあるのを見て拾つて帰り焼いて食べる。それこそ恥も外聞もなく保身に努めた。

三重県 川邊幸治

住まいについて

〇占守島

武装解除を受けた後は、元の兵舎へ戻ることができず、海軍の兵舎に入った。地面を掘り側壁を柱と板で囲み、三角屋根を置いた建物で、比較的快適であった。

〇カムチャツカ カリヤーキー

ペトロパロフスクから徒歩で五〇キロ行軍してきて、休む間もなく一個分隊ごとに各人携行の天幕を組み合わせてテントを張つた。牧草の敷藁の上で寝る

ことになった。

○ドウエナーツチ自動車工場

ここでは、前掲のように建物があてがわれ、居住環境としては何の不自由も感じなかった。

○ボヘジノ(古屯)

ここでも天幕生活であった。ラーゲリの中で分隊ごとに天幕を張るのであるが、天幕の広さに、深さ五〇センチ位の穴を掘り、その中へ天幕を建てる。穴を掘った土を天幕の周りに積み上げて固める。下に牧草を敷き、薪ストーブを焚くと結構暖かかった。しかし、燃料の薪があるので、薪作りと不寝番を一人用意しなければならなかった。

○ポロナイスク(敷香)

終戦後、居住者はどこへ行ったかわからないが、日本人の居住していたと思われる民家が三軒あり、これを利用した。久しぶりに日本の建物ということで、懐かしかった。居住性については特に困ることはなく、広いので今まで交わせなかった会話ははずんだ。

岩手県 土川 清

衛生状態が悪いためシラミがつき、かゆさのために熟睡できず、栄養失調と睡眠不足で数多くの同輩が死んでいった。

少しでも飢えをしのぐため木の葉を食べたり、車から転げ落ちたジャガイモを夜中に拾って食べた。

酷寒の真夜中に、必死の思いでジャガイモを拾い、氷を溶かすために飯ごうで煮たところ、馬糞だったという笑うに笑えない話がある。

帰国が許されたときは、これ以上働くと死んでしまうところまで体が衰弱していた。

体重は四八キロで、あばら骨が見え、足首からももまでが同じ太さだった。

貨物船で帰国した。

愛知県 水野朝之
ブヤンキー山中收容所

住まいの状況

山の斜面を横掘りにして横穴の穴蔵を造り、前方に埋め立てた土の上をトタン屋根で蔽い、中央にストーブを置く。

そのため、冬は午後四時頃、朝は午前八時頃まで真つ暗な時に夕食、朝食となるので、松ヤニのある松明タイマンを前日に準備しておいてその明かりで食事をした。そのため松明の煙で顔や服が真つ黒になり、目と歯だけが白く、黒人同様となった。そのような環境のため、後述しますが、作業員の気力を失う要因の一つとなった。

抑留中の娯楽について

イブヤンキー山中收容所

ロアントニフカ山中收容所

両收容所とも色々な方がおられて嘶家とか落語家のようにお話のうまい人や歌の上手な方が、昼休みや当初はノルマが早く完了し、体もそんなに疲れておらず午後の一〜二時間とか夕食後の四十分位の時には以上の方々の演出、演技によつて皆、堪能し、とても楽しく充実していた。

例えば落語家の場合は、すし、おはぎ、みそ汁等々、現在の抑留中に味わえない日本の食べ物について手や口を使い、顔の表情や動作が面白く、おかしい話ぶりに皆聞き入つて、一緒にどつと笑い、また静まったりして、心の中で刺激を受け、日本内地の様子を食事から想い出させた。またエロ話を、例えば結婚初夜の話の微に入り細にわたつて話され、アンコールを何度もして、よく聞かされ

た。また歌の上手な方もおられ、そのすばらしさに心を奪われ、うつとりとして快い気持ちになる事もできた。けれども段々と話の種もつき、演出される方も昼間の山仕事で疲れ、新しい構想を考えられる環境でないので自然となくなつた。

ハスイソエフカ山中收容所

以上の演出や演技を皆楽しんだ時も過ぎて、前述したように各個人が飯盒に水増しして重湯状にして、熱い重湯で腹いっぱいにして満腹感を味わうようになり、食道を痛め、栄養失調から気力を失い、娯楽どころではなく最悪の状態であつた。その状態から民主運動で收容所内革命があり、ノルマの異常上昇となり、その報酬と、我々の休日の労力で收容所内設備の新設、改築、改善等を行い、完成した後は劇団が編成され、ギター、アコーディオン等も購入して、日曜日の午後はその演劇を屋外劇場で鑑賞することができた。例えば地主とか小作の芝居が延々と上演された。またノルマ上昇の報酬で小麦粉、小豆、砂糖、醤油等を町から購入して、小麦粉で作った「みたらし団子」「ぜんざい」「おはぎ」等を引換券を配り屋台店を作って、そこでそれらを貰い頬張りながら劇を鑑賞した。これらはすべて日曜日の午後に行われた。平日は三〇〇%の仕事、夜は遅くまで洗脳教育でくたびれ、皆午前中は朝食後寝るのだが、芝居の演出関係者や屋台店の関係者は準備や稽古で大変であつたと思う。けれども、一般隊員はたしかに楽しみが増えた。また一方、このような劇で自然に洗脳もされた。

埼玉県 山口秀夫

冬になると長靴、カートンキというフェルトでできた長靴が配給になつたんですが、これは一日履いて道路を歩いていると、それこそ足の湿気で靴自体がかちかちに凍るわけです。それを一晩、ペチカの上だとか、わきに置いて乾かすんです。朝履いて、朝のうちはほかほかしていいんですが、その寒い中を十分から二十分も歩くと、今度はもうその長靴が湿気がかちかちになるわけです。そうすると、もう道路がつるつるに凍っているの、すてんすてんとひっくり返つちやつて、作業

場に行くまでに疲れちゃうんです。本当に寒いというのはひどいことでした。

また、今までの收容所で電灯というものは、ナホトカに行くまで三年何カ月、全然見たことはありませんでした。伐採ですから人家もないような山の中ばかり歩いてたものですから……。それで、明かりはランプです。そのランプも灯油がないものですから、缶詰の缶を大小重ねまして、中にガソリンを入れて、穴をあけてひもを芯のかわりにしまして、それをランプ、明かりのかわりにするんですが、ガソリンなものですから、すすが出て、朝起きると真つ黒になるんです。そのランプが何カ所も收容所の中に置いてあるんですが、朝起きると、みんな顔が真つ黒で、本当にお化けみたいな顔になっている。

また、その收容所も転々とあちこち動いて歩いたんですが、冬、移動すると人の住んでいない家というのは空き家で、暖房も何もしないものだから凍っているんです。柱の割れ目に氷が凍つて光っているんです。それで、いくらストーブをたいても四、五日は溶けないんです。恐らく零下だったと思うんです。寒い思いをしながら我慢して寝ていたんですが、四、五日すると大体温かくなってきました。

分隊ごとに食糧が配給されて、それを個人にまた分配して、各人が自炊するわけです。時々雨に遭つて倉庫が全部びしょぬれになつて、それで着がえもない。春とはいえ、もう寒くて震えたこともたびたびありました。

それから秋になり、道路作業の移動の途中で沼があつて、だれかがこの沼には貝がいるかもしれないと言つて中に入りました。水は冷たいんですけども、中に入つてトリガイ、バカガイとも言つてしまうか、それをたくさんとつてきて腹いっぱい食べる。みんな寒いのを我慢して震えながら沼に入つて貝をとつて食べました。それをゆでて配給の塩をつけて食べるんですが、味は結構おいしいんです。ところが、翌日からひどい便秘になりまして、本当に七転八倒の苦しみを味わいました。

それからまた、道路作業の途中では草原にユリが生えているわけです。もう花は散っているんですが、そのユリの根っこを掘ってゆでて食べる。ユリの根っこというのは日本では高級料理になるんでしょうけれども、バレイシヨにちよつと似ているんですが、それよりもっとおいしかったと思っております。それからまた、アカザやタンポポなどの野草をとってきてゆでて食べるんです。これを飯ごうにとってきてゆでて、ぎゅうぎゅう押しつけてゆでたのを飯ごういっぱいにしてそれを食べるんですが、これがまずいの何のつて、ちよつとぐらい食べるのならないんですが、ただ腹を膨らすために無理やり押し込むので、吐きそうになりながらもでも押し込んで、ひどいものでした。そういう経験もしました。

移動の途中でコルホーズ、集団農場の部落に差しかかるとバレイシヨの収穫をしておるんですが、そのとき、掘っている前に行つて、ちよつとにやつと笑うと、バケツいっぱいジャガイモをくれるんです。これは本当の話なんです。うそみたいですが本当の話です。ロシア人というのは個人的には非常に人がいいのです。そんなわけで、この時期は食糧には割と恵まれました。

北海道 長尾忠也

捕虜の食料は一日三五〇グラムの「黒パン」と米粒の五〜六粒が入ったスープだけだった。食事時になると、お互いの食器である缶詰の底をついて広くする。そうすることによって、多少スープが多く入る。考えてみると人間の食べ物がなくなつた時には、人間としての感覚でなくなる。動物と同じである。人間としての価値判断がなくなる。その時こそ、日本に帰つたら白菜に大根の漬物だけでよい、腹一杯食べたものだと考えた。人間としての価値観や思いやりの心など持つことができない。

收容所の労働は身体の強弱によつて区分される。上位から伐採作業、農作業、收容所の雑役、このほかにパン工場、床屋、風呂当番に割り振られる。私は最初に伐採して木を製材する作業に当たった。しかも、全作業とも細かい「ノルマ」が

あつた。これは大変厳しくつらかつた。

当時のソ連社会にスタハノフ運動というのが盛り上がっていた。炭鉱労働者だったスタハノフ氏が、一般炭鉱労働者の二十五倍の石炭生産を成し遂げたのだつたという。それだけに当時の捕虜にはノルマが厳しかった。

私は製材業に従事していたが、作業中の丸鋸の歯に左手親指がかまれて、二カ月ほど休養していた。收容所には病院などの治療する施設などはなかった。

丁度その時、收容所のパン工場で働いていた斎藤上等兵から、パン工場に来て働かないかと言う声がかかった。彼はかつて召集前には銀座でパンの職人をして働いていた人であつた。

考えてみると、收容所の重労働で食料にも飢える状態の仲間にしてみると恵まれた環境であつた。このパン工場は收容所の仲間のパンと、ソ連人の衛兵やそして将校のパンを生産する場所でもあつた。

パン釜は煉瓦作りの旧式のものであつた。先ず薪を炊いて釜をあたたため、その残り火でパンを焼く方法であつた。收容所の仲間のパンはライ麦の黒パンで、ほとんど精白しないそのものであり、焼き上がりは従つて真っ黒になる。将校のパンは小麦粉の白色パンであつた。一週間に一度麦粉がパン工場に運搬される。パン工場の管理者はロシア人で、元はこの收容所に政治犯として收容され刑の終了した人であつた、毎朝パンの製造内容について検査に来ていた。一昼夜に四回ほど釜にパンの材料を出入するので、夜にうっかりして寝過ごしてしまう事もある。その時は不良パンができる。その時は管理人だつたソ連の民間人に苦言される時もしばしばあつた。

当時の私はパン工場で働いた関係で食料には事欠かなかつた。六十キロに丸々と太つていた。收容所の仲間にはすまなかつたと思つていた。仲間達は夜八時頃になると「パンを多少恵んで下さい」と言つて訪ねて来た。何度か分け与えてやつた。当時の收容所の食料事情からしてやむをえなかつたと思う。

收容所の仲間としてみれば、日常重労働の上に、「ノルマ」という過酷な生活

で飢餓の生活から解放されたいという心境であつたであらう。

岩手県 千葉義一

一番関心のある食料は、しばらくは満州から持ち込んだ米の重湯に近いかゆと馬鈴薯少々の塩汁。米が無くなると酸っぱい黒パン、朝に昼食分まで出るが、一回に食べてしまい昼飯抜きが多く、夕食はパンと牛の内臓の塩漬け少々のスープ一杯。黒パンは一日三五〇グラムと決められているのに、量は毎日まちまち。

夜の食事は日増しに米不足のため、蕎麦のオートミール、無精白(馬糧用)のコーリヤンや原穀の粟、グリーンピースなどのかゆ、塩気なしの日も再々。青野菜など見ることもなく、馬鈴薯やキャベツの塩漬けをスープに少々、日本人の食事に程遠く、炭鉱労働に耐えるカロリーは望むべくもない。国際的な捕虜給与の規定に決められている野菜、肉、バター、砂糖、タバコなど見たこともなく、給料もノルマを達成しないとの理由から一円も貰えなかつた。

冬の日暮れは早く、夕食を兵舎ゴことに当番が棒で担いで炊事場から運ぶ途中、入口地下道の暗がりですすんで樽に手を突っ込み盗み食いして騒がれたり、隣の兵舎の当番になりすまして毛布に包んだパンを背負い、途中ズラかつて持ち逃げして空き兵舎にもぐり、腹を満たしているのを発見され、袋たたきに遭う者などの悲喜劇も見られた。

楽しみとする夕食の分配は厳しく、真剣であつた。六、七人の各分隊ごとに当番がパンを切つて、即席の天秤ばかりで平等に分け、塩汁スープも等量に分け、中味の塩漬けの内臓は小刀で等分し、さらに抽せんで分配された。

湯水の支給はなく、各々飯盒に雪をつめ、ペーチカで融かして飲むのだが、目を放すと盗まれることが多いので、生ぬるうちに飲むため下痢患者が出始めた。

食料不足から腹の減るのにはまいった。朝昼二食分のパンを一度に食べても満腹感がない。作業の帰りには口に入る何かを探して歩き、列から離れて警戒兵

に怒鳴られる。道端に食える雑草のアカザなどを見つけると先を争いつかむ風景があり、そこには階級、年齢の相違がなかった。パン工場前を通ると香ばしい匂いにたまらず、庭端に掘られた穴に群がる放し飼いの牛や犬を追い出し、パン屑をあさる者もいる。

栄養の不足と重労働、衣服はボロボロで不十分なのに、零下三〇度を超す酷寒など、日本人達はみるみる痩せこけ生気を失っていく。下痢症状の原因の一つのできごとは、零下一〇度ぐらいの十一月の夕暮れに野菜支給に大勢で麻袋を持つて、一キロほど先の農場に出かける。雪に覆われた野積みのカブ大根をスコップで掘り起こし、炊事場に持ち帰るわけだが、凍ったカブを歩きながら舌で融かしアイスをなめるように食い始めると、なんとも甘くてうまい。外套のポケットにも詰め込んで兵舎に帰り、ペーチカで融かして食い放題となつたが、これがいけない。翌日から下痢患者が増え、血便垂れ流しが出始めたことにより、一棟を患者病棟として重症者を収容する。

帰還(ダモイ)

岩手県 吉田欽三郎

年一回の健康診断はソ連軍医と通訳、そして日本軍医と衛生兵の立ち会いで行われる。診断結果として第一グループと第二グループは屋外作業、第三グループは管内作業の区分であつて、待望の内地帰還者は第三・第四グループから選ばれたようである。

我が寮、四国のK君は粥食が大の愛好家である。

「今の飯の量ではどうしても腹いっぱいにはなれない……だから粥にするんですよ……」と言って、炊事からもらう粥のような柔らかい飯に、さらに水を足し飯盒一杯にしストープで温め、粥をさらに水粥のようにしてから、これをすすつて食べておつた。

「それでなくとも栄養が少ないのに薄めたんじやどうかなあ……」と言う人もお

つたが、二年目の夏、彼は第三グループとなり、いち早く内地帰還となったのである。

「Kの奴、早く帰れてよかったなあ……」うまくやったぜ……「しかし随分辛い時もあったようだぜ……」と噂する人もおった。

早く日本に帰りたい、帰るためにはどんなことでもしたいのが誰しもの本音なのだ。

伐採の斧で指を切つてまでも帰らなかった奴がおったとの注意があったが、それまでもはしたくないのだ。だが敗戦になり満州から持つて来、黒龍江の土手から船に運んだあの米は、一体どこにどうなったのであろう。

シベリアに来て以来、白米の飯は一度も食べさせられなかった。

戦友達も、今日は一月一日の元日だ、今日は二月十一日だ、やれ三月三日だ、今日こそは何かうまいものをと期待しながらの抑留生活だったのである。

しかるに、毎日毎日が高粱か燕麦の粥のような軟らかい飯に、少しの塩魚と黒パンの食事を与えられるだけである。悲しいかな、あてがわれただけしか食べない抑留の食事なのだ。

四国のKならずとも誰でも早く帰りたいのだ。ああ……早く帰つて白飯を腹いっぱい食べたい。

乏しい食糧

厳しい労働を強いられながら、それを補う食糧は極度に乏しく、また、粗悪であった。飢えて痩せ衰えた体に酷寒、重労働が重なつて、ちよつとしたことが死につながり、多くの人が死亡した。

当時のソ連の捕虜取扱規則によると一日に、

黒パン 三〇〇グラム

獣肉 五〇〇グラム(骨、内臓を含む)

愛知県 齋藤高志

雑穀 三〇〇グラム

野菜 六〇〇グラム

塩 一〇グラム

砂糖 一五グラム(キャラメルの時も)

油 五グラム

これなら結構な量である。しかし、抑留者に渡つたのは桁外れに少ない。大方は二〇〇グラムにも足りない黒パンが弁当(実際には朝食に食べた)。朝夕はカーシヤ、もちろんうすいので箸の必要はなく、すするだけであった。特に生野菜の量が少なく、春になればアカザを茹でて食べた。これは、ソ連の管理者や糧秣受領者がピンハネしたり、地方人に横流しされ、その残りが抑留者の食糧となつたためである。

当時こんな川柳が盛んにいわれた。

「末世かな 高粱、米をはりたおし」

当然米の方が美味しく、高粱の比ではない。しかし、カーシヤにすると、米は三倍にしかのびないが、高粱なら四倍にのびる。同じ目方なら高粱のカーシヤの方がかたくなるので珍重がられた。

「五分確保 水くみノルマ 一度ふえ」

カーシヤはうすくとも、一人で飯盒に半分は食べたい。これがみんなの願いであった。この願いを満たすためには、水汲みは一日のノルマを一回余分にするといい。

昭和二十二年九月頃と思う。ある日、作業から帰つて、みんな監視の中、白樺の皮を燃しての明りで食料を分配した時、ソ連の政治部員が突然来て、分配された二人分を持つて行った。チタ(シベリアの主要都市)で検査の結果、規定の分量とは格段の差があるというので、カマンジル(隊長)、カンボーイまで交代させられた。以後、糧秣受領は抑留者の炊事係がすることになった。それからの糧秣事情は少しよくなった。

滋賀県 山中重夫

私達は極寒のシベリアではなく比較的気候温暖なコーカサス地方であるため、在留したひと冬に二回程度の降雪を見た程度で、この点についてはシベリアの地で労苦に耐え忍んだ同朋よりは幸せであったと思っている。

このラーゲルにおける食事は、毎日、朝と昼の食事として(但し 日曜日は除く)小麦粉を練つて直径五センチメートル、厚さ一センチメートルほどの平たくして蒸し上げた団子が六く八個支給される。それと小匙二杯分くらいの白砂糖が与えられた。私は朝食、昼食の二食分の団子を朝のうちに一度に食べ、昼は別途に調達した馬鈴薯を谷川で洗い、ゆがいて、予め砕いておいた岩塩をふつて食べていた。白砂糖は毎日のものを溜めておいて、日曜日にぜんざい風だんご汁として食べていた。夜の食事は黒パンで、班の当番が三段階くらいのノルマに応じてその人ごとに分配された。例えば、よく働いた人は三五〇グラム、普通に働いた人は三〇〇グラム、やや皆より劣る人は二五〇グラムなどのように、評定は毎週ごとに査定された。野菜などの給与はほとんど無かった。それで我々は山に生えているやわらかそうな草をつんできて、食べられることが分れば塩味を付けて食べていた。時にはデンデン虫を焼いて食べたこともあった。

鳥取県 横川茂男

抑留者の生活実態はそれぞれ場所も就労内容も異なるため一言では言えません、いずれにしても極寒の地での作業であり、すべての点が不備の条件の下でのことで、一口に言えば全くもつて言語に絶するものでした。具体的に言うならば、先ず収容所の設備等環境面も悪く、一事が万事というところでしょう。食事は一応一日に三回であるが何分量質共にお粗末で、黒パン二〇〇グラム、汁は飯盒に半分はあるが中身は全くなく、ただ湯に色がついているようなもの、口に残るものなどありませんでした。もちろんその他の具は一切皆無。時折り

塩漬けされた魚が祝日等に一切れつのが珍しい事でした。その結果というか、全員ではないが鳥目になる、いわゆる極端な栄養不足で困りました。昼間は差し支えないが、夕方、夜はよく小便つぽに落ちたものでした。衣類等、日常生活にかかわる必需品も一切支給はありませんでした。温かい夏季には時折洗濯等もしましたが、秋から冬にかけて寒さが感ぜられる頃は一切できませんので、身の回りの物はどうにもなりません。もちろん替衣等は一切支給されたものではありません。いわゆる着たきりすずめというところでしょう。不足や不満を言えざりありませんのでやめますが、一方、ロシア人の生活自体もあまり贅沢はできぬ状況のようでした。考えるに、あの大国ロシアもあと一歩で国が滅亡する寸前の独ソ戦のように見受けたものです。

愛媛県 梅崎文夫

食糧の支給について

食糧については当然それぞれ支給の定量(品目別)が決まっていたが、日本人の抑留者がシベリアで飢えに苦しんだと言われている。腹いっぱい飯が食いたい、それは私達の共通する願ひであったのだ。ソ連側の倉庫より定められた日に「日本側の代表者(経理担当の将校)が若干の受領員を連れて受領するのであるが、今私が確実に記憶しているのは、一日当りパン三五〇グラム、砂糖一八グラム、野菜六〇〇グラム等で、その他の米を含めた雑穀や調味料の数量ははっきり覚えてないので書かないが、覚えているのは炊き上がったものがいつも粥、時には全くもつて薄いものもあった。現在は腹八分が健康に良いと言われるが、その当時の私達はいつも空腹に泣いていたのであった。

食糧についていま一つ、雑穀の品目について記すが、その種類は米、高粱、粟、キビ、燕麦、大豆、緑豆、小豆等、種々雑多であった。しかも閉口したのは精白していない雑穀を支給された時であった。

何となれば、炊き上がった飯を食べる時「初から出し」が大変であったのだ。い

ま一つ加えると、主食も副食も同一種類という極端なことも一度経験したのである。

風呂と虱

大阪府 前田 康

香坊の部隊を出てモシカの収容所に入った時は既にシベリアは厳寒の冬、ようやく寒さがゆるむ兆しが感ぜられるまで、約七カ月間、施設、環境、厳寒の条件下では一度も風呂に入る事が出来なかつた。モシカから更に沿海州寄りにウルガール炭鉱があり、鉄道が通っていたが、独ソ戦のためレールが全部撤去されてヨーロッパに送られたとの事で、我々抑留者がこの鉄道復活のための枕木を制作する木材の伐採作業に従事したが、シベリア松の松ヤニが手や顔に付き、それに焚き火の煙が、またストーブのガスが付いて垢と一緒にたまって炊事場勤務以外の者は猿顔負けの真黒の顔をしていた。七カ月間ほど風呂に入らない状態を想像して見て下さい。この様な状態の上に更に四人が一つの二段ベッドに寝る時、下着も含め全然着替える事なく過ごせば当然「虱」が猛烈に発生した。

一匹二匹取つては切りがないので闇夜の中でほかに赤く燃えている四角のストーブの天板の上に衣服をかざしていると熱さに耐え切れずに虱が下に落ちると天板に赤い点がポ、ポと光る。文章にすると或いは幻想的と言えるかも知れないが現実には悲惨な状況である。昨晩寝る時まで生きていた隣の兵が、朝何の前触れもなく冷たくなつており、虱が一匹もいなくなつていた。と言う様な事が珍しくない状況でした。

パンの分配

極めて貧しい食事の中でパンが一番の生きるための糧でしたが、一日朝食に定量が三五〇グラム（ノルマ達成度で減量。後半ではノルマ制は緩和された）支給されましたが、高粱粉の水分の大きな黒パンを炊事班が一室人数各に目分量で切

り分け、実に簡単な秤にかけて小さく切つたパンを一つ又は二つと本串で乗せている。水分の多い黒パンなので大きさに微妙に差がある。毎日替る係が自分の室の人数分を持ち帰つてから分配する方法がいかにも抑留生活の貧しさを、公平とあきらめを維持する方法によつて行われます。先ずパンを板の上に何列にも並べます。二段ベッドの上から真剣な目でどのパンが一番大きいか（目方ではない）を見ています。次に係が今日はこのパンからと指定します。今度はベッドの人の中の人を指名します。指名を受けた者は何番ベッドの右上と指名します。これでこの指名を受けた者が係が指定したパンを取ります。この後はベッド番号の次の方が次のパンを取つて行きます。人の手で分配されるパンの大小ですが、この分配方法では、どのパンが当たるかは全く分らず、不足を言えない公平とあきらめの分配方法です。自然に考え出された方法ですが、ベッドの上から食い入る様にパンを見ている姿、究極的な分配方法を考え出したのが共に成人の男子。現代に生きている人々に考えられるでしょうか。これがシベリア抑留生活の悲惨さと残酷で無情さを如実に表している事実だと思えます。

東京都 金井秀雄

服装は段々とひどくなり、かつては北方鎮護のいかめしさがあつた防寒帽は真黒に変色、防寒外套も松ヤニでよごれ、焼け穴から綿がはみ出し、釦は取れ、拾つた荒縄を腰に結び、飯盒と空き缶、岩塩の入つた布袋を下げる姿は乞食よりひどい服装であつた。補修する針も折れてなくなり、針金を拾つて五センチぐらいに切断、片端をヤスリでとがらせ、反対の片端を平たく叩き、中央に糸穴をあけて縫い針をつくる。補修する糸の補給はない。軍袴（ズボン）に付いている紐を丹念にほどき補修糸にしたり、古い車のタイヤからも苦辛して糸を抜いたりした。なんとか生きてゆこう、抑留者は皆、明日に托す希望がない、私達を支えているのは、生きて日本に帰り着きたい、その気力だけだつた。

愛知県 伊藤専一

収容所の食事については、食べる量は空腹に耐えるだけではありませんでしたが、質が問題で黒パンなどは上等の口で、一番こたえたのはコウリヤンでした。完全に精白してあればよいのですが、いわゆる三分つきか四分つきくらいですから、固い皮がほとんど残っている。炊いたからといってその皮は柔らかくならない。そのため痔を悪くする者、下痢をする者の続出です。私も糞詰まりを度々起こし、うんうん呻りながら指でほじくり出していました。冬は外で何もとって食べる物がなく野菜が食べられないので鳥目(夜盲症)になる者も大分出たようです。夏になると草木が芽を吹き食べるものもあります。記憶に強く残っているのはカーシヤ(日本ではお粥のようなもの)に川で採った藻(も)を入れて食べたことです。

栃木県 橋本正男

虱は公平に全員にたかつており、痩せた我々を更に苦しめるのであった。着替えも無い我々は水もないので雪の日に雪を飯盒に入れて解かし、その中に襦袢を入れて煮ると虱は卵と共に死んでしまうのである。三分ぐらいして飯盒から引き出して舎内に吊るし、飯盒には新しい雪を足して袴下と褌は一緒にして煮たのである。見た目は汚くとも二、三日は虱もないので大変気持ちが良いのであった。

ソ連の人も虱がいるとみて、風呂の使役に出るとの号令があり、応募して行ったのは部落の共同風呂で、七日に一度沸かすのだとの事である。その部落の風呂はサウナ式で、建物は十五畳ほどの広さで校倉造りで、板敷きになった建物で、正面に高さ一メートルほどピラミッド型に平たい天然の石が積んであり、一段下がった所に焚口があつて、使役の一人が焚口にて火を焚くと煙が室内に充滿して一寸先も見えなくなつたところで、屋根には予め一メートル四方ほどの穴が開けてあつて、普段は板で塞いであるが煙が立ち込めると板を取り払って煙を外に出し、三時間ほど火を焚くと石が焼けてくるので、一人は傍らのビヤ樽へ五

十メートルぐらい離れた井戸から水をくんで入れておき、櫛の葉のついた小枝を水にぬらし、焼けた石を叩くと室内は蒸気が充滿するので前以て屋根の穴は塞いでおくので大変に温かく、外から入った人は寒中なので厚着をしているから桁に五寸釘を打ち、着物はなるべく間隔を開けてぶら下げておくこと入浴中に虱も熱いので外に出て着物から全部落ちるので虱退治になるとのことだった。

人は、上下二段の棚があり、入ると直ぐ櫛の小枝で焼け石を叩き上段に上って汗を出し、下の段にて垢を落とすのだとのことであった。

虱退治のためにマイクロバスが二台一組で来たことがあった。それは我々の着物を全部脱がせて車の中に吊るし、裸になった我々は別の車に入るとそれはシャワー室で、天井から僅かな水がチョロチョロと落ちてくるので、その水で身体を洗うのであるが、一個の穴の下に三人ぐらいで身体を濡らすと、次々と後から入つて来るので身体と手拭を濡らすのがやつとの有様で、風邪をひかないように、初めに入った車から自分の着物を見つけ出して着るのであった。

その着物の熱い事には驚いたが、虱は死んでも卵は死なないうでであった。

車に一度に三十人ぐらい入り、芋を洗うように混雑するのであった。一冬に二回ぐらい来たと思う。このように寒い冬に虱と南京虫に、夏は蚊と蝨がよに攻められて血を吸われるので痩せる一方であった。

私は復員後、雑誌で見たのであるが、ソ連人が米国へ旅行したところ、虱退治の車も設備もなく大変不自由を感じ、米国といえども虱については後進国だと感じたそうだ。

福井県 片山清次

デジカメラ(乾熱消毒場)

長年にわたり主流を占めてきたフィルムカメラの王座を奪い、今や若者の間ではケイタイと共に必需品となり、売れに売れているデジタルカメラの事ではない。抑留経験者にとっては忘れることの出来ない乾熱消毒場のことを言う。デジンプ

エークチオンナヤ・カメラと言う長つたらしい言葉を短縮してソ連人はデジカメと呼んでいる。

満州から着たきりスズメのままソ連に抑留され、入浴はおろか被服の洗濯もままならず、最低の衛生状態の中で生活は想像を絶するシラミと南京虫の大量繁殖を招き、痩せ衰えた兵士の血液を昼夜を分かたず吸いまくり、更に恐ろしいことに発疹チフスを媒介し多くの人命を奪ったのであった。

ソ連の監獄や収容所では、以前から囚人のシラミや南京虫駆除対策として被服消毒を実施していたのである。どここの施設にもバーニヤ・コンビナート（浴場総合施設）と称して浴室を中心とし周囲に理髪室、洗濯場、被服乾熱消毒場が配置されていた。我々は定められた日時に浴場へ行くと、先ず自分の帽子、上着、ズボン、靴下、シャツの洗濯等と陰毛を理髪係の手で剃髪される。そこでやっと浴室へ入ることを許される。

たつぷりと温湯がたたえられた日本の浴槽ではなく、洗面器代わりの小さな木製の手桶に二リットルほどの、ぬるま湯が担当係の手で配湯され、手持ちのボロ手ぬぐいで垢だらけの身体をふいて入浴は終了する。

一方、初めに脱いだ被服類は消毒場の担当者が消毒場へ運び入れ室内へ順番に吊り下げて行き、いっばいになると扉を密閉する。やがて備え付けのストーブに豊富な薪を入れて燃焼を開始し一五〇度の温度で一時間〜一時間三十分加熱消毒する。その間、ロシア人責任者の終始監視のもとに作業が行われ手抜きは許されない。

やがて消毒を終えた被服類は作業員の手で控室に運び込まれ各人の被服を捜し当て着用する。ストーブの無いツララの下がる室内に全裸で震えている体に、火傷するほど熱くカラカラに乾いた衣服に手を通したときの気分は、短時間ではあるが安らいだいつときであった。

その時、嗅覚の面から発見したのであるが、人間の皮膚から分泌した垢や脂肪分、剥離した皮膚、付着している採尿等が高熱で長時間熱処理される結果、

甘く香ばしい香りが生成される。その香りを分かりやすく言えば、あの食欲をそそる「海老せんべい」の甘い香りとそっくりであった。

ある日、使役で穴蔵のようなデジカメラの掃除に行ったとき、足元に薄茶色に乾いたシラミの死骸が一〜二センチの厚さに溜まっているのを見て背筋が寒くなった。

薬品消毒では大量の薬品を要する。蒸気消毒もボイラー等複雑な機械設備が必要である。だれが考えたのか知らないが、森林資源の豊富なシベリアにふさわしい乾熱滅菌消毒施設であると思った。

増水食

想像も出来ないほど、厳しい寒気の中で常識を越えたノルマのもと、強制された苛酷な重労働、その反面この重労働を支える食事は、全くお粗末な物であった。

ソ連が決定し、麗々しく発表している食糧基準表は数字の上では一応の配慮を示しているように見受けられるが、現実には我々の口に入る量とは相当な隔たりがあった。

独ソ戦に勝利したとはいうものの、当時のソ連の食糧不足は深刻なものであった。更に一九四五年はまれに見る食糧不足が追い打ちをかけるソ連市民社会を背景にして、毎日、日本兵士に給養される大量の食糧が、何人もソ連人の間で動かされていた。

そこに収容所管理者による横流し等の不正行為が各地の収容所で発生した。よしんば量的に確保されても質的には低劣であった。例えば獣肉五〇グラムと示されていても、実際は牛骨や臓物が給与されて肉片にはお目にかかったことはなかった。野菜二〇〇グラムの内訳は、人間が口にしない牛馬か豚の餌になるキヤベツの濃緑の外葉等が支給された。

更に、悪弊と言われた日本軍隊当時の階級制度が、そのままソ連に持ち込まれた。上級者ほど黒パンは大きなものを取り、実の少ないスープにかかわらず上

級者はたつぷりと実をすくい取り、下級者は小さいパンと実の少ないスープを与えられるということが当然のごとく行われていた。そこから空腹感を満たす方法として考え出されたことは、毎回支給される糊状に煮た雑炊に更に水を加えた増水食であった。拳骨ほどの小さな黒パンは二口か三口かで喉に入ってしまった。その黒パンを自製のブリキ包丁で紙のように薄く切り、あぐらをかいた目前に並べる。ちょうどカルタやトランプのゲームをする状況を想像してほしい。

さて、いよいよ食事にとりかかる。飯盒に水増しした雑炊を食事寸前までペーチカの上で沸騰させていたものを足元に置き、カードのような薄切りのパンを横に並べ、あらかじめ白樺を丹念に削った手製の大小五〜六種類のスプーンを用意する。中には飯盒の底にへばりついた雑炊を一滴も残さずすくい取るため先端の一部を直角に削ったものまで案出して、さながら画家の絵筆や彫刻家の鑿のみのセツトを思わせた。

大小様々なスプーンを使い分け、舌がやけどするような熱い雑炊を一さじずつフーフーと息をかけながら口内に流し込み、時折りカード状に切ったパンをゆつくりと食べるのである。こんな食べ方では優に一時間はたつぷりとかかる。

周囲の物は物好きな奴だと見流していたが、やがて奇妙な現象が発生しだした。このような増水食をする者の中から変調者が見受けられ出した。

痩せた体が更に痩せていく。誰が見ても驚くほど痩せ衰えていく。顔は頬骨が尖り、眼の回りは落ち窪んで黒く隈ができ、般若の面を思わせるように変容していく。

時折り行われるカテゴリー検査と称する体格検査での増水食者の裸の後ろ姿を見ると、骨と皮に痩せ衰えた姿になっている。脚は野球のバットののように細まり、両足の太腿の間から睾丸が見えるほど、筋肉はそげ落ちている。検査結果は当然、入院である。

このように肉体的な変容に止まらず、明るい性格が暗くなりトラブルを引き起こしたり感情面にも悪い影響が見受けられることが周囲の関係者にもだんだ

んと理解されだした。

変則的な食事は肉体に悪影響をおよぼすことを互いに戒め合う風潮が広まってきた。

「オイッ、生きて祖国に帰りたいかったら増水食は止める」増水食をやる者を見つけたら仲間で呼びかけて中止するよう強く呼びかけた。入ソ四年ごろから食事情も幾分好転のきざしが見え出すのと共に、各人の自覚も効果を表してきたのか増水食の悪習も消えていった。

冬被服等支給

ソ連の十一月は満州国より一段と寒さが厳しい、寒さも氷点下三〇〜四〇度の気温になると手足先、鼻、耳など痛くなって凍傷になる。

これを放置するとその部分が腐り欠ける恐れがあり、油断は禁物である。その時期によくやく毛布一枚、防寒帽、防寒手袋（綿入れ）、防寒靴、下着など、日本関東軍の押収品が支給された。

抑留者の食生活

抑留者の衣食住は、人間生活でも想像以下、奴隷並の最低を強いられ、食生活は一番揉めるとあつて大変である。朝六時の起床と同時に食事当番を除く全員朝礼に出席、その間に食事当番二、三人は班員全員の朝食昼食を炊事場にて受領、班に持ち帰り朝食（高粱食）、昼食（パン）の分配をする。その結果、いつも多い少ない、大きい小さいでもめること度々、ついにこれの正確を期するため、手製の秤（天秤棒）を造り、文句のないよう等分していた。

炊事場から一括受領する絶対量が少ない。これを個人に分けると、高粱食は飯盒の蓋に一杯弱、昼食黒パン一切れ、栄養もカローリも無視の食事で、作業はソ連人向けのノルマを要求されるので、絶えず空腹で食に飢える。

冬期も深まり草原も枯草で草刈作業も少なくなり、農作物の収穫期でユルホ

ーズ作業として馬鈴薯握りに駆り出された。

収集と一連の作業はトラクターで掘り起こし、トラックにて糧秣庫に運ぶ雑作業。作業前にロシア軍将校(現場責任者)より、馬鈴薯は我が国の重要な主食であり貴重である。無断で持ち帰らないようにと厳重に注意があった。しかし隠して持ち帰った場合はチグマ(営倉、牢屋)に数日間入所となった。

作業終了後、一斉に服装検査が行われたが誰も該当者はいなかった。服装検査で時間も遅れ、周囲は真っ暗で、普段であれば日常必需品の紙類(タバコの巻紙、トイレ用)、ソーセージの空缶(改造して食器などに)、鉄屑(小刀、スプーン、剃刀に改造)など道中物色して歩くが暗くて見当らない。……無言で歩いているうちに、誰となく、馬鈴薯が落ちていけると言う。ふと下を見ると、馬鈴薯ほどの丸い物が点々と目に入る。我れ先にと昼間の作業を思い、拾ってポケットにいっぱい入れた。

ラーゲリ(收容所)に着いて、早速今夜の食事にとポケットに手を入れると不気味な手触り、取り出してみると馬鈴薯のはずが馬糞の臭気に驚き、同士に話し共に苦笑……。

いかに食物に飢えての行動かと恥辱を感じた。当時は何の欲望もなく、ただ空腹をしのぎたい一念のあまりのことであった。

石川県 介田實男

着いたところが、ソビエトで第二の炭鉱地帯と言われておりますがガバス炭田の一角にあるアンゼルカという町へ私たちは到着いたしました。ここは前にドイツ軍が捕虜になって入っておった收容所がありました。そこへ私たちは入れられました。

食事というものは、朝食は鯖の缶詰に栗のおかゆが八分目しかありません。そして、満州から持っていったみそに何も入っていないみそ汁を横へつけてありました。

昼は黒パン三五〇グラムです。人間というのは餓鬼道です。腹減ってくる、隣の人のパンが大きくないかということ、みんな見比べです。炊事場の人も考えました。パンの大きいのは隅を削って三五〇グラムにする、小さいのには上に載せて三五〇グラムにする。みんな公平に見えるだろうというので、そのくらいまで人間というのは餓鬼道に落ちる。

それで、朝飯に栗のおかゆじゃ仕事にならんから、昼の三五〇グラムのパンも一遍に食べてしまうんです。昼はなし、夜になると雑穀のちよつと固めの、これも缶詰缶に八分目しか与えられませんでした。

三重県 服部利男

夜のパンの分配はまた大変な仕事だった。川柳に「食。パンの腸(ハラワタ)を食う青い顔」と言うのがあるが、私たち青い顔をした抑留者たちは皆食。パンの耳の方を望んだ。こうばしくって腹もちが良いからである。当番は一日交代で一個三キログラムのキルビーチパン(レンガの形をしていたので皆がそう呼んでいた。キルビーチとはレンガのこと)を皆の目の前で十等分する。なお一層公平を期するため、当番が一人の者を後ろ向きにさせ一つのパンを指で押さえ、右回り(時には左回り)何番と質問する。情けない話であるが、これが当時シベリア抑留者たちの現実の姿であった。

(6) 民主運動の中心

新潟県 猪俣國雄

ある日、政治局員(ゲ・ペ・ウ)から「ウラジオストックへ行く、荷物をまとめて待機」の命令が出た。柵外に出ると、他の収容所から集められた三十人くらいの仲間達がいた。合流してアメリカ製の軍用トラックに分乗し、春まじかの病院を出発した。氷の墓はしかばねが散乱していた。

着いたところは、ウラジオ港にけいりゆうされた貨物船二隻の前だった。トラックをのぼると「沿海地方本部」の門標があり、そのそばに講師団とおぼしき日本人五人と、ソ連共産党のオルグ、責任者とみえる中佐が我々をむかえた。受講生入口の階段をおりると、二段ベッドがあり、そこが我々の宿舍兼居間だった。

わずかばかりの旅装をといて、腰かけているところへ、中佐、通訳、講師代表(高橋某——新聞記者)がやってきて、受講日程表を配った。期間は五十日、「ロシア共産党小史」「レーニン主義の諸問題」「マルクスの資本論」「アメリカ帝国主義」ほかとあり、沿海地方楽劇団指導と後記されていた。久しぶりにあたたかい黒パンとこいスープ、魚の塩漬けがくばられた。歓迎食なのだろうか。

夕方から甲板で労働歌「インターナショナル」と「ウラジオストックの歌」の指導が始められた。岸辺に打ち返す彼の彼方は日本、故郷新潟があると思うと、歌唱練習もおおざなりである。

翌日から講習が始まり、ロシア共産党の歴史、運動の法則、弁証法的史的唯物論とつづけられたが、講師も受講者も割当て時間をついやせばよい「ノルマは要領よくこなせ」の考えが共通で、一時間毎に顔を見せる中佐やオルグには、問題の解説をできるだけ長くやらせるようにと仕組んで、声高に討論したが、こ

れが意外に好評で、中佐の「ハラショー」が連発するのだった。

中佐の機嫌が良いと休憩もタップリくれた。海から魚やタコ、貝類も多く採り、塩とソーヤをもらつての手料理をしようと、中佐をはじめソ連人の喜びと驚きの声が返ってきた。ノルマの一二〇%が連日続いた。

春が短いウラジオに、夏のひざしを感じ始めた頃、講習が終わった。ほとんどが各収容所へ帰るなかで、何故か講師として残された。

「要領を本分とすべし」を座右の銘に一月くらいたつと、演劇脚本作成の命令が中佐から通訳をつうじて伝達され、楽劇団に紹介された。楽劇団は高名なチエリスト井上頼義氏が責任者、黒柳守綱氏がヴァイオリン担当でセカンドマスターとしており、他にスタッフ総勢十人くらいが、各収容所巡回用の音楽、歌唱、演劇の練習をしていた。

脚本作製の割当時間は相当余裕があり、想を練ると言つては甲板からはるかなる日本への郷愁にひたることができた。

最初の脚本は、復員を待つ留守家族の生活を扱った「花束食堂」で、合格の知らせと同時に、若干のルーブル紙幣、外出許可証が女性通訳からわたされ、通訳、オルグにともなわれてウラジオ市街に外出した。軍港らしく水兵の姿が多い。セミチカや魚介類、煙草を売る娘達と声高に話し合っていた。

劇場にはいり、カザック踊りや種々な民族舞踊をソ連人の視線を感じながらみるのができた。氷壁の原始林、毎日多数の犠牲者、格子なき牢獄の日々が思い出され、合掌する私に、通訳が何回となく「なにしてるの?」と問いただすのだった。

ソ連側のねらつた洗脳教育も、こうした抑留事実の前には、祖国帰還へのいやますねがいと、亡き仲間達の悲惨な最後を祖国に伝える事実伝達者としての意識を高めるだけだと感じた。

東京都 石山権作

二年目より赤化教育が盛んになり、軍国的なものを次々排除していった。まず隊長の解任、階級の廃止、中隊を団に替え、批判会等も毎日持たれ、うかつに口を出すと、直ぐつるし上げを食った。革命映画もよく観せられ、早く赤化思想にならなければいつまでも帰さぬと言われ、みな右へならえと従う。いつ帰れるという当てのない日々ほどつらいものはなかった。

和歌山県 那須淳男

エラブカ収容所に入所以来、ソ連邦政治部員のクロイチエル女史の指導のもと、壁新聞や日本語に翻訳したソ連憲法や、その他政治書籍等によりソ連を紹介するとともに、思想教育を我々日本人に対して行ってきたが、今年に入りさらに強力に推進するようになった。日本人の中にも進歩的な分子もおり、ソ連当局の手先となり、思想教育を担当する者も数人おり、日本人でありながらみんなから警戒された。しかし大部分は日本軍将校である。そう簡単に洗脳されてたまるものか、さからわず長いものには巻かれておけ、我々の目的は一日も早く帰ることであるというのが全般の本心であった。

いよいよ八月に入り、ソ連政治部員から人民投票を要求され、課題は「日本天皇の在位を欲するや否や」である。そのまま投票して在位を欲する回答が多かったときは却ってまずくなり、帰還を遅らされて大変である。全般に規制してある程度、在位を欲せずの方を多くして投票に臨んだのであるが、結果は在位を欲するが多くて、あるいは祖国への帰還を延期されるのではと心配もしたのであるが、ソ連当局としては、こんな将校ども、いかに教育をしても効果はない、早く帰してやった方が得策と思ったのか、九月末になってつぎつぎと帰還者名簿が発表され、私も四回目の発表で名簿に出て呼び出され、喜び勇んで守衛所前に集合したのであるが、ガレージコマンド・ストイ（自動車工場勤務者は中止）の命令で、いかんともしがたく残念至極、足どり重く宿舎に引き揚げたのであつた。

た。

福島県 宗像次男

このころから盛んに洗脳教育が始まり、新聞その他を通じ、いろいろと共産主義を礼讃する言動が多くなり、唯物論等の演習があつた。希望者を募り、研究会等実施したが、何よりも健康で祖国の土を踏みたい一心で、ほとんど加わらなかつた。無事に帰国できたら、こんな国に二度と来たくない嫌な所と心に刻むのみであつた。

和歌山県 浜 寿一

ここで私たち日本人捕虜の中にいたアクチブのことを思い出す。アクチブとは共産主義に迎合し、日本人であるよりもソ連共産党員であろうとして行動する、少数のスパイたちのことである。

彼らの仕事はソ連に敵意を抱く日本人捕虜を探し出し、それを官憲に売ることだつた。そして他の捕虜たちより楽な仕事をさせてもらい、食べものもよりよい物を手に入れることが出来た。

私も帰国が決まったとき、アクチブに呼ばれて「天皇制をどう思うか」と思想調査をされたことがあつた。帰れないと大変だから、適当に答えておいたが、アクチブというのは実にいやな存在だつた。

帰国前、ナホトカの港に集結したが、アクチブはスターリンの温情ある措置でこうしてたくさん捕虜を日本に還してくるようになったが、肝心の日本には船も燃料もなく、迎えにくることができない——と、そんな意味のことを盛んに吹聴していた。また、日本に帰つても日本の金は使えないと、いい加減なことを言つたので、お札で粉煙草を巻いて吸つた人もいた。

待機中、時々山へ薪を取りに行かされたことがあつたが、アクチブは大声でインターナショナルを歌わせるのだった。祖国日本を目の前にして、要するに帰れ

ばいいのだから、私たちは心にもなく大声を上げた。

ところが舞鶴に着いてみると、何隻もの引揚船が出航を待っていた。

千葉県 久保田精一

作業の合い間に職場やラゲルで集会がよく行われ、日本人向け新聞でソ連の社会制度を評価したり、反動的な者を裁いたりされた。指導者は若い者で専門指導を受けた者が当たった。裁かれると気持ちのよいものでないので、みなかぶれたふりをしていた。同胞であっても気が許せなかった。

島根県 右田 武

民主運動

酷寒のシベリアも五月になってだんだんと暖かくなって、氷も解け始めた。一メートル以上も凍っていた川も流水と化し、野辺の草木も芽立ち、ようやく春らしい気候となってきた。氷の下に押さえられた草木の芽立ちとともに、疲労しきつた我々も心身ともによく生気を取り戻してきた。

ソ連側は冬中、あまりにも犠牲者の続出と栄養失調患者の多発で捨ておくことができず、栄養失調患者を一か所の兵舎に収容し、軽作業に当て養生させてくれた。と同時に彼らの真の目的である、共産主義の思想教育が始まったのである。

まずソ連側は、捕虜の中から三人の指導者を選び、友の会なるものを組織させた。そして友の会は軍隊制の打破と共産主義の指導宣伝におかれたのである。そのころよりハバロフスクで発行された日本新聞が送られてきた。隔日に発行され、四ページの新聞である。内容は、世界の共産勢力の状況の宣伝、日本の現状を攻撃、ソ連の建設的發展を褒めたたえ、民主運動の進め方等、繰り返し載せられていた。友の会はこれを教材として我々を指導宣伝していたのである。ソ連側は我々の思想教育者として、シコンジン政治部長、コシターノフ政治部長、コシ

チン日本語通訳が当てられ、日夜共産主義思想の教育に努めていた。翌年冬より種々のパンフレット、ソ連共産党史等が配布され、夜間教室等もあり、運動は次第に活気を呈してきた。友の会は民主グループと改名し、会員も百余人となり、翌年春より楽劇団等も組織され、本格的なアジプロが開始された。

民主グループはさらに民主同盟と改名され、二十二年春よりチタ地区において講習会が開催され、各収容所より数名派遣されていた。二十三年春、帰還態勢の確立のため民主同盟は反ファシスト委員会と改称し、委員七人が選挙によつて選拔され、大隊の運営、作業、思想教育等一切の権力を持たされるに至り、その態勢は帰還まで続き、思想的運動は日々度を加え、ナホトカ湾上まで続いた。

千葉県 関口善一郎

試験により祖国に帰る

私の四年余りの抑留生活で最後の「ラゲル」は昭和二十四年八月ごろで、特殊混成集団の収容所であった。入所して幾日もすぎないある日、突然ソ連軍思想部員と思われる軍人の試験をするという指示により教室らしき一室にはいった。抑留者の同胞達は緊張しきつた雰囲気を受験態度も真剣そのものであった。四十年余経過した今でも、その光景を忘れることなく記憶している。

やがてアクチーブ、思想教育指導者、ソ連軍人の監視のもとに試験用紙が配布された。内容の具体的出題項目については忘れたが、概要は、抑留中、各ラゲルで学習してきたマルクス・レーニン主義、エンゲルス、史的唯物論、ソ連共産党史等の理解力をためすものの単語、文章的な内容は「ソ連の第一次革命の失敗要因」「トロキストの存在」「ポリシイビエキの斗い」「農民と労働者の日和見主義」等、共産主義社会への過程で必要な思想上の専門用語等が主なものであったように思う。私はわかる問題から記入したが、さほどむずかしいとは思わなかった。一応解答し、再点検して補正、補足した部分もあったが、所要時間は半日ぐら

いではなかったかと思う。

答案用紙がアクチーブによって集められたのち、試験合格者は誓約書に署名することになる。そして誓約書を代表がハバロフスクから飛行機でクレムリンに持ち参し、帰国となることが告げられ、試験は終わった。外に出て、私より古年兵らしい二、三の年配者と話し合っているうち、日本軍隊に入隊前の職業が警察官をしていた者や、軍隊では憲兵、特務機関員等の職務にあった者を対象にしていることがわかった。何回かの試験に落ち、いまだ在所中の者も多数いるとのことであつたが、私自身、なぜこのような人達と一緒にされたか疑問がとけず、どうなることか不安な気持ちであつた。

やがて夜となり、八時から九時ごろ呼びだしを受け連れられていってみると、六畳間くらいの個室の机の前にソ連軍将校の大尉が真中の椅子にすわり、両脇に銃をかまえた兵士が立っている。瞬間、取りしらべであると思つた。深々と礼をした。やがて将校は日本語で姓名を聞いた。私は姓名を答えた。将校との問答は今でも記憶している。机上に広げた満洲国の地図を指し、「あなたはこの部隊にいたでしょう」「はい。私は三月中旬、北孫呉の三〇六部隊に現役兵として入隊し、六月下旬頃、ハルピンの新設部隊に一個小隊の転属兵として加えられました。その後、ソ連の参戦により関東軍指令部に転勤命令を受け、私達の小隊は八月十五日未明に新京駅に到着しましたが、指令部との合流はできず他部隊に編入させてもらつて公主嶺に向かう途中、ソ連兵により武装解除を受けました」「よくわかりました。今日の試験はできましたか。」「はい。一応答は全部書きました。カザフ共和国のラーゲルでは三年余、炭坑の仕事の余暇に共產主義の本を配布され学習しました。昨年ナホトカに集結後、他地区の集団に分散し、編成がえされ、冬は伐採、夏はソホーズや煉瓦工場などの仕事に短期間ずつ移動して働きましたので、書物は所持しませんが、夜間或いは休憩中にアキチーブを中心に毎日討論会をしてきましたので、大体試験は出来たと思ひます」「あなたは収容所或いは移動してきたところはわかりますか」「ソ連邦地図をひ

ろげて」「はい。カザフ共和国では同じ収容所に三年余おりましたので大体わかりますが、ナホトカ以後の地名や地域はいずれもまったくわかりません」「あなたは天皇の軍隊でソ連のどんな情報をとりましたか」「私は三〇六部隊で三か月ぐらいでしたので、モールス暗号をおぼえたくらいで通信機器の操作も出来ませんので、情報は何もとれませんでした」「そんなことはないでしょう」「いや、本当です。情報をとるどころか、通信機の使用すらまったく訓練を受けませんでした」「嘘をつくときベリア送りになりますよ。それでもいいですか」「はい。本当に嘘ではありません。将校、疑問視しながらも帰りなさいというので、深い礼をして引き揚げた。

翌日、試験結果の合格者が収容所内本部前に張りだされた。私の姓名が掲載されている。これで一日千秋の思いで待ちに待ったダモイが決まったが、本当に帰してもらえるのかどうか心配であつた。

そしてナホトカ港から昭和二十四年九月二十三日ごろ、舞鶴港に祖国の土を踏んだが、抑留中、カザフ共和国での三年余の生活は食糧事情もよく、給料の支給もあり、地方人との作業現場での折衝においても、私達が考えていたような人種的差別もなく、二年目くらいから収容所食堂内にソ連地方人の売店が開設され、ビール、バター、食パン、タバコ等の購入や、外出によるバザールでの物資購入も自由であつたことにくらべ、ナホトカ集結後の一年間の越冬により、作業や寒さと飢えによる栄養失調との闘いで九死に一生を得た。また帰国を目前に冬期伐採作業の山小屋で、火事のため一夜にして焼死した十六人の同胞に合掌して冥福を祈り、ソ連抑留の一断片ではあるが、筆をとめる。

千葉県 宮崎定雄

二十二年春頃よりきびしくなった民主運動のつるしあげ(将校摘出)(私も一般大衆として後方にて参加)が、今回自分にふりかかった。夕食点呼後、残留六人に対して、前職者(将校、憲兵、警察官等)の摘出である。正面壇上に立たせ

られ、五百人の批判会である。批判と云うより罵声、怒声の繰り返しに不動の姿勢での対応はなすべなしで、終るまで時とのたたかいである。

翌日K、翌々日MS、五日後に警察官、七日後E他の収容所に転出。私一人容疑で終った。この一週間いきすぎた民生運動で夢遊病者のようになり、前途不明、希望なし、やけくその気持ちですこした。

九月十日頃より一人の孤独な勤務、馬方（始めての馬扱い）。乾草刈り及び運搬、馬の放牧監視、食事運搬、便所運搬、短期間、踏切番等、建築官舎の材料監視（夜六時より朝八時）。一月、二月には、屋外の全般監視あり、零下三十度から四十五度ぐらいの日が多く、遮蔽物を見つけ、薪の採暖で動きつづけ（凍傷凍死の警戒）、時間を過ごすのに苦労した。五月頃より皆と一緒の一般作業になった。

千葉県 吉野 靖

部隊は半年か一年くらい経過するごとに、部隊の半数くらいどこかに連れて行かれ、代わりの戦友たちを連れて来る。赤化思想の教育であったのだ。新しく仲間になった中には、特別に赤化教育を受けた何人かがまじっていた。昼間はラポータ、夜は共産主義、マルクス・レーニン主義、史的唯物論の本を一人一人に与えられ、説明され、天皇制について毎晩の教育。反共の言葉でも態度でもしよものなら、大衆の前に引き出され、批判会、自己批判を強いられる。あくまで抵抗すると、ソ連の兵隊にどこか連れて行かれてしまう。心はどうであれ、表面は共産主義を讚美しなければ、自分の明日はどうなるかわからない。

島根県 八幡垣正雄

民主運動

このことについては、昭和二十二年の春ころから始まったようである。モスクワにおいて教育を受けた者が収容所に配置され、将校は指揮権をはくだつされ、

隊長、教育の指導もこれらの人たちによって行われた。テキストはモスクワで発行される日本新聞で、日本新聞は週一回発行され、一人に一部あて配布された。

新聞の内容は、ソ連が日本に対し参戦の意義とか、日露戦争等の実例を挙げ、日本帝国主義の侵略性を批判し、共産主義思想の普及を狙ったものであったように思う。

教育の実施方法は、夕食後消灯までの間約二時間、マルクス、レーニン主義の講義等であった。

一番最初の講義は、ソ連が日本に対し参戦の意義であった。その意義の解説は、ソ連が日本に参戦したことによって、日本帝国主義がポツダム宣言を受諾し、終戦に導き、被害を物的、人的に最小限に食い止めるとともに、帝国主義ファシズムから開放されたとの講義内容であったように覚えている。

壁新聞サークルもできて、収容所の出来事、ノルマ遂行の班毎の発表、ノルマ遂行量の最高、最低の表示、反動分子の行動等の壁新聞は月二回発行されていた。作業場までの往復時に、日本新聞に掲載されている記事を教材として、質疑応答の形で行っていた。

その質疑応答の司会はアクチーブが交替で行い、この民主運動はソ連の指示であったようであるが、日本人の指導者は、私たち捕虜を増産運動に利用しているようであるが、私たちの運動は別の意味での運動であった。

それはいかにも民主主義者のごとく振る舞い、一日でも早く日本に帰るための運動であった。私もアクチーブに選ばれて政治サークルの司会、政治情報の発表等を行った。

帰国の際、ハバロフスクからナホトカまでのダモイ列車の車両長も勤めた。

また、平塚運動といって〇〇地区の〇〇収容所の〇〇作業隊は、創意工夫によって一二〇％、ロシア語でプロセントの作業を遂行したとの内容の宣伝で、抑留者全員が創意工夫等をしてソ同盟のために率先してノルマを遂行するよう等、

の内容であった。

平塚運動とは、日本人の平塚という者が創意工夫によってノルマ以上の作業を遂行したので、その者の名をとって平塚運動と呼ぶようになったのである。

熊本県 岩野寅雄

二年目の春ころだったと思う。ラーゲル内に民主運動が盛り上がり、将校は威張っている、軍国主義者であり帝国主義者であるというのだ。抑留された以上は皆同じで差別するべきでない。まず食するものも同じにすべきである、等でつるし上げのようなことが起こった。そのころソ連側からマルクス・レーニン主義の理論、史的唯物論等のパンフレット(日本語版)を配布するかわら、赤旗の歌、ワルシャワの労働歌等幾つかの歌を通じ啓蒙運動が行われた。中にはほんとに真剣になつている者もいた。

福井県 尾上敏雄

二十二年七月ころからは毎晩二時間マルクス主義の講義を強制的に聴講させられた。指導者はすべて朝鮮人だった。思えば昭和二十年六月在満の朝鮮人が日本軍隊に召集されたが、終戦と同時に我々とともに捕虜になった者ばかりであった。大工仕事は日本人捕虜の本職の大工さんの手もとにあった。八月ころから時々ソ連の政治部員との懇談会があつて、我々はただ日本に帰れることばかり主張した。昼は仕事、夜は共産党の講義と、ただ帰りたいのみ毎晩講義に出た。

二十二年十一月下旬突然移動の命令が出て、汽車に乗せられ着いたところがナホトカであった。いよいよ日本へ帰れるかと思つた。しかしここでも毎日朝から晩まで共産党の講義ばかり、大きな講堂の正面には、日本の野坂参三、徳田球一両氏の写真があり、礼拝させられた。

岩手県 笹川博

民主化運動は昭和二十二年ころより反軍闘争が始まり、学習がグループ活動で開始され、アクチーブ員が若干出、昭和二十三年春、私にも青年同盟へ加入せよと言われた。しかし何がなんだかわからず、もやもやしているとき、眼を患つて入院し退院してきたら、若い人のくせに何もやらないというので、反動としてつるし上げられる状況と知り、青年同盟に加入活動。

福井県 山本武治

思想的訓練が始まった。これは同僚のある者がどこかへ行って共産主義の教育を受け、これを我々を一堂に集め受け売りする。また、夕食後など所外でスクラムを組ませ、赤旗の歌を合唱させる。作業場への往復も同じことをさせる。しかし我々は表向きははいはいとわかつた顔をして、内心は絶対変わるものではない。あくまで先祖伝来の血を受けた日本人である。

新潟県 阿波根朝宏

月日のたつにつれ、いわゆる民主運動、すなわち洗脳教育なるものが各ラーゲルで盛んになった。そこには、洗脳パス者でなければダメイはできないという雰囲気であった。勢い、それは仮面をかぶつた洗脳者を生む結果ともなった。洗脳教育の一端として壁新聞が必要欠くべからざるものとなつてきた。もちろん、私たちのラーゲルにもその風潮は流れ込んできた。いざ壁新聞をつくる段になつていろいろ曲折を伴つたが、結局、私とその責任者となり、他に二、三人が投稿することになった。

ラーゲルは生けす

私は、「生簀」と題して投稿した。日本の伊勢湾でとれたエビは、一たん生けすに入られる。大海で自由に生息していたエビが、いきなり箱詰めに使われる。距離輸送には環境の急変がもたらす危険を伴う。我々の環境は、伊勢湾でとれ

たエビと同じである。すなわち、ラーゲルという生質にて環境の急変に順応すべく体調を整えている、といった意味のことを書いた。

その生けすの壁新聞が張り出された。それがソ連の謀報官の知るところとなり、係官から「お前らを生けすに入れたのはだれか、ソ連の主権者か、または日本の主権者か」との尋問である。以後、懲罰を背負うものとなり、転々として、最後は樺太対岸のソフガワニのラーゲルに收容された。聞くところによると、その同じラーゲルに関東軍参謀らも收容されていたとのこと。「生質」の一文だけではないかもしれないが、リストの載り、それがどこまでもついて回り、ダモイの障害になっていたとは考えてもみなかった。

静岡県 内山 隆

優秀な者は早くダモイするからと常にだまされていた。帰るのだと言いなから、他の收容所に少しずつ移動させ、最初に入所した者は、バラバラにされ、団体で騒動が起こるのを恐れていたと思う。

最初は中隊編成であったが、二年くらい後に、将校、下士官、兵隊の中から選挙により寮長を選び、このため中隊編成ではなく寮編成と呼ぶこととなった。

このころから生活にもなれ、教育にも熱がはいつてきたように思う。集会とか文化活動も活発で、私も寮の文化部長に推され、紙芝居をつくり、部員と他の寮を回ったこともある。

收容所から推された者が三か月くらい単位で思想教育を受け、その者が帰って来て教育を担当するシステムで、私も推されたこともあったが、私の内地での職業から実現はできなかった。

教育を受けた連中は、それは張り切っていたものです。月を増すごとに教育を受けた者は多くなっていた。

ハラショージャポンスキーは早くダモイするのだと、常に言われていたので、批判することもできず、なすすべもなく、洗脳されていたものです。これも早く

帰りたい一心からであった。聞いた話であるが、売店の女の人が砂糖サジ三杯をごまかしたために三年の懲役とか。公の物品をごまかしたためとのことである。スターリンの画がひげが左右違っているとのこと画家は首とか。

あるときは、スターリンほど独裁者はいないと批判したら大変なことになったときもある。仕方なく、大衆の前で自己批判をして決着したが、一時はどうなることかと心配したものです。

いずれにしても、教育を受けながら労働しなければならぬ毎日は苦痛であった。

岐阜県 山田好美

收容所内では満州青年共産同盟に加入していた者たちが頭を上げにかかった指導者がアクチーブを募り、作業終了後に集会を開きつるし上げがたびたび行われるようになってきた。常時ゲーペーと呼ぶ政治局員がアクチーブの頭と連絡をとりながら、共産思想の徹底をはかっていた。

和歌山県 嘉成一郎

一番私の不愉快に思ったことは、日本人の共産オルグの一人が我が作業隊に配属されて労働の勤怠表をつくり本部に送って、作業を怠けるとダモイが遅れるといううわさが出たことであった。このアングレンでは一年半を過ぎたころより共産教育が始まり、若い者は五十人ばかりが作業にも出ずに若干の報酬をもらって勉強していたようであった。

一応我々も皆、共産グループに入ってナホトカで乗船するまでは労働歌を歌ってソ連に敬意を表してきたわけであるが、日本の船に乗ってからは実に静かなものであった。

和歌山県 上田宗雄

統制管理の実態、洗脳の実態

民主活動は最初は壁新聞から始まったようである。収容所内にどこからとなく転属してきたオルグによって、日本国の今までの歩みをことごとく理解に苦しむほど反対の意見をふれ回し、自分たちがだまされていたことを宣伝した。そのころになって「ソビエト人民の歩んだ道」という本を全員で回し読みもさせられた。

我々憲兵も批判的でちよつとでもこれに反発するとすぐ反動としてつるし揚げられるので、上べだけでも一応理解したようにしなければならなかった。それと帰国後においては必ず日本共産党に入党するということが前提のようだった。

だまされ通した四か年の抑留生活で彼らの言うことはだれも信用しなかった。やつとたどりついたナホトカの収容所内にも民主運動の波はよりひどいものだったが、船に乗るまではとじところへ来た一か月ほどだったが、特別な作業は出さなかつたが、過去の取調べは一段と厳しかったが、一応民主主義をかみしめたように見せ、がまんした。

新潟県 田中新治郎

そのころから民主運動が盛んになった。日本新聞を主題に活発なアジアプロ活動が続いた。

ダモイ話を持ち上がったのは、二十四年の八月である。ある朝、ソ連将校が全員の前で、諸君は近々日本に帰ると伝えた。幾度かだまされ続けられた私たちは、納得しかねたが、何も彼も忘れて帰国を喜んだのである。

新潟県 風間健次

約一年間を第二収容所で過ごした私は、四人の仲間とともに移動すること

となった。

行き先は港湾北部に繋留された一万トンくらいの貨物船収容所で、船名は「サマルカンド」と間もなくわかった。作業は電気関係の營繕作業で、船内には「沿海地方指導講習会場」のアーチが甲板に掲げてあり、毎日多くの各収容所からの仲間たちがアクチーブ教育のため出入していた。長兄定信と同級生であった同郷の猪俣氏と会ったのもこの甲板上であった。

波打ち返すかなたは家族の待つふるさと、夕陽沈む水平線を見つめながら尽きぬふるさとの話に時を忘れて語り合った。

隣の船は同じトン数の「サラトフ」号で、「沿海地方楽劇団」の看板があり、歌、踊り、演劇の練習が行われていた。

だまされ続けた四年余月の印象は消えることはない。

新潟県 松岡千代貴

そのころから民主運動教育が前進してきた。中核なる共産主義教育はますます盛んになって日本人同士の団結も、精神的な苦痛の闘いとなり、目につくほど煩悶を生じ始めてきたのであります。

イマンには二十三年の八月まで三か年近くの抑留生活となった。自分にはただただ長かった思いが残る。その間、ソ連秘密警察「ゲープーウー」のうるさい監視の目が光る。以前所属部隊が北支派遣との理由から、ほとんどの人がいやな経験をした。自分も取り調べ尋問等が二回あった。まことに恐ろしい国だ強く心に刻まれたことです。特に驚いたことは、教育が広範囲に広がったころ、日本人同士相互警戒心、猜疑心が高まるばかりであった。

数日後待ちに待った終着駅ナホトカに下車する。全員指定されたラールヘル係員の案内で入舎する。ナホトカには祖国帰還者のためのおのの役目をするグループが労働についていた。中には民主運動指導者は旧軍隊精神の排除、入ソ以来今日に至るまでの自己反省会など、個人的には修行作法と言語解釈にな

ろうか、あくまでも民主的な人間に身を清めさせる係のようである。数日滞在中の行事ともなつて、乗船するまで毎日の日課であつた。素行に乱れがあれば、即大衆の前でつるし上げにかけられる。つまり自己批判から深く反省する。以上の形態などは、今祖国を眼前にして、まことに気の毒な光景にさらされた幾組の目にとまるたび、敗戦の悲哀を深く感じさせられた。

北海道 石川朝雄

夕方ナホトカの町に着く。翌日、町中を見回す。二年前より大分変わつていた。前は惨々たる漁港だったが今は見違えるように立派で整備された港。大きい倉庫が何棟も建っている。栈橋も立派なコンクリート製。大きい汽船が何隻も入港していた。初めて来たとき見た向こうの丘の上には家がたくさん建つていた。このところきよて本場に帰国できるのかと危惧を生ずる。日本人でありながらソ連軍の手先のようになり、我々の何を調べるのか、荷物から言動の検査から、何の理由かわからずこの調査が通らず、ここより返され帰国できない人もいた。ソ連軍の教育を受けた人物が、ソ連軍の事務をしていた。明日乗船出来る由、今晚はよい夢を見たい。さあ、帰国乗船。

京都府 久保田清蔵

そのうち、やせ細つた栄養失調の病弱者がダモイとして収容所を立ち、先の怪我の一団も帰国だつたことがわかつてから、仲間同士で、絶食して栄養失調になるか製材機で腕を失うかして早く帰国した方がよいのでは、とまじめに話し合われることすらあつた。

岩手県 田辺壮久

いつの間にか、旧憲兵、特務機関、警察官たちが隊内からどこかへ移動させられ、かわつて所内に各地区の収容所から集められた民主運動活動家の共産党史講習会が催されるようになった。

この夏ごろと思うが、日本新聞というのが発行され、我々の収容所にも届くようになり、共産主義運動が盛んになってきた。オルグといつて共産主義の指導者だ。こういう人たちが来てまず将校のつるし上げから始められた。やり方は、一日が終わつて収容所によやくたどり着き、夕食を終えて自分自身の寝台で休んでいるのに、将校(まず自分たちの小隊長)を真ん中にして、これを兵隊たちが、日本国の原隊にいたとき、我々兵隊をあらゆる方法で教育すると称していじめたり等々身体例を一つ一つ挙げて頭を下げさせるというやり方。これに参加しない兵隊には、「お前は何だ、共産主義の思想をしつかり身につけないと帰国できないのだぞ」というふうに実施され、日本に帰れるということがだんだんわかつてきたり、作業中の昼食時間、今までは各個ごとに休んでいたのが輪読会と称して一個分後に一枚より来ない日本新聞を読んで、お互い討論するといふふうに一人大変化が来た。

あまりつるし上げが激しくなつたので将校は他の収容所にソ連側は移し、各収容所には将校は一人もいなくなつた。従つて今度はお互い戦友同士がつるし上げられるようになった。例えば「今日お前トイレに行ったが普段より時間が長かつたではないか、作業のサボタージュだ」「そんなことでどうする」「自己批判してみろ」というようなことでこのころから何々君ではなく、「同志○○」と「同志」という言葉を使うようになった。とにかく共産主義一色に変わつてしまい、これに賛同しない者は反動分子として毎晩つるし上げられるので、どうしても主義者になりきるか、そのふりをするしか仕方がなかつたものである。

相かわらず五人ずつ縦隊に並んで乗船を待つたが、このとき名前を呼ばれて列から連れて行かれた者がたしか三人いたと思う。この方たちは再度後方に送られて作業をさせられたとか、それは共産主義者として未だ未熟だとか後に聞かされたが、真偽のほどはわからない。

とにかく一人一人名前を呼ばれて日本船の舷をまたぐまで後髪を引かれる

思いで、舷をまたぎ船に乗り移って、初めて安堵したものだ。

北海道 奈良勝正

翌日ナホトカ第一収容所に入所し、ここでは作業はなく、検査があるだけで何もすることなしで、図書館に行ってみると日本では発禁の小林多喜治の「蟹工船」や「非常線」等の共産党関係の図書が所狭しと並んでいた。理容室に行き散髪を済ませ外に出てみると、珍しいことに日本女性に会う。話しかけて聞いてみると、従軍看護婦で満州で捕虜になったと申し、故国には帰らず、ソ連で共産党の勉強をするのだと、話してくれた。私は改めて洗脳の恐ろしさを覚え、完全に赤に染まった彼女に哀れみを感じた。

島根県 阿部光明

二月ころより思想調査が始まり憲兵、警察、特高、裁判所関係者、その他は調査対象となり転属して行く。いずれ厳しい取り調べを受けるであろう。また行動によっては反動と密告され、恐ろしいことになる。思想かぶれが幅を利かせ始めた。やがて日本新聞が届くようになった。記事は日米反動とか共産主義礼賛である。労働歌の合唱が強制された。全く意に沿わぬことばかりであるが、生きるため、帰るためには致し方ないことである。

二十二年十一月ダモイを口実にソフガワニ港を出港しウラジオ港に行き、四十七地区スーチャン収容所でまた伐採である。仕事も厳しいが民主化と称し、反動者と目をつけられればどこかへ転出され、いつ帰れるかわからぬ。抑留者の同士討ちで、赤化の洗礼を受けた恐ろしい者がいるのである。

神奈川県 新谷俊男

寂しい夕食時あるいは食後、アクチーブがきてアジを飛ばし、また日本共産党紙の輪読会が開かれる。共産主義のよさ、ソ連がいかにして共産主義を達成

し栄えある今日になったかを盛んにアピールした。

二十二年に第一回のダモイがあった。これは病弱者と、まず洗脳された者(らしき者もたくさん入っていた)。ダモイがあつてから輪読会も盛んになり、また日曜日に日ごろ威張っていた者のつるし上げがあり、こうしたことが輪に輪をかけて輪読会も盛んになってきた。しかし作業がきつく忙しくなり、作業場が方々に広がり、また炭坑は三交替なのでいつの間にか終わりに変わった。輪読会にかわり、共産党のよさ、天皇制打倒、日本の貧困さ等々のニュースが流された。

岩手県 川村富弥

翌年春ころから思想革命を狙う共産教育の日本新聞が配られ、シベリア捕虜民主運動が芽生え、労働の汗の力で民主社会建設へと発展したのである。そのころは有刺鉄線を二重に張り、夜間投光器を照らして監視しているのである。

民主運動は日増しにたけり狂い。階級闘争に発展、日本人が日本人を精神的苦痛の死の境地に追い込んだのである。

ある深山ラゲリにて夜の出来事。民主運動研究グループの一人がカン。ピヤ対象者になり、反発をしてわれこそは真の民主主義者なりと、自分の左人指し指をタポール(お)で切断、まさに狂気の沙汰であった。千葉県出身者。朝から晩まで団結の歌、赤旗の歌と悲壮な叫び声を張り上げ、作業現場に向かう。

ライチへに移動し、過酷労働は薄れ、給与も改善された。今考えて見るに、食糧の不足、過酷労働、厳寒、民主運動のテロルによつて多くの死者が出た。

岩手県 長塚力

一方、二十二年ころより、日本新聞による民主化の波も急を告げ、軍隊の階級制度の廃止と同時に、抑留者による所長の選挙等。演劇を中心とした文化活動。共産主義の啓蒙等。二十二年の後半より二十三年にかけて激動の時代で

した。ハラシヨラボートは外出も許可され、食堂でロシア娘を交えながら軽食をした思い出もあります。

島根県 八幡義隆

二週間くらいでナホトカに着いた。入るところがなく海岸の砂浜におろされた。四月中ごろでまだ寒い。寒い。近くの山に木の葉を取りに行き、下に敷く。帰還者は三万人ほどいて汽船は貨物船で二千人くらいだそう。最初に砂浜幕舎、収容者、乗船と順番がある。その間、日本青年同盟が共産教育をする。赤旗やインターナショナルを歌う。言うことを聞かないと部隊全部がまた作業隊へ戻される。我々もナホトカに着くと階級章をはずし、防寒帽の星の上に裏返しに縫いつけ、赤いマークをつけたようにする。

岩手県 折居次郎

肉体的にはようやく仕事に耐えられるようになったところ、今度は例の民主運動が起きて精神的な苦痛を耐えねばならなかった。この運動は心の底から恐怖感と人間相互の不信感を強く抱かせた。そして日本人の無気力、便乗主義、裏切り、非良心、破廉恥などの醜い面をさらし、日本人は最低だと思ひ知らされた人々が多かったことを悲しむ。

シベリア抑留の話には必ず出てくる忘れられない民主運動がある。肉体的に弱り切つてようやく命拾いをして、ひたすら帰還の日を夢みてその日を過ぎていたとき、新たに襲ってきたのが、この精神的な恐怖である。

旧軍隊のあの私的制裁の恐ろしさはだれしも知るところだが、それにも増して恐ろしかったのが民主グループの活動である。不当につるし上げられているのを弁護する勇氣を持つどころか、反対にみんなと一緒にそのつるし上げに同調せねば、すぐに自分がつるし上げられる恐れのある異常な世界がそこにあった。

裏切り、密告、悪意、脅迫、人間性の無視などが日常まかり通るのだった。た

めに多くの人々はみな心の底から(いや魂の奥と云うべきか)の恐怖感と孤立無縁の相互不信に陥るのだった。(今でも人間不信の念を抱き続けている人がいる。)自らの体を傷めて入院して煩わしさから逃れ、可能性のない逃亡を実行してつかまり監獄に入れられて、久しぶりに安住の時を得たと喜んだ人もいる異常な収容所となっていた。

この中で一般の人は集会には努めて参加し、子供だましの幼稚な論議をばかばかしいと思ひながらも、黙つてその場の空気に同調し、労働歌に声を張り上げ、相づちを打ち、手を上げ、そうだと叫び、ひたすら身の保全を図り、ともかく何としても帰還する日までの我慢と、歯を食いしばり耐え抜くほかなかった。

ナホトカに着いて驚いた。ただただ目をみはるばかりの情景が展開していた。狂気の沙汰とはこんなことを言うのだろう。毎日々々集会和デモの連続である。身についた人間不信が目をさまし、隣にも友人にも心を開かず、ここで取り残されてはと、懸命に声を張り上げ、手をふり、歌つて踊つて同調し、無事に地獄の門を出て波止場にたどりついた。

岡山県 田中一司

このころから同志の中に民主グループと称する分子が出始めた。その者たちがソ連側に進言したため私たちのグループは反動主義者だということで超重労働の炭坑のラーゲルに移されることになってしまった。ラーゲルを出るときの検査で所持品はほとんどソ連兵に取り上げられてしまった。反発もできず悔しい思いをした。

取り上げられたものは時計、万年筆、石けんや下着等で、これで丸裸同然となつてしまったのである。これからの生活を思うと涙が流れてとまらない。

ラーゲルの中で「つるし上げ」がこのころから頻繁に行われるようになった。実に情けないことだと思ふ。十数人の民主グループという者(日本人同志)がソ連

の後押しで共産主義の教育と称して時折集会を行う。休みもなく重労働を終えてラーゲルに帰れば早く体を休めたいのが人情である。寝る前に寸時の語り合いや将棋をして心を休めるのだ。そして板張りのベットの横になると南京虫の猛攻を受けて眠れぬ夜が多い。この虫と同じような人間でもある。そんな苦勞などお構いなしだ。彼らはソ連側へつらっているので、労働はなく腹いっぱい食って体力もあり元気がよい、二回、三回と集会に出ないと反動主義者であるといつて、広場の台上へ引きずり上げられて、四方からあることないことを口きたなく長い間のしる。これが「つるし上げ」ということだ。私たちには大変迷惑なことであった。

前記のドイツ兵がこれを見たら大笑いすることだろう。食物に釣られて同志を教育という名のもとに痛めつける等日本人の悪いところのようだ。自分さへよければ他人の苦痛などなんとも思わないのだ。今私はこの異国の地で栄養失調寸前での体で重労働をしているのだから、その苦痛を思えば同志を痛めつけるなどできるものではないはずである。馬鹿者ども……とどなる。そして月日が流れようやくダモイの日がきて故国に向かう途中のことである。ソ連領内での前記のような苦痛を耐え忍んできた気持ち爆発して、日本海航行中のあの引揚船上での恐ろしい出来事となってしまったのである。

神奈川県 山口利一

この間、強烈な民主運動の嵐が吹き荒れた。何事も帰る日までと耐えがたきを忍び、戦友同士励まし合い助け合い、入ソ以来四年間悲惨な抑留生活を生きた。九死に一生を得たとはこのことか。今でも思い出すとぞつとする。

神奈川県 田口幸安

壁新聞や日本新聞等発行されるようになる。選抜者は中央ハバロフスクへ派遣され、共産主義の教育を受け帰所して、徹底的普及に全力を傾注する。青年

共産党突撃隊が組織され、赤旗の歌インターナショナル斉唱して共産主義の吹聴に躍起となり大わらわである。突撃隊は赤旗陣頭に早朝より夜遅くまで動かされる。

集結地のナホトカではグループの活動めざましく、大勢で携っていた。熱弁に圧倒される。壁新聞等も大々的誇大揭示で、徹底的共産主義の思想普及樹立に大わらわであった。乗船の日まで使役に動員される。

岩手県 菅原春一

やがて兵隊同士で運営が始まり、前より暮らしがよくなり、三年目を迎えるころに共産党活動が始まり、最初のうちは、一部の者が活動を行っていたのですが、月日がたつにつれますます激しくなり、共産党活動に参加しない兵隊は帰国をさせないというので全員参加するようになり、でも中には不活動な者がいるので、その兵隊を作業終了後大衆カンパにかけてたたくのです。こういうことが毎日のようになったので、日本人同士のにらみ合いが始まるようになったのです。

青森県 葛西保

つるし上げ、重労働十五年の刑。「反動」「帝国軍人将校のにせ民主主義者」こんなやつは生かしておくな。シベリアの「シラカバの肥料」にしてしまえ。と二十二年の晩秋、コムソリスク第十二分所大講堂でのラーゲル全行動隊員による民衆裁判である。理由は何だったのか、自分のどこに反動性があるというのか今もつてわからない。

とにかく、一方的にソ連刑法の重労働十五年を科せられて営倉へ、そして警戒兵に自動小銃を擬せられながらの懲罰大隊に送られた。

覚悟を決めているものの、捕虜のむなしさ、憤りに泣いた思いでは決して消えない。しかし皮肉にも、懲罰大隊での約四か月間は、私にとっては抑留生活三年

のうち、もつともしのぎやすかった思い出がある。それは、最初ゲーペーウーに連日身上調査や、ソ連のための労働に従事する旨、誓約書に署名を強制された以外は、入ソ以来初めて、“白米食”にありついたこと、そして軽作業のほかは休養ができ、アクチーブの狂乱から逃れることができたからである。今なお忘れ得ないのは営倉入りのころ、雨の夜更けに、川畑さん、吉村さん、村尾さんらの若い隊員が、警戒兵の目をかすめて、営倉の窓から毛布や飯盒飯など差し入れてくれたことである。あの感激は、前述のこととともに忘れることができない。

帰還直前まで続いた「反動の烙印」それはうそとも本当とも計りしれない。重労働十五年であったが、帰国の最集結地ナホトカにたどりつくことができた。

シベリアで味わった苦い思い出は、今も諸々の思い出を秘めて残る。それは、食堂に張られたセメント袋の壁新聞に、肉太に記された私への攻撃文字であった。「反動分子、葛西を祖国に帰すな」、彼は……と罪状が書かれてあったと記憶している。

当時、これはつきりまた奥地へやられると覚悟し、つらく憤りに心が沈んだことである。しかし、幸いに二十三年七月末に生きて帰国することができた。

熊本県 井場寿春

一九四六年の後半から民主運動が始まりました。若い元気な者が選抜されて、共産党の勉強をするために、バロフスクに派遣されました。彼らが帰ってくる共産党の歴史を学ばせられ、作業の後は収容所の庭でインターナショナルの歌を歌わせられました。アクチーブたちは、作業ノルマを上げ、民主運動をより早くマスターした班からダモイだと叫びました。班員たちは一日も早く帰国するために、疲れた体にむち打って共産党史の勉強に励んでいたのです。

岩手県 日沢幸太郎

我々はロシア人といえば共産党、共産党というとロシア人と、相関関係のよう

に思われる。労働のためロシア人とともに働くことがある。彼は実に人なつこく、やさしい面を多く持っている。ところが共産主義のことや思想的なことを話し出すと、今までにぎやかであった座は急に黙りこくなくなり、ついには一人減り、二人減り、ロシア人はその場にいなくなってしまう。これは後でわかったことだが、工場や事業場に共産党員が必ずいることになっていて、主義思想を話すとそのことを党員に密告するという仕組みだということを聞いて、私もそのとき冷汗をかいた。

岩手県 菅原義三

二年ぐらいいしますと思想教育といえますか、ソ連の共産主義の勉強がソ連の指導者によってされるようになりました。新聞も日本新聞というようなものが出まして、共産主義は大変いいものだといようなことが新聞に出て、またそのようなパンフレットを回しながら勉強をいたしたわけです。私たちはそうしなければ日本へ帰れないんだぞ、これを勉強しなければ日本へ帰れないんだと、こういうようなことで、勉強せいというようなことだったわけです。また、実際本も何もありませんから、そういうような活字に飢えておったものですから、自然とそれを見るようになったわけです。そして、労働者こそ一番偉いんだというようなことをだんだん教わってくるわけです。しかしながら、なかなかソ連のことを心のしんから勉強したといいますが、一部あるかもしれませんが、大抵の人はまず勉強したふりをしておこうじゃないか、そうでなければ日本へ帰さないんだから、まあ勉強したつもりにしようというようなことがあったわけでございます。

新潟県 宮野泰

とうとうその日がきて五月二十日、波止場から再び船上の人となった。集結地が炭坑の町であったのでまたまただまされたかとヒヤヒヤしたが、千人の大隊が編成され貨車に乗せられた。北上した列車がシベリア鉄道を東進すると相前

後して引き揚げ列車と行き交う。ところが驚いたことにどの貨車もどの貨車も「ソ同盟に感謝しよう」など歯の浮くようなスローガンや赤旗で飾り立てられ、兵隊たちは労働歌やインターを高らかに歌っている。

我々には赤旗一本もなく、全然歌も知らない。とにかくハバロフスクでチエックがあるとのことなのでそこまで何とかしようということになった。大変な大騒ぎとなった。ハバロフスクは無事寝ている中に通過、七月初めナホトカに着いた。海の香りが懐かしくて涙が出た。ナホトカでの一週間はまたまた大騒ぎである。起床から就寝まで気は許せない。歩くときはスクラムを組んで労働歌を歌う。

民主化運動

約一年を越した頃から民主化運動が盛んになり、夕食後、机の上に立たされ隊員から、あることないこと罵倒雑言をあげられたことも二、三度あったが、これも芝居の一つと軽く受け流す心のゆとりを持っていたからあまり苦にならなかった。しかし堅苦しく考える人の中には、日本人が日本人を苦しめたと表現し、アクチーブに敬意をもつものも居た。

高知県 東山林

島根県 玉木文明

民主運動や反軍闘争などにもいろいろと行き過ぎたこともあったと思われる。お互いに日本人同士はもつと同胞愛に燃えて助け合いながら、一人でも多く祖国の土を踏むべきであったと思う。

敗戦という、初めて体験する苦難欠乏の最悪環境下に耐えて幸いに帰ることができた我々として、残る生命のある限り、尊い犠牲となった幾万人もの戦友たちに慰霊の誠を捧げる覚悟である。

福島県 村上武

各分所に反「ファシスト」民主委員会が結成されたことである。
各收容所には団長(町長)が選ばれて、委員長(議長)が選ばれ、各作業小隊長、啓宣部長らが専任され、收容所を統制管理することになった。昭和二十二年八月ごろではないかと思われる。

静岡県 溝口平二郎

粗衣粗食の上、ノルマで束縛された重労働の連続で疲れ切った抑留部隊員を、毎夜集合させてマルクス・レーニン主義唯物論を講義し、筆記試験で白紙提出者や文句を言う者は大衆の前で日本人同士で吊し上げ、死の苦しみを与えられ、死に追い込まれる者あり、またソ連官憲に渡されて二十五年の重労働刑を科せられラーゲリで死の苦しみを味わされる者あり、シベリアでの流刑は全く悪魔の地獄であった。

熊本県 上羽淳一郎

民主運動が日増しに盛んになり歌声運動により労働歌が盛んに歌われ、日本新聞によつて思想改造教育が活発になつてきた。
軍隊の階級制度は崩れ、選挙により民主委員が選ばれ、その指導により自主的に運営されていた。その背後には、ソ連軍の政治部員の強力な後押しがあることは言うまでもない。

各收容所で人民裁判が盛んに行われていた、いわゆる吊し上げである。前歴を徹底的に調査し、あるいは密告により、元憲兵、警察、高級官僚が槍玉にあげられ大衆の前に引き出され、罵声と怒号の中で制裁され村八分に遭う。暴力こそ振るわないが、暴力に勝る復讐だった。異様な環境でのこの行為には救いがなかった。

ときどき巡回映画会もあり、このときばかりは我を忘れてスクリーンに入っ
た。ロシア語だからせりふは理解できないが、じいつと見ていると何となくそのス
トーリーは分かるような気がする。もちろんソ連の職員、家族も一緒に見て、
笑ったり涙ぐんだりしている。

新潟県 高橋 算

共産教育

秋ごろ、大きなラーゲルへ集合させられた。二棟も三棟もあった。そして、日
本兵は皆満服を着ており、疲れきったひげ面の男たちが千人くらいもいた。

何も作業はなかったが、毎日草原で円陣をつくり、日本軍服を着た日本人が
真ん中で演説をする。その円陣は何十カ所も行われていた。そして言うことには、
自由なソ連、偉大なるソ連とか話していた。そして日本は今、アメリカ兵が日
本女性をめかけのようにはいたりして、全国アメリカ兵でいっぱいであり、我々
は日本に帰るのではなく、日本に上陸して戦わなければならないとも言っていた。
そして最後は全員で労働歌を歌って解散する。この集会在毎日続いた。そして日
本新聞と称した小型の共産新聞が配られた。演説していた兵も、パンのためであ
ろうか、またソ連に命令されていた者であろうか……。

そして多くの捕虜たちは黙っていた。聞いているのか聞いていないのか、分か
らなかった。私も一応は聞いたが、何を言っているのか覚えてはいない。余りばかば
かしいからである。だが、これに参加しないとダメイ(帰国)できないと言っていた
ので、毎日輪の中へ入っていた。ただ一つだけ気になることがあった。それは敗戦に
よって我が国はアメリカに自由にされるであろう、もちろんアメリカ兵も来てる
だろう、帰国はしても昔のようではないと思つた。それは、日本の最近の状況な
どは何一つ知らされてないので、全くわからなかったからである。私たちには大
きな不安があつたことは事実であつた。

岐阜県 伊藤 武

十二月五日、今年も残すところ一カ月弱になつたが帰国のめどは全く立たな
い。とうとう一部のグループが伐採作業のサボタージュをやつたらしい。それを
監督官(マツセル)から聞いた収容所長は、怒つて私たち全員のリードである竹
下大尉を責め、責任を取らせる形で、この寒さの厳しい中で「宮倉入り」の処罰
を科した。そのためサボタージュは中止となり、また同時に、患部の奥田大尉以
下数人の元将校はサボタージュを扇動したという理由で他の収容所へ急遽移さ
れていった。代わりに三輪元兵長がチタ市からシヤバルトイ収容所へ派遣され
てきた。

彼は強制労働は免除されていて終日収容所に残り、夕方みんなが作業から
帰つて来ると、私たちを集めて「労働の喜び」を説き、その反対に日本人元将校
たちは働かないのに良い待遇を受けているといつて、日本軍の階級制度を公然と
批判した。また三輪兵長の主張に積極的に賛同したり、強制作業に批判的な
意見を見張るための組織を作り、「友の会」と名付けて彼に協力させた。したが
つて、余分なことが発言できなくなり、さらに集まって話をしたりすると疑われ
て、厳冬にも増してたいへん重苦しい年末になつた。

新潟県 高橋吉郎

シベリア抑留者に対するソ連の共産党主義宣伝工作

ソ連は、日本軍に対し強制抑留し労働をせしめると同時に、共産主義の宣伝
工作を命じ、我が国をソ連の属国にせんと企図していたことは明らかであつた。
戦争によらず、国民の思想を共産主義化し容易にこれをものにせんとしていた
ソ連が抑留日本軍に対して共産主義の宣伝工作を開始したのは、場所によつて
異なるが、イルクーツク第六収容所の場合は、昭和二十一年の秋ごろではないか
と記憶している。

最初は、日本新聞なるものが、何にも読むものがない収容所に、我々抑留生

活になれてきて活字に飢えている者たちに輪読せよと渡された。部数も少なく回覧のようにして読むようにした。話によれば、ハバロフスクにおいて日本共産党の幹部で宮本顕治なる者が責任者として発行しているとのことであった。ソビエト人民の歩いてきた道、レーニン・スターリン主義の解説がわかりやすく連載的に載っている新聞で、それをソ連の国家機構などがパンフレットにして抑留者に読ませるようにした。これをもとにして討論会や自己批判などが日曜日になると活発に行われるようになり、また壁新聞などをつくり抑留者の意見などを載せたり、アクチーブと称して抑留者の中から工作員を指名して共産主義の宣伝に努めさせており、これらの者はまたソ連のスパイ的存在でもあった。

憲兵、警察官などの前歴者は反動と称して共産主義者にはならないと言って、反動摘発をした者は帰してやるとのこと、小生は現職警察官から召集されていたのであるが、憲兵准尉の分隊長から身分を農民として経歴書に書いて出すように言われ、身分を隠して出したものが摘発されて、ソ連政治部の将校に特高警察ではないかと執拗に食いがられて取り調べを受けたが、頑強に否認してようやく取り調べをやめた。その後は取り調べはなかったが、昭和二十三年の秋には、憲兵、警察官の前歴者は一般抑留者と分離されて、イルクーツクからチレンホーボに移送された。

日本新聞には日本は既に共産主義国家になっているかのごとき宣伝を記事にして、抑留者に輪読させていた。日曜日になるとデモの練習を抑留者にさせ、渦巻きデモなどの堂に入ったデモをさせワイワイと騒ぎ立て、赤旗を立てその盛り上がりをおおりに立てて異様な情景を醸し出すなど、全く苦々しい限りであった。しかし、これに同調したごく行動していないと再び強制労働の奥地に送り返されるのが明らかであった。また、食堂に食事のため並んでいる際も日本新聞を輪読させられ、食事している際にも労働歌の音楽が流れており、朝食を済ませ作業に出発する際も赤旗を掲揚して労働歌を歌いながら出発する。作業が終わり帰所する際も労働歌を歌いながら入所する。夕食が終わると時々映画

を見せたが、それも革命で勝利をおさめたものなど、徹底した宣伝工作の連続であった。共産主義こそ最もすぐれたものであり、共産主義でなければ夜も日も明けぬというような熱気にあふれ、若い抑留者などは涙を流して共鳴しているありさまを見て、何をたわけたことをと苦々しく感じていたが、表面は同調を装うようにするより仕方がなかった。

これは小生のみではなく、心ある者はすべてそうであったと思っている。日曜日になると反動つるし上げと称して、元満州建国大学教授や北海道警察本部長などの偉い人が広場に引き出されて、自分のせがれのような若造が目をもむいて悪口雑言を浴びせかけ、洗脳された者たちが目をつり上げて怒声を浴びせかけるが、偉い人たちはさすがに微動だにできなかった。当時の気違いじみた行動をつた者たちは今どうしているか。日本人はどん底へ落ちると、かくも弱く裏切り行為に出るものであるかと痛感させられた。

共産主義教育

新潟県 中沢 敬

二番目の第四収容所に入ってから、共産主義の教育が始まりました。ある日三人の者が指名され、特別教育を受けるためほかの一人所へ集められ、教育されました。三人とも身近な人だったのでショックでした。期間はどれくらいかはつきり覚えていませんが、一カ月くらいだったようです。帰ってくると、定期的に民主化教育と称して、共産主義がいかによい主義であるか、書いてきたノートを見ながら習ってきたことを毎回聞かされました。だが特に何かを強制するようなことはありませんでした。また収容所の中の関係は旧軍隊と余り変わりませんでした。階級意識は極めて薄くなりました。

二番目から三番目の収容所に移ったが、二番目の収容所の仕事は、戦時中中絶していた劇場の作業でした。三番目では、いろいろの工場、鉄道線路の敷設、建物の内装、土方仕事など、仕事は雑多でしたが、その行き帰りや休日などで

反軍闘争、民主化運動と激しくなりました。アクチーブと称して、自選したような見習士官一名、軍曹と伍長各一名の指導者が、今までの中尉の所長にかわりソ側の意向ということ所で所内一切事を処理するようになり、中尉も一作業員として作業に出されました。この中尉はその後、歯が痛いので休ませてくれというのを、当日出入り口にいた見習士官が仮病を使ってサボるのだと無理に作業に出したのですが、現場でますます悪くなり、その日のうちに死亡してしまいました。この中尉は召集で年をとっていたので気の毒なことでした。見習士官が殺したようなのだと皆陰で非難したのですが、この見習士官が自ら任官して少尉の記事をつけていたには、反軍闘争を唱えながら自らがと、皆陰で笑ったものです。

三月九日の晩、つるし上げがありました。ほかの部屋はわかりませんが、私たちの部屋(百名くらいか)は、私一人を対象になりました。理由は、いろいろの民主化運動に非協力的という理由でした。発言するのは赤くなっている三人ほど、かわるがわる非難の理由を挙げ、中沢がいかに非共産主義的かと声高に私を責めて、二時間くらいも続いたか、あるいはもつと短かったか、随分長く感じました。次の日は、収容所全員が所内で演芸をやる時に舞台前に集められ、陸軍記念日に対する反省と反動分子の糾弾だった。所内で帰ったらこんな社会をつくるのだと下相談をしていたとのことで、それは労働者の敵だと大阪付近の人二人を、これも二時間くらいだったか、数人の者がかわるがわる非難の言葉を浴びせました。

このつるし上げの反動？で、後日舞鶴に上陸した最初の晩、見習士官を逆つるし上げすることになりました。反軍闘争をやりながらみずから少尉に任官したと称して少尉の階級章をつけ、出入り口の監督をしながら病気の中尉を作業に出すついに死亡させたこと、みずからは収容所の最高責任者でありながら、最後まで残るべき者が一番最初の帰還者の中に入ったこと等の罪を挙げ、責めました。皆で殺しかねない雰囲気でしたが、鹿児島出身の軍曹が中に入ってその

晩は事なきを得ました。今思い出しても嫌な思い出の一つです。この収容所のアクチーブの一人(伍長)とは今も消息を確かめ合っております。

新潟県 関口義作

やがてソ連政治局の指導により若いアクチーブがやって来て、訳のわからないような「唯物論」や何やらが始まって民主主義革命のろしが上がった。反軍闘争からインテリゲンチアまでつるし上げになった、日本人同胞が互いに血で血を洗う陰惨な闘争が日夜繰り返された。私にはどうしても心底より共産主義思想に同調できなかった。しかし表面上はあくまでも共産主義者でなければ帰国できなかった。

昭和二十三年十月二十日、スターリン元帥に感謝決議と、天皇島に敵前上陸し日本に民主的革命を起こすのだと言う口実で引揚船「朝嵐丸」に乗船することができた。

福井県 林俊男

洗脳教育は、田中、西村氏らを長に、主に日本新聞による教育を行うが、田中氏らは、何が何でも生きて日本に帰らなければならない、表面上でもよいから協力してくれと言う。我々下級兵士はどちらでもよく、聞くところによれば、アムール州の収容所で成績(民主化度)が一番とのこと、ダメイも一番早かった。

長野県 梅垣恭治

やがて民主化運動が盛んになり、その一環として文化運動があり、演芸会なども催すようになり、その衣裳をつくる担当の文化委員として参加することになる。

千葉県 内田健次

そのうちに共産主義運動が始まった。私はそれに反発したが、大ぜいはそのうち運動の方向に傾いていった。

帰国が始まったのは二十二年ころであった。最初に帰ったのは三十人ぐらいで、O・K組(体が弱く休養している病弱者の組)の者であった。それに優秀作業員も五、六人帰国した。そんなわけで、入会すると帰国できるのではないかと考えた者が次々と入会した。そして収容所の日本人がほとんど全員入会した。

結局、それでは意味がないということで、入会は全部御破算となり、新たに作業から帰って来てから民主教育を受けることになった。軍隊時代に補充兵だった連中がこの運動に染まりやすかった。指導者だった者たちには、入隊前からその気のあつた者もいたようだった。

作業から帰つてくると、疲れているのにマルクス・レーニン主義をぶち込まれた。二回ほど反発したら反動だと言ってやたら吊るし上げられた。仕方なく、帰ったら承知しないぞと思ひながら、ししぶ彼らの言いなりに従つた。

滋賀県 松村晋二郎

二年目のいつころから日本新聞が配布されるようになった。内容は天皇制批判、軍国主義批判、日本国内ニュースなどが載つていた。その中で、階級章を外そうという提起があつた。捕虜になつた以上、将校も兵もない、苦勞をともにすべきだとの趣旨から階級章を捨てたが、抵抗はなかつたように思う。新聞については、活字に飢えていたのでむさぼるように読んだ。小林多喜二の小説「蟹工船」が連載されていたことを覚えている。ラーゲル内での民主教育なり運動は、一部希望者のみの学習で、広がらなかつたようであつた。

日本新聞は情報を得るためには貴重であつたが、それ以上にマルホカの巻き紙として重用されていた。

岩手県 佐藤欽一

乗車数日後、仲間が停車駅を見て、ここはハバロフスクだ、この列車は間違ひなくナホトカに向かつていふと言ふ。その瞬間、車内に何とも言われない喚声が上がつた。数日後、列車はナホトカ着、一同下車。これで帰れると安堵したが、敵さんも簡単には解放してはくれなかつた。朝起きると寝るまでスターリン万歳、我々は闘士となり、日本国民のため、共産主義のため闘うことを誓うなどなど、毎日他人の目を気にしながら自己アピール。ここで反動分子と見られたら折角たどり着いたナホトカより逆送され、別の収容所へ連れて行かれた方も多数いたと聞かされ、乗船するまでの日々のいかに長かつたことか。

和歌山県 北村明

民主主義研究機関である「友の会」が発足して、二名のロスキヤ政治部将校の指導のもとに機構の拡充強化がなされた。会は本部要員「アンチ・ファシスト・スタリシ」宣伝部長・労働部長・文化部長・内務部長などをつくり、日本人全員が強制的に会員にされた。

「天皇制打倒」「スターリン万歳」「真の民主主義、共産主義万歳」「打倒、ファシズム帝国主義」「日ソ親善」などという文句が至るところにデカデカと書き立てられ掲示された。新聞はハバロフスクで発行されていた。日本新聞があつた。これは別名「デマ新聞」と呼ばれていた。抑留日本人に対する赤化手段として右のほかに、会本部での講習・総会・研究会等があつた。これらひつくるめての結論は次のようである。

- 一、反〇熱の高揚。
- 一、親ソ分子の培養増大。
- 一、日本本土の赤化のための闘争分子の養成。
- 一、日本本土のソ連圏編入。

こういふ目的のために手をかえ品をかえて、もつともらしく私たちの脳裏へ工

作の矢がひつきりなしに放たれ続けたのである。

石川県 餅井 茂

収容所内に民主化指導紙として「日本新聞」が配布されたのは昭和二十一年の終わりごろからで、これが各中隊に三、四十枚ほど配られたが、読む人はほとんどおらず、すぐ細かく切つてマホルカ(きざみたば)この巻紙に使つていた。その後、所内に民主化運動の兆しが見え始めたのは、二十二年の初めごろに十人ほどの人(下士官と兵隊)が地区政治学校を卒業して収容所に戻つてきてからだった。

この政治学校を卒業してきた民主化グループの人たちは、その後「日本新聞友の会」(党史研究会)を開き、同志を糾合して反軍闘争を指導し、民主化委員会を結成して、ついに収容所内の指導権を掌握した。このため、今まで収容所内の実権を握つていた原参謀ら将校は、このあと、どこかの収容所へ転属して行った(二十二年の初めごろ)。

新しくできた民主化委員会のメンバーは地区政治学校を卒業してきた人たちを中心に構成され、また、各中隊の幹部も執行部が任命した人たちが座つた。この人たちは元警察幹部や教員、新聞記者などで、過去の経歴や学歴を買われて任命されたようである。

民主化委員会が発足してから所内でも民主講習会が開かれるようになり、ダモイするまでに二期二百人ほどが受講している。民主化運動が高揚してきたのは昭和二十三年中ごろからで、このころは「民主化が即ダモイに繋がつてい」と一途に信じ込まされていたから、この民主化の流れに遅れては大変と、みな真剣に民主化闘争に取り組んだ。

和歌山県 山本良市

昭和二十二年十一月、ナホトカ港に着き幕舎へ収容された。ここには十日ば

かりいたが、作業は薪割りと貨車から松丸太を下ろす作業を割り当てられたくらいで、ほとんど休息の毎日だった。

点呼の後で民主化教育が行われ、日本人の講師が、資本主義と天皇制の粉碎が絶対必要だと熱っぽく檄を飛ばすのを聞いた。時折聴衆の中から、講師に迎合する掛け声がかかると、皆で拍手をした。皆が腕を組んで労働歌を声高く歌いながらデモの練習のジクザク行進も日課の一つだった。ここに着いてからだれが言い出したか分からないが、「前歴調べをされて、好ましくない者は帰国させずシベリアへ帰されるそうさ。だれにどんな告げ口をされるか分からないから控え目に振る舞え。スパイは仲間の中にいて知らん顔で我々の話を聞いている。うっかり話をしたら失敗する」と囁き伝えられて、その話の原因か、日常の会話が聞き取れなくなつて何となく沈んだ空気が漂った。舎内はもちろん舎外でも、二人が肩を落とし顔を寄せ合い囁き合う姿ばかり目について、異様に静かであったことが印象に残っている。ナホトカでは入浴させられて、久しぶりに汚れを洗い落としてサツパリしたところへ、下着も洗濯消毒済みを支給された。また軍服も旧日本軍の物を支給されたから、作業汚れで真っ黒かった全員が明るく生まれ変わったように振る舞った。しかし、今の今まで肌身離さず隠し持つて遺族に届けようと大事にしていた遺品も剥ぎ取られたと悔しがる者がいた。

さらに幕舎で所持品検査があつて、日記、随想、絵画や匙、フォーク、将棋、麻雀、碁などの工作品一切を没収された。

熊本県 畠田 完

そうこうするうちに、何人かの代表が研修という名目で、ハバロフスクに三カ月くらい派遣された。帰つてくると、アクチブ、アジプロとかいつて、まるで人間が変わつている。天皇制の批判をし、スターリン大元帥閣下とたたえ、ちよつとでも反動的な言動をすると、皆の前に立たせ、自己批判をさせ、これでも足りないときは、あることないことを言つて吊し上げが行われた。人民裁判の小型で、人権

は無視されていた。

入ソして一年ちよつとたったころ、言い換えると共産主義のアジプロ活動を勉強し、少しずつ効果が出てきたころ、大きな変革が起こった。旧軍隊の組織制度を残した生活から、将校、特務機関、警察官らをどこでどうやって調べ上げたのか、別のラーゲルに移した。当人は言うに及ばず、お互いの前途が真つ暗になる大きな衝撃を受けた。

下士官、兵だけの集団にし、長を選び、新体制が発足した。ところが、今まで穀類はどこに入っているかわからない雑炊が少し硬くなり、週に一度は、米の飯に、おかずもバラエティーに富んだ駅弁のような献立である。いわく、今までは将校がピンはねをし、自分たちだけ贅沢をしていたからだ。働く者の世の中になると搾取がなくなり、同じ食糧でもこんなに良くなると、共産主義のよさを実例で示す要領のよき。敵ながらあつばれである。そのプロセスはどうであれ、質の向上は大歓迎だった。

熊本県 本田正行

民主運動は日本新聞の渡辺という人が来てから話題となったが、郷土部隊で表向きは青年行動隊も編成しないとダモイが遅れるとの心配から編成することにした。ある日、民主化が遅れていると指摘されたので、ソ連側を資本家に見立てて、労働運動をしてはいかがかとの間に、それは適当ではない、むしろ将校を相手にせよと言われてもピンとこなかった。入口の飾り言葉はよいが先の見えない共産主義に心から賛成できなかった。

千葉県 宮崎定雄

二十三年八月末、帰国の指示あり。テルマに移動。九月一日、服装整備して営門前に五百名集合。氏名点呼順、五名あて営門外に出す。最後まで私を含め六名点呼なく、残し、出発する。理由不明。翌日三百名くらい、翌々日二百

名くらい、他より到着、合併する。数日後より夜、点呼後、広場にて、残留六名、反動分子のつるし上げが始まる。正面の壇上に立たされ、大勢の怒声罵声に対し返答は無駄で、無言の抵抗よりなく、時間の経過を待つのみでした。

九月末、二名、元警察官、他の二名、憲兵とか、他収容所へ転出。十月初めから私と残り一名、各兵舎一巡のつるし上げでした。十月末、残り一名転出。真相不明、うやむやで終わり。誤った民主主義運動の最悪期間でした。

岩手県 金野秀雄

幕舎生活を何日かして、煉瓦の建物に移ったと記憶している。虱からは解放され、今までは全く環境が変わり本当に安堵したのであった。

ここでは、反ファシスト委員会があり、厳しい民主化運動が待っていた。軍隊当時の服装だった私たちを食堂に集め、アクチブと呼ばれる日本人が何やらアジを飛ばし、人民裁判と称して自己批判を迫った。私たちは何も悪い事などしておらず、返事に困った。結局は肩章を今なおっているのがけしからんということ、その場で全部はぎ取られたのである。

翌日には壁新聞に、軍国主義者を追放しよう、などの見出しで貼り出されていたことも思い出す。朝起床と共にアクチブの指示により、各部屋ごと輪番制で、偉大なる祖国ソ同盟、レーニン、スターリンを称賛する言葉を入れてのアジ演説をやらなくてはならず、神経を使ったものだった。

岐阜県 角野重光

さて、昭和二十三年十月中旬、日本ダモイで本隊に復帰することになり、住み慣れた部落民とお別れの時が来た。やがて汽車に乗り、一路キルガへと列車は走り続ける。そのころ本隊では民主運動が盛んであると聞かされた。毎晩遅くまで討論会を行っている。その中に我々も今夜から入らなければならぬ。十名で自由な生活をしていたので必ず吊し上げが来るぞと皆覚悟をしていた。

夜九時ごろ、本隊にソ連の歩哨と共に着いた。すると、私たちが予想したとおり、全員がスクラムを組んで我々を、バプストアーの反動分子が帰って来た、委員長を先頭に全員「ツケ、ツケ」の連発。昔親しかった友人までがまるで敵である。「天皇制打倒、打倒」と言つて、拳を握り腕を高く上げ我々を攻撃。我々の発言は一向に聞き入れない。それを見ていた我々グループの歩哨とソ連側の将校が出て来て「ネリジャ、ネリジャ」と言つて中に入り、「今日はこれで止める、明日の仕事に影響する。ソフトラ(明日)の貨車積みで勝負しろ」と言われ、今日は遅いからすぐ寝るようにと通訳を通じてソ連側から言われ、消灯になったが、私の頭の中は、いかにして明日の貨車積みに勝利をするかで眠れなかったが、そのうちに、いつの間にか眠った。

「起床」の声で目が覚め、各所でアジが始まり出し、我々も負けておれず「今日の貨車積みは絶対に勝つぞ」と大声で叫ぶ。貨車積みと言つても日本のような道具もなく、あるのは太いロープとテコ棒だけ。私は家にいたときに丸太を積む経験が少しあるので、まずは段取り次第と自信を持った。それに我々グループは皆自由な生活もしていたうえ、本隊の者より体も勝っており、力も強く団結心も強かった。

やがていよいよ作業が始まった。各グループは皆真剣である。我々はそれ以上に昨夜の吊し上げもあり真剣である。そうして、やがて、どこのグループにも負けず一番乗りで完了した。そのとき、我々と一緒にいた歩哨が「カンチャイ、カンチャイ」(作業が終わったこと)と言つて手を握る。作業が終わった後収容所に帰り、通訳を通じて全員を集め、「バプストアグループはラポート、オーチンハラシヨ」他のグループは昨夜のアジも口先だけで、口先ばかりの民主主義だ」と言つた。それからは本隊の彼らも昔に戻り、優しさも増してきて、最後の約一カ月ほどではあったが、またナホトカ(最後の集結地)に着いた。

民主化運動

広島県 村中汎雄

『日本新聞』は相当早くから読んでいたと思う。ソ連(ソ同盟といった)の宣伝紙とはいいながら、活字に飢えていたので、一通り目を通していた。そして最後がたばこの巻紙となった。ソ同盟の偉大さの宣伝には嫌気がさしたが、資本主義と共産主義と社会主義との違いとかの記事は、非常に興味がわいて大変参考になった。我々の若い時に『二十になってアカにかぶれないやつは馬鹿だ。三十過ぎてまだまだかぶれているやつは大馬鹿だ』という言葉があったと記憶している。大なり小なりこうした思想を持つ年代であった。折角ソ連に来たのだから勉強してみようと言えば大げさ過ぎるが、こういう研究心は大いにあった。しかし、好むと好まざるとにかかわらず、いや応なしに思想教育を叩き込まれたが、うわべだけであつたのではなからうか。

所内で、《青年共産同盟》というグループが結成されたとき、進んで参加してみた。どんな人から教えてもらったかは覚えていないが、ハバロフスクで教育を受けて帰つて来たと言いつたが、論議で喋るばかりで、今から思えばたいした思想教育を受けていたとも思えない。帰国までの方便であつたかもしれない。我々もつけ焼き刃式で社会主義と資本主義とに分かれて討論会をしても、資本主義が勝つ始末だ。三十過ぎの実社会を経験した人々の方が、我々の生半可な理論より説得力があつた。

私たちの収容所は比較的早くから民主化運動が始まり、所内の空気も和やかになつてはきたが、最大の関心事は帰国であつた。これを利用してのアクチブ(活動家の醜い手段には、内心腹が立つたが、表に出して口に言えない。反動と烙印を押されると帰国できなくなるからだ。スパイ的な人がいて日本人同士で争いが起きる。日本人が日本人を苦しめる。だんだん人を信用しなくなり、二重人格者が生まれる。

昭和二十三年四月、ダモイだと言ってナホトカ行きが編成された。待ちに待った日が来た、故郷に帰れる、だれもが胸を躍らせ列車に乗った。気持ちは既に我が家に帰っている。話題は美味い物をタラフク食いたい。一日も早く満腹感を味わい、親兄弟、妻子に会ってゆっくり休みたい。楽しい夢を乗せた列車は、いつの間にかナホトカ駅に着いた。帰国時には第一分所から第三分所までにその手続を経て帰国の途につくと聞いていたので、専ら皆がその気になっていた。

ところがダモイは真つ赤な嘘で、今までの作業内容によって編成替えがあり、各分所に転属されることになって、だれしもがガツカリ、無言だった。私は、十五名の友と共に教育を受けることを命じられ、三カ月間受講した。内容は、レーニン、スターリン主義、唯物論等、多岐にわたった。早朝から夜遅くまで徹底した詰め込み教育である。教育終了した六月末に、第一分所から約四キロほど東南の山の中にある第六分所に配属になった。この分所はナホトカ港の引揚船用棧橋建設が主作業であるが、埋め立て用の石切り運搬、一輪車(ターチカ)で埋め立てたのである。反ファシスト委員会が労働部を担当した私は複雑な思いであった。

抑留者の統制管理

当初は、戦勝国として威厳を示す必要もあつたかと思うが、自国軍部の統制管理ができず、捕虜として人間離れの威嚇管理であつたのではないかと思う。

同時に、作業能率を高めるために、将校に帯刀を認め指揮を執らせる。その方が、言わばソ連には都合が良かったのではなかったかと思われてならない。ジブヘーゲン当時からの見解である。ハバロフスクからは将校は分離されソ連の教育を受けた。アクチブと言われる人たちによつて統制され、運営管理も日本新聞の指導に任されていたと感じている。こうした人々が果たした役割はいろいろな面で、プラスマイナスは別として、大きかつたのではないかと思う。

二十一年の夏までは軍隊組織のままだったが、どこからともなく民主運動なるものが入ってきた。それまで将校たちは食事は米飯、作業も監督だけであつた。私たち見習士官はソ連では下士官として扱われ、兵隊と一緒に労働していた。民主運動が激化すると、真つ先に槍玉に上がったのは将校であつたが、他所のよう激しい「つるし上げ」はなかったが、反動分子としてどこかへ移された。

見習士官も一緒だったが、私だけは部下が極力庇ってくれて残された。

チタ地区の民主運動も漸次活発になってきていた。将校の端くれの私は、いつ反動分子として吊し上げに遭うか分からないので、先手を打つて運動にも積極的に参加し、壁新聞作りにも協力した。そのせいか、昭和二十二年の九月、アクチブ(活動家)としてチタへ一カ月の講習に派遣された。各地区から集まつたアクチブの前に毎日、ソ連の歴史、マルクス・レーニン主義、唯物論やスターリンについての講義があつた。ある日、日本共産党中央委員の袴田里見の弟が突然来場したが、将軍級の軍服に黒ヒカの長靴をはいた威容?は「シベリア天皇」の名にふさわしいものだった。

収容所に帰つてから、以前の作業をしながら夕食後は民主主義などの講座を開講した。二十三年になると歩哨役も任されて、作業隊長・歩哨・講師と心にもない三役をつけられてしまったが、すべて皆と一日も早く帰国したい一心からであつた。

和歌山県 河端亨之

私の収容所でも昭和二十二年五、六月ころから民主教育というか共産主義の教育が始まつた。アクチブ(積極分子、民主運動指導者)の連中が各宿舎に遊説に回り、ソ連共産党小史と唯物論の講義などが行われた(他のラーゲルについては知らないが、私がいたラーゲルでは、演芸会とか芝居なんか全然なかつたように思う)。アクチブたちの話を聞いていたとき、すべての者が本当に共鳴してい

るのかと疑ったものである。二十二年五、六月ごろから収容所での民主教育の復習というか洗脳教育にアクチブたちは大車輪の活躍であった。私たちのこのナホトカでの暮舎生活は、一週間くらいであろうと考えて、彼らアクチブの共産化運動に誓い、スターリン万歳を唱えた。それは当時のナホトカでは反動的な者は再び山奥の収容所へ送り返されるという何となしの噂を聞かされたが、本当かどうかは定かではない。

神奈川県 池田秀良

このころになると、ソ連側にへつらった一部の先鋭分子により民主運動が開始されるようになった。夕食後早く寝たいと思うのに、彼らの指導で、ソ連の発行する日本新聞等を利用して政治教育を強制された。彼らは、我々に対するソ連側の洗脳教育の一端を担っているのだ。反対すればいわゆる吊るし上げをくう。また、帰国を遅らされては大変だ。何事も帰るまではと我慢を重ねた。このように同胞同士の醜い葛藤が繰り返されたのである。

京都府 中西昇

二年目も森林伐採の労務につく。食事は相かわらず黒く常習的空腹をかかえていた。この冬のところより民主教育が行われるようになった。「日本の天皇制と資本主義は労働者の敵だ、人民は搾取されるばかりである。全世界の国が共産主義にならなければ、我々の幸福はない」と教育する。食うものもロクに食わず、重労働を強制しながら、何を言っても耳に入るものではない。表面は分かっていた顔をする。

民主化教育

島根県 星野好夫

民主化教育は当地に来てから一年くらいしてから逐次やってきた。やる本人

も決して心あつてやっているとも思わない。ただその場のつくりと早くダモイ組となるための手段だろうと推測もしていたので、かえって同情的な目で見てはいた。

我々に直接やつてくるとか他を介してやるということもない以上、取り合わないこととしていた。時々所内の広場や室内で新聞の切り抜きによるスターリン称賛、民主歌を歌い、アジを飛ばしながら解散する程度だった。民主新聞も時々配布されたが、便所用に使われた程度だった。

岡山県 妹尾正一郎

やまと新聞

飢えと寒さときついノルマ、捕虜の体もだんだんと枯れていった。宿舎の中でも黒パンの盗難が多く、炊事の糧秣倉庫からも盗まれた。犯人は寒い冬の宿舎の出入口に縛られ、三日目に死んでいった。炊事の糧秣を盗んだ者は懲罰として営倉(地面を掘った穴で、暖房はない)に一夜放置された。「寒い、寒い。許してくれ。出してくれ」と泣き叫びながら翌朝死んでいった。

こんな状態でよいのか、何とかしなければという声で大和(やまと)という壁新聞が作られた。毎日の生活の心得や漫画、ダモイ物語、歌、意見などいろいろ書かれた。私も五臓六腑、誠実、和などについて投稿した。ところが、この新聞が反動新聞だといわれ問題になった。私もソ連側の調査に何度か呼び出されたが、別に内容が悪いのではなく「大和(やまと)」という名前が反動的ということでおさまった。

ある日、捕虜は一カ所に集められ、ソ連の大隊長から正式に帰国の伝達があった。広い野原で最後の装具検査があり、駅に向かって歩いた。今までの長かった苦しみも忘れ、欣喜雀躍、みんな心から喜んだ。列車の中でも(勿論 貨物列車)、内地の話に花が咲いたが、前にいたヤブローワヤを通過するときは、全員起立して英霊に訣別し、まだ病院に残って懸命に療養につとめている者の健康を

祈り黙祷した。帰国者全員滂沱^{ぼうた}の涙を流し、別れを告げた。

途中ハバロフスクでは、日本新聞のメッセージを受けなければならぬ。この答辞の巧拙と民主化の状態によっては、シベリアへの逆戻りもあるといわれた。我々の部隊は、作業中、ソ連語に精通しているソ連の大隊長当番が、上等兵でありながら指揮官になっていたため第一関門は無事に通過した。上級者が指揮官であれば、民主的でないと判断されることを考慮したものである。

長い期間、貨物列車にゆられ、やっとナホトカに着いた。ここでは海岸の天幕生活であった。昼は四キロもある遠い山から、石を運んで来て海に捨てるのが仕事であった。夜はおそくまで、幕舎ごとに労働歌を競い合つて歌った。いずれも部隊の共産化、民主化の評価の対象となり、良好なものから帰国させられた。とにかく、朝から夜まで戦々競々として、忙しい毎日であった。共産主義、民主主義が徹底したと評価された部隊、作業能率のよい部隊は、第一、第二、第三分所とスムーズに通過していくが、そうでない部隊は、せつかくここまで来て、またシベリアへ逆戻りすることも少なくなかった。私たちの部隊は、作業能率が良いというので無事に通過して第四分所に入った。ここまでくればもう大丈夫。逆戻りは絶対ない。日本から来る迎えの船を待つばかりである。ここで今までの上等兵の指揮官は上級者と代わった。飢餓、重労働の悪夢もさめ、楽しく、ゆったりとした生活であった。

福島県 相田正明

病弱者は一カ所に收容されて洗脳教育が始まり、收容所の一角に集会所を設けて「スターリン万歳、日本国天皇制打倒」のスローガンも一帯に広がってきた。そして赤化教育的な自主演劇も催されるようになりました。日本新聞も出回り、オルグ活動もあり、なんとなくお互いに腹のさぐり合いとなつてきて、密告も出たり、黙して語らず、対人関係に敏感になりました。ソ連側にこびる者も出てきました。また適当に休暇が与えられ、浴場でお湯を使って体を洗って、

その間衣類は地下に温度室ができてそこで熱処理をしたり、衣類の交換もできました。そして赤化教育に順応した者を長として收容所に配置し、洗脳教育が始まり、要求実現の場として活用しました。

(中略)

ナホトカのテント村に入ると、天皇制打倒、日本本土に上陸し、民主運動を展開するソ同盟の一員として闘うことを誓うと頻りに呼びかけられて、その思想活動と洗脳教育に驚きました。我々の作業大隊は抑留中の生活でも、余り赤化教育にも染まらず程々の考えでありましたので、お互いうまくやつて行くことの中で感じました。配船が決まるまで待機とのことで、労役や作業もななく日本から船が来るのを待つことになりましたが、日夜民主化運動が激しくなつて、「ソ同盟万歳」で赤旗を振り歌を唱和し迎合しました。我々の言動は民主化の程度が監視されている。我々も民主共産化したごとく、時には日本政府の批判を行い順応しておりました。反ソ的な行動をとると、またシベリアで重労働になると噂が飛び、神経をピリピリ使っておりました。

神奈川県 宮沢信行

昭和二十二年、抑留三年目ころから民主運動は次第に高まり、日本新聞の発行及び同新聞の輪読会が行われ、民主グループにより任命された新聞解説員の主導のもとに講習会が催されたりした。各收容所の講習会よりさらに程度の高いものとして、地区政治学校が利用され、これらの学校に入るには民主グループの推薦が必要であり、講師にはソ連の政治部将校が当たり、その期間は二、三カ月で、卒業すると生半可な革命用語を駆使して筋金入りとなつて帰つて来て、收容所内のアクチブとして活躍し、青年行動隊の主要メンバーとなつた。共産主義教育においては、ただ学習だけに終わらせず、実践がきわめて重視された。

オルグを動員しての反社会主義者の吊るし上げである。通常、批判会とカンパ

が行われるのであるが、批判会に引き出される者は、「反動」の烙印を押されることがすでに決まっているのである。批判会の最後の仕上げは、いよいよ吊るし上げである。壇上あるいは前に立たせ、周囲を収容所の全員で囲み、アクチブの司会で議事が進行し、オルグが前に出て「被告」の罪状暴露をするのである。要所所に配置されたアクチブが「同感」「同感」「民主主義の敵だ」「やっちゃまへ」などと叫び、あるいは拍手を送るのである。これらの行動により、元憲兵、特務機関員、巡査、後には将校も追放され、将校収容所に、あるいは、バロフスクの戦犯収容所に送られて行ったのである。

時には各作業所にゲーペーウの人々もぐり込み、絶えず我々の言動、動勢を探る。たくみな日本語で、そのような事を言いますとソ連邦憲法で処罰しますと私も言われたこともあるし、直接ソ連将校に拳銃を突き付けられて、二回も収容所内の動勢及び憲兵、特務機関員の有無を調べられた。確かに収容所内に憲兵、特務機関員はいましたが、我々は日本人です。彼らを守りました。その人たちも必死で黙り通しました。

(中略)

途中変わりなく、ナホトカに到着。最後の難関ナオトカには、牢名主が新入りをしごき上げるように、帰還者の一挙一動に目を付け、摘発する民主グループが待ち構えていた。その連中は百名くらいといわれ、大量の引揚者の受入れ送還、設営などの雑務をソ連当局の指示で担当しているとの噂であった。昭和二十一年、昭和二十二年ころは当時発行の日本新聞を見ても大したことはなかったが、昭和二十三年、二十四年と我々が帰還当時は様子が変わり、民主運動の嵐が吹きすさび、「自由と平和の城砦、ソ同盟万歳」「われわれ労働者の祖国万歳」、さまざまな趣向をこらして作られたプラカードでいっぱい。

彼らのしごきは、一足先に帰る者に対する腹いせかと思われるほど執拗で、時には吊るし上げられ、ナホトカまで来て半年以上も足止め、あるいは突然呼び出され、一人奥地へ逆送される人もいた由である。とにかくよく歌い、踊ってい

る。歌はインターナショナルやアカハタの歌、それに民謡を除くと、ほとんどソ連の歌を日本語に訳したものであった。

私たちは十日余りして、回船された「英彦丸」に乗船したが、日本の引揚船に乗船してからでも、なお、安心することはできない。何かの理由で再び下船させられた、というようなことも決して皆無ではないのである。さらに、船が出港してからでさえ、私たちは気を許すことはできなかった。出港した後も、六海里地点まではソ連軍の将校が同乗しており、彼らがハシケに乗り換えて帰港する際、連行されたという例もあったと言われている。

埠頭で日本の船を見て動揺しなかった私が、乗船で希望が出て再び迷いが生まれ、今度は船が動き出して再び「帰れるかもしれない」「思えば心が乱れてくる。」「なんとしても帰りたい」「どうしても帰らなければならぬ」「なんとかこのまま領海を越してくれ」と我々は一心に念じた。

領海を越すまでまだ油断のならないことを恐れているのは、我々だけでなく、民主グループをも含めて乗船者全部が同じであった。危険の度合い、心配の程度の差こそあれ、ひとしく不安にかたずをのんでいるらしく、あちこちでそのことがささやかれていた。船はもうどれほど離れたのか、それからしばらく経ったころ、船が止まったような気がした。「領海線か?!」だれもがそう思った。高鳴る動悸、緊張の時を刻んでいるそのとき、シンと静まる。ソ連の将校が縄梯子を伝つてハシケに乗り移った。

ドツと上がる歓声。「帰れた三俺たちも帰れた」我々は抱き合つて泣いた。いつまでも抱き合つたまま泣いた。英彦丸は時速八ノット、一步一步祖国日本に近づく。船内は急にニコヤかな雰囲気になつていった。

航海は何の変わりもなく着々と日本に近づきつつある。船がソ連領海を離れると、収容所でソ連の威光を背景に権勢を振るっていたリーダーに対する、すさまじい復讐がしばしば行われ、「日本海名簿」(ナホトカ乗船名簿から舞鶴上陸名簿を差し引いたものの意味)というような言葉が伝わっているところを見る

と、船中で病死及び自殺と公表されているものの中に、他殺による死亡が絶無とは言えないようである。

昭和二十四年になると、左派の勢力が圧倒的に増大し、船内そして舞鶴でもその主導権は失われず、引揚船や引揚当局に対する待遇改善要求や政治運動が激化し、帰国妨害の傾向を示すようになったのは事実である。

数日間の引揚収容業務の諸手続が終わって引揚げ列車に乗っても、その労働歌を歌い、品川駅に着いてもやまず、出迎えの人々をはねのけ、東京代々木の共産党本部に行くべく、私も隊伍を組んだ一人であったが、学校の恩師の羽交い締め、同窓生のスクラムに遭い隊伍の中から引き出され、親戚、知己及び学校の恩師に付き添われ、東京芝白金の親戚の家に引き込まれた。

品川駅頭では、一応隊伍を組んだものの、それはうわべの気持ちの者が多く、内心はそれぞれが分派的で、それぞれの親戚、知己の手で三々五々分散をし、当時東京代々木の共産党本部へ行った人はほんのわずかであったと思う。それ以後、引揚者からの音信はなかった。

新潟県 片桐貞夫

初めての夏、白夜というの夜は十二時過ぎまで明るい。どうしても寝不足になる。

このころから、一部の者が、夜二時間くらいずつ勉強会があるそうだが、内容は政治学校と文化学校だということだった。時間をもて余していた私は政治学校に入った。講義の自身は、ソビエト共産党史を勉強させられた。日本人の講師が分厚い冊子を配り、中味を見ないでページごとの解説をしてくれた。この一冊暗記をしている者がいる、すごいなあーと感心した。適当に講義を聞き、何カ月が終了した。

このころだったと思う。戦友が、ある人に頼まれた、収容所の中で民主運動とというのが始まったそうだが、片桐を誘ってくれと言われた、俺が引き合わせると。

夜みんなが寝てからそつと外へ出た。そこにA伍長がいた。同じ指揮中隊にいたんだが、班が違ったのであまり馴染みはなかった。

A伍長から聞かされたのは、「戦争が終わって一年もたつのに軍隊のままの階級でいばっているなんて通用しないんだ、我々はみんな日本人なんだ、階級も要らない、上も下もない、みんな平等なんだ、お前も力を貸してくれ、収容所の中に広げたい、まだ当分は内緒だよ」と言われた。階級でいばっている連中に反発を持っていった私は仲間に入れてもらった。

取りあえず壁新聞を出すということだった。みんなが寝てから空倉庫みたいな所に集まって手伝った。内容は「戦争は終わった、軍隊は解散なんだ、階級でいばっているのは通用しない。我々はみんな平等なんだ、みんな力で合わせて元気で故郷へ帰るんだ。一時も早く日本へ帰れるよう収容所の全員で考えてくれることを訴える」というような中味だったと思う。

A伍長は大学時代はロシア語を専攻したんだそうだが、ロシア語はペラペラとか早速暇を見てはロシア語の単語を教えてもらった。半年近くで日常の用はロシア語で通ずるようになった。

秋ごろには、収容所の中でも民主主義を言う仲間が随分多くなっていた。今までいばっていた連中が少しおとなしくなったように感ずるようになった。

年明けが来て寒い日が続いていたころ、急に帰国(ダモイ)と言う声が聞こえ始めた。ああ、やっと日本へ帰れるかと、心の中では躍り上がって喜んでいて。

一月の末だか二月初めのころだと思いが、全員の身体検査が行われた。

しばらくして、病弱者は今寒い時期なので健康の者を先に帰すそうだが、三百人くらいだ。

だれ彼となくそんな話がみんなに伝わった。ちよつと不審に思った、帰すならなぜ病弱者の人たちを先に帰さないんだろうと。後になってわかったことだが、これらのデマは、民主運動が広まって自分たちの身のことを考えた下士官や将校の策謀だった。

いよいよ帰国だと言つて選ばれたのは、健康の者約三百人くらい、そして思い当たつたのは民主運動に加つていた者が大半だったからだ。

不逞のヤカラと銘を打って追い出しの策謀に乗せられてしまった。

兵庫県 森田 純

昭和二十三年ごろよりデモクラシーの教育(民主教育)が月に一回程度各宿舍ごとに開かれました。その当時、私は機関庫の班長をしていました。宿長よりこのデモクラシーの教育を受けなければ内地に帰れないということをかされ、班員に、どんな事があつても受けてハラシヨ・ハラシヨ、会が終わるようによせよ。休むと残留になるといわれていた。このデモクラシー教育は帰る時まで続きました。内容は記憶していません。帰るための手段として受けただけでした。

広島県 難波繁男

ダモイ(帰ること)ダモイと騙され続けて作業させられていたのが、昭和二十三年十一月下旬、待ちに待ったダモイの本当のダモイかも?の噂に変わり、しばらくすると、収容所を出て貨車に乗せられ、また、どこかに連れて行かれるのかとの不安も出始めました。でもついにダモイの時がきて、私たちを乗せた貨車は途中バイカル湖を過ぎ、着いた所はナホトカ港の横に天幕を張つた収容所に入れられ、一週間の船待ちとなった。

その間シベリアで共産教育を受けた党员たちにより、生まれて初めて赤旗の歌を歌わされ、将校たちの吊るし上げの様子を見る日が続き、五日目の朝、全員屋外に並ばされ、各天幕とも右から五〇名ほどが、我々の犠牲になり、また共産党の教育が足りないという理由で貨車に乗せられシベリアに逆戻りという悲しい出来事が起き、そこで引率指揮者が、党员の見えない所に全員を集め、「これ以上犠牲者を出さぬために、この際党员になつたふりをし我慢しよう」と話してくれ、私たちはこの話を聞くようにしました。もしそうしなかつたら先の

五〇人組のごとくシベリアに逆戻りさせられているでしょう

それから七日目、待望の船が入港、乗船の際はソ連将校が立っていて、挙手の礼をしないと乗せてくれぬ…とのことで、挙手の礼(かつこうだけ)をして乗船。懐かしい日本の船「第一大拓丸」で、船員も日本人だったので心の中で万歳を叫び、これで日本に帰れるぞ…と皆で喜び合いました。二十九日出港、沖合に出た所で、「ソ連スターリンの馬鹿ヤロー」と叫びました。

滋賀県 小西信太郎

ナホトカ

ナホトカに着く二、三日前から少数の進歩的分子より赤旗インターナショナルなどの歌を教えられた。この歌を知っていないと反動分子扱いされることとで、好むと好まざるとにかかわらず皆覚えた。下車して広場に整列、一回だけ食糧運搬のラポータをやつて、ようやく収容所に案内された。ここでは旧日本軍の赤化兵士たちが向ソ一辺倒で専横を極めていた。専らソ連のニュースを誇大宣伝していた日本新聞の記者と称する者たちがそれぞれソ連賛美の演説を行つた。

この連中が、日本新聞を通じ、間接的に赤化指導工作をやつていたのかと、まじまじ顔を見てやつた。中には頭の禿げ上がった元上等兵もいた。大体において将校はいなかったようだ。彼らも日本に帰つたら、果たして今の気持ちで頑張つてソ連政策の一翼を担うのだろうか。それとも在ソ間だけの御機嫌取りなのか心中を疑つた。彼らはソ連軍並みの厚遇を受けて、さながら豚のように肥っていたからだ。朝の点呼から夕の点呼と集合の度に日米の政策を攻撃し、ソ連礼賛のいくさりを罵声と共に聞かされたには全くがっかりした。彼らが声を大にしてアジ演説をすればするほど聞いている我々の方はますます馬鹿馬鹿しくなり、ソツポを向くだけだった。焦つた記者たちの詰込教育の効果たるや、果たして何パーセントあつたことだろうか。

七月十七日最後の服装検査も終わり広場に整列すると、これから復員式が行われるとのこと、我々は聞いてびっくり、全く開いた口が塞がらないとはこのことだろう。日本に帰り復員省の手続を経て復員かと思っていたら、その前にソ連の復員式だと言う。ガラクタ音楽隊が五名居並ぶ中、いとも厳かにインターナショナルの歌を合唱。ソ連収容所長の挨拶で式は終わり、これよりナホトカの港に向かつて前進が開始された。

東京都 小林 保

特に国境近くの古屯(コトン)方面に森林伐採に行った人たちは大変厳しい作業で、病人も多く出て、収容所に帰ってきたときは大半が半病人のようであった。

これを「古屯地獄の殺人部隊」と言っていた。今でも当時の仲間が集まると、必ずこのことが話題に出る。

この間ある夜、私は突然起こされ、持ち物を全部持って外に出るよう命じられ、外に出てみると三中隊の顔見知りの下士官が不安そうな状態で立っていた。何の目的でどこに行くのかと質問しても、何も説明してくれない。そのうち自動車に来て二人はその車に乗せられ、いずこともなく連れて行かれた。真夜中に何時間も車に揺られながら、明け方ある建物の前で降ろされた。中に入ると見ると十人くらいの日本兵がいた。よその収容所から私たち同様連れてこられたことがわかった。

三十分くらい待たされていたそのとき、ソ連の将校(中尉か大尉であったと思う)が入って来て、上手な日本語で、「これから十日間、君たちに共産党の歴史について教育しますから、よく勉強して、教育が終わりましたら、それぞれの収容所に帰って、君たちが先生になって共産党の歴史について教育しなさい」と言われて、日本語で書かれた『共産党の歴史』という分厚い本が全員に配られた。

それから毎日、午前九時ごろから昼食をはさんで午後四時ごろまで続けら

れた。内容は、共産党の歴史の他に赤旗の歌の練習等であった。

教育期間が終わり、また夜中に、一緒に来た三中隊の下士官と二人、車に乗せられ収容所に帰った。その後は月一回火曜日、午前七時から九時までの二時間、共産党の歴史を話したが、だれも聞いている人はいない。しかし、この日は二時間だけ仕事をしなくて済むので、極めて静かにしていた。

東京都 金子亮輔

昭和二十三年に入ると、日本人の食物は若干ではあるが落ち着きを取り戻し、食料事情も一応国際法に沿った物が支給されてきた。日曜日には演芸が始まる。「浅草の灯」など、演芸の好きな人々が役者となって一般に見せてくれた。また相撲大会などをやった。

このころになると、民主的な運営に切り換わる選挙で代表者が決定した。各中隊にも責任者がそれぞれに決まった。また「アクチブ」の人々は、どういう人選でこういう人が選ばれたのか私にはわからなかった。日本新聞や「テキスト」はハロフスクで編集されたのだという。朝、作業に行く前、又は夕食後に必ず、帝国主義又は資本主義を批判する講義が行われた。講義を聞かないと帰国はできないような流言飛語が日常茶飯事となった。この「オルグ」の人々は共産党史等も勉強会を行っていた。

昭和二十四年の正月となり、一日だけは休日になる。平凡な毎日が続く民主教育、厳寒のシベリアでの労働、皆が異口同音に言うことは、「早く内地に帰りたい」の一言である。

四月下旬ごろだったと思う、責任者の方に呼び出され、事務所にて内地帰還を言い渡された。その時は二十人ぐらいだったと思う。二日後に環境整理をして、船のラーゲル「サマルカンド」を後にした。ウラジオストックの街の中の駅に着くと、ウラジオ付近のラーゲルから来た日本人と一緒に、ソ連の責任者と日本の責任者と通訳がついて、一路ナホトカに向かった。人員についてはわからな

い。ようやくナホトカに着いて收容所に入った。

人間は現金なもので、帰国が目前にあるということで精神的に元気が出てきた。ところがそうはいかないで、別の宿舎に回された。皆心配した。そうしたら「ソ連の関係者とオルグたち」（日本人）の民主教育が始まった。昭和二十四年六月のことである。帰国を前にしてまた難題である。日本に帰すかどうかの選別のようなものもある。一週間ぐらい続いたと思う。残された者もいたようだと言う人もいた。我々のラーゲルから来た人は残されずに、第一、第三收容所を通過した。もちろん、身体検査やら荷物の検査等が厳密に行われた。

兵庫 金川浜治

昭和二十年十一月ごろにハロフスクより日本新聞なるものが発行され、十人に一部回覧するように配られました。一面に日本の政治機構は天皇制軍閥官僚であるがため、我々がこのように抑留されることになった。我々は抑留中に十分勉強して天皇制を打倒いたさねばならないということが書いてありました。また、間もなく收容所にも壁新聞がはられるようになり、今まで何々殿と言っていたのが何々さんと言いうようになり、軍隊の階級章も皆取り捨てました。

島根 景山利造

将校は別の收容所に移され、軍隊意識は影をひそめ、軍人としての階級はなくなつた。ところが、民主友の会（後に反ファシスト委員会に拡大改名）なるものが発足し、共産主義的思想の普及と教育が始まりました。したがって、役職を決めるのは、すべて選挙となり、私も小隊長的役から解放されると喜んだが、結果は同じく小隊長の長となり、相変わらず世話をするようになった。当時から日本新聞なるものが発刊になり、週一回程度配付を受ける。

そのころ、地下組織より浮上した、徳田、野坂、袴田ら各氏の執筆も多くあった。我々はその記事よりも新聞紙の方が貴重品だった。なぜなら、たばこの巻

紙用とか大便のときの後始末用とか、その利用価値は極めて高い。

夏に入ったある日、君はハラシヨウボーターだから、チタ市へ行って共産主義の勉強をしていと言われたので、この收容所において、肉体的にまた精神的につらい日を送るよりは楽ではないかと甘い気持ちで引受けた。

約一カ月間、チタ市に受講に行くことに決定して出発した。だが、行ってみて驚いたことは、重労働のつらさとは意味の異なる精神的苦痛というか、針のむしろにいるような気持ちだったことは忘れない。朝早くから夜は遅くまで、それに日本人の講師で、今まで地下活動をしてきたような人物で、日本の封建時代から資本主義、軍国時代に移行した顛末を徹底的に分析した話、また搾取階級などについてのこと、社会主義が歴史の必然性からみても共産主義に移行するのは時間の問題であると説く。さらに、共産主義、マルクスからレーニン時代の推移、ボルシェヴィエキ党史とか、我々が聞いたとて分別がつかないような話に加えて矢継ぎ早の質問攻めに発言を求められたり、また一方では赤旗の歌やインタナショナルの歌で氣勢を上げねばならず、精神的に本当につらく、苦しい一カ月間だった。

ようやく講習が終わり收容所に帰ると、同志の数が少なくなっているのに気づいた。同郷出身の懐かしい塚原、石田もいない。何が起つたのだろうかと聞いてみてもダメイしたと聞き残念でならなかった。私も講習に行っていなかったら、その組に入つて共に帰国できたらうにと悔やんだ。

長野 春日直喜

昭和二十二年の春になり、突然何か分からないが高熱が出て休養組に入る。一カ月くらいたったとき、急に日本に帰すと言われ列車に乗る。途中も半信半疑でいたが、いよいよナホトカに着き、海が見える。間違ひなく日本海だ。これで日本へ帰れると喜んでいると、新青年連盟と言う連中が来て「お前たちはまだ民主教育が成っていない。これから徹底的に仕込んでやる」と言われ、第二收容所

と言う施設に入れられる。

それから二カ月間、作業の行き帰りには赤旗の歌や労働者の歌を声張り上げて歌い、また夜の集会には彼らに同調し、スターリン、ソ連をたたえる。時には大きな声で「我々も日本に帰ったら同志と共に先頭に立つて民主日本を築くのだ」と叫ぶ。皆で「オー」と同調する(陰では日本に帰るため仕方ないと言いながら)。こんなことが認められてようやく復員船に乗ることができる。長い長い二年間の抑留生活に終止符を打つことができた。

長野県 草野克己

二十一年後半ごろより食糧は若干は良くなってきた。そのころから「アクチブ」と呼ばれる連中が、民主教育と言って食堂などに壁新聞等を貼り宣伝したが、作業の疲れでそれどころではなかった。二十二年四月末になって突然、日本に帰すと言われ、列車に乗る。列車がバイカル湖にかかるころ、イルクーツクの街で大勢の労働者が赤旗を立て行進する姿が印象に残る。

五月十日ころ、ようやくナホトカに着く。いよいよ乗船かと思つたのも束の間、新青年連盟と名乗る連中が来て「お前たちは民主教育がなっていない、これから再教育だ」と言われ、第三ラーゲルと呼ばれる所に入れられる。ここで五カ月近くも働かされるとは思わなかった。

岩手県 橋本達夫

ダモイデモクラシーとも言うべきか、『日本新聞』、壁新聞の発行や夕食後の民主学校開校など、いろいろの啓蒙活動の強化、あるいは指導者が中央での教育を終えてラーゲル内に配置され、次第に権力を握るようになり、反動者にはそれぞれ罰則が科せられたりして兵隊も恐れた。

福島県 大室 清

三度目の冬を越した昭和二十三年の春、「東京ダモイ」ということでサンタヘーゼを出発した。どこに連れていかれるやらと、半信半疑で列車に詰め込まれ、着いた所はモスクワの収容所であった。雰囲気が大分違っている。「今度は本当に東京ダモイだぞ」と少しは信じる気持ちになったが、ここでまたアクチーブ(青年行動隊)とかいう、日本人の赤の洗脳教育者が待つていて、毎日、毎日集められて労働歌を歌わされ洗脳教育を受けさせられた。「タワリツシ(同志)諸君、我々はプロレタリア独裁のソ同盟で、同志レーニン、同志スターリンのお陰で、かつての日本人から生まれ変わったのである。そして帰国後は新生日本の先頭に立つて革命を起こし、反動政府を打倒し、労働者・農民の政府を樹立する戦士となるためには理論武装が不十分な者を帰国さす訳にはいかん。これからわずかな時間に徹底的に教育するから、一日も早く帰りたい者は一生懸命勉強するよる」と、まるで恐喝であった。

レーニン主義の諸問題などは、たしかに、現日本の資本主義、今までの軍国主義のあり方に大いに疑問を持たせる講義ではあるが、ソ連の現状を見てきた我々を、果たして納得させることができるのだろうか。牛や馬のような生活を強制し、自由を束縛して、趣旨に反すれば死刑にもなりかねない制度で縛らなければ統制のとれない国家体制のあり方、夢も希望も持てない思想のみの教育、鉄のカーテンといわれるその一部でも知れば同調できるはずがない。しかし、騙され続けてきて、今、目の前にダモイの餌をぶら下げられては、一時の辛抱、馬鹿になるしかあるまいと、皆と一緒に初めて聞く労働歌「民衆の旗赤旗は、戦士のかばねをつつむ……、高く立て赤旗を……われらは赤旗守る」と口をばくばくさせて神妙にしていたため、いよいよ乗船となった。

千葉県 伊藤千次

着いた所はウラジオストックの隣の第二の川という駅の傍の町中の収容所だつ

た。私たち二百人程で、他の主力は途中でどこか別れて行った。毎日小さな雑作業に出されていたが、だんだんと作業が決まってきた。民主運動が盛んになり、ハバロフスクからオルグが来るようになり反ファシスト委員会ができていろいろな活動が始めた。夜強制ではないが勉強会が開かれるようになり、共産主義的教育が始まり、天皇制、資本主義からソ同盟、スターリン礼賛、共産主義的解説である。出ないと睨まれるのでほとんどの人が出席した。

委員会にいろいろな部ができて、私は青年部長に選ばれた。作業場へ向かうトラックの上で赤旗の歌や作業歌を音頭をとって歌わせたり、読書会などを主催したり適当にふるまっていた。

新潟県 真嶋藤作

その以前、まだ寒さの続く三月頃、ラーゲル内に「青年行動隊」と銘打った特別行動隊が編成された。それはソ連におもねる、いわばすり込み隊である。しかし、場合によっては早く帰れる方便に繋がればとかすかな望みを託して、行動隊に志願した。

そしてある日、行動隊の一人一人が、各自が意見、主観を述べ、いずれも揃いも揃ってソ連におもねる、齒の浮くようなソ連讚美の迷句を並べ立てた。いよいよ自分の番が回ってきた。腹の底には皆の言うことに反感を抱いていたわけだから、開口一番「我が日本国の帝国憲法第一条には『大日本帝国は万世一系の天皇を統治す』とあり、第二条には『皇位は皇室典範の定むる所に依り…』と大日本帝国憲法の逐条講義を我流でやり出した。第三条「天皇は神聖にして…」あたりまできたら「やめ！」の停止号令が掛かった。それつきり退席させられ、ラーゲル換えである。行動隊で「一花咲かせよう」と思ったのも束の間、また奥地のラーゲルに移送である。

思惑は完全に裏目に出たわけである、こうなればもはや改心せざるを得なくなつたわけである。「物言えば唇寒し」で黙して、ただ黙々と大衆と流れを共に

し、事なかれで一日一日を送るにしくはなしと悟り、それからは“無言の行”さながらの、木偶人形のごとき、捕虜の生態よりどうすることも無用であり、またでき得なかつたのである。

その頃、『日本新聞』が刊行されていたが、これを思想教育のテキストとして頭が三角になるような、二十幾年育成された日本人としての教科書とはまるで正反対の思想教育が行われた。しばらくは舵棒のとりように困るような船出であった。それとともに共産主義的教育をオルグと称して、ハバロフスク辺りで特殊教育を受けた先鋭指導者(?)が各ラーゲルに逐次派遣されて、いかにももつともらしい論旨をかざして天皇制教育を根本から覆す、いわゆる洗脳に奔走した。

ある日、自分が任命されていた文化部のオルグの役目柄、派遣されてきた中央の先鋭指導者の対応に当たらざるを得ない羽目になった。というのは、我がラーゲルの舎内当番である幹候あがりの至つて性格の穏当な申し分のない同志が、舎内全般の取り賄いを受け持つて遺憾のない運営をやっていた。たまたま当ラーゲルの弱兵(オカ)が屋外の軽作業に出かけた矢先、にわか雨に遭つたので、該舎内当番である幹候の同志が、舎内にあつた傘を持つて出迎えに行つたのであつた。いわゆる温情をもつての行動なのであつた。それをそのとき当ラーゲルに向いていた洗脳オルグに見つかつてしまった。その行為に対する討議が開催され、全員集合させられた。

彼の言うには「こうした行為を当ラーゲルにおける同志諸君は何と見るか。自分の思うにはまことに間違つた行動と見るが、諸君はどう思うか」という主旨の論旨であつたと思う。下手に発言すれば咬みつかれると思つて誰も発言する者などいなかった。そうなれば文化部のオルグである自分が黙つているわけにはいかない。立ち上がつて「当番同志Mの行為はまことに温情に満ちた行為であると思う。この雨の中を、しかも弱兵が雨に濡れては病を誘発する可能性が十分考えられると感じ取つた愛情からであつたと思う。かつて我々は本国にいた当時聞いたところによれば、犯罪の七割までが愛情の欠如から発生していると聞い

ている。ましてシベリアの奥地で愛情のかけらもない境遇にあつては、愛情こそ何物にもかえ難い救いであると思う」と論じ立てた。

それを聞いていた先程のオルグは、やおら立ち上がり「ただいまの同志の発言は誤りもなはだしい。このような境遇とは何事か。我々が祖国ソ連にはそのような誤れる愛情論は通用しない。そのような愛はいわゆる誤れる愛情であり盲愛であつて、害毒でこそあれ、何ら弱者更生の道ではない。そのような軟弱な姿勢は百害あつて一利なき、我々が祖国ソ連を冒瀆する以外の何物でもない」。これでは何を言つても通りようがない。物言えば唇寒し……問答無用である。一事が万事、すべて祖国ソ連の言いなりであつて、他言の余地はどこにもない。他言無用、赤旗こそ唯一のシンボルである。それからは言うだけ野暮と口をつぐんで文化部のオルグも辞退した。

以来、民主運動が熾烈となり、今までの敵とした軍の階級制は弊履のごとく踏みにじり、一兵卒こそ幅をきかす下剋上はだしの様相と変わり果てた。それにつれてつるし上げの行動が茶飯事に行われるようになり、迂闊な言動は一切できない、まことに窮屈と言おうか、下手に大きなあくびもできないような雰囲気が身边を漂つていた。

福井県 井上博夫

入ソ当時より民主化運動は日を追つて進められ、さらにエスカレートして反動分子としての烙印を押されようものなら大変だった。まあ一口にいうと日本人が日本人を殺すとまでは行かなくとも、精神面ではそのようなことがあつたのも事実だ。朝整列し、作業前には必ずアクチーブといつて民主運動の先頭に立つ者から楯が飛ばされる。

「今、我々がこうして毎日ソ同盟のおかげにより食事も与えられ作業も出来るのは、レーニン及びスターリンのおかげである。我々はこの与えられた作業を百%いや百二十%を遂行しソ同盟の発展のために頑張ろう」といつた趣旨のアジ

プロである。おまけに「今、日本の家族の者はアメリカ、イギリスの鬼畜のようなやからのもてで食い物もなく、どん底の生活に追い詰められ、女や子供はなぶりものにされている。我々は本当にソ同盟に感謝して毎日の作業を頑張ろう」といつた具合である。

中にはこうしたことに批判的な者もおり、元の軍隊では幹部といつた者でも、今度は反対に初年兵達にやつつけられるという場面も多く出てきた。特に大衆の前で批判を受け吊るし上げをされるとは全く気の毒なものであつた。一つの例として、「このような者は絶対日本に帰すことは出来ない、民主主義の敵だ」と壇上で叫ぶ。また、これに呼応して「そうだそうだ」と大衆コール。こうして丁度今の選挙運動の頑張ろうコールのようなもので、民主化運動は次第に発展し、その陰では奥地へ移される者も少なくなつたようである。帰国する者には、必ず舞鶴から東京代々木の日本共産党本部へ向かい野坂参三委員長に帰国の報告をするよう、また各県に帰つた時には県本部委員長に帰国報告をするよう指示されたものである。

しかしながら、このようなこともごく限られた一部の者だけが実行したのかしらないが、大半の者はナホトカ港において乗船と同時に、心の中では「何が民主化だ、馬鹿なことを言うな」と思い、そうして舞鶴に近づき祖国のあの美しい緑の山が目に映る頃には心の片隅からも消え去り解放感にはっとしたものである。

島根県 田中勤助

民主委員長ができた。民主運動が始まったのだ。格別将校と兵のいざこざは聞かなかつた。副官の高橋大尉は鼻髭をのばしていたが、部下思ひの優しい人だつた。カラガンダからアクチーブとか教育を受けて帰つて来たという二人がいた。熱心に運動をしているようであつた。壁新聞もできる。うまい漫画の絵が描いてある。日本新聞がくる。活字の印刷物を見るのは久しぶりだ。渴えたように読

むが、内地の欠乏状況や資本・軍国主義打倒の記事ばかり、ダモイの様子は読みとれない。ラーゲリ内から二十八人くらい集めて教育が始まった。ラボートはなく、毎日講義を受けては意見発表をするのである。ボルシエビイキというソ連の革命史を読むようにと渡されるが、興味を持って読んだが共産主義がよいとも思わなかった。

岡山県 横畑友三郎

ナホトカでの生活は、引揚船の入港を待った七月六日までの間であったが、健常者は糧秣運びその他の軽作業に従事させられ、作業の課されない者は、連日、民主教育の美名の下に、共産主義、マルクス・レーニン主義の洗脳教育に強制的に駆り出され、集合場所への往復にも隊伍を整え「民衆の旗赤旗は我らを守る」の革命歌を歌わされ、散会の際には、ソ同盟万歳、スターリン元帥万歳を三唱させられた。この時、声も出さず、もろ手を挙げない場合は叱責され、その叱責に対して反抗的な態度をとれば、日本人のリーダーによって重労働が課され、なお反省しない者は再び境界のラーゲルに逆戻りする結果となる。

民主委員、即ちリーダーは絶対的な権力者であつて、生殺与奪の権限を保持していた。あくまでも信念に忠実に生きることに立派であるが、理非を弁ぜない輩に反抗した結果は明白であつて、私は、卑怯な手法ではあるが、帰国が最大の願望であり、一切の自己主張を放棄して大衆の流れに順応せざるを得なかった。

とにもかくにも帰国しなければならない。民主教育が風靡して、他人を中傷によつて陥れようとする日本人が確かにいる。まさに大的(サブチカ)な人種が横行するラーゲルから一日も早く逃げ出したい。その一念にかられ、自己主張は一切放棄して、ひたすらに乗船できる日を待った。

広島県 榎上竹士

その頃には抑留生活にも多少慣れ、所内もようやく整備されて、散髪、入浴場も整備され、所内で出来るようになった。朝夕の食事も食券で食堂でするようになった。そして民主化運動がボツボツ芽生えて、将校批判を起こさせ、作業隊から将校を追放し、新しく隊長と幹部を選出させた。作業から疲れて帰り、二階の薄暗い裸電球の下でハバロフスクから派遣されたオルグの真(新)民主主義の講義を聞くのは作業以上に辛かったが、そうしないと帰国が遅れると言うので皆仕方なく出席した。

熊本県 大阪公夫

昭和二十三年の夏ごろだったと思う、衛兵所での電話の係の娘さんたちも日曜や休日は休みで、そのようなときは所長は私に依頼し、所長官舎への出入りも自由で、電話での用件を伝えると所長も大変喜んで、便利とありがたさを感じていたようだ。しかし、「好事魔多し」のたとえのとおり、よいことばかりは続かない。日本人が電話の応対に出ることは、ソ連の内規に反することだった。私に依頼した所長は責任を逃れるし、このことが一つの犯罪につながったのだ。後で内容をよく知っている政治の担当者が「ナチャーニツク(所長)のベルウンソーが悪かったもんね」と同情の言葉をかけてくれたのがせめてもの慰めだった。私は簡単な裁判を受け、前職者と呼ばれていた警察官や憲兵(アクチーブの言葉をかりれば資本主義の番犬)、そのような前歴の人だけを集めた特別の収容所に移動させられた。ハバロフスク二一分所ではなかったかと思う。

ここでの生活は、我が身の保全のため、またソ側に認められて一日も早く帰国せんがため日本人同士で相手を傷つけ合わなければならないような、精神的にも肉体的にも、大部分の人は地獄の苦しみを味わった。作業単位は大体四十人ぐらいで、二十五歳以下の者は残らず青年行動隊の組織に入り、目につく活動をやらなくてはアクチーブの指摘を受け、我が身が危なくなる仕組みであった。

毎朝作業出発前、全員が集合整列したとき、必ず行動隊のだけれが壇上に駆け上がりアジを飛ばす。「民主主義の城塞、労働者の祖国ソ同盟のために身を粉にして働くことこそ日本の復興につながる。我々はお互いに生産競争を強化し(平塚運動)、働きの悪い者は反動としてつるし上げよう」。このようなことが毎日繰り返された。

作業出発の時間が迫り、ソ連のナチャーニツクでさえ「フーチ(十分)」と言ってとめる状況であった。作業隊四十人もいれば体力により優劣の差が生じる。一生懸命やろうと思ってもできないのだ。そのことは皆気づいていたと思う。みんながつるし上げの怖さを感じ力の限り働いたが、どの作業隊も同じように作業サボの名目のもとに、一組に一人か二人必ず青年行動隊の犠牲にさせられた。

一日千秋の思いで、一日も早く故郷に帰りたいと思う心は、皆同じであった。そのようなとき「作業サボ」と印を押された人たちは、毎朝千人も整列している前で壇上に立たされ、「この者は反動だ」「反動は絶対日本に帰すな、シベリアの白樺の肥やしになつてしまえ」と叫ばれる。反動と名付けられた人に対しては、自分の身を考え、だれ一人話しかけもせず孤立させられる。そして二十四時間監視の中に置かれるのだ。夜の星空だけしか見ることできない異郷での孤立は、味わった者でなければ絶対わからない想像以上の苦しみだったであろう。我が身が明日は反動になりはしないか?との不安の毎日で、それこそ力の限り一生懸命働かねばならない。合わせる顔にだれ一人として笑顔なく、同胞相食み、目の色も変わり、息の詰まるような、毎日が地獄の生活だった。

仕事の遂行量を決定するために、すべての仕事に対して一人で遂行できる基準が定められており、「国定ノルマ表」という分厚い本をめくりながらデシヤートニツク(ノルマの算定係)によって仕事の終了後決定される。いかに頑張っても十分な食糧、栄養も与えられない我々日本人に、ソ連人並みの法定ノルマ表で計算されても、遂行できるはずはなかった。

熊本県 西崎通

数日後、私はアクチブの仲間入りを勧められた。マルクス理論については一知半解ではだめだと思い、一応一生懸命やつてみた。やはり私の目的が偽装入院で、これがもしソ連及び我れらのアクチブに知れたら大変と、要領よく、仮面が取り外されないよう苦労した。

その後、私は作業部長を命ぜられ病院内の患者の世話指導となったが、これも突然起きた事態でいたし方がなかった。突如、当病院にもダモイ者五十人の割り当てが来た。その条件がいろいろあり、「病気が近日中に回復し作業に従事できる人は除き、重患で内地まで輸送中支障が出そうな患者もだめ」との指示である。

皆、今度はダモイできると思い、重患の同志は残念がった。思えば、人間として自由なき人の身の哀れさが身にしてみた。明日帰国者の発表があるとのことで、病院内は右往左往の状態である。同志のアクチブの某氏が、「西崎さん、女医があなたを呼んでこいと連絡がありました」と言う。さっそく女医の部屋にとんで行った。「タワリーシ西崎、ダモイ、ハラシヨ」と握手された。三年数カ月、女の手に触ったことがなかった。そのときの気持ちは一生の思い出である。

宮崎県 宮川健三

十月、恐らく今年最後の帰国梯団だろうと思われる委員長、団長が皆帰国した。また残った者は不安に閉ざされた。自分も作業に出る日があった。ガラジ(製材所)で製剤作業に挑んだ。反動吊るし上げにかかった者の大衆発表は日々激しく、政治教育は朝六時起床、すぐに政治情報、食事が済みしだい新聞輪読、それによる討論、作業整列、各所でアジ(げき、注意指摘)が飛ばされる。昨夜反動吊るし上げにあった者の大衆発表がある。作業に対する平塚運動(ソ連において日本人抑留者で最もノルマを上げた団体名)者たらんとするげきが

出る。音楽とともに赤旗の歌、平塚運動の歌、平和の歌などを歌いつつ出発する。自動車の上では政治サークル討論、本日の作業に対する討論、危険防止討論、自己批判が激烈なので、作業サボをする者はその反動を許されない。昼食後の集合時も午前中の作業上の欠点の批判、討論は激しく、鍛錬された。

元氣いっばいの二十三、四歳の青年は良く働き、ノルマを上げると金ももらえた。食えば元氣で働ける、働ける者はまた言える。元氣のない十分の働きのできない者は黙っているより他はない境遇であった。

千葉県 鈴木博

二十一年七月頃から第一收容所にも民主運動教育が始まり、各ラゲルから五、六人単位で集結し、指導者は日本人で、表面はソ連とは関係なく自発的だと言つて二週間ぐらい教育していた。八月からは教育を受けた人達が幹部リーダーとなって内部、外部業務を司るようになった。天皇制反対、反動分子摘発で旧将校等は集会の壇上で吊るし上げられたりして、戦前の制度が一八〇度変わつていった。同じ日本人同士で情けなく、シベリア抑留中三年間自由を束縛され、心身の苦悩は筆舌に尽くし難く、希望もない暗い日々を過ごした。

石川県 荒川宏

輿論会議

第九七收容所Bラゲル。将校約五千人。

收容所の管理は初め旧階級が重んぜられた。ソ側のこれに対する方策は、まず「肩章を外せ」。次いで高級将校によるラゲル行政に対する民主的参加として、「民主議会」の結成をそのかしてきた。ファシズムしか知らない思想的後進国日本の将校に、民主主義の手法を教えてやるといった感があった。その主旨は「ごもつとも、主席も同意、一般も賛成した。」

そこで「輿論会議(ソビエト)」が提唱され、各大隊から一人、中隊から一人ずつ、無記名投票で選挙された代議員約三十人で構成された。

第一回の会議は二十二年二月十一日に招集された。私も選ばれて、出席した顔触れを見ると、何と大部分が保守反動と目された輩、即ち我が党の士であつた。

選挙規定、会議の構成、運営に関する規定が可決され、毎月一回の招集、幹事会、分科会その他が設置された。従来の首席の管理系統からの独立性も明確になった。

ところが問題があつた。議長、副議長及び書記長は選挙と関係なくソ側の任命であつた。

仰せに従わざるを得なかつたが、ここに彼等の隠された「意図」があつた。結局は対ソ協力即ち労働強化の方向への命令遵守であつた。「無事に帰国して祖国復興」が我々の共通認識となつてきたのも当然で、代議員の一部で密かに協議が重ねられた。

第四回会議の席上、緊急動議として神亮一中尉が発言した。「我々はソ連当局の指導を頂いたお蔭で、初めて民主主義を理解できるようになりました。ところでいつまでも議長らの任命があるというのは納得できません。これも選挙で選ぶ方が民主的であり、もうその時期ではないかと思ひますが……」

当惑した議長星加軍医中佐は暫時休憩を宣して、陪席のクロイツル女史(政治将校)と別室に移つて相談した。論戦の二番手は横尾中尉、三番手桜井中尉……と準備していたが、意外にも一発でこの提案は受け入れられた。あまりにも簡単に受け入れられて、氣負つていた我々は拍子抜けの感じさえした。

後日の臨時会議で、議長に來問法務少佐、副議長に志村少尉、書記長に私が決まつた。会議は、会を重ねる毎に成果を挙げた。ラゲル生活は次第に秩序立つて、明朗になつていった。日常の重大関心事である労務と給与の分科会も活動した。対ソ交渉には、十分調査した計数的資料に基づき、数字に弱い彼等

を説得することに成功した。八時間労働と週一回の休日も獲得した。

石川県 藤澤栄次

入ソ当初は、作業効果を狙ったソ連側の要請により、旧軍隊組織のままで作業が行われた。暫くして階級章こそ外したものの、この組織は相当長く存続していた。しかし、昭和二十二年春頃より、現地発行の「日本新聞」の配布や、派遣アクチブの共産化・民主化教育により、次第に民主化運動が強まった。やがて旧軍組織に代わって選挙による某上等兵を委員長とする新しい指導者組織が生まれた。このため私もそれまでの糧秣関係の責任や作業指揮の責任から解放され、内心安堵したものである。

共産化・民主化教育については、心底から共感した者は少なかったと思われるが、民主化がダモイ(帰国)への必須条件との噂で、全員表面は心服を装っていた。

京都府 長曾 修

昭和二十三年四月、一カ月間、バロフスクへ民主教育の講習を受けに行きました。敗戦で混乱している日本を共産化するため帰還する兵隊を教育するので講習を卒業すると十人あまりナホトカへ転任を命ぜられました。

ソ連各地から日本帰国のため兵隊が続々とナホトカに集まり二週間程船を待つ間に民主教育をたたき込もうというわけでソ連将校が計画書を作っていました。天皇制反対、資本主義反対。資本家は労働者を搾取し出そうとしない。共産主義こそ働いた分を公平に給料が支払われるもので搾取する者はいない、団結せよ、赤旗のもとへ。

兵たちは帰国を目前に控えて民主教育などどうでもよいのだが、反抗して山送りにでもなつては大変だとおとなしく話を聞いていた。

思想改造(?)された兵たちは続々とナホトカを出航し舞鶴へ帰ってゆき、そ

して働いていた部隊が次々と入つてきました。このような活動が一年半ほど続きました。ソ連に抑留されていた日本兵は大体帰国した様子で、残されているのは五年とか十年とかの刑を言い渡された人々だけでした。

和歌山県 山本富三

この頃から洗脳教育が実施されるようになって、次第に抑留者野中には考え方が変わってきた者もいて、同僚との会話も多くなり討論する場も出てきて、作業場への往復も労働歌を歌い、何となく活気が出てきたようだった。思想について云々するよりも、私たちには「生きている間は活気」が欲しかった。

熊本県 小佐井善次

多くの日本人同僚が異国の地シベリアで命を奪われた。日本人として懸命に頑張つて意地を見せた。作業から帰れば必ず毎日、夜は一時間ないし二時間はソビエト人民の歩いて来た道として民主教育、共産主義教育を厳しく徹底的にソ連政治部員の命令で日本人共産党員、袴田党員が指導した。若い日本人をソ連政治学校と称して三カ月間位別の収容所に連れて行き、共産教育を徹底し、階級闘争を奨励し、共産主義思想の普及を厳しくした。

そして月に一回は必ず民主学校の正課として学科試験を実施した。食堂に収容所全員の名前を一番から最後まで順位を張り出した、成績が悪いと悪条件の作業場に回された。抑留生活一年二年と共産主義教育が厳しくなり、作業場の往復時にも収容所出発時には必ず広場に集まり何人かの組代表が高い台上面にて五分間位の演説をするが、その時は必ず天皇制並びに吉田内閣を打倒しない限り労働者、農民の幸せはないと声張り上げて力説する。次に、復員の時、日本に敵前上陸した暁には必ず日本共産党に入党し、ソ同盟の力になる事を約束すると力説すると、その場合は全員で拍手喝采、大成功で終わるのである。

福井県 尾上敏雄

二十一年の夏頃からと思うが、共産党の講義が始まった。出席せねば反動とされるので、帰りたい一心で、作業が終わり夕食後、疲れた身体に鞭打つて二時間は学んだ。会場の正面にスターリンとモロトフの写真があり、その両横に日本の野坂参三と徳田球一両氏の写真があり、この写真に礼拝してから講義が始まった。講義の先生は、終戦の年の六月、満州にいた朝鮮人で日本軍隊に召集された者ばかりだった。そして終戦と同時に我々と同じく捕虜となつて来た者で、私たちの先生は阿部といった。このウオロシロフの収容所では、週一回、ソ連政府の政治部長の方と懇談会が行われた。

この会合に我々の仲間からも指名された。私もその一人で、まず我々の主張として、第一に作業の軽減、第二に食糧の増配、第三に一日も早く内地へ帰してくれと要望した。しかしソ連の政治部長は何一つとして聞いてくれず、特に日本へ帰すということについては、日本から迎えの船が来ないからと言ひ、また作業についてはソ連の目的達成に協力してくれ等言っていた。

和歌山県 坂本長兵衛

明けて二十三年、民主化運動が盛んになり、古来からの日本共産党やマルクス、レーニンなどといった人の業績を聞いた。夜は批判会とか反省会といった集いがあり、日和見分子とか反動分子など、オルグが延々長舌の解説をした。壁新聞や投書箱もできて食堂の壁に貼り出した。特に投書の内容は中傷しこき下ろすものもあり、建設的な意見の投書は少なく、筆跡を隠すような書き方もあった。また文化部も発足し、器用な人がいて箒の柄で尺八を作り、歌や民謡などを聞かせた。月一回くらいか演劇を見せた。共産主義を讃えるものが多かった。日曜日には空地やベンチに土をこねて像を作り、鎌とハンマーを持たせてこれをみんなで批評した。

鳥取県 森田東明

その頃、『日本新聞(ハバロフスク発行の抑留日本人向け思想教育新聞)』の啓蒙による民主化運動が盛り上がりつつあった。即ち、天皇制の打倒、財閥や地主らの搾取の実態、軍閥に対する批判、そして共産主義国(ソ同盟)の称賛、民族解放等……についてのオルグが各棟で行なわれ、共産主義の洗脳教育であった。ある日、掲示板に張られていた『日本新聞』に、日本の国体の悪口を書いた記事について批判めいた話をした若い大尉(陸士出身)が、朝の点呼の時ソ連側に連行されたことがあった。この連行を機に皆が恐怖感を抱き、見ざる、聞かざる、言わざる主義で、何事も要領よく、御身大切にであった。全員が無事日本へ帰ることの義務がある。今ここで大死にしては……といった雰囲気は漂っていた。

島根県 松浦久雄

二十一年も終わり頃であろうか、ハバロフスクで発行される『日本新聞』を見るようになった。勉強会といった小グループも出来始め、食堂の壁新聞にも民主化運動云々の記事が目につくようになった。それまで人を楽しませていた娯楽記事は、だんだん場所を奪われていった。収容所全体の一つの組織になるまでには時間がかかった。中堅幹部育成のマルクス・レーニン主義の講義。講師を務めるのは当時、大学出の赤カブ組(表面は赤くても中身は白い、身の保全組、炭坑などには入らなかった)。そのうち青年行動隊という組織もでき、壁新聞にはソ連謳歌の記事、民主化、反動分子、帝国主義、日和見主義、これらの文字の羅列が多くなった。時には吊るし上げによる自己批判の集会もあるようになった。こうなると組織、リーダーの批判も小声になる。逆に初めのマルクス・レーニン主義の講師たちには批判の声が出始めた。各収容所にはソ連側の政治委員、名称は覚えていないが、このような肩書の者が所内の日本人の動向に目を光らせていた。

収容所の生活も二年目ぐらいから、充実した活動ができるようになった。収容所内で掲示される壁新聞はなかなか人気があった。炭坑から採った七色の泥絵具を使って色鮮やかな大きな新聞、ソ連側の指導による壁新聞に刺激されたかのように様々な文化活動がにわかに盛んになった。音楽、演劇、彫刻、絵画、舞踏、寸劇、浪曲など定期的に開催されるようになった。同好のグループが生まれ、それぞれ活動をするようになり、昼間の労働ラポートに疲れていても、紙と鉛筆を持って会場に出かけたものである。収容所は朝に夕べに革命歌が渦巻いていた。これは民主グループによる指導である。タシケントの政治教育を受けた民主主義者である。毎晩のように室内でも屋外でも集会があり、共産主義、レーニン・マルクス主義、資本主義等について、十分程度の講義を行い、休日には演劇団による公演を行った。

民主委員会の組織については、委員長を頭に宣伝部、文化部、青年部などに分かれ、青年行動隊もあり、民主化教育にはソ連側の指導があり、『日本新聞』などがハバロフスクで刊行され、収容所にも配布され、日常の宣伝活動に使われた。

管理責任者である収容所長は、軍国主義を否定しながらもその組織の作業向上をはかるため将校団を煽りたて、一方では旧軍組織を壊して、兵士の中から積極分子を抜てき、教育して共産主義化を進めるといふ二本立てで、これを巧みに陽動作戦をとったが、結局は早晚後者の方向に進むであろうことは、先進のタシケントの収容所が立証していることであつた。この手に乗せられている将校たちと、日本人かソ連人か判らぬ民主主義者の無節操をなげくのであるが、私は一刻も早く帰還させてもらうために、二面性のどちらにも偏らないで、本気で作業に熱中した。

ナホトカのアクチーブの者達がやって来て、何号車の者は私達の後について来いと別の場所へ案内され、そこでの話は「お前達はこの偉大なるソ連に来て二年余りにもなっているが、共産主義思想の理論的武装がまだ身につけていないとの報告があつた。従つてこのまま帰国させることはできない。今日からまた働きのながら再教育することになった。幸い日本の船は君達を迎えに来いていない。これから一生懸命共産主義を勉強して下さい」とのことでした。

しかし、昭和二十三年五月には、引揚船明優丸他十隻が出航しており、極めて順調に引揚げが行われている記録があります。六月は十三隻、七月は十七隻等となっています。民主グループによつて私達若い者を集中的に共産主義教育をしたようです。「この年からソ連引揚者の動向が政治運動や待遇改善要求などで次第に活発になり、後半期には一部業務拒否等も起こり、赤い引揚者の異名が生まれた」と舞鶴引揚史年表に掲載されています。私共も、共産主義思想に洗脳されて「日本列島へ敵前上陸だ」、当時の「内閣ぶつ倒せ、男ならやってみよ」と替え歌を歌うまでになっていました。

昭和二十三年十一月、四度目の冬を迎えて、厳しい寒さが始まつて一カ月くらい経た頃突然移動命令があつて、貨物列車にダルマストープでナホトカに集結し、幕舎に収容された。

進歩分子による学習会が毎日開かれたので、使役に当たる以外は当直を残して全員参加させられ、「祖国帰還の暁には、日本共産党に入党して祖国の民主化に貢献しよう」とのアピールが続いた。

シベリア抑留者を最後まで苦しめたのは、もちろん強制労働と、日夜を分か

ため飢餓であった。しかし、民主化運動という名の赤化教育も、またこれ抑留者を精神的に痛め尽くした。この教化活動は、同じ日本人同士が相反目するという不幸を生んだのである。ナホト力を離れるまで民主化のリーダーとして権力の側にいた者たちが、乗船して、船がいよいよ日本海の中ごろにさしかかると、それまでいじめられていた大衆から袋叩きに遭ったという噂も何回となく耳にしている。私は年齢の違いもあり、年寄りとしてあまり関心も持たず、積極的に動いたことはなかった。

千葉県 伊橋芳二郎

私達は「何としても日本に帰りたい」これがただ一つの希望であり、また悲願でもあった。民主化運動も毎日夕方になると決まったように始まる。早くダモイしたければ一生懸命働くんだ、民主運動にも真剣に取り組むのだ、それだければダモイはいつの日になるかわからないということは、誰の目にも明らかであった。

ダモイのためには、ときには本気で作業しノルマを上げた。また、あるときは赤の民主運動に顔を出してみたが、何の効果もなかった。その反面、ソ連は「間もなくダモイだ」とだまし続けるばかりで、鉄のカーテンの裏側はまったくわからなかった。我々の強制労働は独ソ戦で疲弊しきった国土復興のためのシベリア開拓にあった。

新潟県 高橋吉郎

昭和二十三年四月頃、火力発電所の作業から、收容所は丘の上にあったが丘の下には年間三万台を生産するといわれる自動車工場の建設工事が行われており、鉄柱が立ち並んでおり煉瓦積みが行われていたが、その作業に行くことになった。もう抑留二年半程になっており、共産主義者運動も始まっていた。同調しない者は反動と呼ばれていた。これと同時にダモイの話も出ており、既に病

弱者は帰還したということも伝えられて来た。その頃既に憲兵・警察官は反動とされていたようであった。いろいろの噂が飛んだ。ハラシヨラボーター（良く働いた者）は帰れるとか、反動を摘発した者は帰してやるとか、收容所の中も騒然として来た。日曜日になると自己批判などということが言われ、自己反省する者も出て来た。総て、良く思われてダモイの名簿に載せて貰うためである。

その頃筆者は政治部将校に、これはソ連の将校か通訳付きであったが、呼ばれて取調べを受けたのである。收容された当時、身上書の提出があったが、分隊長の憲兵准尉の篠原さんに、入隊前警察官であったことを書かずに農業と書いておいたほうが良いと言われてその通り書いて出しておいたことが、同年兵の反動摘発に遭って警察官がばれてしまったものとわかり、特高という疑いを持たれたようであった。今迄作業責任者として作業に出ていたものが、收容所から見える自動車生産工場建設現場の作業に移り、一般作業隊員として働くことになった。自分では気にもとめてなかったものがいろいろと思ひ当たるふしがあった。警察官であったことが解った以上逃げも隠れもしない、好きなようにしたがよい、どうせ独身で身軽な体である、どうにでもしてくれと、只黙々と指示通り働いた。農業で鍛えた体であり、もう石の上にも三年になろうとしている。どうせ独身である、殺すも生かすも勝手にしてくれと度胸もついて来た。

案の定、夏も過ぎ九月に入るとダモイの話も現実的となつて来たが、誰よりも先にダモイの名簿に載るものと思つていたことが裏目に出てしまった。これまでの人生では何時も良い事が向いて来たと思うとこれが逆行して起伏の人生であったが、シベリア抑留という地獄の道に落ちても他と比べて恵まれた道であった。男盛りの三十歳である。人生はまだまだこれからであると、度胸を決めた。ハラシヨラボーターと言われた戦友は、ダモイの名簿に載つて天にも昇らん喜びであった。何時どうなるか身の保障はない、殺すも生かすもソ連次第である、毎日が不安の年月であったのである、それが祖国に帰れるのだ。やがて出発の日が来て彼等は喜び勇んで收容所の門を出た。必ず帰れるから頑張つて体に気をつけ

てなあ、と後ろを振り返り乍ら手を振って涙をためて別れを惜しんだ。遠く見えなくなるまで見送った。ダモイの戦友が帰った後の収容所はがらんとして、心に風穴があいたような空しさが湧いて来て、何とも言われない淋しきであった。

岐阜県 小川太郎

俘虜生活の間、ベゴワードに移るまでは旧軍隊の編成ですべての行動をして何ら問題もなく過ごしたが、ベゴワードに移ってから、二人の日本人が入って来て共産主義を説き、第二の祖国ソ連のため献身せよと、いつ帰国できるかもしれない不安の毎日を過ごしている同胞を追い立て、ダモイを餌に駆り立てていた。冷静に彼らの言動を観察すれば、ソ連政府の策謀による日本人の思想改革と苛酷なノルマの完遂による疲弊したソ連の復興の目的完遂のため、甘言に載せられ躍らされている輩で、日和見主義者が多く、労働に従事することもなく、汗を流す同胞の上に胡坐して思想改革と苛酷な労働を強要、六十万余の日本人を苦しめた横暴は誰しも終生忘れ得ないであろう。

岐阜県 岩月太郎兵衛

昭和二十三年冬、チタ駅へ百五十人くらいで鉄道関係のいろいろの作業に行っていたときのことである。僕は十五人くらいの組長として勤務していた。線路の水を取り除く作業であった。

ある日、駅近くに住む老婆が「ヤポンスキー・サルダート（日本の兵隊さん）、お願いです。暇をみて私の家へ来てください。薪を切ったり割ってもらいたいです。カルトシカ（馬鈴薯）、麻袋一杯あげますから」と言ってきた。これはいい話だ。久し振りに皆にお腹いっぱい食べさせられるか、よし、と休憩時間に三人を行かせた。ところが、休憩時間は十分間、なかなか帰って来ないので困った。二十分後にやっと帰って来た。彼らは、おばあさんは一人暮らし、薪を切ったり割ってもらいたいとのことだったので、作業終了後また来るからと言ったという。

すると、「よろしく頼む、まずスープとパンを食べて行きなさい」と勧められたので、御馳走になって時間が十分遅れました、すみませんでした、ということであった。

驚いたことに、作業から帰ったら、民主グループ中央委員会から本部へ出頭を命ぜられた。何用かと出頭したら前述の話、君は民主運動のリーダーでありながら、作業突撃カンパニアの展開中、ソ連の五カ年計画に協力しなかった。兵隊は三十分も作業できずにサボったことになると言われた。いやな予感がした。密告者は後日、僕の組の将校、少尉と見習士官と知れた。

人民裁判になった。建設寮三百人全員集合、僕は被告席に座らせられた。裁判官は起訴状を読み上げた。「若月は今日、チタ駅作業場で組員三人をとある老婆の元へ派遣して、三十分も遅刻、ソ連の建設作業に遅滞を来した。本人は口では民主主義を唱えながら、実行が伴わず、天皇制護持論者である。かかる反動は絶対許してはならぬ。我々の中に巣くう最も悪質な分子である。寮生諸君に問う。彼をいかに処罰すべきか、遠慮なく意見、発言を求め。なお、これに関連した三人も同じである」。誰一人発言する者もなく、暫くの沈黙が続いた、しーんと水を打ったように。僕は発言を求めた。「裁判長の発言によれば、僕以外の三人のも刑罰をとのこと、反対である。僕は確かに三人を派遣した。遅刻したことも事実であり、認めます。しかし三人は僕の命により行ったもので、全責任は僕にある。僕一人で十分だ。こうしたことを理由に僕を天皇制護持論者と決めつけることは納得いきません。僕は皆に芋一つでも余計に食べさせてやりたかった。ただそれだけでありませぬ。終わります」。裁判長は、「若月は口うまく言っているけれど、寮生諸君の発言もないので、民主グループ規律委員会に処置をお任せいただきたい」。異議なしの声。「それではそのようにいたします。今晩はご苦労様でした」で、お開きになった。「若月は明朝、本部へ出頭すべし」の声を残して。

翌朝、僕は本部へ行った。結論は、ラーゲル一番の難儀な重労働の現場、第三

煉瓦工場へ配転。そして、今までの公職はすべて解職。身軽でとても楽になり、気分爽快に感じた。

一週間後、ラーゲル全寮生の参加する人民裁判が始まった。大体、入所当時は軍の編成組織の延長のようなもので、幹部らは特権を乱用して衣服や食べ物、ピンハネや横流しで、下級兵士たちが栄養失調になり、弱り目にたたり目といったところへ発疹チブスが發生し、モロドイ収容所では一週間に五百人中二百七十人も命を奪われた。その幹部の中には、僕を密告して青年グループにのし上がった二人も入っていた。僕が裁判にかけられてから僕の友人たちが復讐心を起こし、彼等をどうしても許せなかった。

裁判では、彼等こそ反動であり、弱い初年兵らを栄養失調にしたのだと絶叫した。ソ連当局から支給された物をそのまま配給しておればこんな悲惨な、二百七十人を犠牲にしなくても済んだのだ、兵士たちは次々立つて訴えた。その当時のモロドイの幹部将校らはその事実を認めた。兵たちは、こんな反動こそ日本海を渡らせてはならぬ、ソ連当局に話して処断すべきだ、激怒、悲憤の涙、延々と続いた。「若月は真面目によくやっているから罰は解除にする」と決断された。

僕の友達に喜んだ。いろいろのことであつたけれど、特に忘れられぬ裁判である。被告らは指を切つて血書をしたためた。「私どもは帰国後、亡き戦友たちの墓に参り、罪を懺悔し、謝つて歩くことを誓います」、被告名連名で大食堂に掲示された。

石川県 中田 繁

忽然として降つて湧いたような思想の嵐は、収容所内を荒れ吹いた。社会主義、共産主義を唱えるイデオロギーの台頭はすさまじかつた。同じ同志なのに何だ、同じ捕虜だ、日本人だ、何故にと罵り、どうして互いが争わなければならぬのかと、その霧の中に我が身も被われ、消されそうだった。

日本人相討つの哀れを晒した。軍国主義、帝国主義だと決めつけられた。かつては戦友だったその友、朋友と憎しみ合う悲しいこともあった。反動者と呼ばれ、集會場で高い台に立たされた者。軍国主義者だ、資本主義者は裁き葬るのだとつるし上げられた。自己反省をも強いられて青くなつた者も数多くいた。そして、それらに悩み、自分の行き場もなくなつてしまい、死を選ぶという悲しいことにもなつた。戦友が振つた赤旗はナホトカへと続いたが、帰国の港に来て望みを目前に命を断たされた者がいたことには誠に断腸の思いであつた。お互いに強い執念を燃やして今日まで生き繋いだ。それなのに命を自ら断つた心境をなんと察したらばよいのだろうか。幻か、また夢か、日本人が、同胞がなんとしたことかと思ひ、今も、夢ならばなんなりと偲び続け来た五十余年、この半世紀である。修羅場に立たされ帰れなくなつた戦友の御魂安かれと、日々祈るところである。

岐阜県 坂井文介

この頃から各収容所で共産主義運動が流行した。ソ連側の指導もあるが、日本人でも左側の考え方を持っている者がその指導的地位についた。運動に伴つて壁新聞というものが出来た。それは大きなB紙大の紙に日本資本主義、軍国主義の徹底攻撃をする。またソ連の労働の尊さ、従つて日本人捕虜の労働をほめたたえるというものであつた。なお、憲兵や特務機関、警察官は、日和見主義者、共産主義に反対する者として、収容所内で徹底したつるし上げが始まるのである。大衆の前に狩り出されて、自己批判をせよと迫られる。こうしたことが毎晩のように行われて、さながら地獄図のごとき光景が続いた。私は幸い通訳という立場からこうした難を免れて、一度もつるし上げを食わなかつた。

愛知県 河村廣康

今までずっとだまされ通してした。しかし今、疑心暗鬼の気持ちは完全に吹

き飛びました。間もなくナホトカ港に着くと判りました。

港が見えてきて、汽車は駅のホームに滑り込みました。海岸にブラック建ての建物がずらりと沢山建っています。これは収容所で、第一・第二・第三と三つに区切られていて、帰国する者は先ず第一収容所に入り、順次第二、第三と移動してゆき、その後、乗船出来ると説明がありました。しかし私たちが着いたときは三つとも満員で入所出来ず、一千五百人は海岸の砂地に野宿することになりましたが、テントもシートも何もありません。砂浜を素手で穴を掘って二、三人ずつ入って寝ましたが、寒くて眠れたものではありません。夜通し震え明かして、日中の暖かいときに眠りました。三日間の野宿の後、第一収容所に入ることができました。

この収容所は、一番最初の帰国者の中から共産主義者となった連中により「新日本青年同盟」というものが組織され、ソ連監視の下に運営されていて、帰国者に共産主義思想をたたき込むことに努めていました。朝と晩には「赤旗の歌」を合唱させられ、各中隊ごとに「天皇制打倒」「人民政府樹立」「民主主義徹底」等と書いた幟や旗を作り高唱させられ、これはすさまじいほどのものでした。それは、そのようにしない者がおると「お前は資本主義者だ、軍国主義者だ」と烙印を押され、再度シベリアに送り返されるからです。実際に送り返された者も大勢いるということです。もしそんなことになったら大変だと、外面的だけでもそうしなければならなかったのです。

「民主主義の普及というが、あれは共産主義でアカだ」と、てんで受け付けないう者もいたのですが、彼らは熱心でした。民主主義普及活動は同盟の者が各中隊を回って、民主主義とは・天皇制とは・軍国主義とは・資本主義とは、などについて説明していました。時折『日本新聞』の記者(ほとんどが大学出で共産党に入党している)が来て、なぜ日本は戦を始めたのか、なぜ日本は今の状態になったのか、などの話をしました。私は、これらの話は全部間違っているとは思わず、いい勉強をしました。

大阪府 有光徹二郎

今、思い出されるのが人民裁判である。あまりにも「エゴ」「醜さ」の話になりそうで、あまり話したくないことだが……。

食糧とダモイ(帰国)を求めて日本人同士のだまし合い、陥れ合いで、人間の醜悪な面をまざまざとさらけ出した人民裁判！

入ソ約七カ月後と思うが「友の会」なるものが出来た。これは共産主義社会の優位性をPRする新聞(日本の新聞の四分の一頁程度の大きさで、両面に記事が謄写されている)を発行、各ラーゲルに配布し俺達を洗脳する手段として用いられた。ラーゲルではこの新聞を教材とした研究会が開かれるようになり、共産党小史、一步後退二歩前進とかいろいろと講義が進んでいくうち、その研究会がだんだんエスカレートして来て、これを実践するため「反ファシスト委員会」なるものが誕生した。

先ず最初に始めたのが「人民裁判」である。いわゆる吊るし上げである。「反ファシスト委員会」のメンバーは互いに同志〇〇と呼び合い、作業は免除または作業監督として洗脳計画に従事している。

先ずスタートとして作業能率の悪い者を選び出し台の上に上げ、大衆の前でその欠点をあげき出し吊るし上げるのである。その光景たるや、同じ日本人同士がその欠点を口々に悪口雑言、紙上では書けないような雑言毒舌を陳述するのである。凄惨の極みである。吊り上げられた人は台上に土下座しながら自己批判をする。本当に見てはおれない。(共産党のPRは、先ず人民裁判から始めるのが通則のようであった。)

これがエスカレートして、委員会に反抗する者はダモイが遅れる、協力せぬと減食の憂き目に遭うなどの風評が流れ始めた。事実これがために重労働ラーゲルに転出させられた者も出た。ダモイや食料を求めて同僚の欠点悪口等を告げ口し、吊るし上げの材料を提出して委員会に好感を得ようとする者も出始

めた。そしてお互いに「疑心暗鬼」の毎日がたまらなく悲しい日々であった。

しまいは馴れてしまつて、平気と言えば語弊があるが、とにかく無気力になつて、それが日常茶飯事のようなことになり実に弱いかを限りであった。飢え、体力の消耗、精神的圧迫が加わると人間は如何に弱いかを知り、大和魂、武士は食わねど高楊枝などといばつていたが死の恐怖には負けてしまふ。しかし私達はこのようなことにならないよう日頃の訓練、教養、強固な精神を養つてゆかねばならないと思うが、なかなか難しい。

京都府 谷口信太郎

昭和二十二年秋頃、希望者を募つて共産主義の特別教育に三十人余り派遣されました。私も申し込んでその一員となりました。当時、ハバロフスク発行の日本人向け思想教育の『日本新聞』が各兵舎に配られて民主化(共産化)運動が進められ、我々特別教育を受けた者が収容所に戻つた頃から一層盛んになりました。

夕食後の憩いの一刻、各兵舎に集まつて一時間余、我々が指導メンバーとなつて、天皇制反対、財閥・地主の搾取反対、資本主義の滅亡など、洗脳に反対する者は帰国が遅れるなどの話もあり、ひたすらお手伝いをするより方法がありませんでした。

京都府 中西 勲

昭和二十一年夏頃から民主教育なるものが盛んに行われて来た。夕食が終つた頃から一時間ほど各部屋毎にリーダーメンバー(日本兵の中から選ばれて特別教育を受けた者)がやつて来る。軍閥・財閥の横暴、戦争責任の追及、日本の民主化は労働者、農民が赤旗の下に集結しなければ敗戦日本の再起は不可能だ、まず日本共産党の政府を樹立してソビエト連邦と手を組むことがこれからの日本の進む道だ、と激しい教育だった。質問でもする者があると、翌日は

今まで以上の重労働の作業場へ送られるという噂もあり、おとなしく拝聴するより仕方がなかった。

鳥取県 細木明男

ダモイの港ナホトカ

中央アジア、カザフ共和国のクズオルダ収容所に送り込まれていた私達は、悪夢のような捕虜生活を終えて、祖国日本への帰還の喜びをかみしめながら、ナホトカ港にやつとの思いでたどり着いた。昭和二十二年七月四日の夕刻も間近い頃であった。

抑留者帰還の最終集結地であるナホトカは、乗船するまでの間しばらく滞在させるため、バラック建ての収容所が多数棟建っており、シベリア奥地から引き揚げてきた同胞の抑留者でほとんどの建物が満員の状態であった。

私達は、あたりが薄暗くなつてきたのに建物の中に入れてもらえず、広場のよくな所に集められた。その広場の正面には、仮設の舞台のようなものが設けられていた。

やがて、一人の男が壇上に上り演説を始めた。照明の明かりもないので、どのような人物か分からなかったが、声の調子からして二十代の若い男のようであり、また語調から察すると、かなりの学歴のある人物のようでもあった。

演説の内容は、言わずと知れたスターリンとソ同盟に対する讚美、日本軍閥と財閥のこきおろし、果ては天皇制の打倒に及び、続いて祖国日本を共産主義により民主化しようというものであった。私達への今まで多大な犠牲を払ってきた労役に対するねぎらいの言葉など、ひとかけらも出てこなかった。

演説が終わると、同じアクティブの連中であろうか、数人の者が舞台上に上り、アコーディオンを抱えた男の伴奏により「赤旗の歌」の練習が始まった。何しろここに初めて聞かされた歌でもあり、戸惑いながらの練習であったが、何回も繰り返して歌わされているうちに、歌詞もどうやら覚えたようだった。「赤旗の

歌」が一段落すると、今度は「憎しみのるつぼ」という歌に変わり、あたりが真っ暗闇になるまで練習が続いた。

ようやく広場の集会から解放されて収容所の建物に入ったが、各棟ごとに担当のアクティブが決まっているのかどうか知らないが、一人の男が絶えず私達の言動に注意しているようだった。そして暇さえあれば、皆を集めてアジ演説を飛ばした。

時には、敗戦後の日本国内の状況について、さもよく知っているような話をして私達の関心を呼んだが、ある時、中年の応召兵と思われる人が、戦後日本の中小商工業の状況と将来の見通しといったような質問をして回答を求めたところ、しどろもどろで答えにならず、さもありませんと思つたものだ。

このアクティブの連中は、皆が日本の軍服を着ており、無論階級章などは外しているが、身なりは誰もごさっぱりしていて、私達のような乞食同然の姿とは格段に違つていた。そしてお互いに「さん」づけで呼び合つていた。そして、我々のようにシベリアの辺地まで囚人扱いで送り込まれ、飢えと酷寒にさいなまれながら塗炭の苦しみを受けた者とは違つて、何か特別扱いでもされているように見受けられた。

カザフ共和国からナホトカへ至るダモイ列車の中で、旧軍隊の階級章を取り外すよう伝達があつた。それとともに、最近シベリア奥地からナホトカに集結したある部隊が、旧態依然として旧軍の階級章を付けたままであつたのがナホトカのアクティブの目にとまり、民主化ができていないとの理由で批判された揚げ句、再び奥地に逆送されて、帰国の乗船ができなかつたという情報も伝わつた。

このことがもし事実だつたとするならば、彼らこそ、シベリア全抑留者の中でも、民主運動という名のもとに生殺与奪の権を握つていた特権階級であつた証左でもあろう。我々はナホトカへの輸送の途中で事前にならざるべき措置をしていたから事なきを得たが、同じ日本人であるアクティブの連中の動向には、少なからず恐怖心を抱いたものである。

山口県 末広元一

名を呼ばれることに、「よかつた、よかつた」と手を取り合つて喜ぶ姿があちこちで見受けられた。

帰還への道程は往路の逆で、シベリア鉄道で荒野を走ること二十日間でナホトカ到着。ここまで来ても反動と睨まれて再び収容所送りとなつた者がいるので、言動にはくれぐれも注意するようにとの注意があつた。ここはテント生活。すぐそばの極楽坂を越えればナホトカの港にすぐとのこと。はやる心を抑え、あと一、二日の辛抱と、おとなしく何でもハイハイと模範初年兵そのもの。おかげで全員、二日目に永徳丸に乗船できた。

出航しても領海を離れるまではナホトカに引き返すこともあると物知り顔で言う者もいたが、領海を離れたかと思われる頃、船室の中央広場が騒々しいのでぞいて見ると、何と日章旗を広げている者がいるではないか。顔見知りのD少尉だつた。「俺は必至になつてこの日の丸を守り続けて来た。祖国日本を忘れ、日の丸を忘れたのか。日本と天皇陛下を悪し様に批判し、更に許し難いのは、日本人でありながら同じ日本人の我々の多くをブルジョア民主主義的とか称して、精神的、肉体的に苦しめた奴等がいたではないか。ここで彼等の真意を糾明しようではないか」と叫んでいた。「そうだ、そうだ！ 引つ張り出せ！」と皆の声。中には「海に叩き込め！」と物騒なことを叫ぶ者もいた。そこへ復員官が来て、「どうか手荒いことはしないでくれ」と懇願されたので了承し、数人のいわゆる民主的指導者が引つ張り出され、衆人環視の中で吊るし上げに遭つた。抑留中は虎の威を借る何とやらで、我々の上に傲然と君臨していた当時の面影はなく、ブルブルと身震いしているのは哀れでもあつた。

キルガには多士済々、いろいろな人がいた。武智さん(東京出身)や西沢さんが一緒になって共産主義の研究から始まった。また、この時期に日本新聞社も論陣を整え、袴田氏や諸戸氏が論説を載せ、反軍闘争、天皇制の打破、共産主義理論の連載をしていた。またソ連の政治部の将校も後押ししていたようだ。

毎晩のように西沢さんを囲んで、ソ連共産党史を一冊置いて、それからの注釈を聞いた。マルクス・レーニン主義とか、弁証法的史的唯物論とかの講義は耳新しかった。若いアクチブが議論をし、討論を重ねていくと、それがやがて燎原の火のように延びていった。太田さん(岡山出身)、水村さん(愛知出身)、添田さん(不明)だったが、その肉付けは武智さんのようだ。武智さんはかつて農民運動をされたとも聞いた。

ともかく西沢氏が中心となり、彼の理論と卓越したアジが若い人を魅了した。西沢氏は言った。「発展のためには自己批判と相互批判が必要でかつ実行されねばならない、まず反軍闘争である」。それは天皇制に連なる軍隊であり、警察であり、官僚である。これらに籍をおいていた者を全員の前で自己批判させることだ。かくして武智さん、平岩さん、馬場さん(佐賀出身)にその鋒先が向けられ、皆の前で打倒された。(打倒カンパというのは、本人を全員の前に出し、自己批判をさせて、それについて全員から質問なり詰問したりすること)

このことは次の日からは誰からも口をきいてもらえず、村八分になることである。従って人事係をしていた平岩さんが職を離れ、自動車の修理作業をさせられた。

この風潮が若いアクチブの恰好の勉強場となつて、次から次へ行われて恐怖を感じる人もあつた。一つの運動が弾みをつけると益々高ぶりをみせ、思いもしない広がりを示した。毎朝作業に出掛ける時や晩飯の時に、「同志諸君……」の第一声から始まつて、行動隊員に標的にされた者が全員の前で弁明されられると、

中には自分も何か言わないと吊るし上げられるという被害妄想に陥つた。そして極端には、自分の横に一緒に寝ていた戦友までも対象にした。密室での興奮状態は常軌を逸する場合もあつた。反対意見は誰も言えなかつた。

西沢氏の語録。「物事の判断は大衆の為になるか否かによつて決まる」「相互批判こそ運動を発展させる。ヘーゲルの弁証法の理論だ」「破壊を創造の土台とすべきだ」「水(液体)に加熱すると水が水蒸気(気体)に変化する。即ち量的なものより質的な変化をもたらす。為政者(ツアー)の民衆への弾圧の抵抗が昂じて革命が起きた。これが弁証法的史的唯物論である」

当時理論武装もなくて反抗だけが先行していた私は、愚問をぶつけたこともあつた。「日本の義賊と呼ばれる鼠小僧は、金持ちから奪った金を庶民にくれているが、これは正義と言うべきか、不正と言うべきか」と。

(中略)

民主運動(打倒カンパ)との闘い

私達第三回生がキルガに帰ると、早速帰還報告カンパを催し、私が全員の前で開口一番言つた。「一カ月離れてこの収容所に帰ってみると、所内の雰囲気は暗過ぎる。我々は今まで民主主義を唱え運動をしてきたが、皆が発言するのに他人の顔色を見ながら、おどおどしている。これが本当の民主主義だろうか?」

この発言が終わるか終わらないうちに第一期、第二期の幹部が自分らの批判と取つたのだろう、猛然として反撃してきた。特に第一期の太田さんの反撃はその委員長としての必至の攻撃だった。そして歓迎カンパを打倒カンパに変えようという発言も出た。私も負けていなかった。大勢を相手に論争し、小一時間もたつたが結論は出なくて、明日の仕事があるというので中隊長がとりなして収まつた。そのあと多くの人達から激励を受けた。

しかし最後になって、委員長の太田さんが打倒カンパに遭つて退陣し、口舌のインテリは最後を飾り得なかつた。

やはり大衆のリーダーは最終的には人格者であると思うし、いつの時代でも、

どんな状況の場合でも、集団のまとめは、知識でもなく腕力でもなくその人格である。

今振り返ってみると、果たしてあのことが本当に民主主義だったのかと思うことがある。それでも私の考えは確実に左旋回をしていた。

愛媛県 宇都宮政壽

ちようびこの頃、アクチーブと称する連中がやって来て、收容所の民主化をやるという。私達少数の二等兵は、收容所に入ってから関東軍の編成で、階級もそのままの不合理に屈辱と苦痛と忍耐を強いられていたので、彼等に協力して階級呼称を撤廃しようといひそかに根回しをしていた。ある夜、体中に刺青をしている青木上等兵に裏庭に呼び出され、「階級呼称撤廃の首謀者が貴様ということで、班長達が私刑にかけると息巻いている。俺が抑えているが、長くは抑えきれん。弱っている身体にやられたら死ぬぞ。自分のことだけ考えろ」と注意をしてくれた。これもまた密告によるものようであった。

アクチーブの連中は、收容所の民主化どころか、「スターリン大元帥に感謝しよう」「ノルマを二〇〇%達成しよう」「天皇島に敵前上陸の理論武装をしよう」など、ソ連迎合の話ばかり。「收容所の民主化はどうした」などとヤジっていたら、「收容所の民主化を阻む反動分子」のレッテルを張られ、二十二年九月三十日、ユウレユラク收容所に転属を命じられる。

熊本県 下田繁男

ソ連抑留二年目ころからでしょうか、共産主義の勉強はある程度、マルクス・レーニンの赤表紙の厚いやつを、全員ではないですが、私はもらって、毎晩だったかどうかははっきり記憶にありませんが、日本人から共産主義教育を受けました。そのときはそのときで、帰るために共産の勉強をしたということです。

また、つるし上げとかなんとかということとはナホトカに来てからちよつと聞いた

ことがありました。もう階級の差などは当然なくなっておりませんが、将校などはまだ襟章をそれぞれされておられたようです。私も一時期はアクチーブなんかにおつて、指揮班のようなところにおつた関係で、幾らかは作業面にも好条件であったかなというとも思います。

ナホトカに大体一年ぐらいおり、これも帰るための一つのコースですが、無事に帰ろうと思つて、一つは、より共産主義に浸透したかなというような態度で、ソ連に対してのジエスチャーで、共産主義の普及活動をやりました。ナホトカで各棟を回つて、共産主義の吹聴のために講演、話をしたような記憶もありません。

民主運動

岩手県 佐々木清三

昭和二十一年秋、チタで「シベリア天皇」の共産主義教育を受けたアクチーブ、柏崎晴夫が收容所に派遣されて来た。民主運動を強力に展開され私は、恐ろしい赤いキツネが来たと思つていたが、同じ日本人で生きるための手段と思つた。働かざる者は食うべからず、日本新聞の宣伝など、資本主義・日本帝国主義・天皇制打倒、共産主義の洗脳が始まり、民衆の歌「赤旗」など歌わされ、作業より精神面でつらかった。

ソ同盟の五カ年計画達成のため、また民主化強化のため、私は戦友の選挙により八十人の寮長に選出された。また、作業隊長に任命され、反ファシスト委員会の委員に選ばれてアクチーブの指導に従つた。反すると生きて帰れないと思ひ、内心は階級意識に目覚めていないので致し方ない。

毎日のようにアクチーブの仲間たちの目が自分に注がれて、本当に気を許せなかつた。收容所にいるより、鉾山の作業が一番気楽であつた。また、作業隊員にもノルマ達成など一言も言わず、ただ危害予防と健康に注意し皆元気で帰国するよう話していた。

昭和二十三年五月上旬、私は、作業二番方で午後四時より十二時までの作業終了後、帰途前雨が降り、ぬれて帰り、被服その他の整理を要する隊員のことを考えて、毎日作業終了後読み聞かせることを決められていたソ連共産党史を読まずに早く休ませた。

翌日午後急に柏崎、滝本、阿部、三人のアクチーブに呼び出され、中央広場で、「なぜソ連共産党史を読まなかったか、ソ連の五カ年計画にブレーキをかけた。また君は資本主義の残滓がある。さらに、元第一大隊本部にいたとき長刀をつつて威張っていた」など、数々の悪口を言われ、一時間ばかりで終わったが、中には今までの私の作業隊員もいた。今日からは、寮長、作業隊長をクビと言われ、営倉二日（昼食抜き）。営倉二日間は、私の元の隊員の差し入れで助けられた。

私のかわりの作業隊長は、ハラショウラボーターのK氏になり、監督が、佐々木はなぜ来ない、デモクラシーだめだと言う。後任のK氏は、監督からロシア語で隊員四十人の名簿を書くことを言われたが書けない。監督が怒り、鉱山事務所に連絡し、私を名簿書きによこすよう頼み、一週間ばかり行つて監督と最後の別れをした。

監督と呼ばれ、お前は父母あるかと聞かれ、父（パ）なし、母（マ）ある。マダムあるか、あると答えた。子供（マリンケ）あるか。なし。東京ダモイがあるから、病氣、けがに注意して元気で帰れ。人種が違つても人間の良心は皆同じだと強く感じて涙が出た。

次の作業は収容所の裏山のゲルペーであり、山の土掘りであった。罰として作業終了後、所内の清掃等やり、この生活がいつまで続くかと考え、情けなくなつた。

民主化運動

収容所内はたいがい軍隊の延長の作業隊である。ソ連側は掌握しやすいのである。将校や下士官は、昔のように兵隊を当番につけて、作業しない。パンはビンハネし、上げぜん据えぜんで兵隊を使った。これでは兵隊が下士官に殺されるようなもので、日本の軍国主義は民主主義とは相反するものであった。

一部の兵隊から民主運動が起こり、旧軍隊の将校、下士官はアクチーブ（積極分子、活動家）にいじめられた。

民主化運動

富山県 村澤隆司

ソ連は関東軍の将校と下士官に分け千人の大隊を編成し、大・中・小隊長は別部隊の下級将校を隊長にし、統率・団結の部隊組織を弱めてシベリア護送をなす。収容所においても隊長のほかに特に上下の別なく労働者として取り扱いをなす。ただ日本人側において階級制を固持したのにすぎなかった。しかし、かつての階級権力や学歴博識はもはや労働力には不要であり、歳月が経つにつれ差別から平等の思想が高まつてきた。

ソ連は軍隊を骨抜きにし、共産党を礼賛し、労働歌を奨励し、赤化と民主化の工作に乗り出す。これを受けて同志が立ち上がり、所内の空気は次第に変化していき、やがて『日本新聞』が配布され民主化運動に拍車がかかつてきた。初めはソ連が例のだましの手であると思っていたが、とらわれの身では仕方がない。猫をかぶつてなびいていれば彼らは喜ぶだろうと考えていた。しかし、連日の民主化運動で抑留中だけでも共産党になったほうが得策であると決めていた頃、山田中隊の移動、間もなく入院となり民主化運動の旋風に当たらなかつた。

日本新聞

春が来て夏が過ぎようとするところからか、本部よりの通信で『日本新聞』が発刊され、少しは内地の様子もうかがい知れるから作業の合間を見て読むように廊下に貼り出した。一カ月ごとに新しい新聞が来る予定。労働も肝要であるが精神的な教養も必要と『日本新聞』が発刊され、作業本部前の廊下に貼り出されることになる。入ソ以来、印刷物と言えれば初めてのことである。活字が懐かしく、一度思い切つて本部前の廊下に立つ。勇気の要ることである。今のところソ連側からは作業に対する何の苦情もない。各切羽の上がりの早い、遅いがあるが、皆、ノルマを達成しての上がりである。

「働くこと、食べること、眠ること」この三要素以外のことは考える時間もなくて、また必要もない。この三つが回転して一日一日と月日が過ぎてゆく。また坑内作業で何らかの些細なトラブルがあることもあるが、何もそのことに対するソ連側の要求、または罰則に抵触したというようなことも聞いたことなく、ただただ全員一致して作業に従事することが与えられた使命、運命と割り切つての日。

『日本新聞』の掲載する記事は、内地情報として、物資の不足、インフレ、浮浪者等が隅の方に記載されているのみで、政界における共産党の勝利宣言、戦前における軍部の横暴、関東軍上層部の腐敗等の記事が多く、今、共産党なくして国家の再建はない、と結論を出している。

この新聞を熱心に読む者は、共産主義を少しでも理解し、その主義に賛同し、ゆくゆくは共産党に入党するのではないかと憶測する者も陰であらわれる。

幸いに現在、捕虜に対する一切の教育あるいは講義等は行われていない。また日本人同士、お互いの思想に対する議論等する暇もない。

一番大切なことは食うことである。食うためには働かなければならない。それが帰国へと繋がる最短の道であると多数の兵士は信じ、ただ黙々と働いてい

る。

ソ連側も、そんな無駄な教育をする時間があれば働かせた方が得だとの考えではないだろうか。坑内で働くソ連の労働者にしても義務教育を受けてなく、僅かの常識と基本的な人生の歩み方を身に付けたという者が多く、他はシベリアへ流刑された囚人の満期者、欧州戦線で捕虜となったドイツ人等の労働者であり、彼らもそんな主義主張よりパンの方が大事である。

収容所内での共産主義教育は一度も行われず、また、この本を読みなさい、この新聞記事に対する批評を言いなさい、というようなことは一切なく、そんな時間のないことも幸いだった。

その後、『日本新聞』の記事がどのように変化し、内容も教育論に終始したのかあざかり知らない。

作業中、隊内にも民主化の流れは、自然的、必然的に行われ、階級章はほとんど着けている者はなく、下士官、兵の区別もなく、他の人を呼ぶのも「○○さん」と気兼ねなく、心やすく呼ぶ風習が一般に広がる。

このころ、頭髪を伸ばす者も多く、坑内作業員は落盤に備え頭髪を伸ばした方がより安全であるとの屁理屈を付け、伸ばしていた。私も例外でなく、オールバックにしていた。理髪の方は、手の器用な者が紙を切る鋏を使って上手に刈り上げてくれた。収容所内にはまだ理容所は開設されてなく、地方人として理髪店で働いていた者は本部で氏名を把握し、所内作業員として稼働させ、監視兵等ソ連側の要請があれば理容に従事させる程度であった。

大袈裟に言えば、こんなことが民主化への第一歩であったのかもしれない。

北海道 堀 勇二郎

二年目の後半から、我が分所にも頭の良いのがいて、ソ連からの要請で民主運動がボツボツと起こり、初め先ず将校を反動分子として台上に立たせ軍隊時代の悪事をあばき、厳冬時の大便秘は朝にはコロコロになるのでその始末をさせたり、

ソ連側の指示で実行させたのです。こうするうちに将校は一カ所に収容されたとの噂もあり、日本人同士で罪のあばき合いをしている姿は、早く帰りたい一心でソ連の口車に乗ったものであり、結局は民主運動の指導者として早くは帰れなかったはずで。

民主運動も日増しに活発になり、日本人同士も信用できない状態になり、収容所を三カ所移動しましたが、我が身をかばう醜い人間の本能を見せつけられいかにスターリンの共産主義思想が当時のソ連人民自身を苦しめたのか。

北海道 佐々木佳明

まずは将校のつるし上げから始まった。周囲は青年部が陣取り、アクチープが追及する。軍隊当時妻帯した将校は官舎が与えられ、車で送り迎えされるのである。官舎には官舎当番がつく、いわゆるお手伝いさんである。官舎当番であった同志から直接目にした官舎での淫らな私生活等があばれる、いわゆる大衆裁判である。

いよいよ思想教育、民主化運動が激しさを増し、朝六時になるとアクチープのアジ演説が始まり、檄が飛ぶ。夜になるとハバロフスクから抑留者向けに発行された日本新聞が配られ、アクチープによる輪読会が始まるのである。

この新聞の内容は、階級闘争を通じてマルクスレーニン主義云々とか、帝国主義の誹謗、ファシスト反動打倒せよ、民主主義を勉強しようというものばかりで、ここには強制抑留者をねぎらう文面は全くなかった。その中で今度の戦争に一貫して反対し続けたのが日本共産党であることを知らされた。現実にコルホーズ(集団農場)等の実態を直接目にし、民主主義の利点が強く感じられ、いつしかこの思想に次第に洗脳されていった。

函館に着くや、ひとまず父を列車に残し、日本共産党函館支部に挨拶に出向き、仮入党の手続きをして列車に戻り、再び父としみじみと語り合っているうちに故郷の苦小牧に到着した。

岩手県 山本喜代四

演説は朝の点呼のとき、五分から十分くらい毎日行われた。第一の演説は、「諸君、青年行動隊を見ろ、何か感ずることはないか。階級章を付けてないだろう。もう軍隊はないのだ。我々は平等なのだ」と、こういう具合だった。翌日にはもう階級章を付けているものは誰一人いなかった。

六月頃になって、食堂の一隅に図書室が設置され、マルクス、レーニン、スターリン等の書籍が自由に見ることが出来るようになった。また、劇団も出来て演芸会も行われるようになり、プロの音楽家もいたようで、マンドリンの上手な人もいた。

各ラーゲルには畳一枚から三枚分くらいの大きさの壁新聞が張り出された。プロの画家や絵かきがいたらしく、かなり上手な絵が描かれていた。スローガンは、「ファシズムとの闘争なくして民主主義なし」とか「ソ同盟社会主義万歳」「レーニンの旗の下に、スターリンの指導の下に」等であった。

民主運動というより、権力闘争そのものであった。七十万の頂点に立つシベリア天皇と言われた諸戸氏でさえつるし上げられたとか、ソ連の戦犯にされたとか、最近風の便りに聞いた。数年前にわかったが、諸戸氏でさえその後ソ連の戦犯にされ、昭和三十二年に帰国したという。このように当時のソ連(スターリン)は必要な時は利用して、必要がなくなればつさり切り捨てられる。それはソ連の人達も同様なようであった。スターリン的風土と、でも言おうか。

愛媛県 長野吉雄

帰国の第一回目は、収容所の中で一番の年配者一人だけ帰国した。引き続き我々の帰国が決まった。それとは反対に、労働不振の人、洗脳教育を受けなかった人達は奥地へと転送された。

帰国が決まったら、全員がスターリンに感謝文を書くことを強要された。私は半信半疑であったが、心ははやった。ソ連側より上級将校(佐官クラス)が来て、「君達は近く帰国することになった。帰国したら民主運動に参加し、労働組合を起し日本再建のため活動するように」と檄(げき)を飛ばした。

岩手県 山本喜代四

さて、日本新聞解説委員というのは、休日に食堂か各部屋に二百人くらい集合させて日本新聞の内容を解説する仕事であった。一回につき一時間くらい要したので、夏なら広場で大隊員全員を集合させて一回でよかったが、十月ともなれば外ではできないから、それで室内で二回か三回に分けて行った。当時はまだ委員長だけが作業免除であり、副委員長格であった私を含めて他の委員は作業に出ている。

十一月になつて、ハバロフスクに行つていた五人が講習を終えて帰ってきた。今まで小隊長が兼務していた民主委員は小隊長専任となり委員長以下講習から帰ってきた五人と私を入れ計七人で民主委員を構成することになった。この時から民主委員は重労働免除となり、専ら民主主義運動に専念することになった。

階級闘争とは、收容所内では将校、下士官、兵の階級と、各人出身階級別に分類された。将校は軍隊でも支配階級であるし、出身も資産家出身が多く、最低でも中等学校は卒業している。日本の社会でも軍隊でも支配階級で我々を搾取してきたブルジョア階級だ。軍隊で兵士であつても、中学校以上卒業している者は、ブルジョア階級である。また、前歴者といつて、元、前警察官、特務機関員、憲兵も幹部候補生の下士官もブルジョア階級だという。下士候の下士官は軍隊では我々を苦しめ支配階級の手先ではあるが、出身は自分達と同じプロレタリア階級であると勝手に定義つけた。それから各小隊に一、二人のオルグ、アクチープ(ソ)連語で実際に大衆の中に入って運動する活動家のことを配置すると

う。このようなことは、ハバロフスクの講習で、日本新聞社のソ連最高責任者コワレンコ氏、編集責任者の諸戸(モロト)氏(実名は不明だが、当時のソ同盟外相モロトフ氏にあやかつて命名したとか、されたとかいう風評であつた。シベリア天皇とも言うようになった)等の下請のようにも思つた。

さて、Aが委員長となつて最初の人民集会(この頃は人民裁判とかつるし上げとか言うようになった)が食堂において開かれた。委員長がまず挨拶をした。

「同志諸君、本日は、我々の敵、ブルジョアジーとその手先を摘発して、自己批判と反省を行わせ、民主運動を更に発展させよう」「ブルは前に出る。中学校以上卒業している者は前に出る」「警察官だったものは、前に出る」前後左右、方々から叫ぶ。この叫ぶ者達は皆、Aが選任したアクチープであることは間違いない。

私は、このような事態が来ることは覚悟していた。私は前に出た。「後はないか、五小隊のC隊長はどうだ」Cも前に出た。「警察官をした者はいないか、あつたら前に出る、調べはついているぞ」「出なければ引張り出せ」「つるし上げる」、怒声が飛ぶ。入隊前、警察官だったというDも前に出た。

民主委員達は何も言わない。誰が、どういう発言をしると、アクチープ達に指示していたようで、発言するのはアクチープだけである。十二、三人くらいいるようだ。ほかの人間は、あつけに取られて成り行きを見守つている。アクチープがどなった「最初に山本から批判しろ」。私も黙つていられない。「隅の方でどならないで、どのように批判すればよいのか、前に出て教えてもらいたい」と言つた。会場は静かになった。一分、二分、誰も発言しない。委員長が発言した。「中学校以上卒業している者は、多数の者が行きたくても行けなかつたのに、行けたらいいことは、金があつたからだ。金があつたということは、多数の者から搾取したからだ。また、軍隊でも下士官や将校となり、我々を苦しめた。よつて、深く反省し、今後民主主義運動のため、我々プロレタリア階級に協力しなければならぬ。このことを皆の前で反省して、表明してください。山本からどうぞ」とのこ

とで、私の発言が始まった。

委員長の名前で私が前に引き出された。前のときは委員もアクチーブも質問等はなく弁明だけで終わったが、この頃になって一般大衆も、アクチーブ等が言ったことに同調して、「そうだ、そうだ」とか「つるし上げろ」「白樺の肥やしにする」等々叫ぶようになっていた。何百人の人が叫ぶのであるからその光景は異様である。

青年行動隊も解散になり、小隊も新たに編成された。大隊長には田村曹長に代わつてAがソ連側より任命された。小隊は廃止され、四十人単位の分隊制になり、分隊長は大隊長が任命した。

転入してきた百人の中には七人くらいの講習終了者がいて、その中のEという男が民主委員長にソ連側より任命され、小隊長、民主委員長とも講習終了者で占められ、下士官以上は完全に追放された。

Eは夕食後度々集会を行い、一人で一時間も二時間もしゃべりまくつた。ソ同盟指導者スターリソの礼賛であつた。特にトロツキストとの闘争が強調され、収容所の運動もブルジョアジーの追放、反動の摘発、プロレタリアート団結と独裁が、A委員長のときより強調されるようになった。

一日十六時間の重労働であるが、民主委員も分隊長も作業免除であり、我々が労働している間木陰でグーグー居眠りをしている。まるで労働貴族だ。

民主運動の方はますます階級闘争が激しくなり、十日に一度くらいに人民裁判が開かれ、つるし上げが行われ、毎回二人から三人がつるし上げられた。

Fが読み終わったところで他の委員から発言があり、「弟が中学校に行つていゝことは手紙で証明された。F、貴様も中学校を卒業しているだろう、どうだ」と問い詰められたFは「私は行つていません」。「嘘をつくな」「反動だ」「つるし上げろ」、方々から蛮声が飛んだ。Fはもう返す言葉もない。アクチーブが言う「Fが行つてなくても、弟が行つていればブルジョア階級だ。反省しろ」「そうだ、そ

だ」全員が叫ぶ。Fは「申し訳ございません、許してください」と深々と頭を下げた。

近頃は、人民集会で、アクチーブだけでなく一般大衆も、民主委員、アクチーブ等に同調して唱和するようになっていた。黙つていればアクチーブから反動だと締めつけられる。そのうちに、民主教育によつて洗脳され、自ら発言するようになっていた。

Fのことも情報不足で、中学校が学制改革で義務教育になったことを誰も知らなかつたのである。この頃はもう下士候の下士官もほとんど一度はつるし上げられた。

福島県 小平里美

時を同じくして日本新聞(社会主義宣伝用)を中心にして民主運動なるものが始まつた。民主主義・社会主義・共産主義・帝国主義など言われても何の事かさつぱり分からなかつたが、オルグとか言う民主運動の積極的分子の活動で各収容所に民主運動が広がつていった。

最初は反軍闘争から始まつた。敗戦により戦争は終結し軍隊も解放されたというのに、旧軍の階級組織が厳然と続いていることに初年兵や下級兵士の中で将校や下士官が中隊長や班長を続けていることを不満として、上司に対する批判やつるし上げなどが統発して、組織の長や作業班長など民主的な選挙で決めようということになり、若い初年兵が中隊長や班長になったりして大きな変革があり、将校や反ソ的な幹部等は他の収容所に追放された。

親ソ的なオルグが権力を持ち、ソ連政治部の支援で民主運動は活気を帯び、赤旗の歌やインターナショナルが響くようになった。

社会主義や共産主義に心酔したわけではないが、時の流れには逆らえずに民主運動の大きな渦に漂流していた。

東京都 関口健治

モンゴルでは洗脳教育はなし、収容所は自主管理が主で、私物検査も二回ほどでした。労働以外の情報は得られず、移動はほとんど徒歩でした。

ナホトカに着きました。もう大部隊が先着していました。これは順番待ちだなあと。後続部隊も集まって来ています。次々に舞台のある広場いっぱい兵士を集め、共産教育に洗脳された初年兵がおりたて、意地悪をした上官たちを舞台の上に引っ張り出し、つるし上げ、平身低頭謝らせる儀式みたいなことをして通過しました。

帰りの船内で、乗船する前に行った洗脳儀式の、今度は反対につるし上げをするグループがいましたが、嫌な気分でした。

栃木県 野沢芳夫

吊るし上げの方法は、オルグの吊るし上げの理由説明に始まり、円座している周りの人々から野次と罵声が乱れ飛び、その被告の反動ぶりをなじるのである。円座の中央に立たされた被告は、数十人の視線と悪口雑言を一身に浴びながら一言も反発することもできない。オルグの罪状暴露の熱弁に一般大衆は、同感、異議なし、民主主義の敵だ、使い殺してしまえと怒号し続ける。気の弱い者は発狂状態にまで突き落とされるのである。しかしかつての日本軍隊のように殴る蹴るといった暴力行為が行われなかったのが幸いであったが、精神的な圧迫は甚だしいものがあつたのだ。もしも被告に対し同情的視線を送り発言でもするならば、被告同様反動分子として中央に引き出され、吊るし上げられるからたまつたものではない。いやでも自己反省と誓いの言葉を述べさせられ、オルグの閉会の辞と、インターナショナルの歌をうたつて、本日は有意義な闘争を展開し偉大なる成果を勝ち取つた、として吊るし上げが終了するのであつた。

この非合理的な人民裁判が月に数回も行われ、そのため無関心であつた者も、反動分子のレッテルを貼られる恐ろしさのために、昼間の重労働で疲れ果てた体

に鞭うつて日本新聞の輪読会に集まつたのである。そしてまた作業現場の僅かな休憩時間にも輪読会が催されたのであつた。日本新聞には食料難、戦災の状況、闇市、浮浪児、日本資産家の搾取、日本軍捕虜の引き揚げ状況、共産主義政策の謳歌、等々であり、この指導者となつたアクチープの大半は労働階級の出身者であつた。そして民主化運動が盛んになると、日本への帰還は民主運動の実践の程度如何によつてその順位が決定されるということになつたのである。吊るし上げの怒号の中にも、反動は日本に帰すとか、白樺の肥やしにしろとかいふ言葉が入つて来るようになってきた。そしてノルマ遂行者の名前が出され、ますます日本人捕虜の労働は強化されていった。平塚運動とか暁に祈る事件とかの非人道的な作業事件が起きたのも、その責任者がソ連当局の強要から逃れるために作業を強化した結果生まれた事件であつた。

富山県 中葉正義

二十三年六月に「ダモイ」と言われナホトカに来て初めてハバロフスクの梯団と一緒にりましたが、二年も三年も先に洗脳された者ばかりで、我々は常に反動分子とみなされ、そこで人員をばらばらに編成され、徹底的に民主教育がなれされました。私は若かつたので青年行動隊にさせられ、一般大衆を引率、常に討論、文化活動の先頭に立たされました。夜寝るまで学習また学習、追いつけ、追い越せの毎日でした。民主教育が徹底し、ちよつと口を滑らすとすぐ反動呼ばわりされ、つるし上げに遭い、自己批判させられました。作業も、ソ同盟を強化することは民主陣営を強化することであり、誠心誠意、一生懸命に働かざるを得ません。

大阪府 寺田新次郎

シベリアから復員するとき、ソビエト連邦国家保安委員会(KGB、ゲーペーウ)の秘密指令を受けてスパイになることを承知して早期に帰国した者が四百

人々五百人もいたと言われ、それらの中にはかつて関東軍の参謀だった者もいる。そして、ラストポロフのアメリカ亡命事件当時も話題に上った。第六国境守備隊史の中の六六六頁に、このようにスパイになったら早く帰国させると執拗に脅迫された人の体験談が生々しく書かれている。ダモイを餌に弄したソ連の陰惨な手口でなくて何であろう。

富山県 谷村文平

密告者

昭和二十二年初め、ラーゲリの住居、炊事場もでき上がり、生活も軌道に乗った頃、軍人ではない制服の人物がラーゲリに現れる。帽子の色が青いので通称「青帽」、別称「ゲ・ペ・ウ」。この人物の出現と密告者の組織化は時期が一致している。日中の労苦から解放され深い眠りに落ちた頃、不寝番に呼び起こされる。行ってみると日頃収容所で見かけない人物がいる。日本語のよくできる朝鮮系のような感じの人物の前に座る。「ソ連邦をどう思いますか?」と。山奥のラーゲリでようやく数ヶ月、ソ連の実情など皆目わかっていない。日本式の儀礼では相手のことをもちあげるのが通例である。まして、夜中の呼び出しで議論するのも気が重い。悪しからずの程度で逃げるつもりか異にかかってしまった。「それではソ連に協力してほしい」。任務は、収容所での「反ソ」言動に注意して知らせてほしいというのである。初めの柔和な顔つきが一変して険悪な「特高」の顔になっている。署名させられる。

こうなったら、残るは「彼らにあやつられぬぞ!」が唯一の抵抗である。この密約を担当した人物はこの夜に会ったきりで、実質的にラーゲリ内の密告者を取り仕切るのは「青帽」である。一ヶ月おきぐらいに「夜の呼び出し」がある。「何か情報は?」とくる。「何もなし」と答える。青帽氏は他の日本人密告者には多分あまりうまくない日本語で対応しているはずであるが、私に対してはロシア語のままだから言葉のすこみがじかに伝わる。「お前は日本の憲兵が捕虜をどうし

たか知っているだろう?」「この原生林の中でお前を消すのは何でもないのだ」と言うのが一番身にしてみた。

一方で私自身が青帽氏の要注意人物となっていた。それは別の密告者が私の身上調査を命ぜられていたが、全く手がかりがなく直接話を聞きに来たことでわかった。私は通訳者の仕事で所属部隊から分かれ転々としてたから素性が知られていなかった。青帽氏は、軍隊でロシア語を習得し対ソ連情報の仕事をしていたのでないかと睨んだらしい。直接来訪下さった密告者の方には在満中に民間で習得した旨説明しておいた。この頃、同一収容所で通訳をされていた方が二人他に転出され、関東軍の情報部とか特務機関に関係されていたとうわさが流れた。

私に事情を明かして下さった密告者の方と私自身の共通項を考えると、学歴である。大隊本部で数回隊員名簿をロシア文字で作成させられているので気付くのである。ソ連が学校修業年数を必ず記入させるのは、このような用途に利用する魂胆があったと思われる。

私が青帽氏の支配下にいたのは約一カ年で全抑留期間の四分の一に過ぎないが、「ソ連の闇部に取り込まれた」悔しさが帰国後も長く脳裏を去らなかつた。

石川県 前多義雄

ある日炭坑から上がって来たら「別室に來い」と言う。入室すると、私を真正面の真ん中に座らせ十四〜十五人がぐるりと取り巻いた。早速うるし上げである。あなたはまだ親ソ的でなく労働も理解していない等々、さんざんである。

これには、前日のソ連革命記念日(十一月七日)にウオツカが少々配給され、いささか酔っぱらった時に歌を歌えと強要され、調子に乗って何曲か歌った。その歌は「下田夜曲」等々退廃的なものばかりだったと言うのである。そのことについて切りの出は、俺達は今、ソ同盟のために増産に努め、より多くの石炭を運び出したい、ソ連当局から褒められたいのだ、これは結局待遇改善につながり、

多くのパンにありつけるのだ、あなたはそんな歌を歌うようではプチブル(小ブルジョア)で社会主義の心ではない、言わばソ同盟に対する忠実・忠誠心がない証拠であると言う。その頃ハロフスクで発行される『日本新聞』では、増産運動を奨励し民主化を叫んでいた。私は反論した。「お前等は何を言うとするか。軍隊では軍国主義を謳歌していたのに、僅か一年半足らずで今度はソ同盟万歳！ スターリン万歳！ とはどのようなことか、その心変わりには甚だしい」と反発した。彼等は私の過去まで洗い出して追及する。そして三日三晩(夕食後の一九時〜二時までの三時間)つるし上げられたが、私は屈することはしなかった。

周囲の友達から「前多！お前は偉そうなことを言っているが、日本へ帰りたくないのか。帰国してこそ命冥利というものだ」と言う。私も、こんな所で犬死にしたいくないのは当然のことである。ここは酔った振りをするのが良いのかも知れない。アクチブに勧められて民主化講習を受けることにした。これは各隊から二十人くらいを集めて行う二カ月間の集合訓練である。帰国した後、共産主義とはどんなものかを知ることもあるが、無駄ではないだろう。講習会に参加してみると、テストもあり、いろいろ詰め込まれた。学習の主旨は何のことはない、経済学からソビエト共産党史の解説、マルクス・レーニン主義礼賛、その他資本論の勉強である。一日二時間、二カ月間の講習を終わって帰隊したら、どうしたことか、最後の修了試験は良かったらしい。突然、中隊の文化部長、青年行動隊長、そして政治サークルの講師という三つの大役を仰せつかり、真面目にその任務を全うしたが、「人間万事塞翁が馬」と言われるが、これが逆作用したのか。アクチブと称するAに聞きただした。「何で私が帰れないのか」。彼いわく「そりや、あんたを帰したら指導者がいなくなるからだ」と言う。

長野県 中山麻人

収容所の中も民主運動が盛んになり、天皇制打倒とか資本家追放のポスターが張られるようになっていた。モスクワの共産党学校で学んだという若い指導

者等の指揮で集会所に集まり、演説を聞いたり「赤旗の歌」等の合唱をやらされた。月に四、五回はあった。腹の中では馬鹿にしていたが誰にも話すこともできないし、分かったような顔をして出席していたが、不思議なもので、段々と彼等のアジ演説を肯定するようになってしまった。これが洗脳と言うものか、恐ろしいものだ。彼等曰く、我々が今日このような生活をしているのも軍隊という組織に組み入れられたからだ、農民はいつの時代にも犠牲になって来た、ソ連進入時に軍の上層部は飛行機で本土へ逃げ帰った、東京では資本家は腹いっぱい米の飯を食べている、大衆は食糧がなくて路頭に迷っている等々の演説を聞いているうちに、段々と物の考え方が左に傾いて行くのが分かった。これも苦しい生活の中ですべてが反逆的になっていったせいか。山口さんと「捕虜の中では殿様生活だな」と話しながら昭和二十三年の新年を迎えた。

大阪府 寺田新次郎

同志徳田、志賀、野坂と連日載る。この日本新聞は昭和二十四年十一月の六百六十二号まで発刊され、二十万部印刷されていたそうだ。週三回、編集責任者は極東軍管区政治部に所属したかつてのタス通信の日本特派員だったコロレンコ中佐で、その下に編集委員として、浅原正基(ペンネーム諸戸文夫)、矢浪久雄(ペンネーム相川春喜)、高山秀夫ほか多数が各収容所から抽出されてハロフスクに集まり、上記コロレンコ中佐や他の赤軍政治部将校の検閲のもと編集に当たった。最初は二ページで、後四ページ建て紙面。

浅原はペンネームをソ連外相のモロトフをもじって諸戸文夫といったが、我々は彼をシベリア天皇と言っていた。チタ地区にもう一人、日本共産党中央委員の袴田里見の実弟の袴田陸奥夫という左翼運動の経験者が捕虜として抑留されていたが、彼は前記諸戸と意見を異にし、協力していない。諸戸は日本の大学生から入隊し中支にいたが、後、ハルピンの露語学校に転属になり、いささか戦争直後になって特務機関の端役をやらされていたことが暴かれ、抑留四年目にな

つて戦犯としてシベリア天皇の座から滑り落とされた。これにまつわる高山との抗争の醜聞もあるが、省略する。

この日本新聞の発行を嚆矢として民主運動が始まる。

次いで、赤軍政治部の煽動によって将校の吊るし上げが始まる。反軍闘争と銘うって。そして、今まで利用していた将校をどこともなく連れ出してしまった(軍隊組織の解体)。

次に現れたのが「反ファシスト委員会」なる組織であった。これが所内の民主運動の推進役を務めた。依然として吊るし上げ、相互批判、自己批判が活発に行われる毎日が続いた。

最後にできたのが民主委員会という組織で、これはもう所内の絶対的権力を担った。所内の天皇で、作業場、人事、役割から帰国者の順位の人選まで決定する権限を持った。

山口県 小曾根三郎

そのとき、ふいに後ろから肩を叩かれました。「同志中曾根、大分熱中してソ同盟の批判をしているようだが、今夜八時から、同志中曾根の批判会を行う」と。「シマッタ」と思いましたが、日本の船の中だと思い「いいですよ」と答えました。

このリバティー型の輸送船は、船底に櫓を立てて、その上に吊し上げの被告を立てると、一種の舞台効果があります。アクティブ達にとって、最後の見せ場になるのです。

被告である私が、櫓の上に立ちます。アクティブが、シベリアで何回もやってきた慣れた口調で、「同志小曾根が、本日、船員に対し、光栄あるソ同盟の民衆を誹謗するプロパガンダ行為を同志の前に披露する」と前置きして、「ソ連人民は知能程度が低い、手くせが悪くカッパライが多い、日本人を日本に帰すと言いなから四年も強制労働させた、ソ連軍は悪い食料事情の中で無理なノルマを強制

した、今のスターリンのやり方はツァー時代から引き継いだ暗黒政治であり、密告奨励の恐怖政治であると批判していた。全く的是はずれの暴言に外ならない、反動小曾根は明らかに日本軍国主義者、米国資本主義者の手先であり、彼自身がブルジョアの家庭であり、これから反共プロパガンダの先頭に立つ者である、同志諸君、我々はこれから日本に上陸し、代々木の共産党本部に乗り込み、これと提携して日本の真の民主化政府を打ち立てようとする我々同志に対する宣戦布告である……。」

そのとき、緊急動議が出て「こんな奴は日本海に叩き込め」と言う声が上がりましたが、船長を初め船内の良識派からの制止で流会になりました。私は、捕虜の中の捕虜として監視下に置かれることになりました。

北海道 渡辺照造

十三分所に行つて見ると、若い洗脳された先鋭分子がアクチブやリーダーになつている。朝夕の点呼も、アジに始まりアジに終わる。隊列を組み、赤旗を先頭に闘争歌を歌つての作業場への往来であるが、作業から帰つて来ても作業反省会が終わらねば解散もできない。発言がないと日和見だと批判もされる。食事が終わると、今度は寝台上で、グループごとの討論会や輪読会である。

関東軍司令部の瀬島龍三中佐参謀(終戦時にジャリコワで、秦総参謀長と停戦交渉をし、抑留中は、極東軍事裁判にソ連側証人として出廷し、帰国後は伊藤忠商事のトップとなり、中曾根康弘首相のブレーンと言われた人)がいて、夜になるとアクチブのアジで吊るし上げの対象になつていた。また、関東軍報道部長の長谷川宇一大佐や、佐官の人も随分いた。尼港の将校も二人いたが、一人はアクチブなので、もう言葉を交わすこともなかった。ひたすら大衆の一員として目立たぬよう行動するだけである。

洗脳教育

富山県 菊野末一

二十一年の夏ごろ、収容所から一人、チタ市のある集會場で集合教育が行われ、日本語で書いた『弁証法的唯物論』なる本を一冊渡され、約一カ月間教育を受けた。帰ってくる他、他の収容所から二人のオルグが来ており、七〇〇人ほどに減少した収容所の全員を集め「私は今日からこの収容所の委員長に就任し指揮する。もう一人来たのは副委員長として私に協力してくれるとともに、これからの収容所内で皆さんの民主教育に当たる。副委員長はアジアプロ部長を兼ねる。さらに集合教育から帰った菊野は文化部長として壁新聞の作成と毎日曜日午前中は演芸会を開いてもらう」。

このときから収容所の雰囲気は大きく変わった。

愛知県 糸井紀伊

私も元気が出てきたところで、もともと転んでもただで起きるようなことはできない性分であったから、この機会にソ連のことをできるだけ勉強してみようという気になり、戦前、日本の政府、警察は何で共産主義を恐れたのか、また、反対に、一部の人は生命の危険まで冒して共産主義を広めようとしたのか。そして今、自分らが来ているこの国の実体はどうなのか。その辺のところをこの目で確かめたいと思った。

幸い収容所には日本語で書いたソ連の成り立ち、法律、生活の本もあり、日本語の話せる政治部将校もいる。それらを秋の夜長に読むことにした。どうせ寝るまで時間は十分にあるのである。

また、職場には十人近くのソ連人がいて、その人らとペアを組んで仕事をすることもあって、彼らの日常生活を知ることができた。

収容所に少しはあるが日本語の本があるということ、それ自体も考えるに値することだ。ソ連当局はこの日本人抑留者に対してどういう考えや期待を持

っているのだろうか。戦後の冷戦が始まろうとしていたそのころ、日本人をどのような使い方をしようと考えていたのだろうか。

いずれにせよ日本語のわかる政治部将校を配置していることも深慮遠望のあることと思われた。そう思えば、ソ連に連れて来られたことも、あながちむだではないような気がしてきた。

法政大学を出た主計中尉の解説を聞いた。また、ノルマの研究会もできた。

三重県 中森讓

私達将校集団は毎日交代交代で枯木拾いやコルホーズ農場のカルトーシカジャガイモ（馬鈴薯）畑の除草、揚水散布等を行う。ソ連政治部将校は毎日身上調査をし、調査を受ける者は前日の夜の点呼の時に通達されるので翌日の作業は除外される。ソ連の政治部将校の女性のクロイツルという方は、一般日本人には好意を持つていたが、彼女の狙った特務機関員・憲兵・警察官・情報関係者等を見逃すことはなかった。その頃、「日本新聞」（ハバロフスク発行）の啓蒙による民主化運動が盛り上がっていた。財閥、地主らの搾取の実態、軍閥に対する批判等についての話し合いの場が各棟で行われるようになった。

Aのグループに入った将校集団の中に真木大佐がおられ、師団参謀の肩章をつけ将校集団の中を時々闊歩しておられる姿を見たことがあった。体は大きく太つておられるので堂々たる容姿である。私は、先に私達のラーゲルにいる中尉殿が身上調査を政治部将校のクロイツル女史に受けた時、クロイツルさんは「皇祖皇宗」と書かれ、この字を日本ではどう読みますかと問われたので「クワウソクワウソウ」と読むと申し上げたら、ソ連では「オウソオウソ」と読みますとおっしゃって、日本はまだまだ民主主義はソ連より百年ほど遅れている、ソ連にしても今は社会主義国家で、共産主義国家は道徳的な人々の集まりでないといけないので、今現在においては「皇祖皇宗」をお護りして行かれるのがよいと思うと言われたと聞かされた。真木大佐が身上調査を受けられた時、大佐は、日本は

自存自衛のための軍隊を作らないといけないと包み隠すことなく申されたということを聞かされた。

北海道 菊池普恵

イルクーツク収容期間中、共産主義の教育が二、三週間に一度はあった。混成部隊であることが幸いしたかもしれぬが、アクチブの指導者は頭の毛が白い大衆教授風で、声が低く聞こえず、何をしゃべっているか分からず、大して関心も示さなかった。たまたまハバロフスク方面から新聞が配付されたが、内容は、日本の国はアメリカの植民地化となり、食するものもなく餓死者累々の悲惨さだと何回も繰り返し記載している。自分はそれを信じなかった。

共産党員集団の幕舎からマルクス・レーニン主義の基礎的問題の本を借りて研修する。少し離れたところに共産党関係のグループが幕舎生活をしていたので、この新聞の記事は果たして事実であるか否かを尋ねたら、「このようなことは決してない、デマ八分の新聞である故安心せよ」と言われて安堵の念を感じる。

日本へ帰る途中、イルクーツク郊外の墓地に亡くなった方々の墓標が続々建立されていた。二十幾つ位まで数えているうちにそこから離れねばならず、感無量の思いで去る。

貨車に数日間乗せられ、漸くナホトカの手前、ハバロフスクに着いたときのこと。各ラーゲル地区から集結された数百人の人達で溢れている。一方で、アクチブを中心に、天皇制、ブルジョアジー打倒で氣勢を上げ、共感を示す黒山の人達。他方では、音楽隊を中心に集まって興味を示す多数の人々。そのグループと交わっていたためにテストをされたのである。

ナホトカに着いたが何日たっても乗船の気配がない。後続部隊は続々集結して舞鶴へと引き揚げていく。夜は南京虫に攻められ、痒くて痒くてどうにもならない。昼は柱の穴に潜み、夜な夜な現れる。忍者と同じである。一週間以上も過ごしたであろうか、「お前たちのラーゲルは半年再教育せねば日本へは帰れぬ」と

のことで、ウラジオの郊外、ウオロシエロフで毎日赤旗を掲げ、天皇制打倒、ブルジョアジー打倒を叫んで、半年輕作業に従事しながら、焦る気持ちを抑えて帰国を待ち望んでいた。

北海道 渡辺照造

我々は第八分所に入ったが、ここは関東軍司令部の作戦班長草地大佐を筆頭に、部長や参謀など佐官や尉官連中だけの将校ラーゲルであった。階級章をつけ、もちろん作業等やらない。

ソ連側や民主グループから見ると、極悪反動、軍国主義の塊りのラーゲルである。尼港の将校団も自動的に反動の一員になったのである。そして、これから二年間、反動として民主グループの吊るし上げの対象となり、ラーゲルのたらい回しが始まり、シベリア流れ流れて流浪の旅となったのである。

ラーゲルを移動する度に顔ぶれは変わり、人数も増減する。ここでは、四カ所のラーゲルを移動したが、第五分所では、「極悪反動草地一派」のレットルのもと、二重柵で隔離された特別棟に入れられたこともある。

二十三年三月、アムールを渡り第一地区のムリーに送られた。ラーゲルの入り口には、レーニン、スターリンの絵、けばけばしいスローガンの羅列である。入るなりもう罵声が飛んでくる。馴れているとはいえ、あまり安住の地ではないなと思った。

ピリピリした空気が渦を巻いている。朝夕の点呼では、必ずアクチブのリードで闘争歌を歌い、その後で「反動を叩き潰せ」「生かして日本へ帰すな」「白樺のこやしにしろ」等々のアジである。直接手を出すことはなかったが尋常の空気ではない。

六月にここからもダモイ列車が発し、反動グループからも幾らかダモイしたが、残された反動グループは、ソフガワニに近いトムソに移動した。この空気もムリーとあまり違わなかった。

この頃になると、生きて日本に帰れないかという気持ちになったこともあったが、まだ数十人も集まっている心強さからか、それ程落ち込むこともなかった。

草地大佐は三十一年帰国後『関東軍参謀の証言』という本の中で、「ここを「夜叉の収容所」と書いている。

山梨県 渡辺元信

昭和二十四年四月初旬、ソ連収容所長が突然「バーム鉄道建設作業隊の皆さんの働きによつて建設作業が大幅に促進した、よつてスターリン命令で皆さんは近く東京ダモイすることになった」と発表があった。私どもは「死ぬまでこき使つていながら今ごろ何だ」とこぼしながらもうれしかった。四月十日ごろ、自分の造つたバーム鉄道に乗車。「生きていてよかった」と思いながら、亡くなった戦友に心の中でわびながら、四月半ばに日本海をよく見えるナホトカ港に下車した。驚いたことに、このナホトカの収容所は全く共產主義教育学校であった。私どものように鉄道建設のために三年半もこき使われ「ハショーラポーター」で帰国するのだと誇りを持ってこまで来た者など見向きもせず、「反動グループだから民主教育をしなければ日本ダモイはさせない」と宣告されてしまった。私どもはまただまされたと怒りながらも、これに背けばまたシベリア送りにされる、我慢我慢とまた初年兵になった心算で二カ月間、ナホトカ収容所で民主主義教育を受け、「赤旗の歌」や「インターナショナルの歌」など、一応立派に歌えたり民主革命の定説なども説明できるように洗脳された。

北海道 渡辺照造

七月、ダモイが発表され、この中に私の名が入っていた。反動グループは、各貨車ごとに数人ずつ分散させられ、吊るし上げの対象にされながらナホトカに向

かった。

喜びが実感として湧く間もないうちに、青山、和田、渡辺の三人は本部へ来いと言われ、いわく「お前達三人はダモイできない。ここから引き返す」と。瞬間、呆気にとられ声も出ない。民主グループとしては、「反動全員のダモイを阻止したいのだがそれはできない。それで名簿の初めの三人だけを選んでいいかと思う。「野郎、やつたな。民主グループのコン畜生」と心の中で怒鳴っても如何ともしがたい。折角ナホトカまで来ながら戻る口惜しさより、民主グループに対する怒りが大きかった。

誰かに怒りをぶつけることも、皆に別れを告げる暇も与えられず、三人はパンを受領し、二人のカンボーイと今降りたばかりの貨車でハバロフスクに逆送された。

ハバロフスクでは、二十一分所に二カ月程いた後、九月に十三分所に移された。二十一分所にいるときに、今後どうするかと青山氏と話し合った。もう頼るべき仲間もない。そして、ナホトカから逆送という異常事態の後だけに目立つことはできない、作業をせざるを得ないかと。それから、必要最小限度のことしかしやべらない人間になつてしまった。もつとも他の人も同じだったかもしれない。どこ出身で、どこ部落で、どこラゲルにいて階級はなどの日常会話は全然しない。単なる労働力にすぎない捕虜にはそんな会話は不要なのである。最大の関心事のダモイすら口にするのはタブーである。うっかり口にしようものなら、反ソ分子として批判されるのが落ちである。

シベリア民主運動には、コムソモリスク以降その渦中に巻き込まれたが、尼港にいる間は全然影響は受けなかった。政治部将校が、何とか民主運動を盛り上げようと動き、一部の者が「日本新聞友の会」の部屋を作つたり食堂に壁新聞を貼つても、大多数の者は一顧だにしなかった。実態は、民主運動より食うこと、休むことに関心があつた。他からアクチブが来ることもなく、ラーゲル同士の横

の連絡もない。もともと一度ハバロフスクから誰かが来て、夜、食堂に集められたが、野次られて帰って行ったこともあった。

民主運動が盛んになってきているのは感覚的には分かっていたが、実感はわか
なかつたし、対岸の火災視していた。

「全員元気で日本に帰ろう」が桑田中尉以下皆の以心伝心の合言葉で、作業場に行っても誰一人「我らが祖国、ソ同盟強化のために……」等とアジる者はいない。むしろ、米国が強制労働を強いるのなら話は分かる。だが、何で戦争もしないソ連のために働かねばならないのだ。ましてやこんな少ない飯で、てめえ達のために働いておれるか。お身大切に、という気が強かつた。

作業指揮官の仕事は、作業の遂行より何とか少しでもサボろう、休もうと、そのため監督やカンボーイに消極的抵抗をする（結局は負けるが）。確かにノルマは言われた。しかし作業はマンマンデー（ゆっくり）である。文句を言われてもできないのはできない。働くだけ腹が減り、体力が消耗するだけの話である。

毎日、ダモイと食う話ばかり。春、アムールの氷が解けると「今年は」と期待に胸躍らせ、秋、アムールが結氷すれば「今年もダメか」と落胆する。コックリさんも随分協力してくれたがさっぱりである。

静岡県 松崎市郎

それから列車はナホトカへ向かつて南下するが、ナホトカまで何日かかったか覚えてなし。距離にして七〇〇〜八〇〇キロメートルくらいではないか。ナホトカへ到着したとき一番最初に目に入ったのは、緩やかな小高い丘が二、三あったことだ。そこには皆、幕舎を無数に張り、赤旗を林立させ、「インターナショナル（革命歌）」を高歌放唱する部隊あり、異常な状態であった。何かアクチーブ（活動家）あたりより、持ち物検査、抑留中の印象等の質問があったような記憶あり。また驚いたのは、私の近くへ寄つて来て、私が静岡県出身者と知つてか知らずか、「私は山本某と申しますが、静岡市駒形に父親と家族が一人おります、伝言を

頼みたい」とのこと。なぜ残るのかと聞くと、その山本某氏は「あと二、三年残つて民主運動のために尽くしたい」と言明した。民主活動家の尋問も無事終わり、これから乗船となる。

ナホトカでの山本某君については、帰国後幾日かを経て静岡市駒形の実家を訪問（父親、当時六十歳くらい）し、事情説明したるも父親の反応余りなく拍子抜けした記憶がある。この労苦調査の手記を書くに当たり半世紀以上前の記憶がいかに不正確であるか、自分でも不思議でならない。

ノモソ、ン事件捕虜交換協定により、日本将兵の何人かが昭和十四年より昭和二十年までの六年間、事故もなく生活した事実を感じた。事件当時、現役兵であるならば、今八十三歳か四歳であるその人達はどうなったのか。静岡県静岡市の山本某氏。向こうで幸せな結婚をしたか、さもなければ日本へ帰国したか、これも気になるところである。気になるついでに、抑留途中シベリアの列車が長時間停車、大小の用便途中何の前ぶれもなく発車、取り残された兵士はどうなったのか。零下三〇、四〇度では生存の見込みは絶無であろう。シベリア抑留途中では、このような状況が随所に見られた。

愛知県 森 武雄

入所してから一年位過ぎ、病人も死者もやつと少なくなりかけ、ラーゲル内が落ち着いた頃から民主化教育が行われ始めた。友の会（会長 松原某）が結成され、運動が始まった。しかしまだ水面下で、目立った動きはなかった。

ブカチャーチャの收容所では、私がダモイする昭和二十二年九月までは目立った動きはなく、軍隊の組織がそのまま働いていたが、秋以降に軍隊の組織は全体的に解体されたと聞いている。

ノルマを達成しなかつた時の処分はなかった。ノルマを達成するとパンの増配やルーブルの支給などがあつたと聞くが、私が内地に帰つてからの、昭和二十三年になつて收容所内が落ち着いてからのことと思う。

どの労役に就くかの基準はなかったと思う。ソ連側が提示する労働者の数、種類によって本部が各中隊長と連絡をとって決定された。

本人からの申告より軍医の判断によって入院または兵舎でそのまま休養するということになる。労役に堪えられない者は入院させられたが、薬も食物もなく寝ているだけで、回復した者は少ない。

三重県 中森 讓

ウオロシロフより規模も小さな農場で数カ月いたら、突然十人位引き抜かれた。自分もその中の一人。マイクロ車で連れて行かれ、相当の遠距離を走って着いたのがロシアの首都モスクワである。今までの収容所の環境とまるっきり違う大都会、これでは今までの同志とも皆別れ、故郷へも帰れないと本当に思った。どうすることもできない。

立派な建物の中に入ると、ロシアの将校が出て来て「君達は今日から三カ月間、ロシア共産党の幹部教育を受ける、一生懸命勉強してくれ」と言って、待遇は抜群、龍宮城へも行つたよう。

たった日本人十人だけ、狐につままれたよう。住まいはよいし食事も上等、まるで留学生のよう。でも内心はものすごく不安。若い学生風の通訳がいるが、日常生活が違うし、故郷へ帰してもらえないとも思った。共産教育と言っても、そんなことは少しも念頭にない。好きでこの地へ来たのではない。

話の内容は分からない、全くどうすることもできない。時には若い学生風の通訳が、冗談ではあるが、ロシアへ帰化しないかとも、帰化して、ロシアの将校にするとか。故郷には家族が待っていてくれる、一日も早く帰りたい。少数の日本人、いろいろ話し合つて逃亡すら考えたが、逃げきれないのは重々知っている、できない。

生活環境が余りよいので、故郷のことを思いつつ日が早く過ぎたような気がした。

三カ月位だったと思うが、分らんことを毎日聞かされたがそれも終わったから、今度は国鉄のような汽車に乗せられた。どこから来たのか乗車してみると日本人が多く乗っていたのでやっと安心といったところ。モスクワから相当の時間、一昼夜位乗って降りたのがナホトカだった。

静岡県 小野一男

その頃、学習といつて、日本帝国主義とソ連の考え方(良いことばかり)の話、か、週一回くらい、定期的に行われた。いかに良い話を並べられても、だまされ続けて来たので理解できるものではなかった。ある時「ロスケが……」と言って、反動分子だとつるし上げられた。

岐阜県 中島正教

アクチブの活動

昭和二十一年も終わりのころになると、共産主義による教育がソ連当局直接でなく、「アクチブ(活動分子)」という、日本兵の中で社会主義的思考の者をソ連側が目をつけて結成し、赤化教育を施した構成員の集まりを作り、特別の待遇を与えて、一般兵を含め特に将校に向かって思想教育を開始し始めたのである。

かくて将校の反ソ、労働拒否の言動はいちいちソ連側に通報されるようになり、また『日本新聞』が張り出されるようになった。ある日、事務室勤務の青山軍曹が将校室に入るなり「私は今転出を命ぜられ直ちに出發いたします。理由は、将校の言動をいちいち報告することを求められたので断固拒否したところ、直ちに転出だと言われ、今出發します。このようにアクチブの力が強力になりつつありますから、皆さん十分注意して下さい」と言って立ち去った。このわずかな間に私は、軍曹に別れの言葉を述べた。軍曹は「少尉殿にお世話になった死亡者は二〇七人で、皆お経を上げていただきました、別に入院患者四〇〇余人おり

ましたが、そのうち二〇〇余人死亡で、第五分所としては四〇〇余人の死亡です。十分気をつけて下さい。お元気で」と。私は「お互い会うことがもうないかもしれないが元気でやろう」と言い、別れた。それが最後であった。その後、青山八郎軍曹は他の収容所の金網の張られた部屋に入れられているという噂が流れたが、確認はできなかった。

建制崩壊について、後日、懲罰収容所で他隊将校が言うには、「入ソ一カ年ほどのとき、所内で靴の盗難が頻発した。不審に思いよくよく監視させたところ現場を見つけ、盗んだ兵を調べると、『私は盗みたくありませんが、ソ連の将校から呼び出しを受け、兵士の靴を盗むことを命ぜられました。私も監視されているので命令通り行うしかありません』と告白した。ソ連側はこのような手段まで弄して建制崩壊に努めたのである」と。このようにして強制に反対する反動将校なるものが造成されてゆくのであった。

静岡県 今泉 茂

わたし達は一週間近くかかって赤旗がはためくナホトカに到着した。四月の上旬を過ぎてはナホトカは満目蕭条しやうじょうとした冬景色であった。それでも日差しは暖かく、海は心なしか春めいた色をたたえていた。ここではテント生活であった。毎日、日本軍捕虜の総指揮をとる民主委員のお歴々の煽動叱咤せつたにこたえて『赤旗の歌』『インターナショナル』の練習があった。元気がない集団は乗船を後回しにすると言ひ、反動分子のいる集団はもう一度収容所へ送り返すとすこみ、民主委員が各集団の練習の様子を見回り監視していた。皆帰りたい一心で使役のとき以外は、朝から晩まで声もかれんばかりに練習また練習であった。若いアクチブ（活動家）は「革命戦力を強化するために、なおしばらくナホトカに残って頑張ろう」と呼びかけていた。呼びかけにこたえて幹部候補生だったHは残留を志願した。

大衆討議（吊し上げ）

シベリア民主教育の総仕上げと称するナホトカの大衆討議という化け物には、これを経験した者でなければ、言語にも筆にも表現できぬ想像を絶した、空前絶後の一方的な地獄裁判である。泣き出して土下座する者、気が狂って海に飛び込む者の出るのも真にむべなる哉である。朝食後呼び出されて営庭に行く、千人くらいもいようか、中央前面の台を囲み革命歌を歌いながら、腕を組み手を振り足を振り、踊りながらぐるぐる回っている。すでに気の毒な先客が吊されている。しばらく見ていると「お前も」と台上に上らされた。また一人反動が来たぞ、彼奴は何者だ、何者でもよい、吊し上げの反動だ、そうだ、そうだ、やれやれと、氣勢を上げる。本部ラーゲリのアクチブの一人が、タワリシチ諸君！この男はしかじかか、かようかようか、昨夜我々がせっかく同志的温情をもつて救ってやろうとしたが、それも分からぬファシスト反動だ、諸君の温情で民主主義者として目覚めさせてやつてくれ、とアジる。後はただ聞くに耐えない罵詈雑言ばりぞうごんと怒号で、波の如く寄せては返し、渦の如くぐるぐる回りながら革命歌と訳も分からぬ踊りである。めまいがしそうになり目を閉じると、目をあけてよく見ろ！と大怒声。自分の目も自由にさせぬ。やがて終わりが近づいたのか、アクチブが再び上がってきて、どうだ、この多くの同志がお前を心配する温情が分かったか、分かったら今までの罪状を正直に告白して自己批判しろ、と決めつける。初めのうちは、何をぬかすと心中反論していたが、心身ともに疲労困ぱいの極に達し言葉も出ぬ。そのうちまたまた二人連行されてきたので、こいつは諸君の同志的温情がどうしても分からぬ憐れな奴だ、こいつのような反動はシベリアへ送り返して、白樺の肥になるまで働かすほかない。然り！ そうだ、そうだ、で最後はインターナショナルの大合唱で結び、一時間に及ぶ吊し上げが終了した。

午後になって腕章の若者がやつてきて、「私物を持って宮門まで来い」と言う。いよいよ来たたと観念して出て行くと、民主委員長以下昨夜の連中がいて、委

員長が「これからお前を第四ラーゲリに転属せしめる」と薄気味悪く笑った。残念至極なのは、その時まで持っていた、入ソ以来日記式に小さい字で克明に記載していた二千首に余る歌日記を、ペチカに投入されてしまったことである。

ナホトカ第一ラーゲリにはすでに先着の梯団がいて、異様な興奮に沸いていた。ナホトカ港は歩いて三〇分くらいのところにある。ここから第二、第三ラーゲリと順次に移って行く。第三ラーゲリは船が来れば即乗船で、それまでは待機である。

到着の翌日である。海中に用便するよう岸壁に作った厠で、波に戯れる廃物を見ながらうずくまっていると、隣りのタワリシチ（同志。すべて「タワリシチ何某」と呼ばねばならない）が話しかけてきた。昨日ここから吊上げられた若い元満軍の日系将校が気が狂って飛び込んだが、幸いにここは無人の時がないのですくい上げられて病院に送られたという。かわいそうに、四年間も苦勞してやっとここまでたどり着いたのに、日本人が日本人を死にまで追いやるとは……と、尻合いの気安さからつい話しながら波間に落とした。夕食後、梯団アクチブの一人が突然「タワリシチ諸君！この中に当ラーゲリの民主委員会を誹謗している者がいるぞ！」と叫ぶ。「誰だ、誰だ」「彼奴だろう、引つ張り出して自己批判するまで吊し上げる」「やれやれ！」と周囲に集まり怒号する。そのうちに本部アクチブが来て、「カントローラ（事務所）に來い」と連行された。

さほど広くない事務所には長机が一つ置いてあり、その中央に委員長、左右に委員、前に椅子が一つあり、その周囲は「民主青年行動隊」と腕章をつけた若い連中が立っている。ソ連側は一人もいない。示された椅子に座ると、委員長の右の男に「お前が稲見という反動スパイか」とどなりつけられたので「稲見」と答えると、「ハイと言え」と言う。「稲見だから稲見と言った。反動でもスパイでもないのにハイと言えるか」。「理屈を言うな。お前は関東軍司令部にいた准尉だということは分かっている。准尉という奴は兵隊から上がったくせに、威張り

くさって兵隊を一番苦しめた、天皇制軍隊の大悪玉だ」。「何を言う。見解の相違だ。殊に司令部の准尉、下士官等には中隊当番の兵隊と同じで威張る相手も苦しめる兵隊もいない、私を呼びつけたのは何の用だ」「お前は今日厠で、大勢のタワリシチに我々を、そしてソ同盟を批判しただろう、その糾弾だ。お前のような奴をこのまま日本に帰せば、日本民主化の妨害になる。ここで民主主義精神が確固不動のものになるまでたたき込んでやる。それまでは絶対に帰さんぞ。それとも自分の罪状を告白して自己批判するか」。「大勢とは何だ。隣の者に日本人として当然のことを言っただけだ。帰すとか帰さんとか君達に権限があるのか」。「あるのだ。屁理屈をこねんで自己批判しろ。帰りたくないのか」。「帰りたい。しかし、君達の言う確固不動の精神がすでに昭和二十年八月十五日までできていた者はどうするのだ。事、ここにまで来て偽りの自己批判などできぬ」と口を結んだ。喧々囂々、怒号、罵声、威圧、脅迫が続いた後、正面の委員長が判決を下した。

「よし、帰れ。明日大衆討議にかける」と。

新潟県 高橋吉郎

五月頃に入るとハラシヨラポーターは帰れるとの噂が流れて来た。良く働いた者は帰れるということであった。事実、その通りであった。小生は誰よりも先に帰れるものと思っていた。ところがある日、ソ連の政治部将校のもとに呼び出された。君は日本で特高警察官ではなかったかと言うのである。入所していた最初の頃、分隊長の篠原憲兵准尉から警官の前歴は身上書に書かないように、農業としておく方がよいと言われたのでその通りに出しておいたのである。当時、憲兵、警察官は反動である、これ密告した者は早く帰してやるということであったと言われ、部隊の中の同年兵が密告したものだと思えたのである。筆者はあくまでも外勤巡查で現職一年で召集されたと言ったが、当時、我が国の共産党徳田球一書記長からスターリンに指令が送られ、憲兵、警察官はプロレタリアートの

敵だから永久に帰さないようにとのことであつたという。有名な徳田指令である。

やがて十一月七日の革命記念日が終わると帰還者の名前が呼ばれて、呼ばれた者は天にも昇る思いで喜々としていた。筆者の名前は呼ばれなかったのである。これまでに誰よりもよく働いてきたつもりであつたが、これもやむを得ないことである。運命の神はそう易々と問屋がおろさなかつた。これからもまだ苦闘屈辱が待つていたのである。帰還の戦友は、思い出深い収容所を後に、長い苦闘屈辱を乗り越えて喜々として収容所の門を出た。元気でなあ、頑張つてくれ、必ず帰れるからと力をつけてくれる。地獄の苦しみを耐え抜いた戦友同志達であつた。生死を超越した仲間であつたのである。手を振つて後ろを振り返り振り返り見えなくなるまで見送るのであつた。

昭和二十四年四月頃と記憶しているが、ソ連の高級将校が我々に訓示し、諸君は我が国ソ同盟の労働学校を卒業したと言うのである。何を言うかと反発したが、今考えてみると、昔から若いときの苦労は買つてもしろと言われている。これ程の苦労はほかにないだろう。おかげ様で草を食うても生きていけるといふ自信がついたのである。戦友の中には、これはダメイの挨拶だと言う者もいたが、小生はまだまだ帰れないと思つた。案の定、チエレンホーボを出発することになつたのである。雄大な眺めのバイカル湖を過ぎ、雲つくばかりのウラル山脈であろう、紫色に輝く実に美しい眺めである。どこまでも続く花園、初夏の風が爽やかに頬をなぞる。

思い出深いイルクーツクを過ぎて、着いたところはハバロフスクの炭鉱で、ライチハという所であつた。

我々はチエレンホーボの炭鉱の収容所に送られた。そして憲兵、警察官だけの作業隊となり、北海道警察本部の浅川巡查部長が作業隊長であつた。憲兵曹長もいたが隊長に指名されてなかつた。

和歌山県 南口佐一

俘虜が俘虜を 日本人が日本人を裁く

昭和二十二年頃、ソ連政府は健康そうな日本兵を、将校を除きある所に集め、十分な食事を与えて作業せずマルクス社会主義の教育を教え、その者達を各収容所に四、五人配置し、レーニン、スターリンを神のごとくたたえて作業の行き帰りに赤旗やインターナショナルの歌を歌わせ、夕食後「日本兵が多く死んだのは、日本の糧秣係が糧秣をソ連人に横流し、そのため皆の食事は乏しく多くの犠牲者が出た。それにより今から人民裁判を行う」と言い、糧秣係を呼び出して「この者は皆さんの食糧をソ連人に横流しし、皆を苦しめた」「そのことに相違ないか」、皆が「そうだそうだ」とやじつたのです。それに反対でもすれば帰るのが遅くなるので、「そのとおり」と全員が発言し、その軍曹の日本糧秣係は認めるほかなかつたのです。「その罰により、ただいまから朝晩の便所掃除」「それを皆に報告せよ」「食事半食」「胸に肩章をぶら下げよ」との判決で、可哀相なのはその軍曹で、日本兵が日本兵を裁いたので。裁判にかけるのはソ連人ではないか。それなのに私達も同意したのです、情けない哀れなことで、これが人間の本性か、と胸に手を当てる。その軍曹は朝晩二回便所掃除をやり、「○○軍曹、ただいま便所掃除終わり、帰りました」。本当にむごいことでありました。日本人は相助け合つてこそ同志なのではないか、環境変わればこのようになるのか。

収容所内の組織再編

富山県 菊野末一

炊事要員の再任命、理髪店一人、衣服修理業一人(普通の日も作業に行かないで被服の補修をする)。建具屋を一人残し収容所内の窓や椅子、寝台などを修理補強する。

文化部長は、昼は壁新聞を手書きで作成して、掲示板に張り出し、夕食後劇団員を集めて翌週日曜日の演芸プログラムを作り練習する。

楽団は、ヤミ市場で買ったアコーディオン、バイオリン、トランペットの他、手製のドラムセット(おけを補強し輪切りにしてシート生地を張り、紐でしっかりとシート生地を引っ張り、良い音の出るまで締める)。シナリオを書く人を募集し、「資本家と労働者の紛争」「地主と小作の紛争」などをテーマに毎週実施した。楽団も下手ではあるが何も潤いのない収容所生活だから、みんな「異国の丘」などを合唱しながら日曜日のひとときを過ごした思い出は忘れられない。みんな一人残らず元気で祖国に帰るんだぞうと叫びながら……。

収容所が明るく規律正しく生まれ変わったと思われたが、相変わらず一週間分の食糧を受領して貯蔵してある倉庫に盗みに入る者がいた。発覚すると人形裁判が夕食後招集され、その中に呼び出される。委員長は罪状を述べ、どのように処分するかと聞く。ひどい発言になると「殺してしまえ」などと暴言を吐く者もいたが、委員長がなるべく穏便にと発言し、当時としてはつらかった「炊事用の水くみを十日間」とか「トイレの糞柱を倒して車に積み裏山に捨てに行く仕事を一週間」とか、夏は死亡された方の死体が泥から現れるので「さらに土かけ」などの作業を監視員つきで命令され実行させられた。委員長はいつも温和な顔で「みんながそろって日本に帰る日を待っているのだから理解してあげよう」と結んだ。

新潟県 高橋吉郎

日曜日になると反動吊るし上げが行われた。満州国の建国大学教授とか北海道警察部長など、偉い人が引き出されて自己批判せよと憎々しそうな顔をしたアクチーブと称する者が吊るし上げをやっている。何を考えているのか、同じ同胞ではないか、はたから見ていると浅ましい輩にしか見えない。彼等ほ祖国へ

帰って何をしているだろうか、疑わしいものである。

岩手県 鈴木良雄

昭和二十一年九月ころ、二十人ほどで「友の会」が発足し、我々とは離れた所で研究活動が始められた。しかし、一般には関心がなく、収容所内の変動は何もなかったが、間もなく、政治部員の出入りが頻繁となり、当方の特定の人の接触が公然と行われるようになった。それと同時に、ウソともマコトともつかぬ帰国のうわさが立ち始め、友の会が解散して「民主同盟」に発展してからは次第に運動が強力になったのである。そして、この運動の初期において我々の軍組織は初めて完全に解体され、しかも、手のひら返しに階級、敬称が撤廃されるに至ったのであった。

永い間厳正をきわめてきた規律はともかく、習慣づいた敬称呼びを一日にして「さん」呼ばわりすることは、捕虜の身とはいえ至難なことであった。うっかりいつもの癖を出すものなら、組織委員に反動分子呼ばわりされ弾圧を受ける始末で、一時は無秩序状態に陥った。しかし、ソ連政治部員を後ろ盾に、活動分子(アクチーブと呼ばれた)によって鎮圧され、ソ連式民主主義のもと一つの新しい驚くばかりの秩序が確立されたのである。それはまた、民主同盟から「反ファシズム同盟」に発展改称するに至って、恐るべきものにエスカレートしていったのであった。

その経過はソ連式裁判所構成による裁判官、検事・弁護士といった名で、反対意見者、無関心主義者を反動分子として引き出し、集団の面前で徹底討論をする。つるし上げの責めつけは夜を徹して行われ、被疑者にされた年輩の召集兵なども、土下座して反省の誓いの言葉を泣きながら語る。この成り行きを見守る一同は、次は自分が呼び出されるのではあるまいかとの不安を顔に浮かべ、互いに無視し合う者、余計に騒ぎ出して軽蔑の色をみせて「ぶく者」もあり、かつての友の間に不信感の暗い影が落とされ、戦友といえどもうかつな言動は許

されない事態となった。

委員長は、帰国中止の権限までも口にする権力者であった。ソ連邦の国力強化なくして我が祖国の復興は達成できない。我々は「祖国革命上陸軍」になると息巻く親ソ派、帰国の手段としての運動であるべきとの理解を秘めたグループ、これらが表面上では完全に一体となつてこの思想運動が展開された。

このようにして思想運動がソ連流啓蒙により拡大発展を続け、その思想改変の程度が帰国(ダモイ)の時期を左右するとうとうわさも伝わり、事実、帰国のためナホトカに集結した集団が帰国中止となつて、再度シベリアの奥地に逆送され、労働と思想教育に服しているとの話も聞かされた。

過酷な労働と最悪の生活環境の中で生命を取りとめた者にも、一難去つてまた一難で、いじめ同様の強制的親ソ派の思想運動は、帰国時、ナホトカの港を離れるまで過激に続けられたのだった。

船が日本海の間点を通過したころであろうか。明日の今頃は舞鶴だと私たちグループは上甲板にいた。夜も更けて、月こそ見えぬが満天の星空のもと、ないだ海はあくまでも心地よく、甲板上には多くの戦友たちが涼風と親しみながらにぎやかに談笑が続けられていた。

突然、船尾の方から荒い声がする。近寄つて見ると、十数人に囲まれて、中央に三人ほど正座していた。

「我々は祖国に帰れるが、亡き戦友の遺族には何と申し訳をするのだ！」

「遺族に合はず顔があるか」

「遺骨が帰れなかったのはきさまらの責任だ」

「ソ連の言いなりにしたのは誰だ」

「とにかく、遺骨を持って来い！」

「この海を渡つてシベリアへ取りに行け！」

「何が祖国への敵前上陸だ！」

けんけんごうごうたる暴言の連発で、多少の暴行もあつたようだ。

当然、かの地での思想運動にまつわる遺恨のからむ事件だった。いかなる場合であれ、自分自身そのものである物の考え方、思想を強制された押さえることのできない圧力が、戦友の遺骨を置き去りにしたという、ざんきにたえない感情とともにね返つたものだった。

正座した三人はわびの言葉で頭の下げ通しである。時が変われば立場も地位も平等である。だれ一人として仲裁に入る人もなく、一時はどうなるかと心配されたが、しばらくして事なきにおさまり一件落着した。

茨城県 須藤富之助

さてこの収容所で驚いたのは、隊長は将校級の者ではなく兵卒が実権を握つていたことである。今までは何力所の収容所にあつても、作業現場においても一応の秩序は保たれていたし、隊長たる者は責任者としての任に当たり、統率してきたのである。ここにおいて初めてその秩序が保たれなくなった異常さにはただただ啞然たる思いであつた。

この収容所は完全に崩れていた。一兵隊と二人のロシア語の達者な者の仕組んだものだった。入所に当たつて通訳を通じて責任者は「俺だ」と言うことで、ソ連の所長との取次ぎとなつたのだらうと思われる。隊長そして通訳を副官として収容所を取り仕切つた。一介の兵隊がソ連の当所長にさも当然のごとき体裁をしてやつてきたとは不思議でならぬ。

この収容所の労働に耐えられずに逃亡した者もいたけれども、当然果たせることなく数日後に連行され厳しい仕打ちを受けたが、やむにやまれずの行為であつたのである。

ソ連兵と本部の隊長、副官及び幹部との癒着などが長い間続いた中で一般の我々の苦痛は惨めな生活が続いた。そんな中で収容所の内部においての雰囲気

が変化してきた。ソ連の上級将官に分かつてきたのだ。収容所の様子のこと、それと我々と行動を同じくしてきた大西中尉がいたが、若干ロシア語も話せたので実情等も訴えたのである。早速ソ連の収容所担当の兵隊の更迭、それから収容所の幹部ですべてうまくやっていると同胞を苦しめてきた隊長、副官及び幹部数人は他地区へ転出させられた。これによって収容所内の空気は一変した。

いよいよ一カ月間のナホトカ行きの旅が始まったのである。駅に停車する場合は食事の配給、それから燃料の補給、それに生理的現象による排出作業が行われた。無罪放免となった抑留者も意気盛んであった。全国からの集合体であるからお国自慢の話、特産品そしてまた食べ物で車内は大いに盛り上がった。

不規則な運行で、駅によっては一晩じゅう停車していたような運行であった。夜間ソ連邦の首都モスクワに着いた。さすがに首都だけに強烈な印象を受けた。こうこうとした真昼を思わせる偉容であった。十日も過ぎたところからソ連兵の監視も緩やかになった。駅に着いたときなどは外に出て新鮮なる空気を腹いっぱい吸うこともできた。

毎日変化のない旅が二十日以上も過ぎたころだと思われるが、ハバロフスク駅に着いたとき、ソ連の兵隊が何か後方にわめいているので、何か不安な思いで様子うかがっていると、一隊が下車させられたのである。長い間ウクライナ地方において苦労を共にしてきた同僚が、ハバロフスクの収容所へ入所させられるということである。「リスト」に上っている警察官とか憲兵とか補助憲とか、そのような人だと言われていた。十月一日に発車して二十数日も走ってきた。もう間もなく目的地には着くだろう。もう飽きてしまっていた。

ちょうどそんな折、本部車両からえらい連絡が入って来た。それに対して一同は憤慨した。ソ同盟をたたえる同盟歌を歌わなければならないというのだ。偉大なるソ連国家マルクス・レーニン主義に共鳴し賛同していく表示である。それをやらなければ内地帰還はできないし、ナホトカに着いても戻返され他地区の勞

役に服さねばならない。

そんなこんなで超遅い列車であったが遂に十月三十日午後十時ころいよいよ待望のナホトカ港に終着した。

引揚船「高砂丸」内でトラブルの起きたことも記しておかねばならない、ウクライナのある収容所において自分の地位を利用し同胞を苦しめた当所幹部(前述した収容所の場合)、逆境の中での耐えに耐えて生き抜いてきた者からすれば恨みは骨髄に達していたのであるから、そんな者たちはこの時ばかりと爆発した。横暴の限りを尽くした者に対しグループを組んで徹底的なる制裁を加えたのである。果たして犠牲を強要した者が悪人として裁きを受けるべきか、立場上ソ連の要求にやむなく応じなければならぬ場合があったのである。全収容所において行われたとは思われないが、自分たちが関係した収容所にまれにあったことは何とも悲しいことである。

茨城県 和知義美

他に何も無い状態で活字に飢えていたから、日本新聞などが唯一の読みもので、これがいわゆるマインドコントロールの道具となったのか。私は洗脳されたとは思っていない。

確かに身の回りには社会主義の優位性とか、解説、宣伝のパンフレットばかりでしたが、一方、身近に見るシベリアの生活や風景はむしろ計画経済の欠点みたいな例が少なくなかった。特に教育の低さが目につき、なんでこんな連中に負けたのか割り切れなかったものだ。

町には建物がまだいくらかもできていないのに窓枠がどんどん運ばれて山積みになつていたり、青空市場の貧しい品揃えを見て考えさせられたものだ。

都会に遠い一寒村の見聞でソ連のことを云々するのはどうかと思うが、地方人とも囚人ともわからない人たちが、酷寒の地で我々と大して違わない食料で

働いているのを見ると、この国は？」と首をかしげてしまう。

しかし、日本新聞の紙面からは、生まれて初めて感動というか、そうだ！というものがあつた。たとえば「天皇制」「階級」などという言葉は見たことも聞いたこともなかった。

初年兵のころ、大急ぎで軍装を整え宮庭に整列。「天皇陛下の命により陸軍大尉〇〇を大〇中隊長に任ず」。ラッパ吹奏。命下布達式であるが、なにをこのくそ忙しいのに！と舌打ちしていた。内務班でぶん殴られるときも、これは朕の命であり有りがたく殴られなければならない。不動の姿勢で「お世話になりました！なんて狂った社会だ。

民主運動について

ソ連抑留者にとつて民主運動は必ず通る関門である。真剣に受け入れた者、その場限りのおつき合いのようなあるいは全く反感を持つて受け付けなかった人もいただろう。私は進んで理解しようとしたし、前にも述べたように、社会主義・共産主義とはすばらしいものと受け入れました。

第一段階に、旧軍組織が否定されたこと、大いばりしていた曹長・軍曹が舍内当番になり、仕事帰りの我々に「ご苦労さんでした」なんて挨拶するようになり、皆から選ばれた人が団長となり、収容所の中が自主的に運営されるようになり、明るい雰囲気になったことは、運動を素早く広げるものになりました。

ここでは反軍闘争とか激しいことはなかった。あつという間にソ連が将校を他へ分けてしまったのだ。軍医はいい人だったので残念であつた。

講習会帰りのリーダーは何だか天下りの感じではあつたが、委員の選挙とか集会などやっているうちに落ち着いた。そうになると、寝てもさめても民主主義である。うまい歌なんかもできていて、これでいかなないと皆から浮きあがつてしまうみたいになる。

侵略とか軍閥、封建的絶対主義天皇制あたりはわかつた。史的唯物論なんて

ものが出てくると、もう物すごい。革命ついでうものは大変なものだ……。

困ったことに私はほかの活動家のように「なんとかなんとかでガンバロウ！」なんてアジはできない。勉強会では居眠りで、真剣でない、と批判される。「同志〇〇」とお互いに呼ぶことになるが、何だか照れくさい。やっぱり「〇〇さん」だった。

私にできることは、せいぜい壁新聞をかくことぐらいだ。記事も苦心したが、絵の具が大変だ。赤は煉瓦の粉、緑や青は植物、黄色は泥柳の皮、紫はヨードチンキに飯粒をまぜるとヨウド澱粉反応で紫になる。壁絵をかく絵かきさんに聞いた。たりした。

スターリンへの感謝決議・署名運動

民主運動もここまでくると誰かの作為を感じるようになる。しかしこれが大まじめに実施されたのだ。私は筆作りをした。毛皮の外套(シュール)からとった、硬軟いろいろの毛をまとめたが、ひどいものでした。偉大なるソ同盟・スターリンということで、これに賛成しないと反動分子となるわけである。帰国を目前に「ふみ絵」のようなものだ。誰が考えたものか民主運動の総仕上げ、みんな署名はしたが、リーダーの民主委員でも本当に感謝していただろうか？ 作業もしないで保障された地位にいた者は、その点を感謝したろうか？ 日本人としてこんなばかげた騒ぎには苦々しく思っていたのではないだろうか。

捕虜だから仕方がないと思っていたが、実は国際法違反であり独裁者の一言で抑留が決まっていた、そんなことを知らないで操作されていたわけだ。シベリア民主運動の行き過ぎというか、率直な発展をねじ曲げたなにかが……。

反軍闘争から民主化、その先はソ連の政治指導か

どこまでがよくてどこから行き過ぎとは区切れないが、まず旧軍体制が否

定され、階級がなくなったことは大改革だ。最下級の兵士は地獄からの解放だった。

自主性ということで、食堂は金券なしで食事が出たり、遠い作業場にも温かい昼飯が馬車で届けられるようになった。宿舎も軽作業者が清掃したり、天井壁は石灰で真っ白に塗ったのでぐんと明るくなった。このあたりは民主運動もいいものだったのだ。

「プロレタリアの祖国・ソ同盟の建設」なんてスローガンが出てくると、日本人捕虜がなんでロシアのために尽くすのか。しかし、これを疑問に表したり、ためらったら、これは日和見主義者であり、反動分子とみられるから、そんなことは話題にしない。

わずか三カ月の地区講習会から帰ると、たいした理論家になり、ソ同盟の社会主義に学べなどとブチあげる。そんなときには「同感！」「賛成！」と共鳴しなければいけない。これには困った。わけもわからないで「賛成」なんて大声をだすのは苦手だ。

相互批判というのは、先にやったほうが勝ち。勉強会で居眠りしているのを見つけたら、同志〇〇は熱意がない！と指摘する。昼間の作業で疲れているのに欠席もできない。

「民主運動とはつらいもの」「こんなことはお互いあまり口にしない。誰に聞かれるかわからないから、帰国のことや故郷の話で過ごすのだ。」

タシケント市の日本人民主教育

入所以来三度目の正月(昭和二十三年)が過ぎたころ、私と他二人が民生委員の推選によって民主教育学校の教育を受けることになり、タシケント市に向かいました。学校は郊外にある捕虜收容所内にありました。生徒は各地区收容所から派遣された四十人ほどで、別棟に四班四室での同居生活です。日課として

新潟県 佐藤正平

は作業、使役はなく、午前午後とも講義、夜は自習とかテーマを決めての討論会、反省会等をやっていました。講義課目は日本歴史、世界情勢、日本共産党と労働運動、マルクス・レーニン主義、ソ同盟共産党史など。講師は日本人四人と、ときどき朝鮮の方一人が担当していました。この教育は四、五カ月ほどだったと思いますが、私も含めて皆真剣に勉強討論し合いました。教育期間が終わった時点で私は新たに史的唯物論などの知識を得たこともあって、日本の天皇制教育、忠君愛国、大義等の思想に矛盾を感じたことは確かです。

ナホトカ港での民主運動

ナホトカ港の港湾工事中、帰還船の望見もあり、皆の気持ちが悪くない面もありましたが、反面、民主運動は加速してきました。民主教育も盛んになり、收容所内にも養成所ができて生徒を募集、専任指導員と起居を共にして民主教育が行われました(もちろん港湾工事には従事)。そして他の全員に対しては各班ごとに教育担当者が設けられ、その担当者に民生委員の教育係が毎週一度本部(日本人代表民生委員会)に赴き教育を受けて帰り、教育指導を行った後、担当者が班員に教育をするという仕組みになっておりました。

また、本部に民主リーダー養成所があり、各地区から選抜された者が参加し、教育を受けました。期間は二カ月と短期間でしたが、タシケント市の民主教育修了者より闘争的というか、いかにも革命者らしく活動がより積極的に展開されるようになりました。

従って收容所内の民主運動もより活発となり、並行して頻繁に批判集会(いわゆるつるし上げ)が行われるようになったのです。

この批判集会の矢面に立たされるのは、元特高、憲兵、警察官であり、次に標的にされたのが窃盗者、サボタージュ者、民主運動の妨害者などでありました。行き過ぎの面もあったようです。

昭和二十四年も半ば過ぎたころ、日本新聞でスターリン大元帥感謝署名文

をささげようというキャンペーンが始まりました。九月ごろでしょうか、我々の収容所でも進められ、ある日署名文を納める箱物が公開されました。日本の神社を模型したもので、カヤ屋根、柱、畳、鳥居などが精巧・緻密に造られており驚きました。感謝文は巻紙に筆字で書かれており、署名は半紙一枚に二十人の筆連書です。皆順番に緊張した面持ちで署名していましたが、果たして胸中はどうであったのか。

岐阜県 早川芳美

マルクス・レーニン主義を押し付け、帰国したら共産党への入党、併せてスターリン崇拜を強要する連中の行為は、同じ日本人として感情的に賛同できなかつた。またシベリアへ来て以来の多くの戦友の悲惨な最期を思うと絶対共鳴できなかった。共産主義の本家ソ連は口に民主を唱えながら、一党独裁に反対した者はシベリア流刑、はなはだしきは処刑抹殺と独裁である。

異国の地で亡くなった多くの戦友を厳寒の荒野に一糸も纏わせず葬らせ、ひそかに採った遺髪さえ取り上げてしまった非人道的思想。「平和」の名のもとに周辺の弱小国家を自国の意のままに従わせる大国主義。我が国に対して日ソ不可侵条約を一方的に破棄し、北方領土を占領し、我が国固有の領土を返還しない膨張主義、これらはすべて共産主義国家ソ連の本質ではなからうか。

高知県 東山 林

この頃から民主運動が表面化し、若い隊員の中には進んでソ連側の集合教育を受けて、アクチーブとなり、民主運動の主役となってその任に当たりました。

私は残留隊員となり、他部隊に編入される形になりましたので、これを機として、もう表面へ出ることなく、一隊員として働く決意をしていましたが、過去の経歴（職業軍人としての下級幹部であり、今までずっと人事管理を担当してきた）を消し去ることができず、アクチーブからは、伐採作業が終わり夕食後全

隊員の前で、「軍国主義者、反動」ということで机の上に立たされ、あること、ないこと罵倒を浴び「ツルシアゲ」されたこともありましたが、これも民主運動の一つとして集団を運営していくため一つの芝居であると受けとめて、隠忍自重して反論することなく無言を通しました。

山梨県 桜井彦寿

民主教育と青年行動隊と

昭和二十一年八月頃からシベリアでも収容所ごとに「日本新聞」が配達され、当時のプロレタリア革命とか共産主義とか民主主義教育が始まりました。私どものように天皇陛下の赤子として誇り高い軍人生活をしてきた者にとつては別世界の見聞でしたので驚きましたが、それだけに珍しく、これもいい勉強になると思つて真剣に勉強しました。よかつたことに、私どもの作業隊（ブルガード）は収容所一の働きの小隊だけに、民主主義運動の実践者ということで民主教育宣教者も私どもには一日置いていたので助かりました。

そんな作業成績を評価されてか、私どもは昭和二十二年夏、チタからハバロフスク第三収容所に約百人の同志とともに転属させられました。そして任務は民主主義運動の展開ということで、作業成績の上がない職場に私どもの作業隊が行つて一緒に働き、工夫と努力によつてその職場のノルマの成績を上げるといふ大変な仕事でしたが、「青年突撃行動隊」とおだてられながら、真剣に働くことの大切さを私自身にしみ込ませたよい体験の日々であつたと今にして思つています。

昭和二十三年五月末頃、私どもハバロフスク第四収容所全員に「東京ダモイ」の命令が出されました。私どもはこれまで何回か「ハラシヨラポータ（働き者）は早く日本へ帰すぞ」と騙されてきたので、「また嘘か」と思つていたが、翌朝、非常呼集で駅まで行軍、駅でまた家畜貨車に詰め込まれ二日ばかりでナホトカまで移送されました。今度こそ帰れるぞと喜んでいると、ナホトカでは第一から第

三までの「共産教育課程」に合格した者でないと帰国させないということ、私どもはそれから三週間も「プロレタリア教育」を受け、「赤旗の歌」や「インターナショナルの歌」などを練習して、「日本革命の戦士としての資格が与えられた」上に帰国が許されたわけでした。

宮崎県 田代 香

ナホトカ港に着いた。十一月のソ連はもう実に寒い。収容する建物は限られている。各地から集まった集団で幕舎にも入れなかった者のうち、ある朝、今までに体力、気力共に消耗し尽くしてしまったのか、二人の者が凍死していた。乗船を直前にしての悲しい出来事である。

乗船まで一週間余り、いわゆる民主グループと称する連中が、連日民主教育を行っていた。「将校は前に出る」「資本家、社長は前に出る」「毎回全員土下座のまま、強い調子の彼らの話を聞いている。彼らの言う「天皇島上陸作戦」の第一歩がいよいよ実現した。

兵庫県 田中康夫

地区の民主委員会が行進歌を募集していると聞き、応募する。二席に入選した。時々、作業の往復時に皆が歌ってくれた。一人ひとりに嬉しかった。曲は誰もが知っている。「男なら……」の曲を借用した。夕食後、隊内で反省会なるものが開催される。助言進行するのが地区の政治教育を受けたであろう、議長である。青白い顔で神経質で、笑顔の見たことのない陰気なリーダーであった。反省会は、テーマに基づいて各自が発言する。他人のことでも容赦なくあばいて、本人の反省を求めるのである。ある日、「同志田中は軍隊の地位でも、また社会人の時の身分などでも、もつと活発に発言したり行動する能力があるのに、日々の行動が消極的すぎる」と反省を求められた。これは困ったことになったと思いつつ、何とか反省の弁を並べて切り抜けた。ある日の反省会の席で、作業出発前の朝礼

時に行っていた「政治情報」をするように指名された。これは週一回各隊から交替で行っていたと思っている。何一つ情報のない収容所の中では、頼りになるのは「日本新聞」だけである。食堂に置かれていた新聞の数カ月分を読みあさり、二十三年暮れの零下二〇度を越す中、朝礼台上り、約十分近くもしゃべったと思う。自分は一生懸命だが、聞く方は面白くも何ともない話で大変な苦行であったと思う。

鳥取県 原中宜夫

天皇制の打倒！等と言って、教育勅語で育った我々にはなじめない啓蒙活動が活発に展開されていた。その中心になっていたのがH委員長で、新たに反ファシスト委員会なるものを立ち上げ、第十九地区委員長としてその権力を一手に握り、「十九地区のH天皇」と恐れられていた。

しかし、おごるなんとかのとえ通り、間もなくH委員長はその行き過ぎた指導方針のため、あるいは何らかの不正があったのか、H委員長一派は批判追及を受けて失脚し追放された。

かわつて新たな組織「民主主義委員会」が、若手グループの青年行動隊が中心になり、作業班長はもとより、大隊長、中隊長などの全ポストを占め、収容所日本人捕虜の組織を掌握運営するに至り、軍隊の階級組織は完全に消えた。人々は一時「さん」付けで呼び合っていたが、その後は「同志、同志」と呼び合います。ますます運動は活発化していった。

我々軍隊の下級者にとり、軍隊組織がなくなることは大いに歓迎するところであったが、一難去つてまた一難、階級闘争という重圧が加わることになり、いささか閉口ではあった。余暇には、当然のことながら「日本新聞」の輪読会、政治研究会、批判会等々、各種の集会に駆り立てられた。この頃にはもはや好むと好まざるとにかかわらず、すべてが民主運動にかかわりを持つしか選択肢はなかった。

反抗はもちろん、非協力、無関心、無気力すら反動として批判追及的にされ、吊り上げられた。将校(かつて無慈悲な取扱いをしてきた者は特にひどく)、憲兵、特務機関員等であった人たちは、日本帝国主義の手先だったとして格好の対象とされた。(この後、将校、憲兵、特務機関員等は、收容所の一部の建物を新たな塙で囲み、一時ここへ收容されていたが、他へ移された)

神奈川県 北澤治雄

洗脳とは別に、戦前に日本共産党弾圧や軍への協力、反ソ活動などをした者に対する挑発は苛烈執拗に行われた。私なども月一回くらい呼び出されて尋問を受けた。担当者の制服が一定しないので、どういう職種のか分からなかったが、ハバロフスク集結後また呼び出されたときは検察官だと思った。

「お前は起訴はしないが、対ソ積極分子である」と宣言された。五年間にわたる執拗な取調べの中でも、私には忘れられないことが一つある。それはある日の尋問で、私は行政官として農産物出荷のために道路建設をしたと述べたら、調書の署名に際して聞くと「関東軍の作戦のために道路建設をした」となっている。私は多少露語が分かったので署名を拒否した。すると通訳していた朝鮮人が拳銃を引き抜いて私に向けて「敗戦国民のくせに生意気言うな！」と言って発砲した。弾は私の後ろのドアを引き抜いた。私はこの侮辱を決して忘れない。

この卑劣な洗脳活動の端的な例を挙げておく。それは、やつと帰国列車に乗りハバロフスクを出た貨車の中で、例の執行部が「スターリン大元帥に感謝状を贈呈する」と言つて、立派な巻物に署名するようにと達してきた。しかし断固拒否した人が何人かいたが、長い列車だから何人か分からなかったが、私の車では私ともう一人が断つた。すると、列車が相当時間とまると集会が開かれ、「署名拒否者は帰国させるな」とアジっていた。さすがにこれを理由に帰国できなかつた者はないようだった。しかしナホトカ出航直前に何人かがストップになった。その中に私の友人がいたが、後にあちらで病死したと聞いた。

戦前、私はソ連研究の機会を与えられたことがあったが、党活動の公式を三段階に要約できるとした。一は共同闘争、二は相棒打倒、三は独裁確立と整理できたが、その通りだと思つた。初期は進歩的、プチブル的インテリによる啓蒙活動、第二段階ではほんとの労働者、農民の行動力ある者の蜂起、第三は眞の指導者に対する権力付与、いわゆる弁証法的な組織法なのであった。

この第三段階の活動は目覚ましく、毎日作業の前にはアジがあり、保守反動の暴露、吊り上げが猛烈になってきた。アクティヴという行動隊ができて、かつて先輩・上司・友人をも吊り上げる日が続いた。これは噂だが、他の收容所で自殺者が出たということも聞いた。無論、この連中は今思い出しても怒りが噴き上げてくるが、反面、人間の弱さをつくづく感じた。

ある友人が前職の関係で余りひどくやられるので、「適当なところで妥協して命を持つて帰ろう」と言つたが、その人は「自分は世界史千年の批判に耐えたい。これだけの日本人の中に一人くらい文天祥がいてもいいではないか、私はもう覚悟している」と答えられた。その人は私の帰国後、更に十年ほどして帰国した。この吊り上げに、ソ側は表面上全く関与しない。ただ、吊り上げられた人の中には暮夜ひそかに転出させられた人も何人かいた。

数日後、私を含めて三人が呼び出された。見ると、戦前からの知人で満州国治安部参事官だったN氏、知人ではないが関東軍宣伝部軍属のS氏である。Nは委員長、Sは文化、私は政治宣伝ということで民主委員会執行部を構成せよ、労働は免除と。捕虜貴族である。私は共産主義を未だに信じていないと言つたら、先方の言うことが意外だった。

共産主義ということは一切言わない、宣伝をしないように、ただ日本文の立派な装幀の部厚な本、「ソ同盟共産党史」を解説すればいい、具体的には各バラツクを巡つて本の解釈だけをやれというので、私は拒絶もできず引き受けること

にした。

今思えばいささか恥ずかしい話だが、この党史の第三章の史的唯物論は、学生時代よく読んだし、いささか得意でもあったので、(私はこの読書のために憲兵の調べを受けたことがあった)捕虜貴族の後ろめたさを覚えながらもやっていた。

ほかに委員会としては壁新聞の発行、各種スローガンの提出、S氏は演劇とか楽団を組織していた。この文化活動もイデオロギッシュなものとはソ側からとめられたので、「国定忠司」なんかやっていた。壁新聞の方も、私はうろ覚えの日本の民話などを書いていた。

しかし三カ月くらいたったある日、突然、三人は一室に監禁された。ソ側の将校が来て「君たちはブハーリン的民族主義者で反動である。直ちに執行部を改組せよ」と言うではないか。これには全くびっくりした。何が民族主義なのか、ブハーリンなのか、少しも説明はない。監禁は三日ほどで解かれて、またシャベルを担いで作業に出た。

新しい執行部ができていた。この人たちは皆、小学校くらい出た工員や消防士の前職者であった。消防夫氏は、いわゆるスタハノフツァー(労働英雄)で大きなパンを支給されるたくましい青年であった。

このいわゆる粛清からはつきり共産主義を表に出し始めた。たとえばメーデーで所内に横断幕を掲げるときに、執行部はプラウダの地方版のスローガンを用意したら、中央紙のものに書きかえを命ぜられたりした。私はその後、一、二回移動されて、またチェレンホーボに戻ったときには、また別な執行部になつて、もう年配で、しかも思想的にはラジカルな人たちが構成され、いわゆる反動征伐が始まっていた。

捕虜にとって、空腹も労働につらいことだが、何とか命をつなぐ手だてもあるが、人間、良心の自由を無視されるのがどんなに屈辱か、悔しいか、思想としての共産主義を押しつけ、具体的活動を要求し、ソ連に忠誠を、天皇制否定、反

米活動謀報を約束させる。それを、父母妻子のもとに帰るのを絶対唯一の希望としていた私たちへの帰国の条件とするしかも、この洗脳活動を捕虜同士にやらせる。

中国に「豆がら豆を煮る」という詩があるが、いわゆるアクチーヴと称する一群の日本人がいた。きわめて計画的に執拗に酷薄に強制する。私はこのときほど怒りと恥ずかしさと、そして絶望を覚えたことはない。ここで私は、私自身も身をもつて経験させられたことを述べる。

入ソ二年目くらい、ある日、二十人くらいの者が呼び出された。いわゆる学校出のインテリたちだ。そして次の三問について小論文を提出せよという。

一、戦前の日本政府への批判

二、ソ連に対する見解

三、今後の日本の体制について

お互いによい点を取って、一日も早くダモイ(帰国)に乗らなくてはと、せいぜい気に入るようなことを書いたと思うが、私の記憶としては、

一、日本の軍国主義の批判排撃

二、ソ連共産主義の実体をよく見きわめたい。全世界が注目している。

三、天皇制政治制度は廃すべきだが、天皇制そのものは否定しない。

特に第三の問題については何度も聞かれたので、よく覚えている。

三重県 太田 勇

入ソして半年ほどたったころ「日本新聞」という日本語の活字でタブロイド版の刷り物が配られました。食物だけでなく活字にも飢えていたので、みなむさぼるように読みました。発行所も発行者名もない新聞です。記事はソ連の戦後復興の様子とか日本の政治を批判する文章が所狭しと並んでいます。私たちはその内容から、ソ連の宣伝機関の発行でソ連人の書いた記事だろうと想像してしました。ところが、しばらくしてこの新聞に日本人の書いた記事が載るようになり

ました。その人の名は諸戸文雄といい、大變筆の立つ人で、文意明快説得力を持つ記事でした。月一回ほどの配布でしたが、手元に届くとこの記事を真つ先に読んだものです。文の内容はソ同盟(ソ連の正式名称)の礼賛と米軍政下の日本の現状批判が多かったように覚えています。今我々が置かれている立場についても「食料や日用品の不足は抑留者だけでない。ソ連自体も戦争による国力の消耗に苦しんでいる」として「今のうちにソ連から学ぶべきものは学び、帰国後の糧にしよう」と訴えていました。筆者の素性は不明ですが、文の端々から同じ抑留者であることががわれ、記事の内容よりも、同じ立場にありながら、机に向かい、軽いペン一本で生活する執筆者をうらやましく感じたものです。断定できませんが「諸戸文雄」はペンネームで、ソ連の有名な政治家「モロトフ」をもじったものと想像しています。

「日本新聞」の論調は回を追うごとに厳しさを増しました。中でも日本の米国一辺倒の政治姿勢や天皇制の批判はすさまじく、敗れた日本は今どうなっているのか、帰り着く故郷はあるのかと本気で心配したものです。そのころの記事で、天皇が「帝国ホテル」と書いた看板を担ぎ右往左往している漫画は、今も深く印象に残っています。このような報道と並んで戦後ソ連の復興と社会主義の躍進が民主運動の成果として報じられました。新聞論調はそのまま収容所の空気がとなり、所内のあちらこちらで小さな車座集会が持たれるようになりました。そこでは大抵の場合、所内の規律や日常生活(労働を含めて)のあり方を改善する話し合いが主であったように記憶します。私たちの収容所では入ソ早々に旧階級を捨てて上下のない抑留者集団として何事も行っていましたので、それを民主化と呼ぶならばシベリアで最も早く民主化した収容所であったかもしれない。

北海道 長島秀夫

十一月八日未明、ソ連最後の終結地ナホトカに到着する。駅の近くに野宿す

る。集結している抑留者は、我々モンゴルからのものだけでなく、シベリアの抑留者達も沢山来ていた。

兵主大会といって、あちこちの収容所で、あまり人気のなかった隊長達が、内部告発のような形で、つぎつぎに引つ張り出され、土下座させられ、筋金入りの共産黨員に、罵声をあびせられ、つるしあげられる。黨員が、大声でわめきたっている間中、大きな声で、インターの歌を唱わせられ、氣勢を上げさせられる。

兵隊達も、群集心理もあるが、変な態度をして彼らににらまれ、屁理屈でもつけられ、日本に帰れなくなつては大変と、みんな調子を合わせるので、人民裁判では、益々加熱していった。

この裁判で、シベリアへ逆送された人も相当いたらしい。人民裁判は毎日行われ、到着する隊は、必ず誰かが引つ張り出され、徹底的にやられる。

そして土下座して反省され、共産主義を賛美する言葉を言わされて、共産入党を誓わされる。態度がおかしいと、いつまでもやらされ、周囲の兵隊に、その人間を突き上げさせる。その突き上げが中途半端だと、その兵隊まで引つ張り出される始末である。

苦しい二年間を生き抜いて、ここまで来たのだ。皆一緒に日本に帰らねばだめだ。共産黨員に、にらまれあにようにしなければいけない。人民裁判の時は、必ずインターの歌を歌わせられる。そこでとにかく、何もしていないときは必ずインターの歌を歌えということ、朝、目がさめると、暗いうちから大声で歌い出す。

なんでもよい、ここにいる間は、彼らに気に入られるようにして、反感をかわないようにしなければ。なにしろ、日本の帰還船に乗るまでは、奴らに、絶対的な権限を握られているのだから。がまん、がまんであった。

民主運動について

二十二年秋頃より日本新聞の人が派遣されて来た。民主化が遅れていると指摘され労働運動が始まり、参加しなければダメイが遅れると思ひ仕方無く参加した者がほとんどであった。

集結地ナホトカにおいて三日間、着いた日から民主化運動と言って赤旗の歌や労働歌を歌わされ、アクチーブにより民主教育を受けた。これも帰国の為には避けて通れない大きな関所であったと思う。

北海道 東島房治

二日程でナホトカに着いた、今度は砂浜でなく幕舎が用意されていた。ここで船が来るまでいるらしい。

毎日する事もなく、自分は部隊が違うので知り合ひもないが、それでも帰れるかも知れないと思うと何か心が浮き浮きする。しかしまだ本当に帰れるかどうかは疑問である。夜になると共産主義の映画を見せられる。また日本民主グループと称する連中の指導で赤旗の歌を教えられる。赤旗の歌を覚えなないと帰さないと脅かす。「我が民衆の旗赤旗は」と毎日歌わされる。我々が着いて三日目位に他の部隊が来た。ところが隊長が階級章を付け、部下に将校行李を担がせて来たのを見て、民主グループの怒りをかい、「まだ軍人精神が抜けていないから帰されない、もう一度収容所へ帰れ」と全員帰されてしまった。

民主グループが凄いい力を持っている事が分かった。心ならずも赤旗の歌を一生懸命練習する。民主グループの連中だつて、ただ楽をしようと洗脳した顔をしている者も多い筈。その証拠に皆血色が良い、この食事は今までより大分良い、毎日する事もなく船を待つ。

昭和二十二年末頃アクチーブと言う人達がどこかで赤い教育をうけて来て専門に赤化教育を始めたが、最初は誰一人信じなかったのであるが、民主化が遅くなると東京ダメイの見込みがないとの宣伝であつて、我々もダメイを遅らせられてはたまらないと考え直し、同年兵が相はかつて帰国までの赤い人になろうとて申し合せて、アクチーブの叫ぶ事に相槌を打つて夜の集会やら新聞の輪読会にも出席しアクチーブの叫ぶ声に調子を合せておつたが、やる事が段々エスカレートして、上官はその頃どこかへ集められたようであつたが曹長以下を反軍闘争として吊し上げ軍曹に及び伍長になるに及んだのであるが、考えて見ると自分を吊し上げる順番が来てしまったので余りにも馬鹿々々しいので夜の集会にも欠席し何もかも馬鹿々々しいので発言しなかつたところ、日和見主義者のレッテルを貼られ、間もなく追放同様に帰国者の仲間に入れられて同僚より一カ月位も早く帰国した。

帰還乗船のために集まったナホトカでは食料も良く心にもなく集つてはスターリン万歳を唱和すれば良くひたすら帰りたいので何か決議文があつたようだが、我々はただ賛成と異議なしの道具なので大声で怒鳴るだけで、午前と午後二回ずつ怒鳴つたので赤く染まつた事になつたらしく帰れた。

福井県 増田武也

民主化教育は、私が二十二年六月ダメイまでは作業の行き帰りに「赤旗の歌」を唄わされたり共産党のパンフを読まされたりした。ソ連には自由もなく土地も家も財産も日用品も全部国からの貸与品で、すべて平等だと見たり聞いた。また極寒のシベリアはソ連国の監獄で、我等の収容所の所長も監督も作業員も皆有刑務者で、一番重いのが思想犯で二十五年から二十年、十五年、七年、三年と色々。またここで何か罪を重ねてなかなか家族と共に暮らせない、ま

た「ゲペウ」国の見張り役が絶えず見回るのでウカツに話もできないと、彼ら口助達は皆我らに話す。またここにいるソ連兵も程度の悪いのが回されてくるらしい。

愛知県 鈴木英一

ハラグン、サハリンの両収容所ではノルマに追われ、酷寒、飢餓で体力も消耗しての毎日の厳しい作業で、あまり問題にしなかった民主化運動も活発になり、アクチブが張り切つて動いていた。

私はソ連の民間人の生活ぶりを見たり聞いたりすると、どうしても幸せな暮らしをしているとは思えず、この国の主義には疑問を抱いていたが、早くダモイするには民主化の運動も必要だと割り切つていた。だが、積極的に参加するのではなく傍観的だった。多くの人達も同じように考えていたのではないかと思つている。

北海道 東島房治

ゲペウ

ゲペウには二種類あり、ゲペウの制服を着た者と、全く一般の者と同じ服装の者があり、一般の服装の者はあらゆる階層の中におり、誰がゲペウか全く分からないようになっていた。ゲペウ同志もお互いに分からない。叱られるかも知れないがソ連の共産主義を支えているのは、この秘密警察があるからだと思う。政治批判は一切禁句で自分の女房にも政治批判はできないと言う。しかし収容所にゲペウが調査に来ると言うと、途端に待遇が良くなる。その点ゲペウは捕虜に対しても平等に扱ってくれるらしい。

午前の仕事も終わり宿舎に帰ると、ロスケの本部で呼んでいると言うので行くと、別室に入れと言うので入ると、奇麗な制服を着たゲペウの将校と通訳がいた。通訳を通して自分の名前、年齢、出身、両親の名前、兄弟の名前また故郷の

友人の名前まで聞いて一生懸命書いている。

次は「天皇陛下は悪い人ですか、良い人ですか」と聞く。自分は何て言ったら良いか分からないので黙っていると、「天皇陛下は悪い人ですね」と勝手に書いている。また自分の顔を見ながら人相を書いているようだ。その次の質問が「この収容所に逃亡を計画している者がいる、その名前をお前は知っている筈だ、その名前を言え」と言う。自分はまったくの初耳でそんな事は知らない。「そんな事は知らない」と答えた。「西も東も分からないところから逃げようがない。そんな計画はない」と言うと、いやお前は知っている、知っているという証人がいる。どうしてと言わないならその証人を連れて来るぞと脅かす。「いたら連れて来てくれ、なんでそんな事を言うのか自分も知りたい」と言った。

ゲペウは拳銃に弾を込めたり、抜いたりしている。「どうしても言わないなら今日は宿舎に返さない、持ち物は誰かにもつて来させる。そしてハバロフスクに連れて行き裁判にかける。もしそこで嘘が分かたらお前は銃殺になる」と言う。自分は覚悟を決めた、もし苦し紛れに誰かの名前を言えば、その者が酷い目に会うだろう。自分にはそんな事はできない。「裁判でも何でも、知らないものは知らない」と答える。「もしお前が嘘を言っている事が分かたら、国に帰つてからでも逮捕できる」と言う。そのために住所から親の名前まで聞いたのか、いま日本がどうなっているのか全く分からない。

あるいは無条件降伏した日本だから、帰つても本当に逮捕できるのかと思つた。しかし何と言われても知らないものは知らないと頑張る。段々と時間が経ち点呼の時間になつたが返されない。食事も運んで来た、これは本当にハバロフスクに連れて行かれると諦めた。だがいるという証人は連れて来る気配はない。これはひよつとして山を掛けているのかも知れないと考えた。八時頃だろうか、突然ゲペウがニコニコしてもう帰つても良いと言う。煙草を一箱くれて、この事は誰にも言うなど念を押して返してくれた。

三重県 川邊幸治

抑留生活中の印象に残ったでき事

一 ソ連内務省(MVD)のスパイ誓約

カムチャツカの自動車整備工場にいた時、ソ連軍の命令で、日本兵の動静についてスパイすることを命ぜられた。

工場巡回中、白い縁の軍帽を被ったソ連軍将校が近寄ってきて「川邊さん、こんにちは。私と一緒に来て下さい」と日本語で話しかけてきて、進行方向を指さした。ソ連将校集会所の方向である。

到着すると、鍵で扉を開け「イジ、スダー(ここへお入り)」と言った。更に奥に入つて、もう一度鍵のかかった部屋に誘導された。

そこには将校が四人いた。机の上には拳銃が置いてあった。椅子に腰を下ろすように指示され腰を掛けた。正面に座った将校が、ロシア語で紙に書いた文章を読んだ。すると、私を連れてきた将校が、

「私が通訳するからよく聞いて下さい」

と日本語で私に言った。

『誓約書。私はソ連軍に忠誠を誓いますとともに、指示されたことは堅く守ります。もしこれに違反したときは、どんな処分を受けてもかまいません』以上の事がその文章に書かれています」

と通訳をした。そして、「この文章の一番下にあなたのサインを下さい」と言われた。

私は突然のことに判断に苦しんだ。サインしなければどうなるかわからない。

サインすれば、日本人が日本人を売る羽目になるのは歴然、スパイとなれば日本へ帰れるかどうかわからない。しばし唾を飲んで思案した挙げ句、どうにでもなれという気持ちでサインをした。すると、

「ありがとうございます。それでは宿題を出します。あなたの部下で、憲兵隊、補助憲兵、警察官であった者の住所、氏名、年齢、階級を調査して私に報告して下さい」

と私を連れてきた政治部将校が伝えた。かくして正式にスパイ任命が行われ、スパイ行動に着手しなければならなくなった。報告もさることながら、今後の自分がどうなるか心配で夜も眠れなかった。

回答については、次のように報告した。

「我々の部隊は航空隊であり、技術者ばかりである。元工員がほとんどで、憲兵、警察関係の者は一人もいない」と。

その後、樺太に入り大泊港で、あの時私を誘導した政治部将校に会い、挨拶はしたが、その後スパイ関係の要求はなく安心だった。

二 民主化運動と日本新聞

ソ連兵から日本新聞が送られてきて、収容所へ配られた。その内容を見ると、天皇制反対、共産主義万歳と大文字で書かれており、そのような記事が掲載されている。日本へ帰ったら共産党に入党を勧める文章が載っていた。シベリアの抑留者は、民主化と言って旧軍隊の組織を解散し、指揮者は立候補した者の中から選ばれ運営されているなどの記事も出ていた。

私は全員を集め、その前で次のように話した。

「配られた日本新聞によると、民主化と称して、旧軍隊の階級をなくして、選挙された者が全体を統制していく制度に改革している部隊があるようだが、今まで我々は現体制で全員一致協力で頑張ってきた、特に問題は起きなかった。あとしばらくで復員できると思う。私としては現体制のままですべていきたいがどうか」

と呼びかけた。

「私の意見に賛成の者は手を挙げてほしい」

と言ったところ、全員挙手してくれた。このように、日本新聞に惑わされることなく、復員まで旧軍の体制を維持することができたのである。

三重県 葛巻尊男

十月になり收容所長が突然やってきて私に「イズベストコーワヤへ行き共産教育を受講せよ」と告げられる。私にとってまさに晴天の霹靂のでき事である。なぜ私が受講者に選ばれたのか。教育の内容その他皆目不明、一瞬戸惑ったのであるが、拒絶することは勿論許されないのであり、内心不承不承ではあったが承諾するのである。ウルガル地区の他の收容所から選ばれた四人と共に、入ソ以来初めて体験する監視兵もない客車で寛いだ旅、車窓には白く薄化粧をした白樺林が見え隠れしていた。

イズベストコーワヤの街はずれにあるラーゲリの講習会場で、三十余人の受講生と共に洗脳教育の生活が始まるのである。

朝八時より夕方五時までの講義、講師はハバロフスクの地方教育を終えた三人中には少年開拓団出身とかの二十歳位の若い講師もいた。講義内容は、マルクス・レーニン主義、ソ連共産党史、日本共産党史等の講義で、すべて日本語で書かれたソ連発行のテキスト。中には「小党史」と称した分厚い立派な冊子もあった。これらのテキストの輪読、講師の要約、問題提起による討論会、ベセーダ(テスト)も度々あった。時には政治部将校が訪れ流暢な日本語で講義したこともあった。夕食後二時間、自己批判・相互批判と称した反省会が催される。この席では各自、今日一日の反省、今までの行動、軍隊時代の出来事、青少年期の事、果ては家族、出身階層の事等を各自発表する。発言の中に共産思想に反する言動があれば取り上げ、徹底的に究明する洗脳教育が行われた。今時の語で言うマインドコントロールである。

当時、この收容所は民主化活動が活発に行われていた。各部屋には一、二人のアクチーブなる者が同居し、私達の言動監視役に当たり、夜になると二時間程の夜間授業を開講して出席を強要していた。授業内容は、月二回発行される「日本新聞」の記事をテキストとした講義。この新聞を担当していた「シベリア天

皇(こと本名「浅原正基」(あさはらしようき)、ペンネーム「諸戸丈夫」(もろとふみお)と称する人物の取次ぎの講義であった。

私はこの夜間授業には体調不良を口実に殆ど出席しなかった。いずれ反動分子・日和見主義者として吊るし上げられるであろうと覚悟はしていた。

昭和二十三年五月、病氣も完治しイズベストコーワヤに帰り再び地区講習を受けるのであるが、前回の講習生は修了して新顔の者が受講していた。講師も一人を除き新任講師であり、終講に近いころであった。二十日余りで終講、再びウルガルの收容所へ送還されたのである。

反動分子の多いこのラーゲリでは民主化運動が緒に就いたばかりで、前回の講習会で席を同じくした同志が委員長をしていた。彼は満蒙開拓団義勇軍出身で、早くから共産主義を信奉する積極分子である。早速私に委員会に籍を置き生活部長をするよう命じたのである。私にとって不本意ではあるが、地区講習修了者であるので止むなく受諾する。その頃毎晩のように大衆集会を開き、反動分子とマークした者を呼び出して前歴を暴き、日々の行動をチェックして吊るし上げた。被害者は年配の者・下士官が多かった。主宰者側であった私はこの時の事を思い出すと今も胸が疼く。

昭和二十四年五月になりこの收容所も閉鎖され、全員、ハバロフスク百五十キロ西のビロビジャンの小高い丘にある新しい收容所に移される。南京虫に悩まされることのない明るい宿舎で、今までと違って住み心地の良いラーゲリであった。私はくされ縁で自主運営委員会の委員となり情報宣伝部長を担当するよう選出されるが、ラーゲリ内の勤務を断り一般作業員となる。主な仕事はセメント工場の雑役。粉塵の中での仕事であったが、重労働ではなかった。時には夜中起きてセメントの貨車積み。作業はかなりきつかったが翌日は休業日で、ノルマに追い立てられた今までの作業と違い、それ程苦役とは思わなかった。

休日を利用して壁新聞の旬報を編集する。この新聞はアジ(扇動)を目的と

した宣伝活動で「赤旗の下へ」、「軍国主義撲滅」、「スターリン万歳」のローガンを書くのであるが、私は時々「日の丸の下へ」、「赤化運動排斥」、「天皇陛下万歳」などと、戦前の雄叫びを想起したりして釈然としなかった。もしこんな事を口にしたら反動分子として完全に葬り去られたであろう。

埼玉県 菊田鎮男

それで、そのソ連の宿舎のところから列車に乗りまして、これは一週間ぐらいかかりましたか、のろのろのろのろ走つて。そのうちに海が見えたんですよ。海はもう朝鮮海峡を渡つて以来だから、これは懐かしいわいと思つていつているうちに駅へ着きましたら、ナホトカという、いわゆる日本軍がそこから乗船する港なんです。そこに兵舎があるわけです。その兵舎も必ず二泊三日するんじゃないんです。ここの第一番目で「反動者」がいなければ、今度は第二へ進めるわけです。第二の兵舎で「反動者」がいなければ、今度は第三に進めるわけです。第三の兵舎に行けば、ほぼ乗船は間違いないらしいんです。私のところは幸運にも「反動者」がだれも出ませんでしたから、いよいよ四日目の朝、乗船ということになったんです。

三重県 葛巻尊男

帰還用の衣服も支給され、十月初旬、この収容所と別れ貨車に乗せられナホトカへと最後の旅を続けるのである。「帰心矢のごとき」私達にはなんとのろい貨車。何日間走つたであろうか。十月二十日頃、ようやくナホトカへ辿り着く。この街は帰還者でごった返していた。港の見える収容所で一週間程滞在する。ここのアクチーブの活動は一層激しさを増した。私は唯呆然と立ちすくむばかりだった。ラーゲリ全体が朝から番まで「赤旗の歌」、「インターナショナル」を声を囀らして歌い続けていた。やむなく私も一員となり「屍、死屍、血潮、いざ戦わん」と戦闘的な歌詞を大声で歌い続けた。それもほろ苦い思い出の一齣であ

る。

昭和二十四年十月二十九日、乗船を拒否されるのではないかと薄氷を踏む思いで帰還船に乗る。甲板では歌声とともに「偉大なるスターリン万歳」「祖国ソビエトさようなら」と叫び立てる中、船は埠頭を離れ、私はようやく船室で落ち着き故郷の思いに耽つていた。突然アクチーブと称する若い二、三人の連中がやつてきて、共産党に入党を誓約するように、三重県代表者になって全員に入党を勧誘するようにと強硬に申し出てきた。私は学生時代にかじったヘーゲルの「弁証法」を論拠として、共産主義社会が最高の社会ではない、歴史過程の中で一社会にすぎないと理屈攻めして申し出を断つた。

愛媛県 山本繁夫

ハバロフスク地方代表者会議というのが昭和二十二年秋頃、開催されて、私の収容所からも若林茂雄君(栃木県)と二人で雪の積もつた線路づたいに歩きコムソモリスク駅の手前から左へ折れ十四分所へ向かった。

受講生も講師も知らない人ばかりで恐らく自己紹介もした筈だが記憶に残る名前を挙げることはできないが高原という姓だけは覚えてる。私の記憶が間違つていなければ当時は三十七、八歳に見えて背が高くてスマートな方で言葉遣いの丁寧な方でした。一人ずんぐりした方もいたがほとんどの講師が上品で親切な態度で思想家とか党の活動家タイプの人はおらなかった記憶が多い。講習科目は唯物弁証法、資本論、ソビエト同盟共産党史、レーニン主義の問題、天皇制、植民地論(政策)など十五科目があつて当時はよく判つたような気がしていたが、特に初めて聴いた「植民地政策」が耳新しく感動したことだけは今でもよく覚えてる。コムソモリスク・ハバロフスク地方では講習会(一カ月と三カ月間の二種)とか民主主義者代表者会議と言つて、各分所から二人ないし三人参加していたように思われるが、イルクーツクやタイシエツト地区では政治学校と呼ばれていたと昭和五十年代後半になって初めて知つた。昭和二十二年の秋頃、一

回目約三週間位の講習のときは、はるかかなたのタシケント・アングレン・アルマー・カラカンダなど中央アジアからコムソモリスクまで講習会に参加してくれた。なかでもアルマータから来た男はアルマータとは『りんこの町』という意味で、キャベツやじゃがいもしかできないコムソモリスクと異なり、キュウリ、トマト、水瓜、果物類、タバコなどあらゆる品物ができるスバラシイところだと自慢していた顔が目につぶ。講習は五十分で休憩が十分位か、昼休みや午後は革命歌をよく歌った。私は夜に弱いのに夕食後は昼間の受講科目の復習の意味で討論会に入るが、毎晩眠くて眠くて仕様がなかったが、幸いにして一度も吊し上げられたり反省を求められたりした失態がなかった。五分所から一緒に行った若林君か恩田君も多分、同じ班で受講したと思う。しかし、講師の方は六、七人おられたが、二十七、八歳から三十代後半位の年齢であり、革命家には見えなかった。

秋とは言え、シベリアの十月はもう涼しい。十一月になれば寒い。寒い戸外の重労働を毎日続けてゆくことはそれだけ毎日毎日が体力の消耗に繋がっていき、やがて死が待っている時、戸外の重労働を休み暖房の効いた室内で勉強できるとは最高の幸せと生命の保存につながると感謝した。一体誰の指示で講習に参加させられたのか今でも判らない。講習から分所へ帰つて間もなく収容所内の民主委員会の委員の選挙があるから出ると言われた。これも誰から言われたかも分からない。

昭和二十三年一月十六日から三月八日の四十二日しかいなかった。ちょうど前年の十一月か十二月から三方月間、記憶が大分うすれて正確ではないと思うが、第十四分所の中に一区制、仕切られた兵舎に二部屋か三部屋の教室で二十人位ずつで合計六十人足らずのコムソモリスクにおけるハバロフスク地方講習会に参加して、五分所へ帰つて間もなくのことだから二月下旬頃と推察される、帰所してすぐ分所内の将校ラーゲリの人定調査をペトロフさんとしたのが二月中旬だと思ふから三月の初めに選挙が初めて実施されたのだが、選挙は定員五人で立候補者は五人と既に決められていて立候補すれば必ず当選するような

面白い選挙であった。五人の当選者が互選で民主委員会の役割分担というか担当を決めねばならぬ、まず委員長には若くて口が達者でしっかりした山形県立川町狩川出身の好青年で私と同年の安藤光男君でした。彼は入隊前は代用教員で小学校の先生をしていたが字はともムニクで分かりにくかった。しかし組織力と統率力はあった。文化委員には矢部信壽さん、東京在住で化粧品メーカー資生堂の花椿という顧客用の宣伝雑誌の編集を戦前・戦後と十年以上のベテランの方で当時三十歳位。宣伝委員には立神軍曹、東北出身者で羅南山砲の優秀な下士官で温厚な方だった。青年委員には年齢から言えば山本がなるべきだが山本は所内の作業本部では仕事をしていて関係で作業(営内・外)の担当の作業委員となり、窪田五郎氏が青年委員となり、三月三日頃発足して、帰国ムードがどことなく流れて、メーデーを二カ月後に控えて生産競争にコムソモリスク地区一位を目指して所内一同、生産競争第一位を確実なものにするため、団結と帰国イコールの空気は早春のシベリアに^{こたま}飴した。

愛知県 水野朝之

民主活動セミナー受講者が収容所に帰所。そんな折、ハバロフスクの民主活動の中央本部より、受講の代表を三人出せとの指示があり、指示された年齢の若い隊員三人が選ばれて収容所を出発した。三方月ほどしてその三人が洗脳教育を受けて、大きな赤旗を捧げ、大声で赤旗の歌を歌い、闊歩して収容所へ入って来た。もちろん日曜日の休日で、事前に連絡があり、全員で出迎えすることになって拍手の中へ帰つて来た。

将校さんのつるし上げ

直ちに広場に設けた舞台上上つての帰所第一声が「我々は人生の師である」ソビエト連邦人民共和国の偉大な国に居住させていただき、しかも偉大な国の国家的作業の伐採部門の最先端を任された幸せに恵まれているにもかかわらず、ノルマ達成率が収容所全体で五〇〜六〇%の低い率で放置され、我々人類の師

であるソビエト連邦人民共和国の恩恵に対し、それに応える姿勢がない。各自全員反省せよ。その責任者である将校連中をここへ引きずり出せ」ということになつて、将校さん達は壇上に立たされた。「軍隊はなくなつていながらもかわらず、それを長いこと我々にいつわり、毎日、碁や将棋をして遊んでいではないか。隊員は気力を失い、ノルマ達成を収容所全体で五〇〜六〇%台で放置して、我々人類の師である偉大なソビエト連邦人民共和国の恩恵に対して応える姿勢ではない。自己批判せよ」ということになつて、強制的に「私は偉大なソビエト連邦人民共和国の恩恵を受けておりながらそれに応えないで、隊員が気力を失いノルマ達成が落ち込んでいるのを放置して遊んでおりました。まことに申し訳なく、心よりおわび申し上げます」と自己批判すると、隊員の中から罵声が飛び、逐次エスカレートして「バカヤロー」「裸になれ」「四つんばいになつて皆の周りを回れ」ということになつてしまつた。特に今まで気力を失つていた者まで罵声を飛ばし始めた。そこで将校さん達は裸にさせられ、四つんばいになつて「ワンワン」「ハイハイ」と言いながら集合隊員の周りを回つた。

将校分隊

そこで最終的には将校分隊にさせられて、毎日我々と同様に山に行き、あまり習熟の必要のない道路作業を行うようになった。国家条約では将校は肉体労働にはつかせないことになつていそうだが、それを無視して実行された。

洗脳教育について

電灯を点し、白壁の明るい室で、夜七時半までに夕食を済ませて、格部隊ごとに夜十一時頃まで勉強会をさせられた。昼間は三〇〇%台の作業で働き、皆くたくたになつてくたびれ、眠いのを我慢してそれに臨んだ。モスクワ大学編集による日本語版で「ソビエト連盟人民共和国」「弁証法的唯物論」「レーニン・スターリン」等々数種類の、一冊三〇〇頁に及ぶ立派な本が各小隊に一冊あて配布されて各分隊ごとに回し、誰か一人指名された人が一〜二頁位それを読ん

で、全員がそれに対して感想を一言ずつ述べる方法で行われたが、ソ連に対し批判的言葉は出せず、ほめたたえることのみ述べる雰囲気では何か違和感があった。このように毎晩洗脳教育が行われた。

我々小隊長も自己批判

私ら小隊長も、今まで隊員が黒パンに水増しをして重湯状にして飲むようになって栄養失調となり、気力を失い、ノルマ達成ができなくなったことへの自己批判をさせられ、一般作業員に格下げになつた。そこで小隊長、分隊長は選挙で選出された方々になつた。又、自己批判させられた者は皆、集合隊員の中央に置かれて「憎しみのルツボ」という歌を全員で合唱して責めるといふことが行われ、今まで親しくしていた自分の小隊長員で私を睨みつける人もあつて、私は理解できない気持ちになつた。そのため小隊長には自害された方もあつた。

石川県 山根徳治

① 入ソ当初は、軍国主義教育を受けた私達には寝耳に水的なことばかり。「^{だま}騙されてはならぬぞ」「仕事は要領良く、民主化は酔つたふり」だった。しかし、日本の情報はさっぱり分からない。間もなく「日本新聞」(ハバロフスクで日本人共産主義者が編集した「赤旗」の姉妹編)が来るようになる。日本語の活字に飢えていたから貪^{むさぼ}つて読んだ。「ミイラ取りがミイラになる」の例えどおり逐次共鳴する部分も出て来た。

② そのうち各部隊から労働を免除された数人の活動家(将校等ではなく兵の階級にある労働者・農民層出身者)が大会に集合して三カ月間の特殊教育を受け、この卒業生が逐次多くなると、これが一変した。ソ連人の眼は誤魔化すことはできても彼らをだますことはできない。

③ 各収容所には活動家(アクチブ)として恐れられたが壁新聞を発行し民主委員会が設立された。これに批判的な者は人民裁判で反動分子としてつるし

上げられる。時には他の收容所へ追放されることもある。

捕虜收容所内における軍隊の階級組織は崩れた。

熊本県 家入壮介

しかし私達は、ハルピンで武装解除したときも、海林で作業大隊に編成されたときも、「日本軍隊は解散した、我々は軍人ではなくなった」と、部隊長や上官から言われたことはなかった。

関東軍はシベリアの荒野の中で自然消滅した。

民主運動が盛んになるに従い、選挙による民主教育が発足した。この時、委員長には工兵幹部教育隊の北村忠一氏が選ばれ、私は作業部長兼機関誌部長に選ばれた。

二十三年には、大隊長、小隊長、分隊長の旧陸軍組織は、団長、班長と团组织となり、団長には同じく教育隊の佐藤泰示氏が指名された。そして收容所の管理、運営は日本人の民主管理の傾向が強くなった。

東京都 三上美佐男

ナホトカまでたどりついたその夜、民主グループのオルグに「抑留生活の総括」を迫られたある隊員が、もの考え方が教条主義的なオルグに対し「オレは日本人だ。日本へ帰れば日本人の生活をする」と反発したことが問題となり「ミカミ中隊は反動だ、学習が必要である」と批判され、翌日、着岸している帰国船に乗ることができなかつたばかりでなく、ナホトカから約三十里離れたソ連極東軍高射砲部隊が管理する山奥に逆送されてしまったのである。

このため、帰国は約六カ月遅れたわけだが、逆送語の生活は、幕舎生活であり、仕事は伐採、その合間に政治部将校が一月に一度持参する「ソ連共産党史」「レーニン主義の諸問題」「ソビエト憲法」「弁証法的唯物論」などなど、頭が

痛くなるような本をタタキ台にした学習のあけくればあった。幸い一人の落伍者もなく、昭和二十二年十一月二十五日、大拓丸で故国の土(舞鶴)を踏んだが、逆送された時の教訓を生かし、二度目の帰国命令を受けた時は、終始「反軍・反帝」のお題目を唱えて乗船したことは言うまでもない。

岐阜県 葛口宗一

一九四八年春、この地区で第一回政治講習会が開催された。講師は、バロフスクの日本新聞社から派遣された人。激しい口調で「天皇制打倒」と叫び、「共産主義の旗の下に結集せよ」「資本主義の走狗、反動を許すな」などなど、私などはただ呆然と聞いているだけだったが、この講習会に参加した日から程なく、勉強？ ぶりが目にとまったのかも分からないが、私とあと二人、地区の政治学校行きを命ぜられて行くことになった。

翌日、身の回りの物をつけ、雑囊一つで同僚二人と出発、地区の中央ラーゲリに向かう。各地区の收容所から集合した者三十人ぐらいたったと記憶しているが、毎日八時間の集中授業、夜は討論とグループ会議。グループは戦前の経歴にしたがって分けていたが、私は中学卒業以上の組に入り、それから一カ月間の短期速成教育が始まった。

学校のスタッフはソ連及び日本人職員で構成され、日本人職員は、ハバロフスクやモスクワの長期学校で教育を受けた人々が教えていた。元大学教授だったという人から「私はハバロフスクの長期政治学校で三カ月勉強し、今『ソ同盟共産党小史』を皆さんに講義していますが、自分たちの命令を聞かない者はソ連では反動であり敵なのです。適当に勉強して下さい」と小声で話してくれた。

この政治学校の魅力は、あらゆる労働からの免除と恵まれた生活条件だった。今までいた收容所と比べれば格段にいいし、収用設備も大きく、大きな食堂もあつて、給与も決められた量で境遇としては満足のいくものだった。速成思想教育の教本として渡された日本語版の「ソ連共産党小史」の外、ソ連を知るため

の勉強材料・資料の日本語の印刷物が講座の度に配られ、昼の講義に続いて、夜は討論の時間に充てられる毎日だった。

北海道 長尾忠也

収容所内では軍国主義の体制が続いていた。その中から民主運動がどこからともなく湧き起こってきた。浅川君という若い上等兵を中心にして収容所に立ち上ってきた。収容所内では改革派と中隊長との間で団体交渉が始まった。そうした情勢の中で、浅川君から「リーダー」の養成のためにと言われた。私にもその矢が射ちとめられた。「コムソモリスク」の現在の収容所から「ハバロフスクの収容所」に異動する事になった。井上中隊長の四百人の中より一人選ばれた。そのいきさつはよく分からないが、私はパン工場をやめてハバロフスクの収容所に向うことになった。

このハバロフスクの収容所はシベリアの日本人捕虜収容所から一人ずつ選出して、ここに集結させていた。この収容所の目的は、日本に帰還したり、日本共産党の指導者として活躍させようとした収容所であった。私はなんで選出されたのかよく分からなかった。

このハバロフスクの収容所では、重労働やノルマ等は一切なかった。朝から夕暮れまで学習生活であった。「ソビエト共産党史」や「マルクス弁証法」や「資本論」などの学習であった。当時の講師はソ連の軍人（共産党員）や捕虜だった東大の元教授等であった。徹底的に社会主義や共産主義の教育であった。私はこの収容所で三年八カ月の教育をされた。教育の力がいかに人間の理性を変化させるものであるかを知らされた。

ラーゲルの民主運動

北海道 工藤清吉

昭和二十年八月終戦、帝国陸軍は解散し、私達はシベリアへ抑留される身と

なった。病人食のような少ない食事で強制労働。すし詰め状態で荒板寝台に毛布一枚、寒さと空腹で眠れない夜、そしていつ帰国できるか、全く見通しのない極限の毎日が続いた。

こうした悪環境のなかでも将校、下士官、兵の階級組織は存在していた。誰もが上官の命令に従って行動するという習性を持ち、それが当然とする特異な社会でもあった。

そのうち、ソ連軍の管理下にある捕虜は、解散した軍隊組織を維持する必要はないのかと主張する人達が出てきた。集団生活をする以上、秩序と統制は必要だが、それは軍隊の階級によってではなく、集団の話し合いの合議で決めるべきではないのか、と。

民主主義と称する耳慣れない言葉が使われ出した。私達には階級が消滅した以上、上下関係は存在しない。各人は平等なのだから命令も無いし服従義務も無い。これに対し将校や下士官達は、捕虜という身分である以上、軍人である。軍人である以上、階級は帰国するまで存在すると反論した。そして兵連がとづくに捨て去った階級章を依然としてつけていた。

「民主主義の原則は多数決である。すべての物事は多数決によって決められる」この事は私達が今までの教育では受けたことのない新しい考え方であった。軍隊では階級が絶対で、同階級であっても一日でも早く入隊した者、一日でも早く昇任した者が先任者として羽振りをきかし下位の者に君臨していた。特に高等教育を受けてきた者に対する風当たりは強く、大学出身者には「ここは娑婆ではないぞ」と徹底的にいじめ抜いていたのである。

そういう反動からか、初期の民主主義提唱者にはインテリ層の人達が多かったと思う。

日常生活のきまり事等は班会議を開き、各人の意見を吸い上げてまとめたものが決定されるといふ、今までの上意下達から下意上達の形式に改められていった。

この段階で変わったことは、今まで自分の考えや意見を阻まれていた人達が自由にもが言える立場になったことである。これは従来の命令社会が崩壊したことを意味し、大きな進歩と改革であった。班長、療長、役員等が話し合いや選挙で選ばれた。現在の私達には当然のことではあるが、当時のラーゲルでは画期的な大改革であったのだ。

壁新聞なるものが貼り出され、自分の考えや主張が掲載され、リーダーのアピールに一役買っていたし、文筆家による文芸作品も皆に読まれた。私も「枯れるえぞ松」と題したアイヌ民族と和人の戦いを創作して載せてもらった。それには絵の得意な人が挿し絵を描いてくれ作品を楽しいものにした。

軍隊にはあらゆる職業の人がいて、種々様々な活動が表現できる社会でもあった。最悪の環境にあつても、人々はより良き生活と潤いを求めて生き甲斐を探して努力していたのだ。

皆、食にも飢えていたが活字にも飢えていた。本や印刷物を持つ余裕がなかったばかりか、外部からの印刷物は一切入ってこない。ある日「日本新聞」と称する新聞半ページくらいのもが壁に貼られた。皆貪るように読んだ。「これは日本から来たのか」「いや違う。ソ連軍監視の下に編集された我々捕虜向けのものだ」という結論におちついた。

内容は、民主運動の指針やラーゲル内の運動の成果などで、私達の最も関心事である帰国の見通しの記事はどこにもなかったし、日本国内の記事も一切なく物足りないものであった。

こうした改革運動によつて軍隊の階級は権威を失い、将校達は自分達の班に集まり、私達とは直接顔を合わすことなく、下士官達の中にも運動に参加する人達が出てきた。

そもそも捕虜に対する待遇は将校と兵では違うように国際条約で決められているというのだ。まず食べ物の質が違う。私達には労働用の黒パンだが、将校には白パンで労働が課せられない。この待遇差には不満であつたがいかなともし難い

現実であつた。

「よく働いてノルマを完遂した人達から帰国させる」とか「民主運動に参加して共産主義に共鳴した者から先に帰れる」とか噂されたが、どれが本当なのかは定かではなかった。ソ連が労働力を目的とした抑留からも病弱者が早く帰されたことだけは確かなことであつた。私の帰国が遅れたのもうなずける。

民主学習会が夕食後や休日によくもたれた。参加は強制されなかったが、理論的に勝つた者がリーダーになっていった。そしてラーゲルの生活上の為にソ連側とも折衝した。

明治以降の日本の資本主義社会としての歩んだ歴史が検証され、大陸進出の野望とその結果の敗戦。民主主義社会はどうあるべきか、これからの社会の方向について進路を見つけようとしていた期間となり、他のラーゲルとの交流会も持たれ討論し合った。

行き過ぎたラーゲルの民主運動

昭和二十一年から二十二年にかけて、軍隊の命令服従という体系は民主主義運動によつて次第に消滅し、インテリ層による民主組織が定着していった。その運動の指針となつたのが、ハバロフスク地区で編集されたといわれる「日本新聞」であつた。その論説には「ソビエトは労働者と農民が主権を持つ国である。だからラーゲルでも労働者や農民がリーダーシップをとるべきである」とプロパガンダしていた。このことが行き過ぎを招いた。

民主運動初期の頃は、インテリ層のリーダーシップに無批判に従っていた兵連が、次第に自己の主張をするようになった。インテリ層のリーダー達はとかく口先だけが立派だが実行力が伴わないことから、実行力のある者の発言が支持を得て役職についていった。

二十三年頃には、ラーゲルの指導幹部は、労働者、農民の出身者にとつて代わり、かつての民主主義提唱者はその座を追われ、単なる一抑留者になり下がつていった。

抑留初期の頃は「我々は捕虜なのだから無事に日本に帰ることが本務である。だから労働には体力消耗を押えて健康維持を本分とすべし」この意見は正論と思われた。

また、「ソ連の国力増強の為に我々捕虜は協力すべきではない。労働は最小限度にすべきだ」とした。だが現実にはソ連が大戦で不足した労働力を補う目的で、国際条約を無視して抑留したのであるから、こんな理屈は通るものではない、ソ連労働者と同等の作業ノルマを課せられたのである。

「労働者農民の国ソビエトは我々労働者、農民にとって尊敬すべき国である。だから労働には積極的に参加すべきである」と洗脳されたリーダー達によって作業の効率化を図る為に作業班が編成されていた。

一つの班が十数人で現場監督から受けた作業を班全体で受けて、班長が班員の技術や能力、協力関係を考慮して作業を割り振りした。

私も班内では一番の若輩であったが、推されて班長になった。作業が順調に進められるよう現場監督との折衝や対外交渉もやった。直接作業をしないので身体的に楽だったが精神的には疲れる仕事だった。それに対する班員からの評価は「指示、報告、交渉などは申し分ないが、堅くてユーモアに欠ける」と言われた。やはり人の上に立つ経験不足と若気の至りを否めないということであった。

「この世間でも「やりすぎ」ということはおこるもので、レーニンとロシア革命を崇拜するあまり、リーダーになった者達が、労働者農民出身者以外の者が役職につくことを嫌がるようになっていった。有能なインテリ層や技術者、文化人を排除するような風潮を見せたのである。これは自己卑下からなのか。

休日などに集会がもたれ「自己批判」といつて自分の過去について告白し、民主主義に照らして間違った言動はなかったかと自分で検証するのである。もしこの集会で「自分の過去に誤りはなかった」とでも言おうものなら「お前は全く自己批判をしていない」と激しく突き上げをくらい、役職を剥ぎ取られた。

労働者農民出身者以外の経験者はすべて否定するという極端に走る者さえ

出てきた。もうこうなつては方向を修正しようと思っても、逆に「お前は民主主義の否定者だ、反動だ」の烙印を押されて排除された。

まして嫌気がさして集会に参加しない者は集会に引きずり出されて、徹底的に吊上げられた。これは明らかに運動の行き過ぎであり、集団の暴力と心理的リンチでもあったのだ。

リーダーシップを握つた者達は、あたかも自分達が支配者になったかのような錯覚を起こしていた。こうなつてはどうしようもない、正常な感覚を持った者は「逆らつて睨まれるよりは同調する振りをしてやり過ぎるのが賢明」とつくろつて者が多かつた。

運動の行き過ぎによつて、ラーゲルの生活は何かギスギスしたものになつていた。しかし、中にはこうした出しゃばり者をたしなめるリーダーもいて、行き過ぎを修正しながら常識的な民主運動をすすめていったのである。

この運動で私が得たものは、今まで知らなかつた社会の仕組みがあること。経済面からの資本主義と社会主義、もつと進めた共産主義。そして世界は米国の主軸とする自由主義国家、ソ連を盟主とする共産主義国家の対立。我が祖国日本のおかれた立場は、米国の占領下にある現実の中で民主主義社会をどう発展させるべきかということであった。

民主化運動と日本新聞

岩手県 千葉義一

抑留生活の係わりの中で、いわゆる「民主化運動」を忘れることができない。抑留地によつてその程度はいろいろで、人民裁判に明け暮れる狂乱怒涛の地もあれば、軍国色を拭い去る上に役立ったところもある。

幸いにも我がチエルノフスカヤは作業大隊と呼ばれ、モグラ掘りの粗末な田舎炭鉱で石炭生産に追いまくられ、他の収容所に比較して内部の反目や違和感がなかつたことは、一つの救いともいえる。

熊本県軍人恩友会発行「満ソ殉難記」の第二章七節に「健闘の百七師団将兵は、最後までソ連軍に抵抗し、損害を与えたが故に、懲罰的待遇と管理で臨み、全ソ最高の死亡者を出した」と書かれている。

事実、捕虜とは言いながら、決められた食料の確保をされたためではない。被服、衛生管理も最低、死亡者が多い中に治療や投薬となく、労働に対する給料と呼ぶ現金を手にした者はない。この中での救いは、ノルマに応じた食料であっても個人ごとの食事の差別をせずに、平等の配分であったことであろう。

こんな情勢の中に民主化運動は、軍隊の階級制度の解体から始まり、政治部将校の出入れによる民主化活動の申し入れ、時折の演芸会の出し物の筋書きのチエック程度であったが、ついにこの網にかかる大物はいなかった。

二十一年春よりハバロフスクで印刷の日本人俘虜向けの「日本新聞」が時折わずかな部数が届いて兵舎回覧とされた。活字に飢えた最中のこと、みんなで貪り読んだ、最後になると新聞はぼろぼろに傷み、読み取れないほどであった。政治面では戦後のヨーロッパ情勢、ソビエト同盟の輝かしい勝利と民族解放を讃える。日本国内の混乱と飢餓状況が報道された。

ソ連の管理下で発行する新聞なので割引して読むことにしたが、世相をつかむだけでも役立った。ナチスドイツやイタリアファシスト党の壊滅。独裁者ヒトラーが愛人とピストル自殺を遂げ、ムッソリーニ総統がファッショを憎む民衆によって一家惨殺された。

連合国側はドイツのニールンベルクで、極東は東京で戦争犯罪人を裁く「戦争裁判」が開かれる。東京でこの裁判に出頭するはずの近衛文麿が自邸で服毒自殺したとあった。

敗戦とはいえ、貴族のトップに在る者として敵の縄目を受けることに耐えられなかったのかと推量した。かつて日中事変から太平洋戦争に追い込んだ時の宰相として、ソ連にとって最も好ましからぬ人物であつてか、この人の振り仮名は「このよあやまろう」となっている。

我々の関心の帰国問題には、一貫して「日本側が故意にスムーズな帰国を妨げ、引揚船を送ってくれない」と日本政府の責任のように書かれていた。

いつからか連載小説も載るようになり、小林多喜二の「蟹工船」、徳永直の「太陽のない街」など、かつての左翼文学も連載された。

驚くべきは、ポーランドでナチスドイツの手によるアウシュヴィッツを始め、数カ所において四百万人も殺人工場が明るみに出て、国連から調査団が派遣された記事もあった。

日本新聞の記事の最後に、責任者であろうか「高山秀雄」、ほかに浅原正基なる人物がいて、「諸戸文夫」（当時の外務大臣モロトフにあやかたという）のペンネームで論陣を張っていた。

ここで日本新聞に快刀を振るい、シベリア天皇と恐れられた「諸戸文夫」こと浅原正基は仲間からかつての不利な履歴を暴かれ、後日失脚してソ連側より懲罰の刑を受けたと聞く。

思えば「人間万事塞翁が馬」ならざるはなしということか？

愛知県 齋藤高志

女医さんの検診

三カ月ぐらいに一回、女医さんによる診察が行われた。颯爽とカートンキー（フレット製の長靴）で闊歩する姿は、女医さんとは思えないほど勇ましい。

診察といつても内臓、血圧等はなく、ただ栄養失調の診察である。抑留者を裸にして女医さんの前に立たせ、大腿部をつねって皮の厚さ、筋肉の張り具合等を調べるのみで、一級、二級、三級、OK（オーカー）などが決定される。神経痛・リュウマチなどはわからないので病気ではないと言われ、該当者は大変苦勞した。一級、二級は健康で普通作業、三級は軽作業、OKは要安静者として一カ月間作業を免除される。みんなOKになりたかった。私も二回だったが、残念な事に休む機会には恵まれなかった。

一回目は、休養の代りに炊事の水くみにあてられた。炊事係は食が多いので、三週間で体重が六十五キログラムになり、途端に原隊復帰となって作業にまわされた。

二回目は、洗脳教育の一環であろう、チタ市での集合教育に派遣された。白樺の皮を燃しての原始的な生活から、明るい電灯の下での生活で、少しは人間らしくなった。しかし教育は重労働であった。朝八時から夕方まで共産党を主とした講義であり、夕食後は共産党史の映画であった。この一カ月間は追いつめられた生活で、非常に長く感じた。

壁新聞「大和」

飢えと寒さと厳しいノルマで、抑留者の体もだんだんと枯れていった。ラーゲルの中では黒パンの盗難が多く、犯人はみせしめのためソ連側の命令で宿舍の出入口に荒縄で縛られ、三日目に死んだ。炊事の倉庫から糧秣を盗んだ者は、懲罰として営倉(地面を掘った穴で、暖房はない)に一夜放置された。「寒い、寒い。許してくれ、出してくれ」と泣き叫びながら翌朝死んでいった。

——こんな状態でよいのか、何とかしなければ——という声で「大和」(やまと)という壁新聞が作られた。毎日の生活の心得や漫画、ダモイ物語、歌、意見等いろいろ書かれた。私も互譲礼節、誠実、和等について投稿した。ところが、この新聞が、反動新聞だといわれ問題となった。私もソ連側の調べに何度か呼び出されたが、別に内容が悪いのではなく、「大和」という名前が反動的だということでおさまった。

収容所での教育

ナホトカには第一から第二、第三と収容所があった。

まだ使役はあった。

夜ともなれば共産教育。これには参った。「ネコ」を被つて参加する。

三重県 奥田武男

ハバロフスク発行で日本新聞があった。

反抗すればまた反動分子だとやられ、帰れない。

「民衆の旗、赤旗は戦士の屍を包む。四肢固く冷えぬ間に血潮は旗を染めぬ。高く立て赤旗を、その陰に生死せん。卑怯者、去らば去れ、我等は赤旗守る」

とよくやったものだ。これも上からの命令でやるのだから仕方ない。

〔民主運動と壁新聞〕

大阪府 岡崎博好

「郷に人らば郷に従え」という。生まれて二十年、かちかちに教育された軍国青年が、戦争に敗けたんだ、はい思考を変えなさいと言われても、染み込んだ大和魂が容易に氷解できるものだろうか。各ラーゲルには時流に乗るか、ソ連側の要請か。「民主運動」「壁新聞」など共産主義宣伝とラーゲル運営の民主化を呼びかけるグループが出来ていった。冒頭の諺のごとく、いちはやくこれに乗ってソ連邦万歳を唱えて勝者に迎合し、オルグと称する輩が闊歩するようになる。マルクス、レーニンを説き思想改造の論文を貼りめぐらす一方、アメリカ占領下の日本内地の無秩序な世相を非難し、困窮をきわめる食糧事情などを書き添えて反米、反日のプロパガンダの集会在連夜開かれていた。例によって同盟礼賛のオルグの講義が一段落し討論の時間となる。

集会の初めから私を注視していたオルグは果たせるかな、「日和見主義」についての見解を求めて来た。私は共産主義もソ連邦も今、勉強中であること、従って何も発言の用意がないことを述べると共に「見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿主義なる私考をも語ってみた。以前のラーゲルではまだ民主運動などなかったためか、私考に賛同する相手さえ起こったほどだったが、この集会では全員が顔を伏せて賛意を表する者は一人もなかった。当然の話である。オルグの意に沿わぬ発言は直ちにソ連側に密告され、その結果は苛酷な職場に配転されるのは火を見るより明らかであるからだ。自殺行為の何ものでもない。私の主張はむしろ日

和見主義を批判し右顧左弁するなと訴えたものだったが、三猿主義を理解できないオルグは私を反動分子とのしる始末。やがて政治部将校に呼び出され移動を命じられる羽目となる。「長い物には巻かれよ」——これこそ生き抜くため、生きて日本に帰るための鉄則と悟るのだった。

鳥取県 横川茂男

次に民主教育の件であるが、この事は特別に除外されるものではありません。すべての抑留者は否応なしの教育であり、我々も頑張りつつ勉強をさせられたものです。特に私達力仕事に従事しなかった者達はありがたいことでした。この頃の事は少し記憶が薄れていますが、一応組織らしいものはあったと思います。

理論的な問題は宣伝部、文化部等ありました。私は無学者であり、マルクス・エンゲルスのごとき哲学は分かりませんでした。私は捕虜仲間の中に大学出身者がおられ説明する。ソ連が強く求めたものの中には共産党小史の勉強でした。文化部は心ある人が指導的立場にあつて色々演劇を見せてくれました。また、日本軍のありし頃の徹底追求で当時吊し上げと言っておりましたが、よくやられたものです。当時日本新聞と言って日本の最近の動きを知らせる報道があり、時折ハロフスクから送られて来たように思います。

静岡県 清 初生

捕虜、食事は満州から持つて来た馬糧の豆粕であった。粗悪な食事。零下三〇度、四〇度の中、仕事ノルマが課されて、ノルマを完遂しないと食事が減らされた。そのうちに栄養失調者、また病人が続出し、朝起きると隣に寝ている战友が冷たくなって死んでいった。こんな事は珍しくはない。将校連中は将校食で作業も免じられ、ぬくぬくしていた。兵隊は日々に弱り死んでいった。

そうしている間に民主運動というのが始まりアクチーブが出てきて、共産主義の宣伝が始まった。

ソ連の連中に吹き込まれ得意顔をしていた。日本に帰ってそんなものが通用するものかと思った。天皇制打倒とかスターリン元帥万歳なんて威張っていた。赤に染まったようなふりをしないと吊し上げられて、反動分子にされるので仕方なく天皇制打倒、スターリン大元帥万歳と檄を飛ばす。信念が入っていないとまた叩かれ、いやな奴等だと思ふ。

鳥取県 清水要範

民主化運動

いつの頃からか将校は姿が見えなくなり、大隊長に代つてY氏が委員長の名称で点呼などで演説するようになった。或る寝静まった夜、肩を揺すられて目覚め、誘導されて別の建物に伴われた。既に六、七人集まり、首班はY委員長、他の収容所では階級がなくなり皆平等なこと、初めて日本新聞も見せられた。新聞には、戦後の日本の様子は芦田内閣の昭和電工疑獄事件や天皇制の批判、資本主義の矛盾や米国追従政策の批判などが記され、軍隊の階級が抑留でそのまま残されていることの不合理的なことが論じられた。その後も夜間三回ぐらい誘われて参加したが、作業で疲れた体では続けることはできなかった。室はソ連将校の控室らしかった。Y委員長がE少佐大隊長と代つた経緯は分らない。他の情報のない時代、私達は軍国主義教育を受け、天皇のため命を捨てること。当然と考えていたが、これからは共産主義思想に次第に洗脳されることになる。それでもこの収容所は旧部隊ごとまとまつての入所が多く、下士官を筆頭に階級制度が生き続けた。

転属

昭和二十三年の秋に入る頃、所持品をまとめて集まるようにと指示された。近くに貨車が停まり、六、七人がこれに乗せられた。何の説明もなく不安な気持で貨車に揺られる。四、五時間が過ぎ降ろされた所は日本人の収容所だった。

ずっと後で知ったが、初めの収容所はタイセットからバム鉄道に入り四十六キロ地点のプロベスク、移動したのは百九十三キロ地点らしい。五百人余りが収容されていた。各々の班に配属された。驚いたことに階級章など見当らず、さん、君づけで呼び合っている。作業開始前の集合で分かったが、委員長が組織を統轄し啓蒙(宣伝)、文化、作業、生活など、各部長が専任でいるらしい。作業の指示は作業部長がしていた。私は二十人ぐらいの班で森林鉄道に丸太の積み込み作業が仕事。班長のH氏はみんなを選んだという。元の階級は伍長で、温厚で面倒見のよい人だった。収容所内は至る所民主化宣伝の壁新聞が張られている。ソ連兵の看視はなく監督もめったに姿を見せない。貨車が来れば自発的に仕事にかけ、合間には日本新聞の論説や民主化についての討論などが盛んに行われ、自由に意見も述べられる。いつ故国の土を踏めるか当てはないが、前の収容所に比べて気持を楽に持つことができた。

文化祭

秋も深まった日曜日、文化祭が催された。五百人余りが重なるように一堂に集まり、文化部長の挨拶に続き、先ず楽団によるロシア民謡や労働歌、革命歌などの演奏は玄人はだしの見事さ、ギター、バイオリンやアコーディオン、太鼓などの本物に驚いた。次の演劇は封建社会の農村の地主の息子と小作人の娘の恋物語など、どこであれだけの舞台衣装を揃え、洗練された芸を練習したのか、一同固唾を呑んで見守った。この催しに弁論大会があり、五人の一人に私も指名された。辞退したが許されず、触れれば破れるような藁半紙が一枚渡された。仕方なく前の晩徹夜で原稿を書いたが、破れてしまうので書き直すこともできない。

資本主義を非難し、共産主義を謳歌、復員すれば労働者、農民のため闘うといった筋である。五百人の前で話すなど経験はなく、順番を待つ間胃がキリキリ痛むのを覚えたが、演壇に立つと意外に落ち着いた。あとの講評では「要旨が大変よろしい」と誉められたが賞品などはなかった。

吊し上げ

年の替わった二十四年の春、作業前の集合で委員長の言葉の後、突然T氏が壇上に上りS委員長の批判を始めた。いわゆる大衆批判である。結局温厚なS委員長は自己批判をされた。その挙げ句、経過は分からないがT氏が委員長になった。その数日後、伐採作業に出たS氏は伐木の下敷きになり帰らぬ人となった。雄弁で押し強いT委員長に楯突く者は無かったが、T氏がS氏を殺したも同然と陰で囁き合った。あとでT氏も一緒にナホトカで乗船待ちしたが、今度はT氏がオルグの吊し上げに合い真っ青になって弁明していたが、同じ船に姿はなかった。

一段ベッド

年明けから移動で収容所から次々出発してゆく。次第に少なくなった抑留者、今まで二段ベッドで薄暗い部屋も一段に改造されて窓も大きく明るくなった。次第に給食も質、量ともに良くなった。ほぼ腹を満たすまでになると現金なもので、それまで食物の話に明け暮れていたのが色気話も出始めた。囲碁や将棋の道具を作ったり、相撲や腕相撲に興じ気持も明るくなった。日本新聞も度々配られて、総選挙で共産党議員が躍進、鳥取県からは米原昶氏の当選などが報じられ、更に五、六月から引揚げが再開されたこと、復員者が揃って共産党に入党したとか。

巨人軍の水原監督がナホトカで吊し上げられたなども掲載されていた。

ナホトカに集結

八月に入った朝の作業に田る準備中「復員させるので荷物を纏めて集まるように」指示が出た。半信半疑で持物(といっても何も無い)を集め集合した。三百人ぐらいの人員、そこで収容所長の挨拶が「四年間の労働に対する労りと、帰還したら日本の共産主義の実現に努力するように」と通訳を通じてあった。ほどなく到着した貨車に割当てに従って乗車した。

本当に今度こそは帰れる確信の喜びと、わずかだが四年間住んだシベリアに

惜別の思いが交錯し複雑な気持だった。入ソの時は雪の中、窓や扉が閉ざされ、警戒兵に威されながらどこへ拉致されるのか不安の中の輸送と違い、窓は全開、停車すればどこでも降りられた。時には川で水浴して汗を流しながら、復員後の話が弾んだことはもちろんである。十日ぐらいの旅でナホトカに到着した。

乗船待ち

ナホトカは小さな漁港だったという。引揚げのためバラックが建ち並び既に多くの人が入所していた。一万人以上が待機しているとのこと。至る所に壁新聞やアジビラが貼られている。小高い丘にある日本人墓地の清掃などで特別な仕事はないが、労働歌や革命歌などや踊りの指導など絶え間なく行われる。そしてアジ演説が始まる。オルグが「君達を筋金入りにして敵前上陸させる」などと叫ぶ。素直に合点したふりをせねばならない。資本主義、軍国主義者は復員させないという。

反軍闘争と民主化運動の台頭

シベリアに抑留されて二カ年を経過した頃、第一分所の出張先の山の伐採隊より降りた私は、かつての軍隊組織の崩壊を知ったのであった。即ち遼原の火のごとく燃え上がった反軍闘争。その結果、かつての関東軍当時そのままの軍隊式指揮系統が崩壊して昨日までの大隊編成が改組されて、大隊は「団組織」となり、大隊長以下各将校の人々は将校団として特別扱いではないが別棟（一棟）に收容され、昨日まで一兵卒であった人でも衆望を担えば団長、組長（改組までは中隊長）、班長（改組までは小隊長）と変わったのだ。従って軍隊組織の表徴であった階級章も襟から消えた。また民主委員会が設置され、民主化運動が徐々に展開されるようになった。なお、その頃であったか、もっと後に遅れたか、記憶が定かでないが、かつての憲兵や特務機関員、また警察官、そういう立場にいた人達を総称して、いつからか「前職者」と呼ばれるようになった。ここでつけ加

愛媛県 梅崎文夫

えると、私の帰国が遅れたのも昭和二十一年の七月、憲兵としての前歴が発覚して取り調べを受けたことに起因していると思うのである。

愛媛県 池田政治

秋の収穫が終る頃にはまた転属になって、今度はコムソリス市郊外にあった日本人と一緒に收容所で建築関連の作業に従事する事になった。

この頃からは「日本新聞」も頻繁に届くようになり、民主教育も盛んに行われるようになって、リーダーが各收容所を巡回して各收容所に委員会を組織し、共産主義思想の普及やソ連の国家社会の優位性を吹聴して、日本を卑下する宣伝活動が盛んに行われるようになって来た。しかしながら、このような思想教育の受認の程度については個人差があつて、中には表だつては言わないが、日ソ不可侵条約を破つて満州に侵攻し、わずか一週間ぐらいの戦闘で莫大な物資と糧秣を掠奪して、終戦後に六十万の兵力をシベリアに拉致し、酷使して顧みない国の優位性がどこにあるのだろうと語り合う者もいた。民主教育に異を唱えれば、反動主義者という烙印を捺されて、煙草の火も貸さず会話も途切れて、食堂でも椅子を貸さず土間に座つて飯を食わされる所もできて、日本人が日本人に苛められたのもこの頃である。

昭和二十四年の春頃になると、ダモイ（帰還）の噂がどこからともなく收容所の内部でチラリチラリと聞こえるようになったが、他の收容所の情報は全く入らなかつた。

昭和二十四年の七月になって、帰還のためにナホトカに集結だという事で、急に集合せよという事になり、トラックに分乗してハバロフスクまで出た。ハバロフスクからは貨車に詰め込まれて発車したが、今度は右側に太陽が沈むので列車が南下している事は間違いなかった。

ナホトカに到着してみると他の收容所からも大勢集まつており、船の到着を待つていた。十日間ぐらいは何もすることなく過したが、民主化運動のリーダー

達は、我々の復員が遅れたのは復員船をよこさなかったためで、ソ連が終戦後に六十万の兵隊を抑留して強制労働に使用した事を正当化するために躍起であった。

東京都 金井秀雄

福岡県 羽野 一

昭和二十二年四月三日、突然夜十二時頃、帰還命令(タモイ)の発表と違って起こされました。収容所には千六百人ぐらいおりました。その中から百五十人です。私もその中に入っておりました。嬉しかったですね。今帰れば桜の花に間に合うと言っていました。時に二十七歳。もう寝るところではありません。帰還準備です。帰還準備といつてもなんにもないから簡単なものです。朝食をすまし八時頃には出て行きました。列車輸送です。行く先はナホトカ港です。

三時間ほどでナホトカに着きました。港には日本の国旗を立てた興安丸が来ていました。皆なつかしきで喜びました。ところが我々を船には連れて行かずにまた収容所に連れて行きます。おかしな事だなぁと思ひまして、ソ連政治局員の手下で私によく話してくれるTという三十歳ぐらいの人に聞いたら、貴方達は軍国主義で、民主化してない、民主化するまでここに置いて教育すると言っています。大変なことになりました。今までの収容所では何も特別な教育もなく、うっかりしていたわけです。ここ来てから赤旗の歌、メーデーの歌をよく歌わせました。入所後すぐ百五十人の中より十人が選ばれ、私もその中に入り、作業に行かず本部へ行ってボルシェヴィキ(共産党歴史)、マルクス・レーニン主義が書いてある本を各人一冊頂き、それによつて教育があり、作業から帰つて来た隊員に五時頃より一時間三十分ぐらい、毎日話しておりました。そうした生活が続いているうちに二十二年十一月二十七日の夜十一時頃、帰還者名の発表がありました。翌日お昼頃には乗船が終り内地帰還の途に付きました。ボルシェヴィキの本は十人がソ連よりもらつてきていましたが、船長が言われるには、ソ連からのもらい物を持っていると米兵に引つ掛かるのですよと言われますから、船の

上より日本海に捨てました。舞鶴上陸は十一月三十日でございます。

民主運動は年ごとに盛んとなり、政治教育は作業の合間や夕食後に行われた。

反動(反ソ)分子

ある日、寮長と作業指揮者に集合命令があった。私も寮長をしており出席した。ソ連の所長グロームフ少佐より、日本兵は怪我人が多く作業能率が落ちる。どうして怪我人が多いかと問われた。皆黙っていたので私は「休息が少なく食事が悪い。日本兵は皆疲れて行動力と注意力が鈍り怪我人が多い」と答えた。所長はその意味を通訳から知らされると、怒りを表情に表わし「馬には休息が必要だが、捕虜は命ぜられるままに働くのが当然だ」と述べ、威圧的に私を起立させ、姓名を名乗らせ名前を手帳に書いた。西田通訳が、金井は衛生兵だからその立場からの発言だと弁解してくれたが、所長の怒りは消えなかった。確かに怪我人は多かつた。中には辛い作業を脱れ、片端でも生きて日本に帰りたいと、自ら斧で足を傷つけたり、手の指を落とした兵もいた。敗者には納得も権利もない。何が正しく何が人権か、決めるのは常に勝者であつた。

五月一日メーデーの日、久しぶりに休みであつた。夕食の時、寮で会食する。百二十人ぐらいであつた。その時、皇室の弥栄と祖国の復興を祈念、戦病没者の冥福を祈り「海ゆかば」を合唱した。翌日、医務室にいと寮より迎えが来た。寮には政治部のアクチブ(活動分子)が全員集まつていた。当時、所内には「天皇制打倒」「民主日本の建設」「我らの祖国とソビエトを強化せよ」等のスローガンが大書してあり、演芸会にも軍歌は禁止、浪曲も義理人情を賛美するとの理由で禁じられていた。そんな折での寮での会食のやり方を、民主グループは強く糾弾した。いわゆるつるし上げである。「東京タモイ」の切符は民主グループの手に握られていると信じられていた。ソ連政治部将校の後ろ盾もあつて、ほとんど

の大衆は彼らの言う通りに動いた。アクチブは拳を振り上げ絶叫する。大衆は「同感」「その通り」と相槌をうつ。仲の良い友が助言したり庇ったりすると、助言者を反動として徹底的に攻撃される。「反動は白樺の肥料とせよ」が彼らの脅し文句であった。

今までに何回となくつるし上げに立ち会っていた私は、弁解は無駄であることを知っていたが、私は日本を出た時の気持ちで日本に帰りたいこと、ソ連で受けた政治教育の成果は日本の現実に触れてから判断して生き方を決めたいと言ったが、相手にされなかった。その折、大声で私を批判する人がいる。ふと見ると林元君だった。彼は病弱で何かと相談相手となり、仲の良い兵だった。私と視線が合うと急に黙ったが、それが人間なのだ。なんとか生きて帰りたい、その思いが時の権力者に迎合する弱い人間の知恵だと思った。彼を憎む心も起らなかった。嵐のような批判を受けながら、人の心の中を垣間見た思いであった。幸い委員長は土居君はかつての友であり、本質は温厚な人だったので、他のラーゲルのような激しい体罰的な批判攻撃はなかった。しかし、自己批判し、大衆を間違った方向に導いたことにより寮長を罷免され、翌日より山の作業に出された。他の人に迷惑がかからぬよう自分の力いっぱい働いて、三カ月もたつと足がむくみ、腰は痛み、衰弱してゆくのが自分でもわかった。そんな折、仲の良かった作業指揮者の石塚軍曹が誰もいない木陰で「金井君は疲れているからハラシヨラポーター（作業優秀者）に推薦しておいた」と告げられた。私は、このような状況にも変わらぬ友の情に深く感謝した。作業優秀者には食事の量も多く、一週間の休息が与えられる。翌週、私は名前を呼ばれその休息室に入った。この与えられた一週間に衰えた体力を回復せねばとその夜床に入ろうとすると、ロシアの政治部将校が来て「金井、おるか」と言う。返事をするに「金井はここで休んではいけない。明日から作業に行け」との命令、反ソ分子に休息は必要ないというわけである。私をかばってくれた石塚君に迷惑がかからぬばいごと心配であった。日本人同士がお互いに助け合うべき境遇にありながら、小さな収容所にも権力闘

争があり、政権交代劇もあった。日本人の中に一片のパンのために密告者もおり、前歴者という、元諜報、特務機関、外交官、憲兵、警察官、協和会職員は特別に調査が行われた。ある日突然、収容所から姿を消してゆく者もあり、一種の恐怖を与えた。

民主運動

荒涼としたシベリアでの抑留生活も、二年目になると不自由な中にも落ち着きが出てきた。

三重県 後藤良之介

このころ、「日本軍俘虜（ワイナー・プレッ・ヤポンスキー・アーミー）向けの「日本新聞」が配られるようになった。発行、編集はハバロフスクであったと思う。内容は戦後日本の混乱状態、物価の高騰、進駐軍のことなどオーバーにPRしてあり、俘虜の送還問題については「日本政府は君達旧関東軍将兵の早期帰国を望んでいない」「ソ連政府の要請に対して日本が船を差し向け内」など、復員後に聞いたのとは全く逆な宣伝的内容であった。そして各地の日本軍収容所で、民主運動が広がっていることを報じるようになった。

シベリアの民主運動なるものは、旧日本軍の間で、自然に拡大したように言われていたが、そうではなく、アクチーブと称する一部の連中を巧みに操縦して、無気力な俘虜の気持ちを民主運動の名のもとに統一し、作業意欲を向上させて、ソ連の戦後復興に役立たせようとした当局の企みだったことは間違いない。シベリアの民主運動で洗脳された日本人俘虜が帰国して、共産主義に共鳴するとは到底期待していなかったと思う。

現地シベリアで仮想敵とされた日本の将校や元警察官やプロラポーターが毎日のように「吊し上げ」や「自己批判」をやらされ、思い出してもゾツとするようなことが日本人同士の間で行われたのである。ソ連当局のお先棒を担いでこの運動のリーダーとなっていた連中は帰国後どのように行動したのだろうか。

民主主義運動

大阪府 前田 康

シベリア生活になって相当の期間、旧軍の階級制がそのまま保持され、兵役期間と星の数による圧力が環境が厳しい中でお一層強く發揮されており、この制度のせいで亡くなった例も多くあつた様に思います。どこから派遣されて来た左翼系？のオルグによる民主主義運動が始まったのはいつだったか分明ではありませんが、共産主義の教育と旧軍制度の撤廃運動でした。共産主義については、この悲惨で極端にひもじい食事でも何が共産主義だ。と思つた者がほとんどだつたと思いますが、旧軍制度(階級制度)の撤廃にはほとんどの者は大いに賛成で、オルグの後ろにはソ連の力があるので急速にこの制度は崩壊していった。スターリン大元帥にお礼状を書かされたのもこの時でした。私自身この事が行きて故郷の土を踏む事が出来た大きな要因だと今でも感謝の念を持っております。

滋賀県 重田良三

民主運動、共産主義の思想教育

入ソ二年目よりマルクス・レーニン主義の日本語版の単行本を一冊与えられ、作業で疲れた身体を就寝前の約一時間、仲間から選ばれて講習を受けた活動分子の抗議を絶対的に受けさせられた。ハバロフスクで発刊された日本新聞が民主教育の資料となり、内地の情報も嘘か真実かこれを信ずるより外なかつた。

福井県 片山清次

ここはシベリア本線タイシエツト駅からブライツク寄りに五キロメートル地点にある第三收容所である。噂に聞く帰国集結收容所であつた。ここまで来れば、もう大丈夫と胸を撫で下ろす。

巨大な松材をふんだんに使つた頑丈なログハウスに石灰を塗装した監獄であ

る。外壁から推計しても相当な年代を経過している。建物の棟数や敷地面積からみて地区の基幹收容所だと分かる。

ここでの日々は苛酷なノルマによる労働はなく、所内清掃や軽度の使役等であり、食事は量も多くスープには肉や脂が浮いている。黒パンもうまい。痩せこけた体で帰すと具合が悪いので肥らせて帰すソ連の狡い手段であろうと噂をする。持て余している時間をアクチーブは歌唱指導と称して「赤旗の歌」や「世界民主青年の歌」など革命歌や労働歌を指導する。

アクチーブは全員、栄養状態の良い体で長髪を七三に分け、清潔な被服にソ連軍の長靴を履き、張り切つていた。重労働で失つた体力の回復と併せて思想教育も計画されており、日本新聞を教材として民主の若ソ連を讃え、米国をこき下ろし、天皇制打破を叫び祖国日本を赤旗の波で埋めようと繰り返す教育するのであつた。

休息の家

ラーゲリには定期的に日本新聞(抑留兵士洗脳のための新聞・ハバロフスクで発行)が送られて来た。ソ連の代表新聞であるプラウダやイズベスチヤの政治、文化、産業、教育、医療、科学、歴史等の紙面から、いかにソ連が世界各国に抜きん出て素晴らしい国家であるかを誇る記事を翻訳して大きく採り挙げるほか、日本の国内ニュース、各地ラーゲリの情報などや小説も掲載され多彩な内容であつた。

国内記事でソ連人が職場で常にノルマを完遂している優良労働者には国家がその労に報いるため本人やその家族を『休息の家』と称するところである一定の期間、休息の恩典をうけることが出来ると写真入りで大きく採り上げられている記事がしばしば目に入った。

温暖なソチ地方に国家の手で作られた保養所に優良労働者や家族が満ち足りた笑顔で温泉やレジャー、スポーツに興じる姿が載っており、その説明には休息期間中は有給休暇の取り扱いを受け、自宅からの往復旅費は支給、保養所で

の食費や宿泊費は全部無料であると言う。勤労意欲の向上策の一つである。

この『休息の家』の日本版が一部のラーゲリで開設された。昭和二十三年ごろのことであつた。ところはタイシエツト百四十三キロの第三三ラーゲリであつた。

入ソ以来、階級章が幅を利かし早朝の点呼時には東方遥拝、五箇条奉唱等が旧軍隊当時のまゝを踏襲されてきた日々を過ごして来た者にとつて、第三三ラーゲリは明るく新鮮なラーゲリであつた。シベリア各地のラーゲリが反軍闘争から民主化運動へ展開していく波の中に、このラーゲリも乗つていたのであろう。

日本将校による大隊長の制度は既になく、それに代わる中央委員が選挙で選ばれる委員長のもとに文化宣伝、労務、生活、青年の各部長による自主運営がなされていた。ソ連当局がその後ろ盾として介在していたことは当然のことである。

弁論大会、環境美化コンクール、演劇、正月料理、BKと称する日本人警備担当者、スタハーノフ運動の日本版である平塚運動に刺激された生産競争、ノルマ完遂者に賃金支給、それに伴う各人の作業成績の日々成績の公示、週一回の売店での物品販売等、活気あふれるラーゲリであつた。

反面、タイシエツト政治学校で鍛えられたアクチーブが三人投入され、彼らによる政治教育も毎夜のように行われ、理論と実践の両面からの締め付けの日々でもあつた。このような環境の中に『休息の家』が開設された。偶然にも私はこの恩典に浴したのである。千人の中から一回二人が選ばれた。各宿舍長から推薦された者をラーゲリの中央委員会で審査決定されるのであろうと思われる。作業優秀者でもない平凡な作業班の一員に過ぎない私が、なぜ選ばれたのか未だに分からない。折角の恩典を拒むこともあるまい。班員の羨望の声に送られてオデファイ・ドーマと呼ばれている休息の家にK氏と二人が入室した。ラーゲリの一隅に十坪ほどの新しいログハウスが建っている。白壁に囲まれ、大きな窓には白いレースのカーテンが掛かっている。清潔なシートと毛布で囲まれた二つのベッドが

部屋の中央に置かれている。

傍らの書箱には『ソ連共産党小史』『史的法的弁証法』『蟹工船』『太陽のない街』『絞首台からの叫び』『日本新聞』綴りなどの図書が自由に閲覧できるように備えられている。

先ず、入浴券や食券が与えられ、昼の日に入浴場に行く。客は我々二人だけ、湯桶にはたつぷりの温湯と石鹸が出され、数年ぶりゆつたりとした気分で身体の疲れをほぐす。

湯上がりには清潔な下着が支給され、爽やかな気分になる。食事は交付された食券を炊事に持参すると一人当たり二人前の食事が毎回給与された。砂糖もタバコも二倍であつた。

第一日目は欲も得もなく、ぐつすりと眠つた。

第二日目は、朝早くから夜遅くまで作業に追い立てられている仲間の事を思うと、何か罪悪感のようなものに駆られてジツと寝転んで本を読んでいる気分になれず、同じ悩みを抱いていたK氏と相談した結果、先進寮と呼ばれている自分達の宿舍の室内美化をして謝意を表そうと決めた。早速、ラーゲリの裏の森に生えている漆塗りの箸のような小豆色のつやつやとした灌木の小枝をひと抱え刈り取り、新聞紙を桜花の形に切つたものを大量に用意した。絵の具代わりに炊事でビーツ(ロシア料理に使う濃紅色の大根)を一本もらい受け、その絞り汁を紅い絵の具代わりとした。

第三日目には宿舍に上記のものを運び込み、新聞紙で作つた桜花をビーツの汁で紅く染めたものを小豆色に輝く小枝にあしらひ、満開の桜に見立てたものが沢山出来上がった。

それを宿舍の天井から室内いっばいに吊り下げ、春の雰囲気を盛り上げた。やつと贅沢な三日間の休息から解放されて宿舍に戻つたところ、「ウワーツ凄いい、満開の桜だ」全員から大好評の賛辞を受け、肩の荷が下りた思ひであつた。

僅か三日間の休息ではあつたがその間、肉体労働は免除され空腹感も満たさ

れ、文句のつけようが無かったが、過ぎ去った三日間の生活は日常生活との違和感が大きかったので精神的には疲労が残ったが貴重な体験であった。

愛知県 水野治一

マルクス・レーニン主義講座

夜の点呼後、シマノフスク収容所と違って電灯、暖房設備があり、帰国に備えて、ソ連側の要請により、「軍国主義、搾取の国日本を変える」と題して、社会主義マルクス・レーニン主義、ソ連の制度を学び、帰国して誰もが指導者として活躍するためにと始めた。

最初にそのリーダーとなるアクチーブが日本人通訳の解説から始め、共産主義と、馴染めないマルクス・レーニン主義の教育根幹、国民の反応等の解説、共産主義の長所等々、現状について説明。

講義に先立ち、通訳から講義の前にはまず「当ラーゲリに、軍国主義の軍隊において我々を搾取していた、下士官、将校が共に勉強会を行うこと、不本意。勉強会を有意義に進めるために、過去軍隊にて下士官、将校の職歴のある者を追放すること」を提案可決、該当者一人ずつ前に出し吊るし上げを行った。

吊るし上げは、全員集会の前に出し、各人から過去における行為を個人的批判、一批判ごとに衣類を一点ずつ脱がす。全裸になると一批判ごとに逆立ち一回、いかなる批判でも釈明言訳は許されない。非民主的行為。その夜吊るし上げを受けた者は、数日後使役勤務後、他に追放。……数日後……

ある夜、カンボーイ(警備兵)から「日本人通訳は横暴行為を行い、同士日本人まで犠牲にして、私利私欲に走り、公然と行動している事を皆さん知っているか。通訳はヒートリ(詐欺師)だ、皆さんはよく我慢しているね。」と日本語混じりで話された。我々も承知はしているも、通訳のことは我慢している。急遽我々アクチーブで協議し緊急総会を開き、先ず提案者のカンボーイから真相を聴取したが、論議百出。

吊るし上げに、同士七十人から一言ずつ指摘批判、その都度、身につけている物を脱ぐが、彼には不思議と普段所持が認められない腕時計、眼鏡、指輪、財布、刀類、シガレット(巻タバコ)、ライター等々は武装解除の折、全部没収されたが、其の後入手した物品と聞き驚いた。指摘が続き全裸になったが、逆立ちも何度も繰り返され続けた。

吊るし上げの後、慣例によって罰則の裁決、十一日間食事を半減、便所掃除十日間と従来になく重罪が全会一致で決し散会した。

数日後、いつの間にか、カンボーイにより、他に護送された。通訳不在で不便な点も多かったが、一方思想教育も停滞、スパイ存在もなく雰囲気も明るくなつた。

三重県 服部利男

どういう基準で選定したのか分からないが、兵・下士官の半分以上が帰国し、他の収容所から何百人もの抑留者が第五ラーゲルに入所して来た。其の中に相当大勢のアクチーブ(共産主義教育を受けた民主主義者)がいた。何人ぐらいか記憶にないが、早速収容所内に壁新聞を張り、またハバロフスクで発行されている日本新聞を数人に一枚あて配ると共に、ソ連政治部将校の指導で旧軍組織のままだった作業大隊を解体し、一般兵の中から大隊長を選んだ。今までの大隊長(少佐)、中隊長(中尉)、小隊長(少尉)の将校たちは一般兵と同様毎日作業に出ることとなった。途中、民主大隊長は交替することはあったが私の帰るまで将校たちが旧に復することにはなかった。

いつごろのことだったか記憶が定かではないが、ある日突然工場内に全員が集められた。貨車工場内の鋳物工場で働いていた兵隊が手先の器用なのを利用、使っているアルミニウムの線を盗んでとかし、いろいろな柄のスプーンを作りロシア人の工員に売り、パンを購入して食べた事に対する人民裁判開廷のためだった。裁判長、検事、判事、弁護士等々いたが、どういう形式で判決が下ったか一切

覚えていないが、国家反逆罪で、二十五年の判決が出され、すぐどこかへ連れて行かれた。

「ハバロフスクから来た共産主義の教育を受けた自称民主主義指導者の共産主義教育が始まった。一部の者だけだったのか、全員に対してのものだったのか記憶にない。共産主義者にならないと帰国できないという噂がとんだ。皆、昼間の労働で体がとても疲れていて居眠りしながらソ連共産党の歴史とか、マルクス、エンゲルスの理論とか、私たちには理解しにくい難しいことから始められたのである。特に私の記憶に残っていることは、人類の社会制度の変遷について次のような説明がなされた。

人類の社会制度は、原始共同体―奴隷制度―封建制度―資本主義制度―社会主義制度―共産主義制度と進化し、究極の社会形態は共産主義制度であると説明した。始めは居眠りしながら聞いていたが、何度も何度も同じ事を繰り返し聞かされると、三人市虎を成すのとえ（嘘であつても大勢の人が言え）ばついに真実だと信じられてしまうこと（で、これからはそうなるのかな）と思うようになった。原始共同体から共産主義への流れは大河の流れに似て、どんなことをしても堰き止めることはできないと説明、現在のソ連は一応社会主義が完成した程度で、後七十年ぐらいたつと理想の共産主義国家ができるのだらうと結んだ。

アクチーブの説明によると、社会主義とは各人は其の能力に応じて労働する社会形態で、それぞれ各自の能力に応じて仕事が与えられ、その仕事の評価によつて報酬が与えられるのである。また共産主義国家になると搾取する者がいないから、あらゆる物資が地上に満ち溢れてくるので、人々が希望する物資が好きなだけ手に入るようになること。

なんだか狐に化かされたような気になってきたとき誰かが「資本主義と社会主義とはあまりちがいが無いのでは」と質問するとアクチーブは「資本主義国家には資本家や地主がいて人民から搾取するが、社会主義国家には搾取者がいな

いのだ」と。また別の一人が、自由主義国家では共産主義を初め資本主義思想、信教の自由等すべて自由であるのに共産主義国家では一國一主義で、自由がないのでは……と尋ねるとアクチーブは「人民は赤子のようなものです。皆さんは自分の子供が毒なものを口に入れようとしたときどうしますか、それは毒だから食べてはいけないと止めるでしょう。それと同じことで、人民が悪い物を口にしようとしたとき、それを止めさせるのが本当の親心なんです」と何とも苦しい言い訳である。

静岡県 飯島 久

次の段階として、ソ連は共産主義を謳歌する思想的な洗脳教育を計画的に図りました。第一段階として演芸場などを作り、素人演芸会のような娯楽などを認めるようになっていきました。衛生兵の人が女形で、うどん粉で白い化粧をして、湯島の白梅などの新派演劇などを上演し始め、劇団員には特別待遇が与えられていました。先ず中途半端な社会改良主義者を表面に出してのさばらせ、その発展段階として階級意識？を目覚めさせるように、新聞等で一般兵士たちを教育する。ソ連共産党小史に則つたカリキラムが組まれていたのです。シベリア全土の日本人ラーゲルにほとんど同じ動きが見られました。目ぼしい人間をチタの袴田学校という教育組織に送つて洗脳し、戻ってきたら、彼らをリーダーとして社会改良主義者を放逐させて……筋書きができていたのです。

日本新聞という新聞が配られるようになってきました。偉大なる同志スターリンの偉業を讃え、資本主義社会がいかに間違っているかを教え、日本人の歴史認識を根底から変えてしまおうという、マインド・コントロールを策したのです。活字に飢えていた私たちはまだ十八〜十九歳の若者でした。新聞を貪るように回し読みしていききました。呆れたのは、汽船を世界最初に発明したのはソ連人、初めて空を飛んだのもソ連人、ラジオを発明したのも……何だ、これはという感じでした。

日本の天皇制の誤りなどもくどくどと書かれていました。〇〇天皇の妾は何人いたとか、徳川第〇代將軍××に側室が何人、生まれた子供はすべて痴呆！何とも奇妙な歴史でした。日本の歴史に嫌悪感を持たせようと意図したものでしょう。

袴田学校からアクチブという民主化運動指導者が派遣されてきたのは昭和二十二年の秋ころだったでしょうか。まず、階級意識に目ざめない者を日本に帰すことではないという脅かしから始まりました。階級意識って何だ？そこからカクイの運動は始まっていきました。マルクス式の考え方では人々を資本家と労働者・農民、そして資本家に奉仕して僅かの蜜を吸わせてもらっている知識階級などに分類しています。資本家は、人々が階級意識に目覚めるのを恐れ、悪辣な妨害をしてくることとなっていました。労働者・農民こそプロレタリアとして、世の不平等をなくすように立ち上がるべき主人公だという理屈で、人々を煽り立てたのです。

目覚めないと帰さない、これは効果がありました。俺は資本家に騙されて博打をやらされてきた。変な理屈でした。そして資本家に奉仕する知識階級として、私などがインテリゲンチヤという悪人であると、全体集会で名指して攻撃され始めました。音楽学校を出て将校となった中尉がいましたが、インテリの代表として叩かれ始めました。私がいつ磯貝班長に博打をしると勧めたというのか。質問などしようものなら、お前は全然反省してないと逆ねじを食らいました。磯貝班長こそプロレタリアの代表になるべき階級の出身である。飯島などは資本家に奉仕して……無茶苦茶な論理でした。ラーゲルの中は段々革命歌の練習で割れるような騒ぎになっていきました。昼間働いてラーゲルに戻って休憩、そんな雰囲気が以前にはあったのですが、袴田学校から人が来て以来、ラーゲルの中はとげとげしい雰囲気に変化していきました。

彼らはアクチブと称され、積極派の意でしょうか。アクチブに密告されたら、他のラーゲルに飛ばされるらしいとか、密告すると食券一枚をくれるそうだと

いう噂もありました。誰が食事を二回するか、お互いに疑心暗鬼の嫌な空気が生まれていったのです。しかし三棟あるラーゲルで、博打は見事にピタリとなくなりました。それが民主化運動の成果の最大のものだったでしょう。

一度、食堂にいた時、突然私が指名されて、壇上に立たされ、アクチブから烈しい攻撃を受けました。まだエモーで働いていたころでした。私が最も危険なファシストだということです。何？と思つたら、出身が軍官学校だということです。自ら進んでファシストへの道を選んだ男だ。誰が出身を教えたのでしょうか。ブカチャチャから一緒に来た人たちではなさそうです。とすると、ソ連司令部しか考えられません。青帽子のやったことでしょうか。私の雑囊の中を調べた形跡もありました。家族の写真を未練たらしく未だに持っていると言っています。父親はレーニン、母親をスターリンとして生まれ変わらねばならぬ。(あんな髭を生やした不細工な母親がいるかい)思わず吹き出すような理屈でした。言いたい者には言わしておけ。飯島を日本へ帰してはならぬ、それが結論でした。なるようになれ、それしか方法はありませんでした。

三、抑留中の生活と極限状態における意識

(1) 重労働の苦痛

和歌山県 木下正夫

食糧は、満州からの戦利品の小豆を主とした少量の飯に生鯨ひと切れ。作業は重労働の伐採だ。飢えと寒さの毎日、例えようもないそんな悪条件下でも、与えられたノルマは果たさなければならなかった。

山に入れが深い雪の中での作業、木の根元の雪除け作業だけでも大変で、白樺、紅葉の堅木ばかり。直径の太いものを切らなければ能率が上がらず、ノルマ達成は容易でなかった。

このような難作業の連続であったが、まず自分たちの宿舎を建てなければというので、生木であるが、どうやら建てる事ができた。しかし、なに分にも生木であるので、水分が出るし、丸太の上の寝起きであり、薄暗い悪循環の上で、日常は風呂とてなく、洗面器に少量の湯で体を洗うだけが月に一回あるかなしの状態で、頭の髪は伸びるにまかせ、不潔な体にシラミが増えるばかりだ。

飢えと寒さ、冷えの上に、小豆食、下痢と発熱、細りゆく体をシラミが貴重な血の一滴を吸い取つてゆくのだ。つりゆくソ連の冬將軍の冷えこみの中で、発熱患者が続発して、朝には冷たくなって、幾多の同志が倒れてゆく。

それでも反抗することができなかつた。雪で胸まで漬かる山の難作業、とても容易ではない。大木の根倒し、途中、木がさける。そんなときに切り口がねじけて、逃げる間もなくアツと言う間に倒れる大木の下敷きになって死んでいった戦友の姿が、今もこの目の底に焼きついている。

悪い環境の宿舎、飢えと寒さ、シラミ、不足する食糧の質と量、すべてが人間

生活の極限を通りこした待遇の中で、毎日のように幾多の戦友が冷たくなつていったのが、ソ連強制抑留の実感であったと言つて過言でないといひたい。もし反抗したとすれば、たちまち食を減らされて、結果は我々自身のこととして思ひ知らされるのが常であつた。

岐阜県 斎藤克己

この作業は炭坑の石炭掘りかと思つていたが、そうではなく、石山(カーメン)採掘の作業だつた。歩いて三十分くらいのところに採石場があり、スコップ、ツルハシ等の土方器具を使って、一人一立方メートルの容積になる石の切り出しがノルマで、帰るころになると一メートルの棒を持つて責任者が測りに来て、まだノルマが達成していないと、収容所へは帰してくれなかつた。

気のあつた者が組をつくり作業に当たるのだが、よい器具の確保や、石の切り出しと積み上げに適したところを探すのが大変であつた。

また、収容所近くの引込線に貨車が入つてくると、石や石炭の積み込み作業にも昼夜の区別なく容赦なく動員された。各分隊単位に使役の順番が決まつており、貨車が満杯になるまでは、何時間かかろうとも帰してくれず、食事も抜きた。一番つらかつた労働の一つであつたと今でも覚えてゐる。

和歌山県 山本富三(聞きとり)

私たちの労働といへば、ほとんどは重労働でした。伐採、線路工事、貨物船の荷役、れんが焼き、どれをとつても健康なソ連労働者のノルマは、栄養失調でフラフラとした半病人のような日本人にはとても一〇〇%達成などできるはずがありませんでした。例えば、穀物の積みおろしでも、一袋の重量は自分の体重よりはるかに重いものばかりでした。なかでも一番つらかつたのは冬期の夜間作業です。真夜中、普通列車が通らない時間帯に、バラスを積んだ貨物列車が来て、我々をたたき起こして列車に乗せて現場まで行き、次の列車の通過時刻までに

終わるようのしられながらせき立てられることでした。伐採作業にしても、夏の森の中は大変むし暑く、蚊やブヨに攻められながら、切れない鋸で必死にノルマに挑戦しました。冬は凍りついた鋸やタポールを持って、自由に動けない雪の中、でくたくたになるまで働かされました。やっと作業が終わり、帰り道には、直径十五センチから二十センチ、長さ二メートルぐらいの重たい木を担ぎ、長い凍りついた道をただうつむいて、前の人の足元だけを見ながら歩くだけでした。

東京都 足立芳郎

零下三十度以上は屋外作業は待機であるが、それ以下の場合には作業に従事するも、凍った土はコンクリートぐらいの硬さで、ローム(鉄の棒)で掘って一日がかりで十センチも掘ればよい方であった。ほとんど半病人で、力なく作業を繰り返していた。建築現場ではれんがを背負って二十枚以上運ぶ仕事で、建物が高くなるごとに階段を登るが一番苦しく過酷な重労働で、毎日のように体調を悪くし、発熱をする者が続出し、作業割に皆脅えていた。極寒の屋外作業は本当に過酷な労働で、苦しみは忘れることができない。

愛知県 竹田嘉明

そういう中で十一月の初めになって野良作業が完了すると、今度は雪の中、厳寒の中で石炭掘りの作業に出でいかなければならないという状態でございました。その石炭掘りもご承知のようにシベリアは露天掘りでございますまして、その露天掘りが非常に寒い中で、特に五トン貨車なんかには、いわゆる二人で一組、モッコを担いでの積み込み作業は一通りや二通りの作業でなかつたわけです。特に私どもは、労働作業はあんまりしておりませんでしたので、身にこたえたのはほんとに言語に絶すると、こういう厳しい作業でございました。つくづくそのときに思うことは、可能か不可能かという言葉がありますけれども、不可能はないんだと。可能か死かと、二者択一だと、ここまで究極の作業をさせられたわけ

でございますが、その思いは今でも忘れることはできません。

滋賀県 常喜正和

作業場の往復の狭い雪道の真ん中にちよつと太いツツジの枝が曲がつて雪の凍った中に生えている。人々はこれに足を突つ込み次から次へと無言で転んでいきますが、これを見て笑う元気もなく、声を出す者もなく黙々と転んでいく。手前より少し遠回りすればよいのを知りながら、余計に歩くのがいやで次々転んでいく。

このような生死の境をさまよう中で、日本軍の隊長である東北地方出身の某大佐は、ソ連側より作業能率が上がらないため毎日のようにおどされているが、全責任は私にある、私の体はどうなつてもよいから、諸君は無理をせず体を大切に、元気な体で全員日本の土を踏むように頑張つてほしい、絶対無理をするなど、皆に訓示され、悲痛なる気持ち語られたことは、昨日のように思われます。

岐阜県 厚見茂

我が小隊は主として建築の労役であったが、作業で最も苦しかったことは、夜遅く時間外貨車の荷おろしで、日本の二倍の大きさの貨車に満載されている粉炭を円び一丁で長時間かかって、真っ黒になつておろすことは、重労働中最も苦しいもので、ヘトヘトになつて帰り、翌日も平常どおりで、睡眠不足と空腹で最悪のものだった。

和歌山県 長峯泰夫

作業は、毎日同じことの繰り返しであったが、私の方は髪の毛や眉毛が黒から茶色に変わってきた。栄養失調が進んでいるようだ。衣服をあるだけ着て汗もかかないが、その重量はかなりの負担になつてゐることは間違いない。石があ

つてもまたげずに転んだり、木の根につまづいて顔に怪我したり、注意力が散漫になる。

北海道 石川朝雄

重労働だから疲労困ぱい腹が減ってやりきれないが、さて作業もようやく終わって帰營に着くのだが、ようやく歩いているというのが実態で、小指の先ほどの石につまづいてもすぐ転ぶし、軍隊の防寒帽であったが耳、鼻等何十回凍らしたかわからない。お互い戦友同士が注意し合うのだが、耳のたれを下げるなど忘れて行進するので、白くなってわかり注意する、とにかく半分意識がなくなっているのだから、前列者によく着いて歩いているという有様だから、やむを得ない。精神力のみである。

新潟県 加藤新三郎

冬は零下三十度以上ときには待機命令が出る。太陽が顔を出すのは十時ころで、それでようやく気温が上がってくると作業整理で、また夕方日の暮れるのも早い。主として土方仕事で建築基礎工事の壕を幅八十センチの深さ百二十センチくらいを掘るのだが、カチンカチンに凍ってツルシも受け付けず一センチ二センチを掘るのがせいぜいで、夕方には両腕が痛くなって手も上げられないほどだ。全くノルマが上がらないこともあった。たしかこんなこともあった。五月の中ころだと思うが、監視員の隙を見つけてタラップに使う敷き板を手早くツルシで割って壕の中でたき火をした。凍った土をやわらげて掘り進んで、長さ二メートルの壕を掘って、ようやくノルマを達成したのだ。

島根県 箱上春市

鉱山作業は三個中隊約六百人が三交代（早朝出勤を一番方、午後二時出勤を二番方、夜出勤を三番方）で、鉱石を掘り、良石と廃石とに選別処理する重

労働である。

昭和二十年も師走に入ると零下三十度、四十度台が続き、ことにオックス、カーメンの地上作業は飢えプラス寒冷、その上日々のノルマが酷で男泣きする毎日、凍傷患者の多発を最も心配し出した時期であった。

凍土を鉄棒で崩し、これを除去して石を割るカーメン作業をはじめ穴掘り等のオックス作業では二時間ごとの休憩十分間も、バラック内でするソ連労働者とは異なり、現場の雪の上における休憩である。また鉱山作業ではソ連の労働係などの日本人いじめが日々増大してゆくという険悪な状況が続いていた。

私ら中隊長は強引に収容所に申し出て、監督補佐として現場に出勤することを認めさせたのである。

十二月三日私は現場に至り、まず日本の兵士に秘策を伝え、現場監督イワノフに交渉した。「ソ連の人はバラック内で暖炉を囲んで休憩しているのに、なぜ日本人だけ雪の上で休憩させるのか、人種差別はしないとか、世界の人類はすべて平等だといっているのは偽善か、それとも現場監督の不都合なのかどうだ」：理に詰まったイワノフは直ちに了解した。

そして昼の休憩時ペーチカを囲んでいるソ連人に向かい「あなたたちは東京の歌を聞いたことがあるか」と言うと、もちろんだれ一人知る者はなく「そりゃいい、ぜひ東京の歌を…」と所望したので「日本の兵隊が全員で合唱するので暖炉を日本人に囲ませてくれ」と、口伴奏により軍歌式に復唱し東京音頭を十番まで合唱したところ、コーラス好きのソ連人は監督以下大拍手喝采で、ソ連人にもまして喜んだのは日本人。十分の休憩が二十分となり、暖炉を囲んだ日本の兵士は顔を紅潮させて暖をとる、以来休憩の問題は解決した。

新潟県 白鳥侃児

一日の作業が終わって疲れと空腹で収容所へ帰ったのに、夕食を見ながら空腹で再び作業に行くのがつらく、ほとんど残業の夜間作業であった。

このときは一人でも怠ける者はなく、原木おろしなど、わきに柵として立つておる丸太を根元から鋸で切つて崩し、一気に片づける危険な方法が取られ、崩れ落ちる原木に挟まれて命を落とした人もあった。そして『カンチャイネト、クーシヤイネト。』(終わらないと飯を食わせないぞ)の罵声も捕虜の境遇では、ただ黙つて悔し涙を耐えて作業を続けるほかなかつた。

新潟県 室橋正一

昼過ぎから大隊長(日本軍将校)の命令で廃屋の跡片づけと空き地に生えた雑木の伐採作業であつた。捕虜は数人のグループに分かれてたき火で体を温めていて動かない。広大な空き地の至るところで無数のたき火が燃え上がり、空き地は煙で覆われた。ソ連の監督と将校は大声でどなり散らした、カマンド、シトタマイ。(大隊長これは一体どうしたことだ。

ヤポン、ポチムラボータニト(日本兵はなぜ仕事をしないのだ。)ソ連人は、大隊長と将校を叱咤し、激怒した。大隊長と将校は捕虜をむちで殴り、足でたき火を踏み消した。「作業にかかれ、作業にかかれと言っているのがわかんのか。」と兵をどなった。

兵は大隊長を横目でにらみ、動こうとしない。たき火を消されると別の場所できき火を始めるといったぐあいだ。兵は延吉からシベリアまで野宿して歩き続けて、栄養失調で半ば病人だつた。空腹で動けないのだ。

夏服の軽装で厳冬には耐えられないのだ。兵が輪になつてたき火をしていたとき将校は、働けと言っているのがわからんかとどなつて、私と数人の兵をむちで殴つた。私は頭に手を上げて我が身をかばつた。疲労と空腹で足腰が立たないのだ。このときふと「自分は捕虜だ、いつかは殺されるだろう。どうせ殺される身の上なら、ひもじく生き、苦しい毎日を耐えているより、早く殺された方がいい。」と言つて、将校を見上げた。

将校はたたくのをやめて、黙つて立ち去つた。ロシア人は捕虜をトコトンまで酷

使して、最後には銃殺するつもりであろうという潜在意識が、私の脳裏にしみ込んでいたのである。

重労働

高知県 東山林

酷寒の中であれない伐採というノルマを課せられた作業に加えて、シラミ、ダニ、南京虫、アメーバー性赤痢の発生という外敵の総攻撃を受け隊員全員が栄養失調となり、私自身平常六十五キロあつた体重が四十キロまで減じた時であつた。

熊本県 家人壮介

寒さと重労働の抑留生活を前にして

列車は北へ北へと大雪原の中を進んで行く。見渡す限りの雪原の中を列車は人間社会から遠ざかつていくように感じられた。牡丹江を発つてから三日目であろうか、列車は小さな駅に停車して、全員下車せよとのコンボーイ(警戒兵)の指示で荷物をまとめて降りる。外は雪が二十センチ余積もっており、あたりは鉛色のもやがかかったよう、しばらく立っていると内側に毛皮についた軍隊の防寒靴を通して足に針を刺すような痛みを感じた。今までに経験したことのないような寒さである。雪の中既に多くの人が踏み固められた道を十分位歩くと大きな倉庫に着いた。裏の方に無線塔があり、農業機械倉庫の跡らしく、付近にトラクターの部品らしきものが残つていた。場所はどのあたりか全く見当もつかなかつたが、だいぶ後になつてコムソモリスクの近くの駅であることがわかつた。

思えば国境の町綏芬河からウスリースクまで約百キロ、ウスリースクからシベリア鉄道を北上してハバロフスクまで約百キロ、さらに二百キロ北上してコムソモリスクに至る。約千キロを北上したことになる。ここはドーフと呼ばれていた。場所割りをして大倉庫に入る。数百名は入る広さで今夜はここで宿泊することにな

り、早速雪を溶かし、薪を集め、残り少なくなった米を靴下の袋から出して飯盒炊さんにかかる。思い思いの夕食を済ませる頃には日暮れとなり、電気のない大部屋は暗く寒く、人々は疲れ果てて言葉少なに土間の上に身体を横たえた。帰国の望みを完全に絶たれ、今後の見通しもわからない。ハルビンから持ってきた食糧も底をつき始め、不安と絶望に打ちのめされていた。そんな時大きな部屋の向こうの隅から演芸会が始まった様子で、浪花節の語り声が聞こえてきた。身体を起こして耳を傾けたが、広いのでなかなか聞き取れない。次の漫談(横山昌良さん)もわからないまま終わった。間もなくほのかな明かりの中から透き通るようなハーモニカの響きが聞こえてきた。美しい音色にのって「誰か故郷を想わざる」「荒城の月」「影を慕いて」と演奏が続くと、懐かしい故郷が思い出され、身を乗り出して聞き入り、去りし日の感傷に胸を傷めた。感嘆のざわめきの中に今度は声楽が聞こえてきた。イタリヤ民謡「オオソレミヨ」の独唱である。これはまた素晴らしい声量で我々の飢えた心の中にさらに大きな感動を与えた。忘れ去った青春の思い出が次々と蘇り、大部屋の中はしばらくうっとりとして聞きほれていた。終わって万雷の拍手の中、よく見ると高橋鶴雄の熱唱であった。かくしてシベリア第一夜は、雪に包まれたドーフの大部屋で不安と寒さにふるえながらも、高橋の独唱と深掘さんのハーモニカに慰められながら終生忘れることのできない思い出深い一夜となった。

朝からトラックが数台来て人員輸送が始まった。銃剣を持つコンボイに「ダバイダバイ」とせきたてられながら二、三十名ずつ乗り込み次々と出発して行った。人員輸送は昨日から続けられていたらしく、大部屋の人員も次第に少なくなってきた。我々は第三中隊で、小隊長は誰であったかわからなかった。午後になつて順番がきてトラックに乗り込むと、厚い天幕の覆いをかけられて出発した。道路が悪いらしくガタガタと大きく揺れながら奥へ奥へと進んで行った。森閑とした密林の中を走っている気配である。何時間か走ってトラックが止まると、外でロシア語の話し声が聞こえる。トラックを降りてみるとすでに薄暗く、幾棟かの

丸太小屋が並んで周囲は高い木柵で囲まれている。寒さが一段と身にしむ。

ソ連将校の指示で我々は門より二つ目の丸太小屋に入る。中は中央に四角いペーチカがあり、それを取り囲んで二段ベッドが四方に造られていた。長い間空き家であったらしく、丸太の壁は隙間だらけでガタガタの扉から吹き込む風は肌を刺すようである。電気もランプもなく、真つ暗い部屋に薪を燃やすペーチカの光がチラチラと揺れ、言いしれぬわびしい夜であった。毛布も藁布団もないので、板の上に着のみのまま背囊枕に横になると、小雪まじりの隙間風が顔に吹き付ける。タオルを首に巻き防寒帽で頭を包んで寝ると、疲れが一度に出ていつの間にか眠ってしまった。

この日からシベリア抑留生活が始まった。地球の中何処にいるかもわからない。ただ寒さと重労働の毎日が続くことになり、時間は日の出と日没のみを刻み、月日は止まったままでわからない。年単位で時が経ち文字通り氷の中に閉じ込められた。この収容所(ハバロフスク州ホルモリー地区第二一七収容所)は、第二次大戦前第二シベリア鉄道(バム鉄道)建設のため造られた囚人収容所の跡である。

新潟県 高橋 算

ある日、氷点下三〇度も下がったときに、毎日ノルマが達成できないというこどで、暗くなっても帰れないときがあった。シベリアの冬は午後三時ごろにはもう暗くなる。暗くなれば伐採などできないが、いつになっても帰れる合図がなかった。その中にたき火がちらりと見えるのはソ連兵であり、我々は丸太に腰かけて震えていた。寒さは急激に襲ってきて、立ったり腰かけたり体を動かすより仕方がなかった。どうして我々日本兵がこんな目に遭わなければならないのか、暗い夜の林で泣いた。そして夜の九時ころになり、ソ連の隊長が来たらしく、帰れの声が聞こえてホッとした。

凍傷患者が続出し出した。足がはれて防寒靴が履けない者、手袋に指がよく

入らない者、鼻の頭が赤くはれている者たちがいたが、作業には出されていた。そのうちに寒さと栄養失調で衰弱し死亡する者が出始めた。もう夕食に「シン」は出なかった。

私と一緒に寝ていて食事も分け合っていた大阪出身の若者が、朝起こしても起きなかった。死んでいた！肩をくっつけて寝ていたのに、全く死には気がつかなかった。彼は一言も言わずに死んでいったのである。

その朝も死んだ彼の横で食事をして作業に出なければならなかった。私の寝台の上に寝ていた兵も一人死んだ。地獄とはこんなときのことを言うのだろうか……。そして、明日は我が身だろうか、何とも言えない気持ちにならざるを得なかった。暖かい地方の出身者が大半凍傷になったり、体力のない兵がボツボツと死んでいった。

重労働地獄

大阪府 今井源治

春の気配とともに収容所の動きが慌ただしくなった。果てしなく続く密林に挑んで、本格的な伐採作業が開始された。

原生林は赤松、落葉松、白樺が点綴^{てんてい}していた。私たちは二人一組となり、長大な二人挽きノコギリを持って二抱え三抱えもある巨木に立ち向かった。

メーデーの休みが終わり、雪の消えた密林の伐採跡に延々たる鉄道路盤建設の土盛り作業の幕が切つて落とされたのである。

ターチカと称する木製の手押車を使つてのこの強制労働のために、体力を消耗し尽くした同胞は次々と倒れていき、これをターチカ地獄として恐れた。氣息奄々、ただ体力の限りを尽くして土に取り組み、掘つては積み、積んでは運ぶ果てしない単調な仕事、この作業には物すごい体力の消耗と絶望的に過酷なノルマの重圧がある。

しかも、ソ連側はいやが上にも、あの手この手を使つてきた。不法にも、次々

とノルマの大幅引き上げ。作業成績に対する増食、減食。これは一方から削つた分を他方に与えるだけで、分隊としての総量は変わらないのだ。食物で釣つて、一口でも余分に食いたい者をさらに働かせようというソ連の手口と、それに乗せられるヤポンスキーの愚直さ。

そして、犠牲者の続出を防ぐためか、体位検査が行われた。素っ裸になったヤポンスキーの尻の皮をつまんで一級、二級と決めてゆくだけで、廃牛の値踏みと同じである。

重労働のその上に、夏は物すごい「ぶよ」の大群に襲われた。小雨のようにシャーツと音を立てて襲いかかり、目も口もあけていられない。所嫌わず食いついた。重いターチカの舵棒を握る手は離せず、背中の破れに集まるぶよの襲撃！

「ああ、冬の方がましだ」と悲鳴を上げた。

北海道 北村忠一

飢えと寒さと重労働の体験は入所当時特に感じていましたが、タポール(おの)を担ぎ、ピラー(のこぎり)を持って出掛けた伐採作業の行き帰りはだれもが口数が少なく、頭を深く垂れた集団がとぼと歩くさまは、全く前途に光がなく、ただただ故郷で食べたぼたもちが脳裏に強く押しかぶさり、来る日も来る日も続いた山の中の雪道はどうしようもないものでしたが、これを支えていたものは、きっといつかは日本に帰れるんだ、春を待てば何かあるのではと、わずかな願いではなかったでしょうか。春が過ぎ夏が来て、四季の息づかいには生物に感じられました。

そのころ、日本へ手紙を出すことが許され、わずかながら明るさを取り戻すことができました(私の手紙は家に着いていませんでした)。

福島県 宮城善一郎

ある夜、寝静まった兵の耳に遠鳴りの汽笛が聞こえた、何回も流れてくる。何

であろうか？と思っっているうち、ソルダートが慌ただしく「ダワイ、ダワイ、ブイス
トラ」と大声でたたき起した。嫌々ながら防寒衣を着て、暗い野外に整列した。
棒の先につけた油布が赤々と燃え周囲を照らし、ソルダートとソ連人監督が右
往左往している。感覚も失う寒気が粉雪とともに兵を包んでくる。ツルハシ、エン
ピ、大きな金槌の作業具が渡され、各小隊は隊列をつくって雪原に出た。どこを
どのように歩いているのか、全くわからぬ、四キロほど歩いた鉄路に無蓋長蛇の
貨車がとまっていた。一つの貨車に数人ずつ割り当てがあり、積んである山のよ
うな土砂をおろす作業である。手始めは無蓋車の側板を倒すことである。側板
は頑丈な四本の鉄杭でとめてある。私もやったが、持ってきた鉄槌で両側の杭を
下からたたき外す。両側の二人が呼吸を合わせることに、外れば同時に退避
することが大事だ。さもないと側板が頭に落ちてくる。夜間作業のせいと弱った
足もとが敏速でなく、これで死んだ者が何人かいた。命がけの作業であった。貨
車に上がっても凍てついた砂利は岩盤に等しく、ツルハシを振るう弱った力では、
なかなか崩壊しない。どこまでも地獄の鬼たちは罪なき虜囚を痛めつける。これ
が地獄でなくて何であろうか。

砂利を両側におろし終えて帰路につくころは、かなりの時間が経過していた。
ふらつく足を夜の雪原に運ぶ隊列の中から倒れる者も出てきた。そして、翌朝
十時になると昼間作業に駆り出される。たまったものではない。私はこの收容所
が最後の場所と思うようになった。

抑留中の生活と極限状態における意識

熊本県 畠田 完

飢え、食うか食わぬかの毎日、重病人が食べるような流動食、体力はどんど
ん落ちていく。追い打ちをかけるように、シラミ、ダニまで養い、血を吸わせてい
る。寒さは零下三〇度〜四〇度、防寒具の重さも加わり、身の動きは更に悪く
なる。歩くのがやっとという状況の中の重労働、口では到底言い表せない苦痛

の連続である。

寄るとさわると食べ物の話である。ぼた餅、羊かん、ぜんざい……巻ずし、い
や、握りだど、人それぞれの好みのもが出てくる。お袋の味をかみしめつつ話
は尽きない。酒、ビールなども時々顔を出す。若者の集団だが、女の話は滅多に
ない。人が極限に達したとき、まず食べ物が第一であることがわかった。単調な
生活の中で、食べ物の話が一つの活力源となり、希望の泉だったのではないか。

広島県 塩谷静夫

次の日、軍用自動車に荷物のごとくぎゅうぎゅうに詰め込まれ、ウランバー
トルに着きました。ここは朔風吹きすさび、砂塵舞い上がる、ゴビ砂漠の一角で、
しかも氷点下三〇度〜四〇度の酷寒の地、ここでは三千人ともいわれる死者の
出た飢餓と寒さの下での重労働が待っていたのです。体験者でなければ分から
ない、抑留者の苦闘。分かってもらわなければ死んでも死に切れない、飢えと寒
さに加えての重労働、正に生地獄とはこのことかと思わされたことです。

その上、ソ連は我々強制抑留者を日本に帰すのか帰さないのか、ウランバー
トルでは何一つ情報は得られず、家族との音信も一度もできなかった。このような
条件の中で、ノルマに追われ、私たちは何にたとえたらよいのだろう……。六月
中旬ころまで雪が降り、八月下旬からまた雪、氷点下三〇度〜四〇度の酷寒、
箸もスプーンも要らない少量の朝食をすすり副食はない。少量の昼食のパンを朝
食と共に食べてしまつて、昼には食べる物がなく、ただただつらかった思い出が、み
んなの思い出であり、仕事場から往復の途中、煉瓦のかけらがパンに見え、思わ
ず駆け寄つたこともあった。

三〇メートルもある給水塔の上まで、負いで煉瓦を運ばされたが、このおい
こには番号が付いていて、ノルマは果たさねばならず、体は綿のように疲れ、死の
一步手前、およそ人間として限界を遙かに超えたものでした。

煉瓦作りでは、一日何十回となく、二枚が作れる型枠に、土を水でこねる、

それを型に入れるのだが、ひびで両手が嘔き出る血で真っ赤になり、痛いこと痛いこと。そんなときでもノルマは増えていったのです。これが七月、八月のころのことですが、煉瓦用の土取りで、土砂くずれで死んだ者がたくさんあったことも厳しい事実ですし、また、栄養失調で死ぬ、虱にくわれてチフスで死んだ者、私も四〇度の熱を出したが、冷やす水も飲む水もなかったのです。

外モンゴルでは、川が収容所から遠く、冬季は水面から底まで凍っていました。賃金も払ってもらったこともない、どんなに寒い時でも、毛布は私らが持つて入ソしたときの一枚だけ、別の支給は一切ありませんでした。

過酷な労働の上に、更にこのような条件の中で、父母、妻子を偲び何としても生きて帰りたい、帰国への思い一本、一筋で、耐えに耐えた毎日でした。

神奈川県 石井 勇

私の抑留生活は十月末より始まった。

満州では吉林省にあつた豊満ダム解体作業約一週間を初めに、間島省琿春での駅構内貨車積卸作業四カ月有余、シベリアに移送されたのは翌二十一年五月だった。豊満ダムでは、期間が短かつたせいか、特筆することはないが、貨車の蓋が外れて左足甲にぶつかり、歩行困難になつたこともあつた。

シベリアと朝鮮との国境の街琿春も思い出の地だ。同僚が歩哨のいたずらでマンドリンと称する自動短銃が暴発して頭部を貫通され即死したのを目撃した。また、私自身も大豆を盗もうとして歩哨に発見され、短剣を投げつけられたが、とつさに身をかわし、危うく難をのがれた。

ウラジオストク、グルビンカ収容所に収容所された(二十一年五月〜二十二年七月)。収容所入りしてから気候の温暖な期間はこれといって特筆する事実はなかったが、十二月中旬だったろうか、凍結したウラジオ湾に面した高台(ナールジュナヤ)、寒風吹きささぶ中での建築基礎工事中、コンクリート用鉄板を移動中、左手を挟まれ、中指の爪半分程を切断した。全治には二カ月以上かか

つたが、十日ばかり休養が許されただけで、治療しながら作業にかり出された。そのときの苦痛は今もつて忘れられない。ただ一つ白露系の通訳の女性から慰めの言葉をかけられたのが印象に残っている。その後も苦痛作業は続いた。指の負傷が治癒しないまま、洞穴内のヘドロ除去作業に従事させられた。昼間でも氷点下十幾度だったと聞いている。しかも終始ダワイダワイの連発だった。心身共に冷えきつた。この頃から強烈な冷え性にかかった。今もつてその後遺症に悩まされている。

石川県 山本利男

朝食は高粱や大麦のお粥であるが、その際、昼食弁当として黒パン三百五十グラムも一緒に配給された。ただし空腹のため一緒に食べてしまうので実質は一日二食になる。昼食時には作業場で僅かばかりのスープ(パンの副食としてキャベツやトマトの切れ端が少し混じつたもの)が飯盒のふたに支給された。

私達は飢えと酷寒に堪えながらおよそ土方と言われる仕事は何でもしたが、これらの作業は、防寒具を着た零下数十度の極寒の中、しかも空腹、栄養失調の中で行つた。

入ソした年の冬は最も疲労困憊に達し、身体の弱い者や下痢等起こした栄養失調の戦友達が次々に斃れて逝つた。翌年の夏頃からは、食事事情は改善され、労働や環境にも少し慣れてきた。また、炊事担当責任者のソ連将校が、我々の食料を民間に横流ししていたのがバレて軍法会議に回されたという噂も聞いた。

滋賀県 竹山梯三

二十六日間、何ぼ遅いとはいえ一カ月近くも鉄道の上を走ればかなり北極圏に近いところまで連れてこられたに違いない。おろされたところは沿海州サラワッカーだった。仮設の半分天幕建ての収容所で、この地から初めて見た北極星はひととき大きく頭の真上にあつた。もう少し北へ行けば紛れもなく北極であ

ろう。

この日から、共産主義独特の過酷なノルマ制度に鞭打たれ、番兵の銃口からいつ火をはくかもしれない捕われの身として、氷点下四十度、五十度の厳寒の中、苦しみの明け暮れが続く囚人生活の第一歩が始まった。朝、鐘の合図で起き、少ないながらも朝食、身支度、用足し、全員が整列、点呼。ラーゲル(收容所)の門を出るまで一時間はかかった。作業現場までの往復時間二時間、作業八時間、收容所に帰ってから濡れた物を乾かす、ほころびを縫う、炊事の薪取り、自分たちの薪取り、働く時間を通算すれば十四時間余り。これに対し一日分のカロリー量は、朝、黒パン三百五十グラムとニシンの塩スープ、昼、顔の映る雑穀がゆ、夜、黒パン四百グラム、粟スープ、こんな食事では人間が立っているのも精いっぱいである。土工作业八時間分のカロリーの六五パーセント余り、零下四十、五十度という酷寒、耐え切れないのも当然。衰弱、栄養失調、骸骨に皮をかぶせた人間ロボットそのものであった。手足に生えている毛も伸びず毛穴に縮んでしまえば脂肪分が無くなり、ペキペキと折れた。また、体に縦に筋が入ったりもした。寒さで皮膚が凍傷、真っ黒になり我が身と思えないほど。それでもロシア人は重労働の手を緩めることはなかった。むごいという一言に尽きる。

新潟県 高橋吉郎

シベリアの大森林は切つても切つても尽きることがないと言うが、この大森林の伐採で、抑留日本兵がシベリアの大森林の奥地へ連行され空腹をかかえて重労働をさせられた。空腹は食料を横流しされたことによるものだ。また、悪循環から風の媒介による発疹チブスの伝染病で多くの尊い人命が失なわれたことは、辛うじて生き抜いて祖国へ帰った戦友の苦闘の語り伝えとなって今日に至っているものであるが、この筆舌に尽くし得ぬ苦闘の結果、切り出された材木を製材する工場の作業隊の責任者となって出たことである。作業員十五人程で、一日のノルマは長さ六・五メートル、木口三十センチメートルの丸太三十五本を製材

しなければならぬのである。これが百パーセントで、これによって食料が支給されるのである。重労働であるので、最低百二十五パーセントあげないとこの重労働は勤まらないのである。大量のオガクズが出るので二メートルもある高台に太い丸太三十五本を上げるのはとても至難の業であり、日を追うに従って隊員は体力の減退が目立って来た。顔青ざめ、目は窪み、頬はこけて来るのが目立って来た。骨を削られるような辛さである。

これでは早晚倒れる者が出て来ると考えた末、緊急避難の措置として集団窃盗を考えた。それは、工場の隣の貨車積みになって止まっている上質のカイ炭である石炭に目を付けた。火力発電所用に使うカイ炭である。この石炭を夜間作業となった時に、歩哨の疲れを幸いとして深夜の休憩の時間に集団窃盗することを考えた。隊員の反対もあったが俺が責任を取ると言って賛成してもらい敢行した。石炭の貨車の前後には銃を持った地方人の歩哨がついていたが運よくみづからず、隊員で手送りして相当量のカイ炭をオガクズの中に隠匿した。第一段階は成功した。日を置いて屈強の体格のがつちりした隊員が、二キロメートル離れた高い丘を越えて石炭を南京袋に詰めてかついで行き相当量のジャガ芋と交換して来た。このあと毎晩深夜の休憩時間に飯盒でゆでて食した。この夜食のおかげで隊員の体力も回復し、したがって百パーセントのノルマを達成することが出来て、更に百二十五パーセントにまで上げることが出来たのである。天佑神助と言うべきであった。

新潟県 若月太郎兵衛

煉瓦工場の復旧作業、ラーゲル周りの三重の鉄条網を作る作業。僕らはドイツの捕虜でも来るんだろうと思っておったが、これもまんまと騙された。煉瓦の原料の粘土掘りはこの世の地獄だった。シベリアのツンドラ地帯、夏でも地下二メートル以下は凍っていて溶けないのだ。まさに一枚岩。ボールもツルハシも受けつけない。電柱くらいの大きな木で焚き火して掘るのだけれど、一日かかっても何

升も掘れない。工場長は、まんまにもお粥にもならぬとつかかして怒っていた。彼は、僕ら一人一日いくらと賃金をラーゲル側に支払わねばならぬのだそうだ。

煉瓦窯に焚く燃料は落葉松であった。その伐採がまた大変な仕事で、当時は質より量の時代。ピラー（鋸、一メートル長さの二人引き用）は二人して押したり引つ張つたりの代物で、切れ味は悪い。相手と気合が合わなければ仕事にならぬ。研ぐとしても、ろくにヤスリもなく品も悪い。日本兵の建設隊の物を誰かが持つておつたので助かった。大木を二人で切り倒して、一メートルの長さに切断して、高さ一メートル、長さ六メートルが二人組のノルマだった。お腹いっぱい銀飯でも食べておれば大した労働ではない。栄養失調ではどうにもならぬ。松の小枝にでも足が上がらず倒れる状態、昼飯は前夜のうちに黒パンを支給分食、へてしまつているのだから、昼は空飯盒に雪を詰めて湯を沸かして飲むだけ。夜に我慢して取つておくと盗まれてしまうから。

富山県 窪谷好信

重労働に耐え

シベリア抑留は極寒と飢餓、さらに過酷な労働に強いられ、命の限界まで耐え忍ばねばならない。実弾こそ飛んで来ないが戦闘の第一線に等しいものであり、まさに「この世の地獄のこと」である。

一 水汲み（炊事・浴場、うまや用など自活のため）

馬の扱い経験者（わずかに機関銃隊で駄馬訓練）に選ばれる。所外の井戸でつるべおけで水を汲み上げ、ウオチカ（木桶）にあげ馬そりに乗せ運搬する。井戸端および通路は水がこぼれて凍り、凸凹の滑り道を防寒服装で歩くだけでやつとである。そのうえに蹄で踏まれて転ぶ恐れがあり、命がけの甚だ危険な仕事である。いっぱい汲んだ水は着いた時には桶蓋がないため半分になり、能率が悪く二倍の労力を要した。

二 木材運搬（伐採生丸太を集結）

枝の散らばつた山林斜面に無造作に放置の針葉樹を二、三人でかつぎ運び積み上げる。雪を払いのけ、手ごろな材を運び持ち上げるのにやせた体では力が出ない。たどたどしい足取りでつまずかないように歩く。三人の肩が合わない、切り枝の残りが肩にあたり痛い、松やにで汚れる、雪道で滑るなどの難行苦行、そのうえにノルマを上げるとせき立てる。あまりに酷いので木材を投げ出して動かなかつた。早速、監督が来て、わめきちらし、け飛ばし、突き倒された。仕方なく続けたが、後で何か罰せられると覚悟していた。しかし、その場限りの制裁で終わった。

三 側溝掘り（鉄道路床に排水溝を造る）

長さ五メートル、幅、深さも約一メートルの側面斜め底の溝掘りを、五人組ごとに割当の請負仕事である。堅い凍土のため十字鍬は跳ね返つてきて役に立たない。そこでたき火をして土をやわらげて掘るが、表土二十センチほどしか効き目がない。初めのうちは、日本人の癖で、早く終わつて休もう、他の組に負けてはならぬと一生懸命に無理をする。完了すれば無論ノルマが上がるが、過酷な労働を自ら求めていた。しかし、ロシアのために犠牲になることもなからう、体力をすり減らしてまで競うことはばかげたことである。時間が来れば帰れるのにと、我が組は負けるが勝ちと決め込んだ。掘り終わった溝は凍結し明日は誰が掘るのか分らない、その日その日の日雇い人夫であった。

四 ターチカ運行（一輪車を押し土運び）

岩山を爆破した土を板張り木製の鉄輪車に積み、狭い道板の上をたどり谷に捨てる作業である。積み込み、運搬もなかなか休むことなき骨折りの原始的な連続労働である。道板にこぼれた土に乗り上げ脱線転覆、板の継ぎ目にはまると、車ごと谷に落ちるなど、腕力の操り方に一時も気をゆるがせにできない。やれやれと捨て場に立つっていると、「ターチカピリー（一輪車握り動け）」と監督の大声がこだまする。のろのろでも動いていなければならぬのが情けなかつた。

五 厠の糞尿掻き（収容所便所の汲み取り清掃）

野天の收容所内隅に溝を掘り板を渡しただけが便所であり、同じ箇所用便をするので、盛り上がり凍結する。夜間は特にお尻の危険予防が望まれる。そこで所内の軽作業であるが、鉄棒で「ピラミッド」を掻く使役に出なければならぬ。鉄棒一本を使うが、思うように扱えない。

倒すことはたやすいが運び出すのは至難で、幾分ならして済ませる。凍つて臭みは少ないが、飛んだ氷の粉が被服に着き幕舎に帰り暖まると解け出し、におうこと処置なしである。皆に迷惑がかかったが、誰も怒る者はいない。しかし重労働以上の出来事であった。

岐阜県 鈴木義彦

收容抑留中の兵は、帰国願望待機中は現満州国内は内乱あり極めて危険のため輸送困難であり、沈静の上輸送をすと言ひ、ついに冬期十一月末に至り満服を支給され帰国の途につくこととなるも、依然と国内輸送は困難と言ひ、ソ満国境線にて輸送するという事になり、満鉄貨車内部は急製木枠にて二段ベッドが両脇に造られていて、正にすし詰め搭乗させられ発車した。

全員安堵か心配か、複雑な思いの中で進行した。不安の中、進行中太陽の光だんだん西方に傾き、ついに線上真上に左方向へと進む。ソ連領だ、騙されたと大声が飛ぶ。車内騒然、怒り爆発、いかんともしがたく涙をのむより致し方なかった。車内の天窗、小さな窓より眺めると、先に記述した物資延々と山積みされている。鉄橋に差しかかった時、突然貨車の扉の隙間から数人が飛び降り騒然となる。

着駅名はソ連領鉄路線上ノーパーヤという駅だった。意外にも停車中の貨車の穀物を狙い、原住民がおんぼろの衣服を纏い、日本人で言えば乞食同様の人々が南京袋の糧秣に穴をあけ、洩れる糧秣を両手で掻き集め、数人が競い合い袋に詰めている。意外の実態に呆然とした。ソ連兵は黙認し注意はしなかった。路線上にこぼれた糧秣をも掻き込んでゐる。あまりにも地獄の境地を見て、兵は

私物の物品を数々与えた。あまりの光景が脳裏より離れない思い。

駅着後直ちに三日二夜の不寝強行軍に入った。途中寸時の野営のみで我々は極度の体力消耗、歩行困難に陥りながら、盟友励まし助け合いながら行進す。

着いた收容所は粗末な丸太造り。旧ドイツ兵の收容跡地で、主として伐採と松指集作業をしていたようだった。

労役

我々の編成隊は二千人編成であり、主な作業は伐採作業であった。作業出発時、人員点呼。五列縦隊数えるのに初めから数回繰り返し、一回で済むことが一度もない程。数分雪の中に立たされ、震えた。作業場は延々深雪悪路で数キロ、その上作業で、二人一組で松の大木直径一メートル以上。伐採ノルマは一組三本以上と過酷ノルマ、達成はとも無理。芯まで凍りついた松木は容易に鋸が進まない。苦戦の連続結果、倒木、大声で周辺に知らせ危険排除し倒す。松葉積雪する大木は、大地に倒れると同時に一本の大木となり、枝葉は径三十センチ以上でも元から凍結のためにフツ飛んでしまう。そのため思わぬ重傷者も出る、何と過酷な作業かは言語に絶する。死者も出た。正に地獄境地だ。その大木を鉄道路線広軌の倍の長さの割り切り作業切断。これを源流河川の堰堤に運搬。数百メートル以上を一組十六人、前後八人ずつで鈴なりとなり、ヨイコラシヨイコラシヨの掛け声に合わせ一歩一歩前進。皆肩が腫れ上がり蝟になつてカチカチで、最も重労働で疲労困憊の上なし。

やがて夏期に至り雪解け水の流水を利用、流木作業が始まり、途中流木が重なり合い集積、流木不能解除のため流木上に立ち棒一本で操り、一歩間違えば流木と共に流され圧死の危険あり、正に地獄絵巻。この作業で数人の命が流された。残酷極まりなき作業であった。中には重労働疲労極限に達し、流木と共に生命を断つ願望者もあり、人選苦慮。

ロ、ラーゲル周辺囲み作業始まる。周辺松木の直立木選定、長さ十メートル以

上、伐採運搬。一辺百十数メートル四周、一部衛門ありを、凍結地掘削で一メートル以上掘り、隙間なく松木連立。松木倒立本作業は別途重作業により強要され、自らラールゲル包围する。

その後、ジンビルカ収容所を後にノーバヤ収容所に移動させられる。作業は住宅建設、丸太積上げログハウス。基礎から棟上げまで、十数棟建設に当たる。ほかに製材木工所において鉄道枕木製造、及び現地人指導により松材による大桶製造、または鉄道輸送による原木丸太貨車搭載作業、昼夜を問わず連日重労働だ。

ハウス建設は、基礎丸太の上にもう一本の丸太を重ね、合わせ目をコンパスで印を付け、上の丸太の底部分に印に沿ってタポール斧で深さ一五センチの溝を掘り、中間に乾燥した水苔を挟んで積み重ね壁面を造る。天井はスノコ作りの板並べ、その上に土を乗せる。内壁に石灰を水溶きして一面に塗り上げる。

十数両の無蓋車に丸太登載だ。貨車いっぱい長さの丸太を、前後にロープを掛け、一方十数人ずつで引き巻き、転がし積み込む。一貨車五段積み程の高さに巻き上げる。危険で大変、不眠の重労働である。ただただダモイ、祖国に帰り故郷の土をこの足で踏む夢見て、体力限界を越えながらも耐えがたきを耐え、現在では考えられない程、生の執念に徹せねば生はなし。

洗脳教育について、当時自主的に盟友発行の日本新聞が発刊され一般配布されていたが、私は特別アクチーブと銘ある教育を受けざるを得ずして、マルクス・レーニン主義の史的弁証法、唯物論等を徹底的に、また共產主義理念を植え付けられ、強要された。その後帰国のためと言われ現ノーバヤよりナホトカに移り帰国を待つも、何と当地において一年半有余滞在させられ、主としてプロック造りの四、五階建てドーマの建設に基礎から完成まで。その間、帰国の盟友を数回にわたり互いに手を振りながら大声で元気な一と交わしながら送出した。中に同郷の友あり、家族に元気であること伝えてくれと頼み、送った。彼の行列進行中の一時である。

抑留中の生活と極限状態の意識

申すに及ばず、飢えと寒さと重労働とともに極度の栄養失調に陥り、驚くなけれ、信じられない最悪の事態。当初二千人編成中、一冬越え開けには何と千数百人が死亡、残るは八百有余人。昨夜、すし詰めの就寝、両脇の友、特に何語ることもなく床に就き、朝起きて見ると意外や意外、両脇の友は冷たく語らず他界。夢の故郷を偲ぶ無念の姿、ただ両手で友の手を握り、明日は我が身と涙止まることはない。こんな馬鹿なことがあつてよいのか。これが現実だ。

その後一カ月程、私は意識不明に陥り一週間以上寝たきりの状態の中、突然半身起き上がり、隣の友の食事を取り霧中で食べ始めたとのこと。周辺の友はただただ呆然と驚き見ていたという。そのとき岐阜出身の軍医さんが私にドイツ軍保有貴重薬を投薬下されたことを、衛生看護の友、四国出身山口君が驚異的生還を祝し語ってくれた。現在も彼とは命の恩人と深く交情中。当時は皆、不法侵入のソ軍は許せない、生ある限り絶対仕返しのための命と我が身に誓っていた。

愛知県 森藤真一郎

厳寒の中、超過酷な重労働とは、前夜三百から五百メートルくらいの山の腹にハッパを仕掛け二トンから五トンくらいの岩石を落とし、その大岩石を十五立方センチくらいの大大きさに割り、作業場の後ろに五立方メートルの量を積み上げることです。石は家屋の塀等に塗る石灰の原石です。従つて十五センチくらいに揃えないと、バランスよく焼けない。ハッパを掛けて落とされた石の上に積み上げ、作業量をごまかそうとしても検査で発見される。検査は作業終了前立ち会つて、検査員が長い定規で測つて体積を計算し、底に大きな石があればその日のノルマはゼロである。

マーは四種類ほどあり、大きなものは、つるはしや杵より重い。また、石が小さくなるにつれハンマーを替えるわけだが、最初から石の目に沿つて力強く打ち

込まないと細かい砂利になる。また体力の消耗も激しい。石の目を見極めるようになるまでかなり熟練が要る。検査は厳しく、僅かな食料ではともノルマは上がらない。さらに、冬期に入ると、日の昇るのが遅く日の沈むのは早い。作業時間は昼休み等を除くと正味四時間くらいである。日が短くなっても八時間労働厳守である。現場で、朝夕の暗い時間は凍死を防ぐため戦友と抱き合い足踏みをする。一生懸命作業してもノルマは二五%程度であり、一生懸命やることは死につながることもあった。現場で倒れて亡くなった人も多い。さらに、零下三十三度で風速十メートルだと体感温度はマイナス百度だと聞く。気温がマイナス三十六度になると作業に出せない事になっているが、ラーゲル長はノルマ遂行のため仕事に行かせようとする。そこで歩哨が出て来てラーゲル長と言い争いになる。その間二、三十分整列させられたまま、厳寒の中に放っておかれる。皆は凍傷にならないよう背中の擦り合いをする。しかし結果はいつもラポーターが多い。死に直面する思いの強制労働であった。

山口県 小曾根三郎

私は、夢によつて命拾いをした後、どんなことがあつても生きて日本に帰ろうと心に決めました。そして「帰ろう会」を結成しました。

とにかく仲間と、労働をカサ上げして表現し、ノルマ制度のウラをかき各人の体力を残すか、生命がけでサボりました。

半年くらいは成功しました。だんだんつじつまが合わなくなり、通告され、十二年の大晦日の夜、営倉に放り込まれました。零下三〇度の厳寒の夜、冷え切った営倉に放り込まれ、私は凍死を覚悟しました。しかし、真夜中に人の気配がして、ペーチカに火が入りました。見つかったら殺されるのに決死の覚悟で火を入れてくれた人に、今でも感謝しています。

約一週間、クソ柱処理の刑に服しました。毎年十月、地面が凍り出す前に、収容所の横に幅三メートル、長さ七メートル、深さ二メートルくらいの穴を掘り、

その穴に板を渡し、柱と柱の間を二十センチくらいあけて用を足すように便所を作っておきます。冬の間は地面がかたく凍つて、穴が掘れないからです。

冬に入ると、その板の間で用を足します。便は落下して凍り、秋芳洞の石筍みたいに積もり、一カ月もすると板につかえるようになります。

「反動」である罪人の私は、そのクソ柱をバールで突いたり叩いたりして砕くのです。そのとき、飛びはねたかけらが顔に当たったり口に飛び込んだりします。零下三〇度の世界では匂いがないのですが、撰氏二〇度の部屋に入り、ペーチカのおかげに寄ると猛烈に匂いを出します。「臭い」「あっちへ行け」と言われても、じつと耐える以外ありません。「帰ろう会」の頭目であるのも辛いことでした。

福井県 片山清次

チユナ駅拡張工事

単線から複線へ、さらに引込線を敷本も敷設するようになり、広大な構内を造成する傍ら、そこで掘り出した土砂は一キロメートルほど離れた低地にトラックで運搬し、一辺が三〇〇メートルほどの正三角形の路盤を築き、レールを敷設して、ターンテーブルを造成した。この作業は、すべてスコップによる手作業であった。期限が定められていたのだから、文字通り昼夜兼行の重労働もしばしば課せられ、泣く思いだった。

朝、職場に到着して作業開始。昼食、夕食はラーゲリから現場へ運ばれ、もっぱらスコップで土砂をロボットのようにトラックに積み込む。空腹と疲労とでスコップを杖に立たないと倒れ込んでしまうほど、綿の如く疲れ果てる二十四時間労働は体力の限界を感じた。

和歌山県 辻本信二

ラポータ(仕事あるいは労働)

ここでの毎日は土れんが造りであった。約千人の同胞がノルマ(仕事の基準量)

のために苦しめられた所である。内地では考えられない土で造るれんがだ。前日に水を入れておいた土を練って箱枠に入れ、整地して砂を敷き詰めた上に遙か前方から順にひっくり返して乾燥するのだが、一日三〇〇枚がノルマだ。これを達成するには一五〇回往復しなければならぬし、翌日のために約三時間、土を掘り水を入れて準備をしておかなくてはならない。掘ってゆくうちにだんだん穴が深くなる。地上へ出るだけでも大変な労力を要するがノルマは一向に変わらない。こうした毎日を続け、釈放の日を待ち焦がれながら重労働に生身をすり減らされ、同胞の多くは栄養失調で姿を消していったのであった。

栄養補給をしないと毎日の重労働に耐えられない。作業に出ては野ネズミを取って食べるのが楽しみだ。乾いた土を掘ってゆくと、何を食べているのかよく太って猫位もある野ネズミが穴に住んでいる。この穴を見つけるとそれこそ袋のネズミだ。二人で協力して片方の穴から水を入れ、もう一方の穴ではシャツを袋に待つていると飛び込んで来るといわけだ。早速皮を剥いで料理する。両足の大腿部は、ちよつとした鶏位の肉があつて実においしいものだ。

夜、暗くなつて雑犬が入り込んで来ると忽ちにして我々の餌になつてしまふ。殺してすぐ飯盒で煮るが、肉はゴムのようになり硬い。だが何でも腹に入りさえすれば満足できるので、手当たり次第に捕つては食べた。蛇も我々に見つかつてはひとたまりもないのである。

作業を終えてラーゲルに帰つて来ると、誰もがお国自慢の食べ物や名物の話等して味覚と満腹の妄想を追い求め、空腹の虫をごまかそうとしたのだった。

和歌山県 辻本信二

このラーゲルのほとんどが東京、名古屋方面の人達で、私達が混成して一層賑やかになった。まず最初の作業は、中央アジアの塩湖アラル海(面積約二〇〇〇平方キロ 北海道位の大きさ)に注ぐその源をパミール高原におくアム川とシル川が、延々二〇〇〇キロの流れを千古の歴史とともに悠々と流れている。その

合流点の近くの山(丘と言う方が当たっているかも知れない)を函型に掘割様の底辺約百メートル、傾斜は約四十五度の川を造るのである。

莫大な土の量である。その土を初めの頃は円び(シヤベル)で横に捨てることのできるが、深くなるにしたがつて作業も簡単に捗らない。麻袋にいつぱいの土(約六〇キバ)を担いで石垣を這い登る蟻のごとく、足に鎖こそないがその昔映画や絵で見た奴隷そのままの姿である。岩が出てくると二〜三メートルの空穴を二人で二日がかりで掘るのがノルマだ。ダイナマイトで爆破させるがなかなか思うようにはいかない。彼等の「ダワイ ヴイストロ ダワイ(早くやれ)」の声に追い回されながら来る日も来る日も、来る月も来る月も麻袋にいつぱいの土を担いで坂道を登る。自然と皆が歩いていっているうちに道ができてくる。ノルマを果たさなければパンがもらえないのだ。自然に食事と睡眠と帰りたいことだけに思いが寄せられている日々の中で、他人のパンを失敬して皆に袋叩きにされる哀れな者も出てくる。しかし笑えない事実だ。

身体を酷使するため衰弱が目立つてくる。ただ気力だけで何とか持ちこたえているのだ。休憩の声がかかると欲も得もなくその場に寝ころんでしまふ。生きていることを確かめ合いながら。

この土運搬も、二人がスコップで麻袋に土を入れ、待つている一人(担ぎ役)に両方から肩へ押し上げてやる作業も、朝のうちしばらくは元気に持ち上がつても午後になるともう力が出なくなりますが、この仕事をやり遂げることがあてもなく待ち続けている帰国への第一歩だと、皆力を合わせ怠けるわけにもいかなかった。

宮崎県 田代香

本日、悲しいことが起こつた。同僚の工藤大尉が、ソ連より教化隊(刑務所)入りを命ぜられたのである。工藤大尉は先般、森林伐採の作業隊の責任者としてボルシヨボールに派遣されていたのであるが、余りの給与の悪さに抗議のため、

全員が一時サボタージュをしたのである。この責任を問われ、隊員の責任を自分一人でとり、教化隊(Bラーゲル内)入りとなったのである。まことに同情にたえない。どの程度の期間、どのような苦役が科せられるか不明である。今まで「日本新聞」関係者や同調者から密告され、教化隊入りを命ぜられた者はおつたが、サボタージュの責任を問われての者は初めてである。十五時、宿舎に行き、非常食にと持っていた乾パンを与え、命を大事にするようにと言って別れた。

神奈川県 北澤治雄

このほかの作業として私が経験したのは道路舗装と採石作業。これはイルクーツクやライチハでやった。道路の方はアスファルトを作つて、冷えないうちに運んで道路におろさなければならぬ。これがまたほとんど手作業で、溶かしたペトンと熱した砂との温度がうまくマッチしないと使い物にならなくなる。仲間が工科出がいて、この調子が上手だったものだから、彼だけは工場側が大切にして彼のご機嫌を取り結ぶので、彼を通じていろいろな要求をしたことがある。

ここで忘れられないことが一つある。それはマイナス三〇度くらいの日のことである。(規定では、零下二〇度以下になると屋外作業はないことになっていた)河原に行つたが、砂は全く石のようでツルハシもスコップもはねつける。手足は痛くなるので、中止を監督に申し出た。「テンボー」というあだ名のその男(対独戦で片手を失っていた)がタポール(斧)を振り上げて、隊長の私をおどした。私はそのときはもう覚悟をしたが、ついて来た警備の兵が私に味方をして、さつさとトラックに乗せて帰ってしまった。

また石割り作業というのがあつて、石山に行き発破をかけて、ローム(鉄棒で長さ一・五メートルで先が尖つたもの)を割れ目に叩き込んで持てる程度にしたのを車に積む。なかなか重労働でノルマがむずかしい。しかし毎朝、作業整理をしたときに、前日の達成状況が絵で掲示される。飛行機から亀まであつて、この石出し作業隊はいつも亀で、後で書くが、いわゆる民主運動のアクティヴの連

中が吊し上げる。サボタージュだの反動分子だのと言う、私は、帰国したらこの連中に石油かけて焼き殺してやろうと真底思った。

茨城県 須藤富之助

人間は逆境にあつて薄情というか打算的というか、体力のある者同士でグループを作つて早々とノルマを終えて増食の待遇を受ける者、劣る者は劣る者同士のグループで遅れて迷惑をかける者となるわけであるが、自分は後者である。しかしながら不思議なことに、若干の増食をしてもらつても無理をして体力を消耗した者よりマイペースで無理なく耐えてきた方が最後はよかつたように思われた。

鳥取県 清水要範

夜間作業

シベリアの冬は三寒四温がはつきり現れる。

夕方から風がないのに煙突の煙が横に広がる。そして次第に気温が下る。氷点下三五度以下になれば作業は休みとなる。朝は気温が下り喜んでいと屋前から上つてくる。やがて作業に駆り出されることになる。汽車の積み込み作業は気温にかかわらず行われる。氷点下三五度以下の場合には特別に体力のある者が指名される。夜間など照明と暖をとるため焚火が許される。天を焦がすような焚火も冷えきつた風で熱さを感じない。気のつかぬまま衣服が焦げてぼろぼろになったりする。薪の積み込みは屋根付きの貨車。中を井桁に積んで空間をあけごまかしがきくが、丸太積みはそうはいかない。防寒外套に手袋をしたかじかんだ体は機敏な動作はできかねる。一人でも力を抜けば事故につながる。監督に急かされながら歯を食いしばつてやるしかない。貨車にかけた輪木や足場板が外れぬように細心の注意で。終ればへとへとになる。

我々が居住することになったポルト收容所は、港の近くの丘の上にあつて海岸道路より約三十メートルほど高い台地に建てられている。この收容所へ通じる道は、急勾配の丘の斜面に設けられた木製の階段で片側に手摺が付いており、踏板は雪に埋もれている。昇り降りには手摺にすがつて一步一步進むわけで、永い冬中、時に吹雪の日の苦痛は、終世忘れることのできない体験である。

船内での作業は建設資材を始め食糧、燃料等、およそ人間生活に必要な物資のすべてであらうが、最も苦痛だった作業はセメントの荷揚げである。一応紙袋入りだが袋の破損した物が多くて、狭くて深い船倉の底で発生する粉塵は、ノーマスクの呼吸器官から体内に、また外部は衣服の隙間から肌にと入り込み、特に眼鼻の故障には正視できないものがあつた。この様に非衛生的な状態は作業の終り次第、可能な限り体の清浄な回復を求めたいが、收容所にはシャワー等の設備はおろか、氷点下では洗顔さえも可能な設備はなかつたのである。抑留者に課せられた強制労働とは言え、人道に許し難い虐待だと思ふ。

船からの荷揚作業は十一月下旬まで続いたが、湾内の結氷が厚くなり商船の入港が不可能となつた、しばらく周辺の雑用に使われたが、十二月初めカリマ街道三十九キロ地点の收容所に移動させられ、付近の山林の伐採をやることになつた。ここでの生活は八カ月ばかりで七月末にはマガダンの收容所に引上げることになつたのだが、四年間の抑留中、最も悲惨なものだった。もう六十年も昔のことでもあり記録等はもちろん一切無し、ただこの体が覚えている記憶をたどつて見ることにする。

零下四〇度の寒冷地での幕舎生活の実態を思い出してみよう。電気設備は一切無し、窓も無ければ暖炉は二個(ドラム缶で薪を燃料とする)。室内の照明は、吊下用の石油ランプが二個、床は土間のまま、舎内の中央部を通路に、コの字型に棚が造つてあつて、ここが居住部分で、百二十人ばかり入れられたのだから一人当たり四十センチ幅が各人の休息場である。北緯六〇度の地点では昼間が

六時間と極端に短い。朝は暗い中で食事を済まし、明るくなるころ、伐採現場に到着するようラゲルを出発するのである。帰りは午後三時ごろには暗くなつてくるので労働時間を確保するには昼休みはなく、雪の中で凍った黒パンをかじるのだった。暗くなつた雪道を、とぼとぼと收容所へ向うのであるが約一時間はかかった。帰つてきても暖かい場所は暖炉の回り僅かなスペースのみ、咽を潤す温水も無い、自分の飯盒で雪を解かすのも日課の一つであつた。この生活で苦勞したのは手袋や綿入れ、長靴の破れの修繕である。暗いランプの灯りでは針仕事が出来ないので、缶詰の空缶を拾つて、綿糸を束ねて芯を造り、ソ連人が運転する車両の燃料(軽油)を交換で手に入れ、即製のランプを作つて、手許の灯りとしたのであつた。これも明日の我が身を守るため、欠かすことの出来ない日課だったのである。この様な原始時代に戻つたような生活を、百人以上が続けるのだから幕舎内面に水蒸気が付着して結氷する、日ごとに厚みを増して来る(約三センチ)。これにランプの油煙が付着する。またお互いの衣服や持ち物も油煙で黒ずんで来る。衣服はおろか、体まで煤けてくるが、寒いので衣類を脱ぐことが出来ず、結局五十日ばかり風呂にも入れず髭も剃ることも出来なかつた。このような非人間的な生活が続けば、心身ともに異状が生ずることは当然で、約半数の仲間がマガダンに送還されたようだった。

四月も半ばを過ぎるころになると昼間が長くなり日当りの良いところから昼間は氷も溶け出して来る。そうになると幕舎内は大変である。天井面の氷から壁面へと溶けて、煤も水に融け、薄墨色の雫が所かまわず垂れて、居る場所も無い始末となる。

このように自然環境の厳しい中で、苦難の日が続いたが、七月ごろになつて、作業集団としての態様を失つたのか、残存者一同マガダンのラゲルに引上げることになつた。

マガダン收容所では、仲間も多く、作業の種類も多面にわたり、生活環境もやや改善されていったが、反面作業成績の向上を求めての締付けは、厳しいもの

があつた。

(2) 飢えの凌ぎ

岩手県 高橋隆男

生き抜くために

和歌山県 岡本 昇

干大根と小豆のスープにも五か月くらいでおさらばして、そのころから粗まじりの米や小麦粉の入った、ややボリユームのあるスープを与えられるようになった。粕は捨てたらもったいないと、よくかんで飲みこむ。出てきた便は牛馬同様のときもあつた。

暖かくなると収容所の庭や屋根の上に青い芽が出る。手当たり次第にむしって食べる。家畜の糞まじりのゴミ捨場に生えたくさびら(きのこの類)も、縦に引き裂けるものはそのまま口にする。家畜の屠殺場で作業中、すきを見て生肉をちぎって食う。生肉を靴底に入れてそのまま履きこむと、出口の身体検査も無事通過し、帰ってから足の匂いや汚れも気にせず、分け合つて生のままむさばり食つた。大豆や人参、馬鈴薯の生は天下一品の味がした。おかげで胃腸は原始人並みとなり、腹痛や中毒で死んだ者もない。こうして体力を維持し、栄養失調を克服したのである。

和歌山県 野下善喜

そのころ、お互いの生活の知恵というか、だれが考案したか知らないが、白樺の木に斜めに鋸目を入れ、小さな枝をさし込んで飯盒を受けておくと、糖分のある甘い水が溜るのだ。それを飲むのが楽しみであった。また、休憩時には草木の芽をつみ、飯盒にいっぱい詰めてラーゲリに持ち帰って、ペチカで煮て、塩味もなかつたが、腹を満たし、飢をしのいだものだ。

食事は班(十人くらいだったか)ごとに朝は黒パンにかゆ、もしくはスープで、昼食の分まで渡されるが、飢えている胃は我慢しきれず、だれしも全部食べてしまふ。昼はだれからともなく言い伝わり、松の木の表皮の下の白い皮を斧でけずりとり、飯盒に入れたき火にかけて煮ると醬油状のアクが出て、二、三回水を取り替え、昼までかけておくと繊維が軟らかくなって、白いカンピョウ状になる。それを食つて空腸をわずかにいやす。夜はコーリヤンなどのかゆを班ごとに受け取り各人に分配するのだが、夜の食事のときほど、真剣なときはなかつた。松脂をたく明かりの下で、垢と松脂の油煙で猿面冠者のように塗りつぶされた顔、頭髮とひげは伸びつ放し、爪は鋭く伸びた洗つたことのない手で飯盒に分けられるのだが、真剣な顔の目はみなそれに注がれる。シャモジの力の入れ具合にも文句が出る始末。分配が終われば二段棚の体をやと横たえるだけの自分の領分に座り、ゆつくりと一さじ、一さじ、時間をかけ飲み込んでやる。食事を終えて寝につくまでのつかの間の時間は、故郷の餅のこと、菓子のつくり方など、だれかが話すことに、みな耳を傾け、思いをそらすのだった。

自家でつくっている米が一俵ここにあつたら、一年に分けても一合ずつ食べる。ああ、あの米が欲しい。我が家の食卓を思い浮べて、ああ食いたい、食いたいと切ない妄想をめぐらす。眠りについても、夜半きまつたころ、空腹のため目がさめる。食いたい、食いたいと思ひ悩まされる飢えの苦しさ、切なさは、いまだに忘れることのできないことである。

収容所のそばに飼われていた馬の糞から一粒二粒の麦を拾つて食べたのも、森林伐採作業の行き帰りは何かを探し求める様に下のみ見て歩き、馬糞が馬鈴薯に見えたのもそのころであった。

精が尽き涙も枯れ果て、苦しさ悲しさも超越すれば、無気力な亡者ともなり、恐怖にもうとくなる。あの状態がいま少し続いたなら、重度の栄養失調で次々に死んだであろう。また人里離れた森林の中だったのが幸か、発疹チフスな

どの悪病もなく、なんとか生きのびていた。

千葉県 関 宗則

食事は、私たちが入る前、二十年の暮れころは粟かコーリヤンの水のようなかゆとか。そのため栄養失調と寒さで三百人くらいの大隊で二十くらいのお墓がありました。私たちはたまには米の入った七分がゆが茶碗に一杯半くらい、昼食は黒パン一切れでした。たまには肉、砂糖も食べました。

春食べられる野菜が出れば、ゆがいて飯にませ腹の足しにしました。何もないうときは、昼食のパンと朝食を一緒に食べ、食事の気分を味わい、仕事も腹のすかないうちに一生懸命にすませ、後はゆつくり休みました。食事の足しにしたものはアカザ、ヨモギ、茸。またデンデン虫も焼けば「長らみ」のようでした。また松の実、二合徳利くらいの松かさの中に実がいっぱい入っていて、焼くとギンナンのようでおおいしかったです。

茨城県 松本要祐

食生活についてはあまりにも粗悪で、話の外、次のような例があったことで察しはつくと思われる。同僚の一人に「豚泣かせ」の異名をつけられた者がいる。收容所の片隅に炊事の残飯で飼育していた豚のえさを上前をハネて食べていたのでこの名をつけられた。これとは別に元満州国軍の上級将校(日本人)とかが、小便所の中に投棄される馬鈴薯の小さな粒を拾って焼いて食べたとか、同僚の一人が少ない黒パンを節食しながら煙草と交換しようと、積んどいたのを作業中に盗食されたとか、当時食べ物に対してはかなりの自制心を必要とした悲惨な毎日であった。

当時のつらいことがだれにも共通して三語あった。

「寒い」「眠い」「腹がへった」

どれをとっても平等につらいことであった。

岐阜県 斎藤克己

年が開け三月に入ると、春の野に草の新芽が伸び始めると、タンポポ、ナズナ、アカザ等仕事の目を盗み、手当たり次第に摘みとって熱湯で処理し、夢中になつて食べた。毎日緑色の便が続いた。

鳥取県 真山 基

ある日、三日間雪の輸送のためか糧秣の配給が途絶えたことがあった。平素から少ない食糧の上、三日間の欠食は我々重労働者にはこたえた。食なくても作業は休めない。腹が減っては鉄棒も上がらない。力尽きて立っていれば、蒙古歩哨が銃尾でなぐりつける。力なくよろめき倒れる。敗戦のみじめさが頭をよぎるが、もはや反抗する元気もない。三日ぶりに食糧を積んだトラックが来たときには、皆が思わず「万歳」を叫んだものでした。

ひもじさを耐えた私たちは、さかのぼって配給された三日分の食糧を一度に食べて満腹感を味わうのである。しかし、その後は決まつかわや通いである。下痢と腹痛に悩まされるのである。人が食べるとき、じつと我慢して人が食べ終わつてから見せびらかして一人食べ快感を覚える人、同じ大豆の材料でもつぶしてだんに焼いて食べ満腹感を最高度に感じようと努力する人、いろいろである。「柳に雪折れなし」ということわざがあるが、そのとおりであると思った。

元気で無理をして働き、一番表彰回数が多い優秀者から先に倒れていった。くそ真面目な私も表彰十五回、ついに倒れてしまった。「これではいけない。自分の体は自分が大切にしなければ死んでしまう。夢の内地帰還もできなくなる、どんなに叱られても無理はしない」という考えに変わって消極的になった。今までよい目で見てくれていた幹部も次第に白眼視するようになり、最優秀者の私ももう無用の長物となり、他の收容所に追放される破目になった。

いつも家の中の食糧、麦を煮た煮秣(にまぐさ)食のことを思いました。「あの

にまぐさが食べた」と何度思ったことか。このままでは重労働と飢餓と寒さで死は当然である。ある夜私は単独で隊の斬り込みならぬ食糧調達に出た。降りしきる吹雪の夜であった。厳重な蒙古警戒兵の網をめぐり鉄条網を脱柵し、向かいの山に逃れ、そこから五百メートル向こうに蒙古包(パオ)まで走った。見つければもちろん銃殺である。外からパオの中をうかがえば、老夫婦らしい人がいた。思いきって一人でパオの中にはいり、持っている手袋、靴下等の交換品を出したら、口に手をあて無言で肉やパン、菓子をたくさんくれた。交換は大成功で、喜んでいっぱいになったとうまい袋を担いで、私の安否をきずかい待ってくれている班に無事帰った。他の班は深い眠りについてしたが、私の班は平等に分けて腹いっぱい食べた。悪いことと知りながら「背に腹は変えられず」で皆喜んでくれた。

飢餓、生活極限の状態

新潟県 関本 清

毎日そんな仕事を繰り返しているのではおはこけ、目はくぼみ、足はフラフラで、小さな石ころもつまずいて転んでしまうほどであった。病人も出た。なかでも神経痛はソ連の軍医は血も出ないし熱もないと言って作業に追い出した。顔なんかめつたに洗わなかった。水も乏しく湯などももちろんない。ノルマが上がらないもんだから食糧は少ない。いつも腹を減らして餓鬼道をさまよう亡者のように、食べられそうなものはネズミでもカエルでも食べた。夕食時に配給になる翌日の昼飯用のパンはまず例外なくその日のうちに食べてしまった。手もとに食べ物があると気にかかって我慢できないのである。翌日の昼は何もないから岩塩で塩汁をつくりそれを飲んで我慢した。春になって草が芽を出すと、それをつんで煮て食べた。ジャガイモの取り入れ後の畝に落ちていた小指の先ほどのジャガイモも拾って食べた。すでに腐りかかっているもその腐った部分をナイフで切り落とすといところまで切ってしまうので、水の中で腐った部分を指先でかき取りそれを飯ごうでゆでるのである。腐った臭いがプンプンしているがそんなものは平気であった。

そんな食糧状態だから病気になるとなかなか治らない。しまいには後ろから鞆丸が見えるくらいやせて死んでいった。そのやせた体の血をシラミがようしやなく吸った。感がにぶついているのでかゆくはないが、衣服を持って振れば太ったシラミがバラバラと落ちた。

東京都 青木貞一

その日の作業も終わり、夕日を背にトボトボとラゲルに引き揚げる途中のことでした。人家の散在する部落を通ったときのことです。

かねて聞いていたことですが、どこかでジャガイモを拾った者がいるということで、私はひそかにそれを狙っていたのでした。

豚は庭先の洗いの周りの周りをブーブーいいながら餌を探している様子でした。洗いこぼしの小さなジャガイモを食べているではありませんか。

私は少し離れたところに、直径二センチほどのものを見つけ近よりました。豚も私と争うがごとく足早やに近寄って来ましたが、一瞬の差でその宝物は私の手のものとなりました。数十秒か、数分間かの出来事です。監視兵も見えぬ振りをしてくれたのでしよう。それにしても、豚は私より素早く元気のよい行動でした。

生のジャガイモ一個、それも径二センチの小さなもの、これを手に入れた喜び、何と例えたらよいのでしよう。毛布一枚の寝ぐらの中で、秘薬を味わうがごとく、神妙にかじったこと言うまでもありません。

極端な食糧不足に追い込まれた私は、いや全員でしょう、来る日も来る日も餓鬼道に落ち込むばかりでした。

やがて、シベリア生活も満一年を迎え、この調子だと当分日本には帰れそうもないという諦めもあつて、精神的に安定期間ともいえるころでした。

広い構内に、無煙炭が高さ一・五メートル四辺十メートルくらいの山積みになって、延々と野積みのまま続いています。その石炭山に近づくと、熱風が身を

包みます。よく見ると自然発火なのか、内部は真っ赤な火です。

さて、ここで抑留者の知恵が働きました。ビート大根を火に埋めて、むし焼きにしようというわけです。これを実行するには、三人が一組となり、監視兵の動向を見張る者、大根を火の中に埋める者、もう一人は連絡役を受け持つわけです。

最も都合のよい場所をあらかじめ決めておき、石炭山の間をぬって活動開始となる。二十分くらいかけて焼き上げたビートは、焼き芋と似たような味で、餓鬼道抜けやらぬ私たちにあって、これほどありがたいものではありません。

ところが、こうした甘い生活も長くは続きません。私たちが楽しみに焼いているビートを、焼き上がる寸前に泥棒する者が現れたのです。ほかでもない、あの警備監視役のマンドリンを持ったソ連兵だったのです。盗みかくれて大根を埋めるところを知らぬ振りで見過ごし、時間を見計らって一瞬早く持ち去るのでした。

北海道 奈良勝正

三年間抑留されたがその間米を食べたのはわずか二か月ほどで、あとは馬と同様、エン麦、そば、大豆、アワ、コウリヤン、ヒエが主で、スープはやせたヤギ二頭を五百人に給与するため、おで骨ごとみじんにかき、それに皮ごとの小さな馬鈴薯が少量入ったもので、穀類はカーシヤ(かゆ)が飯盒のふたすれすれにあるだけで、腹の足しにもならず、労働のノルマがあり、極寒マイナス三十度以下の中での作業の苦痛、また収容所に帰ってからは、夜は南京虫、シラミの総攻撃で熟睡もできずに衰弱の一途をたどり、ソ連政府も心配して、シラミ、南京虫が一匹もなくなるまで作業は中止と厳命があり、滅菌、熱処理、入浴で一週間後には駆除もでき、作業が開始された。町での作業中は、監視兵の目を盗み、ちり箱をあさり、不器用なロシア人のむいた馬鈴薯の皮は厚く、それを拾い集めスコップに乗せてたき火で焼いて食べたり、また夜間作業中に、引込線に入った貨車か

ら凍結したひざ株大のキャベツを盗み、かじりつきその味は丁度アイスクリームのようにおいしかったことは、今でも忘れない。

東京都 島崎武男

六月末になるとシベリアは日本の梅雨に似た雨がしとしと毎日降った。そして、この時期、それまで氷結していた川の水が一斉に解けて雨水と合水して道路といわず丘といわず水浸しとなり、昨日までの雪原と道路は泥沼と化し、交通は完全に途絶した。これによりシベリア鉄道沿線からトラックで輸送されていた食糧はバツタリとまって陸の孤島になった。

その間約二十日ほどは食うものは何もなくなってしまう。わずかに生えてくる草は手当たり次第何でも食った。馬糞を拾って丹念にお湯で洗い流し中から出てくる消化していない麦を、根気よく集めてこれを缶詰の空き缶で炒って食った。作業の往復は馬糞を捜すのにみな目を光らせた。早く夏がきてくれ草が食える。昨日の朝は右隣に寝ていた友が死んだ。今朝は左隣の仲間が死んだ。こうして一体私はあと何日生きていられるだろうか。

六月の雨季のころと同じように冬は雪のために食糧輸送が途絶えがちであった。

冬は草もない、木の芽もない。シベリアエゾマツの大木の幹を食って中で冬を越している紙切虫の幼虫をとり、これを串にさして焼いて食うのが何よりのご馳走だった。また、この松の幹に張りついている黒いコケも食った。人間が生死の境のような環境の中では教養もなければ体裁もなくなってしまうものだ。生き延びるためにはどんなことをしても食べるものを探さなければならなかった。

新潟県 周佐喜代止

収容所内は五棟くらいに約二千人くらいを収容し、毎日の重労働で一年足らずの二十一年の夏ころまでに約半数くらいの戦友が亡くなったと思います。そ

の主たる原因は、やはり食糧不足と重労働、そしてソ連兵にたまされた恨み等々で、祖国に帰れる望みや自由が全くなかったための絶望感によるものと思われるような「シベリアボケ」というのか、野良犬同然のようでした。また、馬の糞もジャガイモに見え、春ともなれば収容所内や道路端の雑草さえも飯盒で煮て食うありさまでしたので、食生活が悪いための栄養失調者が続出しました。私は坑内の坑木の組み立てやら削岩機で石炭の層に穴を掘りダイナマイトで爆破をするなどの作業でした。ときには空腹のあまりダイナマイトも少々食べてみましたが、その味は甘酸っぱいようなシビれる感じでした。もう人間の生命の極限とでも言わざるを得ませんでした。

この収容所では毎日のように寝台の上下横の戦友が何も言わずに死んでいきました。その姿は、お尻の穴は大きく開き、ちようどカエルの日干し同然でした。

私は山村生まれで炭焼きや伐採等の職業柄健康な方だったが、戦友の死の方を見ていると今度は私の番かなと何度もお尻の穴に手を当てたこともありました。

岩手県 西野洋一

空腹は日ごとひどくなり、便所のそばだろうが馬の糞の中にあるのが、食えるものがあれば奪い合つて食べた。中には友人のものまで取つて食べるような餓鬼道に陥つた者も出てきた。同じ境遇の中にいるすべての者は、濃淡はあれ、みんな餓鬼と化して、人間の悪い底辺をさらけ出す。体がむくみ、下痢、やせて皮膚が荒れ、これが栄養失調の順序で、飢えと疲労で倒れ、苦痛を感じる神経さえも失われ、眠るように死んでゆく。

千葉県 庄子音松

ある日、ニシンのたる詰が主食として配給された。そのふたを開けたとたん、腐った臭いがツーンと鼻をついた。このものは到底食糧にはならない。すぐにソ連

の軍医大尉に連絡。実情も見てもらい、交替をもらうように交渉した。軍医は了解し、そのものを処分するように言つて帰つた。さて、その処分方法であるが、穴を掘つて埋めれば、必ず掘り返して食つてしまう。種々とみんなと考えた末、便所に捨てたらどうかという案が出た。それならばだれも食わないだろうと、皆一決し、早速実行することにした。その便所とは、一メートルくらいの幅、長さ十メートルくらいで、深さも一メートルくらいの穴を掘り、そこに板を渡し、何人でも一緒に用をたし、その後ろには大きな穴を掘り、そこに流れ出るようつくられている。この便所には、価値を失つた十円札が落とし紙に使われたこともあつた。また、あるときには、麦が配給になり、その麦が全然消化せず、便所が麦だらけになったときもあつた。そのときは栄養失調が続出した。夏のことでもあり、たまりにはウジがわき、深さは膝の上まであつた。そこに炊事係が、たまりの中ほどを目掛け、投げ始めた。そのニシンは沈まないものと、沈んだものもあつた。

そのとき、周りで見えていた私たちの仲間が、いきなりそのたまりにザブザブと入つていくではないか。そして、付いているそのウジを払つて食べようとすることはなかつたが、口には入れなかつた。このままでは伝染病になり、皆死んでしまう。これは大変とばかり、ソ連兵を呼び、マンドリン銃で威嚇し、ようやくのことで皆を静めた。これが生地獄でなくて何であろう。また、ここまで追いやつた空腹の苦しみは、だれもが想像できないであります。

こんなむごい話は私としてはしたくはございません。しかし、話をするときには、涙なくしては語れません。

新潟県 若月大郎兵衛

とうとう糧秣は事切れた。倉庫の床板をはがして縁の下のおちこぼれをかき集めて、炊事してくれた。臭くてとても食べられたものではない。土臭いかび臭い、

だれも食べなかつた。我々は餓死しなければならぬのか。外には草木も何も無い。荒涼とした凍土のみ。絶食である。それでも朝八時になればお構いなしに出勤のサイレンが鳴る。皆ふらふらだ、一体どうなるのだろうか。政治部員は決断した。来春用の貯蔵種馬鈴薯を放出してくれたのである。来年のことより現在が大変なんだ。放出といつてもたらふく食べられるほどのものではない。塩水スープの中へ芋が二、三切れ入っている程度のもので、どうにもならぬ。黒パンだけが命つなぎなんだ。

そのころソ連人も一週間も何もなかつた。我々より苦労したと聞かされた。ウクライナ産のみが入ってきた。我々は死にかかつていたときだけに、思わず万歳を叫んだ。もう死ななくてもよい。体じゆう力がわいてきた。しかしもみでは、鶏ではあるまいしどうしたら食べられるか、考えた。よくしたもので五百人の中には土臼をつくった経験者がいた。粘土に岩塩を粉にして混ぜながら練るのである。堅めに目目はシラカバの木を割ってはめ込むのである。臼は乾燥馬鈴薯の入ったベニヤで側をつくって出来上がり。使役の者数人でもみすりだ。まあ、何とかなりそうだ。ぜいたくは言っておられる場合ではない。もみすりは何とかできたけれど、唐箕(とうみ)がない。仕方なくベニヤで間に合わせの箕(み)をつくり選別をした。箕でふつてもみ殻を吹きながら選別するのである。米にはなつたけれど玄米である。一升ビンに入れて棒でついても容易なことではない。結局は玄米飯を炊くことになった。とにかく米の飯にありついた喜びは言葉では表現できない。そこへもう一つうれいしことは、たる詰め的大型シンが半分ずつ食べられることになった。玄米飯はもみも入っているので、左手のひらはもみ受けといった感じ。おいしかった。飯盒のふたに一杯の玄米飯としてニシン。忘れられない思い出の一つです。そのまま食べるのがもつたいないと言って飯盒いっぱい水に水足してかゆにして食べ、満腹感を味わうという人もあった。皆食べ終わって横になっているのに、後からゆっくり楽しみながら時間をかけて舌打ちしながらやっているのはた迷惑というところ。早く終わった者は音を聞くたびお腹の虫が鳴り出すの

である。

またしても糧秣が不足してきた。小豆、コウリヤン、大豆、米、アワ、何でも一色ずつくれるのである。アワ飯が飯盒のふたに一杯ぐらいずつ上がってきた。食べてみるとジャキジャキする。他に食べるものがないので、皆は我慢して食べたのである。ところが、翌朝出勤前になったら医務室が満員、何事か行ってみて驚いた。強烈な便秘患者でうなっている。洗腸器が足りぬ。洗腸やつても出ない。極めて重症である。見ていたら自分ももじもじしてきた。大変なことになったのである。ドクターの話によれば、アワの皮には強烈なタンニンが含まれている。そのタンニン「渋」が腸粘膜を固めてしまつて内容物が動けなくなったためと聞かされた。精白しないアワは食べられないものとなつている。非常識もはなはだしいとことであつた。お腹はバンバン張ってくる。出そうでない。我慢できずに指で掘り出している者。棒切れで恐る恐るほじくっている者。便所に広場に工場の陰に、もう作業どころではない。こちらは命がけで、糞掘り作業だ。うんうんの呻き声。どうなることかと思つた。

八時過ぎ政治部員がやつて来た。砲列をしいてのしかめづら、うめき。ポチムどうしたのだ。通訳に説明を受け初めて理解したのである。その足ですぐ炊事場へ行つて事情を確かめたのである。アワは精白工場へ持つていつて、完全なものにしてから食べさせることにした。二、三日お尻がひりひりして困つた。アワで泡を食つたお話、笑うに笑われないような糞のことでした。

島根県 松浦進

この世の地獄收容所

吹き荒ぶ風雪は原始林に鳴動しており、雪を掘つての野宿は凜烈肌を刺し、白く凍つていた髭面は幻想的だった。

住い造りは深さ一・五メートルの凍土を解かしツルハシで掘り、昼夜連続の突貫作業が三週間ほどで、百五十名入れる半地下丸太組小屋が数棟完成し、ど

うにか嵐を遮ることができた。

十二月中ごろソ連当局から「働かざる者食うべからず」の鉄則を通告され、恐るべき重労働が始まった。

朝六時警戒兵の自動小銃とベストラ(速く)に追い立てられた雪山に登り、三人一組となつて馴れぬ手付で大木を伐採・集積した。

夕刻巡回する検収員が計測し、八立方米のノルマ(割当量)を達成するまでは下山を許さない厳しいものであった。過酷な労働に加え食事は生命維持の最低限量で、毎日の献立量は

朝 凍った黒パン一塊と菜っ葉の塩汁を飯盒一杯分

昼 米は粟の重湯を飯盒三分の一づつ分けて飲む

夜 米は高粱の飯を飯盒八分目と親指大の肉か馬鈴薯の煮付三、四個

栄養失調と疲労困憊はその極に達し、顔は焚火の煤で真黒く、眼は鋭く光り無言の表情は生ける屍であった。

不幸に枯れ木の折れる如く凍土に骨を埋め、故ナニナの墓、茶毘の木炭で書かれた墓標は、日毎に増え、翌二十一年三月までに三百余柱の尊い犠牲者を出した。

我々を苦しめた警戒兵で悪業の首謀者ユダヤのペレデンスキ(以下「P」という)という兵士がいた。彼は日本人食糧庫(一か月分)から係を脅しパン・肉・砂糖を横領しては村の若い女達に貢いでいた。またある晩P兵士が持物検査を口実に侵入し、調べ、紐で結んだ木箱を見つけた。

P 「これは何か」

私 「亡くなった友の遺骨で、帰国して家族に届け霊を弔う大切な品だ」

P 「ソ連にはそんな風習は無い、古い考えだ捨ててしまえ」

私 「お前には人間の血が流れているのか」憤激したが高ぶる心を抑えていた。

しかし遺品もろとも強引に持ち去った、革命以来宗教を否定した思想と教育の怖さを感じた。

二十一年寒さも和らいだころ、抑留者の実態調査に数人のゲーペーウー(秘密警察)が来て所長立会いで状況を聞かれた。

ゲ 「此処での日本人死亡者が多いのは何故か」

私 「ソ連警戒兵達の悪辣な食糧略奪だ」

即座にP達を名指しで非難し、その日のうちに悪徳者は何処かに連行され、投獄されたと聞き安堵した。以来待遇も改善され体力も徐々に取り戻した。

新潟県 高橋吉郎

収容所の中は板敷きで畳一畳に二名というせまきで、横になつて防寒外套を着たまま寝るよりほかにない。寒さに慣れないのでなかなか寝つかれない。収容されて一週間食糧は支給されない。空腹で体がふらつき力が抜けてだるい。一週間後ようやく凍った黒パンが支給されノギリで六等分し一人二百グラムのパンと、名ばかりのスープであった。まさに囚人よりひどい扱いであった。

やがて零下三十度、四十度にもなる極寒に屋外作業に出された。鉄のように凍結した土をロームといつて直系三センチ、長さ一・五メートル程の鉄棒で土にドスーン、ドスーンと打ち下ろしての穴掘作業である。

ソ連兵で歩哨達の兵舎を建てる柱の穴だと分かったが、とても掘れるものではなかった。ピン、ピンとはね返つて来る。十二月も半ばを過ぎると屋外は零下三十度、四十度にもなる。

空腹と寒さで力が出ない。能率はあがるものではない。少しでも手を休めると寒さに慣れていないマッセル(監督)がダワイダワイ(やれやれ)とどなりつけて来る。体の弱い体力のない戦友はふらふらになるとマッセルが地獄の赤鬼のように怒りどなりつけ、さては足で飛べし、ヨッポイマーチーと悪口雑言を浴びせ、さらにつばをはきかける。実に程度が悪い。ソ連の歩哨が見てもあえて止めようともせず、あざ笑っている。屈辱の上もない有様である。

バイカル湖の方面から白い霧のようなものが風につけて吹いて来ると、吐息が

防寒帽に凍てつき、サンタクロースのように毛が白くなり、頬が赤くなって針をさされるように痛い。じつとしてみると凍傷になる。足踏みをして、これに耐えるが、いても立ってもいられなくなる。僅か一時間が苦痛でとても長く感じる。このような苦しみは体験したものでないと分からない。

いつも、戦い華々しく散ったほうがよい、何が因果で生きていなければならぬのかと思う程であった。

やっと作業が終つても、収容所に帰りほつとしても夕食は二百グラムの凍った黒パンと形ばかりのスープである。食べたあとも空腹である。

入浴をしないのでシラミが湧き腹巻にゴマをまいたように黒く着く、防寒外套を着たまま横になって寝るとモゾモゾとシラミが活動し始める。疲れているので眠りに入るが体力は弱るばかりである。

やっと日曜日に三キロもある山越しで町のバーニヤ(入浴場)に行つても、バケツに二はいの湯しか与えられず、これで体と衣服を洗うのであるが、とても垢が落ちるものではない。

このような悪い環境が続く。ソ連自体がドイツと戦い極端な食糧不足で、我々に支給すべき食糧もソ連兵が横取りしてしまう。体力の弱い戦友は益々衰弱し、オーカーといつて病弱者となり、遂に帰らぬ人となつてしまうのである。

キャベツに粟粒がからまつたものが主食として一週間も食わせられたり、大豆を飯盒のふたに一ぱいこれも主食として一週間も食わせられたりして、膝ががくがくして歩くことも困難になった。またコーリヤンの原穀(皮のまま精白しないもの)のまま炊いて食わしたり、牛馬の如くで、痔になる者が出る。生存に必要な食糧を形ばかりとするなど人道に上許すことは出来ない仕打ちである。

重い飯盒、中味は石

千葉県 富田美徳

昭和二十年十二月一日、ソ連領に入った。すでに酷寒(零下)で辺りは雪一色、

空は灰色に曇り西も東も判らず、只只黙々と行動を続けるのみであった。それは、ひたすらに故国へ帰れると思ひながらである。しかし、何か一抹の不安が脳裏をかすめた。徒歩で一日半ばかりして名も知らない駅に着いたら、真黒な有蓋貨車が数十車両とまっていた。すると直ちに乗車せよとの命令が届き、それぞれ編成毎に乗車、あらぬ方向へ走り出した。

貨車の中は暖房が無く、一車両に四十人位が体をくっつけながら暖をとった。帰国するのにどうしてソ連領に入ったのか、お互い疑問に思い始めたが、どうすることも出来ない。列車は只、雪の原を走るだけである。食糧は「乾パンと水」だけである。

こうして何日か過ぎた或る日、突然大海原が見えてきた。お互いに肩をたたきながら喜んだが、それは束の間、海ではなく「バイカル湖」であることがわかった。喜びは一変して失望のどん底に落とされた。皆無口となり、半日ほどして「バイカル湖」も見えなくなった。やがてソ連兵士の監視の下に行動し、二時間位歩いた。着いた所には雪に埋もれた幕舎が幾棟か並んでいた。これが私どもの宿舎であった。

編成順に舎内に入れられたが、内部は外気と変わらぬ温度であった。情報によると、当分の間、ここを本拠として作業をすることである。翌日より作業班が編成され、一個班は二十人から三十人位であった。

(1) 驚いた食事のこと

燕麦のスープ(燕麦の量は少なく水のように)(飯盒の三分の一位)

黒パン一切れに大匙一杯の白砂糖、これが朝食であり、昼食も夜食も同じであった。

(2) 作業の内容とノルマ

最初は或る工場を解体した資材の整理であった。鉄骨その他の資材が雑然と置かれ、その上は雪に覆われているので、順序として先ず雪を除去し、品物を確認して、これを種類別に片付けるのである。外気は零下十度から三十度位の間

であり、鉄材が多いので共同での運搬が多く、作業はなかなか捗らない。ソ連の監督はしきりに「ダワイ、ダワイ」を連発して促すのであるが、長途の旅と食糧不足のため、充分の力は出せず、ノルマは極めて低劣であった。

(3) 病人の続出

連日の疲れと栄養不足のため、倒れる者がだんだん増して来た。医療機関や施設が無いので、このような者は宿舎の中で休んでいるだけなので死亡する者も出て来た。如何に飢えていたかの一例を挙げると、毎日作業現場に向かう途中、道路にレンガが落ちていると、黒パンかと思つて一斉に飛び込む姿である。今思ひ出してもゾツとする哀れな姿であった。

酷寒の冬が過ぎ春ともなれば、一応ホツとするところだが、依然として食事は変わらないので、道路わきに芽生えたタンポポ、アカザ、鬼アザミなど食べられそうな野草を摘みとつて食べた。飯盒で茹でて、石で砕いた岩塩をふりかけて食べるのである。満腹感を味わうことは勿論だが、ビタミンの補給にもなつたかも知れない。

作業は春から夏にかけて建築、鉄道路盤工事、農場作業と逐次変わつていった。やがて冬が近づくと、森林の伐採、炭坑作業、開発のための諸作業等直接雪に関係ないものへと変わつていった。

こうして春夏秋冬を三度繰り返した。その間、栄養失調で倒れた者、伝染病（バラチフス等）で死亡した者、凍傷で苦しんだ者、作業中に負傷した者等、枚挙にいとまがない。

毒キノコとハチの巣

さんざ悪いことをしたせいか、また林の中へ戻った。五、六十人の收容所であったが、別の部隊であり、我々は十名くらいで仲間になった。そしてまた伐採の相手も変わるが、今度は同県人の東蒲原郡三川村出身の清野君と相棒になった。

新潟県 高橋 算

そして話が合うようになった。

そして八月末か九月初めごろと思つたが、山へキノコが出始めていた。そのころはノルマはどうでもいいようだった。作業の伐採もしなければならぬが、キノコよりも忙しかった。そして夕方はキノコを煮るのにも忙しかった。キノコの種類は色とりどりであったが、中には毒キノコがあつた。珍しいキノコがたくさん出ていた。大阪で警官をしていた兵が食い過ぎて腹痛を起こし、一晩じゅう寝なかつたようだ。ほかにも毒キノコを食べて苦しんだ者が何人もいた。私も同様、毒キノコを食つたようで、一晩じゅう頭が狂つたように、明かり取り窓がくるくると回つて寝られなかつた。しかしだれも中毒死した者はいなかつた。

飢え

大阪府 今井源治

正月、マローズの過ぎた後、私たちの一隊は雪中の徒步行軍三日、奥地のラーゲルへ移動させられた。ここはタイセットから百二十九キロの三十一分所で、いよいよ本格的な飢えと、重労働のシベリア抑留極限の日々が繰り返られるのである。

入ソ最初の冬の飢餓状態は言語に絶した。それは空腹だとかひもじいとかいうような生やさしいものではない。恒常的な飢餓状態の連続、兵隊は全員栄養失調症に陥つていた。

その上に恐ろしい寒気との戦い、重い防寒服装だけでも、わずかに残る体力を消耗させた。そんな状態でも一日の休みとてなく、私たちはよろめく足で雪を踏みながら、朝の暗がりから夕の暗がりまで伐採や除雪作業に追われた。

みんな不思議なほどよく転んだ。自分で足を上げているつもりでもつまずき、のめつた。昨日も一人、今日も一人、次々と朽木のように倒れてゆく。みんな栄養失調死だ。朝、円匙を担いで宮門を出て行く途中、バツタリ倒れた兵を分隊長が引き起こしたら、その兵は死んでいた。

何としても生き残りたい。生きて再び妻子の顔を見るまでは。食いたい、何でもよいかから食いたい。寝ても覚めても、食物の幻影がちらついた。

来る日も来る日も衰えた体力をふりしぼって重労働を強制される兵隊に比べれば、軍刀がわりの白樺の杖をつけて時折作業場を見回りに来る大隊長や将校は、腹ごなしに散歩する旦那のように見えた。

朝と昼はどろどろのなんば粉のめしを飯盒に三分か四分目、夕食は黒パンと薄いスープ、雪、雪のバリケードの中では、その他に何を求められよう。なんば粉のめしを少しでも多くもらいたい一念から、飯盒の底を棒で小突いて外へふくりますことが流行した。そんな中で底の平らな飯盒を持っている人は、そこまですり下り下りがない人格者だ。

岩手県 土川 清

作業場の木の葉、草も食った。馬糞が馬鈴薯に見え、拾ってみんなの目を盗んで飯盒で溶かし、スプーンでかき混ぜてみたら何も無い。がっかりしながら、雪でまた飯盒を洗い、それで食事受領。今では考えられない状況でした。

石川県 村沢 藤作

一番喜ばれたのはポルト(港)の仕事で、船の荷役や倉庫の整理である。食える物がないかと鵜の目鷹の目で塩魚・缶詰の倉庫とくれば大当たり。作業の往き来に小さい鉄片などを拾い、先端を尖らせて缶を破るのである。兵隊は実に器用なもので、どんなに検査が厳しくても工夫して持ち帰る。ソ連の兵隊も利口で、我々をそのかして盗ませ、倉庫番を巧みに言いくるめて持ち帰らせ、収容所の手前で獲物の半分を取り上げるのである。

塩鮭も生のままで一本平らげられるようになる。塩漬けの肉を焼いて食ったら、翌日顔が麻痺してひん曲がったこともある。顔見合わせて苦笑するが、それでも止められない。空腹は苦しいものである。

抑留中の生活と極限状態における意識

岡山県 三宅 正人

1 満州へ残した妻と子供の安否を気づかい、生きて帰ることのみ念願する。

2 空腹時、何も食わなくても三十日くらいは生きて行けると我慢すること。

3 暖かくなり、ダモイを予測して元気で帰ること。

新潟県 真嶋 藤作

またその頃、道路の悪さで輸送ができず、糧秣の入荷がなく何日も食事抜きであった。食わざる者は作業はしなくともよいということで、糧秣の来るまで幕舎の中でごろごろしているわけである。しかし、いかに作業抜きでも、二、三日、一物も腹の中に入る物がないとなると、腹の皮が背にひつつくような感じで、全然起居動作が不如意になる。そんな体で、いよいよ糧秣が車の動く所まで来たということ。四、五キロ先まで歩いて糧秣を担いで運ばなければいけない。こんな状態で食物が目先にぶら下がれば、誰でも口に入れたい。厳重に言われてはいても、つい糧秣袋をこづいて小穴を開け、何だかわけのわからない物でも生のままかじる。あとでそれが知れて、こっぴどく上司に叱られ、頭を頭蓋骨陥没かと思われるくらいぶん殴られた。もはや食うか食われるかの邦人同士のいがみ合いである。

福井県 井上 博夫

あのシベリア奥地での捕虜生活の中で得た貴重なことのひとつは、また食いの物かま話になるが、ある所で我々の食糧・スープの材料の鯀粕の空き 吠を見つけた。これを逆さにしてはらって得た鯀粕の全くの粕、これを御馳走になろうと空き缶で炊いて食べるようになった。しかし残念ながら塩気がない。幾らがつがつした我々にとっても鯀粕の水炊きだけは食える物ではなかった。そこで誰かが茶色い

岩塩をくれた。この岩塩のおかげで実にくまぬ鯨鮓の煮物にありついたというものである。この世の中で一番うまい物は塩であり、また一番うまくない物も塩であるということをやというほど知らされたものである。

今一口に捕虜生活四年と言うけれども、私は帰国するまでに分所を十三回も移り変わり、特に真冬の移動は恐ろしい。移動といえれば必ず休日の日曜に当てられる。零下四十度近くもある中を米貨の荷台に立ったまま皆背をこすりながら励まし合いながら知る筈もない奥地の目的地に送られ、着いた時にはとくに日も暮れ、暗闇の中手さぐり状態で夕食の準備、第一に薪ストーブのカザルマの暖房で、てんやわんやである。

こうして、中には目的地に着くまでに凍傷にかかり手足の感覚も無くなり、小便をするにもズボンの股ボタンをはずすこともできずたれ流し、これが凍りつき、最後には口もきけずただ「うおお、おつかあ」と母親を呼ぶ声。最後の何とも言えぬ叫び声だけが精いっぱい、あのシベリアの凍土に倒れた方も何人かいた。実に気の毒である。本当にこれが人様のこととは思えず、嫌な予感もし、夢見たこともあり、今日一日、今日一日の繰り返し、しかしながら作業は零下四十度まではきちんと八時間労働が守られていた。

屋外作業の昼食は、カザルマからそりにて作業現場に運ばれる。現場に着くまでには完全に冷えきっており、これを各自腰にぶら下げた缶詰の空き缶に貰って、焚き火であたためて頂くというものである。品物と言えれば雑穀の雑炊のような物、いやスープと言った方が当てはまるかもしれない。箸はいらない。第一、箸にかかるような物がない。冬の八時間労働と言くと、朝は暗いうちに出発し、夜はきらきら光る星を頂きながらのカザルマダモイである。肩にはマンドリン小銃を掛けて監視づきの兵隊は、朝晩の（人員調べ）点呼、これが僅か四十人くらいの捕虜の数が一度や二度では無理、時間にしても五分や十分ではなかなか終わらない、三十分ぐらいかかることも珍しくはなかった。先にも述べたように零下四十度近くの寒さの中、また作業で疲れた体にはとても長く感じた。

愛媛県 木屋隆行

春から夏にかけて川に洗濯に行くのがはまった。休日の天気の良い午後、休みの者四〜五人で行く。先ず拾った太さ四〜五ミリのアルミ線で籠の枠を作り、発破銅線で網を編む。大きさは深さ幅が約三十センチメートルぐらい、長さ五十センチメートルぐらい。これを三〜四個持つてゆく。勿論洗濯物を一杯詰めてゆく。各自水筒を二〜三個持ち、川に着いたら洗濯物をきれいにたたんでおく（洗濯物は洗濯済みのものを持つて行く）。

ズボンをまくり上げ二人一組で上流に行き、魚がいそうなところに大きな石を川の中の石に思い切りぶつける。魚はその瞬間、水の振動でクルリとひっくり返る。それを下流で待つ二〜三人の者が籠で素早くすくう。ほんの瞬間の動作で、とにかく素早くすることがコツ。一回で多い時で五〜六匹、少ない時でも二〜三匹は取れる。籠に二〜三杯取るのに一時間は充分かかった。

これを近くのバザールに持つて行く。物々交換である。初めの頃は生きた魚で高値で交換できたが、段々と相手に見透かされ少なくなったが、ウオツカが水筒に二〜三本、ビール二〜三本と桑の実一袋ぐらいはあった。帰りに宮門のカンポイに水筒一本は取られた。これは別のグループの九州出身の三上という男に教わった。時々バザールで炭坑の知り合いのソ連人に会うと、魚を一籠取られることがあり、また川に帰り、取り直しをすることも再三であった。ソ連人、ウズベク人とも、私達がやることを真似ることは全くなかった。彼等は決められたことはするが、自発的に自分たちの生活の向上に努力することのない民族なのであるうか。

熊本県 大阪公夫

腹が減って夜は眠れない。何とかしてもらいたいと炊事に頼み込んだ結果、スーパの水の量だけふやしてもらったのはよかったが、一千人もいる収容所に独立

した便所が四力所しかない。夜通し小便行きの列ができた。零下何十度の夜暗いとき、外で用便を終え寝台に帰り着くと体は冷えきっており、十分な睡眠もとれず、これではしようがないと、またもとのスープになった。

飯はなるべく量を増すため軟らかく炊き、四角い大きな箱の中に移し、固めるために時間をかけて冷まし、それを定規でマッチ箱の倍ぐらいの大きさに切り、食券と引き換えに渡すようになっていたが、これがソ連の考えた角飯である。支給される量は目方によって一定に定めてあり、コーリヤン、エンバクなどは上手に炊けば五倍になり、大豆、エンドウ、小豆など豆類は二倍にしかならない。したがって豆類のときは見た目には少なかつた。食事のことで思い出すのは、大豆だけ毎食二カ月続けて食べさせられたときは、足に何か重いものでもぶら下げている感じで歩くのにも大変苦労したが、ジャガイモだけ二カ月続けて食べさせられたときは何ともなかつた。

抑留中の満四カ年、一度でもよい、腹いっぱい食べてみたいと思いつつ続けた。帰国して茶碗で何杯も食べられたときのうれしさは今も忘れられない。あまりのひもじさに道端の食べられそうな草をつまんで食べる者もいた。警戒兵が「日本人は不思議な人種だ、草を食べる」と話していたが、牛馬ではあるまいし、どこの世界にも草を食べる人間がいるはずもない。日本料理には欠かせない味噌やしょうゆの全くない、塩だけで味つけされた毎日の粗末な食事が、三度三度とも喉へ引き込むようにおいしく感ずる生活であつた。今日、宴席でも鉢盛など半分以上も残すような豊かな世の中となり、あの当時のおいしさを味わうことは終生できないだろう。ひもじさにまずい物なしだ。

作業出発に際して、昼食携行ということで朝食後支給されるわずかの昼食をじつと待つて我慢できる者はいない。朝食でしまい、昼食なしの夕方までの作業の辛さは言葉ではあらわせない。とにかく今日の生活では絶対口にしない魚の骨、肉の骨など食べられるものは長時間かけて炊きみんな食べた。今は故人となられた、友人の蒲地新一氏が「大坂さん、抑留当時を思うと、今ならごみ箱を

あさつてでも十分生きて行けますな」と言われたことがある。当時の困苦を味わう人はこれから先はいまい。夏の暑い日の一日中の作業に水筒持参もできなかった。

熊本県 西崎 通

今度こそはダモイの順番が来るだろうと祈りながら作業を続けた。積雪一メートル以上の酷寒のうす暗い朝方、一人のソ連人が長いシュエバ(毛の外套)を着て、何か物入れを左手にさげ、右手にタポール(斧)を持って向こう側の森林の間から出てきた。続いて同じことを繰り返したので、これは何か動物を殺して、山の雪の中に保管しているのではないかと思ひ様子をつかがっていた。その後、ソ連人と勤務交替。夕方まだ少し明るいころ、向こう側の降雪の足跡をたどって行き、数百メートルのところまで小高い雪を積んだところがあつた。思ったように動物を殺し、肉を保存するための自然冷蔵である。そのときは帰り、次の日の交替後、タポールを用意、物入れ袋も準備して、生命存続のため約五キロぐらいの肉を失敬して持ち帰つた。久しぶりに戦利品として、皆喜んで筋肉の補給をした。

滋賀県 竹山 悌三

日本人捕虜に回される食料はごく少量、空腹を満たすにはほど遠いものだつた。後で聞いた話「昭和二十年、ソ連はどきどきに無計画で一度に日本人を何十万人もシベリアに送り込んだため、ロシア自体の糧秣が不足したから捕虜に食わず食料がないのは当然」。姿こそ人間なれど餓鬼同様食べることだけしかない。食べられるかと思えばすぐ口にほり込み、噛んでみては吐き出す。酷寒のシベリアで都合よく食べられる物があるはずもなかつた。

時たま糧秣倉庫の工夫に出た。貨車からの荷おろし、穀類、旧満州領から輸送してきた物資だろう、ポロポロと生の大豆が落ちている。この生の大豆、本来な

らば口の中に入れてだけで吐き出すものを、宝物を拾ったかのように「ああ、うまい」と食べた。他の穀類、粟、キビ、トウモロコシ等は皆食べられたが、粉、エンバクなどは、どれほど腹がすいていても喉には通らず、嚙んで甘味だけ吸った。それも多くは嚙めない。口の中、舌が切れ血が出るので、一息ついてまた嚙んだ。

拾い集めた穀類をぼろ布に包み番兵に見つからぬよう持ち帰り、人夫に出てこなかった同胞に少量ながら分けてやり、一時の空腹をいやしたものである。また、粉、エンバクを空き缶に入れ、薪で焼き粉にしスープにして飲む、生きるための知恵であった。酷寒の地では野菜と思われる青物類は一切なく、顔の映るような穀類がゆの中に三日に一度ぐらい馬鈴薯が細切れて入れられた。これでは体に大切なビタミンCはないと言った方が早い。皮膚に斑点がで広がる、皮の表が硬くなる、毛穴が埋まる、体内の水分(汗)は出ない、これが原因で死んでいかれた人もいた。捕われた身の悲しさ、何とか祖国の地を踏むまでは耐え抜こう。

これも生きるための知恵。誰言うとなしに、松葉を煮出しこの汁を飲めばビタミンCが取れる。氷雪を溶かし湯を沸かし、松のヤニで嫌な物だが、これが菓だ、ビタミン剤や、皆で飲もう、鼻をつまんで飲む人も何人かいた。

鳥取県 廣瀬重雄

北海道出身で年配の方が、寒い地方の松の実が大きくて食用になると話された。これは良いことを聞いたとその機会を狙っていた。機会は案外と早く訪れた。伐採作業の休憩を利用し、予め松笠の沢山ついた木を見つけていたので、道具があるので早速伐り倒した。直径四〇センチくらいで、伸びが良い五葉松。松笠も沢山ついている。大きさはソフトボールの球より大きいくらいで、玉子型をしている。内地にある実の五、六倍以上もある。早速五人で手分けして持ち帰り、実を取り出そうとしても硬くて駄目、それでは焼けば良いとのこと、それでも駄目だ。結局、くたびれもうけに終わった。そのことで監視は何も言わなかったが、

入ソ以来、主として黒パン、現在の六つ切り食パンの一枚分より小さいもの、それに家畜用のえん麦のひき割りを数時間炊きつめた糊状のスープを飯盒のふたに半分くらい、その外の物を食べた覚えがない。零下三〇度を下るシベリアでの栄養不足は、一千人で入ソした私達の大隊で二百人に近い犠牲者を出した。野菜不足から壊血病になる。手足の関節が硬化し、足を伸ばして寝ると、朝しばらくは曲がらない。曲げて寝ると伸びない。ひじの関節も同じこと。また全身に赤い斑点がいつぱい出た。日本では全く見ることはない。春先になると川辺に三つ葉によく似た美味しそうな野草が生える。しかし、それは世界の三大毒草ともいわれる物だ。それを食べて食中毒を起こしたり落命する人もあった。雑草のアカザは当時、野菜不足を補う貴重品だった。またキャベツの下葉(ロシア人の取り残した)も大切な食糧だ。一番食べにくいのはジャガイモの生を食べることだったが、それでも食べていた。

鳥取県 松浦久雄

抑留期間中一番辛かったのは労働より空腹であった。特に二十一年から二十二年までは、量は変わらなかったと思うが質が悪かった。黒パン、穀物を粥状に煮たもの、スープ。スープの中身は時期によつて異なるが、馬鈴薯、人参、玉ねぎ、それに羊の肉。この肉は、運のよい人にそれらしき筋のようなものがたまに入る程度。青い野菜など入ったことはなかった。年間を通じて多かったのがトマトスープ(熟さない青い実を塩水で保存、これをスープに入れる)、これは酸っぱく、好きではなかったが、当時は、腹に入れ一時の空腹を紛らわしてくれる物なら何でもよかった。各自に支給される黒パンの目方は厳密で、将棋の駒ほどのものでも楊枝で添えてあった。パンも中ほどより両側の皮の多い方が好まれた。胃の中で水分を多く吸収し膨張するとか? 収容所で使用する野菜、トマトの塩漬け等は地下倉庫にあり、食堂に運ぶ使役に当たると皆喜んだ。生でも何でも口に入る物はポケットに押し込み、持ち帰った。人参はそのまま丸かじり。馬鈴薯は、

冬季。ペチカのあるときは焚き口で蒸し焼き。当時は食うことだけが関心のすべて。生涯で最も精力旺盛なこの時期、去勢でもされた人間のようなものであった。食事は食券で支給され、多くの人の中には器用な人がおり、この食券を偽造、再度食事にありつく者まで現れた。

岡山県 妹尾正一郎

厳しい労働を強いられながら、それを補う栄養は極度に乏しく、また粗悪であった。飢えでやせ衰えた体に酷寒、重労働が重なって、ちよつとしたことが死につながり、多くの人が死亡した。当時のソ連の捕虜取扱規則によると、一日に

黒パン 三〇〇グラム 雑穀 三〇〇グラム

野菜 六〇〇グラム 油 五グラム

獣肉 五〇グラム(骨、内蔵を含む)

塩 一〇グラム

砂糖 一五グラム(キャラメルの時もあった)

となつていたらしいが、これなら結構な量である。しかし、実際に捕虜の手に渡つたのはけた違いに少なかった。

大方は二〇〇グラムにも足りない黒パンが弁当(実際には朝食に食つてしまった)、朝夕は塩味のカーシャ(粥)であった。もちろん薄いので箸の必要はなく、するだけで十分であった。特に生野菜の量が少なく、春になればアカザやキノコを煮て食べた。

これはソ連の管理者や糧秣受領者がピンはねしたり、地方人に横流しされ、その残りが捕虜の食糧となつたためである。

静岡県 小山斤所爾

毎日が「ノルマ、ノルマ」で作業は厳しく、その上食物は高粱か粟のおかゆに近いのが飯盒に八分目ほどが二人分で、二人で分け、黒パン三百グラムが一日分

三食に分け、栄養価は少なく、これらを全部合わせて強く握つてしまえば片手の中に入つてしまうほどの量でした。健康な人が空腹のため飢えて栄養失調になつていくのは非常につらく、病気になるべくより苦しいものだと思感しました。

愛媛県 青木明

私達が連れて行かれたのは、満州漠河の対岸と思われる密林地帯に作られた収容所で、元白系ロシア人がいた強制労働収容所の跡でした。毎日朝早くから夜遅くまでの重労働に耐えられるはずもなく、真つ先に私は動けなくなり、働かざる者は食うべからざるの共産社会では食べる物も少なく、付近の民家で飼育している馬の凍った糞をポケットに入れて持ち帰り、シベリア特有の粉雪を飯盒に入れてペチカの飢えで溶かしかきませ、底にわずかに残る消化してない大豆の粒を丁寧に宝物のように水で洗つて、飯盒の蓋で煎つて食べたり、馬鈴薯一個と岩塩を雪水で溶かしてスープにし、一日の飢えをしのいだこともありました。

愛媛県 中泉正一

捕虜生活で一番の関心事は食べることだ。黒パン三〇〇グラム、カーシャ(お粥)少し、塩サンマ一尾、これが一日の食分量だ。早朝の配給が済むと、朝と昼食は一度に食べてしまう。少しは腹に入ったような気持ちになる。そのため昼はサンマのスープに雑草を入れて間に合やす。一日のきつい労働が済むと空腹でたまらんようになる。そんな時の事件が「辻斬り」である。朝の食事配給後、宿舎に帰る途中、生命より大切な黒パンをさらつて逃げるのだ。実になげかわしい事件であった。

ある夜、私達は相談の結果、宿舎の近くに停まっている貨車に積み込んである乾パンを返してもらうことになった。もともと日本軍の食糧である。深夜一時頃、私と友は警備兵の移動を見定めて貨車に忍び込み、乾パン一箱を持ち出し鉄条

網をくぐろうとした時に、影を認めたのかマンドリンの乱射を浴びた。もう駄目だと思いつつ凹地に伏せていた。三十分くらいたつて警備兵が立ち去ったので、ほうほうの態で宿舎に帰り、みんなで久し振りに乾パンにありついて大いに満腹した。

夕食はその日のノルマ遂行量で差が出る。遂行者は砂糖やタバコが特別支給され、黒パンも多いが、未遂者は小さいパンと塩サンマのスープだけである。

北海道 澤田清吉

シベリアの夏は遅い。凍土が深い。アカザ、イラクサ、タンポポ、アザミ、カエル、へび、松毛虫のさなぎなど、煮たり、焼いたりして食べる。あるときは昼のスープの具にして少しでも増量して、腹もちをよくして食べるのである。何とかして生き耐えて故国の土を踏みたいばかりにであった。

毒茸事件というのがあった。森の中では、森の恵みとして茸が生える。いくらでもとれる。それを飯盒で炊くのである。食べた一念の食欲が先に立って、有毒、無毒の見境もなく食べて、ついに茸中毒で数十人の人があたり、何人かの人が惜しくも命を落としたことは、悲しい出来事であった。

(中略)

薪仕事が終わると、主任の奥さんが「一休みして」と言つて、パンの切れはしをくれることがある。ちようど腹ペコになっているから、とても嬉しかった。一休みしてから主任の住宅のまわりの掃除である。こういうときに、棄ててある鶏の骨とか、イモの屑皮など拾つてブラックへ持ち帰る。鶏の骨は夜に皆が寝静まつてからストーブの火で焼いて食べるのだ。イモの屑皮はスープに入れて、少々えがいが、我慢の子でたべる。こうしたおかげで夜も満足して眠りにつくことができた。こういう心理状態は、実際に落ち込んでみないと判らない。人間の生き延びたいという執念からくる、ドン底状態に置かれた者の心理は哀れであるが、落ちてみないと判つてもらえまい。

岐阜県 坂井文介

やがて我々自身の糧秣も底をついた。満州から運んだ軍馬の馬糧など食べていると栄養がとれない。兵はみんな空腹を訴える。その頃から兵は野ねずみを捕らえることが上手になった。野原の枯れ草や藁をはねるとよくねずみが飛び出して来る。それを捕らえて野火で焼いて食べる。焼鳥ならぬ焼ねずみである。兵はうまそうに食べる。あさましい姿に哀れさを誘う。

岩手県 平田玉男

いつもトトロの粟かゆで、箸などいらぬ。中身はお茶碗に軽く一杯だった。腹の皮と背中がくつくようである。昼食は三百五十グラムの黒パン一個で、もちろんおかずはなし。それでも入ソ二年目頃から朝夕は米のお粥になり、いくらかやれやれという気持ちになる。他人よりちよつとでも余計に腹の中に食べ物を入れたい時は、夕食後、後片付けの手伝いや掃除に出ると、夜食に夕食と同じ位のお粥が渡される。いくらか満腹感を抱いて帰り、床に就く。

神奈川県 香坂毅

毎月貼り出される棒グラフを眺め、黒パンの厚さが目に浮かぶ。所詮空腹を免れないので、色々と対策を考え実行に移した。先ずは、食事の時間帯を技術者より遅らせる方法。これは大釜で作るスープの中身を沈澱するのを待ち、濃いスープ、具の入りで満腹感を補った。人によつては食器となる飯盒の蓋の部分を叩いて膨らませ、余計に分量が入るようにしている者もいた。收容所生活の中で一番の楽しみは食べる事と寝る事だったが、その双方共にままならなかつた。

長野県 高嶋利春

健康の管理など考えることより、いかに一時的に空腹を満たすかで毎日を暮らした。春になると作業の行き帰りにヨモギ、アカザなど、野原の雑草で口に入る物は何でも取って来てラーゲルで茹でて食べる。アカザなどは非常にアクが強いので、水でよくアク抜きをしてからでないとい病気になる、命をなくす人もいた。また春のホルホーズ作業。馬鈴薯の種播きに行き、種イモを生で食べて胃の中で醗酵してガスがたまり亡くなった人が、私の知っている中で四、五人はいる。このように空腹に耐えきれずに命をなくすような出来事も数多く、すべてをここには表せない。シベリアの現地の人ですら食糧が不足しているのに、我々抑留者を六十万人も送り込んだのだから当然のことである。

岐阜県 中上英雄

食糧はあまり増えないが、アカザ・タンポポ・オオバコ・キノコ、それにバッタ・ネズミ・カエル・ヘビなど、食えそうな物は何でも食って飢えをしのいだ。待ちに待った昼食も、三〇五分で済んでしまう。日本食に例えたら、お吸い物に饅頭一個ぐらいの割だ。

昼休みは皆一斉に野草取りに出掛ける。帰って来て時間があると、シラミ取りである。お互いに取り合う。猿の毛づくろいの様子をテレビなどで見ると、当時の様子がありありと浮かんでくる。

夏はありがたい。まず寒さからの解放が何より良い。それに野草のおひたしなどで補食ができ、ノルマも時には八〇%くらいまで上げることもあった。

滋賀県 清水誠之助

炊事からの配給で思い出すのは、さきの糊粉殻、缶の底に大豆少し、また馬鈴薯の小さいのが六個ほど、ふすまのサラサラの汁、こんなものでは働けない。黒パンを後で食べようと片付けておけば、鼠でなしに人に盗られる始末。こんな事

では不衛生とのことで食堂が出来る。食券をもらって食堂で食事である。大隊毎に券の形を変えて作った。偽造券で二度食いがあるので良く変えた。仕事による級食券も作ったと思う。まだしっかりしてプライドを持っている者もいるが、帰れない、寒い、辛い、ひもじいとなれば恥も外聞もない。放心状態、夢遊病者、餓鬼だ、極限の状態だ。

煙草の吸殻は拾う。作業場への途中、子供が黒パンを食べていると、くれと言う。子供がちぎって投げると取り合いだ。日本人の満州での生活を知っているソ連人が言ったことがある、文化的なきちつとした生活をしてたのにこのようなグリヤズナ(汚い)生活をどうしてするのだ、もっとプライドを持てと。悔しかった。

鳥取県 細木明男

絶食

さて、私達のこの移動作業隊の食料は、停留した場所で一定期間の量を調達し車両に積み込んでいたようだったが、時には次の調理の場所との時期が必ずしも一致せず、ややもすると食糧が途切れがちであった。

ある時は、どうしたわけか食糧が皆無の状態になって、まる三日間何も口に入れる物がなくなってしまう。その時は止むを得ず作業は中止となり、全員が車内に横たわって動くことさえできなくなった。食べる物が全くなくなつてからまる一日たつと無性に腹が空いていたたまれなくなり、二日目になると、これまた気が狂いそうになる。更に三日目になると意識が朦朧となって思考力が次第に薄らいでくる。誰もがものを言う気力もなく、ただ無言で横たわっているだけであった。

その時である。食物を口にすることができなくなつてからまる三日を過ぎた頃、小さな角砂糖が一個ずつ配られ、それを口に入れてしばらくしたら、体温が少しずつ温かくなつてきたように感じ、何とはなしにものが言えるようになって

た。平素十分な給与を与えられ栄養をある程度蓄積していたならば、このぐら
いの絶食ではへたれなかつたかもしれないが、何せロクな食糧も与えられずノル
マに追いまくられた体ゆえ、この三日間の絶食で一時「もう駄目だ」と観念し
た。

シベリア沿海州も夏の期間は雨が多い。山間を通る鉄道線路の作業では、雨
が降ると、沿線の山の樹々に大きなカタツムリが出現する。これを手あたり次
第に獲つては焼いて食べた。また黒い色をした蛇もつかまえて、同じように焼いて
食つたこともあつた。これにはロシアの警備兵も気味悪がつしかめづらをしてい
た。

京都府 松本長四郎

空腹のあまり炊事場の裏に捨ててあつた野菜を食つて下痢、入院した者も出
た。餓鬼道とはこんなことを言うのであろう。道に落ちて石ころも、何か食
べ物ではないかと目を光らす毎日であつた。

高知県 加納憲

食事は相変わらず少なく、腹の足しにと野草を採つた。ピラでの中毒事件の
こともあつて、野草は慎重に選んだが、長野や北海道出身の人達はよく知つてい
て、「牛馬兔の食う物なら何でも食える」と教えてくれた。蕨・ゼンマイはもちろ
んのこと、道端の雑草まで食べたが、そのうちに、当時は自分が牛馬になつたんじ
やないかと思うほどだつた。

また、松の木を割ると中に松食い虫のサナギが出てきたが、鉄板で焼くと芳
ばしい香りがして蜂の子のような味がした。これを焼いていたときソ連の歩哨が
見て驚き、アンコールして見せてくれというおまけまでついた。

島根県 吉野一郎

食事内容は相変わらず悪く、常に空腹の状態は変わらなかつた。

作業部隊は混成チームであつたが、道路の作業中に、ヘビやカエルが冬眠してい
るので捕獲してスコップの上で焼き、食べた味は今でも忘れることなく残っている。
コルホーズ(農場)でニラ畑の草取り作業に行き、帰りに皆がポケットにニラを持
ち帰り、夜に食べた味はつきりと頭に残っている。

愛媛県 鹿島智夫

捕虜は下を見て歩く。道に転がったものを見逃してはならないからである。上
を見て歩く捕虜はめつたになかつた。拾つて食うことは捕虜のみに与えられた特
権のようなものでもある。他人の物を盗んだり騙したりした物ではないので一心
に下を見て歩く、そして命をつなぐ。大きく言えば国家の償いをする責任があ
る。自らを卑下してはならない。捕虜としての任期を全うしなければならぬ。
こんな気持ちを保つようになつてから私は気分が落ち着いていた。人の道に背い
たような行いをした覚えは、シベリアの日々を省みて一度もない。今日はジャガ
イモを拾つたと言つて戦友にやるのを見たとき心を打たれた。飢えていたからめ
つたに見ることのない有様である。

正月の近づいた頃、私も皆と一緒に列を飛び出して転がっているジャガイモに
走つた。うまく拾つてポケットに入れた。初めてのことであり、とても嬉しかった。
内心わくわくしながらジャガイモのことばかり考えて、時々外套の上から押さ
えてみる。一日中よく凍っている。今日は食えるぞ。斑の門に帰つたので急いで取
り出した。少し解けかかつていたので、すぐ口に入れるつもりでいたが、よく見る
と間違いなく馬糞であつた。驚いたというより内心恥ずかしくなつて辺りを見回
したが、誰もいなかったので門を出て道に放つた。翌日このことを横州に話した。
「なあんだ、俺もこの間拾つたら馬糞だつた。あれは区別がつかぬ」と事もなく言
つてのけた。すでに大方の者が体験済みであつた。馬糞は粗飼料が主で濃厚飼料

が少ない為コロコロと出るときが多い。特に冬期は水分が少なく転げやすい。煉瓦のかけらが転がっていると、これも黒パンにそっくりである。黒パンはジャガイモのように霜がギフついてはいないが、見た者は列を飛び出す。ロシアには小型の薄い煉瓦が窓枠などに使用されていたので、それらのかけらである。これは拾った瞬間、重いのでその場で捨てる。捕虜とは誠に哀れなもので、飢えてしまうと似たものは何でも食い物に見え錯覚に陥るようである。

飢餓と死と重労働

北海道 阿部吉蔵(旧姓佐藤)

そこは沿海州(間宮海峡を挟んで樺太の向かい側にあるシベリアの州)一〇三分所ポルト・ワニナだった。ポルトと言うのはロシア語で港という意味だ。そこは自然の良港で、狭い入り口から入ると中は広い湾になっていた。アメリカの大きな船が、小麦、ジャガイモ、豆などの荷を満載して入っていた。あの頃、アメリカとソ連は、共に日本やドイツと戦ったというので仲が良かった。船を降りていくと、日本人のようなのがアメリカの船から荷を降ろしていた。日本人かな、いや、いるはずないだろうと言いながら尋ねて見ると、関東軍だった。満鉄で運ばれてきたということだった。しかし、禁じられているせい、それ以上は話そうとはしなかった。

俺たちはそこで整列させられた、あいうえおの順で。俺は「さ」の列だ。すると俺の姉の亭主の弟もそこにいた。お互いにびっくりした。しかし、それぞれ別な部隊に属していたので、そのまま別々になった。

俺はこの後大体、このワニナの周辺にいた。これまで部隊はみんな一緒だったが、小さく分けられ、新潟や大阪の人間と一緒に仕事した。同じ部隊の者が一緒にいると反乱を起すと思っただろう。

仕事は船からの荷降ろし、森林の伐採、ブロックを焼いての家造りなどだった。向こうのブロックは、工場から出た石炭殻を砕いたものとセメントで作った。穴も

開いていないため一個三〇キロもあり、とても重かった。それをガタンと型から落とした後、乾燥させるために外に運び出した。朝から晩まで、毎日毎日その重いのを運ぶのは大変だった。それで家を造った。壁は、そのでかいブロックを二列に並べ、間に石炭殻を入れた。だから家の壁はものすごく分厚く、暖かな家ができた。ロシアの天井は、まず丸太を組み、その間にツンドラを詰め込み、上にまた土をせた。そうすると本当に暖かくなった。その後、天井に漆喰(しっくい)を塗った。

それから、馬で伐採された木の藪出し作業もした。猟師だから馬など使ったこともないのに、やれと言う。馬は使えないなどとは言えなかった。馬を初めて見たのは子供の頃、母親の一番上の姉の家に行ったときだ。しかし、その人が、馬が蹴飛ばすときは後ろ足が一里も伸びるから近づいてはいかんと言った。だから、馬の後ろを通るときは後ろ足がぐるぐると畑の中を回って行った。馬なんて触ったこともなかった。それでも「さあ、やれ」と命令されるとはいかかなかった。まず木を二本、根つこの丸いところをつけたまま切った。それを轆(なぐえ)にし、横に太い棒を一本つけて橇(こ)がで上がり。それに切り倒した木を縛り付けて下ろしていった。それは大変な仕事だった。その上、向こうの馬の首輪は日本と違って上で留めるようになっていたので、小さい日本人には大変だった。四年間で何十種類もの仕事をやった。

大阪府 寺田新次郎

ビタミン不足を補うため、春になって芽をふく野草は片っ端から採ってきて茹でて食べた。森林地帯では松葉のスープを作ったというが、ライチハやブラゴエ地区では針葉樹等はなかった。凍った馬糞を馬鈴薯と間違えて拾って帰り、溶かしている間に判ったという、笑えぬ悲喜劇も幾度か経験している。ブレヤ収容所では、野原に捨ててあった家畜の頭を毛が付いてウジがわいているまま拾って帰り煮て食べたという体験話を聞いたが、このありさまを目撃していたという当時の女事務員が生きていて(当時二十三歳の娘は今六十八歳)、昨年訪れた墓参

団一同に、そのとき私はそれを見て身震いしましたと回想話をしたという。(ナ
ージャーさん話)

ゴミ溜まりで落ちている穀物をあさる。黒河事件を書かれた溜口麻一氏の著作「刻みつけられた足跡」の一五〇ページには、この穀物は一度人間の体内を通り過ぎた物の中からも探し出されたと書かれてありますが、ここまで来ますと、もう書くことがあまりにも惨めで、私もワープロが打てません。人は衣・食・住足りて礼節を知るとか何とか言いますが、そんな生易しい段階はとっくに過ぎ去っています。それは、衣や住でなく食が先ず最優先するということです。まさに餓鬼地獄もどん底です。

朝に渡される昼食のパンも、朝いつべんに食べてしまわないと、手にして作業場で食べようと持つて行くものなら休憩中に誰かに盗まれてなくなる。持つて行く物は、腰に吊り下げた昼にスープをもらうための缶詰の缶だけ。私は何かに書きましたが、腰に下げたこの缶詰の空き缶が、皆無言で歩いて行く作業場の行き帰りに寂しく悲しく音を立てて鳴るのが人生の末路を告げる鐘のように聞こえたと申しました。山田の案山子のような姿のことです。しゃべる気力も返事する意欲も失せてしまっている者ばかりでした。それは、いつ帰還できるかが全く分からないことと、祖国日本の現状と、第一に肉親家族の消息に対する不安が瞬時も脳裏から離れないことから、皆をそうさせたのだらうと思います。

熊本県 本田正行

衣食足りて礼節を知るといいますが、人間、生きる条件はまず食事です。裸の赤ん坊もお乳から始まります。とにかく「食べ物の恨みは絶対忘れない」は真実です。その意味で、今回は「食」について回想を歴史の証言として、沿海州の森林での餓鬼道の話を書きます。

雪の中では木の皮か針葉樹の葉しか目に映りません。後で聞いた話だが、他地区では、松の皮をはいであく抜きして食べたと言いましたが、九州の我々には思

いつかなかった。古本に、米沢藩で飢饉のとき、土や松の皮を食べて生き残ったとあり、知っていればなーと今さら悔いても後の祭り。二十一年の雪解けまでは「忍耐」の二字しかなく、栄養失調の体を酷使して飯代を稼がざるを得ず、ピタミン不足で夜盲症が多くなり、夜間便に行くのに目を開いても見えず、手探りで行かざるを得ぬ。そのとき、松葉をぬるま湯に一日浸してそれを飲むと、少しずつ回復してきた。

山梨県 長田十一

シベリアでも春六月頃になると野草がもえ、湿地帯にはカエルや蛇、原始林にはネズミやウサギやクマまで動き出す。食糧のない私ども捕虜は天の恵みと、食べられるものは何でもとって食しました。

私は富士山麓の農家生まれであるので野草や小動物は子供の頃から食べ方を知っていたので、みんながとってくる野草の選別の先生となった。特にカエルや蛇、ネズミやウサギの皮むきは私の独壇場であった。私は皆がとってきたカエルや蛇の皮をむき、内臓は私がいただき、血をすすり、肉や骨は焼いて粉にして精力剤として皆で分けて飲み、特に病人に薬として珍重されました。

野草も富士山麓の一合目〜三合目にあるヨモギ、アカザ、タンポポ、フキ等がありましたので、私が見分け役で、よくとってビタミン補給食だと食べました。

山梨県 渡辺元信

収容所生活で一番つらかったのは、食糧の配給が少なく、冬になると欠配が続く、重労働と空腹で栄養失調患者が多発したことである。昭和二十一年四月頃から、野草のフキとかヨモギ、アカザ、何でも炊事場に持ち込んで、タラやニシンの塩漬けを切り込んで雑炊を作りみんなで空腹をしのいだ。入浴は十日に一度くらい街のサウナに連れて行かれたくらいで、毎日真っ黒な手や顔を洗うのに精いっぱい、したがってシラミが多発。また、棟内に南京虫も多かったが、幸い

伝染病は出なかった。

北海道 太田隆夫

何といつてもシベリア抑留で私が感じているのは、やっぱり腹が減ったということが一番苦痛なんです。作業とか、あるいは寒さとかはある程度しのげますけれども、我々食へ盛りの青年は、食えないということがいかに苦しいかという異常な体験を受けたわけでございます。シベリア抑留は、日本軍あるいは一般個人も含めて六十万人とと言われておりますけれども、その中で約一割、六万人の方が亡くなった。この亡くなった方は、私の見る限りはほとんど栄養失調で亡くなつていふと思ひます。そんなことで、非常に厳しい体験を長らえたのは、自分の体力と、ある程度ずるい点があつたために、かっぱらつて物を食つたとか、物々交換で物を食つてきたということでき生き延びられたと私は考えております。

岩手県 吉田欽三郎

憩いの昼食

楽しみはもちろん昼食である。

水筒を温め少しばかりの食事であつたが、ゆっくり食へることであつた。

毎日の食事だつて本当に少なかつた。朝、炊事からもらう朝・昼の二食分合わせても飯盒を満たすほどの量もなく、朝の出勤前、昼の分も一度に食へてから仕事に出る者が多かつた。

毎日毎日がついつい仕事であり、收容所に帰つたからとて夕食外の間食があるでなし、できなかつた捕虜生活である。

年齢正に二十四・五歳、男子兵隊成れの果てである。飯盒一杯ぐらいの量はいつも簡単である。私も二食分一度に食へて満腹の気分を味わつてみたかつた。…だが昼食後の作業はどうなるだろう。果たして夕食にありつける寮までの道程等、それまで身体が保つだろうか。

「班長殿、大丈夫ですよ…」と、九野航原隊以来の初年兵が笑いながら言う。元気者だ、ままよ食つちやおう。

空腹で夜中目を覚まし、水筒の水で我慢したこともあつた環境なればこそ、嬉しい満腹感であつた。

昼食の時はもちろん、見掛け携行の空飯盒で雪を溶かし、白湯を飲み腹に入れた。

仕事も今まで通りできたし、夕食にありつける收容所までも帰れたのである。

これは佗しく恥ずかしいことながらも、事実のことなれば敢えて暴露し、忘れられないシベリアの記録とする物語である。

三重県 奥田武男

越冬・食うこと

零下五〇度、六〇度となると、もう寒さを通り越して痛く感じる。

ある日、道で馬鈴薯を十個ばかり拾つて帰り、夜、飯盒で煮て食へようかと蓋を取れば、何とそれは馬糞ではないか。

糞が。パラパラと落ちると、もう凍つてしまふ。

全く馬鈴薯と同じに見える。何と情けないではないか！

また、春になれば、若芽という若芽は何でも手当り次第食つた。

チリムシや頭ハリの、のびる、タンポポとあらゆるものを食へた。

秋にはキクラゲ、キノコ(毒キノコ)何でも食へ、パイピイになつた。

また、山で伐採すると五葉松に、手の平ほどの大きな松笠が付いている。取り勝ちで取つたものだ。

油つくく爪ほどの実が入つている。焼いて食つた。

とにかく食うことにはガキに等しい。

「働かざる者は食うべからず」の国だからたまらない。

今日仕事をすると、二日後の食事となつて現れる。

飢餓地獄

初めは玄米が高梁や粟に代り、それも皮の付いた原穀のまま。そして脱脂大豆の粉、おじやからお粥、そして申し訳だけ野菜や魚などの入ったスープ状と劣悪な食糧。それも飯盒の蓋一杯あてが二食分。黒パン三百グラムが一食分は、酷寒の中の重労働に堪えられるはずがない。誰となく松の皮(荒皮を除いた白い部分)を煮て食べることが始まった。渋みがあり、かんびのように似た感じである。食い過ぎて消化不良や腸捻転で医務室が繁盛した。朝夕、寝台の上から手に手に松火を掲げながら、煤で汚れた顔で食事当番の動作を一斉に見守るさまは、さながら地獄絵図のようである。

遅いシベリアの春も、五月の終りは凍った大地も弛み、やがて一斉に木の芽、草の芽が伸びる。アカザやタンポポ、蓬は言うに及ばず、山にら、山うどなどと名前をつけては手当たり次第腹の足し。森林は湿地帯が多く、八、九月頃は多様な茸が発生する。毒草や毒茸で中毒を起こす者、夢中で山を歩き迷つてしまい大騒ぎになることも度々あった。

鳥取県 清水要範

我々のような身体の衰弱した者にとつて貴重な食物であった。松の木を倒す度に走つて松の実を拾いに行った。

愛媛県 池田政治

十二月に入つて、寒さのきびしい朝だった。馬が一頭急死した事があり、ソ連側では日本人が故意に殺したのではないかと疑つたのか獣医を連れて来て解剖したが別に異状を認めず、山の中の枯木を集めて来て解剖した馬の上に乗せ火をつけて焼いておくように指示して帰つて行った。獣医が帰るのを確認すると誰言うもなく「火を消せ」と言つて、馬上につけた火を消してしまい、馬の頭、胴、足、内臓等を別々に分散して雪の中に埋めて目印をして分かる様にして置き、後から掘り出して食べる事にした。一回凍つてしまえば、もう来年の四月頃までは大丈夫である。それからは毎晩十時の点呼が終れば既に集合して埋めていた馬体を少しずつ掘り出して岩塩をつけて焼肉にして食べたが、一カ月くらいに六人の当番だけで全部食へてしまったのである。これはわずかな期間で馬一頭分というわずかな量であったが、その時の食糧難と栄養不足を補う効力は充分にあつたと思つている。

福井県 岩本栄一

ここはドルミンという所らしい。そこに一カ月居た頃か、山へ仕事に行くようになり、二人引きの鋸と斧を持ち、雪の中を山へ行き松の大木を伐採する作業であった。厳寒の中食糧は少なく、パン一切れに汁は飯盒の中蓋に八分目ほどで、それが一食であった。たまにコウリヤンの飯が出ると量が少し多かつたので少し腹ごたえがあつた。馬の食糧であつたらしい。松の大木を倒すと先の方に大きな松笠が有り、その中に内地でいうカヤの実の様な実がたくさんあつた。それはうまく、そして油気も栄養もあり、

静岡県 後藤光義

六月になり木の芽も膨らみ青葉が始めると、白樺の幹にV字の傷を付けて樹液を取り飲んだ。夏になるとロシア鎌で草刈り作業に行く。ブヨが多くて、頭から目の所だけ蚊帳で見えるようにした頭巾を被り草を刈る。食事の時には困つた。北海道出身者がいて、これはアイヌ葱だと教えられ、取つて食べた。食べなかつた者に臭い臭いと言われ困つた。小指の頭ぐら小の小さい百合の根も掘つて食べた。毎日の食事が少ないので少しは役に立つたと思ひます。

愛媛県 橋 兵馬

人間も飢えそうな時には何でも食べられる。作業に行つての昼食は樅もみの木の幹に付いている苔をとって焼いて食べたり、めつたにいない蛇がいたら取って皮をはぎ、焼いて食べていた者もいた。作業の帰りには野草を採って帰り、ペーチカの上で炊いて食べた。

愛知県 土居好太

シベリアでの苦労話はいろいろあります。私の話は、部隊全員が過酷な伐採・炭鉱の石炭掘り、鉄道建設などに強制労働された方たち、それぞれの過酷な苦労がありました。二年も三年も着たきり雀で乏しい食事、衛生状態は最悪で、それを切り抜けていくために全知全能を駆使して、いかに体力の温存を図つてゆくか、そのためにいかに作業を減らす工夫を凝らすか。いかに空腹を満たすか。私はこれも生きて故国に復員するための、生き様だと。

北海道 安田忠雄

食へ物への執着

抑留者は自由を束縛され、食へ物は配給による限定食のために多くの犠牲者を出すに至りましたが、收容所には食糧倉庫があり、ネズミを捕え丸焼きし、骨と肉だけを取り出し食用としました。また炊事班が凍結した馬鈴薯を地下室に放棄したものを煮た上で食用等としました。

愛知県 小沼 勇(旧姓 加藤)

十月十日、ハバロフスク地区の第九收容所(五百人単位)で入れられた。

食糧も無く、衣服も夏の軍服で日中はともかく、陽が落ちると気温が零度以下になるので、寒くてストーブを焚いたが、薪が湿っていて煙ばかりで、舎内にいたたまれず外に出たところで、馬が一匹倒れたということを知り、その馬の

肉を生で、ハイエナが死んだ動物を食い千切るように、よつてたかつて短時間でむさぼり食った。残ったのは骨とひづめのみ。久しぶりの肉食だった。

千葉県 庄司音松

夏が来た。日中は暑い日陰に入ると涼しい。だが炊事場には無数の蠅が飛んでいる。ソ連の軍医大尉(通称私はタークと呼んだ。それは口にタバコをくわえてオーターク、オータークと炊事場に入つて来るからである)。その大尉が入つて来ると汚い蠅がいっぱいいるではないかと怒られるので、来る前に一カ所窓を開け、皆で上衣を振つて隅から蠅を追つて外に出す。しかし、その蠅がブーンと音をたて気持ちが悪いくらいであったが、何分ともかからないうちに、また炊事場に入つて来ている。

この夏の事であった。主食としてニシンの塩漬が一樽配給になってきた。では皆に配給しようと思つたところ、ブーンと臭気が甚だしく、完全に腐つていた。

例のタークに先ず見せなければ代わりの食糧がもらえない。急ぎタークを呼んだ。そのタークも、これは食へてはならんと同調した。

さて、その腐つたニシンの処分方法、どうしたら皆が食へないか、穴を掘つて処置したら、これは必ず掘り返す。思案の末、誰かが便所に捨てたらどうか、これを採用することに決めた。

ではその便所とはどんな便所かと言うと、先ず横型に穴を掘り、それに板を乗せてあり、その板の上に乗る用を足す。穴の両側には後ろに流れる様に溝が掘つてある。うしろの方は大きな穴を掘り、そこが溜りとなっている。

そこに捨てようと皆で相談がまとまった。腐つたニシンを次々にその糞溜の中に投げたがニシンは糞の中に入らずに浮いている。

次の瞬間、そばで見えていた私達の仲間がその溜の中に入つて行くではないか。それを見ていた大勢の仲間がやはりその溜の中に入つて行つた。最初に入つた人

は糞の中のニシンを拾い、蛆を振り払って食べるではないか。これは大変、皆伝染病で死んでしまうぞ、と致し方なし。ソ連の警備兵を呼んで銃でおどかして解散させた。

残ったニシンは全部糞の中に沈める処置をとった。

しかしながら、そこまで空腹を、我慢を重ねて栄養失調になり理性を失うまでには、どんなに辛い思いだったか。幸いにして伝染病は一人も出なかった。

現在の日本は経済大国として食物が豊富にあり、この書いた事は想像もつかないと思いますが、テレビ等で頭からビールをかけて喜んでる姿、また先日ある上棟式にも頭からビールをかけて祝っているというのを聞いて無性に腹が立つた事を強く覚えています。またテレビでケーキのぶつけ合い、食物を本当に食べ物と思わないその姿は、遠いシベリアの地でひもじい思いをし、栄養失調で亡くなられた方を思い出すと同時に、何ともつたない事だ、先ずこの言葉が先に立つと同時に、食糧もなく淋しく亡くなった当時を思い出し、今我々の食糧の半分でもソ連からもらえたら仲間はずれに日本に帰れた人も多々あった事と思うと、涙の一筋が落ちていくのをおぼえます。

愛知県 鈴木英一

収容所での一日の食事は、朝晩が高梁や粟などの雑穀の粥が飯盒の蓋に八分ほど、実のないスープが中蓋に一杯、親指の先ぐらいの野菜の切れ端、魚や肉が入っていれば運がいいと喜んだものでした。昼食は作業場で食べる黒パン三〇〇グラムですが、これは前の晩に夕食と一緒に分配するので、夕食と一緒に食べてしまいます。いくらお腹の足しになったような気がしたものです。翌日の昼は飯盒一杯の雪を解かして、近くにあるタンポポやアカザ、ノビルなど食べられる野草やキノコを煮て、岩塩をちよつぱり入れたスープを作って飲みました。いつとき満腹となりますが栄養にはなりません。なかには毒キノコを食べて亡くなった仲間もおりました。

伐採作業中、ねずみが現れると、仕事を放り出して大勢で追いかけて捕まえ、焚き火で焼いて食べたものでした。日本のドブネズミと違って大きい野ネズミで、これはうまく栄養源になりました。夕食が終わると、五、六人が集まって、つばをこくりと飲み込んでお国自慢の食べ物に話が咲き、最後は味噌汁とたくあんで白い飯を腹いっぱい食べた、早く帰りたいと言ってお開きになりました。

愛知県 今井昭治

切り倒した松の木の幹に近い皮が飴か何かのように見えなかったので、タポールで細かく切つて口の中に放り込みました。味も何もあつたものではありませんが、何か食べないと死んでしまうと思うあまり食べました。これを食べると便秘になり、これで命を落とす人も出てきましたが、何か腹の中に入れてないと命を落とすことになると思い、食べました。

こうした状況の中でのごきりを挽きながら作業をしておりますと、日本人の馬方がソ連人の馬方の親方のところに行き、防寒帽の中に何か入れてもらつておるのが見えました。何をもらつておるのかと見ておりますと、帽子の中に何か入れてもらった馬方は、火が燃えておるところまで行き、馬を木につないで自分は腰に下げている缶に、もらつてきた物を入れて炒つておりました。馬方とどれだけ離れていたか忘れましたが、食べ物炒つておる匂いがしてきました。腹をすかしておるときに食べ物匂いがしてきましたので、我を忘れてふらふらと匂いにつられて馬方の兵隊のところに行き、思わず防寒手袋をはめたまま手を差し出しますと、その馬方の兵隊は驚いて真っ黒な顔をして私を睨みつけましたが、何を思ったかわかりませんが、黙つて缶の中から炒つた物を少し取り出して私の手袋の上に乗せてくれました。お礼を言う暇もなく口の中に放り込み噛みまますと、馬の餌の燕麦でした。うまかつた、今でもそのときの味は忘れることができず、さらに手を出してもらつてもできず、口の中に残つた食べかすを噛んで

おりました。

(3) 酷寒の凌ぎ

寒さとの闘い

和歌山県 岡本 昇

シベリアの冬は長く、真冬になると明るい時間はせいぜい七時間くらいである。朝零下二十五度以下であれば作業中止し、気温の上がるのを待つて作業に出る。零下二十五度くらいになると空気が死んでいる。煙突の煙は真直に静かに昇ってゆく。戸外に出ると、吐く息で口髭は凍る。目を閉じていると臉が凍りつく。鼻の頭はヒリヒリと痛い。常に身体を動かさないと耐えられぬ。手袋は親指と他の四本をまとめてさす綿入れの大きなもの、それでも手袋の中では常に手を動かす。

靴は底から膝かぶまでの厚いフェルトの縫目のない長靴である。雪の上でも平気で割合温かい。ただ一度濡らすと大変だ。そのまま履いていると足や靴下の湿気で靴と一緒に足が凍りつく。こうなると感覚のない足の指を少しずつ自分の力で辛抱強く動かし、さらに靴の上から気長にマッサージを続けると、感覚が戻ってきて、激しい疼痛が襲ってくる。これを気力で耐えようと、靴を脱ぐことができず。凍りついたまま火で温めると、完全に凍傷になって、指の先から腐ってきて、場合によっては足首から切断しないと命にかかわる。

岩手県 佐々木徳男

中部シベリアは夏の期間が十日くらいのもので、八月末からひひとして雪が降る。酷寒期には零下四十度以下になった。天幕をプアプアと鳴らして吹雪が荒れ狂う日があり、水銀柱がどんどん下がった。四十度以下になると空気中の水分が凍結して視界がゼロになった。さすがにそのときはラポータニエット(作業な

し)、スパーチ(休息)の伝令が各幕舎を駆けめぐった。私たちは零下四十度以下になることをどんなに待ち望んだことか……。天幕は二重張りの方錐形天幕という関東軍からの戦利品で、二段ベッド式に組み立て、その上下に六十人が収容された。一個小隊六十人なのだ。中央に大きなペーチカを置いてドンドン薪を燃やすから割り合い暖かいのだが、それでも矢張り深夜は冷え込み、大抵の者は寝小便をするようになり、朝起きてペーチカのそばで着衣のままそれを干すと、特有の酸臭が立ち込めた。

大阪府 小森淳男

夏の太陽は沈まない。夜の十一時ころでも明かりなしで新聞が読める。太陽は地平線を這って午前三時ころにはもう昇ってくる。白夜だ。少し冬季に回してくれたらなあと思ったものだ。

三寒四温は夏場にもあるが、特に冬季ははつきり現われているように思った。入ソ当初の冬はマイナス二十五度以下のときは室内待機で、二十五度まで上昇してくると、レールの切れ端をつるした鐘がカンカンと鳴らされて、作業集合だ。二時間でも一時間でも作業に追い出される。入ソ二年目の冬は、マイナス三十度で作業に出された。シベリアの冬に馴れたらうということだった。入ソ三年目の冬は我々が思うに、リミット三十五度かな、なんて考えていたら、三年目の冬からは制限なし、お陰で、マイナス五十五度の中へほうり出された。これは私の記録だ。その様子にちよつとふれてみたいと思う。

まず感じるのは、警護のカンボーイもさすがに寒そうだ。薪の材料はたくさんあるから、ジャンジャン燃やす。大体日本の四畳半くらいの家が一軒燃えているくらいに燃やす。火を中心に大体三十人ぐらいが円陣をつくってかこむ。前向きに当たると胸など前面が温まるが、背中と両脇腹、両腕が寒くて寒くて、背中を当てれば前面が寒い、右の方を火に向ければその他の部分が寒い……。ちよつど一杯飲み屋の焼き鳥を想像すれば、火を中心にグルグル回る鳥並みだ。火か

ら離れることはできない。だから作業は全然できず、プロローホ・ラボータで食事を減らされる。「働かざる者食うべからず」ちよつときつい言葉だ。

そして冬装束は、靴下は幅二十五〜三十センチ、長さ七十センチぐらいの布二枚だ。上手に足に巻く。靴はフェルト製の長靴で、冬オーバーの上に毛皮のシュバーを着る。下着と服は当然着ている。手袋は軍手の上に、大手套といってウサギの毛が入った親指だけ分かれたものをする。防寒帽をかぶり、垂れをおろす。歩くより転んだ方が早いような格好でコロコロだ。それなのに寒いんだから体力が消耗する一方だ。しかしマイナス十度〜十五度ぐらいの気温で無風であれば、今日は暖かいと大喜びをしたものだ。上衣も手袋もはずして作業ができる。

滋賀県 杉本武男

収容所に入った年の冬は、防寒被服も満足なものはなく、また靴のかわりに福助地下足袋を、また軍足もなく、毛布の端きれを足の指に巻きつけて炭坑に通う。右足の親指は凍傷にかかった。今もその跡は残っている。

まだまだ気力はしっかりしているのだが体力の方が衰えて、これ以上の苦しさが続けば自分の死も目前に迫っていると、こんなことを考えているある日のこと、ソ連の某大官が収容所の視察に見える。これも日本の捕虜が大変に多く死ぬということ、我々捕虜の身体健康診断を命令したのである。

診断の結果、早速入院ということでザビターヤの病院に入院、一冬を越す。お蔭をもつて一命を取りとめることができたのである。やがて春が近づいて退院をする。それからは道路工事、建築作業等の仕事に出る。ソ連の言葉も努力の結果少々覚えることもできて、ようやく収容所の毎日の日課に精を出すことができるようになった。我々には何といつても春の季節が最適である。

和歌山県 長峯泰夫

顔を風上に向けたら、目も明けられない。手もかじかんでラバータを持つこと

もできない。除雪をやめてラバータを腰の後ろに差し、手袋をバタバタたたいたりさすったりして、手の感覚を確かめるのに精いっぱいである。

手の感覚を保つため、手袋の中の手を手袋の内面にさわらないように、手首で支えて手をちゅうぶらりんとして下げ、その辺を走っていた。夜が白々と明けてくる。小便が頻繁にすたくなるが、手を出すとかじかむ。そのうちボタンの開閉もできなくなり、あけたままだ。小便の量もチヨロツとしか出ない。その繰り返して、泣きたくなるがどうしようもない。そのうちバタバタ走っているのをロシア人の監督に見つかり、アツと思つた。その瞬間、監督が雪をすくい、私の鼻を雪でごしごしすすってくれた。鼻の先が凍傷で白くなっているという。あわてて自分も手袋で雪をすくい、鼻の先を感覚が出るまでこすり、だれかに見てもらつて赤くなるのを確認してもらつた。自分では凍傷で白くなつても全然わからない。他人に見てもらうしかない。

凍傷で皮膚が白のうちはいいが、黒くなつたら手遅れで、腐つて切り取らないといけなくなるという。

静岡県 熊谷精一

夜間作業を終え収容所に帰つても寝るにも寝られない。窓ガラスが凍りついて白くなっている。戦友たち毛布を集めても寒くてたまらない。着のみのまま毛布一枚の寝台、暖房設備はあつても、たいていない。冷蔵庫の中に寝かされているようだ。マイナス三十度前後の気候の中での仕事、実にみじめな収容所であった。戦い敗れても故国あり、いつの日か帰りを待つ。

山梨県 中山嘉明

どこまで連れて行かれるのか皆見当もつかない。まるでまな板のコイのようにすべてをあきらめてしまい、汽車がどこを走っているのか、停車駅がどこなのか確かめるのも億劫なほど精も魂も尽き果てて、真つ暗な貨車の中でだれも口をき

く者はいなかった。大地の冷たさが鉄路から車輪に、車輪から貨車の床に伝わって、座っている下半身が凍るようだった。小刻みに体をふるわせて、寒さから少しでも逃れようとした。寒気はいや応なく腰から背中の上り、やがて後頭部に疼痛のように刺激を与えた。耐えられなくなった兵隊は立ち上がって足踏みを始める者もいた。

岩手県 田辺壮久

ようやく作業を終えて帰ってきてても、収容所入りが大変である。入り口の歩哨は五列か十列に整列しないと人員確認ができないのである。

私らが四列で番号で人員を掌握し、報告した数と合うと目を白黒させて不思議な顔をするのだが、歩哨自らが確認し、納得しないことには、三十分でも一時間でも寒い中を立たなければならなかった。

収容所での大便、小便が大変であった。凍結前の秋に大穴を掘った、屋根のないところに丸太を渡し、寒風吹きすさぶ中で用を足すのである。幕舎から滑る雪道を三十メートルほど小走りし、排尿便で小高くなった氷の山を一気に駆け上がるのである。寒くて熟睡できない夜、一晩に数回の小便のときは、我慢がでさず歩きながらのこともあった。

和歌山県 松浦虎市

収容所に入って二日くらいして作業に出された。鉄道の復旧を早くするため、毎日多忙を極めた。十月に入ると急激に寒くなり作業から帰ってきてても部屋の中は寒く、体を温める術もなく、寒さに震えながらウツラ、ウツラ夜を明かす。その上に鉄道が故障のために三日に一度より食糧が入ってこない。しかも入ってくる食糧は、ヒエのかぶつたコウリヤン、そのおかげが飯盒の底に少しまると程度しかもらえない。厳しい重労働で腹が減る。寒いので睡眠はとれない。栄養失調となつてバタバタとわずかに二か月余りの間に倒れる者が出だした。特に私たちの

部隊は、「死骸部隊」と言われるくらいよく死んだ。それは、「内地へ帰れるんだ」というソ連兵の言葉を信じて、行軍途中で毛布や防寒外套などを捨ててしまったので、寒くなつても寝具もないので空きかますを二枚もらつて、それをつづり合わせてかますの中に入り、入り口を閉じて寝た者がいたが、まずこれらの戦友たちから倒れていった。

人間、何がつかいかといつて、空腹なのに食べ物もなく、厳しい寒さの中で寝具もなく、寒くて眠れないほど、つらいことはないと思う。

夜が明けると震えながら作業に出る、そんなことの連続の明け暮れに耐えかねて、精も根も尽き果てた戦友が、続々と言葉もなく死んでいった。その当時のことを思い出すと、身震いがいたします。

遅れて入ってくるコウリヤン、それを待ちかねて炊く、真っ赤な渋のようなおかげができる。そのまま食べると渋のため大便が詰って腹が張る。寒さのため小便の回数が多くなります。特に夜中の小便には困った。だれが考えたのか水筒の中に小便をします。それを腹の上に置いて湯タンポがわりに抱いて寝た。水筒は亡くなった人のものをもらつて、三つくらいを抱いて体を温めたので「水筒様々」でした。

生き延びるためにはあらゆる工夫をしたが、シベリアの冬は日本人の苦しみなど知らぬと言うかのように、遠慮会釈もなく日増しに厳しさを加えていった。

朝になつて、寝ている戦友を起こそうしたら、無言のまま冷たくなつていく。人間の体力に限界がくると、こんなにももろいものかと空恐ろしくなつてきた。それでも毎日の作業はノルマがあつて何一つの手加減もなく酷使された。

厳寒と凍傷

神奈川県 鈴木重雄

日中でも太陽が悲しそうにぼんやりとした光しか与えてくれない。この気温はマロース(零下)四十五度を超えるだろう。

たき火をしてもしばらくの間炎に手をかざさないと暖かみを感じられないほどの寒さ、というより痛さといったのが正しいと思う。手を見ると指先がろうそくのような乳白色をしている。ひどい凍傷だ。交互に指先を強くこすっても血の気は出てこない。こういうときに火にかざすのは絶対禁物で、雪で赤くなるまでこすること。監視兵がやって来て、自分の指を出して見せる、やはり凍傷のあとである。

岡山県 田中一司

さて、寒さについてですが、現在我々が使っている冷蔵庫の中の冷凍室はマイナス五度から十度の間です。鮮魚の瞬間冷凍はマイナス三十度とのことです。私のいたカラカンダではマイナス三十五度を体験しました。ちょうどそのころは地上で炭坑で使う機材を貨車から降ろす作業をしていましたが、フェルト製の長靴にボロ布切れを二、三枚巻きつけて履き、一時間作業をすると靴がカチンカチンに凍ります。小屋で靴をぬぎ一時間半かけてボロ布切れを干さないと凍傷になります。体で一番早く鼻と耳たぶが白くなって血行がとまり凍傷となります。お互いが注意し合つて手でもみっこするわけです。思い出しましたが、炭坑の地下は冬でも平均プラス十八度ほどですから、作業衣上下で整理して炭坑に行くときソ連兵の点呼があります。我々は四列縦隊で端の者の番号で人数を知りますが、彼らには通用しません。五列縦隊にし、前からと後からの二人がかりで各人の肩をたたきながら数えて、二人で話し合い、また肩をたたき始めるのです。薄着の上に時間がかかるので、我々はお互いの顔をみつめ合い、鼻、耳に注意したものです。

鳥取県 持田一男

そのうち、だれかれとなく栄養失調でやせ細つて骨と皮になり、ついで足や顔が黄色くなってむくみ出す。小石につまづいても倒れるほど体力を失つてしまつ

た。小便は黄色いのを通り越して褐色となり、尿意をもよおしたら我慢ができず、便所に行くまで待ちきれない。しかもたまつた小便を一度に出し切れなくて、少しずつポタポタとちびるのだ。夜間に寝小便をする者も多く、彼らは朝になつてぬれたズボンを乾かす暇もなく、そのまま作業に出て行かねばならず、戸外に出ればぬれたそのズボンはすぐカチカチに凍つてしまうのだった。

凍傷患者や栄養失調患者が続出し、おまけに急性肺炎が流行して一命を落とす者が出だした。これらはやむなく茫漠の野に葬られたが、ただ毛布にくるんで運び、細長く掘った穴に埋めて土をかけておくだけであつた。手折つて供える野花もなく、線香のかわりに紙切れで手巻きしたマホルカ(刻みたばこ)の煙が、寒い北風にくすぶつていただけであつた。

新潟県 渡辺幸三

極限

シベリアの寒さは話には聞いていたが、身をもつて体験するのは全くはじめてである。

十一月も中旬になると寒さが急に厳しくなる。雪が毎日降り、野も山も鉄道線路も一面が銀世界となり、積もつた雪は翌年の四月まで絶対に消えない。

十二月中旬頃になると、ほとんど雪は降らなくなるが、温度は零下三十度から四十度になる。体感温度が零下六十度になった事もあつた。

そして吹雪になると目も口も開けられず、防寒帽から出ている眼のまつげは白く凍つて、またたきをするときペタペタとくつついてしまふ。

夢中で作業をしていると鼻の頭が真っ白くなって凍るので、お互いが見ていて知らせると血の気の出るまでマッサージをするのである。

作業用の鉄棒や、スコップ等、鉄の部分を万一素手でさわろうものなら、皮膚がくつついて、無理に取ろうとすると、皮が、その鉄の部分に剥ぎ取られ、赤身の手になつてしまふ。

十二月中旬から翌年の一月中旬までが一番寒さがきびしく、その中からも三寒四温が順序よく繰返され、四温になると、二、三度の差であつても、とても温かく感じて、せめてもの救いであつた。また室内のペーチカの暖かさは、地獄に仏のようであつた。

三寒に入ると寒さが急に下がつて、零下四十度位になると、太陽は輝いて空は抜けるように青いが、大気が凍るといふか、一面に空が銀粉をまいたようにキラキラと光るのである。

しかし太陽は輝くばかりで少しも暖かくないのである。

寒暖計が零下三十度になると、作業が待機となつて屋内で温度の上がるのを待つ。

ちよつとも零下三十度未満になると、作業整理で出発させられた。しかし作業が激しくなるにつれて、零下三十五度でも作業に出された。

その寒さの作業ではとても能率の上がるものではない。収容所の便所は屋外にあるので、カチカチに凍つた丸太をならべたところでお尻をだして用を足すより仕方がない。

私たちは一様に体が衰弱しているので、小便のしまりが悪く、夜中にも三分おきに便意を催し、にわかづくりの二階の寝台からおりて行く途中にこられ切れずもらしたり、入口辺で放尿した。

春になつて氷が解けると、特有の臭いが立ち込めるのである。また冬期間の便所掃除は大変である。便所に積もつた黄金は次々と盛り上がつて凍つてしまうので、鉄棒でそれを欠いて、麻袋でモッコをつくり、収容所の片隅に穴を掘つて、そこへ埋めるのである。

体感零下六十五度

福井県 天谷小之吉

朝ラーゲリ(収容所)を出たころは零下三十度前後で、風速北西七、八メー

トルだったから、普通の日と変わらなかつた。作業中も銀色の粉雪が風にまぎれて、きらきらと飛んで来るありふれた日でした。ところが午後になって急激に気温が下がり始めた。大寒気団接近の前触れだった。北北西の突風が時折り吹き、その都度一段と底冷えがし、皆がたがた震え出した。最悪の天候、風に向つては呼吸もできず、さりとて風に背を向ければ、背筋(骨身)が氷つくような痛み、恐ろしい冷え方だった。(このままでは皆やられてしまふ)と思つた時、歩哨の一人が作業中止の命令を出した。そして山積みにした石炭に火を付けた。風に煽られた石炭はみるみる真赤になり、その火柱は風に薙ぎ倒されて火の粉を飛ばす、その周囲に歩哨も監督もそして我々も、必死で暖を取り自分の身を守るのみだった。

炎熱に暖を取る表側と、その反対面を交互に、まるで餅や煎餅を焼くときのように、何しろ零下四十二度、風速二十数メートル、この数字は収容所での測定だから、荒野の作業場では想像に絶する酷寒だった。

当時私たちが身に着けていた防寒外套は、戦前関東軍時代に支給された、日本製で半防水カッパの内面に、少し長めの別珍(綿糸で作つたビロード)が貼つてあつた。これは寒風には弱かつた。ところで今日の寒波では何を着ても、寒さはみな同じかもしれないが、ソ連の防寒外套は汚れてはいたが、羊の一枚皮で風は透さなかつた。また保温力も強く日本との比ではなかつた。

ところで冷たい痛いと言う感覚があるときはまだよかつた。ただしその感覚がなくなると恐ろしい。急いで摩擦しなければ、血液が凝固し白蠟となる。大手袋のままでの摩擦では、其の効果は空しかつた。たまたま素手を使うと今度はその手が忽ち白くなる。まさに悪夢であつた。また防寒帽には耳穴があつた。もちろんその穴には被覆は着いていたが、その隙間より入る風は実に強い、耳の鼓膜を引き裂くほどに痛い。大手袋で覆して一時を凌ぐ。

ソ連の歩哨も監督も我々と同じ一、二、一、二と足の跳躍運動をやつている。時折り銀の粉雪が突風で、矢のように被服を吹き抜けて肌身に刺す、あるとき

は人間として極限、足は絶えず跳躍しても踵骨の後部や、指先が麻痺して感覚がなくなってくる。

声をさらに大きく一、二、一、二と足踏みを続けたが、時折り眠気のような感覚で、意識が朦朧としてくる。周囲の者同士声をかけ体を叩き合うが「一、二、一、二」の音がだんだん小さくなり、かわって一人、二人その場で倒れ始めた。その時「ヤポンスキーサルダート、ダモイ、ダワイ、ブリテリー」「日本の兵隊帰るぞ、早く急いで」、歩哨が絶叫に似た声を上げた。皆は必死でラーゲリー「収容所」に向かった。

私もこのとき鼻の頭と耳たぶが凍傷に罹った。その部分は数日後にどす黒い色となり、やけど跡の様に爛れてしまう。その後変形し、鼻の頭などは一センチ程も欠けてしまった。

この姿ではB子さんに会わず顔もないと思っただが、幸い翌年五月ころには元の形に戻った。それまでは何とも憂うつだった。この日の寒波で凍傷に罹り、手足の指など切断した人、さらに凍死した人もいたのだから、私はまだ幸運だったかもしれない。

シベリアでの初めての越冬は、抑留者最大の試練だった。衣食住ともに極限の状態で、重労働の連続、その中で迎えた冬の猛威は、弱った体に余りにも残酷過ぎた。

和歌山県 出口為治郎

時は二年目に入つて、シベリアは寒いと聞いてはいたが、零下三〇度という日も少なくなかった。自分たちはシベリアに来て冷えるというのが初めてで、満州の気温は全く知らなかった。お陰で若い年配がものいうとあつて、満州開拓者たちは赤紙一枚でこんな幾千里離れたところに引き連れられた。兵隊たちは口には出さぬが、いずれ取り返しつかぬ事件が発生すると言っていたのである。

島根県 田辺勝義

零下四十度以上になると作業もなくなり、そんな日には庭一面に毛布を広げて干すとシラミが凍死するという知恵もあった。

零下七十度も一、二回は経験した。そんな日にはまばたきと凍^{はな}ずすりは止めてはいけない。まつ毛や鼻毛がすぐ凍るからだ。鼻の頭が白くなってさわると。口りと皮がむけるので、細心の注意が必要であった。

岩手県 松浦竹治

シベリアは大気が凍るのだ。零下四十度になると作業は休む。何故作業を休むのか、それは凍傷になるのを恐れるからである。作業は休みでもストーブの薪とりは交替でやらされる。大きな防寒手袋で火をたきながらの薪とりだが、手が痛くてたき火の効果が無い。零下四十度の厳しさは言葉の説明で納得を得るのは容易ではない。煙は上空に上らず、地上をはう。手を火に押しつけてもその面だけがわずかに感じる程度だ。カンボーイ(ソ連兵)は帽子の耳だれを上げて、「ヤポンスキー(日本兵)寒いのか」と言う。関東軍といつて威張つても、寒さで訓練したソ連兵には「とても勝てない」という感じがした。シベリアの寒さを語れば、夏の七月でも氷点下になることがしばしば、十月以降翌年三月いっぱい平均で零下三十度前後と聞かされた。もちろん零下六十度に達することも稀ではない。

岩手県 岩間栄一

シベリアは寒く、チタ市の記録は零下七十七度の石標があると聞かされましたが、私達が体験したのは零下六十八度と記憶いたしております。朝は九時頃朝日がでて、夕方は午後三時頃を過ぎるとお日様が沈み真つ暗になります。また夏は反対で、午前三時頃より朝日がでて、午後八時になつてもお日様が輝いていたりします。

岩手県 平田玉男

冬の服装と申せば、夏物の肌着に、綿入れのロシア服の上下と毛皮(羊)のシュールバ、毛皮の手袋で、親指のみ別についている袋のような物だった。長靴はフェルト製(カートンキー)で、帽子もロシアの防寒帽である。

我々がソ連に入った当時は、寒さを防ぐ防寒衣も手袋もなく、廃品の布きれを拾って手袋を作り作業に出た。特に印象に残るのは宿舎と寝具である。防寒設備のない作業小屋には何もなかった。寒さを防ぐために、乾いた草を集め、その中に潜り込み夜を明かした。まるで豚のようだ。乞食でもこんな有様ではあるまい。大日本帝国軍人の姿などとは思えない。毎晩、身を震わせながら夜の明けるのを待つ。耐え難きを耐え、忍び難きを忍びと、天皇陛下のお言葉を肝に銘じてがんばる。「我慢だ待ってろ 嵐が過ぎりや 帰る日もくる 春が来る」を常に口ずさみ、歯を食いしばって頑張り続けた。

埼玉県 山口秀夫

夜寝る時はそこら辺にある乾草を盗んできて、積もった雪を除けて、そこに乾草を敷き、その上に木の枝で片屋根をかけ、前面でたき火をして身体を暖め眠くなるとそのままごろりと眠る。五分くらいとると眠ると背中から寒気がはい上がってきて目が覚める。また起き上がって火に当たる。そんな状態を繰り返しているうちに夜が明ける。そしてまた作業に就く。そのような日々が十一月三日まで続いた。

新潟県 若月太郎兵衛

到着早々、各自は寝る所を作らねばならぬ。自分は屋根裏へ行くことになった。各自は、松のこわ板のような粗末なものを釘打ちしながら寝台作りである。松のこわ板では毛布一枚敷いたぐらいで寝れるものではない。人間三分の一は寝

るのだ。こんなことでは冬は越せぬ、僕はすかさず馬屋へ跳んだ。馬夫にタバコをやつて麦藁と毛布一枚を貰った。松板の上に麦藁を広げ、その上へ毛布を敷いて端々を釘止めにした。完成。ごろりと寝てみた。申し分なし。柔らかい。自分これで良いけれど、皆も何とかせねばと心配になり、君たちも早く麦藁を貰ってこい、と。皆は各自、毛布を持って馬屋へ跳んでいった。馬夫は「いけません、駄目です、馬が風邪ひく」。皆はしよぼしよぼうなだれて帰ってきた。若月はいつも要領がいいんだ、と羨ましがられた。僕は大隊長に、日曜日を利用して枯れ草集めをやり、寝台作りをやらせて下さいと進言した。隊長は、よい発想だ、よい着眼だと褒められた。すぐ実施して冬を越す自信を深めた次第。

長野県 高嶋利春

寒さと飢えの環境は経験のないことで、夢にも思わぬことである。毎日毎日、自分の体力の衰えがわかるので、できるだけ動かさず身が保たれるように心掛けて毎日を送っていた。衣服等も、だんだん死んだ戦友の着たものを着るということで購入していた。

愛知県 河村廣康

冬は、日本の北海道で暮らしたことはありませんが、緯度の関係からして北海道よりずっと寒いのです。平均してマイナス三十度から四十度くらいだったと記憶していますが、真冬となりますとマイナス五十度くらいのときはよくありました。一番低いときはマイナス六十二、三度というときが三、四回ありました。国際法ではマイナス三十度以下になったときはラポート(作業)に出ないことになっていますが、ソ連兵はそんなこと構いなしにビストラ、ビストラ(早く早く)と作業に追い立てました。外にいますと時間で五分くらいで鼻の頭が白くなってきます。凍りかけたのです。私たちは普通冷たいとき鼻の頭を横にこすります。しかしそんなことをすると鼻の頭の皮がペロリと剥がれてしまうのです。そのままにしていると凍傷になり腐ってしまいますから、軽くたたいて血の巡りをよく

してこれを防ぎます。

また、マイナス五十度近くになりますと、体を動かすたびに悪寒が走ります。下着が肌から離れていたのが肌に触ると、わずか一分間くらいに冷えきってしまつた下着が肌に触るからです。想像できますか？

小便がしたくなり、ボタンを外して用を足します。終わつてからボタンをはめることができませぬ。手の指に感覚がなくなつてしまつていて、外すときは案外外せませぬが、はめることは容易ではありません。

まつげには氷の花が咲き、まばたきするたびに上と下のまつげがくつついて、まばたきするにも力が必要です。寒いというより痛いのです。凍死するのは、痛い寒いを通り越すと眠くなります。そのままですと、あの世行きになつてしまいません。作業が終わり収容所に帰る道すがら、目をうつろにしてふらふらしてついでくる戦友がおると、言葉をかけるくらいでは駄目ですから、怒鳴つて頭をたたいたり身体を揺すつたりして正気にさせていました。それでないと、倒れたら、もうその時は息絶えていますから……。

冬の最中の仕事で一番楽しくて楽なものがあります。それは穴掘りです。穴掘りの作業を命令されると、戦友たちから「やったな」とうらやましがられます。大体二人一組です。冬の土はカチンカチンに凍つていて、ツルハシぐらいでは歯が立ちませぬ。どうするかと言いますと、穴を掘るところの雪をどけて、どんどんとき火をします。三、四十分たちますと、とき火を横にどけて、ツルハシとスコップで穴を掘ります。約十センチ掘るのに、穴の大きさにもよりますが一メートルくらいの直径ですと十分くらいです。三、四十分は腰を下ろして火に当たりながら食べ物の話など、よもやま話に花を咲かせることができます。一メートルの深さの穴ですと一日がかりの仕事になります。戦友たちが寒さに震えながら仕事をしているのに比べたら、まさしく極楽です。「戦友たちよ、済まないね」と。冬季の服装は、軍隊時代の木綿の下着上下、毛糸の下着上下、軍服、オーバー、防寒帽にマスク、軍手に手筒、フェルトの長靴です。それでも耐えられないくらい

の寒さです。どんなに寒いか、お判りいただけただけでしょうか。

とにかく今思い出しても、冬の季節には、ぞつとします。

富山県 室田幸雄

ここで最も辛苦だったことは寒さと飢えでした。夜中、小便に起きても、屋外の遠いトイレには誰も寒くて行けず宿舎の前で用を足すので、朝にはそこは一面の水で立派なスケートリンクができていました。また、百五十人の捕虜に一日わずか五キロの米の支給、それに毎食小型マッチ箱ほどの一切れの黒パン、一つまみの野菜という劣悪な食事でした。飯盒によそつたご飯は、お湯の中に数えられる程の米粒が沈んでいるものでした。

我々は食事の前、腹いっぱい水を飲み、わずかな食べ物で満腹感を味わい、空腹を水を飲んで忍びました。また、飢えのため、雑草はもちろん、ある人はウジのわいたカラスの死肉さえ煮て食べました。

零下三〇度の寒さで凍傷にかかり指を失った人もいました。私は吐く息で眼鏡が曇り先が見えず、部屋の前戸にぶつかつて眼鏡を壊してしまいました。我々は皆栄養失調、栄養不足でひどい脚気になり、足が上からず引きずつて歩いていました。道に丸太が転がっていてもそれを跨ぐことができず、はつて通りました。私も栄養失調、脚気から急性肺炎にかかり、ついに倒れて動くことも叫ぶこともできなくて意識不明になりました。その頃、多くの療友も病氣衰弱で次々と亡くなられました。私も薄れる意識の中で、いよいよ死ぬ時がきた、もう駄目だとすべてをあきらめました。しかし、天は私を助けてくれました。幸運にもたくさん病人の中で、私は最初の入院患者七人の中に選ばれました。そして雪の中、馬そりに乗せられてジマ市の病院に運ばれました。

病院に着いても自分では動くことができず、玄関の土間に寝ていました。二人の看護婦が担架を持って来て私を乗せたまま浴室に連れて行き、シャワーで私の垂れ流しの汚い体を洗い、汚れた下着をきれいなものと着替えさせてくれました

た。そして病室に運び柔らかい寝台に寝かせてくれました。そのベッドの温かい心地良さに私はまるで天国にきたような気持ちになり、三日間飲まず食わず少しも動かずベッドに横になってほとんど眠っていました。その間日本の軍医さんが薬を持ってきてくれ、ソ連の女医さんが診察治療をしてくれました。彼らの治療のおかげで私は少し食べられるようになり、ゆっくり上体を起こせるようになり、日ごとに元気になり病氣も回復してきました。その反面一緒に入院した療友の半分は段々と病状が悪化して、一カ月ほどのうちに亡くなりました。皆の目の前で死の寸前まで日本に帰りたい帰りたいと涙してつぶやいていた療友たちを今でも思い出すことがあります。生死の運命の分かれの不思議さをつくづく感じています。私たち七人のあととくさんの病人がここに入院して来て百五十人余りでいっぱいになりました。そして毎日一人二人と悲惨な死を遂げていきました。死体はすぐ裸にされ毛布に包まれて屋外の新設の棚に置かれます。零下三〇度でカチカチの冷凍人間に変わります。ただ哀れという言葉しかありませんでした。そして翌朝数人の日本人捕虜が来て、遺体を担ぎ野山や森林の奥に運び、冥福を祈り懇ろに埋葬しました。

私は奇跡的に周りの皆さんの温かいお世話に助けられて二月で退院できました。そして元の収容所に帰り、急に新設された一日六時間労働の軽作業班に入り、班長をさせられました。

その後は二十数人と共に、駅構内の清掃、民家の便所の汲み取り、鉄道線路の枕木交換、パン工場の使役、穴掘り作業、農場での大根、ジャガイモ掘り、冬には井戸が凍って水が出ないので川へ鋸、鉄棒を持って川の氷取り、最後の頃は製材所で製品の運搬、等級別の仕分け作業、夜間のポイラー炊きなど色々のことをソ連人と一緒にやってきました。時々その頃の様子が今でもはつきりと思い出されることもあります。過ぎてしまえばどんな苦勞も懐かしい思いに変わってしまいます。

シベリアで最初に課せられた作業はタイバー炭坑への鉄道引込線の工事であった。幸いなことは、いきなり土方仕事ではなく、予定地の除雪作業が始まりであった。一月の七日頃からと思うが、まだ明けきらない七時頃に収容所を出た。ついでだが、午後の四時を過ぎるともう夕景となってきた。冬は日足の短いことは肌で知っているが、この異様な明け暮れが私達に心理的な圧迫感を与えていた。シベリアの雪はサラサラして大変軽い。だから作業は大した力を要しないのだが、ものの五、六分もそれをしてると爪先や指先が辛抱の限界を超えて、ただただ痛いのである。仕事どころか、スコップを投げ捨てて足踏みと手をこするのが最も大事な仕事となる。寒さに耐えかねて、中には白樺の小枝を折って焚き火を始める者がいた。火が燃え上がるとたちまち監督が飛んできて「何を怠けているのか、早く仕事をさせろ」と隊長に噛みつかんばかりに言う。その場では全員がパツと散るが、いなくなるとまたぞろ焚き火が人垣の中心となる。こんなイタチこつこのうちに初日の作業が終わった。

除雪が終わると、道床造成のため連日土方仕事で、土掘りと土運びに追われる日々となる。除雪の終わった二月頃の大地は地下三メートル位まで凍結していて、つるはしを振り下ろすと「カチーン」という金属音を発して跳ね返ってくる。これには驚いた。大地が土ではなく、岩石そのものであった。だから一日かかると掘り起す土はバケツ一杯程度という日が間々あった。

そんな日に比べて春先の仕事ははかどる。つるはしで大地を打つと一条の割れ目が走る。そこへ鉄のくさびを打ち込むと一トンを超えそうな土くれが転がり出す。飢餓感を忘れてそんな仕事に取り組んだ日もあった。

極寒は満三カ年の間で、私が自分で確認した寒暖計は、無風状態で零下五二度を示していた。風が吹けば体感温度はさらに下がるのである。

零下三〇度で作業は打ち切りということに決められてはいるが、毎日三〇度を超えるから四〇度まで作業させられる始末であった。

身は中隊長であるが、作業所行きは初めはアムール河の船より荷下ろし、列車からの石炭卸下、このときも作業中零下四〇度に達した日があった。一人の兵が風に向かって小便し、陰茎が凍傷になってしまった。

「馬鹿者、早速両手で痛みが出るまで揉め」と一生懸命揉ませた。「痛くなってきました」「今後風に向かって小便してはならんぞ」。こんなことは常に教えていたのに、兵はもう判断力も何も無い。鉄棒を持ってつつ立っている。自分が凍傷になりつつあるにもかかわらず、これに対する処置をやらない無気力状態に陥ってゆく。何よりこれが恐ろしい。

滋賀県 小杉良夫

昭和二十三年九月、冬の訪れを感じる頃、帰国の報を受けウラジオストックに向かったが凍結し、また一年間シベリア生活を余儀なくされた。シベリアでの生活は、零下四〇度の酷寒の中でユルホーズ(集団農場)に五十人程度派遣され、冬は馬鈴薯^{ジャガイモ}の芽かきや選別作業、飲料水や食糧、暖房材の調達が主な作業であった。シベリアの収容所に入ってから栄養失調で体力がなくなり、シラミがわき、朝起きると何やらモゾモゾすると思ったら、隣の人が死んでいてシラミがこちに移ってくるのだ。一部屋二十メートル位、入り口にストーブが一つあるだけで、大変寒い。やっと五月に春がきて、麦、砂糖大根、馬鈴薯の種蒔きや生育作業をさせられた。

北海道 菊池普薫

年二、三回、零下五〇度以上になることがある。そうなると作業どころか、凍傷予防に必死であった。眉毛は白くなり、吐く息のため防寒帽の周囲は真っ白に凍りつく。特に鼻の先が白く凍るのは気づかないので、お互い知らせ合っ

雪を掴んで擦ると元のようになるが、手だけはピリピリと痛くなると指先は真っ白く凍傷を患っている。感覚はない。一生懸命両手で揉みほぐすより手段はない。そのうち徐々に赤味を帯び、元の状態になったときは火傷したような痛みがある。当然そんなときは作業休みで、暖をとって難を防ぐ。中には内地出身の人で、凍傷を患った手足をペーチカで暖めたら手足の指が溶けてしまった。そういう災難を見て、つくづく事前の予防がいかに大切かを知った。

三重県 中森讓

地上で働く他のグループは寒く、パンの量が少ない。体力のないところへ、寒い日は零下三〇度はいつもあるが、二〇度位までは防寒具を着て作業する。やはり体力がない者はバタバタと目の前で死んでいく。何とも言えない無念さ、想像を絶する。飢えや寒さと闘うが、死亡者は初めの一年間が極端に多かった。極限状態にあつて人はどこまで耐えられるか、希望と絶望の生きる力を教えてくれる。

栃木県 天野喜一

作業時における屋外の気温は氷点下三〇度前後であり、服装は作業服(日本製の軍服)に防寒外套・頭には防寒帽・足はカートンキ(フェルト製の防寒長靴)、手には軍手の上に毛の付いた大手袋にて二重に保護し、顔は種々の布で覆い目だけは出ているが、幾ら被服で包んだとしても、外気の寒さには対応できない状態であった。

寒風肌を刺す粉雪の舞う氷点下三〇度を超す屋外作業に、何の慰めもない心細い生活、空腹と疲労に襲われ明日の命も知れず、作業の中で吐く息はたちまちのうちに凍り、口は硬直し、睫毛は瞬間的に上下が凍りつき、盲目同然のシベリアの厳寒は筆舌に尽くし難い。体中が針にて刺されるような痛さ(寒さ)を体験し、死んだ方が楽になれると思ったのが抑留者の偽らざる実感である

う。

寒さのため手や足の指先も感覚も失い、凍傷となり薄黒く変色し、徐々に口ソクのように白くなり、切断しない限り他に影響があるので切断せざるを得なくなる状態に追い込まれる。

北海道 渡辺照造

寒さも極まれば痛さに通ずるという体験もした。零下三五度以下になると戸外作業は中止とか聞いたことがあるが、尼港では寒さのため戸外作業が中止されたという記憶はない。

温度計はないが、皆、北海道出身者なので気温は大体勘で分かる。「今日は寒いぞー」、朝、衛門前に整列しながら皆が言う。地平線に太陽が顔を出すのは九時過ぎだから、あたりはまだ暗い。首に手拭を巻き帽子を目深く被り、手製のマスクをしている。それが吐く息の水蒸気が凍るため真っ白になっている。

寒い。零下三十数度は間違いない。それに風がある。この寒いのに、今日は作業場が悪かった。アムールでの丸太揚げである。

現場に着くと吹き曝しなので風も一層強くなっている。軍隊では風速一メートルにつき体感温度は一度下がるといふ。従って今の体感温度は零下五〇度近いはずである。

監督は作業内容を指示してすぐいなくなってしまった。風上の方に顔を向けると、寒いのではなく痛いのである。頬つぺたが針で刺すようにキリキリする。背を丸めて風下の方を向いて足踏みを始める。とても作業をするどころではなく、さりとてジツと立っている訳にもいかない。

カンボーイは、意地が悪いのか真面目なのか分からないが「ダワイラポート（作業をやれ）」と叫ぶ。顔が子供子供しているだけになおさら腹が立つ。

カンボーイがいくら怒鳴っても、しばらくは足踏みをしていたが、元氣な田村兵長が「よし、やるか」と、ROOM（金属棒）で丸太を掘り出し始めた。三本目の

丸太を運搬中、私も手伝っていたが過って顔を丸太にぶつけ、左の眉毛の所に裂傷を作った。今でも鏡でこの傷痕を見ると、あのときは寒かったなあとアムールの川面を思い出す。

寒くてもうダメだと私は監督を探しに行き作業中止を交渉した。眉毛の傷が物をいったのか、「休憩小屋に入れ」となった。居丈高のカンボーイも本当は寒かったのだろう、ストーブの一番前に座り込んでいる。結局、この日は作業時間より休憩時間の方が長い一日となった。寒さが痛いと感じるような気温は、いくら北海道でも今は体験できない。

長野県 大沢正人

シベリアの冬季における気温は氷点下三〇度、三五度前後はあり、服装は軍服の上に外套、防寒帽、防寒長靴、靴下の上にポロ布を巻き、手袋の上に三重の保護をして、顔も種々の布で覆い、目だけ出しているが、幾ら覆ってもシベリアの外気、寒風、粉雪の中の炭坑作業はつらい。かすかに、ぼんやりと太陽が南の方にあり、細かい小雪がキラキラと降る毎日、何の望みも慰めもない心細い生活。空腹と疲労に襲われ、明日の命も知れず、吐息もたちまち凍りつき、頭はジンジンと鳴って、まゆ毛も真っ白、口は硬直し、まっげは上下がひっついてしまふときもある。シベリアの厳冬は筆舌に尽くしがたい。体じゅうが針で刺されるような痛さ、どこかこのまま引き込まれるような気持ちになる。いつそこのまま死んだ方が楽になれると思ったのは私一人ではないと思う。

愛知県 土居好夫

夏服を着ていたため、九月という冬で寒くなってきた。ある日、雨から雪に変わったが作業を停めることなく仕事を続けさせて、寒さと空腹、疲れで今にも死にそうになったので、カンボーイに「この状態のままだと死んでしまうから銃で撃ち殺してくれ」と叫ぶと、カンボーイが驚いて作業を停めて宿舎に帰ること

ができた。

このように極限の生活をしているために健康であった体が病気になる、入院することになった。

入院治療をしておるとき、担当の看護婦が自分の国に帰ることにになり、看護婦が不足するから衛生兵の私に看護兵として仕事をするようにと病院長から言われたが、入所時から一緒にいた戦友達と別れるのが嫌で病院勤務はしたくない旨を伝えると、病院長は、病院勤務をしなければ労働のきつい収容所へ出すと言うので病院勤務をすることにした。

病院勤務中に日本への帰国の話が出て来たので日本に帰る日も間近だと思っておる時に、病院長から「近日中に日本に帰る者が出るが、一回に全部帰国できないのでこの地に残る者も出るから、残る日本人のためにも少し残留してくれ」と言われ、帰国できないことになり気落ちしたが、病院長の言うとおりの日本人もおるので嫌とも言えず残留組となった。この頃通訳から聞いた話では、女医の診療長は病院長に「よく働く土居をどうして帰さないのか、よく働く者から帰すのが順序ではないか」と怒っていたが、病院長は看護婦が不足しているから止むを得ないと断っていたと話してくれた。

静岡県 松崎市郎

太陽は頭の上あたりだが、大隊がぼーっとして見える空気がキラキラと輝いて見える。身体全体がおかしい。そのときカンボーイは顔色を変えて「作業終了」。早く収容所へ行って休め」と。「ラボータカンチャイ ヴィストラ スバーチ」こんなようなロシア語だったか。零下五〇度を超えて捕虜に事故があった場合、ロシア上層部による処置が及ぶと聞いたことがある。それが一回のみならず二回もあったのである。一回目は不問に付されたが、二回目は何らかの処置がされた模様である。零下五〇度という、カムチャッカの対岸にマガダンという都市があるが、極寒(マローズ)は冬季中は四六時中、現れるとのことである。

三重県 太田 勇

まず厳寒です。シベリアの冬は八月二十日ころの初雪に始まり、十二月から三月までの厳冬期には零下四〇度以下になることがしばしばあります。小便が凍り、便所にピンク色の氷柱が林立し、不用意に素手で鉄製品に触ると手が離れなくなり、晴天でもちらちらと雪(大気中の水分凍結)の降ることがあります。しかし、こんなのは話題にもなりません。私にとつて今も忘れ難い経験は、昭和二十一年正月元旦零下六〇度の山中で伐採をしたことです。もちろん一応の防寒具は着ていますが、寒さを通り越して痛さを感じ、五体が硬直して鋸を持つ手の感覚を失い、樹幹に切り跡すらつけられない状態でした。さすがにこの日は作業中止になり、収容所へ戻りましたが、作業に出た班は全員が凍傷を受けたことはいまでもありません。皮肉にもこの日まっ先に悲鳴をあげたのがソ連の監視兵であった点から推して、シベリアでも零下六〇度になることは滅多にない程の厳寒であったようです。この日以来、零下五〇度以下になると野外作業は中止になりました。

極寒

新潟県 平原敏夫

銀粉をまき散らすようにチカチカ光を放ちながら寒さが降ってきた。凍土からキリキリはらわたにしみる寒さが這い上がってきた。吐く息がすぐ氷の微粒になつて付着し、眉毛が白くなり、まつ毛がまばたくと、パチパチ音がしそうにねぼっこだった。呼吸の度に鼻から二本の白い棒が現れては消えた。そうして鼻の穴がモゾモゾと痛がゆく奥の方がヒリヒリして苦しかった。その寒さは脳髓を何かにつままれてでもいるようで、体中ガタガタ震えがきてなかなか治らないのであった。朝目が覚めたら同室の同僚が冷たくなっていた。会話中静かになつたと思つたら、がくと首を落として、某が事切れた。事故死もあつたけれども、栄養失調

による衰弱死がほとんどで、寒さが厳しくなると共に死者は増えていった。

私の収容されていた地区では、死亡者は近くの病院に運ばれ、解剖、縫合のうえ埋葬されることであつた。病院に送る便が無いと幾日幾日も宿舍の出入口の片隅に、幾体ものカチンカチンに凍った遺体が井桁に積まれていた。背筋の凍るような光景であつた。シベリアの冬、大自然の厳しき、猛威は、衰弱しきつた私たちの身体に情け容赦なく、時には暴力ともなつて襲ひ掛かつて止まないのであつた。

鳥取県 河上武實

二十一年一月中旬より栄養失調で体力は低下、加えてシラミの大発生だ。痒いと思つて手を入れると暗がりでも一匹二匹は手にした。下着をストープの上で振るうとパチパチと音をたてて落ちた。水に漬けて一晩外に出しておけば親は凍死するが卵は死なず、またムズムズと痒くなる。

栄養失調に加えシラミの吸血、この頃から死者が出始めた。私も隣の戦友を二人亡くして、その埋葬に携わつたが、又それが大変で、穴を掘るにも土が凍つていて掘れないので、火を燃やして少し掘り、掘り返して一日五十センチ位が精いっぱい、これに埋葬し上から土を盛っておく程度でした。春になつて深く掘り直した。

早速我々で風呂場と煮沸消毒の設備を完成したのでシラミからもある程度解放された。

栄養失調による体力低下は恐ろしいもので、六十センチ位の溝も飛べず大廻りして通つた。

ちよつと尾ろくな話だが、夜間小便がしたくて外に出るがトイレまでもたない、途中で放尿。朝起きてみると氷の列で、皆が同じことをやっているのです。それだけ寒さがきびしいのです。

ある戦友はズボンのボタンを外すことができず、そのまま漏らして靴に溜り、

ひどい凍傷で足首から切断の手術もした程でとても口では言い表すことができない。

零下六〇度の生活

三重県 奥田武男

零下六〇度を越すという日も時々ある。もう寒くはない。寒いのを通り越して痛いのである。

手足の先がジンジンしている。

その中にしなくなる。白くローソクのように固くなる。凍傷である。火であぶつたり、お湯にでも入れたら大変だ。もう切らなければならぬ。

雪か布で感じが戻るまで擦るのだ。

溶けてくるのが痛くて堪らない。だが切ることを思えば我慢せねばならない。

次に大、小だ。小便は流れるひまもなくすぐ凍つてしまふ。高く盛れてくる。

大便は外で吹きさらし、丸太を二本削つて、その上で用を足すのである。

前も何もかまうこともない。メジロの糞のように盛り上がってくる。用意してある棒で崩すのだ。夜だと足で殴らないと糞で尻を突くからだ。

それを時々、中へ入つてツルハシで砕いて出す。

小さいのはスコップで掘り出す。

部屋に入るとニオイがしてくる。溶けてくるからだ。

ツラの皮とお尻の皮は強いものだ。零下六〇度の中でも出さなければならぬ。

い。

顔はマスクをかけると鼻の凍傷は防げるがマバタキができない。

一面、吐く息で真つ白になる。防寒帽よりツララが下がる。

鳥取県 清水要範

入ソして間もない頃、伐採作業で道具を受取っている時、一人が何気なく鋸

を舐めたらしい。凍った鋸に舌が付着して大騒動になった。「おい、小便だ」誰かの機転で大げがにならずにすんだ。酷寒のシベリアならではの笑えない喜劇である。

愛媛県 梅崎文夫

寒さに一番弱いのは人間の鼻である。いつも外気に晒しているので強いはずなのにと思うのだが、実のところは誠に弱いのである。作業の往復で歩いているときに鼻が白っぽけてくる。気がついた者同士が教え合って鼻を摩擦しなければならぬ。紫がかってくると凍傷になる恐れがあるのだ。指でこするうちに赤くなってくる。これでやっと安心となるのであるが、屋外に出ると日常茶飯事に起こり得ることであった。充分に注意しなければならなかった。

静岡県 後藤光義

昭和二十一年一月十日、便所へ行くことと外へ出ると昨日までと違う。出た途端に顔が痛い、空気が凍ったような感じ、太陽はぼんやり。ペーチカの煙突の煙は少し上った所から横になり、屋根に沿い下り、地面へ付いた所で消えている。動きは全くなく静かだ。外の寒暖計は零下五〇度。下を指す目盛りは零下五〇度までしか無く、本部に問い合わせたら零下五九度だそう。十日間続いた。零下四〇度以上は仕事は休みだったが便所へ行くのは命がけだった。

辛かった事は、毎日の点呼で五列縦隊に並んで数えるのに何回数えても数が分からないうらしく、四十分も五十分もかかるので、寒い時は足踏みと手揉みをしていないと凍傷になるので辛かった。

鳥取県 加藤一郎

シベリアの生活で最も困ったのは寒さ、食糧の問題、環境の劣悪さです。シベリアの十一月と言えば冬の最中で、特にこのノヴィリンスクはバイカル湖に近く世

界で最も深いと言われ、日本の琵琶湖の約四十九倍もある大きな湖で、北半球の気候に大きな影響をもつ、冬は特に寒い地方でありました。

ノヴィリンスクでは作業中に気温が零下五〇度を下がったと言って、収容所の歩哨が作業をやめて帰るよう迎えに来たこともありました。

またアラコルハ収容所では冬の間は毎日零下五〇度以下に気温が下がり、気温が零下三〇度ぐらゐまで上がるのを待って作業に出ていましたから、作業は大体半日でした。このように日本では想像もつかないような寒さの中で作業をしたのでありますが、その被服は満州から持ってきたものばかりですから、年月が経つほどに破損し、特に防寒被服なども中国服の綿入れのようなもので代用する始末、また部屋の暖房もシベリアに流された犯罪者の収容施設で、ペチカも粗末なものですから、着の身着のまま寝ていました。冬は防寒服を着たまま寝ていました。

食料は満州から持ってきたものばかりで、トウモロコシを粉末にしたもの・高粱・大豆等、日本においては雑穀と称するものが主食であり、高粱などは高級の食料ですが、小豆を塩で味付けしたものもおいしいものでした。しかし大豆は三食大豆のみの給食が一週間続いたことがありましたが、全員が下痢をして作業に支障があったので、一週間で終わることがありました。

シベリアに抑留されて一年ほどは特に食料が悪く、寒さと栄養不足、過酷な労働で病人が多く出ましたが、私たちの作業隊ではウランウデの病院に送られました。

食料が不十分であった時の人間行動についてお話ししますと

一 黒パンが一日三〇〇グラム配給されるのですが、日本のアンパンのように一つ一つあれば良いのですが、ロシアでは私達は枕パンと言っていた、日本の食パンの連なつた枕のような形のパン、あるいは座布団パンと言っていた直径三十センチほどの座布団のような形のパンがあり、これを当番の者が切つて分けるのですが、一番好まれるのは外側の硬い部分の多いものであり、中央の軟らかい部分は好ま

れませんでした。また日曜日などはこのパンを小さく切ってサイコロのような大きさにしたものを爪楊枝のようなもので刺して満腹感を味わっている人もいました。

二 食事は飯盒で分けていましたが、満州国軍のものは日本のものより小さいので、分配するときしばしば問題になり、最後には秤(天秤)を考案して平等に皆の者が納得するようなことが考えられました。

三 さらに変わったのは夕食のときのことですが、皆が食事を終えて床についてところを見計らって帰ってきて一人で食事をして満足する者がいましたが、何一つ物音のしない時に食事をすると、ペチャクチャ、第三者が聞くと非常に大きな音に聞こえ、いっぺんに腹が減ったような感じになり、目が覚めてしばらく眠れないこともありました。

また、ロシアの文書には肉が供せられるよう指示されていたようですが、四年間肉らしい物は食べたことはなく、すべて臍物であったり、樺太から持ってきたと思われるみがきにしん、にしんの樽漬けであり、スープの材料でした。

シベリアでは農作物の育成は不適合で、ウクライナ・その他ヨーロッパ、ロシアから貨車で輸送していたので、キャベツなどは良いのですが、ジャガイモは凍って澱粉化していたものが多く、それだけ抑留の給食は質が下がることになりました。

質・量ともに少なく、満腹感を味わいたいと思恵を出しました。お湯を入れて飯盒一杯にする、また炊事からスープの残りをもらって一杯にする、などいろいろやりましたが、塩分の摂りすぎか胃腸障害を起こす人もいて、それが原因で栄養失調になり命取りになる人も沢山いました。

特に昭和二十年から翌二十一年の春にかけて多くの死者が出ていますが、これは先に述べた輸送中の給食と、その環境が大きく関係しています。

私達が作業隊の輸送列車はいわゆる客車で座席であり、便所・洗面所が付いていました。洗面所は水が出なくて用をなしませんでしたが、これは輸送中の生活にはいささかも支障はありませんでした。便所だけは非常にありがたいもので

した。というのは、多くの者が輸送途中下痢をしてしばしば便所を利用したからです。

満州内は客車での旅でしたから種々不満はありましたが、昼夜の区別なく走行中でも排便することができてよかったのですが、ロシアに入ってから貨車で排便の設備がなく、列車が止まったらいち早く降りて用を足しました。困ったのは走行中に貨車の扉を開け取っ手につかまってお尻を出して排便するのですが、下痢便ですので、風圧で貨車の中に逆流し、入口付近の者は大変でした。

輸送中に既にこのように胃腸をこわし、栄養失調になっていた者がシベリアに入り、酷寒の中で栄養も十分でなく重労働に従事したのですから、当然のことながら体調はさらに悪くなりましたが、ロシアの軍隊は目に見えない疾病では作業を休ませてくれません。

凍傷

栃木県 黒川 護

我々が入ソして一番驚いたのは予想外の寒さだった。北支に居るころは寒くても零下一〇度ぐらいであつたので軍手一枚で何とか過ごせたが、ソ連に入ってから寒さはまた格別だ。十一月の十日ころ、既に零下二〇度ぐらいはあつたであろうが、十二月に入ってから温度は日増に下り続け三〇度、四〇度は常温であつたらしい。

私達はほとんどが夏衣に編上靴のいでたちで入ソしたので特に感じたかも知れないが……。

間もなく防寒帽や冬衣、大手袋、防寒靴との交換があつたので一応ホツとしたが、これはかつて関東軍の衣類を満州から取り上げてきたものだった。年改まつて昭和二十一年一月になつてからの気温の低下はまた格別であつた。

作業中、お互い隣の人の鼻に注意し、鼻の先が透き通って見えたら、作業を止めて、手袋で少しづつ擦り、次第に血の巡りを良くして、凍傷を最小限に食い止

める、という方法をとってきたが、それでもやがて春を迎えるころになると、鼻の先を真つ黒くした人が散見された。

次、これは私が恐らく三地区での出来事として記憶しているが、橋梁の基礎工事のため、真冬のコンクリートの打込作業をしていた時の事。

この作業場は分厚い二重の天幕で覆われ、ところどころにストーブを設け、コンクリートの凍結を防いでいたので中での一般作業はさほど苦にはならなかったが、私はこの時水くみを引き受けていたので、履いていた靴がいつの間にか濡れてしまっていたのも気づかずいたのが災難のもと……。もちろん、水は外の雪を大きな釜の中に入れ薪をどんどん燃やしてお湯にして使っていた。いよいよ三交替の次の組が来たので、作業を申し送って収容所まで約三キロの雪道を歩き、やつとの思いで我が舎に戻り、防寒帽をとり防寒外套を脱ぎ、次に靴を脱いで寝台に上がってごろりと横になろうとしたのだが、その靴が抜けないのだ。考えてみると、作業現場でお湯くみの作業中、いつの間には靴が濡れていたのを、そのまま雪道を歩いて来たため、すっかり凍結してしまったという次第。

靴は隣の戦友に手伝ってもらって、やつとの思いで脱ぐことが出来たが、さて、その後が大変。よく見ると両足の指が真白になっているではないか。すわ凍傷という事で、毛布で何回も何回も擦ったが親指だけは遂に元の状態に戻らず、凍傷の痛みには耐えなければならなかった。

福井県 片山清次

入ソ当初の事である。収容所の外は既に固く凍結し、馬の吐息は蒸気機関車の煙突から出る煙の様に白く凍って馬の鼻孔から激しく吐き出されている。マイナス三〇度〜四〇度。満州でも体験したことのない酷寒の世界が毎日、展開されていた。

（二）この当面の作業は炊事や病棟や管理棟等の暖房用の薪採りが多かった。一メートル余りの長い二人挽きの（ぎり）（ピラ）と斧（タポール）、鉄棒（ロー）を

持つて近くの森へ行き手ごろな松や白樺を伐採して薪を作るのであった。

ソ連警備兵は防寒帽、羊の裏革で出来た外套（がいとシニョバ）、防寒手袋、フェルト製の防寒長靴の服装で身を固め、自動小銃を肩にして我々を作業場へ追い立てる。我々は戦塵に汚れた夏の軍衣、口の開いた編上靴、グロデコフ郊外で支給された苦力用（クイリ）の黒い綿入れ上着がすべてであった。

冷たいと言うよりも針で刺すような疼痛を覚える野外作業場では、こんな服装では堪えられない。特に手足の末端部が針の先の束で間断なく突き刺されるような痛みは口では形容できない辛さである。編上靴の足先は特に痛く、反射的に足踏みをして血液の流れを促す仕事を繰り返す。あまりの寒気に作業ははかどるはずは無い。防寒具をしっかりと装備したソ連兵は、我々の苦境に頓着せず「ダワイ・ラボーター（仕事をやれつ）」と自動小銃を振り回して威嚇する。

(4) 死の意識

和歌山県 林三子雄

二週間目にバイカル湖畔を通過する。素晴らしい冬景色だ。真っ白い山々、結氷の向こうに水が波立つ湖面と、澄んだ空気、この景色、二度と見れまい、見おさめておこう。これからはシベリア、何が待つ。凍死か、餓死か、帰れる望みは薄い。この分では陣地で自決した司令部の連中に負けだ。彼らの方が先を見とったぞ」と。陣地を出る朝、別れの酒宴を張り、車坐で童謡を合唱し続けていた青年将校連中が、コップ片手に手招きをして「来いよ、一緒に死のう。敗けて何の望みがあるもんか」と誘われたときの状況が頭に浮かぶ。あのときは「部下を無事に国へ連れて帰るのが責任」と感じて別れたのに、今は部下がどこに行ったかも知らず、空虚にほうけて坐り、ストーブの火を見ているが、足が冷たい、空腹がこたえる。

誰かが「こりや殺されるぞ」と言う。昼間が短い、夜ばかりの毎日だ。防寒帽をかむつて寝転んでも、壁や天井へ氷が厚く付いていて、冷たいのでつらい。毛布も壁の氷とつながり、凍りついている。ストーブが真っ赤に焼けても暖かくならない。寒いから小便ばかり出て、隙き間風がやけに痛い。

和歌山県 土永勲

私が今日になつても忘れ得ぬ一事がある。それは、ソ連兵にも取られずに大事にしていた「奥さんと子供さんの写真」を私に見せながら痩せ細った手で私の手を握り、若し生きて帰国できた時に、この写真を見せて私の死ぬ時の状況を伝えてほしいと頼まれたことです。「私はもう駄目だ」と言つて死んでいったその人の顔は、おそらく私が死ぬ時まで焼きついて目の底に残るであろう。その時の

励ましの声もむなしく数日後に亡くなられた。彼に頼まれた約束事として住所も聞いていたにもかかわらず、その後、ソ連兵に書いた物一切とともに取り上げられてしまったために、その約束事も果たせずにいる。私にとって、罪の深さを感じておる毎日です。

ある友は、肺炎で薬もなく、洗面器でお湯を沸かせて暖を取れるようにしてあげたが、皆んなに伝える声もなく死んでいった。当時この様なことは、今日は人の身、明日は我が身としての毎日味わう実感であった。この様に書けば本当に切りがない……。

東京都 常世田千代松

人生なんてなんと憐れで、寂しいものだろう。夕べに語り合った戦友が、今朝、私が目覚めて、「おい。高梨君」と声をかけた。前日までは低い声で「なんだい」と返事が返ってきたが、応答がない。這つて側に行き身体を揺り動かしたが、もう冷たく口を開かない。死の苦しみも、悲しみも私はきいていない。

嗚呼、悲しいかな。お互い生きて郷土に帰ったら、髪と爪を自宅に届け合おうと紙に包んで前日交換したばかりだ。私も明日の生命は分からない。さびしい限りだ。高梨君の遺体は担架に乗せて運んでいかれた。

生きて永久に高梨君とは言葉をおかわすことはできない。無言のうちに永遠の別れとなつた。私の脳裏から、あの当時の悲惨さは永久に忘れ去ることは出来ない。

同じ内務班で最も親しかった伊藤吉次君、鎌田正事古年兵の二人が寢床の一角所に集まり、高梨君は死亡した。我々は元気で祖国日本に帰ろう。高梨君の霊をなぐさめよう。病気に負けず、強い根性と信念を持って生き、頑張つて、頑張つて絶対死ぬものかと、何度も何度も強くはげまし合つて寢床に帰った。

翌朝、隣りの伊藤君、その隣りの鎌田古年兵を呼んでみた。二人共返事が無い。「あれ」と思つて両戦友の側にはついていき、顔をのぞき見ると、よく眠っている

ようだ。身体にさわってみたが反応がない。手足も冷たくなっていった。呼べども口は開かない。

私は吃驚仰天、大声を出しソ連兵を呼んだ。入ってきたソ連兵は一目見て二人は死亡していると判断、同僚と伊藤君、鎌田古年兵を担架に乗せて運んでいった。

私は茫然自失状態になった。運命とは何と非情なものか。情けない、まことに憐れな死の惜別であった。生きているという心地がまったくなくなってしまう。

明日は我が身が同じ運命をたどるかと思うと、物凄く寂しさに襲われ、その日は悲しくて便所に行くだけで、外套を頭からすっぽり蒙って、一人さびしく物思いにふけた。

夕方になり、明日もまた幾人かの戦友が、或いは自分が死んでいくのかと思うと、不安で不安でたまらなかつたが、いつしか眠りについた。

新潟県 矢部松二郎

何回目かの入浴時に、お尻の肉をソ連の女医に引つ張られ「ニハラシヨ、オカ」病弱者だ。栄養失調の宣告を受けて、作業中止をさせられて、数日後栄養失調者だけが收容所の移動命令があり、行き先のわからない次の收容所へ。戦友たちと再会を約束して果てしない行軍が続く。また幾人かの戦友が、いや私を含めて行軍途中に死亡していくのだろうか。だれが言うともなく死の行軍と語りつがれ、倒れちゃいけない帰るその日まで……。

たどりついた收容所は病弱者だけ。主として收容所内の清掃であったが、鉄道建設作業隊という恐ろしい名前だ。夜の作業が多い。このころ私は栄養失調で夜盲症、鳥目になる。日中の明るいうちはなんともないが、日暮れになると視界がボーンと霞んで見える。眼の前に丸い輪ができてその輪の中だけしか見ることができない。重症になると丸い輪も小さくなり視界も定まらず、歩くことが困難になる。昼は收容所内の草取りや清掃で、時々夜の作業に狩り出される。

鉄道建設作業隊の名前であるから付近に鉄道でもあるのだろう。時々列車の気笛が聞こえる。夜の作業時間は定まらず、貨車の来るたびに起こされる。貨車の積み荷は小砂利である。今夜もまた貨車が来た。人員点呼を受けて角スコップを受け取り、黙々と作業現場まで歩く。月の光に照らされて鉄道のレールが光る。その光を見ながら歩く。枕木につまづき転びながら夜盲症なるがゆえに、ただひたすら鉄道のレールの光をたよりに……。

貨車から小砂利をおろす。枕木が敷設できるように整理する。作業が進行するとだんだん作業現場が遠くなる。このころでは毎日のように夜間作業があり大変つらい。強制労働でますます栄養失調がひどくなったのか、体もカサカサ、どこの肉を自分で引つ張ってみてもよく伸びる。日本への帰国もあきらめなければならぬのか。焦った、本当に焦った。

この收容所へ移動させられて気づいたことは、收容人員が五百人であった。今までの收容所は、どの收容所でも千人単位の生活だったのに、このころ移動する收容所の人員は五百人。移動行軍途中また栄養失調などで死亡者が続出したためではなからうか。と私なりに考えた。こんなところで死んでシベリアの土になつてたまるか。気をゆるめてはいけない。石にかじりついても祖国日本へ帰るのだと、思う心は抑留者全員が同じ気持ちであったらう。

私も栄養失調が重体となり、抑留生活二年六か月後に病弱者と烙印され、病弱者だけの收容所へ移動させられた。ソ連兵は私たち病弱者を「オカ」と呼ぶ。作業は炊事用の川からの水汲み運搬作業。そのほかにシベリアでの抑留生活を総括する「穴掘り作業」。どうしてもシベリア抑留体験記に書き残しておかなければならない穴掘り作業である。

突然のシベリア抑留と連日の強制労働のため、それに加わる栄養失調で、日本帰国を夢に抱きながら入院を繰り返しつつ、異国の地に倒れ散った戦友のしかばねは、被服を全部はぎ取り、下履きだけにして旧牛馬小屋の死体置場にしまう。しかばねが五体か六体になると、カチカチに凍った戦友の死体に、白カ

バの適当な枝で腹側に二本、背中側に二本針金でしばる。その上に見えないように荒むしろを巻つけて、天秤棒で私たち「オカ」病弱者が二人して担ぎ、掘った穴に投げ入れて、そのあとは土を落し入れ、その土をならして死体埋葬作業が終わる。この準備が穴掘り作業である。だから遺品や遺髪どころではない。シベリア抑留中に死亡した戦友ほど本当に哀れを誘う。またそんな感傷に長くひたっておれない、明日は我が身なのだ。ここに收容されている全員が栄養失調の病弱者だ。明日は俺の番か、今度は俺の番だ、と話し合いながら穴を掘り続ける……。

和歌山県 長峰泰夫

作業を終わって帰っても、相変わらず食べ物話くらいしか話すことがない。こんな暮らしをしているある日、朝起床の時間になっても起きない戦友がいた。同年兵で、岩手県出身の三十五歳前後と思うが、静かに死亡していた。体が大きかったが、寒さと栄養失調で亡くなった。最初の犠牲者である。

島根県 大谷 昭

和歌山県出身の召集兵で当時三十三歳くらい、終戦前の部隊では意地の悪い班長だったが、ビタミンC欠乏症で、全身がはれて壊血病となり、夕刻から夜にかけて目が見えなくなり、ほとんど一人で動けなくなって病院へ送られた。

新潟出身で五年兵の上等兵は筋肉たくましい古参兵だったが、班長と全く同様に病院へ送られた。

一棟の人員四十人、幕舎は五十くらいあったはずだ。

二十二年の夏の夜のことである。栃木県出身の召集兵の軍曹が私たちの幕舎から出て、ラーゲルの出入り口から抜け出して、間もなく射殺された。豪快な下士官であったが、強いホームシックにかかり逃亡不可能な状況判断ができなくなったのであろう。

それから間もなく特幹の兵長十八歳が建築現場の足場から落ちて即死した。彼は四階の外壁の足場、私は同じ建物の五階にいたからその瞬間を今でもよく記憶している。

このラーゲルで暮らした一年半の間に、ラーゲル内の墓地には数十人の戦友が永遠の眠りについた。

新潟県 風間健次

私は電気技術者としてブリキ技術者とともに班を編成され、発電所内での電気営繕作業に従事、時折り所長の個人引受けのソ連人住宅の営繕作業もかたこなたとやらされる毎日であった。ある日発電所内に突然銃声が響いたので、その方向に飛んで行くと、溶接作業の仲間が一人胸部から血を吹き出して倒れていた。理由はわからないが歩哨と何かのトラブルがあったことに間違いない。死体は間もなくソ連人労働者によつて所外に運び出され、トラックの走音で消え去った。無情の悲愴が背すじを走った。

島根県 阿部光明

寒さは厳しく常に食糧不足で腹は減り、凍傷の恐ろしさが常につきまとった。栄養失調とビタミンC欠乏が日が経つにしたがつて現れてきた。歯茎がはれ、目は赤く充血し、体内へ黒いはん点ができて、常に体は浮いたよう、何かにつまずくとすぐ転んでしまう、全く半病人のごとくになってしまった。白血病かもしれない。次々と病人が出て、赤痢となり、血便を出して毎日毎日たくさんの人が故郷を懐かしみつつ死んでいくのである。いつ自分の番かと不安になってくる。

和歌山県 松浦虎市

收容されてから一度も入浴させてくれないのでシラミが発生し始めた。この予防として夜間に肌着を脱いで屋外でシラミを凍死させ、再び冷たい肌着を震え

ながら着る。その晩は寒くて眠れない。震えながらそのまま夜を明かす。過酷な労働と飢えと寒さ――。兵隊は死に向かって自ら近づいて行く。そんな条件が重なってくると頭が「ヤラレ」、変なことをやり始める。中には空腹からか、自分の大便を「ウマイ」と言つてつまんで食べたすと、二、三日のうちに死んでしまう。そんな人たちがふえると、まるで生き地獄である。死亡した人の遺体は死骸室にお祭りをして、柩の前にはメリケン粉でつくっただんごを二つずつ供え、真つ暗い冷たい部屋の中で二人の兵隊が寝番する。供えてあるだんご目当ての死骸番を志願する者が多かった。

岩手県 西野洋一

頼れる者のいないシベリアの地では、何もかも自分で身を守らねばならない、ごみ捨て場から動物の骨を拾い収容所のペーチカで真つ黒に焼き、粉にして飲む。これが私たちの手に得られる下痢の最高の特効薬であった。運よく特効薬で下痢がとまれば幸いであるが、とまらなければ体が衰弱してやがては眠るように死んでゆく。東北の人ではなかったが、私の隣にいた人が夜知らぬ間に死んでいった。枕を並べていた彼に最後のお世話も許されず、追いつかれるように作業に出され、帰つて見ると、遺体はどこに運ばれたのか、手際よく片づけられて、荒板の寝場所が一人分空いていた。

新潟県 高橋勝男

その後収容所では、ものすごくシラミが発生し、体力は減退し、栄養失調者が出てきた。医者も少なく薬もないのだ。下痢患者などは消し炭を粉にして飲ませるなどの最低であった。アメバー赤痢や回帰熱等が流行し、千五百人の収容所で多い日は十五人も死亡したこともあった。ソ連もこれには困った。町へ入浴しに連れていったり、衣類の熱菌消毒をやったり、躍起になって防除に専念した。その結果シラミは急に減少したが、困ったことは厳冬の死亡者の埋葬である。

死亡者は小学校の教室大のところへ素っ裸で放置し、墓穴のできるのを待つて、六人ばかりずつそりに積んでソ連人が墓所まで運ぶのである。墓穴は我々日本人が掘るのだ。四メートルから八メートルくらいの穴を昼夜二交替で二か所ずつ掘るのだが、地下四尺からも凍つていてはなかなか掘れない。昼組は帰りに枯れ木を山に積み火をつけて帰り、翌日にはそこをまた掘る。夜組はまた帰るときに火をつけて帰るのだ。ある日、死亡者が運ばれて来たので、もしや知っている人でも来たかと思ひ行つてみたら、自分と同年兵の千葉勝也君ではないか。はっと驚いてそばへ寄つて見たら、まぎれもない千葉君だ。それが何と、右手に黒パンを持つたままではないか。朝の食事中に死んだと聞いていたが、何とだれもがパンも取らずに死体の安置室へ送つたのか。涙がとめどなく流れた。

北海道 倉部辰次郎

同胞の死

同胞の死に何度か出合ったが、一年目の冬、起床時に起きない人がいた。夜中に、誰も知らないうちに息を引き取つたのである。最初の犠牲者であった。そのときは、僧職だった人の読経で皆でねんごろに弔つたが、その後も、病气やけが、また逃亡者と見なされての射殺など、次々と死亡者が出た。だが、だんだんと弔いする心身のゆとりもなくなり、手すきの誰かが、遺体を埋めてくるだけになつてしまった。埋葬されている場所もわからなくなっていると思う。

私が、自分の手で葬つた遺体が二体ある。「日本医務室」に入室して、徐々に健康も回復してきたころ、同室の仲間が一日おいて二人亡くなった。どちらも、夜中に誰にも看取られることなく、ひっそりと息を引き取つていたのである。弔い事はなくもなく、命じられるままに、同室の相方と遺体を担架にのせ埋めに行つた。凍りついた大地、寒風の中で、しかも病中の身では五十センチ掘るのがやつとだった。遺体が隠れる程度の埋葬をし、二人で合掌して埋葬はおわつた。二体とも近くに並べたが、思えば「惨めな埋葬」であった。あの頃は、シベリアの凍

土のように人々の感情も凍ってしまい、人の遺体も「一つの物」としか見ていなくなったと思う。今はただ、故人の成仏を祈るのみである。

「仲間の自殺」という衝撃の事態にも出合った。「医務室」を出て近くの収容所に配置されたときのことである。そこでは「民主化運動」が燃え上がっていた。「運動の強制」と「ノルマ」にほとほと疲れてしまったが、それに耐え切れなかったのか、若い仲間が逃亡するという事件が起きた。手分けして捜しても見つからず、翌朝になって、近くの作業場で縊首の姿で発見された。「広いシベリアでは逃げきれない」と観念して収容所近くまで戻ったものの、懲罰を恐れて中に入れないか、追いつめられた気持ちのまま、自ら死の道を選んだのであろう。彼の心情を察すると切なく、虜囚の身の悲哀をいまさらのように感じたものである。それでもあの時は、形ばかりではあったが、皆で葬礼を行い「黒人霊歌」を斉唱して野辺送りをしたのが、せめてもの慰めだった。

岐阜県 杉山 博

昭和二十二年六月、大腸カタルにて倒れ入室する。軍医が見舞いに来てくれた戦友に、小声で「もう杉山はだめだ、戦友で会わせたい者がいたら知らせてやれ」と言っているのを夢の中で聞きゾーンとしたものだ。

岡山県 妹尾正一郎

伐採作業は特にきつかった。私の小隊の検収員は、融通のきかない二十歳くらいの女性であった。午前中は別に用事がないので、山裾で私と雑談したり、歯磨粉をおしろいだといつて顔に塗り、内地の娘さんより美しいとおだてているうちはご機嫌であるが、午後の検査になると極めて厳格で我々を困らせた(ソ連の女性の全てがこんな人ではない。念のため)。ある日、検査の最後の組が伐採後、枝の後始末がしてなく雪の中にちらばっていた。いつものごとくチースト、チースト(掃除、掃除)と言って聞かない。疲労困憊している二人には、枝の片付けなどで

きないと思い、「よし俺がやる」と言って二人を帰し、雪の中の枝を片付けたが、どう考えてもやれるものではない。いつの間にか検収員もいなくなっていた。「死のう」後は何も考える余裕がなかった。寒いので今日切った材木に火をつけた。狼は近くで吠えているが、火を見て近寄ってこない。「だれでも死にたいくらい辛いんだ。だが、命のある限りこの苦しい生活を耐えぬき、一人でも多くの捕虜を日本に送り届けるのが我々の務めだ、お互いに頑張ろう」と同志に言われた。私は感激し、申し訳ないことをしたと思い一晩じゅう泣いた。

神奈川県 宮沢信行

来る日も来る日も、今月も来月も、終日「ヴィストラ、ダワイ」(早くやれ)と銃床でおどされながら、我々捕虜たちは空腹で、また目のくらむ体で夢遊病者のように重労働に従事し、故郷や肉親、いや私が今まで生きてきた人間社会と全く隔離され、衣食住は考え得る最低の水準に強制され、娯楽もなければ慰安もなく、ただ動物的にその日その日をあえいでいた。

「生きているのをどれほど情けなく感じたことか」

「死んだ方がましだと何度思ったことか」

「実際、我々は先に死んだ人がうらやましかった」

多くの抑留者は当時のことをこのように回想している。郷愁などという甘い感傷ではない。郷愁などというものは、心身にゆとりのあるとき感ずるもので、捕虜たちにとっては故郷はむしろ、「どこか遠く、よその国のような気がする」し、「かつての自分もそのようなことがあったのかと他人のように思える」ことにすぎない。捕虜たちを襲ったのは甘い感傷ではなく、このままシベリアで朽ち果てるのではないかという底知れぬ恐怖であった。

福島県 石黒庄七

二十三年三月ころ、テルマ付近の分所でまた鉄道作業に。毎日二、三人集ま

ればダモイと食い物の話ばかり。本当に死んでいいのか、生きた方がいいのか、人間個人の弱さを痛切に感ずる。でも一度帰つて、自家の井戸水を飲んで死にたいと考え、毎日の苦痛に耐えて頑張る日々でした。

広島県 石井博之

朝食は二百グラムの黒パンと飯ごうに半分(当初は飯ごうの蓋一杯)の高梁か大豆のスープ、昼食・黒パン二五〇グラム、夕食・黒パン二五〇グラムと朝と同じスープ。スープに雪を飯ごうに詰め込んで沸騰させ一時の満腹感を満たしたり、雪が溶けた春から夏には食べられそうな野草や木の実を採って空腹を補っていた。

長い冬はそうもいかない。猛吹雪に襲われて食糧運搬が途絶えて一食分を二回に分けて食べた。体力の消耗、栄養の失調を来すのは当然。朝起きて見たらだれしも声を出さず静かに眠っている。朝の点呼で一人欠け二人欠けてくる。その時になつて隣に寝ていた友の死に気付いた。情報も入らず、あてもない日々が続いた。それでも生きていかなければと精いっぱい生き続ける努力をした。死との闘いであった。

神奈川県 加藤 勇

これが食事かと思えるほどの粗悪な物だった。一日分、拳大の黒パンと馬鈴薯などが主で、しかも少量である。あるとき、腐れニンシが支給された。見れば蛆虫がうようよ付いている。毎日が腹ペコ、背に腹は替えられぬと煮たり焼いたりして食べた。

こんな状態だから、たちまち痩せ衰えてきた。作業ともなれば伐採、鉄道線路工事、炭鉱などの重労働であり、体がだるく動かない。冬ともなれば零下三〇度以上にもなる寒さはざらだ。雪中の伐採作業中、倒木を避けきれず押し潰され亡くなった戦友も大勢いた。また、栄養失調による死者も数知れず。朝

起きない戦友をゆすつて見れば死んでいたなど、悲しい出来事が続出した。死んだ戦友の遺骸はソ連兵が馬車でどこへともなく運んで行く。鄭重に埋葬されたのか、また放棄されたのか、定かでない。来た当時の人数も二年後には半数ぐらいに減ってしまった。全く地獄のような生活で、いつも死と隣り合わせだった。今でも時々この様を夢に見ることがある。

岩手県 石橋善次郎

その頃の私は、既に体力の限界を悟りつつ半ば諦めの境地にあった。春までの命が保てるか、抑留中の最大の危機の頃だった。魅惑一杯の星空を見ても、美しい魅力だの夜空の勘当など一向に感じない。ただ悲しさだけだった。広がる夜空の端は祖国まで続く、星も変わりのない星だ。同じ星でも、場所と己が境遇によつて感じ方に様々な相違があるのだろう。昔、流刑人が配所で身の不遇を嘆きながらも月を眺めてその心境を歌に託す余裕があったが、それ程の風流心も持たずに、ただひたすら望郷一途、遠い家郷の風物や人々に思いを馳せるだけだった。

東京都 飯塚年男

何日かたった日の夕食後、急にいつになく涼しくなった。だれかが「大変だ、川の水があふれている」とどなった。外へ出て見ると、小屋の外は一面の水だ。その水がどんどん小屋の中に入ってくる。みるみるうちに十センチ、二十センチと上がってくる。逃げようと思つても、外は一面の水。屋根に上がるしかないというので、そろそろと一人ずつ屋根に上がった。あたりは真っ暗で、とても寒い。屋根をふいてあるシラカバの皮を一枚はいで火をつけてみると、水は小屋の中ごろまできていて、倒木が流れてくる。小屋に当たったらひとたまりもない。流れは急で、水は冷たい。落ちたら命はない。小便するにも動けず、一晩命の縮む思いで、ここで死ぬのではないかと思つた。

島根県 松浦久雄

抑留の間、我々は「この地で死ねない」というのが合言葉。帰国の念空しくこの地で逝った同胞の埋葬の話など聞くと、絶対に死ねないという、信念にも似た気持ちを持ち続けた。舞鶴に上陸できればその場で死んでもよい、途中は無蓋貨車でも石炭貨車の上でもよい、とにかく舞鶴に帰りたいという一念であった。抑留の間、年改まる度に、今年は帰れる、今年も帰れると四度。

福井県 天谷小之吉

昭和二十年九月十五日、私たちも黒竜江を渡河し北へ北へと徒歩で進む。一週間の過ぎたころホルホーズ(集団農場)で馬鈴薯の収穫をさせられつつ、ライチへ収容所に着く。どこの収容所も同じだったろうが、昭和二十年の越冬が一番厳しかった。被服が悪いので寒さが骨身に凍みる。

食糧が乏しく、そのうえ雑穀等は精白されないまま支給された。労働は強制(ノルマ適用)で重労働。環境が悪い。着の身着のままの生活。生死限界の日々が続いた。終戦時六十キロだった体重も三十七キロまで落ち込んだ。これ以上耐えられない身体、本当に骨と皮、肋骨は洗濯板よりも酷く痩せている。この調子だといつ息を引き取っても不思議でない姿となってしまう。それでも炭鉱作業には出された。情ない、泣くにも泣けない。皆が等しい体力、これがその当時の関東軍の哀れな姿……。

岐阜県 中上英雄

夜中にトイレに行くのが大変であった。別棟で、雨露しのぐ程度の細長い掘っ立て小屋で、仕切りも扉もない。ただ薄暗い小さな電灯が一つあるだけだ。温度は零下三〇度ぐらゐ。特に大便の方は、早くしないと尻が冷たくて体の芯まで冷えてしまう。早々に引き上げる。床に入っても体が冷えていてなかなか寝付か

れない。また、蚤やシラミが攻めたててくる。

ただでさえ生きるのが精一杯なのに、これでは栄養失調になって倒れるのが当然。ならないのが不思議ではないか。生き地獄そのものであった。昨日も、また今日も、哀れにも多くの友が死んでいった。他人様如きではない。明日は我が身である、と覚悟していた。

岐阜県 水野隆男

私も発病、高熱が続く

新谷が死亡した昭和二十年十一月二十六日ごろ、実は私も発病していたのである。「指揮官が病気になるていては申し訳ない」という気持ちがあったのだから、無理をしていたのである。十二月の初めごろ酒井軍医に診てもらったら三十九度の熱があり絶対安静ということであった。発疹チフスである。

当時はまだ将校に当番がつけられていた。私の当番は浜田一等兵(現在も親交、東京都文京区でうどん店を経営、私の命の恩人)であった。その後高熱が続いたが、それでも昭和二十一年元旦には同室の将校、当番一同は室内において遙か皇居に向かって敬礼し、部隊員が一人でも多く故国へ帰還できることを祈ったものである。

正月過ぎがいけなかった。真夜中に襦袢・袴下(軍隊用語で、シャツとズボン下)だけで衣服、毛布を両手に抱え、室外へ出ようと戸を叩いたり足で蹴ったりして暴れていたのである。

私の発病以来、衣食はもちろん下の世話までかかりつきりで看病してくれた浜田一等兵の話によると、前にも同じようなことがあり、私の気づかぬように施錠していたとのことである。物音に気づいた浜田は慌てて私を引き止めようとしたのだが、ものすごい力で押し返されたという。「家の者がタクシーで迎えに来ている、どうしても帰らねばならぬ」と、なかなか言うことを聞かなかったらしい。同室の人にも手伝ってもらい、ようやく寝台まで運び、寝かしつけてもらった

しい。こんな姿で外へ出ていたら大変なことであった。零下四十度〜五十度で凍死である。

その後、私にとっては最大の危機がやってくるのである。一月の下旬ごろのある夜中、二段ベッドの下に寝ていた私が、上段に置いてあった飯盒に半分ほど入っていた水を全部ガブ飲みしてしまったのである。当番の浜田一等兵の説明によると、熱もやや下がりがり特別支給の米の重湯も食が進み快方に向かっていた矢先の出来事であった。その事は「もう病気は峠を越した。よくなったのだ」という生半可な自信がそうさせたのかもしれない。高熱で喉が渴いていたのも事実だ。それから間もなく高熱が続き生死の境を放浪することになる。

私は何人もの戦友が息を引き取っていくのを看取っている。そしてその臨終の様子はほとんど同じだった。一週間くらいは高熱にうなされ、うわ言を言っているが、そのうちに意識がなくなり、ガーゴロ、ガーゴロと苦しそうな息遣いが始まる。喉に痰が詰まっているのだ。意識がないので痰を飲み込んだり出したりできないのだ。その間の時間は人によって多少違うが、口から泡を吹き出すようになると、もうほとんど駄目である。手ぬぐいやガーゼなどで口の中の泡をとってやるのだが、そのうちにいかにも苦しそうな息遣いとなり、う、う、う、と息を吸い込むのがやつとになり、そのうちに突然見る見る顔が真っ赤になり、ぐつと呼吸が止まる。やがてすうと赤みが引き、青白い顔となる。臨終である。

私の意識はすうと前からなくなっており、ゴロゴロと苦しい息遣いも始まっていた。やがて口から泡を吹き出し始めたのだ。それまで不眠不休で看護してくれていた当番の浜田一等兵も正直もう駄目だと思ったそうだ。同室の将校たちも私の口の泡を拭き取りながら、「気の毒だが水野中尉もう駄目だなあ」と小声でささやき合っていたそうだ。

その時そこへフィツと入ってきたのが酒井軍医中尉だった。鼻下にチョビひげを蓄えた酒井軍医中尉は部隊本部から大隊に派遣されてきた人だったが、大変気さくな人で、妙に彼とは気が合い平素から冗談など言い合ってきた仲で、私の

様子を心配して見に来てくれたのだ。入ってくるなり「水野さんもう駄目だなあ」と言ったそうだ。当番の浜田一等兵はその酒井軍医に向かって「何とかしてあげてください」と何度も何度も頼んでくれたそうだ。実はそのとき酒井軍医の手に最後の注射液が一本だけ残っていた。「どうせ駄目だが、じゃあ打ってみるか」。この一本の注射液が私を救ったのである。やがて口の泡がだんだん少なくなり、喉のゴロゴロも次第に静かになっていった。(以上浜田一等兵の話)

意識を失ったのはせいぜい一週間前後だったと思われるが、元旦に高熱を押し皇居に向かって敬礼した事ははっきり記憶があるが、それ以降二月の終わりころまでの二カ月間は、熱にうなされた闘病生活が続き、はっきりした記憶がない。まさに生死の間を放浪していた二カ月であった。

俳優の丹波哲郎さんは死後の世界を確信され、霊界の存在を説いている人であるが、その著書『死ぬ瞬間の書』(廣済堂出版発行)の中で、「蘇生した数百人の人々の体験が集められ、その体験の多くに共通する現象が明らかにされた……」とのニューヨークタイムズ紙の記事を紹介している。

私は、死んだのではなく死ぬ一歩手前の体験であり、正確には死から蘇生したわけではないが、まさに死の直前まで行ったときの経験を記してみたい。

体験と言っても夢に近いものであるが、私は体験したと思っている。なぜならば夢は覚えているようですすぐ忘れるものであるが、他人から見ると生死不明の昏睡状態にありながら、実は私は死の直前の……死に直面したけれども経験するだろう大変恐ろしい体験をしていたのである。そしてその体験は五十年近く過ぎた今でもはつきり思い出すことができるし、まだその時の夢を見ることもある。

それは暗い恐ろしい道だった。ただ一本の道だけが真っ直ぐに続いていた。恐ろしいがどうしても前へ進まねばならない。

大変寒い……気が付いてみると、私は深い深い谷にかかっている長い橋の真ん中近くまで渡ってきたのだ。人と擦れ違うことなど絶対出来ない、やっと歩ける

だけの狭い板の橋だ。つり橋ならば手でつかんでいられる鉄線か何かありそうなものだが、それも無い。こわごわ下の方を覗いてみる。恐ろしいほど深い千尋の谷である。谷の底は真つ暗でよく分からない。ただ下のほうから冷たい風がびゅうびゅう吹き付ける。とても寒い。

前へ進もうとしたが足が出ない。後ろへ下がろうとしたが足が動かない。手でつかんで身を支えるものがないので、体で平均を取るしかない。しかも橋の板が外れそうである。真つ暗な谷底へ落ちそうであるが、自分一人で辛抱し、頑張るしかない。一体どうすればよいのだ。恐ろしくて恐ろしくて身の縮む思いである。

橋の板を踏み外して真つ逆さまに真つ暗な谷底へ落ちて行く自分の姿を見る。でも私はまだ橋の板の上に身をかがめて立っている。良く見ると自分の立っている板一枚が残っているだけで、谷の向こう岸まで続いていたはずの板の橋が突然なくなっていた。絶体絶命である。

深い暗い谷底の上に浮いている一枚の板だけが私を支えているのだ。ほかの所へ行こうとしても必ずまたこういう情景になるのである。

それが、どうしたことであろう。ふと前方を見ると、しっかりと橋が向こう岸まで続いているではないか。足が自然に動いた。そして楽々とその橋を渡り向こう岸まで行くことができたのである。

向こう岸の山は子供のときに遊んだ緑の葉のいっぱい茂った見覚えのある美しい山であった。私は死の一步前で助かったのである。

もう一度繰り返すが、私はこれは夢でなく死の直前の体験だと思っている。私はその後少なくとも一週間はまったく意識がなく昏睡状態が続いていたし、症状が回復するまでの二カ月間のことはほとんど記憶にないのである。

私はまったく意識をなくし、昏睡状態になって口から泡を吹いているとき、実は本人がこんな恐怖感と戦い、一人で辛抱し頑張っているとは、病床で看護している人は想像できないことであろう。

夢ではなく実際に体験したからこそ私は今でもその時の事をしっかりと記憶し

ていると思っっている。熱にうなされたうわ言や寝惚けたのとは違うのである。私とその少し前に襦袢と袴だけで室外へ出ようと暴れたことなど、全然覚えていないのである。

こうした私の経験から考えて、「あの人は良い往生だった」とか「楽に良かつた」等という話をよく聞くが、決してそんなものではないと思っっている。必ず死の恐怖との闘いがあると思う。

しかし、いよいよ死ぬ時は楽になって、楽しい音楽や美しい草花の中に寝転んでいられるかもしれない。私に死の体験がないからそれは分からないことである。

大阪府 有光徹二郎

敗戦だ！ ソ連兵が来るまでヘルビンの治安維持の任に当たり、九月、武装解隊となり牡丹江に集結したのである。

昭和二十年十二月十六日「ダモイ、トウキョウ！ ダモイ、トウキョウ！ ハラシヨ（東京へ帰る、うれしいね）」とソ連兵たちに騙されて、一〇〇〇人を単位とする一個大隊（私の大隊は第一〇四作業大隊で、隊長は大村大尉）が編成されて入ソ、イズベストコーワヤ地区テルマ第二二〇分所（バイカル湖の東）で、バム鉄道建設に従事させられた。

牡丹江を出発した時は一〇〇〇人単位の部隊であったが、目的地に到着した時は六四三人になっていた。途中で栄養失調で死亡した者、落伍して途中のラーゲル（収容所）に置いてきぼりにされた者、合計三五七人ということになるが、私の知っている限りでは、栄養失調で死亡し、途中で真つ裸にされて氷の中に葬られた者は一五〇人を下らなかつたと記憶している。

シベリアでの抑留生活といえ、だれでもが死と隣り合わせの生活であった。ちよつとしたことが生死の分かれ道になり、飢えとヒョロヒョロの体に酷寒の中の重労働、飢餓、それに加えて精神的重圧が襲うのだからたまったものではない。

私のいたラーゲル第二二〇分所の思い出といえ、マンドリン（ソ連製の自動小銃のことで、マンドリンを持つていような格好で私達に銃を突きつけながら監視、威嚇していた）、酷寒、即ち体感温度は氷点下七〇度という日もあった。飢え、人民裁判、凍傷死、いやな思いばかりだ。

納塚一等兵

納塚一等兵は四中隊で初めて知った兵であり、私の左側で床を共にしていた。

小柄で角顔で眼鏡をしていた。終戦前に召集された新兵であり、四十歳に近い老兵だった。新兵である彼は古年兵の指示に従い、よく働いていた。口数の少ない温和な人である。今日も変わらず作業から共に帰り、夕食も共にする。食後は作業の疲れで横になり休息。いつも早く横になる彼が座って写真を出して見ている。妻に「子供達を頼む」と、子供には「母を大事にして、勉強をして」と妻子に話している。納塚の顔に涙が見られた。いつまでも妻子との会話は続けた。私は「納塚、明日も作業だ、早く休むように」と話すと納塚は横になった。朝早く起きる彼が起きない。呼んでも返事がない。良く見ると冷たくなっていた。死ぬことがわかつていけば妻子との会話を中断させないのに、死は予告なくやって来る。痛みも苦しみもなく、自然に死亡していく。死者に対して誰一人悲しむ者はいなかった。それは、誰もが今日の命、明日の命が知れぬからであり、いつ倒れても不思議のないほど体力が弱っていた。

栄養失調による死亡

作業に行くために整列し、行進が始まる。ふと前に行く老兵の首筋を見る。首筋が細く二条の筋が出て肉がない。軍袴を通して見ると尻の肉がなく、ダブダブである。明らかに栄養失調である。歩く足がもつれるようで力がない。それ

岡山県 片山衛真

も一人や二人ではない。年長者が多い。南方へ転出した強力な関東軍の後に補充した満邦人最後の召集兵たちで、四十歳以上の力仕事等したことのない兵である。社会人の頃は良き平和な家庭を持ち、会社では上席に座り、部下を指導し叱咤していても、召集され軍に入れば一兵卒である。

終戦、捕虜、シベリア抑留、強制労働と、精神的、肉体的に負け、一日一日が苦痛の中に生きて、よく今日までと思えるような飢えとの戦いの毎日である。

作業に行く進行中の出来事が今さらのように思い出される。監視兵を先頭にソロソロと歩く日本兵士。物珍しそうに集まるソ連の住民。「ソ連邦」の名の如く、たくさん民族の寄り集まりである。また、流刑された人々も居住している。そうである。同情か？ 擲擲か？ 住民の中からジャガイモの屑、キャベツの葉っぱ等が投げられる。飢えと戦っている老兵たちが我先にと列を乱して拾いに行く。手と手が絡み、正に生地獄の様である。少し距離が遠くに落ちており兵たちが走ると、監視兵の怒鳴る声とマンドリンが向けられる。必死の食への欲望である。涙が出そうな情景である。そこに生と死がある。

「おい、あの兵隊はどうした？」と聞くと、必ず返事は「死にました」と元気がない声が返ってくる。この兵もいつか自分の番の来ることを予想しているのかもしれない。

部下の死の報に、收容されている部屋を訪れ驚愕、一歩後退した。部屋で見たり丸裸にされた遺体である。死亡者の被服は洗濯後補修、不足している衣服の補充に充てるため裸にする、と遺体收容係の言であるが零度以下のこの部屋である。遺体は既に白ろうのように硬くなりつつある。初めての遺体対面。内地での告別式等を思い浮かべる時、この死の報告、この死体の処理をどのような形で言い伝えるか、遺族がどのような反応を示すか？ 涙なくして語れないとはこのことか？ ソ連の誹謗のみにとどめることはできない。人道の問題である。

和歌山県 坂本清次郎

「この遺体は、この後どのように丁重に扱ってくれるのか？」との問いに、係は

「他の遺体と一緒にソリに積んで埋葬に行きます」。材木のように裸の遺体をソリに積みロープで縛り埋葬と言うが、凍土で掘れるわけのない大地にどのように埋葬するのか？ 野犬がウロウロするということも聞いている。ソ連兵の監視下で行う行程、埋葬である。係の日本兵も無情ではないはず。このようにして飢えに敗れた兵隊の数は半年の間に何十体か、何百体に及ぶとも聞く。

「異国の丘」に永遠の眠りにつく日本の兵士たちよ、安らかに！ と涙を流すのみ。「合掌」

「帰りたい！ いつかはわからないが生きて日本へ帰りたい」これが抑留者たちの偽りのない本当の声であった。

抑留中の生活で極限状態における意識

① 衣服は軍隊時代の着のまま、人が亡くなれば下着から靴下、衣服等を奪い合い、死体は裸のままである。誰がどこともなく運んでくれ、また雪を被せられるかと思いい、悲壮感が滲み出た。

② 悲惨な生活を身をもって体験する。恥も外聞もない、ソ連兵のゴミ箱を漁り、魚の頭を元大学教授と奪い合う。そして、奪い合つて得た鮭の頭を一週間嘗めて飢えを凌ぐ。

③ この若さで死にたくない、もう一度祖国の土を踏み、父母に会いたい一念で生きる執着以外何もなかった。過酷な生活の中で戦友の死にさまを見て、自分も死の淵に置かれている状況だが、生きて帰ること以外何も考えないよう努力した。

抑留中の生活と極限状態

① 乗りこえてきた信念……戦友の死体を処理するにつけ、こんな所で死にた

山梨県 有野康彦

くない、何が何でも日本で人間らしく死にたい。

② 生死の境、死に直面したときの感想……火事場の馬鹿力、あの諺の通り普通考えられないことができる。これを捨身と言うのでしよう。

③ 心身を支えた工夫……何が何でも生きなければの気持ち。

北海道 鈴木良男

何事につけソ連流の作業法は能率的でない。その上、厳寒の中で言葉が通じないとすれば、誰であれ考えはまとまらず、やる気になる者もなく、また、リーダーシップをとろうとする者もなく、ソ連兵の目を盗んでは焚き火に身を寄せて体力の温存を計るのである。人跡未踏の凍土、何一つとして凍らぬものとなしシベリアの地でのこの作業は過酷を極めた。

来る日も来る日も重苦しい鉛色の空から粉雪が舞う。凍てつく寒さである。手足が麻痺して、睫毛が凍りつき、鼻毛も凍結、エカエカして息が詰まる思い。全身から知覚が消える。経験したこともない酷寒である。

シベリアの地で、飢餓と酷使と屈辱に身も心も使い果たし、生きる望みを失った極限に立つ同胞たちは泣くに涙なく、荒む姿のむごたらしき。過ぎしあの戦場での弾雨の中を駆け回った頑健壮快なる若者の姿はどこへ消えたのか。既に知力・気力が消え失せて、痴呆老人の如くみずからの体を支えることさえ至難な姿である。

過酷な労働の日々の明け暮れに、変わることはない赤鬼青鬼の罵声が牛馬の如く追い立てる。幽霊さながら、よろめく姿での伐採作業は、見るもまれなる大木に挑む気力もあらばこそ、巨象の足もとに蟻がうごめく如くで、完全凍結の立木は鋸を受け付けず、空腹の体には力の出るところがない。所持する衣類はすべて着重ねるが、体の動きが悪いので寒さが倍加する。骨まで凍る極寒である。誰一人として口をきく者もなく、吹雪のシベリアは暮れるとも作業は全くはかどらない。警戒兵は怒声とともに鞭を振って雪明かりの山中を駆けずり回って

せき立てる。「ノルマ遂行まで」と夜半までも酷使を続ける。

帰りの夜道、路傍に次々と倒れる戦友を互いの肩に小屋までたどり着くが、翌朝まで続かぬ命であった。

富山県 石川正一

作業現場への往復が精いっぱいといえる冬になった。虱が発生したが下着を洗濯する設備も時間もなかった。虱は首すじから這い上がって頭髮にまで侵入したが、彼ら老兵たちはそれを捉え潰そうとはしなかった。そんな気力はすでに失われていたのだ。

彼らが歩くたびに防寒帽は目深にずり下がりが視野を狭くしたが、それをたくし上げようとはしなかった。そんなことのために手を動かすことなどとてもできなかった。彼らにできることといえば頭ごと後に反らすことぐらいであった。若い兵や比較的健康状態のよい仲間たちがロープを掴ませてやったので彼らはそれにすがって、ただ作業現場に行き、ロープにすがって兵舎に帰った。

そんな衰弱しきった兵たちが最初の厳しい冬を越せるはずがなかった。乏しい持ち物と吸い残したタバコ、小袋に入っている一つまみの岩塩、そして手袋などを仲間たちに残し、兵たちが金梃かねてを使って辛うじて掘った凍土に埋葬されていた。

長い、暗澹とした冬が過ぎ、タイガーに足早に夏がやってくるころ、ラーゲリの傍に彼らの墓標がたち並んでいた。白樺で作られた墓標の数は十本や二十本ではなかった(このラーゲリが閉鎖された時点で二十九柱とされている)。

シベリアでの抑留者の死亡率が異常に高かったのは、厳しい自然、苛酷な労働、特異な食糧事情に因ることはいまでもない。私はその外に情報不足に伴う絶望感、タイガーなどでの隔絶感、虚脱症、無気力をあげたい。

愛知県 水野朝之

気力を失うと、生きているのか死んでいるのかわからない状態になってしまう。朝なかなか起きてくれないので「朝だ朝だ、めしだ」と揺り起そうとすると既に死亡している状態であった。苦しまず、悲しみもなく、隣で寝ていた者も気がつかず、知らぬ間に亡くなっている。その方々を茶毘しなければならぬ悲しい思いを重ね繰り返した。気力を失うと熱も出ない。ソ連では抑留者に対して、体温が三七℃を越えると病人として認定してくれて仕事をしなくてもよいが、他は医務室で(ソ連の管理で)病人にしてくれない。又腹をこわして下痢をしても、それにより気力が低下していても、熱が出なければ一人分の隊員としてノルマが課せられて計算されるので、皆苦しんだ。その当時、私は気が付かなかったが、今考えると、気力を失って衰弱した方は、脈拍も体温もむしろ通常より恐らく低かったのではないかと思う。このように気力を失った方々は、年齢的に隊員の中でも年長の方で三十歳前後の方が多く、お嫁さんや子供さんもおられる現地召集(満州におられた方)が多かったと思うが、その家族の名前等と呼ばれるようなこともなく静かに他界された。私は、この方々がこの世にせつかく生まれ生きて来られたすべての意味がなくなるのではないかと何かやりきれない気持ちになり一層悲しくなった。「又昨夜○○さんが亡くなった」と隊員に知らせても、気力のある隊員の中には手を合わせてくれる方もあったが、気力を失った隊員は反応がなく、我関せずの状態で、これ又やりきれない気持ちになった。

岩手県 千葉義一

シラミ、南京虫の攻撃で安眠もできない上にこれらの媒介で発疹チフス、栄養失調のダブルパンチ。二十年十二月から翌年春まで病棟から毎日のように死亡者が出て、荒板の棺に納められ、カダラ地区の日本人墓地に運ばれ埋葬される。

夕方作業から帰ると「今日は何兵舎の○○が死んだ。軍属の××が死んだ」

…との情報が流れるたび、明日は我が身かな？というところ。これほどの病人、死人が出るほど全体が弱っているのに、ソ連側の仮借のない労働は一向に緩める様子はなく、保養の休暇などを与えることは一日とてなかつた。

三重県 奥田武男

遺体は冷凍

夜寝る時は元気であつた友も、朝にはもう二度と帰らぬ全く悲しいこともあつた。

遺体は来春まで、外のテントに積み込まれてしまう。冷凍だ。

栄養失調で多くの友が亡くなった。

自分も番が回つて来るのかと思つたこともあつた。

千葉県 堀越宗悦

ついに盲腸患者と変わり果て

収容所内は伝染病も治まりシベリアにも春の兆しが見え始め、雪解けの始まつた五月、作業から帰り、深夜の腹痛と吐気の繰り返しで発作があり、翌日は同僚に担架で医務室へ運ばれ診断を受ける。医務室には関東軍の盲腸博士と言われた綿谷軍医大尉が「直に手術だ」と言つても、収容所付のソ連軍医は局部を温めて一昼夜様子をみて手術はそれからだと、綿谷軍医と言ひ争つている様子が伺われ、ソ連の医学の遅れを痛感した。

翌日予定通りソ連軍医の執刀で手術は開始するもはや手遅れとなり手に負えず、隣に待機していた綿谷軍医が跡を引き継いでくれた。化膿も治り傷口が塞がるころになった。午後になると毎日発熱が続いた。綿谷軍医は「堀越もう一度腹を切るんだ」と言われた。私は軍医殿に「このままで結構ですから、そつとしておいて下さい」と言つたら、「貴様の命はあと幾日も無い」と言われ同意した。

最初の手術は思わしくなく一カ月後に再手術となり、「明日は我が身に」の諺通り今度は私がシベリアの土になる番かと覚悟するも、幸い八人目で、成功第一号となつた。粗悪な食糧事情で盲腸患者が多かつた。

私の入室中、二年兵の川西衛生兵には大変お世話になり今でも印象深い。河南作戦での戦闘中負傷者が続出し治療中、自分も右大腿部貫通銃創を負い弾雨の中一人で傷口をヨーチンで消毒治療した勇猛な衛生兵で、このラーゲルの医務室で食事の世話やら包帯交換と親身にも及ばぬ温かい看護を受けた。九州出身の綿谷軍医殿とは正に私の命の大恩人でした。

愛知県 小沼 勇(旧姓 加藤)

初めての仕事は、民家の便所のくみ取り作業。零下三〇度以上の寒さで大便秘凍っているから、鉄棒で壊して手で搦つて容器に入れて河に捨てる。しかし河は凍つているので野原に穴を掘つて埋めるのですが、ツルハシで掘つたらツルハシが壊れてしまつた。鉄棒では氷の硬さで弾むだけ。火を焚いて氷を溶かして掘る。これが十センチほどしか掘れないので、またそこに火を移して掘る。一日中かかつてやつと一メートルくらいしか掘れない。極端に言えば腹が空いて、新聞紙がキャベツに見えてきたり、馬糞が馬鈴薯に見えるようになってしまふ状態になる。ああこれが栄養失調かと思うようなことが多々ありました。伝染病こそ出なかつたが、こんなことが続けば死んでしまふと思つておりました。

愛知県 鈴木英一

栄養失調とシラミによる発疹チフスや回歸熱などで二十一年春の終わりにまで私たちの収容所では二割近くの人が倒れて帰らぬ人となりました。作業の行き帰りに道路で倒れて息を引き取ります。隣で寝ているのが起きないのでよく見ると冷たくなつています。食事をしながら箸をぼとりと落としてそのまま息絶えているのです。人間は楽に死ねるもんだと思つたものです。そして、次は

自分の番だと覚悟をしていました。

四、その他

抑留生活を自分の人生にどのように位置づけるか

(1) 戦争の悲哀と平和の尊さ

島根県 松浦 進

生き残った老兵は想う。「不戦こそ人類幸福の礎である。悲惨な戦争体験を後世に語り継ぎ、二度と過ちを繰り返さぬためのよすがともなれば幸いである」。

静岡県 高松 又吉

引揚船内は安心と疲れでみなよく眠って、口を開く者は少なかった。ただ、日本の鳥影が見えた途端、船上に出て大はしやぎしたものだ。昭和二十四年八月三十日、舞鶴に帰還することができた。今までのいろいろの出来事、また現在の社会状況を見ると、戦争とは何か、深い反省と心よりの平和を祈るものである。

島根県 内藤 静夫

私のように生き残れた者は幸せで、日清日露の戦役以来第二次世界大戦の終わるまでの間、御国日本のための名目で各地の戦線で、あるいは銃後でまた強制的抑留のもとで犠牲になられた方々、さらにはその遺族の方々の心情を思うとき、「戦争は本当に悲惨なものだ。今後絶対にしてはならない」と痛感するのは私のみならず、万人の願いだと思えます。

そして今や日本は平和を保ち、経済大国として世界に君臨し、私たちは安

穏な生活を営んでいます。このような状態になれたことは日本国憲法の下で政治のしからしめるところとはいえず、さきに述べた尊い犠牲者の礎によつてもたらされたものであることを痛感し、ここに心から感謝し、そのご冥福を祈るとともに永遠の平和を願って筆を擱きます。

和歌山県 浜 寿一

戦争というものは、勝った者も負けた者も、ただ惨めさをなめるだけである。ソ連に抑留された二年間、ウズベク共和国という中央アジアの辺境の地ではあったが、そこに暮らすウズベク人たちの生活は、私たち、とられの身の日本人とさして変わるところのない貧しいものであった。

今にして考えると、戦争に敗れた日本の方が、勝ったソ連より当時としては物資がまだまだあつた方ではなかったらうか。

ソ連当局は、戦勝国でありながら、貧困と惨めな生活を送っていることを極力捕虜たちに知られたくないと気を配っていた。しかし、朝三百五十グラムの黒パン一個、昼一合五勺の粟がゆ、夕方ハッタイ粉飯盒半分、お菜なしの食事の支給は、この国の貧困の事実が隠せないことを私たちに知らせていた。

島根県 八幡垣 正雄

開拓団員の婦女子の悲惨な状況と中国残留孤児

戦争によつてひき裂かれた夫と妻、親と子の悲劇の要因は、敗戦四か月前から関東軍は開拓団員四十五歳までの男子に騒動員をかけ、入隊させたのであった。

私が本科の教育を受けていた外蒙国境トボシの部隊にいた一か月間のうちに、初年兵が二度入隊してきたと覚えている。恐らくこの人たちが開拓団員の召集兵であつたのであろう、年齢が四十歳前後であつたと思う。

ソ連の参戦により、満州に侵入したソ連軍及び暴民の前に、男子を失った開

拓団の婦女子はなすすべもなく、ただ逃げるために自分の心を鬼にし、可愛い我が子を中国人(満人)にあずける等、開拓団の婦女子のたどった行動は想像しがたいものがある。

召集された開拓団員も終戦と同時に私たちと同じくシベリアに送られて強制労働に服し、日本に帰国しているが、シベリアの地にて死亡した者も多くいると思う。

今なお帰り得ない孤児は大勢を数える。

特に在満日本人でシベリア抑留者はその意味で二重、三重の犠牲を受けたのである。

一方、日本人の子供をあずかった中国人は、我が子同様に育て、あれから四十数年が経過しているのである。これが逆に日本人であつたら、あのようなことをしたであろうか。恐らく見殺しにしたと思う。その点については、日本国は中国人に対して感謝しなければならない。

兵庫 浅田謙治

開戦からソ連側に收容されるまでの四十余日の戦闘期間及び歩いた里程約千二百キロとも思われる死の行軍は、コレヒドール島の死の行軍にも匹敵する難行軍であつた。地図一枚与えられず、南に対して二時の方向に敦化がある。その敦化に終結し友軍と合流しソ連を反撃せよとの命令である。敦化まで一直線で行つたとしても百里は十分ある。平地に出れば住民はみな敵である。山岳地帯を南下するより方法がない。平地の三倍の行程を必要とする。食糧の支給などあるはずもない、現地調達せよである。何もかも無茶苦茶である。敵対行動に移つた住民から食糧調達などできるわけがない。たまにぶち当たつた畑でトウモロコシを失敬するしかない。その畑にも滅多に出会えないのである。

出撃二日目にソ連機による猛爆撃を受けたとき、部隊長は最先頭を行く我が小隊に走つてきた。友軍のトラックに兵の背のうを積みと命令された。私は命

令の意図がよくわからず不審に思っていると、さらの第二の命令が来た。私は内心唾然としてしまった。背のうは兵の命の糧ではないか、その大切なものを身から切り離さずとはどういうことか、中隊長の命令なら私は理由をただしたであらう。しかし相手は部隊長なのである。不審千万ではあつたが兵に命令下達せざるを得なかつたのである。背のうをトラックに積みこんだたん、ソ連機の第二次空襲である。アツと思う間にトラックは炎上、われわれは裸同然となつてしまつたのである。あのときなぜ部隊長は先頭小隊の私の小隊に背のうをトラックに積みなどと非常識な命令を下したのか今もって不明である。

トラックや戦車等の機甲部隊が真つ先に敵空軍の爆撃目標になることくらい部隊長にわからないはずはないのに、なぜ。そのトラックにも兵員も乗せるつもりであつたとすれば、まさに自殺行為というよりほかない。部下は命令をきくしかないのである。背のうを焼失された我が小隊員が以後の四十日間の戦闘行軍にまたソ連に抑留されてからも、どれほど不自由し寂しい情けない思いをしたか、部隊長は思つてくれたことがあつたのだろうか。背のうの中には兵隊の一番大切なもの(親兄弟又妻子の写真)等もはいつていたのである。

ソ連機の第二次空襲後小隊員三人ほどが隊列に戻つてこなかつた。探す時間も与えられず出発。命令戦争とはこうした無情なものである。第九遊撃連隊千七百人の先頭を真壁少佐部隊長が第一中隊長とともに徒歩で部隊を引率される。普通、連隊長なら馬上豊かに權威こうこうとして全軍をへいげいし進軍されたであらうに、部隊長が徒歩で進軍である。よほど足腰、体力に自信がなければ決心できないことである。

ひとたび山にはいればそこはまさに人跡未踏の山岳である。いかに心急げどジャングルの前進は遅々と行手をはばむ。野に出れば四面敵、結局夜間野道を前進するのが一番効果的なれども、バラバラ前進では兵方角を知り得ず、結局磁石を持つ小隊長の私が誘導せざるを得ず、一夜悪戦苦闘するもわずか三、四里のみの行程に終わることしばしばなり。この四十余日の行軍先頭は毎日が

死との対決であり、まさに死の行軍であった。

シベリアでの抑留生活も間接的には死との対決であったが、日ソ開戦当初、終戦を知らされるまでの四十余日の戦闘行軍はまさに死の行軍であり、小隊員五十余人中、実に四十七人を失ってしまったのである。シベリアでの苛烈な生活は戦友があますところなく記録してくれている。ゆえに私はあえて開戦時の状況を記し、負け戦の哀れを留めおく。

岩手県 折居次郎

有史以来経験したこともないことに初めて遭い、この世の地獄シベリアから命からがら帰れた人たちは、いろいろな苦難の十字架を背負ってきた。

国を信じ、身を挺して捧げた真心も無惨に砕かれ、強制抑留されたシベリアで、勝つても負けても戦争はみんなを苦しめているんだと、お互いに戦争を憎まねばならないと心に誓うのだった。平和に暮らしたい。戦争などは絶対ご免だと心の底から叫びたい。

それにしても、望郷の念を抱きながらも、不幸にしてシベリアの雪原に身をさらした多くの人たちの無念さを思うと胸が痛む。だれが悪かったのか、どうすればよかったのか。せめて死んだ人たちの状況をいつの日か日本にたどり着いたら、家族の人たちに伝えたいと当時は思っていたのだが、記録は一切許可されず、思いうそうにもシベリアボケの記憶には全く浮かんでこない。本当に申しわけないと思いがちながらも、お許しを乞う以外今となつては方法を知らない始末だ。

ともあれ幸運にも命を拾って帰った人たちの一日も長く、シベリアでの空白を埋めてなお余りある楽しい老後が続けてほしいと願うことしきりである。

そして不幸にも日本に帰れなかった多くの人たちの霊に改めて心より深く深く合掌し、ご冥福をお祈りし、断片的なシベリア記をとどめる。

岡山県 土居一志

戦争ほどむだなことはない。消耗のみにて生産なし。彼我ともども、どれほどの血が流されたであろう。いわれなき抑留もなかったであろうに。孫子いわく「兵六国ノ大事ニシテ、死生ノ地、存亡ノ道ナリ、察セザルベカラズ」とか。為政者たる者のよくよく肝に銘ずるべき言葉ではなからうか。

滋賀県 松村晋二郎

最も思い出したくなかったシベリア抑留体験、ラーゲルの明け暮れは、まさに地獄絵さながらで、人は極限の状態におかれたとき「いかに生きべきか」を痛烈に教えてくれたと思っている。二年弱の短期であったが、精神的、肉体的に与えられた苦難に満ちた屈辱的な経験を、帰国後の私たちの人生にどう生かすかが、帰還した者の宿題となったのではないかと思ってきた。私は、三十有余年の公務員生活において、事あるごとにこの気持ちを心の支えにしてきたと思っている。

かつて中国湖南省常德市を訪問し、思いがけなくも元日本婦人(残留妻と呼ぶ)に会った。彼女は大阪大空襲で焼け出され、満州に移住。良縁を得ての平和な生活も束の間、ソ連軍の侵攻により夫は召集、彼女は家・財産をなくし流浪中、国共内戦に巻き込まれ、夫(国府軍)とともに中国各地を転々、落ちついたところが常德市であるという。いろいろ苦労話を聞かされたが、その中で、私の人生をこのように無茶苦茶にされたのは、私たちの生命・財産を守ってくれるはずの関東軍が私たちを見放したためではないかと同意を求められ、困った。

当時、関東軍にはソ連軍を抑え撃つ戦力もなかったし、停戦命令が出たのでやむを得なかったのではなかったか。そのため私たちはシベリアでその補償をしてきたつもりであるなど、弁明をした。その後、彼女は一時帰国で本市を訪問、再会したが、その後も文通をしている。今なお肉親探しに来る残留孤児や残留妻の問題もこれでいいのか。北朝鮮も同様で、望郷の夢破れ、寒さと飢えと病魔に

より非業の死を遂げた多くの在留邦人は各地の山野に眠っている。敗戦の惨禍は今なお根深い。

石川県 村沢藤作

ウラジオへ上陸したのは昭和二十一年七月十五日ころであった。波止場や街通りに日本兵を見受ける。元の日本領事館の前では、金色に輝く菊の御紋章が痛々しかった。アメリカの国旗の立つ建物もあった。炎天下を喘ぎ喘ぎ、ウラジオ港の見える丘にある収容所に着いた。第六収容所と言ひ、木造の二棟と天幕一つがあった。

岩手県 及川新蔵

朝夕はるか海を望みながら、この向こうに日本があるんだと思うと、たまらない気持ちになった。

ひんがしの海に向かいて大声を

はしあげむかも 悲しい心

こんな歌が出た。

熊本県 畠田 完

戦争の悲劇を思うとき、いかなることがあつても二度と戦争はしてはならない。戦争を知らない戦後生まれの世代に平和の尊さを伝え、戦没者の慰霊と冥福を祈ることが今後の使命と肝に銘じている。

岡山県 土居一志

戦争は平和を唱えれば防げるほど易しいものではない。我々の体験を正しく伝え、勇気を持って日本の平和のために尽くしたいと心に誓っている。

ソ連住民の姿もあわれでひどくみすぼらしかった。日本軍の衣服を構わず着て、大半は、寒気に、はだしだった。それでも彼らは戦勝国の国民なのだ。これが戦争というものか、勝つても負けても何も残らない、そこには戦いに疲れ切った

笑いのない姿しか残っていない。

時と所とを問わず盗難が頻発した。時には、れっきとしたソ連軍の将校すらが捕虜である我々の品物に手をつけた。その心情たるや、まことに低級きわまるが、彼らには盗みの罪悪感も見られなかった。それとも捕虜の所持品を取り上げるのは勝者の当然の権利とでも思っているのか。

人が人を殺し合つて何ら罪悪感を感じない。いや、感じさせないようにコントロールさせられているのが戦争というものなのだろう。そして殺し合いに勝つた者が敗者を裁き、その生命財産の生殺与奪の権利をほしいままにする。

神奈川県 池田秀良

有史以来、他国に負けを知らなかった日本もついに敗れ去つたのだ。だれも彼もなす術なくただ茫然としていた。ソ連軍が進駐して来た。重装備の機械化部隊だ。兵隊の持つ銃は皆、自動小銃である。これに比べて我が方の兵器たるや到底彼らの比ではない。精神力だけを主張し続けた上層部のたわ言にはあきれ返る。

ソ連側の指示で兵器を集め武装解除に応じた。夢にも見たことのないことが現実に起きたのである。敗戦の悲しさと屈辱とはこういうことだった。拉古という所に集められ千名単位の作業大隊を編成され、貨物列車に乗せられウスリ―江を越えシベリアへと拉致された。小さな窓から外を覗くと、丸太を積み上げたソ連独特の民家が点々と見える。沿海州のヴィンキという所で下車させられ、部落から遙か離れたセミヨノフカ第十五収容所に入れられた。この日を期して飢えと寒さと強制労働がのしかかつて来るのである。

神奈川県 加藤 勇

とうとうソ連軍が戦車を先頭に進駐して来た。戦車の上には勝ち誇ったソ連兵が自動小銃を抱えて乗っている。身近に見る戦車の大きいこと、我々が肉迫攻撃をかけてもどれほどの成果が得られたことか、思い出してもぞつとする。牽引車に引かれた重砲等、近代武器を備えた機械化部隊が後続く。貧弱な武器しかない我々には到底対抗し得ない。ソ連側の指示により、一切の武器を集め武装解除を受けた。

日本の敗戦により延吉の街も騒然としてきた。現地人の日本人に対する風当たりがすごい。まず将校官舎が襲われ家財は掠奪され、女性は大衆の面前で暴行されるなど、見るにたえない事件が各所に起こった。間違った日本の植民地政策への積年の恨みを爆発させての行為であったのか。こちらは捕らわれの身、どうすることもできない。ソ連側に抗議、保護を求めたら木銃を支給され、警備に当たれとのことだった。だが、刀や鎌など持った彼ら暴民の前にはどうにもならない。敗戦国民の惨めさをたつぷりと味わった。

北海道 庄司 忠

抑留体験記執筆にあたり、一民間人の少年の歩んだ九年に及ぶ生き様を記し、収容所の裏面を書き遺そうと思います。後世は戦争のない平和の日々が永遠に続く事を願いながら。

戦争とは互いの国の軍のみの戦いに終わらず、必ず一般の人々の犠牲を伴う事を忘れてはならないと思います。今もなお、真の戦争は終わっていない事を残念に思い、一日も早い戦争の後遺症の消える日を念願してやみません。

北海道 村岡 務

あれから五十何年が過ぎて、満州で別れた何人かの友とも連絡がとれ、お互い無事帰国した喜びを書き残すべく筆をとった。この機会に悪夢の七年間を

思い出し、生の声として書き残すべく筆をとった。戦争は一部の軍国主義者と資本家の貪欲な利益の追求による欺瞞に満ちたものであったと思う。戦争に負けて日本は本当の平和と自由が訪れた。これからは苦しい体験を通して得たものであること、平和の尊さは大勢の犠牲者によって得た宝であることを末永く伝えたい。そしてこれらの宝を失うことのないよう祈ってやみません。

新潟県 平原敏夫

シベリアには約六十万人が抑留され、死者はおおむね六万人と言われている。皆さんの無念さ、口惜しさは如何ばかりか。そうだろう、戦争は終わったのに、どうして、何故、殺されねば——といつてよいだろう——ならなかったのか。

入ソ後は移動移動で人員の入替えが激しく、軍隊の規律は完全に破壊し尽くされ、筆記用具は皆無、栄養失調で思考力の衰退してしまった私たちは、残念ながら亡くなった皆さんの氏名・住所を覚えておられる状態でなくなっていた。そんなこともあつてか、抑留死された方々のうち身元の確認された方は、実に死者の半数にも至っていないという。さらに、身元の確認された方も、いつ、どこで、どのように、何故亡くなられたのか等、その実情、少なくとも正確な命日だけでもご存知の遺族、さらに、肉親の埋葬されているお墓をお参りできた方々は、果たしてどれほどおられるのか。おさむい数字なのではないだろうか。

幸運にも私は生還し今日がある。年金生活ながら老妻と二人、平穩無事な日々を送っている。毎日が平和であればある程、彼の地で亡くなられた皆さんがお気の毒でならない。

いま一度書こう。戦争は終わったのに何故死ななければ、殺されなければならなかったのか。

島根県 田中勘助

列車が止まった。昔した楊木林駅である。懐かしかった。いたいた、昔の仲間の

駅員ヤンである。彼も私を見つけてくれて「田中」と側に寄って来てくれた。そして小声で「モスコーに行くのだ、降りなさい」という。「違う、帰国するのだ」と否定して、他の人のことを聞きたかったが時間がなく、監視の目もある。互いに身体に気を付けてと別れた。対向列車が来た。有蓋貨物車に人がいっぱい乗っていたようだった。

次に停車したのがハルビン^{ハルビン}である。中ホームの上つて駅側ホームを見ると、ボロボロになった衣服を身に着けて子供を背負ったりした婦人達がたくさん見えた。どうするのだろうかと思っていると、ワーツと一カ所に駆け寄る。見ると、誰か立ち売りから買った饅頭を投げたのだろうか、皆空腹のようだった。つられて、誰もが買えるだけ立ち売りから買って投げ出した。必死で拾おうとしている姿を見て涙が出てくる。なんとか出来ないものかと敗戦の悲哀が身にしみてくる。次に停車したところは知らない所、駐車のようだ。各隊から使役を出せという。ソ連兵の警備兵が付いて元官舎だったような所に連れて行く。中に乾草等一杯散らかっている。よく見ると壁や戸に弾痕がある。中を片づけて掃除をさせられる。ここにいた人達はどうかのたのたの胸が熱くなる。しばらく駐車していた。そして着いたのが黒河^{黒河}だったので、ソ満国境である。全員下車する。また作業である。糧秣か何か、大きな袋をかつがせて運搬させる。ソ連人らしいのが「ダバイダバイ、イジシユダー」などとわめくが、言葉が解らない。早く早くと言っているのだから、全くいまいましかった。

広島県 榎上竹士

私は戦後五十年過ぎて今なお心残りなのは、終戦も近い八月十三日、ソ連軍戦車が牡丹江^{牡丹江}掖河^{掖河}を攻撃してきたので、東京城^{東京城}の軍官舎の焼却の命令を受け、焼却警戒中に、燃え落ちる官舎の横を国境の開拓団から避難して来たのである。後脚を一本切断された裸馬に僅かばかりの荷物を負わせた老夫婦が足を引きずりながら南下して行つた。おそらく避難の途中で仲間とはぐれ二人だけ

の逃避行であつたろうが、その悲惨な姿は、見るに堪えなかった。着のみ着のまま、頼る者もなく不眠不休で歩き続けて疲労困憊し、お互い口もきかず追われるように通り過ぎた。あまりにも哀れな姿に慰めの言葉もなくどうすることも出来ない。後を追つて倉庫の砂糖を持つて行かないかと声を掛けしたが、無言でにらみつけて去つて行つた。多くの開拓団がいたが、国境守備隊は二十年四月南下、山に陣地を構築をした。日ソ開戦直前の関東軍には居留民を守ることが出来なかつたのだろうか。国境には多くの開拓団が存在していた。若い男子は軍隊に動員され、残る老人、女子、子供の多くが家や財産を失つたのである。ほんとうの意味の敗戦の悲惨さをなめつくしたのは居留民(開拓団)の人々であることを決して忘れてはならないと思う。

熊本県 大阪公夫

振り返れば、我が一番若い二十歳代の青春は、軍隊よりシベリア抑留と、自由のない柵内の生活であつた。いかし、我が人生にあの当時以上の苦しさは全くなく、当時を思えばどんなことでも平気であり、若いときのよき修業であつたとも思う。

私は現在、我が国ほど立派に住みよい国はほかにないと思つている。豊富な水や温泉があり、必要な諸物資や食べ物を得られ、気候も最高によく、真冬でも素足に地下足袋で出られる。外側の戸を一度開けて閉め、内側の戸を開けて入らねばならないシベリアの気候と何と大きな違いであろう。そして、仕事と休息の自由がある。ノルマの遂行に毎日毎日苦労したこと、年一回の正月元旦の一日を休むために、前の週の日曜日を休まず働いた思い出や、一番ありがたいのは言論の自由である。何をしゃべつてもだれからも束縛されない。何の心配もなく自由な討論ができる。このありがたさは実際体験した者でなければ、平和な社会に過ごす今日の人にはわからないだろう。すべてが解放されて、希望に満ち、足も軽く、近所の人や親類の好感の中で、毎日飛び跳ねたいようなうれい、

安心した帰国当時の毎日。また一方では、夢の中であの恐ろしいシベリアに再び連れ帰されそうになり、目が覚めてみて心より安心した思い出など、五十年後の平和な今日でも昨日のこのようにはつきりと思ひ出される。

彼の地で望郷の念の中で亡くなった多くの戦友を思い、我が熊本県では関係者の大変なご努力と各方面のご支援により、他県に負けない立派な慰霊碑の建立も終わった。

八十歳近い今日、戦争が絶対起こらないことを心より祈念しつつ、現在の平和な生活に対して感謝の毎日である。

熊本県 小佐井善次

敗戦の引き金となった昭和二十年八月九日、一方的に不可侵条約を破りソ満国境を突破しソ連軍の猛攻撃が展開された。全満州の制空権を握り機甲軍団が怒濤の如く進撃、満州における重要塞地は殆ど玉砕したの情報あり。当時私は外務省関東局に在勤中の出来事で、事實は事実として後世のために伝える事が抑留体験者の使命であると思うので、當時を思い出し、多くの証言者の方々を思い出し語ろうと思う。

八月十五日日本は無条件降伏、陛下の玉音放送である。全国民は耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍べとのお言葉であった。それから光陰矢の如く五十数年の歳月が流れ、平和日本として世界最大の経済大国となり、敗戦時の満州における悲劇の有様、またシベリアへの強制抑留、飢餓と酷寒と苛酷な重労働で多くの日本人が異国の果てに死んで行つた事等、国もマスコミも世間より風化されんとしている今日、戦争を知らない世代の人々に戦争の罪悪と悲惨さを知らしめる事は体験者の務めであり、また使命であると信じて、記憶をたどりながら今は亡き証言者の思いと共に語ろう。

日本人同胞が罪もなく暴行され強姦され虐殺され、そうして遠くシベリアの異国の地で強制的に重労働を課せられた。この屈辱の歴史は決して忘却しては

ならない。ソ連が宣戦布告して僅か一週間にしてソ連軍の得たものは、七十万人とも八十万人にも及ぶ強制抑留者の労働力と満州全土の軍需物資、機械、工具、食糧、被服、馬そりに至るまで、拉致したその金額は計り知れない。まさに「スターリンの火事場泥棒」と言つて過言ではない。丸腰の婦女子、老人、子供に至るまで、掠奪、暴行、強姦、その惨状は例えようのない有様であった。

一番目立つのは掠奪、殺害、暴行であり、特に強姦であった。重病患者の家族が病院に入院して危篤の状態だったので、老婦人が荷物を持つて看病に行く途中、病院の前で四、五人のソ連軍に捕まり、その場で裸にさせられ、一人の老婦人を汚れたソ連兵が交代で強姦した。無力の日本人は何も出来ない。婦人は殺されず病院に逃げ込んだが、残念のみではすまされない日本人の気持ちである。

市内の広い公園でソ連軍の女子戦車隊が約三十人ぐらい天幕で野営していた。そこを日本人の男が通ると必ず呼び止め、声をかけて天幕の中に引き込む。何をするかと心配すればロシア語でフルフルと言うのである。セックスのことで、女が男を強姦することであつて、返事しないと殺されるので仕方なく言いなりになつた日本人もいたらしく、そこは通らないようになつた。

夜になると日本人の女性はほとんど天井裏暮らしで、枕を高くして寝る事はなかつた。というのは、ソ連兵が放浪者みたいな服装でまさに飢えた野獣のように戸を片つ端から叩き、「マダム出せ、娘出せ」と毎晩徘徊したからであつた。彼等の女に対する執拗さは全く野獣のものであつた。

日本人の上流家庭の奥さんは、毎晩汚れたソ連兵が女出せと徘徊し、しかも何時まで続くか判らないので耐えきれず、どうせ死ぬならソ連兵から殺されるより日本人の方と共に死にたいと届け出があつたが、丸腰の日本人にはどうにもならず辛抱して貰う事になつた。

徘徊中、女と見たら追い回し車中に引き込んで連れ去り、何処へ連れて行くのか何日も帰さない。一週間か十日位して、身も心もボロボロになつて生ける屍

同然で帰る人もいた。それでも生きて帰れるだけ運が良かったのだ。連日例外なく日本人家屋に小銃を持って飛び込んで来る。どうすることも出来ず、手向かえば直ちに射殺であった。

八月、ある一行は東安省まで逃げ延びて来た。一人の母親は片手に幼児を抱え他の手に少年の手を引き、背中には飢えを凌ぐ僅かばかりの食糧を背負った痛ましい姿で、行く先も決まらずただ安全な地を求めて南へ急ぐ悲惨な旅であった。その時戦車三十台と共に一個中隊の歩兵がこの避難民を襲った。一斉に機銃を浴びせた。避難民は相次いで斃れた。全員死んだ。誠に悲しく、落ちのびて行く運命としてはあまりにもかなしい。

背中に子供を背負っていた日本人女性が、ソ連兵から変な事をされそうになつて非常に怒つて拒否したら、いきなりそこにいた三、四人のソ連兵が背中の赤ん坊をゴボウ抜きにしてホームに叩きつけて殺した。この女性は半狂乱になりソ連兵にかかつていたら自動小銃でバラバラと殺されてしまったとの事である。何とも言いようもない悲惨な光景が至る所、逃げ回る日本人に対して強奪、暴行、虐殺、冷酷無情の限りをしたのである。

特に「開拓団」「満州移民」「王道楽土建設」という国策に沿つて皇国の拓土・戦士として祖国を後に満州大陸に送り出された人々は、酷寒酷暑に耐え望郷の念に涙しながら我が身に鞭打つて、永住の地と定め入植した理想郷の建設も、一瞬にして悲劇のどん底に叩き落とされ、聖業と信じた開拓も水の泡と消え去つたのであった。

多くの拓友が召集され、老人、婦人、子供に至るまでソ連軍に追い回され、一物も残さず掠奪、暴行、強姦され、拓友と共に無念の涙を流しながら銃殺され、また自決して死んでいった事実は何と言つてよいか言葉が出ない。ソ連軍の暴虐は決して生きる限り忘れることは出来ない。

岩手県 及川新蔵

昭和二十年八月九日、ソ連軍は日ソ不可侵条約を一方的に破棄してソ満国境を越え侵攻、満州（現中国東北部）は戦場のつぼと化した。当時極度に戦線が拡大し兵員兵器とも不足していた日本軍は惨敗し無条件降伏、武装解除されて捕虜の身となった。

直ちに日本に送還すべき日本軍兵士を、ソ連は帰すと偽りシベリアに連行し、二年から五年、特殊な人は十数年もの長きにわたつて強制労働に従事せしめた。特に入ソ当時の食糧、被服、住居環境は劣悪を極め、加えて厳しい寒さと苛酷な労働の強制により、連行された六十数万の一割以上の死亡者が続出、内地帰還後もその後遺症による死亡・疾病は後を絶たなかった。その死亡者の数の多さは激戦地並みと言われている。

また、ソ連の終戦間際の火事場泥棒的な参戦により当時の在満民間人も多大な打撃を受け、特に老人、婦女子の逃げ惑う様は言葉に言い尽くせない惨状を呈していた。子連れの女は両手に子供の手を引き、背中に乳呑み子を負い、髪を落として丸坊主となり顔を塗つてトボトボと歩く様は何とも言えない地獄絵であり、疲れ果て、子を置き去りにするのを目の当たりに見た我々は、それを救い得なかつた無力さを今悔やむのである。逃げるのに足手まといになる老人は家に置き去りにされ、一人ポツネンと寝ていたお婆さんに「兵隊さん、助けて」と懇願されたあの言葉もいまだ耳の奥に残っている。

新潟県 上村慶一

強制収容所への行事の途中、道端に幼児が捨てられて泣いていた。母親のわが子への最後の愛情であろうか、きれいな晴れ着姿、目、鼻、口には蠅が群がり、ソ連軍兵士が抱き上げて、折から通りあわせた朝鮮婦人に手渡すと、いやいやながら受け取る婦人。その後どうなったことであろうかと、あのとときの情景が今も脳裏に鮮やかに映っている。

あの北鮮の平和郷が地獄と化した八月九日、そして無辜の日本人老若男女の悲鳴は今も脳裏から離れることはない。何よりも平和を大切に願うこのころである。

福井県 長谷川 久

終戦、停戦、敗戦、いろいろと皆は言うが、武器返納、弾薬返納では敗戦だ。捕虜になったのだ。逃亡する人、自殺する人もいたが、私には何もできなかった。私たちは梅林の収容所に向かい、ソ連の兵隊はヘルビンに向かって入る。両者は行き違うのだが、何か良い物があれば、ソ連兵はダバイと言って取り去ってしまう。何もできぬ悔しさ、悲しくなった。

幾日か過ぎて梅林の収容所に着いた。梅林では、私たちは自動車隊であったので、収容所の糧秣輸送をやった。拉古にも収容所ができたので、半数ほど分遣になった。

一カ月ほど過ぎて、ダモイ(帰国)ということで拉古に集まり、歩いて牡丹江へと私たちが戦った道を歩いた。牡丹江に入ると、私たちは作業大隊と聞かされたが、ソ連の兵隊に東京ダモイと言われ、半信半疑の気持ちでダバイダバイと言われて歩いた。途中、開拓団の女の三人と出会った。彼女達に、泣きながら「兵隊さん、どこに行く」と尋ねられても答えることができない。また、綏芬河を通るときは、電柱の傍らで泣きながら日本の子供が十人近く私たちを見ていた。五十年余り過ぎて、あの婦人子供はどうなっているかと思うと、心が痛む。

北海道 北野 實

戦争は人間が人間を殺し合う罪悪である。「聖戦」の名の下に国民を召集し、また他国民を傷つけ、国土を崩壊に導いたのであった。

新潟県 若月太郎兵衛

八月十五日敗戦、十七日武装解除。僕は師団長はじめ幕僚の拳銃、刀を、敵に指定された場所へ集積するよう任命された。敵に取られる物なのだ、使い物にならぬようにと拳銃、小銃、機関銃、すべて遊底を分解して藪の中へ捨てた。敵は怖がって誰も来ていない。少しばかり鬱憤を晴らした感じ。

翌日、我々は陣地から北孫呉の街へ下りることになった。丸腰で敗残の兵たちはとぼとぼと下山してきた。中国人は胸を張って反り返り、腕に赤腕章をつけ、棒の先には赤旗を靡かせながらせせら笑っておる。昨日まで「大人、大人」と崇めておきながら、今日はロシアの手先になって大威張り。

滋賀県 白井末一

シベリアでの捕虜生活を経験したが、果たして本当に日本に帰れるのだろうか。と何度思ったか。舞鶴港の棧橋に着いたとき、本当に祖国日本に着いたと感無量だった。これからは誰も捕虜生活をしなくてもよい。多くの犠牲者を出さない平和な社会であってほしいと祈るものである。

東京都 井上 勇

戦争を知らぬ戦後生まれの人が全人口の七割を占め、残り三割の中にある私は、直接戦争に参加を強いられたあげく、シベリア抑留という極限を経て生還した、言わば昭和激動時代の生き証人である。

(中略)

「朕深く世界の現勢と帝国の現状とにかんがみ、非常の措置をもって時局を收拾せんと欲し、ここに忠良なる爾臣民に告ぐ、朕は帝国政府をして米英支蘇四国に対し、その共同宣言を受諾する旨通告せしめたり」

私はこの玉音放送を千島列島のウルップ島に駐屯していて傍受した。「これで長かった戦争がやっと終わり、内地に戻って故郷に帰れるぞ！」と戦友と肩を組

んだが、この島に船と名のつくものがなく、内地から迎えに来て帰るということも許されず、全くの虚無の日々にいた九月の初旬、突如として進攻してきたソ連軍に拘束され、シベリアに連行されて抑留されたのである。

初めて体験した敗戦の惨めさと魔境の大地シベリアでの虜囚生活。これをいま改めて語るにはあまりにも疎ましい。でき得ることなら一切を忘却の彼方に葬り去りたいと思うが、抑留二年間の道のりで強いられた苦しみと悲しみ、そして屈辱感は脳裏に深く刻みこまれ、生還以来四十八年という長い歳月が経過した今もなお折に触れて胸中を去来し、心魂を激しく揺さぶるのである。今これを回顧するとき、戦争ほど愚かなものはないと思うと同時に、かつて自分が歩いた虚無と屈辱の道のりは、何人たりとも踏ませてはならないし、ましてわが子、わが孫には、である。二十歳代という人生においても夢多く花ひらく時代を大義名分のない戦争に駆りだされ青春を蹂躪された我々の怨念を子や孫に伝えようとしても、戦争そのものが過去視され、世が華美を競う飽食の時代とあつては、生き残り老人の戯言くらいにしか受け止めてもらえない。しかし、戦争の愚拳から敗戦の空虚を通し苛酷な状況の中を生き抜き、自由と平和の尊さを身をもって体得し、不戦の誓いを心の奥深くに刻み込んだのも我々年代の特質と言えるのである。

新潟県 高橋吉郎

昭和二十四年、約一カ月の入院生活を終えて、秋風の立つ九月に入る頃退院した。今度はあちこちから集められた寄せ集まりの作業隊で作業に出ることになったが、誰も作業責任者になる者はなかった。皆尻込みしていた。私は、よし、俺が引き受けた、と名乗り出た。今迄に幾度か作業責任者をやって来ており、どうせ誰かがやらなければならないのだ、皆ダメイに差し障りがあると思つていいのだらう。よし、最後の責任者となるだらう、失敗して帰れなくなつてもこれも運命だ、と覚悟を決めて作業に出ることになった。作業は水道管布設工事で

あつた。この作業におけるソ連のマツセル(監督)が親的な良い人物で、私がマツセルに「我々日本軍はソ連の一方的のやり方でこうして抑留されている。我々の心の中では決してソ連を良く思っている者はいない。恐らくこれが最後の作業と思う。今迄ソ連の地方の人達は我々に対して常に同情の目で見てくれて親切であつた。どうして戦争をしなければならぬのか。再び戦争をしてはならない」と語つたら、マツセルはプランナー、プランナーと言つていた。この頃、他の作業隊が作業から帰る際、北朝鮮がソ連軍を讃える歌として我々の戦友が歌い乍ら作業から帰つて来たが、その文句は、

自由を愛するソビエト軍隊は

祖国の危機をくぐり抜いて

ファシストやからを叩きつぶし

世界の民族解放の主

レーニンの友スターリンの

率い導くソビエト軍は

永久に幸あれ、栄えあれ

このような軍隊がなぜあのような残酷で凶悪な行為をしたのか、自由解放すべきソ連軍が、なぜ終戦により祖国へ帰すべき日本軍を極寒のシベリアに抑留し、自動小銃を携え強制労働を監視しなければならぬのか、理解に苦しむのである。明治三十七、八年の日露戦争のように正々堂々と正面切つての戦いで勝利をおさめたのではなく、不可侵条約を一方的に破り、不意打ち敵裏切り行為をして勝者となつているソ連軍を讃える歌をなぜ敗者たる日本軍が歌わなければならないのか。まさに踏んだり蹴つたりであつた。

富山県 山田秀三

二十二年二月に入つて作業が割り当てられ、ウランバトル市内で土掘りの作業が小隊毎にノルマが出され、毎日六時起床点呼、黒パン一個持参、モンゴル

兵の監視引率のもと作業に駆り出される。作業は建築の基礎の穴掘り。鉄棒二メートル長さのバールで土を掘るが、土は鉄板のように凍つていてバールは跳ね返つてくるだけ。

全然ノルマは出ないが、零下の街頭現場で作業終了時間まで、誰も声も出さずにシヨンボリと元気のない姿で日暮れの来るのを待つ、なんと情けないことか。俺は今までどこでどんな罪悪をしてこんな仕打ちを負わねばならないのかと、戦争というものの罪悪を実感として体験させられている。

岐阜県 坂井文介

ガタガタ列車はどうも目的地へ到着したようである。とある側線に我々の列車は止まった。ひんやりとシベリアで二度目の秋の風が身にしみる。丸腰の日本人が列車から降りて集合している姿を見ると、敗戦国の軍隊捕虜の哀れさ、しみじみと悲しさが込み上げてくる。

かつての中国、英国、米国の捕虜達の姿とは今は逆の姿である。ここはどこだろうか、ふと見ると駅名にコムソモリスクと記してあった。

滋賀県 志水誠之助

シベリアのことは動ける間は付きまとうだろうし、死ぬまで忘れることは出来ない。二度とおろかな戦争をしてはならない。戦争の犠牲者は私達で終わりと訴える。

福井県 谷崎喜久雄

寒い一冬を越した翌二十一年五月初めごろから、平壤駅まで歩かされ貨車に乗せられ移動が始まり、三百人、五百人と団体で収容所を出るようになった。私たちも六月初め貨車に乗り、日本海側北部の元山港で船に乗りかえ、ソ連領の玄関口と言われるウラジオストクの西側、ポセツト港に上陸した。ちょう

どそのころ、この辺の梅雨の時期だったのか、下船した日も雨降りだったと思う。入れられた収容所も俄か造りの施設らしく、先に送り込まれた日本兵が千人くらいいただろう。飯炊き釜も五右衛門釜が五基くらい据えられていたと思う。しかし、近くに薪木らしい物も見当たらず、水が蛇口から出ているので飯盒で受けて驚いた。黄色の沼水で、とても飲めた物ではない。三十分くらい沈殿させてやつと上水を飲んだが、泥臭い水だった。

ここでも夕方くらいになってもご飯が与えられない。先着者に聞いたら、毎日の雨降りで炊事場が露天で火が焚けないので、我々も昨日から何も食べていないとの話で、またここでもかと、ソ連の無計画というか不手際に、どこまで我々を人間扱いにしないのかと悲しくなった思いはいまだに忘れられない。三日間くらい泥水を沈澱して上水をすすり飲み、我慢するより仕方がない。四日目にやつと分けられたご飯がまた、ワラゴミの混ぜご飯かと思うほどだった。腹が空いている。食べたが口の中にワラが残り、これまた生まれて初めて口にした。後で聞いたら、釜の蓋がないので、米の入った筵カマスを蓋にして炊いたからの言い分と、釜の底は泥水で炊いたため黄色で砂まじりと聞いて二度ビツクリ。我々を人間と思つてないと憤慨した。この敗戦国の悲しさは実感した者でなければわからないと思う。

(中略)

コルホーズではどんな仕事も総てノルマが決められていて、作業を終えて帰るときに現場監督より「今日の仕事のノルマは何%」と、抑留者作業班長に証明書らしき紙を渡していたように思う。各班長はこれを食堂係員に渡して食券をもらい、班員各人に配る仕組みだったと考えられる。何分にもこの国では、作業能率結果の出来高ノルマの上中下で各人の食事の量が決められていた。この当時のノルマはいつも「上級Ⅱ一〇〇%以上、中級Ⅱ八〇〜九〇%、下級Ⅱ八〇%以下」で、スूपの食器一杯は平等で、黒パン、ときどき白パンも渡されたが、このパンの大きさが違ふといった始末で、仕事能率によって食物量を差別される有様は人

間社会を離脱した行為と、敗戦国の惨めさをつくづく感じさせられた。

愛知県 河村廣康

列車はウラジオストックと反対方向シベリアに向けて北上して行きます。二段式にしてある貨物車の小窓から外を見ると、白樺と雑木林の中を走っています。バイカル駅に着きました。

バイカル湖畔で飯炊き。ススや埃で真つ黒な顔を、久しぶりに洗いました。水が冷たくて気持ちがよく感じました。ソ連軍の病院列車が駅に停車しました。負傷したソ連兵が窓から自分たちに向かって何かとなっています。枯れ木を集めていると、ロシア人が子供をけしかけて石を投げかけ、私たちに石が当たるのを見て、大人たちは笑っています。畜生と思うが怒るに怒れない捕虜の身、情けないけれど仕方がありません。

愛媛県 三好清一

その日から丸腰で目的を失った敗戦の兵は、惨めな姿をさらけ出して凶們・延吉と転々し、二〇〇キロ行軍という苦しく長い、しかも一日一袋半の乾パンでの行軍を強いられたのである。その間、激戦のあった彈春を通ったとき、敵戦車のひっくり返っているすぐそばには必ず日本兵の屍が膨れ上がって腐臭を放っており、思わず逃げる自分の冷たい心に、戦死者への申し訳のない罪悪感を覚えずにはおられなかった。そして同じ街道を昼夜の別なくソ連のトラックが走り、火事場泥棒よろしく満州の物資を運び去るのを見て、さらに敗戦の憂き目を見、激しく憤りを感じたのを忘れることができない。

そのラーゲリに入つて間もなく所内の清掃があり、生来几帳面な性格から内棚を越えて中のゴミをとりに入ってしまった。入所早々で、そこへ入ると逃亡と見なされることなど知るよしもない。「バシヤ！」という音がして足元の小石が飛び散つたのである。何事か？と顔を上げる私を、パッと飛び込んできた監督の将校

が慌てて私を引きずり出してくれたので事なきを得たが、すんでのところ、私は望楼のソ連兵に殺されることであつた。次にその後同じケースが起つたが、その時の兵は撃ち殺されたということであつた。戦時中でもなく、夜間でもない真つ昼間、しかも大勢の人中で何故警告もなく狙い撃ちする必要があつたのか。ヤポンスキーの一人や二人、鳥けものと同じに扱うソ連兵の神経、いやソ連という国の非情さと、何の抵抗も出来ない虜囚の運命を感じたものである。

高知県 加納憲

いつの世でも戦争は一番弱い者にしわ寄せがいく。後でわかつたことは、敗戦間際の軍の作戦では一般人は既に捨てられた存在だったのである。

岐阜県 中上英雄

八月十五日の重大放送は、日本は連合国に無条件降伏で戦争は終わったということであつた。

戦陣訓は全將兵に「生キテ虜囚ノ辱メヲ受ケズ、死シテ罪禍ノ汚名ヲ残スコト勿レ」と教えていた。一時は騒然となつた。程なくして武装解除され、丸腰になつた我々は今後どうなるか、無条件の降伏ではソ連軍に従わざるをえなかつた。

奉天の街の治安は一瞬にして暗黒の世と化した。日本人の住宅はことごとく荒らされ、婦女子は人前でも容赦なく辱められ、実に目を覆う有り様であつた。助けを求められても囚われの身、如何ともなしがたく、やるせなく、悔しかつた。五十有余年過ぎた今でも、そのときの様子がありありと脳裏に焼く付いている。

武装解除とともに奉天市内のある学校に收容された。満州にはかなりの物資があつた。ソ連軍は手当たり次第に何でも持ち去つた。残念であつたが、その作業を一カ月ほどさせられた。

残留、そして逆送

鳥取県 細木明男

ナホトカで乗船待機すること三日間、四日目になってようやく乗船命令が出た。そして港の埠頭に集まって、ソ連将校の命令に従って整列した。

その時、縦隊の先頭の方から後方にかけて、各自、姓名の頭文字がロシア語のアルファベット順になるよう整列させられた。その数は約千二百人で、私は縦隊のかなり後方に並ぶことになった。そして、ソ連軍の将校が手に何やら書類を持ってしばらく通訳と話しているようだった。

ところがである。やがて先頭から丁度一千人のところで区切りをつけ、そこまでの者は船に乗るよう指示された。私はその一千人の枠外にいたので、一瞬呆気にとられると同時に茫然としてしまった。つまり、私と同様に隊列の後方に整列させられた者約二百人は、遂に帰還の船に乗ることを許されず、引き続きシベリアの地に残留させられることになってしまった。

見ると、対岸の埠頭には日本から迎えに来た引揚船が停泊しており、今し方乗船を許された同胞は、駆けるように急ぎ足で乗船場へ向かって行く。私達は言うに言われぬ思いでそれを見送った。その時の悔しさと悲憤の情は今もって忘れることはできない。

同胞達の乗った引揚船の出航を見送る間もなく、私達はせきたてられるようにして鉄道の列車がとまっている所まで連れてゆかれ、幾両かの連結された車両に乗り込んだ。やがて列車は動き出し、ほんの数日前にナホトカ港へ向かった線路を、今度は逆の方向へ向かって走り続けた。

このようにして、わずか四日前に折角たどり着いたナホトカではあったが、今ではまたもや祖国帰還の夢も破れ、引揚船を目前にしなから、再びシベリアでの労役に服するため逆送されることになってしまった。

不運に見舞われた私達は全くなす術もなく、腹立たしさをこらえきれず、口々に「畜生！」「こん畜生め！」「何たることだ」と怒りの声を上げた。それは未

だに捕虜の身から脱し得ない悲痛の叫びでもあった。

愛知県 森藤真一郎

直ちに武装解除され、鉛筆、万年筆、時計等、体に着けている物はすべて取り上げられた。自動小銃の先を背中にあてがわれ「ダワイ、ダワイ（早く歩け）」とどなられ、悲壮な思いであった。

この時に起きたのが将校の虐殺である。股間に銃弾を受け、歩けなくなった見習士官を丸太のように倒し、その上を重戦車のキャタピラーを走らせた。血は吹き出し肉塊は四方に飛散した。ソ連兵はこれ見よがしに「スコラーダモイ、スコラーダモイ、ダワイ、ダワイ」と我々に銃口を向けた、正に地獄の行進である。何としても生き抜くんだという気力を持てたのは、祖国の土を踏み、父母に会いたい一心と、スコラーダモイ、すぐ帰すを信じたことである。皆は黙して語らずである。しかし、このスコラーダモイは、復員船に来るまでだまされ続けた。

ソ連兵器はすべてUSAのマーク入りだった。

愛知県 糸井紀伊

入ソ間もなくのことであったが、收容所長が「時計を皆が持っている」と取られることがあるから、自分が預かる」と言うので、皆差し出したところ、どうも自分の時計に似たのを地方人が持っているようなので、たまたま回つて来た警察官に言ったところ、早速調査の上、所長は八年の刑、その下の者は四年の刑になり、他の三十人余りも皆転属になったという事件があった。

愛媛県 窪田貞良

翌年三月頃、また移動の命令が来た。着いた所は周辺何キロあるか判らない農場、多分ソフホーズであったと思う。馬鈴薯ジャガイモの大小の選別等に就かされた。

ある日昼食の時がやって来た。配給のパン二〇〇グラム位ずつ分け、食べようと皆で喜んでいた時、そこへどこから来たともなしに七、八歳の女の子が前に立ってじっと私のパンを見ているので、私は半分に割ってその女の子に与えた。するとその女の子は何も言わずにパンを食ってしまっただけで帰って行ってしまう。戦友達に、「お前どうしたんだ、ただでさえ足りない物を」と言われて、「前に立って見ていたらお前はどうするんだ」位で話を切った。それから毎日のように僕の前に立って、パンをやらなければ帰らなくなった。足りない空腹は草や野菜の残り物で班内へ帰って足らしていた。それもペーチカが使える季節だけ。これからどうしたものか、只々なるようにしかならない、もう故郷の神様におすがりするしかない、八カ所の神様に手を合わせていました。それから何日か過ぎた日の昼時、女の子が小生の足に抱きつき何か言っただけで泣くので、私は驚き通訳に來てもらった、すると、もう父も母もいない、日本に連れて帰ってくれ。日本に行つて蜜柑を足るほど食べたい等、言葉は分かりにくかったが、親をなくした子の気持ち切々と伝わってきたひとときでした。シベリアであの頃蜜柑の味を知っているとはかなりの家庭の子供だと分かったがどうすることもできず、七、八歳位の女の子を見ると今でも思い出される。

あの女の子とはそれから三日程しか会えなかった、私達はまた移動命令が来たのである。

新潟県 高橋吉郎

昼夜二交代での作業隊であったが、夜間作業が終わると收容所まで送り迎えするトラックが出るのであるが、ソ連の歩哨がつかなくなつてから送り車がなくなかない。疲れているのに空腹をこらえて休憩所で待機し三十分も一時間も待たされることしばしば出てきた。ある朝一時間も送り車が出ないことから皆イライラしていた。筆者は休憩所から出てマッセル(監督)にどうして車が出ないのかと言うと、ワイナブレイン(捕虜)のくせに待っていると、一言二言言い争つ

ているうちに喧嘩となつてしまったのである。小生は拳闘のように突いて来るマッセルの腕を取り背負い投げで投げ飛ばしてしまつた。さあ大変、マッセルはのびてしまい、休憩室のドアが破られ隊員がドヤドヤと出て、火力発電所の従業員と揉み合う騒ぎとなつてしまつた。幸いマッセルは起き上がつてスゴスゴと自分の控への室に入つて行つた。小生は隊員に歩いて帰ろうと言うと、そうだ、そうしようと言つてくれたので、小生が先頭になつて門を出ようとしたところ、カントーラから所長らしい偉い人がヨッポイマーチと悪い言葉で怒鳴り出て来る。地方人の歩哨が小生に銃を向けて来た。小生は撃つて構へた。これを見て所長らしい人は飛び出して来たのだろう。結局、送りの車が出て来て我々は收容所へ帰つたのであつた。その翌日発電所へ行くと、マッセルがラポーチに格下げされて働いていた。ソ連では良いことをするとすぐ昇進し、間違いを犯すと容赦なく降格させられるのである。いずれの企業にも共産党員が労働者となつて働いており、信賞必罰であつた。この発電所の作業で波乱があつたがどうやら問題にならず、六カ月の間これを務め、隊員にも異常なく、交代することになつた。こうして六カ月位で次々と作業が変わつていったのも理由があつたことであらうと思つた。

岐阜県 中島正教

また建築穴掘り作業中、あまり見かけたことのない若い十八歳くらいの兵がいるので、「お前、前からいたのか」と尋ねると、「先日この收容所に連れて来られました」と言う。「そりゃ知らなんだ、随分若いじゃないか」と尋ねると、「私は東京で敗戦の詔勅を聞きました少年志願兵です。父母が羅南に住んでいますので、敗戦と聞いてとるものもとりあえず北鮮までたどり着きました。そこへソ連軍の侵攻ですぐ捕虜になつてしまつて、知らない隊と一緒に連れられて来るうちに、ニコムソリスク第五分所に入れられました。現在隣の隊の者です。本日、少尉殿と一緒にの作業に出ました。またよろしくお願いします」と。これを聞いて、人それぞれだなあ、東京で敗戦を迎え、シベリアに連れてこられるなんて全く不

運な青年だと思ったが、その兵と会ったのはそれきりであった。

静岡県 醍醐重雄

入ソして間もないときのことであるが、ソ連人がほとんどそうであったが、日本兵の腕時計に異常なほどの関心を示した。ソ連人の中には腕に時計の入れ墨をしている者を何人か見た。もちろん腕時計を持っている兵、民間人を見たことがない。監視役のソ連兵が部下の腕時計を「見せてくれ」と外させ、奪って離れて行った。部下は返してくれと追いかけたが返さない。そこで私は「この泥棒野郎め」と叫んで追いかけた。ソ連兵はクルリと振り返り、マンドリンを構え数発発射した。弾は体をかすめる音をさせて飛んでいった。中隊長から帰れと声をかけられ、後ずさりして戻った。千島への航海のことと、九七重のテスト飛行のこと、そしてこのことで三度死に向かったが、その都度死を免れた。人間の生死は運、不運と言われるけれど、この先何が起きるか、一寸先はまさに闇である。

岩手県 五十嵐弥助

私の取調調書にどんな具合に人道に反する行為として記載されていたかは、ロシア語を全く知らない私は知る由もないし読み聞かされてもない。ろくに日常会話もできない立会いの通訳が調書に署名しろと言う。二カ月にわたる長期の拷問で既に体力は限界になっていた。頭がもうろうとなっていた。裁判のとき弁解ができるからと親切げな通訳の言葉に乗って、遂に署名したのが命取りとなり、十一年間の長い間、囚人として酷使される出発点となってしまった。

港を出て間もなく強奪が始まる。人の顔がやっと識別できるほどの暗闇に等しい船底だから彼らのもつてこいの状況である。方々から日本語の悲鳴が聞こえてくる。その方に気を取られていると、あつという間に命の綱の配給を受けたばかりのパンが袋ごと持ち去られる。中にはリュックサックごと盗られ騒ぎ始める者もいる。もう百鬼夜行である。奪った品物は護衛兵の手に、そしてその代償と

してパンと煙草が「やくざ」の手に入ることになるのである。

数の上で多い日本人が、同胞の悲鳴を聞きながら助けることができないほど皆、体の方は参っていた。この無法を訴え助けを求めるすべのない囚人の姿は、話に聞いた奴隷船以上であった。

五日もかかつてウラジオに引き揚げられたときは空腹と疲労でフラフラになっていた。数千人も収容されているといわれるウラジオの満員になっている大監獄に驚嘆し、ハバロフスクの赤れんがの大刑務所に投げ込まれたのは樺太を出てから一カ月もたっていた。

ソ連が進駐と同時に豊原刑務所は直ちに接收され、収監の日本の囚人は全部釈放され、それに代わってソ連製の戦犯容疑者、反ソ的行為者が続々ぶち込まれていた。

私は、戦争もしないソ連から、非戦闘員である者が捕虜になることなど予想していなかったし、ましてや戦犯容疑者として収監されることなど夢想だにもしていなかった。それはソ連を知らない甘い考えだった。

確かに私の働いていた職場は、ソ連がしきりに投入していた潜入謀者を捕らえる元締の警察本部の特高課だったことから、たとえ私のポストが直接には無関係だとはいえ、我が身に容易ならざることがふりかかってくることを感じた。

取調べ

さあそれから私の本格的取調べが始まった。終戦の年の五月上旬、ソ連の米国からの援物資輸送貨物船トランスバルト号が稚内沖合で浮流機雷に触れ沈没した事件があった。乗組員五十余人が海上漂流中、本斗の漁船に救助され本斗の警察署に救護された。

当時戦争の雲行きがあやしくなり、独ソ戦で勝利をおさめたソ連の動きについては極度に警戒していた。既に日ソ中立条約を一方的に破棄通告を受けているし、少なくともソ連を刺激するがごとく取扱いは、絶対にあつてはならぬと

務省から厳達が来ていた。もちろんそれ位のことには百も承知していた我々は、忠実にこれを守り国賓のように取扱ひ、彼等の要望どおり、なげなしの小麦粉を都合して白パンを特製するやら、既に市中には姿を消していた豚肉だ、バターだとかき集め、待遇これつとめ、函館の領事の来島を待つて、遭難十数日後には全員を本斗港沖合でソ連の迎えの船で帰してやった。

その折、私が警察部から派遣された一人として救護の一端を背負ったことが、戦犯ということになったのである。理屈はこうである。

「お前は遭難者の調査に当たつて船員の住所、氏名、家族のこと、船の行動等について聞きただしただろう、それはソ連の国状偵知でスパイだ」というのである。すなわち、ソ連刑法五十八条に抵触するといふのである。遭難者があつたとき、氏名、状況を聞くことは当然のことではないかと言つても、そんなものは通らな

岩手県 鈴木良雄

戦争にあつては、相手を殺さなければ自分が殺される。それも集団による大量の殺し合いである。さらに一般民といえども、今やその外にいることはできない。残虐非道は常套手段であり、勝敗を決するためには一国の総力動員が必要となる。人命、兵器、その他莫大な物量の消耗と破壊を見越してのことであれば、誰であれ事の結果・結末の重大さに意を注ぐ者はなくなり、ただただ勝敗だけに血道をあげるのである。

しかし、勝敗はどうであれ、人命の死に泣く悲哀は双方とも変わりはない。遭族の悲嘆と苦境はこの世の限りである。また物資の損耗は、ともに国民全般の経済におびただしい窮乏をもたらすのである。戦争体験者は、世界中どここの国でも語っている。『戦争ほど馬鹿げたことはない』『愚の骨頂だ』と。

戦後五十年。あのソ連大軍団を前に、砲なく、銃なく、弾もなく、ただ肉迫

して若い血を広野に散らせた多くの戦友たち、また、戦傷と疲労に耐えながら囚われの身となり、地獄にも勝る凍てついた大地で、飢餓と望郷の念にさいなまれながら侵攻の責めを果たし死んでいった同僚たちの白骨が、はるかシベリアの草木にうずもれ、風雨にさらされ、墓標もなく、花一輪、線香一本の慰めもなく風化の一途にゆだねられているのである。

ソ連は、当初、日本軍隊の統率力を見抜き活用した。集団の秩序を維持し、命令系統を保つて強制労働力の実効を図り、その成果によつて、戦後の窮乏にあえぐソ連国内経済の復興と国力増進が最大の急務であつた。そのために、我々の軍隊制度をそのまま存続させ、将校には帯刀を許可して作業の指揮権を与え、下士官・兵は隊伍の中で作業につき、依然、階級・敬称を保持継続させ、毎日の朝礼には宮城を遥拝し、故国の父母・妻子をしのびながらの「海行かば」を高らかに合唱させていたのである。

ノルマ達成の作業成績優秀者に対しては、ソ連側の認定で進級させるという時期があつた。同時に、作業成績の悪いノルマ未達成者には「減飼」と称して食事が減らされる。定量でさえ飢餓のふちにあるのだから、死を招くだけの制度であつた。ソ連流「働かざる者は食うべからず」である。こうした悲惨な処遇に対して、当方の作業隊長がソ連監督将校にたびたび抗議するが、何ら回答を得ることがなかつた。

石川県 山根徳治

戦犯収容所の生活

1. 日本人戦犯約千人はハバロフスクの二カ所に分散して収容されたが、私は二十一分所に配属された。ここには関東軍総司令官だつた山田大将をはじめ、後宮大将、瀬島竜三参謀(富山県出身)等の高官達もいた。将官は六十歳近い人達で本当に気の毒だつた。

2. ソ連側は「サムライ・腹切り」その他、特攻隊のことも良く知っており、日本人を恐れて両手の指紋・メガネを外した写真までも撮った。

3. 作業内容は、建築・道路整備・造船所の雑役等々である。特に寒暖の差が著しいので、建築家屋の基礎部分は、凍って土砂崩れの少ない極寒期に、地下一五〇センチメートル位までを掘ってセメントで固めておかなければならない。この作業はツルハシとスコップで行うのだが、大変な重労働である。

4. そのうち、若い能率の良い者には一カ月に一五〇ルーブル程度の賃金が支払われるようになると、早速黒パンを買って飢えを凌ぐのであった。

5. 昭和二十五年になるとソ連当局は「日本人の送還はすべて完了した」と発表した。我々はどうなるのか。生きたままシベリアの凍土で抹消されて仕舞うのか。もし生きていても四十五年後では七十歳近くになる。気の遠くなる話か私の現実の姿である。すべてを「諦めよ、諦めよ」と我が身に言い聞かせる他に手立てはない。…寂しい…無念である…余りにも残酷である…嗚呼！

(注)軍隊の一年半は幹部候補生、しかも乙種の一兵士に過ぎない。抑留後は四年間「日本人通訳」としてソ連の為に十分働いたではないか。勿論個人として天地神明に誓って非違行為等は一切していない。なぜなんだ！なぜなんだ！私は重大な戦争犯罪人として子々孫々に至るまで全世界に恥を曝らされるのか…そしてこれからの永い人生を、身体の続く限り骨の髄まで搾り取られて末は異国の地に放棄されるのか。世に神仏はあるのか？

6. 日本全土は連合国に占領されて、独立国ではない。ソ連とはもちろん国交もない。そんな時、女性ながら勇氣と捨て身の参議院議員・高良とみ女史がシベリアに乗り込んで来られた。次の日曜日に高良参議院議員が収容所に視察に来るとの情報である。しかし、当日は病人以外は全員を仕事に出して留守であるとして会わせなかった。スターリンはこんな手も使う。高良女史はスイス国際赤十字に提訴された。

7. その後、米国とソ連の冷戦が始まり、連合国は一枚岩でなくなった。そし

て昭和二十七年に日本は独立を回復した。更に加えて二十八年三月には独裁者スターリンが死んだ。かかる情勢の変化が私の帰還を早め、二十八年十二月、辛うじて懐かしい祖国の地に辿り着くことができた。

北海道 工藤清吉

昭和二十年八月終戦。中国東北部の日本軍はソ連軍の武装解除を受けた後、帰還すると信じ込まされて貨車に乗せられて北上し、黒河に着いたのは雪のちらつく頃になっていた。

そして国境の河 黒竜江を渡り、対岸のブラゴエシチェンスクに入ったとたんに、私達はこれまでの扱いは一変した捕虜として屈辱的な待遇を味わわされたのである。

揮も外された全くの素裸にされ、鞭を持ったソ連女にまるで家畜のように追いやられたのだ。捕虜とはいえ、また帝国軍人としての誇りを失ってはいない。それが民間人とおぼしき女にまるで囚人のような仕打ちを受けたことに憤慨したソ連兵に銃剣で威嚇されたよりも、もつとみじめであり、私達が敗戦の兵であることを強く自覚させられたのである。

愛媛県 梅崎文夫

さて、ここで思う事は、シベリア抑留という過去の歴史を風化させてはならない、そのためにも私達体験者が「語り部」となって次の世代の人達に語り継いでゆく責任があると思う次第である。最後に声を大にして若い人達にお願いしたいのは、二度と戦争をしてはならない、平和のために努力しなければならないという事である。

戦争は報われるものはない。そこにあるのは、先の大戦でもはつきりと証明しているごとく、破壊と殺戮、勝つても負けても何の利益もない、あるのは大きな人的資源と莫大な資源を失うだけだということを銘記しなければなら

ないと思うのである。だからこそ戦争をしてはならないと今一度声を大にして叫びたいと思う。

「平和な日本」「平和な世界」を永劫に願う。

愛知県 今井昭治

ある日、パンの配分が終わり、受け取ったパンを自分の寝床の二階に登るために梯子のところに置いて二階に登ろうとした瞬間に、暗闇の中から手が出てきてパンを盗みにかかりましたので、命より大事なパンを盗まれては大変と思って、暗闇の中から出てきた泥棒の手を押さえたが、そのときパンは崩れて私の手に残った。パンは硬い皮の部分が三、四センチぐらいしかありませんでした。白樺の皮に火をつけて下に落ちた。パンくずがないか探しましたが、一片もありませんでした。このときほど、敗戦の情けない作業と淋しさと苦しさを感じたことはありませんでした。このとき年齢十九歳でした。

零下何十度となる極寒のシベリアでは、食べ物は何一つなく、他人の物でも盗んで食べなければ死んでしまうという地獄そのものの生活でした。

栃木県 野沢芳夫

帰国後の反省

戦争では、自分の運命が個人の意志とは全く関係なく決定されてしまう。人生には苦しい事や楽しい事があるが、苦しい事もいつかは思い出になる。皆さんは、青春を犠牲にした者がいた事を忘れずに、思いやりの心で命を大切に次代を担って欲しい。

思い出

時の流れは早く、終戦後六十有余年が過ぎ、不法なシベリア抑留のごとき悲惨な事実もはるかかなたに忘れられようとしている。これでは凍土に散った戦友、遺族に申し訳がなく、二度と悲惨な事にならないよう念願するものです。

今や政府の要人も若返り、抑留など知らない先生方がいる事は誠に残念に思われます。

今このように生活が出来るのも我々抑留者の犠牲があつた事を忘れないで、永遠に学校教育を推進して頂きたいと思います。

さて、終戦も「あつ」という間に、そして武装解除までの間、生死をともにした難苦行の数々。今でこそなつかしい思い出として語り合えるのも——本当に目まぐるしい日夜でした。掖河における戦友の屍、目を覆うばかりの惨状、戦争というものの悲惨さは骨身にしみて感じながら、シベリアの酷寒、栄養失調等、ダワイ、ダワイの毎日でした。帰国して我々の考える事は、戦争は是対に御免だ。あくまでも平和な世の中を作り、若い生命を大陸の地に散華した戦友の分まで働かなくてはならない。

愛知県 水野治一

敗戦から六十余年、あの悪夢のような時代を知った世代が少なくなつた。戦争はいかに愚かで悲惨なことか、今なお世界各地で発生している紛争行為などが止み、一日も早く真の平和が到来することを念願してやみません。

茨城県 梅沢正之進

今の日本人は、戦争に対する考え方が非常に甘いと思う。広島とか長崎、東京、焼けた所の人は感じるかも知れないけど、まだまだ日本の人は、ああ、戦争がなんて考えて、今でも戦争をやつてもいいじゃないかと思つている人がいる。しかし、戦争は絶対だめ。戦争というものは、相手を殺さなかつたら自分が殺されるから。

満州で私は見ましたけど。例えば、あそこに人がいる。あの人は味方が敵かわからない。なら、殺しちゃまえと言わけてすからね。殺しちゃうわけですから。あれ、邪魔だからやっちゃまえ。そういうことです。

戦争をやったら本当に惨めです。人が滅びるだけでございます。戦争は絶対にやっつけてはいけません。そのようにしていただきたいのであります。

(2) 赤のレットル

福岡県 日野治水

いよいよ帰国のため復員船栄豊丸に乗船できたときにはうれしくて涙があふれた。昭和二十四年十一月二十七日ナホトカ出航。

復員船栄豊丸がナホトカ港出航と同時に、赤旗組(共産主義者)と日の丸組(反共者)の対立抗争で船内は大混乱。船長の指示で日の丸組は分離。日の丸組と赤旗組は船室を区分され、舞鶴では別々に下船復員した。

私が舞鶴に上陸したのは十二月四日、復員十二月十一日である。

岩手県 菅原春一

やがて日本船に乗船し舞鶴港に上陸しました。このときの気持ちは口や筆では表せません。そして身体検査や消毒等を受け、一週間ほど米人の検問や検査を無事に終わり列車に乗ることができ、舞鶴で千円のお金を頂戴しました。私は釜石製作所に働いておりましたので、製鉄所職員から「光」煙草一個頂戴いたしました。我が家に落ち着き製鉄所に帰国の挨拶にまいりました。そのとき皆様方から共産党活動はやらないように言われたのです。我が家に帰つて数日後、製鉄所病院で身体検査並びに復職手続き等を行いました。後日通知をするからそれまで自宅で待機するように言われました。数日後、通知書がまいりました。開けて見てびっくりいたしました。身体検査の結果は異常はなかったが、体重が少し減っていただけでした。原因は共産党ということ、復員者全員首切りになりました。

私は十九歳から働いておりましたので少しばかり退職金を頂戴し、その後はシベリア帰りということで就職はできず、村の駐在所から数年間注目されまし

た。また、十八年の召集になったとき耕地を近所の人に貸して出征しました。妻は妻の生家に頼み面倒をみていただきました。そのとき耕地を貸すときの約束に、方が一に無事に帰ったときはいつでもすぐに返してくれる約束でしたが、四年間のシベリア抑留中に農地法という法律ができたので返すことができなかつたことでした。帰国して喜んだのも束の間でした。職を探しても職はなく、山中に入つてまき切りや土工作業で生活をしてまいりました。

岩手県 中島忠治

私がアツ島要員ということ十八人でしたが、北千島に行つたのです。行つて北千島からアツ島へ行くのが行けなかつたので、北千島に残つてしまいました。山崎部隊長の本部要員は全員アツ島に三回目に潜水艦で北千島から行つたのです。私たち部隊はそこに残つてしまつた。そしてソ連と交戦をしたのが、終戦後の八月十八日ごろだつたと思うのですが、北千島の占守島というところが日本の最北端の島なのです。そこに夜、カムチャッカから長距離大砲で北千島に攻撃を受けるわけです。それで私たちは知らないものだから、戦闘準備ということ、コクタンという島へ行つたわけです。そして、ソ連と三日間ばかり戦闘いたしました。その三日間というのはソ連と一戦をしないと後に戻ることができなく、戦争ばかりの三昼夜で、その間に降伏したということがだんだんとわかりまして、この守備兵は竿を立てて上げるということ、命令を聞きながら白旗を上げたのですが、ソ連の兵隊は言うことを聞かなくて、進んで来たのです。そして私たちの小隊も全滅いたしましたし、その間に三回ばかり軍旗というものを発見しまして軍旗を立てて武装解除。将校以下三人ばかり兵隊を連れて、軍曹を派遣したのですが、それでもなお、軍曹も弾にやられて死んでしまいました。そしてついに島の中でございまして下がれとの命令のもとに下がつてきたのですが、占守島の南の端の長崎というところに全部下がれというものだから、退却しながら白旗を上げて言うことを聞かなかつたので、兵器を持って下がつて来たです。

ところがもう隣の島からも応援隊も来ましたが、いくら白旗上げて何とも言うことを聞かなかつたので、仕方なく私たちも上官の命を受けて、射撃してくるものですから、反撃をしたのです。やはりソ連の兵隊も相当犠牲者も出たと思うのですが、そして、したところがソ連でも白旗を上げて、そこで終戦を迎えたわけです。

抑留三年ナホトカで返される

岩手県 菅原義三

ある朝点呼に並びましたところが、これから日本へ帰る者の氏名を今から呼ぶから、その者はこっちの別の方に並ぶように言われまして、その中に私も入りました。よし、これで日本に帰れるということになって大変喜んだわけですが、残った方の中に赤旗といえますか、共産主義といえますか、そういうものの指導者がおりました、やあ菅原、お前も内地へ帰るようになったんだが、もう少し残ってソ連の共産主義というのを勉強していかないか、三か月勉強したらすぐ帰すから、ひとつ勉強していけということと言われました。しかし、一たん日本へ帰すと日本へ帰れる名前を言われまして、帰れる組に入ったわけです。もう矢も盾もたまらないとはこのことでしょう、日本へ帰ることだけがもうそのとき頭にあつたわけです。もうどんな誘いも聞かなかつたでしょう。日本へ帰るといふことで帰る支度を始めたわけです。このことが後でまた大変なことにつながつてくるんですが、そのときはそのときで帰りたい一心で帰り支度をしました。

やがて、汽車に乗りまして、そして帰る方向に汽車が進むわけでございますが、途中タイセットからナホトカの港に着くまでにはイルクーツク、チタ、ハバロフスクという大きな町があるわけです。そういう町に入りますと、汽車も半日か一日ぐらいとまります。そうすると、そういう大きな町にはアクチーブといいますが、そういった方たちがおりまして、我々の帰る汽車に五、六人來まして、そしてあんなたちは日本へ帰つたならば必ず今の政府を打倒して、そして新しい労働者の階級の世の中をつくるんだと、そのようにこれから行って頑張ってもらいたいというようなことを言われるわけです。私たちは何そんなことを、帰つたならばもう昔のようにやるんだ、半ばそういう気持ちでそういうアジる人たちの話をうわの空で聞いておつたわけです。ハバロフスクにはそういう教育をする一つの学校があると聞いておりましたので、ハバロフスクの場合は最も激しくそういうふうなことを聞かされました。私たちは聞かされても内地へ帰るんだからもういいじゃないか、適当にしなさいよというぐらいでナホトカに來たわけです。

ナホトカに着きましてナホトカの駅から、夏の季節の大きな海が見えました。そして、その岸壁には大きな日本の船が着いておりまして、ナホトカには第一分所、第二分所、第三分所とあつたように記憶しますが、第一分所に入つて検査をし、第二分所を通つて第三分所で最後の仕上げをして乗船と、こういうことになるわけです。ちょうど第三分所から乗船する人たちが隊を組んで行くのが見えまして、ああ、あの船に乗つて帰るんだぞと、もうみんな先に乗っているから我々もすぐ乗れるんだという帰国の希望を大きくふくらませて、その収容所に向かつたわけです。

ところが、私たちの入るところは先に降りた人たちとは別な収容所に入りました。何だおかしいな。その収容所はあまり立派な収容所ではなかつたわけです。その中に入れられたわけです。おかしいな、どうしてこんなところに入ったのかな、いや、いっばいだからまずここに入つて、それからだんだんに向こうの方に移つていくんだらうということも言われておつたわけです。ところが、最後尾にきた人たちは、いや、ここに入つたのはまた戻つて作業大隊に行くそうぞという話を聞いてきたと、こういうわけなんです。そんなばかなことがあるものか、もう船も來ているし我々もすぐ乗れるんだということ、その人は長い旅に疲れたから休めということ、何もしないで環境の整備をしてそして休んでおりました。夕飯も食べさせてもらつて、さて一服ということになったところが、その中にやはりナホトカのいろいろ世話をしている人たちが五、六人入つてきたわけです。そうして、

長い間シベリアで働いてご苦労であったと。長い旅を疲れたでしょうと、そこまではよかったです、あななたちはずっとこのシベリアの列車で来る途中に大きな町を通ってきたわけだが、あなたたちの行動をつぶさに観察してきましたが、残念ながらまだまだ共産主義の勉強が足りない。こういうことで日本に帰しては我々の共産主義を日本の国に持つていくことができない。あなたたちのような共産主義に徹底しない方たちは帰すわけにはいかない。あしたまた貨車に乗って奥地に行つてもう少し働いてもらいたいと、こういうことを言われたわけです。

今まで三年間も働いて、そうしてようやくここまでできて、海の見えるところ、そして日本の船があるところまで来て、それを見ながらそしてまたそれに乗る人々たちを見ながら、またもとへ戻つてあのようなつらい労働をしなければならぬかと思つたときには、もうだれも何とも言う人はいませんでした。恐らく、みんなの思いも私の思いと同じだったでしょう。だれかが大きな、ああ、というため息をついた以外にはもうだれも何も言わない。そこそこに毛布をかぶつてみな寝てしまいました。

そうして、翌日にはまたナホトカの駅に行きまして、貨車に乗つて奥地の方に向かいました。そのときは奥地の奥地までは行きませんが、興凱湖の見えるところの草原に行きまして草刈り作業ということだったわけですが、とにかくそれからは、いやどうしてもこれは共産主義を勉強して赤旗の歌、それからインターナショナルの歌、そういったものを歌わなければだめだと、何でも共産主義はいいということにならなければだめだということ、それからは毎日勉強してそして赤旗も歌つたわけです。

その前にどうして我々の梯団がナホトカに着くまでに民主主義の勉強、共産主義の勉強ができない梯団なのかということ、ナホトカに問い合わせたところが、だれとだれが乗っているはずだ。この人たちがリーダーとなつて駅途中途中において共産主義を勉強していつているはずだということが連絡あつたらしいです。その中の一人が私だったわけです。つまりタイセットで後三か月勉強したならば帰

すということ、を振り切つて帰つてきたわけです。ああ、あのとき三か月勉強せよと言われていたが、このことだったのかなあと私はつくづく思いました。それは後の祭りですが、そこで草刈り作業をやつたわけです。それからというもの、毎日赤旗の歌、インターナショナルの歌、あるいは労働者の歌というものを全部歌つて歩いたわけです。そうして、何でもかんでも共産主義万歳などということをやつてきました。

ビラカン民衆運動

ビラカン収容所には七百人余りいると聞いた。そのうち五百人は、元関東軍の特務機関の方ばかりで、その真相を隠すため各自が偽名を使い、また民衆運動も盛んにしていた。

朝は作業に出るまで二時間は当然のこと、夕食後は消灯までみっちり、共産党の勉強でした。それから日曜日等は個人演説等をさせられた。反動分子に対しては全員で総攻撃であつた。もうそのころから寸暇の油断もできなかった。

私たちザビタヤより一緒だった七人は、互いに助け合い励まし合つていた。作業でぐたぐたに疲れても、寝る時間を避けて勉強もした。また率先して行動もした。そのころ暢気にしておれば直ちに吊し上げられ、奥地のラーゲリーに転送させられた。

私たち七人のグループは、表面まじめに勉強もし、民衆歌等も歌つていたが、ある日の午後、昔懐かしい軍歌や、民謡を歌つて楽しんでた。ところが次の日曜日の午後のことである。私たちのグループにたちまち攻撃が始まった。先輩二百名の中で、私たち七名が吊し上げられた。

この七名とは、私と高井という北海道出身の二人は関東軍時代の二年兵で、あとの五人はいずれも初年兵でした。いつも私たち二人をまるで兄のように慕つてくれていた。だから私たちも弟のようにしてきたが、ここでこんな不幸な出来事に合うとは、夢にも思つていなかった。もう間近に帰れるというのに、反動分子として奥地に転送されては、と思つと身の毛がよだつ思い、そのときだった。

ふとB子さんのことを思い出した。ヨシどんなことになるうとも、この苦難を突破するぞと、力づいた。

向こう側の二百名の者は誰一人として、助け舟を出す者はいない、思想や主義においては血も涙もない、反動分子と思えば何の容赦もなく、徹底的に突いてくる。

最初私が壇上に呼び出された。私は壇上に登ると直ちに土下座して、同志諸君なるほど同志諸君のいうとおりだ、私たちの民主主義に対する勉強が足りない、また日も浅い、同志諸君、私たちをもっと、もっと鍛えてくれ、私たちも同志諸君と同じ身分だ、(ここでは内地という言葉は使えない)やがて日本に上陸(帰国)したときは、労働者農民を一人でも多く味方にして、二度と再び戦争の起きない、平和な国造りに邁進しなければならぬ、そのためには同志の祖国ソ連において、我々を少しでも指導してくれ、頼む、私も農民だと言うと、向う側の一人が寄つて来て(それでは稲の刈り取り操作を説明せよ)。私はしめたと思いい、手まね足まねで論じたところ、その同志は手を叩いてくれた。すると次々と全員で拍手喝采となった。その時同志の一人が飛んできて握手を求めてきた。今日から同志として頑張ろうと、私もうれしい余り力一杯握り返した。やれやれ私は同志として仲間入りできたが、あとの者も皆無事この難関を突破してくれと祈った。

次々と一人ずつ出では土下座した。こんなばかきさいまた阿呆らしいことはなかったが、生きて帰れるためなら仕方がなかった。日本人同志で本当に悔しかった。そして最後の一人高井君の番となった。

高井君も許してくれ同志諸君と、残念だろうが土下座して平謝すれば、それで終わってしまっただろうに、高井君は見るに見兼ねて、到頭堪忍袋の緒を切ってしまった。

「君たち何が同志だ、たとえ戦争に敗れたとはいえ、大日本帝国軍人たる者がソ連の手先となつて、民主主義、民主主義とは何事だ、貴さまたちのような

者がいたから戦争が敗けたのだ。

私は元陸軍憲兵兵長高井である。まだ君たちの様に赤に化かされはしないぞ」と真赤な顔で怒鳴りつけた。さあ大変なことになった。全員の矢玉は高井君に集中した。こうなつては助ける方法もなかった。異国においては憲兵、警察、特務機関等の前歴のある者は、まるで仇のような取り扱ひだった。だから皆前歴を隠すために偽名まで使い、またきびしい民衆運動も一つの偽装だった。ここにおいて高井君は自分から名のり出たから、始末に負えなかった。

攻撃はまだ続いたが、高井君は最後まで自分の信念を通した。本当に立派な帝国軍人だった。ただし残念なことに翌日某収容所に輸送されてしまった。生涯忘れれることのできない。私の最も信頼する同志だった。御多幸を祈る。

静岡県 溝口平二郎

シベリア帰りは恐ろしい人たち

今度は就職して生活費を得なくてはならないので、就職口を探し回った。その矢先、私の新宅の隣に掛川市立病院が新設されることを知り、早速掛川市役所に赴き、シベリア帰りの事情を説明した上、食うに事欠くので事務員でもまた掃除夫でもよいから新病院で働かせてくれと懇願した。受け付けた市民課は一応引き受けて履歴書を受け取った。その後市立病院の建築完成近くなつて、新規採用の勤務員決定の公報が発表された。しかし私の名前はない。私には採否の何らの通告もなく捨てられていたことが判明した。

シベリア帰りでどんな赤い思想に変心しているか知らない者は危険人物として除外したということが本当らしい。そのときつくづく、シベリア帰りの民主運動家たちが播いた悪種の被害を受けて困り切つてるところへ、更に長期抑留者がやつて来たので、こやつはさらに一層真つ赤に磨き上げられた極左革命闘士であろうと内心思い込んで警戒していたのであろう、と気づいた次第です。

警察官も私を疑つていた

私が自宅へ戻っていると、間もなく私服の刑事が二人私を訪ねてきた。私は先手を打って「あなた方刑事さんが私の家へ来られた真の目的を私から申し上げてみよう。あなた方は市役所から通報を受けて来られたのですね。私をシベリア帰り、即ち共産社会主義思想に洗脳された悪人ではないかと思つて職務上監察に來られたのでしょう」と申し上げたところ、彼ら刑事は驚いた表情で「全くそのとおりです」と告白しました。

最初から絶対的に反共反ソで押し通した連中。それと洗脳運動家から見て邪魔になる憲兵、警察官、軍の参謀級、満州国協和会幹部、鉄道局長、その他官公庁の長官など、反共分子として最初からソ連官憲に通報して科刑せしめられた連中、この人たちは有無を言わず全員がソ連国内法で二十年、二十五年という恐るべき刑を科せられ、ラーゲリ(強制労働収容所)に投獄され、長期にわたつて強制された人たちです。即ち十一年、十二年後にかろうじて生還した人たち、この人たちは帰国後「朔北会」という親睦会を結成しています。

広島県 増田敬三

地元の会社が運転手に雇おうとの話が進んだが、この話は二件ともが土壇場で壊れてしまった。私がシベリア帰りというのが壊れた原因である。帰つてきてしばらくして町民集會が開かれた。集まつた人たちが壇上で意見を述べるといふ、当時の風潮に沿つた集會だった。浴衣姿で出かけた私は、シベリアから帰つてきたことを知つてもらふにはいい機会と思つて演壇に立つた。よく帰つてきたと客席のあちこちから拍手や歓声が上がリ、私もうれしくなつて壇上から、内容は忘れたが、大演説をぶつた。

これがよくなかつたらしい。就職が決まりかけていた二つの会社から、世話をしてくれた人を通して考え直させてほしいと言つてきた。このように社会復帰がなかなかままならず過ぎすうちにもインフレは進み、子供の成長などもあつて、我が家のたんすは空っぽになつてしまった。

列車が下関に滑り込んだとき、父がわざわざ迎えにきており、目と目でお互いの気持ちを分かり合つていた。

やがて父に対し、共産党に入党することを申し合せているがと切り出した。父は「入党はいつでもできる。家に帰り、ゆっくり考えてからでいいではないか。皆首を長くして待つているぞ」と言う。父の言葉に従い松橋駅に降りると、懐かしい友、町内の人が出迎えてくれ、お互いの無事を喜び合つた。ソ連で死んだという噂が流れており、幽霊ではないかと冷やかされた。

家に着くと、「ご苦労さんでした」と入れかわり立ちかわり来訪、中でも面識もない共産党のオルグが訪ねて來たのには、面食らうと同時に、やつてるなど思つた。

父から諭されたように、社会情勢は大きく変わつていた。ちょうどレッドパージの嵐が吹き荒れ、職探しもままならなかつた。集団入党という申し合わせには反するが、入党を断念した。父の忠告に従つてよかつたと思つている。

滋賀県 小西信太郎

帰省後、警察官の試験を受験した結果、合格したはずの結果がソ連帰りとのことで思想的に警戒され不採用で、今更ながらソ連抑留の後遺症がつきまとい、情けなかつた。

岐阜県 小栗晴美

昭和二十四年九月初め、帰国命令によりハバロフスク、ナホトカ経由舞鶴に九月二十四日ごろ上陸、帰国した。

帰国後、一番困つたのは、赤のレッテルをはられて就職できずに苦勞をしたことだ。

熊本県 畠田 完

岐阜県 吉村昭春

帰国後、知人の紹介で、ある有力会社に採用が内定しておりました。履歴書を持参、面接に行きますと、シベリア帰りとの理由で不採用になりました。思わず「バカヤロウ」と叫びたくなりましたが、思い直して町のあつせんで開拓地へ入り、農業、そして今は事業を始めて三十年、お蔭さまで成功いたしました。神様はやはり我々に味方をしてくれたと感謝しております。

和歌山県 山本富三

この機会に述べておきたいのは、その当時のソ連領での四年間の過酷な抑留生活に加えて、帰国後の私たちを、ソ連抑留者であったというだけで就職させない社会的偏見など、昭和二十五年以後も敗戦の重い後遺症として私たちの生活にのしかかって苦しめ続けられた。組の臨時雇、酒造会社へ、また清涼飲料水製造販売自営、次いで同業三社合併会社設立、四十七年三月解散、個人販売と兼業。繊維加工業、これも製造業打ち切り、また清涼飲料水自動販売機による営業を始めて今日に至っているが、帰還後の生活もまた「有為転変」であった。

舞鶴に上陸し故郷に帰った時点でシベリアでの労苦の終結としかつたが、その後の祖国での生活の厳しさは、戦後のことだから皆苦しさは同じだという意味で忘れ去られた。過去の世界史に前例のない、戦後のソ連強制抑留についての国民的理解が必要であると思う。

新潟県 高橋吉郎

昭和二十四年、私が舞鶴へ上陸して帰還者名簿を見たところ、自分の氏名の頭に赤丸がついていた。これは日の丸組の密告によるものと思われた。赤旗組と日の丸組とは、帰還船の中で要求貫徹と称して上陸拒否をしていた赤旗組と日の丸組とで意見の対立からもみあい、日の丸組はさつさと単独行動をして上陸

してしまつたのである。彼等の中のだけれが、作業責任者をやっていた私を共産主義者として引揚援護局の係官に密告したと見受けられた。私は日の丸組でも赤旗組でもなく、中立的立場に立つており、援護局の指示に従つて上陸したのであつた。赤丸がついていたのは責任的立場にあつた者として印がついているのだらうと別に気にもしていなかつた。ところが帰還列車の中で、あとで分かつたのであるが、私に隣席して監視の警察官が私服で同席していた。抑留中は作業責任者であつたからであらうと思つていた。

足掛け七年も軍隊、シベリア抑留と国家の為に奉公したことで、村の人達も出征する際のように大勢出迎えに来てくれて、全く有り難いことだと感謝した。生家の門をくぐり、今帰つたと老婆となつた母親の胸に手をやると、親戚や村人達は皆涙を流して喜んでくれた。一カ月程生家で休養を取つて親戚などに挨拶まわりをして、復職の手続きなどで県庁に出頭したところ、いきなり「良い所があつたらそちへ行つて欲しい」と言われたことで啞然とするばかりであつた。これはどうしたことかと思つたが、頭を下げてよろしくお願ひしますと言つて復職をお願ひした。その時、これはやはり舞鶴で上陸者名簿の頭に赤丸がついていたので共産主義者と見られていたと直感し、これは復職しても監視されるであらうと思つていた。同僚や先輩達は長年の苦勞をねぎらつて親切であつたが、しかし上司は赤丸のことを問題視しているようで、注意人物と見ているようであつた。

滋賀県 清水誠之助

ようやく着いた舞鶴で三日間の間に米軍の日本人二世の将校のMPに質問を何回もされて、私の人間が変わつた。ラーゲル内のことにはよく知つていた。民主運動には積極的でなく主計の仕事を一途にして来た者であつたが、質問者の問い「帰つたら共産党に入りますか」に、はつきり「はい、入ります」と答えた。「ハツキリしてますね」と二世は言つていた。

舞鶴で頭に来て言ったことは、以後、性分として嘘はつけない。翌年入党するが、何かと影響することは言うまでもない。一カ月休養して十一月、電車区に復職。労組の委員になり、運転士会の会長になった。当局は脱党を勧めるが、受けてにレッドバジーを受け取る。三年間法廷闘争を続け仲裁和解をするが、再就職はない。

レッドバジー後、政令違反容疑等でパクられ、ガサを何回も受け、永い間警察の尾行を受けていた。山に行っても川に釣りに行っても、少し離れて警官が上下に釣りをしていた。

北海道 佐々木佳明

入社を期待してこれら会社の面接に赴いた。しかし舞鶴に上陸の際、赤旗を掲げ、敵前上陸の気構えで帰って来た我々を、これらの企業は一樣にソ連からの引揚者を赤化と敬遠しているので就職活動には大きな壁であった。

函館に立ち寄り日本共産党に仮入党の挨拶に赴いた事もあり、苫小牧の日本共産党の党員から、早く正規の入党の手続きをするように催促された。また、「ソ連から復員した同志を囲む会」に招かれた。

身につけた思想問題や就職活動等々、身の振り方をじっくり考える必要があり、しばらく勇払郡追分町のある知人宅に身を寄せ、二カ月余り知人宅の家事を手伝いながら、充電期間を持ち、じっくりと今後の身の振り方、いかに対処すべきか模索した。

昭和二十四年の暮れ頃になり北海道庁から再就職の内定が届き、企業への就職は完全に断念し、地方公務員の途に進むことを決意した。

福島県 小平里美

復員した昭和二十四年末頃は外地に在住していた数百万人の帰国もほぼ終わり、戦後の復興もようやく軌道に乗りつつあり、ソ連引揚者と言うと「赤」と

決めつけられ就職も思うに任せず色々苦勞の連続であった。

富山県 中葉正義

軍隊及び抑留と五年間も空白があり、皆は職に就きましたが、私は赤呼ばわりで大会社へ就職できず、いつも中小企業または請負業者の労働でした。しかし、ソ連で鍛えた寒さに打ちかつ精神力、忍耐力、また食料不足を身をもって知り、食物のありがたさを特に痛感いたし、また何事にも創意工夫をこらす生活には自信を持ちました。

京都府 畑本勝

昭和二十四年九月一日、明優丸に乗船、待ちに待った引き揚げの途につく。

私は和歌山県出身ですので昭和二十四年九月に郷里に引き揚げて、翌二十五年春に現住所にきましたが、あまり知人もなく就職も思うようありませんでした。あるとき、やっと近接の市役所に勤められるように決まりかけておりましたが、決定間際になつてから、シベリアから帰つた者は思想的に好ましくないとのことで駄目になり、その後色々職を変えているうちに昭和三十年半ばに肺結核になり大手術六回、術後、身体障害者となりましたが、なんとか元気で今現在を過ごさせていただいております。

京都府 野村喜与四

どんな社会でも起こる差別の問題や、まだ兵隊の階級をちらつかせる兵や、収容されている兵隊のこれからの処遇について一切不明、そんな先に対する精神的な重圧が体調不良を起す。現在のストレス、当時こんな言葉は使われなかった。

昭和二十五年、帰国(ダモイ)だと言われ、尾形部長達と十余人の日本人と一緒にこの地を後にしたのは四月初旬の雪解けの季だった。例のストリューピン列車に入れられて、長い日数をかけてハバロフスクのラーゲリに収容され、初めて日本人だけの暮らしとなったのである。そこには三〇〇〇人くらいの日本人が集まっていたろうか、私達が到着して数日後、一〇〇〇人くらいは確かに帰国梯団になって出発したが、私達戦犯者は残留組となる。間もなくイズベスチャ紙に「日本人捕虜の帰国は完了した。残余はソ国に対して重大な犯罪行為を犯した戦犯だけである」と発表された。朝鮮戦争勃発も続いて聞いた。残された私達二五〇〇人の戦犯は、さらに五年の間、ハバロフスクで

過酷な労働にさいなまれなければならなかったのである。

「ダモイ」

昭和三十年十二月二十五日、救い出されてソ連からの第五次引揚者の一人になって舞鶴に上陸した。毎晩のように夢に見た日本の山、川、あんなに美しいと思ったことはなかった。

舞鶴に上陸したとき、外務省の係員に、「あなたは、まだ樺太庁警部の地位は継続しているが、引揚げと同時に退職してもらうことになっている」と説明を受け、指示どおり、その場で外務大臣重光葵宛に辞職願を書いたけれども、いわば国の犠牲になったのだから復職は容易だろうと軽く考えていた。

樺太は、東条内閣時代の行政改革により、内務省管下になり、内地並みの行政組織の形になったが、実質は拓務省管下時代のままの権限行使が経過規程としてとられていた。即ち警察の活動は、長官を頂点とし、その具体的指揮は警察部長であり、我々はその手足、否指先に過ぎなかったのである。

もしも警察の活動が、ソ連の言うごとく資本主義援助の犯罪行為とするならば、その根源を追究しないのは常識ではちよつと判断しかねた。

しよせんソ連の戦犯は、まことにいかげんなものであった。

帰国後の生活

満電社員は郵便局に勤務していたが、尾道、三原、福山の局は満員で、二年の遅れは職場がなくなっていた。一般の仕事場はソ連帰りは赤だといって受け入れてもらえず。加藤海運の沖仲士になったり日雇い人夫になったり、個人事業をやつて失敗したり、職数はどんなにこなしたかわかりません。そのために年金は国民年金しかなく、今は仕事をしていませんが、仕事がなくなったら生きられないと心配しながら七十七歳を迎えています。

新潟県 高橋吉郎

しかし残念なことには、舞鶴に上陸寸前、赤旗組と日の丸組とが要求貫徹と称して船中でもみ合い、自分は中立で甲板に出て祖国の山々を眺めて船倉に下りて見ると、思い出の飯ごうと水筒がさつさと上陸した日の丸組と思われる者に持ち去られてしまったことであつた。また、日の丸組と思われる者が先に上陸して、自分を密告したと思われるのであつた。それは引揚者名簿の氏名の頭に赤丸がついていたことである。自分は共產主義には批判的であつた。軍隊に階級がなく、自分は作業責任者をソ連から命ぜられて長くやってきた関係から、赤旗組と対立する日の丸組の仕業と考えられるのであつた。日の丸組は若い将校が主導者であつたが、この赤丸によつて、帰還列車の中で私服の警察官が隣席しており、自分を監視していたことがわかつたのである。また警察官に復職しても思想的注意人物として見られていたのであつた。

四年二カ月という長い抑留生活を祖国のためにしたのであつた。舞鶴の上陸者名簿の氏名の頭に赤丸がついており、別に気にもとめていなかったが、帰還列車に乗車したところ自分の隣の座席に私服の警察官が乗車しており、明らかに監視していることがわかつた。故郷へ帰り復職のため県庁に出頭したところ、係

広島県 平本直行

官から「よいところがあったらそちらへ行ってほしい」と言われ啞然とした。しかし自分はよいところはありませんからよろしくお願いしますと頭を下げてお願いして復職させてもらったのである。もう年齢も三十三歳になろうとしており、足かけ七年の空白となっている。憲法も法律も改正されて新任からやり直しである。

昭和二十五年一月から二月末日までの二カ月間現任教養を受けて、出征当時の部署に配置されたのであった。自分は国家地方警察で新潟地区警察署に配置され警察係を命ぜられ、主として庶務の仕事だったのであった。やはり舞鶴での引揚者名簿の頭に赤丸がつけられた関係から、試験的に見たのであった。

警察官拝命して一年で軍隊へ二年、シベリア抑留四年二カ月、足かけ七年の空白は大きな犠牲であった。警察官に復職しても下積みで自分のせがれのような後輩に敬礼をしなければならず、屈辱的なことばかりであった。

昭和二十四年十一月下旬頃、待望のダモイが発表され、帰還者名簿に載り、晩秋のシベリア鉄道の貨車でナホトカ港に到着して、帰還船「栄豊丸」七千トンに乗船して舞鶴港に上陸したのである。しかし栄豊丸の中で赤旗組と日の丸梯団と称するものと対立抗争事件を起こし、赤旗組は要求貫徹と称して上陸拒否をしていた。日の丸梯団は自分勝手にさつさと上陸してしまった。中立の立場をとった筆者は当局の指示を待っていた。甲板の上に出て御指導をいただいた帝大出身の方々にお礼の挨拶をして船倉に下りてみると、天皇陛下下の一類兵器であるとした飯盒や水筒、後生大事としていたものが紛失している。日の丸組の仕業であると怒りを覚えた。結局赤旗組と昭和二十四年十二月四日上陸したのであるが、上陸して何気なく名簿を見たところ、名前の上に赤丸がついていた。この時は別に気にも止めていなかったが、後で舞鶴駅から生家に帰る列車の中で、隣の座席に明らかに小生を監視に警察官らしい人が座っているのであった。終始無言でいたが、我々帰還者の一人が突然立ち上がり、我々は赤い糸でつながって

いるのであると演説を始めた。赤旗組だと思った。次にこれを制止するように小生が、上陸してみると日本新聞の記事とは明らかに相違しているようである、まず肉親のもとへ帰って温かい懐に抱かれ、状況を見て行動すべきである、と演説した。

約一カ月静養して、翌年昭和二十五年一月、県庁に復職の挨拶に赴いたところ、良い所があったらそちらへ行ってほしいと言われたのである。ねぎらいの言葉とてなかった。これはどうしたことかとあ然とするばかりであった。やっぱり舞鶴の引揚者名簿の赤丸がたたっていたのである。誤解も甚だしいと思ったが頭を下げて復職をお願いしたのである。舞鶴で上陸拒否した赤旗組と日の丸梯団との抗争で新聞などにも出たそうであるが、帰還者名簿の頭に赤丸がついていたことで注意人物と見られてしまい、帰還列車の中でも後で分かったが稲田警部補が監視して同席しており、共産党の同調者と見られてしまっていたのである。

復職しても事ごとに色目で見られていた。足かけ七年の空白もあり、現任教育が二カ月あったが、教室が暖かいのと気候が変わり、教官の話が子守歌のように聞こえて眠気がさし、とても耐えられなかった。現任教育が終わり国家地方警察新潟地区警察署に配置となり警察係を命ぜられたので、ただ黙々として任務忠実に励んだおかげで署長に真面目さを認められたが、ソ連帰りで赤丸がたり、署員には色目で見られているような気がしてならなかったのである。あの鳥が先になり監督者になつて号令をかけられ、後輩に頭が上がらなかつた。自分の弟のような若輩に敬礼をしなければならず、国のために長い間苦闘屈辱を受け、九死に一生を得て帰つて来ても何ら恩典を受けず、下積み生活で馬鹿馬鹿しい毎日であった。警察教修所を三位も下がらずに卒業し、召集を受けず、また終戦後すぐ復職した者は監督者になつて幅をきかせているのである。しかしシベリアの凍土に裸にされて永眠せしめられた戦友のことを思えば喜ばなければならぬと心の中で決意し、任務の本分に尽くさなければならぬと専心し

たのである。

鳥取県 谷口富治

帰還して幾日か過ぎ、何もすることなく、ぼんやりとしているある日、新聞で名前を見たといつて、以前満州で同じ部隊の先輩が、米子からはるばると訪ねてきてくれた。彼は運よく捕虜にはならず帰っていた。そして、私に復職を勧めてくれた。復員して一カ月以内に、元の職場に出向き、復職の意志を申し出れば、復職できると教えてくれた。まだ働くという気分ではなかったが、以前の職場米子車掌区まで出頭する。来て見れば、昔懐かしい者たちが大勢いたが、何か白々しい雰囲気を感じた。助役に会って、幅員したことと、復職を希望することを告げると、車掌区も復員者でいっぱいだから、近くの駅にしないか、ということ、用瀬駅に再就職することとなった。

駅の勤務もなれて来る。そして労働運動も次第に高まるにつれ、シベリア帰りは特別視されていたようであった。レッドページが叫ばれた頃は、職場を追い出されるのではと不安の毎日であった。でも定年退職の日まで勤めは続いたが、レツテルは貼られたままだった。

高知県 東山林

村役場や知人や先輩を通して仕事を探しましたが、自分の意とする職業はなかなか見つかりません。ことに警察は、私をソ連帰りの赤という烙印のもとに、駐在所に私の上半身の写真が保管されており、駐在官が変わるたびに(家庭訪問をして)状況調査をするということが十年以上も続いて、差別を受けていたのです。

このような状況の下で、どうにか職を得たのは、農林省高知食糧事務所です。

時に、年齢、三十三、当時、六三制の高校を卒業し、国家公務員の試験に合格

し二十歳前後で採用され入所していた人達の資格は、既に農林技官として係長クラス、私の場合は(雇)として、給料は技官の半額にも届かない程度、三年経過しても給料は上がりませんでしたから、庶務係長にその理由を問いただしたところ、書類を見ながら、「君は、高等小学校卒業ですからネー」という返答しかありませんでした。

愛知県 堀内俊彦

私も、抑留者に読ませるためにソ連で発行していた「日本新聞」が、昭和二十三年ころから回し読みされるようになってから、日米関係や日本国内の動向をソ連の見方で知るようになり、「日本新聞」や「パロフスク」で民主運動のリーダー教育を受けた人たちによって、「マルクス・レーニン主義」とか「弁証法的唯物論」といった言葉を知り、天皇制反対教育を受けたり、反動分子の吊るし上げに参加したこともあったが、私が過ごした最初の収容所で既に軍隊組織はなくなり、次々と移動するたびに知り合った人たちと別れ別れになったので、このような民主運動が起こっても周囲の人を意識することなく、適当に参加していた。

しかしながら、上記の風潮によって、復員後の就職には大いに支障を来した。ソ連から無事帰還したものの、栄養失調で体重は五十キログラムもないほどになつており、日鉄鉱業は終戦とともに解雇され、父が頼んでいた三井倉庫への就職も決まる様子がないので、就職先が決まるまで晒工場を手伝うということで、昭和二十四年十一月から兵庫県印南郡(現高砂市)米田町古新の晒工場での生活が始まった。

私が引き揚げてきてから古新にいる間も、父は三井倉庫をはじめ東洋棉花、大正海上、住友倉庫といった、いわゆる一流会社の知人に就職を依頼してくれていたが、新卒でなければ駄目とか、思想とか家庭事情を保証する人が必要とか、私の何気ない返事が面接者に不快感を与えたとか、いろんな理由で採用を拒否された。が、その根底には、この年にソ連引揚者の共産党集団入党、三鷹

事件、松川事件などがあり、ソ連帰りⅡ赤Ⅱ組合活動という経営者の警戒心があったのだと思う。

私がソ連からの引揚者であることは上司、同僚にも一切話をしなかった。一時、職場の組合委員に選ばれたことがあったり、安保改定や反戦運動で組合の活動が活発だったときに総務の仕事をしていたが、組合活動には全く関与しなかった。

抑留の労苦について語るようになったのは定年退職になってからである。

岩手県 鈴木良雄

苦衷をまぎらすのは、同僚たちが編み出す手工作である。もちろん、物交のためのもので深刻な目的ではあったが、創造するという行為の中に、春風のようなるおいもあつたのである。手工に必要とする器具一つ、資材一つない原始的な環境でのこと、自らの工夫と努力と執念こそが極致の業を生み出す力であれば、寸暇をいとわぬ熱中ぶりは、涙ぐましい一種の青春劇である。

釘一本見当たらない所では、太い番線の切れ端なども貴重なもので、この先端をたたいて平たくして研いで刃をつければ小さなノミ、彫刻刀に使える。鉄板の切れ端を研いで小刀を作る。拾った古ヤスリで廃品になった鋸を目立てし直し、小細工用の鋸を作る。針金を手入れして編棒を作るなど、種々雑多、多様な多忙なものであった。

特にこれといった工具もなく、また経験もない者が、どんな方法と手段で指輪を作るのか、こちらは金属に対して古ヤスリ一丁の作と言うべきであろうか。その出来栄は、デパートの陳列品にも劣らぬ絶品で、みな驚嘆するほどのものであった。

次々と研究開発される。シャフトの砲金部品を見つけ、自動車修理工場で輪切り切断を願う。仕上げの段階で、ダイヤ、ハート型の浮き彫りと、先を抜く絶妙な細工師も出て来る始末で、当初は金製品と偽り、ソ連マダムの好評を博し

た高価な取り引きもなされた。

ネックレス、ブローチにしても、同じ花型、ハート型とデザインもさまざまで、更に彫りを施すから実に本職顔負けの逸品ぞろいで、細工は流々仕上げを御覧じろである。

もちろん、その職に通じた職柄の人もいたことであろうが、細工の腕前のほど、巧妙なる能力には、常にソ連人の驚嘆するところであった。

秋の夜長に入ったころ、夕食後の舎内をのぞくとランプの明かりで編み物が大量に流行であった。

このようにして、編み物製品は物々交換品として抑留者の体力作り、命の糧として役立つたのである。

北海道 長尾忠也

二十四年七月、ナホトカ港から引揚船「明優丸」で舞鶴港に帰還した。舞鶴ではアメリカ兵の二世に取調べを受けた。ソ連の軍事基地や、ソ連での教育の内容等であった。日本の警察官が便所に行く時も付き添っていた。それほど思想犯罪者として取り扱われていた。私はその警察官に対して「逃げませんから大丈夫ですよ」と言うと、彼も「これが私の仕事ですよ」と言う。この舞鶴で二カ月間監禁された。舞鶴から出身地の弘前市の郊外に帰還した。父親は我が子の帰るのを楽しみにしていた様であったが、親子で面会することなく、二カ月前に死亡していた。これが何よりも淋しかった。帰還したらすぐに訪れた人がいた。「日本共産党弘前地区委員会です」「是非共産党に入党して下さい」との誘いがあった。聞くところによると、ソ連からの連絡でリーダーとしての名簿があるのだと言う。それには啞然とした。

さて、軍隊生活や抑留と空白が続いて、出遅れた戦後社会での生活基盤作りについて述べてみたい。帰還後、田舎に帰り早速就職を求めに職業安定所に通った。安定所の就職係官が履歴書の卒業学校を見て、満州国立開拓指導員訓

練所農学部ですねと言う。「はい」と答えた。当時引揚げて来てから、外務省に出向いて卒業証明書を受領していた。

そこで、青森県農業協同組合連合会を推せんしてくれた。早速面接におもむいた。当時の連合会の係員の面接官から「あなたは今何の政党を支持しますか」との問いに対して、私は即座に「日本共産党です」と答えた。農村社会、特に青森県は保守党であった。その事を考えずに答えた事が失敗だった。その時は帰還して間もない時でもあり、ソ連時代の学習訓練がまだ体、脳裏から離れていなかった。

いつの時代でも教育の果たす役割が人間の価値判断を変える条件になるものだと感じた。

静岡県 飯島 久

昭和二十三年六月、政界を揺るがす昭和電工疑獄という事件が起こりました。政府系の融資機関、復興金融公庫の融資に対し、有力な政治家が絡んだ大事件でした。結果として復興金融公庫が閉鎖されることとなったのです。勤めていた会社はまだ創業開始して間もなく、思想は高かったものの財力はなく、政府の融資がなくなつては、ひとたまりもありません。たちまち倒産、私は職を失いました。地元の大事件でした。

たまたま清水にアメリカ資本の石油精製会社ができることになり、時計会社の同僚が紹介してくれました。親戚に石油会社に土地を提供したりして、その会社に有力な知り合いがいる人がいる。自分もそこへ行く。府立工芸なら立派なものだ。文句なしに入れると叔父さんも言ってる。と誘ってくれました。喜んで応募したのですが、人事部でも問題なく採用が決まり、上司の決済をしてもらう段階になってアメリカ筋からクレームがついたそうです。シベリア帰りは赤化された思想を持っていて危険である。採用できないと断られたそうです。憤然としましたが、相手がアメリカ人ではどうにもなりません。長い間、シベリアで苦勞し

て苦勞様でした、表ではそう言うものの、内心では危険だと警戒されていたのは世の風潮でもあったのです。

(3) 赤裸々の人間性

和歌山県 土井 昇

唯一の楽しみは、翌日用としてパンが渡される。二キロくらいパンを十二に切つて分配する。そばで見ている、これが大きい、これが少ないと苦情がでる。抽せんしていても不服がある。やがて天秤棒をつくつていちいち秤り分ける。それでもパンの囲いが乾いていて、軽くて得たというような意見まで出る。

翌日分のパンだから、自分の枕もとに布袋に入れてつり下げておくが、そのパンが夜のうちに紛失してしまう。人に食べられるなら今のうちに腹に入れておけば心配ないと、翌日の空腹を心配しながら、ほとんどの人が食べてしまうという悪条件が続く。

人間だ、上官だ、いや親友だといつても、いよいよ食糧がなくなると、犬や猫と変わりない。自分の欲望のおもむくままとなり、ことわざどおり衣食住足りて礼節を知るといふ意味が痛いほどよくわかる。

和歌山県 南口 佐一

空腹のために、泥んこのように眠るのは束の間で、すぐに目覚めてしまう。それも夜昼なしの現象で、生活そのものが悪循環であるため、次第に体力が消耗していった。まことにひどい事実の話になるが、餓鬼道の極限ともいべき人間の哀れな行動として、道端で死んだ猫を持ち帰つて料理し、内臓の一切れも残さず食べるのである。野ネズミなどは上食であった。

みじめで哀れな姿はまだまだある。昔日本にもいたことのあるレンペン以上の行動を実際にやって、食べ物となりそうなものをすべてをあさり歩く。よろよろとした弱り切った自分たち同僚の姿、このようなことを今の時代の人たちは本当に

信ずるだろうか。今から四十年前まであったソ連領内における日本人捕虜たちの姿であることを、私は事実であることを証言する者だ。

和歌山県 木下 正夫

飢えるということの、集団生活の中での人間の餓鬼道ほど怖いものはない。汚れた根性があらわとなり、戦友であるということすら忘れて、畜生道そのままの姿となるものだ。これ以来、平等に分配するために私製の計量器をつくり、刻み煙草の葉などはクジで分けることになった。ソ連という国はさすがに労働の国で、スローガンどおり「働かざれば食うべからず」を思い知らされた感もある。

高知県 東山 林

ハラゴン抑留当時の食物の量は、主食の黒パンが桃印燐寸小箱程度の大きさのものが一個に、スープは飯盒のふたに八分目、これが一食分であった。パンを配分するときは、パンの側(耳)の方は堅くて重く、中の方はやわらかくて軽いから、自前の天秤計りをつくり、両方に乗せて水平になるようにし、隊員総監視の中で行われた。スープには器の底に大豆やグリーンピースが沈んでいるから、金網を使って別の容器に移し、金網の上に乗っているものを五個、六個と数えながら平等に分配した後、汁を分けた。将校、下士官、兵を問わず、人間の動物的本性をむきだしにしたのがこのときである。

岐阜県 西尾 正男

私の紹介したいと思うことは、作業隊指導員、名前を忘れましたのでナチャアニックと呼んでおきます。我々作業隊員一同は苦しい中にもこのナチャアニックとの出会いによりせめてもの救いの女神であった。私と同じ年ころの三十四、五歳前後で、背は高く、やせ型、無口で愛想はないが、質素で優しく、怒ったことなど一度もなく、また戦勝国として優越感とか我々を捕虜として軽蔑するよう

な気配もなく、ひたすら作業指導と危険防止にも注意を払ってくれて、本当によく協力してくれました。ヤポンスキーは祖国(ヘダモイ)まで身体大切にして伐採作業に従事するよう大変な心遣いで、日本人捕虜に対して慈悲深いソ連人であった。

あるとき一日の作業を終え、日没ともなれば腹はペコペコだ。まだ一時間ほど歩いてラーゲルに帰らねばならない。こんなときマンドリンの自動小銃を肩からかけた警戒兵が出てきて、まだノルマが足りない、達成せねばラーゲルに帰さぬと言出し、窮地に陥ったとき、ナチャアニックに目くばせで哀願すると、彼は早速我々捕虜の作業隊員の味方となってくれ、いきまぐ若いソ連の警戒兵をなだめてくれた、よきソ連の監督の存在だった。ノルマがなかなか達成できない場合は、ちようど日本という秋葉様のお祭りで各町内ごとに大きなかがり火を燃やして大きなたき火のお祭りがあるが、その火の明かりを利用して夜遅くまで伐採作業を続行したこともあり、また降雪のあった場合は、一メートルくらいの積雪の雪かきをしてから伐採作業開始です。また兵隊はきまづこのナチャアニックにマホルカという刻みタバコをダイ・クリーとねだると、その都度心よく嫌な顔もせず手製の布袋からタバコをつまんで出し、みんなに分けてくれた。彼とて配給のマホルカの手持ちがなくなると、今度は反対に日本の兵隊が彼にタバコを渡している光景も時たまあった。いま一つ感心したことは、兵隊に毎日せびられるにきまつているマホルカを、性こりもなく毎日減らさず持つてくることであつた。このお人好しの素朴な人柄、人種的偏見もなく人種的差別もないのには感心の至りでした。本当に捕虜に親切心があつたナチャアニックとも別れるときがきた。

昭和二十一年正月も終わり、二月末ころのこと、極寒静寂深々として更ける山中の真夜中、我がラーゲルに時ならぬドアをノックする音に何事かと開けてみると、防寒服に身を固め、外気でまつ毛が真っ白に凍っているソ連人が入ってきたので、びつくりしながらよく見ると、指導員のナチャアニックではないか。単語とゼスチャーで察するところ、彼は急な命令で今日今朝早朝ンペリア鉄道ラゾ

駅発にて遠い遠いコーカサス地方とかへ転勤することとなり、別れのあいさつに來たという次第であつた。それぞれ祖国の夢路をたどつていた捕虜の兵隊たちも一斉にはね起き、異口同音にナチャアニック、スパシーボ、スパシーボの連呼であつた。各人に固い握手を求め、恐らくこれがお互いの永遠の別れともなろう惜別の情が、国境を超え心温まる送別の一コマであつた。

さて、この世にこんなナチャアニックのような人たちがばかりだったら、戦争ごともなく、平和におさまるのではないかと感を深くするとともに、ソ連のおえら方もこの優しいナチャアニックの爪のあかでも煎じて飲んだら、我が北方領土四島の返還復帰もいまま少しスムーズに話が運ぶのではないかと思うのは私だけではないかと残念である。わすか四か月足らずのナチャアニックとのつき合ひであつたが、愚直なほどお人好しだつたナチャアニックの面影は、あの暗い陰うつな捕囚生活の中にも幸い明るいエピソードの一つとして、いまだに脳裏に去來してやまない。

静岡県 鈴木速男

月日のたつうちに食事の内容も多少は好転したが、量は相変わらず少なかった。このころまであまり気にもとめなかつたことで、あることに気がついた。それは、自分の隣の戦友が発病して欲しい。それも生死には関係なく、熱を出して練兵休くらいで休む病気を……。なぜなら、発熱で食事のできない戦友の分を食べられるからだ。私は、生きてゆく人間の最後の姿を見たような気がした。また、それほどラーゲルの食事は貧しく少なかったのである。

静岡県 皆川伝治

軍隊という無法組織にも国家という理念の後ろ楯があつた。けれどもわきの下の毛などまで剃られ、蚕棚に並べられてしまつた捕虜たちには、もう明日がなかった。

そんな中で彼ら二人は、人間性の回復を置土産に炭鉱労働の犠牲者として

立派に死んで言った。

その一 坂本経幸 二一・六・一一 没 熊本県

昭和二十一年六月十一日坂本経幸が南方坑で死んだ。南方坑というのは、廢坑に近い坑で、入り口から八百メートルばかり直進すると左へ五百メートル、これがこの坑の主坑道であった。この五百メートルの斜坑道をツリナツツと呼んでいた。みな老人と女子労働者で馬や手押し車で採炭していた。坑から石炭を運び出すのも馬で、坑木を立てるのも割るのも手斧(タポール)一丁が道具のすべてであった。手提げのカンテラランプをたよりの採炭であった。

坂本経幸はツリナツツの斜坑道を坑木を担いで歩いてきた。手提げカンテラの油替えに回ってくる身知り越しの女が線路の脇で休んでいた。十数メートルを歩き過ぎた。「ゴーツ、ゴーツ」炭車が流れてくる。地底の轟音が凄まじい。「いけねえ」おれ一人やり過ぎしても、あの女が危ない。彼は担いでいた坑木を枕木に差し込むと数メートル後方へ突っ走った。そして、運命の中で瞑目した。「わあッ」一切の光と音が瞬時にして消え失せた。坂本経幸は即死だった。

次の日、収容所でも驚いたが、南方坑の炭坑長と油替えの女が収容所へ弔問に顔を見せた。捕虜の命だつてとうといものだと思つたらしい。坂本経幸の死はむだではなかった。ようやく明るい炭坑生活の道が開けかけたのである。六分所全体の死亡者二百八十六柱のうち、それ以後の死亡者は十三人しかいないのを見てわかる。

その二 坂本 勲 二二・二・一一 没 熊本県

日本陣がラワーといつて、横掛式採炭作業に従事し始めたのは、二十一年七月ころからである。ラワーへはいる採炭夫は普通三十人くらいでズラリ横一列に並ぶ。すると、コンベアがガタン、ガタンと動き出し、石炭を送り出すのだ。それは地下に大きな洞穴をつくつてゆくのと同じで危険度が高い。上層からの圧力で三寸丸などは弓なりに曲がってしまう。ここへはいるとコンベアの音のほかに不気味な地鳴りの音がする。まさに坑内は地下の牢獄の鉄格子でもあった。

ラワーは前進する。前進したあとにできた空洞を人為的に落盤させていくのがクリピーシキの仕事であった。彼らは鋸と斧と二本の麻綱を道具に働く。鋸と斧を使つて坑木を一メートルくらいの長さで切る。そして、それを井げたに組んで空洞内へはめこんでゆく。これなら折れる心配はない。パリパリ、どこかで坑木が折れる。天井から砂がこぼれる。鋸を引いても死神が追いかけてくるようだったとは、同じクリピーシキの森島陸平の言葉である。

「ラワーコンパルシート。」日本語かロシア語か、はたまた英語か、コンパルとはロシア語で落盤のことらしい。南方坑、永里隊のクリピーシキ坂本勲は、二十二年十一月一日、落盤のため死んだ。救援隊が担架と小さな円びを持つて幾組も編成されて入坑した。両手で岩盤をかき分けかき分け、大事ななと思つと小円びで掘りながら進んだ。

二日がかりでようやく発見したとき、坂本勲は、ロシア人イワノフと折り重なり抱き合うようにして死んでいた。全身は汚れ、固く握りしめた指先は故国を思う「何か」を握っているように見えた。二人の死体は南方坑から一たん収容所へはいり、そして日本人墓地へ向かった。

日ソ合同葬儀の感があった。日本人もロシア人もうなだれている。しかし、収容所長アントノフスキーはイワノフの遺体を日本人墓地に葬ることを許さなかった。日本人墓地の隣に日本人とロシア人の手によって埋められた。

それから数日の間、この2つの墓標にはロシア人の手によって花が飾られていた。

東京都 青木貞一

「シベリアを経由して日本に帰る」と言われての入ソでしたが、さにあらず、そこは地獄の一丁目だったので。

翌日から早速私たちは、自分の押し込められている収容所から、自分たちが逃げ出せないように鉄条網を三重、四重と頑丈につくり上げる作業に取りか

ることになりました。早くも悲しき運命の訪れでした。

とはいうものの、さすがに根性と体力の持ち主がいて、数日後の真夜中、鉄条網を切断して脱走を企て、その場で銃撃を受け即死、という事件が起こりました。

広い収容所は、四隅に高く組み立てられたやぐらがあり、二、三人のソ連兵が夜通し鉄条網沿いに光線を向けて監視しているので、とても脱走の成功なんて考えられるものではありませんでした。

銃殺された者は二人らしい、いや、三人だそうだが、情報は飛び交いましたが、このうわさが忘れられるようになって再び脱走事件が起きました。

今度は成功したらしい、との情報が流れたと思うと、その翌日、追いかけて逮捕され、即日銃殺刑に処せられた、との情報でした。その後も、厳寒が来るまで事件は数回起きました。

千葉県 庄司音松

その翌日、帰還のための収容所に入れると思いきや、そこから四、五キロ歩いたところの収容所に入れられた。そこには四千人くらいの日本人が収容されていた。また、だまされたかと思ったが、ナホトカの港が見えただけで、何か気が軽かった。翌日から、毎日ナホトカの築港作業をさせられた。このナホトカには、日本人が山を削り、石を運び、さまざまな作業に従事させられた。しかし、この作業は楽しみでもあった。ソ連の誘導艦が朝見えないと、お昼近くにその艦を先頭に日本の引揚船が日の丸を立てて入港してくる。そんなときほど、日の丸をありがたく思ったことはない。病院船の高砂丸、明優丸、第一大拓丸と、何か日本の空気に触れたような気がしてよかった。しかし、幾その船を見送ったことであつたらうか。ある日のことであつた。帰還の船が入港して、間もなく日本人が乗船を始めた。そして、夕刻近く出帆し始めた。そのとき、若い私の仲間が、いきなり「帰してくれ」と叫び、両膝をつき、男泣きに泣き崩れた。引揚船は、無

情のように小さくなっていった。私は「生きていれば必ず帰れるよ」と、涙をこらえて彼に言ったが、しかしそれも自分に対して言った慰めの言葉のようでもあつた。

和歌山県 松浦虎市

日増しに苦しくなる中で、食うや食わずのわずかな食事を盗む者が出てきた。同じ釜の飯を食って生死をともにしてきた戦友だが、一日一日と餓鬼道に陥いつていく。そしてその形相は、ぞっとするほど変わっていく。

夜中に立ち上がって叫び、わめく、とめようとすれば、手に持ったもので殴りかかる。頭がやられているんだ。二、三日すると死んでいく。まるで地獄の世界でした。

そんな中でも、上官風を吹かし、ソ連兵にゴマをすり食糧を横取りする者もいた。外部との連絡を断られた収容所は、弱肉強食で「生と死」は紙一重の生地獄であつた。

ソ連は、うそをついてでも、泥棒をしても、日本人の労働力による復旧が大切で、日本兵の死んでいくのを見て見ぬふりをしてノルマを強制していた。

石川県 河原三雄

長い冬から覚めたウクライナの春が足早にやってきたある休養日、思いがけない収容所の運動会が日独共同で開かれた。ドイツ側は走高跳びや、幅跳び、あるいは三段跳び、百メートル競争など陸上競技に次々と出場し、ベニヤ板でつくった手製ギターをかき鳴らしながらの応援ぶりは、日ごろの暗さを吹き飛ばす盛り上がりようである。

彼らの歓声に比べ、片や日本側は意気さつぱり上がらず、広場の片隅で軍隊式体操を一通りお目にかけて程度で、あとは先方の競技を観戦するのみ。体力の減退から当然のこととはいえ、同じ抑留の身ながら民族的な意欲の格差を見

せつけられた一日であった。

それ以来、彼らとの間に交流も生まれ、寝所を訪ねて、ドイツから届いた家族の写真を貼ってあるはがきを見せてもらったりして、言葉は通ぜずとはいえ、親しみを増していった。ベルリンのオリンピックに出た日本選手の名を覚えていて、平泳ぎで競ったというドイツ人もいて、久しぶりに和やかな気分を味わった。

やがて、待ちに待った「ダモイ」の日が来た。また残っているドイツ人たちと「アウフ ヴィダー ゼーエン」(さよなら)の握手を交わし、三十五人の友を葬った墓地に遥拝して、歓喜を満載した帰還列車は再びウラルの山脈を越え、一路東方へ向かった。太く長い黒煙が原始林の彼方に消えていった。

北海道 塚本光雄

こうした収容所生活の日常にあつては、勢いおのれ一人の身のふり方にさえきゆうきゆうとする中で、あえて進んで友のために犠牲になるということは至難の業であるが、軍隊当時はその存在さえも知らなかったような人が、この地に渡つてからはかえつて、その苦境の生活に負けず、戦友及び団体の中堅となつて、体力の弱い人を庇護したり、嫌な作業にも進んで代わつてくれたりして、同胞愛の神髄を發揮してくれた人々がいたが、一方、軍隊当時、成績抜群とか一選抜とかといわれた者が、生活が苦しくなるにつけ「メッキ」がはげて果ては団体行動さえも乱して顧みないという不徳義漢もいないではなかった。

私は、この両者の真の人間の価値のいづれが尊いかは、言をまたないと思うのである。

落ちぶれて袖に涙のかかるとき、人の心の奥ぞ知らるる

三重県 北川長吉

いつか昼間、工場内の整理整頓作業に行つたときの休憩時に、ソ連人の年配労働者(七十歳くらい)が、我々のところへ来て、付近に監視兵のいないことを確

かめてから、小声の日本語で、「兵隊さん、ご苦労さんです」と話しかけてくれたので、一同びつくりして、通訳を通じ聞いてもらった。「私は日露戦争で捕虜となり、日本の横浜収容所へ行つたときはよい待遇を受けた」と懐かしがり、「今あなた方がロシアへ来られても、革命でこんな社会になって、何もしてあげられないのが残念である。皆さんも体を大切に日本へ帰り、父母、兄弟と幸せに暮らしてください」と言われ、こんな純情なソ連人もいるのかなと思ひ、心温まる思いがした。

岩手県 川口純二

私のシベリア抑留生活において、終生思い出されるのは、入ソ初の収容所テルマにいたころ、抑留者はそれぞれ毎日の重労働と空腹に疲労の連続で、考えることは食べること、故郷への思い、満腹感を紛らすためにあらゆる物を食した。モミの木の子、ソ連人の捨てた残飯ほか、だれしもが恥も外聞もなく生きるための惨めな、情けない毎日であった。ノルマに追われて百%以上の達成など到底できるものではなかった。

神奈川県 宮沢信行

真夜中、白樺の皮を燃やしつゝ、届いた黒パンの配給。勿論、日本側の炊事係班長の立会いで、寒い雪も凍る中で行われる。時には暗闇を利用して待ち伏せて、貴重な黒パンを盗むのである。闇の中で怒声が飛び、格闘が演ぜられる。人間、生活困窮の極限に達すると見栄も外聞もなくなるものである。元大学の先生、講師が、医者がわずかな黒パンを盗むのである。このようなことは自ら困窮状態を体験してみなければわからないものである。

和歌山県 河端亨之

抑留中は、北は北海道、南は沖縄に至るまでの全国津々浦々の出身者と生

活を共にした。極寒中、作業中、休憩中、宿舎での会話は、いつも食えることが大部分で、他の話題は少なかった。思うに、何と言つても、我が身が大切だということではなからうか。終戦後の混乱の中で、我が子を他人に託して自分だけ祖国に帰った母親があったり、我が子を殺して逃げ帰った母親があったのを私が帰還後に耳にしたが、互いに究極の場にあるときの人間の心境を思うと、今更に自分が恐ろしい感に打たれる思いです。

岩手県 及川新蔵

武田という上等兵がいた。どこの出身でどこの原隊であったのか、皆目忘れってしまったけれども、小柄でキリッとした顔立ちであったことだけ奇妙に覚えていた。シベリアの収容所で当初より少しは給与のよくなった昭和二十一年五月ごろのことだったと思う。私が飯上げ当番を指揮する班長を命ぜられ、炊事場から洞窟兵舎まで運んでいる途中で、武田は相棒の目をかすめて隠し持っていた缶詰の空き缶にその飯をかっさらうという事件があった。勿論武田はその場で私の平手打ちを食ひ、皆からもこつびどく非難されたことは言うまでもない。何しろ食料が足りないなどというものではない。足りないのではなくてないのだ。

武田の事件は少しはそれを通り越していたとはいえ、明日の命の保障のない毎日となると、ずるい生き方をした人間はこつびどく皆に糾弾される。武田は爾来、急激に元気がなくなつた。行動がおかしいのである。ブツブツ訳の分からない一人言を言いながら、わずかばかりの分け前の食料を飯盒にあげ、水と塩を入れて煮立てて増やし、どろどろにしたものを食べるようになった。明らかに栄養失調からくるむくみも見られ、顔色も土気色に変わつてさえない顔つきになつて行つた。今考えるに、いろいろな病氣、腎臓病などを併発し、尿毒症などもあつたのではないかと思う。ある日、コロツと帰らぬ人となつた。かわいそうなことをしたものだ。真面目な武田は盗み食いをしなければならぬほど生理的に追いつめられていたのであろうし、それを助けてやれなかつた我々が不甲斐ないと言え

ば不甲斐ない。しかし、実際その時は、明日私がそうなるかもしれないのだ。他人様の事など考える余裕のある人は恐らく一人もいなかったのだ。

岩手県 橋本達夫

ロシアの辺境といわれるシベリアの奥地にて送つた三年の月日の中で、人間が極限の状況に置かれたときのエゴイズムの醜さを痛感し、人間という動物であるのだとさえ思えた。今、五十二年前の記憶をよみがえらせようとしても、時、所、人の細部はすっかり薄れ、あの時々の痛切な思いはとも再現できない。ほとんどが死に、かろうじて生きて帰つた者たちはその苦しさ、そのつらさを表現できるものではない。極端に言えば、死んでシベリアの地にいまだに眠っている者たちだけが苛酷さを語るのではなからうか。

光陰矢のごとし、五十余年を経た現在、約五、〇〇〇人の遺骨を持ち帰つていと聞いている。これ以上の先送りはできない。残る六万余の遺骨が一日も早く帰国できることを心から祈る。

熊本県 大阪公夫

収容所での生活は、皆本当に裸の姿で、そこには学歴も地位も資産も金もない。全く同じ立場の共同生活の四六年を通じて得たものは、人間に上下の差はなく皆同じであること。人との交際では、どんな相手でもこちらよりよくすれば、相手もよくするということ。このことは、私の人生観として大変役立つと思つている。

千葉県 榎本義雄

空腹に対する人間の執念は恐ろしいものだった。ある時兵隊が屍衛兵に立つたことがあつた。その兵隊は空腹に耐えかねて死者の目玉を食べたこともあつた。ともかく私達がいかに寒さと飢えに耐えてきたか、読者の皆様には想像もつか

ないことだろう。

亡くなられた同僚のご冥福を心からお祈りし、筆を止める。

石川県 藤澤栄次

戦いに敗れて軍隊という組織を失い、異国の地で捕虜の身となった集団の姿は誠に哀れであった。自己保身のみに追われ、他を省みる余裕もなく、ひたすら食べることに寝ることのみに終始している姿は、極限における人間の弱い赤裸々な面を表し、全く餓鬼道を思わせるものであった。そこには学歴も教養も地位身分などは全く関係なく、それらは平常の社会生活でしか通用しないものであると痛感した。

千葉県 林興一

五日目の朝だったと思う。極度のホームシックにより逃亡者が二人出た。その日の行軍は中止で、全員整列させられ、ソ連将校から威嚇された。

一、逃亡した二人は発見次第銃殺する。

二、再度逃亡者が出たときは、その日本の指揮官を銃殺する。

また、当地で逃亡しても最後まで成就出来ないものと心得よ、厳寒と飢えと狼の餌食である、とのことであった。

旧式の飛行機が遠く近く近く旋回を始めた。ちょうど午後三時頃であった。発見されて我々の眼前に連行され、儀式が始まった。二人に鍬と円匙を渡し「自ら墓穴を掘れ、銃殺する」と申し渡した。一同よく見ておくようにと居丈高である。逃亡者にはそれなりの理由があるだろう。命永らえたい。犬死にしたくない。故郷を思うあまり、父母兄弟を思う熱情からであろう、ここで銃殺では無になつてしまふ。最後の最後まで、一瞬でも長くと、等しく考えているに相違ない。

前川大隊長がソ連将校に助命を申し出た。本人も駆け寄り泣訴嘆願する。この厳しいシベリアで存命は絶対不可能であることも判断出来ぬほど兵は疲労

困憊しておるので穏便にと嘆願した。ソ連将校は顔を真っ赤にして激怒して逃亡者を蹴飛ばした。兵は二度三度ソ連将校の足にかじりつき哀願を重ねたが、遂に判決は下った。二人は涙を流しながら一鍬一鍬と深く土を掘り起こし続けた。ようやく薄暮が近づいた頃、墓穴が出来た。

「全員整列せよ、二人に目隠し」と命令が出た。二人とも狂乱している。我々も初体験である。チヨ製三十六連発の自動小銃を持った警備兵が一行に対峙し、緊張の一瞬であったが、我々は何をなすべきか、体力、気力、知性を奮い起こして行動しなければ、戦友を犬死にさせてはいけない、どよめきが湧き立った。前川大隊長が二歩三歩歩み寄った。ソ連将校にロシア語で「私の責任において再度このようなことは絶対に起こさない」と。長い長い沈黙が続いた。「前川キャピタン、ハラシヨ」と皆抱き合つて涙を流して喜んだ。(この頃、警戒兵と会話するのロシア語の日常語は少し理解できた)

この事件があつてから絆は一層深まり、一蓮托生、十六日間の行軍で五百キロを踏破して、ようやくザルガレに到着した。

滋賀県 竹山悌三

地上工事は、五、六月のシベリアの夏季、短い夏の間には杵組み、流し込み、上塗り、はつり、煉瓦積み。日本の兵隊が捕虜として、シベリア全土ですべての作業に奴隷として働かされていたに違いない。

煉瓦が運び込まれた。金輪の一輪車で現場に移しかえていた。ふと一枚の煉瓦に目がいった。竹べらで「カエリタイ」と書き込まれていた。ああ、この煉瓦を焼いている場所でも日本人が捕虜となつて血涙を流し、ただもくもくと飢えと酷寒に苦しみながら、いつ祖国の土が踏めるともわからない幻のかすかな希望を抱き働いている。「死んではならぬ、命の続く限り耐えてくれ、生きながらえてくれ」、我が身も苦しさに変わりないけれど、心から戦友の無事を祈った。

私はそれでも帰りたいために凍傷は恐れなかった。両足先が特にひどいので足が不自由になりながらも、旧ソ連の監視兵に発見されないように、戦友と戦友との間に肩を借りながら、十一文半の大型編み上げ靴をはき、なんとか問題の各分所をこまかして通過することができた。もうこっちのものだ。内地にいる父母の顔、姉や妹や弟のこと、東京は一体どんなふうになっているのだろうか。そんなことをあれやこれやと考えながら、第三分所の冷たい幕舎のベッドに横になつて、明日を楽しみに、眠りかけていた。

ところが、各幕舎内が騒がしくなってきた。旧ソ連の憲兵が各幕舎を調べ出している。いわく「凍傷患者がまぎれ込んでいる」「患者を帰国させたら米国により口実を与えることになる」「早く患者を探せ」「凍傷患者が未発見のときは全員帰国を取り止めだ」と、次々に幕舎内の日本人は外に出され搜索された。旧ソ連兵が通訳を同道し「拳銃」を構えながら、だんだん私のいる幕舎に迫ってくる。もうだめだと覚悟し、私は思い切つて大きな声を出した。「凍傷患者はここにいます」と、手を挙げて名乗り出た。もし私が名乗り出なかったならば、せつかく乗船と決まった戦友全員の帰国が取り止めだ、それこそみんなのためにも申し訳ない。今から考えてみると二十二歳の若輩の私が勇気をもつてよく決心がついたものだ、五十有余年前を振り返つて思う。

早速、通訳の喜びの声や、戦友たちの「なに、すぐ後便で帰れるよ」「心配するな、まだ若いじゃないか」「どうもありがとう、これで帰れる」等々の声を耳にしながら、泣くに泣けず、私一人が担架に乗せられ、せつかく入所した第三分所をあとに第二分所それから第一分所と逆送されてしまった。ああ！第一分所の医務室で直ちに通訳立会いのうえ旧ソ連の軍医に診察され、即刻ナホトカ力の五九〇病院に入院を命ぜられてしまった。

黒パンは、朝、時間がないので前夜の暇なときに分配することになっておつた。それも班内で皆の注視の中で当番が、やじろべえ秤(平均秤)、これもシベリアならではの発明品で頭数に切つて計る。余分が出るとそれを細かく切つて、秤に乗せながら平等に分ける。これほど平等公平なことはないだろう。貰ったパンを手作りの袋に入れ枕元に置いたものが、翌朝なくなっている。あき袋は廊下あたりに捨てられている。旅の恥はかき捨てとうそぶいておる。人間の浅ましき、情けなさ、人間の原点を見たものである。だから、夜貰うとお腹に入れてしまう。翌日の昼はじつと我慢という訳だった。

シベリアに連れられてきて以来、食物不足に悩む収容所内は飢餓地獄だった。保身のためとはいえ、命を延べんがための食物盗人と変わり、またその罪悪感も覚え、戦争に敗れた惨めさには心も荒んだ。ソ連兵も心が荒み、憎悪を剥き出しにして、獣畜も同様の様相あらわに、自分が本位と零落し、それが人情をもなくさせる悲運と巡りて、さらに個人主義へと走らせた。戦争の歪みは、心を結ぶ人と人との信頼を失わせたのである。

反軍反抗

中隊がピラに移動したときは、かつての軍の組織そのままに入つて、上下の規律が保たれていたが、そのうちに仕事にも食糧にも不釣り合いがあれば当然不平不満が生じ、また命令がソ連から日本の将校を通して伝えられるので、もはや軍の幹部の一存で兵士を動かすことが出来なくなった。食糧の不足は飢餓状態をもたらし、人間の欲望だけとなり、勢い組織が崩壊せざるを得なかった。

私の班には初年兵が四人いた。その上に一等兵、上等兵がいて班長がいた。班

長の寝所は上段で、下段には丁上等兵と初年兵全員がいた。丁上等兵は北海道出身で元博労をしていたそうである。いわゆる柄の悪い部に属する人だったし、我々はびりついていた。また、S一等兵はやはり北海道出身ながら、中肉中背で、少し我々に対しては威張っていたが、丁上等兵には卑屈にゴマをすっていた。

丁上等兵は班に分配される食事を下で仕切り、大きいパンを自分のナイフを出して切り、分配をしたが、班長や自分には大きく、眼を離すとその隙にパンを毛布内に隠すような人だったが、誰も面と向かって言えないし、また上にいる班長には分からなかった。

食事の量は次第に厳しくなり、兵士たちの体力も日に日に落ちていき、作業に行き来するにもうつむき加減で、道端に食べ物が落ちていけば拾うようになった。冬の馬鈴薯は馬糞と似ており、馬糞を間違えて宿舎に持ち帰り、いざ暖炉で温めてみてはじめて馬糞だとわかったような笑えない話が現実にあった。

この時期に与えられたパンまでが公平でなく、また他の班よりも少ないことに初年兵は真つ先にバテるんじゃないかという危機感を持ったのは当然だった。そこで、このことをそれとなく言つて貰うのにS一等兵を選んで、大勢では大げさになるので単独で頼んでみようと思った。

ある晩の就寝前に戸外にS一等兵を呼び出した。外は暗く冷え込み始めた。それだけに彼は初めから不機嫌だった。私は彼の今までのいきさつから話し、我々の願いを述べた。「呼び出しの件は、食事の分配ですが、見たとおりに上等兵殿が分配されていますが、非常に不公平で、見ていないと隠すようなこともあります。また他の班よりも少ないと思います。いい悪いを言うべきではありませんが、といつても我々のそれこそ死活の問題ですので、それとなくうまく言つて貰えないでしょうか?」「お前は俺に指示をするつもりか!」「決して指示などではなく相談です。ただ、このままだと我々初年兵は最初に倒れてしまいます。それをお願いしているのであります」「お前たちは上の者にたてつく気か!」「そう

言うやいなや「お前は初年兵のくせに生意気だ!」と言つて殴られて、眼鏡が吹っ飛んだ。星一つの差がこんなに差別されることに我慢が出来なかった。私は「よし! この襟章取れば文句ないだろう」と言つて、自分の襟章をちぎった。

それから二人の取っ組み合いが始まったが、どれくらい時間が過ぎたろうか、頭上で「お前らは何をしているんだ」という声があった。声はまさしく初年兵教育時の狩野班長で、彼はどちらの言い分も聞かず別れさせた。本来ならば私が責められるべきだと思うのだが、私の肩を持つてくれたようだ。

その晩はそれで収まったが、翌日からはS一等兵の同年兵の一斉のいじめが待っていた。同期意識というべきか、手こそ下さなかったが、仕事での仕返しがないことがあった。重い丸太を担ぐとき、貨車積みを一緒に行うとき、徹底して相手にされて、そしてそれらの原因もあつて痔とヘルニアで苦しみ、作業中にしゃがみこむことはあつても、休む余裕は与えられなかった。もちろん食事の改善はなされなかった。

体力が目に見えて衰え、しかも持病で苦しむのと毎日の仕事を考えると、ここで殺されるんじゃないかと絶望的になった。

しかし、各地で起こつたこのような事件が、組織そのままに入ソした部隊にはもつと悲惨に進んでいたことは間違いなかった。軍の将校達が離れ、部隊の離合集散によつて混成されたときに軍からの解放があつた。

愛媛県 宇都宮政壽

一年半が過ぎた頃、原木が入つて貨車下ろしの夜間作業中(時間構わず入つて来るたび夜間でも製材班は引つ張り出された)、ソ連軍曹が迎えに来た。何事かと帰つたところ、本部の地下室に放り込まれ、若い中尉から「暗号」について尋問を受ける。通訳が、ハルピンで日本人と結婚していたという四十歳くらいの美しい女性であつたが、日本語はタドタドしい片言程度、応答がかみ合わず、いら立つた中尉が、どなつたり、机を叩いておどしたり、時には拳銃で殴られもした

が、何度も死にそこなった身、クソ度胸を決めて、以降「忘れた」「知らん」以外は黙秘で通したら、匙を投げてか、十時間ほどで解放されたが、この時の恐怖と「戦犯」という不気味な文字が頭の隅に「びり付いて、舞鶴に上陸するまで離れることがなかった。

噂ではあつたが「憲兵、特高、警察官らを三人密告すれば日本に帰す」の甘言に釣られて密告する者がいるらしかつた。

石川県 前多義雄

喧嘩するのは交代時の坑道中である。とにかく新参者としてなめられたことで売り言葉に買い言葉である。しかし、日本人同士ということもあつて、手をあげることは僅かで、口論の類が多かつた。

ただし、ロシア人との喧嘩は真剣だった。彼等はヨーロッパからシベリアへ流刑になつたならず者が多い。このソ連兵たちと「貴様らに負けてたまるもんか」と、すぐ取っ組み合いになつた。その一、二の例を述べれば、パッサン(若者)と二人で仕事をしていた時、たまたま、ヤポンスキー(日本人)が強いが、ロシア人が強いかの口論になり、それならお前と俺で決着をつけようと組み打ちになつた。二人だけで泥水の粉炭の小川の中で上になり、下になり、ゆうに三十分以上の格闘になつた。そのうち二人とも同様に力尽きて戦力はなくなり、とうとうどちらからともなくやめてしまつた。

さて、交渉の場でのロシア人はこぶしを振り上げて大声で怒鳴る。こっちも、お前等になめられてたまるもんかの気持ちと、日露戦争では日本がお前らに勝つたではないかの気概で私も大声を出して机を叩く。日本以外の外国人、特に欧米人は騎馬民族(肉食)の故もあつてか、農耕民族に比し気が強い。カマンジールは日本人の代表なのだからその責任は重大である。私はこんなことを考えながら、何とか釣り合いをとってナリアートを決めていた。

福井県 横田肇

正月も過ぎたある日、昼食の休憩の時キャピタン(大尉)に呼ばれた。仕事の話かと思つて部屋に行くところ椅子を与えられ「お前、このソ連に残らないか、そして仕事をしないか、クラシーバダム(きれいな奥さん)と住宅をお前にやるが」とのこと、考えたこともないので返答に困っていたら、明日返事をくれとのこと。ソ連のことなので、断るとどのような作業場へ移動させられるかもわからず気になるし、かといってソ連に住む気は全然ないので、一晩考えて、翌日キャピタンに「一度帰らせてほしい、両親に会つて顔を見て今までの話をしてから来てほしい、地震のことが気になる(日本新聞)にあつた)ので」と返事した。寒い時であつたが背中汗でピシヨリだつた。

キャピタンに再度残るようになつたが、後には笑つて了解してくれた。本当にホツとした。

石川県 前多義雄

この日は私も体の調子が悪く働くのが嫌だつた。コンベアが止まつたので、その場にべたり座り込んでウトウト眠つたようだ。コンベアが動き出した。突然監督のキリシが「ソルダート(兵士)、起きろ」と大声で怒鳴りながら私の足元を蹴り上げた。日本人には足蹴りされることは最大の侮辱である。この野郎と腹が煮えくり返るが所詮は捕虜の身、歯を食いしばつて我慢した。ところがである。今度は石炭をスコップでコンベアに積載している私の背中を早くしろと小突いた。さあ堪忍袋の緒が切れた。手にしたバッテリー(ランプ)をキリシのすね目がけて叩きつけた。興奮したキリシはそのランプを拾い上げて私に襲いかかり右眉のあたりを切つた(後に医務室で二針縫つた)。顔は血だらけ、相手も足を怪我している。でも二人は殴り合い取っ組み合いである。三十分も揉み合っていたらうか。スメナー(分隊)の連中が気づいて分けに入つた。収まらないのはキリシで

ある。「処罰だ、処罰だ」と叫び続ける。結果は明瞭である。他の特別収容所へ追放か、営倉入りか、何人かの前例を知っている。私はここから絶対に地上には上がらないぞと座り込んだ。その時にはもう三〜四人のロシア人も集まっていた。もしどうしても上げたいのなら、貴様等ロシア人が俺を担いで上げると拗ねた。この結果は大きな問題になった。その晩ラーゲルの会報板で、ロシア人に対しては絶対に手出ししてはならない。当然、強制労働や食物の仕返しがある。ロシア人の感情を悪くすることは厳禁する……予想に反して何の処分もなかった。それは私も大怪我をしていたためか？ しかし、彼等のブラックリストには何と書かれたのか、これが私のダモイを遅らす大きな原因であり、後述するが、引揚船の棧橋でストップになった理由でもある。

長野県 中山麻人

次の日、甲板では大変なことが起きていた。それはソ連で幅をきかせていた民主グループの指導者の若者を甲板の上に引きずり出して、二、三の筋金入りの下士官が殴る蹴るの暴行を加えるのだった。立場は一変したのだ。さすがに船長も見かねて中に入ったが、騒ぎは容易に収まらなかった。「海にたたき込むぞ」の大声を後に、私は「一人ぼっちこそと船倉に戻ってしまった」。

石川県 前多義雄

ようやく祖国日本に帰れる。貨車でシベリア鉄道を横断して待望の港、ナホトカに着いた。ところが、円本から船が来ないと言う。先着組が数千人もいた。こりやまたどうなることか。それからの一週間は、ソビエトを讃える歌やアジテーションの場やら、数回の集会が行われた。反ソ的な者は洗い出され「つるし上げ」の集会である。思想的に改造されない者は再び奥地へ帰されると言う。現に帰国列車内で某准尉が勲章を持っていたとして、その場で帰国をストップさせられ下車したのを目撃している。数日が過ぎ、私達の乗船が始まった。棧橋を渡る

前で名簿に基づき名前を呼ばれて一列に並び順番を待つ。何百何十番目だったか、私が呼ばれて前に出て棧橋を渡ろうとすると、別の将校から「待った」がかり、「お前は後だ」と引き帰させられた。その時の心境たるや、他人にはどうてもい分かつてもらえないだろう。だんだん心細くなってきた。そのうち乗船終了、私一人が残された。どうなるかとの不安はこの上なしである。そのうち将校連中が書類をめぐって話し合い、最後に「よし」の許しが出たが、棧橋の途中でまたストップがかからないか、早く船へと胸は高鳴る。船に足を一步入れた時の感慨は、筆舌に尽くし難いとはこのことであろう。船では、白衣の看護婦さんを初め医師、船員が出迎えてくれた。

長野県 中山麻人

ナホトカより故郷へ

人間は気持ちによつてこうも変わるものであろうか。足取りが、体の動きが全く違う。沖には日の丸をつけた輸送船が見える。しかしナホトカほど人生の明暗を見せつけられた所はなかった。乗船を前にして遂に名前を呼ばれずに力なく宿舎へ帰る人、または一個中隊揃って山の向こうの収容所へ向かう者、名前を呼ばれてタラップを駆け上がる人。日本人同士の告げ口があったと聞いたが、これは信じたくないことだ。

民主運動にも参加した。持ち物の写真も一切捨てた、疑われるものはない、俺は帰れるぞと思いつつもドキドキして待っていた私の耳に「麻人中山」の聲が飛び込んで来た。タラップを上り切った所に日本の看護婦さんがいた。「御苦労さんでした」の声は正に日本人の声だった。

大阪府 藤本善造

当時のソ連で、神様、故国の英雄と仰がれていたのはスターリン大元帥であつたと思う。国家が行使できる権力のすべては彼の手中にあつたはずだ。にもか

わらず、ほの暗い坑内では「スターリンは悪者だ、馬鹿だ」と言う痛烈な声を幾度も聞いた。この言葉を聞いたとき、私達の方が、辺りに誰かいなか、と心配りをしたものであった。

今、ロシアは民主化の推進によってスターリンは歴史の上から消えようとしている。これは往時のソ連の体制からほ信じがたいことだが、この遠因は今を去る五十余年の昔、シベリアグズバス炭田の地下百二十メートルにいた蟻の一穴から始まっていたのだ。

もう一つ、この工場で忘れることができない思い出がある。それは囚人が着るような水色の作業衣を着て我々の尻を追い回していた監督の姿である。前記した二十分の休憩が終わると、この男が機械の上でレールを切ったような鉄片を鐘がわりに叩く。そして、我々をジロリとひとにらみして「ヤポンスキーサルダート、ダワイ、ラポータ（日本兵、さあ早く仕事にかかれ）」と叫ぶのである。この一言を聞く度、私達は捕虜という立場の悲しさ、哀れさを身に沁みて知るのであった。

岡山県 田中一司

しかし、捕虜となると目的もなく異国の地で異国のための労働で、衣食住も最低で、人の食物でも盗んで食べる状況であった。しかもその盗んだ者は、以前は地位のある者であったことには驚いた。

人間、地位も階級も金もなく、すべてが平等で、しかも常に空腹感があると、第一に食へることが先決である。凍った馬の糞がジヤガイモに見えたり、赤レンガのかけらが黒パンに見えたり、中には野草を食べて中毒を起こして死んだ者がいるほど、いつも頭の中は食へることが先決であった。私なりに欲望の順位をつけると、無欲、食欲、帰還欲、私欲、その他の順であるように思う。人間このような環境、境遇に遭遇すると無欲となり、我を忘れて気力を失い、地位や階級の衣

を脱ぎ捨てて丸裸の人間となる。私は、人間は食欲、私欲が満たされて初めて地位、階級が授かるのであるということを、あの酷寒の地シベリアの抑留生活の中でしみじみ感じ、体験したのである。

亡き戦友に代わって、非国民、民主屋を「民主グループの指導者は前に出る」と糾弾する。こうしたトラブルが起き、シベリアでお前たちが我々にとつてきた態度に対して謝れとの内容で詰め寄って船内は騒然となった。

「私たちがシベリアで民主運動をしたのは、ソ連のためでなく、反動分子を批判する目的でもなく、ただ早く日本に帰るためのカムフラージュであったのである」と言ったら、ただ黙って聞くだけであった。船長の仲介により騒動も治まった。

岐阜県 古田 強

五十年たった今も時々夢に見たりするのは、伐採作業中、身体が思うように動かないため、切り倒した材木の下敷きになって死亡した仲間達を、凍りついたまま車の荷台に乗せて収容所へ連れ帰ったのだが、それがどのようにして、どこに埋葬されたかは、我々には一切知らされないまま処分されてしまったことだ。こんなひどいことがあるでしょうか。ロシアの記録には何も残っていないと思うが、そのままでもいいのでしょうか。

岡山県 片山衛真

またソ連労働者達や役人達に多少感化されたのか、兵達の人間関係は失われていた。互いに話し合うこともなく、残念だが最後に残った兵の出身地は一人も聞いていないし、私も出身地を教えていない。先に帰った兵士達は帰国を喜び合って帰ったのに。私も数人のソ連の人と作業したが、作業から帰って明日出発では彼らと別れの言葉も交わさず町を離れて行かねばならない。また、亡くな

つた友を残し日本に帰る、割り切れない気がする。体の具合もすっきりしない。私には今日の日が来るのが長過ぎた。遅過ぎた。幾度も帰国という話にだまされた。帰国という指示も「またか」信じられない。ソ連役人達は平気で嘘を言う。帰国船に乗るまでは「帰国」という指示も信用できない。書いた物は所持して帰国できない。違反すれば帰国できないという。新聞、メモ等書いた物は一切だめだと。そして友の遺骨遺品の所持も禁止された。所持品らしきものもなく、帰国と言っても準備する必要もなかった。ちょうど三年前、小雪の降る道を死の行軍と苦しみ耐えてきた道だ。今日帰る日も小雪が降っていた。日本に帰る喜び、あの寒い冬を逃れるように歩く足は軽かった。

下車した引込線にダモイ行き列車が待っていた。他の収容所から集まった兵士達が乗車していた。帰国後知ったのであるが、クラスノヤルスクには日本兵捕虜二万人が強制労働に送られてきた。この町に十カ所くらいは収容所があったことを知る。いかにソ連は秘密主義であるか、情報は何も知ることできない社会だった。出発前には日は暮れ、ホームの明かりに小雪が照らされ一層寂しい帰国でもあった。見送る者はホームに一人のソ連士官が立っていただけである。列車は東に走り出した。日本が近くなっていく。この日が来るのを夢に見ていた三村、三本木、納塚等の多くの死亡者を残して去って行く私は、数々の面影を迫っていた。私だけでなく、同乗の兵士連はそれぞれの思いに走っているようだった。誰も話す兵は一人もない。口を閉じた集団である。途中ハバロフスク駅近くで材木運搬をする日本兵十人ほどに出会った。彼らは今年の冬もシベリアで、と思うと気の毒に思う。十二日間列車は走り、港ナホトカに到着した。海の見える港、海の向こうには日本か。兵舎に入り、五十人ぐらいに分かれて休むことになる。

二十三年八月、私達が作業より帰ると、収容所の入り口で二人の日本人、四十歳ぐらいたるか、日本の消防の法被ははびを着て私達の帰りを待っていた。ソ連兵は彼らを収容所に入れることを許さないで門の内と外で会話する。数日間何

も食べていないとのこと、粥を運ぶと喜んで食べていた。彼ら二人は樺太の出身で、空腹のために大豆を盗み食べた理由で二年の強制労働をさせられ、タシケントで刑を終わり解放された。所持品も金もない二人はシベリアの大地を放浪しているのだ。日暮れ前に行くあてもなく去って行く。数日後、今度は「人の若い女性が私達の帰りを待っていた。彼女も門の内と外での会話、お粥を運び食べさせる。彼女は結婚式のために三日作業を休んだことで二年の強制労働、タシケントで刑が終わった。彼女も金はもちろん所持品は何一つない。夕暮れに去って行った。

広いシベリアで三人の日本人に出会った。他に大勢の流刑者がいたと思う。空腹のため大豆を盗んで食べた、結婚式のため三日作業を休んだ、その罪で列車で一カ月もかけてそんなところに送り込む必要があるのだろうか。ソ連の刑法を知らない日本人に対して温かい情がないのが残念に思う。結婚のため三日仕事を休んだ、そのために流刑。人生で一番楽しいときであるはずなのに、二年間の刑を終わり出所。ソ連はなぜ樺太に送り返さないのか。一人、二人とシベリアに放り出してしまふ。防寒具も持たずに行動している彼ら、あの寒い冬が近づいているというのに。この町を離れて次の駅まで列車で二日は必要だろう、部落も人家もない雪原を歩くことはできない。暖をとることも食糧を得ることもできない。彼らには何か一日一日と死の近づく音がするようである。

ナホトカ港 夢の帰国実現

愛媛県 長野吉雄

収容所に入る前に広場に集められた。体に異常のない者はそのまま、過去病気をした者、現在体に異常のある者は右手を上げ、一步横に出るようと言われた。私は迷ったが後者を選んだ。二つのグループに区分され、前者はナホトカの作業大隊に、後者は帰国の収容所に送られた。人間の運命なんてわからないものだ。一寸先は闇だ！

山口県 小曾根三郎

ナホトカ港は晴天でした。白い船体に赤十字マークをつけた病院船「高砂丸」が見えます。皆、ほえるような声を出し、船を見つめます。あれに乗って帰れるんだ、と思いました。

しかし、下車して点呼があつて、病人など数十人が残り、大多数は列車に再乗車です。目の前に船がいて、それに乗れない歯がゆさ、もどかしさ。

私達は、もだえました。特に私は、青い日の政治部将校の恐怖がついて回るのです。

列車は、極東の中心都市、ハバロフスクに返送されました。ここで一年間、みっちり洗脳教育を受けました。

青い目の政治部将校につかまった夢は何回も見ましたが、幸いに二十四年の六月、再びナホトカに送られました。

岐阜県 中島正教

母を思う兵士

こんなこともあった。伐採に山に入り食事終了。当番が食事のカンカンを持ってアムールに洗いにいった。いつもならもう帰る時間なのに帰らない。しばらく待っても見えないので、私が出かけた。すると、アムールに手をつけて動かない、川には水は張つてないが非常に冷たく、手を入れれば凍るくらい冷たい。それなのに水中に手を入れたまま何かを考えている。「オイ、何してるんだ、皆待っているぞ」と声をかけると、「隊長殿、すみません」とすぐ帰り支度をした。

帰り道、「アムールは日本海に直通してますね」と言う。「そうだ」「新潟まで水は切れていませんね」「そうだ」「私の家は新潟の山の中です。信濃川のずーっと上流の谷川が裏を流れ、そこに我が家の勝手があります。母は食後、そこで食器を洗います。今、当番で洗っていて、そのようなことを思ったら、何だか母親と

一緒に食器洗いをしているような思いになって、冷たい水の中に手を入れていたのです」と言った。

私はこれを聞いて胸にこみ上げる思いにかられ、「故郷はなつかしいなあ、早く帰りたいものだ」と話しながら作業現場に戻った。忘れ得ざる「こまである」。

富山県 谷村文平

シベリア抑留地への旅

昭和二十一年九月、見元大尉を長とする労働大隊が編成され、陸路、鉄道輸送でソ連領に向けて出発。戦場から徒歩で入ソされた部隊にくらべ、翌年秋は遂に銃殺による処刑にまで至ったのである。鉄道は咸興から内陸部を北上、満州との国境に達して図們江沿いに東進、図們江の河口部（日本海側）の国境を舟橋でソ連側へ移るのが日本支配時代の鉄路を利用するソ連との連絡路であった（現在は図們江の河口部に鉄橋が完成、海沿いの鉄路で清津、羅津經由の国際線が距離を縮めている）。咸興出発からソ連領入りまで約二カ月を要している。敗戦直後の「東京ダモイ」のような「だまし」は通用しないので、途中の排便、給水、炊事などの停車中に逃亡者が出ず出る。当時は朝鮮側の自警団などに摘発され、次の梯団に収容されるようなケースが多かった。輸送指揮官の命令で逃亡者の出た車両について炎天下に扉の開放を許さないというような処分を命じたので、嘆願の未開放されたときには「ゆでだこ」のような状態で車両から運び出された例もあった。

阿吾地での逃亡と銃殺

満州と朝鮮の国境となった日本海に注ぐ図們江沿いで、日本海の河口に近い所、張鼓峰事件の現場に相接しているのが「阿吾地」と称する小集落の位置である。九月末頃、この駅に入った列車が一向に動く気配がない。「どうなったのか？」と説明を求めても具体的な説明がない。一番困るのは付近で拾っていた炊

事の燃料が得られない。嘆願の結果、村の裏側にある小山へ人を出す案が認められる。各車両から数人ずつの五十人ほどに警戒兵が付添い、私は薪取り隊の責任者。逃亡者が出たら大変、森では分散しての作業だから全員の動きが見えるわけではない。好機到来！ 集合時刻が来て点呼すると足りない！ 私は通訳としての付添いだがソ連兵の追及を一身に受けねばならない。

それまでなごやかに談笑していた若い兵士は握る銃に力をこめ殺気立って行く。薪を背負って集合した者の中には、戦友の成功を祈る者、身勝手な奴のために迷惑するとはやく者、様々。貨車に帰ると逃亡者が出た車両は報復的に締め切りや薪取り停止などが課されたが、長期の停滞であるから人道上の配慮を求める我々の要求は無視できない。逃亡者本人の責任を追及しても無駄なことから「所属の班長を銃殺する」とまでの厳命の上で薪取りは再開されたが、やっぱり逃亡が出た。輸送指揮官のロシア人大尉(年配者)の人柄か、そのままになった。「ほっとした」矢先に事件が起きた。

早朝起床前から何かあわただしい。「逃亡だ」「すぐ点呼」と喚んでいる。全員貨車の外に整列、点呼。三人が足りない。事の次第はこうである。阿吾地の駅は村落の外側にあり、更にその外側に三、四本の線路が並ぶ。捕虜列車は駅舎より遠い外側の線路に停車、前方は原野で国境の凶們江に続くから監視は楽、この盲点を突いた。炊事するあたりに水路の入口があつて駅の表に通じている。点呼後の薄暗がりを利用して、彼らはここから暗渠に潜入、村落側へ抜けたが、朝鮮側の自警団員に発見されてしまった。たちちにソ連側に引き渡され、日本側幹部一同の助命嘆願も拒否される。目隠しされた三人が整列した一同に向かつて並ぶ。リーダーはやや年長の人物で、がっしりした体格であるが他の二人は若い兵である。常に死と向き合ってきたので、このような事態に対する覚悟ができていたのか、全くとり乱すことがない。「撃て！」自動小銃が発射されて三人は倒れた。伝え聞くところでは、リーダーは少し年輩で中国在在の経験がある

ところから、中国領に入ったなら何とかなると若い二人を誘ったという。私はこの大隊本部で通訳をしていたので、事件直前の通告に「今度こそはやるかも……：」というソ連側の気持ちを感じていながら、命令受領者を通じて伝達される各隊の受けとり方に反映されていなかった実情が尊い犠牲者を出すことになったと思われてならなかった。

ソ連営倉を体験

和歌山県 南口佐一

十二月初めのこと、仕事場に鶏が迷い込んできた。私は内心しめたとはい捕らえ、夢中になつて首を十回ほどねじつたら、首がちぎれて血が飛び散つたので、鶏を雪に埋めて血の後始末をし、その日は何食わぬ顔で帰り、翌日それを持ち帰り、ナイフを借りて料理にかかった。それが、私にとって大問題が起きたのです。薄暗い所で料理に夢中になり、その日は明日が明治節の十一月二日、今も忘れはしない、ひよいと顔を上げれば前に軍曹(セルジャント)が立っているではないか。アツと思つて鶏を隠すが、ナイフを持っていたのです。

少しずつでも友とカシワの肉を分け合つてと思つたことが、この始末。早速日本の井上中尉を呼び出し、点呼である。十一月になれば雪が降り寒い。そのセルジャントは通訳を通じ語気荒く「この日本兵は私を殺して逃亡しようとした」。私は井上中隊長に「そんなことはない、鶏を料理していた」と言うが聞き入れられず、「この者を営倉に入れる、使役を五人出せ」と中隊長に言い、私を引き出したのです。ソ連の営倉とは、有刺鉄線の杭のところに柱を七〇cm 四方に四本立て、柱を倒れないように杭に縛りつけ、私を中に入れて外から板を打ち、青天井。約七〇cmほどで身動きもできない。ソ連の営倉はつらかった。私は第一号で、自慢ではないが、外に入れられた者は少ないと思う。

シベリアの地は大陸性気候で、十一月になれば体感温度はマイナス四十度くらいになる。夜はものすごく冷え込み、月星まで冷たく感じ、身体を動かさな

くは凍傷になると思うが箱詰め同然で、井上中尉が何回となく来て、南口頑張れ、身体を動かせと励ましてくれた。私も、こんな所で死んでたまるか、冷えきった身体は変調を来たし、少食であるのに用便を催し、垂れ流し。幸いなことに風はなく、風速あれば体感温度はぐっと下がり、シベリアの夜明けは遅く生きた気もしないというのはこのことと思つたのです。明るくなってきたときはほっとし、生き返つた気がした。軍曹は私に「二度としないか、今度やれば殺すぞ」と言い、拳銃を発射し弾は耳元をかすめて後ろの窓ガラスが飛び散つた。私は一瞬首をすくめ、生きた気はしなかつたが、射撃はうまいと思つた。

愛知県 兵東政夫

プーシキンを語り、ドストエフスキーを話しても何の反応もない。ソ連将校と下士官が、革命の日々を語る冷酷な数々のことに私は戦慄した。それは「無辜なる民の血をまるでシャンペンのように流す」ロシア人の姿であつたのか。それまでに、ソ連兵の中に幾人かのロシア人を見た。粗末な平服をまとつて運命の中で生きていくロシア人である。ギリシヤ正教を破壊していく革命の士よりも、深い懐疑と「ニチエボ」を漂わした土深いロシア兵に私は魅せられる。スメルジン軍曹やカザコフ一等兵はそんなロシア人であつた。西欧派とスラブ派の激突の歴史、オプローモフ主義かデオソソスのか、その精神地理に私は困惑した。

彼らは私たち抑留者を差別しなかつた。二人は別れる日、東多来加のなぎさで相擁して泣いた。とくにカザコフは一度たりとも自動小銃の銃口を向けることはなかつた。

多来加の四季は五月から十月までである。私が雑文・雑詩を書きなぐつた「多来加ノート」四冊ができた。あちこちで集めた紙をとじたノートである。この拙い記録を日本に持ち帰らなかつた。

本当の「ダモイ」の日を迎える。私は「多来加ノート」四冊を校舎横の階段の蔭で細々と破り捨て、『罪と罰』『パンセ』を校庭の高台にある石の上に揃えておい

た。私にとって一番大切な、手垢に汚れた「人名簿」を左の靴底に忍ばせた。縦十五センチ、横八・五センチ、十二ページの名簿である。

北海道 村上嘉寿雄

ぬくもり

二十一年秋になり、伐採の現場監督より依頼され、自宅の薪割りを二人で手伝つた。家に着くなり、必ず、まず食べろとバター付きのジャガイモがたっぷり出される。作業後、帰りにも、さあ食べろ。慢性的な空腹を少しでもいやす事ができた。ロシアの民間人とも付き合つたが、ロシア人は個人対個人では全く差別の無い扱いがなされ、ほっとした。

北海道 東島房治

ある日、長江という兵隊がこのパン工場から、パンを盗んだのをロスケに見つかつてしまつた。

所長がカンカンになつて怒つた。あのおとなしい所長がこんなに怒つたのは初めて見た。所長は「腹のすくのはお前だけではない、皆同じだ。それをみんなのパンを盗んで、自分一人だけ腹いっぱい食べるなど、もつての外、銃殺にする。向こうに行つて立て」と言つて、腰から拳銃を抜き弾を込めた。長江は真っ青になつたと言われるままに五メートル程離れたところに立つた。自分達もこれはやられると思つた。本人はもう覚悟を決めたようである。所長は静かに拳銃を上げて狙いを付けた。その時間は僅かであつたろうが、我々にはとても長く感じられた。

ところが所長が突然狙いを外して言つた言葉は「お前はそんなに腹が減つたか」と言つたのだ。長江は「ハイ」と返事をした。「ヨシ分かつた、お前は明日からパン工場の仕事をやれ」と命じた。本当に良かった。そのお陰で彼は一カ月後には丸々と太つてしまつた。本当に運の良い奴である。それにしても誠に立派な所長であり、感心させられた。

愛媛県 山本繁夫

昭和二十一年秋、きのこが美味しい頃だった、まだ我々も相変わらずの食糧不足で食う物もなく働かされていたが伐採作業で林の中へ入るときのこが沢山できている。作業の間を見て雪を飯盒で熱湯にしてきのこを煮て食べると上等のカマボコを食べるように歯当たり、口当たりがよく美味しくて腹持ちよくて満腹感を得る。

ただし、消化は悪いのか胃が弱っていたのか尾籠な話で失礼だが、歯で噛んだままの物がそのまま出ているのである。昭和二十一年十月頃、飯盒いっぱいにきのこを煮てお土産として所内に持ち帰り、作業本部の青山八郎さんに、とても美味しいものです、召し上がって下さい、と差し上げたところ、自分は所内の炊事から一袋のご飯と副食をとって不自由なのに、私の誠意を汲んで下さったのか数日して「山本、明日から作業本部へ来て計算係になれ」と言われました。

青山八郎さんのお陰でソ連将校。ペトロフ上級中尉が人事を担当していたのでそちらの仕事を手伝うことになりました。私はペトロフさんからロシア語の会話と字の書き方、取り敢えず日本人の氏名、階級、兵科、生年月日、日本の県、市、町村、番地、父の名、母の名、兄弟の名、職業、家柄、財産などロシア語で書くことを教えて下さった。

三大隊の兵舎を有刺鉄線で取り囲み関係者以外は勝手に入れなかった。将校だけ二百人で中尉から大佐位までの階級で若手少尉や将官は一人もいなかった。

五分所のロシア人将校、人事係のペトロフ上級中尉と山本の二人で兵舎へ入ってまづびつくりした。大部屋で四十人、五十人が真冬の二月に真つ赤に焼けたペーチカのお陰で全員上半身シャツ姿が多かった。一部上衣着用者もいたがシャツでは階級が判らなかつた。この時はペトロフさんが片言の日本語で質問して、主として自分が将校の氏名と階級と本籍地の三つか四つ問ひ記録するに留まり、一

時間半か二時間ほどであった。

北海道 工藤清吉

殺伐とした生活の中の話は専ら食べる事であった。おいしかったご馳走の話、満腹するまで食べた話をして溜息をついた。また性欲の話もよく出た。年配の男達の遊郭通いの得意げな話、既婚者達の性愛の話などは、経験のない私にとっては新鮮で羨望の限りであった。男と生まれ女を抱くこともなく死にたくない。絶対生きて帰るぞと自分に誓った。

「ここに腹いっぱい食べられるご馳走と、自由にできる女とがいて、どちらか一方だけ取れと言ったらお前はどちらを取るか」などと突拍子もない議論を本気でやり合った。私は未経験の女の方に惹かれたが、大勢は食べる方を取り、食に対する執着心の強さを表した。

作業場で触れ合うロシア女達とのカタコト会話は「妻はいるか、子どもは何人か、日本では何をしていたか」等他愛もない会話ではあったが、心がなごみ慰められた。ラーゲルの限られた生活の中で荒んだ男達の心は、女の容姿や会話でどれほど生き甲斐を与えられたことか、当事者でなければ分かるまい。女達が捕虜と蔑視しなかつたことも救いだつた。

愛媛県 梅崎文夫

奉天を出発以来、列車が停車することに外から監視兵が引き戸を開くと皆一斉に車外に飛び降りる。そこは荒漠たる平原で付近に人家も見えない。誰しも車外の新鮮な空気を胸一杯吸い込むのは当然であるが、最も切実な問題として排便が優先するのであった。

既にあたり構わず、先行したであろう人々(戦友)の名残が至る所に残されていた。私達も我先にすき間を捜してしゃがみこむ。恥も外聞もない。人間である以上、生理現象のためには将校も兵もない、そこにあるのは生身の人間の赤

裸々な姿あるのみであった(その後ウランウデ地区まで続いた)。

大阪府 岡崎博好

「クーシャチ・ニト・ラボート・ニエト」

空腹と酷寒で労働意欲がわくわけがあるのか。どうにでもなれど、鉄棒を抱いて突っ立っていると先刻から私の周りをうろついていた現場視察のカピタン(大尉)が突然大声でどなりだした。かねてから「ドアメートル」と仇名された大男が私の面前に立ちふさがり更に声を張り上げる。「ポチョム・ラボート・ニエト」(どうして働かないのだ)。

「クーシャチ・ニト・ラボート・ニマグー」(食べてないので働けない)

捕虜の分際で大尉殿に反論するとは正に命を張った抗議だ。これを見ていた同僚たちは作業を放り出して大男と小男の二人を取り囲み青くなつて全員ふるえている。大尉は腰の拳銃を抜き、引き金に指をふればかりの形相。早口で「お前は銃殺だ!」とでも言っているのか。三年もシベリアで辛抱したが、もう日本に帰れる望みなどとづくに無くしていたのか若者はどなり返す。「射つなら射て、殺すなら殺せ。俺が殺されたら、お前も日本兵になぐり殺されるだろう。お前一人だ。お前を殺して深い穴の底に放り込んでやる。どうだ、それでも射つか、さあ殺しやがれ」。同僚はこの危急の展開に目を見張り足をふるわせているばかり。

さすがの大男も異様な雰囲気に胆を冷やしたのか「覚えていろ」とかなんとかロシア語の捨てぜりふを後にして穴ぐらを上がつて行った。私は泥んこの水たまりに座り込んだまま、しばらく立ち上がれなかった。

愛媛県 井手正人

人間は不遇な運命や、未知の不安を予見するとき、とかく楽観的に考えるものらしい。捕虜であるから厚遇される筈はないが、戦争は終わったのだからそれ

ほど苛酷な待遇は受けないであろう。敗戦の日本に帰つても苦しい生活が待っているだろうし、いずれどこにいても働かねばならないのだ、働きながら未知の国を無銭旅行できるのではないかと考えたりした。

熊本県 村田昭三

馬鈴薯のおかげで多少は生き長らえらえると思った。ここの収容所は非人間的な扱いで捕虜のわずかな食糧を闇に流す噂も出るなど。一日三〇〇グラムの黒パンにスープは青いトマト、キユウリの塩漬だけが入り、穀物の入っていない日も度々あった。酷いのは粟の皮がむいてないスープを与えたので皆が糞詰まりをおこし、大変な苦痛にあわされた。ちやうど職場でおきたので、マダムや皆の前でお尻を出し合い鉄屑でほじくる。恥ずかしさを越し、生き抜くには仕方がない事であった。

福島県 橋本宗明

特に抑留生活の中でしみじみと感じたことは、私らの収容所には在満の召集の方が非常に多かったです。在満の召集の方というのは三十代、四十代の人たちで、にわかには召集されて、軍隊に入れられて捕虜になったという方たちです。特に満州などでは、日本軍の人たちが、上層部の人で、世間的にいえば経歴も立派だし、社会的にも地位の高い人たちがいっぱい召集されて来ておりました。

どうしてもそういう方たちは、ある意味体力的にも抵抗力が低いといえますか、そういう方で亡くなられた方が非常に多かったです。そういう方たちに接して痛感しますが、人間というのは、飢餓状態において、その人の本音の値打ちが出てくる。現在の日本のように、大変飽食の時代に生きていくと、本当の姿は見えませんが、飢餓状態になると、その人の本質、本音が出てくる。そういうことを学ばせていただいたと思っております。

確かに、つらい思い出もいっぱいございましたけれども、現在から考えると、マ

イナスの体験ばかりではなくて、プラスの面もあった、こういうふうに使っています。

秋田県 藤盛定芳

炊事勤務者の奮闘で昼食の飯上げの号令が出た。当番の同士が昼食を運んで来た。この事は食堂の設備ができてないので、居室兼食道として使用することであった。私達は軍隊生活でもこのようなことは正常な生活と違ってさほど苦にならなかった。しかしソ連当局はこれを認めず、一週間過ぎた時点で全員収容所の食堂を使用することになった。

部屋内での食事時、不愉快なことがあった。今までは下士官連中は「俺の飯は少しで良いぞ」と軍隊で言っていたが百八十度変った。当番兵の食器の盛付に目が光るのだ。鵜の目鷹の目である。一さじでも多くなければ大憤慨だ。でも兵隊が急いで数十個の食器に手早く平均に分配することは非常に困難である。

ここでは兵隊も古年兵も下士官も将校も皆同じでないか。「彼らはどんな人間なんだ」とつぶやきながら分配の仕事に懸命だ。

人間の本性とは、こんなに腐ったものか？我々兵隊達はいつになったら解放されるだろうか？全く奴隷とはこのような生活を送ることかと思いつながら、今日も終った。

静岡県 飯島久

ある日、隣のベッドに豊橋の兵士が入院してきました。体が弱く、ずっと召集されずにきたのですが、昭和十九年の秋に地元連隊に入営、満州に来たそうです。妹さんが手編みのセーターを送ってきてくれたそうで、あたたかそうなセーターを手で触って、豊橋の家のことを思い出しているようでした。家業はさつま揚げなど水産練り製品を扱っているようで、さつま揚げとは魚肉を練り上げてから、昆布や人参などのみじん切りを混ぜ、油で揚げるのですが、少し塩味がつけ

てあり、揚げたてを食うのがとてもおいしいのだというような話をしてくれました。その人は栄養失調二級というより三級に近い危険な状態に見えました。弱々しい声ながら、妹さんが編み物が得意なのだとか、いろいろな話の内容は混乱していません。

ある朝、その人は目を覚ましませんでした。襟首からぞろぞろと虱が湧き出ておりました。死んだのです。病院にはスチームが通っているとはいえ、枕元の水筒の水が凍ることがあるくらいで、死者の体は瞬く間に冷えて、虱がすめなくなつて湧き出るようになってくるのです。栄養失調の死は静かでした。ロウソクが燃え尽きるように命の灯火が消えるのです。私はその人を哀れとは思いませんでした。それよりも、衛生兵に頼んで、あのセーターをもらいたいなどと考えておりました。私自身、危機を脱したとはいえ、もはや人間らしい感覚を持っていません。

愛知県 高木勝巳(旧姓 山下)

このころ民主運動が烈しくなる。日本新聞を見ると、赤旗の歌を歌わなかったと言つて、ナホトカから奥地へ送り返された記事が載っていた。サア大変。収容所から作業に出るとき、作業から帰ったとき、赤旗の歌、インターナショナルなど革命歌を声張り上げて歌った。私は思った。帰るまでは赤になつていよう。日本に帰ったら黒でも白にでもなる。自由にと。

(4) 生命力の強さ確認

栃木県 橋本満

和歌山県 入山敏一

ソ連のチタ収容所で結局は帰国ということになったのであるが、当時は何という感動もなく、今思えば不思議なくらい何も感じなかった。それは周囲への気遣いもあつたからかも知れないが、私がソ連から無事帰り得たのは、「自分の気概」と、かろうじて生きられたこととというべき「野草アカザ」のお陰と信じている。

新潟県 片山正治

とにかく生きるんだ、こんなシベリアの凍土に埋められてたまるもんか。なんでも食べよ、家族の顔を見るまでは、なんとしてでも頑張り抜け！ 身体が、心が叫ぶ。食うことが第一、餓鬼道とはこうしたことをいうのだろうか。

ただいちにぎに生き抜く執念が通じたのかどうかは解らなかつたが、食糧配給が徐々に良くなり、黒パン三百五十グラム、スープ、少しではあるが砂糖も支給されるようになった。作業も余りにも「ダワイ」「ヴイストレー」と言われたときは「スターリンピシピシ」と手紙を書くまねをすると、変わったようにおとなしくなることも覚えてきた。スターリン独裁政治、直轄部局政治局長、これが一番こわい。ソ連人の目がそう語っているのがよくわかるようになってきた。

極寒と栄養失調でふとももとお尻の肉がなくなり、腕をふくめて骨と皮の状態のなか、「ダワイ」「ヴイストレー」の声と、自動小銃にこづかれながらの強制労働の日々。祖国、家族の顔を思いながら、異境凍土に無念の死を上げていった数多くの戦友達のためにも、なんとしてでも生き抜かねばと、強制労働にたえぬく自分であつた。

なぜか私はマリア病になつた。四十度以上の高熱が続き、胃は空のくせに食欲がなく、一片の黒パンも食べられない。栄養失調状態の中で高熱、最悪の状態である。昼でも暗いラーゲルの片隅の毛布の中で、戦友の仕事で出ていくのを見送るたびに、夜帰ってくるこの顔を再び見られるだろうかと思いつつも、薄れゆく意識が暗い闇となり無限の闇の中に落ち込んでゆく……。

ラーゲルでは、死亡した場合は、死体は裸にしてラーゲルの外に出すことになつている。外は零下二十度以下なので、そのまま冷凍になり腐敗しないので、胸に死人番号を書き、来春までそのままにしておく。

私はかすかな意識の中で戦友の声が聞こえた。その戦友は私の鼻の穴に手を取り、「まだ少し息があるから今夜だけ置いて、だめなら明日外に出そう」という言葉がかすかに聞こえるが、「おれはまだ生きています」と一生懸命言おうと思つても声が出ない。私はもうろうとした意識の中で「こんなところで死ぬのはいやだ、国に帰るんだ、死にたくない」。奈落の底に落ちていく加速度が早まつたようだ。真つ暗い大きな穴に近づいてくる。「もうだめだ」私は最後に母の名前を呼んだ。その瞬間だつた。落下が止まつたように感じた。そしてら身体が温かくなつたようだ。私はそれが何だったのか、どうしてそうなつたのか、四十年経つた今でもわからない。そのうち身体も温かくなつた。意識もはっきりしてくる。まくら元の水も一口飲めた。現実に戻れたのだ。戦友たちも生き返つた私に驚いたようだ。実にすがすがしい朝だ。雪に反射した朝の光がラーゲルの窓から差し込んでくる。私は生き返つたのだ。シベリアのラーゲルで迎えた二度目の冬であつた。

栃木県 富樫源次郎

酷寒と栄養不良と束縛の毎日で倒れ行く幾多の戦友をこの目で見ると、自分の気持ちは平常を欠く、自分でもいかんともなすすべもなかつた。しかしこの

異国で捕らわれの身では死にたくない。いかなる苦勞をしてもいま一度本国に帰つて白米を腹いっぱい食べ、暈の上で死にたい。日本人捕虜としてだれもが幾度となく考えたことでしょう。

熊本県 畠田 完

いよいよ冬の到来である。零下三十度前後の気温は、身を刺すような痛い寒さで、想像を絶し、言葉を知らない。防寒の服、手袋、帽子、靴と一応の支給は受けているが、程度が悪く、よくぞ耐えたと、思い出しては身の毛がよだつ思いだ。

着ぶくれて、ただでさえにぶくなる行動は、ちよつとしたものにもつまづき、転ぶというありさま。その姿は哀れというほかなく、捕われの身の悲哀を感じ、「冬の時代」という表現がピッタリだ。雪の凍った上で火をたき、体を温めて仕事にかかる。氷の上に座つての作業で痔が痛む。血がにじみ、どうしようもない。火にあたるのが多くなり、雪を溶かしたお湯を呑むくらいが関の山で、また作業だ。冬の火はツルべ落として、木枯らしがヒューヒューと吹きつける。暗い夜道をトボトボと足を運ぶ。元気な人が急に目が見えないと言う。夜盲症、目くらめがある。ビタミンAの欠乏、栄養不足がさらに進んでいる。明日は我が身と、手を引く。

冬の後半になると、かねて蓄えていたまきが底をつき、三十センチの丸太を担いで帰る。肩に重さが食い込む。しかし、命綱だから懸命に担いでくる。部屋に入り暖をとり、雑炊を流し込んで、やつと生気をとり戻す。

冬は特に体力の消耗が加速され、毎日が何とか生きようとする死との闘いでもあり、死と直面したときの人間の生命力の強さをしみじみと感じる日々でもあった。

疲れた体を、蚕棚のような寝台に横たえ、いつ帰るともわからぬ寂しさに耐えながら故郷の山、川、肉親、恋人のこと等を考え、いつしか深い眠りについてい

た。

生と死の境

東京都 嶋崎武男

激しい下痢の結果、極端な栄養失調になった戦友たちは、次々に息を引き取つていった。グツタリと疲れて空腹に悩みながら、だれもが何とかして生きることだけを考えながら眠つた。しかし生きる希望を失つて首を吊り、みずから命を絶つた人もいた。突然夜中に起き上がり「ほら船が来ているじゃないか。早く行かないと乗り遅れるぞ」と極寒の戸外にはだして飛び出した彼は、とうとう発狂して間もなく死んだ。シベリアの冬は厳しい。野も丘も道路も、氷と雪に閉ざされて交通は途絶する。

収容所の食糧はシベリア鉄道沿線からのトラック輸送に頼っているので、輸送が途絶すると大変なことになるのである。毎年この時期に交通の途絶に苦しめられていた。今度も交通が途絶えた。冬は草もない木の芽もない。シベリアエゾ松の大木の幹を食いながら、幹の中で越冬している髪切り虫の幼虫をとり、これを串にさして焼いて食うのが何よりのごちそうだった。またエゾ松の幹にはりついている黒いこけも食べた。ソ連人の捨てた魚の頭しっぽ、これを拾ってまだ食えるものは手当たり次第食つた。恥も外聞もない人間の極限の姿だったろう。理性にとらわれれば何とも情けない姿である。仏教の言う飢餓道であろう。

シベリアは六月になると、日本の梅雨に似た雨がしとしと毎日降り続いた。この時期までにすべての氷結した川という川の氷、山野の雪が一斉に解けて合流して大洪水となる。

昨日までの荒野は泥沼と化し、道路という道路は水に浸り、またこの時期交通は完全に途絶えてしまう。食糧輸送はまた途切れて収容所はたちまち陸の孤島となつてしまった。これから収容所は十日あるいは二十日食糧はなくなつてしまう。わずかに生えてくる草は皆食つた。小さい木の芽も食つた。馬糞を拾って

丹念に水に流し、中から出てくる消化していない麦を根気よく集め、これをソ連兵の捨てた缶詰の空き缶で炊いて食べた。作業の往復は馬糞を探すのに皆眼を光らせた。早く夏が来てくれ。草が食える。昨日の朝は右隣に寝ていた友が死んだ。今朝は左隣の仲間が死んだ。こうして私は一体あと何日生きていられるだろうか。

十一、月に祈る

収容所の二段ベットの二段と下段では、北極と南洋ほどの違いであった。部屋の真ん中でたく大きなペーチカ(暖炉)で暖められた空気は天井に上がってしまい、逆に冷えきった地面の冷気が部屋の床板を凍らせ、下段のベッド周辺の空気を冷やしてしまうからだ。

上段ベッドでは暖かく寝られるが、下段ベッドでは毛布を何枚重ねても、寒くて寝られたものでなかった。シベリアの夏は短い。九月半ばには白銀の世界になる。シベリアの雪は上から降るのではなく、大地に冷やされた大気の水分が雪になる。酷寒の大地に冷却される大気の水分は次々に氷結して霜状になり、見渡す限りの山野を白銀に埋め尽くしてしまう。シベリアの雪は下から降る。冬のシベリアの夜はよく澄んで、月がこうこうと輝いていた。照る月をふり仰ぎながら思った。私はまだ生きている。我ながらおのれの生命力に驚く。人間はなかなか死なないものだ。いや死ねないものだ。西行は「嘆けとて月やは物を思はする」と歌ったが、私はこうこうと照る月を幾度か眺めながら年老いた父母はどうしているだろうか。またともにこの戦争に出陣した兄はどうなっただろう生死は、もの言いたげな月の光は、今日も故郷のあの山、あの川を照らしているであろうかと思いは尽きることがなかった。私は月に祈った「まだ元気でいてくれるなら、老いた父母に必ず伝えてほしい。私はまだ生きていること」。しかし無念だが肉親の幸せを祈りながら私はやがてこの凍土の土となるだろう。

広島県 村中汎雄

特に、あの時はどんな気持ちであったかと聞かれても、即答できないことが多い。夢遊病者であったのか、諦め切っていたのか、悟りきっていたのか、今でも分からない。

シベリアでの抑留生活と言えば、寒さとの闘いしか記憶に残っていないが、生と死の境で近い方において、屈辱と悲惨などん底の生活の中に、人間の生に対する本能の強烈なものを感じた。知らず知らずのうちに生に対する執着。つらくて死んだ方がましだと言いながら、なおかつ、生きようとする人間本来の本能。恥ずかしながらと、捕虜(奴隷)になった屈辱感も劣等感も耐えに耐えて生きてきた。自覚して行動することなく、自然に身に付いてきた。後から考えると要領が良かったと言われないこともないが、私は運が良かったと思っている。よくぞ生きて帰れたものだ。

岩手県 金野秀雄

食料不足による栄養失調、酷寒下でノルマと監視兵に追い回されての強制労働、虱や南京虫との闘い。これらによる回帰熱媒介、パンを口にしたまま死んだ友、監視兵に射殺された同僚など、極限状態はいつでも、どこでも、だれでも経験し、自分の目で見ているだけに、今度は俺の番かと思っただけに違いない。

体力のさほどない私でも、絶対帰国するぞとの信念と気力だけは欠かすことがなかった。

福島県 相田正明

一時はシベリアで銃殺刑と思ったが、ソ連は我々を、独ソ戦で疲弊した国土復興、即ちシベリア開拓に、何年かかるかわからないが、労役に利用するため連行したような感じが見受けられ、必ず「東京ダモイ」とその都度ソ連に言われると、そうだ、必ず祖国日本に帰るんだ、死んでたまるか、故郷に帰りたい、両親に会

いたいの信念が気力となった。

月夜の晩には、お月様やお星様に手を合わせて、どうか故郷の空で再び拝むことができずようにと心を充実させ、帰りたい、会いたいの一心で頑張る執着を持ち続けました。酷寒や過酷な重労働も、ここでは死ねない、倒れても、這ってでも帰るんだ！いつの日か必ず訪れると心に言い聞かせ頑張り、耐え抜き、極限状態における意識とは、一日一日が生きる戦いでした。

福島県 石黒庄七

四年九カ月の抑留生活。よくぞ生きて帰れたと信じられないくらい。あの苦しみに耐えてきた精神力と仲間の励ましがあったればこそ生きて帰れたと思います。

石川県 高松正朋

運命の糸

人間はいつ、どこで、どんなかたちで死ぬか——それはすべて運命の糸に操られているといつてよい。

衰弱した体が鉄道建設の重労働に耐えられるわけがなく、最初に入ったムリ―地区から逆戻りで、掖河の旧四一四部隊が変貌した病人収容所に収容された。

ここには無数の死の糸がぶら下がっており、毎朝何人かが静かに死んでいった。私は炊事場のごみ捨て場から拾ってきた野菜の屑でスープを作って食べ、どうにか生の糸につかまり春を迎えることができた。

「日本にダモイ」と言われ、喜んで乗った貨車の行き先はまたシベリアであった。

集団農場、製材所、伐採など作業も収容所も転々と変わったが、三年半の抑留生活は飢えとの闘いであった。その間、何度か死の糸にからまれたが、死んで

たまるかという意地と信念を持って懸命に努力すれば、必ず生きる道が開けてくるということを見出すことができた。

東京都 岩本行夫

どこか地名も解らぬ原野に収容所を建設し、シベリアに入つて二回目の酷寒期を越した。路盤も未完成の上にレールが敷いてある。貨車でゆられにゆられて来て、よく脱線しなかったものである。

バム鉄道支線は私たちが路盤もレール修整し完備、今では客車も走り、完成した。山のえぞ松で家を建築、枕木、薪に伐採して山肌が見え明るくなった。

シベリアの夏季は短く、年中冬季と酷寒期のようなだった。栄養失調は隊員全員で、気の緩みで怪我もしたが、凍死者はなかった。シベリアで死んでたまるかと各人思っていた。私も酷寒と栄養失調で何度か倒れ、死んだ方が楽じゃないかと思っていると、戦死した兄に「どうした、しっかりしろ」と励まされてどきどきとしたことがある。戦死した兄がどうして私がシベリアにいることを知っているのかと、靈感を体験した。体調はだれでも同じ、気力だと感じた。

北海道 澤田清吉

シベリア抑留六十万の同胞が、捕虜という屈辱を背負いながら、熾烈な環境と過酷な労働に耐えて、ひたすら生への執念に燃えて生き抜いてきた。

千葉県 伊橋芳二郎

思えば在満軍隊生活、終戦、武装解除、そしてシベリア抑留と人知れぬ体験を通じ、何事もやればできる逆境、貧苦に耐える精神力は今なお私たちの生活の中に力強く生き残っている。

今何一つ不自由のないこの平和な時代にこそ、往時をしのび、二度と戦争のないことを願い、世紀の歴史に永久に残る悲劇ともいふべきシベリア抑留生活の

一端を風化させることなく後世に伝えることが、私たちに与えられた責務ではないかと思っている。

千葉県 菊田鎮男

着衣については最初から着けていたものでダモイまで過ごし、支給は一度もありませんでした。長い習慣でしようか、パンツをはかないことと風呂に入れないことで、人間は垢がたまって死ぬことはないと思いました。

人間の精神力はすごいものと自分自身で実感しました。栄養失調で階段を普通に上れないので、両手で一方の足を上げ、終わったらまた一方の足と、交互にやりながら上ったり、兵隊と兵隊が接触すると両方倒れてしまうなど、炭坑への往復路はふらふらだが、一旦坑内に入るとまるで別人のようになります。ノルマの八トンを積み込みしたり、落盤に際しても逃げ足の速いこと、坑内というところは不思議な所です。人間、生に関してはすごい力が発揮されるものです。

神奈川県 丸山國武

五九〇病院に入院と決定された私は、同夜直ちに旧ソ連の軍用トラックの後部荷台に乗せられ、全く未知のこの病院に到着したのである。心の中では今まで何回もうそをつかれているので、病院ではなく、どこかの収容所、または殺されるのではないかと、不安でいっぱいであった。後で知ったが「国際条約」では捕虜は簡単には殺されれないと言われているが、戦勝国である旧ソ連は何をするか、わかっただけではない。兵隊となった以上はいつ死んでもいい覚悟はできているものの、「死んではならない、どんなことがあつても生きて祖国の土を踏まなくては死んでも死にきれない、なんとか生きよう」と、そればかり考えていた。死ぬことよりも生きるの方が難しいのであった。

福井県 谷崎喜久雄

過去五十年前を溯つて見るとき、飢えと寒さと重労働を強いられながらも生きてこれたと思ふことがある。昔からの格言に、「人間一生の間に、もう人生の最後だということが三回ある」と聞いているが、私の場合は、抑留期間中だけでもこの何倍もあつたと思う。しかし、これを支え越えられたのは……と考えたとき、私は、自力、他力といういろいろ言われるが、神仏の加護はもちろん、我が身を生み育てられた先祖各霊の加護を忘れてはならないと思う。

ソ連現地にいる間に片言交じりと身振り手振りでソ連兵と話す機会も重々あつて、我々はいつごろ日本へ帰されるかと質問したことがある。すると、南方のヒマラヤ山脈の頂点を指差し曰く、「彼の山の雪が消えたらダモイ(帰れる)」と言つていた。ということは生涯帰れないことを意味しているとさえ考えられ、愕然としたこともあつた。しかし、その時すぐ、こんな異国で挫けてなるものかと我が身を振り返つた。

新潟県 若月太郎兵衛

昭和二十一年春のころだつた。どうも体がだるくてどうしようもない。自分の体を持て余した。だんだんおしっこも黄色っぽくなつてきた。爪も黄色くなつた。肉や魚など見たくもない、吐き気がする。これはただごとではない、鈴木ドクターに診察して貰つた。どこも悪くないと言われ、仕方なく作業に行った。こちらは作業どころではない。友達は「遠慮することはない、休んでいなさい」と慰めてくれた。だるくてだるくて、困り果てた。明るる日思い切つて診察を受けた。また、熱もないしと同じことを言う。頭にきて「ドクター、僕は黄疸です」「なんだ、お前医者か」と怒鳴つた。「目を診てください、爪も黄色です」。藪医者はやがて僕の上まぶたを捻り上げた。じーと見詰めて、「うーん、これは黄疸だ、直ぐ入院だ」。僕はほつとした。

即入院、入院と言つてもただの医務室の隣の部屋なのだ。診察入院はよいけれ

ど、菓なし、作業休み。砂糖を炊事から少し貰ってきてなめること、食事は炊事が岩塩を調味料に入れる前に貰う、無塩食だけ。僕は疲労が原因の黄疸なので、疲労回復で治るといふ程度の病気であった。胆嚢が弱いほどでもなく、栄養失調と疲労が重なり合つて黄疸になったのだと思つた。無塩食ばかり三週間食べていると、各関節ががくがくして足の運びが伴わない。締まりがなくなつて骸骨が歩いているような感じ。それでも俺は甲種合格だ、絶対俺は元の体になるんだ、頑張らねばと心に誓うのだった。三週間で何とか退院に漕ぎつけた。内科の鈴木軍医さん、お世話になりました。藪医者なんて御免ね。僕は菓などなくても自力で治るのだ。

岐阜県 坂井文介

理由も何も示されなまま、ここに入れという。丸太の太い格子戸の鍵を外すと、薄気味悪い音がしてドアが開いた。番兵が「サカイ、今夜はここだ」と言う。中に入ると木製の寝台が上下二段取り付けて、毛布がたった一枚支給されてあつた。

中にトイレ用の桶が一つ、小便のイヤな匂いが鼻をつく。まさに監獄舎である。部屋は同じようなものが数個並んでいた。ガチャンと音を立てて入口の窓が締まり錠が下ろされた。遂に投獄されたのである。

私が入った部屋は二人用で既に投獄されている先輩が一人いた。獄の中を監視兵が時々ぞくぞく。話をしてはいけないという。電気は十ワットにも満たない薄暗いものが外の廊下について、部屋の中は読むことも書くこともできない。全くモグラのような生活である。

夜、すきを見て先客に話しかけた。これも日本兵で、柔道二段で作業中にソ連兵と喧嘩して投げ飛ばしてやつたと自慢しそうに武勇伝を話してくれた。この先輩はこの部隊の者か判明しないまま別れてしまったが、こんな程度の者を入れているところならば殺しはしないであろう。しかしソ連は油断のならない国

だ。いつ銃殺されるかも知れない。

食事とは名ばかり、馬の食うような豆のスープを缶に入れて、外から運んでくれる。見れば日本兵だ。話ができない。無言で出したものを小さな入り口から受け取る。こんなものばかり食つていると、やがて栄養失調となつて死んでしまふのではないかと心配になつてくる。こんなところで死んでなるものか。獄に憤死する口惜しさを思うと、何がなんでも生きることだ。死んではならない、死んではならないと、自らを励まして、幾日も幾日も沈黙の時を過ごす。

こんな苦しいことはない。頭の中は満州で別れた妻や子供、古里の父や母、映画のような光景が次から次へと描き出されてくる。ともすれば獄舎に幾日を過ごしたのか忘れてしまう。取り調べもないまま今日もまた暗い獄舎に夜が訪れてくる。寒さのため熟睡できない。

シベリアの獄舎は寒し

天井のくもの巢ゆれて風の入るらし

岩手県 五十嵐弥助

体が弱つてくると思考力もすっかり失つていた。ただ一度でもよいから腹いっぱい食へ、好きな煙草を存分に喫つてみたいという動物的欲望が先に立つていた。これ以上の苦しみはなめたくない、この辺であきらめた方が幸福だろうと考えた。あの世とやらあるならば、この世において自覚する罪がないと確信している私は、閻魔大王の裁きを受けても二度とラーゲリに送られることなどあるまいと信じ

た。ついに自殺を決意した。逮捕以来一度も別れたことのなかつた尾形部長に、バラックの軒下で夕食のパンを食べながらそれとなく別れを告げた。部長も私と同じように、いやそれ以上に弱つていた。部長は強くなしたなめ激励はしてくれたが、私は翻意する気にはなれなかつた。

今生の別れに最後の願いは、腹いっぱいパンを食ふことと煙草を存分に喫う

ことであつた。私は身につけていたシャツ、外套でそれを求めた。それらは既に見るかげもなくよこれ破れてはいたが、ここでは一、二日分のパンやヤニ煙草の二袋くらいの値打ちはあつた。衣類は秋風が吹き始めた頃だったから商品価値は上がつていた。

その翌日、医者を拝み倒して作業休をせしめ、作業に出払つていたバラックの片隅で念願のパンを存分に食べ、しりから煙が出るほど満喫した楽しい日もたちまち夕方になつた。ポロキレをなつて縄を作り、首吊りの準備をした。バラックは人間がいっぱいだから、まさか人前では首吊りはできない。さればといつて屋外は望楼の監視兵が終夜照明灯を照らして監視しているから、人けのない軒下でもそれは無理である。

考へつたのが滅菌小舎である。バラックの裏手に土まんどじゅうのペチカ式の火力滅菌室があり、そこは誰もいないし、錠もかかつていない。しかも衣類をぶら下げる鉄の棒と頑丈な吊り金まであるのだ。ラーグリーでは虱の発生が最も恐れられていた。虱は発疹チフスの媒介となり、一度蔓延すればラーグリーは全滅し、大切な労働源を失つてしまうからだ。ソ連ではこの苦い経験を繰り返してきたから虱退治は徹底している。二週間に一度は全員の衣服をここで滅菌消毒することになつていた。決行は昼の疲れで皆寝込んだ十二時頃とした。

はつと目が覚めたときは東の空が白みかけていた。しばらくぶりで満腹した心地よさですつかり寝込んでしまつたのである。がばつと起き上がり、滅菌小舎に走り入つた。六畳敷きほどの土間の天井に鉄の棒が六本渡してある。この鉄棒に衣類をこつち針金で吊るして、ペチカの高温で虱退治をする仕掛けになつてゐる。用意の縄を鉄棒に結びつけた。妻に先立つことを詫び、近親縁者に謝礼と多幸を祈り合掌した。滂沱と頬を伝う口惜し涙もぬぐい取らずに首に縄をしっかりと結びつけた。ぶら下がつたところ、背の高い私の足は土間についてしまつた。たとえ足が地についても縊死はできるものだが、いっぺんにぐつと下がれないので首に

巻きついた縄が非常に痛い。苦痛なしに死ぬには足の届かない高所が必要なのだ。首の吊り直しをした。鉄棒より高い天井の一番高い梁に縄を結ぶため踏み台になる箱を見つけてこようと外に出てみたら、夜もすつかり明けてしまい、空腹で朝食を待ちかねていた囚人がぼつぼつ外に出て、入つてはならない滅菌室の前をうろついている私を見ていた。こうなれば望楼の監視兵も私の行動を見つけて出したようだった。

かくして私の首吊りは中止のやむなきに至つた次第である。

新潟県 高橋吉郎

よしと一計を案じたのである。どうせ敵国だ、ここで命を落としては犬死にである。集団で窃盗を思いついたのである。どうせ発覚しても俺一人犠牲になればよいと考えたのである。製材所に隣接して東側に、未だできないが火力発電所に使用するという三十センチ立方のカイ炭の石炭が貨車に山積みとなつて停車しており、二十両程の列車の前後には地方人の歩哨が実弾をこめた小銃を持って警戒しているのである。ソ連ではすべて国有財産である。だからその筋の者に見つからなければ見て見ぬ振りをしてるのである。しかし、ジャガイモをバケツに一杯盗んでもその筋の者に見つかれば強制労働の刑に処せられるのである。まして我々日本軍がこれを見つかれば、責任者は銃殺か無期の刑に処せられ永久に祖国には帰れないのである。

深夜ひそかに石炭を盗み、ジャガイモと交換することである。休憩時間に貨車から石炭を手渡しでどんどん運び、山のように出るオカズの中に隠匿してしまつた。天佑神助であつた。ソ連の地方人の歩哨も深夜でまさか日本軍が石炭を盗むとは思つていなかったのか、それとも同情していたか、発覚しなかつたのである。第一段階は成功した。次はこの石炭をたくましい船員あがりの隊員が南京袋に詰めて大黒様のように担いで丘を越えて街に行き、ジャガイモと交換して

来たのである。相当な量であった。これを飯盒で湯がいてホクホクする湯気の立つものをうまい、うまいと言って深夜の休憩時間に食したのである。ソ連人のラポーチ(機械を運転する男)はすでにうつ伏せとなり眠っていた。彼も気がつかないようで、ジャガイモの入手については分からなかったのである。腹が満たされれば血気盛りの男達である。力も湧いてくる、ぐんぐんノルマも上がり、一〇〇パーセントはおろか一二五パーセント、一五〇パーセントまで上げたのである。綿羊の肉が入った粟がゆが飯盒に半分程入ってくるのである。成功であった。もうしめたものである、隊員の体力もつき、作業にも慣れて来た、厳しい冬を越し昭和二十三年の陽春がやってきた。石の上にも三年と言うがよく言ったものである。

このナリリスクは、ここからエセイ河を約二十日ほど下って到着する北方二百キロメートル、即ち北極海に画したドジンカという街の近くで、この地域一帯は、プラチナ、ニッケル、銅、石炭、黒鉛から金、銀に至るまで、ここで産出しなものはないといわれる宝の山であるが、永久凍土の大水原である。北緯七〇度に近いこの地域は、人間がまともに住めるわけがなく、いかに高給を約束されたソ連人でも自発的に出稼ぎする者はいない。従って囚人によって開発する以外はなのである。囚人はナリリスク行きと聞いただけで絶望的呻き声をあげていた。ナリリスクに引かれて行った者で生きて婆に帰れる者は殆どなく、辛い生きて戻ったとしても、まともな体ではなくなってしまうからである。

ソ連では、重症患者の囚人に希望食というものを許して冥土への土産を与える温かい制度がある。私はそれを許された。私は砂糖と煙草を申し出た。私はそんな状態になつても自分では死ぬなどとはちつとも考えなかつたが、同房の友は「かわいそうに、五十嵐も終わりか」と涙を流していた。病室代わりの独房に移されて、うめき通したが、奇跡的に持ち直したのである。そのとき私はまだ三十三歳の若さであったし、生命力があつたのだ。しかし獄内の給与ではもとの体に快復するはずはなく、数カ月後の身体検査のときも骸骨の標本のようになつ

ていた。それが北氷洋行きを免れる原因になり、十一年後生還できた第一歩になろうとは、人間万事塞翁が馬である。

この日、生と死と確然と決定されたのである。即ち、北方送りと中央アジア送りとに区別されたからである。幸いに後者行きとなつたのは、小柄で年配の尾形部長と、既に頭髪の真つ白になつていた谷森、青田老人、それに骨皮の私で、二く三〇〇人の小部隊に分けられた。かくして膨大な囚人が、しりの皮のたるみ程度に従つて、北へ西へと引かれ行き、そして後続の部隊を受入れることを繰り返して行くのであつた。

栃木県 橋本正男

私は抑留中を振り返つて見て、我々の部隊はまとまって入ソしたので各人が気持ちの通ずる者ばかりである事と、我々古参兵が主として何事も主導権を握り弱者を助けてお互いが働かない事を心掛けて体をいたわつたのが良かったと思う。アクチーブが来てからは少し作業は楽になったが我々も工夫をして更に働かないように心掛けた。

死の淵に立たされたような状況ではあつたが、我々の後年次兵の中には更に弱い者が多く加わつておつたのであるが、話をきいて見ると殆んど一家の大黒柱であつて家に帰れば家族何人かが死なずに暮らせるとの話を書けば可哀相でシベリアで死なせてはならないと励まし合つて仕事は怠けたのが良かったと思う。食料がなくてやせている者は仕事を怠ける以外に体力を温存する方法はないと悟つた。

愛媛県 梅崎文夫

シベリア抑留から帰国までの歳月は、酷寒と強制労働と不十分な食糧の支給による飢えとの闘いであり、これを克服できたのは望郷の一念に燃えた精神力と、「負けてたまるか」との根性の賜物であつたと今にして思うのである。

(5) 尊い経験、教訓

和歌山県 木下正夫

和歌山県 南口佐一

この収容所で私が実感として感じたことは、シラミが人間の死期を教えてくれるということだ。死期の近づいた戦友の首筋に、今まで体内にいたシラミが続々と這い出てくる。それはおびただしいもの、血がうまくなってきたからか、体温に張りがなく冷たくなってきたためか、そんなとき、戦友は起きてこない、死んでいるのだ。それは時を定めない当時のハストリハンカ収容所の現象であった。

和歌山県 松本安次郎

小隊長と塩谷

ある晩、夕食をかまどで済ませて班に戻ると、部屋の隅の方にいた塩谷が、周囲の同胞に話している。部屋へ入ろうとしたが、自分の話と直感したので入り口で立ちどまった。

『松本(私のこと)ばかりうまい目させて、チョット交代させてくれ』と言うと、『松本はロートル(満語で年寄り)』『俺と松本は同年や』と言う。小隊長は『松本は病身じゃ』と。はなはだもって不満そうである。しかし、聞いている者たちは塩谷に対して何も言葉はなかったのか、私の耳には入らなかった。当時、私は小隊長福田の顔すら知らない。このイリクーツクに来てまだ一週間か十日もたっていない。もし隊長が、これが松本と知ったとしても、年や病身まで知るはずがないのである。今の幸せは偶然と今の今まで思っていたが、そうではなかったのか。たった今、塩谷の話聞いて、周囲から見守ってくれる自分の幸せを、だれにも話せない喜びとして、深く味わっているのであった。

ちよつとうれしかったことだが、ある日、町の作業を終え、溝でスコップを洗っていると、通りがかりのマダムが、どうしたわけか刻み煙草のマホルカをヤポンにあげるというて、くれた。このようなことは今までになかった。ソ連人の情けであり、思いやりであった。そのマダムの後姿にありがたさいっぱいの気持ちで、手を合わして見送ったものだ。どこの国でも、悪い人ばかりではない、よい人もいるものだ。

岩手県 佐々木徳男

ドン底に落ちた人間関係は時として醜い争いを生じさせ、加えて重労働の厳しさに、私は生きる希望を失い、死んで楽になりたいと何度思ったか知れない。

シベリアは私たちに強烈な窮極なものを与えた。肉体的には死と疲労と栄養失調を、心理的には憎しみと悲哀と人間不信を……。

トタンを折り曲げて食器をつくり、針金を折り曲げた先端をヤスリで穴を開けて縫い針をつくる生活必需品の製法も必要に迫られて覚えた。要するに、生きる気持ちがある限り、人間は生きられるということをシベリア生活で学びとった。

シベリア生活は確かに魂の放浪時代であり、餓鬼道にも等しい飢餓の毎日だった。

しかし、私はそこから、踏みつけられても生きてゆく雑草のような根強い根性と、生への限らない執念を知らず知らずの中に叩き込まれたような気がする。

ソ連人にも非道冷酷な人ばかりではなく、捕虜対戦勝者という関係を抜きにして私に目をかけてくれたカマンジール(作業監督者)がいる。彼は白系のロシア人で、名はモロゾフといった。その当時、五十歳を超えていたかも知れない。彼の息子二人は独ソ戦の時、レニングラードで戦死した。彼は私に、「マダム(妻)、イエス(いるか)、マーリンケ(子供)、イエス(いるか)」と聞いた。私はイエス、

と首を縦に振った。彼は即座に、オウ、ハラシヨウ(よい)、ハラシヨウと目を細めて喜んでくれ、私に熱いスープとパンを振るまつてくれた。

それから一年後、私は偶然ナホトカで彼に会った。まるで夢のようだった。彼は大きな手で私の手を握り「トウキョウダモイ、オーチエハラシヨウ！」内地帰還、本当によかつたと、我がことのように祝福してくれた。

それから四十何年、もちろん彼はこの世に存在していないかも知れないが、私の心の中には、あの優しい柔和な眼もとの彼の面差しが今もなおそのままの若さで息づいている。

和歌山県 野下善喜

あるときに、十人ほどでラーゲルから千メートルほどの地点にある集落に除雪作業の使役として出て行ったことがある。そのときに五十七歳くらいの婦人が私たちの作業を眺めていたが、監視兵がいなくなったときに、手招きして呼んでくれた。行ってみると、部屋の中のペーチカが赤々と燃えていた。黒パンと牛乳をさし出して食べなさいと言ってくれるのだ。私は思わずその婦人の顔を見つめたのだ。モンゴル系の人のだろう、再度食べよと態度で示してくれるのだ。私は胸にせまる感激でいっぱいになり、涙が出そうであった。深々と礼をして頂戴した。婦人は手まねで、態度で語るのだ。「私の息子二人とも独ソ戦で戦死してしまつた」と。人種差別のない国柄であるとは聞いていたが、この婦人からそのとき受けた好意は、現在の今でも忘れることのできないただ一つの私のエピソードだといえる。

千葉県 土橋治吉

終戦後、九月十三日にソ連シベリア地区のスウチャン、トダゴー第十二收容所に收容されました。收容人員は三千八百人でした。收容生活は二年六か月でした。この間の労苦は言語ではとても表現することは不可能です。毎日が苦勞の

連続でした。精神的・肉体的苦痛は計りしれないことばかりです。

日常の食べ物不足していたことです。正しい配分がなかったんです。飯盒一杯を三人で分配するんですが、ドロドロのスープに等しいものです。燕麦、コウリヤン、大豆等、精製されてなく、皮がついたままです。牛馬に与える餌と同じです。お米は一回も食べたことがありませんでした。仕事に行く途中、青いキャベツの葉一枚が道に落ちていたのを拾い、食べたことが青物野菜の一回目で、これで終わりでした。

また、仕事に行く途中、民家の軒端を通るのですが、時折りバケツの中に馬鈴薯の皮のむいたのが入っているんです。これを手を伸ばしてさっと取り上げ、拾い、ポケットの中に入れるんです。これを昼休みに飯盒の中に入れ、量を増大させて満腹感を味わうんです。

日常食事の配分は当番制でした。組十二人で一食、パン一本のときなど一本十二人に配分するときは、全員の目玉はガラガラ光っています。手製の木でつくつた台計りで寸分くらない公平の配分です。豆腐ほどのパン屑でも配分するんです。

終戦から舞鶴港に上陸するまでの間は生きてそらはありませんでした。草の根、葉、木の皮、何でも飯盒に入れて煮て食べたこと、よく生きて日本に帰って来たことなど、思い出は尽きません。いかに食べ物、食料が大切であるかということをもつて体験しました。

和歌山県 奥山博

生命の糧である黒パンであるが、味は酸っぱく、もみ殻が混じり、お粗末の上もなく、当時はトウモロコシを粉にしてパンにつくっていたようであるが、普通なら食べるしろものではなく、一人分の大きさは今日本で販売されている二十本入りのたばこの大きさより小さいくらいであった。それにスープと称して、牛や豚の骨の出し汁にキャベツの外側のかたい葉のところ、よく牛馬に食わず部分

を煮込んだものが我々の食事として与えられる。それも汁わんに一杯程度より少ない。時には生大豆を茶碗に一杯が一食ということもある。

三月ごとになって高熱の病人が出始めた。原因はシラミだ。どの兵も座ったりしている、身体を掻く。ソ連軍の侵入以来、入浴も全くといってよいくらいなく、下着の着替えもなくシラミがどこかまわらず全身を這い回る。夜寝れば、少し詰め状態である。全員に次から次へと移って、下着の縫い目や上服のえりの裏などに巣をつくってウヨウヨするのです。ある者はこれが自分の血を吸ったシラミかと、カチカチ歯の音をたてて食う者もいる始末で、まさに地獄の様相であった。

各中隊の兵たちが、重労働の疲労、空腹、栄養失調、シラミによる伝染熱や野草を食べての下痢、駅へ糧秣整理に出て生コウリヤン、その他を食べての下痢が原因して死んでいった。また実現できない脱走をはかって、鉄条網のそばで射殺される者、気が狂って自殺する者等々、今夜僕の夕食は要らんよと言うと、もうこれは遺言であった。明朝は冷たくなっていった。ソ連抑留の実態は私の味わったこのことをもつても今後の世代に申し継ぎたいと思う。

このようなことが重なり重なって、部屋の中は苦しみになる声を聞きながら介抱するものの、自分のことで精いっぱい状態であった。このころから、ある日突然に一人の兵がソ連側に呼び出されるとそのまま行ったり帰らなくなったり、数日を過ぎると他の部隊から一人派遣されて来た、こんなことが時々行われるようになった。皆、このことを不審に思っていたが、次第にその者の行動でわかってきたことは、收容所内の状況をソ連側に知らすための共産党員であったのだ。今まで親しくしていた戦友同士がお互いに疑いの目で見られるようになり、隊内は何となく陰惨な空気が流れて生地獄とはこのようなどころをいうのである。

食糧の不足、病人対策、死者の続出等々、大隊長から再三にわたりソ連側に対し強硬に交渉するのであるが、全然改善されない。死者は收容所から約一キ

ロくらい離れた山の向こう側に埋めに行くのであるが、三月、四月、五月と死亡する者がふえていった。死体を埋める穴掘り要員は、健康な者は作業に出させるためソ連の命令で行かせてくれなくて、発熱者や下痢患者の半病人がやらなければならぬ。シベリアの凍土は石のように固く、大変な作業であって、人体を埋めるだけ掘ることでも容易なことではない。その穴ができるまで死体は三メートル四方くらいの小屋に置くのであるが、裸のままであるので凍って、枯れ木のような姿になっている手首のところに名前をつけておかねば、だれかわからなくなってしまう。死者が出たことをスタープ(收容事務所)に報告すると、必ず銃を持った警戒兵が二人来て早速死体を裸にしろと言うのである。「服を脱げ、下着を取れ、ふんどしをとれ」と。私たちは、「何をいうか、それでは素っ裸ではないか」と反発するのであるが、銃を向けてダワイ、ダワイ、ヴィストレ(早くしろ、早くしろ)と向かってくる。その都度争うのであるがこちらの負けで、彼らの言うとおりにしなければならなくなってしまう。このようなことで死者全員を裸のまま埋めたわけであるが、とても埋葬したといえない気持ちであった。彼らソ連兵としては、上級の者から命令で動いているのだから、私たちも中隊長とともに大隊長のところに行き、せめて下着だけでもつけて埋葬したい旨述べて、ソ連側收容所長(陸軍少佐であった)に交渉して改善するように強硬に申し入れたが、何回話を持っていても、我々の言うことは聞き入れられることなく、結局ソ連側の回答はなんと「死んだら石と同じだ、地上に置くから見苦しいから裸で埋めるのだ」の一点張りであった。雪の降る夕暮れどき、素裸の戦友の死体を三、四体、足と頭を交互に輜重車に乗せ、せめて毛布をと上にかけてやると、それすらだめだとソ連兵は言う。「これは持つて帰るから」と説明してやっと許され納得さすまでかなりの時間がかかる。縄で滑り落ちないようにくりつけて、二、三人でとぼとぼと埋めに行くのである。

車を引きながら亡き友に「私もそのうち行くだろうから、待っていてくれよ。寒いだろうなあ。これもソ連の捕虜になったが因果というか」ただ口の中で南無

阿弥陀仏と唱えるばかりであった。帰還後何回となく裸の男の夢を見てうなされ目覚めたものだ。夏近くになると、シベリアも強い風が吹く。墓標もない土饅頭の土が飛び散り、埋めていた死体の手足だけではなく顔まで出てくる。また埋め直しに行く始末であった。

埋葬のことはこれぐらいしておくことにするが、亡くなった戦友たちの名簿としての記録をどうするかということであった。中隊長と相談して私が記録係をすることにになり、名前、住所、死亡年月日、病名等を書き、髪の毛か爪をとって健康な班長に預けておくことにしたが、作業に出た我々の留守中にソ連兵が来て、書いた物は全部持つていき、捨てるらしいということに気がついた。それで今度は、舎屋の正面に柵をつくり、「遺髪」と大きく書いて祭ったが、これもくず物と一緒に持つていかれてしまった。それから名簿は各人より聞き、全員を書き上げておくことともに、死亡者については記憶をもとに書き入れて、半紙一枚ほどのものを自分の水痘を二重底にしたところに折りたたんで入れて、絶えず持ち歩くことにした。願うことではないが、死亡者が出ると底から取り出して記入していった。

昭和二十三年の初夏のころ、この收容所に将校一人だけを指揮要員として残り、他の将校全員兵らと分離してチタ市の方に移され、作業員として土れんがの建物の構築をさせられた。ここでは、日本共産党員による徹底した共産主義教育を受けた。

十月に入り貨車にてナホトカに着いた。今度はどうやらダモイ(帰国)らしいが、今までのやり方からなかなか信用できるものではなかった。ここ来てでも全く信用しなかったというのが本音であったかもしれない。ここには、浜辺を第一、第二、第三と仕切つて收容所があり、日本兵の党員が羽振りをきかせて仕事をとり締まっていた。彼らのいわく。何によらず日本文字で書いたものは一切持つてはならぬとソ連側から厳しく取り締められることで、持ち物を調べ、服をさぐるのである。さあ、困った水筒の底には名簿がある。これだけは絶対に手放さな

いぞと心に決めて、第一收容所から第二の方へ移った。ここでは、より厳しく日本文字で書いたものをもし見つけられた者は、直ちに強制重労働所に連れて行くと日本共産党員が検査に来る。彼らは軍隊での内務検査で貴重品を隠す急所は知り尽くしている連中ばかりである。私は岩手県の工兵隊に入隊した関係上、戦友はほとんど北海道と東北四県の人たちばかりで、和歌山県出身の私には全く遠い土地のことゆえに、この名簿をなくせば終わりだ。他中隊の名簿を持つている同輩二人と浜辺で相談したがいい案が浮かばない。ソ連兵の検査であれば逃れることができるかもしれないが、あるいはまた、事情を話してはつきり見せたらとも思ったが、これも前の経験からしても取り上げられてしまうこと明白である。まして、我々を目の仇にしている彼らに見つかつたとなれば、もう生きては帰れないだろう。三人は悩みに悩んだのである。状況はますます悪い。私の直属の中隊長はソ連側に連行されて帰つてこないという情報が入つてきた。もう、いかんともいたしたがたく、三人とも決断して死亡者名簿を浜辺に埋めた。それから、第三收容所に移り乗船したのである。

そんなむごい死に方であったのか、またそんな葬り方では畜生以下ではないか。そして名簿までもこんな彼らの仕打ちのためにとご遺族の方々がこれを読まれたらどんなにかお恨みになれるだろうか。私たちとしては、あのときはあすは我が身であった。お互いに死を前にしてできることは精いっぱい誠心を尽くして処置したつもりです。しかし、捕虜の身であるためどうすることもできなかったのが実情でした。

乗船した船中では、今度は樺太に連れて行かれて労働させられるらしいと、まことしやかなデマが流れた。そこで我々若手で船長に会い、行き先を確かめ日本へ帰国ということであれば、これまでソ連側の手先となり行動し、我々を苦しめてきた共産党員を日本海にほうり込もうではないかと内談した。いよいよ帰国が確実になつたので、約十五人ばかりの党員を引き出した。「いかに親ソ派といえども、お前らは人間か、日本人か」と厳しく詰問し、直ちに水葬にせよと船

中がわき立ったが、私たちにはどうしてもそのようなことはできなかった。

昭和二十三年十月三十日、生命あつて帰国した。

以上三年余りの中のほんの一部のことであるが、書きあらわしてみると、あまりにも残酷であり、ご遺族の方々のお気持ちを察するとき、断腸の思いでいっぱいですが、「亡き戦友たちの土の中からの声」と思っていたらきたい。

今、若き世代の人々よ、戦争とはかくも悲惨であり残酷なものです。これはソ連領でのごく一部の体験ですが、私が戦った二回の戦争の実際は、それはそれらむごたらしい地獄の様相であり、恐ろしい場面に何回も出会った。亡き戦友たちのご冥福を衷心より祈り上げます。

静岡県 鈴木速男

捕虜という特殊環境の中にあつてさまざまな条件を強要され、人間以下の最低生活の辛酸をなめさせられたことは、ある意味においては強靱な精神力の培養となり、その後の人生にプラスになったことは事実である。

鳥取県 真山基

ある日入蒙以来初めてもみの配給があつた。うれしかったが、精米機がないので炊けない。飯ごうの中で棒をついてもみ皮をとるのであるが、思うようにはげない。せわしないから三分の一くらいまでもみのまじった米を炊いて食べた。弱つた体であるから、翌朝からかわや通いである。診断を受けてもなかなか休ませない。体を衰弱しているのに無理に作業に出るので、下痢は悪くなる一方、ねん液が出てしぼり腹になり、血便が出た。汚い話ながら、肛門にしまりが全然なくなり、もうろうとしてわからなくなるまでになっていた。とうとうアムラルト病院に入院させられた。内心「助かった」とホッとしたと思う。入院した当時の担当医の竹田ひろし軍医(横浜在住)のいわく「もう手遅れだ。もう少し早く入院してればなあ……真山君、内地に帰りたいから、石にかじりついても食

たい気持ちに勝たなければいけない」と。現に私とあとさしで寝ていた友達は、夜半衛生兵の捨てた残飯をむさぼり食べてその朝眠るように死んでいった。

私はこの竹田軍医の言葉を神の言葉として忠実に守り、「食いたい食いたい」という食欲を押さえ我慢した。おかげでできめきめ快方に進み、丙食より乙食、乙食より甲食となり、晴れて退院することができたのは、軍医さんのおかげと思ひ感謝している。亡くなられたこの戦友の名前は忘れたが、心から冥福を祈りたい。

十一月ごろであつたらうか、これからつらい冬がくるのに未だ腹も全快はしていなかったが退院させられた。次から次へと入院患者があるので、病室の都合で退院させられたと思う。

和歌山県 松浦虎市

主な作業は木材の伐採と夜間の石炭おろしの重労働で、力が要るし危険な作業だった。いずれもやせ衰えているだけに、死を覚悟の仕事が続いた。そうした毎日の作業をカンボーイというソ連兵がつき切りで仕事を監視しているうちに、顔見知りもできた。親しくなった。トリーカンという兵隊の取り持ちで、露戦争で四国の善光寺で收容されたという民間人のかじ屋と知り合った。片言まじりの日本語を使う。その人に励まされた。というのは、辛抱の緒が切れて逃亡しようとしたが、ふれ合いが取り持つ縁で助けられた。国境を越えた人の情け。

岩手県 折居次郎

帰ってきたが

故国の人たちも山河も温かく迎えてくれたが、体力、気力を消耗してしまつた人たちの中には、帰国間もなく他界した人も多く、壮年の人として大切な時期をあたらしベリアで過ごしたため、社会的立ち遅れはもとより、婚期を逸したり、

妻を失つて再婚し高齢で幼い子供のいる家庭も多い。こんなあんなでいろいろなことが多かつたシベリア抑留である。

一部の人たちには恩給などもあつたらうが、一般多数の人は生活の保障もなく、その日から厳しい生活に立ち向かわねばならなかつた。

岸壁で帰らぬ子を待ち続けた母も、陰膳をすえて無事を祈り続けた人々も、願ひもむなしくその消息すら不明で、多くの人々が泣いた。

前途に光明を失ひ、心の底から襲われた恐怖感、そして孤独感、それにも増して根強く残る不信の感情、生と死との向き合つた地獄の毎日、あの狂乱の民主運動、それらの渦巻くシベリアの地獄から、からくも命拾ひをして帰還した人たちは、あの極限状態の中で日本人がどのように行動してきたかを身をもつて経験して来ている。

今でこそいろいろ批判できるものの、シベリアでの出来事は経験した人のみ知つた多くのことがありすぎた。そしていかなることがあろうとも、二度と再び人間を極限状態に追い込むようなことにはいけないと肝に銘じているに違ひない。そこには常識で判断できない悲しいことがたくさん起こるからだ。

そのとき、私はふと、若いときに読んだデューマの『モンテクリスト伯』の末尾の言葉を思い出していた。

「この世の中には不幸も幸福もなく、ただあるものは或る状態と或る状態の比較だけである」ということです。極度の不運に際会した者のみが、至上の幸福を最もよく感じる事ができるのです。生きるのがいかによいかを知るためには、死を欲するような辛い目に逢わなければならぬのです。

岡山県 土居一志

それぞれの苦勞がどのようなものであり、それをどうやって乗り越えたか。その一つは、隊員諸君がようやく仕事に慣れてきたこと、二つは、言葉が片言ながら少し相手に通じるようになったこと、三つは、これが大事なことであるが、ひた

むきに増産に取り込むソ連側現場監督の気持ちが変わり、働く者同士の一体感が生まれてきたからではないかと思う。それはソ連のためでも收容所長のためでもない。どん底に生きる人間と人間の共感といたわりからおのずとわいてきたものである。空に浮かぶ白い雲、高く飛ぶ雁の群れに望郷の思いを寄せ、祖国日本に帰り着くのはいつの日か、その日が来るまでは生き続けようぜと互いに励まし合うのであつた。

滋賀県 寺村芳郎

次は彼らの糧秣受領、三百メートルほどそりを引き倉庫で麻袋二個を受け取り宿舎の裏にある炊事場へ。当番兵に渡してもとの庭に戻り、休む間もなく大きなまさかりで炊事や暖房用のまきを割つていたところ、今度は警戒兵が入り口に立つてまた何やらわめいている。そのそぶりからして外套に積もつた雪を払えとか。朝から我慢に我慢を強いられてきたが、限度もこれまでと一気に爆発し、持つていたまさかりを振り上げ、「なにを、生意気な」と堪忍袋の緒が切れ、彼目がけて飛びかかろうとしたとき、彼は脱兎のごとく宿舎に逃げ込む。戦友は「何する寺村」と、私にタックルして引きとめるのと同じ。二人は抱き合い、ともに泣き、我に返るのに時間が必要であつた。私の行為はまさに殺人未遂である。

所外作業でのこのような行為は、警戒兵が上司に訴えればラーゲル入門の際引き出され、問答無用で直ちに丸裸にそれ屍室にほうり込まれ、一夜のうちに間違いなく凍死、白蟻の運命に終わるのである。作業が終わりラーゲルに着くまでの間、もしそうなつたときは、あすからの当作業に対する処遇改善をソ連側に訴えてくれと戦友に重ねて頼む。関門が一步一步近づく。警戒兵はどこにいるのか。戦友が「一番後方にいるぞ」と答えると、さらに一皿取り出し食べよと出してくれる。小さくなった胃は、二皿のマカロニに、いかにびっくりもし、満足したことだろう。食べ終わるや、彼は早々にみんなのところへ行けと促す。何食わ

ぬ顔して作業を終え、収容所へ帰り部隊長に報告し、自分の夕食を他に回す。今にして思えば彼は命の恩人と言うべきなのか。一カ月ほどたったとき、古いシガレットケースを差し出し、これとおまえのもの何かと交換しようと言うので、大切に隠していたシャープペンシルを見せると、ハラショーとうれしそうに応じてくれた。

熊本県 本田正行

自己体験を通じて、乗り越えた具体的な核心は「友愛」であった。郷土部隊で、移動がなかったことも幸いして、三年間に彼の地での犠牲者は二十三名である。帰ってから他の収容所に比べて少ないのは「友愛」のお陰と信じている。

岩手県 荒田昌三

日の丸は地に落ちた。出征の時贈られた日の丸の旗も、あのホルルのペチカの火に入れてない。国破れて山河ありと言うが、余りにも惨めな大変転である。神あらばあれ、救われもしたろう。神国日本は崩壊したが、自らの手によって邪を正となし、神の存在しないニホンコトとなったのである。

死ということを考えないとするならば、このシベリアの抑留は全くの空虚な期間としか言いようがない。この体験を、ルソンのレイテで玉砕した我が戦友と、シベリアの凍土に眠る沢山の犠牲者の鎮魂の詞として捧げたい。

広島県 村中汎雄

ソ連将校官舎の薪割りの使役に二、三人で行ったとき、昼になって軒下で休んでいると(昼食の携帯用の黒パンは朝、既に食べていた)、マダムが家の中のテーブルに着いて一緒に食事をしようと言う。捕虜の身分で、彼女の家族と一緒に食事ができるとは思いませんでした。日本では考えられないことだ。どんな料理だったかは思い出せないが、現在の献立から見れば貧弱だったに違いないが、脂っこい

スープの美味しかったことは、今でも忘れられない。

その後、収容所に慰問演芸団が来て、舞台の正面はソ連兵や家族にと腰掛けを並べ、我々捕虜はその周りを囲んで立って見物していたとき、いつかの官舎のマダムが、ここに来て座れと手招きをする。駄目だと言っても、来いといって席を確保してくれる。結局は行かなかったが、それにしても我々を差別しない気持ちには嬉しかった。今でもソ連は嫌いだ、ロシア人は好きだ。私の接したロシア人にはこんな人が多く、今から考えれば幸せだった。

神奈川県 宮沢信行

収容所の撤収、総引揚げである。収容所の庭に全員整列、思い出の兵舎はほとんど空き部屋になっている。今まで何回同僚の転属あるいは日本への復員を見てきたか。今日は晴れて全員ダモイ、でも今までの経験から真偽の程は分からない。今までに何度嘘をつかれたことか、苦い煮え湯をのまされているので、中には小躍りして喜んでいる者もいるが、私は本当の所、またかという心が強かった。

全装具をひつ下げて私たちが作った駅のホームへ。我々と一緒に鉄道建設に従事したあの中島大隊と共同作業で作った駅及び線路、その両側に付近のソ連人及び関係将校の見送りである。見送りのソ連の女性など、目にいっぱい涙を溜め、私たちの手を一人々々握って別れを惜しんだ。日本兵の数多くの人たちは「ソ連人は個人的には善良で親しみやすいけれども、一度それらの人が組織の一員となつて、あるいは上の命令によって日本人に対するとき、掌を返したような冷酷残忍になる」ということを、必ずのようにつけ加えるのを忘れない。

新潟県 片桐貞夫

復員した時は、戦後の混乱が落ち着き始めたころだった。苦しかったり、悲しかったり、嬉しかったり、さまざまな生活をしながら今日まで生き抜いた。

ソ連での苦しみが私の人生のよい教訓となった。

兵庫 森田 純

自分の人生を回想し、終戦という思いもせぬ衝撃と抑留と、帰国すれば満州での研究物と資金を基に小さくてもよい食品加工業と計画を自分なりに考えていきましたが、一瞬にして希望がなくなり悔しい毎日でした。こんなことを思うようになりました。なんのために満州に行き、青春もほとんどなく一にも二にも国のためにと聞かされ、真剣に受け止め、国策にそって努力してきたのに、まったくゼロの人生となつたわけです。父は帰れただけでも有り難いと思えと言おう言われればそうだと思うのだが。

岡山 橋本修一郎

自分にとって、軍隊の二年とシベリアの三年間は、何物にもかえがたい貴重な経験だった。

七十年余りを生きてみて、一生にはいろいろの事がある。何事も紙一重で幸、不幸は隣合わせだ。自分の原隊は満州佳木斯一二四部隊で、フィリピンで全滅している。自分は予備士官学校で教育中のため助かった。また、運の強い戦友は、終戦直前の二十年春、本土防衛軍に転属になり本土の土を踏み、内地で終戦を迎えた者もいた。だが、当初千三百人だった隊員のうち、生きていた者は、転属者たちを含めても百八人と、わずか九パーセントの生存率だった。残り少ない人生は、戦友の冥福を祈り大切に生きていきたい。

福井 井上博夫

これはある収容所で同じくゲルマンスキー(ドイツ人)と作業をしていたことがあるが、彼等は本当に忠実に作業を遂行していた。しかしながら毅然とした態度は我々の見習うべきことも多かったようである。ある時誰かがロシア人の残り物を見つけて一緒に食わないかと誘ったことがあるが、彼等は絶対に口には入れ

なかつた。その点、日本人は恥ずかしいなあと思ったことがある。後でゲルマンスキーが言うのには、足で蹴飛ばしてもそのような物は口の中には入れぬと言ったことが時たま思い浮かぶのである。あのナチス魂で独裁家ヒトラーの率いる独軍がソ連に戦いを挑んだことがうかがえる。

さて私は先にも記したように十三回もの移動で、戦友も変わり、また地名等もほとんどわからないままの生活であつた。こうした中、三年目の冬、要領よく白系ロシア人の収容所幹部三人の当番に付いたことがあつた。身ぶり手ぶりにロシア語の片言を交え日常の生活対話はできて、約半年間生活を共にしたことがある。彼等三人はやはり我々と同じ、先の独ソ戦における捕虜だということであつた。もう国には帰れないと言つていた。

ある時、彼等は私に白米五合(約一リットル)程と牛乳を出して飯を作れという。鍋はホローの洗面器のような物、どうにか牛乳飯が炊き上がり彼等これを報告すると、笑顔でハラシヨハラシヨと言つてほめてくれた。それからである。炊き上がった鍋の中の飯を十文字に筋を入れて四等分し、一緒に顔を揃えて食べると言つてフォークとスプーンを出してくれた。私はその時一瞬はつとした。なんと言つても彼等三人は戦勝国の元佐官級の方。そこでこれを辞退すると、同じ働く仲間だ、遠慮するなと言つて肩をポンと叩きハラシヨと言つてくれた。私はその時、個人的に付き合えば何と心の優しい方だなあと思つて感謝し、心の中ではこれが地獄で仏に会つたようなものだと思つた。何分にもあの広大な土地に百カ国以上の他民族国家であり、民族的差別は何もなかつた、これが非常に良いことであり、また我々にとつてはせめてもの救いであつたことは言うまでもない。

岡山 横畑友三郎

私は、本年七月二日に舞鶴の地を訪れた。特別の観光地ではないが、復員して四十年に当たり、あの当時を偲ぶためであつた。

かつて復員の日、第一歩を踏みしめた平棧橋、引揚援護局跡等は、四十年の星霜を経た今日、昔日の面影は何一つとして残されていなかったけれども、港を見下ろす小高い丘の一角に、舞鶴引揚記念館があることを知り、入館した。数多くの資料品とか写真が展示されていて、当時を偲び、一人の感慨深きものがあった。諸兄もついでに立ち寄り、我々の経験した姿を見ていただきたいと思う。

愛媛県 木屋隆行

この新しい仕事に就く前に、誰かの休みの補充で、ソ連人とペアで作業するよう命じられた。このソ連人を「先山」と言うらしい。四十歳ぐらいの非常に大きな体格のよい男で、「ブリもみ」(炭層に穴をあける)をし、発破をかけて石炭を出し、鳥居形に杭木を立てて、坑道を一〜二メートル進める作業をする。私はその人の補助をし、出た石炭をトロに積んで、トロ押し(女性二人)がいる二十〜三十メートル先までもつて行く。勿論杭木を適当な長さに切り坑道に立てる仕事を二人するのである。このソ連人は「ホーソン」と呼ばれていたと思う。本当の名は知らない。

仕事が一段落ついて休憩時の話で、どうも「ノモンハン事件」の時戦車に乗っており戦闘中キヤタピラが外れ日本軍につかまり、ハルビンらしいところに一年近くいたらしい。その時の仕事は道路工事だったらしく、仕事はとても厳しかったという。静かに話す人で、手真似、カタコトの日本語も話した。相当苦労したらしい。その時の傷だと右足のかかとあたりが変になっていた。変な歩き方をすると思つた。捕虜交換で命拾ひしたと言つていた。

私は恐ろしくなつた。てつきり仇をとられるなと思つた。どうすることもできず、ただ交替時間のくるのを待った。その時間の長かったこと。彼は、今のラーゲルの食事、またラーゲル内のこと、色々聞いたが、下手なロシア語、日本語、手真似等々で現状を話した。ようやく交替が来て、地上に上がった。ほーっとして大

きな深呼吸をした。

無事何事もなくラーゲルに帰つたが、どうも心配でたまらず、本部に行き、くわしい話はせず、体調がよくないと交替を願い出た。が全然話に乗ってくれない。その頃は本部の連中は民主化グループとかいって調子のよい奴の集まりで、事務室で一日中、大仰なことを言っている連中である。私の話など全然聞く耳などないのである。

私は暗い気分であるが、覚悟をして一応元気な顔して一生懸命仕事をした。休憩時間はない方がよいと思つたが彼は「少し休め」と言つた。仕方なく腹を決め腰を下ろして休んでいると、彼は自分の道具入れの前で何かを出している。それはパンと菓子で、その上お茶を出し、「腹がすいたろう、食べよ。わしもあの時腹がすいて倒れそうになつた、食べんか」と言っている様子。私の顔をのぞき込んで、しきりに何か言いながらパンとお茶を突き出してきた。私は何が何だかわからないが急に涙が出て止まらない。「スパシーボ、スパシーボ」と言つてパンを受け取つた。「サルダート(兵隊)、泣くな、元気出せ、そのうち必ず東京ダモイ」と言い、笑いながら、お菓子、お茶をくれた。

うれしかった。とてもおいしかった。あの時のことは今でもはっきり覚えており、一生忘れることのない出来事であつた。

ラーゲルに帰り、色々と考えた。もし私が反対の立場の場合、あんな態度がとれるだろうか。疑つた自分が恥ずかしかった。

十日程度の短い間の臨時作業であつたが、一生忘れることのない思い出である。別の作業になつても、地上で時々会うと向こうから手を挙げ、「元気か、もうすぐ東京ダモイ」と言つた。

そのホーソンという人は、元気ならば九十歳以上と思われるが、私はこんな人に抑留中会えたことは大変幸運なことだつたと感謝している。

宮崎県 宮川健三

私の普段の体重は五十九〜六十二キロ。フェルガナ収容所にて大屋大佐、吉村大佐に診断を受けた頃の体重は四十六キロだった。あの時は死の一步手前だったことを自分も悟り、田縁、山崎氏なども駄目とあきらめていたという。その宮川が無事退院してきたときは、皆びつくりし喜んでくれた。吉村、大屋軍医にも天日の効果の偉大さを喜んでもらった。その後農場に行かされた。野菜、スイカ、メロン、玉ネギ、何でもできる高地で、夏は暑く冬もまた寒い所であるが、農場では地下壕の中に住むのだから夏は涼しく冬は暖かい。雨は降らなかった。農場では監視も割合大目だった。

ある時住民の家に入って苦しんでいる主人に指圧をしてやったところ、本当にうまいメロンを二、三個もらったことがあった。住民のほとんどは無学で、日本にはお月さまがあるかと聞く。日本には月は二つであるのだと言うとびつくりしていた。このような住民もジギスカンは知っていて神と信じており、日本に対していい知れない尊敬をしていた。農場を引き揚げる頃は足も軽く元気になった。

この分所で児玉政一郎憲兵大尉に会った。延岡中学の三年後輩の特務機関大尉で、二十年の刑を言い渡されたというが、幸い出られてこの分所に送られたという。乾パンを一斗袋いっぱい持つてきてくれたので、毎日かじることができてありがたく感謝した。その後児玉君とは一緒に各分所を回っていたが、二十五年三月の私たちの船より前の船に乗り、船中一大事件を起した梯団であり、その主人公だったのだろうと想像した。赤化教育があり吊るし上げされても平気平然としていた連中、反動組が日本の船に乗ったのだ。今までのうっ憤を晴らすとしたのは当然といえることである。あのように日本人が日本人を苦しめ、汗と油や血を流し骨をむしられるように苦しまされた奴を本当に日本人と思えなかった。共産党員としてソ連に居残れば良い奴らなのだ。日本に帰れば何食わぬ顔をして共産の字も口にしない者ばかりだ。

魔の国というよりほかに表現のできないソ連の抑留者だからソ連の内側はよくわからないのでうまく言えないが、私たちの頭で考える以上であるというのには想像できる。まず国が広くて大都市以外は家はないと言ってもよいように点々とあるから、大都市以外は学校もない。義務教育は大都市以外はできないし、無学の者の多い国である。数学的知識がない。まず将校にないのだから兵に至っては想像される。ただ愛国心のみを高揚させ、すべての工場、商業、土地、銀行などを国家支配に置き、国民には他国の事は一切知らせず、金を持たせず働かねばならぬようにしてある国だ。頭が良く常に忠実と思われる者でもなかなか党員としての辞令は難しく、また党員は少ない。一市に一人、大工場に一人くらいおり、その党員からならまれたら最後、一生涯浮かばれない人間になり、いつどこにやられるかわからない不安な国であるというのがどこに行っても労働者の言葉であった。

私たちが出たラーゲルにはどこからか善良な国民を何とか理由をつけて自動車に乗せるなり連れて来て、一定の区域より絶対に出さず重労働させ、ノルマを出せ出せと苦しめるのだ。そうしないとその地区の党員の成績は上がらない。ノルマの国はこうしてできている。本当に愛情のない組織なのだ。だから日本人が日本人を苦しめたのだ。また、罪人の多いことにはびつくりさせられた。どこに行つてもラーゲルがある。ラーゲルにいる者は何かの罪人である。しかし連中はあまり苦しめないのが特徴である。投げた棒が豚に当たつて死んだら十五年の刑という。国家の生き物を殺した者は共産主義国家の妨害者であり、共産主義社会の敵である。そのために罪が重いのだ。

北海道 五十嵐甚吉

昭和二十三年七月二十三日は上陸記念日として忘れられない。米軍の取り調べが三十分程あり、翌朝北海道留萌市に向け列車に乗るも、満員で何日かかつて着いたかわからない程だった。途中、父親に迎えに来るよう電報を打つても、

市役所の係員だけだった。事情を聞くと、父親は昭和二十一年二月十八日に死亡と説明された。弟も海軍でソモン諸島の戦場で戦死。三人家族で泊まる家がなく、係員も復員のため住宅を世話するわけにいかず、戦前勤務していた会社の上司か友達の家に一時世話になるように言われ、冷たい返事、冷たい役人と腹を立てた。

よし今に見てる、軍隊生活と抑留生活の経験で、必ずゼロから出発して立ち上がって見せると覚悟を決め、友人のところへ世話になりながら復職、二年後結婚。妻と二人で一生懸命に働き、無事定年を迎えることが出来た。

妻は平成三年に死亡するも、息子と孫と同居、老人クラブの役員として、皆さんと共にふれあいをもって生活している。

石川県 藤澤栄次

大切な私の青春を奪った三年間の抑留生活は、私に強い反ソ感情を抱かせたことは否めないが、反面、多くの貴重な教訓も与えられた。来年五月で私の帰還五十年を迎える。今では怨讐を越えて、ロシア経済の立ち直りとロシア国民の幸福とを心より念じる心境に至っている。

愛媛県 田坂正

半世紀も経つと労苦も苦汁も懐かしさのペールに包まれるが、そうでなくとも、抑留中に接し見聞した軍人、一般人ともに、素朴な親しみやすい人達だった。我が軍隊の狂信、加虐性と比較すれば、この目で見たソ連軍はむしろ民主的ですらあった。この点は大方の抑留者も認めると思う。彼等が俘虜を、こき使う時どなった”とされる歴史的代表格の言葉「ダワイ、ダワイ、ヴィストラ！」は、監視兵としては、その義務を全うするための当然の掛け声であろう。逆に日本兵ならどう言動したか、想像に難くないと思う。ソ連軍人や監督が我々に暴力を振るったことも、軽蔑したこともない。独裁者を除いて一般国民は、俘虜に公

平、親切であった。私なりに一言で抑留を総括すれば、”(当時の)ソ連社会機構への疑問” ”得がたい極限体験” ”人間愛の発見” ”人間万事塞翁が馬” ”ということになろうか。なお、日付、数字は私の記憶と独断である。誤りがあれば読者のご教示を乞う。

熊本県 小佐井善次

長官の命令でソ軍憲兵隊と共に周辺の治安維持に当たっていたので、大連駅に降りて来る日本人の避難民の見るも哀れな姿には、開いた口が塞がらない状態であった。着の身着のままで一寸の余地もなく無蓋貨車に詰め詰め、ある婦人は赤ん坊を背中に背負い何日間も飲まず食わずの立ち往生で、死んだ赤ん坊をどうすることも出来ず、降りて来る駅前広場には数知れない犠牲者が続出した。武装解除した丸腰の日本人には何も出来ない。権力もなく、無政府無秩序状態であった。

ある日本の憲兵隊本部で白系露人のボーイを使っていた。このボーイが非常に忠実で真面目で、日本人以上に働くので憲兵隊本部では安心して大事な仕事もやらせていたとの事で、不審な点は何一つとてなかった。隊員より可愛がられていたそうであるが、終戦後ソ軍が進駐して来てソ軍憲兵隊より、今まで自分達の留置場であった留置場に逆に留置されて、ソ連憲兵隊の取調官が白系露人のボーイこそ本物のソ連軍憲兵隊中尉であったとの報に接した時、帝国軍人何たる事かと愕然としたのであった。

島根県 松浦久雄

あれから既に半世紀が過ぎた。人間、幸か、不幸か、過去の悲惨な経験、不幸な巡り合わせは、楽しかったこと、面白かったことに比べ早く忘れるようになっていくように思う。あの飢えと寒さ、厳しい労働、望楼のある三重に巡らされた柵の中の收容所、炭坑の行き帰りの厳重な警備、この基本的な肉体、精神的

な苦痛は記憶に残るが、作業現場、収容所で起こった出来事で、当時はロシア人個人に対する恨みなど数多くあったが、今は強く心に残っていない。今でも強く心に残っているのは、帰国列車がナホトカに近づいた頃の出来事。旗振り青年行動隊の連中が、かなり年配の准尉の持っている勲章を見つけ、「この反動、帝国主義者め」と罵り「即刻降ろして元の収容所に送り返せ」と輸送指揮官に申し出たところ、指揮官いわく、「この人もかなりの年齢、日本に帰ったらその先、この勲章で年金を受け取り暮らさねばならぬ体、この件については指揮官に任せろ」で一件落着。抑留四年の間、いろいろな民族、種族の人達と一緒に働いたが、日本人の境遇に同情的で好意を示してくれたのは、有色の人よりヨーロッパ系ロシア人の方が多かったように思う。

この戦争で、アジアだけでも何百万人の人が犠牲になった。戦争に駆り出された日本兵が、祖国に帰ることなく今も赤道直下のジャングルの中に、巨大な鉄塊と共に太平洋の海底に、そしてシベリア大地、凍土の下に眠っていることを思う時、何故この戦争が、誰がこの戦争を……と思ってしまう。

北海道 北野 實

私達は戦争の体験者として、若い世代の人たちに語り伝えなければならぬ。そのことが亡き戦友に捧げる最大の今できる私の仕事である。歴史は繰り返すと申しますが、戦争は二度と起こしてはならない。

岩手県 平田玉男

我々の乗船に先立ち、ソ連軍の陸軍中佐より別れの挨拶があった。日本語の達者な将校である。「長い間、日本のため、また入ソ以来本日までロシア国家のため非常に苦勞さんでした。帰国後もどうぞお元気で日本再建のため頑張ってください。機会があったら遊びにいらっしやい」と、大きな体の大きな手を振り、別れを惜しむ。聞くところによると、この日本語の達者な将校は元日本留学生

で、東京帝国大学卒業生であったという。挨拶の中で、自分は日本の東京で勉強した頃はいろいろとお世話になったと話していた。

高知県 加納 憲

今の日本の飽食では恐らく考えられないことだろう。食欲のトコトンつき詰めたときに、もはや人間の尊厳すら失ったときに、最後に精神の支柱になるのは信念あるいは信仰というか、魂の問題であった。大学の先生がぶざまな姿を見せた。職人肌で学問のない人や、農業でも背筋に一本入ったような人が毅然としていた現実を目の当たりに見ると、艱難に遭ったときこそ人の真価がわかると勉強になった。

岩手県 立石 章

あのシベリア暗黒時代を思い起こすと肌粟を生ずる。ダモイした当初は、シベリア逆戻りの夢にうろたえ、悪戦苦闘、四苦八苦の冷汗で寝覚めの悪い朝を迎えたこともたびたびあった。どうせ悪縁とすっぱり縁が切れぬなら、これを逆手にとり夢想するロマンチストのごとく、そして精神衛生上から想い出は明るくたわいのないものにしようと思うともなく思い、丈夫で長生きしたいなど考えるようになってきた。ちよつと寂しい嫌な言葉だが、自然の法則であり生者必滅の道理である死というこの世の出口も、もうそんなに遠いところではなくなってきたのかなと思ったりするところなのである。

さはあれ、夢は人生にとって必要不可欠なもの、その秘かな夢の世界に遊ぶことも幸せなのである。あの霧中の光が織りなす一連の移りゆく。パノラマは、幽玄の淵をさ迷い五感の世界を超越して、これ一幅の絵か、一連の詩かとまで、いまだに私は昔日のおもかげを彷彿し続けているのである。

さて話を前に戻して、ボイラー室の青年は私に対して手真似で説明を始めた。ちよつと戸惑ったが、その仕草などからどうも船らしきことが理解できた。次に

手指で幼き頃障子に映して遊んだ影絵の狐の形をつくり、その口をパクパク動かしながら数字を言い始めた。相手の演技を眺めながら眉根をよせ首をひねくって考えた末、なにか厚み寸法を示しているのが解ってきた。多少ニヤンスの違いはあると思うが、これを翻訳すると「日本の軍艦はすごい、鉄板の厚みが五センチメートルもあるんだってね」と言ってるらしい。たったこれだけの言葉なのに理解するのに三分の時間を要した。私は半信半疑ながら「うんうん」とうなずき、両手で大きく船の形状を、さらに指で厚みを示す動作をする、「ダダダ」と機関銃のような返事が返ってきた。どうやら彼らには日本海海戦におけるバルチック艦隊せん滅の歴史イメージ、そして戦艦大和、武蔵の情報が彼ら末端にまで流れていたであろう。

口に密あり腹に剣ありで、彼の本心がどのようなものか定かではないし、また単に偶発的なものかもしれないが、開口一番、我が祖国に対する好意的な発言は嬉しかった。さらに善意に感じとれば、その言葉の内に君たちは俘虜となり気の毒だという色合いがこもっているようにも思われた。こいつはどこかで波長が合うぞ、歯車も噛み合いそうだと思うはず膝を乗り出した。ここで私はひと思案、先日生芋を手に入れた時このボイラー室で焼かせて貰ったが、またいつの日か焼かせて貰うためには彼らの虚栄心や自尊心をくすぐり満足させることが今の我々には必要な処世術であり答礼でもあり、かつ相互の理解融合を図るものだと思います、「ソ連の戦車も優秀のようだね」と手真似で伝えると、とたんに相好を崩し、今度は天真爛漫に「ダダダダ・ダァー」と歌のようにメロディがつけられ、はね返ってきた。私は、してやったりと心の中でニタリと笑った。

石川県 中田 繁

その昔にロシア軍が日本軍に敗れ、日本に連れられて石川県の七尾港で使役されたという老人の話が聞かされたが、捕虜だった私らに粗末なことはしなかった、と私に話してくれた。その老人と奇しくもシベリアで会った。真に奇遇なこと

であった。この老人がシベリアの流刑地にどうして地方人として住まっていたのか聞けなかったが、おそらく汚名を着せられ流刑になった、そして定住したのかとも思った。後日、その老人の住宅にて白パンのふかふかを食べさせてもらった。野原の地で赤い果実がとれるのだが、砂糖湯の中に入れて飲めば甘酸っぱく、すきりとしておいしかった。

日露の戦に敗れた老人が口こもった言葉は、「戦争はしてはならぬ、他国を侵してはならない」だった。

新潟県 若月太郎兵衛

我々は騙され騙され北緯五十五度のスタンチャ、バムのラーゲルに連れて来られた。人間の住む限界点だそうだ。我々は到着間もなく、木材運搬(煉瓦工場の薪用ボタである)を命ぜられた。初めての労働、初めての監督、可愛らしいおばちゃん女性監督ホーチャは、三十代後半くらいの色白で丸いポチャポチャとした小柄な女性だった。人なつこい好感の持てる人だった。小走りに足の速いこと実にてきぱきとこまめに動き回っておった。妹も可愛い娘で未婚、名前はナターシャと言った。いくら虜囚の身でも若い可愛い娘には心和むものだ。

私は木材運搬はお手の物。入隊前は馬車運送、材木の探し方は自信あり。人の手を出さぬ物を片っ端から選んで運んだ。もう一人おった。川上君だった。彼と僕は木材運搬を終了して初めて作業優秀者として表彰された。

食糧がなくなり絶食状態の頃、無情にも「作業整列」のサイレンが鳴り、生ける屍どもが出勤である。工場へ到着したけれど、ふらふらのヤポンスキー・サルダート(日本兵隊さん)は哀れな姿であった。ホーチャは「皆さん部屋へ入りなさい、ストーブ囲んでお話でもしましょう」。我々はお話どころではない、色気どころではない。ホーチャは温かく我々に「何も食べていないのですよ。今日は作業は休み、ゆつくりお話でもして休みましょう」。地獄に仏、観音菩薩か、嬉しかった。やつと心和んだ矢先、「ポチュム、ニエラポーター、ヨッポイマーチ(どうして仕事を

しないのか、馬鹿者めが」工場長が怒鳴り込んで来た。部屋の中は一瞬しんとした。緊張した。ホーチャは毅然として立ち上がった。「ヤボンスキー・サルダートはクーシヤチ・ニエート(何も食べていないのです)。ソ連人はかつては何も食べなくても働きました。けれども、我々は日本兵隊さんを預かつておるのです。何も食べさせず働かしたということはソ連の恥ではありませんか」。工場長は「勝手にしやがれ」と言つてドアを蹴つて立ち去った。ホーチャの毅然たる態度、日本流に言うならば男勝り、これこそ本物のヒューマニストだ。男女同権の社会主義の見本を見せつけられた感じであつた。

そのときばかりではない。彼女は筋を通し、誰にも妥協しない女なのだ。ホーチャは、配給なのにパンをくれたり、煙草がなくなしよんぼりしている兵隊には煙草を恵んでくれた。一次の三百人が帰るときも、我々残留組二百人が帰るときも、目を真っ赤にして別れを惜しんでくれた。「一時も早く無事日本海を渡つて父母兄弟、妻たちのもとへ帰つて下さい。無事を祈つております。君たちに恨みはない、君たちは戦争の犠牲者だ、我々働く者同士には国境は要らない、共に平和の為に頑張りましょう」と。最初は、買収か、懐柔か、眉唾か、時間をかけて見抜いてやるぞと息巻いたこともあつたけれど、彼女の言動、心はまやかしてはない、真実だ、誠だ、矛盾がなかつた。ソ連には素晴らしい女性がおつた。もういいおばあちゃんになつてのことだろう。

我々二百人は到着早々、チタの上流四十キロくらいの地点へトラックに乗せられ連れて行かれた。河は阿賀野川クラスの大きな河で、上流から流した木材が至る所に転がっている。河の中には流木が山になって折り重なつて島のようになつてゐる。えらいことになつた、どこから手をつければいいのか思索した。道具と言へば、突いたりひっぱったりする鳶口一丁だけだ。六月入梅の季節に川仕事なのだ。藪や丘に漂着した木材は転がし運搬、手頃なものは二人で担ぐなどして本流へ流す。島のような山は下側から気長に一本ずつ引き出し流しながら山を崩してゆくのだ。島の下は「こうこうたる本流で、木材の間へ転落すればお陀仏であ

る。十八歳のソ連の青年がこうした事故に遭い死亡している。だんだんと山を崩してゆくと最後には山が一斉に動き出す。木材はくるくる回るから危険の上なく、速く機敏に逃げ丘へ上がらねば大変なことになる。仕事は二の次、安全第一にとやかましく命令した。ここの監督は馬鹿な奴で、我々を囚人扱い同然、革の鞭を喰らせながら「ダワイ、ダワイ、ヴィストラ、ヴィストラ(仕事をやれやれ、早く早く)」。牛馬扱いには頭に来た。

作業量がまた無茶で、午前中はこれだけ終わるまでは食べさせない。昼食が二時。午後はまたノルマが大き過ぎる。終わつて夕食が八時、真っ暗になつてしまふ。食は黴びた黒パン、スープだつてまずいもので、寝るのは露天ごろ寝、梅雨どきなので雨も多かつた。せめて天幕でもと要求すれば「捕虜のくせに文句言うな、戦勝国の兵隊でもごろ寝してゐるではないか」と。食事は悪い、家も屋根も天幕すらない。日中は川の中に胴まで漬かり、夜は着干しどころか雨でずぶ濡れ。兵隊は体が冷えて腹痛を起こし、次から次へと医務室送り。こんなことでは我慢ならぬ。係の将校に「スターリンがこんなことをやれと言つたのか、これが社会主義なのか、社会主義らしくもない」「黴びない黒パン、食料を持つてこい、天幕も持つてこい」と要求した。時には抗議の手段として、十分おきに休憩を命じた。監督は怒つた。「ジェーシヤチミヌート ナラボート、ピヤーチミヌート アデーハイ、ヨツポイマーチ、プロホーイ、カンバート(十分作業、五分休憩、馬鹿野郎、悪い隊長だ)」、川を漕いで鳶口を振り上げてやつてきて、僕はしたたか殴られた。殺されそうになつた。

こうした状況を見ていた一人の青年通訳がおつた。満鉄調査部の山形君は、僕の側へやつてきた。「若月さん、僕を使つて下さい。若月さんは殺されてしまふ。僕も覚悟決めました。牛蒡抜きになつてもかまいません」。僕は心配だつた。僕たちは通訳が少なからずおつた集団で、頼めばやつてくれる者もおつたかも知れぬ。だけど通訳経験者は昔、それなりのスパイ活動に従事していた者とみなされ刑務所送りになるので、その犠牲者になつてもらいたくなかつたため誰も頼まない

ことにしておったのだ。「山形君やつてくれるか、ありがとう。皆の為だ、何千の援軍を得たようだ」。それから名通訳は真剣になって、「日本人とはどんな者か、敗残兵ではない、いつでも命を捨てるくらいプライドを持った者ばかりだ、いちいち口うるさく言わぬとも、朝、隊長に作業計画を伝達すればそれでよい、後は隊長を信じて柳の木陰にでも昼休みしておるがよい、兵隊は鼻歌を歌いながら作業はかえつて捗るのだ」と通訳して貰った。それから馬鹿も利口になってくれ、日本人を理解し、要求も通るようになってきた。言葉の通じないほどお互い意思疎通ができなく、あるときは腹が立ったり憎んだり、とんでもない方向へと進展する。殺されそうになったけれど、よい経験受け止めたい。

愛知県 河村廣康

あの大戦中は前線も銃後もないと言われておりましたが、ソ連での抑留生活は生き地獄でした。そして、望郷の念に駆られながら異国の土となった戦友たち、死んでいった戦友たちは、作業中の事故で死んだ者もおりますが、ほとんどは、栄養のことなど考えられないほどの少ない食事の量と苛酷な労働、そして酷寒の気候、その三つが重なり合つて亡くなり、今でもシベリアの凍土に眠っています。死んでいくのは当然のことですが冬季です。シベリアに連れて行かれた人は六十五万人とも七十万とも言われています。そしてシベリアの荒野で亡くなられたのはその一割で、六万人とも七万人だとも聞いています。

私が帰国するまでの一年八カ月の間に、私たちのグループの中で五人の戦友が亡くなりました。一人は原木の下敷きとなった事故死、四人のうち昭和二十年の冬に一人、昭和二十一年に三人がいわゆる栄養失調で亡くなっています。亡くなるのは外での長時間の点呼とか、ラポート帰りの途中の出来事です。点呼の途中に戦友が前に、パターンと倒れます。目はつむついています。呼んでも、身体を揺すつても叩いても、もうそのときは反応はありません。屋内に二人掛かりで抱え込んでマッサージなど手当をしても、息を吹き返しません。このような

有り様ですと、誰しもが明日は我が身と思わない者はおりませんでした。

一晚そのまま寝台に寝かせておきます。ローソクや線香などはありません。戦友の中に坊さんはおらずお経をあげる者としておりません。皆がかわるがわる「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と手を合わせ供養しました。翌朝、製材工場の松の三分板(厚さ一センチ)で棺を作り、着の身着のまま遺体を入れて蓋を打ち付け収容所前の道路を隔てた雪の上に置き、雪を被せておきます。前にも書きましたように土が凍っていて穴が掘れないからです。埋めるのは雪がなくなつて一カ月過ぎ後になります。私はその折の埋葬には行きませんでした。埋葬に行つた戦友から聞いた話ですが、棺はバラバラに壊れ、遺体の衣服はビリビリに破られ、遺体も骨ばかりになって周辺に散乱して、見るも無残な姿になっていたということです。新しい棺を作り、遠くの方にある遺体の一部も拾い集めます。遺体にまとう衣服の代わりはないから、ボロボロになったもので遺体を覆い蓋をしたということです。埋葬を済ませて帰ってきた戦友たちは異口同音に、「冬の間山犬か狼に食い荒らされたあの有り様を見たとき、ああここでは死にたくねえ。死んだ者にはすまんが、どうせ死ぬなら日本に帰つてから死にてえなあ」と沈痛な面持ちで言ったのが印象に残っています。

そういえば、一人の戦友が友の死を悼んで「戦友」の歌の替え歌で、

ここはお国を何千里 離れて遠きシベリアの

赤い夕日に照らされて 友は野末の石の下

思えば悲し昨日まで

ともにラポートした戦友(とも)が

にわかにはたと倒れしを 我は思わず駆け寄りて

……

潤んだ目をして声を詰まらせ歌つたことが昨日のように思い出されます。亡き戦友(とも)よ……。

皆さんからよく言われます「辛かつたらうな。よく生きて帰つてこられたな」

「少しも知りませんでした。本当に大変でしたね」などと、いろいろと感想を聞かせてくださいました。

手紙をいただいた方もあります。内容の一部を掲載させていただきます。「貴方のこのような体験談を初めて知ったような思いです。それに抑留されていたことは知っていました。詳しいことは知りませんでした。そんなひどい目に遭っていたことは初めて聞く話です。読んでいて涙の出るような思いをしました。苦しい時代があったのです。元気で帰ってこられてよかったですね。当時のご両親の喜びがどのようなであったか、目に見えるような気が致します。今となっては貴重な体験ですね……」

青春時代のこの体験が私の人生に大きな心の支えになっております。

京都府 八木敏雄

短歌『抑留』

終戦の日が近づく^いと涙出す

異国で逝^いきし戦友をしのびて

毎日をノルマノルマでた^とちかかれて

空腹のため倒れし戦友よ

月の夜にあれが鏡であるならば

故郷うつせと思^いう淋しき

岡山県 片山衛真

私も倒れる

二十一年十月、四中隊、死中隊、殺人工場の異名のごとく一年過ぎたとき、二百人の隊員も二十人足らずになってしまった。私は鋳物の型を作っていた。ノ

ルマを強要され、連日酷使され体力は衰えていた。

午後の四時頃、急に体調が悪くなってきた。体の痛みは何も感じない。立つことができず、黒い砂の上に横になった。その砂を握っていた。工場長が通ったが、何も言わず通り過ぎて行く。工場の機械の音が遠くに聞こえて来る。死の順番が私にやって来た。自分の死を確認するかのようになり、来るときが来た、何も不思議ではない、今日までよく生きてきた。故郷を思い出している。「幸せに、さようなら」。戦友畠山がノルマで働く手を休め、「作業が終わるまで頑張っている」と一言言って去った。

その後のことはわからない。私が気がついたのは次の日の正午頃だった。私は医務室にいた。私の気をついた姿を見てソ連人看護婦さんが大変喜んでくれた。日本語で「ヨカッタ、ヨカッタ」「元気になって父母のいる日本に帰るんだ」と励ましてくれた。同室の兵によると、彼女は夜中眠らず看病していたとのことである。今まで収容所には看護婦さんがいなかった。私が倒れたとき看護婦さんがおられたことは不思議であったと思う。医務室には医師も薬もなく、手当のすべもない。看護婦さんは私が元気になることを神に祈り続けたに違いない。看護婦さんに心から礼を言った。その看護婦さんもその日から収容所では見られず、また二度と収容所で看護婦さんを見ることはなかった。私は気がついたとき、私は運の強い男だと思った。だが、そうでなく、倒れて気を失った私を、畠山達戦友が戸板に乗せて医務室まで運んでくれた。そしてソ連看護婦さんの手厚い看護みんなの人に助けられ、守られ、死から生還し、暗い道から抜け出て明るい道を歩いている。

栃木県 橋本正男

健康管理は、夏は野草取りと洗濯をするのであるが石けん等はなく飯盒にて下着を交互に煮て乾かす等であった。

冬季野草がないので松葉を各自二十本宛を一日に食べるのお達しでそれに

従つて壞血病を防いだ。

栃木県 高橋莊吉

入ソ第一年目の冬、下級兵士には一言の反発抗議も許される事なく、栄養失調と病苦の身に対し「動作緩慢だ」「たるんでる」として帯革ビンタが喰りをあげて打ち下ろされた。

数多くのシベリア体験記があるが、いずれもがソ連の「不当抑留行為」や「酷寒」と「飢え」そして「強制労働」への憎悪となつている。私が言わんとする日本人が日本人に対して軍階級制度の桎梏によつて迫害を加えた事実に対し、目を向けて記したものは皆無である。

私は敢えて、このタブーに挑戦し、自らの体験を通じて、シベリア捕虜収容所内の実態を世人に訴えんとするものである。

拙いこの一文ではあるが、無念の涙を吞んでシベリアの雪の広野に朽ちた霊に對して、謹みて「鎮魂の譜」とする次第である。

栃木県 高橋莊吉

シベリア捕虜の楽しみとは何であろう。「帰国できる話」と「食べる楽しみ」だ。唯一の楽しみたる毎日のパン配給が正当に支給されず、兵長に搾取配分されて彼らの半分以上の支給とは、何たる残酷非情な仕打ちであろうか。同胞の血肉となる黒パンを権力でかすめ取る人間は吸血鬼でなくて何であろう。

シベリアでは捕虜規定によつて一人一日三五〇グラムの黒パンの配給があり、糧秣受領の時そのように量つて小隊人数に応じて配給される。だがその配給された黒パンを公平に分けるのが当然であるのに、糧秣担当の兵長が二階の暗がりの人目の届かぬところで切り、将校下士官そして古参兵には大きく、我々初年兵にはせいぜい二〇〇グラム位に小さく切つて払い下げた。その分彼らは五〇〇グラムのパンを食つておつたのだ。一回ならまだしも、我々は毎夜毎夜この小さ

いパンの配給を受けたのである。

この話をすると「それは食い物の恨みだな」と冷笑してあざ笑う人間がおる。飽食美食にうつつを抜かしておる者にとつて、黒パンが小さかった話など、何か下品な話のように思うのであろう。米粒一つ・大豆一つも自由にならない飢餓的状况のシベリアの捕虜にとつて、生きてゆく為毎分配給の一片の黒パンは、生きる命の血肉なのだ。

私の傍に朝鮮半島出身で特別幹部候補生として徴兵されて来た、十八歳の明眸白皙な好青年、白川君がおつた。どういふわけか以心伝心、お互いに気が通じ合つた。彼は異邦人ではあるが、育ちがよいとでも言うのか一種のすがすがしい雰囲気を持つておつた。彼は初対面の私に対し「高橋さんは他の人と異なり何か温かい人間味を感じました」と語つた。毎夜枕を並べて寝物語りに彼の生い立ちを聞いた。彼は村長の息子で、早く結婚し妻子もおるとの事だ。

白川君も私のように若いゆえに空腹を感じる青年だ。彼は私に「高橋さん、私がこのように差別迫害を受けるのは人種が朝鮮人であるからです」そして「高橋さん、私は一番楽しい筈の夕食のパンの配給の時が一番悲しい気持ちになりまして」とも語つたのが、爾来五十年近くなるとも鮮明に想起される。私も全く同じ思いであつた。

パンの小さいのは同じでも、やはり日本人とは「上官の視線が違うのです」とも語つた。このようにして彼は心の中のモヤモヤした鬱屈不満を私に語る事により幾分か発散できたのかも知れない。

新潟県 平原敏夫

戦争は終わったのに、なぜ殺されねばならなかつたのか。いつも腹が減つてた。作業は連日、過酷なノルマとカンボーイ(監視兵)の構えた自動小銃の銃口に迫われ、猛烈な寒さに怯えながらの日々であつた。頭の中は食い物のことと帰りたい早く、一日も早くの思いの外何もなかつた。こうし

た中で、六万人もの戦友、同胞が無念、本当に無念亡くなって逝った。どんなにかどんなにか心を残しての最期であったことか。しかも未だに、万を超す死没者の遺体が、超広大なシベリアの山野のどこかに放置されたままと聞いている。

戦争は終わったのどうして、なぜ殺されなければ(と言ってよいだろう)ならなかったのか。皆さん、皆さんの遺族、肉親の方々の胸のうちを思うと、昭和二十三年六月幸運にも生還、年金生活者ながら毎日が平穩、無事であればある程胸が痛む。

戦争は遠くなってしまった。しかしシベリア抑留の悲劇、惨劇、その真実は永久に消えることはない。

私にとって抑留生活とは

三重県 川邊幸治

一 良かったこと

(イ)精神的に強くなった。持久力、忍耐力、指導性が身についた。

(ロ)ロシア語の独学習得により、努力すればどんなことでも身につけることができることが理解できた。

(ハ)工兵隊と共同作業したことで、建築のことや梱包の仕方、紐の特殊な結び方などを覚えることができ、復員後の生活で非常に役に立った。

二 辛かったこと

(イ)多くの戦友を作業や病気で亡くしたことは、本当に残念であった。

(ロ)復員まで三年半に亘るブランクにより、価値観を変えるのに暇がかかった。

(ハ)抑留中に両親、我が子の死に目にも会えず、両親の死後、妻が弟妹四人の生活を支えてくれ、終戦後の苦難の途を歩ませた。

(ニ)復員後の十二月末、米軍CIAに呼び出され、ソ連の情報質問を受けるため東京市内でいろいろ聴取された。前に書いたソ連軍と誓約したことと合

わせ、二重スパイをしたことになり、五カ年位は誰に話をするともなく、胸に包んで心配していた。五年程して何事もなかったのでやっと安心できた。

愛媛県 山本繁夫

昭和二十一年二月か、寒い夜だった。夜間作業の第四カントーラの四階建煉瓦積みだった。午後十時から朝の五時までの予定で、A班二十人は山田安光伍長(連隊本部・静岡県)が作業班長で、B班は自分が作業班長でやはり二十人の二班四十人で屋外作業四十分、作業小屋の休憩二十分の繰り返しでも気温の低い零下三〇度以下でソ連の警戒兵もあまりの寒さに屋外へ出ず、ずっと小屋にいた。三回目の休憩時間午前零時四十分、小屋へ入って人員点呼をすればA班山田伍長の班が十九人しかいない。警戒兵は心配して必死になって屋外の作業現場を隈なく探す。その間、私たち日本兵は小屋で待機、小屋の中で焚火をどンドン燃すが火の前で暑く、背中は凍えるように寒い。ソ連の警戒兵、A班の二人が懸命に探すも遂に判らず一時半頃、あきらめたのか収容所へ帰って指示を仰ぐためか、作業中止で収容所へ帰り、私ら日本兵は中止になって喜んで就寝することができた。しかし作業班長の山田伍長と自分は昼間、作業に出ず待機して、G・P・Uの取調べを受けることになった。逃亡者はA班であり、山田伍長が責任者となる筈が一緒に作業だから山本も同じように責任者で二人の責任者が計画・共謀して逃がしたのであると、G・P・Uは問責し、正直に白状せよと言う。白状せねばお前らも処罰し、日本へ帰るのが遅くなると言う。どうも自分より山田伍長が絞られる(取調時間)のが長い、山田班長が私が逃したようにG・P・Uは言うて私を罵にかけける。逃亡した人の名前も顔も知らない、他の作業隊員も知らない者ばかりで、本位二級か三級の弱そうな弱年兵だけであつた。結果一カ月位、毎日のように作業から帰ったら調べ室へ呼ばれて憂鬱であつた。それからは顔馴染みになったのか作業からの帰りを窓から見ていて視線が合うと必ず当番が呼びにきて、近況報告をせよと言う。前職者でもない私に

は叩いてもほこりは出ないし、経験もない。子供みたいな者を相手にして時間をもてあましていたのだらうと思った。

愛知県 水野朝之

異国の地で、しかも人里から遠く離れ、見渡す限り奥深い山中で、時々熊が出る所で抑留という強制的な重労働で働かされ、日本へ帰れる情報は全くなく、夢も目標(内地へ帰ってからの)も断たれ、又酒もなく女性を見ることすらなく、娯楽は何一つない男ばかりの特別な環境の状態にわたって働かされ、隊長から指示された通りの仕事をすればよく、又働いても働いてもその報酬もなく牛や馬のように扱われていると、人間として生きていく実感が全くない。すべてが単調な状況にあると、人間は皆、ある種の欲求不満を持つようだ。

このような状況になると、人は皆、欲求不満を満たすために何か変わったことをして楽しみを作ろうとする。それが配給された食物(主に黒パン)を水増しして飯盒いっぱいにして、ぐつぐつ煮て、木の葉や新芽を混ぜて重湯状態にする。又、各自特有のスプーンを作つて熱い重湯をすすり飲み、腹いっぱいになって満腹という満足感を味わつて寝るという状態が発生した。初めは他の小隊で始まつていたが、忽ちにして收容所全体に広まり、約八〇%の隊員がそれを行うようになった。私ども小隊長同士は、精神的欲求不満がこれですらでも癒されるのではないかと話し合つていた。

けれども、それがそうでなく、食道、胃腸の内壁を侵し、ただれて胃拡張となり、腹部だけふくらんで、栄養が吸収できなくなり、逐次、栄養失調になり、やせ細つて体重が減り、体力が段々となくなつた。足が上がりなくなつて小さな石ころで倒れ、山へ行くのがやつとの事となつて、作業どころではなくなつた。

作業員の約八〇%の隊員が氣力を失い、作業ができなくなつて来た。朝、やつと山の作業場へ着いても何もできない状態で、ポーと立つたままだ。冬は零下二五〜三五℃以下は毎日です。そのままにしておけば鼻の先や耳、手足が白くな

つて凍傷にかかつてしまう。鼻の先が白くなつた隊員はすぐ手でこすつたりしてやつた。又、私と分隊長と氣力のある隊員数人で薪を集め、火をつけると、このこと隊員が集まり焚火の周囲に腰を下ろす。と、腰が上がりなくなり、一日中、無言で座つたままだ。薪がなくなつても補給する者もなく、私どもが補給した。これは、反発してサボタージュしていいのではない。何かに取り付かれた状態になつてしまった。

そのような状態になつたので、ノルマの達成が三〇%以下になると食べる権利がなくなり、食事ができなくなるので。私と分隊長、数人の元氣のある隊員とで何とか三〇%台を確保して、皆食事をすることができた。これは我々小隊のみでなく、すべての小隊も同じようになつてしまった。

このように氣力を失つた状態になると、朝なかなか起きて来ないので「おい、朝だ、飯だ」と揺り起こすと、すでに死亡している状態であつた。こんな状態の悲しい思いを重ねた。

石川県 山根徳治

收容所では、通訳は将校待遇で肉体労働は免除されるが、夜中でもたき起こされ空砲で威嚇されたこともあつた。また通訳と言っても大学の座学のみでは会話は無理で、辞書一つないのは苦勞した。特に困難を極めたのは、ソ連側の無理難題をどう日本人に伝えるかということである。時にはそんな無茶は通訳できぬと激しく抵抗したこともあつた。でも、そんな場合は間違ひなく「営倉入り」である。ソ連の営倉は旧日本軍に似て、衛兵所の奥にある倉庫の中にある。いくら寒くても毛布一枚で食事も最低である。作業から帰ると直ぐこの独房に入り、一晩中空腹と寒さに震えていても、翌日の労働は免除されない。作業開始のため收容所を出発する際は、疲れた身体を引きずりながら職場に向かう。私は通訳を勤めた四年余の間に、数回以上この罰を受けた。

またこの頃のことであつた。N中尉がロスケの点数を上げるために兵隊を酷使

したと言ってストライキが起り、他の收容所へ追放されたことがあった。

(注)通訳は肉体労働を免除され「ソ連の犬だ」と勘違いされ白眼視した人のあつたことは心外で、誠に残念であつた。

鳥取県 横川茂男

静岡県 小川賢介

抑留中の信条

まず第一に、飢えと寒さと重労働は各人に共通した労苦であつたが、これらの労苦をどのようにして乗り越えることが出来たのか、またそのような状況の中で自分を支えたものは何であつたのか？自己体験を通じて言えば、健康を保つことに留意し、「あくまでもソ連側の指示に従い、企業主の指示方針にも従う」ことを第一とすることを強く自覚し、行動したことが幸いしたと思われる。

第二に、抑留生活は、極限すれば、死の淵に立たされた状況の下での単調な生活の繰り返しであつた。この中で、「あくまでも、健康でよく働き、不正はせず、ソ連側に素直である」ことを信条として暮らすことにより、生への強い執着を持ち続けることができた。

第三に、苛酷な抑留の中で心身の活性化のために、何に心がけたり、工夫をしたか？「あくまでもソ連の将兵に気に入られるように明るく活発に振舞つた」ことである。

三重県 廣田吉生

戦争、それは人間同士が命を奪い合う鬼畜にも等しい残虐非道の行為です。その終結が敗戦でした。

捕虜の身となり、異国の地で、祖国日本の安泰と肉親家族の無事を念願しつつも、極限の苦難に堪え抜いた幾多の試練は、五十余年を過ぎた現在も私の脳裏から離れません。

戦争の恐ろしさを後世に伝える事が、生き残つた者の義務と考えます。

数日間の作業で収穫は終わり、仕事の内容が変わって今度は街中の特別の家の勤勞奉仕のようなもので、指定された家々への作業となります。仕事の内容は屋敷内の掃除や薪割り作業が多かつたようです。

各個の奉仕作業について特に感じた事があり、特筆致します。個々の家庭でそれぞれ異なり、また各個人の性格環境で色々変るとは思いますが、終戦六十年を経過した今日でも強く感じ、忘れ得ぬ出来事として今日まで持ち続けている事がありました。

それは奉仕中、昼食時に家族からの誘いで室内で家族の人達と一緒に食事をした事です。同じテーブルで同じ食事をする事です。今思えば昼食を同じテーブルでする事ぐらい別に特別な事ではないではと思つていますが、当時の環境、身分の相違から来るもの考え方で、いやいやそうではない、戦時中、戦争で負けた国と勝つた国の国民の立場からくる判断行為の中で、同じテーブルでの食事の出来事等は普通ではない。人それぞれの意志の持ち方にもよるが、やはり人間性の問題が大きいかかわつて来るものと考えられます。急に素質や人間性変わるものではありません。やはり生まれ育つた性格はもろんの事、素質性格にも環境の変化によつて育まれて行くものと考えます。特別にご馳走があるわけではありませんでしたが、やはり食事そのものに温もりがあります。私達の食事は一回にパン二〇〇グラム、スープ飯盒に半分ぐらい、時折他のものが付くぐらいです。パン、スープ以外は特別な日だけに限られたものでした。でもうまみが違います。スープには中身がある、味が違う。食事は故郷の母親の手料理を食した気持ちでした。やはり忘れられぬ思いがしたもので、いつまでも記憶の中に残るものでした。

当時、日本人女性がアメリカ兵の捕虜に対しフェンス越しに、汚い、汚らしい

という言葉発したと新聞に出た事があり話題になったと思います。捕虜が故に些少な気持の持ちようもありますが、日本人の性格からしてロシア人の人情味豊かな人柄とは比較のしようがありません。人間かくあらなければならぬと考えます。

愛媛県 井手正人

收容所長はタタール人の少佐で、見るからに獐猛な顔をしており、感情の動きを表情に表さない男であった。彼のやり方は、我々には冷酷に思えたが、それは軍人として任務に忠実であったに他ならないと思う。

彼にも人間的な一面があった。あるとき、私は朝の集合に少しおくれで行く途中、この所長に会った。仕事はどうかと言うので、苦しいと答えた。彼はこちらへ来いと言って、私の小隊から若い者を二人選び、私と合せて三人に、自分の家の雪かきをしてくれと言った。所長の家は小さい木造の家だった。妻と五歳くらいの子供がいたが、彼は子供を見ると抱き上げて、可愛くてたまらないようにこやかな表情で頬ずりをした。あの冷たく獐猛な顔つきの男の、信じられないような一面であった。妻は金髪のロシア人であった。太った中年女で、美人という言葉にはおおよそ縁のないような女だったが、雪かきがすむと我々を室内に招き入れ、牛乳を飲ませてくれた。そして私に年令は幾つかと聞く。西洋人には東洋人の顔は若く見えるらしいことを私は知っていたので、十七歳だと答えた。彼女は「私にも同じくらいの子供がいる。お前はまだ子供なのに兵隊にとられて可哀想に、日本にお母さんが帰りを待っているでしょう。無事に帰国しなさいよ」と言った。

この所長夫妻に接して、久しく忘れていた温かい家庭と、人間的な臭いに接する思いがした。

愛媛県 池田政治

年が明けて一月中頃にソ連軍医による身体検査があった。身体検査といっても女医が一人一人の尻の皮をつまんで肉付きを見て、一級、二級、オカの三等級に分類して、オカ(弱兵)になると別の收容所に送られて、軽作業で療養する事になるのだが、小生もオカになってホルモリン地区の收容所に移動になった。この收容所では倉庫での漬物作りの作業や、青刈用タバコの乾燥作業、豚のえさやり等が主な作業であった。作業は大分楽ではあったが、作業場ではソ連人と一緒に言葉が通じず不自由だったので、ロシア語を一生懸命覚えざるを得なかった。ここでつくづく感じたのは、外国語を習う時は日本語が使えない所に行けばすぐに覚えられる事を痛感した事だった。

大阪府 藤原栄暢

平和でありますように、平穏でありますように、誰もが皆思い願うところです。災害は戦争でなくても地震・暴風雨・水害等天災害もまた忘れたころにやってくる。戦争では国民等しくそれぞれ犠牲被害を受けました。戦争が好きでなくても戦い続けなければならない時代があった事を忘れてはならない。凄絶・勇猛果敢、戦史を懐かしんだり戦争を賛美するものではない。尊い犠牲の教訓を振り返る姿勢は大切です。戦争は決して公平かつ共通なルールに従い行われる国際競技会ではない。各国にはそれぞれの正義があり、主張、国策がある。宗教民族、経済、それが衝突するのが戦争で、非戦闘員である一般市民も一瞬にして生命を奪われたのです。破壊、殺人、残虐、処刑、死闘、悲惨、勝つか負けるか、常識など存在しない。国際法も条約も法規すべて無視される。勝てば官軍正義となる。勝者の利益のために都合の良い理由をつけ正当化し、敗者の言い方は通らない。

ロシアとは当時、平和条約、日ソ中立条約を締結しておりましたので油断しており、まさか突如の侵略に司令部狼狽あわてふためき、うろたえて、満州の一

般邦人、婦女子、開拓団員は一朝にして地獄へと突き落とされた。

日本兵、ロシアの港から日本へ帰す「ダモイ」と欺かれてシベリア収容所へ強制連行、自国の戦後復興に苛酷なノルマを強制し、酷使された。酷寒の追い打ち、凍傷にならぬよう生命を守るのに精いっぱいでした。零下五〇度では寒いというより身体がチカチカする。目をパチパチと絶えず動かさないと呼吸の鼻息でまつ毛が凍り付いて目が見えなくなるのです。小便をするにも大忙し。防寒外套を外し手袋も脱がなければ先が出難い。修了後も早く収めなければ童貞が凍傷になるのです。今のようにチャックではない。ボタンがうまく締まらない。そんな中でも今日は暖かいなと、零下三〇度である。零下二〇度も五〇度の時も着たきり雀、着替えなし。半きれの黒パンに極限状態。残酷な日々。亡くなる戦友、今朝隣の戦友も倒れる、生き残るも悲惨な運命。一步の差異がほんの偶然、今日も生きられた。

収容所の裸電球十ワットは薄暗く、時々ついたり消えたりする。

戦後六十年、死の淵から振り返り、生命の尊さと儚さ、人生のゴール終着駅に現在を考え未来を思う。

千葉県 堀越宗悦

第二次大戦の終末期に遭遇し、北支から自宅へ。写真と遺髪、遺爪を送り届け戦場へと、抑留生活を通じ多くの同胞を失った。「この労苦は貴様を書いてくれよ地下に眠る戦友達の叫びと思えてならない」。

あの戦争を知らない戦後生れの国民が三分の二以上を占めるといわれたのは数年前のこと。敗戦後六十余年を経過し私は人生節目の傘寿を過ぎ今は白髪光頭の身となり、視力、聴力、記憶力、共に低下し、国民の片隅に追いやられようとしている。悲惨な戦争は再びあつてはならない。生還してきた我々には是非次世代へ語り継ぐ責務があり、断片的ですが当時の記憶の糸をたどりながら書きました。

毎年举行される九段会館でのシベリア死没者全国慰霊祭と、千葉県支部主催の護国神社隣の記念碑前での慰霊祭に参加して、六十余年前の青春を酷寒、凍土の荒野に不帰の人となられた六万余人の御霊に往時を偲び、靖国神社と千鳥ヶ淵戦没者墓苑を参拝し静かに余生を送っている。

戦後初めて大阪万博でソ連館を見学した。四メートル四方もある大きなパノラマでソ連にはこんなに近代化された露天掘り炭坑がありますとチェレンホーボ炭坑の宣伝をした。しばらく説明を聞いていたが私は懐かしさもあり思わず、この炭坑は我々日本人の抑留者が白樺林を切り開き多くの友を失いながら造ったのですと言った。するとソ連の係官は日本語で「どうも御苦労様でした」と深く頭を垂れ、それでは記念にソ連館のバッジをさしあげましょうと胸に付けてくれたのは思い出の一つであった。

栃木県 前沢 昭

人間、どんな境遇であれ、今の仕事に興味を持ち、環境に順応する心構えと努力があれば乗り越えられると思う

辛い、四年の抑留ではあったが得難い人生経験でもあった

人間万事塞翁が馬、しみじみ思う今日

福井県 片山清次

糸と針

シベリア抑留経験者ならば誰しも苦しい抑留当時、第一に求めるものは黒パンを代表とする食物の類であろう。食物こそ命の綱なのである。次に大切なものは、と問われれば私は躊躇なく「糸と針」と答えるのである。身につけているのは肉体と同様、くたびれきた「ぼろ切れ」のような被服、激しい労働によって簡単に穴が開いたり鉤裂きになってしまう。厳冬期にこのままで作業に出れば、たちどころに冷気が侵入して凍傷になってしまう。特に手足の部分がこの影響を多

く受けたことを何度も体験させられた。過重なノルマに疲れ果てた体を鞭打ちながら手作りの暗いランプのもとで穴の空いた手袋、靴下、ズボンを慣れない手付きで修理して明日の作業に備えてから、やっと寝に就くのが日課であった。

僅か数センチの結びを甘くみて、翌日作業に出たらしばらくするうちに手足の凍傷に罹り、手遅れの場合は切断と言う恐ろしい結果をもたらす。

それゆえに糸と針は、黒パンに次いでの高貴重品であった。昭和二十一年三月のある日、タイシエットの第五病院での事であった。どこのラゲリから送られて来たのか十人余りの兵隊が貨車で送られて来た。病院まで五百メートルほどの道を汚れた毛布を肩から被り、よろめきながら歩いて来るのに出会った。

その中の一人の兵隊は、杖をたよりに苦痛に歪んだ顔で最後尾を歩いていた。警備兵のサーシャ伍長は気の良い男であり、彼のシャツをときたま洗濯してやっていた仲である。

「オイツ サーシャ、この兵隊は俺が背負って行くからな。良いだろう？」と彼の了解を得てその兵隊を背負った。「もうすぐ病院だ。はやく元気になって下さい」と励ましながら病院に到達した。その兵隊は律義な人であろう。苦しい息の中から薄汚れたものをポケットから出して私に差し出し、うっすらと涙を浮かべ「こんな親切にもらったことは生まれて初めてのことでした。私の感謝の気持ちです。どうぞ受け取ってください」と拳骨ほどの薄汚れた包みが差し出された。中身は何か分からない。

同じ同胞の苦しみを少しでも和らげることが出来たら、という気持ちでお手伝いをさせてもらったただけだ。あなたの厚意だけで十分だと辞退したが、何としても受け取って欲しいと何度も言うので、それでは有り難く頂戴いたしますと受け取って別れた。

別れ際にふと見ると、黒く汚れた綿入り防寒衣の下の夏服の襟元に、金筋一本に三つ星の階級章が、ちらりと見えた。下士官の最高の階級である曹長であった。我々兵卒からみれば雲の上の人である。つい二カ月ほど前までは満州のど

こかの部隊で、多くの兵隊にかしづかれて何不自由なく過ごしていたであろう。名前も聞かなかったこの曹長殿の過去を自分なりに想像して宿舎に帰った。

藁蒲団の上に座り、彼の曹長殿からももらった小さな包みを開いてみたら何と、軍足(白木綿糸で編んだ軍用靴下)をほぐして糸巻きに巻いたものであった。手垢に汚れて白い糸がネズミ色になっている。シベリアでは何にも優る。こんな素晴らしいプレゼントを頂いて久しぶりに心が安らいだ。おまけに針が一本付いていた。

この糸と針のお陰でマイナス四〇〜五〇度の寒気の中で私はどれほど助けられた事であろうか。

道端やロシア人のゴミ箱等で拾った布切れを修理材料として連日のごとく修理を重ねた被服は刺し子ぞうきんのように分厚くなっている。

特に針は貴重品であった。針一本と黒パン三五〇グラムと交換されていることから、その重要性は想像されるであろう、

器用な者はトラックのワイヤロープをほぐし五センチほどに切り、毎日石ころで丹念に磨き先端を尖らせる。針穴は斧の先端を使って小穴をあける。口では簡単であるが、完成するまでの時間と努力はなみ大抵ではない仕事であり、誰にも出来るものではない。

今でも靴下や手袋のつくろいにかけては自信をもっているが、腕を發揮する機会とはつくりに消え失せてしまった。使い捨てが主流の贅沢な現時勢を喜ぶべきか悲しむべきか。

シベリア大学留学

終戦後、成績がよかったのでシベリア大学に留学いたしました。衣食住付きです。重労働も付いていました。皆さんは抑留と言います。四年二カ月おりました。行ったところは、バイカル湖の南のイルクーツク、シベリアの三大都市ですね。

愛知県 岡田康孝

私が四年二月、あえてシベリア大学と申し上げたのは、私の人生にとって最高の勉強の場でしたから。苦労は金を出してでも買えと言われるぐらいです。無償で生活ができ、ロシア語も覚えしました。教訓の一つ目は、命の尊厳、命の大切さです。二つ目は、健康で働ける喜び、三つ目には、何事にもめげないで耐えることと、物を大切にすることです。まして、もっと大切なのは一人では生きられない。「俺が」というのは愚の骨頂である。やはり、みんなが力を合わせることによつて、あの地にうずもれることなく元気に帰つてこられたのは皆さん方の力があります。やはり共生であります。力を合わせるこがいかにかに大切か、これは現代の社会でも言われることです。これらのことを体験したことで現在の私があると思います。私は嘆くどころか、あえてよかつたと感謝しております。今の現在自分があるのは皆さんのお陰、経験が生きているんだなとそんな思ひです。

静岡県 飯島 久

ナホトカ港の周辺は大変な混雑でした。一応、大きな建物がいくつもあつて、宿泊はできるようになつてはいたのですが、至る所でソ同盟に感謝する集会が開かれて、革命歌の大合唱が繰り返されておりました。

階級意識に目ざめた我々の帰国を、日本のファシストたちは恐れている。だから船を回してこないのだ……ということになっていました。終結地に入れず、そのまま引き返していく列車があつたことは確かです。

一番気をつけていたことは、荷物を調べられることです。もし、死亡者名簿など持つていけば、即、ソ連に仇なす者として、奥地へ送還されてしまうでしょう。ソ連が一番嫌がることだったので。私は必至になつて亡き友の名前を頭の中で繰り返し、繰り返し暗誦していました。彼らにしてやれる友情はそれだけしかないのです。三十数人の名前、死亡の日時、住所、親の名前など暗誦しておりました。

舞鶴の港

日本が見えるぞ……感激でした。遠くに日本の山々が黒ずんで見えてきたのです。二日目か三日目かに舞鶴港の入り口にさしかかつておりました。

入江の中を船は静かに進みました。岸辺で日の丸の旗を振ってくれている人たちがおりました。私たちは聞えるはずもないのに「オーイ オーイ」と声をあげて好意に応えてきました。昭和二十三年六月三十日の朝でした。

港では最初にDDTを頭からぶっかけられて驚きました。引揚援護局から求められたことは、やはり知れる限りの死亡者の情報提供でした。協力してはならぬと騒ぐ連中もおりましたが、もはや誰も言うことを聞く者はいなかつたでしょう。私は三十数人の名を一気に書き上げていきました。彼らの恨みを晴らすには、これしかないという思ひであつたように記憶しています。

死者の名前、部隊所属、死亡日時、年令、住所、親の名など。そして自分の目で見た場合は確度「甲」、聞いた話だが確かであるときは「乙」、風聞程度は「丙」でした。

(6) その他

島根県 足立秋男

地球の果てとも言える異郷へ不法に連行され、毎日が死と隣り合わせ。寒さ、飢え、重労働、言葉の四重苦にあえぎながら動物並み、時には動物以下の生活を強制され、人生のどん底を生き抜いたシベリア抑留は、私の生涯にとって忘れられぬ思い出だ。

静岡県 今井一成

満州国の官使であったために捕えられ、二年くらいの間までは時折取調べがあった。これも身の不運と何事があつても諦めてきた。人間の極限の生活をおのれ自身も強いられ、多くの同胞の死もこの目で確かに見てきた。取り返すことのできないシベリアでの辛苦の体験を折々に思い返している、四十余年の歳月は余りにも遠くなつている。

和歌山県 那須淳男

終戦後まる三年の終戦記念日、祖国に上陸し、なんとか生き長らえて抑留生活に終止符を打ったのであつて、生涯忘れることのできない思い出と体験を得ることができた。

岐阜県 鈴木善三

今、当時をふり返つて思い起こすとき、日本人として最も恥ずべきことは、自分の保身のためには、平気で仲間さえも裏切り、ソ連側に通報した人間が多数あつたこと、そのため、どれだけ我々の苦しみが増加したかはかり知れないのです。

島根県 八幡垣正雄

あの北斗七星の真下での抑留中には想像出来なかつた現在の我が身の幸福をありがたく思うとともに、せめて私達の元気なうちに、収容所の裏山などに大きな穴を掘つて、埋められている多くの戦友達の遺骨を収集して、それぞれの故郷の土に葬つてやらねばと今はただそれだけを思う毎日であり、年老いていく我々にとつて焦燥の感、ひとしおの昨今です。

新潟県 湯田太郎

平和の今日あることを思うとき、あたら若い生命を国家のために犠牲にされた戦友、極寒のシベリアで不幸にして亡くなられた同胞のあつたことを忘れてはならないと思います。ご冥福をお祈り申し上げます。

昭和二十五年四月の帰国途中、船内での日本からのラジオ放送によると、ソ連当局は今回でソ連からの送還を終了するとモスクワ放送が伝えていると放送していた。送還の再開は昭和二十七年ころから始まり、三十一年ころに終わったようである。もし私が第一次の最終船で帰国できなかつたら、おそらくシベリアの土と化し、現在のような平和で発展した国を見ることができなかつたと思うと、あの酷寒の地で凍土に骨を埋めた六万三千余人の同胞に対して黙祷をせずにはいられない日々である。

帰国後四十年も過ぎた今日、いまだに年に一〜二回シベリア抑留中の夢を見るのである。いかに五か年間のシベリア抑留生活がつかつたかを物語る。ダモイ

(帰国)の言葉を信じ、抵抗もなく連行されて以来、苦しみ、諦め、そしてなほ生きようとした悲しいまでの人間の姿、望郷の念に支えられて生き抜いた困苦欠乏の日々を私は終生忘れないであろう。

栃木県 奈良大吉

第二次世界大戦後、目ざましい復興をし、世界一の経済大国、長寿国、そして平和と歴史は流れて四十余年。戦後生まれの子供達も、自由と平和、豊かさを満喫して成長、世代交代の時代ともいわれる現在。あの戦争、敗戦といういまわしい事実は風化されようとしている。だが「何のため」「どうして」という疑問と、飢えと寒さ、洗脳という精神的苦渋の連続、すべてが極限状態だった二年六か月の戦後強制抑留だけは、私の脳裏からはなれない。

千葉県 関 宗則

思い出の「むなしさの中に芽ばえた川柳」

私の抑留生活も、皆さんと同じくらい苦しいものでした。戦争中はいくら厳しい軍隊生活も、お国のため、家に残した妻子のためと張りつめた目標も、終戦とともに消え失せて、理由は何であれ、異国での捕虜生活の屈辱感、作業はきつい、食事は足りない、故郷のこと、家族のことは何もわからない、ただただ一日も早く帰りたい、そんな寂しい希望も失せたラーゲルに「苦笑でも笑の内」で、みなに楽しさを与えてくれたものがあり、それは立看板に貼られた川柳でした。出身地も名前も判りませんが、呑海と号しておりました。心に残った句を記します。

星一つもらつて三年捕虜になり

これは解説するまでもなく、私たち初年兵のことです。

梅桜、菖蒲と延びる捕虜の夢

私たちはただただ一日も早く帰りたい、お互いに話すことは食事と帰ること。

「梅の花が咲く頃は故郷で」と、その花散り、「桜の花は日本で」その花も散り、

せめて「五月の菖蒲の花は故郷で」の夢もはかなく、季節だけが過ぎていく抑留者の気持ちです。

積み込みの我が名の薪が先に発ち

私たちの仕事は主として薪切りで、それを一・五メートルの高さに積み、検収のため切った人の名を印します。そんなとき、この薪は私たちが帰った後、ソ連の人が積み込むだろうと話した薪を、私たちがトラックに積み込み、先に山を出て、私たちはまだ山に残っているというやるせない気持ちの句です。

兄弟で分けて食べたも弥生ぎり

大木は甲食お前持つて行け

この句は、四月ごろ、ソ連よりノルマ達成状況と身体検査の結果、太った人は一級で甲食というように、何より大切な食事に多い少ないの差があるといううわさがあったときの句で、実際にはなかったと思います。

私も無事二十三年十月、舞鶴より帰りました。三年余りソ連にりましたが、環境のせいかも知れませんが、美しいと感じたことがあります。それが舞鶴の港に入るとき水路の兩岸の木の緑、特に竹林の緑が印象的でした。

夢に見たより美しき我が日本

私も下手な句を記しましたが、本当に無事に帰つてはや四十年、今でも思い出す暗いラーゲルに、泉のような灯を与えてくれた呑海さんにお礼を申したい気持ちです。

広島県 平本直行

銃殺刑から生還

原っぱへ汽車がとめられまして、引込線がありました。そこで降りて、我々は高射砲ですから、お月さんを見る観測班がいますけれども、これはとんでもない方へ行きおるぞ、モスクワの方へ向いておるといふようなことを観測班が言い出して、ソ連の将校みたいなのに交渉に行ったところ、実は船が来んで、ナホトカ

がいつばいになっておると。どうしようもない。そう遠くまで行きませんが、わざわざかるところへ行って、そこで一たん待機してもらおうと。そこで三日目、四日目ごろにチタ州のシバキへと。これはソ連の島流しの村と言われている。あちこちにいつばい火の見やぐらのようなものが建っています、その上から町全体が見れるような、そういうところへ連れていかれた。そこで約十五日ぐらいの間に、自分らが住む家を、材木も板も十分ありましたから、家をこしらえた。寒さはどんどん厳しくなってきました。もう十月へ大方入りかかっていますから。

家はできた、人間は三段のベッド。草を拾う方は草を拾う方で、どんどん駆けずり回って、草をいつばいに集めてきて、ベッドをこしらえる班、家をつくる班というようにやって、そこへ寝起きはできるようになってきた。

でも、おかしいことに、収容所へ鉄条網が引かれたということです。それに電氣を通された。それでもう大きなショックを受けましたね。今までは軍人に賜りたる勅語を毎朝、東方遥拝で拜んで、部隊長の訓辭を聞くという、もとの軍隊のままの状態が、急にその辺りからおかしくなった。

家は建ったんだけど、十月いつばいの死亡者が、日に三人の死亡者が出たわけ。それで、将校がほとんどどこかに連れていかれて、玉木少尉という、終戦将校ですけれども、もともとは内務係曹長で、それが司令になりました。十月の終わりに私に、本部へ来いと。行きましたところ、どうもこれは、ここにおけるのが長引きそうだ。現在三人ずつ死ぬということは、千五百人の人間が全部死ぬに三年はかからないという計算になる。まして、これだけ寒くなると、今までの三人以上に、これから冬は死ぬだろう。平本、おまえ、済まんけど、わしに命をくれんか、というようなことを言われました。連絡はようわからん。その玉木少尉は、私は初年兵のときに当番もやっておるし、非常にかわいがつていただいた将校さんだったもんだから、それはもう命は出しますよと言った。結局、今、ソ連へどんどん送られてきよる数を見ると七十万とも言われている。これが日に三人ずつ各収容所で死ぬということになると、長うもたんぞ。どうし

てもその実情をマツカーサー連合軍司令官へ通知をしなきゃいけん。恐らくカーテンの中へ入れられてしもうとるだろうから、そのために、ここから満州までは直距離十里しかない。だから食糧さえあれば、頑張つて歩けば三日ぐらいで行ける。もちろん町田という通訳をつけるから、そこからは町田と行動をとともにせいと。

七人が出る、みんな密書を持ってもらう、だれか一人でも日本へたどりつくという戦法でやってもらいたいということになりました。私は「やりましょう」ということで、時計とか毛布とか、食糧と交換して集めまして、大体一週間分を集めた。我々は製材所の労役に服しておったもんですから、その板の下に隠して、いよいよ出発の日にならなければならぬ、皆同僚に取られてしまった。

それで玉木少尉のところへ言うて行ったら、それは七人はもう無理だ。これから寒うなつたら、いよいよ歩かれんようになる、雪は深うなるし、二人だけで通訳と逃げてくれということ、玉木少尉がどこでどのようにしていたのか、すぐ二人だけに一週間分の食糧をくれまして、十一月の二日にシガキの収容所を出ました。

それから、満州へ満州へと約四日―丸四日ではないんです、三日何がしてもうウスリー江へ着きました。それがちょうど月が素晴らしく明るくて、凍つとるウスリー江も向こう側もよく見えますし、これで世話ないかなと言ったところが、銃声が聞こえた。これはどこで銃声があったんだらうかということ、私は町田と、これでは、もし我々の足跡を追うてこられとつたら、飛び出したらもうやられる。だから、月が落ちる瞬間をねらおうと。この時分が一番暗いんで、そのとき突破しようということ、月が降りるのを待つて、腹こしらえをしようというんで、火はたけませんからパンをかじつて。

それで、月が落ちてすぐ突破にかかりましたけれども、照明弾を打ち上げられまして、そしてマンドリンでバリバリと。町田がまず大腿部を撃ち抜かれて、おまえだけでも逃げてくれとは言うものの、放つておくわけにはいから背中

に負うて、駆けるというたつて、凍つておるんですからもう駆けられない。そのうちにどんどん網を狭められて逮捕された。

最後はもう撃たんですね、どんどん攻めてくる、こっちが武器を持っていないですから。それだからとうとう捕まつてしまった。捕まつてから、すぐ、どっちの方向へ行ったのかわかりませんが、馬に乗せられて、途中、食事を三回か四回かしましたから、大分な距離を馬で駆けたと思うんですが、そこへ着きました。何かれんがづくりの家で、そこでまた二日ぐらい、向こうの兵隊は全然来ずに、町田と二人だけでその家にいた。外は兵隊がグルグル回りおるといふような状態で待たされた。今度は向こうの将校が三人ほど来まして、君たち、言い伝えたいことがある。七つの罪状が判明したので、君たちはその七つの罪状によって即刻死刑にする。こういう言い渡しをされた。

反ソ的思想の持ち主の罪、上官侮辱の罪。途中で逃げよるときに向こうの将校と会いましたが作業班が何かしよると思つて、向こうは何も言わななんだので我々は黙つて敬礼もせずに通つたといふようなことで、罪をつけられた。それから共謀の罪、それから脱走の罪といふような……。

これから段取りをする、そのコンクリートの中で死刑を執行すると。よう見たら、今までこれは死刑場に使つていたんじゃないかなといふようなところでした。その部屋から出されて、広いところへ行つたら、一番遠いところで二十五メートルしか距離がなく、十三階段あつたかどうかわかりませんが、その後ろで火をたくわけです。もう火はたいました、私らが二人、中へ引つ張り出されたときは。

町田の方が年上だから先に死刑をやる、おまえはここで見ておれといふことで、台の上へ町田は上がつて目隠しをした。目隠しの前に遺言を書かしまして、「死刑をただいまより執行する」といふんで、死刑の要綱を日本語で読み上げました。三発の弾しか撃たない。拳銃の中には五発弾が入つてゐる。距離は十五メートル。二発は試射すると。銃がいいか悪いかを調べると。後ろの三発で撃つか

ら、当たらなかつた場合には動いてもらつちや困る。これはソ連には国外追放という法規があるので。動いたらサルダートが切つてしまうから絶対に動かんように。そういう死刑の順序でやるからと。

後へ背中が熱いぐらい火をたきおる。それが映つていきますから、地獄絵に等しいような部屋でした。それで町田は、二発の試射を、右左から、ピンポン玉のような、ガラス玉ではなくて、ちつとゆつくり落ちる弾を二発落とす。それをパンパンと撃つわけです。すると、パチンパチンと割れる。それで「ハッショー」、この銃はいいといふことで、一発で町田は落ちてしまふ。もちろん完全に心臓を抜いて、パーツと血も出ましたし、それで後ろの火の中へ。そのときに何かギヤとか何とか、断末魔のような声を聞いたような気がします。

それが終わつてしばらくしてから、今度はおまえの番だといふことで私が行つたんですけれども、「遺言はないか」といふから、「遺言はない、どこからでも撃つてくれ」、「目隠しを」といふから、「目隠しは要らん」と私が言うたら「それじゃあ、ただいまより死刑を執行する」と。また二十二、三歳の若い射手で、前の射手とまた違う射手でやる。

それで銃が違います、自分の銃でやりますから、二発の試射をやりました。やつたときに私は「待つてくれ」と言つた。試射が終わつた時点で、次の撃たれるほとんど目の前を落とすところで「待つてくれ」をかけたわけです。「何ぼにも立つておられん。今の死刑の要綱の中に直立不動で死刑を受けるといふ文句はなかつたので、半歩開かしてくれ」と言うたら、三人ぐらい後ろに立つてゐる人間とゴチャゴチャ話をしましたけれども、「半歩開いてよろしい」といふんで、一発目がドーンと響いたときには、いわゆるれんがづくりの家ですから、もう町田が撃たれたときより大きい響きがあつたような気がしました。ずうつと、目がぐるぐる回るような状態の中で、耳せんをしとつたから、ポタポタと血が流れた記憶もありましたし、目の前を見ると、人間は見えないのに銃口だけはよく見えて、あら、これはわしは撃たれていないぞ、まだ助かつておるぞ。そう思つた瞬間、二

発目が鳴ったけれども、二発目は完全にそれた。私の目から見れば相当離れて弾が行ったような気持ちでした。続いて三発目が来るときに、これは勝つんじゃないかという意識がしましたね。そうしたら、ボウというて煙が出まして、「ハラシヨ」と言うて、後ろに立ってる四人がドドドッとこっちへ駆け寄ってきて、台の上上がった。私はまた火の中に突き落とされるような気がしました。上に二人兵隊が立っておるんやから、六人になります。これは、もう下げて放り込まれるという気がしましたところ、撃った人間が「ドラスチー」言うて握手して、「平本さん、おめでどう、あなたの死刑執行は終わったから、これから国外追放になりますよ。第二の平本君のためにどうぞ」と言う。それで貴賓室に連れていかれて、ブドウ酒で乾杯してくれました。

それで私は、国外追放になりました。国外追放になる三か月の間は、無食営倉十五日もありますし、足も、指が一部切りの拷問で切られています。

十五日間の無食営倉はつろうございしました。私の当番兵が命がけで十五日間、営倉に入っているときに、服をかえてパンを私のところへ持ってきた。どうやって収容所を突破して私の営倉に来てくれたのか、本人とは話はいないですからよくわからないですけども、「平本班長、絶対に生きて帰らにやいけんよ」と言うて、小さな窓から黒パンを入れながら語ってくれたのが今も印象に残ってますし、また恩人だと思つています。「帰りを気をつけんと、おまえが殺されたんじや、わしが助かつて何にもならんぞ」と。収容所と、営倉というんですか、死刑囚を入れるところとは相当距離があつたから、今時分は収容所に着くころじやないかなと思つところに銃声が二、三発したから、撃たれたんだと思つていましたけれども、それは別の事件じゃつたわけで、生きて帰つて、現在も健在です。

それから国外追放になりました、清州の錦山(クムサン)に一月。そこからすぐに、今度は日本へ送り返されるんだと思つておつたら、また汽車に乗せられまして、平壤の三合里へ連れていかれた。そのときがもう六月ごろです。それから半年間、三合里でコレラの病氣と闘つて、無事で、コレラにならずに、十二月三十

一日に興南から船に乗せられまして、三日かかつて、佐世保へ上陸しました。

栃木県 黒川 護

このころどの収容所にいたのかははっきりと覚えていないが、山井戸掘りの経験が未だに鮮明な記憶となつて残っている。これは作業現場が平地より次第に山地に移つていった結果、高い台地一帯に約十メートル間隔くらいに井戸くらいの大きさの穴を掘り、深さも約十メートルくらいまでいろいろあるのだが、それを掘り上げて、その奥に一メートルくらいの横穴を掘りそこにダイナマイトを詰めてそれに導火線をつけて、さらに掘り上げた土をまた元の穴に埋め戻し、どの穴も一せいに点火爆破し、その岩盤を破碎する作業なのだが、この穴を掘るときはノルマがあまりにも高いため、いつも作業隊としての成績が五〇%しか上からず、従つてソ連側はこのノルマの果たせない原因は、みんなが作業を怠けているからで、その帰結は当然皆が負わなければならないというのである。

つまり、「働かざる者食うべからず」、そして「報酬はその労働の量に応じて」というのが社会主義の大原則であるから「お前たちに支給している食糧はそれなりに減らす」と言うのである。給与の詳細については、すでに忘れてしまったが、一日当たりの支給量、一〇〇%達成者が黒パン一日三百グラム、雑穀三百五十グラムをそれぞれ五十グラムずつ減らされ、パンは二百五十グラム、雑穀は三百グラム、雑穀は他の魚や油、少量の内、野菜等と一緒に大釜でスープ状に煮つめたものを缶詰の缶一杯ずつ支給していたのを、その八分目というぐあいに減量するのである。労働に応じた支給が社会主義の原則だといつても、だれもことさらに怠けて仕事をしないのではない。いくら懸命にやつても、これに関係するいろいろな条件によつて、それが万遍なく公平に進行するとは限らない。自分が当たった場所(穴)の岩質の状態、一ツツルハシだけで簡単にザクザクと掘れるところもあるし、石ノミとハンマーを使ってこつこつと頑張つても、いくら掘れないところ、あるいは作業中水が湧き出して、水の吸い上げに時間がかかつてしまつて、能率

が上らない等々……あるわけである。

従って、運がよければ割りのよい作業、運が悪ければこの井戸掘りのようなひどい作業に回ってしまうのである。それから一週間もたたないうちにその組の人たちはめっきりとやせてしまうということなのであり、従って体力の低下は即作業能率に影響するという悪循環になるのである。「泣き面に蜂」とはまさにこのことなのであろうか。

そこで一番問題になったのが、体の弱い人であり、四十歳にもなんなんとする年若い人たちである。極度の栄養失調に陥った彼らは、そこでだれ一人として親身の人にも見とられずに死んでいったのである。いつも何時も故郷の夢ばかりを見ながら凍土に埋もれていったのである。

戦後四十五年を経過した今、しばらく目を閉じて思うとき、当時精神的に打ちのめされ、それに加えて支給すべき食事の量まで加減されて強制労働に連日狩り出されていた当時の虜囚たち――。ましてやそのために遠くシベリアの異郷に散った幾多の同胞を思うとき、まさに断腸の思いを禁じ得ない。そしてまたこれをシベリアの「悪夢」としてだけ片づけることはできない。

新潟県 阿波根朝宏

私は、終戦を満州のハルピンで迎えた。玉音放送直後に一青年将校が銃口を食わえて自殺した。それが終戦と同時に起きた記憶に刻み込まれた印象として残った。二十年八月二十八日、海林收容所から貨車に乗せられ、ソ連の東海岸近くに位置したコムソモリスクの西の奥地に捕虜として第一歩を踏み出し、ノルマ付き重労働を強制される結果となった。私は、隊員千人の作業大隊所属であった。

月日のたつに従っていろんな問題や障害を体験した。ある問題のため、私は、酷寒に何日間も火の気のない営倉に入れられもした。私は、軍医としての任務上、隊員の健康管理の責任者であった。日本軍隊式に、けがや病気で作業に出

られない者を練兵休として休ませた。最初のうちは、四、五人程度であったが、十人、二十人とふえ、ついに八十人にまで達した。それは、毎朝の朝礼時に、大隊長に報告するようになっていた。八十人にまで達したとき、ラーゲルの所長からクレームがついた。患者が多く出るのは軍医の責任である。即決である。衛生兵との交代を命ぜられ、即刻、伐採班に回され、毎日がまき担ぎであった。一種の懲罰である。それから鉄道路線の側溝掘り、土地爆破のための井戸掘り、零下三十度といえは寒さが身にしみるはずだが、労働の汗は、上衣を脱いで上半身裸になっても寒さは感じられない。なれば零下三十度は暖かい。ツルハシ、シャベルを持った寒気の中の裸の列である。零下五十五度も体験したが、そのようなどきには作業はもちろん休みであった。

高知県 東條平八郎

六か月くらい経過するころから、栄養失調のため戦友のしかばねが山に運ばれていく光景が見受けられるようになり、それとともに暗い宿舎内のあちこちでヒソヒソ話が始まりました。

「このままでは、おれも体がだめになる」「地図は持っていないか」「磁石はないか」「可能性は絶対ないぞ」「だけどこのままじゃ……」等々。逃亡計画を決心せんとする者、これを制止する者、ただ黙って考える者、構想は違えど望郷の念は皆同じであります。生きたい、生きて帰りたい……。

ある夜、收容所内に非常警報の金属音(鉄道のレールをつるして金づちでたたく)が響き、全員集合。屋外で一時間以上の人員点呼の結果、隣の宿舎で二人の逃亡者が出た模様で、その後数日間は、夜間も警戒兵が数人休みなしで巡回していました。

それから数日後の朝、作業に出発。收容所営門を出ると右側で、二人の同胞が電柱でも建てるのか、警戒兵付きで穴を掘っていた。

夕方、作業を終えて帰り営門入り口を見て、一瞬目を疑い愕然とし、しばし

息をのみました。そこには土気色の生首が二つあって真つ赤な目がキラキラ光っている。「生きている！」今朝穴を掘っていた人が、全身を土に埋められ首だけ出しているのです。逃亡者なのでしょう。それにしても何という残酷なことを。「これが逃亡者に対する処遇だ」という見せしめのつもりでしょうが、私は煮ええたぎる憤怒に胸も破れんばかりでした。私たちをだまして進行し、四人以上の過酷労働の責め苦に落とし、生き埋めにするとは。鬼だ、人面夜叉だ、生きてその正体を伝えてやらねばならん！

二日後、二人の姿は消えました。その後も二回逃亡者が出ましたが、そのような処置はなく警戒兵の話によれば、逃亡者のみの懲罰重労働収容所送りで、懲罰永久抑留かもしれぬとのこと。さすがに逃亡者はなくなりましたが、死亡者は相変わらず続きました。

差別しなかったソ連人

島根県 山本久夫

昭和二十三年（一九四八年）の夏だったか、私はペルイウチャースク（第一採炭場）のヤポンスキーカマンジールとして第三組（深夜零時から朝八時までの労働）の仕事を終え出坑した。すぐナリヤートのため事務所に向かえばならぬが、蒸し暑かったその日はなぜか疲れがひどく、急斜面の坑道を上がるときからのどがからからに乾いて、とても水が欲しかった。（ナリヤートというのは作業を始める前に就労するヤポンスキーの氏名とその職種等をロシア文字で記入し、作業上の注意とその日の作業達成目標（ノルマ）について話し合う。また作業が終わるとその労働の成果を毎回記録し、提出する仕事である）私は一滴の水を求めて待合準備室を出て水道蛇口のある方まで歩いた。見ると大勢のソ連人婦女子や労働者がバケツなど持って、長い水汲みの行列をつくっていた。ああ、これでは時間もなくても水が飲めない、と思いつつも一応行列の最後尾に並ぼうと列の中ほどまでくると、ブロンズの髪の毛のネックチーフで包んだロシア人マダムが声

高に、「炭坑の仕事は大変で疲れたでしょう、早くこの列の前に並びなさい。パジヤルスター」と叫んで、私に水を飲ませてくれた。暑いところじつと並んで順序を待っていた人たちが、粉炭で顔や手を真黒に汚したヤポンスキーのため順番を譲って水を飲ませるといふ思いやりの心に触れて、本当にうれしく私は心から「オーチェン、スパシーボ！」（大変ありがたう）を繰り返して炭坑をあとにした。

また一九四九年のころ、私はナリヤートを終えて軽い食事をとりたく事務所近くにある食堂にはいったが、そんなに広くない食堂は満席の状態で、うろうろしていると、「ヤポンスキー、イジシュダア、サジイス」（日本人ここに来て座れ）と、きちつと正装したロマンスグレーのロシア人が声をかけてくれた。五く六人掛けのテーブルに、仲間らしい三人の男と談笑していた恰幅のよい人物であった。「スパシーボ」と遠慮しながら私は彼らと同じテーブルの席をおろしたが、炭坑作業を終えたばかりの汚れた顔と貧弱な作業衣袴の格好であったと思う。そんな外見など問題にせず、「日本はどんな国か、どんな仕事をしていたか、父母は元気か、早く日本に帰りたいか」などと話しかけ、自分たちが注文したテーブル中央の果物など「クーシヤチ、パジヤルスター」（どうぞ食べなさい）と勧めてくれた。私は感謝しながら隣の人に「クトー、エータ」と尋ねると、何と中央にいる人はソ連共産党幹部で、この炭坑の最高責任者という偉い人であった。

日本ではこのような役職にある人がうす汚い服装の囚人や戦争捕虜と故なく同席して食事をともにすることなど想像もできないことだと思った。同時に一部のロシア人ではあるが、全く民族人種の差別をしない、明るく、気さくな言動と、何かほのぼのとする人間性の温かさに驚いた。

北海道 川友勝

旋盤工が操作を誤って頭部裂傷を負った。患者護送のため、熊谷衛生兵（岩手県）と二人で第七病院まで行ったその帰りの出来事。病院付大隊長となつてい

た川守田大尉（青森県）と再会を喜び夕食を御馳走になり、映画を見せてもら

つての帰り、夜も更けていた。キビトク引込線に入っていた病院専用の糧秣貨車の蔭から三人のソ連人が飛びだし、我々のトラックが乗っ取られたのである。はじめから警戒兵、トラックの運転手、なれ合い劇だったのである。そこに巻きこまれた私たち二人が悲劇だったわけ。小麦粉、肉、魚、野菜、バター等を小型トラックに積み込み発車、着いたところはキビトク村の一軒の家、私たちもここでおろされた。

収容所までは十六キロくらいの距離だから徒歩でもしているのだが、深夜、警戒兵なしではかえって危ない。隣の部屋では戦利品を山分け、ウオツカで乾杯しているのをジリジリ聞きながら、与えられたパンをかじりマシジリともせず一夜を明かしてしまった。警戒兵は患者の手術に手間取り、様子を見ているうちに朝になったという。

この野郎どうしてくれようか、入院患者の糧秣を横取りされたわけだから腹が立つてしょうがない。ところが朝いざ出発ということになって車が動かない。バッテリーがあがってしまったらしい。青くなつた警戒兵は運転手を怒りあげたが後の祭り、十六キロの道を歩いて帰った。ここで私の腹は決まった。所長から聞かれるまま昨夜のてんまつ、一部始終を洗いざらいぶちまけた。所長は私の言うことを信用し、早速キビトク村の例の一軒を探し出し糧秣や車を見つけ、一味は一網打尽、刑務所行きで一件落着。もちろん私たちはおとがめなし。このあたりはソ連人氣質の面白い一面であるが、糧秣の横流し、横領、強奪等日常茶飯事で、そのたびに我々の口に入る量が減つていったものと思われる。

愛知県 松尾典夫

九月になると工事は終わり、また伐採のため山に入りました。そんなある日です。私たちの作業班長であった岐阜の鈴木伍長が、このままでは我々は殺されてしまう、何とか体力を温存し、内地へ帰る日のために備えたい、責任はおれが持つから指示に従うように言われました。どんなからくりを行ったのか、一例を

挙げますと、二メートルに切った木材を四角に積み上げ、これを何個つくって一日のノルマが達成というのです。マツセルが夕方検査に来て墨で印をつけていきます。翌日は墨のついた何本かだけ新しいのと取りかえ、検査を受ける。そんなことをやりながら少しでも体を休める工夫をされました。その他種々な方法を考へながら、体力の保存を図ってもらいました。我々の隊が他の部隊に比較して犠牲者が少なく、私の小隊では皆無であつたのは、そんな幹部に恵まれた結果だといふまでも感謝しております。忘れられないのは、作業に出るたびに腰に空き缶をぶら下げ、途中キャベツ、ジャガイモの捨ててあるのを集めてきて、夜、ペーチカで炊いて食べるのです。塩味だけの腐った野菜のくずのその味の何とも言えない美味であつたのを今でも時々思い出しております。飽食になれた現代の若者には理解されないでしょうが、紛れもない事実です。

愛知県 竹田嘉明

そんな毎日が続きます中、やがて新しい年が来まして、一月の十五日、私は子供の夢を見ました。どんな夢かと申しますと、ふるさとの日光川で私が妻の手を引き、左手ですっ裸になつた子供を抱いて、川上へ川上へと進む夢を見たものであります。そのときに思ったことは、人間死ぬと三途の川と申しますけれども、ああこれが子供の命日だろう、子供の命日じゃないか、そんなことを思ったわけでございます。どこに知る人もなく、頭の中にきちつと覚えさせて、そしてやがて日本に帰ったときにうちの妻に話したら、それは一月の十二日だと申しましたけれども、その一月の十五日と十二日の違いはやっぱり子供の足でも満州からシベリアのお父さんのところまで訪ねてくるのには、やっぱり三日かかったのかなあという感じをしましたが、そのことは私は今でも忘れることができません。妻や子供と孫呉の駅で別れる時はちようど空襲の最中でございます。別れるとき女房に子供だけは頼むぞ、もしものことがあつたら日本人の妻としていさぎよく、決心をして……。

そのときはちやうど機銃掃射を受けておる最中でございまして、あちらへこちらへ逃げ回った人々の様子が今思い出されてなりません。

東京都 堀口卓也

スターリン ネーハラシヨ

伐採で雪山に入ったとき、同じくソ連の囚人がこの山に入り、一囚人と遭遇したところ、この囚人は首に十字架のペンダントを下げしており、「スターリン ネーハラシヨ」と言い、私を指さして「ダモイ」したらスターリンの首を切ってくれと、自分の首を手刀で切る真似をして「スラー」と言うのである。遠くに人影を認めるとさつと森の中に消え去ったが、ソ連の一面を見たという感じであった。

岐阜県 長澤秀道

突然「全員下船せよ」との命令で、暗闇の中タラップを降りる。降りたところは氷の上であった。既に興南の収容所で冬服、防寒帽、防寒外套、防寒手当、防寒靴に着替えていたので相当の寒さには耐えられたが、いきなり氷の上を歩かされたのは驚いた。百メートルくらいで砂浜らしきところに着いた。うっすらと明るくなって周りを見ると、近くの山の麓に民家が数戸点在する漁村のようであった。ここで初めてソ連の民間人を見て、ここがシベリアであることをいやでも認識せざるを得なかった。私は今でもその地名がわからない。

ここから、いまだに何のためであったのかわからない雪中行軍が始まるのである。五十メートル間隔でソ連の監視兵がマンドリンを担いで「ダワイダワイ」とせき立てる中、行く先も目的もわからず、何もない荒漠とした山中を重い外套を引きずりながら、頭を下げてただ黙々と歩くのみである。長い長い行列であった。ここで思いがけないことが起こった。途中睡眠不足と疲労のため雪の上に腰をおろして眠る者が出てきたのである。このことは、シベリアでは凍傷から死を意味するのである。助け起こして歩かせようとするとソ連兵に銃剣でせき立てられる。

もつとも自分も体力の限界で、歩くだけで精いっぱいであった。

そのときの光景は、五十年間私の脳裏から離れない。アルプスの山中のようなところで、平壤以来の戦友を何人も置き去りにしてきたことは、私の抑留生活の汚点として残っている。このころ、興南から持ってきた食糧は底をついていた。

朝から夕暮れまで、はつきりとわからないが三十キロは歩いたであろうか。夕日が沈むころになって、右手の谷底のようなどころに二十棟ほどのテント村が見え、煙が上がっていた。一棟の長さが二十メートルくらいあった。中は両側に木の二段ベッドが作られていた。昔のシベリア流刑者用のテント村であろうか。二十棟のうち五棟くらいには先客があった。聞けば、北鮮国境守備隊の独歩の人たちで、伐採の仕事をしているとのことであった。

ここで赤いコウリヤン飯の配給がある。今でも忘れられない味であった。地獄に仏である。食後、テント村に入り泥のように眠ってしまった。翌朝の点呼で、二人中やはり四十人ほど足らなかった。何とも残念である。

私がここで言いたいの、公称六万人と言われるシベリア抑留死亡者の中に、入ソ当時各地で起こったこれら置き去りにされた人たちは入っているであろうか。おそらく員数外であろうと思われる。何とも痛恨の極みである。

点呼後、私たちの大隊は食糧を仕入れて再び行軍に入った。道幅は少し広くなったが、相変わらず深い山の中である。三時ごろ海岸の見えるところに出た。遠く下の方を見ると、見覚えのある民家が数軒あった。何のことはない、私たちはぐるっと楕円形に一周したことになったのである。戦友を失ったこの行軍は、本当にどんな意味があったのであろうか。今考えても悔しい思いでいっぱいだ。

静岡県 石川博

日本軍はソ連とは日ソ不可侵条約の締結があるからと油断した。ソ連のスターリンはそのすきを見て各方面から満州に進攻してきた。南方の戦局が次第に不利となり、二十年八月十五日に無条件降伏という悲しい日を迎えることに

なつた。我々は悲しいけど帰国ができると思つていたのに、ソ連は逆に、シベリア各地へ送り込んだ。七十万とも言われる同胞は、過酷な条件の下で二年から、多い人で十年もの長い間、炭鉱に木材伐採、あるいは鉄道工事などの強制労働に服し、七万以上に及ぶと思われる犠牲者を出しました。

ソ連は何ゆえにそのような人類史上例を見ない無法な事をしたのでしょうか。敗戦国が支払う賠償金を我々が肩がわりにしたのか、いまだに明らかにされないのは、いかにしても納得できません。あの東京の裁判では、多くの日本の指導者が戦犯として裁かれ、処刑されました。しかるに、そのソ連の非道を裁く機関は最早この地球上どこにも存在しないのでしょうか。何といつても、この事実は戦後の出来事であり、日本がポツダム宣言を受諾して降伏したそのあとのことでもあります。同宣言には、第九条に次の通り規定してあります。「日本国軍隊ハ完全ニ武装ヲ解除セラレタル後各自ノ家庭ニ復帰シ平和的且生産的ノ生活ヲ営ムノ機会ヲ得シメラルベシ」と。この規定に基づいて、米、英の二国は「それぞれの海外に出征していた日本軍人」をすべて、昭和二十一年末までに本国に帰したのであります。だが、ソ連のみは、その勢力下にあつた日本軍人、軍属及び一般国民をもシベリアに抑留し、労働を強制しました。この行為は、明らかにポツダム宣言の違反であります。

日本政府の政策で海外にいた軍人、軍属及び一般邦人は、六百六十万とも言われる。特に満州の開拓団は、働ける者は軍人となり、老人や女子供は、そのため幼児の遺棄、先を案じての集団自決、戦死等により、さらに引揚げを待つ収容所生活で病氣、飢餓等により、およそ三割の者が故里の土を踏むことなく倒れて逝つた。戦前、戦中、戦後のことを知識として心の中で持たないと、終戦五十年の意味もわからないでしょう。

ウラジオストックだと思つたらナホトカと言う港だった。

長野県 澤上定男

収容所に入つてみて驚いた。帰国する兵隊が二万人も集結して、第一、第二、第三分所に分けられて入つているとのこと。ここは共産教育最後の仕上げであり、我々は皆試験台に乗せられて、まだ民主化が徹底していないとすればまた作業隊に入れられて、懐かしい日本海に通じるこの海を見ながら奥地に転送されるのである。各宿舎とも赤旗の林立にて、朝から晩まで「インターナショナル」「赤旗革命歌」の合唱である。毎日作業はなく、「新日本建設青年同盟」という腕章を付けた日本人による共産主義の講義攻めである。

第一分所は無事十日目で第二分所に移された。ここは前にも増して激しい共産教育である。食糧は、ソ連での最後の印象を良くするためか非常に豊富で質もよいが、この第二分所ではソ連人より同じ日本人である青年同盟の者が恐ろしい。これらの連中にいらまれたら最後、帰国は絶対にできないと思わなければならない。自主的に共産主義の勉強もしなければならぬ。第二分所にある図書室には、スターリン伝、コルホーズ農業、マルクス伝などの本があり、私は隊員一同に、この図書館の本を全部自分たち仲間借りてきて熱心に研究しているようにして彼らの点数を稼いだ。

また、演芸を通じての共産教育も毎日である。また、反動分子の吊るし上げが毎日続けられる。泣いて反動でないと弁明しているが、大衆が聞き入れなければどうすることもできない。収容所において将校だと言つて兵隊を泣かした連中が皆、やり玉に上がっている。気の毒だが仕方がない。

第二分所も無事通過して、いよいよ最後の第三分所である。ここでは帰国の船を待つばかりである。自分たちも第一二三中隊として編制され、第十七梯団として帰国することになった。梯団長、副梯団長、補導長の三人の幹部ができた。自分は補導長として専ら共産運動の指導に当たらなければならなかった。文字通り最後の仕上げに懸命である。せつかくここまでこぎつけた帰国を目の前にして失敗があつてはならない。共に苦勞をしてきた同志である。一人も残すことなく乗船させたい。ソ連から指示された事項については、一人の違反者があつても

ならない。それがために全部の帰国が駄目になった例もあったことを聞かされた。徹底的な教育、帰らんがための教育である。内地に無事に上陸したならば、「赤よ、さらば」である。甚だもつて頼りない共産主義者である。

ナホトカ教育四十余日、いよいよ待望の帰国である。

和歌山県 北村 明

この收容所に来て次第に気づいたことは、各種の国の人々が收容されていることであつた。彼らは、ロシア語で「カマラード、シガレット、イエスチ」(戦友、たばこありませんか)なんて言つて私たちに話しかけてくるのであつた。ドイツ人、ハンガリー人、オーストリア人、チエコ人、ポーランド人、ルーミアニア人、日本人以外にこんなに多くの国々の俘虜たちが收容されていることを知つた。汚い外套の破れた袖から出た毛深い、やせた黒い手が彼らのさびしさを物語つていて、この收容所での長い生活を想像させられたものである。

和歌山県 山本良市

ソ連兵の銃剣に脅かされて酷寒の荒野で強い砂埃を浴びながら、ノルマ、ノルマと毎日、暗い朝から暗い夜まで労働を強いられたところに汚れた軍服が今こころにある。腰を落とし膝も曲がつて哀れに疲れ果て、のろのろ足を引きずり引きずり、声もなく、背を丸めて両手を凍らさないように前で擦り合わせながら耐え難きに耐え得たのも、不慣れた山里で自らの足だけを頼りに鍛え上げた体があつたこと、まだ若かつたこと、神経質に育たなかつたことを感謝する反面、哀れにも生命を落とした数多くの戦友たちの遺骨を故郷に戻し慰霊すること。我々は現地の通貨を見せてもらつたこともなく、賃金等一切支払われていないのだ。給食も家畜の餌と変わらぬ物で、人間として扱われていなかったのも悔しい限りであつたことを申し残しておく。

岩手県 新沼隆男

私たち戦争体験者は、私たちが受けた苦しみや悲しみを二度と繰り返してはならない。被害者を二度と作つてはならないし、作らせてもならないと思う。

神奈川県 宮沢信行

振り返つて見るに、あれほど我々を酷使し、戦後、要領よく立ち回つたソ連兵が分裂し、同じ民族が血で血を洗う戦争を続けている。これも彼の地で亡くなつた同胞の怨念か、それとも天の妥協なき制裁か。このソ連のあがきを見聞しつつ、私の戦後五十年目にこのことを綴る。数多、異国の地で散つた同胞の霊安かれと、その冥福を祈りつつ、私はここにペンを擱く。

岩手県 及川新蔵

シベリアの墓地に佇んで抑留のころに思いを馳せれば、次から次へと思い出されることばかりで尽きることがない。しかし、何と言つても、死んで行つた戦友たちのやり切れないほど痩せこけた青白い顔の一つ一つが脳裏から永久に離れることはないだろう。土捨て場の土と一緒に土に還つた者。申し訳だけの穴に埋められた者は狐狸や野犬などの餌食になつたかもしれない。こうして本当の墓のあるのは一体どれだけだろう。全死者の二割もあるだろうか。あととは墓標のないソンドラの墓なのではあるまいか。せめて生きて還つた我々が、彼らのことを忘れないで、彼らの待ち望んだ「ダモイ東京」を実現させてやりたいものである。

大阪府 西本英明

何とか死の労働に耐え抜き、次に二百二十七キロ建物のない山中暮らし。自分たちの住む建物から作らなければ。次いで二百三十一キロ、二十二キロ、キロ数不明の三カ所。シラミや南京虫に悩まされ、思想改造、日本人が日本人を密告、劣悪な食事……。

計七カ所を転々と移動させられ、過酷な労働に耐え抜いた。この間、目にしたこと、聞いたことは、秩序の崩壊した満州は地獄の様相だ。ソ連軍による略奪・強殺・強奪・強姦などと、悪逆非道の限りであった。十八歳の少年兵は、大きな時代の波に翻弄されながら、大日本帝国と日本陸軍七十七年の歴史の幕と、関東軍四十年、そして満州国の崩壊を見届けた。

心身共にボロボロになり、やっと祖国に辿り着いたのが昭和二十四年七月二十二日、復員船「遠州丸」にて、夢に見た祖国へ、舞鶴上陸。変わり果てた郷土和歌山に着いたのが七月二十七日。すでに父なく、母なく、その日から落ち着く所なし。父母の墓標にすがりついて泣いたことが、昨日のように思える。

私の貴重な青春は、無法な抑留の苦難苦闘でシベリアの地にむなしく消えてしまった。

北海道 遠藤勝好

現在八十二歳となり悠悠自適の生活を送っており、軍隊時代の写真で往時を偲ぶこともあるが、ソ連での抑留生活は「忌まわしい一時」であった。

島根県 景山利造

人生で一番楽しいはずの青春時代、六年有余の歳月の空白、どのようにして挽回すべきか、全く別の世界にいるようで全然見当がつかない。

目下の楽しみと言えば、中支戦線で生死を共にした戦友、そしてシベリアで飢えと寒さと重労働に耐えた同志と、年一回戦友会で苦難の昔話をするところである。

福島県 壁巢一弥

復員以来五十年近い生活の中で、幸い健康に恵まれ、難事に出会えばシベリアを偲んで奮起し、東満の山野に、またシベリアの凍土に寂しく眠る戦友の「冥

福を念じて、今日も生きている。

千葉県 内山留吉

思えば、長い年月をソ連軍は不法にも抑留という手段で我々罪のない人を捕え、不当な労役をしいた。

島根県 高尾敏教

シベリア抑留から五十年になるが、昭和二十年八月十五日を境に暦と時計を必要としない、ただ食欲のみに全神経を働かせ時を過ごした今、いかに努力しても戦友の名前、また詳しい日常生活を思い出すことができない。今こうして無事に健康で帰国でき、酷寒のなか、異国の地で尊い命をおとされた戦友の皆さんに、心から追悼の意を表するものであります。

広島県 塩谷静夫

私は昭和二十二年の暮れに、七年ぶりに懐かしい祖国、雪の降る函館港に上陸、復員しました。このような悲しいシベリア抑留は、日ソ友好条約を一方的に破り、六〇万人余の我々を含む在満日本人を、言語に絶する苦境に陥れたソ連の行為である。絶対に忘れることのできない、許すことはできない……こんな思いです。

熊本県 小佐井善次

さて、日本人抑留者はソ連の奥深く連れ去られ、戦後ソ連の国内復興のため重労働を課せられ、身も心も人間ではなく生ける虫けら同然の姿で祖国日本の戦費賠償の肩替りとなった事実、抑留者一同承知の所である。戦後五十年経た今日、当時の日本は沖繩も米軍の手に落ち、打つ手がなく、和平の斡旋をソ連に依頼する外はなく、目の前が真つ暗となつて近衛文麿を特使として

ソ連に派遣する事を決めていた事実、その内容は六項目で、抑留者に関係ある項目としては第四項目の賠償として一部の労力を提供するとあり、無条件降伏だけは避けたいとの当時の日本としての事実を週刊サンケイ誌が報じた。また、昭和二十年八月十九日ソ連領ジャリコーヴォで、ソ連第一極東方面司令官メレツコフ元帥が当時の感想を発表している。それによると、ハーグで結ばれた陸戦法規慣例に関する国際条約の二十条に「捕虜ヲ本国ニ帰還セシムベシ」とあり、捕虜送還に関する規定について話し合わねばならなかったが、日本軍代表関東軍首脳は、全くしなかったと言っており、これから日本人のソ連国内輸送が計画通り開始されたとしている。

このようにシベリアの広野に極限の飢えと寒さと過酷な労働を課せられた事実は、決して忘れる事は出来ない。武装解除されて何十万の日本兵、民間人、婦女子に至るまでソ連国内の奥深く連れ去られ、収容所に拘禁されたのである。丸腰の日本人に対して威嚇発砲、掠奪の限りを尽くしたソ連兵は人道的に絶対に許せない。ウラジオストク経由で日本に送還すると言ってシベリアに送り込まれ、囚人同様に苛酷なノルマを課せられ強制労働に服した。極限の生活を生き抜いて祖国の土を踏む事の出来た人は誠に幸運であったと言わざるを得ない。思えば、シベリアの奥地で重労働にあえぎながら、いつかは生還できると厳しさを耐え忍んだ身震いするような収容所の光景は、今も走馬燈のように脳裏を駆けめぐる。天皇陛下の玉音放送で全国民に呼びかけられた「耐えがたきを耐え忍びがたきを忍び」とのお言葉とは想像に絶する違いがあり、ソ連軍の満州における開拓団虐殺事件、従軍看護婦の蹂躪事件、ソ連軍の暴虐の爪あと、シベリア抑留者の生死の重労働は一体何であったのか。

第二次大戦中シベリア抑留という事実は小さな歴史かも知れないが、ただ遠い苦しい思い出として語るだけではすまされない。この事を忘却させてはならない。強制労働により五体は蝕まれ、その傷痕は体の奥深く刻み込まれ、今なお病状が進行して暮らしている生き証人がいる事も忘れてほしくない。

今までの出来事で日本の侵略の事は、国会議員の先生方も新聞等や外国訪問の際首脳会談で発言され、遺憾の意を表しておられるが、抑留についての惨虐の実態は一行たりとも記述がない。シベリアでの実態を、後世の国民にその真実を正しく伝えることこそ平和への願いであると信じて、毎年事ある度に大勢の人前でシベリア抑留者の生き証人として訴え、事実を語ってきた。特に老人の皆様方は涙して聞かれた。抑留者はあと幾許もないが、「人道的に全く許せない、言語道断であり、再びあつてはならない」と、私は死ぬまで語ります、叫び続けます。食糧ももらえず重労働で亡くなった人。栄養失調で南京虫に攻められ、骨と皮ばかりで死んだ友。やせ細って斃れた同僚。今語るにも表現出来ない、語るに言葉がない、だが語り続けたい。多くの人のために、後世の日本国民のために、生ある限り語りたい。それが生き証人としての使命だからである。

岩手県 安倍庄吉

武装を解除されたとはいえ、一万一千人の将兵を護送するソ連の監視兵は、僅か三十人ほどの少人数だった。自動小銃を持っただけの軽装な騎馬兵に前後左右を監視されながら、隊列はなだらかな丘陵地帯を南に向かつて歩き続けた。炎天下の乾ききつたこの道には一筋の小川も一カ所の井戸もなく、飲料水に一番苦労した。水筒の水がなくなると水のことばかり思つて歩く。飢えと渇きに疲れ果てた兵隊が崩れるように座り込むと、監視兵は乗馬を飛ばして近づき、罵声を浴びせ、自動小銃を突きつけた。長い間、土の上で寝る生活が続いたために下痢をする者が後を絶たなかった。下痢をした兵隊が隊列から離れて草むらに屈むと銃で小突き追い立ててくる。食糧も水も支給されず、ソ連兵の怒声に追われて歩き続ける私たちは、言い知れぬ屈辱感と疲労のため、あえぎながら重い足を運んでいた。いつしか真つ赤な太陽は山端に隠れて、前方に広がる草原が燃えるように夕焼けに彩られると、地平線の果てまで延々と続く行軍の列に大休止の声が上ががり、この日の行軍がやっと終了した。

翌朝も夜が明けると「出発準備」の声で起こされた。ここでは「起床」はなく、いきなり「出発準備」である。洗面の水も朝飯もないのだから、朝の目覚めから即行軍であった。夜露に濡れて重くなった毛布と天幕を巻いて肩にかけて、隊列を作つて南に歩き始める。道路の両側に畑らしいところが見えると、長い隊列は道を外れ畑の中を行進する。待望のキビ畑があると、一万人以上の将兵に一本残らず踏み荒らされた。食糧が手に入ると、今度はキビを焼くための燃料として枯れ草や灌木を集め、外套に詰めて運ぶ。ソ連兵は糧秣を支給しないので知らぬ顔で傍観するだけであった。

今日の大休止は集落の近くで井戸があり、交替で水汲みもしていたが、私たちの分隊へいつ回ってくるかわからない。ひよいと脇を見ると水路が近くにあり、少量ながら水があつたので長時間待つこともなく水を求めたので、早速馬鈴薯を煮て食べる事ができた。次の朝明るいところで見ると、水路の水と思つたのは数日前に降つた雨のたまり水で、豚やニワトリがかき回した汚水であつたが、全員腹が悪くはならなかつた。

ドイツとの戦争の経験をした、抜け目のないソ連兵の強奪軍は「ダワイ、ダワイ」と襲いかかつてきた。「ダワイ」とは我々が聞いた初めての「ロシア語」であつたが、「急げ」とか「走れ」「来い」というように多種多様に使い分けられた。我々には略奪に使われた「ダワイ」であり、狙われたのは時計であつた。

このとき、前方よりサイドカー付きのオートバイが疾走してきた。オートバイは強奪軍の現場で急ブレーキをかけると、ソ連将校がサイドカーの中で立ち上がり、大声で何ごとか叫び、ソ連兵たちに向かって拳銃を構えた。ソ連将校の眼は血走り、今にも拳銃から火を噴かんばかりの迫力だつた。略奪兵共は将校の気迫にのまれて、先ほどまでの威勢はどこへやら、こそこそと雑木林の中に消えていった。拳銃を握つたソ連将校のオートバイが次の略奪現場に向かって立ち去ると、私たちがほつとして一息入れた。軍紀の紊乱したソ連軍の中で、憲兵か共産党幹部と思われた。正義感の溢れる将校の出現はありがたかつた。その後も

オートバイを疾走させて日本軍の隊列を守つてくれた。

岩手県 菅原登喜雄

時は昭和二十年八月十四日の昼頃である。「召集令状だ、とうとうきたぞ」、第四部落の千栄郷の川村昭一君が馬を走らせながら叫んで行つた。(その後本人はこの地で死亡したと聞かされた)

この地は満州国北安省綏稜県昭北開拓団本部落名豊秋郷として第一第二部落に分割されていた。本部より二キロ手前に大和郷の第三部落、本部の奥に千栄郷の第四部落があつた。戦争は激しく一人一人に召集令状が手渡されず、文書により一度に四十人余り召集された。翌日集合地に着いたとき、八月十五日、予期しない悲しい敗戦の知らせであつた。

スターリンスク地区第七收容所に着いた。時は昭和二十年十二月十四日であつた。

この地で三年、長い歳月であつた。来る年も来る年もダモイの日は長かつた。労役作業は、除雪、ストロイチカ建設作業、キノザボート煉瓦の製造と製品の窯出し作業、シャフト石炭の採掘と搬出作業と色々な労役に課せられた。食料不足、飢えと酷寒そして苛酷な労役は、抑留者を死の世界にと追いやつた。まさに生き地獄そのものであつた。二度と悲惨な戦争を起こしてはならない。この体験は我々で終わりにしたい、後世の人々のために。

東京都 岩本行夫

バム鉄道支線の作業のレール上げ(ポデマイ)とレール修整作業をしていた私たちの班に、ソ連下士官が黒パンとタバコ(マホルカ)を届けに来た。班長(高橋少尉)がどうして我々の班にと聞くと、「ソ連分隊長に良く働く(ハラシヨウラポーター)班なので届けるように言われたので持つて来た」そして「スターリンは、シベリア開発五カ年計画であなたたちを三〇五年建設に労働させ、この鉄道が完

成すれば早く帰国(ダモイ)させるのではないか、そしてソ連の軍人も帰郷させたい。正規の軍人以外のシベリアにいるソ連人はみんな囚人なので十分気をつけるように」と言って帰っていった。ソ連軍隊の中にも私たちに同情してくれる軍人がいることを知った。

神奈川県 石井 勇

十月半ば過ぎには山肌に白いものが混じって見えるようになってきた。固いトウモロコシばかり生かじりしてきたせいお腹をこわしてしまった。そうでもないまでも飢えと寒さで衰弱し切っていたのだ。

とうとう近くの部落に投降した。このときほど国境を越えた人の情が身に沁みたことはなかった。屯長宅で手厚いもてなしを受けた。高粱酒もふるまって貰った。散髪もしてくれた。余程好日派だったんだろう。ああ、生き延びてきてよかった。今までの苦勞が一ぺんに吹き飛んだ感じだった。

石川県 山本利男

今を去る五十年前、シベリアの凍土に立つてつるはしをふるう日本人捕虜二十五人の一団があった。体感温度が零下五十度を超えると、ソ連監督は野外作業を中止してバラック内に待避させる。防寒帽に鼻覆い、顔の中で出ている所は目だけである。まつげが凍って雪ダルマのような相手を確認することすら難しい。突然発狂したかのように一人の熱血漢が大声を挙げて泣き叫んだ「我々は敗けたんだ！ 捕虜なんだ、奴隷なんだ！ 我々は牛馬と変わらないんだ」と。これに続いたY軍曹は「そうなんだ！ みんなよく聞けよ。俺達はみんな奴隷なんだ、一瞬なりともこのことを忘れないように、日に十万遍でもそう叫び合った方がよいのだ。もし自分達が奴隷だと言う意識をなくしたら俺達はもうおしまいだ。俺達は常にこの意識に目覚めていなくちゃならんだ」と叫んだ。私達は極寒寒

下数十度の荒野で、飢えと寒さに震えながら強制労働に耐えた。そして雑草となつても祖国へ帰って生い茂り、日本再建の捨て石になろうと誓い合った。この時の熱血漢G君は、昭和二十二年十月二十二日午後四時二十五分、作業中の事故によつて二十五年の短い生涯を閉じた。彼は立正大学から学徒出陣で入隊した日蓮宗の僧侶だったが、私とは同年輩で満州・中国とずっと一緒に、終戦後はいろいろと天下国家を論じ日本民族の将来や世界情勢等について腹を割つてよく論議を闘わせた、本当に生死苦楽をともにする戦友であった。深く日蓮に帰依し、いつも上人の御言葉「我れ日本の柱とならん、我れ日本の捨て石とならん」と捕虜生活の苦難に耐え、「俺は雑草となつても必ず日本にたどり着くのだ」と断言していたのに実に悲しいことであった。

あれから半世紀以上も生き長らえて来た私は、雑草になり切れない我が身を恥じつつも、彼の面影が還相回向となつて、今もなお私に密着して離れないのである。

滋賀県 竹山悌三

ここから私の冥土に近い生き地獄への出発が始まった。「千島列島は日本の領土だから必ず内地から迎えに来る、それまで兵器を磨き、小銃その他の手入れ訓練に励め」との中隊長命令であった。日本は負けたのになぜこんなことをせねばならんのかな——兵隊たちは小声でつぶやいた。上官の命令に反することはできない。朝の点呼、五カ条朗読。軍隊、まして千島色丹守備隊、孤島である。世間の情報がわかるはずがなかった。

ある捕鯨会社社長が、ラジオのニュースを耳にして、「漁船が今出ることはできない。千島はどうなるかわからん状態や。今なら船が皆休んでいる。貸してあげるからせめて根室まで引き揚げなさい。北海道まで行けばまず大丈夫と思う」と、親切に連絡してきてくださった。しかし、中隊長の「勝手な行動は駄目だ、軍の命令を待つ」と、この言葉が運命の分かれ道となつた。

三日後の朝、沖合に山ほどもある大船が停泊。慌ただしく命令が出たとの連絡、内地からの命令でなくソ連軍からのものだった。皆が一瞬耳を澄ませた。兵器弾薬等、使用可能な機材一式を港の船着桟橋付近に今すぐ集積すること、隠したら銃殺だという。小隊長が「小銃に印ある菊の紋をやすりで消し取れ、ソ連軍に渡るのだから」。これを聞いた中隊長、声を震わせ「銃に傷をつけたら駄目だ」と、脅えていた姿が目に入る。もう出し終わったかと再度連絡、確認をした後、はしけでソ連兵がわからない言葉で自動小銃を手に携えて上陸をさせた。

京都府 今井敬一

我々を乗せた列車はチタから支線で山岳地帯へ向け走り続けた。もう夜になっていた。列車が停止し、警戒兵(ソ連カンボーイ)が大声で「ダワイ、ヴィストラ(早く急いで)」と列車からの下車を促す。あたりは灯がなく、真つ暗闇の中である。列車は山中の引込線の終点のようである。「ここはどこか」と聞くと、「ドリビアンだ」とソ連兵士が言った。山中にて気温は低く、寒さは体に差し込んでくる。体、手、足はいつも動かしていないと凍傷にかかってしまう。

警戒兵は少数だがマンドリンといった強力な自動小銃を所持している。我々は武器を所持していないが、八月中旬までは関東軍の精鋭で最も強いと言われた軍人の集団である。若い警戒兵達も、我々と同じく行軍し、黒パンの乾いた携帯食糧のみで与えられた任務に就いているのだが、寒さ、空腹、睡魔は我々以上で、その上彼等は大きな集団を警戒している。その「緊張感、恐怖感は大変大きかった」と、後日チタの收容所のソ連兵から聞いた。これは実感であったと思った。かつて満州古天子という飛行場の通信所に勤務した時であった。この飛行場の掩体壕(飛行機を隠す壕)を建設中で、屈強な中国人が三百人も使役(作業)をしていた。下士官を含む数人の歩哨が勤務立哨するのだが、他の歩哨に立つよりこの勤務が一番恐怖感が大きかったと飛行場大隊の兵士が言っていたことを

思い出した。

島根県 松浦久雄

收容所に着いた当座はドイツ人捕虜は我々をかつての同盟国と歓迎してくれしたが、それも、宗教、文化、風俗、習慣の違いから長く続かなかつた。最初に彼等の饗應を買ったのが、同じテーブルで食事をする際、日本人はスープを飲む時、咬む時に音をたてることであつた。隣り向かいのドイツ人が手まね、口まねで音をたてぬよう抗議するのだが、当時の日本人の食生活の感覚からそれがなかなか理解できなかった(現在であればテーブルマナーなどといった知識ですぐ理解できたであろうが)。そのうち日本人全員に、ヨーロッパ人と食事を共にする際は特にその点を注意するよう指示があつた。その後も彼等の前で、これが日本人の食事の習慣とばかり故意にする者もあつて更に反感を煽つた。

ある時、ドイツ人のグループと除雪作業に出掛け、別々の区域で除雪をしたが、日本人グループは雪の中でも汗が出るくらい働き、疲れ、一斉に手を休める。警備兵が「ダヴァイ、ダヴァイ」と叱咤する。働き、疲れ、この繰り返し。この時、仲間の一人が、近くで作業をしているドイツ人グループを指さし「あれだ、あれを見よ」と説明を始めた。グループ全員が作業をしているように見えるが、四五人は常に手を休め休憩をしている。作業はスローで汗の出るような働きぶりではない。警備兵も「ダヴァイ」とも言わずぼんやり立っている。この統制のとれた行動を見習うべきと話し合った。次の作業日、休憩の順番、作業のテンポ等色々取り決めやってみたが、日本人の性格というか、他人が仕事をしている時、いかに交代制とはいえ休んだ気がしない。作業テンポも個々に差があり、集団で統一、これも日本人には駄目だった。結局元に戻り、やるときはやり、疲れてくれば手を休めた。やがて警備兵も日本人の性格を理解したのか、手を休めていても、適当な時間を見計らい「ダヴァイ」と一言言うだけになった。

広島県 藤森隆行

衣食住は生きるために欠かせないもの。衣は、抑留中着たきり雀。食は、最低限をなお下回る。住は、これまた最低限を下回る。

武器も持たない衰弱した者を、銃で威嚇し、有刺鉄線で囲い、自由を束縛し、ノルマを課して労働を強制し酷使した。人間としての最低限の価値さえ認められなかった。何故このような事実が許されたのか？

生還し得た私たちも、今は老いさらばえ、指折る余命となつてしまった。凍土に眠る御霊と一緒に叫びたい。「口惜しくて、残念でならない」。シベリア珪肺の療友たちも、年々訃報の多きを聞くようになった。

一片の肉もとどめず、大空に砕けて散つて逝つた勇士の御霊。沖縄決戦に散つて逝つた十代の非戦闘員、ひめゆりの乙女たちの御霊。今日の日本の繁栄の基盤は、これら多くの尊い犠牲の上にあると思う。

戦争を知らない人の不様な謝罪は、靖国神社の御霊をはじめ、靖国に合祀されていらない尊い多くの御霊をも犬死ににしまいたいのか。

私が叫んでいることは時代逆行なのか？

古い人間と言わりようと、

負け犬の遠吠えと言わりようと、

悔しいものは、悔しい。

残念なものは、残念だ。

愛媛県 田中 純

ハバロフスクの駅に停車することもなく再び北に向かつて列車はシベリア本線走り続け、イズベストコーワヤに停車、真っ白に雪化粧したシベリアの大地に下車させられ、長い旅で体力も消耗し半病人のような体に寒さがさらに追いつちをかけ、立っているだけでやつの体を気力で支えながら近くの収容所に入った。

十一月三日、この収容所で一夜を明かし再び徒歩にて奥地に向かった。夏服

の薄着での雪中行軍、それに加えて猛烈な繁殖力で虱が襲ってきた。この三日三晩の行軍で初年兵達は、飯盒や炊事用に使うブリキ缶を背中に背負い、日に日に寒さが加わるその中を、精いっぱい力を振り絞り、黙々と言葉もなく野営を重ねながらタランジャン二〇四捕虜収容所にたどり着いた。三晩の野営は、積もった雪をかきのけ付近の原生林の枯れ木を拾い集めて朝まで火を絶やさぬようにして外気から身を守らなければならぬ。こんなソ連の仕打ち、人種こそ違え、これが人間としてやることであろうか？

この二〇四収容所において、おおかた掠奪した戦利品と思われる防寒靴(バレンキー)、フェルトでできた長靴に綿入りの満人服と防寒帽、防寒手袋を渡された。復興のために日本軍捕虜の労働力、満州全土の物資をいち早くソ連領に運び込んできた品物である。

和歌山県 上村豊三

テルマの収容所では前職差別が行われて、警察官、憲兵、特務機関勤務経験の者は「天皇の犬」だったということで、食堂に入る時に三回回つて「ワンワンワン」と両手を床に付けて犬の鳴き声を出させられた。拒めば食べられないから、仕方なしに食堂の入口で三度回つて両手を下に付けて犬の真似をしたが、あの屈辱に耐えるのが一番苦しかった。また、作業割り当ての時も重労働を割りつけられた。作業は鉄道敷設が主で、レールを延ばし、無蓋車で運んで来た土石を下ろすのだが、下ろす速さを競争させられた。

北海道 澤田清吉

昭和二十年、日本は長い間続いた戦争に敗れた。南太平洋の諸島にいた多くの日本将兵たちは武装解除のあとほとんどなく、日本に帰還してきた。ポツダム宣言の趣旨の通りである。

しかし、旧満州、北朝鮮、樺太、千島にいた将兵並びに民間人の六十七万人余

りは、ソ連に強制抑留され、飢餓と酷寒のシベリアに、軍事奴隸として酷使されたのである。

茨城県 豊田耕八

「異国の丘」 故吉田正先生を偲んで

戦後の国民的作曲家、吉田正先生は日立市の出身で、日立製作所工業専修学校を卒業し、昭和十七年従軍し満州派遣となり、戦後シベリアに抑留された抑留中作曲した「異国の丘」のメロディーは、悲惨なシベリアを忍び一世を風靡した。惜しくも平成十年六月他界されたが、抑留地を調べたら、終戦時、第一一二師団歩兵第二四七連隊に所属、抑留地は私と同じソフガワニだった。共に三年ソフガワニに抑留生活を送りながら、生前お会いする機会がなかったことを非常に残念に思う。

福井県 福田 薫

二十四年十月二十六日午後四時、村長さんはじめ区民の皆さん、親戚、弟妹に迎えられ、家に帰りました。

厳冬のシベリア四年間、もう思い出したくありません。

岩手県 立石 章

老境の今、シベリアに眠る友を想う

「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」(毎年、花は同じように美しく咲くが、人は、年とともに変わり年老いてゆく。)

近ごろこの唐の劉廷芝の詩が、そして「老いる」という言葉が我が頭の中をよぎることが多い。自分の姿や体の変調、即ち老化が紛れもなく表れ、かつ進みつつあるからであろう。歲月というものは残酷なものである。

ふりかえってみると、我々お互い悲喜こもごもの人生があつたであろう。生ま

れて少年期を、そして軍隊とあの忌まわしい抑留生活、そして復員、結婚生活、子供も生まれ、その子供がまた子供を産み、我々もお爺さんやお婆さんと呼ばれるようになり、その間には悲しくも父や母を黄泉の旅に送りもした。いんな思い出が、パチンコ玉のように目まぐるしく去来する。

その人生の青春期として忘れ得ないのは、やはりシベリア抑留であろう。あれから歲月はまるで素知らぬ顔で春秋を繰り返し、もう半世紀近くが流れ去り、今は人生の余生という最終コースを歩むいわば人生を全うせんとする老境の身となった。

ある人によれば、この「余生」または「一種の追加の人生」であつても、それは青春の理想と壮年の行動の期間が終わりこれに次ぐ第三の時期で、自分の一生に決着をつける時期に入ったということである。人の生涯の最高の収穫期ともいえる最も充実した最終コースを歩んでいるとも言える、と言っているが、なるほどなあ！とも思える。

今、静かに瞑目し思いをあの遙かなシベリア時代に移すとき、暗闘死闘の明け暮れの末、青春を空しく、最果ての僻地にねぎらう一人一人としてなく寂しく眠る薄幸の友を想う。

「ダモイ」、それは父母や妻子に会いたいという唯一つ、唯それだけのことなのにそれが達せられず、悲惨な逆境の中で、「無念！」の一言、若い命を落としただけに、あれから五十年近い人生を歩んだ我々は、今、運命という言葉をしみじみ噛みしめるとともに一層哀悼の想いが滲み出てくるのである。

神奈川県 香坂 毅

翻つてみると、満州より望郷の念を抱き続け、東京ダモイを合言葉に労苦に耐え励まし助け合いながら頑張り、その望みも果たし得ず異国の地に埋もれていった同胞の無念さを想う時、生きて帰国出来た幸せに感謝せねばと思つた。そして、失意の裡にシベリアの大地で亡くなられた同胞のご冥福を心よりお祈り

いたします。理不尽な抑留生活のためいかに多くの犠牲者が出たことか。同じ間違いを繰り返してはなるまいと想う。

新潟県 高橋吉郎

今、半世紀前のことを追想して、よく我々日本軍は、不法に抑留されながらじつと耐えて暴動を起す者もなく、いずれの地域においてもソ連軍の指示に従つてあれ程の苦闘屈辱に耐えて来たものだ、自分乍ら日本人の偉大さに感心させられている。これも天皇陛下の終戦における玉音の賜と思わざるを得ない。度々記述するところであるが、天皇陛下の「耐えがたきを耐え忍びがたきを忍び」と命ぜられた玉音を忠実に守つたのはシベリアの抑留者であると言ふべきである。それも、戦争と同時に召集が解除され祖国へ帰還すべきものを抑留したソ連の取つた措置は、歴史上からも忘れ去られてはならないと思うものである。やはり日本人は大和魂で育てられ、武士道を貫き、シベリア抑留者は立派に天皇陛下の命を遵守したことは、歴史上でも高く評価すべきであると思うものである。シベリア抑留者に対して「シベリアの捕虜」と言われていることは、シベリア抑留者の名誉を棄損し人格を冒瀆するものである。

岐阜県 水野隆男

私は、故国へ帰つて我が家の畳の上で新聞を広げて読めるような、そんな夢のような生活は当時はもう二度とあることはないと思つていた。将来の見通しも全然立たず、現実はその程悲惨なものであった。しかし作業の合間や、へとへとになつて僅かばかりの唯一の自分の領分である寝台に倒れ込んだ時、必ず目に浮かんでくるのは幼いとき遊んだ故郷の山や川であり、家族、知人、学友など愛する人々の面影であった。

ここで私はノーバヤ時代を締めくくるに当たり、我々に夢を与え帰国の希望をつないでくれた自分達の作詩作曲した「シベリア哀歌」を紹介する。

故郷で待つているであろうその人の面影を思い浮かべながら……。
ノーバヤの街から一日も早くさようならするその日を心に願つて……。

一、君と別れて幾年の、

異国さすらい流れなら

この身あの月いとおしい

あゝ君ぞ待つ誰故に、

あゝ誰故に……。

二、幼き頃の思い出に、

故郷の夢を慕うては

流れる雲よ 野の果てよ

あゝ君ぞ待つ誰故に、

あゝ誰故に……。

三、ノーバヤの街よ

さようなら、

あの山この川さようなら

うるむ涙でな お見えぬ

あゝ君ぞ待つ誰故に、

あゝ誰故に……。

愛媛県 平井 一

抑留挽歌

私は今まで抑留の短歌を数多く歌誌に発表してきたが、その幾首かを追憶し挽歌とする。

銃構へあるひは銃床を振りかざし

強制されたる炭坑労働の日や

炭坑労働は三交代、ラールから炭坑まで往復百人単位で歩くが、初めの頃

は粗暴な監視兵が多く、病弱者や路端の冬草を摘む者に銃を構え、銃床を振りかざす手荒な監視であった。日に日に飢餓のため身体の弱っていく隊列は乱れ易く、苦しい行進であった。

年老けし召集兵より仆れゆきぬ

墓掘る冬の土固かりき

抑留されて全員階級章は外されていたので初年兵の私には気楽であったし、十九歳の体力は一応人並みに働くことができたが、満州で根こそぎ動員で召集された三十歳以上の人達は、体力がなく衰れであった。夜、背中を合わせて互いに体温で暖をとりあっていた先輩が、ある朝眠るように死んでいった。亡くなると、命令で真っ裸にされ、小屋に積まれた。厳寒の中、通夜をする者もなく、幾人か死体がたまと四人一組で戸板に乗せて山腹まで運び、カチカチに凍った土を掘った。亡骸がやつと隠れる程度に掘ると土をかけて盛り土をした。勿論、死者の氏名を判らず、墓標とする板片もない。小さな板木を建てて墓標の目印としたが、同じような墓が何十と段をなしていた。私は二度この作業に従事した。

斜坑に脚踏ん張りて石炭掘る手許

スコップ大きく苦しむたりき

炭坑坑内作業、坑道掘削、立坑、斜坑、トロッコ運搬等その日の割り当てによって変わった。幸い私は立坑には入らなかったが、きつい作業ばかりで、現場監督のロスキーの指示に従った。と言つても彼等も囚人上がりで、スターリンの独裁を快く思つてない人達であった。砂塵のもうもうと立ち込める斜坑で、掘り出された石炭を下に流すスコップの作業は大変であった。日本人には大き過ぎるのである。

地下二百メートルの坑道には無蓋のエレベーターで下り、ガスランプを先頭に現場に向かった。先年、オウム教団のサリン製造工場の捜索で警察がカナリアの鳥籠やガスランプを掲げているのを見て、シベリアの炭坑を思い出した。

ボタ山に押すトロの雪凍る夜は

日本の雑煮をただに思ひき

必死で肩にトロを押す重み、栄養の足りない身体でよくも頂まで押したものと、凍る雪の上に座り郷里の雑煮の話の友にしたものである。坑外作業はノルマが厳しく、黒パン減配の時もあった。

押して挽く鋸にノルマ上がらねば

黒パン半減の罰にも耐へき

豚の如く腫れし時ありき

毛を刈りし羊の如く瘦せし時ありき

ソ連女医の前に素裸の病む身立ち

労働の軽減を乞ひし日ありき

三十八度以上の高熱でなければ休ませてくれない。寒い室で永く素っ裸で待つて計る体温が、時に三十七度九分の時があった。労働の軽減を乞うと坑外作業に回された。坑木を作るため二人して押し挽く鋸は重く、ノルマなど到底達成出来ない。すると必ず「働かざる者食うべからず」と黒パンを減らされた。腫れたり瘦せたり七変化の身体で耐えた。

ペーチカに雪を溶かしし

空缶の黒き水枕元にい寝し夜々

「ストロイ（止まれ）」と監視兵に服装検査をされる。炭坑帰りの時は震えながら服の下に隠した石炭を下に落とす。ペーチカに焚く石炭である。ラーゲルで水は貴重品、空缶に雪を拾って来て何度も溶かし、寝る時枕元に置いた。真つ黒の水であった。

ある時、ラーゲルの有刺鉄線の下を潜つて雪をとっていた友が、望楼の兵に撃たれて死んだ。

壊血の斑点出でしが

冬草の白き芽採りくれし君も亡し

ビタミンC欠乏症の壊血病、脚から腰に斑点が出て下痢が止まらず死んだ友が随分多く出た。私も一時脚に出たが、友が草の芽の白いのを採ってくれて助かった。蓬は便秘し、アカザは下痢をした。今、畦道に生える野蒜を見ると壊血病の日を思い出す。

硬山ぼたに混じる石炭を拾い帰り

ペーチカに鱈の骨を焙りき

珍しく鱈などのアムールの河魚が配給されることがあった。二年目の冬であったと記憶している。貴重品としてペーチカでその骨を焙って叩き魚粉とした。米粒の形のない糊飯にふりかけて食べた味は忘れられない。この頃からラーゲルの死没が減ったが、減少した労働力を補うため、千島列島から抑留されたという兵が約三百人、私達のラーゲルに着いたと聞いた。元気な人達であった。

板壁の凍りて灯もなきラーゲルに

まなこ凝らしてスープ啜りき

元旦の夜配られたスープには親指ほどの馬鈴薯が二つ、そして八日後の私の二十歳の誕生日もスープに小さな馬鈴薯が二つ、暗い部屋でスープを啜った、腹を空かして。

軌道の広い、ストーブを据えた客車の窓から夏の日の射す白樺林や草原、コルホーズを眺めていたが、何と僅か三つ目の駅が終点ナホトカであった。

強制さるる革命の歌に

喉はらし声囁らし終日船待ち待ちき

海岸に近い砂浜に天幕が張られ、毎日毎日革命の歌を歌わされ、声が低い、逆送されるぞ、とハッパをかけられながら第三、第二、第一の幕舎に移った。列車で奥地から来るダモイ部隊は、服装も様々、元気な人達ばかりであったが、革命歌を歌わない部隊は逆送されたと聞いた。

昭和二十二年十月十八日夜、病院船高砂丸に乗船した。タラップを踏みしめた時、何とも言えぬ解放感を味わった。

そして、間もなく平棧橋に上陸することができたが、大勢の迎えの中に家族はいなかった。

ぼろぼろの軍服の日をまぼろしに

立ちて涙ぐむ平棧橋

五十二年振りに、子供らに連れられ、再現された棧橋に立つことが出来た感慨である。

国敗れ捕はれてシベリアに経し二年

様々にわが生よを暗くあらしむ

岡山県 木下美知夫
すまじきものは戦、総ての日本人はこのことを改めて覚悟すべきである。

高知県 加納憲

工藤さん(青森出身)が言う。「私は今八十歳だが、いたって元気だ。ソ連にいたことを振り返って考えると、色々な事を経験させてくれて感謝している」と。しかし、これは人生に感謝であつて、ソ連への感謝ではないはずだ。

また「ソ連の抑留は恨みだ」と言う人もいる。当然のことで、私が経験した以上に過酷な経験をした人も多い。まして、かの地に無念の死を遂げた人は今もまぶたにあつて、ご冥福を祈るのみである。

京都府 八木篤司

その頃我々の心を少しでも慰めてくれたのは、作業に行く途中、トラックの上から見られるボルガ川の眺めであった。遠くモスクワの北から広いロシアの豊穡の大地を潤し、遙か南の中央アジアのカスピ海まで多くの流れを集め、多くの湖を抱き、海のような水量豊かな川、それは悠久の昔から、醜悪な人間社会の興亡と自然の暴力と恩恵を秘めて流れるボルガ川、我々に命を大切にせよ、達者で日本の土を踏めよと激励してくれ、力強さを与えてくれた感慨は、五十年余後

の今も忘れることが出来ないものであった。

熊本県 畠田 完

老婆は更に続ける。「兵隊さん、せっかくのチャンス逃したら大変よ。日本の兵隊さんも今日、明日、次の所に出発すると聞いている。ついておいで」と言う。半信半疑、老婆について行く。ヤプロニーという村だった。

程なく村の入口に差しかかる。空気がおかしい。案の定、ソ連軍と満軍の兵隊が両面から出てきて挟み打ちだ。ジェスチャーで手を上げろと言う。何もかも取り上げられ武装解除である。老婆が言ったように日本兵士が何人かいた。皆うつろな目をして眺めている。生きて虜囚の辱めを受けるなど教えられてきたのは何だったのか。いても立つてもいられない気持ちにかられる。手榴弾一発を腰に下げ覚悟していたが、何もかも取り上げられた今、自決もできない。あつという間の出来事で、丸腰のまま、集団の中にただ茫然と立っていた。九月十五日の昼頃のことだった。一カ月以上苦勞してきた結末がこうなろうとは夢想だにできなかった。日本は八月十五日、天皇の名において無条件降伏をしたと聞かされ愕然とする。叔父をはじめ戦没した人がかわいそうでならない。死んで花実が咲くものか、たった四日後の事である。どういふ運命の定めなのか、今更ながら、何をしてきたのかとありし日の叔父との思い出がよみがえってくる。反面、敗戦ということを知らずに逝ってしまった方がかえって幸せだったのかとも考えたりしたが、やっぱり死んだ人は浮かばれない。というのも、帰国してから、在満の高官の話として、前線の兵隊、開拓団、義勇軍は軍の囹だったと聞き、例えようのない怒りを覚えている。

辞典で「囹」の字を引くと、①鳥や獣を誘い寄せて捕らえるために、もちぎおや、わなのそばにつないでおく同類の生き物。②人を誘い寄せる手段として使われる人や物、とある。

人を人と思わない、虫けら同然の仕打ちが天皇のためという美名のもとに

公然と行われた結果が、残留孤児・婦人問題として引きずっていると思うと許すことができない。

岩手県 本宮龍平

ナホトカ港と赤旗

列車が山間を抜けると眼下は海、ナホトカ港の終着駅に七月初め頃着いた。海の香りが懐かしい砂浜には赤旗が林立し、何千人かの帰国予定者たちが収容所に入りきれずあふれていた。引揚船の入港を待つ人たちは、歩く時はスクラムを組んで労働歌を歌う。「赤旗の歌、スターリン讃歌、革命歌」など。アクチブ行動隊員が集会で共産党のアジ演説をする。

起床から就寝まで気は許せない。私は偽装転向して共産主義を勉強するふりをし、ラーゲル内の図書館からマルクス主義の本や関係する本を何冊も借りて貸出簿に記帳した。

岐阜県 中島正教

在ソ中、捕虜にとつての四大苦は、重労働、食糧不足、極寒、伝染病に尽きる。労働としては、平時の状態健康で十分な食糧と休養があれば、これらは大したことではなかったはずであるが、上記の四件が重複して地獄の苦しみを味わわねばならなかったのである。

鳥根県 伊藤善雄

帰国後五十数年を過ぎた今日、いまだに年一、二回シベリア抑留中の夢を見るのである。いかに三年八カ月のシベリア生活がつらかったか。「ダモイ」帰国の言葉を信じ抵抗もなく連行されて以来、苦しみ、諦め、そしてなお生きようとした悲しいまでの人間の姿。望郷の念に支えられて生き抜いた困苦欠乏の日々を私は終生忘れないであらう。

山梨県 渡辺元信

最後に言い遺したいことば

私は二十世紀の日本動乱の時代に生まれ、日本人として、軍人として戦い敗れてソ連の捕虜として酷使されながらも運よく生きて帰り、祖国再建に尽くすことができた幸運者です。

そこで私はここで子孫や社会の人に申し遺したいことは、今後日本はもちろん、世界中から戦争は起こさないことにしてもらいたいものです。

今でも米国、ロシアとも核兵器を保有している国もありますが、核兵器は全部なくして、これからは絶対戦争はしないことを世界の人々が誓うべきだと思います。そして家庭では親を大切にして一家仲良く暮らせる世の中を作ってください。

山梨県 長田十一

子孫に言い遺したいことば

私は帰国後、父母の家で農業に従事し、妻もめとつて一男一女を育て、平穏な生活を送ることができるようにも、あの地獄で一緒に働いた戦友(栃木県佐野市、樽見龍三郎様方)のおかげだと今でも感謝しています。

なお、私はシベリア当時の栄養失調症が原因で帰省後次第に視力を失い、今は失明して不自由な生活を送っていますが、あの凍土で果てた戦友を思えば、こうして祖国再建に参加できた私は幸運者だと心から感謝しています。

最後に私は、家族や日本国民の皆さんに遺言として言い残したいことばは「今後日本は平和憲法を守り、決して戦争はしないことを永久に誓い、「家中仲良く暮らしてもらいたい」とお願いし、この労苦報告を終わります。

山梨県 中村清

帰国後の生活と子孫に言い遺したいことば

日本も食糧不足で大変のようだったが、私の郷里河口湖付近では米作り農家が多かったので比較的豊かでした。

帰国後、昭和二十二年六月から河口湖村役場に公務員として奉職し、生きて還った喜びをかみしめながら、公僕として日本再建に尽くしてまいりました。

最後に、子孫や国民の皆さんに遺したいことばは「戦争は絶無とすること。平和な社会、健康で円満、仲の良い家庭を築いて幸福に暮らして下さい」と祈念し、私の体験報告を終わります。

山梨県 奥脇徳

家族や国民の皆さんに遺したいことば

帰国後約半年くらい、私は栄養失調症や抑留疲労のための静養をしました。が、父の家業である織物業(甲斐絹や洋服地等)に専念し、工場を経営して祖国再建のためにと頑張り通しましたが、どんなに仕事が苦勞な時も、シベリアの抑留生活を思えば「このくらいのこと」と頑張ることができました。また、シベリアで亡くなった戦友の慰霊や遺骨収集のため全国強制抑留者協会に加入して、コムソモリスク、イルクーツク等の墓地調査(調査班長渡辺時雄氏)に参加しました。

今こうして苦しかったシベリア抑留時代の報告記を書き終わったとき、ぜひ、私の子孫や若い国民の皆さんに遺しておきたいことばがあります。それは「平和」の一言であります。世界中の人が平和を愛し、二度と再び戦争をなくし、我々のような犠牲者を出さないようにして下さい。

そして家中仲良く、よく働けば家も安泰で栄え

家族や国民に言い遣したいことば

1. 戦争は絶対にしてはいけないこと。
2. どこの人達とも仲良く心を開いてお付き合いをしよう。
3. 健康第一に心がけ、思いやりを大切にしよう。

今でも忘れられない悲惨な情景

1. 武装解除から入ソ途中の峠路で路端に転がっていた襟章が伍長の首なしの遺体。
2. 山を切り開いた谷間の軍用道路で人馬入り乱れて折り重なっている上をソ連戦車のキヤタピラーで踏みつぶされていた光景、その道の側を敗戦して行く先も分らず黙々と歩かされる私ども日本兵の姿(満ソ国境輝春峠)。こんな事が二度と繰り返されないうちにも平和な世界をつくって下さい。

米国の戦力を思う

満州に侵攻したソ連軍でまず驚いたのは、米国製自動車であった。シベリアに入つていよいよアメリカの戦力を痛感せしめられた。イルクーツクにおいても、市民の使用する食糧品は、小麦粉の袋、缶詰類の梱包箱はすべて星条旗印であり、我々が従事する鉄道工事も、これに使用する資材は、枕木を除く以外は犬釘一本に至るまで皆米国製品である。シベリアにおいてしかり、欧露及び欧州戦線は想像に余りあり。地球規模ともいべき東西二正面の大作戦を敢行しながら、なおかくの如き膨大な食糧及び工業生産力、彼の戦力を思うとき、軍配を上げる機を逸した南方戦線、国力の差をつくづくと考えさせられ、U・S・Aと銘のある長いレールを毎日のように見入る。

夏になり、休みの日は収容所内の草むらで日光浴をしながら内地(日本)のことを語ったものだ。私は最後の兵隊の方であり、若かったが、召集兵は内地に妻や子供がいるので良くその話を聞かされた。帰りたい気持ちは私より強かったのだろう。涙を浮かべて話してくれたものだ。夏も終わって、秋、冬と毎日の生活には変化がなかった。寒い冬も三年目でなれてしまった。そんなとき、映画を見せてくれるという報せがあった。日露戦争の映画であった。日本海海戦で、日本の軍艦の粗末なこと、ロシア艦隊に追われて撃沈される様子等があったが、随分異なつた映画を見せられた。何の目的か理解できなかったが、日本で発表されているのはウンであると言いたいのだろう。

三年目の春が来た。体力もついてあまり労働が苦にならなくなった。調子を合わせて働くことも覚えた、無理をしないことにしたから。しかし、彼らの口ぐせは、良く働く者は帰れるということであった。そして五月に入った休みの日である。午後になって急にあたりが暗くなってきた。「日食だ」、誰かの知らせで表に出た。変化のない毎日であったので、久しぶりに珍しい物を見た感じであった。

第二次大戦の終末期の昭和二十年六月から八月にかけて連合国法律家代表(英・米・仏・ソ)が参加し、ロンドソ会議が開かれ、さきに行なわれた(昭和十八年十月)カイロ会談(米・英・中)で協議された日本に関する戦争責任、戦争犯罪の処理についての関係首脳連名の宣言についての考え方を受け継いで討議され、戦争責任追及の法理として「平和に対する罪」と「人道に反する罪」が確立された。その結果が「国際軍事裁判所条例」として定められ、その法理で極東国際軍事裁判所条例がマッカーサー特別宣言で指令され東京裁判が行われた。

私は法律家でないからよく分からないが、戦勝国が戦敗国を一方的に侵略戦

争と決めつけた上で裁判することに根本的に問題があるように思えてならない。そもそも戦争は、有史前から繰り返された人間社会の宿命にも似た非道劇であるから、戦の過程には山ほどの人道に反する行為があつたであろうことは想像できる。それを報復措置として摘発することはうなずけるとしても、戦争もしなかつた我々に「資本主義幫助罪」「祖国に対する反逆罪」というソ連国内法を適用するとは、こじつけも甚だしい。

ソ連も参加したロンドン会議の国際規定では、B、C級戦犯の犯罪は「人道に反する罪、残虐行為」であるはずだが、樺太ではソ連軍から残虐の限りを尽くされはしたが、既に手を挙げてしまつた後だからソ連の捕虜一人あつた訳ではなく、残虐行為等あろうはずがない。

資本主義国家の官吏としてその発展を願い忠実に勤務した行為が資本主義幫助の罪だとするならば、日本国中の官吏は一人残らずソ連戦犯とならねばならないことになる。

関東軍司令部の最後

愛媛県 稲見 正

昭和二十年八月十四日、作戦司令部を通化に移転したばかりの総司令官山田乙三大将が、終戦の大詔あるを予知せられ、総参謀長秦彦三郎中将、同副長松村知勝少将、草地貞吾参謀、瀬島竜三参謀を従え、急きよ新京に飛び帰る際に、作戦班長草地貞吾大佐から「山崎（作戦班庶務山崎力少尉）一人では手が足りん、飛行機を折り返すから急いで続行せよ！」と命令されて飛行場に待機し、十六日昼ごろ、ようやく飛来したスーパー機に、たまたま臨江より到着した満州国の日系要人等六人を便乗させて新京に飛び帰つた。

総司令官山田大将の「承詔必謹」の決断があり、直ちに「即時戦闘行動を中止すべし」の命令が発令せられた。緊張に震えながら、悲痛極まる終戦命令を、隷下各軍等に至急電報すると共に、関総作戦命甲第六号による最後の総軍命

令の浄書、伝達任務に当たつた。

八月十七日には、一ヶ月ほど前まで関東軍作戦参謀として勤務せられ、日夜お仕えした竹田宮恒徳王殿下が、終戦の聖旨伝達の勅使として御来京せられた。

翌十八日には隷下全軍参謀長の緊急会同があり、また終戦命令未達のため、なお戦闘継続中の部隊に対し、土田正人少佐外、軍使の派遣等に伴う事務を、先任の山崎力少尉を助けて不眠不休で実施した。

八月十九日の先発を皮きりにソ連軍の新京進駐が始まり、二十日にはザバイカル方面からガバリヨフ大将が到着し、八月二十二日、遂に屈辱と悲涙で、栄光に満ちた関東軍総司令部庁舎をソ連軍に明け渡し、関東軍四十年の光輝ある歴史を閉じ、後ろ髪引かれる思いで西広場にある海軍武官府庁舎に移つた。

山崎少尉とともに作戦書記一同は、北に南にと軍使として、あるいは連絡にと不眠不休で奔走される草地参謀ほか、各軍使への資料の準備や、自動車、飛行機の手配に苦勞する一方、無秩序に次々と来るソ連軍の苛酷な命令、指示の処理事務に当たつた。

岩手県 五十嵐 弥助

逮捕されてからちようど十カ月目の八月十五日の朝、私達十二人は全員引き出され、長い廊下を何度も鉄の扉をくぐつてがらんとした事務室のような大きな部屋に座らされた。大尉の肩章をつけた大男が現れ、同行の通訳に読み上げさせたのが私達の判決文だった。

いわく、これがモスクワからの決定通告であり、もし不服なら三日以内に上訴せよと。無茶もこゝまで来るとつける薬はない。裁判という形式もないから、被告の申し分を聞くわけでもないし、弁護人がつけられることもない。十年、二十年という長期刑を、あたかも立ち小便をやつた者に違警罪即決令によつて警察署長が科料一円也を言い渡すよりもっと簡単だ。違警罪即決令による言い渡

しでも、正式裁判を受ける権利は保留されていたのに。三日以内に上訴を許す
というのは全くの欺瞞で、その上訴する手段は私達にはないのだ。

言い渡された刑は次の通りであった。

「ソ連刑法第五十八条違反のかどにより、次の通りの矯正(思想・行動の矯
正)労働に処す。

十五年 警察部長 尾形 半

十五年 特高課長 阿部 春夫

十五年 警部 谷森 一二

十五年 警部補 川口 港

十年 警部 五十嵐 弥助

十年 刑事課長 升内 貞二郎

十年 警部補 荒川 熊太郎

十年 〃 川平 匡

七年 巡查部長 新山 忠吉

七年 〃 広島 民雄

この日の言い渡しは警察部関係の十人だった。

人生の節目ふし目にある悲劇

忍耐のいろはにほへとちりぬるを

六十年経てば菩薩になる兵士

違い日の兵には兵の走馬燈

あのページ馬も涙をした別れ

流れ弾かすめた日からある祈り

ラーゲルの詩人になれる円い月

ああ雲は遙かはるかな母の膝

京都府 野村喜与四

きつと吹く風を信じたコーカサス

声かぎり半端じゃないぞおいダモイ

シベリアに向いた足元洗う波

難民の姿シベリア遠からず

有事立法右向け右は怖い道

愛媛県 稲見 正

シベリヤの山の獄舎ひとやは花もなく

風雪月に想い乱れる

物思ひとう気力も失せて一塊ひとくの

生ける屍となりし此の頃

故郷に帰る望みも一瞬に

闇の鉄路に無惨や果てぬ

古里に帰るのぞみも絶へ果てて

雪の獄舎の暗きこのころ

シベリアの雪の獄舎にその上かみの

教へ子と逢い一夜語りぬ

諸共に苦難の道を歩みきし

友は祖国に今帰りゆく

父知らぬ吾子生れしかみ国の子

真幸くてあれ母の愛手に

父も無事兄も還れり吾子生れ

健やかなりと妻がふみきぬ

楽しかる慰安の筈の入浴も

夜半の作業の一つとなりぬ

真澄みたる秋空の下向い立つ

偉人よ塔よ何想うらむ

ニエチヴオで如何なることも諦める

この国の人哀れと思う

心して心して行け此の道は

み国拓かむ新しき道

天雲の遠隔そきへの極み海洋わたつみの波濤の東

吾が生れし大和島根はありがたき国

待つ父が妻が愛児が空しくも

また迎えしか新しき年

古里に還ればあれもこれも皆

腹一パイに食べて見むかな

雪深き奥シベリアの獄舎にて

事故に死にたる若き友はも

和らぎを治政の要と定めたる

奈良の都のみ代をしぞ想う

賢しらに物想より捕虜ボケて

ダモイを待つにしくものはなし

言いたくば何とでも言へ我はただ

我が行く道をひた進むのみ

世に在れば花の若武者哀れなり

尿もらしつ夜途を走る

赤旗を部屋一パイに飾り立て

この正月も四度むかえぬ

後髪引かるる如くシベリアに

眠る友に独り別れる

海の香よ祖国の香りよ日本海

その名祖国の名なるぞ嬉し

古里の田の面嬉しやさしいずる

朝日を受けて黄金波打つ

生命ありて我還りきぬ古里へ

古里人はありがたきかな

回顧して感あり

水様便が軟便となりてよろこびし

俘虜の一日も希望はありき

防寒帽の口のあたりは吐く息に

玉をつらねしごとく氷りぬ

湯を出れば使ひしタオルたちまちに

凍てかたまりて棒としなりぬ

外に置きしバケツの凍てて兵の手の

触るるすなはち吸いつけにけり

銃身はほこり吹かむと唇あつる

兵の唇に吸ひつく凍ててあれば

足踏みは止むるべからずとどまれば

凍傷となる朝々の点呼

北斗七星親しきかもよ満州の

空にシベリアの空に仰ぎし

冬去れば川も湖沼もことごとく

街道ぞこれ櫓の走れる

亡き数に入る戦友も多くなりて

五年を三年にちぢめ寄り合う

傷つくはいつも青春「プラトーン」

の映画にわが兵役重なる

腐りたる大豆ぞと夕餉の納豆を

惜しみつつ捨つ初年兵われら

俘虜われら鉄路作りに明けくれぬ

道具といへばもつこつるはし

かがなべて一すじ鉄路は伸びゆけり

故国へ通ずる路ならなくに

幾軒の炭鉱への鉄路を築きあげぬ

故国への思慕が支へとなりて

地下千丈足裏しんと冷えくれは

ひとしほ恋ほし南の故国

高知県 中平松鶴

牛の糞かき集め炊く飯盒の

汁は実乏しシベリアの曠野に

大揺れの引揚船に酔はざりき

船酔いの止む自信とはなる

シベリアの極寒に耐へしわれにして

霜焼の足ひと冬なやむ

収容所に紛れ入り来し山羊一頭

炊事係のひそかに料る

飯盒に豊かに盛らるる肉食を

俘虜われら食ふは久しぶりのこと

噛みしめて味はふいとまなかりけり

盗み食ふわれらひた箸運ぶ

骨などはへチカに燃やす証拠

いんめつ罪にはあれどせむ術のなく

食事終る間髪にして将校の

見廻りのありてきもを冷やせり

愛知県 兵東政夫

私にとって抑留とは何であつたか。まれに見る独裁専制国家の許されざる恣

意によつて、私たちは労働のためにのみ抑留され、飢えと苦痛と望郷の歲月であつた。日本も世界も歴史も無情なものであり、このことは消え去ることのない屈辱である。

しかし、この事実によつて、人間の尊厳を確認したこと、いま交友は耐えても生涯の白露の友を得たこと、耐えること、学ぶことの意義を教えられた。

私の抑留は、シベリアのそれと比べて短期間であり、思想洗脳もなく、苛酷なものではなかつた。非業の死を遂げた多くの人たちを憶うとき、ただ断腸、生きて還つて何を言うかと自戒するばかりである。

私の小隊員の多くはすでに鬼籍に入り、その消息は絶えた。わずかに、九十歳を越えた札幌市に住む盟友安江徳一上等兵はじめ数人のみ。これらの生きた証人によつて、この記憶が語り継がれ、わが国や世界、とくにロシアの歴史書に永久に抑留の史実が記されることを願つてやまない。

滋賀県 林 憲一

冷静な判断及び絶対にあきらめないこと

昭和二十年八月十七日、大興安嶺のブヘトの収容所に入った時点で脱走のこととは一度ならず考えてみたが、周囲が全部敵側であり、少々満語が話せたり一般人に変装するも奉天までは遠距離でこれは不可能であると判断し、運命に任せていくことが安全なりと判断し脱走のことは一切考えず、これからいかに生き延びるか、体を冷やさないよう、また怪我をしないように注意して、元気で帰国することのみに専念した。おかげで元気に帰つて来られたのである。我が家の兄弟姉妹は現在も全員元気で生存しており、合計年齢は八人兄弟で五百六十四歳である。

昭和二十三年八月ころ全員集合、出發組と居残り組に分けられたが、私は意識的に出發組から居残り組に変更を申し入れた。これが後日、出發組は二十三年秋に帰国したとのこと（米原の息長村出身の木村氏に出發組へ誘われた

が私は断った)。居残り組もなく出発しナホトカへ移動し、以後約一年間、港湾の建設、アパートの建設等の作業をするも、ノルマもなく自主的な作業で、昼の休憩時には港湾で泳いだり、ハツパで上がった小さなキュウリ魚を捕り塩ゆでにして食べたり、宿舎近くの山で山菜を取ったり、作業場への往復道中で石鹼をパンと交換したりして、大いに食べ体力をつけた。

岩手県 鈴木良雄

抑留体験での飢餓と不自由な生活から、身にしみて物のありがたさ、大切さを体得できた。あらゆる物資・物品がいかにか我々の日常生活に役立っているかは不自由してこそ、そのありがたさに気づく。特殊な環境とはいえ、抑留生活における食物はもちろんのこと、紙一枚、針金・糸一本、空き缶一個が、いかに大切な貴重品であるかの体験から、改めて、人が生活するための膨大な数々の必需品の豊かさの中で暮らせることが、まさに天の恵み、神の助けとして、物にあずかる感謝の念、物を大切にすることを信条とした。

三重県 太田 勇

収容所生活で得た最大の教訓は、自然との共生がいかに大切かということでした。物言わぬ雑草や地をはう虫けらから、もつと多くを学べということでした。

省みて

新潟県 佐藤正平

復職後のしばらくの間は「佐藤は捕虜ボケしたようだ」とも言われ、一時は抑留されたことを恨みもしましたが、年月が経るに従って金を出しても買えない貴重な体験ができたと思うようになりました。そしてシベリア方面に抑留されて長期間苛酷な労働に従事した方、また、かの地で亡くなられた戦友とその御

家族の方々に思いをはせるとなおさらの感がいたします。

私は、抑留当初、無気力、怠惰の状態を続けているうちに、ある日、戦友にも刺激され「自分はどうかあるべきか」と考えるようになりました。「いずれ必ず日本に帰るときがくる。もしそのとき怠惰の習慣が身につけていたならどうなるか」「そうだ、ソ連のために働くのではない、自分自身のために汗を流すのだ」と、そう思いついた途端、それまで嫌々拒否していた使役、労働が、全く苦でなくなつたのです。人間、考え方、気の持ちようが変われば行動も変わるし楽になるということを実感したのです。以後これを座右の銘、心の支えにして今日まで来ました。

今更ながら抑留を体験できたことは私の人生にとって大きなプラスでありました。

福井県 山下 均

八月中旬この山に来て、宿舎及び食堂建築の手元として働いていたある日の午後五時ごろで、仕事も終わり私と枕を並べて寝ている友達と二人で向かい側の山(キノコ取りに出たのである。山の中を歩き回っているうちにいつしか友達と逢いはぐれになり、友を呼べど返事もなく、やむなく幕舎の方へ帰ろうと思つて歩き回つたが幕舎の地形には出られず、なおも二時間、三時間と歩くうちに日は西に落ちて暗くなり、これはどうしても宿舎には戻れそうもない、班の皆が心配しているだろう、申し訳がない、逃亡罪を犯してしまった。

シベリアで山の奥地に入り込んでしまったら命は諦めなければならぬ、これは自殺かなと思いを走らせたが、こんなところで死んでも誰一人身元を見てはもらえない。帰国が間近に迫っているので何とか人家のある所まで出れば良いと考え、一応夜が明けるまでの十一時ころから午前三時半ころまで、大木の上に登つてオオカミの被害から守る。東の空が明るくなると木から降りて、近くに川が流れているので川俵いに降り始め、二時間ほど過ぎた時点で川は日本の落合

いになっていたので川伝いに下って行くつもりだったが、右から下りてくる川はひよつとすると我が幕舎の横に流れている川かもしれないと思ったが、思いを変えて右から流れてくる川に沿って登り始めた。二時間余り歩いて登った所の川は、まともに我が宿舎の横を流れる川であることが分かりました。それから間もなく仕事場の所に出てきました。時に午前八時を過ぎていました。現場で安心して一休み、皆から「よかった」と。こんな早く帰ってこられるとは誰も思っていなかったそうだ。

山梨県 高村國夫

昭和二十二年八月十三日、私ども二千人の同志は、日の丸の旗をなびかせた日本の輸送船「遠州丸」に乗船を許され、「これで生きて故郷へ帰れるぞ」と感激しながら飛び乗り、八月十五日、夢に見た舞鶴港に上陸、翌十六日、富士山の麓、山中湖畔の父母の待つ我が家にたどり着くことができました。

その後、私は父の事業を継いで旭ヶ丘の別荘地に家を建て、観光客を相手にホテル事業を経営し国家再建のため働いて、妻良子とともに元気な二男を育て幸福な生活していますが、この労苦調査を申し上げるに際して、子孫や国民の皆さんにぜひお願いしておきたいことを次に申し上げます。

- 1 戦争は絶対にしないで下さい。
 - 2 家庭の者はみんな仲よくして、よく働き、幸福な家庭生活をして下さい。
- 以上をお願いして、私のシベリア抑留の労苦調査報告を終わります。

山梨県 天野清一

最後に言い残したい辞

私は二十世紀の世界戦争の中で日本男子として生まれ、軍人として祖国のために働きながら、戦いに負けてソ連の捕虜となり苦労しましたが、運よく生きて帰ることができ、祖国再建に尽くしながら、よい妻元子や長男清史に助けられ

て今日まで頑張つて生きてこられましたことに心から感謝しています。

私がここで子孫や社会の人々に申し残したいことは、今後、日本はもちろん、世界じゅうとも決して戦争を起こしてはならないということです。

勝つても負けても、戦争ほど残酷なことはありません。

どうか二度と戦争を起こさないで、世界じゅうの人々が仲よく暮らせるように平和な日本を守ってください。

岐阜県 早川芳美

復員(興南港から)

平壤から興南港で乗船するまでの記憶が余りないが、日本兵の中の民主運動家による共産党思想教育があった。しかし、シベリアで亡くなった多くの戦友のことを思えば腹の立つことばかりで、反対とか批判をすれば帰還できなくなるとお互い戒め合いながら黙々と聞き流す。

いよいよ乗船間際にこれらの人たちの音頭取りで「お世話になったスターリン大元帥のために万歳をする、皆唱和せよ、万歳」「万歳、万歳、万歳」全く馬鹿げたことだが、どこにスパイがいるか分からないので仕方なく唱和する。

十二月三十一日大晦日の夜、乗船が始まる。暗闇の中一列に並びそろそろと前に進む。私は最後尾の方でイライラしていると、最後尾の者たちは、今まで何度もロスケに「ダモイ」で騙されてきたので、日本の船に乗るまでは安心できない、早く知りたいと。後尾の者の心情は皆同じだ、誰かが「前に通信(軍隊用語、前に送れ)、日本の船か」ずっと順に送られて行く。しばらくすると「後に通信、日本の船だ、日の丸が見えるぞ」送つて来る声が、暗闇の中をだんだんはつきりと戻ってくる。乗船したが日本の船か、本当に信じるまでにはまだ時間がかかった。

昭和二十二年元旦、船上からの日の出は本当に美しかった。

帰りの玄界灘は行きとは違い波静かで、船はゆつくりと対馬海峡を横切る。

一月七日、佐世保港に接岸する。上陸時に米軍に頭から全身真っ白くなるまでDDTをかけられたのが強く記憶に残っている。厚生省の係官の調査で四、五日過ぎる。

愛知県 太田吉春

給水所へ毎日現地の人に来ますが、並んで順番待ちのとき、しよっちゅうチェンスキーが来ると悪口を言っていました。ドラーク、サブークと、犬だ、けもの扱いの話を聞いていました。チェンスキーはロシアでは相当卑下された恨みが今おもてに出たのかもしれないと感じています。そしてこんな仕事のおかげで、現地には世界中の人がカラカランダに住んでいることもこの目で見る事ができました。イギリス人、トルコ人、中国人、朝鮮人の人たちと会うこともできました。

愛媛県 山本繁夫

ナホトカに勤務中の六月上旬が同志の若林君とナホトカの町を何気なく散歩していると、向こうの方から「ヤモマータ・ヤモマータ」と聞き馴れた声があるではありませんか。四十メートル位離れた有刺鉄線に囲まれた収容所の中にコムモリスク五分所の将校連中と家族がいるではありませんか。所長も副所長もイグナチックさんもニコライさんも一番親しくしていた。ペトロフさんも皆いる。ニコはしていない。疲れた淋しそうな顔をしている。私と若林君はビックリして驚いた。コレは何か事情があるなど、今まで収容所に入れられていて自由に町を歩ける私たちと、鉄条網の中の収容所の中にいる人々、いくらドイツの捕虜になった時期があつたとは言え、あまりにも変われば変わるものかと、近付いて聞けば一両日、食事らしい食事もしない。「山本、パンと缶詰くれないか」と何という言葉。過去二年ばかりシベリアでお世話になったロシアの将校に御礼をできるのは今より外にはないと、「若林君、私がお世話になった人だ、協力たのむと」「わかつとる」と一言。「ペトロフさん、では今は三時、日暮時刻の六時半頃こ

こへ来るから」と。糧秣倉庫へ返りドンゴロス(麻袋)の一つには黒パンを十二本、今一つの袋には魚や肉の缶詰三十個を入れ、二人で再び夕方行き無事渡すことができた。危ない橋を渡ったが胸中は安堵した気持ちであった。翌日昼、訪ねると昨日の礼を言われ、腕時計を一個頼むと言われ、何とかしてみます、では明日と別れた。先にも書きましたが私たちは一度も引揚者の収容所へ入ったことがなかったが、第一か第二の収容所の中で日本人の時計屋さんが二人居てロシア人の時計を修理している場所があるとかねてから聞いていた。私は初対面の小柄な中年の時計屋さんに委細を話して腕時計一個の寄贈を頼んだところ気持ちよく協力して下さい、一番良いのを持って行きなさいと好意ある態度で頂き、自分もほのぼのとした気持ちで、翌日ペトロフさんに差し上げた。「どうせ日本兵が所持していた時計です、どうぞ使って下さい」とペトロフさんの手に固く握りしめて貰った。それから一、二日して収容所をのぞくと誰も人影は無く夜の船でマガダンへ収容所関係の家族ら全員が出発したあどだった。

北海道 長尾忠也

私の青春は戦争そのものであった。戦後六十年、戦争の真実を若き青年層に証言し続ける責任があると思う。ソ連に抑留された私達の過酷な労働と、飢えや寒さ、収容所のいじめ、人間性を失う体験などを、多くの執筆活動として出版されているけれども、語り継ぐことによつて、戦争というものが人間の命を奪う過酷さと、その罪を明らかにする必要がある。決して風化させてはならない。

和歌山県 林 三子雄

戦後六十年を経て、戦中戦後、青春時代に享けた試練を乗り越え八十歳を刻んで過ぎし得たのは、少年時代、窮乏生活で肉体を絞って鍛えられた恩恵と感謝せねばならぬ。

しかし、シベリア抑留は敗戦の償いと課せられるべきでなかつたろうと思う。

満州での棄民、シベリア抑留者と遺族のやるせなき憤りをどこへ打ちつけようか。

受け止めてくれる力のない世の中が歯痒い。

鳥取県 清水要範

敗戦から六十年、あの悪夢のような時代を知った世代がだんだん少なくなってきました。

戦争がいかに愚かで悲惨なことか。今なお世界各地で発生している紛争やテロ行為などが止み、一日も早い真の平和が到来することを願って止みません。

大阪府 岡崎博好

昭和十六年四月に結ばれた日ソ中立条約は、スターリンの策謀にまんまとかった政府、大本営の大失策であった。二十年五月、ドイツが無条件降伏するや欧州戦線の全軍を昼夜兼行、シベリア鉄道をきまして満州侵攻へ転進させたスターリンの狡猾さを見れば、ソ連国家の欺瞞性が浮き彫りになる。日露の大戦後、ソ連は対日報復を念頭に、昭和十三年七月の張鼓峰事件、翌十四年五月のノモンハン事変と挑発をことにしたあげく、二十年八月八日の対日宣戦布告によってわずか六日間の無血占領で、在満在鮮の工場生産設備機械の大半を持ち去った。国家間の条約が反故になることは外交史上、枚挙にいとまないほどだが、満州侵攻のための中立条約破棄だけは絶対に許されるものではない。加えて在満六十万の兵士を拉致し十年余に及ぶ重労働に酷使し、荒廃した国土の再建に資したのは「万国俘虏条約」違背の最たるものである。

抑留中、両三度のラーゲルの移動に際しても必ず口にするのは「ダモイ・トーキョー」だった。日本人の甘さを巧みに利用した宣撫工作だが、警備上の作戦にしても、民族のだましの本性が如実に看取されてならない。時にはナホトカに着き帰還船の煙突の煙に帰心をつのらせつつ、再び奥地への逆送を余儀なくされた

あの口惜し涙を忘れることはない。その陰に民主運動と称する集団の策謀がなかったか否か。大半の兵は日本へ帰るためだけに面従腹背の参加を強いられていたのではなかったか。今日のロシアの国家体制を見るにつけ、共産主義と民主運動、そしてシベリアでのあの嵐のような労働歌の高揚は不思議な夢の世界を想起しているようである。

今なお凍土に無念の情を抱いて眠る幾万の戦友に思いをいたし、灯をともし、香をたき、慰霊の誠を捧げます。合掌

愛媛県 梅崎文夫

ポツダム宣言を無視したソ連

ソ連はポツダム宣言を無視して六十万に余るといわれる元軍人軍属（一部、一般邦人も含まれたかも）を酷寒の地シベリアや中央アジア、その上ウラル山脈を越えたヨーロッパロシアに至る広大な地域に連行して強制労働を強要した。その結果、六万有余の犠牲者が出たといわれているが、私も抑留者の一人として憤りを抑えることができない。

ソ連以外の連合国が、戦後できる限りの早い時期に日本人を祖国に送還してくれているだけに、なおさらこの思いが強いのである。

愛媛県 池田政治

不幸にして抑留中に飢えと寒さに倒れた六万余の戦友は、未だ大半がシベリアの地に眠ったままである。墓参団を募って毎年シベリアに行っているが、一部の特定の地区だけを整備して、巡回させているのであって、大半の者は墓参団が入れない所に眠っているのである。

明治三十八年の日露戦争のときのロシア人捕虜が松山に約六千人来ていたそうであるが、その当時の報告では主として寺に分散収容して、道後温泉はもちろん、五色浜の海水浴場や芝居等にも連れて行って、比較的自由な行動を認め

ており、死亡時には一人一人葬儀を行い、名前を刻んだ石碑を建て、今でもボランティアで老人クラブや勝山中学校の生徒が墓掃除をしているそうである。

終戦から既に六十年を経て、当時二十歳前後だった我々もすべて八十歳を越えてしまい、その間、日本は、戦後の平和に支えられて経済復興を成し遂げ、もはや戦争を知らない世代が七〇パーセントを占めるようになり、平和を当たり前のように思っているのではないだろうか。

今の内に我々の戦争体験を若い世代に語り伝えて、戦争のない平和な日本の将来に資する事が責務ではないかと考えている。

富山県 窪谷好信

激動の昭和は今や遠くに去らんとしています、幸いに生きながらえ、終戦から六十年目を迎えて先ず思い出すことは、シベリア抑留の苦難であります。

終戦の還暦に当たり、敗戦の残酷・悲劇・屈辱・惨めさの体験者として、二度と戦争を起こさない、また風化させてはならないと強調するものであります。

短歌

シベリヤの 捕虜の幕舎に 習いたる

歌を聞きいき 顔剃られつつ

空腹の 癒ゆるすべなき 捕虜の日々

故郷の食を せめて語りき

ラーゲルの 白夜は更けて オーロラの

積乱雲に 耀うを見き

シベリヤの 洞窟兵舎に 仰ぎたる

月思いをり 今日十五夜

香にけむる 遺影を拝す ラーゲルにて

福井訛を 使いし君よ

静岡県 清初男

満四年と八カ月、よく生きてこられた。船の中でつくづく生きた感じだった。シベリア抑留は生き地獄だった。誰に請そうとも、実際に抑留生活をした者でなければ理解できないだろう。それほどに非人間的な扱いであった。

奈良県 川端真一郎

シベリア哀歌

理不尽に襲ふやはげし北おろし

雪原を北へ北へと俘虜の貨車

容赦なくシベリア吹雪俘虜を打つ

吐く息の髭に氷柱となりいたり

地吹雪や前ゆく兵に確かと躡き

呼び交はす声凍てつけり伐採林

凍てし樹の斧はね返すこだまかな

凍て土に戦友葬りし日の無口

望郷の涙こらへて年迎ふ

作業場へ木沓のすべる雪解道

里人の情けにふるる雪間かな

春幾たび帰国の噂流れては

月おぼろ帰国のうわさ立ち消えて

春愁といふにはあらずただ怠惰

行く春や軍歌に替へて労働歌

緑陰に寸時の憩ひ虜囚われ

俘虜の身の日々の哀歎地虫鳴く

一片の黒パンに露命ながらへし

ノルマーを果してつるべ落しかな

秋逝きて明日なきわれと思ひけり

望楼の月に歩哨の影うごく

飢餓に耐へ屈辱に耐へ木の葉髪

名ばかりのシベリアの秋^コ返てきざす

吹き晴れし夜や望郷の寒すばる

虎落笛地底の戦友の哭く声か

日向ぼこ諦観の日々重ねぬて

長き夜の夢ふるさとがちちははが

夏霞む引揚船の日章旗

帰国後の生活あれこれ蚊遣香

巡り来て悲憤あらたや敗戦忌

語り継ぎたいことといえば、人間の英知を集めれば戦争を回避できる方向に動いていくことを願いたい、こういうふうにあります。

福島県 橋本宗明

島根県 増田宗人

戦争が終つて六十年、私はシベリア抑留生活をして多くの戦友達が次から次へと死亡する中であつて、文字どおり九死に一生を得て帰国できたことが今でも夢のように思われてなりません。抑留当時の記憶は八十歳に達した現在、地名、年月日など当時の事は忘れ、思いも遠く薄れる中であつても、あの刃物で身を

切るような寒さ、食べたくても食べる物の無い空腹、その上に強制労働の苦しみ
の三重苦に耐えることができず、多くの戦友が息を引きとった。死ぬる寸前に
苦しい中に微かな声で「お母さん」の名を呼びつつ息を引きとった悲しい姿は、今
でも私の臉に焼き付き、忘れることはできません。私の長い人生の中で一番悲し
い悪夢です。

私の体験から、戦争は最大の敵、二度と繰り返してはならないとの強い思いと
同時に、平和の大切さ、命の尊さ、食物の大切さ、苦しい体験を後世に伝える
役目こそ私の務めではないでしょうか。

最後にシベリアの極寒の地で無念の死を遂げた戦友の皆様のご冥福を衷心よ
り祈念します。

愛知県 東義之

抑留一年目の春ごろより、共産主義を称える日本新聞なるものが出始め、
日一日と思想教育が激しくなり、ソ連を祖国と呼び、ファシズムの日本より解
放してくれた万国労働者の父、偉大なるスターリン大元帥に感謝状を捧げると
「おごそかなる」署名式をも行った。

作業に出ても食事後、新聞輪読会を行い、夕食後は昼間に作業で疲れてい
ても、マルクス・レーニン主義なる思想勉強会。

酷寒のシベリアにも春の訪れとともに、祖国ダモイの噂がチラホラします。ソ
連側は(民主主義者とハシショウラボータ)により、帰国さすとの事を指導者よ
り達しあり、以後自分こそは民主主義者であり、早く選ばれて早期帰国せんも
のと、歪むものだと思われる民主主義運動が激しくなり、連日のごとく批判会
がもたれ、ターゲットされた人は、大衆の前に立たされ、反省会がもたれ、自己
批判を強いられ(そうだ！ そうだ！ 同感)と云う合言葉の喧々囂々たる野
次が飛び交い、呆然自失の状態になり、精神的に参ってしまう。主として、旧将
校、警官、憲兵、高学歴者であった。

在ソ中、民主運動盛んなりしころ(何かおつとりとし、自己主義もあまりせ
ず)、良家出身の友は常に「日和身主義者」「反動分子」「ブルジョワジーの手先」
と何かに付けて批判され、常にターゲットにされ、大衆の前に出され、いつも
ごとく「そうだ！ そうだ！ 同感」の野次で呆然自失の友を目の前にしながら、
当時としては助言もどうすることも出来なかった友に対し、申し訳なさと、自
己の不甲斐なさに、今改めて悔いるばかりである。

福井県 片山清次

プレーヌイ(捕虜)

昭和二十年九月下旬の事であった。旧満州国の海林兵器廠から祖国帰還の
夢を抱き、十日あまりの苦難に満ちた野営生活を続けながら徒歩で綏芬河を
通過してソ満国境を越え、遂にソ連のグロデコフ市郊外の刈り取りの終わった広
大なライ麦畑に到着した。

満州から同行して来たソ連軍の警備将校は「日本の駆逐艦が君達を迎えにウ
ラジオ軍港へ来ている。順番が来るまでここでしばらく待機して連日の疲れをと
り帰国に備えて体調を整えて置くように」と通訳から説明があった。ここでの
我々の下級兵士の日課は、先ず調理用の燃料としてライ麦の刈り取った後の根
株を引き抜いて束ねた物を一日二回集めて来ること。次に古年兵から随時命
令される飯盒での水くみの使役であった。

ある日、近くの井戸へ水くみに行ったとき小学五年生程度の猿のような顔を
した少年が、水をくんでいる我々のところへ近づいて来た。薄ら寒い日であるのに
汚いシャツに裸足という貧しい服装を見て「ロスケの野郎はよほど物資が不足して
いるんだな」と話し合っていたら、少年は傍らにあった三十センチほどの煉瓦の
台の上にあがり、我々と同じ高さになったところで我々の方を向いていきなり
「プレーヌイ プレーヌイ」と大きな声で何度も呼びかけてきた。

昂然と胸を張り、侮蔑に満ちた顔つきを露骨に浮かべ我々を見下した態度は、

言葉は分からぬまでも良い言葉では無いことを直感した。

入ソ直後のことであり何の意味か全然分からない。「このガキ、何を吐かしているのか」と皆で話し合っていたところへ水くみに来た三十年配のソ連兵が、一瞬バケツを置き、得意になつてなおも「プレーヌイ、プレーヌイ」と大声で叫んでいる少年のところへ走り寄り、少年に対して語気強く叱り付けた。少年はソ連兵の言葉に一瞬戸惑つた顔つきを示した。ソ連兵の重ねての強い叱咤の言葉を浴びて泣きながら走り去つて行つた。

水くみを終えたソ連兵はバケツを置いて我々の方を向き、あたかも自分の息子の非礼を詫びる父親の様な態度で軽く頭を下げて帰つて行つた。

あの満州で飢えた野獣の様に乱暴狼藉の限りを尽くしたソ連兵の中にもこんな人間性のある兵士もいたのか？ と強い感動を覚えた。

昭和二十一年の春、私はタイシエツト市郊外の第五病院の洗濯場に勤務していた。簡単な日常会話も可能となり、ロシア文字も少しは読めるようになったころの事である。

某日、責任者のトーニヤに「プレーヌイ」の意味について聞いてみた。彼女は自分の唇の上に人差指を立てて「カタヤマ、これは捕虜という意味で悪い言葉なのよ」と優しく教えてくれた。

グロデコフ郊外で少年が誇らしげな顔をして我々に投げかけた言葉の意味がやつと理解できた。

第五病院の所長スチエンコフ大尉は、時々ノルマ向上のために作業隊員に訓示をした。気に入らないときには顔を紅潮させて「ワエンヌイプレーヌイ」という言葉をよく挟んで口汚く吠えた。

副所長以下、医師、看護婦達は我々に対して気に入らないことがあつた場合「ニエラシヨ」。最悪な表現として男性ロシア人は卑語「ヨッポイマーチ」をよく使つた。

軍人に対して「捕虜」という言葉は侮辱の最たるものであることは彼らも知つ

ていたと思う。日常、仕事の上でロシア人と口論しても、彼らの口からは前述した卑語を乱発するが「プレーヌイ」の言葉を聞くことは無かつた。

抑留経験者は政治将校コワレンコの指導による「日本新聞」をよくご存じであろう。あの新聞の各ページの左上に小さなロシア語で『日本人戦争捕虜』のための新聞と印刷されていたことを知っている人は何人いるだろうか。あの忌まわしいノルマの餌に配られた祖国への往復葉書にも「俘虜用郵便葉書」とゴシックで印刷されていた。

我々軍人は常に変体仮名で書かれた難解にして長文の軍人勅諭に縛られていた。泥沼化してきた中国戦線では軍紀風紀の弛緩が問題化し始め、その対策の一環として昭和十六年、当時の陸軍大臣東條英機は「戦陣訓」なるものを制定して「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残す事勿れ」と軍人の心構えを示し、軍人にとって捕虜は最大の恥辱とされた。

関東軍を初め全戦線の将兵は昭和二十年八月十五日、天皇の命令により武器を捨て投降した。昭和二十年八月十八日、参謀総長・梅津美治郎は「終戦詔書換発以後、敵国の勢力下に入りたる帝国軍人、軍属を俘虜と認めず」との奉勅命令を全軍に発し混乱を防いだ。

一方、ソ連は「無条件降伏の軍隊は全員捕虜である」との見解を譲らず今日に至っている。

「抑留者」として処遇すると多額の保証金を負担しなければならない。ロシアが「捕虜」にこだわる真意は、ここにあると言う。

「非はわがソ連にあり」と言う自己批判を文芸春秋に発表して話題を投げたアレクセイ・キリエニコ氏も九段会館での講演で「捕虜」という言葉を使ったことについて反省の言葉を述べている。

先年の慰霊祭で我々の先頭に立つて抑留問題に献身された故青木泰三理事長のご講演の中でも、この言葉の問題を大きく取り上げられた。

あの元氣あふれる大声でのご講演が最後にならうとは夢にも思わなかつた。

平成十六年一月十七日、急逝されたと新聞紙上で拝見し、ご冥福を祈るものである。

日本人抑留者に対する多くのロシア人のとらえ方について平成十五年、十六年とロシアの各地を旅行したとき私が見聞きした限り、依然として「捕虜」と言う目で見られている感はぬぐえられていない。たかが言葉と言われるが、内外を問わずあらゆる面から粘り強く取り組んで、いわれ無き「捕虜」と言う屈辱的な言葉を消し去らねばならない。

平成十七年二月十八日の全国紙によると、日本政府はシベリア抑留者に対し『戦時捕虜』とのロシア側の呼称を『抑留者』に変更するよう求めていたが、ロシア側は日本政府の申し入れに対し正式に拒否したいという記事が載っていた。

昭和二十二年の五月、突然に病院側から個人番号が手渡された。ツエリコフア衛生中尉が、透明な液体に浸したガラス棒をペン代わりにして十センチ長さに切った包帯の上に番号を書いたものを一人ずつ手渡し、作業服の左胸に縫い付けるよう命令された。玉川通訳の説明では、今渡された番号は各人の個人番号であり、祖国日本に帰還するまで、この番号で処理されるから紛失しないよう心掛けてほしい。との事であった。包帯に水のような液体で書かれた番号は半日ほど経過したら黒い数字として現れてきた。墨汁が無いので硝酸銀の溶液を使ったのであろう。

時を同じくしてラボーチバラック(作業員宿舎)の中では全員漏れなく夕食後、一人ずつ呼び出された。病院の人事係将校と玉川通訳と本人の三人が面談して俘虜番号に基づく「身上調書」の作成作業が行われた。

タバコの巻紙は当然のこと、入院患者のカルテすら紙不足で難渋していた当時のソ連には珍しく厚手の上質紙を使ったA四判クラスの用紙に姓名、生年月日、入隊時の居住地から始まり学歴、職歴、所属部隊、兵科、階級、家庭環境

等四十項目に及ぶ内容のものが記載されており、その項目に添って調査された。そのとき人事係将校の説明によれば、この長所は三部ずつ作成される。一通はソ連政府に、一通は日本政府に送付され、一通はこの收容所に保管される。今後は本人が移動の際にはこの「身上調書」も同様に引き継がれ日本に帰国するまでついて回ることであった。

我々は誰言うとなく、着用を強制された個人番号を「捕虜番号」。身上調書を「捕虜カード」と呼ぶようになった。

私の番号は七四五一六四が付けられた。先頭の七はタイシエツト地区を標榜する数字であると玉川通訳は説明してくれた。胸に付けた番号も激しい労働のために一カ月も経たないうちにどこかへ消え去り、それと共に番号そのものも忘れてしまった。

同じく、この時期にモスクワからの命令と称して、以後死者の取扱いについては清潔な下着を着せ木工が松の板で製作した寝棺に一体ずつ収め、捕虜番号を記入した白樺の木札を手首に結わえ埋葬するように改善された。もちろん、埋葬箇所には捕虜番号を明記した木札が墓標として立てられた。

思えば、長い長い時間の末、やっと人間らしく取り扱われるようになった。入ソ当時は、一糸まとわぬ全裸のマネキン人形の様な姿で非人間的な扱いを受けた多くの戦友の不便を思い、新たな涙に頬を濡らした。

去る平成十三年〜十五年、イルクーツクとタイシエツト地区の遺骨収集に参加して、時折り遺骨と共にメガネ、義歯、軍服のボタン、階級章等が発見されるが捕虜番号を記入した木札は分解して見当たらず、改めて約六十年の星霜を経てきたことを実感させられた。

日本政府が主張する関東軍、朝鮮軍、樺太等の兵士、軍属、民間人を中心とする強制抑留者数七十万人に対し先般、やっと重い口を開いてロシアの発表した数は五十九万四千人とのことであった。

私は思う。入ソ直後に「身上調書」が正しく整備されていたら、このような数

の開きは最小限に止められていたことと確信するものである。

ちなみに、私が入ソしたのは昭和二十年九月某日。それに対し「身上調査」が作られたのは昭和二十二年五月三十一日であった。

巷間言われるように、昭和二十年末頃から二十一年にかけてはシベリア各地でもっとも多くの死没者が出たことは、それぞれの抑留記にも詳細に記録されている。

三重県 服部利男

シベリア抑留についての一考察

昭和二十年八月九日、日ソ中立条約を一方的に破り、ソ満国境からソ連軍はいっせいに攻撃をしかけた。当時の関東軍は、強力師団をほとんど他方面に転用、ソ連侵攻時、骨格兵力は、一般師団六個と国境守備隊十五、それに一戦車師団のみであった。ただ在満居留民の根こそぎ動員により、新設部隊を作り、昭和二十年七月末、主要部隊の人員はおおむね充足したが、装備の整わない部隊が多く、その戦力も弱かった。兵器弾薬類も少なく到底ソ連軍の敵ではなかった。そして六十万近い関東軍将兵と民間人が捕虜としてシベリアに抑留され、一年〜十年の重労働に従事させられた。

ポツダム宣言第九項に「日本国軍隊は、完全に武装解除せられた後、各自の家庭に復帰し、平和的且つ生産的の生活を営むの機会を得しむらるべし」とある。シベリアの捕虜收容所が、各自の家庭である筈がない。なによりも停戦協定によって武装解除された将兵たちが、はたして捕虜に該当するか、法的問題もある。国際法には捕虜はあくまでも戦時捕虜であり、明治四十年に制定されたハーグ条約に照らしてもそうである。ソ連軍が満州侵攻時、戦闘により捕虜となった将兵は終戦時シベリアへ強制移動させられた六十万将兵のごく一部である。

約六十万の将兵を法的根拠のないままで一〜十年の長きにわたり強制労働

させ、六万近い犠牲者を出させたソ連に対して一件も補償請求されたことを聞かない。帰国時一切の書き物の持ち出しを認めなかったためなのか、在ソ中のアクチーブによる洗脳の結果か、未だに理解に苦しむ次第である。従軍慰安婦問題、中国南京の虐殺問題は未だに国際問題化するのに、六万近い犠牲者を出したシベリア抑留者の問題については一度も国際問題化しないのは不思議でならない。

多くの犠牲者を出し占領したにもかかわらず、米国は沖縄を日本へ返してくれた。ソ連は一方的に条約を破り進駐した日本固有の領土、齒舞・色丹・国後・択捉の四島を言を左右して返してくれない。ソ連という国に強いいかりを覚えるのは私だけだろうか！

滋賀県 山口馨

私が今も心に強く残っているシベリアの抑留生活は、三つの苦しみ、大悪である。①食糧不足による飢餓に耐える ②酷寒下におけるノルマ制の労働の辛さ ③民主運動と称する共産主義思想の鼓吹(帰国に影響)であり、この重圧に押さえられて数多くの友が栄養失調による衰弱死や、過酷な労働で体力は消耗し、異国の地で弔いもなく埋葬された戦友の無念さを思う。

栃木県 上野省吾

ぼんぼん 茫々六十有余年の歳月を超えて今シベリアを思うとき、あの辛酸を極めた強制労働の明け暮れも、酷寒の荒野にあつてただひたすら帰国の日を一縷の望みに託して生きてきた收容所での生活も、年月の経過と共に次第に記憶も薄れ、今正に風化しようとしている。

戦後六十二年、繁栄を極める日本にあつて今の私共の生活をみる時、シベリアで生きてゆく極限の中で望郷の念に駆られつつ、異境の地に逝った戦友の無念さを思うと、うたた断腸の思いにかられるのを禁じ得ない。

還らざる友のご冥福を心から祈るのみです。

石川県 今西三郎

わずか一週間の戦争なのに、六十万人が抑留され、六万人が飢えと寒さと重労働に堪えられず故郷を偲び無念の思いを残し凍土の土とられました。シベリアは私にとっては忘れられないことばかりでした。

愛知県 小沼 勇(旧姓 加藤)

十九歳で兵士となり、十七日間のソ連との激戦。それに続いて地獄のシベリア抑留生活三年間が、私にとっては、私の人生のすべてと言つていいほどで、今日こうして生きていることが不思議に思えます。

愛知県 鈴木英一

シベリア抑留と言いますと、異国の丘の歌を思い浮かべることと思いますが、私はシベリアの収容所ではこの『異国の丘』を歌ったことも聞いたこともありませんでした。帰国して、知人からラジオで放送されたとき、「歌ったかん、なつかしいぞら」と言われて、これが『異国の丘』かと初めて知ったのです。

東シベリア、西シベリア、中央アジア、蒙古など広いソ連領内に二千近くの収容所があつたとのこと。作業も伐採、炭坑、道路工事、鉄道敷設、建築工事、農場、工場など、あらゆる作業をやらされてソ連復興の労働力として日本人は酷使されたのです。

戦争が終わつたというのに六十万人以上と言われる日本人がシベリアに強制連行されたのです。国家的な拉致です。そして、酷寒、飢餓、重労働で六万人以上と言われる人たちが倒れて凍った土地の下で無念の思いで眠っているのです。この事実を私たちは決して忘れてはならないと思うのです。風化させてはなりません。何のために、戦争が終わつたというのにシベリアに強制連行されて大勢の

日本人が死ななければならなかったのか、六十余年経つた今も、私の心の中では答えが出ておりません。

最後に、シベリアの凍土に今も無念の思いで眠っている御霊に対して、皆さんのご冥福をお祈りしたいと思います。

愛知県 加藤 一郎

経験したことのない寒さの中、十分な食事を与えられず重労働で酷使され、なお十分な医療手当を受けられず、その結果と言わざるを得ません。昭和二十年十二月から翌年三月までの厳寒期の死亡者は四百四十五人に及び全体の四七%にもなり、先程申し上げたような状況で、本当にキチツと埋葬されたか疑問に思う次第です。

私は怪我が重なつて幸に生きて帰ることができましたが、ウラン・ウデの病院で家族のことを心配し、兄弟のことを思い、生きて帰りたい一心で、配給になつた黒パンを握りしめながら、胃腸障害や栄養失調で亡くなった戦友の話聞くにつけても、誠に感慨無量のものがあります。

このような悲劇を私達の子や孫に経験させることのないよう努力しなければならぬと誓い、皆様にもお願い申し上げる次第であります。